魔法少女に会っちゃった場合

作戦参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女に会っちゃった場合

【Ｎコード】
Ｎ０７０２Ｕ

【作者名】
作戦参謀

【あらすじ】
地元のありふれた県立高校に通う藤島圭介。彼は身体が異常に丈夫だという事を除けば赤点ギリギリ、サブカルチャー系の知識は豊富というちょっとバカでオタクなどこにでもいそうな高校生。新学期が始まってから一ヶ月、ゴールデンウィークに入る頃。圭介は新たなクラスに馴染み、これからもこの日常が続く……と思っていた。だけど彼女は現れてしまったのだ。「拙者、秀吉公の子孫にして魔法の国からやってきた魔法使いなのです！」「どうやら俺はエロゲの世界に入ってしまったようだ……！」――秀吉の子孫を名乗る

アホな戦国系魔法少女・木下暮葉と、《多分》普通の高校生・圭介。
そして《多分》愉快な仲間達や敵共が繰り広げる、おバカでズレた
ラブコメディー！

第1話，まだ平穏だった朝の事

魔法少女なんてファンタジーなもの、信じる？

昨日見たアニメでは偶然主人公が魔法少女と出会っちゃったんだ。
まあこういうネタってアニメや漫画だとありがちだよね。
そういうのが現れ、何かと主人公は巻き込まれ、最後は正義のヒーローになる。
うむ、すばらしい王道ストーリーである。
最終的には女の子とも結ばれ、ハッピーエンド……素晴らしい、リア充だね。

さあ、降ってこい魔法少女！
片翼の天使だろうが破壊するものだろうが、この俺が相手になってやろうじゃないか。
……まぁ、無理だけどさ。普通に考えて俺がラスボスに勝てるわけないじゃん。
スライムさんにだって勝てるか微妙だと思うよ、どんなに……外れた人間でもな。
所詮は人間だ。それに空から降ってくる女の子が普通なわけがない。
現実そんな事があってみろ。絶対面倒に決まっている。

だから、そういうのは二次元に限るんだ。
そう、二次元は俺らの楽園である。ハハハ……。

「こら圭介！　早く起きる！」

「……はっ!?」

ドコなんだよ……ココは……。

知らない天井だ。いいや待て、よく知ってるよこの天井。

天井には中々壊れないので、そのまま使用している古臭い電気。

部屋を見渡すと本棚には漫画やライトノベルで溢れ、パソコンの周りには好きなキャラクターの『いんどろいど』のフィギュアが数体。

特に後輩キャラ多し、まあ俺の好みだからね。おそらくフィギュアがある時点で普通の人から見ればかなり痛い部屋である。そんな部屋にある俺のベッドのすぐ近くで、美少女が俺の事を機嫌の悪そうな顔で見つめていたのだった。

「ったく～、妙にファンタジーな寝言言っちゃって……今日は隕石でも降ってくるのかしらね?」

「アンタ俺をなんだと思ってんの!?」

「変態、バカ、オタク」

「評価最悪ですか!?　確かに俺はバカでオタだが」

……何故でしょう、何故寝起きの俺に女の子が食いかかってくるのでしょう。

これなんてギャルゲーでしょうか……いいえ、ギャルゲーではありません。

答えはこの子、俺の幼馴染だから起こしに来ているのだ。ってやっぱりギャルゲー的だな。

銀髪のショートヘアやツンとした紅い瞳が特徴的で八重歯が目立つ

極上の美少女。
なんとなく黒いリボンがお似合いな彼女の名前は国宗伊吹（くにむねいぶき）。

「な、なにじろじろ見てんのよ……っ」

「ふふふっ、朝から照れる伊吹は可愛いねぇ」

「て、照れてないわよ！」

そうは言っているが、やたら必死かつ頬が微かに赤い。

「う～ん、中々デレないな伊吹は。攻略に時間がかかりそうだぜ……ッ！」

「っ……なにが攻略よ！」

「まあまあとりあえず笑おうぜ？　あと起きるのはもう少し後で。只今俺のハイパー兵器がお盛んなものでして……」

「っ……！　……ッッ、バカ圭介！」

っとその時、俺の言葉の意味がわかった伊吹は恥ずかしそうに怒鳴り、同時に大きく足をあげた。
その瞬間白と水色の縞パンが見えました。
なるほどねぇ、伊吹はああいうの穿くのか……いいよな縞パン。俺は好きだぜ縞パンが。
いやいや朝からいいもの見たよ……と思ったのは一瞬だけである。
次の瞬間伊吹の踵が俺の鳩尾へと、勢いよくナチス・ドイツの急降下爆撃機のように落下してきたのだ。

「ごぶぅっ！？」

鳩尾をやられた俺は当然のように呼吸困難に陥った。

……まあ、この程度ならなんてことがないが。

俺、何故か　異常に身体が丈夫なんです。ハイ。

伊吹もそれをわかってて攻撃したのだろう。伊吹はホントはいい子だし、俺が貧弱だったらこんな事しないハズだぜ。

「セクハラ魔人！　あああ、朝からセクハラってどういう神経してんのよ！」

顔を真っ赤にしてセクハラ言ってくる伊吹も可愛いのだが、正直痛い。

あとセクハラ言われて嬉しいと思うか？言っておくが俺は罵倒されるの大好きなマゾヒスト君ではない。

「セクハラ違ーう！　仕方ねえだろ事実なんだから」

「うぅ……昔はこんなセクハラ男じゃなかったのに……っ」

「それを言えばお前だって昔は素直で可愛い子だったのに」

「うっ……うるさい！　とりあえず黙って起きる！」

その時、伊吹は大声を出しながら俺の布団を剥いでしまった。

ああマズイ、これはいかんぞ。

なんたって朝の男は超がつくほどお元気なのだよ。

……ってか見られるこっちも恥ずかしいんだが。まあいいや、伊吹には何度か見られたし。

なにより反応が可愛いのであえて何もしないでおくぜ！

「……ッ！」

伊吹は目を大きく開き、顔を耳まで真っ赤にして俺の股間を直視している。

「……だから言ったろ、起きるのはもう少し後にしてくださいって」

俺はそう言ったものの、彼女はわなわなと震えている。

そして遂に彼女は大声で。

「……変態ッ！」

と、叫んだのである。

全く理不尽だ、こんなの全国の若い男の子なら当たり前じゃないカ。

「エェッ！？　これで変態扱いされるの！？　仕方ないじゃんコレ男の生理現象ですよ！？」

「う、うるさいうるさい！　とにかく早く着替えて学校来なさい！」

「あれ？　待ってくれないのか？」

「あ、あんたなんかを待つ理由なんてないんだからっ！」

「アーハイハイソーデスカー」

「棒読みすんなバカ圭介！」

そう言い残し、伊吹は俺の部屋から出ていった。しかも扉を強く閉

め、階段をドスドスと音を立てながら。多分家からも出ていっただろうな、まあ慌てて追いかける必要もないが。
その理由？んん……まあすぐわかるよ。とりあえず伊吹も行ったし、俺も起きて下に行くか。
……生理現象も丁度収まった事だしな。

「う～朝ごはん朝ごはん！」

今、朝ごはんを求めて全力疾走をしている俺は、初芝高校に通うごくごく一般的な男の子。
強いて違うところをあげるとすけば身体が異常に丈夫ってとこかナ

名前は藤島圭介（ふじしまけいすけ）……。

って自分でしておきながら言うのもなんだけど、なにさこのくそみそな自己紹介！
俺は嫌だよフットゥーに女の子のほうが好きなんだからね！
……やがてリビングに到着すると、そこから見える台所にまた一人女の子がいました。

「あ、お兄ちゃんおはよう！」

元気に笑顔であいさつをしてくる少女。
ショートカットにちょこんと可愛らしいサイドテールという髪はなんと水色、決して染めているわけではなく天然らしい。

不思議なものだ、俺の髪色は黒だというのに。
そして少女の髪には二つの小さな鈴があり、そこからは黄色いリボンが靡いている。

名前は藤島葵（ふじしまあおい）、ｙｅｓ・我が妹である。
同時に伊吹にも並ぶ極上の美少女であります――――

「おう、おはよう」

「ささささっ！　今日は葵が腕によりを籠めて作った目玉焼きがあるよー」

「……オイ、これ目玉焼き？」

「えっ？　そだよ」

「おかしいだろ！　どうして目玉焼きなのにイトミミズのような色してんの!?　ていうかこれイトミミズだよね!?」

「えっ？　んー、見た目だけだよきっと！　さぁお口へＬｅｔ’ｓＧＯ！」

嫌だ、こんなの食いたくない。
毎日の事とはいえ拷問すぎる。
だって見た目どう見ても下水道とかにいるイトミミズですよ。
そんなのを目玉焼きとして食えってどんな拷問ですか。

「ほらぁ、葵の特製目玉焼きぃ！」

「目玉焼きじゃない！　これイトミミズ焼きだって！」

ていうか赤いまんまだし、焼いてすらいないよね色的に。
嫌だ……俺は実の妹にイトミミズを食べさせられてしまうのか！

「はい、あ～ん」

「きゃあああああああああああっ！」

葵曰く目玉焼きであるらしい、イトミミズ焼きを葵は俺の口の中へ突っ込む。
その顔は無邪気で笑顔で悪気は全くなさそう。ああ、確かに葵は純粋な子さ。
純粋で優しくて、時々悪魔で――――

「……アレ、うまい？　ていうか味は目玉焼きだ」

「でしょでしょ！」

「……はぁ、一瞬マジでイトミミズ焼きかと思ってヒヤヒヤしたぜ」

「い、イトミミズなんてお兄ちゃんに食べさせるわけないよ！」

少し本気になって口答えしてくる葵は妹ながら実に可愛らしい。
ちょっとドキってきそうで……ってダメダメ。コイツは妹だ。
流石に現実の妹に手は出しませんよ。妹に手を出す……即ちヨスガるという行為は二次元だけで十分だ。

さて、葵のこのイトミミズ焼き……じゃなくて目玉焼きの話に移ろ

うか。
実はコイツの作る料理は意外とおいしい。ただし見た目が異常に悪いのだ。
この味噌汁に入っているゲジゲジみたいなのは、おそらくわかめだろう。ったく……どうしてわかめがゲジゲジみたいになっちゃうんだ。いくらなんでも見た目が悪過ぎだろう。
でもそれがなかったら本当にパーフェクトなお味。
逆に言えば、見た目の悪さを治さなかったらお嫁に行けないぞ、コイツは。

「お前なぁ……いくらなんでもひどすぎるぜコレは。マジで恋人できねーぞ？」

「いいもん、お兄ちゃんと結婚するもん」

そんな事を言いながら葵は拗ねている。
葵は超ブラコンなのだ。まあ俺的には嬉しいが、なんと現実なのにお兄ちゃんと呼んでくれるんだぜ。
こんな仲良し兄妹現実だと珍しいよね！……でも一応兄妹だし、一線を越える気はない。

「法的に無理だろ！」

「法の限界を超えてこそ真の愛なんだよ！」

「超えちゃダメでしょ法の限界は！」

「いいもん葵とお兄ちゃんの中だけでするもん！」

「妄想結婚かよ！」

「それにお兄ちゃんだって彼女さん出来ないジャン？」

「とりあえずおだまり！」

悲しい事に俺は彼女いない歴＝年齢……うぅ、頼む。誰でもいいから彼女になってください。

というわけで俺は絶賛彼女募集中だ。彼女をください……。

っと、その前に俺が恋しないとダメっすよね。まあ恋なんてそう簡単に出来るわけ――――

「それにお兄ちゃん今までの恋全部失敗してるじゃん」

「う、うるせぇっ！」

「ちなみにお兄ちゃんの初恋の相手は斎賀春香って名前だよね！」

「もうヤメテー！　俺のライフはとっくに０よ！」

葵ちゃん最悪や、俺の古傷に触れるだなんて……ううっ、悲しくなってきた。

ちなみにその斎賀さん、俺が告白しようと思った時にはイケメンに取られてました。

畜生、これだからイケメンは嫌いなんだ！

……俺だって、自分で言うのもなんだが、そこまで悪いツラじゃないハズなのに……うう！

「あっ、お兄ちゃん早く食べないと遅刻しちゃうよ！」

「お？　確かにそろそろヤバいな。さっさと食って学校行くぞ！」

「うん！」

……今日は5月2日。月曜日である。

世間ではゴールデンウィークというものらしいが、学生にとっては明日からがゴールデンウィークなのだ。

やれやれ、一日だけ学校があるとか面倒くさすぎる……。

俺はな、勉強嫌いだし学校も面倒くさいんだ。まあ行かなきゃ友達とも会えないし、そもそも高校くらい卒業しないと皆心配するし……。

面倒だけど行きますか。どうせ今日一日行ったら3連休なんだしさ、ハハハッ。

……しかし、この一日が人生の大きな分岐点になろうとは、この時俺は全く思ってもいなかったのだ。

第1話，まだ平穏だった朝の事（後書き）

始めましての方もそうでない方も、こんにちは！作戦参謀です！
以前活動報告で予告した通り、本日より新作連載開始です！
相変わらずのド素人でありますが、今後ともよろしくお願いします！

さて、知っている人は知っている。
次回より後書きを使って登場人物の紹介をしていきたいと思います！
……と、言いたい所なのですが。実はアレ、ネタバレになるんじゃね？と最近ふと思いました。というわけで、もう少し物語が進んでからそれをやりたいと思います！
代わりに次回からは後書きを使って、どうでもいいような後書きトークコーナーをやろうと思います！

今後ともよろしくお願いします！

第2話，はいはいピンチピンチ

古宇坂市。とりあえず電車で東京に行ける距離にある、人口約１３万の都市だ。
人口はやや増加傾向であり、俺や伊吹はこの古宇坂市の住宅街にあるとある一軒家に住んでいる。
我が藤島家は俺と妹の２人暮らし。というのも親父は仕事で滅多に家に帰ってこないし、母さんも滅多に帰ってこないし……。
というわけで事実上兄妹の二人暮らし。オマケに家事は葵に任せている。
ご飯の見た目が悪いことを除けばごくごく普通だし、文句はご飯の見た目がグロテスクだって事以外は特にない。あとたまに伊吹が葵を監視してくれてマトモなご飯が出てくる事がある。
それはもう、普段あんなものを食べているせいか、御馳走に感じるんですぜ。

……ていうか、今俺と葵は家を出たのだが、どういう事でしょう。

――――先に学校へ行ったハズの伊吹さんが家の前の電柱によっかかり、俺から顔を逸らして待っておりました。まるで一昔前のアニメにいたツンデレヒロインのように。

「な、なによ……っ？」

「先に行ったんじゃなかったのか？」

「あ、あんたを待ってたんじゃない。葵ちゃんを待ってただけよ」

ぷいっと顔を逸らし、不機嫌そうにおキツい言葉を口にしている。
確かに俺なんて待つ価値もないのかもね。
本心じゃないとは思うけど。いや待て、本当に嫌われているかしれないぞ。
今朝だって思いっきり鳩尾に踵落としされましたからな。

ちなみに葵と伊吹も幼馴染、葵は伊吹の事をお姉ちゃんと呼ぶほど伊吹を慕っているようだ。

「お姉ちゃん、そういうのツンデレって言うんだよ」

「つ、ツンデレじゃないわよ！」

ああ、それは正解だと思う。
確かに伊吹は素直じゃないさ。
でもツンの後ろにデレがない、そう……コイツにはデレがないんだ。
というわけでコイツはツンデレじゃない……と思う。
ツンデレじゃなかったら何か。そう、俺はおバカな頭で必死に考えました。

――――デレのないツンの事を何というか！

「そうだぞ。伊吹はな、ツッパリだ！」

「何か一昔前の不良みたいになってるけどわたしは不良じゃないわよ！」

「デレがないけどツンツン突っぱねてるだろ？　ほら、略してツッパリ！」

「略になってない！」

まあ、そんなわけでツッパリ少女国宗伊吹。
はたしていつデレるのだろうか？
……って、ギャルゲーじゃないんだし。そう簡単に幼馴染がデレるわけがない。
増してや伊吹はデレ無きツンツン突っぱね、略してツッパリだぜ？

俺の幼馴染がこんなにデレるわけがない。

「ていうかこんな所で立ち話してる場合じゃないよ！　遅刻しちゃうよ！」

「えっ？　あ、やべぇっ！」

確かに現在時刻は８時２０分、学校は近いのだが流石にそろそろ行かないとまずい。
学校が始まるのは８時３５分からなのである。
歩けば１０分、今行けば到着するのは５分前だ。

「ほら圭介！　ぼけっとしてないで行くわよ！」

「ちょ、いでででで！」

伊吹が俺の腕をぐいっと引っ張ってくる。
手を引いてくれるって地味に嬉しいかもしれないが、これは正直力が入り過ぎていて痛い。
しかも思いっきり走るンですぜ？痛いってコレ痛いって！
きゃあああぁ～っと叫びながら、俺はしばらく伊吹に引っ張られていた。

全く……やれやれだぜ。なぁ空条ショウ太郎。

○○県立初芝高等学校。
古宇坂市の文京地区、閑静な住宅地に存在する県立高校、通称『初高』。
中々伝統のある学校で偏差値も高め、ぶっちゃけ言うと俺はここに無理して入ったんだ。
理由？ああ、伊吹と離れるのが嫌だった……ってのは内緒だからな。
でも無理した結果が校内でも最低クラスの成績だよ！
……まっ、公立高校だし、いくら馬鹿でも余程の事がない限り、退学させられたりはしないハズだ。

制服は男子は学ラン、女子は少しピンクっぽいブレザーにチェック柄のスカート。
最もかつては女子もセーラー服だったが、元々ここ初高は男子校だった為、女子率が必然的に低かった。
ところが最近女子の制服のみ可愛らしいデザインに変更され、周辺中学の女子に制服で選ばれ、その結果ついに今年男女比がフィフティーフィフティーになったのだ。
俺もね、女子が増えて嬉しいんだ。藤島はうれしくなるとついやっちゃうんだ。らんらんるー！

……まあ、授業風景はどこにでもありふれた学校だし、ここでは割愛しよう。

「では、本日はこれで終わります。さようなら」

と、ありふれたセリフを言う頭がハゲかかった中年教師は乙坂隆一（おとさかたかいち）。我がクラスの担任さんなのである。正直地味すぎるし、現文教師だけどテンポが悪くて人気もない……。

「あぁぁぁぁ終わったぁっ！」

「やれやれ、６時間授業はやっぱり長いな」

「ったく～。僕は小学生がうらやましいぜぇ」

「どうせなら幼稚園時代に戻りたいね。遊んでばかりで気が楽だよ」

ＳＨＲが終わり、皆が帰り始める。中にはこの二人の馬鹿野郎共のように友達の所に集まる者もいる。

ちなみに伊吹も同じクラス、だが伊吹は女友達のほうに行ったようである。あと葵は一年生だ。

さて、俺の所に来た野郎二人。片方の一人称が僕なわりには口が悪い男は長宗我部大吾（ちょうそがべだいご）。黒髪ツンツンに眼鏡というシュールな見た目と、無駄に名前が長い事。

「もう帰んべぇ圭介ぇ。ついでに漫画買って帰ろうぜ？」

そして完全二次元派として有名な男である。

俺以上のオタクだ、流石の俺も彼女が欲しいし完全二次元派ではない。

「じゃあ俺も混ぜてくれ。ちょうど神のみの１２巻が欲しいからね」

「ＯＫ、んじゃあメンバーな広ちゃんと圭介な！」

そしてもう一人の爽やかな男のほうは重原広敏（しげはらひろとし）。

爽やか～と思って近づけばコイツ、かなりデカい。

しかも体育の時に見たがかなり筋肉質な身体を持っている。

何故かと思えばコイツ、『無差別格闘重原流』の跡取り息子で武道家なのだ。

要するにこのメンバーでは喧嘩最強ってわけである。最も喧嘩するような柄ではなく、どちらかというと爽やか系である。実に見た目とのギャップが激しい。

「悪いな大吾、俺は帰る！」

「えぇっ！？　マジで圭介、あぁわかったぞ！　お前どうせ国宗か妹だろ！」

「残念、両方であります！」

……という保証もないのだが、まあ多分かなりの高確率でそうなるのだろう。

「……ふん！　僕は全然羨ましくない！　だって二次元に嫁がいっぱいいるから！」

「流石の俺も、大吾ほどのオタクにはなりきれないね」

「重原に同意だぜ、完全二次元？　無理やろ！」

「無理じゃない！　むしろ現実女でもイケる二人のほうが、僕から

してみればわけがわからないよ！」

いや、絶対おかしいのはアンタだ。
俺の人生の中でアンタ以上の変人は見たことがない。
大吾とは、そういう人物なのだ……名字も長いしな。

「ところで実際どうなんだい、国宗さんとは？」

「あぁ？　そうですねぇ。ツッパリ伊吹さんと付き合ったら逆ＤＶが怖くて怖くて」

「「ツッパリ？」」

おお、二人ともよくそこに突っ込んだ。
流石はｍｙフレンド。掴みは完璧でごじゃいます。

「ツンツン突っぱね、略してツッパリ！」

「その発想はなかった！？」

「略になってない気もするけど藤島にしてはうまい！」

「と言う訳で以後、彼女の事はツッパリ伊吹ちゃん――――」

と、その時。伊吹の肘が艦上爆撃機による急降下爆撃の如く、俺のドタマへと降ってくる。
気分はまるで、爆撃される空母ハーミーズだぜ。
確かに伊吹の肘打ちは正確で、それはそれは熟練した搭乗員が操る艦上爆撃機のようであった。
ドーンと鈍い音が響き渡ると同時に、俺は頭部に激しい痛みを感じ

ました。

「んぎゃっ！」

「ツッパリ言うなバカ圭介っ！」

「さ、さぁ～せん……っ」

「はぁ、圭くんも圭くんだけど伊吹も相変わらずだなぁ」

……と、そこで部外者ですよーと言わんばかりのそぶりで、ぶっきらぼうな姉御口調で俺と伊吹のデスマッチを観戦しているのは小坂亜紀（こさかあき）、伊吹の親友らしく俺の数少ない女友達の一人だ。

アンダーテールというこの学校では珍しい髪型の持ち主、またお胸につけた吉備団子はかなりのものである。そう、小坂の胸には夢と希望がいっぱい！……だと思います。

それに比べて伊吹は……まぁゼロじゃないんだけどね。

Bカップらしいよ。うん、なんで知ってるかって。もちろん、彼女が幼馴染だからさ。

その後の帰り道、俺は伊吹と並んで下校中である。予想に反して葵は俺の前に現れなかった。

おそらく、アイツも友達づきあいとかで忙しいんだろう。

そしてツッパリ少女伊吹さんは何故か背中に竹刀を背負っている。

「ところで伊吹、その竹刀はアレか。魔王バラモツに挑みにいくの

か？」

「ち、違うわよ！」

「気を付けろよ。バラモツ倒してもさらに大魔王ソーマがいるからな」

「黙れオタク！」

はいはいわかってますよ、コイツがちゃんと部活やってるって事くらい。

ていうか伊吹はとらゴンクエストやった事ないのか？

ダメだなぁ、国民的ＲＰＧですぜ。今度伊吹にもプレイさせてあげなければ。

「そういえば今日は早かったけど剣道部、今日はなかったのか？」

「えっ、うん……」

そうそう、こういうふうに普通していれば伊吹は可愛い。

それなのにツンばっかでデレがなく、ツッパリ状態な伊吹さんはもう……。

個人的にはいろいろと残念な幼馴染だぜ。

「でも竹刀は部室に置いておけばよくね？」

「なにいってるのよ。室内で練習できるじゃない」

「ちょ！？　器物損壊だぞ！？」

「はぁ？　……っ、別にあんたの家でやるわけじゃないのよ！」

「ならばよし！」

「爽やかにグッジョブするな！」

と、ムキになって俺の反応に噛みつくツッパリ伊吹。
仕方ないだろ。俺の家が伊吹の竹刀に破壊しつくされずに済むんだ。
それはもう超爽やかに朗らかにグッジョブをしたくなっちゃうＳＡ！

と、俺が調子に乗っていたその時。

「楓～っ！」

「きゃあぁぁぁぁぁっ！」

なにやら車道のほうが騒がしいな。
何事かと思って俺は車道のほうを見た。だがそこは思いっきり地獄絵図であった。
クラクションを鳴らし、ブレーキを踏んでスキール音をあげている一台のトラック。
その前方にはクマのぬいぐるみを持った幼稚園児と思われる女の子。
そして悲鳴をあげている女の子の母親と思われる女性。

まずいぞ、あのままだと女の子が轢かれてしまう。
よし、どうする。我が身を犠牲にしますか？

それとも女の子を見殺しにしますか？

後者はありえない。女の子の笑顔を守るのは男の務め、ならばこの選択肢……前者を選ぶのみ！

「ふっ！」

「ちょ、圭介！？」

伊吹が咄嗟に車道へと飛び出した俺を呼びとめる。
だが一度動き出した俺の足は止まる事なく、女の子のほうへと突き進んだ。
そして、トラックが少女を撥ねる前に俺は少女の所に到着。

「あぶねえっ！」

少々乱暴だが仕方ない、命を助ける為にはこうするほかなかった……。
俺は叫びながら少女を突き飛ばした。ふぅ……よかった、女の子は救われた。
トラックに撥ねられて、お見せできない姿になる事はなかった。

え、なんだって。俺は大丈夫かって？
そうだな、俺はだな……

「んぎゃあああああぁぁぁぁぁぁっ！」

「け、圭介っ！」

さっき少女がいた所にいて大丈夫なわけがないでしょうが！
予想通りの展開である。俺は女の子の代わりにトラックに轢かれたのだ。
あははは、地面に足がついている感覚がないや。見て見て～僕お空を飛んでるよぉ～。
血が口からドバドバ～って、ロケット噴射のように出ているよ～！
……って喜んでる場合じゃねえ！

「きゃあああああああぁぁぁっ！」

俺は叫んだ、激痛に耐えつつ空中で思いっきり叫んだ。
や、やばいですね。一体俺は何m飛行するのだ？
どう考えてもこの調子じゃあそこのアスファルトに落下しますよ。
痛いってアレ、絶対痛いよな。何十キロも出ている状態で隕石の如くアスファルトへ落下ですよ？
これで痛くない人なんていない、いや……むしろ死ねる！

「たぁ～しゅけてぇぇぇぇぇ～！」

お、落ちるぅ～！こりゃ流石に死ぬかもしれない！
そうだ、遺言言っとかないと。
え～っとなんて言おう？そうだなぁ遺言にふさわしい言葉……。
そうだ、俺の嫁の名前を思いっきり叫ぶというのはどうだ！
うむ、いかにその子を愛して死んだかよくわかるじゃないか。
ようし……そうと決まれば叫ぶぞ。落下する直前に！

3……2……1……！

「アズにゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」

ハァーハハ！最高に気持ち悪いぜ俺！
さぁてあとはアスファルトに直撃するのみ。
さよなら皆さん！俺こと藤島圭介は第2話で死亡しまぁぁぁ――――

――

「ごぶぅるぁっ！？」

おおゆうしゃよ、しんでしまうとはなさけない！
……などと言う事もなく、俺はトラックに轢かれたのにも関わらず、何故か生きていた。

……あたた、クソッ……滅茶苦茶痛い。
でも腕や足は問題なく動くし、よかったたぁ〜骨折はしていないみたいだ。
ふぅ……死ぬかと思った。いや、この体質がなかったら絶対即死だろ……。
トラックに撥ねられて無事な人間なんてどこにいるんだ。いや、俺は無事だったけど。
今朝も言ったような気がするが、俺の体は異常に丈夫に出来ているのだ。
ご覧のように俺はトラックに轢かれても生きている。

しかも骨折すらしない……まぁ打撲したせいかあちこち痛むんだけどね。
さらに傷の回復力も普通の人より早い。おかげで怪我してもすぐ治るんだけどな。
まあ考えようによっちゃあ便利な身体だよね。今みたいに女の子の命を救う事だってできる。
でもいっそ死んだ方が幸せだったかも……ああ、全身痛いザマス。
まさか死ねなくて苦しいという、通常味わう事のできない感覚を味わえるとは……俺の体どうなってんの？

まぁ生きてるならいいじゃん……だって？答えはＮｏ、痛くて動けません！
骨折れてないけど全身打ったら痛いじゃんフツー動けないじゃん！
ああ、きっともう少し時間が立たないと動けないであろう。
でもどうしよう？ここ道だし、車が走ってきたら……
いくら身体が頑丈だからって、二度も撥ねられたら流石に持たないぞ？

「あのー、大丈夫なのですか？」

「あ、あぁ……？」

その時突然聞こえた声、顔を上げるとそこには見知らぬ美少女がいた。
綺麗なベビーピンクのセミロングにピンと立ったアホ毛、琥珀色の目に色白で小柄な身体を持つ美少女だ。すげえ日本人離れしている……外国人かな。
でもその女の子は和服に怪しげな日本刀を提げているという、意味不明な戦国少女であった。

「……」

俺は何の前触れもなく現れた少女の、あまりの可愛さに見惚れてしまう。

そしてあまりの意味不明な装備に思わず絶句してしまった……。

第2話，はいはいピンチピンチ（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「オッス！　オラ圭介！　ワクワクすっぞ！」

伊吹「はいはい黙っときなさいオタク」

圭介「なっ！？　と、とらゴンボールは国民的アニメだぞ！？」

伊吹「興味ない人は興味ないのよ。少しは考えなさい！」

圭介「……この小説読んでる時点で皆オタクじゃね？」

伊吹「こらっ！　勝手に読者の趣味を決めつけない！」

圭介「というわけで始まっちゃいましたこの小説。読者の皆様、感想とかありましたらよろしくお願いします！　感想を送ると……なんと伊吹が脱ぐかも――――」

伊吹「脱ぐかこの変態っ！」

圭介「ごばぁっ！？　ちょっ！　し、竹刀はマズいって！　ぎゃあああああっ！」

※感想お待ちしております！

第3話，戦国系魔法少女

ここはさっき俺が倒れていた場所のすぐ隣にある小さな公園。
そう、俺は公園の前の道路に落下したのだ。
ここは比較的交通量も少ないし、そのおかげで二度も車に轢かれる事はなかったのだろう。
現在、俺はたまたま出会った女の子と公園のベンチに座っている。
しかも二人で。
普通に考えてこれは超嬉し恥ずかしハッピーなイベントなハズだ。

でも素直に嬉しくなれないのはなんでだろう。
やっぱりその、お腰に提げた日本刀のせいだろうか。
ていうかコスプレだよねそれ、本物だったら銃刀法違反っすよ。

「おっ？　ようやく首がマトモに動くようになった」

「大丈夫なのです？」

少女が首を傾げながら俺の事を心配してくれる。
小動物のように小柄でお人形さんのように華奢な身体、整った輪郭、本物の琥珀を見ているような瞳。
……なにこれかわいい、こんな可愛い生き物が地球上に生息していたのか。
だが、彼女は服の上から推測するに残念ながらぺちゃぱいだ。形すら無に等しいだろう。

ムフフ……お胸につけた二つの吉備団子はやっぱり美乳だよね！
と、勝手に美乳派の俺が脳内妄想してみる。

「あぁ。まぁ何度か撥ねられた事があるけど、今回は比較的軽傷だな」

俺はそんな可愛いらしい（ただし貧乳）彼女に見惚れていた。
しかし折角心配してくれているのに、ノーコメントは失礼極まりないだろう。
なので俺は現在の状態を正確に彼女に伝えた。

「撥ねられたって……な、なににですか？」

や、やべえ！
余計な事言っちまった、普通撥ねられたなんて言わねえよな。
……仕方ない、今更隠したって無駄だろう。第一空から降ってきたのだし。

「その……ひ、引くなよ？」

「絶対に引かないのです。正直に言ってほしいのです」

「お、おう。……トラックだ」

「もきゅ？　と、トラック……もきゅうううううっ！？」

もきゅっという可愛らしい叫び声を彼女は上げている。
しかし目を白黒させているし、これは驚いているのか？
……ハハッ、ですよねー。
トラックに轢かれたら普通死ぬもんね。おかしいですよねー。

「へ、平気なのですか！？」

「まあ信じられねえかもしれないっすけどね……」

「トラックに轢かれても無事……っ、間違いないなのです。この人がそうなのです！」

「ん？」

「あ、あの！　失礼ですがお名前は！」

「名前？　藤島圭介」

あ、ついノリで本名言っちゃったけど大丈夫かな？
……ま、まあ悪そうな子じゃないし、大丈夫だよな。
一瞬ここはジョン・スミスと名乗っておくべきかと思ったけど、別に本名でもいいや。

一方、少女はというと。

「……つ、ついに発見したのです！」

と言って俺を指差している。
う～ん、まず一言言わせてもらいましょうか。
なにがなんだかサッパリわかんねえっ！
俺とこの子は初対面なハズなのに、何故彼女は俺の事を知っているような反応をするんだ？

「もきゅっ！　でもでもホントにあの人の子孫なのでしょうか！？
あばばばばっ！」

「ちょっ！　よくわからんけど暴れるな！　落ち着くんだ、素数を数えるんだ！」

「もきゅーーーっ！　そ、素数でなんなのですか！？」

「頭悪過ぎだろ！」

まあ人の事言えるほど頭良くないんだけどな。
それでも57くらいまでの素数なら何も見なくても言えるよ。
でも教えるのも面倒だし、とりあえず素数はやめ！
俺が自力で突如慌て始めた、この意味不明少女を落ちつかせよう。

「ようし！　数を数えようか、おっぱいが一つ！」

「おっぱいがふた……ってなにを言わせるんですか！」

顔を耳のあたりまで赤く染め、突っ込みを入れる彼女。
やべえな、つい最近大吾の家で見た子猫ちゃんよりも可愛いらしい……っ。

やっぱり女の子って……最高だ！

「まあまあ落ちつけって。ほら、落ち着いたろ？」

「もきゅっ？　……あっ」

うむ、羊の数を数えるっていうのは昔からよくある事だ。
それをただおっぱいに変えただけだが、意外と人を落ちつかせるのに有効かもな。
まあこの子がもし伊吹みたいな子だったら、俺は今間違いなく殴り

飛ばされていただろうが。

「とりあえず落ち着いたか？」

「も、申し訳なかったなのです……っ」

よかったぁ、もしあのままの状態が続けば、近所のママンに変人カップルと誤解されそうだし。

そんな不名誉な渾名付けられたくないぜ。

そういえば俺、この子の名前聞いてないな。

俺は一応名乗ったんだし、それに俺の名前を知った時のあの反応……うん、謎だ。

でも案外どこかで会った事があるのかもしれないし、名前を聞けば思い出せるかもしれない。

「そういえば君、名前は？」

「もきゅ？　も、申し遅れたのです！　拙者、姓は木下（きのした）、名は暮葉（くれは）という者なのです」

一瞬、自分は坂上田村麻呂であると名乗るかと思ったけど、案外普通の名前だった。

というか可愛い名前だな。まあ見た目も小動物的で可愛いしな。

ただ……このコスプレは一体なんなのでしょうか？

一人称も拙者だし、もしやバジーナさん並の相当上級なオタク様なのではないでしょうか？

それにこの日本刀（多分モドキだよね？）が非常に気になる。

うぅ……き、気になるっ！

「あ、あのさ。今更なんだけどその恰好ってコスプレ？」

「もきゅ？　コスプレじゃないのですよ」

「……ああそうか！　仕事柄か！」

「そうなのです！」

「なるほどぉ～、こうみえて一流の役者さんか……って事は俺今撮影の邪魔なんじゃねえか？」

「そうそう、もう忙しいの何の――――って違います！　拙者は役者違うなのです！」

ノリがいい子だな。正直楽しい、お前みたいなヤツ嫌いじゃないぜ。
ていうかむしろお前みたいなヤツ好きだぜ俺は！
でもこの恰好でコスプレじゃない上に役者じゃないったら、マジで何だろうか。
ていうか年齢的に未成年だよなどう見ても。つーか高校生かすら微妙だ。
伊吹も背の順だったら前のほうに来るは、わりと小柄なほうではある。
だがその伊吹よりも、この子は小柄に見える気がするのだ。

「じゃあその恰好は何でございませうか？　ていうかどこの中学？」

「せ、拙者は中学生じゃないのです！」

「え？　すまん！　小学生だったか！」

「小学生でもないのです！」

「えっ？　まさか高校生……？」

「この世界だと年齢的にそうなる……と思うのです」

なんだか不思議な子だなぁ、でも高校生か。
もしかすると俺より先輩だったりして……ま、まさかね。
ここは現実だぜ。二次元ならアリだが、現実でロリ系な先輩がいてたまるかってんだよ。

「高校生かぁ。もしかして初高？」

「拙者、高校には行った事ないのですよ？」

「えっ？　もしかして中卒？」

「んん～、それも微妙に違うのです」

「マジで？　よし、単刀直入に聞くとお前のジョブは何？」

「拙者、秀吉公の子孫ににして魔法の国からやってきた魔法使いなのです」

「……」

……え～っと、とりあえず質問をしようか。
この場合どう反応すればいいんだ。腹ァ抱えて笑うのが正解でございましょうか？
まず魔法の国とかありえないだろ。そして魔法使い？

ハハハッ、日曜朝8時半のアニメじゃあるまいし。それと秀吉の子孫って戦国オタの小坂曰く、直系の子孫は完全に途絶えたらしいぜ。というか豊臣家自体が断絶したんだとか。

よくわからないけど、戦国オタの小坂がそう言ってたんだ、多分間違いじゃねえだろう。

とりあえずマジでどう反応すりゃいいんだ。そうだ、こういう時こそすばらしいセリフがあるじゃん！

「どうやら俺はエロゲの世界に入ってしまったようだ……！」

眉間に手を当て、妙にリアルな顔を作り、マジな感じで俺はそんなセリフを言ってみる。

「もきゅ？」

ハッ、しまった！

これでは俺が変人みたいでじゃないカ！

……いや待て、自分で秀吉の子孫にして異世界から来た魔法使いという、木下のほうが変人だろ。

え～っとだな、とりあえず……真面目な話をしますか！

「君メルヘンで面白いね！　今から特別にいい精神科を教えてあげるからゆっくり受診していってね！」

「も、もきゅーー！　拙者を精神障害者みたいに扱うななのです！」

「障害者手帳もちゃんと持つんだぞ」

「拙者は障害者じゃないのですよ！」

木下は俺に障害者扱いされたせいなのか、マジギレしていた。
確かに普通は怒るさ。でも木下がかなり変人な事には変わりないだろ。
大体いきなり魔法少女ですぜ。電波女って最近そんな名前のアニメが放送されてるけど、それに通じるものがあると思いますぜ。

「いや……いきなり秀吉の子孫とか魔法使いとか言われてもねぇ？
こう反応するしかないじゃん」

「事実です！　全部事実なのです！」

「そっか、じゃあせめて電波女にしておこうか」

「拙者は電波でもなんでもないのです！　全部ホントの事なのですよ！」

「って、証拠はあるのか？」

「しょ、証拠？」

「ああ。お前が秀吉の子孫であってかつ魔法使いだっていう証拠」

「しょ、証拠ですね。にゅふふ……目にもの見せてやるです」

目に物見せるってなんだろう。やっぱり胸部のダブルマウンテンかしら？
いや、でもねぇ木下って……どちらかというとマウンテンと言うよりは平野だよな。

で、冗談はここまでにしておいて、実際目にものって何だろう？
と、その時。木下は日本刀モドキ（？）に手を掛け、それを鞘から引っこ抜いた。
最初は素晴らしい出来の模型だと思ったが、どうも刃が鋭利かつ光っているし、もしやこれって……ッ！

「オイこれ本物じゃねえか！」

「もきゅ？　そうなのですよ、これは一期一振という豊臣家。今は木下家ですけど我が家に古くから伝わる名刀中の名刀なのですよ」

「はい質問！　貴女は銃刀法って知ってますか！？」

「もきゅ？　よくわからないのです」

「そうか、とりあえず簡単に銃刀法と言う物を教えよう。それ持ってると逮捕されるよ？」

「もきゅっ！？　そ、そうなのですか！？」

このマジな驚きよう、常識のないヤツだなぁ。
それとも銃刀法なんて法律知りませんでしたなんていうけど、本当は知っていましたという確信犯か？
いや、でも銃刀法なんて少なくとも日本国民なら誰でも知ってると思うんだけど。
とにかく、コイツが危なっかしいものを持っているのはわかった。

「でも一期一振ってそれ……本物？　レプリカじゃねえの？」

レプリカでも凶器である事には変わりねえけど。

「本物ですよ！　本物の一期一振なのです！」

「へースゴイネー」

「全然信じてないのですね……っ」

「俺は歴史苦手だからよくわかんねえけどさ、そういうのってレプリカが溢れてるもんじゃねえのか？」

本当に俺にはよくわからないけどな。

ただこういうものって物好きが多くて、粗悪なレプリカとか多そうなイメージがあるぜ。

……て言うか実際どうなのだろう。今度小坂に訊いてみようかな。

まあ、聞いたところですぐ忘れてしまうのがいつものオチだが。

「むぅ～、とにかくこれは本物なのです！」

「じゃあもう秀吉の子孫とかどうでもいいから、魔法使いだって証拠はあんのか？」

「それはもちろんあるのです！　特別にご披露してやるのです！」

ほおほお、実際にやってくれるのか。

それなら確かに口で説明されるよりも説得力があるな。

もしコイツの魔法とやらのせいで不可解な現象が起こったら、それはもう信じざるを負ないだろう。

「って、お前はどういう魔法が使えるんだよ？」

「四大元素の一つ、空気なのです」

「空気？」

「要するに拙者は風を操る魔法が使えるのです」

風かぁ、なんともまああありがちな能力……。
どうせアレだろ。トルネードを起こしますとかそんな感じなんだろ。
わかってるんだよ、とらクエプレイしたから魔法とかは学習済みだ。

でもだからと言って実物を見ないと信用できない。
さて、どうするんだろう。
出来ると言ったからにはすごいもの見せてもらわなければ！

「……ッ！」

おっ、木下の顔がやたらと真剣になった。
どうやらいよいよ魔法とやらをご披露してくれるようだ。

その時木下は強く一歩、地面を踏みつけた。
一見なんてことのない動作。学園都市の第1位ならアスファルトが粉々になるかもしれないが、普通の人がその動作をやったってただ音が響くだけである。
ところが木下の場合は違った。なんと地面に靴底が触れた瞬間……。

「ぎゃあああああああぁぁぁぁぁぁっ！」

何故か俺が地面から吹き上げてくる風に押し上げられ、ぶっ飛ばされたのであった。
ちょっと待て、何故俺が飛ぶ。そこは普通木下が風を利用して飛行する所だろ！

「あぁっ！　も、申し訳ないです！　ちょっと間違えてしまったのです！」

「間違いってレベルじゃねえええええぇぇぇぇっ！」

気分はアポロ１１号ことサターンＶ型ロケット！
空高く突きあげられた俺はとどまる所を知らない、あっという間に木下なんて点に見えるくらい高い所まで来てしまった。
オイオイ嘘でしょ、高々足踏みで地獄の飛行訓練開始ですか！
……あっ、上昇が止まった。まあ実際ロケットのように飛んでいく所まではいいさ。問題は着陸だよ、どうやって着陸すりゃいいんだ。人間様はなぁ、飛行機のように上手に着陸できねえんだよチクショォォッ！

「つんでれぇぇるがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！」

わけのわからない事を叫びながら重力に任せ、ひたすら落下する俺。
やがて俺の背中と母なる大地は激しく接吻を交わしたのだった……。
し、信じます……とりあえず魔法信じるからもうやめてぇーっ！

第3話，戦国系魔法少女（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「どうも、今回二回目ですねっ」

葵「お兄ちゃんお兄ちゃん！　今回葵の出番がないよ!?」

圭介「いや、仕方ないだろ。一応出会いなんだし、重要部分だぞ」

葵「でもでも葵の出番がない！　お兄ちゃんとのラブストーリーなのに！」

圭介「この小説はそういう話じゃありません！」

葵「あわわっ！　お、お兄ちゃんが新キャラ寝取られちゃうよ……っ」

圭介「俺は誰のものでもねえわ！」

第4話，ここにいる理由、そしてツッパリ少女

「あ、ああ……ぐふっ……」

燃え尽きたぜ……何もかも真っ白にな。
子供達がきゃっきゃうふふと遊びまくる、平和な公園。
その公園に通常、クレーターが出来る事はないハズだ。
まあ意図的に穴を掘ったとかならわかるが、俺が言っているのは、本当に何かが落下した事によって出来たクレーターの事である。
そう、普通公園にそんなクレーターが出来るハズがない。
でも出来ちゃったんですよねー。

「もきゅーっ！　だ、大丈夫なのですか！？」

慌てふためきながら俺に寄ってくる木下。
ありがとう俺なんかを心配してくれて……でもね、一つだけ言いたい事がある。
それを今からハッキリ言わせてもらう。それはだなぁ……！

「てめぇのせいだろアホ！」

「うぅっ！　申し訳ないです……ッ、実は拙者魔法は苦手でして……っ」

なるほど、要するに有り余るパワーをコントロールできないのか。
そういうわけで自分が飛ぶつもりだったけど、俺がぶっ飛んじゃったわけね。

……って、オイ待て待て待て待てぇっ！

「全然笑える話じゃねえよ！　もし俺が丈夫じゃなかったら死んでたわ！」

今だけは自分のタフさに感謝するよ。
ありがとうお母様、貴女が俺をこんな丈夫な身体に生んでおかげで、俺は今も生きているよ！
というわけでお仕事頑張ってくれっ、お母様に敬礼。

「もきゅぅ、本当に申し訳ないのです……っ」

「ま、まあわざとじゃねえんだし。もういいよ気にしなくて、あと魔法の存在も信じてやる」

「ほ、ホントなのですか！？」

「あのなぁ、いきなり高度何千mもぶっ飛ばされりゃあ、信じるしかねえだろうが」

それで生きている俺も不思議だけど、足踏みしただけで高高度までぶっ飛ばすその力、絶対普通じゃない。というわけでコイツのいう魔法の存在を信じる事にした。
……というより、信じざるを得なかったのだろう。
だって今のをどうやって科学的に説明しろと？
足踏みしただけで普通高高度まで飛ばせるか？
まあ、頭のいい人なら疑問に思う事ができるかもしれない。だが残念な事に俺はおバカなのだ。
疑問に思ったとしても、それを科学的に説明できない……クッ、無念すぎる！

「ありがとうございます！」

「はぁ……でも魔法とかもう二度と人前では使うんじゃねえぞ」

バレてまずいとかそれ以前に危険すぎる。
下手すりゃ木下の失敗魔法のせいで死人が出るぞ。

「はい！　標的はちゃんと選んで魔法を使います！　というか拙者は基本的にこの刀で戦うのです！」

「標的と戦うって何ですか！　もしかして追っかけっこモドキでもやっちゃってんのか？」

「似たような事はしてるのですよ？　それ＋護衛任務なのです」

「護衛って……お前一人じゃん」

どう見ても守るべき対象がいないと思うんだが。
それにもしその対象がいたとしたら、コイツ護衛対象から離れていいの？
ていうか何から何を守るんだよ。あと戦うって……もしかしてコイツ、可愛い顔して極道？
う、ウソだよね……もし木下が極道なら泣いて土下座しますよ。

「もきゅぅ、護衛対象ならいるのですよ。拙者の前に」

「お前の前にいるって俺かよ。言っとくけど、俺は人生一度も殺し屋に狙われた事はねえぞ」

まあ伊吹を狙っている野郎共に妬まれ、時々絡まれる事はあったが……。
それも過去の思い出、今となっては懐かしいぜ。

「今まではなのです。でもこれからは危険かもしれないのですよ」

「なんで？　ていうか魔法は使えるわ銃刀法思いっきり違反しているわ、しかも追いかけっこに俺の護衛ってお前何者なんだよ」

「話せば長くなるです……っ」

「いきなりシリアスモードかい！　もっと肩の力抜こうぜ!?」

「むぅ～、でもホントに説明すれば長くなるのですよ?」

「ま、まあ出来るだけ手短にお願いします」

「……はいっ！」

そしてここから木下は、半ば夢物語というかブラックユーモアというか……。
とにかく危険な香りがプンプンしやがる話をし始めたのだ。

世界とはどうも一つではないらしい。

俺達がいる世界が“この世界”だとしたら、木下は“レムリア”という世界から来たらしいのだ。

その世界には、魔法がごく当たり前のように存在し、でも科学技術はこちらの世界と大差ないまでに進歩しているという、とてもシュールな世界なのだそうだ。

レムリアではかつて二つの大国が睨み合っていた。

一つは私有財産等を一切認めない総有主義を掲げていた“サヴィエト総有主義共和国連邦”。

そして総有主義の敵である資本主義を掲げた“ドメリカ合衆国”。

二国の冷たき争いは数十年にも及んだと言う……もうこの時点で色々危ないよね。

しかし２０年ほど前、貧困により苦しんでいた国民がついに蜂起し、サヴィエトは崩壊。指導者だった“アリーナ・ウラジミーロヴナ・レニナ”は失脚、それどころか封印されたのだ。

こうしてサヴィエトは国名を“ロジーナ連邦”とし、国民の生活も少しはマシになったらしい。

しかしつい最近、何者かがレニナの封印を解き、解き放たれたレニナはかつての部下と一緒に“この世界に”漂着し、“サヴィエト亡命政府”を樹立させた。

そして“この世界”の人間をうまくコントロールして魔法使い（サヴィエト側称号魔術師）化し、赤軍を編成した。

赤軍は異世界で戦力を蓄え、ロジーナの現政権を打倒しようとしている。

かつてロジーナは帝政だったらしい。その時みたいに倒されるわけにはいかないと、現政権はこの世界にて力を付けつつあるサヴィエト亡命政府を打倒、関係者の拘束を決定。

その結果特殊部隊である“アルファ隊”が結成された。

アルファ隊の任務は関係者拘束と戦闘である。
木下は魔法は苦手だが、剣技が素晴らしい事。元を辿れば御先祖様はこの世界の住人という事で、精鋭アルファ隊に所属する事になったのだ……。

「って思いっきり東西冷戦じゃなイカ！」

「トーザイレーセン？　南北冷戦なのですよ？」

「そっちじゃ南北かもしれねえけど、こっちじゃ東西なの！」

いくら歴史苦手と言っても冷戦くらいなら分かるわ。というか冷戦とか世界の常識だろう。
しかもサヴィエトにドメリカ？
どっかで聞いた事ある国名ばっかじゃねえか！
新鮮なのは魔法があるって事、レムリアって世界の名前、サヴィエトの独裁者が女性って事だけだ。

「とにかく！　拙者達アルファ隊は、レニナの暴走を止めるのがお仕事なのです！」

「マジかよ……ってか向こうの世界でもお前が秀吉の子孫だって事、公認なんだな」

「秀吉とは言われなくても、キノシタ・サムライとは言われてるのですよ」

……未だに秀吉の子孫だって事に関しては、胡散臭く聞こえる。
いや、ぶっちゃけ言えば全部胡散臭いけど。
でも簡単に信じちゃう異世界人も異世界人だよね。
ていうか、コイツが秀吉の子孫だって設定本当にいるのか？

「あれ？　でもなんでレニナってのを捕えるのに、俺を護衛する必要あるんだ？」

「にゅふふ、正確には藤島家の人間全員の護衛なのですけどね」

「それ無理だわ、親父とお袋家にいないし」

「大丈夫っ！　そっちにもちゃんとアルファ隊の人が向かってるハズなのです！　拙者が護衛するのは藤島圭介さんとその妹さんなのです」

「仕事早ぇなオイ！　つかマジで俺らを護衛する理由は何！？」

ただでさえ先程の意味不明かつ長い説明のせいで混乱してるってのに。
護衛とかますます意味不明だよ。

「それも話せば長くなるのですが――――」

と、彼女が一番気になる事を説明しかけたその時であった。

「あー！　いたいたいやがったわね圭介！」

輝くように美しい銀髪のショート、風に靡く黒リボン。
紅く染まったツンとした瞳、とってもキュートな八重歯。
１５１ｃｍ（本人談）という、小柄なボディがその可愛さをさらに引き立てている。
――――そんな極上の美少女である伊吹が、公園の入り口付近に立っていた。

俺を探し回っていたせいか彼女の息か切れている、よっぽど必死に探してたんだな。

「よぉ伊吹、なんだか久々に感じるぜ」

「それはこっちのセリフよ！　あんた今まで何やってたのよ？」

「いやぁ～、トラックに撥ねられるわ高高度まで上昇して落下するわ、とにかくいい事なかったね！」

「自業自得でしょ！　でもっ……あの親子感謝していたわよ」

伊吹の表情が一気に柔らかくなった。
そうかぁ、あの助けた女の子とその母親は喜んでいたのか。
身体を張った甲斐があったぜ。やっぱりいい事した後は気分がいいな。
……まあそのせいで死にそうな目に遭いましたけどね。

「そっか、でもごめんな心配かけて」

「っ……あ、あんたどーせ身体丈夫だしっ、心配なんて別に……っ」

そうは言っているが、伊吹はやや俯きながら顔を赤く染めている。
これってアレかな、照れてるのかな？
ツッパリ伊吹ちゃんもたま～に可愛いから困る。

「あれっ？　そういえば圭介、その子誰？」

「コイツ？　倒れていたらたまたま遭遇した電波だけど？」

「電波じゃないのです！　拙者は木下暮葉なのです」

「って、圭介っ。どういう関係？」

何故それを拳を握りしめながら笑顔で聞いてくる！
なんだかそれ滅茶苦茶怖ぇよっ！
ヤンデレ程じゃないにしろ十分恐怖を感じるレベルだ！

「だからさっき出会った電波だって」

「もきゅー！　電波じゃないのです！」

「……っ。な、ならいいわ」

「あ？」

「……っ」

なに不機嫌になってるんだろう伊吹のヤツ。
まあ不機嫌なのはいつもの事だけどさ、コイツも女の子なんだから出来れば笑顔でいて欲しい。
そうそう、この戦国系魔法少女の電波木下さんのようにな。

それにしても、なんだかあのトラックに轢かれてから、ありえねえ事ばっかり起っている気がする。

ていうかそろそろ帰ってゲームしたいっす……。

第4話，ここにいる理由、そしてツッパリ少女（後書き）

後書きトークコーナー

大吾「ところで作者の前作の主人公の名前は藤沢巧」

圭介「誰だよそれ……っ」

大吾「まあ知ってる人は知ってるさ。で、お前は圭介だ」

圭介「その藤沢って人と俺がどうしたんだよ？」

大吾「巧と圭介。漢字を変えると拓海と啓介……つまり、二人はライバルだったのだぁぁぁっ！」

圭介「な、なんだってーーーーーっ！？」

大吾「というわけで、この関係性から考えるに次回作の主人公の名前は、漢字まではわからないけど、多分りょうすけという名前だ！」

圭介「……つか、この作者来年受験生だよね？　まだ書くつもりなのかな？」

大吾「次回作は頭文字Ｈ！　ＨはヘンタイのＨだ……ッ」

圭介「マジかよ！？　すっごくムフフな臭いがするぜ……っ！」

伊吹「あんたらデマ流すなぁ～！」

※頭文字Hなんてそんな……タイトル的に危なっかしいのでやりません！

第5話，こんな序盤にして究極の選択！

それから数十分後の事である。既に空は茜色に染まっていた。
あのトンデモ戦国系魔法電波少女。暮葉に、どうして俺を護衛するかを聞きだそうとしたんだ。
ところが途中で警察が現れ、一目散に逃走していった。
まあ普通刀持ってる人がいたら捕まえるよね。
その為、どういうわけなのかサッパリわからず現在に至る。
現在、我が藤島家の前。今から伊吹と別れる所である。

「じゃあ、また今度な」

「ふんっ！　か、帰るなら早く帰りなさいよ！」

「……」

相変わらずツッパリな伊吹ちゃんだ。
デレたらツンデレに進化するが、やっぱり伊吹はツッパリのままか。
はぁ～、いっその事デレねえかな。
……と、言いつつも別に伊吹に恋愛感情があるわけでもなく、実際そうなったらどうなるかなんて俺にはわからない。まずそんな事はないとは思うけど。

「な、なにジロジロ見てるのよ……っ、寂しいの？」

「違うっすよ、じゃあな」

「あっ……う、うんっ」

何故か急に気を落とす伊吹……ま、まさか伊吹にもとうとうデレ期が！

……ンなわけないか。大体さっきそれはないって思ったばかりだろ。

さて、予想外の出来事でいつもより遅くなったし、帰ったらきっと葵がいるだろうな。

とりあえず今日の晩御飯はなんだろう。ウミケムシ焼きだったら泣きますよ俺。

そんな事を思いつつ俺は家の扉を開け、ｍｙホームへと足を踏み入れた……その時！

「お兄ちゃんっ！」

「ぐはぁっ！？」

その時、葵がいきなり俺の懐へと飛び込んできたのだ。

クソッ、俺だからよかったけど、これ普通の人なら大変な事になってるぞ。

この時ばかりは自分のタフさに感謝するよ。

「お前！　今の攻撃は俺じゃなかったら耐えられねえよ！」

「お兄ちゃん以外にはやらないもん！　愛情表現なんだよ！」

「そんな特別扱いクソも嬉しくねえし、そんな愛情はいらねえ！」

「それよりどういう事なの！　お兄ちゃんを探し求めて、うちに女の子が上がり込んで来たんだよ！」

「マジで!?　女の子の特徴は!?　できればスリーサイズをお願いします!」

ははははっ、ついに俺にもモテ期が到来したか!
今までの恋愛は0勝3敗0分の惨敗、理由は大抵相手に彼氏がいたからだ。
だが今回は違う。あえて向こうからいたいけな美少女が来てくれたのだ。
美少女かどうかはまだ顔見ていないからわからないが……美少女だという方向に賭けます!
とにかく一緒に一度のチャンス、俺はこのチャンスを逃さない。絶対家にやってきた彼女を攻略してみせますわよ!

「どうして、お兄ちゃんはいつも話がえっちな方向に行くの!」

「許せ葵……男ほど可哀想な生物はいねえんだよ」

「た、大変だね……って違う!　それより早く来てよ!」

「うおっ!　いでっ!　手首引っ張るなって、軽くトラックに撥ねられてきたんだから!」

「えぇっ!?　だ、大丈夫なの!?」

俺がトラックに轢かれたというと、葵の顔が一気に青ざめた。
なるほど、今度から葵を黙らせる為にトラックネタを引っ張るとしよう。
最も今日リアルに引かれた俺としては、正直もう二度と経験したくない出来事だが……。

「おう！　骨も折れてないし、全身元気だぜ！」

「骨は平気でも下半身は無事なの！？　葵すごく心配だよ！」

「……お前も十分変態だよな」

「えへへ、褒められた」

「褒めてねえよバカ妹が！」

まったく、どいつもこいつも変態だから困る。
俺も地味にそうかもしれねえず、少なくとも葵ほどじゃねえ。
とりあえず葵の暴走は俺が止め、俺の暴走を伊吹が止める……いつのまにかこういう図が完成しているのであった。

「それより早く！　お兄ちゃんの知り合いかもしれないんだよ！
これは藤島家の危機だよ！」

「危機に陥っているのはお前だけだろ……ったく～、仕方ねえな」

どこのどいつか知らないが、とりあえず葵がしつこいし会いますか。
……ていうか会いたいです。だって相手は女の子らしいぜ？
男の俺としては夢がひろがりんぐだよ！

しかし俺のその幻想はリビングに入った瞬間、瞬く間にぶち殺されたのであった。
何故なら、リビングにいた俺を求めてやってきたという少女は……。

「あ、お帰りなさいなのです」

「なんですかその不気味な奥様キャラは!?　つかてめぇ一体我が家でなにやってんだ!?」

何故か木下暮葉がリビングでお茶を飲み、寛いでいたのだ。
しかも床には日本刀を置いている。
警察から逃げ切れたんだな。でも将来指名手配とかされそうだぜ。
あと、こんな意味不明な秀吉の子孫気取りのヘンテコ魔法使いかつ、電波娘が押し掛けてきたって。
……あんまり嬉しくねえぞ。てか今はそんな事どうでもいい。まずなんでコイツが我が家にいる？

「なにって、今日から拙者この家でお世話になるのですよ？」

「……え～っと葵さん？　意味不明っすね」

「さっきから何度言ってもこの調子なんだよ。お兄ちゃんなんとか言ってよ！」

「お、おう！」

とりあえずまずは事情を聞きだそうか。
いきなりこの家で寝泊まりするというくらいだ。それも、彼女と俺はさっき会っただけで、それほど親密な仲だというわけではない。
むしろ俺としてはあまり関わりたくない……。
だって、日本刀持ってるし若干オカルトに走ってるっぽいんだぜ？
でも本当に何故、その程度の仲でしかないのに俺の家に泊まるつもりなんだろうか。
何かしらの理由はあるハズだ。つーか理由聞かなかったら何も始ま

らないよね。

「んで、お前はなんだって急にうちに泊まる事にしたんだ？」

「実は拙者、リーマンショックのせいで……っ」

「ウソつけ！　お前にリーマンショックなんて関係ねーだろ！」

つーかどうして異世界から来た魔法少女（？）が、リーマンショックだなんて言葉知ってるんだよ。
色々とおかしいだろうが。

「はい、ウソなのです」

「アッサリ認めやがった！　……つか、本当の理由はなんだよ」

「はい、これ」

「あぁ？　……お、親父から？」

突然と木下から手渡された謎の手紙。
送ってきた人の名前は藤島浩介（ふじしまこうすけ）、俺の親父の名前だ。
親父から俺宛ての手紙。開封して中身を見ると、そこには我が目を疑う文章が記されていた。

“拝啓、新緑が目にしみて青葉若葉のさわやかな季節、風薫る五月となりました。圭介と葵の二人にはますますご清祥のことと存じます。さて、二人の下に一人の女の子がやってきたと思いますが、その子は知り合いに預かってほしいと頼まれたので、暫くお二人と共

に仲良く生活してほしいのであります。急な事で困惑されていると
は思いますが、どうかご理解とご協力をお願いします。それでは圭
介も葵も、そして暮葉ちゃんも自分は滅多に皆と顔を合わせる事が
できないのでありますが、どうかお元気にお過ごしください。敬具〟

「ふ……ふ、ふざけんじゃねえぞあのクソ親父ぃ～！」

しかもなんですかこの気持ちの悪い敬語!?
今までうちの親父が俺らに対して、敬語を使ってきた事があるだろ
うか。
新鮮だけどなんだかこの場合気持ち悪いぜ。つか誰だよ知り合いっ
て！
親父、テメェは浮気かなんかしてんのか。お袋にチクりますよコノ
ヤロー！

「と、いうわけで拙者は家庭の事情で、こちらでお世話になる事に
なったわけなのです」

えへっと言った感じに笑顔を浮かべる木下さん。
お前なぁ、笑顔なのはよろしいがどこか腹黒さを感じるぞ。
特にお前の事を　少しだけ知っている俺にはな。

「か、家庭の事情って……この手紙本物なんだよね？」

「はい！」

すげえよ木下さん、すっごい嘘ついてるのにその太陽のような笑顔
……もういろいろすげえ。

「お、お父さんに頼まれちゃったし、家庭の事情じゃ仕方ないよね……？」

「えぇっ、いいのですか！？」

「ちょっ！　葵、それマジなセリフかよ！？」

「仕方ないよ……葵だって悩んだけど、でもお父さん命令だし家庭の事情らしいし……」

「そ、そりゃあ確かに言葉は綺麗だが、命令だよなこの手紙……」

でも事情をちょこっと知っている俺としては、こんな手紙があっても納得できねぇ！

ていうか木下って確か、アルファ隊とかわけのわからん組織に所属していたよな。

一体コイツの仲間様は親父になにをしやがったんだ！？

……き、気になる。けど聞いたらやっぱり負けだよね？

いやでも、子供が父親を心配するのは当然だと思いますぜ。

でも葵に聞かれると面倒だし、後でとことん聞いてやる。

「せ、拙者！　勿論家事とか手伝います！　ですからその……お願いしますなのです！」

「お兄ちゃん……っ」

え～っと、これはアレですか。俺が決定しやがれって事ですか。

困ったぞ、この場合どういう選択をすればいいんだ？

選択肢は二つ、ふざけんな帰りやがれという選択。もう一つは好き

にしろという選択。
前者は前者で面倒、後者は何か後々色々巻き込まれそう……ああもうなんなんだこのエロゲー展開は！

面倒事を回避したいなら前者、木下を攻略するつもりなら後者。
だが俺はコイツを攻略する気にはなれない。でも前者を選択したら親父に超説教されるパターン……。

「……」
「……」
「……」

やべえ！俺のせいでいつもは明るいリビングに沈黙の空気が漂っている！
……お、おしっ。仕方ねえな。
親父に説教されるのは嫌だし、第一女の子を追い出すのも男としてどうかと。

大体木下の背後にはアルファ隊という、得体の知れない組織が……
もし反抗してみろ。
そんな場合には、俺は確実にアルファ隊という組織に……。

消　さ　れ　る　！

そんなＢＡＤＥＮＤ嫌だよ、俺まだ死にたくねえよ。
まだＰＣにインスコすらしていないゲームがあるっていうのに。
……だったら俺は、より安全そうなルートを選択するぜ！

「……す、好きにしろ」

俺は一言、顔を逸らしながら彼女にそう言い放った。

「ほ、ホントなのですか！？」

「いや、仕方ねえだろ！　流石に親父には反抗できねえし！」

あの親父普段は優しいが、逆らうとちょっと怖いんだよな……。
まあその話はいずれするとしようか。

「にゅふふ……ありがとうございます！」

笑った、今コイツ絶対笑った。
太陽のような笑顔、しかし何故か裏を感じてしまう俺。

ああもう、選択ミスったか？
もし嫌なルートに入っていたらどうしようか。

「……」

一方葵は木下居候を認めたハズなのにも何故か不機嫌そうであった。

……こうして我が家にトンデモナイ家族が一人、増えてしまったのであった……。

第5話，こんな序盤にして究極の選択！（後書き）

後書きトークコーナー！

小坂「圭くんなにやってるの？」

圭介「フッ、ギャルゲーだ！」

小坂「またぁ？　圭くんも好きだなぁ～」

圭介「当然、ちなみに戦国武将を攻略する腐女子向けゲーム売ってたぞ？」

小坂「ええ～！　戦国武将をそんなのに使わないで！」

＊＊＊一週間後＊＊＊

圭介「おはよう」

小坂「おはろー圭くん！」

圭介「あれ？　小坂がゲームなんて珍しいな。なにやってんの？」

小坂「戦国ＢＬ！」

圭介「……オイッ！」

小坂「や、やばいなっ！　伊達政宗イケメンだよっ！」

圭介「元の清潔だった小坂を返してくださいっ！」

※９０％はゲームを紹介した圭介の責任である。

第6話，オオカミさんとやらないか？

わけのわからん不思議な女の子、木下暮葉が居候を開始してから数時間後の事である。

まあ木下は予想通りハイテンションな子であった。
その為最初は不機嫌そうだった葵とも、いつのまにか仲良し小好しになっていた。
葵は『暮葉さん』と呼び、木下も葵の事を『葵さん』と呼んでいる。
ちなみに木下は俺と同い年らしい。つまり葵より一個上ということになる。
それなのに木下は敬語。意外と礼儀正しい子なのかな……と一瞬思ったが、それはナシだ。

それは一時間半前の出来事である。

「こ、これがＰＮＰなのですかっ！？」

「そーだよ。ゲーム最高だよ」

「どうやって食べればおいしいのですか！？」

「ＰＮＰは食べ物じゃないんだよ！」

……スマン、木下はただのアホの子だった。
葵もアホだと思っていたが、木下はその上をゆく。
すげえよ……登場時からアホの子臭がしていたけどさ、まさかあそこまでとは……。

でもなんだかんだ言って、アイツと葵は短期間に仲良しになった。
それはまあよかったと思うぜ。
一方の俺。木下から色々な事情は後で聞くとして、現在ＰＣで……。

『に、兄さん……っ』

き、キタキタっ！

遂に俺は……まふゆちゃんとのあーんなシーンの所まで辿りついた！
えっ、何をやっていやがるかですって？
俺は今“ねこ☆シス”という１８禁ゲーム、いわゆるエロゲーをプレイしていて……。
コラそこ、変態とか言うな！高校生がエロゲー持ってて何が悪い！

いやいや、エロゲーだからってナメちゃダメなんですよ。
確かにタイトルは結構ふざけている、絵も超萌え系だ。しかし話は普通におもしろい……というか後半滅茶苦茶感動する。バカゲーランキングでも上位ながら、泣きゲーランキングでも上位という異例の名作なのだ。だいだいソフトってマジ神ゲー作るぜ。絵もむりこぶで超可愛いしな。
さて、やっとの思いで辿りついてまふゆちゃんとのシーン……き、期待だ！

……と思った、その時であった。

「けーすけ様！　葵さんが呼んでるのですよ～」

「キィエエエエエエエエエエエエエエエエエッ！」

まさかの木下さん乱入、つーかどうして俺の部屋の場所を知っている。

ああそうか、葵だな。葵が教えやがったんだな。

つーか俺の事は様付けで呼ぶのね。なんでだろう……まあそれはいいとしてピンチだ。

とりあえず叫んだけどどうしよう……そ、そうだ。緊急回避！

確かこのボタン……よ、よし……緊急回避だ！

「もきゅ？　どうしたのです？」

「い、いやぁなんでもない！　発声練習だ！」

こんないたいけな女の子に、エロゲーやっていただなんてバレたら俺は……破滅だ！

……まあ緊急回避画面だから大丈夫だと思いますけど。

でも今の奇声は明らかにオカシイ。とにかく純粋な木下さんにバレないように！

「そ、それより葵の用ってなんだ？」

「はい、お使いに行って欲しいらしいのです！」

「ｗｈａｔ’ｓ　ｔｈａｔ？」

「もきゅ？　ですからお使いなのです」

コイツ本当に異世界人か？

確かに世界共通語だけどさ、どうして英語がわかるんだよ。
中学時代から勉強している俺は、日常会話のレベル3にすら達していないのに。

「そ、そうか……わかった。今下に行くからもう出ていってもいいぞ」

つーか出てってください！じゃねえと安心して部屋から出れません！
あんなもの同じ男である大吾や重原ならいいけど、木下暮葉という女の子には絶対見せられない！

「え、もしかしてけーすけ様、何かまずいことでもあったのです！？」

「えぇっ！？　な、なにもねえでございますよ！」

つーかなに！随分と食い付いてきたな木下のヤツ！

「ほ、ホントなのですか！？」

「なにもなかったっすよ！」

「……な、ならいいのですけど……」

あぶねえ、危なく本当にあった事を追及される所だった。

木下は心配そうに俺を数秒ほど見つめた後、ゆっくりと下に降りていった。
えっと、助かったって事でいいんだよな？

とりあえず、今回は緊急回避を実装してくださっただいだいソフト様……ありがとう！
アハハウフフなシーンは帰ってからだな。
それにしても葵の奴、こんな時間にお使いって一体なんなんだ？

……と、いうわけで俺は財布を持って家を出ると、“マックスバリュエ”という日本全域に展開するスーパーマーケットに向かった。
今日の晩御飯はカレー。まあ葵の事だ、外見は期待したら後悔するだろう。
そのカレーに使うハズのニンジンと玉ねぎ、そしてジャガイモがないのだという。
オイオイ、重要なもの殆どないじゃねえか。というわけで俺が買い物に行くことなったのだ。

「こんな夜中に買い物って……めんどくせぇ」

……実は最初、木下も一緒に行くとか仰いやがってたのだ。
だが普通に考えてみろ。和服&日本刀姿の女の子を外に出せるか？
一度はあの恰好のせいで警察に追われてたんだ、あんなの連れて行ったら俺まで不審者扱いだ。
とにかく、アイツには今後外出る時には日本刀を置いて行くよう、言っておかなければ。
あと洋服買ってあげたほうがよさそうだな。和服もいいんだけど流石にあの恰好で街を歩くと……。
間違いなく世間は白い目で俺達を見てくるはずだ。

……つか、やっとマックスバリュエに到着した。
この紫色の建物も、何年も前からここにあるせいか見慣れたなぁ。
と思ったその時である。丁度出入り口から見覚えのある人物が、ｍｙバックを提げて出てきたのだ。
その子は銀髪のショートヘアで、ツンとした紅い瞳とか八重歯が目立つ。なんとなく付けている黒いリボンがとってもお似合いな、そんな超がつくほどの極上の美少女だ。

「……あっ」

「あっ……」

どうやら、ツッパリ伊吹ちゃんは買い物帰りのようであった。

それから１０分後、買い物が終わり俺は自宅に帰ろうとしていた。
だけど行きとは違い、帰りの道にはツッパリ伊吹ちゃんの姿が隣にある。
何故でしょうか、伊吹は俺について来ているのだ。

「わ、私は別に圭介がいたからついてきたわけじゃないんだからっ」

と、いうのが彼女の言訳らしい。
まあ、伊吹はツンデレじゃなくてツンツン突っぱね、略してツッパリなのでデレには期待しない。
ツッパリになってしまったのにも色々事情はあるのだが、あまり触れたくもないし説明はしないでおく。

「ところで夕方のあの子、結局なんだったの？」

さて困った、木下が我が家に押し掛けてきた事言うべきなのかな？
伊吹は何故か学校がある日のみ、頼んでもいないのに俺を起こしに来るのだ。
ということはだな、金曜日の朝にバレてしまうかもしれない……。

「ん？　どうしたの圭介？」

「えっ？　いや、なんでもねえけどさ」

「ならいいけど……」

やけに今日は複雑そうな表情をするなぁ、何が原因だ？
コイツがこういう顔をちょっと心配になる……。

「お前こそどうしたんだよ。今日は機嫌が悪かったり元気がなかったりだけど」

「わ、私もなんでもないわよっ」

「だったら別にいいんだけどよ……」

だったらせめて少しでもいいから笑ってくれると俺も安心できる。
とにかく伊吹の複雑そうな顔を見るとすげえ心配になる。
怒ってるんならまだしも、マジでそういう表情は……。

「……藤島……藤島圭介だな」

「あぁ？」

その時、俺は人通りの少ない夜道で突然誰かに呼びとめられた。
よくわからん、でも背を向けるのは危険だよな。
……というわけで俺は振り向くが、そこにいたのは帽子にコートという、この季節としては少々厚着すぎる恰好をしている……。

「ぎゅふ、ぎゅふふ、ぎゅふるるる～」

そこにいたのは……。

「えぇっ！？　なんじゃこりゃ！？　ちょ、怖ぇっ！」

「けけけけ、圭介！　なによアレ！」

「知るかぁっ！」

「ぎゅふるるるっ！　がぉぉぉぉっ！」

なんということでしょう。狼男、狼男が奇妙な笑い声をあげていたのです！
え～っと何だ。どういう風にコメントすればいいんだ、このいきなりすぎる状況。
とりあえずだな……なんだこのありえない光景は！

どうせアレだ、アレは着ぐるみの変質者だ！
でも変質者が何で俺の名前を……ハッ！？

もしやコイツ……変質者な上にホモなのでは！？
嫌だよ、こんなオオカミ野郎に掘られるだなんて……そんな結末絶

対嫌じゃ！

「お、おい変質者！　な、何の用だこらぁ～！」

「圭介全然迫力ないわよ！」

「だって、初対面のヤツに名前言われたら怖ぇだろ！」

あたりまえだ。これで恐怖を感じないヤツは、相当の天然さんだろう。

「大丈夫怖くないよ怖くないよ」

狼男はそう言う、だけどそれってどう考えても不審者のセリフだよね。

そして、そんなんで恐怖心がなくなると思ったら大間違い。

「怖いわっ！」

「ぐんぬうぅぅぅぅぅぅっ！」

「「えええぇぇぇぇぇっ！？」」

その時、狼男が脱皮した。

もっとわかりやすい表現で言おう。いきなり筋肉ムキムキになって上半身が裸になったのだ。

なんということでしょう。毛で覆われていながら、胸板や腹筋が見事に目立っている。

すごいよオオカミさん。あなたすごい筋肉！でもね……冷静に考え

てこの状況おかしくない？
そういうわけで俺と伊吹は、ありえない光景を目の当たりにし、同じタイミングで叫んでいた。

「悪いが藤島圭介、狩らせてもらう！」

「お、俺の童貞はもしかして……オオカミさんに奪われちゃうんですか！？」

「違うわ！　そういう意味じゃねえ……とりあえず狩らせてもらうぞ！」

なんか怖ぇ、爪立ててるし物凄い殺意を感じるんだが……。
よくわからないけど、こういう場合って警察に通報すべきなのかな？
それとも猟友会、いやいや保健所、待て自衛隊のほうがいいかな？
でも今更通報しても遅いか。やべぇっすよこれ、まさかのチェックメイト？

そもそも事情が分かるヤツ、今すぐ俺の目の前に来い。
そしてどうしてこうなったか説明してくれ！

「ガオオォォォォォォォォォォォォッ！」

き、来たぁぁぁぁぁぁ～！
オオカミさんが獲物＝俺を狙ってダッシュ。これはいかん、俺大ピンチや！

「はぁっ！」

もうダメだと思った……その時。

オオカミさんの攻撃は以外にも、伊吹によって防がれた。

……俺の目の前には角材を持った伊吹が立っていたのだ。なんとも勇ましい、そして俺情けねえ。

おそらく角材はそこのゴミ箱に入っていたものだろう。

伊吹は鍔迫り合いの構えだ。流石は剣道部、今や部長を抜いて一番の実力の持ち主。

伊吹は剣道の技を使えば滅茶苦茶強い、多分不良3人くらいならアッサリであろう。

「がぉぉっ！？」

「何ビビってるのよ、圭介」

「ちょ、伊吹っ！？」

助けてくれたのはありがたい。だが何やってるんだコイツは。

明らかに相手は危ないヤツだろ。剣道の試合の相手じゃねえってのに……ッ！

「私、竹刀以外で剣道やった事ないのにっ。早く構えなさいよ！」

「う、うるせぇ！　ちょっと攻撃されたくらいだったら俺は平気なんだから、別にお前が出てこなくても！」

そうだよ、トラックに轢かれても無事な俺だぜ？

オオカミさんに攻撃されたって、一撃くらいなら多分耐えられるハズだ。

だから伊吹が身を危険に晒してまで、出てくる必要はなかったんだ。

「ぎゅふるるっ！　まさかこの俺の拳を……女子（おなご）が受け止めようとはな！」

「っ！　あ、あんた何者よ！」

「ぎゅふふっ！　俺の名前はヴォルコラク、魔族なんだそぉ～ぎゅふるる！」

「ありえねえだろ！　つーかテメェ、さっさとその拳引いて伊吹から離れろ！」

「いいだろう……ただし、藤島圭介。貴様を狩ればの話だ！」

「いや、意味がわかんねーよ！」

大体なんで俺達、こんなオオカミ野郎に狙われてんの？
つか狩るって……殺す的な意味で……なのか？
まさか性的な意味だったら……嫌だよ！
とにかく、俺はこんなヤツになんか狩られたくねえ。そんでもって伊吹を傷つけたくねえ。

「そうか、事情は後で話そう……だが従わないのであれば俺も手段を選ばん……がるるっ！」

「くっ……ゃッ！」

その時、オオカミ野郎は伊吹から角材を奪いやがった。
伊吹は女の子の中でも握力のあるほうらしく、さっきの角材だってしっかりと握っていた。
あれが竹刀ならもっとちゃんと握れていただろうが、それでも角材

はしっかりと握られていた。
それなのに、あのオオカミ野郎は軽々と角材を伊吹の両手から抜き取ったのだ。己の腕力のみで。

「がるるるるっ！　言う事を聞かなきゃこいつでこの女を撲殺する！」

「くっ……っ！」

伊吹は迷わず、ゴミ箱に入っていたもう一本の角材を手に取ろうとする。

「がるるっ！　遅いっ！」

「うぅっ！」

だがしかし、ヴォルコラクはそれを阻止してしまう。
ヴォルクラクは角材を振りおろし、伊吹が手に取った角材を無理やり地面に叩き落とす。
しかもその時の衝撃のせいか、伊吹は右手首を痛めてしまったようだ。
見ているのが辛い、苦しそうな表情で手首を押さえている。

とても痛そうに……伊吹が……。

「ぎゅふふっ、魔族ナメてんじゃねえぞぉ？　ぎゅふるるっ」

……あの野郎ォッ。
どうしてこうなったかよくわかんねえけど……伊吹を傷つけやがって。

「伊吹！　……チッ、てんめぇっ！」

俺はゆっくりと拳を構える。
拳を握った時にパキパキと、指の関節が鳴る音が響いた。
相手は奇抜だけど、殴り合いなんて久しぶりだな……。

「ぎゅふる？　なんだぁやる気かぁ？」

「け、けい……すけっ？」

「俺だったら好きにすればいいだろ……だけどな、伊吹には手ぇ出すんじゃねえよ！」

久々に心の底から怒りがこみ上げてくる。

「ぎゅふ、いい覚悟だ藤島圭介。いいだろう、一撃で沈める」

オオカミ野郎は角材を投げ捨て、俺と同じように拳を構えた。
すげえ……パキパキどころかバキバキって音がしやがった。
それにこの気迫、なんとなくだけどアイツ素人じゃねえかもしれねえ。

……けどな、俺だって　とある事情により、喧嘩の経験は少し他の奴より多いんだ。
テメェと同じでズブの素人ってわけじゃねえんだよ。
それに俺は身体が丈夫だ。ちょっと打ったぐらいで倒れると思うなよ。
俺はそんな簡単には……。

「……やられねぇっ！」

互いに地面を蹴り、間合いを詰めた……その時！

「がるぅぅだぁぁあうぁうぁあおうあぁっ！」

「……えっ？」

突然オオカミ野郎の後ろを駆けた謎の影、断末魔の声をあげるオオカミ野郎。
その一瞬の出来事の直後――――

「がぁぁぁぁうぅあぁぁぅぁ……」

オオカミ野郎の背中からは、血がまるで火山でも噴火したかのように噴射していた。
血飛沫がビチャビチャと路面に染み込み、血の匂いがあたりに漂う。
そして、オオカミ野郎は力尽きたように地面に倒れ込んだ……な、なんだよコレ、何が！？

「ふぅ……遅くなったのです、けーすけ様」

「お、おまっ！？」

「あっ……あんたは……っ！」

そこには既に刀を鞘に入れ、先程とは違う真剣な表情をして立っている、木下暮葉の姿があった。

しかも斬られたオオカミ野郎。ありえねえ事にその遺体は次第に虹色に発行し、パキンと割れるような音がした後に小さな粉末状の光となり、やがて消滅していったのだ。

……ありえねえだろ。とりあえず、誰か説明してくれぇっ！

第6話，オオカミさんとやらないか？（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「やあ、遅くなった！」

重原「いつも通り0時に更新しようと思ったら、作者がぶっ倒れちゃったらしいからね」

圭介「全く、たかがちょっと歩いたくらいでダウンとか、どんなひ弱な作者だよ！」

重原「まあまあ、作者だって人間なんだからそれくらいにしておこうよ。それに圭介だって大きなミスくらいあるでしょ？」

圭介「えっ？　俺まで作中で重大ミス犯しちゃうの？」

重原「それはネタバレだから言えないね。とにかく人生何があるかわからないものなんだよ」

第7話，藤島家の秘密！？

あれから数分後、俺達は近くの公園に移動した。そこで木下は色々と説明してくれるらしい。
ちなみに伊吹も一緒だ。そりゃ当然、あんなものを見たら興味が沸くだろう。
あと伊吹の手首は大したことがない。
冷やして安静にして、帰ってから手当てすれば特に問題のないレベルだ。本当によかったですぜ。

現在俺と伊吹の前に木下が立ち、上から見るとトライアングル陣形という状態だ。
まず木下が伊吹に自分の事や、自分がやってきた世界の事、そして今ここで起っている事を説明する。
当然伊吹は困惑した。あたりまえだ、俺だって最初は信じられなかった。
……でも伊吹は案外信じるのが早い方であった。
と、言うのもさっきあんな事があったからであろう。
狼男に襲われ、その狼男は木下に斬られ、しかもその死体は不可解な消滅の仕方をしたのだから。

「圭介、あんたは……知ってたの？」

「えっ？　まぁ一応？」

正直信じたくなかったけどな。
でも、魔法とかいうわけのわからねえ能力でぶっ飛ばされりゃあね。
誰だって信じますよ。嫌でも信じざるを得なくなってしまうよ。

「それで、木下さんは」

「暮葉でいいのですよ！」

「じゃ、じゃあ暮葉はなんで圭介に付きまとってるの？」

突っ込み所そこかいツッパリ伊吹ちゃん。

まあ俺も気になっていた所だ。何故木下が俺の一族を護衛すると言うのか。

何故俺の家によくわからん手を使って居候することになったのか。

「それは……むかーしむかしのことなのです」

「なんか昔話になっちゃってるわよ」

「木下、手短にお願いな」

「はいなのです！　それとけーすけ様も暮葉でいいのですよ？」

「えぇっ？　で、でも」

いきなり女の子の名前を呼べってのも……正直恥ずかしい話だ。

「気にしなくていいのです。今日から一緒に暮らす仲なのですから！」

あぁコイツ、伊吹の前で禁句を言いやがった！

なんとか隠し通そうと陰ながら思っていた事を……。

まずい、俺の隣の伊吹がこっちを見て、笑顔で拳を握ってらっしゃ

る。
痛めていない左の拳を……こぇぇ、こぇぇぞ伊吹っ。
「圭介ぇ？　詳しく説明してもらおうかしらね？」
「ちょ～っと待った！　俺のせいじゃねえぞ、コイツが勝手にだからな！」
「どういう事かしらね、く・れ・は？」
伊吹が怒りの矛先を木下改め暮葉に変更した。
ふぅ……いや、まだ安心はできねえぞ。
そもそも伊吹さん、なんで俺の家に暮葉が居候しているからって、そんなに不機嫌なんだ？
「これから説明するのです。えっと……ロジーナは革命によってサヴィエトになる前は帝政国家だったのです。当然のように皇帝がいたのですが、革命によって帝政は倒され、皇室一家はほとんがレニナ率いる革命軍に殺されちゃったのです。しかしただ一人生き永らえた男がいたのです。その名はロジーナ皇太子アレクサンドル様。なんとか生き永らえた彼はここへと渡り国籍を取得し名を変え、現在もその子孫が生きているのです。もきゅもきゅ♪」
……え～っと、どこから突っ込めばいいのやら。
しかも、めでたしめでたしみたいに話を終わらせているが、結構エグい話してるよね。
つーか革命前は帝政って。マジで異世界レムリアは……もしかして並行世界？
いや、ありえねえだろ。魔法とかあるし。つーかこれって色々な意味で危ないネタじゃね？

しかもそれと俺を護衛する理由、全く関係ない気がするんだが……。

「それのどこが圭介に付きまとう理由になるのよ」

「伊吹さん鈍感なのですねっ」

「ちょ、鈍感って……私は圭介ほど鈍感じゃないわよ！」

「俺って鈍感なの！？」

「……っ、ふん」

伊吹はぷいっと俺から顔を逸らしてしまった……。
あのぉ～。伊吹さんいい加減機嫌直してくれ。
とりあえず、色々わけのわからん事があって機嫌が悪いのもわかる。
でも頼む、ここに居づらいから機嫌直してくれ。

で、暮葉は機嫌の悪い伊吹を放置し話を続ける。

「ほら、子孫って所に引っ掛からないのです？」

「はぁ、子孫って……まさかアレクサンドルが俺の御先祖様とか、そんなありえねーラノベ的な設定じゃねえだろうな？」

「ぴんぽーん！　大当たりなのですけーすけ様っ♪」

「「……はいっ？」」

あまりに予想外すぎる暮葉の反応に、俺も伊吹も目を白黒させてしまう。

神は言っている……。

オ　カ　シ　イ　と　！

「いくらなんでもありえねえだろ！」

「そうよ！　圭介はどう見ても日本人じゃん！」

「俺黒髪っすよ！？　肌はフットゥーに黄色人種的っすよ！？」

ロジーナ人って絶対白人だよね。
確かに葵の肌は若干白いけどさ、俺はどう見ても日本人だ。
でもロジーナの皇太子様という、由緒正しいロジーナ人の子孫なら……俺は白人のハズだ！

「それは多分このあたりの人の特徴なのです。でもけーすけ様は確かに。アレクサンドル様の子孫様なのですよ」

「う、嘘だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

「ちょ、嘘つくならもうちょっとうまい嘘をつきなさいよ！」

「なのでしたら、何故さっきの妖怪さんはけーすけ様を襲ったと思います？」

「へ？」

……あ、そういえば。

アイツなんて言ってたっけ？
確か俺の事を狩るとかなんとか……うん、普通に考えておかしいね。
俺にあんな意味不明かつメルヘンな、オオカミさんの知り合いなんていなかったハズだ。

「けーすけ様を捕まえようとしていたのですよね？」

「まあ……」

「そ、そうよね」

「それは何故だと思います？」

「知るかっ！」

考えてもどうせわからない、ならば早い話最初から知るかと言っておけばおk。
どうせぶっ飛んだ回答だろうが、暮葉が何か答えっぽいものを喋ってくれるだろう。

「あれは多分、サヴィエト亡命政府所属の者だと思うのです。サヴィエト亡命政府は拙者らロジーナの現政権と同じ時期に、何故かアレクサンドル様の子孫の存命を確認したのです。そしてどういう思惑かわからないのですけど、その子孫の中でも一番若い男かつアレクサンドル様の血が濃い、けーすけ様の身柄を狙っているのです」

「……一番血ぃ濃い俺がなんで日本人の見た目してるんだ？」

そうそう、そこからしてまず胡散臭い。
だってねぇ、確かに襲われたけど俺どう見ても見た目は日本人だし。

何世か前まで外国人、それも異世界人でしてなんて思えない。
信じろっていうほうが難しいぜ。

「そこはまあぁよくわからないのです……もきゅぅ。でもとにかくこれは事実なのです。そして拙者達アルファ隊の目的は、現在藤島を名乗るアレクサンドル様の直系の子孫を守る。もっと厳密に言えば最も血が濃くて、連中のリストにも登録されてしまったけーすけ様を……お守りする事なのです！」

「ありえねえ……けど」

作り話にしては出来過ぎている。確かに俺達はあのわけのわからない狼男に襲撃された。
あの狼男は俺を狩ると言っていた。そして死体の消滅の仕方、アレは普通じゃねえ。
正直幻覚でも見ているかのようだった。でもおかしいのはその幻覚っぽいものを今日一中見ている事。
もしかして暮葉の言っている事って……ホントなんですかい？

とにかく、この件に関しては……。

「とりあえず考えるのが面倒になってきた、もうそれ事実って事でいいや！」

キラッ！

俺はそんな事を我ながら素晴らしい笑顔で言い放ちました。

「ちょっ！　圭介、考えるのをやめたらダメよ！」

「いいだろ別に？　第一さ、二次元でもねえのにいきなりホントの事ですって、ワケわかんねえ事言われても納得できますか？」

「そ、それは……確かに出来ないけど……でもっ！」

「とにかくもう考えるのが面倒だから。暮葉、勝手に俺達信じましたって事にしてもいいよ」

なんて投げやりでしょう。
でも考えるのが面倒になったのは事実だ。
こんなシリアスっぽい話長々と聞いてられますか、俺はシリアス苦手なんだぞ。
こんな感じでとりあえず信じる事にした俺、その事に暮葉は喜んでいる様子だ。

「ほ、ほんとなのですか！？」

「ああ、だからもう長々とした説明はしなくていいぞ」

正直聞くのが疲れました、ハイ。
二次元ならまだしも現実（リアル）じゃ理解不能っす、あんなメルヘンなお話……。

「それじゃあ！　今日からけーすけ様をしっかりとお守りしますので、家でもよろしくお願いしますなのです！」

「ちょーーーーっと待ったぁっ！」

「どわぁっ！」

「もきゅっ！？」

その時、伊吹が怪獣のように怒声をあげた。
な、なんだ。コイツ一体どうしたんだ？
なにをそんな……怒ってらっしゃるんですの！

「ど、どどど、同棲はいけないと思う！」

「もきゅ？　なんでなのです？」

「だ、だって圭介だよ？　圭介は変態なのよ、そんな変態と一緒にいたら暮葉がその……い、いつ圭介の餌にされるか……っ」

「しねえよ！　勝手に決めつけてんじゃねえっすよ！」

「そうなのですよ。それに葵さんもいるのですから、同棲じゃなくて同居なのです」

そうそう、うちのは葵がいるんだ。
確かに俺もいきなり女の子が一人増えて非常にドキドキしているんだが……ま、まあそういう事もあるし、伊吹とだって何度か一緒に寝た……もちろんフツーだぞ。やましい意味じゃねえし子供の頃の話だ。
だけどそういう事はあったんだ。だから女の子に対する耐性は少しあるというか……。
とにかくだ、ちょっとの事で自棄にはならねえ。
それに葵もいるから二人きりじゃねえし、少しは安全じゃなイカ！

「それに一緒に住んでないと、もしけーすけ様が寝込みを襲われたら……」

「エェッ!?　ね、寝込み!?」

「大丈夫なのです！　けーすけ様はラッキーな事に見た目は普通のこの国の人の見た目なのです。連中もけーすけ様の外見を認識していないのですし、拙者だって最初はけーすけ様だとは思わなかったのですよ。それにやつらはけーすけ様の居場所。古宇坂って場所のどこかにいるとしか認識してないのですし、寝込みを襲われる可能性はほぼ0なのです。ただ念の為に出来るだけけーすけ様の傍にいるようにと上の命令があったのです」

「そ、そういうわけか……」

それだったら今日襲われたのはたまたま……。
やれやれ、俺って今日は運勢悪かったんですねぇ。
んじゃあコイツの話がホントなら、ほぼお前が俺を護衛しに来る意味ないじゃん。
でも上の命令かぁ。そりゃ確かに裏切れんわ。
第一追い返す言葉が思いつかんし考えるのもメンドイ。あと寝込み襲われて拉致られるのも嫌だ……。
とりあえずコイツの居候、認めておきますか。
……でもただ一人、コイツの居候を認めぬ者がいた。

「と、とにかくダメなの！　圭介と一緒に住んだらダメなの！」

「もきゅ、何故なのです？」

「ダメなものはダメなの！」

「……あ、にゅふふふっ。さては伊吹さん、けーすけ様の事が――

――」

と、暮葉がそんなセリフを言いかけたその時。

「ち、違う！　絶対違う！　ありえないから、絶対ありえないから！」

まるで完熟トマトのように顔を紅く染め、音響兵器のように街中に響く音量で伊吹は喋りまくったのだ。

え～っと。これはデレなのか？それとも本気でありえないのか？

う～ん、前者だったら正直かなり嬉しいい。でもなぁツッパリ伊吹ちゃんだし……。

過度な期待はダメか。多分本当にありえねえんだろう。

まあ俺も正直幼馴染に対しては全然恋愛感情が沸かない。

好きだけさ、でもどうしてもただの幼馴染なんだよなぁ。そうとしか思えない不思議。

まあ、何かエロゲー的イベントがあったら、気持ちは変わるかもしれない。

それより……。

「～～っ」

この真っ赤に完熟した伊吹と。

「にゅふふっ」

何故か笑ってらっしゃる暮葉、この二人どうしよう？

……結局収集がついたのは１５分後。
その後。暮葉と一緒に帰宅したはいいが、あまりにも遅すぎた為、
当然葵に説教されてしまった。

……こうして、人生で一番長く感じた俺の一日は、幕を閉じたのだ。

第7話，藤島家の秘密！？（後書き）

今回後書きトークコーナーはお休みします。
ね、ネタがなかったわけじゃないんだからね！

圭介「ツンデレきめえ……っ」

第8話，圭介と愉快な仲間達

朝起きたら……。

「おはろーお兄ちゃん！　葵はこれから遊びに行ってくるんだよ、葵がいないからって悶え死んだらダメなんだよ！」

「……Ｗｈａｔ　ｆｏｒ？」

「なんでって、だってお兄ちゃんは葵と赤い糸で……」

「はいその時点で間違ってます！　血は繋がってるけど赤い糸では繋がってないから！」

妹がバタバタと慌てながら玄関に向かっていた……。

５月３日の朝、暮葉が我が家で居候を開始して一晩が経過した。
突然だが、ｍｙ妹の葵がパジャマから私服に着替え、どこかへ出かけようというのだ。
なんでもｍｙフレンドの家に行くとか行かないとか。
つか、コイツも高校に入ってから一ヶ月経つけどさ。友達いたんだな。
てかそれを突っ込むのは流石に失礼か。葵の性格からしていないのはありえないと思う。
なんたって葵は小学生の頃、歌の文句にまである友達１００人を見事達成してしまったすごい子なのだ。

一方の俺は……うう、聞かないでくれ！

「けどそれって暮葉と二人きりって事だよな？」

「ん、そだよ。大丈夫だよ、お兄ちゃんは葵一筋だもんね！」

「ちげーよ！」

「そうなの？　でもなんでお兄ちゃん彼女さんいないの？　葵一筋だからだよね！」

「だ～から違います！」

まあ確かに暮葉と一緒だからって過ちは犯さんと思う。

だが突っ込み所はそこじゃない。なんでこいつの頭は彼女いない＝自分へのフラグが立っていると考えてしまうんだ？普通に考えてみろ。妹ルートなんてありえないでしょ。

全国の妹を持つお兄ちゃんならわかるハズだ。妹って何故かそういう目で見れないんだよな。あら不思議である。だけど事実だから仕方がない。

それに暮葉と二人きりだからって心配なのは、俺が自棄になるんじゃという事じゃない。

だって和服に日本刀持ってるわけわからない子だぞ。

オマケによくわからない世界から来たし、いきなり人の事アレクサンドルとかいう皇太子様の子孫だとか言ってくるし、オマケに魔法とかいうわけのわからない能力まで使いやがる。

そんなのと二人きりって……まあ確かに暮葉は可愛いほうだと思う。

でも不思議すぎて不安要素しかねえよ！

「あっ、いけないそろそろ行かないと！　それじゃあ冷蔵庫にチャーハン入れてあるからチンして食べてね！」

「ま、まあ気を付けて行って来いよ」

「うん、お兄ちゃんも下着ドロには気を付けてね」

「なんで俺が下着ドロの標的に!?　おかしいだろ！」

「あははっ、いってきまーす！」

「逃げやがったぞあのバカ妹！」

バタンと勢いよくドアを閉める。葵は友達の家に行ったようだ。
葵の友達、新しい友達かな。中学の頃の葵の友達は何人か知ってるけど、まあ　とある事情により俺だけ滅茶苦茶嫌われていたけどね。
それにしても葵、どんな友達作ったんだろうなぁ。
出来れば紹介してほしいぜ。そして人生初後輩をゲットしたいぜ。
あぁ～いつか俺も「せーんぱいっ、お弁当作ってきましたよ」とか言われてみたいぜ！
そして上目遣いで「せんぱい……っ、ボクじゃダメなんですか……っ？」なんて言われた日には……うぅ、死ねる。萌え死ねるぜ。

「げふんげふん！　いかん……今の俺滅茶苦茶キモいぞ……」

あ、そういえば暮葉はまだ寝てんのか？
あとある意味重要な話、暮葉の服だがとりあえず葵のお下がりでしばらく代用する事にした。
アイツ小柄だし、葵がちょっと前に着ていた服とか丁度いいんだよな。

「ようするに身体の凹凸が少な……げふんげふんっ！」

それにしても暮葉って意外とねばすけさんなんだな。
まあ普段の俺もそうだが、今日は特別起きるのが早かった。
とりあえず起こすのも可哀想だし、お昼まで寝かしといてあげよう。

アイツ……ホントかどうかわからねえけど色々事情もあるみたいだし、疲れてるんだろう。
疲労とか肌に悪いらしいし、女の子の敵だからな。
だからゆっくり休ませてあげよう……。
でもお昼は食べないと身体に悪いし、お昼になったら起こして……ん、お昼？

そういえば葵の奴……なんて言ってましたっけ？

（それじゃあ冷蔵庫にチャーハン入れてあるからチンして食べてね！）

……突然だが、昨日のカレーの話をしよう。
正直最悪でした。ニンジンがフナムシ化していたし、玉ねぎはガンゼキフサゴカイ、じゃがイモは何か最初はなかったハズの芽がありました……。
まあ食ったら普通においしいカレーだったし、特に腹痛とかそういう症状もない。
ただ葵の料理は見た目があまりにもひどすぎる。
毎日食わされている俺はもう我慢したけどさ、昨日の暮葉は完璧涙目だった。

で、今日のチャーハンは葵が作ったと……ま　さ　か　！　？

俺はダッシュで冷蔵庫に向かった。
きっとチャーハンは一番上のデカい所に入っているハズ……これか、これなのか。

ラップで包装してある皿には、紫色のご飯に何故かダイオウグソクムシが乗っかっていた……。

「ぎゃあああああああああああああっ！」

ねえ質問があるの、これチャーハンか？
これはチャーハンなのですよね！？

……ひどい、予想を遥かに上回るひどさだ！

「食えるかこんなモン！」

食ったらきっとおいしいチャーハンの味なんだろうけど、これ食べるの嫌だよ！
ていうか俺なら我慢して食うけど、暮葉にとっては精神的にショックだよこれ。
……これ以上アイツにトラウマを植え付けるわけにはいかないな。
仕方ない、買い物に行くか……。

それから数分後、俺はマックスバリュエに行くために外を歩いていた。
これも暮葉の為。純粋な暮葉にあんなもの食べさせられません。
て言っても俺料理できねえしなぁ。
唯一作れるのが焼きそば。理由は簡単、伊吹が焼きそば大好きだからだ。
おかげで伊吹に焼きそばだけはプロ級と称されるほどの腕前になって……。
よし、暮葉に焼きそばを作ってあげようか。

「あっ、あんた」

「あれ、圭くんじゃないか！」

「あ？」

どこからか声が、まあ確実に後ろだろう。
俺は身体はそのままで、首だけを後ろにくるっと半回転させた。
そこには右手首にシップを張ったツッパリ伊吹ちゃんと、その親友である小坂亜紀の姿があった。
二人ともこんな所で何やって……って、遊んでるんだろうな。

「あんたこんな所で何してるの？」

「なにって買い物だけど」

「買い物……ふ～ん」

て、教えたのに感心ナシですか。まあ別にいいんだけど……深く追求されるのも困るし。

妹のご飯が嫌だからって理由で買い物に行く俺もひどいヤツだからな。まあこれは暮葉の為なんだ。

昨日のあの慌てっぷりを見た俺としてはとてもじゃないが、紫色のご飯にガンゼキフサゴカイがそのままの状態で乗っかったような意味不明な飯は食わせられん。

ちなみに、暮葉の事はあの後伊吹と電話で相談して秘密にする事にした。

つーか普通魔法少女だとかそんな事言えねえよ。

「そういえばあんた昨日も買い物してなかったっけ？」

「昨日は妹に頼まれて、今日は個人的な事情っすよ」

「もしかして圭くんは意外と家庭的な人なのか？」

「小坂、俺の何処が家庭的な人に見える？　家事全くできねえぞ」

掃除くらいは流石に出来るが、裁縫とかやったり悲惨だぞ。主に指が。

料理は全然作れないね、ただし焼きそばを除く。

「そうね、あんた焼きそば以外作れないもんね」

「うっせほっとけ！」

大体焼きそばだけ得意になったのは誰のせいだと思ってやがるんだ。
まあおかげで家事スキルが完全０という、人としてはどうかという事態は避けられたが。
ていうか俺はそろそろマックスバリュエに行きたい。

「はぁ、んじゃあ俺そろそろ行くぞ」

「随分急いでんのね」

「だってこんな所で立ち話ってのもなんだろ？」

というのは言い訳、本当は暮葉が心配だ。
とても心配だ。心配すぎて呼吸するのが辛いんだ。だって……。
間違って魔法を使って家の中が滅茶苦茶になったら大変でしょ！

「伊吹、行こう。圭くんだって忙しいんだから」

「……っ。勝手にすればっ。行こう亜紀」

「あぁ～。そ、そーだな」

少し口を尖らせた伊吹は冷たい一言を俺に吐き、親友と共に古宇坂の街へと消えていったのだ。
流石はツッパリ伊吹ちゃん。地味に心が痛くなる言葉を平然と吐きやがるぜ。
さて。さっさとマックスバリュエ行って買い物してこよう。

……それにしても伊吹ってデレたらどうなるのかな。まぁ考えるだけ無駄か。
その後、マックスバリュエで買い物を済ませた俺はついでにラノベも買おうと、ちょいと市街地へ赴きそこの書店で立ち読みをしていた。
ラノベの立ち読みは大変だ。だってこんな公の場で笑ったらただの痛い子じゃなイカ。

「ぶわっはははははっ！　やべぇこれマジやべえっ！」

……て、いたよ痛い子。全くどこのどいつだ？
なんとなくああいうのって一瞬だけでも見たくなってしまうよね。
なんでだろう。やっぱり興味本位というものかな。
とにかく俺は店内で大爆笑をしている痛い子を確認する為、右を向くと……。

「大吾、自重したほうがいいと思うよ」

「仕方ねーじゃん！　これおかしーじゃん！　……あ？」

「あ……っ」

「あれ、圭介じゃないか」

なんと店内で大爆笑していた痛い子は、俺のリア友の一人である長宗我部大吾であった。
そのつき添いだろうか、あまりに非常識すぎる大吾に呆れている重原広敏の姿もあった。

「圭介じゃん！　まさか僕らのストーカー？」

「あのなぁ。男をストーカーとか誰得だよ」

「ハッテン場にいるツナギ男得じゃねぇの？　まあ僕は二次元女子にストーカーされたいな」

「二次元は無理でも大吾なら前者のほうにストーカーされそうだね」

重原は爽やかな感じでそう言う。
しかし前者とはその……いわゆるＢＬというか。
まあそんな感じのもので。当然大吾は女子（ただし二次元に限る）が好きなので当然拒絶反応を起こす。

「アッー！」

「ちょ、声でけえよ！」

「さっきからずっとこの調子なんだよ……俺も流石に疲れたね」

「重原、お前も苦労してたんだな！」

「大丈夫。これでも大吾の扱いには慣れているからさ」

そう、またしても爽やかな感じで発言する重原。
だがその言葉を聞いていた周囲の女子達がヒソヒソ話を始め、終いにはキャーキャーと黄色い声をあげていたのだ。もしかしなくてもアレだろう。
彼女達は重原の発言を薔薇色な方向に捉えてしまったのかもしれない。

全くこれだから重原は。
重原は大分マトモなヤツだが、たまに腐女子に誤解されるような事言うんだよな。

「お前らなんか僕の扱いひでぇ……それはそうとこれからゲーセン行かね！？」

突然眼鏡を光らせ元気になった大吾、立ち直るの早いなオイ！

「ゲーセンかぁ。俺は暇だからいいけど、圭介はどうするんだい？」

「え？　俺はそんなに暇じゃあ……」

「リア充の圭介には伊吹ちゃんがいるもんな！　そうかそうか、暇じゃねえんだなぁ」

なっ、誰がリア充だこの野郎！
確かに伊吹とはそこそこ仲がいいが、何も恋仲というわけではない。
ていうかアイツはツンデレじゃなくてツッパリだし、デレるわけがない。
さっきだってその……つ、冷たい事言われたしな。

とにかく俺はリア充じゃないの。女子のアドレスなんて母ちゃんと葵と伊吹と小坂のしか持ってない。
人生で一度も恋人がいた事ないし。大吾にはしっかり言ってやらねえとな。

「伊吹じゃねえよ。つーか俺はリア充とはかけ離れた存在だ」

「というか、ここにいる俺達みんな女子とはあまり縁がないね……」

「広ちゃんは女子にモテモテじゃねーか！　フラグ折りやがって、そこまで武道好きか！」

「俺は今の所恋愛には興味ないからね。それに大吾は例え圭介が国宗さんといい感じになったとしても、興味なんてないって前に言ってなかったかい？」

「当然！　僕はとことん現実（リアル）に失望し、二次元の世界に生きると決めた男ですから！」

自分で言ってて悲しくならないんだろうか、コイツは。

恋愛に興味がない、武術一筋の重原はまあ仕方ないとして大吾は悲しすぎると思う。

あぁ、俺ももう高2だし。友達の中にもリア充いやがるし、小学生や中学生でさえ街中でイチャラブデートしてるくらいだし。いい加減に彼女が欲しいけど、出会いがないのも事実なんだよなぁ。

増してや俺は、ある事情により一部からはあまりいい目では見られていないのだ。

俺、高校生のうちに恋愛するのは無理なのかな。

「まっ、俺はテキトーに大吾と二人で遊んでいるから、圭介は国宗さんと頑張ってね」

「だから伊吹じゃねえ！」

「ヒューヒューリア充乙！」

「大吾、一回シバこうか？」

……疲れた、まさか友達相手にするのにここまで疲れるとは思いもしなかった。
というかどうしてそんなに伊吹の事で迫ろうとしているんだ、コイツら。
今は伊吹どころじゃない事態が身の周りで起こってるってのによ……。
ていうか、絶対暮葉の事は言わんほうがよさそうだ。
暮葉はもちろん俺や葵とかがフツーに生活する為にも。

……さてと、そろそろ帰りますか。

「ただいまー、焼きそば買ってきたぜ～」

やっとの思いで野郎共を追っ払い、自宅へ到着。
しかし野郎共を追っ払う事に成功したのは１１時５５分。
現在時刻は１２時１５分……ああ、嫌な予感しかしない。
そしてその嫌な予感は現実のものに……。

「もきゅーーーーっ！　ば、バケモノぉぉぉぉぉぉっ！」

丁度暮葉は台所におり、葵が残したのであろうメモ通りに冷蔵庫を開けていた。
そして彼女は見てしまったのだ。ダイオウグソクムシ入り紫チャーハンを……。

「スマン暮葉！　もっと早く帰っていれば！」

もっと早く帰っていればそのチャーハンの存在を知らずに済んだかもしれないのに！
ああ、ラノベ立ち読むために書店に寄らなきゃよかった。
……マジで後悔しました。

＊

「……やっと見つけたぞ。グフフ、金曜日に娘に殺させるとしようか……木下暮葉！」

第8話，圭介と愉快な仲間達（後書き）

あ、後書きトークコーナー？
今回と次回はお休み。
じ、時間がなかっただけなんだからね！

圭介「だからツンデレきめえ……言い訳乙」

第9話，はじめてのがっこう

5月6日金曜日、早朝。

朝っぱらから俺は非常に憂鬱な気分であった。
今日から学校。しかし今日行けば明日からまた休み。
それだけでもかったるいというのに……今日からヤツが。

『にゅふふ、拙者もこーこーという所に行くのですよ。これもけーすけ様護衛の為です！』

……そう、ヤツが高校に通い始めるというのだ。
大丈夫なのかよ。というかいくらアルファ隊だかなんだかか背後にいるからって、そんなに簡単に高校に入れるものなのか？
まあ、いつまでもこんな気分でいるわけにもいかないし、とりあえず起きるか。

「ふぁぁ……眠っ」

しかし暮葉が住み着いせいなのか、伊吹の奴今日は起こしに来ないな。
少し寂しい気分もあるけどまあいいか。
流石にこの歳になったんだし、そろそろ幼馴染離れの時なのかもな。
とりあえず起きよう。着替えた後俺は下に降り、彼女達に挨拶をした。

「おはよう」

「おはようございますけーすけ様！」

「お兄ちゃんおはよう！」

朝からテンションの高い……ん？

この時俺は暮葉の服の違いに気付いた。

いつもなら最初に着ていた和服、もしくは葵のお下がりの洋服だ。

しかし今日の暮葉はピンクっぽいブレザーやチェック柄のスカートが特徴的な、初芝高校女子の制服を着用していたのだ。

「……それ、コスプレ？　コスプレするならセーラー服のほうが俺はいいな！」

「失敬な！　これはコスプレじゃないです、予告通り拙者も学校に通うのです！」

「……３２÷４＝？」

「３２４！」

「……」

暮葉はちゃんと義務教育を受けてから高校に行ったほうがいいのでは？

俺は真剣にそう思いました。だって……いくらなんでもひどすぎるだろ。

確かに俺だって赤点ギリギリ程度の学力しかないよ。でも小学生の問題くらいならフツーに簡単だ。

「お兄ちゃん大丈夫だよ！　教育費とかはクーにゃんの両親が出すらしいから！」

「そ、そうか……」

暮葉の両親なんて知らないし、多分その実態はアルファ隊なんだろう。

第一割り算もロクに出来ない程度の学力しかないのに、どうやって編入試験潜り抜けたんだ？

なんだか背後の組織とか使って、汚い手で潜り抜けたとしか思えないですぜ。

あと葵、いつからお前は暮葉の事をクーにゃん呼ぶようになった。

「それじゃあ二人とも朝ごはん食べようよ！」

「お、おう」

「いただきます」

……ちなみに、あの紫チャーハン事件以来家の料理は暮葉が作っている。

この魔法も苦手でオマケに馬鹿でアホな暮葉にも、料理上手という大変優秀な特技があった。

つーか料理作れるなら最初から作ってくれよ……味は葵と同程度だけど見た目は最高にイイじゃん！

つまりどういう事かというとな。フツーにおいしいです暮葉の手料理！

「むぅ～……なんか悔しいっ」

まあ暮葉が料理を作ると葵は機嫌を悪くしてしまうのだが。

そして朝食を食い終え支度を終えた俺達は、暮葉以外は歩き慣れた通学路を歩き初芝高校に行った。

「職員室は葵の教室のほうが近いから、クーにゃんは葵が案内するね」

「は、はい。よろしくお願いするのです！」

「んじゃあまた後でな二人とも」

「お兄ちゃん行ってらっしゃい！」

「気をつけてくださいけーすけ様！」

こうして玄関で別れた俺達。
多分次に会うのは家に帰ってからだろう。
葵はそもそも学年が違うし、アイツ友達が多いみたいだからきっとどこか寄り道していくハズだ。
暮葉は確かに同学年らしいが、そんな都合よく我がクラスに編入してくるというエロゲー的な展開は流石にないだろう。いくら背後にアルファ隊がいるからって、クラス決めるのは教師陣だろうし。
そういえば今朝は伊吹見なかったな。教室行ったらいるのかな？

「うーっす」

「おう圭介！」

「おはよう」

教室の扉を開け、いつも窓側で騒いでいる大吾達に挨拶をする。
アイツらもいつも通りだ。大吾は元気よく、重原は爽やかに挨拶を返してきた。
ついでに伊吹が教室にいないか確認するが……い、いた！

「おはよ、今日は先に来てたのか？」

とりあえず伊吹にも挨拶をするが……。

「あ、おはよ」

……すごく、素っ気ない返事が返ってきました。
しかも俺の方すら向かず、伊吹はず～っと教室前側扉を見つめている。
アレ、もしかして本日のツッパリ伊吹ちゃんは機嫌が悪い？

「なんかあったのか？」

「別に」

「しかも今日日直でもねえのに随分早いな」

「私の勝手でしょ」

「朝から冷たいっすね！」

「……ふん」

なんだ、俺なにかやちまったんですか？
いつもに増して伊吹の機嫌が悪い！
これほど機嫌の悪い伊吹というのも珍しいぞ！

「あ、圭くんおはろー」

「あ、小坂か。おはよう……あの、何か伊吹さん機嫌悪いのでございますが？」

「ああ、圭くん何かやったんじゃないのか？」

「やっぱ俺ですか！？」

しかし考えれば考える程何も思い当たることがない。
ここ最近伊吹と喧嘩をした覚えもないし、伊吹が嫌がるような事をやった覚えもない。
だったらなんで伊吹さん怒ってらっしゃるんですか！

「……ちなみに伊吹って何時に来た？」

「圭くんが来るちょっと前くらいだけど？」

特別早く来たと言う訳ではなさそうだな。
でもちょっと前くらいなんだろ？
だったら伊吹を一度くらい見かけたって何も不思議じゃないよな。
やっぱり伊吹が怒っている理由がわからない。

「……はぁ、マジで俺何やらかしちゃったんだろ」

「ははははっ！　圭くんってばホント伊吹の事になると真剣になるな！」

「うっせ黙れ！　はぁ……何やっちまったんだろ、俺？」

「テメェがやった事ならわかってんぜ、藤島圭介」

ん、なんだろうこの声は。突然俺の背後から男の声が聞こえた。
後ろへ振り返るとそこには甲高いテノールの声の持ち主がいた。
ツンツンとした金髪にピアス、制服は着崩されいかにも不良といった風貌。
このほか本人曰く天然の赤毛で、それをセミロングパーマにしている大柄な男。
さらにおそらく１６０ｃｍもないであろう、小柄な坊主頭の男が金髪男の周りにいた。

コイツらは……確か。

「よぉ、三馬鹿じゃん！」

「「「誰が三馬鹿じゃ！」」」

三人そろって叫んでいる。息はピッタリ、やっぱり三馬鹿だ。

「それで結局何の用だよ、三馬鹿」

「三馬鹿じゃねえ！　俺は黒木仁（くろきじん）だ！　ボコるぞテメェ！」

「俺は赤佐直人（あかさなおと）や。黒やんの名前はどうでもええんやけど、いい加減俺の名前は覚えような？」

「僕は大林勇太（おおばやしゆうた）、いい加減俺の坊主くらい覚えろよ！」

ご覧の通り、この三人はロクなヤツではない。
頭は悪いし問題行動ばっかりするし、とにかく柄が悪い。
でもアホすぎて憎めないというかなんというか……。
とにかくただの馬鹿だコイツらは。だからこそ恐れられる事もなく、
三馬鹿という称号を得れたのだ。

「んで、結局なんだよ」

「ああそうだ。テメェが伊吹ちゃんにやった事……それはテメェの
存在自体が悪って事よ！」

「意味不明だ！」

理由として成り立たないだろそれは！
実は赤佐と大林とはそこそこ仲がいいんだが……どうもこの黒木だ
けは好きになれん。
一応このハイテンションヤンキーモドキ野郎は、三馬鹿のリーダー
的存在みたいだが。

「ああ、お前のようなウジ虫がいっから俺が伊吹ちゃんに近寄れね
えんだよ。消えろ藤島！　そして伊吹ちゃんは俺の恋び――――」

「あんたうっさいわ！」

「ぎゃあっ！」

その時伊吹が竹刀を取り出し、黒木にそれを手慣れた感じで振って

いった。
バシッといういい音とほぼ同時に、黒木の悲鳴が平和な教室に響いてしまった。
伊吹さん。馬鹿を退治してくれたのはありがたいが馬鹿の悲鳴は騒音だぞ？

「悪かったな藤島に国宗。コイツ絶賛片想い中なんや」

「チョクトてめぇ！」

「だぁ～れがチョクトや！」

「もういいから引っ込もうぜ、黒やんにチョクトさん」

「俺はチョクトやない！　ナオトや！」

と、揉めてはいるが三馬鹿は大林に引きずられる形で立ち去ったのであった。
……なんだったんだアイツら。
つーか黒木。前々から思っていたけどお前、伊吹の事好きだったんだな。
多分このデレのデの字もない伊吹を攻略するのは難しいと思うけど。
ちなみに赤佐のチョクトという渾名は、何か過去にいじめられていた韓国人留学生を助けたら相手は敬意をこめ、赤佐の事を『チョクトさん』と呼んだらしい。
それを黒木らに聞かれて以降、みんなにああ呼ばれるようになったんだとか。

「はぁ……っ」

つーかアイツら余計な事してくれたな。
伊吹の機嫌が余計に悪くなってしまったじゃないか！

「圭くん……がんば」

「アンタはいいよねぇ他人事だし！」

小坂がうらやましいぜ。あと大吾に重原も羨ましい。
だってアイツら完全外野だもん。
そこの窓側の席から今の騒動を見て、大吾に至っては爆笑してるじゃねえか。
はぁ……ま、とにかく今は伊吹に機嫌を戻してもらえるよう頑張るしかないか。

「おはよー。おーし、ＳＨＲ始めるぞ～」

と思ったその時、担任の乙坂が現れてしまった。
これは流石に仕方がないな。怒られるのも嫌なので俺は自分の席に座った。
まあ時間はいくらでもあるんだ。焦らずゆっくり機嫌を直していけばいい。

「え～っと、まず……そうだ、お前らに転校生を紹介するわ」

ええ～！！と教室中がざわめいく。
完全二次元派の大吾は興味がなさそうだが、それ以外は大体驚いている。
特に三馬鹿のテンションは異常クラスであった。
先程まで不機嫌だった伊吹でさえ、転校生という言葉を聞いてから

は前に釘付けだ。

しかし、中には転校生と言う言葉に不安を覚える人だっているんだ。
たとえば俺とか俺とか俺とか……うん、嫌な予感しかしない。

「よし、おーい入っていいぞ！」

ガララという勢いのよい音。
開けられた教室の扉から入ってくる、一人の少女。
彼女は教卓の横に立った瞬間、１００点満点の笑顔で……。

「皆さん、本日転校してました木下暮葉です。いとこの藤島圭介共々、よろしくお願いします！」

「は、はぁっ！？」

いとこというあまりに飛んだ設定に、俺は思わず驚いて声をあげてしまった。
最初から嫌な予感はしてたけど、やっぱ転校生って暮葉かよ！
つーか道端で出会った少女と同じクラスになっちまっただと？
え～っとだな、これはその……なんだ。

……これなんてエロゲーだあああああああああぁぁぁぁぁぁ！

第１０話，風紀委員

「木下さん、ホントに藤島のいとこなの？」

「木下さん彼氏いる！？」

「バーカ、転校してきたばっかなのにいるわけねーだろ！」

「木下さんメアド教えて！」

担任の乙坂が出ていった後、転校生である暮葉の周りには定番のように野次馬共が殺到していた。
あまりにの質問攻めに暮葉も困り気味だが、まあアレはアレでいいだろう。
大変そうだけど、この調子だと暮葉はクラスに溶け込めそうだ。
よかったよかった……って待てよ、全然よくないぞ。
どうしてアイツと俺は一緒のクラスなんだ？
いくら暮葉の背後にはアルファ隊がいるからって、出来過ぎにも程があるだろ。

「それにしても、圭くんあんなのどこに隠してたの？」

「それは俺も気になるね」

「思いっきりギャルゲー展開じゃえか。いつから主人公になったんだよ圭介ェッ！」

「……ふん」

小坂に重原に大吾はまさかの展開に驚いてはいるが、まあ平常運転だ。
だけどやっぱり伊吹だけ機嫌悪い。
ホントに俺、一体なにやっちゃったんだろう。

「お前らな、俺だって会ったのはこの前の月曜日が初めてなんだぞ。どこに隠してたなんて知るか」

「まぁいいか。それにしても圭くんのいとこにしては可愛い子だな！」

「小坂、そりゃどういう意味っすか？」

「確かに、圭介が隠していた子にしては美少女だね」

「俺は何も隠してねえぞ！　しかも地味に失礼な事言ってんじゃねえ！」

「ふん！　だが所詮は現実女（リアルおんな）だ！」

「お前は黙ってろ！」

今日はなんだか質問攻めになりそうな気がする。
ていうか暮葉が質問攻めに遭うならまだわかるんだけど、どうして前からコイツらと一緒にいる俺まで質問攻めされなければいけないんだろう。
これもアイツがいとこなんて変な設定つけやがったのが悪いんだ！
まあ今はこんなくだらない質問よりも伊吹だ。どうにかして伊吹に機嫌直してもらわないと。

「……っ……」

いつも不機嫌だけどあそこまで不機嫌なのは珍しい。
何が原因かわからないけど、アイツの不機嫌な姿を見るのは幼馴染として嫌な気分だ。

「藤島ァッ！　テメェなんでけーすけ様なんて呼ばれてんだよめっちゃ慕われてんじゃん！」

「黒木……頼むから耳元で大声出すな」

「うるせぇっ！　伊吹ちゃんに手ェ出しといて、いとこと二股してんじゃねえ！」

「お前が一番うっさいわ！　しかも二股どころか伊吹ともそんな関係じゃねえよ！」

むしろ今、なんか嫌われている気がします。
得に今朝からやたら機嫌が悪いッス。

……やがて時は経ち、2時間目と3時間目の間の短い休み時間。
俺と暮葉は完全にヘバっていた。

「もきゅぅ～……つ、疲れたのです」

「ああ、俺転校生じゃないのに俺まで疲れたよ……」

朝っぱらから俺達は質問攻めであった。
抜けだす機会さえなかったよ。

1時間目と2時間目の間の休み時間なんて、トイレしてたらいきなり野郎共が殺到してきて暮葉についていろいろ質問してきやがったし。もうホント疲れた。

「拙者こちらの学校は初めてなのですが、大変ですね……」

「心配すんな。こんな疲れるのは初日だけだからさ」

多分ね。何事もなければ初日だけだよ、疲れるのは。
でも疲れた～ってへバってる場合でもないんだよな。
俺は視線を教室の右前方へと向ける。
そこには一人教室から出て行こうとする伊吹の姿があった。

「もきゅ？　伊吹さんどうしたのですか？」

「ああ、アイツ朝っぱらから機嫌悪いんだよ。悪いけど席外すな」

「はい、りょーかいですけーすけ様！」

「何かわからない事があったら誰でもいいからちゃんと聞くんだぞ」

「はいです！」

伊吹と比べると正直でよろしい子だ！
これで変な登場したり怪しげな能力使ったり、変な説明したり刀で化け物倒したりしないフツーの女の子だったら、今頃俺の彼女に対する好感度はＭＡＸだったろう。
実に登場したあたりが残念な子である。
まあそんな事は置いといて、席を外した俺は教室を出ていった伊吹を追った。

探すの大変かな～なんて思ったが、意外にも伊吹はただトイレに行っていただけのようである。
丁度俺がトイレの前に来ると、ハンカチを持った伊吹がトイレから出てきたのだ。

「い、伊吹」

「っ……」

「ちょ、スルーはひどくね！？」

「……なに？」

やっと口を聞いてくれたよ！
冷たいお返事だったけど、さっきまでガン無視でしたからね。
これはギャルゲーマーとしての直感、大きな一歩だと思う。

「あのさ、どうしてそんなに機嫌悪くしてるんだよ」

「……別に、あんたに教える必要ないでしょ」

「俺が原因なのか？　そうだとしたらマジで土下座でもなんでもする、別な事でも相談に乗るから」

「……っ」

伊吹の唇が微かに動いたが、俺には何を言っているのか聞きとれなかった。
でもあからさまにさっきまでの伊吹とは、反応が違った。
やっぱり伊吹が不機嫌なのって俺のせいなのだろうか。

確かに覚えはないけど、無意識に伊吹が怒るようなことをしちゃったのかもしれない。
だとしたらそれはちゃんと謝らなければいけない。

「なあ伊ぶ――――」

「いいじゃねえかよ？　後で返すからさ」

「だ、ダメだって」

俺が伊吹と呼ぼうとしたその時、邪魔をするように二人の声が聞こえた。
全くなんなんだよ。そう思って俺は右を向くと……。
そこにはクラスメイトの田中くんという真面目くんに集る、三馬鹿の姿があった。

「なぁ頼むってぇ。黒やんを怒らせん為にも」

「そうそう。僕らちゃんと金は返す主義だから」

「で、でもぉ～」

「そういうわけだからちょいと俺に１３０円貸してくれよ」

うわぁ～、三馬鹿……いくら馬鹿でもアレはないわ。
露骨に校内でカツアゲしてるぞ。
しかも頭はいいけど気弱な田中くん相手に。
これには流石の伊吹も腹を立てたようで、なんだか先程とは違って厳しい視線を三馬鹿に向けている。
まずい……剣道部伊吹ｖｓヘタレ元ヤン集団三馬鹿の対決かこりゃ？

「待て！」

田中くんがピンチで、伊吹が戦意を出し始めていたその時。
校内のヒーローは現れた！

「アァ？」

「げ、黒やんまずいで？」

「ふ、風紀委員だ……っ」

そう、その校内のヒーローとは風紀委員。
我が校はそこそこのレベルではあるが、特別校則がキツいわけではない。
髪染めもＯＫだし、髪型について特に規則があるわけでもない。
ただしああいう行為に関してはかなりうるさいのだ。

「校内で露骨なカツアゲとは……2年4組の三馬鹿。これ以上の狼藉は許さないぞ」

黒髪の長いポニーテールにツンとした蒼い瞳。背も高くてお胸の吉備団子もなかなかの大きさ。
しかもあのしっかりとした口調。なんかカッコいいお姉さんである。
しかしあの赤を基調とし、黄金の文字で“風紀委員”と記された腕章。
それは彼女が風紀委員である証拠だ。

「へッ、狼藉だってよ。相変わらず俺達とは使う言葉が違うなぁ。明智さんよぉ？」

「黒やんあんま挑発せんほうがええで？」

「つーか狼藉ってどういう意味なんだろ？」

「さあ？」

「狼が結婚して籍入れるって意味なんやないかい？」

「お前らちゃんと日本語の勉強してるのか？　とにかくこれ以上、校内で暴れるな」

「なんだとコラッ？　金くらい誰だって貸し借りするじゃねえかよ？　世の中そういうモンだぜェ」

まずい、黒木が明智に喧嘩を売っている！

……あの風紀委員の名前は明智凪紗（あけちなぎさ）。

今年春に転入し、風紀委員になった2年3組。つまり隣のクラスの女子である。

会話とかはした事がないが、噂じゃ風紀委員の中でも一際高い実力を持つ、最強の女の子らしい。

実際何度か彼女と三馬鹿は対戦した事があるが、当然三馬鹿の全戦全敗。さて今日はどうかな？

「お前達、今日も私とやるのか？」

「へへッ。チョクト、大林。いっちょこの風紀委員をギャフンと言わせてやろうぜ！」

「せやなぁ。これ以上デカい口叩かれんのも癪やしな！」

「よし、頑張れ黒やん！」

「よぉし、そんじゃあ今日は特別のストレートパンチからぁぁぁっ！」

まるで鍵の某泣きゲー原作なアニメを見ている気分だ。
勝てるわけもないのに戦いを挑む黒木。
アイツもまあ、ガタイはいいし元ヤンらしいから弱いってわけじゃないんだけど……。
明智は黒木の拳をパシッと平手で受け止める。それも表情一つ変えずに。

「なっ！？」

「お前。いつも手、抜いてるだろ？」

「チッ……女だから今まで手加減してわざと負けてやってたんだ。調子乗ってんじゃねえぞ！」

今度はさっきよりも勢いのいい右拳だ。
アレは多分本気、というかかなりのスピードだぞ。
アレを本気で女の子に打ち込むつもりなのか、黒木のヤツ！
なんつーか、かなり慣れた感じでキレのいいパンチだ。
あんな攻撃マトモに喰らったら、下手したら鼻の骨が折れるかもしれない！

「あかん！　黒やんついに本気出した！」

「流石にまずいって黒やん！」

他の2人が慌てている。にも関わらず黒木は本気の拳で明智を殴ろうとしている。
しかし明智は黒木の拳を……なんと寸前でひらりとかわし。
気を取られた隙の出来た黒木に、なんと目にもとまらぬ速さで黒木の顎に、キックを浴びせたのだ。

「んぎゃあああああああああぁぁあああぁぁぁぁっ！」

「く、黒やあああぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！」

「うわぁ……黒やん、弱っ」

赤佐が叫び大林が呆れ、明智が後ろを向いてこの場を立ち去ろうとする。
なんだ……この地獄絵図のような光景は。
つか隣にいる伊吹も唖然としている。
……そりゃあ、喧嘩になるかも微妙なくらい一方的すぎる勝負がいきなり目の前で始まればな。

「ちょっとそこのお二人さん」

「え？」

「あ、はい」

突然明智が俺達に話をかけてきた。
考えてみれば、明智に話しかけられるのはこれが初めてな気がする。

「二人はあの3人のクラスメイト？」

「え？　ま、まあそうだよな？」

「そ、そうよ……っ」

「後の事は頼んだ。もうあいつらが何も問題起こさないように見張ってて欲しい」

「わ、わかりました」

「善処します……」

任されてしまったよ、三馬鹿の後の事を……。
まあそこは仕方ないか。明智はクラスが違うからな。
監視するんだったら同じクラスのヤツに任せたほうが、確かにいいだろう。
でも三馬鹿は正直監視した程度じゃどうにもならないと思うぞ。

「黒やん！　あかんで、完全に伸びてる！」

「顎蹴られれば脳も揺さぶられるよ……あ～あ、折角途中までカッコよかったのに」

黒木、無残すぎるぜ……。
それにしても明智凪紗かぁ。
初めて話したけど、やっぱり雰囲気はカッコいいなぁ。
でもよく見るとかわいい顔していたなぁ。
……もしかして、アレがギャップ萌えというものなのでは？

「おーいお前ら、そろそろ授業始まるぞ～！」

げ、乙坂が叫んでいるって事は、次は乙坂の現文じゃないか。
乙坂の授業は１０分くらいで眠くなるほどテンポが悪いし、正直に言うと嫌だ。
それにまだ俺、伊吹と何も話してないし……。
ああでもサボるわけにもいかない。とりあえず仕方がないので教室に戻ろう。

伊吹と話す機会はきっとまだあるはずだ。

第１０話，風紀委員（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「やあ、久しぶりに後書きトークコーナーですぜ！」

暮葉「けーすけ様、読者に対して馴れ馴れし過ぎなのですよっ」

圭介「そっか？　お前が来る前はいつもこのノリだったけど？」

暮葉「とにかくけーすけ様も、ちゃんと敬語を覚えるべきなのです！」

圭介「し、失敬なっ！？　俺だってちゃんと喋れるわい！」

暮葉「ホントなのです？　証拠として喋って欲しいのです！」

圭介「……っ、なのですよ？　暮葉っ」

暮葉「もきゅっ……気持ち悪いのです、けーずけ様」

第１１話，光差す屋上で

４時間目が終われればお昼の休み時間である。
勉強がダルい学生にとっては唯一、楽しみな時間であろう。
お昼ご飯を食べながら友達との時間を楽しみ、色々おバカな話をする。
この俺藤島圭介も例外ではなく、いつもの奴らと飯を食っていた。
まあ今日は伊吹と小坂はいないが、代わりに暮葉という新入りさんが俺達の所にいた。

「なぁ暮葉、いいのか？　女子の友達出来たんだろ？」

そう、暮葉のヤツは早速友達を作ったのだ。
主に小坂と小坂の友達あたりだが……。
まあ転校初日にしてはすごい戦果だと思いますよフツーに。

「いえ、確かにそうなのですけど拙者まだ右も左もわからないので……」

「そ、そうか」

とりあえず表向きの理由はそれね。
きっとコイツの事だ。あくまで俺の護衛が任務だから、という理由が本当の理由に違いないだろう。
別にここまでベッタリでなくても大丈夫だと思うんだけどなぁ。
オマケに伊吹は相変わらず機嫌悪いし。どうしたら機嫌よくしてくれるのかな……。

「それで圭介ェ、転校イベント以外にエロゲーみたいな展開はあっ

たのか！？」

「ねーよ別に」

大吾にそうは答えるが、出会いイベントは確実にこれなんてエロゲーだったような……。

まあそんなの詳しく答えたら、暮葉の正体がバレる可能性もある。

もしバレたら、暮葉はもちろんとして関わっている俺の日常まで脅かされる。

ただでさえぶち壊されかけてんのにこれ以上ぶち壊されたら……。

と、とにかく俺の人生は俺が守るぞ！

「圭介に訊いてもシラを切るから無駄だね」

「重原てめっ！　別にシラ切ってねーよ！」

「ところで木下さん、圭介とはどこで出会ったんだい？」

「はい！　トラックに轢か――――」

そう言いかけた暮葉の口を、俺は両手で勢いよく塞いだ。

「んむっ！　んんんん～っ！」

「フツーに道端で会いましたよ！　そんなラノベ的な展開一切なかったっすよ！　なぁ暮葉！？」

「んむんんんっんん～！」

口をふさがれて暴れている暮葉さん。

スマン暮葉、仕方がなかったんだ……。
コイツらも俺の身体が丈夫な事は知っているが、流石にトラックに轢かれて無事でしたなんて言ったら多分思いっきり引かれる！
俺の日常を守る為にも、トラックに轢かれた～なんてコイツらに教えちゃダメなんだ！
……まあ伊吹は例外だが。長年一緒にいるわけで、何度もああいうシーンを目撃されたからな。

「言ってほしくない出会いって……フフッ、まあいいだろう。所詮は現実（リアル）だ。これなんてエロゲーなんてイベントが起ったとしても、知れたものだ！」

「そうだぞ大吾！　知れた程度のイベントだったんだ！」

「まあそこまで言ってほしくないなら、俺達もこれ以上追及するのはよそうか。あと圭介、いい加減木下さんから手を放してあげたらどうだい？」

「お、そうだないけねぇ」

俺は彼女の口を塞いでいた両手を放してあげた。
しかし見た目以上に柔らかい顔だったな。
正直触り心地がよくて手を放す機会を失っちまったぜ。

「もきゅぅ～！　いきなりなにするのですか！」

「す、すみませんでしたぁーーーっ！」

本当に申し訳なかったよ暮葉さん。
俺の日常を守る為には仕方のない行動だったんだ！

それから数分後。暮葉お手製弁当を食い終わった俺は、一旦一人で教室の外に出た。
暮葉はとりあえず大吾達に任せておくとして、俺はまず伊吹と話をしなければ。
もしかすると俺がわがままなだけなのかもしれないけど、とにかくあんな伊吹を見るのは嫌だ。
やっぱり伊吹の機嫌が悪いのは俺のせいだと思う。小坂やその他の友達と話をしている時に見せる笑顔は、まさにいつもの伊吹そのもの。ただ俺に見せる顔はあの不機嫌な顔だ。
と言う事は、俺の事で機嫌を悪くしているのは１００％間違いないだろう。

「あっ……」

生徒で溢れる廊下の中で、女子高生としての平均よりもやや小柄で銀髪の、黒リボンがお似合いな女の子の後ろ姿を発見した。間違いない、伊吹だ。
その姿を見た瞬間、俺は思わず小走りで彼女の後を追ってしまった。

「伊吹！」

名前を叫ぶと彼女は一旦止まるが、叫び声を無視するように再び歩き出す。

「やっぱスルーかい！？　ちょ、お願いします！　せめて話だけでもぉっ！」

俺は伊吹の前に立ち、柏手を打ちながらお願いしていた。
端から見ればかなり情けない俺。

だけど、そんな情けないことをしてでも伊吹に機嫌を直して欲しかった。

「……なに？」

「さっきの続きだよ。なんでそんな機嫌を――――」

そう言いかけた瞬間、伊吹はいきなり全力疾走を始めたのだ。
短距離走を全力で走る陸上部員にすら匹敵しそうな勢いである。

「ちょ、伊吹！」

なんでだよ……多分俺が悪い。
覚えはないが、今までの彼女の反応を見ていてわかった事だ。
だからってこのままでいいはずがない。
もうこうなったらジャンピング土下座だろうがローリング土下座だろうがやってやる。
とにかく伊吹の機嫌を直したい。彼女には笑顔でいてほしい。
その想いを胸に、俺は校内のどこかにいるであろう、伊吹を探し始めた。

こういう時ってギャルゲーとかだと、大体屋上にいたりするんだよな。
で、伊吹の思考パターンはまるっきりギャルゲーのヒロインそのものだった。
俺は人目の少ない屋上に行ったが、予想通り彼女は屋上で遠くを眺めていたのだ。

「伊吹」

「……っ！？」

声をかけると、伊吹は驚いたのか一瞬ビクッと跳ね上がった。
風になびく白銀の髪、抱き締めたくなるような潤った瞳。
……ぐはっ、なにこれ。破壊力高ぇ！
て、今はそんなしょうもない事を考える場面じゃねえだろ。

「はぁ、どうして私の居場所を特定するかな？　あんたってストーカーの素質あるんじゃないの？」

「ストーカーって……俺はストーカーよりもスカートのほうが好きだぞ。めくれるからな！」

「……変態っ！」

「ちょ！　いつもの軽い冗談ですって！　引っ掻くな！」

人の顔を引っ掻くって、ネコさんかお前は！
でもある意味大きな一歩だ。
さっきは戯れ付く事はなく、むしろ避けられていたんだから。

「……っ」

「いや、その……ホントにごめん」

「……何に謝ってるの？」

「わからないけどわかるんだ。お前が不機嫌なのは俺のせいだって」

え～っと伊吹さん。どうしてそんな露骨に驚愕するのでしょうか？
もしかして、俺って物凄く無自覚な男だと思われていたんじゃ……。

「……あ、あたりよっ。圭介にしては鋭いわね……っ」

俺にしては鋭いって……俺ってそこまで鈍感な男なの？
流石にここまでくると自分が悪いって自覚するよ。
ていうか最初からそんな気もしていた。
けどやっぱりか……ホントに俺は何をやっちまったんだ。自覚はあっても覚えがないから正直困る。

「俺が悪いってのはわかっている。ただ俺が何をやっちまったのかわからない」

「……やっぱ圭介だわ」

「……」

おい、今露骨に呆れられたぞ。
だから困ってるんだよ俺は。全く身に覚えがないから。

「でも、知ってる振りされるよりはマシだわ」

「いや、その……マジで申し訳ない」

「……ねぇ、あんたってホントに暮葉と同棲してるのね」

暮葉と同棲？
もしかして、コイツはまだその事を引きずっているのか？
確かに伊吹は暮葉が我が家に居候すると言った時、一緒に暮らすわ

けでもないのに一番反対していた。
だけどそれを未だに気にしていたのか。

「まあ、一応事実だよ……でも同棲ってのは間違ってる。同棲って要は二人暮らしって事だろ？　うちには葵もいるし、正確には同居というか居候というか……そんな感じのものだよ」

「でも一緒には暮らしてるのね。それで朝は一緒に楽しそうに登校してるのねっ」

「それは事実だよ。でもなんで一緒に登校してたの知ってんの？」

「……っ、べ、別に知ってたっていいでしょ！」

待てよ、伊吹が到着したのって俺より少し前だったよな。
もしかしてコイツ、俺らにバレないようにず～っと近くにいたんじゃ。
あくまで俺の仮説だけど、もし本当だとしたら伊吹はすごい。
全く気付かなかったぜ……伊吹にもストーカーの素質があるかもしれない。

「と、とにかく……今朝それを見て同居してるのが事実だってわかって……っ、ムカついたっ」

伊吹は口を尖らせ、子供のように拗ねていた。
ていうか伊吹さん。アンタやっぱり。

「やっぱ見てたのかよ……」

「う、うるさい！　細かい事はどうでもいいの！」

また猫のように顔を引っ掻いてくる。正直に言うと顔を引っ掻かれるのは痛い。
たとえ相手が人間だとしてもだ。人間の爪だってネコには劣るが、一応切れるんだからな。

「わかったから怒るなって！」

「怒ってない！　ムカついてるだけ……っ」

「それ、世間一般では怒っていると同じ意味だと思うんですが？」

「だぁぁぁもう！　細かいこと気にするの禁止！」

いかんぞ。このままだとず～っとこの調子の会話が無限ループするだけだ。
どうにかしてこのイベントを終わらせる、何かきっかけを作らないと。

とりあえず伊吹が不機嫌だった理由を簡潔にまとめよう。
どうしてかはわからんが、伊吹は俺と暮葉が同じ家に住むのが嫌らしい。
それで多分俺と暮葉は一緒に住んでいない。事実を認めたくないからそう思っていた。
だからだろう。ＧＷ中に会った時は普通に俺と接してくれていたのは、きっとそう思っていたからだ。
だけど現実はその反対。今朝俺は、暮葉と楽しそうに登校をしていた。
それで彼女はどういうわけかは知らんが、機嫌を悪くしてしまったと。

……けどそれって、多分ただの嫉妬じゃないのだろうか。
だったら解決策は一つしかない。

「ったく～、そういう事なら早く言えよな」

俺は一歩足を前に踏み、手を伸ばした。そのまま彼女の白銀の髪を、優しく撫でてやった。
ツンとした伊吹の目が一杯に大きく開き、触れればきっと柔らかな頬が赤く染まり始めていた。

「その嫌だっていう気持ちは痛いほどわかったよ。でもお前だって事情は知ってるだろ」

「い、一応ね……信じたくないけど」

「俺だって超ぶっ飛んだ展開で、未だに色々整理したいと思ってるよ。でもアイツは転校までしてきたんだ。それにアイツ、追い出した所で居場所があると思うか？」

「そ、それは……」

俺の所に来るまで、暮葉は何をしていたのか、俺にはわからない。
あの感じだと少しは日本に慣れているようだし、多分アルファ隊の仕事をしていたのだとは思う。
だけど、だからってこの世界にアイツの居場所はあったのか？
俺が思うに今の藤島家こそ、アイツにとって最も安定した居場所だろう。
アイツは何も言っていないけど、それくらい俺にもわかるよ。
いきなり異世界から来た奴が、この世界のどこかに家を持っている

ハズがないんだ。

「これはさ、アイツの話が全部本当だとしたらっていう前提の話なんだけど。確かに同居までの経緯は滅茶苦茶な成り行きだったよ。でもいきなり異世界から来た奴が、自分の家を持っているハズがない。アイツにとっては俺の家が唯一寛げる場所かもしれないんだ。それに学校にまで来ちまったし、友達もでき始めているみたいだ。今更暮葉を追い出す事なんて俺は絶対に出来ない」

「そ、それは確かに……そうなんだけどっ。でも……っ」

「もちろん伊吹の気持ちだってわかったよ。それでも暮葉を追い出すことはできない」

「わかってるよそんな事は！　でも……っ」

こうして頭を撫でていると、痛いほどに伝わってくる。
きっと伊吹は不安だったのだろう。
何が不安なのか俺にはわからねえけど、きっとそうだと思う。

「……お前、もしかして暮葉に自分の居場所が奪われるとか思ったのか？」

「ち、違――っ！　……いや、そうかも……っ。でも……や、やっぱなんでもない！」

なんだか今日の伊吹はいつもと違ってハッキリしない。
しかも理由を迫ろうとすると、彼女はかなり頬を赤らめ、慌てる。
何かを必死で隠しているようにも見えるが、なんとも言えない……。

「お前……何か隠してる？」

「な、なんも隠してない！」

伊吹の顔は既に、イチゴみたいに真っ赤であった。

なんだか驚くほどに必死そうだ。

「も、もういい。仕方ないもんね、暮葉にだって事情はあるし。あんたも流石に犯罪に手を染めるほど外道じゃないし。く、暮葉の身の安全の心配した私がバカだったわ！」

しかも暮葉の身の安全を心配って……。

どう考えてもアンタ、それ大ウソじゃないですか！

ていうか俺も滅茶苦茶変態扱いされとるし。

「俺、そこまで悪人に見えたんですか！？」

「こういう真面目な顔を見せなかったらあんた、ただの変態よ」

「ひでぇっ！　思春期男子がムフフな想像して何が悪い！」

「大っぴらにそういう事いうな！　この変態！」

やれやれ、でももうどうでもいいや。

正直、伊吹に変態と言われるのはもう慣れている。

むしろ俺にとって変態とは褒め言葉……げふんげふん！

とにかく、伊吹は若干自棄気味だったけど、いつもの元気な伊吹に戻ってくれた。

伊吹は怒っているように見えるけど、これは本当に怒っているとは

違う。
なんだか楽しそうである。根拠はと言われると難しいが、俺は長年こういう伊吹を見てきた。
長年見てきたからこそ、なんとなくわかるのかもしれない。
とにかく今の伊吹はいつもの伊吹だ。本当……戻ってよかった。

でも結局、伊吹は何を隠していたんだろうか。
その疑問だけが、俺の頭に残っていた……。

「圭介！」

「あ？」

「……まだ、お昼食べてない」

突然伊吹にそう言われた俺。
つまり、そういう事なんだろう。

「わかった。俺もう食い終わったけど、付き合うよ」

「そうと決まれば早く行く！」

「わかったから走るなって。食後に走ったせいで腹痛い……っ」

……太陽の光が、屋上にいる俺達を照らしている。
その光に見送られるように、俺達は校舎の中へと戻って行った。

第11話，光差す屋上で（後書き）

後書きトークコーナー

黒木「なんだこのリア充ども!?　死ね、そして死ね!」

赤佐「とか言って、黒やん伊吹ちゃん取られるの嫌なだけやん」

大林「まあ、黒やんよか藤島のほうがいい男だしな」

黒木「うるせえチビにチョクト!」

赤佐「誰がチョクトや!」

大林「チビだと!?　テメェ骨へし折るぞコラァッ!」

黒木「ああ、俺と伊吹ちゃんのラブストーリー……いつになったら始まるんだろ?」

赤佐「ないわ」

大林「ねーよ……」

黒木「ひどくねお前ら!?　クソッ、絶対伊吹ちゃん攻略してやる!」

第12話，突然過ぎるぜこの展開……ッ！

そして一日が終わり、帰り道の事である。
伊吹は部活、葵は友達との用事だそうで、今この場にはいない。
今日は大変な一日だったな。伊吹の機嫌を直すだけでも一苦労だった。

意外な事に暮葉についてはそれほど手間がかからなかった。
ほとんどクラスのみんなが面倒を見てくれたからだ。
しかも本人曰く、日本には一ヶ月前からいるらしく、その上事前に調査をしてきたようだ。
通りで異世界人のわりには慣れていると思ったよ。
まあきっと、アルファ隊の仕事で日本に滞在していたのだろうけど。
その暮葉は現在、俺の隣で今日一日の思い出話を語っていた。

「それでですね、小坂さんってすっごく拙者の家の事について詳しかったのです！」

「ああ、アイツ戦国オタだからな。ってかお前、まさか木下家について言っちゃったのか？」

「それはないのですよ。それを言ったら拙者も困りますし、言うなという上からの通達もありますので！」

「そっか」

そりゃそうだよな。異世界から来た上に秀吉の子孫？
そんなふざけた設定のキャラ、ラノベでも見たことねえぞ。
異世界から来た魔法使いってのはまあ……魔法は苦手みたいだが一

応は使えた事だ。
しかも妖怪みたいなヤツも見ちまったし、それは信じてやろう。
でも秀吉の子孫ってのはやっぱり信じられない。
もし本当だとしたら、どういう経緯で秀吉或いは子供が異世界に渡ったのか、非常に気になる所だ。
いっその事、聞いて見ようか。

「暮葉」

「もきゅ？　どうしたのですか？」

「いや、お前が秀吉の子孫って話、ホントなのかなぁ～って」

「んな！　失敬な！？　けーすけ様信じてなかったのですか！？」

いや、最初から信じてねえよ。
だって胡散臭いじゃん。そもそも豊臣家って断絶したハズだから子孫はいないハズだ。
流石の俺でもそれくらいの知識はあるぞ。

「いやぁ、だってそんなゲームみたいな設定どう信じろと？」

「けーすけ様はオタクだから簡単に信じると思ったのに！」

「……お前、オタクの意味わかってる？」

「はい！　可愛い女の子の絵を見てハァハァする人の事ですよね！？」

まあ、強ち間違いではないと思うよ。
確かにオタクの中にも変態という人種がいてだな、二次元の女の子にハァハァする輩もいるよ。
でも全てのオタクがそうってわけじゃない！す、少なくとも俺は……。
そ、そうさ。エロゲープレイしているくらいならまだセーフだよね？
とにかくだ。暮葉のその情報は間違いなくアレだ。

「それただの偏見だろ！　全員が全員そうってわけじゃねえよ！」

「もきゅ？　そうなのですか？」

「あたりまえだ！」

大吾は間違いなくハァハァするタイプだが、オタクの中にだって紳士的なヤツもいるんだからな。
例えば重原とか。アイツは確かにオタの部類だが、決して邪な感情は抱いていない……ハズだ。

「でも、けーすけ様がオタクなのは事実なのですよね？」

「まあ、それについては何の否定もできないんですけど……つか、なんで俺がオタだってわかったの？」

「はい！　家では葵さんが言ってました。学校でも皆けーすけ様の事変態オタクって言ってましたよ」

「誰が変態だ失敬な！　つーか誰だ変態オタクって言った奴！」

つーか変態オタクって言われたせいなのか！？

暮葉がオタク＝ハァハァする変態だと思いこんだのは！

「え～っと、亜紀さんに森島さんに中村さんに渡辺さんに……あ！
あと伊吹さんも言ってました！」

「へー、ソーナンデスカー」

女子共めぇ……つか小坂と伊吹までなに言っちゃってるんだよ。
アイツらは少なくとも俺の趣味容認してたハズだぞ。
ふざけやがって。俺は変態じゃない、仮に変態だとしても変態と言う名の紳士だよ！
つーか、小坂とはいつ名前で呼び合うくらい仲良くなったんだ？

「けーすけ様、変態なのですか？」

「変態じゃねえ！　紳士だ！」

「し、紳士だったのですか！？」

「あ、ああ。まあな！」

ＹｅｓロリータＮｏタッチ。女子は触るものではない、見て心で楽しむ物等々……。
そう、俺は紳士だ。決してムフフなものを見て、デュフフとかフヒヒとかキモい笑い方はしない。
そう……《恥》を感じても冷静でいられる。どんなムフフな場面でも冷静でいられる。
それこそ！それこそが変態という名の紳士なのだ！
……ああ。俺、なんでこんなくだらん事で盛り上がってるんだろう。

「それじゃあ葵さんから聞いたのですが、けーすけ様。えっちぃゲームしてるってホントですか!?」

「女の子が公の場でえっちぃゲーム叫ぶんじゃありません!」

「大丈夫なのです!　拙者、別に少しくらいの下ネタなら平気です!」

「それ、女の子としてどうなんだよ!?」

やっぱりアレだ。伊吹はちょっとガード硬すぎる気もするが、小坂くらいが丁度いい。

とにかく、バンバン下ネタを言う女子ってどうかと思うんだ。

「それでどうなのですか!?　護衛対象を知るというのも拙者の仕事なのです!」

「嫌な仕事だなオイ!　やってねえから!」

まあ……実はＰＣの中には結構な数のエロゲーが入っているんだけどね。

オマケにエロ画像フォルダーだけで２０ＧＢあるし……。

でも、こんなのフツー女子には言えないだろ?

それを言ったら俺は破滅だ。だから紳士として、これだけは隠し通されなければならない。

……まあ、要するに思春期男子は可哀想な存在なんだよ。

「ていうか秀吉の子孫って話はどこいった!?」

「あ、そうでした!　拙者ホントに子孫なのですからね!」

「で、根拠は？」

「んん～、豊臣国松って知ってます？」

「知るか！」

誰だよ豊臣国松って。豊臣おそ松の間違いじゃないのか？
いや、流石にそれはないか。とりあえず国松というのは豊臣家の人間だろう。
とにかく歴史ネタはあまりマニアックなものにはついていけん。
こういう時小坂がいたら便利なんだけどなぁ。

「豊臣秀頼の息子なのですよ」

「ひでより？　ひでよし？」

「もきゅ？　……けーすけ様、もしかして歴史苦手なのですか？」

「俺はあらゆる教科が苦手だ」

「もきゅ？　にゅふふ……けーすけ様はバカなのですね！」

「そこは心が折れるから突っ込むな！」

いいですよ、どうせテストの点数赤点ギリギリのバカですよ。
別にそれでも留年しなかったし、今まで補習すら受けたことがない。
ていうか俺、中学の頃はそこまで馬鹿じゃなかったんだぞ。
ただ無理して初芝という、そこそこ偏差値のある学校に入ったせいで……うん、一気に落ちぶれた。。

そうやって考えてみればあの三馬鹿も、初芝に入れるだけの学力はあるのだ。
いわゆる高学歴ヤンキーというヤツだろう。まあアイツら赤点常習者だし、馬鹿には変わりないが。

「んで、結局その国松がどうしたんだよ？」

「豊臣国松は処刑された事になっているが、実際は何者かに救出され、処刑されたのは替え玉。その後国松と救出者はどこかへ消えた。それが真実の歴史だぞ」

「え？」

「もきゅ？」

ハハハ、わかりやすい説明だったよ。ありがとうございます。
でも問題はそこじゃないんだ。さっきの歴史を説明したのはもちろん暮葉ではない。
突然背後から現れた、明智凪紗のような人物だった。
ところで何で明智凪紗と決めつけていないか。それにはちゃんと理由がある。
確かに見た目は明智凪紗その人だ。だけど……。

「明智……その服装はありえねーだろ！」

妙に短い着物だと？なんだ、このアニメに出てきそうな少し露出度の高い和装！
もしかして明智はコスプレの趣味でもあるのか！？

「もきゅ？　誰なのです？」

「私？　私は明智凪紗って名前だから、お見知りおきを」

「それはわかってるけど、お前その恰好なに？　コスプレ？」

「お前は今日廊下で見たヤツ。もちろんこの恰好は戦闘服だぞ」

「おかしいだろ！」

ていうか風紀委員たる貴女がなんでその……ふ、風紀を乱すような恰好してるんだ。

その……なんというか。生足エロいですよ明智さん！

それにそのバスト。なんという事でしょう、男子納得のサイズだ。

正直コスプレをした明智は、普通の男なら思わず見てしまう魅力的なものであった。

「それで、何の用なのです？」

「木下暮葉だな？　単刀直入に言う……私と、決闘しろ」

「っ！？」

「……ｗｈａｔ‘ｓ？」

すまん、サッパリ意味がわからん。

まず何故風紀委員であろ明智が、ただの転校生である暮葉に決闘を申し込む？

もしかして、明智がキレるほどの無礼を暮葉はやっちまったのだろうか？

「暮葉、お前何かやったの？」

「拙者は何もやった覚えがないのですよ！」

「確かにお前自身は何もしていない。でも、仕方ないんだ……」

そのセリフはなんだか意味あり気であった。
それでも意味がよくわからん。
まず明智と暮葉、戦う理由がないんじゃないのか？

「……っ！　もしかして、貴女は明智光秀の子孫なのですか！？」

「エェッ！？　暮葉さん、それは流石に妄想のレベルじゃね？」

「鋭いな、流石は豊臣秀吉の子孫……」

「マジなのかよ！？」

どういう事だ。待て、待つんだ。現実（リアル）に呑まれるな。
冷静に今までの展開を整理するんだ。
暮葉が説明しようとしたら、代わりに突然現れた明智が暮葉の家の事を説明した。
んで、その後何故か明智が暮葉に決闘を申し込み、果てに暮葉は明智の事を明智光秀の子孫と指摘。
明智はそれは事実だと肯定し……待て待て、ありえねえだろ。
そもそも秀吉に討たれた明智光秀に子孫なんているのか？秀吉の子孫並に存在が怪しいぜ。

「も、目的はなんなのですかっ！？」

「っ……仇討ちだ」

「天王山の……なのですか？」

「一応そういうことになるぞ」

あー、もうわけがわからん。
戦国武将の子孫だと思いこんだ方々が、何故かリアル殺し合いしようとしてるよ。
とにかくこれって止めるべきだよな。うん、そうしないと後々面倒そうだ。

「ちょっと待てお前ら！　戦国武将の子孫とかいうガセネタで争うのやめい！」

「ガセネタじゃないのですよっ！」

「一応事実なんだけど……というか、なんでお前までいるんだ？」

なんか明智さん、今度は俺に話を振ってきたぞ。
しかも完全に俺がいちゃ迷惑なような言い方である。
そりゃあね、なんでここにいるかって言われても。

「仕方ねえだろ。暮葉と帰る方向一緒なんだから」

「暮葉？　お前っ、木下の何だよ？」

「何って……まあ家族みたいなもん？」

一応同じ家に住んでいるし、ご飯まで作ってもらっているんだ。

確かに暮葉曰くそれは仕事らしいが、それでも強ち間違いではない。
俺も葵もなんだかんだで、家族のように彼女に接しているし。

「お、お前も……もしかして木下家の一員？」

「いや、俺は藤島って名字だけど」

「家族じゃないだろ。もしかして不純異性交遊か？」

「してねーよ！　ていうか風紀委員のお前がそれ言うと洒落に聞こえなくて怖ぇよ！」

そもそも俺は告白された事すらない非モテ男だ！
そんなニヤニヤな展開があったんなら今頃ニヤニヤしてるぞ！

「とにかく邪魔だ。死にたくなかったら……今までの会話内容をすべて忘れて帰れ」

「いきなり脅しかよ！？」

「けーすけ様！　あの人冗談じゃないのです、危険ですから下がってください！」

「あのなぁ、展開的にお前が一番危険だろ？」

明智は間違いなく、暮葉の事をぶっ倒そうとしている。
二人とも戦国武将の子孫だなんて、今だに信じられない。
だけど明智は確かに彼女と決闘をしようとしている。
それもすっごく胡散臭い理由で。だけど、もしそれが本当の事だとしたら相当まずいんじゃないか？

だって明智ってバケモノみたいに強いじゃん？
あの喧嘩ばっかりしてると噂の三馬鹿をアッサリ倒すくらいだしね。
暮葉も多分刀を使えば強い。しかし暮葉は今、その刀を持っていない。
当然銃刀法に関わる問題だ。だから持ち歩くなって俺が言っといた。
でも暮葉は魔法少女ながら魔法が苦手だ。あんなの使われたら俺が被害を受けるかもしれないだろ！
魔法を使わないとしたら明智といい勝負、下手したら明智のほうが強いんじゃあ……ふ、不安だ！

「早く帰らないと頭を攻撃するぞ？　打撃によって記憶をぶっ飛ばすぞ」

「絶対嫌だ！」

「なら帰れ、それから秘密を絶対バラすな」

「いや。お前が暮葉を狙うってんなら、どんな事情があろうと引き下がるわけにはいかないんだが」

一緒に暮らしている人の身が危ないかもしれないのに、引きさがれるわけがない。
それにコイツはサヴィエトの人間じゃないんだろ？
暮葉曰く明智光秀の子孫らしいし。俺は全然信じていないが、多分俺を狙っている組織とは関係ない。
だったら別に……俺が出しゃばったっていいよな。

「……っ、お前。ただの人間じゃないな？」

その時、明智の目付きが変わった。冗談のじょの字もないほど鋭い。
俺はまるで、威嚇されているような気分をいつの間にか味わっていた。
ていうかさ、なんで俺がただの人間じゃないってわかったんだろう？
自分では普通の人だと思ってるのに。みんな普通の人だと思ってるのに。
あ、でも常人に比べてやたら体は丈夫か。

「藤島……だったっけ？　どこか広い所に行こう」

ひ、広い所って……それって俺と戦うって意味だよな？
狭い場所ならエッチな事を期待するが、広い場所でそれはないし。
そもそも明智が俺に向けているものは、好意ではなく戦意だ。

「ちょっ！　せ、拙者はどうしたのですか！？　というかけーすけ様には手を出さないで欲しいのです！」

「暮葉、下がってろ」

「もきゅ？　で、でもっ！」

「いいから」

俺は暮葉を無理やり退かし、一歩前へと踏み出した。
この時、完全に俺と明智が睨み合う形となった。
どうしよう。成り行きで出しゃばっちゃったけど……正直戦う理由がない。
大義名分もないのになんで戦う展開になってるんだろう？

「あのさ、俺、出来れば女の子とは戦いたくないんだけど？」

「私はお前に興味が出たっ。正直、木下よりも」

「それで俺と戦うのかよ？」

「ここまで言っても引き下がらない上に、ただの人間にしては異様な雰囲気を放っているからな」

異様な雰囲気かぁ。そんな事今まで言われた事ないのに。
最初から変な奴とは思っていたが、やっぱり明智も真性の変人だったよ！
……でもまぁ、正直明智みたいなバケモノと丸腰の暮葉を戦わせるのも気が引ける。
どうせボコボコにされるんなら、体が頑丈な俺のほうがいい。
それに、相手から敵意は感じても、それ以外のものは……。

「はぁ、わかったよ。それで気が済むってんなら……相手になってやる！」

俺がそう言うと、明智は一瞬驚いた表情になる。
本当に俺が喧嘩を買うとは思っていなかったのだろう。
しかし彼女は俺の真剣な顔を見ると、本人も真面目な顔になり、コクリと首を縦に振った。

第１２話，突然過ぎるぜこの展開……ッ！（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「さてさて、今日から皆がどんなヤツか見て行くぜ！　と、いうわけで最初は俺な」

伊吹「バカ、変態、オタク、鈍感、脳の９９％はエロで出来てる最低男」

圭介「……なにこれひどい」

小坂「あはは、ごめん……あたしも伊吹と同じ」

圭介「俺いいとこないじゃんっ！」

暮葉「そ、そんなことないのですよ！　けーすけ様にだってきっと……っ」

圭介「思いっきり言葉詰まってんじゃねえか！」

伊吹「まあ、焼きそばだけはおいしいわね」

圭介「そこだけ褒められてもうれしくねぇっ！」

小坂「そういえば圭くんって友達少ないよな。なんで？　カッコいいと思ってるのか？」

圭介「それクールとか思ったら大間違いだぞ！　悲しい所なんだか

らな！」

暮葉「けーすけ様っ、ふぁいとなのです！」

圭介「……もう嫌っ、こんな現実！」

第１３話，魔法使いではない者

初芝高校からわりと近い場所に、古宇坂中央霊園という墓地がある。その墓地、規模はそれほどの大きさではないのだが、霊園の前は結構な広さの荒れ地が存在する。
霊園自体お参りに来る人も少ないし、近くに工事現場があるが近頃何か事情があるのか、全く工事をしていない。つまり人目を気にする必要もないし、戦闘するには十分なスペースが確保できるのだ。
俺ら３人は今まさに、古宇坂市内に存在するその荒地にいるのだ。

「け、けーすけ様。元々木下家と明智家の問題に、けーすけ様は関係ないのですから……っ」

「わかったわかった。とりあえず手出し無用だ」

大丈夫だ。何も明智は一般人を殺すつもりはないだろう。
それに俺なら少しくらいボコられる程度なら平気だ。
あの三馬鹿があのザマだし、勝てるとは思えないが……。

「一応警告しておく。私は戦う時……普段の私よりも強い」

「言ってることがサッパリ意味わかんねえけど……俺も少々殴ったくらいじゃ倒れないからな」

そう言って俺はゆっくりと、拳を構えた。
あんなに丈夫な俺でも、頭を強打したら時々気絶くらいはしてしまう。
だからそれを防げるよう、頭をガードできるようにしっかりる両腕

を上げた構え。
ハッキリ言うと俺は格闘技経験なんてないド素人。しかしちょっとした事情により喧嘩の経験は多い。
前にも言った気はするが、これでも俺はズブの素人じゃないのである。

「……ふ～ん、藤島。喧嘩には慣れてるのか？」

「なんでそんな事わかるんだよ」

「構えと雰囲気を見れば大体わかるだろ？」

「お前はプロの格闘家か！」

確かに絶対勝てなさそうな相手なら素人でもわかるよ。
でも微妙な実力を見抜くなんて、素人にはできねえよ！
やっぱり明智はバケモノだ。さて、どんな武術を使ってくるんだ？
きっとそこらの武術とは違うだろう。まさか軍隊が使うようなもの使ってくるんじゃ？

「格闘技？　確かに習った……でも私は違う」

「はぁ？　まさか三馬鹿をアッサリ倒す実力持ってて、実は素人とか言う気なのか？」

「素人でもない。私は……」

多分この時だろう。明智が本当にオカシイ奴だって確定したのは。
そこまで言いかけた後、明智の掌がぼんやりと光る。
その時点でも十分におかしいと思ったのに、今度は突然掌が轟！と

爆発したのだ。

「な、なんだそりゃっ！？」

掌の上で燃えあがるオレンジ色の炎。
確かに大した大きさではない。例えるならサッカーボール程度の大きさの火の玉である。
ただ俺はそれでも信じられないんだ。だって、常識的に考えてあんなのオカシイじゃん！
どうして明智はライターも何も持っていないのに、いきなり火を起こせたんだよ！
もしかして、明智も暮葉と同じ魔法使いで、あの意味不明な炎は……！

「お前っ、それは魔法か！？」

「けーすけ様！　明智殿からはほとんど魔力を感じないのです！
あれ、多分魔法ではないのです！」

魔法ではないって……じゃあ他になにがあるんだよ！
魔法はとりあえず信じてやるよ。滅茶苦茶だったけど暮葉も使えたし。
でも今の所魔法以外のものは全く信じられない。
結局アレは魔法じゃなかったら、一体何の力なんだよ！
実は人の錯覚を利用して科学的に騙す、マジックとか言うんじゃないのか？」

「ねえ、超能力って知ってる？」

「ちょ、超能力？　とあるラノベじゃ良くでてくるけど……」

「私もいつ自分に発現したかわかないんだけど、でも便利な力だぞ」

緊張が、このあたりを支配する……。

超能力とかいうワケのわからないもの。

ぶっちゃけ魔法と区別のつかない能力（チカラ）。

でも、何より……あんなのを明智が使えるって、チートじゃねえか！

俺は今まで戦いと言っても、そこらの不良しか相手にしたことがないんだぞ！

なんでいきなりこんなのと戦わなきゃいけないんだよ。俺はそげぶの人じゃねえんだぞ！

「なんたって、こうやって投げつけるだけで……攻撃できるんだから！」

明智は余裕そうな笑みを浮かべながら、オレンジ色に燃える火の玉を俺に投げつけてきた。

それはまるで、野球ボールを投げるようであった。

ただ投げつけるものが、野球ボールよりも大きく、そしてボールではなく火の玉であるというだけ。

そして一回投げられた火の玉は、時速１００ｋｍ／ｈは超えるスピードで俺に向かってきた。

「けーすけ様！」

「くっ！」

気分は第二次世界大戦時のレジスンタンス。これほどのスリル、感じたこがない。

まさに新感覚スリル満点！……って喜んでる場合か！

とにかくあんなの喰らえばフツー死ぬ。いや、死なぬにしても病院送り確定だ！
こんな体質なせいか、俺は火傷にも強い。でも火傷はただ殴られるよりも痛いから嫌じゃ！

――――そんな事を考えている間に、俺は何故か右へ跳躍していた。

きっとそれは本能だ。俺は反射的にあの火の玉を避けていたのだ。
もちろん火の玉が地面に着弾する。刹那、火の玉は爆発を起こした。
吹きつける熱風に衝撃波。俺はそれに押され、５ｍほど吹っ飛ばされてしまった。

「くそっ！」

地面に体を打った時の痛みに耐え、俺は立ち上がる。

「遅いっ！」

だが俺が行動に移った時には、既に明智は俺の目の前。
そして明智が放つ廻し蹴り。綺麗な孤を描く右足。鋭く華麗な一撃。
明智は俺のこめかみにソレを打ち込んできた。

「ぁ――ッ！？」

声にもならぬ一声を俺は放つ。
そのまま立ち直る事もできず、勢いをつけたまま荒地に倒れてしまった。

「つ、強い……っ！」

耳はしっかりと聞こえる。暮葉の叫び声がよく聞こえる。
それよりも目まいがするな。いかん、今の一撃で軽く脳震盪起こしたかも。
三馬鹿を倒した時とは動きがまるで違う。これが明智の本気かよ……。

だけど、所詮は人の攻撃だ。トラックに轢かれて無事な俺だぜ？
これぐらいの攻撃でダウンしちまうほど……俺はヤワじゃない！
ようやく目まいもなくなったことだし、痛みも殆ど消えた。
俺はゆっくりと立ち上がり、明智を睨みつけた。

「驚いた。あの馬鹿（くろき）に放った蹴りよりも強くやったのに……」

「アホ！　そんなもん同級生に打ち込むな！　殺す気か！」

「やっぱり、ただの人間じゃないんだな……お前」

「そんなの関係ねえよ！　風紀委員の癖に危なっかしいヤツだな！」

そもそも、どうして超能力者が存在しているんだよ。
アレって大体嘘つきの詐欺師だと思っていたが……。
それを言っちゃあ魔法使いも怪しいが。

「さて……そろそろ本格的に行くぞ。そしてお前の記憶を消す！」

「消されてたまるか！」

明智が両手首を合わせて手を開いて、体の前方に構える。
腰付近に両手を持っていきながら炎を作り出し、両手を完全に後ろにもっていくと、再びサッカーボール程の大きさの火の玉が、手の

中で激しく燃えていた。

「波！」

両手を一気に突き出し、柱のような炎が俺へと迫ってくる。

「かめはめ波かよ！？」

そうは突っ込んでみたが、アレは炎だ。似たようなものだけど、多分かめはめ波ではないだろう。

このままだとマズイ。あんなのに当たったら大火傷。いや、死ぬかもしれない。

とにかく俺は発火能力（パイロキネシス）によって放たれた、あの攻撃を避ける為に左へ跳躍する。

ギリギリ、まさにギリギリであった。

体に激しい熱を感じる。それはあの炎が本物であるという証だ。

「トドメ！」

明智はいつの間にか間合いを詰めていた。

さっきと同じように、避けて油断している俺を攻撃するつもりなのだろう。

だけどなぁ、考えが甘いぜ。

「二度も同じ手に引っ掛かるかぁぁ！」

突き刺さるような右ストレート。明智は正確に俺の頭部を狙っている。

だけど言ったろ。二度も同じ手には引っ掛からないと！

反射的に両腕を出し、その攻撃から頭部を守ってみせた。

しかしなんちゅー威力じゃ！防いだ腕が痛ぇよ。でもマトモに喰らうよりはマシだろう。

「ふっ！　はっ！　ふんっ！」

その後、次々と振られてくる拳に脚。
そのどれもが修業を積んだ空手家のように素早く、鋭く、キレがいい。
クソッ、流石と言わざるを得ない。避けるだけでも精一杯だ。

「素晴らしい反射神経だけど、避けるだけでは状況が悪くなるぞ！」

「くっ！　くそっ！」

確かに、このままだと必ず一発は入るだろう。
そして明智は一発で崩れた俺をさらに追撃してくるハズ。
そうなると逆転の可能性はなくなってしまう。早くなんとかしないと！
でも、こんな強い奴相手にどうしろってんだよ！

「波ぁぁぁっ！」

「ぐぁっ！」

射抜くようなボディーブロー。
腹部を貫くような痛みに、一瞬呼吸が止まる。しかも前に倒れ込んでしまうそうになった。
でも明智に負けるという事は、今までの記憶すべてを失うのと同じ意味なんだ。
そんな結末俺は望んじゃいねえ。何よりこんなくだらない戦い、早

く終わらせたい。
何より俺が負けたら暮葉に合わせる顔がない。アイツは俺を守る為にここにいるって言っていたんだ。
もし俺の身に何かあったら、アイツはアルファ隊で……だから俺は負けられない。
その気持ちがあったらこそ、俺は今の攻撃を踏みとどまって堪える事ができたんだ。

「んぬっ！」

「っ！？」

既に明智の右拳は俺の顔面目前だった。
そんなの避けれるわけもなく、モロに喰らってしまったが……。
それでも俺は、左頬に当たっている拳を気合いで押し戻してゆく。

「っ！」

拳が完全に押し戻されるのを防ぐ為、明智はグリグリと右拳を俺の左頬に押し付けてくる。
痛ェ……久しぶりに人の攻撃で痛いと感じた。
でも、これで負けるわけには……いかねえんだよ！

「ぅ、ぐぅおおおおおおっ！」

「ぐっ！　ふ、藤島っ！」

「これがテメェの……ッ！」

そう言いながら、明智の拳を右手で振り払い。

「限界だぁっ！」

叫び、歯を食いしばる。俺は力の限りのヘッドバットを彼女にかました。

「うっ、あぁっ！」

「ぐっ、いってぇ～！」

滅茶苦茶頭痛い……明智の奴、女の子なのになんて石頭してるんだ！だけど決死の頭突きにより、明智は後退りした。それはつまり、俺との距離が離れたという事。

しかも彼女は今の攻撃で痛がっている。そう、隙が出来たんだ。もちろん俺はこの隙を逃さなかった。

でもなぁ、流石に女の子の顔面殴るなんてできないし……いや、頭突きの時点で最低だと思うけど。

それでもグーパンはしたくない。そういうのはそげぶの人がやってりゃいいんだ。

そうだな……こういう場合、俺は！

「うあああああああああああっ！」

要するに動けなくすればいいんだ。

「んっ！」

だったら……押し倒すのもアリだよね！

だから俺は一気に駆けだし、勢いで彼女に掴みかかって押し倒した

のだ。

「うっ……」

下から苦しげな声。。

俺は今、彼女を押し倒してマウントポジションを取っている。

この体勢だと彼女は行動不能。戦いの主導権は俺が握っている。

……勝った、黒木が何度やっても勝てなかった明智に……俺が勝った！

それにしてもこうして明智を見ていると、やっぱり明智も女の子だなぁ。

綺麗な肌、整った顔、美しく蒼い瞳……やべえ、可愛い。

それにこの弾力ある女の子特有の感触が――――あれ、ちょっと待て。この感触って？

「こ、これは……っ！」

なんということでしょう。なんと俺の右手が神聖なる女の子のお胸に……。

「……エェッ！　こ、これなんてエロゲー！？」

思わずそう叫んでしまうような、幸運なのか不幸なのか判断に迷うイベントが……。

そもそも、なんでわたくしの右手が、ふにゅふにゅとした乙女の左胸に？

ちょっと待て。考えようによっちゃあ嬉しいイベントだけど、まずくないかコレ！？

「け、けーすけ様……っ」

「待て暮葉！　こ、これは違う、違うんだ！」

いかん、暮葉が露骨にどん引きしている。まずいぞ、早く手を放さなければ！

いや、でも……なんだろうコレ。すごく……揉みごたえあります。

明智のナイスなおっぱい。俺らの夢が詰まった二つの膨らみ。

多分赤ちゃんの頃お袋のを触ったのを除けば、これが初めて触る他人のおっぱいだ。

ああ……おっぱいってここまで素晴らしい感触を持つものだったのか！

「……おい」

「ひぇっ！？　は、はい！」

……あ、明智の口から放たれた一言がなんか怖い。

低く掠れたハスキーボイス。

大噴火でも起こしそうなくらい不機嫌な顔。

「いつまで触ってるんだ、この変態っ！」

その時、ついに明智山が噴火してしまった。

「ぎゃあああああああああっ！」

下から放たれる、アッパーカット。

ダイナミックなその攻撃を喰らった俺は、気付いた時にはお空を飛んでいた。

ハハハッ、ボク飛んでるよ～ハハハ……って喜んでる場合じゃねえ！

気分は落下傘が開かなかった空挺兵。
こんな状態で受け身が取れるハズもなく、俺は頭から地面に突っ込む。

「んぐっ！　ふんぐぐぐっ！」

うあああああ！
か、顔が、首から上が土に埋まってしもうたあああぁぁぁっ！

「ふぁぁふぃゅふぇふぇ～（たすけてぇ～）！」

ああ、いかん……窒息死してしまいそうだ。
幸せだったのは、ホントに一瞬だけでした……。

第13話，魔法使いではない者（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「今回は暮葉だな」

暮葉「もきゅ？　拙者ですか？」

葵「クーにゃんは明るくて面白い人だよね！」

圭介「ただのアホなぺったんこだけとな」

暮葉「んな！？　失敬！　失敬です！　拙者はちっちゃくないですよ！」

葵「お兄ちゃんは美乳派だもんね。ほら、葵の胸はお兄ちゃんのどストライクだと思うよ！」

圭介「ただの妹には興味ありません。二次元の妹を連れて来なさい」

葵「なっ！？　ぐぬぅ……こうなったら葵も二次元の妹に敵うくらい、立派な妹キャラになってやる！」

暮葉「もきゅ？　にじげんのいもうと？」

圭介「暮葉もいつかわかるさ……現実の精度の低さにな！」

※結論：暮葉は純粋、だが圭介はダメ人間である。

第１４話，そういうわけだったのですね

「参った……藤島がこんなに強いなんて、一瞬たりとも思わなかった……っ」

「いやぁ、戦いをやめてくれるんならいいよ。いいんだけどさ……」

明智との戦いに勝利したはいいが、ちょっとした事故で土に埋まってしまった俺。

あの後暮葉が俺を助けてくれたんだ。大根を引きぬくような感じでな。

そして現在、明智が俺に対し、降参宣言をしている。

そこまではいいんだ。ホント、そこまでは完璧だった……問題は。

「どうして俺を縄で縛ったんですか！？」

暮葉がそこらへんで拾ったと言う丸太。それに俺は縄で縛られているのだ。

今の俺はとても勝者とは言えない、超無様な姿であろう。

「変態は縛るべしって、私は教えられたぞ」

「誰が変態じゃ！　暮葉、助けてくれ！　護衛対象が拘束されてますよ！？」

「拙者も明智殿と同意見なのです。けーすけ様は少し反省するべきだと思うのです！」

「アレは事故ですって！　決して邪な感情があったわけではないですよ！」

でも明智のお胸の吉備団子。素晴らしい弾力だったなぁ。

「けーすけ様！　顔がニヤけてるのですよ！」

「ソ、ソンナコトナイッスヨ！？」

「やっぱり、藤島はただの変態だっ！」

「だぁ～から事故だって！　いい加減俺を解放してください！」

殴られるのと押し倒されるのだったら、誰だって押し倒されるほうがマシじゃ！

顔面が血だらけになるよりは遥かにマシなハズだ。

その際に起きた、いわゆる不幸な事故なんだよアレは！

「変態だと認めろ。じゃないと火刑にするぞ？」

「お前が言うと冗談に聞こえねぇ！」

正直縛りがキツすぎて痛いんだが。

しかも明智に超能力で火刑にされそうだなんて……。

窮屈極まりないぜ。気分は火刑に処されるジャンヌ・ダルクだ。

「けーすけ様、やっぱり変態だったのですね……っ」

「コラそこ！　哀れな目で人を見るんじゃありません！」

「明智殿！　けーすけ様は一応皇族なのです。ですから処刑の際はギロチンでっ！」

「そんなもの用意できないなぁ。よし、この変態は名誉ある銃殺に処そう！」

「二人揃って怖い事言うな！　暮葉も護衛対象を殺そうとするな！」

その後、死にそうになったり、「変態」と明智に罵倒され続けた事は言うまでもない。

しかも時間にして３０分。なにこれ、新手のＳＭプレイですか？

だけど俺はマゾヒスト君じゃないし、ちっとも嬉しくない！

それどころか……何度か生命の危機を感じましたよ！

危なく俺は、ジャンヌ・ダルクの如く、焼き殺される所であった。

だけど俺が解放される事はなかった。相変わらず縄で縛られた状態で会話は続けられた。

「んで、結局暮葉や俺を襲った理由ってなんなんだよ？」

「……藤島は興味。木下は父の命令だ」

「もきゅ？　お父様の命令なのですか？」

「俺は興味だけで攻撃されたのかよ……っ」

「そう。私自身木下には何の恨みも持っていない。あと藤島はホントに興味があっただけだよ」

「……」

このクールな風紀委員の女の子、ガチで言ってやがる。
もうなんだか泣きたくなってきたよ。もう泣いてもいいかな？
だけどこの状態で泣いたら、流石に情けなさすぎるか。
というかいつ解放されるんだろう、俺？

「私は本当に明智光秀の子孫らしいんだ。父は二週間前に木下を発見し、秀吉の子孫だと直感的に思ったらしい」

「もきゅ！？　すごいですそのお父様！　確かに拙者は秀吉公の子孫なのです！」

俺には信じられないが、一応そういう事にしておこう。
もう考えるのが面倒になってきた。
でも本当におかしいぜ。豊臣秀吉の子孫が異世界人な上に魔法使い？
明智光秀の子孫が風紀委員で超能力者？
一体どこのレーベルから出てるラノベなんだよ。常識的に考えてありえねーだろ。

「それで父は突然、私に木下暮葉抹殺を命じたんだ……っ」

「……やっぱり、天王山の仇なのですか？」

「おそらくそうだと思う……っ」

明智は相当悔しそうな表情をしている。
勝負に負けたからなのか、何かを思い出して悔しんでいるのか。
それはわからない。でも彼女は歯を食いしばり、目をつり上げ俯いていた。
おそらく彼女は本当に殺すのが嫌だったのだろう。
だとしたら、なんで俺達と戦う必要があったんだ。なんでそんな命

令引き受けちまったんだよ。

「本当は嫌だったのはわかった。だったらなんで命令のままに動いたんだ？」

俺がそう訊くと、明智がいきなり口を大きく開き。

「仕方なかったんだよ！　父は普段はそんな人じゃなかったのに……私を暴力で脅した！　私の力じゃまだ父に抵抗はできない。だから動かざるを得なかったんだっ！」

叫ぶように真実を明かしてくれた。

明智でも抵抗できないって……どんな親父さんだよ！

あれほどの強さを明智は誇っていたのに、それ以上って……信じられねえぞ。

……明智はさらに言葉を続ける。

「だから私は木下の所に行って、戦う事にした……っ。実力を試す為に！」

「もきゅ？　拙者の……実力ですか？」

「もし木下が強かったら……共闘すれば……父に勝てたかもしれなかったからっ」

共闘すれば勝てる。うん、実に少年シャンプ的な話だ。

だけど確かに2対1なら、絶対人数の多いほうが有利だろう。

だから明智は態々悪役になりきって実力を試し、実力を知って共闘しようとしたのか。

明智は風紀委員。成績も優秀だって噂だ。だけど、それなのに……。

「お前って意外と馬鹿だったんだな」

「っ？　へ、変態に言われる筋合いは――――！」

「そういう話なら、最初から戦わねえで相談すりゃよかったろ」

俺の言葉に、明智の動作は止まってしまった。
だけどすぐにジト目になり。

「……超能力なんてハナから信じてなかったのにか？」

「うっ……で、でも暮葉は魔法を使える！　証拠さえ見せてくれれば……ほ、ほら今は信じてるぜ！？　あの炎のせいで焼死するかと思ったんだからな！」

「魔法？」

俺の怪しげな言葉を追及されると思ったが、どうやら彼女は魔法という言葉に興味を持ったらしい。
そりゃ超能力と魔法は違うらしいからな。とあるラノベによると。
……実際似たようなもんじゃね？と思っているが、まああえて突っ込まない事にしよう。

「ああ、暮葉は超能力は使えないが、魔法ってものを使えるんだ。一度使用したら大惨事だけど」

「もきゅうぅっ！　けーすけ様、まだ魔法で人殺しはしてないのですよ！」

「俺が死にそうになっただろ！」

だって　超空の要塞（スーパーフォートレス）こと、Ｂ－２９もビックリな高高度までぶっ飛ばされたんだぜ？

もしアレが俺以外の別な奴だったら、もうお見せできない姿になっていただろう。

とにかく俺でよかったよ……いや、全然よくないけど誰かが死体になるよりはマシだ。

と、そんな事を考えていた時。明智が口を動かし始める。

「……でも、相手の実力を知りたかったからっ」

「相手の実力か、別にそんなのどうでもいいじゃねえか」

「お前は父の実力を知らない！　だからそんな口が叩けるんだ！」

確かに、俺はコイツの親父の実力を知らない。

だからこそ言えたというのも、あるかもしれない。だけど……。

「そうじゃねえ！　協力して欲しいんなら最初から言えばいいって話だよ」

「だけど……っ」

「実力なんて後からでも試せただろ？　全く、敵だって誤解しちゃったじゃねえか」

それがなかったら最初から明智の事、敵だなんて思わなかったのに。

最初から協力する姿勢でいられたのに。

実力なんて、それから知って行けばよかったんだ。

「わ、私は……敵じゃないのか？」

「はいっ！　事情はわかりましたので！」

「それにお前、風紀委員だろ？　だったらある意味風紀を乱しているその親父さんを、とっちめに行こうぜ！」

そんなセリフを言ってみた。

すると明智は、少しだけ表情を穏やかにし。

「……ありがとう」

その一言を言ってくれたのだ。なんだか初めて見た気がするなぁ。

あのカッコいい雰囲気の明智が、素直にお礼をするシーンを。

何より、こんなに　女の子らしい表情の明智を……。

だけど、まだ何もかもが始まったばかりだ。

おそらくここからが大変なんだろう。だけど苦しんでいる明智を放ってはおけない。

だから必ず親父さんに会って説得してやるよ。もう暮葉を狙うなって。

それから――実の娘を暴行するなってな。

「……ところで、そろそろ縄解いてくれない？」

「それは嫌だ、変態藤島」

「そうですね。けーすけ様、もう少しだけ反省しましょう！」

「誰か助けてくださぁいっ！」

結局この後３０分くらいは縛られたままであった。
そして、危うく緊縛プレイに目覚める所でした……。

第１４話，そういうわけだったのですね（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「今回は伊吹！」

暮葉「伊吹さんって可愛いですよね！　羨ましいのです！」

伊吹「そ、そんなっ！　褒めたって何も出ないわよ……っ」

圭介「まあデレのないツッパリだけどな」

伊吹「ツッパリ言うのやめい！」

圭介「いいか伊吹。ツッパリじゃあ誰も見てくれねえぞ。せめてツンデレになれ！」

伊吹「誰がツンデレじゃばか圭介っ！」

圭介「べ、別にお兄ちゃんの為じゃないんだからねっ！　くらい言わないと、ツンデレには永遠になれないぜ？」

伊吹「言うかバカッ！」

圭介「ちょ！　し、竹刀らめぇっ！　ごぶるぁっ！？」

※安全な竹刀を使用しております！

第１５話，決戦前日

あの後……明智を途中まで見送った俺達は、二人で我が家に向かっていた。
なんだか成り行きだが、明日明智家に突撃をかける事になったのだ。
なんという急展開。しかし後悔はしていない。
アイツ、真剣に悩んでいるみたいだしな。

「けーすけ様、ホントに明日行かれるのですか？」

「そりゃあ、行くしかないだろ？」

だって、そこには困ってる女子。いや、困っている人がいるんだ。
日本男児としてそれは当然放っておけない。
昔からそうだった。……アイツも俺も小さかった頃から。
すべての始まりは……アイツの為に、俺は……。

「……けーすけ様？」

「お、おう！」

「どうかされたのですか？」

「いや、なんでもない。それより明日はお前も来るのか？」

「あ、あたりまえなのです！　けーすけ様をしっかり護衛するのです。それに明智殿の問題には拙者の家の事も絡んでいるのですよ！」

「そうかっ」

そういえばそうだったな。明智の親父さんが、暮葉を抹殺しろって命令したのが原因。
暴力で脅された明智はそれに従うしかなかった。
だからあんな騒ぎになってしまったのだろう。
俺は未だに、二人が本物の戦国武将の子孫だなんて信じられない。
ただしそう思いこんでいる家庭は小坂曰く、現代でもいくつかあるらしい。
きっと暮葉も明智家もその類の家庭だろうと、俺は思っている。
だったら騒ぎを解決する方法は一つしかない。その親父さんを説得し、木下家と和解させる事。
互いに因縁がなかったとしても、そう思いこんでいるせいで自然と因縁が生まれている。
だからその状態を無くす為には、そういう事にしておいて和解させるしかないんだ。

「そういえばけーすけ様、たくさん打たれましたけど大丈夫なのですか？」

「ん？　ああ、全然平気だよ」

「でもでも！　あれ、普通の人なら大怪我なのですよ！？」

「高高度まで吹っ飛ばされて落下した時のほうが痛かった。言ってなかったっけ？　俺こうみえても頑丈なんだよ」

「頑丈……？　確かにけーすけ様、普通の人より打たれづよいのですけどっ」

ああ、やっぱり暮葉のヤツおかしいと思っているな。

そりゃそうだ。俺でさえおかしいと思っているよ。自分の頑丈さにはな。
トラックに轢かれても死なない。高高度から落下しても死なない。伊吹に殴られようが明智にこめかみを蹴られようが、別に大した事がない不思議な体。
オマケに怪我の治りまで早い。俺の身体……一体どうなってるんだろう？
……まあいいか、考えた所で無駄だからね。それにこの体質はある意味で便利だし。

「それより暮葉、今日の晩御飯は？」

「はい！　本日は拙者が日本に来て初めて学んだ料理、焼き魚をやってみたいと思うのです！」

「思いっきり和食だなぁ。一ヶ月の間に随分学んだな」

「はい！　色々ありましたのです！」

「色々ってなんだよ！？」

なんか犯罪臭がするんだけど、そう思ってるのってもしかして俺だけ！？
……と、こんな感じで俺達は、楽しく会話をしながらｍｙホームへの帰路を歩いていた。

その後、ようやく到着した我が藤島家。
もう日暮れだ。きっと葵は帰ってきているだろう。
アイツはなにをしてるのかなぁ。今朝から色々な事がありすぎて、

アイツと会うのが久々に感じるよ。
ま、葵の事だ。きっと一人でもうまくやっていたのだろう。
鍵は……開いている。という事はアイツいるな。
鍵を取りだすのも面倒な作業なのだが、わざわざ開ける必要がないのは俺としても少し助かる。
というわけで、俺は自宅の扉を開けた――――

「ただい――――」

「お兄ちゃんにお兄ちゃんお兄ちゃーーーんっ！」

瞬間、ｍｙ・シスター葵たんが飛びかかってきたのだ。
おおすごい、まるでＶ２ロケットがロンドンを狙うようだ！
って、呑気な事言ってる場合じゃねえええぇぇぇっ！

「おおぉわあぁあぁあぁあぁっ！」

全く準備が出来ないなかった何の対処も出来ず、妹の思うがままに押し倒されてしまった。
その上、マウントポジションまで取られてしまったぜ。
どうしよう。葵が乗っかっているせいで全く身動きが取れん！
しかも後頭部を打ってしまった。正直痛いぜコレは……っ！

「えへへっ、おかえりお兄ちゃんっ。あと暮葉さん」

「た、ただいまなのです……っ」

ほら、暮葉が困っているじゃないか。
あと葵さん。一つ問いたい事があるんだ……。

「顔を胸にスリスリさせんな！　胸を圧迫するな！　つーか降りてくれ！」

「んん～っ！　だって、葵の中のお兄ちゃん分が不足してるんだもん！」

「なんだよお兄ちゃん分って！？」

「とにかく今補給中なの！」

「ちょ、降りんかい！　ヨスガるのは二次元だけでええわ！」

ヨスガる。それはとあるアニメから生まれた言葉である。
まあ具体的な内容はアレだ。実の兄と実の妹とがあ～んな事をするって事ですよ。
だが、常識的に考えてそれは色々と問題だ。
いくら俺でも超えちゃいけない壁は超えないの事ですよ！

「もうヨスガっちゃおうよ、お兄ちゃん！」

「するかぁっ！　そういうのは好きな人とするもんだっ」

「葵はお兄ちゃんＬＯＶＥだもん！」

「そういう歪んだ愛はいらねえっ！」

葵は妹だからそういう対象になってたまるか！
藤島家の近所での評判ガタ落ち。
いや、下手したら学校も停学或いは退学かもしれん。
……とにかく、世間とは兄×妹という組み合わせに冷たいものなん

だ。
そもそも実の兄だからこそわかる、妹には決して芽生えない感情というものもあるのだよ。
とにかく、ヨスガるのは二次元のみで十分だぜ。俺、二次元だったら兄×妹もアリだと思うんだ。

その後、色々あって晩飯を食い終わり、俺は自分の部屋に戻った。
やっぱり落ちつくよねぇ、ｍｙルームってさ。
この時々うるさいＰＣの音、本棚に並ぶ漫画やラノベ達。
そしてこの棚に隠している、エロゲーや同人誌達……げふんげふん！
とにかくｍｙルームは最高だ。俺が一番落ちつける俺だけの空間である。
……まあ、時々葵や伊吹。最近は暮葉も侵入してくることがあるんだけどな。

しかし明日が決戦だとはとても思えないぜ。明日、どうなるんだろうなぁ。
もし親父さんと戦う事になったらどうしよう？
そりゃあそうなったら、もちろん俺は明智や暮葉を助けようとするけど。
……でもなぁ、面倒くさいじゃん戦うの。とにかく会話だけですべてが解決するのを祈ろう。
そうなればこの拳で、誰かを殴る必要なんてなくなるんだからな。
とにかく、決戦は明日である――――

「……んっ？」

その時、俺の携帯が振動している。
携帯電話を開くと……電話か、しかも国宗伊吹という文字が表示さ

れている。
こんな時間に何の用だろう、伊吹のヤツも俺と電話だなんて暇だなぁ。
とにかく伊吹からの電話だ。出なければまた機嫌を悪くしてしまうだろう。

「もしもし？」

『あ、圭介っ』

「どうした、暇なのか？　それとも俺が恋しいのか？」

『ち、違うわバカっ！』

いやいや伊吹をいじるのは面白いぜ。俺の趣味の一つもでもある。
もちろんいやらしい意味じゃないぞ？
最近俺＝いやらしいという図が出来つつある。どういう事だ、俺は紳士なのに！

「じゃあ冗談抜きにどうしたんだよ」

『……来週からの事よっ』

「来週？　何かあったっけ？」

来週は確か、生徒総会というかったるいものと、スポーツテスト・身体計測があったな。
クソッ、前者は寝れるからいいとして、後者は野郎の近くにしかいれないから本当に嫌だぜ。

『来週って、あんた行事予定表とか見てないの？』

「全然見ねぇなぁ。でも大体は覚えてるよ」

『い、意外ねっ』

電話越しからでもわかる。コイツ、笑ってやがる。
そこまで馬鹿にされるほど、俺って記憶力悪い事になってんの！？
まあここは、大人の対応としてスルーの方向でいこう。

「ごほんっ！　で、結局何の話だっけ？　今なら生徒総会で先生にバレずに寝る方法と、あと身長を１ｃｍくらい高く誤魔化せる方法も話すぞ」

『ぜ、前者は別にいいけど後者は教えて！』

「さりげなく背伸びしろ！　以上！」

『うわっ……期待した私が馬鹿だった……っ』

「なんだ？　それやって怒られた事でもあんのか？」

『う、うっさい！』

背が低い事を気にして、地道な努力をしている女の子……。
な、なんて萌えるんだ！これが二次元なら俺の嫁確定だ！
きっと伊吹は今、顔面を赤く染めていることであろう。
こういう時折見せる姿が人気なのか、伊吹は結構野郎にモテるのである。
まあ確かに伊吹は顔も可愛いし、野郎ウケするのは当然だと思うん

だが……。
それでも伊吹は未だに男がいない。というか告白されても断っているらしい。
なんでだろう？俺とは違って恵まれているのになぁ……。

「って、結局本題なんだったっけ？」

『そ、そうよ！　あんたが変な事言うから忘れてたでしょ！』

「俺のせいかよ！？　全く、圭介さんの知恵袋を聞けただけでもありがたいのに……っ」

『ｙｏｈｏｏ知恵袋のほうがまだいいわよ！』

……ｙｏｈｏｏ知恵袋って有名だけどさ、確か真面目に答える回答者いなかったよね？
アレと比べたら俺の知恵袋の方が、１００倍足しになると思うんだけどなぁ。
まあいいか、下手に褒められても正直照れるだけだからな。

『圭介の家に暮葉が住む事になったでしょ』

「ああ。アイツなら今多分葵とゲームしてるぜ？」

どうやら葵がＰＮＰを紹介した結果、暮葉はそれにハマッてしまったらしい。
まあゲームをするのはいい事だ。ジャンルによってはストレス解消にもいいらしい。

『そ、それはいいけど。それより圭介ぇ……来週から私、起こしに

いかないほうがいいの？』

「あ？　なんでまたいきなり？」

『だって、暮葉もいるし……私お邪魔虫じゃん』

「あのなぁ、誰も伊吹の事をお邪魔虫だなんて思ってないよ。来るか来ないかはお前の自由だよ。ただ一緒のほうが朝は楽しいぜ！」

俺も楽しけりゃ葵や暮葉だって楽しい。
出来れば４人で登校したいな。そのほうが絶対面白いと思うんだ。
それを俺は、いつものノリで伊吹に伝えたのであった。

『じゃ、じゃあ来週も行くからね。言っとくけど葵ちゃんと暮葉に会いに行くんだからね！』

「葵と暮葉の為かよ！　そこは俺の為って言って欲しかったよ！」

『おお、俺のためっ！？　～～っ……き、キみょイわばかばかけえしゅけぇっ！』

「馬鹿×２かよ！？　しかも呂律回ってないぞ？　もしかしてときめいちゃいましたか？」

『うるさい！　なにキモい事言ってんの！　もう切るっ、またねっ！』

その時、本当に電話をブツッと切られてしまいました。
流石にいじりすぎたかな。滅茶苦茶キモいって言われてしもうた……。

しょ、正直伊吹にキモいって言われるとショックだ！

しっかし、相変わらずガードの硬い娘だよなぁ……。
最も俺は所詮幼馴染だし、アイツにとっては眼中にもないんだろう。
だけどアイツの場合は、他の男に対するガードも鉄壁だしなぁ……。
まっ、確かに伊吹に男が出来たと聞いたら……俺、ヘコむかもなぁ。
でも幼馴染とはそういうものなんだ。いつかは絶対、俺の役目が終わる時が来るんだ。

はぁ……役目かぁ。
そろそろ明日どう戦うか、どう説教するか……。
ゲームとラノベを読んでシミュレーションしないとな！

第１５話，決戦前日（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「今回は葵か……」

葵「なんでお兄ちゃんテンション下がってるの！？」

圭介「いや、だってねぇ？　毎回これが続くと思うと読者も飽きるだろ？」

葵「ひどいよ！　まだ紹介してもらってないキャラいるんだよ！？」

凪紗「そ、そうだぞ。折角私も登場したのに……っ！」

圭介「もう葵はブラコン、明智は超能力者、大吾はオタク、重原は武道バカ、小坂は戦国オタ。これでいいだろ？」

葵「あってるけど省かれて悲しいよ！」

凪紗「私だけなんか違う気が……っ」

圭介「まあまあ細かい事気にすんなって。さて、次回はゲスト連れて来るよ」

葵「えぇっ！？」

凪紗「た、他作品からゲストって許可とったのか？」

圭介「いや、作者の作品からだけど？」

凪紗「大丈夫なんだろうか？」

葵「お兄ちゃんが寝取られないか不安だよっ！」

第16話，エェッ！？ここにきてこれですか！？

翌日早朝、俺の携帯には一通のメールが着ていた。
そこには明智凪紗と表示されている。
明智からのメール……そうだ、今日は明智と一緒に、明智家へ殴り込みをかける日なんだ。
それにしてもどんなメールだろうか……。

「はっ？　親父が明智家を追放されたから殴り込み中止？　詳細は説明するから電話してほしい……だと？」

おいおいおい！どういう事だ、これはどういう展開なんだ！？
今すぐ明智に電話だ。そして確認だぜ。
全く意味不明な超展開だ。とにかく、すぐに確認をとろう！
俺はすぐに明智凪紗を選択し、音声電話という所を押した。

『んん……藤島？　どうしたんだ、こんな朝早く？』

「どうしたはこっちのセリフじゃ！　親父が追放されたってどういう事？」

『ああ！　私の爺さんが父のやってる事に昨日気付いたんだ。私の爺さんはつい最近織田家と和解したばかりで、親父が秀吉の子孫を発見した時も和解する事を望んでいたんだ。それを親父に指示したハズなんだけど……』

「それが実は、子孫を抹殺する為に動いていたと？」

『そう、それを知って腹を立てた爺さんが父を追放したんだ。おか

げで戦う必要はなくなった』

おいおいおいおい！いくらなんでも急展開すぎるだろ！
こんなシナリオのゲーム、人生で一度もやった事がねえぞ！？

「ンな馬鹿な！？　折角脳内シミュレーションまでしたのに！？」

折角とらゴンボールＺのゲームでどう戦うか、シミュレーションしたのに。
折角説教のセリフ考えるのに、インなんとかさんの原作読んだってのに！
こんな展開アリですか！？お、俺の……俺の苦労の意味は何処？

『すまんな……こんな展開になって』

「い、いやぁ。いいさ、戦わずして事態が解決するのは素晴らしい事だと思うよ」

『出来れば、風紀委員の仕事もそうありたいな……』

「そ、そうでございますか……っ」

……じゃあ黒木と戦わなきゃいいだろ！
確かに黒木から喧嘩を売ってはいるけどさ。
でも気絶するまでボコボコにするって……まあ一発ＫＯだったけどさ。
ああ……でも昨日の努力が。地味に大変な作業だったのに……努力台無しや！

『ああ、でも木下と一緒にうちには来て欲しいんだ』

「えっ？　なんで？」

『木下と和解がしたいって爺さんが言っている。あと……私も二人に謝罪がしたい』

和解かぁ。まあ複雑な家庭なのだろう。
多分のほほんな暮葉はそんな事、微塵も気にしちゃいねえんだろうけど。
……それでも、ここはそういう事にしておいて、正式に和解させたほうが穏便に済むだろう。
でも何故だろう。どうして謝罪の対象に俺が入ってんのかな？

「まあ、暮葉は行かせるとして……どうして俺まで？」

『藤島には迷惑をかけた。散々殴って本当にごめん……っ』

「なんだそれかぁ。別にいいよ、殴られ慣れてるから」

『ふ、藤島。もしかして……いじめられてるのか！？』

「ぶっ！　ちょ、どうしてそうなる！？」

『だって、殴られ慣れてるという事は……よく殴られるんだろ！？』

電話越しでもわかる。明智、アイツガチでいじめだと思ってやがる。
まあ、確かに一時期いじめまがいの事はされたよ。
理不尽な理由で殴りつけられた事もあるし、その度に喧嘩だってしていた。
今だって時々見知らぬ人に嫌味を言われる。でもほとんどが過去の

話だ……。
出来れば、　アイツと俺のそういう話にはあまり触れたくない。

「あのなぁ。お前もわかってると思うけど、俺は丈夫なんだよ」

『そ、それでも殴られ慣れているというのは……っ！』

どうしよう。この突っ込みようがないマジ反応？
そうだ、また自分に得がない事だけど……。
あの手を使って誤魔化そうではないか！

「本当に気にするなって。大体殴られる相手は女子だから」

『女子？　ああ……藤島、真性の変態だもんな』

「……」

ほらね、自分に全く得がない。
それに今の明智の声。あの冷たい感じは絶対に俺の事を引いたに違いない。

『よし、絶好の機会だ。藤島、うちに来て変態を治そうか！』

「なんでそうなるの！？」

『そのうち藤島が悪人にならないか心配なんだ。だから藤島の変態を治すという結論に達したんだよ』

「人を犯罪者予備軍みたいに扱うな！」

『え、違うのか？』

「なにそのマジ反応！？　俺は常識ある健全な男子だ！」

『常識ある健全な男子が胸を揉むか？」

「じ、事故ですよアレは……っ」

『よし、藤島更生は決定だな！』

なんて楽しそうなんだ……クソッ、変態を治す？
無理だな。何故なら人間みんな変態だからＳＡ！
その中でも異常者というのが犯罪者。
つまりなにが言いたいかと言うとだな。変態＝悪というのは間違っているんだ！
全く、明智はそれをわかっていないぜ。風紀委員もまだまだこれからだな……フッ。

『とにかく、謝罪をしたいのは本心だ。その……本当にすまないっ、続きはちゃんと会ってから謝罪するっ』

「い、いや……ホントにいいんだよ？」

『頼む！　というか私の爺さんもお前に興味があるんだ！』

へー、俺って明智の爺さんに興味を持たれているんだ。
爺さんに興味ねぇ……えっ、爺さんに興味？
ちょっと待て、それってもしかして……ッ！？

「アッーーーー！」

『ど、どうしたんだ……っ？』

「待て待て待て！　爺さんなに言っちゃってんの！？」

興味があるって、やっぱりそういう意味ですよね？
お爺さんは俺に対してその……そういう感情を！？
嘘だ！嘘だと信じたいよジョニー！

『ふ、藤島？』

「かわいい男の娘ならともかく、爺さんと薔薇色でくそみそな青春なんて過ごしたくねえっ！」

『……藤島、やっぱりその変態。治そうか』

「どうしてそうなる！？　変態なのはお前の爺さんだろ！」

『そういう考えしかできない藤島のほうが、よっぽど変態だ！』

だって興味があるでしょ。常識的に考えてそういう意味じゃないのか？
少なくとも俺はそう学んだぞ。ギャルゲーでな！
ちなみに同じ男でも、男の娘なら十分守備範囲内だ。
例えるならば準にゃんとかな。あれは素で可愛いと思います。
正直、男じゃなかったら俺の嫁確定だったぜ……。まあ世の中あの子を嫁にする強者もいるのだが。

「じゃあどういう意味なんだよ？」

『お前、私に勝ったろ？』

「えっ？　あぁ、あれ勝ったって事でいいの？」

『み、認めたくないけど負けは負けだ！』

明智さん、アナタは意外と潔い子だったのね。

まあ、確かにあの時ある意味では勝った気分になったよ。

『とにかく、私に勝ったお前に爺さんは興味を示した。どんな男かって』

「それで来なさいと？」

『そうだよ。全く……ただの変態だって伝えたのに』

「残念そうにそういう事言うな！」

『藤島……将来幼女誘拐とかやりそうだ』

「俺はロリコンじゃねえ！」

どうしてみんな揃って俺を変態扱いすんの！？

俺ってそこまで危険視される程変態なのか！？

世の中俺より危険な人って、いっぱいいるだろ。大吾とか大吾とか、大吾とかな。

とにかくひどいよ明智は。そこまで人を変態扱いするだなんて……。

『あ、あと。申し訳ないと思ってるのは本当だ。私は直接藤島に謝りたいんだ。と、当然木下にもな』

「明智……っ」

『だから木下と一緒に来てくれ……っ』

電話越しだから、表情とかは読み取れない。
それでも、何故だか明智の真剣な気持ちがビリビリと伝わってくる。
……コイツ、変態更生というのもマジらしいが、こっちの謝罪もマジみたいだな。
正直変態更生はゴメンだが、本人がここまで言っているんだ。
俺も明智家に行こうかな。それが明智の為になるってんなら……。

「……わかった、俺も行くよ」

『うん……待ってるぞ、藤島』

「お昼過ぎに行くけどそれでもいいか？」

『きょ、今日中ならいつでも構わないっ』

「そっか。それじゃあそろそろ切るな」

『必ず来いよ』

「わかってる。また後でな」

最後にそう言って、俺は長かった通話を終了した。
突然の展開だなぁ。まさか明智家へ行くことになろうとは。
……思えば俺、伊吹以外の女の子の家に行くのは初めてかも。
爺さん付きとはいえ、やっぱり緊張するなぁ……。

「けーすけ様！　明智殿からメール来ましたか！？」

その時、暮葉がドタバタと俺の部屋に入ってきました。
それも丁度明智の話のようである。
アイツの所にもメール、送ったんだな。

「ああ。昼飯食って少し休んだら行こうか」

「……了解なのです！」

満面の笑みを浮かべる暮葉。
なんというか……伊吹にもしてもらいたい素晴らしい表情だ。
こうして、俺と暮葉は午後に明智家へ行くことになったのである……。

あ、そういえば通話料……どうなるんだろう？

第16話，エェッ!?ここにきてこれですか!?（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「どうもどうもー！　今回から数人ほどゲスト登場だぜ。最初は……」

???「だぁぁぁぁっ！　ひ、悲劇じゃあぁぁぁぁっ！」

???「たくみぃ～！　浮気……許さないぞっ！」

たくみ?「ちょ！　誤解です！　誤解ですってばクーさん！」

クー?「じゃあなんで歩美に抱きついていたのか説明して欲しいぞ！」

たくみ?「アイツが勝手にだな……ってうわ!?　やめて、エクエスシュヴェルトはやめてェェェェェェェェェッ！」

伊吹「……なにこれ?」

圭介「さあ?」

伊吹「男のほうは見た目以外ほとんど圭介ね……」

圭介「俺があんな不幸に見えるの!?」

伊吹「違う、バカっぽそうって所が似てんのよ」

圭介「ひどい！　泣いていい、ねえ泣いてもいい！？」

クーニグント・コスモバース「ウワキゼッタイユルサナイウワキゼッタイユルサナイウワキゼッタイユルサナイ！」

藤沢巧「ヤンデレ怖ぇよ！　だぁぁもう不幸です不幸すぎますーっ！」

圭介「……このゲストコーナー、続くのか？」

第17話，明智家へ、だがしかぁ～しっ！

昼食後、俺と暮葉は明智家へ向かう事になった。
準備を終え、まさに今出発する所である。

「それじゃあ葵、留守番頼むな」

「お兄ちゃんとクーにゃんがデートだなんて……葵も行きたい！

「もきゅ～！　でで、デートじゃないのですよ！」

「そうだぞ、友達と遊んでくるだけだ。それじゃあ行ってくるな」

「わかったよぅ……お兄ちゃんにクーにゃん。早く帰ってきてね！」

「はいはい、それじゃあ行ってくるな」

留守番は葵に任せた。少し不安だがまあ大丈夫だろう。
こんな事もあろうかと、伊吹にも一応連絡はしてあるんだ。
伊吹は今日暇みたいだし、あと数十分かしたら葵の所に行ってくれるだろう。
いやいや、こういう時には非常に便利だぜ。幼馴染の存在って。
それから明智と幾度とメールをし、明智のメールによる道案内を参考に歩いた……結果。

「けーすけ様……どこなのですか、ここは？」

「すまん、迷った……っ」

「もきゅうっ!?　け、けーすけ様っ！　古宇坂市民なのですよね!?」

「うるせえ！　市民だからって市全体の道を把握してると思うな！」

誰だった道に迷う時は迷うんだよ。とにかくここはどこなんだ？
住宅街みたいだし、白陵高校があるみたいだけど……。
そもそも白陵高校が、古宇坂のどこらへんにあるか知らないし。
学校自体は知ってるんだけどね。確か偏差値３９のヤンキーばかりが通う学校だったハズ。
知り合い曰く、金髪や服装の乱れなんて甘い甘い。リーゼントとかパンチパーマがいるらしいんだ。
……古宇坂ってさ、一応電車で東京に行けるんだぜ。そこまで田舎だったっけか？

「ど、どうするのですか？」

「どうするもなにも……っ、そういえば明智からもメールが来なくなったな」

まあ、俺とメールばかりしているわけにもいかないんだろうけど。
でも道案内してくれる人がいないと……うう、ホントにどこなんだよココは。
今日が休日でよかったぜ。もし平日だったらこの辺にきっと、白陵高校の怖いお兄さん達がうろうろしているに違いない。やだなぁ、もし中学時代に絡んできたヤンキーさんがいたらどうしよう？
とにかく、早くこのあたりから立ち去りたい。絡まれる前に立ち去りたいぜ。

「どうしましょう。拙者達、このまま行き倒れに!?」

「流石にこの街でそれはないと思う」

「でもロジーナではあったのですよ！？」

「心配するな、日本で行き倒れはまずできないと思うから」

……まあ、倒れても誰も救急車呼んでくれないだろうけど。
冷たいよねぇ。ところが別な街に行くと、通報くらいはしてくれるらしい。
なんて心優しいんだ。そういう人もいるんだね！
ってか、こんな冗談言ってる場合じゃない。真面目に早くなんとかしないと。
そして明智さん、メールによる道案内を再開してくれぇ……。

「それにしても、本当に明智殿の家はどこなのでしょうね？」

「知ってりゃもうついてるわ！」

とにかく記憶を頼りに進もう。
確か明智家は、白陵高校から５００ｍ離れたあたりにあるらしいのだ。
だけどなぁ、その５００ｍがどっちなのかサッパリわからん。
と、迷っていたその時だ。明智から一通のメールが届いた。
やっとかよ！もう待ちくたびれちまったじゃないか。
というわけで俺は早速、携帯電話を開きメールを確認……したのだが。

「もきゅ？　どうしたのです？」

「た、ＴＡＳＵＫＥＴＥ？」

「もきゅ？　ホントだ、ＴＡＳＵＫＥＴＥって書いてあるのです」

何故、助けてがＴＡＳＵＫＥＴＥとアルファベット表記なのか。
それはよくわからんが、何故だか冗談じゃない臭いもするのだ。
どういう事だ。助けてって……アイツ、何かあったのか？

「けーすけ様……っ」

「待て、焦るにしても行き先がわからねえぞ」

ＴＡＳＵＫＥＴＥが本当か冗談か、そんなのわからねえ。
でも多分、このメールは俺達にさっさと来いと言っているようなものだろう。
そりゃあね、俺達だってさっさと白陵高校から離れたいさ。
だけど肝心の明智家の場所がわからん。だからこうして迷っているんだ。
いきなりはよ来いと言われても、少々時間がかかりそうで……。

「むむぅ～、こうなったら……」

「ん？　どうしたんだ暮葉？」

暮葉が一言口にしてから、何故か彼女は瞑想を始めたのだ。
こりゃ本気である。その為か滅茶苦茶話しかけづらい……。
しかし暮葉のヤツ、一体なにをするつもりなのだろうか？

「わかったのです！　明智殿の居場所！」

「マジで！？」

「はい！　ここから北東へ大体５００ｍの地点にいるのですよ！」

「ホントか！？　ていうかどうやってそんな事を……？」

「はい、魔力を感じたのです。拙者は魔法は苦手なのですが、魔法使いとしての必要最低限。つまり魔力を感じ取るという事は普通にできるのですよ。明智殿は魔法使いではない故、魔力が低めだったので探すのが大変だったのですが、一度会った人の魔力は大体覚えてるので！」

「……」

……え～っと、これは何から突っ込むべきなのだろうか。

満面の笑顔で説明する暮葉は、自信という素晴らしいものに満ちていた。

それにしても魔力感知ですかぁ。確かに便利な能力だ。

とらゴンボールで言う、『気』を探るのと似たようなものだよな。

うん、確かに便利である。だけどなぁ暮葉さん……。

「そういう能力あるなら最初から使え！」

「もきゅうぅぅっ！　だってだってっ、思いつかなかったのですから！」

「うるせぇっ！　このバグ武将！」

そんな使える能力が間近にあったなんて、もう思いっきり脱力しましたよ！

なんだか今、初めて暮葉が役に立ったような気がしたぜ。
でも登場遅ェよっ！もう少し早く使ってほしかったと俺は思っている。
だって、明智家探すのに無駄に歩いたじゃないっすか……。

「け、けーすけ様ひどいのです～！　折角拙者、頑張ったのにっ！」

「わかった！　わかったからこんな時にいじけるな！」

ホントにコイツは俺と同い年か！？
なんだか妹２号みたいに感じるぞ。
まあ、妹１号よりはある意味扱いが楽であるが。

……そんなわけで暮葉の言う通り、５００ｍを北東へ移動する。
するとそこには、なんとも立派な日本屋敷が建っていた。
表札には、確かに『明智』という文字が墨で描かれている。
しかも何故だろう。中から戦っているような物騒な音が聞こえる。
しかも不吉な予感しかしない……。
なんだよ、この異様な空気は。明智家の問題って終わったんじゃねえのかよ。

「けーすけ様っ、危険なのでけーすけ様はここでっ」

危険を察知したのか、暮葉は俺を心配してそんな事を言ってきた。
気持ちはとてもありがたい。でも……危険かもしれないんだろ。
そんな所に、暮葉一人を行かすわけにはいかない。
これでも俺は一応日本男児だ。だから――――

「嫌だ。俺も行くぞ」

「もきゅ？　……ですけどっ」

「護衛対象は常に近くにいないと、ダメだったんじゃなかったっけ？」

「ひ、卑怯なのですよけーすけ様！」

「ごめん。でもやばい事かもしれないのに、明智や暮葉を放っておくことはできないから」

それに俺は昔からそうなんだ。困ってるヤツがいるのに、見過ごす事なんてできない。

引けと言われても引く事ができない。だったら面倒事に介入するしかないよな。

明智はもう俺達の仲間なんだ。だから……放ってはおけない！

「でも、もしけーすけ様が大怪我をされたら……っ」

「大丈夫だって。俺の打たれづよさが普通じゃないの、お前知ってるじゃないか」

「でも怪我する時はするのですよ！？」

「心配してくれるのはありがたいよ。でも俺は行きたいんだ、頼むっ」

改まって俺がお願いしてみると、暮葉の瞳に真剣味が浮かぶ。

果たして護衛対象を戦場へ向かわせていいのか、それを真剣に考えるように。

だけど、結果は俺の予想通りだった――――

「仕方ないのですねっ。特別なのですよ、危険になったらすぐ後方に下がってくださいね」

「……ああ、ありがとな！」

暮葉は渋々、俺がついて行くことを許可してくれたのだ。

ありがとう暮葉。これで俺の気は多分済むよ。

――――さて、あとは明智家で今、何が起こっているか知っとかねえとな。

そして明智や明智の爺さんが苦しんでるなら、それを俺と暮葉で解決してみせる。

そんな気持ちを胸に、俺と暮葉は明智家へと潜入した……。

第17話，明智家へ、だがしかぁ～しっ！（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「さてさて、前回は『うちゅうじんですよ！』の主人公とメインヒロインに登場してもらいました。んで、今回は……」

伊吹「ああ、そのコーナー中止よ」

圭介「へ？　な、なんでっすか伊吹さん！？」

伊吹「元ネタわからない人には本当につまらないネタでしょ！　少しは考えなさいよこのオタク！」

圭介「いいだろ！？　前作のキャラクターを使うって、何度も作品書いてる作者様だったらよくある事じゃねえか！」

伊吹「とにかく！　この小説は初めて読む人にも優しい小説を目指してんのよ！」

暮葉「そうですよ！　前回の巧さんもクーさんも、読者様からしてみればよくわからない人物なのですよ？」

巧「……ひどくね？」

クー「なんの為に妾達、他作品から呼ばれたんだろう？」

巧「……不幸だっ」

伊吹「とにかく次回から別な事しないと、このコーナーも打ち切りなんだからね！」

圭介「でも展開的にお前は今、本編で出番ないし。打ち切りになったらお前の出番なくなるぞ？」

伊吹「だぁぁぁぁうっさい！　そうならない為にも、次回なにをするかは次回までの宿題よ！」

圭介「へいへい……け

第１８話，明智家の死闘

ピンクブリッジの死闘……なんてものが、ＦＦ５（ファーストファンタジー）にありました。
アレはね、素直に名曲だと思うんだ。ちなみにＦＦは７までしかやった事がない。
ところで、それと明智家の中の関係があるかって？
いやぁ、関係なんてほとんどないんだ。
ただ、明智家では死闘が行われていたんだ。だからなんとなくピンクブリッジが思い浮かんだのだ。
きっとここに伊吹がいたら、ゲーム脳乙とか馬鹿にされた事だろう。
しかし事実だから仕方がない。
それでピンクブリッジ……げふんげふん。明智家の死闘だが、それは――――

「明智ぃっ！」

「明智殿っ！」

暮葉が扉を一期一振で斬って開け、俺達は戦場へと侵入した。
……ちなみに、暮葉は背中のあたりに一期一振を隠していたらしい。
すげえな。どこかでそういうの見た事あるぞ。でも思いっきり銃刀法違反じゃねえか。
まあ今はそんな事はどうでもいい。何故なら――――明智がピンチだからだ。

「ッ！？　木下っ、藤島！？」

「隙アリィッ！」

だが、明智がこっちを振り向いた瞬間。
明智の前に立ちはだかる、中年くらいの男が突如として刀を振りまわす。
刀、それは通常は白兵戦用の武器である。しかし男は明智に近づく事なく刀を振りまわす。
普通なら全く効果のない、無駄な動作――しかし。

「うっ！」

素早く映った鋭い衝撃波。それは一瞬のうちに明智に届き、彼女を傷つける。
咄嗟に反応した明智は直撃は避けたものの、少しだけ左腕を斬ってしまったようである。
裂けた衣服からはドロドロと、彼女の紅い血が流れ出していた。

「明智っ！」

「わ、私は……平気だっ。それより藤島は爺さんを……っ」

「え？」

後ろを振り向くと、床に倒れる年老いた男性が一人いる。
アレが……明智のお爺さん。かつて争った一族との和解を望む人か。
……なんでだよ。なんであの爺さん、背中から血を流しているんだ？
ていうかその前に、なんで明智は変な男と戦ってるんだよ。これどういう状況なんだ？
とにかく、明智に頼まれたんだ。あの爺さんの面倒を見なければっ！

「明智殿！　拙者は加勢するのです！」

「ほぉ、木下の小娘か。いいだろう……裏切り者の凪紗と共に墓穴に埋めてやろうぞ」

戦闘はとりあえず明智と、たった今一期一振を鞘から抜いた暮葉に任せるとしよう。

暮葉も刀さえあれば滅茶苦茶強い。あの日オオカミ野郎を一撃で倒したのは、まさに暮葉だからな。

とにかく、俺はあの爺さんの無事を確認しねえと！

それから状況を確認しなければ。どうしてこんな事になってんのかとかな。

駆けだした俺は爺さんの所へ、姿勢を低くし声をかける。

「ちょっと！　しっかりしてくださいっ！」

「……ん、うぅ……だ、誰じゃっ？」

よかった、意識はあるみたいだ。それに思っていたよりも元気そうである。

この爺さんは傷の痛みで苦しんでいるだけのようである。

さて、まずは自己紹介をしないといけないな。

「藤島圭介ですよ」

「ふ、藤島……すると君が圭介くん……かの？」

「そうですよ、藤島圭介です！」

「話は娘から聞いておる……っ、変態じゃが中々腕の立つ男らしいのぉ」

「変態ってのは余計ですよ……」

明智めぇ、ホントに俺の事を変態だって教えやがったな。
まあ否定はできないが。俺が変態なのは事実だ。
というか、それを言うと人類のほぼ全員が変態になるぞ。
きっとのこの爺さんだって若い頃は……うん、お盛んだったハズだ。

「すまんのぉ……本当は、歓迎パーティーの予定だったのじゃが……っ」

「一体、何があったんですか？　明智と戦ってる野郎は誰なんですか？」

「……このワシ、明智光昭（あけちみつあき）の息子、明智光雄（あけちみつお）……凪紗の父親じゃ」

明智の父親って……ちょっと待てよ、その話って終わったんじゃ。

「明智から聞いたんですけど、その話は確か貴方があの人を追放して、解決したんじゃなかったんですか！？」

「そのハズじゃった……しかし、ヤツは我が家を襲撃してきおったっ」

その言葉を聞き、俺は一旦明智の父親である光雄のほうを見る。
彼は相変わらず一人で刀を振りまわす。だが、たったそれだけで鋭い衝撃波が、暮葉達に襲い掛かる。
なんだか明智は、さっきよりも傷が増えている気が。
暮葉も刀だけで頑張っている……というかアイツ、衝撃波を斬り裂いてるぞ。

どうなってんだよ。もしかして暮葉は光雄の真似を!?

「ほう。何の能力も無しに衝撃波を生み出し、それで風を斬り裂くとは……中々の腕前だな、木下の小娘」

風って……もしかしてアレは衝撃波じゃなかったのか。
あの鋭いものは風だったのか。だけど風ってあんなに鋭いのか?
あんな鋭利な風、今まで見たことがねえぞ。

「そっちこそ何者なのです!? 殆ど魔力を感じないのに……っ」

「木下! 私の父も私と同じ、超能力者だ。それも単純な実力だと私の上だ、気を抜くな!」

「ちょ、ちょーのーりょく? ……意味不明なのですけど、強いのはわかったのです!」

再び刀を構え、今度は自ら突撃をかける暮葉。
速い、暮葉のあの運動性能……並の人間が出せるものではない。
アイツ、魔法少女か疑いたくなるくらい身体能力が高いな。
一方の明智は双方の掌に、バレーボール程度の火の玉を生み出している。

「もうお前なんかの命令は聞かない! 私はな、こいつらに出会ってNOと言える勇気を貰ったんだよ! お前のやってることなんて最初から反対だった、内心じゃお前を倒せる時を……ずっと待ってんだ! だから……こいつを喰らえっ!」

彼女は本気でそう叫ぶと、明智は作り出した火の玉を光雄へと投げつけた。

右、左と投球される火の玉。その速度は光雄の超能力を防ぎつつ、前進している暮葉の移動速度よりも遥かに速い。暮葉はジリジリと迫る程度であるが、火の玉は１００ｋｍ／ｈを超えるスピードで彼に迫っていた。当然、光雄はどちらを優先して迎撃するかと言うと、火の玉のほうであろう。

「フフフ、無駄な事だ！　残念な我が娘よっ！」

一振りすると、何故か両方の火の玉が真っ二つになってしまう。強い。あの光雄さんは信じられないくらいに強い。俺でさえ避けるのが精一杯だった、あの攻撃をアッサリ迎撃しやがった。

――――だが、火の玉を迎撃したその行動こそ、光雄最大の失敗であった。

――――カキィッ！

刀と刀がぶつかり合う、金属音。両者とも剣道で言う、鍔迫り合いの構えだ。

金属がぶつかり合い、バチバチと激しく火花が散ってゆく。

だがいくら中年とは言え、明智光雄は男である。女子である暮葉よりも腕力があって当然だ。

両者とも本気で押し合っているが、若干暮葉のほうが負けている感じである。

「くっ！　んんん～っ！」

「ぐぬぬっ！　この細腕でどこからこの力がっ！？　ぐおおおぉっ！」

「んっきゅぅぅぅ！」

まずい、力で負けている。このままだと暮葉が斬られてしまう！

――――と思った、その瞬間であった。

「親父殿、覚悟ぉっ！」

勢いよく飛びあがった明智は、勢いをつけて回転。

これは、間違いないぞ――――

あの蹴りの威力を高める為の加速。あの攻撃は俺が受けた、明智必殺の一撃だ。

俺でさえ軽く脳震盪を起こしたあの蹴り。その華麗なる一撃が、光雄のこめかみに突き刺さる！

「……！」

暮葉との鍔迫り合いにより、思うように身動きが取れない光雄。

彼は明智の蹴りをモロに喰らってしまった。その威力に、彼は無言で吹っ飛ばされる。

それから起き上がることはない。どうやら、たったの一撃で気絶してしまったようである。

「や、やったのですよ明智殿！」

「おおっ！　や、やりおったわい！」

暮葉や爺さんも歓喜。俺も素晴らしい連携プレイを見て、拍手をしたくなりそうであった。

やっぱり明智すげえ……いくら急所とは言え、あんなに強い人間を

一撃でダウンさせるとは。
俺、よくあの蹴りに耐えられたな。今更ながら自分の身体の頑丈さには感謝だよ。
それから暮葉もすごい実力だ。明智でさえ反応しきれなかった、あの風の斬撃を刀で斬り裂いていた。
あんな事、聖剣を持った勇者でもできないかもしれないぜ？

「おう、お疲れさん暮葉。それに明智」

「けーすけ様はご無事なのですか！？」

「心配しなくても、情けない事に俺はずっと後方だったし、それより明智は大丈夫なのか？」

明智の身体には、いたるところに切り傷があった。
間違いなく、あの斬撃によるものであろう。
明智と明智の爺さん、この二人が今回の主な怪我人だ。
特に明智は怪我した状態で戦っていた。それは大きな無理になっていたハズである。

「わ、私は平気だっ」

「それにしても、追放した者が襲撃してこようとはのぉ……完璧不意打ちであったから、対抗できなかったぞい」

「ごめんなさいっ……私が力不足だったから」

「いやいや、気にせんでええ。凪紗はよくやったよ。それにワシも元気じゃぞ」

「う、うんっ」

こうして橋から見ていると、家族だよなぁ。
なんだか羨ましいや。うちの良心は昔っから仕事でよくいないし、
だからいつも葵と二人きりだった。
とにかく葵の面倒を見るのは大変である。アイツは極度のブラコン
だし、やたらと絡んでくるんだよ。
まっ、それはともかく。今回はこれで終わったってわけだな……。

「み、皆さん警戒するのです！」

しかしその時、突然暮葉が全員に向かってそう呼びかけたのだ。
何故かと言うと、振り向けば光雄の身体から、白い蒸気のようなも
のが吹きだしていた。
それは次第に人型を形成していき、やがて着色までそれ、完全なる
人と変貌したのである。
おいおい……煙が人になるって、魔人プーかよっ！？
しかも顔、なんだか教科書で見たことあるような気が……。

「な、なんじゃっ！？」

「もきゅっ！？」

「な、なんだよこれ！？」

「ちょっ！？　これなんてＲＰＧ！？」

一斉に驚く俺達……何故なら、煙から人になったその人の正体は…
……。

「やはり……この身体のほうが、動きやすいぞ……フフフッ」

――――なんと、明智光秀その人だったのである。

……なんだ、この超トンデモ設定なありえない展開は？

そもそも、なんで明智光秀が生きてるんだよ！

本当の地獄はこれからだぜ……な展開であった。

第１８話，明智家の死闘（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「みんな聞いてくれ、なんとこの、『魔法少女に会っちゃった場合』が来年の春にアニメ化される事になったんだ！」

暮葉「もきゅ！？　ほ、ホントなのですか！？」

圭介「ああ、来年４月から独立ＵＨＦ局放やＡ○－Ｘにて放送予定。特にＡ○－Ｘ版は規制も緩いしパンチラ解禁だせ！　あ、製作はＪＣね」

大吾「だ、大丈夫なのか？　変なオリジナル入れたりしないよな？」

圭介「大丈夫！　監督が『原作通りにする』って言ってたから！」

伊吹「あんたら詐欺するなぁぁ　ないない、絶対ないから！　読者のみなさん信じちゃダメだからね！」

※圭介の思いつきのネタです。

第１９話，明智光秀の野望ッ！

明智光秀。
本能寺の変で織田信長を自害へ追いこんだ事で有名だ。
しかし山崎の戦いで敗れ、百姓・中村長兵衛に竹槍で刺され死亡したんだとか。
その戦いも何世紀も前の話である。仮にそこで死んでなくても、現在生きているハズがない。
それなのに、俺達の目の前には何故か、明智光秀その人の姿があったのだ。

「ど、どういうことなんだっ？」

明智が警戒しつつ一歩下がり、光秀らしき人物に問いかける。

「完璧な成りすましだった……だが、他人の身体では、力に制限がかかってしまうな」

「てんめぇ……っ」

明智が一歩下がる代わりに、今度は俺が前に出る。
今回俺、何もしてないしな。
だったら光秀から聞いてやるよ。なんでこんな事をしてのか。
俺の目には明智光秀の姿が映っている。
甲冑を着た男……開いているのは顔面だけのようである。

「けーすけ様っ！　危険なのです、下がって――――」

「そ、そうだぞ！　藤島、丸腰じゃ危険だ！」

「お前らはさっき戦ったろ？　だから今度は俺の番だ」

そう言って、俺はまた一歩光秀に近づいてゆく。

光秀……以外と背が低いな。

やっぱり戦国時代の人と、現代人とでは体格が違うのだろう。

だが、小柄だからって油断はしちゃいけないな。だってアイツはただの明智光秀じゃない。

煙から生まれたんだぜ？そもそもとっくの昔に死んだ人物なんだ。

だから、あそこにいる光秀がフツーなわけがないんだ。

「我の子孫でも木下家の人間でもないな、何者だ？」

「誰だっていいだろ。ただ一つだけ教えてやる、俺はコイツらの仲間だ」

「……ほぉ、現代にも仲間の為に身体を張る、おバカがいようとは……我の時代に生まれれば、戦場の英雄になれたかもしれないな」

「うるせぇっ。地味に現代人見下してんじゃねえぞ、エセ武将！」

そうだ、きっとエセ武将に違いない。

じゃなかったら明智光秀が、あんなふざけた超能力なんて使えるわけがない。

多分アレは明智光秀の姿をした、別の何かだ！

……と、俺は勝手に思っております。

「それで、貴様はどうするつもりだ？」

「まずテメェはどうしてこんな事をした？　何が目的だよ」

「……フッ、復讐に決まっておろう。我は死んでも、我の魂が成仏する事はなかった。そこでちょっとあの男の身体を借り、霊力という、簡単に言えば具現化する力を蓄えていたのだ。しかも……あの男の身体にいた副産物として、我に超能力までついてしまった。これは素晴らしい副産物だ。これで我を討った豊臣秀吉の子孫連中にも、我を裏切った我の子孫たちも、そして……まだ生きていやがるという織田信長の子孫を叩き斬れる！」

要するに、コイツは豊臣秀吉に討たれた。
その事を何百年も根に持った末、こんな犯行に及んだというわけか。
つまり恨みを晴らす為に、自分の子孫にまでこんな事を……。
自分のプライドの為、負けた屈辱を晴らす為に……。

「ふざけんなよてめぇ！　結局てめぇがやろうとしている事は、ただの自己満足じゃねえか！」

「あれは国家の運命が変わる出来事だったのだぞ！？　それを自己満足と言えるのか貴様は？」

「確かにそうだけど、でも違うんだよ。今やってるのはそんな大きな事じゃねえ、ただの人殺しの犯罪じゃねえか！」

「話のわからぬ男だ。いいだろう、我は我のやりたいようにやる。敵は明智家にあり」

「いいぜ、てめぇがまだ暮葉や明智を狙うってんなら、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！」

決まった……とあるシリーズ読んでおいてよかったよ。
説教ウニ男もビックリな説教が、今決まっちゃったよ！
やっぱりアレですな。説教ウニ男さんはこういう場面じゃ最強っすよね。
でもどちらかというと、俺はアクセロリータさんの方が好きだぜ。
まあ、こんなオタな話は今は置いておこう。
今の俺は決め台詞が決まって、最高にハイな気分であった。
しかし、そう喜んでいる場合でもないのが現実である。

「……フッ」

ニヤッと不敵に笑った光秀は、突如として刀を振りまわす。
どうする、勢いで突っ込んでみるか？
……そうするかねえよな、とにかく何も考えずに突っ込め。
そしてあの野郎の顔面に一発、確実に入れてやるんだ！

「うおおおおおぉぉぉぉぉっ！」

玉砕覚悟で床を蹴り、一気に敵との間合いを詰めようとする俺。
距離にして約１０m、大した距離ではない。
走ればすぐに間合いを詰められる、そんな程度の距離でしかない。
しかし、光雄の能力を手にした光秀を相手とした場合。そんな常識などは通用しなかった。

「くたばれ、天誅だ」

「ぐぁっ！？」

振られた刀、向かってくる幾多の風の斬撃。
それは床板を砕き、俺の肉を斬り裂いていく悪魔のような一撃。

とても風とは思えない切れ味だ。しかも何故だ、さっきより能力が凶悪化している気がする。

「けーすけ様っ！　相手っ、さっきより強くなってるのです！」

マジかよ、暮葉にもそういう風に映っていたのか。

ということは俺の勘違いではなさそうだ。

明智光秀、アイツが使う光雄の能力は……本人の能力よりも凶悪化していた。

たったの一撃で負ったダメージは結構深いものだ。いつの間にか右腕が血だらけになっている。

右腕だけではない。服にも血が滲み始めていた。どうやら今の一撃であちこち斬り裂かれたらしい。

「確か旋風烈剣（サイクロンブレード）だったかな。中々便利な力だ。刀と空気を特性を生かした、まさに武士向けの能力だ。我の子孫は素晴らしい力を持ったものだ……っ」

「くそ……ったれぇっ」

「ほら、もっと来いよ。我の子孫と木下を守ろうとするヤツが、足軽程度のタマで終わってるんじゃないぞ」

「くっ！　……ちっくしょおおおおおおぉぉぉぉっ！」

残りたったの６ｍ、飛び込めば一瞬で相手の懐に入れるんだ。

とにかく一発でもアイツを殴って、能力を無効化させないと……。

先に俺の肉体が切刻まれ、潰れてしまう！

拳を振り上げ絶叫しつつ、俺は相変わらずの突撃を仕掛けている。

――――だが。

「そんな速度では、我に届く事は一生ないぞ！」

「うあぁっ！」

轟！という音と共に再び叩きつける斬撃、紅い切り傷が増えてゆく俺の身体。

黙っているだけでも苦痛なほどの激痛がする……っ。

その後ぴちゃぴちゃという男が室内に響く。

その音の正体、それは俺の血が床に落ちている音であった。

鮮血が辛うじて砕かれるのを免れた床板に、水たまりのように溜まっている。

クソッ……まずい。出血量が半端じゃねえぞコレ。

ていうか分が悪いぜ。俺の体は主に打撃系には強いのだが、斬撃にはちょっと弱いんだ。

そして甘く見た。光秀……滅茶苦茶強い。こうして歯を食いしばって立つだけでも精一杯だ。

「フフフッ！　フゥッ！」

「……！」

しかも、いつの間にか明智が間合いを詰め、俺の顎にド派手な蹴りを打ち込んでいたのだ。

吹っ飛ばされた俺は壁に叩きつけられる。ダン！という音と共に、何かか砕ける音。

激痛に耐えあたりを確認すると、壁の破片が床にまで散乱している。

どうやら俺は壁に激突した際、明智家の壁をぶち壊してしまったらしい。

「けーすけ様っ！　大丈夫なのですか！？」

やられてしまった俺を心配し、暮葉が可愛らしく駆け寄ってきた。
ああ、俺も馬鹿だ……こんな時にまで可愛いって思うなんて。
ここは滅茶苦茶痛いが、女の子の前で弱音を吐くわけにはいかない。
日本にはやせ我慢って便利な言葉があるが、それを使わせてもらおう。

「大丈夫！　きっとこれよりＳＭプレイのほうが痛いって」

「け、けーすけ様……真性の変態なのですねっ」

「うるさいわっ！　とりあえず平気なのはわかったろ？」

「は、はい！　でも、もう戦わないでほしいのです！　これ以上けーすけ様が傷ついたら……っ」

そりゃあわかってるよ。暮葉の任務は俺の護衛である事。
そういういうわけなので、俺が怪我をするのは好ましくないという事くらい。
でも、この状況でそんな贅沢は言ってられない。
とにかく明智光秀の暴走を止めねば……もっと多くの人が血を流す事になってしまう。
痛いけど……あと一撃くらいなら耐えられそうだ。だったら我慢して突っ込めばいい。
そうすれば、他の人は傷つかずに済むかもしれないんだ。
ハッピーエンドを迎える為には光秀を止める。光秀を止める為には俺が頑張るしかねえ！

「うっ……！」

「む、無理しないで欲しいのです！」

「だ、大丈夫だ……っ！」

「とにかくもう立たないでください！」

そんなわけにはいかない。

立って戦わないと。光秀の暴走を止めないと……ッ！

……けど、どうすれば。どうやってあの野郎と戦えばいいんだ？

「お前のせいで……父が、木下が、藤島が……っ、焼き殺すっ！」

俺がそう考えている間に明智が一人、光秀へと飛びかかっていた。

明智の右手には超能力で発生させた炎が、刀のように伸びている。

２ｍにも及ぶ長い炎剣を持つ明智が、かなりの速さで光秀の懐に潜り込む。

「凪紗自身、我の攻撃で十分打ち砕ける。懸念すべきはあの炎剣のみ……ならばっ」

刀を振るという、似たような動作を取り続ける光秀。

だが風の斬撃は意外にも、明智ではなく炎剣を切裂いた！

２ｍもあった炎剣は５０ｃｍに分けられ、ガランガランと残骸のように床に落ちて行く。

「……！？」

「ふふふ、発火能力（パイロキネシス）ごときぎ！　より強化された我の能力には及ばん！　ふんっ！」

かなりの勢いを持った右拳が、明智の顔面に直撃する。
女の子とは言え、少なくとも４０ｋｇは超えているであろう。
それなのに、光秀は明智をたった一撃の拳で、宙に浮かせてぶっ飛ばしてしまったのだ。
なんというパワー。常人には無理だぜあんなの。明智でさえ常人離れしてるっつーのに……。
あんなのにどうやって勝てってんだよ。だけど暴走を止めないともっと深刻な事態になっちまう。

そして暴走を止めるには、光秀をぶっ倒すしかないんだ。
アイツを倒したい……ぶっ倒して何もかも解決してやりたい。
だけど俺にはアイツを倒せる程の力がない。クソッ、倒したいのに！

「ふ、藤島っ！　どけっ！」

「へっ？」

光秀にぶっ飛ばされた明智が、俺の方へとぶっ飛んでくる。
ウソッ、まさか光秀さん。俺を明智の下敷きにするつもりですか！？
これは予想外の展開だぞ、一体どういう事なんじゃい！

「んぎゃあああああぁぁぁぁっ！」

明智さんの素晴らしいダイブをする姿に、俺は思わず叫んでしまった。
ああ、叫ばざるを得なかったんだ。
だって上からものすごい勢いで、人が降ってくるんだぜ？
いくら明智ほどの美少女でもな、怖いもんは怖いですよ！
結局全身ボロボロの俺は、ダイブしてくる明智を避ける事も出来ず、

見事に爆撃されてしまったのだ。
しかもすげえ勢い……ああ、トールボーイ爆弾にやられた戦艦ティルピッツの気分だぜ……。

それにしてもやたら息苦しいな……。
もしかして、今ので致命傷負った？
いや、でもなんだか生温かいし……それに柔らかいような。
なんだろう。この今まで感じた事もないような唇の感触？

「けけけ、けーすけ様っ！？」

しかも暮葉が驚きの声をあげている。
一体何がどうなって……ん？

「おぉおわあぁあああぁあぁっ！？」

あああ、明智顔近ぇえええええええっ！
なんか唇がっ！乾いた彼女の唇……しかしそれがまた、なんとも言えないっ。

「んんっ？　――――っ！？」

ようやく俺に気付いた明智は、顔面を真っ赤に染め上げている。
その上、石化魔法でもかけられたかのように、ピタリと動きが止まっていた。
つーかコレ、アレですよね。日本語にすると接吻ってヤツっすよね？
マジかよ！なにこのロマンもクソもないファーストキス！？
いや、でもこれはご褒美じゃ？
事故とは言え、明智のような美少女とのファーストキス……すげえ、ご褒美だ！

――――ドクン。

うおっ！？

しかも体中がむくむくと強張り、なんだかズキズキムズムズしてきた。

なんだこの感じ。キスすると男ってこんな変な感覚になるのか？

ああ、なんだか段々……身体が熱くなってきた。胸が高ぶってきた。

そしてなにより――――超モーレツにみなぎってきたぞ！

「おおぉぉぉっ！　俺のこの手が真っ赤に燃える！」

「けーすけ様……あ、あれってもしかして……っ」

「ふ、ふじ……しまっ？」

恥ずかしがる明智と何か考えている暮葉……。

まあとりあえず、この二人は置いといて俺は再び立ち上がった。

あの――――明智光秀の幻想をぶち殺す為に！

なんだかよくわからないが、身体が軽いし素晴らしい気分だ。

多分、今ならヤれるよっ！

「な、なんだ？　あの男が復活した？」

「さぁ～て、覚悟はいいですかな？　明智光秀ェッ！」

「……おもしろい！　ようやくいい目になったではないか。いいだろう、我の敵として認めようぞ！」

「さてと、んじゃあそろそろ行くぞっ！」

最高にテンションの高い俺は、いつものように駆けだした……のだが、今回は何かが違った。

というか最初から色々と違い過ぎていた。

いつもならノロノロと走りだすだけだ。しかし今日は違う。

床を一蹴りしただけで、砲弾のように勢いよく飛び出していたのだ。

しかも、俺と光秀の距離は何十メートルもあったハズなのに、あっと言う間に５ｍくらいまで近づいている。

その間、精々２～３歩足をついただけだというのに。

「速いっ！　だがまだ甘いぞ、旋風烈剣（サイクロンブレード）の敵ではない！」

おおっ。マジかよ、あの風の斬撃がこの目に見える。

俺は軽くステップを踏み、その斬撃を軽々と避けてゆく。

すごい――――自分でも信じられないが、俺は光秀に善戦している。

「馬鹿なっ！？　我の斬撃を避けて……貴様、ホントに人間か！？」

「違う！　俺、ゾンビっす。あと魔装少女っす！」

「嘘つけ！　どこがゾンビで少女じゃ！　ええい面倒じゃ、次で決める！」

「無駄だ、もうてめぇはチェックメイトだ！」

明智光秀――――復讐という理由で子孫達を巻き込みやがって。

復讐したい、その気持ちはわからないでもないよ。でもなぁ……。

ここは光秀の居場所じゃねえ。もう戦国時代は終わってんだよ。

死人は死人らしく、さっさと成仏しやがれェッ！

「喰らえ！　黄金の左だぁぁぁぁぁぁっ！」

そう叫び、俺は明智光秀の顎に左アッパーカットをかましてやった。
華麗に決まった幻の一撃。光秀は空高く飛びあがり……。

「ほぎゃぁぁぁぁぁぁっ！？　わ、我の壮大な復讐計画がぁ！
ヤな感じぃぃぃ～！」

お決まりのセリフを吐き捨て、どこか遠くへと消えてしまった。
そう、青空がキラーンと光ったのである。
それはつまり、明智光秀がお星様になったという事であろう。
明智光秀……謎多き武将だったぜ。もう一度戦国時代に生まれれば
変われるかもな。
頑張れ、明智光秀。敗北という言葉に負けるなよ！

「おお！　す、すごい……っ。あやつ、あの幽霊男を倒しおったっ」

「ふ、藤島っ……」

「んんっ……あ、あれ？　私なにしてたんだっけ？　というか何故
か家がボロボロだぞ！？」

明智家のメンバーが全員驚いている。
それといつのまにか、光雄のおやっさんが目を覚ましていた。
どうやら光雄のおっさん、明智光秀にとりつかれている間の記憶が
全くないらしい。
その為何故明智家がボロボロなのか、サッパリわからない様子であ
る。
――――そして。

「けーすけ様っ！」

「く、暮葉っ」

全速力で暮葉は駆けよってくる。俺との距離１ｍくらいの所で彼女は停止した。

彼女はとても心配そうな顔をしている。

どうやら俺が勝ったのでやったね！と、いいに来たわけではなさそうだ。

「だ、大丈夫なのですか！？　お怪我は！？」

「まぁ若干痛むけど、この程度ならどうって事ないよ」

「そ、そうなのですか……っ。それにしても、さっきのけーすけ様……っ」

「ん？　どうかしたか？」

なんだろう、この思わせぶりな表情は。一体彼女は何を考えているのだろう？

俺もいつの間にか、暮葉の考えている事を予想しようと、色々とおバカな頭を働かせていた。

だけど答えを導き出す前に、暮葉が答えを語る前に――――

「ふ、藤島と木下っ」

「お、おう」

「な、なんでしょうかっ？」

今度は俺達の所に、明智が歩み寄って来る。

「……あ……ありがとう」

ありがとう……か。

まあ……俺にとってはその一言で十分だ。

やっぱり、人にありがとうって言われるのは気分がいい。

「明智、よく頑張ったな。なんだかよくわからないけど、多分明智のおかげで光秀に勝てた気がするんだ」

突然強くなったのも、明智とキスをしてしまった後だしな。

考えてみれば、アレがファーストキスだったんだよな……。

だ、ダメだ。アレは事故なんだ……っ、自惚れるなよ。

「だ、だけど藤島には一番迷惑をかけたというかっ……えと、その……っ」

頬を少し赤らめ、宝石のように美しい蒼い瞳をうるっと潤ませる明智。

どうやら明智は、俺に迷惑をかけてしまったと思いこんでいるらしい。

全く～、そんな事気にしていたなんてな。

俺はそんな明智の肩に手を伸ばし、自信をつけるようにポンと手を置いてみる。

すると彼女は、その目を俺の目に合わせてきた。所謂上目遣いだ。

「迷惑だなんて思うなよ。仲間を助けるのは当たり前じゃないか？」

「なか……ま？」

「ああ、一緒に血を流したんだ。もう仲間じゃん俺達？」

「……そうだなっ」

「そうそう。だから迷惑だなんて思わないで欲しいよ。俺も暮葉もあたりまえの事をしたんだよ、なっ？」

俺はそう暮葉に話を振りと、暮葉も笑顔で頷いてくれた。
それを確認した上で、再び明智のほうへと視線を戻す。
まだ話があるんだ。それも大事な話、とにかく俺は明智に謝りたい。

「それと、キスしちまってごめん……」

「ふぇっ！？　い、いやっ！　もう……気にしてないっ」

「いや、でもあれって好きな人とするものだろ？　ホントにごめん……っ」

「き、気にするなっ。あれは事故だ……仕方ない事なんだっ」

いや、事故でも気にするだろ普通……。
まあ、あのキスのおかげで強くなったような気もしたけど。
ホントになんだったんだろうか、さっきの？
まるで別人みたいに身体が軽かったし、視力も異常に高くなっていた気がするなぁ。
今まであんなに動けたこと、なかったのに……。

「……藤島っ、お相子だっ」

「は？　お相子？」

「ああ、私は藤島が変態だという事はもう気にしていない。だから……そのっ、変な事は気にしないでほしいっ」

「ここで変態関係なくねっ！？」

「くすっ……関係あるんだぞ、世界で一番心強い変態さんっ」

……いかんっ、この明智の笑顔が想像以上に破壊力高いっす。
あのクールな明智だが、やっぱりこうして見ると可愛いぞコイツ。
そこは流石、女の子という生き物だぜっ。
でも、世界で一番心強い変態さんってなんでしょうか？
正直言うと、それって微妙に褒め言葉じゃないような気が……。
ま、細かい事は気にしちゃいけないってシーンなのかな、ここは。
――――それにっ。

「いやいや皆様、大変迷惑をおかけしました。じゃが幸い食材は無事じゃから、これからパーティーをしようではないかっ！」

どうやらこれから、パーティーっぽいしな。
確かに色々とボロボロだけど、でも折角なんだ。
細かいことは気にせず、思いっきり楽しんだほうが人生楽しいだろう。

「けーすけ様っ！　なに、ご飯食べれるのですかっ！？」

「ああ。昼は食べたけど戦って腹減ったろ？　食おうぜ！」

「はいなのですっ！」

――――こうして、昨日から続いていた、俺達にとっても明智家問題は解決した。

掃除の後、立派な食事が並べられ、俺達は楽しいパーティーをここで行う。

記憶がなかった光雄さんにも事情を説明し、本人は謝るも皆、光秀の影響だとわかっていたので彼を許した。さらに俺や暮葉にも謝罪の言葉が並べられ、当然俺達はそれを軽く許す。明智家と木下家の和解も会話1分以内で完了した。こうして、このパーティーは楽しいものになったのである。

すべてが解決し、みんなニコニコできる状態へとなったんだ。

そして――――

「藤島っ」

「ん、どうしたんだ明智？」

「これからも、よろしくなっ」

「……おう！」

爽やかな笑顔で言ってくる明智に、俺も笑顔でハッキリと返事をしてみせた。

第１９話，明智光秀の野望ッ！（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「突然ですが、作者が旅に出ます」

暮葉「もきゅ！？　ほ、ホントなのですか！？」

伊吹「ちょ！　この小説はどうなるのよ！？」

圭介「ちょっと日高のほうに……」

暮葉「日高って誰なのです？　そういえば噂で聞いたのですが、日高一派ってすごい集団が日本のどこかにいるらしいのですよ」

伊吹「日高一派って極道みたいね……ていうか、日高って北海道の日高の事でしょ？」

圭介「仕方ないだろ……学校行事なんだから。つーか作者曰く、なんでこの学年で修学旅行じゃなくて宿泊なんだよ、だそうだぜ？」

伊吹「それ、さり気なく作者の年齢バラしちゃってるわよね！？」

暮葉「もきゅ？　どういうことなのです？」

伊吹「普通修学旅行って高校生なら――――」

圭介「なお、木曜日になるまで帰ってこないので、更新はいつも通り０時と１３時に予約掲載昨日でしますが、その間に貰った感想な

どの返信は作者自宅不在の為、木曜日まで不可能なのでございますが、学生にならよくある学校行事なんでご了承ください」

伊吹「こらっ！　まだ私喋って――――」

圭介「あ！　感想とかしてくれると俺らも嬉しいぜ？　ついでに暮葉と伊吹がスク水を着てくれるかもしれないぜ？」

伊吹「着るかばかぁ！　無視すんなばかぁ！　2回死ねっ！」

圭介「ぎゃあぁあうぅふぉあっ！？　うぎゃあぁぐごがぁおぅお！？」

大吾「国宗、縞パンだったな……」

重原「どこかで見たことある光景だね……」

暮葉「けーすけ様！　スク水ってなんですか！？」

第２０話，定番イベント

翌日、日曜日。
実は昨日、とんでもない事実が発覚したんだ。
それは暮葉曰く、俺にはアレクサンドルの能力が、先祖返りして宿っているらしい。

はぁ、頭オカシイんじゃね？

誰もがそう思う事でしょう。しかし本当にそうらしいのだ。
事実俺は明智とキスをした後、滅茶苦茶強くなっただろ？
アレが俺の能力、そしてアレクサンドルにもあったとされる能力らしいのだ。
暮葉曰く、アレクサンドルは特定の条件を満たすと、滅茶苦茶強くなったらしいのだ。
例えば異能の力を右手で打ち消すとか、性的に興奮すると普段の３０倍まで能力が増すとか。
……おいおい！全部どこかで聞いた事あるようなのばっかだぞ！
特に後者なんて……釘〇病の大吾が悶絶しちゃうだろ？

まあとにかく、そういう話があったんだよ。
つまりアレクサンドルの能力とは、『解放』というものらしい。
潜在能力を最大に引き出す、トンデモな力らしい。
魔法でもなければ、当然ある程度の科学技術が必要になる超能力でもない。
全く異種の能力……暮葉曰く、ロジーナの皇族で時々発現するらしいのだ。

ただし『解放』するには条件が必要らしい。

それが俺の場合、キスするかつ敵を倒したいという感情を抱く。
そうする事により、俺の潜在能力が『解放』されるようである。

「全く……だったら最初から解放してればいいのに……っ」

そう呟いてみるものの、そうはいかないらしい。
暮葉曰く、あまりに強大な力な為、どうも日常生活に支障を来すらしいんだ。
だから普段はリミッターがかかっている。
身体が丈夫で回復力が高いのは、リミッターがかかりきらなかった為らしい。
ホントがどうかわからん。つーか胡散臭いけど……まあ確かにキスをした瞬間、強くなりましたよ。
というわけだから信じてやる事にしたんだ。考えるのも面倒だしね！

「さてと、風呂でも入ろうかな」

晩飯後、丁度我が家ではお風呂の時間である。
実は俺、わりと風呂好きなんだ。旅行とか行ったら絶対風呂は長い。
だから修学旅行とか最悪だ。短い上に裸の野郎がいっぱいなんだぜ？
風呂は静かな所にゆっくり浸かるのが一番なんだよ！

と、というわけで我が家の風呂は、それなのに落ちつくのである。
脱皮……もとい全ての服を脱いだ俺は、生まれたままの姿で風呂場へ突入する。

――――だが、しかし！

「……も、もきゅっ？」

火照った身体、僅かに上気した頬、濡れた髪……。
そんな感じの暮葉が浴室にいました。しかも全裸です。
もちろんタオルなんてしていない。そもそも家の風呂で隠す必要性もない。
つまり、彼女は本当に産まれたままの姿なのだ。

「は……にゃ……わっ……あっ」

「……」

嫌な沈黙である。わなわなと身体を震わせ、みるみる赤くなってゆく暮葉さん。
まずい、叫ばれると非常にまずい。女の子が叫ぶ＝無条件で男は犯罪者という図が社会には存在する。
つまりここで叫ばれれば、俺の人生はコンスタンティノープルの陥落。つまり終了というわけだぜ。
じゃあどうすりゃいいんだよ……ああ、一つだけ生還の方法がある。
あまり使いたくはない手段だが、生きる為には仕方がない！

「きゃあああああああああっ！」

そう、腹の底から思いっきり叫んでやったのだ。
当然叫んだのは暮葉ではなく、俺である。
つまり言うとだな、先に叫んだ方が勝ちなのだ！

「もきゅっ！？　どどど、どうしてけーすけ様が叫ぶのですか！」

「アホ！　裸を見られたのは俺もだ！」

言いながら近くにあるタオル等を拾い、大事な所等を隠す俺達は正

に真っ裸。
二人とも母親のお腹の中から出て来たばかりの、ありのままの姿なのであった。
濡れた髪、成熟しきっていない身体。まだ幼さの残る彼女、そこに底知れぬ美しさが秘められている。
そんな暮葉に、素晴らしい魅力を感じてしまった俺である。

「誰も乙女なけーすけ様なんて期待してないのです！」

「誰が乙女だっ！　モノだってちゃんとついてたろうが！」

「とにかく変態です！　けーすけ様は明智殿の言う通り、世界で最もＨＥＮＴＡＩさんなのです！」

「探せば俺以上の変態はいるよ……つか、結局俺が悪かいっ！」

「あたりまえなのです！　この変態皇太子様っ！」

いかん、緊急回避として俺が叫んだのに、なんだか俺が悪い方向に話が流れ始めている。
このままだと、本当に人生がビザンツ帝国のように終了しちまうぜ。
なんとしてでも逆転勝利し、身の潔白さを証明せねば！

「落ちつけ暮葉。これば事故、不幸な事故なんだっ」

「い、今更謝ったって遅いのですよっ！」

「じゃあどう責任取れと！？」

「せ、責任取って一緒に入ってくださいっ！」

……ん、ちょいと待てよ？
そのセリフは色々な意味でおかしいと思いませんか？
女の子から一緒に入って……だとっ？

「はいいいぃいいぃいっ！？」

あまりの衝撃に奇声を発してしまったよ。
え～っと、やっぱりなんだよコレ。ただの天国じゃねえか！
でも、考えて見れば俺の理性と暴れん坊将軍がまずい事になっちまうじゃねえか！
やべェよ俺の理性が！どっかにぶっ飛ばないようにしねェとまずいぜ！

――――というわけで、藤島家のそれほど広くもない浴室。
俺と暮葉は同じ浴槽に浸かっていた。
当然裸を見るのはまずいので、お互いに背を向ける形である。
それでも……時々暮葉の生々しい背が触れて……っ。

「……っ」

「み、見ちゃダメなんですからねっ」

「だが断……げふんげふん！　見ねえから心配すんな」

「……怪しいのです」

「怪しくねえよ、絶対見ないから」

待て、落ちつけぇ～現実（リアル）に呑まれるな。

どうして責任を取る事が、二人で一緒にお風呂へ入る事なんだよ。
女の子と嬉し恥ずかし一緒に入浴って……これなんてエロゲ？
確かに滅茶苦茶嬉しいよ。すっごく緊張して、心臓が先程からバクバクうるさい。
ドキドキするし、男として大切なエッフェル塔の制御だって大変だ。
大変そうに見えるけど、本能的にそれくらい喜んでいるわけですよ。
だけどおかしいと思うだろ。どうしていきなり一緒に入浴なんだ？
どうしようか、ここはストレートに訊いてみるべきなのかな？

「な、なぁ。俺、一緒に入る必要あったのか……？」

「あ、ありますっ。罰ゲームなのですからっ」

へぇ～、罰ゲームなのかぁ。それってむしろ暮葉のほうじゃ……。
だってその……すまん、俺には混浴とかご褒美です。
でもこれって暮葉には苦痛なんじゃ……。
いくら護衛対象とは言え、俺の事を変態というくらいだ。
きっと好印象ではないだろう。だから嫌いな人と一緒に入る風呂は……。
喜んでいた俺が馬鹿だった。なんだか暮葉が心配になってきたよ……。

「あのなぁ、女の子と入浴って全然罰ゲームにならないぞ？」

「そ、そうなのですか！？　だって葵さんがけーすけ様は変態だけど意外と純情だって……っ」

「お前……俺が鼻血を吹いて倒れると思ったのか？」

「は、はい……っ」

……バカだろ。普通に考えて女嫌いか現実女嫌いを除き、誰でもご褒美と思っちゃうだろ？
全然罰ゲームにならないし、しかも辛いのはどう考えても暮葉のほうだ。
好きでもない人と一緒に風呂なんて……エロゲーでも今時そんなのねえよ。
嫌い嫌いと言いつつ、実は主人公が大好きってパターンがほとんどだからな。
とにかく、今辛いのは俺ではなく暮葉だ。なんとかしないと……っ。

「そんなわけないだろ、それより暮葉はどうなんだよ」

「も、もきゅ？　拙者ですか？」

「好きでもないヤツと風呂入って、嫌じゃないのか？」

「っ……無神経な人なのですね、けーすけ様」

「む、無神経って……」

そりゃあ何度も伊吹に言われましたけど……。
まさか、こんなちっこい女の子に言われようとは。堕ちねえ俺さんも。

「と、とにかくこれからお風呂上がるまで会話禁止なのですっ！」

「なにその理不尽な要求！？　気まずいだろ！」

「もきゅっ！　こここ、こっち見ないてください！」

「うおっ！？　す、すまん！」

あぶねぇ～、一瞬振り向いて見てしまった……。
クソッ、なんて綺麗な肌してやがるんだよ。
おまけに触れると温かくて……ああ、精神的に辛い。
息子の暴走を抑えるのが辛いぜ……っ。

「……」

「……」

しかもホントに無言になっちゃったし……なんだこれ、滅茶苦茶気まずい。
やっぱり何か会話くらいしたほうが……。
でも話題がない、そして恥ずかしくて言葉が喉を通らない。
やっぱり暮葉もそうなのかな。だからあえて黙ってるのか……。

「……あのっ、けーすけ様っ」

「あ？」

は、話振られた……さっき黙ってろって命令されたのに。
一瞬ドキッとしちまったじゃねえか。

「……昨日は、申し訳ございませんでした……っ」

「昨日？」

なんだ、突然？

コイツいきなり昨日の事を謝りだした。だけどコイツ、昨日何かやったっけか？

「はいっ、本来けーすけ様は関係なかったのに……拙者の力不足でっ」

「……あのなぁ。俺から首突っ込んだんだぜ？　おまえは気にする必要ないんだよ」

「な、なのですがっ」

「力ならお前のほうがあるだろ？　ほら、俺って身体が丈夫な事だけが取り柄。別に魔法も超能力も使えねえし、変な能力はあるっぽいけど、それも滅多な事じゃ発動できねえんだろ？　つー事は普段はただの高校生、いつでも実力のあるお前に比べりゃ、俺なんてカスみたいな存在だから」

自虐ネタって正直痛いが、暮葉の為には仕方ない。

それにこれは事実だ。実際俺は暮葉よりも遥かに弱い人間だ。

俺は身も心も弱い。だからあの時　あんな事になっちまったんだよ。

思い出したくもねえ……そして出来れば暮葉にだって知られたくもない。

知られれば、きっと俺の評価は真性のクズ野郎になるだろうから……。

「けーすけ様っ、そんな……自虐しないでくださいよ。けーすけ様は強いのですよ」

「……弱いよ。たった一人をロクに守れなかったくらい」

「た、たった一人？」

「いや、なんでもねぇ……っ」

女の子と風呂に入れて、幸せな気分……なハズなのに、次第に俺は鬱な気分になっていく。

たく、やっぱり弱いぜ俺は。もう終わったってのに何時まで引きずってんだ。

ていうか、なんで暮葉に言っちまったんだろうな？

暮葉はそういうのを絶対心配するタイプ。だからこそ余計な心配はかけたくないのに……。

「……にゅふ、けーすけ様」

「なんだよ？」

「……弱いのでしたら拙者、けーすけ様を全力でお守りします！」

お守りするって、元からそれが目的の仕事だろ？

……でも、かと言って彼女の仕事の邪魔はしたくない。

それに、こんなに活気ある声で言われるとなんだか気分がいい。

「……ありがとう」

だから俺は、素直に彼女にお礼を言ってあげた……。

……ところで、いつまで入ってるつもりだろう？

そろそろ息子がホントに限界です！

第２０話，定番イベント（後書き）

後書きトークコーナーは木曜日まで中止させて頂きます。
申し訳ございません！

第２１話，部活入ろうぜ！　前編

５月９日月曜日、放課後。

「ぶ、部長ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！」

血と汗で汚れた黄ばんだ胴着を着た、二人の女の子。
一人は小柄で、もう一人はお姉さん体型。
だが、お姉さんのほうは完全に口から泡を吹き、伸びている。
オマケに白目だ、これは完全に勝負が決まっちまいましたぜ……そして。

「にゅふふっ！　勝利完勝パーフェクト勝ちなのです！」

笑顔で喜ぶ、小柄で愛くるしい外見を持つ女の子。
……さて、どうしてこんな事になったのでしょうか。
それは遡る事数時間前、お昼休みの事である……。

――――昼休み。

小学生の頃、机を動かし班で一塊になり、みんなで談笑をしながら給食を食べた事がある。
今はそれが弁当や購買のパンというだけで、俺達は机を動かし皆で昼飯を食べていた。
主に俺や伊吹、小坂に重原についでに大吾。

そして先週から初高に通う事になった暮葉が一緒に食うメンバーだ。
あと今日になって発覚したけど、暮葉って携帯電話を持っていたらしいんだ。
どうやって手に入れたかは定かではない。おそらくアルファ隊の活動の為だろうが……。
だが、それがわかったので今日の昼はアドレス交換会であった。
俺も暮葉の電話番号とアドレスをゲット。やった……母ちゃんや葵を含めれば、女の子6人目だ！
んで、その後も色々と談笑をしたのだが……ある時、伊吹が。
「そういえばさ、暮葉って部活とか入るの？」
そう暮葉に言ったのである。
思えばこれがすべての始まりだった……。
「もきゅ？　ぶかつ……って？」
「ああ、どこの学校にもあるけど、基本的には同じ趣味や興味を持つ人の集まり……かな？　ちなみに伊吹は剣道部で一番強いよ」
「こ、こら亜紀！　余計な事言わないでよ！」
前にも言った気はするが、伊吹は剣道部所属。
そして、今や部長を抜いて一番の実力を持つ、天才剣道少女なのだ。
なんたって、あのバケモノの攻撃を受け止めるくらいだからなぁ。
相当強いよ、伊吹は。
「そ、そうだったのですか！？」

「ま、まあ……一応よ一応っ」

「伊吹さん！　すごかったのですね！　思わず尊敬しちゃいましたのです！」

「えぇっ？　え、えっと……ほ、褒めても何も出ないわよ？」

困ってるように見えるけど、アレは多分嬉しいのだろう。
だって顔が微妙に笑ってるもん。

「重原さんや大吾さんは何か部活やってるのですか？」

「僕はやっていない。ゴールデンタイムのアニメが見れない！」

「だから引きこもりって言われるのよ……」

「大吾に限ってはキモオタ乙だよな……うん！」

「ぐはっ！？　ふ、ふん！　現実女に言われてもショックじゃねえやい！」

うわぁ～、女子からの評価すこぶる悪い。
まあ、似たような理由で部活をやらなかった俺としては。なんだか俺の事を言われている気がして……正直ヘコみます、ハイ。

「俺は家が忙しいからね、部活はやってないよ」

「でも重原は確か武道家だったわよね？」

「重原は大吾と違って、部活やってない動機が不純じゃないからOKだね」

「なんか僕との扱いの差がひでえ！　くそっ、なんで広ちゃんばっかり！」

そりゃあ堂々と現実女の前で、現実女がクソッて言ってりゃあね。自然とお前の評価は下がるよ。ていうか俺も大吾の歪んだ愛はどうかと思うんだ。

まあ、俺も二次元は大好きだけどね。事実あそこは楽園だしさ！

「けーすけ様はやってないのですか？」

「ん、俺？　俺はやってねえけど？」

「けーすけ、オタクだから体力に自信ないのよね？」

「いやいや、圭くんは馬鹿だから文化系に入っても脳が追い付かないんだよな？」

「てめぇら人の事見下しすぎだろ！　確かに頭は自信ないけど体力は自信あるわ！」

これでも、陸上部に１００ｍ走で勝った事あるんだからね！

……まあ、中学時代の話だけど。流石に高校生にもなると差が半端じゃないね。

ていうか伊吹さん、俺で遊んでやがるな。その嫌な笑顔、絶対遊んでいる時の表情だ。

一方、暮葉はその琥珀色の瞳を輝かせ……。

「拙者も部活に入ってみたいのです！」

ああ、部活に憧れちゃったよこの子……。
ていうか、部活に入る＝俺の護衛放置だよね？
いいのか、職業的にまずいんじゃないのか？
……まあいいか、自分の身くらい自分で守れるし、暮葉にだって楽しみを与えてあげたい。
折角学校に通うんだから、やっぱりこの生活を楽しんで欲しいよ。

「部活って今時期入れたかい？」

「僕は知らん！」

「大吾は黙ろう？　あたしの記憶だと、うちの学校いつでも入れたよね？」

「うん。来るものはいつでも拒まないっていうのが、うちの学校の部活だったわね」

そう、伊吹の言う通り、基本的に我が校の部活は来るものを拒まないんだ。
学年も季節もソイツの事情も知ったこっちゃねえ。やりたい人は楽しくやろう。
それが初芝高校の部活動である。しかも、地味に部活は強いほうである。
大会じゃよく上位にいるし。特に陸上部は前の大会まで決勝まで行ったらしい。

「じゃあ、今日あたりにでも許可取って見学に行ってくれれば？」

どうせ他人事だしと、俺はテキトーに暮葉にそう言ってあげた。
うん、これは俺なりの優しさなんだっ！

「はい！　じゃあ一緒に行きましょうけーすけ様！」

「ちょっ！？　なんで俺まで！？」

「そうね、暮葉だけじゃ不安だし、あんたも一緒に入ってあげれば？」

「い、伊吹さん！？　どうして暮葉をフォローした！？」

どういう事だ。畜生、何故俺まで部活に入る展開になっているんだ？
しかも小坂や大吾達まで「それいいね」とか言いだすし。
ちょっと待てよ、部活に入ったらアニメ見たりゲームする時間なくなるだろ！？

「圭くん、部活入って友達増やせば？」

「な、なんだたったら剣道部でもいいのよ？　一からシバくから！」

「シバかれるなんてお断りじゃ！」

なんで少し恥ずかしそうに言うんだよ、伊吹さん！
どうせシバくのが目的な癖に。
ていうか、そこまでして剣道部に入って欲しいのかよ！

「拙者……けーすけ様が一緒のほうがいいのですっ」

「ほら、木下さんだってそう言ってるじゃないかい？」

「ふん、部活なんて僕的にはリア充がやるもんだ。でも圭介だし、特別に認めるぜ！」

「逃げられないわね圭介。いっそオタク人生さよならすれば？」

「圭くん、可愛いいとこの頼みなんだから。ちゃんとお兄さんするんだよ」

「よろしくお願いします！　けーすけ様っ！」

「……なんでこうなったんだっ！」

……というわけで、俺まで部活に入らざるを得なくなってしまったのだ。

もちろん暮葉が入る部活にな。この日の放課後は、それはもう色々な部活を見回りましたよ。

まず最初に見学したのは、県内でも最弱を誇る――

「行ってくれ……頼むぞ。目指すは……甲子園だあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

熱い顔に熱い闘志、どこまでも熱い男が全力投球をする。

時速は１１０ｋｍ／ｈ超え、高校野球にしては高レベルであろう。

汚れたユニフォームからは漢気（おとこげ）を感じるぜ。

一方、バッターは黒いユニフォームを着用した、近所の古宇坂東高校の生徒。

「打たせるかよぉぉっ！」

バッターはバットを一振り。
カキンという音が響き渡ると、ボールは空高く舞い上がっていた。

「う、打たれたっ！？」

物凄くショック顔の少年……。
結局この古宇坂東高校との試合は、我が初芝の惨敗に終わった。

「うぅぅっ！　こ、甲子園があぁぁぁぁっ！」

「畜生、せめて砂だけでも持って帰ろう……っ」

お前ら、その砂は母校の砂だぞ！？
甲子園の砂じゃねーだろうが！
……ダメだこりゃ、初芝高校の野球部本格的に終わってる。

「けーすけ様、あれどうしたのですか？」

「ああ、うちの学校。野球部だけは滅茶苦茶弱いんだよ……今１３５連敗な」

他が強いのに何故野球部だけ、地元の弱小校にすら負けるほど弱いんだろう？
ていうか高校の部活動じゃ、世間では野球が一番注目されるのに……。
北海道の高校すら野球のおかげで有名な所、あったりするのになぁ。
つまり言うとだな、初芝高校は地元でしか有名じゃない高校なのだ。
でもさ、これだけ弱かったらむしろネタにならないんだろうか？
……ま、世間は雑魚には興味ないみたいだ。連敗記録がすごくても

ネタになるわけないか。

「そもそも、野球部って女子はマネージャーにしかならねえぞ？」

「もきゅ！？　そ、そうなのですか！？」

「ソフトボール部があれば似たような事はできるけどなぁ」

うちの学校、野球部が弱いせいでそういうのはないのだ。
その代わり水泳部とか相撲部とか、普通いらないような部活はあるんだ。
理由は当然、強いのでそこそこの結果を残したからである。
ったく、いくら強いからって税金使ってまでプールと相撲部屋作るか普通？

「とりあえず次どこいく？」

「んん～、伊吹さんは剣道部なのですよね？」

「スマン、剣道だけは勘弁！」

「もきゅ？　どうしてなのですか？」

「いやぁ～、まあ……とにかく剣道部はダメ！」

俺がシバかれるし、剣が得意な暮葉が剣道部に入る＝最強フラグなのである。
つまり、伊吹の立場が危うくなってしまうんだ。
それでもし伊吹が負けて自信を失ってしまったら……うん、流石にそれはいけないと思う。

部としての戦力は上がっても、伊吹がヘコんじゃったら元も子もない。
だから、暮葉は剣道部に入ってはいけないんだ！

「んん～、けーすけ様がそういうのでしたらっ。それじゃあ……じゅーどー部ってなんですか？」

「お前……男っぽいのばっか選ぶな」

「知らないものには興味があるのですよ！」

ま、まあ暮葉は異世界人だし、日本にいたのは一ヶ月ちょいだからな。
まだ知らないことはいっぱいあるだろう。
そうだなぁ。入るか入らないかは別にして、柔道がどんなものか見せるのはいい事だろう。
万が一入るとしても、柔道部だったら俺としてもやりやすいかもしれない。

「そっか、それじゃあ柔道部に行ってみるか！」

「もきゅ！　りょーかいなのです！」

こうして、俺達は柔道部に見学に行くことになったのだ。
……そして現在――――

「ぶ、部長おおおおおおおおおおっ！」

「にゅふふっ！　勝利完勝パーフェクト勝ちなのです！」

「柔道部に行くなんて言った結果がこれだよ！」

あの後柔道部に行って、俺達はごく普通に見学をしていたんだ。
そしたら暮葉が「やってみたいのです！」なんて言うので、部長が対戦相手になり、練習試合を始めたのであった。
そこまではよかったんだ……ところが、暮葉はアレでも戦闘のプロである。
流石はアルファ隊、そこらの高校生が敵う相手ではなかったのである。
部長は見るも無残な姿を晒し、無様にその場に伸びていたのであった……。

「けーすけ様！　柔道って、意外と簡単なのですね！」

「お前なぁ……」

「部長に勝っちゃいましたよ♪」

やべえ、部員の視線が冷たい。
というか、完全に暮葉を恐れている目だぞアレは……。
なんか、風当たりが冷たいですよ!?

「もきゅ？　けーすけ様、帰るのですか？」

「アホ！　部長ボコボコにしといて長居できるか！　行くぞっ」

「あわわわっ！　ま、待ってくださいけーすけ様ーっ！」

慌ただしく去ってゆく俺達に向けられた視線は、冷たいの一言であ

った……。

その後、テニス部にも行ってみたが、そこでも暮葉は大暴走。

なんと部長とのシングルスで勝利してしまったのだ。

その為その場に居づらい雰囲気となり、俺達は帰らざるを得なかった。

結局、この日の見学は無意味なものになってしまったのである……。

第２２話，部活入ろうぜ！　後編

５月１１日水曜日……ん、部活はどうしたって？
まだ入ってないよ。何故なら……運動系の部活は全滅だからだ。
暮葉の神すぎる運動神経には、いくら経験者でもそこらの高校生が敵うレベルではなかったのだ。
中には新戦力として暮葉を招きたい所もあったが、今度は逆に暮葉が興味がなかったりで……。
一方暮葉が興味を示した所も、こんな恐ろしいのを入れれるかと暮葉入部を却下。
そんなわけで、結局俺達はどこの部活にも入っていないのである。

「もきゅう……ぶ、部活っ」

でも暮葉は入りたいみたいだしなぁ、どうしよう？
でもなぁ、もう暮葉を受け入れてくれる所なんて……。
いや待てよ。まだ文化系には足を踏み入れていないな。

「よし暮葉。今日は文化系の所いこうぜ？」

「もきゅ？　文化系ですか？」

「ああ、うちの学校文化系のほうが種類豊富だぜ？」

それに俺としても、正直運動系より文化系のほうがいい。
別に体力に自信がないからとかじゃなくて、文化系のほうが楽そうだし。
週に２回くらい、顔出しとけば問題はなさそうだからな。
正直に言おう。俺はホントは部活なんて入りたくないんだ。

……アニメ見たりゲームする時間がなくなっちまうからな！

「文化系……うん、行ってみましょう！」

「決まりだな」

……とは言うものの、実は文化系の部活なんてよくわからないんだ。
伊吹は運動系だし、小坂に大吾に重原はそもそも部活をやっていない。
……そうだ、こういう時こそ我が妹！
アイツ、部活やってる友達とか多そうだからな。
それに暮葉が部活を探しているというのも知っているし、アイツに訊くのが一番だろう。
というわけで昼休み。俺達は1年3組、葵がいるクラスを訪れた。

「すいません、藤島葵さんって人呼んでくれますか？」

「ふじ……ひぃっ！？」

あれ、なんか後輩に怖がられたぞ！
……もしかして、俺と　同じ中学出身なのかな？
中学時代は色々あったからな……仕方ない、ここは暮葉を使おう。

「けーすけ様……？　なんかあの人、けーすけ様の事……っ」

「あ、ああ。とりあえずお前が呼んでくれないか？」

「わかったのです。あの！　このお方は葵さんのお兄さんなのです。
少し用事があるのですが、よろしいでしょうか？」

「お、お兄……さん？　わかりました……っ」

暮葉に頼まれると、後輩の女子生徒は渋々頼みを引き受けてくれた。
やっぱり、俺が一緒に来るのは問題だったかな。
ていうか、まだ俺の噂って消えてないんだな。
俺の評判がこのように、すこぶる悪いのには色々な事情がある。でも今は詳細は省いておこう。

「お兄ちゃんお兄ちゃん！　あ、クーにゃんも一緒だ！」

「こんにちは、葵さん！」

「よぉ、呼び出して悪かったな」

「うんうんいいんだよ！　葵はお兄ちゃんの為なら脱いだっていいんだから！」

「そ、そうですかございましゅか……」

……ダメだこのブラコン妹、早くなんとかしないと。
まあ、妹に好かれるのは悪い気分ではないけどね。

「ところで、お兄ちゃんこっちに来ても平気なの？」

「え？　あぁまあ……軽く引かれたけどいつもの事だし、別に気にしてねえよ」

「そっか……大丈夫！　葵はちゃんと事情、わかってるんだからね！」

「お、おう。ありがとな」

たとえ周囲は悪い目で見ても、家族や友達は味方だ。
下手に騒ぐと余計に状況が悪化するのは目に見えている事である。
だから、俺は正直この現状でもいいんだ。
だけど困ったな。事情を知らない暮葉が心配そうな表情をしている。

「あ、あの。けーすけ様、どうかしたのですか？」

「あ？　いや、大したことじゃないし、別に気にすることないよ」

「なのでしたらいいのですけど……っ」

やっぱり、暮葉には知られたくないな……。
もし知られれば、場合によっては俺はただの悪人だ。
さっきの後輩のように、俺を恐れてしまうかもしれない……。

「ところで二人とも、葵に用ってなに？」

「ああ、今暮葉が部活探しているのは知ってるだろ。それでさ、文化系の部活ってどんなのあったっけ？」

「クーにゃん、文化系に入るの！？」

「はい！　そのつもりなのです！」

「絶対運動系だと思ってたよ！？」

「お前、そりゃ偏見だぞ」

まあ、運動系に入ろうにも入れない状況になっちまったのが事実なんだけど。
それは葵に言っても信じてもらえないだろう。
なんにせよ、運動部に入れなくなってしまったのは事実だ。
しかし文化系なんて俺達は知らない。だから葵に話を訊くんだ。

「お願いします。葵さんだけが頼りなのです！」

「んん～……葵も帰宅部だし」

「もきゅ？　葵さん部活やってないのですか？」

「うん！　お兄ちゃんの為にやってないんだよ！」

「け、けーすけ様の為になのですか！？　……愛されてるのですね、けーすけ様」

「正直ちっとも嬉しくねえ……」

それでも言う事聞かないのが葵だがな。
まあ別に、帰宅部で悪いって事はないだろう。だから問題はないと思うけど。
……ところで、帰宅部は内申点が下がるって本当の話なのかな？
社会に出ると、部活やってないテメェはクズって扱われるのはホントなのかな？

「すみません……葵さん」

「い、いやクーにゃんは謝らなくても！？　あ、そういえば葵の友達に人数不足で困ってる部活があるよ？」

「え？　マジで？」

「何部なのですか！？」

「え～っと、写真部だよ」

写真部かぁ、確かにあまり人は入らなそうだな。
それでも人数不足で困ってるって……そりゃ深刻な問題だな。
確か我が校の場合、部員数が半年足りない状況が続いた場合、廃部がサークルへ格下げされるんだよな。
廃部は当然部活自体が消えるし、サークルになると部費も出なくなる。つまり、全額自腹でなんとかしないといけなくなるのだ。葵の友達の部活……危機だな。

「写真部？」

「うんうん！　でも葵、写真部ってよくわからないんだよ」

「わかんねえのかよ！　まあ俺もわからんが……」

……とりあえず、写真を撮って何かをする部活だとはわかった。
多分そこまで苦労する部活ではないだろう。
それに暮葉がいくらアホでも、流石にカメラの使い方くらいは覚えられるハズだ。
俺としても部活をするなら楽なほうがいいし、それを考えると写真部は案外いい所かもしれない。

「とりあえず行ってみるか？」

「はい！　とりあえず行ってみるのです！　部活に入らないとニートになるって、大吾さんが言ってましたので！」

「そ、そうか……」

大吾……アイツ絶対某ガールズバンドアニメの話しやがったな。
確かにあのアニメの放送以降、軽音楽部って人気になったよね。
ウチの学校にも、突然軽音楽部なんてのが出来ちゃったくらいである。
例によって部員の大半は野郎で、しかもオタクなのだが……。

「それじゃあ友達に言っておくね！　きっと友達経由で部長さんに話が伝わると思うから！」

「おう、頼むぜ」

「お兄ちゃんとクーにゃんの頼みだもん。断れないよ！」

我が妹ながら非常に出来た妹である。
勉強もできる。スポーツも得意。交友関係も良好。その上明るくて人見知りは絶対しない。
これでブラコンではなく、適度に仲のいい妹ならパーフェクトなのにな。
そんなｍｙシスター葵の案内もあり、放課後俺と暮葉は本当に写真部へ見学に行った――――

第２３話，写真部

……部室の前、確かに写真部と言う案内がある。
壁には写真部撮影の写真が数枚。どれも中々の傑作だ。
それなのに、人の気配はほとんどない。不思議な所である。

「ここが写真部の部室なのですか～」

「てか、普通の教室だろ？」

文化系の部室なんて、吹奏楽とか美術とか以外は普通なハズだ。
でも写真部だしな。パソコンとかスキャナくらいはありそうなもんだ。
まあ、とりあえずは入ってみないとわからないな。
俺は扉を開け、「失礼します」と一言挨拶をし、暮葉と一緒に部室へ入る。
部室は普通の教室の半分程度の大きさだが、やはり写真部だけあって設備は整っているようである。
ノートパソコンにスキャナ、プリンタ等はもちろん、奥には暗室なども存在していた。
あの暗室と思われる部屋にある機械……多分現像機であろう。

そして、部室中央にある机。その席に座っている２人の人物。
一人は男、細身で金髪のイケメン野郎だ。畜生イケメンかよ！
一方、もう一人は女子であった。もしかしてあの子が葵の友達かな？

「……っ？」

びくんっと俺達に反応する少女。

セミロングな緑髪。女子としては平均的な身長。ぱっちりとした瞳は茶色だ。
どことなく大人しそうな雰囲気で、優しそうな女の子だ。
しかも顔まであどけない。なんてことだ、これは美少女ではないか！

「やあようこそ、バーボンハウスへ」

「ぶ……部長。ここ……写真部ですっ」

「まあまあ青山くん、細かい事は気にしない」

……なんなんだ、コイツら？
部長はキザだし、青山さんという人はおどおどしている。
青山さんは可愛いが部長はムカつくぞ。イケメンだしな。

「そんな事言うから……部員、いないんですよ……？」

「痛い所突くね青山くん……まあいい、そんな勧誘にホイホイついて来ちゃったのが君じゃないかい？」

「だって……写真好きですから……っ。部長が少し気持ち悪いのも我慢です……っ」

「ひどいや！　ボクそこまで気持ち悪いの！？」

正直……かなりキモいっす。
でもそれを言ったら殺されるし、今は我慢しておこう。
それよりもまず、俺達は自己紹介をしないとな。
俺と暮葉は隣に並び、部長と青山さんのほうをしっかると見る。

「あのー、俺達見学の者なんですが……」

「うん、話は青山くんから聞いているよ！　ようこそ写真部へ！」

葵のヤツ、ホントに青山さんって人に言ったんだな。

なるほど、だからさっきから俺達の事をチラチラと見ているのね。

キザな部長さんも、青山さんから話は聞いているみたいだ。

「は、始めまして！　木下暮葉と申すのです！」

「俺は藤島圭介っす」

「ボクは浅間英樹（あさまひでき）。射精部の部長さ☆」

「……写真部です。気持ち悪いですよ……部長」

「おっと失礼。ちなみにこちらはボク以外の唯一の部員、青山千早（あおやまちはや）くんだ」

……部員数が足りない理由、なんとなくわかりました。きっとこの部長が原因であろう。

いや間違いない。こんなのが部長なら普通は引くぞ。

そうなると、青山さんの写真にかける情熱は本物みたいだな。

こんなキザで言動がキモい部長なのに、それでも写真部にいるんだもんな。

本人だってさっき言っていた。きっとその情熱は本物だ。

「よ、よろしくお願いします……っ」

「は、はぁ。よろしくお願いします」

「よろしくお願いしますのですっ」

なんか、変な部活に来ちゃった？

いや、でも青山さんはマトモな人だし、変なのって部長だけだよね。

「まあまあ、そう改まらなくてもいいだろう。そこに座るといいさ」

爽やかなスマイルを浮かべ、空席に指を指す浅間部長。

なんでだろう。イケメンだからか滅茶苦茶ムカつく……。

だけど冷静に考えれば、浅間部長って残念なイケメンだよな。

「ちなみに藤島くん、そこにエロ本あるけど読むかい？」

「別にいらないっすよ」

いや、ホントは欲しいんだけど暮葉や青山さんがいるし。

世間体を考えなければな。それを守ってこそ紳士になれるのだ。

「……部長っ、やっぱり……気持ち悪いですっ」

「けーすけ様といい勝負かもなのです……っ」

「俺はあそこまでオープン・エロじゃねえ！」

――――それから数分後、浅間部長の暴走もようやくおさまり……。

俺達は写真部の活動について、ようやく説明を受けたのであった。

長かった……説明されるまでここまで時間がかかった事、今までなかったぜ？

これも全て、浅間部長が残念すぎるせいだろう。

青山さん曰く、浅間部長は真性の変態なんだとか。ちなみにあんな男でも3年、俺達よりも先輩である。

「具体的に写真部というのは、普段は各自で写真を撮影して、活動日にそれを皆で楽しく批評し合ったり談笑したりするんだ」

「……部長が嫌ですから、その……今は批評だけですけどね……っ」

わかるよ青山さん。その気持ち、痛いほどこの胸に伝わります。

「冷たいねぇ青山くんは。まぁ結論写真を撮って楽しくやろうというのが日常の活動さ。後は色々な技術が学べたりするね。そして文化祭や体育祭などの行事では、生徒が頑張っている姿を撮影するんだ。それを生徒会に送りつけて会誌に載せてもらったり、あと年に一度の校外展でテーマを決め、写真を撮影してそれを展示する。これが写真部の活動だよ」

浅間部長の説明を聞く限り、やっぱりごく普通の部活である。
その手の趣味の人にとっては楽しそうな内容だし、素人でも安心できる内容だ。
それなのに部員不足って……やっぱりこの部長が問題なんじゃね？
俺や暮葉でさえ引いてしまう程の男だ。普通の人なんて目撃したくもないだろう。
あ、そんな事言ったら青山さんが普通の人じゃないみたいだな。青山さんはごく普通の人だと思うよ。
ちょっと控えめな感じだけど……正直そこがたまらないです！

「ちなみに今入部すると、安物だけどデジカメ1個。そしてこのエロ同人誌があたるよ」

「もうダメだ……部長のせいで写真部廃部だよ……っ」

……な、なにいいいいいいいいいいっ!?

ええええ、エロ同人誌。しかもそれは北方ｐｒｏｊｅｃｔの同人誌やん!

それも俺の大好きな……みょ、みょんじゃねえか!?

しかもそれって入手困難な限定版なハズ。何故浅間部長がそんなレア物の同人誌を持ってるんだ?

もしかして浅間部長、相当のオタクなのか。いや、それはともかく

……滅茶苦茶欲しい!

あのレアな北方ｐｒｏｊｅｃｔの同人誌が欲しすぎる!

「もきゅう……面白そうなのですけど……でもけーすけ様、どうしま――――」

「よし!　入部しましょう!」

「……えっ!?」

「ほ、ホントかね藤島くん!?」

おお、浅間部長のイケメンフェイスがさらに輝いた。

これなら、彼の本性を知らない子なら一目惚れであろう。

さらに、あれだけ絶望していた青山さんまで驚いていた。

これはいい傾向だ。よし、このまま話を続けよう。

「ああ。妹から事情は聞いています。部員が足りないんですよね?」

「ああ、ボクと青山くんを含めてたったの二人だね」

「部長が気持ち悪い事……するからですっ」

「ボクのせいかい！？」

「９割は部長のせいですよ……っ」

まあ、確かに青山さんの意見に同意だ。浅間部長はあまりにも残念すぎる。

折角宣伝に使えそうなイケメンフェイスが、そのド変態のせいで台無しである。

きっと浅間部長が真人間なら、写真部が廃部の危機に陥る事はなかったんだろう。

だけど、そんな浅間部長のせいで廃部になんてさせれないな。

青山さんは葵の友達。その友達は写真が大好きで写真部にいる……みたいだ。

だからそんな青山さんの為にも、写真部を廃部にさせてはいけない。

我が校は４人入れば部として認められるんだ。だから俺は入るぞ、写真部に！

……それに、北方ｐｒｏｊｅｃｔのエロ同人誌も欲しいしな。

「え、え～っと……まあとにかく、写真部は廃部の危機なんですよね。だったら俺達が入れば丁度穴が埋まります」

「けーすけ様……っ、そうですね。実は拙者もちょっと楽しそうだな～って思ったのです！」

俺の気持ちも暮葉の気持ちも整った。あとは、入るだけだ。

それで暮葉が部活に入れる。青山さんの居場所を守れる。

――――そして、北方ｐｒｏｊｅｃｔのエロ同人誌が手に入る。

「ですから俺、入部します」

「拙者も、よろしくお願いしたいのですっ！」

「藤島くん、木下くん……ありがとう。君達は我が写真部の救世主だ！」

「あ、ありがとうございます……先輩方っ」

浅間部長も青山さんも喜んでいる。

……よかった。これで暮葉が部活に入ることができた。

青山さんの居場所も守った。そして……北方ｐｒｏｊｅｃｔのエロ同人誌も入手できる。

部活なんて初めてだけど、多分……。

――――きっとこれから、それなりに楽しい日常が始まるのかもしれない。

「それじゃあこれ、入部届けは担任に提出するように」

「はい」

「ありがとうなのです！

……こうして、俺と暮葉の部活選びはこの日で終了したのである。

第２３話，写真部（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「どうも、今回からこのコーナーまた復活です！」

伊吹「どうせ読む人いなさそうだけど」

圭介「こらそこ！　夢をぶち壊す事言うな！」

伊吹「ああごめんね。むしろ後書きを楽しみにしていたり」

圭介「そういう事も言うな！　ていうか後書きだからってこんな話するなよ！　フリーダムすぎるだろ！」

伊吹「あんたもいつもこんな感じだったじゃない！」

暮葉「けーすけ様！　それより拙者はご飯が食べたいのです！」

第２４話，ツインテールの女の子

――――あの後、乙坂に入部届けを提出した俺達は、正式に写真部の部員となった。
時間が時間だけに、提出して報告した後にすぐ学校を出たが……。
うん、明日が少し楽しみだ。どうやら明日は活動日らしい。
今日は本来活動日ではないのだが、俺達が訪れるから特別に集まってくれたらしいのだ。
ちょっと悪いことしちゃったかな……でも、結果的に暮葉は部活に入れたんだ。
写真部も救われたし、それに北方ｐｒｏｊｅｃｔのエロ同人誌も手に入った。

……ちなみに、同人誌はちゃんと鞄に隠しております。こっそり浅間部長から受け取りました。
そんなわけで現在。あかね色の空の下、俺と暮葉は帰路を歩いていた。

「……なあ暮葉、今更だけどさ」

「けーすけ様？　どうされたのですかっ？」

「いや、ホントに写真部でよかったのかなぁって。無理して合わせてたりしてないよな？」

「いえいえ！　拙者はホントに本心から楽しそうだって思いましたよ」

「そうか。よかった……」

もし合わせていただけなら、申し訳ない事をしてしまったような気がするから。
よかった。強引な入部だけど本当によかった……。

「にゅふふ……っ」

暮葉は時々俺を顔を見ると、何故か嬉しそうに笑っていた。

「どうしたんだよ？」

「もきゅ？　けーすけ様って本当に優しいのですね」

「は？　なんで？」

「だってけーすけ様の入部理由って、二人の為なのですよね？」

「……ま、まぁ」

確かにそれは合っている。浅間部長も青山さんも、居場所を失いたくはないハズだ。
それを守りたかったから俺は入部した。それはそうなんだけど……。
言えねえ……北方ｐｒｏｊｅｃｔのエロ同人誌が欲しかったなんて、絶対言えねえ。
それがもしバレてしまったら、俺は……破滅だ！

「にゅふっ……伊吹さんが必死になるわけです」

「は？　伊吹がどうしたんだよ」

「いえいえ、なんでもないのですよっ」

なんだろう。この嬉しそうな表情？

確かに、女の子に優しいと言われると嬉しいのは事実だ。

だけどどうしてここで伊吹が登場し、どうして暮葉が嬉しそうな顔をしているのだろう。

……わからん。恋愛フラグではないと思うが、やっぱりわからん。

暮葉が喜んでいる理由って一体――――

「いてっ！？」

――――その時、俺は後頭部に痛みを感じ、思わず声に出してしまった。

「もきゅ？　どうしたのですか？」

「いや、今なんか後頭部に……？」

なんだろう。何かを投げつけられたような……。

それも小さくて硬いものだ。つーかホントに痛いなぁ、後頭部は人体の急所なんだぞ。

ったく～、一体何なんだ……ん？

なんだろう、このアスファルトに落ちている、白銀の輝く物体？

気になる物体を拾い上げ、よくこの目で観察してみる。

「けーすけ様、これって……」

「コイン……だな。しかもこれ、近所のゲーセンで手に入る――――

いてっ！？」

「けけ、けーすけ様っ！？」

いってぇ～！今度はこめかみにヒットしたぞ？
しかも落下したものを拾ってみると、やっぱりコイツ。
さっき俺の後頭部に直撃したのと、全く同じデザインだ。

「畜生ぉ、どこのどいつの悪戯だよ？」

やられたこっちはいたんだからな。悪戯する側もちったぁ考えろよ……。
そう思った、その時――――

「どこのどいつの悪戯だ！　と聞かれたら、答えてあげるが世の情け！」

どこかで聞いた覚えのあるフレーズが、どこかから聞こえてくる。
前後左右ではない。少なくとも俺と同じ高さにいるとは思えない。
これは……上から声が聞こえてくる感じだ。

「けーすけ様！　あそこ、人がいるのです！」

「あ？」

どうやら暮葉が人影を発見したらしい。
その暮葉が指差す方向へ視線を向けると、ブロック塀の上には確かに人間が立っていた。
輝くようなだ橙色のツインテール。若干ツンとした紅い瞳。小動物のように小柄な体躯。
そして獲物を狙う獅子の如く、俺を睨みつけている女の子。
友達になろう……って雰囲気じゃねえよなぁ。敵意どころか殺意ま

で感じるぜ。なんだよアレ？

「世界の破壊を防ぐため、世界の平和を守るため。愛と真実の正義を貫く、ラブリーでチャーミーな仕置き人。そんなあたいの名前は浅間(あさま)あかり！」

しかも構わずセリフを続けるし。

それ、大丈夫なのだろうか？著作権的に考えて。

だが、浅間あかりを名乗る彼女は、そんな俺の心配なんて完全無視。

あの聞き覚えのあるセリフを続けたのだ。

「古宇坂をかけるあたいには、ホワイトホール、白い明日が待っている！」

「もきゅ！？　正義の味方というより悪役に見えるのですっ！」

「お前……もしやミサイル団か！？」

「ちが～う！　あたいは浅間あかりだ！」

ハイテンションだけど、怒ってばかりで血圧の高そうな娘(こ)だ。

ていうか誰だよ、浅間あかりって。

一応初芝高校の制服は着ているが……俺はあの娘の事を知らないぞ。

「……もしかして、暮葉の知り合いか？」

「違うのです。拙者もあの人は初めて見るのですよ」

「じゃあ誰なんだよあの娘は……」

知らない人なのに何故、俺は敵視されているんだろうか。
サッパリ意味がわからんぞ。俺が一体何をした？
まさか……誰かによる、あの娘を使った新手の嫌がらせなのか？

「あたいの友達を蝕み、あたいの友達の部活まで荒らす気か！　この暴力害虫藤島圭介！」

「はぁ！？　誰が害虫だよ！　つーかてめぇは誰ですか！？」

「だから浅間あかりって名乗ってるだろ！？　いい加減覚えろよな！」

あれ、おかしいぞ。こういうキャラどこかで見たことあるぞ。
もしかして浅間さんは、実は異世界から来た魔装少女さんなのかな？
魔装少女がいるなら、冥界のネクロマンサーさんとか居てもよさそうだな。
まあ俺の嫁はイカ……げふんげふん！吸血忍者の健康系アウトドア少女だけどな。

「あの！　貴女はけーすけ様に何の恨みがあるのですか！？」

「お前！　お前は絶対、その下衆野郎に騙されているんだからな！」

「け、けーすけ様は変態ですけど詐欺師ではないのですよ！」

「フォローはありがたいけど変態は余計だ！」

余計に誤解される事を言うなよ全く。これだから暮葉は……まあ変態なのは事実だけどさ。
それにしてもホントに意味がわからん。なんで絡まれた？

一体、どこでこんなイベントが発生が発生するフラグを立てたんだ？

「暴力魔な上に変態だと！？　どうしようもないな……早く死ねよな！」

「いきなり死ねって何様っすか！？　あと暴力魔ってなんだよ！？」

「とぼけんな！　あたいは知ってんだからな。あんた、中学時代に見知らぬ先輩を半殺しにしただろ！」

「半殺しって何だよ！？」

いや、確かに中学の時にある意味では先輩であろ人物を、かなりボコボコにしたことはある。

だけど半殺しにしていないハズ。ただ動けない程度に痛めつけただけである。

それにそれも、ちゃんとした理由があったんだ。

戦わざるを得なかった　理由が……でないと俺、ただの不良じゃねえか。

とにかく浅間の言ってる事の８割は正解だが、ちょっと拡大解釈され過ぎだ。

「どこまでとぼけるつもりだよ、この悪魔！」

「悪魔とは失敬な。俺は紳士だぞ？」

「けーすけ様は変態なのです！」

「お前は黙っとれっ！」

ていうか浅間のヤツ、もしかして俺と同じ中学出身かな……。
じゃなかったらあそこまで俺を敵視する人って……うん、多分出身中学は同じだろう。
それと浅間って名字、どこかで聞いたことあるんだが……。

「こんなのがあたいの友達の兄貴なんてガッカリだ。友達の為にもあんたは粛清だからな！」

「女の子が粛清とか怖い事言わないの。つーか、結局てめぇは俺に何の用だよ？」

「粛清に決まってんだろ。それくらいわかれよ！」

どこまで魔装少女なんだよ。はぁ……吸血忍者が俺の嫁として現れないかな。
出来れば一人称が俺の子が。あと冥界のネクロマンサーでもいいぜ？

「とにかく早く死ね！　藤島圭介！」

「こんな所で死ねるかよ……行くぞ、暮葉」

「えっ？　あの人はいいのですか？」

「ああいうわけのわからない、人様に絡んでくる人は放置プレイが一番なんだよ」

「もきゅ？　そ、そうなのですか……」

相手が男の場合、そのまんま路地裏という選択肢もあったろう。
だが、相手はまだ幼さの残る女の子である。

当然、路地裏なんていう選択肢を選べるわけがない。
まったく感謝しろよ。俺は基本的には女子に手を出さないの。
明智の時は特別だったんだからな……。
そういうわけで俺と暮葉は彼女に背を向け、この場から立ち去ろうとしました。
……ところが。

「男が逃げるなよ！　ああもう問答無用だ、喰らえっ！」

「いてっ！？　ちょ、あだだっ！？」

少女は俺を逃そうとしない。例のあのコインを何度も投げてつけてくる。
今度は後頭部のみならず、全身の至る所にコインの痛みを感じた。
なんということだろう。どこかの激戦地で突撃かけた時の気分だぜ。
ああそうだ、アレは間違いなく鋼鉄の雨（スチール・レイン）だ。

「この！　この！　このぉっ！」

「お、お前っ！　超電磁砲（レールガン）じゃねえんだから自重しろ！」

「うわっ！？　変態で暴力魔な上にオタクかよ！？　やっぱり真性のダメ人間だ、友達の為に死ねよな！」

「元ネタ分かる時点でお前もオタクだろっ！」

まったくコインで攻撃とか、ホントにどこのビリビリ中学生だ！
ビリビリは可愛いが、あの子は正直ただの迷惑にしかならねえ！
ていうか誰だよ友達って。とりあえず中学の時の騒動で俺を嫌っているのは分かった。

だけど、それだけでこんだけやられるってわけわからん。
友達の為？じゃあ友達って誰なんだよ。全く……せめて納得できる説明してから攻撃しろよ！

畜生……こうなったら間合いを詰めて腕を押さえよう。
このままコインを喰らい続けていたら、俺の身体が変になっちまいそうだ。
……と、思ったけど。

「クソッ！　いてぇっ！？」

「けーすけ様っ！　い、今助けるのです！」

おお、ここで救いの手が！
そうだよ、暮葉って俺の護衛が任務じゃん。

「た、頼む暮葉っ！　なんとかしてくれっ！」

「ふん！　女に助けを求めるなんて流石外道藤島。やっぱ粛清だな！」

テメェも女だろ――――と、思ったその時。

「やめてよあかり！」

「んみゃ？　あ、葵……っ？」

はっ、葵だと……？
俺は目を開け、浅間の後方を確認する……。
するとそこには葵ともう一人、写真部にいた青山さんの姿があった

のだ。
も、もしかして……友達ってあの二人？
「お兄ちゃんを痛めつけないで……っ！」
「わたしも……せ、先輩はなにもしてないと思う……っ」
「んみゃっ？　で、でも……こ、こいつはいきなり人を殴る悪魔だよ？　あたいはそんな悪魔から二人を守ろうと……」
やっぱ友達ってあの二人か。ったく～、どうして今日になって現れた？
……そういえば、今日昼休みに葵の教室に行ったな。
まさか、その時に俺の正体がバレちまったとか言うんじゃ？
「そんなのあかりの勝手だよ！　お兄ちゃんは理由もなしに絶対そんなことしないもん！」
「わ、わたしも……事情知ってるからっ、先輩はそんな……悪人じゃないからっ」
えっ……ちょっと待て。なんで青山さんがそんな事を……？
「だ、だけど……っ、あの男は……っ」
「これ以上お兄ちゃんにひどい事したら……あかり、絶交だよ！」
うわっ、絶交宣言キター！これは浅間選手、人生最大のピンチなのでは？
……ていうか浅間か、あの浅間部長と混合しそうだな。

まあ、浅間って名字の人はどこにでもいそうだ。
それより、あの女の子のほうの浅間は、葵に絶交宣言をされた途端にうろたえ始めたのである。
やがて彼女は悔しそうな顔をして右拳を握りしめ、睨みつけるように一瞬で俺のほうへ振り向くと。

「藤島圭介っ！　い、いい妹を持ってるな……っ、きょ、今日の所は見逃すけど次の為に遺言書執筆と遺産分配やっとけよな！」

そんな事を彼女は俺にハッキリと告げた。
背は明らかに彼女のほうが小さいのに、まるで俺を見下すように人差し指を向けながら。
つーか遺言と遺産分配って、どこのビリビリ中学生だよ。
まあ、アレは一応初高の制服を着ているあたり、高校生なのだろうが。

「べーっ！」

うわぁ～……ありゃ謝る気ナシだな。あっかんべーしながら去りやがったよ。
それをしている時の顔、可愛かったんだけどなぁ。
ていうか、あの子も暮葉や明智に匹敵する残念な美少女だな……。
黙ってれば可愛いと思うのに。全く勿体ないヤツであった。

「せ、先輩方……っ」

「お兄ちゃんとクーにゃん！　だ、大丈夫!?」

「もきゅっ！　拙者は実害ないのですよ」

「俺は散々コインをぶつけられたぞ。無傷だけど」

もし１５５ｍｍ榴弾砲にも匹敵する威力を誇る、そんな化け物コインだったら死んでたけどな。

増してや浅間がソレに加え、電化製品が全滅する程の電撃を出せる超能力者だったら……。

あるわけないだろって油断はできないぞ。明智という超能力者がいるくらいだ。

暮葉だって不完全ながら、風の魔法を使いやがるんだ。

きっと電撃浴びせるような輩が、世の中に一人くらい居たって不思議ではないだろう。

「あの……あかりさんは決して悪い子じゃないんですっ」

俺が考え事をしていたその時、青山さんがいきなり浅間の話を振ってきた。

……まあ、根元から悪い子ってわけではないのは、俺にもなんとなくわかったよ。

本人はきっと、アレがいい事だと思ってやっちまったんだろう。

「そうだよっ。あかりは本当は明るくて元気で面白くて友達思いな子なんだよ。きっと、あかりがお兄ちゃんの事を悪いと思っているのは……」

葵も青山さんと似たような事を言っている。アイツもこの二人に大切に思われてるんだな。

そしてこの二人の言う事も多分事実だ。アイツも普段はあんなヤツじゃないんだろう。

ただ葵の言う通り、俺が嫌われている理由は間違いなく、中学の時の……。

「わかってる。別にあの子に対して怒ってないから」

こんな状況を作った原因には間違いなく俺の存在もある。
あの子はきっと誤解している。だからこそ友達を守ろうと……。
根はいいが、もう少し大人しくしてほしかったぜ。
まあ、とにかくそういうわけで仕方ないんだ。だから俺はあの子に対して怒っていない。
むしろ怒ってる相手は……その原因を作り出した　あの野郎だ。

……久々に隅々まで思い出した。怒りと悔しさが俺の脳や心を回りまわっている。
でも、もうアレは終わった事なんだ。今更……何もする必要はない。

「……っ」

暮葉や葵が心配そうな表情である。だけど、少し気になるのは……。
なんで青山さん、事情を知っているなんて言っていたんだろう？
俺と青山さんは初対面なハズ。仮に中学が同じだとしたら……俺を嫌うハズだぞ。

そんな疑問を抱く中、あかね色の空は薄暗くなり始めていた……。

第２４話，ツインテールの女の子（後書き）

後書きトークコーナー

凪紗「過去作から読んで思ったんだが、この作者の書く主人公がどんどんダメ人間になってないか？」

圭介「は？　どういう事だよ？」

凪紗「だって……

・保坂充＝わりと常識人

・橋立純＝バカ

・日高恭介＝最強に馬鹿で元ヤン卑怯者、ただし歴代で最も端整な顔で男前。

・薮内遼一＝超が付くほど鈍感（連載時、あまりの鈍感さに非難轟々）

・上条春希＝自他ともに認めるヘタレ

・藤沢巧＝不幸でいつも喧嘩したり逃げたりしている上に、妄想癖でロリコン。

・藤島圭介＝どうしようもない変態。犯罪者予備軍、女子にセクハラ発言余裕。

……マトモな主人公が最近、全くと言っていい程いないぞ？」

圭介「ちょっと待てい！　なんで俺だけ犯罪者予備軍なんだよ！？」

凪紗「私、胸揉まれたし押し倒されたし唇奪われた……もちろん、合意なしに」

圭介「事故だろそれは！　もうそのネタ引っ張るのやめい！」

凪紗「とにかく……藤島以上に最低な主人公はいない」

圭介「俺ってそこまでサイテー野郎だったの！？　どう考えても妄想癖でロリコンな藤沢巧が一番サイテー主人公だろ！」

伊吹「あんた達、元ネタわからない人の事考えなさいよ……」

凪紗「すまなかった。でも藤島が最低の変態主人公だとはわかったろ？」

圭介「どうしてこうなっちまったんだよ！」

暮葉「けーすけ様！　讃岐うどんというものを食べてみたいのです！」

第２５話，波乱の一日　前編

５月１２日、木曜日の早朝。
昨日のあの襲撃騒動の事を考えながら、目覚めると……。

「あ、起きた？」

なんだろう、物凄く久々な気がするんだ。
何故なら、俺のベッドのすぐ近くに伊吹がいたからだ。
中途半端に手が伸びている所、俺をこれから起こす所だったのだろう。
それにしても、ＧＷ前からずっと来ていないし、やはり久々に感じる。

「んん～……ここは？　バサラタウンか？」

「なにパケットモンスター的な事言ってんのよ。あんたの家でしょ？」

「ああ、そうだな……」

伊吹……コイツは今、俺らの昔の事なんて考えていないんだろうな。
俺は今、物凄く考えているよ。昨日あんなことがあったせいか……。
あの、浅間あかりって子が誤解をしている原因。
……ダメだ、伊吹の前でそれを考えちゃいけない。それを伊吹にバレてはいけない。
もう終わった事なんだから。俺らは皆忘れていたい事なんだから。
特に……。

「……？　圭介？　ねぇ圭介ってば」

「……お、おぅ」

「ボッーとしてたけど、もしかしてどっか具合悪いの？」

「いや、なんでもない。朝飯食ってくか？」

「いや、私はもう食べたから。下で待ってるわ」

「おうっ」

アイツは変わらないな……まあいいけどね。
部屋から出て行った伊吹が、階段を降りてていているようである。
あまり重々しくない、むしろ軽々しい足音が室内にまで響いている。
さてと……俺も起きようかな。いつまでも考えながら寝ているわけにはいかない。
学校をサボるわけにはいかないし、休みと皆に心配をかけてしまう。

――――それから、俺らはいつものように3人で登校し、いつものように学校生活を送った。
授業風景は……まあ面倒なので省くとしよう。
どうせ、やっている授業なんてどこの学校と比べても、似たようなものである。
所詮は公立高校である。特殊な授業なんて、おそらく私立高校にでも行かないとないだろう。
……ん、グラウンドで体育をやっている。しかもアレは女子……なに、女子だと！？

「こ……これは……っ！？」

なんと女子が準備体操中だ。なんだこれ……すごく、エロスです。
ああいうのをさり気なく鑑賞できるのは、まさに窓際席の特権。
フフフ……窓際席って幸せだ。クソッ、どうしてラノベの主人公はアレを喜ばないんだ。
普通の男の子なら授業より、あっちの体操中の女子に目がいくだろ？

ブルマーじゃないのが悔やまれるぜ。初芝は日本で最後までブルマーを使っていた学校だが、２００４年を最後にとうとう廃止してしまったんだ。畜生、誰だよブルマー＝変態衣装って決めつけたヤツは！
だが、うちの短パンはジャージ生地で紺色。横に白い線という定番のものまで存在する。
それはそれで中々いいものである。結局、露出度は制服着ているよりも高いのだから。
あの感じは一年生……ていうか、葵がいるじゃないか。
なんだよ……でも妹ながら葵だって女の子。見ているのは正直……たまらんぜっ！

そして、前列にいるのは同じ部活の青山さん。あの位置にいるのは出席番号の関係であろう。
青山さん、制服の時はわからなかったけど……中々美乳ですな。
大きすぎず小さすぎずのバストサイズ。俺好みすぎてグッジョブだ、よくそこまで育った！
あれ？青山さんの隣にいるのは、もしや昨日俺にコインを投げつけてきた……。
……浅間あかり。確かに美少女だが、全くいい印象がないな。
しかも浅間のスタイルは暮葉並に悲惨だぜ。吉備団子がぺったんこではないか！

はたして暮葉とどちらが大きいか、気になる所ではあるな。
いやいや、窓際サイコー！俺は今、超青春を謳歌しているぞぉっ！

「センセー！　藤島が女子の体育に夢中になってまーす！」

「なっ！？　く、黒木てめぇ！？　はっ！？」

気がつくと、主に女子から敵意が込められた視線を向けられている。
伊吹に小坂、そして暮葉までもがジト目であった。先生に至っては額に血管が浮いている。
そう、今は数学の授業。数学教師である野原数馬（のはらかずま）先生は鬼な事で有名である。
しかしやばいね。地雷踏んじまったよ！つーか、もしかして死亡フラグ立っちゃったかな？

「藤島圭介、テメェはまたそれか？」

「野ォォォ原くゥゥゥゥンよォ！　そりゃ誤解だっつってンだろォ？」

「はぁ……つか、本気でムカつくガキだよなぁテメェは。やぁシバきたいわ、滅茶苦茶シバきたいわー」

いかん！野原先生の野原くンモードが発動した。
あの人、たま～に某学園都市小説の木原くン化しちゃうんだよね。
その度に、俺が一方藤島（フジシマレータ）を演じなきゃならないのだ。

「つーかよォ。オマエも男だろォが？　女子の体操見たくらいで怒ってンじゃねェぞ三下ァ？」

「そんなワケで廊下に立たせるわ。このクソガキィ！」

野吉良先生が俺の机に向かって走ってくる。

教師が教室を走るというのも、なんだかシュールな光景である。

だが、俺と野原先生に限っては時々ある光景なんだ。

で、その野原先生は拳を思いっきり振り上げ、俺に突っ込んでくる。

ヘッ、ナニ考えてンだこの馬鹿、さァどう料理して――――

「ぐはぁっ！？」

反射が、効いてねェ……あ、そうか。これって現実（リアル）なんだよね。

そもそも俺、ベクトル変換なんてできないじゃん。木原神拳とか意味ないじゃん。

結局モロに顔面を殴られた俺は、そのまんま野原先生に引きずられ、廊下に放り投げられてしまったのである。なんとも情けない結果……俺ｖｓ野原先生の戦いは、野原先生の圧勝に終わった。

「根元から変態なのですね……っ」

「最っ低……」

最後に聞こえたのは、クラスメイトの笑い声。そして伊吹と暮葉の残念そうな声であった。

あはは。色々な意味で人生オワタ……。

――――結局、数学の時間は殆ど廊下で過ごしてしまった。

畜生黒木め……いつか去年の宿泊の恥ずかしい話をバラしてやる。

そんなわけで昼休み。野原くン事件のせい不機嫌だった伊吹に、「焼きそばパンを買ってくれたら許す」と言われたので、俺は購買で

焼きそばパンを購入していた。
畜生結構痛いぜ……１５０円消えた。校内だとペットボトル１３０円だが、外で買うと１５０円だぜ？
ジュース代が消えてしまった。５月とは言え、関東地方はそれなりに気温が高いのだ。喉乾いた……。

「あっ……ふ、藤島っ」

「あ？」

おや、どこかで聞き覚えのある声だ。
背後から声をかけられた俺は後ろへ振り向く。
そこにはポニーテールが靡く、“風紀委員”の腕章が目立つ、背の高い女の子が立っていた。
ところで、風紀委員をジャッジメントだと思っちゃった俺は、もしかして病気なのかな？

「やっぱりっ、その変態オーラは藤島だ」

「変態オーラで判断するなよ！　つか変態オーラってなんですか！？」

「藤島が自然に発している、いかがわしいオーラの事だろう？」

「明智……あんた一体、俺をどこまで卑猥な人物にすりゃ気が済むの？」

「元から卑猥だろ？」

……ひでえ。明智は相変わらず、俺の扱いが変態の扱いであった。

まあ確かにそうだけどさ、実際に言われると悲しいよ。
よし、もう話題を変更しよう。とりあうずあの後明智家はどうなったんだろう？

「そういえばさ、あの後お前の家どうなったんだ？」

「え？　あぁ、光秀が父に乗り移る前に戻ったぞ」

「そっか。すべて元通りだな」

「うん。これも変態藤島のおかげだぞ」

「……はぁ」

だから何度も言っているが、変態は余計だ！
俺をそこまで変態にしたいんですか！

「……なぁ、藤島っ」

「ん？」

「そ、その……っ、藤島は私以外とキスした事、あるのか？」

頬をほんのり赤く染め、チラチラと視線を逸らしながら、明智はそんな事を聞いてくる。
こ、コイツ……いきなりキスの話題を振ってきやがった。
確かにしたよな。最近色々ありまくって忘れていたけど、俺は明智とキスをしてしまった。
そのおかげで俺は『覚醒』し、光秀撃退には成功したが……。

「え、え～っと……あ、アレが初めてだ」

とりあえず俺は事実を伝える。

そうですよ、アレがファーストキスですよ。ロマンのカケラもないキスである。

「……ふふっ。そう、初めてだったんだ……」

「なんで喜ぶんだよ……はっ！？　お、お前！　俺が今まで経験なかったからって笑ってやがるな！」

「ち、違うぞ！　そそそ、それに藤島にあるとなんて思ってなかったしな！」

「ひっでぇ！　事実だけどひどすぎる！」

いいですよどうせ……俺なんて、キスの経験すらないチェリーボーイですよ。

はぁ……ファーストキスは好きな人にとっておきたかったのに。

……なんて贅沢言っていたら、永遠にできない気もしないでもないけど。

でも、色々な意味で残念すぎるファーストキスだったよ、アレは……。

「心配するなっ。私も……初めてだったから」

「……へ？」

あ、明智さん……それマジで言ってんのでしょう。

明智ほどの美少女が、アレがファーストキス？

マジですか。どうせリア充なんだろって思っていたど、実は非リア充？
しかもキスが初めてって事は、今までそういうヤツがいなかったって事か。

「だからっ、心配するな……藤島の事、絶対笑わない。私も経験なかったら……っ」

マジかよ……ファーストキスを頂いてしまったのか。
それを聞いた瞬間、あの時以上の罪悪感を感じてしまったんだが。
好きでもない人相手にファーストキスって……女の子的には辛くないのか？

「明智……ホントにごめん」

「い、いいんだ！　あれは事故だってわかっている。こんな事聞いた私も私だっ、もう気にするなっ！　お、お相子だお相子！」

「大丈夫か、顔真っ赤だぞ？」

「ふにっ！？　……だ、大丈夫。私は正常だ！」

いや、どう見ても正常には見えないんだが！
明智は普段はクールな子。なのに今は可愛い女の子だぞ？
そんなの、普段の明智なわけがないぜ。

「はわわ！　そ、そうだ。私はこれから風紀委員の仕事が……またな、藤島っ」

「お、おうっ」

妙に駆け足だった。今日の明智はいつもと違い、慌ただしい。
冷静さのれの字すら欠けているように見えるのだ。
何か変わったよなぁ……明智家騒動前はあんな事、なかったのに。
やっぱりキスの事を気にしているんだろうか。って、あたりまえだよな。
大切なファーストキスを、変態と嫌う男に奪われてしまった。そんなの女の子的に面白いハズがない。

やっぱり俺……明智にとんでもなく悪い事、しちまったな。
アイツはお相子って言ってるけど、やっぱりちゃんと謝ったほうがいいかもしれないな。
……さて、そろそろ教室に戻るとしようかな。

「藤島ぁ！」

「げっ、野原くン……」

「さっき女子の下着が盗まれたという報告を受けたが、テメェが犯人かぁ！」

「全然身に覚えがねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？」

……ダメだこりゃ、あと30分は帰れない予感。
――――で、教室に戻って最初に待ち受けていたものは……。

「遅い！」

「いや、すみません！　オバチャン手際が悪いもんで……」

「購買で焼きそばパン買うのに、３０分以上もかかるわけないでしょ！　もう昼休み終わりの時間よ！」

「ホントすみませんでしたぁぁぁっ！」

「そ、そこまで改まらないでよ！　わ、私が悪いみたいじゃん……っ」

……ツッパリ伊吹ちゃんの可愛い可愛い、ありがたいお説教タイムであった。

ああ、野原くンの尋問に比べりゃ、遥かに甘いね。

しかしなんだろう、今日はやたらと不幸だな。午前中だけで一日学校にいたくらい疲れたよ……。

第２５話，波乱の一日　前編（後書き）

後書きトークコーナー

千早「は、初めて……後書きに出ましたっ」

圭介「そうか、青山さんは初めてだな」

千早「あの……なにをすればいいんでしょうか？」

圭介「そうだな、テキトーにふざければいいと思うんだ」

千早「ふ、ふざける……ですか？」

圭介「ああ、例えばな……次回も読まないと見ないと風穴あけるわよ！？」

千早「……」

伊吹「はいはい、ただ痛いだけよ……ばか圭介」

暮葉「けーすけ様！　風穴よりも落とし穴を掘ってみたいのです！」

第２６話，波乱の一日　後編

ふぅ……ようやく帰りのＳＨＲが終わった。
さて、今日は写真部の活動日だったな。
正式な部員としての初の活動だ。と言っても、まだ写真は持っていないが。
一応我が家にカメラは二つあるんだけど、まだ何も撮ってないんだよね。
まあ今日は大した活動はしないだろうし、正直どうでもいいだろう。

「あれ？　圭介と暮葉は部活？」

「はい！　伊吹さんもなのですか？」

「うん、私もこれから剣道部があるから」

伊吹は剣道部最強。今日もきっと、伊吹のせいで部員達の悲鳴が空高く響く事だろう。
頑張れ、強くなるには伊吹を超えようとするしかないぜ。
まあ、出来れば伊吹には最強で居続けて欲しいけどな。
それが、彼女の自信にも繋がる事だから――――

「そっか、まあ頑張れよ」

「け、圭介に言われなくても頑張るわよ。あんたこそ部活中に寝たりしたらダメなんだからね！」

「俺にはキツいっすね伊吹さん！？　流石ツッパリや……」

「ツッパリ言うなばか圭介っ！」

あ～あ、ツッパリ伊吹ちゃん行ってしもうた。
さてと、そろそろ俺達も行こうかな。

「もきゅう、伊吹さん行っちゃいましたね」

「そうだな。俺達もそろそろ行くか」

「はいなのです！」

そんなわけで、向かった先は写真部の部室。部員は俺を含め、僅か４人の弱小部であろう。
まあ、そもそも写真部なので弱小とか関係なさそうなのだが。
部室に入ると、そこには浅間部長と青山さんの姿があった。どうやら先に来ていたらしい。
机には数枚の写真が並べられているが、写真を見ているのは青山さんだけで、浅間部長は写真ではなくエロ同人誌を鑑賞していた。なんというか……部長として論外だ！

「やあ、ようこそ夢の国ネズミーラ――――」

「写真部です……」

「社会の窓部へ」

「部長……いっそ、死んだほうがいいかと思います……っ」

ダメだこの部長。相変わらずこのノリだよ！
絶対この写真部が廃部の危機に陥っていたのって、１割がマイナー

なイメージだとしたら、残りの9割は浅間部長のド変態のせいだよね？
でも浅間部長。そこまでオープン・エロだと……むしろ尊敬するッス！

「こんにちはなのです」

「どうもっす」

俺らも一言挨拶をし、自分の席へとつく。
俺の隣は丁度浅間部長……うわっ、随分ときわどいの読んでるな。
青山さんだってここにいるのに、やっぱりエロ同人誌は自重したほうがいいんじゃね？

「ところで藤島くん！　これを見たまえ……素晴らしいと思わないかい！？」

「アァ……マァ、イインジャナイデスカー？」

浅間部長が見せつけてきたものは、それはもう口では言えないくらいエロい同人誌である。
これはアカンというか、アブノーマルすぎやろ！
なんというか……あまりにもひどすぎる！
もうエロを通り越して気持ち悪いとすら感じる！
流石の鍛えた変態である俺も、これにはドン引きしました……。

「欲しいかい？　今なら３０００円だね」

「そんな高額払ってまで気持ち悪い欲しくないですよ！」

「部長……最低です」

「けーすけ様でもドン引きって……どんな本なのですか」

「ん？　見るかい木下くん！？」

「見ないのですよ！」

「部長……女子にそういうの見せるのって、どうかと思います……っ」

これがまあ、あたりまえの反応であろう。

ていうか俺も付き合いきれなくなってきた。浅間部長、まさかここまで変態だったとは。

……とりあえず、俺も浅間部長に突っ込んどくべきかな？

うん、これ以上は女子が可哀想だ。

「部長、それ完璧セクハラっすよ」

「僕の辞書にセクハラなんて言葉はない！」

な、なんだってーーーーーーーーー！？

しかも何このカッコつけ。眼鏡もないのに眉間に指を当てているぞ？

「よいか。セクハラは性的嫌がらせという意味だ。だけどそれってなんだい？　どこらへんからがセクハラなんだい？　基準点……絶対の基準となる基準点が欲しい。だが現在それがない、言わば定義が曖昧なんだよ！　従って僕の辞書にセクハラなんて言葉はないのだ！」

なななな、なんて無茶苦茶な理論だ！？
そんなのあったら、セクハラが社会問題になったりしねーぞ！？
でもオカシイ。何かがオカシイ気がする！
なんだか、それは浅間部長のワガママによって生まれたトンデモ理論な気がするぞ！

「……やっぱり。部長は写真部の為に退部したほうがいいと思います」

「拙者もそう思うのです……っ」

とうとう女子から退部しろって言われてるし……。
まあ、言われても仕方のない事をしてたけどね。

「そ、そんな！？　僕がいなくなったら写真部はどうなるんだい！？」

「部長さんに代わる、新入部員を入れればいいと思うのですっ！」

「藤島先輩か木下先輩が部長になって……もう一人部員を募集しますっ」

「そこまで僕を追い出したいわけ！？」

「「はい」」

「うわあぁぁぁぁぁっ！　ふ、藤島くんっ！　木下くんと青山くんがセクハラしてくるぅ～～～！」

「浅間部長！　全然セクハラになってねえですから！」

この時、俺は素直にこう思ったのだ。

――――よく今まで廃部にならなかったな。この変態写真部……。

結局これから３０分ほど、全く部活動らしい活動をしないまま、時間だけが経っていき……。

俺はトイレへ行く為、一旦席を外して校内を歩いていた。

はぁ～……俺と暮葉、もしかして入る部活を間違っちゃったのかな？

でも北方ｐｒｏｊｅｃｔのエロ同人誌は手に入ったし、それはすごく嬉しいんだ。

でも男の俺は耐えられるが、女の子の暮葉の精神が持つかな……あんな部活にいて。

「とにかく……なんとかしないと、特に女子は精神的に苦痛だぞ、アレ？」

「あ、あの……藤島先輩っ」

「うおわっ！？　お、おう！」

し、心臓に悪い登場の仕方だったな！まあ、今のは青山さんだったから許すとしよう。

浅間部長だったら……え～っと、一発殴っていたかもしれないね。

ここは男子トイレ前。雑音は聞こえるが、近くにある女子トイレも含めて現在ここには誰もいない。

つまり俺と青山さんは今、二人っきりというわけである。

「あ、あのっ……お邪魔でしたか？」

「いや別に？　今用も済ませた所だしな、手は開いているよ」

思えば青山さんとマンツーマンで話すのは、これが初めてな気がする。
そんな彼女は恥ずかしさから、少しだけ俯きもじもじとしていた。
青山さんは浅間部長にはストレートだが、基本的には控えめな子みたいだ。
もじもじしている理由はそこであろう。
初めて二人きりで話す相手なんだ、恥ずかしくてあたりまえである。

「青山さんはどうしたんだ？」

「あ、わたしも用を……」

「そ、そうかっ」

頬を染めながら女の子が用。
すると確実にアレであろう。それを口にするのは恥ずかしいに決まっている。

「だ、大丈夫です！　もう……お、終わりましたからっ」

「そうか。じゃあ一緒だな」

「は、はい……一緒です……っ」

相当恥ずかしいんだな。なんだか時々会話が途切れ途切れである。
それにしても、どうしてこんな純粋そうな子が、あの変態写真部にいるんだろう？
余程の写真好きじゃないと居れないと思うが……いっそ訊いてみるか。

「そういえば青山さん。青山さんは写真好きなのか？」

「え？　はい……撮影するの好きですよ。将来その……写真家になりたいんです」

「写真家かぁ、いい目標じゃないか」

あの業界は厳しそうだけど、それでも撮る側は楽しいだろうなぁ。

１０００万とか稼ぐ人もいれば、５０万しか年に稼げない人もいるらしい。

そんな厳しい業界でも、楽しんでやれるかもしれない、そんな仕事だろう。

「あ、ありがとうございます……っ」

「もしかして、それで写真部に入ってるの？」

「はい、技術を学びたかったんです……っ」

「なるほど。通りで部長を我慢してまでやってるわけか」

「あはは……流石にもう一ヶ月は経ちますし、そろそろ慣れましたよ……？」

「そっか。まぁ何事も慣れが大切だよな」

青山さんは春から写真部にいるんだもんな。流石にあの部長にも慣れたようだ

でも、俺らが慣れるにはもう少しだけ、時間がかかりそうである。

「藤島先輩は……どうして写真部に入ったのですか？」

「ん？　暮葉が入るって行ったから、一緒に入ったんだよ」

「き、木下先輩……ですか？」

「ああ。暮葉はまだこっちに来てから日も浅いし、知り合いも少なくて不安なんだよ」

「そ、そうだったんですか……でもそれだと写真部、退屈じゃありませんか……？」

退屈か……考えたことないな。しかもそれなりに面白いし。
全く活動らしい活動はしていないが、所謂談笑というヤツが面白かった。
ロクな話をしていない気はするものの、それでも楽しかったと感じている。
つまり、部活を楽しんでいるのと全く同じ事であろう。

「全然？　今日一日の感想、楽しかったよ」

「そうですかぁ……っ」

青山さんはホッとしたように、安堵の表情を浮かべた。
こうして安心してくれると、俺としてもホッとするな。

「……藤島先輩っ、やっぱり優しい人ですね」

「え？」

「わたし、知ってます……先輩がどうして悪く言われているのか。
そうなってしまった原因をっ」

「あ、青山さん……？」

知っているって……やっぱりアレか、中学の時のアレなのか。
そういえば彼女、昨日も不思議な事を言っていたような気がするな。

“わ、わたしも……事情知ってるからっ、先輩はそんな……悪人じゃないからっ”

アレは俺の聞き間違いではないハズだ。
確かに青山さんはそう言っていたハズである。
という事は、青山さんはやっぱり事情を知っている。

「……」

「っ……？　はわわっ！　ご、ごめんなさい……っ。先輩にとっては思い出したくもない話……ですよね」

「いや、別にいいんだけど。それより何で、俺が暴力魔だと害虫だのって言われる理由を知ってるんだ？」

「中学の時に友達から聞きました……」

友達って葵かな。まあ確実に葵だろう。
あの事件の真相を知っているのは、俺と犠牲者の他には葵と小坂しかいないんだ。
他は誰も信じず、結果的に俺は中学時代の大半を、半ば孤独状態で

過ごしたのだ。
今でさえ俺の嘘の悪名が消える事もなく、浅間あかりのように俺から友達を守る為、俺との関係を引き裂こうとする人までいる。
そんな事になってしまうくらいの事を、この手でやってしまったんだ……。
しかも、結局犠牲者を満足に守る事はできなかった。ホントに……
俺は弱い。

「そ、そうか……」

「はわわっ！　ご、ごめんなさい……先輩っ！」

「いや、青山さんが謝る必要はないよ」

こうなってしまったのも、すべて俺が弱かったから……。
あの野郎の手から、犠牲者となったアイツを守る事ができなかったから……。
正義のヒーローになるって約束していたのに、最低だよ……俺は。

「せ、先輩……っ？」

と、いけないいけない。女子の前で弱い姿を見せるわけにはいかないな。
いい加減前を見ようか。もうアレは終わったんだし、今更後悔する必要もない。
多分、犠牲者もあの時の事はもう、あまり気にしてはいないハズである。

「よし、そろそろ戻ろうか！」

「……は、はいっ」

だから、俺ももう気にしないでおこう。

第２６話，波乱の一日　後編　（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「野ォォォ原くゥゥゥゥゥゥン！　オレは写真部にも入ったし、これで立派な学生だァ！　もう帰宅部なンて弱い生物じゃねェンだよォ！　あぎゃはははっ！」

野原「テメェ……何言ってるかわかってんのかぁ、アァン？　部活に入ったくらいで調子に乗ってると……潰すぞゴルァッ！？」

圭介「ぐわはぁっ！　す、すいません先生！　台本に書いてあ――――」

野原「台本に書いてあるからってよぉ、何言ってもいいと思ってんのかぁ！？　ちなみになぁ……俺は校長職狙ってんだよ、どうだコノヤロォッ！」

圭介「ち、ちなみにですね。写真部には暮葉も入ってて――――」

野原「暮葉ちゃんは可愛いからいいんだよぉっ！」

千早「わ、わたしも……春に写真部に入りましたよ」

野原「良かったじゃん！」

大吾「……僕、こういうのどっかで見たことあるんだけど？」

暮葉「けーすけ様！　台本より大根のほうがおいしいのですよ！」

第27話，お客様ｖｓ店員大抗争？

写真部の活動……と言っても、殆ど談笑であった。
だがそれも終わり、俺と暮葉は丁度玄関で靴を履き替えていた。
今日も暮葉と二人で帰り――――と思いきや。

「あ、暮葉と圭くん」

「もきゅ？　亜紀さん？」

「あれ、どうしたんだよ？」

突然、小坂がこちらに駆け付けてきたのだ。
確か小坂は頼りないながらもクラス委員、それの関係で仕事があったのだろうか？
小坂は帰宅部だし、そうでなければ説明がつかない。
なんにしても、もし仕事だとしたらそれは珍しい事だ。
だって、小坂は面倒くさがり屋の若干ニート予備軍だからだ。クラス委員をやっているのが奇跡と言っても、多分過言ではないだろう。

「フフフ。圭くんや、ちょろっと暮葉を借りるよ」

「もきゅーっ!?　せ、拙者をですか!?」

「このアホを一体何に使うんだ？」

「あたしの友達に是非暮葉を紹介したいんだよ。というわけだからヨロシク～」

「もきゅーっ！　け、けーすけ様！　脱出不可能なのですよ～！」

あ～あ、暮葉が小坂につれてかれてしまった。

……まあいいか、サヴィエトの魔法使いさんが襲ってくる気配もないし。

俺としても暮葉には、もっとプライベートな時間を与えてあげたい。

「大丈夫だって、ちゃんと一人で帰れるから。友情育んでこいよ」

「な、なのですけどっ！」

「もっとプライベートを大切にするんだぞ！」

「け、けーすけ様ぁ～っ！」

こうして暮葉は完全に連れていかれたのである。

多分、その小坂の友達の所に連れて行かれたのだろう。

いいじゃねえか、もしかすると友達が増えるんだしさ。

はぁ……なんだか、暮葉のほうが後から入ったのに、友達の数では暮葉に追い抜かれそうだな。

さてと、そろそろ俺は帰ろうかな。

……思えば初めてな気がするな。暮葉が来てから一人で下校をするのは。

気がつけば暮葉はいつも隣にいた。隣で満面の笑みを浮かべてくれた。

それがここ数日で、あたりまえのものになりつつあった。

久々に暮葉がいないと、ある意味で新鮮に感じるな。そして、少し寂しくも感じる。

アイツってこんなに影響力のあるヤツだったのか……。

そんな想いを抱きながら、俺は学校を出て一人夕暮れの住宅街を歩いていた。
……腹減ったなぁ。どっかでおやつでも買おうかな。
よし、そうと決まればどこかの店まで行ってみよう。

――――そんなわけでやってきたのは、幹線道路沿いにあるマックである。
うわぁ……丁度部活帰りの学生で溢れている。
これはちょっと、ハンバーガーを買うのに時間がかかるかもしれないな。

「いらっしゃいませ～！」

店員さんが営業スマイルを浮かべ、お決まりのセリフを言ってくる。
ちょっと待つかなとは思ったのだが、実際そうでもなかったみたいだ。
席がないだけだな。まあハンバーガーは歩きながら食えるし、店で食べる必要性は皆無だ。

「ご注文はいかっ……」

「あ？」

……ちょっと待て、この小柄な店員さんはもしや？

「ご、ご注文はいかがいたしましょう！？」

間違いない。この小柄な体躯に橙色のツインテール。

やべえ……コイツは浅間あかりだ。なんでこのコイン女がこんな所に？
まさか、ここでバイトをしているんじゃ……？
まずいぞ、ハンバーガーに何をし込まれるかわかったもんじゃない。

「ご、ご注文は……っ」

いかんいかん！いくら浅間っつってもバイトはバイト。
邪魔をするわけにはいかないぜ。とりあえず注文しないと。

「じゃあ……ダブルチーズバーガーとポテトSを」

「ダブルチーズバーガーお一つと、ポテトSお一つでよろしいですね？」

「はい……」

なんか嫌な予感しかしない……だって浅間の顔、妙に引き攣ってるもん。
それに敬語が棒読みだ。絶対これは何か企んでいるパターンだぞ。
とにかく、浅間の行動に要注意である。

「スイートコーン一つ！」

「は、はぁっ！？」

おいおいおいおいおいおいオイィィィッ！
今コイツなんて言った。絶対スイートコーンって言ったよな？
チーズバーガーとポテトSは何処に消えたんだ！？

「お客様」

「は、はい」

「他のお客様の迷惑、邪魔ですのでさっさとあちらに行きやがってください」

しかもまだ敬語ではあるものの、いきなり態度が悪くなった！

つーかなんですか、このザマァみろと言わんばかりの笑顔！？

こんのチビ助ぇ～、完璧にお客様をナメてらっしゃるな。

いいだろう上等だ。大切なお客様をお粗末に扱うとどういう目に遭うか……。

社会の厳しさを徹底的に叩きこんでやらぁっ！

「失礼、俺はダブルチーズバーガーとポテトSを頼んだハズですが？」

「え？　お客様は確かにスイートコーンと言っておられましたよ」

「いやいやいやっ！　嘘つきは泥棒の始まりっすよ！？　俺は確かにダブルチーズバーガーとポテトSを頼みましたって！」

「お客様。そろそろ移動してください。他のお客様の邪魔になります」

ぐぅあぁあぁぁ～！

これは正直かなりムカつくぅ。この客を客とも思っていないふざけた態度。

いくら個人的に嫌いな人がお客様だからって、この扱いは流石にないだろ！

ていうか、フツーに苦情言ってもいいレベルだぞ。
畜生……正義は必ず勝つ。意地でもダブルチーズバーガーとポテトSを手に入れてやる！

「ふざけんなっ！　元はと言えば貴女が注文と違うもの言っちゃうのがいけな――――

「オイてめぇ早くどけよ！　迷惑なんだよコラッ！？」

「げっ……」

やべえ、俺の後ろに立っているリーゼントヤンキーさんの怒りが……。
ていうか、やっぱりこれって俺が悪人なの？
いやいや、俺は何も悪いことをしていない。むしろ悪いのはこのキュートな店員さんじゃ！

「てめぇ話聞いてんのかよ、表出るか？　アァッ！？」

どうしよう。この小悪魔の成り損ないのせいで……。
ヤバいルートに突入した気がするぞ！？
畜生、ニコニコ笑いやがって。こっちは全然笑えないぞ？
食べ物は全然出てこないし、ヤンキーさんには絡まれるし、もう色々と最悪じゃ！
とにかく、ここは最善の選択肢を選択するしかない。今の俺とって最善とは……。

「ス　ミ　マ　セ　ン　デ　シ　タ　ネ　ェ　！」

爽やかな笑顔を浮かべつつ、怒りを込めたその一言。

浅間あかりとヤンキーさんに、その一言を打ち込むように言ってやった。
そして俺は、明らかに不機嫌を装って店から出て行ったのである。
……まあ、実際かなり不機嫌であったが。

――――結局、俺はあの後コンビニでおやつを買い、テキトーにそこらの公園でおやつを食べていた。
畜生、あのマック二度といかないぞ。マックに行くにしても別なマックに行ってやる。
初めて会った時は怒ってなかったけど、今はホントに怒ってるぞ。
いくら俺とは言え、あれが客に取る態度ですか。もう本気で嫌だぞアイツは。

「んみゃ？　そこにいるのは……変態暴力魔の藤島圭介！」

げっ……この聞きたくもない暴言のオンパレード。
間違いない、浅間あかり……バイト終えやがったのか。

「はぁ……散々人の事ナメといて、今度は何の用だよ？」

「せ、成敗の続きだ、察しろよな！」

「またそれかよ……もういいだろ？　さっきので参りましたよ」

「だ、ダメだ！　あたいはまだあんたを認めた覚えはないんだからな！」

なんて面倒くさい子なんだ……。
泣きまくる赤ちゃんよりも遥かに面倒かもしれない。

友達想いもここまで来ると重傷だぜ。

「認めるも認めないも、俺はお前の思っているようなヤツじゃない。アレには深い事情（ワケ）があったんだよ」

「し、信じられるかそんなもんっ！　本人の口ほど怪しいものはないんだからな！」

「じゃあもう信じなくていいから、頼むからもう俺に関わらないでくれよ」

「あ、あんたがあたいの友達に暴行しないって、しっかりきっちり約束したらな！」

「約束する。つか、あたりまえだろ……」

なんで葵や青山さんを暴行しなきゃいけないんだよ。
その時点でもう、ありえない事であろう。
いつから俺は、女子にまで問答無用で暴力を振るう、最低下衆野郎って事にされているんだろうか。
女の子大好きな俺だぜ。殺されそうとかそんなわけでもないのに、どうして暴力なんて。
つーか、基本男にも振るいませんよ。問答無用なんて、それだと不良の中の最低男じゃねえか。

「ほ、ホントだな？　もし破ったらびりびり～のばりばり～のべっちゃんべっちゃんだからな！」

「へいへい……」

例えがよくわからない。まあ、とりあえず恐ろしい目に遭うって解釈すればいいのか？

……それにしても。そこで俺と遭遇してからず～っと、顔が赤い気がする。

それは果たして気のせいなのか？

どう見ても気のせいには見えないが……多分、突っ込んだら負けであろう。

「そ、それじゃあ帰るからな。後ろから不意打ちするなよ暴力魔！」

「するわけねぇだろ……」

もう最初っから最後まで呆れっぱなしである。

ようやく彼女は後ろを向き、公園から去ろうとした。

浅間あかり。二度と会話をしたくない人物ベスト１０に入るヤツだったぜ。

「……あっ」

あれ？

今、浅間のヤツがよろめいた気がする。

一応浅間もか弱い女の子の部類だ。心配くらいはしたほういいかな。

「おい、大丈夫か？」

「う、うっさい！　あたいは元気だ！」

元気かぁ。まあそれくらい元気があれば、確かに問題はなさそ――

――

……と思った、まさにその時であった。

「あっ……」

一瞬、彼女はバランスを崩したように前へと傾く。
一歩二歩と、足を踏み、三歩目くらいまでは頑張って歩き続ける。
だが、四歩目で彼女は完全にバランスを崩し、奇妙な音を立てた時には既に倒れていた。

「あ、浅間……？」

呼吸が荒いし、顔色もよくよく見ると悪い気がする。
倒れた彼女の額に手を触れてみると、熱い……。
平熱とは思えない熱を、掌に感じたのである。
まずいぞ、コイツ熱まである。ていうか、完全に力尽きたように伸びている。

「……っ！」

ああもう、考えるのが面倒だ。確かに、コイツは散々な事をしてくれた。
でも、だからと言って弱っている人を放ってはおけない。
とりあえずなんとかしねえとな……！

第27話，お客様ｖｓ店員大抗争？（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「ぶっちゃけ暮葉って魔法少女じゃないよね」

暮葉「もきゅ？　な、なんでなのですか！？」

圭介「いや、魔法使わねえじゃん」

暮葉「し、失敬な！？　使う場面がないだけなのですよ！」

圭介「まあ、確かに使われたら近隣住民に迷惑だしな。お前の暴走突風魔法は」

暮葉「ししし、失敬な！？　拙者はちゃんと魔法を使えるのですよ！」

圭介「ほぉ、あの暴風以外にも？」

暮葉「もきゅ！　と、当然なのです！」

圭介「でも、展開的にしばらく魔法使う場面はねえと思うぞ」

暮葉「ひどい！　ひどいのですよけーすけ様！」

圭介「書いてるの俺じゃねえし、苦情は作者まで」

伊吹「ついでに圭介に対する苦情も送っていいわよ」

凪紗「そうだな。藤島は色々な意味で反省したほうがいい」

圭介「お前らひどすぎやろっ！」

第２８話，アンタお兄ちゃんキャラだったの！？

俺のすぐ傍に、女の子がいるんだ。
先程まであまる元気を全て俺にぶつけていた、そんな元気な女の子。
だけど……その子は息を荒くし、弱々しくその場に倒れ込んでいた。
額を触るとすごい熱を感じる。３８度……いや、３９度あるかもしれない。
とにかくこのままではまずい。早くなんとかしないと浅間が危険だ。

……とはいうものの、高校生が保険証なんていつも持ち歩いているわけがない。
だから病院なんて連れていけない。じゃあ自宅？
ダメだ。コイツの自宅を俺が知っているわけがない。
クソッ、どうする。俺の家に連れ込む……わけにはいかないよな。
コイツは俺の事を一番嫌っているんだ。葵や暮葉が居た所で、俺がその後攻撃を受けるのは明白だろう。畜生、助けようがねえじゃないか！

「おや、そこにいるのは藤島くんではないか？」

俺が絶望していた、丁度その時。
金髪のイケメンフェイスだが、中身は真性の変態である残念なイケメン。
写真部の部長を務める浅間部長が声をかけてきたのだ。
制服姿にあの鞄。おそらく学校帰りであろう。
……そうだ、浅間部長に協力してもらおう！

「部長！　丁度いい所に来てくれましたね！」

「おや、どうしたんだい？」

「手伝ってください。人が倒れたんです！」

「な、なんだって！？　って……あ、あかり！？」

「……え？」

その時浅間部長は馴れ馴れしく、自然な感じで彼女の下の名前を叫んだ。

……これは一体？

――――それから数十分後、俺は浅間部長にどう見ても昭和中頃に建てられた、超オンボロ一軒家へと連れてこられた。２階建ての狭い一軒家。

木造ではないにしろ至る所が変色していたり、所々にヒビが入っている。

相当の年代物であろう。風が吹きつける度に窓ガラスもガタガタと音を立てていた。

一応狭い駐車スペースもあり、そこには一台の乗用車もあった。

……アレ、古い型のブルーバードだな。まだ走ってたんだなあんなの……。

そして、中に入るとそれはそれは質素。地デジ化間近だというのにテレビはアナログ式のブラウン管。

テーブルではなくちゃぶ台で、座布団すらなく、誰かの仕事用机が居間には存在していた。

本当……なんというか、必要最低限のものしかない上に、どれもこ

れも年代物だ。

「ふぅ……お茶くらいしかないけど、礼儀だから出すよ」

「ありがとうございます。あの……あいつは？」

「あかりなら、部屋まで運んだよ。今日は元々風邪気味だったんだけど、その上過労だね……」

「そうですか……」

浅間部長はまるでお兄さんのようであった。

いつもはただの残念なイケメン。しかし、今だけはごく普通のお兄さんである。

……ていうか、もう名字から想像がつきました。

「浅間部長。あの、もしかして……」

「ん？　あぁ、ボクはあかりの兄だよ」

「やっぱりっすか……」

ンなこったろうと思いましたよ。最初から怪しかったもんなぁ、浅間って名字が。

それにしても浅間のヤツ、どうしてぶっ倒れるまでバイトをしていたんだ？

どう考えても、高校生があそこまでバイトをする必要って……。

「ところで、君はあかりとどういう関係なんだい？」

「どういう関係と言われると、まぁ……一方的に恨まれている感じ？」

「恨まれている？」

「誤解があったんですよ……」

それも、解ける可能性が限りなく低い誤解がな。

「そうなんだ。それで君はこれからどうするんだい？」

「どうするって、どういう事ですか？」

「気になるだろう？　どうしてあかりが倒れるまで働いていたのか」

「まあ、そりゃ確かに……」

滅茶苦茶気になるな。こんな女の子がどうして倒れるまで労働をしていたのか。

どうして、風邪をひいているのに無理をしていたのか。

……なんでだろう。出来ればもう関わりたくないヤツだったのに、なんでそんなに気になるんだ？

「知りたいならば覚悟するんだな。それとも、このまま立ち去って一般人に戻るかい？」

「……部長、厨二展開になってません？」

「フッ。一度言ってみたかっただけさ……！」

なにカッコつけてるんですか、このおバカな真性変態部長は。
変態の上に高三の癖に厨二病とは……全く救いようのない男である。
だけど……そんな部長の口からだとしても。

「それで、実際どうなんだい？」

「……教えてください、お願いします！」

事情は知っておきたいな。
一応浅間も葵の友達だ。俺は恨まれているし出来れば関わりたくもないが、だからと言って弱っている人を放っておけるほど、俺も残酷じゃないんだ。

――――浅間家は親子５人のごく普通の家庭であった。
少し貧乏であり、ご覧のように家もボロボロではあったが、安定した収入もあって休日には一家で出かけるという、そんな仲良しな家族が存在していたらしい。
しかし、ある日父親が出張中事故に巻き込まれたらしい。首都高でルーレット族に追突されたようで大破炎上。父親がその笑顔を見せることは永遠になかった。こうして浅間家は安定した収入を失った。

まだ中学生だったあかりと下の弟の為、母と浅間部長が全力で働くが、それでなんとか暮らせる程度だったという。だが先日、母が病気で倒れてしまい入院。治療費はなんとかなるものの、子供３人で過ごすにはどうも収入が足りない。そこで部長の妹である、あの浅間あかりが週６でバイトを始め、兄である浅間部長よりも熱心に仕事をし始めたのだという。

当然浅間部長はそれに反対だったが、何せ兄嫌いな妹は言う事を聞かないんだとか。つーか浅間部長、やっぱり嫌われていたんだな。

それでも所詮は高校生のバイトが2人。3人で暮らすには厳しい稼ぎであった。

増してやアイツは母が不在の中、浅間家の家事を全部一人でやっていたらしい。

その上、毎日母の所にお見舞いに行っていたんだとか。

そして本日は彼女も風邪気味であった。にも拘わらず彼女は無理をしていた。

限界ギリギリの貧乏生活。病気の母への心配。学校もあるのに週6というバイト。

風邪をひいていても無理をしている彼女……。

アイツ、意外と家族想いだったんだな。

いや、友達想いでもあるし、そこに俺が含まれていないだけで本当に他人想いなのかもしれない。

その他人想いな彼女だからこそ、自分に鞭を強く打ち過ぎてしまったのか……。

「全然……そんな風には見えないのに……」

「当然、人間には表の顔と裏の顔があるからね。ボクのように素で通っている人間は希少価値だろうさ」

……部長は生粋の変態だからな。

部室で女子が見ている中、フツーにエロ同人誌をニヤニヤしながら読む程の男である。

どんな人間も基本的に性欲には素直らしい。アレが素じゃなかったら少し疑うぜ？

「あかりは無理をし過ぎだ……確かに、ボクの稼ぎだけじゃ足りないかもしれない。それでもあかりはやり過ぎなんだ。それでも本人はボクの話なんて聞くハズもないし、だからボクは様子を見ている事しかできなかった。その結果がこれだね……」

「部長……」

アンタ、本当に真性の変態じゃなければいい兄貴だよ。
ちゃんと妹の事考えてるんじゃねえか。
俺なんて特に何もしていない、むしろ妹に迷惑をかけているのに……部長、俺なんかよりもずっとお兄ちゃんやってるじゃねえか。

「さて、ボクは風邪薬を買ってくる。藤島くんはそろそろ帰らなくてもいいのかい？」

「薬って……金は？」

「ボクのへそくりを使うさ。流石に薬代をケチれはしないよ」

「でも部長がいない間はアイツ、一人じゃ？　そういえば弟さんは？」

「ああ、弟は最近グレちゃってね。下手すると一日帰ってこない事があるから」

「……」

兄貴は真性の変態で、妹は他人想い過ぎて暴走しがちで、弟は滅茶苦茶グレたヤンキーさんって……。

浅間家に真人間はいないんですか！？
でも弟が帰ってこないとすれば、本当にアイツは一人だな。
流石に病人を一人にするのはまずいんじゃないか？

……って、何考えてるんだよ俺は……。
アイツだろ。もう関わりたくないって思ったヤツだろ？
それなのに……なんだってこんなに放っておけないって思っちまうんだよ。
……クソッ、仕方ねえなぁ。救いの手を差し伸べるのは今回だけだからな。

「部長！　俺、部長が帰ってくるまでここにいます」

「藤島君？　君にも家族がいるだろう？」

「大丈夫です。少しズレた人達なので遅くなるって言えば、絶対納得してくれます！」

「君はあかりに一方的に恨まれているんだろう？　それなのにそこまでするって……」

確かに、そんな状態なのにここまでするのは馬鹿げている。
そんなの自分でもわかっている。だけど、どうしても弱っているヤツを放ってはおけない。
たとえそれが、あんなヤツでもだ。

「お願いします部長。じゃないともしアイツに何かあったら、兄貴の部長はどうするんですか？」

「そ、それを言われると……う～ん……」

浅間部長は相当思い悩んだ末、遂に。

「……わかった。藤島くんなら任せても大丈夫だろう」

「任せても大丈夫って……なんでそんなのわかるんですか？」

「当然だ！　ボクより変態じゃない君が危険なわけがない！」

判断基準がすげえアバウト……。

いや、確かに何もする気はないが……。

ていうか、犯罪行為にだけは手を染めたくないので何もしません。

「あ、ありがとうございます……」

「うむ、それじゃあ出来るだけ早く帰ってくるけど、あかりの看病は頼んだ」

「はい！」

「では、ボクは行ってくる」

浅間部長は鍵を取り、そのまんま玄関へと向かった。

やがて扉が開け閉めされる音が響く。どうやら浅間部長は本当に外に出たようである。

……さて、俺も仕事をしないとな。

まったく、出来ればもう関わりたくなかったけど、今回はサービス残業だからな。

第２８話，アンタお兄ちゃんキャラだったの！？（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「今回は重大報告があるんだぜ？」

伊吹「何よ」

圭介「実は……キャラが増えたので、そろそろキャラ設定を載せようと思ったんだ」

伊吹「それって……私らのプロフィールよね？　プライバシーの侵害じゃないの？」

野原「テメェらはクズの集まりだ。クズにプライバシーなんざねぇ。テメェらみたいなキャラの補充なんざいくらでもきく。大事な大事な企画を邪魔ァすんならぶっ殺しちまっても構わねえんだよ。分かるかなぁ。お前、今、一度死んだぞ？　確認するぞ、分かってんのかぁ？」

圭介「野ォォォ原くゥゥゥゥゥン！　そりゃ言い過ぎだろォがよォ！　オマエはキャラの重要性を全く理解していねェ。こういう系の話はキャラがいねェと話が成り立たねェだろォが。どンなモブだってちゃンとした意味を持ってンだよ！　それほど大切なキャラをいくらでも補充の効くクズ扱いしてンじゃねェぞ――――」

野原「ハハッ！　無駄だぁ、テメェ一人くらい相手にすんのは簡単なんだよ」

圭介「チッ、ナメてンじゃねェぞ。三下がァッ！」

大吾「な、なんか今の圭介。僕らの為に戦っているように見えるぞ！？」

重原「相変わらず野原先生と会話する時だけ、口調が変だけどね」

暮葉「けーすけ様！　それより今日の晩御飯はなんですか！？」

第２９話，漢（オトコ）の決意

浅間先輩が薬を買いに外出した後、俺は2階の浅間の部屋へと移動した。
ベッドなんて豪華なものがあるわけがない。当然彼女は布団で寝ている。

「人の寝顔って素直な表情になるもんどすなぁ……」

寝ている浅間の表情は、苦しそうではあるがとても女の子的だ。
ていうか息が荒いな。本当に大丈夫なんだろうか？
俺は浅間の額に掌を乗っける。やっぱり熱が高いように感じる。
顔色もあまりよろしくはない。ったく……どんだけ無理していたんだよ。
生活が苦しいのはわかっている。ロクでもない兄弟ばかりでも、それでも家庭を支えたいという気持ちもわかる。だけど本人が潰れてしまったら何の意味もないのに……。

「あ、そうだ。暮葉か葵に電話しとかないと」

今日は浅間の看病で遅くなるかもしれない。
だから、あらかじめ暮葉か葵には連絡しておいたほうがいいだろう。
得に暮葉は俺がいないと、仕事上まずい所があるかもしれない。
……そうだな、この場合は両方にメールでもしておこう。

俺は、『今日は私用により遅くなる。晩飯はあるとうれしいぜ』とメールを打ち、それを二人に送信した。……って早ッ！もう葵から返信が来たぞ。
何々、『りょうかい！　早く帰ってきてね』か……ああ、なるべく

早く帰るよ。
葵に遅れる事1分、暮葉からも『了解なのです。念の為に、サヴィエトの魔法使いに気を付けるのですよ？』というメールが返ってきた。

「サヴィエトねぇ……」

すっかり忘れていたよ。俺って一応身柄を狙われているんだよな。
でもサヴィエトの連中は、俺の居場所を完全には突き止めていないらしいのだ。
だからだろう。こうして比較的平穏な日常を送っていられるのも。
……もし見つかったらどうなるんだろう？
まぁ、見つからない事を祈って生活するしかねえよな。

「……あ、あんた……？」

ん……今、下から声がしたような……？
ていうか、この部屋にいるのは俺と浅間だけだ。
という事は、今の声は間違いなく浅間であろう。

「よっ、目が覚めたのか？」

「んみゃ、ここあたいの部屋……えっ！？　な、なんであんたがあたいの部屋に！？　襲う気なのかこの変態！？」

「誰が襲うか！　公園で倒れたのはどこの誰だよ……」

「た、倒れた？　あたいが？」

「ああ。つーかお前、風邪ひいてるんだろ？　熱もあったし大丈夫

なのか？」

俺がそう問う相手、浅間の顔は若干赤い。
触ると熱かったし、やっぱりまだ熱が高いのだろう。
ていうか熱が下がるハズもないか。ただ一時的に寝ていただけなのだから。

「あ、あたいは平気だ。それよりなんであんたがここにいる？　なんであんたがあたいの家を知っている？　ストーカーか！？」

「ストーカーじゃねえよ。お前の兄貴、俺の部活の部長なんだけどさ、部長に案内してもらったんだよ」

「んみゃ……アイツが……？」

なんてひどい妹……兄貴の事をアイツ呼ばわりだぜ？
どうやら、浅間は現実（リアル）世界の妹タイプのようである。
これに比べたら……ブラコンな俺の妹は可愛いほうだな。

「お前なぁ。ちったぁ自分の兄貴に感謝しやがれ。お前の兄貴がいなかったら、今頃お前は公園で死んでたかもしれねぇんだぞ？」

「……って、なっ……なんであんたがいるんだよ？」

「覚えてねえのかよ。俺はお前と最初っから一緒にいたろ？　保険証がないから病院に連れていくわけにもいかねえし、俺の家なんて絶対に嫌だろ？」

「あ、あたりまえだ！　変態の家なんか――――」

「でも、俺の家って事は葵の家。つまりお前の友達って事になるんだぞ？」

「っ……あ、あんたがいなかったら……行くっ」

よっぽど俺の事が嫌いなんですな、コイツは……。

まあ、それは仕方がないとしよう。どう足掻いたって誤解が解けるわけがない。

何も起こらないようにする為には、俺が大人しくするしかないんだ。

だから出来ればコイツとは、あんまり関わりたくなかったのに……

全く、本当に今回だけだぞ。

「とにかく、少しは兄貴に感謝しやがれ」

「……あんたは。あんたは……なにやったんだよ？」

「俺？　お前をここまで運んだたけだ」

「あ、兄貴は……？」

「お前の為に薬を買いに行った」

「って、あんたは今何を……？」

「病人一人にできるかよ……弟はグレてるみたいで家にいねえし。

だから看病してたんだよ」

俺は物凄く投げやりにそう説明した。

彼女は俯いている。それは嫌がっているのか、はたまた恥ずかしさなのはか不明だ。

ただ彼女は俯き、決して俺にあどけない顔を見せようとはしなかった。

「……弟がグレてる？　なんで、あたいの家の事を……？」

「部長から聞いたんだよ、全部」

「ぜ、全部……っ？」

「ああ。かなり無理してたんだろ？」

「無理なんかしてないっ。それにあたいが働かなかったら生活費が……お母さんの治療費がっ」

おいおい、話がおかしいぞ。浅間部長は確か治療費は大丈夫って言っていた気が……。

どういう事だよ、こりゃ聞くしかねえぞ。

「ちょっと待て。治療費はなんとかなるって……」

「……あんた、ほんとに全部聞いたんだなっ」

「ああ。部長が全部話してくれたから」

正直、申し訳ないとは思っている。

だけど、人の為に一人で無理をするヤツなんて……俺は放っておけなかった。

それに個人的には好きじゃなくても、コイツは葵や青山さんの友達だ。

だからこそ放ってはおけないんだ……余計に。

「……余計な事をっ」

「ごめん。でもそのおかげで見直したよ」

「み、見直したって？　どういう意味だよ？」

「ただの嫌な女だと思っていたけど、誰よりも他人想いで優しいヤツだったって所だよ」

「へ、変態暴力魔に言われても別に……嬉しくもなんともないっ」

「言われなくてもわかってるよ」

だけど、浅間がいい子だって思ったのは事実だ。
確かに俺の扱いはひどいが、無理して倒れてまでその行動をやめようとはしない。
そこまで人の為に強い意志を持っている。本当にコイツは優しいヤツだ。
だからこそ俺は言ってやりたい――――

「倒れてまで無茶をするくらい優しいってのはわかった。だからもう無理はするな」

「なっ……い、言ってる事が滅茶苦茶だろ！　兄貴は部活もあるし圭太はグレちゃってるし……あたいが無理しなかったら誰が生活費を稼ぐんだよ！　誰がお母さんの治療費を稼ぐんだよ！？」

やっぱり……コイツは今ハッキリと、お母さんの治療費って言ったぞ。

何かがおかしい。浅間部長は確かに母親の治療費はあると言っていた。
つまり、どっちかが嘘って事なんだよな。一体どっちが嘘だってんだよ。

「なぁ……母さんの治療費って……？」

「兄貴は誤魔化してるけど、あたいは知ってんだよ！　本当は全然足りない。あたいが働かなきゃ、手術をするお金がないんだから！」

「ほ、ホントなのか？　それ」

「嘘なんて言わないっ。お母さんは一回手術すれば治るのに……でも、お金が足りないんだよ！」

「……」

俺は浅間の叫びに、思わず絶句してしまった。
浅間部長の言葉は嘘だってのかよ……じゃあ、全然お金なんて足りてねえじゃないか。
……って、浅間部長を悪く言っちゃいけないよな。
浅間部長は浅間に無理をして欲しくなかった。だからこんな嘘をついたのかもしれない。
それに浅間が気付いてしまったんだ。だから彼女はこんな無理をしたのだろう。

……けど、浅間は今がこの状態だ。これ以上無理をさせるわけにはいかねえ。
これ以上は浅間部長の為にも。葵や青山さんが心配しない為にも……。

絶対に、浅間に無理をさせるわけにはいかない……！

「……おい浅間」

「んみゃ？」

俺が静かに名前を呼ぶと、いかにも不安そうな表情をした彼女が顔を向ける。

「あと……何円だよ？」

「な、なにがだよ？」

「あと何円か聞いてるんだよ。手術に必要なお金は？」

「……１０万。頑張って溜めたけど、１０万円足りないんだよ……っ」

「１０万か……」

学生からしてみればすごい金額だ。でも、世間からしてみればそんな金額できないのだろう。

それに学生二人のバイトじゃ、月収は１０万に及ぶかすら微妙なレベル。

増してや3人生活しなけりゃいけないんだ。そんなのすぐに溜まるわけがない。

こうしている間にも、コイツの母さんの容体が悪化するかもしれない……。

とにかく残り１０万円か……へっ、なんだよ。予想より難易度が低

くて助かった。
２００万とか３００万なら引いていただろう。でも、１０万くらいなら……ッ！

「わかった。お前はしばらく休んでいろ、金は絶対なんとかする」

「なんとかするって……あ、あんた！　何する気だよ！　やめろよな！？」

「不正な真似は絶対しねえ。だけど１０万円は絶対用意するって約束するよ」

「あ、あんた！　何をっ！？」

その時、微かに扉が開く音が耳に入る。
きっと、浅間部長が薬局から帰ってきたのだろう。
丁度いい、このまま家を出て今から資金を用意し始めよう。

「じゃ、俺はそろそろ帰るな。無理はしないで休んでろ、絶対に１０万円はなんとかするから」

「あ、あんた……っ」

「じゃ、皆を大切にするのもいいけど、その前に自分を大事にしろよ！」

俺は出来るだけ笑顔を作り、そう言い残して部屋を立ち去った。
……さて、こっから先は少しばかり本気にならねえとな。
ぶっちゃけ、１０万円なんてどうやって手に入れればいいんだ？
バイトしたって最低２ヶ月はかかる。でも出来れば一週間以内に手

に入れたい。

……まあ、頑張るしかねえよな！

第２９話，漢（オトコ）の決意（後書き）

どうも、作戦参謀です！
今回からキャラ設定的なものを乗せていきたいと思います！

伊吹「キャラ設定にまでパロディあるわよ……」

Ｎｏ１
藤島圭介（ふじしまけいすけ）
イメージＣＶ：間島淳司（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『とらドラ』高須竜児役
『これはゾンビですか』相川歩役

県立初芝高等学校２年４組在籍
ジョブ：馬鹿でオタクだけどたま～に頼れる、自称『紳士』の変態主人公
性別：男性
年齢：連載開始時点で１６歳
誕生日：８月２６日生まれ
身長：１７２ｃｍ
体重：５９ｋｇ
趣味：エロゲープレイ、アニメ鑑賞、ラノベ読書、伊吹をからかう
好きな物：アニメ、エロゲー、女の子、ポテチ、平和
嫌いな物：勉強、野原先生、長ネギ、現実

その他：本作の主人公。ボケる事も多いがツッコミ役に回る事が多い。
実はロジーナ皇太子アレクサンドルの子孫。

先祖返りによりアレクサンドルの能力が宿っており、キスをすると能力解放モードになる。
普段はリミッターがかけられているが、身体が異常に丈夫で傷の回復力も高い。
運動は得意だが学力は低く、無理して初芝に入った結果成績はいつも赤点ギリギリ。
何だかんだ言って世話焼きであり、困っている人は見逃せないタイプ。
しかし変態な為、主に女子に『変態』と呼ばれ時には犯罪者予備軍扱いされてしまう。
エロゲーで鍛えている為、キザなセリフは得意。
反応が可愛いという理由で、よく伊吹の事をからかっている。
実は過去に色々あったらしく、今でもその事を気にしているが……。
……まあ、ちょっと馬鹿でオタクで変態だけど本気を出すとすごい人です。

第３０話，手っ取り早く１０万円を稼ぐ方法

短期間で１０万円を稼ぐ……普通なら無理な話だ。
とらゴンボールみたいに格闘大会でもあって、もし俺が格闘家に勝てたら１０万稼げるかもしれない。
だが、それは非現実的な話だ。そもそも路上でそんな大会やってない。
仮にやっていたとしても、プロの格闘家に勝てるわけがない。
と、思いつつも。ぶっちゃけ金を稼ぐ方法なんて……。

「ただいま」

「おかえりお兄ちゃん！」

「けーすけ様！　今日は遅かったのですね」

「ごめんな、ちょっとトラブルが発生したもんで」

「と、とらぶる！？　なんだんエッチな臭いがするね！」

……ああ、当然絶句したよ。葵が想像しているのは多分漫画のトラブルだろうね。
俺的に美柑は妹キャラだけど可愛いと思うんだ。
やっぱり妹と言えども、二次元になると精度が大幅アップだね。
まあ、話を戻してこの程度の勘違い、葵だけなら問題がないんだが……。

「けーすけ様がエッチなトラブル！？　へへへ、変態！　今度は誰

を襲ったのですか!?」

「ねぇ暮葉さん！　どうして俺が加害者だって前提なんですか!?」

「だだだ、だってけーすけ様。明智殿の胸を……っ！」

「ホントなの!?　お兄ちゃんダメだよ！　そんなことするくらいなら葵の胸を――――」

「もうお前らいい加減にしてくださいッ！」

どうしてだ、なんでいつも下ネタ展開に行くんだろう？
俺も変態だが、身の周りの女子のほうがよっぽど変態じゃねーか！
……そんなツッコミを入れてみたいのだが、賛同してくれる人がいなさそうなのでやめておこう。

――――その後、俺は自室に戻り作戦を練っていた。
如何に短期間で合法的に１０万円を稼ぐか。これは俺にとっては大きな課題である。
アイツと約束したからには、この約束は必ず果たさなければない。
そうは簡単に言ってみるが、現実は二次元よりも厳しいものだった。
そう、現実というクソな世界はそんな簡単に１０万円を稼げるようには、できていないんだ……。

「困ったなぁ……」

ああもう、格闘大会やるならどんな強いヤツ相手でも戦うよ！
ゲーム大会やるんだったら、どんなクソ強いプレイヤー相手でもやってやる！
とにかく、手っ取り早く１０万円を稼げる方法を見つけたい。

アイツの為にも、浅間部長の想いの為にも、友達を心配させない為にも！
でもどうすりゃあいいんだ！

「……んっ？」

ゴーグル先生で賞金１０万円を検索をしていると、丁度いい情報が掲載されている事に気付いた。
房総丘陵トレイルランニング３０ｋｍ、優勝者には賞金１０万円…
…おお！
５月１５日早朝受け付け、１０時にスタートし制限時間は５時間。

「これだ！」

トレイルランニング。、ランニングスポーツの一種で、舗装路以外の山野を走るものである。
最もそれがどういう競技か、詳しい事はわからない。
それでも賞金１０万円はおいしいぞ。しかも５月１５日って今度の日曜日じゃないか。
俺はこれでも足腰には自信がある。万が一これで優勝すれば、１５日には１０万円が手に入る。
……上等だ、出場してやるよ。これで必ず賞金１０万円を手に入れてやる。
というわけで明日から早速特訓だ！

――――翌日、学校で俺は房総丘陵トレイルランニングへの参加を、皆に報告してみました。
すると、皆さんの反応はこんな感じでございました。

「け、圭介っ！？　あんた本気なの！？」

「ああ、わりと本気だぞ」

そりゃあ、今回は背負ってるものがあるからな。
わりとというよりもかなり本気である。

「けーすけ様！　いきなりどうしたのですか！？」

「いや、俺。実は走るの大好きなんだ！」

「見え見えの嘘ね。圭介って走るの速くても走ること自体は面倒だって、前に言ってたじゃない」

「い、伊吹さん鋭いっすね……いや、でも本気なのは確かだ！」

そう言いながら、俺はガッツポーズを取ってみる。
だけどなんだろう。皆の反応がやけに薄いぞ？

「圭くん。それって足腰の強さにスタミナもいるし、足が速いだけじゃダメなんだよ？」

「そんな事わかってるって。スタミナのほうにも自信はあるよ」

「まぁ、あんたは結構タフだからね。でもどうしていきなり出る気になったのよ？」

「そうですよ！　拙者達はその大会の存在すら知らなかったのですよ！？」

存在すら知らなかったって……あんたらそれでも県民ですか！？
まあ、確かに房総丘陵なんて俺らには縁のない所だ。

「それにしても房総丘陵かぁ、懐かしいな」

「あ？　広ちゃん行った事あんのか？」

「中学の頃山籠りに行った事があるね」

「ぐはっ！　すげぇ流石広ちゃん、山籠りってフツーのヤツはしねーぞ！？」

大吾が驚くのも無理ないぜ。俺だってちょっと驚いちゃいましたよ。
多分重原という武道バカは、道場破りくらいならやった事があると思っていたが……。
まっさか山籠りまでしていたとはね、そりゃフツーに強いよ。
一度道場で試合を見せてもらったが、重原の廻し蹴りは明智の蹴りにも匹敵しそうである。

「じゃあ、重原は向こうの地理に詳しかったりすんのか？」

「まあ程々にね。確かそこまでアップダウンは厳しくなかったハズだよ」

「なるほどねぇ……」

とは言え、悪路な上にアップダウンはあるのだ。
フツーのマラソンと同じと考えちゃ、きっと痛い目に遭うだろう。

「あ、そういえば私も行ったことあるわ」

「え？　それってマジな話なのか？」

「剣道部の合宿よ、夏休み時々いなくなるでしょ？」

「ああ、なるほど」

どうやら、房総丘陵は重原と伊吹が経験済みのようである。
お互い目的は違うけどね。伊吹の目的のほうがマトモな気がするぜ。
部活の合宿なら仕方ないよね。

「けーすけ様、葵さんも連れて絶対応援に行きますね！」

「あたしも伊吹と一緒に行くな！」

「ま、まあ……圭介が頑張るなら仕方ないわね。特別に応援してあげるから感謝しなさい！」

「じゃあ僕も行ってみますかい。ラノベのネタになりそうだからな！」

「大吾……新人賞狙ってるんだよね。まあそれはともかく、俺も応援に行くからね」

みんな……なんていい友達なんだ。思わず涙が出てしまいそうになったぜ。
……そうだ、他のヤツにも一応この事を伝えておこう。
出来れば応援してくれそうな人にしよう。応援してくれるとこっちもテンションが上がる。
戦う原動力にもなってやる気が出てくる。決まりだな、他の奴にも

言おう。

――――というわけで、次に参加を告げた相手は……。

「ほ、ホントなのか。藤島？」

「ああ、諸事情により出る事になっちゃいましたよ！」

そう、明智光秀の子孫であり、初芝高校では風紀委員を務める明智凪紗である。

彼女も俺にとっては大切な友達だ。だから彼女にも伝えることにしたのである。

「で、でもどうしていきなり？」

「だから諸事情だよ。その辺には深いワケがあるんだよ」

「藤島……もしかして、罪償い？」

「は、なんで？」

「あまりにも変態すぎて皆に嫌われたから、優勝して信頼を取り戻そうと――――」

「そこまで皆の好感度下がってねーよ！　頼むから変態と結びつけないでください！」

きっと明智の脳内では俺＝全てが変態という図が、完成しちゃっているのであろう。

全く迷惑な話である。俺はそこまで腐った変態じゃねーですよ。

「う～ん、では深いワケって？」

「そりゃあまあ……」

「はぁ……やっぱり罪償いか。今度は何をやったんだ？　覗きか痴漢か？」

「だから違うっつってんでしょ！」

コイツ、どうしても俺を犯罪者に仕立て上げたいんだな。

「で、でも藤島が出るなら私は応援するっ。その……頑張れっ」

「はぁ……」

応援してくれるのはとてもありがたい。

だけど、なんだか勘違いされたままのような気がするんだ。

まあ、明智も応援してくれるようだし、次は青山さんや葵あたりだな。

――――そう思って1年の教室に行ってみたはいいが……。

「もう知ってるよ～」

「え？　そうなのか？」

「はい、わたし達はその……木下先輩に訊きましたので」

なるほど、葵と青山さんは暮葉ルートで知ったんだな。
確かに葵も連れて行くとか、そんな事を張りきって言っていたよな。
……アイツ、変な事をこの二人に吹きこんでいないだろうな？

「お兄ちゃん！　やるからには優勝目指そうね。その為に特訓しよう、お兄ちゃんのベッドで！」

「何の特訓だよ！？」

「藤島先輩と葵がベッドで……っ！？　はわわっ！　そ、そういう関係だったのですか！？」

「違うわ！　葵の言う事は信じるな！」

畜生、言わなきゃよかったかもしれない……。
まさにこんなに変態扱いされたり、露骨に下ネタトークされるとは思わなかった！
流石の俺でも引くレベルだわ。もうホントになんなんでしょうかこの人達は！？

「先輩……わ、わたしは先輩と葵がそんな仲でも……ずっと尊敬する先輩ですっ」

「納得しないでくださいよ！」

でも尊敬はされていたのね。あれ、尊敬されるようなことやったっけ？
……まあいいか。少なくとも嫌われているわけではないみたいだしな。

「あははっ、お兄ちゃん可愛い」

「元はと言えば、てめぇが変な事言うのが悪いんだろ！」

コイツが変な話を始めたせいで、俺が青山さんにシスコンだって勘違いされただろ。

確かに、妹は好きだが兄×妹は二次元のみに許された、禁断かつ神聖なるセカイだぜ？

それをリアルに引っ張ろうとする葵はもう……邪道の一言に尽きるぜ！

葵は俺の知っている人物の中でも、最もトラブルメーカーな存在かもしれない。

「でも……どんな理由でも先輩が出場するのは事実ですよね？」

「まあな、もちろん葵の為ではないぞ」

「バッサリ否定された！？」

そこまで露骨に残念そうな顔すんなよ。欲しかった同人誌が完売していたわけじゃないんだぞ。

どこまでブラコンなんだ、我が残念な妹は。

「先輩……っ、頑張ってください！」

「お兄ちゃんファイト！　優勝のご褒美は葵だからね？」

「頑張るけど葵はいらないからな！

「さ、爽やかな笑顔で葵の存在を否定された！？」

うるせぇブラコン！
もう少し妹らしく兄を応援しやがれ！ここは二次元ではなく現実（リアル）なんだぞ！？

……さて、大抵のヤツにはこの事を報告したな。
浅間部長には……黙っておこうかな。
出来ればドッキリをやってみたいんだ。もしも勝ったとして、１０万円を手に入れたら……。
その時は浅間に直接諭吉さん１０枚を手渡すんだ。
当然、房総丘陵トレイルランニングには数多くの人が参加するだろうし、そもそも３０ｋｍなんて長距離を走った事がない。
ぶっつけ本番で優勝なんて殆ど不可能に近いかもしれない。それでも……俺はこの機会を逃したくない。アイツの為にも、アイツの母親の為にも。そしてアイツを心配している友達や浅間部長の為にも。

……絶対負けられる戦いじゃねえ！

第３０話，手っ取り早く１０万円を稼ぐ方法（後書き）

Ｎｏ２
木下暮葉（きのしたくれは）
イメージＣＶ：伊藤かな恵（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『神のみぞ知るセカイ』エルシィ役
『とある科学の超電磁砲』佐天涙子役

県立初芝高等学校２年４組在籍、アルファ隊所属。
ジョブ：ちょっと魔法が苦手な魔法少女
性別：女性
年齢：連載開始時点で１６歳
誕生日：６月５日生まれ
身長：１４６ｃｍ
体重：３７ｋｇ
胸ランク：極小（貧）
趣味：一期一振を磨く事、最近はゲームとかにもハマリ出した様子。
好きな物：甘い食べ物、牛乳、地球で出会ったＰＮＰのゲーム
嫌いな物：野菜、辛い食べ物、戦闘

その他：異世界からやってきた魔法少女で、自称豊臣秀吉の子孫。
魔法少女と言いつつも魔法が苦手で、戦闘スタイルは魔法使いというより武士。
でも、魔法が役立つ事もあるので、全く無駄というわけではない。
アレクサンドルの子孫である圭介の護衛を指示され、藤島家に居候しつつ圭介を護衛。
しかし、遊んでいるようにしか見えないのが現状。
少なくとも圭介と出会う前に一ヶ月ほど日本に滞在しており、その

為日本の事についてはある程度知識があるみたいだ。
性格は明朗快活で人懐っこく、小動物のような愛嬌を持っている。
見た目通り子供っぽいところもあり、圭介曰くアホの子でしかも馬鹿ある。
愛嬌ある外見と活発な性格によってすぐにクラスに馴染めた。
圭介の事は「けーすけ様」と呼ぶあたり、一応慕ってはいるみたいである。

第３１話，房総丘陵トレイルラン大会

５月１５日早朝……房総丘陵トレイルランニング当日。
俺は現在、受け付けを待つ人の行列に並んでいた。
結構早くきたつもりだったんだけどなぁ。皆さん中々朝が早いようで既に大行列だ。
選手は見た所老若男女勢ぞろい。子供から老人まで性別問わずに並んでいる。
……まあ、子供や老人は敵じゃないとして。問題はやっぱりある程度若い人だよな。
それに中年の中にもすごい人はいるだろう。例えば現役自衛官とかな。

とにかく、こっちの武器は体力と身体が丈夫な事だけだ。
ただ問題は肺と脚の、どっちが先に潰れて使いものにならなくなるかである。

「……っ！」

……いや、そんな事を考えていちゃダメだ。
どんな事があろうと勝たねえと。この勝負だけは負けてはダメなんだ。

「……ん？」

あれ、あのＴシャツに短パンって初芝じゃないか？
俺以外にも初芝の生徒が参加していたんだな……。
しかもよくみるとあの子、中々レベルの高い美少女ではないか。
セミロングな黒髪で身長は……伊吹よりは高そうである。

バストサイズ……うはっ、なんて丁度いい大きさなんだ。滅茶苦茶俺好みではないですか！？
あんな子もトレイルランに参加するのかぁ。こりゃ俺もいつも以上に本気を出さねえとな。

――――やがて受け付けが終わり、開会式も終わって現在スタートライン。
大勢の人々が立ち並び、ただひたすらスタートの時を待っている。
こっからじゃ応援席が見えないな。つか皆どこで応援しているんだろう。
はぁ……伊吹とかがチアガールの恰好していたりしないかなぁ？

「よぉ～し、本気出しちゃうぞぉ！」

「な……なっ！？」

考え事をしていたその時、さっきの初芝の女の子がなんと……かかか、髪を括った！？
すげえ、どこのギャルゲヒロインだよ全く。現実（リアル）で髪を括る女の子がいるだと？
なんということでしょう。我が初芝高校にはあんな希少価値な子が存在しているのか。
スバラシイ！現実（リアル）もまだまだ捨てたもんじゃねえぜ！
髪を括ったあの子、その為現在ヘアスタイルはサイドテールであった。
元気が出た。俺はギャルゲヒロインのような事をするあの子を見て、パーフェクトに元気が出ました。
フフフ……この元気。これで勝つる！

「……」

「ん？」

「っ！？　……」

なんだ？

今、さっきの髪を括った女の子が俺の事を凝視していた気が……。

……ハハハ、気のせいですか。ですよねー！

さてと、そろそろスタートの時間だな……この勝負だけは負けられないぜ。

〔スタート5秒前。４、３、２、１……０！〕

放送が０という数字を告げると同時に、選手たちは一斉にスタート地点から足を動かし始めた。

俺もそのうちの一人である。こういうのはスタートが大事なのだ。

「１０万円でエロゲー沢山手に入れるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

「彼女とのホテル代ゲットだぜぇぇぇぇぇぇぇっ！」

「働いたら負けだし、ここで一ヶ月の金を稼ぐぞぉぉ！」

「俺！　この大会が終わったら結婚するんだ！」

……しかし、ロクでもねえ目的で参加している人多いな。しかも誰

だよ死亡フラグ立てたヤツ！？
こっちは超真剣なんだぞ。こんなのに絶対に負けてられない。
必ず勝って１０万円を手に入れる。絶対に浅間家を救ってやる……。
俺がやなきゃ誰がやる！……そんなとらゴンボール的な事を考えながら、俺は３０ｋｍという長距離を走り始めたのであった。

――――それからしばらく、１０ｋｍを走った地点である。

「……！」

俺は結構先頭のほうを走っているようで、俺の前にはたったの６人しかいなかった。
何故こんなに走れるか。前にも行った気はするが、これでも足腰とかには多少の自信があるんだ。
リアルに陸上部にスカウトされた事もある……まあ、面倒なので断りはしたが。
なので俺は走るのは結構得意なのである。それでも追い付けない前方の６人……。
多分いつも鍛えているか、学校に通っていて陸上部にでも所属しているのだろう。
でもよかったぁ。陸上選手とか現役自衛官がいたらどうしようかと思ったが、俺でもこうして追いつけるという事は……その手のプロの人は今回参加していないんだな。
よし、少しは勝利の兆しが見えたかもしれない。でも前は６人だけとは言え、それでも陸上において１人を抜かすのは大変な事だからなぁ……この勝負、少し厳しいかもしれない。
……そんな考えはゴールまで残り半分である、１５ｋｍ地点まで走

ってから消えていった。
なんと、6人のうち3人を抜いてしまったのだ。3人は前半調子よく先頭走っていた連中である。
どうやら、最初のほうで体力を使い過ぎてしまったらしいのだ。
俺の方も大分疲れてはきたが……一応、これでも体力は温存しているほうである。
こうして俺の順位は4位に。一番先頭の選手の容姿も見え始めていた。
アレは……髪を括っている？もしかしてスタート地点にいたあの子だろうか？

――――さらに走って20km地点。

「はぁ！　はぁ！　はぁ！」

ああ、流石に疲れてきた……でも身体のほうはまだ大丈夫だ。
それに……この勝負には負けられない。多少疲れようが関係ないんだ。
ていうか……流石トレイルラン。ここモロ未舗装というか、荒れた山道じゃねえか。
こうして走るのは少し危険かもしれねえぞ。だけど……負けたくはねえ。
ていうか負けられねえんだ。どうしてもやり遂げなきゃいけない事があるんだ！

――――そして……いよいよ残り3kmという地点。
ついに俺は2位まで上り詰めたんだ……何があったって。単純に体力のおかげである。

短距離走では陸上部員に劣るが、長距離では持久力があるほうが勝ちである。
俺の体質上、身体の強度の他にも心肺能力も高めなので、ぶっちゃけ短距離よりも長距離のほうが得意なのである。じゃなかったらこんな競技には出ないぞ。
……とは言うものの、流石にペースを保ったまま３０ｋｍ近くを走ると、滅茶苦茶疲れる……。

「はぁ！　はぁ！　はぁ！」

「……っ！？」

よ、ようやく……い、一番先頭に並べたぞ……？
やっぱり髪を括っていた女の子。意外だな……女子が一番前か。
ちなみに俺のすぐ後ろには、さっき俺が抜いた連中がいる。彼らも再び抜き返す機会を覗っているのだろう。だがそんな彼らは全員が男である。つまりこの中に女子は先頭を走るあの子のみだ。

「……はぁっ！　んっ……ぐぅっ！」

クソッ……流石に厳しい……ッ！
やっぱり日頃鍛えてねえからな……いくら御先祖様の恩恵があるとは言え、鍛えてなけりゃ所詮は少しすごいだけの人間である。

「……っ！　っ！」

まずい、あの子との距離が離れて行く……後ろのヤツが近づいてくる……ッ！
クソッ、残り僅かだぜ。こんな所で離されたら……抜き返すチャンスなんてっ！

「あ、皆さん！　選手が来たのですよ！」

「う、うそっ！？　圭介が2番目だわ！」

「圭くん頑張るねぇ、何か賭けてるのかな？」

「でも藤島のヤツ、相当バテてる……しかも相手は陸上部エースだぞ？」

「そうだね。このままじゃ圭介は最高によくても準優勝だね」

「お兄ちゃんガンバレー！」

「せ、先輩……頑張ってくださいっ！」

「あ、アレ？　僕何も言う事なくね？」

アイツらゴール地点にいたのか。通りで途中で見かけなかったわけだ。

クソッ……息苦しいっ。足は痛くないがとにかく息苦しいぞ。

滅茶苦茶苦しい、下手すりゃ倒れる……ッ。でもっ！

“あたいが無理しなかったら誰が生活費を稼ぐんだよ！　誰がお母さんの治療費を稼ぐんだよ！？”

“本当は全然足りない。あたいが働かなきゃ、手術をするお金がないんだから！”

“嘘なんて言わないっ。お母さんは一回手術すれば治るのに……でも、お金が足りないんだよ！”

アイツが……アイツが味わった苦しみなんかに比べりゃ……。
こんなの全然、大した事は……。

「……ねぇんだよっ」

アイツ以上の苦しみなんて、トレイルランでは絶対に味わう事ができない。
だけど、そんな苦しみを味わい続ける必要はない。
アイツ一人が無理をする必要なんて……全くないんだ。
努力をするのはアイツ一人じゃねえ。その中にはあの時から俺も含まれた……。

“不正な真似は絶対しねえ。だけど１０万円は絶対用意するって約束するよ”

アレは、あの言葉は俺の……覚悟の証だ……ッ！

「ぐッ……うぅおおおおおおおおおおっ！」」

その時だった。
ようやく、消えかけていた気合いが再び入ったんだ。
崩れかけた身体を踏ん張って持ち堪え、大きな声で雄叫び、拳を力強く握る。
相手の女の子も限界ギリギリで、ペースを保ってはいた。だが、悪く言えばそれ以上の事はできない。

多分彼女もここで俺が突然本気を出そうとは、思ってもいなかったろう。
それは、ひどく隙だらけであるのと同じ意味である。
俺は隙だらけの彼女を抜くべく、残る全ての力を籠める。そして大地を力強く蹴りあげる。

一足とびに飛びだした刹那、再び彼女と並ぶ事に成功した。
チラリと左を見ると、Tシャツの右胸のあたりに生駒の文字が見えた。おそらく彼女の名前であろう。
彼女も俺の方を見て、自然と視線が合ってしまう。彼女の目は驚いたように見開かれていた。
そんな隙だらけの彼女にはもう……俺に反撃する術は残されていない。
大地をもう一蹴りし、飛び出す勢いで右手を伸ばす。その結果……。

――――最初にフィニッシュしたのは俺である。

まさに僅差、ギリギリの勝利であった……だが、もう体力が残っていない。
俺はフィニッシュした勢いで、そのまま地面へと倒れ込んでしまった……。
ああ……アスファルト熱い……。

「け、けーすけ様が勝ったのです……」

「やった！　お兄ちゃんが勝った！」

「ふふん。伊吹、圭くんに惚れなおした？」

「っ！？　わわわ、私は別に圭介なんて元々好きじゃないわよ！」

「国宗先輩。その……顔、赤いですよ？」

「それにしても圭介のヤツ、随分熱かったな。なぁ広ちゃん？」

「そうだねぇ。やっぱり、小坂さんの言う通り何か賭けてたんじゃないかな？」

「……すみにゃん」

ああ、みんなの声が聞こえる……。
ていうか明智さん。すみにゃんって一体なんなんだ……？
まあ……そんなことはどうでもいいけど。

――――俺は勝った……。
合法的に１０万円をゲットした……。
……ははっ。ようやく……浅間に合わせる顔が出来たような気がする……。

「あのっ！」

「……ん？」

その時、どこからか少女の声が聞こえてきた。
場所は右上。そこを確認すると、胸元に生駒と書かれた髪括りの少女が立っていたのだ。

「同じ初芝で２年の人だよね？」

「お、おう……君は？」

「初芝高校2年の生駒純奈（いこますみな）です。今日はありがとうございました！　完敗です！」

「お、おう……君も、すごく速かったよ」

「ありがとうございます！　ではっ！」

明るい笑顔を浮かべ、彼女は背中を向けて走り去ってゆく。

話しかけられた……なんというか、いかにも体育会系だな。

でも、近くで見ると極上にキュートな子だったな……。

「ナギちゃん！」

その時誰かをそう呼んだのは、まさに先程の生駒純奈であった。

ていうかナギちゃんって……まさか名字が三千院だったりして。

……流石にないか。そんな事を思いながら声のしたほうを見ると……。

「すみにゃん。お疲れさん」

「えへへ。ナギちゃん負けちゃったよ」

「気にするな。あの変態は本番に滅茶苦茶強い男だから」

「……なん……だと！？」

ナギちゃんが明智で、すみにゃんが生駒純奈……？

なんじゃこのエロゲーにありがちな、ヒロインと親友みたいな感じ

はぁぁぁ！？

第３１話，房総丘陵トレイルラン大会（後書き）

Ｎｏ３
国宗伊吹（くにむねいぶき）
イメージＣＶ：斎藤千和（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『ストライクウィッチーズ』フランチェスカ・ルッキーニ役
『魔法少女まどか☆マギカ』暁美ほむら役

県立初芝高等学校２年４組在籍。
ジョブ：ツッパリ（？）幼馴染
性別：女性
年齢：連載開始時点で１６歳
誕生日：９月４日生まれ
身長：１５１ｃｍ
体重：４０ｋｇ
胸ランク：小（貧）
趣味：圭介に絡む（？）事、焼きそばを食べる事、音楽・テレビ鑑賞
好きな物：食べ物全般、特に焼きそば大好き、剣道、お昼寝、お笑い番組
嫌いな物：身体測定、ヤンキー、煙草の煙

その他：圭介の幼馴染の女の子。
全然素直じゃない性格だが、デレがないと思っている圭介にはツンツン突っぱね＝ツッパリ伊吹ちゃんと呼ばれている。
剣道部に所属しており、部長を超える高い実力を持つ。魔族のヴォルコラクにさえある程度実力を評価されている。
どういうわけか、暮葉の居候に最後まで反対していた。
それどころか、圭介が他の女の子といい雰囲気だといつも機嫌を悪

くしている。
焼きそば大好きっぷりは異常レベルらしく、家事スキルほぼ０の圭介さえ焼きそばだけは上手に作れるようになった程。

第３２話，街灯の下で

房総丘陵トレイルランを制覇した俺。
元気な体育会系である生駒純奈と、実は超能力者である明智凪紗が親友であるという、意外な事実も発覚した。無事に賞金１０万円を手に入れる事ができた。
マスコミに勝手に撮影さけ、その後何故かゴールしてきた人達に伊吹が彼女だと勘違いされ、伊吹が噛みついて来て……うう、ちょっと傷が出来ました。

あの後、途中までは皆で一緒に帰った。
そして最後は賞金１０万円を片手に、ボロボロな俺は暮葉と葵に支えられつつ帰路を移動していた。
……だけど、俺にはこのまま直行したい場所があるんだ。

「二人とも、ちょっと寄り道したい所があるんだけど」

「もきゅ？　けーすけ様、どちらになのですか？」

「いやぁ知り合いの家。ちょっと用事を思い出したんだ」

「お兄ちゃん！　知り合いって……女の子？」

うわぁ！ｍｙシスター葵たんからダークなオーラが！？
……まずいぞ。突然『お兄ちゃ～ん、二度と葵以外の女に近寄れないように……し☆て☆あ☆げ☆る』なんて言われて、イキナリ刃物で四肢切断なんてされたら……。
はわわ、怖ぇぇぇっ！葵は多分ヤンデレではないと思うが、万が一の事も考えよう。

そんな事になるのは絶対嫌だ。それに浅間の家には浅間部長だっているんだ。

「男に決まってるでしょ！　女の知り合いなんてしねぇし……」

そう。こう言ったって強ち間違いではないんだ。

フフフ、これぞ噂の緊急回避というヤツである。

「けーすけ様、拙者もお供したほうがよろしいのでしょうか？」

「いや、一人で大丈夫だよ」

「でも万が一けーすけ様が暴漢に襲われたら！？」

「そうだよ！　お兄ちゃんが公園なんかに行ったらその……つ、ツナギの男に……」

「アッー！　薔薇色な話はやめい！　そもそも公園なんていかねえよ！」

「それではどちらにいかれるのですか？」

「……先輩の家？」

うん、この答えで合っているハズだ。

浅間の家は一応部長の家でもあるからな。嘘は言っていないハズである。

「けーすけ様が男の先輩の家に……ですか？」

「お兄ちゃん！　その……汚されても葵はお兄ちゃんの妹だよ」

「お前らどうしても話を薔薇色にしたいのね！？」

葵は腐女子じゃないハズなのに、なんででしょうか？

まあそれはともかく、ようやく抜け出せた俺は浅間家へと向かったのだった。

暮葉、大変心配そうな顔をしていたなぁ。アイツの任務は俺の護衛だしな。

……多分、サヴィエトの皆さんには見つからないと思うし、大丈夫だとは思うんだけどな。

――――浅間家。ここに来るのは二度目だが、相変わらず耐震強度が０に等しいオンボロ住宅であった。

浅間部長いるかな。いや、でも休日はいつもバイトしているって言っていた。

もしかすると、まだ帰ってきていないかもしれないな。

……どうしよう。浅間は絶対俺と二人きりなんて嫌だよな。前回は特別だったんだろうし。

流石に俺だけで家に入るのもなぁ。やっぱり暮葉を連れてくればよかった気がするぜ。

「あ、あんたは！？」

その時、丁度いい所で浅間が現れた。

しかも私服、こいつ今までどこかに出かけていたんだな。

「よっ、体調はどう……っておわぁぁっ！？」

「っ！　こ、来いっ！」

ななな、何故だ。何故俺は浅間に手を引かれているんだ？
しかも手を引く浅間の表情。やっぱり不機嫌そうである。
そりゃあそうだ。嫌っている相手が自宅の前に不自然に立っていたんだから。
ていうか、俺はコイツにどこに連れていかれるんだ！

――――こうして連れて行かれた場所は、浅間家の近所にある“こうなん公園”という小さな公園。
正直に言おう。こんな公園古宇坂に存在していただなんて、俺は全然知らなかったぞ。
滑り台にブランコ、砂場しかないなんて……どんだけ小さいんだ、この公園は。
そんな公園まで連れてこられた俺。手を引いてきた浅間は両手を腰に当て、仁王立ちをしている。
その目はとても厳しく、肉食獣が獲物を狙うように俺を睨みつけていた。

「おい！　あんたは……家の前で何やってたんだっ」

「え？　ああそうだ。これを渡そうと思ってよ……」

俺はポケットの中から封筒を取り出す。その中には当然、優勝賞金１０万円が入っている。
浅間にそれを渡すと、彼女は当然のように封筒の中身を調べた。
そして、予想通り彼女は驚きのあまり目を見開いていた。

「あ、あんた……これって……っ」

「約束のものだよ。これでお母さんの手術ができるんだろ？」

「なんで……どうやって手に入れたんだよ……？」

「房総丘陵トレイルランってあるだろ？　あれって賞金１０万なんだぜ？」

「あ、あんたがボロボロなのって……」

「ああコレ？　ちょっとゴールでコケちゃって……でも大した怪我じゃないから」

「……ばかだろ、あんた……っ」

突如、彼女は小さな顔を俯かせてしまった。さらに歯を食いしばり、小刻みに震えている

まずい……もしかして、何かやばいフラグを立てちまったんじゃないか。

そんなに怒ることを言っちまったのか。それとも勝手に家に来た事を怒ってんのか？

……多分後者だろう。それ以外には何も思い当たらない。

「ま、待て怒るな。勝手に家の前に来た事は謝るからっ」

「あたいは怒ってない。むしろ呆れてるんだよ……っ」

「あ、呆れてる？」

「なんでこんな馬鹿な事をするんだよ！　あたいがあんたに何やっ

たかわかってるんだろ！？」

ようやく顔をあげたと思いきや、とても必死な表情である。
そんな表情で自分がやった事を知ってるんだろと、叫ぶように問う。
コイツ……少なからず悪いと思っていたんだ。
……なんだ、やっぱり根はいい子じゃねえか。

「……確かに、コイツを投げ釣られてマックでひどい目に遇った。
全部浅間がやった事だよ」

「だって。あ、あんたの事……最低の暴力魔だと思ってたから……」

「合ってるよ……どんな理由があろうとも、俺が中1の時に先輩をぶん殴ったのは事実だ。そしてそれは浅間のように後の世代にまで、俺が一番の悪として語り継がれている。だから俺は正真正銘暴力魔だよ。コインを投げつけられたりマックで悪戯されたのも、仕方のない事だと思っている」

「嘘だ！　完全にあたいの誤解だった……あんたは絶対そんなヤツじゃない。そんなヤツなら嫌いな人間の為にこんな事……」

「するよ。俺は最低だけど最低が嫌なんだ」

……言い終わってから思えば、なんちゅーキザなセリフなんだ。
ギャルゲーで鍛えたとは言え、現実だとかなり痛いような気がしてきた。

「ど、どういう意味だよ……っ？」

「言葉のままだよ。確かに俺は先輩を殴った最低暴力魔だ。けど誰

かが困っているのを見るのも嫌だ、それを見捨てるのも嫌だ。最低なハズなのに最低が嫌なだけだよ」

「……絶対あんたはおかしい……っ。殴ったのだって理由があるんだろ？」

「あるけど殴ったのは事実だよ。ぶん殴った時点で善人とは言えないと思わないか？」

「確かに……殴るのはあたいもダメだと思う……でも！」

「だったらそれでいいじゃないか。今更善良に戻る気もないし、おそらく世間はそれを認めてくれない。だから、俺の評価はそのままでいいんだよ」

……俺も馬鹿だな。折角浅間が俺の事を見直しているのに、こんなことを言っている。

もしかしたら、このまま上手く広まって悪印象が消えないにしても、限りなく少なくなっていただろうに。俺は自らそうなる選択肢を選ばなかったのだ。

殴らざるを得ない状況になっちまったのは、あの時俺が弱かったからだ。俺の責任なんだから。

「……あたいには理解できない。そこまで悪を被る理由が……っ」

「いいだろ？　実際、生活するにはあまり影響なかったんだから」

「……あたいは？」

「確かに、痛かったし腹も減ったよ。でも……たったそれだけだろ

？」

「……ッ」

いずれ、こんなことになるかもしれないとは薄々感じていた。
それに、アレはコイツが本当にいいと思ってやっていた事なんだ。
確かに浅間は馬鹿だ。やんちゃで正義感は強いけど、後先とかその他の事は一切考えていない。
でも、だからって別に咎めるつもりはない。元々、やられる原因は俺の方にあったんだから。

「とにかく、理由なんてどうだっていい」

「あ、あたいは納得できない……あんたが悪を被る必要なんかない。それにあたいはあんたにひどい事を……」

「浅間はホントに他人想いだな。こんなにいい子だから……俺も本気になれたんだと思う」

「……」

またしても、浅間は俯いてしまった。
髪の毛で鼻から上が隠れて見えない。いや、わざと見えないように俯いているのか？
……とにかく、俺の話はまだ終わりじゃない。最後に言いたい事があるんだ。

「その１０万円は本気になった結果だよ。だからそれを治療費に使ってくれ。お母さんを……大事にするんだぞ」

再び俯いたまま歯を食いしばる彼女。
だけど、さっきとは違う所があった。
……一筋の雫が、彼女の頬を伝っていたのである。

「……ご……めん」

「うん？」

「ごめんな……さい……ごめんなさいッ」

「最初から……怒ってないよ。だからもう謝るのはよそう？」

その言葉の後、彼女はごしごしと右腕で涙を拭いていく。
その後俺に見せた表情は、何故だか穏やか笑顔で大変清々しい。
浅間がとても可愛い女の子に見える。そんな浅間が俺に言い放った一言は……。

「……ありがとう。」

ありがとう……。
そっか、浅間にありがとうって言われたのか……。

「あと、あたいの事は別にあかりでいい。兄貴もいるし面倒だろ！」

「え、だ……だけどっ」

「気にするなよな。そう呼んでくれたほうが兄貴と一緒の時とか、反応しやすいだろ！」

「まあ……そりゃそうだけど」

「だったら、あたいもあんたの事を圭介って呼んでやる。光栄だろっ☆」

「……よ、よろしくお願いします。あかり」

「うん！　よろしくな、圭介！」

……俺、一応あかりの先輩ですよね。

歳上に敬意を払わぬガサツな態度。やっぱコイツはどこぞのビリビリ中学生といい勝負だ。

……でも、元気も戻ったみたいだし、これでいいんだよな。

とにかく、悪い方向ではないと思うんだ。これでちょっとした騒動は解決した。

「さてと、そろそろ帰るか？」

「うん！　ついでに送れ☆」

「へいへい……」

わがままお嬢ちゃんを家まで送る、か。

端から見れば俺達、一体何に見えるんだろうなぁ。

……暗くなりかけの空。点灯時刻になり光り始めた街灯が、俺達二人を照らしていた。

第３２話，街灯の下で　（後書き）

Ｎｏ４
藤島葵（ふじしまあおい）
イメージＣＶ：阿澄佳奈（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『アマガミＳＳ』橘美也役
『ＷＯＲＫＩＮＧ！！』種島ぽぷら役

県立初芝高等学校１年３組在籍。
ジョブ：超絶ブラコン妹
性別：女性
年齢：連載開始時点で１５歳だが誕生日を迎えたので、現在１６歳。
誕生日：５月５日生まれ
身長：１５５ｃｍ
体重：４４ｋｇ
胸ランク：中（美）
趣味：お兄ちゃん観察、兄のお世話、料理（ただし下手、アニメ鑑賞、ゲームプレイ。
好きな物：お兄ちゃん、お兄ちゃんのベッド、兄×妹系の同人誌、楽しい事
嫌いな物：お兄ちゃんと自分の禁断の恋の邪魔をする人、つまらない事

その他：圭介の妹。
見た目通り人見知りなどは一切しない社交的な性格であり、友達は多い。
根はしっかりもので両親不在の中、家事などしっかりやっている。
勉強も得意で高校３年の内容までならほとんど覚えているくらい、

学年どころか学校全体でも三本指に入る学力を持つ。
身体能力は中の上くらい。ただし護身術を習っていた事があるので不良一人なら撃退できるらしい。
そんな出来た妹だがとんでもないくらいブラコンで、家事さえ兄がいないとやる気がでないらしい。本気でヨスガりたいと思っているらしい。
料理は味はすごいが、見た目が如何せんグロテスクで皆に不評。
暮葉にとってはトラウマにさえなっている。
兄の趣味や行動、性癖などかなりの部分を把握しているらしく、圭介の初恋の人の名前等、圭介の弱みも数多く握っている。

第３３話，男にとって一番泣けるイベントだよ

……あれから一週間、５月２３日の月曜日。
あの後あの賞金１０万円も使い、あかりの母親は手術を行った。
その結果は――――大成功。順調に回復すれば６月には退院できるようである。
……よかった。久々に心の底から満足な気分になれたよ。

「もきゅ？　けーすけ様がニヤニヤしてるのですよ？」

「アイツの事よ。どーせ厨二病な妄想でもしてるんでしょ？」

「けーすけ様……やっぱり厨二病なのですね」

「圭介以上の変態なんて、この学校にはいないわよ」

……暮葉と伊吹がひどい事を言う。ううん、ひどいやひどいや。
そこは普通いい事あったんじゃない、とかだよね？
つーか、魔法とか言いやがる暮葉のほうがよっぽど厨二だろうが。

……さて、トイレにでも行こうかな。
そういえばこの一週間で少し、不思議に思う事があるんだけど……。
なんで野郎共、あんまりトイレに行きたがらないんだろうか？
我慢は身体によくないのになぁ。まあいいか、とりあえず俺は行こうっと。

「ん、あんたどこいくの？」

「便所だよ」

「ＢＬ展開に気を付けてくださいね、けーすけ様！」

「あのなぁ……またそれかよ」

いい加減トイレ＝ＢＬも飽きてきたよ。

突っ込んで欲しかったらもっと斬新なネタ考えろよな。

「……それがね、どうも冗談じゃないらしいのよ？」

「Ｗｈａｔ，ｓ」

「あら、圭くん知らなかったの？　最近男子トイレで……お尻から血を流して倒れている男子生徒が続出してるらしいんだっ」

「そしてですね。血を流している人は皆、男なのに男性恐怖症になっちゃったらしいのですよ？」

……ハハハ、おもしろい冗談だね。

やだなぁ……ハハハ、ハッ？

ちょっと待て。どうして最近野郎共があまりトイレに行きたがらないのだろう？

大吾や重原でさえ、学校で用を足すのは自重しているみたいだ。

それってもしかして……この三人の言う事が事実って事なんじゃ……。

「アッーーーーーーーーーー！」

戦場で被弾し、絶叫する兵士さえも真っ青な顔をするほどの雄叫び。

俺は、学校という公共の場でソレをあげてしまった。

「けけけ、けーすけ様落ちついてくださいっ！」

「そうよ！　一応教師だって犯人探しくらいやってるわよ！」

「で、でもまだ捕まってないんでしょソイツ！？」

「「「……」」」

やっぱり捕まってないのか、チクショォォォォォォォ！
これじゃあ落ちついてトイレもできねえじゃないか！

「じゃあどこで用足せばいいんだよ！？　我慢の限界ですよコンチクショー！？」

「そ、外とかどうなのでしょうか……？」

「外で用を足すのはフツーに犯罪です！」

「いっそ覚悟を決めてトイレでしてくれればいいじゃない。男は度胸なんでしょ？」

「それ一部の人だけだ！　俺は絶対安全なほうを選ぶぞ！」

「圭くん圭くん。だったら女子トイレですれば？」

「快適そうだけど入った瞬間、犯罪者に成り下がりそうだから嫌だ！」

ということは……今学校には安全にトイレができる場所がないと？

ふ、ふ……ふざけるなあああぁぁっ！
俺達男共はどこで用を足せばいいんだよ。トイレに入ったら掘られるだと？
そんな悲劇的で薔薇色な展開、おそらく腐女子と本物以外は喜ばねえだろ！

「ど、どうすんのよ……圭介？」

「うぅ……と、とりあえず今だけはトイレに行ってくる」

「もきゅ！？　正気なのですか！？」

「じゃあどこでしろってんですか！？」

「と、とりあえず……あたしらは何があっても、圭くんの味方だからね」

「お、おう！」

なんて悲しい応援なんだ。こんな応援されても全く嬉しくないぞ。
しかし、学校のトイレで血を流して倒れるだなんて……。
学校での怖いお話とかならありそうだけど、高校生にもなるとそれがＢＬネタになんのか。
こうして思うとやっぱり小学生って、純粋で可愛らしい生き物なんだなぁ。
……っていかんいかん！これじゃあ俺がロリコンみたいじゃねえか！
言っておくが俺はノーマルだ。強いて言うならば美乳派である。

――――やがて辿りついた男子トイレ、俺は用を済まし手を洗っている所であった。

それにしても本当に誰もいないな。休み時間のトイレと言えば、必ず一人は騒いでいるハズなのに。
でも俺は襲われなかったし、やっぱガチホモがいるって言うのはただのデマなんじゃ……？

「ヤ　ラ　ナ　イ　カ」

「……あ？」

今、不吉な声が聞こえたような気がしたのですが……。
ハハハ、気のせいだよね。別に「やらないか」と言っても、いろいろ種類はあるんだ。
何も、アッーな事をしよう限定で使う言葉じゃないんだから。気にしないのが一番なのである。

「ウ　ホ　ッ　！　イ　イ　男」

「……」

ひ、ひぃぃぃっ！
なななななな、なんかいやがるぞ。今絶対「ウホッ！　いい男」って声が聞こえた。
「やらないか」だけならまだしも、もうこれガチだろ！？
そのわりには姿を現さないが……そうか。恐怖で怯えている所をイキナリ襲う気だな。
そうはいかないぞ。見せてやるぜ……俺が今までの野郎ともとは違うって所を！

「来いよガチホモ！　汚れたバベルの塔なんか捨ててかかって来い！」

……アレ、全然こないな。やっぱり今のは幻聴だったのだろうか？
う～ん。よくわからないけど、とにかくさっさとトイレから出よう。
考えてみろよ。屈強な男さえ屈服させてしまうガチホモ相手に、一般高校生が腕力で勝てると思うか？
増してや相手はガチ変態のガチホモ。会話が通じるとは限らないぜ。
やっぱりここは、早急にトイレから出たほうが安全であろう。そう決めてトイレから出ようとした。

「ヤァァラァァァセェェェロォォォっ！」

「……！」

瞬間、俺は何者かにフェイスロックをかけられてしまった。クソッ、完全に油断していた！
さらにこの状況なのでよくはわからなかったが、何時の間に俺は地べたに倒れていた。
足首に何かをかけられた感じはしたので、おそらくバランスを崩されたのだろう。
倒された俺は、謎の男に袈裟固をかけられてしまう。
クソッ……強い。コイツ何者なんだよ……ていうかすごい筋肉質だな！？

「ぐっ……てんめぇっ！」

「フフフ……イイケツシテルナ少年」

うわっ、すっごい筋肉質な上に金髪マリーンカット。
コイツはなんだよ米国人なのか。多分そうだろう、日本語がカタコトだぜ？

「オーオーオコラナイオコラナイ。ダイジョーブコワクナイヨー？」

「怖いわっ！　アンタ誰だ！？」

するとオッサンは袈裟固を止め、マウントポジションを取ったまま俺の首を掴んできた。

息苦しくはないが、全くと言っていい程身動きが取れない。

やっぱりコイツ素人じゃない！絶対コイツ軍隊上がりだ！

「ミーノ名前ハ神崎・Ｈ・アリック。元Ｓランク武偵デース！」

「どこのラノベじゃっ！？　アンタただのオタクだろ！？」

「日本ノアニメ大好キデース！　チナミニ海兵隊出身デース！」

「やっぱ軍隊上がりかよ！？　つか何の用ですか！？」

「ミー、超ボーイズラブラブデーッス！　二次元ジャ我慢デキマセェーン！　ト、言ウ訳で若キ高校生ノオ尻ヲ掘ラセテイタダキマース！」

最低だコイツ。こんなのがいるからオタク＝変態にされるんだ！

……ていうか俺、どうなっちゃうんだろう？

相手は軍隊上がり。正直今も抜けだそうと努力はしているが、ここから抜けだせる気配はまるでない。

あらら、まずいざますね。俺の貞操がめっちゃ危機ではありませんか！？

「や、やめろっ！　やめてくれぇぇぇぇぇぇっ！」

「ダイジョーブコワクナイヨー？」

「怖いっつってんだろ！　っておわあぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

何故俺が叫んだと思う？

答えはいつの間にかズボンが脱げていて、下半身はパンツのみになっていたからだ。

コイツ、いつの間に……全然気付かなかった。どこまでプロなんだよ！

「ベアーパンツ……」

「うるせぇっ！　熊さんパンツしかなかったんだよ！」

葵のヤツ、よりによってこんなもの用意しやがって。

オッサンの顔が更に赤くなってニヤけてきただろ！

「サーテ、オパンチュモ脱ギマショーネー」

「嫌ァァァァァァァァァァァァァァァッ！」

ホントお願いします！お金ならいくらでも払うから、誰か哀れな俺に救いの手をください！

「そこまでだ犯罪者！」

「アァン？」

おお神よ！

まだ俺の事を見捨ててなかったのか、誰かが男子トイレまでやってきた！
……でも待てよ。なんか今の女の子の声だった気が……。

「幾人もの罪なき男子生徒を犯し、増してやその……ふ、藤島までっ！　これ以上の狼藉は絶対に許さないぞ！」

あの黒髪ポニーテールのクールな女の子は……あ、明智……明智じゃないか！
風紀委員の腕章が眩しいぜ。こういう時には風紀委員って結構頼りになる存在だ。

「フン！　女ノ子ニ興味ハナイ。立チ去レ！」

「うちの生徒がピンチなのに、立ちさがれるわけがないだろう？」

「フフフ、モウ二度ト刑務所ニハ戻ランゾォッ！」

うわっ、アリックさん前科持ちかよ。それはともかくまずいな……。
アリックさんが明智という女の子に襲いかかるが、アリックさんはド素人ではないんだ。
いくら明智が強いとは言え、流石にまずいんじゃないだろうか？

「ウオオォォォォォォォォォォォッ！」

「……ふっ！」

「ウオッ！？　熱ィッ！」

今、オレンジ色の何かを帯びた物体が飛んでいった。

明智のヤツ……公共の場でさり気なく超能力使いやがった！
しかも炎でアリックが怯んだ瞬間、明智がアリックとの間合いを詰め……なんと。
ビビッと目にも止まらぬ3発ほどの肘打ちを、鳩尾にクリーンヒットさせたのだ。
鳩尾を押さえ、苦しむアリック。アレでも倒れないとは流石は軍隊上がりである。
だが、そんな彼に休む時間など与えられるハズがない。
明智は飛びあがり、あの1～2回は見た華麗なる廻し蹴りを、アリックのこめかみに正確に当てる。
トドメに床に倒れ込んだアリックを、明智がポケットに隠し持っていた縄で縛りつけた。
――――これで、風紀委員ｖｓ元海兵隊の変態アリックの戦いは、完全に終わったのである。

「アフゥ……」

「ようやく最近校内を荒らしているヤツを捕まえられたぞ……っ」

明智はとっても爽やかな笑顔を浮かべていた。
犯人は地面である。いかにも勝利したという感じだな。

「あ、コイツの言う通りホントに熊さんパンツだ……藤島、あんなの穿くのか……」

……はい？
熊さんパンツ……あ、そういえばと俺は自分の下半身を確認する。
確かに俺は下半身はパンツであった。それも、可愛らしい熊さんがフリントされたトランクス。
それを見た瞬間……俺の中の何かか崩壊したような気がした。

「きゃあああぁぁぁぁぁぁっ！　ちょ、頼む見ないでくれぇっ！」

「す、すまん藤島！」

明智に見られた……葵がテキトーに買ってきた、ふざけたパンツを見られてしまった……。

な、なんなんですかこの羞恥プレイは！？

「けーすけ様ぁぁぁぁっ！　ぶ、無事なのですか！？　も……もきゅ？」

「ちょっと圭介！　叫び声聞こえたけどアンタ平気……えっ？」

「……はぁぁっ！？」

ちょっと待てやコラァッ！

どうしてだ、どうして暮葉と伊吹が男子トイレに現れた？

しかも暮葉も伊吹も竹刀で武装。おいおい、それって剣道部の備品じゃないのか？

まあ、それはどうでもいいとして。二つある問題のうち一つは二人が男子トイレに入ってきた事。

そしてもう一つ――――二人に俺の熊さんパンツを目撃された事だ。

「け、けーすけ様……以外とお子様な趣味してるのですね……っ」

「ぷっ！　あっはははは！　圭介！　ちょ、小学生みたい！」

暮葉は赤面しつつ俺のパンツを評価、一方の伊吹は大爆笑。

……これはひどい、あまりにもひどすぎる結末！

「笑うなぁぁっ！　こ、これは葵が勝手に用意した――――」

「大丈夫だ藤島。童心というものは大切だからな」

「そうですよ！　童心は結構大切なものなのです！」

「圭介、案外可愛くて似合ってるわよ？　ぷっ……あっはははは！」

「もう嫌だ！　誰か、誰か俺を殺してくれえええぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

……だかこの時、俺は気付きもしなかった。

三人の女の子に熊さんパンツを見られたことによって、あんなフラグが成立していた事に。

そして、あんなイベントが起ころうとは、全く思いもしなかった――

――――

第３３話，男にとって一番泣けるイベントだよ（後書き）

Ｎｏ５
明智凪紗（あけちなぎさ）
イメージＣＶ：小清水亜美（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『ストライクウィッチーズ』シャーロット・Ｅ・イェーガー役
『スクールランブル』塚本天満役

県立初芝高等学校２年３組在籍。
ジョブ：クールだけど時々可愛い顔を見せる風紀委員
性別：女性
年齢：１６歳。
誕生日：１２月８日生まれ
身長：１６５ｃｍ
体重：４８ｋｇ
胸ランク：大（巨）
趣味：圭介を変態扱いすること、映画観賞、ひなたぼっこ
好きな物：正義、温泉、おじいちゃん、お菓子
嫌いな物：爬虫類全般、キノコ類全般、明智光秀

その他：明智光秀の子孫らしい女の子。
去年まで別な高校に通っていたが、古宇坂市へ引っ越しこの春より初芝高校に通っている。
光秀のせいで自分や自宅が散々な目に遭うも、圭介らの協力もあって解決。
高校では風紀委員を務め、いつも黒木ら三馬鹿を制裁している。
戦闘能力が高く、素手でも黒木を瞬殺し丈夫な圭介でさえ脳震盪を起こす程。

その上発火能力（パイロキネシス）を持ち、火の玉やかめはめ波モドキ、炎剣などを生み出す事ができる。
普段はクールだが、明智家の一件以降圭介らに女の子らしい表情を見せる事が多くなる。
圭介の事を変態扱いしているが、どこか彼の事を意識しているようにも見える。
圭介らとはクラスが違うのにそこそこ出番が多いキャラである。

第３４話，新入部員！

放課後、帰りのＳＨＲも終わりみんな帰る頃。

「んじゃあ僕ら先に帰るなぁ～」

「圭介、部活頑張って」

「お、おう……」

大吾と重原は先に退場、まあそんな事はどうでもいいんだ。

……俺は今、限りなく鬱な気分なのである。理由？そんなのは出来れば聞かないで欲しい。

とにかく俺が負った傷は、ソ連のコラ半島超深度掘削坑よりも遥かに深いのである。

丁度その時、笑顔で教室から出て行く伊吹と小坂の姿が見えた。

いいよなアイツら……今が幸せで。それに比べて俺は今が苦痛だよ。

「けーすけ様！　そろそろ部活に行きましょう！」

「お、おう……」

「もきゅ？　……もしかして、まだ気にされているのですか？」

「だ、黙っててくれ……」

ああ、まだ気にしてるんだよ。女子三人に熊さんパンツを見られた事を……。

暮葉も明智も伊吹も、一応はフォローしてくれたけど……。

でも暮葉も明智も汗かいてたし、伊吹に至っては笑っていたし。
……みんな、下着がアレな時はくれぐれも気を付けるんだよ。
それは女子のみならず、男子にも言えることである。その事は本日身をもって経験したよ。

あ、ちなみに明智がとっちめたあの元海兵隊のアリックさん。
当然警察沙汰になりました。俺も襲われたので色々事情聴取はされたものの、未遂だった上に精神的ショックはそれほどでもなかったので、案外アッサリ警察さんに解放したもらった。
まあ……掘られるのも嫌だけど、それ以上に熊さんパンツを見られた事のほうが恥ずかしくて……。

「け、けーすけ様……大丈夫なのです！　拙者のやつは猫さんがプリントされているのですよ！？」

「お前のパンツの情報聞いても……慰めにならねえよっ」

「し、失敬な！？　報告するの恥ずかしかったのですよ！？」

「じゃあしなけりゃよかったろ！」

「～～～っ。と、とにかく、今のでお相子なのです！」

……どこがお相子だよ。お相子なら猫さん柄のやつ穿いてる所見せろよ！
そうは思ったが、そんな事をレディーに言えるわけもない。
そもそもそれは犯罪なので、俺は決してそういう事は言わなかった。

「わかったわかった……じゃあ、そろそろ部活に行くか」

「はい！　今日の為に拙者、写真撮ってきたのですから！」

「おお、撮ったのか？」

そういえば、俺達が属する部活は写真部。
日頃の活動は写真を適当に撮影し、それを批評し合う事である。
……あ、まずいな。俺は一枚も写真を撮っていないぞ。
どうか青山さんに怒られませんように……しかし、完全に暮葉のほうが部員としては俺より優秀だな。
俺は優秀どころか何もしていないけど。そんな事を考えながら俺達は写真部の部室へと向かった。

「失礼します」

「お邪魔します！」

「おお、藤島君に木下君！」

「先輩方……こんにちはっ」

「圭介っ！　それにえ～っと……木下先輩ですよね！」

写真部の面々が入室する俺達に挨拶をしてくる。
浅間部長に青山さんにあかり、いつもと変わらぬ顔ぶれだ。
我が写真部は、この３人と俺らの５人で構成されているのである……ん？

「お？　どーしたんだよ？」

「ちょっと待て。お前って写真部だったか？」

「超ウルトラ究極不本意だけど、あたいも今日から部員だからな！」

「……なんだってーーーーーーーーっ！？」

イキナリすぎるにも程があるだろ！

いや、あかりが入部＝プライベートに余裕が出来た証なのはわかる。

それはとても喜ばしい事ではある。でも、なんだって写真部なんですか！？

「もきゅ！？　けーすけ様、このお方は以前けーすけ様に攻撃してきた！？」

「ちょ、部長！　何故にあかりが写真部に！？」

「ボクの妹だからに決まってるじゃないか」

「誘ったのはその……わたしですけどねっ」

「圭介のおかげで余裕が出たんだ！　少しくらい遊んだっていいだろ！」

まあ……確かにあかりはまだ高1だ。本当なら遊んでいたい年頃である。

いくら家計が厳しいからって、流石に週6のバイトはキツいだろう。

それに最大の難関であった母親の治療費も、この前の大会の賞金でどうになかった事だし。

あかりがシフトを減らしても、少し収入は減るかもだが特に問題はないだろう。

「もきゅ～!?　けけけ、けーすけ様があかりって……あのお方はけーすけ様をけーすけって……はわわわっ！」

「……暮葉？　おーい、大丈夫か？」

どういうわけか、暮葉は暮葉で暴走しているし。
なんなんだ、今日の写真部はいつも以上にカオスだぞ。

「こ、こんなのおかしいのです！　だって、浅間さんはけーすけ様の事嫌いだったのですよね!?」

「前はそうだったけど、今は好きなんだからな!」

簡単に笑顔で好きと言われると照れますなぁ！
……って、流石に自惚れ過ぎか。あかりの好きは友達としての好きなのだろう。
ちょっとだけドキッとしたけど、ここはドキッとしたら負けだ。

「けーすけ様の事が好きだなんて……い、一体けーすけ様と浅間さんの間に何が!?」

「それが……そのっ、いろいろあったらしいんです。藤島先輩……あかりの事を助けたらしいですっ」

「うん、藤島君には本当に感謝だよ。うちの母も君に会いたいって言っていたくらいだ」

相変わらず自信のありそうな顔で浅間部長はそう言った。
……マザーが会いたいだってさ。他人のマザーに会うのが恥ずかしいのは俺だけだろうか？

「拙者が知らない間に、けーすけ様が感謝されるような事をしている!?　あわ、はわわっ！」

暮葉は目を白黒させ、フラフラと部室内を難破船のように漂っていた。

アイツ大丈夫なのか。ちょっと危ない人間に見えてきたぜ？

しかもその時。前を見ていなかったせいか、暮葉は額を壁の出っ張っている角にぶつけてしまった。

「いたっ！？　も、もきゅ～」

可愛らしい声をあげ、涙目になり痛そうに額を押さえる暮葉。

……くはっ、ナニコレ破壊力高ッ！

一般青少年の俺にとって今の暮葉は破壊力が高過ぎた。やれやれ、本当に萌え死にそうになったぜ。

現実（リアル）で萌え死んだらそりゃもう痛い子確定。それだけは避けなければならないぞ。

「だ、大丈夫ですか！？　……そのっ、絆創膏ならありますよ？」

「平気なのです！　拙者は見た目に反して打たれづよいのですよ！」

いや、滅茶苦茶額から出血しているし！

全然大丈夫そうには見えないし、むしろ出血のせいでヤバそうに見えますよ！

「暮葉、一応世話になっとけって。額から出血してるぞ？」

「そうですよっ！　その……怪我は放置が一番ダメなんですよ……

？」

「うぅっ、千早さんありがとうなのですっ」

「いえいえ……っ！」

毎回そうだが、暮葉ってすぐ他人と仲良くなるよな。
青山さんの事をいつの間にか下の名前で呼んでいる。全く、葵にも匹敵するスピードである。
それに比べて俺は……最近友達が増えた気もするが、相変わらずの少人数である。
で、でも友達の数が多いからイイってワケじゃないんだ！
それほど悲観的になる必要もないよね……多分。

「で、でも本当に一体何が!?　それに先程けーすけ様の事が好きって……そそそ、それって!?」

「き、木下先輩……っ。落ちついてくださいよっ！　あかりの事です、きっと友情的な意味ですから」

「フフフ、藤島君も罪な男だ。まさか、あそこまで動揺するほどのフラグを立てていたとは……」

「なに言ってるんですか部長は……」

そんなフラグを立てた覚えは皆無だぞ。第一、暮葉は仕事の都合で俺の下にいるんだぜ。
普段散々変態言われているんだから、好感度は下手すりゃマイナスだろうぜ？

「ええい！　このままじゃ収拾がつかない。みんな一回落ちつけよな！」

いよいよ収拾がつかなくなってきた所で、あかりが大声で全員にそう呼びかける。
その一言によって騒がしかった部室も、一旦は静かになった。
まさに今はあかりサマサマ。あのカオスな状況を一瞬にして止めやがった。
考えが一直線なバカでも、意外とこういう所はカリスマ的だな。

「勘違いされないうちに言っておくけど、あたいと圭介はただの友達だからな！　あとクソ兄貴は黙れよな！」

「うはっ！？　く、クソって……うあああああっ！」

ただの友達である事を証明してくれたおかげか、暮葉が安堵のため息をついた。
青山さんも暮葉と似たような反応をしている。しかし何故にため息なんだろう？
まあ、多分あかりが俺に敵対心を持っていない事に対し、二人は安心でもしたのだろう。
しかしそれと引き換えに部長の涙腺は崩壊してしまった。当然、あかりの毒舌が原因だ。

「それだけなんだからな！　とにかく、あたいは今日から写真部の部員だ！」

相変わらずハイテンションでお調子なあかり……それでも。

「うんっ、よろしくね……あかりっ！」

「もきゅう……よろしくなのですっ」

「よろしくな！」

笑顔の彼女を拒む者は、誰一人として存在しなかった。

「クソって言われた……妹にクソって言われた……クソクソクソ……うううっ」

ただ一人、歓迎せずにヘコんでいる男がいたが……。

こうして、この日から浅間あかりが写真部の部員になったのである。

これで部員は５人、浅間部長が卒業しても４人は残るぞ。

つまり、ようやく写真部は安泰になったのであった。

第３４話，新入部員！　（後書き）

Ｎｏ６
浅間あかり（あさまあかり）
イメージＣＶ：野水伊織（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『これはゾンビですか』ハルナ役
『そらのおとしもの』ニンフ役

県立初芝高等学校１年３組在籍。
ジョブ：他人想いのやんちゃな娘
性別：女性
年齢：１６歳。
誕生日：４月３０日生まれ
身長：１４５ｃｍ
体重：３８ｋｇ
胸ランク：極小（貧）
趣味：人助け、カラオケ、野球観戦、
好きな物：正義、家族、寿司、愛木みどり（後述）
嫌いな物：邪悪、変態兄貴、野菜類全般

その他：葵や千早の友達で新たに写真部に入った新入部員。
やんちゃで他人想いで正義感が強く、少し思いこみの激しい所があるようで自分が正しいと思った道を突き進む傾向がある。それで自爆する事もしばしば。
強気だが、折れると弱いタイプ。
最初は圭介を暴力魔などと呼び、敵視していたが浅間家の一件で見なおした様子。
運動神経はいいらしいが、頭が致命的に悪く、初芝に入れたのも奇

跡としか言いようがないらしい。
アイドル『愛木みどり』の大ファンらしい。でもお金がないのでイベントに行けない。
実は意外と苦労人で、一時期生活費と母親の治療費の為に一人で無理をしていた。
簡単にまとめると根はいい子だけど馬鹿で一直線である。

第３５話，体育館倉庫で……ウフフ☆

夕刻、部活も終了して帰り道。俺はいつも通り、暮葉と帰路を共に歩いていた。
いや……今日は暮葉だけではない。偶々校門で遭遇した伊吹も一緒である。
伊吹はいつも通り竹刀を背負っている。また自分の家で練習でもするつもりなのだろう。
考えてみればここにいる三人は、みんな部活をやってるんだよなぁ。
俺もノリで写真部を初めてみた。部員らしい活動はしていないが、それでも皆との談笑は面白い。
今日はあかりも新たに混じったしな。まあ……相変わらず部長の扱いは散々だったけどな。

「暮葉っ、部活はどう？　圭介に邪魔されたりしてない？」

「なんで邪魔しなきゃいけないんだよ……」

「そーですよ！　けーすけ様は何もしていないのですよ！」

「暮葉さん……それ、何か俺がプータローみたいに聞こえますぞ？」

「圭介って半分くらいプータローよね」

「俺はニート予備軍じゃねえぞ！？」

第一学校にも通っていて、なおかつ部活にも所属している。
そんな俺のどこがプータローだ。とにかく、俺は絶対にニートにはならねえぞ。

確かに働くのは面倒だが、ニートになったらお金が手に入り辛い。
つまりゲーム購入費とかがなくなってしまうではないか！
って、そんな話部活とかとは何の関係もないな……と思ったその時、事件は起こったのである。

「おわっ！？」

突然、高速で飛び出してきた何者かに首の後ろを掴まれ、俺と二人の距離は次第に離れて行った。

「やった！　ついに噂の男を捕まえたよーーーーーーーーー！」

「け、けーすけ様！」

「ちょ、ちょっと！？」

次第に伊吹と暮葉が点になってゆく。
速いぞコイツ、人一人を引っ張っているというのになんというスピード！
コイツ只者じゃないぞと思ったけど、その前に一つ言いたい事があるんだ。

「意味わかんねえええぇぇぇっ！」

なんで俺は引っ張られているんでしょうか。せめて納得のいく説明をしてからにしてくれぇーっ！
……そんな叫びなどは虚しく、俺は何時の間にか初芝高校の体育館倉庫へと連れてこまれていた。
マットの上にか弱い乙女のように倒れ込む俺。
そもそも、こんな所に倒れている時点で問題なのだが、一番の問題

は……お、俺は男だぞ！
なんで男なのに、これから女子に強姦されるみたいな体勢になってんでしょうか！？

「あの……念の為に確認しておくけど、俺をどうするつもりなんでしょうか？」

俺は目の前の髪を括っている女の子に質問をする。
ところで、あの子をどっかで見たことがあるんだけど……気のせいだろうか？
……いや、気のせいではなかった。胸元には生駒の名前が記されている。
アイツ、房総丘陵トレイルランで俺と競ったヤツではありませんか。

「ごめんね！　どうしても圭ちゃんに用事があったから……っ」

「けけけ、圭ちゃん！？」

「うん！　藤島圭介って名前なんだよね？　だから圭ちゃんっ！」

「……」

べ、ベタな幼馴染の呼び方をされたぞ！
最も、リアルの幼馴染にはアンタか呼び捨てでしか呼ばれた事がないが。
でも生駒のは違う。アレはよくゲームで見かける呼び方。

「確か生駒……だったよな？」

「うん！　私は生駒純奈って言うんだよ！」

「……純奈だからすみにゃん？」

「あっ。それ知ってたんだ。やっぱりナギちゃんと知り合いなのは本当なんだね！」

ナギちゃんというのは多分、明智の事だろう……プッ、ナギちゃんって！

アイツ普段はクールキャラなのに、生駒には随分可愛らしく呼ばれてるな。

それにしてもなんて天真爛漫な子なんだろう。この笑顔が暮葉にも匹敵するくらい眩しいぞ。

「まあ確かに明智とは友達だけど……でも、結局何の用なんだ？」

「おっといけない、本題を忘れる所だったね。単刀直入に言うと……陸上部に入ってください！」

「……えっ？　エエエエエエエエエエエエエエエエエッ！？」

目を見開き、口を全開にして力いっぱいに叫んでやった。

だって、あまりにも展開が唐突すぎるんだもん。いきなり勧誘されちゃったんですよ？

ていうか生駒さん、薄々感じてはいたけど陸上部だったんだな。

「いきなり無理を言うのは悪いって思っているよ。でも、今の圭ちゃんはどうしても陸上部に必要なんだよ」

なんて必死な顔！？

俺は写真部だし、ここはバッサリと断るべきだとはわかっている。
なんだけど……突っ込み所のない真剣（マジ）な表情をされると、断るにも断れねえじゃないか！
ていうか、うちの陸上部って強かったハズである。なんでロクに鍛えてもいない俺を勧誘するんだろう？
この前の房総丘陵トレイルランの勝利なんて、ほとんど奇跡に近かったのに。
……もしかして、強かったハズの陸上部に何か問題でもあったのだろうか？

「ちょっと待て。陸上部に何かあったのか？」

「ううん、ないよ？」

そっかそっか……え、ないのかよっ！

「圭ちゃんは大会で私に勝ったもん。私よりエースとして相応しいもん」

「いや、あの時は背負ってるものがあってですね、殆ど奇跡というか……」

「だったら今日から陸上部の看板を背負おうよ！」

どうして話がそっちの方向に言っちまうんだよ！
ていうか、俺はもう部活やってるから簡単に変更はできないんだよ。
どうにかしてその事を証明し、この勧誘をやめてもらわなければ。

「待て、俺は写真部の部員だぞ？」

「それでも、圭ちゃんの才能を埋めるのはもったいない。だから私と契約して陸上部員になってよ！」

「いやいやいや！　流石に出来る事と無理な事があるって！　てゆーかその幼馴染口調は勧誘の為なのか！？」

「……チッ、バレちゃったよ」

アッサリ認めやがった、なんて悪女なんて生駒さん！
ここは普通、「違うよ？　圭ちゃんは圭ちゃんだもん」とか嘘でも言うよね？
……まあ、さっさと本性を現わしてくれたほうが後のショックも少なくて済む。

「んで、結局お前は何が目的なんだよ……才能とかそう言うのは嘘なんだろ？」

「ふん、バレちゃったら仕方ないね」

いや、自らバラしたんでしょ……。
お前がもう少しうまく隠さないから、殆どバラすような形で俺にバレたんでしょ。
……ていうかまずい。そろそろ時間的に危ない。そろそろ銅魂の放送時刻だ。

「出来れば早く帰りたいんだが……」

「私もだよ。だって銅魂始まるじゃん！」

「お前も見てんのかよ！？」

「はぁ？　アニメくらい、高校生が見るのは常識だよね？」

「いやいやいや、確かに見る人は見るけど見ない人は本当に見ないから！　それ完璧偏見だから！」

あれ、まずいぞ。なんだか銅魂の旧八みたいなツッコミしちゃってるぞ。

クッソォ～、コイツのペースに乗せられてたまるか。

むしろ俺のペースに乗せる勢いじゃないと。銅魂の放送時刻に遅れてしまうじゃないか！

「でもクソ介は見てるじゃん」

「見てるけどその前にクソ介って何！？」

「圭ちゃんなんて媚び売るのホントは嫌なんだよ。お前なんかクシ島クソ介で十分だよ！」

……笑顔で中途半端に優しい口調、それなのに言っている事は滅茶苦茶厳しい。

これはこれで全てが厳しいのとは違うけど、でもなかなかショックを受けるぞ……。

ていうかクソ島クソ介って……コイツ、全くと言っていいほどセンスがねえな。

その呼び方だと頭文字Ｃのイケメン兄貴である、高島涼介だってクソ島クソ介にできるだろ。

「……で、結局何の用？」

「もう誤魔化すのも面倒だから、単刀直入に言うよ。クソ介が陸上部に入る理由は監視☆」

「なんで監視なんだよ！？」

「そんなの……ナギちゃんを盗られない為に決まってるよ！」

「……はいぃっ！？」

わけのわからない事を、わざわざ頬を赤く染めて言っていやがる。一体どういうつもりだ。いや、もう予想はついてるし結果は見えているが……。

「ナギちゃんは私の嫁！　しょーらいはオランダに行って結婚して、親友じゃなくなったナギちゃんとず～っと一緒に幸せに暮らしたいの！」

「な、なんだってーーーーーーーーっ！？」

やっぱりかよ！そういうオチですか、まあ予想通りだけど驚いたよ！いきなり生駒が百合宣言。どうやら生駒にとってのお嫁さんは明智のようである。

それは、同性結婚が認められているオランダに行って、ず～っと幸せに暮らしたい程であるらしい。

とうとう『とある科学の変態淑女』ポジションが、たった今ここに誕生してしまった……。

「お、思い知ったかクソ介っ！　クソ介なんかにナギちゃんとイチャつく権利、これっぽちもないんだよ！」

「そもそも俺、明智とそういう仲じゃねえし……」

「ウソだ！　だったらなんで、ナギちゃんはクソ介が熊さんパンツ穿いてるって知ってるの！？」

「く、くま……ハッ！？」

どうして明智が、俺のパンツが熊さんパンツだって知ってんだろうと一瞬思った。

だけど、思い出して見れば今日、しっかりトイレで見られてしまった気がするんだ。

でも明智は知ってて不思議じゃないが、どうして生駒が……ハッ！？

明智のヤツ……俺の下着の話を生駒にしやがったんだな！

「それって……ナギちゃんとエッチな事した証拠だよね？」

「してねえよっ！」

むしろ男に無理やりされそうになったわ！

そんな可哀想な俺を慰めて欲しいわ！

「とにかく、ナギちゃんを汚すクソ虫は絶対許さないんだよ！」

とうとう虫扱いされてしまった。明智を汚した覚えなんて一切ないのに。

ていうか、明智とそんなイベントなんてなかったのに。

胸揉みとキスは単なる事故、しかも生駒が知ってるハズもないのに。

「大体熊さんパンツなんてありえないよ！　ロリっ娘の特権を男が穿くな変態！」

「俺だって好きで穿いてんじゃないわっ！」

「とにかく、ぜぇーったい監視の為に陸上部に入ってもらうんだから！」

「だから、俺はもう写真部だから無理だって」

「いいよね別に？　クソ介はクソ虫の癖に足速いから、何の影響もないよね？」

「同じ写真部の仲間に迷惑かかるだろ」

ああもう、このままじゃ埒が明かない。
なんとかして、この面倒くさい百合女とのイベントを終了させなければ。
エロゲー鍛えた俺の実力……見せてやろう！

「やだやだ入ってくれなきゃやだっ！」

「駄々こねるなよ！？　……はは～ん、もしかしてお前、明智も好きだけど俺も好きなのか？」

「はぁ？　なにキモイ事言ってるんだよ、２万３千回くたばったほうがいいと思うよ」

……ひどい、照れのテの字すらなかった。
どうやら、生駒の俺に対する好感度はマイナスのようである。
しかし、面倒くさいポジションのキャラが増えてしまったな……。
これも全部、あそこで熊さんパンツを見られたせいだ。

でも、一番の原因は学校で男を狙いまくっていた、あの元海兵隊の変態野郎のせいだ！

「とにかく、陸上部には入ってもらうよ！」

「嫌に決まってんだろ……」

「じゃあ陸上部はもういいから、私の弟になろ？」

「なんでそうなるんだよ！？」

「姉として、類人猿のクソ介を監視できるからに決まってるんだよ！」

「絶対にお断りします！　ていうか明智には何もしないからもう解放してくれ！　銅魂始まるだろ！？」

俺が言った瞬間、彼女がいきなりきょとんとした顔になった。

やがてわなわなと身を震わせ。

「あああぁぁぁぁっ！　い、いけない。銅魂の時間だよ！？　クソ島クソ介！　ぜぇーったいナギちゃんに手を出さないでね。手を出したら腸ぶちまけに行くんだよ。わかったなら明日までに写真退部して陸上部に来るんだよ！　きょ、今日の所は同じオタクとして見逃すから！」

そんな特撮にでも出てくる、雑魚敵のようなセリフを吐きながら生駒は遠くへ消えて行った……。

なんというか、アイツの言葉がもう支離滅裂すぎる。

ていうか生駒ってやっぱオタだったのか。陸上部女子でオタクとか、

どこの俺の妹ですか。
はぁ。それにしても、あかりと仲良くなれたと思いきや今度は生駒か。
人間関係って本当、難しいよなぁ……。

――結局、俺が家に帰れたのは銅魂が始まって15分後の事であった。
しかも、保険に録画しといたヤツは失敗。
今日は色々な意味で悲劇な一日でした……がく。

第３５話，体育館倉庫で……ウフフ☆（後書き）

Ｎｏ７
青山千早（あおやまちはや）
イメージＣＶ：花澤香菜（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『化物語』千石撫子役
『Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！』天使　／　立華かなで役

県立初芝高等学校１年３組在籍。
ジョブ：物静かな謎多き後輩
性別：女性
年齢：１５歳。
誕生日：１１月２１日生まれ
身長：１５７ｃｍ
体重：４５ｋｇ
胸ランク：中（美）
趣味：写真撮影、読書、音楽鑑賞
好きな物：写真、本、マヨネーズ、友達
嫌いな物：変態部長、自宅、仕来たり

その他：写真部に所属している１年生の女の子。葵やあかりとは友達。
控えめな性格だが、その容姿から男子にはモテモテ。ただし当の本人はその状況に困惑している。
圭介が嫌われている事情や本当は優しい人だと知っている様子。
将来は写真家になりたいと思っており、その為にあまり好きではない浅間部長のいる写真部に所属している。
上記の通り、控えめな性格ではあるが意外と発言はストレートであ

り、浅間部長に対する文句はいつも圭介達以上にキレがいい。
勉強も得意であるが運動は苦手らしい。写真撮影の他に小説執筆が得意かも。
そんな彼女だが、まだ謎が多い子である。

第３６話，生駒純奈の暴走

とうとう６月１日……今日から夏服期間である。ちなみに中間テストは６月７日から。
正直に言おう。今物凄く鬱な気分である。その理由は当然テストが近いからだ。
前にも言った気はするが、俺の成績は結構ギリギリなのである。
増してやここ数日、生駒の勧誘地獄が……。

……最近の例としてはまず三日前。
「クソ介はスク水好きなんだよね？　ほ、ほら。着てあげたんだから陸上部来てよ！」と、何故かスクール水着を来て勧誘。ただしスク水を着ているからと言ってデレがあるわけではない。
そもそも、生駒が俺に向ける感情は敵意のみである。
正直、この日ほど天罰術式を使いたいと思った事はなかった。

……二日前。
今度は「クソ介！　陸上部に入らないと、風穴あけるわよ！？」と、何故かチアガールの服を着用し、おもちゃの拳銃二丁を持って俺に迫って来たんだ。
いやいや、流石に無理があるだろ。第一生駒はツインテールじゃないじゃん。

……そして昨日。
昨日は「もう、私のへそくりカロリーあげるよ」とオムそぱパンを貰った後、「ねー！　陸上部に入ってよ！」と迫って来たんだ。多分今までで一番キャラが合っていたと思う。元ネタも陸上部だしな。
ていうか一連の勧誘でわかった事。生駒は結構なオタである。

それも、どう考えても男性向けのアニメばかりであった。
これについて、暮葉や伊吹に意見を聞いてみたんだけど……。
「いいじゃない、楽しそうね！」
「拙者も、なんだか楽しそうに見えるのです！」
「つ、使えねえこの二人いいいいいいいいっ！？」
結局無駄でございました。
いや、大体予想はできていたんだけどさ、ここまで全くフォローをしてもらえないとは。
そんなことをしている間に昼休み。来ちゃったよ……絶対生駒とか来るだろ。
「クソ介クソ介クソ介～っ！」
やっぱり来たよ……しかも、今日の生駒の服装はこれまたオタクなもの。
……ていうか、それはお偉いさんに訴えられるんじゃないか？
だって、どう考えても某ボカロ風じゃん……。
「おい、その頭の上の白いリボンってモロアレじゃねえか！」
「当然だよ！　だってこれコスプレだもん！」
「お前……人をオタだと思って。つーか必死すぎだろこのキモオタ！」

「はぁ！？　クソ介も同じだよね。同族嫌悪とかどうかと思うよ！」

「学校で平然とコスプレしているヤツが言うなっ！」

ていうか周りの反応もおかしい。どうしてこんなに浮いた恰好のヤツがいるのに誰も気にしないんだ？

まるで、日頃からコイツがコスプレをしていて、いい加減見るのも慣れたって感じじゃないか。

中にはごく普通の人もいて、生駒を軽蔑するような冷たい目で見ている人もいるが。

つか確かに俺もオタクの部類だろうが、学校で平然とコスプレする奴と同類には思われたくない！

「うるさいよクソ介！　ロードローラーで引き殺すよ！？」

「ロードローラーネタやめい！」

つーか今更ロードローラーっすか。

後のタコさんネタでさえ、古いし飽きたネタかもしれないという時期なのに。

「じゃあ猫村コスのほうがよかったかな？」

「そういう問題じゃねえ！　学校でコスプレするな、あとついでに勧誘もやめてくれっ！」

「うるさいよクソ介！　いい加減にしないと……みっなみなにしてやんよ？」

「お前、もう狙ってるだけだろ……」

流石にそろそろ付き合ってられなくなってきた。
まあ、あかりの時とは違って実害があるわけじゃないし、そこらへんはあかりよりはマシだけど。
でも……正直相手にするのが面倒になってきました。
やっぱ、この状況が続くと学校生活も疲れるだろう。
こうなったら最後の手段だ。生駒の原動力に生駒の暴走を止めさせてもらうしかない。

――――というわけで、俺は生駒を振りきった後に明智の所に向かった。
クラスメイトに訊いた所、今彼女は仕事中なので校内のどこかにいるんだという。
廊下を歩く俺はふと思う。ゲームだとヒロインの居場所に矢印がつくよな。
やっぱり……現実（りある）というのは不便な世界だ。

「ぎゃあああああああああぁぁっ！」

「く、黒やん！？」

「黒やんがまた負けたぁぁぁぁっ！」

その時、どこかで聞き覚えのある馬鹿みたいに3人の声が耳に入ってくる。
この時俺は確信した。間違いなく明智はこの近くにいると。
断末魔が聞こえた場所へ行くと、三馬鹿のリーダー格である黒木がトイレ前で伸びている。
その周りには、勝ち誇った表情の明智と泣き顔の馬鹿2人の姿があった。

……てゆーか黒木、アンタまた負けたんですか。

「では、私はもう行くぞっ」

「は、はい！」

「お気を付けてっ！」

ダメだこりゃ。赤佐と大林は完全に明智の言いなりである。
これはもう黒木の権力が消えうせたか？

「あっ、変態藤島……っ」

「変態は余計だろ」

明智が向かって来たのはまさに俺のほう。
たまたま居合わせた俺達、明智は俺を目撃すると変な挨拶をしてきたのだ。
変な挨拶とは言っても、俺らにとっては普通の挨拶になりつつあるが。

「さっきの……見てたのかっ？」

「あんだけ悲鳴が聞こえれば嫌でも見たくなるよ」

「ごめん……っ、私は風紀委員なのに、風紀を乱すような悲鳴をあげさせて」

本当に彼女は表情を暗くしていた。
いやいやいや、まずいだろコレは。どうせ黒木から喧嘩を売ってき

たんだろう。
だったら別に、明智が落ち込む必要なんてないだろうぜ。
というわけで俺は、出来るだけ優しい表情を作り彼女に。

「気にするな。どうせいつものアレだろ？　黒木のほうから喧嘩を売ってるに等しいんだし、皆もその辺はわかってると思うから」

そう言ってあげた。すると彼女は上目遣いで。

「……ホント？」

……ぐはっ、すみません今のは破壊力が強すぎた。
一般青少年な上に、チェリーボーイな俺さんにはちょっと危険でした。
何故だ。明智が時々見せるこの女の子的な表情。いつもの明智は全然違う。
って、こんなくだらないこと考えてる場合じゃない！

「嘘だったら誰も明智の相手なんてしないだろ？」

「……うん、ありがとな……藤島っ」

そう言う彼女の顔はほんのり赤く、そしてなんだか嬉しそうな表情をしていた。

「気にするなって。それよりもちょっと頼みがあるんだけど」

「ん、頼み？　藤島が私に？」

「お、おう。明智にしかどうすることもできない頼みだよ」

「わわわ、私にしかどうすることもっ！？　～～～～っ！」

明智の顔は、一瞬にしてイチゴのように真っ赤に染まった。
その上、驚愕したように口をかなり大きく開けている。
なんというオーバーリアクション。俺……明智に何か言ったっけ？

「あ、あのー。大丈夫か？」

「はっ！？　だ、大丈夫だ問題ないっ！　それで用事ってなんだ！？」

そのなんてことのない一言が、某シャダイネタに聞こえてしまった俺は病気だろうか。
それにしても明智は本当にどうしたんだろう。そこまで慌てて答える程の事だったのか？
まあとにかく、話は聞いてくれるっぽいし、素直に頼みごとをしてみるか。

「お前の友達に生駒純奈っているだろ？」

「……え？　す、すみにゃ……げふんげふん！　純奈がどうした？」

せき込む明智に一言。お前絶対すみにゃんって言いかけただろ。

「いや、アイツの勧誘がしつこ過ぎて困ってるんだよ」

「……え？　もしかして用事って……」

「頼む！　アイツの原動力は明智みたいなんだ。だから明智の力を

生駒の暴走を止めてくれ！」

もう、クソ介クソ介言われている俺には止めるの無理です。
いくら俺でも限度というものがあるんだ。
生駒の暴走を止めるのは、賞金１０万円獲得よりも遥かに難しい事だ。

「それが……頼みなのかっ？」

「あ、ああ。頼む！　アイツは俺の話を聞こうとしない。もう明智だけが頼りなんですよ！」

俺は土下座をしながら明智に頼みこんでいる。
端から見れば情けないだろう。でも、それほど俺は必死なのだ。
とにかく、生駒の毒牙から一刻も早く逃れたいのである。しかし、俺の話を聞いた明智はと言うと。

「……はぁ」

何故だか、凄まじい脱力感を彼女から感じる。
あのため息からもソレが強く伝わってくる。

「……？　どうしたんたお前？」

「いや……別になんでもないっ」

「そ、そっか」

明智はまるで期待していた話とは全然違ったかのよう、肩を落とし残念そうな顔でガッカリしていた。

「……とりあえず、純奈の事は任せてくれ」

「いいのか？」

「純奈は私の友達だ。それに藤島の疲れた顔はその……見たくないっ」

「おお！　マジでやってくれるのか！？」

「あ、あたまりえだっ」

明智は微妙に視線を俺から逸らしながらも、生駒の暴走停止を約束してくれた。

この時、俺は改めて明智の優しさを知ったのである。

やっぱり明智はいい人だったぜ。相変わらず俺を変態扱いしてくるけどね。

これで、俺はもう生駒に付きまとわれることもなく、いつも通り伊吹をからかう事ができるぜ。

この時の俺は久々にウハウハな気分であった……。

第３６話，生駒純奈の暴走（後書き）

Ｎｏ８
小坂亜紀（こさかあき）
イメージＣＶ：佐藤利奈（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『とある魔術の禁書目録』御坂美琴役
『みなみけ』南春香役

県立初芝高等学校２年４組在籍。
ジョブ：テキトーすぎるクラス委員
性別：女性
年齢：１６歳。
誕生日：１０月１１日生まれ
身長：１６２ｃｍ
体重：４８ｋｇ
胸ランク：大（巨）
趣味：グッズ集め、映画観賞、読書
好きな物：戦国武将、そのあたりの歴史、映画、ラーメン、圭介争奪戦観戦
嫌いな物：大吾、玉ねぎ、面倒な事

その他：圭介や暮葉のクラスメイト、伊吹の親友。
超アバウトで面倒くさがり屋な人。
一応クラス委員であるが、面倒くさがり屋な為あまり頼りにはされていない。でもやる時はやるタイプらしい。
伊吹の親友なだけに、伊吹の気持ちには気付いている様子。
成績は意外と優秀で運動も人並みにはできるようである。
大吾とは喧嘩友達、重原との関係は至って普通。無類の戦国好き。

また大吾の長宗我部という名字に関して『長宗我部元親に失礼』と言っている。
圭介の事は『圭くん』と呼んでいる。

第37話，誤解ほど恐ろしいものってないよね！

「クソ介のせいでナギちゃんに怒られたんだよ！？」

残念賞。

明智に頼んだ結果がこのザマだ。

そう、生駒が一筋縄で引っ込む程度の小者なら苦労はしない。

だけど生駒は人様の胸倉をしっかりと掴み、笑顔で俺にキレていた。

確かに明智は仕事をしてくれたようである。だからこそ生駒はその事について怒っているのだ。

現在5時間目と6時間目の間の10分休み。水を飲もうと思ったら捕まっちゃったんだよ。

……女の子に胸倉を掴まれる俺って、男として結構情けない気がする。

「お前がしつこいのが悪いんだろ？」

だけど俺だって男だ。最後のプライドとして反論だけはさせてもらうぞ。

まったく、俺らはどこのヤンキー少女とフツーな野郎だよ。

まあ、生駒はヤンキーとは対極の体育会系オタクだけど。

「だからってナギちゃんに言う？　私、ナギちゃん相手には反論できないんだよ？」

「それってさ、自分が弱いって言ってるようなもんじゃね？」

「クソ介よりは弱くない！　私みたいな女に胸倉つかまれてる癖に。カツアゲされる気弱な中学生じゃないんだよ！？」

「じゃあ、殴ったりしてもいいのかよ？」

「男として最低だと思うよ！」

「だから対処しようがねえんだろうが。そろそろ授業始まるから離してくれないか？」

「だが断る！」

生駒は人様の胸倉を掴みながらどや顔だ。

畜生、最初に出会ったときはいい子そうだったのに……。

イザ関わってみればただの百合な問題児だったよ！

なんで俺の周りにはこう、残念な人ばかりが集まってくるんだろう？

「お前、授業に遅れてもいいのか？」

「大丈夫だ、問題ない！」

「またそれっすか！？　シャダイ好きだな！？」

「ニヤ動ネタ全般大好きなんだよ。クソ介もそうだよね？」

「いや、ニヤ動自体あんまり利用しないけど」

たまに友達がやってるニヤ生は視聴するし、時々ＭＡＤは見るがそんなにしょっちゅうは利用しない。

意外かもしれないけど、これでもニヤ厨ではないのである。

ちなみにニヤ厨とは重度のニヤニヤ中毒者。あるいはそれらに誇りを持つ人の事だ。

「残念ボーイだねクソ介っ！　ニヤ動利用しないと人生の9割は損するよ？」

「それほとんどじゃねえか！　一体何時間ニヤニヤしてんだよ」

「5時間近いかも……」

「もうすぐニヤニヤ廃人じゃねえか！　この廃人陸上部員！」

つーかそんなにニヤニヤしていて、オマケに陸上部でも頑張っている。
そんな生駒は一体いつ寝ているんだ。ちゃんと睡眠とってるんだろうか？

「廃人なんてそんな……私、ニヤニヤニート狙ってるのに」

「親が泣くからやめなさい！」

一日に16時間以上もニヤ動に常駐してられるか！
逆に達成できる人がいたとしたら、そいつは俺の前に来い。
名誉ある『全国ニヤニヤニート大賞』を授与しようじゃないか。
それにしても、体育会系女子って一番ニヤ動と縁がなさそうなのにねぇ……。
人というのは、見た目とジョブで判断しちゃいけないんだなと改めて思ったぜ。

「とにかく、クソ介のせいでナギちゃんに怒られちゃったよ？」

「いいだろ？　好きな人に罵られるってのはMにはたまらない事だ

ろ？」

「そ、それもそうだけどっ。確かにナギちゃんに罵倒されるとキモチイイけど……で、でもそれがクソ介の為だと思うとムカつくんだよ！」

これはひどい。

そんな理由の為に俺は胸倉を掴まれているの？

ていうか、生駒って明智に罵られたいドMの変態さんだったのか。

やっぱり、生駒はとある科学の変態淑女ポジションであった。

「そもそも、お前がしつこいからこんな事になったんだろ？」

「だって！　クソ介とナギちゃんがその……下着を見せ合う仲に――」

「ストーーーップ！　俺は明智の下着なんて知らねえ！」

「ほ、ホント？　今日のナギちゃん何色？」

「知るか！　白とかが無難だと思うけどな」

「合ってるじゃんこの変態クソ介！」

白で合ってたのかよ！

クソッ、勝手に予想しなければよかった。明智は白だろうと妄想した結果がこれだよ。

せめて、アダルトでセクシーな黒と言っておけばよかった。

畜生、女子の下着を妄想する事でここまで後悔した事なんて……今までなかったぜ。

でもやっぱり……伊吹の縞パンは最高だった気がするぜ。
でもなんでだ、なんでコイツは明智の下着の色を知ってるんだろう？

「ちょっと待て。お前が明智の下着の色を知ってるって変じゃね？」

「普通だよ。だってこっそり見たもん」

「……どうやって？」

「スカートめくりがメジャーだよ？」

「……めくったのか？」

「うん！」

「最低だコイツ！？」

どこまで変態なんだよ。学校でスカートめくりって二次元以外じゃ見たことねーぞ。
とにかくよ～くわかったぜ。生駒は百合で変態で思いこみの激しい、危険人物だってな！

「黙れクソ介！　クソ介はナギちゃんを脱がして自分も脱いだ癖に……」

「待て、俺は脱がされたんだ！　決して脱がした覚えはない！」

しかも俺は男なのに男に脱がされたんだぜ？
これ以上、男として可哀想な事はないと思うんですよ。

「ナギちゃんは男を脱がすなんて不埒な真似しないもん！　嘘つかないでよクソ介！」

「明智に脱がされんだじゃねえよ！」

「じゃ、じゃあ誰に脱がされたの？」

「……男、今日現行犯逮捕されたヤツいただろ？」

その時、生駒の表情が驚愕のものへとなっていた。
目を見開き口まで半開きである。本当に彼女は事実に驚いているようである。
ていうか、ノリで話していたけどこの展開だと誤解が解けそうだな。
よかった。これで俺と明智の件は白だって彼女に証明できる――――！

「そっか……クソ介は仲間だったんだ」

「は？」

なにコイツ、いきなり納得したような顔をしてどうしたんだ？

「ごめん。私、完全にクソ介を誤解していたよ……」

「え？　あぁいや、わかってくれたんならいいけど……」

「うん。そうだよね……だってクソ介は……同性愛者なんだよね！？」

「はっ……はあぁぁぁぁぁっ！？」

ががが、同性愛者ですとおぉぉぉぉっ！？
ちょいと待ちやがれ。今の会話からどうしてその答えに至ったんだ。
アレは俺は望んでいない。下品な言い方だがレイプというヤツだった。
まあ、未遂だったからよかったけど、された側としては精神的にショックだったんぞ。
それがどうして……どこから同性愛者という答えになりやがったんだ！

「わ、私も男は大嫌いだよ……でも女の子は好きなんだっ。そして……ナギちゃんが一番好きなんだよ？」

「そうか、それはよかった。でもその前に一つ言いたい事が――」

「クソ介も同性のほうが好きだったんだね！　それで、クソ介は誰が好きなの？」

「おいちょっと待――」

「同じ同性愛者として、私はクソ介の恋愛相談に乗るよ？」

「だからちょっと待ちや――」

「まちや……？　町屋君の事が好きなんだね？」

頼む生駒さん。お願いですから……すこしは俺にも喋らせてください。ていうか誰だよ町屋君って！
初耳だし知らねえよ。でもこの展開的に町屋ってのは男なんだろう。

そんな……俺は男だ。なのに男と恋愛するなんて死んでも嫌じゃあああぁっ！
ここは断固否定。町屋君なんか好きじゃないって生駒に言ってやらねば！

「違うわ！」

「待ってて。今すぐ町屋君を呼んでくるから」

「町屋君って実在人物なのかよ！？」

「私の前のクラスメイトに町屋君がいたよ？　だから今からクソ介と町屋君がトイレに行くイベントを――――」

「やめてくださいお願いします！　そして町屋君逃げてぇーーーっ！」

俺は本当に町屋君を呼びに行こうする生駒の手首を、しっかりと握っていた。
だって……呼びに行かれたら困ることしかないじゃねえか！

「けーすけ様っ！」

「あ？」

おお、あの綺麗なベビーピンクのセミロングにピンと立ったアホ毛。そして小柄な体躯にあどけない顔、とても元気な敬語。まさしく暮葉であった。
何故だろう。このタイミングで登場してくれた暮葉が女神さまに見える。

「あ！　こんなところにいたのですね！」

「く、暮葉！　丁度いい所に来た。誤解を解いてくれ！」

「もきゅ？　なんの誤解ですか？」

「そ、それは……」

……それを正直に言いやがれと？
う～ん、いくら相手が暮葉でも流石に恥ずかしいぞ。
ホモ疑惑をかけられてますなんて言ったら……ああ、嫌だよ言いたくないよ！

「って、疑惑は後で聞くのです！　それよりけーすけ様、野原先生がお怒りなのですよ！？」

「えっ？　あっ！」

俺は時計を確認し、初めて自体の深刻さに気付いた。
だって……もう授業が始まってんら１０分近くが経過している。
しかも次の授業は野原先生の数学ではありませんか。

「早くなのです！　早めに行ったほうが身の為なのですよ！」

「お、おうそうだな！　とりあえずよく聞け生駒！　俺は同性愛者じゃねえ！」

「そ、そうなの……？　あ、わかった！　クソ介はバイなんだね！」

「それも全然ちげえええぇぇぇぇぇぇっ！」

「けーすけ様！　揉めてる場合じゃないのです！　野原先生の野原神拳が炸裂しちゃうのですよ！？」

「そ、それも嫌だ。というわけでさらばだ生駒っ！」

もう、生駒のくだらないＢＬ話には付き合ってられない！
そんな事よりも早く授業へ行かなければ。じゃないと……俺が野原先生に殺されてしまう！
暮葉もそれを恐れてか、俺の手を引いて全速力で走っていた。

こうして俺は生駒に、完全に同性愛者か両性愛者だという誤解をされてしまったのである――――

第３７話，誤解ほど恐ろしいものってないよね！　（後書き）

Ｎｏ９
長宗我部大吾（ちょうそがべだいご）
イメージＣＶ：吉野裕行（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『カオス；ヘッド　－ＣＨＡＯＳ；ＨＥＡＤ－』西條拓巳役
『機動戦士ガンダムＯＯ』アレルヤ・ハプティズム役

県立初芝高等学校２年４組在籍。
ジョブ：完全二次元派オタク男子
性別：男性
年齢：１６歳。
誕生日：７月１２日生まれ
身長：１７１ｃｍ
体重：６０ｋｇ
趣味：アニメ鑑賞、漫画、ラノベ読書、ゲームプレイ、その他二次元全般
好きな物：二次元の女の子。ラノベ、漫画、アニメ、ゲーム等々……
嫌いな物：現実、現実女子、その他不条理なモノ、理不尽なモノ。

その他：圭介の悪友Ａ。何故かいつも重原とつるんでいる。
我欲に素直であり、圭介ですら『変態』と引くほどの男。
おちゃらけた性格であり圭介にすらウザがられ、女子からの評判は心底悪い。
しかし現実女に何を言われても平気らしく、完全二次元派。
成績は意外と優秀だが、校則で禁止されているハズのＰＮＰを学校に持ち込んだり、その他生活態度にかなり難があり教師陣は彼を問題児扱いしている。

自称『ギャルゲーの神』、しかしネット上で有名な某落とし神には到底敵わない存在である。
なんだかんだ言って圭介や重原とは仲がよく、この男三人で行動する事は多い。一人称は『僕』、しかし口は悪い。

第３８話，疑惑の圭介

「圭介、あんたってホモだったの？」

「圭くんまさかのＢＬ！？」

「けーすけ様って実は男性のほうが好きだったのですか！？」

「……」

ヘルプ・ミー！

誰か助けてください！

――――あれからしばらく経過し、テスト明けで憂鬱な気分の月曜日の事。

校内にはある噂が広まっていた。それは、俺こと藤島圭介ガチホモ説である……。

……多分、こんなのを広めたのは生駒だろう。ていうかアイツ以外には考えられない。

そうじゃないとすれば、あの時の会話を誰かが聞いていたとか……

まあ、考えても仕方がない。

おかげで男には近寄るな言われるわ、女子も大半がキモがり腐女子だけが歓喜。

それどころかリアルガチホモ青年が俺に近寄ってきて、それを迎撃すべく時々路地裏で喧嘩。

……もう嫌だ。色々突っ込みたい事があるけど、まずはどうしてこうなった!?

「なぁ、どうすれば誤解って解けると思う？」

「誤解は変な事をすると余計に真実と思われますよ？　拙者は我慢する事をオススメするのです！」

「そうね。まぁ少なくとも私らはちゃんとわかってるから。気にしないで生活すればいいわよ」

「僕はそもそも二次元以外に興味ないし、同じオタクなら別に圭介がどうであろうが関係ねえぜ？」

「まあ、俺も圭介が美乳派なのはわかってるから」

……重原、それフォローになってなくね？
確かに俺は美乳派だけど、要するに変態って言ってるようなもんじゃないか？
失敬な、俺は変態ではなく紳士だぞ。

「圭くん。いっそ女子と付き合うってのはどお？」

突然、小坂がニヤニヤしながらとんでもない事を言いだした。

「ぶっ！　な、なんでだよ!?」

「だって、要するに圭くんが女に興味がない人って誤解だよね？
だったら簡単、女子と付き合っちゃえば万事解決だ！」

た、確かにそうだ……！
俺がリア充になっちまえば、もうそんな誤解とはオサラバできる。
でも簡単に言うけどさ、高2にもなって彼女いない歴＝年齢だぜ？
そんなモテない野郎が、これから先彼女が出来るとは限らないだろ。

「だだだ、ダメよ亜紀！　圭介に彼女なんてその……か、彼女の身が危険よ！」

「俺がデートDVするような人に見えるんですか！？」

「で、デートDVはしなさそうだけど……む、無理やりエッチな事しそうよアンタは！」

「俺はそこまで強引な男じゃねえ！」

伊吹もとことん失礼なヤツだぜ。そんなに強引な男なら今頃彼女の一人や二人はいたっつーの。
肉食系じゃないからいないんだろうが。でも草食系ってわけでもねえし……雑食系？
まあ、身体が丈夫な事と回復力が高い事。念じながらキスをすると強くなること以外、俺は多分ごく普通の健全な男子高校生である。
とにかく、俺はそんなに強引エロじゃないんだよ。

「だったら俺と一緒に武道やらないかい？　男にも女にも興味がないように見えるよ？」

「いやダメだろ！　男と格闘する時点で余計に誤解されるから！」

重原みたいな爽やか系男子との武道も、当然腐女子ホイホイなネタなのでアウトだ。

「だったら一日中ＰＮＰでギャルゲーをするってのは！？　眼鏡なら僕が貸すぜ！？」

「どこのオタメガだ！」

「僕は尊敬してるけどな……っ」

「お前はリアルにオタメガだっ！」

ダメだ。大吾の案に乗ったら人生負けな気がする。そう言うのは家でこっそりプレイするに限る。
流石に学校でプレイする気にはならないな。

「けーすけ様っ。拙者はやっぱり我慢が一番かと思うのです」

「そ、そうよ！　恋愛とか格闘とかギャルゲーなんかより、我慢が一番いい方法よ！」

「そ、それもそうだよな……っ」

恋愛なんて可能性がないし、格闘なんかモロ腐女子ホイホイだからアウト。
学校でギャルゲーなんて、そんなオタメガチックな真似は俺にはできないぜ。
でも……我慢するのも辛いよなぁ。だって大半の人にはキモがられ、一部の人には集られて……そんな日常が続いてみろ。絶対現実が嫌になってくるから。

「そんな圭くんにやっぱり、あたしは恋愛をオススメしよう」

「小坂……お前は人の心でも読めんのかよ？」

「ふっふっふ～！　あたしはこうみえても友達から鋭いと評判なんだっ」

小坂のヤツ、地味にドヤ顔で自慢してるし……。

まあ、確かに鋭いというのは世間では便利なスキルだ。

「確かに、亜紀ってホントに鋭いわ……」

「特に伊吹の気持ちはお見通しっ♪」

「お、お見通しってどういう意味よ……？」

「え、気になるひ――――」

「だぁぁぁぁっ！　そ、そんなのいない！　いないわよ！」

やけに必死になって伊吹は叫んでいた。

言いかけで伊吹の叫び声が入った為、結局小坂が何を言いたかったのかがわからなかった。

だけど、伊吹にとってはあまり話して欲しくなかった事なんだろう。

「って、圭くん。やっぱりあたしは誤解を解くために彼女を作るべきだと思うの」

「まあ、お前の意見は確かにいいかもしれないけど。でもねぇ相手が……」

3度の恋は失敗。現在出会いのカケラもナシ。
仮に暮葉達とのアレが出会いだとしたら、出会った女の子は美少女だけどどこか残念。
辛いぜ……非モテ男は。

「そうだ！　身近な人から選らべば？　例えば暮葉とか伊吹とか隣の明智さんとか」

暮葉は何故目を輝かせている？
そんなに人の色恋沙汰が面白いのか。まあ暮葉だって女の子だしな。

「もきゅっ!?　せ、拙者もなのですか!?」

「わぁぁ、私は別に対象にしなくていいわよっ！」

「あのなぁ……簡単に言うけどそれも結構無理があるだろ？」

「そうだねぇ。じゃあじゃあ、圭くん的にあたしらの中で誰が一番好み？」

「えぇっ？　好みかぁ……」

まあ、好みの女の子を妄想するくらいなら。
でも、それを本人の前で答えろというのも中々の羞恥プレイである。
ていうか、俺は誰が好みなんだろうか……とりあえず選択肢を絞ろう。

1：暮葉
2：伊吹
3：小坂

4：明智
5：青山さん
6：あかり
7：生駒
8：葵

……うわ、絞ろうと思ったけど結構な人数になってしまった。
まずは……葵は実の妹だから論外。生駒も元はと言えばアイツの暴走がこの結果を生んだんだ、当然論外である。ていうか女子をこんな風に評価するのって……何か嫌だな。
でも実際の所を言うと俺は美乳な青山さ――――げふんげふん！

でもなぁ、青山さんとはたまに1対1で話すけど、回数自体は少ないし。
明智とはそこそこ話せるが、近寄ると変態生駒さんからボロクソ言われそうだ。
あかりはシスコンの浅間部長の監視に遭いそうだ。
そうなると話しやすいのは暮葉か伊吹か小坂の三人。
そうだ。どうせ無駄だろうが、からかった時の伊吹の可愛い反応が見てみたいかも。
……よし、伊吹だ。いつもの調子で伊吹と答えてみよう。

「圭くん、決まった？」

「お、おう。俺の好みだっけ？」

「そうそう！　って、誰？」

「伊吹、君に決めたっ！」

なんとかモンスター風に、俺は伊吹を指名してみる。
すると伊吹はわなわなと震え、目を白黒させ。

「え、エエェェェェェェェッ！？」

彼女は本気で驚いていた。
まさか、自分の名前が出てくるとは思っていなかったかのようである。
……うん、やっぱり伊吹の反応が可愛い。

「もきゅ！？　け、けーすけ様……伊吹さんの事が好きだったのですか！？」

「圭介……まさかの幼馴染ルート突入か？」

「やっぱり。まあ俺は絶対国宗さんだと思ってたよ」

「お前らなぁ……タイプを聞かれただけなのに、なんでそこから好きって事になる？」

しかもいつも通りのジョークなのに。
ていうか、タイプ＝好きな子というのも色々とオカシイだろ。
あの子可愛いとか、そういう日常会話にもありそうなノリである。
いつも伊吹に可愛いって言ってるんだ、伊吹も流石に本気になったりはしない……と思う。

「そーだそーだ。というわけで圭くんと伊吹は今日からカップルね」

「……え？」

……え～っと、この小坂さんは今なんと仰いやがったんだろうか？
伊吹と俺がカップル……？
ちょ、ちょっと待て。話が冗談のレベルじゃなくなってきたぞ！？
もしかして、俺は思わぬルートに突入するという地雷を踏んじまったのか？

「ちょ、ちょっと亜紀！？」

「いいじゃん。誤解が解けるまでの恋人ごっこなんだから。まぁ……あたしとしては、ホントに付き合ってくれると面白いんだけどねぇ？」

小坂のニヤニヤとした顔が何かムカつくぅっ！
ていうか伊吹も、何かもの欲しそうな視線を向けてくる。
……と思った刹那、突然伊吹は不機嫌そうな表情になり。

「け、圭介！　どーせいつもの冗談でしょ！？　あ、あんたも亜紀に何か言ってやりなさいよっ！」

「お、おう！　小坂、悪いけど今のはいつも通りの冗談だよ」

我ながら実に最低である。そんな事は自分でもわかっている。
でも毎朝こんな感じだし、伊吹もいい加減慣れた感がある。
だからこそ、こんな最低なやりとりでも俺達は気を許せている。

「えぇ～？　絶対いい案だと思ったのに。それに伊吹はいいの？　このまま圭くんがガチホモ扱いされた辛い思いをしても」

小坂のヤツ。意地でも俺と伊吹をくっ付けたいらしい。
さて、どうしようか。伊吹の言う通り俺はいつもの冗談を言ったつ

もりだ。
だけど、ガチで幼馴染ルートに突入しそうな展開になってしまったぞ？

「……っ……っっ……し、仕方ないわね。本物は嫌だけどフリくらいならしてあげるわよ！」

「ちょ！？　い、伊吹……マジで？」

「あんた、このままガチホモ扱いされたいの？」

「そりゃ確かに嫌だけど……」

「恋人じゃなくてあくまでフリよ！」

何故でしょう。何故だか伊吹さんまで乗り気であった。
腕を組んで見下し命令するように、彼女は俺に迫ってくる。
……でも、伊吹はそれでいいのか？
あの時から伊吹は俺に対して冷たかった。まさに今のツッパリ伊吹ちゃんになった。
きっと俺はあの時の事で、他の人程じゃないにしろ伊吹にも嫌われたのかもしれない。
ある程度の距離を置く為に、伊吹は俺にツンツンするようになっちまったのかもしれない。
そんな伊吹が、フリとは言え俺と恋人になる……？

「伊吹、それで本当にいいのか？」

「……えっ？」

「お前……普段があだし、俺の事そんなに好きでもないんだろ？」

「……っ、とっ……当然よ！　嫌いだけどその……っ、困ってるし、どーしても助けて欲しいらしいからっ！　別に好きだからじゃなくて仕方なくよ？」

仕方なく……か、やっぱりそうなのか……。

だったら俺の答えは一つしかない。

俺は伊吹が嫌いなわけじゃない。むしろ好きかもしれない。でも、伊吹がそう言うなら――――

「だったら、無理なんてしなくてもいいだろ？」

「む、無理……？　無理って……なによ？」

「大した好きでもないヤツと恋人ごっこなんて、そんなの伊吹だって嫌だろ？」

「それはその……あたりまえよ！　でも圭介がどうしても――――」

「さっきも言ったろ、いつも通りのやつだって。だからそんなに無理はしなくても……」

伊吹に無理はしてほしくない。

嫌いな人と恋人のフリをするなんて、女子としてはそんなに嫌な事はないだろう。

男でも同じだ。それなのに、伊吹は好きでもない人と恋人にフリをしようとする。

俺は……そんな無理をするような。そして真剣じゃない恋愛なんて嫌だ。

「……ごめんっ」

その時、口から零れたその一言。
それを吐いた刹那伊吹はゆっくりと歩み、教室から出て行ってしまった。

「……え？　ちょ、伊吹！」

さすがにこれはマズイと思った俺は、教室から出て行こうとする伊吹を追う。
しかし、俺が廊下に出た時には既に彼女の姿はなかった。
何故だろう。廊下に出た瞬間に走りだしてしまったんだろうか？

「伊吹さん……っ」

「あぁ……ちょっと、あたしも悪いことしちゃったかな……？」

伊吹を心配する皆。特に小坂なんて親友なだけに本当に心配そうだ。
あんな提案さえしなければ……と思っているのかもしれない。
でも、一番悪いのは俺だ……多分俺がアイツを傷つけるような事を無意識に言ってしまった。
そうに違いない。でもなんで。アイツ無理してたんじゃないのか？

……おかしい。ツッパリなのにわからない。
とにかく、何よりも先に伊吹に土下座でもなんでもしねえと――――

第３８話，疑惑の圭介　（後書き）

Ｎｏ１０
重原広敏（しげはらひろとし）
イメージＣＶ：小野大輔（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『涼宮ハルヒの憂鬱』古泉一樹役
『デュラララ！！』平和島静雄役

県立初芝高等学校２年４組在籍。
ジョブ：武道家学生
性別：男性
年齢：１７歳。
誕生日：４月１８日生まれ
身長：１８０ｃｍ
体重：７０ｋｇ
趣味：身体を鍛える事、アニメ鑑賞
好きな物：武術、ラノベ、漫画、アニメ
嫌いな物：身体に悪いもの、セロリ

その他：圭介の悪友Ｂ、長身で筋肉質だが爽やかなキャラ。
家が『無差別格闘重原流』の道場であり、重原流武術の使い手。
山籠りなんて常識離れな事もやってきたらしく、圭介曰く腕前はかなりのもの。
武道家で恋愛にも興味はないが、圭介や大吾に匹敵するほどのオタク趣味を持つ。
大吾とつるんで行動することが多い。
一人称は『俺』だが、圭介や大吾と違ってそこまで荒い言葉使いはしない。

実はある秘密があるらしい……。

第39話，side story 伊吹編

あ～あ、結局授業サボっちゃったな……。
あの後、学校を飛び出した私は古宇坂駅前の、古びた商店街をフラついていた。
お昼休みに何も言わず飛び出してきちゃった。きっとサボり扱いよね……。
でも、そんなことは仕方ないと思っている。それに飛び出してきた私が悪いんだから。

「……はぁ」

……やっぱり、アイツは私の事心配してんのかな？
アイツは世話焼きだし、私が少し不機嫌でも真剣になってくれるヤツだから。
そんなヤツだから、いつも通りの冗談を言い合える。
でも今回は違う。いつもアイツに冷たく当たっているのは私なのに。
アイツが嫌われているって思っちゃうのも、別に不思議な事なんかじゃないのに……。

って、別に私はアイツが好きだから。だから気にしてるとかじゃっ！

でも、このままの状態は嫌だ。世話焼きなアイツは私のために必死になるかもしれない。
それって、アイツにかなりの心配をかけちゃってるって事よね。
それに今回はアイツだけじゃなくて、亜紀や暮葉達にも心配をかけちゃってる。
ホント……私は身勝手だ。絶対心配するような事をやってしまった。
別にわかってたのに。アイツの言葉はいつも冗談だって事も。亜紀

の提案もノリの思いつきだったって事も。アイツが『無理するな』って言ったのは優しさからだって、全部全部わかっていたハズなのに。

でも、今から戻るって雰囲気でもないわよね……。

「はぁ……」

やっぱりアイツ、今頃私の事心配してんのかな？

……バカみたい、何を考えるにしてもアイツの姿が脳裏に浮かぶ。胸が高鳴る。頭の中までわけがわからなくなるくらいに混乱している。

アイツの馬鹿っ。頭の中にまで出てこないでよ、胸をもやもやさせないでよ……っ。

「……はぁ」

またため息ついちゃった。今日で3回目……。

そう言えば誰だろう。ため息をつくと幸せが逃げちゃうって言った人。

これだけため息ついたら、私の幸せも逃げちゃってるのかな？

……確かに、今は幸せじゃない。皆に迷惑掛けちゃっている。それにアイツに嫌われて当然のように冷たく当たってきたのに、それが嫌で勝手に飛び出してアイツに心配をかけている。

……嫌、か……やっぱり変わらないのかな……私の気持ちは。

ずっとそうだった。ずっと昔からいつもいつも考えている事はアイツの事。

胸のもやもやだって、別に最近感じるようになったものじゃない。

ずっと昔から――――子供の頃から感じていた。

否定しているけど、やっぱり溢れ出そうで……。
……ダメだな私。今でも否定しようとしても、全然否定ができない。
それに私は、私の中の莫大な感情の正体なんて、もうとっくの昔に自覚している。
何があろうとも変わらない。変わることがなかった……そんな莫大な感情。
苦しいけど、でも時々幸せになれる……そんな不思議な想い。

……って、そんな事思っちゃダメよ！
それじゃあ私……強くなんてなれない。そういうのは強い子はしないんだから。
決めたのに……もう二度と誰にも傷つけられたくない。アイツにを傷ついて欲しくない。
だから私は今までずっと、強くある為に人を変えてきた。
誰にも迷惑をかけたくなくて、アイツに傷ついて欲しくなくて、自分を守る為にもずっと強気でいた。
でも――――

「やっぱり、私ってばか……」

そんな事をしていたら、確かに自分を守ることはできた。
でも、誰にも迷惑をかけていない？
アイツを傷つけたりなんかしていない？
……それは、やっぱり嘘になる。結局私は自分を守ること以外は何もできていない。
だから今みたいに皆に迷惑をかけている。日頃の冷たい言葉がアイツを傷つけてしまっている。

でも……っ、今更私を変える事なんてできない。

あの時みたいにイキナリ変えられない。今更素直になんかなれない……っ。

「……っ！」

「おぅっ？」

いたっ……しまった。考え事をしながら歩いていたら、誰かとぶつかってしまった。

古宇坂の商店街は空洞化も進み、人通りは少ないけどそれでも人は必ずいる。

ホントばかだわ……前すら見えない程に考え事をしていたなんて……。

とにかく、早く相手に謝らないと。

「ご、ごめんなさ……っ！？」

私が顔を見上げると、そこにはどこかの高校の制服を着た長身の男が立っていた。

でも制服は着崩され、赤い坊主の髪にはラインアートが入っていた。

耳にもピアス、灰色のちょっとダボっているズボン。

上は蜘蛛の模様が入っている紫色の長袖シャツを着用。ズボンには金色のチェーンを付けている。

どこをどう見ても不良として思えない外見の人が、私を見下ろし狂気のような笑みを浮かべる。

そんな彼を見て私は……。

「っ……っ……っ？」

息が喉で詰まる、そして足がガクガクと震える。

いや、足だけじゃなくて……身体そのものが震えている気がする。
とにかく……相手を見た瞬間、私は思わず恐怖を感じてしまった。
そして、脳裏にいつかの光景が広がってくる……。

「久しぶりだなぁ伊吹ちゃん」

「あっ……っ……」

なんで……どうしてコイツが昼間から商店街をフラついてるの？

「ハハッ、ンだよォそんなにビビっちまってよ。久々の再会だってのに冷たくねえか？」

……なによ、ビビる必要なんてなのに。
こういう時の為に、コイツから身を守る為に強くあろうとしてきたんじゃん。
一応念の為に、制服の中には竹刀を隠している。
こんな、こんな不良なんて恐れる必要……全くないのよ。

「……永渕晃（ながぶちあきら）、何の用？　私に何か用でもあるの？」

「ほぉ？　しばらく見ねえ間に随分強気になったんじゃねえか」

「別に、私は元々こういう人よ」

「ヘッ、嘘ついちゃってよぉ……強がりとか一番嫌いなんだよなぁ」

そう言いながら、永渕という男は徐々に私に近寄ってくる。
一歩近づくごとに、私は思わず後ずさりをしてしまう。
それでも、永渕は私なんかを気にせずに迫ってくる。

……危ない。これ以上永渕に近寄られたら……危険すぎるっ！

私は警戒しつつ後ろへ右手を廻し、竹刀の握りの部分を握った。
いつでも竹刀を取り出せるんだから……変な事したら、すぐにこれを振りまわすんだからっ。

「なんだぁ、手なんか後ろに廻して……もしかしてそのポーズで誘ってんのかぁ？」

「近寄らないでよ……っ」

「……フッ、いいだろ別に？　つーか伊吹ちゃんと会えたのは都合がいいぜ。丁度俺も伊吹ちゃん達に用事があったからさぁ」

「よ、用事……？」

「あぁ。悪いけど……伊吹ちゃんには俺に付き合ってもらうぜ？」

……嫌だ、そんなの嫌に決まっている。
私はこういうのが一番嫌い。しかも嫌いになった理由は全部コイツ……っ。
永渕さえいなければアイツが悪く言われることも。私が今の私でいる必要も……っ！

「……っ！」

「さてと、んじゃあ来てもらおうか――――」

不敵な笑みを浮かべるワルな男。
私はそんな永渕の伸びてくる手を、空いていた左手で叩き払った。

「はァ……？」

いかにも、意外な事が起こったという表情をしている永渕。

……バカじゃないの。普通よ普通、こんなのに連れ去られたい人なんていないわよ。

それに私だって忘れたわけじゃない。永渕に何をされたか……忘れるわけがない！

「嫌だって言ってるでしょ。帰ってよ！」

「……ぐっ、こんのクソアマァッ！」

私が嫌といった瞬間、永渕は突然キレ始めた。

どんだけ短気なのよ……と思ったその時、永渕がその拳をいきなり振るってくる。

私は咄嗟に後ろへ跳躍し、ギリギリの所で永渕の一撃を避けれた。

私はわけがわからなかった。突然殴られそうになった意味って……。

……いや、そんな事は後で考えればいいのよ。とにかく今は自分の身を守らないと。

元々右手で握っていた竹刀。私はそれを取り出し身構えようと――

――

「させると思ってんのかよ。このクソアマがぁっ！」

「きゃっ！」

気付けば左頬に激しい痛みを感じていた。口の中に血の味が充満してゆく。

そんな中でようやく状況を整理できた。完全に身構える前に殴られ

てしまった……。

「い……痛っ……」

当然だけど痛い……でも、それ以上に私は……っ。
何故だか次第に震えが止まらなくなる。マトモに身体が動かなくなってゆく。
そして……脳裏にいつかの光景が蘇っていく。
……こ、怖いっ。怖いよ……っ。

「オラァ！　さっきまでの勢いはどうしたんだよ？　テメェ、人の手ぇ叩いてくれて痛ェだろコラァッ！？　どぉしてくれんだよ……マジでざけんじゃねえぞコラァッ！？」

「い、ぐ……！」

馬鹿みたいなセリフを吐き、永渕は私の鳩尾を握った拳に叩き込んでくる。
殴打を受け、横隔膜の動きが一瞬止まってしまったせいか、痛みだけではなく息苦しくなる。
マトモに呼吸が出来ない。痛みで思わず右目から一筋の雫が零れてしまう。
そうして怯んでいる間にも、永渕は大きく振り上げた拳を放ってくる。

「あ、ぁ！？」

拳は私のこめかみを直撃し、薙ぎ払われるように吹っ飛ばされてしまった……。
朦朧とする意識の中、気付けば私はアスファルトの上に寝転がって

いた。
……竹刀が、近いのに遠く見える。動こうにも満足に動けない……なによりもっ。

「へッ、そぉーだよ最初っからそうやって寝てろよ。なぁ？」

「う、く……いやっ……」

「あぁ？　はは、聞こえねえなぁオイ！　まあいいや。それより約束通り、伊吹ちゃん付き合ってもらうからなぁ？」

いや……だ、やだよ……こんなのやだよ……っ。
……助けて、誰か……助けてっ！

「さてと……伊吹ちゃん。そろそろ終わりにすっかぁ……恨むんならテメェの幼馴染にでも恨みな……フフフ、ハハハハハ！」

……最後に聞こえた言葉。そして蹴りでも撃ち込まれたのか、脇腹へ感じる激痛。
この時から、私の意識は次第になくなっていった……。

第３９話，ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　伊吹編（後書き）

Ｎｏ１１
生駒純奈（いこますみな）
イメージＣＶ：竹達彩奈（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『けいおん！』中野梓役
『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』高坂桐乃役

県立初芝高等学校２年３組在籍。
ジョブ：オタク系変態陸上部員
性別：女性
年齢：１６歳。
誕生日：７月２９日生まれ
身長：１５４ｃｍ
体重：４３ｋｇ
胸ランク：中（美）
趣味：ナギちゃんと一緒にいる事、漫画、アニメ鑑賞、ニヤ動
好きな物：ナギちゃん、アニメ、陸上、ナギちゃんが好きな物、ニヤ動
嫌いな物：クソ介、その他ナギちゃんにちょっかいを出すもの

その他：圭介が房総丘陵トレイルラン会場で出会った天真爛漫な少女。
陸上部に所属しながらオタク趣味を持っている。
凪紗とは同じクラスであるものの、圭介と全く接点がなかった為、見た目と凪紗の友人であるという事は知っていても名前までは知らなかった。
低身長ながら二年ながら陸上部エースを務めている。

その実力は同じ部の先輩や男子を遥かに上回っている。
本気を出す時に髪を括るというギャルゲー要素アリ。
凪紗の事は『ナギちゃん』と呼び慕っている。凪紗にも『すみにゃん』と呼ばれている。百合属性でナギちゃんが大好きで、ある誤解から圭介の事をやたらと敵視している。

第40話，side story 部長編

学校が終わった後、ボクこと浅間英樹は帰路を歩いていた。
ボクだけはなく妹の浅間あかりも一緒だ。
ただし、あかりは不機嫌そうであった。

「はぁ、どうして兄貴なんかと一緒に……っ」

「仕方ないだろう？　家も同じなんだから」

「うぅ……少し離れろよな！」

「わかってるよ」

あかりはボクの事を嫌っている。
その理由はわからない。藤島君には『ボクが変態だから』だって言われている。
でも、男が変態なのは皆そうだろう。ボクだってナチュラルに変態なんだい。
それに、悲しい事実だけど現実の妹とは、自然と兄を嫌っていくもの。
ブラコンの妹だなんて、そんな夢のような妹は存在しないハズだろう。
仮にいたとしたら、その子はこの世界でもかなりの希少価値なハズだ。

「……あ、兄貴っ」

「ん、なんだい？」

「圭介って本当にガチホモだったりすんのかな……？」

……そういえば、藤島君ガチホモ説という根拠のない噂が最近校内で流れている。

あかりはその事が気になっているようだ。

確かに、あかりは藤島君と友達になれた。折角出来た友達の噂だ、気にならないハズがない。

「大丈夫だ。藤島君は決してガチではない」

「ほ、ホントか！？」

「嘘はつかない。彼は浅間家を救った人だから」

もちろんボクはわかっている。藤島君はボクの同人誌を喜んで受け取った。

だから、藤島君がガチホモなわけがない。仮にそうだとしても写真部の部員である事には変わりないんだ。個人的には嫌でも拒むつもりは全くない。

個人的な理由で部員を退部にする部長がいるとすれば、その人はただの馬鹿だろう。

「……うん、もうあたいは噂だけでは動かないんだからな！」

「いい心がけだね」

きっと藤島君も大喜びだろう。今のあかりなら彼でも好印象を持てるだろう。

問題は一つ……ブラコンになってくれないかな！

ボクだって……ボクだって実の妹に好かれたいんだよ！
ヨスガるとまでは言わなくても、『にひひ、お兄ちゃん！』って懐かれたいよ！
……まあ、ボクは今まで全然あかりに甘えられたことが――――

「お、アレ写真にあったヤツじゃねえか？」

「おーおー、確かにそうだな」

「ん？」

ボクらの目の前に、何かを喋りながら突然現れたのはどこぞの不良。
あの灰色のズボン……確か古宇坂のどこかにある、白陵高校の連中じゃないだろうか？
でも、先頭に立っている金髪リーゼントだけ服装が違う。
なんというか……短ランというヤツにドカンという太いズボン。いつの不良だよ……。

「アヒャッ！　おいテメェら。初芝高校だろ？」

「そうだけど、何か用かい？」

「……！」

金髪リーゼントの問いにボクが訊き返すと、ボクの横であかりが身構える。
ボクも左右両方の拳を握っているが、不良達はケラケラと笑いながらボクらを目視している。
……そもそも、市内一の不良校の生徒が、一体ボクらのような一般人に何の用だろう？

まあ、おそらくはカツアゲだろう。しかしカツアゲをするのにこんな大人数を使うのか？
見た所、相手の人数は6人……普通に考えてこの人数はまずい。

「じゃあさ、テメェら写真部だったりするか？」

「……っ？　確かに……ボクらは写真部だね」

「それがなんだよ。早く帰れよな！」

あ、あかり……元気なのはいいけど、そんな風に不良を挑発するのはマズイと思う。
ボクは穏便に事を済ませたい。絡まれた以上会話で事態を収束させたい。
――だけど、どう考えても相手はそんな雰囲気ではない。

「帰れ？　ケッ、無理な話だ」

「なんでだい？」

「俺らが初芝の坊ちゃんを相手すんのも、クソ大人げねぇ事のような気がすっけどよぉ。永渕さんの命令だからなぁ……ちゅーわけだから、テメェら拉致るからな！」

金髪リーゼントの男が、パキポキと指の関節を鳴らしながらボクへと接近してくる。
どう考えても……会話をしましょうって雰囲気ではない。
それに拉致だと。一体どういうつもりなのだ……コイツら？
とにかく、このままだと危ないぞ。隙を見て逃げるしかなさそうだ
――――

「うあ！？」

その時、あかりの叫び声がボクの耳にしっかりと入る。
その声を聞き振り向くと、あかりは茶髪の不良にフェイスロックをかけられていた。

「あかり！？」

「な、なにするんだよ！　離せよな！？」

「アヒャ！　うるせぇよぉテメェ！　女は黙ってろ！」

金髪リーゼントは怒鳴りつけた瞬間、握った拳をあかりの腹部へ打ち込んだ。
ゴキゴキと嫌な音が聞こえ、あかりは口から紅い血液を吐きだす。
そんな……吐血するほどの威力でぶん殴ったのか……？

「あっ！　が……っ」

今の一撃のせいか、ガクッと首の力が抜けたようにあかりは俯く。
その後……あかりが動くことはなかった。腕もぶらんとぶら下がるのみである。
何より一番腹立たしいのは、あかりを殴りつけた金髪リーゼントは笑顔である。

「アヒャ……完全におねんねよ。さぁて、次はテメェだぜお兄さんよぉ！」

「……あ、あかり……っ」

「あかりちゃんって名前なのかぁ。へへ……次はテメェがあかりちゃんみたいになる番だぜ？」

あかりを取り押さえている人を除く、不良達がボクを取り囲んでいく。

あかりを傷つけられたせいか、ボクは今非常に機嫌が悪い。

今にも冷静さを失ってしまいそうだ……い、いやダメだ。冷静になるんだ……ッ！

理性を失って暴れたって、こっちには何の得もない。でもあかりは助けたい……ッ！

逃げ道は……ない。あかりを助けた上で逃走するなんて、この状況では不可能に近い。

どうする……ボクは一体、こういう時にどう行動すれば？

「アッヒャヒャッ！　さぁて、どうされてぇかな。金髪のお坊ちゃん？」

「君も金髪だろう？」

「そぉだな。俺ら似たモン同士じゃねえの？」

「ふざけるな！　ボクを……女の子さえ簡単に殴る不良と一緒にするな！」

「アヒャヒャッ！　テメェ何様だァ？　不良が全員女殴ると思ってんのかぁ？」

そんな事はわかっている……。

すべての不良がそういうわけではない。とりあえずは知っている話

だ……でも。

「そうだね……失言だったね。でも少なくとも君は見境無しに女子も殴る、男として……いや、人間として最低の奴だ！」

「アッヒャヒャ！　カッコイィ～！　よくそんなクセェセリフ吐けるなぁキザな金髪さんよぉ？　んじゃあ、その最低野郎の俺っちを止めてみろよぉ？」

そう言いながら相手は拳を構える。
リーゼントのみならず、周りにいる仲間の不良まで皆拳を構え始めていた。
……どうしてもなのか。どうしても戦わなきゃ……いけないのか？

「あ……にきっ」

「っ！？　あ、あかり……？」

ボクはあかりの微かな声を聞き逃さなかった。
歯を食いしばる口からは血を流し、苦しそうに片目だけを開けたあかり。
失っていた意識を取り戻したのだろう。でも……意識があるほうが苦しそうに見える。

「あたいに……構うな……っ、早く倒せ……よな！」

あかりがボクに告げたこと――それは、さっさと周りの不良達を倒せという事だ。
そんな事言われても……ボクは喧嘩なんて生まれてこの方やった事がないんだぞ？

そんな弱々しいボクが、６人もの不良全てを倒せる……のか？

「だってよ？　妹さんからやっちまえって言われてるけど、テメェどうするよ？」

余裕そうな笑みを浮かべ、ボクを小馬鹿にするように嫌味な感じで告げるリーゼント。

……仕方ない。やれるだけやってみよう……。

期待はしないで欲しい。ボクにとって殴り合いはこれが初めてだ。

そう決意しボクも拳を構えた……。

「ペッ！」

「うっ！　め、目がぁっ！？」

刹那、突然何か生温かいのか冷たいのか微妙な、気持ちの悪い液体が目に入って来た。

物凄く染みる……目を潰されたボクは自分の目に両手を当てる。

しかも――その動作が大きな隙となってしまった。

「オラァッ！」

「ぐはっ！」

襟首を掴まれると、続いて感じたのは腹部の痛み。

ようやく視力が回復し確認をすると、リーゼントは膝蹴りをボクの腹に打ち込んでいたのだ。

なんて痛いんだ……っ、男にマトモに殴られたのもこれが初めてだ。

ボクはあまりの痛みに、思わず叫んでしまいそうになった。しかもリーゼントの暴力はこれで終わりではなかった。

「オラオラまだ倒れるんじゃねえよ！」

「ッッッ！」

勢いよく顔面に打ち込まれた右ストレート。
ミシッという激しく嫌な音が響き、その上殴られた影響か脳まで揺さぶられる。
倒れそうになるも、なんとか踏ん張る事によって持ちこたえた。
しかし鼻が潰れるように痛む。思わず顔面を触ってみると、掌には真っ赤な血がべっとりと。
それだけではなく、ピチャピチャという音まで聞こえる。赤い雫がアスファルトへ落ちる音だ。

「アヒャ！　あぁゴメン！　鼻の骨折れちまったかも？　でもまぁ……イケメンなんだから、少しくらい顔の形変わっても問題ねえよな！」

「き、貴様ぁ……ぁぁぁぁあああっ！」

もうこうなれば自棄である。ボクはリーゼントの懐に入り込み、低い位置からのアッパーカットを仕掛けようとする。何度も漫画で見た戦法だ。
――――でも、現実（リアル）は二次元のようには甘くできていない。
岩をも砕きそうな勢いのエルボーが、スイカを割るかのようにボクの後頭部を打ちつけた。

「がっ！　あ、くぁ……っ？」

め、目まいが……意識が……ッ！

……ど、どうしてだ。漫画だと……カッコよく敵を倒せるのにっ！
このまま……あかりを助けることだって出来るのに！

「やりましたね船木さん！」

「へッ……コイツはもうダメだな。よし、コイツらアジトに運ぶぞ」

「うっす！」

「アヒャヒャ……後は、残りの連中を倒して、永渕さんが藤島をぶちのめすだけだな……」

藤島……だと。藤島君の名前がどうしてここで？
朦朧とする意識の中、その会話だけ上手く聞き取ることができた。
そして、この時を最後にボクの記憶は一旦途切れていた……。

第４０話，ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　部長編　（後書き）

Ｎｏ１２
黒木仁（くろきじん）
イメージＣＶ：日野聡（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『ゼロの使い魔』平賀才人役
『とある魔術の禁書目録』浜面仕上役

県立初芝高等学校２年４組在籍。
ジョブ：三馬鹿Ａ
性別：男性
年齢：１７歳。
誕生日：４月２７日生まれ
身長：１７５ｃｍ
体重：５９ｋｇ
趣味：伊吹にアプローチ、ゲーセンのゲームプレイ、音楽鑑賞
好きな物：伊吹、味噌ラーメン、ゲーム、音楽
嫌いな物：圭介、勉強、その他ダルいと思った事

その他：三馬鹿の一人、通称『黒やん』でいつも赤佐と大林とつるんでいる。
元ヤンキーで素行が悪く、凪紗ら風紀委員にも目をつけられている。
伊吹に惚れており何かとアプローチを仕掛けているが、いつも失敗している。
ちなみに当の伊吹本人は彼の好意を快く思っておらずかなり鬱陶しがっている。
圭介の事を敵視する発言が多い。というかかなり敵視している。
性格は超ハイテンションで自由気まま。とにかく楽しい事大好き。

基本的に遊び人。
日常的に凪紗と戦っているが、連敗中だ。

第４１話，悪魔襲来

「それじゃあ今日はこれで終了な。気を付けて帰れよ！」

帰りのＳＨＲも終わり、乙坂が書類か何かを持って教室を出ていく。
それ以外にも三馬鹿や、大吾に重原も早々に教室を飛び出してゆく。
――――結局、伊吹は昼休みに飛び出し以来帰ってくることはなかった。
完全に俺のせいだ。じゃなかったら他に何があるってんだよ。
とにかく俺が悪いんだ。早く伊吹に謝りたい……でも、メールを送っても無視。
電話をかけても出る気配がない。困った……アイツ、ちゃんと家にいるのかな？

「け、圭くん……」

「けーすけ様……っ」

「ん？　暮葉に小坂か……」

複雑な表情を浮かべる二人が、まるで俺を心配するかのように俺の所にやってきた。
……やめてくれよ。俺のせいなのに俺を心配すんなよ……。

「圭くん……ごめんっ。あたしが変な提案しなかったら……」

「いや、小坂は悪くないだろ？」

「けーすけ様こそ思い詰めないで欲しいのです。わかってるのです……けーすけ様は伊吹さんを心配していたからっ」

確かに伊吹の事は心配した。嫌いなヤツと恋人ごっこなんて辛いだろうって。

でも、逃げ出しちまったって事は違うのだろうか？

好かれてるとまでは行かなくても、別にそこまで嫌われているわけじゃないのか？

……流石に自惚れすぎだろうか。でも、間違いなく伊吹が飛び出したのは俺のせいだ。

とりあえずこの二人は俺を心配してくれている。それに対してはお礼を言わないと。

「ありがとな、二人とも」

「ううん。圭くんは友達だから」

「拙者も、落ち込んでいるけーすけ様なんて見たくないのです！」

「悪い、ホントにありがとう」

暮葉も小坂も、神レベルなくらいいい人すぎて目から汗が出そうである。

いや、でも男は泣くもんじゃないっぽいし。学校で泣く事ほど恥な事はないぞ。

ここは我慢だ藤島圭介！とりあえず耐えとくんだ！

――その後、小坂に別れを告げた俺達は帰路を歩いていた。

葵からメールがあり、今日は友達と用事があるから遅くなるらしい。

アイツも友達多いからなぁ、今日は誰だろうな。もしかしてあかり

達かな。

「けーすけ様！　この後どうされるのですかっ？」

「そうだな、とりあえず伊吹の家に行こうと思うんだ」

「もきゅ？　伊吹さんの家にですか？」

「ああ。今日の事をちゃんと謝っておきたい」

謝ってどうにかなるとは限らない。今までなんとかなっていたとしても、今回それが成功するとは限らない。それでも俺は伊吹に謝りたい。悪いことをしたんだから謝るのは当然だ。
伊吹には土下座でもなんでもする。それくらいの気持ちで謝りたい。

「小坂さんも言っていたのですけど、けーすけ様って伊吹さんの事になると本当に本気出しますよね」

「そうか？　……でも、ふざける時以外は基本的には真面目だぞ」

特に伊吹はな。アイツはああ見えて結構弱いんだ。
それに昔の事もある。俺はもう二度と伊吹を傷つけたくない。
だから俺はアイツに対しては基本的には本気だ。
それでも……今回また伊吹を傷つけてしまった。しかも殆ど俺のせいで……。

だから、せめて真面目に謝っておきたい。
その為にはまず伊吹を探さないとな。多分伊吹は自宅にいるハズだ。
いや、仮に居なくてもいつかは伊吹が戻ってくるハズである。
順調に行けばそこで伊吹に謝れるハズ。そう、順調に行けば……

…。

けど……この日は全く順調にはいかなかった。

「……よぉ、藤島」

道の向こう。ポケットに手を突っ込む、いかにも不良といった風貌の男が立っていた。

ダボタボのズボン。紫色の長袖シャツ。黄金のチェーン。坊主にラインアート。

そのどれもが奇抜で、そしてワルそうな雰囲気を放つ男……。

しかも、相手は久々に俺に会ったかのように挨拶をしてきたんだ。

……そういえばあの顔と髪型。俺もあの男をどこかで見たような気がする。

「もきゅ？　けーすけ様っ。お知り合いなのですか？」

ようやく立ち止まる男の顔を、俺はもう一度よく見てみる。

結構整った顔立ちだ。でも、見た目が怖いせいで女の子は近寄りそうにない……。

ていうかコイツ……やっぱり……ッ。

「な、永渕……っ！？」

思い出した。永渕……永渕晃だ。

俺が中学の時にぶっ飛ばした先輩……アイツの心を踏みにじり、俺が世間で悪党になってしまった原因の……ッ！

全てを思い出した瞬間、俺は本能で全身に少し力を入れ、それでもしっかりと身構える。

歯を食いしばり、強い眼差しを向けてみせる。俺は完全に永渕を警戒している。

「久しぶりに会ったと思いきや、伊吹ちゃんじゃなくて別な女の子が隣にいやがる……ンだぁ、ソイツはもしかしてテメェの彼女かぁ？」

「もきゅっ!?　か、かのっ、！　彼女っ!?」

永渕のヤツ。どこをどう見れば俺と暮葉が恋人同士に見えるんだ。暮葉とはただの友達。しかも暮葉は仕事上俺の近くにいるだけなのに……。

でも、実際俺は暮葉にどう思われているんだろうか。

伊吹にどう思われているかと同じくらい、暮葉にどう思われているのかが気になって仕方がない……。

……とりあえず、彼女である事だけは否定しておこう。

「違うよ。コイツは俺の友達だ」

「もきゅ……友達っ」

ん、さっきまで驚いていたのに急に大人しくなった。どうしたんだ？

まあ、それはともかく。事情を聞かねえとな。

「で、お前は一体こんな所で何やってんだよ。その制服白陵だろ？　ここは白陵のテリトリーじゃねえだろ？」

県立白陵高校……明智の家の近所にある、筋金入りの不良が数多く通う不良校だ。

かつては太田高校という名前で、今の白陵同様荒れた学校だったら

しい。
その為かネット上で『バカ田高校』と馬鹿にされ、学校が存在する太田地区も『バカ田地区』と呼ばれようになってしまった。
そのせいか、地元住民から校名変更しろという署名が数多く寄せられ、結果現在の校名になる。

そういえば、たまに１０年前の太田高校時代の制服、つまり学ランを着ているヤツも見かけるな。
俺は白陵の詳しい場所までは知らないけど、それでもこのあたりに白陵の生徒が現れるのは珍しい。
アイツらは黒木達曰く、普段はテリトリーからは出てこないらしい。
という事は……今は通常モードってわけじゃない。テリトリーの外に出た奴らは何かを企んでいる。

「フッ……その言い方だと。俺らが普段テリトリーから出ねえ事を知ってんな？」

「あたりまえだろ」

「そうかぁ……」

永渕はポケットから煙草とライターを取り出し、煙草に火を付けてそれを吸い始めた。
オイオイ、アンタ一応高校生でしょ。煙草吸うなよ……ん？
そういえば永渕って、俺が中１の時には３年だったよな。なんでまだ高校生なんだ？
……もしかして永渕、何度も留年（ダブ）った？

「あの、けーすけ様！　あのお方けーすけ様も伊吹さんも知ってるのですけど、やっぱり知り合いなのですか？」

「まぁ……会いたくもない知り合いだよ」

「もきゅ？　会いたくもないって……？」

そっか、暮葉がここに来たのは先月だもんな。
永渕の事なんて知らなくて当然だ。ていうか、永渕なんてただの不良を知ってるヤツも数少ないだろう。
もちろん俺は不良じゃないぞ。でも、なんでアイツの事を知っているかと言うと……。

「そりゃあそうだろうなぁ。テメェ、俺をぶん殴ったせいで悪モン扱いだもんなぁ？」

「……っ！」

とても嫌味な顔で事実を言ってくる。クソ……滅茶苦茶ムカつく！
……でもダメだ。あんな馬鹿野郎の挑発に乗ったら負けだ。

「ぶん殴ったって……もしかして、あかりさんが言っていた事って……！」

「……っ」

暮葉はあかりが襲ってきた時の事でも思い出したのだろう。
あかりは確かに、俺の事を『暴力魔』だの『いきなり人を殴る悪魔』だと言っていた。
その事が事実だって――暮葉にバレちまった……。
でも、殴ったのには理由がある。そうせざるを得なかった……でも、殴ったのは事実だ。

やっぱりどんな理由があろうとも、ぶん殴るってのはいい事じゃない。

「いやぁ最高に愉快だったぜ？　だってよぉ、俺はほぼ無実になっちまったんだからなぁ！　テメェだけが悪モンになってくれて本当にありがてぇよ」

「ぐっ……！」

いちいち癇に障る事を……ってダメだ。
落ちつけ、挑発に乗ったら本当に永渕の思う壺だぞ。

「さて、そろそろ本題に行くとするか」

「……っ、何の用なんだよ？」

俺がそう問うと、相変わらず不敵な笑みを浮かべる永渕はフィンガースナップを行った。
学ランとブレザーが入り混じった、筋金入りの不良達が何処からともなくゾロゾロと現れる。
白陵の歴史を知らない人から見れば、まるで白陵が他校と組んでいるかのような光景だ。

「もきゅ！？　に、人数が増えたのですよ！？」

「やばいぞ……？」

木刀や棍棒、金属バット等と言った武器で武装している不良達。
その人数は、少なく見積もっても１０人を超えていた。

「拙者達をどうするつもりなのですか!?」

「俺の目的？　フフフ、そんなの藤島への復讐に決まってんだろ？」

「復讐？」

「やられっぱなしじゃ気分悪ィしよ……」

復讐って……やっぱり中学の時にぶっ飛ばした事か。
まだ根に持っていたのかよ……。
どう考えても、アレは永渕のせいだっていうのに。

「あと藤島よぉ。テメェがあの時最も大切していたヤツは、こっちの手にあるんだからな」

一瞬、永渕の言っている事の意味がわからなかった。
だが、その意味はすぐに分かる事になった。
突然十数名の不良達の中に割って入って来た、茶髪のボサボサ頭の男。
ソイツが汚い手で掴んでいるのは――

「あ……な、なん……でだよ……っ」

「け、けーすけ様っ！　あ、あれ……っ！」

俺も暮気も驚きを隠せなかった。
同時に、久々に心の底から押さえる事が出来ない程の怒りを感じた。
ショックを受ける以前に全身に力が入って行く。次第に他の事を考えられなくなっていく。
何故なら……そこには――

「おぉ怖ぇなぁっ！　いいツラしてきたじゃんかよ……やっぱ、テメェを怒らせるにはコレが一番だ」

「てめえ、どういう事だよ……？」

茶髪の男が手で掴んでいる白銀の髪。
綺麗な髪の持ち主は美少女であった。
ただし瞳は閉ざされ、口元や鼻から紅き血が流血している。その上頬にも殴られたような跡がある。
……クソッタレ。この中の誰だよ……伊吹をボコボコにしたヤツは！

「どういう事って？　テメェには少し暴れてもらわねえと割に合わねぇんだよ。伊吹ちゃんはよぉ……テメェを怒らせるには丁度いい道具なんだよ」

道具……？
道具だと。伊吹というたった一人の女の子を……道具扱いだぁ？
あの野郎ォ。どういう事なんだよ……だってアイツは元々伊吹の事を――――！
いや、そんな事はどうだっていい。それより伊吹を道具扱いしやがったな……。

しかも伊吹を……あんなに傷つけやがって……ッ！

「てめえ……ッ！　永ァ渕ィィィィィィィィィィ！」

「け、けーすけ様っ！」

もう、俺は何も考えていなかった。

きっとまた悪い噂が流れる。下手をすれば停学や退学だってありえるのに……。

それでも俺は――――この足を止める事はできなかった。

第４１話，悪魔襲来（後書き）

Ｎｏ１３
赤佐直人（あかさなおと）
イメージＣＶ：細谷佳正（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『電波的な彼女』桑沢ジュウ役
『会長はメイド様！』黒崎龍之介役

県立初芝高等学校２年４組在籍。
ジョブ：三馬鹿Ｂ
性別：男性
年齢：１７歳。
誕生日：４月６日生まれ
身長：１８５ｃｍ
体重：６８ｋｇ
趣味：人助け、無駄に身体を鍛える事、ツーリング、バイクいじり
好きな物：焼き鳥、女の子、エロい事、バイク
嫌いな物：勉強、ダルい事、先生

その他：三馬鹿の一人、通称『チョクト』でいつも黒木と大林とつるんでいる。
三馬鹿の中でもわりと常識人で、基本的に黒木の暴走を止める掛かり。
ただしとにかくエロいのが好きな変態でやはり嫌われ者。
人助けが好きみたいで、かつていじめられたいた韓国人留学生を助けたらしい。
ただ、その時韓国人に敬意をこめて『チョクトさん』と呼ば、しかもそこを黒木に聞かれ、いつのまにかあだ名が変なあだ名がついて

しまったらしい。
自称関西出身らしいが、喋っている言葉はエセ関西弁。
黒木とは中学時代からの付き合い、同じく元ヤンキーである。
ただし、ガタイはいいけど腕っ節が強いかどうかは不明。

第４２話，涙色の夕日

「うおおおおおおぉぉぉぉぉっ！」

感情任せに何の考えも持たず、ただ只管駆けるのみの俺。
永渕との距離は５ｍ。ここから一気に跳躍して間合いを詰める。
……とにかく倒す。伊吹を傷つけたクソ野郎を潰す！
その怒りの感情のみが俺の頭と心を支配していた。

「永渕イィィィィィィィィッ！」

力の入れ過ぎで拳が痛いほど、俺はしっかりと右の拳を握った。
右足でアスファルトを蹴りあげ、右拳をミサイル発射前の様に構える。
永渕の懐に入り込み、その勢いでボディーブローを仕掛けようとした。
だが、永渕は殴られそうなのにも関らず、唇の端を歪め。
一言。

「ダメだなぁ……」

あざ笑うかのように放たれた一言。
それを言った時、俺は既に拳を突き出し攻撃を仕掛けていた。
だが、当たったハズの拳には何の手応えもない。それどころか――
――

「がッは……っ！？」

何かか鳩尾へ突き上げて来た。
その瞬間俺の呼吸が止まり、中途半端な体勢であった為かバランスを崩してしまう。
幸い、そのまま地面へ転ぶという事はなかった。

「ゲホッ！　ゲホッ！」

クソッ……なんだ？
痛い。まるで鳩尾をぶん殴られたみたいだ。
永渕も周囲の不良達もケラケラ笑っている。茶髪の手に掴まれた伊吹は今だ眠っている。
そして、無様に攻撃を受けた俺を見ていた暮葉は。

「けーすけ様！」

いつもの事だけど、俺の名前を腹の底から出すような大声で叫んでいた。
暮葉のけーすけ様も、最初は違和感全開だったけど聞きなれたな……。
って、今はそんな事を思っている場合じゃねえ。
全く……身体が丈夫でよかった。もう鳩尾を殴られた痛みは完全に消えている。
即ち……俺はもういつでも次の攻撃に移れる。

「あぁ遅いっ。テメェそんなに弱かったっけ？」

「ぐっ……！」

「スマン、俺が強くなり過ぎただけなのかもなぁ？　フハハッ！」

「うぅ……！」

確かにオカシイぜ。中学の時はこんなハズじゃなかった。
確かに永渕は強かったよ。でもここまで差がある程ではなかったハズだ。
でも今はどうだろう。永渕は単なるヤンキーとは言い難い程の強さだ。
痛みが完全に消えるの時間が、ただの不良に殴られた時よりも長かった……。
それはつまり、アイツが滅茶苦茶強いって証拠だ！

「さぁてどうする藤島ぁ？　あ、そうそう。伊吹ちゃんの身柄は俺らの手にある事を忘れんなよ。やろうと思えばいつでもテメェよりも先に、この伊吹ちゃんをぶん殴る事ができるんだからなぁ？」

「てんめぇ……っ！」

「熱くなんなよ？　テメェが今動くとよぉ……伊吹ちゃんにこんな事やっちまうぞコラァッ！」

永渕は信じられない事をしやがった。
だって、アイツは気絶している上に取り押さえられている、ボロボロの伊吹をさらに何発も殴りつけたのだ。顔面ではなく身体を殴っていた。だから顔面が血だらけになる事はなかった。
でも……永渕が無抵抗な伊吹を殴りまくったのは事実だ。

「や、やめてください！　それ以上は――――」

「ハッ！　オイオイ藤島ァ！　テメェの友達が言ってるぜ？　なぁどうする？　伊吹ちゃんの顔が変わっちまう覚悟で俺と戦うか？

アァ！？」

クソッタレ……！

なんなんだよ永渕のヤツ。強い癖に小者くさい真似をしやがって！

さらに永渕は再びフィンガースナップを行う。

すると、今度は永渕ではなく、先程まで待機していた不良達が一歩ずつ俺らに近付いてきた。

「な、なんだ……ッ！？」

「ゲームだぜ藤島ァ？　テメェ何発耐えられっかな？」

「卑怯な手ぇばっかり使いやがって……ッ！

「フハハ！　喧嘩に卑怯もクソもあるかよ。オラァテメェら！　藤島も藤島の友達も好きにやっていい。ブッ殺しても構わねえぞッ！」

永渕が怒鳴りつけるように命令をする。

「いくぞコラァァァッ！」

「うっしゃあ最高のタイムじゃあっ！」

「あの子可愛いぜぇ……イタダキマァァァァァス！」

「藤島ァァァ死ねやぁぁぁぁぁっ！」

刹那、一斉に１０人を超える不良達が襲いかかってきたのである。

いくら身体が丈夫でも、所詮元々の身体能力は人間なんだ。

念じながら誰かとキスでもしない限り、俺は元の弱い人間のままな

んだ。
リミッターがかかっている、こんな状態じゃあこの人数相手に出来るかわからねえ！
伊吹は捕らわれ、俺達は大勢の敵に囲まれ……まさに絶体絶命のピンチ。
いよいよ、目前に迫った不良達が一斉に攻撃を加えてくる。
その直前で。

「けーすけ様っ！」

「うおっ！？」

何故だろう。いつこんなフラグを立てたんだろう？
ピンチの中、俺は思わずそんな事を考えてしまった。
何故なら、俺は暮葉にぎゅっと可愛らしく抱きつかれたからである。

「しばらく間、我慢していて欲しいのです！」

「え？　ちょ、暮葉？」

「～～～っ……っきゅぅ！」

踏ん張るような声をあげたその瞬間。
叩きつけられるような暴風が下から吹き上げ。
轟！という音が響いたとわかった時。俺達は既に上空高くに舞い上がっていたのだ。
……え～っと、これは……。

「エエエエエェェェェッ！？」

どどど、どういう事なんじゃコレは!?
永渕達が点に見えるぞオイ。大体どうして暮葉に抱きつかれた瞬間、俺達空を飛んでいるんだよ!

「け、けーすけ様暴れないでくださいっ!」

「仕方ねえだろ!　つーかお前、何やったんだよ!?」

「飛行術式なのです。簡単に言えば舞空術みたいなものなのです」

「とらゴンボールか!　つーか永渕達の前で魔法使ってもいいのかよ!?」

「大丈夫!　上昇は一瞬の間なので多分あの人たちに目視されてないのです!」

だ、だからってなぁ……こんな魔法で。
ていうか暮葉って魔法が苦手だったんじゃ……?
飛行術式なんてカッコいい事を言っているが、果たして大丈夫なのだろうか?

「なぁ暮葉。お前魔法苦手じゃなかったっけ?」

「もきゅ?　に、苦手とは失敬な!?　ちょっと難しいだけなのです!」

……もう、言い訳乙としか言いようがないわ。

「で、この後どうするんだよ?」

「……そ、そのっ。着地がちょっと乱暴になるのですけど……か、覚悟してくださいね！」

「はぁ？　ら、乱暴？」

それってどういう意味なんだろう？

……だが、この直後俺は身をもって経験するのである。

暮葉の言う乱暴な着地という、恐ろしきモノを。

「……！」

その時、暮葉を俺を抱く手の左手のみした。

片手だけになったせいか、腕の力をさらに強くし俺は一層締め付けられる。

うおっ！く、暮葉の胸が当たる。暮葉の貧乳は貧乳だがそれでも柔らかい。

なんて事を考えていると、暮葉は右手を背中に廻し服の中から何かを取りだす。

暮葉さん、その……それってもしかして。

「ちょ！？　一期一振！」

「一期（これ）一振の力を借りて着地するのです！」

調子よく暮葉が言う。

刹那、暮葉はどこぞの悟空が如意棒をぶん回すように、一期一振を右手で大胆にぶん回し始める。

気分は輸送ヘリであるＣＨ－４７チヌークに吊るされるが、何かのミスで降りれなくなった兵隊さん。

確かに乱暴だ！次第に地面が迫るものの……オイオイ速度早過ぎだ

ろ！
絶対一期一振あんまり役に立ってない。ただ落下しているだけな気がするぞ！

「衝撃に備えてなのです！」

「ンな無茶なっ！？」

アホかよ暮葉さん！
いくらなんでも無理がある。この高さからこの勢いで落下したら……。
へ、下手すりゃ死亡だ。衝撃に備えてなんて言われたって限度があるだろ！

「ぎゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

お、オワタ。人生オワタ！
このまま落下してこの世とオサラバじゃあああああぁぁぁぁっ！

……と思ったが、ギリギリの所で一期一振が効果を発揮したのか、地面と激しい接吻を交わす前に俺達は、僅かに１ｍほど空中に浮いた状態で停止したのである。た、助かった……のか？
その後、１ｍをジャンプするように着地し、俺は久々に陸地を踏んだような錯覚に陥ったのだ。

第４２話，涙色の夕日　（後書き）

Ｎｏ１４
大林勇太（おおばやしゆうた）
イメージＣＶ：代永翼（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『おおきく振りかぶって』三橋廉役
『いちばんうしろの大魔王』三輪ヒロシ役

県立初芝高等学校２年４組在籍。
ジョブ：三馬鹿Ｃ
性別：男性
年齢：１６歳。
誕生日：２月２６日生まれ
身長：１５５ｃｍ
体重：４８ｋｇ
趣味：サッカー、ゲーム、彼女とイチャイチャ、あと秘密の趣味が……
好きな物：サッカー、彼女、カミソリ
嫌いな物：背が高くて生意気な人、勉強、先生

その他：三馬鹿の一人、身長１５５ｃｍと男子としては小柄な体躯の持ち主。
サッカー一筋のスポーツ少年だったらしく、高校に入ってからだらけ初めて現在はやめているが、その時の名残で今も坊主頭。リア充らしい。
元サッカー部員でしかも天才と呼ばれていただけに、脅威的な体力と脚力を誇り現在でもサッカーの技術は現役部員にも勝るほど。また足も陸上部員より少し速い。

ただし所詮スポーツバカなので頭は悪く、テストはいつも赤点を取っている。
三馬鹿の中で唯一元ヤンではない存在だ。あと意外な趣味もあるらしい。

第４３話，圭介の過去

「アホかお前はぁぁぁぁぁぁぁっ！」

誰もいないハズの明智には人影が二人。それは俺と暮葉であった。
そんな人気のない空き地で、俺は暮葉に思いっきりのツッコミを入れていた。

「ごごご、ごめんなさいけーすけ様っ！　せ、拙者飛行はできても着地は苦手なのです！」

「やっぱり魔法苦手なんじゃねえかっ！」

「もきゅ！？　し、失敬な！　難しいだけだと何度も言ってるのですよ！」

「なぁ……いい加減自分の弱点認めないか？　その方が楽だぞ」

「と、とにかく助かったのですから！　もういいじゃないですかっ！」

まあ確かに俺達は助かったけど……。
その代わり、一番大切な存在はまだ永渕達の手に渡ったままなのである。
そんなんでは全く意味がない。俺達だけが助かったって何の意味もない。
ただ、俺達が地獄を見るまでの時間が少し伸びただけである。

「……クソッ！」

「もきゅう、けーすけ様……」

次第に腹が立ってきた。

当然永渕に対してもあるが、一番腹が立つ相手はあの時伊吹を助けられなかった俺自身だ……。

俺がもっと強ければ伊吹を助けられた。いや、こんな事未然に防げたハズだ。

俺はまた……またしても伊吹を守る事ができなかった。

伊吹は二度も永渕に襲われちまった。それもこれも……全部俺が弱かったせいだ。

……でも、いつまでも落ち込んでいる場合じゃねえのはわかっている。

だから俺は、今からでも伊吹を――――！

「暮葉！　お前確か魔法か何かで、相手の魔力を感じ取れるんだったよな？」

「は、はい！　初歩的な魔法なので拙者でもそれは使いこなせるのですっ」

「だったら、それを使って永渕の居場所を調べてくれ」

「な、永渕さんってさっきの……？　ど、どうするつもりなのですか！」

「決まってんだろ！　今から行って永渕をぶっ飛ばす。そんでもって伊吹を助けるんだよ！」

未然に防ぐことはできず、既に事件は起こっちまった。
だったらやる事は一つしかない。さっさとソレを解決しちまう事だ。
とにかく、永渕さえ倒せば俺はどうなるかは知らないけど、伊吹は助かるんだ。
中学の時だってそうだったじゃねえか……。

「……あの、けーすけ様っ！」

「ん？」

「永渕さんは、どうしてけーすけ様と伊吹さんを……？」

不安げな顔で真相に迫ろうとする暮葉。どうしよう、ちゃんと説明すべきなんだろうか？
出来ればアレは１ｍｍたりとも思い出したくない。
……永渕が現れた時点で全てを鮮明に思い出しちまったけど。
まあ、もう暮葉の目の前であんな事があったんだ。上手く誤魔化す方法さえ思いつかない。
どのみち永渕の所へは行かなきゃならない。だったら先に説明しておこう。

「……暮葉、教えてやる」

「もきゅ、何をですか？」

「こうなっちまった原因。過去の話だよ……」

☆

人間っていうのは本当に色々な奴がいる。正義感あるヤツもいれば可愛いヤツもいる。
俺みたいに馬鹿なヤツもいれば、テストはいつも９５点以上の天才だって存在している。
みんなそれぞれがこの現実で努力をして、それぞれの生活を営んでいる……。
でも……中には努力もしないで、ただ他人の生活をぶち壊す連中がいる。
俺がその事を学んだのは中学１年の時だった。

――圭介、今日どっか行こうぜ！

――おぅ！　つーか５００円しか持ってねえから安上がりで済む所な。

――俺も３００円しかねぇし。金使わねえ所でヨロ！

……当時の俺はそこそこ友達も多かった。
あたりまえのように友達がいて、クラスメイトの女子の殆どとも会話する事ができて。
そうだな……あの時に頑張っていれば、初彼女が出来たのかもしれない。
当時は家に親父は仕事でいなくても母親はいたし、普通の中学生としての生活をそこそこ楽しんでいた気がする。伊吹もその頃までは今とは違って、結構素直な子だったハズだ。
そう、今でさえモテモテなのに、当時は素直だったから余計にモテ

モテだったんだ。伊吹は……。
別のクラスの野郎共とかが、伊吹目当てで俺らのクラスにやってくる程であった。
その中の一人にアイツがいたんだよ。永渕晃ってのが……。

――ねぇねぇ、国宗伊吹さんってアンタだよな？　今日さ、俺と一緒に遊びにいかねぇ？

そんな軽いノリで教室にやってきた、当時3年の先輩だった永渕晃。
見た目は今よりも若々しいが、それほど変わっているわけではない。
その頃から永渕には悪い噂がいっぱいであった。
例えば、ちょっとメンチを切ってきたチンピラ5人を即日整形外科送りにしたり、自分の前を横切ったサラリーマンをボコボコにして川に投げ捨てる等。とにかくやる事は極悪人そのものである。
ただ、容姿が端整である事と強い事とみんな中二病だった事が理由なのだろう。
一部の女子にはそこそこの人気があったらしい。

どうやら永渕は伊吹が好きだったらしいが、当然そんなヤツを伊吹が好きになるわけなかった。
ある日、いきなり永渕は仲間の不良を率いて、俺らの教室にやってきたんだ。

――伊吹ちゃん！　好きだ、俺と付き合ってくれ！

堂々と、俺らの前での告白……。
正直、永渕は結構根性のあるヤツなんだなと思ったよ。
だけど、伊吹の答えは。

――私、好きな人いるから。ごめんなさい。

当然Ｎｏであった。俺としては、そんな事よりもあの時の好きな人が誰なのか気になるけど……。
誰なんだろう。でも伊吹に彼氏が出来た気配なんてないし、片想いで終わったんだろうか。
それはともかく、ここまではごく普通だった。永渕晃の短い恋が終わっただけ……だったハズである。

でも、それから一週間後の事であった。
放課後、水飲み場の近くで俺は男友達3人とゲームの話で盛り上がっていた。
そんな時、小学校の頃からの付き合いで伊吹の親友だった、小坂が俺の所にやってきたのだ。
それも、いつもとは違う血相を変えて……。

――ん、どうした小坂？

――け、圭くん助けて！　い、伊吹が……伊吹がっ！

――ちょ、落ちつけよ！　一体どうしたんだよ？

――伊吹が……永渕に拉致られた！

――はぁっ！？

嘘だと信じたい事態が起こってしまった。
小坂と伊吹は下校中であったが、その途中に永渕ら不良グループに襲われたらしい。
小坂は隙を見てなんとか逃げたようであるが、伊吹が永渕らに捕まってしまった。

告白を断られた腹いせか、永渕は伊吹をいきなり拉致ったそうなのである。
場所を聞く、数分前に体育館倉庫前で嫌がる伊吹を見たのが最後らしい。
俺も中1だったし、その話を聞いた時点でマズいと思った。
それと同時に、たかが振られただけでそんな事をする永渕に対し、俺は怒りを覚えた。

――あんのクソ野郎っ！

――け、圭くんっ！

――おい圭介っ！？

――やべっ！　だ、誰か先生呼べっ！

俺を止める声が聞こえるも、カッとなった俺にそんな声など届くハズがない。
今思えばあの時の俺は子供だった。子供なだけに短気であった……。
まず俺が向かった先はグラウンド、野球部だった友達に俺は。

――谷口！　バット貸してくれっ！

――え、な……なんで？

――いいから！　後で必ず返すから！

――ちょ！　圭介っ！？

友達から野球部のバットを強引に借りた。

そのバットを片手に俺は体育館倉庫で突撃をかける――――

――アァ？　なんだテメェ！？

――何見てんだコラァッ！？

倉庫に入ると、いきなり不良達が俺を怒鳴りつけてきたのだ。
たかが倉庫に入っただけ。あそこは不良のたまり場ではないのに。
そして不良の他には、マットに倒れ込み涙を流す伊吹の姿があった……。
伊吹の服装は乱れ、幼さの残るブラジャーも外されかけていた。

――チッ、これからお楽しみだったのによ……。

これからお楽しみ……当時の俺でも、その言葉の意味くらいは理解出来た。
あと少し到着が遅かったら、本当に取り返しのつかない事になっていた。
伊吹の初めては、本人の望まない悲しい形で奪われる所だった。
ギリギリだったけど間に合ってよかったよ……。
そう思ったが、それと同時に永渕に対する怒りがさらにこみ上げてくる。

――伊吹にひどい事しやがって……ムカつくんだよテメェら！

そう言った瞬間から、伊吹のみならず俺まで崩壊し始めたのである。
不良グループの一人が、いきなり俺に攻撃を仕掛けて仕掛けてきたのだ。
一発殴られると2人3人……次々と不良が俺をぶん殴ってくる。
……俺も黙ってはいなかった。数発ぶん殴られた後、俺はついに反

撃を初めてしまったのである。
本格的な不良との喧嘩は初めてだったが、意外となんとかなるものだ。
散々ぶん殴られはしたものの、元々身体が頑丈なのであまりダメージを受けなかったんだ。

数分の戦闘の後、永渕以外の3人を倒してしまった俺。
続いての相手は当然永渕。永渕は怒り狂ったように殴りかかってきたのである。
永渕は滅茶苦茶強かった。始終圧倒されまくったけど……それでも感情任せに戦ってなんとか勝てた。
気付いた時にはもう、永渕も俺も血だらけであった。
特に俺の血は自分の血だけではなかっただろう。きっと、永渕の血も身体についていたハズだ。
体育館倉庫には血だらけの不良達4人。恐怖のあまり声すら出せない少女が一人。
そして……金属バットを持つ血だらけの俺の姿があった……。

当然、この事は暴力事件として問題にされた。
しかも伊吹をレイプしようとした永渕ではなく、助けようとした俺が悪い方向で話が流れて行く。
親呼び出しを喰らい、担任に校長など……いろんな人に全部俺が悪いと怒鳴られた。

――君のようなダメ人間が将来、事件を起こすんだ。

――お前には失望したよ。そんな底辺なヤツだったとはな……。

誰も俺の話を聞いてくれなかった……。

伊吹はショックで何も語ろうとしない。家族は話を聞いてくれたが学校側が信じてくれない。
そんなわけで俺は……二週間の家庭謹慎を食らってしまったのである。
小坂からは『伊吹を助けてくれてありがとう』って、そう言われた。
小坂曰く、伊吹も感謝はしていたらしい。何も言われなかったけど……。

そして二週間後、俺は久しぶりに学校へ行った。
いつものように友達へ挨拶をしたが、帰って来たのはぎこちない返事。
女子からは露骨に避けられるし、何かがオカシイと思った。
すると、小坂がこんな事を言って来たんだ。

――圭くん……沢山悪い噂が流れてるけど……大丈夫？

――わ、悪い噂……？

それは、俺が『理由もなく先輩を半殺しにした』だとか、『男をボコッて女子をレイプした』だとか、そんなような噂である。
前者は確かに永渕をボコボコにした。伊吹だってあと少しで危険だった。
……でも、俺は伊吹に何もしていない。レイプをしようとしていたのは永渕だ。
しかも、それはギリギリの所でなんとか防いだ事である。
だけど……いつのまにか全てが俺のせいになっていた。その上伊吹の態度も……。

――べ、別に感謝なんかしてないわよ！

こんな感じで今まではあったかもしれない、デレという要素が消えてしまった。
この頃から、伊吹は“ツッパリ伊吹ちゃん”になってしまったのである。
もちろん思ったよ。あの件で嫌われたなって……それでも伊吹は友達でいてくれたけど。
今まで友達だったヤツとも、あの一件以来殆ど話をしていない。
皆避けるから……いや、俺も皆を避けていた。
証人だっているんだし、頑張れば俺の汚名だって消えるハズである。
それでも俺は皆を避けた。正直このままでもいいって思ったのである。
俺さえ悪なら、それで全てが解決する。だったらそれでもいいって思うようになってきた……。

……とにかくこの日以降、俺は自分の事がどうでもよくなった。
それこそ。俺が見つけた誰かを救う方法である。

……そして結局、俺は高校に入るまで、友達なんていう存在はたったの2人しかいなかった。
伊吹と小坂。その二人だけが俺の友達だった。
他の奴らは皆俺を避ける。いや、一部は近寄ってくる連中がいたな……。
喧嘩無敗と言われていた永渕を倒したせいだろう。どこぞの不良が俺に喧嘩を売ってくるのだ。
俺もストレスが溜まっていたのだろう。馬鹿な事に鬱憤を晴らすべく、喧嘩を買っていた……。
不良達を相手にしているうちにも、どんどく俺の悪い噂が広まり…

…。

学校での俺の扱いはまさしく、“孤独がクールでカッコいいと思っている痛いヤンキー”だった。

不良じゃねえのに……好きでこんなことになってるわけじゃねえのに。

今いる友達は全員、高校に入ってからであった奴ら。つまりあの事件を知らない奴らばかりである。

それでも、不良に絡まれる事はなくなったが、同じ中学出身のヤツに時々冷たい視線で見られる。

それは多分、今後も変わる事はないだろう。もういいんだ……どうでも。

とにかく俺はその事を忘れようとした。伊吹にも思い出させないように努力をしていた。

それから、どんな事があっても伊吹の笑顔を守ろうとしたんだ……。

でも、結局守る事ができなかった。

俺が弱かったせいで……また伊吹が永渕の手に……っ！

第４３話，圭介の過去（後書き）

Ｎｏ１５
浅間英樹（あさまひでき）
イメージＣＶ：杉田智和（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）
『銀魂』坂田銀時役
『涼宮ハルヒの憂鬱』キョン役

県立初芝高等学校３年１組在籍。
ジョブ：写真部の変態部長
性別：男性
年齢：１８歳。
誕生日：４月１０日生まれ
身長：１８１ｃｍ
体重：６４ｋｇ
趣味：同人誌、アニメ鑑賞、エロゲープレイ、写真撮影
好きな物：写真部、カメラ、エロいもの、家族（特にあかり）、部長という地位
嫌いな物：妹に無理をさせる事、荒事、ゴキブリ、熟女（母は除く）

その他：写真部の現部長で高校３年、圭介や暮葉の先輩にあたる人物。
金髪で背も高くてイケメンだがデリカシーがなく、その上大吾もビックリなオタクである。
その為千早をはじめとした写真部の部員、周囲の女子からの評判はすこぶる悪い。
勧誘の際、何故か北方ｐｒｏｊｅｃｔのエロ同人誌を活用。ちなみに圭介はまんまと釣られた。

基本的にふざけた男だが、部の事を誰よりも考えている。
妹であるあかりには殆ど無視され、仮に会話したとしても暴言を吐かれる程嫌われている。
だが、妹を含む家族想いの人であり、圭介に言わせれば変態である事を除けばいいお兄ちゃんである。
１８歳なので合法的にエロゲーを購入できる。

第４４話，雨の中の……

「そんな……みんなひどいのです！　普通は永渕さんも悪く言われるハズなのです！」

「普通……ならな」

でも、普通じゃなかったんだよ。ウチの学校は……。

永渕は問題児だったけど、アイツが問題児なのは元々の話だ。

それに、噂じゃあ永渕は基本放置の方針だったらしい。

学校側としても、あの暴れ者を相手にはしたくなかったんだろうな。

けれど、普通に過ごしていた俺となれば別だ。普通の人が永渕がやるような問題行動を起こせば、問題児とは違って激しく怒られるに決まっているだろう。

増してや、やられたのは永渕だ。重傷だったらしいのでしばらく永渕は暴れられない。

学校一の問題児である永渕が暴れられないのは、学校側としても非常に好都合なのだ。

つまり……俺は学校の都合の為に、全ての責任を押しつけられたわけである。

……確かに、伊吹を助ける為とは言え、あんな事をやったのはマズいと思う。

それは俺も悪いと思っている。でも……俺の持つ責任とはそれ以上のものであった。

「……拙者は、納得いかないのです！　どうしていつの間にけーすけ様が悪い事になってるのですか！？　どうして学校側はけーすけ様だけに制裁を加えたのですか！」

「仕方ねえよ……世の中そういうモンなんだから」

だから永渕とは関わりたくない。永渕が動けないのは学校にとって好都合。

そういう理由なんだよ……でも、暮葉に説明したって無駄だよな。

別にこんな事実を今更言ったって、ウソ乙と笑われるのが関の山だ。

それに……俺一人で全てが丸く収まるんなら、安い犠牲だろ？

「拙者は……わからないのです。けーすけ様ばかりが悪人にされる理由が、全然わからないのです！」

「俺は悪人だぞ？　永渕をぶん殴ったし、売られた喧嘩は買っていた」

「で、でも！　それも伊吹さんの為なのですよね。だったらいいじゃないですか！」

暮葉って本当にいい子だよな。

こんな馬鹿みたいな俺の味方までするって……優しすぎるだろ。

ひょっとすると、仕事柄で味方せざるを得ないだけなのかもしれないけど。

それでも俺は、この時暮葉は本当にいい子だと思ったのである。

「ありがとな、暮葉……」

「もきゅ、あたりまえなのですよ。けーすけ様が極悪人なわけないのですよっ」

そう言ってくれる人がいるだけで、俺はもう幸せな気分だ。

……でも、例え暮葉がそう言っているとしても、世間での俺の評価が変わる事なんてないだろう。
俺はいつまで経っても“暴力魔”なんだから……。
もう、今更光の道に帰るつもりなんて全くねえ。
とっくに昔に決めたんだよ。元々評価はこれ以上下がらないくらい最悪なんだし、誰かを救うためなら俺が泥を被ったっていいってよ。
だから今回も――――

「よし、行くぞ暮葉。永渕の魔力を感じ取ってくれ」

「もきゅ……わかりました！　拙者もけーすけ様をしっかりサポート護衛するのです！」

サポート護衛って、随分無理やりくっつけたな。
まあいい。これで永渕のクソ野郎がどこにいるかがわかる。
――――待ってろ伊吹……絶対に助け出して見せるから！

「おっ、いやがったぞ！」

「間違いないで、藤島や！」

「藤島ぁ～！」

オイオイ嘘だろ……？
まさか、永渕達のほうから攻めてきたってのかよ。アイツらどんだけ俺を潰すのに必死なんだ！
自業自得であなったのに、ここまで必死に復讐しようとするものなのか？
……でも、向こうから来てくれたのは正直ありがたい。
足代が浮いたからな。ここで永渕達を倒して伊吹を救ってみせる！

「永渕ぃっ！」

「アァ？　永渕見たいな馬鹿と一緒にすんじゃねえよ。俺は黒木だ」

「え？」

「もきゅ？　けーすけ様……この人達って！」

この空き地に現れたのは永渕達ではなかった。
いかにも馬鹿っぽい金髪のピアス男、関西弁な長身のセミロングパーマ男、低身長坊主男。
3人とも、ちょっとだけ怪我しているような気がするけど……コイツらは確か。

「「さ、三馬鹿！？」」

間違いない。この超おバカっぽい見た目の人達……ああ三馬鹿だよ。
素晴らしき三馬鹿じゃないか！
思わず俺と暮葉の声がハモッてしまったよ。
まあ、アイツらがそれほど三馬鹿という名で有名になっている証拠だな。

「コラァーッ！　折角の出番なのに三馬鹿言うなっ！」

「そーやそーや！」

「絶対名前覚えてないから三馬鹿って一纏めにしたんだろ！？」

「ソ、ソンナコトナイノデスヨ！？

「そうそう！　黒木に赤佐に小林だろ？」

「僕は大林だ！　いい加減名前とこの坊主頭覚えやがれっ！」

俺がそう言うと、小林……じゃなかった。大林がキレ気味で自分の名前を叫んだ。

小林じゃなかったのか。スマン、流石に名前を間違えるのは失礼だった。

それにしても脱力するなぁ。なんでこれから永渕をぶちのめしに行こうとした所で三馬鹿なんだよ。

一気にテンションが下がってしまった……いや待て。三馬鹿って結構使えるかもしれないぞ？

しかも、黒木に至っては永渕の事も知っているみたいだ。

「って、お前ら一体何の用なんだ？」

「チッ、伊吹ちゃんを守れなかったヤツが偉そうな口聞くんじゃねえっ」

「……っ！」

な、なんで黒木がそれを知ってんだよ……？

「お、おい黒やん！　そんな事言ったら藤島に悪いだろっ！」

「そうや！　少し黒やんは黙れ！」

「うっせえぞハゲにチョクト！　事実だろぉーが！」

「誰がハゲだコラァッ！」

「チョクトやと？　ええ加減にせいや！」

……あのー、なんでコイツらが喧嘩してるんだろう。

ていうか、真面目にコイツらは何の用でここに来たんだよ？

俺も暮葉も、３人の醜い争いを呆然と見ていた。そんな中暮葉が勇気を出し。

「いい加減にするのです！　全然話が進まないのですよ！」

「おっ」

「アカンなぁ、黒やんのせいやな」

「そうだな、殆ど黒木のせいだよな」

「ざけんなよテメェら！」

「まあまあ落ちつこうぜ？　そないな事よりも本題を藤島達に話さないとな」

「本題？　やっぱ何か用なのか？」

俺がそう問うと、赤佐が黒木や大林を置いて一歩前に出てきた。

どうやら用事というものは、黒木ではなく赤佐が説明するらしい。

まあ確かに、赤佐は三馬鹿の中でもわりと常識人なほうではあるけど。

「さっき、俺ら白陵のヤツらに絡まれたんや。その中には永渕や国

宗の姿もあったで？」

「ほ、ホントなのですか！？」

「ああ、大人数なだけに疲れたわ」

そっか……コイツらの傷は喧嘩の傷だったのか。
俺がここで暮葉に過去話をしている間に、アイツら三馬鹿まで襲っていたんだな。
……でもおかしいだろ。俺らの件に三馬鹿は一切関係がなかったハズ。
だったらなんで、三馬鹿は白陵の連中に絡まれちまったんだよ？

「赤佐、アイツら何か言っていたか？」

白陵が三馬鹿に絡んだ理由が知りたい。俺は赤佐にそんな質問をしてみた。

「それが本題や。藤島に伝えて欲しいって永渕が言っていたんや」

「何をだよ？」

「明日午後3時までに、白陵のテリトリーに来いちうわけや。来ないとその他の人質は殺害、伊吹ちゃんも滅茶苦茶に犯してやるって……」

他の人質……オイオイおかしいだろ。伊吹以外にも人質がいるってのかよ！
永渕の野郎何がしたいんだよ。ていうか人質って誰なんだよ。

「そ、それで！　永渕さん達は他にも何か言っていたりしましたか！？」

「1分でもオーバーしたらアウトらしいちうわけや。ほんで、殴りこむのに人数制限はないみたいや」

暮葉の質問に答える赤佐。回答から察するに、相手も多分かなりの大人数でお出迎えするんだろう。

人数制限がないって所が怪しいぜ。それは絶対、人数が多い時にしか言えないセリフだぞ。

とにかく赤佐の話は為になったよ。明日の3時までに助ければ、全然大丈夫なんだよな……？

「わかった。暮葉！　白陵のテリトリーに行くぞ！」

「もきゅ！？　で、でも白陵高校のテリトリーなんて拙者、全然わからないのですよ！」

「お前の魔法（チカラ）を使うんだよ」

「わ、わかりまし――――」

「待てや藤島っ！」

その時、先程まで大人しかった黒木がいきなり怒鳴りつけてきたのである。

しかも黒木の表情は鬼の形相だ。あんな顔の黒木は初めてである。

まるで、裏切り者をこれから殺そうという感じで、俺を睨んでくる……。

「テメェみてえな雑魚が、勝手に動いてんじゃねえよ」

「っ！？　……誰が雑魚だよ……っ」

「テメェ以外に誰がいると思ってんだよ。このヘタレ野郎が」

「……誰がヘタレだよ。ヘタレヤンキーにだけは言われたくねえよ」

――――待て、落ちつけよ俺。

黒木の言ってる事のほうが正しいハズだろ？

それなのに、なんで俺が黒木の言ってる事に反発してんだよ……。

俺がヘタレなのも雑魚なのも全部事実だろうが……。

「うるせぇ。伊吹ちゃんを守れなかったクソ野郎が……調子のいい事ほざいてんじゃねえよ」

「お、おいおい黒やん！　や、やめとけって！」

「そうや！　藤島だって故意じゃなかったんやで？」

「お前らは黙ってろ。俺は藤島と話をしてんだよ」

黒木の言ってる事は事実。俺は伊吹を守れなかった……。

それなのに、なんで俺はこんなにイライラしてるんだよ。

「……確かに、俺は弱いよ。だけどてめえはどうなんだよ。あの場にもしてめえがいたら、伊吹は助かってたのかよ？」

「あたりまえだろ！　……俺は昼休みのテメェらの会話を聞いてたんだよ。なんでこうなっちまったかわかってんのか？　テメェがあ

まりにも鈍感すぎるからだよ！　テメェ自身はわかってねえかもしれねえけど、テメェは伊吹ちゃんを傷つけたんだ。逃げ出したくなるくらいに傷つけたんだよ。伊吹ちゃんは多分、ショックで逃げている所を永渕にやられたんだよ……どういう事かわかるよな？　全部テメェが悪い。テメェがもう少ししっかりしてれば、伊吹ちゃんが永渕に襲われる事なんてなかったんだよ！」

気がつけば空が暗くなり始めていた。別に日が暮れているからではない。

6月のこの季節にもなれば、もう少しだけ明るい時間が続くからな。この暗さは厚い雲によって日光が遮られた時の暗さだ。オマケにピチャピチャと、空高くから雫が降り始めてきた。

……雨だ、こんなタイミングでいきなり雨が降り出したのだ。

そんな中、俺の中で更に怒りが爆発しようとしていた。

畜生……なんでだよ。黒木の言葉は正論過ぎて反論ができないハズ。

それなのに……俺は――――

「……喧嘩、売ってんのか……？」

「やっと気付いたか鈍感野郎。その鈍感さが伊吹ちゃんを傷つけた事……わかってんだろうな？」

俺は、そのセリフを聞いた後に黒木と向き合ってしまった。

お互いに厳しい視線を向ける。メンチビーム、火花がバチバチと出ていそうな感じだぜ。

「や、やめろよ黒やん！　僕ら喧嘩しに来たわけじゃねえだろ！？」

「藤島もや！　それくらいでやめとけ！」

「二人ともやめてください！」

そんな三人の声も……今の俺達には全く聞こえなかった。

雨が俺達の身体に強く打ち付ける。凍えるように冷たいその雫。

そんな雨の中、まず黒木が――――

「このクソ野郎ォッ！」

「ぶぉっ！？」

一瞬にして間合いを詰めてきた黒木は、目にも留まらぬ速さで拳を振るってきた。

口内に広がる苦い味。脳にまで激しく響いた振動。

そして、ストレートを完璧に決められた俺は背中から地面に落ちてしまう。

びちゃん！と泥が飛び跳ねる音が響く。

当然俺は起き上がろうとするが、その前に黒木がマウントポジションをとってきた。

「テメェが鈍感であまりにもダセェから！　伊吹ちゃんが永渕に拉致られただろ！　どう責任取ってくれんだよテメェ！」

殴りながら説教をしてきやがる黒木。顔面が痛ぇ、なんだよ黒木……滅茶苦茶強いじゃねえか。

だけど、一方的に殴りつけられるのも嫌だ。それに黒木が強いと言っても高校生レベルでの話だ。

俺の頑丈な身体には大した威力には感じねえ……！

攻撃を見切った俺は、黒木の拳を左の平手で受け止めた。

その後は平手と拳の押し合い、そして相変わらず黒木の説教が続く。

「てめえ……ッ！」

「だから俺はテメェが嫌いなんだよ！　お前が存在しねえほうが伊吹ちゃんの為だ！　お前みたいなのに伊吹ちゃんが騙されてるから、こんなことになっちまったんだろうが！」

「……ふざけんじゃねえよ、てめえっ！」

叫んだ勢いで、俺は黒木の右頬を握った拳で殴りつける。
その衝撃でマウントポジションを取っていた黒木がぶっ飛ばされ、俺の体は自由の身となる。
だけど、それだけでは何の意味もない。
立ちあがった俺は追撃の為に駆けだし、逆にマウントポジションを取ってやった。
襟元を左拳でガッチリ握り、右拳で黒木の顔面を殴りまくる。
顔面を殴る度にバゴッ！という嫌な音が響いた。

「てめえだったら……てめえだったら未然に防げてたのかよ!?　仮に伊吹が襲われたとしても、その時てめえは伊吹を救えたのかよ!?」

「……うるせぇよ三下野郎！　逃げたヤツがほざいてんじゃねえ！」

その言葉を聞いて俺の胸が痛くなる。
逃げた――黒木が言ったその一言。そう、確かに俺はあの場から逃げた――――
暮葉が飛行術式を使ってしまったからだけど、それでも逃げた事には何の変わりもねえ。
俺は……伊吹という大切な幼馴染を敵に残したまま、逃げてのんびりとしていた。

最低だよ……正論を言う黒木さえ、こんな風に殴りつけて……全く俺は最低な野郎だ。

「オラァッ！」

「ぐぁっ！？」

すべての怒りを込めたような一撃。

顔面に突き刺さった瞬間、一体何ｍくらいぶっ飛ばされたのだろうか。

気付いた時には濡れ濡れの地面に倒れ、黒木が俺を見下していた。

「逃げるとかよぉ……男として一番最低じゃねえか！」

「が……は……っ！？」

まるで隕石のように降ってきた黒木の足が、俺の鳩尾を突き刺す。

いてぇ……っ！しかも、呼吸がぁ……！

その上、見下す黒木の冷たい視線……その視線が俺にとっては一番痛かった。

どんな攻撃なんかよりも、ただの冷たい視線が痛かった……。

「最低野郎の癖に……調子に乗るなよ！」

「ぐっ！？　あぁ……っ！　あ、がぁっ！？」

何回も、何十回も。俺は全身を踏まれ蹴られる。

その度に思うんだ。どうして俺は……こんなに弱くて最低なんだと。

ハハッ……もうダメだな俺は。そうだよな……黒木は伊吹が好きなんだもんな。

俺は自分の幼馴染、そして黒木の好きな子を泣かす最低野郎なんだ。
殴られたり蹴られたり踏まれたりしたって……何の文句も言えねえよな。
ホントそう思うよ……俺はただ、自棄になって黒木に当たっていただけなんだ。たったそれだけで黒木を殴りつけてしまった。俺はマジで最悪な男だ……。
下手すりゃよ、俺なんて生きてる価値すらないかもしれねえ……。

「オラァッ！　この！　死ねヘタレ！」

「く、黒やんもうよせ！」

「そうや！　それ以上やったら藤島が死んじまうで！」

「……チッ。行くぞテメェら……オイ藤島。伊吹ちゃんは俺が助けっからよ、テメェはママの膝で寝てやがれ。テメェは出てくんな、それから俺と伊吹ちゃんの前にその間抜けなツラ出すんじゃねえぞ」

そう言い残し、黒木は俺と暮葉を置いて去っていく。
赤佐と大林も、暮葉と俺に「ごめん」と一言を言い残して、黒木の後を追って行った。
雨の空き地に残るのは……。

「けーすけ様っ！　だ、大丈夫なのですか！　しっかりしてくださいけーすけ様っ！」

俺の名前を叫びながら駆けよって来た暮葉と、そして――
無様に伸びている俺だけであった……。

第４４話，雨の中の……（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「このコーナーも久しぶりだな」

伊吹「そうね……ていうか私本編で出番ないわよ！？」

暮葉「伊吹さん、捕まっちゃってますしね！　そういえばどうしてキャラ紹介コーナーが終わったのでしょうか？」

圭介「そりゃお前、主要キャラっぽいのが尽き――――ふがぁっ！？」

伊吹「メタな発言は控えなさいこのばか圭介っ！

小坂「このコーナー事態メタの塊だと思うけどね」

圭介「ふぁぐぅふぇふぇ（たすけて）～！」

暮葉「も、もきゅ！　それ以上はけーすけ様が窒息死しちゃうのですよ！」

※キャラが増えたらまた設定コーナーは再開します！

第４５話，決意

あれから４０分後くらい経ったのだろうか。
俺は自宅で暮葉や葵に手当てを受けていた。
黒木に散々ぶん殴られ踏まれ蹴られまくったが、流血があまりにもひどかったらしい。
……俺の身体は丈夫だし、回復も早いから心配する必要もないのに……。
なにより、俺に手当てされる権利なんざねえ。家でくつろぐ事さえ許されない。
……なにしてんだよ全く。明日までに助けなきゃ伊吹も他の人質も皆……。
「はい、手当て終わったのです」
「ああ……」
「お兄ちゃん……大丈夫？」
「ああ、大丈夫……」
「……」
藤島家が沈黙に包まれる。これも全て俺のせいだ……。
俺が自分のせいでヘコんでるから、余計に重たい空気を作っちまったんだ。
……でもいいのかよ。確かに俺は最低だしヘタレだし、しかも伊吹を残して逃げてしまった。だからってよ……黒木に何でもかんでも

任せていい理由（ワケ）になんのかよ？
たとえどういう形でも、どんなに俺が人間のクズだとしても。
――――俺が伊吹の幼馴染である事には変わりねえだろ！
そうだ、だからこそ俺は……こんな所で閉じ困っているワケにはいかないんだ。
黒木になんと言われようが、伊吹に拒まれようが関係ねえ。
俺はただ伊吹を助けたい。俺らのせいで犠牲になった人質も助け出したい。
こうなってしまったのも俺の責任だ。だから、その責任は俺が取らなければならない。
それだけだろう。俺に出来る事と言えば……唯一俺が出来る事がソレだ。
「……っ！」
そう決意した俺は、拳を握りしめた状態でふと立ち上がった。
「お兄ちゃん？」
「ど、どうされたのですか！？」
「二人とも……ちょっと出かけてくる」
「……！　ダメなのです！　もう少し安静にしてから――――」
「それでも俺は行く。揉めてる余裕なんてないんだよ！」
立ち上がった俺はスタスタと玄関へ向かおうとする。

だけどその時、俺の右腕に何かが掴まったような感じがした。
右を向くと、そこには必死そうな表情で俺を止める暮葉の姿があった。

「けーすけ様……落ちついてくださいっ」

「離してくれ……っ、責任は俺が取るんだよ」

「何もけーすけ様だけの責任じゃないのですよ！　自分をそんなに責めないでください！」

「でも、黒木の言っていた事は全部本当の話だ。やっぱり責任は俺にあるんだよ」

こんなことをするだけで、全てがチャラになるなんて思っていない。だからって、責任を取らないで消えるなんて真似もできない。それが俺の最後の役目だ。
決意を固めた俺は優しく暮葉の手を離していき、完全に離れると前を向き一歩ずつ、確実に玄関へと歩んでいく。背中に2人の視線を感じるが……俺が二人に振り向く事はなかった。
だが、靴を履いてドアノブに手をかけた。

「待ってください！」

瞬間、玄関に俺を呼びとめる暮葉の声が響いた。
その時、初めて俺は後ろを振り向く。すると暮葉はいつも以上に真剣な表情で。

「拙者も……拙者も一緒に行くのです！」

「くれ、は……？」

突然、暮葉が一緒に行くと言いだしたのである。

「永渕さんの魔力を感じれば、白陵のテリトリーがわかるのです。それに拙者の役目はけーすけ様を護衛する事なのです。ですから、拙者も一緒に行ってけーすけ様をお守りするのです！　けーすけ様の周りの世界も守りたいのです！」

「暮葉……わかった、一緒に行こう」

俺はすんなり暮葉の要求を受け入れ、暮葉も一緒に白陵のテリトリーへ行くことになった。

本当なら巻き込みたくはない。だが生憎、俺は白陵のテリトリーの場所を知らない。

その上、リミッターがかかっている通常の状態では、俺の実力なんて暮葉の足元にも及ばない。

情けない話だが暮葉が居たほうが、あらゆる確率が上がるのである。

さっきだって……暮葉に助けられたようなもんだしな。

「お兄ちゃん！　暮葉さん！　晩御飯までには帰ってくるんだよ！」

葵はまるで母親のセリフみたいな事を俺らに向かって叫んだ。

晩御飯までに帰れればいいな。相手はマジ殺人とかやりそうな相手だし、下手すりゃ死ぬぜ？

――――扉を開けて外に出た俺と暮葉。しかし、どういうわけか玄関の前に一人の男が立っている。

男は長身で筋肉質だが、どこか爽やかな雰囲気を放つ優しそうなヤ

ツである。
しかも男の服装は白い道着に黒い帯、左胸元には“重原流”という刺繍が入っていた。
俺も暮葉も――この男には見覚えがある。

「し、重原さん!?」

「お前……！　なんで俺ん家の前に！」

「……行くよ、白陵のテリトリーに」

重原の口から放たれた意外な言葉。
……コイツ、どうして今回の件を知っているんだ?

「なんでだよ……っ、お前が何でこの事を?」

「俺も守れなかったからね」

「もきゅ?　だ、誰か襲われたのですか!?」

「不意打ちを食らってね。不良はほとんど退けたけど大吾はボコボコ、小坂さんは拉致されてしまった……」

「こ、小坂!?」

「亜紀さんが拉致されたのですか!?」

「すまないっ、俺が居ながら不覚だったよ……！」

重原の口調はいつもの優しい感じでも、その表情と握られた拳が悔

しさを表している。
永渕の野郎……一体どういうつもりなんだよ。
他の人質もいるとか言っていたらしいけど、なんだって態々知り合いを襲うんだよ。
もしかして他の人質ってのも……知り合いとかなんじゃ！
ふとそう思った俺はポケットから携帯を取り出し、一人ずつ確認を取って行く。
そのうち、出てくれたのは青山さんと凪紗と大吾のみ。部長とあかりは全然繋がらない。

「けーすけ様、どうしたのですか？」

「いや……確認していただけだよ。クソッ！　長淵の野郎……ッ！」

「圭介、もしかしてその永渕というヤツ、知り合いなのか？」

「一応知り合いだ。中学の時に色々あったんだよ」

「圭介、俺は状況がよくわからない。知っているのは圭介が関わっているらしいって事だけだよ。だから詳しく説明してもらえるかい？」

どうする、下手すりゃ友達を失う過去だぞ。
重原はいいヤツだけど、俺がそんな最低な暴力魔だと知った瞬間……。
って、なに友達を失う事で怖がってんだよ。俺なんてもうとっくの昔に堕ちた存在になってるだろ。
それに、うまく行けば協力を得られるかもしれない。だったら事実を話すしかねえだろ。

――――俺は、俺の過去やどうして白陵が初芝の生徒を襲うのか、その理由の全てを重原に説明した。

「そんなことが……？」

「悪い。今回の件は殆ど俺のせいなんだ」

「待て、今の話でどうして圭介が全て悪い事になるんだい？」

「なるだろ。俺がもっとちゃんとしてれば、こんな事にはならなかったハズなんだよ。だから今回はその責任を取る、全てがチャラになるってわけじゃねえと思うけど、それでも俺はテリトリーに殴りこんで永渕をぶっ飛ばして、伊吹と他のみんなを助け出してやる！」

……しかし、重原も暮葉も相変わらず表情は暗いままであった。そんなに俺の自虐が嫌かよ。でも自虐しているわけじゃねえ。全て事実なんだからしょうがねえだろ。俺は事実を言っただけだ。それなのにコイツらは――――

「……けーすけ様っ、そこまで自分だけの責任だって思い詰めると、身が持たないのですよ……？」

「そうだよ。それに、事実これは圭介だけの責任じゃないよ」

――――コイツら、優しすぎだろ。

ここまで最低な事をしておいた男に、どうしてここまで優しくするってんだよ？

黒木の反応が普通なくらいだぜ。それなのにどうしてコイツらは……。

いい友達すぎるだろ。目から汗が出たらどうするんだよ……！

「……ありがとう」

とりあえずはそう言った。ここで否定したってしょうがないから……。

でも優しい人が何人か居ようが、所詮俺は最低のクズ野郎だ。

――――たった一人の幼馴染さえ満足に守れなかった、ただの雑魚でヘタレ野郎だ！

「わかってくれればそれでいいよ」

「重原さんの言う通りなのです。あまり自分を責めないでくださいね！」

「わかった、ありがとな」

……この二人は本心なんて知らないんだろうな。

出来れば知られたくないけど。こんな事を考えていると知れば、二人とも優しいから絶対に救いの手を差し伸べようとする。俺にはその手に触れる権利なんてないのに。

「よし、それじゃあ白陵のテリトリーに行こう」

「おう」

「了解なのです！」

……時刻は１８時丁度、俺達は白陵（せんじょう）のテリトリーへと赴く。

第４５話，決意　（後書き）

後書きトークコーナー

伊吹「し、信じられない……圭介が主人公してる！？」

暮葉「ホントなのです！　けーすけ様が主人公なのですよ！？」

圭介「お前ら、俺は一応――――」

伊吹「今まで圭介なんて村民Ａレベルだったのに」

暮葉「全くなのです！　けーすけ様……いつ主人公になったのですか！？」

圭介「悪かったな個性の薄い主人公で！　俺は元々主人公だ！」

☆以下、本編で出番のない人達のつぶやき☆

凪紗「私、出番がないのはなんで？　三馬鹿よりも出番がないなんてひどくないか？」

千早「多分……ちゅ、中途半端に強いからだと思いますっ」

大吾「今まで広ちゃんとセットでの出番だったのに。とうとう僕の出番が広ちゃんより少なくなった！」

純奈「私はナギちゃんとの愛さえあればどうでもいいんだよ！」

第４６話，夕日の下の戦場

夕焼けが素晴らしい時間帯……。
本当なら家でエロゲーをプレイしている時間。
それなのに、今日の俺はエロゲーなんてものとは無縁な生活を送っていた。
下手をすれば、今日が人生最後の日となるかもしれない……。

ここは白陵高校や明智家からわりと近い、自動車工場の跡……。
敷地内は荒れ果て、ゴミや廃車が山積み状態である。
その上、大勢の不良達が俺達を待ち構えていたのである。

「へへへ……」

「たった3人で良く来たな、褒めてやんぜぇ！？」

不良達はバットや木刀など、あらゆる武器で武装している。
ブレザーと学ランが入り混じっているのだが、俺はコイツらに対して素直に思った事がある。
……コイツら、一体いつの時代の不良だよ！あまりにも古風すぎるぞコイツらは！

「クソッ、なんちゅー数だよ！」

「流石にこれはまずいですね……っ！」

「この人数で男二人に女子一人じゃ、１０分持つか微妙だね」

喧嘩と言うのはどんなに鍛えられた人間でも、やはり数が多いほう

が有利だ。
そんなことはよくわかっている。3人相手にするのだって結構キツいもんだ。
相手はどう考えたって、一クラスの人数よりも多いんだぜ？
いくら武道家と戦国系魔法少女がいるからって、なんとかなるんだろうか？
でも重原も暮葉も苦しそうな表情だし、やっぱりマズいんじゃないだろうか……と思った。

「ちょっと待てやコラァッ！」

「アァ？」

「なんだアイツら、どこの学校だ？」

刹那、何者かの声が響きそれに白陵の不良達が反応した。
その声は俺達のすぐ後ろから聞こえた。ていうか、どこかで聞き覚えのある声である。
確認の為、急に後ろを振り向くがその視線の先には。

「チッ、藤島までいやがる……あんだけボコッたのに、よくこんな所に来る根性あるなアイツ」

「まぁまぁ。ええやないか別に」

「うぅ……なんで僕までこんな喧嘩に……っ！」

三馬鹿だ。なんと三馬鹿がいやがったのだ。
当然黒木の姿も……黒木は完全に俺の事を敵視しているようで、鋭い目つきで俺を睨みつけている。

赤佐や大林がいなかったら、また黒木が飛びかかってきそうな勢いだ。
……ところで疑問に思う事があるんだ。三馬鹿の後ろにいる如何にも不良な人達は何？

「チッ、まあ藤島は我慢するか。オイテメェら！　好きなだけ暴れていいぞ！」

「マジっすか黒木さん！？」

「上等だコラァ！　この機会に白陵ブッ潰してやんぜ！」

「やったるぞオラァッ！」

ま、マジかよ！黒木に仲間というか手下のような存在がいやがるだと？
確かに黒木は元ヤンだって話だけど、手下がいるほど偉い地位にいたのかよ！
とにかく、黒木が連れてきた不良達は結構な人数だ。これはもしかするとイケるんじゃないか？
……いや、仮に可能性が殆どないとしても、俺は突き進まなければならない。
伊吹やほかのみんなを助ける為に……責任を取る為に！
そして叩き直してやるわ……あの永渕の腐った根性を！

「……」

「……」

睨み合いが数十秒ほど続く。

とにかく相手の数が多い、三馬鹿のおかげで俺達の数も多くはなったが……。
正直、これはどうなるかわかせないぜ。でも……そんな事、俺達には全く関係がない。
やらなきゃならない事が山積してんだよ……こっちには！

「行くぞみんな！」

「はい！」

「藤島テメェ！　全ての原因が指図してんじゃねえぞ！」

「うおおおおおおおおおぉぉっ！」

俺を先頭に一斉に皆が駆けだした。
暮葉は鞘に入れたままの一期一振を両手に持ち、重原もとにかく走る。
黒木らは何らかの武器を持ち、それを手に持って敵中へと突撃をかける。

「ナメやがってぇ……！　俺達も行くぞ！」

「おおおおおおおぉぉぉぉぉっ！」

俺らに対して白陵の不良達も向かって来た。
しばらくして遂に両陣が衝突、俺らと白陵ヤンキー集団の殴り合いが始まる。
こうして――最悪の乱闘が始まってしまったのである。

「……ッ！　ッ！　ッ！」

暮葉が全長１０６ｃｍ、刃渡りにすると７３ｃｍ程度の一期一振を振りまわす。
ただし鞘付きなので、攻撃は斬るというよりは突いたり打ち込んだりする形であった。
暮葉の素早い動きに不良達はついていくことが出来ず、ただその鞘に打たれるのみだ。
当たった場所によってはミシッという嫌な音が響く。
しかも暮葉の狙いは正確であり、たったの一撃で不良達を沈めて行く。

「オラァッ！」

「ぐ、は！」

――――そんな実況をしている間に、俺の所にも一人の不良が襲いかかって来た。
一発顔面をぶん殴られ、その時の衝撃に任せてくるりと一回転をしてしまう。
……だかなんだよ、たかが不良が放つ拳だろ。身体が丈夫な俺には――――

「……ッ！　生ぬるいんだよっ！」

咄嗟に突き出したアッパーカット。なんとその攻撃で不良は宙に浮いた。
地に落ちた不良はボロ雑巾のように倒れている。意識はあるっぽいが思うように動けないらしい。
俺は経験上知っている。顎を思いっきりぶん殴ると脳震盪を起こす。
特に資料なんて読んだわけでもないし、元々そんな事を知っていた

わけではない。
ただ過去の経験上、腰の入ったアッパーカットを決めた相手は大抵、脳震盪を起こした。
そして、後でそこは急所であると知ったんだ。うまくやれば一撃で倒せるかもしれない急所。
急所はそこまでの力を入れなくても普通に痛いと感じ、力を入れると下手すれば危険な場所である。

「あ……ぐぅ……っ」

「テメェ！」

俺に倒され、伸びた不良を見て仲間が次々と襲いかかってくる。
今度は二人……人数が多い時にはスピードだ大事だ。

「ふんっ！」

「んがぁっ!?」

向かって来た一人に対し、俺はヘッドバットを放つ。
バゴ！という植木鉢を高い所から落としたような音がする。
それによって一人は怯むが、もう一人はいつの間に俺の後ろに回り込んでいた。
背後に回り込んだ不良に俺は、左腕をぶん回し裏拳を不良の眉間へと打ち込む。
人体の急所でもある眉間に拳を打ち込まれた相手は、声にもならぬような声をあげてバランスを崩し、ゆっくりと後ろへ崩れ落ちる。

「ぐっ……テメェーーーッ！」

さっき怯ませた不良が立ち直り、決死の突撃を仕掛けてくる。

「ぐおおおぉぉぉぉっ！」

俺も不良に立ち向かうかのように駆け出す。

直前で相手から放たれた拳を避け、俺も右拳を放つ……が、あえてそれを当てなかった。

相当不良は驚いている。不良は何の回避もしなかったので、普通は外れるハズがないのである。

にも関わらず、俺の拳は僅か１ｃｍの差で外れたのだ。

相手は何かの奇跡だろうと思ったかもしれない。しかしこれは俺の作戦であった。

外れたと安心をさせた所で――――

「がっ――――ばっ、ァ！？」

後頭部、俺が狙ったのは後頭部だ。

後遺症の残る危険性がある箇所なので、格闘技では反則技にされている急所である。

そこに俺は、しっかりと握って右の裏拳を打ち込んだのである。

まあ、多分大丈夫であろう。一応程度というものは身体でわかっている。

眉間に後頭部、急所ばかりを打たれた相手はたまらず大地と接吻を交わす。

「ぐっ！　オラァ！　だぁっ！」

「フッ！　ありゃ！」

「だぁぁもう！　チクショォォォォォッ！」

3人を倒した所で俺は前方を見ると、三馬鹿が白陵の不良相手に頑張っていた。
黒木のヤツも明智が相手じゃなかったら、結構強いもんでほぼ一方的な勝負だ。
赤佐も黒木に負けていおらず、その大柄なボディーにタックルされればひとたまりもない。
大林も小柄で非力ながら、サッカーで鍛えた脚力と素早さだけで頑張っていた。
黒木が連れてきた不良達も、白陵の不良とほぼ互角の戦いを展開。
重原も――――

「フッ！」

「――――！」

顔面に打ち込んだ素早くキレのよい裏拳。アッサリと崩れ落ちる白陵のヤンキー。
その直後の達人のように隙のない構え。
山籠りをした事があるだけに、重原の武術の腕前は達人級であった。

戦況は確実に、暮葉や重原といった達人。
そして黒木に赤佐といった喧嘩慣れした奴らのおかげか、若干俺らのほうが有利である。
だけど――それでも白陵の不良の勢いがなくなったわけではない。
相変わらずの大人数で俺達を襲ってくるんだ。全くキリがねえぞこれじゃ！

「圭介！　大丈夫か！？」

「あぁ、まあなんとか」

重原が俺を心配してか、大ジャンプで俺の所にやってきた。

……しかも、飛んでいる間に蹴りで2人を撃退していた。もう重原ってチート級に強い！

無差別格闘重原流って一体どんな修業をしてんだよ。

しかも、アレでも重原は父親や爺さんには敵わない存在らしい。重原家……恐るべし！

「けーすけ様！　ご無事ですか！？」

「え、おう！　暮葉こそ大丈夫か？」

「はい！　この程度の相手ならなんともないのですよ！」

「木下さん見かけに寄らず強いんだね。なにかやってたのかい？」

ま、まずいぞ。実は異世界人で特殊部隊の人なんですーなんて、絶対に言えない事だ。

暮葉も困惑しているようだし。仕方がない、テキトーに誤魔化すしかない！

「く、暮葉は銃剣道やってたんだよな！？」

「もきゅ！？　は、はい！　拙者の家はかつて軍人家庭だったので！」

「そうなんだぁ。通りで！」

……よかった。テキトーに銃剣道の達人って事にしておいたら重原

も納得してくれたよ。
まあ、オリジナルの銃剣道とは全然違う戦い方だったけどね。
でも、重原だって戦っていたんだ。そこまで細かくは見ていないハズである。

「それにしても、すごい数なのですね……っ」

「つーか、さっきよりも増えてねえか？」

「確かに、このままだとまずいね……」

どういう事なんだよ。全然白陵の不良の数が減らねえぞ。
まさか永渕の野郎。白陵に通う不良生徒全員を動員しやがったのか。
だとしたらマズいぞ。このまま戦ってたら疲れるだけだ。
さっさと戦いに終止符を打たねえと、その為には――――

「二人とも。先に永渕を叩くぞ！」

「……そうですね！　大将さえ叩けば戦いは終わるのです！」

「でも、三馬鹿とその仲間だけでは厳しいよ。俺はここに残って戦うよ」

「ではけーすけ様！　永渕さんの居場所まで拙者が護衛するのです！」

「お、おう！　重原、頑張れよ！」

「任せて。そっちの戦いが終わるまで……全力で食いとめるから！」

それを言い残した後、重原は再び敵中へと飛び込んでいった。
重原がここに残り、暮葉が俺の護衛をする。
確かに敵の数が多い場所よりも、敵の数が少ない場所のほうが暮葉の身は安全だ。
いくら強いったって暮葉は女の子。無理だけはさせたくない。
この展開だと重原にはとても悪いけど、でも重原がいないと三馬鹿もおそらく厳しいだろう。

「けーすけ様！　先を急ぎましょう！」

「おう！」

みんなが頑張る中、俺と暮葉は大将を叩くべく先へと進んだ――

―

第４６話，夕日の下の戦場（後書き）

後書きトークコーナー

千早「藤島先輩……その、す……好きですっ！」

圭介「えぇっ！？　ちょ、青山さんそれマジっすか！？」

千早「は、はい……っ。ずっと昔から先輩の事、見てました」

圭介「……いいのか、青山さん？」

千早「はい！　私……藤島先輩じゃなきゃ嫌です。だって……ミー、君ノオ尻ノ形ダイスキダカラ☆」

圭介「エッ？」

アリック「ヤア、久シブリダネ！　神崎・Ｈ・アリック参上ダボーン！」

圭介「嫌アアアアアアアアアアアッ！」

……

圭介「……といういう夢を見たんだ」

伊吹「の、ノーコメントよ……」

暮葉「拙者はお菓子に囲まれる夢を見ました！」

第４７話，白陵Ｎｏ２

「誰も……いないですねっ」

「不気味なくらい静かだな」

荒れ果てた工場内部へと進んだ俺と暮葉は、敵の襲撃を警戒しつつ慎重に足を前に進める。外はあんなに騒がしかったのに、工場内部は静けさに包まれている。なんだか不気味である。

畜生……永渕は一体どこにいるんだよ。人質がいる事以外、こっちには何の情報もねえぞ。

何か情報さえ手に入れば、永渕の居場所を掴める情報があれば……！

「アヒャヒャヒャッ！」

「……！　誰か来るのです！」

「っ！？」

静かな空間に、不気味な足音と狂気じみた笑い声が響き渡った。

タッタとゆっくり、気味の悪い笑い声をあげながら何者かが近寄ってくる。

それは短ランにドカン、金髪のリーゼントで凶悪なツラをしている、明らかに時代を間違っている古風なヤンキーであった……。

「アヒャヒャ！　よく来たじゃねえかテメェら……外の広場でくたばると思ってたのによ」

言いながらヤンキーは、口に銜えた煙草を吐き捨てて火を踏み消す。

露骨なポイ捨てだ。煙草のポイ捨てって古宇坂の条例じゃ違法じゃなかったっけ？
まあそれはともかく。アイツ、なんだか危なっかしい雰囲気の男である。

「何者なのですか！」

「アヒャヒャ！　俺は船木健太（ふなきけんた）つーモンだけどよぉ。通称“右方の船木”ってんだ、まぁ白陵のＮｏ２よ」

この男が……古宇坂最強を誇る不良校。白陵高校のＮｏ２。
つまり、永渕の次に喧嘩が強い男ってわけか。
でもちょっと待てよ。右方の船木だって？

「てめえは神の右席気取りかよ！　しかも右方って最強キャラじゃん！」

「いいじゃねえか！　右方の船木って強そうじゃね？　アヒャヒャ！」

「もきゅ！　わ、笑い方が気味悪いのですっ！」

なんだよ船木さん、あんたとあるラノベに影響された厨二病かよ！
しかもあまりの不気味さに、暮葉が思いっきり引いちまってるじゃないか。
同じく気味悪いキャラ繋がりで、舌に十字架でも付けて“前方の船木”って名乗っとけよ！
全く……最初にそげぶするぞコノヤロー！

「アヒャヒャッ！　さぁ～て、二人まとめてボコボコにしてやろう

か？」

「……されてたまるかよ！　それより永渕の居場所を教えろ！」

「そうなのです！　大きな趣味の悪いパンを頭に乗せてるくせに、出しゃばるななのです！」

「テメェこれはリーゼントだ！　食い物と一緒にすんじゃねえ！」

暮葉も地味にひどい事いうな！

金髪リーゼントだって船木してみれば立派なチャームポイント。

ていうか、アレがなかったら船木じゃなくなるだろ。

よくあるヤンキー顔なので、あの髪形じゃなかったら誰だか見分けがつかなくなる。

「り、りーぜんとってああいう髪型だったのですね」

「知らなかったのか？」

「は、はい！　すごく新鮮なのです！」

確かに暮葉は異世界人だしな。

世界情勢が一昔前の地球みたいでも、細かい文化とかは地球とは全くの別物なのだろう。

魔法が存在するくらいなのでそれくらいの違いがあったって、別に変な事ではないハズだ。

たまたま、暮葉の世界にはリーゼントという髪型がなかったんだろうぜ。

「でも今時アレは流行らねえぞ？」

「もきゅ、そうなのですか？」

「今時のヤンキーもあんな髪型のヤツ、そんなにはいねーぞ？」

「なるほど、つまり時代遅れってわけなのですね！」

「誰が時代遅れだコラァッ！　テメェらリーゼントの素晴らしさを全く理解していねえ！　短髪剃り込み？　丸刈り剃り込み？　角刈り？　パンチパーマ？　そんなの全然気合いが入ってねえ。俺から言わせて貰えば永渕さんの髪型だって気合いが足りねえ。ツッパリならリーゼントがあたりまえだ！　どうだ参ったかコラァッ！」

……すげえ。リーゼントについてあそこまで熱く語る人、初めて見た気がするよ。

不良漫画とかあんまり読んだ事はないけど、でも俺の知ってる不良キャラでさえ、あそこまで熱く語るキャラクターはいなかった。

そもそも、今時リーゼントなんてツインテールの貧乳ロリっ娘よりも希少価値だぜ？

リーゼントの硬派なツッパリ……これはもう絶滅危惧種の国宝レベルだ！

「随分とまぁ……リーゼントにこだわりがあるようで」

「あたりまえだ！　そこのピンクのアホ毛とは違うんだよバーカッ！」

「も、もきゅ！？　よくも拙者のアホ毛をバカにしたのですね！　アホ毛は拙者のチャームポイントなのですよ！」

く、暮葉さんそのアホ毛。チャームポイントだったんだ……。
どちらかという俺は、その琥珀色の瞳がチャームポイントだと思っていたけど……。
つーか、暮葉も船木並に自分の髪にこだわりがあるんだな。
正直、特にイジりもしていない黒髪ナチュラルな俺にはわかりません。

「うるせぇ！　大体ピンクとかありえねえだろアニメかよ！　金髪のほうがフツーだし！」

「もきゅ！？　き、金髪なんて素行が悪いだけに見えるだけなのです！　それに拙者の髪は天然だから仕方ないのです！」

暮葉のピンクはおかしいだろと思ったの、俺もです。
でも、金髪も十分奇抜な色ですよねー。それを言ったら伊吹の髪色も不思議だけど。
……まあ、結論を言えば世の中いろいろあるというわけだ。

「素行も何も不良にンなもン関係ねェ！　とにかく俺の金髪リーゼントを馬鹿しやがって、テメェら処刑確定だ！」

ダッ！という突然の足音。
狭苦しい工場内を駆け始めた船木は、僅か数秒で５ｍという距離を詰める。
――――アイツ、ふざけたキャラだけど実力は確かも。動きは滅茶苦茶速ェ！

「アヒャヒャ！　まずは……女からミンチ確定だぁぁぁぁっ！」

間合いを一気に詰めた船木は右足で跳躍し、拳を振り上げながら暮

葉へ飛び込む。
暮葉も透かさず鞘に収めた一期一振を突き出し、飛び込んでくる船木を自滅へと追い込もうと試みる。
あのまま突っ込めば、確実に一期一振の先端は船木の腹に突き刺さるだろう。しかし――ガシッ！
まるで、刀を突き出されるのが予想済みだったかのようだ。
鞘を力強く握った船木。勢いで突っ込む事も刀の先端が刺さる事もなかった。
そして猿のように身を動かし、空いていた右拳で思いっきり暮葉を

――――

「ぐっ！　させるかよてめえ！」

ぶん殴る前に、俺は衝動的に飛び出してしまった。
そして、眼を瞑り衝撃に備える暮葉を助けるように――俺は船木の横顔をぶん殴る！

「だ――――ハァッ！」

ゴギンッ！と、如何にもぶつかり合うような嫌な音が響き渡る。
その衝撃でぶっ飛ばされた船木は、どうにか自らの脚力で倒れずに済むものの、頬を痕を赤く腫らして口元からも血を流していた。

「けーすけ様っ！」

「大丈夫か、暮葉！？」

「は、はい！　助かったのです！」

よかった――暮葉が無事で本当によかった。

何故俺があのタイミングで飛び出したか。それは当然、この可愛い顔を守りたかったである。
一方の船木は左頬を左手で押さえ、鋭い目つきで俺達を睨んでくる。しかも、船木の右拳は血が出る程に握られていた。

「アヒャ！　この野郎ォ……1対2とは聞いてなかったぜぇ？」

「それはお互い様だ。今はてめえ一人でも、もう一人いたら仲間も使って攻撃するんだろ？」

「そりゃあ当然だ。サシで勝負するって誰も言ってねえからな。あとこうも言ってねえな……」

思わせぶりな台詞を吐いた――刹那。
船木は短ランの中から鋭く光る、バタフライナイフを出してきやがった。
オイオイ。刃物って冗談で済まされるレベルじゃねえぞ！

「もきゅ！　は、刃物！？」

「誰も武器を使っちゃいけねえとかな、そんなふざけた事言ってねえよなぁ！」

「くっ……てんめえ！　いくら喧嘩でも刃物なんて普通使うかよ！」

「そういうテメェらこそ武器持ってんだろうが。刃物だって武器なんだよ、同じだろうが！」

確かに、刃物も武器と言えば武器だ。
ていうか道具なんてものは、使い方によってはどんなものでも武器

になり得る。
でも――喧嘩に刃物は邪道だろ！

「だったら……拙者も！」

え……ちょ、暮葉さんもしかしてアンタ！
その時、暮葉は握りに手を移し、鞘から一期一振を抜きだしたのである。
ギラリと輝く鋭利な刃。明らかにバタフライナイフとは格が違う迫力。
まさに本物の日本刀。そんな本物を見た船木は――――

「ほほほほ、ホンモノ！？　て、テメェ！　日本刀は卑怯だろっ！」

「もきゅ、知らないとは言わせないのです。日本刀だって……刃物なのですよ？」

こ、怖ぇ……。
笑顔で言う所が余計に怖い。暮葉の事は絶対に怒らせないほうがよさそうだな。
下手をすればあの刀の錆になってしまう。そんな刀の錆にされそうな船木は明らかにビビっていた。
冷や汗をダラダラと流し、顔面蒼白となり、その上足までガクガクと小刻みに震えている。

「あ、はわ、あぁ……っ」

「もきゅ！　では……覚悟はいいですね？」

「は、はぁぁ……あぁぁあぁぁあぁ母ちゃーーーーーーーーんっ！」

に、逃げた……あの強かった船木さんが一期一振にビビって逃げた！
いくら強いと言っても、やっぱりただの不良である。
……ていうか、刀なんて誰でも怖いモノだと思うけどね。
恐怖心を煽ると言う意味では今の作戦、間違いなく成功だったろう。
暮葉は安心したように一期一振を鞘へと収め、満足そうな顔をして俺の傍に駆けよって来た。

「やりました！　サシゴロになる前に相手が逃亡してくれたのです！」

「さ、サシゴロって……」

意味わかる人いるんだろうか。ていうか俺も少しわからなかったぞ。
多分サシゴロとは刃物を持って喧嘩をするって意味だろう。
……おそらく、本職の方でも一部の人しか使わないと思う。
暮葉もよくそんな日本語知ってたな。何か漫画でも読んだのだろうか？

「さっ！　けーすけ様、先に進みましょう！」

「お、おう……」

まあ……いいのか。邪魔をするヤツを退けたんだから。
でもどうしよう。相変わらず永渕の居場所はわからないぞ？
――まあ、根気強く探すしかないか。待ってろみんな……絶対助けてやるからな！

第４７話，白陵Ｎｏ２（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「弱くたっていいだろ。誰がそんな事で文句を言うんだよ……」

伊吹「う、うっさい！　そんなの……っ！」

圭介「そんなのでいいんだよ。弱いからって、それでなんかの罪になるハズがないだろ？　人間誰だってどこかは必ず弱いんだから。確かに努力で己を強くする事はできるけどさ、それでも弱さというのは誰にでも残るものだよ」

伊吹「け、けい……すけっ」

圭介「……それでも、どうしても強くなりたいってんならいい事を教えるよ。思いっきり泣くと……強くなれるらしいぜ？」

伊吹「圭介……圭介っ！」

圭介「……伊吹」

……

圭介「……という小説を書いてみたっ！」

千早「先輩のセリフが臭すぎて……そのっ、キザすぎます……っ」

あかり「流石千早、バッサリだな！」

葵「確かにお兄ちゃんの臭いセリフで恋に落ちる女の子なんて、葵以外にはいないよね！」

伊吹「ていうか……なんでヒロインが私なのよ！」

凪紗「いくら伊吹編だからって……わ、私の出番がっ」

圭介「思いのほか酷評かよ！　自信作だったのに！」

暮葉「けーすけ様！　それよりも本日の晩御飯何にしますか！？」

第４８話，恐怖の男

結局――その後も俺達は永渕や人質の居場所を求めて、狭苦しく黴臭い工場内をさ迷っていた。
延々と続く古びた通路は、次第に俺達をイライラさせていった。
この工場は以外と広いのである。中々永渕達の居場所を突き止める事ができない……。
畜生。まだ明日の午後3時までは時間あるけど、このままだと今夜のアニメに間に合わない。
……いや、葵との約束。晩飯の時間に間に合わねえぞ。
皆を助けて葵との約束も守る。このままだとそれが出来ない……クソッ！

「全然……辿りつかないですねっ」

「ああ。ホントに永渕はここにいんのか？」

「それは間違いないです！　魔力自体は物凄く近くに感じるので、必ずここにいるのです！」

「とにかく、今は暮葉と感だけを信じるしかねえな」

こんな事になるんだったら、白陵のヤンキーを一人捕まえておけばよかった。
そうすれば、もしかすると永渕の居場所とそこまでの道を教えてくれたかもしれない。
でも、今更後戻りはできない。外では重原や三馬鹿が頑張っている。
この中でも……伊吹や捕まった人達が傷ついている。

こんな所で後戻りなんてできねえ。もう二度と逃げたりなんかはしねえ。

「ぎゃあああぁぁっ！　ああ！　や、やめてくれっ！　がはっ！　あああああっ！」

「もきゅ！　す、すごい悲鳴なのです……っ」

「しかもこの声、さっきの船木って野郎のじゃないか？」

なんだよ、一体どういう事なんだよ。

今の叫び声は間違いなく、さっき俺達と戦っていた船木の声である。

だけどさ、そんな敵だった船木が叫ぶって色々とおかしくないか？

人質が叫び声をあげるのなら許せないが、決してわからないわけではない。

だけど、永渕にとっては味方のヤツがどうして叫ぶんだ。俺達以外に戦えるヤツはいないハズだぞ？

「けーすけ様！　こっちです！　こっちから声がしたのです！」

「お、おい待てよ！」

俺は一足先に駆けていた暮葉を追いかける。

暮葉に追いつき並ぶと、やがて俺達二人は大きな扉の前に佇んだ。

錆びた大きな扉……その向こうから響く船木の雄叫び……。

「ど、どうしますっ？」

「……開けるぞ」

俺達に残されている選択肢は前進あるのみ。この先に永渕も人質のみんなもいるんだ。

「あ、あの……けーすけ様っ！」

「ん？」

「い、いえ……なんでもないのですっ」

暮葉は少し恥ずかしそうに俯き、その上左を向いて俺から視線を逸らしていた。

その後はただ口ごもるのみ。何かを言いたそうではあったけど……。

でもその直後、強い意志を感じる表情の暮葉が顔を上げ、俺の事を見てきたのである。

「暮葉？」

「行きましょう！　けーすけ様！」

「……おう！」

俺は暮葉の言葉に大きな声で返事をし、そしてガシッと勢いよく取っ手に手を掛ける。

ここを開ければ敵陣の中央。そして捕まってしまった人質も沢山だ。

……俺はその人質を助けなきゃならない。俺のせいで捕まってしまった人質を。

そして助けて、全ての責任を取らなきゃいけねえんだ。その想いを胸に……。

――――遂に重たい扉を開け、俺達は本当の戦場へと足を踏み入れ

た。

「伊吹！」

「皆さんっ！」

俺は伊吹の名前を、暮葉はみんなの事を叫ぶ。
だが、そこには思わず息をのんでしまうような、衝撃的な光景が目の前に広がっていた。

「あ、あれ……藤島君に木下君ではないかっ？」

「……け、圭介……っ？」

「うそっ、圭くん！　やった助かった！」

「圭介が来たって……ほんとなんだよな！？」

浅間部長、伊吹、小坂、あかり……。
そしてその前には船木をボコる永渕の姿がある。
オカシイ事に人質達はチェーンで縛られていたのだ。オイオイ普通は縄とかだろ！
こんなくだらねえ作戦で、どんだけお金かけてんだよ白陵の不良どもは！
……しかも、人質達はみんな明らかに怪我をしていた。
浅間部長なんてぶん殴られたような跡が変色してるぞ。ホントに大丈夫なんだろうか？
そんな事を思っていたその時――――

「アァ？　へへ……やっとお出ましのようだなぁ」

「永渕……！」

永渕がようやく俺達に気付く。今まで気付かなかったあたり、よっぽど船木をボコるのに夢中になっていたのだろうか。先程までボコられていた船木は見事なまでに血だらけだ。

「うぅ……な、永渕さ……がはっ！」

永渕の名前を呟く船木の首筋に、永渕は踵落としを打ち込んだ。
色々とありえねえだろ……永渕、アイツ外道すぎるだろ。
大体、船木はてめえの仲間だってのに、なんててめえは船木をボコボコにしてんだ。
船木は、さっきの永渕の一撃で完全に伸びてしまった。白目を向き口からも流血。
明らかに船木は人質達よりも重傷を負っていた……。

「てめえ！　なにやってんだよ！」

「あぁん？　敵前逃亡をしたボケに制裁加えてたんだよ」

「てめえ……なんだって友達にそんな事ができるんだよ！」

「友達？　フッ、俺に友達はいねえ。ただし手下なら山ほどいる。この船木も俺の手下の一人だぁ」

友達はいないけど手下はいる……なんだよそれ、ただの寂しいヤツじゃねえか。
しかも、友達以外に唯一自分について来てくれる存在にさえ、そんなふざけた真似をすんのかよ。

……この大馬鹿野郎は！

「ふざけんじゃねえよてめえ！　たとえ手下だとしても、ちょっとの失敗でそこまですんのかよ！」

「そうですよ！　今時軍隊でもそこまではシバかれないのですよ！」

少なくとも、暮葉が所属するアルファ隊ではそうなのだろう。
世の中先輩軍人にシバかれる軍隊なんて、山ほどありそうなものだが……。
でも、それでもあの永渕は許せねえ。船木のヤツ気まで失ってんじゃねえか！
今までアイツがやってきた事に加えて、余計に腹が立ったぞ！

「なに必死になってんだかなぁテメェら……さ、ンな事より地獄のショーでも初めっか？」

そんな事を言いながら、永渕は拳を構えて臨戦態勢に入った。
そのポーズが示す意味はただ一つ。
俺も永渕同様拳を構え、永渕の事を強く睨みつけた。
……つまり、ポーズが示す意味とはこういう事なのである。

「……！」

「おぉ怖ぇ、滅茶苦茶怖ぇっ！　その顔最高じゃねえかよ、やっぱ暴力魔のてめえにはその凶悪な顔がお似合いだな！」

「……誰が」

「あ？」

「誰が暴力魔だって？」

俺は永渕の暴力魔という一言について訊き返していた。

――――暴力魔、いつの間に広がっていた俺の異名の一つ。

あかりも最初は俺の事を散々暴力魔って言っていた。

決して名誉があるわけではない。むしろ不名誉な俺の異名……。

俺はそんな異名を言いやがる永渕に対し、いつのまにか文句をぶちまけていた。

「ふざけんなよ！　確かに俺はてめえをぶん殴ったし、てめえの仲間さえも血だらけにした……そんな暴力魔だよ。だけどてめえ自身はどうなんだよ？　過去に伊吹を襲っといてそれで俺にやられて……その復讐の為だけにこれだけの大人数に暴力を振るって、挙句の果てには失敗した仲間にまで暴力だと？　……俺は確かに俺のせいでみんなを傷つけた。たった一人の幼馴染さえ守れなかったクズ野郎だ。でもな、みんなが傷つく主な原因はてめえが暴力を振るうからだろ。てめえが手下に暴力を振るえって命令するからだろ。結局俺は何が言いたいかって言うとな……てめえが一番暴力魔なんじゃねえかって事だよ！」

今まで溜まっていた事を全て解き放つような――そんな俺の叫び声。

本当にスッキリした――胸中に秘めていたものを解き放つ。

確かにこれほどスッキリするものはない。

きっとそれは永渕も一緒なハズだ。ただ永渕の場合は解き放つ方向を間違っていた……。

そんな間違っている永渕は俺の叫び声に対し。

「ハッ、くだらねぇ……そんなんでハイやめますなんて言うほど、テメェの敵は甘い存在じゃねえんだよ。必ずテメェは殺してそこの

女も滅茶苦茶に犯してして、人質も男はブッ殺して女は俺の肉奴隷になってもらう。復讐もできるし最高の楽園（パラダイス）も出来上がる……テメェの説教ごときで俺がコレをやめると思ってんのかぁ！　アァ！？」

「やっぱり……てめえはそうやって今まで人を傷つけてきたんだな。最低だ……っ」

俺は俯くも、両方の拳には力を入れながら言い放つ。

拳……いや、次第に全身に力が入ってゆく。

永渕に対する怒りがもう、押さえられないくらいに表面化してゆく……。

「最低で結構！　俺はテメェとテメェの周りの世界をぶち壊す為に動いてんだ！　その目的が達成されるとは俺にとっちゃあ……最ッ高に嬉しい事なんだよォ！」

「……だったら、そんな最低野郎を止めてやるよ！」

「止められるモンなら止めてみろや！　藤島ァ……止めたきゃ俺とタイマン張って勝ってみやがれェェッ！」

タイマン――簡単に言うと不良用語で1対1の喧嘩の事である。なんでも学校やグループの番長、大将同士が抗争の最後にタイマンでケリをつける事が、不良の間では美徳なんだとか。まあ確かにタイマンは楽だ。だって……人数を気にしなくて済むからな！

「わかった……勝ってやるよ。そしててめえを止めて、ここにいる全員を必ず助け出したやる！」

「やれるモンならやってみろよ……」

不敵な笑みを浮かべ、指の関節をパキポキと鳴らしつつ永渕は俺へと迫る。

――――こっから先は、俺と永渕の1対1の勝負。だとしたら……暮葉は！

「暮葉！　お前は人質を助けてくれ」

「もきゅ！　で、ですがけーすけ様は！？」

「俺と永渕の勝負には手を出すな。それよりお前は人質を助けてみんなを誘導してくれ。みんなと一緒に逃げてくれ」

それもすごく重要な役目である。ていうか、ここまで来れた暮葉にしかできない大切な役目なんだ。

とにかく人質を戦いには巻き込みたくはない。

俺達の戦いに巻き込まれて怪我をされるなんて、そんなの一番嫌な事なんだ。

「……わかりました！　けーすけ様、やられちゃ嫌なんですからね！」

しばらく思い詰めた顔で黙りこんだ暮葉は、ようやく口を開いて了解してくれた。

しかもやられちゃ嫌……か。こんな時に何考えてるんだかだけど、今の可愛くてよかったな。

……さて、暮葉が人質を安全に救出する為にも。人質を安全に逃がす為にも……。

そして、この事件のすべてを終わらす為にも……。

――俺は目の前のクソ野郎をぶっ倒す！

第４８話，恐怖の男（後書き）

後書きトークコーナー

大吾「突然だが、やっぱりギャルゲーは素晴らしいな」

圭介「あ、どうしてだよ？　確かにすばらしいけどさ……」

大吾「だって現実の人気アイドルは歳は取るし、後になって当時のファンが絶望するような姿で出てくる事が多い……それに対し！　ギャルゲーのヒロイン達はいつまで経っても輝かしい姿を保っている！　そのギャルゲーが存在する限り、ヒロイン達が消える事はない！　いや、ギャルゲーが消えてもヒロイン達が存在したという事実は決して消える事などない！」

圭介「つまりお前は何が言いたいんだ？」

大吾「フッ……つまり、現実なんてクソゲーだ！」

圭介「現実は確かにクソだよな。はぁ……彼女欲しいっ」

小坂「大吾……キモッ」

伊吹「亜紀、もういいじゃん……大吾なんていつもあんなもんよ」

暮葉「そーですよ！　けーすけ様が変態なのと同じで、大吾さんのアレももう二度と変わらない事だと思うのです！」

圭介「変態は余計じゃっ！」

第４９話，男なら拳で語れ！

永渕は滅茶苦茶強い。何時間か前の一戦で思い知った。
一撃しか喰らっていなかったが、あの動きと狙いの正確さは素人が打てるものじゃない。
永渕の奴、何か格闘技でもやって鍛えたのだろうか……まあ、そんな事は関係ねえ。
とにかく大事なのは永渕を止める事。
たとえ勝てないとしても、人質が逃げるまでは俺が永渕を足止めしなければならない！
そうすれば、逃げた人質も次の襲撃に備えてくれるだろう……。
……とにかく今重要なのは永渕を止める事。１分でも長く永渕を止めてやる。
いや、出来る事なら永渕をここでぶっ倒してやる――！

「うおおおおおおおおおおおおっ！」

比較的広いこの空間（スペース）で、俺は拳を振り上げ永渕への突撃を仕掛ける。
俺には暮葉のように風を操ったり、明智のように炎を操る事はできない。
キスをすれば強くなれるが、そんな相手など存在するわけがない。
即ち、俺は丸腰の状態で戦う事しかできない。それでも……どんなに弱くても俺は戦う！

十分に間合いを詰め、俺は右拳を放った――

「てぇっ！」

「ハハッ！」

刹那、笑い声をあげた永渕。
そこで俺の目は見開かれる。
何故永渕はこんなにも余裕なんだろう。俺には全く理解ができなかった。
しかし次の瞬間、永渕はひらりを身体を右へ揺らし、俺の精一杯の右ストレートを回避したのだ。
そして次の瞬間、ストレートを空振った俺に向かってクロスカウンターが飛んできた。

「ァ……！」

永渕の拳は何の躊躇もなく、俺の鼻柱に容赦なく打ち込まれる。
痛みに怯んだ俺に、永渕が追撃を仕掛けてくる。
ドゴ！バゴ！全身の至る所を何発もぶん殴られた俺……とりあえずこのままヤツに近くにいるのは危険と判断し、後方へと勢いよく跳躍してみせた。

「ははははっ！　甘ぇんだよ、テメェの攻撃はよぉ！」

「くッ、てめえ……っ！」

再び俺は接近し、今度は廻し蹴りを仕掛けたみた。
だが、永渕はぴょいっとジャンプをしただけで廻し蹴りを避け、着地と同時に拳を放ってくる。
それが、俺の顔面に野球ボールのように飛んできた。

「が、ぁっ！」

打ち込まれた時の衝撃と痛みにより、思わず俺は後退りをしてしま

う。

……畜生、いくら身体か丈夫だとしても、それは長期的に見てのものだ。

打たれた時の一瞬は普通の人と変わらない。それ相応の痛みを感じるんだ。

ただ俺が普通の人と違うのは、その痛みに身体が耐えられる事。そしてすぐに痛みが消える事だ。

でも、結局ぶん殴られたりした瞬間は、普通の人が感じるのと同じくらい痛いのである。

「オラァ……もっとかかって来いよ。テメェにはもう少し付き合ってもらわなくちゃあ……割に合わねえンだよォ！」

「く、そォォォォォォォォォォッ！」

とにかくダメージを与えろ。そうすれば永渕のバランスと自信は崩れるハズだ。

とにかく――ヤツに一発でも与えて、なおかつダメージを与える事ができれば！

そう考えた俺はタックルを試みた。だがひらりを永渕は俺を避け。

「あ〝っ！」

――刹那、衝撃が俺の尻を襲った。

顎から床へと落ちてしまい、その時の衝撃のせいか脳が揺さぶられる。

畜生……俺は何をされた。多分ケツを蹴られたんだろうが……クソ、頭が。

「フハハァーッ！」

「……！」

その時、永渕が踵を突き出しつつ降下してきた。
おそらくはジャンプをし、その勢いで俺を踏みつけようとしたのだろう。
咄嗟に危険を感じた俺はゴロゴロと床を転がり、永渕の踵を回避はしてみせるも、永渕はすぐに次の動作へと移り右足をぶんっ！と振ってくる。
俺はその足を左腕でガード、ミシリという嫌な音は響いたが……こめかみに当てられるよりはマシだ。

「オラオラ！　ジタバタしてんじゃねえぞ！」

「ぐっ！」

ジタバタと地面をゴキブリのように這い、なんとか距離を取った俺は立ち上がる事に成功する。
だが、目の前には既に拳を構えた永渕の姿がある。
この距離からじゃ避けれねえ――クソ、どうすれば！

「――永渕晃！」

――！？

……い、今……確かに女の子の声が聞こえた。
そして何より、永渕の拳は俺の眉間目前で止められたのだ。
永渕は声がしたほうに釘付けである。
そんな状態で永渕が攻撃をしてこないと判断すると、俺も永渕と同

じ方向を見てみる。
そこには、工場内のどこかで拾ったのであろう鉄パイプで武装して、伊吹の姿があった――――

「い、伊吹……っ」

「……アァ？」

俺は驚き永渕も機嫌の悪そうな顔をする。

「……動かないで。あんたを……これで叩くわよ！」

おそらくは脅しのつもりなのであろう。
ボロボロの伊吹は震えながらも、これ以上俺を攻撃すると鉄パイプで叩くと脅しをかけていた。
歯を食いしばり、頑張って恐怖を我慢している伊吹。
……だが、苦労して永渕の前に立つ伊吹に対する永渕の反応は。

「……フッ、相変わらず強がりな女だ。そういえば他の人質がいねえな？」

「暮葉が……助けてくれたのよ。私はただ戻ってきただけ」

そっか、暮葉のヤツ……今の間に全員を逃がす事に成功したのか。
手際がいいというか、きっと一期一振を使ったんだろうな。
アレなら確かにチェーンを簡単に斬る事ができる。
人質達も捕まってからそれほどの時間が経っていないのか、少しは体力や思考力に余裕があったのだろう。でもなんでだよ……なんで折角逃げれたのに、伊吹はここに戻って来ちまったんだよ！

「逃げろ伊吹、すぐにこっから逃げろ……！」

「へッ……戻ってきた上玉を、逃がすわけねえだろうがよ」

永渕はパキポキと拳を鳴らしながら、伊吹へと徐々に接近してゆく。
伊吹は明らかに顔色が悪いものの、それでも歯を食いしばり鉄パイプを構える。
アイツ――あんなに怖がってんのに、それでも戦うつもりなのかよ！

「やめろ……伊吹も永渕もやめろ……っ！」

「……ごめん。私は……あんた一人を放っておけなかったから」

「そういうこったぁ。俺にも前進って選択肢しかねえしなぁ」

畜生……このまま突っ込んだところで、永渕に強烈な一撃を貰っちまうのは安易に予想ができる。
でも、だからってこのまま伊吹を放っておいていいワケはない。
助けなきゃ……無理してあの場に頑張って立っている、伊吹を永渕の魔の手から！
とにかく他の事は何も考えるな。永渕を止めて伊吹が逃げる時間を稼ぐんだ。
そう心に決め、両方の拳を握った……。

「……！　ぶ、はぁっ！？」

――刹那、どういうわけか永渕が崩れ落ち、地面へと落ちた永渕は顎を叩きつけていた。
その時に唇でも噛んだのだろうか、痛そうに起きあがった永渕の口

元からは血が出ている。
でも、永渕は口元よりも後頭部を押さえている。何故なら永渕は後頭部を攻撃されたからだ。
当然位置から言って伊吹のハズがない。だったら他に誰が居るだろうか……正解は。

「船木……テメェッ！」

「アヒャヒャッ！　後ろくらいしっかり見とけよ……永渕さんよぉ！」

そこには、血だらけながらも角材を持ち構えている船木の姿があった。
痛がる永渕を見て船木は、どういうわけか口元が笑っている。
……どうなってんだ。確かに散々制裁を食らっていたけど……アイツら仲間じゃなかったのかよ？
しかも、船木は永渕が完全に体勢を立て直す前に、その角材を勢いよくぶん回した。
永渕は右腕でそれをガードはしてみせたが、永渕のミシミシという痛々しい音が俺にも聞こえた。

「ぐっ！」

「オラァ！　テメェらはこっから逃げな……永渕倒すのは俺だからよぉ！」

永渕を倒すのは俺――――
ちょっと前の船木からでは、考えらないようなセリフである。
それでも船木はそのセリフを、なんともまあ嬉しそうな笑顔で言い放ったのである。

「テメェ……どういうつもりだ船木ぃっ！」

「アヒャ！　決まってんだろォがよ。よくもこの俺の端整な顔を傷つけてくれたな……第一テメェがＮｏ１なんて俺は認めてねぇ。だからテメェを潰して俺が白陵のＮｏ１になってやんよ！」

「謀反ってわけか……上等だ。まずは裏切り者からブッ殺すぜ！」

その言葉を最後に、いよいよ戦いの火蓋は切って落とされる。
船木も永渕もほぼ同じタイミングで、床を蹴りあげ一気に間合いを詰めたのである。
そこから先は言うまでもなく――船木と永渕の死闘（デスマッチ）であった。

「チッ！　よくそんなボロボロの状態でここまでやれるな……」

「アッヒャヒャヒャ！　伊達にＮｏ２名乗ってねえんだよ！」

「チッ、ほざいてんじゃねえぞ！　Ｎｏ１とＮｏ２じゃ圧倒的な差があるって事……たった今思い知らせてやるぜぇっ！」

「上等だぁ！　だったらテメェにもＮｏ１に勝てる可能性を秘めてんのは、Ｎｏ２だけだって事を教えてやんぜェェッ！」

すげえ……本気のガチバトルだ。永渕もすごいが船木もすごいぞ。
さっきあれだけボコボコにされたってのに、永渕とほぼ互角の勝負を展開している。
体力全開だった俺でさえ、さっきまで散々ボコボコにされたってのに……。
確かに、あれだけの差しかないんなら……船木のヤツ、永渕に勝て

るかもしれねえな。

「圭介っ！」

その時、突然伊吹が俺の右手をガシッと握ってくる。
その目は何かを訴えているようで、俺は思わずドキッとしてしまった。
……なんなんだよ。今真剣な時だってのに余計な事を考えるなよ、俺。

「な、なんだ？」

「逃げるわよ、あの船木って人に任せよう」

「で、でも！」

「いいから！　とにかく走るっ！」

「おわぁっ！？」

永渕と船木が激闘を繰り広げる中、俺は伊吹に引っ張られる形で戦線を離脱した。

第４９話，男なら拳で語れ！　（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「さて、本日は作者の友人からの苦情を紹介！　もう特に目的のない学園コメディーモノ飽きたんだけど、別なモン書けやコラッ」

大吾「確かに、処女作からず～っと学園モノ執筆してりゃマンネリ化するよなぁ～。魔法とか超能力とかファンタジー的要素入れて誤魔化してるけど」

圭介「じゃあ結局何すりゃいいんだよ……」

大吾「そうだな……特に目的がないってのが問題なんじゃねえか？　というわけで僕は、最初から主人公達にはある目標があるストーリーを提案する！」

圭介「おおソレいいな！　例えばどういうのだよ！？」

大吾「ブラスバンド部の存続を賭けたコンクール対決ってのどうだいエビ？」

圭介「むがぁ～！　エビって呼ぶな！　それってただのパクリじゃねーか！」

大吾「んん～。じゃあ不幸体質の主人公の家にダンボールで神様が送られ――――」

圭介「兄さん、それもパクリですよ！　どーせ神様の一人称が妾な

んだろ！？」

大吾「じゃ、じゃあ貧乏な主人公が自分そっくりの人と会って、その後色々あって影武者のバイトを――――」

圭介「うにゃ！　失敬、失敬ですよ！　これだけパクリ連発ってゆ○ソフトに失礼だろーがっ！」

大吾「うるせぇ！　佐○みたいな妹が欲しいよぉ～！」

圭介「馬鹿野郎！　佐○もいいけどやっぱりひ○ただろ！」

大吾「大体圭介は最近の話ばっかりして。僕はちゃんとぶ○ばんからプレイしてるんだぞ！　僕はエビから攻略したんだからな！」

圭介「俺もぶ○ばんから初めてぶ○くすもプレイしたわ！　ちなみに俺は須○たんを初めに攻略したぞ！」

浅間部長「……これ、ネタ全部わかる人いるんだろうか？」

第５０話，戦いの結末は……　前編

――――伊吹に引っ張られるまま、工場内を移動する。
しかし、散々永渕にボコボコにされ、体力も失っているのだろうか。
伊吹は途中で息を切らして立ち止まってしまった。
狭い通路に黴臭い空間、ゴミや工具が廊下の端に散乱する……廃工場の狭苦しい通路。
さっき、俺と暮葉が通って来た場所である。

「はぁ！　はぁ！　はぁ！」

伊吹は苦しそうに荒々しい呼吸を繰り返す。
よっぽど無理して走っていたのだろう。おそらく、もう伊吹の体力は限界に近い。

「大丈夫か、伊吹？」

「わ、私は平気よ。それよりあんたも随分殴られてたけど大丈夫なの？」

「俺トラックに轢かれても平気なんだぜ？　永渕の拳とか全然効かねえから」

「そう？　結構痛がってたような気がするけど……」

「き、気のせいだ！　あんな痛みどうって事ねえから！」

「結局痛かったのね……っ」

うわぁ～、伊吹さんがジト目で俺を見ている。そりゃあまあ、普通はぶん殴られたら痛いよ。
いくら俺だって鋼の身体をもってるワケじゃないんだから。
でも、こんなの伊吹が味わった痛みなんかと比べれば、まだまだ甘いもんだろう。
永渕から味わった痛み。俺から味わった痛み……俺から？

……そうだ、今丁度俺と伊吹は二人きりだ。だったら昼の事を謝るいい機会なんじゃないか。
善は急げだ。早く伊吹に昼休みの事を謝ろう。

「……なあ、伊吹」

「なによ……圭介」

俺が伊吹に声をかけ伊吹もそれに答えると、この場に沈黙が続いてしまう。
なにしてんだよ俺、とにかく謝れよ。
許してもらえるとは思っていない。だけど……土下座くらいはしないと。
だから俺は――地べたに手をつき頭を下げ――

「ごめん！」

「え……ちょ、あんた……なにを？」

「あの時、俺は伊吹を好みのタイプって言った。伊吹が折角誤解を解くために恋人のフリをしてくれるっていうのに、それを勘違いして無理だとか勝手な事を言ってしまった。本当にごめん！　俺を……ぶん殴ってくれ！」

やべえ……これはマジでぶん殴られるかもな。
しかも、いつもの冗談では済まされないくれい強烈な一発を。
でも、悪い事をしたのは俺である。それでぶん殴られるんなら何の文句も言えない。

「ちょ、ちょっと……頭上げなさいよっ、なにも土下座なんかしなくても……っ」

しかし、帰ってきた伊吹の反応は予想外のものであった。
何故だか彼女は土下座をしている俺に対し、心配をする言葉をかけてきてくれたのである。
……どうしてだよ、心配される権利なんざ俺にはないのにっ。

「……」

「……わ、わかったわよ。あんたがそのままでいいならそのままでいい……っ」

そう言った伊吹は次の瞬間――自らもしゃがみ込んで、俺の肩に優しい手を置いてくれた。
俺は伊吹の予想外に行動に思わず反応し、顔をあげてしまった。
視線の先には、今にも泣きだしそうな伊吹の姿があった――――

「い、伊吹……？」

「これなら、嫌でも顔をあげちゃうでしょ？」

「な、なんでだよ……」

「わ、私もその……圭介はいつもの冗談を言っただけで、無理とかそういうのもあんたの優しさからだってわかってる。それなのにわけもわかにないで逃げちゃって、勝手に永渕に捕まって……私のほうこそごめんなさい！」

なんだよ、珍しく素直だと思ったら謝罪かよ……。

謝るなよ……ほとんど俺が悪いのに、伊吹なんて悪い事はしていないのに。

伊吹は犠牲者だ。俺や永渕にいいように振りまわされた……ただの犠牲者なんだ。

その犠牲者が加害者に謝るなんて。俺はただの加害者だってのに。

「いや、伊吹が謝る事なんてないよ。俺が過去に永渕をぶっ飛ばしたからこんなことになっちまった。なにより、今回は俺が無意識に伊吹を傷つけるような事を言っちまった」

「……っ、やっぱあんたって鈍感ね！」

うぅ……怒鳴られてしもうた。

伊吹には何度も言われ、黒木にはそれが理由でぶん殴られたんだが。

俺ってばそこまで鈍感だったのか。俺、色々な意味でダメ人間だな……。

「ごめんなさいっ」

「……っ、だぁぁもう！　謝るの禁止！　折角助かったんだからもう喧嘩はここまでよ」

あらら、伊吹に謝るのを禁止されてしまった。

しかも、この時の伊吹はいつもの伊吹に近い表情をしていた。

……いや、微妙に違う。いつもと違って何だか爽やかな印象を受ける。
どういう事だ。珍しく伊吹が本当に可愛い女の子に見える……。

「ゆ、許してくれるのか？」

「ま、まあ。ばか圭介にしては謝るのが早かったから。と、特別よ特別！」

「……」

頬をほんのり赤く染まっていたが、言っている事はいつも通りで、しかも俺から視線を逸らしていた。
はたして、俺は本当に許されたんだろうか？
確かに伊吹はいつものツッパリ伊吹ちゃんには戻ってくれたが……。

「ハァ、ハァ……へへッ、なにハッピーエンドっぽい事しちゃってんのよテメェら」

「……！？」

その時、俺らの目の前に信じがたい事が起こってしまった。
汚れた制服に殴られた跡が沢山の顔面、口や鼻からは流血しており息も切れている。
ボロボロではあるものの、相変わらず凶悪で不敵な笑みを浮かべる永渕の姿……。
ここに永渕がいるって事は……ふ、船木は？

「な、なが……ぶちっ？」

「てめえ……船木はどうしたんだよ！」

「あぁ？　ククッ、死にかけたゴミを潰すのにそこまで苦労はしねえよ」

まさか、船木の野郎がやられたってのか……。

さっき見た時はほぼ互角、どっちが勝ってもおかしくはなかったのに。

永渕……やっぱりアイツ、ただのヤンキーにしてはバケモノみたいに強い。

俺らが中1の頃の話だから5年くらいかな。一体5年間で何があったんだよ……！

「け、圭介……っ」

伊吹は震えている。もう伊吹はさっきまでのように強気にはなれない。

彼女は永渕に怯え、小刻みに震えながら後退りをする。

ただし、口では俺の名前を言っていた。

どうしてそこで俺の名前なのかはイマイチわからんが……とにかくこうなったら手段は一つ。

「大丈夫だ伊吹ちゃん。藤島を殺した後にたっぷり相手すっからよ」

「……ッ」

「怖がんじゃねえよ……俺、経験は豊富だからよぉ？」

永渕が下心が丸見えなセリフを吐いた直後、俺は伊吹を庇う様に前

に立つ。
そうやって永渕の前に立ちふさがるのである。

「させねえよ……指一本触れさせねえ！」

「ハッ……テメェは伊吹ちゃんの王子様のつもりかよ？」

「王子様？　ハッ、確かにそれはいい響きだな。でも、俺は伊吹の王子様なんて大層なモンじゃねえよ」

「だったらなんだよ！　言ってみろやコラァッ！」

俺は王子様でもなければ勇者でもない。武士なんてもんでもなければ騎士でもない。
そう――俺にカッコいいジョブなんてものはない。
ただ、それでも一つだけ確実に言える事がある。
それは昔からそうであって、これからもその事実は永久に変わる事がないもの――――

「俺は伊吹の幼馴染だ！　伊吹は俺にとって大切な存在なんだよ！」

「け、けいすけ……っ」

「そんな大切な存在を傷つけるてめえの腐った根性を、今ここで叩き直してやる！」

永渕は船木との戦いで傷ついている。しかも少しばかりか疲れているようにも見える。
という事は……今なら通常モードでも永渕に勝てるかもしれねえ。
口づけなんて言う相手とっても悪いし、何より恥ずかしすぎる事を

しなくてもいいかもしれない！

「おもしれぇ雑魚だな。いいぜ、やれるもんならやってみろよ？」

「永渕……」

俺は、音もなく両方の拳を握りしめた。

永渕もボクシングのように構え、ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべる。

「さぁ来い暴力魔！　もう一回俺を倒してみろよ……今の高校でも皆に嫌われるがいい！」

「永渕ィィィィィィィィィィッ！」

叫んだ俺は、永渕に向かってて全力で走る。

永渕は後ろを下がる事はなかったが、右手をズボンの中に手を突っ込んでいる。

ガサゴソとズボンの中をいじくる永渕。なんだ、アイツは何を企んでいる？

そう思った――刹那、永渕はズボンの中から伸縮式の警棒を取りだした。

あんなのをズボンの中に隠していたのか……って、無駄な事を考えている場合じゃねえ！

「ハッハッ！　オォォラァァッ！」

永渕は一気に駆けてきた。念の為に拳を顔の前に構えておくが、その判断は正解であった。

十分な距離まで近づいた瞬間――俺の耳にビュン！という風を切る

音が聞こえる。
音の正体は当然、あの警棒が振られた音であろう。

「ッ！」

こめかみを狙った一撃を左腕で防ぐと、なにやら鈍い音が立つ。
……まあ、普通なら骨にヒビでも入りそうな一撃である。
でも俺は違う。俺の体質ならこんな一撃――どうってことねえんだよ！

「油断してんじゃねえぞ！」

「ご、ァッ！」

思い切りのいい膝蹴り。鋭利な膝が痛々しく俺の腹部を突く。
いきなり襲ってきた腹部への痛みに、思わず顔を歪めてしまう。だがたったそれだけだ。
永渕の攻撃自体は確かに高いし、不良とは思えない腕っ節の持ち主である事は確かだ。
だけど……所詮永渕はただの人間である。
増してや背負ってるものなんてなにもない。自分の為だけに戦うしょうもないヤツだ。
――俺にはそんなヤツの攻撃なんざ、全然効かねえッ！

「うおおおおおぉぉぉぉぉぉっ！」

「ご、ばぁっ――――！」

腹を抱え込んでいた為に低くなっていた俺の頭。
それを一気に上へ突き出し、永渕の顎へ頭突きを仕掛ける。

ゴン！という衝撃的な轟音が鳴り、さらに永渕の口からは白くて小さなモノが飛び出ていた。
コイツ、今の一撃で前歯でも折ったのだろうか？

「うぅ……ぁっ！　て、テメェッ！」

目を見開き驚いた表情で俺を見る永渕。
ヤツは俺を見てはいるが、どんな素人でも攻撃を当てられ程に隙であった。

永渕晃……コイツは多くの人の心を踏みにじり、なにより大切な幼馴染を傷つけた。
俺はコイツが絶対に許せねえ。
たかが復讐という目的だけで、全く関係ないヤツまで巻き込みやがって……
皆が感じた恐怖や悲しみ、そして痛み……。

「全てを思い知れ……」

一瞬で間合いを詰め、懐奥深くへと突っ込む。
そして、俺の最大の武器である右拳に全力を注ぎ込み。

「このクソ野郎がアアアアアアアアアァァァッ！」

――――咆哮（ほうこう）と共に、俺は全てを賭けた全力の一撃を放った。

ドン！と、顔面に打ち込んだ拳の勢いで永渕を薙ぎ倒す。
埃まみれの床に倒れた永渕はピクリとも動かない。
汚い床に転がる永渕を見捉え、荒々しく乱れた呼吸を呼吸を整えながら――――

「もし、また伊吹や皆にちょっかいを出すってんなら……またこの手でぶん殴ってやる！」

拳を突き出した俺は、倒れた永渕に確かにそう伝えた。
永渕にこの言葉が聞こえているかは微妙だけどな。
とにかく、永渕を倒した事によって全てが終わった。

今回のふざけた騒動。そして、おそらく俺の高校生活もここで……。

第５０話，戦いの結末は……　前編　（後書き）

後書きトークコーナー

純奈「ぶっちゃけクソ介ってテンプレ主人公すぎるよね！」

圭介「は、なんで？」

純奈「バカだし時々ネガティブだし、でもヒロインの為に奔走しまくる上に喧嘩はそこそこ慣れていて、臭い台詞が得意で……ほーらテンプレ主人公だよ！？」

圭介「悪かったな特徴なくて……」

純奈「そうだよ！　というわけで今日からキャラ変えようよ！」

圭介「どういう風に？」

純奈「とりあえず……青いツナギでも――――」

圭介「待て待て待てェッ！　俺はどこの自動車修理工だよ！？」

純奈「だったらイケメンになって余計キザなセリフを言って。そして可愛い後輩の男の子と――――」

圭介「それなんてＢＬアニメ！？　しかもイケメンになれとか無理だろ！」

純奈「だったら気弱になってみれば？　すると肉食系のイケメン男

子がクソ介をバックから――」

圭介「生駒……お前、腐女子にでもなっちまったのか？」

第５１話，戦いの結末は……　後編

「おお、圭介と国宗さんが帰ってきたよ！」

「ふう……今回もまた、藤島君に助けられたな」

ようやく工場の外に出ると、そこには割とピンピンしている重原やボロボロの三馬鹿。
そして、救出された人質達や暮葉の姿もあった。
……俺はあの後、永渕をその場に放置しておいて、疲労でマトモに動けない伊吹をここまでおぶってきた。
背負うまでにちょっと揉めたが、結局はこうなってしまったのである。
しかも、伊吹は一度背負うと眠たそうな子供のように静かであった。

「けーすけ様ぁぁ！　ご、ご無事なのですか！？」

「圭くん！　伊吹！　大丈夫！？」

「圭介！　あの坊主アタマに散々殴られてたけど、平気なんだよな！？」

暮葉に小坂にあかりが駆け寄ってくる。
ハハッ……伊吹だけかと思いきや、俺も心配されていたんだな……。

「け、圭介……っ。そ、そろそろ降りるっ」

「え？　お、おう！」

流石にみんなの前だと恥ずかしいしな。俺は姿勢を低くし、伊吹を背中から降ろした。
それでも、若干小坂の顔がニヤニヤしているのが気になるが。
あと、なんであかりは不機嫌そうなんだ。
やっぱり永渕と殴り合いなんかしたからであろうか？

「ねぇ伊吹、ホントに大丈夫？」

「わ、私は別に平気よっ！　それより亜紀は平気なの？」

「うん。あたしも怪我自体は大したことないから」

笑顔なあたり、小坂は本当に大丈夫なのだろう。
よかった……確かに小坂は人質の中でも一番軽傷っぽいしな。
問題はあかりだな。さっきから苦しそうにお腹を押さえているし。

「あかりは大丈夫なのか？　腹押さえてるけど痛いのか？」

「気にするな。ちょっと殴られただけなんだからな。あたいは別に平気なんだからなっ」

「平気ならいいけど無理だけはするなよ」

「あっ……ありがとうっ」

恥ずかしそうに顔を伏せつつも、彼女は俺にお礼を言ってくれた。
別にお礼はいらなかった。ただ、わかってくれるならそれでよかった。
とにかく、あかりはいい子だ。だからこそ無理はして欲しくないんだ。

無理のし過ぎで倒れたのがちょっと前の話だしな。

「それよりけーすけ様は大丈夫なのですか！？　お怪我はないですか！？　無理とかされてないですか！？」

最後に暮葉、場合によってはあかりよりも手間のかかる子である。
その理由はご覧の通り、暮葉はやたらと心配性だからだ。

「暮葉も心配性だなぁ……俺は何発殴られたって平気だって何度も言ってるだろ？」

「で、ですけど……ッ！」

「だから心配し過ぎだよ。永渕結構弱かったし！」

「……」

あ……あれ、なんで皆さんジト目で俺を見ているんですか！
そりゃあ確かに、永渕がすごく弱かったというのは嘘だけど。

「スミマセン、調子乗り過ぎましたァッ！」

「……ぷっ！　あっはははははは！」

エェッ！ちょ、今度は伊吹さんが大笑いし始めた！
それに釣られてあかりや暮葉、小坂とか後ろの男共まで笑い始めたぞ！？
ちょっと待て、俺そんなにおかしい事した！？

「圭介っ！」

「ん、どした？」

機嫌よく、俺の僅か５０ｃｍ手前に飛び出してきた伊吹に訊き返すと、伊吹は嬉しそうな笑顔を浮かべる。そして、そのまま唇を動かして――――

「……ありがとう」

一生懸命な、たったの一言なのに心がこもっているお礼を言った。それも、中学のあの一件以来中々見せてくれなかった、満面の笑みで――――

「そうだな……圭介、ありがとうな！」

「ありがとう、圭くん！」

そして、伊吹に釣られてなのか、みんなが俺にＴｈａｎｋ　ｙｏｕを言ってくる。

あかりも伊吹のように満面の笑み、小坂までもが機嫌の良さそうな笑顔を浮かべていた。

「僕もお礼がまだだったね。ありがとう藤島君、おかげで助かったよ」

「圭介が頑張ってくれたから戦いは思った。俺からも礼を言うよ、ありがとう」

「お、お前ら……」

みんなが俺にありがとうを言ってくる。
その言葉をただ受け取る俺。なんだろう……胸のあたりがふわふわして落ちつかないな。
こう、なんというか……言葉の一つ一つが妙にくすぐったい。

「けーすけ様！　よかったですね！」

「あ、ああっ」

でも、こういうのもいいな。
こんなのがずっと続けばいいと思う。多分続かないとは思うけど。
……俺は永渕を倒してしまった。いや、俺のせいでここまで大きな暴力沙汰が起こってしまった。
多分、俺はただじゃ済まされないだろう。停学……いや、下手したら退学だな。
だけど、そんな覚悟ならとっくの昔にできている。覚悟の上で俺は行動したんだ。
だからまずは――そんなネガティブな事を考える前に、皆で家に帰ろう――

――それから数時間が経った、ここは自宅ではなく国宗家。
伊吹はかなりお疲れの様子だ。正直俺も疲れているが、俺とは違って伊吹はただの人間である。
それなのに永渕の攻撃を受けたのだ。食らったダメージが俺とは決定的に違うのである。
そんなお疲れの伊吹を俺は放っておけなかった。だから俺は――

「やきそばしか作れねえけど、それでいいか？」

「うん……焼きそば大好きだから。それに、助けてもらったのに贅沢なんて言えないわ」

「そっか」

俺は伊吹に微笑みかけた。

そうだったな。確かに伊吹は焼きそばが異常なまでに大好きだった。

だから、家事スキルがほぼ0の俺でも焼きそばだけは作れるんだ。

――結局、俺は自宅には帰らなかった。

いや、この後帰るつもりではあるが直接は帰らなかった。

だって……今の伊吹を一人にはしたくなかったから。

国宗家は父親が中々帰ってこない上に、母親は父と既に離婚しているのである。

その離婚の理由がいわゆる薬だ。母親は伊吹がまだ幼稚園児の頃、覚醒剤の所持で逮捕されたらしい。

当然旦那である父親も疑われ、結局身の潔白さは証明されたものの、そんな事があったせいで国宗家は近所から散々言われていたようである。

――国宗さんには決して関わるな。

その話は子供達にも広まり、あの頃の伊吹は野郎共に結構ひどいいじめを受けていた。

たまたま近所だった俺の親だけは親父さんと仲良くし、俺や葵も伊吹とはずっと仲良しだった。

でも……伊吹は小学校に上がるまでは孤独だった。

今でも母親の消息は不明であり、父親は俺の親父みたいに仕事が忙しくて帰ってこれない。

学校では友達に恵まれていても、家庭内では伊吹はいつも孤独だ。

「……よし、結構上手く出来たかもな」

俺が回想をしている間に、丁度焼きそばが出来上がった。
焼きそばはやっぱソース焼きそばだよな。うん、青海苔と紅生姜がまたいい雰囲気を出している。

「伊吹、焼きそばできたぞ～」

俺はそんな自信作の焼きそばをテーブルに置き、テレビを見ていた伊吹を呼んだ。

「お、おいしそう……っ」

「おう。今日は腕によりをかけて作ったからな」

「あれ、あんたの分は？」

「多分暮葉が晩御飯作って待ってると思うから。俺はこの後戻って家で食べるよ」

「なによ。も、もしかして私が食べ終わるまで居るの？」

「食器洗いに風呂沸かしに、あと入浴の面倒も見ないとな」

「な、なにさり気なく一緒に入ろうとしてんのよ！　ばかけいすけ！　へんたいっ！」

俺の作戦は大失敗！
顔を赤らめ、少し機嫌を悪くした伊吹は俺へと飛びかかり、いつも

のよう引っ掻き始めたのである。
全く、何度も思ったけどコイツはツン猫かよっ！

「ちょ！　ふ、風呂は冗談だから引っ掻くな！　とにかく伊吹は怪我人でお疲れなんだから。食器洗いと風呂沸かしまではやっておくよ。他にも困ってる事があったら言ってくれよ」

ああ……エロゲーならここで入浴イベント発動、エロいＣＧも回収できるというのに。
……やっぱり伊吹はガードが硬いな。
まぁ、簡単にホイホイついて来ちゃうのもどうかと思うけど。

「……ねぇ、圭介」

「ん、どうした？」

恥ずかしそうに俯きながら、俺の名前を呼ぶ伊吹にそう訊き返す。
すると伊吹は何かを言いたそうに唇を動かし、そして――――

「……ありがとうっ」

一生懸命に、不器用ながらも伊吹をお礼を言ってくれた。
本日二度目である。なんというか……不思議な気分だ。
だって、伊吹にお礼を言われたのなんてすごく久々な気がするからだ。

「べ、別に構わん……っ」

少し言葉が詰まり、その上素っ気のない俺の返事。
俺は照れいてるのだろう。自分の顔だから見えないが多分俺の顔は

赤いハズだ。

「……ねぇ、圭介」

「ん、今度はなんだ？」

また、伊吹が恥ずかしそうにしながら俺の名前を呼ぶ。
今日は随分と伊吹に名前を呼ばれる日だな。
というか、ここまでベッタリ伊吹と一緒にいた日も久々な気がする。
そんな伊吹の次の質問は。

「も、もしまた……圭介だけが悪者にされたら……っ」

「……」

「そ、その時はその……っ。し、仕方ないから面倒くらいは見てあげるわ！」

がく……っ。何か大切な事を告げられるのこと思いきや、伊吹はいつも通りであった。
でもやっぱりいいな。こうして、わかってくれる人がいるのは。
それに、今の伊吹の言葉は洒落にならねーかもしれないし。
バレたらホントに下手すりゃ退学だもんなぁ。退学になった瞬間、俺は無職になってしまう。
退学させられたヤツに仕事をさせてくれる会社とか、もう一度勉強をさせてくれる学校なんて存在しないだろう。
退学になると本当に人生が終わる——そう考えても強ち間違いではない。

そんな俺を、伊吹は面倒見てくれると言っているのだ――――

「……ありがとうな」

自分が情けないけど、事実は受け止めなければならない。
何より、俺なんかの為に微妙な優しさを伊吹は見せてくれた。
だから、俺は伊吹に対してお礼を言ったのである。

……はぁ、それにしても。俺は本当にこれからどうなるんだろうな

――――

第５１話，戦いの結末は……　後編　（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「野ォォォ原くゥゥゥゥゥン！　オマエは先生キャラとしてどうなンだよ。わかってンのかァ、アア！？」

野原「テメェなに言ってやがんだァ……アァ！？　学生の分際でいい気になってるとぉ、潰すぞコラァ！？」

圭介「ぐはっ！　すみません！　台本に書いてあるモンで……ッ！」

野原「台本に書いてあるからってよぉ！　何喋ってもいいと思ってんのか！？」

圭介「ち、ちなみに伊吹も内心アナタの事が嫌いでして――――」

野原「伊吹ちゃんは可愛いからいいんだよ！」

暮葉「拙者もけーすけ様を暴行する人は嫌いなのです！」

野原「いい事言うじゃんっ！」

伊吹「……なにこれ？」

第52話，はがない圭介、弱い圭介

「期末に出るからしっかり覚えとけよ。わかったかなマゾヒスト君ども？」

……あれから一週間後。何もかもが元の日常に戻った。

いや、まだ戻っていないモノがあるけど。

あかりが思いのほか重傷だった為に入院。なんでも吐血するほどお腹を強く殴られたらしい。

部長もすっかり落ち込んでおり、写真部はあかり入院中は活動を自粛するんだとか。

お見舞いに行きたかった所だけど、校内で部長すら見かけないし。

行きたくても場所がわからなくて行けないという……あかり、大丈夫なのかな？

浅間家の家計がヤバのは俺もわかっている。あかりの入院費とか……う～ん、心配だ。

そして、現在野原先生の授業をかったるそうに受けている俺。

結局俺の日常は崩壊する事がなかった。

そりゃあ、ちょっとは説教を食らったけど……でもそれだけで済んだんだ。

アイツのおかげでな。

――――2時間目と3時間目の間の休み時間。俺と暮葉と伊吹は特に要は無いが廊下を歩いていた。

「よかったですね、けーすけ様！」

「あぁ、何かあったっけ？」

そんなある時、暮葉が笑顔でそんな事を言って来たのだ。
一体何の話だろう。よくわからん俺はそう思いましたよ。

「あんた知らないの？　あの一件の噂が広まって皆あんたの事見直したらしいわよ」

「え、それって……」

「はい！　けーすけ様を悪者だと思っていた人が、今はけーすけ様は別に悪者じゃないって思ってるのですよ！」

「そうそう。あんた、校内じゃ正義のヒーロって思われてんのよ」

「ま、マジでございますか!?」

知らなかった……いつのまにそんな噂が流れていたとは。
噂って恐ろしいね。本人が知らない所でいつの間に広まっているんだもん。
でも、今回の噂は悪い方向ではないっぽいし、正直どうでもいいや。
それにしても、暴力魔から正義のヒーローねぇ……俺の異名もコロコロ変わるもんだなぁ。

「もきゅ！　拙者達は歪曲報道はしないのですよ！」

「そーそー！　よかったじゃない。それに……あんたの評判がいいと私も気分いいしっ」

「ん、なんでお前の気分が良くなるんだ?」

「――っ！？　し、き、気分がよくなるとか言ってないわよ！　調子に乗るな変態圭介っ！」

「ぐはっ！」

で、デレ期に突入したと思いきやいきなりこれですか……。
やっぱり伊吹はツッパリだ。ツッパリからツンデレに変わる事なんて……うぅっ！

「にゅふふっ♪　伊吹さん。素直なほうがけーすけ様の気を惹けるのですよ？」

「ば、ばっ！？　き、気を引くとかそんな……っ！　私はこんなヤツを攻略する気ないわよ！」

「攻略って……お前オタクだったっけ？」

顔を赤らめながら攻略言う伊吹さん。
しかし、他人を攻略なんてエロゲーでよく使う用語だぜ。
多分、というか確実に一般人は他人を恋に落とすのに攻略なんて言葉は使わないだろう。
そーかそーか。ついに伊吹もオタクに……フフフッ、いいぜテンション上がってきた！

「むがぁ～っ！　あ、あんたのせいでしょ！　あんたのせいで言葉が伝染しちゃったのよ！」

「けーすけ様の趣味が他人に伝染する事、あるのですねぇ～」

「お前だって葵の趣味伝染してね？　最近家でＰＮＰばっかやって

るだろ？」

「もきゅ！　だってだって面白いんですもん！　レムリアにはあんなものなかったのです！」

「学校でレムリア言うな！　バレたら日本での生活オワタになるだろ！」

よかったぁ～、たまたま一緒にいた人が伊吹で。

伊吹は一応事情を知ってるからな。というか事情を知っている唯一のただの人間だろう。

ん、何故そこに明智をカンウトしないかだって。だって明智は超能力者じゃないか。

異能の力なんか持っていない、ただの人間という枠の中では伊吹が唯一の存在。そういう意味である。

「そうよ。あんたの事が私ら以外にバレたら大変よ」

「もきゅう……申し訳ないのです。ついテンションが上がっちゃったのです……っ」

暮葉ってテンションが高い時と低い時の差が激しいよな。

まるで、昼間は熱いけど夜は寒い砂漠のような女の子だぜ。

……暮葉って小さいし。大事な所も砂漠みたいに何も生えてなさそ……げふんげふん！

「まあいいや。それよりそろそろ戻ろうぜ？」

「そうですねっ！」

「次は物理かぁ……まぁ早く行こう」

こうして、俺達はぼちぼち教室に戻ったのである。
一時は終わるかと思ったけど、結局終わらなかった素晴らしいこの日常。
この日常が続いたのも、まさにアイツのおかげである。

――――昼休み、俺は例のアイツに会いに行った。
いや、正確にはたまたま遭遇したという感じである。

「お？　よぉ明智」

「お、ふ……藤島っ。おはよう」

「おいクソ介！　私はスルー？」

「悪いっ、ちゃんといるのはわかってるから心配すんな」

「そっか、でさクソ介、最近町屋くんとはどんな感じ？」

「……」

案の定苦手な人も一緒にいたけどね。
まあ、生駒については我慢しよう。別に生駒自身は悪い人でもないし。
ただ……いい加減俺ガチホモ説から離れてください！
折角その噂も校内から消えたというのに。つーかまだ町屋くんネタ引っ張ってるのかよ。

「藤島、藤島がガチホモの変態さんだっての……ホントの話なのか？」

「違うわっ！」

「……そうだな！　藤島はただの変態だもんな」

「なんかちっとも嬉しくねえっ！」

もういい加減慣れましたけどね……はぁ、いつになったら俺＝変態ってイメージがなくなるんだ。

変態だって事はもう認めるけどさ、それを面白がって言いふらしているわけじゃないのに。

出来るだけ真人間だってアピールしてるハズなのに。

「素直に喜べばいいのに。クソ介はナギちゃんに人生助けられたのに」

「まあ……確かに助けられたけどさ」

そう、俺は明智に人生を助けられたのだ。

何の処分も受けずにこうして平穏な日常を送っていられるのも、すべて明智が頑張ってくれたからだ。

明智は先生にも随分信頼されている風紀委員である。

その風紀委員の発言力はかなりのものなのだ。多分明智の発言力は生徒会もビックリであろう。

そんな発言力があったからこそ、悪い言い方をすれば先生を脅せたのである。

だから、俺は明智にはかなり感謝をしている。ラーメン三杯くらい奢ってもいいくらい感謝している。

……でもね、それと俺＝変態とか俺＝ガチホモは関係ないと思うんだ。

「そ、そんな低姿勢になるなよ。私はその……友達を救うという当然の事をしただけでっ」

「いや、もう何度頭を下げればいいのかってくれい感謝してるよ。ありがとう明智」

「どっ！　ど、どういたしまして……っ」

明智は恥ずかしく思ったのかはわからないが、後頭部に手をやって軽く掻いていた。
まぁ、照れ隠しって事にしておこう。

「おいクソ介！　男のお尻を追うのは勝手だけど、ナギちゃんに手を出したら去勢だよ？」

「なんでお前は話題をそっちに持っていくのかな！？」

もう嫌だ！明智には感謝だけど生駒は何か嫌だ！
……結局、昼休みは明智や生駒と一緒に過ごした。
それはもう当然のように、俺の扱いは変態だのガチホモだのとひどいものであった……。

――――放課後、今日の俺は一人帰りである。その理由は伊吹は部活で暮葉は小坂に拉致られたからだ。
野郎共は重原は今日は道場、大吾は新作発売だかでさっさと帰っちまった。

明智は明智で忙しいし、浅間兄妹は学校で見てすらいない。
部活もないもんだから青山さんも見かけないし、葵は多分友達と一緒なのだろう。
そして三馬鹿だが……うん、赤佐と大林は元々仲良しだったからいいけど黒木がねぇ……。
アイツ、あの一件以来俺を見る度にガンを飛ばしてくるんだよ。
まあ黒木は伊吹の事が好きだし、その伊吹を満足に守れなかった俺が悪いのは分かっている。
でも、それで黒木と殴り合いの喧嘩になるのは嫌だ。だから黒木とは距離を置く事にしたのである。

……こうして見ると、誰も一緒に帰る友達がいない。
というか他に友達と呼べる人がいない。他の野郎共は別なクラスだし部活だし……。
はぁ……まさに俺は友達が少ない。はがない状態である……。
まあでも、明智のおかげで悪い噂は消えたようだ。
これから1人でもいいから新しく出来ればいいなぁ……それと、もう一つ一番重要な事がある。

――――伊吹を守る。それは幼馴染としての俺の役目だ。
でも今までの俺……いや、今の俺でも満足に伊吹を守る事はできない。
いや、伊吹だけじゃねえな。他のみんなも守らなきゃいけない。
……でも、今のままでは絶対不可能だ。今の俺はすげえ弱いんだ。
俺がこんなに弱かったから……今回のように多くの人々が傷ついてしまった。

「……っ！」

だから――もっと強くなろう。

どんな危険が来ようと伊吹や皆を守れるように……もっと強くなろう。

永渕……いや、この前の光秀みたいに異能の力を使う連中だって、これから先相手にしなきゃいけないかもしれない。なんたって俺の守る対象には暮葉や明智も含まれているんだから。

だから今のままじゃダメなんだ。キスしないと強くなれないようじゃ……まだまだなんだ。

「……上等だ。もっと強くなって皆や皆の周囲の世界を護ってやる！」

――俺は拳を力強く握り、沈みかけの太陽に向かってそう叫んでいた。

第52話，はがない圭介、弱い圭介　（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「まずい事が発生した……」

伊吹「ど、どうしたのよ？」

圭介「……この小説、ストックが0になった」

伊吹「ちょ！　だ、大丈夫なの！？　折角順調に更新できてたのに！？」

圭介「大丈夫だ！　幸い学校の都合で作者は三連休……根性で持ち直すぜ！」

伊吹「し、信じていいのかしら？」

圭介「今までリアル忙しかったけど、夏になって少し余裕が出てきたらしいしな……とりあえず更新ペース保つ為に頑張りますのでよろしくお願いします！」

暮葉「もきゅ！　以上、珍しく真面目なお話でした！」

第５３話，神は言っている……オカシイと！

それは、俺がある決意をした翌日の事である。
いつも通り帰りのＳＨＲも終わり、皆がぼちぼち帰り始めている頃。

「そんじゃあ僕は先帰るな」

「圭介、部活頑張ってね」

「おう、じゃ～なお前ら」

さっさと帰りやがる野郎共……まあ仕方ない、アイツら基本的に暇人だしな。
それはそうと、今日から部活があるのである。
先日の一件であかりが重傷を負った為に入院し、その間自粛していた部活が今日から再開なのだ。
その理由はもちろん、あかりが退院して浅間部長の元気が戻ったからである。

「あかりさん、元気にしてるのでしょうか」

「そうだなぁ。まあきっとアイツのことだ、部室の扉を開けた瞬間やたらテンションの高い声で挨拶してくるよ」

「そうですね！　そーだけーすけ様！　拙者は今日の為にいっぱい写真を撮ったのですよ！」

まるで、楽しい事でもあったかのように言う暮葉。
というかいつの間に撮影したんだ。家にいる時はいつもゲームして

いるイメージしかないのに。
ああ、あと最近は葵に変わって料理してくれているな。
正直助かる……暗黒物質（ダークマター）を食べる必要がなくなるからな。
でもそれだけだ。暮葉がどこかへ外出していただなんて全然知らなかったな。

「ホントかよ。お前いつの間に撮ったんだ？」

「にゅふふ。拙者がいつも家でぐーだらしていると思ったら大間違いなのですよ」

「そっかぁ、それで何を撮ったんだ？」

「はい！　便所コオロギにゴキブリさん、あとけーすけ様のベッドの下のえっちな本です！」

「ちょっと待ったァ！　ロクなもん撮ってねえな！　しかもいつベッドの下なんて見たんだよ！」

「けーすけ様が寝ている間なのですよ」

しかも居候に勝手に部屋を荒らされ、ベッドの下のエロ本まで発見されてしまった。
畜生。葵にはどこに隠しても見つかるからもう諦めたけど、暮葉に見つけられるのは正直恥ずかしい。
ううう……プライバシーの侵害だ。恥ずかしさで死んでしまいたくなっちまうよ。

「お前……寝ている人の部屋に勝手に入るってどうかと思うぞ？」

「で、でも！　もしサヴィエトの魔法使いさんに寝込み襲われたら……」

「その心配は殆どないってアンタ言ってたじゃん！」

「ソ、ソンナコトナイデスヨ？」

なんという笑顔でしょう。そして新人声優もビックリなほどの棒読みである。

「……で、結局お前はどこまで漁ったんだよ？」

「けーすけ様の机の二段目の引き出しにしまってある、参考書のカバーを被せた“快感のマテリア”って本を見つけだしたあたりまでです！　けーすけ様……そのっ、えっちな本も二次元派なのですねっ」

「やめてぇ！　こんな往来で俺の趣味をバラさないでください！」

しかもコイツ、なんでそのエロ本の場所を特定できたんだよ！滅茶苦茶苦悩した上でようやく見つけた、かなり見つかる確率の低いエロ本の隠し方を実践したのに。

葵には見つかっても、親父やお袋には見つかった事がなかったのに……！

暮葉恐るべし。というか完全プライバシーの侵害だ。ああ、なんだか自害したくなってきた……！

「けーすけ様……拙者はその、けーすけ様の事ロリコンだと思ってましたのにっ」

「俺にそんな性癖はねーよ！」

「あ、でも本棚に数学の参考書のカバーを被せた“みょんなとれーにんぐ”って、どう見てもロリコン向けなえっちぃ本はありました！」

「ちょ、それは部長に貰った北方ｐｒｏｊｅｃｔの……っ」

葵にはバレたけど、それ以外の人に対しては完璧な偽装だったハズ。
それなのに……なんで暮葉にバレちゃったんだよ！
折角のレア物同人誌だったのに。俺の嫁の一人であるみょんの同人誌だったのに！

「けーすけ様！　拙者、けーすけ様の守備範囲が気になります！
何歳から何歳までＯＫなのですか！？」

「もうこんな猥談やめようよ！　そんなの暮葉のキャラじゃねーよ！」

それにその、それ以上エロ同人誌について突っ込まれると……。
正直、精神的にキツいです。恥ずかしすぎて死にたくなるっす……。
母親は息子のエロ本の隠し場所を全て把握しているとは言うが、俺の場合は妹と居候に把握されているようだ。一体なんなんだ……この色々な意味でおかしい状況は？

――――結局、俺はその後もエロ本について暮葉にからかわれ続けた。
普通なら変態と引く所であろう。なのに暮葉はどういうわけか楽しんでいるようだった。
その上必死にも見えた。まるで……俺の趣味を理解しようとしてい

るような……。
結局、その理由は全然わからねーけど。
そんな事はさておき、ようやく俺達は写真部の部室に到着した。
――――だが、ここでも俺は衝撃の光景を目の当たりに驚いてしまうのである。

「お、お帰り……兄貴っ」

「お帰りなさい……え、えっと……兄さん」

「お兄ちゃんお帰りーっ！」

いつもの質素なものとは違い、悪趣味なくらい金ぴかになってしまった部室。
どこから仕入れたのだろうか、高級そうなグラスにはりんごのジュース。
執事のような恰好をしている浅間部長……うん、この時点で既に変である。
だがもっと変な事が目の前で起こっている……そう、それは――――

「なんで葵がここにいるんだよ！　つーか二人もその作ったような妹キャラは何!?」

「そそそ、そうですよ！　不自然ですよ皆さん！」

俺も暮葉も衝撃的な光景を目の当たりに、思わず大声で驚いてしまった。
どういうわけでしょうか、青山さんとあかりが妹キャラになってい

たのだ。
しかも実の妹までいやがるし。ていうか立派な装飾と執事の恰好をしている浅間部長は何？

「だってぇ……葵が圭介はシスコンだって言うからっ」

「わ、わたしもその……葵からそう聞いたので……っ」

「俺はシスコンじゃねえ！　あとなんで葵がここにいる！？」

「ああ、彼女も今日から写真部の部員だよ。君の妹みたいだし、お世話はよろしく頼むよ」

浅間部長は平然とした顔で衝撃的な事実を告げる。
ホント、嘘だと信じたいような事実をね。

「嘘だぁーっ！　つーか部長もその恰好はなんですか！？」

「これ？　ハハッ！　コスプレに決まってるじゃないカ！」

イケメンだけど中身は残念な超絶変態野郎の浅間部長。
一体、彼のコスプレを誰が望むのであろうか。誰得という言葉がピッタリ合うぜ……浅間部長！
……あと、なんだか頭がクラクラしてきたぞ。

「ああ、頭痛が……っ！」

「けーすけ様ぁ～！　し、しっかりしてください！」

「だ、大丈夫だ……それより葵、なんだっていきなり写真部に？」

もう色々と面倒だけど知りたい事もいっぱいだし、とりあえず一つずつ聞いていこう。
まず、葵が写真部に入部した理由である。
葵は小中高と今まで部活をした事がない。その分友情を大切にし家事なんかも必死でやっていた。
そんな子だったハズなのに、どういう風の吹きまわしで部活を始めたんだろうか。
葵は人差し指を自分の顎へと当て。

「んーっとね。千早やあかり、そしてお兄ちゃんを追って入部したんだよ！」

両手を開くと、元気よく満面の笑顔でそう答えた。
ああそうか。そういうわけでしたのね。
要するに、このブラコン妹は俺目当てで写真部に入ったというわけね。
……んじゃあ、次は浅間部長に質問だ。

「次、部長！　この変な装飾は一体なんなんですか？」

「もちろん気分転換――――」

「ウソつけ！　そんな目的の為に貴重な部費を使うわけないでしょ！」

「ええ。藤島君は気に入らなかったかい？」

「派手だし目が眩しいわ！」

金ぴかすぎる今の部室。お城で偉い人しか入れないようなレベルである。
もうコレ、どこの昭君之間（しょうくんのま）だよ。こんな装飾の為に部費いくら使ったんだよ！
……まあいい。浅間部長は馬鹿だからこれ以上聞いたって時間の無駄だ。次は青山さんとあかりだ。

「次は青山さんとあかり。なんで妹キャラなんて演じてるんだ？」

「それは圭介が喜ぶと思ったから……っ」

「え？」

「あかりの言葉のままです。その……それで葵に聞いて……っ」

恥ずかしそうにしながら、それでも正直に答えてくれたあかりと青山さん。
その葵のアドバイスで二人は妹キャラを演じていたというわけか。
……葵のヤツ、この二人に俺がシスコンだと言いやがったのか。
しかも別にシスコンでもねえし、全く……二人にシスコンだと思われてるじゃねえかよ。

「もきゅ。それならどうしてけーすけ様が喜ぶような事を？」

「ああ、ちゃんとしたお礼がしたかったんだよ」

暮葉の質問に真っ先に答えたのは、残念なイケメンこと浅間部長である。
あかりと青山さんの間に割って入った彼は、穏やかな表情で俺と暮葉を見ていた。

「部長……どうしてですか？」

「ボクらがまたこうしてここに集まれたのも、藤島君と木下君のおかげだからね。だから女子陣はシスコンの藤島君の為に妹キャラを演じ、木下君は女の子だからこのボクが執事さんの恰好をしてご奉仕を――――」

「拙者は別に部長さんのお世話はいらないのです」

「ぐはっ！　そ、そんなぁっ！」

暮葉に振られて撃沈してしまった浅間部長。なんだ、すごく落ち込んで見えるぞ。

もしかして浅間部長は暮葉を……流石にないか。この人はいつも冗談で生きているし。

「で、では藤島君はどうだった!?　３人の妹達に迫られる気分は!?」

しかも落ち込んだと思いきやもう復活している。

なんという立ち直りの早さ、やっぱり暮葉を狙っているのとは違う見たい。

つーか今度は俺ですか。その話題を俺にも振るんですか。

「俺も別にシスコンじゃないですし、というか妹は二次元以外に興味ないんで」

「あ、葵の嘘つき！　圭介のどこがシスコンなんだよ！」

「そ、そうですよ……っ、その……藤島先輩の反応、どう見ても妹に興味ない感じですよ？」

「そ、そんなぁ！　お兄ちゃんは絶対シスコンだと思ってたのにっ！」

どう考えても葵の勝手な妄想じゃねーか！

そりゃまあ好きではあるよ。家族だしたった一人の掛け替えのない妹なんだから。

でもねぇ……そんな危ないほど妹が好きってわけでもないし、やっぱり妹は妹なのである。

これでも世間一般のお兄さんと比べると、十分妹に対して好意を示しているほうだと思うぞ。

「はぁ……それで結局、皆はこの前のお礼を俺達にしようとしたんですね……」

「そ、そうだぞっ。あたいもありがとう以上のお礼がしたかったんだからな……っ」

「わたしも、あかりを助けてくれたから……先輩にお礼がしたくてっ」

「葵は入部ついでに面白そうだったから企画したんだよ」

「ボクはお礼がしたかったのと、あと木下君とちゅっちゅしたかったからね」

間部長はもう人として最低だな。葵の企画もロクでもないものだった。

……でも、あかりや青山さんはそれを信じてやっていた。本当に俺にお礼がしたかったかのように。
おそらく、彼女達の想いは本気だったんだろう。

「ありがとう、気持ちはすっごい嬉しいよ。でも、俺達は別にこんなことされなくてもよかったんだぜ」

「そうですよっ。拙者達は言葉だけでも十分なのですよ」

「……え。そ、それじゃああたい達……は、恥かいただけ！？」

「～～～ッ」

今更自分達がやっていた事に気付いたのだろうか、二人は顔を赤く染めて恥ずかしがっていた。
……でも、この二人の妹キャラ。案外よかったかもしれない。
元々が美少女な二人だからだろうか。それとも俺達の為に本気だったからなのだろうか。
とにかく、二人も葵も俺達の為に努力をしてくれた。だったらその努力を水の泡にはしたくないな。

「……でも折角のお礼だしな。どっちかって言うと続けてくれると嬉しいかな」

「拙者も……お姉さんにしてくれると嬉しいです！」

俺と暮葉は笑顔になり、優しい口調でそう言ってみると。

「藤島先輩……木下先輩……っ」

「……わかった！　今日だけあたいが圭介と木下先輩の妹になってやる！」

「葵はお兄ちゃんの実の妹だし、クーにゃんもお姉ちゃんみたいな存在だもん！」

二人＋葵は嬉しそうな表情を浮かべてくれた。

ハハッ、なんだかこういうのもいいかもな。

端から見れば奇抜だけどさ、お礼をされている俺はとっても嬉しい気分だ。

こうして写真部も復活し、俺達の日常は完全に元に戻った。

……いや、元に戻ったんじゃなくて、パワーアップと言ったほうが正しいかな。

だって今日から――ｍｙシスターである葵も写真部の部員なのだから。

俺と暮葉へのお礼と葵の入部祝いを合わせたような、そんなパーティーは何時間も続いた――

「……あの、ボクの存在なかったことにされてないかい……？」

第５３話，神は言っている……オカシイと！　（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「ふぅ！　０時の更新には間にあったぜ……」

伊吹「で、でも１３時の更新はどうなんのよ？」

圭介「大丈夫、それは実現できる。というかなんとかストックできそうな段階らしい」

伊吹「作者は学生らしいけど、よっぽど暇人なのね。だから彼女とか出来な――――」

圭介「コラッ！　そういう事言わない！」

暮葉「そういえばけーすけ様も彼女いないですけど、けーすけ様も暇人だから出来ないのですか！？」

圭介「お前は俺をショックで殺す気か！　うあぁぁぁぁぁ～！」

浅間部長「恋愛資本主義社会って残酷だよね……」

第５４話，凶悪な男と特異点？

世の中には、決して触れてはいけない真実がある。
真実は常に真っ暗で血みどろで……それを知った瞬間“普通”には戻れなくなる。
そんな闇の秘密が世の中には数多く存在している。

――――これは永渕との戦いが終わり、平穏な日常を取り戻した圭介達が知らない間に起こった真実だ。

＊

６月１５日の深夜。
今日は風が強い……その上曇り空だ。
オレは東京都民だってのに、この日は東京から少し離れた古宇坂って所を歩いていた。
ただ、目的を果たす為だけに。

「はぁ！　はぁ！　はぁ！」

オレから逃げようとする一人の女の子。
歳は大体オレと同じくらい、多分高校生くらいの女の子だろう。
女の子の恰好はそれは奇抜だ。クソみたいに重そうなロッドに馬鹿げた帽子。
外見は見るからに魔法少女である。その魔法少女がなんて事のねぇオレから逃げているのだ。

「……っ！？」

「ヘッ……行き止まりでしたってなぁ」

「……ッ！」

「さあて、どうすっかなぁ。行き止まりって事は、オマエはもうチェックメイトじゃねえの？」

どこまでも楽しいそうに、そして狂った笑みを作って少女にそう語り掛ける。

一方の少女はオレを恐れ振るえるが、それに耐えて戦おうとしている。

ロッドを構え、厳しい視線をオレへと向けてくる。

「ンだァその構えは？　もしかしてこのオレ、早川悠（はやかわゆう）と一戦交えるつもりかぁ？」

「……ッ！　サヴィエトの魔法使いめ……っ！」

「魔法？　ぎゃはっ、イイネそういうメルヘンなの。オレは嫌いじゃねえよ。でも違うんだよ……オレは魔法とかそういうのは一切使えねえ。でも、魔法以外のそういう力なら使えるんだよなぁ。あと、オレにはサヴィエトってのか何だかよくわからねえな。流石……謎の多い特異点だぜ」

それを告げた――――

「……！」

刹那、魔法少女はロッドを振りまわしてきやがった。
ぶん回されたロッドからは火の玉……いいねいいね、アレが魔法ってモンかァ？
でも、所詮は火の玉だよなぁ。だったら……そんな程度じゃあこのオレは倒せねえ。

「……フッ」

火の玉が俺の目前まで迫った――瞬間、その火の玉は俺の前で消滅した。
まるで、燃える為に必要な何かが消えてしまったかのように。
炎は完全に消え去ったのだ。オレは全く熱すらも感じなかった、火傷すらもしていねェ。
魔法少女は驚きを隠せていない。いや、オレが何をしたのかサッパリ理解できていねえみたいだ。
……仕方ねえ。バカみてぇな女の為に、少しだけこのオレが講義をしてやるとするか。

「なぁオマエ、炎ってどうして燃えるか……それくらいは知ってるよなぁ？」

「……っ、気体が燃焼するのよね……？」

「まぁそうだなぁ。んでだ、炎が燃えるには酸素って重要だよなぁ？　さて問題です、酸素がなくなっちまったら炎はどうなっちまうかなぁ？」

「……っ！？」

「ハッ！　まァ大体は消えるよなぁ。炎を消すには水なんかいらねぇ……空気中の酸素濃度を0にしちまえばいいんだよ。無酸素状態じゃ燃焼なんてしねえしなぁ？」

「なんで……どうして酸素濃度が0になるのよ……っ？」

オレはちゃんと炎が消えた理由を説明したが、それでも魔法少女は納得いかないようである。

……まぁ、確かに消える理由だけしか説明してねえからなぁ。

仕方ねえ、このオレが……何をやったか特別に教えてやろうか……。

「酸素濃度が0になる理由ねェ……じゃあそれがオレのせいだとしたら？」

「……？」

「魔法じゃねえ……けどなぁ。能力で酸素濃度を上げ下げが出来るんだよなぁ」

「魔法じゃない？　ま、魔法じゃなかったら何なのよ！？」

「答えは超能力……もしかして初耳かァ？」

超能力――通常の人間にはできないことを実現できる特殊な能力を指すための名称。

科学的にも合理的に説明できず、超自然的な力……とされている。

実際は脳とかいじくれば誰でも使えるんだけどなぁ。

まあ、確かにオレは元々超能力を使えた。

一応……バレたらマズいって事で超能力者が集まる施設に在籍はしているけどなぁ。

けどそんな事は今はどうでもいい。オレは目標を果たすだけだ……
そうすれば。

「ちょ、超能力……っ」

「まぁ確かに魔法と超能力、違いを説明しろっつわれても難しい話だけどなぁ。ンで、オレはその超能力で風・空気・気圧といったもの全般を操作できるんだよ。例えばさっきみたいに酸素濃度をいじくっちまうとかなぁ」

オレの言葉を聞いた魔法少女は次の瞬間、ロッドを構えつつオレへと接近してくる。
全力疾走。どうやら魔法が通用しないと思ったからか、少女はオレに接近戦を挑むらしい。
まぁ確かに正しい判断だよなぁ。魔力っつったっけか……それを無駄に消費せずに済むからなぁ。
……でも、魔法少女はまだオレの能力をわかっちゃいない。
オレに接近戦を挑んだって意味はねえんだよ。例えば……こんなふうに。

「が……っ！」

少女はオレに触れる寸前、まるで何かに吹き飛ばされたように弾き返される。
言っておくが、オレは少女に触れてすらいねえ。
少女の柔らかい身体、体温、ロッドに打たれる痛みさえ感じていない。
それでも少女はオレにふっ飛ばされた……ぎゃはっ、さてさて……
オレは何をやったでしょう？

「な、なん……で？」

「言ったろ、オレは大気を操作できんだよ……なぁ、暴風ってあらゆるものをぶっ飛ばせるよな？」

「……そ、それがどうしたのよ……っ」

「台風で暴風が吹いてみろ。看板は吹っ飛ぶし下手すりゃ車だって横転しちまう。それくらい風ってのは強いモンなんだよ……んで、さっきオレは何をやったかっていうとなぁ。暴風で膜みてぇなモンを作り出したんだよ」

「ま、膜……？」

「あぁ、それに触れただけで暴風で対象はぶっ飛ばされる……その気になれば９ｍｍ弾はおろか、１５５ｍｍの榴弾だって防げちまうんだよ」

それがオレの超能力。最もこれが全てってわけじゃねえけどな。ほんの一部……本気の１％にも満たねえ程度の力を少女に見せただけだ。

オレが本気を出せば、このあたりは多分吹っ飛ぶだろう……ぎゃは。

「う、く……っ」

「隙見て奇襲でもできればオレを倒せるかもしれねぇけど……オマエじゃ無理だな。このオレに触れる事すらできねぇ……死ぬしか道は残ってねえんだよ」

オレはそう言いながら、少しずつ少女へと近づいていく。

チッ、可愛い顔してんじゃねえか。殺すのがもったいねえ……。
でも、殺さねえと目標は達成されねえ。殺す事の先にある目標がな……。
あんな……クソみてえな所に関わらねえ為にも。オレはコイツらを殺さなきゃいけねえ。

「うぅ……うあああああああああああああああっ！」

「……ぎゃはっ、最後の悪あがきかぁ？」

少女は再びロッドを握り、敵うハズのないオレに向かってくる。
十分に間合いを詰め、ロッドを振りおろす……オレはそれを避ける事はない。
ただ先程と同じ、暴風の膜を生成して待機するのみ。
態々こんなガキを殺すのにオレが動く必要なんてねーんだよ……相手が勝手に自滅するからなぁ。

「うぐぁ……っ！」

ロッドが膜に触れた瞬間、少女は暴風によってぶっ飛ばされた。
その時の衝撃でロッドが手から離れ、いよいよ少女は丸腰となったのである。
オレの眼下には振るえる丸腰の少女……頭から足まで完全にガタガタと震えてやがる。
やれやれ……既に戦意は喪失してるってかぁ。

「最高に怖いみてえだなぁ。さて、そろそろ殺すけど……オマエだって楽に死にてェよな？」

「……う、く……っ」

「そこで、だ。いい方法があるんだけど……気圧を操作してオマエの身体を押し潰す、それか思いっきり膨張させる……どっちがいいかなァ？」

「……っ……っっ！」

狂気じみた笑顔を作って迫ると、少女はさっきよりも震える。
目は見開かれ、冷や汗もダラダラと出ている。
ダメージはそれほど受けていないようだが、恐怖で全く足が動かない。
……もう、少女は全てにおいて終わっている状態だ。

「そうだぁ……今日は膨張させっかぁ。最高に愉快なバラバラ死体が出来上がるからなぁ……」

「……っ！」

「大丈夫……バラバラになるんだぜ？　痛みは感じねえよ」

「……嫌っ！」

「さて……覚悟はできたかな……ふふ、あはは……あひゃはっ！」

オレは気圧を操作する事で、目視可能範囲にあるあらゆる物質を押し潰したり膨張させる事ができる。
今回はそれが人体ってだけだ。
さて問題です、人体が思いっきり膨張するとどうなるでしょう？

正解は、たった今気圧操作を行い膨張させ破裂させたあの少女のよ

うに……。

……もう女の子だったかすらわからねえ程、ぐちゃぐちゃのバラバラ死体に……。

「クソッタレ……最高に哀れな死体だ……」

まあいい……これで目標には一歩近づいた。

とにかく、このままこの少女のような特異点を潰していけば……。

オレはいつか、あんなクソッタレた場所から――

オレは少女の死体を放置し、そのまま夜の古宇坂へと姿を消した……。

第５４話，凶悪な男と特異点？（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「……ねえ伊吹」

伊吹「なによ？」

圭介「今回俺、物語を語ってないんですが」

伊吹「確かに、名字も名前も一回も出なかったわね」

圭介「もしかして……主役交代なのかな？」

伊吹「さ、さあ……逆に言うと、あんな凶悪そうな人が今度から主役なの？」

圭介「つーか……あれって一方〇行さんだよね？　絶対一方〇行さん真似てるよね？」

伊吹「そ、そうなの……？」

圭介「前作のフィリーネといい、作者はどんだけ一方〇行さん好きなんだよ……」

大吾「そのうち木原くンっぽいのも出るんじゃね？」

野原「ハハッ！　誰だァこの俺を呼んだ奴はァ！？」

圭介＆大吾「もういたわ！」

暮葉「一難去ってまた一難……この話どうなっちゃうのでしょうか！　次回に続くのです！」

第５５話，いつもの朝

６月１６日早朝、今日は木曜日である。
週末に迫ると段々テンションって上がってくるよね。
だって……週末は見るアニメも多いし、何より土日という休日が迫っているから！
フフフ……今日と明日学校へ行けばもうお休み。
もうそろそろ春アニメも終わるけど、それはそれでいい。７月からは夏アニメの放送開始だ。
もう夏に何を見るかは決めている。
もう今月はアニメ以外には何もないし、あとは夏アニメ放送開始と文化祭がある７月を待つのみだ。

「圭介っ！　ああもう、やっぱり寝てる……」

「んん……っ」

「ほら朝よ、そろそろ起きなさいよ。下で暮葉も葵ちゃんも待ってるわよ？」

ああ……見慣れた天井だ。そして妙に安心できる聞きなれた声だ。
……今日も起こしに来てくれたんだな。
さてと、そろそろ起きようかな。折角伊吹が起こしに来てくれた事だしな。

「……んんっ、おお……おはよう伊吹」

「ったく～、あんたは私が来ないと起きないのかしら」

「一時期来なかった時はちゃんと起きてたろ」

「うっ……そ、それじゃああんたは私がいないほうがいいの？」

怒ってるんだか寂しいんだか……伊吹の表情は複雑だった。

落ちつけ俺。ギャルゲーで鍛えた洞察力をフルに活用するんだ。

こういう場合の選択肢は一つしかねえだろ。

「俺は嬉しいけどな。毎朝伊吹が起こしに来てくれるのは」

「っ……し、仕方ないわね！　ねぼすけ圭介の為に明日以降も起こしに来てやるわよ」

「へいへい、よろしくお願いします」

なんというツッパリ伊吹ちゃん、相変わらず素直じゃないぜ。

これじゃあ起こしたいのか起こしたくないのか、サッパリわからないじゃねえかよ。

う～ん。エロゲーで鍛えた洞察力って現実でも使えるものなのかな？

「それじゃあ、私は先に学校行くから」

「ん、何かあるのか？」

「部活の朝練があんのよ。運動系はあんたがやってる文化系と違うんだから」

「文化系だって吹奏楽部とかは朝練あると思うぞ？」

「だぁぁもう！　細かい事はいいの！　それより遅れると迷惑かけ

るから本当に先に行くね！」

「わかったよ。白陵のヤンキーに気を付けるんだぞっ」

「そう何度も襲われないわよっ！」

そう言って伊吹はバタンと扉を閉め、ドカドカと階段を降りる音を立てながら下へ行く。

やがて、玄関の扉が開閉される音が響いた所、どうやら伊吹は本当に先に行っちまったようである。

アイツ剣道部でも一番強いしなぁ。そういえば、今度大会があるらしいな。

俺もいつものメンバー誘って応援に行こうかな。

……さて、伊吹と会話したおかげで完全に目が覚めたし、そろそろ下に降りようっと。

――――下に降りると、居間にはいつも通り暮葉と葵が俺よりも早く起きていた。

暮葉は朝ごはんを作っており、葵はテーブルで待機している。

……以前は葵が飯を作ってたんだけどな。まあ、葵の料理は暮葉にとってトラウマだし。

俺としても好き好んでは食べたくない……おいしいんだけどね。その、見た目がグロテスクすぎて……。

「おはようございます、けーすけ様っ♪」

「あ、お兄ちゃんおはろー！」

「おはよう、二人とも」

しかし、こうして見ていると暮葉の制服エプロン姿も中々似合うもんだなぁ。
小柄だけど、何故か時々見せる表情が大人っぽくて……。
ってオイオイ、なにロリな暮葉に見惚れてるんだよ。これじゃ俺がロリコンみたいじゃねえか。

「お兄ちゃんお兄ちゃん。葵も久々にお兄ちゃんに料――――」

「それより葵、寿司の出前でもとってみないか？」

「ひどい！　葵はまだ全部発言してなかったんだよ！」

だってねぇ……葵が何を言いたかったかわかっちゃったし。
それが現実のものになるとその……暮葉のトラウマが。

「せ、拙者もお寿司の出前のほうが嬉しいのです……っ」

「クーにゃんまでひどいよ！　葵だっておいしいご飯作ってあげたいのにっ！」

すまん葵。たとえお前は本気だとしても、暮葉にとってアレはトラウマなんだ。
ていうか、俺も我慢して食べるのが辛いんだ。
特にダイオウグソクムシの紫チャーハンを見てからは……やべっ、頭痛くなってきた。

「にゅふふふ……も、もうしわけないのですっ」

「悪い葵。手料理はそのうち彼氏に作ってあげればいいじゃないか」

「彼氏なんか作らないもん！　葵はお兄ちゃんさえいれば問題ないもん！」

「……」

うん、その時点で色々な意味でどうかと思うんだ。
現実世界で妹属性のない俺としては、正直ただのいい迷惑である。
世の中にはごく少数だけど、妹が彼女だと思われて中々彼女が出来ない。
そんな人がいるらしいからな。

『あちらの路上でバラバラになった身元不明の遺体が見つかりました』

その時、そんな男の声が俺の耳に入った。
今藤島家には俺以外に男はいない。しかし俺はそんな事を喋った覚えがない。
だったら声の主は決まっている。それはテレビに写っている人の声であろう。
台詞的に考えて何か事件でもあった感じである。
映像もどこかの住宅街……ってアレ、ちょっと待てよ。ここどこかで見た事ある気が……？

『今日午前4時前、○○県古宇坂の民家の前で、バラバラになった人が倒れていると警察に通報がありました。遺体は完全にバラバラな形で身元の特定が困難との事です。警視庁は身元の確認を急ぐとともに、近頃古宇坂市で頻発している連続殺人事件との関連性も視野に入れ、捜査を続けています』

今度は見慣れた光景と女子アナの声……というか、やっぱり古宇坂かよ！

俺と永渕が戦い終わった頃からの話であるが、近頃随分とまあ古宇坂で事件が発生するな。

しかもその遺体というのが、殆ど触れられた形跡がないらしいのである。

全く……同じ犯人が殺しているとしたら、そいつは一体どうやって殺しをしているんだ？

第一、なんでこんなに頻発して殺人事件が発生するんだよ。古宇坂だけでもこれで3件目だ。

「うわぁ～、また殺人事件……怖いねお兄ちゃん」

「そうだなぁ。最初の二件は確か女の子だったらしいから、葵も暮葉も気を付けるんだぞ？」

「うん！　だいじょーぶ、葵はこれでも護身術習った事あるもん！」

「はいなのです……」

葵はまあ大丈夫だろう。なんだかんだ言って葵はサバイバルアスペクツの高い子だし。

暮葉も達人級の強さだから多分問題ない。

俺だって身体は丈夫だ。一度刺されたくらいならそのまま逃げるくらいは出来るハズである。

……ただ、気になったのは今の暮葉の表情である。

いつもの暮葉なら「拙者なら全然平気なのですよ！」とか言いそうなのに、どういうわけか今の暮葉は暗い。まるで……強大な敵が迫っている時のアニメキャラのような……。

「どうしたんだ暮葉？」

「もきゅ！　な、なんでもないのですよ！　さて、そんな事より朝ごはんが出来たのです！」

あれ、急に元気になった。

さっきのあの暗い顔は気のせいだったのか。いや……そんな風には見えなかったけどな。

でもまぁ、連日の深夜アニメで俺は結構朝は寝ぼけてるし、そんな風に見えたのかもしれない。

それよりも暮葉の作った朝ごはん。またまたこれがおいしそうだなぁ。

白いご飯に焼いた鮭、何かの和風なサラダにお味噌汁。これどこの旅館の朝ごはんだよ。

もうなんというか……暮葉の作った朝ごはんは豪華であった。

「おお！　今日もおしいそうだね！」

「つーか俺はもう食ってるけど、うまい！　相変わらず最高のお味だぞ！」

「あ、ありがとうなのです二人ともっ」

暮葉は恥ずかしそうに少し赤くなりながらも、そんなお礼を言ってくれた。

最近、特に暮葉が来てからの藤島家の朝は、いつもこんな感じである。

伊吹が起こしにきて、俺と葵が暮葉の朝食をべた褒めして。

それから、伊吹の部活がない日は伊吹も混ぜて４人で登校。

最近の朝はとても楽しくて、毎朝が楽しみな感じである。
ああ、暮葉という怪しい世界から来た子もいるけどさ、こういう平穏な日常って素晴らしいよね。
今までが平穏じゃなかったからか、最近は本当にそう思うようになってしまったよ。
……よし、そんじゃあ今日もいい気分だから。

――今日も一日頑張って過ごしますか。

第５５話，いつもの朝（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「皆さん、重大報告です……なんとこの旅、この『魔法少女に会っちゃった場合』がゲーム化される事になりました！」

大吾「な、なんだってーーーーーーーー！？」

圭介「ゲームはシナリオを読み進めて選択肢を選ぶことで各ヒロインのルートに分岐するオードソックスな形式。ちなみにヒロインはメイン５人＋サブ２人だ！」

大吾「なにその大ボリューム！？　つかどこのエロゲーだよ！？」

圭介「エロゲ？　フフフ、文章読むだけならそうかもな。だが！このゲームには戦闘イベントもちゃんとあるんだぜ？」

大吾「は、戦闘イベント？」

圭介「プレイヤーが俺や暮葉とか、とにかく戦闘要員を操作して光秀や永渕とかをぶっ倒していく。格ゲーモードも搭載！　もちろんキャラの特性を完全再現！」

大吾「すげえぇぇっ！　ど、どんだけ機能搭載してんだよ！？」

圭介「ちなみに全年齢版と１８歳未満は買っちゃダメってのがあるけど、後者はヒロインとのエッチなシーンも収録！」

大吾「もろエロゲーじゃん！　で、でもそれって高いんじゃ？」

圭介「全年齢版はＰＮＰソフトとして発売。新作６０９０円！　１８禁版はＰＣにて発売、格ゲーモードもあるからちょっとお高いけど、それでも１２０００円以内になんとか収めたぜ！」

大吾「ぐはっ！　ぼ、ボリュームのわりに安い！　頑張ったな製作会社！」

圭介「発売日は今年の１１月３０日、みんな予約はもう済んだか！？　『魔法少女に会っちゃった場合』……是非買ってプレイしてみてください！」

伊吹「嘘つくなぁーっ！」

圭介「ごばぁっ！？」

大吾「あべしっ！」

伊吹「み、皆さん！　こんなのデマ、ばか圭介が撒いたデマなんだから！　第一ゲーム化なんてありえないわよ！　しかもその……えっ、エロゲーなんて！　わ、私と圭介がエッチな事するなんて……～～～っ！」

暮葉「それより拙者は、葵さんから借りるのではなくて自分のＰＮＰとモ○ハン３ｒｄが欲しいのです！」

第56話，ちょーのーりょくしゃ

放課後、俺こと藤島圭介は掃除当番を任されていた。
もちろんたった一人で……はぁ、最初は3人いたハズなんだけどな。

「大吾に重原……畜生、アイツら雲隠れしやがったなっ！」

大吾は不真面目だし、重原も大吾の付き合いでたま～にだがサボるし。
伊吹は部活、暮葉も先に部活に行き用のない小坂はとっくの昔に下校。
そんなわけで俺は、一人寂しく教室掃除をしていたのである――――

「はぁ……畜生、いじめられっ子の気持ちを今よく理解したぜ」

外からは野球部や陸上部の気合いの入った声。
校内からも、まだがやがやと生徒たちが行動している音が聞こえる。
どれもこれも楽しそうな音であり、そんな音が孤独の俺の心を痛めつけていく。
ああ、俺も部室に行って早く皆と遊びたいぜ……。

「……あ、変態藤島」

その時、聞きなれたハスキーボイスが耳に入る。
ハスキーボイスな上に俺の事を変態と呼ぶ者、そんな人はこの学校に一人しかいないであろう。

「よぉ明智。ってか、そろそろ変態ネタから離れないか？」

「胸揉んだ癖に……熊のパンツ穿いてる癖に」

「おいやめろ。深すぎる心の傷を掘り返すな！」

思えばあの時、明智に葵がテキトーに用意をした熊さんパンツを見られたせいで、色々と狂ったんじゃないかと思うんだ。
あの後生駒には狙われ、何故かガチホモ疑惑が流れてしまい、その結果伊吹を傷つけ……。
畜生。トイレでズボンを脱がしやがった神崎・H・アリック。俺はてめえを永遠に許さないぞ！

「すまない。で、でも事実じゃないか？」

「事実だけど思い出したくない事ってあるじゃん？」

「まあ、確かにな……」

「頼むからもう思い出せないでください！　お願いします！」

俺は柏手を打ち、やや頭を下げて明智に頼みこんでみた。
うん、実に情けない光景である。
でも思い出したくないのも事実だ。その為にはやむを得ない行動である。

「私の御先祖を一撃で倒すくらい強いのに、案外中身はチキンなんだな」

「うっせ黙れ！　お前だってパンツを異性に見られるのは嫌だろ！」

「うん。好きな人だったらわからないけど、確かに嫌だな」

「だろ？　俺だってめちゃんこ恥ずかしかったんだよ。もう頼むから傷に触れないでください」

「悪かった……藤島だって男の子だもんな」

なにその○○だって女の子だもんね、的なセリフは？

きっと明智は俺を慰めているつもりのだろう。しかし何故だ、全然嬉しく思えないのは俺だけか？

「はぁ……それで結局何の用なんだ？」

「用はない、ただ藤島が一人で掃除していたから……」

「ん、ああ。友達が雲隠れしやがったんだよ」

「それ……友達って言えるのか？　実は藤島って友達がいな――」

「コラッ、そういう傷つく事言うのやめい！」

リアルに友達が2人しかいなかった時期があった俺にとって、その言葉は妙にズキッとくるよ！

今でさえ、本当にお願い事友達の数なんてそんなにいないのに……。

はぁ……心から友達って呼べるヤツいるのかな、俺。

「大丈夫だぞ……私は藤島の友達だからっ」

「なに悲しい雰囲気作っちゃってんだよ！　いるから、ちゃんと友達いるからな！」

「ホントか？　木下と伊吹以外の人と一緒にいる所、あまり見たことないぞ？」

……意外な事実が発覚しました。明智、伊吹のことを名前で呼ぶんだね。

ということは二人は意外と仲良しなんじゃ……そんな疑惑が脳内に浮上しました。

俺の知らない所で色々な交友関係ってあるんだな。

……まあ、俺が友達少ないだけなのかもしれないけど。

「あのなぁ。今日逃げやがった馬鹿野郎どもとはよく遊ぶし、部活の皆とだって結構話せるんだぞ」

「だからって友達とは限らないぞ。藤島、利用されているだけかも――――」

「妙に現実味ある事言うのやめましょうよ、明智さん！」

「すまなかった。リアルパシリの藤島には荷が重すぎたか」

「まだパシられた事ないよ俺！　一応対等な扱いは受けているぞ！」

「そ、そうだったのか……！？」

なにその突っ込み所のないマジ反応！

もしかして明智さん、マジで俺が友達のいないただのパシリだと思ってたの？

……もう、そんな人生だったらとっくの昔に自害コマンド選択してるよ。
今頃、富士の樹海で身元不明の遺体が見つかっているかもな。

「……お前、どうしても俺をぼっちにしたいんだな」

「もちろん冗談だぞ。友達は冗談も言い合えるくらいじゃないと！」

「そりゃそうかもだけど……悲しくなる冗談はよそうぜ？」

「もしかして藤島……いじめられてたのか？」

「いじめられてはいなかったけど？」

まあ、それに近いくらい周囲から冷たくされた時期がありましたが。
それも、結構最近まで。特に同じ中学出身のヤツからはね。
思えばそんな誤解が解けたのも、明智が風紀委員の発言力を利用して頑張ってくれたからなんだよな。
ホント、この明智凪紗って一人の女の子には頭が下がるよ。

「そうか……じゃあ変態だから女子に嫌われてたんだな」

「もう俺＝変態ネタは飽きたわ！」

「大丈夫……っ、藤島がぼっちになっても私はずっと一緒だっ」

「俺をぼっちみたいに扱うな！」

やたらと変態扱いしてきたら、どうしてもぼっち扱いしようとしなければ、本当にパーフェクトなのに。

容姿端麗、頭はいいかは分からないけど正義感ある風紀委員。
でも、俺をいじめて楽しむ所があるし……やっぱり明智は残念な美少女である。
というか絶対明智ってSだよね……。

「そうか、それじゃあ……あ、そうだ」

「今度はなんだよ」

「私とした事が、わりと重要な話を忘れていたぞ」

「ああ、重要な話？」

明智が重要な話って一体何だろう。
明智家の問題はもう解決したハズだし、するともしかして明智本人の話……。

ハッ、まさか明智が俺に告白でもするのか！
オイオイもしそうだとしたらどうする。
そんなフラグを立てた覚えは皆無なのだが、でももし本当に告白だとしたら――――
いや、俺が明智に恋とかしてないから、告白されてじゃあ付き合うかじゃ流石に失礼かな。
でも明智はハッキリ言って上玉である。それを逃すのも勿体ない気が……。

「う～ん」

「な、なに真剣に悩んでるんだ？」

「え？　ああいや！　なんでもないッスよ！」

「怪しいぞ、藤島。どうせ卑猥な妄想でもしていたんだろう？」

今ジト目で変態扱いされた……。

ところで、明智に告白される妄想は卑猥な妄想に入るんだろうか？

でもエロ要素はハッキリ言って皆無だ。

卑猥ではないと思うけど……クールだが意外と純粋（ピュア）な明智には卑猥に思える事なのかな？

……ってそんなことはどうでもいい。それよりこのまま変態扱いされるのは嫌だな。

「お前なぁ……俺が悩む＝卑猥な妄想って、流石にそれはないと思うぞ？」

「ほ、ホントか？　変態なのにか？」

「もう変態は認めるけどさ、年がら年中エロい事考えてるわけでもないんだぞ？」

というか、そういう事を考えるのは一日のうち３０％未満だ。

これだけは断言できる。俺は至って健全でお年頃な男子高校生なんだ！

「そうなのか……って、大事な話を忘れる所だったぞ！　これも藤島が変態なせいだ」

「だぁぁもう！　変態変態うるさいわ！　それで、結構重要な話って一体なんなんだよ？」

「ああ、実は……藤島。最近殺人事件が頻発しているだろ？」

「え、ああ。そういえば今朝もニュースでやってたな。古宇坂だけでもこれで3件目だぜ？」

殺人事件が頻発するようになったのは、まさに俺達が永渕ら白陵高校を倒してからの事である。

東京で5人、隣町3つくらいで3人、そして古宇坂でも3人である。

これほどの大人数が不可解な死に方をしているのである。

触れられた跡もないのに、何故か窒息死していたり……そして、今朝のようにバラバラだったり。

とにかく、殺人犯は人間技とは思えないような殺し方をするヤツらしい。

……全く、どこの殺し屋がやったんだよ。しかも身元がわかる人は女の子ばっかり。

しかも、不思議な事に殺害された人々は皆、どういうわけかどこの国の国籍も持っていないらしい。

「うん。その事に関してなんだけど、古宇坂で起きた一件目の事件の現場は私も見たんだ」

「え？　だ、大丈夫なのか？」

「安心しろ。これでも普通の人よりはグロテスクなのに慣れてるぞ」

いや、そういう問題じゃねえだろ……。

ていうか明智は女の子なんだから、少しは怖がるとかしたらどうなんだろうか。

「そうか……でも誰なんだろうな。おかげで周りの誰かが巻き込ま

れないか、不安で仕方ねえぞ？」

「大丈夫だ。殺されているのは何故か無国籍の人達だけ……多分、日本人は大丈夫だと思う」

「無国籍ってのも不思議だけど、やっぱり一番不思議なのは犯人だよな。どんなプロの殺し屋だよ？」

「そこに思い当たる事があるんだ」

明智が犯人に心当たりだと？
ンな馬鹿な。もしかして某名探偵的な展開で、実は犯人は明智でしたとか？
……ンなわけないか。明智が殺人をやったら必ず触れた跡があるハズだ。
仮になかったとしたら、その遺体は間違いなく焼死体であろう。
発火能力（パイロキネシス）じゃ跡ナシで殺すことは多分、不可能である。

「……え。マジで仰ってるんですか、明智さん？」

「うん。誰が犯人かまではわからないけど、犯人はおそらく……」

「……っ」

「超能力者だ」

「……っ！？」

超能力者って……それって明智みたいなヤツの事だよな。
例えば明智の発火能力（パイロキネシス）とか。

あと能力名は忘れたけど、あの明智光秀が使っていた風の斬撃。
でも、ああいうのを使う人って明智家の人だけなんじゃ……？

「ちょっと待て、明智家の人間以外に超能力者なんているのかよ？」

「いる、そんなの当たり前だろ？　公にはなっていないけど、日本には超能力開発を行う私立佐井学園。通称“ＰＳＩ研”が存在しているからな」

「佐井学園？　それって東京に最近できた私立の進学校だろ？」

「表向きはそうだよ。でも実際には表向きは技術開発分野を専攻する“開発科”では、私のような超能力者の育成が行われているんだ」

なんですか、その某学園都市ラノベみたいな学校！？
ていうか、超能力者を育成する機関って日本にあったのかよ！
そこって卒業生とかもいるし、増してや今は情報社会である。
よく今まで騒がれずに済んだな……超能力なんて、いいニュースのネタになるのにな。

「ん、そういえば明智って随分そこについて詳しいな」

「あたりまえだ。だって私、１年の最後までそこに通っていたんだから」

「それってもしかして、初芝に転校する前に通っていたって事か？」

「そ、そうなるな……っ。だって、私は元々能力が発現していて、ある日佐井学園の学園長にスカウトされて……っ」

「それで一度は入学したのか」

「うん……親父殿がうるさかったから家に戻って初芝に転校したけどな」

そのうるさかった親父、きっと光秀がとりついていた頃の話なんだろうな。

それにしても初めて知ったぜ。日本にそんな学園が存在していたってのか。

確かに、それなら他にも超能力者がいたっておかしくはないよな。

「けど、なんで超能力者が犯人だって思ったんだ？」

「そ、それはその……ちょ、超能力者としての感だ！」

「それ信用していいのかよ！？」

「あたりまえだ！　バラ・ゲラーのスプーン曲げよりは信用できるだろっ！」

まぁ……明智は実際超能力とかいうのを使えるしね。

バラ・ゲラーのように超能力かもわからないうじょ、ちょっと疑っちまうけど。

「それで、私は犯人に心当たりがあるのともう一つ、警告に来たんだよ」

「警告？　もしかして超能力者は俺を狙ってます～とかか？」

「違う。藤島は多分平気だと思うけど……あ、危ないのは多分木下

だ」

「暮葉が？　なんで……あっ！」

そういえば、殺害されているのは国籍のない人達ばかり。
確かに暮葉は学校には入っている。だがそれはアルファ隊が仕組んだからこそ出来た事なのだ。
暮葉はこの街で普通に日常生活を営んでいるが、日本国籍を持っているわけではない。
それどころか、全世界のどこの国の国籍も持っていないのである。

「わかった……だろ？　だからその、出来るだけ木下から離れるなよ？」

「あ、ああ……わかった」

またまた明智に助けられたよ。おかげで手遅れになる前に気付けた。
そうだ……この状況で一番危ないのは暮葉じゃねえか！
畜生、どうして今まで気付かなかったんだよ。
でも、おかしいよな。どうして犯人は無国籍者ばかりを狙って惨殺しまくっているんだろう？
無国籍者連続殺人に何か意味でもあるんだろうか？

「……あ、そうだっ。それはそうと藤島、その……そ、掃除手伝おうか？」

「え？」

「だから掃除だ掃除っ。一人で困ってるんだろう？」

なんだいきなり。明智が暗い話から嬉しい方向に話題を変えたぞ。
掃除を手伝ってくれるって、俺としては滅茶苦茶助かる！

「いいのか？」

「い、いいんだっ。その、藤島は友達だからな……っ！」

「……ありがとな、明智」

本当、最近俺は明智に世話になりっぱなしだな。
ここまで頭が下がる相手は先生と親以外にはいないぜ。

――その後、俺は明智と二人で掃除をし、終わった後はいつも通り写真部の部室へと向かった。

第56話，ちょーのーりょくしゃ（後書き）

後書きトークコーナー

凪紗「やった！　久々にまとまった出番だ！」

圭介「よかったな明智！」

凪紗「セリフも今回は多かった！」

圭介「そ、そうだな……」

凪紗「しかも、なんだか藤島の役に立っているっぽいぞ！」

圭介「あ、ああ……」

凪紗「これからも私の出番があるかな？　いや、主人公になれるかな！？」

圭介「……」

凪紗「いっその事タイトルも『変態藤島に会っちゃった場合』でいい気がするぞ！」

圭介「いい加減落ちつかんかい空気委員！」

凪紗「なっ！？　く、空気委員……うわあぁっ！」

※凪紗はショックで3時間ほど倒れました。

第57話，自己防衛本能【モザイク】

「圭介、あたいの兄貴のシバき方を教えてくれよな！」

「……はい？」

部室に入ると、突然あかりが上目遣いで言ってきた一言。
ハッキリ言って意味不明だ。ただ一つだけわかる事がある。
どうやら、あかりは自分の兄である浅間部長をシバきたいようである。
全く……今度はあのバカ部長、なにをやらかしやがったんだ？

「……なんじゃこりゃぁあ！」

で、俺が部室の奥まで行くと――なんと浅間部長が全裸で立っていたのだ。
ああ……自己防衛本能で視界にモザイクが。ていうか……。
一緒に入って来た暮葉と元々いたあかりの他に、葵や青山さんまでいるのになんで全裸なのこの人！
しかも全く恥じらいとか感じていないっぽい。あれじゃあまるで露出狂じゃねえか。
とにかく……ここは公立高校という立派な公共の施設だぞ。
そうじゃなくても自分の家ではない外。更衣室とかトイレとか、そういうものではないただの外。
そんな所で全裸になるって……浅間部長は公然わいせつ罪の現行犯だな。

「け、けーすけ様っ！　な、なんか……下にぶら～んって――――」

「待て暮葉！　それ以上は放送禁止用語になるからやめろ！」

「ぶ、部長……最低です」

青山さんの反応は普通だと思うよ。俺もそう思うし、多分青山さんが一番普通な反応をしている。あとあかりも引いているし、あかりも正常である。

暮葉もアブナイ事を言いかけはしたが、少し引き気味なあたり彼女も正常だ。

ただ、女子の中にも一人問題児がいて――――

「う～ん……お兄ちゃんのほうが大きいかな」

「てめえは何ガン見してんだよ！　少しは恥じらいやがれ！」

「えぇ？　でも葵が小さい頃よくお兄ちゃんの見ていたし……」

コイツ何過去話暴露してるんだよ。

いや、確かに見られたというか……絶対見られるような状況だったけどさ。

でも、このタイミングで言う事じゃねえだろ！

「なっ！？　け、圭介も露出狂かよ！　このエロスペシャル！」

「藤島先輩……もしかして、最低な人？」

「けーすけ様、露出狂になるほど変態だったのですね！」

「違うわ！　小さい頃に兄と妹が風呂に入るのってよくある事だろ！？」

――――そう、お風呂である。
時間短縮の為に親が兄と妹と一緒にいれるというのは、多分よくあることかもしれない。
ただしそれは小さい頃の話だ。もちろん今はちゃんと一人で入ってるぞ。
ていうか、この歳になって妹と風呂に入ったら色々大問題だ。

「せ、先輩。その……何歳まで葵と入っていたんですか……？」

「そ、そうだ！　それによっては許してやるからな！」

「そんなの小学せ――――」

「葵が小６の時までだから、お兄ちゃんは中１だったよ！」

おまっ！バカだろ、確かに事実だけどそれを言っちゃうわけですか！？
しかも、あの時は葵に迫られた仕方なく入っただけなのに。
おかげで青山さんは青ざめ、あかりもジト目になり、冷たい視線を向けてきちゃってるじゃねえか！

「先輩……そんな歳になるまで葵とお風呂に……？」

「うわっ、流石ｙｅｓ・エロキュア５……ただのシスコンの変態だろ！」

「シスコンじゃねえ！　しかもどちらかと言うと俺は被害者だ！」

「嘘です！　けーすけ様……最近拙者とお風呂に入りましたよね？」

「「「エエエエエエエエエエエエエッ！？」」」

驚く三人の女の子たち。当然だ、だって暮葉が爆弾発言をしやがったからだ。

事実だから否定はできないが、わざわざこのタイミングで言うかこのアホは！

しかも、そんなうるうると涙目で語られたら……まるで俺が悪いみたいじゃん！

「無理やり脅して入れたのか！　このエロロ軍曹が！」

「違うぞあかり！　事故だよ、事故なんだってば！」

「は、入ったのは……事実なんですね」

「ちょ、青山さん？　事故ですよ事故、不幸な事故があったんですって。邪な感情は皆無でしたよ！」

「お兄ちゃんズルイ！　どーしてそこに葵をまざてくれなかったの！？」

「お前は少し黙れ！」

もうダメだ、本格的に青山さんとあかりが引いているよ。

そして葵は若干怒っている気がする……いや、一緒に入れなかった事に気分を悪くしている。

そして暮葉は耳まで真っ赤だ。恥ずかしいなら言うなよ……俺の立

場まで悪くなったじゃねーかよ。
でも、そんな暮葉も流石に責任を感じたのか。

「み、皆さん。その……けーすけ様の言う通り、本当に事故なのですよ」

「え、木下先輩。それはホントの話なのか？」

「はい！　けーすけ様はチキンですから、そんな大胆な事はできないのですよ？」

なんだかひどい事を言われた気がする……。
でも、暮葉のおかげで大きな誤解は解けたようである。

「んみゃ……ごめん、圭介」

「別にいいよ。ひどい扱いを受けるのは慣れてるしね」

あかりは思ったよりも素直に、瞳を閉じて申し訳なさそうに謝ってくれた。
前々から思っていたけど、あかりは馬鹿だがやっぱりいい子である。
元々容姿は可愛らしいし、もう少し女の子らしくしていれば絶対モテるのに……勿体ない。

「よかった……そうですよね、先輩がそんな……無理やりな人なわけ、ないですもんね」

「あ、ああ……無理やりなんてするわけないだろ？　ハハハ……ッ」

青山さんアンタ、思いっきり引いてたじゃん。そしてあかりと同じ

くらい俺の事疑ってたじゃん。

「申し訳ないのですけーすけ様……拙者が余計な事を言ったばかりに……っ」

「全くだぞ。つーかお前、あんな事暴露して恥ずかしくないのか？」

「～～～～っ」

瞳を詰めって耳元まで顔を赤く染めているあたり、相当恥ずかしかったのだろう。

まあ、暮葉にだって悪気はなかった。

それにあの時は事故とは言え、暮葉の裸を見てしまった上に一緒に入浴までしちまった俺も悪いしな。

「大丈夫、怒ってなから元気出そうよ。でも、もう恥ずかしい事は言うんじゃないぞ？」

「はい。ありがとうなのです、けーすけ様……っ！」

「お兄ちゃん。今度ぜぇーったい葵と一緒にお風――」

「却下！　一人で入れ！」

「えぇ～！　大切なお兄ちゃんの息子さんを洗ってあげようと思ったのに！」

「汚すの間違いでしょ！　とにかく葵は少し黙りましょうよ！」

ダメだこの変態妹、早くなんとかしないとホントに一生彼氏が出来

ないぞ。
まあ、何はともあれ誤解も解けたし別にこれでいいや。
問題は危うく忘れる所であったが、部室で全裸で立ちつくしている浅間部長である。
このおバカ部長はどうして全裸なんだよ、しかも部室で。

「ふんふふん♪　ふんふふん♪　……ん、どうしたんだい皆の衆？」

「どうしたじゃねーよ！　部長はなんで全裸なんですか！？」

「いや、なんとなく脱ぎたくなる時ってあるじゃないかい？」

すげえ。全裸で、しかも真顔でこんなことを言っているよこの部長。
カッコいいようなカッコわるいような。でも常識的に考えてこれは……。

「ねーよそんなもん！」

「このエロスティックバイオレンス！　早く死ねよな！」

「部長……最低ですっ」

「何故だ。どうしてボクの意見は反対される？　一体ボクはどこで服を脱げばッ！」

……いや。
それ以前にこんな所で服なんて脱ぐなよ。
しかもここには男の毒牙を知らない、いたいけな女の子が４人もいるのに。

「部長さん。早く服を着た方がいいのですよ？」

「そーですよ！　お兄ちゃんより小さい癖に生意気なのですよ！」

……葵、コイツはどうして俺のサイズを知っているんだ。
俺、知らない間に実の妹に寝込みを襲われているのかな。
不安になってきたし、今度から部屋に監視カメラでも設置しておこうかな？

「全く……裸になって何が悪い！」

……いや、悪いだろ。
ガラパゴス諸島で全裸になっても、もしかすると怒られないかもしれないけど……日本じゃ犯罪です。
しかも、そのセリフどこかで聞いた事があるんですが。

「……とりあえず部長。今なら通報しませんから服着ましょうよ」

「やれやれ……裸になれないんじゃヌーディストが犯罪者みたいじゃないか」

脱ぐならヌーディストビーチにでも行ってください。
合法的……なのかはわからないが、低いリスクで女子の裸が見放題だぞ。
まあ、ああいう所にいる人達はきっと経験豊富で、しかも鍛え抜かれている人達ばかりだろうけど。
とにかく俺達はその後、部長に服を着てもらうためにあの手この手の交渉術を用いた。
結局この日の部活は部長を説得するだけで終わってしまった。実に残念な一日である。

とりあえず、今日一日で俺の中で部長の評価がガクンと下がりました。

……しかし、こんなに馬鹿な事をしていても、俺の頭の中からたった一つの単語が中々抜けない。

“超能力者”。畜生、一体どういう事なんだよ――明智！

第57話，自己防衛本能【モザイク】（後書き）

後書きトークコーナー

伊吹「結局超能力ってなによ？」

圭介「シラネ。レベル0からレベル5まであるんじゃねえの」

伊吹「圭介、それどうせアンタが見てるアニメの話でしょ？」

圭介「だってねぇ？　バラ・ゲラーは胡散臭いしねぇ？」

伊吹「だからって二次元に走る、普通？」

圭介「あたりまえだ！　超能力なんて二次元以外にありえない！　どうせなら俺はヒロインを簡単に攻略できる超能力が欲しいな」

伊吹「な、なによそれ……？」

圭介「フフフ……そんな能力さえあれば。俺は某落とし神にも匹敵するギャルゲーの神になれる！　フフフ、フハハハッ！」

伊吹「ダメだ。圭介の厨二病モードが発動しちゃったわ……」

暮葉「けーすけ様！　ゲームのキャラがエターナルフォースブリザードなんて技を覚えたのです！」

第５８話，超能力者

放課後。私、明智凪紗は自宅とは正反対の方向に向かっていた。
ここは古宇坂市でも南端に近い所。
別にここら辺に私が通っている塾とかがあるわけではない。
そもそも私は塾なんて、佐井学園に入る前以外には行った事がない。
だったらなんで私がここにいるのか。それは――普通とは違う人物を探しているからだ。

「超能力者……」

私と同じ存在。でも、結局その超能力者は誰なんだろうか。
私には全然わからない。予想のしようがない。
でも間違いないんだ。木下のような魔法使いがそう何人もいるとは思えない。
だからといってどんなに優れた殺し屋でも、あんな完璧な殺しができるとは思えない。
だったらあの死に方は間違いなく超能力者。それもかなり高レベルな超能力を使う奴の仕業だろう。

……けど、一体誰が？
佐井学園には５人ほど、軍隊を相手にしても負けないような超能力者が在籍していたハズだ。
そのうちの一人は私も会った事がある。
確か……この世に存在するあらゆる“波”の振動数、周期、振幅、波長、波数を自在に操る。
チートのような能力を使うようなヤツだった。それでも学園では２番目だったけど。

……やっぱりその波を操る奴が犯人なのかな？
アイツ以外の5本指なんて、精々写真で見た容姿と使える能力くらいしかわからないぞ。
でも、私の中で一番怪しいのはやっぱり、波を操るチートな超能力者だ。
アイツ以外に考えられない。あんな奇妙な死に方をさせれるヤツなんて早々いないぞ。
それに……アイツの性格なら、普通に汚れ仕事もやってしまいそうだよ。
あれ……なんでだろう。私はいつのまにか探偵のように推理をしていた。

「……ん」

推理をしながらなんとなく周囲を見回していると、家と家の間の狭い道路が視界にはいる。
どうしてだか、その道路に何かが引っ掛かる。何かはわからないけど何かが引っ掛かるんだ。
どういうわけだかわからないけど、まるで喧嘩でもしているような音が聞こえるからだ。
……だからなに。超能力者が無国籍者を殺しているとは限らない。
ただの不良の喧嘩かもしれないけど……私は風紀委員、些細な喧嘩でも見逃す事ができない。
そういう仕事を日常的にしているから。たとえ他所の学校の生徒でも放ってはおけない。
――そんな正義感から動いてしまった私。そんな行動が――真実を知るキッカケになってしまった。

「……っ」

――私は只管狭い道路を歩き続ける。
滅多に人が通らない上に、やっぱり不良のたまり場になっているせいか、ブロック塀は落書きだらけ。
煙草の吸殻やビールの空き缶、袋や吐き捨てたガム。そして武器のような何かの残骸。
……本当に汚いな――ん、ちょっと待って。どうして武器の残骸みたいなのが転がってるんだろう？
緊張で喉がつまる。それでも私はこの足を止める事はなかった。
再び歩み始めた私。延々と続く汚い道路……ま、待て。

「こ、これ……血痕？」

どうして血痕が塀に……？
不良が喧嘩して、怪我による出血が染みついたのならわかる。
でも……この血の量は明らかにおかしい。しかもその血はこの道の先まで続いている。

……一体、どういうことなんだろう？
恐る恐る足を進めてみると、そこには――

「……ッ！」

道の真ん中で一人寂しく立つ人の下に、何か生々しいものが散乱している。
どこまでも紅くて、ぐちゃっとしていて……所々紅以外のピンクっぽい何かが散乱している。
本当に生々しい。まるで何か生き物を隅々まで解剖したかのようだ。

……でも、これは解剖じゃない。これって……ほ、本物の……っ？

「お、うげ、ぇ……っ！」

散乱しているもの――それは人のパーツ。つまりそれはバラバラ死体だった。

ぐわっと、喉に何か……吐き気がこみ上げてくる。

だ、ダメだ……吐いちゃダメだ。死体なら数日前に見たじゃないか。

……でも、あの死体はまだ完全体。ちゃんと人の形はしていた……

というよりもほぼ無傷だった。

でも今回は違う。あまりの損傷にその人が誰だったか、サッパリわからない……っ。

「アァ……？」

その時、死体の前に立っていた人が振り向いてきた。

どう見ても少年だ。身長は大体私と同じくらい。肩に後ろ髪が当たるまで伸びている白髪。

肌も白く、瞳の色まで紅く……お世辞にも強そうには見えない。

何より不思議なのはその少年。上こそベージュ色のTシャツだったものの、穿いているスボンはやや緑っぽいの佐井学園の制服そのものであった。

……こ、コイツが……連続殺人事件の犯人の超能力者……？

「そ、そこでなにしてるんだよ……お前っ？」

「なんだァアイツ？　オレが潰すリストにあんなヤツは登録されてねぇハズだ」

その言葉を聞いた瞬間、私はいつでも戦えるように身構える。

……でも、少年はただ、歪んだ笑みを見せつけるのみであった。

「お、お前か。最近無国籍者ばっかり連続で殺している……超能力者は！」

「アァ？　……ヘッ、よくオレが超能力者だってわかったな。オマエ何者？」

「あたりまえだぞ。私だって超能力者だし……元佐井学園の生徒だぞ」

「へぇ、オマエも超能力者だったのか。そりゃ失礼したねぇ」

案外アッサリ自分が超能力者である事を認めた。

……でもなんで。なんだか馬鹿にされているような気がするのは……なんで？

「お……お前っ、何者？　波を操るヤツとは全然違うな」

あの男は小柄な少年じゃなかった。

もっとこう……藤島よりも身長が高くて金髪の男だった気がする。

「アア？　……チッ、あのクソ野郎とオレを一緒にするなよ。オマエも佐井学園の生徒ならオレの事知ってるだろォ？　さて問題です。佐井学園で最も成績が優秀な人物と言えば一体誰でしょうか？」

「……っ！　も、もしかして……っ！」

「わかっちまった見てぇだなぁ。答えは早川悠に決まってるよなァ？」

早川悠……うん、名前だけなら聞いた事がある。
佐井学園で最も成績がよくて、その上一番完成された超能力者だという……あの。

「なんで……成績優秀な優等生のハズなのに、どうしてこんな事を……？」

「簡単に学校を辞められる、オマエのような低レベルの超能力者は羨ましいなァ。ンで、オレがこうして特異点を潰してんのも、すべてはオレの為ってわけだ」

「それって……すごく個人的な理由じゃないか！　そんな事の為に人殺しを働いているのかっ！？」

私は、早川のくだらない理由を聞いてしまった。
そのせいだろう。怒りが腹の底から込み上げてくる。
その怒りを言葉にし、いつの間にか私はそれを早川にぶつけていた。

「オマエのように簡単に辞めれたヤツには、理解できねェよ」

早川悠……くだらない事の為に人殺しを続ける極悪人。
コイツを止めなかったらそのうち、無国籍者の木下の命が危ない。
木下は……私の友達だ！それから木下がいないと……藤島やその友達も絶対に悲しむ。
それと、これ以上早川に無駄な殺生はさせない！

「早川……！　火傷したくなかったら帰れっ！」

私はそう叫びながら、発火能力（パイロキネシス）で両手に炎剣を作りだした。

燃えあがる双方の剣は2mの長さを誇る。コイツで早川を斬れば無事では済まされない。
私は勢いよくアスファルトを蹴り上げ、素早く早川の懐へ入り込む。
……早川って馬鹿なのか。何も動こうとしない……隙だらけすぎる。
どんな素人でも殴れるくらいに。
とにかく幸運だ。この間合いじゃもう早川に避ける術なんて――――

「……あ、はっ！」

「ん――っ！」

刹那、早川が気味の悪い狂った笑い声をあげると――信じられない事に双方の炎剣が消えたのである。
……強制的になんらかの力で炎が消された？
私は自分で能力使用をやめたわけではない。それなのに炎は消えてしまった。
しかもなんだったんだろう、今の一瞬感じた息苦しさは。
まるでそこに酸素がなかったかのようだった――――

「ど、どうなってる……んだ？」

「驚く事はねえだろ？　ただオマエの周りの酸素濃度を0にしただけだぁ……迷惑のかからねえ消化方法だろ？」

「くっ……！」

酸素濃度を0に……コイツ、酸素濃度の調整が出来るのか。
だとしたら、私の発火能力（パイロキネシス）は非常に相性が悪い。
つまりコイツに超能力は通用しない――なら！

「ふっ！」

さっきのお返しだ。こっから鳩尾でも突いて呼吸困難にしてやる。
生きる苦しかったんだぞ。その苦しさをお前も味わってみろ――――
――！

――――しかし！

「あ、ぐぁ！」

な――んで？
私は早川に触れる事さえできなかった。拳は早川の鳩尾ギリギリにまで迫っていた。
でも触れてはいない。だけどなんで……どうして私は吹っ飛ばされたんだろう？
一瞬すごい風みたいなのを感じたけど……一体早川は何の力で？

「残念。やっぱ同じ超能力者でも、オマエ程度じゃこのオレの相手にはならねえなぁ」

「……こ、このっ！」

「……行けよ、オマエみたいな小者なんざ眼中にねえんだよ」

こ、こいつ……完全に私をナメている……っ！
でもなに……この止まらない震えは。
なんなんだ一体……私と早川の何が違うんだよ……っ！

「……っ……っ」

「ハッ、もう戦意はねえな。じゃあ、オマエから行かねえ見たいだからオレはもう行くわ」

「……っっ……っ」

「ちなみにイイ事教えてやろうかァ？　この事言ったら殺しに来るから……そん時はヨロシク」

早川悠はそれだけ言い残し、誰かのバラバラ死体を乗り越え、この細い道の奥へと消えて行った。

……怖い、震えが止まらない。どうなってるんだよ。

とにかく一つだけ確実に言える事がある。間違いなく早川は私の御先祖様よりも――強い……っ！

……私はそんな事を考えながら、しばらく死体の前で立ち尽くしてした――――

第５８話，超能力者　（後書き）

後書きトークコーナー

千早「あ、あれ？　今日は藤島先輩……いないんですか？」

暮葉「もきゅう……けーすけ様、ゲームにハマっちゃいまして」

千早「ゲームお好きなのですか？」

暮葉「たま～にやってます。でもけーすけ様は熱中するとやり込むタイプなのです！」

千早「あはは、いますよね。私もその……趣味は熱中すると止まらないですっ」

暮葉「わかります！　拙者もやめようと思っても中々やめられないのです！」

千早「葵も言ってました。その……せーぶぽいんと……でしたっけ？　それがあっても何故かやめられないって」

暮葉「わかります！　セーブポインがあってももう少しだけ続けたくなる事あるのです！　そうしているうちに時間が経っちゃうなんてよくあるのです！」

千早「木下先輩も……ゲーム好きなんですか？」

暮葉「葵さんに教えてもらっていこう、ハマッちゃったのです！」

千早「あはは……っ、藤島兄妹ってホントにゲーム、好きなんですね……っ！」

伊吹「……あれ、なんでだろう。圭介がいないとこの後書きトークコーナーの会話内容、かなりマトモな気がするわっ！」

※圭介は話がおかしくなる原因であった。

第59話，夜……そして

“違う。藤島は多分平気だと思うけど……あ、危ないのは多分木下だ”

暮葉が危ない……かぁ。確かに暮葉は無国籍者だよなぁ。
思えばアルファ隊ってすごいよな。よくそんな状態の暮葉を初芝に入れれたものだ。
大した試験もやらなかったらしいし。全く、あの特殊部隊は色々な意味で謎の組織だぜ。
でもいいんだろうか。異世界でロジーナの国籍は持っているのだろうが、この世界では暮葉は無国籍扱い。今まで考えた事がなかったけど、これからの生活とか大変なんじゃないだろうか。

異世界の記録なんて当然無効だし、やっぱり日本の国籍を取得させたほうがいいのかな……。
でも難しいかなぁ。帰化するという方法はあるけど、アレって結構条件が厳しいらしい。

「……はぁ、なんだか……」

考え事をしていたら外の空気が吸いたくなってきた。
たまにあるよね。家の中にいて無性に外の空気が吸いたくなる事って。

今がまさにそれだよ。こういう時は素直に気分転換をするのが一番だな。

――――と、いうわけで俺は誰にも何も言わず、ただ気分転換の為に外に出た。

外に出たからと言って何かをするわけではない。どこかに行くわけでもない。

ただ、こうして外の空気を吸うだけである。

晩御飯の時間もあるからな。外に出ていられる時間はよくて３０分くらいだろう。

でもどうせ１０分もしたら飽きるし、このまま玄関の前でボーッとしていよう。

「……あ、もしかして圭介？」

「ん？」

どこからか、俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

誰だろう、多分この近所の人だろうから伊吹だとは思うが……でも伊吹にしては声が。

「やっぱり圭介。じゃあここが藤島家であってるんだな！」

「あれ、あかり？」

意外や意外。伊吹かと思いきや、俺の家の前を通っていたのはあかりであった。

輝くようなだ橙色のツインテール、ツンとした紅い瞳、小柄な体躯で小動物のような美少女。

そして何を入れているのだろう、とても大きな鞄を肩からさげてい

た。

「おっす、めっちゃ久しぶりだな！」

「めっちゃって、さっき部活で会ったじゃないか」

「にゃははは！　まーまー、細かい事を気にしたら負けなんだからな！」

「まぁ、今日は気にしないでおくよ。それよりどうしてウチの前にいるんだ？」

確か、浅間家って我が家から遠かった気がする。
ていうか、初芝高校から見て思いっきり逆方向だった気がするぞ。

「ん、そんなの下見に決まってんだろ」

「下見？」

「あたい！　そのうちこの家に遊びに来るからな！　その下見だよ、それくらいわかれよな！」

だからお前はどこの魔装少女だよ。
まあそはともかく、あかりが我が家に遊びに来るだと？
以前は死んでも嫌だ～とか、そんな事を言っていた気がするのになぁ。
思えばあかりとはアレだけ仲が悪かったのに、短期間で随分と仲良しになったよな。
男みたいなノリの子だし、正直言うと男友達みたいで話安くて面白いヤツだ。

それなのに時々女の子っぽくて、可愛くて……何より中身は馬鹿だけどとてもいい子。
俺もあかりは結構好きだ……も、もちろん友達としての意味だぞ！
それはともかく、俺の家に遊びに来るなんて言うものだから、ついついそんな事を考えてしまったよ。

「そうか。俺も暮葉も葵も、みんな待ってるからいつでも来ていいぜ」

「んみゃ！　ありがとな！」

あかりは満面の笑みを浮かべ、元気よくお礼を言ってきた。
それにしても、時間の進みというのは早いんだな。
こうして話しているだけでも、既に1分近くが経過していたのである……。

「葵さん！　拙者ちょっと出かけるのです！」

「えっ？　く、クーにゃん!?　もうすぐ晩御飯だよ!?」

「多分すぐ帰ってくるのです！　ご飯は作りましたのでけーすけ様と食べていてください！」

その時、家の中から暮葉と葵の声が聞こえてきた。
大声でなに話してんだろうアイツら。屋外だからかよく会話を聞き取れなかったぞ。
……と、そんな事を考えていた――――

「あ、けーすけ様！　拙者ちょっと出かけるのです！」

「え？　ちょ、暮葉！？」

「木下先輩、なんか急いでるなっ」

何が起こったのやら、どこかへ駆けてゆく暮葉は必死そうな表情をしていた。

アイツ、もうすぐ晩御飯なのに。折角自分の分まで作っていただろうに。

なのに、どうしてあんなに血相変えて夜闇に包まれた古宇坂の街へと消えたんだろう。

「どうしたんだアイツ？」

「さあ、でも急用を思い出したかのように必死だったような……」

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん！」

今度は葵が血相を変えて家から飛び出してきた。

しかも葵さん、それパジャマじゃないですか。

ネコさんがプリントされている葵のパジャマ……まるで子供そのものである。

ちなみに我が家は晩御飯を食べてから風呂に入る日と、風呂に入ってから晩御飯を食べる日の両方がある。要するに、統一性の全くないバラバラというわけだ。

「葵、どうしたんだ？」

「あ、アレ？　どうしてあかりもいるの？」

葵は驚きのあまりに目を白黒させていた。だって、そこには普段は

いないあかりの姿があったから。

「たまたま通りかかったんだ、あとさっき木下先輩が全力疾走でどっかに走って行った！」

「そ、そうだよソレだよ！　お兄ちゃんお願い、クーにゃんを追って！」

「え、俺が？」

「お願いお兄ちゃん！　ニュースを見た瞬間飛び出しちゃったクーにゃんを追って！　葵、クーにゃんがいない晩御飯なんて嫌だよ！」

確かに。日常的に一緒に食べているヤツが一人でも欠けていると、それはそれで寂しい気分である。

それにしても不思議だなぁ。ニュースを見た瞬間飛び出したって……。

……なんだか、嫌な予感しかしねえな。

「葵、そのニュースって何のニュースだ？」

「え～っと、確か連続殺人事件のニュースだったような……」

「れ、連続殺人事件！？」

「それって最近ここら辺で起こってるヤツだろ？　あたい犯人を捕まえたいな！」

正義感溢れるあかりはともかく、暮葉が連続殺人事件のニュースを見て飛びだして行った？

暮葉とは全く関係のなさそうな事件なのに、なんだって暮葉がそのニュースで……。
しかも暮葉は無国籍者。殺人犯殺害しているのも主に無国籍者。
暮葉は一番危ない存在だろ……それなのにアイツは……っ！
……ええい、飛び出した理由なんてどうだっていい。追って暮葉の所に行かないと！

「わかった。俺は今すぐ暮葉を追う！」

「ごめんねお兄ちゃん！　あ、後でキスするからっ！」

「圭介！　あたいも協力するからな！」

「気持ちはありがたいけど、相手は下手すると連続殺人犯だし危険だぞ？　大丈夫、悲劇になる前にアイツを連れ戻すから。あと葵、キスとかはいらないからな」

「そ、そんなっ！　妹の愛を否定されてしまったよ！？」

妹の愛って……お前の愛は色々な意味で歪んでるわ！
まあバカ妹は放っておいて、そんなことよりも今は暮葉である。
俺は、殺人犯に殺される可能性のあるアイツを一人にしてはいけない。
むしろ今まで助けてくれたお礼に――アイツを守るつもりで行かねえと！

「それじゃ、ちょっくら行ってくる」

「圭介！　ホントにあたいも一緒じゃなくていいのかよ！？」

「大丈夫だ、問題ない！」

「気をつけてねお兄ちゃんっ！」

「おう！」

わかってるよ……気を付けねえとな。下手すりゃ連続殺人犯と遭遇するかもしれねえ。

相手は不可解な方法で人を殺しやがる超能力者だ。

そんな危険な相手と暮葉を……絶対に戦わせたくない！

相手がどんなヤツかは知らないし、もしかしたら現れないかもしれない。

出来れば後者のほうを望みたいが、それがもし敵わなかった場合は――

――今までの恩返しに、俺が連続殺人犯と戦ってやる！

第59話，夜……そして（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「あー、暇だなぁ……」

伊吹「あら、今回は圭介がいるわよ？」

凪紗「これは荒れるパターンだな」

圭介「どうして俺をトラブルメーカーみたいに扱うんですか二人とも！？」

伊吹「だって前回でわかったのよ。あんたがいないと如何にこのコーナーがマトモなものなのかって」

圭介「ひどくね！？　それって遠回しに俺に消えろって言ってるんじゃね！？」

純奈「大丈夫！　クソ介が消えたら町屋君呼ぶから！」

圭介「だから町屋君って誰だよ！　いい加減正体見せろよ町屋君！」

※謎の人物、町屋とは一体何者なのであろうか……！？」

圭介「カッコいい予告風にすんじゃねえよ！　ＢＬ展開は俺がお断りだ！」

第６０話，衝突

拙者は今、古宇坂港の工業地帯にいるのです。
古宇坂港は重要港湾に指定され工業港として発展し、事業所の数でも１００を超える……らしいのです。
全部拙者が調べた事なのですが、正直合っているのか不安なのです。
それより、どうして拙者がこんな所に来たのか。それは――――

「ここにいるのですよね！　わかってるのです、出て来てください！」

拙者は連続殺人事件のニュースを見た後、けーすけ様の家を飛び出してしまったのです。
……でも、それにはちゃんと理由があるのです。
今は仲間の危機。だから……拙者が殺人犯を成敗するのです。
実は今回の事件について、アルファ隊の上から通達があるのです。

“各個で自衛戦闘を行いつつ、特隊員は敵能力者を抹殺せよ”

特隊員とはアルファ隊の中でも、特に戦闘能力の高い隊員の事を示す隠語なのです。
一応拙者も魔法はあまり得意ではないのですが、この剣術のおかげでそれに分類されているのです。
古宇坂に特隊員なんて……アルファ隊の人数的に拙者しかいないのです。
それどころか、通常の隊員さえこれまでの戦闘で皆亡くなってしまいました。
……許せません。大切な仲間を……どういう理由なのでしょうか。
第一、相手はサヴィエトの魔法使いじゃないらしいのですが……一

体誰が。

……今、拙者がここに立っている理由。
それは殺人犯のものと思われる魔力を追ってきたのであります。

「ハッ……次のオレの標的はオマエってかァ？」

……その時、使われなくなった引き込み線の上を怪しげな人が歩いている。
闇から現れた人は全体的に白いイメージで、でも着ている服はベージュに緑色のズボン。
すごいのです……その、髪も伊吹さん以上に真っ白です。
瞳も植えた狼の血の色のような紅く染まっているのです。
なにより、あの不気味で歪んだ笑みが……。

「ついに……現れたのですねっ！」

拙者は鞘に手をかけ、一期一振を抜く準備をする。
にもかかわらず、相手のあの人はただどこでも狂気に満ちた、そんな笑みを見せるだけ……。

「ヘェ……オマエ、今までの特異点とは違うな。刀使いなんて初めて見た気がするなァ」

「戦う前に一つ教えて欲しいのです。どうしなのですか……どうして拙者達、アルファ隊の人間ばかりを襲って殺害しているのですか！」

拙者は最初から知っていたのです。だって……アルファ隊から連絡があったのですから。

けーすけ様達は絶対に知らないでしょうけど、そのほうがいいのです。
こんな事にけーすけ様達を巻き込みたくない。これは拙者達だけで解決しなきゃいけない事なのです。
だから……この件に関してだけは、けーすけ様達に触れさせてはいけないのです！

「まぁオマエもどうせ死ぬんだからな。オマエには特別に説明してやってもいいかなぁ？」

拙者が理由を尋ねると、相変わらず狂気じみた笑みを浮かべるその口から、相手はそう口にしたのです。
更にあの人は一度舌打ちをした後、さっきの話の続きをし始め。

「一応オレが在籍している、佐井学園って所の命令なんだよなぁ。最近地球で暗躍している魔法という怪しげな能力を使う無国籍者の集団。オレ達はソイツらを特異点って呼んでるんだけどなぁ。ソイツらを潰すようにオレに命令があったんだよ。条件付きでなァ……」

「条件……？　一体、何の条件なのですか？」

しかも、拙者達が異世界人って事には気付いていないのです。
まあ、そのほうが拙者達アルファ隊にとっても都合がいいのです。
そのほうが……拙者達もこの世界で活動しやすいですからね。

「なぁオマエ。学校ってのはさァ……成績優秀者を手放したくはねえんだよな。オレは今すぐにでも佐井学園ってのを辞めたいんだけど、学校がソレを決して許さねえんだよ。でも、学校はオレが辞める為の条件を出してきた。それがオマエら特異点を全員残らずブッ殺すって事だァ」

「まさか……そんな理由で拙者達を!?」

ただ学校がやめたい。

そんな事の為に佐井学園という、普通の学校じゃありえない殺人命令を受け入れた……。

そんなの、絶対オカシイのです!大体そんな命令を出す学校自体がオカシイのです!

やっぱり……戦友(なかま)達を殺したヤツは狂っているのです!

「オマエにはエリートってのがどんなんかわからねえんだな。まぁいいわ、オレが佐井学園を辞める為には……どうしてもオマエらに付き合ってもらわなくちゃいけねえしなぁ。悪いけど早く死んじまえよ」

「……そうは、いかないのです!」

その時、ついに拙者は鞘から一期一振を抜きだしました。

もう我慢の限界。あんなに単純な理由で、しかもあれだけ楽しそうに戦友が殺されていたとわかると……。

腹の底から怒りが沸いてきて、どうしようもなくなっちゃったのです!

「やっぱオマエも戦うの?」

「あたりまえなのです! 拙者は……皆の仇をとりに。そしてまだ殺されていない皆を守る為にここに立っているのです!」

「へェ……いいヤツじゃねえか。そういうヒーローもガキの頃は憧れたなァ」

「悪いですけど、貴方はヒーローとは逆なのです！」

「わかってんだよそれくれぇ……さてと、ンじゃあオマエが戦意を表明した所で、そろそろ地獄の殺し合い（デスマッチ）を始めてぇんだけど、覚悟はできてんだよなぁ？」

「ええ……絶対に貴方を倒すのです。仲間の仇、皆を守る為……絶対に負けられない、貴方を許せないのです！」

ついに拙者は足から腰のあたりにまで力を入れ、いつでも飛び出す準備を終えた。
後は……火蓋が切って落とされるのを待つだけ。
でも、それももうすぐのような気がするのです。
何故なら……もう必ず拙者達は衝突するという雰囲気に、この場が包まれているからなのです。

「そっか……んじゃあ、そろそろおっぱじめるとするかァ」

なんで……拙者にはわからないのです。
殺人がそんなに楽しい理由が。どうして人を殺しているのに……あんな狂気じみた笑みを浮かべれるのか。
心から楽しんでいるのでしょうか。それとも、ああしないと自分が崩壊してしまいそう。
だから凶悪そうな顔を作っているのでしょうか。
どっちにしても、やっている事は絶対許せない事なのです。
拙者は必ず、あのやたら強いと噂のヘンテコ能力者を……倒さなくちゃいけないのです！

「……さて、んじゃあ……行くぞオラァっ！」

相手の人が拙者に向かってくる。イキナリ間合いを詰めてくる相手。
拙者は相手の攻撃を避ける為だけにジャンプし、そのまま積み上げられたコンテナの上に乗る。
うわっ……錆びている。このコンテナも、しばらく使用されていないのですね。

「へェ……それは魔法か？　それともオマエの身体能力か？」

「避けようと思えば、いつでも貴方の攻撃なんか避けれるのですよ？」

「そっかぁ……大した自信じゃねえか！　ぎゃは、じゃあその自信をもう少し俺に見せてくれよ……っ」

そうですね……避けているだけではどうにもなりません。
なら、今度は拙者から攻勢を……仕掛けてみるのです！

「いいですよ……」

拙者は先ほどよりも力強く、ぎゅっと握りを握りしめた。
そして、出来るだけ力強強く相手の歪んだ笑みのその顔を見て――

――

「見せてあげます。今までの皆様の苦しみを……拙者の怒りを貴方に全てぶつけてやるのです！」

「最高にいい気分になってきたぜ……来いよ、オマエら今まで弱過ぎたから……オマエはこのオレを少しでも楽しませるように努力でもしてみろっての！　ふふふ……あはは、あっぎゃははは！」

拙者は飛び降り、相手は駆け出し……。

――こうして拙者と殺人犯は“衝突”したのです。

第６０話，衝突（後書き）

後書きトークコーナー

葵「はわわっ！　く、クーにゃんが戦っているよ！？」

凪紗「珍しく真面目な展開だな。それにしても木下……大丈夫かな？」

葵「まずいよ、クーにゃんってそもそも強いの！？」

凪紗「うん、まあ……私よりは遥かに戦闘力高いと思う」

葵「と、とにかく葵はクーにゃんを応援します！　頑張ってくださいクーにゃん！」

伊吹「……やっぱ圭介がいないとこのコーナー、マトモだわ」

第６１話，早川悠

連続殺人事件のニュースを見た後、すぐに飛び出したと言う暮葉。
彼女を追うために、俺は古宇坂港南岸から隣の街に掛けて存在する工業地帯の近くまで移動していた。
ここはまだ、工業地帯の近くに存在する住宅街なので、全然工業地帯という感じもしないのだが。
というか、俺はここに来てもよかったんだろうか。
暮葉が工業地帯にいるって保障すらねえのに……。
万が一違う所にいて、もう連続殺人犯と出会ってしまったとしたら……。
……ってダメだ。そういうネガティブな事は考えないようにしよう。

「それにしても……」

古宇坂の南部にも初めて来たもんだ。
古宇坂市民だからといって、すべての地域を制覇したわけでもないし、古宇坂博士というわけでもない。
多分、俺のこの街に関する知識なんてオタクの小学生以下のものだろう。
そんな程度の知識しかないからこそ俺は今、とても驚いているんだ。
工業地帯が近いのに、存在しているのはただの住宅街……こんなの予想と全然違うよ！

「はぁ……」

思わずため息をついてしまった。
畜生、俺も暮葉みたいに魔力を感じ取ることができれば……。
こうして考えてみると、アイツってやっぱり役に立つヤツだったん

だな。
今までアホの子扱いしてごめんね暮葉さん。

「ふじ……しま？」

「ん？」

どこからか、俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。
聞きとるのがやっとなくらいに小さく、震えるように掠れたその声の主は。

「……明智？」

長く凛々しい黒髪のポニーテールに、ツンとした蒼眼の肌白で綺麗な女の子。
――明智凪紗と偶然出会ってしまったのであった。
しかしどうしたんだろう。今の明智はなんだか元気には見えないぞ？

「藤島。どうしてこんなところに……？」

「いや、なんつーか……誤魔化しても仕方ないか。飛び出してしまった暮葉を追い掛けてたんだよ」

「木下をか……？　しかも木下が飛び出したって……」

「アイツ、どういうわけか連続殺人事件のニュースを見た直後に飛び出しちまったんだよ」

「……ッ！」

“連続殺人事件”という言葉を言った瞬間、明智が突然ビクンと身体を震わせた。
それと同時に顔色も悪くなり、目は見開かれ口も半開き状態になる。
瞳さえひどく覚えているような感じである。
ちょ、これは絶対オカシイ……どう見ても何かあった感じだ。

「ちょ、どうしたんだよ明智。何かあったのか？」

「れ、連続殺人事件……藤島っ、ヤツには関わるな！　すぐに家に帰るんだ！」

「すぐに帰れって、それじゃあ暮葉を連れ戻せねえじゃないか」

しかも明智が言う、ヤツって一体誰の事を言ってるんだよ。
連続殺人事件と関係しているヤツだという事は、流石の俺にもわかった事だけど。

「そ、そうだった……それじゃあ早く、木下を見つけてうちに帰れ。木下の命が危ないっ」

「ちょっと待て。一体どういう事なんだよ」

「……っ……っ」

相変わらずおびえ続ける明智。その姿はいつものクールなものとは違い、やけに弱々しい。
こんな時にこういう言い方もどうかと思うが、その姿は正に女の子であった。
あの明智が怯えている……待てよ、それってただ事じゃねえに決まってる。

知りたい。明智がどうしてこんなに怯えているのか。連続殺人事件と何か関係があるのか。
それがもし、事件解決のカギになるってんなら――――

「なあ、辛いのはわかるよ。でも……俺はこの事態を何とかしたいんだ」

「む、無理だ……光秀なんかとは格が違う。あ、アイツはホントにやばいぞ……っ」

「そのアイツとか言うヤツは一体誰なんだ。一連の騒動と関係のあるヤツなのか？」

「は……犯人。この事件の犯人だぞ……っ」

重く閉ざされた口から久々に放たれた言葉。
その中には確実に、犯人という言葉が含まれていた
――――犯人……え、それじゃあ……。
明智がこの一連の騒動を巻き起こした犯人の顔を知っている？

「……教えてくれ。その犯人ってヤツは一体どんなヤツなんだ」

「……っ……っっ」

「頼む。辛いのはわかる……でも知りたいんだ。無意味な殺生をしやがるクソ野郎の事を」

「……わかった……全部、話すから」

「わかった……っ！」

……いよいよ、か。
いよいよ一連の事件を起こしやがった犯人の、目撃情報が手に入るのか。
緊張してきたな……でも、しっかり聞かねえと。
なんたって今回は暮葉の命もかかっているかもしれないから――――

「佐井学園……って、藤島も聞いたっけ？」

「ああ。進学校と名乗りつつ、超能力者を育成してるって学校だろ？」

「うん。そこには“五本指”っていう、学校内で強い超能力者５人の事を指すんだけど……反応はその中の一人で、しかも五本指の中でも一番すごい存在なんだ」

「一番すごい存在？」

それってつまり、最強って事だよな……。
え～っと。こんなシリアスな時にオタクな話をするのもなんでありますが。
……これなんて一方〇行さん？
そのうちソイツは幼女とのフラグでも立っちゃったりって、ミサカはミサカは……げふんげふん！

「……藤島、今しょうもない事考えてただろ？」

「す、すいませんっ！　真面目に聞くから許して！」

「たく、ホントに藤島はしょうがないヤツだ……とにかく、そうい

うヤツがいるんだよ」

最強の超能力者ねえ……。

やっぱりオタクな俺には一方〇行ってイメージしかないけど、実際はどんなヤツなのかな。

って、連続殺人事件を犯している時点でマトモとは言えなさそうだよな。

困ったなぁ。一方〇行は正直説教ウニ男よりも好きだけど、現実であああいうのがいると流石に困る。

というか、一方〇行は二次元だからカッコいいんだ。現実だったらただのムカつくヤツだぞ？

「それで、その超能力者の頂点ってのはどんなヤツなんだ？」

「名前は早川悠。見た目は弱そうだけど……実力は化け物だった」

見た目は弱そうなのに実力はバケモノの超能力者の頂点？

オイオイ……それってもうモロじゃねーか！

リアル一方〇行って……とりあえず一方〇行に謝れこのヤロー！

「あ、あのー……もしかしてその早川さん。ベクトル操作とかやっちゃったり……？」

「ん、早川の能力は大気操作（エアオペレイション）だぞ？」

「能力名までモロ似たようなモンだな！　ていうか佐井学園の校長、ぜったいオタクだろ！」

まあ、ベクトル変換じゃなかっただけマシか。

あんなの俺にどうやって倒せと。もしかして木原神拳でもやりやが

れと？
……無理でしょ、あんな神業現実の人間には真似できません。
「でも、ナメてかかると死ぬぞ藤島……アイツには、炎もこの拳も通じないっ」
「な、なんでだよ？」
「アイツは酸素濃度を操作できるし、暴風で膜を作って攻撃してきたヤツを弾き返すんだ……っ」
「結局反射っぽい事はできるのね！」
やっぱりチートだ。ベクトル操作じゃないだけマシかと思った俺が馬鹿でした。
結局ソイツは攻撃を反射できるのか……うわっ、最悪だ。
ていうか、それじゃあどんな異能の力を打ち消す右手がない俺じゃ勝てなくね？
……いや、でも大気操作系の超能力らしいし。きっと何処かに隙があるハズだ。
「それで、無国籍者を襲っている理由は学校を辞めたいから……らしいんだ」
「そ、それだけ……なのか？」
「それだけ……だと思う」
――――学校を辞めたい。
なんだよ。確かに人生の中でそういう選択肢もアリだとは思う。

だけど、その為に殺人って一体どういう事なんだよ……。
くそっ、ふざけんじゃねえよ……そんな事の為に罪なき人々が殺されてるってのかよ。
そして……下手をすれば今度は暮葉が……。

「……明智、早川の居場所ってわかるか？」

「え？　は、早川に何か……って藤島。ま、まさか……っ」

「そんな事の為に誰かが殺されるのって許されるのかよ。だったらそれは止めるしかねえだろ」

「む、無理だ！　間違っているのは私だってわかる。でも……早川はバケモノなんだ！」

「いいから任せろ……これ以上は何もさせねえ。俺がソイツを止めてやる」

標的の無国籍者の中には多分、暮葉も含まれているハズだ。
多分殺された無国籍者も暮葉の仲間。と言う事はアルファ隊の隊員なのかもしれない。
そうだとしたら、連続殺人事件のニュースを見て飛び出す暮葉の気持ちもわからないでもない。
仲間がどこぞの馬の骨ともわからないヤツに、次々と殺されているんだ。
アイツは仲間想いだから……きっと居ても立っても居られなくなったんだろう。
それで、きっとこれ以上仲間を傷つけない為に。アイツは自ら戦場へと向かったんだ……。

……でも、俺は暮葉に傷ついて欲しくねえ。
ついさっき決めた事だ。連続殺人犯――早川悠から暮葉を守るって。
今までの恩返しを今してやるんだって――――

「ふじ……しま……っ」

「頼む、どこか教えてくれ」

「……わからない。でも、もし木下と早川が戦うなら……戦うなら
人が少なくて影も多い港の近くの工業地帯が望ましいぞ」

「わかった……とりあえずそこに行ってみるよ」

「ふ、藤島。待てっ！　やめろ、早川に勝てるわけがない……アイ
ツはバケモノなのにっ！」

それでも俺は、アイツの為に戦わなきゃいけねえんだよ！
酸素濃度をイジくる？攻撃を暴風の膜で逆にぶっ飛ばす？
……そんなの、俺の丈夫な体で耐えてみせるよ。
この身体さえあれば……俺は一方〇行だろうが未元〇質だろうが全
然怖くねえっ！
俺は、明智の言う事などを無視して……ただ一人、工場の敷地へと
走り続けていた。

――――そして、走る事数分だった。ついにそこに到着したんだ。
やけに静かだな……と、フェンスを乗り越えようとしていた。
――――刹那、何だろう……戦いの音が聞こえたのだ。

……いる。間違いねえ……暮葉と早川はここにいる！

第６１話，早川悠（後書き）

後書きトークコーナー

大吾「圭介が上○さん化してる！？」

浅間部長「藤島君がやたらとモテるのは、もしかしてそのせいなのか！？」

重原「主人公補正だね。正直主人公補正がひどすぎるのはどうかと思うよ」

大吾「それはそうと、作者は今月赤字らしい」

重原「なんでだい？」

大吾「ゲーセンで高○歩美のフィギュアを手に入れようと悪戦苦闘した結果……玉砕っ！」

浅間部長「バカだ！　まあボクは霧○希の枕をゲーセンで手に入れようとして失敗したけどね」

重原「浅間先輩、家貧乏なんですよね？　そういう事していいんですか？」

浅間部長「ハハハッ、あかりに３０発くらい殴られたね！」

重原「家計を圧迫してるんですから……文句言えないですね」

大吾「殴られるだけありがたく思え。ホントに嫌なら姿さえ見せなくなると思うぞ？」

浅間部長「……泣きたいっ」

第６２話，魔法使いｖｓ超能力者

古宇坂市内にある工業地帯。今は使用されていないであろう操車場は戦場と化してしました。
魔法使いと超能力者……本来ぶつかる事のない両者によって――――
拙者と相手の距離は１０ｍもありません。

「えぃっ！」

拙者はそれくらいの高さまで飛び上がり、右手に一期一振を握り左手の手のひらを相手へ向ける。
脳内で理想を描き、その理想を具現化させた風を掌の前に起こす。
魔法とはそうやって扱うものなのです。
魔力とかいう要素よりも、いかに理想を具現化させられるかが大事なのです。
拙者は理想を具現化させた、ドッジボールの二倍の大きさの風の弾を相手へ放ちました。
それなのに相手は一歩も動きません。一体あの相手の人はどういうつもりなりでしょうか――――

「ぎゃ、は！」

「う、嘘っ！？」

どこまでも不気味に歪んだ笑みを浮かべる。
それでもなお、あの場所から動かなかった相手に風の弾が直撃した――ハズだったのです。
ところが相手の人に風の弾が当たる寸前、どういうわけか風の弾が消滅したのです。

まるで――あの風が何らかの形で崩されたかのように……。
……ですが、その程度で諦められません。拙者は二回三回……何回も風の弾を放ち続けたのです。
でも、さっきと同じように風の弾はアッサリと消されていきます……っ！

「ハッ、なんだよそりゃあ。ワンパターン戦法だなァ、そんなんでオレを楽しませられるのかぁ！」

「こ、このっ！」

もう一度、今度の拙者の理想はすごいのですよ。
あらゆる物を吹き飛ばす四大元素のひとつ、風……その風の力を最大限に利用した……。
今の拙者に放てる最大の魔法――――！

「んっきゅぅぅぅ！」

あらゆる物を吹き飛ばせる威力を誇る、風速１５０ｍを軽く超える暴風が、渦を巻きながら相手へ突き進む。
どこまでも一直線に、アルファ隊の皆さんの仇を打ち込むかのように――しかし！
――――そんな必死の一撃も、どういうわけだか相手の寸前でかき消されてしまったのです。
そんな……意味がわからないのです！確かに拙者は魔法が苦手です……。
たったのこれしか戦っていないのに、もう魔力なんてものは残っていないのです。
でも……さっきの一撃は普通は避けれない。喰らえば確実に死ぬような威力の暴風だったのです。

それなのに相手の寸前で暴風は完全に消滅した。
どうしてですか……拙者が魔法の扱い方を間違えちゃったのでしょうか……っ。

「へェ……オマエ、今の風は中々だなぁ。ひょっとしてアメリカで記録された巨大トルネード並だったんじゃねえの？　でもダメだなぁ……そんなんじゃこのオレに触れるなんて、百年経っても無理だっつーの！」

「……」

そんなに強い威力の魔法が……どうしてあんなにアッサリ消えちゃったのですか……？
わからないです。拙者には何が何だかサッパリなのです……。

「なんだぁ、その困ったちゃん見てェな顔？　オマエ、もしかしてこのオレ早川悠の能力を知らねえで戦ってたんかぁ？」

「の、能力……？」

それ以前に貴方の名前すら知らなかったのです……。
早川悠、すごくいい名前……なのに、どうしてこの人はここまで気がふれているのでしょうか？
あと早川の能力って一体なんなのでしょうか……！

「オレは風・空気・気圧といったもの全般を操作できるんだよ。だからオマエの風の魔法とかいうヤツなんざァ、オレが風をちょっと操作すりゃあ動かねえでも攻撃を防げるんだよ……」

ポケットに手を突っ込み、口元をニヤニヤとさせ、早川は自分の力

を説明していました。
風・空気・気圧……早川は、もしかして大気そのものの操作を自由自在に行えるのでしょうか？
アルファ隊の皆さんがみんなアッサリ負けていたから、ある程度は覚悟していたのですが……。
あの人、バケモノ級に強いのです！
拙者は魔法の扱いは苦手とは言え、これでも一応特隊員のハズなのです。
でも、早川は一度たりとも動いていないのに、苦戦しているのは何故か拙者のほうです。

「要するにお前じゃオレには及ばねえんだよ。さっさと諦めちまえよ？」

「……そうは、いかないのです……っ！」

「アァ？」

「貴方なんかに負けるわけには……絶対に行かないのです！」

拙者はそう言い放った瞬間に、一期一振を両手で握りしめた。
もう覚悟は決めたのです……魔力なんてもう残ってないですし、仮に使えたとしても早川は拙者が起こした風を操作してしまう。操作されると風はいとも簡単に消されてしまうのです。
だったらもう手段は一つ――接近戦を挑んでみるのです！

「……ッン！」

拙者は大地を蹴るように飛び出し、ミサイルのように一瞬で早川との間合いを詰めました。

早川は反応に遅れたのでしょうか……全く動こうとしないのです。どういう事でしょう。でも――ハッキリ言ってこれはチャンスなのです。

拙者はこのチャンスを絶対逃しません。隙だらけの敵のこの一期一振で切り裂いてやるのです！

そして拙者は果たすので……生き残ったアルファ隊の皆さんを、けーすけ様を守る事。

そして――殺された戦友（なかま）の仇討ちを――しかし、刃が触れようとした――――！

「もきゅっ！？」

刹那、気付けば拙者は背中を地面へぶつけていたのです。

痛い……背中も痛ければ刀を持っている手首も痛い……。

どうして、なんでですか……今の間合いから避けれるハズがない。

というか、早川は避ける素振りなんて全く見せなかったのです。

それなのにどうして拙者が吹き飛ばされてしまったのでしょうか……っ！

「残念、風もダメなら斬撃もダメでしたってなぁ」

「……くっ！」

「さて問題です……オレはどうやってオマエの攻撃を防いだでしょうか？」

「……ふ、吹き飛ばされた……風っ？」

「ぎゃは！　中々いい線イクじゃねェかよ！　正解です、オレは一瞬の間に暴風で身体の周りに膜を張り巡らしたんだよ。多分、大和

の４６ｃｍ砲を受けたってオレはビクともしねぇよ」

４６ｃｍって……すごい大きさの砲ですね。

拙者の世界では魔力を込めて大幅に強化した小口径砲が主流なのです。

ですから、４６ｃｍなんてバケモノにしか聞こえないのです。

でも――あの早川悠という男はそれさえも防いでしまうらしいのです……っ！」

「オレにとっちぁ、日本刀の斬撃を防ぐ事なんざ造作もねェ事なんだよ」

「……」

どうしましょう、相手はチート級に強いのです……っ！

こんなのに勝てるワケが――いや、待つのです。

一瞬で暴風の膜を張り巡らせる。確か早川はそう言っていたハズなのです。

という事はあの暴風の膜は……試してみる価値はありそうなのです！

「……えいっ！」

咄嗟に、拙者は一期一振を投げつけて突き刺す槍のように投げつけました。

当たれば普通は最後――人体を真っ二つに斬り裂ける鋭い刃が突き刺さるのです。

でも、どうせ早川にはその攻撃は効かないのです。

そんな事は既に計算済み、だから拙者は一期一振を投げつけてみたのです。

本当の狙いは一期一振で早川を串刺しにする事ではありません。本

当は――――

「ハッ、学習能力がねぇなぁ！　たった今オレにはどんな攻撃も通じねえって言ったばっかだろォ！」

やっぱり一期一振は暴風の膜に触れた瞬間、弾かれるように吹っ飛ばされてしまいました。

今の間、早川の注意は完全に疾風の如く向かってくる一期一振か、その後方にいた拙者でした。

だから後ろは隙だらけ。攻撃をするなら正に今がチャンスなのです！

一期一振を反射された――刹那、早川の背後へと回り込んだ拙者は、大きくジャンプをして両足を突きだしました。

――――ドロップキック、葵さんと一緒に見たプロレス技の一つなのです。

拙者はそれを――完璧とも思えたのに、僅かに油断をしていた早川に打ち込もうとしました……でも。

「……ッ！？」

残念、ギリギリの所で避けられてしまいました。

……でも避けたのです。暴風の膜を張り巡らす事により、どんなに強力な攻撃を受けても無事でいられるハズの早川が――――なんと拙者の攻撃を回避したのです。

初めて早川が見せた動き。一見大した事のないように見えて、その行動には重要な意味が含まれています。それは――早川が常時、攻撃を風で逆に吹っ飛ばす事が出来ないという事を証明したのです。

「……チッ、あの野郎。まさか気付きやがったのか？」

露骨に驚く早川……やっぱり、拙者の読みは当たったのですね！

「見つけましたのです……貴方の、僅かな隙を！」

「……ふふ、ぎゃははっ！　最高じゃねえかオマエ！　このオレをここまで楽しませたヤツは久しぶりだなァ」

何故でしょうか……拙者は弱点を見破ったのです。
つまり、ほんの僅かでも拙者に勝利の光が見えたハズなのです。
でも、早川は相変わらず不敵な笑みを浮かべているのです。
あの狂ったように余裕そうな顔……この状況でどうして出来るのでしょうか？

「退屈しねぇなオイ。今までの雑魚が嘘みたいに思えてきた。イイぜ最高に愉快だぜ？　オラァ！　もっとこのオレを楽しませてみろよ！」

「……上等なのです。でしたら――――！」

拙者は早川に向かうのではなく、そこに落ちている一期一振。
そしてもう一つ、線路の上に落ちている鉄パイプを回収しようとしました。
その為に拙者は今、早川に背を向けて全力疾走中なのです。
一見危険なこの行為。でも……あれだけヒョロヨロな身体では多分、拙者の足についてはこれないハズなのです！

「またオレが油断している時を狙うってか。オマエ中々いいアタマしてんなぁ……でも一つだけミスがあったな。この作戦はオレがオマエに接近したら何の意味もねえよなァ！」

その時――信じがたい事が起こったのです。

早川は一歩だけ足踏みしました……それはいいのです。でも、何故か足踏みをした――――

瞬間、早川が砂埃をあげながら信じられない速度で拙者の横に並んだのです――――！

「い、一瞬で間合いを詰めた！？」

「なに、ただ風の力で高速移動をしているだけだ。オマエだって魔力が残ってればそれくらい出来るんだろうがァ！」

叫びながら放たれた一撃――咄嗟に両腕でガードをしようと試みるも、アッサリそのガードは崩され、拙者の顔面に早川の拳が突き刺さってきました……っ！

それもただの拳ではありません。まるで――殴る時さえ風を利用しているような――――

……気付いた時には、拙者は既に仰向け状態で倒れていました。

夜だからか地面が冷たいのです。

そして、拙者に向けてくる早川の視線も狂気に満ちつつ、どこか冷たい気がするのです。

「ご、ふ！」

突然脇腹に打ち込まれた蹴り、早川は楽しそうに拙者を何回も蹴ってきます。

「サービスだサービス！　オマエはオレを楽しませた……だからオマエにはもっと痛い目に遭う権利があるんだよォ！」

「ご、はぁ――――っ！」

ぼやける視界に、お腹の底から吐き出される紅い液体が映った。
もうダメ……動こうと思っても……どうしてだか、ダメージのせいか動けないのです……っ。
……ごめんなさい。皆様……ほんとにごめんなさい。
拙者は弱いです……超能力者に勝てませんでした……っ。
ごめんなさい……ごめんなさい、けーすけ様……っ！

「……」

……あ、れ……？
どうしてなのでしょうか……殺そうと思えば早川はいつでも拙者を殺せた。
拙者にだってもう戦意はない。でも、どうして早川は攻撃を――

「なんだァアイツ……もしかしてオマエの仲間だったりすんのか？」

……うそっ、早川の後ろに立っている人……。
黒髪で、少し痩せ形でもどこか頼りのある感じで、握りしめられた拳が熱く感じる……。

「け……けーすけ……さま……？」

――どうしてか、そこにはけーすけ様が立っていました。

第６２話，魔法使いｖｓ超能力者（後書き）

後書きトークコーナー

あかり「な、なんだ一方（ｒｙ　……あ、アイツ……強っ！」

圭介「殆ど動かないでアレだもんなぁ」

あかり「……というか、話題がない！　なんとかしろよな！」

圭介「確かに話題がねえけど、俺に振られても困るよ。俺だって話題がないしな」

伊吹「だったら、私が圭介の恥ずかしい過去話してあげよっか？」

圭介「はい？」

あかり「ほ、ホント！？　楽しみだな！」

伊吹「そうねぇ、例えばオネショの話とか――」

圭介「ちょ！　黒歴史ヤメテェーッ！」

第６３話，一般人ｖｓ超能力者　前編

疲れた……工場内を探しまわっていたけど、ようやく暮葉達を見つけた。
暮葉はボロボロであった。多分、あの白いヤツが早川悠ってヤツなんだろう。
女の子の腹部を楽しそうに蹴る所に俺が登場。俺の扱いに困る早川悠……。
……どこまで早川は一方〇行なんだよ。髪型は銃でやられた後っぽい感じなのだが。
そんな事よりアイツ……暮葉をあんなに散々ボコボコにしやがって。
生きてるだけマシかもしれないけど、かと言ってそれで言いわけがない。
そういう問題じゃねえんだよ……ッ！

「け、けー……すけ……さま？」

「おいてめえ……邪魔だからどけよ」

「……チッ、やっぱり仲間か。こりゃ予想外の展開だったなぁ」

胸を貫くような一言を放った瞬間であった。
――――早川悠が初めて、笑み以外の表情を見せたのは。
でも、これでは全然足りない。もっとキツい、激しい言葉を浴びせてやらねえと。

「どけって言ってんだよ、聞こえてねえのかよてめえ！」

早川を激しく睨みつけつつ、俺は早川を怒鳴りつけた。

すると早川は驚きとも何とも言えない、複雑な表情を俺に見せてきた。

……でも、それはたったの一瞬だ。すぐに早川は瞳を閉じ口元を笑わせる。

そして遂に――俺に対して初めて一言を言ってきやがった。

「まぁオレの存在は公にはなってねぇから、知らねえから仕方ねえかもなぁ。でも一応教えといてやるよ……オレはオマエと違ってただの人間じゃねぇんだよ」

すげえ……アイツの言葉からピリピリと伝わってくるよ。

その言葉には優しさのカケラもない。伝わってくる感情は殺意のみだ。

……わかってんだよこっちは。てめえが普通の人間じゃねえって事くらい。

明智があんなに恐怖するほどの、あの暮葉をこんなにボロボロにできる程に強くて残忍なヤツだって事くらい。そんな事は承知の上だからこそ、俺は今ここに立っているんだ――

「……ッ」

俺はさらに強く、早川を睨みつけた。

流石にメンチビームは出なかったけど、本当にそれが出そうな程に彼を睨みつける。

拳も力強く握られ、足も何だか今すぐ飛び出してしまいそうな程、ウズウズしている。

「へぇ……オレと会ったヤツは大抵、自信過剰になり過ぎるか恐怖するかのどっちかなんだけどなぁ。オマエは違うみたいだな」

「……っ」

「なるほど、少しは覚悟できてるってのかァ？　……おもしれえ」

早川が初めて、ポケットの中から手を出した。
たったそれだけの動作が余計に俺を緊張させる。
明智を恐怖させ、暮葉をあんなところまで追い詰める……おそらく、というか確実に早川は強い。
しかも、実際どれくらい強いのかは戦ってみなければわからない。
もしかすると、本気を出される前に殺されちまうかもしれねえ……。
……でも、要するにたったそれだけじゃねえか。
それだけ強いヤツだからこそ存在している、僅かな隙ってのは絶対にあるハズだ。

「けーすけ様……だ、だめです……逃げてくださいっ」

「ん？」

暮葉が喋っている。俺に逃げろと言っている、喋るのがやっとなくらい弱っているのに……。
あれだけ無理して、自分がヤバいのに俺の事を心配して……。

「殺される……のですっ。けーすけ様が殺されたら……何の意味も……っ」

「――死なねえよ」

「もきゅ……？」

「お前の前で死ねるわけねえだろ。お前の任務は俺の護衛、俺に死

なれるのが一番困るんだろ？」

「だ、だったら……逃げて――――」

きっと暮葉は俺を守りたいから。だから連続殺人犯である早川から俺を遠ざけたいと思っている。

だからこそ、アイツはしつこく俺に逃げろって言ってくるんだろう。

確かに、俺がこのまま早川から猛ダッシュで逃げれば……俺は助かるかもしれない。

でも、その方法で助かるのは俺しかいねえじゃないか。そんなの俺は絶対に嫌だ……だから――――！

「でも、俺だってお前に死なれるのは嫌なんだよ」

「……ッ！」

仰向けで寝ている暮葉は、俺の言葉を聞いた瞬間――目を見開き小さな声を上げた。

おそらく、俺の言葉は暮葉にとって予想外だったのだろう。

俺の中では予想外と言うか……あたりまえの事を言ったつもりだったのだけど。

「それに俺達は友達だろ？　友達ってのはお互いを助け合うものだろ？　俺は日頃からお前に助けてもらっているけど、俺からお前にした事って殆ど何もねえじゃないか」

「ぇ……え……？」

「俺は今までみたいな一方通行なのは嫌なんだよ。だから、今日は今までの借りを返す。今からお前を助け出してやる……絶対に！」

叫ぶような言葉を暮葉に放つと、俺は咄嗟に早川のほうを見た。
距離にして数十センチ。攻撃する素振りは見せてはいないものの、俺と早川はかなり近い所にいた。
相変わらず早川はどこまでも狂っている、そんな歪んだ表情を見せつけていた。
脅しのつもりなのだろうか……生憎、俺はそういう表情を何度も見てきた。
だからてめえなんて怖くねえ――てめえ、どう考えても一方〇行みたいなキャラだからな！
そんなキャラは今まで漫画とかアニメとかラノベとかゲームで……散々見て来たんだよ！

「なんだオマエ、カッコいい事言ってんじゃねえよ……それで負けたら恥かくだけだろ？」

「うるせえ……てめえなんかに、負けてたまるかぁっ！」

ドン！左足で大地を蹴り、跳躍するように前へ大きく飛び出した。
この距離からなら一瞬で飛びこめる。素早く拳を振り上げ、狙いを早川の顔面に定める。
よし、今だ……喰らいやがれ、俺の怒りの鉄拳を――――！

「チッ……魔法も超能力も使えねえクソか」

「――――！？」

刹那、早川が右足で足踏みをすると、信じられない程に強い風が下から吹き上げてきたのだ。
俺がそれに気付いた時には既に時遅し、俺はあまりの暴風に耐えき

れず、いつの間にか身体が浮いていた。しかも、小石だかなんだか知らないけど、それが機関銃の弾のように俺の身体に突き刺さる。クソッ――なにこれ、暴風も苦しいけど小石のほうが滅茶苦茶痛ぇぞ！

「ぐ、ぁっ！」

畜生……背中から落ちる時、受け身はとったもののここはレールの上。

肘をぶつけてしまった。体質的にすぐに消えるとは思うが、結構痛いもんだな……。

「なに驚いたような顔してんだよ。ヘッ、マリリン・モンローのめくれるドレスのように、下から風を吹かしただけなのになぁ？　なぁ、オレに喧嘩を売るって事は……下調べくらいはしたんだろ？　だったらそれくれぇ理解していて欲しいもんなんだけどなぁ」

そうだ……早川は明智曰く、大気そのものを操る事ができる。酸素濃度を操る事も風を自由に吹かす事も、早川にとっては造作もない事なんだろう。

忘れていたけどさ、確か暴風の膜を一瞬で張り巡らせ、風の力で攻撃を吹き飛ばすらしい。

畜生……どこまで某学園都市ラノベの最強さんだよ。

でも、今はそんな事は関係ねえ。さっさとアイツをぶっ飛ばさねえと――――！

「ぎゃは！　そうだ、おもしれェ事してやろうかァ？」

「……！？」

その時、早川が一度足踏みをすると……。
なんと、廃線同然に錆ついたレールや、そこらに散乱しているゴミ。
さらに暮葉の一期一振や落ちていた鉄パイプまで、何もかもが風の力で空に浮かび上がったのだ。
なんだ……早川のヤツ。一体何をやらかすつもりなんだ？

「あはぎゃははっ！　あひゃはっ！」

楽しそうに、狂気に満ちた笑い声を発する早川は次の瞬間――
なんと、自分の能力で吹かせたものなのだろうか。
竜巻もビックリな程の暴風を吹かせ、風の力で浮かせた様々なモノを俺に飛ばしてきた――！

「やべぇっ！」

思わず叫んだ俺は咄嗟に、2～3回地面を転がり、ようやく立ちあがった所で必死に走り回った。
ただ、飛んでくる様々なモノを避ける為に。だが――その時！
銀色に輝く一期一振の鋭い刃が、猛スピードで俺に飛んでくる。
その刃が僅かに俺をかすり――俺の左腕を僅かに鋭く傷つけた。

「ぐぁっ！」

痛みに耐えられず、思わず声を上げて右手で左腕を押さえてしまう。
本当に軽くかすっただけなのに……畜生痛ぇ。
左腕からの出血も半端じゃねえな。少しだけ深く切ったのかしれない。
……まあ、体質的にすぐに治ると思うけど。

「オラァ！　もう一度やってやっから、愉快にケツ振りながら逃げ

てみろっての！」

そう言いながら早川は、散らばっていたレールや一期一振等を再び宙に浮かせ、それを暴風の力で俺へと再び放ってきやがる。俺はそれからただ必死に逃げるのみ。

逃げる事しか俺にはできねえ――ただ、反撃のチャンスを覗いながら。

……でもどうしよう、完全に俺は遊ばれている。早川のヤツ……滅茶苦茶強いっ！

「はぁ……はぁ……はぁ……」

なんとか全ての攻撃を回避したものの、走りまわったせいで息が切れてしまった。

畜生……アイツ、こうやって遊びながら俺の体力を削いでいくつもりか。

ナメやがって。他のアルファ隊の隊員は一瞬で殺しただろうに……！

「クソッタレ、結構楽しいじゃねえか。あんなの良く避けれたなァ？」

「クソッ……てめえっ」

「でもいい加減面倒になって来たなぁ……じゃあそろそろ、終わりにするとすっかぁ？」

早川は下に落ちていた小石を軽く蹴る……。

瞬間、地べたで竜巻並の風が発生し、その小石は狙撃銃から放たれる弾のように俺へ向かってきた。

いくら身体が丈夫とは言え、あんなのを食らって貫通したらどうし

よう？
とにかくマズい。避けなきゃマズいけど避けられねえ……どうすれば！
――――そうだ、いい事考えたぞ。俺は咄嗟に早川にふっ飛ばされた残骸を手に取り。

「ぐっ！」

カァン！と、小石を弾く音が響き渡る……。
鉄板。そう、俺は鉄板で小石を弾いたのだ。
敵戦車の砲撃によって被弾したものの、それを装甲で弾き返す。
そんな光景を思い出せた事と、早川が暴風で残骸を作りまくってくれたからこそ、今の作戦は成功したのである。

「ハァ？」

早川は信じられないものを見たような目で、俺の事を見ている。
おそらく、今までいなかったのだろう。自分の攻撃を防いでしまうようなヤツは……。
プライドが傷つけられ、その事に対して腹でも立てたのか……早川は。

「ギッ！　うあああああああああああああああああああっ！」

物凄い雄叫びを、この戦場で上げたのである……！

第６３話，一般人ｖｓ超能力者　前編（後書き）

後書きトークコーナー

大吾「クソッ、胸が苦しい」

圭介「恋でもしたんじゃねえの？」

大吾「そんなハズはない！　僕は二次元世界に生きる聖職者だ！　現実女などに惚れるハズがない！」

圭介「じゃあ他に思い当たる事でもあんのか？」

大吾「ある！　昨日な○は同人誌が完売していてショックだった！」

圭介「……それかよっ！　ああもう悲しくなってきた……彼女欲しい」

――――一方、伊吹と小坂は。

小坂「あ～あ、最近あたし。本編で出番ないなぁ……学校が出てこないもん」

伊吹「はぁ……」

小坂「ん、どしたの伊吹？」

伊吹「なんか……胸が苦しいっ」

小坂「ふふふ、もしかして圭くんの事かな？」

伊吹「っ！？　ち、違う！　あんなのありえないって！　ただの幼馴染だから！」

小坂「ほほう……わかりやすい反応ありがとうございます」

伊吹「亜紀っ！　あんた絶対楽しんでるでしょ！」

第６４話，一般人ｖｓ超能力者　中編

「うあああああああああああああ！」

突然雄叫びをあげた早川。
瞬間、右足をリズムを刻むように、小さくアスファルトを足踏みした早川。
その動作に何か意味でもあったのだろうか、強烈な暴風が下から俺を襲う。
最後に見えたのは両手を真横に開き、叫び続ける早川の姿。
その姿も次第に小さくなっていき……俺は気付いた時には空中に浮いていた。
おそらく、さっきの暴風で上に吹き飛ばされ、未だに身体を浮かすくらいの風が吹いているのだろう。

「く、くそぉ……っ！」

畜生、こんな状態じゃ身動きが全く取れねえじゃないか！
しかも早川はもう叫ぶのを止め、拳を握りしめながら俺へと接近していた。
さっきも言ったけど、俺は今早川の能力のせいで空を飛んでいる。
そんな俺に早川がどうやって接近するか――答えは簡単、早川は信じられない事に空を飛んでいるのだ。

「あぎゃははははっ！　あひゃぎゃはっ！」

危なっかしい笑い声をあげながら俺へと迫る早川の背中からは、四つの噴射する竜巻が出ていた。

それがどういう効果かはわからねえ。でも、早川は確実にお空を飛んでいやがる。

「ぐぁっ！」

ガコン！と顔面に突き刺さる、早川の拳。
コイツ……滅茶苦茶ヒョロヒョロな体型の割に力が……ッ！
いや待て、どう考えても早川に筋肉なんてものがあるハズねえ。
という事は、今の正拳突きは能力の手を借りた……ッ！

「ぐぅっ！」

ちくしょ……よくわからねえけど、背中を壁か何かに打ちつけてしまった。
鼻っ柱も背骨も痛ぇ……まあ、動けない事はないけどさ……って、安心している場合じゃねえ！
悪夢なのかこれは。無数のレールが早川が起こした暴風により、空中に浮いている。
――――そしてそれは、間違いなく俺の所に高速で飛んできていた。

「！！」

身体に痛みは残っているものの、あんなのを食らっては骨の一本はヤバいかもしれない。
咄嗟に立ちあがり、焦って転びそうになるものの、それでも俺は必死に走り続けた。
ヒュン、ヒュンと、レールが俺の真横を飛行する音が耳に入る。
これ……なんというか、超怖ぇぇぇぇぇぇっ！

「うわあ……っ」

レールが来なくなったので、試しに後ろを確認してみると……。
地獄絵図。建物に無数のレールが突き刺さっている。
もし避けなかったら、レールが俺の身体に突き刺さっていたのかな？
……俺、一応身体は丈夫だ。でも、モノが刺さったらどうなっちゃうんだろうか？
う～ん……流石にヤバい気がするな。というか、想像しただけでも冷や汗が出てくる。

「へへ……オマエおもしれぇな。オレのパンチ喰らって立っていられたヤツは初めてだし、あれだけのレールを全部避けるなんて、オマエもしかして身体も鍛えている未来予知系の超能力者かァ？」

「お生憎様、俺は魔法も超能力も使えない普通の人間だよ」

「だったら……余計におもしれえよ！　そんなおもしれえヤツにもう一つ……おもしろい事してやろうかぁ？」

「お、面白い事……？」

一体なんだ。今度はどんなバケモノじみた事をしやがるつもりなんだ。

「ここは工場だし、さっき破壊した建物はヤバい工場だったみてえだ。可燃性のガスが充満しているんだろうぜ？　なぁ……ガスを集めて、そいつを静電気か火花か何かで爆発させるとさぁ……このあたりはどうなっちまうと思う？」

「……ッ！？」

ようやく、バカな俺にもその言葉の意味が理解できた。
コイツ……もしかして、ガスを集めて爆発させる事とかも出来るのか――――？
走れ、とにかく走って距離を取れ。爆発に巻き込まれたら流石の俺でもまずいかもしれない！

「ウフフ、フフフ、ハハッ、アハハ、アヒャハハ、アハ！　ギャハ！　アギャハハ！　アッギャハッハッハッハッハッ！」

どこまでも楽しそうに、早川は笑いながら両手を伸ばす。
どんな処理をしているんだろうな……サッパリ理解できねえ。でも、さっさと逃げないとマズい。
そんな事を思っていた――次の瞬間。

半径数十メートルの範囲が一瞬にして、光と炎と熱風に包まれた。
炎に焼かれる事はなかったものの、激しい衝撃波や熱風が俺の背中を叩くように吹きつける。
第一撃の衝撃波で吹き飛ばされ、熱風で焼かれるような熱さを感じた。

「が……ハァ……っ！」

くそ……っ、声を上げる事さえ辛い……っ！
なんなんだよ早川は……やっぱりアイツはバケモノなのか？
ハナから勝ち目なんてない。隙も全くの０だったりすんのか……ッ！
しかしチャンスだぞ。周囲は煙に包まれており、誰がどこにいるかさえ把握が難しい状況だ。
この状況なら早川も俺を探しだせない。今のうちの冷静さを取り戻し、作戦を練る事ができる……。

「よく無事で居れたなオマエ、ひょっとしてオマエ不死身なんじゃねえの!?」

……と、思ったけど……やっぱりムリです。
燃え盛る炎と煙の中から、細くて折れてしまいそうな早川の影が見える。
影は次第に近づき、やがて煙の中から白いヤツの姿が現れた。

「それに比べて俺は死にそうだァ。軽く酸欠になっちまったぜ……まァ、このオレに完全なる酸欠なんてありえねえんだけどな。要するに水中や宇宙空間じゃねえ限りは好きなだけ酸素濃度を操作できる。エベレストの山頂だってオレなら余裕だぜ?」

「そんな能力があるんなら……どうしてそういう、フツーの事をやってすごいって褒められようとしなかったんだよ……てめえは!」

俺は拳を握りしめ、歯を食いしばりつつ早川を厳しく睨みつけ、足に入れれるだけの力を入れて立ちあがる事に成功した。畜生……フラフラだ。
身体が丈夫と言ってもこういう経験は初めてだからな……身体が覚えていないのも結構辛いものだ。
というか、俺自身自分の身体の限界を知らない。
限界を試せるイベントが、今までの日常で発生する事などありえなかったからである。
ところが……今はなんとなくだが限界を感じている。
これ異常激しいのを喰らえば、ホントに骨折くらいしてしまうかもしれねえ……ッ!

「それを許さねえのが佐井学園ってモンだァ」

「さ、佐井学園……そういえば、てめえもそこの生徒だったよな。そして、そこをやめてえからこんな事をしてやがんだよな」

「へぇ……中々オレの事情に詳しいんじゃねえか。最も、同情するつもりはねえ感じだけどな」

「あたりまえだろ！　たとえ指示だとしても、それで暮葉の仲間が殺されていい理由にはならねえ！　てめえが佐井学園でどんなに辛い目に遭ったとしても、そこから意地でも逃げ出したかったとしても、殺人なんてもの、認められるハズがねえだろ！」

「は～ん。オマエ、わかってねえ……学園っつってもあの学園は一つの組織だ。組織を裏切るってのは相当な覚悟なんだぜェ？　なぁオマエ……オマエがもし軍隊に入っていたとしたら、そう簡単に自分の軍隊を裏切れたりすんのか？」

「……っ」

「答えはＮｏだよなぁ。例え組織からは除名されても、裏切り者を意地でも潰そうとする連中は現れるハズだァ。そいつらと永遠に戦う覚悟がオマエに出来たりすんのかァ？　オレには出来ねえ、そんな事より学園から出された条件をクリアして、余生を平和に過ごしたほうが人生得だろォがよ」

笑顔でそんな事を言っている。恐ろしい事を笑顔で言っていやがる。でも……アイツはそんなヤツだけど、それでも少しは伝わってきたぜ。

アイツ、佐井学園でそんなにひどい現実を見てきたのか。

だから、ここまで必死になって学校を辞めようとしてんのかよ。

……気持ちはわからねえでもねえ――でも、結局早川は根本から間

違っているんだ。

「それでも罪のねえヤツを殺していい理由にはならねえ！　てめえが嫌がっている学園が出した殺人命令を、なんで聞く必要があるんだよ！　大体、てめえくらい強かったらどんなヤツにだって負けたりするハズがねえじゃないか！　てめえがそういう覚悟を決める勇気さえあれば、こんなふざけた自体にはならなかったんじゃねえのかよ！」

「勇気ねェ……ずっと永遠に血みどな日常を送るのと、今の一瞬だけ血みどろな現実を見る。どっちがいいかって話だけどなァ……オレには前者を選ぶ事はできねえ。それだったら前者を選ぶ方が遥かにマシだ。それともなんだァ？　オマエはオレに単独で佐井学園と戦う勇気でもくれるってのかァ？」

「いいぜ……だったら俺がてめえを勇気づけてやるよ。この拳でな！」

「おもしれえなオマエ……上等じゃねぇか。愉快に素敵にやってみやがれよ！」

そのセリフを早川が言い終えた後、ゆっくりと拳を構えた。
いつも通り咄嗟に頭をガードできるようにする為、両腕をしっかりと上まで上げた構えである。
一方の早川も口元を歪ませ、血に飢えたような目で俺を見ながら、両腕を大きく開き始めた。

……まだ戦いは始まったばかり。本当の意味での戦いは――たった今、これからだ！

第６４話，一般人ｖｓ超能力者　中編（後書き）

後書きトークーコーナー

大吾「圭介が完全に上○さんになりきってるな……」

重原「それを言ったら敵さんも完全に某最強になりきってるけどね」

伊吹「ていうか、今回随分と戦闘シーン長いわね。いい加減読者も飽きてる頃じゃないの？」

小坂「まあ、これだけ長引くくらい早川が強いって事だと思う！」

伊吹「で、でもそんなヤツに圭介が勝てるの！？　も、もし圭介が死んじゃったら……っ！」

小坂「あれぇ？　もしかして圭くんの事心配だったりするの？」

伊吹「ち、違う！？　圭介なんてどーせ身体が丈夫だから大丈夫よ！　べ、別に私は圭介なんか心配じゃないから！」

大吾「これは……ツンデレなんだろうか。それともいつものツッパリなんだろうか？」

重原「さあね……ふふふっ」

第６５話，一般人ｖｓ超能力者　後編

身構える俺、両手を広げて気味悪く笑っている早川。
俺達の睨み合いは続いていた――でも、先に口を開いたのは。

「まァ……オマエも幸運だよなァ」

「……？」

「オマエひょっとして稀に見る幸運体質の持ち主なのか？　このオレを前に未だに息してるなんてよ」

いや、俺はどちらかと言うと不幸だと思うぞ。
未遂で終わったからいいけど、ガチホモに掘られそうになったし。
あと、もう終わったからいいけど校内でガチホモ疑惑が浮上したし。
とにかく、最近ロクな事がない気がするんだ！

「あのピンクのアホ毛とどっちがすげえかな？　アイツはオレの弱点まで見破ったしなぁ」

……弱点。暮葉のヤツ、早川の弱点を突いたのか？
いや、その前に早川の弱点って一体何なんだよ。
すべてが完璧に思えるほど強力な力を誇る早川悠――そんなヤツに弱点があんのかよ。

「でも、オマエはピンクのアホ毛よりも長い間、オレの前で邪魔をしやがっている。オレからしたら迷惑な話だけどなァ、それって結構すげえ事じゃねえの？　オマエ、ホントに頑張るなぁ……」

「……あたり前だろ。友達の為に頑張る事の何が悪いってんだよ」

友達がいないヤツにだけは言われたくねえぜ、そのセリフは。

……と、そんな事を思った。

「へェ……頑張るねェ。希望に満ちたいいセリフじゃねえかよ……チッ、でも無神経だな。まぁいい……オマエは頑張ったから頑張る必要はもうねえよ。そんな事より――そろそろあの世にでも行きやがれ！」

刹那、セリフを全て言い終わった早川はダン！と、地面をとても強く蹴りあげた。

アスファルトの残骸と砂埃が舞う、早川だけは俺へと近づいてくる。

その速度があまりにも速い所、アイツはまた超能力を使いやがったに違いない。

クソッ……いざ来るとなると、やっぱり怖いかもしれねぇ……。

2～3歩歩んだだけなのに、何十メートルかの距離があったハズなのに……。

それでも早川は――一瞬で俺との距離を詰め、右手を突き出し始めた。

畜生……どうすりゃいい。多分引いてもすぐに間合いわ詰められる。

かと言って殴りつけても、明智曰く早川は攻撃を暴風で防ぐらしいからな。避けても殴っても無駄……ああもう対策がねえ！

こうなったら手段は一つ……どうせ身体は丈夫だ。玉砕覚悟でコイツをぶん殴る！

「ちくしょおおおおおおおおおおおおおっ！」

俺は目を瞑り、ただ只管前を走り始め、どこを狙っているかもわか

らない右ストレートを放ってみた。
……でも、ガツンと言う鈍い感触を拳に感じる。
なんだ、これ……慣れた感触だな。過去に何度も経験した……まさか？

「ぐぁ、が、ぁ……ッ！」

……あれ、殴れた。おかしいぞ、明智の話って実はウソなんじゃ？
だって今、俺は確かに早川をぶん殴った。早川のぶっ飛ばされて倒れているぞ。

「あ、はは……面白ェ畜生。殴られたのは随分久しぶりな記憶だぜ。オマエ……ついにピンクのアホ毛を越しやがったな。アレを超えるくれえ面白いヤツが、まさか魔法使いでも超能力者でもねえヤツとはなぁ……」

ぶん殴られた顔面を押さえながら、狂気じみた声で早川は語る。
早川もよく喋るよなぁ。戦闘中なのにここまで喋る人、俺は初めてみた気がするな。

「さて、と……じゃあそろそろ、本格的に始末だクソ野郎ォ！」

さっきと同じく、再び衝撃的に突撃をかけてくる早川。
確かに早川の動きは早い。おそらく、また風を利用して加速でもしているのだろう。
ホントに便利だよなぁ風って。他にも酸素濃度操作や気圧操作、ガスまで集めて爆発させられる。
ホントにすごい能力の持ち主だ……だけど。

「てぇっ！」

「ぐ、ぼぉぁっ！」

身体を少しだけ振り、早川の右手を優雅に回避する。
そして空いていた右拳をぎゅっと握りしめ、カウンターを決めるように俺は早川をぶん殴った。
一度吹っ飛ばされた早川は痛みに耐えつつ、近距離から俺を攻撃しようと手を伸ばしてくる。
だが、俺は何度も避けては早川を殴り続けた。３発、４発……５発６発と。
ここで俺の疑いは確信へと変わった。そう、早川は――殴り合いの喧嘩だけは滅茶苦茶弱い！

「ク、ソォ……ッ！　この三下野郎ォ！」

早川は振るわれる俺の拳を掴もうとする。
多分、拳を取って零距離で超能力を使うつもりだったのだろう。
だが、その手は確かに速かったが、どこか抜けている感がある。
拳を寸止めした俺は、ひらりと身体を一回転させ、低い位置からボディーブローを鳩尾へ打ち込んだ。

「ぐぼぁっ！」

「フッ！」

「が、はぁ――――ッ！」

ボディーブローの次は顔面へのストレート。
今の一撃で早川は、数ｍは吹っ飛ばされた事だろう。
しかし何か超能力でも使いやがったのか、早川はなんとか立って持

ち堪えやがったのだ。

「ちっくしょう……オマエ、どうして……っ」

「は、てめえは確か暴風の膜で攻撃を防げるんだったよな？」

「チッ……そんな技、オマエには使ってねえのに」

「確かに、でも俺は知っているんだ。だから俺はてめえを恐れていた……でも、てめえには致命的な弱点があるだろ。攻撃中は暴風の膜を張り巡らせられないっていう弱点が！」

絶対的な風の壁を作り、それが作りだせない攻撃時は誰も抵抗する事が出来ない程の、破壊力が凄まじすぎる攻撃を放つ早川悠の戦闘スタイル。それは一見完璧とも見えた。

……だけど、そんな僅かな所に弱点は存在していた。

だって、攻撃時は俺の普通の右ストレートさえ、満足に防ぐ事ができないんだから――――

「あと、お前は素手で喧嘩なんてした事、ねえんだろ？」

「なっ……」

「遅いんだよ。どう考えても喧嘩のやり方しってるとは思えねえ。能力に頼り過ぎだ……てめえは！」

超能力に頼り切った戦い方。確かにそれは強い……。

彼の能力は態々手を使わなくとも相手を殺せる凶悪さを秘めている。

その凶悪さは本当に最強を誇るレベルである……ただ、接近戦での弱点を知られない時点では。

でも、ちょっとでも弱点が表に出てしまった瞬間、その弱点は大きな弱点となってしまう。
俺と早川の僅かな差とは正にそこの話なのだ。
弱いけど近接戦闘に慣れた俺。強いけどそこだけは苦手な早川……
俺と早川の差は歴然だ。

「……チッ！　ふざけんじゃねえぞ、この三下ァ！」

早川が再び地面をたん、と軽く足踏みする。
それだけど、アメリカの巨大トルネードもビックリするほどの、巨大な竜巻が生成された。
それは次第に俺へと迫り、どうする事もできなかった俺を上空へと一瞬で突き上げてしまった。
……だが、俺はこのピンチを逆にチャンスに捉えた。

「ぐおおおおおおおおおおおおっ！」

空中で体勢を立て直した俺。
早川のほうへと落下するが、その勢いで早川の顔面を思いっきり殴りつけた。
突き刺さった俺の拳は落下する時の勢いもあったのか、通常よりも重い一撃であったらしい。
真っ白な早川とは真逆である、真っ赤な鼻血がドロドロと流れていた。

「ぐ、はぁ……ちっくしょう……この野郎ォ」

「……暮葉も暮葉の仲間も、みんな必死に生きてんだよ。てめえの勝手な都合で必死に生きる皆を傷つけてんじゃねえよ！」

「さっきも行ったじゃねえか……オレに残された選択肢のうち、一番楽なのを選んだんだ。その途中にいる特異点なんざオレにとってはどうって事のねえ、ただの学校を辞める為に必要な道具に過ぎねえんだよォ！」

早川はムカつく事を吐き捨てた……。

「……大気中の分子運動を抑制・活性化。湿度……操作」

瞬間、早川は笑う。そして両手を上に広げて何かを呟き始めた。

なんだ……あの野郎、一体何をするつもりなんだろうか。

ハッキリ言って早川がやろうとしている事がサッパリわからん。でも、ホントに嫌な予感しかしない。

危険を感じた俺は再び拳を握りしめ、いつもでも戦えるよう再び身構えた。

「くく……か、ぎゃは……うふふ、あはは、はっぎゃぁはははっ！」

な……マジかよアイツ。頭上へ伸ばした手の上には巨大な火の玉が。

なんだよコレ、とらゴンボールの元気玉じゃねえんだぞ。

すっげえでかい……軽く直系１０ｍは超えているかもしれないぞ。

アイツ、あんな巨大な火の玉をどうするつもりなんだ？

「さて、と……焼け死ぬかァオマエ？」

「！？」

狂った笑顔の早川の口元が、さらに大きく歪んでいく。

その瞬間――まるで太陽を小さくしたかのような火の玉を投げつけてきた。

アレを喰らえば身体は黒こげ決定。完全に黒こげになったら治るかわからねえぞ……。
そんな事を恐れた俺は背を向け、全力疾走をするのだが。

「ぐあああああっ！」

――瞬間、俺の背後からイキナリ火の海が襲ってきた。
というか、このあたり一帯が一瞬にして火の海に包まれたのだ。
凄まじい熱、奪われていく酸素……。
く、そ……まずいっ。これ、もう少し近い所にいたらホントに死ぬっ！

「ぎゃあっはははは！　最高に綺麗な火の海じゃねえか！」

「て、てめえ……っ」

「おらぁ！　今度こそオマエを徹底的に焼き殺してやるから、悔しかったら火の海渡ってオレをぶん殴ってみろってのの！」

早川は笑いながら、さっきのように大きな火の玉を作りあげて行く。
でけえ……段々と出来上がっていく火の玉。その大きさはさっきの倍はあるかもしれない。
……というか、まだまだ大きくなっていく。
畜生、あんなの打ち込まれたらいくら逃げても……今でさえ輻射熱がすげえってのに！

「結局、オマエじゃオレを止める事はできねえってなぁ！　よく頑張ったけどこれが最後だ、さてさて……最高に愉快な火刑の始まりだぜェ！」

暴風、飛行、酸素濃度、気圧、爆発、防御……ああもう、なんでもアリだなあの野郎。
とにかく、このままだと本当に火刑にされちまう……。
でも、火の海がすごくてマトモに動けない。畜生、こりゃまさかのチェックメイトか？
俺はこの後どう行動すりゃあいいんだよ、畜生！

「さぁて、そろそろ焼死の時間だぜ！　愉快で素敵な焼死体にでもなりやがれ！」

「ちっくしょぉ……っ！」

動けねえ。完全に火の海に囲まれて動けねえ！
でも、早川は容赦なく攻撃をしてこようとする。
避ければいい話なのだろうが、さっきも言った通り火の海が邪魔で満足に動く事すらできない。
……終わった、完全に終わりかもしれない。
早川相手に俺じゃあ話にすらならねえ……そう思い、苦しき焼死を体験する覚悟を決めた――――

「……チッ、今日は随分とクソみてぇな風が吹くな……」

刹那、早川は俺を殺すのではなく、機嫌の悪そうな顔で独り言を言っていた。
……どういう事だろう。しばらく意味がわからなかったが、火の玉を見てようやく納得ができた。
なんと、早川が作りだした火の玉はウネウネと、まるで風でも吹きつけているかのように動いていた。

「どういう事だこれ……この風、自然のモンじゃねえ。クソッ、蝋

燭やライターの火じゃねえからまだいいけど、こんな状況じゃ満足な火の玉を作り出せねえ」

奇跡と言ってもいいのだろうか。突然吹きつけてきた風は早川の調子を狂わせていた。

この奇跡としか思えない風はもしかして、神が吹かせる風こと神風なんじゃないだろうか。

でも、早川のヤツが自然の風ではないと言っていた。じゃあどういう事なんだ？

近くに巨大扇風機でも……あるわけないよな。どうやってこの風は起こっているんだろうか。

「けーすけ様っ！」

「く、暮葉！？」

――その時、暮葉が一期一振を振りまわしながら、乱暴に俺の隣へ着地してきた。

コイツ……そういえば最初っからいた。早川にボコボコにされていたのは暮葉であった。

そうか、今までずっと俺と早川の戦いを見ていたんだよな。

でもどうしてだ。なんでこのタイミングで戦場に割って入ってきたんだ。

逃げていれば……そうすれば、こんな地獄なんて見ずに済んだかもしれねえのに！

「けーすけ様。ご無事なのですか！？」

「俺は無事だけど、火の海が邪魔で動けねえな……」

「だったら今、この炎を消火するのです！」

暮葉がそう叫んだ瞬間、どういう事だか空中から大量の水が巻かれ始めた。

別に天ぷらの油とかで発火したわけではない、俺の周りで燃えていた炎は次第に鎮火してゆく。

水の力すげえ……というか、どうやってこんなに大量の水を放水しているんだ？

「な、なんだこれ！？」

「けーすけ様。急遽他所からアルファ隊の皆さんが駆け付けてくれたのですよ」

「じゃ、じゃあこの水って……」

「はい！　水系統の魔法使いによるものなのです！」

なるほど。

炎や風の魔法を使えるヤツがいるんだから、水の魔法が使えるヤツがいたっておかしくはないよな。

ハハッ、なんだかよくわからないけど、コイツはいい気がしてきたぞ。

なんだか、次第に俺達が有利になってきた気がするんだ。

……一方、大量の水を浴びている早川。

何故か早川だけ水が激しい。まるでバケツで水をかけられているかのようであった。

「クソッ！　この……野郎ォ……殺すっ！」

しかし早川は気付いていた。これはすべて、暮葉達アルファ隊の仕業である事に。
だからこそ、早川はあのように殺意をむき出しにしているのであろう。
おそらく早川は本当に暮葉達を殺すつもりであろう。あの目はマジだ……。
……でも、そんな事をさせるとおもうか。俺はなんの為にここに立っているってんだよ？
あの子への恩返し、そしてあの子とあの子の周囲の世界を守る為に……俺は立ってんだろ！

「……させねえよ」

「アァ？」

「させる、わけ……ねえだろ！」

魔法使いの魔法による雨と、未だに小さく燃える複数の炎の中……俺はゆっくりと歩んでいく。
一歩、また一歩……ゆっくりではあるが少しずつ、確実に早川へと接近していく。
視界の先には早川ただ一人。アイツさえ……アイツさえ倒す事が出来れば。
アイツに佐井学園と戦う勇気さえ――与えてやる事ができれば――！

「……おもしれえクソッタレ。いいぜ、そこまで言うなら……オマエから殺すッ！」

轟！という音と共に、全速力で走る新幹線の如く早川が迫ってくる。

だが、それは俺にとっては大変都合がいい。正直に言うとこっちも結構疲れている。
走ったら多分、戦う体力なんてなくなっちまうだろう。

……早川のヤツ、どうして接近戦なんて挑んでくるのだろうか。
実はかなり焦っているのか、だからよく考える事も出来ずにただ近寄るだけなのだろうか。
確かに、総合的な戦闘能力は俺が一番低いだろうし、俺さえ潰せば暮葉とその他のアルファ隊の皆さんを、存分に相手にする事ができるハズだ。
だから、まずは一番弱いが一番邪魔くさい俺を潰そうと……早川は駆け出したんだ。
……でも、接近戦を挑むのは馬鹿すぎる。なんたってアイツは攻撃中は――他のヤツと同じで防御なんて出来ねえんだから！

「く、ぎゃは、ァッ！」

一瞬で俺の懐に入ってきた早川。右手を勢いよく突き出してきたが俺は右手をひらりと回避。
続いて第二撃、振るわれた早川の左手を右腕でガードしてみせる。
……大した威力じゃない。コイツ、熱くなり過ぎているあまりに能力を満足に使う事を忘れている。
力も全く入っていない。俺は……そんな早川の左手を払い除けてやった。

「……ァ……ァ……ッ！」

隙だらけの早川悠――ハッキリ言って、今の早川なら子供でも一発入れれるであろう。
それくらい早川は隙だらけであった。

オマケに早川は目を見開き口も明け、激しく驚いた表情を見せている

「……このリアル一方〇行……ッ！」

攻撃手段も失い、冷静に対処する能力さえ奪われた早川に対し、俺は冷たくそう言い放つ。

そして……ダッ！と勢いをつけて、僅かな距離を前方に跳躍し。

「――――もう一度やり直してきやがれ、このクソ野郎ォ！」

言い放った、瞬間。

俺の全力の右ストレートを、超能力者である早川悠の顔面深くに突き刺してやった。

早川の弱そうで軽々しい身体、はゴロゴロと乱暴に地面を転がっていった……。

がくっと仰向けで伸びている早川。完全に力が入っておらず、瞳は閉じられ口は無様に開いている。

呼吸は苦しそうだが、一応しているあたり多分死んではいないだろう。

とりあえず……な、なんとか……勝てた……ッ！

第６５話，一般人ｖｓ超能力者　後編（後書き）

どうも、作者です！

１８時に更新すると言っておきながら出来なくてごめんなさい！
しかも０時の更新もいつもより３０分も遅れて申し訳ございません！
もっと小説を書く時間が欲しいです……（涙）
とにかく色々と申し訳ございませんでした！

以下、後書きトークコーナー！

圭介「お、終わった……やっと戦闘シーンが終わった！」

伊吹「今回長かったわね」

大吾「しかもほとんどパク（ｒｙ」

圭介「おいやめろ！　全部早川がアレに似ているのが悪い！」

伊吹「それにしてもよくあんなのに勝てたわね。圭介に勝てるんだったら重原は余裕じゃないかしら？」

圭介「俺……どんだけ弱く見られてるんだよ！」

第６６話，トモダチ

ここはベッドの上、つまりは病院……などというわけがなく、実際ここは俺の部屋である。
一応病院へ行くことをオススメされたのだが、実際大した怪我をしているわけではないし、正直早く家に帰ってこの疲れを癒したかった。だから俺は病院などに行かず、自宅へ直行したのである。
……それに、もう痛みなんて大分消えてきたしな。
やっぱり自分の体質には感謝だよ。

「けーすけ様っ！」

特攻隊の如く俺の部屋に突入してきた暮葉。
もう葵のお下がりのパジャマに着替えたのだろう。
随分と可愛らしいピンク色の花柄パジャマを着用していた……子供か、でも可愛いからＯＫだ！

「暮葉か……」

俺がそう言うと、暮葉はゆっくりとベッドに上がってきた。
……ちょ、待て。男女二人がベッドだと……！？
これは色々な意味でまずい……いや待て、一瞬でも変な事考えた俺が一番危険だ！

「けーすけ様、もう大丈夫なのですか？」

「まあ、元々大した怪我とかしてねえしな。あと何時間かすればもうどこも痛くねえだろ」

「にゅふふっ、圭介様の体質ってやっぱり凄いのですね！」

「あ、ありがとな」

畜生、ストレートに褒められるのも何だか恥ずかしいな。
それに、この体質って元々は御先祖（アレクサンドル）ってヤツの体質だったんだろ？
確かに俺もこんな体質を持っているが、何も俺だけの体質じゃねえのに……。
まあ、アレクサンドルはとっくの昔に死んだ人だし、今はどうでもいい話なのかもしれない。

「……あの、けーすけ様？」

「今度はどうしたんだよ」

「すみませんっ、拙者の力不足で……けーすけ様を戦わせて」

暮葉が本当に申し訳なさそうな表情で謝罪をしてくる。
確か暮葉の任務は俺の護衛。だからこそ自分が負ける事は許されない。
ところが、暮葉は早川との戦いには負けていた。だからこそ、責任を感じているのかもしれない。

「……いいじゃねえか。それを言ったら俺だって謝りたいよ」

「もきゅ？」

「俺も大した事ないヤツで、最後は暮葉とその仲間に助けられた。
本当にごめんな」

「け、けーすけ様は謝る必要ないのですよ……だって、元々は早川とアルファ隊の問題なのです。けーすけ様は元々何の関係もなかったのですよ？　むしろ謝るべきなのはけーすけ様を巻き込んだ拙者達なのですっ」

完全に俯いてしまった暮葉。本当に……暮葉は落ち込んでいる。関係のない戦いに俺を巻き込んでしまった事に、これでもかというくらい責任を感じている。

でも……よくよく思い出してみようか。関係のない戦いに口を出したのは――――

「暮葉こそ、何も謝る必要はないよ」

「へ、変な優しさはいらないのですよ……」

「変な優しさじゃねえよ。大体、あの戦いに口を出したのは俺自身じゃねえか」

「もきゅ……けーすけ様が？」

俯かせていた顔をようやく上げてくれた暮葉は、上目遣いで俺の事をジロジロと見てくる。

……いかん、なにこの可愛い生物。少し目を逸らそう……っ。

「だ、だってそうだろ？　俺は自ら暮葉達の所に行ったんじゃないか。それって要するに戦闘に巻き込まれたんじゃなくて、態々自分から戦場に足を踏み入れたって事だろ？」

俺はただ……助けたかった。ただ暮葉を守りたかった。

今までの恩返しもしたかった。その為だけにあの場に行ったんだ、別に巻き込まれたわけじゃない。

……まあ、完全に守る事も恩返しもできなかったけど。

むしろ暮葉がいなかったら、多分今頃俺は早川の言う愉快な焼死体になっていたんだろう。

恩返し所かもっと多くの借りが出来てしまった気がするよ。

「そんな……でも、けーすけ様が傷ついたら……っ」

「わかってる。俺が死んだりすると暮葉の立場が悪くなる事くらい。でも……俺を守る為には生きてなきゃいけないだろ。暮葉が死んだら元も子もないじゃないか」

俺は出来るだけ優しい顔を作って、暮葉に一言一言を確実に伝えていく。

「そ、それはそうですけど……っ」

「だったらいいじゃないか」

「いいって……けーすけ様は拙者を……許すのですか？」

「許すも許さないも、暮葉は悪い事なんてしてないじゃないか。それに俺達は友達だろ」

「と、友達……？」

「うん、友達だ」

なんだかんだ言って、俺達はお互いの価値を認め合っている。

相手の為に出来る事をなんでもしようとする。時には相手の為に自己を犠牲にしている。
そして、なんだかんだ言って信頼もしているし、暮葉の事も好きだ。
も、もちろん友達としての意味だぞ！

「友達は友達を助ける。それは多分普通の事なんじゃないか？」

「ともだち……けーすけ様も友達」

「ああ、俺はそう思っている。だから助けられるのは俺だけじゃない、暮葉が危ない目に遭ったら俺も暮葉を助けるよ」

「……」

無言で口を開いたまま固まっている暮葉。
頬がほんのりと赤く染まっていた。その状態で彼女は俺をじっと見つめている。

「く、暮葉……？」

「はにゃっ！？　す、すみませんっ！」

ほんのりどころかトマトのように真っ赤になってしまった。
コイツ、素で意識がどっかにぶっ飛んでいたようだな。
突然意識がこの世に呼び戻されたかのような反応だったぞ。

「大丈夫か、顔赤いぞ？」

「その、えと……拙者は平気なのですよ」

「そっか、よかった」

安心したぜ、もしかして熱でもあるのかな～とか思っちゃったよ。
だって……暮葉の顔がどう見ても赤いんだもん。

「あの……けーすけ様？」

「お、おう。なんだ？」

暮葉が四つん這いになりながら、覗きこむように俺を見ながら名前を呼んでくる。
同じベッドの上に暮葉と二人きり、しかも俺と暮葉の距離は僅か数十センチ程度だ。
そんな近い距離から女の子に迫られると、なんというか……恥ずかしいな。
多分、自分では見えないけれど俺の顔も赤くなっているかもしれない。

「拙者達……友達、なのですよね？」

なんてことのないようで、とっても重要な確認。
何度も彼女の事を友達だとは言っているが、それでも確認を取ろうとするあたり、彼女はとても不安に思っているのかもしれない。自分が本当に俺の友達なのか……そんな不安を抱いているんだろう。
だから――俺はそんな彼女に対して――――

「うん、友達に決まってるじゃないか」

「……けーすけ様っ」

彼女から離れようとしなかった不安を取り除いてあげると、彼女は少し笑顔になってくれた。
よかった。ようやく暮葉がまた笑ってくれたよ。
俺はやっぱり……暮葉の笑顔が一番好きだな。

「えへへ……友達。うん、友達っ」

なんだか暮葉は、友達という言葉が大変気に入った様子である。
別に俺が初めての友達ってわけでもないのに、彼女の喜び方はそれに近いようなものであった。
眩しい程の笑顔で、ぎゅっと枕を抱きよせて。
好きな人の事で妄想でもしちゃって、思わず嬉しくなっちゃった女の子のようである。
……って、暮葉は本物の可愛い女の子だったな。

……しかも、こんな事を考えている俺も正直、初めて友達が出来たくらい嬉しいような気がするな。
元々、本当の友達と呼べる友達が少ないせいもあるかもしれないけど……。

「けーすけ様！」

「ん、どうした？」

満面の笑みを浮かべた暮葉。その素晴らしい笑顔を俺に向け。

「ありがとうございます！」

ありがとう……嬉しいな、友達にありがとうって言われると、なんだかとても嬉しい気分だ。

それと同時に、ちょっと恥ずかしい気もするんだけどね。

「お、おう……暮葉。俺達は友達だからな、お前を頼る時もあると思うけど……暮葉だって俺を少しは頼ったっていいんだぞ？」

ああもう俺の馬鹿！
なに言ってんだよ、今のセリフはあまりにも臭すぎるだろ！
いくら友達である事をアピールする為とは言え、流石に今のセリフは失敗だ！
……と、思ったが――――

「……はい！　拙者も……けーすけ様の事、頼ってみるのです！」

何故か暮葉は喜んでくれた。今のくさいセリフで……。
な、なんでだろう？
ま、まあいいか。喜んでくれたんならそれで。

――――この日から俺と暮葉の関係は、ただの上下関係から友情へと変わったのであった……。

第６６話，トモダチ（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「そろそろ、この後書きトークコーナーもネタが尽きてきたな」

伊吹「ちょ！　いつもこのコーナーを盛り上げているあんたがそんな事言わないでよ！　このコーナーが終わったら出番のないキャラ達の出番がホントになくなっちゃうわよ！」

圭介「いつからこのコーナーは救済コーナーになったんだよ！」

千早「……お、お願いします。このコーナー終わらせないでください……私の出番がっ」

凪紗「わ、私もだ。出番が減る」

大吾「僕なんて重原より出番ないんだぞ！　ここで少しは出演させてくれ！」

小坂「あたしも正直、出番がないからなぁ……」

圭介「お、お前ら……まあ、全てはキャラを増やし過ぎた作者のせいだな」

暮葉「過去作見るといつもこんな感じですけどね、進歩がないのですね！」

伊吹「あんた達自虐ネタやめなさい！」

第67話，戻ってきた平穏（？）な日常

あれから数日が経過した、俺も暮葉もいつも通りの日常を適当に満喫していた。
明智も、最初は早川に勝ったなんて信じていなかったけど、どうやら少しは安心したようである。
そして事件の後の休日、暮葉はアルファ隊の戦死者の葬儀の為に一時レムリアに帰還。
ただし、翌日にはいつもの元気な顔を見せ帰って来てくれた。

そして……現在、7月1日の金曜日。
いよいよ7月。7月と言えばテストも終わってお気楽な気分である時期だ。
それと同時に文化祭も近づき、その準備で少しずつ忙しくなる時期でもある。

「文化祭なんて、ぶっちゃけ5人の女の子がステージで演奏すればいいよな！」

「うっせ黙れ！　てめえはけ○おんのアニメでも見てろ！」

「まあまあ二人とも。だったらいっその事天下一武道会でも開いたらどうだい？」

「この武道オタクがっ！　ンな危なっかしいの出来るかっ！」

大体、もう文化祭でウチのクラスが何をやるか、とっくの昔に決まった事じゃねえかよ。
文化祭でやる事は大体、どこの学校も6月か遅くても7月のアタマ

には決まっているハズである。
うちの学校の場合、6月のうちにさっさと決めちゃうようであり、既にクラス委員を中心に話しあいが行われ、その結果ありがちすぎる喫茶店をやる事になったのだ。

「い、伊吹……そんなに清水〇太好きなの？」

「な、なによ変！？　歌の歌詞もいいし、なにより声が最高じゃないっ！」

「もきゅう……拙者は音楽聴かないからよくわからないのです……っ」

「まあまあ、音楽の趣味なんて人それぞれだから」

「あ、亜紀さんはどんなの聞くのですか！？」

「あたし？　あたしは結構ロックとか聞くけど」

……まあ、ウチのクラス委員ってのがあの小坂で、小坂はクラスでも発言力のある女子だ。
その取り巻きにも伊吹や暮葉などの人気者がいるし、そもそも我がクラスは女子の人数の方が多い。
男子にも黒木ら三馬鹿や大吾と言った、いわゆるうるさいヤツはいるのだが……。
それでも、人数的に必然的に女子のほうが発言力があって……。

「はぁ、どうせならコスプレ喫茶とかがよかったね」

「重原……無理だろ。うちのクラスの場合女には勝てねえよ」

「大体それでいいじゃねえか。僕的には、三次元の女の子がコスプレしても何の意味もないと思う！」

「お前は色々な意味で特殊なんだよ！」

この完全二次元派め！

なんでも三次元はクソと言いやがって、二次元は確かに素晴らしい。だが、二次元では決して出来ない事がある……三次元の女の子は抱けるじゃねえか！

とにかく……お、俺は完全に三次元を捨てる事ができないっ！

「も、もしかして清水〇太聴いてるの私だけっ！？」

「すみません……その、ＣＤ貸してくれたら聞いてみるのですっ」

「暮葉、無理に伊吹に合わせようとしなくてもいいと思うよ。あと伊吹も音楽の趣味は本当に人それぞれだから」

……で、その三次元女子達でよく話す暮葉達だが、どうやら音楽トークで盛り上がっているようだ。

まさに健全。さっきからオタク談義ばかりしている俺らと違って本当に普通だ。

「そういえばさ、圭くんとか色々いるけど、男子って音楽なに聞いてるんだろう？」

「どうせ圭介なんてアニソンばっかだと思うわよ」

「そうですよ！　けーすけ様がアニソン以外聞くとは思えないので

すよっ！」

クソッ、伊吹と暮葉め……まあ、確かに大体合ってるけどさ。
これじゃあ俺が重度のオタクみたいじゃないか。また、確かに重度のオタクなんだけどさ……。
これでも一応身だしなみには気を使ってるんだからね。
毎日お風呂には入るし無駄毛処理は完璧。制服以外に私服だって結構いっぱい持ってるんだぞ。

「う～ん、こりゃ本人から聞いたほうが早いかな」

「さ、三馬鹿は嫌だからね！」

伊吹さん、ホントに三馬鹿が嫌なんですね。
というか三馬鹿は何処に行ったんだろう。アイツら元ヤンだけによく学校サボるしなぁ。
多分、今日も街中のゲーセンで遊んでいるんだろう。

「大丈夫大丈夫！　圭くん達に聞くから」

「け、けーすけ様達にですか！？」

「ま、まあ……悪くはないわねっ」

「よし決まり！　ちょいとそこの野郎ども～！」

野郎共って……俺達かよ！
俺達に音楽の話を聞いてどうするつもりなんだろうか。
俺は基本、ゲーム音楽とかアニソンくらいしか聞かないし、大吾も俺と全く同じであろう。

そもそも俺の妹もどちらかと言うとオタクだから、ごく普通の音楽ってのがよくわからない。
重原はアニソンは聞くだろうが、他の曲は古いのしか聞かなさそうなイメージだしなぁ……。

「ん、皆さんどうしたんだい？」

「突然だけどあんた達ってどんな曲聞くの？」

本当に突然だな、小坂のその質問……
まあ俺は横で聞いていたから、どうせそんな質問だろうとは思っていたけど。

「そんなの放〇後テータイムに決まってるじゃなイカ！」

「だ、大吾……っ」

若干引き気味の伊吹と小坂。まあ一般人として普通の反応であろう。

「そもそも普通の歌はクソなんだ！　ほとんどが何かのパクリじゃないか！　それに比べて……ああ、なんて完成度が高いんだ放〇後ティータイム！　僕はもう一瞬で唯ちゃんのファンになったね！　そして同時に唯ちゃんは僕の嫁だ！　唯ちゃんこそ全ての救世主なんだ！　唯ちゃんがいればどんな困難だって乗り越えられるさ！　唯ちゃんＬＯＶＥ！　唯ちゃんマジ天使！」

途中から唯に対する愛を叫んでるだけになってんじゃねーか！
どこが音楽の話だよ。音楽の話なんて前半のちょっとだけじゃねえか。
どんだけ大吾は唯が好きなんだよ。そこまで愛を叫ぶほどですかっ！

確かに唯は可愛いよ。可愛いけどさ……俺の中ではアズにゃんが一番――げふんげふん！

「大吾、相変わらずキモいわ……っ」

「大吾さんはホントにアニメ好きなのですね」

「いや、もうこれ病気のレベルだと思うよ？」

引き気味の伊吹に関心する暮葉、そして病気の大吾を心配する小坂。

まあ、正直に言おう……これはひどいとしか言いようがない。

「もういいわ、重原はどんなの聞くの？」

後ろで唯への愛を熱く叫ぶ大吾を無視し、気を取り直すかのように伊吹が重原に質問した。

「俺はどっちかって言うと、海外のロックとかよく聞くよ」

「へぇ。あたしもロック好きだけどどんなの聞くの？」

「そうだねぇ、俺は――――」

小坂と重原。ロックが好きという事で意気投合した様子である。

しかし意外だなぁ。絶対重原は古い曲が好きだと思っていたけど。

まあ、ロックと言っても別に今の曲とは限らないしな。

それにしても意外だ。重原はロックと言うより爽やか系だと思っていたのに。

「けーすけ様はどんなの聞くのですか！」

「え、俺？」

「どうせ圭介だからアニソンよアニソン。圭介の部屋にアニソン以外のＣＤってそんなに数はなかったハズよ」

「なんで知ってるんだよ！　泥棒みたいに家の中漁ったのかよ！」

「ほらやっぱり。それを言うって事はアニソンしか聞いていない事は、肯定してるようなものよ」

ぐっ……クソッ、ゲーム音楽とかアニソンしか聞かないのは事実だ。事実なんだけど……なんだかムカつく！

結構小馬鹿にされている気がしてならないぞ。こうなったら……知ったかぶってやる！

でも音楽とかよくわからないし……一日勉強する必要があるな。

だけど明日は休日だし……あ、そうだ。いい事を考えたぞ。

「じょ、上等だゴルァッ！　明日カラオケ行ってみるか！？」

「え？　どうしたのよ。そんないきなり……？」

「カラオケ行って歌えたら知ってるって事だよな？　知ってるって事は聞いてるって事だよな？」

「た、確かにそうだわ……で、でも無理はしなくてもいいのよ？」

「無理なんかしてないっ！　これでも一応聞いてるんだからな！

それを明日証明してやる！」

まあ……実際は伊吹が聞くような音楽に関する知識は、一切なかったりで……。
伊吹の言う通り、結構無理をしていたりするのである。
それに気付いたのか、暮葉が俺の袖をくいくいって引っ張ってきて。

「ん？」

「だ、大丈夫なのですか？　けーすけ様……ホントにアニソン以外もＯＫなのですか？」

ヒソヒソと語り掛け、俺を心配をしてきたのである。

「あたりまえだろ。俺は大吾とは違うんですよっ」

俺は小声でそう返し、暮葉を安心させてあげようとした。
まあ確かに知らないよ。でも今日一日で覚えればいいじゃないか。
そして見せてやろうじゃないか。俺がアニソン以外も聞くって事をな！
……まあ、伊吹に馬鹿にされたくないから、うまく知ったかぶろうとしているだけだけどね。

「わ、わかったわ……っ。あんたとカラオケ行くのも初めてな気がするし……そ、その代わりっ、アニソン歌ったら罰ゲームで翌日言う事なんでも聞いてもらうからねっ！」

「ＯＫ上等だ。じゃあ俺がアニソンを全く歌わなかったら……伊吹も翌日俺の言う事聞くんだぞ？」

「わ、私もっ！？」

突然驚いた伊吹。彼女の頬が同時ぽんっと赤く染まった。

「あたりまえだろ？　じゃないと不公平だろ？　心配しなくてもよ、俺が伊吹に負けたらちゃんと伊吹の罰ゲームを受けてあげるから」

「っ……わ、わかったわ。じゃ、じゃあ明日カラオケ行くわよ……っ！」

「お、おうっ」

明日カラオケへ行くことを決めた伊吹に、俺は調子のいい事を言ってみせた。

やばいぞ……言っちまった以上は伊吹の奴隷にならない為にも、頑張って今時の音楽を覚えねえと。

でも、そもそも俺はそういうのがよくわらない。

他人に訊くと言う手段もあるが、このやりとりを見ているクラスのヤツには聞けないな……。

そうだ……音楽の話なら部活のみんなに訊いてみよう。

みんな、どんな音楽を聴いているのか――――

第67話，戻ってきた平穏（？）な日常（後書き）

後書きトークコーナー

大吾「唯ちゃんの為なら死ねる！　この世は唯ちゃんの存在があるからこそ存在しているようなものだ！」

圭介「てめえはまだ唯に対する愛を叫んでるのかよ！」

大吾「圭介は嫁に対する愛を叫ばないのか！？」

圭介「叫ぶのはネットと脳内だけにしておくっす……」

大吾「愛が足りない！　足りないぞ！」

圭介「そういう問題じゃねえだろ！　好きなのはわかるけど、実際に教室で叫んだらただの痛い子じゃねえか！」

大吾「まったく……これだから三次元を捨て切れないアマは……っ」

圭介「三次元を完全に捨てるのもどうかと思うわ！」

大吾「大体こんな世の中に期待して何の得がある！　不条理かつ不合理なこの現実……僕は、もうとっくの昔にこの世界を捨てた。僕は二次元世界の神だ！」

圭介「確かに二次元はいいよ、俺も好きだよ。でも、だからって現実世界を捨てるのはマズいだろっ！」

大吾「いいや！　僕は捨てた、後悔は全くしていない！」

圭介「せめて1秒でも後悔しろっ！」

二次元ｖｓ三次元……この二つの世界の戦いは、未だに続いている。

第６８話，♪おんがく♪

放課後、困ったぞ……考えてみれば今日は部活の活動日じゃない。
あかりも浅間部長も早々にバイト。二人の家計は苦しいし、邪魔だけは絶対に出来ないな。
暮葉はあのやりとりを見ていたし、葵はオタク系女子だから多分アテにならない。
生駒のせいで学校内で明智に近寄るのは難しいし……というか、個人的に生駒が嫌だ。

こうなったら……そうだ、青山さんを探そう。
青山さんなら話題に乗ってくれるかもしれないしな。
というわけで、俺は青山さんを探すために一年の階へと移動した。

「あ、あの……先輩っ？」

「おわっ！？」

さて、青山さんを探そうかと思ったその時だ。
誰かが甘く幼く澄んだ可愛らしい声で俺を呼びとめる。
先輩……そう俺の事を呼ぶのは青山さんだけなハズ。
という事は青山さんだな。青山さんだと予想しながら振り返ると――

――

「す、すみませんっ。その……驚かせちゃいましたか？」

「やっぱり青山さんだったのかぁ。全然大丈夫だよ」

「いえいえ、その……すみませんっ、いきなり話し掛けちゃって」

そういえば、青山さんから話しかけられるのはなんだか珍しい気がするかも。

「だから全然大丈夫だよ。それに俺、丁度青山さんに用があったから」

「ふぇ？　わ、わたしに御用……ですか？」

「おう、実は頼みごとが……」

「た、頼みごと……ですか？」

首を傾げる彼女に思わず、胸がドキッとしてしまった……。

一般青少年の俺にソレは破壊力高すぎるっす……っ！

って、青山さんにデレデレしている場合じゃないぞ。それよりも青山さんに事情を説明しないと。

まずはそっからだ。いきなり『好きな音楽は何？』と聞いても、青山さんは多分困惑するだろうし。

――そんなわけで、青山さんに事情を細かい所まで説明してあげた。

「そ、それって……先輩の自業自得ですよね？」

「小馬鹿にされたくなかったんだよ。ちょっと見栄を張っちまったんだよ」

「……ぷっ、ふふっ」

ええ！
わ、笑われた……１００点満点の笑顔で笑われたぞ！
「ちょ、青山さん？」
「っ！？　す、すみません……っ！　でも……意外と子供な所もあるんですね、先輩っ」
「子供言うな！　泣けてくるでしょ！」
「すみませんっ。でも……お気持ちはわかりますよ。オ・キ・モ・チは」
「なんでお気持ちって所を強調するの！？　それ以外はわからないのかよっ！」
「ソ、ソンナコトナイデスヨ？」
素晴らしい笑顔だ。でも言葉がカタコトであった。
フッ……笑うがいいさ。どうせ俺は見栄っ張りのお子様な性格してますよ。
だって……伊吹に馬鹿にされるのって傷つくんだもん。
「それで、青山さんはどんなのを聞くのかな～って」
「う～ん……ＢＯＭＰとかでしょうか？」
「な、なんすかソレ？」

「え～っと……ロックバンドですっ」

物静かな青山さんがロックとは……い、意外や！
大人しそうなイメージとは違って、意外とそういう系のものを聴くのか。
小坂が聞くならなんとなくわかるが、青山さんがロック……なんつーか、ギャップ萌えだ！

「青山さんってロック聴くんだね」

「え、え!?　お、おかしいですか……っ!?」

「そんなことはないと思うよ。音楽の趣味なんて人それぞれだし」

「……せ、先輩はホントにアニソン以外聴かないのですかっ？」

「元々音楽に興味がなかったというか、アニソンはなんとなく聴いていたら気に入ったというか……まあそんな流れで結果的に、アニソンしか聴かない状態になっちゃったんだよ」

「そ、それでアニソンばかりに……っ」

「お、おう……そうなっちまったんだよ」

その結果、アニソンとかゲーム音楽に関しては大吾もビックリなくらい詳しくなったよ。
ただし、普通の音楽に関しては全然話についていけなくなってしまったのである。
正直今何が流行っているのかも、どの曲が全国的に有名なのかも俺にはわからない。

たとえ歌手やバンドの名前を知っていたとしても、どんな曲を歌ったりしているのかがわからない。
なんつーか……高校生としてどうかと思う感じである。
まあ、アニソンだってよくオリコン上位にランクインしているらしいし、神曲もいっぱいだけどな！

「それで……そのっ、先輩は今度カラオケに行くのに、それだといけないと……？」

「いけないというか、アニソン歌ったら罰ゲームというルールが出来ちゃったんだよ！」

「……それ、皆さん知っているような定番のものでもダメなんでしょうか……？」

「多分ダメなんじゃね？　伊吹のヤツ、アニソン歌ったら罰ゲームって言ってたし」

「それは……オタクの先輩には厳しいですねっ」

よかった……青山さんが理解ある人で本当によかった。
まあ、あれだけ毒のある部長を間近に見ていれば、少しは耐性がつくのかもしれない。

「どうしよ……調子のいい事言っちゃって、結局は恥かくだけなのかな」

「だ、大丈夫です先輩……っ！　その……先輩さえよければＣＤ……貸しますよ？」

「ほ、ホントか!?」

「はいっ。親に内緒で買ったCDが丁度あるんです……っ」

「親に内緒？　ロックって親に内緒にするものだっけ？」

「い、いえっ！　普通は違うと思います。その……わたしの家、お父様が厳しいのでっ」

「そ、そうなのか……っ」

ロックを聴いただけでお説教って、本当に厳しい親父さんだな。
確かにロックを聴く人は不良と思っている人もいるらしいけど……。
それでもロックは老若男女、幅広い層に支持されているハズである。
ロック聴いたくらいで説教する親父、しかも青山さんのお父様って……。
青山家、一体どんな家庭なんだろう。まあ、家庭の事情とか色々あるわけだから聞かないでおこう。

「そ、それでどうしますか……っ？　その、借りてくれるとわたしも助かりますっ」

そっか……自分の手元からCDが離れるもんな。
親父さんに見つかる心配もなくなる。聞けないのは残念でも、リスクは確かに減るよな。
それに、明日うまく知ったかぶる為のいい勉強道具になるかもしれない。

「わかった、それじゃあちょっとだけ借りようかな？

「……っ！　あ、ありがとうございますっ！」

「おう、次の部活の時にでも返すね」

「は、はい……っ！　あの、これ……どうぞっ」

青山さんが鞄から取り出したのは、確かにＢ○ＭＰのＣＤであった。
本当に聞くんだな……そしてケースが綺麗な事。
家でも親父さんに見つからないよう、厳重に保管されているんだろうなぁ。

「おう、ありがとな」

「いえいえ……っ、先輩のお役に立てたならその……わ、わたしも嬉しいです……っ」

頬をぽっと赤く染め、少しもじもじとしながら青山さんは言ってきた。

「そ、それじゃあその……今日はそろそろ帰らないと、お父様がうるさいので……っ」

「ああ、わかった。また来週な」

俺がそう言うと、青山さんはニコニコと笑いながら手を振る。
よっぽど時間がないんだろうか、『また来週』という言葉はなかった。
ただ、俺にはあの手を振るというのが『また来週』という意味に感じた。
多分、タイミング的にそれで合っているハズである。

やがて青山さんは手を振り終え、背を向けてゆっくりと立ち去っていく。
靴音が空しく響き渡る中、俺はただ彼女の後姿を見送っていた。

「やっぱり不思議な子だよなぁ……」

出会いの時から既に謎が多いとは思っていた。
でも、今日はそんな数多き青山さんの謎に、新たな謎が追加された気がするよ。
その中でわかった事は二つだけ。青山さんもロックを聞くこと、そして家の事で苦労している事だ。

「けーすけ様〜っ！」

元気な声が聞こえる。この声は間違いなく暮葉だ。
ただし、二人分の靴音が聞こえるあたり、暮葉一人で来たわけではないようである。

「あ、いたいた。お兄ちゃん探したよ？」

「あれ、暮葉に……あれ、誰だっけ？」

「ひどいっ！　実の妹が存在しなかった事になってるよ！？」

もう一人は葵であった。
一年の教室が並ぶ階まで来たっていうのに、青山さんも葵も背後から現れた。
なんだか、ちょっとだけ不思議な気分だな。

「泣くなよ、軽いジョークだって」

「でも拙者達、けーすけ様を探していたのは事実なのですよ」

「そうなのか？」

「だってだって！　今日は部活がないからお兄ちゃんの教室まで行ってみたら……お兄ちゃん、どこにもいないんだもん！」

帰りのＳＨＲが終わった後、すぐに青山さんを探しに行ったからなぁ。

多分、葵とはどこかですれ違ってしまったのだろう。

「そうか、悪かったな。ちょっと青山さんに用があったから――」

「ち、千早に？　ハッ！？　お兄ちゃん……まさか千早にえっちな要求を！？」

「してねえよ！　兄貴を犯罪者みたいに扱うなよ！」

「あははは っ！　そんな事より帰ろーよお兄ちゃんっ☆」

あの純粋そうな笑顔……葵の事だ、きっと裏があるに違いない。

それでも何故か憎めねえ……妹効果（シスター・エフェクト）ってここまで強烈なのね。

まあいいか。こういう扱いを受けるのもいつもの事だ、もう慣れっこですよ。

「けーすけ様っ！　帰りましょうっ！」

「……そうだな！」

とりあえず、今日の所は家に帰るとしようかな。
この後、俺達は何かと盛り上がりながら帰宅したのであった――――

第６８話，♪おんがく♪（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「さて、今回は重大発表があります」

伊吹「どーせいつものアニメ化詐欺とかゲーム化詐欺でしょ？」

圭介「ち、違うぞ！　今回はマジだ！　ほら、活動報告で第二回『夏の感謝祭』やるっていってたじゃないか」

伊吹「知らない人は知らないわよね……それ」

圭介「……い、いつ始まるんだと思っていた人もいるハズだよ……多分！　もう7月も半ばを過ぎちゃいましたが、いよいよ『夏の感謝祭』、本格開催です！」

伊吹「まずなにをするのよ？」

圭介「短編あげたり夏のホラー２０１１に参加したり、ネタバレにならない範囲で読者様の要望を番外編でやろうと……」

伊吹「そ、それで最初はなにを……っ？」

圭介「まず最初に、キャラクター人気投票をやろうと思うんだ！期間は今から８月３１日までの予定です」

伊吹「な、長いわねっ！」

圭介「一応夏の間が投票期間の予定だからな。ちなみに投票場所は←です」

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

圭介「読者の皆様はどのキャラクターが好きでしょうか、もしよかったら投票してみてください！」

伊吹「どーせ票なしで終わるんでしょ……」

圭介「コラ伊吹っ！　ネガティブな事言うなっ！」

※読者の皆様のたくさんのご投票、お待ちしております！
そして、見事一位に輝いたキャラは――そのキャラの短編を執筆しようと思います！
どうかよろしくお願いします！

第69話，やんちゃっ娘参☆上！

7月2日土曜日早朝。
……ああ、緊張してきた。一晩かけて勉強はしてきた。
青山さんから借りたCDだって何度も聞いた。
見たいアニメだって録画で我慢する勢いで、俺は今日のカラオケで歌うために勉強をしたんだ。
でも……イザ本番で上手く歌えるか心配である。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃ～んっ！」

「ぐ、ハァッ！」

その時、元気のいい声と共に、体中の骨が折れるんじゃないかという勢いで女の子が抱きついてきた。
明るい髪色のショートカットにちょこんとサイドテール。Tシャツにハーフパンツ。大きな瞳と弾けるような笑顔。
藤島葵。俺のブラコン妹様のご登場であった。

「お兄ちゃんおはよーっ！」

「あふぉっ！　もう少しで骨折する所だったぞ！」

「そうですよっ！　けーすけ様が壊れちゃうのですよっ！？」

暮葉も葵の背後から現れ、休日なのに何故か一家三人が玄関に集結してしまった。
しかも、三人とも私服姿である。どうやらみんな何処かへ出かける

ようである。

「はぁ……で、葵は何処に行くんだ？」

「ゲーセンだよ！　今日はM〇Oの公式大会の日だから、葵も参加してみる！」

葵はよくゲームの大会に出場しては、いつも好成績を残して帰還してくる腕のいいプレイヤーである。

俺もゲームは得意なほうなんだけど、それでも対戦で葵に勝った事は一度もない。

一部では“神”と呼ばれ崇められている葵。

その努力を現実で役に立つ事に回せば、多分葵は今頃天才と呼ばれていた事だろう。

ちなみに、葵が参加しようとしているM〇Oの大会とは、その名の通りM〇Oというゲームの大会だ。

「そ、そうか。頑張れよっ」

「うん！　優勝は7泊8日イタリア旅行2人分だから。お兄ちゃん……もし優勝したら葵と二人で行こうね！」

「……」

前言撤回、是非とも全国の強豪に負けてください。

というか、どうしてゲームの大会に優勝したくらいでイタリアに行けるんだ？

しかも7泊8日って……ただの旅行にしては滅茶苦茶長い気がするぞ。

……そのイタリア旅行ってさ、もしかしてシチリアのマフィアのボ

ッタクリなんじゃねえのか？

「けーすけ様！　拙者は亜紀さんの家へ行くのですけど……その、大丈夫なのですか？」

「う～ん、多分大丈夫じゃないか？」

暮葉の俺を心配する言葉に、俺はそう答えた。
暮葉は多分、今日のこのカラオケの事を心配しているのだろう。
でも、多分大丈夫なハズである。この日の為に青山さんからＣＤを借りたり、ニヤニヤ動画でテキトーな曲を検索して聴いたりしたからな。
多分、今の俺ならＮｏアニソンでもイケるハズである。
そして伊吹、俺に勝負を挑んだ事……たっぷりと後悔させてやろうじゃねえか！

「もきゅ、でもけーすけ様。アニソン以外というのが条件なのですよ？」

「お、お兄ちゃんカラオケ行くの！？」

「伊吹とな。あと昨日勉強したからアニソン禁止でも多分ＯＫだよ」

「む、無理だよ！　アニソン禁止なんて辛すぎるよ！」

そりゃあ葵はどちらかと言うとオタクだからな。
というか、俺だってアニソン禁止は辛いよ。
だから昨日寝る間も惜しんで音楽聴きまくったんじゃねえか！
おかげでブラックアウトしそうなくらい眠たいぜ……っ。

「もきゅ、心配なのです！　けーすけ様がアニソン歌っちゃって、伊吹さんの尻に敷かれちゃいそうで恐ろしいのです！」

い、伊吹が暮葉に鬼嫁扱いされている！

まあ確かに、お仕置きという理由で引っ掻かれそうな気がするけどね。

伊吹の引っ掻き……猫ちゃんみたいで可愛いんだけど、正直されているこっちは痛いんだよな。

やられた後はヒリヒリするし、出来れば避けたいものだ。

「そうならない為にも頑張るから」

「応援してます、負けないでくださいね！」

「が、頑張ってお兄ちゃん！」

「おう、んじゃあ俺はそろそろ行くからな」

「気を付けてくださいね、けーすけ様っ！」

――――こうして藤島家を後にした俺は、伊吹との待ち合わせ場所である……。

「……」

自宅玄関から僅か数メートル。

家を出るとすぐに見える、我が藤島家の目の前にある電柱へと向かった。

向かうと言うか、家を出たらすぐそこなんだけどね。

そんな近すぎる待ち合わせ場所には、既に彼女が電柱によっかかり

ながら待っていたのであった。

「な、なによ……っ？」

少し頬を赤く染めながらも、むっとした表情で振り向いてきた伊吹。
風に靡く白銀の髪と、最近は中々お目にかかれない私服姿がとても美しい。
でも、現代の女子高生としては小柄な体躯を持つ伊吹。
八重歯があったりと、美しい女性というよりは可愛い女の子だ。
俺はそんな伊吹にゆっくりと近寄り――――

「よぉ、待ったか？」

「ま、待ったもなにも家の目の前よ？」

「どうせここで待ってるんなら家にいればよかったのに」

「う、うっさい！　どこで待ってようが勝手でしょ！」

顔を赤くしながら、今にも噛みつきそうな勢いで怒鳴りつけてくる伊吹さん。
う～ん。やっぱり中々デレないものですなぁ。
一瞬ようやくツンデレになったかと思いきや、やっぱり伊吹はツッパリのままであった。

「で、まだ開店時間までしばらくあるけど、その間どこで暇潰す？」

「そうね。とりあえず市街地まで行ってみる？」

「そうだな、街中に行けば何かあるだろうな」

というわけで、俺達はカラオケの開店時間まで古宇坂の街中で時間を潰す事にした。
古宇坂市自体人口は１３万人程度に過ぎないので、大した遊び場があるわけではない。
それでも、街中に行けばここら辺よりは暇を潰せる場所があるだろう。

「……」

俺の隣をてくてくと歩く伊吹。
……そういえば何年ぶりだろうな。
登校する時や下校する時は何度か並んで歩く事はあったけど、こうして遊ぶために伊吹と歩くのは中１以来な気がするぞ。永渕の一件以来、俺達は話はしても一緒に遊んだりはしなかったからなぁ……。

――――やがて歩いていると、気付けばそこは古宇坂駅前であった。
意外と大きな駅舎の前にあるロータリーには、今日も数代のタクシーが停車している。
一応古宇坂市の中心駅なので、規模はそこそこ大きいのである。

「さて、ここまで来ちまったけど」

「ど、どうする？　まだ１時間くらい時間があるわよ？」

……え～っと、これはアレだな。
どうして１時間も早く来てしまったかというと、俺達があまりにも張りきり過ぎたからである。
はあ……張りきり過ぎるのもよくないよね。こういう失敗だってた

まにはあるから。

「とりあえず、そこのデパートにでも行ってみる？」

一応デパートは数分前に営業を開始した所である。
今行けばきっと品ぞろえは豊富、食品を見てもしょうがないとは思うが、ブランド物の服とかなら結構揃っているハズである。
服とかなら俺も伊吹も十分に楽しめるハズである。

「そうね……時間を潰すには丁度よさそうね」

「それじゃあ、ちょっとあそこに行ってみ――――」

と、言いかけた。

「オイお前っ！」

瞬間、なんだか軽そうな男に俺達は声を掛けられてしまった。
男は半そで半ズボンで、盛った金髪にネックレスという……いかにもチャラい感じの人であった。
ああ、この時点で俺はわかったよ。きっとコイツは伊吹をナンパしに来たに違いない。

「なんですか、貴方？」

「随分可愛い彼女連れてんじゃねえかよ？」

「な。なによあんた。別に私は圭介の彼女じゃないわよっ！」

「へぇ～彼女じゃない？　じゃあお前さぁ、その子俺にくんねぇ？」

「なんでですか？」

「だって付き合ってるワケじゃねえんだろ？　だったらさぁ、俺と遊んだって問題ねえよなぁ？」

うわぁ……なにこのラノベでありがちな展開は。
しかも小者臭が半端ねぇ。不良が怖いハズの伊吹でさえ強気な態度である。
そしてなにより男の腕……細っ！
見た目は派手でチャラいけど滅茶苦茶弱そうだっ！

「いや、問題大アリだろ！」

「アァ？　なんだよテメェ……もしかしてこの俺に喧嘩売っちゃうわけ？」

「今の会話の流れでどうしてそうなる！？」

あとアンタ、弱そう何だから無理するなよ！
伊吹でさえジト目で呆れて見ているぞ。
……全く、こういうのって弱い癖にしつこいから面倒である。
どうしようかな、一番手っ取り早いのは倒す事だけど……流石にそれをやると色々問題だしなぁ。
第一、無駄な体力を消耗したくない。あと、警察沙汰になるような事はしたくないぜ。

「け、圭介っ、行こう？」

「え？　あ、おうっ」

俺がそう答えると、伊吹は俺の左手をぎゅっと握ってきた。
そして、俺は伊吹に手を引かれるまま、この場を去ろうとしていた。
……まあ、そうだよな。こういう馬鹿は相手にしないに限るぜ。

「おいおいテメェら無視しちゃってんじゃねえよ？　やっぱ喧嘩売ってんのか！？」

ああうぜぇ……でも相手にしないほうがいい。
仮に殴られたとしても、俺の身体は普通の人より丈夫である。
だから、あんな普通の人に何発殴られようが平気なハズである。
一方的に暴行され続けていればそのうち警察も来て、自然にアイツが悪い事になるだろう。

「待てって言ってんだろうがこの野――ぐぁぁぁぁっ！」

……え？
今、なんか後ろからさっきのチャラ男の悲鳴が聞こえたぞ？
俺と伊吹は流石に気になったので、後ろを振り向いてみた。
するとそこには――

「こらぁ～圭太ぁっ！　あたいの友達に喧嘩売るなよなっ！」

「いでっ！　ちょ、このチビ姉貴っ！」

「誰がチビだこの厨二のチャラ男！　早く家に帰れよなっ！」

「あ、ぐぁぁぎゃあぁっ！　ちょ、悪い！　悪かった姉貴！　もうヤメテェェェェッ！」

あ、姉貴……？

なんだかよくわからないけど、そこにはチャラ男にキャメルクラッチを掛けるあかりの姿があった。

……え～っと、色々言いたい事はあるが一言だけ言わせてもらおう。

「……なにこれ、どういう事だ？」

第69話，やんちゃっ娘参☆上！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

後書きトークコーナー！

作者「今日は0時の予定がいつもより更新が遅れて申し訳ございません！　いきなりの腹痛と腰がいきなりつったように痛くなったりともうボロボロで……っ」

圭介「言い訳はもうどうでもいいよ！　それより今日は重大発表があるんだろ？」

作者「そうでした！　実は……コラボのお知らせです！」

圭介「え？　コラボしてくれる優しい人いんの？」

作者「コラッ！　失礼な事言わない！　実は只今開催中の夏の感謝祭ですが、それでｋｕｘｕさん執筆の『Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙ』とこの『魔法少女に会っちゃった場合』のコラボをやる事になりましたので、ここで報告させて頂きます！」

圭介「ネタかと思ったけどマジなのかよ!?」

作者「マジです。許可もとってあります！　出来れば7月中にコラボ番外話をあげたいな～と思いますので、皆様よろしくお願いします！　そしてコラボを提案してくださったｋｕｘｕさん、本当にありがとうございます！」

第７０話，カラオケ♪

カラオケ開店１５分前、ここはデパート内にある休憩所である。
休憩所と言っても、ベンチが複数あるだけの簡単なものだけど。
あの後、あかりも入れた俺達はデパートに入り、ここで途中から入ってきたあかりと話をしていた。

「え、えぇっ!?　今の弟さんだったの?」

「そうだ、残念すぎるだろ!」

確かに残念すぎる……というか、あれがあかりの弟だったのか。

「確かにお前の弟、グレているとは言っていたけど……」

「そうなんだよ、あたいと変態兄貴はアイツの食費を稼ぐ為にも必死なんだからな」

……そりゃまあ、御苦労さまとしか言いようがない。
本当ならお世話もしたくないんだろうが、一応浅間圭太（あさまけいた）という人物は、アレでも元気の中学生なのである。
少なくとも、義務教育を受けている間は世話をしないといけないのだ。
ただでさえ浅間家は家計が苦しいのに……ホントにお疲れっす！

「ところで圭介、な～んであんたはあかりの家の事情を知ってんのかしら?」

伊吹が拳を握りしめ、笑顔で俺へと迫ってくる。

その笑顔が軽くホラーだ、紫色のオーラさえ立ちこめている気がするぞ。
今の気分は大国に圧力をかけられる小国の首相だ。

「ちょ、伊吹少し落ちつこう！」

「そーだぞ伊吹！　圭介はあたいを助けてくれたんだ。べ、別に深い出来事はなかったんだからな！」

ていうか、お前らも地味に仲良しになってるな。
いつの間に名前で呼び合っているし、先輩後輩とかそんな上下関係を微塵も感じねえ！
今の2人はまるで、昔から近所に住んでいて、姉妹のような関係になった二人のようであった。

「ほ、ほんとなの？」

「ホントだよ、別に大した事情はねえよ」

「……わかったっ」

どうしましょう、伊吹が少し落ち込んでしまった。俺、何かコイツに悪い事言っちまったのかな。
これから遊びに行く所なのに正直この空気は重すぎるぞ？
仕方ない……俺が適当に話を振ってこの空気を――――

「あ！　そーいえば二人はどこに行く予定だったんだ？」

この重たい空気をぶち壊す為に話を振ろうとした瞬間、あかりが先に話を振ってきた。

俺がやろうとした事を、あかりが真っ先にやってくれたのである。
ナイスだ、あかり！

「俺達はこれからカラオケに行く予定だけど？」

「そ、そうよ！　お互いの明日を賭けた戦いよ！」

「明日をかけるって……面白そうだな！　あたいも混ぜてくれると嬉しいな！」

あかりは瞳を輝かせ、おねだり光線を俺へと放ってきた。
その眼差しに俺は……ぐふっ、これは勝てませんっ！

「あかりも来るか、別にいいけど？」

「えっ！？　ちょ、圭介！　話が違うわよっ！」

怒ったり落ち込んだりまた怒ったり……伊吹は忙しいヤツだなぁ。
まあ、確かに最初は二人きりの予定だったし、当初の予定とは違うよな。
とりあえず、あかりをパーティーに加える為にも伊吹を説得してやらないと。

「別にいいだろ。本人も行きたがっているし、折角なんだからさ」

「で、でも……っ」

「ん～、多分人数は多いほうが楽しいんじゃないか？」

それに正直、あかりが来てくれるのは俺としても助かる。

こっそりあかりに何を聴いているのか、あかりの好きな音楽を聞き出せそうだからだ。
そして、その聴きだした音楽をテキトーに知っていると誤魔化し、上手く合わせて一緒に歌う……。
この完璧な作戦！これからＮｏアニソンでも数時間歌えるハズだぜ！

「……わかったわよ……っ」

伊吹は渋々と、あかりのパーティー加入を認めてくれた。
よかったぁ……でも何故か機嫌を悪くしちまったなぁ……。
仕方ない、後でお昼に焼きそばでも奢ってあげよう。

「圭介！　今から行ったら数分待つだけで開店時間になるハズだ！」

「ホントかあかり？　……そういえば、もうそろそろ開店時間だな」

「うん、行こうか二人とも！」

「そうだな。伊吹、行くぞ？」

「う、うん……っ」

こうして俺達は休憩所のベンチを立ち、これから俺にとっては戦場になるであろう、恐怖のカラオケへと歩み始めたのであった。それにしても伊吹のヤツどうしたんだろうか？
さっきから全然元気がないんだけど……まあ、カラオケに行ったら少しは元気になるかな？

「二人きりがよかった……圭介と二人きりがよかった……っ、３人なんかやだ……っ」

や、ヤバい。よく聞こえなかったけど独り言を呟いている！
伊吹さん……まさかのツッパリからヤンデレへのジョブ変更！？
とにかく恐怖しか感じねえ。こりゃ何としても機嫌を直してもらわないと……っ！
……それと、後で聞いた事だけどあかりはカラオケが好きらしい。
だからカラオケという言葉を聞いた瞬間、張り切って行きたくなったんだとか。

――――カラエケ店【ドックアイ】
どこにでもあるごくごく普通のカラオケ店だ。
特徴と言えば、看板に二匹の可愛らしい犬がいる事くらいであろう。
店内にはカラオケルームはもちろんのこと、ゲーセンまで存在していてゲーセン目当てお客さんまで店内にいたりと、意外と混んでいる店なのである。

到着とすると普通の部屋を2時間取って、一応マラカスやらタンバリンやらをせっせと運び込んだ。
……まあ、ただ歌うだけだからな。使い道があるかどうかは微妙な所だけど。
2時間って結構短いものだけど、人数はたったの3人である。
多分、思っているよりは長く歌えるハズであろう。
さてと……部屋にも入った事だし、そろそろ俺も曲を入れようかな。
つい何時ものノリでアニソンを入れちゃわないよう、気をつけて操作しないと――――ピッ。

【ｏｎｌｙ　ｍｙ　○ａｉｌｇｕｎ】

しまったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！
初っ端から大失敗だ。いつものノリでアニソンを入れてしまった！
もうダメだ。俺は明日……伊吹の奴隷確定だ！
……でも、入れてしまったものは仕方がない。泣きながらこの熱い神曲を歌ってやろうじゃねえか！
もうヤケクソじゃヤケクソ。さあ伊吹よ、早速アニソンを歌ったとして失格扱いするがいい。
そして――明日は俺を奴隷にするがいいっ！

「け、圭介！　よくわからないけどソレカッコいい曲だな！」

「ほ、ホントだ……圭介がアニソンじゃないの歌ってるっ」

――――え？
あれ、案外女子からのウケがいい……というか伊吹さん、これ普通にアニソンなんですが？
某学園都市アニメのＯＰなんですが。俺の大好きな佐〇涙子さん大活躍なアニメなんだけど。
……そうか。アニソンかアニソンじゃないか、その判断をする為には元ネタを知っている必要がある。
オタクじゃないので伊吹は――この曲の元ネタを知らない！
それに、伊吹のアニソンのイメージというのは、とにかく妙に声が高くて早口でオマケに歌っているのは声優さんというヤツなんだろう。
要するに……それ以外のヤツならアニソンでも誤魔化せるというワケか！

「～～～～～～っ！」

俺が見事に某学園都市アニメのＯＰ曲を歌い上げると……。

――――信じられない事に拍手が沸き起こった。

「盛りあがる曲だったしうまかったな！」

「圭介っ！　これなんて曲なの？　か、歌手は誰なのよっ？」

「……南〇愛乃さん？」

あ、しまった。そういえばこの人声優もやってるじゃん。

……まあ伊吹の事だ。後でじっくり調べるなんて事はないだろう。

「……っ、まあ圭介にしては頑張ったじゃないっ」

「は、ハハッ！　見たか！　俺だってアニソン以外歌えるんだからな！」

……実に悲しい演技である。神様、どうか後でアニソンだって事がバレませんように。

さて、どうでもいい話かもしれないが、伊吹とあかりは俺を挟むように両側に座っている。

伊吹は俺の左側、あかりは俺の右側だ。

俺から歌い始め、左に行ってから右に戻るという順番なので、次に歌うのは伊吹である。

伊吹の歌声なんてそんなに訊いた事がないな。伊吹って歌上手いのかな？

そんな歌唱力が謎の伊吹が入れた曲は、清水〇太の【アイシテル】。

とりあえず、清水〇太の名前なら俺でも知っている。

伊吹が愛してやまない歌手らしい。多分、俺が好きな曲とは違って至って健全な曲を歌う人だろう。

……一度写真見たっけ、結構イケメンなヤツだったしな。
まあ、どうせ俺みたいな凡人が勝てる相手ではないだろう。

「♪～～～」

それにして……う、うまいぞコイツ。
伊吹のヤツ、実はド下手かと思ったけど……滅茶苦茶歌上手いじゃねえか。
俺は原曲聴いた事はないけど、伊吹の歌唱力はもうプロでも通用しそうなレベルである。

……歌い終わった伊吹は、自分の好きな歌手の歌を上手く歌えたからだろう。
なんというか、いつもは中々見せない爽やかな笑顔を浮かべていた。

「うまかった！　原曲並に上手かった！」

「えっ？　えぇ！？　そんな……っ、私なんか原曲には全然……っ」

「謙遜する事ないだろ、フツーに上手かった！」

「あ、ありがとうっ」

なんかあの二人通じあってるし！
しかもあかりさん、一応原曲知ってるのね！
……どうやら、アニソンやゲーム音楽以外に関心がないのは俺だけのようである。
さてと、次はあかりだな。あかりはカラオケが大好きらしいし、という事は歌うのも大好きなハズだ。
きっと素晴らしい歌を披露してくれることであろう。

あかりが入れた曲は、B〇MPの【天体観測】。
コイツもB〇MP聴くのかよ！どんだけウチの学校で人気なんだっ！
まあそれはともかく……期待のあかりの歌唱力は――――！

第７０話，カラオケ♪（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

後書きトークコーナー

圭介「どうしよう……」

暮葉「どうしたのですかけーすけ様っ！？」

圭介「ＰＣの容量がそろそろギリギリなんだ」

暮葉「もきゅ？　で、でしたらいならいデータを削除すれば……？」

圭介「それが出来ないんだよ！　ＴｏＨｅ○ｒｔ２とか○ａｎｏｎとか！　古いゲームでも消すのはもったいないんだよ！」

伊吹「またエロゲーか！　この変態ばか圭介っ！」

第71話，はたして勝者は――？

……

……

……は？

こ、ここはどこだ。俺は今までどうしてたってんだよ？

そういえば知らない天井だ。いや、知っていると言えば知っている。

何故なら大吾達とはよく【ドッグアイ】に来るからだ。

そうか……ここは【ドッグアイ】なのか。そういえば俺達はカラオケに来ていた気がするな。

確かアニソン禁止と言う縛りプレイで……それで、俺と伊吹が歌い終わってあかりが歌い始めて……。

「はっ！？　そ、そうだった……っ」

そういう事だったのか……。

とりあえず、俺の横でぐったりしている伊吹を起こしてやらないと。

「おいっ！　起きろ伊吹！　しっかりしろ！　まだあの世に行くには早いぞ！」

とりあえず伊吹の肩を揺さぶり、彼女を起こそうと頑張る俺。

その努力が向かわれたのか、伊吹はようやく目を覚ましキョロキョロと周りを見渡し始めた。

そこで彼女もここがカラオケである事に気づく。何があったのかを考えている様子で……。

「っ！？　け、圭介っ！　あの……あの悪魔のボイスは！？」

どうやら、彼女は全てを思い出したようである。

「心配するな。もう終わった……終わったんだ」

「ホントなの？　ホントに悪魔の雄叫びは終わったの？」

「ああ、大丈夫だ。もうあの雄叫びは――――」

「あぁぁんたぁぁぁらあああぁぁぁぁぁっ！」

俺の声を斬り裂いたのは、ただ一人ピンピンしているツインテールの女の子である。

ガオオと言わんばかりに口を大きく開けている。どうやらお怒りの様子だ。

「なんであたいが歌い始めたと同時に気絶するんだよ！　しかもあたいを悪魔みたいに扱うなよな！」

「ちょっ！　おまっ、くるぢぃっ！　胸倉掴むなっ！」

まだあどけなさが残る女の子に、胸倉を掴まれる男子高校生……。

多分、これほどシュールな光景は中々お目に掛かれないだろう。

気分は不良にカツアゲされる気弱な少年だ。

「だってみんなしてあたいを悪魔扱いするんだもん！　圭介だけは……圭介だけは信じてたのに！」

「信じてたのかよ！？　ついでに伊吹も信じてやれよ！」

「私はついでかいっ！」

しまった、伊吹がついでという何気ない言葉に腹を立ててる。

「いや、その……すみません伊吹さん。つーかあかり、そろそろ手を離そうぜ？」

「その前に質問！　なんであたいが歌ったら気絶するんだ！　あたいはマイクカー○ィか！」

「似たようなもんだったぞ？　お前……歌ヒドすぎ」

声デカい音遭ってない妙に響くの三拍子。

歌というよりは騒音であった。近くで１５５ｍｍ榴弾砲を撃つようなさいかも。

下手すりゃあかりの歌声は……大和の４６ｃｍ砲の砲声に匹敵するかもしれない。

とにかく……これならまだジャ○アンのほうがマシだ！

「あ、あたいが……１０年も掛けて生み出した芸術なのに！」

「芸術というより必殺技だろ！」

しかも１０年もカラオケ通ってるのかよ！

もしかしてあかりは１０年間、こんな間違いまくっている歌い方をしてきたのだろうか？

「必殺技……あ、なんかそれカッコいいな！」

「それで納得するなよ！？」

「必殺技……昏睡の狂声（ボイス・ザ・ボイス）なんてどーだ！」

「お前、絶対厨二病だろ……」

ちなみに、俺も中学生の頃はバリバリの厨二病だったな。
その頃にやっていたネトゲのハンドネネームは、もちろん厨二チックなものであった。
確か……？古宇坂の夜天光？だったような……ああ、思い出しただけで痛い。

「そ、そんな事より次は圭介の番よ！」

「え？　あぁ……そういえばそうだったっけ？」

確かに、あかりの次は順番的に俺だったな。
あかりのジャ○アン・リサタイル騒動のせいですっかり忘れていたぜ。
そうだそうだ、じゃあさっさと歌を入れねえとな……今度は間違ってアニソンを入れませんように。

【未○への咆哮】

ぎゃあああああああああああっ！
ま、また間違えた。ついノリでアニソンを選んでしまった！
さっきは上手く誤魔化せたけど……今度は上手くいくかわからねえぞ。
ま、まあこの曲は元々エロゲーのＯＰだし、多分伊吹達も元ネタ知らないだろう。

……でも、あかりは兄貴が浅間部長で、浅間部長はオタクでしかも１８歳で合法的にエロゲーを。
まずい……あかりが兄貴の影響で知っている可能性がある。
でも学園都市ＯＰを知らなかったからなぁ。神様、どうかあかりがこの曲を存在を知りませんように。

「～～～っ！　～～♪」

とにかく、選んじまった以上は仕方がない。
演奏停止を選択すると伊吹に疑われてしまう。
……ならば、最後までノリで歌いきる事だけを考えろ――――！

「――――♪」

俺はノリで歌い続ける。この曲エロゲーの曲じゃないか……という疑いは出てこない。
よし、あかりも伊吹も元ネタを知らないらしい。
……だ、だよなぁ。だって二人ともエロゲーをプレイするような柄じゃないし。
ちなみに俺はこのゲーム、１８禁版と全年齢版の両方を持っているぞ。
とまあ……そんなどうでもいい情報はともかく。

「～～～～～っ！」

――――サビを歌え終えると、伊吹とあかりが拍手をくれた。
どうやら元ネタがバレる事もなく、二人は妙に熱くてカッコいいこの曲を気に入ったらしい。
……まあ、この調子だと俺の不正がバレるのも時間の問題か。
でも、この局面さえ乗り越える事が出来ればそれでいい。

それにこれは元々エロゲーの音楽だ。アニソンと似たようなものかもだが、正確には全然違うもの。
ゲームとアニメを一緒にしちゃいけないぜ！

「圭介！　今のも熱くてよかった！　もう歌手になるオーディション受けちゃえよな！」

「ま、まさか圭介が二曲続けてアニソン以外を歌うなんて……しかもちょっとカッコいい曲っ」

「は、ハハハッ！　ま、まあ俺が本気を出せばこんなもんだよ！　ハハハッ！」

言えねえ……エロゲーの曲だなんて今更言えねえ……っ！
まあ、バレたら伊吹の奴隷確定だし、もうこのままでいいや。

――――それから、1時間と数十分が経過した。

「圭介も伊吹もすっごいうまかった！　あたいには敵わないけどな！」

「そ、そうね……っ」

「ああ、あかりには敵わないな……」

あかりの必殺奥義、昏睡の狂声（ボイス・ザ・ボイス）に勝てる日は永遠にないだろう。
あの全てを破壊し尽くすような歌唱力、とてもじゃないが俺には真似できないぜ。
……カラオケで2時間、無事に歌い終えた俺達。

現在、俺達3人は【ドッグアイ】の出入り口の前で屯っていた。

「あかりはこの後どうするんだ？」

「んん～、もう少し遊びたいけどあたいはこれからバイトだからなぁ」

「バイトなの？　それじゃあ……仕方ないわねっ」

「バイト頑張れよ。またな、あかり」

「んみゃ！　明日の為にちょっと働いてくるからなっ！」

まるで戦争に行く兵隊さんのように元気よく叫ぶと、くるっと向きを変えて次第に遠ざかって行った。

あかりにとって、バイトとは大変重要な意味を含むものだ。

浅間家は母親が退院したとは言え、家計が苦しいのは相変わらずの話である。

だから、浅間家の明日の生活の為に――彼女は今日もバイトで汗を流している。

可愛い外見とは裏腹に、あかりは皆が思っている以上に苦労をしているんだ。

「……さて」

「……っ」

あかりが去ると、急に伊吹がしょんぼりとした様子で俯いてしまった。

何故なら――今日のカラオケ対決の結果は――

「ん、どうしたんだ？」

「なんでもないわよ……そ、それより罰なら早く言ってちょうだいよ！」

「罰？　あぁっ」

全てを思い出したぞ。

俺がアニソン以外を歌い続ける事が出来た場合、伊吹が明日俺の言う事を聞くんだったっけ？

確か、そんな条件だったような気がするな。

「は、早く言いなさいよ……そのっ、なんでも受けて立ってやるんだから……っ」

……伊吹のヤツ、本気で罰を受けるつもりだったんだ。

俺へ向けられる強い眼差しのせいか、痛いほどに伊吹の本気の気持ちが伝わってくる。

伊吹の言葉は間違いなく冗談じゃない。今、俺が冗談を言えば確実に落ち込んでしまうだろう。

だから俺は――――

「わかった。罰を言うよ……」

「……っ！

瞳を閉じ、ビクッと一瞬震えた。

怖いんだろうか、伊吹は俺に何をされるのか……不安で仕方がない

のだろう。
俺に恐怖している伊吹に、俺は――――

「あ、明日は……好きにしていいぞ？　それが罰だっ」

真っ直ぐ。
どこまでも素直に。
俺はちょっと不器用ながらも、本当に思っている事を伊吹へ言ってやった。

「……え？　ど、どういう事……なのよ？」

「どういう事って、言葉のままだよ。明日は好きにしていい、伊吹の自由だって言ってるんだよ」

「そ、それっ！　罰にはならないでしょ……？」

「あのなぁ……俺がビクビク震えている女の子に、罰だと言ってひどい事をするヤツに見えるか？」

「び、ビクビクしてないわよ！」

よかった。
こんな風に怒って突っかかってくるあたり、伊吹はいつも通り元気な様子だ。

「とにかく、明日は伊吹の自由。俺に縛られる必要なんて全くないんだぞ？」

「……け、けいすけ……っ。あ、ありが……と……う」

「ん、今なんて？」

“あり”までは聞きとれたが、そっから先は声が小さすぎて聞きとれない。

だからもう一度聞こうと、言葉を返してみたのだが。

「……な、なんでもないわよ！　そろそろ帰るわよばか圭介っ」

「へいへい……っ」

ダメでした。伊吹はやっぱり何も言ってくれなかった。

相変わらずだな……伊吹はいつものツッパリ伊吹ちゃんである。

――――でも、なんでだろう？

俺の前を歩く伊吹は時々、俺のほうをチラチラと見てくるのだ。

その時に見える伊吹の横顔。なんだか頬がほんのりと赤かったような……。

……結局、伊吹が何を想っているのかよくわからないまま、俺は自分の家へと戻ったのであった。

第７１話，はたして勝者は――？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

後書きトークコーナー

あかり「アッカリ～ン！」

千早「あ、あかり……どう、したの……？」

あかり「よくわからないんだ。ただ、あたいのエロ兄貴が最近あたいの事をこう呼ぶんだよな」

千早「……あかり、悪い事は言わないよ。今のうちに部長を……施設に送ったほうがいいよ？」

あかり「んみゃ？　あたいは昔から兄貴を収容所送りにしたいと思ってるけどな！」

――その頃、浅間部長は。

浅間部長「ボクの妹の影が薄くなりませんように、アッカリ～ン！」

圭介「俺、ゆ○ゆり見た事ないんだけど……」

第７２話，恋バナ　暮葉ｓｉｄｅ

小坂家、１０階建てマンションの８階に亜紀さんは住んでいます。
拙者は本日、亜紀さんに誘われてこの家まで来ました。
拙者と亜紀さん他には、何故か明智殿や生駒さんの姿もありました。
今、この四人で色々と駄弁りながら過ごしています。

亜紀さんの部屋はけーすけ様の部屋よりも狭い気がしますけど、けーすけ様の部屋よりも片付いていてとっても綺麗です。けーすけ様も見習ってほしいくらい綺麗なのです。
綺麗なのにちゃんとポスターもありますし、本棚にもいっぱん本があります。
本当に、亜紀さんの部屋は理想の部屋と呼べるものです。

「こ、こらすみにゃん……っ。く、くっ付くな……っ」

「えへへっ！　いいじゃんナギちゃん……んん～っ」

「はいはい、あたしの部屋でいちゃつき禁止ねー」

「明智殿も生駒さんも相変わらずなのですっ」

本当に仲よしなのですね。あのお二人はいつも抱き合っています！
……若干明智殿が嫌がっている気もしますが、でも仲良しである事には変わりありません！
本当に仲のいいお友達って、ああやって抱き合ったりするのですね。
せ、拙者も……けーすけ様と抱き合った方が、お友達としてよろしいのでしょうか？

「おかしいなぁ。フラグを立てて行けば抱きつくと喜ばれるってギャルゲーしたんだよ？」

「わ、私とギャルゲーのヒロインを一緒にするなよ。それに私はノーマルだぞ？」

「そんな！　私はガチ百合なのにっ！」

「すみにゃん……そんなの、ちっとも誇れないと思うぞ？　あ、あとくっ付くな！」

けーすけ様は……どうなのでしょう。
拙者が抱きついたら喜ぶのでしょうか？
お友達として、抱きついてあげたほうがよろしいのでしょうか？

「えへへ～、でもさナギちゃん。ナギちゃんって男の人と付き合った事ないよね？　ホントにノーマルなの？　実はガチ百合だったりするの！？」

「つ、付き合ったことはないけど……でも本当だ！　私は本当にノーマルだぞ！」

……って、これじゃあ拙者がけーすけ様に抱きつきたいみたいじゃないですかっ！
にゃ、なんででしょう。変態さんみたいな事を考えているのに……嫌な感じじゃないのです。
……拙者とけーすけ様がお友達になってからでしょうか。
最近です、拙者はずっと……変なのです。
なんかこう、胸がもやもやして落ちつかないのです……っ。

「私は男なんかと付き合いたくないもん！　ナギちゃん一筋なんだよ！」

「あはは、愛されてるねぇ～凪紗は」

「あ、亜紀……別に嬉しくないぞ」

「またまたーっ！　ナギちゃんはツンデレだね♪」

拙者だったら。もしけーすけ様に愛されていたら……。
って、なんでここでもけーすけ様なのですかっ！
け、けーすけ様は護衛対象。そして大切なお友達なのです！
……はぁ。拙者は一体、けーすけ様に何を求めているのでしょうか……？」

「……な、なぁ。亜紀と木下はそのっ。男と付き合った事……あるのか？」

「付き合ったこと？」

「もきゅ？　だ、男女交際……ですか？」

明智殿、いきなりどうしたのでしょうか？
お顔が少し赤いのです。それで、いきなり男女交際のお話なのですか……？

「あたしは……一回だけあるかな？」

「もきゅ！？　ほ、ホントなのですか！？」」

「い、意外だ……っ」

「す、すごい！　亜紀って付き合った事あるんだね！」

亜紀さんの回答に一同驚き。

だって亜紀さん……全然男女交際とかに興味がなさそうでしたし……っ。

「そ、それで。どうだったんだ？」

「ん？　別に何もなく終わったけど？　中学の時だったかなぁ。野球部の人に告白されて、先輩な上に相手が本気すぎて断りづらかったからＯＫしてみたんだけど。でも……やっぱりあたしはその人が好きになれなくって……結局キスすらしないで３日で別れちゃったっ」

「は、早っ……！　それって付き合ったうちに入るのか？」

「ど、どんまいなのですっ」

「亜紀に３日で振られるって……やっぱ男ってクソだね。で、３日の間にエッチはしたの？」

「するわけないじゃん！　手すら繋いだ記憶がないし……っ」

明智殿の言う通りなのです。亜紀さん……それってホントに付き合ったうちに入るのでしょうか？

でも、亜紀さんファーストキスもまだみたいなのです。

その上の階段も登っていないみたいなのです。

よかったぁ……って、何が良かったのかサッパリわからないりです

けど。
というか、人の失恋をよかったなんて言う拙者。最低なのです……っ！

「き、木下はどうなんだ？」

「もきゅ？　拙者も明智殿と一緒なのです」

そもそも、元々の世界で通っていた学校が女子校だったのです。
男の人と付き合う機会なんてなかったのです。
拙者は……恋がよくわかりません。
経験も機会もなくて、どういうのが恋なのかサッパリなのです。

「そっか……皆意外と経験少ないんだなっ」

「ナギちゃん、それ経験豊富な人が言うセリフだよ？」

「すみにゃんだって男嫌いな癖にっ」

とにかく、今日わかった事は……皆さん意外と付き合った事とかないのですね！
明智殿も生駒さんも亜紀さんも、みんな綺麗で可愛いのに。
……あれ、伊吹さんはどうなのでしょうか？
ちょ、ちょっとだけ亜紀さんに訊いてみましょう！

「あ、あの！　伊吹さんは付き合った事とかあるのですかっ？」

「え？　伊吹はないと思うよ。あの子、キツい事言うようで圭くん一筋だしねぇ」

「もきゅ！？　け、けーすけ様の事を……っ？」

「伊吹がその……ふ、藤島に？」

「え？　そうなんじゃないの？　だって伊吹って圭くんがあたしらと二人きりで話してると、いっつも機嫌悪そうに拗ねてるじゃん？」

それは確かに……伊吹さん、けーすけ様の事好きみたいな行動してますけど。

で、でもでもホントなのですか。伊吹さんがけーすけ様を狙っているって……？

……な、なんでしょう。この妙なもやもやは……っ。

もきゅう……わからない、わからないのです。

「あんなクソ介のどこがいいんだか。ナギちゃんの好きな人は当然私だよね！？」

「え、わ、私は……別に好きな人なんて……っ」

「はは～ん。もしかして凪紗の好きな人って圭くんだったり？」

「ち、違う！　藤島は友達だっ。あ、あんな変態恋愛対象なんかに……っ！」

そうは言ってますけど、明智殿……顔が真っ赤なのです。

……明智殿も伊吹さんみたいに、けーすけ様の事が……？

もきゅぅっ、わからない。どうして拙者が変な気分になってるのでしょう？

なんか、気に入らないって思っているのはなんでなのでしょうか……っ？

「あんのクソ介ぇ～！　ナギちゃんを虜にするなんて……やっぱ陸上部で監視すべきだったかも！」

「だ、だから私は別に藤島なんて……～～～っ！」

「あはは、真っ赤だね！」

「うぅ……亜紀はどうなんだ？　す、好きな人とかいるのか……？」

「あたし？　ん～～……好きな人の検索結果は０かな？」

もきゅ……よかった、亜紀さんはけーすけ様の事、男の人として好きってわけじゃないみたいなのです。

……あれ、そういえば拙者。どうしてそれがわかった瞬間安心しているのでしょうか？

「そ、そうか……木下は？」

「もきゅ！？」

「木下は好きな人、いたりするのか？」

「せ、拙者も好きな人はいないのです！」

多分……というか絶対なのです！

そもそも、アルファ隊でけーすけ様護衛という任務中に、誰かを好きになるなんてありえません！

恋なんてしたら……し、仕事が捗らないのです！

もきゅう……そういえば、恋をするとどんな感じになっちゃうのでしょうか？
それから……さっきからやたらと脳内に出てくるけーすけ様。
どうでもいい場面ですら、脳裏に浮かぶけーすけ様の姿。
さっきから……一体なんなんでしょうか？

わからない、全然わからないのです……。

第72話，恋バナ　暮葉ｓｉｄｅ（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

大吾「さて、今回のオマケは野郎共の恋愛話だ。ちなみに僕は三次元に興味ナシ！　二次元なら最近はもう平〇唯ちゃんにハマリまくりで（ｒｙ」

圭介「もう唯への愛はいいわ！　皆はどうなんだ？」

重原「俺は付き合った事とかないね。あんまり興味もないし」

大林「僕はまぁ……色々だ色々！」

赤佐「モテないんやなぁ俺」

黒木「伊吹ちゃん一筋だし。つーかテメェはどうなんだよ？」

圭介「失恋3回、クソもモテません……リア充とイケメン死ねぇっ！」

大吾「所詮、現実（リアル）などそんなもんだ！　それに比べて僕の唯ちゃんは永遠に僕を愛してくれて――――」

圭介「画面の中の女子は誰でも愛せるけど、別に愛されるわけじゃねーだろ！」

重原「まぁ、二次元と三次元は完璧好みだよね～」

第７３話，マトモに活動？

翌週月曜日。
いつものように乙坂が帰りのＳＨＲを勝手に進め、いつものように気付けば終わっていた。
さてと……放課後だな。今日は確か部活の活動日だった気がするな。

「圭介、今日あんた部活？」

「え？　ああ、そうだよ」

「なんだ、部活か……っ」

どうしたんでしょうか伊吹さん。
何故か、俺が部活だと言うと落ち込んでしまった。
……ていうか、伊吹も剣道部の試合が近いとかで、最近は部活が忙しかったりするんじゃないのか？

「今日、お前も部活なんだろ？」

「え？　そ、それはそうだけど……っ」

「だったら一緒に帰ろう。俺もお前も部活やってんだから、多分一緒に帰れると思うぞ」

「……っ、わかったわよ。暮葉もいるし……そこまで言うなら仕方なく一緒に帰ってあげる」

伊吹は不機嫌そうに腕を組み、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

やれやれ……相変わらずと言えば相変わらずだ。
ホントに伊吹は素直じゃねえな。いつも嫌々言いつつ絶対一緒に行動するもんなぁ。
まあ、それは暮葉の存在があるからこそなのかもしれないが。

「けーすけ様っ！　そろそろ部活に行きましょう！」

「お、そうだな」

そろそろ行ってやろう。1年生三人組も変態浅間部長も待っている事だろう。
それに今日はどうやら、写真部始まって以来のマトモな活動らしいしね。
というわけで俺達は今日も皆が待っているであろう、写真部の部室へと向かったのである。

――――なんてことのない教室棟に存在する写真部の部室。
普通の教室の半分程度の大きさの部屋。
室内にあるテーブルの上にはＰＣ、隅っこに並べられている机にもスキャナとプリンタ。
中央のＰＣが乗っているテーブルの周りには、いつもの部活のメンバーが勢ぞろいであった。

「ちーっす」

「こんにちは！」

テキトーに挨拶をしながら入る俺と、その挨拶を返すいつものメンバー。

中でも、しつこく俺と話をしようとしてきたのは妹の葵だった。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん！　遅いよ待ちくたびれたよ！」

「悪い、ちょっと今日はＳＨＲが長引いたんだよ」

俺は謝りながら、不貞腐れる葵の髪をくしゃくしゃと撫でてあげた。
葵は目を細めて、気持ちの良さそうな顔で俺に凭れかかってきた。

「にひひ～っ、なでなでしてくれたから許してあげる！」

「そっか、ありがとうな」

よかったよかった。葵が機嫌を直してくれて……。
で、葵は俺達が遅れた事に対して不貞腐れていたようだが、その原因はというと――――

そう――こんな日に限って乙坂のヤツ、帰りに渡す予定のプリントを忘れやがったのだ。
オマケにその場所すら忘れ、結局クラス委員長の小坂も動員して探すという始末。
結局、プリント自体は見つかり皆の手には渡ったのだが……。
正直、クラスのみんなのイライラは頂点に達していた。
黒木とかはもうキレて暴れてたし……まあ、例によって明智に制裁されていたけどね。

「にゅふふっ。葵さんはホントに」

「ホントだな、兄妹愛ってなんか見ていて微笑ましいよな！」

葵を撫で撫でする俺を見て、暮葉とあかりは羨ましそうな眼差しを向けてくる。
しょ、正直痛いぜ……いい意味で。

「あかりにもその……一歳年上のお兄さん、いるよね？」

「ち、千早。冗談はやめろよな！　あたいはあんな変態兄貴に甘えたくないんだからな！」

「うぅ……どうして藤島君は妹に好かれ、ボクは妹に嫌われるの！？」

あかりのストレートすぎる言葉がよっぽど効いたのだろう。
半ば空気と化していた部長が初めて口を開いた。
それも、泣いているかのように掠れた声であった。
そんな泣いている浅間部長への部員の反応は、それはまあ実に冷たいもので……。

「部長……自業自得だと思います……っ」

「拙者も原因の１００％は部長さんのせいだと思うのです」

「俺もそう思います。部長……今まで何してきたか思い出してください。部室でエロ本読んだりエロゲーやったり、挙句の果てに全裸になる人が慕われると思いますか？」

俺も彼女達が言い終わった後、最期に率直な感想を浅間部長にぶつけてみせた。
それも、浅間部長が犯した罪（一部）を挙げてやったぞ。
俺の挙げた事にあかりや葵もうんうんと頷き、それを見てた浅間部

長は余計に落ち込んでしまった。
いつもならそこで再起不能になる部長。しかし、今日の部長はどこか違った――――

「はぁ……って、落ち込んでいる場合じゃないんだ」

「ぶ、部長にしては……復活早いですね」

「いつもこんなもんだろ？　あたいの兄貴、何気に生命力はゴキブリ並だからなっ」

「浅間部長よりもお兄ちゃんの方が丈夫で打たれづよいもん！」

いきなりキリッと復活した部長に対する皆の反応。
それはもう、ひどいの一言に尽きる。
……どんだけ嫌われているんだ、我が写真部の部長さんは？

「みなさん！　それ以上は部長さんが可哀想なのですよっ」

「そうだぞ。現実女子（リアルじょし）と二次元の女の子に罵倒されるとじゃ、圧倒的に前者の方がショックなんだからな？」

「おお！　二人とも、ボクの味方をしてくれるんだね！」

「いえ、全然、これっぽちも」

「まあ、俺も正直暮葉と同じっす」

「ぬぐわあぁぁぁぁっ！　く、クソゲーだっ！　やっぱり現実（リアル）なんてクソゲーだぁぁ！」

完璧に現実（リアル）に失望してしまった浅間部長。
まあ、こうなったのも殆ど貴方のせいっすよね。
浅間部長……黙っていればイケメンなのに、この男は本当に残念なイケメンである。
ていうか、さっきから浅間部長が叫んでいるだけで、何も話が進んでいない気がするぞ。
仕方ない……ここは俺が、話を進ませるようなセリフを言ってやろうか。

「それで部長。結局写真部始まって以来のマトモな活動ってなんですか？」

「おっといけない。ボクとした事が取りみだしてしまった……ありがとう藤島君！」

「全くだ変態兄貴っ、圭介に感謝しろよな！」

「ごほん、さてと……それじゃあそろそろ説明しよう。もうすぐ初高祭なのは皆理解しているよね？」

初高祭――どうやら、【初芝高校の文化祭】の略らしい。
なんてありがちな……なんて思っちゃったら多分負けだろう。

「もきゅ！　拙者は楽しみなのです！」

「私も……こういう行事は楽しみかな？」

「そうだな、あたいも好きだな！」

「葵もすっごい楽しみなんだよ」

みんな文化祭が楽しみなようである。

葵達1年生はこれが初めてだし、暮葉だって2年生だけど文化祭的な事をやるのは初めてだろう。

俺は正直面倒くさい……だって、別に関係ないでしょって仕事までさせられるじゃん？

去年は俺と大吾と三馬鹿の5人でサボッて、野原先生にぶん殴られたもんだ……。

「うん、その楽しみな文化祭でボクらの写真部はなんと、生徒の勇姿を撮影しなきゃならないんだ」

部長がそう言った瞬間、楽しみムードだった彼女達は――

「しゃ、写真撮影……なのですか？」

「うげぇ面倒くさいっ。兄貴一人でやれよなっ」

「葵も文化祭の準備とかもあるから、当日くらいは遊びたかったのに……っ」

テンションが一気に下がってしまった。

特にあかりと葵の下がりよう。この二人は心底面倒くさいみたいである。

まあそりゃあそうだ。俺だって文化祭は遊んで過ごしたい。

正直、生徒の勇姿を撮れと言われてもねえ……。

「ま、まあ心配するな。全員でやるわけじゃないから」

「ホントか!?　あたいは絶対やらないからな!」

「葵も……やらない方向でお願いします」

早速かよコイツら!?

面倒くさい気持ちはわかるけど、やらないって決めるのが早すぎるだろ!

「拙者もその……亜紀さんや伊吹さんとの約束で、クラスの準備に回らないといけないので」

ああ、そういえば暮葉は今日、クラスでそんな話をしていた気がするな。

こういう忙しいヤツは仕方ないよな……。

しかしどうするんだよ。あかりと葵はやる気ナシで暮葉は仕事で忙しい。

かといって俺も面倒くさい。でも、この展開だとカメラマンになる人は必然的に――――

「あ、あの……部長。わたし……写真撮影やりたいですっ」

写真を撮るのが大好きで、将来プロの写真家を目指している青山さんになる。

そんな事はわかっていた。だが問題は……青山さん、このままだと一人ぼっちだな。

たかが写真撮影だ。大人数で行動したって無意味なのはわかっている。

だけど、流石にぼっちはキツいよなぁ……。

「そうか、ありがたい!　編集はボクがやるけど……でも青山君一

人で大丈夫なのかい？」

……ああもう我慢できん！
青山さんを一人には出来ない。こうなったら俺もカメラマンになってやりますよ！

「部長、俺も青山さんを手伝います」

「え、ふ……藤島先輩っ？」

「おお、ホントかね藤島君！　いやぁ～助かるよ、青山君一人では心細いだろうからね」

どうやら部長も、少しは青山さんの事を心配していたようだ。
俺が撮影隊に志願をした瞬間、浅間部長はどこか安心したような表情を見せたのだ。

「あの……藤島先輩」

「ん？」

「その……ホントにわたしと一緒でよかったのですか……っ？」

青山さんが両手を胸に当て、少しだけおどおどしながら尋ねてきた。

「嫌がる理由なんてないだろ？　俺は青山さんを手伝いたいんだよ」

「……っ。その……あ、ありがとうございます……～～っ」

頬を少しだけ赤く染め、上目遣いをしながらお礼を言ってきた。

だけどお礼を言った後、恥ずかしかったんだろうか、青山さんはすぐに顔を背けてしまった。
……ちょっと待てよ青山さん。その破壊力は卑怯でしょ。
俺、今軽く萌え死にかけましたよ。今の表情は全国の男の子がドキッとするくらい可愛すぎた。

「お兄ちゃんが千早にデレデレしてる……っ」

「な、なんかその……気に入らないのです」

「で、デレデレすんな圭介！」

……なんか、その他の女子の視線が痛いです。
なんでだろう、突き刺さるように痛い……痛すぎる！

第７３話，マトモに活動？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

大吾「二次元妹と現実妹……そう言われてもピンと来ない人がきっと読者にもいるだろう。そこで今日は！　僕がこの二つの違いを教えようではないか！」

重原「まさに誰得コーナーだね……」

大吾「コラそこ！　妹ファンに謝れ！　さて……口で説明するより実物を見たほうがいいね。そこでまず最初に、二次元の妹に限りなく近い行動をする圭介の妹から見て見ようか」

――藤島家。

葵「お兄ちゃん！」

圭介「なんだよ？」

葵「勉強わからないから教えて欲しいなっ」

圭介「お前……勉強得意っつーか学年でも三本指に入るだろ？」

葵「えへへ、バレちゃった？」

圭介「バレバレだっつーの。まぁいいや、たまには一緒に勉強しようか？」

葵「お兄ちゃん！　その……お兄ちゃんのお膝に座りたいなっ」

圭介「あのなぁ！　……ったく、今日だけだからな」

葵「ありがとう、お兄ちゃん♪」

――――一方、大吾達。

大吾「こんな甘えてくる妹が現実にいるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

重原「お、落ちつかないかい大吾！」

大吾「クソッ！　まあ……わかっただろう？　要するにありえない程ブラコンなのがよくいる二次元妹だ。続いてどう見ても現実妹の浅間あかりを見て見よう」

――――浅間家。

浅間部長「あ、あのーあかり？　き、気まずいし……母さんもそこで見てるからね？　少しはお話でも」

あかり「やだ」

浅間部長「……そんなにお兄さんの事、嫌い？」

あかり「黙れ変態兄貴」

浅間部長「あ、あかりさん……？」

あかり「……」

――――一方、大吾達。

大吾「どうして現実の妹ってこうなの！　全っ然可愛くねえ！」

重原「だから落ちつこうよ大吾！」

大吾「やっぱ現実（リアル）はクソゲーだ！　二次元サイコーだ！」

※あくまで大吾の主観です。

第７４話，不思議な青山さん

まだ活動時間中の事だ。
俺はトイレへ行くために一度部室を出ていた。
今はその帰り。用を済ませた俺は部室へ戻る為に一人で歩いていた。

写真撮影かぁ。確かに、写真部に入ってからというものの毎日が談笑。
写真部らしい活動なんてした事がなかったな。
正直、部活として成り立っているのか疑いたくなる。写真部とはそんな部活であった。
……でも、今回は違う。生徒会に頼まれているので学校祭の様子を撮影しなければならない。
初めての活動らしい活動だ。青山さんを手助けする目的で志願してみたけど……責任重大だよなぁ。

「あの……」

その時、俺の背後から澄んだ可愛らしい声が聞こえた。
まるで俺を呼びとめるように――――

「……ん、青山さん？」

声の主は青山さんだった。
しかし、いつも聴いてもいい声だよなぁ青山さんって。
まるでどこぞの声優さんのようである。

「あの……少しお話、してもいいでしょうか……？」

「話？　うん、別に構わないよ」

「あ、ありがとうございます……っ」

どうやら青山さんは俺に話があるようだ。彼女は俺について来いと言わんばかりに歩き始めた。

青山さんの話ってなんだろうなぁ。態々二人きりで話すような事なんだから……ハッ、まさか！

あああああ、愛の告白とかじゃあ！？

……はは……流石にそれは違うよね。でも少しだけ期待しちゃったぞ……っ！

でもそんなわけがないだろう。

何故なら……青山さんに告白イベントを発生させるフラグを立てた覚えは皆無だからだ！

「……あの、先輩……？　顔赤いですけど……？」

「え！？　あぁ気にするな。土日に風邪ひいてただけだから」

「だ、大丈夫ですか……熱はっ？」

「もう治ったよ。仮にあったとしても動く分には何の問題もないから」

「は、はい……その、無理だけはしないでくださいね……？」

「おう……」

畜生……いい子過ぎて今度は涙が出そうだ。

しかしなんとか誤魔化したが、この調子だといずれ俺の内心がバレるかもしれないな。
余計な事は考えないように気をつける事にしよう。
でも、青山さんのお話って本当になんなんだろうな？
……そういえば、俺も青山さんからＣＤを借りっぱなしだ。
丁度いい機会だ、話のついでにＣＤを返そうかな。

――――こうして、青山さんに案内された場所は学校の屋上であった。

初めて来るなぁ屋上って。
そういえば、６月に入ってから一般生徒にも開放してるんだったな。
赤佐がそんな事を言っていた。三馬鹿はよく屋上で屯っているらしいのだ。

「……すみません先輩っ、急にこんな所に呼び出しちゃいまして……」

「別にいいけど……それより俺に話って？」

放課後、屋上、男女二人っきり……普通なら告白イベントが待っているハズだ。
そんな事も見抜けないくらい鈍感ってわけじゃない。
このシチュエーションは間違いなく、エロゲーでもよくある告白イベントだろう。
……と、言う事は……もしかして青山さん、本気で俺に告白を――――!?
ままま、待て待て。いつ青山さんにそんなフラグを立てたんだ！
ありえんっ。ロクなフラグも立てていない相手が告白してくるなん

て……。
そんなの現実（リアル）では絶対にありえない！

「あの……先輩っ」

「お、おう」

「……先輩は苦労人ですよね」

「えっ……？」

突然苦労人って言われた。まあ確かに色々な意味で苦労はしているが。

「いつも一人で罪を被って……いつも誰かの為に奔走して……っ、先輩は無理し過ぎだと思います」

まあ……確かによく言われるけど。
けど、どうして青山さんがそれを俺に……？

「今回だってそうです。わたしを……手伝うって……っ」

「もしかして無理して言ったって思ってるのか？　心配しなくてもあれは本心から言った事だよ」

「わ、わかってますっ！　その……わたしも嬉しかったです……っ、でも、無理はしないでください」

久しぶりかも、ここまで他人に心配された事って。
つい最近までは心配されるどころか、一方的に恨まれる存在だった

からなぁ。
なんだか、心配されるっていう普通の事が不思議な感じだ。

「……無理って、他人から見たら無理しているように見えるかもしれないけど、やってる本人は全然無理していないって事、あるんじゃないかな？」

「えっ……？」

「少なくとも、俺は無理なんか全然してないよ。苦痛とかは感じてないぞ？」

まあ、永渕と戦ったりした時は滅茶苦茶痛かったけど……。
それでも、みんなを助ける事が出来たんだ。
殴られた時は苦痛でも、それをやった事自体は苦痛じゃなかったな。

「せ、先輩……っ」

「ん？」

「先輩は……不思議です。そこまでその……現実と向き合えるなんて、なんだか……不思議です」

その時、青山さんは不思議な表情を浮かべていた。
一応穏やかに笑ってるようには見えるものの、その表情はどこか寂しげで悲しげで……。
まるで、誰かに助けを求めている。今の彼女はそんな感じであった。

「青山さん」

「ふぇ？」

「青山さんのほうこそ、無理とかしてないか……？」

「……っ、わ、わたしは別に無理なんて。毎日を楽しく過ごしてますよ……？」

「そ、そうか……」

その割にはさっきの表情。そして思わせぶりなあのセリフ……。

……ダメだ、心配になってきてしまった。

だって今の青山さん。どう考えても嘘をついているとしか思えないから――――

「……あのさ、青山さん」

「は、はい……？」

「もし何か悩みがあるなら相談してくれても構わないよ」

「え、で……でもっ」

そりゃあいきなりこんな事を言われれば、躊躇するのは当たり前である。

……でも、さっきのあの青山さんを見たせいなんだろうか。

俺はすごく――青山さんが心配で仕方がない。

「大丈夫、俺も悩みがあるなら相談するから。これで俺達は対等だろ？」

「た、対等なんて……わ、わたしは後輩で先輩は先輩ですよ……？」

「先輩後輩とか、そんな上下関係は関係ないよ。妹の大切な友達で、そして同じ部活の大切な仲間の事を放っておけないんだよ」

「……せ、先輩……ありがとうございます……っ」

不器用で、恥ずかしそうに、彼女はリンゴのようにしかも俯いているせいか、前髪で目が隠れて青山さんの目が全然見えない。

「……お、おうっ。あ、あんまり気にしなくてもいいぞ……？」

そうして、しばらくの間の沈黙……。

いかん……こっちまで恥ずかしくなってきやがった。

俺も右手で前髪を引っ張り、手と髪で自分の顔を隠すようにしていた。

頬が熱い……多分、今は俺も顔が赤いかもしれない。

……そ、そろそろ戻ろう。流石に屋上で二人きりでコレは恥ずかしすぎる。

どうやら告白イベントじゃなかったみたいだし。暮葉達も多分部室で待っているハズだ。

「そ、そろそろ戻ろうぜ？」

「……っ！　せ、先輩！」

「ん？」

青山さんにしては珍しい、とても大きな声で俺を呼びとめてきた。
今みたいに大きな声は初めて聞いた。青山さんが珍しく叫んだのだ。
振り向くと、恥ずかしそうにもじもじとしている青山さんがいた。

「……っ！」

その瞬間、何かを決心したように右手を胸に当て、真っ直ぐに俺を捉えてきた。
そ、そんな直視するなよ……恥ずかしいだろ。
でも一体……今度は何なんだろうか？

「先輩は大きな障害があったとしても、突き進む覚悟がある人ですよね……っ？」

「大きな障害？　んん～、まあ程度によるけど」

それが一体どうしたんだろう。
そもそも、大きな障害ってどんな障害なんだ？
物理的な何かか、それとも精神的・身体的な何かなのか……いまいちよくわからん。

「わたし……先輩に迷惑掛けるかもしれません。でも……もう我慢ができませんっ」

「え……青山さん」

なんだ、何が起こってる？
一体なんのイベントが発生したってんだ？

「――好きです、中学生の頃からずっと好きです！」

青山さんの口から放たれた言葉……それは――――

冗談とは思えない――お互いの人生を左右する大事な言葉であった

――――

第７４話，不思議な青山さん　（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「暮葉、世界を構築する三大元素って何だか知ってるか？」

暮葉「もきゅ？　四大元素なら知ってるのですけど……なんなのですかそれ！」

圭介「教えてやろう……神が発見した……三大元素を！」

暮葉「もきゅ！　楽しみなのです！」

圭介「答えは……エロゲーとエロゲーとエロゲーだ！」

暮葉「……エエエエエエエエエエエエエェェッ！？」

第７５話，告白の返事――――

言われてしまった。
生まれてから約１６年と１０ヶ月……いや、来月誕生日だから１１ヶ月か。
俺は人生で初めて――女の子に告白をされてしまった。

「……っ」

恥ずかしそうに片手を胸に当て、イチゴのように真っ赤な顔にいつも以上に潤っている瞳。
そんないつもとは違う青山さんは、恥ずかしそうに視線だけを横に逸らしていた。
それでも逃げる事もなくいつまでも、ずっと告白の返事を待っているようであった。

「……あ、青山さん。今、俺の事……」

「す、好きです……って、言いました……っ」

「えっ、でも中学の時からって……？」

「は、はい……わたしはその……葵達と同じ中学で、先輩の事も中学の事から知っていました……っ」

ああ、そういう事だったのか。
時々青山さんは永渕の件を知っているような発言をしていた理由……。
なるほど、同じ中学だったら確実にあの話は知っているだろうな。

なんせ、俺は全校生徒から暴力魔だと思われていたくらいだ。
……でもあれだけ散々言われていたのに、青山さんだって俺の悪い噂を聞いていたハズなのに……？

「な、なんで？　あれだけ悪い噂が広まっていたら普通……」

「確かに……わたしも最初は怖い人がいるって思っていました」

「で、ですよねー」

「でも……葵から事情を聞いて、僅かな時間を見つけてこっそり……っ」

「それってもしかして……俺を追跡していたの？」

「すみません……っ！　ストーカーだってわかってました……でも気になって……っ」

「別に気にしてないからいいけど……」

というか葵のヤツ、青山さんには事情を説明したんだな。
……いや、一応あかりにも言ったのかもしれない。
でも、あかりは性格的に事実を信じようとしなかったのかもしれない。
だけど青山さんはあかりと違って、ホントかどうか事実を確かめようと……。

「すみません……でも見たんです。先輩がその……階段でお婆様の荷物を持っていて……っ」

「そんな事やってたっけ？」

「し、してました……っ！　この目でちゃんと見ました……っ！」

まあ確かに、時々困っている老人がいたら手を差し伸べたりはするが……。

中学の時にもやってたんだ。んで、それを青山さんに見られていたのか。

しかもお婆様って、すっごい改まった言い方っすな。

「あんまり覚えてないなぁ……でもそんな事してたんだ」

「は、はい。それで……そのお婆様はわたしのお婆様で……っ」

「え、青山さんの！？」

「はい……っ」

身内だったんかい！

でも、おかしいな……身内なのに様付けって。まるで青山さんが圧倒的格下みたいじゃねえか。

それを言ったら暮葉も俺を様付けで読んでいるけど……。

アレ、俺が暮葉の支配者みたいで嫌なんだよなぁ。

でも行っても治らないから、半分くらい諦めているけど……。

「その光景と……その後のお婆様とのお話で、その……確信しました」

「確信？」

「は、はい……その、先輩は親切で優しい人だって……っ」

「……」

あの中学でそんな風に思ってくれている人が、まさかこんな身近にいたなんて。

普通は誰だって俺を嫌がる。そんな空気が校内どころか学校周辺にまで漂っていたのに。

そんな中で彼女はただ一人、俺との関わりもないのに事情を知っていた。

暴力魔ではない俺の姿を知っていた……。

「だから気になっちゃったんです……どうして、あんなに親切な人が悪く言われるのか……先輩は国宗先輩を助ける為に、自らの身を挺しただでしたのに……っ」

「……いいよ。人を助けたって、その過程で永渕を殴った事には変わりない。俺は本物の暴力魔だから」

「そ、そんなっ、ごめんなさい！　その……先輩を落ち込ませるつもりで言ったわけじゃ――」

「大丈夫、わかってるから……」

そんな事はわかっている。それにもう、永渕の件は過去の事なんだから。

今はそんな事よりも、青山さんの告白に対する返事を――

「……せ、先輩はわたしの憧れでしたっ。自由で、でも優しくて、あれだけ先輩に散々な事をやっていたあかりさえ受け入れて……っ」

「そりゃあね、怒ってもしょうがない事じゃん？」

あかりは友達が大切だったからこそ、友達に危害を加える可能性があった俺を遠ざけとした。
友達の為を想ってやっていた事で、別に悪気があるわけではないってわかっていた。
それに……永渕をボコボコにしちまったのは本当の話だ。
あかりに言い返す言葉なんて、全く思いつかなかったよな……。

「……心、とっても広いんですねっ」

「そんな事はないと思うけど」

多分、重原とかでもキレたりはしないだろう。
大吾は多分、これだから現実はクソゲーだって叫びそうだけど。

「……やっぱり、わたしはそんな先輩が……大好きですっ」

「……っ！」

だだだだ、大好きです……だと！？
……初めてだ。葵以外の女の子に好きだって、ストレートにそんな風な事を言われたのは。
すげえ……これからバンジージャンプをするわけでもねえのに、滅茶苦茶心臓がバクバクするぞ。
そして、今まで感じた事のねえようなこの……へ、変な感覚。

「先輩……教えてください……っ！　……先輩の正直な気持ち、お願いします……っ！」

――――青山さんは本気だ。罰告とかそんな遊びではない、ただ……彼女は本気だ。

青山さんとの会話を思い出す限り、青山さんはずっと俺に片想いをしていたらしい。

何年も俺なんかの事を想っていてくれたなんて……。

正直嬉しい。思わずハッスルダンスを踊っちゃいそうだ。

嬉しいって思うって事は――俺、青山さんの事好きなんだろうか？

……いや、よっぽど嫌いな相手でもない限り、男なら告白されて嬉しくないハズがないだろ。

でもこうして見ていると……あ、青山さんって可愛いよな。

見た目ヨシ中身ヨシ。どんな男でも思わず惚れちゃいそうな青山さん……。

やっぱり彼女を見ていると……俺は――――

「あ？　おいおいテメェらそろそろ下校時刻だぜ？　そんな所でよ、恋人ごっこしてんじゃねえぞ！」

荒々しく扉を開け、俺らに説教をしてきた白衣の男。

ったく、空気読めよ野ォォォ原くゥゥゥゥゥン！

野原先生には婚約者どころか彼女すらいない……つまり、独身のオッサンというわけである。

その為、校内恋愛に比較的寛大な教師が多いこの学校の中で、唯一校内恋愛禁止を掲げる男だったりするのである。要するに野原先生は、自分がモテないから生徒が恋愛するのがムカつくだけ。

……校内恋愛反対の理由があまりにも個人的すぎる！

「す、すいません。すぐ帰りますんで……ハハハッ！」

ま、まあ……一応野原だって教師である事には変わりない。
逆らったらまた殴られるだろう。
仕方ねえな……ここは一応従っておくか。

「……せ、先輩っ」

「ん、ん？」

「その……返事はまた今度で構いませんから……っ。気持ち、整理してくださいね……？」

「お、おう……っ」

そう言い残し、青山さんは一足先に屋上を後にした。もしかして、青山さんにはバレていたのかな？
告白の返事、どう答えればいいのかを滅茶苦茶悩んでいた事……。
なんだか、折角告白されたのに悪い事をしたような……というか、悪い事をしてしまったんだろう。
告白されたら即返すのが普通だ。しかも相手は青山さんだぞ？
断る理由なんてないハズなのに……それなのに俺はチンタラと……
ああ、俺ってやっぱ最低だ。

――――そもそも、俺は青山さんの事が好きなんだろうか。
そうじゃないのに告白をＯＫしたら、やっぱり青山さんに失礼だよなぁ……。
……って、そんな事をチンタラ考えていたからこうなったんだ。
やっぱり、俺は最低のクソ野郎だよな……。

「……」

青山さんの野原先生もとっくの昔に立ち去った屋上。
そこでただ一人、俺は脳内真っ白状態で立ち尽くしていた……。

第７５話，告白の返事――（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「何故だ……」

伊吹「どしたのよ、圭介？」

圭介「どうして俺にはボクっ娘で元気な後輩がいないんだ！」

伊吹「そ、そんな事で悩んでたの！？」

圭介「だってボクっ娘後輩で可愛い子がゲームに――」

伊吹「またエロゲーか！　この変態ばか圭介！」

圭介「のー◯るわぁぁっくす！　ぐは……ちくしょ……ボクっ娘後輩……っ、現実にいるんだろうか？」

――その頃、関東地方某所。

？？？「ふぇっくしょん！」

？？？「どうしたんだ、奈々？」

奈々「ふにゃぁ……先輩、なんかボクの噂をされたような気がしま

すっ」

先輩（？）「気のせいじゃねえの？　それより週末皆でカラオケ行かない？」

奈々「いいですよ！　また先輩の微妙な歌が聞けるんですね♪」

先輩（確定）「悪かったな歌唱力微妙で！　これでもクーや吉野よりはマシじゃ！」

第７６話，悩む圭介

あの後、部活が終わって暮葉とか葵とか伊吹とか、その辺の面子で下校した。
……でも、三人の女子が会話で盛り上がる中、俺はただ一人黙りこんでいた。
別に話すのが嫌だからとかじゃない。ただ、単純に悩んでいるだけである。
告白――されたのに、結局返事を言う前に……はぁ、どうしていつもこうなんだよ。
俺がこんなヤツだからだよな。今まで全部相手がリア充で、結局片想いで思っちまったのも……。
というか、そもそも俺は青山さんの事が好きなんだろうか――

「けーすけ様？」

「……」

「あ、あの！　けーすけ様！」

「……え？　お、おう」

気付かなかった。暮葉がいつの間に話を掛けきてくれたようだ。

「完璧上の空でした。体調でも悪いのですか？」

「し、心配するな。ちょっと考え事をしていただけだ」

「もきゅ？　考え事……そ、それってなんですか！？」

「未来の事……？」

……まあ強ち間違いではない。

青山さんの告白にどう答えるかで――俺のちょっと先の未来が変わってしまう。

これは、エロゲー的に言うと重要な選択肢なんだ。

「けーすけ様、未来の事とか考えるのですね！」

「ふ～ん。あんたの脳内っていつもエロ一色かと思ってたけど……違うのね」

「……」

伊吹さんひでぇ……俺、そこまでピンク色な人間じゃないよ？

少なくとも女の子は脚こそ最高とくらいしか……あ、ゴメン、やっぱり脳内ピンク一色かもしれない。

……って、今はピンクい事を考えている場合じゃない。

「お兄ちゃんの未来は葵と結婚してずーっと幸せに暮らす事だよね！」

「アホかお前は！　近親婚は禁止っすよ！？」

というか、今は葵のどうでもいい話に付き合っている余裕がない。

……はぁ、結局俺はどうすりゃいいんだよ。

「ちなみにあんたって何か将来の夢でもあるの？」

「全然ないっすね。しかも思いつかないし……」

正直に答えると、三人とも呆れたような表情で俺を見てきた。

まあ、そりゃあ呆れるだろう。だって、将来の夢が全くないんだぜ？

現実主義ってのもいいかもしれないが、やっぱり人間夢は持つべきかもしれないし。

ああ、青山さんの事もそうだけど、将来マジでなにして暮らそう……？

「……や、焼きそば屋でもやってみたら？　味は私が保証するわよ？」

「あ！　拙者もけーすけ様の焼きそば、すごくおいしかったような気がします！」

「葵もお兄ちゃんの作る焼きそばは大好きだよ！」

「……俺、真面目に焼きそば屋でもやってみようかな？」

でも焼きそば以外は作れないしなぁ。

しかもソース焼きそば限定だ。他の味の焼きそばは正直作った事がないな。

焼きそば屋と言っても、ソース焼きそばの他にも色々出さないと売れねえだろうし。

はぁ……今度の休日から料理の練習でもしようかな？

「ほ、ホントにやんなら……仕方なく圭介の店で働いてもいいわよ？」

「拙者も！　けーすけ様の手助けをしたいのです！」

「葵だって手伝うよ？」

「まだやるとは言ってねえし……つーか、お前ら無理しなくてもいいんだぞ？」

特に伊吹に至っては仕方なくだ。

まあ、伊吹らしいっちゃ伊吹らしいけどね。

でも無理してまで働いて欲しくないし、そもそも焼きそば屋をやるなんてまだ決めていない。

それどころか、就職するか進学するかすら……今が楽しけりゃそれでいいやと思っているのが現状で。

……っと、そんな未来の話はまあ重要だが、今は置いておこう。

それより重要なのは青山さんの告白への返事だ。

「……」

「け、圭介が真剣だわ……」

「もきゅ、あのけーすけ様が真剣だなんて珍しいのです」

「ホントだね。こんなお兄ちゃんはレアだね」

……どんだけ普段不真面目な男だと思われてんだ、俺。

まあ否定しようがないけどね。俺は普段トコトン不真面目に生きているし。

授業中寝たり野原くンとバトルしたり、そんなヤツのどこが真面目なんだよってね。

――――その後、結局女子三人とロクな会話をする事もなく、俺は悩みつつも自宅へ足を踏み入れた。
しかし、自分の部屋ほど落ちつく場所ってないよなぁ。
俺はそんな事を想いつつ、朝から直していない荒れたベッドの上に転がった。
寝る時にでも直しとかないとな……寝相が悪いらしく、毎日の事だけどよく荒れるんだよなぁ。

「はぁ……っ」

いかん、誰かがため息は幸せが逃げるって言ってたな。
誰だろう、最初にあんな事を言ったヤツは？
……まあ、正直誰でもいいんだけどね。そんな事より真剣に青山さんの事、考えねえとな。

♪～♪

あ？
携帯様が鳴っておりますぞ？
……電話か、誰だよ人が真剣に悩んでいる時に……えっ、明智？
明智から電話だと、これまた珍しい。光秀を倒す前以来な気がするなぁ。
そういえば明智とはしばらく会話をしていない気が……って、ンな事考えている場合じゃねえな。
さっさと電話に出ないと相手に失礼だろう。

「もしもし？」

『よ、よかった……出てくれたっ』

「そりゃ出るだろ？　あ、でも寝てる時は出れないかもな」

『うん、寝てるんだった仕方ないな』

それでも、電話をスルーされるのは女の子的にはムカつくんじゃ？
まあ、明智は心が広いって事で納得しておこう。実際明智はいいヤツだしな。

「それで、なんか用か？」

『う、ううん別に。特に要は無いが……最近、藤島と話していない気がして……』

「あぁ、丁度俺もそんな事を思っていたよ」

『お、思ってたのか！　だ、だったら学校で話しかけてくれても……』

「スマン！　その、生駒が……」

『藤島はすみにゃんが苦手なのか？』

「まあ……正直」

ちょっと、というかかなり苦手だ。
正直ガチホモネタでイジられるのは嫌だ。
増してや明智に絡もうものなら、きっとガチレズの生駒は噛みついてくるに違いない。

そういうわけで、学校で明智に話を掛けるのはアルティメット級に難しいのだ。

『すみにゃんを悪く思わないでくれ。私の友達だし、すみにゃんだって悪気があるわけじゃないから……』

「わかってるよ、心配すんなって。別に顔を見たくないくらい嫌ってるわけじゃないから」

『だ、だったら一度、すみにゃんと会って話してくれないか？』

「えっ、なんで？」

『すみにゃんからお前の悪口を訊くと……なんか気分が悪いんだ』

わ、悪口って……アイツ陰口叩いてたんですか！

まあ別にいいけどさ、そういうのは慣れっこだ。しかも、生駒の悪口ってのも大体想像できるぜ。

どうせ俺が明智に近寄る害虫だとか、ガチホモの癖に～とか、そういうくだらん悪口なんだろ？

だったらスルーが一番だと俺は思うんだ。でも……。

「なんで明智が気分悪くなるんだ？」

『えっ！？　あ、ふぁ……べ、別に深い理由（ワケ）はないんだぞ……？』

「そ、そうか？」

『そ、そうだ！　そうに決まってるんだ！』

なんかゴリ押しされた気がするなぁ。
しかし本当に不思議だ。悪口を言われて傷つくのは普通言われた俺じゃないか？
でも、どうしてそれを聞いただけの明智が？
……やっぱり明智って、ちょっとS気味だけど優しいんじゃ？

「仕方ないな、そこまで言うなら生駒と話しとくよ」

『そ、そうか。ありがとうなっ』

「まあ、仲が悪いってのも嫌なもんだしな」

『……あ、そうだ、藤島っ』

「ん？」

いきなり話題を変えようとする明智。
一体今度はどういう話をしようとしてるんだ？
まあ明智の事だし、いつも通り俺を変態扱いするつもりなんだろう。

『お前、青山に告白されたのか？』

「……ブッ！」

オイオイオイオイ待てぇっ！
おかしい、この話は絶対にオカシイぞ。明智って今日の放課後校内に居たっけか？
それ以前に明智は屋上にいたのか？
いなかったとしたらオカシイぜ。なんで明智がその話を……っ！？

『あれ、まさか……図星なのか？』

「ちょーーーーっと待て！　なんでお前がそれを知っている？」

『の、野原先生が廊下でボソボソと……』

「……」

明智に聞かれたって事は当然、他の生徒にも聞かれた可能性があるな。

あの野郎……全校に俺と青山さんの言いふらすとは中々いい度胸だ。

……いつか絶対ギャフンと言わせてやるっ！

『藤島……その話、ホントみたいだな』

「……確かに今日、青山さんに告白されたよ」

『……そ、それで、藤島は青山と付き合うのか……っ？』

なんだか、とても不安げで震えているような声だったな。

明智にしては珍しく弱々しかったような気がするぞ。

とにかく、ここは事実をありのまま伝えるべきだろう――

「いや、野原の乱入で結局保留のままだよ」

『ほ、ホントか！？』

……なんか、超嬉しそうな感じがするのは俺だけか？

ま、まあ気のせいだ。気のせいだと信じておこう。

「お、おう」

『で、でも……藤島、お前は青山になんて返す気なんだ……？』

またしても不安げに……喜んだり落ち込んだり、明智も中々忙しい人だなぁ。

まあ、忙しいからこそわかりやすい。

少なくとも、明智は俺と青山さんがくっ付く事に何らかの不安を抱いている。

その理由はわからないけど、その事だけは多分間違いじゃないと思うんだ。

「俺はまだ自分の気持ちの整理ができてなくて。確かに告白されたのは嬉しいけど、でも……」

『……要するに藤島は、青山に対する恋愛感情がないんだな？』

「え？　な、なんでそれが？」

『言葉を聞いていればわかるぞ』

「流石というか……中々鋭いんじゃないか？」

『こ、これでも推理は得意なほうなんだぞ？』

い、意外や……推理なんて全然関係のない人だと思っていたのに。

まあいいや、俺の気持ちは完全に明智にバレているようだし。

ここから誤魔化したって何の意味もないだろう。

「わかった、負けを認める。確かに告白自体は嬉しかったけど……

恋愛感情はないよ」

あんなに可愛い子に告白されたのに、どうして恋愛感情が沸いてこないんだろう？

生駒の言う通りのガチホモでもないのに。というかそれはありえない。

今までに3度くらい女の子を好きになった事があるし、ホモなわけがねえよ。

でも……なんなんだホントに。

好意を受け入れようとした時、意味不明な気持ちがそれを追いだそうとする。

なんでなんだろう……まさか、無意識に好きな人でもいるんだろうか？

……っ。一瞬、誰かの姿が浮かんだような気がしたけど……気のせいだ、というかありえないだろ！

ないない、俺は別に誰も好きじゃない。でも何かか青山さんからの好意を遮るんだ……。

『……藤島？　藤島』

「……え？　あぁ！　わ、悪い！」

『全く、相変わらず何も考えずに空を見ていそうな男だ』

「……」

すいません。

よく授業中に暇だから何も考えずに青空見てます。

……ちくしょう、なんて鋭いんだ……明智凪紗！

『そ、それで……青山に恋愛感情は抱いていないんだな？』

「あ、ああ。青山さんは好きだけど……それは後輩とか友達とか、そういう意味だよ」

『だ、だったら断れ……私もその……藤島と誰かが付き合うのは嫌だ……』

「えっ？」

『……ッ！　な、私はなにも言ってないぞ！』

最後のほうを聞き逃しちまった。
断れってあたりで話が終わったと思っちまったよ。
畜生、一体明智さんは何を言ったんだろうか？

「すまん、最後の方は聞いてなかった。なんて言ってたんだ？」

『な、何も言ってない！』

「そ、そうか」

まあ、どうでもいい事だったんだろうな。
でも気になるなぁ。やっぱり俺も最後の明智の呟きを聞きたかったな。

『と、とにかく。恋愛感情もないのに付き合うのは相手にとっても失礼だぞ……だからっ、お互いの為にも断れ……っ』

「……わかった。なんか、相談にまで乗ってくれてありがとうな」

『ふふ、気にするな。私らは友達だぞ？』

「……そうだな！」

俺達は友達だ。

友達なんだから困った時はお互い様で、相談し合うのはあたりまえだろう。

――――明智と話をしたおかげで、なんだか色々気持ちが落ち着いた気がするなぁ。

というか、明智のおかげで決心がついたような気がするよ。

とにかく告白の返事は明日しよう。こういうのは出来るだけ早い方がいいに決まっているしな。

その後、俺と明智はしばらく談笑をした後、数時間くらい経った頃にようやく通話が終了した。

長電話だったな……通話代、大丈夫かな？

第７６話，悩む圭介（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「眠い……」

暮葉「け、けーすけ様！　目の下のくまさんがすごい事になってるのですよ!?」

圭介「お、おう……っ」

小坂「圭くん、寝不足？」

圭介「まあそんな所だよ」

伊吹「ど、どうしたのよ？」

圭介「……ア○ガミやってた」

三人「真性の馬鹿だ（ね）（なのです）！」

第77話，なんだ、このギャルゲー的展開は!?

翌日、告白の返事は早めにしておいたほうがいいよな。
というわけで、俺は朝っぱらから青山さんを探して校内を歩きまわっていた。
前に葵から聞いたのだが、青山さんはいつも登校してくるのが早いらしい。
だからもういるハズなんだけど……おかしいな、どこにもいないような気がするぞ。
まあここは学校だし、学校と言っても結構広いものだ。
所詮は現実（リアル）、そう簡単に女の子の居場所を突き止められるなんてありえない話だ。

「もきゅ！　けーすけ様！」

「え、暮葉？」

あれ、暮葉は教室に置いてきたハズなのに。
どうしてここがわかったんだろうか？
……あ、そういえば暮葉は魔力を感じる事が出来るんだったな。

「けーすけ様！　こんなところで何やってるのですか？」

「青山さんに用があるんだよ」

「もきゅ？　青山さん……ん～確かに今日は見てないのです」

「そうかぁ……」

今日は暮葉も青山さんの姿を見ていないのか。
風邪でも引いて休んじゃったのかな？
もしそうだとしたら……あの告白の返事はいつすればいいんだろうか？
出来る事なら早く返事をしてあげたい。そのほうがお互いの為でもあるしな。

「それより、青山さんにどんな要件なのですか!?　ならなら拙者がひとっ飛び――――」

「ま、待て！　魔法とかは使うなよ？」

「もきゅ？　だいじょーぶなのです！　ああいうのはバレなきゃ何やってもオーケーなの――――」

「いいわけあるかっ！　ファンタジー世界でやれ！」

「もきゅう……魔法が実在している時点でじゅーぶんファンタジーだと思うのですよ？」

何故だ、全く否定ができねえ……。
確かに魔法が存在する時点で十分ファンタジーかもだが、それでもここは現実世界だ。
魔法の存在が世間で認められているハズがない。
やっぱり、この世界で堂々と魔法を使うのはまずいだろう。

「……とにかく、自重しとけって」

「もきゅう、わかったのです……でも青山さんに用事って本当にな

んなのでしょうか？」

「た、大した用事じゃねえよ！　そうそう、ＣＤ返すんだよ！」

「もきゅ？　ＣＤ……い、いつの間に借りてたのですか！？」

「まあ、青山さんって結構音楽聞くらしいし」

そして、俺が持っているほうが都合がいいんだとか。
ロックを聞いたら説教され、お婆さんの事をお婆様と呼ぶ。
……青山家、一体どんなご家庭なんでしょうか？
まあそれはともかく、昨日の告白騒動でＣＤを返しそびれたのは確かだ。
このＣＤも返事をするついでに返してあげないとね。

「やっぱり拙者が青山さんの魔力を追跡して――――」

「だ～から魔法は使うなって！」

しかも俺達が魔法とか魔力とか、そんな事を大声で言っているせいか周囲の視線が痛いぞ？
まあ、どうせ一般高校生が考える事だ。
オカルトマニアがいるというよりも、厨二病の頭の痛い人がいると考える人のほうが多いだろう。
正直、オカルトマニアより厨二病のほうがマシかもしれない。

「でも学校に来てないなら仕方ないのです……あ、そーだ！　葵さんやあかりさんに頼んでみるのはどうでしょうか！？」

「それも一つの手だろうけど、出来れば俺は直接返したいな」

というか、ＣＤを返すのはオマケでメインは告白の返事だ。
返事だけは葵やあかりじゃ絶対に出来ない。
いや……それだけは俺がしなくちゃいけないんだ。
青山さんは俺に対して好きって言ってくれた。だからその返事は俺がしなければならない。

「け、けーすけ様にしては律義なのですね！」

「俺にしてはってなんですか！？」

「ジョ、冗談ナノデスヨ！」

「嘘つけ！　思いっきり某読みじゃねーか！」

いっそのこと、こんな事を言われない為にも真面目に生きてみようかな？
でも今更ねぇ。第一クソ真面目に生きても人生って面白くないじゃん。
折角の青春なんだぜ、テキトーに馬鹿な事をやっていたほうがいいに決まってるぜ！
……っと、いうのが藤島圭介青春謳歌理論の一説である――――

「もきゅ！？」

初芝高校の廊下にて、事件は一瞬して不意に発生した――――
何者かに体当たりされた暮葉。
小柄な彼女はアッサリと吹っ飛ばされてしまい、何故か俺のほうへと倒れ込んできた。
あまりにいきなり過ぎる事態――というか、このまま避けたら暮葉

が転んで怪我をしてしまう。

「――――っ！」

「……っ！」

なんとか暮葉を抱きしめ、暮葉が転んで怪我をするという最悪の事態だけは回避した。

回避はしたんだが……しまった、抱きしめたのは失敗だったかもしれない。

「わ、悪ぃ――って、エェッ！？」

「す、すごい……っ！」

「え、なになに！　こんな所で？」

「うわっ、リア充マジで爆発しろよ……っ！」

なんてこったい。

暮葉に当たって来たヤツも、そこらへんで立ち話をしていた1年の連中も。

とにかく、俺達の周りにいた殆どの人達が野次馬と化してしまった。

その中で暮葉を抱く俺……なにこれ、すっごく気まずい……。

「す、すみませんけーすけ様！」

「え、いや……」

ていうか、俺も早く暮葉を離せよ。

なんだよ俺は、なんでまんざらでもないとか思ってるんだよ……！
でも、正直に言うと……なんだろうかこの安心感は？
ドキドキするのと同時に安心できる、なんだか意味不明だぞ？

「あ、あの……けーすけ様っ？」

「えっ？　ご、ゴメン！」

暮葉に名前を呼ばれ、俺は咄嗟に暮葉から離れてしまった。
……というか、最初から離れればよかったんじゃないか。
そしたら何かの事故だと思われたかもしれないのに。

「なんだか初々しいわね、もしかして付き合ってから日浅いのかな？」

「こ、こら明美！　そういう事言わないの！」

……周りもみんな、俺達の事をバカップルだって誤解してしまったじゃないか。
まあ、俺の事を知っている人はこの中でも少数だ。
1年内では噂になるかもしれないが、2年3年に伝わる事は多分ないだろう。
それにしても、さっきの暮葉……小柄なのに柔らかくて、とても甘い匂いがして……。

なんつーか、女の子って感じだった……。
やっぱり、あの暮葉も一人の女の子――――

「……けーすけ様？　完全に上の空でしたけど、どこか具合でも……？」

「……えっ？　お、俺はいつも通り健康でございますよ！」

「そ、そうなのですか……っ」

これでも、今まで風邪で休んだ事がないんだ。
身体だって丈夫だしな。俺の身体は外からの攻撃にも中からの攻撃にも強いのだ。
だから、風邪のウイルスごときに負けるわけが――コラそこ、馬鹿とか言うな！

「……」

「……」

暮葉は頬を赤くし、少し俯きながら視線だけを俺から逸らしていた。
俺達を包み込む沈黙。ちくしょう……話しかけづらい。
それに心拍数がヤバい、ドキがムネムネでござるよ。

「……っ」

相変わらず同じように黙りこむ暮葉……。
なあ、暮葉って……こんな可愛い子だったっけか。
俺の知っている暮葉と何かが違う。
俺の知っている暮葉はもっと元気で、敬語なのに無邪気で子供っぽくて……。
とにかく、実年齢を言われてもピンと来ないようなヤツだったハズ。
それなのに、今の暮葉は少し大人っぽく見える――

「あ、あの！」

「お、おう！」

さっきまで視線を逸らしていた暮葉が、今度は俺を見上げてきた。
おそらく１４０ｃｍ代の暮葉。普通に立っていても俺より顔は下である。
そんな暮葉が――可愛らしく赤面し、さらに上目遣いで俺の事を真っ直ぐ見ている。

「け、けーすけ様……っ、その……あの……っ」

えっ、えっ、なに、どうしたんだよ暮葉のやつ？
も、もしかして……暮葉からも告白されるパターン！？
もしそれがホントだとしたら……青山さんに返事すらしていないのに、なんちゅータイミングだ！
で、でも……まだ告白だって決まったわけじゃ――

「あー！　いたいたいたーっ！」

……えっ？
この超お元気そうな声は……まさか。

「お兄ちゃん！　クーにゃん！」

そして、聞きなれた心を癒すやわらかなボイス。
振り向くと、そこには二人の女の子が仲良く並んでいた。
だが、必死そうに息を切らしている。どうしたんだろう？

「も、もきゅ？　葵さんにあかりさん！？」

「二人で血相変えて、一体どうしたんだよ？」

「呑気な事言ってる場合じゃないんだよ！」

やたらと必死な葵が俺に近付き、ぐいぐいとワイシャツを引っ張りながら叫びかけてくる。

この時、ようやく俺は確信できた。

二人が血相を変えているのは冗談ではなく、本当に何かがあったせいだと――――

「お、落ちつけって！　まずは事情を説明しろよ？」

「千早が……千早が急に転校するらしい！　とにかく早くこっちに来てくれよな！」

……えっ？

あかりが放った信じられないその言葉。

俺も暮葉も叫ぶ事さえできず、絶句してただ立ち尽くすだけだった。

というか、一瞬脳内まで真っ白になってしまった。

俺にとってそれほど衝撃的な言葉だったからだ……。

――――青山さんが……転校だと？

第77話，なんだ、このギャルゲー的展開は！？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

黒木「おい藤島、テメェぜってぇーリア充だよな？」

圭介「はぁ、なんでだよ？」

黒木「テメェいつも女の子と一緒にいるじゃん！」

圭介「あのなぁ……暮葉とか伊吹とか、友達であって恋人ではないんだぞ？」

黒木「うるせえ！　女の子と会話できるヤツはみんなリア充なんだ！」

圭介「なんじゃそりゃ理不尽すぎだろ！？」

黒木「テメェ彼女欲しいとか言ってたな？　ぜってぇーすぐ作れると思うんだけど？」

圭介「そりゃねえだろ。イケメンでもないし金も持ってないし、モテないし……」

黒木「ざけんなよテメェ！　何がモテねえだよこのクソ野郎！　ロクに女子と会話したことねえ俺に謝れ！」

※圭介がリア充かどうか、多分それは見る人それぞれ！

番外話，Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙとコラボっちゃった場合　前編（前書き）

どうもです！
今回は以前も後書きトークコーナーで予告しました……。
ｋｕｘｕ様執筆『Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙ』とのコラボストーリーです！
キャラ崩壊（特にＦｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙのほう）があるかもしれません。
ｋｕｘｕ様ごめんなさい！そしてコラボ提案＆許可ありがとうございます！
なお、今回のコラボは両作品の本編とは殆ど関係ありません。

それではいつもと違う、『魔法少女に会っちゃった場合』をどうぞ！

番外話，Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙとコラボっちゃった場合　前編

「圭介！　今度科学都市って所に行こうぜ！」

ある日の昼休み、俺は野郎どもと飯を食っていたのだが……。

二次元マスター長宗我部大吾くんが、突然科学都市なんていうわけのわからない名前を出し、そこに行こうと誘ってきやがったのである。

第一科学都市ってなんだよ、能力者が沢山いる学園都市って街なら電〇文庫のラノベであったけど。

「科学都市って……いったい何処にあるんだよ？」

「多分東京都？」

「知らねえのかよっ！　つーか、なんだってそんな所に行きたくなったんだ？」

「いやぁ。そこにある私立星道高校に団殺者（ディスター）ってのがあるらしいけど、なんと警察の学生バージョン。そう、武偵だ。武偵がいるらしいんだ」

厨二臭い設定やなぁ……というか大吾さんよ。

「どこの緋弾のア〇アだよ！　ちなみに俺は白雪押しな」

「なっ！？　ば、馬鹿か圭介。やっぱア〇アだろ！？　ツンデレにくぎゅだぜ？」

「惹かれる所がそこかよ！　お前はアレか、釘〇病患者か！」

「ｙｅｓ！」

……大吾、そりゃ悪かったな。

釘〇病患者なら確かにア〇アは素晴らしいキャラだろうさ。

ちなみに、俺は竹〇病だ……アズにゃん。

……てか、俺達真昼間からなんちゅー会話してるんだろう。

こんな事だからいつまで経ってもリア充になれないんだよなぁ……

はぁ、彼女が欲しい。

そんな調子で、俺は今日も一日をテキトーにぐーだらと過ごしていた。

――――そして放課後。

今日は部活もないので暮葉と二人での下校だ。

「け、けーすけ様。歩きながらＰＮＰは危険なのですよ？」

「大丈夫だ、問題ない！」

とりあえず、誘導とかは暮葉に任せて俺はＰＮＰ。

折角ＰＮＰ版ＴｏＨｅａ〇ｔ２買ったんだ。存分に楽しまないと損じゃなイカ。

っと、いうわけで今日は小〇愛佳ちゃんを攻略する事に全力を注ぐぜ。

いやぁ～、しかし俺はＰＣのエロゲ版はやったけど、エロのないＰＮＰ版も案外いいものだな。

「もきゅ！　け、けーすけ様！　前っ！　前っ！」

「よっと」

俺は暮葉の慌てっぷりを頼りに、なんとか前方から迫ってきたママチャリを回避してみせた。

フフフ……案外歩きながらギャルゲーと言うのも悪くないな。

暮葉のサポートさえあれば、ごく普通に歩けるじゃないか。

「けーすけ様ぁ！　このままじゃいつかオタメガさんになっちゃうのですよ！？」

「お前、俺の部屋にあった漫画勝手に読んだろ？」

「ち、違うのです！　拙者は葵さんから借りて読んだのです！」

「そ、そうか……」

葵のヤツも神〇み読んでたのかよ！

知らなかったぜ……というか、最近葵の部屋に一歩も足を踏み入れてないな。

まあ、この歳になって妹の部屋に入る兄もどうかと思うが。

その割には葵は部屋に入ってくるし、今度仕返しのつもりで部屋に入ってやろうかな？

……と、考え事をしていたその時――

「けけけけっ、けーすけ様、後ろ！」

どうしたんだ暮葉のヤツ。志村後ろみたいなノリで俺の事を呼んで……。

っと思った、次の瞬間――――

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああぁっ！」

激しい痛みを感じた。

さらにドン！という轟音が響き、口や鼻からも大量に流血していた。

……そういえば俺、どうして眩しき青空をフライしているのだろうか。

とりあえず頑張って眼下に広がる地上を見て見ると、さっき俺がいた所には大型トラックが不自然に停車しており、何か慌てた様子で運転手さんが駆け下りていた。

地上と今の俺の状況から考えるに……ああそうか、俺はトラックに轢かれちゃったんだ……轢かれた？

「呑気な事考えてる場合じゃねーじゃん！」

ど、どうしよう。今回はいつも以上にド派手にぶっ飛んでいる。

明らかに最後にトラックに撥ねられた、暮葉と出会った日とは飛距離が比べ物にならないぞ？

ていうかどうしよう。トラックに撥ねられたという事は……。

「お、俺のＰＮＰとＴｏＨｅａ○ｔ２がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

相変わらず、激痛を感じながら空を飛ぶ中、俺は自分の身の心配よりもゲームの心配をしていた。

些細な事で壊れてしまうＰＮＰ３０００……多分、というか確実に壊れただろう。

しかもＴｏＨｅａ○ｔ２と一緒に散ったぜ……ううん、両方とも高かったのに！
その二つが無事である可能性はほぼ皆無。仕方ない、自分の身の心配でもしよう。
ところで、俺はこの後どうなっちまうんだろうか？
相変わらず落下するどころか、さらに空高くへ上昇している気がする。
その証拠に地上が段々離れて行く。気温も低下していく。そして……さ、酸素が薄くなってきた！

――――数分後。
あれ、なんだか落下している気がするぞ。
そうか……いよいよ隕石の如く、大地と激しく接吻を交わす時が来たようだな。
いやぁ、何分も飛んでいたら地面が久々に感じるよ。
久々の地面ってどんな感じなのかなぁ。まあ言うまでもないだろうが……。
きっと、久しぶりの地面は――――！

「ごぶぅるぁっ！？」

おおゆうしゃよ、しんでしまうとはなさけない！

……という事はなかったが、ちくしょう……動けないくらい痛い。
そりゃあまあ、確かに日航１２３便もビックリな速度で大地に衝突したけどさ。

おかげでアスファルトにクレーターが出来てしまったぞ。

「あ、あきにい……空から人が……っ！」

「僕にもそう見えました……」

なんか今、男女の声が上から聞こえたような気がするぞ。

ああそうか、クレーターになっちゃったけど一応ここ、道路のど真ん中なんだよな。

もしかして、こんな所で倒れている俺って邪魔なんじゃないか？

……邪魔以外の何者でもないよな。とりあえず、さっさと立ち上がるとしようか。

「ちっくしょう痛ぇ～っ」

身体も痛けりゃ損失も痛い。

……ＰＮＰが、ＴｏＨｅａ○ｔ２が、俺の小○愛佳ちゃんが……っ！

「あきにい、どうする？」

「一応倒れてましたし、声をかけてみますか」

俺は後頭部を押さえながら、さっきから二人でコソコソ話をしている男女を見る。

女の子のほうは小柄だ。金髪で小柄で……おお、峰・理子・リュ○ン４世じゃん！

多分別人だろうし、よくよく見ると似ていないがパッと見りこ○んじゃないか！

り○りんと違う所は瞳の色と、胸のサイズだろうか。

服の上からの推測にすぎないが、彼女の胸はもしかすると暮葉並に

小さいかもしれない……！

男の方は白髪で、髪の長さは大体肩に後ろ髪が当たるくらい。
瞳は紅く染まっており、オマケに細身で……ん、こんな男をどっかで見たような……？

“おもしれえなオマエ……上等じゃねぇか。愉快に素敵にやってみやがれよ！”

……っ！

こ、こいつ……まさかあの時のっ！
男の姿を見た瞬間、思わず立ち上がり拳もしっかりと握った。
そして、力強く目の前のアイツを睨みつけ――――

「てめえ……早川悠っ！」

「……？　あきにいこの人怖い！　しかもなに言ってるかわからないよ！」

「とりあえず……あの、僕は早川悠じゃなくて優輝晃（ゆうきあきら）ですよ？」

「……えっ？　べ、別人！？」

ウソや！
だって……肌白で細身で白髪で一方〇行みたいで、そんなヤツ早川以外にいるのかよ！
……でも確かに、目の前の男は早川と違い、なんだか優しそうな雰囲気である。
目付きだって早川みたいに悪くないし、狂気じみた笑みも浮かべて

いない。
やっぱり別人……じゃあ俺、この人に滅茶苦茶失礼な事をしたんじゃ？

「誰かと誤解されたようですけど、僕は君の探している人とは違うと思います」

「そうだよ！　あきにいはあきにいだよ、早川悠なんて知らないから！」

や、やべえ。ホントに別人みたいじゃないか！
それじゃあ、やっぱり俺は滅茶苦茶失礼な事を……。
とにかくここを乗り越える為にやることはただ一つ！

「すみませんでしたぁーっ！」

俺の勘違いだとわかった瞬間、俺はジャンピング土下座を実践してみせた。
謝罪、こういう場合何よりも重要な事であろう。
とにかく謝れ、ここは頭を下げておくんだ。

「……どうする、あきにい？」

「ここじゃなんですし、場所でも変えましょうか？」

……え？
優輝さん、もしや俺とお話するおつもりで……？
……まあ丁度いい、この二人にここがどこかを聞いてみようか。
正直言うと、俺……ここが何処だかサッパリわからないっす――

番外話，Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙとコラボっちゃった場合　前編（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

早川「なんだァ？　このオレを写したような三下はァ？」

晃「いきなりなんですか……というか、いよいよコラボが始まりましたね」

暮葉「序盤は殆どそちらのキャラクターさん登場しませんでしたけどね！」

真「次回は私もあきにいも、他のみんなも登場するよ！」

晃「また地味言われないように頑張らないと……っ」

圭介「俺のＰＮＰが……ＴｏＨｅａ○ｔ２がっ！」

※ｋｕｘｕさん。ありがとうございました！

「はい、と……東京だと！？」

「はい、ここは東京の下町です」

う、ウソだ……トラックに轢かれただけで東京まで来ちゃうとか。
そんなの二次元にしかないと思っていたのに、あんまりだぁ！
……俺こと、藤島圭介はあの後二人に連れられ、“自由荘”とか言う場所へ来てしまった。
他人の家に上がるなんて久しぶりだけど、よく掃除でもしてんのかこの部屋は綺麗だなぁ。
まあ、そんな事はどうでもいいんだ。それより俺を襲う現実があまりにも厳しすぎるぞ？

「こ、古宇坂って街は知らないっすよねぇ？」

「こうさか？　あきにい、それって隣の県だよね？」

「確かにそうですね。ですが、一応東京圏内だったと思いますよ」

古宇坂の人口はたったの１３万だ。
古宇坂港とか工業地帯がなかったら東京圏内だって実感沸かないよなぁ。
でも、晃ってヤツ曰く曰く一応東京圏内であるらしい。
は、初耳や。地元なのに知らなかった……っ！
……どうでもいいけど、なんだか晃って名前に抵抗があるぜ……間違いなく永渕のせいだな。

「はぁ……まぁ、古宇坂まで帰るくらいの交通費なら――――」

とりあえず俺は財布を取ろうと、鞄を探してみたのだが……。
あ、あれ。どうしてでしょうか……鞄がないぞ!?

「あの、どうかしましたか？」

「……鞄、古宇坂だわ」

なんてこったい。
トラックに轢かれた時、きっとわが身から離れてしまったのだろう。
でも、財布も勉強道具も何もかもが鞄の中だし……それを古宇坂に置いてきてしまった。
運が良ければ暮葉が回収しているかもしれないが、運が悪けりゃ今頃貧乏人の手に渡って現金に……。

「ふ……不幸だっ」

「お、落ち込んじゃったよ？」

「元気出してくださいよ……必ず古宇坂に帰れますから」

「一銭も持ってないのにどうやって帰れと!?」

無理でしょ！
いくら古宇坂が東京圏内だとしても、一応他県だし……。
歩いて帰ったら何時間……いや、何日かかると思ってんじゃ！
どうやって帰れば……あ、そうだ。
俺ってトラックに撥ねられてここまで来たんだよな。

だったら……痛いのを我慢してもう一度轢かれれば――もしかしたら古宇坂に帰れるかも！

「すごい、奇妙な笑いだね」

「……あ、あの。藤島さん？　どうしたのですか？」

「思いついたんだ。古宇坂に帰る方法をな！」

「えっ？」

「悪いなお二人さん！　お世話になった、じゃあ機会があったらまたいつかなーっ！」

俺はそう叫びながら、飛び出すように“自由荘”を後にした。
目指すは――トラックが飛ばして走っている首都高か幹線道路！
ふふふ、これで俺は古宇坂に帰れる――――！

「あきにい、あの人やっぱり変だよ？」

「ぼ、僕も……あのノリにはついていけないです」

――――やがて数十分後、どういうわけか俺はとある学校の前に来てしまったが……。

「ま、迷った……」

“東の丘学園”という高校の前で俺は絶望していた。

ついノリで優輝家を飛び出しちゃったけど、完璧に道に迷っちゃったね。
ははははっ、すっかり忘れていたよ。ここは東京で俺の地元じゃないって事にな。
困った、首都高の【し】の字も幹線道路の【か】の字もねぇ……。

「ねぇ、あの制服他校じゃない？」

「ホントだ、どこ校だろ？」

「もしかして……東の丘に殴り込みかけるつもりか！？」

「いや、流石にないでしょ……」

なんだ、ここらへんの連中は他校の生徒が珍しいのだろうか。
なんだか俺を囲むように、東の丘学園がぞろぞろと現れ始めた。
ちょ、やばいんじゃないか。このままだと抜け道を塞がれてしまう。
ていうか……どうしてそこまで他校の生徒が珍しいんだよ！

「静音さん！」

「会長！　例の怪しいヤツはあの人です！」

「あら、確かに他校の制服ですね」

げっ……誰だよ生徒会長呼びやがった奴。
面倒くさい事になるフラグが立っちまったような気がするぞ。
ま、まあ……ここはアレだ。さっさとこの学校の前から消えたほうがいいだろう。
というわけで俺は学校に背を向け、さっさと立ち去ろうとした――

「そこの貴方、ちょっと待ってください」

「……っ！？」

ヤバスヤバス！

呼び止められてしもうたぞ、しかも銀髪の美人じゃなっすか。

いいなぁここの生徒会長は可愛くて。

初芝の生徒会長は戸愚呂みたいな感じで、とにかくゴツい野郎だぜ？

美少女が生徒会長なんてこれなんてエロゲー？

……て、そんなどうでもいい事を考えている場合じゃないだろ。

考えろ藤島圭介！このピンチをどう乗り越えればいいんだ……っ！

「あの、先程から校門でなにをされているのでしょうか？」

「……えっ？　あ、いや……もしかして俺、滅茶苦茶怪しい？」

「はい、凄く怪しいですよ？」

「すみません……なんつーか、道に迷っちゃったもんで……」

「そういえば見かけない制服ですね。ひょっとしてこの近隣の学校の生徒ではないのですか？」

「まあ、そんな感じっす……」

言えない。トラックにぶっ飛ばされて古宇坂から遥々飛んできましたなんて……。

そんな超ありえない事を、こんな清楚なお嬢様には絶対に言えない！

とりあえず万が一聞かれた場合、東京都内のどっかから来たって事で誤魔化しておこう。

「……ふふっ、わかります。貴方は今物凄くお困りのようですね？」

「ま、まあ有り金も０で正直……」

せめて古宇坂まで帰るくらいの交通費が欲しい。

でも、そんなものが簡単に手に入る程、この現実（リアル）は甘くないのである。

全く、これだから現実（リアル）は大変だ。

……と、こんな調子で現実（リアル）の厳しさを感じていた――――

「か、かいちょーっ！　大変だよ！」

「あ、あら福本さん？　どうかしたのですか？」

「あ、あっちのほうでアッキーを探して暴れている人達がっ！」

「……もしかして、また反逆者（レジスタンス）でしょうか……？」

な、なんだ。なんだかちょっとヤバい空気になってきた気がするぞ。

「早く早く！」

「わかりました。それでは私、これにて失礼します」

「えっ？　あ、ちょっと！」

あの可愛らしい生徒会長の女の子は、元気な女の子に手を引っ張ら

れる形で去って行った。
どうしよう、全く状況がわからない。
とりあえず何か問題が発生したのはわかったけど……。

「うわっ！　な、なんだテメェ！？」

「お前ら大人しく科学都市に引き返せ！」

「テメェ柊翔太――ぐぁぁぁっ！」

……なにこの声、すげえ気になるんだが……？
い、行ってみるか……とりあえず事件ってんなら俺も行こう。
明智だったら絶対に介入しているだろうしな。

――そう決心した俺は大地を蹴り上げた。
ここの生徒の注目を浴びている事さえ気にせず、何も考えずにとにかく学校内へと侵入する。
えっと、次はどっちに進もう。とりあえず右に曲がろう。

「きゃっ！」

「うおっ！？」

しかし、丁度曲がり角で俺は一人の少女と遭遇してしまった。
黒髪のショートカットでオマケに小柄で……うむ、この子も中々の美少女。
やっぱり東京の女の子って可愛い子が多いですなぁ！
……ってそんな事考えている場合じゃないだろ、俺。
ぶつかりそうになってしまったんだ。相手はおどおどしているし、謝っておかないと……っ！

「ごめんっ！」

「え……？　い、いえっ！　私のほうこそ不注意で……それより、ここは危険らしいですので――――」

危険？

そういえば、さっきの生徒会長や元気な子も何か慌ただしく動いていた。

あと、男達の悲鳴も聞こえたし……畜生、この学校で何が起こってるってんだ。

この子が言う危険……まあ危険なのかもしれない。さっきの悲鳴もあるし。

やっぱり行かないほうがいいんだろうか？

「ぐぁぁぁぁぁっ！」

「チッ、なんちゅー数だ！」

「翔ちゃん！　アキ君はもう少しです！」

「くっ……早く来てくれよ、親友！」

……そ、そうだよな。なんだか危なげなアロマが漂っている。

今回は仲間が関わっているわけではないんだ。

わ、態々こんな危険な事に首を突っ込む必要はない……よね？

それに偶然出会ったこの大人しそうな女の子……危険地帯にこの子を一人にするのもアレだよな。

……仕方ねえ、戦闘はまあ誰が戦っているかは分からないが、今戦っている人に任せて。

――俺はこの子と一緒に学校の外まで行くことにしよう。

「あのさ、君の名前は？」

「え？　……ふ、藤森渚（ふじもりなぎさ）です」

「よし藤森さん、ここは危険なんだよね？」

「は、はい。怖そうな人達が暴れてて……」

やっぱりいまいち状況がわからない。あまりにも超展開すぎて話についていけない。

けど……小刻みに震えるこの子を見て確信した。

詳しい事はよくわかんねえけど、それでも事件は確かに起こっていると――

「わかった、とりあえず一緒に校外まで逃げようぜ？」

「えっ？　で、でも……っ」

「緊急事態なんだろ？　だったら一人より二人のほうが安全なハズだよ」

「は、はいっ、わかりました……ありがとうございますっ」

藤森さんは少しだけだが、表情を穏やかにしてくれた。

よかったぁ。やっぱり女の子に暗い顔は似合わないよな。

「あの……お名前は？」

「ん、そういえば自己紹介がまだだったな。俺は藤島圭介だよ」

「藤島……よ、よろしくお願いします……藤島さん！」

「おう、そんじゃあさっさと逃げようぜ？」

いよいよ逃走開始だ。

さて、さっさとこんな所から逃げて、首都高か幹線道路を探してトラックに轢いてもらおう。

そして――俺は古宇坂に帰るんだ！

だが。

「……動くな」

振り向くと、俺達の進路を遮るように――茶髪の男が立っていた。

番外話，Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙとコラボっちゃった場合　中編（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「ぶっちゃけこれ、『Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙ』読んでない人にはわかりにくいんじゃないか？」

晃「確かにそうですね、ちょっとは考えて書くべきだったと思います」

圭介「全く、作者はホントに馬鹿だなぁ」

晃「まあまあ、折角なのですから文句はなしにしましょう」

圭介「それにしても、最後に出てきた敵キャラ……早くも浜面臭がするんだが」

大吾「はー○づらぁ」

※Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙ本編・ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１９６０ｓ／

番外話，Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙとコラボっちゃった場合　後編

背筋が凍る。
俺達の行く手を阻むように立っている人影が一つ。
茶髪で黒木と似たような体格で、誰かと戦ったような跡があり鼻血を流していた。

「動くなよテメェら……テメェらは今から俺の人質だ。団殺者（ディスター）をぶっ倒すまでは……テメェらは俺の支配下だ」

団殺者という言葉に、俺は眉をひそめる。
確か、今日の昼休みに大吾がそんな事を言っていた気がする。
大吾がテキトーに考えた厨二設定だと思っていたけど、どうやら本当に存在するヤツらしいな。
目の前の男の表情もやたらと真剣である。
ああもう……事情がサッパリわからねえよ。

「団殺者（ディスター）だと？」

「ああ、テメェらは事情を知らねえんだな。まあ一般人に説明したって何の意味もねえけどよ」

「何の事かサッパリだ。理由もわからねえで人質にされるなんて納得できねえ。俺達にもわかるようにちゃんと事情を説明しろ」

せめて事情が知りたい。
コイツが団殺者（ディスター）と何の関係があるのか。
なんだってこの学校に殴りこんできたのか。

「俺は科学都市の反逆者（レジスタンス）って組織のモンだけどよ、ここに団殺者（ディスター）がいると聞いてなぁ、ちっと襲わせてもらったんだよ」

科学都市……これも大吾が今日言っていたな。
どういう街か詳しい事は知らねえ。某学園都市ラノベに出てくるような街かもわからねえ。
科学都市、団殺者（ディスター）、反逆者（レジスタンス）……ああもう意味がわからん！

「とりあえずてめえ……よくわかんねえけど、くだらねえ事で人様に迷惑かけてんじゃねえよ！」

「迷惑？　ハハッ！　迷惑してんのはこっちなんだよ！　団殺者（ディスター）の存在が俺達にとっては超迷惑なんだよぉっ！」

相手の男は、今にも襲いかかってきそうな勢いで叫んだ。
本能的にまずいと思った俺は拳を構え、獲物を狙うベヒのように力強く男を直視する。

「待ってください」

声が聞こえた、俺の背後からである。
妙に落ちついた声で優しそうではあるが、そこに激しい怒りが籠められているような気もした。
前方の男に警戒しつつ、まだ襲ってこないと判断した所で俺も後ろを確認すると……。

「団殺者（ディスター）です！　おとなしく降伏しなさい！」

「あ、晃……さん！？」

「て、てめえが……団殺者（ディスター）!?」

白く、細くて壊れそうで、でも正義感に満ちていて……。
そんな男、優輝晃という人物が真剣な表情で立っていた。
その後ろに女の子が数人いるのが気になるけどね……。

「あきにい！」

「アッキー頑張って！」

「アキ君の前にいるあの人……他校の生徒っぽいけど誰なの？」

さっきの妹キャラに赤髪ツインテール、水色のロングの美少女。
き、奇抜や……まあ俺の周りにも奇抜な色の人はいるけどさ。
それより晃って随分信頼されてんだな。
ハハッ、初芝での俺とはまるで違うもんだな……。

「さて、どうしますか？　君達の得意のロボットは翔太達が撃破したのでもう一台もないですよ」

「ふ、ふざけんな！　そんなちっせぇ事で降伏なんざしねえよ！」

「出来れば実力行使はしたくないのですが……」

「う、うるせぇっ！　こうなったら……テメェらみんな殴り殺してやる！」

言いながら、相手の男は服の中から何かを取り出す。
おそらくアレは伸縮式の警棒、要するに特殊警棒というヤツであろ

う。
それを右手に持った男は一気にこちらへ駆けてくる。
どうする、晃はさっきまでカッコよかったけどさ……細身だし、なんだか喧嘩とかは弱そうだぞ？
かといって女の子に戦わせるわけにはいかない。
じゃあ逃げる……無理だ。俺のすぐ後ろで藤森さんが怯えている。
この状況じゃあアイツから逃げる事もできねえ。
戦うしか選択肢は残されていねえけど、戦うにしたって体格的に晃じゃ勝てるかわからねえ。
――――だったら仕方ねえ……俺が戦ってやる！

「みんな下がってろ！」

「え？　あ、貴方は藤島さん！？」

晃がそう叫んだ。さっきちょっと会っただけだったけど、俺の名前を覚えていてくれたんだな。
さて、この危機から脱する為にも頑張って戦わねえとな。

「ハァッ！」

誰よりも先頭に立って男を迎え撃とうとする俺。
男のほうも、最初のターゲットを俺に変更したようである。
俺へと一直線に駆け寄ってくる……クソッ、アイツ意外に動きが早い！
俺が身構えた頃には既に、男は俺の目前に迫っていた。
それどころかビュン！という警棒が風を切る音が響き渡っていた。
既に警棒はテニスラケットのように振られていたのである。

「ッ！」

恐らくこめかみを狙う予定だった一撃。
そこを打たれると流石にマズいし、俺は咄嗟に左腕に左腕を上げた。
久々に感じた激痛……まぁ俺の身体の事だ、骨にヒビが入るとかそんな事はないだろう。

「ごっ、はぁ！」

しかし、少しだけ安心していた隙に――男は膝で鳩尾を蹴りあげた。
。
鈍い痛みと、呼吸を難しいものにするその一撃。
体質上、身体は壊れなくてもその痛みだけは感じる俺は、攻撃の痛みに思わず顔を歪ませた。
さらに追撃するように、警棒を左拳を合わせた一撃が俺の頭部を狙ってきた。

「くそっ！」

左へ跳躍するように攻撃は避けた。
だが、跳躍した勢いでアスファルトに全身を強く打ちつけてしまった。
硬いアスファルトは、ごろごろと車輪のように転がるだけでも痛みを感じるものだ。
……でも、俺の場合その痛みはすぐに消える。
さっきまでは滅茶苦茶痛かったけど――もう痛くもなんともねえ！

「オラァッ！」

「が、はぁっ！」

だが、立ち上がった瞬間。
特殊警棒が俺の横顔に直撃してしまった。
顔面どころか脳さえ揺さぶられる一撃に、俺は思わずよろめいてしまった。
さらにゴン！という嫌な音、どうやら男は俺の顎を思いっきり蹴りあげたらしい。

「ぶ、ごぁっ！」

脳を揺さぶる一撃……つか、この野郎随分高い所まで足が上がるな。
アッパーカットを足でやりやがった。
だが、相手はどうせ素人である。達人格闘家とは違い足と手じゃあ俊敏さが違うハズである。
その僅かな差こそ隙であった。足を元の位置に戻す隙に、俺は素早く体勢を立て直し――――

「……オォッ！」

「……ッ！」

全力疾走をして相手の腹を目がけ、思いっきりタックルを仕掛けてみせる。
このまま押し倒し、マウントポジションを取って殴りまくる作戦だ。
だが――俺のタックルは通用せず、ずずっと後ろへ下がっただけで男は倒れなかった。
その時――俺が抱いていた疑惑は事実だと判明し、確信した……。

「俺を相手にここまでやれるたぁ、テメェも……随分慣れてんだな？」

「く、そぉ……っ」

コイツ――相当喧嘩慣れしてやがる！
そこらの不良が1人なら、ここまで慣れたような行動はできねえ。
俺だって昔の事情で残念ながら、少しはこういう荒事に慣れているハズである。
だから、ちょっとした不良1人くらいなら余裕なハズだ。
なのに――コイツには結構手間取っている。この野郎……鍛えてるし戦い慣れている！

「俺らの敵は団殺者（ディスター）……アイツらは道具使って超能力じみた能力を使うし、銃火器などの武器も豊富だ。こっちはロボットと銃は持っているけど、それ以外には何もねえ……」

「だから……その為に身体を鍛えてるってのか？」

「察しがいいなテメェ！　その通りだ……俺達は団殺者（ディスター）と戦うために、ある程度身体を鍛えてんだよ！」

言葉と共に、男は特殊警棒を投げつけてきた。
なんとかギリギリで特殊警棒を避けてみせたが――

「てぇぁっ！」

「ご、ばっ！」

刹那。
射抜くようなボディーブロー、脇腹を貫くような激痛に呼吸が止まる。
それからずっと、男は

「あきにい！　あの人負けそうだよ！」

「アッキー！　あの人を助けてあげて！」

「アキ君、お願いっ！」

「真、美紀、結衣……わかってますよ、そんな事――――」

晃が女の子たちの願いを聞き受け、いよいよ飛び出そうとしたが。

「動くな！　テメェらはコイツを倒してからゆっくりとだ……動いたらコイツをブッ殺すからな！」

「ッ！」

動けば俺を殺す、その言葉で晃の動きは止まってしまった。
女の子たちは震え、俺もその言葉が冗談ではない事を確信した。

「ホァッ！」

「が、はっ！」

またしても膝蹴りが、俺の腹部へ激しく突き刺さる。
一瞬だけ感じるあまりの痛みに、俺は思わず腹を抱えて身体を丸めてしまう。
次の攻撃が来る事も覚悟していたが――攻撃は来ない、男は俺の目上で笑みを浮かべていた。

「テメェがいくら頑張っても無駄なんだよ。一般人が俺達反逆者（レジスタンス）に

刃向かってんじゃねえぞ。さっきも言ったけど俺は団殺者（ディスター）と戦う為に身体鍛えてんだよ……この船山健太（ふなやまけんた）をそこらのチンピラと一緒にしてんじゃねえぞ！」

ハハッ……そうかよ。そりゃあ悪かったな……確かに俺はアンタをただのヤンキーだと思っていた。

科学都市とか団殺者（ディスター）とか反逆者（レジスタンス）とか。

そんな言葉を使いまくる、邪気眼系とＤＱＮ系をを足した厨二病ヤンキーだと思ってたよ。

だけど違うんだな……そりゃあ素人じゃ太刀打ちできないわけだ。

でも、お前は一つ大事な事を知らないな……！

「ナメてんじゃねえぞ……この野郎ォ！」

ゆっくりと船山って男の胸倉を掴み、起きあがると……。

俺は少しずつ頭を下げ、一気に力強く自分の額を船山の眉間に叩きつけた。

激しい音が響き渡り、船山は俺のヘッドバットの衝撃で後ろへ下がろうとしたが、胸倉を掴む左手に力を入れて向こうへ吹っ飛ぼうとする船山を、無理やり俺の近くまで引き寄せる。

そこへ、俺は船山の鼻っ柱に強く握った拳を叩き込んだ。

「あ！　が、ぐあぁぁぁっ！」

地面へ叩きつけられた船山は、転がりながら己の顔面を両手で押さえていた。

押さえているにも関わらず、船山の手や下のアスファルトが血で染まってゆく。

どうやら、今の一撃で鼻血が出てしまったようである。

「ち、くしょお……やってくれたなクソ野郎ぉっ」

手で鼻を押さえながらもぞもぞと起きあがる。

出血が結構ひどいけど……まあ、多分命に別状はないだろう。

鬼のような形相で俺を睨み付ける元気があるしな。

「クソ野郎？　クソ野郎はてめえだろうが。なんでここまでして団殺者（デイスター）ってのを狙ってんだよ！　なんだって、その為に関係ないヤツまで巻き込まれなきゃならねえんだよ！」

「俺達はなぁ！　ガキんちょの癖にどこの犯罪者だろうが裁ける、団殺者（ディスター）の存在が気に入らねえんだよ！　なんでアイツらだけ特別なんだよ！　なんで団殺者（ディスター）って学生集団だけが、科学都市にいる警察よりも上にいやがるんだよ！」

ようやくわかったきたぜ……団殺者（ディスター）って組織が。

ようわからんけど、要するに学生がやってる警察なんだろ？

……でも、それだけじゃないか。警察の存在の何が悪いんだよ。

むしろそういうのが存在する理由って――――

「団殺者（ディスター）ってのが存在する理由は、てめえらみたいな犯罪者が暴れまくってるからじゃねえのかよ？」

「なん……だと？」

「それくらいわかってろよ！　犯罪がなけりゃあ警察も何もいらねえだろ！　俺は科学都市とか団殺者（ディスター）とか、そっちの事情はサッパリわかんねえけど……でもこれだけは言える。てめえらが暴れまくってるから、ロクに平和に暮らせねえような事をやってやがるから、

だからそういう組織が結成されたんじゃねえのか！？」

馬鹿馬鹿しい。そんな常識的な事すらわからねえのか、コイツら反逆者（レジスタンス）ってのは。

結局船山達反逆者（レジスタンス）ってのは、ただの自己中心的な奴らの集まりじゃねえか。

コイツらが何もしなけりゃ別に不便な事はねえ。

要するに、不信に思っているのは犯罪者だけなんだろ。

「うるさい！　科学都市は……科学都市は何をするかわからねえ場所じゃねえか！」

「でも、科学都市の中だろうが外だろうが、てめえらがやってる事は犯罪以外の何者でもねえだろ！」

「この野郎……団殺者（ディスター）でもねえのに、科学都市の事情なんてこれっぽちも知らねえ癖に……俺達に説教くれてんじゃねえよ！　クソガキがぁぁぁぁっ！」

船山は右拳を振り上げ、大きく叫びながらこちらへ突っ込んできた。

そんなアイツを迎撃すべく、俺も拳を握りしめた。

ちくしょう、最初から最後までホントにわけがわからねえ……。

多分、事情なら団殺者（ディスター）を名乗る晃のほうが詳しいんだろう。

でも、知識のねえ俺でもわかる事――やっぱり相手は犯罪者。

科学都市だろうがその外だろうが関係ねえ。取り締まられるような事をやっているんだ。

「てめえらの科学都市や団殺者（ディスター）に対する不安はくだらねえ……」

言いながら歯を食いしばり、右拳をさらに強く握りしめる。

一方の船山は雄叫びをあげながら、俺に向かって突っ走ってくる。

「一度刑務所かどっかで頭でも冷やしやがれ！　この大馬鹿野郎がぁ！」

全力を振り絞った放った俺の右ストレート。

船山の右ストレートと俺の右ストレートが、お互いの顔面に同時に激突した。

脳さえも揺さぶる衝撃に、お互いバランスを崩した。

だが、倒れたのは船山だけであった。

俺は力強く踏ん張り、絶対に地面に倒れ込む事はなかった――――

――――それから数十分後。

複数の警察車両や救急車両、そして警察官や野次馬等が学校のグラウンドを埋め尽くしていた。

怪我人の大半……というか、ほぼ全員が反逆者（レジスタンス）のメンバーである。

その他奇跡的に無傷だった反逆者（レジスタン）のメンバーも、当然現行犯で逮捕であった。

そして、そんな中で俺は――――

「本当に病院へ行かれなくても平気なのですか？」

「晃も心配性だなぁ。これでも身体の頑丈さには自信があるんだぜ？」

俺も随分殴られたが、今では全く痛みを感じない。

それどころか、どこを怪我したのかさえわからない。

だって痛くないんだもん。ふぅ……俺の体質って本当に便利である。あれだけ暴れて殴られたってのに、既に怪我もないし意味も感じないのだ。

「すみません……他校の生徒をこんな事に巻き込んでしまって。東の丘学園の生徒会長としても、そして一人の人間として深くお詫び――――」

「え～っと、柊さんでしたっけ？　別に気にしなくていいですよ」

「……え、ですが……っ」

「あんなの大した事ないですから。それに学園側の皆が怪我しなくてよかったですよ」

一応先輩らしいので、俺は敬語を使ってそう説明した。
まあ確かに、船山なんて光秀や早川に比べりゃあ……全然大したことなかったし。
事情を知らないからちょっと混乱したけどね。

「藤島さん。藤島さんがいなければ、僕が到着する前に渚ちゃんが拉致されていました。本当にありがとうございます」

「あ……ありがとうございます、藤島さんっ」

「おう、二人もそんなに気にする事ないよ。困っている人を助けるのは当然だろ？」

「ハハッ！　藤島さんは団殺者（ディスター）向きの人かもしれませんね」

晃が笑顔を浮かべながらそんな事を言ってきた。
団殺者（ディスター）ねぇ……団殺者（ディスター）かぁ……。

「誘ってくれたのはありがたいけど、面倒くさそうだから止めとくわ」

「そうですね。僕もこれ以上藤島さんを巻き込みたくありません」

「さてと、俺はそろそろ帰ろうかな？」

流石にそろそろ帰らないと、暮葉達だって心配しているハズだ。
それに、これ以上何か事件に巻き込まれるわけにもいかないしね。

「藤島さん、また自由荘にでも遊びに来てくださいね」

「あきにいがそういうなら……私も歓迎するよ」

「わたしは一之瀬（いちのせ）美紀（みき）、まあ……よろしくね」

「羽衣結衣（はごろもゆい）です。その、よろしく」

「おう」

なんだか知らんけと、トラックに轢かれると言う些細な事故がキッカケで、東京に知り合いが出来てしまったな。しかもこの人達自由荘の面々だけではない。

「私は柊静音（ひいらぎしずね）、東の丘学園生徒会の会長です。是非学校にも遊びに来てくださいね」

「藤島さん……私も図書館にいますので……来た時には足を運んでみてくださいね……っ」

東の丘学園の人とまで、俺は事故がキッカケで知り合いになってしまった。

まあいいか、知り合いは多いほうが人生楽しいし。

何より、みんなとってもいい人そうだしな。

……今度、東京に来た時にでも遊びに来ようかな。

「……わかった、皆も古宇坂に遊びに来たら、俺も俺の仲間も皆で歓迎するよ」

「それでは、お気をつけてください。藤島さん」

そんな晃の言葉に対し、俺は。

「おう、またな」

さよならは決して言わない。

多分、これが最後ってわけじゃないから。

というか最後にはしないだろう。

そのうち、今度は事故で偶々じゃなくて正式に遊びに来よう。

その時は——暮葉達も連れてこようかな。きっとここにいる人達も喜ぶはずである。

さて、古宇坂で暮葉達が心配しているハズだし、俺もそろそろ帰ろう——

……あ、交通費ねえし結局道もわからない。どうやって古宇坂に帰ろう……？

番外話，Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙとコラボっちゃった場合　後編（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「どうもー！　今回でコラボは最後、次回からまた本編です！」

晃「藤島さん、その前に言う事がありますよね？」

圭介「あ、更新時刻から１時間近く遅くなって申し訳ございません……ネタを考えるのに時間が（ｒｙ」

晃「藤島さん、余計な事は言わなくてもいいと思いますよ？」

圭介「ぐっ……晃のツッコミが的確すぎる……っ！」

晃「そうそう、Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙのほうでもいつか『魔法少女に会っちゃった場合』とのいコラボをやる予定ですので、よろしくお願いします」

※ｋｕｘｕさん、本当にありがとうございました！
そしてＦｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙ本編・ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１９６０ｓ／

第７８話，突然すぎるぞ？

俺と暮葉は二人に手を引っ張られ、写真部の部室へと連れてこられた。
扉を開けると、そこにはいつもと違って真剣な表情の浅間部長がいた。
なんか……いつもよりも部室の空気が重たい。

「失礼します……」

「変態兄貴、圭介達を連れてきた」

「うむ、ありがとう二人とも」

空気どころかみんなも暗い。
やっぱり……青山さんが転校するって言うのはネタじゃねえのか？

「あの、部長……」

「藤島君、話は聞いていると思う」

「はい……その、青山さんは……？」

「今朝、青山君の母親が青山君の代わりに退部届を提出してきてね、転校の話はどうやら本当らしい」

た、退部届って普通本人が提出するんじゃ……。
なんだって青山さんの母親が？

しかも、今日は青山さん本人を見かけていない。
……なんだこれ、もう色々と滅茶苦茶すぎてワケがわからない。
青山さん。一体どうしてこんなに急に……？

「もきゅ、部長さん……青山さんはどうして？」

「それが僕にもわからないし、顧問の先生に訊いても何も事情を知らされていないらしいんだ」

「なんでだよ……全然意味がわからねえ」

今日、青山さんに告白の返事をするハズだった。
正直な気持ちを伝えるハズだった……でも、青山さんがいないんじゃ何の意味もねえ。
それどころか、この先青山さんに会えなくなるかもしれない。
転校なんて止める事ができないだろう。だけど……せめて事情くらいは知りたい。
青山さんがいきなり転校してしまう理由を――――

「今日みんなを招集したのはこの事の報告だ。青山君は今度の文化祭の写真撮影係だった、もう一人藤島君がいるが……藤島君、一人でも大丈夫かい？」

「……はい、仕方ないっすよね……任せてください」

青山さんがいないんじゃ仕方ない。
元々、俺は青山さんを手伝う為に立候補したんだ。
だったら――青山さんが不在の今、俺がしっかり仕事をしなければならない。

「けーすけ様……っ」

「あ、あたい、手伝うから忙しかったら言ってくれよな！」

「葵も、全力でお兄ちゃんの事サポートするから！」

「……けーすけ様、拙者も暇を見つけて頑張るのです」

「おう、ありがとうみんな……」

手伝ってくれるのは本当にありがたい。嬉しいハズだ……でも、ちっとも喜べない。

青山さん、どうして転校なんかしちゃうんだよ……。

――――その日の昼休み。

俺は野郎共に伊吹や小坂、そして暮葉を加えて弁当を食べていた。

今日はハンバーグとか卵焼きか。はぁ……好きなメニューのハズなのに、ちっとも美味しく感じない。

俺の頭の中は未だに、あの子の事でいっぱいだ。

確かに、青山さんに対して恋愛感情があるわけじゃないさ。

でも……だからって転校して悲しくないわけがない。

青山さんも大切な仲間なんだ。だから……出来る事ならいなくなって欲しくない。

けど、転校するにはそれなりの理由がある。転校を止めるなんて事は難しいだろう。

……でも、せめてその理由くらいは知りたい。

それから、最後に会ってＣＤ返却と告白の返事をしたい。

青山さんに会いたい……このままだと未練たらたらだ。

「圭くん……なんか今日は大人しいね？」

「……」

「あ、亜紀の話をスルー。圭介……重傷だわ」

「……え？　あ、わ……悪いっ！」

しまった。小坂をスルーしてしまった。

いくら思い悩んでいるからって、今のは人として最悪すぎる。

「いやいや、いいんだよ！　圭くんだってお年頃だしねぇ？」

「あ、亜紀さんっ！　今のけーすけ様は……っ」

「……あ、ご……ごめん」

暮葉の言葉で感づいたのか、小坂はいきなり謝ってきた。

確かに、冗談に乗るような気分じゃないけど……何も全く言うなというわけでは。

……やっぱり、落ち込んでいる俺の存在が場の空気を悪くしてるのかな？

「ねぇ圭介、なんか悩みでもあるの？」

「いや、大した事じゃねえよ」

「あ、あんたが落ち込むって……大した事だと思うわよ？」

「そ、そうか……心配してくれてありがとうな」

「べ、別に心配してるわじゃないわよ……っ」

言いながら、伊吹はぷいっとそっぽを向いてしまった。
その時の伊吹は何故か、頬がほんのり赤く染まっていた。
まあ……どう見てもいつものツッパリ伊吹ちゃんだな。

「空気が重すぎて僕ら話しかけ辛ぇ……」

「大吾、シリアス苦手だねぇ」

「うっせ！　俺はブヒる事が専門だからな！」

「それ、全然威張れる事じゃないような気がしないかい？」

「し、重原にはわかんねーよーだっ！」

野郎共は相変わらずだなぁ……はぁ、俺も出来ればあれくらいのテンションでいたい。
でも、今の俺には無理だ。青山さんの事で頭がいっぱいで……。

――――その後。
昼飯を食い終えた俺は一人、廊下をふらついていた。
最初は暮葉も一緒だったのだが、暮葉は別なクラスの友達に呼ばれて途中でログアウト。
暮葉、他のクラスにも友達いたんだなぁ。
アイツの交友関係も中々広いものだ。まあ確かに、葵と似たような

ものの社交性あるヤツだしな。
きっと今じゃあ、俺なんかよりもずっと友達の数が多いのだろう。
それに比べて悩みながら一人でふらついている俺……何やってんだろうなぁ。
仕方ねえ事なのに。もうほぼ確実に会えないのだろうに……。

「あ、藤島」

「……え？」

背後から女の子の声がする。
振り向くと、そこには背が高く、胸まで大きいクールなポニーテールの女の子が立っていた。

「明智……？」

「うん、学校で話すのは久しぶりだな……？」

「そう言えばそうかもしれないな」

昨日電話で沢山話をしたけどな。
まさか、その翌日に明智に声を掛けられるとは思ってもいなかった。
赤を基調とし、黄金の文字で“風紀委員”と記された腕章をつけているあたり、今は風紀委員の仕事で見周りか何かをしている所なのだろう。
だったら、邪魔をするわけにはいかないよなぁ。俺も今は気分がよろしくないし……。

「なあ藤島……元気がないように見えるが、ど……どうした？」

「え？　そ、そう見えるか？」

「あたりまえだ。いつもの藤島ならエッチな発言をしているハズだぞ」

「……俺、普段そんなにオープンエロだったっけ？」

「す、すまない……冗談を言っていい時じゃなかったな」

「いや、別にいいけどさ……」

ダメだ。明智と会話をしてるってのに……こんな態度じゃ明智に悪いじゃないか。

青山さんの事が心配だとしても、今はそれを考えている場合じゃない。

俺は今、明智と話をしてるんだろうが……っ！

「藤島、もしかして……青山の転校の話か？」

「えっ？　どうして明智がそれを？」

「一応私の家は青山の家と並ぶ家、故に青山家の情報は普通に入ってくるからな……っ」

「エェッ！？　マジで！？」

初耳や、明智家と青山家が同等……でも、どうしてだ？

明智家って前にも行った事があるが、確かとんでもなくデカい家だったような気がするぞ。

その明智家と同等らしい青山家……一体、どんな家庭なんだよ？

……待てよ、明智は青山さんが転校するって話を知っている。
そして明智家には青山家の情報が入っている。
という事は、青山さんが転校する事情を知っているんじゃねえのか？

「……なあ明智」

「……ど、どうした藤島？　そんな急に真剣に？」

「教えてくれないか」

明智家には青山家の情報が入る。
その明智家の一人娘である明智は、青山さんについての事実を知っているかもしれない。
だったら、明智に聞いてみる価値はあるだろう――――

「な、なにをだよ……？」

「青山さんが転校する理由……いや、出来れば青山家について知っている事を、全部……っ！」

俺は力強く言い放つ。しかも、その勢いで明智の両肩に手を置いていた。

「は、にゃ、あ……わ、わかった……わかったから……は、離れて欲しいぞっ」

明智は口元をわなわな小刻みに震わせ、何故か顔を耳まで真っ赤にしていた。
目もしっかりと見開いており、恐怖していると言うよりはあがっている感じだ。

「だ、大丈夫か明智？　顔赤いぞ？」

「っ！？　ななな、なんでもないぞ！　心配するなっ」

「そ、そうか？」

「～～～～っ」

いや、どう見ても大丈夫じゃないでしょ。
相変わらず、明智の顔は耳まで真っ赤に染まっていた。
……まあ、時間が経つにつれて次第に収まってきたけど。
もしかして、俺が勢いで肩に触れたのが原因なのかな？

まさか明智って……実は男性恐怖症だったりするのか！？
アレって確か、触れられたり話したりするだけで震えたり顔が赤くなったりするらしいし。
こ、今度から明智と話す時は気をつけよう。なるべく触れないように、怖がらせないように……っ！

「……そうだっ！　あ、青山の話だったな？」

「お、おう。頼むぜ明智、教えてくれ……っ！」

「わかった。一度しか言わないからよく聞くんだぞ」

明智にそう言われ、俺はもちろん首を縦に振った。
……いよいよだな。青山さんの……いっぱいある不思議の一つが明らかに――――

第７８話，突然すぎるぞ？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「さて、今回から本編だな！」

伊吹「圭介……鈍感っ」

圭介「え？　ど、どうした伊吹？」

暮葉「確かに、あそこで男性恐怖症なんておかしいのです」

圭介「く、暮葉までどうしたんだ？」

小坂「圭くんに彼女が出来ない理由、なんとなくわかったかも」

圭介「ちょ！　こ、小坂さん！？　俺が何をしたって言うの！？」

黒木「こんな鈍感野郎がモテモテなんて……クソムカつく！」

圭介「さっきから皆さん揃って鈍感鈍感って一体なんなんですかぁぁぁ！？」

第７９話，青山家

青山家……。

この古宇坂市で一番の歴史を持つ名家。

かつてはこのあたり一帯の名主をつとめていたらしく、その上明治以降は華族で最後の当主が子爵であり、現代でも莫大な財産と広い土地を持っているらしい。

なんでも厳格な家庭らしく、明智曰く青山さんが初芝に通っているのも部活をやっているのも、全て青山家の現当主である青山流（あおやまながれ）の特別許可があったからしい。

つまり、この由緒正しい名家に生まれた青山さんは、所謂箱入り娘というわけである。

確かに大人しくて上品な雰囲気はあったけど、お嬢様って感じではなかったよなぁ……。

人は見かけによらずとはよく言うけど、まさにその通りかもしれない……。

「そ、そんな家が古宇坂にあったんかい！」

「うん、私も明智家も理由（ワケ）あってこっちに移ってから知った事だぞ」

「青山さんがお嬢様ねぇ……ん、でもなんで？」

「なにがだ？」

「いや、どうして青山さんが転校する事になったのかなって」

青山家の事はわかった。青山さんがお嬢様だって事もたった今知った。

でも、まだ肝心な事を知れていないぞ。
青山さんが転校してしまう理由……俺は何よりもそれが知りたい。
そして、青山さんが行ってしまう前に――どうしても返事がしたい！

「そんな事……本人に訊かないとわからないと思うぞ？」

「じゃ、じゃあ理由を知るのって無理じゃねえか……？」

「会わなかったらな……っ」

そう簡単に言うけどさ、旧家のお嬢様となんて早々街中で出会えるとは思えないぞ？
困った……というか絶望的だ。
まだ告白の返事どころか、借りたＣＤだって返していないっていうのに……。

「……」

「ふ、藤島……っ、青山に会いたいのか？」

「えっ？」

「そういう顔、していたぞ？」

気付かれちまったか。まあ隠しようがないくらい落ち込んでいたからな。
ここはもう、無理だとわかっていても正直な事を言おう。

「……そりゃあ、会いたいとは思っているよ」

「そうか……」

……でも、無理だ。
そんな事情があるってんなら、青山さんに会おうと思っても会えないだろう。
でも会いたい、せめて残されたやるべき事だけはやっておきたい。

「なあ、藤島……」

黙りこんでいたその時、俺はいきなり明智に声をかけられた。

「なんだよ？」

「……青山に会えるかもしれないぞ？」

「ま、マジで！？」

「う、うん……絶対ではないけどっ」

その時の明智の言葉で、俺のテンションは思わず上がってしまった。
青山さんに会える……そんなありえないと思っていた事を明智は言ったのだ。
まあ、【かもしれない】と言っていたという事は、確実に会えるわけじゃないんだろうけど。
……それでも、僅かでも可能性があるってんなら――――

「明智、どうやって会えばいいか……教えてくれっ」

「わかった、私が青山家に連絡をつけておく」

「……えっ？」

「この地域で青山家にタダでお願いできるのは、多分私の家だけだ。青山家だって私と会うって条件なら青山の外出を認めるハズだろう」

おお、こんな所で明智が役に立とうとは予想もしていなかった。

やっぱり、明智ってすげえな……。

俺も暮葉曰く、一応アレクサンドル皇太子って皇族の子孫らしいけど、生憎異世界の皇族だからこの世界じゃ何の意味にもならないんだよなぁ。

しかも胡散臭いしさ、多分誰も信じたりはしないだろう。

そういう意味で明智家ってすごいよ。明智光秀の子孫だって言うのも事実だしな。

だからこそ――青山家と対等に話をする事ができるんだ。でも……。

「い、いいのかよ？　お前にそこまで迷惑を掛けるわけには……」

「藤島には私を光秀から救ってくれた恩がある。だ、だから……恩返しだと思ってくれればいいぞっ」

明智……いつも思っているけど改めて思ったよ。

ホントにいいヤツすぎる――――！

「ありがとな、明智！」

俺がお礼を言うと、明智は少しだけ頬笑みながら頷いてくれた。

その後、青山さんと会うまでの作戦を話し合い、作戦が決まったのは昼休み終了ギリギリであった。

明智が青山家へ電話し、放課後明智家の近所の青山さんを呼び出す。

もちろん、青山家には明智と話をすると伝えて……でないと多分青

山家は話を聞こうともしない。
もし全てが上手くいって明智家の近くにある公園まで青山さんがきたら、次は俺の出番である。
青山さんが転校する理由。やり残したこと……すべてをそこでやるんだ。

「それじゃあ今日はこれにて終了、気をつけて帰れよ」

ずっと考え事をしていたら、いつの間にか乙坂が勝手に進めていた帰りのＳＨＲが終わっていた。
しまった……午後の授業なんて殆ど聞いていなかった。
後で暮葉か伊吹にノートでも借りよう。でも、今はそんな事よりも……。

「……んっ？」

ポケットのあたりに振動を感じる。
多分、ケータイにメールが何かが届いたのだろう。
まさかと思ってケータイを開けて見ると、確かにメールが１通来ていた。
そこからさらに受信ボックスを開いてみると……やっぱり明智からのメールだ。

“成功したぞ、私の家の近くにある公園で待っていてくれ”

……やった！
でかしたぞ明智、よく青山さんを呼んでくれた！
後は俺が遅れないように、急いでその公園まで行かねえと。
今日は一応部活の活動日であるが、そんな事は今の俺にとっちゃあ

どうでもいい話だ。
それより、青山さんとお話がしたい――――

「けーすけ様！　そろそろ部活に――――」

「悪い暮葉！　一身上の都合により俺は先に帰りますぜっ！」

「もきゅ！？　ちょ、けーすけさまぁ！」

悪いな暮葉、そのうち何か奢るから今は勘弁してください！
……俺はただ只管、明智家の近くにある公園へと駆けていた。

――――走る事数十分、明智家って結構学校から遠いよな……ようやく公園に到着した。
既に7月、春頃なら夕日が辺りを包んでいるだろう。
でもこの季節は日が長く、未だに青空が眩しい。
そんな太陽の光に照らされた公園にある、一本の大きな樹の下に――彼女は立っていた。

「青山さんッ！！」

「っ！？」

俺が大声で彼女の名前を呼ぶと、彼女はビックリした様子で俺のほうを見てきた。
最初から最後まで、ず～っと彼女は驚いていた。
大声で呼ばれた事と、そして……自分をここに呼んだ人物とは違う

人物が現れた事に……。

「よかった、本当に来てくれたんだ……っ！」

「えっ……う、うそっ……藤島先輩、どうして……っ？」

青山さんは俺が現れた理由（ワケ）を知らない。

きっと明智が現れると思っていたに違いない、それなのに俺が現れたんだ。

一応、これでも詐欺ではあるから謝っておかないと。

あと、勝手に青山家の事情を知ってしまった事についても……謝らねえと！

「明智から来てほしいって言われたんだろ？」

「えっ？　ど、どうして……っ？」

「全部聞いたよ、明智から」

「ぜ、全部って……わたしの家の事も？」

「……ごめん、どうしても青山さんに会いたかったから」

「先輩……そのっ、わたしも……会いたかったですっ」

まだ全てが終わったわけじゃないからな。

それにしても青山さん、やっぱりいつもよりもテンションが低い。

本人も望んでいなかった転校なのだろう。

でも、どうして青山さんがいきなり転校する事になったんだろうか？

告白の返事は一番重要だから最後だ。ＣＤ返却もこの後すぐにすれ

ばいい。
まず最初に転校する理由から聞いてみようか。

「あのさ青山さん、色々話があるんだけど……まず最初に一つ聞いていいかな？」

「な、なんでしょうか……？」

「青山さんってどうして転校する事になったんだ？」

「……」

俺が問うと、青山さんはどこか悲しげな表情で黙りこんでしまった。
まずい、流石に今のはストレートすぎたか。

「いや、ちょっと気になっただけだから。話しづらかったらスルーしてくれても……」

「……わたし、心配かけてますよね……？」

「えっ？」

さっきまで黙りこんでいた青山さんが、俺を直視しながら問いかけてきた。
その視線は、とても強いようでとても弱々しい。
見ているこっちが辛くなってしまう程に、とても……。

「……話します、わたしも……みんなに何も知らせないまま消えたくはありません……っ」

「青山さん……」

こうして俺は、青山さんが転校する理由を聞ける事になった。

名家青山家のお嬢様。彼女はどんな理由で転校してしまうのだろうか……。

第７９話，青山家（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「そういえば皆の家って昔何やってたんだ？」

伊吹「私の家はよくわからないわ。刀鍛冶って説があるけど」

小坂「あたしは多分農民かな？」

大吾「僕は名前的に武家じゃねえの？」

小坂「長宗我部ねぇ……？　あんたが子孫じゃ長宗我部元親に失礼だと思う、しかもどーせ名ばかりで実は農民でしたオチなんだろ？」

大吾「ひでえ！　これだから現実女は嫌いだ！」

重原「俺の家はずっと武道一筋だね」

伊吹「そういえば、圭介の家ってどんな感じなのよ？」

圭介「お、俺の家か……シラネ」

小坂「……ダメじゃん」

伊吹「言いだしっぺの癖に」

圭介「うっせ黙れ！」

（アレクサンドルとかいう異世界人が御先祖様なんて言えるかよ！

しかも伊吹は事情知ってるだろ！　嫌がらせかよ！）

第８０話，理由

「わたしの家……多分先輩も知ってると思います……とても厳しくて」

青山家、古宇坂で市で一番の歴史を持つ名家。
そんなお家柄だからこそ、厳しいのは当たり前の事だろう。
でも、それと転校の理由が何の関係があるんだろうか？
特別許可さえ出したらしいのに、なんだって今更転校する必要があるんだよ……。

「だから、最初はわたしが初芝高校に通う事さえ……両親は反対でした。部活動をする事さえ反対でした……」

確かに、初芝はレベルこそ高いものの一番ではない。
増してや男女共学。隣町にはもっとレベルの高い女子校が存在している。
大事な自慢の娘を男がいる共学より女子校に通わせたい。
両親はきっとそんな事を考えていたんだろう。
それなのに俺と中学が一緒だったのは、多分この近隣に女子中がなかったからだろう。

「でも……わたし、どうしても友達と一緒にいたくて、先輩もいて……だから、どうしても初芝に進学したくて……っ」

「お、俺も？」

「は、はい……っ！」

そうか、青山さんは俺に好きと言ってくれた人。
その好きって気持ちは中学の時からあった。
だからなんだろう、初芝にどうしても入りたかったのは。
友達も入る予定だし、そこには青山さんにとっての憧れもいた。

「それで……お兄様と一緒に強く望んだ末、ようやくお父様とお母様の特別許可が下りました……」

「お兄様って……青山さんって兄貴がいるのか？」

「はいっ、今はその……社会人なので中々会えませんが……っ」

「そうなんだ。じゃあ青山さんが今まで初芝に通っていられたのも……」

「はい、お兄様のおかげなんです……っ」

青山さんは瞳を閉じ、何か思わせぶりな表情でそう答えた。
青山さんの兄貴ってどんな人なんだろうな。
とにかく、妹想いのいい兄貴だって事はなんとなくわかったよ。
兄貴が一緒に頑張ったからこそ、青山さんは今まで初芝に通っていられた。
友達と一緒に笑っていられた、それなのに……。

「じゃ、じゃあ。折角兄貴と二人で頑張って、ようやく許可を貰って入学できたのに、なんで今更転校する事になっちまったんだよ？」

「それが……一週間前、わたしの家の前で喧嘩があったのです……っ」

「えっ、喧嘩？」

「はい……それがっ、喧嘩をしていたのが初芝高校の生徒とうちの執事で、初芝のほうはどう見ても不良で……」

「初芝の不良って……も、もしかしてっ」

そういえば一週間前、黒木と赤佐が顔面にガーゼを貼って登校してきたような。

まあ、アイツらが怪我して登校してくるのはよくある事だし、そもそもアイツら短気だから、むしろ一ヶ月に一回も喧嘩をしないほうがおかしいくらいだった。

どうせいつもの事だって軽くスルーしていたけど……。

アイツら、よりによって青山家の前で喧嘩するなんて……。

「せ、先輩……どうしたのですかっ？」

「え？　あぁいや、犯人に超心当たりが……」

「……え？　も、もしかして……先輩？」

「違うよ。クラスメイトに丁度一週間前、怪我して登校してきた二人がいたんだよ。その二人ってよく喧嘩してるって話だからさ」

「あっ、そういえばお母様も……初芝の生徒は二人だったって……っ」

黒木と赤佐ぁ～！

別に皆諦めてるし、白陵の不良と殴り合う分にはもう文句は言わな

いよ。
相手だって黒木や赤佐と似たようなもんだからさ。
でも、なんでよりによって青山家の前で、しかも青山家の執事と殴り合ったんだよ！
もう大体読めたぞ。青山さんが転校してしまう理由が……！

「要するに、その二人を見て青山さんの母親は初芝は危険と思ったんだな」

「……えっ？」

「そんな危険な所に娘を居させるわけにはいかない。だから安全な学校へ転校させよう」

「……っ！　ど、どうして……っ？　せ、先輩……なんで何も言っていないのに……っ」

「ん、もしかして正解だった？」

「は、はい……っ、殆どそれで合っています……っ！」

「……」

やっぱりな、そんなこったろうと思ったよ……。
ったく、黒木と赤佐め……あんな所で殴り合いなんかしやがって。

「……わたし、嫌です……転校なんか嫌ですっ」

「転校の話はやっぱり、親が強引に進めている事なのか？」

「はい……っ、折角……折角お兄様と頑張ったのに、努力が水の泡です……っ。それに、先輩達とお別れするなんて絶対に嫌です……っ！」

「……」

大人しく、物静かでお上品な雰囲気で、それでも元気だった青山さん。

それが……今は両目に涙を浮かべていた。真珠のような雫が頬を伝って流れていた。

本心を強く言い放った後はただ只管、歯を食いしばり、きつく閉じた目から涙を溢れさせ続ける。

そこから感じる彼女の想いの強さ……。

転校したくない、仲間と別れたくない。

……でも、現実には逆らえない。

こうして俺のような他人に愚痴を言うのが精一杯、自分にはどうする事も出来ない。

そんな……とても弱々しい青山さんを、俺はただ黙って見ている事しかできなかった。

「――――」

「……」

ちくしょう、俺って本当に男かよ……。

こう言う時、何か言ってやったり彼女の為に何かをするのが、本当の意味での男じゃないのか。

少なくともエロゲーの主人公なら、今頃ヒロインを慰めているハズだ。

でも……俺にはそれができない。ただ、無言でそばに立っている事

しかできない。
男失格、先輩としても失格だよな……俺。

「……っ！　せ、先輩、後ろっ！」

「えっ？」

泣いていたのにいきなり慌てだした青山さん言われ、俺は後ろを振り向いてみた。
すると――俺の後ろに誰かが立っていた。
黒髪の眼鏡でその上イケメン、しかも黒服を着用している若い野郎。
すげえな……黒執事のコスプレかよ。ていうか何者？
なんで俺の後ろに立って――――

「お嬢様から、離れろ」

「はっ？　――――ごはっ！」

な……なん……で？
突然黒服のイケメンは、突き上げるようなボディーブローを俺に放ってきた。
貫くような激痛に俺はたまらず、地べたに膝を付いてしまった。
さらに執事は膝を付き、腹を抱える俺のこめかみに廻し蹴りを打ち込んできた。
頭蓋骨さえ打ち砕くような蹴りを受け、俺の体は数メートル程吹き飛んでしまった。

「ぐぁっ！」

……ちっくしょう、受け身は取ったが体中痛ぇ。
まあ、ボディーブローはこめかみへの一撃の痛みはもう消えたが。
でもこれ、普通の人なら気絶してるぞ？

「せ、先輩……っ！」

「ちっくしょう……てめえ！　いきなり何するんだよ！」

「ごめんあそばせ、千早さんにちょっかいを掛ける初芝の輩がいたものだから、ついつい追っ払うよう命令しちゃったザマス」

もう一人、新しいヤツが俺達の前に現れた。
和服の中年の女性だ。
その人は先程俺を攻撃してきた執事の横に立ち、俺をあざ笑うかのような見下してきている。
……なんか、扇子に銜え煙草にあのゴミでも見るような表情、ムカつくババアだ……っ！

「お、お母様……っ」

「え？　お、お母様って……あの人がお母さん！？」

「あらまぁ！　貴方にお母さんなんて呼ばれたくないザマス。やっぱり初芝は教育程度が低いザマスね」

うるせえ……っ！
ザマス口調のてめえよかずっとマシだろ。
ていうか、いきなり人様ぶっ飛ばしといて、嫌そうな表情しながらテキトーに謝るたけでお終いか。
どう見てもあんたらの方がずっと無礼だろ……。

「お母様……どうして？」

「オカシイと思ったザマス。明智の者なら千早さんに会いたければ、向こうから来るハズなのに……心配して千早さんの後を追ってみれば、千早さんを泣かす下衆な平民が……っ！」

「ち、違いますっ！　泣いたのはわたしが勝手に――――」

「わかってるザマス！　この平民のゴキブリの仕業なのは存じてザマス！」

ザマスザマスうるせえ！

しかも、勝手に俺が青山さんを泣かせた事になっているし。

まあ……青山さんに何もできなかった俺にも、責任があると言えばあるけど……。

でも、この人明らかに理不尽すぎだろう。

「さあ千早さん。明日には転校の手続きが終了し、隣町の有名女子高へ通う事になるザマス。そろそろ家に帰り、英気を養うザマスよ」

「……っ！」

青山さんの手を握る母親。

しかし、青山さんは明らかに嫌そうにしていた。

止めなきゃ、青山さんは道具じゃねえんだよ！

「ちょっと待ってください！　娘の話くらい聞いて――――」

「岡本」

「はい……君、シャラップだ！」

その時、背中まで突き抜ける衝撃が鳩尾にめり込んだ。
やべえ……一発が強力だ。
すぐに痛みが消えたとしても、激痛で瞬間的に行動が出来なくなっちまう……っ！

「お嬢様に手を出すな、さもなくばこうだ」

瞬間、右アッパー。
ゴンッ！という嫌な音が響いた。
突き上げる強烈な一撃に、さっきの鳩尾パンチで倒れかけていた身体が起き上がる。
……気付けば、俺は公園の砂場に倒れ込んでいた。

痛みは消えた。でも……未だに母親と執事の冷たい視線。
そして、俺を心配する青山さんの悲しげな視線が、容赦なく俺に突き刺さってくる。

「フッ、ところで千明様。殴ってもよろしかったのでしょうか？」

「大丈夫ザマス。岡本も御存知でしょう、初芝の生徒は暴力沙汰が好きザマスよ」

「……そうですね」

ふ……ざけんなぁ……っ。
初芝の生徒がみんな不良みたいな事言いやがって……。
だからって、俺を黙らせる為に暴力振るうかよ……？

これが……青山家ってもんなのかよ……っ！
同じ金持ちでも明智とは全然違ぇ……なんだよ、この外道な家は……？

「いいことそこの平民。今後、千早さんにまとわりつくようなら……古宇坂港に沈めるザマスよ」

「先輩……っ」

「行きましょう、千早さん」

「……はいっ」

「あ、青山さん……っ！」

ちくしょう、流石に暴れるわけにはいかないよな……。
でも、青山さんが……このままだと青山さんが！
まだ告白の返事とか、大事な用事が残っているっていうのに。
それだけじゃねえ……このままで青山さんが幸せだって言えるのか？

俺はその後も１０分程、別に痛いわけじゃないのに砂場で寝そべっていた……。

第８０話，理由（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

一方藤島「野ォォォ原くゥゥゥゥゥゥゥン！　宿題出し過ぎなンだよォ！　もっと減らさねェと皆が遊べねェじゃねェか！」

野原「だぁ～から言ってんじゃねえかよ。テメェら学生は学校の僕なんだよ。学校はさぁ、生徒が優秀なら優秀なほどその学校がいい事になるんだと」

一方藤島「だからってェ、この宿題の量はオカシイじゃねェかよォ！」

野原「はぁ……うるせえな。このクソガキィ！」

一方藤島「ごぶるぁっ」

※夏休みシーズン、宿題が多くて困っている学生はきっと多いでしょう。
……作者も困ってます。

第８１話，決意

「……」

公園のブランコにただ一人、寂しく座っている俺はずっと考え事をしていた。
まず第一に、ブランコなんて久々に乗ったなぁという事。
小学生の頃は伊吹と一緒に乗ったりしたけど、流石にこの歳になると全く乗らなくなったよなぁ。
まあ、この歳になって喜んで乗っているのもどうかと思うけどさ。
……そういえば、ア○ガミで後輩とブラコンに乗るシーンあったな。
あの子、俺の中では結構好きなキャラだったなぁ……。

……まあ、そんな事はどうでもいいや。
それよりも第二の考え事だ。第二に青山さんの事である。
無理やり母親に引っ張られ、嫌がる青山さんの姿が脳裏に焼き付いてしまった。

「……なんで、だよ……」

俺は怒りに任せて拳をぎゅっと握りしめた。
……クソムカつく、なんなんだよ青山家は……。
確かに俺は馬鹿だし青山家の人間に及ぶとは思えない。
でも、あのオバハン……勝手に人様の程度を決めつけやがって。
初芝を馬鹿の吹きだまりみたいに言いやがって。
なにより娘を、青山さんをあんなに乱暴に扱いやがって……っ！
結局、青山さんを転校させたいのってただの我がままじゃねえか……。

「……あ、藤島っ」

声だ、声が聞こえる。
その声に反応して振り向くと、そこには制服姿の明智が立っていた。
おそらくは学校帰り、たまたま俺の姿を見かけて駆け付けてきたのだろうか。

「明智か、今から帰る所か？」

「藤島と青山がここにいる予定だったろ。だからちょっと寄り道したんだけど……あれ、青山は？」

「……」

「……その様子だと、青山の両親あたりの妨害を受けたみたいだな」

ははっ、明智さんは全部お見通しってか。
流石というか鋭いヤツだよなぁ。
正確には母親と青山家に使える執事だったけど、それでも明智の言葉に間違いはない。
話の途中で俺達は――――

「……すげえ、大当たりだよ」

「やっぱり……すまない、怪我とかはないか？」

「怪我はないけどどうして殴られたって事まで？」

「最近あの三馬鹿が青山家の執事と喧嘩をしてな。それ以降、青山

家は初芝の生徒に対して万が一の場合、実力を行使しても問題ないって……」

「な、なんだよそれ。意味わかんねえよ！」

そういえばあの母親も、初芝の生徒は暴力沙汰が好きだとか言っていたけど。

まさか、そんな事まで思っていただなんて。

ホントに青山家って歴史も長い由緒正しき名家なのかよ？

「私にもわからないぞ。でも……喧嘩の後、青山家はそう言うようになってしまった……っ」

「喧嘩って、そもそもなんで喧嘩になったんだ？」

初芝が散々言われる原因や、青山さんが転校する理由になった三馬鹿と執事の喧嘩。

そもそも、その喧嘩はなんで起こったんだろうか。

普通に考えて学生とどこぞの執事が喧嘩するだなんて、ありえないに決まってんじゃねえか。

「それが誰も口を開いてくれなくて、私も全然わからないんだ……っ」

「んじゃあ、事情を知ってんのは三馬鹿と執事だけなのか」

「そういう事になるぞ」

「そうか……」

だったら、いっそのこと三馬鹿に訊いてみよう。
でも大林は関わってないっぽいし、黒木は個人的に嫌だし……。
よし、ここは赤佐に訊こう。赤佐とはそこそこ仲もいいしな。
とにかく、このままじゃなんか嫌だ……このまま終わりになるなんて絶対に嫌だ。
俺は決めたぞ――絶対に真実を知ってやる、意地でも青山さんに会って用事を済ませてやる。
いや……出来る事なら青山さんの転校を阻止してみせる――――！

「明智、ありがとうな」

「えっ？　そんな、私は全然大した事してないぞ？」

「いや、明智のおかげで僅かな時間でも青山さんと会えた。そのおかげで色々知れたんだ。本当にありがとう」

「藤島……っ。ど、どういたしまして……っ」

明智が恥ずかしそうにそう言った。
そして、明智は俺に背を向けて公園から去って行った。
「それじゃ」などのお別れの挨拶がなかったのは、多分恥ずかしさからなんだろうと思った。
恥ずかしいから思わず逃げてしまった。まあ……エロゲーだとよくある事だな。
明智はドSだけど割と純粋だ。ストレートにお礼を言われると恥ずかしくなるのだろう……。

さて、明智との話が終わった所で……そろそろアイツを呼び出してみるか。

――――数十分後。

俺は相変わらず、明智家の近くにある公園のブランコに座っていた。

ただ、アイツを待つためだけに。

そのアイツはジーパンにタンクトップという、なんだか涼しそうな恰好で公園に現れた。

「よお藤島、用事って一体なんや？」

「赤佐、ちょっとお前に訊きたい事があるんだけどよ」

「なんや？　メールじゃアカンような事なんかい？」

「メールより直接のほうがいいかなって思ったんだよ、話が話だけに」

言うと、赤佐は俺が冗談を言うつもりじゃないって気付いたのか、急に表情を真剣なものに変えた。

ここまで真剣な赤佐、そう言えば今まで見た事がないような……。

それくらい今の赤佐は、普段の赤佐とは全然違うというわけである。

「それで、一体何の話なんや？」

「なあ赤佐。お前……一週間前に黒木と一緒に執事みたいなヤツと喧嘩しなかったか？」

「……なんの話や？」

「とぼけないで答えて欲しい。頼む……イエスかノーで答えてくれ」

赤佐は目を閉じて歯まで食いしばっている。
怒っているけではないんだろうが、相当悩んでいるのだろう。
きっと、あんまり話したくない話なのかもしれない。

「……その質問、イエスやな」

「……やったんだな」

「ああ、黒やんと二人でやったね」

まあ、その事は最初からわかっていた。
だから別に聞いても意味のない事だった。
確認の意味で本人に訊いてみたんだけど……まあ、やっぱり事実であった。
でも俺が知りたいのはその事実ではなく、どうして喧嘩に至ったかである。
ここからが勝負だよな……明智には話さなかったという喧嘩の理由。

「それじゃあもう一つ、どうしてその執事みたいなヤツと喧嘩したんだ？」

「そ、そりゃあ言えへんな」

「なんで？　まずい事でもあるのか？」

「……まあ、そんなところやな」

言えないような事したのかよ……。
ったく、黙られたら余計に気になっちまうじゃねえか。

「大丈夫だ。俺は乙坂だろうが野原だろうが絶対に先生には言わない。いや、先生だけじゃなくて誰にも言わないって約束する。もし破ったらぶん殴っても構わねえ。頼む、この通りだ！」

俺はセリフを言い終わった後、土の上に直に坐り平伏してざ座礼を行う――土下座を敢行した。

ここまでする予定はなかった、でも事情を聞きだす為には仕方ねえ。

俺は真実を知る為なら――多少の恥だってかいてやるさ。

「藤島……え、ええから頭あげい」

「……？」

「わぁった、説明するから土下座はやめろ」

「赤佐……無理言ってすまねえな」

「もうええ、それより立ってくれや」

俺は赤佐に言われ、土下座をやめて立ちあがった。

土下座とは非常に屈辱的だが、同時に他人の心を動かす可能性を秘めている。

頻繁にやり過ぎると効果はないが、普段全くしない俺がやると効果は抜群だ。

「そんやあ、一回しか言いまへんからよく聞いとけ」

赤佐と黒木は二人で青山家の前を歩いていたらしい。
その目的は、近所に知り合いの家に遊びに行くためだったらしい。
その途中で二人は偶然、青山家を見かけたんだとか。

――すっげえ！　でけえ家だなぁ！

――ホンマや！　こんなお家古宇坂にもあったんやなぁ。

二人は青山家の大きさにビビっていたらしい。
……どんだけ大きいんだ。
実物を見た事がないからイメージが沸かないが、あの二人が驚くって事は相当デカいのだろう。
とりあえず明智家には行った事があるので、明智家みたいなのを想像しておこうか。

――何坪くらいあるんだろうなぁ。

――そうやなぁ。ああ、俺らもいっそ金持ちに生まれたかったなぁ。

赤佐と黒木はそんな話をしていたらしい。
別になんて事のないごく普通の話……ところが、二人の前に黒服の執事が現れた。
その執事は赤佐達を睨み付け、最後に「平民のゴキブリが何の用だね？」と言われたらしい。
その他、ゴミだとか失せろハエだとか……とにかく見下すような暴言のオンパレード。
途中まで我慢していた二人だが、とうとう我慢の限界に達し――

「って、先に喧嘩を売って来たのって青山家の執事じゃねえか！」

「それで俺ら頭にきて……けど藤島、なんでいきなりこないな事を聞いてきたんや？」

「お、おう。実は――――」

赤佐が聞いてきたので、俺は事情を全て赤佐に話した。
青山さんが転校するという話。青山さんの転校理由、そして青山家の状況もすべて……。
事情の説明を終えると、赤佐はなんだか申し訳なさそうな表情になり。

「す、すまん藤島。俺らが執事と揉めたせいで……」

「気にするなよ。赤佐が俺だったとしてもキレてるレベルだよ」

「せやけど、藤島の大事な後輩さんがっ」

「……青山さん」

青山さんと小声で呟いてみる。
ダメだ、虚しくなるだけだな。
でも、俺はまだ諦めたわけじゃねえ……いや、むしろ始まったばかりだぜ。
喧嘩の理由。その喧嘩が原因の青山さん転校話。青山家の実態。青山さんの気持ち……。
……ふ、フフフ。見えたぞ……青山さんルートのエンディングが！

「な、なんや藤島……？　きゅ、急にニヤニヤして……？」

「赤佐！　俺、今からちょっくら青山家に突撃してくるぜ☆」

「……な、なんやってーーーーーーーーーーーーーーーー！？」

俺のトンデモ宣言に赤佐は当然のように驚いた。
まあ、それが普通の反応であろう。

「さて、青山さんを青山家から救ってやるぜ！」

「な、なんや。藤島がぶっ壊れた……？」

一見自棄になったような調子のよすぎる俺のセリフ。
だが、これは別に自棄になっているわけではない。
ちゃんと見えたんだ……青山さんの転校を阻止する話が。
つまり、青山さんルートのエンディングが見えたんだ――――！

……あぁ、眼鏡があればよりリアルに落とし神ごっこができたのに。
まあいいや、それより早速青山家に突撃だ！

第８１話，決意（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

暮葉「けーすけ様がついに壊れたのです……」

圭介「暮葉までそんな事言うの！？」

暮葉「だっておかしいのですよ！　シリアスシーンでいきなりあのテンションなのですよ？　シリアスブレイカーにも程があるのです！」

圭介「うるせえ！　確かに空気は読んでねえかもしれないけど、でもエンディングが見えたんだから仕方ねえだろ！」

暮葉「もきゅ？　えんでぃんぐって……どんなエンディングなのですか！？」

圭介「そ、そりゃあ……ネタバレだから次回以降を読め！」

暮葉「そ、そんなぁ！　少しくらい教えてくれてもいいじゃないですか！」

圭介「一つだけヒントを言おう。全く同じ展開のゲームをプレイした事がある！」

暮葉「もきゅ！？　ま、またゲームなのですか！？」

※圭介は重度のゲーム脳です。

第８２話，突撃ッ！青山家！

夕方、俺は青山家の前にいた。
赤佐から大体の道を聞いてここまで来たんだけど、やっぱり街一番の名家だけあって大きいなぁ。
中々立派な日本屋敷じゃないっすか。
……というか、明智家をイメージしてきたけど想像通りだ。
確か明智家も日本屋敷だったような気がするぞ。
でも、青山家は正直明智家よりも大きいかもしれない……。

さて、どうやって乗り込もうかな。
まあ正面から突撃するのが早いんだろうが、相手はあの名家青山家だぜ？
さっき俺を殴りつけてきた執事のような連中がいっぱいいたら……。
うん、とてもじゃないが俺一人では手に負えないぞ。
……でも、そんな小さい理由がどうした。その程度の事で突撃を躊躇するのか。
俺の覚悟は――その程度のものでしかねえのか？

「……違うよな、藤島圭介っ！」

こんな所で立ち止まって立ったしょうがないぜ。
行くぞ……。

「突撃ィィィィィィィィィィィィッ！」

突撃ラッパ鳴り渡る。
出て来る敵は皆々倒せ出て来る敵は皆々倒せ～！

……まあ、ラッパないから脳内再生だけどね。
青山家の立派すぎる城壁（ただの塀だけどね）をよじ登り、なんとか城壁を乗り越えた俺は――ついに青山家の敷地に侵入。警備の者はおらずどうやら侵入成功のようだ。
さてさて、問題は青山さんとその両親がどこにいるかだけど……それにしてもいい匂いだな。
まるで焼き魚でも焼いているかのような……。

「そういえば腹減ったなぁ……つーかいい匂いだなぁ」

「あたりまえだチェリーボーイ。今は夕食の時間なのだぞ？」

「……エッ！？」

ちょ、やべえ……早速青山家の執事に見つかってしまった。
しかもコイツ、さっき俺を殴り飛ばした野郎じゃねえか。
相変わらずイケメンなヤツだなぁ。
確か名前は……あの母親が岡本って呼んでいたから多分岡本なんだろう。

「いい度胸だなチェリーボーイ。青山家に堂々と侵入してこようとは……そこまでしてお嬢様を泣かせたいか！」

「うるせぇっ！　青山さん泣かしてんのはどっちだよ！」

「無論君だろうチェリーボーイ？」

「つーかてめえ！　さっきからチェリーボーイうるせえわ！」

「ん？　チェリーボーイがダメなら童貞君がいいかな？」

「同じじゃねえか！　ったく、いきなり童貞だのチェリーボーイだの、失礼極まりねえだろ！」

まあ、俺はコイツの言う通り本当にチェリーボーイなのだが。
だって女の子と付き合った事はないし、かと言って犯罪じみた事に手を染めたわけでもない。
セフレ？いわるわけねーじゃん……つか、いたらいたで高校生だし色々問題だろ。

「じゃあ君はアレかい。ヤッた事あるのかい？」

「ねーよ！」

「ふっ、やっぱりチェリーボーイか」

「うるせえっ！　見境なしに女の子と遊ぶヤリまくりよりはマシだろっ！」

「失礼な。僕も童貞だ！」

「……」

人の事言えないけど突っ込みたい……い、威張れる事じゃねえ～っ！
まあ、やりすぎってのもどうかと思うけどさ。
実際チェリーボーイって全然誇れないよね……。
あれ、でもそうじゃない人は今度は馬鹿みたいに見られるし……世の中って難しいなオイ！

「さて、男同士の悲しい話は置いといて……そろそろ終わりにしようか」

「……っ！」

「運がいい事に今は夕食時間。警備の者も僕を含めて８人のみだ。つまり……残り７人を見つからず、なおかつ僕に勝つ事が出来れば家の中に侵入できるぞ？」

「……殴り合えってのか？」

なるほど、数学とか英語とか物理なんかよりもずっとわかりやすい。この岡本ってヤツも結構な腕っ節だったからな。
絶対頭脳ゲームよりも、こういう身体を張った事のほうが得意だろうと思ってたよ。
でもなぁ……正直言うとコイツと戦うのに時間はかけたくない。
出来れば短期決戦でアッサリと勝負を決めたい。
だが、コイツは動きを見る限り相当の達人である。一筋縄では倒せないだろう……。

「まあね、僕もこうみえてかつては体育会系でね。ぶっちゃけ言うと勉強よりこっちのほうが得意なんだ……君もこっちのほうが頭が楽でいいだろう？　身体は忙しいかもしれないがなぁ……」

「……ああ、上等だ！」

……仕方ねえ、出来れば滅茶苦茶疲れるからやりたくなかったけど。
久々にアレ、やってみるか。
さっさと戦いを終わらせる為に――――！

「それじゃあそろそろ行くけど、死なないでね」

岡本が駆け出し、俺との間合いを詰めようと走って来た。
流石に早いな……距離も近いしこのままだと殴られる。
……だが、俺だって何もしないわけじゃないぜ。
左手で右腕を押さえつつ、俺は右腕全体にこれでもかという程に力を入れる。
筋肉のおかげで普通の状態よりも明らかに腕が太くなり、さらには血管まで浮かび上がる。

「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

岡本が素早く右ストレートを放ってくる。
マトモに喰らえば普通は失神、防いでも衝撃で後退りしてしまうレベルであろう。
そんな高威力な右拳を受ければ、防御をしたとしてもただでは済まされないハズ。
……だが、俺は岡本の全力全開パンチをパシンッ！と、なんて事のない右手だけで受け止めたのだ。
かなりの威力かつ衝撃だったハズだが、俺はその場から微動だにしない。
右腕の力だけでどうにか拳を受け止めたのだ。
これには、流石の岡本の驚きを隠せない様子だ。

「あ、ば……馬鹿な……っ」

「俺を……普通の人間と一緒だと思うなよ！」

言いながら右拳を握り締め、瞬間。
ゴガン！という壮絶な激突音。

大理石をも砕くかもしれない勢いの右ストレートが、岡本の眉間にクリーンヒットしたのである。
あまりの衝撃に岡本の身体が吹き飛び、何メートルも芝生の上を転がった。
転がり、何度も跳ね上がってようやく動きを止めた岡本。
その時既に岡本は気を失っていた。

「……ふぅっ」

終わった……予定通り、アッサリ戦いが終わったぜ。
その代わり右腕が痛いけどな。まあ、1分もしないうちにこの痛みは消えるであろう。
その1分が泣きそうなほど痛いもんだから……普段は１００％の力を使わないんだよなぁ。
つまりどういう事かと言うと、さっきの一撃は普通の人間には中々出せない一撃なのだ。
俺は身体が頑丈であり傷の回復も早い。
生まれつきこういう体質なもんだから、脳もそれを記憶しちゃっているらしい。
んで、続いて別な話に移るけど、人間は通常１００％の力を使えないらしいんだ。
なんでも肉体が耐えられないので、脳が勝手に力をセーブしているらしい。
で、俺だがさっきも言ったように、脳が身体が大丈夫だって記憶しているんだ。
だから――自分の意志で瞬間的に１００％の力を出す事が出来るのである。

「な～んか、ゾンビにでもなった気分だよなぁ」

俺、一応生きているのにゾンビで魔装少女な気分っす。
まあ、俺は生きているから痛みも感じるし、ぶっちゃけ１００％の力を使うと身体は壊れる。
その損傷した身体が１分程度で回復するだけだ。
１００％の力を使うと身体は痛いし、オマケに滅茶苦茶疲れるし……。
だから、普段の喧嘩では極力使わないようにしているんだ。
もし力を使っても倒せなかったとしたら、しばらく行動不能でフルボッコにされちゃうしな。

……さてと、無駄な事を考えていないでそろそろ先に進もう。
この立派な日本屋敷に――青山さんはいるんだ。
確か今はお夕食の時間だって岡本が言っていたよな……。
だったらとりあえず中に侵入し、お食事処でも探してみよう。
そこには――青山さんも青山さんの両親も……一家全員揃っているハズだから。

「よし！　痛みも消えたし、そろそろ突撃再開だな！」

青山さん、必ず青山さんを不自由な世界から解き放ってやる。
だから待っていてくれ、今行くから――――！

第８２話，突撃ッ！青山家！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「今回は報告だぜ。なんと……つい最近コラボをした『Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙ』のほうで、この『魔法少女に会っちゃった場合』とのコラボをしてくれました！」

暮葉「もきゅ！　拙者も出演してるのですよ！」

圭介「ｋｕｘｕさんありがとうございます！」

伊吹「地味に圭介が他作品進出してるわね……」

圭介「伊吹、お前も出演していたぞ？」

伊吹「う、うそっ！？　……い、一応感謝はしておくわ……っ」

大吾「……ツンデレ乙」

重原「ツッパリじゃなくてツンデレだったねぇ」

圭介「そうだな、珍しくツッパリじゃなか――――」

伊吹「ツッパリ言うなばか圭介っ！」

圭介「ほぎゃあああっ！　な、なんで俺だけぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？」

※Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙ本編・ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１９６０ｓ／

第８３話，全てを賭けた対決

ちょっと悪い事しちゃったなぁ。
青山家に入るには当然鍵を開ける必要があるのだが、その鍵を俺が持っているハズがない。
だったらどうやって屋内に侵入したか……。
倒れている岡本が鍵を持っていたんだ。
だから俺は岡本から鍵を奪い、正面玄関から堂々と屋内へ侵入したのである。
普通コソ泥ってもっとマイナーな所から出入りするじゃん。
だから、俺はその裏をかいて真正面から侵入したのである。
それにしても広い屋敷だ……どこがお食事処だかサッパリわかんねえな。
と、思っていたその時。
俺の視界に思わぬものが飛び込んできた。
なんと【お食事処】と書いてある部屋が……わかりやすいな、しっかり書いてあるじゃないか。

「……よしっ！」

折角青山家の庭で腕痛めてまで執事ぶっ倒したんだ。
もう後戻りはできねえ……このまま突撃して青山さんに会ってやる。
そして――青山さんの転校を阻止してみせる！
俺は扉に手をかけ、勢いよくサーッと襖を開けてやった。

「えっ？　ちょ、なんなのアイツ！？」

「んっ？　な、なんだね君は？」

「まぁ！　あ、あの男は先程の……！？」

「……せ、せん……ぱい？」

襖を開けた瞬間に視界に入ったものはテーブルに並ぶ、多分俺なんかじゃ一生食べる事がではないであろう、それほど豪華な食べ物の数々。

高級そうなスーツに身を包んだ眼鏡の中年男性と、青山さんの母親である和服の中年女性。

青山さんの姉なのだろうか、でも青山さんよりは元気そうな二十歳くらいのお姉さん。

そして、いつもと違って和服姿の青山さん。

この四人がテーブルを囲い、立派なご飯を食べていたのである。

「まぁ何ザマスの！？　不法侵入だなんて……やっぱり初芝の生徒は猿並ザマスね！」

「まあ母さんや。彼もそれなりの覚悟で来たんだろう？　ここは私に任せなさい」

「あ、あなた。でも……」

「私に任せなさい」

す、すげえ迫力だ親父さん……。

映画に出てくる極道の組長以上に恐ろしいかもしれない。

そんな恐ろしき親父さんがゆっとりと俺へ歩み寄って来た。

……怖ぇ、青山さんも心配そうな表情で俺達を見つめている。

「君は誰だね？　千早が先輩と呟いていたから……学校の先輩か何かかね？」

「それで合ってます。俺は青山さんの先輩です」

「ふん、それで君は一体何をしに不法侵入などと犯罪じみた事をしたのだね？」

「青山さんの転校をなしにしてもらう為に……話をしにきました」

両足に力を入れ、ついでに両方の拳もぎゅっと握りしめる。
そうでもしないと恐怖でバランスを崩してしまいそうだからだ。
圧倒的な威圧感……そこのおばさんやさっき戦った岡本とは比べ物にならない。
多分本物だぞ……このオッサンは……っ！

「普通、人間はこういう局面で遠回しな事を長々と言うもんだ。だが君は違うみたいだ、中々素直でいいではないか……だが、千早の転校をなしにする事は絶対に出来ないね」

「どうしてですか？」

言いながら、威圧的に親父さんを睨んで見せる。
相手の方がより威圧的な雰囲気なので、俺はそれを返すように睨みつけた。

「先日、うちの執事が君や千早が通っていた学校の生徒さんに殴られたって話、君は聞いたかな？」

「はい。そちらの執事さんと喧嘩をしたのは俺のクラスメイトなん

で」

「なら話は早いだろう。そんな……危なっかしい不良がいる学校に、大事な大事な娘を居させておけるかい？」

予想通りの展開と予想通りの理由だ。

というか、青山さんから聞いた通りである。

この馬鹿親はそんな程度の事で青山さんの自由を奪ったってか。

「……喧嘩の理由、貴方は知ってるんですか」

「知ってるも何も、うちの岡本は一方的に殴られたと話しているが」

「その岡本さんって人の言葉が、本当に事実だと思ったんですか？」

「少なくとも、不良少年の言葉よりは信用できるんじゃないかな」

まあ確かに、執事と不良じゃ執事の言葉のほうが信用はできる。

……でも、これだけはハッキリと言える。

「岡本さんと殴り合ったヤツは多分、黒木と赤佐っていうヤツですけど……ハッキリ言って二人は正直者です。黒木は嘘を付くのが苦手で赤佐も馬鹿正直なヤツです。俺は直接話を聞いたのですが、なんでも岡本さんが二人を挑発して怒らせたって話らしいですよ」

「ふーん。君はよっぽどクラスメイトを信用しているようだね」

「個人的にあんまり好きってわけじゃないですけど、それでもアイツらは嘘をつくような奴らじゃありません」

「そうか……中々信頼を置いているな。だが、私らも岡本に信頼を置いている。岡本が嘘をつくとは思えない……残念ながら君と同じで私は相手の話が信用できない」

ちくしょう、やっぱりその事を言ってきやがったか。

まあ予想通りだったよ。絶対こういう事を言うとは思っていたよ。

そりゃあ自分の家の執事だし、疑いたくない気持ちや言葉を信じたい気持はわかるよ。

俺だって友達の事は信じている。いや、黒木は友達じゃないけどそれでも信じている。

「……じゃあその信じている人がもし、本当に最初に挑発をしていたとしたら？」

「君の方こそ、二人がうちの岡本を一方的に暴行していたとしたら？」

「……」

「……」

俺達はしばらく睨み合う、きっとゲームなら俺達の間で火花が散っているだろう。

「まあとにかく、岡本が殴られた事は事実だ。そんな危ない生徒がいる所に千早を通わせられない。安全かつ高レベルな女子校への転校は決まった事だ。今更やめますだなんて言えるわけがないだろう？」

俺はその言葉に思わず口籠る。

何も言い返す言葉がなくなったからではない。
ただ……この馬鹿げたオッサンに対する怒りが、心の底から段々込み上げてきた。

「……それだけか？」

「何？」

「たったそれだけで、青山さんから自由を奪おうとしてんのかよ」

「っ！？　……ほう、いきなり強気になったではないか？」

オッサンは表情を崩さない。
俺だけが感情的になっていた。
今回の相手は古宇坂一の名家、青山家の現当主である青山流という男。
そんな相手にさえ、俺は荒々しい言葉を放っているのだ。
端からみれば俺はどこまでも子供っぽく、みっともなくて恥ずかしいヤツに見えるだろう。
それでも――俺はあのオッサンに言ってやりたい事があるんだ。

「確かに殴るっていい事だとは思えねえよ。黒木や赤佐だって元々ヤンキーでよく喧嘩もしていた。でも、たったそれだけの事じゃねえか！」

「それだけ？　どういう事だね？」

「結局青山さんを転校させたい理由って、てめえが安心したいからなんじゃねえのか？」

「私も安心すれば千早も安心する」

「ふざけんじゃねえよ！　親と子供は一心同体みたいな事いいやがって、子供は親の操り人形じゃねえんだよ！　親だからって勝手な理由つけて子供の人生変えようとしてんじゃねえよ！」

そうだよ。青山さんが転校する理由なんて簡単な事だったんじゃねえか。

この親たちは青山さんが心配だ。子供が心配なのはどんな親だって同じハズだ。

でも、この親の場合は心配が行き過ぎた。

だから子供を守って……自分が安心する為だけに大切な子供の自由を奪おうとしている。

娘を大切に思い過ぎた為に奪われる自由。ちくしょう……やっぱり馬鹿じゃねえか。

「娘を心配して当然だろう。娘の為を思って行動するのが親の務めだ」

「だったら、娘を信頼して見守ってやるのも親の務めじゃねえのかよ」

「何を言っている？　もちろん信頼して――――」

「じゃあこのまま青山さんが初芝にいたら、青山さんが暴力の被害にでも遭うと思ってんのか？　大体てめえら初芝には黒木や赤佐みたいなのしかいねえと思ってんのかもしれねえけど、それは間違いだぞ！　アンタ知ってんだろ！　初芝が市内でも高レベルの学校だって事を！　そんな所に何の理由もなく、見境なしに人を殴りつけるようなヤツばかりが通えると思ってんのか！？」

「君の事ではないのか？」

……そうかもしれない。

伊吹を助ける為とは言え、永渕を殴りつけた事がある。

暮葉を助ける為とは言え、早川だって思いっきりぶん殴った事がある。

端から見れば俺はただの暴力魔だ。こんな人間のクズが正しいわけがねえ。

……だけど！

「確かに俺も人様の事は言えねえかもしれねえ。でも、何の理由もなく暴力沙汰を起こすほど、自分の都合で誰かの自由を奪うほど落ちぶれたつもりはねえよ！」

「けど、そういうヤツがいるのも確かではないのか？」

「確かにそういうヤツだって全くいないとは限らない。でも、初芝（あそこ）は青山さんの居場所なんだよ！　大切な友達がいて、一生懸命打ち込める部活があって……そんな、アンタが想像しているような地獄のような場所なんかじゃねえ！　青山さんが転校を嫌がるくらい素晴らしい居場所なんだよ！」

その叫びを聞いた瞬間、オッサンは目を見開き。

「千早が嫌がる？　どういう事だ？　千早は確かに転校には賛成――――」

そんな事を言いだしたのだ。

きっと、青山さんは親の前では転校に賛成していたのだろう。

というか、嫌でも賛成しないと説教されていたのかもしれない。
青山家の自慢の娘として失格だと思ったのかもしれない。
だから――親の前では本当の気持ちを言う事ができなかった。
……でも今は、本当の気持ちを言う絶好のチャンス。

「青山さん。本音を言ってもいいよ」

だから俺は、ここで青山さんに話を振った。
青山さんに本音を言ってもらう為に――

「せ、先輩……でもっ」

「大丈夫だよ。正直に言う事は何も悪くないよ」

そうは言ってみるものの、彼女にはまだ勇気がないのだろう。
俯いて黙りこんでしまった。しかも、そんな彼女に追い打ちをかけるように。

「千早さん！　あんな男に耳を貸しちゃダメザマスよ！」

「……」

「千早さん！　千早さんは嘘つきじゃないザマスよね！？　千早さんは心から転校をしたいって――」

「……です」

その時、青山さんが何かをつぶやいた。
小声過ぎて誰も聞きとれなかったが、確かに何かを呟いたのである。

「千早さん、今なんて……？」

「わたし……転校なんかしたくない……」

「えっ？」

「転校なんか……したくないですっ。お友達や先輩と別れるのなんて嫌です……っ！　それに……先輩の言う通り、わたしは初芝（あそこ）が大好きです……っ！」

青山さん……よかった、ついに青山さんが本音を叫んでくれた。

両親にとっては意外すぎる言葉に、オッサンもオバサンも驚愕の様子だ。

特にオバサンは半ばヒステリック状態となり、「千早さん！　嘘よ、嘘と言って！」と叫んでいた。

一方の親父さんは冷静に千早を見つめ、そして。

「ほ、本当かね、千早？」

「……はいっ。今まで嘘をついていて申し訳ございません……っ」

「だ、だけど千早。あそこにいたら千早が何らかの事件の被害に――」

「……大丈夫ですっ、初芝（あそこ）にそんな人はいません……っ！」

そう、少し涙目になりながら必死に訴える青山さん。

大切にしている実の娘に、そう訴えられたオッサンの心は動くに違いない。

いや、もう心は動いていた――

「千早……っ、そんなに、そんなに初芝がいいのか？」

「はい……お兄様と努力して、ようやくお父様とお母様から登校許可を頂いた初芝高校……わたしは、初芝が気に入りました。通いたいから入ったのです……ですから、今更転校なんてしたくありません……っ！」

その言葉に、しばらく黙りこむオッサンとオバサン。
広いお食事処を沈黙が包んだ。
……そんな沈黙を最初に突き破ったのは――――

「流、千明さん。お二人の負けです」

「お、お袋？」

「お義母様っ！」

「お婆様……っ！」

なんと、突然現れた老婆が沈黙を突き破ったのだ。
しかも……あ、青山さんのお婆さんだって？
それじゃあ青山さんが以前言っていた、俺が偶然助けたお婆さんって……。
あの優しそうな雰囲気のお婆さんだったというのか！？

「二人には残念かもしれないですが、そこの少年の言う事は全て正しいですよ。かわいい子には旅をさせろとはよく言うじゃありませんか？　心配だからと言ってそこまで子供の事をやっては駄目ですよ」

しかもその言い草だと、俺の言葉を最初から聞いていたのだろうか？
まあそれはともかく、ナイスタイミングだぞお婆さん。
老婆とは言え、それでもオッサンやオバサンと比べれば目上の人間である。
そんな簡単に逆らえはしないだろう。青山さんが自分の親にそうだったように……。

「お義母様！　そうは仰いザマスが――――」

「千明さん。千明さんはどういう風に生きてきましたか？」

「それはもちろん、己の信じる道を――――」

「でしたら千早にも同じように、自分の信じる道を歩ませてはどうです？　それを暖かく見守るのが親の務めではないですか？」

おお、老人が言うと馬鹿な若者である俺が言うより説得力があるぜ。
あのヒステリックババアな青山さんのの母親が、なんと後退りしているぞ？
しかも、青山さんの親父さんだって黙りこんでいる。

「……次、初芝で何か問題がありましたら、問答無用で転校させるザマス」

「千早。好きにしなさい。そこの君ももし千早を泣かせるようなら……八つ裂きだからね」

あの二人がお婆さんに負けた……ッ！？
強ぇ、誰よりも長く生きているだけあって最強だな。

ていうかオッサン、八つ裂きって……アンタそれ脅迫じゃねえかよ。
まあいいや。結果的に勝ったんだから――多分。

「まったく……頑固なお二人です」

「お、お婆様……っ」

「千早、私はこの後もあの二人と話をしてきます。絶対に千早の夢を壊したりはしませんよ」

「……はいっ、ありがとうございます……っ！」

「ふふっ。お礼なら私よりもそこの少年に、ね？」

言いながら、お婆さんは俺のほうへと視線を向けてきた。
お礼って……果たして俺はお礼を言われるほどの事をしたんだろうか。
結局事態を収束させたのだって、青山さんのお婆さんだし……。
ぶっちゃけ俺って喧嘩を売りにきて、ただこの場を滅茶苦茶にしただけなような……。

「先輩……っ」

「お、おう」

「その……ありがとうございます……っ」

和服姿の青山さんはお上品に、でもどこか恥ずかしそうにお辞儀をしてきたのだ。
……そうだ、折角両親撃退に成功したんだ。

青山さんとお話をしよう。そしてやるべき事をやってしまおう。
このまま終わらすわけにはいかない、ちゃんと返事をしないと失礼だ――――

「いや、俺は大したことはしてないよ。それより青山さん、ちょっとお話があるんだけど……いいかな？」

「せ、先輩……っ？　……はい、わたしも……先輩とお話がしたいです」

「うん。じゃあ、ちょっと庭にでも出てみる？」

「ふふ、先輩。まるで自分の家のように言ってますね」

久々に笑ってくれた青山さん。
ああ、やっぱり可愛いなぁ。
どんな女の子にも言える事だけど、青山さんはやっぱり笑顔が一番だ。

「ははははっ。それじゃあ行くか」

「……はいっ！」

こうして、俺と青山さんは青山家の広い庭へと行くことになった。

「そういえば、あの少年どこかで会ったような……何にしても、いい人ですね……ふふっ」

お食事処から立ち去ろうとする中、背後からお婆さんの声が聞こえたような気がした。

……まあ、多分気のせいだろう。

さて、いよいよだな……返事をするぞ。

青山さんが俺にしてくれた告白に対して――――

第８３話，全てを賭けた対決（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

伊吹「ぶっちゃけ圭介、ゴリ押しよね」

圭介「い、伊吹さん？　どういう意味っすか？」

伊吹「だって今回、テキトーにそれっぽい言葉を並べて叫んでるだけじゃない？　だから圭介は読者に上○さんって呼ばれるのよ？」

圭介「なんで俺が上○さん！？　確かに禁○目録全巻揃えたけどさ……」

伊吹「あと、ゴリ押しばっかりしてると読者に嫌われるわよ？」

圭介「か、上○さんは割と人気なほうじゃないか！？」

伊吹「でも圭介、あんたに対する苦情が……」

・作者の友人Ｎ氏より、藤島圭介について一言。
「ぶっちゃけ圭介ってウザくね？　説教臭いしいつも都合のいい展開ばっかじゃん？」

圭介「ウソダドンドコドーン！」

大吾「それ、ネタわかる人いるのか？」

第８４話，その日の夜

日も暮れてきた頃である。
俺は青山さんを青山家の庭へと呼び出した。
綺麗な芝生に鯉でも泳いでいそうな池、そして程良く手入れされた樹林。
なんだか心が現れる庭だなぁ。
日も暮れ始めているが、それがまた妙に合う感じである。

「……」

青山さんは頬を赤くし、視線だけを俺から逸らしていた。
多分、青山さんもこれからどんな話をするのかわかっているのだろう。

「青山さん。まずは……これ、返すな」

「えっ？　こ、これは……？」

告白の返事かと思いきや、最初に俺がやったのはＣＤ返却である。
完全なる不意打ちに青山さんは驚愕の様子だ。
驚いた様子でＣＤと俺を交互に確認する。
その反応がまた可愛い事この上なしだが、あんまりやらせると可哀想なのでそろそろ説明しよう。

「この前借りていたＣＤだよ。折角両親との騒動も終わったことだし、ずっと借りっぱなしっていうのも悪いからな」

「あ、ありがとうございます……っ」

「借りていたのは俺だし、お礼言うのは俺のほうだよ」

そう言うと青山さんは俺からＣＤを受け取り、なんと胸元へとしまい込んだのだ。

ちょ、地味に胸が見えたような。

まあ、残念ながらブラはしていたのだが……しかしええ乳やないか！

……げふんげふん！いけない、そんなしょうもない事を考えている場合じゃなかった。

それよりＣＤを返したんだ。次は一番の目的でありとても重要な事を――――

「それで青山さん。青山さんは昨日俺に……なんつーか、告白してくれたよな？」

「……えっ？　は、はい……っ！　そういえばまだお返事を聞いてませんでした……っ」

「うん。だから今返事をしようと思ったんだ」

「……っ！？　は、はいっ！」

青山さん普段とイメージが全然違うな。

今の青山さんは輝いている。

なんだか目がギラギラしてる気もしないでもないぞ。

なんか、こんな表情をされるとすごく返事し辛いなぁ。

俺は青山さんに対して恋愛感情を持っていないし、中途半端な気持ちで付き合うのは相手にとっても失礼な事だと思う。だからごめんと言おうと思ったんだけど……。

すみません。青山さんの必死すぎる表情のせいか、とても言いづらいです……。

「……」

「……」

俺が迷っている間も、青山さんは真剣な表情で俺の事をじっと見ていた。

待っているんだろうなぁ……それなのに俺は、答えは決まっているのに言えずにいる。

全く最低な野郎だ。ここで言わないとダメだっていうのに……。

「……っ」

ん、どうしたんだろうか。

青山さんの表情が次第に暗くなってゆく。

まるで究極に落ち込むように……ちょ、待て、もしかして俺のせい？

「先輩……わたしのこと、好きじゃないんですね……」

「えっ？」

「顔……見ていたらわかっちゃいました。だって先輩……困ってましたから」

「……ごめん」

見抜かれてしまったか、青山さんかなり落ち込んでいるなぁ。

なんだか本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

俺はただ青山さんに謝る事しかできなかった……。

「そ、そんなっ！　謝らないでくださいよ……っ、わたしも振られると思ってましたから……っ」

「えっ？」

「……ダメ元で告白してみたんです。そしたらやっぱりダメで……っ」

あわわわわわ！ど、どないしよう！
青山さんが泣きそうになってしまった。
そりゃあ俺の気持ちに気付いて悲しくなるのはわかるけど、さっきあんな騒動があったばかりだ。
それに青山さんは女の子だし、というか誰であっても同じだけど流石に泣かれると……。
どうしよう。こういう時ってどういう風に慰めればいいんだ。
下手に慰めたら相手にまだ気があるんじゃないかって、そう思われる可能性があるからやめとけっていう話も聞いた事はあるが、だからと言って泣かれるのは嫌だしなぁ……。
こ、こういう時って経験ある人はどうするんだろう？

「……でも、わたしは先輩を諦めたくありません……っ！」

「えっ？」

「先輩の事を嫌いになるなんて無理です……っ、ですから……わたしは絶対に先輩を諦めません」

……あ、あれ？

なんだろうか、このラノベによくありがちな展開は。
好きでもないのに恋人になっちゃったという事態回避できたが、もっとややこしい方向に話が進んでいるような気がするのは、果たして俺だけであろうか？

「青山さん……？」

「……先輩、覚悟していてくださいね。絶対に……先輩を恋に落として見せますから……っ！」

突然の宣言。
どうやら青山さんは意地でも俺を攻略したいらしく、楽しそうに微笑みながらそう宣言した。
普通笑顔でこんな宣言をする人がいるであろうか？
いや……俺の目の前にたった一人だけ存在していた。
青山さんは宣言の後にくるりと背を向け、その状態で後ろを向いて俺を微笑みながら見ていた。
セミロングの緑髪が風に靡き、月光が静かに彼女を照らしていた。
彼女の全てがなんとも神秘的かつ清麗な雰囲気を醸し出している。
……ちくしょう可愛い。こんなに可愛いのにどうして好きにならないんだよ俺？
やっぱり好きな人がいるんじゃ――いや、それを考えるのはやめよう。

「……先輩っ」

「お、おう」

「また会いましょうね……それではこれで失礼します……っ」

「あぁ……それじゃあ俺もそろそろ帰るな」

「はいっ、お気をつけて」

完全に向こうを向き、青山さんは青山家の屋内へと戻った。
結局、青山さん告白の件はナアナアで終わったような気がした。
いや、まだ正確には終わりでないかもしれない。
何故なら彼女はまだ俺を諦めていないからである――――

「……っ」

ちくしょう……俺ってば、ホントに何やってるんだろうな。
……そろそろ帰ろう、きっと暮葉や葵が心配しているハズだ。

「ただいまー」

数十分後、青山家を出た俺はようやく自宅に帰ってこれた。
扉を開けてただいまを言うと、そこからは予想通りの展開だ。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃーーーーーーーーーーーーんっ！」

爆竹のような声を出して突撃を仕掛けてくる女の子。
コイツにはきっと悩みなんてないんだなぁ、彼女の表情を見て思わずそう思ってしまった。
そう思ってしまうほど、彼女は明るく天真爛漫としているのである。
藤島葵。

……改めて紹介する必要のない、俺のｍｙシスターである。
今日も葵は全速力で俺へと突っ込んでくる……だが、その手に二度も引っ掛かる馬鹿はいないぜ。
俺は直前で葵の全力タックルを避けてみせた。

「うにゃぎゃあぁぁぁぁっ！」

避けても止まる事を知らない葵は、そのまま玄関のドアへと激突してしまった。
……ふぅ。よかったぁ……うちの暴走特急葵が衝突してもドアは壊れなかったぞ。
あ、もちろん葵の心配もしているぞ。葵にも怪我がなくてよかったぜ。

「ひどいよお兄ちゃん！　避けるなんてひどいよ！」

「アホかお前っ！　普通の人なら避けねえと死ぬわ！」

「大丈夫、葵はちゃんとシャワーは浴びてきたから☆」

「何の準備だよ！？」

「えっ？　お兄ちゃんとエッチする準備だよ？」

「アホかっ！　ンな事よりゲームか勉強でもしていなさい！」

「そ、そんなっ！？　兄は童貞を妹で捨てなければいけないって、刑法２６５条に――――」

「話聞けェッ！　つーかそんな法律はねーよっ！」

葵め、勝手に刑法２６５条なんぞ作りやがって。
刑法は確か２６４条までだったような気がするぞ。
刑法２６５条なんて思いっきり架空の法律じゃねえか。
しかも近親相姦を容認する法律って、一体どんなふざけた法律だよっ！
二次元の妹ならまあいいかもしれないが、現実妹（リアルいもうと）がいる俺としてはいい迷惑だ！

「あ、けーすけ様っ！」

「えっ？　おう暮葉かっ」

「もきゅ、部活サボってどこに行っていたのですか？」

どうしよう。青山家に突撃をかけましただなんて流石に言えないよな。
……ようし仕方ない。ここはおバカな暮葉が簡単に信じるような嘘をつこう。

「ば、バイトの面接だ」

「もきゅ、バイトですか？」

「お兄ちゃんバイトするの！？」

「まあ面接に受かったらの話な。相当厳しい所だし人数も多かったから受かるかわからねえぞ？」

「面接なのですかぁ。なら仕方ないですね！」

「うん！　バイトをしようとする必死な姿に、葵のお兄ちゃんに対する好感度はさらに上がったよ！」

「そうか、ハハハッ」

誤魔化せた……暮葉が馬鹿なのはわかっていた。
でも葵は成績はいいハズなのに……案外馬鹿だったな。
まあいいや、誤魔化せたんだから結果オーライである。
数日後にバイトの面接は落ちましたって報告すれば完璧であろう。
やれやれ、今日は戦ったり走りまわったり説教したり嘘ついたり、色々大変で疲れたな……。
今日は早めに寝よう。見たいアニメは録画でもういいや。

……こうして、俺の一番長い一日が終わったのである。

第８４話，その日の夜（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

大吾「ちょっとだけネタバレしよう。次回の主人公は圭介じゃない！」

圭介「な、なんだってーーーーーーーーーー！？」

大吾「しかも！　そいつはとんでもないヤツだ！」

圭介「だ、誰だよ。つーかなんで俺視点じゃないんだよ」

大吾「さあ？」

圭介「……もしかして、主役交代？」

大吾「さあ？」

圭介「ちくしょう……誰だよ、次回の主人公って。あと俺の立場はどうなっちゃうんだろう？」

※あくまで圭介は主人公です。

第８５話，新たなる出会い？

昼間の古宇坂は人々で溢れ、それなりに明るい街で治安も非常にいい。
ンじゃあ、夜の古宇坂はどうかってなァ。
深夜の古宇坂の路地裏をオレは一人、だるいと思いながら歩き続けていた。
歩き続けていたんだ……ただそれだけだったが、やがてオレの周りには。

「ヘッヘッヘッ……」

「この前の借り、たっぷりと返させてもらうぜぇ？」

今日もお出ましのクソ野郎共……。
コンクリートに阻まれた狭い直線。おそらくここは廃れた商店街の裏だろう。
そんなクソ狭い所でオレを取り囲むクソ野郎共。
連中はバットや木刀、それどころかギラリと輝くナイフを持っていやがった。
ナイフとか、コイツらには銃刀法ってモンが通じねえのかァ？
……まァ、どうだっていい話だけどなァ。
さてと、今日はどう料理してやろうかァ……。

「早川ァ！　死ねェェェェッ！」

「オォアッ！」

一斉に襲い掛かってきやがったクソ野郎共。
やれやれ……どう料理するっつってもなァ、こんなヤツらを相手に本気を出すのも面倒癖ぇ。
いつも通り、暴風の膜でも張り巡らして攻撃を防いでおくか。

「ぐ、あっ！」

「ぎゃはぁっ！」

「ご、ぁぁっ！」

「……チッ、クソッタレ」

戦闘……って感じすらしなかったな。
オレはただ暴風で薄い膜を作りだし、それを向かってくる相手の逆へ吹きつけさせていただけだ。
だが、暴風に触れただけで連中は吹き飛ばされ、蹲ってそのまま動かなくなってしまった。
まァ……痛がっているだけだし、死んじゃあいねえだろうけどなァ。
はぁ、全く面白くねえ……クソも張り合いのねえヤツらだ。
まぁ倒した事は倒したし、コイツらから財産を奪っていくとするか。

「チッ、ロクな金も持ってなかった……」

――――このオレ早川悠はあの一戦以来、こうして不良から金や食い物を奪いながら生きていた。
堕ちたモンだ。まぁ元々汚ェ仕事ばかりやっていたんだ。
不良から物を奪う以上に凶悪で、悪質で、汚らわしく不名誉な仕事

をなァ。
結局、特異点を全て潰せなかったオレは佐井学園を辞めれなかった。
というか、未だに特異点を潰している最中という事になっている。
けど、その特異点潰しはあの野郎に阻止され、今じゃあオレもやる気を失っちまった。
オレにはもう戻る場所もねえ。佐井学園を辞めるには佐井学園と真正面から戦うしかなくなった。

「ったく、どーやれってんだぁ？」

面倒癖ェ事してくれやがったぜ、あの野郎。
だから、オレは佐井学園から逃れる正面対決以外の方法を考えた。
このまま……特異点潰しをやっているっちゅー事にしておき、テキトーに物でも奪いながら連中に気付かれねえように過ごす。
要するにクソしょぼい盗賊をやるって事だ、オレのような人間のクズには丁度いい生き方だろ。

……けど、何やってんだかなァ。
あの野郎はオレのほうが圧倒的に強いのにも関わらず、何の躊躇も無しに向かってきた。
そこまでは普通だった。でも、あの野郎にどんな攻撃を仕掛けても倒れなかった。
むしろオレのほうが追い詰められ、いつの間にかオレは工業地帯のアスファルトに転がっていた。
普通ならオレの強さに途中で絶望するハズなのに、最後まであの野郎は向かってきやがって。
あんな馬鹿げた勇気のあるヤツは今までに見た事ねぇ。
あんな野郎だってこの世の中にはいるんだ。オレはあの夜にそんな事を学んだ気がする。
だと言うのにオレは——佐井学園から逃げているだけか。

やれやれ、どこまで堕ちれば気が済むってんだァ？
まぁいいけどな。オレはそんな事を考えながら夜の古宇坂を歩いていた。
さてさて、さっさと今日の寝床でも探さねえとな。最近は目立たねェゴミ捨て場の近くで寝ていたから、今日はせめて公園で寝てえな。
クソ、身体も臭ェし水道水でも浴びたいモンだ。

「……ヘッ、丁度いい公園みっけ」

久々にマトモな所を見た気がするぜ。
確かここは古宇坂でも高級住宅が立ち並ぶ地区。
でっかい日本屋敷見たいなモンも2軒くらいあったかな。
そんな所にある公園は中々の広さであった。
水道もあるしトイレもある、一通りの遊具だって揃っていた。
多分昼間になれば子供やその子供の母親で溢れている事だろう。
ハッ、あんまり長居は出来そうにねェが……一晩過ごすには最適の環境だな。

「さてと、んじゃあそこのベンチで寝るとするか」

公園ってだけに愉快にベンチまでありやがる。
まあ、路上で寝るよか遥かにマシだろう、今まで寝ていた所に比べれば遥かに綺麗な場所である。
って、くだらねえ感想考えてねえでさっさと寝よう。
最近は馬鹿共の相手とロクな寝床がねぇから寝不足だ、ちょくちょく寝とかねぇと身体が持たねえ。
オレは割と綺麗に手入れされているベンチに転がろうとした――――

「んにゃぁっ！」

刹那、背後から女のものと思われる悲鳴が聞こえた。
ったく……夜遊びしようと思ったけどコケちゃったオチか？
オイオイ勘弁してくれよ。こっちは眠くて今すぐにでも寝たい気分なんだっつーの。
とにかく、夜遊びするつもりだってんならさっさとこの公園から追い出すとするか。
というわけで、オレは後ろを向いて女の姿を確認した。
歳は小柄だけど大体中学生くらいか。女の瞳は綺麗な緑色で、澄んだ水のように明るく淡い青色のツインテールはどこかの外国人の風貌を感じさせる。
まあ、そこまではいいんだが……問題は女の服装である。
頭の赤いリボンにハート、胸元の赤いリボンにもハート、持っているステッキの先端にもハート。そして桃色のフリフリドレスはどこぞの魔法少女を思わせる。
なんなんだコイツ……オレが潰していた特異点にもこんなコスプレをしているヤツはいたが。

「はん、くっだらね……っ」

倒れているクソガキを見てオレはそう吐き捨てた。
まあ、こんなガキなら何かをしなくてもすぐにどっかに消えてくれるだろう。
でもまぁ、ちったぁ心配してやんのが大人の礼儀ってモンかぁ？

「オマエこんな所で何やってんですかぁ？　ガキは家に帰ってママの膝の上で寝ている時間だろぉが」

「いたた……あれ……っ？　早川悠？」

「アァ？」

なんだコイツ、今紛れもなくオレの名前を呟きやがったぞ。
コイツはオレの事を知ってんのか？
……チッ、くだらねえな。

「早川悠！　やっぱり早川悠だよね！」

「オマエはオレの事を御存知見てぇだな。だがお生憎様、オレはオマエなんか知らねえな」

「うん、知らなくて当然だよ。だってミネットは貴方と初対面だから」

「チッ、気味悪ィな。初対面が名前を知っているってオカシイじゃねえかよ」

「そんなことないよ？　だって貴方は部隊じゃ有名人だから」

待て、部隊だ？
コイツ一体何者なんだ。まるで今までブッ殺してきた特異点みたいな事を言いやがる。
もしかして、このコスプレはギャグじゃねえってのか。
本物の特異点だって言うのか……にしては、随分とまあオレに対する態度が甘いモンだ。
もし特異点だとしたらオレを恐れるか、或いは大いに恨んでいるハズだろうに。
まあ、部隊って発言しただけでまだ特異点とは限らねえけどな。
それにオレには何の関係もねえ……どうでもいい話じゃねえかよ。
それにしても夜の公園がここまで騒がしいとは思わなかった。
やっぱ他をあたるとしようか。身体とかはクソ臭ェが一日くらいは

我慢してやろうじゃねえか。

「そぉかい。ンじゃあその有名人とももうお別れだ」

そう少女に告げ、速やかにこの場から立ち去ろうとした……。

「シャアアアアアアアアアアッ！」

刹那、突然濃霧があたりを包み込み、ようやく晴れたかと思いきや……。

オレの目の前には何かデカいバケモノ見てェなのがいやがった。

「あン――？」

なんだこりゃ？

見た目はタランチュラか何かだな。

だが、どう考えてもタンランチュラがこんな大きさまで成長できるとは思えねえ。

４ｔトラックよりデカく見えるって、一体どういう生き物なんだこりゃ？

超能力者や特異点のような魔法使いは散々見てきたが、こんなバケモノは初めてみた気がする。

「しまった、追いつかれちゃったよ……っ！」

追いつかれた？

なに言ってやがるんだこのクソガキは。

……チッ、仕方ねえなオイ。

「オマエ、このバケモノとどういう関係なんだ？」

「強いて言うならばミネットの敵だよ？」

「ミネットっつーのはオマエの名前か？」

「そうだよ、ミネットの名前はミネット・ローランって言うんだよ」

「そうかい……」

ミネット・ローランねぇ……どう考えても日本人の名前じゃねえな。
何というかフランス人癖ェ名前だな。
けど、フランス人がこんなワケの分からねえバケモノと戦うのか？
部隊とかオレの名前を知っているとかバケモノと戦っているとか、
色々気になる事が多いヤツだな。
面白ェ……最近退屈していてつまんねえんだよ。
暇潰しにコイツと会話でもしてみるか、その為には……。

「ンじゃあオマエの自己紹介が終わった所で、目の前のバケモノを殺すとすっかぁ」

「えっ？」

ミネットはオレのセリフに驚いたようだ。
おそらくミネットにとって予想外の事をオレは言ったんだろう。
さてさて……相手は蜘蛛のバケモノときた。どう料理してやろうかなぁ……？
虫は虫らしく焼くのがいいってかぁ？
だったらやる事は簡単だ。大気中の分子運動を抑制・活性化させてやればいいんだ。
オレには急激な温度変化で炎とか氷を発生させる事ができる。

今回の場合は発火点まで上昇させてやって……ぎゃは、腹ァ抱えて笑いたくなる発火パラダイスだ！

「ぎゃ、は――！」

面白いくらいにアッサリと、タランチュラの化け物が燃え始めた。

「オラァ！　臭ェからさっさと燃え尽きちまえよ！　こっちはテメェを燃やすのにアタマ使ってんだからちったぁ感謝して天国にでも行きやがれ！」

そう叫びながらタランチュラのバケモノを燃やし続ける。

しかし、不思議な事にバケモノは命が尽きた瞬間、バケモノの死体は虹色に発光し、パキンと割れるような音と共に小さな粉末状の光となり、完全に砕け散って消滅したのである。

オイオイ、バケモノの黒焦げ死体をどう後始末するかまで考えていたってのに、この結果はあまりにも予想外すぎるぞ。つーか現実的に考えてありえねえだろうが。

「なんだこりゃ……どうなってんだ？」

「すごい……っ、やっぱり本物の早川悠だよ」

「さてと、おいオマエ。オレが本物とかどうとか言ってねえで、どういう事か説明してもらおうか？」

「ふぇっ！？　う、うん！　わかった。もうバレちゃったもんね……今から貴方にわかりやすい説明をするよ！」

どうやら、ミネットのヤツも今の状況を説明する気になったらしい。

一体どんなぶっ飛んだ説明が来るんだか。
やれやれ、眠いけど我慢して聞いてみっかぁ……。

第８５話，新たなる出会い？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「俺出番ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

暮葉「大丈夫です！　拙者も全く出番がないのです！」

圭介「しかもこの話、なんか続くっぽくね？」

暮葉「そ、そうですね……っ」

圭介「俺……主人公なのに」

暮葉「まあまあ！　きっとあと何話かしたらけーすけ様や拙者にも出番がありますよ！」

圭介「俺……主人公なのに」

伊吹「あんたそれ本日何度目よ。虚しくなるだけだからそろそろ言うのやめなさいよ……っ」

第８６話，男の子？女の子？

オレはミネットっていう変な女から、今がどういう状況かを説明してもらう事になった。
なったはいいんだが……このクソガキ、オレをどこへ案内しようってんだ。
遠足に行く小学生みたいなルンルン気分で歩きやがって、そんな楽しい所に行こうってのかぁ？
くっだらね……と思いつつオレはミネットの後を歩いていた。
やかて辿りついたのは一件のマンション。
つーか表札にミネット・ローランって……オマエの家じゃねえか！
しかもここって高級マンションじゃねえか。
もしかしてミネットってのはいいとこ育ちのお嬢様か？

「ただいまーって！　そういえばミネットは一人暮らしだったっ」

「チッ、オマエは小学生かっての」

「ひどい！　ミネットはこうみえても１４歳なんだよ！」

「１４だぁ？」

十分ロリじゃねえかよ、大事な所もぺったんこだし。
まあ、どうでもいい話だしあえて突っ込まない事にしよう。
噛みつかれるのを阻止すんのに、暴風の膜を張り巡らせんのも面倒だからな。

「その顔、信じてないね？」

「オマエがあまりにもガキくさすぎんだよ」

「ひどい！　ミネットはちゃんとこの世界で言う中学生だよ！？」

「証拠あんのか？」

「学生証が家の中にあるもん」

「はン――そぉかい……」

「自分から聞いた癖に興味がなさそうだね？」

「黙ってろクソガキ。つーかオレを家まで連れて来てどうするつもりなんだ？」

もしかして、いくらオレでも他人の家では戦いづらいから、そこでオレを不意打ちしてブッ殺そうとしてたりするんじゃねえだろうな。

……ぎゃはっ、そういうのは無駄だと思うけどな。

オレは他人の家だろうが何処であろうが、この超能力（チカラ）を使う事に何の躊躇もねえ。

もしミネットがオレを殺すつもりなら、その時はマンションそのものを破壊してでも身を守る。

「どうするって、ミネットは貴方にお風呂に入ってもらいたいんだよ」

「あン、風呂だァ？」

「こんなことを言うのは失礼ってわかってるけど、正直に言うと倒れそうなくらい臭いかも」

「チッ、今までゴミステーションの近くで寝てたんだから仕方ねえだろ！」

「貴方も臭いのは嫌だよね？　だからミネットの家のお風呂を貸すよ！」

なんだよコイツ、親切のつもりで言ってんだろうか。
その風呂ってのがトラップだとしたら……。
まあいい、このオレが臭ェのは自分自身でもわかっている事だ。
水で洗い流したいから公園で寝ようとしていたくらいだし、風呂を貸してくれるってんならとりあえずは借りておこうか。そう言えば風呂なんて夏に入ってから入ってねえな……。

「……チッ、案内しろ」

「んにゃ！　ご注文承ります！」

「オマエはどこぞの怪しい店員かっつーの……」

まあ正直どうでもいい。
それより風呂だ風呂、温かい湯ってのが本当に久々だからゆっくり浸かるとしようか。
……あとこのクソカギ。覗いてきやがったらぶち殺すからな。

――――んで、オレはミネットから風呂を借りて現在身体を洗っている所だ。
オレの東京にある家にも一応風呂があるが、そことは比べ物にならない広さだ。
全く、オレの家は一軒家でここはマンションだってのに、普通風呂

の大きさは逆じゃねえのかよ。
いくらオレの家が築50年近いボロ屋だからと言って、あまりにも差があり過ぎじゃねえか。
それにしても……あのタランチュラの化け物、ミネットが呟いていた部隊がなんとか……結局アレはどういう事だったんだろうか。それを風呂上りに説明してくれるらしいが……。
チッ、さっさと洗って浸かるだけ浸かってあがるとしよう――――

「おっじゃまっしまーす！　……ってミネットいきなり乱入してみたよ！」

「あン――う、オァっ！？」

このクソガキどういうつもりだ？
突然やかましい声をあげやがったと思いきや、バスタオル一枚で風呂場に侵入してきやがった。
オイオイ、なんだよその可愛らしいピンク色のバスタオル。
つーかミネットのヤツ、バスタオル一枚って誘ってやがんのかぁ？
……って、突っ込み所ソコじゃねえだろ。

「オマエ、どぉ言う神経してやがるんだ？」

「貴方は結構焦っていたから、だからお背中でも流しながら説明しようかなって思ったんだよ」

「ほぉそうかよ……ンじゃあなんでオマエは全裸なんだ！」

「服が濡れるのが嫌だったし、ミネットもお風呂に入りたいんだよ。大丈夫、ミネットはこれでもバスタオルは完備だしこの下には水着も来ているよ！」

「そういう問題じゃネェだろっ！　よく知りもしねえヤツに裸晒してんじゃねえぞ」

「……っ！　ミネットだってすごく恥ずかしいんだよ……？」

「急に乙女になってんじゃネェ！　能力使ってオマエの所だけ氷点下にするぞコラァ！」

「まあまあ肩に力を入れないで。ミネットだってその……っ、他人にここまで見せるのは初めてなんだからね？」

「あっそ……チッ」

俺は舌を打ちながら前を向いた。前を向けばミネットから視線を逸らす事ができるからである。

ったく、予想外のイベントが発生しやがったぜ。

誰だァ混浴なんてふざけたイベント考えやがったヤツは。

って風呂場に突撃してきやがったのはミネットか。

まあ、ホントにそこまで見せるのはオレがは初めてみたいだし、特別に大目に見てやるとしよう。

「それじゃあ……洗うね？」

「チッ、勝手にしやがれ……」

自分から入って来た癖に躊躇ってんじゃねえぞクソガキ。

結局コイツが何をしたいんだか、オレにはサッパリわからねえ。

ミネットはオレの背中をゴシゴシと、濡れ濡れ泡泡なタオルで洗い始めた。

コイツは手先が器用なんだろうか、中々気持ちいいじゃねえか。

「すっごい……細くて綺麗な身体だね」

「褒めてるつもりかナメてんのか、どっちなんだァ？」

「ミネット的には褒めてる方向だと思うよ？　色白で肌も綺麗で細くて……貴方ってまるで女の子みたいだね」

「先天性色素欠乏症（アルビノ）って知ってるか？　オレはどうもそれらしくてなァ、メラニンだかってヤツの生合成に係わる遺伝情報の欠損のせいで、先天的にメラニンが欠乏する一種の病気みてぇなモンだ。肌が極端に白いのはそのせいじゃねえのか？」

「身体が細い理由は？」

「オレは生まれつき超能力ってのがあったからな。その気になれば風の力を利用して高速移動とか、空さえも飛べるから運動の必要がねえんだよ。飯だってそんなに食わねえからな、必要最低限の筋肉してついてねえんだよ」

そのおかげで身体能力は正直最悪で、超能力ナシでの戦闘が危険なレベルになっちまったがな。

ただでさえアルビノは弱い種だってのに、そのせいか素じゃ握力も２０ちょっとしかねえよ……。

まあ別に後悔はしていない。超能力（チカラ）さえあれば運動の必要もねえ。

肉弾戦をする時だって、能力を使えば普通の人間よりは素早く動ける。

それが何故か、あの時に戦ったあの野郎には通用しなかったけどなァ。

「もしかして髪の色もアルビノのせい？」

「まァな、天然の白髪ってヤツだ。幸いアルビノは弱視なハズなのに、そこだけは普通の人間と同じで視力は1．2以上はあるけどなぁ」

「そうなんだ……でも貴方とっても綺麗だよ！　貴方の性別がよくわからないくらい綺麗だよ！」

「あぁそうかい……」

「って、貴方の性別って結局何？　男の子？　それともやっぱり女の子？」

やっぱりって、コイツオレの事を女だと思ってんのか？
確かに中性的だとはよく言われたが、最初から女だって言いやがるヤツはコイツが初めてだ。

「オマエ、オレをなんだと思ってるんだ？」

「う～ん。男の子かな～って思ったけど、やっぱり女の子かな？」

「どういう基準で判断してやがんだテメェは？」

「だって貴方、男らしい感じがしないくらい綺麗なんだもん！　それで、貴方の性別はどっちなのかな？」

チッ、愉快に楽しそうに一方的に喋りやがって。
このアマ遊んでやがるな。

つーかミネットのヤツ、事情を説明するって話はどうなったんだ？
いつまでオレの身体的特徴の話をしてるつもりなんだクソが。

「おいミネット、くだらねえ話してねえでさっさと説明しろ」

「く、くだらなくなんかないよ！　一応性別を確認しておかないとこれからの扱いが――――」

「オマエは男女平等って言葉を知らねえのか？　どーでもいいから、さっさと今がどういう状況か説明しろってんだ。オマエの事もあの蜘蛛もバケモノの事も全部話せ」

「ぶーっ……わかったよ、今からちゃんとわかりやすい説明をするよっ」

ったく、遊び好きで気分次第な感じで。
どこまでガキ臭いヤツなんだミネットは。
まあ、ようやく質問攻めから解放された事だ。
さぁて……ゆっくりと事情を聞かせてもらうとするか。

第８６話，男の子？女の子？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「そういえばさ、早川って作中で男とか女とか言われた事ないよね」

暮葉「もきゅ！　確かにそうなのです！」

圭介「おう、それで思ったんだ……結局アイツの性別って何なんだ？」

暮葉「さぁ？　拙者は男性だと思うのですが……」

圭介「そうか？　案外女子の制服とかスク水とか似合いそうな感じだぞ？」

暮葉「エェッ！？　で、でも髪も地味に肩にかかるくらい長いですし、そういえば体格も中性的ですし……まさか！？」

圭介「うん、わからん。ここは第３の性別が秀吉だから……第４の性別悠ちゃんだな！」

暮葉「もきゅ！　まさかのそっち方面ですか！？」

早川「オマエら死にてェか！？　アァ！！」

※正直早川の性別は決めてないので、読者様のご想像にお任せしますorz

そして人気投票、キャラを増やしましたのでよろしくお願いします！

第87話，ミネットの事情、辛かった悠？

「……アルファ隊って知ってる？」

「あン――なんだそりゃ？」

背中を洗ってもらいながらの説明だが、クソッタレが。
何がわかれやすい説明だよこのクソガキ。
さっきから知らねえ単語のオンパレードじゃねえか。
オレは複雑な超能力を扱うだけに頭脳には自信があるのだが、いくらオレの頭脳でも意味不明な単語ばっかり並べられると理解に苦しむっつーの。

「ここは違う世界、レムリアってところのロジーナって国にある特殊部隊だよ」

「はいはい、素晴らしい設定の小説でも書こうってか？」

「小説じゃないよ！　事実だよ一応！　それに貴方だってある程度は知ってるハズなんだよ？」

「はン――ある程度ねぇ……ンで、そのアルファ隊がどうしたってんだ？」

とりあえず、知らねえ単語ばっかで意味不明でも、オレは頑張って理解しようとしていた。
新たなる計算式を覚えるよりは簡単なハズだからな。

「アルファ隊は反政府組織、“サヴィエト亡命政府”の打倒と関係

者拘束の為に結成された、基本的には腕のいい魔法使いの部隊なんだよ」

「魔法使いねえ……」

そういえば、オレがブッ殺しまくっていた特異点のヤツらも、魔法だとかふざけた事を言ってやがったな。おまけにミネットは部隊だとか異世界人だとか言いやがる。

つー事はやっぱりミネットは、オレが潰しまくっていた特異点だってのか？

まあそれを訊くのは後でいい。それよりあの蜘蛛のバケモノについて知りてェ。

「ンじゃあ、あの蜘蛛のバケモノはなんだ？」

「多分魔族かも。サヴィエト亡命政府はどういうわけか、魔族とも何らかの関わりがあるらしいよ」

「オイ……色々言う前にその魔族がなんだか説明しろ」

「すっご～く恐ろしいんだよ！　腕力も魔力も人の上をいくし、今は封印されちゃったとか死んじゃった説があるけど、魔族の頂点には魔王と大魔王が存在していて、かつては勇者や魔法使いが頑張ってその二人と戦っていたんだよ」

「チッ、ふざけてんのか？　なんだよそのクソみてぇな王道ファンタジーな話は？」

「ミネットはこの事を疑問に思っている貴方に疑問だよ。貴方はすごい超能力が使えるのに、ファンタジーなお話は信じられないのか

な？　かな？」

「わかぁった、信じときゃあいいんだろ……」

突っ込みまくるのも面倒癖え。
だったらもういっその事、魔族も魔王も大魔王も存在しているという事にしておけ。
ンで、昔は勇者がいたって話も事実だと言う事にしておこう。
こんなクソッタレな話、考えるだけでも面倒癖えっつーんだよ。
あとは、ミネットに聞きたい事は一つだけだな。
この野郎……どうしてオレの存在やオレが超能力を使える事を知っていたんだ？
いくら異世界人の魔法使いだからって、初対面のヤツにそこまで知られてちゃ気味悪いっつーの。

「はい、お背中流し終わったよ♪」

「あぁそうかい」

「むぅ、もっとミネットに感謝して欲しいかも！」

「そうかい、ンじゃあ恩返しにオマエの背中でも洗ってやろうか？」

「え、遠慮しておきます……っ」

急に敬語になりやがって。
ンじゃあどういう風に感謝すりゃあいいってんだ？
ったく、女ってのはいつも思うが面倒な生物だ。
そんな事を考えながらオレは浴槽に入り、身体を伸ばしてくつろぎ始めた。

久々に風呂ってのも悪くねえな。しばらく入ってねぇだけに妙な有難味を感じる。

「一応忠告しておくけど、ミネットが身体を洗う所を見るのはＮＧだからね！」

「誰もオマエみてぇなガキの入浴シーン、無理やり見せられても見たくねえっつーの」

「貴方ってストレートにひどい事言うよね。でも下手に隠し事をする人よりは信用できるかも」

「ンじゃあどうでもいいじゃねえかよ……」

結局、ストレートに物事言われるのが好きなんだか嫌いなんだか、どっちなんだよこのクソガキは。

まあどっちにしたって、別にオレはミネットの裸なんざ興味はねえし。

オレにはロリコンなんて特殊性癖はねえんだよ。

それよりも、コイツからしか知れねえような知りたい情報が山ほど事があるんだ。

「ふんふふんふんふふん～♪」

ミネットのヤツ、呑気に鼻歌歌いやがら愉快に身体洗いやがって。

ふとミネットのほうを見ると、ミネットは既に泡だらけで大事な所が隠れていた。

泡で隠したつもりってか。ったく……ガキの考える事はよくわからねえ。

それよりも……。

「オマエ、愉快に鼻歌歌ってねえでオレの質問に答えろ」

「――――っ！？　ちょ、見ないでってミネットは言ったのにひどいよっ！」

「うるせえ、泡で隠れてるから問題ねえだろ」

「……貴方ってロリコン？」

「オマエ……死にてェのか？」

そこまで脅すと、ミネットは頬を赤くして俯いてしまった。
そりゃあ、降参のサインって捉えていいのか？
まあとにかく、これで話は聞ける事になったっぽいな。

「さて、と。じゃあ聞くけど……オマエはどうしてオレの名前を知っている？」

「それ、さっきも言ったよ？　貴方はアルファ隊では有名人なんだよ？」

「ふ～ん。ンで、どういう風に有名人なんだ？」

「……強いて言えば、かなり恨まれているよ？」

恨まれている、ねぇ……。
そこでオレはようやく確信した。
アルファ隊ってのがオレが潰していた特異点の所属する組織だって事に。

オレはとにかく特異点をブッ殺しまくっていた。
恨まれるのは当然の事だろう。つーか、恨まねえほうがオカシイっつーの。

「ふ～ん、つまりオマエらがオレが殺しまくっていた、無国籍者どもの特異点だって言うんだな？」

「貴方の言い方だと、それで合っているよ」

「そぉかい、そんじゃあ第二の質問だ。オマエはオレをどう思ってんだ？」

「んにゃ？」

「オマエもアルファ隊の一員だろ。にも関わらず、オマエらを殺していたオレを風呂に入れるってどういう神経してやがんだ？」

それがオレの中の一番の疑問だ。
コイツは最初から、あまりオレに敵意を向けたりはしていねえ。
にも関わらずコイツは特異点で、アルファ隊の連中は仲間なハズである。
だからこそオカシイんだよ。
オレはコイツらを楽しんで殺していたってのに、なんでミネットはオレに好意的なんだよ。

「……ミネットも、正直貴方を恨んでいるよ？」

「だったら何でだ！　恨んでるんだったら不意打ちでもしてオレを殺せばいいだろ！」

最も、こんなヤツの攻撃なんざ風で跳ね返してオシマイだがなぁ。

「そうだよね……でも、ミネットは知っちゃったから」

「あン？　何を知ったってんだオマエは？」

「貴方が……殺したくなくても殺さなきゃいけない。そんな状況に置かれていた事だよ」

「……っ？」

コイツとは初対面なハズだ。
第一、オレが特異点との戦闘でそんな事を漏らした覚えはねえ。
だったらコイツは……なんでそんな事を知ってやがるんだ？
しかも、まるでオレは被害者だって言い方じゃねえかよ。

「オマエ……どういうことだ？」

「ミネットは……貴方と木下先輩、そしてアルファ隊の護衛対象との戦いを見ていたんだよ。その時に貴方は学園を辞めたくて、ずっと永遠に血みどな日常を送るのと、今の一瞬だけ血みどろな現実を見る。どっちがマシかって話をしていたよね？」

「……ッ」

このヤロウ……まさか、あの一般人のクソ野郎との戦いを見物してたってのか。
そういえば、最後のほうで特異点が多数駆け付けたって、あのピンクのチビが言ってやがったな。
まさかミネットもそのうちの一人。水系の魔法を使えたりすんのか？

「貴方はしつこい学園を辞める条件として、嫌々ミネットたちと戦っていたんだよね？」

「ふざけんじゃねえぞ。あの言葉のどこにそういう意味が含まれてるってんだ」

「含まれているよ。確かに言葉はものすごく汚かった。でも、貴方の辛い気持はミネットにも……そして貴方を倒したあのお方にも伝わっているハズだよ。だからミネットは仲間を殺されて当然貴方を恨んでいるけど、貴方だって辛かったんだから……恨み切れないんだよ？」

……クソッタレ、さっきから知ったようなセリフをペラペラペラペラ。

“勇気ねェ……ずっと永遠に血みどな日常を送るのと、今の一瞬だけ血みどろな現実を見る。どっちがいいかって話だけどなァ……オレには前者を選ぶ事はできねえ。それだったら後者を選ぶ方が遥かにマシだ。それともなんだァ？　オマエはオレに単独で佐井学園と戦う勇気でもくれるってのかァ？”

一体あの言葉のどこに、そんな辛い意味が込められてるってんだよ。確かに、あの学園は二度と見たくねえくらい嫌だが……ッ。

「……チッ」

「あ、あれ？　どこに行くの？」

オレは荒々しく浴槽があがり、この浴室からオサラバしようと歩き始めた。

そんな時にミネットに呼び止められたのだ。

クソッタレ、呼びとめてんじゃねえぞガキんちょが。

「オマエとはここでお別れだ。精々、オレのことでも忘れて幸せに暮らしやがれ……」

「ちょ、ちょっと！」

そんな背後から聞こえるうるせえ声は無視して、オレは浴室から出ようと……あ、アレ？

急に頭がクラクラしてきやがった。く、そ……寝不足が今更響いてきやがったってか？

……まずい、マトモに思考できなくなってきやがった。

それどころか、こうして足で身体を支える事そのものが……っ！

「……っ！」

いてぇ……倒れたのか……オレは？

そして、意識が……。

「えっ……ね、ねぇ貴方！　大丈夫なの!?　しっかりしてよ！」

最後に聞こえたのは、ミネットのうるせえ叫び声……だったような気がする。

第87話，ミネットの事情、辛かった悠？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「なにこの一方〇行？」

伊吹「圭介、もうそのネタいいわよ……読者だって多分わかって読んでるから」

圭介「それにしても女体に興味ナシとは……ますます早川女性疑惑が――――」

伊吹「あんたは興味ありすぎなのよ！」

凪紗「そうだぞ……っ？　そういえば藤島はまだ変態なのか？」

圭介「うるせえ！　男が変態で何が悪い！　つーか変態ってのは不治の病だ！」

伊吹「迷惑な病よね……？」

凪紗「ＴＰＯをわきまえない変態はただの迷惑だぞ」

圭介「うっせ黙れ！　俺は紳士だからちゃんとわきまえてるわ！」

第８８話，まだ残っていた心

「……？」

気付けばカーテンの隙間から光が差し込んでいる。

……どういう事だこれは。

オレは昨日夜の古宇坂を歩いていて、それで変なガキと出会って風呂に入って……。

その後の記憶がまるでねえぞ。しかもなんでオレは布団で寝ているんだ？

……ここは一体どこだってんだ？

「ふ～ん！」

「あン――――？」

覗き込むように俺を見下ろす外国人のような少女。

間違いねえ、昨日オレをここに案内しやがったのはコイツだ。

そしてここはおそらくコイツの家だろう。

「すごく優しそうな顔だったよ。寝顔って誰でも素直なものなんだね！」

「……オマエ、このオレのどこをどう見たら優しいヤツに見えるんだ？」

「またまた～！　謙遜しなくてもいいんだよ？　昨日帰ろうとしたのだってミネットに配慮したからなんだよね？」

なに言ってやがるんだコイツ？
付き合いきれねえから帰ろうとしたに決まってんじゃねえか……多分な。
つーかオレはあの後、どうしたんだっけな？
そういえば、なんでオレは布団で寝ている上に服着てんだ？
ちょっと待て……オレは風呂に入っていたハズだ。

「オイ、なんでオレはここにいるんだ？」

「んにゃっ？　そ、それは……うん、ミネットが頑張ったからだよ？」

「頑張った……ッ！？」

そこでオレは理解しちまった。
このクソガキが寝ている間に、とんでもねえ事をされたってなぁ。
確かこのガキはオレと一緒に風呂に入っていたハズだ。
そんでオレは風呂場で倒れて、何故かオレは似合わねえ明るい柄の服を着て布団で寝ていて。
つまりどういう事か。ンな事ぁ言わねえでもわかるだろ……ッ！

「このガキ……ッ、人様の裸をタダで見やがるとはいい度胸してんじゃねえか！」

「仕方なかったんだよ！　だって……お風呂場で放置するわけにもいかないから……っ。しかもそのセリフはミネットのセリフでもあるよ！？」

「チッ、貴重な情報の代償がコレかよ……っ」

「ま、まあまあっ！　裸を見られたのはお互い様なんだよ？　お相子お相子！」

「フツーそう言うのは男のセリフじゃねえのか？」

「昨日男女平等って言ったの、誰だったかな？」

ニヤニヤしながらそんな事を言うミネット。
このオレをいじろうとは……いい覚悟だ、上等じゃねェか。
ここまで精神的にオレを追い詰めた特異点、初めてじゃねェかよ……畜生、腹立つくらい愉快だなぁ。
まあ、もうこのガキには用はねえけどな。
それよりさっさとこの家を出て、今日の朝飯でも調達しに行くか。
いつまでもこんな所にいたらそのうち……佐井学園の刺客が来る可能性があるからな。

「……チッ」

「およ？　どこか行くの？」

「こっから消えるんだよ。オマエとはもう二度と会う事はねェと思う」

「えっ？　で、でも貴方の服はまだ乾いて――――」

「関係ねえ。服はどこにあるんだ？」

「……っ、ベランダ？」

「そォかい……一つだけ言っといてやる。災難に遭いたくなかったらオレとは関わらねえほうがいい」

オレと関わればそのうち、連中に襲撃される可能性があるからな。
連中っつっても佐井学園の連中だけじゃねえ。
普段、食糧とか金を奪ってるこのあたりの不良も含む。
ソイツらとオレの戦いに巻き込まれねえ為には……オレとは関わらねえほうがいいだろう。

「貴方って……どうしてそんなに他人を避けてるの？」

「……深い理由はねェ、面倒癖ェんだよ。それより着替えるから見るんじゃねえぞ」

「んにゃっ！？　う、うん……っ！」

ミネットはあっちを向きやがったが、果たして本当に見ねえんだろうな？
まあいい。今更ミネットに下着くらい見られようが、オレはもうどうとも思わねえ。
それにしてもオレの服……ありえねえくらい濡れ濡れパラダイスじゃねえかよ。
まあ今日は幸い快晴だ。着てりゃあそのうち乾くだろう。
滅茶苦茶深不快だけどそこは我慢だ。

――――こうして。
着替え終わったオレはミネットの家を出て、食い物か金でも持っていそうな不良を探し求めていた。
それにしてもいい天気だ……まぁ、オレにとっちゃあこういう天気は苦手なモンだけどな。

アルビノってのは非常に弱いモンで、オレは幸い弱視にはならなかったがこういう日光には弱いんだ。
日光、特に紫外線で皮膚が損傷したり、普通のヤツよりも皮膚がんのリスクが高ェ。
その上、目が明るい所を苦手としてんだよ。眩しくてしょうがねえ……。

「ったく……不便なモンだ」

だが、オレには生まれつき超能力が発現していた。
最初は精々小せぇ風を吹かすとか、そんな程度の事しか出来なかったが、成長と共に能力も強力になっていき、今じゃあ佐井学園……というより全世界で最強の超能力者になっちまった。
そのおかげでガキの喧嘩にも負けなかった。筋力がなくても何の不便にも感じずに生きてこれた。
オレをここまで強くしゃがった佐井学園。まァ、その事に関しては感謝しといてやろう。
……だが、あの学園のやり方はもうゴメンだ。
それにしても金持ってそうな不良なんて全然歩いてねえモンだな。
まあ所詮古宇坂も田舎ってかァ？
仕方ねえ、そろそろ古宇坂からオサラバして東京にでも行くか？
……いやダメだ。東京には佐井学園がありやがる。
ンところに行けばすぐにオレの居場所が特定されちまう。
クソッタレ……これから先、オレはどうやって生きていけばいいんだァ？

「こちら陳、これよりアルファ隊殲滅作戦を開始する。ＯＫ？」

「あン――――？」

なんだァ、あのチャイナ服を着た怪しげな野郎。
変なことを呟きながら古宇坂の住宅街に消えたが、畜生怪しいなあの野郎。
アルファ隊殲滅って要するに、さっき別れを告げたミネットをブッ殺すって事だよなァ。
……だからなんだってんだ。オレはもうあのガキとは関係ねえ。

「チッ……！」

ポケットに手を突っ込み歩き始めたが、クソッタレ……なんだかムカつくな。

「……」

……あの怪しい野郎、一体これから何をするつもりなんだァ？
まァ、知った所でオレにどうしろって話なんだが。
それでも気になる、そしてクソムカつく……。
オレはどうしてこんなにムカついているんだ？
もう関係ねェだろ……たとえあの中国人見たいなのがアイツを殺すとしてもだ。
たかが一泊半ば強制的に止めさせられただけだ。
貴重な情報を教えてもらっただけだ。そんで……ふざけた事を言われただけだ。
たったそれだけだし、オレとは関わらねえほうが安全に決まってんだよ。

“貴方も臭いのは嫌だよね？　だからミネットの家のお風呂を貸すよ！”

あんなガキはもう関係ねえ……。

“……ミネットも、正直貴方を恨んでいるよ？”

それにアイツはオレが殺しまくっていた特異点。

“貴方が……殺したくなくても殺さなきゃいけない。そんな状況に置かれていた事だよ”

もし、さっきのヤツに殺されようが知ったこっちゃねえ……。
ヤツらがどれだけ死のうが、目的を果たす為なら関係なかった。
いや、その目的が果たせなくなった今でも……もう他人だ、何の関係もねえ。

“貴方って……どうしてそんなに他人を避けてるの？”

チッ、あのクソ野郎。
こんなタイミングでアルファ隊の名前を出しやがって。
アルファ隊ってヤツを殲滅するだとか言いやがって。
おけげで、あのクソガキが脳裏から離れなくなっちまったじゃねえか。
なんなんだろーなァ……オレもまだ甘いってェのか……？

「……クソッタレ」

ムカつく……こうなったら暴れるしかねえ。
さっき走って行った、あのチャイナ服の怪しげな野郎を相手になァ。
ったく、あの野郎が誰を襲う気かは知らねえが……。
あの野郎に襲われた死ぬんじゃねえぞ。
アルファ隊の連中を殺していたオレが、間接的にオマエらを救ってやるんだからなァ……！

第８８話，まだ残っていた心（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「あー暇だぁ。そういえばそろそろ花火の季節だよなぁ」

浅間部長「何言ってるんだ藤島君！　僕に言わせれば海水浴の季節だね！」

圭介「海水浴……水着……お姉さん……おおっ！」

浅間部長＆圭介「夏ってスバラシイ！」

あかり「……誰か、アイツらシバいてもいいよ！」

第８９話，最悪

あの中華野郎、確かこっちの方に行きやがったよな。
ここは確か……元々旧日本軍が使ってたって言う、自衛隊の滑走路があるあたりだったな。
滑走路の周囲は住宅と畑だ。あの野郎……こんなだだっ広い場所でどうするつもりだ。
って、アルファ隊の連中を潰すんだからやる事は決まってるよなァ。

「あァ？」

不自然に立ち入り禁止という看板が立てられた、自衛隊基地付近にある運動場。
はン、バレバレだっつーの。
何の声も聞こえねえし、この中で何かの大会なんかやってるわけがねェ。
そもそも、大会なら一般公開していたっておかしくはねえハズだ。
にも関わらず、わざわざ立ち入り禁止にするたァね……やれやれ、人間ってのはホントに馬鹿だ。
まァ、オレも一応その人間だがなァ……。

「さて、と……オレにしちゃあ珍しい事をしてやろうか。１０分で終わらせてやる」

オレは立ち入り禁止の看板を無視し、笑いながら運動場へと足を踏み入れた。

……って、堂々と立ち入り禁止の場所に来てみたはいいが。

「アイヤー可哀想だネェ！　でも、そろそろ終わりだネェ」

「まだ……だよ……っ！」

「減らず口だネェお嬢チャン？　じゃあそろそろレニナ様の計画の為だ、死んでもらおうかネェ」

オイオイなんだこりゃ……あの中華モドキにミネットのヤツが負けてやがる。

ったく、どこまで予想通りのシナリオなんだ。

しかもなんなんだ、このナイスすぎって言われそうなタイミングは。

まあいい……ちっとだけ運動してやるか。

見せてやる……オマエらサヴィエト亡命政府の連中だって、このオレと戦えばひ弱なオタクと９０式戦車くらい差があるって事をなァ。

ゆっくりと、オレは二人の下へ歩んでいった。

「アァ？」

中華野郎がオレの気配に気づいたのか、まるで嫌なヤツに向けるような目でオレを見てきた。

それでも俺は気にせず、何処までも狂った笑みを浮かべ、ただ只管中華野郎へと近づいていく。

中華野郎はミネットを殺す為か、さっきまでしゃがんでミネットに手刀（しゅとう）を向けていたが、オレが近づくとそれをやめ、細い目でオレを睨みつけつつ拳を握り締めて立ち上がる。

「アイヤー！　立ち入り禁止って看板建てといたのに、どうして侵

入しちゃったのかネェ？」

「……あ、あな……た……っ？」

弱々しくオレを呼ぶミネットに、嫌味な感じで語り掛けてくる中華野郎。

やれやれ……クソムカつく口調だなあの野郎。

「君は一般人だネェ……悪いけど、君には死んでもらうかな？　秘密を守る為にも……個人的にも日本人は嫌いだからネェ！」

そうかい……別にオレはオマエがどう思ってようが、知ったこっちゃねえんだよ。

けどな、このオレがオマエのようなヤツに殺されるってぇ？

はン――くっだらね……。

オレがオマエごときに殺されるわけがねえだろ。

寝言は――寝ながら言えってんだよ！

「死ネェーーーーッ！」

カッコいいつもりで、でも実際は情けなく叫びながら中華野郎は掌を突き出す。

別に飛びかかってくるわけでもない。銃を向けて撃ってくるわけでもない。

ただ、掌を一歩も動かずに俺へ突き出す。あの野郎はたったのそれだけしか動かなかった。

当然距離的に右手がオレに届くハズがねえし、そんな事をされたって痛くも痒くもねえ。

むしろ、目の前の中華野郎の存在が痛く感じるくらいだ。

だがそう思っていた瞬間、あの中華野郎の掌がぼんやりと光り始め

やがったのだ。
おもしれえなオイ……あれって確か特異点どもも使っていた、魔法とかいう変な能力なんだろ？
サヴィエトの連中は魔族ってのとつるんでるらしいし、オマケに魔法まで使うってなァ。

「……っ！　波ァァァァァァァァッ！」

ぼんやりと光っていた掌から出たのは、別に驚く事もねえ……ただの光線だった。
おもしれえ畜生。ありゃ一体どういう魔法なんだ？
ただ一つだけわかるのは、オレに向けて放ったんだから攻撃魔法だよなァ。
だったらオレがやる事は一つしかねえな……。

「……ぃ……ひぃっ！」

突然驚き、情けねえ声を出しやがる中華野郎。
無理もねえ。人間理解が出来ねえ事が起これば、誰だってあんな風に恐怖を感じるものさ。
きっとあの野郎は攻撃を弾かれた事がねえのだろう。
まあ正確には、弾くというより風でヤツの魔法を吹き飛ばしただけだけどな。
弾き返されるように飛んでいく光線は、中華野郎目がけて一直線に突き進む。
そのまま自滅してくりゃあ楽なモンだが、残念な事にあの野郎は寸前で右に跳躍しやがったのだ。
はン――中々反射神経はいいみてえだ。
流石は中国人。魔法使いであると同時にクンフーの達人ってかァ？

「怖がる事はねえだろ？　オレはただ、一瞬で暴風を身体の周りに吹かして攻撃を防いだだけだ」

「な、なんだネお前!?　アルファ隊の新入りか、それともロジーナの軍人か!?」

「お生憎様、オレはこの世界の人間で……今のも魔法ってモンじゃねえんだ」

「ウソだネ!　この世界に……魔術以外のチカラがあるだなんて――!?」

「ヘェ？　ミネットは魔法っつってたけど、オマエらは魔術って言葉を使うんだな？」

「……は、ハハ!　敵性語だからネ……こっちで勝手に言い変えてるってわけネ」

「そォかい……じゃあ、オレはオマエの敵だから魔法って言っとくわ」

あの中華野郎は露骨にオレを恐れていた。
魔法以外の力は信じられねえらしい。
だけど、オレはそれ以外の力を使ったとヤツに言った。
事実オレは魔法は使えねえが、それ以外の力なら自由自在に使える。
事実を伝えただけだったのに、随分とあの野郎オレを怖がってやがるな。
やっぱり、オレが光線を弾き返しちまったせいなのか。
まあ確かに、ビビってくれたほうがいじめがいがあって面白ェ……ぎゃはっ。

「お、お前誰なんだ！　どうしてアルファ隊の味方をしているネ！？」

「味方？　ぎゃは、笑わせんじゃねえよ……このオレがアルファ隊の連中にどう思われてるか、オマエわかってんのかァ？　答えは恨まれている……最も、オレがこのミネット達に恨まれるような事をしたから、まあ当然のことなんだけどなぁ」

「だ、だったらアルファ隊の味方をする意味もないだろ？　どうだネ！　お前は我の魔法を弾き返したんだ。いっそレニナ様の下で財産とかそういうあらゆる不平等を平等に、すべての人が皆平等に生きれる社会を使ってみないかネ！？　その為に、それを阻止しようとするアルファ隊という蛮族の組織と戦わないかネ！？」

平等ね……言い言葉じゃねえの？
あくまで理想としてはなぁ。
まあ、現実そんな甘いもんじゃねえからそれは不可能だろう。
どう考えても無理な理想を追い掛ける上に、もうゴメンな事までしろってか。
そんなの、オレの答えは当然――――

「――お断りだァ。オマエらに協力する理由だってねぇし、それに特異点潰しなんてモンを再びすんのも、もうゴメンだからなぁ？」

「ゆ、悠……貴方……っ」

なに物珍しそうな顔してんだ、ミネットのヤツは。
しかも、コイツがオレを名前で呼ぶなんて珍しいモンだな。
まあどうでもいいけど……それより、今は目の前のクソ野郎を葬ら

ねえとな。

「は、ハハハ……ッ！　我らに協力しないと言うのネ？」

「当然だ。オマエらに協力するくらいなら、クソッタレな学園に戻るほうがマシかもしれねえ」

まあどっちにしても、あの学園には今後一切関わりたくねえがな。
けど、それと同じくらいコイツらとは手を組みたくねえ。
オレはもう――何かの為に汚れ仕事をすんのはゴメンだ。

「いいだろう……ならばこうするまでだネ！」

「あァ？」

すると突然、中華野郎が大きくジャンプをしやがった。
おーおーよく飛ぶねェ。
ひょっとして、マンションの3か4階くらいの高さはあるんじゃねえか。
大胆なハイジャンプしやがって、あのクソ野郎一体何をするつもりだ？

「ん、にゃっ！？」

「ヒャハハッ！　大人しくしろアルファ隊！」

あの……ヤロウ……ッ！
ミネットの近くに着地しやがったと思ったら、左腕でミネットを抱きしめやがった。
恋人同士でするような、そんな生易しい抱き方じゃねえ。

プロレスの試合で相手レスラーを締め付けるような、そんな荒々しい抱き締め方である。
一方の右手ではチャイナ服のポケットに手を突っ込み、そこから黒々とした何かを取り出しやがった。

「チッ……ンだぁそりゃ、トカレフＴＴ－３３ってヤツか？」

「我が祖国でライセンス生産したものネ。それより動くなよ？　動けばこのガキの脳味噌が花火みたいに飛び散る事になるからネ！
この子の死体を見たくなかったら……君は我らに協力することだネ！」

ライセンス生産だろうがコピー生産だろうが、そんなくだらねえ情報はどうでもいい。
それより、あの中華野郎は中々の小者みてえだな。
ミネットのこめかみに銃口をしっかりと当て、それで動けないオレを見ながらニヤニヤしてやがる。
まったく……やる事が小悪党すぎるぜ。
だが、いくら小悪党のやることだとしても――コイツぁちっとどうするか、考えなきゃいけねえな。
オレに銃を撃つんなら何の問題もねえ。
ただ暴風で膜を張り巡らせ、向かってくる銃弾をクソ野郎にお返しすればいいだけだ。
……だが、標的がミネットとなれば話は別だ。
アイツはただでさえ怪我して弱ってるってのに、元から銃に対しては弱い存在だろう。
うかつに動くのはマズいが、だからと言ってあの野郎の条件を飲みこむつもりはねえ。

「……っ！」

「恐怖で何も言えないみたいだネ。さて君はどうする!?　この子の死体を見るか、それとも我らに郷協力するか!?　そしてら、この子を死体にする事だけは特別にやめてやるネ」

「……」

ミネットが捕まってるとなると、あまりド派手な技は使えねえ。
もし使ったらミネットまで巻き込まれちまう。
思いきって飛びこむか……いや、どんなに風の力を使って高速移動したって、引き金を引くには十分すぎる時間があるだろう。オレがヤツの目の前に行った時には、既にヤツは引き金を引いているハズだ。
仮に間に合ったとしても、ヤツは間違いなくオレかミネットに発砲する。
ミネットに当たればアウト……だが、このまま何もしないわけにはいかねえ。
一か八かの賭けだ。一気に間合いを詰めてあの野郎を殴り飛ばし、ミネットを助け出す――――！

「ァァアアアアアアアアッ！」

「な、何ィ!?」

ドン！と力強く足踏みをし、風の力を利用して弾丸のように中華野郎の懐へ突っ込む。
右拳を握り締め、中華野郎の目の前まで来ると、握った拳を能力使って加速させつつソイツを放った。

「――――あ、がぁ――――っ！」

当たれば大怪我確実の拳は確実に中華野郎の顔面に突き刺さる。
殴られたと同時に中華野郎は、左腕からミネットを荒々しく離してしまった。
ここまでは読み通りだ。それに案外今の攻撃が効いたのか、中華野郎が反撃してくる気配もない。
だったら今のうちにミネットを助け、とにかく中華野郎から距離を取ろう。
倒れそうになっていたミネットをしっかりと抱き、吹き上げるような暴風を吹かしてオレは空を飛んでみせた。その結果、着地すると中華野郎とは１０ｍ程の距離を取る事に成功した。

「……ひゃ、はは……っ、ヒャハハハハハ！」

「……ッ！？」

オレはどうやって体勢を立て直したのか、歪んだ表情を見せる中華野郎……ではなく、中華野郎がオレに向けている黒々とした拳銃の銃口を見つめた。
冗談じゃねえぞオイ……！
あの中華野郎、今オレが暴風の膜を張り巡らしたら、このガキも一緒に吹き飛んでしまうじゃねえか。
ミネットは衰弱している。ちょっと吹き飛ばされたって、荒々しく地面に叩きつけられりゃあ大きなダメージとなりやがる。これ以上ミネットがダメージを受けるのは危険すぎる。
畜生、こんなガキ早く地面に置いて、中華野郎が撃つ拳銃くらい……簡単に弾き返して……ッ！

「ひゃ、はっ！　仕返しだ……受け取るがいいネ小日本人ッ！」

中華野郎が銃弾を放ったのは、まさにオレがミネットを優しく地面へ置いた瞬間だった。
早く手を離せば、乱暴にミネットを放り投げていればオレは確実に助かっていた。
……ったく、オレも甘いぜ……。
ミネットがこれ以上怪我すんのが危険だからって、それが嫌だと思っちまったからって、この手を離さず優しく置く所までやっちまうだなんて……。

「……ァ……ガ――――ッ！？」

何かが突き刺さった。
突き刺さると同時に吹き飛ばされた。
痛みは……感じない。
感じる前に視界が揺らぎ、次第に真っ暗になっていったからだ。
一応、この後オレが勢いよく背中を地面に叩きつけた事はわかった。
そこから次第に意識がなくなっていくことも。
ったく、オレの人生ここで終わりか？
まあいい、それより……あの中華野郎からさっさと逃げろ、そして生きろよ……クソガキ……ッ！

第８９話，最悪（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「最近暇だなぁ」

大吾「圭介、最近お前はなにやってるんだ？」

圭介「ん、そうだなぁ……なあ大吾、ネット住人って馬鹿じゃね？」

大吾「なんで？」

圭介「いや、女子中学生のフリしてチャットに入り込んだら……変態親父と馬鹿なヤンキーっぽい兄ちゃんいっぱい釣れたし」

大吾「おまっ！？　それで遊んでるの！？」

圭介「まあな。しっかしなんで見抜けないんだろう？　アニメキャラ参考にテキトーに作った女子中学生キャラだってのに」

大吾「圭介ひでえけどクソワロタ！　まあ、見抜けないくらい二次元キャラが完璧ってことだよね！」

伊吹「こいつら……ロクな遊びしてないわね……っ」

第９０話，死闘

「……やった？　ひゃはは……冗談じゃないかネ？」

いきなりあの人が駆けつけて、ミネットを助けてくれて……。

でもあの人は吹き飛ばされてしまった。

陳炎彬（チンヤンビン）という名の、サヴィエト亡命政府では気功と拳法の達人の男の攻撃で。

陳が放った一発の銃弾によって……。

「我の気功を弾き返したコイツが、一発の銃弾に負けた……？　ふ、ひゃはははは！　こりゃあ確実に死んだネ！　７．６２ｍｍ弾を額に受けて生きてるハズがないネ！」

死んだ……えっ？

あのアルファ隊の魔法使い何人掛かりでも倒せなかった、あの早川悠を殺した……？

なんで……どうしてなの。ミネットを助ける為？

だからって、仲間を楽しんで殺していた人が自らの命を投げる？

助けに来てくれた時点で何かがおかしいとは思っていたけど、ここまでしてくれるなんて……。

どうして……ミネットが死んでも、アルファ隊全体では何の影響もないんだよ。

ミネットを助けても……あなたには何の利益もないのに……っ。

「さて……次は君ネ」

「……っ！」

その言葉が耳に入り、ミネットはボロボロの身体でなんとか身構える。
先端にハートを飾ったステッキ。
ハートは飾りだけど、ステッキ自体は魔法を使うためには必要なもの。
でも……陳には四大元素の一つ、万物の根源（アルケー）こと水の魔法が全く効かない。
増してやもう……ミネットには戦うための体力が……っ。

「貴様の王子様は弱かったネ。さて……そろそろ死ねェッ！」

「……！！」

叫びながら陳は銃をミネットに向ける。
あの人を殺した銃……ミネットだってあんなのには耐えられない。
しかも、ミネットは普段のあの人とは違って、銃弾を防ぐ術もなければ避ける術もない。
もうダメだ……ミネットはもう死を覚悟した。

「ひゃ、は、はぁっ！」

炸裂する銃声。
1秒以内にミネットは死ぬ……覚悟を決めた――刹那。
ミネットは死ななかった。銃弾がミネットに直撃どころか掠りさえもしなかった。
陳が下手糞というわけではないと思う。さっきだって、あの人の額に正確に弾を当てていた。
きっと陳は射撃の達人でもあるのだろう。そんな陳が目標に弾を当てられなかった。
射撃の達人であるハズの陳が、ミネットに弾を当てられなかったそ

の理由は――――

「あ、うぐぁあああああああああああっ！」

「――――、死なせてたまるかよ……このクソ野郎ォ」

なんで……どうして……？

理解が追いつかなかったけど、奇跡が起きているのはミネットにもわかった。

あの人が……生きている。生きていてミネットを助けてくれた……っ。

「うぁ、はぁ……はぁ……ぎぃっ」

陳は右手を怪我していた。ボタボタと血が地面に垂れている。

左手で押さえ隠しているけど、きっと右手はグロテスクに裂けているのかもしれない。

そんな右手では何も持てず、陳は持っていた拳銃を地面に落としていた。

そのまま怯えながら後退りしていく陳。あの人は額を押さえながら、ゆっくりと陳に歩み寄る。

「な、なんで貴様が生きてるネ！　一体なにをやったんだネ！？」

「……ッ」

「もしかして魔術、いや貴様は超能力か……それを、直撃の寸前に使ったのかネ！？」

「ぎゃは……推理……ご苦労様だなァ……っ」

あんなにボロボロなのに。今にも倒れそうなのに。
あの人は歯を食いしばり、目をギラギラ光らせながら陳へ近づく。
陳はあの人が近づくたびに恐怖し、右手を左手で押さえながら後退りしていった。

「なんでだネ！　ひゃは、今更貴様に何ができると言うのだネ！」

「知るかクソ野郎ォ……こんなどこまでも堕ちたクソ野郎が、こんな事をしてるって時点で奇跡みたいなモンだってのによ。これ以上ヒーローじみた事をしろってかァ？」

「だったらやめればいいネ！　貴様動けるなら……今から病院に行けば助かるネ！」

「ハッ、オレが逃げたらこのガキを殺すって魂胆か？　丸見えだっつーの……」

自虐しながらも相手を威嚇するあの人は、本当に勇者のようだった……。
カッコいい……ミネットにとって恨むべき人なのに。
どこまでも傷ついた人なのに……なんだかとってもカッコよく見える……。

「なんで……貴様、本気でアルファ隊の味方をしているわけじゃないのにネ。その上、貴様はどう見てもヒーローじゃない、悪人が足掻いているだけにしか見えないのにネ。悪人がなんでこんな事をしてるネ！　悪人は悪人らしく、さっさと我に協力してソイツを殺す手伝いをするネ！」

「わけわかんねェ事言ってんじゃねえぞクソ野郎ォ……確かに、オレはコイツの仲間をブッ殺しまくった極悪人だ。それ以外にも通ってた学園の汚れ仕事を沢山引き受けた。だからってなァ……オマエの味方をする理由にはならねえだろ」

ミネット達を殺す以外にも……汚れ仕事を……？

やっぱり、あの人はそれが嫌で……。

だからそんな仕事ばかりを押しつける、佐井学園という所を辞める為に……？

「ふ、ふざけるでないネ！　綺麗事言ってんじゃないネ！　貴様がどう足掻こうが……なにをしようが！　所詮悪人は悪人だネ！」

「それくれえ分かって動いてんだよ。確かにオレみたいなクズが何やったって、それで全てがチャラになるとは思ってもいねェ……けどよぉ、だからってコイツを見殺しにしていい理由になんのかァ！　だからコイツをここで死なせるわけには、絶対にいかねェんだよッ！」

そう言いながら、あの人は弾丸のように陳へと右手を伸ばして突っ込んだ。

目で追うのがやっとな速度。あの人もう瀕死の重傷なのに、ミネットの為なんかに……っ。

あのまま行けばあの人が勝ちそう……だけど、ミネットだってアルファ隊。

それなりには戦いを経験しているから、不利なのは陳だはなくむしろあの人だとわかってしまった。

確かに陳も右手を大怪我しているけど、あの人の怪我は陳の怪我とは比べ物にならない。

あの人はギリギリで貫通を防いだと言っても、銃弾が頭に命中した

んだよ？
大怪我している人が長時間、今までのように動けるハズがないよ…
…ッ！

「ひぃ！　あぁっ！」

怖がりながらも、あの人が振るう悪魔の右手を回避してゆく陳。
避けられても避けられても、あの人はしつこく陳を狙って右手を振
るう。
気圧や酸素濃度を操ったり、暴風を吹かせたり爆発を起こせたりす
るあの人が、どうして苦手な接近戦を挑んでいるのだろう。きっと、
怪我がひどくて大胆な攻撃ができないのかもしれない。
だから、息の根を止める為には接近する必要があるのかも。
でも、瀕死の重傷の人の動きなんて知れたものだった。
頼りない攻撃を次々と避けていく陳。その頼りない攻撃を延々と続
けるあの人……。

「ァ、う……が、ァ……ッ」

やがて……あの人はバランスを崩した。
立て直す事もできず、力尽きるようにバタンと地面に転んでしまっ
た。
それからもう……あの人はピクリとも動かない。

「そんな……っ」

「う、は……ハハハハハハッ！　そうだよな……コイツは撃たれた
んだ、無事なわけがないよネ！」

もうダメだ……陳はボロボロ。

でも、ミネットに戦う力は残されていない。
最後の希望だったあの人も動けない。
終わった……ミネットは、上から課せられた任務さえ達成出来ずに……ここで死ぬんだよね？
しかも、関係がなかったあの人まで巻き込んで……っ。
最悪だ。ミネットは本当に最低だよ……。

「さて……そろそろ――――」

ニヤニヤしながらミネットのほうを見てきた。

「警察だ！　手をあげて地面に伏せろ！」

刹那、いきなりパトカーや機動隊の人員輸送車がここに入ってきて、中からゾロゾロと警官や機動隊の人達が降りてきた。盾を構え、威嚇の為か銃を構えている。
もしかして、誰かがこの光景を見て通報したのかな？

「……くそっ！」

とにかく、助かったのかな……？
流石に気功や拳法、射撃の達人だった陳も数の暴力には勝てないらしく、警察相手に大人しく降伏しそのままひれ伏した。よかった……

「君！　大丈夫かね！」

一人の警官がミネットの所に駆け付けてきた。
ミネットが男に捕まっていて、その男が銃を乱射しているって通報だったのかな。

「み、ミネットは大丈夫です！　それよりあの人を……っ！」

「あの人……？」

あの人のほうを見ると、頭部からの夥しい量の出血に警官は絶句していた。

でも大丈夫……あの人、まだ生きている。

ミネットにはわかるもん。

あの人はまだ……辛うじて生きているよ。

「これはひどい……」

「あの人――悠はまだ生きてます！　ミネットはどうでもいいからあの人を助けてください！」

ミネットはまだ軽傷だもん。

戦えないけど自力で動けるし、こうして元気に喋っていられる。

でもあの人は重傷……いや、意識不明の重体だった。

意識はないしピクリとも動かない。何より出血がそろそろ危険なレベルのような気がするよ。

「……っ！」

ミネットの叫びに答えたのか、警官は無言のまま行動に移った。

それから数分後、近くに飛行場があったからかヘリが到着。

早川悠という一人の超能力者は東京の病院へ搬送された……。

――――あれから3日、7月も半ばの頃。

ミネットは大した怪我じゃなかったし、何より無国籍者だってバレたら行動が出来なくなるから、だからミネットは入院をオススメされても拒否し、一旦本部へ戻って回復魔法をかけてもらった。
そのおかげで今はとっても元気です。
ミネットは今、東京都にあるとある大きな病院に来ています。
この病院のとある病室にはあの人が寝ている――――

「早川悠♪」

調子よくミネットは病室へ足を踏み入れる。
っていけないここ病院だったよ。病室では静かにしていないと怒られちゃうよね。

「……」

「やっぱり、人の寝顔って素直だねっ」

ベッドの横に来ると早川悠が眠り姫のように眠っていた。
単に意識がないだけだけどね……。
でもお医者様曰く、意識を取り戻す予兆はあったらしい。
早ければ明日くらいには起きるかもしれないらしい。
でも、お医者様曰く心配される事がいっぱいあるらしい。
例えば後遺症……。

『よく撃たれてこの程度で済んだね。僕の腕にかかれば死にはしないと思うけど、ただ……脳の一部が破片によって欠損している。欠損部分はごくわずかだが……まあ何らかの後遺症は避けられないだろうね』

後遺症。

病気や怪我が治癒した後も、機能障害などの症状が残ること。
まだ目覚めてもいないし、重度か軽度かはわからないけど……。
心配だよ……悠。目覚めたら超能力は使えるかな？
いや、その前に日常生活を送れるのかも心配だよ。
だから……もし元気でもそうじゃなかった場合でも、ミネットはこの人を全力で介護します。
早川悠はミネットの命の恩人だもん。
なにより……この人はいっぱい傷ついて、どこにの行き場がなくて……。
ミネットは弱いから守れないかもしれない。むしろ迷惑を掛けてしまうかもしれない。
それでも、せめてこの人の心の支えにはなりたい……だから。

「悠、たとえみんながあなたを恨んでも……ミネットはあなたの味方だよ？」

優しく言いながら微笑んで、さらに一言。

「だから、早く元気になってね……悠！」

ミネットはまだ目覚めぬ命の恩人に、ゆっくりと、約束を刻むように唇を触れ合わせた。

第９０話，死闘（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「ども！　お久しぶり、本来の主人公藤島圭介だぜ」

伊吹「あんた主人公だったっけ？」

圭介「ちょ！　本来の主人公は俺だぞ！　決して６話連続で俺の出番を奪った一方〇行野郎じゃないぞ！　主人公は俺なんだからな！」

あかり「うそだろ！？　あたいずっと早川悠が主人公だと思ってた！」

暮葉「拙者もミネットさんがメインヒロインで、早川悠が主人公だと思ってました！」

明智「藤島、確かお前は春に原って書いて春原（ふじしま）じゃ……」

圭介「ちょっと待てコラァッ！　俺はポジション的に春に原よりも岡に崎って書いて岡崎（ふじしま）だぞ。これでも主人公だからな」

千早「先輩……先輩の名字って確か井ノ原（ふじしま）で、いつも筋肉って言っていたような――――」

圭介「それも違うから！　むしろ筋肉は重原だから！」

純奈「ふん！　クソ介の名字なんて吉野（ふじしま）で狂犬で――――」

圭介「それも違うわ！　俺は鍵ゲーのサブ違うからな！」

葵「お兄ちゃんっ。とうとうお兄ちゃんが脇役に……でも皆の見ていない所でいちゃつき放題――――」

圭介「やめい！　次回から俺視点に戻るからな！」

第９１話，プールって嬉しいイベント！……のハズ

――――時は遡る事３日前、金曜日早朝の藤島家。

……眠い、なんという眠さだ。

朝ごはんを食べているというのに、眠気のせいかロクな味がしねえよ。

今日は特別寝起きが悪かったもんだから、伊吹にいい加減にしろとビンタされたし。

にも関わらずまだ眠たい……ちくしょう、絶対昨日まよ○キを見たせいだな。

しかも今日は帰ったらバカ○ス。さらに今夜は夜深ししてい○天を見なけりゃいけない。

ハードすぎるぜ……俺のアニメ三昧な日常。

「けーすけ様、味噌汁落としそうなのですよ」

「悪い、ああ……眠っ」

「お兄ちゃんまた深夜アニメ見てたの？」

「うっせ黙れ。葵、てめえも水曜日はいつも眠たそうだろ」

水曜日に眠たいって事はどーせ葵の事だ、神様○ォルズでも見ていたのだろう。

葵は俺の突っ込みに何も言い返せないのか、ただ苦笑いをしているだけであった。

「あっ！　そういえば今日はお兄ちゃんとクーにゃん、体育の授業

でプールあるんだよね？」

「はい！　夏だけにプールなのです！」

「プールねぇ……」

我が初芝高校は古宇坂で最も伝統ある高校である。
部活動も活発であり、中には水泳部というものも存在している。
その水泳部がまた強豪であり、何故かと言うと学校にプールがあるのだ。
つまり、夏期は態々高い金払ってプールを借りなくても、自分の学校でプールの練習ができる。
水泳部にとってはありがたい施設なんだよな。
でも、巻き添え食らうように一般生徒にもプールの授業があるのだ。
はぁ……プールとか憂鬱すぎるぜ……。

「もきゅ？　けーすけ様、なんだか顔色がよろしくないのですよ？」

「ね、寝不足だよ……」

「あれれぇ？　もしかしてお兄ちゃん……まだ――うにゃっ！」

そう言いかけた瞬間、俺は瞬時に葵の口を左手で塞ぎ、右腕で首をガシッと固定してみせる。

「あァおいくゥゥゥゥゥゥン！　少し黙ってようかァ？　あァ！」

「け、けーすけ様が一方藤島（フジシマレータに）っ！」

「はわわわっ！　ご、ごめんなさいお兄ちゃん！」

ＴＨＥ・顔芸。
葵を捉えた俺は鋭い目つきで彼女を睨み、殺意すら感じる勢いで彼女を脅してやった。
これぞ俺流うるさい妹の黙らせ方である。
ぐふふふ、言わせねえぞ……俺とプールの事については絶対になァ。
さて、葵も反省したようだからそろそろ解放してやろう。

「はふぅ～……あ、ああ……はにゃ……っ」

「葵さんしっかりしてください！　けーすけ様の眼力に負けちゃダメなのですよ、葵さん！」

暮葉が葵の必死に肩を揺さぶる。
どうやら、今ので葵の魂はあの世へ行きかけてしまったらしい。
よかったな葵。死ねば死んだポチと再会できるぜ。

「葵を勝手に殺さないでよ！　しかもポチはお兄ちゃんの友達のペットだよね！？」

「お前人の心が読めんのかよ！」

「ま、まあまあ二人とも！　それより早く食べないと遅刻しちゃうのですよ？」

「えぇっ！？　お、お兄ちゃんが葵を脅すのがいけないんだからね！」

「お前いつからツンデレになったんだよ。まあいいや、さっさと飯食って学校行くぞ」

危うく葵との口喧嘩から変な求愛イベントが発生する所だった。
葵がデレモードになると長いからな。本当に遅刻しちまう可能性が高い。
褒めすぎずいじめ過ぎず、これが正しい妹の扱い方である。
全国の妹の事で悩むお兄ちゃん諸君。これ家族関係良好の一番の秘訣だからな。
さてと、飯も食い終わったしそろそろ学校にでも行こう。

靴を吐きドアを開けると、やっぱり家の前の電柱に伊吹がによっかかっていた。
俺ら三人に気付くと伊吹はわざとなのか、俺に視線を合わせないように近づいてきた。
うぅ……ツッパリ伊吹ちゃん。それって新手のいじめ方でございましょうか？

「おはようございます伊吹さん！」

「お姉ちゃんおはよう！」

「二人ともおはよう」

ニッコリ笑う伊吹ちゃん。
ちょっと待て、なんか一人足りなくありませんか？

「あ、あのさ伊吹……俺は？」

「あ、圭介。あんた部屋でおはろーしたじゃん？」

「……寂しいからもっかい」

「っ……おはようは一回で十分！」

「ぐはぁっ！」

まるで飼い犬に説教するような言い方で、伊吹はビシッと正論を俺にぶつけてきやがった。

ちくしょう……俺は伊吹のペットちゃんじゃないんだぞ。

朝っぱらからショックだぜ。しかも今日は一日鬱になる予感。

だって……今日授業でプールあるんだもん。

えっ、普通男なら女の子の水着が見れるから、大いに喜ぶべきイベントじゃないかって？

ハハハッ、確かに女の子のスク水姿は最高だよ。俺だって超みたいしそれだけは楽しみだよ。

でもプールだぞ、プールって事はもちろん泳がされるんだぞ？

「そーいえば葵さん！　青山さんの事って何か聞きました？」

暮葉のヤツ、いきなり誰かの名前を出したと思ったら青山さんだって？

そういえば転校騒動あったよな。しかも昨日か一昨日の話のような気がするぜ。

頑張ったよなぁ俺。古宇坂一の名家の当主相手にお説教だぜ？

あの時は勢いでやっちまったけどさ、今思い出すとおしっこ漏らしちまいそうだよ。

「うん！　千早の転校なくなったんだって！」

「もきゅ！？　ホントなのですか！？」

「あの子の転校取り消しになったんだ。よかったわね！」

「よかったぁ～」

青山さんが転校しないことがわかり、大喜びの暮葉と伊吹。
とりあえず、俺もよかったって相槌を打っておこう。
衝撃の事実を告げられたような気もするが、別に俺は知っていたのであまり驚けない。
だって昨日、青山さんからメールでそんなお知らせがあったから。
ちなみに、最後のありがとうにハートで萌え死にそうになったのは秘密だ。

「一時はどうなるかと思いましたよ！」

「そうね。とりあえずこれで安心だわ」

「うん！　お兄ちゃんもよかったね！」

「お、おう」

本当に良かった……青山さん、この学校で自由に出来る事になって。
本当……転校が取り消しになってよかった。
その後も、俺達はくだらない雑談をしながら学校へ歩き続けた。

やがて時が経ち、初芝高校2年4組教室。
2時間目が終わって次は体育。そう、プールのお時間だ……。
そんなイベントがあるせいか、2時間目が終わった瞬間教室が騒がしくなった。

「おっしゃあああプールじゃあああっ！」

「女子の水着やでぇーっ！」

「僕もテンションが上がってきたぜ！」

特に三馬鹿なんて今朝からこのノリ。
そりゃあ女子の水着は嬉しいけどさ、よくプールでそこまでハイテンションになれるぜ。
こっちはもう今朝から憂鬱だってのによ。

「どーしたんだよ圭介？」

「冴えない顔してどうしたんだい？　何か悩みごとでもあるのかい」

「大吾に重原か……別になんでもねえよ」

「そっかぁ。僕ら先行ってるからな～！」

「そうそう、圭介も早くパラダイスにおいでよ」

「わかったわかった。授業には出るから心配すんな」

大吾と重原はルンルン気分でプールへと向かった。
大吾は多分単純に泳ぎたいだけだろうが、重原はきっと女の子目当てであろう。
アイツ、普段は興味ない素振りを見せているが、意外にムッツリスケベだからなぁ。
女の子に興味がないと言いつつも、部屋にはちゃんとお宝本もあっ

たしな。
まあ、俺らは健全な男子高校生。お宝本の一冊や二冊は持っていて当然であろう。
しかしプールの授業……ああ、ホントはサボッていたいぜ……でもよ。

「あれ？　けーすけ様行かないのですよ？」

「圭くんプールなのに張りきってないねぇ」

「意外だわ。いつものメンバーで一番変態の癖にっ」

「誰が変態じゃ！　わかったよ行けばいいんでしょ行けば！」

全くみんなせっかちだなぁ、つーか俺は男だぜ？
皆さんと違って水着は海パン一丁なんだから、着替えにそんな時間はかからないんだぞ。
暮葉はプール好きっぽいし、小坂や伊吹も何気に好きそうだ。
大吾も泳ぐの結構好きらしくて、重原や三馬鹿は女の子目当てで。
まあ……女の子目当てって所なら俺も同意できるぞ。
だけどなぁ、プールの授業自体は心の底から嫌だぜ。

だって俺、水恐怖症な上に泳げないから……ッ！

第９１話，プールって嬉しいイベント！……のハズ（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

小坂「ねぇ、誰が一番女装似合うと思う？」

暮葉「もきゅ？　大林さんは小柄ですからいいと思いますよ？」

伊吹「ダメダメ、大林は顔がいかにもスポーツ少年よ」

生駒「クソ介とか案外似合うかもしれないよ？」

明智「ふ、藤島は男前だからダメだ……っ！」

あかり「変態兄貴は女装させたくない……キモイから！」

ミネット「はいはいはい！　悠は絶対女装似合うと思うよ！」

暮葉「悠って早川悠ですか……？　確かに中性的ですよねあの人！」

明智「案外本当に女の子に見えるかもしれないぞっ」

葵「なるほど、鈴〇百合子ってわけだね！」

圭介「お前ら人様で気持ち悪い想像してんじゃねえ！」

悠「チッ……誰が女装似合うって？　アァ！？」

第９２話，プールなんて嫌だ……と思っていたら！

突然だけど、俺は水恐怖症なんです……ハイ。
いや、なんでって言われても怖いもんは仕方ないじゃん。
別に洗顔とかは平気なんだが、何故かプールや海に入るのに抵抗があるんだよなぁ。
こうなっちまったのにも理由があるが、話すと長くなるので手短にまとめめよう。
あれは俺はまだ８歳だった頃――――

――けいすけっ！　けいすけっ！

――あ、ぷぁ！　た、たす――けてっ！

あの時俺は伊吹とプールで遊んでいたのだが、俺は溺れていた５歳くらいの女の子を目撃。
そのまま助けようとしたんだが、しがみつかれたまま泳げず、結局俺まで溺れてしまった。
しかも、助けた女の子に足蹴りされてしまい、俺はどうする事も出来ずに水中へ落ちる。
５歳の女の子に悪気なんてない。怖くて暴れたという幼稚園児ならよくある行動だ。
だか、８歳だった俺はそれにやられてしまい、水中で次第に意識を失っていった。
結局５歳の女の子は親に助けられ、俺も伊吹に助けられたのだが……。
何故だかその一件以降、俺はプールとか海とか……とにかく、泳げるくらい溜まった水が怖くて仕方なくなってしまった。
見る分には何の問題もないんだが、入るのは絶対に嫌だ。

「つーか、この歳になっても怖いって……水恐怖症だってバレたら笑いモンだぞ？」

みんなより後に登場した俺は、ぶつくさ呟きながらプールサイドを歩く。

既にみんな着替えて集まっている。プールサイドで談笑をしている者が多い。

んで、俺は一人憂鬱な気分で……。

「あっ、クソ介じゃん」

「――――はい？」

「藤島、こんなところで何やってるんだ？」

なんだぁ、この声は明智と生駒かぁ。

明智はいいけど生駒は苦手なんだよなぁ。

まあスルーすると明智にも悪いし、とりあえずここは振り向いて――

「ぶ、はぁ――――！？」

「うげっ！　クソ介が鼻血噴いた……っ」

「ど、どうした大丈夫なのか！？」

心配して迫ってくる明智……アカン、近づかれるとまずいぞっ。

しかも女の子の前で鼻血って、これじゃまるっきり変態じゃねえか。

とにかく……今からでもコイツらから離れて誤魔化さないと。

「ス、スマン……さっきチョコ食い過ぎたんだ」

「どうだか？　どーせクソ介はナギちゃんの水着姿に興奮しただけだよ。下心丸見えだっつーの」

「すみにゃん藤島を信じてあげよろよ。藤島、チョコは程々にするんだぞ？」

「お、おう。心がけとくよ……っ」

言えねえ……今更生駒のツッコミが事実だって絶対に言えねえ。
そうですよ。どーせ俺は明智のスク水姿に興奮したんですよ。
だって巨乳にスク水だぞ。貧乳スク水ならなんとも思わんが……正直、破壊力強すぎるっす。
反則だろ……その二つの吉備団子は……ッ！
ちくしょう誰だよ水泳の授業を男女混合にしやがったヤツは。
しかもいくら伝統ある高校だからって、なんで今時旧型スク水なんだよ。
このままじゃ……俺が出血多量で死んでしまうじゃねえかよ！

「そろそろ整列の時間だ。藤島は鼻血出てるから無理はするなよ」

「えっ？　アッハハハ、鼻血くらいどうってことねえ！」

「プールを鼻血で汚すなよ。クソエロ介」

「俺はクソエロじゃなくて紳士だ！」

ふぅ……やっとあの二人が立ち去ってくれた。

明智は破壊力強すぎる。巨乳だけにやっぱり谷間がすげえもんだ。
しかも生駒のスタイルも何気によかったし、胸は明智ほどじゃないが美しい気がしたよ。
やっぱスク水はラインがモロに出るからな。
つるぺったんなロリよりも、ある程度成長した娘が着るのが一番ヤバいぜ……。
クソッ、水恐怖症だってバレる前に貧血で倒れそうだ。

……もちろん、４組に整列しても地獄は続いた。
当然俺ら男子の視線は女子なんだか、その女子のスク水姿がまたなんとも。
特に我が４組のミス・おっぱい、小坂亜紀ちゃんなんて……。

「ぶ、がはぁ――――！」

「む、ムッツリーニ圭介！　大丈夫か、しっかりしろぉぉぉぉぉっ！」

「忘れていたよ。圭介って画像なら二次でも三次でも平気だけど、実際に見ると一番初心だった」

や、やべえ……明智とどっちが大きいんだろう。
小坂のスク水姿もヤバすぎる……ああ、貧血で死にそう。
しかも小坂だけじゃない。伊吹の起伏の少ない身体も中々抱き心地が良さそうだ。
暮葉のぺったんこボディーも捨てがたい……スク水って誰でも似合うから困る。
特にぺったんこな暮葉ややロリ体型な伊吹はお似合い。
生駒だってスタイルいいし……でも、スタイル抜群の小坂と明智は

４６ｃｍ砲以上の威力だ！

「もきゅ？　けーすけ様……鼻血噴いてません？」

「暮葉は知らないかもだけど、圭くんって意外と初心なんだよねぇ」

「普段一番変態な癖に、なんでなのかしらね？」

仕方ねえだろ、水着って全裸よりもエロく感じるんだから！

俺はな、別に全裸なら辛うじて耐えられるんだ。

暮葉と一緒に入った時だって耐えられたし、葵のだって事故で何度か見た事あるからな。

あとパンチラを見たって、そりゃ嬉しいし興奮はするが鼻血は噴かない。

けど……水着や裸ワイシャツ、裸でもニーソとか穿いていたらもうダメだ。

全裸はエロいけとどエロくない、興奮するけど鼻血を吹くほどではない。

やっぱ女の子は着エロでしょ。そして俺は――実際に見る着エロに滅茶苦茶弱いんだ！

「う、ぐ……油断した。着エロフェチの俺には厳しいぜ……プールって場所は！」

「おお！　僕らの性戦士圭介が復活したぞ……っ！」

「立派だよ、よく復活したね！」

「僕には理解できないが、よくぞ死の淵から蘇った！」

「ふ、はははっ！　俺のド根性をナメてんじゃねえぞ！」

あの世に行きかけたがなんとか復活を遂げた俺。
そんな俺を褒め称える大吾と重原は笑顔で泣いていた。
だけどいつ倒れる事か……こうして鼻血を押さえるので精いっぱいだぜ。
水は怖いし女子の水着姿で貧血になりそうだし。
女子の水着だけは嬉しいが、ああ……早くプールの授業終わらないかな。

……案の定、プールの授業というのは名ばかりだった。
体育教師の紅瀬（くぜ）先生は基本遊び人で、教師の癖に髪が金髪で……。
俺ら生徒の間では彼を“ヤンキー紅瀬”と呼んでいたりする。
人柄はもちろん見た目通り軽く、今日の授業だって――――

『そんじゃまあ！　今日は自由でいいや、つか面倒だしモ前ら高校生だから毎回自由でよくね？』

と、いうわけで授業は完全に自由時間、つまり俺らの遊び時間になってしまった。
まあ……自由だからこそ泳ぐ必要もないし、俺にとっては都合がいいけどさ。

「きゃ～！　重原くんすっごい筋肉！」

「ははははっ、一応毎日鍛えているからっ」

「ねぇねぇちょっとだけ触らせて！」

「いいよ」

「あーたーしーもぉーっ！」

「はいはい順番だからねー」

ちっくしょう重原の野郎筋肉でモテやがって。
普段の爽やかキャラ＋健康的で強そうな筋肉。
ツラだってむしろいい方だ。まったく……モテ男ってクソムカつくぜ。

「ダァーッハハハ！　喰らえ、ウォーターパラダイスゥゥッ！」

「黒やん過激やぁぁっ！」

「うおおお、右手が……右手が真っ赤に燃えるっ！」

「喰らえ三馬鹿！　僕の唯ちゃんへの愛を込めた……ハイドロ唯ちゃんカノォォォォン！」

大吾は三馬鹿に混じって馬鹿な水遊びをやっているし。

「うひひひっ。ナ～ギちゃんここがええんかぁ～？」

「ん、ひゃ、ぁ……だめっ、すみ、にゃん……っ」

生駒のヤツなに明智のおっぱいマミマミ……いや、モミモミしてるんだよ。
これもう下手すりゃ１８禁のアウトだろ。
あの二人が不純異性交遊で停学になりませんように……。

「伊吹ーパスッ！」

「――ッ！　亜紀っ！」

「あいよっと！」

伊吹と小坂は友達とプールでバレーをやっていた。
なんともまあ微笑ましい光景。伊吹のあの姿は本当に癒されるぜ。
……しかし、さっきも思ったけど本当に自由な授業だな。
これ野原にバレたらヤンキー紅瀬シバかれるんじゃねえか？

「けーすっけ様っ♪」

「うおわぁっ！？」

いきなり後ろから締め技……かと思いきや、ただ暮葉が抱きついてきただけであった。
その……背中に微妙に膨らんでいるものが。
暮葉でも一応あるんだ。つーか小さい割に柔らかい――ってツッコミ所ソコじゃねえ！

「けーすけ様はプール入らないのですかっ？」

「俺は別にいいよ。つーか早く離れて欲しい、じゃねえとみんなが……」

俺は冷や汗を掻きながら辺りを見回す。
野郎共が横目で俺を睨みながら、ヒソヒソと何かを話していやがる。

「藤島の野郎ォ……やっぱ木下と付き合ってんじゃねえのか？」

「マジかよ。アイツ確か国宗と付き合ってるんじゃなかったか？」

「いや、３組の明智と付き合ってるって話もあるぞ」

「ちょっと待て。俺は一年のツインテールの後輩と付き合ってるって聞いたぞ」

「はぁ！？　俺は物静かな1年の子と付き合ってるって聞いたんだけど」

「待てよお前ら。藤島って妹に手ぇ出したんじゃなかったっけか？」

犬もキュイ～ンと鳴きながら逃げるくらいの殺意が、俺に向けられている気がしてならない。

いや、絶対に向けられている。

今俺が暮葉と下手な事をすれば、確実にモテない野郎共に殺されてしまう。

ってか、俺もモテない男子の一人のハズなのに、なんで俺が野郎共に妬まれているんだよ。

そして、なんで暮葉相手にこんなハッピーなイベントが起こってんだ？

こんなに嬉しいフラグを建てた覚えは皆無なんだが……。

「も、申し訳ありませんけーすけ様っ！」

咄嗟に離れた暮葉は本気で頭を下げてきた。

角度は斜め４５度……コイツ、一番丁寧なお辞儀をしてきやがった。

「何もそこまで謝らなくても……」

「でもでも、拙者のせいでけーすけ様が恨まれている気が――――」

「大丈夫。重原は俺以上に妬まれているし、誤解は多分すぐに解けると思うから」

そう……最近まで女子のメアドが数えるほどしかなかった俺。
いや、今も数えるほどしかないが、今年の春頃と比べれば大分マシだ。
だが女友達が増えたからと言って、別に彼女が出来る気配はない。
結局俺は非モテ野郎だし、彼女なんて生まれてから一度もいないから妬まれる要素ナシ。
今回は単なる誤解である……。
まあ、青山さんには告白されたけど、何故だか恋愛感情が沸かなかったし……。
俺、ホントに彼女が欲しいと思っているんだろうか？
それは思っているはずだけど、じゃあなんで青山さんを好きになれなかったんだろうか。
やっぱ、俺って気付いていないだけで好きな人がいるんじゃ……いや、流石にねえよな。

「……あの、けーすけ様……っ」

「……え？」

「だ、大丈夫ですか？　今朝からぼけーっとしてますし、鼻血も沢山噴いてました。あと……今だって表情が冴えないのですよ？」

まずい。

あまりにもボケっとしていたせいで暮葉に心配をかけている。

「ゴメン、俺は大丈夫だから暮葉は遊んでおいで」

「もきゅ、やっぱり変なのです！　遊び好きなけーすけ様が遊ばないだなんて！」

仕方ないだろ水恐怖症なんだから。

……なんて、こんな小さな女の子に言えるハズがねえよな。

やっぱり体調不良って事で誤魔化そうかな。

でも暮葉は心配性だから……困った、このピンチをどう切り抜ければいいんだ。

「別にいいだろ。泳ぎたい気分じゃねえんだよ」

とりあえず不機嫌そうにそうは言ってみた、だが。

「ウソはやめてください」

「う、ウソ？」

「けーすけ様は隠しごとが下手糞です。今の言葉なんて嘘丸出しでしたよ？」

「……」

いつもと違って真剣みを帯びた暮葉のマジな言葉。

弱ったなぁ……完全に俺の嘘がバレている。

ここでまだ嘘をつくようなら完全に暮葉の信頼を裏切っちまうし、

事実を言うべきなんだろうか？

……でも嫌だなぁ、絶対馬鹿にされるじゃん……暮葉にだってあんなヘタレな事言いたくねえよ。

「あの……本当のことを言ってください……っ」

「……っ」

「けーすけ様。どんな理由でも拙者は絶対に笑いません。けーすけ様のことを小馬鹿にしたりなんかしません。ですから拙者に打ち明けて欲しいのです。トモダチの拙者に……っ」

暮葉は俺の前に座り込んで顔のみを近づけ、至近距離から俺を潤った瞳で見つめてくる。

ちょっと動けば額や鼻、そして唇が触れ合ってしまいそうな……それほど近い距離。

彼女の生温かい息が顔にかかる。やべえぞ……これ、マジでカップルだって誤解されちまう。

だが、ヤバい状況なのに何故か嫌な気がしなかった。

太鼓を叩くような心臓の鼓動が早く、激しくなってゆく。

頬までかぁっと熱くなる……きっと俺の頬は紅く染まっているに違いない。

困った。嫌じゃないけど不思議な気分で……その上暮葉に迫られていて……っ。

でも、暮葉に引く気はなさそうだし。それに暮葉は無意識に顔を近付いているっぽいし……。

……ああもうわかったよ。馬鹿にされる覚悟で言ってやりますよ。

「……俺、水恐怖症なんだよ……っ」

「もきゅ？　水恐怖症……ですか？」

それを言うとようやく暮葉が離れてくれた。
よかった……でも暮葉との距離が近いのは相変わらず。
向かい合う俺達との距離は１ｍもなかった。というか暮葉の綺麗な太股が俺の足に当たっている。
ちくしょう、何故だか鼓動が全く落ちつかねえ……っ。
……ってくだらねえ事考えてねえで、暮葉に事情を説明しろよ――俺！

「その……アレだ。水道水とか洗顔とか、そういうのは平気なんだけど……海とかプールとかとにかく泳げる深さと量がある水がダメで……」

「けーすけ様……それでさっきから……っ」

「おかしいだろ？　トラックに轢かれるのは平気なのにさ、たかが過去に溺れただけで水が怖くなっちまうなんて。笑えよ暮葉……」

俺はヤケクソ気味に、自分を嘲笑うように言い放った。
こんなヘタレのクソ野郎は笑われて当然だ。
むしろ笑われない方がおかしいんだ。
――だが。

「笑えないですよ！」

暮葉は俺みたいなヤツの為に怒鳴ってきた――

「くれ、は？」

「ふざけるのもいい加減にしてください！　誰にだって欠点はある

のですよ……？」

「そりゃあそうかもしれねえけど……」

「それで苦しんでいる人だっているのです、今のけーすけ様のように」

暮葉が俺の肩を掴んで熱血教師のように訴えてくる。
なんてこったい……俺が暮葉に負けてるぜ。
でも――もしかするとこれでいいのかもしれない。

「だから拙者はけーすけ様の欠点を笑えません。ネタにして馬鹿にすることもできません」

「暮葉……」

早川悠と戦って後には俺が暮葉を慰めた。
そこで俺と暮葉は友達になった――でも今は逆である。
俺が暮葉に怒られ慰められている。
友達とは対等なモノ――そう、つまりこういうことなのだ。

「あ……っ、も、申し訳ございません……」

俺を怒鳴った事に対する謝罪であろうか。
何かに気付いた暮葉は急に頭を下げてきた。

「気にするな、悪いのはどう考えても俺なんだから」

「けーすけ様……あっ、そうだ！」

暮葉は何かいい事でも思いついたのか、表情を明るくしてポンっと手を叩いた。

「どうしたんだよ」

「今は恥ずかしいでしょうから……放課後、一緒にここで泳ぎましょう！」

「えっ……な、なんで！？」

アメリカ軍に特攻するゼロ戦の如く、暮葉はぶっ飛んだことを提案し、それを俺にぶつけてきた。
放課後二人きりで泳ぐって……ちょ、待て。これなんてエロゲー？

「水恐怖症、嫌で嫌で悩んでいるのですよね？」

「ま、まあそりゃあ……治るものなら治したいけど」

水恐怖症のままだったらイザ海に行った時、俺だけ泳げず女子に引かれる悲しい自体に。
もし間違って海上自衛隊にでも入って、万が一戦争になって護衛艦が撃沈されたら一人だけ泳げず、というか海が怖くて飛びだせず、艦と運命を共にするという昔の提督みたいな事に。
そして何より……将来もし子供が出来たらヤバい、子供にナメられてしまう。
絶対に嫌だ……そんな絶望しかない未来なんて嫌だ。

「でしたら今日から拙者と特訓なのです。けーすけ様、夏という絶好の機会に水に慣れましょうっ」

暮葉も乗り気だし、この笑顔をぶち壊したくはない。
何より男としてこんな恐怖症……さっさと治してしまいたい。

「よろしく頼むな、暮葉」

「お任せなのです！」

――――こうして、俺と暮葉は放課後に特訓する事を約束した。

「――ばか圭介……っ！」

第９２話，プールなんて嫌だ……と思っていたら！　（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

大吾「プールで生駒で思い出した。神〇みに生駒みなみって子いたよね？」

圭介「あ？　そういえばいたような……それがどうしたんだ？」

大吾「あの子可愛くないか！？」

圭介「いきなりどうしたんだよ、また二次元キャラに惚れたのか？」

大吾「フフフ……あれこそ水泳部って感じでイイよね！　僕はもう一瞬で惚れたよ！」

圭介「唯に惚れて撫子に惚れて……お前って結構浮気性だよな」

大吾「じゃあ圭介の好きな子は？」

圭介「アズにゃん歩美希メイ子ハルナ打ち止めマサムネ秀吉黒猫（ｒｙ」

大吾「好きな子のうち４人が同じ声優って……竹〇病乙、つーか圭介ロリコン気味だろ……」

重原「あれ、一人だけ男の娘じゃない？」

※圭介の好きな子は２０人はいます（※ただし二次元に限る）。

番外話，超能力が使えちゃう場合

超能力――――今日の科学では合理的に説明できない、超自然な能力を指すための名称。
でも、それは一般レベルの話でしかない。
どういう事かと言うと、実は超能力者は実在するという事。
世間で認められないからその存在は影のものになっているだけ。
超能力者の中には自然に発現した人もいれば、私のように東京の人工浮島にある私立佐井学園に通う事によって、能力を発現させた超能力者だっているわ……。

――――これは、ようやく春本番と言う3月ごろのお話よ……。

「へぇ、君可愛いね？」

「綺麗な黒髪じゃん、俺こういう長い髪の女の子好みだわぁ」

「マジかよ～、でも胸小さくね？　お前ロリコンかよ！」

「うっせ黙れ！　幼さがちっと残ってるけどよぉ、見た目と逆に大人しそうなのがいいんだろ？」

私の名前は西園寺雪乃（さいおんじゆきの）、私立佐井学園2年……これでも超能力者。
佐井学園は全寮制なので、許可を得ないと外出が出来ないという面倒くさい規則がある。
増してや私達、超能力者は外での能力使用は基本禁止だから。

外出許可を得るのは結構難しい事なのよ。
でも、私はなんとか学園から外出許可をもらい、私は東京の街を一人ふらつき遊んでいた。
そしたら……変な奴らに絡まれてしまった。

「へぇ～赤い瞳、すっげえ珍しいかも」

「緑っぽい制服ってのも珍しいなぁ、もしかして最近出来た佐井学園って進学校のお嬢様？」

「ねえねえ！　俺ら暇なんだけどさぁ、これから遊びに行かねえ？」

馬鹿馬鹿しい誘いをしてくる男３人。
正直、嬉しい気持ちよりも不快感しかしないわ。
別に顔がいいと悪いとかそういう問題ではない。
ただ……私は単純にこういうのが嫌いなだけ。

「丁重にお断りさせていただきます……貴方達と遊んでいるほど暇じゃないわ」

「あぁ？」

「なんだよコイツ……お高く留まりやがって」

はぁ……こんな奴ら、恐怖も何も感じないわね。
ただ、あまりに頭が悪過ぎる上に、相手の実力も見抜けないだなんて……。
正直、ただのおバカさんにしか見えないわ。

「おい、こいつヤッちまおうぜ？」

「そうだなぁ……まあたまにはガキ臭い女も悪くねえな！」

「……ふふ、おバカさん」

私は不良達を嘲笑った。

だって彼らはホントにおバカさんだから……私の実力を全く見抜けなかったんだから。

襲ってくるなら仕方がないよね。少しくらい能力を使ったって文句を言われる筋合いはない……。

――――数十分後。

私は佐井学園開発科の寮、自分の部屋へと戻り自分のベッドに転がっていた。

佐井学園開発科とは、表向きは技術開発分野を専攻するものだけど……。

実際は私達のような超能力者を育成する、そんな怪しげなものだわ。

私も最初は知らないで入って……いつのまに超能力者になってしまった感じだわ。

ところで、さっきの不良達はどうしたのって？

そんなの、能力で氷漬けにしたに決まっているわ。

私の吹雪念力（ブリザードサイコ）は僅かでも水分さえあれば、瞬間的にに冷やす事によって氷などを発生させられる。吹雪だろうが氷の塊だろうが、私にかかればそれくらい作るのは余裕。

そして作った氷は雪は念力によって勢いよく飛ばす。もちろん氷以外のものも念力で動かせる。

そういうわけで私は、そこらの不良には絶対に負けない力を持っているわ。

「あ、雪乃ぉ～おかえりっ」

「ふふ、ただいま」

寮の私の部屋に戻ると、早速ルームメイトの木山朱実（きやまあけみ）が歓迎してくれた。

朱実は私のクラスメイトであり、同時にルームメイトで幼馴染のとっても元気な子。

簡単に言えば、私は朱実と一緒に学園に騙されたってわけ。

「もぉ～こんな時間までどこほっつき歩いてたの？　もしかしてまた秋葉原？」

「御名答。今日は沢山同人誌を仕入れてきたわ」

「うわぁ～すごい量……あんたのオタク趣味も相変わらずね」

「ふふふ、私にとってその言葉は褒め言葉よ」

「まぁあたしは別にいいんだけどね、一応雪乃は学園で五本指に入る超能力者だぞ？　雪乃の趣味を知ったらみんなどう思うかな～」

「さあ？　でも私はこの趣味を捨てるつもりはないわよ」

理由は分からないけど、私は二次元がとっても大好きだわ。

むしろ現実（リアル）がクソに思えるくらいにね。

だから、誰が何と言おうと私はこの趣味を捨てるつもりはないわよ。

「あっははは。あ、そうそう雪乃、学園長がなんか雪乃に用事あ

るらしいよ？」

「学園長が私に？　珍しいわね、普段は早川と久我って人以外とは接触しない頑固親父が」

「早川と久我ってアレ？　学園で一位二位を争う超能力者で、確かライバル同士だっけ？」

早川は風系の超能力者で……一度だけ会ったけど冷めた人だったわ。まるで全てを捨ててしまったかのように……。
対する久我はクールだけど不良みたいな感じ。
……まあ、二人とも普通の人ではなかった気がするわ。

「あの親父の事だからロクな用事じゃないとは思うけど、とりあえず行ってくるわね」

「おっけ～気を付けてね雪乃っ」

「ふふっ、生きては帰ってくるわよ」

そんなセリフを残して私は部屋を出る。
ふふっ、一見戦場に行くようなセリフだけど、別にそういうわけでもない。
そもそも学園長は生徒が大事で仕方がないハズ。
だから、死ぬような事は普通はありえないハズよ。
……ただ、一部の生徒に汚れ仕事をさせているって噂はあるけど。

「失礼します」

薄暗い西洋風の広間、その中央に佇む背の低いバーコード頭の男。
ワインのように紅いスーツに、金ぴかの腕時計。
成金のようなその男は不敵な笑みを浮かべ、ゆっくりと振り向いてきた。

「君が五本指の一人、西園寺雪乃君だね？」

「はい……あの、学園長。私に何か用でございますか？」

「うむ。彼だけでは厳しいだろうからな。実力の高い君にも是非手伝って欲しい事がある」

「私に……ですか？」

学園長はゆっくりとその足を動かし、少しずつ私に近寄ってくる。
煙草臭いわね……出来ればその銜え煙草はやめて欲しいわ。
でも、生徒が教師にモノ申すなど反逆に近い。
増してや相手は学園長。そんな小さなことで注意など私には出来なかった。
弱気な私に近付いてきた強気な学園長は、私に一言。

「……お前に人殺しをしてほしい」

「……ッ、どういう意味でしょうか……？」

「言葉のままだ。これは極秘情報なのだが、最近どうも無国籍者が国内で暴れているらしい」

「無国籍者……ですか？」

「そうだよ君。存在が許されない無国籍者だよ。その無国籍者は無国籍者同士で争っており、至る所で何らかの能力を使った痕跡を我が学園は発見したんだ。無国籍者の2グループが争う事自体には問題はないが、そいつらは超能力か何かは知らんが何らかの能力を使う連中だ。このまま野放しにしていたらいずれ我々も危険かもしれん。将来の事を考えての、身の安全の為の極秘作戦だ……どうだね西園寺君？」

ちょっと待って、これってどういう事なのよ。
普通学園長が生徒にこんな話をする？
ここは現実（リアル）よ。やっぱりこの学園は何かが狂ってるわ……っ。

「……申し訳ございません。そんなトチ狂った作戦には参加したくありません」

相手が善か悪かもわからないのに……増してや人殺し？
そんなの、自分が死んだってやりたくないわよ。
やっぱりこの学園は——狂っているわね。

「……そうか、下がってよいぞ。ただし……この事は秘密でありもし暴露した場合は……君に特別指導が待ち受けているからな」

「……わかりました、失礼しました」

背を向けて早歩きで逃げるように部屋から出る。
一応、学園長相手にお辞儀はしたけど、正直そんなことなんてしたくなかった。
私は今あの学園長に対し、猛烈に不信感を抱いている。
あの人の考えている事がわからない。あの人のやりたい事がわから

ない。
どうして善悪も決まっていないのに、増してや無国籍者だって証拠も怪しいのに。
どうして学園長は人殺しを……よりによって立派な犯罪を生徒に犯させようと……？

「はぁ……っ」

思い返せば学園に入って以来、ロクな事がなかったわ。
学園に騙されて超能力を発現させられて……まあ、そのおかげで不良にはアッサリ勝てるけど。
それでも常人とは違う人になるよう、脳を散々いじくられてしまい、挙句の果てには学園長からの殺人命令……狂っている。この学園は何もかもが狂っている。
……いいんだろうか。立派な教育機関がこんなんで、ホントに正しいことなのかしら？

「……正しいわけないわよね……っ」

このままじゃいけない……絶対にいけない。
生徒がいつ学園長の無理な頼みごとに巻き込まれるか。
いつ生徒が何かの騒動に巻き込まれてしまうか。
そのような状況に置かれている学園なんて、絶対におかしわよ。
みんなが騒がないのは知らないから。でも私は違う……知ってしまった。
知りたくもなかった事実を知ってしまった。
そして、知ったからにはもう黙ってはいられない……っ。
私の中の何かが真実を闇に埋めてはいけないって、私自身に強く訴えかけている。

「……そうよ。特別指導なんかで震えている場合じゃないわ……っ、私は五本指の一人よ？」

その気になれば軍隊だって相手にできるのよ。

そんなすごい能力の持ち主が、内容が不明な特別指導が怖いからって真実を見過ごす？

できるわけがないわ。そうやって……今まで情報が隠蔽されてきたんじゃないの。

だから――変えてみせるわ。この学園そのものを……この超能力（チカラ）を使って……っ！

「ふふ、やってやるですっ」

っと、私は気合いを入れる為にアズにゃん風にそう言ってみる。

そして衝動的にくるっと振り向き、私はある場所へと向かった。

……場所は変わって学園の東側、実を言うと学園の東側には出入り口がない。

実際にはある事にはあるのだが、警備員らしき人達によるお堅い警備のおかげで侵入不能。

だから私は裏ルートからの侵入を試み、それは見事に成功した。

その裏ルートとは天井裏のダクト。ふふっ、ここから潜入する人はラノベの武偵くらいだろうね。

「よっと」

通気口から抜けだし無事に着地を果たす。

今度から通気口付近も警備することね。

超能力を使うに当たって最も重要なのは頭脳だから、レベルの高い超能力者は基本頭がいいのよ。
私でさえ、校舎東側への侵入方法をパッと思い浮かべれたのだから。
まあそもそも、頭の固い大人達には無理な発想なのかしらね。

「さ、てと……お仕事開始よ」

こうみえても東側に侵入したのには理由がある。
だって生徒はおろか教師さえ一部を除き、侵入が認められない未知のエリアよ。
普通に考えれば秘密はここにあるわ。きっと、何かの機密文書くらいはあるハズよ。
それさえ盗めば学園長が何をしようとしているか、その為には何が行われるのか、闇に包まれ隠された真実を暴く事ができる――

「止まりなクソアマ」

「……ッ」

しまった、あまりにものんびりしすぎたのかな。
私は見張りの者に見つかってしまったらしい。
仕方がない、一瞬で倒して情報が伝わる前に先に進もう。
私は後ろを向き、超能力を使うために身構える――が。

「久しぶりだな。テメェは確か……西園寺雪乃ってヤツだったか？」

「久我劉生（くがりゅうせい）……ッ」

背が高く、整った顔立ちでくすんだ金髪の男。
まさしく早川悠のライバル――久我劉生その人であった。

「ここは立ち入り禁止だ。テメェは一体ここで何をしていやがる」

「それはこっちのセリフよ……貴方こそ立ち入り禁止区域で何をしているのかしら？」

「逆に質問して自分は答えない魂胆か。まあいい、俺は学園に頼まれてここの警備をしているだけだ。クソが……特異点潰しを俺にやらしてくれたらよかったのによ。こっちはアイツの影に隠れて地味な警備だぞ」

久我は不満そうにブツブツと文句を言うが、その中に気になる言葉がいくつか含まれていた。

学園に頼まれたって、今日の私みたいな感じかしら？

それと……特異点潰しって一体……？

聞いた事のない単語に深まる謎……直接聞いた方が早いかしら。

「久我、特異点って一体なんなのかしら？」

「テメェ関係はないだろ。知った瞬間テメェはカタギじゃなくなるしな……」

「カタギ……？　もしかして、特異点潰しは人殺しかしら？」

「ハァ……？　あ～あ～カタギは見逃そうと思ったけど、どうやらテメェ……それを知っていてここに侵入したみてえだな？」

知っていて――――？

それって、まさか本当に特異点潰しは人殺しなの？

しかもまぐれで特異点潰しの中身を当てた瞬間、久我の目付きが９

0度ほど変わってしまった。
獲物を狙う肉食獣の目、徹底的に殺すと言わんばかりの殺意。
まずいわね……このままじゃ私は食われる豚だわ。

「カタギには手を出さない……相変わらず硬派なのね」

「関係ねえ奴は関係ねえ……区別はしっかりしているつもりだ」

「貴方のその硬派なキャラ、漫画のキャラなら好きになってたわよ？」

「お生憎様ここは現実（リアル）だ……」

「残念ね……五本指同士、出来れば戦いたくはなかったのに……っ」

本当に出来る事なら戦いたくはない。
何故なら久我は最強と言われる早川と張り合う男。
つまり――学園で一位二位を争う強さとチートな能力を振るう男よ。
私も同じ五本指とは言え、彼との直接対決で勝てる自身はないわ。
本当……出来る事なら戦いたくなかったわ、でも……。

「さてと、お片付けの仕事開始だ……」

久我は不気味なくらいゆっくりと、細いが若干筋肉質な腕を横に大きく広げた。
そして――目が前髪で隠れ、口元が不気味に笑うと。

「テメェは殺し確定だな」

そう告げた。

「――――ッ！」

刹那、突然身体が重く、全くと言っていいほどに身動きが取れなくなる。

全身に満遍なく重りを乗っけられたような感覚。

いや、自分自身が重くなったような感覚かもしれない。

私は潰されるような重みに耐えられず、思わず膝を綺麗に布かれた絨毯についてしまった。

私は久我が使う超能力を知っている。だから、久我が何をやらかしたのかもすぐにわかった。

「じゅ、じゅう……りょく……っ？」

「知ってたか。確かにテメェの所だけ重力を１０倍に設定してやった」

「……波動操作（ウェーブハウンド）っ」

波動操作（ウェーブハウンド）。久我が持つ超能力。

この世に存在するあらゆる“波”の振動数、周期、振幅、波長、波数を自在に操る。

他の能力の代用的な技も使えて応用力は極めて高く、使い方次第では破壊力も抜群。

「動けねえだろ……？　なら、次はコイツだな……」

あまりにもチートすぎる能力の持ち主、久我の次なる攻撃とは何かしら。

答えは今すぐ私に放たれようとしている。

突然、久我の掌から光り輝く光線が放たれる。
今の私は１０倍の重力に耐えるので限界。あの光線を避ける事なんて不可能だわ。
でも、氷の装甲を作りだす事なら辛うじて。
精神を集中させて複雑怪奇な計算を瞬時に行う。同時に己の幻想を思い浮かべる。
――――すると、ごく僅かな水分をかき集める事に成功し、私の前に強固な氷の装甲が完成した。

「……ッ……ッ……ッッ！」

装甲と言っても所詮は氷。瞬時に粉々に破壊されてしまったが、光線から身を守る事には成功した。
久我め……相手を見下して本気を出していないわね。
本気でやればあんな装甲、砕かず貫通して私の胸さえも貫いたハズよ。

「手を抜いたわね……っ？」

「小手調べだ。テメェがどの程度の使い手だかな」

「それで、私の力はどうなのよ……？」

「……同じ五本指にしては大した事ねえな」

「ふざけた事言ってくれるわね……私は動けなくても貴方を攻撃できるのよ？」

あまりの重力に身動きを取る事ができない、全身に激痛を感じる。
それでも単純な演算なら余裕のよっちゃんだわ。

ニヤニヤと笑いを浮かべながら私は、水分を集めて４本の大きな氷柱を生成する。
先端が刀のように鋭利な氷柱を、今度は念力で砲弾のように動かして見せる。
氷柱も粉々になるが、恐らく戦車の装甲さえも貫く威力のハズ――しかし。

「全く――面白い技を使ってくれるな――」

一言呟く時間。
そんな時間なんてなかったハズ。氷柱は喋り出す寸前に久我に突き刺さっていたハズ。
でも、あの氷柱が身体に突き刺さる事はなかった。
氷柱はなんと久我の手前で水となり、細かい飛沫だけが久我に噴きつけていた。
ただそれだけ……全くの無傷で北叟笑む久我の姿が私の目に映った。

「そん、な――」

「驚くなよ。俺は物質を別モンに変えただけだ」

「……超弦理論ね……ッ」

「よく御存知だな。素粒子レベルの波として変換し、不思議じゃねえけど別の物質に変化させる」

説明しながら久我はゆっくりと近づき、いや……いつの間にか私の目の前に立っていた。
しゃがんだまま動けない私を見下ろし、相変わらず北叟笑む久我。
なによ……その人を嘲笑う目は？

「重力、解除」

「……ッ！」

何故か久我は重力を元に戻す。おかげで身体が身軽になった。
身体に痛みが残る一方で、解放感が私の身体を支配する。
久我が重力を１Ｇに戻し、元気に動ける今のうちに攻撃をしようとした。

「――――いぎゃ、あッ！」

刹那、革靴の先端が私の顎に突き刺さる。
久我の足蹴りを受けてしまった私は、成す術もなく後方へ吹き飛ばされる。
その後方にはＴ字路があり、私は背中をその先の壁へ強く叩きつけてしまった。

「ぐ、ぎゃ、ぁ――――ッ！」

「重力を元に戻したのは動く為だ。俺も１０倍の重力じゃ満足に動けねえ……」

説明しながら嫌らしく歩み寄ってくる。
敵が近付くにつれて心拍数が上がってゆく。
あまりにも強すぎて……久我が怖い……。

「しかし学園も難しい注文をしてきやがる。校舎を破壊せずに能力を使いやがれとは……あの暴風野郎には無理な話だな。だからこの俺を警備員に選んだわけか」

しかも久我は本気を出していない。屋内だから本気を出せな――待て、考えなさいよ私。
屋内だから本気を出せない。という事は……久我は真の力を発揮できない。
……理解出来たわ。この状況だからこそできる、久我への必勝方法――

「さてと。さっさとクソアマを愉快な死体に仕上げてやるか」

能力を使えば校舎が傷つく。
そんな判断からか、久我は慣れた手つきで拳銃を構え――

「――させると思うかしら!?」

私は久我が拳銃を構える僅かな隙を突き、一瞬のうちに銃を持つ右手を握る。
しかしそれだけだと撃たれてしまう。ならどうするか――答えは決まっている。
私は大気中の僅かな水分を瞬間的に冷却。その範囲は私の右手が握っているもののみ。
ただし私は影響を受けないよう、能力を使用した瞬間この手を久我から離した――

「う、ぐぁ――つ、めっ――ッッ!」

「……凍傷になっちゃえば、銃は使えないわよね?」

そして、痛み故に人間は冷静さを失う。
久我も例外ではなかった。

焦って左手を突き出し――光を変換して光線（ビーム）でも放つつもりだったのでしょう。

「遅いわよ――ッ！」

右手に作りだしたバレーボール程の塊。
それをボーリングのボールのように投げつけるが、距離が近いために久我の腹部に命中する。

「――が、はっ！」

減り込む氷の塊の弾を受け、久我は大きく開けた口から鮮血を吐きだす。
密度の高い白色の塊が、久我の血で紅く血みどろに染まってゆく。
でも、この程度じゃ久我はまた動きだす。だから――

「吹き飛びなさい――久我劉生ッ！」

「う、あぁ――――ッ！」

私は念力で塊を動かし、塊に押される久我も一緒に吹き飛ばしてみせた。
吹き飛ばされた久我は５０m程先にあった壁に激突。
丁度、そこは廊下がＬ字型に曲がっている場所だった。
壁への衝突による背中への大打撃、腹部に力強く減り込む氷の塊。
久我は血を吐き、直後に力強く歯を食いしばる。
あの攻撃に耐えた久我は、激痛にムカついてしまったのか。

「痛ってえ……だろォッ！」

「１８インチの雹……二段射撃――――ッ！」

左右両手に作り出した約４６ｃｍの巨大な雹。
ネブラスカ州に降ったものより若干小さいけど、それでも十分巨大な雹を二個念力で飛ばした。
前後に並び、一直線に突き進む雹。先頭を砲弾のように飛ぶ雹は久我の光線で粉々に破壊される。
校舎の破壊を防ぐべく、最低限の威力でしかなかった光線は雹と共に砕け散った。
しかし――私が放った雹は二つ。そのうちの一つは未だ久我へと突き進んでいた。

「な……ッ！　防御と攻撃を同時に――――！？」

「これが私の全力全開――突き進めえええええええッ！」

「格下が……ッ、この屈辱はいつから晴らす――――ッ！」

ドゴン！という衝突音が炸裂する。
衝撃は一瞬、でもその一瞬はあまりにも残酷。
この一撃で、五本指同士の勝負は決した。

夜空は輝いていないけど、その代わり東京の街灯りが綺麗だわ。
私はお台場海浜公園から夜景を眺め、勝利の余韻に浸っていた。
あの後――顎への一撃と激突による背中の痛みが思いの外大きく、結局私は東側校舎から脱出した。
機密文書を盗み出す事に失敗し、結局何の秘密もわからなかったけど……。

でも、私という一人の人間にとっては、とても大きな事をしたような気がする。
だって……勝ったのよ。最強と呼ばれる早川悠と張り合っていた、あの久我劉生に――――

「勝利、ねえ……っ」

いまいち実感がないわ……だって、相手があの久我劉生だもの。
きっと戦場が校舎内で、校舎破壊禁止令があったからこそ、私は久我に勝てたんだと思うわ。
久我の能力は強すぎて、強大な能力を満足に使う事ができなかった。
戦場が狭いから行動範囲が狭かった。
学園による制限と狭い戦場、そして久我の僅かな油断が勝負を決した。

「……」

「……ったく、一人で勝利の余韻に浸ってんじゃねェよ」

声がした。聞いただけで背筋が凍る、冷たく残酷で血に飢えた、狂気に満ちた声が……。

「――――ッ！」

衝動的に振り返る。
月明りと街灯りとが照らす砂浜に一人、白く狂った悪魔のような一人の少年。
狂気に満ちた超能力者――早川悠が不気味に佇んでいる。

「奇跡的に久我のクソ野郎を倒したって聞いてなァ……」

「……だ、だから何。貴方には全く関係のないことでしょう？」

「佐井学園からオレへの御命令。潰して身柄を確保しろってよォ？」

つまり最強の超能力者、早川悠は佐井学園の命令て動いているのね。
だから久我の名前が出てきたのね。
そして、敵意……いや、殺意を私に向けている理由も……っ。

「な、なによ……やるの？　私は貴方のライバルを倒したのよ？」

「なに言ってんだ三下。オマエ……もしかして調子に乗っちゃってるワケェ？」

「乗ってないわ。ただ事実を素直に伝えただけよ……っ」

「オマエ程度が久我に勝てるってのは、１％程度の奇跡が起きたって事だろ？　それによォ……オマエ、まさかオレが久我と互角だって思ってんのか？」

「なによ……違うの？」

「確かにあのクソ野郎とは一度も戦ってねえ。けど、なんでオレが一番なのか知ってるか？」

早川悠が一番でいる理由……そんなの、私が知ってるわけないじゃない。
しかも何様よ。直接戦った事がない癖に、自分のほうが強いって思いこんで。
こういう勝ってる気分だけの人……私、あまり好きじゃない。

早川悠との比較ならまだ久我のほうが好きだわ。

「知らないわ。第一、貴方と久我がどっちが強いのかもね」

「なら、たっぷり愉快に素敵に教えてやんよ……」

つまり……私と一戦交えたいってわけね。

いいわ、やってやるわよ。

久我を倒した勢いで早川も倒してやる。

そうすれば、私は一番最高の超能力者に勝った超能力者として、学園から恐れられる存在になる。

そうなれば警備員は逃げ出すし、強力な人間も戦うのを躊躇するハズよ。

本当にいい機会じゃない……。

「……倒してあげるわ、早川悠……ッ！」

「遊んでやるよ……三下ァ」

早川は確か大気そのものを操る能力者だったはず。

でも、所詮それだけよ。氷の塊を暴風で吹き飛ばす事はできない。

私の念力は暴風程度じゃ無効化できない――――！

「……ぎゃ、は――――！」

「――――ッ！」

信じられない事が発生した。

ざっと直径２５ｃｍはあった塊が、砲弾のように突き刺さる――はずだった。

だけど塊は早川を目前に、瞬間的に蒸発してしまった。
なにが……一体、何がどうなったのよ……。
どうして……なんであんな一瞬で大きな塊が蒸発しちゃったのよ。

「例え念力を使っても、オレの暴風の膜を突破できねえと思うが……今のはサービスだ」

「さ、さーびす……っっ？」

「ホントは気圧操作で押し潰してもよかったんだけどな。愉快なショーを見せつけんのも面倒だし、だから分子運動の操作で我慢っつーわけだァ」

「うそ……っ」

「オマエの氷くらいいくらでも砕ける、蒸発もさせれる。仮にオレに近づけたとしても、オレの周囲に張り巡らした暴風の膜がソイツを弾き返す。吹雪（ブリザード）ってのも無駄だァ……逆に風を吹かしてオマエに吹雪を向けれるんだからよォ？」

「そん、な――――」

全身の震えが止まらない。足が震えて動かない。冷や汗が流れ続ける。
背筋が凍って死後硬直のように硬い。そして……恐怖によって感じる圧迫感。
……違う、何かが違うわ……早川悠と私。根本的な何かが……ッ。

「さってとォ……そろそろおやすみするかァ？」

「いや……っ、た……助けて……っっ」

殺される――瞬間的にそう悟った。

「ふふ、あはは……ふぎゃは、ふはぎゃはは、あはっ、いひゃはっ、ぎゃはははははっ！」

私が最後に聞いたのは――早川悠の正気の沙汰とは思えない笑い声だった。

笑い声が響くと同時に、私は次第に意識を失っていった……。

……

……

……

「……ん、あれ……っ？」

夢……だったのね。

気付けば空き地に放置してある土管の中。そういえば、昨日も一昨日も野宿だったわね。

その度に私、西園寺雪乃は……つい４ヶ月前の出来事を思い出していた。

――あれから私は特別指導を受け、その真っ最中だったけど……耐えられなくて逃げ出してしまった。

ついに一昨日学園を飛び出し、気付けば古宇坂という知らない街に来ていた。

……そういえば、夢で思い出したけど……朱実、元気かな？

今朱実はなにをやっているのかしら。
それと、早川に久我……アイツらも今はなにをしているのかしら？
多分……懲りずに汚れ仕事を続けていると思うけれど。
結局、私があの時決起した意味ってあったのかしら……？
決起の結果は早川に惨敗して、学園にあった私の居場所がなくなってしまっただけ……。

「……はぁ、高校……行こうかな？」

ふとそんな事を思った、佐井学園……上に勝てないなら辞めちゃおう。
反乱を起こした私ならきっと学園も不要と判断し、バッサリと勢いよく捨てるはずよ。
じゃあ、捨てられたら……せめて、普通の女子高生として生きようかしら。

「……決めたわ。もう転校しちゃおう……っ」

番外話，超能力が使えちゃう場合（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

あかり「なんだよ！？　この無駄に長い番外話っ！」

圭介「さあ？　でも後々本編に響くんじゃね？」

あかり「んみゃ、なんで？」

圭介「いや……なんとなく？」

あかり「なんとなくかよ！　そんなはっきりしない圭介はあたい信用しないからなっ！」

圭介「だってわんらないだろ？　某学園都市ラノベが好きな作者がインスパイアしてそれっぽいの書いただけかもしれんし」

あかり「それインスパイアじゃなくてパクリだろ！」

圭介「とにかく……よくわからんっ！」

あかり「だ、だめじゃんっ！」

※特異点潰しの裏側を書きたかったのが本音です。

第９３話，特訓と乱入と夢と

そして約束通り、全ての授業が終わった放課後。
俺と暮葉はマジでプールに来てしまった。
なんてこったい……３~４時間目のプールのせいで水着がびしょびしょだ。
正直着心地は最悪であるが、暮葉曰くプールに入っちゃえば気にならないとのこと。
それにしても、なんだって今日に限って水泳部の練習がないんだか。
おかげで今日の放課後は……超怖い目に遭いそうな気がするぜ。

「さあけーすけ様っ、早速ですけどプールに入ってみるのですっ」

「あの……ちなみに拒否権は？」

「ありません！」

「……ですよねー」

ちくしょう水怖ぇぇぇぇぇっ！
でも暮葉に逆らうとなんか怖いし、晩御飯とか抜かれそうだ。
抜かれたら葵に作ってもらうか、俺が自分で焼きそばを作ればいい話だが……。
今はお金がないし、葵のグロテスクな料理は出来れば食べたくない。

「けーすけ様っ！　水恐怖症克服にはとにかく水に慣れることが大事なのです」

「水になれるねぇ……って、お前まさかいきなり突き落としたりし

ないだろうな？」

「大丈夫なのです！　無理強いたり急に慣れさせようとするのは逆効果だって、同じアルファ隊の水系統魔法が得意な後輩に言われた事があります！」

でもアルファ隊ってただの魔法使い集団だし、信じていいのかそんなこと。

あと、暮葉に後輩なんていたんだ……。

しかも水系統の魔法使いって、俺にとっては恐怖以外の何者でもねえぞ。

「でも、無理強いしない癖に拒否権はないんだな」

「だって慣れなきゃ治らないのですよ？」

「……」

「大丈夫ですよっ、拙者がちゃんと支えてあげますから！」

「お、おう……っ」

このちっこい暮葉が何故だかお姉ちゃんに見えるよ。

それにしても、スク水は身体のラインがよく出る水着だが。

こうして見ているやっぱり暮葉ってぺったんこ――――

「……今、失礼なこと考えましたよね？」

「ソンナコトナイゾ！？」

「なんでカタコトなのですか！？」

「キノセイダ、ツヅケタマエ」

「もきゅ！　やっぱりけーすけ様失敬な事考えてるのです！」

だって仕方ないじゃん男の子なんだから。
そりゃ目の前に水着の女の子がいたら、自然に女の子の事を考えちゃいますよ。
男と言う生物ほど可哀想なものはいないだろう。
目の前に乙女がいればすぐに反応しちまうんだから……フッ、だが逆に考えよう。
女子にだって変態はいる。つまりだ……変態じゃない人間っているのだろうか？

「……あの、今度はなに小難しい事考えてるのですか？」

「気にするな。ちょっと夏休みどうしようかな～って考えてたんだ」

「今夏休みのこと考えるような場面じゃないですよね？」

……ちくしょう、なんて鋭い子なんだ。
暮葉の前じゃ下手な事は考えられないな。
しかも暮葉との距離が……その、今にもくっ付いてしまいそうなくらいに近い。
でも、そんことを考える前にまずこの場をどう切り抜けよ――――

「ぐ、ぼぁ――――！？」

その時、突然尻を何者かに蹴られた俺は、成す術もなくプールへ地

獄のダイブを果たしてしまった。
――ていうか俺は恐ろしき水ではありませんか！
し、しかも俺泳げねぇ……ッ！

「あ、ぶぉ――ちょ、助けてぇ～っ！」

「け、けーすけ様っ！？」

沈みそうになって慌ただしく暴れる中、俺は暮葉の横に立っていやがる犯人を見た。
俺を蹴り飛ばし、恐ろしきウォーターパラダイスへダイブさせた犯人は……。

「公の場でいちゃいちゃすんな！　ばか圭介っ！」

スク水姿の伊吹がプールサイドで、俺を蹴った右足をあげて必死に叫んでいた。
伊吹のヤツめ……よくも俺をプールに突き落としてくれたな。
しかもアイツ――俺が泳げないのを知っててやりやがったろ！
ちくしょうあのツッパリめ……悪魔のような事をしやがって……ッ！
暮葉が妙に近くにいるのは俺のせいじゃない。暮葉が勝手に近づいているだけなのに。

「い、伊吹さん！　けーすけ様は水恐怖症で泳げないのですよ！？」

「あはは～ごめん暮葉。伊吹が止めても言う事聞かなかったんだよな～」

「ご、はぁ――――ッ！」

あ、アカン――小坂までスク水姿でプールサイドに立っていやがる。
その豊満な胸に抜群過ぎるスタイル。
何より微妙に濡れたその身体。裸よりもエロく見える旧型スクール水着（巨乳ｖｅｒ）。
あまりのエロに俺の鼻が悲鳴をあげた。
鼻血、そう――鼻血だ。我慢の限界に達した俺は遂にそれを噴射してしまったのだ。
それもプールの中で……プールの水は俺を中心に真っ赤に染まってゆく。

「もきゅっ！？　け、けーすけ様がまたムッツリーニ状態に！？」

「ごめん、圭くんの鼻血はあたしのせいかも……っ」

「へ、へんたい……非常識……ばか圭介っ！」

うるせえ変態は仕方ねえだろ。こちとら元気が有り余る思春期の男子だ！
思春期男子が変態ってのは健康的でいい事じゃねえかよ。
まあ、浅間部長のようにアブノーマルすぎるのは流石に危険だが。
しかし……ぺったんこの暮葉。体つきは女の子でもロリ体型な伊吹、そしておっぱい小坂……っ。
うぐ……なんだここは。天国ってヤツなのか……ッ？

「が、は――ァ――ッ！」

「もきゅっ！？　け、けーすけ様の出血量が危険なレベルに！？」

「圭くん泳げないしみたいだし、しかもあの様子だと貧血だから……そろそろやばいんじゃない？」

「あいつ……まさかまだ泳げなかったの……っ？」

オイッ、ツッパリ伊吹ちゃんめぇ～忘れてたのかよッ！
ちくしょう……忘れたとは言わせねえぜ。俺はまだ……泳げない、
そして水が怖ぇ。
でも今は水よりも……お前らの水着姿のほうが……ッ。

「……我が生涯に一片の悔い無し……ッ！」

「はわわわわっ！　死んじゃいますっ！　このままだとけーすけ様が死んじゃいますよっ！」

「圭くん死んじゃうって。いいのかな～伊吹？」

「……えっ……ぃや……圭介っ！」

伊吹がプールに飛び込み俺の所まで泳いできた。
自分で突き落とした癖に必死になって泳ぐ伊吹。
それを見た時安心した俺は――やがて目の前が真っ暗になる。

……

……

……

「ねぇ、けいすけっ」

空が茜色に染まる時間、古宇坂市内にあるとある公園。

その公園にあるブランコに、まだ幼かった俺と伊吹はちょこんと座っていた。
赤いランドセルにショーパンに水色のTシャツ。
伊吹はどこにでもいそうな小学生の恰好をしていた。
この伊吹はおそらく、小学校1年生の頃……それも伊吹の様子から入学してすぐの頃かな。
暗黒時代を抜けだし、ようやく友達が出来てこの頃の伊吹は上機嫌だった。
そういえば、俺の視線も低い……俺も子供になっているのか？

「なんだよ？」

「あしたの作文になんて書く？」

「そーだなぁ……俺、サシレッドになるって書く！」

「けいすけ昔からずっとそれだね！」

サシレッドとはサシレンジャーの登場人物で、サシレジャーとは当時流行っていた戦隊モノだ。
戦隊モノと言いつつ最後はレッドと敵キャラのタイマンという……。
まあ、ぶっちゃけ戦隊の意味があるのかわからない物語であった。
戦隊モノにありがちな特殊兵器はあっても、肝心のレッドに必殺技がなかったりで。
結局、レッドの攻撃手段は殴る蹴る程度であった。

「うん！　俺、レッドになってこれからも伊吹を守るんだっ！」

「えっ……でも私、もういじめられてないよ……？」

「でも悪い奴はぜったいいるもん！　だから俺、強くなって伊吹を守るんだ！」

ぐはぁ……ガキの頃の俺、どんだけ痛くて恥ずかしい事言ってんだ。

「……決めたっ！」

「え、なにを？」

「私はね、作文にけいすけのお嫁さんになるって書く！」

おい、ガキの頃の伊吹がなんかすっげえ爆弾発現しやがったぞ！
俺のお嫁さんになるって……しかもこんな満面の笑みを浮かべて。
いやいや、でも誰もが子供の頃「結婚」って、超軽い気持ちで言うだろ。
俺だって葵に結婚しようって言った事がある。もちろん幼稚園の頃に。

「じゃあ、俺はレッドになって伊吹の旦那さんになるっ！」

「うん、約束だからね……！」

「うん！」

ホントに子供って軽いよねぇ……微笑ましい。
今だったら冗談でもこんな事言えねえぞ。
……ってアレ、なんだか視界がぼやけてきて……。
……。

第９３話，特訓と乱入と夢と（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「さて今回は過去暴露大会だ。みんな子供の頃に軽い気持ちで結婚しよって言った事ある！？」

重原「圭介は葵ちゃんかぁ……圭介も昔はシスコンだったんだねぇ」

大吾「今でも十分シスコンだと思うけどな」

圭介「てめえら勝手に言うな！　昔は知らなかったんだよ、兄妹じゃ結婚できねえって！」

重原「じゃあ今なら駆け落ちＥＮＤ目指すのかい？」

圭介「しねえよ！　二次元じゃねえんだよ、妹なんて恋愛対象になるか！」

大吾「広ちゃんは？　冗談で言った事ある？」

重原「俺は近所に住んでた子かな。でもその子とは卒園以降会ってないよ」

大吾「ギャルゲー的にはこの後、その幼馴染は帰ってくるな」

重原「ないない。所詮現実だからね」

圭介「大吾はどうなんだよ。お前って案外言ってそうだな」

大吾「もちろん言ってたよ！　おんぷちゃん将来は結婚しようねって！」

重原「……」

圭介「今の子、おジャ〇女知ってるのかな……？」

※大吾は昔から完全二次元派だった。

第９４話，侵入者（前書き）

あれ、おかしいな？
ちゃんと１時に投稿設定しておいたハズなのに……。
いつもより遅れて申し訳ございません！

第９４話，侵入者

不意に目が覚めた。
随分と昔の夢を見ていたような気がする。
ぼやける目を細めると、視界には延々と続く青空と点々と存在する白い雲。
どうやら俺はプールサイドで横になっているらしい。

「あっ……圭介……っ！」

何かの声優のように綺麗かつ可愛らしい声が聞こえる。
伊吹……あぁそっか。出血多量で気絶したんだっけか。
目がぼやけていてよくわからんけど、伊吹……泣いてるのか？

「おぉ～圭くんが復活したっ」

「けーすけ様っ！　よかったのです……」

「んん……な、何分くらい俺寝てた？」

「え～っと、１０分くらいピクリとも動きませんでしたよ？」

１０分……その間ずっと俺は夢を見ていたのか。
随分と昔、俺と伊吹の軽い約束……。
きっと伊吹はあの約束とか覚えてないんだろうなぁ。
まあ覚えていたらいたで大変だよ。もし本気だった時の事を考えたらさ。
とりあえず思い出されても困るし、夢の事は言わないようにしよう。

「け、圭介……大丈夫……？」

「……あれ、伊吹……泣いてんのか？」

「ば――ッ！　な、私が泣くわけないでしょ！」

伊吹は顔を真っ赤にしながらも涙目で必死に訴える。
なんだよ。これって相当我慢してるって事じゃねえか。

「心配かけてごめん……」

「えっ……け、圭介が謝る必要は……っ」

いつものように否定はするものの、いつもみたいな勢いを感じられない。
今の伊吹はツッパリではなく、一人の弱々しい女の子であった。
その後ろで小坂が何故かニヤニヤしており、暮葉は伊吹のように今にも泣きだしそうであった。
なんか、俺のせいでプールが修羅場になってる気がする。
小坂は修羅場を楽しんでいるみたいだ。でもこっちは全然楽しめねえ……っ。

「……ごめん」

「……ッ」

あまり事態を大きくしたくは無かった。
そんなヘタレた理由のせいか、俺はただ謝る事しかできなかった。
水恐怖症……ちくしょう、てめえのせいだぞ。

って、水なんかが怖い俺が一番悪いんだよな……。
結局この後特訓という空気でもなかったので、全員プールから上がって現地解散となった。

夜、俺は自分の部屋のベッドで考え事をしていた。
プールから出た後の事。つまり解散してから今までの事を思い出す。
俺は暮葉と伊吹との3人で帰ったんだが、家に帰るまで殆ど会話ナシ。
伊吹も暮葉も妙に暗くって、話をしようにも声をかけ辛いという……。
ちくしょうどうすりゃいいんだよ。俺はどっちにも悲しんで欲しくないんだぞ。
それがなんか……殆ど俺のせいみたいな感じで。
……ってか、事実俺のせいだよな……水恐怖症の俺ホントに死ねばいいのに。

「……ッ」

色々この後の事を考えるよりも……まず二人に謝った方がいいよな。
あーだこーだ言う前に謝った方がいい。絶対にそのほうがいいと思う。
よし、まず同じ家に住んでいる暮葉に謝ろう。
決心した俺は起きあがって扉を開けようとした――

「けーすけ様っ！」

「えっ？　く、暮葉っ！？」

刹那、勢いよく開けられた扉。

特攻隊のように突撃してきたのは血相を変えた暮葉だった。

「あの……もうお身体は大丈夫なのですか！？」

「え、俺はなんでもないけど……それよりどうした？」

「おバカのけーすけ様にも分かりやすいよう単刀直入に言います」

心配して来たのかと思いきや用事があって、しかも地味に馬鹿にされたような気がする。

ちくしょう暮葉のヤツ、一体何の用事で来やがったんだよ。

まあいいけど、俺も暮葉に謝りたかったから。でも謝るって空気じゃないよな……一体。

「ホントに何があったんだ？」

「サヴィエト亡命政府の魔法使いが古宇坂に侵入してきました」

「サヴィエト？　それってアレか、俺の身柄を狙ってるっていう？」

「はい、人数は2人です。1人は今朝拙者の後輩を襲いまして、途中で乱入してきた何者かとの戦闘で重傷を負った上に逮捕されらしいのです」

「何者かって……サヴィエトのヤツって魔法使いだろ？　そんなのを倒すってどこのバケモノだよ」

「拙者的にはけーすけ様も十分バケモノなのですよ？　素手しか武器がないのに魔法使いにも匹敵する人達を倒したのですからね」

それって……明智光秀とか早川って野郎とか、あの辺の連中の事言ってんだよな？
確かにアイツらバケモノだった。光秀でさえ暮葉と互角で早川に至ってはチートじゃん。
でも、確かに俺ってその二人に勝ったよな。

「それを言われると反論できねえ……ッ！」

それにしてもアルファ隊でもねえのに、一体誰が魔法使いってのを倒したんだ？
まあそれだけ敵が減るわけだし、別に誰が倒したっていいけどさ。
でも気になるよなぁ。そんなに強い奴が古宇坂にいるってのか。
フフフ……案外明智だったりして。超能力者のアイツなら十分互角に戦えそうだ。
でも今朝って事は俺ら学校だしなぁ。筋肉馬鹿の重原って可能性もあるけどアイツずっと居たし。
まあ、さっきも思ったけど誰が倒そうが別にどうでもいいや。

「――すけ様っ、けーすけ様ってば！」

「えっ？」

「もきゅ、ちゃんと聞いてるのですか？」

しまった、くだらない事を考えていたら話を聞き逃してしまった。

「す、スマン！　なんだって？」

「ですから、拙者はこれからサヴィエトの魔法使いを倒すのです。けーすけ様、撃退に成功するまではぜぇーったいに外に出ちゃダメ

なのですよ？」

「あのなぁ……明日は土曜日だからともかく、このまま倒せなかったらどうするんだ？」

暮葉からの外出禁止令。

それは、暮葉がサヴィエトの魔法使いを倒すまで有効らしいのだ

しかし暮葉が魔法使いを倒せなかったとしよう。

外出禁止令は当然解除されないし、その間俺は学校に行けないのだ。

んで、来週は文化祭本番がある週だ。

特に火水木は準備期間と言う、本番に向けて本格的な準備が取り行われる期間なのだ。

文化祭は全3日。1日目のド派手なオープニングに仮装行列。2日目3日は一般公開があったりでもう大変で……特に3日目は展示とステージ発表が同時に行われたりする日だ。

当然その準備には多大な労力が必要だが、なんせ準備時間はたったの三日。

もし貴重な労力である生徒一人が休んでみろ。学校行った時間違いなく大顰蹙（だいひんしゅく）だぞ？

「なっ、拙者を信じて欲しいのです！　拙者だって魔法使いなんですからね！」

「お前……魔法苦手じゃなかったっけ？」

「もきゅ！　失敬、失敬ですよ！　別に拙者は魔法が苦手じゃないですよ、難しいだけなのです！」

「そうでございますか……っ」

結局苦手なんじゃねえかよ、やっぱり不安だ。
思い出してみれば暮葉が単独勝利したシーンなんて1度しか見た事ない。
しかも相手は分けがわからんオオカミ野郎。
光秀には善戦はしても勝てはしなかったし、早川に至ってはボロ負けだったじゃん。
要するに強敵に勝った所を見た事がないわけで、やっぱ暮葉一人じゃ危険なんじゃないか？

「あのさぁ、よかったら俺も手伝ってやろうか？」

「けーすけ様こそ引っ込んでいてください！　けーすけ様が藤島圭介様だってバレちゃいましたら、一日に一回は魔法使いが襲ってきますよ、多分っ！」

魔法使いどんだけ数多いんだよ！
まあ、思想的に一致するこの世界の人間を、魔法使いに育てているって話だからな。
きっとかなりの数の魔法使いがいるんだろう。だけどよ……。

「俺が藤島圭介だってバレなきゃいいんだろ？　変装でもなんでするから」

「けーすけ様っ、どうして態々危険な事に足を踏み入れようとするのですか？　もしかしてけーすけ様は結構なやんちゃさんなのですか？」

「ああそうだよ。喧嘩は男の仕事だっつーの」

今までだって伊吹や、最近は暮葉を助ける為にやってきたんだ。

魔法使いが今更なんだってんだ。俺はこの拳で超能力者を二人もぶん殴ったんだぞ。
そりゃあ……俺は魔法も超能力も使えない。その他の特殊技能だって全くねえよ。
でも身体は丈夫だ。少なくとも暮葉の盾にはなれるハズだ。
隙を見て相手をぶん殴る事くらいはできるハズだ。

「もきゅ……けーすけ様のその一直線な所、拙者のお姉様にそっくりなのです……っ」

「あ？　暮葉……姉貴いたのか？」

「はいっ！　最もお姉様は戦闘員ではなく科学者で魔法学者なのです」

「要するに学者さんってわけか。明らかに俺より頭良さそうだし、どこが俺とそっくりなんだ？」

「確かに頭はけーすけ様の1万倍いいと思いますっ！」

「ひでぇっ！」

暮葉マジでひどいや、そこまで差があるなんて……うぅっ！
これでも俺、進学校である初芝に入る頭はあったんだぞ。
中学の頃の成績はそこそこだったんだからな。
……まあ、無理して入った結果がこのザマでございますが。

「……でも根本は似ているのです」

「根本？」

「はい、お姉様が学者様になられたのは、それで誰かを救うためなのです」

「誰かを……救う？」

「はいっ、お姉様は科学と魔法を融合させた、最先端医療技術の開発を行っているのです」

科学と魔法を融合させた医療技術の開発……。

確かに、誰とは言えないが誰かを救うための研究だな。

「けど、やっぱり俺と似てるってわけじゃ――――」

「似てるのですよ？　だってその為に研究してますもの、馬鹿正直に一直線に」

馬鹿正直に一直線に……ねえ。

なんか自分の事を馬鹿にされたような気もするが、不思議と悪い気もしないな。

「いい姉貴じゃねえか？　今時そんな良心持ってる学者さんなんていねえよ」

「もきゅ……それって自分の事褒めてるのですか？」

「違う違う。純粋にお前の姉貴の事を褒めてんだよ」

「もきゅう……ありがとうなのですっ」

大体自画自賛ってどこのナルシストだよ。
でも、コイツの姉貴ってホントにいい奴そうだな。
暮葉の姉貴って事は俺よりも年上かぁ。
やっぱり暮葉と同じ体型で、しかも年上だけに合法ロリってヤツなのかな？
……って、そんなことはどうだっていいよな。

「さて、んじゃあさっさと魔法使い倒して、今週の土日も伸び伸び過ごそうや」

「結局……けーすけ様は止めても無駄なのですねっ」

「おうっ！　俺達友達なんだから、一人だけで危険な目には遭わせたくねえしな」

「……もぅ、仕方のないおバカさんなのですっ。バレないように気を付けてくださいね」

バレるわけねえだろ。
向こうの魔法使いは俺が藤島圭介であることも、俺がこの街に住んでいる事も知らねえって話だ。
……さて、倒しに行ってやるか。サヴィエトの魔法使いってヤツを！

第９４話，侵入者（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

☆変態レベル☆
浅間部長＜＜超えられない壁＜＜＜＜圭介＜＜＜＜大吾（二次元限定）＜＜＜＜その他野郎共、純奈＜＜＜＜その他女子

圭介「ちょっと待てコラァッ！」

あかり「どーしたんだ圭介？」

圭介「なんで俺がてめえの兄貴の次に変態になってんだよ！」

明智「藤島……変態だろ？」

小坂「鼻血も噴くしねぇ～」

圭介「俺より黒木とかのほうが変態じゃねえか！　なんだって黒木達はその他野郎共で一纏めなんだよ！」

純奈「ひどいよ！　私も男みたいなのと同じくらい変態に扱われるなんて……きっとこれはクソ介のせいだよね！」

圭介「俺なにもしてないって！　てめえは何でもかんでも責任を押しつけるな！」

千早「あの……でもっ、強ち間違ってないと思います……っ」

暮葉「確かにけーすけ様、ＰＣも部屋の中もエッチなものばかりなのです！」

葵「もっと言えばお兄ちゃんは歴代で最も変態な主人公なのです！」

圭介「嘘だァァァァァァァァァァァァァッ！」

第９５話，泥人形使い

――――その頃、古宇坂市南部。

「と、止まれっ！」

アタシの前に立ちふさがる日本の警察官達。
前列に盾を構えた奴らが数十名。後方には拳銃を構えた奴らが数十名。
全く……折角遥々遠い所から来てやったのに、なんて野蛮な歓迎方法なのかしらねえ。

「ふふふ……随分と手荒な歓迎ね。人様に拳銃向けてんじゃねえぞォ！」

アタシは警察官たちを指差す。
すると、アタシの背後の巨大な泥人形（ゴーレム）が大きな足音を立てて前進する。
警察官は恐怖し発砲してきたが、泥人形（ゴーレム）は何発受けようが倒れる事はない。
小さな破片だけを撒き散らしつつ、ドシンと足音を立てて少しずつ警察官へ接近していった。
もはや恐怖のあまりに狙いが滅茶苦茶で、ただ拳銃を撃ちまくる警察官は無力そのもの。
アタシが生み出した泥人形（ゴーレム）は、十分に間合いを詰めた時にその拳を振るった。

「まずい……ッ！　このままだと死人が……ッ！」

「今朝は中国人の発砲事件。今度は何人か知らないが白人とバケモノ……今日はなんだって凶悪事件ばっか起こるんだよ！」

仕方ねえでしょ。アタシには仕事があるんだよ。
アタシがこうして暴れていれば、そのうちアルファ隊のヤツが来るだろ。
ソイツを倒し、アレクサンドルって野郎の子孫がどこに居んのか聞きだしてやる。
その為なら人が何人死のうが……関係ねえんだよッ！

「腕はいいわねアンタ達。けど経験不足だわ……こんな素人さっさと蹴散らしちまいな泥人形（ゴーレム）！」

「グ、ゴゴォ……ッ」

アンタら武装した治安維持部隊なんてな、アタシら魔術師からしたらただの雑魚なんだよ。
アタシの本命はアルファ隊とあの野郎の子孫。
アンタらは所詮ソイツらを誘き寄せる磁石でしかねえのよ！

「ちっくしょうこの金髪女……ッ！」

「上は何やってるんだ！　こんな武器じゃ勝ち目がないぞっ！」

「ヘッケラー&コッホは欲しいぞ……クソッタレ！」

無駄無駄、どんな武器を持ってこようがよ……。
アンタら雑魚じゃこのアナスタシア・アベルツェフ様には勝てねえ！
さっさと地面にひれ伏しちまいな！

――――その頃、藤島家周辺。

あの後、晩御飯を食べた俺と暮葉は自宅を飛び出し全力疾走していた。
家を出る時に隣の国宗家が見えたが、そこで俺は大事な事を思い出した。
暮葉はもう気にしていない様子だが、伊吹は後々まで引っ張るし、何よりアイツは泣いていた。
今は忙しいから無理だけど、後で必ず伊吹に謝っておかないと。
それともう一つ重要な事。古宇坂に侵入したっていう魔法使いはどこに？

「暮葉！　魔法使いってどこにいるんだよ？」

「斥候部隊によるとこの街の南側で暴れているらしいのです」

「せ、斥候って……」

斥候ってアレだよな。偵察と攻撃と追跡の三つの事だよね。
さすがアルファ隊……ナメてたけどやっぱ軍隊なのね。

「けーすけ様っ、敵は泥人形（ゴーレム）の使い手なのです」

「ゴーレム？　ゼ〇の使い魔とか禁書〇録に出てきたアレ？」

「詳細不明なのですが、多分けーすけ様のイメージ通りだと思うのです」

要するに土系統の魔法を使うヤツってわけね。
ゴーレムってどれくらいの大きさかな。
よくわかんねえけど、俺が現場に向かって役に立つんだろうか。
ゴーレムって絶対デカそうだし、殴ってもダメージ与えられないような気が……。
そうだっ。ゴーレムを操るのは術者。なら術者を叩けばゴーレムと戦う必要はないんじゃ？
フフフ……日頃から厨二臭いアニメって見とくものだな！
……あ、そういえばアニメで思い出したぞ。

「なあ暮葉！　い○天放送時間に間に合うかな？」

「もきゅ！？　ろ、録画してないのですか！？」

「思いっきり急いでて忘れたんだよ！」

「もきゅ……仕方ないのですっ。さっさと相手を倒しちゃいましょう！」

「倒すって言ってもねぇ……」

多分デカいであろうゴーレムと、それを自由自在に操る魔法使い。
さっき術者を叩くって思いきった事を考えたが、考えてみれば術者も馬鹿じゃねえだろうし、きっと近づいたらゴーレムをこっちに向けてくるよな。
……そんなチートじみたバケモノ使い、俺や暮葉だけで勝てるのかねえ？

……数十分後、俺達は魔法使いが暴れているという古宇坂南部へ来たが。

「な、なんだこりゃ……！？」

「全滅みたいですね、ひどい有様なのです……っ」

なんということでしょう。

場所は古宇坂南部の幹線道路、数多くの車両が並んでいる。

警察車両が多めだが中には一般の車両も……だが、どれも事故車であった。

しかも衝突事故によるものではなく、まるで何かにぶっ飛ばされたかのように転がっている。

転がっているのは車両のみではない。一般人や銃を持った警官達が倒れ込んでいた。

まだ生きている者もいれば、もはやそれが人間であったかもわからな者まで……。

まずい……リアル死体は初めて見たが、なんだか吐き気がしてきた……っ。

「だ、大丈夫ですかけーすけ様？」

「う、ぐ……心配すんな、これでも男ですぜ？」

「あの、無理はしないで欲しいのです……っ」

とは言うものの結構辛い……ちくしょう、アニメとかで結構慣れてるハズなのに。

暮葉は平気……みたいだな。

まあ一応特殊部隊の人間だし、もしかしたら見慣れているのかもし

れない。
こんな見た目ロリな女の子が慣れてるって……何だか複雑な気分である。
吐き気や複雑な気持ちが巡り巡る。
だが、時が経つにつれてその気持ちよりももっと荒く、野蛮で破壊的な感情が……。

「クソ……っ、暮葉……相手の魔法使いの目的は俺たちだよな？」

「はい、間違いなく拙者達なのです」

「だったらこの人達は関係なかったんだよな？」

「元々拙者の世界の問題なのです。この世界の人々には基本的に関係のない事なのです……けど」

警察と魔法使い。どっちが先制攻撃をしたかなんて、別に考えなくてもわかる事だ。
日本の警察は他国の警察よりも甘い。
たとえ凶悪犯相手に発砲したって、後々世論がふざけんなと騒いでしまう。
その上、撃った警官が殺人罪で有罪にもなるらしい。
元々甘い上に世論がうるさい。マトモに戦闘さえ行えない……それが警察だ。
そんな警察が先制攻撃なんて、おそらく出来ねえだろう。
と言う事はこの事態、かなりの高確率で魔法使いから起こされたものなんだろう……ちくしょう。

「……上等だ魔法使い。標的ならここにいるってのに、俺達を誘き寄せる為か何の為かは知らねえけど……無関係な人間を巻き込むっ

てんなら――」

そこまで言いかけて、俺は近くの電柱に一発の拳を打ち込んだ。
電柱はビクともしないし、ただ拳が痛むだけだが……それでよかった。
今の一撃は俺の怒りを籠めた一撃。そして――

「てめえのツラは俺がぶん殴ってやる！」

「……っ」

怒りにまかせて叫ぶ俺を暮葉は黙って見ている。
ごめんな暮葉……でも、俺らを倒す為にこんな事をしやがる敵が――すっげえムカつくんだよ！

――その頃、同じく古宇坂南部……工業地帯付近。

あ～あ、あのエロ兄貴め……バイト帰りのあたいにお使い頼むだなんて。
全く、兄貴は今日暇なんだから自分で行けよな！
――あたい、浅間あかりは兄貴に頼まれ、このあたりに住んでいるお母さんの知り合いの所に、なんていえばいいのかな……お菓子を届けて欲しいと頼まれたのだ。
お母さんは退院したけど、それでも体力が低下しているので兄貴に頼んだんだけど……。
あたいの馬鹿兄貴、よくもその仕事をあたいに押し付けたな。
……そういえば、まだ今週は圭介を見てないよな。
千早の転校を阻止してくれたあの人……あたい、すっごく圭介にお

礼がしたいのに……。

「……圭介っ」

……ああもうあたいがくよくよしてどうするんだ！
今度会ったらお礼すればいいだけの話だろっ！
元気出せよな――――

「へぇ……圭介。んじゃあアンタ藤島圭介ってのと知り合い？」

「んみゃ？」

あたいは誰かに声を掛けられた。
だから振り向いたが、見知らぬ色白で金髪の妙齢の女性が佇んでいた。

「……だ、誰……っ？」

あたいはあんな人知らないぞっ。
しかも圭介の知り合いらしい……圭介、お前は何人の女の子と知り合ってるんだよ？
いい加減にしろよな――いい加減に……。
なんだか、その事を考えると胸が痛む。圭介なんかの事なのに……なんで。

「その圭介が藤島圭介かどうかは知らないけど、とりあえずアンタには付き合ってもらうわ」

「な、なんだよ……っ、あたいになんか用か？」

「ふふふ……肉の塊になってもらおうじゃねえかおチビちゃんッ！」

「――――ッ！？」

その時、あたいは信じられないものを見てしまった。

アスファルトが盛り上がった――瞬間、兄貴が見てるアニメに出てくるようなバケモノが現れたんだ。

第９５話，泥人形使い（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「１話に三回も視点が変わるとか……読み辛っ！」

大吾「最大のタブーだよなぁ。まぁ新人賞狙ってる作品じゃねえからいいけど」

圭介「大吾、お前新人賞狙ってんの？」

大吾「ｙｅｓ！」

圭介「マジすか！？　どんな作品だよっ！」

大吾「僕と唯ちゃんのＬＯＶＥストーリー……ッ！」

圭介「……第一次選考にすら残らねえな、それ」

第９６話，アナスタシア・アベルツェフ

幹線道路には死人と負傷者と物の残骸のみ。
そこには絶望という一言しか残されていなかった。
――そう、犯人である魔法使いはそこにはいなかったのだ。

「暮葉、魔法使いの居場所がわかるか？」

「はい。かなり大きな魔力を近くに感じるのです」

「じゃあ案内してくれ」

「気を付けてくださいね。くれぐれも無理はしないで欲しいのです」

「無理はしねえよ。暮葉こそ無理とかするなよ？」

「大丈夫なのですっ、それじゃあ先に進むのです！」

俺達は再び走りだす。無関係な人々の命を奪いやがった魔法使いの居場所へ向かって。
それにしても暮葉の魔力感知、やっぱり便利な能力だよなぁ。
暮葉と一緒に居れば索敵が簡単で助かるぜ。
さて、くだらねえ事の為に人殺しをしやがった、クソ野郎の顔面をぶん殴ってくるか。

歩く事数分。何だか見覚えのある場所にやってきた。
ここは……間違いない。古宇坂南部にある工業地帯の近く。
あのあたりにある住宅街である。実を言うと俺は一度だけここに来

た事がある。
このあたりに友達が住んでいるわけでもないし、家族ぐるみの付き合いの家庭があるわけでもない。
6月ごろ。早川と戦う前に通り、確かこのあたりで明智と会って話をしたような記憶がある。
まさか……また戦場はあの施設の中なのだろうか？
いや、それはないハズだ。
確かあの戦いの後、工場は警備が硬くなって侵入が難しくなったハズだ。

「はぁ、はぁ、はぁ、た……助けてっ！」

「もきゅ、けーすけ様……あ、あの人っ！」

「あ？」

暮葉が反応した先。確かに誰かが叫びながら走ってくる……と言うかアイツは――！
輝くような橙色のツインテール。若干ツンとした紅い瞳。小動物のように小柄な体躯。
そして狩人から逃げる野生動物のように、必死に自分の命の為に走る女の子。
女の子の名前は浅間あかり。俺の後輩であり友達であり同じ写真部の仲間でもある。

「やっぱアレってあかりだよな？」

「あかりさんっ！」

「――ッ！？　圭介っ！？　それに木下先輩まで！？」

俺らとの遭遇に驚愕の様子のあかり。
なんだか随分服が汚れてるな。
必死に走っていたし……もしかしてあかりのヤツ、例の魔法使いってのに追われてたんじゃ？

「どうしたんだよそんな血相変えて？」

「……ッ！　け、けーすけ様……敵が来るのですっ！」

「――――ッ！？」

暮葉の呼びかけで前を見ると、なんだかどんでもなくデカいヤツがいる。
土色でごっつくて、その上目がギラリと赤く光っていて……。
間違いねえ。こういうヤツをアニメで見た事がある。
１００人中９９人はゴーレムって答えるだろう。
つまり――俺らを追っている魔法使いはすぐ近くだ――――！

「はにゃわぁわわっ！　で、出た化け物っ！」

「化け物って……あかり、アイツに追われてたのか？」

「襲われたんだよ！　ああもう、こっちに来るなよな！」

いつものやんちゃな強気口調ながら、小刻みに震えながら俺の背後に回り込むあたり、態度だけは正直のご様子である。まあ、あんなの怖くないヤツは普通いないと思うんだ。
俺だって正直怖いわ。あんなバケモノどうやって倒せと？

「へぇっ、アンタ圭介って名前なのねぇ？」

しかもバケモノを操る術者さん――サヴィエトの魔法使いもお出ましのようである。

しかもまずいぞ。暮葉が俺の名前を叫んだせいか、相手に俺が藤島圭介だったバレかけている。

その事に気付いたのか、暮葉は慌てて両手で口を塞いでいた。

もうしっかりと聞かれちゃったし、そんな事をしても無駄だとは思うが。

「なんだよ……てめえっ」

「もう一度問うわ、アンタ名前が圭介って事は藤島圭介だよねぇ？」

ここで藤島圭介を名乗ったら負けだよな。

仕方ねえ、こうなったら――偽名を名乗ってやんぜ。

「俺は確かに圭介って名前だけどな、残念だけど藤島じゃねえんだよな」

「へぇ？　じゃあアンタの本名はなにさ？」

「俺は――上条圭介（かみじょうけいすけ）だ！」

「か、カミジョウ！？　圭介の名字は――ふぐぉふぁごっ！」

「あかりさん、話を合わせて欲しいのです……っ」

俺の本当の名字を言おうとしたあかりの口を、暮葉は必死に押さえつけた。

なんか……すっごく悪い事をしている気分だ。すまないあかり……
これも生きる為なんだッ！
ちなみに俺の偽名、某学園都市ラノベの主役から取った名前だってのは内緒な。
これはあくまで正体を誤魔化す為の偽名。
幸い相手は俺が藤島圭介だって気付いていないっぽいし、暮葉とあかりのやりとりにも無反応だ。
っという事は……上条圭介ってありがちな偽名で誤魔化せたんだ――

――――

「へぇ、じゃあアタシの標的とは別人ってワケね」

「標的だと……？」

「折角だから聞いとくわ！　アンタ達、藤島圭介ってヤツ知らないかしらぁ？」

「知らねえよっ」

「拙者もその人の行方がわからないのですっ」

「？？？」

俺と暮葉は上手い事嘘をついてみせるが、あかりは何かなんだかよくわからない様子。
あかりのヤツ、うっかり俺の本名を言っちゃわないか不安だ。
でも今は信じるしかないか。大丈夫、あかりならきっと話を合わせてくれるハズだ。

「なんだぁ～関係者じゃないのねぇ？　そんじゃなまあ仕方ないわ

ねぇ……秘密を知った一般人の口を封じるってのかアタシらのやり方。三人とも汚ぇ肉塊になってもらうわぁっ！」

サヴィエトの魔法使いが叫ぶと、彼女の背後で構えていたゴーレムが動きだす。

ドシン！という凄まじい足音をあげ、じわじわと俺達へ接近してくる。

「はにゃ、あわわ……っ！　ふ、二人とも逃げよ――――」

「さて、と……こんなのどうやって倒せばいいんだ？」

「泥人形（ゴーレム）を倒す方法は三つ。完全に消滅させるか頭の部分の核を破壊するか、あとは召喚者（じゅつしゃ）を気絶させるかのどれかなのです」

完全に消滅させることと核を破壊する事、召喚した本人――つまり目の前の魔法使いを倒す事？

う～ん……こんなバケモノ消し飛ばす事なんてできないだろう。

核を吹き飛ばすにしてもねえ。せめてＭ７２ＬＡＷがあればできそうだが……素手じゃ無理だ。

戦いで態々不利な選択をする必要はない。ここは常識的に考えて――

――――

「術者を倒すしかなさそうだな……ッ！」

「けーすけ様っ、拙者がゴーレムを食いとめます。その隙に相手を気絶させてくださいっ！」

「け、けどそれじゃあお前が危険だろ！」

「危険なのはどっちもなのです！　大丈夫……拙者だって一応魔法使いなのですよ？」

……まあ、魔法のほうはあんまり信用できないが、確かに暮葉は刀使いとしては相当の腕前。
オオカミ野郎を一刀両断し、光秀の素早い攻撃にも対抗でき、その上空まで飛ぶ事ができる。
個人的には暮葉を囮にするなんて、死んでも嫌なんだけどな……でもこの状況じゃ仕方ねえか。

「わかった。3分以内に片付けるから、絶対死ぬなよ……ッ！」

「けーすけ様こそ相手は魔法使いなのです。くれぐれも魔法攻撃には気を付けてください……！」

ゴーレムと魔法使い……倒すなら魔法使いのほうが簡単そうだ。
しかし、俺には何の特殊技能もない。精々身体が丈夫な事とキスをすれば強くなる事くらいだ。
つまり俺が魔法使いと戦うのは、暮葉がゴーレムと戦うのと同じくらい危険な事なのかもしれない。
なるほど、考えてみれば対等かもしれない……。
けど、警察が勝てねえようなバケモノだ。そんなヤツと暮葉を戦わせるのは流石に気が引ける。
でも戦わざるを得ない……それだったら戦闘時間が短いほうがいい。
その為にしなけりゃいけない事はただ一つ――あの魔法使いをさっさとぶっ倒す！

「けーすけ様……拙者が先に飛びかかります。泥人形（ゴーレム）が拙者を狙っている間に……けーすけ様はあの魔法使いをやってくださいっ」

「わかった。必ず早めに倒す」

自分の身を守る為。あかりの身を守る為。
暮葉を傷つけない為。そして……古宇坂の平和の為にな。

「ちょ、ちょっと待って！　馬鹿だろっ！　二人とも人間とバケモノの実力差考えろよなっ！」

「あかり、いいから下がっていてくれ。勝てるかもしれないからさ」

「む、無理だろっ！　圭介も木下先輩も戦っちゃダメだっ！　あたいの命令だからな！」

相変わらずのやんちゃな口調……でもビリビリ伝わってくるよ。
あかりのヤツは本気で俺達を心配している。
ありがたい……けど、目の前にいるヤツを倒さなきゃ後で大変な事になっちまう！
だから――――

「――ごめん……くっ、オオオオオォォォォ！」

あかりにその一言を告げ、直後に俺は大地を蹴りあげ、ゴーレム目掛けて突撃を仕掛ける。
ほぼ同時に暮葉も駆け出し、凄まじい速さであっという間に俺を追い抜く。
暮葉がゴーレムに飛びかかる。俺はひたすら走って突撃を掛ける。
そして、遂に――――

「おもしろしわね！　しょうがないねぇ……このアナスタシア・アベルツェフ様がテメェらを血祭りにあげてやんよォッ！」

――魔法使い、アナスタシア・アベルツェフとの戦いの火蓋が切って落とされた。

第９６話，アナスタシア・アベルツェフ（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

作者「またしても大幅に更新が遅れて申し訳ございません！」

圭介「ったく、ホントにしょうもねえ作者だな」

作者「仕方ないじゃん、疲労が溜まって小説書けない……っ」

圭介「そういう愚痴はしないほうがいいと思うぞ？」

作者「オープンキャンパス行ったり夏期講習行ったりその他諸々、先週と今週忙しい上に小説書いたりで寝る時間がなかったんだよ！」

圭介「ダメだこりゃ……っ」

※本当に申し訳ございませんでした！

第97話，アスリート並の魔法使い

「おおおおおおおおおぉぉっ！」

喉に響いて痛いほどに叫びながらの全力疾走。
標的は前方のゴーレム……ではなく、その後方にいるアナスタシアだ。
アナスタシアを攻撃するにはまず、ゴーレムを避けてアイツの所にいかかなければ。
その為には……右や左から回り込むのはかえって危険だろう。
巨大なゴーレムに拳でも振るわれたら、まあ耐えられない事はないだろうが大怪我は確実だ。
なら、暮葉がゴーレムに攻撃をして怯んでいる隙に――――

「天神無双木下流“天下統一”！」

「グ、ガガ……ッ！」

なにあの新必殺技みたいなの！？
しかも地味にすげえ威力……暮葉は一期一振でゴーレムの腕を斬り落とした。
ゴーレムの腕ったって岩石とかそんなものだぞ。しかも太いから普通は斬れないと思うが……。
神〇火織もビックリかもしれねえ……うん、暮葉は身体能力的に聖人に果てしなく近いだろう。

「ガ、グゴ、ガガ……ッ！」

しかしゴーレムもやはりバケモノ。
アスファルトから土を吸い出し、それを身体に吸収する事によって身体を再生させている。
だが、再生中のゴーレムは隙だらけであった。
ただでさえ鈍重な上に、再生に全力を注いでいる為かゴーレムは微動だにしない。
最も、ゴーレムの再生もかなりの速さではあるが――――

「く、おあぁっ！」

この難関を潜り抜けるには十分すぎる時間があった。
ゴーレムは体長４ｍ程の巨大な土の塊。
腕力も高くて防御力も高く、その上斬撃を受けても身体は物体を吸収して再生してしまう。
だが、そんなゴーレムにも死角という弱点があった。
このゴーレムは首の構造上、下を向く事ができないようだ。
増してやゴーレムの腹部はデブのお腹のようで、従って自身の下半身は絶対に見えない死角だ。
スライディングをし、俺はゴーレムの足の間を一気に突き抜ける！

「なっ……アタシのゴーレムを避けやがっただと？」

「てめえのゴーレムは足元がお留守なんだよ！」

そう叫ぶ俺の後方では、暮葉がまだゴーレムと激戦を繰り広げていた。
暮葉はゴーレムにダメージを与え、一見押しているかのように見えるが、ゴーレムは傷ついた部分に次々と物体を吸収していき、新たに土の塊（にくたい）を作りだす。
暮葉とゴーレムの戦いは簡単に言うと、際限のない消耗戦であった

……。

「ふ、はは……っ！　面白い事してくれるわねアンタ達。警官よりは有能じゃねえか！」

「ふざけんなよてめえ……その警官ってのは関係者じゃねえんだろ？　だったらなんで襲いやがった！」

「そんなの、アタシがゴーレムを使っていたら来ちまいやがったから。その姿がムカついたから攻撃したら銃撃されたんだよ。銃を撃ってくるヤツを攻撃して何が悪いんだぁお坊ちゃん！？」

「悪いに……決まってんだろ！　先に攻撃したのはてめえだろ！自分や周りの人々の生命の危機を感じたから警官は発砲したんじゃねえのか！？」

俺は何が言いたいかと言うと……撃たれるほど街中で暴れていたアナスタシアが悪い。

本来も標的である俺や暮葉相手ではなく、街中で無差別に暴れていたコイツが悪い。

予想通りだったけど、結局警察が戦った理由はアナスタシアに襲われたからだった。

「うっふふふ……全く、ここまでうるさいガキんちょは久々だわ」

「……ッ」

不意にアナスタシアが不敵な笑みを浮かべる。

「困ったわねぇ。ゴーレムは一度に二体も作れないし、アタシは召

喚魔術以外は専門外でね、あんまりうまくは扱えないのよ」

「だったら降参するか？　今なら警察送りで勘弁してやるよ」

「でも……こっちにはこっちの目的ってモンがあんのよ！　こんな所でチェリー君にに負けるわけには――いかねぇんだォッ！」

叫んだ――刹那。

ロシアの民族衣装のようなものを着ているアナスタシアが、長いスカートの裏から何かを取りだす。

黒光りする神秘的な塊。それは先端を鋭く研いだ黒曜石であった。

「アッハハハっ！　串刺しにしてあげるわっ！」

「――――ッ！」

黒曜石を構えたアナスタシアが決死隊の如く突撃してくる。

アナスタシアが目前まで接近した刹那、先端が大変鋭利な黒曜石を振られる。

俺は反射的に身体を斜めに逸らし、アナスタシアの攻撃をギリギリで避ける。

その反撃として俺は右拳を振るったが、不安定な姿勢だったせいか力が入らん。

結局俺の右ストレートは空振りである。

だが、反動で前へ転びそうになると、アナスタシアが背中を刺そうと黒曜石を突き出してきた。

咄嗟に身を屈めてこれを避ける。お返しに右の肘打ちを放つが、アナスタシアは後ろへ2～3歩ほど後退し、俺の肘打ちを避けやがった。そこで俺はある事にようやく気付いた。

「……こ、こいつ……ッ！」

「召喚魔術以外は使えない。アタシは魔術師としては欠点だらけだわ……だけど、そのおかけでアタシは魔術に頼り切る事ができない。だからこれでもアスリート並に鍛えてんのよ？」

「ちっくしょう……やっぱりそうかよ……ッ！」

通りで動きがやけに鋭いと思った。

あまり力強そうなイメージはないのだが、アナスタシアの実力は素人のものではなかった。

まずいぞ……一応俺も喧嘩で鍛えたが、流石にアスリート並のトレーニングはしてねえし。

けど、魔法使いに殴り合いで負けたらそれこそ勝ち目はゼロ。意地でも勝たねえと――――！

「さぁ～て、一般人のアンタがどこまで持つかな！？」

「うるせえよ……てめえに負けてたまるかっ！」

負けたら今後ろで戦っている暮葉が危ない。

コイツに勝たなきゃゴーレムは止められない。

だから、どれほどの差があったとしても――負けてはいけないんだ！

「くあぁっ！」

俺は走る勢いに乗せて拳を放つ。程良く体重の乗った拳はきっと当たればかなりの威力。

しかし、アナスタシアは俺の拳を華麗に避け、黒曜石を脇腹へ突き刺そうとしてくる。

――でも、さっきの経験からこうなる事くらい……予想は出来てたんだよ！

「ぎゃあぁ――ッ！」

――悲鳴を上げたのはアナスタシアだった。

くるりと身体の向きを変え、勢いよく放った左拳が彼女の右頬を捉えたのだ。

アナスタシアは鍛えているだけあり、一発殴られた程度じゃ倒れず持ち直すが、右手に握っていた黒曜石はアスファルトに落ちていた。

よって今の彼女は丸腰――素手の殴り合いなら五分五分だ。

「ぐおおッ！」

「チッ、素人が調子に乗ってんじゃねえ！」

黒曜石を拾わずに向かってくるあたり、やっぱりアナスタシアはプロであった。

普通は殺傷力がある黒曜石を真っ先に拾おうとするが、それだと対応が遅れて攻撃を受けてしまう。

アナスタシアはその事を理解していた様子である。

拳を構えながら迫る俺達二人。先に拳を放ったのは俺のほうだ。

だが、アナスタシアはひらりと身体を廻す。避けられたと思った――

――

「ぐ、は――っ！」

刹那、鈍い痛みと息詰まる感覚が俺を襲う。

民族服越しながら、その膝蹴りは確かに俺にダメージを与える。

――でも、この程度でくたばるような……そんなありがたい身体を

俺は持ってねえんだよ！

「てぇっ！」

「きゃぁ――っ！」

痛みを堪えて左拳で殴り返す。
ゴリゴリと右頬に減り込んだ拳を引いて、痛みも消えた所で次なる攻撃を移ろうとする。
顔面を押さえて怯んでいるうちに、俺は廻し蹴りをアナスタシアのこめかみを狙って放つ。
だが、アナスタシアは反射的に身を屈める事により、俺の蹴りを避けやがった。

「だ、はぁっ！」

背中を拳で打たれ、それで一瞬俺は怯む。
当然痛かったが、その痛みは俺の体質のおかげですぐに消えた。
だからアナスタシアに肘打ちを放つ事ができた。
怯んだ俺を抑え込もうとし、アナスタシアは接近してきた。
俺は腹部にあった僅かな隙を突き、見事に肘打ちを成功させたのだ。

「さっきから面倒くさいわね……っ、素人のくせに……さっさと倒れちまえよっ！」

「倒れねぇ……やられもしねえ」

数秒の睨み合いの後、俺との距離をゼロに縮めるべく、アナスタシアはただ前へと駆け抜ける。
アナスタシアの攻撃を避けるつもりはない。

避けても意味がない、際限のない戦いが続くだけだ。
だったら……右腕の筋力１００％で一撃で仕留める――――！

「素人が！　少しは避けようとしないワケェ！？」

「避ける必要なんかねえよ……」

全速力で迫るアナスタシアに近付くべく、俺もゆっくりと歩み始める。
歩きながら――俺はアナスタシアに告げる。

「刑務所にでも行って反省してきやがれ、このクソ野郎が！」

極限まで固く握りしめた拳。それがゴン！とアナスタシアの鼻っ柱に突き刺さった。
俺もアナスタシアの拳を受けたが、そんなのをモノともせずに拳をめり込ます。
アナスタシアの身体は数メートルも飛び、夜の冷たいアスファルトにぐったりと倒れ込んだ。

第97話，アスリート並の魔法使い（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

浅間部長「＼アッカリ～ン／」

あかり「からかうのもいい加減にしろよな！」

浅間部長「何故だ……何故ボクの妹には元ネタが通用しない！」

圭介「あかりは健全な子だからじゃねえの？」

浅間部長「ちなみにボクはあかりが好き――――」

あかり「キモいんだよシスコン兄貴っ！」

浅間部長「ちょ！　確かに名前はあかりだけど君のことじゃないって！　あぎゃあああああああっ！」

圭介「妹と同じ名前のキャラを好きになるって、お兄さん的にどうなんだよ？」

第９８話，あれ……こんな展開予想してませんでしたよ？

アナスタシアは俺の拳を食らって気絶した。
瞬間、暮葉と一進一退の戦闘を繰り広げていたゴーレムは崩壊を始め、気付けばゴーレムはただの土くれと化していた。つまり――俺達は戦いに勝ったんだ。

「けーすけ様っ！　ありがとうございます！」

「おぅ、どっか怪我とかしてないか？」

「拙者はご覧の通りとっても元気なのですよっ？」

確かに暮葉はどこも怪我をしていないし、精々土か何かで服が汚れている程度であった。
ホントにゴーレムと互角の勝負をしていたんだな。
斬っても斬っても再生する厄介な相手に、暮葉は一歩も引かなかった。
俺がアナスタシアと殴り合っている間にも、コイツはゴーレム相手に背を向けたりしなかった。
よし、褒めてあげよっと。そう思った俺は膝を伸ばし、暮葉のピンクの髪を優しく撫でてやった。

「あ……っ」

「天下統一だっけ？　あの技すごかったぞ」

「もきゅ……あ、ありがとうなのです……っ」

撫でられて照るているのか、それとも褒められて照れてるのかな。
暮葉は珍しく頬を赤らめていた。

「おいっ、あたいもいるんだけど」

「えっ？」

「もきゅ！？」

しまった。そういえば確かにあかりも居たわ。
その事を忘れて暮葉を褒めていたが、端から見ればムカつく光景だったんだろうか。
何故かあかりはむすっと頬を膨らませていた。アカン……ご立腹の様子だ。

「あ、あかりもすごかったぞ！？　逃げないでちゃんと見てたしな！」

「だ、だって2人が急に戦い始めたから……仕方ないだろ！」

「も、申し訳ないのですっ」

「でも倒さないと危険だしさ？」

「戦う方が危険だろっ！　しかも木下先輩……なんか人間離れした動きしてたようなっ、刀持っていたような……っ、あとあのバケモノは一体なんだよ……っ」

いかん――誤魔化さないと今後の生活に関わるぞ。
暮葉も慌てているし。仕方ない……ここは俺がテキトーに！

「知ってるかあかり。人間って窮地に陥ると幻覚を見るらしいぞ？」

「げ、幻覚……？」

「そうそう。つまり今まであかりが見ていたのは全て幻覚。ゴーレムだって凶悪犯がそういう風に見えただけなんだよ」

「じゃ、じゃああたいを追っていたのは人間？」

「あたりまえだろ。この世にゴーレムなんて存在ハズないし、あかりは恐怖のあまり幻覚を見てたんだよ」

まあ、恐怖を感じて幻覚を見るってのは、今俺が咄嗟に思いついたデタラメである。
恐怖で幻覚見るなら俺なんていつも見てるよ。
だけど、あかりは何を隠そう“アホの子”である。

「さすが圭介っ！　一歳年上だけあって頭いいなっ！」

「フッ……もっとお兄さんを頼ったっていいんだぜ？」

「うん！　あたい圭介のことこれからも信じるっ！」

満面の笑みを浮かべてあかりはそう言い放つ。愛想笑いをしながら俺はこう思った。
あかりが馬鹿で本当によかった……。
これが明智だったら誤魔化せなかっただろう。
ってか明智は俺の事を名字で呼ぶし、俺が藤島だって確実にバレていた事であろう。

とにかく……たまたま遭遇した人があかりでよかった。

「けーすけ様っ、うまく誤魔化せましたね」

「お、おう。俺の読書（ラノベ）で鍛えた話術が役に立ったぜ……っ」

俺と暮葉はあかりにバレないよう、小声でこっそり会話をした。

一方のあかりはまだ笑っている。ハハハ……あかり、やっぱりアホの子ですね。

「さてと。暮葉、コイツどうする？」

あかりを誤魔化した所で、次にアナスタシアをどう扱うかを暮葉に訊いた。

警察に引き渡すってのが一番現実的だが。

一応サヴィエト亡命政府の人間だし、アルファ隊の行動目的の中にも関係者拘束ってのがあったし。

だから通報するかしないべきか、念の為に確認を取ろうと俺は思ったのだ。

「えっと……身柄は拙者達が拘束するのです。なのでけーすけ様……できればあかりさんをっ」

なるほど。言葉では言わなかったが暮葉の言いたい事はわかった

「わかった。それじゃあ後はよろしくな」

「はいっ！」

「よし、あかり！　気晴らしに2人でどっか行かないか？」

暮葉の元気な返事を聞いた後、俺はくるりと向きを変えてあかりに声を掛けた。

「えっ？　で、でも木下先輩は？」

「暮葉は用事があるからゴメンだって」

「はいっ！　その、すっごく大事な用事ですのでっ！」

「そーなのか？」

「ああ。とりあえず幻覚を見て気分も悪いだろうし、だから気晴らしに散歩でもしようぜ？」

暮葉が俺に頼んだ事。それは、アナスタシア拘束の為にあかりを遠ざける事だ。

あかりは俺達の事情には全く無関係であり、関わらせたくないし秘密を知られたくもない。

知られればたとえあかりは認めても、その秘密が何処からか漏れてしまう可能性がある。

そうなると、暮葉達アルファ隊の作戦行動に支障を来す可能性がある。

俺だってそうだぜ。折角学校の皆に受け入れられ始めたってのに、また変な事に関わってるからって引かれるかもしれねえぞ。きっと暮葉はその二つの事を心配したのだろう。

だから――俺にあかりを遠ざけるように言ったんだ。

「んむぅ～～いいぞっ！　あたいも圭介と少し話がしたい！」

「よしっ、んじゅあ早速行くとしようか」

「うん！」

暮葉にも匹敵するくらい元気のいい返事だな。
ふと思ったんだが、暮葉とあかりってキャラ被ってないか？
“元気なアホの子”っていう点で。まあ……どうでもいいか！
それより散歩だ散歩。暮葉の仕事を助ける為にあかりとお散歩だ。

「暮葉も気を付けろよっ！」

「それじゃああたいらはこれで、お仕事頑張ってください木下先輩！」

なんだか普段の口調のせいか、あかりの敬語に違和感を覚えるのは俺だけだろうか？

「はい！　お二人ともお元気でっ！」

暮葉は無難に言葉を返してきた。
さて、極力あかりに気付かれないように暮葉から離れないとな。
とりあえずあかりとどの辺を散歩しよっかな。
そんなことを考えながら１０分後、いつの間にか古宇坂港にある海浜緑地公園まで歩いてきていた。

「んん～っ！　潮の香りっていいよな～っ！」

「おう、ここ初めて来たけど中々いい所じゃねえか」

夜の海は暗いが、月明りと遠くの船のあかりがとても綺麗だ。

こういう所って昼間や夕方に来るもんだと思ってたが、夜の海浜公園ってのも案外いいものだ。
なにより、このクソ暑い季節に涼しい風はとてもありがたい。

「……なあ圭介」

「ん？」

「千早の転校を阻止したの……圭介だってほんと？」

「えっ？　それ誰が言ってたんだ？」

「千早が言ってたんだ。圭介のおかげで転校せずに済むってすっごーく嬉しそうに！」

一瞬なんであかりがその事を知ってんのかって思ったが、なんだ青山さんから聞いたのか。
転校を阻止……かぁ。確かに俺は転校阻止の為に必死だったな。けど――――

「そっか。でも別に誰がやったとかって気にする必要はないと思うぞ？」

「結果的に青山さんは初芝に残る事になったんだ。その結果だけで十分だと思うよ」

「んみゃ、なんでだ？」

だから俺は――余計で無駄な高望みなんてしない。
別に褒められたってそりゃあ嬉しいけど、でも殆ど意味がないだろ。

とにかく、青山さんが転校しないって結果だけで十分なんだ。

「そ、そんな……圭介はそれでいいのか？」

「なんで？」

「だ、だって……っ」

少し俯いたあかりは遂に口ごもってしまった。

……もしかして、心配してくれているのか？

「大丈夫だよ。だからあかりは気にしないで、お礼とかそんなのはいらないからさ」

「そ、そうか……っ」

それに、俺は褒められることがあまり好きじゃない。

今まであまり褒められた事がないし、何より返す言葉が思い浮かばない。

それでテキトーに返した言葉が、相手に不快な思いをさせるかもしれない。

ただの嫌味になっちまうかもしれない。逆に否定すると謙遜が嫌いな相手を怒らせるかもしれない。

だから俺は――褒められるのが苦手だ……。

「それじゃもう一つ。千早を振ったって本当……？」

「えっ……？」

「千早から聞いたんだ」

「そ、そうか……っ」

青山さん、とにかくあかりに何でも報告したんだな。
まあ、それで俺に害があるわけでもないから別にいいけど。

「なぁ圭介っ、なんで千早を振ったんだ？」

すると、あかりがやたらと真剣な表情で振った理由を訊いてきた。
こういう時なんて答えればいいんだよ。素直に答えればいいのかもだが……。
恋愛感情が沸かなかったからとか、そんな理由じゃあかりは怒るだろうな。
でも嘘をつくのはもっと悪い気がする。やっぱり、ここは事実をありのまま告げよう。

「恋愛感情が沸かなかったから？」

「ッ……そ、そんな。それだけの理由で振ったのか！？」

「悪い事じゃねえだろ？　中途半端な気持ちで付き合って、それで青山さんを傷つけちまうよりはずっとマシだと思う」

「け、けど……振られるってすっごく悲しいことだとあたいは思うぞ！」

「でも好きじゃないのに付き合うって、すごい失礼じゃないか？」

そんな失礼なことを青山さんにしたくなかった。
中途半端ほど失礼なことは無い。そして後で絶対相手を傷つけてし

まう。
俺はそれが嫌だ。嫌だからあの場で青山さんを振ったんだと思う。
それでも……青山さんは諦めてくれなかったが。

「……圭介、絶対チャラ男だと思ってたけど……案外誠実なんだな！」

「俺の何処がチャラ男!?」

「だって圭介の周りって女の子ばっかだろ!?」

あかりさん、貴女も女の子っすよね。あと皆が思ってる程女友達は多くないと思うぞ。
それにしても、俺って周りからどんな目で見られているんだろうか。
俺……そんなに女癖悪く見えるの？

「あのなぁ……つーか、あかりはどうなんだ？　誰かと付き合った事とかあるのか？」

「んみゃ、そんなもんないぞ」

この人ガチで誰とも付き合ったことがないらしい。
即答な上に真顔だ。まあ確かにあかりって恋愛とか興味なさそうだけど……。
でも、それで納得するのも面白くないしなぁ……よし、少しからかってやろう！

「ホントか？　好きな人くらいいるんじゃねえのか？」

「好きな人……ぁ……ッ！　そ、そんなのいないっ！」

突然、風邪でも引いたかのように顔を赤らめ、そうだと言っているかのように否定をする。
あかりのこの反応は……絶対好きなヤツがいる。
これでも俺は三度の恋愛を経験したんだ。まあ三回とも告白すらしてないけど……。
それでも恋とかってのは理解しているハズだ。だからこの僅かな反応でわかったぜ。
あかりに――好きなヤツがいるっ！

「嘘つけぇ～！　その反応は絶対にいるだろ？」

「だ、だからあたいにそんなのはいないっ！」

「まあまあ折角だから言っちゃおうぜ？　安心しなさい、これでも俺は口堅いからさ！」

「な、だ、誰が言うかっ！」

真っ赤になったあかりが、全然力が籠っていないハンマーパンチを、俺の胸板へと打ち込んでくる。
しかしいい事を聞いたぞ。誰が言うかーっと言うって事は……好きな人いるんだな！
フフフ……これは面白くなってきた。他人の恋愛話ほど面白いものは無いぜ。

「女は度胸！　なんでも言ってみるものさ！」

「それ、男は度胸だろ……？」

「細かい事気にすんなって」

「き、気にするに決まってるだろ！　～～～ッ」

叫んだ直後に再び顔が真っ赤に染まる。あかりってやんちゃな癖に結構初心な子だなぁ。

おそらく今が初恋って感じなのだろう。

恥ずかしくて仕方ない……ちくしょう、今のあかりは何か女の子な感じで可愛いな。

俺よ、あかりのせいでロリコンに目覚めちゃダメだぞ……ッ！

「大丈夫だって言っちゃおうよ。恋愛相談ならいくらでも乗ってやるからさ！」

もうずっと顔が赤いあかりは、急に借りてきた猫のように静かになってしまった。

ハハハ、流石にちょっとからかい過ぎたかな。

ちょっと謝った方がいいかな～と思った――刹那。

「……け、圭……介……」

「えっ？」

俯いているあかりが何かを呟く。

誰かは聞きとれなかったがそれは人の名前、間違いなく誰かの名前だった。

やがてあかりは拳を握り、力強く俺を見つめて――

「だ、だから……圭介だって言ってるだろ！　……ッ、～～～っ！」

「……へっ？」

思わず呆気に取られた声を漏らす。

好きな人の名前をハッキリと告げた後、彼女は顔を完熟トマトのように赤くして、そのまま逃げるように背を向けて走っていってしまった……。

「い、今の……って……？」

あかりの今のあれって、ひょっとして……。

――コクハク？

第９８話，あれ……こんな展開予想してませんでしたよ？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

葵「ま、またライバルが増えた……しかも友達がライバルだよ！？」

千早「あはは……あかりまで先輩に取り付かれちゃったね」

あかり「そ、そんなことないんだからな！　あたいと圭介は友達だっ！」

葵「でもお兄ちゃんの事大好きなんだよね？」

あかり「……っ、だ、黙れよな葵っ！」

千早「あかりに先輩を盗られたら……わ、わたしもっと頑張ろうっ！」

あかり「ち、千早ダメだっ！　必要以上圭介と仲良くなるなよな！」

葵「こらぁ～！　お兄ちゃんは葵のものだよ！？」

――――一方、２年の教室。

圭介「ああ、出会いが欲しい……ふぉぐぉっ！？　にゃにすんれすかーっ！？」

赤佐「いやぁ～、藤島が言うと嫌味にしか聞こえないんや～」

黒木「ったく！　てめえそんな事言いやがって……殴られて当然だクソ野郎っ！」

圭介「だ、だからって殴る事ないだろ……ちくしょう不幸だ……っ」

※作者も圭介は殴られて当然だと思います！

第９９話，学園モノにありがちな出会いのシーン

……よし、整理しよう。
頭の中が混乱していて真っ白だし、とにかくこう言う時は整理するのが一番だ。
まず、俺はあかりに好きな人がいるのかと聞いた。
あかりは最初は躊躇ったが、遂に好きな人の名前を言ってくれた。
って、そのあかりの好きなヤツの名前ってのが――ケイスケ。

……ケイスケ？

はて、どこかで聞き覚えのある名前だ。
そういえば俺の名前ってなんだったかな。記憶が正しければ俺は藤島圭介って名前だ。
圭介……圭介。ひょっとしてあかりは俺の事が好きなのか……？
いやいやいや待てよコラッ。あかりにそんなハッピーなフラグを立てた覚えは皆無ですぞ？
それを言ったら青山さんにだって、フラグを立てた覚えはなかったけど……。

「だぁぁぁぁちっくしょう！」

ラッキーなイベントなハズなのになんなんだこの苦悩はっ！
しかも結構嬉しかったし……なんたってあかり、見た目は超弩級に可愛い美少女だからな。
ヤベェどうしよう。俺はこの後どうすればいいんだ？
と、とりあえず落ちつこう。うん、告白された直後って気持ちが高ぶるからな。
落ちついた時にあかりの事をどう想っているか……返事はその時の

気持ちだろう。
とにかく、中途半端ってのが一番ダメだ。
一番重要なのは俺があかりを好きなのかって事だよな。
……まあ、それを考えるのは後だ。とりあえず葵も心配しているだろうし、そろそろ家に帰ろう。

特に何も考えず、ただボケーっと歩いていると、いつの間にか古宇坂市の中心まで来ていた。
あと何キロくらいかな。中心街っつっても南部からは結構遠い。
でも、気分のせいかすごく短く感じたなぁ……。
はぁ……なにやってんだろうなぁ、俺……。
とにかくアレは告白……だよな。だったら次に会った時までに返事をしないと。
伊吹には謝らないといけないし、あかりには告白の返事をしないといけない。
オマケに超能力者や魔法使いと戦う羽目になるし、高校2年の夏……予想以上に忙しい……ッ！

「キミ可愛いねぇ～。おお～しかも最近東京で有名な佐井学園じゃん？」

あ、佐井学園？
それって明智が前に通っていたって言う、名ばかり進学校の超能力者養成所……。
その声を聞いて振り向くと、如何にも不良な人達が一人の少女を取り囲んでいた。

「……はぁ」

長い黒髪、紅い瞳、冷たいが可愛らしい顔立ちで、この辺では見かけない緑っぽい制服。
俺はある事を思い出した。そういえば早川ってヤツも緑っぽい服を着ていた。
なるほど。緑は佐井学園の制服の色ってわけか。
でも、佐井学園で能力開発を行っているのは開発科のみ。
それ以外の学科では進学校らしく、レベルの高いあくまで普通の授業を行っているらしい。
だから彼女が超能力者とは限らない。そもそも、外で超能力をバンバン使うのはまずい事だろう。
っと、言う事はあの子……不良に囲まれてヤバい状況なのかもしれない。

「今から俺達と遊びに行かない？」

「帰りは送ってやるからよォ。まあ、いつ帰れるかわからねえけどな！」

「だっははははは！」

馬鹿だろアイツら。ナンパはもっと上品にやらないと。
あんな下品な言葉じゃ女の子に引かれるぞ。
まあ、ナンパ自体女の子に引かれる行為な気がするが。
しかしまずいぞ。あの兄ちゃん達はあどけない彼女を取って食うつもりだ。
あの子はさっきから黙ったままだし。ヤバい……この状況は非常にマズい。

「だいじょーぶだいじょーぶ！　ちゃんと送って帰るって！」

「だからさぁ～俺達と遊ぼうよ。きっと楽しくて気持ちいいからよ！」

気持ちいいって言ってる時点でもうオカシイだろ。
下心丸見えだっつーの。　しかも気持ちいいのは回数を重ねた子のみ。
女の子は初めてって痛いらしいぞ。まあ……エロゲーで得た知識だが。
第一こんな奴らにやられるって相当な屈辱だろう。彼女だってそれを望んではいないハズ。
よ、よぉ～し……ここはひとつ、俺が一肌脱いで助けてやろう。
しかし……相手は8人。流石にこの人数をぶっ倒せってのは無理があるよな。
よ、よぉ～し……こうなったら上○さん戦法を試してみるか。
そうと決めた俺は勇気ある一歩を踏み出し、不良達の間に割って入り――――

「あぁ～いたいたっ！」

「あ？」

女の子と不良達が一斉に俺を見る。
女の子は少し驚いた様子だ。一方の不良達は俺を睨みつけている。

「ダメだろ勝手に逸れちゃ！　いやいや～どうも、皆さん連れがお世話になりました～！」

よし、出だしは完璧だ。
不良達は威嚇モードから驚きモードへと変わった。
この隙に彼女をこの場から連れ出し、安全な所まで移動して彼女と

別れる。
相手がビリビリ中学生じゃないだけに、この作戦の成功率は１００％。
俺は「ほら行くぞ～」と言いかけつつ、彼女の手を引いた――――

「誰かしら……貴方？」

「あははは……ははは……へっ？」

彼女の一言により、場の空気が凍りついた。
や、ヤベェこれじゃ上○さんとまるっきり同じやん！

「ちょ！　うまく合わせろって！　知り合いのフリして自然に助け出す作戦が台無しだろ！」

「知らない人についていったらダメって、私は親にそう言われたわよ？」

ちくしょ～まさか同じ運命を辿るとは！
ああもうやっぱり手ぇ出さなきゃよかった。
おかげで不良達が再び威嚇モードに移り、メンチを切りながら柄悪く歩み寄ってきやがったぞ。

「なんだテメェ何か用でもあんのかぁ？」

「ふざけた真似しやがって。殺すぞ、アァ？」

「あはは～え、え～っと……」

どないしようこれ。気付けば８人の不良に俺は囲まれてしまった。

不良は確かに一人じゃ弱い。酒やたばこで身体を壊し、しかも服装は動くには適していない。
不良の喧嘩の腕はアスリート並に鍛えていた、あのアナスタシアに比べれば遥かに劣るだろう。
だが不良達は弱いから仲間と群れている。それはつまりどういうことか。
いくら個人レベルで弱くても……群れれば大きな力となる。
実際、俺の喧嘩の腕じゅあ一度に3人くらいまでが限度。
つまり言うとだな……この人数相手じゃ体質上、大怪我はしないだろうがフルボッコは確定だ。
ちくしょ～フルボッコ嫌だ。身体は丈夫でも殴られると痛いんだぞ！
でもなぁ。無抵抗のままフルボッコにされるのもカッコ悪いし……
ったく、仕方ねえなぁ。

「ったく、てめえら恥ずかしくねえのかよ！　こんな大人数で女の子一人に寄ってたかって、それが大の男のすることかよ！」

「アァ？　なんだてめえいきなり？」

「俺達に説教くれるってのかよ？」

「ああそうだよ！　てめえらムカつくんだよ！　俺はな、お前らみたいな胸もなきゃ学もねえ奴ら大っ嫌いなんだよっ！」

「なんだとコラッ？」

「てめえやっぱ殺されてえんだな？」

よしよしいい感じだぞ。実を言うと、これは女の子救出の為の作戦だったりするのだ。

俺の作戦とは――まず、不良達を見下すような言葉で挑発し。

「いいぜ、殺せるもんなら殺してみろよ。言っとくけど俺は強ぇから怪我しても泣くじゃねえぞ！」

あえて喧嘩を買うような素振りをみせて。

ついでに自分は強いと思わせておいて、それで潰し甲斐あるヤツだと想いこませる。

すると、不良達は額に血管を浮かべ遂に激昂する。

「上等だ！　てめえらコイツブッ殺すぞ！」

「おう！」

さてさて……誰かが一人駆け出す瞬間。俺の作戦はそのタイミングが重要なんだ。

そして――遂に不良の一人が大地を蹴りあげ前進を開始。その瞬間、俺は――――！

「藤島流秘奥義……馬鹿の相手はしない！　さらばぁぁぁぁぁぁぁっ！」

不良達が進む逆の方向に、俺は瞬く間に駆け出した。

すれ違いの瞬間、不良達は驚きや呆気に取られた顔をしていたが……まあそんなのは気にしない。

とにかくあんな人数相手に勝てるわけがないし――今はただひたすら奴らから逃げるのみ！

「なっ！？　ま、待てやコラァッ！」

「てめえの秘奥義って逃げる事かよ！？」

「うるせぇ！　殴られなかっただけ感謝しやがれ！」

1、2、3、4、5、6、7、8……。

よし、8人全員が俺を追い掛けている。

ヤンキーさんってホントに馬鹿だなぁ、まあ俺の犠牲によって女の子は解放された。

よかったよかった。後は俺がコイツらを振りきるだけだ。

房総丘陵トレイルランを制したからこそ言えるが、俺はこれでも長距離には自信があるんだ。

不良なんて酒と煙草で身体を壊しているし、靴だって走るのには適していないし、しかもアイツらはペース無視の全力疾走をしている。

このままで行けば間違いなくアイツらはスタミナ切れで倒れる。

俺が狙っているのはそこだ。不良を倒すことではない……逃げて振りきるんだ！

「この野郎ぉ～……てめえこそ逃げて恥ずかしくねえのかよ！」

「うるっせえ！　てめえらにいい言葉を教えてやるよ……逃げるが勝ちだっ！」

「てめっ！？　それでも男かよ！　そして日本人かよ！」

「男でも日本人でも逃げる時は逃げるんだよ、このサル並野郎！」

敵は幾万って歌を御存知だろうか。

既に著作権の切れた日本の軍歌だが、その歌詞に【敗れて逃ぐるは國の恥　進みて死ぬるは身のほまれ】というものがある。確かに逃げるってのは恥ずかしい事かもしれん。

それより突き進んで玉砕したほうが、よっぽど華々しい事なのかもしれない。

――だが！俺はこう考える。

死んだら後で何もできないじゃん、なら一度引いて態勢を立て直すのもアリだと。

だから俺は逃げるぜ。この後の人生をエンジョイする為にも――逃げる事は恥じゃねえ！

「待てコラァ！」

「おるぁ止まれ～っ！　玉となりつつ砕けやがれっ！」

ああもう！

プール学習があって貧血になったり、溺れ時にそうになってしまったり。

その後暮葉と伊吹を傷つけてしまい、魔法使いと戦った挙句のこれですか。

あかりに告白された以外はホントにツイてねえ！

「ちっくしょお～～～っ！　これじゃい〇天放送時間に間に合わねえぇぇぇぇぇぇっ！」

……こうして、俺の人生で一番不幸な一日は終わった。

結局家に帰った時には既に暮葉もいて、しかも疲労で寝てしまい、結局い〇天を見逃してしまった。

伊吹に謝る事もできなかったし。ちくしょう、明日必ず謝らないと。

ああ……色々な意味で俺って最悪だ。

ところで、あの女の子との出会い……意味あったんだろうか？

第９９話，学園モノにありがちな出会いのシーン（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「おおっ！　次回で１００話じゃん！」

伊吹「長っ、半分くらいでよかったんじゃないの？」

暮葉「そうですねぇ～。作者も友人に「お前の小説長過ぎ」って、文句言われた事何度もあるらしいのですよ？」

葵「その他、読者様にも言われた事あるらしいよ！」

重原「長いと読む気失せるよねぇ。俺も禁〇目録原作が２０巻以上出てると知った時、読もうかどうか渋ったものだよ」

圭介「お前ら折角次回で１００話達成なんだから、もう少し喜びやがれ！」

第１００話，デレ期？いいえ、ツッパリです

その翌日、俺は我が家の隣――国宗家の前に立っていた。
ちくしょう緊張する。俺はこれから伊吹に謝ろうと思うんだ。
けどなぁ、昨日は魔法使いと戦ったりに不良に追われたり、結局一日が経ってしまった。
どうなんだろう。謝るのが遅いっていうのは。よくそれで非難される政治家はニュースで見るが。
けど、だからって何もしないのは気が引ける。
伊吹が落ち込んでしまったのは、俺が水恐怖症のチキンだったからだし……。

「……あっ、」

「あっ」

――なんて考え事をしていたら、伊吹が制服姿で家から出てきた。
俺と目があった瞬間、俺と伊吹の間に気まずい空気が流れる。
やっぱり……向こうも昨日の事を気にしているのだろう。

「あのよ」
「あのさっ！」

俺が声をかけようとすると、伊吹も同時に同じ事を言ってくる。
なんというタイミング。アニメではよく見るシチュエーションだが、まさか現実で経験するとは。
え～っと……こういう時は常識的に考えて。

「さ、先に言っていいぞ？」

「えっ……？　け、圭介が先に言いなさいよ」

風に靡く銀色の髪と微かに染まった頬、視線を逸らして小さく呟くその姿。

長年の付き合いのせいか、普段は全く意識しねえけど……やっぱ伊吹って女の子だな。

黒木が惚れちまうのも無理がない。ていうか俺、これから謝るってのになに考えてんだよ。

とにかく伊吹から予想通りの返しがきた。だから俺が先に言わなければ――――

「――ごめん伊吹！」

どこまでもストレートに、俺は４５度のお辞儀をする。

少しだけ視線を上に向けると、伊吹は呆気に取られた顔で俺を見ていた。

だがそれも一瞬。次第に伊吹は悲しげな顔になっていく。

「ちょ、ちょっと圭介……なんで謝るの……っ？」

「昨日の事で今更かもしれねえけど、心配かけてホントにごめん！」

「し、心配ってそんな……私のほうが悪いのよ？　圭介が泳げないってことを忘れていて……そのっ、私のほうこそごめんなさいっ！」

……あれ、なんだか予想外の展開だぞ。逆に伊吹に謝られてしまった。

しかも、さっきの俺と同じく斜め４５度のお辞儀を伊吹はしていた。

「俺は別に気にしてないよ。アレは俺が泳げなかったから……だからあんなことになったんだ。伊吹は別に悪くないよ」

「……あんたさ。ずっと前から思っていたけど、なんでもかんでも自分のせいにし過ぎよ」

「えっ？」

「マイナス思考なのよあんた。いつもはふざけていて、時々ちょ～っとだけカッコいいのに……」

ちょっとって所を随分強調しますね、伊吹さん……。
でも少なからずカッコいいは思われていたのか。
まあそれよりも、俺って伊吹が言うほどマイナス思考なのか？
そりゃあたまに自分を責めたりするけど、でもそれは事実を脳内で考えているだけだ。
それに普段はゲームの為に徹夜をするくらい、超能天気かつ不規則に生きているんだぞ？

「別にマイナス思考ってわけじゃねえだろ……？」

「誰が見たってあんたはマイナス思考よ。いっつも自分のせいだ自分のせいだって言って……いい加減あんたが鬱にならないか心配になるわよ……」

「鬱って……そんなのなるわけないだろ？」

「でも、あんたの自虐っぷりはホントになるそうなくらいよ！」

紅い瞳を一直線に向け、本当に俺を心配するかのような表情を伊吹は見せている。
その表情を見て懐かしいと感じる俺。これは――間違いない。
８歳の頃にプールで溺れた後、伊吹はこんな顔でプールサイドに倒れる俺に迫っていた。
ただ、あの時は今とは違い、必死なあまりに目に涙を浮かべていたが……。
それでも涙がないだけで全く同じだ。伊吹は本当に俺を心配している。

「……ごめん」

「……あんたのそのすぐ謝る癖、やめたほうがいいわよ？」

「えっ？」

「その、お互いあまりいい気分にはならないでしょ……？」

まあ確かに。時と場合によっては謝られても嬉しくない、むしろ謝られて自分が罪悪感を覚える。
そんな事が俺にも何度かあった。もしかして、今の伊吹も同じように感じているのだろうか。
ったく。俺ってホントになにやってんだろうな……。
結局、俺は幼馴染を困らせる事しかできねえのかよ……っ。

「ほら、元気出しなさいよっ！　圭介は男の子でしょ？」

「ははっ。なんか今の伊吹、お姉ちゃんみたいだな」

「お、お姉ちゃん？　あたしは一人っ子よ？　それにあんたのほう

が誕生日早いでしょ？」

「そういえばそうだったなぁ。ってことは俺は伊吹のお兄ちゃんかっ！」

「～っ！？　あ、あんたには葵ちゃんがいるでしょ！？」

伊吹は妹というポジションが気に入らなかったのか、むがぁ～っと両手をあげて、まるで怒った猫が襲いかかるかのように突っかかってきた。

本気で怒っているわけじゃないのはわかっている。

伊吹が猫のように突っ掛かってくるのはいつもの事だ。

要するに伊吹は猫みたいな女の子だ――――

「俺は伊吹が妹でも別にいいけどなぁ」

「わ、私が嫌よ！　別なやつなら妥協してあげてもいいわよ？」

「別なヤツねぇ？　幼馴染はデフォルト設定だし……フフフ、恋人とかどうだっ！」

「こ、こここ、恋人っ！？　こ、恋人なんてそんな……っ、別なのでいいわよっ！　例えば夫婦とかでもっ！」

「もしもし。恋人より重たくなってますよ伊吹さん」

「ひっ！？」

伊吹はボンッと、完熟トマトのように赤くなってしまった。

その上、借りてきた猫のように静かになってしまった。

ありゃりゃ、少しからかい過ぎたか？

「は、にゃ……わ、訳のわからない事言わないでよばか圭介っ！」

「夫婦って言ったのは伊吹だろ」

「そんな事言っちゃったのはあんたが恋人って言ったからでしょ！」

「ちょ！　悪かった！　悪かったから引っ掻かないでゴメンナサイッ！」

俺は顔面をカチャカチャと引っ掻かれてしまった。
いつもの事とは言え、伊吹は爪が鋭いから痛いぜ……。
ていうか……やっぱり伊吹はネコさんだった！

「……」

「ん？　どうしたんだ、借りてきた猫みたいに」

「……っ」

「伊吹？」

「――――ッ！　仕方ないわね……あんたがどうしてもっていうんならその……っ」

またしても俯いて小さく呟いている。
途中までは聞こえても、声の小ささで言葉の後半が全く聞こえないぞ？

「〜〜〜っ！　どうしてもって言うんならその……あんたと付き合ってあげてもいいわよっ！」

ちょ、伊吹のヤツ。ヤケクソ気味にとんでもない事を叫んでいるぞ？仕方ねえな。伊吹の爆弾発言にフォロー入れておくか。

「あの〜伊吹さん？　すっご〜く発言ぶっ飛んでませんか？」

「は、はぁ！？　最初に告白してきたのはあんたでしょ！？　私のこと恋人って言ったじゃない！」

「えっ……ちょ！　おま、本気にしてたのかよ！？」

「別に本気になんかしてないわよ！　でも……あんたモテないでしょ？」

「うぅ……」

そこを突かれると胸が痛いんだが。でも、最近は何故か本当にモテないのか疑わしいんだ。

青山さんに告白されて、あかりにまで似たような事を言われ……。

はぁ。こんなの赤佐とかが聞いたら絶対キレるぞ？

しかも中途半端ってのが嫌だからって、青山さんとは付き合わなかったし……。

「私だって嫌で嫌で仕方ないのよ？　で、でも圭介が彼女欲しいって言ってるし、ガチホモ疑惑だって消えちゃうでしょうから……っ」

「まだガチホモ疑惑気にしてたのかよ！」

それって春頃か初夏の頃の話じゃねえか。
もう最近はガチホモだって噂も聞かなくなったのに。

「と、とにかく！　私が付き合ってあげるって言ってんのよ！？
返事は！？」

……あれ、おかしいぞ。
確かにパッと見は嫌々って感じだし、告白のセリフとは思えないくらい恐ろしく命令形だ。
でも……なんだろう。この本気で言っている感は？

「付き合うって男女交際だろ？　そんな無理してするものじゃないと思うぞ？」

「……っ、じゃあ確認。あんた、私のこと……すすす、好きなの？」

「好きか嫌いかで言えば好きだけど……」

「だ、だったら付き合いなさい！　仕方なくモテないあんたと付き合ってあげるわよ！」

おいおいおい。なんだよこのデレ期に入ったツンデレ娘は？
あのツッパリ伊吹ちゃんだぞ。こんな事を言う子じゃなかったハズなのに。
もしかして……ああ、もしかするとの話だよ。
俺が自惚れているだけかもしれないが、伊吹は俺の事が好きなのか？

「あのなぁ。それはラブじゃなくてライクって意味だぞ？」

「ら、らいく？」

「普通に友達としてって意味だよ。俺達、何だかんだで付き合いも長いし、よく喧嘩もするけど何だかんだで上手く行ってるだろ？」

「そりゃそうだけど……あんたは……っ」

「ん？」

「……ごめん、やっぱなんでもないわ」

途中で打ち切るように、何かを言い直すように伊吹はそう告げた。伊吹は俺に微笑みかけてはいたが、なんだろう……何処か寂しげな瞳をしている気がするぞ。

「伊吹？」

「……わ、わかってるわよ。圭介は普段冗談ばっか言う人だって」

「なんかそれ、俺が軽い男みたいじゃねえかっ！」

「軽いでしょ？　冗談でも恋人言うんだから……っ」

「あのなぁ」

そりゃああんなこと、伊吹だからって冗談で言ったのは悪いと思うよ。

でもそのせいか、俺は伊吹の中ではチャラ男になってしまった

「とにかくわかってるから。その……私だって全然気にしてないん

だからねっ！」

「お、おう」

ホントに気にしていないのか？
そのわりには、伊吹の瞳がやけに真剣な気がするが。

「そ、それじゃあ私……そろそろ部活行くからっ！」

「えっ？　ちょ、伊吹っ！？」

行っちまったよ……剣道部で使う竹刀を持っていって。
う～ん……伊吹のヤツ。本当になにも気にしていないんだろうか？
やっぱり伊吹はツッパリ伊吹ちゃんなんだろうか？
さっきのあの伊吹の反応、あんまりそんな風には映らなかったけどなぁ。
……まあいいか。部活の邪魔になったらいけないし、今日はこれ以上はやめておこう。

第１００話，デレ期？いいえ、ツッパリです（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「ついに１００回目キターッ！」

伊吹「テンション高いわね……」

圭介「そりゃ１００回だぞ？　天下分け目だぜ？」

暮葉「けーすけ様、意味不明なのです」

圭介「……だって、１００回だぞ？」

凪紗「長すぎるぞ？」

圭介「……みんなもっと喜べよ！」

第１０１話，好きな人と力仕事とラッキー……？？？

それから数日後、遂に文化祭準備期間へと突入してしまった。
文化祭準備期間とは、前にも説明したような気もするが、とにかく文化祭の準備をする期間だ。
授業などはなく生徒が文化祭に向けて、ひたすら準備に取り組む。
毎年恒例、俺達遊ぶのが大好きな高２男子にとっては面倒くさい期間である。

「６やでっ！」

「７……っ！」

「はい黒やんダウト！」

「だぁぁぁぁちっくしょうっ！」

「黒やん相変わらずダウト弱いんやなぁ」

「こらぁ男子っ！　遊んでないで働きなさいよっ！」

カードゲームで遊ぶ三馬鹿に対して一喝が入る。
怖ぇ～。今の伊吹の顔は間違いなく鬼だったぞ？
――あの日から俺と伊吹の間には、なんだか気まずい空気が流れ続けていた。
伊吹の視線を感じて振り向き、そこで目が合うと必ず伊吹は視線を逸らしてしまうのだ。
なんてこったい。謝って関係を修復するつもりが余計ぎくしゃくしちまったよ……。

「圭介、国宗さんと何かあったのかい？」

「うわっ！？　ビックリしたぁ～なんだ重原か。まぁ、何もなかったと言えば嘘になるけど……」

「国宗さん。圭介の事を意識してないかい？」

「あ？　あの伊吹が？」

「そうだよ。恥ずかしそうに目を逸らすじゃないかい」

やっぱりそうなのか。伊吹がとうとうデレ期に突入したってのか？いやいやいや。その割にはツンな言葉しか聞いていないし、というか視線を逸らされるんだぞ？

これってつまり、目を合わせたくないくらい嫌ってるってことじゃねえの？

「わっかんねえなぁ……」

「ちなみにこれ大吾情報、国宗さんは昔から想い人がいるらしいよ？」

「へぇ～……まあアイツだって一応女の子だし、好きな奴の一人くらいはいるだろ」

その伊吹が好きなヤツって誰なんだろう？

なんだかムカついて嫌な気もするけど、それで伊吹が幸せになるなら応援しようかな。

まあ……相手が誰だかは気になるし、伊吹が誰かと付き合うって嫌

な気しかしねえけどよ。

「それが自分だとは思わないのかい？」

「あのなぁ！　万年非モテ男の俺が女子に好かれるわけねえだろ。増してや伊吹だぞ？　あれだけ冷たく当たられるって嫌われてる証拠じゃねえのか？」

まあ、完全には嫌われていない様子だが……それでも、少しは嫌われているかもしれないな。
特に今日は顔さえ合わせてくれないし。
ああ……どうしよう。伊吹と普通に話が出来ないって精神的に結構くるよ。

「俺でも気付く事に気付かないって……流石は圭介だよ」

「なんだよそれ？」

「いやいや気にしないでいいよ。それで圭介、圭介は国宗さんの事どう想っているんだい？」

「伊吹のことか？　そんなの幼馴染で大切な仲間だと思ってるよ」

「恋愛対象じゃないんだね？」

「幼馴染が恋愛対象ってのは、多分ギャルゲーとか二次元限定の話だと思うぞ」

現実の幼馴染が付き合うだなんて話、今まで俺は聞いたことがねえぞ。

事実、俺だって伊吹に対してそんな感情を持ってないし……多分。
とにかくだ。それは二次元だけの話だ。
現実（リアル）じゃそんな事はありえねえよ……多分。
伊吹は俺に言わせれば家族みたいな存在で、どうしてもそういう目では見れないんだ。
それに、恋人なんてすぐに壊れるかもしれない関係。俺はそれが嫌だな……。
伊吹とは今まで仲良しだったんだし、これからもずっと仲良しでいたい。
……やっぱり、俺ってある意味じゃ伊吹が好きなのかもしれないな。

「現実って退屈だねえ……それじゃあ木下さんはどうだい？」

「えっ……く、暮葉っ！？」

なななな、にゃんで暮葉しゃんなんでしゅかっ！
……っつか、なんなんだこの変な感じ？
一瞬胸に感じた違和感……どこか懐かしい感じの不思議な感覚。

「二人は校内スキンシップも余裕らしいし、大吾情報だと1年の廊下で抱き合って、1年の間では2人は付き合っていると思われているらしいよ」

「なんでやねんっ！　別に俺と暮葉は付き合ってねえよ。その……いとこだいとこ！」

確か俺と暮葉はいとこって設定だったハズ。
いとこなんだからスキンシップがあってもいいだろ。
そうだ、だから別に特別な意味なんて……第一、1年の廊下でのアレは事故だったんだ。

馬鹿な1年が暮葉に体当たりしたから、その勢いで暮葉が抱きついて来ちゃっただけなんだ。
暮葉は何とも思ってないだろうし、抱きついてくるのはいつもの事だ。
だから……別に特別な意味は。俺だって別に暮葉には……っ！

「もしかして圭介、木下さんの事が好きなのかい？」

「はい！？」

「まんざらでもない感じだねぇ」

「ふっざけんな！　俺はロリコンじゃねえよっ！」

俺はロリコンなんかじゃない。だから暮葉を好きになるわけがない。
俺は……女子高生が好きなんだ。暮葉は……アレだ、妹みたいなもんだ……ッ！
妹……でもなんでだろう。葵とは全然違うような……っ、ああもう！
余計なこと考えてんじゃねえよ俺！

「圭介も国宗さんに負けないくらいツンデレだね」

「うっせ黙れ！　そういうてめえはどうなん――――」

「ちょろっとそこの野郎共ぉ～！　力仕事手伝って～！」

「けーすけ様っ！　荷物の量が多いので手伝ってくれると助かるのですっ」

重原に叫ぼうとした瞬間、気だるそうな小坂と元気が暮葉が、俺達

に輜重兵（しちょうへい）として出兵しやがれと優しく迫ってきた。
力仕事かぁ。確かに女の子には厳しいよな。
暮葉は力があるほうだけど、小坂はあんまり力がなさそうだし……
何より二人とも女の子だ。

「暮葉も小坂も随分働いただろ？　俺ら今まで遊んでたんだし、だから力仕事は任せてくれ」

「もきゅ？　で、でもけーすけ様っ。結構な量なのですよ？」

「そーだよ？　圭くんの細腕二本じゃキツいかもだよ？」

「あのなぁ、こう見えても腕力には自信があるんだ」

悪かったなあんまり強そうな見た目じゃなくて。
そりゃ鏡で見たら自分でも思うよ。平均的すぎて全然強そうに見えないって。
けど、この拳で魔法使いや超能力者を倒した。永渕だってこの拳で倒したんだ。
それに――俺には強力な助っ人がいる！

「俺と圭介で全部やっとくから、２人は休んでても構わないよ」

とても爽やかな笑顔を浮かべ、レディーに対して優しく振舞う重原広敏くン。
彼は武道家でとっても筋肉質なのだ。
多分、いつも一緒にいる俺と大吾と重原の三人組の中じゃ、重原が最も腕力のある奴であろう。

「けーすけ様に重原さん……ありがとうなのです！」

「へぇ。日頃からそうしてれば圭くんもモテるのにねぇ」

「うっせ黙れっ」

なんでそんなニヤニヤしながら言うんですか。

あと暮葉。モテるって言葉を聞いた時、なんで不機嫌そうな顔になるんだ。

まあ、そんな事を気にしていても仕方がない。それよりさっさと仕事に行こう。

え～っと……小坂から手渡されたメモ帳を見ると、行き先は第一準備室か。

取ってくる物は……２－４と書かれたシールが貼ってある段ボールね。

さっさとブツを取って教室に戻ろう。廊下で生駒や野原には絡まれたくないからな。

――――と、いうわけで俺と重原は準備室前まで辿りついたのだが。

「う、ぐぁ……っ」

「どうしたんだ重原？」

「圭介……俺、トイレに行ってくる」

「えっ？　なんだよ、お前もしかして今日はあの日か？」

「馬鹿！　俺は男だい……まあお腹が痛いのは確かだね。１０分以内に戻ってくるからヨロシク！」

「あ、ちょ……オイ重原っ！？」

ダッシュすんの速ぇ～……。

まるでドイツのロケット戦闘機、ｍｅ１６３コメートが急上昇するかのようだ。

まあ、腹が痛いなら仕方ねえか。

とりあえず重原の負担軽減の為、一人で仕事をちゃっちゃとやっちゃいますか。

でもなぁ。あの筋肉男が使えないとなると、結構キイい仕事のような……まあいいか。

とりあえず、俺は任務を遂行する為にドアを開けて――――

「……えっ？」

「――――ッ！」

「ふ……藤島――ッ！？」

驚きの後に流れる沈黙。瞬間、２人の少女の顔が真っ赤に染まった。

そう、視線の先に――マンガみたいに着替え中の女の子がいたんだ。

一人は豊満な胸の持ち主で、なおかつクールなイメージのある明智。

明智は何故か片手に青系の男モノの衣装を持っており、近くには剣のようなものが置いてあった。

ちなみに下着の色は黒。ぶ、ぐ……やべえ、エロスな身体にエロスな下着で鼻血がでそう。

その隣で着替えていたのは生駒だ。美乳でスタイルのいい生駒は黄色い帽子を被っていた。

何の衣装であろう。ちなみに下着の色は白。なんとも生駒らしい……ってかヤバくねコレ？

とにかく言い訳をしなければ――――！

「こ、これはそのっ！　荷物を取る為にやったことで、決して邪な感情があったわけでは――――」

「ふ、藤島……やっぱり藤島はヘンタイさんだ……っ！」

「ちょ、違っ！　俺は紳士――――」

「クソ介ぇ～……くたばれエロ野郎ぉ～っ！」

瞬間、生駒のしっかり握られた拳が顔面に激しく突き刺さった。
鼻っ柱が折れる勢いの拳をモロに受け、俺は後方へ数メートルも吹き飛ばされた。
そして――俺は殴られると同時に壮絶なる悲鳴をあげてしまった……。

第１０１話，好きな人と力仕事とラッキー……？？？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

黒木「ちくしょ～羨ましい！　なんでテメェにラッキースケベがあるんだよ！」

圭介「うっせ黙れ！　どこがラッキーだよ、顔面殴られたんだぞ？」

黒木「それでもラッキーだろ！　女の子の下着姿を見れたんだぞ！？」

圭介「確かにそれは嬉しかった……だが、殴られるのはゴメンだ！」

黒木「馬鹿野郎！　殴られて感じるのが真の男だろ！？」

圭介「お前ドＭかよ！？　俺にそんな趣味はねえっ！」

第１０２話，主人公は修羅場を経験する運命

「うへぇ～……」

ちっくしょう生駒のヤツ。ホントに思いっきり殴りやがったな。
どうやらアイツは俺が心底嫌いらしい。くそっ、これが普通の人なら病院送りだぞ？
まあ着替えを見ちまったのは悪いと思うよ。でも、流石にこの仕打ちはねえよ。
やっぱ俺、生駒は苦手だ……ッ！
まあその生駒は明智にこっ酷く説教され、現在は――――

「うにゃあああっ！　ご、ごめんにゃさいナギちゃ～んっ！」

「全く。すみにゃんは陸上部で鍛えているんだ。藤島は素人なんだぞ？　ホントに気を付けろよ」

そっか。生駒があまりにも変態すぎるせいで忘れていたが、アイツ陸上部だったんだよな。
それはいいんだけど……。
陸上は俺が間違っていなけりゃ、ただ単に走ったり跳ねたりする競技だ。
そんな陸上部に所属する女の子が、なんでボクサーもビックリなパンチを出せるんだよ。
しかも生駒はニヤ厨のオタクなんだぞ？

「藤島っ！　すみにゃんがすまなかった……っ、その、怪我とかしてないか？」

「別に怪我なんてしてないよ。俺の方こそ着替え見ちゃってごめん……」

「き、気にするなっ。準備室で着替えていた私らが悪いんだ」

「ああ、ノックくらいすればよかった……」

でも、そのおかげで明智の破壊力抜群なボディーが。
生駒の美しいスタイルが……あかん、思い出しただけで鼻血が出そうだ。
やっぱ下着姿は全裸よりエロですな！

「うう……すまなかった、藤島……っ」

「明智、そこまで落ち込むなよ」

俺は一歩ほど明智に歩み寄った。なんかその……落ち込んでいる女の子は放っておけない。
何より明智は俺の友達だからな。うん、放っておくわけにはいかないぜ。
――というわけで接近し、慰めてあげようかな～と思ったのだが……。

「ちぇすとぉ～っ！」

「――ふぉがぁッ！？」

刹那、ゴン！とこめかみに激しい衝撃。
グラッと脳が揺さぶられ、視界がぼやけてフラフラとしつつも何とか体勢を整える。

ふぅ、俺の体質ってホント便利だ。脳震盪すら起こさず痛みさえも既に感じない。
そんな通常の状態になったからこそ、俺は誰に何をされたのか整理する事が出来た。
犯人は生駒である。生駒が飛び蹴りで俺のこめかみをやりやがったのだ。
おそらくは靴の踵の部分。あのあたりでこめかみを蹴りやがったのだろう。

「ちっ、角度が甘かったみたいだよ……っ」

「おぉまえっ！　今の下手すりゃ死ぬぞ!?」

しかもなんだよ角度が甘かったって。
コイツ……俺を殺す気満々じゃねえか――ッ！

「クソ介がゴキブリ並に丈夫だって、ナギちゃんから聞いたからだいじょーぶだよっ」

「明智っ！　お前余計なこと生駒に吹き込むなよっ！」

「うっ……すまん、つい言っちゃったんだ……っ」

「ああもう！　とにかく効こうが効くまいが、あんな攻撃を躊躇なく仕掛けるって……てめえは一体どういう神経してんですかっ!?」

「私の任務はすみにゃんを守ること！　害虫クソ介駆除は私の仕事だよ！」

あははは、ねえねえ俺さ……キレちまってもいいかな?

流石にそろそろ我慢の限界っすよ。
もうね、怒りを押さえるのが……そろそろ限界っす。
でもなあ。女の子にキレる男って情けなく映るだろうし。
やっぱ世の中理不尽。絶対現代は女尊男卑だ。ちくしょう誰だよ男女平等って言ったヤツは！

「いでっ！」

「すみにゃん！　藤島に乱暴するな、謝れ」

「うにゅ～だってナギちゃん……っ」

「謝れ」

拳骨までして俺に謝れと言う明智のあの姿……怖ぇ。
流石は明智光秀の娘。そして我が初芝高校の風紀委員。
正直ヤクザの組長よりも迫力があるかもしれん。
まあ、ヤクザの組長なんて映画でしか見たことないけど……。

「ごめんなさい藤島君……」

「えっ？　ああ、まあ……気にするな」

生駒の態度が１８０度も変わってしまうだなんて……明智、恐ろしい子！

「すみにゃんが本当に悪かった。私からもこの通りだ」

「いやいやいや、もういいから頭上げようぜ？」

「許して……くれるのか？」

「許すも何も怒ってねえからさ」

まあ、生駒に対してちょっぴり怒りを覚えてはいたが……。
ここまで謝られると、なんだか怒る気も失せてくる。
それに、生駒の扱い方がなんとなくわかった気がするよ。
生駒が暴走した時は――とにかく明智を利用すればいいんだ！

「お～い圭介ぇ～……ってあれ？　４組の明智さんじゃないかい？」

「ん？　おお、確か藤島の友達の……」

その時、トイレに立て篭もっていた重原が戻ってきた。
なんだよアイツ。明智の事知ってたのか。
そういえば……何度か顔を合わせている所を見た事あるかもしれん。

「俺は重原広敏、よろしくね」

「うむ、明智凪紗だ。こっちは生駒純奈、よろしくな」

「よろしくね重原くんっ♪」

う……ッ、生駒のヤツ、吐き気がするほどに猫かぶりをしているぞ。
本性を知ってる身としては、まあなんとも見ていて不快な……ッ！
後で重原に教えてやらねえとな。生駒純奈という人物の本性を、純奈だけに隅から隅まで。

「それじゃあ、そろそろ仕事を再開しようか」

「おう！　んじゃあ明智も生駒もまたな」

「仕事頑張るんだぞ二人とも」

「圭ちゃんに重原くん！　まったねー！」

うおあああああっ！やめろ、やめるんだ生駒。
猫かぶりするのもいい加減にしてくれぇ～！
それにして生駒のヤツ。圭ちゃんなんて呼び方よく覚えてたな。
まあいいや。それよりさっさと仕事を片付けよう。
……うげえ、とんでもねえ量だなダンボール……やっぱ筋肉重原がいてよかった。
ちなみに、明智達のクラスではステージをやるらしい。
その内容はロミオとジュリエット。明智がロミオで生駒がジュリエットらしい。
……ダメだな。ロミジュリは俺的にやっぱ律澪だっ！

――――放課後、っと言っても帰れるわけではない。
放課後はクラス展示やステージ発表などの準備に加え、部活や有志の準備や練習が行えるのだ。
我が写真部も例外ではない。今日は当日活動に向けた打ち合わせがあるのだ。
ただし、部員全員参加というわけでもなく、それに部員全員が参加できるわけでもない。

「申し訳ないのですけーすけ様……拙者はその、クラスのほうが忙しくてっ」

現に暮葉はクラスのほうが忙しいらしく、今回は写真部に顔を出せ

ないらしい。

「大丈夫だよ。俺の方こそクラスは手伝えねえけど、まあお互い頑張ろうな！」

「はい！」

「暮葉～！　ちょろっとちょろっと！」

「はいはい今行くのですっ！　それじゃけーすけ様、また後で会いましょうっ！」

「わかった、お前も頑張れよ」

こうして小坂に呼ばれ、暮葉は教室のほうへと向かったのだ。

暮葉が部室に来ない……か。なんだか残念な気分だなぁ。

まあ、仕方ねえか……文化祭は皆それぞれ忙しいもんな。

「栄（ロン）！」

「く、黒やんがあがった！？」

「黒やん、麻雀は強いんやで～。黒やんが金旭中の番長の頃は、賭け事は黒やんの得意な麻雀以外は認められなかったんや」

「ちょ！　赤佐テメェ変な事言うんじゃねえっ！」

「ちょっとあんたら！　いい加減にしないと竹刀でシバくわよ！？」

まあ、中には遊んでいるヤツらもいるが。

そして伊吹にお説教されているのだが……伊吹、一体いつになったら顔を合わせてくれるのかな？
ていうか、やっぱり俺が謝らないと。でもこれ以上謝るなって言われてるし。
いやいや、でも昨日のアレと今のコレは話が違うだろうし。
……やっぱりいやだな。伊吹に嫌われるって……。
まあ悩んでいても仕方ないし、とりあえず部室に行こう……。

――――写真部の部室。一見ただの狭い教室だが、意外にも機材などは揃っているのである。
そういえばこの部室に入るのも、青山さんの一件が終わってから初めてだな。
つまり、その間一切青山さんとは会っていないわけで……元気にしてるかなぁ青山さん。
いや待て。そう言えばあかりも写真部で、俺はそのあかりに告白されたような気が……。
どうしよう！もしあかりが部室で堂々と言ってみろ？

【藤島君も所詮はリア充……失望だよ、退部確定だ！】
【先輩……わたしがいながらひどいです……っ】
【お兄ちゃんサイテー！　何人落とせば気が済むの！？】

やがては暮葉達にもバレて……。

【けーすけ様……拙者が必死で働いている間にそんな事を……？】
【し、死ねばか圭介っ！】
【へぇ～？　あたし的にはおもしろい展開になってきたかな？】
【流石ヘンタイ。藤島、お前には失望したぞ】
【さすがクソ介、マセてんな】

嫌ァァァァァァァァァァァァァッ！
人生が終わる――あかりが下手な事を言えば人生が終わっちまう！
野郎共も強敵だが女子陣も強敵だ。
何故か俺の友達は……他の女子と仲良くしていると機嫌を悪くするどころか、突然蹴ったりひどい事を言ったり……とにかく、最近みんなが何故か厳しいんだ！

「落ちつけェ～考えろ。なんとか生存ルートに突入する方法を考えるんだ……ッ！」

ここはギャルゲーマーとしての意地の見せどころ。
無難に死亡フラグを回避しつつ、なんとか生存フラグを回収していくんだ。
その為にはまず何をすれば。いや、どうやってあかりを口止めすれば――――

「あ、圭介っ！　やっぱりここにいたんだ！」

「――ッ！？」

出たァァァァァァァァァァァッ！
火種を撒き散らす可能性のある存在――浅間あかりが！
さらに、部室のドアが不意に開かれ。

「あっ、先輩とあかり……よかった、約束通り来てくれたんですね……！」

瞬間、俺攻略を掲げる青山さんまで入場してきました。
どうする……俺。この修羅場をどう切り抜ける――！？

第１０２話，主人公は修羅場を経験する運命（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「今回はお悩み相談コーナー！　俺と暮葉が皆の悩みを解決するぜ！」

暮葉「まず最初の一通は……○○県Ｉ市在住Ｒ・Ｉさんのお悩みなのです！」

『レナには好きな先輩がいます。でも先輩はバイト先に住んでいる人と付き合っています。でもレナは先輩を諦められません。そこで先輩を寝取る方法をレナに教えてください』

圭介「なるほどＮＴＲってわけか。確かに好きな人に恋人がいちゃ辛いよな……けど寝取るのはダメだと思うぞ？　その人の彼女さんがどれだけ悲しむか、自分が先輩を寝取られたらどんな気持ちになるか。それを考えるとやらねえほうがいいと思う。それよりＲ・Ｉさんは多分若いんだから、もっといっぱい恋愛を経験してその先輩よりいい男を探しなさい！」

暮葉「けーすけ様……くさいけどいい事言うのですね！　さてお次は○○県Ｋ市在住Ｔ・Ｆさん！」

『不幸です、よく不良に絡まれます。教師に変な因縁つけられます。あと最近彼女がヤンデレで怖いです。悲劇じゃ……助けてください

！』

圭介「なにこのリアル上○さん？　こんなヤツホントにいるんだな……不良に絡まれたらとりあえず逃げろ！　教師に因縁つけられたら一方○行になれ！　ヤンデレ彼女は……まあ、浮気しなけりゃいいんじゃないか？」

暮葉「もきゅ、けーすけ様の言葉がＴ・Ｆさんの力になる事を望むのです、さて最後次は○○道Ｓ市在住Ｓさん！」

『小説の時間が進まなくて悩んでます。まだ４月から始まって１０２話の時点でまだ夏休みに入っていないだなんて……あと、睡眠不足が響いて指が進まず執筆速度が低下して……あと、身体が鈍ったもんで正拳突き練習やったら腕がだるいです……たったの１００発（空手じゃ基本）ごときで……ッ！』

圭介「いい加減にしろ作者ァ！　あ、言っちゃった……」

暮葉「もきゅ、Ｓさん運動不足なのですね……」

第１０３話，準備（？）――ｉｎ部室

写真部の部室。今のここに部長である浅間英樹の姿は無い。
俺と青山さんとあかりだけだ。
２人によると、浅間部長はクラス委員なのでクラスのほうが忙しいらしい。
おいおい浅間部長。アンタあれでもクラス委員だったのか。
そして葵も似たような理由で忙しいらしく、時間通りに集合できたのはこの３人だけらしい。

「つか、招集かけたの部長だよな？」

「は、はい……部長です……っ」

「ったくうちのエロ兄貴は。ちゃんと時間を守れよな！」

あかりは兄貴のルーズさにお怒りのようである。
まあ、人様を呼んでおいて呼んだヤツがいないってのは、俺もあかり同様ムカついてますけどさ。
どうせ浅間部長だし……もう、あの人の場合は怒っても仕方がない気がするよ。

「部長がいない事には何も始められないし、雑談でもゲームでもして時間でも潰さないか？」

「おっ！　圭介ナイスアイデアだなぁ！」

「わ、わたしも……先輩の案に賛成です……！」

案の定、２人が俺の提案に乗ってくれた。
フフフ……いいぞ。これはいい展開である。
ここで説明しよう。俺の死亡フラグ回避作戦要領を！
まずは俺から適当に話を振って二人に乗ってもらうんだ。
続いて恋愛のお話……つまり、恋バナというヤツに発展しないように気を付けて話を進める。
そして雑談している間に浅間部長が来るハズだ。浅間部長が来れば部活の話になるだろう。
そして――部活が終われば真っ先に部室を出て、俺は暮葉達がいる教室へ向かう。
ぐっふふふふ……見よ！この完璧の作戦。これで俺は死なずに済むぞ！

「よ、よぉ～し……そんじゃあ何の話する？」

「あの……っ！　その前にその……し、失礼します……っ！」

「いぃっ！？」

「なっ！？　ち、千早――ッ！」

これは予想外の展開。なんと青山さんが椅子を持ち、立ち上がったと思いきや俺の隣に椅子を置き、なんと肩に凭れかかってきたのだ。
おいおいやべえぞ……こんな自体は予想もしていなかった！

「あのー青山さん？　こいつぁ一体どういう事で？」

「えへへ……先輩はわたしの彼氏なんですよ……？」

「待て！　ちょ～っと待て！　何かぶっ飛んでやいないか！？」

「気のせいですよ先輩っ」

こんなにも早く修羅場が訪れるとは思ってもいなかった。

あかりが対抗心をむき出しにしているぜ。歯を食いしばり力強くこちらを睨みつけている。

「ち、千早ぁっ！　今すぐ圭介から離れろよな！」

「え……？　なんであかりが怒るの……？」

「……ッ！　と、とにかくどけよな！」

「いいじゃん。わたしのこと……応援するって言ったよね……？」

「言ったけどダメなんだ！　……ああもう仕方ない、こうなったらあたいも――――」

その時、あかりまでもが俺の肩に凭れかかってきたのである。

あまりの驚きに思わず情けなく声をあげてしまう。

右方のあかり。左方の青山さん……。

そりゃあ当然嬉しい事は嬉しいよ。女の子の感触、匂い、そして温もり……。

すべてが男である俺の心を満たし、同時に純粋かつ邪な欲望を生み出しつつある……ってダメだろ！

もしこんな所でエッチなイベントが発生し、誰か見られたら……俺の学園生活は破滅だ――――！

「二人とも、肩が重いんだが……」

「……ごめんなさい先輩、キスのほうがよかったですか……？」

「いや、そういう問題じゃねえから！」

「そうですよね……先輩は男の人、エッチなことがしたいんですよね……」

「ちぃぃぃがぁぁうぅぅぅ！　いや、違わないけど違うんです！」

「わたし……先輩が相手なら、いつでも来いですから……っ」

「青山さん！？　もっと自分を大切にしようね！」

これまた予想外だったぜ……青山さん、まさかここまで積極的な子だったとは。

これもアレか。俺が青山さんを家から解放して自由にしたせいなのか？

いやいやそんなハズがない。俺に告白して心を広いただけなんだろう。

でも――心と一緒に股は開かんでもいいわ！

「圭介！　千早が好きじゃないんなら誰が好きなんだ。いい加減ハッキリ教えろよな！」

「あのなぁ……特に好きな人はいないぞ？」

「……そうなんですよ、先輩……困ったちゃんなんです。だから……わたしは先輩に好きになったもらう為なら……先輩の望む事をな

んでも――」

「ってなんで制服に手をかけるの!?　どうして服を脱ごうとするんですか!?」

しかも着替える女子ってなんかアレだよね。ぶっちゃけ全裸よりヤバいよね……ッ！

「千早、ただのビッチだな！」

「違うよあかり！　先輩も誤解しないでくださいね……わたし、こんなこと先輩にしかした事ありません……っ！」

「いや、そりゃわかってます……」

青山さんは中学生の頃から俺を想っていたらしいし、なんだかそれが初恋っぽいし。

とっても純粋な子……だったハズ。うん、今は白〇黒子もビックリな変態淑女だけど。

でもきっと……今がオカシイだけなんだ。

恋というウイルスに毒され、マトモに思考ができないだけなんだ――！

「圭介！　千早が好きじゃないんならもっと手厳しくしろよな！」

「そう言われてもなぁ……」

このベタ惚れ状態の女の子を突き離せと？

そりゃあそうしないと面倒なのはわかっている。でも、流石にそこまで心を鬼には出来ねえし……。

「あかり……わたしの事、応援……してくれる約束だったのに……っ」

「そ、そうだけど……でも千早は進み過ぎだ！　恋愛はもっと順序を踏めよな！」

「経験ないくせに……」

「っ！　ち、千早だって圭介が初めてだろっ！」

な、なんか俺の目の前で女子同士の喧嘩が始まっちゃったんですが。こりゃあ男として止めるべきか。それともしばらくさせておくべきか。

う～ん……なんせ恋愛絡みの喧嘩だからな、判断に苦しむぜ……。

「……あかり、すごく必死だね……っ」

「あたりまえだろ！　あたいは千早が大事なんだ、だから千早には間違った道を歩んでほしくないんだ！　圭介との交際なんて絶対間違ってるんだからな！」

あかりは応援するのかしないのかどっちなんだ？

って、応援したいわけがないか。応援する＝ライバルがさらに強くなるって事だしな。

多分、あかりも俺が――

「あかり……その、先輩の事……好きなの？」

「――ッ！　そ、そんなわけないだろ！　吐き気がする事言う

なよな！」

「ぐはっ！　は、吐き気……」

そんな。まさかあの時俺の名前を呼んだのって……幻聴？
ハハハ……ですよねー。そういえば忘れていたよ。
あかりは最初俺を嫌っていたんだ。
好感度はマイナスだったのが最近０になって、ようやくプラスになり始めて……。
フフフ、あかりも伊吹みたいなものか。デレ期なんて来るハズがない――――！

「あ……け、圭介違う！　今のは違うんだからな！」

「せ、先輩……っ！　その、元気出してください……わたしは先輩のこと大好きですから……っ！」

「……どうしてこんなことになったんだろ？」

こんなカオスな状況……ハハハ、もう笑うしかねえや。
アハハハ……なんだろう、この妙な虚しさは……。

そして――完全下校時刻となり、俺はただいま一人で下校中であった。
暮葉と伊吹は小坂に拉致られ、部活のメンバーとも部室でお別れ……と言うか逃げてきた。
結局、あの後気を落としたあかりを慰め、青山さんの暴走もなんとか止め、部室が落ち付きを取り戻した所で浅間部長と葵がやってき

て、それでようやく打ち合わせが行われたのだ。

「しかし……」

この状況がずっと続くのは流石にダメだな。
早く終止符を打たなければ。
その為には2人のうちどちらかと付き合うか、2人以外の誰かを彼女にする。
あるいは――もう高校での恋愛は諦めて、とりあえず純粋を保っておくか。
三番目は無理っす。青春に燃える高2男子にはキツすぎる。
じゃあ二番目……困ったことにあの二人を友達以上として見れないんだよ。
好きだって迫ってくれるのは嬉しいが、俺がこんなに半端な気持ちじゃ付き合うのはダメだろ。
失礼極まりないし、そしていつかは本気じゃない為に傷つけてしまうかもしれない……。
とにかく、片方でも中途半端な気持ちを持ってんなら、お互いの為にも付き合いたくはない。

「……なんて言ってもなぁ」

そういえば、高1の頃のクラスメイトに同じ事を言った時かな。
お前は考えが堅すぎる。そんな事じゃいつまで経っても彼女が出来ない……って言われたな。
俺……そんなにお堅い考えの持ち主なんだろうか。

「……とにかく、このままじゃダメだな」

現状が一番ダメなんだ。だから――早く現状に終止符を打たなけれ

ば。

……こうして準備一日目が終わり、二日目三日目も順調に準備が進み。

――木曜日、文化祭一日目が訪れた。

第１０３話，準備（？）――ｉｎ部室（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

凪紗「ふぅ、やっと文化祭か。ようやく私の出番がありそうだな」

暮葉「明智殿は文化祭で何をされるのですか！？」

凪紗「私はステージでロミジュリをやる。ちなみに私はロミオ役だ」

暮葉「すごいのですね！　拙者、必ずけーすけ様と一緒に見に行きますね！」

凪紗「う、うん……藤島が来る……うん、頑張る……っ！」

生駒「暮葉のクラスは何するの？　クソ介が馬のアニマルマスクを付けてハイポーションでも作るの？」

暮葉「もきゅ！　作りませんよそんなもの！　拙者達は喫茶店なのです！　そしてけーすけ様が女装しちゅうんです！」

圭介「誰が女装なんかするかぁ～～～～っ！」

※圭介が女装するかは、それは当日のお楽しみ☆

番外話，作者による馬鹿なキャラ紹介　メインキャラ編！（前書き）

どうも、今回は夏の感謝祭企画！
キャラも増えたので、ここらでキャラクターを一挙紹介したいなーと思います！
途中作者のおバカ主観や、完璧作者の妄想であるイメージ声優まであったりなので、そういうのが苦手な方はご注意ください。

それではどうぞ！

番外話，作者による馬鹿なキャラ紹介　メインキャラ編！

・藤島圭介（ふじしまけいすけ）

イメージＣＶ：阿部敦（上条当麻、相馬空海など）？

初芝高校２年４組在籍。

身長１７２ｃｍ、体重５９ｋｇ、８月生まれ。

この物語の主人公。

一人称は【俺】で外見上の特徴と呼べるものはあまりないが、どうしても治らない寝癖がピンと立っててアホ毛みたいになっている。それが多分唯一の特徴っぽい。親が共働きで滅多に帰ってこない為、現在は妹の葵に加えて居候の暮葉と三人生活。

全く家事が出来ず、家ではいつもゲーム（主にエロゲー）をプレイしているが、焼きそばだけは作るのが得意である。馬鹿の部類だが、進学校である初芝に入れるだけの学力はある。初芝に入った理由は単に伊吹と離れるのが嫌だったからしい。

トラックに轢（ひ）かれ、高高度から落下しても死なない丈夫な体を持っており、過去に伊吹を守る為に奔走していたこと。最近は魔法使いと戦っていたせいか喧嘩慣れしていており、実力も。

本人曰く「一度に倒せるのは三人くらいまで」らしい。

それでも彼の相手である魔法使いは基本的に身体能力が低く、仮に高い相手と戦っても持ち前の防御力のおかげか、最終的には勝利に持ち込む事が多い。

実は革命で失脚したロジーナ皇太子だったアレクサンドルの子孫で、暮葉曰くその能力や体質が先祖返りしたもの。身体が丈夫な理由も、怪我をした時の回復力も異常に高いのもその影響。しかも、【敵を倒す】と念じながら女の子とキスをすると、爆発的なパワーを手にする事が可能。

解除時の力は聖人と精霊の二つの力を持つ、二重の意味で聖人であるサラマンダーと互角以上。

一方で弱点は攻撃手段が素手しかない事。リミッターを解除するにはパートナーが必要な事。そして何より水が怖い事である。

性格的には優しくて面倒見がいいが、多少感情的で口も時々不良並に汚い。

だが精神的に弱い部分もあり、何か事件、特に伊吹絡みだと自虐的になる事が多い。

一応常識人なのでポジション的にはツッコミだが、エロの方面ではボケに回る事が多い。

いわゆる性欲豊富な変態さん。女の子にセクハラ的な発言をする事もあるが、本人は『変態という名の紳士』であるとアピールしている。

重度のオタク趣味を持っており、もう深夜アニメどころかエロゲーにまで手を染めている。

彼女いない歴＝年齢で当然彼女が欲しいとは思っているが、当の本人が恋愛に関しては鈍く、数多くの女性に好意を寄せられてもあまり気付かない。

本人曰く友達も少なく嫌われ者。実際途中までは永渕との一件でかなり嫌われていたが、最近は見直されている様子。あとモテないらしいけど、どう見てもハーレムです本当にありがとうございました。

ちなみに部活は2年の途中から写真部に入部。

また水恐怖症であり、海やプールは苦手で当然泳げない。

暮葉に好意を抱いており、隙を見れば攻略しようとしているが、妨害が入って中々成功しない。

まあ……良くも悪くもありがちな主人公キャラ。

・木下暮葉（きのしたくれは）

イメージＣＶ：伊藤かな恵（佐天涙子、エルシィなど）
初芝高校２年４組在籍。アルファ隊所属。
身長１４６ｃｍ、体重３７ｋｇ。６月生まれ。

某エロゲーに影響されて誕生した本作のヒロインの一人。
豊臣秀吉の子孫、綺麗なベビーピンクのセミロングにピンと立ったアホ毛、琥珀色の目に色白で小柄な身体を持つ戦国系魔法少女。
異世界【レムリア】の【ロジーナ】出身。ちなみに御先祖様は豊臣秀吉（自称）。
アレクサンドル皇太子の子孫である圭介を、【サヴィエト亡命政府】から守るべく藤島家に居候することになり、その上日本人に成りすまして高校にまで通っている。部活は圭介同様写真部。
なんか、アルファ隊が怪しげ（秘密☆）な手続きをして誤魔化しているらしい。
性格的には明朗快活で人懐っこく、小動物のような愛嬌を持っている。見た目通り子供っぽいところもあり、要するにアホの子である。
学校では人気者らしく、男からも女からも愛でられている。
圭介の護衛任務と言いつつも、藤島家では結構ぐーだらしているようで、圭介曰く『ニート予備軍』との事。背が小さい事と貧乳である事を気にしており、その事を指摘されると激怒するらしい。
戦闘能力が非常に高く、得意な剣術と未熟ながらも強力な風の魔法を掛けあわせ、特に彼女の必殺技である『天神無双木下流“天下統一”』は、サラマンダーさえも評価するほどのもの。
使用武器は一期一振という有名な日本刀。一応魔法少女だが、魔法が苦手で一度使えば周囲に甚大な被害をもたらす。だが全く使えないわけではないようだ。一応風系統の魔法を使える。
さらに魔力を感じ取れる為、何かと圭介に頼られている。

圭介に好意を抱いていおり、最近ようやく自覚した様子。
読者様には結構人気キャラらしく、作者も扱いやすい上に可愛いから大好きなキャラの一人です。

・国宗伊吹（くにむねいぶき）

イメージCV：斎藤千和（フランチェスカ・ルッキーニ役、暁美ほむら役）
……いや待て！青葉りんごのほうが（ｒｙ
初芝高校２年４組在籍。
身長１５１ｃｍ、体重４０ｋｇ。１６歳、９月生まれ、Ａ型。

（多分）圭介がだぁ～い好きだが、何故かいつもツンツンしている幼馴染。
銀髪のショートヘアやツンとした紅い瞳が特徴的で八重歯が目立つ極上の美少女。また黒リボンを好んでつけている。
あまりにツンばっかりな態度なせいか、圭介に【ツッパリ伊吹ちゃん】と呼ばれているが、本人にそれを言うと殴られるので気をつけましょう。
幼い頃母親が薬で捕まり、その後父と母は離婚。そのせいか周囲から無視、あるいはいじめられ続けてきたが、そんな中圭介や葵だけが彼女と仲良くしていたらしい。
圭介曰く、中学１年の頃までは素直だったらしいが、中１の頃に永渕にレイプ未遂に遭う。以降もう暴漢に襲われない為か、あるいは弱い自分を隠すためか、急にツンデレになっちゃったんだとか。
とっても強気だが、少しでも折れると誰よりも繊細で弱々しい女の子。
いつも助けてくれていつも一緒にいてくれる圭介に対し、恋愛感

情を抱いている様子だが、素直になれない上に圭介にも「伊吹がデレるわけがない」と思われている……なんだか可哀想な子。
そんな彼女も圭介の事以外になれば普通の女の子で、剣道部では部長を通り越して実力Ｎｏ１。
交友関係も良好で友達も多い。普通にモテるが告白は全て断っている（多分圭介が好きだから）。
焼きそばが大好きで、そのせいで圭介が焼きそばだけ得意になったらしい。
背が伸びない上に胸が全然大きくならず、その事で悩んでいる。
作者的に一番好きなキャラ……というか俺の嫁（オイ！）。
読者からの人気も高いようで、ぶっちゃけ伊吹ルートが書きたいのですが……どうしよ、皆さんはどうでしょうか！？

明智凪紗（あけちなぎさ）

イメージＣＶ：小清水亜美（シャーロット・Ｅ・イェーガー、麦野沈利など）
初芝高校２年３組在籍。
１２月生まれ。１７歳、身長１６５ｃｍ、体重４６ｋｇ。

黒髪の長いポニーテールにツンとした蒼い瞳。姉御口調で喋り一人称は『私』。
容姿端麗、頭脳明晰、御先祖様は明智光秀。クールな雰囲気だが時々女の子な初芝の風紀委員。
昨年まで佐井学園開発科に通っていたが、古宇坂市へ引っ越しこの春より初芝高校に通っている。
豹変した父、光雄に頭を悩ませ仕方なく暮葉に勝負を挑み、何故か圭介と対決するが敗北。その後三人がかりで光雄（光秀）と戦い、

彼女が圭介にキスをしたおかげで何とか勝利する。
実は超能力者で発火能力者（パイロキネシスト）。その能力自体はバレーボールくらいの火の玉を投げたり、２ｍの炎剣を作りだしたり、本気を出してもかめはめ波のように放つ事くらいしかできない。
ただし身体能力が高いため、肉弾戦と併用して能力を使用している。戦闘力は作中でも高いほう。
だが発火能力は弱点が多く、悠との一戦では酸素濃度を操作され、炎を消されてしまった。
スタイル抜群の巨乳で、それはスミ水を着た時に圭介が鼻血を噴くほどらしい。
交友関係も良好。特に純奈とは親友と呼べるほどだが、純奈のレズっぷりに本人は困惑している。
真面目で教師達からも一目置かれており、発言力も高くそのおかげで圭介の学校生活を救った事も。
圭介の事は友達……と思っている様子だが、どうも好意を抱いている様子があるっぽい。
あまりクール系キャラを書かない作者だけど、読者には好評でもっと活躍して欲しいとの意見も。
超能力者であることと、過去のことから一番短編が書きやすいかも。

・浅間（あさま）あかり

イメージＣＶ：：野水伊織（ハルナ、ニンフなど）
初芝高校１年３組在籍。
身長１４５ｃｍ、体重３８ｋｇ、４月生まれ。

輝くようなだ橙色のツインテール、ツンとした紅い瞳を持つ美少

女。

一人称は『あたい』、やんちゃな性格で正義感が強い。

そんな性格からか、圭介の悪い噂を聞くと友達を守る為に圭介に喧嘩を売る。その後も険悪な関係だったが資金不足の一件以降、彼の事を見直して徐々に仲良くなっていく。

今では恋愛感情を抱いており、遠回しに告白もしているが、本人は口では否定しようとしている。

頭が致命的に悪く、初芝に入れたのも奇跡としか言いようがないらしい。

先述の通り正義感が強いが、後先考えずに行動に移る事が多い為、思わぬ所で失敗することがある。

とても強気だが、一度折れるとツンデレ娘のように脆い。

家庭の事情でかなり厳しい生活を送っているが、普段はそれを感じさせない雰囲気。しかし一度過労によって倒れてしまい圭介の世話になってしまう。

交友関係は良好。葵や千早とは親友と呼べるほど仲が良く、暮葉ともそこそこ仲がいい。

反面兄貴や弟には手厳しく、特に兄貴の事を【馬鹿兄貴】【エロ兄貴】と軽蔑している。

圭介に対しては、出会いの頃こそ勘違いによって彼を嫌ってはいたものの、彼の行動によって彼を見直すようになり、やがては好意を抱いて告白にまで乗りだしたが、フラれてしまった。本人は諦めて今後も友達でいようとしているが、反面彼を諦めきれていない様子も見受けられる。

馬鹿だが部活とバイトを両立している、結構すごい子なのかもしれない。

最近人気が出てきた様子。このキャラ紹介を機にもっと人気が上がればな～と思います！

・青山千早（あおやまちはや）

イメージＣＶ：花澤香菜（千石撫子、天使　／　立華かなでなど）
初芝高校１年３組在籍。
身長１５７ｃｍ、体重４５ｋｇ、１１月生まれ。

控えめな性格だが、その容姿から男子にはモテモテ。ただし当の本人はその状況に困惑している。
圭介が嫌われている事情や本当は優しい人だと知っており、密かに想いを寄せていた。
圭介が暮葉と一緒に写真部を訪れた時、初めて彼との会話を交わす。
将来は写真家になりたいと思っており、その為にあまり好きではない浅間部長のいる写真部に所属している。前述の通り、控えめな性格ではあるが意外と発言はストレートであり、浅間部長に対する文句はいつも圭介達以上にキレがいい。最近デレ期に突入し、圭介に告白したが積極的にアプローチ中。
実は由緒正しき旧家の出身で、所謂箱入り娘である。部活動に励む事すら特例とされており、一時は転校させられそうになるが、圭介によって阻止され初芝に留まる。
交友関係は良好。あかりや葵とは親友と呼べるほど仲が良く、暮葉ともそこそこ仲がいい。
だが、最近は圭介を巡ってあかりと抗争状態に突入（？）。
さらに圭介を振り向かせようと、最近はエロネタに走るなどキャラ崩壊が激しい。
作者的にはもっと人気が出て欲しいな～というキャラだったり。
この紹介＆これからのデレ青山さんが人気出ればな～と思います！

・藤島葵（ふじしまあおい）

イメージＣＶ：阿澄佳奈（種島ぽぷら、橘美也など）
初芝高校１年３組在籍。
身長１５５ｃｍ、４４ｋｇ、誕生日５月５日。

ショートカットの水色の髪にちょこんと可愛らしいサイドテール。またその髪には二つ鈴がありそこからは黄色いリボンが靡いている。そしてその無邪気そうな顔が特徴。
圭介の妹で、見た目通り人見知りなどは一切しない社交的な性格であり、友達は多いようだ。
ブラコンで圭介が大好き……というか病気レベルの感情を抱いており、圭介と肉体関係を持ちたいとすら思っている様子。もちろん、他の女子と圭介が仲良さそうにしていると不機嫌になってしまう。
根はしっかりもので両親不在の中、家事などしっかりやっている。勉強も得意で高校３年の内容までならほとんど覚えているくらい、学年どころか学校全体でも三本指に入る学力を持つ。
身体能力は中の上くらい。ただし護身術を習っていた事があるので不良一人なら撃退できるらしい。
趣味は兄の影響を受けてかなりの二次元ラブ、特に兄妹（義理もアリ）で恋愛する話が好きらしい。
それと同じくらい兄の観察が好きで、兄の趣味や行動、性癖などかなりの部分を把握しているらしく、圭介の初恋の人の名前等、圭介の弱みも数多く握っている。
また楽しい事も大好きで、人（主に圭介）をからかうのが大好き。ニヤニヤする話も大好き。
料理が壊滅的に下手で、味はいいものの見た目がグロテスクになってしまう。
作者的には「これサブ？　ヒロイン？」と悩みましたが、一応彼女もヒロインにいれました！

・早川悠（はやかわゆう）

イメージＣＶ：岡本信彦（一方通行（アクセラレータ）、烏丸与一など）

一応佐井学園の生徒（退学志望）

身長１６８ｃｍ、体重不明（軽い）、誕生日不明、年齢も不明（一応高校生）。

本作のもう一人の主人公。

肩のあたりまで伸びる白髪に紅く染まった瞳、白い肌でホストのように整った顔を持つ。

その正体は超能力者の中でも頂点に立つ存在。大変弱々しい外見をしているが戦闘能力は高い。

学園の依頼で特異点潰し（異世界人殺し）をやっていた。その理由は佐井学園を辞める為に、佐井学園から出された条件をクリアする為。本人は今すぐにでも汚れ仕事から離れたかったようである。

しかし汚れ仕事を続けてきたためか、人格は破綻寸前でかなり気がふれている。

人を殺す事に何の躊躇いもなくなっており、普段はクールだが戦闘時には必ず虐殺的な笑みを浮かべるている。

特異点潰しを続けていたが圭介に敗北した為、それを中止してしばらくは街の不良から物を奪って生活。その後ミネットと出会い、良心が完全に消えていなかった為に彼女の救出に向かう。

しかし銃撃され重傷を負う。医者曰く脳にダメージを負ったのでほぼ確実に後遺症が残るらしい。

大気そのものを自由自在に操作するという『大気操作』を持ち、暴風を吹かせたり風の力で自ら飛行したり、さらには大気中から成分の濃度を操作したりもでき、その気になれば可燃性のガスを集め、

爆発させる事もできる。【暴風の膜】という風を利用した防御も可能。

気圧操作や大気中の分子運動の操作まで可能。空気中の酸素濃度を下げる事が出来るほか、三原との戦い以降、謎の【噴射する黒翼】を発現。世界最高クラスの科学者でもある三原の頭脳でも、全く理解不能な新たな法則の塊のような能力で、三原や久我を一瞬にして消し飛ばし勝利している。

最強に恥じない能力の持ち主だが、反面身体能力が低いので単純な殴り合いは大変弱い。

その事が圭介との戦いでの敗因となった。

さらに、陳との戦闘で脳にダメージを負って以降は、魔力エネルギー変換機による恩恵を受けなければ超能力を使うどころか、満足に歩く事さえ出来ない身体になってしまった。

機械に頼れば今まで通り能力を使う事が出来るが、制限時間は１５分程度。ただしザスローン入隊後は技術部の努力により、制限時間が３０分に延長されている。

登場はかなり遅かったのに、本来の主人公である圭介より人気っぽい。

やっぱり一方通行効果であろうか。

ミネットには甘いので、そのうちロリコン扱いされる日も近いかもしれない。

ちなみに性別不詳なのでミネットによる女の子説アリ。

・ミネット・ローラン

イメージＣＶ日高里菜（打ち止め（ラストオーダー）、香椎愛莉など）

アルファ隊所属、暮葉の後輩らしい。

身長１４２ｃｍ、体重３８ｋｇ。ちなみに１４歳。

悠曰く「小柄だけど大体中学生くらいか。女の瞳は綺麗な緑色で、澄んだ水のように明るく淡い青色のツインテールはどこかの外国人の風貌を感じさせる」外見らしい。

アルファ隊の一員で、いかにも魔法少女といった外見をしている。暮葉などの魔法少女が魔法少女らしかぬスタイルである中、ある意味この子が一番タイトルにピッタリ合う子なのかもしれない。

魔族と戦闘中に悠と出会い、彼と一夜（いやらしい意味ではない）を過ごし、その翌日に陳との戦闘で苦戦するも、殺されそうになった所を悠に助けられる。命を賭けてまで自分を救ってくれた悠に感謝の気持ちと同時に、意識のない彼の唇を奪った事から好意のようなものを抱いている様子。

以前は一応悠の事を仲間の仇として恨んでいたが、同時に彼の気持ちも理解しており、完全には恨み切れなかったらしい。だからこそ悠に対して優しく接していたんだとか。

悠の事を男……だとは思っているが、時々性別不詳な悠が女ではないかと思う事も。

水系統の魔法が得意で、サラマンダー戦ではブーメラン状の水魔法を行使していたほか、【清い水】を利用した回復魔法も得意な様子。

性格は明るく元気で、純粋すぎて悪を知らない雰囲気。悠曰く「ガキっぽくて単純」との事。

登場直後から人気者なキャラクターで、作者も大好きなキャラの一人です！

イメージＣＶ？早川が岡本ときたらやっぱり彼女は……ねぇ？

日高里菜こと、ヒダカリちゃんと作者は同い年――いやなんでもないっ！

・リーネ・ディートリッヒ
イメージＣＶ：田村ゆかり（高町なのは、古手梨花など）
身長１４６ｃｍ、体重４０ｋｇ、１５歳。

木下木葉の助手。
見た目は黄色いリボンで結んだ茶色のツインテールで、活発そうな瞳を持つ元気っ娘だが助手と言うだけに意外と頭脳派。しかし文化祭ではミネットと一緒に迷子になる等、子供な所も多い。
その為悠には「クソガキ２号」と呼ばれいるが、胸だけはミネットとは対照的らしい。
他人を「～ちゃん」と呼び、語尾に「～なの」あるいは「～の」を付ける口調で話す。
意外だが、これでも車の運転が出来るらしい。
悠が変換機入手の為にロジーナに行った際、セルゲイに襲撃されるも悠に助けられる。
それ以降命の恩人である悠に懐いているようで、好意のようなものを抱いているようだ。
悠の事を大変心配している様子。
悠を励ましたり悠の為に変換機の制限時間を伸ばそうと努力している。
悠サイドのもう一人のヒロインのような存在である。

・白藤早苗（しらふじさなえ）
イメージＣＶ：後藤沙緒里（稲森弓弦、加賀愛など）
身長１５４ｃｍ、体重４３ｋｇ、１６歳。

圭介のクラスメイト。
明るい青緑色の股まで伸びたふわふわロングヘアーを、頭の横か

ら水色っぽい白リボンで束ねた髪が二房伸ばしている、無口で携帯電話に文字を打って会話をすると言う不思議な女の子。

その正体はサヴィエトの魔法使いであり、圭介の身柄を拘束しようと媚を売っていたが、本人もサヴィエトを不審に思っていたものの、上が怖くて命令に従っていたらしい。

そこから救ってくれた上に、「友達」になってくれた圭介の事を気に入っている。

同時に圭介に恩返しをしたいと思っており、８・１７事件では圭介への恩返しと圭介の日常を守る為、単身シルフと共に侵入してきた魔法使いの迎撃に向かった。その後、西園寺が事実上のリーダーを務めている【フレンド】の一員になり、サヴィエト時代に培(つちか)ってきた諜報技術を活用している。

瞬間移動(テレポート)という魔法を扱う事が出来る。「記憶」した物体を自分の手元へ呼びだす魔法だが、記憶した場所に物がなければ転送不可能という欠点を持っている。自分自身の瞬間移動(テレポート)も可能ではあるが、飛距離は８０ｍに限られている。

その為、戦う際は必ず武器を一定の場所にまとめて隠している。

殆ど言葉を発しないが、強い衝撃を受けた場合や感情的になると叫び声を上げる。

・浜島雅人(はまじままさと)

イメージＣＶ：日野聡（坂井悠二、平賀才人など）

身長１８２ｃｍ、体重６７ｋｇ、１８歳。

本作の第３の主人公。

元Ｋ・Ｍ・Ｐリーダーの不良少年……と言っても、先代リーダーが殺害された事により、本人の意思関係なしにリーダーに仕立て上げられただけである。

茶髪のボサボサ頭に作業ズボン、スカジャン姿でこれといった特徴はない。

依頼（というより脅迫）を受けて、藤島圭介拉致作戦を敢行するも、拉致したのは圭介の妹である葵であった上に、仲間達を早川に殺されてしまった。本人は圭介と殴り合い、敗北。その後は警察に逮捕されるハズであったが、圭介救出に出動した西園寺に身柄を拘束され、【フレンド】に墜ちる。

その後、佐井学園襲撃戦に参加し、不意打ちで春日を撃破。錐夏と対峙した際には時間稼ぎと言う名目で逃げ回るが、最終的には口論の末に彼女を説得する。

基本的にはヘタレだが、窃盗やその場のハッタリが得意だったり、武器の取り扱いや機械類にも詳しく、少なくとも圭介を痛がらせるくらい喧嘩の腕が立つなど、意外と万能な男である。さらに運転免許証は持っていないが、自動車の運転もできる。

主に戦闘では武器を使い、その場の状況を見て考えながら戦うタイプだが、やはり圭介や悠と比べれば火力不足は否めず、主人公どころか全キャラの中でも、単純なスペックでは弱い部類に入る。

・早川錐夏（はやかわきりか）

イメージＣＶ：茅原実里（長門有希、南千秋など）

身長１６３ｃｍ、体重４５ｋｇ、１４歳。

早川悠の妹。

早川悠とは正反対の性格で、基本的に大人しい子ではあるものの、暴走すると手をつけられない辺りがやはり兄妹。外見は兄貴同様赤い目に白い髪で、凪紗が伊吹と間違えるほど伊吹そっくり。ただし身長や胸は伊吹よりも大きい。

兄貴同様元々能力者で、才能こそあったものの精神的にかなり不

安定な為、超能力者としては兄に劣っていた。しかし3年前に三原に回収され、【感情能力者計画】の実験の被験者にされた。

機械に繋がれている間は兄に溜まった負の感情を受け蓄積し、自身の脳に負の感情を刺激する事によって能力を進化させることができる。

その結果、彼女の【暗黒活力（ダークエネルギー）】は、第2位の久我や兄の早川悠を遥かに凌ぐ力を持つことになったが、その分彼女の精神は完全に崩壊してしまっており、少しでも傷つくことを言われると、能力を上手く制御出来ない【暴走能力者】と化してしまう。

兄と自分を不幸にした者を恨んでおり、自分の考え以外を認めようとはせず、愛ゆえに兄さえ考え方を矯正させようとしたほどのヤンデレ。西園寺達を一蹴し、早川さえ苦戦させたものの、逃げ回る浜島に手を焼き、さらに浜島に説得されて戦意を喪失。以後は浜島らと共に行動する事になった。

宇宙全体に広がる、あらゆる正体不明な負のエネルギーを自由自在【暗黒活力（ダークエネルギー）】を持つ超能力者で、能力を発動すると【漆黒の霧】が発生する。

その霧を用いて攻撃も防御も、この世に存在しない物質を新たに作り出す事も可能である。

――以下追加……するかも――

番外話，作者による馬鹿なキャラ紹介　メインキャラ編！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「メインだけでこの長さかよ……」

悠「クソッタレ。オイ、もっと短縮できなかったのかよ？」

作者「今から短縮作業をしろと？　徹夜で書いたのにぃ～！」

圭介「うるせえ！　いいからもう黙れ！」

悠「ンで、次回は脇役のクソ野郎共だって話らしいなァ」

大吾「こらぁ～誰が脇役だっ！」

純奈「私はメインヒロインだよ！？　ナギちゃんに攻略されたいのに！」

圭介「……相変わらずカオスな後書きだ」

作者「ああ……絵が上手くなりたい……っ」

番外話，作者による馬鹿なキャラ紹介　敵キャラ編！

・久我劉生（くがりゅうせい）
イメージＣＶ：中村悠一（岡崎朋也、グラハム・エーカー）
佐井学園の生徒。
身長は不明だが多分１８０は超えている。

悠とはライバル同士であり、直接会った回数は少ないがそれでもいつも競い合っていたらしい。
現状では悠に次いで２番目の超能力者。
長身で金髪に端整なという整った容姿を持つ。口癖は「テメェは殺し決定だな」。
悠同様口が悪いが、カタギには絶対に手を出さない主義。しかし関わった者は徹底的に叩き潰すという考え方を持ち、雪乃は「こういう硬派な人は好き」らしい。
悠と同じく汚い仕事を行っている
能力的にはこの世に存在するあらゆる“波”の振動数、周期、振幅、波長、波数を自在に操る【波動操作（ウェーブハウンド）】を持つ。ある程度以上の力を出すと背中からあらゆる波の６枚の翼が発生するが、その理由は本人にもわからないらしい。
他の能力の代用的な技も使え、使い方次第によっては最高の破壊力を誇る最強と成り得た能力。
雪乃との戦いで１度は条件を上手く利用され、敗北するが再戦時では圧倒的な力を見せつけ、その後アルファ隊を追い詰めたりと有利な戦闘を展開。悠を相手にしても、その能力を利用して【暴風の膜】や【空気の膜】を突破し、ダメージを与えるなど善戦するが、結局は僅かな隙を突かれて敗北。
追い詰められた所で自身のフルパワーを見せつけ、「神にも匹敵する力」を手に入れたと思いこんでいたが、謎の黒翼を発現させた

悠に手も足も出せず、一方的に「虐殺」され、以後消息不明。

・明智光雄（明智光秀）
イメージＣＶ（光雄）：大塚明夫（フォンヴォルテール卿グウェンダル、西村宗一（鉄人）など）
イメージＣＶ（光秀）：緑川光（明智光秀（戦国無双など）、人造人間１６号など）

凪紗の父、本来は優しい人らしいが光秀に取りつかれてしまって以降は鬼のようになってしまう。
しかし光秀が抜けて以降は元の温厚な性格に戻る。
光秀は山崎の戦いで秀吉軍にやられた事を根に持っており、彼が秀吉の子孫の存在を知らされると同じ女子高生であり、比較的近寄りやすいであろう凪紗に暮葉殺害を計画。
その為に光雄に取りつき、彼からエネルギーを吸い取る事によって具現化に成功する。
具現化後は光雄に取りついている頃よりもパワーアップ。圭介、暮葉、、凪紗を追い詰めるがリミッター解除モードの圭介によってぶっ飛ばされ、その後は多分成仏したと思われる。
戦闘には刀と超能力、旋風烈剣（サイクロンブレード）を用いる。
大気中の分子運動を活性化させ、空気による斬撃を可能とする能力。
簡単に言えば、見えない空気でできた刃を作り出すことができるらしい。
……まあ、劣化版ねーちんみたいな戦い方をするキャラである。

・永渕晃（ながぶちあきら）

イメージＣＶ：高橋広樹（播磨拳児、菊丸英二など）

白陵高校の番長。本来は卒業している年齢だが何度か留年している。

圭介達が中学時代にその中学で番長を務め、伊吹に好意を抱いていた。

しかし告白を断られて腹を立てたのか、彼女をレイプしようとするが圭介に阻止される。

しかしこの一件以降彼のせいなのか、圭介が一方的に彼を暴行したという噂が流れ、圭介だけが悪人として扱われるようになってしまった。

最近再び圭介達の前に現れ、圭介達を全員潰して伊吹を自分のものにしようと企む。

喧嘩の腕は圧倒的で始終圭介を圧倒していたが、船木の妨害や本気を出した圭介に撃退される。

その後、サヴィエトとの接触を図ったらしく、圭介殺害計画を立案。それを阻止する為に魔法衣服（マジッククローズ）を着用し、アナスタシアを撃破し、そのスピードで悠さえ驚かせたものの、結局は悠の【暴風の膜】を破る事が出来ず自滅。その後、悠にトドメを刺されて死亡する。

死ぬ寸前まで改心しなかったなど、本作でも数少ない純粋な悪役キャラであった。

・船木健太

イメージＣＶ：高木渉（鬼塚英吉、青木勝など）

白陵高校Ｎｏ２の不良。元々どこかの学校の番長だったらしく、喧嘩の腕も立つ。

あかり達を襲い重傷を負わせ、圭介達と戦うも暮葉の日本刀にビビって敗走。

その後永渕から制裁を食らうも、彼を裏切り立ち上がり永渕を襲う。
結果的には敗北するも、圭介が永渕に勝利するキッカケを作った人物である。
何故かリーゼントに異常なこだわりを持っており、本人の髪型も当然リーゼントである。

・陳炎彬（チンヤンビン）
イメージＣＶ：関俊彦（アレイスター＝クロウリー、ムースなど）

サヴィエトの魔法使い、サヴィエト亡命政府では気功と拳法の達人の男。
ミネットと戦い彼女を追い詰めるが、悠に襲われ恐怖心を感じる。
それでもミネットを人質に取って戦ったり、悠を銃撃したりと果敢に戦うが最後は警察に逮捕される。

・アナスタシア・アベルツェフ
イメージＣＶ渡辺明乃（シェリー＝クロムウェル、結城リトなど）

サヴィエトの魔法使い。古式魔術である召喚魔術の天才でゴーレムを自由自在に操る。
だが一度に一体しか作れない上、ゴーレムを操っている間は他に魔法を使うことができない。
その分アスリート並に身体を鍛えており、喧嘩慣れした高校生程度の圭介を苦戦させる。
それでも最終的には圭介に敗北し、その後はアルファ隊に身柄を拘束された。

古宇坂では警察や機動隊を全滅させ、あかりまで襲っていたが、その行為が圭介を怒らせる結果となる。圭介に敗北後はアルファ隊に回収され、「ザスローン」の構成員にされる。得意としている魔法の都合上、主な任務は拠点制圧である。

・セルゲイ・ベレゾフスキー
イメージCV：中田譲治（ディートハルト・リート、破壊大帝マスターメガトロンなど）

ロジーナ人の魔法使い。サヴィエトとは一切関係ないらしい。扱う魔法の詳しい詳細は不明だが、スリングショットで普通ではありえない速度で鉛玉を撃つ事から加速系の魔法を使うらしい。娘を救うために仲間たちと共に魔力エネルギー変換機を奪うべく、木葉の研究所に襲撃を仕掛けるが早川悠との戦闘に負け、木葉に銃撃され計画は失敗する。
人生で何度も挫折したらしい。また、木葉とも面識がある様子。騒動の後、地元の警察に引き渡されたらしい。

・鷲尾有資（わしおありすけ）
イメージCV：三宅健太（瀬戸豪三郎、駒場利徳など）

AMA（アキバ・ミッドナイト・アーミー）という不良集団のアタマの男。
大柄で筋肉質で顔に傷がある。依頼を受けて動く男であり、「依頼は善行でも悪事でも必ず引き受け達成する」という信条で行動している。
サヴィエトからの依頼で圭介拘束を試み、彼を引き寄せる為に秋葉原で部下の不良達を暴れさせていた。最も、本人は依頼主がサヴィエトだとは気付いていなかった。

サヴィエトから貰った魔法衣服（マジッククローズ）を着用し、普通の人間では不可能な運動性能を発揮し圭介達を追い詰めた。しかし、圭介達のチームワークの前に結局は破れてしまう。
その後、警察に逮捕されたようだ。

・近藤政信（こんどうまさのぶ）
イメージＣＶ：鳥海浩輔（斎藤一、黒田坊など）

新撰組に似たデザインの服を着た、２０代後半くらいの男。サヴィエトに所属いる自称武士のお雇い兵士である。圭介を捕える為に圭介達に襲い掛かるが、圭介達の連携プレイの前に敗北する。
その後、圭介達に犯行動機と警告を行い、解放を求めたが結局身柄はアルファ隊に拘束された。
病弱な息子を救うために魔法を覚えたが、その事が当時勤めていた会社にバレてしまう。
口止めの代わりに職を失い、稼ぎと行き場を失った彼はなんとしてでも息子を助けるべく、魔法使いを募集していたサヴィエトに身を売った。
やった事はともかく、何だかんだ言って息子想いのいい父親ではあった。
その後は「ザスローン」のメンバーに選び抜かれ、「ザスローン」最年長にして現役のお父さんだからなのか、他のメンバーの父親的な役割を担っている。戦闘能力も高く、普段は前線に立って刀を振り回しているほか、ラウルの剣術の修行にも付き合っている。

・アマデーオ・ベルサーニ
イメージＣＶ：若本規夫（セル、アナゴなど）

サヴィエト所属の魔法使い。
魔術系の秘密結社にいた過去があり、基本的に宗教を信じていた。
しかし、何らかの理由で弾圧され居場所を失い、サヴィエトに身を投げる。
ただし、とにかく迫害されずに魔術師として生きれればよかった為、総有主義などという思想はどうでもいいみたいである。むしろ、神を否定するその組織に不満を感じている節もある。
老人ながら２m近い長身で、その上重々しく引きづりそうな衣装を着用しているのにも関わらず、杖など使わないで自らの足で歩ける等健康ではあるらしい。
ただし所詮は老人である事と、魔術に頼り切った戦い方をする為身体能力は大したことはない。
近代西洋儀式魔術を極めており、『魔法日記』に記録されたこれまで行った訓練や儀式の内容、状況など様々な経験を魔法の杖（ロータスワンド）を介して再現をする事ができる。
葵達を拘束し、ガブリエルを召喚したり、その他にも反則級の魔法を次々と扱い、戦闘能力は作中でもかなり高い部類に入る。
それでもリミッターが解除された、覚醒した圭介には敗れた。
アリーナからは「神様なんてくだらないものを信じる魔術結社崩れの魔術師。藤島圭介（ターゲット）に敗れる程度の小者」と称される等、サヴィエトという組織内でも厄介者だったらしい。
拘束後、しばらくは出番がなかったが、最近かつての教え子ローランドの愚行を見過ごすことが出来ず、戦場へ向かい説教。ローランドの戦意を喪失させる事に成功する。

・アリーナ・ウラジミーロヴナ・レニナ
イメージＣＶ：水橋かおり（巴マミ、呂蒙（恋姫）など）

元サヴィエト連邦国家主席、元サヴィエト連邦共産党中央委員会書記長、サヴィエト亡命政府代表。
さらっと長い銀髪にサファイアのような瞳を持つ小柄な美少女。別名『氷の女王』。
不老不死の薬を飲み、全世界征服の野望達成の第一歩としてロジーナという国を手に入れるべく、表面上は人類の平等を掲げた『総有主義』を考案した。
革命により帝国を滅ぼし、国の頂点となったが自分と上層部にのみ贅沢な暮らしをさせ、国民には貧乏生活を強いる。圧政を布く、自分にとって都合の悪いと思った人物を次々と粛清するなど可愛らしい見た目に反してやる事はダーク。
その為国民の反感を買い２０年前のクーデターで失脚、国民に封印された。
しかし何者かによって封印が解かれ、再び自らの野望の為に動きだす。
現在レムリアから抜けだし、この世界で魔術師を育てているらしい。
リリアによると、昔はこんな人格の持ち主ではなかったらしく、さらにウンディーネによると【魔族の皇帝（カイザー）】が体内に宿り、彼女の身体を借りて魔力回復に専念しているらしい。

・リリア
イメージＣＶ：中原麻衣（古河渚、竜宮レナ）

レニナの友達、彼女の事を唯一アリーナと呼ぶ。
ふわっとした金髪ツインテールでピンク色のコートをいつも着用している。
アリーナの事を心配しており、さらに昔のアリーナの姿を知って

いる様子。
実は善良な女の子で、アリーナを心配しているのはその為。サラマンダーも彼女の為なら戦えるようで、彼女がウンディーネに重傷を負わされた歳、怒りを露わにしていた。
シルフに助けられた為、一命は取り留めた様子。

・ニキータ・ヴァシレフスキー
イメージCV：玄田哲章（海坊主、黒獅子ラルゴなど）

サヴィエト亡命政府の元帥、元軍人。
アリーナに忠誠を誓っている。兵隊など捨て駒と考えており、何百何千何万と死のうが関係ないと本気で思っているらしい。

・三原寅彦（みはらとらひこ）
イメージCV：藤原啓治（野原ひろし、木原数多など）

佐井学園の科学者、三原中隊（カンパニー）の隊長。
学者としては大変優秀な人材だが、人格に問題があり極めて冷酷非道な性格である。
行き場のなかった早川を受け入れた、特科会時代から早川の能力開発に携わってきた人物。
早川の能力や思考パターン、性格など早川の全てを熟知している。
8月17日、学園長の命令を受け、特異点を回収すべく三原中隊を率いて出撃。
風が循環し膜の裏に戻る僅かな一点を突き、暴風の膜を突き破って早川にダメージを与えると言う凄まじい理論の実践で、早川を圧倒し勝利する。

その後、科学と魔法を融合させた最強の魔道能力者を生み出し、魔道能力者を量産して学園長をブッ殺し、さらにその力で世界を征服するという野望を持っている事が発覚。

その後、早川の襲撃を受けるも始終彼を圧倒する。しかし謎の黒翼を発現させた早川に、手も足も出せずに流星となって殺害され、敗北。彼によれば早川の新能力は科学的な法則では説明不能であり、早川こそが三原自身が目指していた【魔道能力者】の片鱗をみせる者なのかもし；ないという。

しかし、それを解明する前に彼は死んでしまった為、結局は詳細不明である。

・風剣（ふうけん）のシルフ
イメージCV：沢城みゆき（ペリーヌ・クロステルマン、九条和音など）

サヴィエト所属の魔法使い、赤の軍神の一人。
ブリガンダイン風の鎧を身に纏った金髪縦ロールの少女。背はそれほど高くは無く、見た目はヒロイン級に可愛らしい容姿を持っている。風の精霊【シルフ】の力を持つ。
しかし、女の子には不似合いな大剣を軽々と振り回している。
アリーナの指示で圭介拘束の為に出動し、ついでに古宇坂市の占領を試みる。大剣を利用した風の魔法を得意とし、その威力は小さな風の塊でさえ自動車を簡単に破壊し、突発的に吹かす暴風は弱っている状態で放っても、建物を瞬時に破壊するほど強力なもの。
ものの数十分で、しかも単身で警察や自衛隊を壊滅に追い込み、初めて圭介と遭遇した際の戦闘では圭介を圧倒。続く二戦目でもリーリヤによる【魔女殺し】の魔法を受け、魔法の出力が低下してもなお彼を圧倒するなど、その高い実力を遺憾なく発揮している。
幼少期、友達を守るために行動するが、そのせいで多くの人々に

裏切られてしまった。それ以降現実世界に疑問を抱き、「自分が破壊した素晴らしい新世界を創る」という結論に達する。
赤の軍神の一員になったのも、それが理由だ。
圭介に敗北後、重傷を負って長らく行動不能状態だったが、圭介がサラマンダーに勝利した直後に復活したようで、ピンチのリリアを救出。その後は唯一信じられる相手であるサラマンダーと手を組み、【自由な傭兵】としてウンディーネの計画を阻止すべく、世界中を駆け巡っている。

・硬質（こうしつ）のノーム
イメージCV：大塚芳忠（自来也、チボデー・クロケットなど）

サヴィエト所属の魔法使い、赤の軍神の一人。
黄緑色の修道服を着た、白人にしては小柄で痩せた初老の男性。
地の精霊【ノーム】の力を持つ。
戦闘においては、属性に合った大地に存在するものを利用して戦う。砂の槍や砂の嵐、石剣（せっけん）など技のレパートリーは豊富。シルフに同じく、単身で軍隊と戦える実力を持つ。
大規模震災術式を組んで日本を滅茶苦茶にし、圭介達と争うことになる。
始めは圧倒的な実力を見せつけたが、結局はこれまでの敵のように圭介の頑丈さに敗れる。
圭介やアレクサンドルの正体を知っているようで、それを語ろうとした所で悠の攻撃に晒され、圭介の前から姿を消した。
実は生き延びていたのだが、彼を嫌う邪炎のサラマンダーに粛清されてしまった。
作中において、圭介を初めて気絶させた実力者でもある。

・邪炎（じゃえん）のサラマンダー
イメージＣＶ：東地宏樹（草加拓海、バルドロイなど）

サヴィエト所属の魔法使い、赤の軍神の一人。
茶髪の筋肉質な中年の男、爽やかな雰囲気を放ち、白人ながら重原に似ていると圭介に評される。
火の精霊【サラマンダー】の力を持つ。
数少ない聖人の一人で、その聖人の力に加えて精霊の力も兼ね揃えているという、二重の意味で聖人という極めて稀な男。かつてはノームと同じ教会に所属していた傭兵であり、その強い力を利用して数々の功績を残し、多くの激戦を潜り抜けてきた凄腕。
戦闘能力も高く、通常状態の圭介の拳を受けても痛みすら感じず、アルファ隊が総力を挙げてもダメージを負う事がなく、同じ聖人であるリーリヤさえ敗北寸前の所まで追い詰めた。激戦の末、体をリーリヤ達に押さえつけられ、力を解放した圭介の一撃を受けて敗北。
その後、アルファ隊に拘束されるも脱出し、一度は圭介を再度襲撃しようと企んだが、ウンディーネの計画を知り、圭介襲撃を中止し、彼女の計画を阻止する為にシルフと手を組み、戦う事を決心する。
硬派な男で、硬質のノームのやり方を嫌う。その為硬質のノームを処刑した。
シルフの過去の事情を知っており、彼女の保護を最優先している様子。
元々硬質のノームとは教会で同僚だったらしく、今でも神を信じており、サヴィエトの思想は嫌いだと宣言している。

・聖波（せいは）のウンディーネ
イメージＣＶ：田中理恵（水銀燈、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケなど）

サヴィエト所属の魔法使い、赤の軍神の一人。
青く長い髪を持つ、見た目は少女で服を含めた全身がいつも濡れている。
水の精霊【ウンディーネ】の力を持つ。
赤の軍神では最も権力があるらしく、他のメンバーも彼女には従っていたらしい。万物の根源（アルケー）とされている水を司るだけに、その実力は手負いとは言え、強い力を持つ聖人さえ玩具のように扱えるほどのものらしい。
現時点では詳細はまだ不明だが、【魔族の皇帝（カイザー）】を復活させるという、壮大かつ危険な計画を実行に移そうとしており、さらにロシアで革命を起こし、ソ連を復活させようとしている。
その計画の為なら、サヴィエトや圭介の存在をどうでもいいと思っており、極めて自分勝手な性格の持ち主である。９月３０日、ロシアで決起すると革命予告を宣言した。

――――以下、追加予定――――

番外話，作者による馬鹿なキャラ紹介　敵キャラ編！（後書き）

キャラが増えたらまた追加します！

番外話，作者による馬鹿なキャラ紹介　愉快な仲間編！

☆初芝高校関係者☆

・小坂亜紀（こさかあき）

イメージＣＶ：佐藤利奈（御坂美琴、南春香など）
初芝高校２年４組在籍。
身長１６２ｃｍ、体重４９ｋｇ、１０月生まれ。

ぶっきらぼうな姉御口調で話すアンダーテールの女の子。
伊吹の親友である、何かとアバウトだけど何故かクラス委員長。
圭介や伊吹とは中１の時に知り合い、永渕との一件でほぼ全員が圭介を敵視するようになった時も、彼の友達で居続けたという。なので圭介には意外と感謝されている存在。
戦国オタ……らしいがあまり活躍シーンがない。よく聞くのはロックらしく重原とは趣味が合う。
恋愛関係のニヤニヤ話が好きらしく、伊吹が圭介に惚れているのを見抜いているのでよく彼女をイジっている様子。本人は一度付き合ったことがあるらしいが、キスすらせず3日で別れたらしい。
今は好きな人はいないらしい。成績は意外と優秀で運動も人並みにはできるようである。
圭介が鼻血を噴くほどの破壊的なボディーの持ち主。もうスク水を着たらただのエロ（ｒｙ

・長宗我部大吾（ちょうそがべだいご）

イメージＣＶ：吉野裕行（西條拓巳、アレルヤ・ハプティズム）

初芝高校２年４組在籍
身長１７１ｃｍ、体重６０ｋｇ、７月生まれ。

黒髪のツンツン頭に眼鏡というシュールな外見をしている少年。
圭介の悪友。我欲に素直であり、圭介ですら引くほどの男。
おちゃらけた性格であり圭介にすらウザがられ、女子からの評判は心底悪い。
その実態は現実の女子になにを言われても平気で、現実女子に何の興味もない完全二次元派。
成績は意外と優秀だが、校則で禁止されているハズのＰＳＰを学校に持ち込んだり、その他生活態度にかなり難があり教師陣は彼を問題児扱いしている。
好きなものはアニメなどとにかく二次元。嫌いな物は現実。ちなみに彼の嫁は平沢唯らしい。
最近は唯に対する愛ばかりを叫んでおり、圭介達に完全に引かれている。
本編での出番はあまり多いとは言えないものの、扱いやすさから後書きでの出番はかなりのもの。
自称『ギャルゲーの神』、しかしネット上で有名な落とし神には到底敵わない存在である。
なんだかんだ言って圭介や重原とは仲がよく、この男三人で行動する事は多い。一人称は『僕』、しかし口は悪い。
あと何かと情報収集能力が高いが、なんでかは詳細が不明である。

・重原広敏（しげはらひろとし）

イメージＣＶ：小野大輔（古泉一樹、平和島静雄）
初芝高校２年４組在籍。

身長１８０ｃｍ、体重７０ｋｇ、４月生まれ。

身長が高く筋肉質、多分初芝高校では最も強い男。
家が『無差別格闘重原流』の道場であり、重原流武術の使い手。
攻撃手段は素手しかないものの、白陵の不良を一人で何人も圧倒する事ができる程の腕前。
また、山籠りをしていたせいかやたら山の事については詳しい。
基本的にはしっかりもので爽やかなイメージもあり、その健康的すぎる筋肉や元々の顔面偏差値がそこまで悪くないせいか、女子には結構モテるが本人は恋愛にそれほど興味はない様子。
いつも圭介や大吾と一緒にいるが、多分この三人の中では一番マトモな人だと思う。
しかしマトモと言っても三人の中での話であり、山籠りをした事がある等やっぱり普通ではない。
圭介達と一緒にいる時はいつもオタク談義に花を咲かせ、最近は小坂と音楽の話をしているらしい。
もしかして２人は意外といい感じかも……作者的には扱いやすくてお気に入りなキャラ。

・生駒純奈（いこますみな）

イメージＣＶ：竹達彩奈（中野梓、高坂桐乃など）
初芝高校２年３組在籍
身長１５４ｃｍ、体重４３ｋｇ、７月生まれ。

普段は黒髪セミロングだが、本気を出すときは髪を括るのでサイドテールになる。バストサイズは圭介好み。圭介が房総丘陵トレイルラン会場で出会った天真爛漫な少女。陸上部に所属しながらオタク趣味を持っている。

凪紗とは同じクラスで親友……というか彼女は一線を越えようとしている。
その為に邪魔となりうる存在（圭介）を排除しようと、いや……監視しようと圭介を無理やり陸上部に入れようとしたが、なんだかんだで失敗に終わる。
圭介をクソ介と呼んだり、最近は凪紗と圭介の会話を妨害しようとするなど、とにかく圭介に対する扱いがひどい。その為圭介からはあまり好かれていない様子。
本人も圭介が嫌いらしい……が、本当に嫌いというわけではないような描写がたまにある。
そんな百合百合で滅茶苦茶な彼女だが、それ以外を除くとごく普通の女の子で陸上部所属。
その実力は同じ部の先輩や男子を遥かに上回っている。
低身長ながら二年ながら陸上部エースを務めている。

・黒木仁（くろきじん）

イメージＣＶ：日野聡（平賀才人、浜面仕上など）
初芝高校２年４組在籍。
身長１７５ｃｍ、体重５９ｋｇ、４月生まれ。

亜麻色の短髪で耳にピアスをつけている。
愛称【黒やん】、クラスの三馬鹿のリーダー的存在。
元ヤンキーで素行が悪く、いつも凪紗に目をつけられては彼女と対決して敗北している。
伊吹にベタ惚れ状態であり、故に圭介の存在が許せないが完全に仲が悪いわけではない様子。
学校のサボりはあたりまえで、時々喧嘩もしているらしい。

そんな彼だが中学時代は金旭中の伝説の不良と呼ばれ、そのカリスマ性と腕っ節で大勢のヤンキー集団を纏め上げていたらしい。今でも権力があって白陵への殴り込みの際、大勢の仲間を招集できた。

赤佐曰く『バカみたいに強い』『そこらの不良が敵う相手じゃない』らしい。

でも今はただのおバカ。

性格は超ハイテンションで自由気まま。とにかく楽しい事大好き。

基本的に遊び人。

・赤佐直人（あかさなおと）

イメージＣＶ：細谷佳正（桑沢ジュウ、黒崎龍之介）

初芝高校２年４組在籍

身長１８５ｃｍ、体重６８ｋｇ、４月生まれ。

三馬鹿の一人。

身長は１８０ｃｍを超えており赤髪のセミロングパーマというどこぞの戦場伝説に出てきそうな騎士のような面構え。しかし中身はただの馬鹿。

とにかく面白い事とエロい事が好きで、女子からの評判はすこぶる悪いが圭介達とは仲良し。

人助けが好きみたいで、かつていじめられたいた韓国人留学生を助けたらしい。

ただ、その時韓国人に敬意をこめて『チョクトさん』と呼ば、しかもそこを黒木に聞かれ、いつのまにかあだ名が変なあだ名がついてしまったらしい。

自称関西出身らしいが、喋っている言葉はエセ関西弁。

黒木と同じ中学出身で黒木同様元ヤン。その実力は不明だがガタ

イと黒木と対等な所から察するに、かなりの腕っ節の持ち主だと思われる。しかしいつも凪紗との勝負に負けている。

・大林勇太（おおばやしゆうた）

イメージＣＶ：代永翼（三橋廉、三輪ヒロシなど）
初芝高校２年４組在籍。
身長１５５ｃｍ、体重４８ｋｇ、２月生まれ。

三馬鹿の一人。かなり小柄な上に一番キャラが薄い気がする……が、かつてはサッカー部に所属しており、坊主頭はその時の名残なんだとか。
小柄故に動きは素早く、それがサッカーの試合などではかなり役立っていたらしい。
ただし所詮スポーツバカなので頭は悪く、テストはいつも赤点を取っている。
基本的にいつも黒木や赤佐と一緒だが、意外にも大吾や圭介と仲がいい。
一人だけ違う中学出身な為。黒木や赤佐が元ヤンキーだとは知っていたが、黒木が伝説の不良だとは信じておらずかなり疑っている。
実は影でリア充説が浮上しているが、真相は不明。

・浅間英樹（あさまひでき）

イメージＣＶ：杉田智和（坂田銀時、キョンなど）
初芝高校３年１組在籍。
身長１８１ｃｍ、体重６４ｋｇ、４月生まれ。

圭介達が所属する写真部の部長、あかりの兄貴。
金髪でしかもイケメンであり、一見モテそうな男だが中身は部室で全裸になったりなど真性の変態。
デリカシーもなく、その上大吾もビックリなオタクである。
その為千早をはじめとした写真部の部員、周囲の女子からの評判はすこぶる悪い。
ただし圭介は同人誌をプレゼントしてもらったので、内心いいヤツだと思っている。
基本的にふざけた男だが、部の事を誰よりも考えている。
また千早曰く、「本当に彼が嫌いな人はいない」らしい。
だが部の為ならなんでもやるらしく、勧誘の際、何故か北方ｐｒｏｊｅｃｔのエロ同人誌を活用。ちなみに圭介はまんまと釣られた。
ただし妹であるあかりにはかなり嫌われているが、本人はあかりに罵倒されるのが嫌な様子。
１８歳なので合法的にエロゲーを購入できる。しかも自動車の運転免許まで持っている。
インドア派なので体力などはあまりない様子で、喧嘩なども白陵に襲われるまではやったことがなかったらしい。その為船木にアッサリ敗北し、あかりを守れなかったことを未だに悔んでいる。
また彼女に無理な心配をさせない為にも、自分の家庭の事で彼女に嘘をついているなど意外と他人想いのいいヤツである。

・乙坂隆一

イメージＣＶ：津田健次郎（海馬瀬人、風間千景など）
初芝高校２年４組担任
身長体重生年月日不明。

圭介のクラスの担任。
頭がハゲかかった教師であり、圭介曰く「正直地味すぎるし、授業のテンポが悪くて人気もない」。
ちなみに担当教科は現文。担任という都合上超脇役であるにも関わらず、意外と出番は多い。

・野原数馬

イメージＣＶ：藤原啓治（野原ひろし、木原数多など）
初芝高校教職員。
身長体重生年月日不明。

数学教師であり体罰上等でオマケに口が悪い。
なんというか……狙ったように木原くンな感じでいつも一方藤島（フジシマレータ）と死闘を展開。
ちなみに大抵は教師である彼の勝利である。
完全にネタキャラとして登場させたキャラだが、意外にも人気がある。
彼に対して一言あるとすれば、もちろん……野ォォォ原くゥゥゥゥゥン！！

・西園寺雪乃（さいおんじゆきの）
イメージＣＶ：喜多村英梨（美樹さやか、涼月奏など）
佐井学園２年（元）
身長１５２ｃｍ、体重４２ｋｇ、１２月生まれ。

長く綺麗な黒髪に紅い瞳を持つ少女。小柄な体格で胸も控えめだが、本人はあまり気にしていない様子。元々は佐井学園開発科に通

い、悠などと共に五本の指に入る超能力者であった。
【超能力が使えちゃう場合】で先に登場し、当時1年だった彼女はしょっちゅう外出許可を貰っては秋葉原をふらついていたらしい。
ある日、学園長から特異点潰しの誘いを受けるが拒否。
その為口止めをされはしたが、特異点潰しに疑問を抱き計画を中止に追い込もうと試みる。
しかしその行動が学園側にバレ、学園2番目の久我劉生と衝突する事になり、始終圧倒されるものの久我が本気を出せない状況であった事や、彼の僅かな隙を突くことによって辛勝。
しかしその後、早川悠に襲撃され戦闘をするがあまりの実力差に指一本触れる事なく敗北。その後、逃げるように学園を飛び出したらしい。
その後古宇坂にいるらしく、第99話「学園モノにありがちな出会いのシーン」では、彼女らしき人物が不良に絡まれ圭介とも出会っている。
その後初芝高校に転校し、暮葉達とは良好な関係を築いている様子。
「フレンド」を創設した張本人であり、佐井学園での戦いでは学園の信じられない計画を発見、その計画を阻止しようと戦う覚悟を決め、沢那を撃破するも久我に一方的に敗北。さらに錐夏との戦いでも圧倒的な力を見せつけられ、成す術もなく敗北している。
使える能力は吹雪念力（ブリザードサイコ）。水蒸気など水分から氷や雪を発生させ、念力によってそれらを自在に操る能力。大気中に僅かでも水分が存在していれば、それらを瞬間的に冷やす事によって氷などを発生させられる。
作者的には今後の活躍に期待なキャラクターである。

・ジャンボ鶴屋（つるや）
イメージCV：石塚運昇（ヴァン・ホーエンハイム、藤原文太な

ど）

身長１９６ｃｍ、体重１２７ｋｇ、１８歳。

第１０９話「ジャンボと付きまとう理由」に登場した一発キャラ。

初芝レスリング部の主将。その鬼のような強さから【怪物】と呼ばれており、まさにヘビー級王者並の強さを誇る男。何故か「オー！」と叫ぶ時に右腕を大きく上げる。

ジャンボ・ラリアットやジャンピング・ニー・バットなどを得意とする。

作中では明智と対戦し、脅威的なタフネスさを見せつけるもアッサリ敗北してしまった。

元ネタは作者や神〇みの長〇純先生も好きなプロレスラー、ジャンボ鶴田。

・木山朱実（きやまあけみ）

イメージＣＶ：野中藍（佐倉杏子、伊吹風子）

身長１６３ｃｍ、体重４９ｋｇ。

元佐井学園の生徒、雪乃や明智とは元々クラスメイトで雪乃の元ルームメイト。

化粧がいらない程に整った顔。肩まで届く紫色のしなやかな髪。

その両サイドに赤いリボンが結ばれた活発そうな雰囲気を放つ少女。

【超能力が使えちゃう場合】で先に登場し、雪乃とは仲のいい親友ポジションにある。

その後、雪乃を追って初芝に転校したらしく、雪乃の学園を潰すという提案に賛成する。

偏差電換（オブザーブホリック）という能力を持ち、戦闘向きではないがサポート要員としては有能。

父親が軍オタらしく、ミリタリー関係の知識は豊富らしい。

西園寺と共に「フレンド」のメンバーになり、浜島とよく行動を共にしている。ひょっとしたら浜島の事が好きなのかもしれないが、詳細は不明である。

☆明智家☆

・明智光昭（あけちみつあき）

イメージＣＶ：前野智昭（堂上篤、橘純一など）

明智家現当主、凪紗の祖父。

６８歳、温厚な性格で織田家と和解したという功績を持ち、秀吉の子孫を発見した時にも木下暮葉との和解を望んだ。

しかし本人腰痛の為光雄に和解を任せ、しかも光雄は和解どころか娘を使って暮葉を殺害しようとしていた。その事を知ると激怒し、光雄を勘当して明智家から追い出したが

今度は光雄に恨まれ、命を狙われてしまう。

光雄の攻撃によって負傷するが、凪紗や圭介達に助けられ一命を取り留める。

そして遂に本人が望んでいた和解が成立し、明智ｖｓ木下の戦いは終了したのである。

☆無所属異世界人☆

・木下木葉（きのしたこのは）

イメージＣＶ：悠木碧（鹿目まどか、ヴィクトリカ・ド・ブロワなど）

ロジーナに住む科学者（魔法学者）。

暮葉の姉らしく妹同様小柄で妹と同じ髪色を持つ少女。自分の研究で誰かを幸せにしたいという信条を持ち、科学と魔法と融合させた最先端医療技術の開発を行っている。
「～かな？」という語尾を多用する口調で喋る。
妹の暮葉に「お姉様」と呼ばれ尊敬されている。同時に暮葉の目標でもある。
暮葉曰く、何かに真っ直ぐな所は圭介そっくりらしい。
魔力を脳波に変換するという魔力エネルギー変換機を開発した張本人でもあり、超能力者としての早川悠を救った人物でもある。ミネットとは暮葉繋がりで知り合いらしい。
８・１７事件にも関わり、三原と悠が戦っている背後でミネットの治療を行った。

☆圭介の家族☆

・藤島浩介（ふじしまこうすけ）
イメージＣＶ：乃村健次（ラルゴ・ポッテル、範馬勇次郎など）

圭介の父親、普段は仕事で家を開けている。
圭介曰く変態のロリコン親父らしい。

・藤島青葉（ふじしまあおば）
イメージＣＶ：井上喜久子（グレイス・オコナー、ベルダンディーなど）

圭介の母親、普段は仕事で家を開けている。
歳のわりには若く見える美人で、息子の恋愛事情に興味深々な様子。

昼ドラ的な展開が好きらしい。

☆アルファ隊・ヴィンペル隊、ザスローン☆

・リーリヤ・コスティリナ
イメージＣＶ：門脇舞以（サーニャ・Ｖ・リトヴャク、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンなど）
アルファ隊の隊長。
身長１６８ｃｍ、体重５０ｋｇ、誕生日は不明だけど冬、圭介と同い年くらい。

アルファ隊の隊長を務める魔法少女、実年齢は不明だが多分１０代後半。
長い金髪と赤い瞳を持つ美人な人……しかし顔は可愛い系。ロシア風の民族衣装を着ており、首からは八端十字架のネックレスを提げ、胸元にはアルファ隊のペンダントを装着しており、ジャラジャラとして装飾だらけの杖を常時持っている。
聖人の一人でもあり、隊長というのは名ばかりではなく、レムリアでも１０本指に入る実力者。
誰もダメージを与える事が出来なかったサラマンダーと互角の勝負を演じ、さらに彼に僅かながらもダメージを与え、その上彼に認められるなど戦闘能力は非常に高い。
主に東方正教会系の魔法を得意としており、【聖杖ジェーズル】と【聖扇リピタ】の二つの武器を駆使して戦うほか、ロジーナの神話や正教会系のお話に因んだ魔法もバカスカ放てる凄い人。しかも【魔女殺しの術式】を即効で組み上げ、シルフを一時的に弱らせたり、サラマンダーさえ一時的に魔術的出力を低下させるなど、他の魔法少女とはケタ違い。

しかしサラマンダー戦ではあまりにもサラマンダーが強すぎた事と、土地を守る為にサラマンダーの攻撃を受け止めたせいで、単独での勝利は出来なかった。
暮葉曰く「基本自分で何でもやっちゃうタイプ」らしく、他人への頼み事は珍しいらしい。
部下には慕われ、ロジーナ正教からは聖人認定されるなど、何かと幸せ者。
性格は冷静で頭脳派。口調も「～とリーリヤは～します」と独特である。
今後の活躍に期待なキャラクターである。

・電話の男
イメージＣＶ野島健児（佐藤啓作、七原文人）

ヴィンペル隊所属の男、本名容姿ともに不明。
連邦特殊情報総局から、ヴィンペル隊経由で早川悠を暗部へ引き込むよう指示されたらしい。
非常に丁寧な口調だが、悠とミネット達との面会を許さないなど、徹底している部分もある。

・ラウル・ゲリエ
イメージＣＶ：岸尾だいすけ（トゥエンティ（二十里海）、青野月音など）

かつてアメリカによって潰された魔術結社【メシーカの太陽】の元メンバーで、その後はサヴィエトに所属し、圭介を襲撃するよう命令を受けたラテン系の青年。
ブゥードゥー教信者で、儀式用の【バチ】を使用し、オグンの力

を借りるという宗教魔術を得意とする。その他、人の中に入ってその人を操ったり、中身はその人のままで、その人が得る情報のみを得るという【複製】という魔術を得意としている。

重原を【複製】し、油断していた圭介を攻撃するが、本物の重原も現れた敗北。その後はアルファ隊に掴まったようで、近藤らと共に「ザスローン」にて暗躍する。

佐井学園戦ではかつての恋人、ミキストリと再会するも彼女に襲撃を受ける。その際、かつての上司であるケツァコアトルの生存を知り、彼が新たな組織を立ち上げた事。その組織が彼女を悲しませるような事を企んでいると知り、今度はケツァコアトルと戦う覚悟を決めた。

ミキストリとはよりを戻した様子。

――以下、追加予定――

番外話，作者による馬鹿なキャラ紹介　愉快な仲間編！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「やっとこの無駄っぽい企画終わったなぁ～」

暮葉「けーすけ様！　無駄言わないでくださいよっ！」

圭介「ていうか思った事があるんだ。イメージＣＶ、とあるの声優多くね？」

大吾「あのアニメも有名どころ使ってるからね～。ちなみに僕の好きな声優は豊崎愛（ｒｙ」

圭介「わかった！　わかったからもう黙れ！」

暮葉「それではそろそろ、次回の本編予告に移るのです！」

圭介「次回は当然文化さ――――」

悠「先にオレの話だ三下ァ……」

圭介「うそ……だろ？」

第１０４話，復活の可能性　前編

――――文化祭準備二日目が行われた火曜日、その頃……東京都のとある病院では。

「……」

このオレ、早川悠は目が覚めれば知らねえ所にいた。

白い天井に白い壁。独特すぎる匂いに時々廊下から聞こえる慌ただしい音。

どうやらオレは入院しているらしい。らしいっつーのはよくわかんねえからだ・

目ェ覚めたのは今朝だしな。

クソッタレ……オレはあの魔法使いに撃たれた後、一体どうなったってんだ？

一応一般の病院らしいけどなァ……けどオレは結局、どこのどいつに搬送されたんだ？

オマケに頭には包帯を巻かれ、未だに頭痛が激しい……チッ、これも銃撃された傷のせいか。

「……ッ」

それだけじゃねェ……。

頭がぼんやりとしていて、全くと言っていいほど超能力が使えねえ。

その上歩行も困難だ。

どうやらオレは脳に穴が開いたせいで、歩行障害になった上に脳の演算能力も低下したらしい。

常人レベルにまでだ。つまりどういう事かと言うと――オレはもう超能力を使えない。

「……クソッタレ」

「なにがクソッタレなの？」

「――あン？　……オマエいつから居たんだ？」

「ひどい！　ミネットはさっきから窓の外を眺める貴方を見ていたんだよ？」

「あァそーかいそりゃ御苦労なこったぁ」

「むぅ～、いくらなんでもミネットの扱いがぞんざいすぎるよ！」

「あァそーかいそりゃ大変なこったぁ」

「むかぁ～！　相変わらず貴方はサディストなんだね！」

オレがいつマゾヒストになったってんだこのガキ？
このオレは昔からサディスト一直線だろォが。
ったく。打たれるのが好きな豚になるワケねえだろォがよ。
つーか目覚めたらいきなりこれだ。耳元できゃーきゃーうっせぇんだよクソガキが。

「それで貴方っ、身体のちょーしはどんな感じ？」

「ンなモン最悪に決まってんだろ。撃たれてから一週間経ってねえんだぞ。傷口だってまだ完全に塞がったわけじゃねえってのによ」

「そのわりには手術で一回髪の毛全部剃ったハズなのに、すぐに元

の長さまで伸びちゃったね？」

「髪だけは伸びんの早ェんだよ。１日もあれば元に戻るっつーの」

昔からずっとこの髪型で、どんだけ切ろうがハゲになろうが、１日以内に元の長さまで伸びちまう。

どォやらオレは不思議な体質の持ち主のようだ。まあ、だからって困る事もねえがな。

むしろハゲで悩む必要もねえし、これ以上の贅沢ってねェんじゃねえの？

「そうなんだ……不思議な髪」

「勝手に言ってやがれ。オレからしてみればオマエの髪の色のほうが不思議だわ」

「それはミネットのセリフだよ。貴方の髪の色は何、若白髪なの？」

「オマエ……前にも説明しなかったか？　オレはある意味先天的な病気なんだっつーの」

「あ、そっか！　そのせいだったね！」

この野郎……ぜってぇーわかってて聞きやがっただろ。

オレがコイツの髪の色を不思議がった仕返しってかぁ？

……チッ、ガキの考える事は単純極まりねえな。

「ンで、オマエまだオレに付きまとうつもりか？」

「じゃあ逆に質問するよ。貴方はこれから先どうやって暮らしてい

くの？」

……そういえば、オレはこの先どォ暮らしていけばいいんだ？
超能力が使えねえ以上、佐井学園は退学確実だ。
まァ最初から辞めるつもりだったから、そいつぁオレにとってはむしろ好都合だ。
けどなァ、能力使えねえんじゃ馬鹿共から財産さえ奪えねえ。
つーか能力どころか歩けねえし。クソッタレ……この先オレはどうしろってんだァ？
一応汚れ仕事で稼いだ金はあるが、だからって家を建てんのも馬鹿馬鹿しい。
建てた所で、こんな身体じゃマトモに生活できねえっつーの。

「……」

「歩行が難しいし超能力も使えないし、時々神経痛とか痙攣とかひどいんだよね？」

「……」

「遂行機能障害にならなかったのが奇跡って、お者様が言ってたくらいなんだよ？」

「……」

「あとサヴィエト亡命政府はね、貴方をブラックリスト登録したらしいんだよ？」

「……」

「戦闘は不可能な上に日常生活も困難な今の貴方……自力で生活できるの？」

「……」

「だからミネットはね、これから先の貴方のお世話をするよ！　助けてくれたお礼にね！」

「……チッ、勝手にしろ……」

うるせえなあ……どんだけ世話焼き女房だってんだ。
ミネットは結婚したらうっせえ嫁になりそうだ。
まあ、こんなクソガキを結婚相手に選ぶヤツは、相当の覚悟があるヤツかただのバカだろう。
つーかブラックリスト登録ねぇ。勘弁しろっつーの……こっちは能力使えねえんだよ。
こんな無害なヤツをリストに登録して、一体ヤツらはどうするつもりだってんだ？
今更攻撃したって、今のオレなんて殺す価値もねえだろうに。

「でも困ったね。貴方の介護と戦闘、両方を同時にしなきゃいけないんだよ……」

「ンだぁ？　やっぱり連中はオレを殺す気か？」

「たぶん……だから、戦えない貴方の命をミネットは守るよっ」

戦えねえ……か。
クソッタレ……一般人に戻れてハッピーなのかもしれねえが、全く嬉しくねえのはなんでだ？

オマケにこのオレを守るって、このクソガキ弱ぇじゃねえかよ。
雑魚に守られても安心できねえ。むしろこのガキが守られる側じゃねえのかァ？
……ったく、やっぱこのガキに守られるんなら、全くと言っていいほど安心できねえ。

「おいミネット」

「んにゃ？　なになに？」

「顔近づけてんじゃねェぞクソガキ……ンで、オマエは異世界人なんだって？」

「う、うん！　ミネットはレムリアからやってきたんだよ」

その異世界ってのがどの程度の技術か。どんな魔法が他にあるんだか。
よくわかんねえけど……まあ、一応訊いてみる価値はありそうだ。

「そのレムリアってのに足りねえ演算能力を補う魔法とかねえのか？」

「えんざん？　なにそれ？」

「そこからかよバカガキが。計算する能力って事だ」

「そーなんだっ！」

佐井学園じゃ常識だっつーの。能力使うには自分の想像を思い描く必要があンだよ。

その想像を思い描く為には、複雑な計算式を瞬時に組まなきゃいけねえ。
ミネット達が使う魔法で例えると、呪文を唱えた術式を組み上げるって感じだろう。
似たような事を超能力者は一瞬で行い、それぞれの想像通りの超能力を使うんだ。
最も……結局重要なのは脳だ。魔法は多分脳なんてあんまモノは使わねえだろ。
脳が良けりゃあすごい能力を使え、逆に悪けりゃショボい能力しか使えねえ。
だから今のオレには能力が使えねえんだ。脳の重要部分が欠けちまったんだからな……。

「ンで、オマエら魔法使いにはンな事は出来ねえのか？」

「う～ん……ごめんね。流石に脳の能力を上げる魔法なんてないよ」

「……チッ」

流石にそういうぶっ飛んだ魔法はねえってか。
魔法ってのはすごいんだかすごくねえんだか、よくわからねェ能力だ。

「……あ！　でもね！」

「うっせえぞガキ……耳元で叫んでんじゃねェぞ」

「ごめん……でもね、魔法じゃないけど脳の能力を補助する機械ならあったと思うよ？」

「――あァ、ンだァそりゃ？」

「え～っと……高次脳機能障害を持つ人の為に作られたらしいけど、貴方にも多分有効かもだよ？」

高次脳機能障害ってアレか。脳の損傷のせいで起こるっていう……なんだったかな。

オレの記憶が正しけりゃ神経心理学的症状だったハズだ。

まあ、要するに脳が傷ついた事によって引き起こされるわけだ。

けど、その障害を補助する機械ってのが……果たしてこのオレに意味あるモンなのか？

いや待て。それが演算補助に繋がるかは知らねェが……試してみる価値はあるかもしれねえ。

異世界の技術ってンだ。この世界の常識が通用するとは限らねえだろ。

「オイ、今すぐそれがある所にオレを案内しろ」

「えっ？　で、でも貴方は入院中だし、それにあの機械は特注品で本人に頼まないと……」

「医者なら脅す。本人に頼む必要があるならオレをソイツの所に案内しろ」

「貴方って時々すごく横暴だよね？」

「いいから案内しろ。それで演算能力が戻ればまた超能力が使えるンだ」

「そ、そうなの！？」

確証はねえけどな……異世界の技術で期待ができる半面、信用も全く出来ねえからなァ。
下手すりゃ副作用があるとか、演算能力を補助する機械ではなかったりとか、とにかく様々なマイナスの可能性があるってモンだ。未知の機械だから仕方のねえ事だ。
だが……それでも試す価値はある。
ぎゃ、は……いいぜ、中々面白ェ展開になってきてンじゃん。

「とにかく、オレとソイツを会わせろ……交渉だけでもしてえモンだ」

「でも、その人と貴方を合わせるってことは……貴方をレムリアに送る必要があるんだよ？　レムリアはこの世界と違って魔物がいるし……貴方は歩くことさえままならないんだよ？」

「あ、は――なんとかやってみるっての」

とにかく――オレは今無性に異世界に行きたい。
行ってソイツを会って……上手くいけば超能力が復活する。
そうすりゃあこのオレを狙うクソ野郎共から、自分の身ィくらいは守れるだろう。
ついでに……このクソガキの身の安全もなァ。

「……わかったよ。ミネット、今から転移魔法の使い手と貴方の為に杖か何かを持ってくるね！」

「頼むぜ……これがオマエの最初の介護だ」

さてさて……どうなる事やらな。

上手く行くなんて全く思っちゃいねェが、それでもオレに超能力が戻ったら――――

第１０４話，復活の可能性　前編　（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

大吾「こんな話ばっかりやるから時間の進み遅いんじゃね？」

重原「夏休みどころかか文化祭もまだたからねぇ」

圭介「一体何話まで続く事やら……でもプロットは書いたっぽいからネタ切れは多分ないぞ？」

重原「もう長いのは仕様だね」

大吾「さて次回はアクセラ（ｒｙ　……げふんげふん！　早川悠、復活なるか！？」

圭介「そういえばコミケで【な○は完売】の代わりに【ま○か完売】が現実になったよな」

大吾「そりゃ当然だ！　僕もコミケでま○マギの同人誌買ったからね！」

重原「まだこの作品内では８月入ってないけどね、大吾」

第１０５話，復活の可能性　中編

夜、オレは密かに病院を抜け出す為の準備をしていた。
ミネットに服のサイズを教えてやり、それで買ってきてくれたジーパンと赤と黒の縞々カットソー。
そして右手に持つものは、どぉやら病院にあったらしいロフストランドクラッチ。
杖の一種で大変現代的な形をしていやがる。
しかも、なんなんだこりゃ……オレの腕のサイズに合ってやがるな。
ハッ、まさか病院もこっそり用意していたってオチかァ？

「服と杖はこれで大丈夫かな……？」

「あァ……完璧すぎるくらいになァ。後は如何に病院を抜け出すかだ」

「それならミネットに提案があるよ！」

「――あン？　言ってみろォ……」

「ミネットは今日ずっと院内、いや市内を走り回っていたんだけどね、この病院に入院している元軍人さん達が深夜に揃って外出するらしいんだよ？」

「軍人？　元日本兵か？」

「ミネットはこの国の事情はよくわからないけど、みんな元気そうで暇してるらしいんだよ。だから迷惑かからないように夜中に集団

でお出かけするらしいんだよ」

なら、その爺さん達と一緒に出て行けば……まあ病院側の目も誤魔化せるかもしれねえな。

要するに朝までに戻ればいいんだ。

だったら、オレが元気になる為にも……爺さん達に間接的に協力してもらうとすっかァ。

「その爺さん達は何時に病院(ここ)を出るんだ？」

「えっと……15分五くらい後だよ？」

「……フッ、いいね最高に面白ェ……ッ！」

さて、と……旅に出るとすっかァ。オレの超能力復活の為の旅になァ……。

この後、爺さん達に合わせて行動した結果、無事にオレ達は病院を抜け出す事に成功。

やがてミネットは本人は専門外と言いつつも、空間転移の魔法を発動させる為のルーン文字を、そこらで買ったような大量のコピー容姿に書いていく。

やがて、変な魔法陣がアスファルトに描かれ――気付けば視界は真っ暗であった――――

――――目が覚めると、目前に怪しげなコンクリート建築の建物が聳え立っていた。

オマケにさっきと比べると肌寒い。この長袖で丁度いい感じである。

もしかして、ここがレムリアにあるロジーナって所なのか？

「んん、自信なかったけど座標は合っていたみたいだね。丁度目的地の前だよ」

「――あァ？　ひょっとしてここが例の機械作ってるヤツの研究所か？」

「そうだよ。ロジーナが誇る木下木葉（きのしたこのは）の研究所だよ」

「ふ～ん……」

その木下くンが例の機械を作ってるってワケか。
おもしれェ……早速会ってみて交渉するとすっかァ。
ミネットが静かにインターホンを押す。すると、数秒ほど経ってから何かが繋がる音がし、そこから女の声が響いてきやがった。

『はいはーいどちら様でしょうか？』

「み、ミネット・ローランですっ！」

『あぁ～うちの妹の後輩ちゃんね！　ミネットちゃんお久しぶり！』

なんだよミネットの野郎。木下木葉ってヤツと知り合いだってのか。
なら話は早ェ……こりゃあ交渉は上手く行くかもしれねえな。
最もそれはオレの理想だ。現実、どうなるかわかったモンじゃねェけどなァ……。

『待っててねぇ、今鍵開けるから』

ぎゃは、さてさて……木下木葉ってのはどんなヤツかなァ。
まあ木下木葉に興味があるワケじゃねえ。ソイツの発明品、オレは

そっちのほうに興味がある。
……やがて鍵が開くと、オレはミネットに案内されつつ屋内へと足を踏み入れたのだ。

――――屋内。如何にも研究所と言った感じだ。
あまり掃除はされておらず、その上部屋によっては試験管などが放置されている。
全く汚ェ……これじゃあ、佐井学園の研究部と似たようなモンだな。
佐井学園にも立派な研究所ってのがあった。そこでは様々な研究が行われていた。
だがオレが知る限り、ロクな研究ではなかった気がすんな……。

「こっちこっち。あ、この部屋だよっ！」

「ンだァこの不自然に綺麗な扉はァ？」

汚ェコンクリート造りの建造物の中に、一際綺麗な西洋風のドアが存在していた。
ミネットはコンコンとノックし、取っ手を握ってドアをゆっくりと開ける。
ギィィっと古い洋館のようにドアが開く。まあ、このドア自体中世ヨーロッパ風だがな。
部屋は結構広かった。広くて立派でここだけが掃除もされ、手入れがされていたのだ。
その中に一人、白衣を着た女が佇んでいた。
女は形が違うから絶対にそうとは言えねえが、パソコンらしきもののキーボードを打っていた。
だが、オレ達が部屋に入ったと気付くと、すぐさま作業をやめてこっちを向いてきやがった。

「き、木下さんお久しぶりですっ！」

「久しぶりねミネットちゃん。でもウチの事は普通に木葉と呼び捨てでいいかな」

「で、ですが……っ」

「ウチはね、下手に距離を置かれるほうが嫌いなの」

「……わかりました、木葉さん！」

「う～ん……ま、さん付けだけど妥協してあげよっかな」

コイツが木下木葉か……見た所ミネットと大して変わらねェクソガキだ。

桃色ブロンドの髪の木下木葉は、背も胸も小さく顔つきだ誰かに似ていた。

誰だったけなァ……一度だけ会った記憶がある。

全く思い出せねェ。けど、コイツと似たようなヤツに何処かで会ったような……。

オレはそれを思い出したいが為に、じ～っと木下木葉の事を見ていたのだ。

「あれ？　ミネットちゃんその人は知り合い？　もしかして彼氏かな？」

「～～っ！？　ち、違います！　悠はミネットの彼氏じゃありません！」

――あァ、なに赤くなってんだコイツ？

「そっかぁ～。それで実際その人は誰？」

「木葉さんっ、お願いがあるんです。この人の為に【魔力エネルギー変換機】をください！　お金は後でミネットが必ず払います！」

魔力エネルギー変換機ってどういうセンスだァ？

だが、ソイツが演算能力復活に繋がるかもしれねェ、オレが求めていた機械ってワケか。

その名を訊いた瞬間、あの女の顔もふざけた感じから真剣なものへと変わりやがったし。

「それが欲しいってことはその人……どこか悪いのかな？」

「え、え～っと……そのっ」

「オマエは下がってろ。詳しい事はオレが説明するわァ……」

ミネットは超能力などに関してはド素人だからな。

オレが魔法に関して素人なのと一緒でなァ……だから、この場はオレが説明したほうが早いだろう。

オレは真っ直ぐ前方の木下木葉を見つめる。そして、オレは木下木葉に事情を説明し始める。

「まず最初に質問がある。【魔力エネルギー変換機】ってのは演算能力を補えるのか？」

「そりゃあそうに決まってるかな。魔力エネルギー変換機は高次脳機能障害を持つ人の為に作ったものだからね。失語症とかは計算能

力の低下も原因だったりするんだよ？　でも君は怪我をしている以外はとっても元気そうだけど……一体どこが悪いのかな？」

「オレは数日前に脳にダメージを負った。そのせいで超能力が一切使えなくなりやがった」

「超能力者？　ふ～ん、妹から存在は聞いていたけど……ホントにいたんだぁ～」

コイツの妹がどんなヤツかも気になるが、今はそれどころじゃねえ。とりあえず流石は科学者って所かァ。ちゃんとオレの話についてきているじゃねェか。

「ンで、今のオレは超能力を使うには演算能力が足りねえ。だからオマエの機械で補助とかは出来ねえのか？」

「んん～どうかな――？」

言いながら木下木葉は何かを手に取る。チョーカーと補聴器だ。チョーカーには黒い機械があり、そこから細い線が伸びて補聴器に繋がっている。

なるほど……それが魔力エネルギー変換機ってヤツか。

予想とは全然違う形をしている上に、結構小さくて使いやすそうだな。

なるほど……こりゃ医療器具として使うには丁度いいなァ。

「最大出力にしても補えるのは一人分程度。それでどこまで君の計算能力が復活するかはわからないかな」

「そんな事は構わねェ。とりあえずどうなるか試してくれ」

最悪、暴風の膜を張り巡らせる程度の超能力（チカラ）が使えればいい。
それだけ使えれば攻撃を弾き返せる。後は武器か何かを使ってどうにかすればいい。
とりあえず――第一の目標は防御手段の復活だ。

「わかったわ。その為には……君の波長を知る必要があるかな」

「波長まで合わせる必要があるってか」

「当然よ。じゃないと確実に君の脳に影響がでるかな？」

「そりゃ大変なこった……」

「それじゃあ早速調べるから、君にはちょっとした検査を受けてもらおうかな？」

「ぎゃは、上等じゃねェか……」

予想以上にいい展開に進んでるじゃねえか。これでオレに超能力が復活するかもしれねえ。
超能力が復活すりゃあ、そのチカラでなんだって出来るだろう。
前より弱くたって構わねェ……ただ、オレは色々な物の為に超能力を復活させた。
ただそれだけであった。それ以外にはあまり望む物はなかった。

……一時間後、検査は終了しオレの首にはチョーカー、耳には補聴器が取り付けられた。
ついに――オレはお目当ての物を手に入れたんだ。
さて、超能力は使えるようになったか……そこが問題だよなァ。

第１０５話，復活の可能性　中編（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「つ、疲れた……」

伊吹「どしたの圭介？」

圭介「一日田舎に行っていた分ずっと作品を書き続け……ああ、締め切り一日前だから今日も徹夜だ！」

伊吹「それアンタの話じゃないよね！？　絶対違うわよね！？」

圭介「大賞の為にユ○ケルが欲しいぜ！」

伊吹「だからそれアンタの話じゃないでしょ！？」

小坂「次回予告～、早川悠に超能力は戻ったのかな？」

圭介「あと作業用ＢＧＭ！　今のうちにアニソンを（ｒｙ」

伊吹「いいからアンタは寝なさいっ！」

第１０６話，復活の可能性　後編

多分、一日くらいが経過したと思う。
全ての検査を終えて木下木葉が機械を調節し、遂にオレ用【魔力エネルギー変換機】が完成した。
この機械はなんでも蓄えた魔力を脳波に変換し、装着者の演算能力を補助する。
あらゆる場合にも対応し、演算能力を回復させて日常生活を補助する。
そんな便利アイテムである。特に今回は念には念をという事で最大出力にしてもらった。
まァ……そのおかげで木下木葉に「超能力を使用すると魔力は１５分で切れる」と言われたが。

「悠っ！　遂に完成したんだね！」

「オイ木下木葉、このスイッチを押せば電源がＯＮになるのか？」

「ええ、それで変換機が作動するかな。たださっきも言ったけど、君の場合は計算能力があまりに凄すぎるせいかな。消費魔力が異常に多くて超能力を使えば１５分で魔力が切れるかな」

「ハッ、使えるだけマシだ……」

さて、早速試したい所だが……暴れようにも場所がねェな。
流石にここで暴れたら木下木葉を怒らせそうだ。
この機械の発明者を敵に回すのは利口な判断とは言えねえな。

「ねえねえ使わないの？　超能力使わないの？」

「うっせえぞクソガキ。能力使ったらこの辺が吹っ飛ぶだろォが」

「へぇ～。君の能力ってそこまで凄いのかな？」

オレの超能力の話に木下木葉が口を挟んできやがった。

……まあ、一応説明しておくか。この世界でオレの話をしたって何の問題もねえだろ。

「オレがその気になれば、この辺の天候や大気中の分子運動を操作できるってなァ」

「へぇー……なんだかよくわからないけど、とりあえず研究所を壊す能力なら勘弁かな」

「チッ、だから自重してんだろォが……」

全く、これじゃあ超能力を試しに使えねえ。

オレの能力は破壊することに特化していやがる。それ以外は全くの専門外だ。

だから試に使ってみれると、下手すりゃ周囲を破壊し尽くかもしれねえ。

ったく。どっかのクソ野郎がオレに喧嘩を売ってくれれば、遠慮なく超能力を使えるんだがなァ。

まあ……そうタイミングよくイベントが起こるハズもねえ――――

ドウッッッ！！！

「あン――？」

「爆発音……だよね？」

「あれ、ウチの研究所のほうからかな？」

その時、狙ってんじゃねえかと言いてェくれェ、ナイスなタイミングで何かが起こりやがった。

突然響いたのは爆発音。２５０ｋｇ爆弾くらいかそこらだろうか。

研究所のほうを確認すると、確かに反対側から黒煙が立ち上っていた。

同時に聞こえてきやがった女の叫び声。ハッ、面白ェ……いいタイミングで何かが起こりやがった。

「今の声……リーネかな！？」

「リーネさんって……木葉さんの助手ですよね？」

「そうだよ。ウチの助手が向こうで危険な目に遭っている……ッ！」

「あっ！　ダメですよ木葉さん危険です！」

衝動的に飛び出しそうになった木下木葉を、ミネットは強く押さえつける。

そうだァ……インテリちゃんはテンテリちゃんらしく、そこで大人しくしてやがれ。

さてさて、リハビリでも始めるとすっかァ。

「おいミネット。オマエはそこで木下木葉の面倒見ていやがれ」

「え……？　貴方もだめだよ！　まだ超能力が使えるって決まったわけじゃ――――」

「リハビリだァ。いいからオマエらはそこで大人しくしてろ」

「ちょ、ちょっと！」

オレはミネットのうるせえ言葉をガン無視し、ひたすら杖をつきつつ戦場（げんば）へと向かった。

おそらくミネットは木下木葉の事で手一杯。オレを妨害する事はねェだろう。

なら、静かな今のうちに向こうに移動しちまおう。

――――そして数分後。

足が不自由なのも不便なモンだ。ようやくオレは戦場（げんば）へと辿り着いた。

研究所の一部が崩れ落ち、地面には鉄筋むき出しの残骸が散らばる。

さらに奥を見渡せばそこには、傷だらけで倒れる女の姿があった。

肌は純白。黄色いリボンで結んだ茶色のツインテールは、程良く綺麗に手入れされている。

さらに瞳は活発そうで口元もとっても元気そうであった。

ただし、背はともかく胸はクソガキとは正反対だ。

そのさらに奥には敵と思われる姿。ンだァ……あの背広の中年くらいの親父は？

「――はァいクソ野郎ォ」

「……っ？」

「うむ……？　あやつ……何者だ？」

声をかけた瞬間、女も背広のクソ野郎もオレのほうを見た。
背広のクソ野郎の周りには、さらに大勢のクソ野郎がうじゃうじゃしていやがる。
ソイツらは銃か何かで武装し、その銃口をオレへと向けていやがる。

「それはこっちのセリフだ。折角ブツが手に入ってハイな気分だったってのに、オマエらは何が目的でこんなクソみてェな所に来やがったんだ？」

「ふ……貴様には関係なかろう。さて……この者を射殺せよ」

ハッ、どォやらあのクソ野郎はこのオレを殺すつもりらしい。
確かに、さっきまでのオレなら瞬殺されていただろう。
だがなァ、オレだって何時までもあのままってワケじゃねえ。
オレは杖を持つ手の反対。即ち左手で首筋にある変換機をスイッチを押す。
小さな電子音が響くと同時に、不思議と懐かしい感覚に陥る。
コイツぁ……間違いねえ。ちゃんと演算が働いていやがる。

「殺れ、標的はあの男だ」

刹那、一斉にクソ野郎共の銃が放たれた。
迫りくる無数の銃弾。オレの視力じゃ全てを捉える事き出来ねえ。
だが――弾丸が進む座標値が脳に入ってきやがる。完璧だ。完璧に能力が復活している。

「ぐ、は――！」

「だァ！」

「う、ぎゃァ――！」

暴風の膜を何の問題もナシに張り巡らせれた。
ぎゃ、は――木下木葉もいい仕事ゃしやがる。超能力（チカラ）が不完全だが復活しやがったぞ。
膜に触れた弾丸は反射でもされたかのように吹き飛ばされ、次々とクソ野郎共を襲っていった。
クソ野郎共の身体に風穴が開き、血飛沫が愉快に素敵に飛び散っている。
それを見ていた女は呆気に取られた様子で、オレとクソ野郎共を交互に見ていた。

「何故、だ……何故貴様は銃弾を反射できた？」

「やはり回復した演算能力は前の半分程度だな。まァ上出来だ、半分もありゃあ十分だ」

オレが以前の半分程度まで弱くなった所で、別に他の連中が強くなったワケじゃねえ。
これだけ回復すりゃあ十分、他の連中にも勝てる力を持っている。
普通に風を起こせ、普通に酸素濃度や気圧の操作が出来て、普通に分子運動の操作もできる。
ただ、それが出来る範囲が狭くなっただけだろう。

「何を言っているのだ？　貴様……一体何者だ。そんな魔法はこの世に存在せぬ……貴様、異世界人か？」

「御名答。オレはオマエの知らねえ世界から来たモンだ。ンで、オマエは何者だ？」

「先程も言ったハズだ。貴様に関係のある話ではない」

「じゃあ、サヴィエトのクソ野郎って事でいいかァ？」

「……っ！　違う……私はそんな連中の仲間ではない」

刹那、背広のクソ野郎がスリングショットを構え、黒光りする鉛玉を放ってきやがった。
スリングショットで撃った割には、初速も速過ぎる上にそこからさらに加速している。
普通じゃありえねえ動きだ。あの野郎、何らかの力で弾を加速させていやがるな。
けどダメだなァ――オマエさっきオレを見ていたのに、全く学習能力がねェ馬鹿野郎だなァ。
膜に触れた刹那。暴風によって弾かれた鉛玉はスリングショットに直撃。
破片が飛び散り、その破片がクソ野郎の右腕をズタズタに引き裂いていく。

「う、ぐ……ァあああああああ！」

無様に血飛沫を噴く右腕を、クソ野郎は必死に抑える。
左手の面積的に不可能だってわかってるハズなのに。
まぁ、人が窮地に陥ると冷静さを失うのは当たり前のことだろう。

「……何故。何故貴様に攻撃が効かん。貴様の存在が邪魔だ……貴様さえいなければ全ては成功していた。私は娘を救うことが出来たのに――っ」

「娘を救うだァ？　教えろォ……殺されたくなけりゃあオマエの目的を正確になァ」

オレの問いの後、しばらく沈黙が流れた。
だが、遂に観念したのか背広のクソ野郎が口を広く。

「……ここに来れば高次脳機能障害者を救う機械がある聞いた。だが、私の家は貧乏だ……それでも私は娘を救いたかった。その為に仲間を招集した……だがそれがどうだ？　貴様が邪魔をしたせいで、私は仲間を大量に傷つけてしまった。娘を守るどころか仲間の身体を……」

「バッカじゃねェの？」

「……？」

「娘を救いたい？　だが仲間を殺したァ？　全ての原因はオマエにあるんだろォが」

「……っ、だが……それでも私は娘を救わなければならない。私の未来などどうだっていい……ただ私はあの子の未来を救いたいのだ。その為なら私はなんだって――――ぐ、ォ！？」

不意に銃声が響いた。それは男がやったものではない。
そもそも、今のあの野郎に銃を撃つ余裕などなかった。
発砲したのはコイツでもなければ、そこで呆気に取られている木下木葉の助手でもねえ。
振り向くと、そこにはミネットと銃を構えた木下木葉が佇んでいた。
――そう、発砲したのは木下木葉であった。

「き、貴様……木下、木葉……っ」

「久しぶり、3年ぶりくらいかな……セルゲイ・ベレゾフスキー」

なんだァ――木下木葉とクソ野郎が知り合いだって？
オイオイ聞いてねェぞこんな展開。

「う、ぐ……何故。私は何故こう何度も挫折を……っ」

「君のその人格、相変わらず変わっていないかな」

「私の人格を理解しているのなら貴様にもわかるハズだ」

「……さあ？　ウチと君は親しいわけじゃないし、詳しい事は全然わからないかな？」

オイオイ一体コイツらはどういう関係なんだ？
しかも、いつの間にかオレの左右にはミネットと、あとは木下木葉の助手がいやがる。
確か助手の名前はリーネだったか。コイツは大した怪我じゃなさそうだな。
あの叫び声から骨くらいは折ったかと思ったが……まァ、これでハッピーなんじゃねえの？

「悪いのか？　我が身を犠牲にして娘を助ける事が……う、ぐっ」

「悪いかな？　例え娘が助かったとしても、父親が死んでいたら娘が可哀想でしょう？」

「だが私は……既に仲間を大量に傷つけ、娘の為だけに貴様らを襲

った。私など生きる価値が――」

「ないとは言えないかな？　君がどれほどの極悪人だとしても、君の存在なしに娘は生まれなかったでしょ？　それに娘を育てるのは誰かな？」

「……っ」

「それを考えれば、君は今すぐ刑務所で反省すべきかな？　反省してやり直して……また娘の為に働けばいいんじゃないかな？　今度はこんな真似なんてしないで真っ当な方法でね」

木下木葉が喋り終えると、背びれのクソ野郎から嗚咽する声がもれる。

どぉやらオッサン、何かに感動して泣いているらしい。

やれやれ……面倒なオッサンだった。だがこれで一つだけ分かった事がある。

オレの能力は不完全ながら復活していた――

――それから1時間くらいが経った。

あのオッサンは地元の警察っぽいものに引き渡された。そして――

「あの、ありがとうなの！」

「……ッ」

丁寧にオレにお辞儀をしやがる木下木葉の助手――リーネ・ディートリッヒ。

どうやらオレに命を助けられたと思いこんでいるらしい。
チッ、おめでたいヤツだ……オレはただ、リハビリの為にちっと暴れただけなんだがなァ。

「ねぇ悠。貴方ってもしかしてツンデレ？」

「うっせェぞクソガキ……絞って果汁みたいにしてやろォか？」

「まあまあ、そんなに怖い顔しないで欲しいんだよ！」

「……チッ」

ったく、このクソガキはいつもいつも……。

「君もアレかな。もう少し素直になったほうが人生は得だと思うよ？」

「――あァ？」

「ボクもそう思う。少しツンツンしすぎなの」

「オマエらどォいう目ェしてんだ？」

オレのどこがツンデレだってんだ。思いっきり感情には素直じゃねえかよ……。
ったく、まァいいや……こんな事もあったが、無事にオレの超能力は復活した。
後はさっさと元の世界に戻るだけだな。

「あ、そうそう。説明し忘れていたんだけど……その変換機に魔力

を注入する方法ね」

「あっ。そういえば聞いてなかったね！」

「ンで、どうやって魔力を注入するんだ？」

「それがその……魔力を持つ人とキスする事……かな？」

「え、えええぇっ！？　き、キス！？」

「オイ……なんだそのふざけた方法は？」

キスすりゃ全てが解決って、一昔前のアニメか何かですかァ？
今時そんな設定流行ったりしねえっつーの。
けど、なんだって魔力を持つヤツとキスしなきゃいけねえんだ？

「ぼ、ボクが考えたんだけど……仕方なかったの！　それ以外効率よく魔力を注入する方法がなかったから……だから仕方なくその方法を採用しただけなの」

「そ、そうそうっ。だからリーネやウチに悪気はないから」

ふざけやがって……このオレが一体誰とキスしろってんだ。
そんな彼氏彼女がイマス――なヤツじゃねえと使えねえ医療器具って、医療器具としてどうなんだ？
ったく、能力復活以外は期待外れの品だった。
しかもその能力もあと数分だけ。キス相手がいなけりゃすぐに魔力は切れてしまう。
つまり――オレはまた超能力が使えなくなるって事だ。
あーあ。束の間の喜びってヤツだったなァ……。

「〜〜っ、ゆ……悠っ！」

「――あン？　人が本気で悩んでいる時になン――――ッ！？」

「おぉ？」

「大胆なの……っ」

いきなり胸倉を掴んできたと思いきや――ミネットがオレの唇を塞ぎやがった。

オレは思わず目を見開くが、ミネットはその反対で瞳を閉じていやがる。

初めての感触――チッ、誰だ。キスの味はストロベリーだって言った野郎は？

キスの味はキスの味しかしねェじゃねえか。つーかそれ以前に――――

「ぷ、は――っ、このクソガキいきなり何を――っ！」

「魔力……注入されたんだよね？」

「……ッ……？」

このガキ。まさかオレに魔力を注入する為だけに？

チッ、ありがたいんだか迷惑なんだか。

だが、嫌な気分ではねえ……って何考えてんだァオレ。

「言ったよね？　ミネットは貴方の介護をするって……その、これも介護の一つだよ！？」

と、言っているミネットは耳元まで顔を赤らめていた。
瞳も妙に潤っており……って、クソガキの癖に女見てェなツラしやがって。
まあ実際、コイツにキスでもしてもらわねえと……オレは能力を全く使えない。
このクソガキには世話になりっぱなしだな……ったくコイツは仕方がねえな。
オレはその恩返しに――コイツのおかげで使える能力で、コイツの身の安全を確保してやるか。
今のオレに出来る事はたったのそれだけだ。だが、それは結構重要な事のような気がする。
このガキの為でもあれば――オレの為でもあるからな。

「わかったァ……介護はオマエに頼んだわ」

「……うん。これからもその……よろしくね」

「……チッ」

全く、本当に仕方がねえなァ。
まあ悪い展開じゃねえ、これで正しいんだろう……。

第１０６話，復活の可能性　後編（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「まずい……大賞作品が半分も終わってない」

伊吹「またその話！？」

圭介「ちくしょう、徹夜したのに……っ！」

伊吹「寝なさいよっ！」

圭介「だが断る……寝たら作業時間がなくなる。締め切り近いようわぁぁ！」

大吾「ついでに夏休みも終わりが近いよぁぁぁぁっ！」

伊吹「ダメだわコイツら……」

第１０７話，文化祭一日目

木曜日、ついに文化祭一日目が始まってしまった。
始まってしまったという、それほど嬉しそうに聞こえない表現にはワケがある。
第一に伊吹は目を合わせれば逸らしてしまうという、相変わらずのツンツン反応。
第二にあかりや青山さんに告白され、でも当の俺が２人を友達以上に見れず、そんなこんなで生まれてしまった中途半端な状況。
そして第三の理由は――――

「あのさ小坂……なんで俺が女装しなきゃいけないんでせうか？」

「そんなの決まってんじゃん。あたし女子にアンケ取ったんだよねぇ～、女装させたら一番似合いそうなうちのクラスの男子は誰って」

「それで俺が選ばれたと？」

「うん、今日は仮装行列があるし。だから圭くん！　しっかり女の子やっといてね！」

「ふっざけんな！　藤島さんに女装趣味はないのことよ！？」

そう――俺は今、小坂やその他女子の言いつけで女装させられているのだ。
白と黒のオードソックスなフリフリメイド姿＋黒髪のロングヘアー。
ああ、鏡で見たよ。完璧に女の子だったね……ちくしょう情けねえ。
俺は男のハズなのに……なんで意外にも女装が似合ってるんだよ。

ちなみに、小坂はジャンヌ・ダルクもビックリな西洋女剣士の恰好であった。
小坂って確か戦国オタだったよな。なんか戦国武将とは真逆じゃないっすか？

「けーすけ様っ！　とってもお似合いなのですよ？」

「うっせ黙れ！　暮葉、てめえそれは嫌味か何かっすか！？」

「そんなことないよねぇ？　流石、女子全員が圭くんって答えただけあって、圭くんミスコンでも上位狙えそうなくらい可愛いじゃん」

「……ッ」

相変わらず伊吹とは気まずいし、女装は嫌だし嫌味は言われるし。ちくしょう。散々悪口言われるだけだった去年のほうが、まだ１０倍マシだったかもしれん。
とにかく今日は不幸だ。これが不幸以外の何者なんだろうか。
ううう……早く男に戻りたいです。男に戻って堂々と青春を謳歌したいっす……。
――だが、こんなのは悲劇の序章に過ぎなかった。

――――文化祭ＯＰが終了後、俺達は校門前の道路に整列していた。
当然、仮装行列の為である……畜生、こんな恰好で知り合いに遭遇したら……。

「あれー？　圭介どこ行ったんだ？」

「おかしいね。今朝はいたはずなんだけどねー」

おいアイツら！
どうして俺がわからない、どうして俺を探しているんだ！
大吾と重原は俺が真横にいるというのに、何故か俺の事を探していたのだ。
そんなに俺の女装がわかり辛いかコラァー！

「おいお前らいい加減気付けっ！」

「あ？　……ッ！　やべ……現実女なのに……っ」

は、何をおっしゃっているんでせうか大吾のヤツ？
いきなり眼鏡を光らせ、頬を赤らめるなんて……正直気持ち悪いことこの上なし。

「ねえ、君は2年かい？」

「あのなぁ重原いい加減に――」

「すみません！　いきなりですが……俺、君に思わず惚れてしまいましたっ！」

「……ハァッ！？」

待て待て待て待て待てェ！
どういうことだよ。なんで俺が重原に惚れられているんだよ！？

「僕も現実に対する初恋だよ……その、僕と付き合ってください！」

「ブッ！」

ひどすぎる現実に思わず俺は吹いてしまった。
ちくしょう、なんで完全二次元派の大吾まで俺に惚れちゃってんだよ！
どうみたって俺は女装男子だろうが。ていうか中身はホントにただの男の子ですよ？
コイツらにＢＬな性癖があるとは思えんし……ああちくしょう、勘違いって怖い！

「お前ら落ちつけ！　お、俺は圭介だ。藤島圭介だぞっ？」

「藤島圭子ね。あれ？　なあ重原、圭介と同じ名字じゃね？」

よし、大吾が早速疑問に思い始めたぜ。
俺の名前を藤島圭子と間違えた所はなんかムカつくが、まあそこは仕方がない。
このまま俺だと2人がわかってくれて、それで解放されるってんなら――――

「確か圭介って妹がいなかったかい？」

「ああ！　いたな……なるほど圭介の妹か」

「違うわっ！」

どうして二人とも物事をそういう風に考えちゃうんだよ。
確かに妹はいるよ。いるけどその妹は葵って名前だし、それに葵は正真正銘本物のメスだ！

「圭子ちゃん。兄貴にはちゃんとよろしく言っておくぜ？」

「だから俺と付き合ってください！」

「なっ！？　重原テメェ、圭子ちゃんと付き合うのはこの僕だ！」

「なに戯言を言ってるんだい！　大吾は完全二次元派じゃないかい！」

「圭子ちゃんだけは除外する。圭子ちゃんは僕の恋愛対象だ！」

大変恐ろしい事態が俺の目の前で起っていやがる。
まずい……このままだと俺は2人に食われてしまう。
何度言い訳してもコイツらは聞く耳持たないし……こうなったら仕方ねえな。
いっそこのカツラを取ってコイツらに正体を――――

「ぐ、はぁ！」
「ぎゃ、お！？」

その時、重原と大吾が何者かによってぶっ飛ばされてしまった。

「ったく……コイツらは！」

その何者というのは――ホスト風の恰好をして黒木であった。
よかったぁ……黒木、この気持ち悪い光景に耐えられずに飛び出してきたんだな。
ありがとう黒木。俺、お前の事を少しは見直したぜ。
俺の事をトコトン嫌っているお前だけは、俺の女装姿を見たって間違える事はないよな。
というわけで俺は笑顔を作り、思い切って黒木に声をかけてみた。

「いやぁ～、危ないところ悪かったな」

「ホントだぜ……危うくアイツらに奪われる所だった」

「……はい？」

その時、俺の背筋が凍った……ような気がした。

なんか、黒木がいつもより色気づいているような気もしないでもないし……。

――ま、まさかっ！？

「圭子ちゃんだっけ！？　その、俺と付き合ってください！」

やっぱりかーーーーーーーーーーーーーー！

「て、てめえ！　伊吹の事が好きなんじゃ――――」

「伊吹ちゃんも好きだけどお前も好きだ！　だから俺はハーレムを――――」

サイテーだコイツ！

そりゃあ二次元ならハーレムルートもありだと思うさ。

だけど、黒木の馬鹿野郎は現実でハーレムを形成しようとしていやがる。

ていうかハーレムってダメだろ。いつかは伊〇誠みたいな運命を辿るぜ？

――ていうかそもそも、こんな野郎の恋人にだけはなりたくねえ！

「ちぇすとーっ！」

「ぶ、はぁ――!?」

だから俺は最終自衛手段として、黒木の下顎に握った拳を打ち込んでやった。

いくら黒木が喧嘩慣れしているからと言って、流石にこの不意打ちから体勢を立て直す事はできなかったようである。背中からアスファルトに落ちた黒木は、そのまま動かなくなってしまった。

だが――俺にとっての脅威は黒木だけではなかった。

「け、圭子ちゃんは僕の……っ」

「いや俺のだよ。俺、強い女の子大好きだよ……っ」

「俺も惚れちまったで!」

復活した大吾に重原、そして赤佐までが俺に惚れてしまったようである。

なんたる地獄!しかも今度は筋肉野郎が2人もいやがる。

ハッキリ言って俺に勝ち目はない。だったらここは――逃げたほうが得策じゃあ!

「あ!　待って僕の圭子ちゃん!」

「俺のマイ・ハニーよ待ってくれ!」

「俺これでもエッチだけは自信あるんやでー!」

「俺は男だ!　バカヤロォォォォ!」

俺はただひたすら野獣と化した野郎共から逃げていた。
もちろん、泣きながら女の小走りで――――

――――こうして文化祭1日目、仮装行列はただ逃げるだけで終了した。
それから数時間後。現在俺達は3人揃って晩御飯を食べていた。
葵も暮葉も美味しそうに食べているなぁ……俺、俺はその……まあアレだよアレ。

「それでね！　お兄ちゃんやクーにゃんの学年にね、すっごく可愛いというか……う～ん、カッコいい系かな？　そんな感じの女子がいたらしくてね、葵のクラスの男子もみんなその人に告白しようとしていたんだよ！」

「もきゅ！？　す、すごいですねその人……学園のアイドルみたいなのです！」

「そ、そうだね……あはは」

その女子は俺です――なんて言える空気じゃねえ……。
どんだけ全校の男子にモテてんだよ、藤島圭子ちゃん。
今までで一番最悪の文化祭一日目だった。こんなに野郎共に迫られた事は今まで一度もないぜ。
いや、迫られる事が地獄以外の何者でもないが……。
とにかく色々言いたい事があるけど一言、これだけは確実にハッキリと言える事がある。
そう、それは――――

「うぅ、二度と女装なんかするもんか……っ」

楽しい食卓でただ一人、俺は密かに涙を流していた。

第１０７話，文化祭一日目（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

大吾「結局あれから圭子ちゃん見てないけど、何組の子なんだろう？」

重原「圭介の妹らしいからね。きっと１年だと思うよ？」

大吾「じゃあ圭介に訊くのが手っ取り早いな」

重原「圭介。圭子ちゃんって何組か知らないかい？」

圭介「……知らん」

伊吹「圭介、テンション低いわね……」

小坂「あはは、悪い事しちゃったかな……？」

第１０８話，文化祭二日目――両親と再会と無口と……？

金曜日、今日もまた3日間の文化祭のうちの1日であり、今日は昨日と違って生徒間による展示などがメインとなる……まあ、本格的なお祭りとなる一日だ。
最も、このお祭り騒ぎは明日も続き、特に今日からは一般公開があったりで色々と大忙し。
まあ今日はまだいいほうだ。金曜日は他校は殆どが授業な為、一般人と言っても保護者くらいしか来ないもんだからな。
本当に大変なのは明日だ……明日は学生が主な客だからな。

「……んで、なんで暮葉がメイド服を着てんだよ？」

「もきゅ？　え～っと大吾さんの提案でして……男の人はこの恰好でご奉仕すると喜ぶと――」

「確かに嬉しいけど何か間違ってる！　ちくしょう大吾のヤツめぇー！」

「もきゅ？」

アイツ、絶対暮葉をコスプレさせて楽しんでいるんだろ。
普段は完全二次元派の癖して……アイツ唯好きと言いつつまさかのロリコンだったのか！

「どったの圭くん？」

「あ？　小坂――でえっ！？」

小坂は赤と白の巫女さんの恰好を、その隣の伊吹は女中さんのような和服を着ていたのだ。
いくら喫茶店とは言え、このコスチュームは色々とオカシイやろ。
そういえばと思い周囲を見渡す。
野郎共は普通の制服だが、女子の大半は何かコスプレっぽい恰好をしていた。
これはアレか……全てはアイツのせいだったりすんのか？

「くそーっ！　これも全部大吾か、いや大吾しかいねーだろっ！」

「まあまあ圭介そう怒らないで。その大吾は今日いないんだしさ」

「もきゅ？　大吾さんいないのですか！？」

「は？　重原……なんでまた今日に限って大吾がいないの？」

「豊〇愛生のソロライブと文化祭が重なったって言っていたし、大吾的にはライブのほうが大切だったんじゃないかい？」

……ひでえ、呆れて言葉も出ねえよ。
ひょっとしてアイツ、声優のライブが楽しみで文化祭サボったのか？
やっぱり大吾は完全二次元派だった。
ちくしょう、アイツ……現実（リアル）なんてジャガイモ程度にしか思ってねえぞ。

「相変わらず大吾はキモいね。やっぱり大吾の名字は長宗我部元親に失礼だなぁ」

「いいじゃないの別に。だって大吾よ大吾？」

「まぁ確かに……大吾さんは居てもいなくても変わらないですね！」

小坂もひどいが伊吹と暮葉もひどいモンだ。

どうやら女子達は大吾の事を、なんてことのないパセリ程度にしか思っていないようである。

「それにしてもあたしら前半はお仕事かぁ。それじゃあ伊吹、今のうちに作戦考えようね？」

「……え？　あ、亜紀？　作戦ってなによ……っ？」

「いいからいいからっ」

「あっ！　ちょ、ちょっと亜紀！？」

ニヤニヤしている小坂に背中を押され、伊吹がこの場から強制退場させられた。

しか伊吹は作戦ってなにと言いつつも、内容自体は知っているようだ。

何故ならアイツ、頬が赤く染まっていたからだ。

アイツはツッパリな癖に赤面症だしな。それにしても作戦って一体なんだ？

あと、未だに伊吹と一言も交わしていない俺って……。

「伊吹さんに亜紀さん、どうされたのでしょうね？」

「ふ～ん……まっ、俺達は聞かないほうがよさそうだね。特に圭介は絶対にね」

「なんで俺！？　つーかやっぱ俺の話！？」

ちくしょう……まさか作戦会議って俺を如何にぶっ倒すかとか、そんな話なんじゃ……？

まずいな。今のうちに竹刀で襲われた場合の護身術を練習しておこう。

――それから数十分後。

店の中では暮葉、小坂、伊吹などの女子共が男性客をご奉仕。

重原ら野郎共も女子共のハートをキャッチすべく、この教室の中で奮闘中であった。

そして、今の俺はお客さんを集める為、廊下に立って呼び込みを行っていたのだ。

しかし呼び込みって殆ど効果がないし、その上超気まずい空気が……。

そう、この気まずい空気の原因は――

「……なあ白藤、お前も少しは呼び込みの為に喋らないか？」

「……」

「あ、あんのー白藤さん？」

「……」

「白藤ちゃん？　早苗ちゃ～ん？」

「……」

「もぉーっ！　一言くらいは喋ってくださいお願いしますー！」

白藤早苗（しらふじさなえ）。
2年4組の在籍する……まあ簡単に言えばクラスメイト。ただそれだけである。
白藤とは仲がいいわけではないし、というか白藤が誰かと話をしている所なんて見たことねえぞ。

「……」

「あのなぁ白藤。一応呼び込みの仕事なんだからさ、何か喋らないと意味ないんだぞ？」

「……」

白藤はどう見ても美少女である。背は伊吹よりは高く青山さんよりは小さい程度。
とっても明るい青緑色の髪は長く美しい。長さは太股まで伸びたふわふわロングだが、それとは別に頭の横から水色っぽい白リボンで束ねた髪が二房、伸びている。
しかもリボンには小さな鈴が二つずつ、可愛らしい飾りのように取り付けられていた。
紫色の瞳は何かグッとくるものがあり、正直その……あどけない顔が可愛いです。
しかもなんだその首に巻いた黒リボンは。あと襟の辺りに黄金に輝く鈴は。
もうそれ狙ってるよね。俺のような男のハートをキャッチする為に狙ってんだよね？
だが――彼女はそもそも言葉を話せるか自体怪しい程、超絶無口な女の子なのだ。

「……」

「……」

どうしよう。会話が全く続かない……。

青山さんは単に恥ずかしがりなだけだし、物静かなだけだけど……白藤は違う。

白藤は物静かとかそれ以前に――コミュニケーション障害なのかと疑いたくなるほど、無口なのだ。

無口な上にいつも一人なせいか、誰も白藤の好きなものを把握出来ていないという……。

つまり、共通の話題がない上に無口……困った。

俺としては出来れば仲良くしたいのに。ほら、友達が増えれば人生はそれなりに楽しいだろ？

「……」

「……」

でも話題がない、そもそも声をかけても返事をしてくれない。

これでも成績は葵に並ぶ学校の３本指だなんて……うん、信じられねえ。

「あらあら浩介さん。あちらにいらっしゃるのは圭介さんじゃありません？」

「お、ホントだ。お～い圭介っ！」

「あん――？」

はて、聞き覚えがあるというか……なんだか懐かしい声が人ごみの

中から聞こえてきた。
誰だ。中学の時の知り合いだとは思えない。
今日は他校は授業だし、そもそも中学の時の知り合いはまだ俺の事を敵視しているハズだ。
けど――大人にそんな知り合い居たっけか？
そもそもこの声は一体どこから――

「ん？」

その時、ぐいぐいと袖を引っ張られたような気がした。
振り返ると――なんと白藤が俺の袖を引っ張っていたのだ。

「ど、どうした……？」

「……んっ」

白藤は控えめに人差し指を西側に向ける。
ちくしょう、コイツ喋らねえけど滅茶苦茶可愛いな。
でもなんでだ。なんでコイツ指差したんだろうか、西側に何かあるってのか？
というわけで俺はそっちを振り向くと――そこには。

「おー、ようやく気付いたかぁ！」

「元気そうでなによりだわ圭介さん」

「貴方……あの時の？」

なんだこれ、どういうことなんだよ？
そこには人が三人いる。一人は中年の男でなんとなく俺に似ている

ような気がする人。
もう一人は葵に似た青髪ショートの女性。多分中年男性と同い年くらいだろうが……異常に若い。
そしてもう一人は長い黒髪の少女だ。初芝の制服を着ているが……どこかで会ったような？
つか、俺の親父とお袋が何故文化祭に来ているんだ。二人とも一体仕事はどうしたんだ。
そして、なんで可愛い女の子を連れて歩いてるんだよ。
なによりこの女の子は確か前に街中で――――

「ごるぁロリコン親父っ！」

「ひぃ！？　い、いきなりなんだ圭介！？」

俺はつい衝動的になって、自分の親父の胸倉をガシッと掴んだ。
しかもそこから強引に揺さぶり、俺は親父に事情聴取を始める。

「なんでお袋と一緒に文化祭に来てんだ！　仕事はどうしたんだよ仕事は！？」

「いやぁ～お盆は忙しいからな。代わりにこの時期に休暇を取ったんだ」

「いきなりすぎるだろ！　せめて連絡くらいは入れやがれ！」

「くわあぁっ！？　ちょ、圭介っ！　悪かったから揺さぶらないでくれ！」

だって揺さぶりたくなるだろ。
いきなり何の連絡も無しによ、遠くに行っていた両親が戻って来た

んだぞ？
事情を小一時間くらい問い詰めたいに決まってんだろ。

「あらあら、圭介さんは両親との再会が嬉しいのね」

「違うわ！　お袋も仕事はどうしたんだよ！？」

俺は今度はお袋――藤島青葉（ふじしまあおば）の事情を聴取しようとする。

「私も浩介さんと同じ理由かしら？」

「夫婦揃って息子にビックリショーしてんじゃねえ！　つかロリコン親父、その子は一体何なんだよどういう関係なんだよ！」

俺はビッと長い黒髪の少女を指差した。
だったこの子――前に街中で不良に絡まれていた佐井学園の――

「ああ、道に迷って困っていた所を案内してもらったんだ」

「そうそう。圭介さんの同級生みたいだけど、とってもいい子だったわよ」

「えっ？　え、え～っと……」

俺は再び長い黒髪の少女を見る。
うわぁ～見られている。じっと見られているよ俺……きっと怪しまれているんだろう。
相手もきっと、俺の事を何処かで見た馬鹿だと思っているに違いない。

「私は西園寺雪乃よ。貴方と同じ2年……この前はありがとうございます」

「え？　や、やっぱり貴女様はあの時の？」

「ええ、おかげで面倒なことにならずに済んだわ」

「あ、あっははは。まあ気にすんなって、いい運動にはなったからさ」

西園寺雪乃……やっぱりあの時の絡まれ少女だったか。
でもコイツって確か佐井学園の生徒じゃ……？

「あらあら圭介さん？　西園寺さんとは知り合いだったのかしら？」

「知り合いと言うか……まあ、知り合いでいいのか？」

とりあえず知り合いでいいだろう。一応、お互い面識はあるんだからな。
それにお袋に細かい事を説明しても無駄だしな。
お袋はとにかく恋バナが好きな若づくりオバハンだ。
下手に詳細なんかを語れば――「それはフラグじゃないかしら？」なんて馬鹿にするに違いない。
親父もそうだ。というか親父はロリコンだし、西園寺を狙わないか心配だぞ？

「ん？　それじゃあさっきから圭介の袖を握ってる子は誰だ？」

「ん？　――ッ！？」

「……っ」

おかしいな、一度離れたのにどういう事なのさ！
気付けば白藤が俺のそばにおり、何故だか俺の左の袖をぎゅっと握っていたのだ。

「あらあら。圭介さんに彼女がいたのね」

「違うわ！」

俺の彼女がこんなに無口なわけがない！

「そうかぁ～、ついに圭介にも春が……父さん嬉しいぞ！」

「違うっつってんだろうが！」

「へぇ？　貴女ってお節介焼きな割には恋人がいたのねぇ」

「西園寺！　てめえも少しは人の話を聞け！」

なんだって俺の周りには会話が通じない相手が多いの！？
ていうか……なんか次第に俺ら、他人の注目を浴びている気がするのだが？
４組の連中まで野次馬として現れ、三馬鹿が「死ねリア充！」とか騒いでいる。
なんか、他の奴らにも俺と白藤の関係を誤解されてないか？

「あれぇ～？　圭くんに先客がいるじゃん」

「……え？」

思わず俺は凍りついてしまった。
それでも頑張って無理やり振り返る。すると、そこには小坂と伊吹、あと暮葉の姿があった。
そして何故だか、伊吹と暮葉がお怒りの様子で俺に接近し――――

「あんたは次から次へと……」

「あ、あの～伊吹さん？　貴女は何か大きな誤解を――」

「けーすけ様？　そんなに異性の友達が欲しいのですか？」

「なんで暮葉まで怒ってんの!？　違います、お二人はなんか誤解してますって！」

アカン、伊吹と暮葉から紫色の恐ろしいオーラが……ッ！
こうなったら仕方ない。折角親がいるんだ、大人の力で助けてもらおう。

「ちょ、助けてお父様！」

「ハハハ、そういえば圭介には伊吹ちゃんがいたな。しかも圭介と仲のよさそうな女の子がまた一人……流石の父さんにもその修羅場はどうにも出来ないな～」

「お母様なんとかしてくださいお願いしますっ！」

「あらあら。こういう昼ドラ的な展開、お母さんは好きよ？」

なんで息子の危機を笑ってみてんだよ、うちの馬鹿両親は！

絶体絶命の危機なのに。下手したら殺されるかもしれないのに！

「だあああもう！　西園寺様、どうか俺を助けてくださいっ！」

「あら、浮気をした貴方が悪いんじゃないかしら？」

「浮気も何も俺は誰とも付き合ってねえっ！」

白藤は……ダメだ、俺から離れようとしない。

ちくしょう、いつ俺が白藤にこんなフラグを立てたんだ。

思い出せば声をかけたのは今日が初めて。白藤とこうなるイベントをこなした記憶もない。

それなのに……なんでこんなことになってしまったんだ？

とりあえず白藤に離れてもらった方がここは安全。

しかし、そんな事を言っても無口な白藤が返答するとは思えない。

「歯ぁ食いしばりなさい……ばか圭介っ！」

「けーすけ様……これは教育なのです。超法規的措置なのです……ですから覚悟なのです！」

「ちょ、おま……ヤメ――――だあああああっ！　不幸だあああああああああああっ！」

俺は説教ウニ男のように叫び、そして何故か怒る乙女達にシバかれたのであった……。

第１０８話，文化祭二日目――両親と再会と無口と……？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ（投票できるキャラを追加しました！）

・後書きトークコーナー

黒木「藤島のハーレム野郎……マジで死ねばいいのに」

圭介「てめえは女の子にシバかれる状況が嬉しい状況に見えのんか？」

黒木「あたりまえだろ！　我々の業界ではご褒美なんだよ！」

圭介「どんなドＭ願望だよ！？　俺はゴメンだっ！」

重原「すると圭介はドＳなのかい？」

圭介「知るかっ！」

大吾「僕の予想、圭介は多分エッチの時だけドＳ……」

圭介「どこのエロゲー主人公だコラァ！」

第１０９話，ジャンボと付きまとう理由

２年４組の展示でやっている喫茶店。
クラスの女子が提案した可愛らしい装飾に包まれ、大吾が提案した可愛らしいコスチュームに身を包んだ女子達。女子達の要望でホスト風の恰好をしている重原達。
そんな色々なものに囲まれる形で、お茶か何かを頼んで飲んでいる俺の両親がいた。

「お、おっ、お久しぶりですっ！」

「久しぶりだねぇ伊吹ちゃん。ああでもそんな堅くならないでいいんだよ」

「そうそう。私達にとって伊吹ちゃんは家族みたいなものよ？」

「始めましてっ！　性は木下、名は暮葉と言う者なのですっ」

「おお～、すると君が子供達と一緒に暮らしている暮葉ちゃんだな」

「あらあら、始めまして。私達は圭介と葵の父と母よ、これからもよろしくね」

畜生、こっちは色々とボロボロだってのに、なにアイツら人の親と楽しくふれ合ってるんだよ。
ていうか、親父もお袋もホントにアレだよ。帰ってきてるなら連絡くらい入れろよ。
俺や葵が暮らしていられるのも、全部あの二人の稼ぎのおかげだ。
だから帰ってくると知っていれば、恩返しの為の準備とかもできた

のになぁ。
そういえば葵のヤツはこの事知ってんのかな。
まあ家族なんだし、そのうち知るとは思うけど……一応後で教えておくとしよう。
それよりも……俺が殴られた主な原因をなんとかしなければ。
「おいこら白藤。てめえ……いつまでそうしているつもりだ？」
「……っ」
白藤はまだ俺の袖を掴んでいた。
それはまるで、超内気な彼女が彼氏を超頼っている感じであった。
そう――まさに【超】がつくほど控えめベッタベタなのである。
「……あのさ、視線逸らさないで何か喋ろうぜ？」
「……」
「とりあえず俺から離れない理由をだな――」
「あら、貴方達まだ離れてなかったのかしら？」
その時、西園寺がニヤニヤしながら冷やかしを入れてきやがった。
なんすかそのカップルを見るような目は。
「うっせ黙れ！　こちとらコレのせいで殺意向けられてんだよ！」
もう一度周囲をよく見回すと、主に三馬鹿や他のクラスのヤツが俺を殺したい目で見ていたのだ。
先に言っておくが、白藤が俺から離れないのは俺のせいではない。

これは勝手に白藤がくっ付いているだけだ。
まあ嬉しいと言えば嬉しい。でもねぇ、周りの視線と言うものがありましてですね……。

「まあでも、以外とお似合いだわ」

「か、からかってんじゃねえよ……っ」

「その代わり、あそこの2人は相当不機嫌みたいだけど」

西園寺が横目でその2人のほうを見る。
西園寺の視線の先には暮葉と伊吹がいるが、その2人はまあ怖い目で俺の事を見ていたのだ。
そして、ガンバレとサインをしやがる我が両親。

「うぇ……」

「ふふふ、まあ頑張りなさい」

「ん？　西園寺、どっか行くのか？」

「これでも仕事中なのよ？　折角恩人と出会えてもうお別れなのが心残りだけど、どうせ同じ学校だわ。また後で会えたら会いましょう」

「そっか……またな西園寺」

「ええ、またね」

西園寺は背を向け、長い髪を靡かせながら立ち去っていく。

なんだかアイツ楽しそうだな。
確か佐井学園の生徒だったような……明智のように初芝に転校してきたのかな？
しかし気になるなぁ。西園寺雪乃……アイツは超能力者なのかな？
あともう一つ。まだ大事な問題が解決していない気がするんだ。

「さて、おい白藤。いい加減離れないか？」

「……」

「頼むお願いします！　周囲からの視線が痛いんですよ！」

相変わらず俺に向けられる殺意。ちくしょう、みんなして俺を汚いゴミを見る目で見やがって。
まあ確かに事情を知らなけりゃ、今の俺を見るとムカつくかもしれねえけど。

「オー！」

「あ？」

なんだ、この妙に特徴のある雄叫びは？
しかも白藤がまたぐいぐいと、俺の袖を引っ張ってきたのだ。
そして雄叫びの聞こえた方を指差す。
白藤……無口だけどこういう時は便利だな。
でも、いい加減野郎共の殺意ある視線が痛いから離れて欲しいぜ……。

「おいおいマジかよ？　ホントにやっちまうのか？」

「ああ。初芝レスリング部の怪物、ジャンボ鶴屋と最強の風紀委員、明智凪紗がガチバトルだぜ？」

明智とジャンボ鶴屋がガチバトルだって？
そういえばジャンボ鶴屋ってどこかで聞いた覚えが……多分アイツだな。
確か3年で身長は１９０ｃｍを超え、体重も１２０ｋｇを超えている初芝レスリング部の主将。
鬼のように強いらしく渾名は【怪物】。その異名通りの強さなんだとか。
んで、なんでソイツと明智がガチバトルする事になったんだ。しかもこんな廊下で……？
しかも相手は怪物ジャンボ鶴屋だぞ？

「明智のヤツ……なんで鶴屋なんかと」

「オー！」

右腕を豪快に挙げ、雄叫びをあげるジャンボ鶴屋。
どういう成り行きでこんな事になったかは知らんが、アイツ明智に勝つつもりらしいぞ。

「お前……本当に私と戦うつもりなのか？」

「人生はチャレンジだ、チャンスは掴め！」

「はぁ……わかった。戦えばいいんだろう？」

どうやら、勝負を挑んだのはジャンボ鶴屋のほうらしい。
明智は明智でバケモノみたいに強いし、ジャンボ鶴屋は異名が【怪

物】なだけに相当パワフルな戦い方をするヤツなんだろう。案外この勝負……わからないかもしれない。

「ナギちゃ～ん頑張って！」

「鶴屋ぁ～！　明智なんかぶっ倒しちまえ！」

明智を応援する生駒と鶴屋を応援する黒木。

まさか……黒木じゃねえだろうな。ジャンボ鶴屋が明智と戦うように仕組んだのは？

可能性は十分あるな。自分じゃ勝てないから強い奴に頼みましたとか、アイツならやりかねないぞ。

「オオォォ！」

鶴屋が駆けだした。足はそこまで速くはないものの、あの巨体が突き進むんだ。

襲われる側からしてみれば、重戦車がけたたましい音を上げて近づくのと同じくらい怖いだろう。

だが――明智もやはりプロだ。

鶴屋のジャンボ・ラリアットに怯む事もなく、なんとそれを回避したのだ。

そのまま明智は背後に回り込み、素早く鶴屋の腰のあたりに蹴りを打ち込んだ。

「オゥ！？」

鶴屋の巨体をも突き飛ばす威力の蹴り……やっぱ明智はバケモノだ。

だが、鶴屋も流石は【怪物】。蹴りの一発や二発でダウンなんてするハズがない。

「ウオオ！」

「――――ッ！」

鶴屋が走る、ジャンボが明智目がけて一直線に進む。

そして――ここぞという間合いで鶴屋はいきなりジャンプをしやがった。

「鶴屋が膝を突き出した……あ、アレは！」

「やべえ！　ジャンピング・ニー・バットだ！」

「決まったらまたオーが来るぞ……ッ！」

どうやら明智の一撃で鶴屋は、明智のことを相当の実力者と判断したらしい。

いきなりジャンボ鶴屋は自身の大技を繰り出したのだ。

アレが顔面に突き刺さったら、明智はまず立っていられないだろう。

だが――拳を構えた明智はまるでZ戦士の如く、残像だけを残して鶴屋の前から姿を消した。

「ば、バカな！？　どこに消えた！？」

レスリングはスピードも大事かもしれない。

だが、それより大事なのはどんな攻撃にも耐えられる屈強な肉体。

そんな肉体にダメージを与えられるパワー。

そして、どれほど攻撃を食らっても折れぬ――メンタル的な強さだ。

鶴屋はパワーとタフネスさが自慢のご様子。

……だが、明智はそんな鶴屋さえ撃退できる程の――馬鹿力の持ち

主であった。

「――フッ！」

不意に鶴屋の背後に現れた明智。鶴屋が振り向いた時には既に遅かった。

明智は既にジャンボ鶴屋のこめかみに――鋭く華麗な一撃を放っていた。

勝負はそれで決まったのだ――――

「ァ……ぐ……ォ……ッ」

「安心しろ。ちゃんと手は抜いたぞ」

すげえや明智……アレで本気じゃなかったのかよ。

「おおおおおおっ！」

「あ、あのジャンボ鶴屋が負けた……ッ！？」

「強ぇ……明智のヤツ反則級だろっ！」

「なんだあんな強いヤツが風紀委員やってるんだ！？」

まあなんというか……。

最近明智の実力も隠れ気味だった気がするが、やっぱり明智はバケモノ級の強さを持っていた。

なんたって、あのジャンボ鶴屋をあそこまで簡単に倒したんだ。

「すごかったなぁ、白藤」

「……っ」

どうせ無反応だろうとは思いつつも、俺は白藤に話を振ってみた。
だが、その時白藤は微かに反応してくれたのだ。
なんと――静かに首を縦に振ってくれたのである。
初めての白藤のマトモな反応……これはひょっとすると、聞き出せたりできるかもしれないな。

「なあ白藤。さっきから俺にくっ付いてる理由ってさ……」

「……」

「やっぱ教えてくれねえのか？」

「……っ」

すると白藤はポケットの中から携帯電話を取り出し、何か必死に文字を打ち込んでいた。
そして、その画面を白藤は恥ずかしそうに俺に見せる。
オイオイ……何もエロ画像見せるんじゃないんだから。
ていうかこれ、紙のいらない筆談ってヤツか？
無口な上に会話がコレとは……白藤、アンタは冥界のネクロマンサーかよ。
でも、俺に付きまとう理由はなんとなくわかったかもしれない。
白藤の携帯の画面にはこう書かれていた――

【相手にしてくれて嬉しかったから】

なんだ……そういうことだったのか。

それなら喋ればいい――とは思ったが、白藤早苗とはこういう人物なのだ。
それに、声を全然出さないのには理由があるのかもしれないし。
某冥界のネクロマンサーみたいな……！

「俺でよかったらいつでも相手するよ」

そう言うと、白藤は再び携帯に文字を打ち込む。
再び恥ずかしそうにもじもじしつつ、白藤は携帯の画面を俺に見せてくれた。

【ありがとう】

ありがとう……か。
やっぱりお礼を言われるのって嬉しいな。
俺は微笑みながら窓の外を見る。
今日は快晴。夏の日差しが入りこんで、俺達を見守るかのように照らし続けていた。

――それから数時間後、俺は教室に戻ったが……。

「あ、あのー暮葉さん？　これは一体なんでござんしょうか？」

「伊吹さんと二人で用意したのですよ？　大変でしたよ～」

「伊吹と二人で用意したのかぁ。んで、これはなんでござんしょうか？」

「もちろん鉄の処女なのですよ？」

「お前！　それ拷問道具じゃねえか！」

そもそもなんで教室に鉄の処女があるんだよ。

ていうか持ち込みＯＫなのかよ。一応これだって使い方によっては痛い拷問具だぞ？

大体、こんなものどこに入手してきたんだよ。

「圭介……日頃の不満、今ぶちまけるわ……っ！」

「ちょ、伊吹さん？　なにをそんなに怒ってらっしゃるのでしょうか？」

「圭くんごめん。暮葉と伊吹の気を沈めるには圭くんが犠牲になるしかないよ？」

「う、ウソだ……２１世紀なのに鉄の処女で拷問されるだなんて……そんなのあんまりだあああああああああああっ！」

――――こうして、文化祭二日目は終了したのだ。

まあ鉄の処女と言っても所詮はオモチャ。

ただ暗くて狭くて怖いだけだったのだが……でも鉄の処女の中は色々スリル満点であった。

ちくしょう……一体俺が２人になにやったってんだよぉぉ！

第１０９話，ジャンボと付きまとう理由（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ（投票できるキャラを追加しました！）

・後書きトークコーナー

大吾「女の嫉妬怖ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

浅間部長「大丈夫だ。バ○テスのヒロインのお仕置きよりはまだマシだ」

大吾「それにしても今回ネタだらけだけど、元ネタ全部わかる人いるのか？」

浅間部長「ジャンボなんて今の人知らないかもしれないな」

大吾「……浅間先輩もこの小説書いてる作者も今の人だけどね、一応」

浅間部長「一応とはひどいな！　ボクは立派な現代人だ！　ちなみに／アッカリ～ン／はボクの嫁な！」

あかり「あ、あたいが嫁……？　キモいんだよバカ兄貴っ！」

浅間部長「ぐわなにをするやめ（ｒｙ」

大吾「なんなんだこのオチ？」

第１１０話，裏の動きと一家の日常

――その頃、地球のどこか――

薄暗い紫色のような背景。
その中央の赤く高級そうな椅子に一人、少女が座っていた。
さらっと長い銀髪にサファイアのような瞳を持つ小柄な美少女。
だが、彼女が他人に向ける視線は氷のように冷たいものだった。

「失礼します！」

一人の地味が軍服を着た白人男性が、何かの報告書を持って彼女の前に現れる。

「ふふふ、なにか報告でもあるのですか？」

「藤島圭介の居場所について新情報であります」

「それじゃあ、その情報が書かれたその紙。読んで欲しいな」

っと、銀髪の少女の隣にいた少女が言い放つ。
彼女はピンク色のコートを着用して、ふわっとした金髪ツインテールと銀髪の少女とは対照的だ。
彼女の名前はリリア。そこに座っている銀髪の少女のただ一人の友達。

「読みます。”発　ＳＳ、宛　連邦総有党中央委員会書記長　クラスメイトの藤島圭介は標的の藤島圭介と認む。速やかに回収命令を下し、上記の者の身柄を拘束せよ”」

「へぇ……いよいよ藤島圭介の居場所が特定できたんですね」
軍人の報告を訊くと、銀髪の少女は頬杖をつきつつ、ニヤリと微笑みを浮かべた。
その様子をリリアは不安げな表情で見ている。
一方の軍人は一歩前に出て、ハッキリと銀髪の少女に何かを進言する。

「どうします。アルファ隊の妨害が入っているとの情報も存在します、精鋭の魔術師を初芝高校という場所に送ってやりましょうか？」
「その必要はないですよ。そのＳＳ……本名は私も知らないですが、その者に身柄の拘束をさせなさい」
「しかし、アルファ隊が……」
「クラスメイトですよ？　馬鹿正直にぶん殴れるとは思えませんけどね」
「りょ、了解しました！」
軍人は報告書を片手に、血相を変えて逃げるようにこの部屋から出て行った。
銀髪の少女はその光景を、不安になるような微笑みを浮かべ、やはり冷たい視線を向けている。
やがて彼女は左手で自分の長い髪に触れ、そのままリリアの方を少し嬉しそうな顔で見た。
「ねえアリーナ、遂に標的を発見できてよかったね」

「ええ。これで憎き皇族を全員排除したことになりますね」

「……これで、アリーナの支えになれば……アリーナが元に戻れば……っ」

リリアが俯き、かなりの小声で自身の想いを口から漏らす。

だが、微かにそれはアリーナと言う少女に聞こえていたようだ。

アリーナは眉間を寄せ、彼女のほうを見つめる。

すると冷たい言葉しか発しない口を、また冷たい言葉を吐く為だけに開けた。

「リリア、なにか仰いましたか？」

「い、いえっ！　なにもっ！」

「ふふふ……」

不敵な笑みを浮かべる氷の女王。

彼女の名前はアリーナ・ウラジミーロヴナ・レニナ。

――そう、圭介の身柄を狙い、異世界で戦力を蓄えるサヴィエト亡命政府の代表である。

――――その頃、藤島家。

「お、お父さんっ、お母さん！」

「おお～、久しぶりだな葵！」

「あらあら、葵さんも元気そうでなによりだわ」

俺は今、リビングで喜ぶ葵の姿を見てなんとなく心が満たされていた。

葵が喜んでいるのには当然理由がある。

今日――俺の両親が何の連絡もなしに家に帰ってきたのだ。

その事が葵は嬉しくて嬉しくて、もう仕方がないようなのである。

葵は俺とは違って親の事が大好きみたいだし、ぶっちゃけこの光景は見ていて心が温まるよ。

「けーすけ様っ、家族仲がよろしいようで拙者も安心なのです！」

「そ、そうか……」

暮葉も家族仲がいいのはいい事だと言っている。

だが、何故か俺はそれに納得ができなかった。

確かに暮葉の言っている事には同意だ。問題はそれを暮葉が言っているという所にある。

コイツ……おもちゃとは言え、俺を鉄の処女に閉じ込めやがって……ッ！

「いやぁ～、今日は父さん達文化祭の会場にいたんだよなぁ」

「そうだったの！？　葵の所にも来てほしかったよっ」

「ごめんなさいね。途中で圭介さんと遭遇しちゃって、そこでの出来ごとが面白かったから」

あのなぁ……こっちはクソも面白くなかったぞ。

むしろず～っと自分の生命の危機を感じていたくらいだ。
実際、そのせいで俺は鉄の処女に放り込まれ……はぁ、不幸だ。

「なになに面白い事って！？」

「ん？　なんだっけ、確か圭介に彼女がいたことだっけ？」

「あらあら、もう覚えていないのかしら？　でも浩介さん、それで正解ですよ？」

なっ！
あ、アイツら葵になんという事を言っちまったんだよ。
葵はブラコン。俺が誰かと交際するなんて……絶対に認めない子だぞ。
その葵にそんな嘘情報を吹き込みやがったら――――
葵は殺気が溢れるように目を光らし、凄まじい足音を上げてたったの２秒で間合いを詰めてきた。
そして、俺の目の前で止まったと思いきや――葵は人様の胸倉をガシリと握ったのである。

「お兄ちゃんどういうこと？」

「ちょ、落ちつけ葵！　あの二人の言ってる事はウソですウソ！」

「そうですよ！　けーすけ様は誰とも付き合っていないのです！」

ちなみに暮葉と伊吹にはあの後、ちゃんと事情を説明したんだ。
もう暮葉は怒っていない様子だが、伊吹はいつものことながら、相変わらず不機嫌そうだった。
伊吹……やっぱり目も合わせてくれなかったよなぁ。

なんでだろう。照れているって事も考えられるが、ツッパリ伊吹だしなぁ……。
やっぱ俺、伊吹に嫌われちまったんだろうか。

「ウソつけ圭介。だってお前、女の子にずっとくっ付いていたじゃないか？」

「ごるぁ親父ィ！　それは殆ど事故みたいなモンだろ！」

「ひどい……ひどいよお兄ちゃんっ！」

「ち、違う葵。これはまあ誤解というヤツでして……」

まずいぞ。葵のヤツが本気で泣きそうな目になっている。
涙を溜めた瞳とむすっとした表情。そんな状態で葵は上目遣いで俺を見つめてくる。

「お兄ちゃん！　お兄ちゃんの童貞は葵のものなんだよ！？　っていうかお兄ちゃんの初彼女は葵だよ！？　だから葵以外の女の子と付き合うのは絶対にダメっ！」

「なんでその結論に達するんだよ！？」

「兄と妹は初めから結ばれる運命。別にヨスガちゃっても問題ないんだよ？」

「ありまくりだろ！　玄関での行為の末同級生に見つかるプレイなんかしたくねえよ！」

どうして葵はヨスガなんて知っちゃったんだろうか。

そのせいか、葵のヤツすっかり俺との既成事実を作ろうと本気だよ。
ちくしょう……アレは二次元だからいいけど、コレは現実（リアル）である。
現実（リアル）でヨスガったらもうね……笑える話じゃねえよ！

「相変わらず仲がいいなぁ～圭介と葵は」

「あらあら。私は兄と妹のドロドロ恋愛も好きよ」

「てめえら親だろ！　責任持って妹の行動を止めんかいっ！」

この時、俺は確信したんだ。
ダメだこの家、変態と無責任者しかいねえ！
暮葉が一番マトモに思えてきたよ……はぁ。

第１１０話，裏の動きと一家の日常（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ（投票できるキャラを追加しました！）

・後書きトークコーナー

黒木「畜生！　やっぱり藤島はギャルゲー主人公だ！」

圭介「なんで！？」

黒木「意味もなく妹に好かれやがって……畜生！」

浅間部長「ボクなんてゴキブリ扱いだよ！？　藤島君、君というヤツはモテまくりな上に妹とまで……」

黒木「テメェ、マジで罪深いヤツだな……」

圭介「ちょ、なんでこんな話になってんだよ！」

第１１１話，文化祭三日目、そして……

文化祭三日目、今日は多くの学生達で校内が賑わっていた。
多くの学生達……というと自分の学校だけと考えそうになるが、今日は文化祭の日なのである。
どちらかというと、自分の学校の生徒よりは近隣の学校の生徒のほうが目立っていた。
今日はうちの地味な喫茶店も、まあ女子陣や大吾の案によって結構繁盛していたのだ。
最も、今日は非番なので結構暇な俺なのだが。
ただ……午後のステージでちょっくら仕事があるがな。
そう、青山さんと一緒に文化祭の写真撮影をしなければならないのだ。

「ああ……このまま蒸発でもしたい」

「どうしたんだよ圭介？　お前も昨日のライブ来ればよかったのに」

「うっせ黙れ。俺は学校行事はサボりたくてもサボらねえの」

「むしろ圭介の場合、サボったら野原先生あたりにシバかれるよね」

「うぇ～……」

俺は今、大吾や重原と一緒に1年がやっている猫カフェという所に来ていた。
猫カフェだけにどっから集めてきたんだか、大量の猫が教室内にいて……結構痛いです。

痛いと言うのはもちろん、猫が俺を引っ掻いてくるのだ。
だから俺、今日は異常にテンションが低いのである。
猫さん……しつけ悪過ぎだろ。つかなんで俺だけ引っ掻かれるんでしょうか？

「ていうか圭介、どうして僕らと回るんだ？」

「あ？」

「そうだね、女子はどうしたんだい？」

「あのなぁ……お前ら俺が女たらしか何かだと思ってねえか？」

「そうじゃねえの？」

「俺もそうだと思ってたよ」

「お前ら……」

そんな女たらしならもうとっくの昔に彼女がいるわ。
ったく、コイツらは毎度毎度大げさだぜ。

「――って、置いてかないでよ！　ミネットはあそこでわたあめ買いたかったんだよ！」

「あン――？　ったく、ちったぁ黙りやがれクソガキ」

「なんで貴方はいつもミネットに対する扱いがひどいの？　もうキスしないよ？」

「オマエ、それじゃオレが能力使えねェだろォが！」

なんだ、廊下のほうがかなりの大声が聞こえたぞ。
女の子のほうは随分大声で話すモンだな。誰と話してんだろうか？
それにしてもミネットって……どう考えても外国人の名前じゃねえか。

「どうしたんだ圭介？」

「んぃや、別に」

大吾が心配してきたが、別にどこかおかしいわけじゃないし。
たまたま聞こえた声に気をとられただけだからな。
それにしても、暮葉達も今非番なんだよな。アイツら今頃なにやってんのかなぁ。

――――同時刻、初芝高校の廊下に……白きあの男が不機嫌そうに歩いていた。

チッ、なんちゅー数の人間がいやがるんだ。
出来れば病室でぐーだらしていたかったんだが、ミネットのクソガキめ……何がリハビリだ。
こっちは杖つかねえとロクに歩けねえってのに、容赦なく周りの人間がぶつかってくるじゃねえか。
しかも謝罪の一言もなし。
クソッタレ……能力使ってブッ殺したかったが、ミネットに止められちまったし……ハァ。
しかも、たかがリハビリだってのに……。

「ンで、なんでオマエまでこっちの世界にいるんだ。リーネ・ディートリッヒ」

「ボクは技術者なの。その機械が不調になった時、誰が修理すると思う？」

「ンで、それで木下木葉がオマエをよこしたってワケか」

「そそっ！　だからボクの事は気にしないほうが得策なの！」

チッ……こんのクソガキ2号が。

まァ、胸はそこで騒いでるクソガキ1号と違ってガキじゃねえけどな。

でもまあ、クソガキってことには何の変わりもねェ。

それにしても、ちっとアレだなァ……。

「オイ、オマエらここで待ってろ」

「あれ？　貴方どっか行っちゃうの？」

「どこいくの？　ボク達もついていった方がよさそうなの？」

「オマエら、男子トイレまでついてくるつもりか？」

「えっ！？」

「あ、ご、ごめんなさいなの……っ」

恥ずかしそうに俯きやがった2人のクソガキ。

ったく、最初からそうして大人しくしてりゃいいんだよ……クソッタレが。

「チッ」

オレは軽く舌打ちした後、そのまま数十メートル先にあるトイレに向かった。

それから数分後、用を済ませたオレはトイレを出て元の場所に戻った。

だが……どこを見ても制服着てるヤツか、私服のどっかの学校の連中ばかり。

肝心のクソガキ共はどこかに消えていたのだ。

「あんのクソガキ共……どこに消えやがった？」

だからこんな人の多い場所に反対だったんだ。

リハビリするにしてもしにくいし、逸れた場合見つけンのが面倒じゃねェか。

ったく、あのクソガキ共。一体どこでなにして遊んでやがるんだ。

しかもアイツらのほうが人数多いし、これじゃあオレが迷子みたいじゃねえか。

ったく……そもそも、こっちは脳味噌シェイク状態なんだ。

撃たれてからまだ一週間経ったばかり。本来ならまだ病室で寝てなきゃいけねえってのによ。

まあ、今更そんな事を気にしたって仕方ねえな。

それよりあのクソガキを探しに行かねえと。とりあえずは情報収集って所か？

この辺にいるヤツの誰かに訊いてみるとすっかァ……。

「限定版のフィギュアを飾った出店があるだと！？　これはもう僕

が行くしかない！」

「いや～、なんだか面白い事になってきたねぇ」

「お前ら待てよっ！　とりあえずフィギュアの詳細ってのを教えてくれ！」

その時、ダッ、と勢いよくオレの目の前を駆けて行く三人の男達。
一人は眼鏡をかけたオタクっぽい野郎。もう一人はやたら筋肉質な爽やかな野郎。
そしてもう一人は見覚えがある。いや――忘れもしねえ。
中肉中背の体格。髪は黒く寝癖のようなアホ毛が一本、伸びていた。
制服は着崩されてあまり真面目そうには見えねえ。
そんな外見の男――間違いねえ、アイツはあの時オレをぶん殴った

――――

「あの――野郎ォ……ッ！」

杖を持つ手に力を入れる。ギュギュと締め付けられる音が響いた。
俺は右手に入れられるだけの力を入れていたのだ。
さらに思いっきり歯を食いしばり、激しくあの野郎のことを睨み付ける。
――だが、あの野郎は全く気付いていねェ。しかもあの野郎とは別のヤツがオレに近付いてきた。

「なんだテメェ？　この永渕晃様になにガン飛ばしてくれてんだ、アァ？」

「オラァ！　喧嘩売ってんだろ、なんとか言えやもやし野郎！」

「……チッ」

なんであの野郎じゃねえんだよ……。
こんな坊主のラインアート野郎なんざ、全く眼中にねェってのによ……ふざけんじゃねえよ。

「ったく、藤島に復讐してやろうと思ったのによ……気分悪ィ、こいつボコってから行こうか」

「そうっすね。このもやしにも永渕さんの恐ろしさ……たっぷり叩きこんでやりましょうや」

ハァ……面倒癖ェ。
永渕って野郎と角刈りのクソ野郎、コイツらは人の実力がわかっちゃったりしねえのか？
まァ、こんな連中にわかるような頭があるわけねェか。
それにしてもどうする。こんな連中相手に能力使っても仕方がねえ。
超能力を使えは変換機（コイツ）の魔力なんて、たったの１５分でなくなっちまうんだ。
この１５分はあの野郎にとっておく。こんなクソバカ相手に時間を無駄に使いたくねえ。
しかし、丸腰で戦うのは危険だ。仕方ねえ、酸素でも奪って１秒で気絶させてやるか。

「ウオォォ――が、はぁっ！」

なんだァ……いきなり永渕の野郎がぶっ倒れやがった。
その背後には竹刀を持った一人の少女。
輝くような銀髪に紅い瞳。小さい事には変わりないが、ミネットのクソガキよりは背は高そうだ。

「まったく……あんたは一体こんな所でなに考えてんのよ？」

「て、テメェ！」

「――ッ！」

突如少女に殴りかかる角刈り野郎。一方、竹刀を構えた少女は咄嗟に行動に移る。

だが少女は竹刀を振りまわさず、その先端を角刈り野郎の鳩尾に突き刺した。

呼吸困難にでも陥ったのか。それともよっぽどの威力だったのか。

角刈りはそのまま地面へ平伏しやがった。

ったく……弱ェ、これでオレに喧嘩を売るつもりだったのか。

「いってて……伊吹ちゃん、中々いい攻撃くれるじゃねえかよ……ッ」

「あんた、一体こんな所に何しに来たのよ？」

「文化祭を滅茶苦茶にして……テメェらに復讐しようとしたんだよ。そして、伊吹ちゃんを俺のものに――」

「ふん――ッ！」

「ぐ、はぁっ！」

少女の不意打ちに永渕は反応できず、首筋を打たれた永渕は床に倒れ込んだ。

それでもまだ、意識だけはあるようだ。

「い、ぶ……きィ……ッ」

「ふん、そう何度もあんたなんかにやられないわよ」

「くそ……ッ」

そのまま永渕は気を失ったらしく、全身の力が抜けたようにぐったりとしていた。

ったく、この少女と永渕。一体どういう事情なんだ？

まあ知った所でオレにどうしろって話だがなァ。

「まったく……あの、大丈夫ですか？」

「あァ？　……問題ねェ」

そうだ。コイツにミネット達の事を訊こうか。

丁度いいタイミングで現れた事だしな。

コイツなら――ひょっとするとあのクソガキ共を目撃していたかもしれねェ。

第１１１話，文化祭三日目、そして……（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

暮葉「ところで、あそこで早川が戦っていたらどうなっていたのでしょうね？」

圭介「さあ？　永渕が強いと言っても不良の中での話だし、瞬殺だったんじゃね？」

暮葉「伊吹さんにもやられましたけどね」

圭介「不意打ちだったし、それに伊吹は実力隠れ気味だけど実際強いからな」

暮葉「でしたら、もしけーすけ様と会っていたら！？」

圭介「お前わかってて言ってるだろ……多分激戦で文化祭が崩壊するぞ」

暮葉「とにかくけーすけ様っ、今回は早川と伊吹さんに感謝ですね！」

圭介「永渕と戦う必要はなくなったからな。けど伊吹に無視されるし……うぅ」

大吾「次回！　圭介に迫るＳＳの正体とは？　そして早川悠にも戦いが迫っていた――――！」

圭介「なに熱血展開にしようとしてんの！？　つかてめえ、美味しい所盗るなよ！」

第112話，2人に迫る危機（？）

ったく～アイツらは……この人ごみの中どこに消えやがったんだ？
俺こと藤島圭介は、大吾達と一緒に限定版フィギュアを求めて外に出たが……。
あまりにすごい人ごみのせいか、大吾と重原をロストしてしまったのだ。
アイツら無駄に歩くの速いし、ちくしょう一体どこに消えたんだよ。
でもなぁ、この人ごみを掻き分けて探すのも面倒だ。
とりあえず何処にいるかメールで確認とってみようかな。

「……ん？」

その時、俺は何者かに袖を引っ張られたような気がした。
まあ犯人は考えるまでもない。この感じは昨日もたっぷり感じた。

「なんだぁ白藤か。こんなところで何してんだ？」

【来てほしい。とっても話がしたい】

白藤は左手で携帯に文字を打ち込み、画面に映ったその文字を俺に見せつけてきた。
この特殊な会話方法、なんとかならないんだろうか？
ネクロマンサーもビックリだぜ。しかも携帯だから紙はいらないし。
なんて地球にやさしい無口キャラなんだろう、白藤……。

「は、話？　ここじゃダメなのか？」

【とっても大事な話。出来れば二人きりがいい】

「ふふふふ、二人きりですとぉぉ！？」

コクリと、相変わらずの無表情で頷く白藤。

待て、白藤から二人きりで話をしたいと言われた。

言われたんだが……これってもしかして、やっぱりそういう意味なんでございますか？

確かに昨日から白藤は、やたら俺にベタベタくっ付いてはいたが……。

俺、いつのまに白藤にまでフラグを立ててたんだ！？

【……ダメ？】

画面に書かれたその文字……うう、無表情でダメって言われるのも中々の破壊力。

まずいな。これはもう乗るしかないな。いや、神がそうしろって言っている気がする！

何故俺はそう思ってしまったんだろうか。俺はその理由について考える事にした。

って、考えるまでもないよな。告白イベントだとわかっていながら、それでも期待して行こうとしている俺……そうだよ答えは簡単じゃねえか。

――俺、多分白藤が好きなんだ！

理由なんてよくわからねえ。でもきっとそうなんだろう。

思えば一目惚れだったのかもしれない。だって白藤……見た目超俺の好みドストライクだもん。

えっ、一目惚れはナシだって？いやいやそんな事はないだろう。

一目惚れだって立派に惚れてるって事じゃなイカ。

ふ、ふふ……そう考えると告白が楽しみになってきた。
俺、告白されたら白藤と付き合う。いや、それがないならこっちから告白する！

「よ、よ～し白藤！　早速行こうじゃないカ！」

俺の言葉に白藤はコクリと頷く。よっしゃキターーー！
このまま白藤ルート突入だ。待ってろ、ラブリーマイエンジェル早苗たん――ッ！

――それから数分後、俺達は人目のない校舎の裏側に来ていた。
フフフ……遂にこの時が来たぜ。
白藤からの告白イベント。あるいは俺による白藤への告白イベント。
いかん、想像しただけでニヤニヤしてきた。だが、一人でニヤニヤしていてはただの変態だ。
ここは我慢しよう。己の感情を押し殺し……う、ぐ……中々ハードだ。
だが、このイベントが成功すれば俺は――晴れてリア充に！

「白藤、その～用って一体なんなんだ？」

「……」

白藤は無言。フフフ、これはひょっとして照れているのかな？
やっぱりここは男である俺がリードすべきか。
そうだな、折角の告白イベントなんだ。これは男のほうから言ってやったほうがいいのかな。

「俺もその……丁度言いたい事があるんだよな」

「……？」

「だから、もし白藤が言いづらいんならその……俺から言ってもいいか？」

【だめ】

画面に表示されたその一言……ってオイ。

――ダメなのかよおおおおおおおおおおおお！

ひょっとして白藤のヤツ――自分から想いを告げたいのか！？

なんという子。無口だけど白藤スバラシすぎるっ！

「……ッ」

今、白藤が必死に携帯に文字を打ちこんでいる。

これはまさか――告白のセリフを書き込んでいるのであろうか？

やべえ興奮してきた！と、とりあえず白藤と恋人になったらなにしようか。

まずはデートっすよね。手を繋いでテキトーに街中回って夜にホテルへＧＯ――――

だあああああっ！アホか俺は、最後のやつは欲望に忠実すぎるだろっ！

と、とにかく。この後のことはちゃんと考えておかないとな。

うんうん。俺は多分これから白藤の恋人に――――

「……んっ」

「お、どれどれ？」

白藤が俺に携帯の画面を見せてきた。

さてさて――白藤が必死に考えた告白のセリフとは――――？

【ごめんなさい】

――はい？

ゴ☆メ☆ン☆ナ☆サ☆イ……ですと？

それってどういう――って考えなくてもわかるよね。

そうか、俺は白藤に振られちまったのか……って待てよオイ。

そもそもなにもしていないのにごめんなさいって、ホントにどういう意味なんだ？

なんかその、恋愛とは全く関係がない気が――っと思った。

「ご、ふ――っ！」

刹那、何故か俺の腹部に鉄球がめり込んでいたのだ。

ゴキゴキと嫌な響きがするほどの勢いで突っ込まれた鉄球は、そのまま俺を何メートルも後方へとぶっ飛ばしてしまった。

「しら、ふじ……っ！」

口の中の苦い味を感じつつも、歯を食いしばり白藤の事を見る。

そこには――もう一個、鉄球を浮かす白藤の姿があった。

――同時刻、早川悠は……。

「オマエ、このガキを見なかったか？」

オレは携帯電話に保存されていた、ミネットの画像を少女――国宗伊吹ってヤツに見せてみた。

オレと国宗は校内にあるベンチに座っており、丁度国宗がオレの隣に座っていた。
国宗は写真を見ると、思いっきり何かを考えているような表情になるが、決して答えは言わない。
その理由は簡単だ。何故なら国宗は――――

「ごめんなさい。この子見たことがないわ」

「そォか、ならこっちのガキはどうだ？」

今度はリーネの画像を国宗に見せてやった。
だが、反応はミネットの画像の時と全く同じである。

「う～ん、この子もわからないわ」

「クソッタレ……あんのクソガキ共、どこで遊んでやがるんだ？」

「あんた、その二人のお兄さんか何かなの？」

「あン――？　なんだろォな……まァ、保護者みたいなモンだ」

知らねえし、そもそも保護なんかしてるつもりはねえけど。
だが、そう言っておくのが一番無難だろう。
なんせ国宗は女だ。ここでロリコン野郎だと思われたら、間違いなく面倒な事になっちまう。
……チッ、これだからクソガキの扱いは面倒だ。

「そう、あんたいい人ね……っ」

「あァ、迷子捜しのどこがいい事だ？」

「いいことじゃない。私なんかと比べたらさ」

なんなんだコイツは……妙に寂しげな顔しやがって。
それにどう考えたって、コイツのほうがいいヤツじゃねえか。
オレのどこが善人なんだ。オレは何十人もの特異点をブッ殺したヤツだぜェ？
そんなヤツが今更、善人なんかになれるワケがねェだろ。

「オマエのどこが悪いヤツなんだ？」

「はぁ……言ったほうがいいのかな？」

「さっきのクソ野郎を代わりにぶっ倒してくれたお礼だ。話くれェは聞いてやる」

「……私さ、幼馴染がいるのよ。ソイツとは昔から仲がよくて、ずっと昔から一緒で……」

「はン――要するにオマエ、ソイツの事が好きって事かァ？」

「～～っ！？　ち、違っ……くはないかもしれないけど……で、でもやっぱ違うわよ！」

ハァ……コイツはどうやらミネットとは逆のタイプらしい。
そんな感情なんてこれっぽちもわからねえ、そんなオレにさえ気持ちがわかるコイツの態度。
言ってる事と態度が全然違ェ。コイツは全く素直じゃねェ。

「ンで、その幼馴染に関しての悩みって何だァ？」

「最近その……会話ができないのよっ。わ、私のせいなんだけどさ……ちょっとした事があって以来、ずっと話ができなくて……」

「……」

「なんかよくわからないけど、その……目とか合わせられなくて……」

「ふ～ん。だったら簡単な事だ、ソイツに声でもかければいいだろ？」

オレはごくあたりまえな――普通すぎる答えを国宗に言ってやった。国宗は完熟トマトのように顔を赤らめ、必死に顔を横に振りやがる。

「む、無理無理っ！　今更遅いわよっ！　それにその……アイツも多分、もう私の事が……っ」

「オマエにそんな事がわかんのか？　ソイツは違うかもしれねェだろ」

「そ、そんなこと言われても……っ」

「第一、ソイツの事を一番理解してんのはオマエじゃねェのか？」

「……えっ？」

「オマエはソイツの幼馴染なんだろ？　一番理解してて当然じゃねェのかよ？」

最も、生まれてこの方そういうのがいねえオレには、イマイチよく理解が出来ねえがな。
だが恐らくそうだろう。幼馴染ってェのは昔っから一緒で、切っても切れねえ縁で。
要するに――互いに家族以外じゃ一番長い付き合いって事だ。

「それはそうだけど……っ」

「ソイツはどんなヤツだ？　そんな簡単にオマエを切り捨てるヤツかァ？」

「ち、違う……と思うけど……でもっ」

「違うと思うなら――これからもそう思っとけ。ンで、今日でもソイツと話をすりゃいいだろ？」

オレが言い終えると、国宗はしばらく無言で考え込んでいた。
その表情はとても真剣で。でも今にも折れてしまいそうなど、とても弱々しかった。
だが、遂に国宗は――――

「……わかった。今日……話しかけてみるっ」

「そォかい……そんじゃ、オレはそろそろクソガキ捜索を再開すっかァ」

そう言ってオレは立ち上がり、ただひたすら前を見ていた。
そう言えばここは人通りが少ない。なるほど、だからコイツも本音を言えたのかもしれねえ。
コイツもそうだし、木下木葉の研究所を襲ったオッサンもそうだが

……色々と悩んでるなァ。
人ってのはやっぱ、誰にだって悩みがあるモンってかァ。
中にはそれでコイツのように――今にも折れちまいそうなヤツだっていやがる。
悩み……ソイツは人を変えちまう何かがある。
人を変える悩み……ンじゃァ、オレはどうなんだろうか――

「は、早川悠……なんで貴方がここにいるのよっ！」

「……あン――？」

右を振り向くと、長い黒髪の少女とピンクのガキがそこには居やがった。
2人ともどこかで見たことがあるツラだ。いや、忘れるハズがねェよなァ。

「もきゅ！？　さ、西園寺さんお知り合いなのですかっ！？」

「い、嫌ってくらい知ってるわよ……なに、貴女も知り合いなのかしら？」

「な、仲間の仇なのです――っ！」

「もしかして……貴女は特異点ってヤツかしら？」

「もきゅ？　そ、それじゃあ西園寺さんは……ふぇ、ど、どういうことなのですか！？」

「事情は後で説明する。だから貴女の事情も後で聞くことにするわ」

「りょ、了解なのですっ！」

オレは二人のことを嫌ってくれェ知っている。
一人は西園寺雪乃。あの野郎……佐井学園の生徒だったハズだが、なんでここに居やがるんだ？
もう一人は名前は知らんが、オレと戦ったアルファ隊のそこそこ強いガキだ。
あのガキもここの生徒だってのか。チッ、これまた面倒な連中に遭遇しちまった。
２人は戦意丸出しだ。要するにオレと戦うつもりらしい。
勝てねェってわかってんのに……全く、あのおチビコンビは。

「なによこれ？　く、暮葉……どういうことなのよ？」

「い、伊吹さん逃げてください！」

「えっ？　なんで？」

「いいから早く逃げて欲しいのです！　その人は――連続殺人犯なのですっ！」

「えっ！？　も、もしかしてそれって……あんたや圭介絡みの問題の事？」

「大体そんな感じなのです。それより危険なので早く逃げてくださいっ！」

国宗は後退りはして距離をとったものの、決してこの場から逃げようとはしなかった。
あの野郎、あの様子だとちょっとは何かの事情を知っているらしい。

っと言うことは、ここで事情でも把握するつもりなのか。
まあ国宗のことはともかく、目の前の2人をどうにかしねえとな。

「早川悠……どうして貴方が文化祭に来ているのかしら？」

「目的はなんなのですか！？　とにかく……早くここから立ち去って欲しいのです！」

ハッ、よっぽどオレを恨んでやがるらしいな。
まあ当然と言えば当然だ。オレのやった事を考えればそんなのは当たり前。
今更――オレのそんな汚点を綺麗サッパリ流すことは出来ねえ。
ったく、学園を辞める為とは言え……あの件のせいでオレは永遠の悪となった。
最も……その前から学園の指示で汚れ仕事をしていたがなァ。
そんな汚れ仕事をさせる学園から逃げ出す為にやった事が――また汚れ仕事であった。
――ったく、なんなんですかァオレの人生ってヤツは？

「オマエらには関係のねえ事だ。悪ィが構っている時間はねェ」

コイツらの相手よりも――あの遊んでやがるミネット達を探さねえと。

「何をしようとしているかはわからないけど……また汚れ仕事のようねっ」

「させないのです……これ以上、貴方の行為で誰かを不幸には絶対にさせないのですっ！」

ハァ……全く、コイツらはどうやらオレと戦うつもりらしい。
勘弁しやがれよ。こっちは能力を15分しか使えねェんだ。
確かにコイツらは簡単に倒せる相手のハズだ。
だが――アイツらの思いこみのせいで起る戦いで、無駄に超能力を使いたくはねェんだ。
増してやここは学校。あまりド派手に戦えばオレ達の行為がバレちまう。
そうなると流石にまずい。超能力が公になったら――それこそオレの生存にも関わる問題だ。
……チッ、仕方ねえなァ……戦いの回避は無理そうだ。だったらやることは一つ。

「お片付けだ――2人まとめて3分で終わらせてやる」

第１１２話，２人に迫る危機（？）（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「なんか、俺が本来の主人公なのに俺のほうが出番少ない……」

凪紗「しかも、藤島はボコられて終わりなのに……なんだろう、早川はカッコいい終わり方だったな」

圭介「ちくしょう、俺が真主人公なのに何この扱い！？」

暮葉「けーすけ様が勝手に一目惚れなんかするからなのです……」
ボソッ

伊吹「自業自得よ、ばか圭介……っ」ボソッ

圭介「なんか、御尤もな事を言われた気がする……」

第113話，仲間だから

ぐ、くそ。なんで俺は白藤に攻撃されたんだ？
ていうかコレ、どう考えても普通の攻撃じゃない。
白藤は鉄球を投げつけてきた……らしいが、あの細腕でこんな鉄球を投げられるとは思えない。
そもそも、この鉄球は一体どこから持ってきたものなんだ？
ていうか白藤って一体何者なんだよ――――！

「白藤……お前一体誰なんだ！　普通の人間じゃねえのは今のでわかったぞ！」

すると白藤はこんなときであるにも関わらず、携帯に文字を打ち込みそれを俺に見せてきたのだ。
やれやれ、こんな時まで会話手段が携帯とは……白藤、果たして彼女は喋れるのか？
って、そんなことより携帯の画面を見ないと。そこに彼女の言いたい事が書かれているんだ。

【魔術師】

画面に表示されているその一言。そう、その一言が重要なのだ。
魔術師。確かに彼女の画面にはそう表示されていた。
魔術師と名乗り、なおかつ俺を襲う存在。
それはつまり――サヴィエト亡命政府の魔法使いということである。
っと、言うことは白藤の正体は――――

「お前……まさかサヴィエトの魔法使いなのか！？」

白藤はコクリと首を縦に振る。
マジかよ……うぅ、こりゃかなり胸が痛い失恋だよっ。
白藤がサヴィエトの魔法使いかよ……ああもう、どうすればいいんだ畜生！
とにかく――学校から一旦出よう。
こんな所で暴れられちゃあ下手すりゃ周りに被害が出る。

「へッ、悪いな！　生憎俺もそう簡単にサヴィエトに捕まったりはしねえんだよ！」

そう言い放ち、俺は学校の外に向かって全力疾走を始める。
とにかく走れ。そして人目のない所まで行くんだ。
そうすれば――周りを気にせず白藤と話をする事ができるハズだ。
ひたすら逃げる俺。当然、白藤は俺を追ってくる……ハズである。
しかし後方を確認すると誰もいない。白藤のヤツ……追い掛けてこないのか？
そんなことを考えているうちに、俺はいつのまにか学校の外の道路を走っていたのだ。
とりあえずどうしよう。そこの工事現場にでも入ってみるか。
まだ建設中のビル。鉄骨だけの状態のビルの下に俺は入りこむ。
白藤は……来てないな。やっぱりアイツ追い掛けてこないんじゃ――

――

「ご、はァ――ッ！？」

その時――こめかみに激しい衝撃を感じた。
痛い。オマケに頭がグラグラする。視界も脳が揺さぶられたせいかクラクラしている。
いや、一瞬だが若干ぼやけたような気もするぞ。
この感じはまさか――白藤の攻撃か！

「――――ッ！」

「……」

衝動的に振り返ると、そこには相変わらず無表情の白藤が佇んでいた。

とても、暴力を振るうとは思えない少女の姿。

しかし実際は魔法を容赦なく放つ――サヴィエトの魔法使いである。

え～っと。とりあえず人目のない所まで逃げたはいいが……この後どうすればいい？

ちっくしょう。暮葉のヤツ……こんな時にどこで何してやがるんだよ！

「なんで……なんでてめえはこんな事をするんだよ！」

「……」

「俺を捕えて何の得がある！？　確かに俺はアレクサンドルの子孫っぽくて、てめえらにとっては迷惑な存在なのかもしれねえ。けど、俺はてめえらを止めるような力なんてどこにもねえんだ！　そんな無害なヤツを襲って一体てめえらの何の特になるってんだよ！」

【わからない。でも命令されて動いているだけ】

白藤が携帯に打ち込んだその一言。俺はその一言で思わずカッとなってしまう。

「ふざけんじゃねえよ……てめえはサヴィエトの言いなりかよ」

「……」

無言の白藤を俺はじっと見つめる。

いや、さっきよりも厳しく睨みつけるように――俺は白藤の事を真っ直ぐ見ていた。

「よくわかりもしねえで、人の事を意図的に傷つけようとしてんじゃねえよ！」

【ごめんなさい。でも命令には逆らえない。逆らったら私が殺される】

「さ、逆らったら殺される……？」

【サヴィエトで裏切りは許されない。たとえ、無理やり入れられた者でも】

「無理やり？　もしかしてお前……無理やり魔法使いにされたのか？」

再びうん、と頷く白藤。

そうか……そうだよな。白藤が自らオカルトの道に走るとは思えねえ。

でも、無理やりだったら反抗すればいいじゃねえかよ。

「お前には力があるじゃねえか。その力があればサヴィエトとだって戦えるじゃねえか」

【無理、あなたは幹部の力をわかっていない】

「それでもだ。そんな理由があるからって、お前は俺を殺したいのか？」

【殺さない。身柄を拘束するだけ】

拘束って言われてもね、普通の人間さんは嫌な予感しかしないんだよ。

第一、ドMでもないのに拘束されて喜べるわけがねえ。

それに――そんな事になったら青山さんに悪いだろ。

俺はこの後、青山さんと一緒に写真撮影という、超忙しい仕事をしなくちゃいけないんだ。

だから――サヴィエトの魔法使いに捕まるわけにはいかねえ！

「絶対に捕まらない。お前のこともその場所から救い出す」

【無理、運命には逆らえない】

「だったら逆らえるような――そんな状況を作ってやる！」

いつ命を落とすかわからない。

そんな危ない場所に白藤（コイツ）をいさせたくない。

白藤（コイツ）をその場所から救ってやりたい。

その気持ちだけが俺の脳や心を支配していた。

全く……失恋はちっと痛かったけどさ、それでも白藤は同じクラスの仲間じゃねえか。

その事実だけで十分だ。クラスメイトってだけで俺にとっては十分すぎる。

それだけでもう――助ける理由は出来ているんだから！

【私は上に殺されたくない。殺されたくないから圭介に抵抗するよ

？】

け、圭介って下の名前で……って、今はそんなことを気にしている場合ではない。

やっぱり白藤は怖がっているようだ。怖いから上の言う通りに動く。そうすれば――自分は殺されずに助かるかもしれないから。

だからこそ俺の救いの手を拒み、上の命令を果たすために抵抗をする。

「いいぜ、だったらその抵抗を――打ち破ってやる！」

そして白藤に近づき、その場所から解放してやる――――！

「……ッ！」

白藤が両手を前に突き出すと、掌の前方に突然鉄球が現れた。

どういう魔法かはサッパリわからねえ。

こういう時に魔法の専門家が不在だからな。

全く暮葉のヤツ。お前がいないせいか、あの魔法が何なのかサッパリわからんぞ！

まあ……あくまで俺の推測だが、あの魔法はおそらく――――

「……ッッッ！」

白藤の鉄球は作り出したもの――――

っと言うよりはどっからか呼び出し、瞬時に己の手元に持ってきた。

まさにそんな感じである。もしかしてあの魔法、瞬間移動（テレポート）の一種か？

さらに白藤は何らかの力で鉄球を加速させ、まるで砲弾のようにソレを勢いよく放ったのだ。

そんなものを避けれるハズもなく――俺は鉄球を腹にマトモに喰ら

ってしまった。
ゴキゴキ、と嫌な音が響き、口の中に再び苦い味が広がってゆく。

「――はっ！」

白藤からの第二撃。今度は複数のものが向かって飛んでくる。
その全ては鉄球という訳ではなく、中には刃物や金属バットまでもが混じっていた。
オイオイ――明らかに命中したら死ぬものまであるぞ。
白藤のヤツ……もしかして、俺の身体が丈夫だって知ってるのか？
どう考えても彼女の攻撃は、それが前提でやっているとしか思えない。
だって普通の人に放つ攻撃にしては――あまりにも殺傷力が高すぎる！

「う！　ぐっ！　く、そ――う、ぁぁっ！」

「……」

辛うじて白藤の攻撃を避けていく俺。
地面に寝そべって転がったり、ゴキブリの用に這ったり……。
もう、攻撃を避ける為の手段は選ばなかった。
どれほど惨めな姿であろうと、攻撃は避けたほうがいいに決まっている。

「ぐ、くそ……ッ！　これじゃキリがねえ！」

「……」

白藤の攻撃を散々避けまくった挙句の一言。

どうしよう、ホントにこのままだと際限のない消耗戦だぞ。
とにかくさっさと倒さないと――遅れたり行けなかったりしたら、青山さんに悪いじゃねえか！
送れない為には戦いをさっさと終わらせるしかない。でも、どうやって？
……やれやれ、いちいち考えるのが面倒になった。こうなったら手段は一つしかねえ――――

「正面突破あるのみ――――！」

「……っ？」

白藤は一瞬、とても驚いた表情を見せた……気がした。
正面突破という選択が予想外だったのだろう。
だが、予想の斜め上を行くことをしなければ、戦いに勝つことは絶対にできない！

「う、オオオオォォォォォッ！」

雄叫びを上げながら、必死に白藤へと迫る俺。
だが――そんな俺を白藤は受け入れようとしない。
サヴィエト上層部が怖い為に命令に従い、白藤は俺に向かって再び魔法を使ってきた。
今度は３０個はあるであろう鉄球だ。ってかまた鉄球かよ本日何度目だよ！

「……ッッッ！」

「ォ、オオオオオォォッ！」

俺は鉄球を一つずつ避けていく。最も、俺の反射神経なんて多少他人よりいい程度。
そんな程度で全てを避けれるハズもなく、当然鉄球が被弾することもあった。
ゴン！という鈍い音に激しい衝撃。
当然被弾すれば被弾箇所が痛むが、そんなものは走っているうちにすぐに消えていった。
俺はとにかく突き進み、白藤へと徐々に迫っていく。
そして――最後の一球。

「――――ッ！」

しっかり握った左拳を振るった。利き手ではない左手。
それは、自分でもわかるくらい威力が落ちていた。
キレもなければスピードもない。左拳では右拳と比べてやはり見劣りする速度しか出ない。
それでも――この鉄球を弾くには十分であった。
狙い通り、俺は最後の一球に拳を打ち込む。
すると、鉄球は僅かに軌道を逸らし、俺の顔面ギリギリ真横を通り過ぎていった。
左拳は鉄球の軌道を逸らし、自分の顔面を守る為に放ったものだ――――！

「う、おおおおおおおおっ！」

「――――ッ！」

今度は全ての力を注いだ右拳を――目の前の白藤の顔面へ！

「……ッ？」

……放つことは無く、彼女の顔面ギリギリで拳は停止している。

「……心配するな。ちゃんと寸止めしたから」

【……私の、負け】

白藤はポケットから携帯を取り出し、文字を打ち込んでそれを俺に見せてきた。

そこには確かに――降参を意味する分が書かれていた。

その分を見た瞬間、俺は微かに表情を和らげ彼女を見つめる。

「降参したか？」

【うん】

「もう白藤は俺を襲ったりしないか？」

【……わからない。上が怖い】

「そうか……大丈夫だ。お前を守れるやつならいっぱいいるぞ？」

「……？」

いまいちよくわからない、という顔を白藤はしている。

そうだな……とりあえず、あんまり問題にならない程度に教えておこう。

一応白藤もサヴィエト亡命政府の人間だ。詳しい事を教えるのは危険だろう。

だから、教えるにしてもかなり大雑把に教えるだけだ。

「お、俺の友達強いヤツが多いからな。うん、魔法使いなんてイチコロだろっ！」

「……っ」

「それにほら、俺だって白藤に勝ったろ？　多少の魔法使いならなんとかしてみせる」

「……ッ」

「だから大丈夫だ。白藤のことはみんなで守る」

なにも白藤一人で悩む必要なんかないんだ。
何故なら――仲間がそこにいっぱいいるからである。

【……頼ってもいい？】

「ああ。俺から仲間にもちゃんと事情は説明する。だから最初の一歩としてさ――友達になろうぜ」

【……ありがとう】

ありがとう。
今の俺にはその一言で十分だった。
それを聞けるだけで――十分俺は幸せに思えた。
やっぱり、こういうのも悪くはないよな。まあ、流石に戦いには疲れたけどさ。
それでもやっぱり幸せだ。ありがとう、本当にいい言葉である。

――そして、この日から白藤は俺達の仲間になった。

第１１３話，仲間だから（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

大吾「なんか最後無理やりシメたな」

重原「まあ毎回の事じゃないかい？」

圭介「ああ疲れた……っ」

大吾「お疲れさんっ」

重原「圭介もよく戦うキャラだよね～」

圭介「うっせ黙れ！　てめえら俺を置いてフィギュア鑑賞に行きやがって……こっちは鉄球打ち込まれるは、いろいろ大変だったんだぞ！？」

大吾「あっ！　あそこの休憩コーナーにけ○おんの原作がっ！？」

重原「おお、それは行かないといけないね！」

圭介「おいコラッ！　お前ら勝手に逃げるな！」

第１１４話，最強の超能力者

相手は２人。一人は氷やら念力を使う超能力者。
もう一人はオレと同じ風系統の能力を使う……正確にいえば魔法使いってヤツだ。
西園寺の奴はあまり警戒する必要はねえだろう。
問題はあっちのピンクのチビだ。あの野郎は確か、オレの弱点を知っているハズだ。
なら話は早ェ……最初に倒すのはあのピンクのチビのほうだ。
制限時間は１５分。何らかの不測のトラブルが発生する可能性を考えれば、あまりコイツらとの戦闘に時間を掛けたくはない。能力使用は最低限で済ます必要がある。

「それでは開戦なのですっ！」

「今度は貴方を……倒す」

ピンクのチビは背中に隠していた刀を抜き、西園寺は巨大な氷柱を自分の左右に作り出す。
西園寺はオレと同じ５本指の一人。アイツは吹雪念力（ブリザードサイコ）という能力を使い、なんでも水蒸気などの僅かな水分から氷や雪を発生させ、念力によってそれらを自在に操れるらしい。
オレも左手で変換機のスイッチを押した。電子音と共に何かが復活したような気がする。
何の問題もなく演算能力が回復した。
オレに迫ってくるのは砲弾並の氷柱。ピンクの少女の速度もそれに負けぬほど速かった。
足の下から強烈な風を吹かせ、足元から砂埃を立たせ、ロケットのように一気に飛び上がる。

瞬時にしてオレは上空２０m、あの2人を十分に見下せる位置に到達した。

「ぎゃっははっ！」

虐殺的な笑い声を上げる。

オレはそのまま風の力を利用して2人の所まで、ロケット推進の戦闘機のように、素早く一直線に突き進んでみせた。

「……ッ！」

西園寺は能力を使い、あくまで推測だが５０ｃmはあるであろう氷の装甲作り出す。

それでオレの攻撃を防ぐ、あるいは防げなくとも逃げる為の時間を稼ぐつもりなのだろう。

だがなァ、そんなことはとっくの昔に予想済みだ。

オレは急激に進路を右に変更、数十メートル先にあった建物を足場とし、その壁を蹴るように再び暴風によって前方に突き進んだ。あまりに強すぎる風の力は校舎の壁を粉砕し、まるで何かが激しく激突したかのような円形の穴を開けてしまった。まァ、オレがやったとは思われねえだろう。

普通の人間にはこんな事をする力がねェからなァ。

「あっははぎゃはあはァッ！」

「西園寺さん左ですっ！」

「っ！？」

チッ、オレの突撃ナックルも西園寺に寸前に避けられちまいやがっ

た。
流石は五本指ってかァ。反射神経はそこそこいいみたいじゃねえか。
ったく、オレの馬鹿っちゃあ馬鹿だよなぁ。
3分で片付けるって言ったのに、不得意な近接戦闘を自ら挑んじまったんだモンなァ。

「やっぱり速いわね貴方……っ！」

「相変わらずの笑い声なのですっ！」

オレはその言葉を聞くと、一旦変換機のスイッチを切った。
こういう何もしねえ時は、魔力節約の為にも能力使用モードを切っておくんだ。
そうでもしねえと、15分って時間はあっと言う間に経ってしまう。
オレはすぐに戦闘不能になる。そうなれば、確実にあの2人に殺されるだろう。
オレはこの場で死ぬわけにはいかねえ。死ねばあのクソガキ共を探すことだってできねえ。
何よりオレは——とりあえずクソガキ共の居場所を守らなきゃいけねェんだよ。

「チッ、オマエらも相変わらず思考回路が単純じゃねえか。ちったァ人様がほんの僅かでも変わったとかって思ったりしねえのかァ？」

「ええ、思わないわ……貴方の人格で変われるとは思えないわ！」

「拙者は変わろうが変わらないが関係ありません。貴方は拙者の仲間の仇なのですっ！」

「……ハァ、哀れだなァオマエら。それって本気で言ってんのかァ

？　確かにオレはそこのピンクの仲間をブッ殺したし、今更どォにかなるようなモンだとも思ってねェ。オレが豹変することもねェ」

睨みを利かせながらオレは語り続ける。
西園寺もピンクも黙っては聞かず、今にもオレを攻撃しそうな態勢で聞いていた。
そんな中、オレは「だがな」と言葉を切って、

「オレにはオレの道があんだよ。オマエらにそれを邪魔する権利なんてねェだろォがよ……あァ！？」

叫んだ後、オレはもう一度スイッチを入れ、ドン！とこの足で大地を激しく踏みつけた。
その勢いのせいか、まるで地震でもあったかのような振動が発生する。
当然、オレの能力によるものだ。地面に放射状の亀裂が走りまわる。
衝撃は数十メートル先の校舎にまで届き、ギシギシと音を建てた校舎から破片が転がり、ここら辺一帯全ての窓ガラスが無残にも砕け散り、無数の破片がオレの吹かした風によって、くるくると宙で回りながら浮いていた。

「もきゅ！？　な、なんなのですかこれは……ッ！？」

「う、ぁ――そんな、ここまですごい事を――！？」

彼女達は驚きを隠せていない。いや、驚きを隠せていねえのは彼女達だけではない。
校舎にいた全ての人間が叫び、喚き、そしてガキんちょは泣き声を上げていた。
だが――これで彼女達が降参するとは思えない。

だからオレは――もう一度足踏みを行う。足元で発生した僅かな風を操作し、それを風速１６９ｍのＦ６クラスの巨大竜巻レベルにまで成長させる。
あらゆるものを破壊し尽くすＦ６の竜巻。現実じゃあ観測された事がないらしいそれは、周囲のあらゆるものを吸い込みつつ、一直線に彼女達の所へと突き進む。

「も、きゅ――っ！」

「ま、まずいわ――――ッ！」

流石に殺すのはまずいか……。
そう思ったオレはギリギリの所で竜巻を能力で掻き消し、代わりにオレがこの足で進みだす。
ガラスの破片やベンチの残骸、その他あらゆる物の残骸の雨が降り注ぐ。
オレは残骸に触れた。だが、傷一つ付けずに地獄を突破してみせる。
通常、高速移動中に暴風の膜を張り巡らす事はできない。
だが――普通に移動しながらなら造作もない事だ。増しても彼女達も降り注ぐ残骸から身を守るので精一杯で、オレに反撃する余裕などは全くないのだ。
だからオレは杖を付き、破片を膜で反射しつつ彼女達に近付く事ができたのだ。

「あはぎゃはは！　あぎゃはっ！」

気付けばオレは彼女達の目前――たったの２ｍという至近距離に近づいていた。
この状況で彼女達が冷静に判断し、冷静に行動する事など不可能に近い。

西園寺は咄嗟に氷の装甲を作り、ピンクのヤツは刀を構えて防御態勢に入る。
だが――西園寺の装甲など全く気にもせず、ただ握り締めた右拳を素早く放ってみせた。
風の力で加速させ、直撃の寸前に張り巡らす膜によって己の拳を守り――そして放たれる一撃。
結果は言うまでもなく、装甲が粉砕されるだけである。

「オマエらにオレの道を塞ぐ事はできねェ！　大人しくママの膝元にでも帰りやがれェ！」

叫び、両腕でダブルラリアットを仕掛けようとした。
少女達はただ本能的に身を丸め、自分自身を守ろうとする。
さァて……死なねえように手加減しておかねえとなァ――――

「う、ォ！？」

しかし、腕が当たる寸前にオレは動きを止めてしまった。
いや、正確には止められたというのが正しいだろう。
突然俺は――何者かに襟を掴まれてしまったのだ。

「待って悠！　木下先輩を倒さないでっ！」

「ゆーちゃんダメなの！　これ以上暴れたらボク達異端者が公になっちゃう！」

なんだこのクソガキ共。消えたと思ったら突然俺らの間に割って入ってきやがった。
つーかリーネの野郎、ゆーちゃんってナメてんのかァ？

「もきゅ!?　え……み、ミネットさん!?　どうしてここにいるのですか!?」

「なに、この人達は知り合いなのかしら?」

「おい、オマエらどこで遊んでたんだ?　オマエら探してたらコイツらに絡まれたんだけど?」

「リーネさんと2人で演劇見てたんだよ!」

「そうなの。ロミオとジュリエットだったかな……面白かったの!」

「チッ……あァ!?」

オレはクソガキ2人を睨みつける。
ったく、散々探しといてオチがこれとは……ふざけんじゃねえぞ。
まあいい。これでクソガキが見つかったんだからな。

「ミネットさん。あの、早川悠とどういう関係なのですか……?」

「木下先輩!　悠はもう学園と関係がありません。汚れ仕事なんかもやってません。例え仇だとしても悠はもうカタギなんです。だからこれ以上の破壊を防ぐためにも――悠に喧嘩を売らないでください!」

「もきゅ?　が、学園とは関係がない?」

「早川悠。一体どういうことなのかしら?」

西園寺が腕を組み、露骨に不機嫌そうな表情を見せながら訊いてき

た。
ったく。人に物を訪ねる時の態度知らねェのかコイツは。
「オマエ見たいに学園を辞めたに決まってんだろォが」
「そ、それじゃあどうして……貴方はどうしてその事を最初に言わなかったのかしら？」
「あン――？　聞く耳持たなかったのはどっちだ？　大体喧嘩を売ったのはオマエらだろォが」
ったく……面倒くせェ。説明する気も失せるぜこの三下が。
「とにかく木下先輩もそこのお姉さんも、今は悠になにもしないで欲しいです」
「もきゅ、で……ですけどっ」
「そうよ。だってその人は……」
「……チッ、行くぞ」
ピンクのチビと西園寺の言葉の後、オレは2人にそう言い放つ。
そしてオレは後ろを向き、杖をついてゆっくりと歩き出した。
もうリハビリは十分だろう。第一ダルい、さっさと帰ってゴロゴロでもしたいモンだ。
それに――西園寺とピンクはオレの顔を見ねェほうが、ずっと幸せだろう。
「ちょっと待ちなさい！　早川悠、貴方の目的は……？」

オレは西園寺のその問いに、

「ハッ、目的はもう果たした……これ以上用はねェ」

それだけを言い放ち、再び足を動かし前へと歩き始める。

オレの背後には「待ってよ悠！」などと、ミネットやリーネが騒がしく追い掛けてきやがる。

うるせェなァ……誰を探していたせいでコイツらと遭遇し、こんな戦闘になったと思ってんだ？

まァいいやどうでも。能力使用モードは１１分と半分くらいしか持たない。

こんな状況で無駄に超能力は使いたくねえな……クソッタレ。

「もきゅ……ど、どういうことなのでしょうか？」

「わからないわね……早川悠が学園を辞めたって……っ」

背後から、ピンクのチビと西園寺、

「さ、サッパリ状況がわからない……なんなのこれ？」

そして国宗の声が聞こえた――ような気がした。

第１１４話，最強の超能力者（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

あかり「なんかカオスなことになってる！？」

千早「ほんとだね……その、校舎壊れちゃってるね」

あかり「こ、これで文化祭が中止になったらあたい達の出番は！？」

千早「わ、わからないよそんなの……っ！」

あかり「このままだとあたい達……文化祭編で出番がないんじゃ！？」

浅間部長「まさにボクの妹、アッカリ～ン化だね！」

あかり「うるさい！　バカ兄貴くたばれよな！」

浅間部長「ぐ、はぁ――！？

第１１５話，仲直り

その後、俺は白藤と一緒に学校に戻ってきた。
さてさて、今から文化祭を楽しむとしようか。
今日に限って暮葉を見かけねえし、伊吹とは相変わらず気まずくて話辛い。
野郎共は見つからんし、小坂は多分暮葉と一緒だろうし、明智や生駒は今忙しいハズだ。
だったらいっそ、白藤と一緒に文化祭を回ろう。
なんたって白藤は友達だからな。友達として最初の遊びは文化祭を回る事だ――――！

「……」

「……」

しかし、俺と白藤は学校に戻ってから……うん、思わず絶句してしまったんだ。
確かに人は多いものの他校生徒が全くおらず、それどころか警察車両の車列が停車していた。
さらに、なんとなく校舎が壊れているような気もするぜ。

「……な、なんすかコレ？」

「あっ！　いたいた圭介だっ！」

「せ、先輩……っ！」

いつも通りのあかりと、カメラを提げた青山さんが俺の所に駆け付

けてきた。
2人とも何故か俺の顔を見るや、安堵の表情を見せてきたのだ。
「あかりに青山さん？」
「よかったぁ～！　圭介が無事であたいは安心だぞっ！」
「先輩……その、生きていて本当によかったです……っ」
「あのさ2人とも。俺達がいない間に何があったの？」
「じ、実はな――――」
口下手な青山さんではなく、お喋り大好きで口先が立派なあかりが説明を始めた。
そこで俺と白藤は驚くべき事実を知ったのだ。
何やら激しい揺れを感じ、巨大な竜巻が初芝高校の奥のほうに発生し、もう文化祭の会場や校舎そのものが滅茶苦茶になってしまったらしいのだ。
幸い死者は出なかったものの、初芝の学生や一般人の負傷者は大勢いたらしいのだ。
そんな大事件が発生した結果――――
「ぶ、文化祭が中止――ですと？」
「は、はい……その、先輩と回れなくて残念ですけど……っ」
「被害があまりに多すぎて文化祭所じゃないんだ。それくらいわかれよな！」

「う、ウソだ……俺、まだロクにエンジョイしてなかったのに……ああもう、なんたる不幸！」

写真部の活動だってまだしていないし、第一白藤と文化祭を回るという予定が……。

ていうか折角3日もかけて準備したのに――苦労して設営した文化祭会場が！

もうなんなのコレ。女装させられるし、大いなる誤解から暮葉と伊吹に暴行されたし、白藤と戦う羽目になっちまったし、そしてトドメに全ての苦労が水の泡って……さ、最悪の文化祭じゃ！

「俺の苦労返せバカヤロォオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォッ！」

「せ、先輩……し、しっかりしてください……っ！」

「落ち付けよな圭介っ！　明日は臨時休校でその翌日から夏休みなんだぞ？　ほ、ほら。得したと思えば幸せに感じるだろっ！？」

【圭介、泣いちゃダメ】

「うあああああああ！　ちくしょう色々と不運すぎるぞクソッタレェェェッ！」

全ての苦労が水の泡となり、泣き叫んだ後の俺は――もう、放心状態であった。

その後、通常より一日早く一学期が終了。俺と暮葉と葵の三人で仲良く下校中であった。

俺が中心に立って右に暮葉、左に葵が並んで歩いている。

時々周囲の「リア充死ね」的な視線が痛いが、残念ながら俺はリア充ではない。
右にいる暮葉は俺の友達であり、左にいる葵は単なる妹。
そう――俺には恋人という存在がいないのである。
白藤に対する恋心も、あんな騒動のせいかいつの間にか消えているし……なんたる悲劇。

「はぁ……」

「お兄ちゃん元気出そうよ。明日から夏休みなんだよ」

「そうですよっ。ほら、けーすけ様が大好きなお休みなのですよ！？」

「うっせ黙れ！　こちとら折角の努力が水の泡になって色々アレな状態なんです！　ああもう、女装とか誤解とか魔ほ……げふんげふん、どこぞのヤツに喧嘩売られたりとか！　なんなんですか今年の俺のトンデモ日常は！？」

「うわぁ～、葵の知らない所でお兄ちゃんすっごい苦労してるね……っ」

「けーすけ様も色々と大変なのですねっ」

うるせえ、そもそも誤解で俺をシバいたのはアンタじゃん。
そういえばサヴィエトの魔法使いとの戦い。暮葉に一応報告したほうがいいのかな？
でもなぁ、白藤は友達だし……もう害はないっぽいから別にいいや。
そんなことよりも、今の俺にはとっても気になる事があるんだ。

「ところで何で学校があんな事になったんだ？」

「それが原因不明なんだよ？」

「えっ？　げ、原因不明？」

「うん。人災か天災かすらもわからないらしいよ？」

なんだそのワケのわからん理由。

って、わからないからワケのわからん理由になってるんだ。

それにしても、どんな事になったらあんな事態に……。

まさか……暮葉が魔法使いか何かと戦ったとか……？

ハハッ、流石にそれはないか。

仮にそうだとしたら相手はどんなヤツだよ。

こんな滅茶苦茶な状況に出来るヤツだぜ、絶対普通じゃねえよ……。

「……」

その時、三人の間についに沈黙が走ってしまった。

まあロクに話をしない俺のせいだが、やっぱり3人もいて沈黙状態だと気まずいもんだ。

ヘコみたいことはヘコみたいが、やっぱりいつまでもコレじゃダメっすよね。

仕方ない。そろそろ元気を出して話をしながら楽しく――

「う、あ――っ！？」

「え……お兄ちゃん？」

「けーすけ様っ！？」

その時、何故か俺は胸倉を掴まれ引っ張られ――気付けば暮葉達と離れていたのだ。
あまりにもいきなりすぎるこの事態。
俺はよくわからないまま、何者かによって胸倉を引っ張られ続ける。

「おっしゃあ圭介ゲットだわ！　わはははーっ！」

「ちょ、てめ、苦しいッ！　ってお前は――!?」

俺を引っ張るソイツの正体がわかった時には――もう俺は近所の公園にご案内されていた。

そして――ボロ雑巾のようになった俺は、公園のベンチで首筋をいじっていた。
最初に引っ張られた時の影響か、ちょっと首筋に違和感があるんだが……。
ああ、ちっくしょう。いきなり引っ張るくらいなら一言説明しろよ。

「い、つつ……っ」

首筋を押さえ、ゴキゴキと首を動かし続けていると、

「あ、圭介っ。よかったわ…元気そうでっ」

「あのなぁ……引っ張ってきたのはどこのどいつだよっ！」

俺はいきなり俺を引っ張り、公園に案内しやがった犯人――伊吹に向かってそう言い放つ。

「……やっぱり、思い切って行動するものね。これくらい大胆になるとむしろ話せるわね……っ」

「あ？　な、何言ってるんだ？」

伊吹が何か呟いているが、あまりにも小声すぎるせいで全く聞きとれない。

言っておくが俺は耳だけはいいほうだ。小学生の頃はそりゃ地獄耳とまで言われた事がある。

伊吹のさっきの呟きは、そんな俺でさえ聞きとれない――とんでもなく小さな声であった。

「ふぇ……っ！？　な、なにも言ってなんかないわよっ！」

「どうしたんだ？　顔赤いぞ？」

「だ、だからその……なんでもない！　なんでもないから心配する必要ないわよ！」

ホントに大丈夫なんだろうか。伊吹の顔は耳まで真っ赤に染まっていた。

コイツ……もしかして熱でもあるんじゃないだろうか？

いやいやそれは考えにくい。だってあれだけ元気に走っていたじゃねえか。

熱があったらあんなに走れないだろ。じゃあ、なんで伊吹の顔が赤いんだよ？

「はぁ……それで何の用なんだ？」

「え、えっと……それはその……っっっ」

「……あ？」

何故そこで俯いて黙っちゃうんだろうか。そんなに言いづらい事を言いに来たのか？

――と思った。

「ご、ごめんなさい……っ」

「え？」

刹那、俺の目の前には深々と頭を下げる伊吹の姿。

言われた「ごめんなさい」という一言……俺は謝られたのか？

え、でもなんで。伊吹って俺になにかやったっけか？

むしろ伊吹になんかやったのは俺。だから伊吹と今まで気まずい状態になっていて……え？

「と、とりあえず頭上げろよ。お前らしくねえぞ？」

「……圭介、あんた怒ってないの？」

「な、なんでだよ？」

「私、その……今まで圭介のこと無視してたのよ？　圭介と視線すら合わせなかったのよ？」

「……」

ひょ、ひょっとして伊吹……そのことをずっと気にしていたってのの

か？
それで伊吹から謝って――あぁ、元はと言えばまた俺の軽率な言葉のせいだったのに。
ホント……俺ってば最低だよ。それでまた伊吹をここまで傷つけたんだ。

「お、怒るわけないだろ？　むしろその……俺のほうこそごめん！」

「っ！　な、なんであんたが謝んのよ……っ？」

「元々こうなったのは俺が軽率な事を言ったせいだ。ほんと、ごめん！」

「……はぁ、あんたこそ顔上げなさいよ」

その言葉で俺はさっきの伊吹と同じく、顔を上げて伊吹の顔を見つめる。

「……ッ！　あ、あんまりジロジロ見んなばか圭介っ！」

「す、すまん」

伊吹は恥ずかしそうに腕を組み、右を向いて視線を逸らしてしまった。
え～っと……いきなりどうしたんだ。
視線が合うくらいいつもあった事なのに……。

「別に気にしてなんかいないわよ……わ、私が勝手にあんたの事を……その、あんたのことがっ」

「い、伊吹？」

彼女がその素直じゃない口から、何かを言いかけた、

「〜〜〜〜ッ！」

その時、伊吹の足が俺の横顔にめり込んできやがった。
右足による凄まじい廻し蹴り。華麗な一撃に俺は――吹っ飛ばされて地面に転がってしまった。

「ふぉ、ぐぉ……にゃにすんれすか……っ」

「なんでもないわよっ！　とにかくその……もうあんたの事無視しないからっ！」

「え？」

「……ッ！」

そう言い残し、伊吹は逃げるように公園から出て行ってしまった。
しかもちらっと見えた彼女の横顔。それはまるで、赤信号にように真っ赤に染まっていた。
ちくしょうすげえ一撃だ。結構効いたぜ今の……普通の人なら気絶モンだ。
まあ伊吹も、俺は大丈夫だってわかっててやったんだろうが……それでもなんなんだよ一体。
でももう俺の事は無視しないみたいだし……いいかの、コレで？

……こうして、波乱の文化祭は終わり――ついに学生待望、夏休みが訪れた。

第１１５話，仲直り（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

作者「どうも、作者です！　またまた更新が遅れてもうしわけございません！」

圭介「全く何度目だよ！　最近ほぼ毎日だろ！」

作者「すみません。いや、その～最近疲労度が半端なくてですね、小説を書いていたら気付けば机の上で寝ていたりとか、全く記憶にないのにベットの上にいたりとか……とにかくボロボロなんです」

伊吹「ちょ、あんた寝なさいよ！？」

作者「いや、でも一日2度更新は続けたいと思いますので！　今後ともよろしくお願いします！」

圭介「そのうちコイツ、睡眠不足で死ぬんじゃねえか？」

第116話，Ｌｅｔ，ｓ　Ｇｏ　Ａｋｉｈａｂａｒａ

今日は日曜日。本来明日は一日だけ学校があり、文化祭などの後片付けを行う予定……だった。
しかし、その必要はなくなってしまったのだ。
理由は簡単。原因不明の謎の何かによって校舎が破壊され、早急に修理せねば夏休み明けに間に合わないのだという。その為、早速学校の修理工事が行われる事になったので、学生たちは普段よりも一日……いや、今日は日曜日だし二日くらい多い夏休みを過ごせる事になった。
まあ、素直に喜ぶべきことだよね……うん、一日学校が潰れて夏休みが二日増えたんだし。
しかし夏休みが増えたからと言っても、俺の日常に何か変化があるわけではない。

「フォロワー増えねえ……」

大吾達とは夏コミ行ったり、そのうちカラオケやら何やらに行く予定があったりするんだが……。
こういうどうでもいい日に遊びたいとはお互い思わないし。
かと言ってねぇ、女子を遊びに誘っても嫌な予感しかしないしさ。
っと言う訳で現在俺がやれる事は――そう、ネットサーフィンくらいしかないのだ。

「くそっ、大吾の垢はフォロワー７０００超えてるってのに。重原だって５０００だぞ？　なんで俺は４５０ちょっと超えた所で止まってんだよっ！」

……って、もちろん自分のせいでしかないんだけどね。

はぁ、もっと面白い事つぶやかんと、いつまで経ってもフォロワー増えねえぞ。

「……はぁ」

どうしよう。ツイッターとかエロゲーくらいしかやる事がねえ……。
前年もそうだったが、今年もつまらん夏休みになるのかな。
ああ、きっとそうなるに違いない。所詮人生なんて急に変わらないものなんだからな。

「よ～し！　天気もいいし、気晴らしに買い物にでも出かけようかな～！」

それは思いつきであった。買い物……そう、買い物だ。
これほど手っ取り早い暇潰しは無い。しかも買い物に行くったってただの買い物じゃないぞ？
今から秋葉原に行くんだ。アキバのア○メイトで色々買ってやる。
幸い俺にはお金がある。
ここ数ヶ月、魔法使いやら超能力者やら白陵の不良と戦ったり、仲のよかった幼馴染と気まずい関係になったり、その他部活やら突っ掛かってくる人達やらで……お金を使う機会がなかったんだ。
一ヶ月５０００円のお小遣い。４月から溜まりに溜まって出費はたったの３０００円。
１７０００円の収入＋貯金の５３０００円。ふ……フフフ、８万円。
バイトもしていないのに８万円も溜まってるぞ！

「こ、ここらで１万くらい使ったって問題ねえよな。うん、お金を使うことは社会にはいい事じゃねえかよ！」

よし、じゃあ早速秋葉原にレッツＧＯしようじゃねえか。

というわけで階段を降り、リビングを確認するとそこには親父とお袋、そして暮葉と葵がいる。
親父とお袋は今日まで休みで、明日から再び仕事で家を出るんだとか。
大変そうだよなぁ……暮葉と葵は俺と同じく暇人のようだ。
だが、アイツらを連れていったら絶対面倒事に発展しちまうだろう。

「もきゅ？　けーすけ様っ、どこかお出かけされるのですか！？」

げっ、バレてしまった……まあ仕方ない、テキトーに誤魔化しておこう。

「だ、大吾とかとイベント行くんだよ！　田村ゆ○りのな！」

「お兄ちゃん声優のイベントに興味あったっけ？」

「……と、とにかく行くの！　大吾がどうしてもって言うからな！」

「お兄ちゃん。田村ゆ○りのイベント、今日から一ヶ月後の話だよ？」

「……」

しまった、忘れてたよ。葵もどっちかと言うとオタクな趣味持ってるって事をな。
しかも葵は結構声優が好きだったりで、そういうイベントは男女問わずに把握しているらしい。
ちくしょうミスった。もっと別のもので誤魔化しとけばよかった。
俺の妹がこんなにオタクなわけがない……ううっ。

「けーすけ様、結局どちらに行かれるのですか？」

「デートだったら葵が絶対に許さないよ！」

「……ふ、フフフ……とにかく大吾達と遊びに行くのは事実だ。ではさらばぁぁぁぁぁぁっ！」

逃げる。

そう、それがこの場における最善の選択であろう。

俺はダッシュで玄関に向かい、孫〇空もビビるような速度で靴を履き替え、ドアを突き破るような勢いで家の外へと飛び出した。

「もきゅ！？　け、けーすけ様っ！」

「お兄ちゃんが逃げたっ！」

「あらあら、圭介さん元気が有り余ってるわねぇ」

「うむ、やっぱり若いって素晴らしいなぁ～」

案の定ヤツらは追ってこない。よかった、やっぱり逃げるという選択は正しかった。

フフフ……ハッハハハ！……家に帰るまでに言い訳考えねえとな。

それからしばらく、ＪＲ古宇坂から何十分だろうか。

蘇我駅から京葉線に乗り換え八丁堀まで行き、そこから日比谷線に乗り換え……。

ついに念願の秋葉原に到着したのであった。長かったぜ……普通列車の旅。

相変わらず秋葉原は賑わっているなぁ。
電化製品を買いに来た老若男女関係ナシな人達、俺と同じ目的で来たアレな兄ちゃん達。
とにかく、秋葉原は色々と大勢の人々で溢れていた。

「つか、こんな所で知り合いに遭遇したりしねえよな？」

秋葉原で知り合いと遭遇＝恥をかくフラグなのは間違いなし。
だって、ねぇ？秋葉原だよ秋葉原。
俺みたいなのがここに用がある＝絶対二次元モノ目当てって思われるじゃなイカ。
まあ実際そうなんだけどさ……しかし、一人秋葉原ってのも寂しいモンだよなぁ。

「なぁちょっとそこに兄ちゃん？」

さてと、メイトはどこだったっけなぁ。
まあメイトじゃなくてもいいけどね。
この辺は色々いっぱいあるし、エロゲーだって普段はこの辺で買ってるしな。
そっちのほうの店を見たって別に変わりはない。

「オメーだよオメー！　そこの一本寝癖のアホ毛野郎っ！」

「無視してんじゃねえよ！」

「……あん？」

うぜえ声が聞こえたので、振り返ると今風ヤンキーな2人組がニヤニヤと俺を見ている。

茶髪のロンゲに白いホストスーツの男と、もう一人はオールバックにサングラスに黒いヤンキージャージの男だ……はあ、なんでこんな連中が秋葉原に？

「ねえねえそこの兄ちゃんさ、俺らに金貸してくれねぇ？」

「そーそーっ。ちっとパチンコで使いすぎちまってさぁ、だから貸してくれよぉ」

「まっ、借りたらもう返さねえけどさ」

「ぎゃっはははは！　お前まじパネェな鬼すぎんだろ！　つーわけだからさ、兄ちゃん金貸してくれたらアブネーからさっさと帰りな？　ってか帰れ」

アホだ、相手にするのも面倒な程のアホが目の前にいる。
恰好は今風だがやる事は古風なモンだ。
やれやれ、今時こんな連中がいるんだなぁ。
ってか警察さんは何やってんですか。
露骨にカツアゲされてるんだから、さっさと助けに来てくださいっての。
でもねぇ、そんな都合よく警察さんが近くにいるとは思えないし。
やれやれ、こりゃ仕方ないな。

「はぁ……鬱陶しいなぁ」

「あ？　今なんか言ったか？」

「別に？　とりあえずそこの路地で話でもしないか？」

「はぁ！？　なにこいつ、喧嘩売っちゃってるわけ？」

「うわぁ～マジかよ。俺らに喧嘩売るとか１００年早くね？」

「マジ早ぇよなぁ！　お前もう死んだな、病院送りで済むといい方かもなぁ」

ホントにうぜえ……やっぱり相手にすんのも嫌だなコイツら。
でもなぁ、こんなのに何かされるのも嫌だし……まっ、超法規的措置だな。
あんまり暮葉達に心配はかけたくないが、多分コイツらは危険の内には入らないだろう・
俺はため息をつきつつ、２人の背中を押して秋葉原の路地裏に入った。そして――――

ガシ！ボカ！

……狭き路地裏での一戦。結果は――俺の圧勝であった。

「……弱っ……」

大通りに出て俺はそう呟いた。アイツらとの戦いの素直な感想である。
なんだかその……可哀想になるくらい弱かった。
永渕みたいな強いヤツは嫌だし、魔法使いや超能力者はもっと面倒だけど……。
でも、あんまり弱い連中と喧嘩をするのはもっと面倒くさい。

「とりあえず、気を取り直してメイトにでも行くかぁ」

「けーすけ様っ！」

「は？」

「やっと追いつきました……けーすけ様っ、こんな所にいたのですねっ！」

「くくく、暮葉っ！？」

振り返ると、何故か葵のお下がりの私服を着た暮葉が仁王立ちをしていた。

「けーすけ様！　大吾さん達と遊ぶというのは……やっぱり嘘だったのですね！」

何故か笑顔の暮葉。嘘つき相手に何故笑顔なのか、そこがわからない。

いや、そろどころか何もかも全てがわからん。

「待て、サッパリわからん。なんでお前がここにいる？」

「怪しいので追い掛けてきたのです！」

「ストーカーかよ！？」

「お・に・い・ちゃ・んっ！」

「ッ！？」

声が聞こえた瞬間、背筋が凍る。

どこからどう聞いても、お兄ちゃんＬｏｖｅな小序の声。
小刻みに震えつつ恐る恐る振り返ると、背後で葵が恐ろしい笑みを浮かべていたのだ。
意味わからん。まさか葵も暮葉と一緒にストーカーしてきたのか？

「葵を置いていくなんてひどいよ！　お兄ちゃんだけお出かけなんてずるいよ！　葵だってお兄ちゃんとラブラブデートしたかったのに！」

「あ、葵？　あのー、周りに注目されてるんですが……？」

「けーすけ様。お一人なんて寂しいでしょうし、拙者達もけーすけ様に同行するのです！」

お、俺の計画が……メイトに行った後、エロゲーを見に行くという俺の素晴らしい計画がっ！
ああもう――不良に絡まれるはストーカーされるわ！
夏休み初日。初っ端からもう、滅茶苦茶な事になる予感しかしなかった……。
だが――こんな事はさらなる騒動の序章に過ぎなかった。

第116話，Ｌｅｔ，ｓ　Ｇｏ　Ａｋｉｈａｂａｒａ（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「ああ、嫌な予感しかしねえ……」

重原「いいじゃないかい。木下さんと葵ちゃんとの３Ｐも夢じゃないよ？」

圭介「そういう問題じゃねえよ！　暮葉はともかく、葵の存在がもう嫌な予感しかしないんだよ！」

大吾「フフフ、圭介。ヨスガっちゃったら僕の親戚がいる鳥取に逃げるがいいさ」

圭介「妹との駆け落ちエンドなんて嫌だぞ俺っ！」

重原「っと、いうのがツンデレシスコン兄貴、藤島圭介の意見でした」

圭介「ツンデレじゃねえしシスコンでもねえよ！」

第117話，Ａｋｉｈａｂａｒａ　ｄａｔｅ

夏休み初日、俺は一人秋葉原を満喫しようとしていた。
だが、そう思っていた矢先に可愛い乱入者が現れたのだ。
木下暮葉と藤島葵。前者は俺を守る為に異世界からやってきたという魔法少女。
後者はお兄ちゃんＬｏｖｅな俺の実の妹だ。
暮葉は見た目が幼く子供っぽい性格だが、戦闘力は神〇ねーちんとも戦えそうなほどに高い。
葵はただの人間だが、もう俺に対する愛情が異常レベルで……正直、身の危険を感じます。
もちろん身の危険に晒されているのは葵ではなく、俺である。
しかも身の危険の意味とは生命の危機の事ではなく、貞操の危機という意味だ。

「えへへっ、お兄ちゃんの二の腕さいこぉ～だよっ」

「っ！？　あああ、葵さんっ！　ベタベタしすぎなのです！　けーすけ様から離れてくださいっ！」

「暮葉の言う通りだぞ。ちょっとは離れろよ……」

「やだ！　クーにゃんはどうして葵がお兄ちゃんに近づくと機嫌が悪いの？　もしかしてお兄ちゃんの事がだいだいだぁーい好きなの？」

「もきゅ！？　ち、違いますっ！　けーすけ様はただの友達なのですっ！」

「へぇー？　じゃあ葵がお兄ちゃんをいただきますしてもいいんだねっ！」

「そ、それは絶対にダメなのです！」

「へぇ～？　クーにゃん、ハッキリしないと葵は問答無用でお兄ちゃんをゲットしちゃうぞ！」

なんの会話をしていることやら……でも、これでわかったことだろう。

葵はリアルに俺を狙っているのだ。それはもう、発情期に突入した肉食獣のようにな。

実際、俺は葵に夜這いされた事がある。

未遂で済んだからよかったが、もし未遂じゃなかったら……間違いなく駆け落ちＥＮＤ確定だ。

そんなヨスガ的な展開望んじゃいねえぜ。

俺は妹は好きだが……そんな展開は二次元だけで十分だぜ！

「あ、けーすけ様！　そういえばそろそろお昼の時間ですよ？」

「そういえば飯食ってねえな……よし、んじゃあそこの店でも入るか！」

突然、暮葉が昼食を食べようという話を振ってきた。

確かにまだ飯は食ってねえし、そろそろ腹も減ってきた頃だ。

俺は暮葉の案に乗り、早速とあるビルの４階にある飲食店へ向かう事にした。

「ちっ、葵はお兄ちゃんとホテルに行きたいのに……っ」

背後から恐ろしい言葉が聞こえた気がしたが……まあ、気にしないほうが幸せだろう。

こうして俺たち3人は秋葉原にある、とある飲食店に入店したのだが――――

その店はただの店ではなかった。普通の店にはないものが沢山あったんだ。

だって――知らずに入ったその店は――――

「おかえりなさいませ、ご主人様っ☆」

「……」

俺、暮葉、葵の三人は思わず絶句してしまった。

目の前に展開する数名のブリティッシュなメイドさん達。

店にいる人の殆どが、見た目だけでオタクと分かるような人達。

そう――俺たちは間違えてメイド喫茶に入ってしまったのだ。

別にメイド喫茶が嫌ってわけじゃない。むしろ俺、メイドさんとかは大好きである。

だがな……メイド喫茶ってそこらのファミレスより高いんだよ！

なんですか、おにぎり2個で４００円って……詐欺か何かですかっ！

「ご主人様、こちらへどうぞっ」

「……」

俺たちはメイドさんに誘導され、店内でも割と端のほうの席に座らされた。

そして、メニューを見て再び絶望するのだった。

すげえ。やっぱメイド喫茶って値段高ぇ……。

「はぁ……」

「け、けーすけ様っ。拙者達だってお金は持ってるのですよ？」

「そうそう！　割り勘なんだからお兄ちゃんは安心していいんだよ！」

「……お前ら、ホントにいいヤツだな」

いい友達といい妹を持ったものだ、俺。

これでヤンデレの素質があったりブラコンだったりしなけりゃ、二人とも完璧なんだけどな。

「ご主人様、呼び方のオーダーはありますか？」

その時、一人のメイドが笑顔を浮かべて俺の席までやってきた。

呼び方のオーダーねぇ……う～ん。

こういうの、どっかで見たことある気がするんだが。まあ気にしないほうが幸せだろう。

「なんですかそれ？」

「私どもにどう呼ばれたいか、いろいろ選べるんですよ」

そっかあ。それじゃあお兄ちゃんとかなんとか様は却下だな。

暮葉や葵とキャラが被るし。

そうだなぁ……お兄ちゃんもなんとか様もＮＧなら……。

「ホントになんでもいいんですね？」

「ええ、もちろんですよ」

「それじゃあ……俺の事を“にぃに”と呼んでもらおうかぁ？」

「えっ？」

「そして、君の一人称は今日から“みゃー”にしてもらおうか？」

「えぇっ？」

「さらに――今日から君は笑う時！　必ず“にししし”と笑いなさい！」

それが俺の――理想の妹像だ！

このメイドさんは、ご主人様の言う事をなんでも聞くと言った。

だったら読んでもらおうじゃないか。にぃにってなぁ。

なりきって貰おうじゃないか。俺の嫁――美也になぁっ！

っと、己の欲望に素直になっていた、

「お兄ちゃんっ！」

「いい加減にするのですけーすけ様っ！」

刹那、２人の少女の握られた拳が俺の顔面を狙う。

突き刺さる拳。それと同時に感じる激しい痛み。

そのあまりの痛みと、いきなりすぎる攻撃に俺は思わず、

「ぎゃあああああっ！」

鬼もビビるような断末魔を上げてしまった。

「欲望丸出しなのですよけーすけ様っ！　メイドさんが困ってるじゃないですかっ！」

「葵はお兄ちゃんの妹なんだよ？　言ってくれれば葵がそのキャラを演じるのにっ！」

「とにかく！　けーすけ様は一度深く反省するべきなのですっ！」

「す、しゅびみゃしぇんでひぃたぁ……」

それにしても、葵の拳はともかく暮葉の拳が痛ぇ。
暮葉のヤツ。思いっきりぶん殴りやがったな。
しかもアイツ、俺の身体が頑丈だって知ってやがるから……はぁ、とにかく不幸だ。
一方、メイドさんは俺たちを見守りつつ苦笑いを浮かべていた。

その後、メイド喫茶を出た俺たちは当初の予定通り、ア○メイトへ向かう事にした。
でも、当初の予定よりは物が買えないぞ。
なんたってメイド喫茶で使っちまったからな。ちくしょう、やっぱメイド喫茶って高ぇよ。

「お兄ちゃん大丈夫？　大量出血した時の顔してるよ？」

「ああ……ホントに血に近いものを大量に吐いたからな」

お金（マネー）と言う名の血を大量にな……フフフ。

「すみませんけーすけ様。拙者が普通のお店を選んでいれば……」

「気にすんな。腹は膨れたんだからさ……」

「もきゅぅ。ホントにごめんなさいなのです……っ」

「だから落ち込むなって。それに飯は上手かったしメイドさんも見れたんだからいいだろ？」

あ、いけね。メイドさんを見て嬉しいのは多分俺だけだな。
でも腹が膨れたのは事実だし、それにあのメイド喫茶の飯は意外と美味しかった。
サービスと飯の上手さを考えれば、あの高額も許せるかもしれない。

「お兄ちゃんは妹萌えでメイド萌えっと……」

「こらそこっ！　いらん事メモってんじゃねえ！」

「ぶーっ、いいじゃん。お兄ちゃん攻略の為に必要な情報なんだよ？」

「女の子が攻略なんて、超エロゲチックな事言ってんじゃありませんっ！」

まったく俺の妹は誰に似たんだか……完璧エロゲ脳であった。
つか葵のヤツ、まさかエロゲーやってんじゃねえだろうな？
実の妹がエロゲーをプレイ……兄貴としては泣ける話だぞ。
かくいう俺もエロゲーをプレイしていて、人の事なんて言える立場

じゃないんだけどね。

「けーすけ様と葵さん……やっぱり兄妹なのですねっ」

「……く、暮葉さん？　一応聞くけど、兄妹ってどういう所が？」

「もきゅ？　兄妹揃ってＨＥＮＴＡＩな所なのです！」

「失礼な！？　俺は変態じゃない。仮に変態だとしても変態と言う名の紳士だ！」

「葵は変態じゃないもん！　健全な子だもん！」

「……やっぱり兄妹なのですね」

ハッ、しまった……ついいつものノリで叫んじまった……ッ！
しかも葵とほぼ同時に似たような事をな。
ちくしょう、やっぱり俺と葵は兄妹なのかぁぁぁあああぁぁあっ！

「おおおおおぉぉぉ！」

その時、突然前方の人ごみから歓声が起こった。
秋葉原じゃコスプレした人が集団で踊ったり、コスプレレディースが現れたりしている。
だけど今回は何かが違う。音楽も全く聞こえないし、バイクのコールも全く聞こえない。
ダンスでもなければレディースでもない。じゃあ、一体これは何の騒ぎなんだ？

「さっきの子すごくね？」

「うんうん、あの巨乳ポニテの子すごいよ！　あの白金の不良に勝っちまったんだもん！」

俺たちとすれ違った野郎2人が、そんなような会話を交わしていた。
白金？　一体どぉこの不良校だよ……つーか。

「けーすけ様、今のってもしかして？」

「う～ん……」

巨乳でポニーテールで、その上ヤンキーなんて目じゃないくらい強くて……。
ま、まさか……嫌な予感しかしないのは何故だろう？
とりあえず確認する必要があるな。
俺は人ごみの中に謝りつつ割って入り、人ごみの最前列に出てみる。
暮葉と葵も俺の後を追ってきた。それを確認した上でもう一度前方を見てみる。

「いでで！　ちょ、ぎ、ギブギブぅ～！」

「や、山田ぁ～生きろぉ～！」

「む、無理無理死ぬって！　てかもう降参ッス勘弁してくだせぇ～！」

……はぁ、やっぱりかよ。

「こ、こんな街中で喧嘩してるよお兄ちゃん？」

「もきゅ？　しかもあのお方は――」

黒髪ポニーテールでその上巨乳の女の子が、学ランのヤンキー2人組と喧嘩をしていた。
山田というモヒカンのヤンキーに、キャメルクラッチを仕掛ける少女。
既にヤンキー2人は顔面蒼白であった。
見ていてヤンキーが可哀想になってきた。
仕方ねえ……あのヤンキー2人を助ける為に喧嘩を止めるとするか。

第117話，Ａｋｉｈａｂａｒａ　ｄａｔｅ（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

葵「やった！　今回は葵の出番が多いよっ！」

暮葉「久々に拙者の出番も多かったような気がするのですっ！」

圭介「俺は相変わらず不憫な扱いを受けてる気が……」

伊吹「……」
大吾「……」
重原「……」
小坂「……」
あかり「……」
千早「……」
凪紗「……」
純奈「……」
→今回名前すら出なかった人達。

小坂「圭くんはまだ恵まれてるほうだよね？」

第118話，なにやってんの？

「明智……もうその辺で勘弁してやれよ」

「え？　ふ、藤島……あれ、木下に藤島の妹まで？　な、なんでここに？」

黒髪ポニーテールでその上巨乳の女の子――その正体はやっぱり明智凪紗であった。

どこぞのヤンキーをフルボッコにしていたのは、彼女なのであった。

しかしどういう事だ。なんで明智が秋葉原で不良とストリートファイトしてんだ？

どう考えても明智……秋葉原とは無縁な感じなのに。

生駒ならわかるが、明智が秋葉原って色々な意味でありえねえだろ……。

「夏休みだから遊びに来たんだよ」

「そ、そうか。そういえばもう夏休みだったな」

「学校が壊れたせいでな。んで、お前はなんで不良と戦ってるんだよ？」

「話せば長くなるが……」

「葵は長い話は嫌いだよ！」

「お前に言ってねえよ！」

突然突っ込んできた葵に、俺はツッコミを返してみせた。
全く……一応わりと真剣な場面っぽいし、葵も空気を読んで少しは黙ろうぜ。
そのうちＫＹなんて言われても知らねえぞ？
「でも、明智殿はどうしてこんな所で不良達と戦っていたのですか？」
「うぅ、だから色々と深い理由（わけ）が――」
明智は微妙に俺らから視線を逸らし、冷や汗をかきながらそう呟く。
そんなある時。ふと振り返ると、学ランの怖そうな集団が近づいてくるのが見えた。
紺色の学ランはどう見ても標準型ではなく、いわゆる変形学生服。
短ランだのボンタンだの。一昔前の不良が好んで着用していたタイプの学ランだ。
そんなのを着用した不良達がゾロゾロと、俺たちに近付いてきた。
「狩野さん、菅原さん、宇部さんアイツっすよ！　山田やったの！」
一人はゴリラのようにゴツく、イカつい顔をした長ランの男。
すげえ……あんな番長みたいなヤツ未だにいるんだ。
もう一人は坊主頭のドカン野郎。さらにもう一人はリーゼントの短ラン野郎。
その他大勢の古風なツッパリ達。
なんなんだコイツら……映画の撮影ってわけじゃなさそうだが、どこの田舎ヤンキーだよ。
「お前か。うちのモンをやってくれたのは？」

「ん？　やっぱりおかしいぞ……こいつらＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）じゃないのか？」

もしも～し。明智さん、何を仰っているのでしょうか？
そもそも貴方、なんでこんなヤンキー共と戦ってるんでしょうか？

「なんだそれ？　俺たちは白金高校だ。チームなんてもんはやってねえ」

「……しまった、誤解でやってしまったぞ」

話がサッパリわからんが、一つだけ分かった事がある。
明智のヤツ……どうやら誤解で白金の不良をやっつけたらしい。
そもそも白金ってどこの学校だよ。まあどうでもいい話だが。

「ふざけんじゃねえぞテメェ！」

「もう許さねえ。フルボッコ確定だコラァ！」

「誤解でも俺たち白金に喧嘩を売った事には変わりねえ……全力で相手させてもらうぞ？」

なんか、すっげえ面倒な事になっちまってる気がするけど……どうすりゃいいの？
残念ながら俺の力ではどうにもできない。
相手が一人ならねじ伏せられるかもしれないが、いくらなんでもこの人数は無理である。
だとすると、ここは逃げるのが最善であろう。
しかし明智に逃げる気はナシ。相手も絶対に明智を逃す気はないだろう。

ああもう！なんで夏休み初日から面倒事に巻き込まれるんだよ！
ちくしょう……こういう時に頼りになるのは一人だけだぜ。

「なあ暮葉。なんとかならないのか、これ？」

「拙者の風の魔法を使えばその……逃げられない事はないですよ？」

「待て。それによってどれくらいの被害が――」

「もきゅ！？　けーすけ様、全っ然信用してないのですね！？」

「いやだって！　お前の魔法が高度１万までぶっ飛ばされた事があるし！？」

「あ、あれはたまたまなのです！　ちょっとして失敗なのです！」

「まあそんな失敗はともかく、お前……こんな大勢いる中で魔法使うのか？　しかも葵だっているんだぞ？　葵は確かに家族だけどさ、俺たちの事情なんて一切知らないんだぞ？」

その葵に今の話がバレてないか、ちょっと気になったが心配する必要はなかった。
葵は少し離れた所でぽか～んとしている。つまり、俺たちの話を理解出来ていないと言う事だ。
よかったぁ～。葵は頭はいいが、時々アホの子だからな。
そのおかげで助かったような気がするぜ……。

「もきゅぅ……ですけどっ」

「はぁ……仕方ねえ。明智を連れてダッシュで逃げるか」

「あ、け……けーすけ様っ！？」

そうと決めた俺はさっそく明智に近寄り、不意に彼女の左手を握る。
明智は「えっ？」と一瞬驚くが、その驚いた瞬間――俺は彼女の手を引き全力疾走を始める。

「ふぁ！？　ちょ、ふ……藤島……っ！？」

「暮葉！　葵！　走れ！　一旦ここから逃げるぞ！」

「りょ、了解なのです！」

「あぁ待ってよお兄ちゃんっ！」

少しだけ振り返り、暮葉と葵がちゃんとついて来ている事を確認する。
よかった。２人は俺の全力疾走にちゃんとついて来ている。
まあ当然と言えば当然だが……暮葉も葵も身体能力は高いし、特に暮葉はチートレベルだ。
俺が手を引いているこの明智だって、黒木を一撃で倒すほどの達人である。
とにかく――三人ともしっかりついて来ている。

「待てコラァ！」

「逃がさねえぞクソ野郎ォ！」

まあ……いらない連中まで俺の後を追っているが……。
とにかくよかったぜ、このまま逃げれば俺たちの勝ちだな。

このまま――誰も殴らずに全てを解決できればいいな。

……こうして楽しい夏休み一日目は、早くも波乱の一日となってしまった。

そして俺はヤンキー共から逃げながら、ずっとある事を考えていた。

結局、明智は何の為にヤンキーと戦っていたのだろうか。

そして、ＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）って一体何なんだろう？

俺の中でその疑問は次第に深まっていった――――

第１１８話，なにやってんの？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「今回短くね？」

伊吹「確かに短いわね……」

暮葉「不良から逃げて終わりだったですね」

千早「その、なんで今回……こんなに短いんでしょうか……？」

大吾「ヒント：作者がこれを執筆していた時間は午前４時１５分ごろ。学校に行く為に家から出る時間は７時３０分。流石に仮眠くらいはとりたかったらしいぜ？」

あかり「……寝ろよなっ」

第１１９話，卑怯な男

散々不良から逃げ回る事２０分。
俺たちは今、秋葉原のとある路地裏に入っていた。
流石にあの白金だったかな。そんな名前の学校の不良達はもう追ってこない。
ふぅ……なんとか振り切る事に成功したぜ。
全く我ながら素晴らしいと思うよ。誰も殴らずに騒動を解決したんだからな。

「もきゅう、もう皆さん追ってこないみたいなのですっ」

「はぁ、はぁ……あぁ疲れたぁ」

「疲れたよぉ～お兄ちゃん！」

「藤島、逃げる必要なんてなかったんじゃないか？」

「うっせ黙れ！　明智、風紀委員が喧嘩なんて問題起こしてどうするんだよっ！」

全く止めに入っただけでもありがたく思え。
もしこのままアレが続いていたら、多分明智は警察沙汰になっていただろう。
ところが、今の俺のツッコミに対する明智の回答は――予想の遥か斜め上を行っていた。

「だから私……その風紀委員の仕事をしていたんだぞ？」

「は？」

ふ、風紀委員の仕事が不良との喧嘩って……なんですかその某学園都市ラノベみたいなの！？

風紀委員（ふうきいいん）じゃなくて風紀委員（ジャッジメント）じゃねえか！

「明智殿っ。風紀委員って一体どんな仕事なのですか？」

「そーですよ！　風紀委員なのに校外活動じゃないですか！」

暮葉と葵も同じ疑問を抱いていたのか、俺が思っていた事を明智に向かって言い放つ。

ところが不思議な事に明智。全くギャグですなんていう顔をしないのだ。

最初は風紀委員の仕事＝不良との喧嘩なんて、ギャグだろうと思ったのに……どうも違うらしい。

やがて明智はスゥーっと、静かに息を吐き――――

「わかった。みんなにわかりやすいように説明するぞっ」

……こうして、明智がこんな所で戦っている理由を聞いた。

アキバ・ミッドナイト・アーミー（ＡＭＡ）。

それは秋葉原一帯を根城にするカラーギャングのチームである。

かつてはカラーギャングの中でも、まだそれなりの節度や誇りを持ったチームだったらしいが、最近はそこらのギャングと変わらん状態らしい。

武装は当たり前。大人数で一人の弱者を取り囲み、ボコボコにするのも当たり前。

最近じゃあ観光客がボコボコにされ、メイドさんが時々レイプされているんだとか。
ひょっとして……今日俺に絡んできたあのバカ2人組。アイツらもＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）なのかな？
んで、警察がいきなり大事を起こすなんてありえない事だ。
そこで――各校の腕自慢委員が集まり【連合】を結成。
頼りない大人達に代わり、現在特に危険なＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）を解体し、秋葉原に平和を取り戻そうとしているんだとか。

「って、各校の腕自慢ってとこは……他校の生徒もいんのかよ！？」

「流石に私一人じゃ相手にできないからな」

「で、でも明智先輩っ！　それってやっぱり犯罪じゃ……？」

「大丈夫だ。ちゃんと許可を取って行動しているぞ？」

「許可って……一体誰の許可で動いてんだよ？」

その時、明智の目が不気味に輝き、

「知りたいか？」

ひぃぃいいいぃいいっ！こ、怖えぇぇぇぇっ！
その不気味な笑顔が超怖い。
俺たち三人は明智の笑みを見て、思わず後ろへ3歩ほど後退りをしてしまった。

「……いえ、結構なのですっ」

そして暮葉が明智の問いに対し、ごく当たり前の返事を返したのだ。
当然だ……なんかその。知っちゃいけない事のような気がするぞ。
とにかく、ここは何も聞かずに黙っておいた方が得策だろう。

「んで、さっきの白金だっけ？　アイツらは関係ないのか？」

「うん、あれは私のミスだぞ。ＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）にあんな露骨なツッパリはいなかったハズだ」

「そ、そうっすか……」

明智さん……随分とまあ詳しいんですね。
きっと長い事この仕事をやってたんでしょうね。

「それでは明智殿。この人達は関係者……なのですか？」

「あ？」

暮葉が刀を取る為か、密かに背中に手を持っていく。
葵も少し怯えた様子だ。やがて明智の表情も真剣なものに変わり……俺もようやく気がついた。
どうらや俺たちは――いつのまに大勢の不良に取り囲まれていたのだ。
しかもそのうち2人はどこかで見たことが……。
ああ思い出した。今朝俺がぶっ飛ばしたアホ2人組やん。
あの茶髪ロンゲとオールバックは間違いないな。

「よぉそこのくせ毛野郎！　さっきはよくもやってくれたじゃねえかよ？」

「もきゅ？　けーすけ様、このお方たちと知り合いなのですか？」

「えぇ？　誰だったっけコイツら？」

「本当なのか藤島？」

「いや、マジで知らねえぞ？」

「お兄ちゃんは東京に知り合いなんていないよね？」

本当は知っているが、ここで知っているだなんて答えてみろ？
俺まで不良扱いされる可能性がある。ここはひとつ……知らんぷりという必殺技を！
あと葵。残念ながら東京に知り合いはいるぞ。
そういえば、東の丘学園の連中は元気にしてるかなぁ？
まあ大丈夫だろう。どーせ晃は今頃ハーレム構築しているに違いない。
ちくしょうハーレム羨ましい……だが、今はそれどころじゃねえよな。

「ふっざけんじゃねえよテメェ！　今朝会ったばっかだろォ！？」

「散々ボッコボコにしといてその態度かよ？　もう許さねえ。お前殺して女はレイプするわ！」

すると俺が今朝ぶっ飛ばした２人を含む、１０人の男達は服の中から何かを取りだす。
それはナイフだのスタンガンだの特殊警棒だの……様々な武器であった。
それだけではない。木刀や金属バット、鉄パイプを持っている連中

までいやがる。
ちくしょう……10人全員が武装してやがるな。

「みんな下がっていてくれ。ここは私に任せ――」

「明智一人に任せられるかよ。火種撒いたのは俺だし、俺も責任取って手伝うよ」

「拙者も戦闘なら得意なのです……っ！」

「あ、葵は下がって観戦していようかな……？」

そうだな。葵はブラコンである事を除けば、どこをどう見ても普通の女の子だ。
戦闘は普通じゃない俺たち三人でやればいい。
ったく、夏休み初日からホント面倒な事に巻き込まれたよ……。
あ～あ、秋葉原なんか来るんじゃなかった……ちくしょう。

「よしテメェら行くぞ！　コイツらをブッ殺――ぶ、はぁっ！？」

……え、なに？
突然、茶髪ロンゲのホスト風野郎が倒れてしまった。
それも自ら倒れたわけではなく、何者かによって無理やり倒されたという感じだ。
ふと見てみると、ホスト風の男の上には一人の男が乗っかっていた。
男は学ランを着ていた。しかし学ランの色は黒なので、白金の生徒ではないようである。
若干着崩された学ランに、ツンツンとした黒髪……え～っと、上○さん？
……ではなさそうだけど。いきなり現れたコイツ……何者？

「ぐっふふふ……おまたせ」

「うあ！？　て、テメェ何者だ！？」

「みんなのヒーロー日高恭介（ひだかきょうすけ）様だっ」

日高さん、その自己紹介はウケ狙いっすか？
なんというか……いつまで茶髪ロンゲの上に乗っかっているんだろうか？
人の上に乗りながら、ズルそうな笑みを浮かべて残り９人を見回している。
コイツ、ある意味すごいかもしれねえ……っ。

「日高？　聞いたことあるぞ……？」

「アイツが財閥に喧嘩売ったって噂の……」

「下藤野の若虎……！？

「テメェ……いつまでもソイツに乗っかってんじゃねえ！」

「おーっ！　悪ィ悪ィ！」

全然反省してない気がするが、まあ相手はＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）だし、どうでもいいか。
それにあの日高って人。まあ変な人だけど……そこまで悪人じゃない気がする。
うん、アレは一言で言うと――ただの馬鹿だな。

「な、ナメられてね俺ら？」

「おいテメェ！　俺らがＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）だってわかって喧嘩売ってんのか！？」

「別に喧嘩は売ってねえけどさぁ？　女の子が絡まれてんだぜ？だ～からついつい衝動的に飛び出しちゃったのよ。ほら、よくある事じゃねえか？」

つまり、俺単独だったら日高さんは助けなかったって事ね……はぁ。コイツもアレですか。黒木並に女の子が好きなタイプですか。まあ確かに明智はスタイル抜群だし、暮葉はロリ可愛いし、葵は美乳の持ち主。

そして何より三人とも――かなり可愛い顔の持ち主だからな。思わず助けてくなってしまう気持ちはわからないでもないぜ。

ていうか、男なら困っている人を助けるのは当然だろう。

「な、なんてふざけた野郎だ……っ」

「テメェ！」

その時、ＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）の一人。

ゴリラのような男が前に跳躍し、日高恭介という男を狙って大振りの拳を放ちやがった。

危ない！と思った俺と暮葉は、衝動的にその場へ飛び出しそうになった。

しかし、何故か明智が腕を伸ばし、俺らが飛びだそうとするのを阻止してきたのだ。

「あ、明智！？」

「もきゅ！？　な、なんでなのですか！？」

「大丈夫だ。彼、【連合】の一員だから」

「もきゅ？」

「ま、マジで？」

日高恭介……まさか、あの人が明智と同じ組織の人間だってのか？
ていうかさ、アイツ明智の知り合いだったのかよ！
その日高恭介は現在、ゴリラの大振りパンチを次々と避けていた。
それもかなり余裕そうである。あ、アイツ……ふざけた人格の癖に結構な達人じゃないか？
だがその時。一瞬の油断からか、日高の腹部のゴリラの膝が突き刺さってしまった。
一瞬日高は怯む。しかし、たったの一撃でダウンするような――そんなヤワなヤツではなかった。

「痛ぇだろォが……ボケェ！」

刹那、日高が左手に持っていた鞄でゴリラを殴りつける。
今明らかにガコンという金属音が響いた。
も、もしかして日高……あの鞄に何か細工とかしてるのか？
鞄でアッパーされたゴリラは背中から地面に落ち、そのままピクリとも動かない。
完璧に気絶していたのだ。やっぱりあの鞄オカシイ、鞄で普通気絶するかよっ！

「や、野郎ォ――ぐ、ァ！？」

今度はオールバックが殴りかかるが、またしても日高の鞄が炸裂した。
しかし今度は殴りつけるとか、そういう普通の攻撃ではなかった。
なんと……日高の鞄からグローブのようなものが飛び出し、それは確実にオールバックの野郎の股間を捉えていた。股間を強打したオールバック野郎は涙目になり、遂に倒れてしまった。

「あの人……ひ、卑怯だけど強いよっ！？」

確かに葵の言う通りだ。日高恭介……卑怯だけどある意味強い……。

「テメェ……卑怯じゃねえか！」

「卑怯？　グッフフ……いい言葉を教えてやろうか？」

「アァ？」

「卑怯はな……俺の専売特許なんだよゴルァ――ッ！」

叫びながら日高は――一瞬。１秒もしないうちに不良の懐ら入り、顎に強烈な一撃を打ち込んだ。
向かってきた不良にも蹴りや右ストレートなど放ち、殆ど一撃で不良達を倒していく。
そして、最後に残ったＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）の構成員は――

「ひ、ひぃ……日高一派のトップってこのレベルかよ……ッ！？」

「いい事教えてやろうか？　俺のダチにはなぁ……もっと強ぇヤツがいるんだからな？」

「て、テメェだけじゃ……ねえのかよッ!?」

「さて、と……お前は覚悟出来たのか？」

「ひ、ぃぃ……うあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁっ！」

遂に最後の一人は日高恭介という一人の男にビビり、敵前逃亡をしてしまったのである。

「た、ただの人間にしては凄い腕前なのです……っ」

「あの馬鹿が負けるわけがないと思ったが……やっぱり圧勝したか」

「す、すごい……っ」

暮葉と葵は驚き、明智は当然の結果を見たような顔をしていた。

俺？俺はモチロン……あまりの凄さに絶句している。

とりあえず、一言だけ言える事があるぜ。

日高恭介……そんなに強いなら卑怯な真似する必要なくないか？

……まっ、どうでもいいか。とりあえず誰も怪我をしなくてよかっよ。

第１１９話，卑怯な男（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「ま～た他作品キャラご登場かよっ！」

重原「まあまあ。他作品と言っても他の作者様の小説のキャラじゃないんだから」

圭介「いや、そう言う問題じゃないっしょ！　ていうかこの秋葉原編は一体何がしたいんだ？　大体ＡＭＡってアレか、武装無能力者（スキルアウト）集団かよっ！？」

黒木「そのうち、第三の主人公（はまづら）でも出るんじゃね？」

千早「とにかく、今回わたし達の出番……なさそうだね？」

あかり「うぅ、あたいだって活躍したいのに！」

伊吹「私、圭介の幼馴染なのに出番が……っ」

第１２０話，妹がブラコンすぎる件

秋葉原・某所喫茶店。
ってか、さっき飯を食ったばっかなのにまた喫茶店か。
まあいいけどさ。今度はメイド喫茶じゃなくて普通の喫茶店だし、出費も少なくていいぜ。
俺たちは明智に案内され、ここまで来たのだが……え～っとなんだ？
なんで日高さんまで一緒なんでせうか？

「んで、結局明智と日高さんはどういう関係なんだ？」

「だから【連合】の一員だって言ってるだろう？」

「もきゅ？　日高さんもどこかの学校の腕自慢という事なのですか？」

「腕自慢？　俺は世界一強いんだぜ？　だぁーっははは！」

「……」

ダメだ俺、この人のノリにはついていけないかもしれない。
そして俺は――初めて真性の馬鹿を見たような気がするよ。
日高恭介。コイツは強いけどただの馬鹿だ。

「ま、まあこれでも日高は強い方だぞ？」

「まあ……先程の戦いを見ていればわかるのですっ」

「やべ！　今日帰ったら花〇ろ見る為に昼寝しねえと。でも深月や

深雪の相手もしなきゃいけねえし、つかルナの餌買って帰らねえと怒られるよな。畜生折角の日曜めっちゃ忙しいじゃねえかよ」

確かにお忙しそうでございます。ていうか日高さんアニメ見るんだ。花〇ろは俺も見てるぜ。当然、伊藤〇な恵の声を聞く為にな！俺、実はあの声大好きなんだ。佐〇さんとかエ〇シィとかもう色々最高だろっ。

そういえば日高さんの髪型とかファッション。絶対某説教ウニ男意識してるよな……。

うん、シャツの色は違うが、学ランの着方や髪型がどことな〜く似ている気がするぜ。

もしかすると俺、日高さんとはうまい酒が飲めるかも――っていけね、俺未成年だった。

「お兄ちゃん、葵……全然目立ってないよ？」

「心配すんな。俺も今日は全然目立ってないから」

ちょっとメタな話をするが、俺……一応主人公だよね？

今回主人公らしい事を全くしていないんですが……。

なんか、おいしい所を全部日高さんに持っていかれた気がするんだ。

「ねぇお兄ちゃん……」

「ん、どうしたんだ？」

そういえば葵のヤツ、今日は随分と大人しいもんだな。

いつもなら一番騒がしい存在なのに、今日に限ってはどこぞのお嬢様のように静かである。

いや……まるでおしっこを我慢する子供か？股の間に両手を挟め、

妙にモジモジしている。
葵のヤツ一体どうしちまったんだろう……ちょっと心配だぞ？

「お兄ちゃん……といれっ」

「って、ホントに我慢してたのかよ！？」

まさかの予想大当たり。葵……そこまでお子様だったとは……ッ！

「お兄ちゃん、トイレどこ？」

「そ、そこにあったような気がするぞ？」

「うん、一緒に来て……っ」

「一人で行けよ！？」

「やだ、怖い……っ」

「お前、俺と一緒にトイレに行って既成事実作りたいだけだろ！？」

「……」

「なんでそこで黙るんだよっ！　やっぱそうですかいっ！？」

やっぱり葵は所詮葵であった。テンションを低くして兄を心配させ、心配した兄を誘惑して一緒にトイレに行き、そこでヨスガって既成事実を作っちゃおうとしていたのだ。
魂胆丸見えだぞちくしょう。俺がそんな手に引っ掛かると思ったのか？

長年葵からセクハラを受け続けてきたんだ。いい加減これくらい見抜けるようにはなったわい。

「～～っ、とにかく一緒に来るのっ！」

「へッ？　おおぉぉおおわあああぁぁあぁっ！？」

「ん、藤島が叫んでるぞ？」

「けーすけ様！　どちらに行かれるのですか！？」

「助けて暮――――」

「お兄ちゃんはお腹の調子が悪いから、今からトイレに行くんだよっ！」

葵のバカヤロォォォオオオオオオオォォッ！

とうとう俺の変態妹が強硬手段に出やがった。

単純に考えて俺のほうが葵より力が強いし、抵抗しようと思えば簡単に出来るハズだ。

でも……抵抗できないんだよね。

こんな人目の多い所で女子と戦ってみろ。きっと俺が悪い方向で話が進むに違いない。

それが現代――女尊男卑の世の中の現実である。

そして、俺は無理やり妹に女子トイレに連れてこられてしまった。

「おい葵……なんでよりによって女子トイレなんだよ？」

「にししっ、お兄ちゃんが簡単に逃げられないように……ネッ？」

「ネッ？　じゃねえよ！　ホントに逃げられねえじゃねえか！」

逃げたら人生が終了するだろう。なんでって、おいおい聞かなくてもわかるだろ？

ここは女子トイレ。そして俺は紛れもなく♂である……ああ、死ぬ。

こっから出たら社会的に死んじまうぞ、俺ェ……。

「葵ね、ず～っとお兄ちゃんとこうなるの……待ってたんだよ？」

「そうか。残念ながら俺は1秒たりともそうは思わんかったぞ」

「うそつき。葵と結婚するんだ～って言ってたよ？」

「それいつの話だよ……つーかてめえ、なに人のズボンに手ぇかけてんですか？」」

トイレのクソ狭い個室。この密室に俺と葵は2人きり。

葵は床にしゃがみ込み、上目遣いで俺の事をじっと見つめている。

一方その華奢で柔らかそうな両手は俺のズボンのベルトを掴んでいた。

「お兄ちゃんがやってるゲーム。口取りシーンとか多かったよ？」

「てめえ、いらんことばっか研究してんじゃねえ！」

しかも口取りっておまっ、なんで古語なんでせうか！？

意味わかる人いんのかよ。いや、わかられても困るような気もするけどさ……。

一番の問題はだな……なんで葵がそんな隠語知ってんだよっ！

「お兄ちゃんの性癖だもん。妹が理解していて当然だよ？　世の中の常識だよ？」

「それが常識なのはお前だけだろ」

「えへへ～そうかも♪」

そう言いながら葵は俺のベルトに手をかけ、ゆっくりとそれを取っていく。

ベルトを取られたせいか、随分ズボンが緩くなったような気がした。

そりゃそうだ。なんたってベルトが無くなっちゃったんだからな。

今、ちょっとでも歩けば俺のズボンは脱げるであろう。

いや――歩かなくてもズボンは脱げる。それも自然にではなく人為的にな。

「おい葵……っ」

「なぁ～にお兄ちゃんっ？　葵の手を握ってちゃ脱がせられないよ？」

「いやいやいやちょ～っと待て！　脱がすって時点でおかしいだろ！」

「なんで？　脱がなきゃお兄ちゃんの大好きな口取りできないよ？」

「アホかお前っ！　それ以前に俺らの関係考えやがれっ！」

「え？　お兄ちゃんはお兄ちゃんで葵のお嫁さんだよね？」

「……ダメだコイツ、早くなんとかしないと」

これがまあ義理の妹なら許すかもしれんが、なんたって葵は実の妹である。

許されるハズがない。いや、それ以前に俺にその気がない！

それなのに……なんでこれなんてエロゲ的なイベントが発生してんだよ。

ていうか俺の脳内ＢＧＭ自重しろ。なんか、脳内でリ○バスのあのシーンのＢＧＭが……。

ちなみにあのシーンが何かは、この状況から考えて言わなくてもわかるだろ？

――そして、とうとう俺はズボンを脱がされ、葵は俺のトランクスにまで手を伸ばしてきた。

「き、緊張するよ……お兄ちゃんの見るの久々だよっ」

「その前に見るな！　つーかこっから先は禁止だっ！」

あたりまえである。これ以上は流石にマズいだろ……。

ていうか葵のヤツガチなのか。ガチで本番突入するつもりなのか？

「そ、それじゃあ……行くねっ」

「行くなぁぁあああぁぁあああっ！」

俺は今、自分が出せる最大の力を出し、穿いているトランクスをがっちりと握る。

絶対に脱がさせてたまるか……これ以上の関係になってたまるか！

「ち、力抜いてよっ！」

「抜いたら色々と終わる気がするから嫌だっ！」

「だいじょーぶだよ！　い、痛いのは葵のほうだからっ！」

「そういう問題じゃねえよ！」

つーか地味に下ネタ言ってんじゃねえよ。

この変態め、やっぱり葵は俺以上の変態だ。

誰か助けてくれ……逃げたら逃げたでここは女子トイレだし、逃げなかったら葵に食われる。

前者も嫌だけど後者も嫌だ。ちくしょう、俺はどうすりゃいいんですか！

ていうかどうしようもない。だからお願いします誰か助けてくださいっ！

「――きゃあああっ！」

「オラァ大人しくしろっ！」

な、なんだ……外が妙に騒がしい。

まるで何者かが店に襲撃してきたみたいな……ていうか、本当に襲撃されたんじゃねえか？

「テメェら……ＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）か！？」

この声……間違いない、日高さんの声だ。

日高さんは確かにＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）と言っていた。

と、言う事はヤツら――俺らがいるこの喫茶店に！

クソッタレ、何が目的で来たんだよ……とにかく行くしかないな。
俺は素早くズボンを穿く。もう犯罪者扱いされる覚悟はできた。
とりあえずさっさと女子トイレから出よう――――！

「お、お兄ちゃんっ！？」

「ごめん葵！　今それどころじゃねえんだ！」

「ちょ、あ……葵とお兄ちゃんの合体は！？」

うるせえ合体なんてナシだっ！
まったく、今日はなんだってこんなに騒動が起こりやがるんだ……。
でもまあ、ＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）のおかげで俺は助かった。
葵とアレな関係にならずに済んだ――助かった！

そんな事を考えながら葵を放置し、俺は飛びだすように女子トイレから脱出した。

第１２０話，妹がブラコンすぎる件（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「なんなんだよ今回。限りなくアウトに近いアウトだろ！」

小坂「いやぁ～限界に挑戦だよ。もちろん警告がきたら修正するにょ」

圭介「なんすかその一昔前のアニメにありがちな語尾！？」

小坂「気分気分♪　それにしても圭くんよく耐えられたね」

圭介「そりゃあ妹相手に興奮できるヤツとしたら、そいつは深夜アニメのみ過ぎか妹に変な幻想を抱いてるヤツだろ？」

小坂「へぇ～？　じゃあ葵ちゃんが伊吹だったら圭くんどうなってたかな？」

伊吹「ちょっ！？　あぁあぁ亜紀っ、なに言ってんのよっ！」

圭介「い、伊吹相手にそんなのねえよっ！」

小坂「ふ～ん、２人ともまんざらでもなさそう……まあどうでもいいや！」

第１２１話，妙に詳しい謎の男

「な、なんだこれ？」

俺と葵が女子トイレから出た時には、既に店内はどこぞの世紀末並に荒れ果てていた。
テーブルや椅子はひっくり返り、大勢の不良達が地面に寝そべっている。
不良達の怪我は二種類。殴られた跡か何かに吹き飛ばされて激突したような跡。
現場で立っているのは日高さんと暮葉のみ。
ああ、もうなんとなくだけど……犯人がわかっちゃったような気がします。

「あっ、けーすけ様に葵さん！」

「２人ともどこで何やってたんだ？」

「お兄ちゃんとエッ――っっっ！」

「いやぁ～葵が男子トイレに入ってきてさ、もう色々と面倒なことが起きてたんだよ」

「男子トイレに入る妹って……それなんてエロゲ？」

「葵さんっ、男子トイレに入っちゃダメなのですよ？」

「ぶぅ～……葵悪くないもん……っ」

ふぅ～、これでトイレでのあの騒動は葵のせいになったモンだ。
トイレであんなエロゲ的な事があったなんて、死んでも言えねえよ……。
暮葉からのお仕置きが怖いし、何より日高さんは絶対そういうネタがあるとイジるタイプだ。
イジられるのはゴメンですぜ。俺はイジられるよりイジるほうが好きだからな。
やれやれ……葵が俺を女子トイレに連れ込まなけりゃあんな事には……。
っていうか今トイレの話をしている場合じゃないな。
俺たちがトイレで揉めている間、この店で一体何があったってんだよ。
なんでこんなに店内が荒れてるんだ。そして明智のヤツは一体どこに――――？

「それにしても明智殿……全然帰ってきませんねっ」

「残りの連中片付けるのに手間取ってんだろ？　結構な人数だったからなぁ」

結構な人数がいやがったって……。
やっぱりアレか。ＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）が襲撃してきたのか？
……って、一人で悩むよりは話を聞いたほうが早いよな。

「なあ、さっきの騒ぎはなんだったんだ？」

「ＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）の連中の仕業に決まってるだろ？」

「じゃ、じゃあ明智は今そいつらの残党と戦ってるって事か？」

「はい！　明智殿はこれ以上被害を大きくしたいとのことで、この近くの路地裏まで行って残りの敵と戦うそうなのですっ！」

「そ、そうなのか……」

暮葉も日高さんも随分とまあ楽観的だよなぁ。

まあ確かに、あの明智がそこらの不良に負けるとは思えない。

黒木には毎日圧勝し、イザなれば超能力を使える彼女。

そんな彼女が、そこらの不良との喧嘩で負けるハズがないだろう。

だけどなぁ……なんなんだろう、この妙な胸騒ぎは？

「……」

みんながどうせ明智の勝利だと楽観的になっている中、俺は一人荒れた玄関を見つめていた。

――同時刻、明智は路地裏で激戦を展開していた。

先程、喫茶店にＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）の連中が襲撃を掛けてきた。

なんでも私達【連合】の動きを、奴らはある程度把握しているようなんだ。

私らの行動がバレている。そこで、一気に私らを潰そうと総攻撃を仕掛けてきた。

大体今回の襲撃はそんな理由で行われたものだろう。

連中の襲撃によって店内は大混乱だ。既に店内は滅茶苦茶……しばらく営業できないだろう。

それでも私は――アレ以上の被害を店に受けてほしくなかったんだ。

だから私はこんな路地裏まであえて逃げたんだ。あえて逃げてそこ

で連中を撃退する。
既に私の作戦は殆ど成功していた。連中の大半を仕留める事に成功したのだ。

「……全く、数ばかりで大したことがないぞ……っ」

確かにＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）はすごい数だ。
だが、数が多いという理由で絶対的に強いとは限らない。
戦術も戦略も最悪だ。連中はやはりいいとこ――路地裏の不良程度の実力でしかない。

「ようやく現れたな……貴様は明智凪紗か」

不意に、私の耳に冷たく低い男の声が入りこんできた。
私は咄嗟に振り返る。するとそこには――ゴリラのような巨体な男が佇んでいた。
大柄だが肥満とは正反対の厳つい筋肉のを持つ、眉毛は剃ったのか一本もない。
その上左目付近には深い傷跡があり、男が歴戦の兵士である事を物語っていた。
しかし……今までこんなヤツはいなかった。それに私の名前を知っている？

「お前は一体何者だ。ＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）なのか？」

「中々の名推理だった。俺はＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）のアタマだ」

「ついでに名前を名乗ってもらえないか。私のことを知っているんだろう？　だとすれば知り合いかもしれないし、名前を聞けば思い出せるかもしれないぞ」

「……鷲尾有資（わしおありすけ）だ。先に言っておくが貴様とは初対面だ」

「だったら何故私の名前を知っている？　どのルートから私の情報を得たんだ？」

「生憎……俺もそれをよくは理解していない」

理解していないだと……どういうことだ、鷲尾が指示をしているのではないのか？
しかし、鷲尾は何故か疑いようのない表情を浮かべていたのだ。
ということは……本人もよくわかっていない？
そんな事を疑問に思っていると、鷲尾は重く閉ざされたシャッターのような口を動かし、

「情報が的確に伝わっていたのは数日前までだ。ここ数日は全くの音信不通……奴らめ、俺らを利用してどうするつもりなんだ」

「利用？　お前……それはどういうことだ？」

「生憎とこっから先は機密事項だ。だが、貴様に教えられることならいくつかあるぞ」

「な、なんだ？」

「俺らの行動目的だ。秋葉原で暴れていたのも――全ては貴様らを誘き寄せる為だ」

誘き寄せる為に暴れていたとは、
なるほど……私らは鷲尾の思惑に、まんまと乗ってしまったという

わけか。

「私らを誘き寄せてどうするつもりだっんだ？」

「詳しい事は知らん。だが、藤島圭介という何者かは知らんが……その者を如何なる手段を使ってでも拘束し、身柄を引き渡せという依頼だ。」

「依頼だと？」

「ああ、ＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）への依頼だ」

藤島圭介……多分言うまでもなくあの変態のことだろう。ふ、藤島がどうして……どうして藤島の名が鷲尾の口から出てくるんだ？

「しかし面倒なことになった……まさか、この俺が貴様のような超能力者と戦わなければならないとは……」

「お、お前……私が超能力者だって何故……ッ！？」

「これも不明なルートからの情報だ……やれやれ、厄介な相手だな」

「……ふ、ふふ。その不明なルートというのが気になるな……いいだろう。無理やりでもお前にそのルートが何なのかを聞いてやろうか」

「やれるものならやるがいい、こちらだって何の対策も立てずに貴様らに喧嘩は売らん」

少し笑みを浮かべながら鷲尾がそう言い放つ。
瞬間――鷲尾が信じられない速度で移動し、気付けば私の目前にまで迫っていた。
私は驚愕のあまりに目を見開く。信じられない、ただの不良が出せる速度ではない。
轟！と、全てを破壊し尽くすような拳が風を切り、砲弾の如く飛来してくる。
私は反射的に身体を逸らし、鷲尾の一撃を間一髪が回避。
その後、鷲尾から距離を取るべく――後方へ2～3歩ほど跳躍した。
跳躍と言っても一歩3m。今の跳躍で鷲尾から9m程の距離をとる事に成功したのだ。

「お前……本当にただの不良か？」

「魔術（オカルト）は一切信じていなかったが……なるほど、確かに効果はあるみたいだ」

足尾の奴、魔術（オカルト）が一体どうしたろうか。
それってアレだよな。木下が得意としているヤツのことだよな。
どういう事だ……鷲尾はそっち方面の関係者ということなのか？

「何者だ……お前っ！」

「名乗ったハズだ。鷲尾有資、ＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）のアタマだ」

私が知りたいのはそんなことではない。
そんなことではないのに……この男、他には何も語ろうとしない。
ますます怪しいぞ。こうなったら……力ずくでも情報を聞きだしてやろう。

「ふっ、悪く思わないで欲しいぞ。今からお前を倒させてもらう――！」

「やれるものならやるがいい。ただし……こちらだって貴様のようなバケモノが相手なら――それなりに本気を出させてもらうとしようか」

それが、戦闘開始の合図であった……。
謎の男である鷲尾有資、必ず倒してお前の秘密を暴いてやる。
それに――藤島の名が出ている以上負けるわけにはいかない。
あいつらが、どういう理由で藤島を狙っているかはわからない。
それでも……藤島を狙っているという事は事実らしいんだ。
だから私は――藤島を守る為にも負ける事はできない……ッ！

第１２１話，妙に詳しい謎の男（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

・後書きトークコーナー

圭介「突然ですが疲労で死にそうです……」

伊吹「まったく、あんたはいつもそうよねっ」

圭介「ああもう……ダメだ。もうすぐテストなのにこの疲労はマズい……っ」

伊吹「……あれ？」

圭介「今にもぶっ倒れそうだ。どうしよう、でも小説は書かなきゃ――」

伊吹「それあんたの話じゃないでしょ！　これを書いている人の話でしょ！」

圭介「……次回、、果たして鷲尾の正体は――！？」

第１２２話，不良集団

喫茶店を出た俺たちは暮葉の能力――魔力感知を頼りに明智を追いかけてみた。
辿りついた先は秋葉原のとある路地裏。
荒れたアスファルトに散乱したゴミの数々。壁には不良が描いたと思われるアートたち。
いかにもって雰囲気だな……ここがＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）の根城なのか？

「暮葉、ホントにここに明智がいるのか？」

「間違いないのです。明智殿の微弱な魔力と……その、変な魔力を感じるのです」

「変な魔力？」

「はい。人ではなくて物に籠められたような……」

魔力って物にまであんのか……って、元々物に魔力があるわけないよな。
きっと魔法使いが後から魔力を付け足したのだろう。
しかし、それってどういう事なんだ。ＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）ってただの不良集団なんだろ？
魔力とは普通全然関係ないよな。にも拘わらず変な魔力を感じるって……。

「それってもしかして、サヴィエトの連中が絡んでいる可能性があんのか？」

「十分それも考えられるのです」

「マジでございますか……」

だとしたらまずいよな。サヴィエトの連中に俺のことがバレたら……。

まあその時はその時、とりあえず魔法使いを倒せばいいんだ。

問題はその後のことである。如何に日常的に襲ってくるであろう魔法使いから身を守るか……。

「なあ、気になるんだけどさっきからお前ら、一体何の話をしてんだよ？」

やばっ、そういえば日高さんは部外者だったな。

あんまりこの件に関わらせるわけには……いや、絶対に関わらせたくないぜ。

なんたって日高さんは一般人だ。魔法だなんて言われても信じる人じゃないだろう。

だったら……この件は絶対に言っちゃダメだ。

俺や暮葉が平穏な日常を過ごす為にも――絶対に！

「ああ、なんつーか……ゲームの話だよ！　なっ、暮葉？」

「もきゅ？　……あ、は、はい！　ゲームの話なのですよ！」

「ゲーム！？　そ、それ神ゲーなのか！？」

「まあ難易度は高いけど、そこそこ面白いゲームかと……」

「マジか！　よし、この件が終わったら俺に教えてくれっ！」

「お、おう」

困ったな……まあいい、俺が持っているＲＰＧをテキトーに紹介しておこう。

日高さんは馬鹿である。多分それで納得してくれるハズだ。

それにしてもえらく静かだな。なんつーか、まるで戦いが起こっている感じでは――っと思った、

「――――ッ！」

その時であった。

頭上が激しい打撃音が聞こえ、それと同時に黒い影が上から落下してきたのだ。

影は華麗に着地して空を見上げる。その影の正体とは――――

「あ、明智！」

俺がその影――明智凪紗に声を掛けると彼女は振り返ってきた。

「んっ？　ふ、藤島？　木下に日高まで？」

「けーすけ様が明智殿のこと御心配な様子で、それで拙者達は明智殿を追ってきたのです！」

「う、うるせえっ！」

「つーか、まだ仕事終わってねえのか？」

「生憎、一筋縄ではいかない相手だからな」

明智が一筋縄ではいかないと言う相手……そのバケモノは一体何者だよ？
あの明智が手こずるんだ。おそらくただの人間じゃねえだろう。
ちくしょう、やっぱりサヴィエト関係のヤツらか？
そう俺が推測していた時――もう一人の影が上から舞い降りる。
その影は明智とは違って大柄で、まるでゴリラのように巨大な男であった。
ゴリラ野郎は黒髪短髪だが眉毛は全剃りで、なんとも言えぬ冷徹な雰囲気が漂っていた。

「やはり手加減を知らぬヤツだな……明智凪紗（ちょうのうりょくしゃ）」

「ふん、お前こそ随分と常識離れした不良じゃないか……鷲尾有資（ばかやろう）」

どうやら、あのゴリラと明智は先程まで戦っていたらしい。
なるほど……あのゴリラはＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）のボスか幹部あたりか？
あれだけ強そうな見た目をしているんだ。
現に明智を追い詰めているし、相当の実力者なんだろう。
けど――明智と戦っているってことは、一応俺らの敵ってことにもなるんだよな。

「只ならぬ気配……なのですっ」

「……ッ」

暮葉と日高さんも敵味方識別でゴリラを敵と見なし、ゴリラとの戦闘に備えて身構えた。
日高さんは右手をポケットに入れ、暮葉は背中から一期一振を取りだした。

おそらく暮葉は刀を鞘から抜かず、打撃用の武器として使うつもりなんだろう。
けど、日高さんはポケットに手を入れてどうするつもりなんだ？
って、なんとなく予想できたぞ。多分卑怯な事でもするつもりなんだろう……卑怯者だしな。

「木下暮葉……藤高の日高、もう一人の貴様は何者だ？」

「あ？　俺の名前は――」

「待てっ！　名乗るな！」

「えっ？」

なんで明智は俺が名乗ろうとした瞬間――必死になってそれを止めやがったんだ？
別に名前くらい名乗ったって何の問題も――

「……そうか、明智がそこまで必死に止める存在……貴様が藤島圭介というヤツだな」

「――しまった……っ！」

いまいち状況が飲み込めないが、とりあえずなんであのゴリラは俺の名前を知ってんだ？
それに暮葉や日高さんの事まで……ホントにあのゴリラ何者なんだよ。
絶対普通じゃない。見た目もそうだが中身や行動もそうだな。見ていてわかったぜ。

「なあ明智。あの野郎はなんで俺のことを知ってんだよ？」

「詳しい事はわからない。でも、裏のルートで私達の事は知っているみたいだ」

「裏のルート？」

「うん。それでアイツの目的は――――」

「藤島圭介。貴様の身柄を拘束させてもらう」

明智がゴリラの行動目的を説明しようとして――その時だ。

ゴリラが敵を確実に撃破するミサイルの如く、冷徹な鋭い表情で突撃を仕掛けてきた。

しかも信じられない事に――そのスピードは常人の域を遥かに超えていたのだ。

日高さんが「あぶねえ！」と、暮葉が「けーすけ様っ！」と、背後で砲声のように叫ぶ。

その叫び声が耳に入ったと同時に――俺はゴリラの攻撃を反射的に回避する。

左方向に走り幅跳びのように跳躍、アスファルトでぐるぐる身体を転がし立ち上がる。

「……ォ――ッ！」

「うわっ！？」

体勢を立て直した時には既に、ゴリラ野郎は目前に迫っていたのだ。

今度は左へ跳躍し、辛うじて今の一撃を避けてみせた。

今度は地面に転がる事なく、なんとか立ったままの姿勢を保てた。

跳躍した反動で後方に2～3歩ほど後退するが、体勢を立て直した俺は前へ突き進み、

「おっ、オオオオォォオォォオオォォォっ！」

いけるか？と思った俺は拳を握って、ゴリラ野郎の懐深くに勢いよく踏み込んでみる。

入った！かわせるタイミングじゃねえ――直撃を確信した俺は全力の一撃を放った。

次の瞬間。

「……えっ？」

入った――ハズだった……けど俺の右拳には何の感触も感じない。

空振り。

そう、空振りである。俺はこの拳をゴリラに打ち込む事が出来なかったのだ。

理由は単純だ。拳が触れる寸前にゴリラが何処かへ消えたのだ。

「なっ、野郎どこに――ッ！？」

「危ねぇっ！」

日高さんの叫びが聞こえ、衝動的に後ろへ振り返った――刹那。

ガコン！という物体を激しく殴りつけたような金属音。

「――ふん、妨害されてしまったか……」

「粉々ってオイ！　鉄板入りの鞄だったのに！？」

鉄板入りの鞄とはまあなんとも卑怯な。でも、その砕け散った鉄板入りの鞄は俺を救った。
日高さんは咄嗟に飛び込み、鞄を突き出しそれを俺を守る盾代わりに使用したのだ。
結果、鉄板入りの鞄は粉々に粉砕されたが、その代わり俺が殴られることはなかった。

「えいっ！」

暮葉の可愛らしい叫び声。しかしやっている事は非常に攻撃敵だ。
刀を鞘に入れたままの状態で振りまわす暮葉。
それでゴリラ野郎の首筋を狙うつもりだったらしい。
だが、ゴリラ野郎はガシっと刀を鷲掴みし、そこから暮葉との力比べが始まった。

「ん、きゅ――っ！　この力にその運動性能……貴方、魔法衣服（マジッククローズ）を着ているのですね？」

「確か連中もその名を言っていたな。確かに……俺はオカルト用品を着ている。最初は半信半疑であったが……まあ、貴様らのようなバケモノと互角に戦えるあたり、中々いいブツだったようだな」

「貴方の言う連中は一体何者なのですか？」

「さあ。この俺も詳しくは知らない連中だ」

「では、貴方の目的は一体なんなのですか？」

「連中の依頼だ。秋葉原（ここ）で暴れ貴様らを誘き寄せ――そこの藤島圭介の身柄を拘束する事だ」

「――――ッ！」

拘束？

ちくしょう、あの野郎一体俺の身柄なんかを捉えて――って待てよ？

俺を拘束するって依頼を出した、その連中ってまさか……。

いや、それを考えるのは後にしよう。とにかくアイツを止めねえと――！

ゴリラの右腕が一回り大きく膨らみ、刀を握る力と引っ張る力が数倍に膨れ上がったらしい。

暮葉も一期一振を軽々と振りまわし、一撃で相手を仕留めるなどかなりの腕力の持ち主だ。

だけど暮葉は小柄な女の子。そこに限界が存在しているのである。

いくら暮葉が鍛えているとは言え、その細腕から出せる力には限度があるらしい。

対してゴリラ野郎はよくわからねえが、何らかの力で筋力を強化しているらしいのだ。

本来なら暮葉のほうが圧倒的に強いのだろう。

だが、強化されたゴリラ野郎は暮葉以上の腕力を誇っていた。

「木下――！　う、ああっ！」

その時、ピンチの暮葉を助けるように――明智が火の玉をゴリラの手首に向かって放った。

右手首を火傷する事、ここで右手を離して暮葉を逃す事。

当然のようにゴリラは後者を選び、右手を刀から瞬時に離して素早く左方へ跳躍した。

しかしゴリラは不運な男であった……跳躍したその先には日高さんが居た。

その事に気付いたゴリラは衝動的に振り返るが、

「な……っ！？」

「ふんンッ！」

「ぐ、が――――ッ！？」

瞬間、日高さんの右拳が勢い良くゴリラ野郎の顔面に突き刺さった。
正にその一撃が反撃開始の合図。
大きく後ろへ仰け反ったゴリラは、己の脚力で体勢を立て直そうとする。
……けど、そんな事なんてさせるわけねえだろ！

「う、オオォォォォォォォォォッ！」

「――けーすけ様！」

全力疾走をする俺。途中から俺に並んで走り始めて暮葉。
俺達は体勢を完全には立て直していない、あのゴリラに思い切り体当たりを仕掛けた。
暮葉の体重は４０ｋｇもあるか微妙だ。
それでも俺の体重と加われば――多分１００ｋｇ近くにはなるハズである。
弾丸のように体当たりでもすれば、激しい衝撃を与えるには十分だ。
俺と暮葉の２人と走った勢いの重圧は、ゴリラ野郎を確かに後ろへ吹っ飛ばした。
凄まじい勢いで地面に叩きつけられたゴリラ野郎。それであの野郎の意識は途切れたようだ。

「ふぅ……やっちゃいましたね、けーすけ様っ！」

「ああ、ナイスな連携プレイだったな」

俺と暮葉はお互い見つめ合い、巨体に乗っかったまま勝利の余韻に浸っていた。

それから数十分後。

秋葉原の大通には数両の警察車両が車列を組んでいた。

手錠を掛けられた不良達が続々と、警官達に連れられ護送車へと乗せられていく。

どうやらあの後、明智が通報したようである。

今回の一件でＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）の構成員の大半が逮捕されたようだ。

不良達の列の中には当然――一際デカいあの男の姿もあった。

「あの、ちょっと聞きたい事があるのですが……よろしいでしょうか？」

「ん……勝てば官軍、負ければ賊軍。煮るなり焼くなり好きにすればいい」

暮葉が呼び止めた男はＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）のリーダ、鷲尾有資。

つーか鷲尾のヤツ潔いな……中々硬派なヤツじゃねえかよ。

「その服はどんな人達から貰ったのですか？」

「正確には取引だ。藤島圭介を必ず捕える事と引き換えに、この特殊な衣服を俺は受け取ったのだ。それも名前も団体名の名乗らぬ連中からな……」

「もう一つ、なんでそんな取引に乗っちゃったのですか？」

「依頼は善行でも悪事でも必ず引き受け達成する。それが俺達ＡＭ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）の信条だ」

「最後にもう一つ。貴方は魔法使いとかではないのですよね？」

「そのようなオカルトに興味はない。今回は特別だ……」

それだけ言い残し、鷲尾は警察に連行され護送車に乗せられた。
その光景を見ている俺達。ふと気がつくと俺の左右に明智と日高さんが佇んでいた。

「魔法とかオカルトとか一体なんなんだよ？」

「えっ？　ゲームの話じゃねえの？」

「ゲームかぁ。まあいいや、俺そろそろ帰ろうかな？　深月と深雪も心配してるだろうし」

そんな事を呟きながら、日高さんは手を振りこの場から立ち去ってしまった。
結局……あの人何しに来たんだろうか。
まあ鷲尾を倒すのには役立ったし、全く無意味な登場ではなかったよな。

「んで、明智はこれからどうするんだ？」

「私はこれから後始末をするぞ。一応仕事だからな……っ」

「そっかぁ。お前も夏休みなのに大変だよなぁ」

「うん、出来れば遊びたいのにな……っ」

明智はここの所全く遊べていない状況らしい。
勉強も忙しいのだろうし、こうした裏の仕事も忙しいんだろう。
けどなぁ明智だって年頃の女の子だし、俺としても少し気を抜いて遊んで欲しいな。

「明智、夏休みのどっかで皆で遊ばないか？」

「……えっ？　けど、いいのか？」

「いいも何も俺ら友達だろ？　高2の夏だし遊べるうちに遊んどこうぜ」

「うん、ありがとな藤島っ。その、そろそろ仕事に行かないと……」

微かに見せた微笑み、やっぱり明智も笑うと可愛いぜ。
出来ればこのまま話をしていたい。でも、やるべき事が山積してるらしいしなぁ。
仕方ないよな。それに遊ぶ機会ならいつでもあると思うし。

「わかった、またな明智」

「うん。藤島もいい夏休みを過ごすんだぞっ」

「おう」

こうして、明智も後始末の為に俺達の前から一旦立ち去った。

だが明智と入れ替わるように、今度は暮葉が歩み寄ってきた。

「けーすけ様、その……ちょっとお話があるのです」

「話ってアレか？　さっきの鷲尾の背後にいるヤツの事？」

「はいっ。あの、どうも今回の件はサヴィエトの関与が疑われるのですが……っ」

「それなら俺も薄々思ってたよ」

「その件に関してなのですが、どうも敵は拙者達の情報を裏ルートで得ているようなのです」

「裏ルート？」

そういえば鷲尾にしたって随分とまあ、俺らの事情に詳しかったよな。

それがサヴィエトの連中に聞いた事だとすれば……。

もしかして、俺らの近くに――――

「一応アルファ隊でも調べてみるのです！　なんだかその、けーすけ様の居場所も知られた可能性がありますし、その……拙者や明智殿の事まで知っているという事は――」

「やっぱり、俺らのすぐ近くに連中のスパイがいるって事か？」

「可能性は大きいのですっ」

スパイ。

敵対勢力の情報を得るため、合法違法を問わずに諜報活動をする連中の事である。
まさか……俺らのすぐ近くにサヴィエトのスパイが？
もしいるとしたら誰だよ。詳しい情報を得られるという事は相当近くにいるヤツだぞ？
もしかすると――ソイツは俺らの友達になっているかも……ってなに考えてんだよ俺は。
だからってよ、友達を疑っていい理由（ワケ）にはならねえだろ。

「ちっくしょう、夏休み初日からコレですかっ！」

「で、でもけーすけ様は安心していてください！　スパイの特定などは全部アルファ隊（こちら）でやっておきますから！」

「た、頼っていいのか……？」

「けーすけ様？　拙者はけーすけ様をお守りする為にここにいるのですよ？　だいじょーぶですっ！　拙者はこれでもプロなのですよ？　もっと頼ったっていいんですからね！」

「――そうだな。今回は友達（おまえ）を頼るよ」

「はい！　任せて欲しいのですっ！」

そう言いながら、暮葉は満面の笑みを浮かべてくれた。
けど、やっぱりコイツに任せっきりにするのはよくないよな。
俺もコイツをサポートできるくらい――強い野郎にならなくちゃな。
どんな魔法使いが来ようとも負けねえような、そんな野郎に――
それにしても、連中のスパイって一体誰なんだろうか？
……そういえば、スパイとかよりももっと重要な事を忘れているよ

うな――？

――その頃、忘れ去られた妹（シスター）さんは……。

「君かわうぃーねぇっ！」

「ハァハァ、やべぇよ二次元並の可愛さだＹＯ！？」

「ねえねえ写メ盗らせてくださいよっ！」

「お兄ちゃん達どこ！？　キモイ男に絡まれてるよっ、助けてお兄ちゃあああああああんっ！」

――藤島葵、御愁傷様である。

第１２２話，不良集団　（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「どうも！　作者のテストが終了したので今日から更新再開！」

伊吹「今までで一番長い休載だったわね」

圭介「まあ……それは仕方ねえとして、今日はいくつか報告があるんだ」

暮葉「もきゅ？　報告ですか？」

圭介「まず第一に短編について。散々掲載するとか言いつつ結局一つも投稿していない短編ですが、今月中には５本全部投稿したいなと思います！」

明智「全く、一ヶ月遅れで掲載とは……計画性が全くないな」

圭介「……つ、次にちょっとした報告。なんと休載中にＰＶが１０万を突破しました」

あかり「おお！　やったじゃないか！」

圭介「読者の皆様本当にありがとうございます！　って、最後の報告……っというか次回予告でもあるのですが、次回は特別回【人気投票結果発表】を行いたいと思います！」

千早「その……３１日まで募集していたアレですよね？」

雪乃「あら、いよいよ発表なのね」

圭介「その他諸連絡は活動報告にて追々する予定です！　以上、報告終了！」

暮葉「えっと……こ、これからもよろしくお願いします！」

特別回：人気投票結果発表！（前書き）

どうも、作者です！
今回は人気投票の結果発表！
なお、今回の話は本編とは全く関係がありません！

あと、駄文かついつもより長くてすみません！

特別回：人気投票結果発表！

「んで、一体なんの集まりなんだよコレ？」

初芝高校体育館。
そこにテーブルとパイプ椅子が並べられ、何やらいつもの連中や敵対している連中まで勢揃い。
っていうか敵同士を一か所に集めるってどうなの？
もう既にグラウンドで一戦あったんだよね……。

「折角の全員集合なのに、どうして貴方はいっつも喧嘩しちゃうの！？」

「――あン？　ムカつくクソ野郎がいるからに決まってんだろォが。なぁ格下ァ？」

「テメェこの久我劉生ナメてんじゃねえぞ、もう一戦やるか最強？」

「おォーおォいいツラになりやがったなァ三下ァ。愉快に素敵に殺してやるかァ？」

「はっ、おもしれえな……テメェは殺し決定だな」

「ちょっと！　２人とも喧嘩はダメなんだよ！」

今にも体育館で死闘を始めそうな早川と金髪イケメン野郎。
それを止めるツインテの女子であるが……暮葉も早川とは敵同士じゃなかったっけ？
他にも永渕達が黒木らと殴り合いそうになるし、俺もアナスタシア

あたりに喧嘩を売られ……。
もう、人も会場もボロボロです。
とりあえず、俺らをここに集めた張本人に直接理由を訊くとしよう。
……っと、思ったのだが。

「てめえ……なんなんだよそのコスプレは？」

俺は思わず彼に突っ込んでしまった。
俺たちをここに召集した人物。その正体は暁美ほ○らのコスプレをした西園寺雪乃であった。

「あら、藤島君の大好きなほむほむよ？」

「なっ！？　なんで俺がほむほむ好きだってわかったんだよ……？」

「藤島君はほむまど派だって木下さんが言っていたわ」

「暮葉の野郎ぅ……さてはま○マギ見やがったなっ！」

だからって西園寺にほむほむのコスプレ着せるなよ。
確かに西園寺は黒髪ロングだし、コスプレすればそこそこ雰囲気はほむほむに似るけど……。
待てよ、そういえば今日暮葉を見てねえぞ。暮葉のヤツはどこで何を？
待て、暮葉の髪の色って確か桃色で、まどかの髪の色も確か似たような色で……ま、まさか？

「けーすけ様ぁーっ！」

「あ？　げっ、予想通りかよっ！？」

髪は元々だから仕方ないとして、あの魔法少女のような服は間違いねえ……あの野郎っ！

「どうですかコレ、結構高かったのですよ！」

「ああ、お似合いじゃねえの？　って、お前ら揃ってなんなんだよ！」

「あら、貴方はコスプレが嫌いかしら？」

「ひどいのです！　折角本気になって選んだのに！」

「そういう問題じゃねえ！　オイ西園寺、結局ここに全員集めたのは何の為だよ！？」

俺はそれだけでいいから知りたいんだよ。
伊吹も明智も小坂も野郎共も写真部のみんなも……。
つーかここにいるヤツ全員困惑してんだよ！
さァて答えてもらおうか西園寺……こんなに大勢を体育館に収容しやがった理由を――！

「あら、人気投票の結果発表よ」

「へ？　け、結果発表？」

「そう……ネットに掲載も考えたんだけど、面倒くさいわよね？」

「待て、面倒くさいのはお前だろ？　絶対ＨＰ作るのが面倒だっただけだろ？」

「失礼ね。現代人は何でも機械に頼り過ぎよ」

「そういう問題じゃねえだろ！　つーか直接全員集めるほうが大変だろ！？」

「あら、そういえばそうかしら？」

わざとらしくニヤニヤ笑ってやがる……コイツ、さてはカオスな状況作って遊んでるな。

でもって本来の目的忘れてるだろ。結果発表なのに中々発表しねえし。

しかも、この時点で文字数１３００超えてるんだぞ。ったく……いい加減に発表しろっ！

「けーすけ様、イライラしちゃダメなのですよ？　ほら、煮干し食べてカルシウムを――」

「うっせ黙れ！　いいからさっさと結果発表せんかいっ！」

「相変わらず短気ね……貴方絶対早漏でしょ？」

「こんな大勢いる中で下ネタ言ってんじゃねえ！」

「けーすけ様、そうろうってなんですか？」

「聞かなくていい！　そして知らなくていいんだ暮葉！」

「ちなみに、誤解されないうちに言っておくけど私は処女よ？」

「そんな事誰も聞いてねえよ！」

コイツら俺を弄って遊んでやがるぞ。

しかも、こうしている間に文字数はついに１５００……いや、１６００を超えてしまった。

あと半分で３０００文字じゃねえか。いい加減に始めろよ、読者も多分飽き始めているぞ？

っと思っていたその時、パァンと言う柏手を打つ音が体育館中に響いた。

それはステージのほうから聞こえた。

体育館にいた連中はその音を合図に、一斉にステージのほうに顔を向けた。

「いい加減にしろ。中々始まらないし読者もそろそろ飽きている頃だ。早急に人気投票の結果発表をしたほうがいいと思うぞ」

おお勇ましい……明智が壇上で堂々と説教をしているぜ。

ありがとう明智。お前のおかげで少しは話が進みそうだよ。

ったく……正体された明智が活躍して、主催者の西園寺が何もしないってどうなんだよ？

でも明智の行動のおかげか、西園寺もいい加減本来の目的を思い出したようだ。

西園寺は慌ててステージに登り、明智からマイクを取って深呼吸をしていた。

……ったく、最初からそうやって仕事しろよな。

「失礼、大分本題とは関係ない話になっていたわね。それではこれより人気投票の結果を――」

「一位は最強のオレに決まってンだろォが三下ァ」

「ふざけんなよ早川……テメェは殺し決定だな」

「に、人気投票ならミネットも負けないかも」

「拙者が一応メインヒロインなのですよ!?　だから拙者が一位なのです！」

「なっ!?　め、メインは私よ私！　別にばか圭介の為に一位になりたいってわけじゃないけど……えと、とにかく私が正真正銘のヒロインなの！」

「そんなのやるまでもない！　あたいが一位なのは決定事項だろ！？」

「い、一位はわたしです……そして、先輩の恋人ポジションを――」

【私が一位、他の追随は許さない】

ダメだこりゃ……早川&金髪だけならまだしも、暮葉や伊吹達まで暴走してやがるぞ？

「いい加減に黙れ！　順位の発表ができないだろうが！」

しかしざわめいていた会場は、明智の一喝によって一瞬にして静まり返った。

流石明智、やっぱりアンタがいないと物語は進まないぜ。

メタ発言をすると明智は確か、連載当初はそこそこ人気のあるキャラだったハズ……。

案外一位は明智だったり……って、そんなのわからねえよな。

俺だって順位は知らないんだ。下手したら俺……ビリだったりして？

「それでは結果発表を始めるわ。この順位は9月1日午後5時ごろに集計したものよ。まずは１０位からの発表ね」

西園寺がマイクと紙を持ってそう告げる。
おそらくあの紙は順位表、俺たちの名前が記載されているものなんだろう。
西園寺はそれを読むように言葉を続ける。

「第１０位。１０票で浅間あかり、青山千早、白藤早苗、明智光昭の同列ランクインよ」

「え、あたい１０位なのか？」

「……そんな、えと……白藤先輩は登場が遅かったから仕方ないとして……わたしまで１０位？」

【私は納得、ここから舞い上がる予定】

「ちょ、こんなの不正だっ！　あたいは主催者の西園寺先輩にクレームつけるからなっ！」

どうやら、白藤と寝ている明智光昭以外、この結果に納得できないようである。
いやいや１０位だぞ。今回きっと１０位以内にすらランクインできなかったキャラも多いハズ。
それで文句を言うのは贅沢な気が……。
あと明智の爺さん起きろよ……折角出番のあるチャンスだってのに。

「フフ、これは厳正な投票による結果よ？」

「……な、納得……できないですよ」

「そーだそーだ！　白藤と千早はともかく、なんでこんな爺さんとあたいが同じ順位なんだよ！」

「それが現実よ？　現実を見なさい……ふふふ」

西園寺の冷徹な笑いに恐怖し、青山さんは後退りをしてしまった。
あかりは強情にもまだ食いつこうとするが……まあ、いつまで持つ事やら。

「う、ぐ……とにかく、あたいはこんなの認めな――う、わっ！？」

その時、突如体育館に乱入してきた黒服の集団に、あかりは両腕を掴まれてしまった。
そしてそのまま、強制退場させられるように、あかりは黒服達に連れていかれてしまったのだ。
え～っと、その……まあ色々突っ込みたい事はあるんだ。
けど、ここは素直に西園寺に突っ込んでもいいんだろうか？
いや、突っ込まなければ俺の気が済まないぜ。

「お、オイ西園寺！　今あかりを連れ去った集団はなんだよ！？」

「青山家の執事達よ。ちょっと青山さんに無理を言ってね……彼らは暴動処理兼クレーム処理課として仕事をしてもらっているわ」

「く、クレーム処理って……」

「……すみません、先輩。その……圧力かけられちゃいまして……っ」

「青山さん、西園寺の圧力には勝てねえよ……」

ひどい現実だ！

西園寺の圧力ってのがどんなものかは知らんが、いや知りたくもない。

けど合法的なものとは思えねえな。うん、きっと知らないほうが幸せな方法であろう。

それよりさっさと人気投票を進めて、地獄から解放してもらったほうがいいな。

「続いて第９位。１２票でこの私、西園寺雪乃がランクインよ」

「って、てめえ自身じゃねえかよ！」

「あら、藤島君何か御不満かしら？　登場が遅かった割には十分な快挙だと思うわよ？」

「……なあ西園寺、この投票ってやらせじゃねえよな？」

「違うわ。読者の皆様による厳正な投票よ」

「……」

もう突っ込む事すら面倒になってきた……もういいや、先に進ませよう。

このままだと永遠にこの話が続きそうだ。

「第８位は１４票で小坂亜紀よ」

「とぉっ！」

西園寺が小坂の名前を読んだ瞬間、小坂がロケット推進の航空機の如く壇上に登ってきた。

ぐは、おっぱいすげえ……じゃなくて、どうしたんだよ小坂のヤツ！

そりゃ８位にランクインして嬉しいのはわかるが、いくらなんでもテンション高すぎだろ！

「あたしのような脇役が８位……？　嬉しい、嬉しいよ……けど贅沢を言うとなんで１位じゃないのかな？　巨乳キャラは問答無用で人気が出る法則は一体どこに――きゃあっ！　ちょ、なに離してっ！」

壇上で西園寺からマイクを奪い、ひたすら持論を語っていた小坂。

しかし、結果発表の進行を妨害したせいか、小坂はクレーム処理課の連中に連れ去られた。

小坂……哀れ。いや、全然哀れじゃねえかも。

８位なんだぜ？贅沢言わずにそこで納得しとけよ……。

「はいはい、じゃあ次は７位。１６票で明智凪紗よ」

「７位か……まあ私はギャーギャー騒がないから心配するな。この順位に納得するとしよう」

あれ、意外と明智の順位が低かったな。

つーか、あかりや青山さんの順位も意外と低かったような。

一体上位には誰かランクインしてんだ？

ちょっと……というかかなり気になる所だぜ。

あと素直に現実を受け止め退く明智――なんか、ちょっとカッコよかったぜ！

「続いて6位。17票で……えっと金、髪リーゼントの名前。なんだったからしら？」

「オイ！　船木健太だこの野郎っ！」

「それにしても現実不思議よね。なんでこんな脇役のダサいリーゼントがランクイン――」

「コラァテメェ！　リーゼントナメてんじゃねえぞ！？　ツッパリの定番はリーゼントだ。その他の髪型？　ハッ、気合い入ってねえんだよ！　今時のチャラチャラした髪型よりもリーゼントのほうが数千倍は気合い入ってんだ！」

「……はぁ。クレーム処理課、出番よ？」

「――つまり言うとだな、リーゼントは最高の髪で――ってうわ、なんだテメェら何しやがるブッ殺すぞコ……あぎゃああ！　ちょ、痛い！　痛いってば馬鹿野郎！　やめ、うあああ畜生覚えてろっ！」

あ～あ、本日三人目の犠牲者だよ。

つーか船木さん、すっかりただのネタキャラになっちまったな。

なんというかその……折角いい順位になったのにあまりにも不憫すぎる……。

「さて、変なリーゼントが消えた所で第5位を発表するわ」

ひでえ……西園寺は船木を変なリーゼント扱いしてるよ。

船木健太。一応俺が永渕に勝つキッカケを作った、悪人だけどいいヤツキャラだったのに。

「第５位、１８票で早川悠よ」

ここで本作の第二の主人公的なヤツがランクイン。
まさかの元々敵キャラだったヤツだよ。
体育館の奥から不自然にまで白く、白く、白い、狂ったソイツが杖をつき歩いてきた。
ここで西園寺が早川に近付き、マイクを彼の口元まで持っていく。

「一応貴方にも聞いておくわ。第５位になった感想をどうぞ」

「第５位だァ？　ふざけンじゃねェよ……最強のオレがなンで第１位じゃねェンだよォ！」

おいおいちょっと待て早川！確かに最強だけど何か違う！
第１位ってもろアレだよね。あのロリコンベクトル野郎の事だよね！？

「一応言っておくけど、男性キャラでは貴方が一番人気だったのよ？」

あ、この西園寺の言葉で全てを確信した。
どうやら俺は１０位以下らしい。
という事は、早川の上にランクインしている人々は全員、可愛らしい女の子って事ですね。
しかし、早川はやっぱりこの結果に納得がいかないらしく、

「ふっざけンじゃねェぞォ！　読者の三下がァァァァ！」

「ちょ、貴方がキレたら青山家の執事どころじゃ解決できないわよっ」

「あぎゃはははっ！　あっはぎゃはははっ！」

早川は首筋のスイッチを押した。すると、まるで復活したかのように超能力を使い始めたのだ。

体育館内に暴風が吹き荒れ、テーブルとパイプ椅子が全て宙に浮かぶ。

それだけではない。ガラスと言うガラスが全て割れ、気がつけば体育館の扉も破壊されていた。

一応青山家の執事が止めに入ろうとするが、結局彼らはただの人間。体術以外に能力があるわけでもなく、結局超能力者の早川悠の前では無力同然。

パンチやキックは早川の暴風の膜で反射され、執事が撃った銃さえも彼は反射していた。

弾かれた銃弾が四方八方に弾かれ、早川を撃つハズの銃弾が俺達を襲っていやがる。

ちょっと待て。ヤツを止める＝俺達が危険じゃねえかよ！

「……仕方ねえ。オイ西園寺……気に食わねえけど俺と手ぇ組んで早川を止めるぞ」

「久我……ふふ、仕方ないわね。ヤツを止めない事には結果発表もできないわ」

「仕方ないですね。拙者も協力するのです！」

「はわわわっ！　ちょ、ミネットが止めるよっ！」

こうして戦える者は全員、暴走した早川悠との戦いに身を投じたのだ。

――しばらくお待ちください――

結局早川は俺の右ストレートで気絶し、そのまんま保健室に運ばれたのであった。
神様、どうか早川が保健室で暴走しませんように。

「それでは気を取り直して、人気投票結果発表の続きをするわ」

ボロボロになりながらも、マイクを持って司会を行う西園寺。
ようやく結果発表再開である。
早川め、散々会場を荒らしてくれたせいで疲れたぜ。
戦闘の後は会場の復元作業。そのせいでもう夕方になっちまったじゃねえかよ。
やっぱり、ネットに結果を掲載したほうが安全だったんじゃないか？

「第４位は２２票で藤島葵よ」

「えっ！？　あ、葵が４位！？　う、嬉しいな……ありがとうみんな！」

あれ、葵が４位という結果に満足しているぞ？
ちょっと待て……こんなの葵じゃねえぞ。
ここは一つ、兄が妹の本当の気持ちを確かめてやるとしよう。

「葵、本音はどうなんだ？」

俺は葵に尋ねると、葵は半眼になって、

「葵が４位？　ありえないよ！　こんなの不正に決まってるよ！
葵は１位になってお兄ちゃんと結ばれる運命なんだよ！？　それなのに４位って……これじゃお兄ちゃんと結婚できないじゃん！」

やっぱり……これでこそ我が残念な妹だよ。
っていうか、別に人気投票で葵が１位になってもさ、俺達実の兄妹なんだから結婚は無理だろ。
葵はその後も黒いオーラを放ちつつ、ぶつぶつと文句を言っているが……。
まあ、ここは放置しておいたほうがいいだろう。
下手に三国干渉的な事をやると、多分会場が再び炎上しちまうハズだ。
やっぱり葵は放置プレイすべきだな。

「さて、いよいよ上位３名の発表……と行きたい所だけど、ここで惜しくも１０位以内にランクインできなかったながら、作者が印象に残ったキャラを紹介していくわ」

西園寺が今までのように、調子よさそうにそう言い放った。
へぇ～、そんなマイナーなキャラ紹介する必要あんの？
ふとそう思ったが……ちょっと待て、俺１０位以内にランクインしてないっぽいじゃん。
ううう……実際の所、俺に誰か投票してくれたんだろうか？

「まずは１票だけど藤島圭子ってのがいるわ」

「は？　け、圭子って……おい俺じゃねえか！」

誰だよ女装した俺に投票したの！？

「僕は納得できないぞ！　あの全校の男子が憧れた圭子ちゃんがたったの１票！？」

「俺もおかしいと思うね。どうして圭子ちゃんがたった一票なんだい？」

圭子ちゃんの順位が低い事に腹を立てる大吾と重原。

「てめえら、いい加減に圭子＝俺だと気付けよ……」

結局、俺はいつまでコイツらの中で圭子ちゃんなんだろう？
まあそんな事は放っておこう。コイツらに変な幻想を抱かせておくのも面白いかもしれない。
とりあえず、今は圭子ちゃん＝女の子だと思わせておこう。

「それじゃあ次発表するわ。７票の永渕晃よ」

永渕？
ああ、あのガチ悪役に投票した人っているんだ。
まあ確かに、この作品始まって以来の外道キャラだったが……。

「俺がたったの７票！？　ざけんじゃねえぞコラァ！　こうなったらテメェらに思い知らせてやる……白陵高校の恐ろしさを――ってなにしやがんだっ！　離せテメェ！　俺は伊吹ちゃんとヤてぇんだよ！」

その外道も今やこの有様。
永渕は小坂や船木同様、青山家の執事に連れていかれてしまった。
永渕……アンタ強かったよな。
でもこうして見るとやっぱり……早川には及ばないんだな。

「それじゃあもう一人紹介するわ。６票で藤島圭介……そう、藤島君よ？」

げぇ、俺永渕より下なのかよ……まあ仕方ねえか。
俺なんて多分ありふれた主人公キャラだし、これと言って特徴もないからな。
そんなテンプレ主人公に６票も集まったんだ。これでも奮闘したほうだろう。

「まあ……なんつーか。俺なんかに投票してくれてありがとな」

「ついでに、これは感想欄に書き込まれた事よ。藤島君、貴方の上条〇麻な性格は読書に飽きられてるわよ？」

「へ？　ちょ、待って……それって俺がいらない子みたいじゃ――」

「事実だから仕方ないわよ。悔しかったら新しい事でも始めればいいんじゃないかしら？」

「う、ウソだ……俺がいらない子だなんてウソだァァァァァァァァァッ！」

「……次、行ってもいいかしら？」

……おっといけない。俺とした事が取り乱してしまったぜ。

どんな時でも冷静でいられる者こそ、真の変態と言う名の紳士なのだ。
とにかく冷静になろう。変態紳士を名乗る為にも、スムーズにこの企画を進める為にも。
スーハースーハ……ふぅ、大分落ちついたぜ。

「それでは第3位を発表するわ。２９票で木下暮葉よ」

「もきゅ！？　せ、拙者ですか！？」

「ええ、間違いなく貴女が三位よ」

「え、にゅふふっ。一位じゃなかったですけど……ありがとうございます！」

やっぱり暮葉は素直でいい子であった。
これまでの奴らとは違い、自分の順位に不満を覚えて大暴れする事はなかった。

「まあ貴女はメイン的な扱いだから、そこそこ人気があるのは当然だと思うわ？」

「いや待てよ西園寺。メインヒロインが人気ねえ作品って結構あるんだぞ？　それを考えたらやっぱ暮葉はかなり奮闘したと思うぜ？」

「その、ありがとうなのです！」

暮葉はニコッと満面の笑みを浮かべた。
何かかズッキューンと胸にくるような感覚。
あぁ、まるで天使や……危なく俺も萌え死ぬ所であった。

「それじゃあ次へ進むわ。第2位の発表よ」

いよいよ第2位か……少なくとも男キャラで一番人気は早川悠。
女の子キャラである事には間違いないが、さて……一体誰であろうか？

「第2位。４３票でミネット・ローランよ」

「えええええええ!?　み、ミネットが!?　ホントにミネットが2位なの!?」

ミネット――って名前らしい、小柄な女の子が驚いた表情を見せた。
顔を左右に向け、あたふたした動きを見せていた。
やがて、彼女は西園寺に迫って、

「ホントなんだよね!?　ホントにミネットが2位なんだよね!?」

「間違いないわ。厳正な投票の結果よ……貴女は胸を張れる順位に見事輝いたのよ」

「しかも3位の拙者とは随分差があるのです……でも、それだけミネットさんが人気だったって事なのですよ!」

「し、信じられないよ……だってミネットは登場遅かったんだよ？
他の人達よりもず～っと遅い登場だったのに……」

そう言った後、ミネットはハッと笑顔を浮かべて、

「ど、読者の皆様！　えっと……投票してくれて本当にありがとう

！　ミネット、すっごく嬉しいんだよ！」

ミネットはぺこりと一礼をした。
しかし、この素晴らしくいい雰囲気をぶち壊す――一人の男がステージに上がってきやがった。
ソイツは金髪長身のイケメンであり、残念ながら初芝高校の制服を着ていやがる。
彼は西園寺から強引にマイクを奪うと、

「１０位の僕の妹のあかり、３位の木下君。そして２位のミネット・ローラン君……この三人に共通する事、それは三人ともロリな体型であるという事。そう――きっとこの小説の読者にはロリコンが多いと言う事だ！」

彼――妹とは大差をつけられ１０位外だったあかりの兄、浅間英樹は熱くそう演説していた。
え～っと……なんつーか、アイツなに言ってやがるんだ？

「貴方は確か……この高校で最も評判の悪い残念なイケメンさんかしら？」

「つーか部長なに言ってんだよ！」

「だってそうじゃないか！　三人ともロリだよロリ！？　特に木下君とミネット君は大人気、これはもう読者にロリコンが多い決定的な証拠ではないか！」

「いくらてめえがロリコンだからって、その指摘は流石に読者に失礼すぎるだろ！」

「いいや！　ロリコンである事は誇るべき事だよ！　そう……【魔法少女に会っちゃった場合】の読者を増やす為には、戦闘シーンなんかよりも……ロリっ娘の登場のほうが効果的！」

「そんなんで読者が増えるわけねえだろ！」

「確実に増える！　事実、あるゆる作品でロリキャラは結構人気なのだ！　そう、ロリこそ至高の属性だ！　ｙｅｓロリータＮｏタッチ！　ロリロリロリロリロォォォリィィィィィィタァァ――ぐふっ！」

あまりにも騒がしかった為、俺は浅間部長の鳩尾をぶん殴ってやった。

喧嘩慣れしていない彼は、俺のような素人の一撃でも簡単に沈める事が出来た。

彼が気絶した瞬間、会場はとても静かに……浅間部長がいかにウザいかよくわかったぜ。

浅間部長はその後、青山家の執事によってどこかに運ばれたようである。

まあ、当然の始末であろう……さて、そろそろ結果発表に戻るとしよう。

西園寺が気を取り直したようにマイクを持ち、再び司会としての仕事を始める。

「……それでは、数々のキャラクターを追い抜き、見事１位に輝いた人を発表するわ」

会場に緊張が走り、体育館内にいた人々が固唾（かたず）を呑む。

所詮はラジオだが、ドラムロールが通常よりも長く鳴る。

俺も思わず力が入り、気がつけば両手の拳をガッチリと握り締めて

いた。
一方、西園寺もマイクを握り締め―、大きく息を吸って腹に力を入れて――

「第1位、66票で国宗伊吹。藤島君のツンデレ……いや、ツッパリかしら？　とにかく幼馴染ポジションのキャラクターが堂々の1位ランクイン！」

瞬間、会場内わあああああああ！っと歓声が沸き上がる。

「わ、私が1位……？」

呆然とした声を上げた伊吹。
その姿は普段のツッパリ伊吹ちゃんのものではなく、正真正銘一人の女の子の姿であった。

「おめでとう、心から祝福するわ」

西園寺が伊吹に近づき、多分心からそう思っている事を伊吹に言った。
俺もおめでとうくらいは言おうかな。
というか、伊吹が一位なら俺もすっげえ嬉しいよ。

「おめでとう伊吹。やっぱお前はすごいな！」

「それじゃあ第1位の国宗さんに是非、感想を言ってもらおうと思うわ」

伊吹は顔を紅葉のように真っ赤に染めて、かなりおろおろしていた。
しかし我に帰ったようにハッとし、俺達から視線を逸らすように俯

いてしまった。
だが、それでも彼女の瞳は大変潤っており、顔もかなり赤く染まっている事がまるわかりである。

「う、嬉しくなんかないわよ……？　で、でも一応ありがとうって言っておく……っ」

そして、強がっているような一言。
まあ予想通りの言葉である。コイツは全く素直なヤツじゃないからな。
きっと、内心は騒いで踊りたくなるほど嬉しいに違いない。
俺の幼馴染――国宗伊吹とはそういう人なのだ。
ハハッ、なんだか見ていて可愛いな。よし、ちょっとからかってやろうかな？

「はにゃっ！？」

俺は伊吹の頭に優しく手を置き、それをゆっくりと動かし彼女の頭を撫でてやった。
伊吹は絶対赤面癖だよな。そう思うくらい彼女の顔は真っ赤になっていたのだ。
一見、ただ恥ずかしそうにしている風にしか見えない伊吹。
だけど、その表情はどこか嬉しそうでもあったので、

「嬉しいのか？」

「ば、ばか圭介……っ！　べ、別に嬉しいとか……そんな事は全く……っ」

「答えてくれ。俺はお前の気持ちを確かめたい、伊吹の事をもっと

知りたいんだ」

「えぇっ!?　け、圭介っ!?　え、えと……あのっ」

「うん、だから――結婚しよう！」

「……えっ!?」

さ～てここで伊吹の拳が飛んでくるハズだ。
あの流れからのまさかのプロポーズ。こんな馬鹿な方法失敗するに決まっているだろう。
だからこそからかっているって事だ。
そもそも、伊吹に結婚しようって言っても、彼女がそれを受け入れる事だなんて――

「い、いいわよ……？　どーせ圭介なんて彼女出来ないもんね！
仕方ないから私がお嫁さんになってあげるわよっ！　で、でも……
その、その前にちゃんと恋人として付き合いなさいよね……っ！」

「……えっ？　ハッ!?」

予想外すぎる伊吹の回答……思わず呆然としていた矢先――背後から凄まじい殺意を感じる。
ふと振り向くと――そこには会場内に居た野郎共が、まるで獲物を確実に仕留める目で見ていた。

「藤島テメェ！　俺の伊吹ちゃんを落としてんじゃねえよ！」

「いくら幼馴染同士だからって、流石に今のはボクもムカついたでぇ～？」

「リア充死ね！　爆発しろ！」

やべえ……黒木に赤佐に大林がキレてる。
いや、アイツらだけじゃねえ――大吾と重原を除く殆どの男がキレてやがるぞ！？
しかし――命を狙われている俺に救いの手が、

「ほら圭介！　殺されないうちのその……ま、まず家に行くわよ！　りょ、料理くらい御馳走してやるんだから……っ！」

「えっ？　ちょ、伊吹さん何故に手を！？」

「は、にゃ……ああ、あたりまえでしょ！　あんたと私は恋人なんだから！」

「ちょ、待て！　なんか違う！　予想と展開が１８０度くらい違うぞ！？」

どうしてこうなった！
俺に対する好感度がマイナスなハズの伊吹が、なんで俺の冗談を真剣に受け止めちまったんだ？
そしてなんで、俺だけが野郎共に命を狙われているんだ？
ああ、きっとコレはアレだ……うん、アレでしかない！

「ああもう！　不幸だあああああああああああああああぁぁぁぁぁっ！」

伊吹に引っ張られながら俺は思わず、そんな説教ウニ男的な事を叫んでしまった。

「……はぁ、もう収拾つかないわ。ちなみに今後の話だけど、1位に輝いたキャラの1話完結ストーリーを描くわ。今回の場合は国宗さんのショートストーリーね。多分今月中に投稿すると思うので読者の皆様、期待してくれるととても嬉しいわ。それと、全キャラの順位は後々活動報告にて掲載するので、今回未登場だったキャラの順位もわかるから必見モノだと思うわ。それじゃあ今回はここで終わるけど……」

「う、うそ……さっきの告白が冗談って……ば、ばか圭介死ねぇっ！」

「だあああああっ！　ふ、不幸だあああぁぁあぁぁっ！」

「……これ、今日中に帰れるのかしら？」

――皆様、ご愛読ありがとうございます！　今後も頑張りますのでよろしくお願いします！――

特別回：人気投票結果発表！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

・後書きトークコーナー

圭介「……不幸だ」

伊吹「自業自得よ」

暮葉「確かにけーすけ様、アレは自業自得なのですよ？」

圭介「伊吹だけならまだしも、まさか野郎共にまで殴られるとは……不幸だ」

暮葉「それにしても伊吹さんのショートストーリーですか、どんな話でしょうね？」

伊吹「えっ？　そ、その……大した話ではないと思うわよ？」

暮葉「そうなのですか？　でも拙者は楽しみなのですよ！」

伊吹「あ、ありがとぅ……っ」

圭介「てめえら！　俺は無視ですかスルーですか！？」

伊吹「ん？　け、圭介……あんたまだいたの？」

圭介「うわあああああああああああああっ！」

第123話，行かなイカ？

夏休みもかれこれ一週間が経過し、そろそろ7月も終わろうとしている頃。
俺は相変わらず、ぐーだら引きこもりライフを満喫していた。
別に好きで引きこもっているわけではない。暮葉に言われて俺は引きこもっているのだ。
それは夏休み初日。
大量出費しちゃったし、葵に強姦されかけ不良にも絡まれ、終いには大事に巻き込まれ……。
もう、不幸としか言いようのない一日であった。
しかも、どうやら俺達の周囲にサヴィエトのスパイがいるらしく、その調査の為に暮葉が今アルファ隊（なかま）と頑張っている所だが、その件で俺は……。

「まさか暮葉に外出を規制されるとは……」

そう、外出禁止令である。
敵は常に俺達を監視している可能性がある。
だから、大胆かと単独での行動は控えるべし――っと暮葉から言われてしまったのだ。
従って俺は……よっぽど重要な事でもない限り、外出ができなくなってしまったのだ。
ううう……外出する事さえ制限かけられるとは。やっぱ今年の夏はロクでもねえぜ。

「ああもう！　なんか無性に外出たいよっ！」

でも外には出れない現実……はぁ、なんたる悲劇なんだろう。

ああ……せめて買い物くらいには行きたいぜけどなぁ、買い物に行くって言って秋葉原に行った結果が――外出禁止令発令だもんな。
俺、もしかして呪われてんのかな……？

『♪～♪～♪』

「うわっ！？」

び、ビックリしたぁ～。
携帯って不意に鳴ると本当にビックリするよな。実は結構心臓に悪いんじゃねえのか？
まあそんな事はともかく、電話らしいからさっさと出ないとな。
って……なんだ浅間部長か。浅間部長から電話をかけてくるとは珍しいな。
一体何の用だろう。まぁロクな用じゃねえとは思うが……。
そんなしょうもない事を考えつつ、俺はボタンを押して電話に出た。

「はいもしもし、藤島ですけど」

『いやぁ～突然悪いね藤島君！　もしかして今絶賛自家発電中だった？』

うわぁ……朝っぱらからきわどい下ネタだ。
いくら変態の俺でも流石にこれはキツい。

「部長、いたずら電話なら切りますよ？」

『ちょ、冗談だから電話は切っちゃダメ！』

「はぁ……んで、一体何の用なんですか？」

『うん、今日エロ同人誌を読みながら藤島君に電話をしたのは他でもない、合宿のお知らせだよ』

浅間部長はやっぱり最低の変態野郎である。

フツー読みながらでもそれを態々言うヤツがいるか？

つーか、それ以前にエロ同人誌読みながら電話するなよ。

まあこんな事を気にしても仕方ない。浅間部長が残念なのはいつもの事だからな。

とにかく、エロ同人ってのはまあ……気になるけどスルーしておこう。

「合宿？」

『そうだよ合宿だよ海だよ水着だよ！』

「よし、出来れば手短に説明してください」

『夏休み、合宿、青山家別荘』

うん、結局合宿で何をしたいのかサッパリわからない。

「……とりあえず、夏休みに青山家の別荘で合宿するってのはわかりましたよ」

『それで十分じゃなイカ？』

「十分じゃねえよ！　なんでいきなり合宿なんですか！？　しかも青山家の別荘って一体どういう事なのですか！？」

『いやぁ～、他の部活は夏休みに合宿を行っているし、我が写真部も合宿くらいやったほうがいいのでは？　っとボクは思ったわけだよ。青山君の家の別荘は青山君に無理を言って、あくまで合法的に3日間だけ借りれる事になったんだよ』

つまり他の部に負けているのが悔しいから、合宿の必要がない部活で合宿をすると？

なんてひどい理由なんだ。結局活動内容は語られなかったし、これは遊ぶだけになりそうな予感。

しかも、あくまで合法的に借りたって……その合法的って言葉が怖ぇよ。

きっと浅間部長と青山さんは、暴力団と警察の裏取引も真っ青な事をやったに違いない。

だって相手はあの青山家だぞ？

それ程ブラックな事でもしない限り、「はい別荘解放します」なんて展開になるハズがねえ。

「……そ、それで……合宿って強制参加？」

『強制はしないさ。ただ、参加しない部員の個人情報が流出してもボクは責任を――』

「待てコラッ！　個人情報流出ってなんだよ！？　なんでそうなるんだよ！？」

『いや、青山家とはそういう契約で……』

「どんな契約だよ！」

恐ろしい契約してんじゃねえよ！
これならキュウベぇと契約して、魔法少女になっちゃったほうがまだマシだぜ。
絶対に参加せざるを得なくなる契約……そうか、わかったぞ。
これはきっと青山さんのせいだ。
青山さんが夏休みに俺と会う為に仕組んだ――って、こんな事考えるのはよそう。
流石に今の想像は青山さんに失礼だ。青山さんがそんなヤクザみたいな事をするハズがない。
いや、絶対にそうだと信じたい――！

『まあとにかく、自分の身を守る為にも、今回の合宿には参加したほうがいいと思うんだ』

「自分の身を守るって……部長、それただの脅しじゃないっすか？」

『心配しなくてもいいさ。ボクだって脅されている側だ……プッ』

「ウソつけ！　最後笑ってたじゃねえか！」

バレバレなんだよ浅間部長。そもそも、その契約が本物なのかすら怪しいわ。
でもなぁ……もし本物だったり怖いし、やっぱり身を守る為に参加すべきなのか？
だけど合宿って事は当然、外に出ないと行けないんだよな。
アレ、ひょっとして俺……参加できないんじゃねえか？

『まあとにかく藤島君は参加する方向で。日程は8月4日から3日間、それじゃあ木下君と葵君にもこの事を連絡しておいてくれたまえ。では！』

「えっ？　あ、ちょっと部長!?　部長ォォ！」

ブツッ、という音が響く……うう、あんのクソ部長逃げるように電話を切りやがった。

……え～っと、どうすりゃいいのこれ？

身の安全の為にも参加したほうがいいんだろうが、外出禁止令発令中だしなぁ。

まあ、一応暮葉と葵にこの事を伝えておくか。

あんまり期待はできねえけどさ。とにかく連絡だけでもしておこう。

――っと、言うわけでみんなで揃って夕飯を食べいてる時に、俺は合宿の話を2人に振ったが、

「写真部の合宿？　って事は千早やあかりも来るんだよね!?」

「行き先は青山家の別荘だし、誘ってきたのは部長だから多分2人とも来るぞ」

「やった！　葵は絶対行くよっ！」

葵が合宿に行きたがるのは予想していた事だ。

なんたって友達が2人も来るのだ。浅間部長の存在さえ我慢すれば、友達と遊べるいい機会だ。

問題は暮葉である。暮葉自身は行くとしても、俺だけ行けない可能性が……。

暮葉曰く今こそヤバい時なのだ。

連中（サヴィエト）に身柄を狙われている俺を、そう簡単に外出させてくれるハズがない。

それでも俺は――個人情報を守る為にダメ元で暮葉に訊いてみる。

「暮葉はどうだ？　みんな行くみたいだぜ？」

「もきゅ、そうですねぇ……拙者も行きたいのです！」

「そ、そうか。けど俺が行っても平気なのか？」

「もきゅ？　何を言っているんですか？」

あははは、やっぱりダメかぁ～ですよねぇ。

だって俺、連中（サヴィエト）に狙われているんだもん。

もし合宿先に魔法使いが現れ、俺を巡って戦闘になったらそれは大変な事態だ。

下手すりゃ俺達が普通じゃないって、葵や写真部の部員達にバレてしまうぜ。

そうなると日常生活に支障が……やっぱ、迷惑になるかもしれない

俺は行けないのか――

「拙者がいるんですから平気なのです！」

「へ？」

「だから、けーすけ様も一緒に行きましょう！」

「マジ！？　お、俺も行っていいのか？」

「当たり前なのですっ！」

「そうだよ、お兄ちゃんだって写真部の部員なんだよ？」

「おお……か、神よ……っ！」

感激のあまりに目から汗が出てきてしまった。

外出禁止令が発令され、かなり退屈になるかと思われた今年の夏休み。

だが――そんな退屈な夏休みももうすぐ終わり。遂に夏休みにビッグな予定が出来たんだ！

丁度いいぜ……本当、外出できなくて身体が腐りそうだったんだ。

浅間部長がいるのと、後は変な脅しがあったのがちょっと嫌だけど……まあいい。

折角みんなが集まるんだ。それに合宿っつっても何か遊びっぽい感じだ。

だから――みんなで行ってエンジョイしようじゃねえか！

――生涯。

生涯、俺はこの合宿に行くと決めた事を悔やむだろう。

なぜならこの後、またとんでもない騒動が起こってしまったんだから――

第123話，行かないイカ？（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「青山さん」

千早「は、はい……？」

圭介「俺、部長に参加しないと個人情報流出するぞって脅されたんだが……」

千早「えへへ……っ」

圭介「やっぱり貴女の仕業だったんですね！？　そうなんですね！？」

千早「ごめんなさい先輩っ、その……わたし、どうしても先輩と一緒に……」

圭介「青山さん……」

千早「先輩……その、合宿楽しみましょうね……っ」

圭介「おう、まずは青山さんを警察に引き渡してから――」

千早「～～っ！　はわっ、だ、ダメです……電話から手を離してください先輩っ！」

第１２４話，合宿一日目　出発編

それからも、俺はずっと室内でぐーだら生活を満喫していた。
満喫、と言うよりは監禁されていたと言うほうが正しいのだろう。
だけど、それを自分で言うと悲しくなるんだ。だからまあ、とりあえずは暇人ライフを満喫していた事にしておきたい。そう思いこんでいたい……。
けど、そんな暇人ライフを送っていたらあっと言う間に数日が経過し、今日は8月4日。そう――今日から俺達は写真部の合宿に出発するのである。

「よ、よし！　忘れ物とかねえよな？　着替えも洗面道具も念の為にカメラも持った。あとパスポートは持ったかお前ら？」

「けーすけ様……その、合宿先は青山さんの家の別荘なのですよね？」

「え？　そうだけど？」

「お兄ちゃん部長さんから聞いてなかったの？　千早の別荘は国内だよ」

「……エッ！？」

暮葉と葵がジト目でそう言うと、俺は素で大声を上げて驚いてしまった。
あれ～、青山さんの別荘って国内だったっけ？
普通ラノベじゃああいうお嬢様の別荘って、サイパンとかパラオとか海外の南の島にあるモンじゃないっすか？　とにかくこんなの

絶対おかしいよ。折角あるかもないかもわからなかったパスポートを、頑張って家中探してようやく見つけたのに……。
つか、俺って外国行った事あったんだな。全然記憶にないんだけど、なんで俺のパスポートがあったんだろう？
まあいいか。気にしたら多分負けだろう。

「けーすけ様、ホントに海外旅行に行くつもりだったのですね」

「服までアロハシャツに短パンだしね」

「こ、これはその！　ほら、海辺らしいし暑いじゃないの！？　なっ？」

「……けーすけ様、ウケ狙いなのですか？」

「その恰好、なんかチンピラみたいだよ？」

サングラスにハワイ直送のハイビスカス柄アロハシャツ。黒色の短パンという、超ハワイアンな服装はうちの女の子達には大変不評であった。
つーかチンピラって……アロハシャツ日常的に着ている人に謝れ！　確かにまあ、チンピラのお兄ちゃん達もアロハシャツ、よく着ている所を時々目撃はするけどさ……。

「ええいもううっせえ！　とにかく、俺が着替えたら早く待ち合わせ場所に行くぞ！」

「国内ですから普通の恰好にしてくださいねー！」

「間違ってもほむほむの服着ちゃダメだよ！」

着るかっ！　そもそも俺、ほむほむのコスチュームなんて持ってねえし！

結局、朝の準備からこの通り滅茶苦茶であった。はぁ……まあ、朝が滅茶苦茶になったのは殆ど俺のせいではある。だけどこれからもっと濃いメンバーと合流するんだ。

こりゃあもう先が思いやられるぜ……どうなるんだよ今回の合宿。

その後家を出て待ち合わせ場所に向かおうと――したのだが。

玄関の扉を開けた瞬間だ。重そうな鞄をアスファルトに置き、気の強そうな鋭い視線を向けてくる一人の少女が、俺達三人の前に立ち塞がるように仁王立ちしていた。

「もきゅ？　あれ伊吹さんじゃないですか？」

「あっ、ほんとだっ！」

「……なにやってんだ伊吹？」

「べ、別に？　あんたについて行こうとしたわけじゃないわよ……っ」

……なんつー分かりやすい反応。

そう言えば昨日だったか、俺は伊吹と久しぶりに電話をしたんだ。んで、明日から合宿だって確かコイツにも言ったハズだ。

コイツ……ひょっとして羨ましかったのか？　自分もみんなについて行きたかったのか？

「はぁ……んで、結局お前も一緒に行きたいんだろ？」

「なっ……だ、ダメなの？」

「別にあの部長の人格からして、1人や2人増えたってなんとも思わねえだろえけど、でもいいのか？　お前確か剣道部だろ？　そっちのほうで用事とかねえのかよ？」

「それなら全然大丈夫よ。もう許可取ったから……って、違うわよ！　別について行きたかったからじゃ――っ」

素直な気持ちを全力で押し殺そうとしているが、まあ分かりやすい事この上なし。

伊吹って下手な推理ゲーより分かりやすいよな。まあ伊吹らしいっちゃ伊吹らしいけど。

「はいはい。んでっ、暮葉と葵はどうだ？」

「拙者は別にいいのですよっ！」

「葵も！　人数は多いほうが楽しいよ」

「って言ってるけど、伊吹はどうするんだ？」

まあ暮葉と葵が伊吹を拒むわけがない。それはわかりきっていた事だ。

要するにこれは本人の気持ちの問題なんだ。だから俺は再度伊吹に確認をとってみる。

「……し、仕方ないわね。あんたがどうしてもって言うなら行ってやるわよ！」

「へいへい。んじゃあそろそろ行くぞ」

こうしてＲＰＧ風に言うと、伊吹が俺らのパーティーに加わったのである。青山さんの別荘が海外じゃなくて国内だったり、突然伊吹が乱入したり……なんか、朝から予想外の出来事ばかりだな。何事もなく無事に合宿が終わればいいが。いや、終わってくださいお願いします。

それから歩く事数十分、ここは青山家の近くにある公園前。

俺達写真部の面々はここで待ち合わせをしていた。

待ち合わせの時刻は大体午前８時前後。つまり今から１０分後の話なのだが……うわっ、もう公園に浅間兄妹と青山さんがいるよ。まあよくある展開だが……つか、待ち合わせ時刻より前から待っているってデートかよオイ……。

「おはようございます」

俺がそう挨拶をすると、残りの三人も続くように挨拶を行った。

向こうも俺らの声に気付いたようで、

「おお！　ようやく着たかぁっ！」

「まったく、エロ兄貴のせいであたいら１時間も待たされた……っ」

浅間部長が元気よく挨拶をする傍ら、あかりは不満そうにぶつくさ呟いていた。風の音とかでよくは聞こえないものの、ちらっと聞こえた声によると、どうやらあかり達は１時間も前から待っていたらしい。なんというか……やっぱりデート気分かよ。しかも浅間部

長のせいって……アンタ、女子2人を立たせたまま1時間も待たせるって最低だと思うぞ。
決して俺達は悪くないハズだ。だって俺達時間通りに来たんだもん。別に悪くはないハズだ。

「……えへへっ、先輩おはようございます……っ！」

「ん？　おぅ、青山さんおはよう」

不満そうなあかりを見ていたその時だ。青山さんが隙だらけだった俺に話をかけてきた。
後輩にこのように挨拶をされる――むふふ、なんてスバラシイッ！
だが、一つ警戒しなければならない事がある。そう、青山さんは――っと警戒していたその時！

「……先輩っ！　だぁ～い好きっ♪」

むぎぅぅぅぅぅ～～～っと。
何を間違ったんでしょうか。朝っぱらから青山さんは満面の笑みを浮かべ、大胆にも俺の身体に抱きついてきた。しかも胸のあたりに顔を埋まらせ、ぐりぐりと抉るように顔を左右に動かしていた。
すげえ……子供に懐かれる親並に好かれてるぞ俺。
っていうかやべぇ、服越しに感じる女の子の柔らかな感触。鼻にしっかりと入ってくる、女の子のとっても甘くていい匂い……。
ぐふっ、これヤベェよ萌え死ぬって、俺の股間がマスタースパークになるってッ！
もう頭の中は真っ白。顔が妙に熱くて……多分、俺の顔は真っ赤であろう。そして何よりこの堪らない感触。アカン……このままだと、確実に俺の理性が吹っ切れて股間が暴走しちまうっ！
っと思っていた――、

「ちぇすとぉぉぉぉっ！」

「ぐ、はびゃるぁ～～っ！？」

刹那、ゴン！　っという鈍い音と共に感じた鈍い痛み。

ぐにゃぐにゃと視界が揺らぎ、フラフラと足取りも悪くなっていくのが……あれ、わからん。普通の状態だとすぐわかる事さえわからない。どうやら今の一撃で、俺は一時的に思考力を失ったらしい。

んでっ、結局何があったかと言うと、

「あぁぁあぁあんたっ！　朝っぱらからなにやってんのよっ！」

どうやら伊吹が竹刀を華麗に振り下ろし、俺の後頭部にそれを激しく打ち込んだようである。

いてぇ……竹刀っつっても後頭部に当てたら危険だぞ？

まあ伊吹は実力者だ。多分加減はしていると思うし、俺だって普通の人間よりは遥かに丈夫だから……まあ、これくらいの衝撃ならなんともないんだけど。

「く、国宗……先輩？　えと、先輩とのスキンシップです……っ」

「もきゅ！？　け、けーすけ様とスキンシップ！？」

「千早っ！　圭介と千早は恋人じゃないだろ！？」

「……で、でもスキンシップって今時は当たり前って――」

「そっ、そんなわけないでしょ！」

「そうですよ！　そんなに簡単にしていいものじゃないのですよ！」

一見いい事を言っているように聞こえるが、暮葉だって日常的に抱きついてくるじゃん……。

「と、とにかくだ！　神がそれを認めてもあたい達は認めないからなっ！」

「そーだよ！　お兄ちゃんは葵のものなんだよっ！？」

女子全員に説教をされている青山さん。なんかその……ちょっと可哀想に見えてきた。

そりゃ確かに、人前で頻繁に抱きつかれたら困るんだけど……アイツらなんでだ？　そこまで厳しく言うほどの事でもないと思うんだが……？

「藤島君、修羅場だね」

「はぁ……」

「って、君は結局誰ルートに突入したいんだい？」

「誰ルートも何も、別に俺はそんなフラグ立ててませんよ……っ」

「相変わらず鈍いね君はぁ。まあいい、折角君の幼馴染も来ている事だ。今回の合宿を利用して誰かと距離を縮めたらどうだい？」

「距離ねぇ……」

って言われても、恋愛感情がないのに迫れって……。

俺はまあ、そんな事より無事に合宿が終わる事。そして――合宿中にラッキースケベがある事を祈っておくよ。

……ってか部長、伊吹が来る事に関しては文句ないんだね。まあ予想はしていたけど。

……こうしてメンバーが揃い、数分後に俺達は目的地へ向けて出発したのだった。

第１２４話，合宿一日目　出発編（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「う、ぐ……」

小坂「どーしたの圭くん？　とうとう死に時？」

圭介「死に時……まんざらじゃねえかもな」

小坂「えっ？　じょ、冗談のつもりだったのに……大丈夫？」

圭介「ああ、すっげえ腹が痛いんだ。俺……死ぬのかな？」

小坂「……ぷっ、にゃはははっ！」

圭介「笑いごとじゃねえよ！」

小坂「ごめんごめん！　けど、お腹痛い程度じゃ死にはしないよ？」

圭介「いや死ぬだろ！？　腹痛で死んだ人って多分いるだろ！？」

小坂「腹痛で死んじゃったら、あたし含めて全国の女の子はもう生きてないじゃん？」

圭介「下ネタかよっ！」

小坂「ごめんごめん～♪」

圭介「……なあ小坂、生理痛ってそんなに痛いのか？」

小坂「圭くん、それを女の子に聞くってデリカシーないと思うよ」

圭介「……サーセンでした」

第１２５話，合宿一日目　到着編

「――――はっ！？」

「あっ、けーすけ様起きました？」

「う、ぐ……どこなんだよここは……？

「もきゅ？　もう目的地につきましたよ？」

うう……すっかり気絶しちまったよ。ちくしょう……ここ数時間の記憶がねえ。すべては浅間部長の運転があまりにも荒すぎたせいだろう。

……あの後、青山家から借りたというグランドハイエースに乗せられ、青山家の別荘へ向かうべく国道だの高速だの峠道だの、とにかく色々な道を走ったのである。

もちろん、ただ道を走るだけで気絶なんかするハズがない。

そんなんで人々に気絶されたら、車なんてとっくの昔に発禁を食らっているだろう。

問題は人ではなく浅間部長の運転だ。国道や高速を走っているうちは確かに快適だったよ。

だが、峠道に入った後の事。それは突然の出来ごとであった。狂ったように速く、リアに輝くＲのエンブレムが大変眩しい――Ｒ－３２スカイランＧＴ－Ｒが俺らを追い抜いていったのだ。

その瞬間からである――兄妹揃って狂い始めたのは。

「いやぁ～久々にいいドライブだったね」

「ぶっちぎりだったな兄貴っ！」

「なにがブッチギリだったなだよてめえら！　頭文字Ｇみてぇな事してんじゃねえよ！」

……そう、浅間部長とあかりはＲ３２に抜かされた瞬間、闘争心を燃やして某兄貴の公道最速理論の完成形にも近いような走りをし、ブッチギリでＲ３２に勝利したのである。

しかも、Ｒ３２はガードレールに突き刺さってしまい……多分あれは板金７万円コースだろ。

「でもボクすごいじゃないか。ハイエースでドリフトしたんだよ？」

「すごいけど褒める気ねえよ！　てめえのせいで俺と青山さんは気絶するし、葵は窓に頭打って怪我しちまうし、伊吹に至っては車酔いで再起不能状態じゃねえかよ！」

浅間部長の暴走運転は散々な結果を生んだ。

暮葉は平気だったっぽいが、俺と一緒に気絶した青山さんは未だに気絶中。

伊吹も吐き気が激しいようで、現在そこの茂みに隠れて……まあ詳しくは言わないでおくよ。

「けど、おかげで到着予定時刻より数十分早く到着したんだ。ほら、予定よりも長く遊べるではないか！」

「そうだぞ圭介！　折角海辺の立派な別荘に来たんだ。細かいことは気にしないで遊べよなっ！」

「……俺、間違った事は言ってないよね？　普通は公道で暴走しちゃダメだよね？」

しかも、結局遊べる時間は同じだと思うんだ。確かに、浅間部長の暴走運転は予定よりも早く目的地に到着するという結果を生んだ。けど、肝心の遊ぶ人がボロボロじゃあ何の意味もねえ。気絶だの怪我だの車酔いだのでボロボロな俺達の遊ぶ時間は、結局変わらないどころかむしろ減ったような気がするのだ。だってもう……かれこれ３０分以上は皆体調不良を訴えているのだ。

きっと、この状況はあと何十分かは続くぞ？　そして遊ぶ時間が刻一刻と減っていく……。

「け、けーすけ様……その、怒ってないで家のお掃除しましょうよ！　やることやってから遊んだほうがいいと思いますし、拙者達が働いている間に皆さん復活すると思いますよ？」

「そ、そうか……つーか暮葉はなんともねえのか？」

「もきゅ？　拙者は全然なんでもないのですよ？」

「お前、やっぱり強い子だな……っ」

「けーすけ様も気絶こそしてましたけど、今はピンピンしてるじゃないですかっ！」

「はぁ、不幸だ……」

とりあえず暮葉の提案通り、伊吹達を休ませている間に仕事をしちまうか。

「部長とあかりも手伝えよ？」

「えっ！？　あ、あたいも働くのか！？」

「そんな、ここは青山君の別荘でボクらの別荘では――」

「その別荘に世話になるんだからつべこべ言うなよ！　つーか、こんなカオスな騒動になったのは部長のせいなんですから、責任取ってちゃんと働いてください！」

「そ、そんな――ッ！？　ふ、不幸だ……っ」

うっるせえ！　不幸は俺のセリフだよコンチクショー！

その後、俺達４人は面倒な別荘の掃除を行った。一方先程まで休んでいた伊吹達も、流石に昼ごろになると体調が回復してきたようである。まずは伊吹の車酔いが治り、次に青山さんが深い眠りからお姫様のように目覚め、一番最後に現れた葵も本調子に戻ってきたようである。

よかったよかった……って全然よくねえよ。

結局体調が良くなっても疲れている事には変わりねえ。俺達は彼女達に配慮し、彼女達に仕事をさせず４人で働き続けたが……まあ、当然人手不足で当初の予定よりも遅れ、結果的に遊ぶ時間も取れずにお昼ご飯の時間になってしまったのだ。

不幸だ……ちくしょう浅間部長め。ちっとも時間短縮になってねえじゃないか。

やっぱり安全第一。公道ではスピードを落とし、安全に運転をするべきだな。

「はぁ……初っ端からすげえ疲れたっ」

「ごめんねお兄ちゃん」

「その、先輩……わたし達が休んでいる間にお仕事をさせて……本当に申し訳ございませんっ」

「別にいいよ。こうなったのもあの部長のせいなんだから」

俺はできるだけ優しい口調で2人を慰める。

2人は何もしていないし全く悪くない。何度も言うがこんな事になったのは、浅間部長の運転があまりにも荒かったせいである。

「あれ？　そういえばクーにゃんは？」

「暮葉ならさっきあかりや部長一緒に買い物に行ったぞ？　アイツ、部長の運転平気らしいから昼飯の買い物に付き合うってさ」

「ふぇ、そうなの？」

「木下先輩にもその……ちゃんと謝ろうと思ってたんですけど……っ」

「んー、その必要はねえんじゃないか？」

俺が何気なくそう言うと、2人はえっ？　と言う感じで俺の事を見てきた。

ぐは……っ、2人の上目遣いに思わず死ぬかと思ったぜ。

け、けど男の意地で絶対2人には言えねえ……とにかく今は話を続けねえと――！

「暮葉も2人に怒ってなんかねえよ。何度も言うけどこうなったのは部長のせいだから」

「お兄ちゃん……うん、ありがとうっ！」

「えへへ……先輩。やっぱり先輩かカッコいいです……♪」

先程まで表情が曇っていた2人に、ようやく笑顔が戻ってきたようだ。

特に青山さんのセリフ。ちくしょう、青山さんは俺を殺す気かよ……っ！

思わずドキッとした挙句、顔まで微妙に熱いじゃねえか。

「き、気にするな……っ」

あまりの気恥しさに耐える事が出来ず、俺は2人に背を向けてしまった。

背中を向けたまま黙りこむ俺。ただ、手だけは前髪をいじる為に動いていた。

一応照れ隠しのつもりである。まあ隠れているかは微妙だけど……あれ、そういえば伊吹のヤツはどこにいるんだ？　今気付いたけどアイツ、起きて一回現れて以降見てねえぞ？

多分外には出てないと思うが……伊吹のヤツ、一体どこで何してんだろう？

――その頃、伊吹は――

「圭介……ムカつく……っ！　デレデレしてんじゃないわ……っ！」

第１２５話，合宿一日目　到着編（後書き）

後書きトークコーナー！

凪紗「今回短くないか？」

圭介「いや、色々時間の都合で……」

凪紗「執筆時間がなかったと言うのか？」

圭介「はあ、まあ……つーか珍しいな」

凪紗「ん、なにがだ？」

圭介「いや、今回明智の出番なさそうなのに……お前今回は出番がないとか言わないんだな？」

凪紗「まあな、今回は騒がない理由があるんだ」

圭介「理由？　なんだよそれっ」

凪紗「まあそのうち藤島にも分かる事だろう」

圭介「そ、そのうちって……まあどうでもいいや」

凪紗「藤島……お前つくづくひどいヤツだな」

第１２６話，海水浴しなイカ？

お昼にみんなでラーメンを食べた。何故ラーメンかと言うと、青山さんの別荘がある地域はラーメンが美味しい事で有名らしい。昼食がラーメンになったのはその為である。

立派な西洋風の建物のベランダで食べ、そこから眺める大海原。澄んだ空気と程良く吹きつけてくる風。そして――７人で談笑をしながら食べるラーメンは最高に美味しく感じたのだ。やっぱ外で大勢で食べるのっていいよなぁ。

まあ飯の話は一旦置いといて、現在俺達は下の浜に遊びに来ていた……のだが、

「夏の海ってスバラシイ！　そう思わないかい藤島君！？」

「部長、普通こういう合宿イベントで来る砂浜って、貸し切りとかじゃないんですか？」

「何を言っているんだね藤島君？　ここは観光の街――六角町だ。観光客がいて当たり前だろう」

辺りを見回すと、少年少女やその保護者。水着のギャルや彼氏と思われる男だらけ。

そう――この砂浜は結構有名な海水浴場なのだ。

「なんでこういう時だけ現実見るんですか、部長は……」

「当たり前だ。ボクはこれでも空想と現実を区別しているのだよ」

……これほど説得力のない言葉がどこにある事やら。もし浅間部長が捕まって警察に二次元との関連性を迫られたとしても、こんなに説得力がねえんじゃすぐに牢屋行きだな。なんつーか……浅間部長は普段の行いが悪すぎるせいか、すごくいい事を言っても全然信じられねえ。

やっぱり日頃の行いって大事なんだね。

「お兄ちゃ～ん！」

「皆さんお待たせしたのですっ！」

その時、聞きなれた2人の元気な声が耳に入ってきた。

俺と浅間部長は衝動的に振り向いた。そこには楽園（パラダイス）が広がっていたのだ。

「お兄ちゃんお待たせ！　どうかな……葵の水着？」

天真爛漫な笑みを浮かべ、葵が俺に迫ってくる。

葵は真っ赤なビキニを来ていた。発展途上とは言え中々素晴らしいボディーライン……その、特におっぱいが俺好みの大きさだ。大きすぎず小さすぎずの美乳。その素晴らしき乳にはきっと夢と希望が詰まっているのだろう。さらに程良く肉のついた細く綺麗な脚……うむ、足フェチには堪らん。

「おう、似合ってんじゃないか？」

「そ、そう？　ありがとうお兄ちゃんっ」

褒める時は褒めて叱る時は叱る。それが藤島圭介流【妹】の扱い方である。

一方、浅間部長は「ボクは？」という顔で葵を見ているが、葵は部長を軽くスルー。
どうやら、葵は部長の事など眼中にないようだな。

「せ、先輩……その、えと……っ」

「あたいらはどーだっ！」

次に俺に感想を求めてきたのは青山さんとあかり。
青山さんは赤と白の縞々タンクトップスカート。ぶはっ、青山さんって控えめな感じだけど……脱ぐと結構すごいモンだな。葵にも匹敵する程良いラインである。胸も文句ナシの美乳だ。
もう一人のあかりはショーパンタイプの水着である。可愛い事は確かだが……まあ、体型といい水着のセンスといい、これは完全に小学生である。まあ似合っている事には変わりないな。

「2人とも結構似合ってると思うぞ？」

「よっしゃ！　やったな千早！」

「えへへ……先輩に褒められた……っ」

2人とも俺に褒められて嬉しそうだ。嬉しそうだからこそ、これ以上褒めるのは教育と俺の人生の為にもよろしくはないな。2人は俺に好意を抱いている。その事については夏休みに入る前から気付いているし、告白もきちんと断ったハズである。
だけど2人は諦めてくれなかった。未だに俺を彼氏にしようと狙っているのだ。
しかし俺は彼女達に対して好意はあっても恋愛感情はない。そんな半端な気持ちで付き合うのは失礼なことだと思っている俺は、彼

女達の愛を受け入れないようにはしている……んだけどねぇ？

「けーすけ様っ！　拙者達はどうでしょうかっ？」

今度は暮葉の声がしたので、暮葉の水着姿を見てやる為に振り向いてみた。

当然そこには暮葉がいたが、もう一人。不機嫌そうに睨んでくる伊吹も一緒にいた。

暮葉はレモンイエロー色のスカートワンピース水着。これがピンク色の水着なら、俺の嫁ことアズにゃんが着ていたのと同じタイプの水着である。

暮葉は元々可愛い容姿なので似合ってはいるんだが……まあ、なんと言うかアレだな。あかりにも負けないくらいロリロリしていて、まるで小学生の妹がいる気分である。

対する伊吹は……アレ？

「暮葉、すっげえ似合ってると思うぞ？」

「もきゅ！？　ホントなのですか！？」

「こんな事で嘘言ってどうするんだよ。本当に似合ってるぞ？」

「あ、ありがとうなのです！」

「……あんた、私にはなんっにも言わないのねっ」

まずは暮葉を褒めたがその途中、ツッパリ伊吹ちゃんが不満を漏らしてきた。

伊吹ねぇ……確かに水着はとっても似合ってるよ。

ロリっぽくて小柄な体躯ながらも、女の子らしい体つきではある

と思うよ？
だけどねぇ伊吹さん、貴女のその水着は……。
「ごめん伊吹。けど似合ってると思うぞ？」
「……っ、そ……それって馬鹿にしてんのかしらっ？」
「いやいやマジだって！　やっぱり伊吹にはスク水が一番――」
っと言いかけた刹那。伊吹は身を引きつつ、右足をゆっくりと引いていった。
なにをするのかな～？　なんて平和な事を思ったのは一瞬だけだ。
「に、二回死ねっ！」
どこかで聞いた事のあるセリフを放ち――伊吹は勢いよく右足を上げてきた。
上段廻し蹴り。
一瞬で感じた恐怖と上げられた足を見て、反射的に身を引こうとした俺の首筋に、強烈な上段廻し蹴りが突き刺さってきた。
「ぐ、はっ！？」
どうにか体勢を立て直す――なんてことが、ド素人の俺に出来るハズもなく、喰らった蹴りの威力に俺の身体は肌に右方向へぶっ飛んだ。
「け、けーすけ様っ！？」
「はわわ……せ、先輩……っ？」

「今の蹴り。く、首筋にクリーンヒットしてたよ！？」

「おい！　だいじょーぶか圭介っ！？」

４人の女子が俺を心配してか、砂浜に倒れる俺に駆け寄ってきてくれた。

４人とも心配そうな目で俺を見つめるが……実は意外と大した事がなかったり。確かに伊吹の上段廻し蹴りは最高に強烈だった。おそらく俺がそこらの不良か何かだったら、今の蹴りで確実に気を失っていただろう。それほど強烈な蹴りだったんだが……俺の日常を思い出してみよう。

ある時は明智の飛び廻し蹴りをこめかみに喰らい、ある時は永渕の破壊的な右ストレートを顔面にモロに喰らい、ある時は早川がぶっ飛ばした残骸に身を打たれ、またある時は白藤が放つ鉄球を凄まじい勢いで全身に喰らった。

半年でこれだけダメージを受けても、無事に生きているわたくし藤島圭介。

――そう、伊吹の加減した蹴り程度じゃあもう、ダメージにすらならないのである。

「だ、大丈夫だ。身体は超元気ですたい……つか伊吹！　いきなりなにするんれしゅかっ！？」

「うっさい！　無視すんなスク水褒めんなばか圭介っ！」

「なんで！？　無視はしてねえし、スク水姿を褒めて何が悪いんだよっ！」

「全てが悪いわよ！　どーせ圭介は私の事……子供みたいでかわい

いとか……ごにょごにょ」

なんだ？　段々声が小さくなっていったせいか、最後のほうは全く聞きとれなかったぞ？

けどとりあえず、子供みたいって所までは聞きとれた。

コイツ……もしかして自分の体型がコンプレックスなのか？

「んー、気にする必要はないんじゃないか？」

「な、なによ……どういう意味よ」

「スク水だって立派な水着だよ。むしろ、だがそれがいいって人だっているんだぜ？」

「……」

伊吹は複雑そうな表情を浮かべ、少し俯いていた。

つーかコイツ他に水着が――って、あったらスク水なんて着てこないか。そういえば伊吹が水遊びだなんて珍しいもんな。伊吹は俺があの事故以降――つまり、俺が水恐怖症になっから全く水遊びをしなくなってしまったのだ。多分俺に配慮しているんだとは思うが……。

とにかく、ずっと水遊びを避けていたせいで、彼女は今の身体に合う水着を持っていない。

持っていたとしてもスク水だけなのだ。でも俺はスク水好きだけどなぁ……むしろ、スク水こそ一番その人の魅力を表す素晴らしい水着だと思っている。

あとは体型の事だな。伊吹は小柄で思春期で止まっちまったような感じだ。

まあ、一応高校生はまだ思春期の後期らしいが。でも女の子だか

ら気にはするよな、やっぱりここは俺が伊吹の不安を取り除いてやろう。

見せてやるぜ……エロゲーで鍛えた体型にコンプレックスを持つ人の慰め方を――ッ！

「あと……男の俺が言うのもアレだけどさ。身長とか胸の大きさって人それぞれだろ？　むしろそれがお前の個性になったりするんじゃねえのか？」

「ちょ！　べ、別に身体の事なんて気にしてないわよっ！」

「じゃあ、さっきの子供みたいでかわいいからなんとかって……あれはなんだったんだ？」

「……っ、す、スク水の事よ……っ」

そう答えた伊吹は恥ずかしそうに視線を逸らし、顔も紅葉のように赤く染まっていた。どうやら図星みたいだな……ホント、伊吹ってわかりやすい子だよな。

「ま、まあそう気にするなっ！　世の中もっと小柄な人だっているんだ。伊吹だって十分お姉さんに見えると思うぜ？」

「……それ、ウソじゃないわよね？」

「ウソなんて言うかよ、だからもう元気出してくれよ。お前が不機嫌だと俺、なんつーか……とにかく胸も痛ぇし嫌なんだよ」

「……はぁ。し、仕方ないわね……っ！　あんたが可哀想だから許してあげる！」

「えっ？」

なんだ……俺は許されたのか？　伊吹がいつもの伊吹に戻ったようだ。明るくて、ツンツンしていて突っぱねたいつもの伊吹に――。

「け、圭介……っ」

「ん？」

「その……ありがとぅ……っ」

しかも伊吹は普段俺には絶対に言わない――ありがとうの一言を言ってきた。その時伊吹が見せたなんとも言えぬ表情。それはまるで、恋でもしている女の子のように可愛かった。

そういえば重原曰く、伊吹には好きなヤツがいるらしい。

ずっと気になっていたんだよなぁ……結局伊吹の好きなヤツって誰なんだ？　伊吹に好かれるヤツって何か羨ましいというか、幼馴染の俺としてはムカつくというか。

とにかく、一度でいいからソイツのツラを拝んでみたいぜ。

「おい、らぶらぶで幸せは時間は終わったか圭介？」

「そうですね。けーすけ様、もうお喋りは終わったのですか？」

びくっ！　俺の背筋に冷たい何かが走る。直感的にヤバいと感じる。俺は恐ろしい何かの片鱗を感じながら、恐る恐る顔を後ろへ向けると――指の間接を鳴らすあかりと紫色のオーラを放つ暮葉の姿があった。

「え、え～っと……お二人は何をそんなに怒ってるんでせうか？」

「とぼけちゃうのですねけーすけ様？」

「圭介、アンタはあたい達の事を馬鹿にした」

「えっ、ちょっと待て。俺がいつお前らの事を馬鹿にしたんだ？」

「伊吹さんよりも小柄な人がいるって言いましたよね？」

「それって……地味にあたい達の事を言ってるよな！？」

ええええぇえぇえぇ～！　ま、まさか俺こんな事で2人に怒られてるんですか！？

そうか、忘れていたぜ。コイツらは年齢は同じだが外見はロリキャラだ。そしてコイツらも自分の体型にコンプレックスを抱いている。

つまり、俺が伊吹を慰める為に言った言葉で傷ついてつまったのだ。

「く、暮葉さんにあかりさん？　アレを言ったのには色々深い理由（わけ）がありまして……」

「拙者達を傷つけたけーすけ様にはお仕置きなのです！」

「圭介、アンタは確か水恐怖症だったよな？」

「えっ？　ちょっと待て、それ誰に聞い――」

あかりが何故俺が水恐怖症である事を知っているか、それを問お

うとしたが……その、後ろで葵が申し訳なさそうな顔をしてるんだよね。

わかったぞ……アイツだな！　葵が俺の弱点をばらしたんだな！

しかも、隣にいる青山さんの何とも言えぬマジ反応。青山さんも俺の弱点知ってんのかよ！　ちくしょう葵め後でこっ酷く叱ってやるからな！

けど、その前に暮葉とあかりから逃げなければ――！

「木下先輩！　圭介を追い詰めるぞ！」

「了解なのです！」

「うわあああああああ～っ！」

お、追ってきた！　２人がダークな笑みを浮かべながら追ってきた！

俺はそんな恐ろしい２人から逃げるべく、我を忘れて全力疾走をする――が、その時俺の足に恐怖のような感触を得る。恐る恐る下を見ると……。

海水。

そう、俺の足は海水に浸かっていた。前を見るとそこには無限に広い大海原。じわじわと身体が震えて感情も高ぶり、冷や汗も額からダラダラと流れ始めて、

「ひ、ひぃやぁあぁあぁっ！　み、水じゃんコレ海水じゃん！　こ、怖ぇよ誰か助けてくれぇえぇえぇえぇえぇ～～～～～っ！」

「冗談だと思ってたけど、圭介ってホントに水恐怖症なんだな……っ」

「にゅふふ、けーすけ様！　そこでしばらく生き地獄を味わうがいいのです」

誰かたしゅけてくらしゃあいっ！　ホント水だけは勘弁して欲しいんです！　これだけは怖くてもう達打ちできないんですよ。いやホントマジっす、誰か助けてぇぇぇぇぇぇぇぇっ！

……その後、しばらく俺はギャラリーに笑われ、水に恐怖し生き地獄を味わったのである。

ちくしょう……不幸だ不幸です不幸すぎます。

合宿一日目の昼にしてこの調子。もう、ホントに先が思いやられます……。

「……ところでボク、一応部長なのに完全に忘れられてないかい……ぐすっ」

第１２６話，海水浴しないカ？（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「ハァ……」

圭介「どうしたんだよ黒木」

黒木「お前……羨ましいよな」

圭介「なんでだよ。俺今回散々な目に遭ったんだぞ？　伊吹に蹴られるわ暮葉とあかりに海に追いやられ、あんな人前で取り乱しちまうわ……はぁ」

黒木「いや！　幸せだろ！」

圭介「どこがだよ！？」

黒木「俺、伊吹ちゃんに蹴られたいんだよ！」

圭介「……ドMの変態かよ、救いようねえな……」

第127話，違います！俺たちナンパなんかじゃないです！

さて、相変わらず海で遊んでいる俺達。女子陣は海で泳いだりビーチバレーをやったり、果てはスイカ割りに挑戦していた。一方俺と浅間部長は2人で寂しく浜辺を歩いていた。

なんでかって？　俺が水恐怖症だからだよ……浅間部長はこれでも俺に気を使って、一緒に陸上でいてくれてんだよ。まあ一緒にいるのが浅間部長なせいかちっとも嬉しくねえが。しかも浅間部長はやっぱり真性の馬鹿でその上変態であり、考えている事も本当にロクでもない事であった。

「しかし、中々女子だけってのがいないよね」

「部長、やっぱナンパはまずいと思うんですが……」

「いいじゃないかい！　ナンパ素晴らしいじゃないかい！」

「いやいやいや！　ただのチャラ男だろっ！」

もはや黒木や赤佐レベル。しかもナンパって多くの地域で条例で規制されてるらしいぜ？

下手すりゃナンパで犯罪者扱いかもしれねえ……つーか、最近のガードの堅い女の子ホイホイついて来るのだろうか？　やっぱりナンパって成功率は超低いんじゃ……。

「君かわうぃ～ねぇ？」

「俺らさ今チョー暇なんだケドォ、よかったら一緒に遊ばねェ？」

「帰りはおくってやっからよぉ！　まっ、いつ帰れるかわからねえけどな」

「ぎゃっはははははは！」

あ～あ、見ちまったよ不快なものを……。

小麦色に焼けた金髪髭面グラサンの男と、茶髪のツンツンヘアーの男が、一人の女の子にしつこく絡んでいやがる。ナンパだ、どう見てもアレは浅間部長がやろうとしていた事だ。夏の海でナンパと言えば定番のイベントではあるが、やられる側としては迷惑以外の何者でもない。

しかもねぇ……フツーのイケメンにナンパされるならともかく、アイツらってどう見てもただのヤンキーさんじゃねえかよ。下心丸見えな上に危なっかしいなぁ……。

「ふ、フフフ……」

「どうしたんですか部長？」

「藤島君、あの子を助けに行こう！」

「顔も見てないのによく言いますね。つか、危ないんじゃないですか？」

「大丈夫！　イザという時は君に任せる！　藤島君、結構喧嘩強いんでしょ？」

……サイテーだ。ここにサイテーの男がいやがる。

自分の愛する部活の大切な部員を、自分が逃げる為の時間稼ぎに使おうとしている、サイテーの下衆野郎がここにいるぞ？　つーか、

なんで喧嘩する前提なんだよ。

「……言っとくけど、停学になったら嫌なんでやりませんからね」

「うう……けど、ここでボクらが女の子を助けたらフラグが立つよ！？」

「立たねえよ！　ここは現実（リアル）ですよ！？」

「いや、立つ！　ボクの予想では５０％の確率で立つ！」

「高いんだか低いんだかわかんないけど、まず現実（リアル）じゃそんなフラグ立たねえから！」

「よし、そうと決まれば行くよ藤島君っ！」

「えっ？　ちょ、待てバカ部長っ！」

ああもう仕方ねえな。いいですよわかりましたよ、やればいいんでしょやれば。とりあえず女の子助けてカッコつけてやりますよ。まぁ、どうせここは現実（リアル）世界。浅間部長の妄想のようなハッピーなフラグは立たないだろう。

けど、男は基本的に馬鹿である。そこに女の子が絡んでいたら――この足を止める事ができない。

結局俺は部長について行った。部長はどこに隠していたのやら…サングラスを取り出しキメるようにそれをかけた。ああ……やだなこの人の後ろについて行くの……。

でもこうなったら仕方ねえよな。俺も少し本気モードになるとしますか。

「よおォ久しぶりだなテメェ！」

「うぐっ！　な、なんだテメ――」

「ひ・さ・し・ぶ・り・だ・なァ！」

不良の一人、金髪髭面グラサンの男に浅間部長は近寄り、激しく腕を肩に回した。

うわぁ……普段と口調が違うよ。これが浅間部長の本気、素晴らしい演技力である。

馴れ馴れしい事この上ナシ。しかもなかなか迫力があるし……不良がビビってる。

こりゃあ俺も負けてられませんな。俺も海パンのポケットに手を突っ込み、目つきを鋭くメンチを切りながらもう一人の不良、茶髪のツンツンヘアーの男に接近した。

「こんな所で会うなんて奇遇だなぁオイ！」

俺達が女の子の前でしつこく2人の不良に絡む。当然俺らの存在は浮いている。周囲からの注目度は悪い意味で抜群である。柄の悪い人が柄の悪い人に絡むこの光景を見てか、一般人の誰かか「警察呼んだほうがいいんじゃない？」と言っている。

まずいぞ……警察呼ばれたら俺の学生生活が終了するぜ。停学はマジで勘弁、そんなものを食らったら今後の進路にも関わるだろう。

一度でも警察沙汰になったら多分、どこの会社でも働かさせてくれないハズだ。

ええい！　もうこうなったら、警察かライフセーバーのマッチョな兄さんが来る前に、さっさと不良共を追っ払って女の子を助けよう。

「テメェら一体何様――ふ、ぐっ！」

「一般の方に迷惑だろ？　そこの裏に行くぞこの野郎ォ！」

何か文句でも言おうとした不良の口を、浅間部長がその手で強引に塞ぎ、強気な様子でかなりストレートに啖呵を切った。浅間部長……ホントにいいのかそれで？

もしマジで殴り合いになったら、浅間部長みたいなヒョロヒョロは即ノックアウトだぞ。

かといって、こんなヤツらと殴り合うのは面倒すぎる……。

「お、おいタケやん……もう行くべ？　コイツらオカシイぞ？」

「ふ、ぐぁ――ぷはぁっ、お……おう。ちくしょうテメェら次に会ったらぶち殺すからな！」

茶髪のツンツン野郎に言われ、浅間部長から解放された金髪のグラサン。

彼は負け犬の遠吠えとして思えないセリフを吐き、森の中からティーガーが現れ、ビビッて逃げ出す連合軍兵士の如く彼らは逃げていった。

……なんだろう。初めて言葉だけで荒事が終わった気がする。

浅間部長すげえ……現役ヤンキーを退かすその啖呵。もう……いっその事写真部じゃなくて演劇部に入ればよかったのに……。

まあとにかく騒動は終わった。さあ、後は女の子に話しかけて――って……あれ？

「やあ、大丈夫だったかい？　危ない所だったねぇ」

「く、クソ介……？　それにクソ介の部活の部長……？」

「……えっ？　い、生駒！？」

これはなんという不幸。俺達が助けた女の子は生駒純奈――俺のことを嫌う明智ＬＯＶＥなガチレズのニヤ厨のオタク少女であった。

彼女はワンピース水着を着ていた。やっぱり生駒は健康的でスタイルがいいですなぁ。

……でもなんで？　なんで生駒が六角の砂浜にいるんだ？

そして、その生駒はよからぬ事を思いついたように、嫌らしくニヤっと笑みを浮かべ、

「ナギちゃ～～～ん！　不良に絡まれたよ助けて～～～っ！」

はあああああ！？

い、生駒のヤツなんて事を叫んでんだ。まさか明智にＳＯＳをするなんて……そんな、反則じゃねえかよ勝ち目が０じゃねえかよ！

つーか、明智まで海に来てんのかよ！？

「私の友達に――手を出すなっ！」

生駒のＳＯＳコールを訊きつけ、黒いビキニというせくしぃで、その……ボリューム満点のお胸と殺傷力の高い抜群のスタイルのせいか、妙にアダルトな匂いのする明智が飛んできやがった。

別に比喩表現ではない。本当に明智は空を飛んでいた――、

「ぐ、はぁ――っ！？」

「ぶ、部長っ！」

そして明智は綺麗に孤を描く右足を、浅間部長のこめかみに打ち

込んだ。
　間違いねえ……アレは俺が明智と戦った時に喰らった、ローリングソバットだ。
　俺でさえ脳震盪を起こした一撃。ド素人な上にひ弱な浅間部長が耐えられるわけもなく、明智の蹴りを食らった浅間部長は一撃で気絶してしまった。
　――って安心してられねえ、次に狙われるのは俺じゃねえかよ！

「次は貴様だ。覚悟しろ下衆野郎――正義の鉄拳を喰らえ」

　なにカッコいい事言ってんだ！　明智め、戦隊モノのみ過ぎじゃねえのか！？
　明智の体重を乗せた右ストレートが、俺の顔面目がけてぶっ飛んでくる。
　……冗談じゃない。そんな一撃死んでも食らいたくねえ。俺は反射的に右方向へ跳躍する事によって明智の右拳をギリギリ回避する。ゴロゴロと砂浜の上を転がり、細かく熱い砂や転がる石や貝殻などで身体を痛めつつも、次の攻撃に備えて立ちあがり身構えた。
　予想通り――明智は空中での胴回し回転蹴りを仕掛けたきたが、前に明智と戦った時の記憶や俺の直感で予想はできていた。その為俺は明智の攻撃に反応する事が出来たのだ。
　右足を捉え、俺は咄嗟に顔面を守るように左腕を上げる。こめかみを狙った一撃は、鈍い音を立てて俺の右腕に直撃する。ミシミシと言う嫌な音が響き、思わず顔を歪ませてしまう痛みを感じた。
　……まあ、こめかみに直撃よりはマシだな。

「……ッ！　できる……ッ！」

「できるじゃねえ！　俺だよ俺、藤島圭介だよ！」

「……えっ？　あっ……ふ、藤島！？」

ふぅ……ようやく明智は俺に気付いたようだ。

やれやれ……まさか、もう戦うことはないだろうと思っていた相手と、こんな形で再戦する羽目になるとは……何というか不幸としか言いようがないね。

……さて、戦いが終わった所で事情を訊くとしよう。

なんでここに生駒と2人でいるかをな……ッ！

第127話，違います！俺たちナンパなんかじゃないです！（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「いやぁ～、見事に命中したな」

浅間部長「……」

伊吹「ダメね、まだ気絶してるわ」

暮葉「相当重傷だったのですね」

千早「……このまま気絶してればいいのにっ」

あかり「……そのまま死ねよな」

葵「2人とも！　心の声が漏れてるよ！？」

第１２８話，何かの片鱗

「ホントにすみまなかった、藤島！」

「いや、わかればいいんだよ……」

あの後、明智は生駒の頭を無理やり抑えて俺に頭を下げてきた。浅間部長は未だに絶賛気絶中であるが明智は彼にも謝りたいようで、大変申し訳なさそうな表情をしていた。

……まあ、今回は明智は悪くないしな。悪いのは明智にＳＯＳコールをした生駒、あんな事を叫びやがったせいで俺たちは攻撃を受けたんだ。浅間部長も無様に気絶する事になったんだ。

おのれ生駒……イタズラでも度が過ぎるぞ。今回は流石の俺も少しムッときましたよ。

「その、そっちのヤツは大丈夫なのか？」

「ああ、部長はひ弱だけど丈夫だから多分大丈夫だよ」

「ほ、ホントか？」

「妹に毎日シバかれてるっぽいしな。多分大丈夫だろ？」

「そ、そうか……けどホントにすまなかった」

「だからお前は悪くないって！　そんなに気を落とすなよ」

どうして騙されたヤツがここまで落ち込んでいて、明智を騙した

真犯人は腕を後ろに組んですましているんだよ。しかも自分は全く悪くありませんと言わんばかりに、口を尖らせて俺たちから目を逸らしているし……あの野郎、全く反省していねえな。

「すみにゃん。すみにゃんがあんな事を言うからこうなったんだ、その態度はないだろう」

明智も生駒の態度にお怒りの様子。

いいぞ、もっと怒ってやれ。つーか拳骨しても俺は文句言わねえよ。

「ぶーっ、不良に絡まれていたのは事実だもん」

「それでもだ。藤島達はすみにゃんを助けてくれたんだろう？　それを不良扱いして私に攻撃させるなんて……下衆にも程があるだろ」

「うぅ……ごめんなさいクっ……圭ちゃん」

コイツ今クソ介って言いかけたぞ。そしてなんだよ圭ちゃんって？　そう言えば生駒は俺のことを最初はそう読んでいた気がするな。コイツ……猫かぶってやがる。普段は俺のことをクソ介呼ばわりする癖にいきなり圭ちゃんだって？　ありえねえだろ……しかも生駒がこんな素直に謝るハズがねえ。

「すみにゃん。あっちの人にも起きたらちゃんと謝るんだぞ」

「はぁ～い……っ」

今回は浅間部長も一応被害者だしな。まあ……ちゃんと謝っとけよ。

アレでも心は結構ピュアなんだ。見知らぬ女の子に蹴られたんだぜ？　多分浅間部長は絶賛片想い中の子に「キモイ」って言われるくらい、心に深い傷を負ったハズである。

「……あ、先輩いたよ……っ？」

「あっ、ついでにバカ兄貴が死んでるっ！」

「お兄ちゃ～んっ！」

「けーすけ様っ！」

おっ、どうやら女子陣がここに来たらしい。というか、あの様子だと女子陣は俺たちのことを探していたみたいだな。でも……浅間部長の事を心配しているのがあかりだけって、浅間部長ってホントに嫌われ者な上に不憫な人……っ。

「ちょっとあんた。いきなり浅間先輩と一緒に消えたけど、こんな所で何やってんのよ？」

「いやぁ～その、伊吹さん？　色々と面倒な事が起こっちゃいましてねぇ……アハハっ」

「アハハじゃないわよ！　みんな心配してたのよ？」

「え？　心配してたって……伊吹もか？」

「……っ？　べ、別に私は心配なんか……あんたはどーせ無事だろうしっ！」

ひどいやひどいや。伊吹はホントに俺のことを心配してねえんだ……うう。

でも、ツッパリ回答が返ってくる事くらい、訊いてみる前からわかってたけどさ。でもこうしてストレートに言われるとすっげえ傷つくよね……はぁ。

「なんだ、藤島は団体さんだったのか？」

「もきゅ？　――あっ！　明智殿に生駒さん!?」

明智の声に反応し、ようやく明智達の存在に気がついた暮葉は、何故ここに明智達がいるのかと言わんばかりに驚いていた。そりゃ驚くよね……最初見た時俺だって驚きましたよ。

「ありぇ、木下じゃん？　それに何でクソ介の部活のメンバーが揃ってるの？」

「拙者達、写真部の合宿でこちらに来ているのです！」

「合宿？　ねえナギちゃん、普通写真部って合宿とかする部活なの？」

「う～ん……常識的に考えたら、合宿するような部活ではないぞ……っ」

ですよねえ……まあ、合宿と言っても浅間部長の思いつきで、実質中身はただ海辺の行楽地（リゾート）で遊ぶだけだもんね。全然写真部らしい活動はしていないし、実際俺はおろか浅間部長や青山さんでさえ、本格的な写真撮影用のカメラは持ってきていない。

一応一夏の思い出を撮る為、小型のデジカメは用意してあるが…

…まあ、写真部らしい活動をしていない事には変わりない。

「……その、えっと……合宿と言っても遊びみたいなものなんです……っ」

「そうそう！　そこで倒れている兄貴の提案なんです！」

青山さんが身体を小刻みに震わせながら、勇気を振り絞って明智達に事情を説明した。

よく頑張ったな青山さん。あと……あかりのヤツ敬語喋れるじゃねえかよ。普段敬語で話す所なんて見たことがなかったせいか、あかりの敬語は凄く新鮮に聞こえるよ。

「お兄ちゃんお兄ちゃんっ、結局ここでなにがあったの？」

「葵……気にしないほうがいいと思う。なぁ明智？」

「えっ？　あ、うん！　葵は深く考えなくてもいいんだっ」

「えぇ～？　なにがあったかいごく気になるよ！」

「とにかく、気にする必要はないんだ。私と藤島達の間にはなにもなかったんだ」

明智、その言い訳はかなり苦しいと思うんだ。現行犯逮捕されたのに「俺は何も盗んじゃいねえ！」と叫ぶ、下着ドロがする言い訳以上に苦しいと思う。

そんな明智の言い訳に葵どころか、暮葉や伊吹まで疑いの目で俺たちを見ている。

……はぁ、仕方ねえ。いつまでもこんな話を長々と続けるわけに

もいかんし、ここは俺が助け舟を出してやるとしようか。

「言っとくけどホントに明智の言う通りだぜ？　浅間部長はナンパしたら女の子に殴られただけなんだ」

「……けーすけ様、それホントの話なのですか？」

「ホントだって。なぁ生駒？」

「あ、うん……」

よっしゃありがとう。話を合わせてくれた事だけは感謝するぜ、生駒！

まあ、実際浅間部長はナンパしようとしていたし、生駒を助けようとした動機も、女の子と仲良くなりたいからと言う不純なものだ……俺が言った事も強ち間違いではないハズだ。

けど、それだけで疑いが晴れるわけないし……そうだ、こうなったら別な話題を振ってこの現状を忘れさせる作戦で行こう。そうと決まれば早速、明智達にここへ来た理由を尋ねるか。

「そういえば、なんで明智はこんな所にいるんだ？」

「ああ、六角にはすみにゃんの実家があってな、夏休みを利用して遊びに来ていたんだ」

「実家？　生駒って元々六角に住んでたのか？」

「うん！　高校入学と同時に古宇坂に引っ越したんだけどね、そこで出会ったお友達1号がナギちゃんなの！　私は思わずナギちゃんのクールさに、内に秘めた可愛さに……そのっ、ずきゅ～んって胸

を撃たれて惚れちゃったんだよ！　私はもうナギちゃんしか見られないゾッコン――」

なんてこったい……暴走した生駒が明智への愛を語り始めた。
これはしばらくうるさいぞ。きっと小一時間は語り続けるだろう。

「なあ明智、どすりゃいいんだこれ？」

「すみにゃんのことだ。気が済むまで語り続けたら大人しくなるだろう」

「つまり放置しとけって事か？」

「うん、それが最善の策だと思うぞ」

やっぱり放置プレイが一番かぁ……まあ確か、こんなのに構っていたら時間の無駄だよな。
無駄に疲れそうだし。ここは明智の案に乗っておくとしよう。
それにしても意外だなぁ。生駒が他所の街出身だったとは……まあ、出身地なんて人それぞれだから別に気にする事でもないよな。

「それと藤島」

「ん、なんだ？」

「気を付けろ」

「はぁ？　お、おい！」

明智はそれだけ言うと、生駒の所へ行き無理やり彼女を取り押さ

えた。おいおい、放置しておくって言った言いだしっぺが、初っ端から放置していいねえじゃないかよ。

けど、そんな事よりも……気を付けろって一体どういう事なんだ？

なんか、すっげえ嫌な予感がするんだが……ちくしょう、いきなりなんなんだよ明智のヤツ？

第１２８話，何かの片鱗（後書き）

・後書きトークコーナー！

ミネット「どうも！　最近全然出番がないミネットだよ！」

悠「……チッ」

ミネット「今回もミネット達の出番なさそうだけど、一体いつになったら出番回ってくるのかな！？　すっごく心配なんだよ！」

悠「おいクソガキ……うっせェぞ」

ミネット「ひどい！　貴方は出番がないという危機的状況を何とも思わないの！？」

悠「あーはいはい、そりゃ深刻なこったァ……」

ミネット「とにかく……出番がなくて不安なんだよ……っ」

悠「そのうち回ってくるんだろ。だから黙っとけクソガキ」

ミネット「ぶぅ～っ」

第１２９話，男だって叫びたい時は叫びますよ！

散々下の砂浜で遊びまくっていた俺たちが別荘に戻ったのは、時刻はまもなく5時になろうとしている頃であった。別荘に戻った俺たち、家事スキルが最高１００だとすれば、たったの１０しかない俺の代わりに、浅間部長が腕によりを掛けて夕食の準備を進めていた。

ちなみに、今日の晩御飯はカレーだ。浅間家のカレーは辛いらしいが……期待しておこう。

これでも俺は辛いカレーが大好きなのだ。

「よし、後はしばらく放置しておけば大丈夫だな」

「部長は良く煮込むほうなんですか？」

「まあね、それより藤島君……我々の目的を達成する時が来たぞ」

「あ？　なに言ってんですか部長？」

部長がやたらと真剣に言う。コイツ……絶対よからぬ事を考えてやがる。あの部長が無駄に真剣な顔をするなんて、ロクでもない事を考える時だけだぜ。

「フフフ……藤島君、女子は今みんなでお風呂に入っている」

「は？　ま、まさか部長……」

「そのまさかだよ！　ボク達はこれから決死の覚悟で――」

「待て！　犯罪だろ！？」

「何を言っているんだい君は？　ボク達がこれから行うものは聖戦である。聖戦を行うことは罪ではない。そもそも君は聖戦の意味を理解しているのかね？」

「神聖かつ正義の為の戦争だろ？」

まあ、あくまで宗教的な意味での事だし、それが正しいとは到底思えねえけど。

今回の場合もそうである。どうせ浅間部長にとっての聖戦なんて、世間から見れば立派な犯罪にしか見えないだろうぜ？

「そう……正義の戦い――つまりこれからボク達にお風呂に突撃を仕掛けるのだ！」

「てめえ……やっぱただの犯罪だろ？」

「ボクらの聖戦に法もクソもあるか！　己の信じる道を突き進む事こそ正しい事なのだ！」

「一見立派な事言ってるように見えますけど、やろうとしている事は最低ですよ！？」

「大丈夫だ！　イザと言う時は藤島君。君を盾に――」

「ふっざけんな！　俺はやらねえからな、勝手に一人でやってろ！」

「チッ、仕方ないね……こうなったらボク一人で聖戦に赴くさ。後で後悔しても知らないよ」

後悔なんかしないさ。むしろ後悔するのは部長のほうだと思うんだよね。だってねぇ……お風呂覗きなんてサイテーじゃないですか。そんなのを女の子達が許すと思いますか？　とにかく俺はこういう犯罪じみた事には手を出さないの。そりゃあまあ……女の子の裸は見たいよ？

暮葉とあかりという禁断の果実。伊吹の思春期止まりな貴重な身体。青山さんと葵のよく育ちましたね的な素晴らしい身体……ぐは、想像しただけで鼻血が出そうだ。

しかし！　だからと言って見ていいわけじゃねえ。

うん、ヤバい事には手を出さないほうがいい。ここは我慢して一人でのんびりしていよう。

それに……少し考え事だってしたいしな。

『気を付けろ』

……なんだったんだろう。あの明智の警告は……？

未だに意味がわからない。一体俺は何に気を付ければいいんだ。俺をことを狙っているヤツが近くにいるって意味なのか？　でもねぇ……サヴィエトじゃあるまいし。そもそも明智はサヴィエトのことなんて知らないハズだ。だからそんな警告をしてくるハズが……いや、待てよ？

そう言えば秋葉原に行った時に暮葉と何を話したっけ？

『やっぱり、俺らのすぐ近くに連中のスパイがいるって事か？』

スパイ……それに対する暮葉の回答は、可能性は高い……だったかな？

つまり、友達のうち誰かが連中のスパイで……って、何言ってんだよ俺は。だからって友達を疑っていい理由にはならねえだろ。少

なくともここにいるヤツらが、連中のスパイだとは思えない。
いや、思いたくもない。第一スパイなんてホントに近くにいるのかよ？
……でも、じゃあ今日の明智の言葉は一体なんだったんだ。明智はどうして俺にあんな警告をしてきたんだろうか？　何か理由があるハズだ……でないと普通は冗談でもあんな事は言わないだろ。

「キャーッ！」

あ？　なんだ、風呂のほうから悲鳴が……ってわかりきってる事か。

「こここ……この馬鹿！　へ、変態っ！」

「早く死ねよなバカ兄貴！　瞬く間に――ｎｏｗｎｏｗｎｏｗ！」

「天神無双木下流“天下統一”！」

今、浴室では浅間部長ｖｓ女子陣が死闘を繰り広げている。戦況は女子有利、あかりは多分浅間部長を殴りまくっており、暮葉は何やら必殺技を繰り出しているようだ。
後は伊吹かな？　アイツも何気に暴力的だし……多分黙っていないハズだ。
そして、次の瞬間――、

「ふべらっ！」

ボロ雑巾のようなぐちゃぐちゃになった浅間部長が、風呂場から吹っ飛んできた。
あ～あ……まあ、予想通りだよ。この状況で男が女に勝てるわけ

がない。

「我が一生に……い、一辺の悔い……なし……ぶはっ」

「あ～あ、死んじまったよこの部長……」

まあいいや、浅間部長はヒョロいが結構丈夫ではある。明智のあの蹴りを喰らってもとりあえずは生きていたし、多分放っておいてもそのうち復活するだろう。

……とりあえず俺は男の寝室に戻り、そこに置いてあった鞄の中からラノベを取り、女子が上がってくるまでそれを読んでいる事にした。まあ、ラノベはいい暇潰しになるよね。

何よりＩＳだし……はぁ、これはブヒれるね。

「いい湯だったなぁ！　あたい広い風呂に入ったの久しぶりだっ！」

「……えへへ、楽しかったね……っ」

「千早の別荘ってお風呂大きいよね！」

それから数十分後、女子達が風呂から上がってきたようだ。

一年生三人組はかなり上機嫌の様子だ。どうやら、浅間部長乱入のことなんてあまり気にしていないようである。まあ、気にしたら負けってのもあるかもしれないが。

「圭介、風呂いいわよ？」

「おう」

伊吹が濡れた髪をタオルで吹きながら、俺に入ってもいいと言ってきた。はぁ……お風呂上りの女の子ってホントにいいですよねぇ。見ているだけで幸せな気分っすよ。

さて、浅間部長はまだ気絶しているようだし……仕方ねえ、カレーの準備はあかりに任せるとして俺は風呂に入るとしますか。もちろん一人で……。

……そういえば、暮葉はどこ行ったんだろうな？　まあいいや、部屋にでもいるんだろう。

その後、俺はいったん寝室に行って着替えを用意してかに、着ていた服をすべて洗濯機に叩きこんでやった。つーか、洗濯機があるなんて……流石青山家の別荘である。

ガラスのドアを開けて中に入ると、うわぁ～お。確かに風呂は広い、これなら数人で入っても全く問題はないだろう。下手すりゃ、宿泊で行く青年の家の風呂より広いんじゃないか？

「もきゅ！？　け、けーすけ……さま？」

「え、この声って暮葉……のわあああああああぁぁぁっ！？」

不意に暮葉の声がしたので、思わずキョロキョロと首を左右に動かすと……なんと、湯船にバスタオル一枚で立ち尽くす暮葉の姿があった。

ちょっと待てコラッ。なんで古典的ラブコメ展開が発生してるんでせうか？

一体いつこんなフラグを立てたんだ！？

「うおおおおいっ！　なにやってんだお前！？　伊吹達と一緒に上がったんじゃないのか！？」

「すみません！　その……拙者長風呂なのですが、みんなと一緒に

上がったらやっぱり物足りなくて……けーすけ様、ホントに申し訳ないのです！」

いやぁ、まあ……確かに暮葉は長風呂だったな。

毎日我が家の風呂に暮葉を入れてるんだ。それくらい理解はしていたさ。

けどねぇ、伊吹は皆上がったって言ってたし……これはいくらなんでも不意打ちすぎだろ！

「あのー、暮葉さん？　まさかとは思いますが……そ、そのタオルの下は？」

「お、お風呂ですから当然全裸ですっ！」

「ぐはっ！　う、ぐぐ……っ」

あっぶねえぇっ！　予想通りだけどやっぱ衝撃的や、思わず鼻血を噴く所だった。

やべえ……なんなんですかこのハッピーなイベント？　っていうか願い通りだよ、まさかのラッキースケベが来ちゃったよ。けど、いざラッキースケベが起こるとその……アカン。理性を保つという作業が滅茶苦茶苦痛に感じる！　どないしよう、襲ったらやっぱ負けですよね？

「あとけーすけ様……そのっ」

「ハイ？」

「……し、下……っ」

「下？」

こちらから目を逸らして、小さな声で呟いてきた暮葉。

オイオイオイ……これは何の変態プレイだよ？　このままだと、お兄さんの短距離弾道ミサイルが暴走しちまいそうですよ。

っていうか、暮葉の下ってどういう意味なんだ。下に何かあったっけ……？

そう思いながら、俺は視線を下に向けると――そこでやっと言葉の意味を理解したのだ。

当然誰もいない想定で風呂に入った為、タオルなんてものを巻いているわけがない。

つまり……俺は母親の中から生まれてきた時と同じ姿なワケで……。

真っ裸の男のアレを年頃の女の子に恥ずかしそうに、でも地味にガン見されている……。

「きゃあああああああああああああああああああああああああ！」

もちろん叫びました。裸をオッサンに見られた女の子のように、腹の底から叫びました。

俺……男なのになんで叫んでるんだろ？　まあいいや、とりあえず叫んどけ……。

第１２９話，男だって叫びたい時は叫びますよ！（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「しかし、なぁ？」

凪紗「どうしたんだ、藤島？」

圭介「この後書きもかれこれ何百回もやってるけど、そろそろネタ切れ気味なんだよな……」

凪紗「それは深刻だな……っ」

圭介「なあ明智、どうすりゃいいと思う」

凪紗「大丈夫。そういう時の為にいい言葉を知っているんだ」

圭介「おお、ホントか！？」

凪紗「うん、きっと藤島の力になれる」

圭介「頼む！　それを聞かせてくれ！」

凪紗「諦めんなよ！　諦めんなよ、お前！！　どうしてそこでやめるんだ、そこで！！　もう少し頑張ってみろよ！　ダメダメダメ！　諦めたら！　周りのこと思えよ、応援してる人たちのこと思ってみろって！　あともうちょっとのところなんだから！」

圭介「ただのＭ岡Ｓ造じゃねえかよ！」

第１３０話，初めて……なんだっ

わたくし藤島圭介は未だに彼女がいない、童貞を守る純粋な少年だ。そんな純粋で初心な俺にとって今の状況がどれほどヤバい事か……そう、俺は今女の子と２人で入浴中なのだ。コソコソとピサの斜塔と化したアレを隠すべく、必死に前かがみになって身体を洗う。

彼女の視線に注意しつつ大事な所を隠し、ゆっくりと見えないように湯船に浸かる。

それは彼女も同じ。ずっと湯船に浸かっているのが辛いのか、彼女は度々湯船から上がってその辺をうろうろしているが、その度に見ないようにと目を瞑り……なにこれ、精神的に疲れるぞ？

ホントは見たいのに見ちゃダメって……ああくそ！　でも見たら絶対に理性を保てない！

このままだとガチでＲ１８な展開になっちまうよ。どうしよう、流石にお風呂で本番やっちゃいましたなんて事になって、それがみんなにバレたら……俺は破滅だ！

そんな風に、考え事をしていた気を抜いていた――瞬間。

「……ひゃうっ！」

背後から可愛らしい悲鳴が聞こえた。

背中に感じる温かく、柔らかくて小さい何か……胸ではないのは確かだ。するとこれは暮葉の背中か何かだろう。いや、この感触は背中に違いない。

「あの～暮葉さん？　上がろうとは思わなかったんでせうか？」

「もきゅぅ……えと、けーすけ様とは前に一度入りましたので……多分大丈夫なのですっ！」

お前が大丈夫でも俺が大丈夫じゃねえよ！
マジでこのままだと理性がぶっ飛びそうだよ……耐える事がキツい。クソッ、なんとなくだが一緒に入浴するエロゲー主人公の気持ちがわかったぜ。これは確かに辛いわ……耐える事がな。
ああ、なんか俺の邪心が「襲え！」って言ってる。
そして良心は「そっと触れ」って言ってやがる……って待て、なんでどっちもエロいルートに突入するような選択肢なんだよ？

「あの、けーすけ様っ！」

「お、おぅ！　な、なんだ……？」

「隣……行ってもいいでしょうか？」

「とととと、隣ィ！？」

オイオイオイ！　全裸の女の子が俺の隣に来るですと？
これはアレか、誘ってるんですか？　って違うだろ落ちつけ俺。
いくらなんでも隣に女の子が来るってだけで取り乱しすぎだろ。これじゃいつか恋人が出来た時「あんた童貞？」って、女の子に超バカにされちまうじゃねえかよ。実際童貞なんだけどさ……なんかバカにされると傷つくじゃん？
とにかく落ちつけェ俺。ここは紳士の対応をするんだ……ッ！

「もきゅ……ダメでしょうか？」

「い、いいですともっ！　ハイ、勿論いいですよ！」

……って、どこが紳士の対応だよ。ただ変態的な笑み浮かべて喜

んでるだけだろ。
　これじゃあ俺が変態みたいじゃないか。えっ、変態だって？　気のせいだ、俺は仮に変態だとしても変態と言う名の紳士だよ。決してただの変態じゃねえぞ？

「それじゃあその……失礼するのですっ」

「お、おぅ」

　ばしゃばしゃとお湯を掻き分け、暮葉がゆっくりと俺の隣に座った。幸い湯煙や湯の色のおかげで大事な所は見えないものの……やっぱり、ねぇ？　暮葉は女の子ですぜ？　それだけで十分俺の息子が反応しちまうんですが。どないすりゃいいんだろうか？

「けーすけ様……夕焼け、綺麗ですね」

「え？　おぉ、そういえばそうだな」

　よく見ると、この広い浴室には大きな窓があった。別荘自体高い所にあるので、多分浅間部長でも覗く事はできないだろうが、そのおかげで大海原と夕焼けが堪能できるのだ。
　なるほど、確かにいい長めである。

「にゅふふ、なんだか初めてな気がしますっ」

「なにがだ？　風呂なら今回で二度目だろ？」

「もきゅ！　ち、違いますよ！　けーすけ様は相変わらず変態なのですねっ！」

「じゃあなんだよっ！？」

あと変態は仕方ねえだろ。だって……男の子諸君ならわかってくれるハズだ。男、特に思春期の男子とは可哀想な生き物なんだよ。

「もぅ、旅行に決まってるのです」

「旅行？」

「みんなで楽しく遊んで、気楽に騒いで……そんな旅行は初めてなのですっ」

「子供の頃とかに行かなかったのか？」

「……」

あ、いけね……そうだよな。家庭の事情ってのは人それぞれだ。振り返ってみれば俺も旅行に行った記憶なんて全然ないな。あったとしても、それは宿泊研修か修学旅行のみ。しかも中学の時の修学旅行は友達がいなかったせいか、ホントクソも面白くなかったなぁ……。

それどころか、ムカついて他校の生徒をぶっ飛ばし、さらに嫌われたような記憶が……。

ああ、やっぱ中学時代は暗黒時代だったな。それに比べりゃ今はすごく幸せかもな……。

「け、けーすけ様まで暗くならないでください！　別にシリアスな事情があったわけではないのですよ？」

「そ、そうなのか？」

「ただお父様は軍人でお母様も忙しくて、お姉様も研究に没頭していて……」

そう言う暮葉の表情は、笑ってはいながらもどこか寂しげであった。

ひょっとしてこいつ……家庭じゃ孤独だったのか？　両親はいつも仕事、姉は趣味とも言える研究に熱中していて、結局誰も自分に構ってくれなくて……。

なんだろう。すごく失礼かもしれないけど、親近感が沸いてきたかもしれない。暮葉も一時期は孤独で寂しくって、長年それが続いて傷ついて……。

ハッ、なんだよ……俺の中学ン時と同じじゃねえか。

ただ、俺と違うのはそれが自分の家である事。そして暮葉には全く非がない事だ。

「暮葉……」

「もきゅ！？　だ、だからけーすけ様、そんな落ち込まないでくださいっ！　そんなに深刻な事でもないのですから、えと……けーすけ様？」

「……そうだな、悪かった」

なにやってんだろう俺……これじゃあ、暮葉に心配かけてるみたいじゃないか。

ったく、俺は男だろうが、もうちょっと元気出せってんだよ。

「……もきゅ、けーすけ様は色々と心配し過ぎなのです」

「そうか？　心配するのは普通じゃねえか？」

「けーすけ様の場合は度が過ぎてるのです」

「……ごめん」

暮葉の指摘に、俺はただ謝る事しか出来なかった。

心配性、俺ってそこまでひどいのか？　そりゃあまあ、伊吹にはよく言われるけど……やっぱり俺って異常なまでの心配性なんだろうか？

しかも、暮葉に指摘されたのはそこだけではなかった。

「……その、すぐ謝る癖も治したほうがいいのですよ？」

「えっ？」

「けーすけ様って、自分が悪くない事でも謝るじゃないですか？そうじゃなくても自分を責め過ぎです……あと、すぐ謝る人って信用されないらしいのですよ……？」

……なんか、前にも同じ事を言われた気がする。確か伊吹だったかな。っていうか伊吹から毎度同じ内容の説教をされている気がする。

すぐ謝る癖かぁ……確かに、謝って物事から逃げる人っているし、信用されるわけないよな。

「……はぁ、同じ事を伊吹にも言われたけどさ……俺ってやっぱダメ人間なのかな？」

「そ、そんなことありません！　いい加減にしてくださいっ！」

……あれ？　暮葉……ひょっとして怒ってんのか？
妙に声のトーンが高いし、何よりこの真剣かつムッとした表情。
やっぱり怒ってる、暮葉はさっきからマイナス思考な俺に対して怒っている。
暮葉はばしゃんと音を立て立ちあがる。更に説教を続けるように、

「どうしてけーすけ様はいつも自虐的なのですか！？　そんなに自分を責めて何の得になるのですか！？　そんなの……ただけーすけ様が辛いだけなのですよ？」

っと、最後に複雑な表情を浮かべて俯き、暮葉は俺に言ったのだ。
その……言葉に胸を撃たれたのは事実だ。
だがそれ以上に……暮葉さん、その……全てが丸見えなんですが？　発展途上と言うかある時期で成長が止まってるような、そんな暮葉の身体の全てがしっかり俺の目に映っていた。
いかん。このままだとマジで俺が暴走しそうなんだが……と、とりあえず！

「く、暮葉……全部……見えてるぞ……っ？」

「……もきゅ？　～～～～っ！」

ようやく自分の状態に気付いた暮葉は、恥ずかしそうに耳まで顔を真っ赤にし、慌てた様子で湯船に身体を埋めた。ふぅ……助かった、あと少しで暮葉を襲う所だった。
危ない危ない。ガチで犯罪者になる所だったぜ……。
しかし相変わらず鼓動は早く、かぁっと全身が熱くて……その、アレも元気で、とにかく俺の興奮は全然収まらなかった。思考力もだんだん無くなってきた……どうしよう？

「……けーすけ様のばか、へたれ、エッチ……」

「……っ！」

今の言葉で顔が極限まで熱くなるのを感じた。そして、同時に何かが吹っ切れた気もした。

限界。

そう、限界だ。もう我慢の限界、これが男の宿命である。いくら頑張った所で、やっぱり女の子に弱い可哀想な生き物なのである。

俺を抑制するものはもう何もない。ただ本能のままに動く狼になった俺は、この手を伸ばして暮葉を抱き寄せた。暮葉は小柄で華奢で……乱暴に扱ったら壊れそうである。

せめて優しく……出来る限り優しくしねえと。

「もきゅ！？　け、けーすけ様っ！？」

「ごめん、暮葉……っ！　嫌なら俺を蹴って逃げてくれっ！」

暮葉を心配するセリフを吐く事だけが、今の俺に唯一できる彼女を守る為の行動であった。

そして俺は何も考えず、自分の顔を暮葉のあどけない顔に近づける。このまま唇を重ねようとしたのだが……あれ、なんでだよ？なんで暮葉は抵抗しようとしないんだ。それどころか、まるで俺が今からしようとしている事を待ってる……様に俺には見えた。

暮葉は小刻みに震え、赤くなりながらも目を瞑り、口を少しだけ突き出していた。

おいマジですか……これってその、受け入れてくれるって事……だよな？

この反応は間違いなくそうだよ。それ以外に何かあるか？　とに

かく、暮葉が俺を受け入れようとしている事には変わりない。よし……ここはエロゲーで得た知識を頼りに――！

「いやぁ～すっかり気絶しちゃったよ！　藤島君まだ入ってるかい？」

その瞬間、扉が開く嫌な音と共に――この世で一番空気の読めない男が入ってきた。

「もきゅ――っ！？」

「おわあああぁぁぁぁぁっ！？」

俺は慌てて暮葉を自分の背後に回し、暮葉を隠そうとした。俺の方が身体は大きい。暮葉が湯船に埋まっててくれれば多分隠れるハズだ。

背中に暮葉の身体が……いや、暮葉の髪の毛の感触も……うぅ、耐えるのが辛い。

「どうしたんだい藤島君？　顔が真っ赤だが？」

「な、なんでもない。それにしても大胆ですね部長……っ」

「何を言ってるんだい、男同士ではないか？　それとも君は自分のモノに自信がないのかい？」

「ありますよ！　一応自分では立派だとは思ってますよ！？」

「まあとにかく、男同士で隠す必要などないじゃないか」

「そ、そうっすね……」

ああ、浅間部長すっげえ解放的だ……自己防衛本能が働いて視界にモザイクが……うげっ。

でもなんでかな。やっぱり見たくもないものを見たせいか、さっきまでの興奮が次第に鎮まってきたような気がした。いや、確実に鎮まってきている……ある意味ではＧＪだぜ浅間部長。

でも空気読めなさすぎだろ。もし浅間部長が現れなかったら、今頃俺は暮葉と……。

「そうだ藤島君。折角だからボクとナニの比べ合いを――」

「だが断る！　気色悪いからさっさとあっち行け！」

暮葉の為にもあっち行ってください、マジでお願いします！

「なんだい？　まあいい、ボクは身体でも洗うよ」

「……ふぅ」

浅間部長がシャワーに向かった事を確認し、俺は暮葉にそっと声を掛け、

「おい……今のうちに風呂から上がれ」

「は、はいっ！　その……ありがとうなのです、けーすけ様っ」

「お礼はいいから早くっ！　浅間部長にバレたらヤバいだろ……っ！」

ヒソヒソと暮葉と会話をした。神様、どうか浅間部長に聞こえてませんように。

その後、暮葉は無事に風呂から上がり、俺もしばらくして風呂から上がった。

あ～あ……なんだろう。風呂で疲れを癒そうと思ったのに、何か余計に疲れた気がする。

しかも暮葉とはその……若干気まずいし、はあ……。

第１３０話，初めて……なんだっ（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「今回危なくね？　そろそろ警告喰らうんじゃね？」

大吾「だ、大丈夫だ！　か○こん原作は全年齢対象でももっとヤバかった気がする。流石は最強の寸止め作品って感じだったね」

重原「うん、この作品はヨスガってないから平気さ」

圭介「てめえら安心しすぎだろ！　大体今回タイルトの時点でアウトじゃねえか！」

大吾「深読みのし過ぎじゃないか？　初めては初めてだろ？」

重原「そうそう。木下さんが旅行するのが初めてって意味でしょ？　それ以外になにか意味があるのかい？」

大吾「や～い！　圭介の変態ぃ～！」

圭介「う、ぐ……久々にコイツらシバきたいと思った……っ！」

第１３１話，襲撃者

風呂から上がった後、俺たちは全員で晩御飯を食べた。浅間家のカレーは確かに俺の口にも合うほど辛くておいしかったが、甘党の伊吹には辛い一品であった。

「けけけ、圭介っ！　み、水っ！　水ーっ！」

「ちょ、水より牛乳のほうがいいって！　青山さん牛乳を頼むっ！」

「……え、えと……その、牛乳牛乳……っ！」

「千早！　牛乳は一番上の所に入ってるから落ちつけよな！」

「やっふぁりキャレーはあみゃいのがいいわょっ！」

「お姉ちゃん、呂律回ってないよ？」

青山さんにもあかりにも、そして葵にまで心配されている伊吹。なんたるカオスな光景、伊吹は本当に辛そうであった。

伊吹、まだ辛い物苦手だったんだな。伊吹が超甘党で辛い物苦手なのは知っていたが、まさかこの歳になっても全然変わっていないとは。ある意味可愛い特徴かもしれない。あと……さっきから俺と暮葉が妙に気まずくて一言も会話してません。

そりゃあね、お風呂であんな事があれば普通は気まずいよ。目があったら俺か暮葉のどちらかが絶対恥ずかしそうに目を逸らすし、はぁ……合宿中に元の関係に戻るべか？

……いや、無理かもしれないな。だって俺は風呂で暮葉にあんなことを――。

「どうしたんだい藤島君？　風呂の時から思っていたが様子が変だな」

「なんでもないっすよ部長。つーか放っておいて欲しいっす」

「やっぱり何かあったんじゃないかい？」

「な、なにもありませんよっ！」

大体浅間部長のせいだろうが。折角いい雰囲気だったのに……それを、あんな変なタイミングで現れて雰囲気ぶち壊しやがって。雰囲気ブレイカーにも程があるだろ。

はぁ、どうしよう。絶対あの一件で暮葉に嫌われたよ……もうダメかもしれない。

やっぱり女の子に嫌われるって、精神的にキツいっすよね……なんというか、暮葉に嫌われたと思うと胸が妙に痛むんだよ。なんでだろう、部長に嫌われたって多分こうはならないだろうに。

それから数時間後、色々屋内で遊びまくって……そろそろ就寝の時間である。

みんなで寝室がある2階まで行き、当然男女で部屋が別れており、その前で男性陣と女性陣は当然のように明日の朝までの別れを告げたのである。

「それじゃあおやみーお兄ちゃん！　ついでに部長さん♪」

「ボクはついでなのかい！？」

やっぱり葵は浅間部長のことなど、ミジンコ程度にしか思っていないようだ。浅間部長のことなんてついでしかないらしい。

「せ、先輩……その、先輩にならわたし……夜這いされてもいいですよ？」

「しねえよ！　さっさと寝ろ変態淑女！」

「兄貴は来るなよ！　圭介は……多分許すっ」

「多分って何だよ！　間違っても過ちは犯さねえよ！」

もう暮葉のように嫌われるのはゴメンだ。同じ過ちは二度も繰り返さん。せめて他の人達には嫌われぬよう気をつけないと……はぁ、結局暮葉とはあれから一言も喋っていない。

なんかその、恥ずかしいと言うか……気まずい。

「ねぇ、あんたと暮葉何かあったの？」

どうやら伊吹は俺と暮葉の妙な距離に気付いたらしく、さり気なく俺の隣に並び、俺と暮葉を心配するような言葉をかけてきた。何かあったって……そりゃあ色々ありましたが、どう考えても俺が全面的に悪い事だろうし。増してや伊吹は永渕に無理やりやられそうになった過去があるからな。

そんな事をしたと聞けば、彼女も俺を絶対に許さねえだろう……。

なんか逃げるみたいで嫌だけど、無駄な争いを避ける為にも言わない方が賢明だな。

「別に……なんでもねえよっ」

「そう？　さっきまで仲良しだった気がするけど、なんかあんた達だけ空気重いわよ？」

「き、気のせいだろ？　とにかく俺疲れたし……もう寝るな」

「えっ？　う、うん……おやすみっ」

「おぅ、おやすみ……」

なんなんだろうなぁ……俺、ホントに最低の下衆野郎だな。結局、俺は逃げるように彼女達の前から立ち去って、自分のベッドに横たわった。そのまま右腕を額に乗っけて考え事をする。

この先俺はどうすればいいのか。暮葉に一体どのツラ下げて顔出せばいいのか……。

そんなの当然、謝ればいい話なんだけど……謝って許してくれるだろうか。だって俺がアイツにやろうとしていた事はその……まあアレだ。責任重大な事でして……だって、ねぇ？

けど、このまま逃げっぱなしはやっぱダメだよな。たとえ許されないにしても、謝っておいたほうがいいに決まっている。よし、明日勇気を振り絞って謝るとしよう。

明日もどうせ遊ぶんだし……その為には――今日はもう寝よう！

……

……

……

それから３０分、なんだ……なぜなんだろうか？

「全く眠れねえ……っ」

浅間部長のいびきはうるさいし、虫の鳴き声もかなりのボリュームである。そして何より頭の中でついつい暮葉のことを考えてしまい、そのせいか全く眠れないんだよね……どうしよう？

このまま眠れなかったら、明日辛いんじゃないだろうか？

いや、絶対辛いよね……とにかく、さっさと寝よう――と思うと眠れない。ちくしょうこうなったら奥の手を使うしかない。ちょっと気晴らしに外でも散歩するか……。

「はぁ……」

わたくし、藤島圭介は青山さんの別荘を抜けだし、夜の六角を歩いていた。しかし流石に田舎だけあって夜空は綺麗である。これは心癒されるな……なんつーか、今まであった散々な出来事を全て忘れられそうな気分である……って、流石に忘れたらダメだよな。

つーか、こんな散歩で眠くなるんだろうか。夜の涼しい空気に虫の鳴き声、いかにも平和な空気である田舎町の夜景を眺めてたら、むしろ目が覚めちまうんじゃないだろうか？

……なんて事を考えた、まさにその時であった。シャーっと言う、まるで刀か何かを抜くような音が俺の耳に入ってきた。その音を聞いて思わず緊張が走った。

「！？」

刹那、ばんっと。

不自然な音を立てて、俺が右手に持っていた缶ジュースが吹き飛んだ。反射的に缶ジュースに何かが当たる寸前に手を離し、それが

幸いしたのか、手首を痛めるという事もなかった。
俺は両手に力を入れ、きょろきょろと周囲を見回しながら、
「くそ……誰だっ！」
「はっ、中々鋭い反射神経の持ち主だな……藤島圭介とやら？」
「――っ！」
振り向くと、そこには笑みを浮かべた２０代後半くらいの男が立っていた。男は長身で細身ではあるが筋肉質で力は強そうだ。その上、暮葉の一期一振よりも長そうな日本刀を右手に持っていた。
服は着流し、それもデザインは新撰組のものに似ていた。
なんなんだアイツ？　つか、なんで俺の事を攻撃しやがったんだよ。
「てめえ……一体何者なんだよ！」
「お前さんは何度も俺らに襲われてるって話だよな？　だったら、事情くらいは知っててもいいと思うんだよなぁ？」
「……っ！　てめえ……サヴィエトか！」
「一応そんな名前の組織だったか？　まあ、俺は所詮お雇い兵士でしかないんだがなぁ？」
「お雇い兵士だと？」
「連中の思想は俺も気に食わねえ。けど、俺たち魔術師ってのはこの世界じゃ弾圧される存在だ。そんな存在に仕事をくれるってんな

ら……話は別なのよな」

どういう事だよ……つまり、コイツは思想が合わねえのに、わけのわからねえ組織の為に働いているってことなのか？　そんなのってアリなのかよ……。

「……てめえはあの連中の理不尽さを知ってんだろ？　それを知ってるんだったらその刀を引いてくれないか？　俺は出来ればてめえ見たいなヤツとは戦いたくない」

「それは俺も同じ事よ。丸腰の学生さんを刀で襲うなんて……武士としては情けなさすぎる。けどなぁ……こっちにも色々事情ってモンがあんのよ。お前さんを襲って身柄を引き渡さねえと、俺は今月無給で生活費もロクにないのよなぁ？　悪いけど……お前さんのほうこそ刀を振る前に降参してくれねえか？」

「それはできねえ……俺には居場所があるんだよ。そこからいなくなるワケにもいかねえし、第一てめえらみたいな怪しい連中にホイホイついて行く気もねえ！」

すると、男は暗闇の中輝く日本刀を振りまわし、やがていつでも俺を切り裂けるようにと、彼は刀をガッチリと構え鋭く俺を睨みつけてきた。

やべぇ……怖ぇ、ありゃ確実にプロの目だぞ？

素人じゃねえ……体格からしても絶対に勝ち目はない。戦闘のプロな上に魔法使いって事は当然魔法を使えるって事だよな？　だったら……圧倒的に俺は不利だぞ？

「そうかい……仕方ない、お前さんは今からこの近藤政信（こんどうまさのぶ）の敵だ」

……けど、俺にはみんながいる。居場所もちゃんとある。今は合宿中で若干暮葉とは気まずい事はあったけど、それでも仲間である事には変わりねえ。その仲間たちを裏切ることはしたくない。

何より、ここでコイツに捕まったら――それだけで暮葉を裏切る事になるじゃねえかよ。

「ナメてんじゃえねよ……てめえ！」

「いい目だな？　しゃあないなぁやるってんなら……一瞬で仕事を終わらせてやるよ！」

言葉と同時に――近藤という謎の無事は飛びかかってきた。

第１３１話，襲撃者（後書き）

・後書きトークコーナー

圭介「また俺襲われたのかよ！？」

雪乃「貴方、よく襲われるわねえ？」

早苗【しかも、今度は剣使い】

雪乃「あら、丸腰の貴方にはキツい相手じゃないかしら？」

圭介「うぅ……ま、まあなんとかするさ！　ノリで！」

雪乃「なんとかなるのかしら？」

早苗【さあ？】

第１３２話，近藤政信

言葉と同時に――近藤という謎の無事は飛びかかってきた。

ゴッ！　という爆音を俺は聞いたが、次の瞬間、１６ｍという鉄道車両１両分はあった距離を１秒もしないうちに詰めてきたのだ。

反射的に俺は両腕を頭の上に持っていき、身を守ろうとはとたものの……相手が持っているのは日本刀だ。その程度の防御で身を守れるハズがない。

……なら、やることは一つしかねえだろ。

俺は僅かに前へ突撃を始める。すると、近藤は怪訝そうな顔を浮かべた。普通、こういった状況で素人が取る行動はガードするか、無意味に逃げ回る事だけだ。それが、俺の場合はあえて捨て身の突撃をし始めたのである。その理由が近藤にはわからなかったのだろう。

「ふっ！」

だが、それでも近藤はプロの武士であった。僅かに吐息を吐くと、何事もなかったかのように日本刀を振り下ろし、確実に敵を仕留めようとした。

風を切る凄まじい音。一瞬それにビビって動きが止まりそうになったが……ここで止まれば死は確実であろう。死なぬにしても大怪我は絶対するハズだ。だから――今度こそ。俺は今度こそ自分の身を守る為に右へ思いっきり跳躍したのだ。

「……ッ！」

とりあえず斬撃をかわす事はできた。しかし着地の瞬間にバランスを崩し、今にも転びそうなほどに不安定な姿勢になってしまった。

それを見た近藤はニヤリと笑い、今度は薙ぎ払うようにその長く大きな刀を振りまわしてきた。下手にバランスを直していたら斬られる……ならっ！

「う、ぁ――ッ！」

「――あン？」」

あえてバランスを崩し、俺はアスファルトに倒れ込んでやった。刃はギリギリ俺に当たらず背中を掠めて振り抜いた。よかった……辛うじて斬られずに済んだ。

……なんて安心している場合じゃねえ。ハッ、と気付いて上を見ると、近藤は既に次の動作に移って俺を仕留めようとしていたのだ。魔法か何かを使ったのか知らないが、近藤は人間の跳躍力を遥かに超えるほど高い所までジャンプしていた。真上から刀を串刺しにするつもりか……？

……馬鹿野郎かアイツ。サヴィエトがお前に課した任務は俺を捕まえる事。そんな事したらいくら俺でも死んじまうじゃねえかよ。俺だって身体は丈夫でも一応は人間である。万が一アレが脳にでも刺さったら死ぬのは当然のことである。

ちくしょう……どうしてこういう時に限って身体が動かないんだよ……ッ！

動けよ……俺の身体ァ――ッ！

「……ッ！」

俺は僅かに右へ身体を転がした。本当に僅かな距離だ……それでも、近藤の日本刀を避けるには十分すぎる行動であった。俺はゴロゴロと転がり、１mほど転がった所で起きあがる。

近藤の刀は勢いよく、アスファルトに突き刺さっていたが、それ

が問題だ。刃がアスファルトに刺さってしまって抜けない様子である。俺の瞳には刀を抜こうと必死に力を入れる、一人の男の情けない姿が映っていた。これはハッキリ言って……神様が俺にくれた僅かなチャンスかもしれない。

「う、オオオオオオオオオォォ！」

俺は叫んで、拳を握って、ひたすら前を突き進んで近藤の懐に飛び込んだ。

拳を振るう――が、その瞬間だ。近藤は刀を抜くことに成功したようだ。だけど拳をかわせるタイミングじゃねえ。今から攻撃する事も不可能だ。だから俺は――わかりきったように安心し、この拳をクソ野郎の顔面目がけて放った――のだが、

その時。フッ、と近藤の姿が消えたのだ。

「……ッ！？　くそっ、どこに――！？」

キョロキョロと敵の姿を探すが、見当たらない――と思ったまさにその時であった。既に近藤は２０ｍ近く離れた所におり、その近藤は何故か、俺から離れているのに刀を振り下ろしたのだ。

なにやってんだよ……っとは思ったが、その意味を理解したのはこの直後である。

振り下ろされた刀が地面に接触した――刹那、その斬撃は地面を伝って俺の所まで一直線に伸びてきたのである。真っ二つに引き裂かれたアスファルトが抉れて、何故か銀色に輝いている。

咄嗟に俺は亀裂を避け、もう一度近藤を見つめる。一体なんだったんだ？　どう考えてもアレは物理法則を無視しまくってんだろ…普通じゃねえ。って事はアレなのか？　アイツは魔法使いって言っていたくらいだから、アレは魔法によるものなのか？

「ほぉ？　素人さんにしちゃあ……結構やるなぁ？」

「……っ」

近藤が挑発するように刀を頭上で廻し、笑いながら俺に語りかけてきた。

「痛い目見ないように一撃で沈めようと思ったんだけど……なんか、お前さん無駄に反射神経いいしそれ無理かもしれないなぁ？　悪いけど、痛い目見てもお兄さんを恨むんじゃねえよ？」

どうする……俺？　相手は身体能力が高い上に魔法使いだ……勝ち目は殆どねえぞ？

いっそのこと別荘まで逃げるか？　そこには暮葉がいる、暮葉ならあの野郎とも対等に戦えるかもしれねえけど……今はみんな寝ている時間だ。こんな事の為にみんなを起こしたくはない。

だったらやっぱり一人で解決するべきだろう。それに……俺の身体なら――多少攻撃を喰らったって何の問題もないハズだ。なら手段は一つしかねえだろ――ッ！

「ナメてんじゃねえぞ……くそったれぇぇぇぇぇぇぇっ！」

一気に前へ跳躍し、その勢いでダッシュする俺。そう――俺がとった行動とは、何も考えずに近藤に近付く事であった。近づいてどうするかまでは考えていない。だけど、この場で一番重要なのは戦いの主導権を握る事である。

バルジの戦いのドイツ軍と同じだ。いくら非力でも主導権さえ握っちまえば――強大な相手とも少しはマトモに戦えるハズである。それでドイツ軍は一時的な大反撃に成功したのだ。最も、いつまで

主導権を握ってられるかはわからないが……やってみる価値はあるハズだ。
拳を握って突撃。近藤は刀を構えて待ち構えるが……さっきだって一瞬、アイツを殴るチャンスはあったんだ。もう一度そのチャンスを探すんだ。そして――今度こそ確実にアイツを殴れ！
……しかし、俺のこの作戦は失敗した。その理由は近藤のせいではなく――、

「ちょっと……なにようっさいわね……っ」

何故か、そこにパジャマ姿の伊吹が佇んでいたのだ。
そういえばここは別荘から遠くは無い……というか、別荘からまだ３０ｍも離れていない。
なるほど。俺たちの戦いの轟音で伊吹は目覚めたのか。
だからって様子を見にくるかよ普通。伊吹は普通に何事もないように俺に近付くが、それがどれほど危険な事か、彼女はまだ理解していないようだ。どうやら彼女は寝ぼけているらしい。
髪も寝癖でボサボサであり、何よりジト目が寝起きの不機嫌さを示していた。

「……っ！　来るな、伊吹！」

「えっ？　――きゃっ！」

俺は衝動的に伊吹を抱きしめ、そのまま左方向へと跳躍した。何故なら近藤がまた刀をアスファルトへ振り下ろし、再び亀裂が凄まじい勢いで迫ってきたからである。

「……えっ？　ちょ、なに……圭介？」

「いいからお前は黙ってろ。そこでじっとしていてくれ」

「えっ？　ちょ……その、私まだ心の準備が……って何言わせんのよばか圭介っ！」

「いいから！　事情は後て説明するから、頼むからお前はそこで大人しくしていてくれ！」

そう叫んだ後、俺は再び近藤のことを睨みつけた。

相変わらず近藤は余裕そうな笑みを浮かべている。クソッ、これがプロの余裕ってヤツか？

「大変だなぁお前さん。女を守りながら戦う……か、お前さんのような素人さんにそんな高度な事が出来んのかい？」

「うるせえ……やるしかねえだろ！」

「ほお？　なら仕方ねえな……だったら女を守ってみろよ勇者様っ」

ちくしょう、完全に主導権を近藤に握られた。このままじゃ絶対に勝てない――っと思っていたまさにその時であった。いきなり俺の背後がオレンジ色に輝き、そして焼けるような熱を感じた。

この感じ……まさかと思って、俺は咄嗟に後ろへ振り向いた。

そこには――２ｍにも及ぶ炎剣（えんけん）を超能力で作り出した、明智凪紗の姿があった――！

「明智！？」

「説明は後、藤島――そいつを倒すぞ！」

「えっ？　お、おう！」

どうなってんだ？　なんかまるで、アイツが俺を襲っている理由を知ってるみたいだな。

明智……どういう事なんだよ。って、それを知りたきゃまず近藤に勝たねえとな。

「ちっ、いつかの超能力者（クソアマ）か。確かにアンタの能力はすごいが……その程度で引き下がるわけがねえのよな！」

……なんて叫んでいるけど、近藤は内心かなりビビっている。そして――その明智に対する恐怖はちゃんと外面にも出ていたのだ。

近藤は叫ぶ事だけに熱中し、身構える事を忘れていたのだ。

隙だ。滅多に見せる事のない隙である。今がまさに攻撃のチャンスだ。だから俺は一気に駆けだして近藤との距離を詰めたのだ。近藤がハッ、と気付いた時には俺はもう、近藤の目の前に立っていた。

後はこの拳を放つだけ――だったのだが、

「……ッ！？」

ウソだろ？　また消え――、

「ぐ、はぁっ！？」

気付けば近藤は俺の真横にいた。そして近藤は開いていた左手で――俺の鳩尾を殴った。

その衝撃に一瞬、俺の呼吸は止まった。まずい――このままだと斬られる！

「藤島！　う、あああああぁっ！」

その時、明智がこっちに向かってきたのだ。ただ走っているだけではない、２ｍにも及ぶ超能力で作り出した大きな炎剣を右手から伸ばし、狩人のような鋭い目つきで近藤を睨みつけていた。

轟々と響く燃える轟音。それだけでも常人にとっては既に恐怖である。

「藤島圭介はさほどの脅威ではない……懸念すべきはあの女のみ……なら！」

近藤は何かを呟いている。何を言っているのかハッキリはわからない……が、俺にもハッキリわかった事があった。どうやら彼は明智を恐れている。

だからこそ、近藤は明智を優先的に攻撃しようとした。それが完璧とも思えた彼の――近藤政信の唯一のミスであった。どうやらにコイツ、俺がさっきの鳩尾攻撃でしばらく動けないと思ったらしい。

だけど……俺がその程度で怯みはしても、本当にしばらくの間は動けなくなると思うか？

答えは――Ｎｏに決まってる！

近藤が刀を構え、何らかの呪文を唱えている――この隙に俺は拳を握り締めた。

そのまま勢いで低くなっていた姿勢を上げ、俺の拳が近藤の顔面に力強く突き刺さった。

「が、は――！　な……バ、カな……普通ならさっきの一撃で――！？」

そう――普通ならさっきの鳩尾で伸びている。

だけどな……俺の身体はちっとばっか普通じゃないんだよ！

さて……んじゃあそろそろ、フィニッシュと行くか。俺は前へ跳躍し、途中で明智と並んでとにかく近藤の懐へと飛び込んだ。俺と明智は近藤にタックルを仕掛けたのである。

衝撃によって近藤は大きく後ろに吹っ飛び、凄まじい勢いで近藤は地面に叩きつけられた。

「う、ぐ……く、この……っ！」

それでも近藤は気絶しなかった。刀を杖代わりにして立ちあがろうとする近藤。

「――ァ――ッ！」

だが、近藤は立ちあがる前に気絶した。誰かに攻撃されたようである。

近藤の意識を奪う攻撃を放ったのは、明智でなければ当然俺でもない。

そう、近藤を完全に沈めた者は――、

「ったく、なんなのよ一体……っ！」

国宗伊吹。

そう、そこで戦いを見ていた伊吹だ。彼女はしなやかに竹刀を振りまわし、近藤の後頭部に激しくそれを打ち込んだのである。

竹刀と言っても、思いっきり叩かれれば骨にヒビは入るだろう。

それだけの威力があればボロボロの相手を気絶させる事くらい、造作もない事なのだ。

「……ふぅ、やったな藤島」

「あ、ああ……とりあえずは勝ったな」

……はぁ、しかし疲れたぁ……なんだか疲れて眠くなってきたし、案外近藤との戦いは安眠という意味では無駄ではなかったかもしれない。

それにしても気になるな。まさかここでサヴィエトのヤツに襲われるとは……。

それになんで明智がこの事を？　相手も明智のことを知っているみたいだし、一体何が起こっているんだろうか？　それを明智から詳しく聞く必要がありそうだな。

あとは……。

「……っ」

伊吹にはなんて説明すればいいのやら……はぁ。

第１３２話，近藤政信（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「ぷひゅるるるっ！　ね、寝起きの伊吹ちゃんカワユス！　ぷひゅ～！」

圭介「ちょ、なんだコイツきめえっ！」

黒木「いいないいなァ～！　俺も寝起きの伊吹ちゃん拝みたいお！」

圭介「い、いいから落ちつけ黒木！　悪い意味で注目浴びてるぞ！？」

黒木「ぷひゃ～ぷるる、ぷひゅぁ～ブヒィィィ！」

圭介「もしもーし！？　おーい、現実に戻ってこーいっ！」

黒木「ハァハァ、伊吹たん……ぶ、ブヒィィィィィィィィィィィィ！」

圭介「……最近、黒木が伊吹に対してのみご覧の有様なんだが？」

赤佐「仕方ないやろ。放っておいたほうがええで？」

圭介「そ、そうですか……っ」

第１３３話，友情ってスバラシイ！

夜の砂浜、当然こんな時間帯に砂浜にいる者など誰もおらず、実質この砂浜は俺たちの貸し切り状態であったが、だからと言って楽しい空気というわけではなかった。

周囲を警戒する明智に竹刀を持った伊吹。そして、俺たちに捉えられ縄で縛られた近藤。

どう見ても、僕ら遊んでもハイな状況とは言えない。戦いが終わって捕えた捕虜をこれからじっくり尋問するかのような、そんな空気が辺りに漂っていた。

「他には曲者はいないみたいだな」

「って、結局明智と近藤はどういう関係なんだよ？」

俺は明智に一番気になっていた事を聞いた。すると明智はこっちを向いて、

「関係とか、そんな深いものではないぞ？　私はそこの男に襲われたんだ」

「おっ！？　襲われた！？

明智さぁ～んそれってどういう意味でしょうか？　ボコボコにされたって意味か、それとも性的な意味で襲われてハァハァな感じでしょうか？　うぐぐ……気になる、すっげえ気になるぞ。

「圭介……あんた、またしょうもない事考えてるでしょ？」

「か、考えてねえよ！」

「顔に出てる。やっぱ藤島は変態だな」

「う、うるせぇ！　俺は変態じゃない、変態と言う名の紳士だ！」

「結局変態じゃない……」

「変態だな……」

女の子2人にジト目で見られるプレイ……ちくしょう、ドMに目覚めていれば、冷たい視線で見られる事自体がご褒美に感じられるのに。なんて惜しい男なんだ、Mじゃないから嬉しくないぞ。

それより早く話を進めろよ。俺が変態とかそんなわかりきってる事はどうでもいい、それより明智がどうして近藤に襲われたのか。その理由を知りたいんだよ。

「それで、結局何があったのよ？」

「う、ああ藤島のせいで本題を忘れてた。ありがとうな伊吹」

「俺のせいかよ！」

「2～3日前くらいの話だったかな？　たまたま買い物帰りだったんだ」

しかもスルーしやがったし、淡々と理由を語ってやがるし。

なんてヤツなんだ明智凪紗……お前、色々な意味で恐ろしいヤツだよ！

そこまで高度なスルースキル。東京都民ですら持ってねえと思う

ぞ？

「私は自宅に向かって歩いていたんだけど、その途中であの男に襲われてな、やむなく超能力を使って応戦したんだが……結局逃げられてな。まさかこんな所で再び遭遇するとは思わなかったぞっ」

「……っていうか凪紗、あんた超能力者だったの？」

「で、出来れば秘密にして欲しいぞ……っ、というか伊吹は信じるのか？」

「ま、まあ……わけのわからない事には何回も巻き込まれてるし、一応は信じてやるわよっ」

流石伊吹、俺たちの事情を知っているだけはあるな。

アッサリ超能力を信じるとは、某自称超能力者もビックリだと思うぞ。

っていう事はアレですか。もしかして天使とか悪魔がいたとしても、伊吹ちゃんはアッサリ信じちゃうんでしょうか。もしそうだとしたらある意味すごいぞ？

「んで、それで何で俺に気を付けろって言ったんだよ？　やっぱり近藤のことに関係してるのか？」

「まあ……だって、近藤は藤島を誘き寄せる為に私を襲ったって……っ」

「明智にまで手ぇ出すって……コイツ武士としての誇りあるんだろうか？」

なんて事を絶賛気絶中の近藤に言ってみるが、当然近藤は気絶中なので、俺が近藤の文句を言っても近藤はうんともすんとも言わなかった。ですよねー、気絶中なんだから、むしろいきなり目覚めて襲われるほうが怖いっすよ。

そんな不意打ち的な事があったら、ロンメルを相手に戦う英国紳士の気分になるぜ？

「それはともかく、藤島……お前一体どんな事件に巻き込まれてるんだ？」

「えっ？　ど、どんな事件って……？」

「秋葉原の時もそうだったろ？　あの不良は藤島の名前を言っていたぞ」

「あ、アイツはその……まぁ初対面だけど違うようなで……？」

「藤島、言ってくれ……友達を心配させるな……っ」

「……」

すみません。今の心配そうな表情がその……たまらなく可愛かったです。やっぱり明智って普段はカッコいい系だけど、たまに見せる仕草とかは完璧女の子だよなぁ。

それも、とびっきり可愛い女の子である。明智のことを見て思わず、照れか何かは知らないが顔が熱くなってしまった。多分俺の顔は今、結構赤くなっていることだろう。だってねえ……明智が可愛かったんだから仕方ないじゃん？　男は基本的に女の子に弱い生き物なのだ。

「わ、わかった……説明するからその……顔近ぇよっ」

「えっ？　～～っ！　ご、ごめん藤島……っ」

完全に負けた。明智の美貌に完全に敗北しました……まあ、仕方ないよね？

けどなんでだろう。たかがそれだけなのに、その……伊吹が不機嫌そうなんだが。

まあ、今は伊吹は後回しでいい。とりあえず事情を説明するとしようか。

その間に伊吹の機嫌が戻りますように……。

……っと、言うわけで俺は明智に全てを説明した。

俺の正体や暮葉達の行動目的。サヴィエトという敵対勢力の存在と、そのサヴィエトの目的や魔法使いという連中が多数存在するという事実。そして、俺らが戦ってきた今までの相手の事。

その全てを、何の偽りもなく明智に説明したのだ。

明智は呆気にとられた表情を浮かべていた。まあ……それが普通の反応であろう。

「そんな事に巻き込まれているのか……藤島は……っ」

「あんた……私の知らない所でそんな危険な目に遭っていたの！？」

「まあ……一応全部事実だよ」

驚いているのは明智だけではない。伊吹もこれまでに潜り抜けた数々の危険を聞き、かなり不安そうな表情を浮かべていた。そりゃそうだ、伊吹にだって全てを教えたわけではない。伊吹に余計な心

配をかけたくなかったと言うのもあるが、伊吹の性格的に下手すりゃ介入してくれかもしれない。
伊吹を危険に晒したくは無かった。だから、事情を知ってるのにも関わらず、俺はあえて伊吹には何も説明せずに日常を営んできたのだ。

「どうしてもっと早く言ってくれなかったんだ……そういう事なら私、この超能力（チカラ）で藤島を守ろうとしていたのに……！」

「わ、私もそうよ！　その……別にあんたの為じゃないけど……っ、周りでそんな事が起こってんのは何か嫌だし……それに、私だって一応暮葉達の事情は知ってんのよ？」

「ごめん……迷惑とかかけたくなかったから」

「迷惑なんかじゃないぞ。私達はその……友達だからなっ」

友達って言葉が照れくさかったのか、明智の顔はほんのり赤く染まっていた。
けど友達っていうまでに、少しだけ間があったような気がするが……気のせいだよな？
き、気のせいだと信じたい。奴隷とか言われたらフツーに泣きますよ俺。

「わ、私だって圭介の……お、幼馴染よ！」

伊吹も幼馴染って言葉が照れくさかったのか、少し俯いて顔を赤らめていた。
けど、伊吹まで幼馴染って言うまでに、少しだけ間があったような気がするぞ。ひょっとしてコイツも何か違う事を言おうとしたん

じゃないか？　例えば奴隷とか奴隷とか奴隷……って、なんで奴隷ばっかりなんだよ！　そもそも俺は日本国民である以上、一応基本的人権は保障されてるハズだぞ。

まあ、とりあえずはお礼を言うべきなのか？　うん、言っておこう。なんか言わなきゃいけないような気がするよ。

「2人とも……サンキューな」

「そ、そんな……お礼を言われるほどの事は言ってないぞ？」

「そうよっ、心配するのは当然よっ」

ああ……なんていい子たちなんだろう。俺は不思議といい気分になっていた。

なんてことのない、ただの当たり前な心配だったのかもしれない。それでも、俺が2人に想われてるんだなと感じるには、十分すぎる言葉であった。

やっぱり友情っていいよな……持つべきものは友とかく聞くけどさ、ひょっとしてこういう事を言ってるのかもしれないな。

「みなさんっ！」

ん、こ……このソプラノボイスの明るい声。

間違いない。振り返ると――伊吹同様パジャマ姿のまま別荘を飛び出してきた暮葉がいた。

だけど、何故か俺は暮葉を直視できなかった。だって……ねぇ？

別に意識しなくてもお風呂の時のことを思い出しちまって、恥ずかしさと申し訳なさで思わず目を逸らしてしまう。

何故か、顔がかぁ～っと熱くなってしまう。それは暮葉も同じらしく、俺と目が合うと暮葉も恥ずかしそうに俺から目を逸らしてし

まった。
　ああもう……これじゃあ話すどころか、面と向かうことさえ難しいじゃねえかよ……。
「木下じゃないか。そういえば藤島達と一緒だったな」
「あら暮葉？　あんたも起きたの？」
「あれだけの騒がしかったら普通起きますよ！　みんなを説得するの大変だったのですからね！」
「そうか……木下、すまなかった」
「いえいえ、いいのですよっ！　それより何があったのですか？」
「実は――」
　明智が事情を説明しようとした……まさにその時、
「なあ……お前さん達。悪いけどコイツを解いてくれねえか？」
「……ッ！？」
　一瞬にして空気が凍る。少し野太い若い……と言えるが微妙な年頃の男の声。
　目を覚ました近藤政信が、俺たちを睨みつけながら、そんな事を願ってきやがったのだ。
　あの野郎……一体どういうつもりなんだ？

第１３３話，友情ってスバラシイ！（後書き）

・後書きトークコーナー

重原「ねえ、ぶっちゃけ近藤って建〇さんだよね」

圭介「おいコラッ！　みんなそう思ってるかもだけど口に出すよな！」

大吾「いや、だってねぇ？　まあ作者の禁〇好きは相変わらずという事だろ？」

圭介「それより俺、明智と伊吹にどう想われてるのか気になるんだけど……」

重原「そんなの決まってるじゃないかい？」

大吾「そーだ！　答えは一つしかないじゃなイカ！」

圭介「ウソだ……ど、奴隷だなんてウソだァァァ！」

大吾「……鈍感だな」

重原「鈍感だね……」

第１３４話，襲撃者からの警告

場の空気が凍った。理由は単純だ、さっきまで気絶していたハズの近藤が、突然目を覚まして縄を解いて欲しいと頼んできたからである。

当然明智や伊吹もはぁ？　っと、眉をひそめた。俺だってそうだ、近藤がどういう目的で解放を求めているかは知らないが、それでもアイツとはさっきまで戦っていたんだ。いつ攻撃してくるかわからないようなヤツを解放するなんて、そんな馬鹿げたことが出来るわけがない。

「馬鹿かお前？　そんな危なっかしいことが出来るわけ――」

「藤島圭介。俺はなぁ、金さえあればどっちの味方にでもつくのよ？」

「てめえ……それって武士としてどうなんだよ？」

「確かになぁ、だが……ちっとばっか生活に困ってるのは事実だ。だから俺は頼まれた仕事をするだけなのよ。大体サヴィエトに協力したっていくら働いても給料は同じだし、相手の思想も俺としては気に入らねえのよ」

金で動くって……アンタはどこぞの傭兵かよ。金でコロコロ忠誠を誓う相手を変えるような野郎なんて、ますます信用できないだろうが。仮に金を払ってこっちの味方になったとしても、サヴィエトがより高額の報酬を提示してきたら、コイツはそっちに行くってわけだよな？

まあ、サヴィエトの思想的に考えて、そんな事はまずないとは思

うけど……。
だけどなぁ……やっぱりこんなヤツは信用できない。

「なあ、そこの超能力者」

「ん、私か？」

近藤のヤツは今度は明智に話をかけた。まあ……なんとなく想像はつく。このメンバーの中で一番金を持っていそうな人は明智である。青山さんは今別荘で寝ているし、そもそも近藤は青山さんのことまでは知らないだろう。

「俺と契約してくれんかな？　無理言ってんのはわかってるつもりだが、契約さえすれば俺はアンタに忠誠を誓うつもりよ。アンタの命令次第で藤島圭介を守るか攻撃するかも決まるんだ。どうだ、悪い話じゃねえとは思うんだがな」

「どういうつもりなんだ？」

「俺にはなぁ息子がいるんだが、病弱でしょっちゅう入院してんのよ。その息子を救う為に俺は魔術ってヤツを覚えたんだけどな……それがまずかったのか、バレた瞬間口止めの代わりに職を失ってジリ貧生活になっちまったのよ。入院費とかも払わなきゃいけねえし、息子は病弱でまだ幼いが一応将来の事もあるだろう？　その為にも俺は金が欲しいのよ」

「じゃ、じゃあ、あんたはお金の為にサヴィエトに身を売ったの？」

明智と交渉するため、自らの事情を説明する近藤に伊吹がそう突っ込んだ。確かに俺も伊吹と全く同じ事を考えていた。確かに職を

失うのは大変だ。子供の夢を叶えてあげたいという、親の気持ちもわからないことはないけど……だけどなぁ。

「おいおい剣道のお嬢ちゃんよ。身を売ったってのは聞き捨てならないなぁ？　ただ、俺たち魔術師が飯食ってく為にはそこしか働く場所がなかったのよ。昔から魔女狩りだとかで魔術師は弾圧されいたんだがな、今日じゃあ科学も発展して完全に魔術は無かったものにされた。従って社会は魔術師に冷たいものなのよ。そんな状況で俺たちが働ける唯一の職場――サヴィエトってのにはなんつーかなぁ、僅かに希望ってのを持ったのよ」

希望を持ってそこに就職したのかよ。って、就職した結果がこれってわけか。大体事情はわかったけど一つ問題があるぞ。コイツの言ってる事はホントの事なんだろうか？　出来る事なら俺だって信じてやりたいし、それが事実なら究極に苦しい生活を送ってるんだろうが……。

あんな事があった後だ。ひょっとすると近藤はウソをついているかもしれない。

人間、ウソなんて結構簡単につけるもの。俺だってウソのおかげで、修羅場を脱出した事ならいくらでもあるんですぜ。増してや近藤はプロだ、その手のウソなんて簡単に思いつけるだろう。

そう思っていたのは俺だけではなかったらしく――、

「明智殿、耳を貸してはダメなのです。彼は言葉を武器にしているのですよ？」

「そんなことはわかってる。私もこんな話を信じるつもりはないぞっ」

「おいそこのアホ毛ちゃん？　お前さん、確かアルファ隊って異世

界の特殊部隊の一員なんだよな？」

「もきゅ？　……なんで拙者がそこの一員だって知っているのですか？」

「まあいい……信用を得る為にも話してやるよ。お前さん達の所にはスパイがいるって話だ」

「す、スパイ……なのですか？」

スパイって秋葉原でも暮葉と話したよな。それで俺が外出禁止になって。まさかホントにスパイがいるってのかよ。だけど、そんなスパイが一体どこにいるんだ？

「おぅ、お前さん達も薄々気付いてはいただろう？　でなかったら、俺もこんな簡単にお前さん達を発見する事なんてできなかったのよ」

「……一つ聞きたいのですが、スパイは一体どこにいるのですか？」

「さあな？　ただ、わかってる事は2人いたハズなんだが……片方とは最近連絡がつかないのよ。もう片方は相変わらず情報を送ってきているらしいけどな。まあ俺もサヴィエトでは下っ端だ。そこまで詳しい事情は知らねえのよ」

片方とはおそらく、白藤のことを言っているんだろう。白藤はクラスメイトになりすましたサヴィエトの魔法使いだった。それで俺と戦い、結局アイツはサヴィエトとは縁を切ったようである。

それでも、一時期はサヴィエトの魔法使いとして活躍していたんだ。だから近藤の言う2人のスパイのうち、片方は白藤のことで間違いないだろう。けど……もう一人は誰なんだ？　そのもう一人の

スパイってのも俺たちの身近にいる人物なのか？
近藤は本当に下っ端のようで、全部を知っているわけじゃなさそうだし……。

「了解なのです……あともう一つ聞きたいのですが？」

「あン、まだ質問があんのか？　まあいいけどよ」

「今回は……今回けーすけ様を襲いに来たのは貴方だけなのですか？」

「いんや、俺の他に……確かイタリア人のジジイだったかな？　この世界じゃ結構大物の魔術師が今度の作戦の陣頭指揮をやってんのよ」

「大物……ですか？」

暮葉はその言葉に反応したようだ。まあ、俺もだけど……。つーか、ホントにこの世界にも魔法使いっているんだな。二次元の特権だと思ってたんだけど……現実（リアル）恐るべし。

「詳しい事は知らねえが、今回の場合はソイツが俺の上司よ。言っとくけどヤツと戦うなら覚悟しといたほうがいいと思うのよ。ヤツ――アマデーオ・ベルサーニは近代西洋儀式魔術を極めてやがるからな」

アマデーオ・ベルサーニ。それが今回のボスキャラのようだ。つーか近代西洋儀式魔術って俺の無駄知識が正しいならば、ホントにただの儀式の為の魔法なんだろ？
そんなんで戦えるのか？　しかも、それこそ怪しい存在だぜ。近

代西洋儀式魔術ってホントに存在するものなんだろうか？　まあ、暮葉や近藤だっているし、全くないとは言えないが……。
……なんて事を考えていたその時、明智が一歩前に出て、
「なあ近藤、お前の言ってる事は全部本当の事なのか？」
「抵抗できない状態で嘘言って、何の得になると思うんだ？　拷問されるのはゴメンなのよな、だからさっさと真実を言っちまうのが俺なのよ」
「……信じていいんだな？」
「あ、明智殿！　そんな簡単に信じたらダメなのです！」
「そ、そうよ！　私にはよくわからないけど……でも、嘘ついてるかもしれないのよ！？」
「残念だけど嘘はついてねえのよな。近々、必ずアマデーオはお前さん達の前に現れるだろう。その時俺の言葉を信じなかった事を……後悔すりゃいいのよ」
近藤は口元を歪ませ、怪しい予言者のように笑っていた。
「……とりあえず、貴方の身柄は拘束するのです」
「フッ、好きにするがいいさ……だが、これだけは約束した欲しい。俺の家族に金を渡して欲しい……なんならお前さんの所の諜報機関を使って、俺の素性を探ったっていい。とにかく……俺の事はどうでもいいから家族だけは救ってほしいのよ」

近藤のその言葉に、迷いやためらいはない。まるで、ただ必死に我が子の事を想う――父親のような顔を近藤はしていたのだ。こんなヤツでも、我が子を想う気持ちは他人と変わらないらしい。

そんな近藤の表情を見て、暮葉は目を瞑り、

「……了解なのです。ご家族の事は調べ次第、生活に困らないだけの額は支給するよう、上と掛け合ってみるのです」

「悪ぃな……こんな悪人の頼みを聞いてもらってよ。それでも……子供は心配なのよな……っ」

言いながら近藤は夜空を見上げ、寂しげに微笑んでいる……ように俺には見えた。

やがて暮葉が連絡をつけたのか、アルファ隊の魔法使い達が駆け付け、縄で縛られた近藤をどこかに連行していった。そういえばいつも思ってるんだけど、アルファ隊に捕まった魔法使いってこの後どうなっちまうんだろうか？　なんか気になるなぁ……でも、ロクな末路は辿らないだろう。

興味はあるが聞くのも怖いし、その疑問は心の中にしまっておくとしよう。

その後の話をしよう。もう夜も遅いのでみんな帰って寝る事になったが……。

「それじゃあ藤島、私はそろそろ戻るな」

「おう、おやすみ明智」

「うん……その、私も魔法使いと戦う。藤島の力になりたい」

「お前がそう言ってくれるとマジで心強いよ……サンキューな」

「れ、礼なんて別にいらんぞ、友達だからな……っ」

明智は少し照れながら、背を向けて自分の寝床に戻っていった……。

っていうか、明智や生駒はどこに泊ってるんだろうか？

気になるけど……まあいいや、今度会ったらそれを聞くとしようか。

「圭介、私もそろそろ寝るわね」

「おやすみ、伊吹」

「おやすみ……言っとくけど、今度何かに巻き込まれたら私にもちゃんと言いなさいよ？」

「わかってるよ。もうお前には何も黙らねえから」

「そ、それならいいわっ。それじゃおやすみっ！」

伊吹も相変わらずだなぁ……まっ、あの不器用さが伊吹らしいっちゃ伊吹らしいが。

それで夜の砂浜に残されたのは、俺と暮葉だけだが……なんか、気まずい。そりゃあお風呂であんな事があったんだし、気まずいのは当然なんだけど……どうしよう？

何か会話すべきだよな。っていうか、その前にお風呂での事を謝るべきだよな。考えてみれば今が謝る絶好のチャンスじゃないか。

とにかく、こんな空気が何時までも続くのはダメだ。早く仲直りし

ていつも通りの関係に戻りたい。
戻れないにしても……それでも暮葉は友達だ。
友達じゃないにしても、悪い事をしたんだから謝らないとダメだ。
だから俺は――、

「暮葉！」

「……っ！」

びくん、と小さく震えた暮葉。ゆっくりとこちらを向いた暮葉の顔は……やっぱり恥ずかしさからか耳まで真っ赤に染まっていた。
え～っと……俺も恥ずかしいんだが、この後どうしよう？
って、謝ればいいだけの話だろ。ここまで上がる必要なんてないだろ。いくら恥ずかしいからって真面目な場面でコレはダメだろう。いい加減俺も落ちつけってんだよ……！
とにかく呼吸を整え、気持ちを落ち着かせてから俺は――、

「今日はその、ごめん！」

謝る方法はいくらでもあるが、その中でも究極のものが日本には存在する。
土下座。
そう、土下座だ。本来恭倹の意を示したり、深い謝罪や請願の意を表す場合に行う、日本古来の礼式の一つである。今でもたまにテレビで見かける……が、自己保身のために使う人もいるらしい。
俺も暮葉にそう思われているかもしれない。それでも俺は――暮葉に心から謝る為に土下座をしているのである。たとえ自己保身のためだと思われても、後悔なんかは絶対にしない――。

「……けーすけ様、とりあえず立ってくださいっ」

暮葉に言われて、俺はいいのかと思いつつも立ちあがった。
……あれ、なんかデジャブを感じるぞ？　相手は暮葉じゃなかった気がするが、似たような事がつい最近あったような気がする……気のせいだろうか？

「く、暮葉……怒ってないのか？」

「もきゅ？　その……けーすけ様、何か拙者を怒らせる事したのですかっ？」

「え？　じゃ、じゃあなんで……？」

「そ、それはその……えっと……っ」

「暮葉？」

「～～～っ！　伊吹さんの言う通りですっ、けーすけ様はばかけーすけ様ですっ」

ちょっと拗ねたように、林檎のように赤くなった暮葉は俺の事をそう呼んだ。
ば、馬鹿って……ちょ、結構傷つくんだけど？　いや、確かにね俺バカですよ？　成績だって赤点ギリギリだし元々初芝に入れる頭もなかったよ？　バカなのは自分でも認めるけど、それをストレートに言われると妙に虚しくなるんですよ。

「いや、マジで馬鹿でごめんなさい！　前の期末に英語３１点でごめんなさい！」

「そういう意味の馬鹿じゃないですよ……やっぱりけーすけ様は馬鹿です……っ」

「え？　ち、違うの？　じゃあ化学が３８点だった事に対してか？」

「はぁ……」

「えぇっ！？　ちょ、呆れられた！？」

それも違うってことは……じゃあ俺、言わなくてもいい事言っちゃったワケ？

俺の恥ずかしすぎるテストの点数が、暮葉にバレちゃったってわけか。

ちくしょう！　こんな点数誰にも言いたくなかったのに！

「もきゅ、仕方ないですね……」

「暮葉？」

瞳を閉じた暮葉が、そっと俺に歩み寄ってきた。その距離僅か１０ｃｍ。女の子がこんなに近くにいるというだけで、ドキドキするには十分であった。おまけに、こんなタイミングで俺は風呂であった事を思い出してしまった。う、ぐ……心臓がバクバク言ってやがる。

やべえ……ちょっとでも気を抜いたら、暮葉を抱きしめてしまいそうである。

けど、そんな事をしたらまたさっきみたいに――ええいくそっ、我慢しやがれ俺！

「けーすけ様……っ」

「お、おぅ……なん――っ！？」

それは――あまりにも突然の出来事だった。

あまりにも唐突すぎるだろ。

だって、何の前振りもナシだったんだぜ？

それなのにいきなり抱きつかれ、何故か暮葉の唇が――俺の唇と重なっていたのだ。

「――っ！？」

突然、口を塞がれた俺。別にこれがファーストキスというわけではない。前に事故で明智にキスされた事があった。だけどなんだろう？　その時とはまるで違う何かを俺は感じていた。

だけど、それが何なのかはわからない。そもそも考える事もできない。突然の出来事に頭の中は真っ白になっていた。唇の柔らかい感触。それと、女の子の甘い匂い、そして突然暮葉にキスをされたという事実に支配され、俺は完全に思考力を失ってしまった。

やがて唇が離れると、俺は自然と右手で自分の唇を触っていた。

……気のせいではない。まだ唇にキスの感触が残っている。そこでようやく――正気に戻ったように俺の脳が再び動き出した……ような気がした。

「おっ、おおおおおまえっ！　なななな何するんだよいきなりっ！？」

ダメだこりゃ……あまりのことに、全然呂律が回っていなかった。

全然落ちつけない。それどころか、鼓動は早くなるばかりであった――。

「せ、拙者だって初めてなのです！　〜〜〜っ！　で、でも！　これで全てチャラなのです！」

そう言うと、暮葉は恥ずかしさから、走って逃げるように俺の前から去って行った。

ちゃ、チャラって……一体どういう意味だったんだ？　それじゃまるで、風呂でし損ねたキスを今したみたいな感じになっちゃうじゃねえか。

もしかして暮葉のヤツ、俺とキスしたかった……のか？

いやいや待ておかしいだろ。これじゃ暮葉が俺の事が好きみたいじゃねえかよ。そりゃいくらなんでもおかしいだろ。そうだ、今時は友達同士でもキスをする時代。きっとそうだ、さっきのキスに特別な意味なんてないハズだ。

……だけど、もしもの話だ。

もしも、暮葉が俺に気でもあるのだとしたら、俺は――。

「……っ」

くそっ、考えただけでもドキドキするんだが……どうしちまったんだよ？

俺はその後もしばらく、夜の砂浜で一人月明りに照らされつつ、一人佇んでいた……。

第１３４話，襲撃者からの警告（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「話が全然進まねえ……」

伊吹「ど、どういう意味よそれ？」

圭介「いや、話数だけ増えてって話自体が進まないというか……」

伊吹「余計なシーン書かなきゃいいんじゃないの？」

圭介「ちくしょう、テンポ悪い言われたらどうしよう！」

伊吹「ちょ、泣かないでよ！　っていうかそれあんたの悩みじゃないわよね！？　絶対この小説のキャラの悩みじゃないわよね！？」

圭介「うあああああああああ！」

伊吹「……誰かこの人なんとかして……っ」

第１３５話，渡る世間は変態ばかり

翌日の朝の事である。折角明智達もいるのだからというわけで、俺たちは青山さんの別荘に明智達を呼んで室内で遊んでいたのだが、早速カオスな光景が目の前に広がっていた。

「ナーギちゃ～～～～んっ！」

「うあっ！　ちょ、す……すみにゃん……！？」

実を言うと別荘に呼んだのは明智のみ。生駒が加わると面倒だとみんなが思ったので、生駒には伝えていなかったハズ……なのだが、何故か生駒は明智をストーカーしていたのだ。その為生駒は明智がここにいると知っており、明智が別荘に入ってから僅か１０秒後にはご覧の有様である。

生駒は明智に抱きつき、ふにっと笑いながら明智にすりすりしていた。当然明智は迷惑そうにしており助けてやろっかな～なんて思ったが……スマン、生駒の暴走は俺たちじゃ止めれないわ。

「ナギちゃん私を放置プレイだなんてひどいよ！　あ、でもむしろ放置されてハァハァってのも捨てがたいかも！　いや、でもこの全てを包み込む胸が恋しいから放置は嫌だよ！」

それってただ明智のおっぱいが好きなだけじゃねえか。いや、確かに明智のおっぱいは大きくて素晴らしい感触だとは思いますが。

「ちょ、ちょっと離れろすみにゃん……みんなが見てるっ」

「いいんだよ関係ないんだよ！　私とナギちゃんの世界に他人なん

て関係ないんだよ！　特にクソ介なんて一番関係ないし早く死んだほうがいいと思うんだよ！」

今すっげえ事言われた気がするんですけど！？

ちくしょう、やっぱり俺生駒だけは大っ嫌いだ！

「さぁナギちゃん！　朝だし天気もいいので早速ベッドｉｎしましょう！」

「な、なんでだ？　もう朝だろ？」

「わかってないな～ナギちゃんは～。いいよ私がナギちゃんをじっくり調教して――ふ、にゃぎゃっ！」

あまりにもしつこすぎる生駒に、明智も我慢の限界に達したようだ。明智は生駒の右肩を掴んだと思いきや、そのまま必殺技を仕掛けた。

一本背負投。

そう、柔道の投技である。しかも凄まじいキレであった……流石明智、あの黒木を一瞬で沈めるほどの武術の達人ではあるが、柔道の技まであそこまで完璧に使いこなすとは……。

明智、やっぱり恐ろしい女の子である。しかしそれ以上に気味が悪いのは生駒であった。

「はぁ、はぁ……な、ナギちゃんに投げられた……ナギちゃんに痛めつけられたっ、ふは……気持ちいいよぅ。も、もっとお願いしましゅ……っ」

「ドＭかてめえは！」

あまりの気持ち悪さに、思わず俺はそう突っ込んでしまった。生駒は相変わらず変態的な笑みを浮かべて、ヒクヒクと身体を震わせていた。

流石の変態代表浅間部長も、この生駒には引き気味であった。

「……あ、あの……先輩はSですか？　それともMですか？」

「青山さん……一応聞くけどそれ何の為の質問なんだ？」

「圭介はドSよドS。圭介ほどいじめるのが好きな人はいないと思うわ？」

「誰がいじめっ子だよ！　伊吹にだけは言われたくねえよ！」

「じゃ、じゃあ先輩……その、わたしのことは……滅茶苦茶にいじめてもいいですよっ？」

「青山さんも少し黙ろうか。この変態淑女が！」

ダメだこりゃ。朝っぱらからカオスな事になってきている。そもそもの原因は生駒が明智に抱きついたり、ドMな姿を見せたのが悪いんだ。

そのせいで、余計なヤツまで話に乗ってきちゃったじゃねえかよ。

「ちなみにボクはドMだ！」

「このエロ兄貴！　あんたの性癖なんか聞いてないんだからなっ！」

「ぐはっ！　はぁはぁはぁはぁ、はぁ～あっかり～んっ！　あっかり～んの攻撃がボクの鳩尾にいいいいいい顔面にいいいい！　も、

もっと！　もっとこの気持ち悪いブタ野郎に最近空気のあっかり～んの拳をカモぉ～んっ！」

「誰が空気だよこの浅間ブヒデ樹！　あと、あたいは空気じゃないんだからなっ！」

浅間部長はどうしようもないドMだな……つーか、色々ネタが混ざりすぎだろ。とりあえず浅間部長が某ド変態ライトノベルと、主人公空気漫画を読んでいる事はわかったよ。

あかりも不憫だぜ。名前が被ってるだけで浅間部長にネタにされるんだからな。

だけど密かに思う事があるんだ。あの兄妹、実は仲いいんじゃないか？

あのＳＭプレイ……なんかその、息がピッタリな気がするんだが……。

「全く、ドＭの変態が２人。発情期に突入中の後輩とドＳの後輩。ブラコンの妹にエロゲオタの変態に……木下の友達は変態ばかりだな」

「あはは、言われてみるとそうかもなのです……っ」

「オイコラ明智！　誰がエロゲオタの変態だっ！」

「そうだよ！　お兄ちゃんは妹に欲情する変態さんだけど、葵は純粋にお兄ちゃんを愛しているだけだから変態じゃないよっ！」

嘘つけ、俺は知ってるんだからな、葵が兄妹系のエロゲーを所持している事を。とにかく葵はブラコンの危ないド変態である。言っとくが、俺は兄妹系のエロゲーではなく、そのゲームに妹ルートが

あるだけで、別に特定ジャンルのエロゲーは持ってないぞ？
強いて持っているとすればそう、後輩キャラが沢山でるエロゲーなら持ってるぜ。
……すみません。どうせ俺も変態です、ホントごめんなさい。

「ぶ、ブヒィィィィィィィィ！　あ、あっかり～ん！　あっかり～んっ！」

「アッカリ～ン言うなブヒデ樹！」

「はぁ、はぁ……な、なぎ……ちゃん……んはっ」

「……えへへ。わ、わたしも先輩にいじめられて……えへへっ」

「クーにゃんも明智先輩もわかってないんだよ？　そもそもブラコンって言うのはね――」

しかし、こうして室内を見ていると素直に思うよ……ひどい現実だ！

マトモなのは暮葉と明智と伊吹だけかよ。
いや、考えようによっちゃあ三人ともマトモじゃないぞ。明智は超能力者だし、伊吹はツンツン突っぱね＝ツッパリ伊吹ちゃんだし、暮葉はその……っ。
その時、ふと昨日の夜の事が脳裏に浮かんだ。
月明りに照らされた砂浜。そこに2人っきりの俺と暮葉。暮葉が抱きついてきたと思ったら――俺は暮葉に唇を奪われていて……。

「……っ」

「ん、どしたの圭介？　熱でもあんの？」

「えっ？」

「なんか、顔真っ赤よ？」

昨日の事を思い出していたら、伊吹に心配されてしまった。

多分、心配されるほど赤くなっていたんだろう。だってねぇ……

あんな不意打ちで女の子にキスなんかされたら、誰だってドキドキはするだろ。

「な、なんでもねえ……っ」

「ホントに大丈夫なの？　昨日あんな事があったから、どっか悪くしたんじゃないの？」

「大丈夫だって。怪我もしてねえし、風邪もひいてねえよ」

「……っ、なら……いいけど……っ」

伊吹がここまで俺を心配するなんて。昨日に引き続き珍しいな。

妙に心配性な伊吹といい、不意打ちキスをしてきた暮葉といい……

不思議な事が次々と起こっていく気がする。

伊吹はどうして突然俺を心配なんて？　暮葉の昨日のキスは一体……？

俺はこのカオスな状況の中、ずっと2人の変化に思い悩んでいた。

それから数時間――俺たちはポーカーだの麻雀だの、午前中は家の中で遊んだり楽しく話をしたりして、そこそこ楽しく有意義に過

ごしていた。やがて、昼になると暮葉と一年生グループが買い物に出かけ、浅間部長と生駒は未だにポーカーやブリッジで対決をしていた。

あの2人……一体いつになったら決着つくんだ？

博打が強いと言う浅間部長と生駒――確かに山本五十六もビックリなほど強かった。

モナコやラスベガスに行っても、フツーにやっていけそうな実力であった。でも、2人ともどうしようもない変態って……まさに残念なイケメンと残念な美少女だな。

俺は買い物にもついて行かず、2人の対決も観戦せず――ただ、ベランダから太平洋をず～っと眺めていた。はぁ……海は広いし、かもめは気楽そうでいいよなぁ。

「藤島……っ」

不意に背後から声を掛けられる。

このハスキーボイスは間違いない。そこにいたのは、一つに結ばれた長い黒髪の少女。

「あ、明智……？」

「さっきから思っていたんだが、一体どうしたんだ？　悩みごとでもあるのか？」

……ひょっとして、明智はさっきから俺の事を見ていたのか？

こんな事を言うんだから多分そうだろう。今朝からずっと暮葉と伊吹の事を考えていた俺を、明智はずっと見ていたんだ。

「いや、悩みはあるっちゃあるけど、大したことじゃねえよ」

「そうなのか？」

「おう！　男はそんな簡単に悩まんものなんだぜ」

「……それって、自分が軽いって言ってるようなもんじゃないか？」

「ぐはっ！　違う違います違うんです！」

「そ、そうか……まあ別にそれはどうでもいいんだ。いくら軽くても藤島は藤島だしな」

……うわぁ、今さりげなく馬鹿にされた気がするぞ。

俺ってそんなにチャラく見えるのか？

確かに、今着ている黒いTシャツには厨二病的な模様が入っている。それに、今日のジーパンは微妙にダメージ加工もしてあるし、これで髪が金髪でメッシュや盛り髪だったらチャラくは見えそうだ。

だけど、そう言うのって中身だろ。俺ってそんなに軽くて女癖悪いか……？

「でも、もしホントに悩みがあるなら相談するんだぞ」

「明智、いいのか？」

「当たり前だぞっ。私と藤島は友達……だからなっ」

「……そっか、そうだよな。ありがとうな明智」

「うん、気にするな。友達なんだから相談に乗るのは当たり前だぞ。それじゃあ私はそろそろ下に戻るな」

「おう」

背を向け、明智は屋内へと戻っていった。

仲間想いでクールでお姉さんっぽくて……明智はいつも通りだったなぁ。

だけど暮葉と伊吹は……う～ん、今日も何か違和感を覚えるな。

なんでだろう？

……まあ、悩んだって仕方がないか。とりあえずは一旦中に戻ろう。

第１３５話，渡る世間は変態ばかり（後書き）

・後書きトークコーナー！

全員「＼アッカリ～ン／」

あかり「ん、なんだよ？　あたいに何か用か？」

浅間部長「ダメダメ！　そこは【は～い！】って元気よく登場しないと……」

あかり「またそれか！　いい加減にしろよなブヒデ樹！」

浅間部長「ぶ、ブヒィィィィ！　も、もっと打ってぇぇぇぇぇっ！」

圭介「お前らいい加減にしろよ……」

葵「あっかりんは愛されてるね！」

第136話，砂浜のガレオン船

もしもの話をしよう。もしも、海で遊んでいたらいきなり――海が盛り上がって海中から巨大な木造の船が現れたら、どういう反応をするだろうか？

普通はそんなファンタジーな事なんてありえないと思うか、何言ってんだ？　潜水艦だって一応は船じゃないかよ、潜航できるじゃないか？　と思うことだろう。

だが、そんな常識を覆すように――もし本当に木造帆船が浮上してきたとしたら？

普通は驚いたり腰を抜かしたりするだろう。俺たちも例外ではなかった――。

「な、なんなのよこれ！？」

「ふ、船が浮上してきやがったぞ！？」

「す、すみにゃん！　は、浜ってあの船が沈むほど深かったっけ！？」

「いや、ここは浅瀬だぞ……っ、漁船でも座礁するところなのに……っ！」

「……間違いない、これは――魔法なのです！」

砂浜で遊んでいたら突然、でっかい船が浮上してきたのだ。

船は帆船。それは昔の戦争で各国が運用したガレオン船だ。側面には何十という数の大砲が並べられており、何故かイタリアの国旗が掲げられていた。意味不明である。そもそも、帆船が浮上してく

れ時点でありえないってのに、こんな浅瀬じゃ明智の言う通り――普通は座礁するだろ。
それなのにこの船は……一体どうなってやがるんだ？
そもそもどうしてこんな事になったのか……それは時間を遡る事2時間前――。

「よし、今日も海で遊ぶぞーっ！」

「わーい！　二日連続で海だよ！」

「あ……ま、待ってよあかり、葵……っ！」

午後、やる事のなかった俺たちは結局――夕方まで海で遊ぶ事にしたのだ。
昨日に引き続き、そこら中に水着のギャルがいっぱいで……ふふふ、いい眺めだぜ。
やっぱり男にとっては天国ですなぁ。夏の海ほど見ていていいものはない。まあ海に来ている女の子なんて大抵はリア充だけどさ……それに、俺は浅間部長みたいにナンパはしないぞ。こう見えても俺は普通の恋愛がしたいのだ。だから、ナンパから始まる恋愛は浅間部長に任せておくよ。

「サイッテー！」

「ぐはっ！　な、殴られた……はぁはぁ、だけどそれがイイ……ッ！」

まあ、浅間部長は言動が変態じみてる上にドMだ……ナンパで彼女ＧＥＴは無理だろう。

ていうか、浅間部長がナンパに成功したら――多分世界が崩壊すると思うんだ。

「ふわぁぁぁっ！　な、ナギちゃんのおっぱいに顔を挟めるの最高ぉーっ！」

「いい加減にしろっ！　か、海底に沈めるぞっ！」

「か、海底に沈める……？　なにそれ、すっごく興奮するよ!?」

「き、気持ち悪いぞ……っ！　最近すみにゃんが気持ち悪いぞっ！」

コイツらは相変わらずだ……っていうか気のせいかな。生駒の変態度が出会った頃よりずっとひどくなっている気がするのは？　うん、気のせいだ。気のせいだと信じたいぜ。

それにしても……た、確かに明智の胸はすごい。あの破壊的なボリューム、そして以前服の上からは揉んだが素晴らしい弾力。完璧だ、明智の胸は最高のおっぱいである――。

「ちぇすとーっ！」

「ついでに拙者もっ！」

「ぐ、は――っ!?」

不意に衝撃が身体を襲う。

――2人の蹴りである。

暮葉と伊吹の飛び蹴りが俺の背中に突き刺さり、俺を後ろからぶっ飛ばしていた。

「こらぁてめえらっ！　今の俺じゃなかったら気絶してたぞ！？」

前に倒れかけた身体を立て直しながら、俺は叫んだ。

よかったよかった、幸い大した威力ではなかった。どうやら彼女達は手を抜いていたらしい。

……って全然よくねえよ。そもそも俺はなんで蹴られたんだ？

「うっさいわね！　スキンシップよスキンシップ」

「そうですよ！　変態のけーすけ様には少しお灸をすえる必要があったのです」

「今お灸って言ったろ！？　何のお灸だよ！？」

「……ばか圭介、変態っ」

「けーすけ様……そんなに大きいのが好きなのですねっ」

「な、何言ってんだお前ら？　とりあえず落ちつけ、なっ？」

そうは言ってみたが、結局ジト目の2人に睨まれてしまった……。

やっぱりコイツら合宿に来てから様子がおかしい！　今までこんな事はなかった。確かに2人の胸は大きくはないけど、2人とも今まで特に思い悩んではいなかっただろ？

それがいきなりどうしたんだ。なんでいきなり気にするようになったんだ？

考えてもわからん……と、とりあえずここで貧乳とか思ったら殺される。あえてその話題に触れないように接して、これ以上暴行されないルートに突入しなければ――！

「落ちつけ2人ともっ！　俺は別に明智を見ていたわけじゃない。あの海に何かあるな～なんて事を考えていたんだよ」

「……」

「……」

「ホントだって！　そんな腐った魚を見るような目で見るよな！？」

「……けーすけ様、冗談にしては下手すぎるのです」

「ったく、あんたはもう少し上手い嘘つけないわけ？」

「あ、バレちゃいました……？」

「バレバレよばか圭介……っ」

「バレバレなのです……」

うぐぐ……ちくしょう、どうしてこういう時に限って口下手なんだよ。誤魔化して回避ルートに突入するどころか、余計2人に変な目で見られるようになっちまったじゃねえか。

あ～あ。ホントに海から何かが出てくればよかったなぁ。例えばお宝とか、昔沈没した海賊船とそれに乗っていた海賊たちの骸骨とか。

そんなファンタジーな事が起これば、今の作戦も上手くいっていただろうに……。

……と、考えていた――まさにその時。

「う、わ――っ！？」

突然、大地が揺れ始め、波が荒々しく波しぶきを飛び散らす。
轟々とうめき声を上げる大地。それは地震のものとも違う揺れ方であった。
だけど――それ以外になにがあるんだ？　それ以外に何も思い浮かばなかった俺たちは――。

「な、なによ！？　地震！？」

「す、すみにゃんっ！」

「抱きつくなっ！　それより……万が一の事を考えて高台に逃げるぞっ」

明智が冷静に常識的な判断をする。流石は明智、この状況でも落ちついていられるとは……伊達に風紀委員やってないな。とにかく、もしもの事も考えて早く逃げたほうがいいな。揺れの規模から考えて多分大丈夫だとは思うが、それでも万が一という事もある。
全員と合流して――さっさと砂浜か逃げよう。
――と思っていた、まさにその時であった。

「きゃあああああああああっ！」

人々の悲鳴が聞こえる。だが、それをかき消す勢いの轟音も響いた。
その原因は巨大な水柱であった。まるで悪夢でも見ているかのような光景、舞い上がった水は次第に下へ落ちて行き、やがて水柱の中から巨大な物体が見え始めた。

「……っ！」

俺……いや、周囲にいた人々すべてが、その物体を見て思わず絶句してしまった。

海底から飛び出してきたものは、一隻の帆船であった。大航海時代に大海原を渡っていたような木造で、四本のマストがついた古めかしい船。しかも、側面には数十という大砲が並べられていた。スペインの無敵艦隊（アルマダ）にでも所属していそうな、そんな雰囲気のガレオン船である。

ただし、掲げられている旗は――何故かイタリアの国旗であった。

「ウソだろ？　船が……浮上してきやがった？」

「藤島！　あれはなんだ……？　お前、少しは詳しい方なんだろ？」

――そう、俺はこう見えても軍オタってほどではないが、少しだけこういう兵器とかに関する知識を持っていたりするのだ。理由は簡単、ラノベ読んでたらたまに出てくるんだよね。

「多分ガレオン船だよ。昔ヨーロッパ各国で使われた軍艦だ」

「す、すみにゃん！　は、浜ってあの船が沈むほど深かったっけ！？」

「いや、ここは浅瀬だぞ……っ、漁船でも座礁するところなのに……っ！」

「そもそも帆船に潜航能力はねえよ」

明智の回答を補足するように、俺はそう付け加えた。あの形で潜れるわけないだろ、仮に海中に潜るとしたらそれは――敵艦に撃沈

された時くらいであろう。
しかも一度潜ったら最後。帆船じゃ二度と浮上する事はできないハズだ。
それなのに……これは一体どういう事なんだよ。

「……っ！」

「ん？　どうした暮葉？」

「間違いないのです……けーすけ様、この不可解な現象は魔法によるものなのです！」

「魔法？　魔法でこんな事が出来んのか？」

「詳しい事はまだわからないのですが、物体を具現化する魔法は確かに存在するのです」

なるほど……確かに魔法によるものだったら、あらゆる法則を無視したような現象が起こったとしても納得できるな。そもそも、魔法による現象を深く追求するのも馬鹿馬鹿しい。
だけど、なんでこんな事が起きたんだ。一体誰が何の為にこんな魔法を？
……まさかとは思うが、このふざけた光景も――。

「まさか……サヴィエト！？」

「可能性は高いのです。そもそもけーすけ様がいる場所でこんな事が起こるなんて――怪しいにもほどがあるのですよ！」

やっぱり連中の仕業なのか？　じゃあ、近藤ってヤツが言ってい

た事も本当なのか？
　なんて名前だったっけ……確かアマデーオ・ベルサーニ。イタリア出身の地球じゃかなり大物の魔法使い――らしいが。ホントにそいつが来やがったってのかよ。

「ねぇちょっとっ」

「ん、なんだ伊吹？」

「さっきから思ってたんだけど……葵ちゃん達やあんたの部活の部長さんはどこに行ったのよ？」

「えっ？　そ、そういえばさっきから見てねえぞ？」

「ねぇ、もしかしてあの船の中に……」

　伊吹が心配そうにそう言うが……とりあえず落ちつけ、そして思い出そう。海に来た時葵達がはしゃぎながら海に入って行ったのは覚えている。一方の浅間部長は、確か砂浜でナンパしていたぶん殴られていたような気がするんだ。それ以降葵達と浅間部長の事はよく見てはいなかった。
　だけど、葵達はずっと海で遊んでいたハズである。
　じゃあやっぱり葵達は船の浮上に巻き込まれて――。

「……っ！」

「ちょっと待ちなさいよ！」

　衝動的に船のほうへ駆けだそうとした俺の右手を――伊吹がぎゅっと握ってきた。

その手にはやたらと力が入っている。男の俺でも振り解くのが難しいほどに――。

「あんた、行ってどうすんのよ？」

「決まってんだろ！　あの中に葵達がいるかもしれねえ、確認しにいくんだよ！」

こんなクソやばい状況の中、妹を全く心配しない兄貴がどこにいる？

妹だけじゃない。大切な後輩２人も行方不明状態なんだ。もし船の中にいたら――やる事はひとつしかねえだろ。大切な妹と後輩を――あの場から助け出す……！

「だけど藤島。得体の知れない船に侵入するのは危険だぞ？」

「そうですよ！　もしサヴィエトだったら……けーすけ様の身が危険なのです！」

「クソ介。私はこれっぽちも状況がわからないけど、行くのはやめたほうがいいと思うよ？」

全員揃って俺を止めようとする。危険なのは百も承知だ。俺が連中に拘束される可能性だって十分あるだろう。だけど、仲間がもしあそこにいるとしたら――放っておけるわけがない。

だから俺は――この足を止める事なんてできない。

「それでも俺は行く。葵達を見捨てる事なんてできるかよ」

「……わかった、じゃあ私も行くぞっ」

「拙者も――けーすけ様や明智殿を護衛するのです！」

「し、仕方ないわね……昨日約束したもんね、私も一緒に行ってやるわよ！」

明智は指の間接を鳴らし、暮葉と伊吹もどこから持ってきたのやら……一期一振（それぞれのぶき）と竹刀を持ち、あの船へ共に突撃すると言ってきた。

三人とも本気だ。本気の眼差しを俺にぶつけ続けている。それだけではない、三人から出ているオーラからも本気を感じられた。三人の表情に迷いや躊躇いはない。まったく……これじゃあ三人の願いを断れないじゃないか。

それになんだかありがたいな……正直言って、あんなの一人でなんとかなるとは思えないし。

「わかった、三人ともサンキューな」

「よし、そうと決まれば行くわよ」

「すみにゃんはどうするんだ？」

「わ、私は行かないよ！？　危険な事は嫌だよっ！」

「――それでは皆さん、行きましょう！」

暮葉が最後にそう言い終えると、生駒を除いた俺たちは、突如現れたあのガレオン船へ侵入すべく突撃を仕掛けた――。

第１３６話，砂浜のガレオン船（後書き）

・後書きトークコーナー！

作者「どうもです、今日は更新遅れて申し訳ございません！　実は先日体育でやらかして捻挫しちゃいまして……嫌だって言っていたのですけど、結局病院に行ってきたので執筆時間がありませんでした！　ホント申し訳ございません」

暮葉「けーすけ様みたいに丈夫じゃないのね」

伊吹「いや、現実世界であんなに丈夫だったら気味悪いでしょ？」

凪紗「っていうか、バスケで捻挫って……作者は能力ナシの早川並にもやしなのか？」

作者「ほ、ほっといてくだせぇ……っ！」

圭介「誰が気色悪いんだよ！？　悪かったな身体が丈夫で！」

第137話，サンティシマ・マードレ（前書き）

どうも、作者です！
あれ、おかしいな。０時に時間設定してたハズなのに……？
更新遅れて申し訳ございませんでした！

第137話，サンティシマ・マードレ

帆船への侵入は比較的簡単であった。暮葉が魔法で空を飛び乗船すると、船上にあったロープをこっちに降ろしてくれたので、ロープを伝って残りの俺たち三人は帆船に乗り込んだ。

すげえな……アニメや映画で見たまんまだぜ。まさか、保存用でもない木造帆船に乗る事が出来るとは思いもしなかったぜ。だけどどういう事なんだ？　俺たち以外に誰もいない。こんなにデカい船に俺たちだけって……あまりにも不自然すぎるぞ？

「誰もいねえな」

「な、なんなのよこれ……映画のセットじゃないわよね？」

「流石に無理があるぞ。だけど人の気配が全くないのは不気味だな……」

武術の達人――明智でさえ人の気配を感じれない。

つまり、ここには誰もいないという事である。見張りすらいないって……ホントにこれはサヴィエトの仕業なんだろうか。アイツらなら大戦力で一気に押してきそうな気がするのに。

「油断は禁物なのです。魔法に常識を求めてはダメなのですっ」

「それくらいわかってるけど、それにしたって誰もいないのは不自然じゃねえか？」

こんな大船なら、そこそこの人数がいなけりゃ動かせるハズがない。そもそもガレオン船は昔の軍艦である。今の海軍は態々人を使

わなくとも、自動的に装填はできる。そもそも、現代の海軍は相手が砲で十分な不審船でもない限り、砲撃戦なんて行わずにＶＬＳからミサイルをぶっ放すだろう。

だがガレオン船は違う。

この木造帆船に、ミサイルなんてハイテクなものが搭載されているわけがない。辛うじて複数の大砲が舷側に搭載されている程度である。そもそも大航海時代の艦船に、自動装填装置なんて立派なものがあるわけないのだ。

だから、大砲を撃つためには人の力がどうしても必要である。

それなのに、どういうわけか――砲兵の姿さえ確認できなかった。

「……っ！　気を付けろ、誰か来るぞ……っ！」

「……っ！？」

その時、明智が何者かの気配を感じたようだ。明智に続いて暮葉や伊吹も反応し、最後に俺も背筋が凍るような気配を感じた。その途端、ジャラジャラという不快な物音と、コツコツという不気味な足音が耳に入ってきた。船内からだ、あの船内への入り口から音が聞こえてくる。

扉は閉められておらず、中には灯りがないせいか、真っ暗で中身が何も見えない。

それがむしろ不気味だ。迫ってくる者の姿さえ見えない。だが、それも音が聞こえてきた最初の数十秒のみの不安であった。相手がわからないという不安はすぐに――不気味な服装の相手に対する不安に変わっていった。

何故ならヤツが――アマデーオ・ベルサーニと思われる老人が現れたからだ。

「ようこそ……サンティシマ・マードレ号へ」

老人は2m近い長身の男であった。重そうな聖職者の法衣を身にまとい、首からは白銀に輝く十字架を提げていた。右手には紫色の金属製の杖、左手には厚く古びた本を持っている。

そんな不気味な老人が不敵な笑みを浮かべ――渋く、鋭い声で語り掛けてきた。

「あんた、何者よ！」

甲高いアニメ声で叫んだのは――伊吹であった。

伊吹は目の前の不審者を威嚇するように叫び、そして竹刀を構えて睨みつけた。

老人は伊吹の事を見たが、その表情に変化はない――相変わらず、不敵な笑みを浮かべて右手に持つ杖を親指で、ゆっくりとさすっていた。

「そう気張るでない娘よ。本番は力を抜かないと……相当痛く苦しいモンらしいぞ」

「……っ！　あ、あんたなに言ってんのよ！」

言葉の意味を理解したのか、伊吹は顔を耳まで赤くし、甲高い声で叫んだ。あのジジイ登場していきなり下ネタを言うとは……もしかしてただのエロジジイなのか？

「ほほう？　もしかしてその様子だと処女（ヴァージン）なのか」

「ふ、藤島以上の変態だぞ……っ」

「明智、俺があそこまでオープンに見えんのかよ？」

「それで、結局貴方は何者なのですか？」

今度は暮葉が確認の為に、目の前にいるエロ老人にそう訊いた。

恐らく、あの老人がアマデーオ・ベルサーニだと思われるがまだ確証はない。最初からそうだと決めつけるのは失礼だ。だからこそ暮葉は確認を取ろうとしたのだ。最も、確認を取る必要はなかったのかもしれないが。

「人の名を聞く時はまず、自分から名乗ると教わらなかったのか？ならばこのアマデーオ・ベルサーニがお主らの礼儀を教えようか？」

「てめえがアマデーオ・ベルサーニか。ならてめえの目的は俺を捕える事なんだろ？」

「その通りだ目標（ターゲット）。私の目的は、藤島圭介――貴様という若造を捕えて上に身柄を引き渡す事だ」

アマデーオは右腕に持つ杖を力強く握り、左手を揺さぶって古本を開いた。

魔術書（グリモワール）のような本は、中身こそよくは見えないが、焦げ茶色の表紙には霞んだ金色の見慣れない文字が記されていた。よくはわからないが、おそらくあれはラテン語。かつては広く使われた言葉で、今なお専門用語などではよく使われる言葉だ。

まあ……おバカの俺にはわからないけどね。

「魔法日記１２０頁。記された記録を具現化――再現せよ」

アマデーオが意味不明な言葉で、呪文のような事を言っている。

あくまで推測だがあれはラテン語であろう。あの本にラテン語が書かれていると言う事は、アマデーオはあの本をラテン語で読んでいるということになる。ラテン語喋れるって……今じゃイタリア人でも少ないと思うぞ？

アマデーオは意味不明なラテン語を言い終える。

すると、ドバァ！　と水面が大きく爆発した。水を割る轟音、水柱はガレオン船のマストを超える凄まじい高さにまで昇った。高さだけではない、太さもガスタンク二つ分ほどはあるだろう。

「う、ぐ……っ！　くそっ、今度はなんだ……！」

水飛沫が豪雨のように降り注ぐ。目を開けている事すら辛いほどの勢いだ。そんな水飛沫もやがては降り終え、視界が戻ったが――そこには信じられない光景が広がっていた。

一回仰げば街を吹き飛ばしそうな、それほど巨大な純白の翼を生やし、金色に輝く輪を頭上に持つスカート一枚の筋肉質の男が、神々しく輝き宙に浮いていたのだ。

「ちょ、なんなのよ……これっ！」

「どういうことだ？　あの巨大な翼の男は誰なんだ？」

一般人の伊吹と超能力者の明智には、もはやアレは理解不能であった。

というか、俺もサッパリわからないんだが……なんなんだアレ？　一体あの男は何者なんだよ。とりあえず人間じゃない事は確かだろうが。

「しょ、召喚魔法……ですかっ？」

俺たちが驚きのあまり、言葉を失っている中――暮葉は確認するようにそう呟いた。

その呟きが聞こえたのか、アマデーオはニヤリと笑い、

「その通り。聖書正典にはミカエル、ガブリエル、ラフェエルと言った天使の名前が登場する……アレはその中でもガブリエルという存在。近代西洋儀式魔術では西の方角、青色、水の元素の象徴。まあ……あくまでガブリエルの力の一部を召喚したに過ぎないが、それでも天使の力は偉大だ。人間……いや、本気を出せば日本程度なら10分で水没するだろう」

「てめえ……そんな危険なモン召喚してんじゃねえ！」

「安心するがいい……貴様ら若造が抵抗しないのなら何もせん。仮に天使の力を使う事になっても――私のサンティシマ・マードレ号が壊れては困るんでな。本気は出させないぞ……フッフフフ」

これがアマデーオ・ベルサーニ。近代西洋儀式魔術の使い手か。確かにとんでもねえ魔法使いじゃねえかよ。下手すりゃ世界を変えちまうような――そんな実力の持ち主だな。

だけど何故だ。こんないかにもキリスト教徒な爺さんが、なんだ宗教そのものを否定するような組織（サヴィエト）の一員として戦っているんだ？

「冗談じゃない。藤島は絶対に渡さない、私はお前に降伏などしない」

「私も……悪いけど、あんたみたいなムカつくヤツ相手に――引き下がる理由なんてないわ」

「拙者も引く気なんてありません。けーすけ様を絶対に護ってみせ

るのです！」

「俺もだ。てめえなんかに捕まってたまるかよ。それと、俺達は葵や部長がこの船にいるのか調べなくちゃならねえ。それを邪魔するってんなら――てめえをぶん殴ってでも先に進んでやる！」

俺達全員の全力の叫び。アマデーオは全ての叫びを聞くと、ため息をつき金属製の大きな杖を天を仰ぐように持ち上げた。杖の先端が光っている。おそらく日光でも反射しているのだろう。

杖を持ち上げたアマデーオは、笑みを浮かべたまま、

「殺せ、ガブリエル」

っと、そこの天使に命令しやがった。すると、ガブリエルの目が光り――同時にアマデーオは船内へ戻って行った……。

「ま、待て――う、ぐっ！」

俺はアマデーオを追おうとしたが、瞬間――何かが目の前で爆発した。

正確に言うと爆発ではなく、何かが甲板に落下してきたのだ。まるで、砲弾のように落下してきたなにかのせいで船内の埃が舞い上がり、埃が風に流されると、大きな穴が木造の甲板に開いていた。

「藤島！」

「ちょ、圭介っ！」

「く、そ……俺は大丈夫だけど、今のは……？」

見上げると、ガブリエルの周囲には文字通り――水玉が二つほど浮いていた。

遠いので小さく見えるが、おそらく１ｍはあるだろう。４６ｃｍ砲弾を二つ合わせた以上の大きさの水玉が、さっき俺を狙って甲板に穴を開けたのだ。

ちくしょう、こんなの喰らったらいくら俺でも死ぬぞ？

「……けーすけ様、ここは拙者に任せてお二人と共に先に行くのです」

「お、おい暮葉？」

「ちょ、あんたはどうすんのよ！？」

「伊吹の言う通りだ。てめえ一人で勝てる相手じゃねえだろ」

「勝てるなんて思ってないのです……でも、ガブリエルと真正面から戦えるのは拙者だけなのです。それより皆さんはアマデーオを追って欲しいのです！」

だけどガブリエルは天使だぞ？

確かにアマデーオはあれでも力の一部だって言っていたが、それでも日本をたった１０分で壊滅させる程の実力の持ち主だ。暮葉一人じゃ危ないに決まってる。

だったら全員で戦ったほうがマシだ。勝てる可能性は低いが……それでも、暮葉一人に戦わせるよりは遥かにマシなハズだ。

「悔しいが木下の言う通りだぞ。私の能力じゃガブリエルとは相性が悪い……２人とも、ここは木下の腕前を信じるしかないぞ」

……だけど、そんな俺の考えを否定する一言を――明智は言った。
そういえば、明智は発火能力者だったような気がする。確かに水タイプのガブリエルとは相性が悪いな。
それに考えてみれば、相手は空飛んでるじゃねえかよ。俺や伊吹じゃ射程距離圏外で攻撃なんて絶対にできないだろうし、精々ガブリエルの攻撃を避けるのが限度だろう。
そして暮葉は確か危なっかしいが――魔法で空を飛べたハズだ。

「……わかった、暮葉……死ぬなよっ」

「圭介、ちょっといいの？　暮葉を一人であんなヤツと――」

「じゃあ俺達に攻撃手段があんのかよ？」

「そ、それはその……ないわねっ」

「お前は知ってると思うけど、アイツはあれでも風系統の魔法使いだ。ガブリエルと唯一戦えそうな力を持ってんだ。だから今は暮葉を信じるしかねえよ」

「わ、わかったわよ……！」

よし、伊吹も渋々だが受け入れてくれた。
あとは暮葉を信じて――俺達は船内に突き進むだけだ！

「木下……頼んだぞっ。藤島、伊吹、突っ込むぞ！」

「おう！」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよっ！」

こうして俺と伊吹と明智は、サンティシマ・マードレ号の内部へと突き進んだ。ガブリエルを足止めすると言う暮葉を残して――。

頼むぜ暮葉……絶対アマデーオをぶっ飛ばして帰るからよ。

それから死ぬんじゃねえぞ――絶対に……！

第137話，サンティシマ・マードレ（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「あたい、全然出番がないけど言わせてくれ……これ勝てんのか？」

千早「さあ……？　相手は天使と変態老人……だよね？」

葵「だいじょーぶだよ！　お兄ちゃんは覚醒すると髪が金色になって逆立って、戦闘力だって５０倍にまで膨れ上がるんだから！」

あかり「おお、強いな！」

千早「す、すごいです……先輩っ」

葵「特にスーパーお兄ちゃん3はすごいよ？　眉毛が無くなるし髪伸びるし……魔〇ブウにだって勝てるんだから！」

あかり「すごいな圭介っ！」

千早「お、男の中の男ですね……先輩……っ！」

圭介「おいコラ、勝手に俺をサ〇ヤ人にしてんじゃねえ！」

第１３８話，召喚天使【ガブリエル】

拙者――木下暮葉は一期一振を構え、アマデーオによって召喚された天使――ガブリエルと３０ｍほどの距離を空けて対峙しています。それでもガブリエルは大きく見えます。ガブリエルの本体自体は大した大きさではありませんが、ガブリエルの背中から伸びる純白の翼が巨大なのです。

拙者は幸いこの世界の宗教は信じていません。それどころか、拙者はこの世界の宗教に関しては全くの無知なのです。なので、この世界の天使を攻撃する事に、大した躊躇いはないのですが……。

やっぱり気が引きるのです。たとえ未知の宗教のものでも――天使は天使なのです。

増してやこの異常なまでの魔力。果たして、拙者で5分も持つでしょうか。ガブリエルと戦って皆さんの期待に答える事ができるのでしょうか。

「――死ね（mors）」

ボソリと、人外の声でガブリエルは呟いた。何語なのでしょうか……ロジーナで聞く言葉ともこの世界で聞く言葉とも違う、拙者が全く知らない言語なのです。

ただなんとなく意味はわかります。ものすごい殺意を感じるのです……きっと、あの意味不明な言葉は拙者を殺す的な意味なのでしょう。

ガブリエルはそう呟いた瞬間、純白の翼をさらに大きく開いて、自身の周囲に海水から巨大な水玉を作っていきました。その数は５０近いような気がします……もしかして、アレをすべて拙者にぶつけるつもりなのでしょうか？

轟音を立てて生成されていく水玉。あれでも力のほんの一部なの

でしょうね、それなのに震えるような凄まじい魔力を感じるのです。これが――天使の力なのですね。

「――それでも、拙者は生きなければならないのです」

けーすけ様達の期待に答える為にも。皆さんを悲しませない為にも……拙者はこの戦いで生き残らなければならないのです。たとえガブリエルが相手でも――。

「拙者、姓は木下（きのした）、名は暮葉（くれは）という者なのです。アルファ隊に１０人もいない特隊員の一人として、けーすけ様を守る者として――異界の天使に反抗します！」

――それが殺し合いの始まりでした。

ガブリエルは迷うことはおろか、表情一つ変えずに水玉を一発放ってきた。

それはまるで、敵の戦艦を撃沈する為に放たれた一発の砲弾。船を沈めるなというアマデーオの命令を本当に聞いているのか、疑いたくなってしまうほどの超高速。それでも、ガブリエルにとっては十分手を抜いた結果なのでしょうね……しかし、この程度で降参するほど拙者も甘くは無いのです。

巨大な海水の水玉が目前に迫った――、

「――ッ！」

刹那、水玉は弾けるように小さな滴と化し、バラバラと甲板に飛び散りました。

ガブリエルとピタリと動きを止める。拙者はそれを睨み付け、ゆっくりと、しかし鋭い呼吸でガブリエルを威嚇しました。

一期一振。

これがなければ拙者は今頃水圧に負け、絨毯のようになっていたでしょう。しかし一期一振を激しく振り下ろしたことにより、拙者は無理やり衝撃波を生み出しました。春頃に明智光秀と戦った時と全く同じ戦法なのです。

衝撃波で対象を切り裂き、自分の身を守る――それが拙者の護身方法なのです。

「驚かれたのですか？」

拙者は問うように、ガブリエルにそう語り掛けました。ガブリエルはそれでも――表情を全く変えずに冷徹な目で拙者を見下していました。

そんなガブリエルを見上げ、次の攻撃に備えて刀を構えながら拙者は、

「貴方は確かに天使なのです。それは拙者も認めます……しかし、天使だからと言って貴方は拙者のこと過小評価していませんか？」

ガブリエルを挑発するように、そう言い放ってやったのです。

それでもガブリエルは微動だにしない。ただ翼を微かに動かし、生成された水玉を拙者に向かって射出するだけでした。今度は二発、確実に拙者を押しつぶそうと水玉が襲ってきました。

しかし、拙者は全く動じないのです。二つの水玉の動きをしっかり捉え――。

薙ぎ払うような一撃で一発目を。下から突くような一撃を二発目に叩きこみ、拙者は二つの巨大な水玉を消滅させてやりました。

「……」

爽やかな夏の海風が吹きつけて、とっても気持ちがいいのです。

まったく、折角水着も着ているのですから出来れば戦闘ではなく、ずっと皆さんと遊んでいたかったのです。

でも、贅沢を言っている場合ではないですよね。拙者が天使を止めなければ、誰があの暴走し掛けた天使を止めると言うのですか。

だから――拙者は出来るだけ涼しい顔を作って、

「確かに天使の力は偉大なのです。それに、普通の人間なら天使そのものと戦う事を拒むハズなのです……しかし、拙者にそのような躊躇いはありません！」

言い終えると、ガブリエルは更に水玉を放ってきた。今度は４発、ガブリエルは拙者だけではなくサンティシマ・マードレ号を攻撃する為に、４発の水玉をバラバラに放ってきたようなのです。

まずいのです。船内にはけーすけ様達がいるのです。皆さんを守る為には一発でもサンティシマ・マードレ号に当ててはいけません。水玉からサンティシマ・マードレ号を守らなければ！

拙者は一発目を切り裂くと、右方向に走って二発目を。さらに走って、三発目と四発目を拙者の一閃でいとも簡単に切り裂いていく。よかった……船体は無傷なのです。

それを確認した上で、拙者は続けるようにガブリエルに、

「何故だかわかりますか？　拙者は異世界人なのです！　つまり――この世界の宗教とか神様とか天使とか、そういうものはサッパリわからないですし、信仰心も全くないのです！　拙者の刀は神の為に振るうものではなく、拙者の信じるものや守りたいと思う人の為に振るうもの。そう、いくら異界の天使様でも拙者の仲間に手を出すのなら――容赦なく拙者は貴方を刀の錆にしてやるのです！」

自分の気持ちを真正面から、どこまでも素直にぶつけてやりました。

その後に訪れた静寂。拙者はその間に呼吸を整え、体勢を立て直す。そしてガブリエルが次にどのような動きをするか、それを調べるように見上げ、ガブリエルの事を見ていました。

そして――静寂の中の睨み合いの後、

拙者とガブリエルの殺し合いは――真の意味で始まりました。

ドウ！　という、ガブリエルが翼を振り仰ぐ轟音。

同時に１m近い複数の水玉が、無差別に降り注いできました。拙者はその水玉を一個一個確実に切り裂いていきましたが……まずいです、数も多いしスピードも速い。このまま、全ての水玉を叩き斬る事は至難の業なのです。

やむを得ないです……おそらく、ガブリエルは船を沈めはしないでしょう。召喚者であるアマデーオにそう命令されている以上、ガブリエルはその命令には逆らえません。所詮、今のガブリエルはアマデーオの召喚獣であり、忠実な僕なのです。

「う、く――っ！」

それにしてもなんという数なのでしょうか。全てを迎撃できない、何発かは外して船体に命中してしまいました。ですけど、やはりアマデーオの命令は有効なのですね。

甲板には複数の穴は開いたものの、致命傷とはなっていないようなのです。やはりガブリエルはアマデーオによって力を抑制され、本来の力を出し切れていないのです。しかし、そんな状態のガブリエルにさえ拙者は防戦一方。恐るべしなのです、天使の力は……！

「――なっ！？」

その時、ガブリエルは一本の水柱を放ってきた。破壊光線のよう

な水柱は、渦を巻いて音速に近い速度で、サンティシマ・マードレ号に接近してきました。まずい……もし、あれがサンティシマ・マードレ号に命中すれば、間違いなく粉々になってしまうのです。

ガブリエルは力の加減に失敗したのでしょうか。とにかく、戦艦のような鋼鉄の城ならともかく木造のガレオン船では、あの攻撃には耐えられないのです。

拙者は刀を立てて、全身に力を入れて歯を食いしばり――破壊的な水柱を身に受けました。

しかし、水柱は拙者を押しつぶし、船を撃破する事はありません――。

一期一振の刃が渦を巻く一撃を真っ二つに切り裂き、衝撃を小さく抑える事によって船への衝撃を最小限にとどめたのです。ですけど……身体への負荷が……っ！

「も、きゅ――っ！？」

耐えきれず、遂に拙者は後ろに何メートルも吹き飛ばされた。

……それでも、守れたのです……どうやら、今ので水柱は最後。

拙者はこの船をあの破壊的な一撃から守りきったのです。ですけど安心はまだできません。先程の一撃を放った天使は――かなりの余力を残した状態で未だ存在しているのですから。

全身に痛みが襲いかかる中、拙者は我慢して立ち上がり――再び刀を構える。

「はぁ、はぁ……っ！」

ゆっくりと呼吸を整え、上空にいるガブリエルを睨み付けました。

ガブリエルはさっきの一撃で水を使い果たしたのか、海水を吸収し、１ｍは確実にある巨大な水玉を何個も作っていました。水玉生成中の今は大きな隙……のハズなのですが、ここで拙者が魔法を使

って空を飛び、ガブリエルに近付いたとしても……果たして攻撃が通用するのでしょうか？

あれほどの相手に――拙者の未熟な魔法が通用するのでしょうか？

「……っ！　ま、まずいのです――っ！」

変な考え事をしている中、ガブリエルは複数の水玉を完成させてしまい、まるで敵の要塞に集中砲火を浴びせるように――大量の水玉を一斉に放ってきました。

拙者は再びそれを、斬れるものは斬ってやりました。無理なものは船体に命中し、甲板に穴を開けていきました。延々と続くガブリエルが攻撃し、拙者がそれを防ぐ戦闘……そこで拙者はようやく気がつくことができました。ガブリエルは――拙者の自滅を狙っているのです。

もしこのまま戦いが続けば、間違いなく拙者はスタミナ切れで倒れるのです。

ガブリエルの狙いはそれなのです。だから、拙者を一撃で殺さずに遊んでいるのです。

完璧にナメられてるのです……でも、それならむしろ都合がいいのです。

何故なら拙者が倒れない限り――ガブリエルはけーすけ様達を攻撃できないのですから！

「……ッ！　遅いのですっ！」

周りの水玉よりも少々大きい、特大の水玉を拙者は叩き斬りました。

斬っただけで衝撃が全身に伝わり、拙者は吹っ飛ばされそうになりました……が、どうにか着地に成功しました。危なかったのです……ですが、どうしましょう？

穴の数が増えてきました。次第に足場が無くなってきたのです。
それなのに、ガブリエルとは際限のない消耗戦に突入しました。
まずい、本当にこのままだとガブリエルの思惑通り、拙者はスタミナ切れで自滅してしまうのです。
もし仲間がいれば――とも思いました。
でも、改めて思えばけーすけ様達を先に行かせたのは正解なのです。けーすけ様達ではおそらく防御さえ出来ず、ガブリエルの攻撃で即死していたかもしれません。
別にけーすけ様達が弱いとか、そういう低次元な問題ではありません。ただ、けーすけ様達の戦い方ではガブリエルとは相性が悪いのです。攻撃が届かないし、身を守る手段さえもない。だからこそ拙者はけーすけ様達をここから遠ざけたのです。
それともう一つ。どのみち拙者にガブリエルは倒せません。ですが、一つだけガブリエルの暴走を止める方法があるのです。それは――召喚者を叩く事。アマデーオさえ倒せば、アマデーオの召喚獣であるガブリエルは消滅するハズなのです。

「う、あぁ――っ！」

拙者はガブリエルの攻撃を刀で切り裂き、自分と船とけーすけ様達を守りながら思いました。
――助けてください、と。
ガブリエルは召喚者さえ叩けば消えます。
皆さん……アマデーオを倒してください――そうすれば誰も死なずに済むのです！

そう願いながら、死ぬかもしれない戦いを――拙者は続けました。

第１３８話，召喚天使【ガブリエル】（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「あ、あんた……すごい強かったのねっ」

暮葉「そ、それほどでもないのですよっ！」

圭介「実は弱いんじゃね？　説が流れるほど実力が隠れ気味だったのにな」

暮葉「けーすけ様……今すっごい失礼な事言いましたよねっ？」

圭介「き、気のせいだっ！　つーか、絶対ガブリエルのほうが強そうなのになんで早川には勝てなかったんだよ？」

暮葉「もきゅ！？　そ、それは仕方ないのです！　早川は攻撃を反射するのですよ？　卑怯です反則なのです男じゃないのです！」

――その頃、東京の病院では――

早川「っくしょん！」

ミネット「へぇ～、貴方のくしゃみって可愛いね！　やっぱり貴方って女の子だよね？」

早川「くだらねえ事言ってんじゃねェぞクソガキ……ったく、誰だオレの悪口言ったクソ野郎はァ？」

第１３９話，船の水兵

外からすごい轟音が聞こえる……どうやら暮葉はあの天使と戦い始めたらしい。ああもう心配すぎてしょうがねえよ。大丈夫かな暮葉のヤツ……とにかく今は暮葉を信じるしかないな。

頼むから死ぬなよ。折角の合宿で誰かが死ぬなんて、俺は絶対に嫌だからな。

それで船内に突入した俺達は、コツコツと足音を立て船内を歩いていた。それでも誰ひとりとして俺達を襲ってはこない。本当にアマデーオ以外は誰もいねえのか――？

「どうすんのよ圭介。葵ちゃん達を探す？　それともあの変態をやっちゃう？」

「あのジジイを倒すに決まってんだろ。敵がいる中で下手に行動するのは危険だ」

「それについては私も藤島と同じ意見だぞ。あの老人……ただ者ではないが、三人で奇襲を仕掛ければアッサリ倒せるハズだぞっ」

奇襲――つまり不意打ちだ。確かに不意打ちを仕掛ければ、相手の実力がどれほど高かろうが俺達のほうが有利になるだろう。不意打ちでさっさとあのジジイを倒し、葵達を探して急いで葵達を船から降ろした後は――天使と戦う暮葉を助ける。

最後まで上手く行くかはわからんが、とにかくその作戦でいこう。

「よし、そうと決まればさっさとジジイを探そうぜ」

「それにしても寒いわねっ、今夏なのに……っ」

「うん、私も流石に水着だけじゃ肌寒く感じるぞ……っ」

うぐぐ……2人の言う通り、確かに船の中は結構寒いぞ。

水着しか着ていないせいもあるんだろうが。うう寒っ、やっぱさっさとジジイを探して葵達と暮葉を助けて、それから暑い砂浜に戻って遊ぼう。

それにしてもこのガレオン船も魔法の賜物か。すごいもんだな……これがこの世界でもトップレベルの魔法使いの実力かよ。天使まで召喚しやがるし。

俺達3人がかりでも倒せるんだろうか。ちょっと不安になってきた、

「――っ！」

通路の角に差し掛かった所で思考を打ち切る。俺は咄嗟に伊吹の手を引っ張って、かなり強引に俺の胸元に引き寄せた。伊吹は小さく悲鳴をあげ、その後1秒もしない間に――バスッ！　何か嫌な音が響き、俺達の目の前を小さな何かが通り抜ける。瞬間、異音と共に木造の壁に風穴が開いた。

「な、なによ……っ！」

「しーっ！　とにかく黙れ伊吹っ」

警告するように伊吹にそう言うと、明智が俺達の一歩前に出て、壁に張り付くと彼女は恐る恐る顔だけ出した。どうやら視界に何かを捉えたらしく、明智は瞬時にこちらを向いて、

「水兵だ。銃を持った奴が何十人もいるぞっ」

「マジかよっ！」

「ちょ、銃持ってるって……どうやって戦うのよ！」

困ったなぁ。まだ試した事はないけど、刃物でちゃんと切れるんだ。いくら俺の身体が丈夫っつっても銃弾には耐えられないだろう。貫通して下手すりゃ即死ってのがオチだな。

いや、もしかしたら耐えられるかもしれないけど……きっと痛いんだろうな。仮に耐えられたとしてもしばらくは動けないかもしれない。蹲っている間に集中的に攻撃されたら、それこそホントに何発目かで銃弾が身体を貫き、死んでしまうかもしれない。

しかも足音が段々近づいてきている。こうして悩んでいる間にも、サンティシマ・マードレの乗組員達は俺達を殺しにくるだろう。ちくしょう、何かいい手段はねえのかよ……って、

「――ふんっ！」

おいおい、明智のヤツいきなり何やってんだよ！

突然明智が飛び出し、銃を持っている水兵たちに向かって――火の玉を放った。

発火能力（パイロキネシス）。

掌の中で爆発が発生し、作り出された炎弾（えんだん）は、轟音と熱と火の粉を撒き散らして木造帆船の廊下を突き進んだ。水兵服を身にまとった男達に当てないように放ったのか、炎弾（えんだん）は男達に命中する寸前に床に着弾。眩い閃光と耳に響く轟音を撒き散らして爆発した。

直撃こそしなかったものの、爆発の衝撃波だけで何人かがひっくり返る。

それだけではない。熱風によって重度の火傷を負った者もいた。

「う、ぐ……な……なにが――が、はっ！」

明智は水兵の腹部を踏みつけて意識を奪いつつ、残りの銃を構える男達の所に自ら飛び出していった。

「明智！」

「凪紗っ！」

俺と伊吹はそう叫んだが、決して明智には近づかない……いや、近づけなかった。

彼女に近づくという事は、水兵にも近づくという事。それはつまり――自分の命を自分で危険に晒すようなものであった。俺も伊吹もその事が頭に浮かび、明智に近づく事を躊躇ったのだ。

一方、超能力というチートじみた力を持つ明智は、その場から俺らに声をかけてきた。

「先に行け」

「な、なんでだよ！　お前が戦うんなら俺だって――」

「いいから藤島、伊吹を連れて先に行け！　ここは私が引き受ける、だから2人は先に言ってアマデーオを倒してほしいぞ。それから妹や後輩をしっかり助けてこい！」

俺は反論しようと思ったが、ふと冷静になって考えてみた。

ここで俺や伊吹が飛び出して役に立てるのか？

相手は銃で武装している。超能力を使えば遠距離攻撃も可能な明智と違い、俺や伊吹は飛び道具もなければ何の能力も持たない一般人。即ち白兵戦しかできないのだ。

ちくしょう……結局役に立てねえのかよ！

「先に行かせてもらおうよ。あんたや私じゃ攻撃する前に撃たれておしまいよ」

「くそっ……！　わかったよ、必ずジジイを倒して葵達も助ける！　てめえも死ぬなよ！」

叫んでから、俺は伊吹の手を引っ張って走りだす。そんな俺達を逃がすまいと、水兵たちが発砲してきたが、恐怖して足を止めるよりは走り続けたほうが安全だ。俺は銃撃にビビりながらも足を止めずに走り続けた。とにかく走る俺達の後方で、再び爆発音が響いてきた。

どうやら、水兵達と明智の戦いが再開されたらしい。

「もっと気合い入れてかかってこないと……お前ら全員焼死するからな！」

最後に聞こえた明智の言葉は、そんな感じの気合いを入れる為の叫び声だった。

とにかくありがとうな明智。それに外で戦っている暮葉も――。

2人の努力は絶対無駄にしねえ。絶対に目的を果たして帰ってきてやる――ッ！

――その頃、サンティシマ・マードレ号の砲室。

ボク――浅間英樹と妹、そして後輩達は気がつけば、木造帆船の中にいたんだ。

わけもわからず脱出しようとは思ったけど、命綱すら見つからず、飛び降りるにはあまりにも高過ぎたため、あかりや葵君の提案で船内探索を行う事にした。

それにしても不気味な雰囲気だね。青山君も完全に怯えていて、先程からずっとあかりにしがみついているではないか。しかし……これがまたイイね。怖がる青山君はハァハァモノだよ。

全く羨ましいね藤島君は。ここにいる可愛い子猫ちゃん3人全員に――あれだけ強い好意を寄せられているんだからね。全く……出来る事ならボクと変わって欲しいくらいだよ。

「おっ宝おっ宝～♪」

「うう……あたいわくわくしてきたぞっ！」

「あ、葵とあかりはその……怖くないの……っ？」

「うん、全然怖くないよっ？」

「だって化け物とかがいんのはゲームの話だろ？　誰かいたってあたい達は兄貴を盾にして逃げればいいんだからなっ！」

「ひどい！　ボクを盾になんてひどいよあかりっ！」

「そうだよあかり、流石にひどいと思うよ？」

おお、なんて優しいんだ葵君は。流石はブラコン、ボクだって藤島君と同じお兄ちゃんキャラなんだからね。いくら他人の兄とは言え、お兄ちゃんキャラには優しいんだね。

はぁ……今まで妹は血縁（ブラッド）が大切だと思っていたが、妹分見たいな存在っていうのも悪くはないものだね。いや、ボクの場合……自分

の妹よりもいいかもしれない――！

「だって、部長さんは貧弱だから――盾にもならないよっ！」

ぐはっ！　ひ、ひどい……なんてひどい事を言うんだ葵君！

「……あ、葵……流石秀才だね……っ！」

「確かに、あたいの兄貴は超貧弱だな！」

「みんなしてひどいよ！　ボクはそこまで貧弱じゃないよ！」

ボクは抗議するように言い放ったが、何故だか三人はジト目でボクを見てきた。

えっ？　えっ？　ボク何かおかしい事言ったかい？　そんなにボクって貧弱で使い物にならないお荷物キャラなのかい？

「それじゃあ兄貴、何か危機が訪れたらあたい達を守れよな！」

「そうだよ！　そこで部長さんが頼れる男の人だって、証明しちゃってください！」

「……うん、証拠があれば……わたしも信じますよ……っ？」

「うぐ、証拠かぁ……まあいい、本当に危機が訪れたらボクが君達を守って――」

っと、ボクが彼女達に向かって調子よく言っている時――背後から足音が聞こえた。

コツコツと、音を立ててそれは迫ってくる。ボクだけに聞こえた

幻聴――でもない、あかり達にも足音は聞こえていたようだ。びくんっと反応した彼女達は、ボクと同じタイミングで身体ごと後ろに向くよう移動した。すると、闇の中から――重々しい法衣を身にまとった老人が現れたのだ。

「侵入者は目標（ターゲット）のみではなかったか……」

なんだいこの老人は……まるで厨二病アニメに出てくる聖職者のようだ。

重々しい法衣にギラギラと輝く十字架。紫色の怪しい金属製の杖。左手に持っているのは古びた分厚い本である。いかにも……オカルトやっていますって雰囲気だね。でもまあ、流石にここは現実世界なので変な能力は使わないだろうね。

「ふん、何者だい君は？」

「年上に対する礼儀を知らんのか、最近の若者は？」

「無論知っているさ。ただ――君のような不審者に警戒するのは当然の事だろう？」

決まった……出来ればキリッと効果音が欲しかったね。

とにかく、今のは決まったよ。表情もセリフも完璧だった。これならきっと――初対面の女の子ならボクに惚れている事だろう。

「うわぁ～、兄貴がカッコつけてるぞ？」

「強がりなんだよ、部長さんは」

「……目立ちたいんですね……部長っ」

「こらそこっ！　折角ボクカッコよかったのに空気が台無しだよっ！」

「悪いが馬鹿騒ぎなら外でやってくれんか？　このアマデーオ・ヘルサーニ。若造と遊んでいる時間はこれっぽちもないのだよ」

随分とまあ威勢のいい老人だね。その上怪しいし……しかも外国人だって？

突然現れた大きな船に、突然現れた謎の老人……何が起こっているんだい。ボク達は今度はどんな騒動に巻き込まれてしまったんだい？

「そうしたいのも山々だけど……生憎、ロープすらないからボクら船から降りれないんだよね」

「そうかそうか。まあ……今更お主らを逃がしはしないがな」

「どういう意味だい？」

「私のこの姿は一般人には見せられないのだよ」

そう言うと、アマデーオと名乗る老人は本を開き、杖を天に上げる。

「魔法日記１６９頁。記された記録を具現化――再現せよ」

ブワッとボクらの頭上に突然、縄が現れ――それはボクらを瞬時に縛り付けた。黙っているだけでも痛いほど、強く縛られた硬く太いロープ。

「う、く……っ！」

やられたね、こんな頑丈なロープを自力で解くなんてまず不可能だろう。ボクは踏ん張れるだけ踏ん張ったが、ロープはビクともしなかった。

「な、なんだ!?　このロープどっから――!?」

「う、あ……っ！　お兄ちゃんになら縛られてもよかったのに――！」

「あ……葵っ、冗談……言ってる場合じゃないよ……っ！」

女の子達も当然ロープを解けなかった。

くそっ、この爺さん一体何者なんだ。一体どうやってボクらを縛り付けた。さっき爺さんは一言意味不明な言葉を喋ったが、結局あれはなんだったんだ――！

「おいジジイ！　あたいらに一体何したんだよっ！」

「理解が追いつかんか小娘よ？　それが一般人の反応だ、心配するでない」

「一つ君に聞くよ。ボクらをこれからどうするつもりだい？」

「折角捕えたのだ。ここで殺すのは勿体ない。折角だから大部屋に案内してやろう――最高の魔術演劇（マジックショー）を堪能してもらおうではないか……フッフフフ」

ボクらは縄で縛られて全く抵抗できない。その状態であの老人は、勝手にボクらには何かわからない大事を引き起こそうとしていた。これからボク達はどうなるのだろうか――それを知るのはあの老人のみのようである。まずいね……非常にまずい事に巻き込まれた気がするよ。

藤島君達はどこで何をやっているのだろう。無事なのだろうか――？　この大きな帆船から逃げる事ができたのだろうか……いや、彼の性格からして逃げはしないだろう。

必ずボク達を助けに来るハズだ。でも、助けに来るのだとしたら――。

――気を付けて欲しい。この老人は――普通じゃない。

第１３９話，船の水兵（後書き）

・後書きトークコーナー！

浅間部長「足りないね……」

圭介「何がっすか？」

浅間部長「最近シリアスな話が続いてるじゃないかい」

圭介「合宿編もクライマックスに近いですからね」

浅間部長「うん、それでだ。最近この作品には――コメディー＆日常分が足りない！」

圭介「ええ？　でも仕方ないですよね、展開的に」

浅間部長「いいや！　シリアスな話ではボクが活躍できないじゃないかい！」

圭介「今回活躍してたじゃないですか！？」

浅間部長「けどすぐやられたじゃないかい！　やっぱり日常回で女の子に囲まれてウハウハな話がボクはいいよ！」

暮葉「どのみちそういう話でも、部長さんは活躍できないと思うのです……っ」

第１４０話，魔法日記

暮葉は外で、明智は船内で敵と戦う仲、俺は伊吹と2人でこの足を進めていた。

サンティシマ・マードレ号の乗組員の数自体は少ないようで、どうやら連中は明智一人に足止めされているようである。従って、現在俺と伊吹を狙う奴は一人もいない。抵抗する者がいないから俺達は足を止める必要がなかった。

それでも不気味だな……さっきあれだけの水兵がいたのに、このあたりには一人も水兵がいないだなんて……何か罠でもあるのか？

いや、そんなわけでもなさそうだ。

さっきから随分歩いているが、罠など一切なかった……。

それが作戦なのか、それともアマデーオが油断しているのか、俺達にはわからない。

「圭介！　こっちこっち！」

「ん、どうした伊吹？」

伊吹に呼ばれて、俺は小走りで伊吹に近寄った。伊吹が指差す通路の先には、怪しげな木造の大きな扉が閉まっていた。うん、怪しいね……とんでもなく怪しいと思う。

「でかい扉だな……大きい部屋でもあるんだろうか？」

「そんなのわかんないわよっ、でも調べてみる価値はあると思うわっ」

「……なあ、一つだけ聞かせてくれ」

「なによこんな時に……っ！」

「今回の相手はお前にとっては初めて魔法使いだ。それも一筋縄じゃいきそうにないヤツだ。俺は出来ればお前にソイツと戦ってほしくない。それを言われても――お前は戦うか？」

俺は確認するかのように、伊吹の瞳を見つめながら言った。すると、伊吹の顔がほんの少しだけ赤くなったような気がするが、同時に伊吹はいつもの強気な表情になり、

「あたりまえでしょ。今更引き下がれないわ……それに私はあんたの幼馴染よ。あんた一人を置いて逃げるだなんて――絶対に出来ない……ッ！」

決意に満ちた表情で、伊吹は俺に向かってそう叫んだ。

それが伊吹の覚悟であった。

伊吹に逃げる気はない。足を止める気はない。竹刀を下げる気だってない。あるのは襲いかかってくる魔法使いから――その竹刀で俺を守ろうとする気持ちだけのようだ。

いや、俺だけではない。伊吹は仲間たち全員を守る気だ――。

覚悟を決めた伊吹は強い。それは別に剣道の実力がすごいというわけではなく、精神的に物凄く強いという意味だ。そう、精神的に――誰よりも。

こんなに強い伊吹なら大丈夫だろう。そう思った俺は右手を伊吹の右肩に置き、

「行くぞ――アマデーオをぶっ倒しに」

俺がそう言うと、伊吹はコクリと首を縦に振った。

それが、俺達にとっての真の意味での開戦であった――。
俺と伊吹は１０秒以内に扉の前に辿りつき、俺は扉の取っ手を握る。大きな扉は木造と言えどもかなりの重量であり、男の俺でも苦労してようやく開けられる程であった。
こうして開けられた大きな扉。その先で――魔法使いが不気味な笑みを浮かべていた。

「ようこそ……藤島圭介と処女（ヴァージン）ちゃんか」

「な……っ、誰が処女（ヴァージン）ちゃんよっ！」

「ふふふ、子供扱いされたくないのなら、その処女（ヴァージン）を誰かに捧げればいだろう。例えばそこの藤島圭介とかなっ」

おいこのエロジジイなに言ってんだ！
つまりアレか。このジジイは俺に伊吹とヤれって言ってんのか。
アホだ、いくらなんでも恋人でもない人にそれを言うとは、アホ以外の何者でもないぜ。
ほら、伊吹だってお怒りで――あれ？

「け、圭介は恋人じゃなくて幼馴染よっ……だから……そんなの捧げるわけ……っ！」

あの～もしもし伊吹さん？　なんで赤くなりながらもじもじしてんだ。絶対それ誤解される反応だと思うんですが。ほら、あのエロジジイだって笑ってやがるじゃねえか。

「ふん、まんざらでもないのか？」

「ち、違うわよっ！　ああもう、こんのスケベ二回死ねっ！」

あ、やっぱり怒ったか。ですよねぇ、こんな話をされて怒らないわけがない。だって伊吹は下ネタ耐性はあるのだが、別にそういう話が好きなわけじゃない。増してや俺と伊吹だ。ツッパリ伊吹ちゃんが俺とヤりたいわけがないじゃん。

俺はまあ……伊吹がいいって言うなら……ってダメだろ馬鹿か俺は！

そんな事になった瞬間――幼馴染からセ○レにジョブチェンジ。色々と危ない関係になっちまうじゃねえかよ。それは健全なお付き合いをしたい俺としては、ちょっと気が引ける関係だぞ。

「ところで2人に問おう。私は先程侵入者を4名拘束したのだが……アレはお主らの知り合いかぁ？」

アレ？　アレってなんだよ――と思いつつ、俺はアマデーオの後ろを見る。アマデーオの背後には確かに縄で縛られた男女4人がいた……ってオイ。ちょっと待て……アイツら――！

「――あ、葵！？　青山さんにあかり！？」

「ついでにあんたの部の部長までいるわよっ！」

縄で縛られた葵達は瞳を閉じ、ピクリとも動かない。

気絶……してるんだよな？　もし気絶や寝ている以外だったら――。

思わず全身に力が入る。わなわなと身体が震え、ギシギシと歯も食いしばっていた。

「てめえ……葵達になにしやがった！」

「案ずるな。うるさいから仮死状態にしただけだ。今起こしてやろうか？」

アマデーオはあの紫色の杖を天に上げ、

「魔法日記Ｐ１６９頁。先の手順を逆に行い、記録を再現せよ！」

っと叫ぶと、目を閉じていた四人が目覚め始めた。死んでなくてよかったけど、アマデーオのヤツは一体どんな魔法を使いやがったんだ。

魔法日記ってなんだ？　記録を再現するってどういう意味だよ。あの紫色に輝く不気味な杖と分厚い本の正体は一体――何なんだよ？

「ん、みゅ……はっ！　お、お兄ちゃん!?」

「……先輩……っ！」

「んみゃ……どういうことなんだ？　国宗先輩まで一緒だ？」

「ん、んん……あれ、ボクらは？」

目覚めた当人達もよくわかっていないらしい。そりゃあそうだ、少なくとも葵達よりは魔法によく触れている俺でさえ――アマデーオが使う魔法は意味がわからん。

召喚も出来る。人を眠らせる事もできる……アレはどういう魔法なんだよ。

こう言う時に専門家がいれば――って思ったけど、その専門家は外で戦闘中だ。

「懐疑の念を抱いているようだな。藤島圭介、それに処女（ヴァージン）ちゃんよ」

「だ、だから処女（ヴァージン）ちゃんはやめなさいよっ！　ホントに最低の変態ね！」

「伊吹、とりあえず抑えとけ。話が進まねえよ」

というかエロジジイ。処女（ヴァージン）ちゃんって、今回合宿に来ている女子全員が処女（ヴァージン）ちゃんだと思うんだが……まっ、そんなツッコミしてもしょうがねえよな。

俺がくだらない事を考えていると、アマデーオは長ったらしい言葉を続ける。

「魔術とは常に己の理想を追求するものだ。私の魔術は理想を追い求める事に特化した――究極の儀式魔術なのだよ」

「究極だと？」

「私は理想を追求する為に魔術を覚えた。近代西洋儀式魔術には魔法日記というアイテムがある。これは何をするものか……素人の若造にはわかるまい」

「だったらなんだよ、何に使うんだよ！」

「なぁに、これまの訓練や儀式の内容、状況、感想などを記録するだけのつまらんモンさ。たったそれだけのモンで何が出来ると思う？　最も、これ以上君に教えたって私に得はない……だからこれ以上は説明しないがな」

儀式を……記録？

そんなものを記録して一体どうするんだ。一体何の得になるんだ。

記録したって別にすごい魔法が使えるわけじゃないんだろ。だったら魔法日記で意味のないアイテムじゃ……まさか！

「まさか……てめえ、魔法日記（それ）に記録した事を再現してんのか！？」

「その通りだよ！　中々鋭い若造だ……どうだ、上層部に引き渡す前に私の下で修業をしないか？　お主はひょっとすると魔術師の才能があるかもしれん――！」

「……便利な魔法を使えるんなら悪くねえ話かもな。だけど――お断りだ」

「私もよ。圭介を魔術師なんかにはさせない。あんたなんかの弟子には――絶対させない！」

どうやら伊吹は気持ちは同じのようだな。俺も――あの野郎の弟子にはなりたくない。

そもそも、魔法使い自体になりたくない。今の俺が弱いのは分かっている。だからって魔法なんてワケの分からないモノには頼りたくない。突き進むんなら――拳で突き進んでやる。

拳じゃねえと出来ない事が一つあるかなら。アマデーオみたいなクソ野郎を――思いっきりぶん殴れないじゃねえか！

「そうか、残念だ……なら私のみで理想を追求しよう。この魔法の杖（ワンド）を介し――お主らの為に地獄を再現してやる！」

「そんなモン再現させるかよ――クソッタレがあぁぁあああぁあっ！」

「逆にあんたに見せてやるわよ――挫折って名前の地獄を！」

アマデーオの理想を跡形もなくぶち殺すべく――俺と伊吹はアマデーオに飛びかかった。

第１４０話，魔法日記（後書き）

・後書きトークコーナー！

早川「作ァァァ者くゥゥゥゥゥゥン！　なンでオレの出番がねェンだよ、アァ！？」

作者「いや、仕方ないじゃん。この展開で早川登場って無理あるじゃん？」

早川「オレはミネットも助けたしィ、第二の主人公という座にもついた。後は本来の主人公に勝利するだけなンだよ。わかってンのか――あァ！？」

ガブリエル「……」

早川「なンだオマエ？　おもしれェ……ブッ殺す！」

ガブリエル「……ッ」

早川「あァ？　なンだこの破壊光線的な水柱？　こんなモン暴風の膜で反射して――な、反射しきれねェ！？　コイツ、オレの処理能力を超える威力で！？　……チッ、おもしれェクソッタレ。遊んでやるよ三下ァ！」

作者「ちょっとアクセラ……げふんげふん！　早川がうるさいので、しばらくガブリエルと遊んでてもらいましょう」

ミネット「次回！　アマデーオとの決戦だよ！」

第１４１話，アマデーオ・ベルサーニ

「おおっ！」

俺は叫び、アマデーオの元へと突っ走る。

考えなんてない。ただとにかく、伊吹と一緒にアマデーオに突っ込んだ。間合いを詰めてこの拳を叩きこんでやろうと思った。ただそれだけの単純な戦法。しかし、その単純さだけでも十分アマデーオを叩きのめす事で出来るハズであった。だが――、

「魔法日記Ｐ２０１頁。儀式の結果を見つめ直し、ここに再現せよ！」

アマデーオは魔法日記に記された、訓練やら儀式の内容や結果を読む。一見するとそれだけだがヤツは魔法の杖（ロータスワンド）を介し、その記録を再現する事が出来るのだ。

あの魔法日記にどんな事が書かれているかは不明だ。一つだけ言える事は、そこに俺らの特になる事は一切書かれていないという事だ。

アマデーオの魔法はアマデーオの理想を追及するんだろ？　だったら、俺達にとってプラスとなる事が書かれているハズがない。そしてその当たり前の予想は――見事に的中したのだ。

アマデーオが魔法の杖（ロータスワンド）を振りまわし、杖の先がガツンと言う音を立てて軽くぶつかった、瞬間――気付けば俺は床に倒れていた。

何があったかサッパリわからない。ただ、全身が押し潰されるように重い。黙って呼吸をする事そのものが苦痛に感じる。血液から骨の髄まで、何もかもが重くなった気分だ。

「う、あ……っ！」

「け、圭介!?　……あ、あんた。圭介になにしたのよっ！」

「１５倍の重力に耐えられるとは……流石、報告に受けていた通りの頑丈さだぞ、藤島圭介」

じゅ、じゅう……ごばい？

ふざけてんのかよ。戦闘機のパイロットだって９Ｇがいい所だ。なに何も鍛えていない俺に１５倍の重力って……つーか、魔法日記（アレ）にはこんな事が書かれているのか。

アマデーオは長い人生の間に――こういう儀式を行ったってのかよ！

「ふ、ざけんじゃないわよ――このっ！」

激昂した伊吹がアマデーオに飛びかかった。右手でしっかり握った竹刀で、アマデーオの面を打とうと伊吹は彼の懐に飛び込む。

伊吹の動きは速かった。

これが剣道の試合なら――彼女は確実に一本を取っていただろう。

「魔法日記Ｐ２６０頁。女となるその結果をここに再現せよ！」

しかし、アマデーオは伊吹に面を打たれる前に――反応する。

叫ぶアマデーオに響く金属音。アマデーオは先程と同じく杖を突いた。アマデーオが叫んでからそのような動作を見せるという事は、何らかの儀式を再現したということだ。実際そのせいで俺は１５倍の重力に押し潰され、こうして平伏しているのだ。

気絶しちまえば楽なのかもしれない……けど、俺の身体は丈夫である。たとえ１５倍の重力が襲ってこようが、苦しいだけで気絶さえもできないのだ。

まさに生き地獄。ちくしょう、アマデーオに地獄を作らせてしまった……。

「ん、あ、ぃ、あぁぁぁ……っ！」

伊吹も丁度同じような状況になっていた。アマデーオの儀式再現によって――。

目に涙を溜めて、ギリギリと歯を食いしばりながら、伊吹は蹲っていた。

俺は腕と首に力を入れ、やっとの思いで首を上げると、

「て……てめえ……今度はなにをしやがった……っ！」

「錯覚だよ。初体験の女の子とは痛いらしいな。私はその痛みを彼女に与えたのだ」

「……てめえっ」

「そう怒らんでもいいだろう。何も本当に処女（ヴァージン）を奪ったわけではない。先程も言ったが単なる錯覚だよ」

単なる錯覚だとしても、その痛みって半端じゃないんだろ。やっぱりダメだ、そんな事を魔法で再現しやがるなんて――アマデーオの野郎イカれてやがる！

本当なら今すぐにでも伊吹を助けたい。

ふと、アナスタシアってヤツと戦った時の事を思い出す。アイツはゴーレムを率いて暴れまくっていたのだが、召喚者であるアナスタシアを倒した瞬間――ゴーレムは跡形もなく消滅した。

あくまで素人の推測だけど、魔法って術者がやられれば無効化されるんじゃ……？

だとしたら、伊吹を助ける方法は一つだけだ。この拳で――アマデーオのクソ野郎を殴り倒せば全ての魔法は無効化される。
伊吹が痛みから解放される。アマデーオが召喚したガブリエルも消える。結果的にそれは外にいる暮葉を救う事にもなる――。

「さてと、私は面倒くさい事は嫌いだ……さっさと藤島圭介を回収するか」

だけど、それを達成する為には――身体に１５Ｇがかかっている状態で、あのアマデーオと戦わなければならない。ハッキリ言ってそれは不可能だ。
１５Ｇの中を普通に動けるヤツなんて、おそらくこの世にはいないだろう。ド○ゴンボールじゃねえんだから、そう簡単にはこの状況で動く事は出来ない。だけどな――俺だって何も考えていないわけじゃないんだぞ。
あるんだよ――１５Ｇの中でも動けるかもしれない方法が。
だけど、その為には女の子の協力が必要だ。ふと周囲を見ると……この大部屋にいるのは伊吹と葵とあかりと青山さんである。伊吹はご覧の有様、これでは何もできないだろう。
かと言ってねぇ。残りの三人は縄で縛られているし……どうすりゃいいんだよ。
いや待て――アマデーオのヤツ、足までは縄で縛っていないじゃないか。つまり手を使う事が出来ないだけで、ここまで歩いてくる事はできるんじゃないか？

「ああん？　なんだその思わせぶりな表情は？　藤島圭介……何を企んでいるかは知らんが、貴様がここから逆転する事は不可能だ。素直に諦めて拘束されろ――この童貞野郎が」

あとはアレだ、条件に合う子を三人の中から選ぶだけだ。

その条件とは……足が速くて、俺の事が好きで、俺になら――どんな要求をされたって構わないと言える素直な子である。

青山さんは俺の事は好きみたいだし、確かに俺の要求は何でも受け入れそうだ。しかし青山さんは運動が苦手である。ここまで走ってくる間に――アマデーオに捕まっちまうぞ。

続いてあかり。あかりは足は速いし俺の事は好きみたいだ。だけど――あかりは何かとプライドが高いからなぁ……あかりじゃ俺の要求を受け入れてはくれない――！

残るは……げぇ、葵かよ。でも待てよ？　葵って条件にピッタリな子じゃないか？

葵は頭も避ければ運動神経も抜群で、お兄ちゃんＬＯＶＥで、その上自分から一線を越えようとするブラコンのド変態だ。葵なら――俺の要求を喜んで受け入れてくれるかもしれない……！

一か八か……全てを俺の妹に賭けてみるか――！

「う、ぐ……っ！　、あ……葵っ！」

「……っ！　お、お兄ちゃん!?」

「来てくれ……頼むっ！」

「う、うん――！」

葵は縄で身体を縛られている為、安定ながらも小走りでこっちに来てくれた。

アマデーオは邪険な顔で葵を見るが、手出しをしようとはしない。

自分を無視して素通りした上に、葵は魔法も何も使えない一般人だ。脅威度は限りなく低いとでも彼は思ったんだろう。助かった……葵が俺の所に来てくれた。

「来たよお兄ちゃん！　だ、大丈夫……動けないの？」

「いろいろあってな。それより葵、頼みがあるんだ……っ」

「頼み？　うん！　葵に出来る事ならなんでもするよ！」

この状況下でなんて明るい返事をするんだ。それだけでも勇気が沸いてくるよ。

後は――葵を信じるしかないな。

しかし、相手は実の妹だしな……なんかその、こんな事を言うのって変だよな。

なんつーかすっげえ恥ずかしいな……けど、言わせてもらうぜ。

「わかった……それじゃあ俺と――キスしてくれ！」

「――っ！？」

……言ってしまった。

爆弾発言を――そのせいで場の空気が凍りついてしまった。

アマデーオはピクピクと眉を動かし、伊吹やあかりは唖然とし、青山さんはショックを受けたような顔をしていた。いや――ホント皆さんすみません。

けど、アマデーオを倒す為にも必要なんですよ――ハイ！

「ふぇ……え、えと……お兄ちゃん？」

すっかり紅潮してしまった葵。頼む――いつもの勢いでガバッとお願いします！

「葵！　明日は必ずお前と遊んでやる。だから頼む――してくれ！」

「な……なに言ってんだよ圭介！　ダメに決まってんだろ！」

「そ……そうですよ先輩……っ！　葵もその……先輩としちゃダメ……っ！」

「け、圭介……あんた、妹になんて頼みを――っ！」

大顰蹙だ。まあ当然と言えば当然だが……でも仕方ないだろ？　アマデーオを倒す為には――アレしか方法が思い浮かばなかったんだ。

「わ、わかったよ……お兄ちゃんっ」

「……っ」

ごくっ……ついに決意した葵が、ゆっくりと瞳を閉じて顔を近づけてくる。あかりや伊吹の叫び声が耳に入ってきたが……まあ今は気にしないでおこう。後でどうにかすればいい。

とにかく俺は――葵とのキスに集中する事にした。

俺も葵に合わせて瞳を閉じ、唇を少しだけ前に突き出してやった。

同時に――キスとは全く関係ない事を脳内で念じる。念じなければ何の意味もない。

そして遂に――。

「――！」

俺と葵の唇が重なった。

葵の桜色の唇は、明智や暮葉とはまた違った感触。柔らかく、甘い、桃のように香りに葵の匂いが混じったキスは――実の兄の俺で

も興奮するものであった。そして興奮と同時に――別な何かが込み上げてくるような気がした。

守りたい。

目の前の家族を守りたい。幼馴染や後輩達を守りたい。別な場所で戦っている友達も守ってあげたい――何よりこの日常を守りたい。

そんな想いと、葵とのキスによる興奮や、込み上げてくる何かと重なり……。

「ぉぉぉおおおおおおおっ！　気が高まる……溢れるっ！」

――遂に俺は覚醒する。

リミッターが解除され、全ての力が解放された。

その状態で俺は立ち上がる。おお、普段と大して変わらない。流石は解放モード、１５Ｇなんてやっぱ目じゃねえな。最後の賭けに出て正解だったぜ。予想外の結果に、アマデーオも眉間にしわを寄せて驚いていた。

「どういう事だ？　何故貴様は――１５Ｇもかかっているのに動けるのだ！？」

「残念だったなぁ。てめえが葵を攻撃してりゃあ、俺がゾンビのように復活する事もなかったのになぁ？」

「う、ぐ……ナメやがって！　魔法日記Ｐ３５頁、魔法陣を描き火柱を立たせる魔術を――再現せよ！」

「――ッ！」

アマデーオが叫ぶと、丁度俺の真下から突き刺すような火柱が３本ほど、まるでベトコンがし掛けた罠のように突然出現した。

普通、そんな罠を避けれはしないだろう。こんな罠でも人は殺せる。事実、そんな程度の罠に米兵は引っ掛かり、結構な数が犠牲になったのだ。

普通の人間ならそれで死んでしまうが――俺は平気だったりする。脚に力を入れ、勢いよく跳躍した。リミッターが解除された俺が本気を出せば――１０ｍくらいまでなら普通に飛べたりする。素早く１０ｍも跳躍した俺は――火柱を華麗に避けた。

「魔法日記３９５頁！　絨毯爆撃、逃げ場のないその攻撃を――再現せよ！」

今度は絨毯爆撃。

絨毯爆撃とは、多数の無誘導爆弾を用いて地域一帯を爆撃することを指す。第二次世界大戦中に大型戦略爆撃機を持つ連合軍が得意とした、結構エグくて残酷な戦い方だ。

っと言っても所詮は魔法だ。別に本物の爆弾が使われるわけではない。そんなものを船内で使えば船ごと吹っ飛んでしまうからだ。実際に降ってきたのは重そうな鉄球である。鉄球と言えども脳天に当たれば普通の人間は死んでしまうだろう。だが――そもそも俺には鉄球が当たらなかった。

ボクサーのようなフットワークを使い、軽く跳躍をしながら鉄球を避けていった。

そうしているうちに――アマデーオとの距離は５ｍにまで近づいていた。

「魔法日記１８１頁！　主の敵と認められる者を――十字架で圧殺せよ！」

首から提げていた十字架を強引に取ると、十字架はアマデーオの頭上に浮き、一人の人間と同じ大きさにまで膨張する。

「これがてめえの――限界だっ！」

俺は十字架に向かって左拳を放つ。リミッター解除モードとは言え、やはり普段使っている右手と比べれば、左拳は明らかに威力が落ちていた。右拳に比べれば見劣りする速度である。

それでも――そんな程度の拳でも！

「ッ！」

俺の左拳は十字架を僅かに弾き、十字架の角がアマデーオの顎に突き刺さる。

真上に跳ね上がるアマデーオ。そんな状態で、彼は熱く叫んでいた。

「う、ぐぁ！　ち――くしょう、チクショォォォォォォォォォ！　私にぃ……魔術師の私にはサヴィエト（ここ）にも居場所がないのかァ！　結局弾圧される身なのかァァァァァァッ！」

何を叫んでいるんだかわからない……が、一つだけわかる事があった。このジジイも結局魔法使いとしての居場所が欲しかっただけ。ただそれだけだ。それだけの理由でサヴィエトに協力していたんだ。たったそれだけの為に宗教の敵である組織に――協力していたんだ。

ったく、ふざけんじゃねえよこの野郎……っ！

そんな事の為に……力を変な事に使ってんじゃねえ――このクソ野郎！

「――おおおぉおォォォあああああッ！」

俺は咆哮と共に――全力を籠めた一撃を放った。
もちろん、副砲の左拳ではなく――主砲の右拳を。

「ぶるわあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

バゴン！　という強烈な打撃音。
ガードも出来ずに殴られたアマデーオは――2～3回真上に跳ねて、ようやくその身体が止まったのは何メートルも先の地点であった。
……終わった。馬鹿みたいに強い魔法使いに――俺達は勝ったんだ……っ！

第１４１話，アマデーオ・ベルサーニ（後書き）

・後書きトークコーナー！

凪紗「相変わらず藤島の解放モードはチートだな」

圭介「そうでもねえぞ？　１５Ｇだと流石に動きが鈍かったし」

凪紗「アレとマトモに戦えるヤツ……いるんだろうか？」

圭介「さあ？　ラスボスあたりなら戦えるんじゃね？」

暮葉「けーすけ様……完全に調子に乗っているのですっ」

第１４２話，気付いてしまった事、

拙者――木下暮葉はまだガブリエルと戦っていました。
無数の水玉を放ってくるガブリエル、その全ての迎撃は難しいのです。拙者は今の一撃を真っ二つに切り裂いたのですが、次の一撃への反応が遅れてしまい、やむを得ず拙者はガブリエルが放った巨大水玉を避けました。先程まで拙者がいた場所に、大きな穴がぱっくりと開いていました。
まずいのです……これ以上サンティシマ・マードレ号にダメージがあると……いくらガブリエルのアレが手加減したものとはいえ、いい加減この船に限界が訪れてしまうのです。
沈めてはダメなのです……っ！　まだ、この中にけーすけ様達が……っ！
……と思った――その時でした。

「……ッ！」

突然、ガブリエルの動きが止まりました。
本体も、純白の羽も、作り出された水玉も。その全てが動きを止め、まるで死人のように空中で固まっているのです。一体どうしたのでしょう……と思った――さらに次の瞬間。
バリン！　ガラスの割れるような音が響くと、全身にヒビの入ったガブリエルは次第に破片となって崩れ落ちていったのです。水玉も空中で形を崩し、そのまま海へと落下しました。
ガブリエルが消えた……つまり――けーすけ様達がアマデーオを倒したという事。
召喚者の意識が途絶えた為、魔法が無効化されたのだと思います。
拙者は刀を甲板に落とし、力尽きるようにその場にへたり込んでしまいました。

「ありがとうございます……けーすけ様っ」

何故か。

けーすけ様だけが活躍したわけではないのに、何故か最初に――けーすけ様の姿が脳裏に浮かんでしまいました。何故なのでしょうね……これじゃ、他の方達に失礼なのです……。

でも、どんなに頑張っても――結局最初に思い浮かぶのはけーすけ様。

最近の拙者……ずっと変なのです。そもそも自分で自分がわかりません。なんで昨日けーすけ様とキスをしてしまったのかさえ、拙者はわからないのです。

あの時はけーすけ様にされそうになって、結局それはなかったのですが……何故か最後までしてくれなかったのが不満で結局……。

「はぁ……っ」

結局、拙者は何がしたかったのでしょうか……？

どうしてけーすけ様とキスを……っ。

「……っ！」

かあっと顔が熱くなる。　あれ、なんで……なのでしょう？

拙者……やっぱり、けーすけ様のことが好きなのでしょうか……？

でもでも、違いますよね。恥ずかしい事を思い出したから……ですよね。

「……わからないのですよっ」

恋なんてした事がありません。多分……今もしていないと思うの

ですけど……。
あれ？　よくわからないのです。自分のことがわかりませんっ。そもそも拙者はけーすけ様のことをどう想っているのでしょう。拙者は……どうしたいのでしょうか……？

「木下？」

「もきゅ！？　ふにゃ、は……なんだ、明智殿でしたかっ」

いきなり声をかけられたからビックリしたのです。気付けば背後に明智殿がいました。
し、心臓に悪いのです……人が考え事をしている時にっ。
真剣に悩んでいる時に……でも、明智殿は悪くないのです。中途半端な気持ちのまま悩み続けている拙者が――最も悪い存在なのです。

「あの天使は倒したのかっ？」

「はい……その、けーすけ様達がアマデーオを倒したみたいなので。アマデーオが死んだか気絶したかはわからないのですが……倒れたのと同時に天使は姿を消したのですっ」

「そっか。連中を片付けて、木下の力になりたいって来たんだが……どうやら一足遅かったようだな」

「何はともあれ、今回の騒動の主犯は倒されたのですっ。今日はその……色々後始末とかしなきゃいけないのですが、明日は拙者も皆さんと遊べるのです！」

「……そうだな。明日こそは皆で遊ぼう」

「はい！」

……でも、拙者は元気よく遊べるかわからないのです。
こんなに元気のいい事を言っても――全然気分は晴れないのです。
拙者はずっとあやふやな気持ちに悩んでいるのです。いくら考えても……やっぱりわかりません。

「……ん？　木下、どうかしたのか？」

「もきゅ？」

「いつもの元気がないぞ？」

「そ、そうですか？　後始末が面倒くさいな～って思っているだけなのです！」

「ふ～ん。いつも真面目な木下がか？」

「もきゅぅ……っ」

以外に鋭いのです……明智殿。
確かに拙者、何事にも面倒くさいとかって文句を付けた事がありません。それはきっといい事なんだとは思いますが、こういう場面だと全く武器にならないのです……っ。

「木下、悩みがあるなら言って欲しいぞ。私達だって――友達なんだからな」

「もきゅ、友達……うん、友達ですよね！」

「そうだぞ。まあ……木下の悩みは何となくわかるが……どうせ藤島の事だろう？」

「け、けーすけ様の事なんかじゃ！　ないの……ですけど……っ」

「素直に認めたほうが楽だぞ？　お前が藤島の事を見ているのはみんな知っているんだ」

「みみみみんなですかっ！？」

「おっ？　やっぱり藤島絡みかぁ……予想通りの展開だぞっ」

「もきゅぅ……」

拙者ってそんなに顔に出やすいのかな？

そこまでバレバレになっちゃうくらい、すぐ表情に現れちゃうのでしょうか？

そ、そんな事ないですよねっ！　明智殿がたまたま鋭かっただけなのです。それで明智殿が拙者の事をみんなに言っただけ……だと思いていいのですっ。

……何故なのでしょう。急に恥ずかしくなってきたのです……みんなから見ても、拙者はいつもけーすけ様の事を見ている？　でもなんで？　けーすけ様をずって見ている理由は……？

ううう、自分でもわからない。わかりたくてもわからないのです……っ。

「まあ……なんだ？　助言出来る事は少ないが……とりあえず木下、藤島をどう思っているんだ？」

「どどど、どうって！？」

「木下を見ていればわかる。きっとそんな悩みなんだろ？」

「……っ」

もきゅう……そんなところまでお見通しなのですか。なんか明智殿が怖いのですっ。

どうしてそんなトコまでわかっちゃうのでしょうか？　やっぱり拙者、考えている事が表情に出ちゃっているのでしょうか？

「それでどうなんだ？　大丈夫だ、私は口は堅い方だぞ」

確かに明智殿はお口どころか、考えまで固いような気がするのです……明智殿になら言っても大丈夫なのでしょうか？　いや、この際打ち明けたほうが楽なのでしょうか？　それに明智殿は拙者よりはそういう事に強そうですし。いっその事……明智殿に話してみるのです。

「えと……拙者、どうしたらいいのかわからないのです」

「わからない？」

「けーすけ様の事だって好きと言えば好きなのです。でも……どういう好きなのかが……っ」

「ふ～ん、つまり……木下は藤島の事が好きなんだな」

「っ！？」

何故かまた、顔がかあっと熱くなってしましました。
……あれ？　なんでまた……ドキッと胸を突かれるような感覚もありましたっ。
うぅ……余計意味がわからないのです。

「まあ、あくまで私の予想だけど……でも木下は迷っていたぞ」

「ま、迷っていたって……？」

「うん、即答でも出来ればそうは思わない。だけど木下は“好き”の意味がわからず迷っていた。それって、家族とは友達に向ける好きとは違う……って事じゃないのか？」

「……」

家族や友達、もちろん好きです。それを言ったらお姉様の事は尊敬していますし、明智殿や他の皆さんだって好きなのです。そんな事はわかっています。
だけど、けーすけ様に対する好きだけ――意味がわからないのです。

「……っ」

……あれ？
こ、これってその……もしかして、けーすけ様の事を……。
なんて言えばいいのでしょう。特別に見てるって事なのでしょうか……っ？
“家族や友達として好き”には、他の皆さんは当てはまるのに……何故か、けーすけ様はその枠に収まりきらないのです。もっと仲良くなりたい、ずっと一緒にいたい――。

「……っ！」

理由（わけ）が――わかりました。

けーすけ様に対する気持ち。拙者が悩み続けていた理由――わかっちゃいました……っ。

気付いた瞬間――何故か鼓動が速くなっていく。かぁっと顔も熱くなっていく。

もきゅう、こんなの……クラスの人に言ったら笑われるのです。拙者はとても単純な事に気づけませんでした……今更それに気付いたのです……っ。

だけど……気付けたのです。それだけでも――幸せな気がしますっ。もちろん、それ以上を望む気持ちのほうが強いのですけどね……えへへ、明智殿に相談して正解だったのです。

おかげでもやもやの正体に――気付けました！

「にゅふふ。明智殿、ありがとうございます」

「えっ？　わ、私……まだ木下の答えを聞いていないぞ？」

「さあ？　内緒なのですっ♪」

「な、なんだ？　なんで楽しそうなんだ？」

「さっ！　そんな事よりけーすけ様達の所に行きましょう！　この船だってアマデーオの魔法で作り出されたものなのです。そう長い時間は持たないと思いますし、早く皆さんを連れて下船しましょう！」

そう言って――拙者は船の中へ向かって走りだしました。

「あ、木下！　おいてくなっ！」

にゅふふ、今の拙者はちょ～っとだけ気分がいいのです。けーすけ様に会って今まで出来なかった分のお話をしたいのですっ。とにかく今拙者は――けーすけ様と一緒にいたいのですっ。

けーすけ様は護衛対象です。でも、上から何も言われていないですし、そういう仲になっちゃってもいい……ですよね？

と、とにかく負けないのです。伊吹さんや千早さんには絶対に負けないのです――！

けーすけ様……今頃なにしているのでしょうかっ？

とにかく――拙者はけーすけ様に会いたい。会いたくて仕方がないのです。

拙者は少しだけ軽やかに歩き、ただずっと――けーすけ様の事を考えていました。

……なのですが、船内にある大部屋に行くと――そこは、

「い、いてえっ！　ちょ、あっかり～ん痛いよっ！　伊吹も竹刀振り回すなっ！　あと青山さん視線が怖いよオーラが黒いよっ！？」

「ううう、うっさいわね！　これは立派なお仕置きよ、このシスコンっ！」

「罰だからなっ！　あたいを裏切った罰なんだからなっ！」

「先輩……ひどいです。わたしがいるのに……葵とあんな事を……ひどいです、先輩……っ！　そんな先輩にはお仕置き、今夜恥ずか

しい写真撮っちゃいますから……っ！」

え、え～っと……途中から来た拙者にはサッパリわかりません。誰か教えて欲しいのです。この状況は一体なんなのでしょうか？　と～ってもカオスな事になっている気がするのです。修羅場……でしょうか？

「ふにゃあ……えへへ、私……今日からお兄ちゃんの恋人……へへっ」

「違うからな葵！　圭介は葵のものじゃないからなっ！」

「そうだよ……せ、先輩は……わたしのものです……っ！」

「と、とにかく……アレよアレ！　兄妹なんて認めないわよっ！　そんな事になるくらいなら私が圭介と――て……ッ！？　ば……ばか圭介えええぇえええっ！」

「ぐはぁっ！　お、俺が悪いの！？　今叩かれた理由がわからん！」

「あんたのせいなんだからっ！　あんたが小さい頃からアレなのが悪いんだからっ！」

「そ、そうですよ……先輩、わたしというものがありながら……浮気するのが悪いんです……っ！」

「～～っ！　と、とにかく反省しろよなっ！」

「だあああちくしょう！　俺は誰のものでもねえ！　ああもう痛いし怖いし……不幸だあああああああああぁああああああっ！」

すごいのです……。

何が起きているのやらなのですが、すごい事になっています。後から来た明智殿も凄まじい光景を前に唖然としていました。拙者も凄すぎてその……けーすけ様と話すどころか、言葉が全く出てこないのです。一体、何をどうやったらこんな状況が生まれるのでしょう？

謎なのです……そして、けーすけ様の部屋にあったバ〇テスを思い出したのですっ。

アレも確か――ひょんな事でカオスな状況になる話、多いですよね？

なるほど。今のけーすけ様は観察処分者同然なのですねっ。

「どうする……木下？」

「とりあえず止めましょっ！　船が消滅するのも時間の問題ですし……っ」

……その後、拙者と明智殿は苦労の末――ようやく事態を収拾させる事に成功しました。

なんでもけーすけ様、リミッターを解除する為に葵さんとキスをしたそうなのです。

うむむ、納得なのです……聞いた瞬間拙者も拳に力が入りました。やっぱりけーすけ様はけーすけ様なのです。おバカなシスコンなのです……っ！

でも、それで戦いが終わったのですから――今回は特別に許すのですっ。

――結局、後始末に時間もかかってロクに遊べず、拙者にとって

の合宿はこの日で終わってしまいました……折角の夏休みの思い出が台無しなのです……もきぅ。

でも夏休みはまだまだ続くのです。一回はけーすけ様とお出かけしたいのです。

でもでも、いつ出かけましょう……結局、拙者はその後も数日迷っていました。

「あのー！　ぼ、ボク完全に忘れられてるよね!?　ボク完全に空気だよね!?」

第１４２話，気付いてしまった事、（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「にゃっはははは！　やった！　兄貴よりあたいのほうが出番あるぞっ！」

浅間部長「何故だっ！　何故あかりって名前の妹よりボクのほうが空気なんだ！」

あかり「あたいだって一応ヒロイン格だからな！　兄貴とは違うんだよっ！」

浅間部長「それを言ったらボクだって部長だい！　他の男とは違うのだよ！」

あかり「とにかく、今回はあたいほうが出番多かったんだからな！」

浅間部長「うぐぐ……今に見てろ、きっといつかボクが主役になるさ！」

圭介「すっげえ醜い争い……」

暮葉「そ、そうですね……っ」

第１４３話，本物の戦争、オタクの戦争

――地球のどこか。氷の女王――アリーナ・ウラジミーロヴナ・レニナは、質素な軍服の中年男性と話をしていた。彼の名前はニキータ・ヴァシレフスキー。サヴィエト亡命政府の元帥で元々はサヴィエト赤軍の軍人であった。アリーナに忠誠を誓う忠実な部下である。

アリーナは相変わらず冷徹な笑みを浮かべている。

氷の女王に相応しい――シベリアのように冷たい堂々たる姿であった。

「へぇ……つまり、アマデーオ・ベルサーニまでやられたというわけですね？」

「はい」

「所詮、神様なんてくだらないものを信じる魔術結社崩れの魔術師。藤島圭介（ターゲット）に敗れる程度の小者だったというわけですね……ふふふっ」

「同志アリーナ、次はどう動きますか？　貴女の出方で作戦を変えなければなりません」

「そうね……もう一人のスパイとあと――そろそろ赤の軍神を送りだそうかしら？」

「も、もうアレを使うのですか？」

「ええ、明日までにスパイが藤島圭介（ターゲット）を捕獲できなかった場合――８月１７日に“風剣（ふうけん）のシルフ”を送ります。この際……ついでに古

宇坂という街を占領しましょう。あの土地を私達の拠点とするのですよ……ふふふっ」

「……では、ワシは古宇坂攻略作戦の内容でも考えるとしますか」

ヴァシレフスキーは一礼し、アリーナがいる大部屋から立ち去った。

アリーナは一人、ウォッカを飲みながら冷徹な笑みを浮かべていた。

彼女の命令は一週間以内に実行される。

藤島圭介の拘束と――エリート魔術師とその部下による、古宇坂市への総攻撃が……。

――その頃、8月11日、圭介の部屋……。

はぁ……なんでこうなってしまったんだろう？

それは8月11日――合宿から帰ってきて数日。暮葉からの外出規制により、相変わらず引きこもりな夏休みを満喫していたのだが……。

「♪～♪～」

現在、俺の部屋には青山さんがいる。その時点でもうおかしいとは思うが、青山さんは人の部屋の本棚にあったラノベを、ルンルン気分で読んでいたのだ。青山さんってオタだっけ？　まあそれ以前の話だとは思うけどさ。そもそもなんで青山さんが俺の部屋にいるのか。

それには色々と深い事情があるのだ……そう、全てはアマデーオ

との戦いが終わった後。

伊吹、あかり、青山さんにシバかれていた俺はあの後、今回の事態を誤魔化すべく暮葉と一緒に苦労をした結果――あかりと葵、そして浅間部長の洗脳には成功した。

洗脳と言っても、ただテキトーな事を言って誤魔化しただけだが。

まあ、なんにしても俺達の事が3人にはバレずに済んだのだ。

ところが合宿後、街中で俺は青山さんに捕まってしまい――、

『……先輩、先輩って怪しいですよね』

そう――アマデーオとの戦いで完全に怪しまれてしまったのだ。

正直ビビったよ、どうしようかと思ったけど……青山さんは優しかった。なんと彼女は詳しい事情を効かないって言ったのである。

まあ……もちろん条件付きではあったが。

んで、その条件というのは――、

「青山さん、いつまでここにいるつもりなんだ？」

「あはは、やですね先輩……わたし達恋人じゃないですかっ？」

「ちげーよ！　いや、形はそうだけど違いますよっ！」

「……先輩、深く追求しちゃってもいいのですか？」

「すみませんっ！　俺は正真正銘青山さんの彼氏ですよ！」

「えへへ……せんぱい大好きですっ」

そう、深く追求をしないと言う代わりに――何故か俺は青山さんの彼氏になってしまった。

つまり、俺達は付き合い始めたという事である。なんてこったい。
俺、別に青山さんに対して恋愛感情を抱いちゃいないのに。まあ、これを選んだのは俺だから仕方がないが。もちろん青山さんの要求を受け入れたのにはちゃんと理由がある。
青山さんに事情を説明すると言う事は――彼女も伊吹達みたいに、俺達の世界に足を踏み入れるかもしれないと言う事だ。
魔法使いだのサヴィエトだの。あんな危険な事にか弱い青山さんを巻きこみたくはない。
青山さんと付き合うというのは、まさに苦肉の策なのである。だけどねぇ、恋愛感情もない相手と付き合うって……何をすればいいのやらって感じである。
ちなみに、俺と青山さんが付き合っている事は、暮葉や葵にはまだバレていない
当然伊吹やその他友達にもである。つーか、バレたらイジられそうだし、伊吹や葵あたりにバレたらお仕置きされそうで怖いよ……。
女の子と付き合うって大変だなぁ。しかも恋愛感情がないっていうね……。
でもまあ、彼女が出来た事については嬉しいよ。何気に毎日も楽しいからな。

「……あの、先輩……っ」

「あぁ、なんだ？」

「あ、あの……明日は暇でしょうか？」

「暇っちゃあ暇だけど？」

「……そ、それじゃあ、デートいきましょうっ！」

青山さんが瞳をキラキラと輝かせ、俺の袖をぎゅっと握ってからおねだりしてきた。

ぐは……こりゃ可愛い。青山さんって可愛い方だし。形だけでも青山さんが彼女な俺ってやっぱりリア充なのだろうか。とにかく、今の仕草で一度死にそうになっちまったよ。

「え～っと、デートだって？」

「はいっ！　その……わたし達まだ一度も行ってませんよね……？」

「そうだなぁ。恋人なんだからデートくらいは行ったほうがいいよなぁ」

「い、行きましょう……っ！　そ、それからその……わたし、先輩にならいつされてもいいですよ……？」

「ま、まあ……当日の俺の気分次第な」

え～っと、青山さんってこんな変態キャラだったっけ？　いや、最近の青山さんは葵並にアレなキャラになってきた気がする。青山さん……恋をして変わっちまったのか。恋が人を変えるって話は本当だったんだね……お兄ちゃんちょっとショックですよ。

神様、どうか明日俺がその気になりませんように。どうか、青山さんの大切なアレを奪っちゃうような展開になりませんように。

「えへへ……先輩とデートっ♪」

「そんなに楽しみか？」

「はいっ！　だって……先輩と一緒にいれるんですからっ」

青山さんは乗り気っと。
まあ、デートくらいならしたっていいだろう。
というか、デートすらしないカップルって……そいつは多分、遠距離恋愛をしているか喧嘩中の険悪カップルくらいであろう。何よりいま青山さんを下手に怒らせると、彼女を危険に巻き込むかもしれない事を言わされる羽目になる。それだけは絶対に避けたい。
青山さんを守る為にも、それだけは絶対に――言ってはいけない。

「けど、デートっつっても何処に行けばいいんだ？」

「え、それは……そのっ」

「う～ん、どっか行きたい所とかある？」

「は、はい……先輩の行きたい所に行きたいです……っ！」

「……」

う、ぐ……これは困った回答だ。
俺の行きたい所？　明日は８月１２日だし、出来る事なら夏コミに行きたいんだ。
だけどねぇ。夏コミってオタクの祭典じゃん？　いや、俺もオタクだよ。胸を張ってオタクと言えるくらいアニメも見てるし、エロゲーだって大量に所持している。だけどな、夏コミデートって人間としてどうなんだろう？　中にはそれを実行するツワモノもいるらしいが……。
だけど流石に最低だと思うんだ。でもなぁ、ま○マギの同人誌欲しいし……。
いやいや、でもコミケは戦場である。果たして、戦場に可愛い可

愛いラブリーマイエンジェル千早たんを連れてっていいのか？　いやダメだろ常識的に考えて。

だけどコミケ行きてぇし……ああもう！　こうなったらダメ元で誘ってみよう！

「あのさ、青山さん」

「は、はいっ」

「コミケ……って知ってるか？」

「はいっ、え～っと……同人誌即売会ですよね……？」

おお、流石は青山さん。オタクでブラコンな残念妹が友達で、部長が残念イケメン系キモオタで俺もオタクと周囲はオタだらけ、その上、最近ラノベまで読み始めただけあって知っていたか。

「そうそう、俺それに行きたいんだが……やっぱデートにそれはダメだよな！」

「いいですよ……？」

「……へ？」

「先輩……そこに行きたいんですよねっ？　その、わたしも興味ありますし……っ」

「い、いいの！？」

「……はいっ！　先輩、連れてってください……っ！」

マジかよ！　コミケデートＯＫってどんな彼女だよ！？

青山さんってすげえ、オタク男子に優しい彼女だな。コミケに行けると聞いて、だんだん俺もテンションが上がってきましたの事よ。とにかくありがとう青山さん……っ！

よし、明日の予定は青山さんとコミケデート。そしてま○マギ同人誌の入手。

戦争だ。

彼女を楽しませつつ、俺は戦争を行わなければならない。くそっ、なんて厳しい条件下で同人誌争奪戦に参加しなきゃいけないんだ。しかし、そこで本気を出さずに男と言えるか？

戦うぞ……青山さんを楽しませる為に。ま○マギ同人誌入手の為に――！

……はぁ、今思ったけど俺――ある意味最低だな……。

第１４３話，本物の戦争、オタクの戦争（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「デートでコミケはねぇわ」

赤佐「サイテーやな藤島」

圭介「うっせ黙れ！　青山さんがＯＫ出したんだからいいだろ！」

黒木「普通ホテル直行じゃね？」

赤佐「黒やんもサイテーやな」

圭介「俺より最低じゃねえか？」

赤佐「やっぱデートはエベレスト登山やろ！？」

黒木「……コイツは一生彼女出来ねえだろうな」

圭介「……そうかもな」

第１４４話，有明大戦争

諸君、私はコミケが好きだ。諸君、私はコミケが好きだ。諸君、私はコミケが好きだ

夏コミが好きだ冬コミが好きだかつての春コミも好きだ……なーんて、某少佐的な事はどうでもいいとして……今日は８月１２日。つまり俺達にとっては決戦の日である――。

朝は早起き、当然朝飯なんて家出は食べない。駅のキオスクで十分だ。服装は見た目はカッコいいながら動きやすいものを選び、同人誌を入れる為に大きい鞄を持っていく。ふ、悪ぃが今回の俺はま○マギ同人誌の為に――本気を出しちまうぜ。

「……あれぇ？　けーすけ様……出かけるのですかっ」

「ああ！　俺ら、戦場さ行ぐだ！」

「もきゅ！？　せ、戦場！？　というかけーすけ様――！」

「悪ぃっ！　今日は超急ぎの用があるから！　話は帰ってきたらちゃんと聞いてやるから！」

「あっ！　けーすけ様っ！　はぁ……今日、けーすけ様と遊ぼうと思ったのに……」

暮葉が何かを呟いているが、全力疾走中の俺には聞きとる事が出来なかった。

とりあえずごめんよ暮葉。帰ってきたら愚痴はいくらでも聞くぜ。あと、ついでに暮葉の為にも一冊同人誌を買ってやろうかな。暮葉は確か青エク好きだったハズだ。これも全部……葵がオタな趣味を

吹き込みやがったせいだがな。あの純粋な暮葉が葵の手で何時の間に……ちくしょう！

まあ、それを言ったら俺の彼女だって、俺や葵の影響を受け――ついに今日、

「よぉ～、青山さんっ」

「……っ？　あっ！　先輩……っ！」

青山さんが俺を視界に捉えた瞬間――満面の笑みを浮かべ、嬉しそうに飛び込んできた。

俺の胸板には青山さんの顔。すりすりと押し付けるように顔を左右に振り、同時に青山さんの甘いいい香りが鼻に入ってきた。さ、最高でございま……ごちそうさまでした！　ふぅ……。

「ぷ、はぁ――！　えへへ……先輩分補充完了。これで……一時間くらいは平気ですっ」

「一時間かよっ！　燃費悪ぃなオイ」

「当然ですっ。それほどわたしにとって先輩分は重要なんですよ……っ」

「ったく、コミケはマジで戦場なんだぞ？　あと、俺らみたいなリア充が行く所でもないし、下手すりゃ襲われっかもしれないんだからな」

「大丈夫です。そういう時は……えと、フェアバーン・システムでしたっけ？　あかりに教わりました……っ！」

「……」

あかりの奴、青山さんになんてモノを教えてやがったん。フェアバーン・システムってやっぱり第二次世界大戦中に連合軍が採用した、近接戦闘用の格闘術の事だよね？　確かに、青山さんでも出来そうな単純な技ばっかだけど……。

そもそも、青山さんが戦うのが間違いだと思うんだ。そもそも、オタクの祭典だし喧嘩上等な人なんて殆どいないだろう。

仮にいたとしても、青山さんのフェアバーン・システムは不安だ。だから俺の素人喧嘩術で相手と戦ってやろうじゃないか。まあ、何度も言うが俺らが行く場所はコミケ会場。そんな荒くれ者が行くような場所ではないだろう。ハハハ、多分大丈夫――、

……。

「君かわぅーねぇ？」

「ねえねえ、そんな男放っておいてさぁ、俺らと遊びに行かねえ？」

全然大丈夫じゃねえじゃん……。

それは東京都にある新木場駅での事。俺と青山さんはコミケ会場へ向かうべく、京葉線からりんかい線に乗り換えようとしていた。だが……アホだ。アホに絡まれてしまった。これは多分青山さんがあまりにも可愛いから、アホが嫉妬でもしたんだろう。はぁ……相手にすんのも面倒くさい。

「せ、先輩……っ！　ささささ、下がってて……くださいっ！」

うお！　青山さんが構えてる。あかりから教わったフェアバーン・システムを、コイツらで試そうとしているのだろう。だけど……や

っぱり不安だ。青山さん弱そうなんだもん。相手の不良のあまりの可愛さに爆笑してるじゃねえかよ。仕方ない――やっぱりここは俺の素人喧嘩術で――、

「はいはいお二人とも。まあなんだ？　そこのトイレで話そうじゃないか？」

「あ？　なんだテメェ？」

「俺らテメェに用ないんだけど？　殺されたくなかったら帰ってくれね？」

「いいからいいから！　ほら、さっさと行きましょう。ねっ？」

「はぁ!?　なんだコイツ生意気じゃねぇ？」

「ちょ～ムカついた！　テメェぜってぇー生きて帰さねえ！」

はぁ……面倒くさい。コイツらのせいで遅れたらどうすんのよ。コミケは徹夜NGだから早朝にならべなかったら、ま○マギ同人誌入手は絶望的なんだぞ？

っと言うわけで、さっさと騒動を終わらせる為に――俺が不良と戦った。結果は別に報告するほどの事でもないだろう。街のヤンキー2人程度で苦労はしないですよ。魔法使いに襲われたりとデンジャラスな日常を過ごしているんだ。そんな事もあって――俺はいつの間にか強くなっていた。

「ぐ、はぁ――！　う、そ……三発しか……喰らってないのに……？」

「ひ、ひぃ！　ば……バケモノだぁ……っ！　あの、これで勘弁してくだせぇーっ！」

不良の一人は俺に財布を渡し、床に倒れていたもう一人を引きずって逃げてしまった。

……え～っと、とりあえずこの財布どうしよう？　やっぱり、人の財布はちゃんと届けないとダメですよねぇ。はぁ……結局この騒動のせいで、飛び込み乗車をする羽目になった。

しかも今は夏ですよ？　黙っていても汗ばむこの季節に、走ってぎゅうぎゅう詰めの電車に飛び込んだのである。暑い上に汗だくな事この上ナシである。

はあ……朝っぱらからこれとは、今年のコミケは先が思いやられるよ。

それから数十分後、俺と青山さんは遂に――東京国際展示場へ足を踏み込んだ。

もう始発電車で来たんだけど……なんなんだこの人ごみは？　ひょっとしてコイツら徹夜組じゃねえだろうな。ルールを守った結果がこれだよ、ちくしょう徹夜組多すぎる。果たして無事にま○マギ同人誌を手に入れる事が出来るんだろうか。

「す、すごい人数……ですねっ」

「始発列車に乗ってこれかぁ……やっぱ上級者はすげえな」

「その……あれですよね、暇人……なんですよね？」

「まあ、ここに来るって事は殆ど暇人なんじゃねえのか？」

俺だって正直暇人だからな。外出規制がかけられてロクに外出が出来ん……そんな日常が続いていい加減引きこもり生活にも飽きていた頃だ。そんな時にコミケに来たんだ、当然たとえ猛暑でも人が多くても俺のテンションは最高に高かった。

……だけど、ま○マギ入手できるべか？　流石に人数多すぎだろ……。

っと思っていたその時、ピンポンパンポン。このありがちな音は間違いなくアレだ。

『おまたせいたしました――』

開戦。

そう――今、まさに戦争が始まったのである。

拍手の音で放送の声が掻き消されているが、まあ関係ない……そんな事より、２０１１年有明大戦争は今まさに始まった――！

「青山さん」

「は、はい……っ」

「ここはマジで危険だ。迷子になるかもしれねえ……だから俺から離れるなっ！」

「～～っ！　は、はい……っ」

借りた猫のように静かになり、顔もすっかり紅潮していた。そんな状態の青山さんは静かに俯いてしまった。え～っと……俺、何か恥ずかしいセリフ言ったっけ？

ってかそんな話はどうでもいい。それより、早く飛びこまねえとま○マギが――！

……その後も、俺は青山さんの手を引きつつ、人ごみを移動し――狙っているサークルの場所へ迅速かつ慎重に向かった。彼女連れだが……それでも辛うじて到着はしたが。

「せ、先輩……大変です、あれ……っ！」

「……っ！　さ、最後の一冊!?」

ウソだろ。今年のコミケはレベルが高ぇ……ッ！

俺は始発組だったんだぞ。それなのにもうま○マギねえのかよ。な○は完売ならぬま○か完売が現実のものになっちまうのか。ちくしょう、なら最後を飾るのは俺だ。たとえ死んでもこの一冊は誰にだって譲らねえぞ――！

「……ッ!?」

同時に――触れやがった?

一冊の本に2人の手が同時に触れた。これはまずい。いや、ある程度は予想していたがまさか本当にこんな事になっちまうとは。だが、この程度で諦めるほど――俺は甘くなんかねえ！

「ここは俺も譲れないね……途中でリタイアした友達の為にもね――」

「……いいぜ、てめえがまだま○マギ同人誌を狙うってなら――まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！」

「――あれ、圭介?」

「……えっ、お……お前まさか重原?」

意外な場所……でもないか。去年はコイツや大吾と一緒に来たしな。

俺と同時に同人誌を手に触れたのは――重原広敏その人であった。

偶然の遭遇である。コイツら……今年もコミケに来ていたのか！

第１４４話，有明大戦争（後書き）

・後書きトークコーナー

伊吹「ま～た私ら出番のなさそうな話が始まったわね」

凪紗「そうだな……っ、コミケっておもしろいのか？」

伊吹「圭介は暑いし、人多いし、徹夜組がうざいとか言ってたわよ？」

凪紗「な、なにが面白いんだろう……？」

伊吹「圭介の世界は私もあんまりわかんないわよ……っ」

――その頃。

葵「でねでね！　今年は葵二日目を狙おうと思うんですよ！」

純奈「私は３日目まで全部行くよ！　百合百合な同人誌いっぱい買うんだ！」

※世の中、よくわからない。

第１４５話，友達と彼女、どっちを優先すべき？

「はぁ！？　サークル参加！？」

８月１２日の東京国際展示場。ここでは夏コミが開催され、俺は青山さんと２人でこの戦場までやってきたのだ。しかし、俺らは始発組だったにも関わらず、ま○マギ同人誌は既に最後の一冊となっていたんだ。全く、予想以上に徹夜組が多くてビビったよ。

なんとしてでも同人誌を手に入れるべく、迅速かつ慎重に行動した結果――俺達はついに最後の一冊に手を触れる事が出来た。しかし、俺は誰かと同時にその一冊に触れたのだ。最後の一冊を賭けた戦いが始まる――と思いきや、同時に最後の一冊に手を触れたのは、我が友の重原広敏であった。

どうやら重原は大吾と一緒に来たらしく、その大吾は家現在トイレ中らしいが……。

「そうなんだよねぇ。大吾ってアレでもサークルの一員らしいから。俺は大吾の手伝い＆ま○マギ同人誌入手の為に頑張ってたんだよ」

「だ、大吾がサークルの一員ねぇ……」

以外過ぎる事実だな。マジで言ってんのかよ、あの大吾がサークルに入ってたって？

そう言えば、アイツとは最近連絡が取れなかったな。唯一大吾と連絡がついた日なんて「僕は今聖戦の為に忙しいんでね！　ごめんね圭介、それじゃあいい夏休みを満喫してね！」と、なにやらわけのわからん事を口にしていた。アイツ……あの言葉は夏コミ参加の為だったのか。

「ん？　けど、お前はお手伝いとして誘われたんだろ？」

「まあね」

「俺もお前らの友達で、同じ趣味を持つ同志なハズなんだけど……なんでお前だけ？」

「ああ、それ俺と大吾の配慮」

「えっ？　ちょっと待てこら、どういう事なんだよ？」

　すると、重原は突然俺と青山さんを指差してきた。

「だって圭介はリア充だからねぇ。圭介争奪戦を面白くする為にも、圭介を誘うのは悪いかな～なんて思ったんだよ」

「はぁ！？　ふっざけんな！　非リア充の俺は室内で腐ってたんだぞちくしょう！」

「あれ、そうなの？」

　なにこの素で驚いているマジ反応。俺って一体重原や大吾からは、どんな目で見られちゃってんだろうか。まさか、ホントにリア充だとでも思ってんの？

　今は形だけリア充なのは確かだけどさ……あ、そういえば青山さんは？

「……せ、先輩……わたし達の関係は嘘……だったんですかっ？」

　しまった、これはまずい。非常にまずい事が発生したぞ。さっき

の俺の非リア充宣言のせいか青山さんが……か、悲しんでいやがる。ていうか青山さん、リア充の意味知ってたんだ。このままだと青山さんに深い事情を追及されてしまう。なんとしてでもそれを避けなければ――！

「ちょ、待て青山さん！　これはそのアレだ……すまん、今は話を合わせてくれ！」

「……えっ？　は、はい……っ」

どうしよう。一応頷いてはくれたけど、青山さんがすっげえ悲しそうだ……そこまで俺の事が好きだったなんて。もしかして、今まで邪険に扱い過ぎたかな。いやいや、だけど本気で好き合っているカップルではないし、色々な意味で過ちは犯したくない。

だからまあ、これでいいとは思うんだが……ああもうどうしよ、恋愛って難しすぎるぞ。

「ところで圭介、その子って圭介の部活の後輩さんだよね？」

「ああ、そうだよ」

「……あ、あの……先輩のお友達の重原先輩……ですよね？」

「おお、俺の名前覚えていてくれたんだね」

「はい、先輩が話してくれましたので……っ」

直接話す事ってのは少ないが、一応お互い顔は知っている。それが青山さんと重原のなんとも微妙な関係である。って、青山さんには何度かコイツの話をした事がある。だからだろう、青山さんが重

原の名前を覚えていたのは。
　重原は唯一人に話せる友達だからな。大吾はちょっと……アレだな。完全二次元派ってのを隠さないと引かれるヤツであろう。
　それでもアイツ、何故か付き合いはいいからか、そこそこ男女問わずに人気らしいが。
　……あの完全二次元派が人気とは、最初知った時は烏龍茶吹いたぜ。

「はは、そうだったんだ。僕は重原広敏、改めてよろしくね」

「は、はい……！　青山千早です……その……け、圭介先輩とお付き（ｒｙ」

　俺は全てを言おうとした青山さんの口を塞いだ。言わせてたまるか、重原なんかに知られたら絶対にいじられるだろうが。青山さんはふがふがと手の中で暴れている。
　でも……そんなの関係ねえ。とりあえず重原専用の紹介をしてやろう。

「まあ、なんだ？　仲のいい後輩ってヤツだ」

「へぇ～？　仲のいい後輩ねぇ……実は付き合ってるんじゃないのかい？」

「……っ！　付き合っちゃいねえぞ？」

「その割にはさっきまで、随分といちゃらぶしていたような気がするけどね」

「してねえって。それよりお前、大吾の所手伝わなくてもいいのか

？」

「あ、そうだったね。サークルの人に無理言って抜けだしてきたからね、そろそろ俺も戻った方がいいのかな？」

「ああ……あっ、そうだ重原。ホントにま○マギ貰っちゃっていいのか？」

俺は重原に最終確認的な事をしてみる。そう――さっきの同人誌。あの後重原と話し合った結果、なんと同人誌は俺のものになったのだ。だが重原はそれが欲しいが為にサークルの人に無理を言い、ここまでやって来たんだ。その努力を水の泡に……流石にそれはちょっと可哀想な気がするぞ。やっぱりここは友達として――譲ってやるべきなんじゃ？

……と思ったが、重原はニッコリと爽やかな笑顔を浮かべて、

「いいんだよ。大吾に乗せられて圭介を夏コミに誘わなかったし、圭介が暇している事にも気付かないでね……」

「別にそれはいいんだけどよ、つーかお前は全然悪くないだろ？」

悪いのは大吾。まあ、別に怒っちゃいないけどさ……。

でもねぇ、勝手にリア充って決めつるなよ。まあ、今は形だけでもそうだし、文句を言える立場じゃないって事も自覚はしているけど……。

「いいんだって。実は俺らの所もま○マギ売ってたんだよね。俺はサークルを手伝って、そっちのほうは持っているんだ」

「マジ！？」

「それも欲しかったんだけどねぇ、そのうちお互い持ってる同人誌を貸し合う……って話でどうだい？」

「ち、ちなみにお前らの所の同人誌は……？」

「ここが始発組でギリギリだったんだ。多分、向こうも完売していると思うよ」

ですよねぇ……はぁ、ま○マギどんだけ人気なんだよ。な○はのビックリだ、まさかここまでま○マギが人気だったとは。全くわけがわからないよ。

「じゃあ、学校始まったら貸し合おうぜ」

「そうだね。よし、男の約束だよ」

「ああ、約束だ」

ガシっ、と俺と重原は腕を組んだ。

ぐっふふふ……やっぱり持つべきものは友達だな。交渉成立である。こうして俺は当初の予定よりも充実した結果を得る事に成功。今年の有明大戦争は友軍のおかげで――大勝利だ。

「それじゃ、俺はそろそろホントに行くね」

「おう、重原もサークルのほう頑張れよ！」

こうして――俺は大切な友と別れを告げたのだ。

ふぅ……終わった。さて、後はテキトーにコミケ会場を回るとし

よう。目的は達成されたんだから後はお遊びタイムだぜ。青山さんも興味があるって言っていたし、去年大吾達と来た時もドタバタだったからなぁ。今年はじっくり会場を回るとしよう――。

――それから数十分後。俺達は話しあいながら外に来ていた。

理由は簡単。青山さんがトイレに行きたいからである。だが、夏コミとトイレと言うのは非常に混雑しているものだ。なので、用を足すまでに時間がかかってしまうのだが、青山さんがそこまで長時間我慢できるわけがない。そこで俺は外の仮設トイレに目を付けたんだ。

去年の大吾情報なんだが、１０時を過ぎると仮設トイレは比較的空くらしい。その話を信じて実際に言ってみたのだが……正解だったな。確かに中のトイレよりは人が少ない。

「よかったな青山さん。思ってたよりも人が少ないぞ」

「……そうですねっ」

「あ、青山さん……？　まだ怒ってるんでせう？」

「……先輩、わたしのこと……ただの後輩って……っ」

「ちょ！　だからアレは違うんですよ！　色々と事情があったんだよ！」

「素直に恋人って……言えば良かったじゃないですかっ」

「それだと後ほど俺の身に危険が……っ」

そう言うわけにもいかないのが現実。アイツらにバレたら大変だ。すぐに暮葉達にも情報が届いて俺は下手したら――葵あたりにシバかれるかもしれない。

絶対に嫌なんだよ。ちょっとした事で制裁を受けるのが！

「うぅ……せ、先輩。その……話は後にしてその……行ってきますっ」

「え？　お、おう。気を付けろよ？」

青山さんは相当近いようで、少し身体を震わせていた。よかったぁ外来て、中のトイレだったら青山さんは漏らしていたかもしれないな。

だけどどうしようかな。早速自己保身のためにとった行動が、青山さんのご機嫌をかなり損ねてしまったよ。青山さんがトイレから戻ってきたら、ちゃんと事情を説明しねえとな。

「あ、圭介じゃないかい」

「ん？」

不意に横から声をかけられた。

男の声だな。誰かと思って左を向くと――爽やかだが大柄な男が佇んでいた。

「やあ」

「あれ、重原じゃねえか？」

そこに立っていたのは我が友――重原広敏であった。

さっき約束をして別れた、現在サークルお手伝い中のヤツである。
だけど何故？　重原はサークルの手伝いに戻ったハズなのに。

「トイレで会うだなんて、これまた奇遇だね」

「ああ、だけどお前……サークルの仕事は？」

「大吾の次は俺だよ。俺もトイレがしたくなってね。時間帯的にここのトイレが好いているだろうからこっちに来たんだ。今済ませて帰ろうとした所だよ」

「そっかぁ」

「あ、そうだ。圭介……ちょっと話があるんだけどいいかな？」

「えっ、話？」

なんなんだ、こんな時に？
つーかまずい展開だぞ。これって青山さんの機嫌を更に損ねるフラグでは？

「うん、ちょっと来てくれるかな？」

「いや、だけど青山さんが……」

「大丈夫。彼女には俺がメールで伝えておくから」

「えっ！？　何時の間にメアド交換したのか！？」

「まあね、だから大丈夫だよ。すっごい大事な話だから……お願い

！」

あの重原が素直に頭を下げるだなんて……よっぽど大事な話らしいな。だけど青山さんの事もあるから俺はうかつに動けんし。困ったな……どうすりゃいいんだろう。

っと、俺が悩んでいたその時――重原が俺の右手を取って、

「うわっ！　ちょ、重原！」

「ごめん圭介！　ちゃんと彼女さんには事情をメールで伝えておくから！」

「俺の意志は無視ですか！？　スルーですか！？」

あ、あれ？　コイツってこんな無理やりなヤツだったっけ？

まあいいや……それより一体なんの話なんだよ。

一体俺は重原からどんな話をされるんだ？

第１４５話，友達と彼女、どっちを優先すべき？（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「はぁ……ちくしょう、指いてぇ」

伊吹「どうしたのよ圭介？」

圭介「格ゲーやり過ぎたんだ。俺の体質でも治りきらねえ……」

伊吹「い、一体どんだけ長い時間プレイしてたのよ！？」

圭介「いや、軽く５～６時間？　しかも強いヤツばっかり相手にしてな」

伊吹「し、真性の馬鹿だわ……っ！」

第１４６話，……あれ？

「はぁ……」

わたし――青山千早はお手洗いから出て、先輩に抱きつこうと思ったんだけど……いない。

先輩、どこにいっちゃったのかな。やっぱり先輩はわたしの事……で、でも、完全に嫌っているって素振りは見せないし。中途半端ですよ……先輩っ。先輩はいじわるです。わたしの心を揺さぶるだけ揺さぶらせて、いつもいつもわたしにカッコいい姿を見せて……。

わたしは先輩がずっと好きです。中学の頃から片想いしていました。そして今――やっとわたしはただの先輩後輩の関係ではなく、彼氏彼女の関係になれた。だけど、先輩はわたしがお手洗いに行っている間に消えてしまった。もちろんメールも一件もありません。

「……先輩っ、どこ……ですか？」

先輩……。

大好きな先輩……。

もしかして……嫌われちゃったのかな？

……そう、ですよね……わたしは殆ど無理やり先輩の彼女になった。先輩の数少ない弱みを握れて嬉しくって……でも、冷静になって考えてみればわたし……最低だよね。

だけど、そんなわたしに今まで怒りもしなかった先輩。優しすぎですよ……だからこういう事があると余計に悲しいです。好きに……させないでくださいよっ。

わたしはこれからどうすれば……。

「う、ぐぁ……っ！」

「……え……っ？」

突然、左下から男の人のうめき声が聞こえた。とっても苦しそうな声だった。咄嗟にわたしは首を動かし下を向くと、顔を見た事がある人が――苦しそうな表情を浮かべていた。

「……え、えと……重原先輩……ですよね？」

「き、君は確か青山さん……早く、圭介を連れて逃げてくれ……っ！」

どうして？　なんで重原先輩がこんなにボロボロなの？　先輩はいないし、重原先輩はボロボロだし、しかも逃げてって……もしかして、またなにか大変な事が起こったの？　わからないよ……どういう事なのかさっぱりわからない。

でも、とりあえずその……せ、先輩の名前を出しましたし、先輩の事を教えないとっ。

「あ、あの……その……先輩ならわたしがお手洗いに行っている間に……」

「い、いなくなったのかい……？」

「はい……っ」

「ちくしょう……まさか、もうヤツにやられたのかもしれない。行かなければ……っ！」

「あ……っ！　し、重原先輩……っ！」

重原先輩は傷だらけの体を引きずって、走ってこの場から立ち去ってしまった。

ヤツってなんなのでしょうか。そもそも、重原先輩はどうしてあんなにひどい怪我をしているのでしょうか？　先輩がやられたってどういう意味……？

もしかし、先輩はわたしを置いて帰ったのではなく、無理やり連れ去られた……？

……とにかく、重原先輩について行こう。何かわかるかもしれないよ――。

――その頃、人気のない会場裏。

俺――藤島圭介は無理やり重原に引っ張られ、人気のない場所まで来てしまった。何が入っているのかまではわからないが、壁際にはダンボールが山積みされている。誰も乗っていないトラックが３台ほど並んで駐車してある。どうやら……ここは会場の裏らしいな。

「ったく、いつもに増してほんっとに無理やりだな」

「ごめんね圭介。どうしても話しておかなければならない話だからね」

「わぁったよ付き合うよ。けど、青山さんに悪いから手短に頼むぞ」

「大丈夫だよ。抵抗がなければすぐに済むから」

「はあ？」

抵抗って、何の話をしているんだコイツ？
言っとくが、俺は化学苦手だからな。だけど重原は化学得意だった気がするし、一体なんでこんな場所で化学の話をするんだよ。しかも、それが青山さんに聞かれたくない話なのか？

「……んで、結局お前の話ってなんなんだ？」

「おっといけない。話を忘れる所だったよ……あれ？　あの子青山さんじゃないかい？」

「えっ？」

青山さん？　ひょっとして青山さん、俺らの後を追ってきたってのか？
でもトイレをしていた割には速過ぎだし。まあ、今の状況を簡単に説明すると俺は青山さんを心配させているわけだ。突然俺がトイレから離れる姿を見て、彼女は不安に思ったのかもしれない。
俺は青山さんの姿を確認するべく、後ろを向いてみると、

「が、はぁ！」

突然、かなり強い衝撃を受けた。
ちくしょう……なんだ？　一体何が起こった……肺の中の空気が一気に排出され、叫ぶ事も呼吸する事もできねえ。おまけに背中が滅茶苦茶痛ぇ、主に内面が痛ぇよ……ひょっとして、俺は背中のど真ん中あたりをぶん殴られたのか？
俺は苦しそうに胸部を押さえ、重原がいる後ろを振り向いた。
確かにそこには重原がいたが――いつもの重原ではない。何故か拳を構え、目も鋭く口元が奇妙に歪んでいた。まるで――重原だけ

ど重原じゃないみたいだ。

「しげ……はら……っ！」

「チッ、この大男の力（パワー）を持ってしても一撃では無理か。よく観察していたとは言えこの耐久力には流石の俺もビックリだよ」

よく観察……？

どういう事だ、よく観察って……まるで俺の事を見張っているみたいじゃねえか。

重原とそんなにしょっちゅう一緒にいたか、俺？

「あれだけ丈夫なら接近戦を仕掛けるのは危険か。なら――っ！」

すると、重原はポケットの中から二つの木製の棒を取りだした。

それはバチ、太鼓を叩く為に使う道具である。小学生の頃、よく授業中にふざけて音楽室にある太鼓を叩いていたが、まさにその時手に持っていたのと同じバチを、重原は両手にしっかりと握っていた。

一体……何をするつもりだ。いきなり殴りつけてきて……アレで俺を叩くつもりか？

「御父（Father Son）と御子と精霊（Holy sprit）の御名によりてアーメン（Amen）」

重原が発した意味不明な言葉。少なくとも日本語でも中国語でもない。英語のような気がするが英語赤点ギリギリの俺に、そんなものが上手く聞きとれるわけがない。結局、重原が何を言っていたのかはサッパリわからなかった。

重原はバチを頭上で叩く。

その動作自体に変なものはなく、意味もわからず呆然としていた……、

「――ッ！」

瞬間、白く輝く鋭い何かが弓矢のように飛んできた。反射的に俺はそれを避けたが、謎の白い物体は俺の後ろにあったトラックに命中し、胸にも響く轟音が鳴り響いた。。トラックは運転席の部分が完全に破壊されており、自走も不可能な状態になっていた。

金属片やタイヤなど、衝撃でぶっ飛んだトラックの残骸が降りかかる。それに当たるだけでも重傷は確実であろう。俺は身体を振ったり時には跳躍したりなど、あらゆる手段を使ってトラックの残骸を避けてやった。もちろん避けられないものもあったが、それについては両腕で顔面を守った。

避けれない物は大体小さな破片であったため、それで十分防げたのだ。それから残骸が飛んで来なくなった事を確認し、俺は再び重原を見つめる。

「ふん、中々面白いじゃないかい圭介。並の動体視力じゃ避けられないスピードで鉄を射出したハズだったんだけどね。どうやら……場数を踏んで想像以上に喧嘩慣れしてしまったようだね」

「て、鉄……？」

鉄をぶっ飛ばしただと？　じゃあ、さっきの白く輝いていた物体は鉄だってのか？

だけどなんで鉄があったんだよ。重原は太鼓のバチしか持っていないだろ。じゃああのトラックを破壊した鉄はどっから――っと考え事をしていたその時。

……俺は気付いてしまった。

今の鉄は隠していたものではない。あのバチを叩いた後にいきなり現れたんだ。ひょっとするとあの鉄は作り出したものなのかもし

れない。鉄を飛ばす時もそう。冷静に考えてみれば鉄をあんな高速で投げ飛ばせるヤツなんかいない。いくら重原が武術の達人だとしても、限度があるだろ。

だとしたら答えは簡単――アレは魔法だ。重原は魔法を使ってきやがった。

俺を攻撃するのに魔法を使う奴……ちくしょう、重原はアレなのかよ。

「今のは魔法か？　つーことはてめえ……まさかサヴィエトの！？」

「よく気付いたね。そうだよ。俺、スパイやってたんだけど何か文句でも？」

「スパイ……重原が……アイツらの？」

「直接君には恨みもないし、何かと君と話すのは楽しかった。ここで友達としての関係が終わるのは残念だけど……俺も上には逆らえないし、悪いけどここで狩られてくれないかな？」

言い終えると、重原は再びバチを叩き合わせた。

まずい。

さっきの攻撃が来る。俺は攻撃を避ける為に衝動的に走りだし……と、言うより得体の知れない魔法への恐怖心から、思わずこの場から逃げ出してしまった。ったく、これなら白藤みたいに鉄球ぶっ飛ばしてくるほうがまだマシだ。重原の攻撃はホントに意味がわからねえ。

アレは一体どういう魔法なんだよ。こ、こういう時は……そうだ、魔法に関する知識で頼れそうなヤツは暮葉しかいない。暮葉なら何かヒントをくれるかもしれない。

直感的にそう思った俺は走りながら携帯電話を掴んだ。いつ、あ

の鉄に背中を刺されるかという状況は無駄にプレッシャーを感じる。指が勝手に震えやがる……胸も張り裂けそうだ。

怖い。

単純に飛び道具が怖い。だってトラック壊れるんだぜ？　あんなの喰らったら俺の場合死にはしなくても重傷は確実だろう。

それでも俺は、あの魔法使いに勝つヒントを得るべく――暮葉に電話を掛けたのだった。

第１４６話，……あれ？（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「これ、もうコミケ関係ないんじゃね？」

黒木「確かに……」

大吾「大体なんでオタクネタで僕の出番がないの！？　作者ァ！　僕の事ちゃんと覚えてんのか！？」

黒木「心配すんな。俺なんて最近全然登場してねえよ……」

赤佐「まあ、まだ後書きで出番があるだけマシやな」

大林「僕……後書きでも滅多に出番ないんだけど」

大吾「僕は学校始まるまで出番がないのかぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

第１４７話，黒魔術

８月２１日、東京国際展示場。本来なら青山さんと２人でコミケデート。今頃夏コミを２人でエンジョイしている……ハズなんだが、何故か俺は魔法使いから逃げていた。しかも、その魔法使いってのが俺の友達の重原であった。重原のヤツ……今まで俺らを騙していたのかよ。

そう思うと腹が立ってくるが、今はそれどころではない。そんなことより、暮葉に連絡して一発逆転のヒントを教えてもらわねえと。

震える手でボタンを押し、どうにか電話を掛ける事には成功した。

『はいもしもし！　けーすけ様ですか!?　今どちらに――』

「暮葉！　そっちは無事か――うわっ！」

暮葉も魔法使いに襲われている可能性があるので、俺は無事を確認しようとするが、途中で重原の攻撃を受けて思わず転びそうになってしまった。なんとか態勢は立て直したものの、後ろを見る青いプラスチック製のごみ箱は、文字通り木端微塵になっていた。

『けーすけ様……まさか、追われているのですか!?』

「そうだよ、今逃げるコマンド選択して逃走中だよ！」

『だ、大丈夫なのですか!?　場所は!?』

「場所って、古宇坂から東京まで時間がかかるだろ！」

『で、ですけど……っ』

「俺の心配はいいから！　それより一発逆転のヒントをくださいお願いします！」

『わ、わかりました！　その、相手は誰ですか！？』

一瞬、俺は相手の情報を暮葉に伝えるのを躊躇った。

だってアイツは重原だぜ。今までずっと友達だったんだ。今は間違いなく敵だけど、だからってそれを暮葉に伝えるのは――いや、言わなきゃダメだよな。

真実は伝えるモンだ。それにこのまま重原を野放しにするのは――まずい！

「相手は重原だ！」

『し、重原さんですか！？』

「アイツ成りすましのスパイだったんだよ！　んで、バチを叩いたら鉄が飛んできて……もう何が何だかサッパリわからねえよ！」

『……た、多分それはレムリアのほうじゃなくて、こっちの世界の魔法なのです』

「ああ！？　こっちの世界の！？　アマデーオと同じ近代西洋なんとかってヤツか！？」

『それとは違います！　多分、重原さんが使う魔法はブードゥー教の魔法なのです！』

「ぶ、ぶーどぅー教？　よくわかんねえけど聞いた事はあるよ。確

かにこっちの世界の宗教だ。けどお前……こっちの世界の事なんてわかるのか!?」

暮葉は確かに魔法に関する知識は豊富だ。一応魔法少女だからな。だが、こっちの世界の魔法となると話は別である。いくら異世界の魔法に詳しくても――こっちの魔法や宗教には疎いハズだ。

ちくしょう、こりゃあ期待できないかもしれない。でも、知らないとしたら……なんで暮葉は重原の使う魔法がブードゥー教のものだってわかったんだ?

『以前はサッパリだったのですが、アマデーオの一件でこちらの世界の知識もカバーしたほうがいいのかなって思ったのです。本隊から資料を取り寄せたので、少しは力になれると思うのです!』

「だ、だったら教えてくれ! その魔法って一体どういうヤツなんだ――うおわっ!?」

またしても、重原が放った鉄が何かに命中した。今度は電柱、一部が粉々にされたコンクリートの電柱は、樵に伐採された樹木のように倒れてしまった。千切れた電線からはバチバチと火花がド派手に飛び散っていた。これ……下手したら停電になるんじゃないか?

『だ、大丈夫ですかけーすけ様っ!?』

「俺は大丈夫だから! ちゃんとお土産買って帰るから教えてくださいっ!」

『は、はいっ! えっと、多分重原さんの使う魔法はロア(Loa)の力を借りた魔法なのです』

「ろ、ロア！？」

『え～っと……た、多分精霊の事なのです！　それでえ～っと鉄の精霊は――』

暮葉、絶対資料を読みながら喋っているだろ……言葉に出ているぞ。きっと暮葉は今頃焦りながらページをめくっているに違いない。その姿を想像すると……おお、可愛らしい。アセアセと本を慌てて開く女の子って、何か知らんが可愛くてグッとくるよね。

まあ、今はそんな事を考えている場合ではないが。

『あ、いました！　オグン（Ogoun）という、火、鉄、政治、戦争を司る神様がブードゥー教にはいるらしいのです！』

「じゃ、じゃあ重原がぶっ飛ばしてくる鉄って！？」

『多分、オグンの力を借りて応用したものだと思うのです。太鼓のバチは儀式のために必要な道具らしいのです』

「そ、そうか！」

とりあえず、重原がどういう魔法を使うのかはわかったが……これ、一発逆転のヒントにはなっていないんじゃないか？　まあ、でも相手の魔法の情報があるだけマシか。

『オグンは鉄以外にも、火を司っています！　炎系の魔法を使ってくる可能性もあるので注意してください！』

「お、おう！　それで俺はどうすりゃいいんだ！？」

『難しいとは思うのですが、バチさえ失えば重原さんは多分、魔法を使えなくなると思うのです』

「そっからは俺の実力次第って事か？」

『はい！　でも……重原さんは確か武道家で――』

「な、なんとかなるだろ？　俺の体質を忘れたのかよ。重原の攻撃くらい何発でも耐えてやる！」

『無茶なのですけーすけ様っ！　五分五分の殴り合いに持ち込むには、まず重原さんの魔法を封じなきゃいけない――ッ』

聞いている暇もないので、俺は携帯電話の電源を切った。ありがとう暮葉、おかげで重原との戦い方が少しだけわかったような気がするよ。

勝てるかどうかはわからんが……やれるだけやってやる。生憎、こんな所で捕まって暮葉や青山さんを泣かせる気はねえんだ。何が何でも重原に勝って帰ってやる――！

……それにしてもブードゥー教って。サヴィエトの思想は宗教否定だろ？　それなのにアマデーオといい重原といい、なんで宗教絡んでる魔法を使ってくるんだろう。もしかして、この世界の場合は魔法自体が元々宗教に絡むようなモンなのか？

ったく、俺の馬鹿な頭じゃサッパリわからねえ……ッ！

「……げっ！　行き止まりかよ……ッ！」

目の前には海。気付けば俺達は東京国際展示場を出ていたようで、展示場のすぐ近くにある港のような所に来ていた。車が並んでいたり、船が繋留されてはいるものの、人の気配は殆どないので暴れて

も問題はないだろう。だが、考えようによっちゃあ助けは来ないって事だよな……。

……ええい。魔法使いと戦うんだ。ただでさえ最近魔法使いのせいで、わけのわからん事件が起こっていて、実はオカルトって実在するのではと言われてんだ。これ以上、そんなものを世間に広めるわけにはいかない。だから――警察とかの助けなんかはいらねえ！

「残念だったね……もう逃げ場はないよ？」

「くそっ……」

どうする、何か武器になるようなものはないか？　一応ここは港だ、それなりに使えそうなものはあると言えばあるが……正直、飛び道具には無力そうなものばかりである。

だからって拳一つで突撃すんのは危険だろう。ちくしょう、どうすりゃいいんだ？

「圭介！」

「あ？」

なんだ、重原……の声がしたけど、重原のヤツが叫ぶわけがないよな。重原は今もバチを構えて俺を攻撃しようとしているんだ。そんなヤツが俺の名前を呼び、叫ぶハズがない。

じゃあ今の声は――。

「圭介っ！　こっちだ！」

「なんだ……えっ？　う、そ……なんだこれ……っ？　どういう事だよ！？」

あまりにもしつこいので振り向くと、そこには――ボロボロの重原が佇んでいた。
重原が2人ってどういう事だ？
しかも片方はボロボロじゃねえか。なんでアイツはあんなに傷ついているんだ？

「チッ！」

……っと、その時。
片方の重原がバチを叩き合わせ、ボロボロの重原に向かって鉄を放った。
びゅん！　と、鉄が風を切りボロボロの重原を狙う。ボロボロの重原はかなりギリギリの所でその攻撃を回避した。しかし、その際にバランスを崩したのか、薄汚い地面に倒れ込んでしまった。
片方の――魔法使いの重原は不敵な笑みを浮かべ、倒れた重原に接近してゆく。

「もうお目覚めになったのかい本物（オリジナル）？」

「お、本物（オリジナル）？」

どういう意味だよ、オリジナルってさ……。

「圭介、よく聞け！　そこにいる俺は俺じゃない！　信じてもらえないかもしれないが、そいつはいきなり俺の身体から出てきた偽物だよ！」

「な――ッ！　に、偽物！？」

「圭介、早く逃げるんだ！　俺の偽物は変な力を――が、はっ！」

本物……と思われる重原の胸に、偽物と思われる重原が強烈な踵落としを仕掛けた。本物と思われる重原は激痛のあまり蹲り、さらに肺をやられた為か咳き込んでいた。

「あーあ、こんな事になるなら、やっぱ本物（オリジナル）を殺しておくべきだったかな」

「……てめえ、何者だ！　なんで重原の姿をしてんだよ！」

「まあいい――ラウル・ゲリエというのが本名、ハイチから遥々きたんだ……藤島圭介、君に直接恨みは無いがここで潰れてくれないかい！」

言い終えると、偽重原（確定）は再び太鼓のバチを叩き合わせる。俺は偽重原がそのような動作を見せた時点で、反射的に右へ跳躍した。微かに左頬に風を感じた。多分、クナイのような鉄は俺の顔のすぐ横を通り過ぎたのだろう。

偽重原は当然第二撃を放とうとする――が、

「ふあぁっ！」

「な、この――！　離せ本物（オリジナル）！　素性が割れた以上、君に用などもうない！」

「嫌だね……これ以上、皆に迷惑を掛けるな偽物……ッ！」

突然立ち上がった本物の重原は、偽重原にリストロックを掛けた。流石格闘家、身体だけは重原で力は強いものの、中身はただの魔法

使い。格闘技なんて習っているハズがない。本物の格闘家である重原と比べれば、実力は一目瞭然である。

「チッ、やはり……最初の段階で人格も俺に設定しておくべきだったか。いや、それだと本物（オリジナル）のキャラがわからなかったし……クソッ！　いい加減離れろ本物（ホンモノ）！」

「俺には何を言っているかはわからない。だけど、圭介（ともだち）を狙うのなら武道家として、そして圭介の友達として――見逃すわけにはいかない！」

本物と偽物の戦い。リストロックで手を封じ、バチを打てない状態の今……確かに本物のほうが有利ではあるのだが……だけどどうなんだ？

本物は俺が知らない所で散々やられたんだろ？　疲れてるだろうし……だったら、武道家としての強さはそんなに長い時間発揮できないんじゃ？

「――フッ！」

「が、、ぁぁっ！」

そんな危惧をしていた刹那――偽物は本物の足首に蹴りをいれやがった。

ゴガッ！　という強烈な音。それは本物にとっても耐えがたい一撃だ。本物の重原は蹴られた左足首を押さえ、苦しそうに蹲っていた。それにしても本物の重原……あれだけの達人がさっきの一撃であそこまで痛がるハズがない。まさか――重原のヤツ足を怪我していたのか！

「重原っ！」

俺がそう叫んだ瞬間――偽重原は本物の重原の顎に蹴りを入れる。耳を塞ぎたくなる衝撃音と共に顎を蹴られた重原は、一旦宙を舞った後背中から地面へと落ちてしまった。

顎への蹴りで脳を揺さぶられ、落下による背中の強打で悶え苦しむ友達の姿。

それを見ていた俺は――自然と身体が震え、身体に力が入り、自分自身を抑える何かが吹っ切れたような気がした。

「てんめぇ……ッ！　ふっざけんじゃねえよ！」

「やれやれ……今日中に捕えないと俺の地位がガタ落ちだよ。こうなったら、一旦退散して別な人の身体でも複製しようかな」

「……複製だと？　どういう事だ」

「俺は単純な宗教魔術の他に――人の中に入ってその人を操ったり、あるいは中身はその人のままで、その人が得る情報のみを得る事……まっ、簡単に言えば幽霊のように取り憑かれる魔術を使えるんだよ。今回は君のスパイという都合上、君の友達に取り憑いただけさ」

幽霊みたいに……取り憑く？

まったく……魔法使いってのはドイツもコイツも、一体なに考えてやがるんだ。

やっぱり普通じゃねえ。色々といかれてやがるんじゃねえか？

「いいのかよ、そんなにベラベラ喋りやがって……」

「どのみち……バレる事だからね。仮にバレたとしても――本物か

偽物かを見破る能力は君にはない」

「そうだな……だったらなおさらてめえを逃がしはしねえ。誰かに取り憑こうだなんて――そんなふざけた事は絶対にさせねえよ！

「そうかい……残念だね。折角、君が自由の身でいられる時間を延長してやろうと思ったのに……じゃあ、悪いけどここで倒れて素直に捕まってくれるかな？」

「――ッ！」

そう言うと、再び偽重原はバチを叩き合わせる。今度は今までみたいに一個ではなく、あらぬ方向から複数の鋭い鉄が飛来してきた。前に行くにしても左右に行くにしても、これじゃあどこに逃げたってあの鉄に当たってしまう。待て、後ろは？

そう思って首を後ろに反らすと――唯一後方だけが安全地帯だと確認できた。ただし俺のすぐ後ろには東京湾の海がある。そこにあえて飛び込むヤツはいない。

俺だって飛び込みたくはない。泳げないし、そもそも水が怖いよ。じゃあ、俺は一体どこに逃げればいいんだよ。このままじゃ串刺し確定だ――。

「――ァ、ァ――ッ！」

突然。

突然、偽重原がバランスを崩しよろめいた。同時に、俺を狙っていた鉄の大群は、力を失ったかのようにバラバラと、重力に任せて地面に落下していった。

再び偽重原を見ると、偽重原は何かの衝撃でバチを地面に落としたようだ。木製のバチがコロコロと地面を転がっていた。一体どう

いう事だ、何が起こったってんだ？

「お、本物（オリジナル）……ッ！」

「へ、へへ……後、任せたよ……圭介っ」

重原にそんな事を言われた時点で――ようやく何が起こったか理解が出来た。

どうやら、重原は偽重原の背中にコンクリートブロックを投げつけたらしい。激しく背中に激突したブロックによって、偽重原はバランスを崩してしまったようだ。だから、大切そうに持っていたバチを偽重原は手放してしまったのだ。そのせいか、ヤツの魔法の無効化されたのかもしれない。

ラッキーだ。バチさえ持っていなけりゃ――こっちのモンだ！

「――オオォ！」

俺は拳を振り上げ、咆哮と共に偽重原の懐へ飛び込む。

偽重原はバチを拾おうとしていたのだ。確かに勝てるどうかかわからない、素手の殴り合いなんかを仕掛けるよりは、一撃必殺の魔法を使ったほうが楽だし確実だ。

誰だってそう思うだろう。俺だって偽重原の立場ならそう思うぞ。だが、そんな動作を見せた僅かな隙こそ――偽重原の一番大きな失敗であった。

俺の接近に気付き、立ち上がって拳を構えた時には―すでに手遅れ。

「――ッ！」

俺の拳は偽重原の顔面を捉えていた。

鈍い衝撃音が炸裂し、殴り飛ばされた偽重原はその脚力をもって、辛うじて地面に倒れずバランスを立て直した。偽重原の戦意は――まだ消えてはいなかった。

第１４７話，黒魔術（後書き）

・後書きトークコーナー！

重原「次回決着っぽいね」

圭介「つーか……長ぇよ！　多くの読者がそう思ってると思うよ！」

重原「戦闘に3話も使う（予定）とか、早川以来だもんね」

圭介「しかも相手は重原だぜ？　もったいなさすぎるだろ！」

重原「……それ、地味に俺の事馬鹿にしているよね？」

第１４８話，攻略宣言

ラウル・ゲリエ。これが重原に化けていたという、ハイチ出身のサヴィエト所属の怪しげな魔法を使う偽重原の本名だ。ヤツの目的はただ一つ――俺の身柄を拘束する事。同時にそれはサヴィエトという組織全体の目的でもあった。

俺は偽重原を殴り飛ばし、ヤツが怯んでいる隙にバチを東京湾に捨ててやった。これで偽重原は魔法を使えないハズである。

行ける……いくら重原の身体を使っていたとしても、魔法使いは喧嘩ド素人だ。力技でねじ伏せられなければ俺でも――素手で十分勝てる相手だ。

「全く……君は人をイライラさせるのが好きみたいだねっ」

「ふざけんな。イライラしてんのはこっちなんだ。人の友達を好きなだけ利用しやがって……折角の夏休みをこんな滅茶苦茶にしやがって」

「俺だって、好きで君を襲ったわけじゃない。ただ、俺の所属する組織は君を狙っている」

「……んで、お前はこれからどうするんだよ？　バチは海に捨てた。ここの海は濁ってるっぽいし、潜っても回収できるとは思えねえ。てめえはもう魔法を使えねえんだ」

「関係ないね！　確かに儀式用の道具を捨てられたのは痛いよ。だが、俺は重原広敏という武道家の身体を持っている……つまり、君のような素人が相手なら素手の殴り合いでもこちらが有利なのだ。そんな単純な事も理解できないのかい？」

「ハッ、お前自分で分かってねえのかよ。自分の本当の実力をよ？」

「分かってるさ……これは重原広敏の身体。鍛えられた肉体を俺は持っている……少なくとも、路地裏ストリートファイター程度には負けないと思うけどね」

自信過剰。

偽重原は自信過剰であった。重原の肉体を手にしたからって、自分が以前の自分よりも強くなったと完全に思いこんでいる。確かに重原の身体能力は高いが――中身がショボかったら意味がない。

「分かったよ……じゃあ教えてやる――てめえの実力を！」

俺は偽重原に身の程を教える為に――偽重原と全力で戦う事にした。あ～あ、偽重原と戦い初めてから一体何十分経った事だろう。今頃、青山さんは怒っているか泣いているんだろう。

自分の身が危険に晒されているとは言え、流石に悪い事をしちまったな。後で青山さんにちゃんと謝っておかないとな。

……というわけで、青山さんに会う為にまずはコイツを――！

「が、ァアアァァッ！」

偽重原の顔面を捉え、右ストレートを放ったが、偽重原は後ろへ2～3歩後退した。

右ストレートは空振りに終わる。まずい――このままじゃ偽重原に、

「が、はぁっ！」

そう思っていた瞬間、鈍い痛みを腹のあたりに感じた。
膝蹴り。
偽重原の膝が射抜くように腹へめり込み、俺の腹に激痛を与えた。体質上、この程度の衝撃なら痛いだけでどうって事はないが、痛みで一瞬怯んでしまった。その隙に偽重原は拳を振り下ろす。

「あ――がっ！」

瞬間、後頭部に強烈な衝撃。
腹を蹴られ、蹲って姿勢が低くなっていた俺。そのせいか、どうやら俺の頭は偽重原が攻撃するには丁度いい位置にあったらしい。後頭部に拳を喰らった俺はバランスを崩し、そのまんま必殺の一撃を打ち込まれたボクサーのように、固く薄汚れた地面に顎から落ちてしまった。
後頭部、そして顎を打った事により脳が揺さぶられる。普通なら病院送り――いや、死んだっておかしくは無いほどの衝撃を俺は受けた。ちくしょう、偽重原は俺の体質を知ってやがる。
俺を捕えるのが偽重原の目的だ。もし知らなかったら――こんな激しい攻撃はしないハズだ。

「うぐっ！」

偽重原は倒れる俺の髪を掴み――無理やり俺を起こしやがった。
痛い。
髪を引っ張るって結構痛いんだぞ。しかも痛みはずっと続くし…
…丈夫な俺にとっても地味に耐えがたい攻撃なのである。偽重原は俺の髪を引っ張り、俺を自分の顔の位置まで持ち上げた。
覗き込むように偽重原が俺の事を見てきやがる。口元が歪んで目も少し笑っていた。

「フフフッ、もう少し楽しませろ藤島圭介。君にはもう少し付き合ってもらわないとさ……割に合わないんだよ！」

偽重原は俺の髪から右手を離し、同時に胸倉を左手で掴んだ。

そして次の瞬間――離された右手が握られぐしゃり、と。鈍くグロテスクな音を響かせ俺の顔面に突き刺さっていた。く、そ――鼻っ柱を殴られた……ッ！

ドロドロと、何か鉄臭いものが鼻から流れている気がする。今ので鼻血が出たようだ。

「ぐ――ッ！　て、てめえ……っ」

「まだ終わりじゃないよ！」

続いて二発のヘッドバット。

一発目は血が流れる鼻に、二発目は眉間に命中する。ミシミシと、眉間の骨を砕く寸前のような嫌な振動が伝わる。痛みに顔を歪める俺を、偽重原は――投げ捨てるかのように突き飛ばした。

突き飛ばされた俺は、たまたま背後にあった建物に背中と後頭部を打ちつける。あまりにも激しい衝撃に肺から空気が排出され、脳も揺さぶられてぐにゃぐにゃであった。

それでも……俺は倒れない。この程度――俺にとっては大したことはない。

「あああああああああああああ！！」

一気に俺を沈めるつもりの偽重原は、思いっきり突っ込んできた。壁に張り付いている俺に拳を打ち込もうとしている。だが、その時には既に――俺の身体からは痛みが消えていた。

寸前の所で俺は左へ身を反らし、偽重原の拳を避けてやった。ゴ

ォン！　という轟音は偽重原の拳が建物を突いた打撃音だ。
当然のように偽重原はうめき声を上げ、左手で右手を覆い痛がっていた。
その隙に――俺は偽重原の背後へ回り込んで、
「おらあああああああああああ！！」
ワシッと偽重原の後頭部を右手で掴み、思いっきり偽重原の顔を押しだす。すると、偽重原の顔面は鈍い音を立てて建物の壁へと激突した。
そのままグリグリと右腕に力を入れ、偽重原の顔を壁に押し付ける。俺に出せる最も強い力を右腕に入れて――偽重原の頭部を圧迫し続けた。
……やがて、偽重原から力が抜ける。手を離してみたらぐったりと、重原は崩れ落ちた。
正常に呼吸はしているし、いびきをかいているわけでも痙攣しているわけでもない、本当にぐったりと倒れているだけのようだ。よかった、命に別条はなさそうだな。
「はぁ、はぁ、はぁ……っ」
ああやっべえ疲れた……相手が気絶して気が抜けると、一気に疲れが出てきた。
やっぱり喧嘩ってのは面倒くさい。とりあえず、今回は重原本人ではなく、魔法が使えなかったら喧嘩ド素人の弱者でしかないヤツでよかったよ。
「お……おまわりさん……あそこです！」
不意に青山さんの声が耳に入ってきた。まさかと思ったので、本

物の重原と同じタイミングで振り向いてみると……建物の角からちょこんと顔を出し、俺らの事を見ている青山さんがいたのだ。
青山さん、ひょっとして……俺達の事を見ていたのか？
……ん、そういえば青山さん何か言っていたな。一体なんて言っていたんだ――。
「なんだ、不良の喧嘩か？」
「まったくこの時期になったら……コラァー貴様らぁぁぁ！」
まずい……あの青い制服のお二人は――。
警察。
そう、我らの味方にして時に敵となる警察だ。まずい、警察官のご登場＝被害者である俺と重原の身も危険という事である。何故なら――現代日本は喧嘩両成敗だからだ。
このままだと俺らまで犯罪者。いや、その前に停学か最悪退学にされちまう！
「やばっ！　お、おい重原立てるか！？」
「だ、大丈夫だいよこれくらい……っ」
「よし！　撤収しますよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」
「ま、待て貴様らあああああああああああっ！」
当然警察官二人のうち、一人は俺達を追ってきたが……いちいち構ってられるか。ああもう青山さんったらなんで警察呼んだんだよ。一番まずい連中呼びやがったなちくしょう！

と、とりあえず。俺と重原はこれだけひどい目に遭ってるんだ。だから叫んでもいいよね？

「ええい、ちくしょう！　不幸だあああああああああああああ！」

「こ、今回は俺も不幸だね！　折角の夏コミが台無しだよっ！」

――こうして、俺と重原は逃げまくった。

追ってくる警察官から逃げて逃げて、逃げまくったのである――。

そんなこんなで数分後。俺達はどうにか警察を振り切り、建物の裏で呼吸を整えていた。

だが、安心していた矢先――今度は今朝新木場駅でぶっ飛ばしたヤンキー２人が、仲間を１０人くらい連れて来て俺らに絡んできたのだ。当然、俺も重原もそんな大人数を相手にする体力が残っているわけがない。そもそも、これ以上暴れたら本当に警察にマークされてしまうだろう。

だから――俺達は今度はヤンキー１２人から逃げたのだ。それから数十キロ、やっとの思いでヤンキー１２人を振りきったが……いつの間にか知らない街に辿りついてしまったのだ。

「どこだよここ！　ああ……交通費もねえし、なんたる悲劇……っ！」

「け、圭介……とりあえず道でも聞こうよ」

「そうっすね……っ」

結局、俺達が家に帰れたのは６時過ぎであった。

当然暮葉にも心配され、葵にもお説教をされてしまった……つ、

疲れた。もう嫌、秋葉原といい夏コミといい、東京に行った思い出にいいものがねえ……。

俺……市街から出たら不幸な目に遭遇する、そんな呪いでもかけられてるのかな……？

とにかく……不幸だ。

それから数時間後、夜１０時頃。俺はＰＣでエロゲーをプレイしていた。今回プレイしているエロゲーは【いろとりどりのセ○イ】だ。７月に発売されたばっかのゲームで、まあ俺の好きなエロゲーメーカーの一つである、フェ○バリットより発売の新作だ。

ちなみに俺は今作では連ちゃん押しだが……何故だ、何故攻略キャラじゃねえんだ！

どうして俺の好きなキャラは毎回毎回、攻略できねえんだよ。アレか、どうしても攻略したかったらＦＤ（ファンディスク）買えっていう、エロゲメーカーのよくある戦略か！

ちくしょう……まあいいや、東峰つ○さもお気に入りだからな。まあ、もしＦＤ（ファンディスク）売るんだったら、当然有り金叩いて買いますぜ。

……っと、妄想に浸っていたその時――携帯電話が振動し始めた。

電話みたいだな、携帯電話を開いて確認すると、電話をかけてきたのは青山さんだった。

なんだろうこんな時間に？　とりあえず、ボタンを押して電話に出よう。

『あ、先輩……よかったぁ起きてました……っ』

「大丈夫、これでも結構夜深しなほうだから」

『ダメですよ、ちゃんと寝ないと……身体に悪いです』

「ごめん、これからは出来るだけ早く寝るよ」

まあ……深夜アニメの為にも寝れないってのが現実だが。そんな事を青山さんに言えるわけがないしねぇ……無駄に心配をかけるわけにはいかないよな。

『そうですよ……今日はその……お疲れでしょうからっ』

「大丈夫、そんなに疲れてもいないぞ」

『……あの、先輩……お怪我とかはありませんか？』

「怪我？　怪我はしてないぜ？」

『よ……よかったぁ』

青山さんはホッとしているようだな。電話越しでも何となくわかるよ。まあ、実際は鼻っ柱を殴られた時に鼻血が出たが……でも、もう痛くもなんともないし、鼻血も止まっている。

それに散々殴られたような気がするが、今となっちゃあどこに痛くは無い。

ホント、自分の体質にはいつも感謝だよ。怪我だってすぐ治るしな。

この体質がなかった――魔法使いと戦っても瞬殺されてただろう。

「……」

『……』

「……」

……あれ、なんでしょうかこの沈黙は？

すっごく気まずい……会話が途切れてしまった。最初の頃は会話が途切れるって、よくある事だったんだけどなぁ。やっぱ、青山さんは一応俺の彼女だ。会話が途切れると不安に思うぞ。

そんな事を考えていた――、

『……あの、先輩っ』

その時、青山さんが沈黙を破った。

とっても決意に満ちた声で――俺の事を呼んでいた。

『先輩はその……わたしの事、好きじゃないですよね？』

「いきなりなに言うんだよ。好きじゃなかったら遊びに行かないだろ？」

『いえ、そういう意味じゃなくて……その、恋人としてって意味です……っ』

ああ、そういう意味での質問だったか。てっきり友達としての意味だと思ったよ。青山さんと絶交だなんて絶対に嫌だからな。好きじゃないって言葉は結構胸に響いたぞ。

だけど……どうなんだろう。俺は青山さんの事が好きなんだろうか？

好きと言えば好きだ。だけどなぁ……やっぱりいくら考えて、その好きという気持ちは友達としての好きという意味……なのか？

特別ドキドキするわけでもないし、一日中青山さんの事を考えているわけでもない。

一応失恋経験3回……いや、白藤も含めたら4回だな。それだけ経験していりゃ、好きって気持ちが大体どんなものか――わかってはいるつもりだ。

『……先輩、ごめんなさい』

「えっ？　青山さん……何もしていないのに、謝る必要なんてあるのか？」

『いえ、しましたよ……先輩に迷惑をかけました』

「め、迷惑って……」

『先輩、わたしの事……好きでもないのに無理やり振り回して、ごめんなさいっ』

「青山さん……」

好きという意味が女として好きだという事は、いくら俺でも分かる事であった。

青山さん……俺と付き合える事が嬉しかったのか、幸せそうであった。でも、青山さんは無理やり自分と付き合わせた事を悪く思っていたのか。それを反省していたのか……。

……なんでかな。ここまで謝られると逆に俺が悪いみたいだ。また俺が中途半端な気持ちでいたせいで青山さんを傷つけた。そんな気がしてたまらない。

「……確かに、条件を呑むって形での変な付き合い方だったよ。でもさ、別にそこまでそれを反省する必要はないんじゃないか？」

『……？』

「むしろ、振り回していたのは俺のほうだろ？　散々な事に巻き込んじまってさ……そっちのほうが悪いような気がする」

『そん、な……やめてください先輩っ、先輩がそんな……優しい事を言うからわたしは……っ』

「知ってるか？　俺、単純だからそう言う事しか言えないんだよ」

『～～っ！』

すると、再び無言の沈黙が訪れた。今のセリフはやっぱりまずかったか？

うん、自分でもキモい事言ったなって思ってたよ。まあいいや、どうせ俺は電話をしながらエロゲーをプレイしている、変態の最低キモ男だしな……。

『……えへへ、先輩には……やっぱり勝てませんっ』

「えっ？」

『なんでもありませんよっ』

なんだ？

青山さんの機嫌が戻ったような気がするが……俺の気のせいだろうか？

『……あの、先輩……一回わたし達……別れませんか？』

「え……な、なんで……？」

突然、青山さんの口から衝撃的な言葉が出てきた。

別れる？

つまりアレか……今から恋人をやめましょうという、そういう意味の別れか？

……けど、青山さん……なんでだよ。まあ、確かに俺はいい男じゃないし、今回彼女の事を無視して喧嘩している姿を見て、幻滅したのかもしれない。仕方ねえ……のかな？

青山さんの事、そういう意味では好きでも嫌いでもない。そういう風に俺は思ってはいたんだけどなぁ……イザ別れを切りだされると、結構胸にグサッと刺さるもんだ。

しかし、

『だ、大丈夫ですっ！　別にその……先輩の事か嫌いになったわけじゃないです。むしろ……先輩の事は大好きですっ！』

うおっ！　なんてストレートな告白なんだ……今のは軽くドキッとしてしまった。

だけど……じゃあなんで？　好きなら別れる必要がないだろ。俺だって……まあ付き合ってしまった以上は仕方がない。中途半端な気持ちを中途半端じゃなくすべく。青山さんのことを全力で好きになろうと努力はするよ。それなのに青山さん……。

「え、な……なんで？」

『やっぱり……わたし、普通の方法で先輩の恋人になりたいです』

「普通の方法？」

『はい……今更言うのもなんですが、わたし……先輩とは脅迫じみた方法でこの関係になりましたよね……？』

まあ確かに、殆ど脅迫みたいなものだったかもしれない。

俺はおうっと小さく返事をすると、青山さんは話を続ける。

『でも、こんな方法で付き合っても……やっぱり幸せにはなれないと思うんです。だからその……一回関係をリセットして――今度は真正面から先輩を落としてみせます……っ！』

熱く語る青山さん。これは……アレだな。

攻略宣言。

俺をマトモな方法で攻略しようと、青山さんは決意したのだ。その堂々たる声は電話越しでも熱意が伝わるものであった。

本気だ……青山さん、本気で言っている。きっと本人も辛いんだろう。どんな理由があっても好きな人と別れる事には変わりない。失恋と同じようなものかもしれない。

それでも――彼女は決意を改めない。

彼女は真正面から攻めて俺を恋に落とし、最高のリア充になろうとしていた。その気持ちを挫く権利など俺にあるわけがない。それに俺だってアレだよ。中途半端なまま付き合い続けるのはやはり失礼だと思うんだ。

「……わかった、そうしよう」

『……はいっ！　その……覚悟していてくださいね……先輩っ！』

「おぅ、言っとくけど――俺の攻略は難しいぞ？」

『だいじょーぶです……っ！　わたし……落とし神さまになってみ

ますからっ！』

落とし神って……青山さん、一体誰から漫画を借りたんだ？
つーか、青山さんその漫画読んでたんだな。
……関係が終わり、そこから再び青山さんは再出発をする。そんな中、夜は更けて雲間からはお月様が顔を覗かせていた。

……あっ、暮葉にお土産買うの忘れてた。
どうしよう……まあ、何も言われてないから別にいいや。

第１４８話，攻略宣言（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「よっしゃ！　千早が別れたぞ！」

葵「やったあああああああああああああぁっ！」

凪紗「ふ、藤島……ざまあだぞっ」

伊吹「そ、そうよっ！　脅されたくらいで付き合うからよっ！」

圭介「お前らひどくね？　別れを言わうってひどくね？」

白藤【私も嬉しい】

圭介「てめえもかよ！」

重原「圭介、ホントに鈍感だねぇ……みんなが別れを祝う理由は、ねぇ？」

大吾「まっ、そんな事はさておき……次回から新編突入だぜ！」

第１４９話，夏休み明け

８月１７日。８月もこの時期になると、学校が始まる所は始まるらしい。このオレ――早川悠も車内から登校中の学生の姿を見物していた。ただ、膝の上にクソみてェに重いヤツを乗せて。

「今日から学校の人もいるんだね！　ミネットももう一度学校に行ってみたいな～って、きゃあ！」

とりあえず、クソガキがウザかったので、オレはミネットの後ろ襟を掴んで放り投げた。

ったく、ようやく身体が軽くなったってモンだ。それにしても不便だ。能力が使えねえんじゃ態々腕使う必要があるしなァ。まァ、全く使えねェわけじゃないが、使う為にはこのクソガキの協力も残念ながら必要なのだ。ったく……世界でも頂点に立つと言われたオレは、一体どこに消えたんだ？

「ひどいよ貴方！　いきなり突き飛ばすだなんて……軽くショックだったんだよ！」

「うっせェぞクソガキ。さっきから人の膝の上でベラベラ喋りやがって……オマエ、人が能力使えねえ事をいい事に遊んでねえか？」

「そんなことないよ！　ミネットは貴方の事をず～っと心配していたんだよ！」

「だったら、退院早々人様に乗っかってんじゃねェ。オマエが重くて辛いんだっつーの」

「ひどい！　ミネットはデブじゃないよ！」

「そういう事じゃねえ、オマエ……オレの身体よく見てみろっつーの。歩けねえ身障者には辛いんだっつーの」

ありゃあ確か、一ヶ月くらい前の事だったか。オレは何を思っちまったのか、このクソガキを助ける為に奔走しちまったのだ。その結果ガキは救われたが――オレは超能力を失っちまった。

今はこの補聴器型、いやチョーカーか？　その魔力エネルギー変換機を使い、１５分限定で無理やり能力を使えるようにはなったんだが……まっ、こんなの気休め程度にしかならねェだろ。

１５分は短い。ダラダラ戦っていたらすぐ経っちまう程度の時間だ。

こんな短い時間で何が出来るってんだ？

「あーちょっと、あんまり騒がれるとボク事故っちゃうかもなの。だから黙っててくれると嬉しいの」

……と、クソガキと戯れていると、運転席からオレ達を説教する声が聞こえた。

どうやらオレとミネットの騒ぎ声は、運転手にとっては安全運転妨害ボイスにしか聞こえていねえようである。んで、その運転手についての話なんだが……どォなってんだ一体？

運転手の姿を見てみる。

ソイツの肌は純白。黄色いリボンで結んだ茶色のツインテールは、程良く綺麗に手入れされていやがった。若干ツラは子供っぽさが残っているが、何故か胸だけはミネットと正反対だ。

まっ、性格的にクソガキである事には変わりねェ。

「……リーネ・ディートリッヒ。なんでオマエが車を運転してるん

だ」

「ふっふー！　ボクは技術者なの。技術者が運転していたらオカシイの？」

「そういう問題じゃねえ。オマエ……異世界人だろ。無免だったらブチ殺すぞ」

「大丈夫なの。木下さんに頼んでボク、偽装免許証を作ってもらったの」

「結局無免かよクソガキ2号……捕まったら承知しねェぞ」

「大丈夫なの！　ボク、運転は得意中の得意なの。それより悠ちゃん」

「誰が悠ちゃんだ……張り倒すぞ」

「ティヒヒ、今の悠ちゃんには超能力は使えないんじゃないの？」

「生憎全く使えねェわけじゃねェんだよ。オマエらがヘンテコな機械を作ってくれたおかげで、コイツで魔力を脳波に変換すりゃあ、一時的に元の演算能力の半分は戻るんだっつーの」

「いいの？　悠ちゃん元の演算能力が高すぎるせいで15分限定なの。しかも魔力を補充する為には恥ずかしい事をしなきゃだよ？」

「……チッ」

やっぱりリーネもクソガキだ。クソガキ2号と命名しておいて正

解だぜ。一方クソガキ1号は病院で誰かから貰ったという、ＰＮＰでゲームをプレイしていた。ったく、静かに出来るんじゃねえかよこのクソカギ。ずっとゲームして遊んでやがれ。

はぁ……クソッタレ、やっぱり改めて考えると不便だ。好きな時に能力も使えねえ、やっぱあの時怪我したのは失敗だったか。いや、そうでもしなけりゃこのガキは助からなかった。結局オレは非情になりきれねえクソアマ野郎だったのか？

……チッ、くっだらねえ……こんな程度の事で悩んでんじゃねえぞ。

「ねえ悠ちゃん。佐井学園っと所やめちゃうの？」

不意にリーネが話を掛けてきた。しかも話題はそれか……チッ、わかりきった事を。

「まァな……汚れ仕事に携わるのは、もうゴメンだからな」

「大丈夫なの？　学園側は悠ちゃんを手放したくないんだよね？」

「心配すんな。ロクに超能力（チカラ）も使えなくなったオレは、学園にとっちゃあお荷物同然だろォからな……手放しても損にはならねェだろ」

「それじゃあ、今日からミネットちゃんのマンションで三人ぐらしなの」

何嬉しそうに目を輝かせてんだこのクソガキ2号。つーか危ねェよガキが、ちゃんと前見て運転しろってんだよ。一瞬対向車線にはみ出て、対向車がクラクション鳴らしてたじゃねえか。

どこが運転得意なんだよ。こっちは不安にしか思えねえだろ。

「ミネットもリーネさんや悠と暮らせるの、楽しみだよっ！」

「ハァ……退屈な日常が始まりそうだ」

学園から離れて普通の暮らしが出来るのは、そりゃあありがたい事だ。だが、今まで血みどろの世界に生きてきたオレにとっちゃあ、ただの日常ってのはおそらくつらまんモノだろう。

だが、さっさと平和な日常に慣れねえと、この社会じゃ生きてけねえ。まっ、学園のクソ共が何もしなけりゃあ、普通に過ごせてそのうち日常にも慣れるだろう。

そう思いながら、オレは車窓の外へ目を向けた……ホント、日常は退屈そうだ。

――その頃、初芝高校の廊下では。

夏休みが明けた。俺こと藤島圭介にとっての夏は終わった。

思えば夏休みにはロクな思い出がない。秋葉原に行けば妹にレイプされかけ、その上変な不良集団との戦いに巻き込まれた。合宿では暮葉とすこし気まずくなり、しかも近藤だのアマデーオだけサヴィエトの魔法使いと戦った。その後のコミケじゃあ、重原に化けた魔法使いと一戦を交え……。

結局、夏休み中はお出かけすると、必ず俺は災難な目に遭っていたのだ。しかも一瞬青山さんという彼女が出来たものの、青山さんの決意によって別れてしまい……まっ、結局俺は相変わらずの非リア充な日常を過ごしているわけだ。

そんな中、夏休み明け最初の学校。俺は廊下に出て窓から古宇坂の町並みを眺めていた。

「あ……リア充になりてぇ……」

思い出せば、青山さんと付き合っている間はそこそこ楽しかった。
そう、相手の事は友達としてなら普通に好きだし、そんな程度の好感度を持っているだけでも――リア充生活は楽しかった。
それを思い出すと、本気で俺はリア充になりたいと思ったのだ。
しかし――そんな本音を漏らしてしまった直後。
何故か左右から拳が飛んできて、俺の頬は正拳突きの犠牲となってしまった。

「ぐはっ！　あたた……いきなりにゃんれすかアンタ達ぃっ！」

ちくしょう痛ぇっ、本気でぶん殴りやがった野郎共。
俺はいきなり殴りつけてきた2人の姿を見る。一人は黒髪のツンツン頭に眼鏡というシュールな外見をしている少年。もう一人は大柄で筋肉質ながら、爽やかな雰囲気を放つイケメン野郎だ。
右に大吾、左に重原。くそ、いきなりコイツら何なんだよ。

「いやぁ～圭介ごめんごめん！　リア充がそんな事を言うとムカついちゃうんだよな！」

「そうそう、俺も大吾と同じ意見だよ。まあ、これはモテない男子による鉄拳制裁かな？」

「だからって殴るかよ普通っ！　つーか大吾、てめえ完全二次元派じゃなかったのか！？」

「確かに僕は現実（リアル）なんてどうでもいい。だが、それでもリア充はムカつくんだ！」

「結局現実（リアル）に未練タラタラじゃねえか！　あと、重原はモテるだろ！」

「ハハッ、モテたらとっくに彼女はいるよ。そもそも俺、あんまり恋愛に興味ないんだ」

「じゃあモテない男子による鉄拳制裁とか言うなよ！　ちくしょう理不尽だ。なんで恋愛なんてどうでもいい奴らに殴られたんだ俺はあああっ！」

怒りとショックで自分を抑えきれず、俺は髪を掻き毟り絶叫していた。

「はろはろ～野郎共諸君♪　あれ～圭くんが暴れちゃってるぞぉ？」

「けーすけ様っ！　ど、どうかしたのですか！？」

そんな時、２人の少女が俺達の前に姿を現す。

一人は暮葉だ。半袖の夏服に身を包んだ暮葉は、まるで高校生の制服を小学生が無理やり着ているような感じであった。つまり、暮葉は相変わらずロリロリしているという事だ。

まったく、小学生は最高だぜ……って言う事を言うロリコン諸君も、暮葉の姿を見たら余程の重傷者でもない限り、おそらく９９．７％の確率で一目惚れする事であろう。

あ、先に言っとくけど俺はロリコンじゃないからな。

んで、もう一人暮葉の右に立っているのは、アンダーテールで巨乳の小坂だった。

ニヤニヤといやらしく笑う小坂。コイツ……カオスな状況を楽しんでやがる！

「ああ、僕らはリア充に正義の鉄拳を放ったんだ」

「そうそう。そしたら圭介がいじけちゃってね」

「そうだよ！　俺は理不尽に殴られたんだよ！　助けてくれ2人ともっ！」

「……けーすけ様、自業自得だと思うのです」

「う～ん……圭くんだからなぁ、失礼な事言ったら怒る人はいっぱいかも？」

「ぐ、はっ！」

ひ、ひどいや……俺に味方は一人もいないのかよ。

ちくしょう！　夏休みは散々な目に遭ったんだぞ。暮葉と一緒に入浴したり一時期青山さんと付き合ったり、それなりにハッピーなイベントは確かにあったよ。でも、結局暮葉とは何もないし青山さんとは別れたし、その上俺が行く所で必ずサヴィエト絡みのトラブルが発生していた。

くそ……なんて不憫な夏休みを過ごしたんだ、俺。

……神様、どうか夏休み明けからは普通の日常が過ごせますように。

第１４９話，夏休み明け（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「夏休み編で一回も出番がなかったけど……」

小坂「ついにあたしらの出番キタね！」

大吾「全く、重原でさえ出番があったのに……僕らはっ」

小坂「ま、まあまあ！　学校始まったんだからあたしらだって出番あるって」

大吾「畜生！　こうなったら、今日から僕はギャルゲー三昧だああぁぁあっ！」

小坂「やっぱり大吾は大吾だ、相変わらずキモいなぁ……っ」

第１５０話，意外……でもない事実

８月１７日。今日は夏休み明け初日なわけで、授業などは午前中で終了。つまり放課後はいつもと違って遊び放題と言うわけである。幸い今年は暮葉による外出規制の為、外に出る機会も例年と比べると少なかった上に、暮葉が教えてくれたおかげで夏休みの宿題は終わっていた。

だから、野原先生に呼び出されて説教……なんて事にはならなかったのである。

「このクソガキィ！」

「ぐ、はぁっ！」

「黒やぁぁぁぁん死んじゃダメやぁ～っ！」

「おーっと、黒木君吹っ飛んだー！」

三馬鹿は相変わらずだな……どうやら黒木は宿題を忘れたらしい。しかし、たかがそれくらいで生徒をぶん殴る教師って、今時野原先生くらいなんだろうなぁ。

さて、じゃあ俺は暮葉と伊吹と一緒に下校するとしま――、

「はいはーい！　女子会するから暮葉っ！　あと伊吹付き合って！」

「ちょ、亜紀！？」

「あ、亜紀さん女子会ってなんですか！？」

「ん？　女子同士で話してお酒飲む事だけど？」

「わ、私ら未成年よっ」

「だいじょーぶだいじょーぶ。ジュース用意しといたから。と、いうわけで早速あたしん家へＧＯ！」

「ああ、ちょっと亜紀さんっ！」

「わ、わかったわよ！　付き合うから背中押さないでよっ！」

あらら～2人は小坂に拉致られてしまったぞ。女子会ねぇ……つまり、ガールズトークってヤツをしに行くわけか。ガールズトークっつったらやっぱ恋バナだろうか。恋バナ……そういえばあの3人って彼氏とかいるんだろうか？

まあ暮葉にはいないと思うけど。アイツとは毎日一緒にいるし、恋人がいるような行動なんて見せた事がないな。第一、アルファ隊の仕事もあるんだから付き合うのはまずいのかもな。

伊吹は……うん、モテそうだけど……アイツ、男に興味なさそうだしなぁ。伊吹の場合は永渕の件で男自体が恐怖みたいな存在になってるのかもしれないし。小坂は……恋人とかいそうな雰囲気だけど実際どうなんだろう。以外とああいうタイプって経験なかったりして。

エロゲーではよくある事だ。

「はぁ……野郎共もいねえか」

仕方ねえ……一人寂しく帰るとしますか。大吾も重原もいつもの事ながら、俺が暇な時に限って姿を見せないんだから。そう思いながら、教室を出て一人寂しく廊下を歩いた。校内にはまだ立ち話を

している生徒達や、これから部活という生徒達が残っている。
あとは……まあ、俺のような暇人くらいか。それにしてもどうしようか。やっぱりいつも誰かが一緒だと、イザ一人になった時に結構寂しいような気がする。だけどなぁ、わざわざ一年の所に行くってのもどうかとは思うし。第一、一年の3人はみんな問題児じゃねえか。
それにその……今、青山さんと会うのは若干気まずいしな。いや、青山さんはむしろ俺の再攻略に夢中になっているのかもしれないが、俺が気まずく思っているのだ。
やっぱねぇ、一応形だけでも一時は恋人だったんだし……はぁ。

「あら、そこにいるのは藤島君じゃない？」

久しぶりに聞く声だなぁ。そう思いながら首を後ろに反らすと、現代の女子高生の平均より若干小柄な体躯を持つ、長い黒髪を持つ女の子の姿が瞳に映った。
あー、そういえばコイツもウチの生徒だったっけ。確か微妙な時期に転校してきたよな。

「あー、え～っと……西園寺だっけ？」

「随分ひどい反応ね。文化祭の時にいっぱい話したじゃない？」

「文化祭以外で話した記憶がねえぞ」

「それでも、忘れるってひどいと思うわ」

「心配すんな、ちゃんとお前の事は覚えてるって」

俺は左手で肩を揉み、首を傾げて首筋を伸ばしながらそう呟いた。

西園寺雪乃、忘れるハズがないだろう。コイツと俺は街中で出会ったんだ。それも超デンジャラスな場面でな。
少なくとも、外見を忘れる事はないだろう。名前は……う～ん、忘れるかもしれん。

「でも、考えてみれば貴方とは文化祭以来じゃないかしら？」

「つーか文化が夏休み前最後の日になっちまったからなぁ」

「……っ、まあ……あの日は大変だったわね」

「ん、どうしたんだ？」

一瞬、西園寺の表情が曇ったような気がした。それだけではない、あれだけハッキリ物を言う西園寺の言葉が、この時だけ詰まっていたように聞こえたのだ。

「なんでもないわ。それよりあの日貴方は大丈夫だったの？」

「……ま、まあ……大変だったけど身体は平気だ」

やべ、俺まで言葉が詰まっちまったよ。思い出してみれば、俺も文化祭三日目は散々な一日だったような気がするよ。白藤と戦う羽目になるわ校舎が壊れちまうわ。まっ、あの時校舎がぶっ壊れてくれたおかげなのか、若干古臭かった初芝の校舎も一部だけ真新しくなったのだが。

「……貴方こそ、何か大変な事でもあったのかしら？」

「あぁ？　どうしてそう思うんだよ」

「何か一瞬言葉が詰まってたわよ」

「気のせいだろ？　ところで俺、そろそろ帰ろうと思うんだけど――」

「そう、それじゃあ帰りに何処か寄らないかしら？」

西園寺が笑いながら、地味にすごいお誘いをしてきやがった。学校帰りに女の子と2人で何処かに行くって、思いっきりリア充がやる事じゃねえか。もしかして西園寺は俺の事が好き……なわけあると思う方が馬鹿だろう。そんなフラグを立てた覚えは皆無だ。

まあでも、西園寺がサヴィエトの魔法使いって事はないだろうし確か出会った時に佐井学園の制服を着ていたハズだ。襲われる心配はない……と思う。誘いに乗っても問題はなさそうだ。

「暇っちゃあ暇だし、昼は家族も用事あるみたいだからなぁ。そんじゃ、どっかで昼飯でも食いに行くか？」

「ええ、出来れば安い所を希望するわ」

「それは心配すんな。俺だって金に余裕があるわけじゃないからな」

まあ貯金はまだまだあるんだけどな。その貯金は欲しいゲームの為に使いたいし、食費にあんまり金を掛けたくないってのが、一般庶民の学生というものである。

そうだなぁ……よし、古宇坂駅前の安いファミレスにしよう。平日だし、あそこならかなりの安価でお昼ご飯が食べられると思うし。そうと決まれば早速ファミレスに行くとしますか。

ファミリーレストラン【グスト】
全国に展開する、おそらく誰でも知っているであろうファミレスで、安価でそこそこのものが食べられるので、我々学生としては非常にありがたいお店なのである。最も、駅前店は若干初芝から離れているせいか、初芝の生徒は中々見かけないのだが……一つ気になる事があるんだ。

「あら……貴女もしかして？」

「おい……なんでお前がここにいるんだ、明智ぃっ！」

どういうわけか、明智がレジに立っていたのだ。
当然【グスト】の制服を着用し、明智と立派に記された名札を胸に付け、冗談のじょの字もない真剣な表情を浮かべて。待て……おかしいだろ。普通のヤツならバイトなんだろうが、明智って一応明智家のお嬢様じゃねえかよ。そんな彼女がバイトをする必要ってあるだろうか？
そうだ。きっと明智は別な理由で【グスト】の店員に――、

「なにって、当然バイトに決まっているだろう？」

やっぱりバイトかよ！
あたり前すぎる明智の答えに、むしろ腰を抜かしそうになっちまったぜ……だけどなんで明智のようなお嬢様が、こんな超庶民的なお店でバイトをしているんだろう？
どうやら西園寺も同じような思っていたらしく、俺よりも先に口を開いて、

「貴女ってお金持ちだったわよね。どうしてバイトをしているのかしら？」

「なんでって……もうすぐあの日だからな。それに向けてちょっと……」

どうしたんだろう明智のヤツ。珍しく顔が少しだけ紅潮していた。あの日ってそんなに恥ずかしい事をする日なのか。ん、恥ずかしいあの日……もしかしてコイツ？

「明智、お前彼氏でもいんのか？」

「違う！　そんなものはいないぞ……っ」

「じゃああの日ってなんだよ？」

「……お、お前に言えるかっ」

「えぇっ！？　お、俺には言えねえって……」

なに、なんなんだよ。そんな事を言われるとすっげえ気になるじゃん。第一あの日って何月何日のことなんだろう。８月か、それとも９月か。いや、９月は前期期末テストがあるし、その上体育祭と言う大イベントが控えているのだ。

明智は風紀委員だし、その時期に遊んでいる余裕なんてないだろう。じゃ、じゃあやっぱり８月中の話なんだろうか。ちくしょう気になる！　明智に彼氏がいるのかも気になるが、８月に一体なんのイベントがあるのか……それもすっげえ気になるぞ！

「それより藤島、どうして雪乃が一緒なんだ？　そもそも西園寺は

どうしてうちの制服を……？」

「あら、貴女知らなかったのかしら？　私は転校してきたのよ」

「て、転校？」

「そう、いい加減あの学園が嫌になってね……初芝には貴女もいるって噂もあったからね」

「そ、そうか……知らなかったぞっ」

「貴女の連絡先を知っていれば、真っ先に教えていたのだけどねぇ」

なんだ、明智と西園寺がやたらと親しそうに話をしているぞ。ひょっとして、コイツら知り合いだったりするんだろうか。８月のイベントも気になるが、俺じゃあ聞けそうにないし、せめて２人の関係だけでも聞いておくとするか。

「お前ら、随分親しそうだけど知り合いなのか？」

「ああ、雪乃は私の去年のクラスメイトだったんだ」

「そうよ、まあ……アドレスは持っていなかったけど、そこそこ話はしていたわよ？」

「そういうわけかぁ」

そういえば、明智も去年までは佐井学園に通っていたんだっけ？しかも超能力者の明智と同じクラスに在籍していたって事は……やっぱ、西園寺も超能力者だったりするんだろうか？

「それより2人とも。私はバイト中なんだ、その……なんで2人でいるのかは後で聞くとして、とりあえず空いている席にでも……っ」

「お、いけね。悪かったなバイトの邪魔して」

「いや、いいんだ。2人と話せて私も楽しかったぞっ」

「それじゃあ明日学校で会いましょう？　私も久々に凪紗と話がしたいわ」

「うん、また明日な2人とも」

……こうして、西園寺と明智が知り合いだったという新情報を入手し、俺と西園寺はとりあえず空いている禁煙席に座ったのであった。

第１５０話，意外……でもない事実（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「大ピンチだぞっ！」

葵「なになに！？」

千早「こ、このままだと……一年グループの出番がっ」

あかり「あたいらの出番がないかもしれないぞ」

葵「うそっ！？　学年が違うだけでお兄ちゃん達とはこれだけ差があるの！？」

千早「せ、せんぱい……っ」

あかり「というわけで作者、あたいらも登場させないと処刑決定だからなっ！」

第151話，好きなヤツと修業

「へぇ、そんじゃ2人は友達だったのか」

「そうよ、凪紗は佐井学園(あっち)でも面倒見のいい人だったわ」

「つまり今とあんまり変わってねえっつー事か」

ファミレス【グスト】に入った俺達は、偶然にもバイトをしていた明智と遭遇。その後西園寺から佐井学園時代の明智の事を聞いていた。

どうやら、明智は昔からキャラが変わっていないようである。よかった、家が家だけに落ち込んでいたらどうしようかと思ったよ。けど、前からあの調子らしいし……よかったよかった。

「藤島君はどうなの？　貴女……女たらしって噂を前に聞いたわよ」

「誰から聞いたんだよ……俺は彼女なんていた事ないですよ～だ」

まあ、実際は夏休みに青山さんが彼女だったが……それを言うと、ホントに女たらしでしたって思われるかもしれない。どうせ西園寺にバレる可能性なんてないだろうし、別にそれくらいの嘘なら何の問題もないだろう。しかし……誰だよ、俺が女たらしだって噂流してヤツは。

「ふ～ん、それじゃあ木下さんや幼馴染の子とはなんでもないのかしら？」

「べ、別にそういう関係ではねえよっ」

「あら、照れてるの？　ひょっとして2人のうちどっちかの事が好きなのかしら？」

「違うわい！」

た、多分違うとは思うんだ。うん、違うとは思う。とにかく、今の俺に好きでたまらないって言う人はいない……と思うんだ。思うんだけど……最近どうしたんだか。俺の心の中で何かが渦巻いているような気がする。それが何かは知らんが……ハッキリ決めないとダメだとは思う。

一体それが何かは本当にわからん。ただ、一つだけハッキリと言える事がある。

サヴィエトの事ではない。

それだけはハッキリと言える。確かに、サヴィエトとは決着を付けないと、俺の身が今後も危険に晒され続ける。それくらいは分かっているハズなのに……。

俺は今――サヴィエトとは別の事で頭を悩ませている。

一体俺は……何の事で……？

「……藤島君、貴方好きな人でもいるのかしら？」

「いねえよ……」

「ふ～ん……木下さん以外ではって意味かしら？」

「ぶっ！」

俺は思わず、たまたま飲んでいた水を吹いてしまった。

ったく……意味わからん。俺はちゃんといないって答えたハズな

のに、いきなり西園寺がそんな事を言ってきやがったのだ。俺が暮葉を……ね、ねえよ。

そもそも、なんで暮葉なんだよ……俺はロリコンじゃねえ……と思うけど。

「あら、もしかして図星だったかしら？」

「てめえ……今の反応のどこが図星に見えたんだよ」

「だって、一瞬楽しそうだったわよ」

「ふっざけんな！　つーか、なんで暮葉なんだよ！」

「同じクラスでしょ？　しかも、いとこで住んでる家も同じらしいじゃない」

暮葉のヤツ、住まいまで言いやがったな……後でお説教だな。それにしても俺が暮葉の事を好きだなんて冗談じゃねえぞ。確かに暮葉は可愛いし、愛でたくなるような子だぞ。

だが、アイツの事を本気で好きだと思った事はない……ハズだ。

「確かにそうだけど……」

「じゃあ、やっぱり好きなのかしら？」

「そんなわけねえだろ……」

だけど……連中（サヴィエト）から俺を守ってくれるのは結構ありがたい。それに、なんだかんだ言って暮葉には世話になっている。

料理を作ってもらったり、俺の相談に乗ってくれたり……数える

とキリがない。
あと、アイツと話をするのは楽しい。自然と話が弾むんだ。最近は……夏休み中は暇だったからずっと話をしていたけど、時間を忘れて深夜まで話していた事があったなぁ。
初めてだ、誰かと話をしていて深夜アニメを見逃してしまったのは。だけど、後悔をした記憶なんて全然ないんだよな。変だなぁ……葵のせいで見逃した時は怒ったのに。
……だけど、だからって好きとは限らねえだろ……っ。

「……まあ、これ以上は問わないわ」

「お、おう」

俺が……暮葉を……ってねえよ、そんなもんあるわけないだろ。第一、俺が暮葉と釣り合うわけがないだろ。アイツは俺より強いし真面目だし、結局俺の方が情けないだろ。そんなヤツに好かれたって暮葉は嬉しくないだろう……。
あれ、何かがおかしい。俺、暮葉が好きって前提で話をしてないか？
ありえないだろ、あってたまるか。これ以上の迷惑はかけたくない。アイツは俺を守る為に日本に派遣されて来たんだ。それだけでも俺は暮葉に迷惑を掛けている。俺の存在そのものが暮葉にとっては迷惑なのかもしれないのに……。
……やっぱ、強くなるしかねえな。これ以上アイツに迷惑をかけてくない。アイツが戦わなくても笑って過ごせるような、幸せな日常を作ってあげたい。
だったらやる事は一つ——俺が強くなるしかない！

――と、言うわけでやって西園寺と別れた後、俺は単身道場へ向かった。

黒崎道場。

重原の家と対立していると言う、古宇坂に二つある道場だ。重原の家とは違って黒崎は空手の使い手らしく、有名な選手を輩出した事もあるらしい。いきなり殴り込みって、無謀なチャレンジだって事くらいはわかっている……だけど、今更立ち止まる事は出来ねえ。

「頼もう！」

そう叫ぶと、門が開けられゴツいオッサンが現れた。うげえ……直感だけど、多分このオッサンが黒崎さんなんだろうな。半端じゃなく強そうだ。だが……強くなるには実戦あるのみ。

「なんだ小僧？　まさか、ド素人の癖に道場破りか？」

「ああそうだ、殴り込（カチコミ）みだよ！　文句あるか？」

「ふん……いいだろう。一瞬で素人とプロの違いを教えてやる……」

上等じゃねえか……こっちだって素人だけど、てめえらと違ってなぁ……素手で戦わない連中との戦闘経験だけは豊富なんだよ。そいつを生かせば――少しは差が埋まるハズだ。

……その後、黒崎のオッサンに道場の中へと案内された。早速道着に着替え、俺は闘志を燃やして決戦の舞台へと立った。相手は黒崎のオッサン……ではなく、眼光の鋭い坊主頭の男だ。

若いな……俺と同い年ぐらいだろうか。

「克哉（かつや）、プロとアマの差を見せてやれ」

「へッ、見てな親父ぃ……ド素人ぐらい軽く捻ってやんぜ」

なんで、黒崎のオッサンの息子かぁ……それでもプロらしいしな。やっぱり手を抜くのは自殺行為だろう。姑息な手は通用しないだろうし、最初から全力で飛ばすしかねえ。

今のうちに、右腕の筋力を１００％に引き上げておこう……メリメリと、嫌な音が響く上に次第に腕も痛くなってくるが……ここは我慢だ。これが通用しなけりゃ黒崎の息子には勝てねえ。

「始め！」

審判を務めるのは黒崎の弟子の男だ。

叫びながら、黒崎の弟子は右腕を大きく振った。すると黒崎の息子は、俺が先制攻撃を仕掛けるつもりがないと気付いた瞬間――、

「でぇおりゃあああああぁぁあああっ！」

雄叫びを上げ、凄まじい速さで間合いを詰めてくる。

正直、この目で捉えるのがやっとであった。強い、アイツは間違いなくプロだ。今まで戦ってきたどこの不良よりも確実に強い。しかし、黒崎の息子の拳が目前に迫った……瞬間。キッ、と俺はこの目を凝らし、全神経を集中させ――ギリギリの所で黒崎息子の拳を避けてみせた。

「――ッ！？」

首を傾げただけであった。黒崎息子の拳が左頬の横を通り、微かな風を頬に感じた。

ヤツは驚いている。俺が攻撃を避けた事自体がありえなかったのだろう。とにかく今の黒崎息子は骨抜き同然――隙だらけであった。

やるとすれば今がチャンスである。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

俺は叫ぶ。飛び込むように黒崎息子の懐に潜り、その拳を限界まで固く握り締め。

狙い――黒崎息子の胸を睨みつけて、

「――ッ！」

ゴン！　という鈍い音が響いた。

これは空手だ。顔面を狙うのはNGだ。なので俺が突いたのは――胸の中心点。

黒崎息子は、場外へ投げ出された挙句、壁に背中を打ち付けてしまった。

試合の結果は――態々説明するまでもない。

「しょ……勝負アリ……ッ！」

「「えぇぇえぇぇっ！？」」

「か、克哉ぁ！」

道場内の弟子達は一斉に驚きの声を上げる。黒崎のオッサンは息子を心配し、小走りで駆け付け黒崎息子の様子を見ていた。やばい……驚きたいのはこっちだよ。黒崎息子って本人もオッサンも言っていたけどプロなんだろ？　つまり……俺、プロに勝っちまったって事か？

なんで勝っちゃったんだろう。う～ん……黒崎息子は確かに強かった。強くなかったらあんなに素早い動きは無理だろう。なのに、

素人の拳一発でぶっ飛びやがった。
おかしいな。いくら一撃必殺の筋力１００％とは言え、相手はプロ。一撃で倒せてしまうのってやっぱりおかしいよな。それとも俺――知らない間に強くなったのか？
なんか、普通に戦っても勝てたような気がしてきた……。

数十分後、俺は着替えて道場を出た。出ようとしたら、黒崎のオッサンに「弟子にならないか？」と言う、猛烈なラブコールを貰ったんだが……正直、面倒なので断っておいた。
それに、この程度じゃ強くなれん事もわかったし……はぁ。
マジでどうすりゃいいんだろう……格闘家相手に圧勝しちまった。これって普通の方法じゃ絶対に強くなれないってワケだよな。俺……何時の間に強くなってたんだな。
そりゃそうだ。あの重原の身体を持つ魔法使いにだって勝った。あの時は勝手に身体は重原でも中身が素人だから、所詮は大したことのない相手だと思っていた。けど、冷静に考えてみると喧嘩じゃ体格差や筋力って結構重要だよな。仮に中身は素人でも、身体は鍛えられた達人の身体。
冷静に考えてみれば……ただの高校生が勝てる相手ではない。
それでも、俺はあの魔法使いに勝ってしまった。重原は武道をやっているし、もっと上手い戦い方をするだろうからさらに強敵なんだろう。だけど、今の俺なら重原にも勝てるかもしれん。

「……はぁ」

それでも……いくら武道家並の力を持っていたとしても。魔法使い相手じゃいつも俺はボコボコにされていた。アナスタシアや偽重原とは素手でギリギリ互角。

近藤やアマデーオに至っては、一人じゃ絶対に勝てなかった。
弱い。
俺はまだ弱い。人間としては強いかもしれないが……魔法使い相手にはただの雑魚だ。
この程度じゃまだ……暮葉に迷惑を掛けるレベルじゃねえか。だけど、並の武道家じゃあちっとも練習相手にならねえし、一体俺はどうやって修業をすればいいんだ。
これ以上、どうやって強くなればいいんだよ……！

「あー！　すっごい珍しい場所で圭介発見っ！」

不意に、嬉しそうな声が耳に入ってきた。
俺が後ろを振り返ると、初芝高校女子夏服を着用している、ロリロリしていてとても高校生には見えない少女が、どだだだーっ！と高速接近している最中だった。
浅間あかり。
輝くような橙色のツインテールに、高校生には見えない小柄な体躯を持つ少女。ツンツンとした赤い目は愛と夢と希望に満ちており、まるで勇者のご登場のようであった。

「あ、あかり……？」

コイツ、こんな所で一体なにをやっているんだろうか？

第151話，好きなヤツと修業（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「ここで予告！　なんとこの作品のエロゲーを某社で開発中です」

大吾「な、なに!?」

圭介「攻略ヒロインはメイン6人＋サブ3人の大ボリューム。み○さんや青葉り○ごさん、安○深音さんなど人気声優沢山出演！」

大吾「ちょ、待てっ！　それアニメ声優じゃねえだろ!?」

圭介「エロゲーだからな。あ、ちなみにOPは榊○ゆいさんな」

大吾「って、絵師とシナリオライターは!?」

圭介「絵師はむりこぶ、シナリオライターは作者だぜ」

大吾「作者……ってのが不安だが、つーか、OPが榊○さんで絵師がむりこぶって、もしかして作者はゆずクラスタか？　出演声優もゆず出演経験アリだし」

圭介「しかも、初回限定版を買うと設定資料集やイラスト、さらに全キャラテレカなどもついてくるぜ！」

大吾「そ、それで!?　値段は!?」

圭介「通常版は９２４０円（税込）で初回限定版は……なんと！
あれだけ付録がついていても１２０４０円！」

大吾「うおっ！　こ、これは……初回限定版を買うべきだなっ！」

圭介「そ、それじゃあ俺も早速これを予約しに――」

大吾「ぼ、僕も予約予約――」

暮葉「しちゃダメです変態さん達っ！」

伊吹「ば、ばか圭介えええええええええええぇっ！」

圭介「ぎゃあああああああああっ！」

大吾「うぎゃあああああああああっ！」

※ちなみにエロゲー化は当然企画すらありません、常識的に考えて無理です。

第１５２話，食生活

「よ、よく食うな……お前」

「ふごぉふがぁふごぉふぇごっ！」

「とりあえず、飲み込んでから喋れよ……」

それは黒崎道場へ殴り込みをかけて、アッサリ勝利してしまった後の事。俺は道場付近で偶然にもあかりとバッタリ出会ってしまった。この元気な女の子に嬉しそうな声をかけられ、引くにも引けなかった俺は仕方なく、古宇坂駅前付近にあるマックにあかりを連れてきたのだが……。

なんだ、このカオスな状況。他のお客さんの注目の的になってるよ俺達。ガツガツと色々なものを食べているあかりは、女の子……と言うよりは、少年漫画の大食いキャラであった。

「ぷ、はぁっ！　いやぁーうまいうまい！　こんなうまい飯は久々だなぁっ！」

「お前普段何食ってんだよ」

「ん？　野菜炒めだろ？」

「うまそうじゃねえかよ」

「圭介が想像しているような立派なもんじゃなくって、あたいらが普段食ってるのは特売キャベツ９８円だけだ。しかも少量ずつ毎日だからなっ！」

「……他には？」

「お金がある時はカレーを食べるなっ」

「ほら！　結構マトモなもの食ってるじゃねえか」

「圭介が想像しているような立派なモンじゃないからなっ。当然具なんて入ってない！」

「かけそばならぬかけカレー！？」

「あとはパンの耳をちょっとずつか？　アレ油で揚げて砂糖をかけるとうまいんだよなぁ！」

「それ飯なの！？　ちゃんと栄養取れるのかよ！？」

なんとなくわかったよ。あかりがマックのハンバーガー程度で、こんなにうまそうにガツガツと食べる理由が……コイツ、普段ロクな飯食ってないんだな。もしかして、あかりが幼児体型なのって栄養不足のせいだったりするんだろうか。

可能性は十分ありえる。キャベツのみ野菜炒めが数日。カレーは具なし。主食のパンに至っては耳をちょっとずつ油で揚げるだけ。こんな飯でバランスのいい栄養を取れるハズがない。

そりゃあ身体だって成長しませんよ。長身イケメンの浅間部長は奇跡だな。

だけどこれから先、流石に成長は無理かもしれないが、こんな食生活を続けていたらそのうち栄養失調にでもなるんじゃないか？

不安だ……浅間家の現実がひどすぎる。

そういえば、合宿の時もカレーとか嬉しそうに食っていたな。っ

て事は、兄妹揃って料理がうまいのって自炊しているからなのか。
それも、なるべく安い飯になるように……。

「だからマックとかあたいにとっては聖地だ！　こんなうまい飯…
…あたい、もう死んでもいいくらいだよ！」

「そこまで行っちまうのかよ。どんだけ普段ひどい飯食ってんだよ
！」

マックが聖地に思えるほどの食生活を送っているとは……本気で心配だ。あかりだけじゃなくて浅間部長の健康も心配だ。一応兄妹っ事は、あかりと一緒のものを食べてるんだろ。だったらあかりがさっき挙げた悲惨な飯の数々を、毎日食べているって事だよな？
……初めて浅間部長が可哀想に思えてきた。それ以上にあかりが可哀想だけど。
友達がここまでひどい食生活を送っていたとは……これは、アレかな。一度でいいからマトモなご飯を恵んであげたほうがいいのかな？

「なぁ、あかり……」

「んみゃ？　どーしたんだよ圭介」

「よかったら今度焼きそばでも御馳走してやろうか？」

「や、焼きそばってアレか！？　あの超豪華料理の焼きそばなんだよな！？」

「あ、ああ。多分お前の考えているもので合ってると思う」

「おお！　焼きそばを食べられるだなんて――あたいもう死んでもいいっ！」

「待て！　死ぬな！　焼きそばくらいで死ぬなあああぁぁあああぁぁあっ！」

この時俺は確信した。あかりは母親が退院した後も――相当厳しい生活を送っていると。

アフリカの難民と比べれば、そりゃあ裕福な暮らしをしているかもしれんが……現代日本の水準からするとひどすぎるぞ、浅間家。一日に必要なカロリーすら足りてなさそうだ。山籠り中の重原でさえ動物を狩って生活していたらしいのに……つか、動物狩猟って密猟じゃねえのか？

まあいいや……重原の山籠りの話をすると、２４時間は必要だから黙っとこう。

それから数十分後、マックを出た俺達は特に用事はなかったが、なんとなくぶらりと古宇坂の街を歩いていた。かれこれ１０年以上はこの街に住んでいるけど、あんまり変わらないな。

精々商店が無くなっていたり、結構大きなスーパーが出来たくらいだ。基本的な景観は俺が小学生だった頃と全く変わっていない。まっ、１０年で変わる街なんて殆どないんだろうが。

それにしても、流石に駅前に来ると人が多いモンだなぁ。

これだけ多いと、バッタリ知り合いに会うってイベントもありそうだが、そんなイベントは出来れば起きて欲しくないものだ。だって今、俺はあかりと２人で歩いていんだもん。知り合いにカップルだと思われるのは何か嫌な感じである。

……っていうか、あかりって確か俺に告白してきたよな。

その割には今日は普通だが……もう俺のことを諦めたんだろうか。

だとしたら都合がいい。あかりとはいつも通り――友達として遊べるようになるからな。

「あ、圭介っ！」

「あん？」

あかりが楽しそうに小走りで向かった先は――古宇坂で一番大きなゲーセンの前である。

「ゲーセン？」

「なあ圭介っ！　ここでちょっと遊ぼっ！」

「遊ぶって……お前お金あるのか？」

「ふっふー、あたいは資金管理大ベテラン様だ！　これくらい大丈夫なんだからなっ！」

「そうか。その大ベテラン様に一つだけ言いたい事があるぜ」

「んみゃ、なーに圭介？」

「ゲーセンで遊ぶ金を食費に使えよっ！」

「えぇ～？　あたいだって遊びたいんだよ……な、圭介！　一回でいいから格ゲーやろうよ格ゲー！」

格ゲーねぇ……確か、ここのゲーセンの場合一回１００円だったよな。けど、あかりにとって１００円って結構な出費じゃないか？

やっぱりここは、あかりの健康（食生活的な意味で）の為にも、ゲーセンは諦めて静かな公園お散歩コースのほうがいいんじゃないか？

だけど……なんだこの訴えの眼差しは。僅かに赤く染まった顔に、うるうるとした上目遣いは我々男子にとっては、核爆弾以上に強力な兵器である。やめろおおおおおっ！　これ以上そんな風に俺を見ないでくれ。引く事が出来なくなっちまうじゃねえか！

「……だめ？」

……ぐはっ。

今の一撃で死んだ……俺はもう、我慢の限界だ。これ以上は耐えられない。全く俺もまだまだ修行不足だな。この程度のおねだりで死んでしまうとは……。

「わかった……一回だ、一回だけだからな」

あかりの食費の為にも、浅間家の厳しい家計を考えた結果――１００円ゲーム一回。

これがギリギリの妥協点である。

それ以上は浅間家にとってもマイナスだろうし。それに、あかりだって遊びたい年頃だから少しくらいならＯＫだろうと思った結果が――１００円ゲーム一回である。

こうして俺とあかりはゲーセンに入ったわけで、早速――格ゲー席に座ったのである。

【ＡＱＵＡＰＡ○ＺＡ】というものを御存知だろうか。う○われるものとか、ＴｏＨｅ○ｒｔ２などのゲームのキャラで、なんと格闘が出来ちゃうゲームである。当然、俺は大好きな小○愛佳ちゃんを使ってやるぜ。あかりは……ハ○オロか。上等だ、愛佳ちゃんの強さを思い知らせてやる。

いや、愛佳ちゃんの強さじゃない――ゲーセンファイターの俺の実力をな！

「うおおおおおおおおお！　ユニバアアアアアアアアアアアアアス！」

俺は叫んだ。ボタンを連打した。必殺技を正確に打ち込んだ。勝てる……この調子だとあかりはゲームド素人だ。この調子で行けば――俺の勝利は確実だ！

第１５２話，食生活（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「おお、圭介が珍しく本気を出した！」

重原「圭介はホントに格ゲー強いからねぇ」

圭介「ふふふ……ゲームで俺に勝てるヤツは――いない！」

大吾「強気だな」

重原「これで負けたら恥だ、」

圭介「まあ見てろ。お前らが束になっても勝てなかった俺が――アッサリ勝利するから！」

大吾「け、圭介すげえ調子に乗ってるな……」

重原「だけど、事実だから言い返せない悲しい現実……」

第１５３話，決着

「……」

あなたは神を信じますか？　俺は信じません。だって神様は姿が見えないし、俺らに何も与えてくれないんだもの。これを言ったら宗教家には怒られるだろう。だけど、俺個人の意見としては神様は絶対にいないはずだ。もし神様がいたとしたら――敗北と言う言葉はないんだから。

つまり、俺は何が言いたいのかというと……。

負けた。

格ゲーでド素人に負けた。信じたくないんだけどね、現実だから仕方がない。まさかあれだけ動きの鈍かったあかりが、途中から１６連打の高林名人もビックリな腕前になるとは……トホホ。

「わっはははは！　何が四丁目の撃破王（デルタフォース）だっ！　弱いな圭介！」

「うあああぁあぁあぁっ！　い、言うなっ！　弱いとか言わないでえぇえぇぇえっ！」

なんでだよちくしょう。これでも俺……大吾や重原には負けた事がなかったのに。

一回別な格ゲーでランキング１位のヤツと戦った時、苦戦はしたが、それでもなんとか勝てたって言うのに……なんでド素人のあかりに負けたんだよ！

日本格ゲー界現チャンピオンの俺が……し、素人のあかりに負けるだなんてっ！

「まあまあまあ！　あたいに負けただけまだありがたいと思えよな

！　あたいのエロ兄貴に負けるよりは１００倍マシだろっ！」

そう言われてもねえ……あかりは一応女の子だし、しかも格ゲード素人だし。やっぱり多少は経験のある浅間部長に負けるほうが、ショックは少ない気がするんだよね。でも、あかりの機嫌を損ねたらもう一銭させられそうだし……。

約束は約束だ、１００円ゲーム一戦限定。今回は素直に負けを認めてやる、だから頼みますから第二ラウンドはやめてくれ。

「きゃ～キスプリ撮っちゃった！」

「マジ僕、みずっちの事チョ～愛してっから！」

不意に耳に入ったどこぞのバカップルの騒ぎ声。うるせえな……まあ、ゲーセン自体がうるさい店なんだけど、この騒音の中よく声が響くよ。つーかどこのリア充だ？

振り返ると、四角い箱の中からカップルが……って、

「お、大林ィ！？」

「……は？　げぇ！？　ふ、藤島……っ」

おいおい、どういう事なんだよコレは。なんであのサッカー少年大林君が、あんなロリ顔の彼女を連れて歩いてるんだよ。しかもキスプリってなんだよオイ。たまにアイドルのキスプリが流出して問題になるけど、やっぱそれの事言ってんだよな。

つまり大林は隣にいる女の子と――キスプリを撮ったって事か！

「てめえ……彼女いたのかよっ！」

「う、ぐ……ふ、藤島だって人の事言えないだろ！　誰だよその隣の子は！？」

「あ、あたいは別に圭介の彼女なんかじゃ……彼女なんか……じゃ……っ」

「あの～、あかりさん？　どうして赤くなってるんでせう？」

あかりはかぁ、と頬を紅潮させていた。

そこで赤くなるなよ。余計大林に誤解されちまうじゃねえか。つーか大林、その言い草だけ隣の子が彼女って認めてるんだな。ちくしょう大林はリア充だったのかよ！

……こりゃあ、黒木達に報告だな。あ～あ可哀想に……きっと大林は明日、見るも無残な屍と化していることだろう。嫉妬した黒木と赤佐の手によってな。

「よし藤島、協定を結ぼう」

「あ？　きょ、協定？」

「僕達は何も見なかった。僕達に彼女がいるのはクラスのみんなには内緒だ、よろしい？」

「お、おう……」

あかりは彼女じゃないんだけどね。まあ、ゲーセンにいる時点でアレだし、変な誤解を生んで俺がシバかれない為にも、この協定に署名しておいた方が身のためだろう。

署名と言っても、署名用紙なんてものはないけどな。

「それじゃあさらばだ藤島。さっ、次行こうかぁ～みずっち」

「うん！　ねえねえ勇太ぁ～今の人達友達？」

「片方はそうだけどもう片方は知らない、アイツ藤島って言うんだけど多分アイツの彼女じゃない？」

「可愛い子だったね～！　乗り替えたらダメだよ？」

「ははっ！　僕はみずっち一筋だぜぇ～」

なんちゅーラブラブカップルだ。見ていて腹が立ってくるほどラブラブだ。一生イチャラブしてやがれこのリア充め。つーか、完全に大林にあかりが彼女だと思われたんだが、どうしよ？

肝心のあかりは黙りこんだままだし……なんだか気まずい空気だ。

と、とりあえず……今の空気はあまりにも気まずすぎる。なんかと、この空気を明るくするルートへ持っていかなければ――。

「よし、もう一戦ゲームでもやるか！　１００円くらい俺が出してやるよっ！」

「……なあ、圭介っ」

「な、なんだよ？」

今まで一番騒がしかったあかりが、不自然なまでに静かな今の状況……なんだろう、不気味で仕方がないや。一体あかりのヤツどうしちまったんだ？

ひょっとして、さっきの誤解を気にしてるのか？

そりゃあまあ、俺も大林に誤解されてヤバいなとは思っているが

……何もここまで気にする必要はないと思うんだ。それともあかり、まさかまだ俺の事が……いや、流石にないだろ。だって今日のあかりはいつも通りだったじゃないか。
もう吹っ切れたんじゃない……のか？

「こんな所で言うのもなんだけど……あたい、圭介が好きだっ」

「……っ！」

あかりは胸に手を当て、俺を見上げていた。すっかり顔は紅潮しており、どこか色っぽいうるっとした瞳になっていた。いかん……これは誰がどう見ても恋する年頃の少女。
コイツ、俺の事を全く諦めていねえ……。
やんちゃ少年系少女だったあかりは、すっかり女の子と化していた。しかも、少しずつ俺に近付いて来ているような気がする。ちょっとずつ、不器用に歩み寄ってきている。
正直俺は困っていた。胸はどきどき鼓動が早まり、かぁっと顔も熱くなる。
だけど、それと恋心は別である。
エロいシーンに遭遇したって似たような反応はするぞ。だから別に……俺はあかりが好きってわけではない……と思う。

「あたい、前にも告白したよな？」

「あ、あぁ、夏休みの前だっけか」

「まだあたい、圭介からの返事を聞いていない……」

いや、だってアンタ逃げたじゃん。とっても恥ずかしそうな顔をして。その後ろ姿が完全恋する乙女で何とも言えぬ感じだったけど。

つーかコレ、ホントにあかりなのか？
あかりにしては……か、可愛すぎるだろオイっ。

「だから……ここで聞かせろよなっ。圭介はあたいの事どう想ってんのか……っ」

言葉はやや乱暴ながら、彼女は本気の様子だ。
冗談を飛ばす場面でない事くらい、俺でも容易に理解ができた。
彼女は――本気で俺の事が好きみたいである。だから勇気を振り絞って告白したんだろう。
問題は……俺の気持ちだ。実を言うと、俺はここの所ずっと悩んでいるんだ。それは俺自身がどう思っているかについてだ――。
わからないんだよ。最近俺の中で渦巻いている何かが……。
それがわからない以上、俺は誰にも何とも言えない。だから――。

「……少し、考えさせてくれないか？」

「か、考えるって……保留かよっ！」

「曖昧な答えなのは分かってるって。だけどよ……お前に返事をする前に、俺は決着をつけなきゃいけないんだ」

自分の気持ち――な。

「決着？　決着って何にだよ？」

「今は言えねえけど、返事をする時にちゃんと説明はする」

俺の言葉にあかりは黙りこむ。がやがや、という喧騒の中で彼女は迷っていた。

保留されて逃げられるかもしれない。おそらく、彼女はそう思っているのだろう。
それも手の一つだけど……そんなサイテーな事、俺はやりたくない。
あかりは、そんな俺の気持ちに気づいたように顔を上げ、
「……わかった。その代わり、さっさと決着つけろよなっ」
一瞬しょんぼりしていたあかりの顔が、一気に太陽のように眩しくなった。
なんでだよ、なんでこんな明るい顔が出来るんだよ。もしかしたら、あかりの気持ちに応えてやれないかもしれないのに。
だけど……あかりの言う通りだな。さっさと決着をつけなきゃいけない。
その結果はどうあれ、何事も気持ちが一番だ。
その気持ちに決着を付けずには——何も言える事はない。
「必ずつける、だからもう少しだけ待っていてくれ」
これが今の俺に唯一言える事——あかりと交わした唯一の約束であった。

第１５３話，決着（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「今回は読者のみなさんの性癖を診断するぜ、以下の選択肢から好きなキャラを選んでくれ！」

※かなりいい加減な診断です＋下ネタ注意。

・木下暮葉
・国宗伊吹
・明智凪紗
・浅間あかり
・青山千早
・藤島葵
・小坂亜紀
・西園寺雪乃
・白藤早苗
・ミネット・ローラン

結果は←

・木下暮葉を選んだあなた。
あなたはズバリロリコンです。尽くしてくれるタイプが好きみたいですね。
自分の欲望を素直に満たしてくれる、そんなプレイを望んでいない

でしょうか？

・国宗伊吹を選んだあなた。
もしかして言う事を聞かない子猫みたいな女の子が好きでしょうか？
ツンツンしていながら、一度デレるとにゃんにゃん……そのギャップが堪らなく好きなんでしょう。そんな貴方はズバリ、おへそをペロペロしたいと思っています。

・明智凪紗を選んだあなた。
ズバリ足フェチです。誰がなんと言おうと足フェチです。確かに彼女は大きなおっぱいの持ち主ですが、何より素晴らしいのは足だと思います。
よって、画面の前のあなたはきっと足フェチでしょう。

・浅間あかりを選んだあなた。
ズバリあなたはロリコンですね。そんでもってツインテール萌えでしょう。
ほっぺたをぷにぷにしたいと思っていないでしょうか？

・青山千早を選んだあなた
ひょっとして、貴方は純粋な心の持ち主かもしれません。
この中で一番マトモな性癖の持ち主かもしれません。

・藤島葵を選んだあなた。
あなたはおそらくシスコンです。近親相姦モノがお好きなのでしょ

う。
でも、現実でやっちゃダメですよ。エロゲーで我慢しましょう。

・小坂亜紀を選んだあなた。
あなたはおっぱい星人です。おっぱいを愛し、おっぱいの為に死ねるおっぱいの為に生まれてきた。そんな感じのお方ではないでしょうか？
ちなみに、あなたは巨乳派でしょう。

・西園寺雪乃を選んだあなた。
ズバリ貴方はドMです。虐められたいと思っていませんか？
叩かれたり罵られたり冷たい視線で見られると、ついハァハァしちゃいませんか？
ある意味一番害のない性癖ですが、その性癖を公の場で発動すると当然キモがられますので、時と場所を選んで発動させましょう。

・白藤早苗を選んだあなた。
あなたは力で人を支配したいと思っていませんか？
大人しい子を支配して、いじめて……あなたはドSかもしれません。しかし決して悪い事ではないです。ただ、度が過ぎると犯罪ですので気をつけましょう。

・ミネット・ローランを選んだあなた。
ロリコンです。まだ間に合います……警察に行きましょう。
決して世の中の幼女を襲わないでください。

大吾「……なんだよこれ、ロクな結果がねえ」

重原「ちなみに作者も圭介も心理学なんて知らないんだよね～」

黒木「じゃあアウト気味な診断作るなよ！」

第１５４話，新たな生活

古宇坂市内にあるとあるマンション。ここがクソガキの住処だと言う場所で、このオレ早川悠が今日から過ごす場所である。あのクソガキの部屋は８階、いちいちエレベーターに乗らねえとマンションから出る事も入る事も出来ねえのか。ったく、身障者にはキツい家だ……クソッタレ。

「広くて綺麗なの！　ミネットちゃん、アルファ隊って結構お金を無駄に使ってるの？」

「わからないよ。ただ本隊がミネットに隠れ家として、ここを提供してきただけなんだよっ」

「どっちにしても……オマエ一人で住むには贅沢すぎンだろォ……」

「ひどい、これからはミネットと貴方とリーネさんの三人暮らしなんだよ！　しかも貴方は一回この家に上がった事があるよね？」

どうでもいいっつーの……それにしても、こんな所に住んでいて大丈夫なんだろォか。

佐井学園にしてもサヴィエトにしても。襲撃する時は結構大胆だ。襲ってくる時はビルごとぶっ飛ばそうとするに違いねェ。８階って結構高い所にあるからって、安心は出来ねえぞ。

いくらオレでも、建物ごと吹き飛ばされちまえば、守りようがねェっつーの。まあコイツらはそんなリスクなんて、クソも考えていねェみたいだがな。気ィ抜きすぎだクソバカ。オレを匿うってのは佐井学園にもサヴィエトにも狙われるって事だ。コイツらはソレを分かってンのか？

「さーさーっ！　昨日お掃除したから綺麗なハズだよっ。そこのソファーにでも腰かけてゆっくり――って貴方！　リーネさんもいるのに一人でソファー占領しちゃダメだよ！」

オレはこの部屋に来て最初に、白くて綺麗なソファーに寝っ転がったが、そんな行動にクソガキが怒ってきやがった。

「ま、まぁまぁミネットちゃん。悠ちゃんもお疲れなの、少し休ませてあげよう？」

「だ、だけどっ」

「それよりボク達はお買い物に行こうなの」

リーネ……クソガキ2号は少しは人に優しいみたいだな。まったく……クソガキ1号もリーネを見習ってもう少し優しくしやがれ。こっちは杖つかねえと歩けねェんだっつーの。

……ハァ、ちっとだけ寝るか……早起きして眠いし、クソガキ共が出かけて静かな今のうちに睡眠を取っておこう。それにしても……このソファー寝心地がいいな。

……それから数時間後。

不意にオレは目を覚ました。別に悪い夢を見たわけではねェ。元々、オレは夢なんて見ねェ人だから悪夢なんてモンはありえねェ。オレが目覚めたのは自然的なモノだ。そんなどうでもいい事を脳内で整理しながら、オレは左手を首筋のチョーカーへと持っていった。

……っといけねェ、なにオレは能力使用モードに変更しようとし

てんだ。たとえウッカリだとしても敵がいない時にそれをやるのはマズイ。

不便な身体が……魔力エネルギー変換機を使っても、１５分しか超能力者に戻れねェ。

こんな身体でこれから先、どうしろってンだ……１５分以内に敵を駆逐できるか？

とにかく１５分でどう戦うか、そういう作戦を練っておくべきだろう。オレをブラックリストに登録したサヴィエトはもちろん、佐井学園のこのまま黙っちゃいねェハズだ。どっちが先に攻撃を仕掛けてくるかは知らねェが……連中の攻撃は必ず来る。

それがオレを殺す為か、オレを理由する為かは知らねェがな……。

「さて、と……どうすっかなァ……」

「いやあああぁぁぁあああぁぁあああああっ！」

あァ……クソガキの叫び声じゃねェか。佐井学園かサヴィエト、どっちかは知らねえがもう襲撃者が来やがったってのか。クソッタレ……こっちはまだ考えている途中だってのに。

まァ仕方ねえ。たとえ１５分限定とは言え、その間のオレは超能力者。しかもこの世界でも最強って呼ばれる存在だった。そんなオレに戻れるんだ。最強のオレなら、クソ野郎の一人くらい蹴散らすのは余裕ってヤツだろう。

面白ェ……ゴミ掃除だ。１０秒でクソ野郎の居場所を血だまりに変えてやる。

オレは変換機のスイッチを押し、能力使用モードに入れた。電子音と同時に頭に何とも言えぬ違和感を覚え、頭の回転も良くなったような気がした。

杖は……能力使用モードなら風の力を使って歩けるし、本来はいらねえ。それでも戦闘の後すぐスイッチを切る事を考えれば、持っ

ていったほうが楽であろう。
オレは静かに歩み始め、クソガキ共の居場所を探す。

「ひゃう！」

「おおおお、落ちついて欲しいのミネットちゃん！」

風呂場か、あの白い浴室が真っ赤に染まるかもなァ……まぁ関係ねェ。クソ野郎を潰さねえと日常を営めねェからな。それにしてもミネットで対処が出来ねェヤツか。だとすると、相手は相当の使い手であると見た。佐井学園の超能力者かサヴィエトの魔法使い。
どっちかは知らねえが……まァ、ぶち殺しは確定だァ。
オレは風呂場へ繋がる扉を開けた。さて――どこのクソ野郎だ……。

「……っ」

「……は、あわ……っ」

「あン――？」

なんだコレは……クソ野郎はいねェ。
いるのは素っ裸のクソガキ2人だ。ミネットはホントにクソガキだが……リーネは顔と身長さえ見なけりゃ少しは救いがあるかもしれねェ。主に胸のあたりがな。

「きゃううっ！」

「ゆゆゆゆ、悠ちゃんっ！？」

「ど、堂々とした覗きだよっ！　悠のばか、えっち、すけべっ！」

「なにピンクい事言ってやがるンだクソガキ……さっきの悲鳴はなんだ？」

「え、えと……さっきの悲鳴はミネットがナメクジに驚いただけなの――ふ、ごぉっ！？」

「はわわわわっ！　り、リーネさんそんな事は言わなくてもいいんだよっ！」

ミネットは慌ててリーネの口を塞ぎ、恥ずかしそうに抗議をしていやがる。

しかも丸見えだ。恥ずかし思い出暴露と、自分の素っ裸をオレに見られるの、コイツらはどっちが恥ずかしいんだか。つーかナメクジに驚いていただけかよ。紛らわしいんだっつーの。

おかげで無駄に魔力を消費した。後でミネットに補充してもらわねェとな。

それにしても、一般人ってのはこんな日常を送ってんのか？　一人暮らしならともかく女と一緒に過ごすってのは、無駄に神経を使わねえとダメなモンなのか……面倒かもしれねェ。

まっ……とりあえずは戻るか。

第１５４話，新たな生活（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「へっくち！」

圭介「可愛いくしゃみだな」

伊吹「う、うっさいわね！　風邪気味なのよっ！」

圭介「夏風邪かよ（現実では秋ですが、作中ではまだ夏です）」

伊吹「わ、悪い……？　あんたはどうなのよ？」

圭介「俺は風邪なんかひかねえよ」

暮葉「拙者聞いた事があります。馬鹿は風邪をひかないらしいのです！」

葵「お兄ちゃん馬鹿だったんだ！？」

伊吹「た、確かに圭介は馬鹿ね……っ」

圭介「なにそのひどい結論！？」

第１５５話，クソガキ探し

数十分後の話。折角だからクソガキ共が上がった後、オレも気分転換の為にシャワーを浴びる事にしたのだが……それはオレがシャワーから上がった後の話だ。リビングへ行くと、リーネが黒々しい怪しげな機械をいじっている。それだけで随分奇怪な光景だが……何かが足りねェ。

いつも騒いでいる、一番うるさいヤツが居ねェ気がする。

オレがシャワーを浴びている間に何処に消えたんだ、あのクソガキは。

「おい、リーネ」

「ん、何なの？　ひょっとしてこの機械が気になるの？」

「ソイツの説明は後で聞いてやろう。その前にミネットはどこに消えた？」

「これは新型蓄積機って言う機械なの。これを小型化出来れば悠ちゃんの制限時間が――」

「人の話ガン無視してンじゃねェぞコラァ！」

「もぉ、悠ちゃん心配性なの。ミネットちゃんは多分遊びに行ったハズなの」

「……どォ言う事だ」

「ミネットちゃんには近所に友達がいるらしいの」

「……チッ」

友達かァ……その前にあのクソガキ、ちゃんと理解してんのか？
オレ達は狙われている身なんだよ。ンで、あのクソガキがオレ達を狙っているクソ野郎をシバく組織の一員だって事を。ったく……呑気なクソガキだ。こっちはいつ裏世界のクソ共に襲撃されるかビクビクしている所なンだよ。変換機（コイツ）が無けりゃ自己保身も出来ねェしな。

……制限時間は残り13分。チッ、さっき2分無駄遣いしたからな。まァ、相手がただの雑魚なら10分以内で片付けられるだろう。

そうと決まればやる事は一つだァ。

オレはリーネに背を向け、杖をついて玄関へと向かった。

「あれ、もしかして探しに行くの？」

「……」

「悠ちゃん本当に心配性なの。でも止めはしないの、噂だと風剣のシルフが動き始めたらしいの」

「風剣のシルフ……なンだそりゃ？」

「ボクもミネットちゃんから聞いた程度なの。でも、すっごく強い魔法使いらしいの」

つまり、クソガキはとんでもねェ輩が襲撃してくるヤツと分かってて、にも関わらず友達ってのと遊びに行ったってワケか。その友達を巻きこんだらどうするんだ……？

それに、あのクソガキの能力じゃあ強いヤツと戦わせるのは、あ

のクソガキの寿命を縮める結果になるかもしれねェ。やっぱりあのガキは連れ戻すべきか……？

そう思ったオレはリーネに特に何も伝えず、背を向けてマンションを後にした。

その後、オレはクソガキを探すべく、不便な身体に鞭を打って市内を歩いていた。

三丁目付近にある児童公園。ここにいるかと思ったが……流石にいないか。いくらミネットが見た目も中身もガキだからって、流石に公園で遊ぶほど幼くはなかったか。チッ、単純なクソガキだと思って甘く見ていた。中々探すのが難しいじゃねェかよ……クソッタレ。

……っと、なんだ。ポケットの中から振動が身体に伝わる。携帯電話か……おそらくリーネのヤツがオレに電話でもかけてきたのだろう。

仕方ねえ……出る気はしねェが、一応相手にしてやるかァ。

『よかったなの！　ボク、出てくれないと思ってたの』

「……なンの用だァ？」

『よく考えたら、ボク魔力を探る事が出来たの』

「そういう事は最初に言えクソガキ2号……要するに、オレは無駄に歩いたって事かァ？」

『そうでもないの。その近くに初芝高校があるハズなの』

「……オレが前にブッ壊した所か？」

『そ、そういう事になるのかな……？　その近くにミネットちゃんはいるハズなの』

「ふ～ん……って、オレはそっちに向かえばいいんだな」

『そう言う事なの！』

そういう事かァ……まっ、あのクソガキが同じ所にいるとは思えねえが、それでも初芝高校に行ってみる価値はあるだろう。待てよ……ミネットのクソガキはアルファ隊。ンで、初芝高校には木下ってアルファ隊のチビが居たよな。

もしクソガキと遊んでいるのがあのチビだったら、また戦う必要があンのか？

冗談じゃねェ……こっちは切羽詰まってンだ。

あんなチビ構ってる余裕なんざ一切ねェンだよ。

『……ねぇ悠ちゃん。悠ちゃんはどうして……その、他人に冷たいの？』

「……あ？」

『いや、正確には悠ちゃん。あえて他人を拒んでいる気がするの』

「……オマエがオレに説教くれンのかァ？」

『ボクは悠ちゃんが心配なの。悠ちゃんだって人間なの、それなのに……』

「普通の人間じゃねェよ、普通の人間にも戻れねェ……」

一言をすらすらと言い終えると、ふとオレは昔の事を思い出した。

まだ、背丈もミネットより低かった頃の時かァ。オレが学園の前身――特科会に引き取られるキッカケとなった……。

オレはその日以来、何事にも興味を無くした。あえて興味を無くした。

フン、今更……くだらねェっつーの……。

『……悠ちゃんの言葉はどこか寂しそうなの』

「寂しい？　オレの汚ェ言葉のどこにそんな要素が含まれてンだ？」

『そう、言葉は汚いの。だから誰かを求めているみたいに聞こえるの』

「……どォ言う事だ？」

『弱音を吐いて構って欲しい人がいるって、よく聞く話なの。悠ちゃんの場合はそれと似たようなものなのかな』

……チッ、そんな事……一番分かってんのは自分自身なんだよ。だから今更なんだ。あのクソガキ2号に指摘された所で、今更どうなるんだ？

何か変わる事でもあんのかよ。ねェだろ……マイナスの方向には変わるかもだがなァ。

『悠ちゃん……もう少し、笑顔になろうなの』

「……そいつは無理だ。今更笑って何になる？　そもそも、笑った

瞬間クソ共が潰しに掛かるかもしれねェ。オマエやミネットがクソ共に殺されるかもしれねェんだ」

『それでも悠ちゃんにはボクにはない……笑顔を守る力があるの』

「……フン」

何が笑顔を守る力だ……オレの能力はそんな素晴らしい力じゃねェ。ただ、可愛らしい容姿を持った女さえ肉塊に変え、あらゆる物体を破壊し尽くす……オレの能力はそういう力だ。

そんな血塗れの力で、笑顔を守る事なんざ出来るわけがねェ。力を使えば、笑顔じゃなくて血の涙が増えるだけだろう。第一、そんな大層な力があれば特異点狩りなんてしてねェよ。

もしも、この能力で特異点狩りをやめさせたなら……。

もしも、この能力で学園を潰す事が出来たなら……。

もしも、この能力で何かを守る事が出来るのなら……。

……考えただけでもくだらねェ……不可能なんだっつーの。そんなものは、ヒーローが出てくる夢物語でしか実現不可能なんだ。オレはただの殺人鬼だァ、出来るハズがねェ……。

「くっだらねェ、手遅れだっつーの……」

『手遅れじゃないの』

「オマエらも不幸なモンだ……末期ガン患者並のどうしようもないヤツを、態々自分達の住処に抱え込んじまったんだからな」

『そんな事は絶対にないの。悠ちゃんはまだやり直しが効く段階なの』

「その言い草……オマエのオレの母さんかァ？」

『失敬な！？　ボクはまだギリギリ１５歳なの！』

要するに……年下に説教されたってワケか、クソッタレが。

そう思ったオレは咄嗟に電話を切り、空を眺めた。さっきまで快晴だった空は、いつの間にか雲のせいで灰色に染まっていた。嫌な天気だ……雨でも降ってきそうだな。

……さて、そろそろクソガキの事でも探しに行くか。

とりあえず、クソガキがいるって話の初芝高校へ向かって歩き始める。

そこでまた、随分と昔の事を思い出した。

場所は東京の銀座のあたりだ。まだ黒いランドセルを背負っていた頃、既に超能力に目覚めていたがその事は周囲に黙っていた。世の中は……そういうモノに冷たいと、当時のオレは子供ながら理解していたからだ。だが……親に連れられて遊んでいたあの日、オレは不良に絡まれた。

怖かった。

喧嘩なんてした事のねェオレは、いきなりド派手な奴らに絡まれた。金を出せだのぶん殴るだの殺すだのという怒号。ガキがデカいヤツらから、それを聞いて怖がらないハズがない。

オレは逃げようとしたが、捕まって殴られそうになってしまった。だから――オレは超能力を人に向かって使った。不良は死んだ……自分の能力がそこまで強いとは思わなかったのだ。

その後、周囲の大人達や警察だの自衛隊だの……全てがオレに襲い掛かり、オレの前で壊滅してしまった……それはオレの力のせいだ。こうしてオレは行き場を無くした。同時に、他人との接触は世界の滅びに繋がるとも思った。子供ながらに嫌だったんだろう……。

こうしてオレは、あえて一人でいる事を望んだ。

当然、騒動の原因かつ一人のオレに居場所はなくなった。そんな

孤独なオレに――居場所を提供したのが学園の前身で、そこの研究を受けて超能力に磨きがかかった。

だが、その果てにあったモノは血も涙もない、殺戮の世界――。

「くっだらねェ……」

「何がくだらないのよ？」

「……あ？」

不意に耳に声が入ってきた。独り言を聞かれたか……しかしなんだ、どこかで聞き覚えのある声のような気がした。なので振り返ってみると――、

「あ、あんた……あの時の！？」

そこにいたのは――制服姿の国宗伊吹ってヤツだった。

第１５５話，クソガキ探し（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「セロリだ」

大吾「セロリだな」

重原「セロリだね」

伊吹「せ、セロリってなによ？」

圭介「過去までセロリだったな」

大吾「性格はセロリだったけどな」

重原「どこまでセロリ化するんだが」

伊吹「だ、だからセロリって何よ？」

圭介「そういえばセロリも心配性だよな」

大吾「セロリはロリコンだもん」

重原「こっちもセロリ並にロリコン＋心配性だね」

伊吹「だからセロリってなんなのよっ！？」

第１５６話，言えばいいだろ

児童公園。

オレはクソガキを探すためだけに、こんな場所へ来たのだが……

チッ、まさか国宗のヤツと遭遇するとは予想外だった。現在、オレは公園のペンキ塗りたてのベンチに座っていた。若干シンナー臭いベンチに国宗と2人で座っていたのだ。

ったく……ガキ探してんだから、あんまりオレを足止めしてんじゃねェよクソアマ。

「って、結局あんたは暮葉達とどういう関係だったわけ？　いきなり漫画もビックリな戦闘始めちゃうわけだし、何か事情でもあんのよね？」

「……フン、オマエにそれを知る権利はねェ……」

「な、なによ！　こっちは結構心配してるのよ！？」

「裏世界に手ェ出すと……ロクな事にならねェぞ」

「う、裏世界って……」

「……ッ」

国宗は一応一般人だ。前にコイツの前で戦った事でさえ本当はまずい事だ。チビと西園寺との戦いでオレは――とんでもないモノを一般人に見せつけてしまった。

幸い、それが超能力者の能力（ちから）による破壊だとは思われていない。

それだけでも少しは救いがあるのかもしれないが、これ以上国宗を

こっちの世界に引き込むわけにはいかねェ。
あんなクソッタレた世界に――ド素人の一般人を巻きこむわけにはいかねェ。
もし巻き込もうとするヤツがいるのなら……っといけねェ。本当はこんな事を考えている場合じゃねェンだった。さっさとあのクソガキを探さねえと。そういえば国宗は初芝生徒、あのクソガキがいる場所も初芝らしい。この女が何かを知っている可能性があるかもしれねェ。

「オマエ、こんな顔のヤツを学校の近くで見なかったか？」

オレはポケットから携帯電話を取り出し、ミネットの画像を国宗に見せた。確かコイツは前にもこのガキの画像を見た事があったハズだ。そのせいか写真を見た瞬間、国宗は一瞬ぴくんと身体を震わせ口を僅かに開けた。どうやら……覚えているようだな。

「この子って、前にも探していた子よね？」

「あァ……今丁度探している所だ」

「前から思ってたけど、あんたとその子ってどういう関係なの？兄妹にしては全然似てないけど……」

「話すのは面倒臭ェ……色々事情があってコイツと暮らす事になってんだ……クソッタレ」

「つまり、あんたが面倒を見ているって感じなの？」

「まァ……間違ってはいねェな」

ホントに世話の焼けるクソガキだ。人がこうして探しているっていうのに、全くどこにも居やしねェじゃねェかよ。こっちは通常モードじゃ歩くのも辛いンだっつーの。

「その子ってどんな子なの？」

「あァ？　クソうるせェしすぐ迷子になるし弱ェし……保護すンのが面倒なヤツだ」

「……なんか、圭介にちょっと寝てるかも……っ」

「あ？」

「いや、なんでもないわっ！」

「待て……圭介って言うのはどういうヤツだ？」

圭介……どこかで聞き覚えのある名前だ。

あれは7月。この街の南部あたりにある工業地帯での出来事。オレは木下暮葉をブッ殺そうとしていたンだが、その時一般人が乱入してきやがった。その一般人は弱い、超能力も魔法も使わず銃どころか刃物さえ持っていない、丸腰のただの学生だった。

――いいぜ……だったら俺がてめえを勇気づけてやるよ。この拳でな！

――あたり前だろ。友達の為に頑張る事の何が悪いってんだよ。

――もう一度やり直してきやがれ、このクソ野郎ォ！

にも拘わらず……オレはソイツに完膚無きまでにボコボコにされた。

何回攻撃しても倒れねェ、死にたくなるような絶望を与えても諦めねェ。何かを守る為に戦うヒーローのような男だった。
だけど……確かソイツの名前は――。

「……あんた、圭介の知り合いなの？」

「今の段階じゃわからねェ……可能性はあるかもしれねェ」

木下もあの男を圭介と呼んでいた。そしてコイツは木下の知り合いだ。その圭介ってヤツについて何か知っているかもしれねェ。
出来る事ならソイツに会いたい。会って……リベンジしてやる。
とにかくオレはあの一回の敗北が許せねェ……超能力者がただの学生に、ただの喧嘩で負けただなんて恥以外の何者でもねェ。
だから今度はオレのプライドの為に……もう一度あの野郎と――。

「……はぁ、圭介の知り合いってホントに愉快な人が多いわね……っ」

「そういうオマエは、その圭介ってヤツの何なんだ？」

「わたしは別にアイツとはただの……お、幼馴染よっ」

なんで幼馴染って所がハッキリ言えてねェンだよ……しかも微妙に赤いし、オレはそういうのは経験ねェし、そもそもする気もねェからわからんが……ひょっとしてこの女。

「オマエ……ソイツの事が好きなのか？」

「は、わ、あぁ……っ！　いいいきなりなに言ってんのよアンタ！
あ、ああんな馬鹿でオタクで変態で八方美人でいつも一人で勝手

に消えて、その上お節介で時々カッコよくて一緒にいて楽しくて――」

「途中から長所になってンぞ……」

「きゃうう!?　な、なんでアンタにまで分かるのよ……っ」

「オマエ、表情に出てンだよ」

「う、うそ!?」

「自覚ねェのかよ……」

どんな幸せ者だよこの女。つーかこんだけ表情豊かなのに、相手の野郎とはまだ付き合っちゃいねェみたいだな。これに気付かねェとか……圭介ってクソバカはどんな鈍感野郎なんだ。

「うぅ……なんでアイツは気付かないのよ……っ」

チッ……オレが恋愛相談なんざ、柄でもねェのに……。

この女は相当本気で悩んでるようだ。サッパリわかんねェが、とりあえず一般論でも語っとけばなんとかなるだろう。

仕方ねェ……恋愛相談なんてくだらねェモンするのは、今日だけだ。

「そりゃあ、オマエ次第じゃねェの？」

「……えっ？」

「相手がどんな野郎かは知らねェ……けど、そう言う鈍感な野郎に

は素直に言えばいいだろ」

「な、何をよ……っ」

「常識的に考えて告白ってヤツかァ……？」

「っ！？」

オレが指摘した瞬間――ぼんっ、と赤くなった国宗が借りてきた猫のように静かになった。

なんだ……告白ってそんなに恥ずかしいモンかァ？

オレにはわからん……経験ってモンがねェし。まっ、超能力を暴走させずに正確に扱うよりは簡単なモンだとは思うが。

「ストレートに言ってやれ、それが一番の近道だとは思うがなァ」

「……無理よ、さっき女子会言ってかったんだけどライバル多いし、それに私は……っ」

ライバルが多いって、どんだけモテてんだよその男。オレが能力で竜巻でも起こしてソイツをぶっ飛ばしてやろうかァ？　聞いているだけでムカつく野郎かもしれねェ。

まァとりあえずわかったわ。コイツがソイツを攻略する方法が――。

「気にすンじゃねェよ……」

「……？」

「ライバルだァ？　そんなの関係ねェ、オマエはそいつの幼馴染だ

ろ？　だったらオマエは他のヤツよりソイツの事を理解してンじゃねェのか？」

「……っ」

「それだけで立派な武器になンだろ。別に仲悪いわけじゃねェンだろ？」

「それは……多分っ」

「だったらポジティブになれ、オマエなら何かをやって成功する可能性があると思う」

オレとは違ってなァ……まっ、今更羨ましがっても仕方がねェ。オレはオレ、コイツはコイツだ。オレは光の道に戻る事は多分できねェ……オレは一生今の中途半端な位置にいるしかねェんだ。それと比べりゃコイツは――光に満ちている。

「……あんた、話に聞いていたのとは全然違う、いい人かもね」

「あ？」

「なんでもない、こっちのことよっ」

「……チッ、そんじゃ……オレはそろそろクソガキ探しに戻るが？」

「そ、そうね。そういえばあんた人探し中だったのよね……ごめん」

「気にすンな……じゃあな……」

オレは国宗に背を向け、初芝高校へ向けて再び歩き始めた。後ろから、国宗が「ありがとう」って叫びかけたきたような気がするが……正直それはどうでもいい。あの女と関わるって事は多分もうねェだろうからなァ。しかし恋愛ねェ……そんな事で悩むヤツを初めてみた気がする。

まァ所詮、オレには関係ない次元の話だ。

それから数十分後、杖をつき苦労した結果――ようやく初芝高校に到着した。オレがブッ壊した所は綺麗に修復されており、周りの壁と比べると、不自然なくらい真新しい所があった。もうちょっと上手く修理できなかったのかよ……。

まァいい、そんな事よりあのガキは――？

「葵お姉ちゃん！　千早お姉ちゃんこっちこっち！

「にゃはは！　待て待てミネット～っ！」

「はぁ、ちょ……ま、待ってよミネットちゃん……っ」

いたいた愉快に遊んでやがる……アレが友達か。大人しそうなヤツが一人に、もう一人ミネットそっくりのうるさそうなヤツが一人。ハッ、まああのクソガキにピッタリな連中だ。

楽しそうに遊んでいる所悪ィかもしれねェが……これも安全の為だ。

「ミネットォ！」

叫ぶと、三人が一斉にこちらを向いた。そのうちの一人――ミネ

ットは笑顔を浮かべ、

「あ、悠っ！」

楽しそうに駆け出し、オレの目の前まで走ってきやがった。

ったく……散々人を歩かせておいて、自分は随分楽しそうだな。

まァ、別に友達と遊んでたってンなら文句は言えねェが。いや、一つだけ言う事があるな。

「もしかしてミネットの事を探しに来たの……って、なんで不機嫌そうに拳を握り締めてるのっ！？」

「オマエ……あのガキ共と何してたんだァ？」

「ガキじゃないよ！　葵お姉ちゃんも千早お姉ちゃんも貴方と歳は近いんだよっ！」

「オレの質問無視してンじゃねェ、何してたんだァ？」

「ん～っと、遊んでもらってたんだよっ！」

まァ当然の回答である。だけどなんだ……散々探してオチがこれだと、ちっとばっか腹が立つというか何というか……まっ、少しクソガキをビビらせておくか。

オレは一気に口を開き、睨みつけるようにクソガキを見て、

「あァッ！？」

……って全然ビビンねェし……ダメだこりゃ、このクソガキに成長の余地はねェかもな。

まァ、結局クソガキは無事だった。その事実さえあれは別に問題はねェだろう。

だが……今後は油断が出来ねェな。いつ連中が襲ってくる事か……。

「あの人ミネットのお兄ちゃんか何かかなっ？　すごいイケメンだねっ！」

「さ、さあ……で、でも先輩のほうがカッコいいと思います……っ！」

「葵もお兄ちゃんが一番だもん！」

なに言ってんだアイツら……まァいい、そろそろクソガキを連れて帰るか。

色々と面倒臭ェなァ……クソッタレ。

第１５６話，言えばいいだろ（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「うあああああああああああああああ！」

暮葉「どうしたのですかけーすけ様っ！？」

圭介「お、終わる……」

暮葉「なにがですかっ？」

圭介「今期アニメが終わっちまうよおおおおおおおおおおおおっ！」

暮葉「……」

葵「お兄ちゃん、もうすぐ秋アニメが始まるよ？」

圭介「おおっ！　そういえばもうそんな季節か！　秋は見るもんがいっぱいで困るぜ！　アニメのおかげで一年退屈しないぜ！」

暮葉「……けーすけ様、病院に連れてったほうがいいのでしょうか？」

葵「お兄ちゃんはアレでノーマルだから平気だと思うよ」

第１５７話，武装集団（前書き）

どうもです、更新遅れて申し訳ございません！

第１５７話，武装集団

もう日も暮れ始めた頃、ようやく拙者――木下暮葉は解放されました。

先程までずっと、亜紀さんや伊吹さん、それにクラスメトの浦上さんや横井さんなどと一緒に女子会に参加していたのですが……。

「もきゅう……」

バレちゃいました……亜紀さん達にバレちゃったのです。

女子会とはその名の通り、女子だけの集まりなのです。女子同士なら男子がいると話辛い事も話せるというわけで、よくこの国の女の子がやっているらしいのですが……。

まさか、あそこまで吐かされるとは思わなかったのですっ。

ひどいのですっ、応援してくれるのは嬉しいのですが、その変わり亜紀さんや浦上さん達に散々いじられたのです……ううん、あんまりなのですっ。

……でも、伊吹さんはただ一人……落ち込んでいたような気がしますっ。

なんででしょうか、やっぱり伊吹さんも拙者と同じで――。

「ちょっとよろしいですか、とリーリヤは貴女を止めます」

ふと、拙者に語り掛けるような声が聞こえました。

振り返ると――プラトークと呼ばれるロジーナの民族衣装を身にまとった、背の高い金髪の美人な人が立っていました。ジャラジャラと飾りのついた杖を右手に持ち、八端十字架のペンダントを首から提げているその人の胸の部分には、アルファ隊の紋章が描かれたバッジがついています。

この人は……間違いないのです――！

「り、リーリヤ隊長！？　なのですか……？」

リーリヤ・コスティリナ。

アルファ隊の隊長であり、同時にアルファ隊最強と呼ばれる魔法使いなのです。多分レムリア全体で見ても１０本指に入る実力者だと思います。隊長はそれ程凄い魔法使いなのです。

「はい、貴女に警告があります、とリーリヤは言ってみます」

「警告……ですか？」

「風剣のシルフが動き出した、というのは御存知だと思います、とリーリヤは推測します」

「はい、その事なら……けーすけ様を守る為に、いつでも戦闘準備はできているのです！」

「いい心がけです、とリーリヤは貴女を称賛します。しかし、別件で貴女にも協力して欲しい事があるのです、とリーリヤは頭を下げて頼みこんでみます」

「頼みごと……なのですか？」

隊長が拙者なんかに頼みごとって……一体、なにがあったのでしょう。

リーリヤ隊長は基本自分で何でもやっちゃうタイプなのです。なので、そんな隊長が拙者に直接頼みごとをしてくるのは、珍しい上に嫌な予感しかしないのです。

もちろん拙者は隊長の事は大好きですっ。でも……そうじゃなくて、何か隊長も頭を悩ませる嫌な事が起こったとか……そんな感じの嫌な予感なのです。

「はい、とリーリヤは返答してみます」

う、ぐ……この全てを包み込む安らかな笑顔、やっぱり何か大事そうなのです……。

拙者は一体、隊長様になにを頼まれちゃうのでしょうか……っ。

そう恐れていた矢先、隊長は言葉を続けて、

「実はこの街に不審な集団が侵入しました、とリーリヤは状況報告します」

っと説明しました。

不審な集団……なんとなく思い当たる節があるのです。

「あの、それって風剣のシルフと共に古宇坂を攻略しようとする、サヴィエトの別働部隊の事ではないのでしょうかっ？」

「いいえ、その不審集団は魔法使いでもありません。１３０人程度の武装勢力です。その上サヴィエトとの関与は一切ないと思われます、とリーリヤは補足説明します」

「そ、それじゃあその集団は一体……？」

「以前、隊員を狙っていた人物と関係のある集団……という報告がありますと、リーリヤは事実を告げてみます」

「もきゅ？　拙者達を狙う……って、まさか！？」

「はい、貴女もその人物とは交戦した事があると思います、とリーリヤは推測します」

早川悠……アルファ隊の隊員を無差別に殺害し、最近では拙者の後輩と何らかの関係を持つ最凶最悪の超能力者。あの人と関係のある組織って……確かに無視できない集団なのです。

下手をすれば、また他の隊員が殺されて……結果的にけーすけ様に迷惑を――。

「わかりました！　早急に調べてみるのです！」

「はい、ですがいきなり攻撃を仕掛けるのはやめてください。まだ、こちらに害があるかもわからない段階なので、無闇な戦いを避けるべきだと思います。調べた結果、害があると判断した場合に仲間と襲撃して欲しい……と、リーリヤは頼みこんでみます」

「了解なのですっ！」

もきゅう……帰ったらけーすけ様と遊ぼうと思っていたのに、本日は帰りが遅くなっちゃうかもしれないのです。でももし、この隙に風剣のシルフがけーすけ様を襲ったら……。

……頑張って、早く仕事を終わらせましょう。そしてけーすけ様の傍に急ぐのですっ。

待っててください、けーすけ様――っ！

――その頃、古宇坂市南部では……。

クソガキを見つけた後、このオレ――早川悠は個人的に買い物をしていた。オレが欲しかったものはおかかかってヤツだ。オレはおにぎりが好きだ。腹も減ったし、晩御飯まで凌ぐにはおにぎり一個が丁度いいだろうと思ったのだ。フン……やっぱりおにぎりはうまい。

しかし、リーネのヤツ……ちゃんとクソガキの面倒を見ているだろうか。一緒に家を抜けだしたりしてねェだろうな。もし抜けだしていたらオレは今日、何の為にクソガキを探したんだ？

そしてオレは、一人で食うわけでもないのに……なんでおにぎりを3個も買った？

クソッタレ……いつからオレは、無意識にクソガキ共を受け入れるようになった。

いつからオレは……。

「……っ」

……本当にこれでいいのか。オレは幾人殺した人間だと思っている。どれほどの汚ェ仕事をやってきたと思っている。そんなクソ野郎が……こんな光の世界にいていいのか？

結局、オレはなんでここにいるんだ。いるべき場所ではない場所に……どうしてオレは何事もなく暮らしているんだ。どうしてアイツらはこのオレを受け入れたんだ。

いつからオレは――。

……と、ここでオレは思考を停止した。

ゴン！！　と、何かがガードレールを突き破ってきた。

全ての終わりを告げるような轟音、だが――同時に変換機に手を伸ばした。

左手の人差し指で触れているのは、魔力エネルギー変換機の制御スイッチ。これを一度押せばオレは超能力者に戻る事が出来る。

そう、暴風の膜であらゆる攻撃を防げる本来のオレに――。

「――あァ？」

振り返ると、真っ黒なワンボックスカーのフロント部分が消滅していた。交通事故で正面衝突でもしたかのように、車両のフロント部分が潰れていたのである。ガラスは割れ、タイヤも前輪が無様に外れてしまい、その上衝突の衝撃で車は横転していた。

装甲車……ってワケではなさそうだ。そもそもこの車、誰かの物かすら怪しい。

ナンバープレートも不自然だ。ひょっとして偽ナンバープレートか。よく見ればドアの鍵穴も無理やりこじ開けたような跡があった。つまり――この車は盗難車か。

盗難車の中には素顔さえ分からない、特殊部隊のような服を着た男が2名。サヴィエトの魔法使いがこんな恰好をしているとは思えねェし、車なんてモンを使うとも思えねェ。サヴィエトの魔法使いではないのは確実だろう。なら、それ以外でオレを狙う組織と言えば――。

「やっぱり来やがったか……何の用だ？　オレを始末しに来たか？　それともオレを連れ戻して利用でもしたくなったのかァ？」

「ひぃ……あ、う……あぁ……っ」

「愉快にビビっちまいやがって……さっきの轢き殺す気はどこに消えたァ？　まっ、今のでオマエらは完全にオレを怒らせたがなァ。つーワケで――ブチ、殺す」

言い終えると、オレは右手を車の中へと伸ばした。既にガラスはない、腕を車内に侵入させるのは簡単であった。車内を手を伸ばし

たオレは、ひとまず運転席の男の顔を掴んだ。
ぐしゃり、と言う嫌な音。口の部分が変形し、布が不自然に染みてきた。おそらく今ので顎か何かが潰れたのだろう。まぁこの程度では人は死なねェ……痛いだけだ。

「あははぎゃあえひゃあうへはぎゃははアハははぎゃはははッ！」

顎を潰した男を、今度は建物に向かって放り投げてやった。投げ飛ばされた男は建物のガラスを突き破り、その後床にでも落ちたらしい。あ～あ、あの様子だとガラスが刺さったかもな。
後で救急車でも呼んでやるかァ……せめてもの情けだ。
ところで……まだ中にクソ野郎がいたな。もう一人は助手席でビビってやがる。
面白ェ……ぎゃは、こういうのを見ると――余計に虐めたくなる。

「あァン――ふふ、ぎゃあははは！　あァ楽しい！　ウヘヘ、やべェよォォッ！」

車が不自然に振動する。
理由は、オレが無理やり車内の部品を取っ払い、外へ放り投げているからだ。そういう部品はオレが車内に入るには邪魔くさいだろ。まったく……本当に楽しいィ――。

「ひい！？」

「最高にトンじまったよ……クソ野郎ォ！」

「う、うあああああああああああああああああああああ！」

男は咄嗟に拳銃を取り出し、２発ほど発砲してきやがった……が、

銃弾はオレの身体に触れる事さえなかった。そう、少なくともオレの身体にはな。放たれた二発の銃弾は、一旦はオレに風穴を開けようと向かってきた。ただ、その2発はオレに触れる前に暴風の膜に触れたのだ。

膜に触れた銃弾は、そのまま勢いよく男の肩と足に突き刺さる。ハッ、畜生こんな所でブッ殺しはしねェよ。病院送りで助かるレベルの怪我で済ませてやるっつーの。

オレはうめき声を上げ苦しがる男の首を掴み、今度は車道側に投げてやった。

続いてどうなったか確認をすべく、オレはバリバリと天井を突き破り、上半身だけを外に出して周囲を見回す。さっき自分の銃弾で自滅した男の周りには――数代の車両が停車していた。

その車の周りにも、同じような服を着ている連中が、銃口をこちらに向けている。

どうやら……佐井学園も本気でオレをどうにかするつもりらしいな。

「あァ――？　はァ……こんな雑魚虐めても面白くねェぞ」

さてさて、どうすっかなァ。一人ずつ大サービスで相手するって手もあるが、それはオレが面倒臭ェし時間もかけたくはない。オレはたったの１５分しか超能力者でいれないのだ。しかもオレは今日一回能力を使ってしまった為、戦闘開始時点で制限時間は１３分程度であった。

あんまり時間をかけていると、すぐにオレは力を失う。力を失えば、こんな雑魚にだって風穴だらけのゴミクズにされてしまうだろう。

なら――短期決戦で行くべきだな。

「あひゃッ！」

オレは拳を車の天井に振り下ろす。その動作自体には何の意味もない、ただ雰囲気を作る為に行った無駄な動きである。しかし、拳がオレがブッ壊した車の天井に触れた、瞬間。

車はドッ！　という轟音を上げ、たちまち大爆発を起こしたのだ。

オレがやったのは分子運動の抑制・活性化だ。それでガソリンに火でもついたのだろう。

爆風と熱波が周囲へ飛び散り、周りの車や銃を構える連中を巻きこむ。突然の衝撃と熱で火傷を負った者や大怪我を負った者、果ては恐怖で逃走しようとするヤツも現れる始末だ。

オレはそんなヤツらを見回し、素晴らしい笑みを浮かべて、

「あひゃぎゃはあひゃはははっ！　今から素晴らしい祭りでも開催してやるよォ！」

血みどろの祭りをなァ……ぎゃは、この程度なら何の問題もねえ。もう少し遊んでいたって魔力が枯渇してハイ戦闘不能って事はねェだろう。とにかく……久しぶりに楽しい。楽し過ぎでホントに頭がどうにかなっちゃいそうだよオイ。あはは、すげェストレス解消になるっつーの。

……と、その時。

「あーあー派手にやりやがってぇ」

数十メートル先にもう一台、今度は白のワンボックスカーが停車した。ガララと開けられた車体中間部分のドアから、一人の男が降り立つ。男は何かをぶつぶつ呟いている。

……フッ、しかも白衣のあの男。

「こりゃあ始末書書かされるかもなぁ……まっ、あの男さえ潰せば

問題ねえか」

――あ、は！　なにやってんだよあの野郎ォ……った、一仕事増えたな。

いいぜ、お次はあのクソ野郎を始末してやろうじゃねェか。

第157話，武装集団（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「木ィィィ原くゥゥゥゥゥゥゥゥゥン！」

葵「いきなりどうしたのお兄ちゃん？」

伊吹「しばらく出番がなかったからいかれちゃったんじゃないの？」

圭介「違うわ！　俺は今回の感想を言っただけだ！」

暮葉「かわいそうなのです……けーすけ様っ」

圭介「く、暮葉まで俺を変人扱いするなよっ」

凪紗「うん、藤島は変人ではない。ただの変態だ」

圭介「うあああああああああああああああああああっ！」

第１５８話，マッドサイエンティスト

突然オレを襲ってきやがった変な連中。特殊部隊のように顔すら隠す、そんなファッションに身を包んだクソ野郎共をオレは始末していた。だが、数十メートル先に別の白い車が現れ、中から柄の悪そうな白衣の男が降りてきた。オレはソイツに見覚えがある。

あァ……忌々しい思い出しかねェがな。確かにあのクソ野郎の世話になった事はある。

そう、あの野郎の名前は確か……。

オレはそれを思い出しつつ、杖をついて男のほうへ近づいてみる。やっぱりな、あの憎たらしい極悪面に妙に真新しい白衣。あの場違いな科学者で間違いはねェ。

「ぎゃはあはひゃアハははははッ！　三ィ原くンよォ、こんな大群率いてゴクローさん。ンで、オマエの目的って何なんだよォ？　オマエ程度がオレを連れ戻そうだなんて思っちゃいねェよなァ？」

三原寅彦（みはらとらひこ）。

特科会時代からの知り合い、まァどうしようもない不良科学者だ。しかし、超能力の研究に携わっている上に俺の研究もしていたんだ。見た目の割には頭はいい……いや、いいってレベルで済まされはしねェだろう。おそらく、日本でもトップクラスの頭脳を持つ男だ。

……だが所詮は科学者。ひ弱なモヤシがオレをどう止めるつもりだ？

「俺としてもテメェにだけは会いたくなかったんだけどなぁ……まっ、学園長直々の命令だから仕方ねえんだよ。なんでもテメェが潰していた連中に、何らかの利用価値があるかもしれねえんだ、と。俺もソイツは大いに思うぜ。なんで潰して歩いていたんだが……」

「オレが潰した……？　ハッ、今更学園が特異点をどう扱うつもりだァ？」

「なァ早川悠。手を組もうぜ？　今ならその変換機、何かは知らねえがこっちで研究して今より性能アップしてやるよ。テメェが嫌なら待遇も前より良くしてやる。だからさぁ……その変わり特異点を狩って生きた状態で俺らに渡してくれねえか？」

今から手ェ組んでミネットを渡せって事か……なるほど、やっぱり学園はオレを連れ戻して利用するつもりだったか。聞くところ悪ィ話には聞こえねェ……だがな。

「お断りだァ」

「あ？　なんでだ早川悠。悪ぃ話じゃねえと思うけどな」

「オレがオマエらの味方をする理由なんざ、とっくの昔に消えちまったんだよ。つかよォ、そんな仕事ならオマエらだけでやればいいじゃねェか。神様もビビる血の雨を降らせる演出がオマエらを待ち受けてるだろうからよォ。オマエの極悪面もそこで整形すりゃあ科学者らしいオタク顔になるかもなァ？」

第一、アイツらが関わっている時点で――コイツらはオレの敵だ。

あのクソガキがコイツらの手に渡ったら、一体どんな事になるか……おそらく皮膚はべりべり剥がされ顔も破壊されるかもしれねェ。いや、下手すりゃ命が危険かもなァ。オレはこの狂気の科学者（マッドサイエンティスト）がどんな研究をするのか、どんな実験をするのかよォく知っている。

だからこそ余計にミネットを渡せねェ……たとえ三原を肉塊に変えてもだ。

「あークソッ、なんだかなぁ……相変わらずムカつく性格のガキだ。学園を飛び出しても何一つ変わっちゃいねえなテメェ」

すると、三原はガチャガチャと拳を構えている。

なんだ……あの銀色のグローブ。三原の事だ、どうせくだらねェ機械だろう。あの男がしょうもない機械を開発するのが好きだからなァ。

三原はくすくすと笑みを浮かべ、

「俺さ、実はテメェの事が嫌いなんだよな。ガキの癖に威張るし強くもねえのに強がるし。そんなテメェの姿がムカついて仕方ねえんだよ。今回の交渉だって嫌々だったんだよなァ……」

と、一回言葉を切った三原は唇の端を歪め、目を大きく開き、

「じゃあテメェを始末してから特異点を頂くか。テメェがいなくても超能力者くらい沢山いるしな……つーわけであばよクソガキ。テメェの人生はこれで終了だ――！」

なんと三原は駆け出し、右拳を振り上げてきやがった。なんだコイツ……ひょっとしてオレをぶん殴るつもりなのか？　ぎゃは、おいおい科学者さん冗談はやめてくれよ。コイツ、オレの事を忘れちまったんじゃねェだろうなァ。オレに触れた瞬間――多分ヤツの手首は折れちまうだろう。

さて、と――どう料理してやろうか？

「――ッ！？」

――あ？

い、痛ェ……なんだ……何が起こった、とりあえず落ちついて考えろ。オレの顔面に何かが突き刺さったような気がした。鈍い痛みの後の鋭い痛み……皮膚でもやられたか。

クソッタレ、どういう事だ。オレは確かに暴風の膜を張り巡らせた。今のオレならどんな攻撃を喰らおうが、問答無用で弾き返しちまうハズだろ。

それなのに何故――あの野郎の拳がオレに突き刺さりやがった？

「そんな顔するなよ。一体何年俺はテメェと一緒にいたか……わかってんのかぁー？」

響いたのは鈍い金属音。三原の拳が再びオレの顔面を捉えたのだ。またしても、暴風の膜が効果を発揮しなかった。脳を揺さぶられる一撃でバランスを崩し、オレは路上に倒れ込んだ。

杖が手から離れる。おにぎりの入ったコンビニの袋も地面に落ち、中からおにぎりがバラバラと飛び散ってしまった。

意識が揺らぎ目もぼやける中、オレは必死に見上げる。

三原はだるそうに手を腰に当て、一歩ずつ近づいてきた。

その調子で三原は右足でおにぎりを一個、踏みつぶしやがった……クソ野郎。

「特異点の世話はこっちでするからさぁ、テメェはここで腐っててくれねえか？　ハッ、いくらクズのテメェでも死んで腐って自然に戻れば、それなりに貢献するだろうしさ」

相変わらずムカつくクソ野郎だ……三原ァ。

さっきの拳がどういう原理で、オレの暴風の膜を破ったかは知らねェ。だが、オレは軍隊が相手でも負けはしねェ超能力者だ。そして三原は結局ただの引きこもりだ。いくら暴風の膜がヤツに通用しないと言っても、こっちには遠距離攻撃の手段がまだいっぱいある

んだよ。
　オレがこんなクソ野郎に負けるハズがねェ……このクソ野郎がオレに勝てるハズがねェ。
　最終的にはオレが勝つ。クソガキをコイツに手渡すわけにもいかねェ。
　あのクソガキに――これ以上の負担をかけるわけにはいかねェ。

「……ナメてんじゃ、ねェぞ……この、三下があああァァアアあァあああああっ！！」

　轟！　周囲の建物のガラスが割れ、樹木や看板なども空高くに吹っ飛んだ。
　オレの能力は大気操作（エアオペレイション）。その名の通り、大気そのものを丸々操作できると言う使い勝手のいい強力な能力だ。それは当然――大気の流れであってもだ。
　オレを中心として竜巻が発生した。その風速は１６９メートル。このレベルの竜巻は非公式の発生報告のみしか存在せず、現実には実証されていないレベルだ。だが、オレにかかれば実証されていないレベルの嵐を起こすのも容易いことだ。
　並のミサイル以上の威力を持つ竜巻は、徐々に三原に迫って行く。逃げ場はない。直接竜巻に触れなくとも、その周囲は暴風が吹き荒れ、普通の人間ならマトモに歩く事さえできないからだ。ぎゃは……いいぜ、そのまま三原を殺せ――！

「……はい残念賞」

　――だが、三原が首から提げていた怪しげな笛を吹いた瞬間――竜巻は完全に消滅した。

「ッ！？」

信じられねェ事態が発生した。ちっくしょう……どういう事なんだ。元々の大気の流れやその計算を間違ったか……いや、いくら弱体化したとは言え、その程度の計算ミスはありえねェ。

だとすると、やはり三原が首から提げている――あの笛のせいか？

「まったく……一般人に迷惑だろ？　一体誰がこの街を修理すると思ってんだ――」

と、三原が言い放った瞬間。

こめかみに激しい衝撃を感じた。鈍い音に鈍い痛み。三原は白衣の中に自分の背丈の半分ほどの鉄パイプを隠し持っていた。オレは吹き飛ばされ、ガードレールに背中を強打する。

朦朧とする意識の中、三原が鉄パイプを捨てるシーンを目撃。

そんな事はどうでもいいが……何故だ。何故あのクソ野郎にこんな力が……？

まさか……あのクソ野郎ォ……ッ！

「オマエ……どういう、能力を……ッ」

「あ？　ハッハハハハ！　あー違うってぇ～これは超能力じゃねえよ。大体、なんでこの俺がそんなキモいもの覚えなきゃならねえんだ？　別にさぁ、あんなの使わなくたってテメェ一人と戦うのは余裕なんですよぉーハイ。いやぁ～最高に気分がいい、最強と謳われたテメェがゴミクズ同然だしな」

三原の挑発は気にするな……それより考えるんだ。超能力を使ってないとして、あの男はどうやってオレの暴風の膜を破ってきたか。あの笛が本当にオレの能力をかき消しやがったのか。

あのグローブ、機械か機械じゃねェかわからないが……オレの暴

風の膜を突き破った原因の一つかもしれねェ。まずはアレを破壊しよう。だが、それでも三原にはあの笛がある。引き千切るってのも手ではあるが、それだと三原自身は無事だ。

三原の事だ、それ以外にもオレを苦しめる策を講じているハズだろう。なら、笛を使われないようにヤツの身体から酸素を奪っちまえば――。

「おォアッ！」

足の裏に風の力を働かせ、オレは地面からロケットのように飛び上がった。そのまま右腕をがむしゃらに振りまわす。カチン、と指先がグローブへ触れた。風の力を一転に集中させ、オレは左右のグローブをバラバラに砕いてやった。普通なら不可能な一撃だが――オレには簡単な仕事だ。

よし、暴風の膜を突き破る手を封じてやった。後は三原をブチ殺すのみ。

オレは左手を伸ばし、口のあたりでも掴むようにぐわっと手を大きく開く。

「はは、テメェをボコっていたのはグローブじゃねえ……はい残念っ！」

三原は言いながらくるりと周り、オレの腕を華麗に避ける。三原がオレに見せた顔は文字通り笑顔であった。それも狂った笑みである。

狂気に満ちた笑みを浮かべる三原は、左拳をオレの腹へ叩きこむ。

何故か――暴風の膜が作用する事はなかった。

「いい加減ゴミ処理場にでも行けってんだよ、この産業廃棄物がァ！」

今度はアッパーカット。
丁度くの字に曲がった身体に、下から拳が叩きこまれたのだ。突き上げられたオレの身体が面白いように飛んでいき、やがて仰向けの状態でアスファルトに落下する。
吐き気がする。視界もぐにゃぐにゃ、口の中は血の味しかしねェ……。
三原は全くダメージを受けてねェってのに……クソッタレ。

「暴風の膜っつってもよ。要はただの風じゃねえか……」

な、なに言ってやがんだこのクソ野郎……拳どころか、爆弾が降ってこようが一切ダメージを受けない鉄壁のガードだぞ。ただの風で扱えるような、そんな代物じゃねェってのに……。

「テメェはただ風の薄い膜を張り、それをテメェとは反対に吹かせているだけ、さらに膜として存在する為には循環が必要だろ。なら話は簡単でよぉ、風が膜の裏に戻る僅かな隙を突けばいいんだ」

なンだァ……その無茶苦茶な理論は。
確かにオレは膜を存在させる為、風を循環させている。だからってなァ……こんな科学者にその一点を突く事が出来るのかよ。

「こっちはテメェの考える事全て把握済みだぁ。テメェがいくら策を講じようがそれは予想の範囲内ってワケなんだよ。さっきの不意打ちだってそうだァ……テメェは無駄に頭を使うタイプだ。単純に俺を攻撃してりゃ、今頃オレは肉塊になっていたかもしれねえのに……ハァ、勿体ねえなクソガキよぉ？」

クソッタレ……だが、今の三原は油断している。もうオレは動け

ねェとでも思っているのかもしれねェぜ……だったら手は一つ。暴風の不意打ちをかましてやれば――、

「がアァッ！」

オレは暴風を起こそうとした。ぎゃは、さよなら三ィ原ァ……オマエの人生も今日で終わりにしてやるっつーの――と思った。

しかし、三原は咄嗟に笛を銜えてソレを吹く。

やはり笛の音で強制的に能力が無効化された。チッ、オレの読み通りかよ……。

「あぁこの笛か？　コイツは特殊な音波で思考を妨害する笛だ。能力を使う為には複雑な計算が必要なのは、どんなカス能力者でも同じ事だ。つまり……ソイツが乱れちまえば何らかのバグが発生する。そういう事なんだよ……俺はテメェの思考を妨害したってわけだ」

と、言い終えた瞬間――三原の右足がオレの顔面に突き刺さってきた。まるで、噴火した火山から放たれた火山弾のように降ってくる三原の足。踏みつけられる度に、普通の神経をしているヤツなら聞きたくもないような鈍く、グロテスクな音が響いた。

揺らぐ視界に血飛沫が映る……多分、オレの血だろう。クソ……ひょっとして神経が麻痺でもしてきたのか、痛みすら感じなくなってきやがった……。

何秒経ったか、あるいは何分経ったかすらもわからない。三原はようやく蹴りをやめた。

よく見ると、三原の顔にも血が確認できた。三原の血じゃねェ……絶対オレの血だ。

「いやぁーテメェも体型の割にはタフなモンだ。中々死なねえな……ったく、モヤシはモヤシらしく早く死んでくれねえと、こっちの

ストレスがたまるっつーの」

「く、そ……たれッ」

「まっ、死ぬ前にいい事を教えてやる。ほら、寝返ってあっちを見てみろ」

三原が顔を向けたほうへ寝返り、顔だけを向けて見ると……その先に――数台の盗難車と数人の軍服姿の男達。そして――血塗れのミネットが男達に捕まっていた。

力が入っていない。意識がねェみたいだ……しかもどういう事なんだよ。身体のあらゆる所から血が滲み出ているじゃねェか。何で……あのガキが半殺し状態に……ッ？

「残念だけど、テメェが守りたかったモノはあのザマだ。つか、アレって生きてるんだろうか？　まあいい……アレが死んだところで特異点はまだ沢山いるんだ。次はアレだなァ……アイツが死んでいたら木下暮葉ってヤツを狙ってみるか」

じゃあ何だ、あのガキの存在は別にどうでもいいって事か。特異点さえ捕まれば誰でも構わねェって事なのか。あのガキが死んだ所でどうとも思わねェのか。

ハッ……なんだかなァ、あの学園はやっぱり狂っている。オレもそうだ、あの学園にいる間はなる気もなかったのに、いつの間にか血も涙もねェ人間になっていた。どう考えても、あの学園は存在自体が間違っているモンだ。

クソッタレ……そんな学園に殺されていた連中が、今度は学園の実験動物（モルモット）にされるってのか……ふざけんじゃねェぞ。

おそらく……ミネットはまだ生きている。僅かだが動いている気がする、つまりミネットはまだ呼吸をしているという事だ。だが、

あの車に乗せられたら――本当に命が危ねェ。絶対にさせてたまるかってんだよ……あのクソガキやその仲間を、関係ねェ事に巻き込むンじゃねェよ――！

「……ミネットオォォオオオオォォオオオオオオオオオオオォオオオオッ！」

僅かに残された力を振り絞り、オレは拳をアスファルトに叩きつけた。すると、凄まじい勢いで暴風がミネットのほうへ伸び、その風はミネットを空高く突き上げた。

……ここで限界が訪れた。

「ご、ばぁ――ッ！」

身体の中から込み上げてきた赤黒い血の塊を、ついに体内から吐きだした。実を言えばさっきから吐くのを我慢していたのだ。力を失ったオレはぐったり倒れ込んでしまった。クソ、呼吸するだけでも苦しいじゃねェかよ……動く事も能力を使う事も出来ねェ。

魔力はまだ枯渇してねェってのに……意識が朦朧としていて、その上痛みも激しくて能力を使う為の計算がクソも出来ねェ……ッ！

「あーあーあー、面倒臭ェ事してくれるなぁテメェ。ったく、一体誰がアレを回収すると思ってんだよ。つか、やっぱテメェは相変わらずだ。何を考えてんのか知らねえが……今の不意打ちを俺に向けりゃあ俺は死んでいたかもしれねえのによ。全くテメェの思考は相変わらず単純だ」

うるせェ……オマエなんかよりよっぽど重要なんだよ、あのクソガキは……。

三原はオレに背を向け、後ろの軍服野郎と何か会話をしていやが

る。

「どうします？」

「あぁ～そうだな、テメェらの班はあのガキを捕えろ。残りは全員俺の下に残れ。ちっとこのガキが暴れまくったせいで難しくなったがぁ、一応証拠隠滅はしておかねえとな。全く面倒な作業だ」

「了解しました。では、自分らは本命を捕まえてきます」

「オーケーオーケー、ハハ……相変わらず有能な部下だ。それに比べてこのガキは……」

言いながら、三原はオレの事を見下すように睨みつけてきた。

チッ……そのセリフはオレのセリフだ。部下は有能かもしれねェが、結局オマエはただ命名して不貞腐れているだけの、腐れ親父じゃねェか。だが……オレはこの腐れ親父に負けた。

思い出しただけでも腹が立つ……だが、今のオレにはどうしようもねェ……。

「無駄に仕事ばっか増やしやがって。テメェは会社じゃすぐ解雇モンだろうな」

「黙れェ……クソッタレ、オマエもいつかは――オレのように……っ」

地獄に落ち……ぐっ、そ……息苦しい、喋る事すら難しい。

「最後まで言えなかった感じだが……まっ、テメェの存在価値からして、今程度の長さが言葉として丁度いい感じだな。さて、じゃあ

殺すけど――文句ナシな？」

三原が俺を殺そうと近づいてくる。足で頭を踏み潰すつもりか、三原は丸腰だ。

しかし丸腰の三原が今は凶器だ。この状態じゃ一切抵抗はできねェ……今のオレは食われるだけのただの豚野郎だ。クソ……リーネはどうした、銃でも持って来ねェのか？

いや、リーネは確かミネットと一緒にいたハズ。生死すらわからねェ。じゃあオレをボコボコにして特異点を救ったあの男は？

もう一度特異点を救わねェのか、ついでにオレを助けたりしねェ……いや、あの野郎は基本的に丸腰だし、武装して三原達の前には無力だ。それにミネットの存在を知らねェだろうし、そこにオレが関わっていると知れば――助けるのをやめるだろう。

オレはヤツにとっての敵であり、オレもヤツを目標としていた。ヤツさえ倒せば再び最強として君臨出来たハズだからだ。実際はただの科学者相手にこのザマだがなァ……。

まっ、それはどうでもいいとして……いくらあの野郎が善人でも、敵を助けるような馬鹿な真似はしねェだろう。所詮現実は現実……空想のように救いがあるわけがねェンだ。

それでも願ってやる……オレはどうなってもいい。死んでも構わねェ、一生馬鹿にして拷問されても文句は言わねェ……誰か、誰でもいい……ミネットを守ってくれ――。

「――ようやく見つけたのです不審者っ！」

その声で、三原は動きを止めた。三原は首を動かし後ろを向いた。オレも揺らぐ視界で三原の後ろを見る。人だ、人がいやがる。小柄で小動物のような体躯の日本刀を提げた少女だ。何処かで見た事がある……思い出せ、確かアイツの名前は――。

第158話，マッドサイエンティスト（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「……名前までそれっぽいな」

大吾「また出たよ作者の一種の病気が」

重原「ところで早川も背中からアレが……」

圭介「出るのか？」

大吾「出ないだろ」

重原「いや、出るかもね」

圭介「結局どっちだよ！　つーか黒翼って逆に俺が欲しい能力だよ！」

大吾「無理じゃね？」

重原「無理だね。圭介の戦闘スタイルは肉弾戦って決定事項だしさ」

圭介「……ひでえ」

第１５９話，非常事態

「ったく～暮葉のヤツ、一体どこに行きやがったんだ？」

俺こと藤島圭介はあの後、さっさと家に帰ったはいいのだが……葵が帰ってきた後も暮葉は帰ってこなかった。ひょっとするとアルファ隊の仕事があるのかもしれないが、それでも暮葉がいないと寂しくて仕方がねえし、何より――晩御飯が葵の暗黒物質（ダークマター）になっちまうじゃねえか。

味はいいとして、あんな見た目の悪いもの絶対に食いたくない。やっぱ、暮葉がつくる見た目も味も抜群の料理が食べたい。暮葉と何かお喋りでもしたい。

とにかく、そんな事を考えていた俺は必死に暮葉を探していた。だけどなぁ……闇雲に探して見つかるわけがねえよな。だって暮葉だぜ暮葉、もしアルファ隊の仕事だとしたら集合場所は異世界かもしれない。小坂の家にまだいるとしたら、俺は小坂の家がどこにあるかなんて知らねえぞ。携帯電話は繋がらねえし……ホントに何処にいるんだよ暮葉のヤツ。

とにかく早く連れて帰らねえと、晩御飯が暗黒物質（ダークマター）に――！

「……あれ？」

なんか知らねえけど、随分と風が強くなってきたな……。

さっきは雨が降っていたっぽいし、暮葉のヤツ傘持ってるかな。なんだかこの分だと嵐がきそうな感じだな。でもおかしいぞ、天気予報では一雨降ったら晴れるって……。

まぁ、所詮は天気予報だ。あんなの外れる確率のほうが高いだろう。だけど勢い余って制服のまま出てきちまったし、風が強くてちょっと肌寒い感じもするな。まあでも……鬱さで茹だるよりは動き

やすくてマシかもしれないな。
……しっかし、今日は随分と人が少ないな。いや、全くいないじゃねえか。
不気味だなぁ。強風に人の気配ナシって……しかも季節はまだ夏、ホラー映画かよ。

「あーちょっと君、君、そこの君！」

その時、俺は何者かに呼び止められた。
振り返ると、そこには2人の警察官が厳しい視線を向けていた。
ちょって待て、俺は警察様に睨まれる悪い事をいつしたんだよ。まさか……コミケの時、俺は警察から逃げたけど俺は警察に顔を覚えられていて、ようやく喧嘩をしていた犯人を見つけたって感じか？
やばい……停学だ。このまま警察に捕まったら停学……いや、退学かもしれないぞ。
とりあえず面倒事は起こすな。あくまで紳士的に接するんだ……。

「は、はい」

「君ダメじゃないか。今は国民保護法に基づき警報発令中だ。場所を教えて護衛もつけるから早く避難場所へ行きなさい」

「警報？　何かあったんですか？」

「あぁ君、テレビでもラジオでもいいから情報は収集しておきなさい。とにかく今、国籍不明の輩がこの街で暴れまくってるんだ。混乱に乗じて別な輩も来ているみたいだし、とにかく非常事態なんだ」

暮葉がいなくて、警察が出動するほどの非常事態……確信したぜ。
どうやら古宇坂市に魔法使いが侵入して暴れているらしい。その魔

法使いがとんでもないバケモノで、だから警報を発令させて住民を逃がしたってわけか。だけど魔法使い関係ってんなら――逃げるわけにはいかねえな。

「あぁ！　ちょっと君！」

「すみません、近くの家に妹がいるんです。妹を連れてから避難場所へ行きますんで！」

なーんて言うのは嘘、とりあえず葵にはメールで気を付けろと送っておこう。それじゃあ俺は魔法使いを探すとするか。暮葉だけに無理はさせねえ――俺も少しは役に立ちたい。守られるだけのお荷物じゃ嫌なんだよ。俺はほんの少しでも――暮葉の支えになりたいんだ。

だけど魔法使いってどこにいるんだよ。俺には魔力を感知できねえしなぁ、とにかく何かで情報を集めて、被害に遭った地域に行って魔法使いを探そう。

――と、思ったその時。

「お、わぁっ？」

小さな何かと衝突した。それは冷たく濡れた少女であった。水玉模様のワンピースを着用したツインテールの……え～っと、この感じは外国人か。しかもやたらと傷だらけだ。

とにかく、今は危険な状況らしいし……この子を避難所に届けたほうがいいのか？

「え～っと……君は？」

「助けて……」

少女は俺にしがみつき、弱々しい声で助けを求めてきた。
少女はまだ何かを言いたげである。俺はそれを聞こうと少女の顔を見て黙っていた。
そして、少女も俺を見上げて、

「圭介様、無理を言っているのはわかっているけど……お願い、あの人を助けてっ！」

「け、圭介様って……お前、ひょっとして……？」

その呼び方にピンと来た。普段、うちの居候にそう呼ばれているからだ。

「はい、ミネットはアルファ隊の一員だよ……っ」

「アルファ隊……暮葉の仲間かっ」

それは意外な出会いであった。
偶然出会った少女はアルファ隊の一員――暮葉の仲間であった。
だけどアルファ隊の魔法使いが、こんなにボロボロになっているとは……やっぱり相手はバケモノ魔法使いのようだな。ちくしょう、やっぱり暮葉だけを戦わせるわけにはいかねえな。

――丁度その頃、古宇坂市役所４階の市長室。

古宇坂市長――正宗勘介（まさむねかんすけ）が椅子から転げ落ちる。続くように女が激しく机を踏みつけ、女にビビる市長を見下していた。

女は西洋風の鎧を着た金髪碧目の少女で、黄金に輝く柄を持つ大剣を持っていた。

「なな、何者だ……貴女はっ」

正宗市長はビビりながらも彼女に問う。すると、彼女は大剣を指で触り、ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべて、

「アンタが古宇坂市の市長ってワケェ？　きゃはは！　ホントにこの国の人間って何の力もないのねぇ。アンタからは一切魔力も感じられないし、オマケに太ってて弱そうだわぁ」

「そんな事は関係ない。そんな事より君はどこの誰なんだ……っ」

「赤の軍神……って言っても理解できないわよねぇ？　カッコ良く言うならば私は侵略者ってトコかなァ？」

「侵略者……だと？」

「そぉそぉ、悪いケドォこの街しばらく私に貸してくれないカナ？」

「君が……突然このあたりを攻撃し始めた」

「そぉーそぉー私が指揮官。別働部隊もあるわよォ？」

言いながら、女は正宗市長の顎に指先を当て、顔を近づけた。レベルの高い容姿を持つ女に迫られる正宗市長。普通ならそれだけで興奮できる……のだが、この場合は全く出来なかった。

なんせ目の前の女は自分の街を破壊し、その上自分の命すら危うい状況だからだ。

正宗市長は腰を抜かしながらも、歯を食いしばり、鋭い目つきで女を睨んでいた。

「抵抗してもムダよォ？　アンタ、ひょっとして私に勝てると思ってんのォ？」

「……思わない。私自身は運動不足だし、君に勝てるとは思っていない……だが」

その時、外から不自然な物音が響いてきた。それに気付いた女は、正宗市長から離れて市長室の窓から駐車場を見下ろした。約２００台の車を駐車できる駐車場には、かなりの数の迷彩柄の服を着た屈強な男達の他に、見飽きた警察の人々やその車両。

さらに、屈強な男達が乗ってきたと思われる複数の装甲車が集結していた。

この場面では警察よりも目立っている男達――それは陸上自衛隊である。

恐らく戦況を聞いた正宗市長が、県知事にでも頼んで自衛隊を出動させたのだろう。

治安出動してきた自衛隊は敵の情報を知っているようで、相手がどこかの軍隊でも多少は戦えそうな程の装備を持ってきていた。

警察のほうも普通の警察ではなく、特殊急襲部隊（SAT）と呼ばれる、ハイジャックや重要施設占拠など、重大テロ事件への対処を主な任務とする特殊部隊であった。

それでも、彼らは歩兵戦闘を想定した装備しか持っていないようだ。

そんな彼らを見下ろす女は――、

「流石に、散々治安維持の為に出てきた警察をブッ殺せば……いずれはこうなるわけね」

「ふ、フフフ……案ずるな。君が攻撃しなければ彼らも攻撃はしない……降参しろ」

正宗市長は笑っていた。あれだけの大戦力が集まれば、いくらこのバケモノみたいに強い女でも降参するだろうと思ったからだ。しかし、現実とはそこまで甘いものではない。

「へぇ～？　中々面白い事してくれるわねェアンタ……ッ！」

「ぐ、ぉあ……ッ！」

女は正宗市長の腹を踏みつけた。汚物を吐きだした正宗市長はそのまま気絶する。

正宗市長が気絶したのを確認した女は、何を思ったのか窓から飛び降りる。建物の４階から落下すれば普通は無事なわけがない……が、どういうわけか女はふわり、とアッサリ着地した。

彼女を持ち上げ、減速させるような風が下から吹いたように……。

「貴様、市長はどうした！？」

ＳＡＴの隊員の一人が、メガホンで女にそう呼びかけた。

その言葉を聞き、狂ったような笑みを浮かべた女は、

「はん、市長なら中でおねんね。死んじゃいないだろうから安心しなさい」

「……ッ！」

自衛隊、ＳＡＴの男達が一斉に銃口を女に向ける。

火花が散るような睨み合い。気迫は両方とも負けていない。
ただ、女は自衛隊やＳＡＴを威嚇するように、

「さぁて……アンタ達随分本格的に武装してるけど……この風剣のシルフを楽しませてくれんのかしらァ！？」

言い放った瞬間――戦いの火蓋は切って落とされた。

第１５９話，非常事態（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「やったあああああああああ！」

伊吹「な、なに喜んでんのよ？」

圭介「俺、久々に出番が来たよ……っ！」

伊吹「……」

圭介「主人公なのに久々に登場したぜ。ったく、この作品は誰かが活躍すると必ず誰かが空気になるよな。主人公なのに空気になるとは思わなかったぜ」

千早「わたし……今回ずっと空気です……っ」

葵「葵も全然活躍してないよっ！」

第１６０話，三原中隊（カンパニー）

「――ようやく見つけたのです不審者っ！」

オレはここで死ぬハズだった。三原に殺されるハズであった……しかし、三原の動きは突然現れた少女の声によって封じられた。その結果、オレの寿命は僅かに伸びたようである。だけどこんな展開望んじゃいなかったぜ。最悪だ……なんであんなチビが来やがったんだ。

確かあの女の名前は木下暮葉。実力自体は高ェようだが……結局オレの敵だ。

しかも三原の狙う特異点の一人でもある。要するに……あのチビのご登場はオレにとっては障害が増えただけに過ぎない。

クソッタレ……まだ魔力は枯渇してねェな。能力自体は使えそうだ。最も、全身に刻まれた傷のせいで激しく痛む身体が言う事を聞けばの話だが……。

「おいおい……ありゃあひょっとして木下暮葉じゃねえか？」

「標的の一人ですね。捕えますか？」

「そうだなァ……アレを捕えなくても何れさっきのガキが捕まるだろうが……まっ、研究材料が２人に増えるだけだ。ついでに捕まえておけ」

チッ、三原の野郎ォ……余計な事をしやがるつもりか。あのチビは強いし、放っておいても自分の身ィくらい自分で守りそうな気がする。だが……万が一だ。万が一、あのチビが三原達に負けて捕えられたとしよう。あのチビはオレの敵ではあるが、それでもミネッ

トの戦友だ。
　要するに……あのチビが無事じゃなければ――ミネットは何らかの行動を起こす。
　その行動とは何か、考えるまでもねェだろう。それともう一つ、ミネットは三原の別働部隊に追われているらしい。このままだと、確実にミネットは三原達に捕まるだろう。
　つまりアレか……気に食わねェチビも含め、オレは2人を助ける必要があるのか。
　チッ……あのチビまで助けるのは本当に気に食わねェ。だがいい機会だ。このままやられっ放しってンじゃ収まりがつかねェ。ここらで少しビビってもらおうか――三ィ原ァ！

「木下は相当手ごわい……という報告がございますが？」

「あー心配すんな。いくらアレが手ごわいっつっても、数と武器の前にゃあ無力だろ」

　とりあえず、三原達の殲滅は後回しだ……やっても勝てる見込みがない。もっと作戦を練ってから慎重に殺していくべきだろう。なら今やる事は一つ――とりあえず生き延びるか。
　その為には逃げるしかねェ。ついでに木下ってチビも連れてなァ……。
　今後の行動方針が決まった所で、オレは目を見開き、右足に力を入れ始めた。

「あ？」

　オレの僅かな動きに三原が反応した。いや、驚いていやがる。おそらくこの野郎はオレがまだ生きている事に驚いているんだろう。そりゃそうかもなァ……今のオレは、放っておいても死にそうなほ

どボロボロだったからな。だが残念だったな三ィ原……流石にそこまで華奢じゃねェンだよ。

「おおおぉァああッ！」

大地が揺れる程のボリュームで絶叫し、爪先を地面に押し付け、勢いよく飛び出す拍子にオレは風の操作を行った。荒い強風が吹き荒れ、三原の髪や白衣が不自然に靡いた。一方、能力を使って飛び出したオレは瞬間的に一台の盗難車へ飛び乗る。

車両中間部のドアは元々開いていた。なので乗車は比較的簡単であった。問題は運転席に座っていた運転手をどう手中に収めるかだ。

――ハッ、いい事考えたぜ。

オレは右手で手刀を構え、その手刀をずぶり、と、男の身体に押し込んでやった。

「――――ッ！」

生々しい感触を手に感じる。ハッ、相当奥まで刺さりやがったな……。

シート越しに背中を刺したのだが、流石と言うか……能力で加速させ、また能力で手を守りながら放った一撃は、シートなんてものをいとも簡単に貫通し、男の背中に突き刺さっていた。

気持ち悪ィのも嫌だし、オレはゆっくりと右手を抜いた。

すると……シート越しからドロドロと、背中から鉄臭い液体が流れてきやがった。

「いいか、オレの言う事をよく聞け。オマエはもうすぐ死ぬ」

「……ッ」

「助かりたければ車を運転しろ。そうすりゃ命は助けてやる」

「……ッッ！」

男は僅かな時間で決断した。

そうだ……いい判断だ。男はいきなりアクセルを踏み、華麗なハンドル捌きで不安定ながらもUターンをさせながら、無事に車を発車させるという荒技をやってのけた。ぎゃは、クソムカつくほどいい腕してンじゃねェかよ。コイツが運転手なら——なんとかなりそうだ。

しかも丁度いいコースを進んでやがる。丁度、車は木下の真横を通りそうであった。

だがその時——カンコンと、車両後部から物音が響いてきた。それはこの車に何発もの銃弾が撃ち込まれている証。それでも車は走り続けていた、丈夫な車で助かったァ……。

あとは木下の回収だ。オレは邪魔くさい右側のドアをぶっ飛ばし、限界まで右手を伸ばして木下の二の腕をガシリ、と力強く握った。

オレの腕力ではこんな小せェヤツですら、引き上げる事は出来ねェ。だったら、風を操作して木下を車内に放り込んでしまえばいい。

「もきゅううっ！？」

風の力で宙を舞う木下を、オレは無理やり車内へ釣り上げる。

木下はワケのわからねェ悲鳴を漏らした。

よし、木下救出成功。後は運転手に行き先を教えるだけだ。オレは木下に男の傷が見えねえように身体を位置を調節し、耳元に口を近づけて、

「いいか、古宇坂駅の近くにマンションがある。そこまでオレを運べ……後は近所の病院にでも転がりこめばオマエは助かる」

と、運転手に囁いた。
運転手はゴクリと唾を飲み、静かに頷いた。

――その頃、三原達三原中隊（カンパニー）は。

「あーあーあー面倒臭ェなホントに。おいアレだアレを持ってこい！」

「し、しかし運転手は――」

「関係ねえな。脱走兵にはキツいお灸を添える必要がある……それより早く持ってこい！」

「は、はい！」

たっく……優秀かと思えば手際の悪い部下だ。
俺こと三原寅彦はムカつく野郎を逃してしまった。特異点を2人も逃した上に、殺すべき対象まで逃げちまったじゃねえか。あームカつく、心底ムカつく事が起こりまくりやがったよ。
だけどまぁ……早川悠の悪運の良さもこれまでだ。

「チッ、遅えよテメェ！」

「ぐ、あ――ぁっ！」

あー手際が悪ぃムカつく。つーワケで俺はアレを持ってきた部下

を殴り飛ばし、強引にソレを奪い取った。部下に持って来させたアレとは――いわゆるパンツァーシュレックというヤツだ。

コイツはかつてドイツ国防軍が使用した、対戦車ロケット擲弾発射器で、裏ルートで現存するヤツを入手して量産したものだ。しばらく使ってなかったせいか、埃だらけだが……まあ所詮は使い捨ての一撃必殺兵器。こんな汚れを気にしていたって何も始まらねえ。

それよりさっさと撃たねえと、コイツの射程は２０１メートルしかねえんだ。

安全装置を解除し、後付けの照準器を除き組んだ。

俺達から逃げようとする車が照準器に映り込んだ。やれやれ……早川悠もやっぱり経験不足なガキんちょだな。車に乗った状態で全てを防げるワケがねぇ、風の操作も出来ねえ。

「じゃ、天国や地獄があるか……その目で見て確かめるんだな」

そう言い、俺は引き金を絞ろうとした……その時だった。

何故か、照準器に怪しげな黒い何かが映り込んだ。

なんだ……とりあえず、一度照準器から目を離した。すると――僅か数十メートル先に長い黒髪を持つ少女が佇んでいたのだ。

俺はその女に見覚えがある。確かこの女の名前は――。

「西園寺……雪乃」

「あら、貴方は誰なのかしら？　私の家の近所で随分暴れているみたいだけれど？」

「……チッ」

ったく……邪魔しやがって。おかげで早川悠を取り逃がしちまったぞ。まあ、とりあえず早川悠の代わりにあのクソアマを殺してお

くか。西園寺も学園を裏切ったヤツだからな。
と言うわけで、俺は西園寺を狙って引き金を引き、パンツァーシュレックでロケット弾をぶっ放してやった。ロケット弾は西園寺に直撃、赤い炎と黒い煙が西園寺を前方を包んだ。あらゆるものを破壊し焼き尽くす一撃。元々戦車を攻撃する為に開発されたヤツを人間に撃ち込んだ。
そんなものを喰らった人間がどうなるか――言うまでもない。
だが……煙が消えると人影が見えた。
その人影は西園寺。しなやかな黒髪が風に靡いており、どこにも傷はついていない。
無傷だと……チッ、まさか西園寺のヤツ。

「ひょっとして学園の関係者かしら？　だとしたら貴方馬鹿ね……学園の関係者なら私がどんな能力を使うか知っているハズよ」

「知ってるさ、テメェの事なら嫌ってほどにな……どうせ、テメェの事だから氷で装甲でも作って身を守ったんだろう。パンツァーシュレックに耐えられる程の装甲を瞬間的に作る……チッ、相変わらずテメェの能力は嫌なモンだ。早川悠の能力より嫌いかもしれねえな」

「そういう事よ。貴方達がどういう目的で動いているかは知らないわ。だけど……さっきの車には私の敵も乗っていたけど、一緒に私の友達も乗っていたのよね。だから――それを攻撃する貴方達を見過ごすわけにはいかないわ」

敵ってのはおそらく早川悠。俺の記憶が正しけりゃ、西園寺雪乃は学園をやめる前に早川悠と戦ってボッコボコにされたハズだ。今でも西園寺雪乃は早川悠を敵だと思っているのだろう。
友達ってのは木下暮葉か。やれやれ……この街は面白いモンだ。

知らねえ間に知ってる奴らが独自の交友関係を築いているんだもんな。全くくだらねえ事をやってやがるぜ。じゃあ、俺はその関係をぶち壊す極悪人って所だな。

極悪人……まっ、少なくとも俺は善ではない。俺にピッタリのいい響きかもなぁ。

とりあえず、笛を使えばヤツの能力を封じられるだろうが……あくまで、俺の対抗策は早川悠専用のものなのだ。あまり他の超能力者に有効だとは思えねえ。

ここは一旦、身を引いておくのが正しい判断だ。

さっさと特異点を探す必要もある、早川悠を見つけてブッ殺す必要もある。

「……殺せ。テメェら１０人で西園寺雪乃を足止めしろ。その間に、俺は本隊と別荘へ移動する」

そう命ずると、カチャっと部下達は銃口を西園寺に向けた。

俺はパンツァーシュレックを投げ捨て、白いワンボックスカーに乗ろうとした……が。

完全に乗り込む前に、背後から西園寺に声をかけられた。

「貴方、逃げるのかしら？」

「どうしてもこの戦いたいのなら、鬼ごっこでテメェが鬼になって俺を見つけりゃいい」

それだけ言い残し、俺は車に乗り込んだ。

ドアを閉めると、運転手は一言も漏らさずに車を進めた。全く……この運転手は使えねえクソ共と違って優秀な部下だな。さて……

コイツは少しまずいかもしれないな。

１０人で西園寺を足止め出来るとは思えねえ。俺らは西園寺の敵

になった。いつから西園寺も俺ら別荘に襲撃してくる事だろう。今から対西園寺戦に備えて準備をするしかない。だがその前に学園から課された任務を遂行し、完璧に達成しねえとな。

それとついでに――早川悠の息の根を止めてやる。

第１６０話，三原中隊（カンパニー）（後書き）

・後書きトークコーナー！

野原「俺は三原が嫌いだ」

一方藤島「なンでだァ野ォ原くン？」

野原「三原は俺とキャラが被ってんだよ！　俺の出番奪ってんじゃねえぞ！」

一方藤島「それを言ったらオレだって早川が嫌いだァ！　キャラ被ってンじゃねェぞ三下がァ！」

野原「俺のほうが三原より登場早かったんだ。わかってんのか、あァ！？」

一方藤島「オレも早川より早かったンだよ、このクソ野郎がァ！」

葵「どっちにしても、ただのパク（ｒｙ」

暮葉「葵さん、それを言ったらおしまいなのですよ」

伊吹「もうこれただの自虐ネタよね？　何も面白くない自虐ネタだよね？」

第１６１話，最悪の生還方法

俺はミネット・ローランという少女と出会った。
彼女は暮葉と同じアルファ隊所属の異世界人で、水系統の魔法使いらしい。なんでも俺とは早川悠との戦いの時に会っているらしい。そういやあの時大量の水が降ってきたよな。もしかしてあの水はこの子の魔法によるものだったんだろうか。
ミネットは市内のマンションで３人暮らしだったらしいが、突然室内に怪しげな連中が押し掛けて襲われたらしい。気がつけば何処かの路上、そこにいたのは自分を襲った人達と、白衣を着た怖そうな雰囲気を放つ中年の男。そして――ミネットと同じ部屋に暮らす知り合いであった。
早速俺はミネットに案内され、その現場に向かったのだが……。

「あれ？　あの人も白衣の男もいない、もうみんな行っちゃったのかな……？」

「ちょ、ちょっと待て……」

焦げ臭い匂いに無数の残骸。横転した死亡事故を起こしたように潰れた黒い車。意識を失って倒れている男達。ガラスが割れた建物の数々。そして、道路には生々しい血が付着していた。
何があったんだよ……これ、全部魔法使いの仕業か？
俺は壮絶な光景に一瞬言葉を失ったが、それでも頑張ってミネットに聞こうとした。
なんせ、彼女が俺の知る唯一の目撃者らしいからな。

「ん、なになに？」

「これって……魔法使いがやったのか？」

「多分違うよ。ミネット達を襲ってきた人達に魔力はなかった。多分相手は魔法使いじゃないと思うんだよ」

「魔法使いじゃ……ない？　それじゃあ一体誰が？」

「多分あの人。精一杯抵抗したんだと思うんだよ」

「抵抗って……何者だよお前の知り合いは？　もしかして同じアルファ隊の隊員か？」

「違うよ。あの人は魔法使いじゃなくて超能力者なんだよ」

「ちょ、超能力者って……佐井学園の人間か何かか？」

「うん、元々はね……」

元々佐井学園の人間だったって事は……まさか、ミネットが言っている、ここで倒れていた知り合いってのは明智か西園寺なんじゃ……？

思い出せ、確か明智は立派な日本屋敷に住んでいたハズだ。マンションなんかとは縁のない超お嬢様だったハズ。だけど俺は――西園寺の家は知らない。

まさか……西園寺が魔法使いではない、謎の奴らに襲われて……ッ！

「ちくしょ――ッ！？」

衝動的に走りだしそうになった俺を、いきなりミネットが俺を引

っ張ってきた。
俺とミネットは横転した車に隠れるように、静かに座りこんでいた。
……待て、なんで隠れるんだよ？
「どうしたんだよ？」
「来たよ、ミネット達を襲った人達が」
「……よし、任せろ」
相手が魔法使いじゃねえんなら楽勝だ。魔法っていう、喰らえば下手すりゃ死ぬような一撃を放って来ないんだからな。ちょっくら俺が言ってぶん殴ってやる。
そんな軽い気持ちで俺は――顔だけを出して連中の姿を確認する。
「げぇっ、銃持ってるじゃねえか……っ」
数十メートル先で停車している数台のワンボックスカー。中からぞろぞろと、自衛隊でもどこの軍隊のものでもない戦闘服に身を包んだ、屈強な男達が降りてきやがった。その手には自動小銃（アサルトライフル）が握られている。多分、アレはソ連のＡＫ－４７ってヤツだろう。
安価かつ高威力で耐久性も高く操作や整備が簡単。よくゲリラやテロ組織が好んで使う為か人類史上最も人を殺した兵器……とも呼ばれている。
ちくしょう、素手か精々鉄パイプ程度だと思って甘く見ていた。
そういえば、寝ている奴らの近くにも銃が落ちているぞ。ああもう、もっと早くに気付いていればこんなに怖く感じる事もなかっただろうに。
どうしよう……撃たれた事はないけど、俺の身体……銃弾に耐え

られるだろうか？
　しかも連中が持っているのはカラシニコフ自動小銃。おそらく、俺に向かって飛んでくる銃弾は一発ではないだろう。耐えられるかもしれないけど、耐えられる自信がねえ……。

「ど、どうするの？　ミネットは逃げる事を推奨するんだよ」

「くっそ……武器持ってるなんて卑怯じゃねえかよっ」

　どうする。俺の近くに男が2人、気を失って倒れている。
　その近くにはＡＫ－４７二挺がアスファルトに落ちている。さらに、男の身には拳銃やら手榴弾が装備されていた。なるほど……こっちにも少しは武器があるわけだ。なら、ミネットを逃がすくらいの時間は稼げるかもしれない。
　俺は確かにただの学生だ。ド素人だし、戦争なんかとは一切関係のないヤツだ。
　だけど――生憎こういうのに関する知識はある。実際に使った事はないから、上手く扱えるかどうかは別として、銃や手榴弾の扱い方程度なら知っている。
　これさえあれば――抵抗出来るかもしれない。

「ミネット、危険だからそこの影に隠れていてくれ」

「えっ？　で、でも圭介様は……？」

「大丈夫、アイツらとは何とか戦えそうだ……っ」

　本当は怖い。
　小便を漏らしてしまいそうなほど怖い、足もガクガクと震えている。全身から嫌な汗だって噴き出ているよ。だけど……逃げるにし

たって、アイツらに背を向けるのは危険だ。だったらここにある武器を使って、アイツらと頑張って戦うしかねえだろ。
自信はねえけど……なんとかしてみせる――！

「ちょ、ちょっと！　ダメだよ圭介様、数と武器には勝てないんだよっ！？」

「いいから下がってろ、ここは俺に任せてくれ！」

その時、一斉に黒ずくめの男達がこちらを見てきた。銃を構え、徐々に嫌な足音を立ててこちらに歩み寄ってくる。まずいな……俺らの事がバレたかもしれねえ。
こうなった以上、余計に引き下がれねえな。とりあえず、俺は右手を伸ばしてカラシニコフ自動小銃をを手に取る。これが安全装置……らしいけど、もう解除されているな。
これが引き金。弾は……まあ多分残っているだろう。幸い、気絶している男は替えの弾も持っているようだ。イザとなれば気絶男から弾を貰えばいいだろう。
よし――戦うぞ。
俺は勢いよく飛び出した。男達は姿を現した俺に反応するが――先制攻撃を仕掛けたのは俺のほうであった。

「――――、」

タタタタタ……ッ！
男達が引き金を引く前に、俺が引き金を引いて発砲した。銃弾は、生々しい音を立てて男達の体内へ侵入する。ド素人の俺の腕前では外れる弾の方が多かったが、それでも数人の黒ずくめ達が血飛沫撒き散らして地面に倒れ込んでいった。
う、ぐ……なんか、すげえ罪悪感を感じる。俺……今人を殺して

る……んだよな？
俺はもう悪人だ、この手は汚れちまった……だけど、殺らなきゃ俺らが死ぬ――！
ミネットも助からない。ミネットが助けたい人物を助けられない。こんな事は間違っているのはわかっている……俺が犯罪者に成り下がった事も自覚済みだ。
だけどもう――攻撃する前から覚悟はできていただろ。
覚悟の上で戦っているんだ――！

「……ぐっ！　弾切れッ！？」

予想外に速かった……クソっ、こうなったら二挺目のＡＫ－４７を――。
……と思ったまさにその時。

「……ッ！」

俺は咄嗟に身を引っ込めた。
何故なら、弾切れの間に態勢を立て直した黒ずくめ達が、俺を殺すべく、その手に持つ銃を放ち無数の銃弾を撒き散らしてきたからだ。車は横転している……多分だけど、７．６２ｍｍ弾に横転した車を貫くほどの威力は無い。かなり頑丈な盾がこっちにはある。
この盾を上手く利用して戦えば……ッ！

「くそったれえええええええええええぇぇっ！」

俺は銃と顔だけを出し、男達に向かって再び発砲を始めた。
今はもう……ただ自棄になって弾を撃つだけであった……。

……それから数十分後、戦闘は終わった。
銃を撃ち合い、時々手榴弾を投げつけ、最後は拳銃を使ってまで応戦し……辛うじて俺とミネットは生き延びる事に成功した。
それにしても……。

「一体、何の奇跡が起こったんだろうな……」

「わからないよ。でも……応急処置は完了だよ。後は病院へ送ればみんな助かると思う」

本当……奇跡だ。あれだけの事があって、なんと俺が撃ったヤツらは全員生きていた。
辛うじて生きていたんだ……中には今にも死にそうなヤツもいかが、そういったヤツらはミネットの回復魔法のおかげで一命を取り留めた。一応、救急車は呼んだ。病院で治療を受ければコイツらの命は助かるらしい。よかった……俺、まだ人殺しじゃ……ねえみたいだ。

「……っ」

「だ、大丈夫……圭介様？」

「……悪い、もう大丈夫だ」

そうは言うけど……ちくしょう、下手すりゃ今のでコイツらは死んでいた。いくら人殺しにならなかったとは言え、俺がやったのは立派な殺人未遂じゃねえか。
もう俺はダメかもしれない。誰も幸せに出来ない……人殺し予備軍のクズ野郎だ。

「……あ、あまり思いつめなくてもいいと思うんだよ？　し、仕方ないよ……相手だってミネット達を殺す気だったんだよ？　抵抗しなかったら……ミネット達が殺されて――」

「お前はアルファ隊の一員で、こういうのに慣れてるからそんな事が言えるんだろ！」

「圭介様……っ」

「……ごめん。そうだよな……やらなきゃ俺達がやられてた……」

ホント……どうかしているぜ、俺。

結局俺はどうしたかったんだ。人殺しはしたくない、銃も向けたくない。だけどミネットを助けたかったのは事実。助ける為には生きる必要がある。生きる為には戦わなきゃいけない。コイツらと対等に戦う為には武器が必要だ。だけど武器を使えば人は死ぬ、ひどく傷つく。

ちっくしょう……やっぱり俺は、ヒーローとは程遠い人間だよ。

「――あの人は」

「……ん？」

「あの人は、無事なのかな……？」

あの人――多分それは西園寺の事だろう。

確証はない、そもそも西園寺が超能力者なのかすら怪しい。ただ、俺の知る限りで佐井学園に通っていた過去を持つ人物は2人、明智と西園寺だ。

明智はそもそもお嬢様で、ミネット達とマンションで暮らしてい

た事はないハズだ。
だけど西園寺は……？　アイツの家の事はサッパリわからない。
だとすると、ミネットの言うあの人とは、西園寺の事なのかもしれない。西園寺は本当に超能力者なのかもしれない。
それに、その人がたとえ西園寺じゃなくても、俺はソイツを助けたい。
助けてミネットの笑顔を取り戻してやりたい。早くこんな騒動を終わらせて、暮葉の所に行って暮葉の事も助けてやりたい。
その思いを胸に、俺は真剣な表情を作って、

「絶対にソイツを助けてみせる」

「……え？」

「お前だってソイツに死なれたくないだろ？　だったら助けるしかねえだろ」

「う、うんっ」

「よし、行くぞ。ソイツを助ける為に今できる事をしよう」

地面に倒れるコイツらは……まあ、救急隊員に任せるとしよう。
それよりも、俺達には今――やるべき事があるんだ。

第１６１話，最悪の生還方法　（後書き）

・後書きトークコーナー！

生駒「クソ介がとうとう銃を撃った」

凪紗「藤島の戦闘スタイルは素手なのに、ガッカリだぞっ」

生駒「まったく、これだからクソ介はっ！」

凪紗「まあ、あの状況だったら作者も撃ってるかもしれないぞっ」

生駒「とにかくクソ介は殺人未遂の凶悪犯だ！　早く逮捕されろよな！」

圭介「もうなんとでもいってくれ……っ」

大吾「小説内での話で散々言われる圭介カワイソス」

重原「みんな、無法地帯で殺されそうにでもならない限り銃は撃っちゃダメだよ！」

黒木「そもそもンなもん持ってねえよっ！　それより出番くれ出番！」

第162話，もう一人の思い

しっかし、今日はやたらと風が強ェな……オレの能力のせいとは思えねェ。オレが散々ボコボコにされた程度で、能力が暴走するとは思えねェ。この風は自然のものなのか……それとも三原のクソ野郎による演出なのか。ちったァ気になるなァ……この街で一体、何が起こってやがるンだ？

……ふとオレは隣を見る。荒れた椅子には木下が不機嫌そうに座っていた。そんな木下とオレは偶然にも――目と目が合ってしまった。

木下の表情はさらに曇った。さらに、露骨に嫌そうな態度で木下は、

「それで、なんで貴方がここにいるのですか？　早川悠」

っと言ってきたのだ……ったく、それを言いてェのはこっちだっつーの。

だからオレはお返しをするように、木下にこう言ってやった。

「オマエこそなんであの場に来やがった」

「拙者はアルファ隊の仕事なのです。あの人達が拙者の仲間を狙っているとわかったので」

「……チッ」

しっかし……この車はどう見ても盗難車だ。警察が追ってきたっておかしくはねェのに今日は一体どうしたってンだ。警察車両を一切見かけねェな……三原の仕業、とは思えねェ。流石の三原や学園

も国家そのものを操作する事は出来ねェだろうからな。
もっと別の原因があるのかもしれねェが……チッ、考えても分からねェな。ちなみに今のオレは変換機を通常モードに戻している。理由は簡単、節約の為だ。
フルで戦うとしたら、残り4分も残ってねェだろう……チッ、三原との戦闘で随分と無駄に魔力を消費しちまった。どこかで魔力を補充してもらわねェといけねね。だが、肝心のミネットがここにいないんじゃ魔力の補充が不可能だ。
クソッタレ……これから先、どう三原達と戦っていくか考える必要がある。

「早川悠、一応情報収集の為に聞いておくのです」

「何だァ木下ァ……」

「貴方とあの不審者集団はどういう関係なのですか？　共謀者……なのですか？」

「オマエの目はどォなってる。アレのどこがオレの味方に見えるンだ？」

「もきゅ？　で、でもあの人たちは学園の関係者なのですよね？」

「科学者だァ……オレらが使う超能力の研究をしているな」

「……どうして拙者達を潰していた貴方が、同じ学園の人達に狙われているのですか？」

「ふン……説明した所で、オマエが信じるとは思えねェ……オマエ、今すぐ帰れ」

「そ、それはダメなのです！　決戦前にあの人達を潰さないと拙者達の身も危険なのです！」

「三原のクソ野郎はオレが潰す。オマエは決戦ってヤツでもしてきやがれェ」

「もきゅう、で、ですけど……っ」

「これはオレと三原の潰し合いだ。特異点は関係ねェ……だから三原はオレ一人で潰す」

これはもう決定事項なんだ。オレは三原を一人で潰す、特異点は巻き込まねェ。闇の世界でくたばるのはオレと三原だけで十分だァ。そこにミネットだろうが木下のチビだろうが。関係ねェヤツを潰し合いには参加させねェ、巻き込ませもしねェ。

「おかしいのです……こんなの、拙者の知ってる貴方じゃないのです」

「勘違いすんじゃねェ……オレの敵が三原なだけだ、深い意味は微塵もねェ」

「分かっているのです。拙者も貴方が嫌いなのです」

これでコイツがオレについてくる事はなくなった。思う存分一人で三原達相手に暴れられる状況を作れた。後はオレ次第だ、クソ……制限時間４分じゃ三原達をぶち殺せねェ。

早急に対策を講じる必要があるな。

……と、気がつけばもうマンションの前か。

「このあたりで止めろォ」

オレの命令で重傷を負った運転手は、静かに車を止めた……ぎゃは、丁度マンションの入り口の前じぉねェか。いい位置に止めてくれたなコイツは。

サービスだァ、コイツは特別に病院に行かせてやる。精々生き地獄を味わうがいい。

オレはまず車内で杖代わりを探し始める。杖は三原との戦いで失った、さっきの戦場跡に行けばまだあるかもしれねェが、今更取りに行く気はしねェ、それにまだ三原がいたら、そこでオレも運転手も木下も全滅だァ。だったら何か代用品を探すしかなさそうだ。

車内で代用できそうなのは……この散弾銃か。知らねェ型だ……アメリカ製でもイタリア製でもロシア製でもなさそうだ。コイツは学園で開発されたｗｉｋｉにも乗ってねェようなヤツだな。

全長は1メートルを超えるくらい、鉄製銃床は伸縮可能……ハッ、丁度いい代物だ。

オレは散弾銃を持ち、木下と一緒に車から降り、その後オレだけ車内へ顔を覗かせ、

「オマエはこのまま病院へ行けェ……15分以内に行けばオマエは助かる」

「うぅ……か、解放して……くれんのか？」

「あァ？　ひょっとして殺して欲しかったかァ？」

「ひ、ぃ――！？」

男を軽く脅すと、荒々しく盗難車は夜の古宇坂へと消えて行った。

チッ……まぁ、精々病院で痛がれェ。それであの男は多分助かる。別に殺しておいてもよかったがァ木下もいるしな。今日のオレは特別紳士モードだァ。

さて……それじゃあリーネの無事でも確認しに行くか。

つかアイツ……三原達に襲撃されて生きてンだろォな……。

「……オマエも行け」

「早川悠、最後に問うのです……貴方は何をするつもりなのですか？」

「三原を潰すのはオレだ。オマエは気にせず決戦とやらをしてこいっつってンだ」

「……わかったのです。拙者は行かせてもらいます！」

「……チッ」

やっと鬱陶しいのが消えやがった……これで思う存分暴れられるってモンだ。それじゃあさっさと家に戻るとするか。まずはリーネの生死を確認しねェといけねェな。

生きていた場合は状況報告。死んでいたら……まァその時はその時だ。

オレはそんな事を考えながら、ロックを解除してミネットの部屋へと向かった……。

そして、オレはマンションの８階――ミネットの部屋に入った。

室内は散々に荒らされていた。ドアには弾痕、さらに無理やり開けられた跡。台から落ちたテレビにも弾痕があり、テーブルは脚が

一本折れて傾いていた。カーテンは破られ、窓ガラスは全てが割られて床には破片が散乱していた。それだけじゃねェ、色々小物も散乱していて危険な状態だ。

そして荒された部屋の中に――リーネが倒れ込んでいた。

リーネに触れると……温かい。怪我をして出血はしているが、呼吸も安定しており命に別条はなさそうであった。どうするか……とりあえず、リーネのヤツを起こしてみるか。

「生きてンだろォリーネ。さっさと起きろォ……同居人が帰ったぞ」

「……っっ、あれ……悠ちゃん……なの？　ひどい怪我……なの、どうしたの……？」

「オレの怪我を気にする暇があったら、さっさと何があったか説明しろっつーの」

「襲われれた……なの、変な……銃を持った黒い人達に……っ」

「チッ、予想通りの展開だ……三原のクソ野郎ォ」

しかもリーネは元々何の関係もねェヤツだ……あのクソ共、このロリ巨乳までふざけた事に巻き込みやがって。こりゃあ本格的に――ブチ殺し確定だなァ。

魔力の補充は……諦めるか。仕方ねェ、４分は三原の為に温存しておこう。

残りの雑魚共は極力バレず能力を使わず、一人一人確実に殺していくか。

そう決めたオレは散弾銃を杖代わりに立ちあがり、リーネに背を向けた、

「悠ちゃん……どこ、いくの……？」

刹那、ボロボロのリーネに呼び止められてしまった。

チッ……こっちには時間がねェンだ。さっさと三原を殺さねェと、色々と取り返しのつかねェ事になっちまう。だから今はこんなガキに構っている暇なんて――、

「ミネットちゃんが……連れ去られたの、悠ちゃん……ミネットちゃんを……っ」

「……生憎制限時間は残り4分。オレもクソガキも生きて帰れる保障はねェ」

「……だ、ったら……ボクとキス、して……」

「――あン？」

その言葉に思わず反応し、オレはリーネのほうへ振り返ってしまった。リーネは何故か嬉しそうに瞳を閉じて口元を歪ませ、その顔は僅かに紅潮していた。

このクソガキ2号……自分で何言ってんのか分かってンのかァ。

「ボクにも魔力、あるから……全部は無理でも、5分程度なら補充……できそうなの……」

5分プラスしたって9分程度……4分と変わらねェ気もするが……まァ、最初から4分で三原達に挑むよりはマシか。少しは楽に戦えるかもしれねェ。

だけどこのクソガキはいいのか。魔力を補充するってのはつまり――。

「オマエの覚悟は出来てンのかァ？」

「覚悟なんていいの……お願い……ミネットちゃんを、助けて……なのっ」

「……チッ、クソガキ2号が」

後悔したって知らねェからな……オレは腰を降ろし、瞳を瞑って。

「――！」

頭を降ろして唇を近づけると――オレの唇とリーネの唇が触れ合った。

リーネの唇はミネットと比較すると……って、比較すンのってどうかと思うが、ミネットのそれより柔らかくて。吸い込まれるようで……やっぱミネットよりは大人だな。

これで男がいねェらしい。全く信じられねェ話だが……どうせリーネの事だ。木下木葉と共にずっと研究所に籠っていたんだろう。それなら男がいなくても納得のいく話だ。つーかオレも人の事言えねェ立場だし、そもそもそう言う事にあまり興味もねェ。

オレが興味を持てば――下手すりゃ誰かを傷つける結果になる。

「……確かに、制限時間が9分に増えた」

ぷ、は――と、オレは唇をリーネの唇から話した。リーネの言う通りだ、制限時間が4分から9分に延長された。これで多少能力が使えるようになった。

それでもたったの9分。節約しねェとすぐに魔力は枯渇しちまうだろう。

「悠、ちゃん……必ず帰ってきてね……っ」

「善処しとく」

「……それ、ダメ政治家の……セリフなの」

「チッ、オマエは黙って安静にしてろ。何なら救急車を呼んでやろォか？」

「平気……なの。ボクは貧弱だけど……肉体再生の魔法を使えるの……っ」

「そォか……クソ野郎には気をつけるンだな」

今のオレにはリーネをどうこう出来ねェ。下手すりゃリーネも同じ異世界人だ。また三原のクソ野郎に襲われるかもしれねェ。リーネも危険な状況下に置かれている。リーネもミネットも危険度は同じくらいかもしれねェ。ならどうやって2人を救うか……正解はたったの一つ。

早急に三原を――ブチ殺す事だ。

第１６２話，もう一人の思い　（後書き）

後書きトークコーナー！

大吾「リア充死ね！」

重原「リア充死ね！」

黒木「リア充死ね！」

赤佐「リア充死ね！」

圭介「リア充死ね！」

全員「圭介死ね！」

圭介「な、なんでっ！？」

※リア充だから……だとは本人は自覚していないようである。

第１６３話，　ほんの僅かな恩返し

ここは古宇坂市の自衛隊基地付近。

私――白藤早苗は自衛隊基地付近の畑に足を踏み入れていた。その理由は簡単、北部からとっても怪しい魔術師達が侵入してきたから。それはきっと……私もかつていた、サヴィエトという組織に所属する魔術師だと思う。あの人たちの目的はただ一つ――私の圭介（ともだち）を拘束すること。

圭介は私の初めての友達。一度裏切ったのに私を受け入れてくれた、強くて優しくて心が広いとってもいい人。しかも圭介は私を守ってくれた……サヴィエトに怯える私を、あの悪魔のような場所から私を救いだしてくれた。

私は一度は圭介の敵だったのに……圭介に助けられて。多分、どれだけのお金をあげようがどれだけお礼を言おうが、すべての恩を返す事はできない。

それでも、ほんの僅かだとしても――圭介に恩返しをしたい。

「……っ」

携帯電話を開いて現在時刻を確認する。時刻は９時２０分……もう、普通なら家に帰って晩御飯を食べ終え、お風呂にでも入っている時間だ。だけど……今日の私は帰れない。

現在、風剣のシルフの他にサヴィエトの別働部隊が日本国内に侵入。古宇坂市の北にある袖川浦市から侵入した別働部隊は機動隊と交戦。損耗５０％に達した機動隊は後退したらしい。私はもうサヴィエトの人間ではないけど、でも、元々スパイをやっていた身。だから情報収集は得意中の得意。

合法な手段から非合法な手段まで、様々な手段で情報を収集する。それが、私が昔やっていたスパイ活動というもの。それにしてもサ

ヴィエト……もう赤の軍神を使うだなんて。
話くらいには聞いていた。まさか……警察や自衛隊を簡単に退ける実力を持つなんて……。
でも……だからこそ私は戦う必要がある。私もあの人たちと同じ同じ魔術師。私程度の魔術師では風剣のシルフを止める事は不可能かもしれないけど、その別働部隊の殲滅程度なら――。

【ガ、グ、ギァ、アァア――ッ】

不気味な笑い声が田園地帯に広がる。人外の声だ……映画に出てくるモンスターのように声にノイズが混じっている。風剣のシルフは裏ルートで入手した情報によれば、外見上はごく普通の人間の女性で風剣の名を持つだけに、大剣と風の魔術を利用した戦法をする。
だけど……１００メートルほど先にぼんやりと、私の目に映る白い影は男だ。大剣なんてものは持っていないし、そもそも本当にただの人なのかすら怪しい存在。
それに……ここで使われている術式は風の術式じゃない。

「――――、」

嫌な予感がした瞬間、私が立っていた場所から先端が尖った、鉄製の大黒柱のようなものが一気に飛び出してきた。しつこく突き出てくる鉄の杭を、バックステップで回避していく。こうして攻撃を避けていきながら、私は推測を行っていた。
一旦攻撃が来なくなり、田園地帯が再び静かでのどかな風景……。

「……っ」

……には戻らなかった。
眼前には無数の先端が鋭い杭が飛び出し、処刑場のような残酷な

光景が広がっている。
鉄は錬金術によって錬成された即席の杭。その杭を遥か彼方の輝く星――恒星の光を観測し風剣のシルフとの戦闘で傷つき、動きが鈍った人々を串刺しにしていく……と。これは、錬金術に占星術という古代バビロニアで行われた大規模天体観測術式を足した魔術ね。
本来攻撃用の魔術でないものを、錬金術と組み合わせる事によって、不特定多数の人間を串刺しにする残酷な魔術に変えてしまうだなんて……相手は中々のプロかな。
私の予想では、処刑場を作るだけが相手の攻撃手段ではない。おそらく、他にも鉄製の杭を星の力を利用して無差別に降らすとか。

「……ッ！」

たとえばこのように――。
今度は頭上から無数の鉄製の杭が落下してきた。瞬間的な天体観測、強度の高い鉄の錬成と観測結果による星と地上の座標指定、指定した場所への爆撃。これは、どう考えてもバックステップだけで避けられるとは思えない。仕方ない……私も魔術を使おうかな。
鉄製の杭爆撃から身を守る適当な手段として……やっぱりアレかな。私はその物がそこにあったと覚えているものを思い出し、脳内でとあるイメージを働かせた。
瞬間。
１０メートルほどの高さの場所に、一台の大型トラックが現れた。宙を舞う大型トラックに次々と鉄製の杭が突き刺さっていくが、私はそんなシーンをいちいち楽しみはせず、出来る限り大型トラックから離れようとした。
やがて、２０ｍは走った地点で背中に轟！　という轟音と衝撃が叩きつけられる。
爆風と熱波により、私の身体は何メートルも吹き飛ばされ、たまたま近くにあった農機具を収容している木造の小屋に激突。バリバ

リと木造の壁を破壊し、最終的に私の身体は倉庫内にあった大きな農機具に激突してしまった。

「――う、ぁっ！」

あまりの衝撃に、普段は出さない声を勢いよく出してしまった。

農機具に背中を強打し、その衝撃で肺の中から空気が排出される。呼吸することすらままならない状態になってしまった。

でも、このまま何もしなかったら繊細な術式の前に、私は串刺しにされてしまう。

それに、直撃しなかったよりはマシ……私は胸を左手で押さえ、ゆっくりと農機具に掴まりながら立ち上がった。手を離せば倒れてしまうそうだ。全身に鈍い痛みも走っている。圭介はきっと私がこういう事をしていると知れば、鬼のような形相になって怒るに違いない。

でも――私にはやめられない理由がある。

【キャ、シャ、アァア……ッ！】

私は瞬間移動（テレポート）という特殊な魔術を扱える。これは、異世界から来たという魔術師に習ったものなので、少なくともこの世界の魔術ではないと思う。

脳に記憶したものがその場所にあるとすれば、何でも自分の手元に呼び出す事が出来る便利な魔術なのだけど……欠点は一つ。同じモノが長い時間同じ場所にあるとは思えない。つまり他人の物を瞬間移動させようとすると、瞬間移動魔術自体は働いても何もこちらに転送されない。

だから、私はその欠点を補うため――ある程度の武器を一定の場所に固め、決して他人にバレないような場所に隠して来てから戦場に立っている。

この場合は……錬金術は魔術師によるものとして、天体観測術式はどう考えても個人で扱えるものとは思えない。それなのに相手が一人と言う事は、どこかに魔術を働かせている核――すなわち中心点が存在しているハズ。

その中心点を探して破壊すれば――私にも勝ち目がある！

「――――、」

私はとある場所に隠していた武器――携帯対戦車擲弾発射器を呼び出した。

以前、何処かのゲリラ組織が盗み出した安価で簡単で高威力なこの兵器。ソレを構えて安全装置を解除し、スコープ型の照準器を除きこんだ。

狙いは鉄製の杭によって作られた処刑場。全てを破壊する事は出来なくとも……相手の魔術師の視界を一時的に削ぐ事なら出来るハズ――。

「……、」

無造作に引き金を引くと、対戦車ロケット弾が発車された。一本の噴射煙を描いたロケット弾が処刑場に突き刺さる。ゴァ！　という大地を揺るがす轟音が炸裂した。畑の土が汚く飛び散った上に衝撃で直撃しなかった鉄製の杭も、次々とドミノ倒しのように倒れていった。

炸裂したロケット弾によって生み出されたのは、まさに灼熱の地獄世界。元々戦車を破壊する為に開発された兵器なだけに、その威力は１００点を付けたくなるほどに抜群だった。

さて、魔術師はきっと怯んでいる。今のうち魔術の中心核を探そう。

私は今度はトランポリンを眼前に瞬間移動させ、そこに勢いよく

飛び乗った。その上で跳躍を繰り返していくと、普段の数倍もの跳躍力を得る事に成功。

一番飛び上がった所で私は――自らを瞬間移動させた。

私の魔術は物の転送の他に、半径８０メートル以内なら自分も指定座標まで瞬間移動が出来ると言う中途半端な力を持つ。移動するには遅すぎるし、小刻みに動くには範囲が広すぎる。

本当に中途半端な力……。

それでも、この状況では大いに役に立つ能力だよ。

一度ロケット弾で破壊したとは言え、まだ半分以上が残っている処刑場。さらに地上から対空砲火のように私を串刺しにしようと、無数の鉄製の杭が私を目がけて飛んでくる。

空中で僅かに身を振りながら、私は鉄製の杭を回避してゆく。そして――何十本もの杭の中に黄金に輝く不自然な杭を発見。

きっとアレが中心核、アレを破壊すれば――天体観測術式は消滅する！

「――――ッ！！」

中心核を破壊するのに必要なモノ――２５０ｋｇ爆弾を転送させた。

私よりも重たい爆弾は私よりも早く、中心核へと落下してゆく。

そして、爆弾が鉄製の杭に触れた瞬間――ピカッ！　と言う閃光を放ち、轟音と爆風が炸裂しあらゆる物を吹き飛ばし、破壊していった。

そんな破壊と絶望しかない空間で――。

――圭介、これで……恩返しできたかな？

……そんなことを思っていた私の意識は――ここで途切れてしまった。

第１６３話，　ほんの僅かな恩返し（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「おお、やっぱ白藤はやれば出来るこじゃないか！」

白藤【……どう？】

圭介「すごいすごい、あんな無理ゲー臭するヤツに勝つなんて」

白藤【……撫でて？】

圭介「よしよし」

白藤【……好き、圭介】ワシャワシャ

暮葉「なんなのでしょう……白藤さんを無性に殺したいのです！」

伊吹「偶然ね、私もよ！」

第１６４話，破壊の嵐

黒ずくめの武装集団との戦闘後、俺とミネットはとりあえず、ミネットの言うその人と同じ同居人の無事を確認すべく、古宇坂駅付近にあるマンションへと向かっていた。しかし、その途中で市役所のほうから物凄い爆音が轟いたので、一旦コースを外れて市役所のほうへと向かった。

古宇坂市の市役所はそこそこ大きい。６階建ての白い近代的な建造物に、約２００台もの車を収容できる駐車場。さらに2階建ての第2庁舎までもが存在する。

そんな立派な市役所だった……ハズだ。しかし俺とミネットが市役所を訪れた時には見るも無残な姿に変貌していた。

「な、これ……全部さっきの黒づくめ達が……？」

「それは多分ないかも。あの人達の装備でこの人達に勝てるとは思えないんだよ」

ミネットの言うこの人達とは、倒れている自衛隊や警察の人々であった。不自然に静かな自衛官に警察の特殊部隊か何かの人々。破壊された警察車両や自衛隊のトラック、装甲車。そして俺が最初に見た市役所の建物も全てのガラスが割られ、オマケに玄関部分は大胆に破壊されていた。

「すいません！　大丈夫ですか！？」

俺は倒れている一人の自衛官に声を掛け、顔を覗き込んでみる。目立った外傷はなく呼吸も一応してはいる。意識だけがないようだ……にしても不自然なやられ方だな。なんでトラックや装甲車は粉

々に破壊されているのに、どの人も目立った外傷ナシで生きているんだ。
気だけを失っている。やっぱりさっきの黒づくめ達以外にも、古宇坂に侵入したヤツってのがいるんじゃねえか？
それもこんな事が出来るんだ。ソイツは普通のヤツじゃなくて――魔法使い。
ちくしょう、黒づくめ達も厄介な相手だけど、魔法使いはそれ以上に厄介だ。なんたって対人戦での戦闘力は魔法使いの方が圧倒的に上だからな。
しかも今度の相手は何人か知らねえが、警察や自衛隊を壊滅させるようなバケモノ。
つまり暮葉は、この人達を倒したバケモノを倒す為に……。

「ハッア～イ！　凄まじい光景に言葉も出ないのカナ？」

突然響いた謎の声。
甲高さからおそらくは女のもの。俺はその声が何処から聞こえたものかを知る為、キョロキョロと左右に顔を振り、万が一の事を考えて空も見上げていた。

「圭介様！　あっちだよ！」

「……ッ！」

俺はミネットに言われた方法――後ろを向いた。
奇妙な女がいた。
服装は、胸部と腰周りを覆うブリガンダイン風の鎧に見える。それは中世の戦乱を駆けていた軽装兵のようでもあった。しなやかな金色の髪を左右におさげにし、縦ロールにしている。背丈もそれほど高くは無いのでいい所育ちのお嬢様のようであった。

容姿はヒロインになれそうなほどに可愛らしい。それなのに……女の子の手には不似合いすぎる大剣が握られていた。
刃は白銀色に輝いており、通常地味なハズの柄まで黄金に輝いていた。

「……っ」

あんなのに攻撃されたら痛いじゃ済まされない。身体は真っ二つになるか、切れ味が悪いとしても肋骨や背骨が完全に逝ってしまうだろう。
だけど……まだ銃を持っていないだけマシだ。剣を持っているくらいなら……過去に経験があるから何かなるかもしれない。

「誰だよ……てめえはっ」

「赤の軍神――風剣のシルフ」

「風剣のシルフ……？　貴女が噂のシルフなんだね」

「そぉーよそちらのお子様は御存知だったかな？」

「てめえ……サヴィエトか！」

「やっと目標発見ね……つーわけでさっさと捕まりな藤島圭介！」

女が大剣を構えた、全てを潰すような大剣を。
俺を捕まえるって……冗談じゃねえぞ。ふざけんな、あんなので攻撃されたら捕まる前に死んじまうっつーの。そもそも連中が俺を捕えるのにここまでする理由って、一体なんなんだよ。
それにあのシルフってヤツ……油断は出来ねえぞ。もしこのシル

フが、自衛隊や警察を壊滅させた張本人だって言うんなら、攻撃を当てる前に瞬殺されてしまうかもしれねえ。たったり一人で治安維持や日本の国防を担う人達と、真正面から戦って勝つような女……。

クソッ、今そんな事考えるなよ……怖くなるだけじゃねえか。

「大丈夫よ怖がらなくても。一撃で気絶させてやるからさぁ……オラァ！」

シルフは両手で柄を握り、力を振り絞って持っていた大剣を無造作に振った。

横殴りの一撃だったが、目標である俺とは5メートル以上も離れている上に、振った先にも何もないので大剣は当然空振り。今の動作に意味があるとは思えなかった。ただ、あれだけ重たいモノを無意味に振り回しただけで、体力を無駄に使っちまうような無駄に動きにしか見えなかった。

しかし――、

「――が、ぁッ！？」

瞬間。

腹部に感じた鈍い痛み。そして胃の中込み上げてくる吐き気。何かが俺の腹部へ叩きこまれたようである。ソレは殴られたような感触に近い気がした。しかし、その一撃の威力と言うのがやたらと強烈なモノで、こうして立ち続けている事そのものが辛い。

立っているのが限界であった……。

「へぇ～流石は噂の身体。今のを喰らって意識を失わないんだねぇ～？」

「く、そ……ッ！

「圭介様っ！　今のは風の魔法の一種だよっ！」

俺を心配したのか、シルフが放った攻撃の正体を証ながら、ミネットが駆け寄ってきた。

ミネットは一応アルファ隊らしく、水系統の魔法を使えるらしいが……ダメだ、こんな小さな女の子をあんな危険なヤツと戦わせるワケにはいかない。

「来るな、ミネット！」

叫んだ瞬間、シルフがさらに大剣を振り、ミネット曰く風の魔法の一種という、サッカーボールと同じくらいの大きさの渦巻く何かを放ってきた。

破壊の嵐は俺……ではなく、ミネットを目がけて放たれた。おそらく、シルフは俺を捕まえるのに邪魔であるミネットを始末しようとしたのだろう。

俺は咄嗟にミネットを押し倒し、今の一撃をギリギリで回避してみせる。背中に僅かに渦巻く塊から僅かに漏れている風を感じた。

咄嗟にソレを見るべく左を向くと、ソレは無傷だったパトカーに命中し、パトカーの運転席のドアに大きな穴が開いてしまった。

俺はさっき、パトカーをブッ壊せるような攻撃を喰らって……耐えたのか。

一見ショボい攻撃だけど、威力は凄まじいぞアレ。

それにしても流石は俺の身体……。

あんなのに耐えちまったんだ。俺って本当に人外かもしれない。

俺はミネットを守るように立ち上がり、シルフの事を睨んだ。

「小さい子供を守りながら戦うって、アンタ中々やんのね」

「見ただろ、俺はてめえらについて行くつもりはねえ。さっさと諦めて帰ってくれ」

「私も一般人の生活をぶち壊すのは趣味じゃないし、そうしてもいいんだケドォ……」

「……ッ！」

言いながらシルフが大剣をゆっくり振り上げたので、俺は反射的に身構える。

「そういうワケにもいかないのが仕事なのよねぇーっ！」

俺が身構えたのは正しい判断であった。

予想通り、シルフは狂気じみた風に笑いながら、大剣を一気に振り下ろし、それに伴って破壊の嵐が渦巻き始めた。野球ボール並の速度で迫ってくる塊。俺はソレに――左拳を叩きこんだ。

メリメリと、拳が嫌な音を立てたものの、風の塊はその衝撃で砕け散ったようだ。

「身体が丈夫だとそんな事も出来んのね？　アンタ本当に楽しいわぁっ！」

ちくしょう……左拳が痛ぇ。拳が潰れるかと思った……やっぱ避けるべきだな。しかもシルフのヤツはまだ本気を出していない。アレが本気なら――自衛隊に勝てるハズがない。おそらくシルフはまだ実力を秘めている。俺を殺さないように本気を出していない。

最大限に手を抜き、極力俺を傷つけず一撃で沈めようとしている。

どうする……そもそも一人で勝てるか微妙だぞ。ミネットは戦力になるか不明、出来る事ならこの子を戦わせたくない。そうだ……

暮葉だ、暮葉を呼ぼう。俺はアイツにだって出来れば戦って欲しくないんだけど、それでも暮葉はアルファ隊に１０人もいない特隊員。
何より暮葉はコイツを追っているんじゃないか？
だとしたら……よし、決めた。

「ミネット、行ってくれ！」

「え、で、でも……っ」

「お前もアルファ隊なら暮葉を知っているだろ。ソイツを呼んできてくれ！」

「き、木下先輩をっ？」

「頼む！　助けを呼んできてくれ！」

と、叫んだその時。そんな事をさせるかと言う勢いでシルフが大剣を振り、渦巻く破壊の嵐を巻き起こした。塊が俺とミネットを捉えて一直線に突き進む。
どうしよう、何かいい物は……と、探していたその時、あるモノが目に入る。
盾。
おそらく警察のものであろう。俺はたまたま視界に入った盾を咄嗟に掴み、それをぐわんっと思いっきり投げつけてやった。盾と風の塊が触れ合った瞬間――両方とも粉々に砕け散った。
しかしその衝撃のせいなのか、暴風が巻き起こり俺達2人を吹き飛ばす。俺は背中を地面に強く叩きつけてしまい、数秒は痛みで立ち上がれなかった。
それでもミネットの無事を確認すべく、俺はシルフよりも先にミネットの方を向く。

ミネットは痛がりながらも立ち上がり、小さな足で暗闇に消えていった……って、アイツ携帯電話落として拾わずに行っちまった。イザと言う時に誰かと連絡取れないんじゃ……仕方ねえから後で俺が回収して、後で会ったら返してあげよう。

「アンタ、あの子に助けを呼びに行ってもらったの？」

「どうかな？　どっちにしても今は俺とてめえの2人っきりだ」

「そうかい……じゃ、その助っ人が泣くような光景を作ってやるわよっ！」

「そんな事はさせねえ。この場でてめえをぶっ倒して――」

「ご、ばぁっ！　ゲッホ！　ごほっ！」

「……え？」

ごばぁ、と言う水っぽい音が響いた。恐る恐る下を見てみると、アスファルトに鮮血の水たまりがあった。水たまりにぽちゃぽちゃと、真っ赤な血の塊が水滴のように落ちている。その水滴が何処から降ってきたものかを確認する為、俺は視線をゆっくり上へ向けていく。

血の塊は――シルフの口から吐かれたものであった。

いきなり吐血しやがって一体何だ。コイツ……もしかして持病でも持ってんのか？

……だとしたら幸運だ。コイツには悪いが勝つチャンスだぜ、さっさとコイツを倒して警察に引き渡す前に病院送りにしてやるよ。

「こ、これは……ッ！　特定の魔力を持つ者を圧迫する……」

「ハッ、今すぐ病院送りにしてやるよ！」

「く、がアアアあああアぁぁッ！」

俺は大地に足を踏みつけて前へ跳躍し、シルフをぶん殴ってやろうと思った……まさにその時の出来事である。突然シルフが大剣を大きく振りまわし、風速６０メートルは超えているであろう局地的な嵐を巻き起こしたのだ。あらゆるものを破壊し尽くす、猛烈な台風並の暴風。

俺はソレに耐えられず、吹っ飛ばされてしまった。

しかし、咄嗟に標識か何かのガシッと掴まった。これで遠くへは飛ばされない……。

「原因を調べなきゃ、テメェのような小物は後回しだっ！」

シルフはそんな事を叫びながら、風の中へ消えていった。

やがて嵐は収まった……シルフの姿は既になく、残っているのは俺と、破壊された車両と気を失っている自衛官や警察の特殊部隊の人々のみであった。

風剣のシルフ……結局、アイツはなんだったんだ……？

第１６４話，破壊の嵐（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「結局アイツ、強いのか弱いのかよくわからないキャラだったわね」

千早「で、でも……まだ本気は出していないみたい……ですよ？」

凪紗「微妙な所だな。まあ藤島の事だからなんとかなるんじゃないか？」

伊吹「圭介だしね」

千早「先輩……ですからねっ」

圭介「なんだよ俺だからって！？」

第１６５話，血の海

オレこと早川悠はミネットやリーネを襲いやがった三原、そして、その三原が率いていると言う三原中隊（カンパニー）をブッ潰す為、まずは三原中隊（カンパニー）のほうを潰す事にした。

ここは古宇坂市内にある私立高校の校舎。この時間の校舎には基本、用務員のオッチャンすらいないらしい。そこに付け込んで連中は学校を、夜間限定の秘密基地として利用している。オレは体育館側の扉から校内へ侵入し、一通り校内の視察を行った。

どうやら、体育館に２０人、校舎内には確認しただけで５人の連中がいた。やっぱりオレの読み通りここをアジトにしていたか。さて、どう潰しにかかろうか……？

とりあえず一人は生かしておこう。三原のクソ野郎の居場所が知りたい。元々それを知る為に少ない魔力を消費してまで、ここにいる全員を相手にしようとしていたんだからなァ。さっさと１人を除いて片付けて、三原のクソ野郎の居場所を知ったら……ぎゃは、楽しみだなァ。

さて……能力を節約しながらどう殺していくか……。

「本当なの？」

「ああ、誰かが目撃したらしい。ここに早川が侵入した」

「だ、大丈夫なのかしら……？」

「心配すんな。今のアイツの能力は時間制限付きだ。もうタイムオーバーだろ」

「お、恐れる事はない……のね？」

「ああ、見つけたら蜂の巣にしてやろう」

さっさと行動しねェはまずいかもしれないな。既に連中、オレが校舎に侵入した事に気付いているらしい。出来れば能力は使いたくない。コイツは……三原との戦いに温存したい。

まずは……体育館で待機している大人数だ。連中を殺しにかかるか。

オレはその為だけに――知らない学校の体育館へと向かった。

それから数十分後、オレは女子更衣室から体育館の様子を覗っていた。体育館への侵入ルートは三つほどあり、一つは校舎の中から入るルート。もう一つは直接体育館に入るルート。最後に体育館裏から入るルートが存在している。

オレはその中の最も警備が手薄かつ、直接体育館に入るわけではない裏ルートから侵入し、階段を上って女子更衣室へと移動した。

変態紳士どもォ……夜なら女子更衣室の侵入は割と簡単だ。最も、女子の衣服なんてモノは一切ねェがな……とにかく、ここからカーテンを開けて見下ろす体育館の絶景は最高だ。

連中がぼんやりと、懐中電灯か何かを付けているお陰で……連中の姿が丸見えだ。

「……ハッ、いい事思いついたぜェ……地獄を見せてやろォか？」

オレは女子更衣室の窓を開け、散弾銃の銃口をクソ野郎共に向ける。照準器を除きこんで照準をクソ野郎の一人――女と思われるヤツに合わせた。

そしてオレは笑いながら――引き金を引いた。一発の銃弾は女の後頭部を貫く。暗くて詳しい状況はわからねェが、ぐちゃり、と生

々しい音が炸裂した。
それからややしばらくし、同じクソ野郎共の悲鳴が聞こえてきた。
ぎゃ、は……騒いじまって面白ェ。メンタル弱ェ癖に戦闘員になるなよクソ野郎共ォ。
さて、次の行動に移るか。オレは次の標的――今度は男に金具を投げつけた。女子のいたずらで取れたどこかの部品だろう。女子更衣室にあった金具である。
オレの腕力では強くは投げれねェ。だが……それでいい。カツン、と緊張しているヤツの肩に当てるだけで十分なンだよ。

「ぎゃあああああああああああああああああああああっ！」

大地が揺らぐほどの叫び声をあげた男。
次の瞬間。
複数の銃声と叫び声、そして女子更衣室にまで鉄の臭いが充満してきた。

騒動が収まった後、オレは下に降りて状況の確認を行った。
ひでェモンだ……死体はグチャグチャ。中には顔が原型をとどめていねェやつ、手足が吹き飛んでもがき苦しんでいるヤツもいた。
まだ生きてるヤツもいる見てェだな……。

「う、あ……お前……早川ァ……」

そんなうめき声も聞こえるが、オレはその声をスルーしてやった。
どうせ、ここまでボロボロになっちまえば、病院に送ったって間に合わねェだろう。そもそもコイツらを助ける気など、オレにはこれっぽちもねェしなァ。あるのは殲滅すると言う気持ちのみ……。

三原中隊……さっき病院へ逃がしたヤツはどうでもいいとして、その他は生かさねェ。
全員ぶち殺して地獄に送る……あのガキを助ける為なら、全てを捨てて戦ってやる。
……さて、あとは校舎の5人だな。その残りのクソ共を始末して行くとするかァ。

さらに15分後、オレは校舎内を静かに歩いていた。聞こえるのは僅かな靴音、そして杖代わりに使っている銃が床をつく音のみ。
それが、連中にとっては恐ろしく聞こえるのかもなァ。
既にオレは15分の間に、3人のクソ野郎を殺した。
残り2人、1人は三原のクソ野郎の居場所を知る為に生かすとして……どうやってその1人をオレに従わせようか。絶対オレに服従させる方法……そうだ、いい方法を思いついた。
……ぎゃは、丁度カツカツと靴音が聞こえ始めた。ソイツに犠牲になってもらおう。
オレは教室に入り、ソイツが来るのを待っていた。ここは家庭科室……なら、家庭科室らしい殺し方をしてやろうかァ。
……来た来た、じゃあ人間料理……始めるとしますかァ。
まずは動けなくする。その辺で売ってる肉だって最初は動物、今回もそれと同じだ。
だから、オレはソイツの姿が見えた時――引き金を引いた。

「ご、はっ！」

相手は女か……被弾箇所は横腹。撃たれた女は倒れ込み、持っていたサブマシンガンも激痛で持っていられなくなったようで、手放してしまったようだ。

馬鹿な女だ。戦場で武器を手放すとは……オレはその女の頭に銃口を突き付ける。

「な、何の真似よ……早川悠……っ」

「何の真似ェ？　ハッ……殺し屋ごっこだァ」

引き金を引いた。

発砲音と同時に生々しい嫌な音が炸裂する。ベチャベチャベチャ、と、勢いよくオレの顔に汚らわしい何かが飛んできやがった。その中の一つ、口元についたモノをペロリと舐める。

どろりと濃厚……頭の中に詰まってるモンの味だな。

「オマエの味噌うめェな……さて、次のエモノはどこだァ？」

この死体なら十分脅しに使える。

……それから5分ほど経過して、カツカツという足音が聞こえ始めた。ぎゃは、どうやら最後の一人が来やがったようだな。地獄のような光景が広がっているとも知らずによォ。最後の一人もサブマシンガンを構えており、性別は……体格的に男だな。まァそンな事はどうでもいい。

その時、さっきまで順調だった男の動きがピタリと止まった。

その理由は言うまでもない……。

オレは動きの止まった男の背後へ周り、男の背中に銃口を突き付ける。

「オマエは今からオレのパシリだァ……言う事聞かねェと、背中撃って家庭科室にある包丁でオマエの肉を切刻む」

「ひぃっ！？」

男は悲鳴を上げ、サブマシンガンを床に落とし、携帯していた手榴弾や拳銃を捨てる。
やがて男は、荒々しい呼吸でゆっくりと手を上げる。
ぎゃは、制圧完了って所だなァ……捕虜も一人捕えたしよォ。段々、オレに有利な方向で話が進んできやがったな。さてェ……三原の居場所を聞き出すとするかァ。

第１６５話，血の海（後書き）

後書きトークコーナー！

暮葉「うわあ……」

伊吹「……」

凪紗「……」

千早「……っ」

葵「……っ」

あかり「千早、無理すんなよなっ！」

圭介「えっ！？　みんなのこの反応なにっ！？」

※ちょいグロくてごめんなさい。

第１６６話，殺人鬼と少女の決意

オレは再び古宇坂駅前に戻ってきた。あの後、オレは三原の居場所を聞き出し、用無しになった捕虜をブッ殺してやった。その後は地獄のショーの再開。三原中隊（カンパニー）の連中がいる場所を捜し出しては連中を殺しまくり、既に９０人以上のクソ野郎共を肉塊に変えた。

血の雨が古宇坂中に降り注いだ。にも拘らず、何故オレは警察にマークされない。

これだけ街中で散々暴れまくれば、ニュースになったって不思議じゃねェ。警察が犯人探しをやり始めたって不思議じゃねェ。なのに、そう言った動きが全く見られねェ。

どういう事だ……そう言えば街がやたら静かだ。もっと人がいるかと思ったが、どういうわけか今日の古宇坂には人っ子一人居やしねェ……。

ま、その方が連中を殺しやすいがな。

「――――、」

オレはとある居酒屋の扉に凭れかかっていた。雨が再び降り始め、大きな雨粒がオレの身体を叩いてきやがる。そんな中、オレは随分と懐かしい気分に浸っていた。

久しぶりに人を殺した。

ぐちゃぐちゃに、めっちゃくちゃに、泣き叫ぶ人の声を聞いても何とも思わず、ただひたすら助けを求める連中を殺しまくった。そこに少しの優しさもなく、甘さもなく、あるのは殺意という残酷な感情のみであった。それ以外の感情は戦う前に捨ててきた。

つまりオレは戻ったのだ。ミネットと出会う前のオレに――。

「……チッ」

オレはもう光の道には帰れねェ……トコトン闇に走るしか道は残ってねェ。下手すりゃ闇に走る道すら残ってねェ、死という道しか残されていねェかもしれない。だが……もしオレに死の道しか残ってねェとするなら、そこに三原のクソ野郎も巻き込んでやる。

ここでオレは、首筋の魔力エネルギー変換機に手を触れた。残り4分。いや、4分も残ってねェかもしれない。ちょっと能力を使えばすぐに魔力は枯渇する。

90人を殺すのに能力を使い過ぎた。ここから先は無駄に能力は使えねェ。

出来れば三原中隊（カンパニー）全員を殺したかったが、そういうワケにもいかねェな。三原を潰せば三原中隊（カンパニー）は自然崩壊するかもしれねェ。なんせ、あのクソ野郎は恐怖と力のみで隊員どもを押さえつけているらしいのだ。その恐怖が消えれば隊員は自由。

つまり……自由を望む隊員は自然と部隊から離れるワケだ。

なら次に潰すのは三原本人。いや待て……その前にやるべき事が一つ残っている。

そこに行けば、残りのクソ野郎共がいるかもしれねェ。そこにいないヤツは、三原本人のボディーガードをしているのだろう。

つまり――次に行く場所で大半を叩き潰せるかもしれねェのだ。

「……もう何もいらねェ。血があればいい……ッ」

そう呟きながら、散弾銃を杖代わりにしてよろよろと立ちあがった。オレはもう“最強”の超能力者に戻ったのだ。今更引き返しても一般人には戻れねェ。

なら、全てを捨ててでも三原をブッ殺す。一人で騒動を解決してみせる。

あのガキだけでも……闇の中から連れ出す……ッ！

私――西園寺雪乃は古宇坂総合病院と言う大きな病院にいた。その理由は、別に誰かのお見舞いというわけではなく、ここに侵入した１０人に警告をする為。さっき私はその侵入者の仲間の人からお話を聞いたのだけど、どうもこの騒動には早川悠が関わっているらしいわ。

そして、その早川悠は次々と侵入者たちを殺害しているらしい。私に彼を止める権利もなければ実力もないのだけど、出来れば死体の数を増やしたくはないわね。

と、言うわけで私は警告の為――病院内へ入ったのだけど……。

「貴様、何者だ？」

「まさか……西園寺雪乃か？」

手厚い歓迎ね……私が現れた瞬間、黒ずくめの侵入者達は銃を向けてきた。人に銃を向けるだなんて失礼じゃないかしら。まあそれはどうでもいいとして、早く警告をしましょう。

「警戒しなくていいわ。私は貴方達に敵意はない、今回は警告しに来ただけよ」

「なんだと……？」

「手短に言うわね。三原って言ったかしらあの男？　あの人の下を離れて今すぐ逃げたほうがいいわ。今なら私が貴方達を護衛するわよ？」

「……どういう意味だ？」

「あら、理解できなかったかしら？　貴方達の命が危ないのよ。早川悠が貴方達の仲間を沢山殺したわ。次の標的は多分貴方達よ。ただの殺人鬼と化した彼に甘さも優しさもない。会えば見逃してはくれないわ。死体の原型が留まっていれば運がいい方かもしれないわよ」

「ふざけるな……それを三原さんが許すわけがないだろ」

「つまり……逃げる気はないのね？」

「当然だ。俺達はあくまで任務を遂行するのみ、敵前逃亡などするハズがない」

あら残念、折角命を助けてあげようと思ったのに。私の敵――早川悠の敵がいなくて驚く顔を見たかったのに……本当に残念だわ。

だけど、あまり時間をかけてられないわね。

いくら彼が身障者だからと言っても、そろそろここに来ているハズ。あまり長居をしていると私まで肉塊にされてしまうわ。今の早川悠が手加減するとは思えないし。

「ぎゃあああああああああ！」

ほら、ね？

今の叫び声。おそらく、早川悠が黒ずくめの侵入者の一人を殺したのね。このままだと私まで本当に殺されてしまうわ。だけど、この人達に逃げる気はないみたいだから、仕方ないわよね。

「いいい、今の声……ッ」

「そう、今のが現実よ。貴方達――早川悠に会ったら最期だから気をつけなさいね」

それだけ言い残し、私は静かに一階の受付ロビーから立ち去った。だってこのまま居続けたら本当に私まで殺されるんだもの。あの人達は……もう知らないわ。

だけど祈ってはおくわ……あの人達が早川悠に会いませんように。三原に操作されているだけの人達が早川悠に殺されませんように。

ま、そんな事を思っていても、別に私はあの人達の味方をする気はないけどね。

……さて、そろそろ私は家に帰ろうかしら。警報発令中だし夜も遅いしね。

ここは古宇坂市の南――沼山市にある小学校の体育館。私――国宗伊吹や亜紀に葵ちゃんなど殆どの知り合いがここに避難していた。

なんでも、古宇坂市が何者かに攻撃されているらしい。警察どころか、ラジオによると自衛隊まで出動しているらしい。一体誰なのよ……自衛隊が出動するほどの相手って。そして私を不機嫌にさせる理由はもう一つあった。

葵ちゃんに亜紀、凪紗や純奈。圭介や暮葉が所属している写真部のメンバーも、みんなこの避難所に逃げているのに……肝心の圭介や暮葉がここにはいない。

あの2人、一体どこにいんのよ。どうして姿が見えないのよ……。

……ばか圭介、ばか暮葉……本当に馬鹿だわ。

「お兄ちゃんにクーにゃん……どこ行ったんだろう？」

「先輩……無事なんでしょうか？」

「け、圭介も木下先輩も多分無事だ！　……と思う」

「あかり……っ！　いつもの勢い……ないよ……？」

「そうだよっ！　いつも見たいにハッキリ言ってくれないと不安になるよっ！」

「だって、今夜になって圭介と連絡つかないんだからな……っ」

葵ちゃんや後輩達も圭介や暮葉を心配している。

「圭くんに暮葉もどこに消えたのかなぁ？」

「クソ介もう死んだんじゃないの？」

「すみにゃん！　不謹慎だぞっ」

亜紀に凪紗、純奈は微妙だけど……それでもみんな2人の事を心配している。一般人にだって犠牲者がいるらしいんだもん。そんな状況下で2人の姿が見えない上に、電話を掛けても出ないしメールをしても帰ってこない。普通、心配しちゃうに決まってんでしょ。

だけど変ね。一番助かりそうな2人なのに、どうしてこの場面でいないのよ。まさかまたあの2人変な事に巻き込まれてんじゃ……ありえるわねっ。

騒動が起こるのはいつもあの2人の周りだから。きっと今回も、あの2人はとんでもない事に巻き込まれてんのかもしれない。また魔法使いって奴らに狙われているのかもしれない。

そう思うと、居ても立ってもいられなくなってきた。

「――――、」

私は限界を迎えた。

もうこの足は止まらない。何が何でもあの2人を探すわ。圭介と暮葉がどんな大事件に巻き込まれているかは知らないけど、このまま黙っていられるわけがないわ。私も2人を探して2人に加勢して騒動を解決してやるわよ。

……っと思っていたその時、ガシッと私の左手が誰かに握られた。

「伊吹、どこに行くんだ?」

「凪紗? 夜景を眺めるだけよ。べ、別にアイツらなんか心配じゃ――」

「心配なんだな……」

「……べ、別に」

どうすんのよ。凪紗って結構手ごわい相手よ。しかも超能力者だし、あの時は炎しか使っていなかったけど、実は心を読むくらいの能力は使えるんじゃないかしら?

そう思っていた……その時。

「伊吹、私も一緒に行くぞ」

「……えっ?」

「私も伊吹と同じ考えだ。このまま藤島や木下を放ってはおけない

ぞ」

「あ、あんたまで……いいの？」

「心配するな。自分の身を守る力があるのはお互い様だろっ」

そう微笑みかける凪紗。

そうよね……私には剣道、凪紗には超能力がある。それさえあれば、多少の相手となら戦う事だって出来るハズよ。それに、やっぱり一人よりも誰かがいると心強いわ。

何より私も凪紗も――考えている事は一緒よ！

「……仕方ないわねっ、行くわよ！」

「うん、急ごうっ！」

こうして、私と凪紗は避難場所である小学校の体育館を飛び出した。

飛び出して、あえて危険な古宇坂に戻ろうとしたのだ。

ただ、大切な人達を見つける為に……。

第１６６話，殺人鬼と少女の決意（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「よっしゃあ出番あったぞ！」

葵「葵も出番があったよ！」

千早「わ、わたしも……『８・１７編』で二度目の出番です……っ」

純奈「なんで私今回こんなに出番ないの？」

大吾「僕も活躍したい！」

重原「俺だってもう少し目立ちたいよ」

圭介「たった一度の出番でキャラが大喜びするこの小説って一体何！？」

2023

第167話，気付いてしまったもの

ちくしょう、どこに行ったんだよ。

風剣のシルフもミネットの居場所もわからねえ。俺――藤島圭介はその2人を探し求めて古宇坂中を走り回っていた。右手に握り締めているものはミネットが持っていた携帯電話。可愛らしい柄をしている携帯電話の持ち主は、暮葉に助けを求めに行ったっきり帰ってこない。

その暮葉とも連絡がつかない。やばいぞ……今回の攻撃は大規模だ。暮葉どころか伊吹や葵達にもメールを送れない。回線が混雑しているか、あるいは切断されたか……。

どっちにしても好ましい状況ではねえな。とにかく早くミネットを探そう。暮葉とも合流して風剣のシルフを倒さねえと、古宇坂は何時まで経っても危機的状況から抜け出せれない。

もし暮葉と合流できなかったとしても……俺一人でシルフをぶっ倒す。

……と、その時。ミネットの携帯電話が振動を始めた。電話……らしい。もしかして何時の間に回線が復活したのか、それとも元々切断なんてされていなかった。ただこんな状況だから回線が混雑していただけなのか。とにかく電話がかかってきた……悠って誰だよ。

まあ、ミネットの知り合いなんだろう。とにかく……一応出てみるか。

「もしもし？」

『……チッ、誰だオマエ……ッ』

あれ、この声どこかで聞いた事があるような……まあいい。それよりこの人はミネットが心配で電話を掛けてきたんだろう。早く状

況の説明をしなければ。

「あんた、よくわからねえかもしれないけど話を聞いてくれ！　あの子が危険なんだ！」

『どォ言う事だ……オマエは何者だ？』

「俺はたまたまミネットと同行していた一般人だけど……すまねぇ、途中であの子を一人にしちまった」

『そォか……気にすンな。オレもあのガキを一人にした。だからオマエはその携帯を捨てろ』

いきなり過ぎる相手の言葉に、思わず胸に何かが刺さる感覚に陥る。あまりにも冷たく言い放たれたその一言に、自然と心が痛んでしまう。自分の無力さを突きつけられたような気がした。

だけど……それで退くような人じゃねえんだよ。俺は――！

「なんでだよ！？」

「あのガキは追われている身だ」

「もしかして……黒ずくめの連中か？」

『オマエも知ってンのか？　なら早く避難所に逃げる事だ。連中は数も少なくなったし、それにいくら連中でも騒ぎなンで起こしたくねェだろう』

この言い草……もしかしてコイツのあの黒ずくめ達の事を知っているのか。コイツもあの黒づくめ達と戦っていたのか？　何処かで

聞き覚えのあるような声だし……。
電話の向こうのこの人は一体……って、今はそんな事より、
「なに言ってんだ、俺も手伝うに決まってんだろ！」
『この問題はオレとクソ野郎共の問題だ。一般人が手ェ出す場面じゃねェ』
「だけど……」
『それに、ガキの居場所は何とか掴めそうなンだ。あのガキの逃走能力からしてもう三原に掴まっていると思うンだ』
三原？
もしかして、ソイツが犯人なのか？
ミネット達を襲いやがった、魔法使いではない第二勢力。その第二勢力を率いるボスの名前が三原ってヤツなのか。三原とシルフ……くそっ、どっちを先に倒せばいいんだよ。
いや、まあ……危険度で言ったら圧倒的にシルフのほうが上なんだが。
相手の人の実力はわからないが、ミネットの事はこの人に任せて……いいのか？
「……わかった。古宇坂には今、ソイツら以外にも襲撃者が沢山来ている」
『何者だァ……？』
「一人で警察や自衛隊を壊滅させるようなヤツだ。俺はその魔法使いを止めてみせる」

『……チッ、死にたがりには警告しねェ。オマエのやりたい通りにやりやがれ』

「悪い……アンタと協力が出来なくて」

『構わねェ……それよりオマエ、どっかで――いや、やっぱなんでもねェ』

なんだ、今コイツは何を言おうとしたんだ？
まあいいや、それより早くシルフを追おう。
早くしなければ――本当に手遅れになる。

「悪いな、死ぬなよ」

『互いになァ』

相手の男が言い終えると、電話を切ってミネットの携帯をポケットに入れた。とりあえずミネットの事は電話の相手の人に任せるとしよう。あの言い草だと、相手の人は多分俺なんかよりもずっとプロっぽい人だし、ミネットを想う気持ちも本物に見えた。

下手に素人が介入するより、その手の人に任せたほうが結果は確実だ。それより俺は早くシルフを探し出してぶっ倒さねえと。警察や自衛隊じゃおそらく勝ち目はない。いや、自衛隊が一気に大戦力を送りこめば勝ち目はあるだろうが、日本政府や国民がそれを許すとは思えない。

この国は争いごとに関して――あまりにも厳し過ぎる。
だったらやっぱり――関係者である俺がシルフを倒すしかない。

「けーすけ様っ！」

「えっ？　この声――」

このソプラノの高くて明るい声。聞き慣れた楽しげな声。聞いているだけで、自然と心が満たされるような声。間違いない、暮葉だ――暮葉がここに来たんだ。

「暮葉！」

振り返ると、やっぱり声の主は暮葉であった。暮葉は初芝高校の制服姿で片手には一期一振が固く握られていた。暮葉のヤツ……一度も家に戻らなかったから制服のままじゃん。まあそう言う俺だって一度家に帰ったクセに、

ま～だ学ランのズボンにカッターシャツと言う、初芝夏の男の制服を着たままだが。

実は一回家に帰って着替えようと思っていたんだ。だけど、昨日の夜全部洗濯しちまって洗濯物が完全に乾いていなかったのだ。午後から曇って雨も降ってきたしな……とにかく、若干湿っているのが嫌だったので、俺は着替えずしばらく制服で過ごしていたのである。

まさか、こんな時間になっても制服を着ているだなんて……はぁ。

「けーすけ様……どうしてまだこの街にいるのですか？」

「お前こそ今まで何してたんだよ。避難所……なわけねえよな？」

「仕事なのです！　今、この街にサヴィエトの魔法使いが多数侵入していたのですっ」

「た、多数？　襲撃してきた魔法使いって、まさかシルフだけじゃ

ねえのかよ！」

「シルフ……けーすけ様、もしかして風剣のシルフに会っちゃったのですか？」

「襲われたんだよ。そこでお前の仲間だって言う女の子とも逸れちまった」

「その子なら多分大丈夫だと思うのです。それよりけーすけ様は早く逃げて――」

「逃げるなんて真似はしねえよ！」

……最低だ、俺。

折角暮葉は俺を心配して言ってくれたのに、逃げる気がなかった俺は、我を忘れて叫んだ挙句暮葉の襟首を掴み、強引に引き寄せてしまった。

ホント……最低だ。ははっ、今度こそ本当に嫌われたかもな……。

でも、言っている事は本当の事。俺は逃げる気なんてなかった……だから、

「お前ばっかり戦う必要なんてねえんだよ。それに問題はお前やアルファ隊、そしたサヴィエトだけのモノじゃねえ。標的にされている俺だって、十分関係しているじゃねえか。だったら俺も戦う。黙って捕まるのを待つくらいなら俺は戦う。それを止めようとしてんじゃねえよ！」

「で、でも拙者は――けーすけ様に……か、かかわって欲しくなくて……っ」

えっ？　と思って、俺は暮葉を優しく少しだけ引き離した。
泣いている……のか？
元々雨のせいでずぶ濡れの暮葉であったが、不自然に瞳から何かが流れている……ような気がするんだけど……それは雨粒なのか、それとも涙なのか……？

「せっしゃは……けーすけ様に……っく、死んじゃ……嫌なのですっ」

いや、後者だろう。暮葉の声が掠れてきたような気がする。じゃあ、暮葉は……。
……最低だ。
俺って本当に最低だ。散々心配させた挙句、怒鳴りつけて女の子を泣かすって……。
ああもう……ホントに最低だ。暮葉は今までこんなヤツを心配していたのか。こんなヤツの為に魔法使いを沢山倒してきたのか。こんなヤツの為に泣いているのか……。
なんだろう……ハハッ、熱くなりすぎてたのかな。勢い余ってブレーキが効かなくなっていたんだろうかな。とにかくもう少し――冷静になったほうがいいよな。

「ごめん、暮葉」

ぽん、と、暮葉の頭に優しく手を置いて、撫でてやった。
わしゃわしゃと、撫でる度に暮葉の髪のいい感触。そして甘く、気を付けないと引き込まれてしまいそうな女の子の匂いが、全身に伝わってきた。暮葉は目に涙を溜めながら、うるうると上目遣いで俺を見上げてきた。う、ぐ、え……何これ、呼吸が止まりそうなくらいドクドキしてるんだが。

「けーすけ様……死んだり捕まったり……しない、ですよね……っ？」

「絶対死なない、捕まったりもしない。約束するから……お前にも約束して欲しい」

「……っ？」

「お前も一人で戦場に飛び込むな。俺だって……お前が死ぬんじゃないかって、すごい心配してんだからさ……」

言うのに物凄く緊張した言葉。

だけど言っちまった……なんだこれ、体育館のステージで全校生徒に向けて、スピーチするより恥ずかしかったかもしれねえ。おまけになんなんだよ俺……心拍数が妙に上がって、なんだか顔も熱くなってきたような気がして……クソッ、これじゃまるでアレじゃねえか。

薄々そうかもしれないと思っていたけど……まさか、ソレは本当なのか？

「ねぇ……けーすけ様っ」

ぐいっ、と暮葉がしがみつき、力の入っていない手で俺の袖を握ってきた。暮葉の顔が俺の胸に埋まってきた。暮葉の身体が俺の身体に密着している。柔らかい……しかも、男からは絶対にしない極上のいい匂い。俺が……そんな匂いに反応しないわけがない。

「お、おぅ」

「その、これからは……っ」

「お前とは……友達だろっ。楽しい時だけじゃねえ、辛い時も一緒だ」

友達って言うのに何故か抵抗があった。友達じゃ嫌なのかよ……暮葉とは。それなのに俺は暮葉の事が嫌いじゃない。むしろ……。

……はぁ、なんだよ。結局ソレかよ。

散々悩んでいた俺が馬鹿だった。こんなに簡単な答えに気付かなかっただなんて。

気付いてしまった……やっぱりそうだったんだな。

それだけに――この状況は何となく嬉しいかもしれない。

……しかし、そんな幸せをぶち壊すかのように、

「――ッ！」

一発小さなの何かが、暮葉の太股を貫いた。

第１６７話，気付いてしまったもの（後書き）

今回は諸事情（これ投稿したのが登校寸前）により、後書きトークコーナーはお休みです。申し訳ございません！

第１６８話，それぞれの遭遇

暮葉が撃たれた。

突然の銃声と共に、暮葉の太股に銃弾が当たったらしい。倒れている暮葉の足からドロドロと赤い血が流れてい。暮葉は傷口を手で触れ、出血を抑えようとしていたが、当然そんな所に触れて痛くないわけがない。暮葉は苦しそうに呻き声を発していた。

あまりにも痛々しい光景。ちっくしょう……どっから銃弾が飛んできたんだよ。

「クソッ、出てこい！　暮葉を撃ったのは誰だよ！」

叫ぶと、建物の影から銃を構えた黒ずくめの集団が現れた。あれは……まさか、さっき俺と戦った三原って名前の人の部下か何かか。ミネットの事を狙っていた連中だ。だけど、標的はミネットのハズなのに何で俺達を攻撃……そうか、俺がいるからアイツらは攻撃してきたんだ。

俺も連中のリストに登録されているってわけだ。そのせいで暮葉が……ッ！

「おい、なにやってる。女は標的じゃないだろ？」

「しかし我々の姿は見られた……まだ生きている、殺すべきだろ」

「しかし、女のほうは……」

「三原さんがそれを許すわけがないだろ。ここは戦場だ、躊躇うな！」

男達が会話をし終えた直後――前列の5人が一斉に射撃を開始。
自動小銃（アサルトライフル）から放たれた無数の銃弾が目にも留まらぬ凄まじいスピードで迫ってくる。
まずい、これ以上撃たれたら暮葉は本当に死ぬ。
だったら――、
「う、がぁ――ッ！」
俺は死を覚悟する。暮葉を守るように仁王立ちをした。そして、こちらに飛んできた銃弾全てをこの身で受け止めたのである。暮葉を死なせない為に――俺が盾になってのだ。
俺に当たった銃弾がバラバラと、次々とアスファルトに落下してゆく。意外な事に俺は全ての銃弾を弾いていた。痛みは半端じゃねえけど……それでも、俺は銃弾を弾いていた。まるで歩兵に銃撃されている装甲車のように――。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
連中は銃弾が尽きたのか、それとも無駄だと思ったのか、突然銃撃を中止した。ただ一つだけわかる事は――アイツらみんな怖がっている。
無数の銃弾を身に浴び、何発被弾したかさえ分からない。それでも、俺は倒れるどころか風穴が開いたり身体の一部が吹き飛ぶ事もなく、義経を守る弁慶のように立ち続けていた。
既に身体はボロボロ。服に穴が開いているのは勿論の事、被弾の影響か僅かに皮膚が銃弾に抉り取られたらしく、傷口から鮮血が流れ出していた。真っ白だったカッターシャツも、流れ出す血液のせいで一部が真っ赤に染まっている。だけどよかった……意外と軽傷で済んだぞ。

「ど、どうなってんだ……アイツ、ちゃんと弾当たってたよな？」

「なんでピンピンしてんだよ……バケモノかよっ！」

「７．６２ｍｍ弾が当たって無事なわけ……クソッ、お前アレ持ってこい！」

「はい！」

黒ずくめの一人が、たまたま近くにいたもう一人に何か指示をした。アレが何かはわからねえけどアイツら……俺に銃が効かないからって、何か秘密兵器を出すつもりだぞ。

ソ連製の銃でやや出血する程度の軽傷。だけど……だからってさ、それ以上の武器に耐えられる保証はねえぞ。

重機関銃かグレネードか知らねえが、そんなモノを持って来られたらおしまいだ。

「け、けーすけ……様っ」

「俺は大丈夫だ。お前は喋るな、今は無駄に体力を使うな！」

「だ、大丈夫……ですっ、風の力を利用した回復術式を組み上げました」

「か、回復術式？　それって魔法か？」

「はい……回復が遅いのですが、明日になれば傷跡も目立たなく……ッ！」

「やっぱり無理して喋るな！　せめて傷の回復を待て！」

風を利用した回復魔法って意味不明だけど、とりあえずＦＦに出てくる“いやしの風”と同じモンだと思えばいいのか？

とにかく、今はその魔法の効果に期待するしかない。そして――どんな手段を使ってでもアイツらを食いとめて、暮葉を運んで戦線を離脱しねえと――本当に大ピンチだぞ。

くそっ、だけどどうすりゃいいんだよ。今は睨み合いが続いているが、下手に動けば連中が攻撃してくる事は間違いないだろう。

「アレ持ってきました！」

「よし、これで――殺す！」

「――ッ！？」

アレというヤツを一目見て、思わず呼吸が止まってしまった。

ＲＰＧ－７。

冷戦中にソ連が開発した携帯式対戦車擲弾発射器だ。対戦車兵器かよ……いくら馬鹿みたいに身体が丈夫な俺でも、流石に戦車より防御力が高い自信なんてねえぞ。このままじゃ、運が良かったとしても腹に穴が開く。運が悪けりゃ上半身がぶっ飛んでしまう。

どっちに好んでも俺は死ぬかもしれない。

「へへ、くたばれコラァァァ！」

ＲＰＧ－７を受け取った黒ずくめが叫んだ瞬間――ロケット弾が放たれた。そんなものが目に見えるわけがない。増してやアレは対戦車兵器である。終わった……俺の人生は多分、ここで上半身がぶっ飛ばされるか、腹か胸に穴が開くかのどっちかで終わる、と思ったが――。

轟！　とロケット弾が爆発を起こした。

俺は死んでいない。だが、炎も煙もあるのでロケット弾は何かに命中したらしい。だけどロケット弾は確かに俺を捉えていたのに、一体何に命中したってんだろうか。さらに次の瞬間、ＲＰＧ－７を持った黒ずくめの男の前に影が舞い降りて、その影は着地の寸前に華麗に一回転をする。

打撃音の直後、影が着地したと同時に――黒ずくめの一人が地面に倒れ込んだ。

その他の黒ずくめ達は咄嗟に銃口を影に向け、引き金を引こうとした……が、立ちあがった影は右腕を大きく振るい――激しく燃え盛る灼熱の弾を黒ずくめ達に放った。

着弾と同時に発生した、空間を切り裂くような爆発。

爆風と熱波で黒ずくめ達は吹っ飛び、後列の黒ずくめ達はやや後退りしていた。

俺は一瞬で前列の黒ずくめ達を駆逐した影を見る。やたらと強い影の正体は――、

「あ、明智！？」

「ここは私が引き受けた。だから藤島は木下を連れて逃げて欲しいぞ」

「だけど――」

「いいから！　暮葉は私がおぶってくからさっさと逃げるわよ！」

今度は明智とは対照的に高い声が聞こえた。咄嗟に暮葉のほうを見ると、アスファルトに横たわっていた暮葉を背負っている人の姿

がある。
　負傷した暮葉を背負っていたのは間違いなく――伊吹であった。
「ば、馬鹿野郎っ！　なんでお前までこんな戦場（ところ）にいるんだよ！」
　背後で明智と黒ずくめが戦っているのか、銃声と爆音が轟く中で、俺は心配になって伊吹に向かってそう叫んでいた。超能力が使える明智ならまだしも、伊吹は基本一般人だろ。確かに剣道の腕前は素晴らしいものだけど、それだけで銃を持った黒ずくめ達と戦えるハズがない。
　伊吹が来たって――殺されるだけじゃねえかよ。
　しかし、そんな事を言ったにも拘わらず――伊吹の瞳は希望に満ちていて、
「あんた達を助けに来たに決まってんでしょ！　ほら行くわよばか圭介っ！」
「い、痛っ！　痛いのです伊吹さんっ！」
「ちょっと我慢しなさい！　今すぐ病院まであんたを運ぶからっ！」
　言いながら伊吹はいきなり走り始めた。俺は「おい！」と叫びかけながら、その背中を走って追いかけ始めたのである。時々黒ずくめ達と戦う明智の姿を確認しながら……。
　明智と黒ずくめ達の戦闘は一方的であった。明智は――余裕そうであった。
　それから数分経って、俺と暮葉を背負う伊吹は古宇坂の街を走り続けていた。伊吹曰くどうやら俺達は病院へ向かっているらしい。

救急車なんて呼んでもこないであろう今、被弾した暮葉を病院に運び込もうとしているのである。
しかし、しばらく走り続けていたその時、
「い、伊吹さん……拙者は大丈夫なのですっ」
「な、何言ってんのよ、あんた撃たれたんでしょ？」
「大丈夫なのです……即席の回復術式が効いてきて少し楽になってきたのです」
暮葉のその言葉に、伊吹は眉間にしわを寄せた。
無理もない。伊吹は暮葉が普通じゃないとは知っていても、流石に回復魔法まで使えるとは思っていなかったのだから。
「かいふくじゅつしき……？」
「ああ、コイツは風か何かの力で傷を癒せるらしいんだ」
「そ、そうなの！？」
「はい、その……明日になればほぼ完治出来るのです。ですからその、傷口を洗って出血さえ止めてくれれば明日には完全復活なのです」
その言葉が嘘は本当かは知らないが、暮葉は真剣な顔でそう答えている。おそらく暮葉が回復魔法を使えるというのは事実なんだろう。
こんな状況だ。病院に行っても病院そのものがやっていない可能性がある。だから今はその魔法の効果に期待するしかないだろう。

「なあ伊吹、そこの薬局で包帯でも盗んで応急処置してくれないか？」

「は、はぁ？　なに言ってんのよ……どう考えても病院に行ったほうが――」

「じゃあ、この状況で病院やってると思うのかよ！？」

「そ、それは……」

「信じるしかねえだろ……回復魔法の効果を。魔法使いとしての暮葉を」

それに今なら信じられるかもしれない。あれほど苦しがっていた暮葉も、今では大人しくなって大分楽そうにしている気がする。衰弱してぐったりしているわけではなく、本当に傷が治ってきたのか痛みが引いて、楽になったような顔をしていた。

暮葉の回復魔法はどうやら――本物らしい。

「わ、わかったわ……それであんたはどうすんのよ？」

「俺は風剣のシルフってヤツを止めに行く」

「そ、それこそダメなのです！　けーすけ様、下手したら死んじゃいますよ！」

俺の言葉に暮葉が反応し、俺の行動を止めようと必死に叫んでいた。風剣のシルフとは一度会っているから何となくわかってるよ、アイツが危険なヤツだって。しかも俺と会った時はまだ本気を出し

ていなかったっぽいし、だから心配してくれるのは本当にありがたい――。

でも、それだけで立ち止まる理由にはならない。

俺は戦場に行かなければならないんだ――。

「死なねえよ！　大体、お前がそんな状態の今、誰がアイツを止めるんだよ！」

「な、仲間のアルファ隊の人が……っ」

「その味方が来る保証あんのかよ。それに俺は一度ヤツと会っている。俺はヤツを力をなんとなく知っているんだ。その上でヤツの所に行くっつってんだよ」

そう、俺はヤツの力を知っている。

その上での決意なんだ。死ぬかもしれない覚悟は既に出来ている。

問題は今、ソイツを止められるヤツが――俺しかいねえって事なんだ。

「……わかりました、けーすけ様の頑丈さに賭けてみるのです」

「ああ、アイツの事は俺に任せてくれ」

「あんた！　何が何だかサッパリだけど死ぬんじゃないわよ！」

「絶対死なねえ！　だからてめえらも死ぬんじゃねえぞ！」

今の俺にはそれしか言えない。とにかく、さっさと騒動を終わらせよう。明日から普通の高校生活に戻れるかは知らねえけど、出来れば戻ってみんなと楽しくやっていきたい。

暮葉とも……もうちょっと仲良くなりたい……かな。まあ、それを実現する為にはさっさと風剣のシルフってヤツを倒さなきゃな。だけど俺には魔力感知なんてできねえし、アイツが何処で誰を襲っているかなんてサッパリわからねえ――。

「――っ？」

その時、轟々という爆音が炸裂した。

……この音、海浜公園のほうから聞こえてきたぞ。しかも、その海浜公園のほうを見てみると眩い閃光で夜空が照らされていた。

……あそこかな。とりあえず行ってみよう――あそこにヤツがいるかもしれねえ！

……それから数十分後、俺はようやく爆心地に到着した。ちくしょう……ずっと走っていた上に怪我もしているせいか、大分疲れてきたけど……まだまだ休めねえな。何故なら、爆心地には倒れ込んだ自衛隊の人達を踏みつける――風剣のシルフの姿があったからだ。

「あ～ら？　アンタぁまさか殺されにきちゃったわけ？」

「てめえ……その人から足を退けろよ！」

「私を苦しめる元凶を調べていたんだけど、どうやらコイツらじゃなさそうね」

「ふざけんじゃねえよ。いいから足を退けろっつってんだよ！」

すると、シルフはようやく足を退けた――瞬間、足で自衛官を蹴

り飛ばし、夜の東京湾の奥底に沈めやがったのだ。

「てめえ！」

自衛官を助けようと、俺は衝動的に飛び出しそうになったが――。
その行動はシルフによって阻止されてしまった。
シルフが俺の前に立ちふさがったのである。
コイツ……平然と人をブッ殺しやがった。それで笑ってやがる……ッ！

「はっは！　あんた、自分の身の心配をしたほうがいいんじゃないの？」

「うるせえよ……血も涙もねえヤツにだけは言われたくねえ」

「ハッ！　折角アンタは後回しにしようと思ったのに。態々殺されに来るとは……」

言いながら、シルフは背中に背負っていた大剣を握り、それを振り回す。ガチャガチャという金属音と風を切り裂く音が響き渡り、シルフは高級そうな大剣を構えて、

「いいわぁ！　じゃあアンタからぶっ殺してあげるわよ！」

「そう簡単に死んでたまるかよ……今からお前をぶっ倒す。てめえの目論みはたった今ここでぶち壊してやる！」

こうして俺と風剣のシルフは遭遇し、向き合ったのだ。
さて……みんなの為にも、暮葉のためにも――精々死なねえように頑張らねえとな！

ここは古宇坂北部、市境にある使われなくなったオフィス。
ここの8階に俺――三原寅彦は5人の部下を率いて、外を眺めていた。こんな地方都市には初めて来たモンだが、案外東京より騒がしいモンだな。なんでも俺達以外のクソ野郎共が街の中で騒いでいるらしいのだ。全くどこのクソ野郎なんだか……ま、それは好都合な話だ。
これだけ混乱していると、俺達の行動はばれ辛い。つまりだな……警察に大した睨まれる事もなく作戦を遂行出来るってワケだ。
特異点もしっかり捕獲したしなぁ。

「ミネット・ローラン。コイツが最強の超能力者を生み出す鍵になるかもしれねえ」

呟きながら、俺は捕えた特異点が寝ている台へと近づいた。東京の研究施設に戻るってのも手の一つであったが、その途中に襲撃されちゃあお終いだ。なら話は簡単でよぉ、実験セットを仲間に持ってきてもらうとして、この廃墟で実験を行えばいい。
なぁに、バレたりはしねえだろう。このあたりは人口が少ないんだよ。その上今は警報発令中との事で殆どの市民は市外だ。いるのは精々治安維持の為に出動した警察や自衛隊程度。その主戦力も今や市内南部に動いているらしいしなぁ。

「ハハッ！　何から何まで思い通りだぁ！　見てなぁ学園長。ここで俺が実験に成功すりゃあ早川なんざ目じゃねえ魔道能力者の完成だ。科学と魔法の融合……ハッハハハ！　いいなソレ俺も小せえ頃そういうの夢に思っていたよ！　それが現実のモンになるんだからなぁ！　なぁてめえら……あ？」

なんだ、俺の部下が全員窓の外を眺めて唖然としてやがる。そんなに外でおかしいモンでもあるってのかよ。まあいい、そんなに面白いモノなら俺も見てやろうじゃねえか――。

……しかし、それは全く面白くねえ――邪魔くさいだけのものであった。

ガッシャァァァッ！　空を飛んできた早川悠が――窓を蹴り破ってきやがった。

あの野郎ォ……どうしてここがわかったんだ。だが、それだけだ。確かに邪魔くさいヤツが来た事には変わりねえが、所詮早川は早川だ。俺以外には倒せねえが……俺からしてみればこのクソガキも所詮はガキんちょ同然。軽く捻ってやれば無問題だ。

そんな早川は窓の近くにいたヤツの一人を蹴り飛ばし、豪快に床に着地した。

ゆっくりと起きあがり、その赤い瞳で俺を捉えると、

「三ィィィ原くゥゥゥゥゥゥゥゥゥン！！」

狂った笑みを浮かべ、持っていた散弾銃の引き金を引きやがった。まずいな……俺は咄嗟に目の前にいたヤツの背中を叩き――ソイツに犠牲になってもらった。

被弾したヤツは血飛沫を噴き、そのままゆっくり床へ倒れていく。そんな中、俺はふざけた笑顔を見せる早川悠に対して、

「お～ら、どこ目ぇ付けてんだテメェ？　銃弾撒き散らしてんじゃねえぞ！」

ガチャ、と俺の部下は銃口を早川に向ける。しかし早川は動じず、

風の操作でぐわんっと一気に部下に接近し、手榴弾のピンを全て抜き、そのまま腹を蹴りやがった。巻き込まれた2人を道連れに三人は大胆に爆発しやがった。ったく……使えねえ盾だ。

最後の一人はそんな早川にビビったのか、特異点を左腕に抱えて、

「ひ、ひぃ！」

だが、そんなクソ野郎の些細な抵抗など無意味であった。銃を構えていたソイツや早川悠にぶん殴られたのである。それも早川悠が持っていた散弾銃でな。

ソイツの生死はどうでもいいが、いいのかぁ早川悠。今の攻撃でテメェが今まで愛用してきた散弾銃がぶっ壊れちまったぞ。カッコよく特異点をお姫様抱っこしやがって……そんな余裕がテメェにあると思ったら大間違いだぜ。ったく～ムカつくから挑発してやろぉか。

「ぎゃっははは！　カッコいい～ヒーロ早川ちゃんのご登場だなぁ！」

早川は俺の言葉など気にもせず、特異点を台に置いた後、鬼のような怖い顔を浮かべて俺のほうを向いてきやがった。チッ、面白くねえ……折角ネタ飛ばしたんだから反応しろよ。

唯一の反応が殺意って、ただこっちがムカつくだけだっつーの。

「さァて、スクラップの時間だぜェ！　クソ野郎がァあああッ！」

さて、と……じゃあ目の前の早川悠（バカ）を殺す作業に入るとするかぁ。

第１６８話，それぞれの遭遇（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「おい作者」

作者「はい？」

圭介「正直に言え、今回〇〇くぅぅぅぅぅぅン！　ってのがやりたかっただけだろ」

作者「いやぁ～最近起きてられなくて、更新遅れ気味でごめんなさ――」

圭介「話題変えるなよっ！？　正直に答えろ！」

作者「そういえばすきやきってさ――」

圭介「作者ァァァァァ！」

※色々ごめんなさい。

第１６９話，実験

制限時間は残り６０秒。

クソッ、雑魚共を片付けるのに能力を使い過ぎた。まあいい……６０秒もあれば油断しなけりゃ余裕で殺せる。問題はここが屋内だって事と、そこにミネットがいるって事だ。こんな状況じゃ大技は使えねェだろう。使ったとしても笛で発動を強制停止させられンのが関の山。

なら三原に近付いて、オレの右手でヤツの口元を掴んで、そのまま能力で酸素でも弄ってヤツを酸欠状態してやる。酸素濃度を６％未満にしてやれば人間は簡単に死ぬ。

とにかく、三原を殺せば全ては終わる。あの野郎さえ殺してしまえば……。

だからオレは三原を殺す。とにかくあの野郎を殺す事だけを考える。どうせオレはもう光の道に帰る事は出来ねェ。今更引き返す事なんて出来ねェ。

なら三原と一緒に堕ちてやるよ……地獄でも大地獄でも何処にでもなァ！

「……ッ！」

ダッ！　と、オレは一瞬で三原の懐に飛び込んだ。風の操作で加速し、風の力でオレの身体を前へ動かしたのである。ぐわっと五本の指を開き、三原の顔面を掴もうとした。指一本でも三原に触れる事で出来たならオレの勝ちだ。皮膚さえ触れれば酸素濃度を操作出来る。

地味な戦い方だが、それでも十分三原を殺せる……だが。

三原は首を振っただけで一撃を軽く避けやがった。

凄まじい勢いで突き出したオレの右手が空振りする。瞬間、三原

のクロスカウンターがオレの顔面に突き刺さりやがった。暴風の膜の僅かな弱点を突き、風が循環する僅かな一点を突く三原の左拳は容赦なくオレの鼻っ柱に激突する。

「ァ……ッ！」

流石に拳一発で意識を失うことはない。三原はそこまで強くは無い。所詮は地下でずっと研究をしていた引きこもりだからだ。怖いのは三原が使う不思議な術だ。オレへの対抗策は腕力は低くとも素早い三原にピッタリで、一発に重みはないながら確実にオレにダメージを与えている。

鼻への一撃でぶっ飛ばされたオレは、三原の数メートルで着地。そのまま走って五本に開いた指を突き出して、再びソレで三原の顔面を掴もうとする。

だが、その一撃も軽々と避けられた。

三原は軽く後ろへ身を退けただけだった。たったそれだけ。でも、オレの渾身の一撃は軽々と避けられてしまったのだ。

「相変わらず進歩のねえクソガキだな、テメェはよぉ！」

三原の叫び声と共に、ゴンと言う激しい衝撃がオレに伝わってきた。脳が揺さぶられて一瞬能力が暴走するかと思った。クソッ、腕力のねえ三原にしては力の入った一撃であった。

それでもオレは倒れなかった。辛うじて着地に成功し、そのまま立ち続けたのだ。

「お～らどうしたぁ早川悠？　テメェの助けたいガキんちょはここにいんぜ？　俺を殺してみろよ、そうすりゃあの特異点は助かるんだろ？」

「クソッタレェ……ッ！」

余裕そうなツラしやがって……そのツラ潰したくなってきやがったぜ。そう思ったオレは再び一瞬で間合いを詰めて、三原のクソ野郎を鷲掴みしようと手を振った。

それでも――オレの手は触れる事さえなかった。

オレが攻撃すれば三原は必ず避け、逆にオレは三原の攻撃を避けられない。頼りの暴風の膜は三原には全く通用しねェ。オレは何回でも左右の手を振りまくったが、一瞬たりともオレの手が三原の顔面に触れる事はなかった。三原はちょこまかと攻撃を避けまくるのだ。

クソッタレが……あと２０秒で魔力が枯渇する。魔力エネルギー変換機のご加護がなけりゃあ能力を使うどころか、この足で立つ事さえできなくなっちまう。

クソ……三原ごときで立ち止まってる場合じゃねえ。このままじゃ……ミネットを助ける事なんざできやしねェぞ……クソッタレェ！

「遅ぇんだよぉテメェ！」

「ぐ――が、ァあ……ッ！」

三原が叫んだ瞬間、高く上がった三原の足がオレの首筋に激突する。コイツ、こんな大振りな技でも暴風の膜を潜り抜ける事で出来ンのかよ。今ので首が折れそうになった。衝撃で吹き飛ばされたオレは凄まじ勢いで、ミネットが寝ている事務机に激突したのだ。

さっきから連続で喰らっていた攻撃。そしてトドメの一撃。

オレの身体はもうボロボロだ。黙っているだけで血が体内から込み上げてくる。今にも鮮血を吐きだしちまいそうだ。だが……まだ諦めるわけにはいかねェ。オレの目の前に、まだクッソムカつく不良中年が嫌なツラを見せてやがるンだからなァ。

オレは事務机に手を乗っけ、己の腕力を使ってふらふらと立ち上がる。

「三ィ原ァ……ブチ…殺すッ！」

「殺れるモンなら殺ってみろ。最も、テメェの実力で可能ならな」

ふざけんじゃねえよ……今更学園がなんで特異点を求めるんだ。散々厄介だと思ってブッ殺しまくっていた特異点を。危険じゃないと判断されて放置していた特異点を。どうして今更捕まえて何かに利用しようとしてやがンだよ。これ以上特異点が地獄を見る必要があンのかよ。

もうあのガキ、そして特異点を不幸にはさせねェ。これ以上、闇の世界の為に犠牲になる事なんざ神が許してもオレが許さねェ。オレが人の事を言えねェってのは分かってる。だけど今はそンな事を気にしている場合じゃねェ。

大切なのは気持ちってモンだろ……今のオレはあのガキを守りたい。

そう思ってンだよ。

だから、その為には三原は邪魔だ――悪ィがオレと一緒に地獄へ来てもらうぜェ！

「が、ァ――ァ――ッ！」

風の操作を行い、オレは飛び上がった。正面がダメなら上からだ。上から三原を襲えば三原は当然オレの攻撃を避ける。そこに僅かな隙が生まれるハズだ。なら、その隙を突いて一瞬でもいいから三原の皮膚に触れるンだ。それで三原を殺せる。

成功率は２０％くらい……だが、賭けるしかねェよ。今更どうしろってンだ、残りの魔力残量から多分この一撃がラストチャンスだ。

これで三原を殺せなかったらオレが殺される。
頼むぜ幸運（ラッキー）。オレに少しでいいからチャンスをくれ――ッ！

「おおおォあァあああああ――ッ！」

くたばれェ――三原ァ！
……しかし、現実と言うものは上手くいくものではない。それは、一般人だけの話かと思えばオレにも当てはまる残酷な事実であった。
小さな電子音が聞こえた。
その音が示す意味――それは魔力切れ。
魔力エネルギー変換機に蓄積されていた全魔力が、完全に無くなってのである。その時点で超能力を使う為に必要な演算能力を失った。こうしてオレは完全に戦闘能力を失ったのだ。
ガクン、と。いきなり力を失ったオレは――埃だらけの床に崩れ落ちてしまった。

「ふ、はっははははははははははは！」

「……ぁ……ぁぁ……ッ」

絶望。
絶望と言うモノをオレは味わっていた。
守れなかった……オレはミネットを守る事が出来なかった。情けねェ事に助ける前にオレが力尽きてしまったのである。三原はゆっくりと俺から離れ、ミネットへ近づいて行く。

「血だらけな上に能力使用不能か。どうせ自分の力じゃ歩けねェだろうし、放っておいてもうぜェだけで害はナシかな？　そんじゃ、今から本当の絶望でも味わってもらおう……実験開始だ」

クソッタレ、情けねェ……オレは超能力がなかったら戦うどころか、自分の力で歩く事さえ出来ねェのかよ。以前のオレならまだ戦えたかもしれねェ。そこに最初に蹴り飛ばした、黒ずくめの三原中隊（ニー）の隊員が寝ている。ソイツの武器は無傷だ。

以前のオレならその武器を手にし、多少は走れたから三原（カンパ）と戦えたかもしれねェ。

だが、今の……身障者のオレには無理だ。杖がなければ歩けない。頭がぼんやりしていて小難しい事を考えるのが以前より苦手になっている。

こんな状態じゃあ……戦うどころか日常生活すら送れねえ。クソッタレ、他の奴らは超能力を使わなくたって戦えるのに。俺をぶん殴った圭介（アイツ）は能力を一度も使ってねェ。

そもそもそんなモノを使えない——ただの一般人だった。

あんなヤツでもオレを倒せたってのに……その一方でオレは……ッ。

「ほら小僧よく見てろ！　今からテメェが守りたがっていた特異点を解剖してやる。生きたまま手始めに頭蓋骨でも切り裂いて脳でも見物するかぁ。魔法使いの脳ってのがどうなってるか前々から興味あったんだよなぁ……」

ふざ……けンじゃ……ねェ……ぞ、クソ野郎ォが……。

ソイツは実験動物（モルモット）じゃねェ……ンだよ。

近づくな。そのガキに汚ェ手で触れてンじゃねェよ……コンのスクラップ野郎ォ。

一瞬消えかけていた戦意。しかし、三原の発言で再び燃えてきたような気がした。

そして……拳に次第に力が入り——次第に理性がなくなっていくような気がした——。

第１７０話，風剣のシルフ

「あはっ！」

夜の海浜公園。大剣を持った風剣のシルフが真正面から突っ込んできた。動きは俊敏だが決して目に見えない程速いわけではない。俺は向かってくるシルフに合わせて目に見えない程速いわけではない。気に走り始めた。拳がシルフに命中する――と思った。

瞬間、突然目の前からシルフが消えた。

ヒュッ、と拳が空しく空振りする。右にも左にもいなければ、一瞬で背後に回り込んだわけでもないらしい。そこでふと、俺は上を見た。

シルフは空にいた。それも５メートルも一気に飛び上がったようである。彼女にそこまで凄い身体能力があるとは思えないし、おそらくは風の魔法の一種なんだろう。そして、シルフは着地しようと落下してきたが、そこで――シルフの右足が俺の顔面に突き刺さった。

「ぁぅ……ッ！」

５メートルの飛び蹴りは強烈だ。鼻の骨が砕けるかと思ったほどである。衝撃で殆ど無理やり地面に押し倒された俺は、なんとか痛みを我慢して起きあがる。が……その時、既にシルフは大剣を振りまわし次の攻撃に移っていた。彼女は大きく振り回した大剣を地面にグサリと突き刺す。

瞬間、局地的な暴風が発生した。

凶器と化した風が容赦なく俺に吹きつけてくる。立ち上がった俺は、凄まじい暴風の前に再び押し倒されそうになるが、ズルズルと後ろへ押されながらも、必死に立ち続ける。

「ふっ！」

俺が強風で動けない事を確認したのか、シルフはがむしゃらに大剣を振った。

放たれた3発の風の砲弾。

パトカーさえ簡単に破壊する砲弾を喰らえば、俺の場合は死にはしないが、それでもかなりのダメージを受けるだろう。このまま暴風に耐えていてはいつまで経っても形成は不利。そう思った俺は咄嗟に右へ跳躍し、まずは一発面を回避。

しかし、そのせいで風に飛ばされた挙句――二発の砲弾が俺のすぐ近くに着弾した。

「う、あ――ッ！」

地面に倒れた俺に細かく砕かれ、鋭利な石が容赦なく襲い掛かってくる。ズシャっと飛んできた石の中の何個かが俺の皮膚を切刻んだ。切り傷からは真っ赤な血が流れ出す。

しかし同時に――シルフも口から血の塊を吐きだしていた。

「げっほ！　ごほ、げほ！　クソ、かなり出力が低下している……攻撃に威力がない！」

「……はっ、随分弱ってるみてえだな」

「何処の誰か知らないけど、嫌な術式を組み上げたモンだわ。特定の魔力を持つ者を圧迫する魔女殺し……チッ、ホントにどこの誰が組み上げたのよ！」

確かに、どこの誰がそんなものを組み上げたんだろうか。しかし、

その魔法のおかげでシルフはかなり弱っている。だから俺でもギリギリ戦えている。何処の誰かは知らないが、間接的に俺を助けてくれて本当にありがとう。その魔法を組み上げた努力は――決して無駄にしない！

「お、おォァあぁぁぁあっ！」

今度は俺がシルフの懐に飛び込もうとした。シルフも俺に合わせ、体格に合っていない大剣を持って間合いを詰めてきた。再び俺とシルフが接近する。俺は再び拳を握って、ソレをシルフの顔面に叩きつけようとしたが、またしてもシルフは飛び上がった拳を回避する。

咄嗟に俺は上を見ると、シルフはそれほど高くは飛び上がっていなかった。すぐに俺の背後へ着地すると、大剣を大きく振り回した。決してそれで俺を斬るわけではなく、振られた大剣から突然大きな竜巻が生まれ、俺の身体を何メートルも高く突き上げる。

吹き飛ばされた俺は着地なんて出来るハズもなく、子供に投げつけられたおもちゃのように近くにあった建物の壁に激突。ズルズルと、３メートルほど下にあった地面に落ちていった。

「ホントそういうのは嫌いだわ！　いつもいつも私ばっかりこんな目に遭わせて、私をこんな風に変えやがって、これだから現実ってのは嫌いなのよ！」

何を言っているのは訳がわからない一方的な罵声。すると、大剣を振りまわしたシルフが風の鈍器を作り出し、大剣を振ってソレを激しく投げつけてきやがった。咄嗟にゴロゴロと、身を転がす事によってその一撃を回避した。が……ふと後ろを見ると、建物には大きな穴が開いていた。

こりゃあまずい……あんなの喰らってたら、俺でも病院送りになるかもしれない。

「く、そぉ……っ」

「ホンットしつこいわねアンタ。いい加減うざくなってきたんですけどぉ？」

「うるせえ……てめえみてえな外道女に、負けるかっつってんだよ」

「ふん、私をこんな風にしたのは誰だと思ってんのよ？」

「そんなモン知るかよ。だからって無差別に攻撃してんじゃねえよ！」

「あ～ら？　私はこれでも標的は選んで攻撃してるわ。そこの軍服の人達も、私の前に立ちふさがったから攻撃したのよ。自分の身を守る為に戦う事の何が悪いワケェ！？」

シルフは大剣を振りまわし、それを地面へ叩きつけようとした……が、刃が地面に突き刺さる寸前でシルフの動きが停止した。シルフは左を向いて、何かに釘付けになっていたのだ。

俺も恐る恐るシルフと同じ方向を見る。

そこには、何処かの民族衣装に身を包んだ、背の高い金髪の女の子が佇んでいた。

なんだアレ、十字架っぽいけど……なんか変な形だな。それよりアイツは何者だ？

「間に合いました、とリーリヤは状況報告します」

「リーリヤ？　はっ、アンタがアルファ隊ってヤツの隊長ってワケねぇ」

シルフが言ったその言葉。隊長？　アルファ隊の隊長って事は……あの人、暮葉の上司さんって事になるのか。だけど、隊長さん自らが戦場に来るって……一体何の用なんだろうか？

「風剣のシルフ、気分はどうですか？　とリーリヤは問います」

「気分？　そうか……アンタなのね、変な術式を組み上げた術者は！」

「いかにも、とリーリヤは答えます」

「チッ、イおかげでこんなガキ一人さえ、満足に押さえつけられないじゃない！」

「満足な状態でも、藤島様を倒す事は不可能……とリーリヤは推測してみます」

どこかで似たような感じのを聞いた事があるな、リーリヤって人の口調。まあそれはどうでもいい話なんだけど、シルフを弱らせていたのはあの人だったんだな。そうか、通りで急にシルフが弱体化したと思ったよ。お陰でなんとかシルフと戦えている、なんともありがたい。

「いちいち癇に障るわね……この野郎ォがあァァああっ！」

風剣のシルフは大剣を振りまわし、リーリヤに向かって風の砲弾を放つ。

その数なんと5発。それも目で追うのがやっとの速度。速い上に強力、そんな5発の風の砲弾が容赦なくリーリヤに襲い掛かる。

が、リーリヤは手に持っていた飾りだらけの杖を振りまわす。カキン、という音が炸裂したと同時に風の砲弾は砕け散った。同じ事を何度も繰り返し、5発の砲弾は完全に消滅する。

「な、ば……うそ……っ？」

あまりの荒技に――シルフは口と目を大きく開けていた。

それだけではない。僅かに身が震えているような気もする。怖がっている……シルフは突然現れた謎の強者――リーリヤを恐れていやがる。

そのリーリヤは表情一つ変えず、冷たい視線でシルフの事を睨み続けている。

「一つ警告しておきます。リーリヤは正教会から聖人として認定されました。その実力は一般の魔法使いを遥かに上回る事を……忘れないで欲しいのです、とリーリヤは貴方に警告します」

聖人って……ホントにいたんだ。二次元だけの話だと思っていたけど。それにしてもあのシルフが赤ん坊扱いとは、アルファ隊の隊長……恐るべし。

しかし、圧倒的な力を見せつけられてもシルフは戦意を失わず、むしろ、

「……ナメられたモンね。腹が立つわ！」

むしろ戦意が高揚していた。

大剣を構え、今にもリーリヤに斬りかかりそうな勢いだ。

それでもリーリヤは余裕なのか、一言も喋らず表情すらも変えていない。ただ、じっとシルフの事を生ゴミを見る目で見ていたのだ。

このまま行けばシルフはリーリヤに倒される。それでこの騒動は

終わるだろう、だけど本当にそれでいいんだろうか。少なくともその方法だと――俺の怒りは収まらねえ。

散々この世界の人を痛めつけたんだ。だったら、やっぱりシルフはこの世界の人間が倒すべきだと思うんだ。そして、この世界の人間で戦えるのは――この場には俺一人。

だから、俺は咄嗟にシルフの前に立ち塞がり、

「あ？　アンタ何のつもりよ？」

「何のつもりよじゃねえよ。勝手に目標変えてんじゃねえ、てめえの相手は俺だ！」

「雑魚に構ってる余裕なんてないわ！　アンタは後回しだからそこ退きなさい！」

「だったら、その雑魚を一瞬で倒してみろよ。てめえの力なら簡単なんだろ？」

「……そうよ、簡単よ！　アンタみたいな雑魚余裕なんでとケドォ！？」

「だったら、この人と戦う前に俺と戦え。こっちもいい加減ストレス溜まってんだよ！」

俺がこの世界の代表として――風剣のシルフをぶっ倒す。

大体暮葉と約束したじゃねえか。俺がシルフをぶっ倒すって。その約束を……俺は守って暮葉の所に帰りたいんだ。だからシルフだけはリーリヤに譲れない。

シルフを倒すのは――俺だ！

「命知らずのおバカさん。いいわぁ、じゃアンタから殺してあげるわよっ！」

「馬鹿はお互い様だろ……今からお前をぶっ倒す。殴られる覚悟でもしとけよ！」

こうして――本当の戦いは始まったのである。

第１７０話，風剣のシルフ（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「実はシルフって小物なんじゃね？」

重原「ありえるね。段々ボロが出てきた気がするよ」

大吾「僕でも倒せたりして！」

重原「大吾に倒せるなら俺だって余裕だね」

圭介「てめえらいくらなんでも馬鹿にし過ぎだろ」

※シルフは単独で軍隊を壊滅させる事ができます。

番外話，切ない片想い（前書き）

どうも、今回は人気投票で1位に輝いた伊吹の番外話です！
9月中に投稿すると言っときながら10月になってしまった挙句、本編は絶賛戦闘中なのに空気の読めないタイミングでの投稿になって申し訳ないです。

番外話，切ない片想い

私には男の子の幼馴染がいる。
幼稚園の時に家が隣になって、ソイツの妹と3人で一緒に遊んでくれたり、悩みなんかもしょっちゅう聞いてくれた。馬鹿で変態だけど優しくてたまにカッコよくて、何故か頼れる……。
そんな、幼稚園も小学校も――今の中学校も一緒の腐れ縁が私にはいる。
だけど、一見人気のありそうな人柄のソイツは――何故か浮いた存在になっていた。
それは私のせいでもあるんだけど。そう、私なんかの為にアイツは友達を失った。私をあんな奴らから助けようとするから、皆から怖がられ次第に孤独になっていった。アイツが私や亜紀と友達である事を除いては一人ぼっちなのも、小さい頃みたいに私を助けようとしたから……。

「はぁ……」

ソイツ――藤島圭介はため息をつきながら、鞄を持って自分の席から立ち上がる。何故かその時だけクラス中が静まり返った。
圭介はクラスでは……番長をぶっ飛ばした不良扱いになっている。アイツもアイツで誤解を解く為に努力すればいいのに、アイツはいつもいつも……。

「なによあんた、帰るの？」

私は不機嫌そうに彼――圭介に訊いた。私も最低よ……わかってんのよ、全部私が悪くてコイツが悪くない事くらい。私が人に手厳しく接するのは、自分の身を守る為だって事くらい。だけど仲のよ

かったコイツに当たる事はないのに……でも、今更昔に戻る事も出来ない。
　ホント……私は最低だ。そんな最低な私に対して圭介は、
「いいだろ別に。出席日数足りてんだから……学校面白くねえんだよ」
　投げやりな感じでそう答えた。真面目に過ごせば誤解は解けたかもしれない。だけど圭介はあの一件以来ずっとこんな感じで、何事にもやる気を出さず、その上だるいと言って学校を早退したら近所の不良と喧嘩をしたり……。
　いつの間にか、圭介は不良のような事をやっていた……。
「……ふん、勝手にすればいいじゃない」
「そんじゃお先に行かせてもらうよ。ノートよろしくな」
「あんたの為にとるノートなんかないわよ」
「へいへい、それじゃもうホントに行くからな」
　そう言って、圭介は鞄を持って教室から堂々と出ていってしまった。まだ、二時間目と三時間目の間だと言うのに……ホント、圭介はいつからあんな風に……。
　って、私も人の事言えない立場よね……変わったのは私も一緒。以前の自分に戻れなくなってしまったのは私もアイツも同じ。そして……アイツが変わってしまったのも私のせい。私が変わってしまったのは自業自得。ホント、私って最低だわ……。
「うっひゃー！　今日もヤンキー藤島怖ぇ～っ！」

「しかも、幼馴染の国宗さん放置とかひでえよなぁ」

「なんであんな奴がクラス一緒なのかしら」

「ホントホント、授業はサボるは喧嘩はするわ……最低男ね」

「つか、国宗も国宗だ。あんなのに構う必要ねえのに優しすぎるだろ……」

ホント……最低だわ。聞いてイライラするわ……最低なのは私よ。そんな事情も知らずに勝手にアイツの悪口言うんじゃないわよ。

……と、私が一人イライラしていた――、

「おっす伊吹っ！」

その時、肩にぽんっと手を置かれ、元気そうな声で名前を呼ばれた。

振り返ると、私を呼んだのは親友の小坂亜紀だった――。

「あ、亜紀っ」

「あれー圭くんは？　今朝はいたんだけどなぁ」

「……アイツならさっき帰ったわよ」

「ふ～ん、大好きな幼馴染がいなくて寂しい伊吹ちゃんであったっ」

「……ッ！？　ばばば、ばかぁっ！　ないない、寂しくなんかない！　あんなヤツ居ても居なくても全然変わらないからっ！」

いきなり何言いだすのよ亜紀、別に私は圭介なんて……その、そうよ。単なる腐れ縁だから居ないとちょ～っとだけ寂しく感じるだけよ……って、あれ？

……ダメダメ、私は強くならなきゃいけない。

今までの弱い私は捨てなきゃいけない。だから……そんな事を言っちゃいけないっ。

「冗談冗談♪　でもそこまで必死に否定されると、本当にそうだと言ってるように聞こえるよ」

「ないから！　絶対そんなことないからっ！」

「にゃはは、じゃあそういう事にしておこっか♪」

「どういう意味よっ！　亜紀のばかっ！」

「はいはい、それじゃあ学校終わったら圭くんの家に行くとしようか？」

「な、ば――っ！？　なに……言ってんのよっ？」

いいい、いきなり何なのよ亜紀はっ！　いつもいつも……そんなにその、私の圭介のことでいじってこ面白いの？　別に私はそんなんじゃないのに……そういうのはいらないのに。

強い子になる為には――捨てなきゃいけないのに。

今更素直になれないのに……。

「はいはいとりあえず決定ねっ。今日の圭くん特別不機嫌そうだったから、伊吹の顔でも見たら少しは元気出るんじゃないかな？」

「で、でも……っ」

「いいじゃん。それともあたし一人で行こうかな？　ついでに圭くん襲って彼氏にし――」

「い、1分だけよっ！」

「あははは……やっぱり伊吹は圭くんが好きなのであった」

「だ、だから違うっ！」

ダメダメだわ……亜紀には絶対に勝てないわ。なんでだろう、亜紀……人のことからかうの絶対好きでしょ。人をいじるの上手すぎるよ。つい本音がぽろって出そうに……。

って何言ってんのよ。言葉にしている事が本音、それ以外には何もないから……っ。

それから午前・午後の授業を終え、放課後になり部活に励む人は励み、これから用事がある人や特にやる事のない人は次々と下校していく。私だってあの一件以降、剣道をやり始めたんだけど今日は稽古の予定がない。結局、私も亜紀と一緒に圭介の家に行くことになった。

圭介の家は私の家の隣だけど……入るのは久々かな。そういえば、圭介はともかく葵ちゃんは元気にしているかな。毎朝会ってるけどさ……葵ちゃんも幼馴染だから心配だわ。

「いってぇ……くっそあの野郎ォ。なんで何回殴っても倒れねえんだよ」

「噂は本当だったみてえだな……」

「畜生、次会ったら必ずブッ殺す！」

その時、怖そうな人達と私達はすれ違った。怖そうな人達は傷だらけ。何回殴っても倒れない強いヤツってまさか、アイツら圭介と……ばか圭介、また性懲りもなく喧嘩ばっかりして。

そんなんだからクラスで浮くのよ。何時まで経っても誤解されたままなのよ。

「あっははは……今の人達、圭くんの話でもしてるのかな？」

「……知らない、あんな喧嘩ばっかりしてるヤツのことなんかっ」

「でも、何だかんだ言って圭くんの事が心配なんでしょ？」

「……別にっ」

そんな会話を繰り返しながら、気付いた時には既に藤島家の前にいた。そこそこ立派な一軒家でこうしてみると、圭介の家も結構お金があるんだな～って思う。両親共働きな上に、２人とも忙しいらしくて結構重役らしいし、圭介の部屋が半ば痛部屋化しているのも納得できるわ。

それにしても、アイツ……もう家にいるのかな？

亜紀は私が一歩前に踏み出す前に、圭介の家のインターホーンを鳴らした。誰も出ない上に物音すら聞こえてこない。もしかして誰もいないのかしら？

「ありゃ、圭くんも葵ちゃんもいないみたいだなぁ」

「……っ」

「伊吹、愛しの王子様が居なくて寂しい？」

「――だから違うわよっ！」

ホントに違う……違うって。

私は別に圭介なんか心配じゃ……別に心配ってわけじゃ……。

どうして……なのよ。なんで普通にしていて、強いキャラを演じていないのに。どうして私以外のみんなは普通に暮らしてられんのよ。

なんで私はいつもいつも……はぁ。

結局圭介の家に入る事が出来なかった私達はその後、亜紀を私の家に入れてしばらく女2人でお話をしていた。意外な事に亜紀に彼氏がいた……らしい。最も3日で別れた上に、キスもそれ以上のこともしないで別れたらしい。先輩な上に必死だったせいか、告白を断れなかったらしいけど……。

亜紀、それってホントに付き合った事になるの？

「……はぁ」

お風呂上り。私はパジャマに着替えて一人、ベッドの上に座り込んでいた。

私には話せる家族がいない。

お母さんは小さい頃に逮捕されて、それ以降消息不明。お父さんはお仕事。そして私には圭介みたいに兄弟というヤツがいない一人っ子。だから私は……家ではいつも一人。でも、家の中に一人とい

うのも意外と気楽なものよ。だって……人目を気にする必要がないんだから。

「……っ」

私はベッドの横の棚の上に、時計と一緒に置いている写真入れを手に取る。中には小学生の頃の私と圭介と葵ちゃん、そして私のお父さんと圭介の両親が映っている写真があった。写真は私と圭介が中心に写っていて、他の人達はその周りに立っているという感じだ。

圭介……。

この頃の圭介は幸せそう。毎日が楽しくって……私も楽しかった。だけど……今の圭介はこの頃の圭介とは真逆の存在。いつも退屈そうで辛そうで……。

ごめんなさい……。

私が弱かったから。あの場で永渕達に拉致されたから。本当にごめんなさい……あんたの人生を狂わせちゃって本当に……っ。

「ごめん、圭介……っ」

やっぱり私……弱いままなのかな。必死で強くなろうと思ったのに。強くなろうと思ったから自分のキャラを変えて、もう引き返せなくなっちゃったのに……。

結局、私の根本は変わっていない。

私は弱いまま。だから……今もこうして些細な事で涙を流している。強い人なら泣かない程度の事で涙を流してしまっている。

ダメよね……私、一人の時にこんなんじゃ……。

「……っ」

アイツ……ひょっとしたら、私と会わなかったほうが幸せだった

のかな？　私さえいなければ今だってアイツは輝いていたのかな？
でも、そう考えるとズキズキと胸が痛む。ぶわっと、また涙が溢れそうになる。
嫌だ……。
アイツから離れたくない。見放されたくない……アイツを幸せにしたい。もう一度アイツの笑顔が見たい、アイツが輝いている姿が見たい。
それなのに私は、いつもアイツを突き放すような事を言っちゃってる。そもそも、アイツがあんな風になっちゃったのは私が弱いから。
ほんと……私って最低ね。自分のせいなのに自分の為に我がまま言って……。
本当に……ごめんなさい……っ。

……。

「……はぁ」

……なんだろう、随分懐かしい事を思い出していた気がするわ。
――あれは中3の頃だったかしら……どうしてあんな事を思い出していたんだろう？
今日は8月16日、明日から学校が始まる。
私はあの日と同じく――パジャマ姿でベッドに座り込んでいた。
そんな状態で私はまた圭介の事をずっと考えていた。
高校に入ってからそんな感じなんだけど、今年の圭介は生き生きしている。まるで昔の圭介に戻ったみたいに元気で、輝いている……私の瞳にはそんな風に映っている。だけど、私と圭介が元に戻る

ような事は決してなかった。
私は相変わらずだし、圭介は……なんだか、暮葉が来てからかな。確かに今まで通りに優しくて時々カッコいいんだけど……なんでだろう。段々――圭介が遠くなっていく気がする。
その理由ってやっぱり――。

「アイツ、暮葉の事……好きなのかしら……っ？」

最近になって何となく、アイツが暮葉の事が好きなんじゃないかって、そんなような事を思うようになってしまった。確かに今、暮葉は一番アイツに近い女だと思う。
住んでいる家は一緒だし。私が知らない間に――圭介と一緒に行動している。
私が詳しく知らない世界に――2人で足を踏み入れている。
なんか……気に入らない。まるで……圭介が奪われたみたいで。
圭介っ、あんたは私を置い一体どこに行くつもりなのよ……。
口では言ってないけど、物凄く恥ずかしいけど、いつも逆の事を言ってるけど……。
……でも、もう抑えられない。

だから私は――頑張ってみる事にする。
少しだけ変わろうと努力をしてみる。

間違いなくアイツの気持ちは暮葉に傾いている。
もうチャンスを逃しているかもしれない……でも、それでも諦めたくはない。暮葉にアイツを奪われたくない。久々にぎゅってしてもらいたい――っ。
すぐには無理だと思う。まだ私はソレが弱い人のする事だと思っているから。ソレをする事によって自分が弱くなると思っているから。

そもそも――私はアイツに正直になれないから……っ。
でも……暮葉に負けたくない。
奪われたくない……これ以上、何も失いたくない……っ。

これから先――ずっとずっと隣で笑っていたい。

決意は固まった。その決意を胸に抱き、やがて夜は更け、新しい日が訪れた……。

番外話，切ない片想い（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「全く藤島はありえねえ」

大吾「ん、なんでだ？」

黒木「伊吹ちゃんが幼馴染だったら――俺は即効攻略するのに！」

大吾「フッ……甘いな」

黒木「な、なにがだよ？」

大吾「国宗は幼馴染として設定が甘い」

黒木「……は？　何言ってんだお前？」

大吾「まず、幼馴染は主人公をあだ名で呼ぶモンだろ！　それから主人公にお弁当を作るイベントが国宗にはないじゃなイカ！」

黒木「……コイツの頭はマジでゲーム脳だな」

大吾「そしてやっぱり――幼馴染はツンデレよりヤンデレだよねっ！」

黒木「結局コイツは何が言いたいんだ！？」

※ちなみに作者はツンデレもヤンデレも好きです。

第171話，キレた能力者

俺――三原寅彦は特異点が寝ている事務机の中から、錆びかけた箱を取り出す。

この中に魔法使いと超能力者を融合させた最強の存在――魔道能力者を作り出す鍵となる実験用の道具が入っている。

ついに幼い頃からの夢、最強の存在がここに生まれるんだ。そして……俺の学園内での地位も今以上に向上する。何れは……あのクサレ学園長から学園そのものを奪い取る。そして、生み出した最強の魔道能力者達を利用し、世界を俺の思い通りに変えてやる。

圧倒的な力を持ち、逆らおうとする事そのものが馬鹿馬鹿しく思える、そんな歴史上の誰もが作る事の出来なかった巨大な政府。誰もが争う事を諦めるのだから、全ては俺の思い通りかつ争いなど怒るはずもないある意味平和な世界。

この計画の遂行には、やはり早川悠では力不足だ。俺に負ける程度じゃな。しかも今の早川悠は自分の足で立つ事さえ難しい、泣き叫んでも何かを出来るわけではない。

「ハッ、その魔力変換機ってのが切れれば、動けねえ社会のゴミクズってか」

まあ、早川悠らしい無様な姿だな……まあ、コイツを今すぐ殺すのはやめだ。今から特異点に実験をするから、それでコイツがどんな反応をするのか楽しみだ。それと……もし最強の魔道能力者が生まれた時に――誰がソイツの対戦相手になるんだ？

それは当然――現時点で最強の名を持つ男。

そう……早川悠だ。久我って選択肢もあったが……アイツは役不足かもしれん。

魔道能力者ｖｓ早川悠……もし実現して、魔道能力者が早川悠を

殺せば……俺の今までの苦労が報われるってワケだ。いやいや楽しみだ……本当にそうなったら楽園（パラダイス）が完成する。

「――――？」

その時、一瞬だけ俺の思考が止まった。

ありえねえ……少しだけそう思ってしまった。

無理もないかもしれない。俺は早川悠がどんな状態か知っている。別に、あの野郎のすぐ傍にいたからではなく、あの野郎が入院している最中に何度もスパイを送ったからだ。それであの野郎の現状や首筋の変換機の事も大体は知っている。知っているからこそありえないと思ったのだ。

ミシリ、と。

事務机に手を掛け、鬼のような形相を浮かべる早川悠が再び立ち上がったのだ。

「なんだ、どういう事だ一体？　あのクソ野郎が再び立ち上がるハズがない」

今の早川悠は、超能力を使う為に必要な演算能力を失っている。しかも、歩行機能に障害があるようで杖をつかなくては歩けない。そうか……机を杖代わりにしているのか。だが、それを杖代わりにした所で何になると言うんだ。

机は杖代わりにならない。要するに、あの野郎はあそこから動けない。ハハッ、とんだ馬鹿野郎だな早川悠は。それでなんとかなると思ってやがるとは……。

まあ、あのまま武器でも出されちゃ困るし、何よりうぜえからな……だけどあの野郎を魔道能力者との対戦実験に使ってみたいし、ぶん殴って完全に気絶させてやろうか。

あーあーあー手間取らせやがって……そういうのホントムカ

つくわぁ。

「ふざ、っけんじゃねえぞ、この身障者がぁァあああッ！」

俺は本気で早川悠をぶん殴ろうとした。今までのような精密な操作は必要ない。今の早川悠は能力を使えないんだから、当然暴風の膜を張り巡らせる事など出来るハズがない。そう、今の早川悠は体力のないもやし高校生レベル。体重を乗せて殴ればアッサリ沈むハズである。

だが……。

「――なっ！？」

拳が早川悠の顔面に直撃する寸前に、俺は早川悠に右手首を掴まれた。

ありえねえ……どうなってんだコイツの身体は。細いし力なんてなさそう……なのに手首を握るその力は予想を遥かに上回っている。何故だ、簡単に振り解く事が出来ねえ。

こうして俺が苦労している間に、早川悠がもう片方の手で俺の髪を触ってきた。気持ちの悪い野郎だクソッタレ、頭を叩くにしてはあまりにも威力が弱過ぎる。何しやがる気だ、さわさわと来る感触があまりにも気色悪過ぎる。この野郎、こうなったら残った左拳でぶん殴って――、

「う、ごァあああああああああッ！？」

ブチブチ、メリメリ、と嫌な音が連続で響き、あまりの痛みに思わず絶叫する。やられた場所を押さえてみると、激しく痛みを感じると同時に――あるべきモノの感触がなかった。

再び俺は早川悠を見てみると、そのあるべきものを早川悠か持っ

ていた。
あの野郎ォ……俺の髪を根こそぎ抜き取りやがった。しかも……クソッ、皮膚と肉ごと分捕りやがったなあの野郎。今度から俺はスキンヘッドにしなきゃいけねえのかよ……チッ。

「この……クソガキィ！」

ムカついた……本気でムカついたぞ。やっぱコイツはブッ殺す。魔道能力者との対戦実験の被験者は久我で別にいい。早川悠だって久我を瞬殺出来ねえだろう。なら、その魔道能力者が久我を瞬殺出来れば実験は成功だ。そうと決まればこのガキを殺す――バラバラにしてやる！
だが……そう決意した瞬間、早川悠がふらふらとして足取りで歩いてくる。見ていて危なっかしい歩き方をする早川悠は――全体重を乗せて俺に抱きつき押し倒しやがった。
辛うじて後頭部は守ったが……まずい。このまま完全にマウントを取られたら――。

「く、そガキィ！」

咄嗟に早川悠にフックを打ち込み、ごろごろと転がる事によって脱出。クソ、今ので早川悠が気絶するとは思えねえ。何か武器は……あった、早川悠が潰した俺の部下が持っていた拳銃。
ハハッ、今の早川悠に暴風の膜は作り出せない、反射は不可能だ……なら、一発でも銃弾を撃ち込んでやれば早川悠は死ぬってわけだ。ざまあみろ……そのムカつくツラに風穴を――、

「う、おあっ！？　テメェ！」

ズルズルと早川悠に引き寄せられる。拳銃を手に取ろうとした瞬

間、早川悠に足首を掴まれた俺はそのまま引きずられてしまった。
結果、俺は拳銃に手が届かない位置に動かされたのだ。
とりあえず俺は、この足で早川悠の顔面を蹴る事にした。何発も何発も、鈍い打撃音と時々ミシッと響く嫌な音が炸裂する。それでも早川悠は俺から離れない。離れようとしない。自分に受けるダメージなど関係ないと言わんばかりに、何度攻撃を受けても早川悠は決して離れない。
何故だ……今まで俺は早川悠を圧倒していた。それが今はどうした、何故早川悠ではなく俺が地面を這っているんだ。そうか……早川（コイツ）悠が能力を使えねえって事は、俺がコイツを倒す為に態々考案した対抗策も無効ってワケか。畜生ここに来てボロが出やがった……。
俺は早川悠には強いが――それ以外には強くはない。
一般人と同レベルと化した早川悠、増してやコイツはキレてやがる。怒りとアドレナリンが爆発した早川悠に俺の理論は一切通用しない。キレた馬鹿と殴り合いをしているようなモンだ。
こうなったら……ただ攻撃するだけではダメだ。余計に早川悠を怒らせる。
なら……早川悠が怒る意味を奪っちまえば。その為には何をすれば――。
ミネットを殺す……いやダメだ。余計にコイツを怒らせる。クソッ、何かねえのか？

「こんの短気野郎ォがっ！」

ああもうイライラする。そう思って放った一撃が――奇跡的に早川悠をぶっ飛ばした。
俺も相当イライラしていた。そのイライラが強烈な一撃を早川悠に与えたのである。
足首を掴んでいた手が離れ、顔面血だらけの早川悠は埃だらけの床に落ちる。周囲に杖代わりに出来るモノは一切ない。この位置に

来れば早川悠は起きる事が出来ない。ハハ、神ってモンがもしも本当に存在するものだとしたら、その神は俺の味方をしたってワケだな。

まっ、科学者の俺にしてみりゃあ……神ほどくだらねえモンはねえと思うがな。

「ハハ、ざまあみろクソガキ！　能力が使えねえんじゃ仕方ねえかもれねえが……感情に任せた強さなんて所詮その程度なんだよ！　悔しかったら煮干し食ってカルシウムとって少し冷静になってみろよ。所詮最近のすぐキレる若者なんざ――この程度ってワケなんだよぉ！　あっはぎゃはひゃははっ！」

言いながら、俺は床で寝ている早川悠の腹に蹴りを打ち込んでいく。何発も何発も内臓が破裂しそうな勢いで蹴り続けた。これが裏社会ってモンだ。加減も容赦も情けも救いもねえ。ただ強者が弱者を喰らい弱者はそれに従うか――死あるのみ。

今の早川悠は間違いなく弱者だ。まさに――喰われるだけの豚状態。

そして強者の俺は早川悠をブッ殺そうとしている。そう……早川悠、テメェに残された唯一の選択肢ってのは“死”のみなんだよ。

「はぁ、はぁ、はぁ……ほぉ～ら、そろそろあの世へ行く時間だ。首の骨へし折ってやっから１０秒間で覚悟でもしとけ、ハハハッ！」

勝った……俺は結局早川悠がキレた所で結果は変わらねえ。

初めからこの戦いは俺の勝ちだったんだ。早川悠に勝ち目なんざ０だ……ハッ、全く世間から厄介払いされた挙句、コイツを受け入れた俺達にも嫌われ、最後はこのザマか。哀れなクソガキだがテメェらしいっちゃテメェらしいな。精々あの世じゃ幸せになりやがれよ。

最も、テメェは地獄行きかもしれねえがな……さて、そろそろブッ殺すとしよう――。

「ふぅ、リーネに助けを求められたから来たけど、今は修羅場かな？　とにかく到着かな」

不意に声が聞こえた。俺と死にかけた早川悠は声のした方に首を向ける。

そこに。

桃色ブロンドの長い髪を持つ、白衣を着た小柄な少女が立っていた……。

第171話，キレた能力者（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「早川の所に折角来た助っ人があんなに弱そうで、勝ち目あんのかコレ？」

赤佐「まあ科学者同士っぽいし、なんとかなるんやないか？」

大林「キレた早川も能力ナシの割には意外と強いしね」

圭介「完全に外野のコイツらが本編について議論している事に違和感を感じるんだが」

大吾「最近後書きトークコーナーもネタ不足で、それしかやる事がないんだよ」

重原「何かいい企画でも考えないといけないね」

圭介「そうですねぇ……」

第172話，　風剣（ウインドソード）

「う、おォァあああああああっ！」

アルファ隊の隊長、リーリヤが見守る中。俺は夜の海浜公園を駆ける。全力で走ってシルフの懐へと突っ込む。一気に戦意が沸いてきたせいか、気のせいかもしれないけど……でも、さっきよりも軽々と動けるようになった気がする。

シルフを倒して騒動を終わらせる。暮葉を守ってみせる。アルファ隊の力を借りなくったってシルフは倒せる。いや、この世界の人間がシルフを倒さなきゃいけないんだ。

その想いが――この足をさらに加速させていった。

「クソッ！」

リーリヤの魔女殺しの魔法により、かなり弱っていたシルフ。一気に間合いを詰められるとシルフは慌てた様子で大剣を振りまわし、2発の風の塊が放たれた。俺は2発の風の塊をジグザグに走る事によって回避し、一気にシルフの懐深くに潜り込む。

右腕を下から突き上げ、シルフの腹部にボディーブローを打ち込もうとした。

「ッ！」

しかし、シルフは風の魔法か何かで5メートル以上も飛び上がり、軽々とした軽々しく俺の背後に着地をすると、横から殴るように大剣が振り回される。

咄嗟に振り向き、攻撃に気付いた俺は身を屈めてこれを避ける。

轟音が頭上から聞こえた。シルフの大剣が風を切る音である。だ

が、俺を叩き斬ろうとした大剣は空振りしてしまった。
今のシルフは隙だらけだ。
そんなシルフに横腹に俺は――固く突き立てた肘を打ち込んでやった。

「げ、はぁッ！」

鈍い音が炸裂すると、衝撃でシルフは後退りする。さらに、濡れた地面に足を滑らせて地面に転がってしまった。寝ているシルフに対し、俺は飛び上がって腹を踏みつけようとしたが、それより先にシルフは両手に握った大剣を振り回す。俺は慌てて後ろへ2、3歩後退りする。
その後、大剣を構えるシルフと拳を握る俺は――何十秒も睨み合った。
睨み合いの中、俺はこう思っていた。
風剣のシルフ……確かに強いけど、勝てない相手ってわけじゃねえ……。
これは――いける。

「アハハ、素人にしちゃ攻撃力が高いのね……接近戦じゃ私が不利ってわけね」

「そんな重たい物持ってるから、動きが鈍くなっちまってんじゃねえのか？」

「私の風剣（ウインドソード）は魔術発動に絶対必要な、魔道書のようなモンよ。風の術式を組んで多少は動かしやすくもしているし、アンタが考えているほどの強い力は必要ないのよ」

「だから風剣のシルフって名前なのか……だけど、結局てめえの動

きは魔法に頼ってるだけで大したことはねえよ」

「チッ、言ってろコラァ！」

構えた大剣を一気に振り下ろし、シルフは巨大な風の塊を作り出す。それを確認すると同時に俺は拳を固く握り、勢い良く前に駆ける。シルフによって作り出された風の塊から、台風並の暴風が放たれ暴風が容赦なく俺の身体に吹きつけてくる。

それでも――俺は進み続けた。

身体が壊れる覚悟で全身の筋力をＭＡＸまで引き上げ、ビリビリと来る激痛に耐えながら吹き荒れる風の中を突き進んだのだ。

「この世界の人間の力――てめえに思い知らせてやるっ！」

「赤の軍神を――ナメてんじゃねえぞおおぉぉぉおおおお！」

シルフはさらに大剣を振りまわし、激しい暴風を起こし始めた。

全くワンパターンな攻撃だ。最初の一撃をマトモに喰らえばお終いだが、しばらく耐えて戦っていれば案外大した事がない。シルフの攻撃は単純馬鹿並にワンパターンなのだ。威力こそ高いが同じ組み合わせがずっと続けば――いい加減こっちも慣れてくるモンだ。

しかも、シルフはリーリヤの魔法によって弱体化している。本来のシルフなら、今以上に凄まじい力を放ってくるんだろうが、今の彼女は俺でも耐えられる程度の攻撃しか放ってこない。

つまり彼女は――相当弱体化している。

「いい加減気絶しろってんだよ！　こんの素人があああぁああああぁっ！」

キレているせいか、シルフの口調がさっき以上に汚くなっていた。

だが、叫ぶと同時にシルフは今まで以上に大剣を大きく振り回し――今まで以上に強烈な暴風を放ってきた。
それは暴風を超える颶風であった。全てを破壊し尽くす颶風は、周囲にあるあらゆる物を破壊しながら突き進んで来る。

「ぐわっ！　く、くそ……これは――まずいっ！」

前に早川が起こした竜巻よりやべえ……シルフのヤツ、まだ……こんな事をする力が残っていたってのかよ。これが赤の軍神の力かよ……ちくしょう、完全にナメていた。
やっぱりさっきまでのシルフは――決して本気ではなかったんだ。
颶風が激しく身体にぶつかる、もうダメだ……。
……と、思ったその時。
突然颶風が砕け散り、数百もの尖った空気の錐となって飛んで来る。そのうちの何個かは俺の身体に僅かれ触れ、皮膚を素早く切り裂いた。

「く、あぁッ！」

痛みで思わず悲鳴を上げ、右腕で左腕を押さえ込む。ゆっくり右手を離し、掌をこの目で確認すると真っ赤な血がべっとり付着していた。今度は左腕を直接確認すると、空気の錐によって生まれた傷跡から鮮血が流れ出ている。
ちくしょう痛ぇ……けど、今のは何があったんだ？
どう考えてもシルフの技とは思えない。何故直接颶風が来なかった。どうしていきなり颶風が砕け散ったんだ。それで攻撃の威力が弱まった。そんな威力の弱まる選択をシルフがするハズねえだろうに……なんでいきなり？

「藤島様、左手をご覧になってください……とリーリヤは言ってみ

ます」

「左……？　って、あ、アレは……ッ！」

リーリヤの言葉を受けて、俺は首を左に向けるの瞳に映ったのは――隊列を組み、銃を構えている自衛官達の姿であった。あの人達……さっきまで倒れていたのに、どうして？

「あの人達は藤島様の戦いぶりに感動しています、とリーリヤは状況を報告します」

「それじゃあ……あの人達はっ」

「はい、藤島様を助けるべく、傷だらけの身体を引きずって立ちあがったのです……とリーリヤは彼らが戦う理由を説明します」

「た、隊員さん達は……っ」

俺はもう一度、シルフに銃口を向けている自衛隊の人達に目を向ける。シルフとの戦いで身体は既にボロボロ、すぐに病院へ行かなければならない者も、中にはいるかもしれない。それでも彼らは俺なんかを助ける為に立ち上がり――シルフに銃を向けているのだ。

「この……死にぞこないの腐れ兵隊め……っ！」

やがて砂埃が風に流され、シルフの姿が現れる。シルフは額に血管を浮かべ、お怒りの様子で自衛官達を睨みつけていた。シルフから数メートルは離れているのに、大剣を握る彼女の手に一段と力が入っているのがわかる。アイツは相当自衛隊に怒っているようだ。

そんなシルフに構わず、銃口を向ける自衛官達。

俺は彼らを一瞬見た後、再び血塗れになったシルフのほうを向く。

「アンタといいそこの死にぞこないの兵隊どもといい、ホント……現実世界の人間ってのはムカつくモンだわね！」

「なんだと……？」

「だから私は現実が嫌いなのよ！　挫折と絶望しかない、こんな現実が――！」

「……どういう意味だよ？」

俺がそう問うと、シルフは血に溢れた口からペッ、と血の塊を吐き捨て、掌で唇を拭いながらその理由を喋り始める。

「裏切られたのよ。先生にも友達にも――親にもね」

「なに？」

「友達がいじめを受けていてね、私はその友達を助けたのよ。それがどう？　学校側は私ばかりを悪者扱い、親も先生も聞く耳を持たないで友達には裏切られ……」

「お、お前……っ」

なんだよそれ……俺と同じじゃねえかよ。コイツ、俺と同じ事をやって、友達は救えたけど周囲からは突き離されたんだ。だけど、コイツはそんな現実に耐える事が出来なくて――。

「どうさ、赤の軍神の一人がこんな理由で戦ってんのよ？　腹抱え

て笑いたくなるでしょ？　でもね、私はそこまでしてでも現実をぶち壊したい。こんな現実なら存在する価値はない。だから、私がこの力で現実を壊して作り直す。誰もが笑って過ごせる挫折のない世界を作り出すのよ！」

風剣のシルフ……お前は。

一歩間違っていたら、俺もシルフみたいになっていたのか。

なんて笑えねえ話なんだよ。コイツ……まるで俺を見ているみたいだ。だけど俺と違う所はコイツは現実に耐える事が出来なかった。耐えられなかったから非行に走った。それで、自分の嫌いな現実を魔法でブッ壊そうとした。その為にサヴィエトに入ったってのか……。

だけど、いくら俺に似ているからって——彼女のやる事に納得は出来なかった。

「ふっざけんな。だからって全てを破壊する必要はあんのかよ」

「あるわよ！　こんな世界——一度ブッ壊して作り直したほうがいいのよ！　そのほうが、私みたいに現実が嫌な人も幸せに過ごせる世の中になるのよ！」

「じゃあ、その世界をつくる為に誰かが不幸になっていいと思ってんのかよ、てめえは！」

なに？　とシルフは眉をひそめる。

僅かなシルフの反応を確認すると、俺はさらに言葉を続けた。

「お前の気持ちは俺にだってわかる。俺だって信じていた人達に裏切られたよ。お前のように誰かを救った結果、俺一人が恨まれるようになっちまったよ。今だって多分、当時のことを知ってるヤツの

一部は俺を恐れているよ。けど、お前のように全てを壊すような事はしなかった！　なんでかわかるかよ？　確かに全てを壊して思い通りの世界を作れば、俺もあの時楽になれたかもしれねえし、てめえだって幸せになれたかもしれねえ。だけど、その世界をつくる為にどれだけのヤツが不幸になると思ってんだ！　結局、何かを壊して作る世界なんて――誰かが不幸にならなきゃ作れねえんだ！」

その言葉でシルフはわなわなと身体を震わせる。
そして、溜まっていたモノを一気に爆発させるように、

「黙れぇっ！　それでもアンタには味方がいるでしょ……私ほどの地獄は味わってないでしょ！」

激昂のあまり、叫びながら大剣を振りまわした。
これまでのように計算して放たれたわけでもない、単なる風の塊を、俺は身体を僅かに振るだけで軽々と避けてやった。感情的な一撃は俺を粉砕する事は出来なかった。
攻撃を避けた俺はそのままシルフを直視し、言葉を続ける。

「確かにそうかもしれねえ。だけど、それでも俺は誰かの犠牲によって生まれる楽園なんざ望んじゃいねえ。そんな楽園を作る作るくらいなら――まだ我慢していたほうがマシなんだよ！」

「うるさい！　私は……あんたじゃないのよ！　あんたみたいに全てを諦め、それで我慢しながら過ごせるようなヤツじゃないのよ！」

「諦めてなんかいねえよ！」

「ウソよ！　何かをするわけでもない、何もしない、結局アンタは諦めてんのよ！」

「違う！　諦めてなんかいねえよ！　諦めていたらお前の前に立ち塞がるかよ。誰か守る為に立ちあがったりすんのかよ。サヴィエトに抵抗したりすんのかよ！？」

「……っ！」

シルフは今にも涙がこぼれ出しそうな目を見開き、１歩ずつ後退りをしていく。その姿はあまりにも弱々しく、とても赤の軍神の一人とは思えない――普通の女の子であった。

段々と遠のいて行く少女に、俺は一歩ずつ、力強く迫っていく。

「結局、お前は救って欲しいだけなんだ。寂しくて嫌なだけなんだ」

「う、うるさい……うるさいうるさいうるさい！　知ったような口聞くんじゃないわよ！　所詮アンタは私から見れば充実しているヤツなのよ！　そんなヤツに慰めの言葉を貰ったって――何にもならないわよ！」

「お前……」

「とにかく私はこんな現実が嫌いよ！　だから全てをぶち壊してやるわ。アンタの信じる腐った世界も叩き潰す！　そして――誰もが幸せになれる世界を新たに創ってやるのよっ！」

シルフは再び大剣を握り締め、それを構える。俺も拳を握り締めた。リーリヤの魔女殺しによって相当弱体化している上、今まで我慢していた弱みを外に出してしまった。彼女は弱い、おそらく一発でもぶん殴ってしまえば彼女は折れてしまうだろう。

だが、彼女が放つ一撃も強烈だ。

そう——勝負は次の一撃で決まる！

「「！！」」

俺は勢いよく前に向かって走りだした。
シルフはそんな俺を叩き潰すべく、大剣を振りまわし颶風（ぐふう）を創り出す。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

シルフが叫ぶ。

「ぐ、　おォあああああああああああああああああああああああ！」

俺も叫びながら前身し続ける。
無謀にも、俺はシルフを創り出した颶風（ぐふう）へ突き進んだ。全身の骨が砕けそうなほど激痛を全身に感じたが、それでも構わず進み続けた。
どちらが先に折れるかの勝負——先に折れたのはシルフのほうであった。

「援護射撃だ！　あの少年を援護しろ！」

「射撃用意！　射（て）っ！」

一斉に放たれた無数の鉄の雨が、シルフに降り注ぐ。シルフは自分の身を守る為に颶風（ぐふう）を放つのを止め、自分の周りに竜巻を発生させた。

それで銃弾を吹き飛ばすつもりなのだろう。確かに、自衛官達が放った銃弾はシルフの魔法によって全弾吹き飛ばされ、シルフに風穴が開く事はなかった。おそらく自衛官も、こうなる事をわかっていて撃ったのだろう。彼らの目的はシルフ殺害ではない――隙を作る事だ。

「今だァ少年！　行けえええええええええええ！」

自衛官の一人――隊長と思われる人物が壮絶な叫び声を上げる。

確かに彼らのおかげで隙は出来た。その上、リーリヤの魔女殺しの魔法が、かなり効いているようでシルフはゴバァ、と血の塊を口から吐き出していた。そしてもう貧血と疲れで、彼女に大剣を振りまわすだけの体力は――もう残されていない。

ガラン、と大剣を地面に落としたシルフは、驚いた表情で俺の事を見てきた。

「今から少しだけ教えてやる。まだまだこの世界には希望が満ちているってことを――」

言いながら、シルフの懐深くに飛び込んだ俺。

拳を限界まで固く握りしめ、シルフの顔を睨みつけて、

「だからその前に――もう一度やり直してきやがれ、このクソ野郎ォ！」

ゴン！　と拳がシルフの頬に突き刺さった。

ぐるりと、彼女の身体が数メートルほど宙を舞い、夜の海浜公園を転がった。やがて動きの止まったシルフはピクピクと、起きあがろうとするが……そのままガクリと気を失う。

「ハァ、ハァ、ハァ……っ」

俺は息を切らしながら、気を失ったシルフの事をずっと見ている。

ガラガラと、その横で自衛官達が武器を地面に落としていく。リーリヤも、少しだけ微笑み俺達の事を温かく見守っている。

終わった……勝ったんだ、この世界の人間の勝ちだ……ッ！

第172話，風剣（ウインドソード）（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「どうも、今回はちょっとした報告！」

伊吹「なによ、またくだらないエロゲの話でもすんの？」

圭介「違う違う。活動報告でも報告したけど「作者による馬鹿なキャラ紹介」の紹介キャラを追加したんだ。あと、キャラが増えたから味方キャラと敵キャラを分割したんだ」

伊吹「う、ウソ……」

圭介「嘘じゃねえよ、ホントの話だよ」

伊吹「け、圭介が……マトモな話をしたわ！？」

圭介「驚く所そこかよ！　本編で大活躍したのにこっちでは相変わらず扱いひでえな！」

第173話，新たなる力

ウチ――木下木葉は、ボロボロになって床に倒れている早川悠と、彼を蹴飛ばしているウチの同業者っぽい男を交互に見ていた。リーネの報告は正しかったのかな。確かに、このままだと同業者に早川悠は殺されてしまいそうだ。そして、ミネットちゃんの命もおそらくこのままでは――。

「あぁ？」

同業者の男がウチのほうを向いてきた。

悪そうな顔……かな。

血も涙もないような雰囲気、金髪の鋭い眼光の白衣の男は、ウチのことを見ながらもずっと早川悠の事を蹴り続けていた。顔、首筋、腹など至る所を蹴られ、早川悠は血の塊を吐く。出来れば第一に早川悠を助けてあげたいけど、生憎ウチに戦闘能力は殆どない。

白衣の中に拳銃を隠してあるが、この近距離だとあまり効果はないかな。さて、ウチはここからどんな行動をするべきかな？

「なんだテメェ？　学者気取りのクソガキか？」

「残念、ウチは正真正銘の学者かな」

「チッ、そんな事はどうでもいいが……こっちは仕事だ。最も、その仕事を見ちまったテメェに生きる死資格なんてねえんだけどな」

指の関節を鳴らしながら、ウチの同業者はゆっくり歩み寄ってきた。どうする、ウチは白衣のポケットに手を突っ込み、右手で拳銃をしっかりと握っていた。本当にどうする、今すぐ拳銃を抜いて男

に発砲すべきなのかな。
とにかく、今の状況はあまり好ましくない。早急に打破したほうがいいかな。

「おいテメェ！　まさか拳銃（チャカ）隠してんじゃねえだろうな！？」

まずい……あの男にバレたかな？
……と、手の内を読まれてまずいと思っていたその時――救いはウチを見捨てなかった。
バン！　と事務机を叩き、強引に立ちあがった早川悠が、

「おおおぅぅあッ！」

勢いで飛びかかり、白衣の同業者にしがみ付く。離せ離せと同業者は喚くが、早川悠は決してその手を離そうとはしなかった。彼も必死なのかな……ミネットちゃんを守る為に。見た所彼は魔力を切らしているようで、戦闘力は殆ど皆無の状態なのに……それでも必死に戦っている。
ウチも黙っていられないかな。今のうちにミネットちゃんを助けよう。
ウチは小走りで、ミネットちゃんが寝ている事務机に近寄った。ミネットちゃんは静かに瞳を閉ざしている。小さく呼吸をしている、相当……衰弱しているのかな？
下手に動かすのはまずいかな。まあ、でもこれも予想の範囲内。
一応ウチだって医療の研究をしている学者さん、対策は既に練ってある。科学と魔法を融合させた治療プログラムはもう組んである。
今のミネットちゃんは危険な状態かな。意識を完全に失い、昏睡状態。だけどそれも予想の範囲内だから、ウチの治療プログラムを使えば危機から脱する事が可能かな。
さて……今から治療の開始かな。一応この治療には彼女の力も必

要かな。

「リーネ、ミネットちゃんはやっぱり昏睡状態だったかな」

『木葉さん、こっちは既に準備完了なの』

ウチは白衣から携帯電話を取り出し、リーネに電話を掛けた。ウチが開発した治療プログラムは結構単純なもの。元々脳死の人の為に開発したものだけど、それを応用すれば、もっと軽度な昏睡状態のミネットちゃんなら――脳死の人を救うよりも簡単かな。

あとはウチが、背後で早川悠と戦う同業者に――殺されなければいい話。

「それじゃあこっちはこっちで準備を始めるかな」

『お願いなの、ミネットちゃんと悠ちゃんを助けて――』

「わかっている。その期待に答え、新たな技術で人々を助るのが学者の務めかな」

言いながら、ウチは白衣の中から補聴器を取り出し、ミネットちゃんに装着する。

もちろんただの補聴器ではない。魔術的効果によってあらゆる音声を、脳に直接送りだす信号に変換する特殊な補聴器かな。開発に大体2年くらいはかかった気がするかな。だけど、この補聴器単品では何の効果も発揮しない。そこで――ウチの治療プログラムの出番かな。

補聴器から伸びている一本の線を、ウチが持っている小型の特殊受信機に接続する。

これで準備は完了したかな。

「リーネ、こちらの準備も完了かな」

『了解なの。今から音声ファイルを再生、受信機のほうは大丈夫なの？』

「問題ないかな。ちゃんとそちらの音声を受信しているかな」

『了解なの。それじゃあ木葉さん、音声ファイルに会わせて――』

「“歌”は最も伝わりやすい手段。しかしウチ、歌うのは中等部の合唱コンクール以来かな……でも、それで人が救われるのなら――頑張るしかないかな」

治療対象は昏睡状態。

それは外部からどんな刺激を受けても、脊髄反射以外の反応がない状態。でもそれはあくまで“歌”からの刺激。なら内部から、脳に直接刺激を与えればいいのかな。ウチの治療プログラムは脳に直接適切な単語を並べた歌を聞かせるもの。

確かに、プログラムと言えるほどデジタルなものではない。むしろ、機械を殆ど使わない原始的なアナログ方式の治療法。

それでも、昏睡状態から目覚めさせるには――この方法が一番かな。

――怪しげ女が部屋に侵入し、特異点に何かをしている。

さっさと止めなければ。俺――三原寅彦は多少焦っていた。だが、あんな小娘はすぐに止められんだろうが、その前に目の前をウザい

ヤツを叩き潰す必要がある。早川悠、コイツは既に能力を使うだけの演算能力を失い、理性も失っていると言うのに――何度も立ちあがってきやがる。
それが目障りだ。クソうぜぇ……ムカつくったらありゃしない。

「なんだこの野郎ォ！」

俺は血だらけになった早川悠の顔面を殴り飛ばす。後ろにあった事務机に、殴られた時の衝撃でぶっ飛ばされた早川悠は背中を打ちつけた。さらに俺は右足を大きく振り上げ、激痛で事務机に凭れかかるようにぐったりしている早川悠の顎に、思いっきり靴の先端を打ち込んでやった。
メリメリと、下顎に靴がめり込んでいく。

「いい加減しつこいっつってんだよ！」

そしてトドメを刺すように、大きく振り回した右拳を早川悠の顔面に叩きこむ。
完全に動く力を失っている早川悠は、そのままぐったり地面に倒れ、さっきまでのように勢いよく立ち上がろうとはしなかった。ハハ……ざまあみろ、いよいよ力尽きたか。
そう思うと面白くなってきやがったぜ……ハハ、笑いが込み上げてくる。

「ふ、ふふふ……はぁっハハハハハはははははははははッ！」

あー面白ェ！　まっ、結局テメェはその程度だったんだよ。たった一人で巨大な悪と戦って勝つヒーローなんざ、この現実世界には存在しねえんだよ。結局テメェも他の人と同じ、何かを信じて戦って失敗したゴミクズ野郎って事さ。

ホントにざまあみろだぜ。さて、じゃあ息の根を止めたらあの小娘を殺して――、

「……あ？」

なんだ……この聞いた事のねえ音色は。優しさを感じる……チッ、コイツはとっくの昔にゴミ箱にでも捨てたモンだな。受信機からメロディーが流れ、歌を小娘が歌っている。日本語とは違う意味不明な言葉だった。ロシア語に近い感じだが……何語なんだこれは？

そして早川悠は一体なんなんだ。歌に合わせて口を動かしてやがる……コイツ、キレて理性なんてとっくの昔に失っているのに、その感情とは全く反対の歌を……何故口ずさむ。

「み、はら……」

「……っ？」

久々にマトモな言葉を口からこぼす。

まさか冷静さを取り戻した……いや、そんなハズがねえ。だとしたら、もっとクールな表情で俺を睨んでくるハズだ。だけど、今の早川悠は怒りに身を任せる猛獣。冷静さなんてモンはカラケも残っていねえ暴走野郎である。だけど動きが不自然だ、キレたヤツのモンとは思えねえ。

それに何故だ。何故――アイツが杖ナシで立ち上がる事が出来るんだ？

ゆっくりと、フラフラしながら立ち上がった早川悠。

「三ィィ原ァァあああああああああああああああああああああ！！」

俺の名前を叫び、完全に立ち上がった早川悠。
どうなっている……ありえない事が起こりまくっている。早川悠、テメェはなんでその足で立ち上がる事が出来たんだ？
あの女の歌のせいなのか？
クソッ、そうだとしたら女から始末しておくべきだった。
……だが、こうなっちまった以上――仕方ねえよな。

「面白ェ……テメェがその気なら――殴り殺してやるわクソガキがあああああああああっ！」

「ォおおおぉあああああァああッ！」

俺と早川悠が駆けだしたのは、ほぼ同時であった。
だが――先手を撃ったのは俺だ。
早川よりも速く懐に潜り込んだ俺は、早川悠の顔面に右拳を叩きこむ。ズドン！　という激しい打撃音が炸裂する。ぐらん、と早川悠の身体が揺らいだ。
……が、それでも早川悠の動きは止まらない。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおあああああああああああああああああああ！」

聞いてて痛くなるような叫び声を上げ、なんと――早川悠は今のを堪えた。
失ったハズの脚力で踏ん張り、埃だらけの床に立ち続けたのだ。
多くの血を見てきた真っ赤な瞳で俺を厳しく捉えた早川悠は、痛みを気にせず、カウンターをぶっ放してきやがったのだ。
ガゴン！　と言う轟音が響き渡る。脳を揺さぶられる顎への一撃。
それは説明するまでもなく、早川悠の全力の一撃であった。だが……所詮能力のない早川悠は極細のもやしっ子に過ぎねえ。そんな

細腕から放たれる攻撃など――知れたモンだ。

「おおおぉぉぇらあァあああああああああああッ！」

死ねや小僧！　と言わんばかりに叫びながら、拳を一気に顔面へ叩きこんだ。早川悠の端整で細い顔がメリメリゴリゴリと、嫌な音を立てて歪んでいく。痛いんだろうか、早川悠は血だらけの顔面を必死に押さえていた。そんな早川悠の脇腹を――俺は何度も蹴り続けた。

何度も何度も、時々何かが砕ける音が聞こえた。赤い液体が周囲に飛び散る。俺の顔面にもソレは飛んできて、生々しい感触を感じた。

俺は口の周りについたソレを、いやらしく舌で舐めた……鉄の味がしたな。

「さて……殺すか。ほ～ら悔しかったら暴風の膜でも張ってみろぉ！」

俺は後退りをしながら、白衣の中からパイナップル型の物体を、1個取り出す。

それは、俺の部下が持っていた装備品の一つ――手榴弾だ。

対人用殺傷兵器……フフ、はは……今のテメェに避けれるかよ。能力を使って爆発から逃れる事が出来るかよ。悔しかったらやってみろ……コイツで終わりだ！

そう思いながらピンを抜いた。そして――手榴弾を早川悠へと投げつける。

コン、と額に当たった手榴弾は僅かに跳ねる……すると。

凄まじい爆発音が炸裂し、破片を撒き散らす。

手榴弾が爆発したのだ。

俺も手榴弾の近くにいたのか、撒き散らされた大量の破片に1か所をやられた。頬に破片の一つが掠めたのだ。ピュ、と肉がざっくり切れたが……関係ねえ。

それより俺は嬉しかったんだ――早川悠を殺せた事が！

「ぎゃはははははははははははははははははははははははははは！」

勝った。

俺は散々ムカついていたクソ野郎に勝ったんだ。悪は最後に勝つんだ。善なんてモンは所詮心の弱いクサレ野郎共。そんなモンが実際に勝てるわけがねえ。善が勝つのは空想限定。実際には悪のほうが強大な力を誇ってんだよ。それを理解していなかったクソ野郎を――俺はブッ殺した。

俺らの世界にいながら、善に憧れていたクソ野郎を――肉塊に変えたのだ。

……しかし。

「……あぁ？」

物音が聞こえた。

灰色の粉塵の中から聞こえるハズのない音――誰かが立ち上がる音が。

恐る恐る煙を凝視する……白衣の小娘、ではない。じゃあ早川悠……いや、能力を使えない今のアイツに手榴弾に耐えられるハズがねえ。ぐちゃぐちゃの死体になったハズだ。じゃあ、今の物音は一体誰のモンなんだよ……。

そんな推測をしていた、

「……ッ！」

刹那、粉塵が不自然に周囲へ吹き飛んだ。

そして生きているハズのねえ――早川悠が佇んでいたのだ。

真っ白で細い中性的な身体。傷だらけながらも整った顔。鋭い真っ赤な瞳。赤と黒の縞々模様の服に首にあるチョーカー。間違いねえ……けど何故だ、どうやったヤツは生き延びた。まさか超能力が復活しただなんて事はねえだろうな。

いや、ねえな。だってアイツにあんなことが出来るわけ……ッ！

「どうなってんだよテメェ……その真っ黒な翼は一体なんなんだァああ！？」

早川悠の背中から――墨よりも、そして闇よりも黒く染まった翼が伸びていた。

待て、考えるんだ俺。アイツは大気そのものを操る超能力者。そうだ、きっとアレは風の操作か何かで生み出した翼なんだ。翼だが待て、ヤツに関するデータにあんなモンは存在しない。かと言ってヤツが成長したとは思えない。むしろ弱体化したハズだ。

じゃあ一体……あの翼は何なんだ。噴射に近いが……翼は翼だ。だが、どうもアレは風の操作とは違うっぽい。じゃあ何の力なんだよアレは？

「――――、」

その時、不意に近づいてきた早川悠に俺は捕まった。ぐわん、と伸びてきた右腕に顔を鷲掴みされてしまったのだ。クソ、油断した……だけど酸素の操作は行わない。普通なら、俺の皮膚に一瞬でも触れた早川は酸素濃度を操作し、俺を酸欠状態にしようとするハズだ。

だけど今回それがない。
ありえねえ……コイツの思考パターンから考えて、絶対にあねえねえ行動だ。
この野郎……一体何の力で。新ネタか……だがこれは風の操作ではない。その応用ってわけでもなさそうだ。コイツ――何を考えた新たな能力を発現させたんだ。
まさか……魔道能力者。早川悠はその片鱗を持つ最初の存在だったのか？
首にある変換機。そこに蓄積された魔力によって変換された脳波を受け、その影響でコイツは自然と魔道能力者に進化していたのか？
早川悠――テメェの身体は非科学にも対応しているのか……？

「テメェ、その翼……気付いてんのかよ……化け物がァ……ッ！」

本当に化け物だ、俺とした事が見失っていた。
態々特異点を解剖しなくたって――実験材料はここに存在していた……ッ！

「――――ッ！」

あまりにすごい言葉で聞きとれなかった。声にノイズが走り、この世のものとは思えない人外の言語で早川悠は叫んでいた。そしてその直後――背中の黒い翼が爆発する。
掌が不自然に黒くなる。その瞬間――俺は何らかの力よにって吹き飛ばされてた。説明不能の新たなる力である。
凄まじい噴射に吹き飛ばされた俺は、恐るべきスピードで窓ガラスを突き破り……。

……。

第173話，新たなる力（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「こうして早川は完全にセロリと化した」

伊吹「なにめでたしめでたしって感じの雰囲気になってんのよ！」

圭介「まさか……黒い翼まで来るとはっ」

暮葉「でも、結局あれは何の力だったのですか？」

圭介「さあ？　まあＡ○Ｍじゃあないでしょ」

明智「とにかく、アイツはまた一段と化け物になったわけだな」

圭介「これで再戦なんて話があったら……俺死ぬんじゃね？」

あかり「そもそもこのパク（ｒｙ　インスパイアだらけ小説は何時まで続くんだよ」

千早「わたしの出番……増やしてくださいっ」

第１７４話，赤の軍神

俺は自衛隊の衛生要員に手当てを受けていた。ちょっと切り傷があるくらいだし、この程度ならすぐに完治するんだけどなぁ……まあいいか。

海浜公園での戦闘では、陸上自衛隊に戦死１名、負傷者２３名。多分、戦死した人はシルフに海へ蹴飛ばされたあの人だろう。ちくしょう……結局助ける事が出来なかった。それに、今回の騒動全体で見たら死傷者の数はさらに増えるだろう。

幸い、一般市民の大半は市外に退避している。一般人の犠牲者は恐らく少ない。

それでも犠牲者はいるんだろうな……。

風剣のシルフ。友達の為に孤立し、そんな現実に絶望したこの女は……これから先どんな扱いを受けるんだろうか。単独で都市機能を停止させ、警察や自衛隊を撃破。さらに、街や市民に多くの損害を齎(もたら)したんだ。このまま野放しって事はないだろう。

最悪、死刑にされちまうのかもな。

それでも俺はシルフを助けたい。事情を知っている者とし、似た者同士として……。

「藤島様」

「……ん、リーリヤか」

「ご心配なさらずに。風剣のシルフは我々のほうで回収します、とリーリヤは今後の方針を告げます」

「……わかった、けど一つだけ頼みがある」

「はい、なんでしょうか？　と、リーリヤは問います」

「確かにアイツは沢山の人を殺した。街だってブッ壊した悪人だけど……さ、即刻死刑にするとかじゃなくて――ちゃんとした形で罪を償ってほしいんだ」

「それはつまり？」

「重罰でもいい。でも、とにかくアイツを殺さないでくれ」

その言葉にリーリヤは黙りこむ。やっぱりダメか……シルフは、どう足掻いたって近いうちに処刑されてしまう運命なのか。とにかく、ここでシルフを見殺しにするのは後味が悪い。

なんとしてでも助けたい。しっかり罪を償って――もう一度やり直して欲しい。

現実に壊されたシルフに――救いを与えてやりたい。

「……わかりました。全てこちらの一存で決定できる事ではないですが、善処はしてみます……と、リーリヤは貴方と約束してみます」

「頼むぜ、暮葉の上司さん」

絶対にとは言えないが、それでもシルフが生きれる可能性が生まれた。これで、シルフが深く反省してやり直してくれればいい。もしまた道を間違ったら、その時はその時。シルフを逃した責任は俺にあるんだから、その時も俺が戦えばいい。

今度は誰も巻き込まない、俺とシルフのタイマン勝負だ。

……その時、

突然、シルフの攻撃で崩れかけた建物が爆発を起こす。

黒煙と粉塵で周囲が覆われる。

「ぐっ！」

「……っ」

破片から目を守るように、俺は咄嗟に両手を上げた。リーリヤも、そして自衛隊の隊員さん達もチラっと確認すれば、同じような行動を取っている。

「待て、あの女は？」

「いないだと？」

そして、2人の自衛官はある事に気付いた。今の爆発の後、さっきまで捕らわれていたハズのシルフが居なくなっていたのだ。まさか、今の爆発はシルフのせい？

いや、それはないな。シルフは風の魔法の使い手。第一、俺はアイツを派手にぶん殴ってアイツも完全に気を失っていた。目を覚ましたとしても、動ける体力はもう残っていねえ。つまり今の爆発はシルフの魔法じゃねえ。もっと違う――第三者が現れたんだ。

やがて、空気中の粉塵は風と雨で次第に消えていく。

そして読み通り――第三者と思われるシルフを抱えた男が、残骸の中に立っていた。

「誰だッ！」

思わず俺はそう叫ぶ。

あの肌の白さは白人……かな、茶髪の筋肉質な男であった。しかも、大柄で筋肉質な割には爽やかな雰囲気で、日本人離れはしてる

が重原に近い雰囲気を放っていた。いや、重原とも微妙に違うかもしれないな。なんせあの男……俺達には絶対に出せない、渋い雰囲気も放ってやがる。

若々しく見えるが、やや年老いた中年のオッサンのようである。

爽やかでイケメンな上に渋い……か。

女受けしそうだけど、そんな事を考えている場合ではないな。

「私はこの子の回収に来た者だ。そちらに回収されれば、間違いなくシルフは処刑されるだろうからな。命が消えてしまう前に――こちらで回収する事にしたのだ」

「そんな事はどうでもいい。それより名前を名乗れっつってんだよ！」

「邪炎（じゃえん）のサラマンダー。シルフと同じく、赤の軍神の一人だ」

「てめえ……」

その名を聞いた瞬間――俺は拳を握った。

コイツがシルフの仲間だってのはわかった。そして、同じ赤の軍神である事も。その実力は未知数だけど、シルフと同等の力を持っているとしたら――かなりまずい。

俺も疲れている。ここにいる自衛官達も疲れている。リーリヤは……わからないし期待できる実力かも不明である。ちくしょう……万事休すか？

……だが、邪炎のサラマンダーと名乗る男は静かに微笑み、

「心配ご無用。今回はこれで退くつもりだ」

「……なんでだよ。てめえらの目標（ターゲット）ならここにいるんだぞ？」

「こちらにも色々と事情はあるのだ」

「そうかよ……まあ色々言いたい事はあるけど、何よりもまず――シルフを離せよ！」

「断る、この子は仲間だ。敵に身柄を引き渡す真似は出来ない」

言いながら、サラマンダーは背を向け立ち去ろうとする。

おい待てよ……シルフをどこへ持っていくつもりだ。

あの野郎は――どこに逃げるつもりなんだよ。

「おい待て！　てめえにはまだ山ほど文句が残ってんだよ！」

「……ふん、一つだけ警告しておく。私はただの魔術師ではない。そこのアルファ隊の隊長と同じ――聖人だ」

「せ、聖人……？」

「教会に認定された神に近い存在だ。ちなみに、私は神を否定するサヴィエトの事は嫌いだ」

「なんでだよ……じゃあなんで、てめえはその地位にいるんだよっ！」

「その話はまた今度――貴様に用事がある時にしようではないか？」

言いながら、邪炎のサラマンダーを中心に再び爆発が発生した。

爆風と熱波が俺達に容赦なく襲い掛かってくる。そして、やっと目を開けたと思いきや――そこにはもう2人の姿はなかった。

邪炎のサラマンダー。
何者だったんだ……アイツ。サヴィエトとは逆の思想を持ってるってのに、なんであの男はサヴィエトの、しかも赤の軍神なんて所に身を置いているんだ？
次第に疑問が深まっていく。聖人……チッ、どこぞのねーちんかよ。
いや、アレはゴツい男だからアッ○アさんか？　だけど炎タイプっぽいし……。
とにかく、何かこの先――まずい事が置きそうだ。

雨は嫌いだ。
水は炎を消してしまうものだからな。最も、私の出力からしてみれば、この程度の雨など大したことはないのだがな。私――邪炎のサラマンダーはシルフを抱え、古宇坂市を脱出した。
最も、早急に日本国内から脱出しなければ、すぐに追手は来るだろうが。その追手と言うのが先程の聖人リーリヤか、あるいはこの国の治安維持組織かは知らぬ。後者は余裕だ、だが前者とあればこの私とて少しは手こずりそうである。
やれやれ……と、その時。ポケットの中に振動を感じる。
携帯電話……ふん、硬質（こうしつ）のノームであるか。

「ノームか」

『いかにも、硬質のノームとはこの私の事ですよ。そちらの仕事は終わりましたか？』

相変わらず……耳に障る声を持つ男だ。

私はこの男があまり好きになれない。私がこんな世界に堕ちる前の、神聖なる教会に所属していた頃からの同僚だが、その時からノームに対する気持ちは変わっていない。

外道で騎士道精神から外れた――ただのムカつく嫌味親父だ。

「たった今、風剣のシルフを回収し、市内から脱出した所だ」

『それにしても情けないですねぇ。赤の軍神たる者が別働部隊の支援もありながら、高々地方都市一個さえ落とせないとは……全く歴史に残る大敗北ですよ』

「アルファ隊と例の裏切り者が活躍したらしい。あれだけの人数がいた別動部隊は7割が壊滅した。貴様の方こそ敵の戦力を甘く見過ぎではないか？」

『それでも、別動部隊の雑魚はともかくシルフは赤の軍神の一員です。標的（ターゲット）に敗れるようでは、その資格を持つ価値があるか疑いたくなりますねぇ』

「街全体に特殊な術式が働いていた。いくらシルフとて、その術式に圧迫された状態では全力を出し切れなかったのだろう。事実、彼女の本気はこの程度ではない」

『ふ～ん……しかし、貴方は随分負け犬の肩を持つのですねぇ……邪炎のサラマンダー』

全く……赤の軍神はどいつもこいつも、自分本位な連中ばかりだ。騎士である私からしてみれば最悪な連中だ。それにシルフの肩を持つのは当然の事。私はこの子の真実を、つまりこの子の辛き過去を聞かされた人間の一人なのだ。だから私だけでも――この子の味方

でいるつもりだ。
そんな事は……一度も口にはしていないのだがな。
口にできるわけがない。彼女の過去は――他人が語れるほど軽いものではないのだ。

「貴様の方こそ冷酷さは相変わらずだな……硬質のノーム」

『まあいいでしょう……さて、そろそろ戻ってきなさい邪炎のサラマンダー』

「面倒くさいな……なんなら私が今から引き返し、標的も回収してやってもよいが？」

『命令違反ですよ。帰還命令は聖波（せいは）のウンディーネの命令でもあります』

「レニナの命令であれば、即刻引き返すのだが……ヤツの命令か」

『いけませんよぉサラマンダー。そのような台詞を聞けばウンディーネは怒るでしょう』

「……ふん、まあいい。失言であったな」

『そうですよぉ、それではさっさと引き返してください。上も今回の失敗を受けて相当お怒りのようですからねぇ。こちらも、一応お咎めが最小限になるよう努力はしていますよ』

「了解した、今から帰還する」

返答すると、私は電話を切ってポケットの中にしまい込んだ。

気がつけば、私は古宇坂市のほうを向いていた。アルファ隊に隊長の聖人、そして風剣のシルフの攻撃を喰らってもなお立ち上がり続け、その事情に胸を痛めたあの標的。その標的の少年に感銘を受け立ち上がった自衛隊という、日本の国防組織……。

その三つが重なり、この風剣のシルフを完膚無きまでに叩きのめした。

「硬質のノームよ……古宇坂、そして日本は――貴様が思っているほど甘くはない」

これは一大事である。魔術世界における歴史に残る……大事件だ。敵を甘く見るな。私は直感で感じた……敵は想像以上に手ごわい連中であると。

全く……レニナのヤツは、とんでもない輩を狙ったモンだ。

藤島圭介……あの男の力は、一体――。

自衛隊基地近くの田園地帯……だった場所。大きな爆発と火災が発生し、畑だった場所は焦げ臭い焦土と化した。さらに中心点には爆発の影響で、クレーターまで出来ていた。私――白藤早苗はこのクレーターの中で倒れていた。

鼓膜が吹っ飛ぶかと思ったよ……身体もバラバラになるかと思った。でも、直撃の寸前に瞬間移動（テレポート）したお陰で、死だけは回避できたよ……。

「……っ」

痛い……手を見ると血がべっとりついている。あはは……明日、

学校に行って圭介の顔を見る事が出来ないかもしれない。
でも……よかったのかな？
侵入者は撃退した。これで……少しは恩返しになったのかな？
でも……っ。

「……っ！　けほっ！　ごほっ！」

咳き込み、血の塊を吐きながらのろのろと立ち上がった。それが限界……ダメージが大きすぎて歩くことが出来ない。もう少し……休んでからのほうがよかったかな。
でも、とにかく早く圭介に教えないと――赤の軍神が本格的に動き始めたって……っ。

第１７４話，赤の軍神（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「さて、そろそろ秋アニメの季節だな」

大吾「ｆａｔｅ／ｚｅｒｏ最強だろ！」

重原「大吾は厨二病だからねぇ」

圭介「は？　Ｃ３はいいパンツアニメだったろ！」

重原「圭介は典型的萌豚だからねぇ。どうせＩＳでブヒってたんでしょ？」

大吾「広ちゃんはどうなんだよ！」

圭介「そうだ、てめえさっきから文句しか言ってねえじゃないか」

重原「俺は全ジャンル見るよ」

圭介「なにそれすごい」

大吾「ある意味神だな」

第175話，新たに手を組む者達

「ふぅ、ミネットちゃんはこれで平気かな？」

ウチ――木下木葉はミネットちゃんの救出に成功した。今はただ気絶しているだけ、昏睡状態という危険な所からは抜け出せたみたいかな。だけど、しばらくは安静にしておくべきかな。

後は早川悠、この人を救わなきゃ。今、早川悠は事務机に寄りかかっている。どうやら完全に気を失っているようだ。その上鼻や口、頭からも血が流れている。これは……ちょっとどころじゃないくらい危険な状態かな。早く救急車を呼びたいけど……困ったかな。

ウチの携帯がさっきの通話で切れてしまった。ウチ一生の不覚かな。充電くらいはしておくべきだったかもしれない。でも、下のフロアに電話があったハズ。回線が生きていれば、そこにある電話で救急車を呼ぶ事が出来るかもしれない。

「君はよく頑張ったよ。最後に使った能力だけは不思議だったけど……それでも、君はミネットちゃんを守り抜く事が出来たんだから」

言いながら、ウチは早川悠の頭を撫でていた。

こうして見ると寝顔は可愛らしい。人の寝顔ほど素直なものはないかな。

こうして撫でていると、まるで弟が出来た気分になる。

「もう少しだけ待ってて欲しいかな。君も必ず救う――今から救急車を呼ぶから」

流石に今回、怪我を治す治療プログラムは持ってきていない。こればかりはこの世界のお医者様に見てもらった方が確実かな。だか

らもうちょっと待ってて欲しいかな。
その前に倒れないでね……。
ウチは早川悠やミネットちゃんに背を向け、オフィスから飛び出してた。電話がある下の階に行って救急車を呼ぶために――。

……く、そ……結局、どうなっちまったンだ……？
世界が暗い。体中が痛ェ……頭がぼんやりしてやがる。部屋は静かだ、さっきまで木下木葉の声が聞こえていた気がするが、結局三原のクソ野郎はどうなった。
このオレ――早川悠は三原のクソ野郎に勝ったのか。でも思い出せねェ……仮に勝ったンだとしたらオレはどうやって戦った。超能力も使えねェ、歩くこともままならねェオレが、どうやってあのすばしっこいクソ野郎と……しかも三原の姿がない。死体すらない気がする。
あの野郎ォ……どこに消えたってンだァ？

「……あ……ぁ……？」

今にも再び眠っちまいそうなほど、意識がぼんやりとしている中、木下木葉のものとは思えねェ新たな足音が聞こえてくる。複数……チッ、どこかの集団が来た見てェだ。
まさか、三原か……クソ、この状態じゃ戦えねェぞ。

「貴方が早川悠でしょうか。少々、お話してもよろしいですか？」

飛んできた声は妙に落ち着きのある男の声であった。三原じゃねえェ、声して聞いてねェからわからねェが、三原よりも若い感じに

聞こえるな。誰だァ……知らねェ声だ。まさか学園から送られてきた新手のクソ野郎じゃねェだろうな？

男の姿はよく見えないが、周りには顔さえも隠した兵隊が銃を構えている。要は特殊部隊に守られるようなヤツ、相当高い地位にいる野郎ってワケか。

「……何の用だ、オマエは何者だ？」

「ヴィンペル隊……と言っても貴方には意味がわからないでしょう。我が国のアルファ隊が魔法少女による特殊部隊だとすれば、ヴィンペル隊は男の魔法使いの部隊ですね。任務は近頃はアルファ隊と同じ事が多めですが、本来は魔動力施設防護です」

つまり……この世界の連中じゃねえ、ミネット達の世界の連中か。しかもアルファ隊の仲間のヴィンペル隊と来た。名前だけはミネットから聞いた事がある。人員こそアルファ隊の上をゆくが所詮は後方の施設防衛が任務。装備や隊員の質はアルファ隊に劣っているらしい。

最も、ミネットから聞いた話でしかねェがな。

けど何故――そんな特殊部隊のヤツがオレの所に来やがったんだ。

「何の用だ……オレとヴィンペル隊に接点なンてあったかァ？」

「殆どありません。貴方の事もお話程度にしか聞いておりませんよ」

「はン――まァいい、話くらいは聞いてやろォか」

「聞いていたよりも紳士的なお方で助かります、それでは本題に移りますね。早川悠、我々と行動を共にする気はございませんか？」

行動を共にする……このオレが異世界人――特異点とか。
例外的にミネットやリーネというガキとは行動を共にし、木下木葉って異世界人の科学者には変換機の事で世話になった。
だが、それだけでアイツら以外のヤツと、行動を共にする理由にはならねェ。

「……どォ言う事だ」

「今回の騒動では佐井学園の有力部隊が動き、貴方や我々の仲間を襲撃しました」

「三原のクソ野郎か」

「ええ、その三原という男の手によって、我々の仲間に重傷を負った者もいます。それに、彼らは貴方が一度目的を阻止した程度で思いとどまるとは思えません」

「そりゃあな、あの学園に情けも容赦もねェ。やる事は最後までやるだろうさ」

これでもオレは少し前まで学園で、散々汚ェ仕事をやってきた身だ。だから、あの学園の内部の事情はコイツらよりは詳しい自信がある。
オレが暴れた程度じゃ――あの学園は絶対に止まらねェ。

「ええ、学園は貴方の敵でもあれば我々の敵でもあります。それだけではありません、サヴィエトと言う組織の行動が最近活発になってきています。アルファ隊とヴィンペル隊の二隊のみでは、両方の問題を片づける事は不可能です」

「軍はどォした。オマエらの国にもあるンだろ？」

「まだ、正式に戦争をやっているわけではありません。増してやここは我々からしてみれば異世界です。おおっぴらにこちらの正規軍を送りこむ行為は、少々常識に欠けると思うのですよ」

「そォかい……ンで、結局オマエは何が言いたいんだ？」

「貴方の力はそのまま軍事方面に利用可能です。現在、我々は過去に罪を犯したものの、戦力になる者を集めて新たな部隊“ザスローン”を創設しようと考えています」

オレは過去に罪を犯した……と言う所で反応する。

罪人……チッ、それってオレの事じゃねェかよ。

「ヘェ……で、丁度いい罪人がここにいたと？」

「貴方は我々の仲間を数十名ほど殺害しました。ここだけの話、一時はサヴィエトの魔法使いよりも貴方をどう倒すかの話で、当時襲われていたアルファ隊やその仲間の我々ヴィンペル隊。そして我々の上にある連邦特殊情報総局は盛り上がっていましたよ」

「そりゃあどうも、随分と有名人だった見てェだなオレはァ……」

「はい、結局貴方も罪人です。しかし罪を償うことは可能です。命の危険を晒してでも平和を取り戻す事が出来れば――貴方の罪は償われると思いますよ」

そんなんで償えるなら悩みはしねェよ……とは思ったが、悪ィ話じゃねェな。要するに罪人を集めて新部隊を創設し、それで学園や

サヴィエトと戦おうってわけだろ。こんな形と言ってもついでに学園を潰せるってンなら、確かに丁度いい話かもしれねェな。
まっ、同時に気に入らねえ話でもあるが。
こんなヤツらの下につくことが気に入らねえ……。

「一つだけ教えろ。その新部隊を創設したらオレらは何をすればいいんだ？」

「色々やってもらう予定ですが、大きな仕事としては佐井学園の解体。そして我々と共にサヴィエト亡命政府を崩壊に追い込み、アリーナ・ウラジミーロヴナ・レニナらの身柄を拘束する事です」

「なるほど、戦いの原因を根元から潰すってかァ」

「それで、どうしますか？」

どのみち、散々人を殺しまくったオレはもう――光の道に戻ることは出来ねェ。
それでもオレには守りたいモンがある。
だが、光という場所からそれを守る事、いや……居る事さえ許されねェ。オレが唯一存在出来そうな場所と言えば、今誘いを受けている闇の世界。闇の世界は血も涙もねェが、だからと言って何かを守ってはいけないという決まりはねェ。
なら俺の進むべき一つ――闇の世界から光の世界を守ることだ。

「好きにしろォ……」

「わかりました。それでは貴方を新入りとして迎える事にしますよ――」

これでいいんだ……。

どんな形だろうと、ミネットを守ることが出来るなら――これで別に……。

こうして、オレはもう一度闇の世界に戻ったのだ。それも、ミネット達と出会う前に暮らしていた所よりも深い闇の世界にな……。

悲しいなァ、一度光を知ってからこの世界に入るのは……まァいい。そんな甘ったれた事を考えている暇があるなら――学園をどォ潰すかを考えたほうがよさそうだ。

雨が深々と降り続け、私の能力によって生まれた炎も気がつけば鎮火していた。

私――明智凪紗は黒ずくめの男達と戦っていた。藤島と木下を守る為にな。大胆に超能力を使って戦っちゃったけど、まあ多分大丈夫だろう。この黒ずくめ達はおそらく、佐井学園で暗躍していた連中に違いない。私が超能力を使っても驚かなかったし……十中八九そうなんだろう。

それにしても、どうして佐井学園の組織が動き出したんだ。それが何故、藤島や木下を狙って攻撃していたんだろうか。

私は濡れたアスファルトに倒れる黒ずくめ達を見る。

う～ん……謎だな。結局この者達は何の為に動いていたんだ？

「あら凪紗、丁度いい所で発見したわ」

ん、この声……不意に誰かが話を掛けてきたが、この声は間違いない――。

「雪乃……？　こ、こんな所でなにして――」

「貴女を探していたのよ。私もずっとこの街にいたのよ？」

「そ、そうなのか？　だから避難所で見かけなかったんだっ」

「そう言うこと。それでね凪紗、ちょっとお話があるんだけど……いい？」

「うん、構わないぞ」

「ありがとう。それじゃあ早速話をするわね」

倒れている黒ずくめの人達を見ても驚かず、何時もの調子で話を続ける雪乃。確かに雪乃も元々佐井学園の生徒で、１年の頃は私のクラスメイトだった。

多少の事では驚かないのもわかるけど……それにしたって無反応すぎるぞ。どうして雪乃はこの人達を見ても驚いたりしないのだろう？

だけど次の瞬間、

「一緒に佐井学園と戦わない？」

そんな疑問を吹き飛ばすほどの――凄い事を雪乃は口にした。

学園と戦うって……私達があの佐井学園と？

流石にぶっ飛び過ぎているぞ、あの学園と真正面から戦おうだなんて……っ。

「確かに、私もあの学園に対していい印象は抱いていないけど……でも」

「大丈夫よ。最大の敵――早川悠も今や学園の敵だわ」

「ど、どういう事なんだ。雪乃っ」

「言葉のままよ。この黒ずくめの人達は佐井学園の暗部組織の人達よ。そして、この人達は早川悠と戦っていた。どういう事か説明しなくてもわかるわよね？」

「本当……なのか？　あの男が学園の敵に回ったってっ」

「おそらくね。でも、これで学園側の戦力は大幅に低下したわ。今なら私達が手を組めば学園を叩き潰すことが出来るかもしれないわよ？」

確かに雪乃は強い。五本指と呼ばれる、佐井学園に在籍する生徒の中でも特に強い超能力者の中でも3番目の実力を誇る。それで彼女――西園寺雪乃の強さだぞ。

だけど、それに比べて私は単なる発火能力者（パイロキネシスト）。雪乃のように特別強い能力を持っていわけじゃない平凡な超能力者。

それに敵にはまだ――実力第2位の超能力者がいる。

さらに――第4、第5、それ以外に彼らには及ばないながら、強い能力を扱える強者どもが学園には沢山いるんだぞ。私と雪乃が手を組んだって勝ち目なんか……。

「本当に……大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。確かに正面勝負でこちらに勝ち目はないわ。でも、作戦を練って一つずつ確実に敵を倒していけばそれは可能かもしれないわよ。それに私が作ろうとしている反学園組織“フレンド”のメ

ンバーは、現時点でも私だけじゃないのよ？」

「……？」

と、その時。

街灯さえ灯っていない道路の真ん中、暗闇から一人の少女が現れる。ゆっくりと歩く少女はどういうわけか、半袖夏仕様の初芝の制服を着用している。まさか……初芝の生徒なのか？

やがて少女は雪乃と並んだ。

化粧がいらない程に整った顔。肩まで届く紫色のしなやかな髪。その両サイドに赤いリボンが結ばれた活発そうな雰囲気を放つ少女だ。

……待て、この子もしかして――。

「あ、朱実……？」

「えっ、ウソ！　ホントに凪紗じゃん！？」

雪乃の隣に並んだこの子は木山朱実（きやまあけみ）。確か1年の頃、つまり私がまだ佐井学園にいた時のクラスメイトだ。それと確か、雪乃の幼馴染でルームメイトだった気もするぞ。

だけど……どうして朱実が初芝の制服を？

「紹介……しなくてもわかるわよね？」

「あたりまえだろ。それより朱実、その制服……」

「転校してきたんだよん♪　だって雪乃が心配だったしね！」

「……って事は、それじゃあフレンドのもう一人のメンバーって」

「――そう、朱実よ。朱実は戦闘には不向きだけど、朱実の偏差電換（オブザーブホリック）は敵の大まかなスペックを知れる便利な能力だわ。おまけに朱実は武器にも詳しいのよ」

「いやぁ、父が軍オタだったから自然に知識がついちゃったんだよねー」

朱実は偏差電換（オブザーブホリック）という、対象物を分析し、数値で観測する事が出来能力の持ち主。

対象物を分析する能力だから、人の戦闘能力や武器の性能、それどころか気象観測もある程度まで行えるらしい。私の能力より使えるかもしれないぞ……でも、あくまで朱実の偏差電換（オブザーブホリック）は対象物を観測するだけで、決して力が向上するわけではない。

朱実は戦闘タイプじゃない。

朱実は強制されるのが嫌だから、雪乃に強制されたわけじゃなさそうだけど、だからってこんな危険な世界に足を踏み入れて欲しくないぞ。相手は生半可な気持ちじゃ勝てない相手だ。

「朱実、どうしてフレンドの一員になったんだ？」

「どうしてって……う～ん、雪乃を助けたかったから？」

「雪乃を……？」

「うん、学園さえ潰せばあたしらは自由の身だしね！」

自由の身……確かにそうだ。あの学園が消えてなくなれば、誰も学園のくだらない計画の犠牲になる事はない。今日だって、木下が撃たれる事もなかったんだ。

早川悠だって学園さえなければ、あそこまで外道にはならなかったハズ。この黒ずくめ達も学園がなかったら、今頃普通の人として日常を営んでいたかもしれない。

あの狂った学園さえなければ、藤島が襲われる事も……っ。

「もちろん無理にとは言わないわ。友達を危険な目に遭わせたくないのは私も一緒よ……なんなら、私は一人で戦う覚悟だって出来ているわ」

「それはダメ！　あたしもあんたの力になるの！」

雪乃も朱実もやる気満々だ。自分の身を守る為に、友達を守る為に。これ以上、学園の行動による犠牲を増やさない為に――。

それなら……私だって、藤島を学園から守りたい。

木下の仇を討ってやりたい。この黒ずくめ達に襲われた藤島達を守りたい――。

覚悟は決まったぞ。決心した、私には――守りたい人がいる。

「……わかったぞ、私も戦う」

「凪紗……」

「凪紗、本気！？」

「うん、このはは2人を放ってはおけない。それに私にだって……な？」

あえて詳しい事は言わなかった。

だって……なんか、その……恥ずかしかったからっ。

「……わかったわ」

「雪乃、これでメンバーは3人になったね！」

「そうね、でも3人じゃ勝ち目がないわ。だから今から――仲間探しをしましょう？」

……こうして、私と雪乃と朱実。佐井学園の現実を知る3人が集まり、フレンドという反学園組織を立ち上げたのだった。

それは学園を潰す為――大切な友達を守る為に……。

第１７５話，新たに手を組む者達（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「やっと話が進んできた」

大吾「もう本編だけで１７５話。番外話も全部カンウトしたら１８４話だよ」

重原「正直長過ぎだよねぇ」

圭介「ホントすみません。でもまだ終わる気配がありません……っ」

大吾「赤の軍神にサヴィエトそのもの、佐井学園とか問題は山積してるしな」

重原「果たして何話まで続くんだろうねぇ？」

圭介「知らねえけど、ようやく８・１７編もお終いだな」

大吾「長かったぁ……」

第１７６話，穏やかな日常

８月２２日、月曜日。

先日のシルフらが暴れた一連の騒動は、８・１７事件と命名され、日本の歴史に残る大事件として記録されたのである。俺こと藤島圭介もあの後色々忙しかったんだ。取り逃がしたとは言えシルフの暴走を止めた功績は警察に評価され、なんと俺は警察協力章を受賞した。

しかし、それと同時に色々と事情聴取を受けたりで、結局騒動の影響で翌日は臨時休校となってその翌日、１９日も事情聴取の為に学校を欠席。

土日も殆ど休めず、そして今日……ようやくいつもの生活に戻る事が出来たのだ。

「ふわぁ……けーすけ様ぁ、眠そうですねっ」

「お前も人の事言えねえくらい眠そうだな……」

「あんた達昨日ちゃんと寝たの？　というか、ここ数日ずっと連絡つかなかったわよ」

「お兄ちゃんとクーにゃんはあの事件の後、忙しかったみたいだけど何やってたの？」

「俺も暮葉も犯人に遭遇してたから、警察とかから事情聴取を受けてたんだ」

「もきゅ！？　そ、そうですよ！　だからしばらく忙しかったのですっ！」

っと、言っても5割ほどは嘘になる。
暮葉はあの日、太股を撃たれたが大事には至らなかった。その場で組んだ、回復術式というヤツが効果を発揮したらしく、翌日には被弾した後さえ残っていなかった。
しかしその後、暮葉は今回の騒動の始末書執筆に明け暮れ、同時に今回の残業もしなければいけなかった為、俺と同様ここ数日はめちゃくちゃ忙しかったと言うわけである。その為俺達2人はここ数日プライベートな時間が少なく……と言うより睡眠も殆ど取っていないのだ。
まあでも、暮葉が残業してましたーなんて、伊吹はともかく葵には言えないよね。

「ホント？　暮葉はともかく、あんたはま～たアニメかゲームじゃないの？」

「違うわっ！　ここ数日ホントに忙しかったんだよ！」

「そうだよね、お兄ちゃんここ数日ずっとお出かけしてたもんね。きっと禁断の兄妹愛がバレて近親相姦と言う事が問題になったんだよ！」

「うわっ！　あ、あれほど葵ちゃんに手を出すなって言ったのに！　ばか圭介っ、変態！」

「けーすけ様！　近親相姦は最低だと思うのですっ！」

「違うわ馬鹿共！　ああもう、お前ら朝っぱらからしつこい！　いい加減にしろ！」

けど、こういう日常が戻って来たんだよな……。
よかった、こうしてコイツらとくだらない話をして、一緒に笑って……やっぱり平和ってモンは伸び伸び出来ていいもんだなぁ。
それから数十分後、学校に到着し、1年の葵と別れた後に教室へ向かった俺達。久々に登校してきた暮葉を女子達は温かく迎え、俺の所にも――。

「は、ぐぅあわっ！？」

突然、両サイドから飛んできた拳が俺の頬を捉えた。俺を殴ったのは、三馬鹿の黒木と赤佐の得に馬鹿な2人組であった。ちくしょう……なんでいきなり殴られたんだ！

「いきにゃりにゃにしゅんれすひゃっ！？」

「ニュース見たぞテメェ！　なに勝手にヒーローになっちゃってんだよ！」

「でぇも、犯人逃がしちまったあたりが実に藤島らしい、アホなミスやったなぁ」

「つーかシルフが何だか知らねえけど！　俺が戦えばよかったぜ！」

「そうやな黒やん！　そうすれば、今頃伊吹ちゃんも黒やんにメロメロやったでぇ？」

「なんで藤島の前でしか大事件が起きねえんだよ！　なんで俺出番がねえんだよおおお！」

そう、コイツらの言う通り――俺の顔はニュースで全国に流れて

しまったのだ。
単身犯人と戦い、事件を終息に導いた高校生として――。
そのせいだろう。黒木と赤佐は大活躍した俺に嫉妬しているようである。だからって思いっきり顔面ぶん殴る事ねえだろうに……地味に痛ぇ。やっぱりこの2人強いじゃねえかよ。でもシルフと戦ったらボロ負けしそうな気がする。コイツらじゃあの風に耐えられるか微妙だぞ……？

「よかったですねけーすけ様。すっかり有名人なのです！」

「僕も毎日ネット確認してるぜ。圭介のヤツ、今時の日本人にしては骨があるって高評価だったな」

「そうだねぇ、リアル上〇さんとまで言われてるらしいよね」

誰が上〇さんじゃ、好きで戦ってんじゃねえんだよこっちは。だって向こうが俺や暮葉達を狙って襲ってくるんだから、自分の身を守る為にも仲間を守る為にも仕方ないじゃん。
全く……赤の軍神って何人いるんだろう。
というか、サヴィエトとアルファ隊の戦いっていつ終わるんだろうか。戦いが終わらないと皆で伸び伸び過ごせないじゃないか……って、あれ？
そういえば……。

「……っ」

「久々に学校に来てくれて喜ぶ圭くんの嫁でしたっ」

「なっ！？　ば、そそそそんなわけないでしょ！　大体嫁って何よ嫁って！」

「さあ、あたしは何も言ってないけど？」

「……別に、圭介が来たって嬉しくなんかないわよ」

ツッパリ伊吹はいつも通りだけど、今日の２年４組には何かが足りない。そう、携帯電話に文字を打ち込んで他人と話をするという、大変ユニークな会話をするお方がいないのだ。

どうしたんだろう。いちいち覚えている俺も気持ち悪いかもしれないが、アイツは少なくともこのクラスになってから休んだことは無かった。いや、噂だと去年も皆勤賞。一日も休まず成績も優秀だったらしいのに……今まで皆勤賞だった人がいないと、やっぱり心配になるなぁ。

とりあえず、確認だけでもしておこう。

黒木と赤佐はまだ暴走状態だし、大林は……チッ、あいつサボりかよ。時々あのチビ坊主学校サボるから困ったもんだ。

伊吹と小坂は仲良さそうに話してるし、ここは暮葉か大吾達に聞いてみよう。

「なあ、白藤は今日どうしたんだ？」

「もきゅ？　そういえば今日は一度も見ていないのですっ」

「ああ、白藤さんなら怪我で入院らしいよ？」

「入院？　重原……ソースあんのかよ？」

「ソースかい？　いつも通り大吾情報だし、間違いはないと思うよ？」

「フフフ……僕の情報網をナメない事だな！」

またおまえか！

情報収集能力相変わらず高ぇなオイ。多分ＣＩＡもビックリだろうな。大吾は情報収集能力の高さに定評のあるヤツだ。しかもコイツ、毎回かなり正確な情報を掴んでくるのだ。コイツの情報網って一体どうなってんだ？

高〇涼介だってここまで情報収集できるか微妙だぞ。

「しっかし入院って……大丈夫なのかアイツ？」

「心配しなくても平気だぜ圭介。僕が昨日入手した情報によると退院は今日だ」

「てめえは何でそこまで知ってるんだよ！？」

「僕は歩く情報本部だ！　知らない事など何もない！」

真っ先にプライバシー侵害で罪に問われそうな渾名だな。しかも情報本部って、随分とまあ微妙なチョイスだな。ここはカッコつけてＣＡＩって言ったほうがよかったんじゃないか？

「でもよかったのです！　大吾さんがそのことを知っている理由はともかく、白藤さん今日で退院らしいのですよ？」

「ああ、重傷じゃないっぽいしな」

いつ入院したのかまでは知らないが、８月１７日以降彼女を見ていないし、多分１７日から今日までの５日間だろう。仮に１７日に入院したとしてもたったの５日。どうやら、白藤は怪我と言っても

そこまでひどい怪我を負ったわけではなさそうである。
よかったよかった……だけど、やっぱり心配である事には変わりない。
学校が終わったら会いに行ってやろうかなぁ。
でもアイツと親しく話せるのは俺だけだし……だからと言って、俺だけで行くのもなんだか恥ずかしい気もするな。よし、家に帰るついでだ。暮葉と葵を連れていくとしよう。
白藤は特殊な子だけど、暮葉も葵も不思議っ子だ。
多分、変人同士で仲良くなれるだろう……。
よし、放課後の予定は決まりだな。白藤のヤツ――元気にしてるだろうか？

第176話，穏やかな日常（後書き）

・後書きトークコーナー！

凪紗「相変わらず藤島達のクラスは賑やかだなぁ」

雪乃「そうね、羨ましいわ」

圭介「お前たちのクラスはどうなんだよ？」

凪紗「まあ、賑やかと言えば賑やかだぞ？」

雪乃「私のクラスもよ？　賑やかな事は賑やかだわ」

圭介「じゃあ別にいいじゃない――」

純奈「ナギちゃあああああああああああん！」

凪紗「うわっ！　こら、離れろすみにゃん！」

朱実「ゆっきっの～ん！」

雪乃「ッ！？　あぁぁあ朱実っ！　スカートめくりは自重して欲しいわっ！」

朱実「ごめ～ん☆　つい学園にいた時のノリでやっちゃった♪」

圭介「お前ら、俺以上に苦労してるんだな……っ！」

第177話，ザスローン

8月22日早朝。

つっても……こんな所じゃ朝か夜かは分からねェ。ただ、頼りになるのは所々に設置されているデジタル式の時計のみだ。

このオレ、早川悠はヴィンペル隊が建設会社に依頼して作らせたという、灰色の分厚いコンクリートに囲まれた巨大な地下空間で訓練を行っていた。

そう、的に正確に銃弾を中てる――射撃訓練だ。

今のオレは残念なことに、超能力の使用に制限がかかっている。その為、制限時間内なら以前のように思いっきり暴れられるが、それを過ぎればただの身障者。戦うどころか、杖がなければ満足に歩くことすらできない弱者となるのだ。

そんな状態では戦えない。だが、この世界には情けも容赦もない。だから、オレは通常モードでもある程度戦えるようにならなくては、この先すぐに死んでしまうだろう。

その為の訓練だァ……。

「コイツは反動がでか過ぎてしっくりこねェ……次はコイツだ」

トカレフＴＴ－３３を目の前に台に投げ捨てると、今度は別の銃を左手に持つ。イタリアのベレッタＭ９２っていう、今でも軍や警察で使われているヤツだ。しかも、コイツはマガジン・キャッチが左右差し替え可能らしい。右手が杖で塞がっている今のオレには優しい拳銃かもなァ。

「どうだい早川、俺の目から見たらまだまだ修行不足みたいだけど？」

突然声が聞こえた。
オレは特に振りかえらず、そのまま返事をする事にした。
何故なら、ソイツが誰だかわかったからなァ。

「ラウル・ゲリエ……何の用だァ？」

「出来れば、素顔は故郷以外で晒したくなかったんだけどね」

ラウル・ゲリエ……元サヴィエトの魔法使いって話だったな。
変装が得意な中米出身のブードゥー教信者で、素顔は確かそこそこ端整な容姿を持つ色黒な男だったハズだ。見なくてもわかる、ここに来た時に一度姿を目撃したからな。

「言っとくが、オレに化けた所で余計に命を狙われるだけだぞ」

「それくらいわかってるよ。所で武器は決まったかい？　君も今日が初陣だよ」

「悪ィが、銃はオレの肌に合ってねェみたいだなァ」

オレは一度持ったベレッタＭ９２を台に置き、身体ごと後ろに向ける。やっぱりそこには色黒の上はＴシャツ、下はジーパンというシンプルな服装の爽やか野郎が佇んでいた。

「仕方ないよ、君の能力は制限時間付きだからね」

「侮辱してンのかァ？」

「そう聞こえたなら謝罪はするよ」

「チッ……まっ、オマエの言う通りだ。今は変換機（コイツ）に頼れねェ」

「何故だい？　確か“ザスローン”の技術部の報告によると、君のソレは３０分に延長されたのだろう？」

「知ったような口聞くンじゃねェよ……コイツは機械だ。機械を壊すのは簡単だ」

「なるほど、つまり壊れたらお終い……と言うわけかい？」

「それで終わったらオレは戦力外だ。話にならねェだろ」

やれやれ……ラウルのヤツも嫌な性格してやがる。同じ部隊にいる者として、オレの情報も少しは知っているハズだってのに……チッ、ここも周りは敵だらけだ。所詮、ラウルも他のメンバーも利害が一致しているだけだ。ちょっと裏を返せば全員危険な連中、全て敵に回る可能性もある。

最もオレも同じだがなァ……。

コイツらが使えねェンなら容赦なく切り落とす。もし、ミネットやリーネ達を狙うってンなら容赦なく愉快な肉塊に変えてやる。

オレはアイツらさえ――守る事が出来れば他の全てを失ってもいいんだ。

「ハハ、まあそれは置いといて……そろそろ仕事の説明をしてもいいかい？」

「何だ、オレの初仕事ってのはァ？」

「街の不良退治だよ」

「あァ？　チッ、サヴィエトや佐井学園を敵に回して戦う組織が、街のゴロツキを掃除するたァね……こりゃ驚きだァ。で、何でオレ達からしてみれば無害そうなゴミを掃除するンだ？」

「有害だからだよ、俺達が不良を潰そうとしているのは？」

なにィ……？

チッ、オレ達は映画に出てくる嫌な教頭役かよ。それってアレだ、その不良共を救おうとする熱血教師に社会的に殺される展開じゃねェのか？

つーか、何で頭もなければ力もねェ、そんな不良共が有害なんだ？常識的に考えてみろ。確かに一般人にとっちゃあ奴らは脅威だ。だが、全員武器や何らかの力を持つザスローンからしてみれば、殆ど無害にしか見えねェだろ。

「……どォ言う意味だ」

「古宇坂市には複数の不良集団が存在しているが、その中でも最大の一派である白陵高校の不良達が最近、サヴィエトらしい組織と関わりを持っているらしいね。武器の提供を受けているらしいよ」

「は～ン……で、ソイツらの狙いは何だ？」

「アレクサンドルの子孫拘束。俺も一時はソイツを狙った……まっ、負けたけどね」

「そんな強いヤツなら、放置してても大丈夫じゃねェのか？」

「確かにそうかもしれないが、人は誰でも数と武器の前には弱いんだよ」

それはオレ達超能力者にも言える事だな。オレにはあまり関係ねェが、他の超能力者は1対1での勝負なら確かに強いモンだ。だが複数が相手で、かつ武器を持っているとしたら……ソイツは間違いなくその超能力者を襲撃した連中の勝利だろう。

超能力者は無敵じゃねェンだよ。

基本的には他の人間と同じ――数と武器の前には無力なのだ。

「要するに、ソイツをオレらが支援（バックアップ）するってワケだな」

「その通りだね。個人的には気に入らないが……ま、仕事だから仕方ない。特に連中（サヴィエト）に対する忠誠心があったわけでもないし、別にどうでもいい話だよ」

「ンで、標的（ターゲット）は誰だ？　不良集団全員か？」

「現在白陵高校は船木健太の転校により、永渕派による一党独裁状態が続いているんだ。今回その永渕派のリーダーである、永渕晃の生首を切り落とすよ」

「永渕晃ねェ……」

どこかで聞いた名前だな……まあいい、ソイツが今回の標的ってわけか。後で顔写真でも見せてもらうとしようか。

今回の任務……アレクサンドルってヤツの子孫拘束を阻止するべく、サヴィエトに雇われた不良共の頭の首を切り落とす。簡単な仕事だ……簡単すぎるぜこの程度ォ。

「彼はその子孫を大変憎んでいるようだ。だから、サヴィエトと手を結んだんだろうね」

「報復の為に身を売り払ったってかァ、笑えねェ話だな」

そのアレクサンドルの子孫ってヤツが何者か知らねェし、興味もねェが……ソイツはサヴィエトと言い永渕ってクソ野郎といい、よほど多くの人間に恨まれてるんだな。それってソイツにも責任があるんじゃねェのか……って、オレがそんな事を考えても仕方ねェな。

仕事は仕事だ。乗り気じゃねェが……相手はサヴィエト。

やらなきゃ――ガキ共を守れねェ。

それから数十分後、最低限の装備をしたオレはすぐに現場へ急行した。

どうやら現地へは自動車で移動するらしいが……オイオイ、ちょっと待て。この黒くて荷台が金ぴかしているこの特殊な車は……、

「ラウル・ゲリエ。何で霊柩車なんだよ?」

オレは不機嫌そうに、電話でラウルに質問してみる。

まだ死んでねェのに霊柩車になんか乗りたくねェぞ、オレは。

『永渕晃の死体を運ぶからだよ。一応永渕晃は日本人だし、近藤さんの提案で死体の処理は日本式のほうがいいって事になったんだよ。俺としては祖国のやり方がよかったんだけどね』

「死体を運ぶからって霊柩車とは、しかもコイツら葬儀屋じゃねェだろ?」

オレは隣で車を運転している男を見ながら、思った事をそのまま

ラウルに告げた。
オレの隣で霊柩車を運転している男は中年だ。
だが……どう考えてもカタギには見えねェ。なんなんだよ……ピンク色のふざけたスーツにスキンヘッドで顔面に傷があって、その上怪しげなサングラスまで付けてやがる。
こんな露骨な暴力団員、むしろ怪しまれるんじゃねェのか？

『その通り、今回は高田組と言う暴力団の方々に協力してもらっているよ』

「どう考えても最近話題の暴排条例に引っ掛かるンじゃねェか、コレ？」

『大丈夫、俺らも十分反社会的な組織の一員さ』

そォだな……下手すりゃヤクザよりヤバいかもなァオレらは。なんせ、これからオレらは殺しの為に武器や能力を使いまくるワケだ。
やれやれ……佐井学園に戻った気分だ。結局オレに来る仕事は全部汚れ仕事だ。

「チッ……」

『それじゃ、俺はそろそろ仕事があるんで切るね』

「勝手にしろォ」

『一応、武運長久を祈るよ』

「へいへい……」

こうしてラウルからの電話は切れた。
ったく、好きな事を散々言いまくりやがって。次の仕事ねェ……ま、どうせあの複製変装野郎の事だから汚ェ仕事なんだろう。
そんな事を考えていたその時、組員が運転していた霊柩車はゆっくり停車する。
窓から周囲を眺めると、どうやらここは市内にある廃工場らしい。
永渕達のテリトリーか。つーか、不良の根城が廃工場とはありがちだな……。

「そんじゃ、後で回収に来るから白い兄ちゃん、気を付けてくだせえ」

「オマエらは戦わねェのか？　どォせ武器とか持ってンだろォ？」

「俺らが高校生をバラすのはマズいだろ？　だからアンタ、代わりに頑張ってくれな」

どっちも一般人からしてみれば、全く同じようにしか映らねェだろ。ザスローンもヤクザも非合法な活動を行う所じゃ、全く同じようなモンじゃねェか。
ただ、ヤクザにはそれなりの仁義がある。
オレらはその仁義ってヤツすらねェ――ただの無法者の殺し屋。
それがヤクザとオレ達の――唯一の違いってヤツだろう。
黒く、黄金に輝く霊柩車から降りたオレは、杖をつき工場内へと足を踏み入れる。
随分とまァ汚ェな……閉鎖してから何年放置してたんだろうか。
こんな場所を閉鎖してからいつまで経っても解体しねェから、永渕達不良がたまり場に変えちまうんだぞ。この廃工場はそこそこ広い上に死角も多い。不良がたまり場に使うには丁度いい場所だ。

「ふん……懐かしい空気だァ」

こういう所は不良以外にも――馬鹿共がよく根城にする。
佐井学園時代、オレはこういった所を根城にするクソ野郎共を――何十何百とブッ殺す任務を繰り返し遂行していた。それだけに、こういう場所は懐かしいなァ……悪い意味でな。

「さて」

そろそろ行くか……と思った所で携帯電話が鳴った。
画面には近藤政信と表示されている。
コイツもザスローンの一員――現代に生きる武士を自称する男だ。

「近藤か、何の用だァ？」

『ちょっとお前さんに伝えておきたい事がってなぁ』

古臭い喋り方で近藤はそう言ってくる。流石武士、言葉使いも古風なこったァ。

「……何だ？」

『なぁに簡単な事よ、今回の作戦。今、俺達の紅一点――アナスタシア・アベルツェフが奇襲をし掛けた所だ』

アナスタシアという、ザスローン唯一の女隊員ってヤツの名前を聞いた瞬間、
突然、鼓膜が破れるような轟音が轟いた。
僅かに砂埃が不自然に宙を舞い、どこかへ飛んでいく。
チッ……あの女、また泥人形でも作ってンのか？

「あの女は拠点攻略と言うより、拠点防衛の方が向いてンじゃねェのか？」

『それは俺も思ったんだけどなぁ、ゴーレムってのはインパクトが強いのよ。不良さんをビビらせんには俺の刀やラウルの魔術より、ずっと効果があるって事よ』

「でっ、それで混乱した連中をオレが一気に潰せばいいのか？」

『その通りよ。まっ、俺達は永渕晃の首さえ切り落とせばいいのよなぁ。出来る事ならそれ以外は生かしておいて欲しいもんよ』

「チッ」

オレはそこで電話を切った。

永渕以外は生かしておけってねェ……そりゃあまあ、サヴィエトと関わっている事実を知ってるのは永渕くらい。下っ端の不良がそれを知る術はない。だからってなァ……まあいい、要するに永渕以外を殺さず任務を遂行すりゃあいいってワケだなァ。

面白ェ……久々にゴロツキ退治だ。

オレはそう思いながら笑みを浮かべ、変換機のスイッチをｏｎにする。瞬間、懐かしい超能力者の感覚が戻ってくる。戻った、負傷する前のオレの状態に――。

「永渕晃、コイツを殺せばいいんだな？」

オレは静かにポケットから写真を取り出す。

悪人面な上にラインアート入りの坊主頭……いかにもってヤツだな。

まあとにかく、コイツ以外は殺すな……。

「さてと、そんじゃあ……オレも仕事を始めるとしますかァ」

コイツ――永渕だけを肉塊に変えるンだ。

第177話，ザスローン（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「うわぁ～、懐かしい連中がいっぱいだ……」

暮葉「作者は今までの敵キャラを使い捨てにしたくなかったらしいのですよ」

圭介「だからって……ねぇ？」

暮葉「そしてその為に犠牲になる永渕さん、ある意味可哀想なのです」

圭介「っていうか、永渕って攻撃手段が殴る蹴るしかないじゃん。どうやって早川と戦うんだ？」

暮葉「さあ、次回以降になればわかると思うのですっ！」

圭介「お前、地味に宣伝してるだろ？」

第178話，永渕晃

チッ……やっぱ不良は不良だ。
弱いって言葉がお似合いだった。オレは連中をものの数分で黙らせたのだ。酸素濃度を操作して酸欠状態してしてやっただけ。それで黙ったヤツらに拳銃を打ち込み、その足に風穴を開けて動けなくしてやったのだ。たったそれだけで――殆どの不良は無力な怪我人と化したのである。
超能力は殆ど使っていない。
三原との戦いで少しは学習したんだよ……これでも。それに、この程度の相手にそんな長時間能力を使う必要なんざねェんだ。一瞬、ちょっとだけ使ってやれば――それで十分だ。

「さてさて、永渕晃はどこだァ？　今まで潰してきた連中の中にいたか、それともアナスタシアのヤツがブッ殺したか……つまんねェなァ」

と、一応敵が残ってないかの確認を行う為、オレは工場内を歩いていたが、

「ハッ、なんだよ。俺達に喧嘩売ってきた奴は一人じゃねえのか」

不意に、そんな声が耳に入ってきた。
どこかで聞き覚えのある声……そういえば、一度初芝高校に行った時、こんな声の野郎と揉め事を起こした気がする。その時はソイツ、国宗って女にボコられて……。
まさかとは思うが、永渕晃ってあの女にやられたクソ野郎じゃねェよな？
あ？　と振り返ると、やっぱりな――永渕晃は国宗にボコられた

男だった。

「テメェ、前に初芝で会ったよな？　ムカつくもやし野郎がよぉ」

「するとオマエが永渕晃か。国宗にボコられた子犬ちゃんが何吠えてンだァ？」

「チッ、あん時は油断したんだよ。それに見ろ、オマエの仲間ならこの通りだぜ？」

永渕晃の右手を見てみると、ぐったり力が抜けているアナスタシアが掴まれていた。

どぉ言う事だ……泥人形使いのアナスタシアが不良に負けるたァ、現実は小説より奇なりって言葉がピッタリの事態が発生してるぞ。

永渕の野郎ォ……単なる不良が、どうやってあのゴーレムを破りやがった？

「どぉやって殺した？」

「まだ死んじゃいねえよ。後で俺の食い物になってもらう予定だからなぁ」

「とんだマセガキみてェだなオマエ。つか、あのゴーレムはどぉした？」

「最初はビビったぜぇ？　けど、この女をぶん殴ったらゴーレムは消滅したぜ」

なるほど、ゴーレムを叩かずアナスタシアを叩いたか。確かに、力のねェ奴が取る行動としては最も適切だ。永渕の野郎もいい判断

をしやがる。
　という事は、アナスタシアは油断したってワケか……馬鹿女が、ゴーレムがいるからって安心してるからこうなるんだ。いくら相手が雑魚の不良でも、警戒はしとけっつーンだよ。

「ハッ、オマエ面白ェなァ？　けど、オレはその面白いヤツを今から殺す」

「何言ってんだもやし野郎。俺を殺すなんざ馬鹿げた真似が出来ると思ってのか？」

「おめでてェヤツだ……これじゃあ、殺される理由さえ理解してねェだろうな」

「テメェ……完全にナメてるな！　殺すぞコラァ！？」

「オレを殺す……か。随分粋がってンなクソ野郎ォ」

「うっせえんだよもやし。オラァ、やれるモンならやってみろってんだよ！」

　あーハイハイうるせェうるせェ……そんじゃ、期待通りにしてやるか。一瞬でぎゃーぎゃー喚いている目の前のクソ野郎をブッ殺す。
　オマエはもう――ミンチ確定だ。

「チッ！」

　オレは変換機のスイッチをｏｎにした、これで超能力が使える。
アナスタシアが永渕の野郎の手元にある以上、あまり派手な技を使えばあの女も巻き込む結果になる。別に、オレはアナスタシアが死

のうが関係ねェが……殺せば確実にペナルティがあるだろう。
だったらついでだ――アナスタシアも助けてやろう。
風の操作を実行。
一歩、力強く足踏みすると、足の裏から吹き上げるような風が発生し、ロケットのような推進力で一気に永渕との間合いを詰める。
ぐわん、と五本の指を大きく開き、永渕の顔面を鷲掴みしようとする。
木下や圭介（あのやろう）には能力発動中、暴風の膜を使えねェって弱点を見破られ、特に後者には隙を突かれぶん殴られたが……この野郎にそこまでの頭はねェだろう。
増してや、この速度に対処できる不良は――いねェハズだ。
しかし、

「オラァ！」

永渕は右手でアナスタシアを放り投げて来た。
慌ててオレは前身を中止し、左足をダン、と地面に突きつけ、風の操作で今度は一瞬で１０メートル以上の高さまで上昇する。アナスタシアを避ける事が出来た。永渕の野郎も、流石にこの高さまでジャンプ出来る程の身体能力は持ってねェだろう。

「チッ、バケモノかよ……あの女といい、まあいい……ッ！」

ここで僅かに気になる事がある。なんだ……あの永渕の余裕そうな表情。どう考えても今の状況を理解しているとは思えない、勝者の表情である。あの野郎ォ……まさか、このオレと自分自身の実力を分かってねェのか？
しかし、そう思って笑みを浮かべていた――、

「――――ッ！」

刹那、永渕は悪あがきをするようにジャンプをするが、跳躍力がありえない。普通ならぴょんと跳ねる程度で終わる。それが一般人の跳躍力で、鍛えたって変わるモンじゃねェ。

ところが永渕は違った。

一度跳躍すれば１０メートル以上。オレと同じ高さまで飛び上がり、オレが驚いている隙を突くように不敵な笑みを浮かべ、永渕は固く握った拳を振りかざしてくる。

「オマエ……ッ！」

オレは咄嗟に暴風の膜を張り巡らし、永渕の一撃を防いでやった。普通なら弾き返された衝撃でそのまま地面に叩きつけられるハズだが、永渕は何事もなかったかのように着地する。

どォ言う事だこれは……あの動き、そこらの不良のレベルを遥かに超えている。

「ンだァ、この運動性能はァ？」

「魔法衣服（マジッククローズ）だったかな。奴らも便利な道具をくれたモンだ」

あの野郎、服の裏に特殊なモンを巻いてやがるな。その名前が魔法衣服（マジッククローズ）、名前から推測するに魔法の力で運動性能を向上させる特殊な衣服だろう。

チッ、サヴィエトめ。くだらねェモンを永渕に供与しやがって。アナスタシアのバカは油断しているところを、卑怯なアイテムで強化された永渕に隙を突かれたワケだ。これならアスリート並に鍛えているって自慢していたこの女を、アッサリ沈められるワケだ。

そうか……そっちがその気なら、オレも手ェ抜く理由がなくなった。

オレは風の操作を行い、ゆっくりと地上に降りる。
視線の先には永渕晃――装備品で強くなったつもりのクソ野郎の姿のみ。

「そォかい……そりゃ油断している女を倒せたワケだ」

「テメェも今すぐ沈めてやんよ。俺はテメェに勝たなきゃいけねえ……勝って藤島に復讐して伊吹ちゃんを手に入れなきゃいけねえんだよ！」

永渕は腰の周囲に装着したヒップホルスターから拳銃を出し、その黒光りする殺人用の道具の銃口をオレに向けてきやがった。
オレは特に何もせず、黙って永渕を睨み続ける。
ホルスターに収容してある拳銃さえ抜かない。常識的に考えれば、銃を向けられても黙っている今のオレはただの馬鹿か、余程自信のあるヤツにしか見えないだろう。
前者か後者か、オレにとっては何の関係もねェが……。
少なくとも、

「それに前の借りも返さねえとな！　だからさっさと死ねや、このもやし野郎がああああ！」

永渕の銃から弾丸が放たれた。それでも――前者になる気だけはしなかった。

「な、あ……がぁ……っ」

永渕が放った一撃で勝負は決した。
勝敗は接戦の試合を見るより明白だろう。
オレは何もしなかった。ホルスターにしまってある拳銃を抜かず、

かと言って事前に退避したり永渕に飛びかかりもしていない。弾丸を避けると言う荒技は流石に不可能だ。永渕が放った一発の銃弾は間違いなく命中した。

命中した弾丸は柔らかい肉を突き破り、鮮血が服にまで染みている。９ｍｍの弾丸は脇腹の肉を食いちぎり、弾は貫通して真っ赤な穴が開いている。

赤い液体はボタボタと、荒れた地面に落ちて染みてゆく。

「う、そ……だろ？」

絶望を感じているような声を漏れる。

やがて口の中にまで血が広がっていき、ダラリと涎のように赤い液体が口から流れ出す。

「――なんで、銃弾が跳ね返ってきたんだよ？」

その台詞を聞いてニヤリと、獲物を仕留めて喜ぶ猛獣のような笑みをオレは浮かべた。

薄く薄く、血に飢えたような笑顔を浮かべて、

「オマエも敵の情報を事前に調べておくべきだったな。いや、調べなくてもさっき拳を反射されて時点で気付くべきだったなァ？」

「どういうことだ……まさかお前――何らかの力で反射を？」

そんな馬鹿なという顔で、オレの真相に迫ろうとしている永渕。

全く、オレの本質に迫ろうとするのが遅すぎるンだよ。流石は脳味噌が足りてねェクソ野郎って所か。

まァいい、最後に特別にご披露してやろうか――オレの超能力（チカラ）を。

「さァって、と」

オレはその場に杖を置き、腰に両手を当てて再び永渕を見直す。恐怖と絶望のあまり後退りをしてゆく永渕晃を、今一度厳しく睨みつけてやった。

「ただの不良と超能力者の違い――今から徹底的に教育してやろォかァ？」

脅すように言ってやると、永渕は慌てて拳銃を構える。やれやれ、さっき弾丸を反射してやったってのに学習能力がねェヤツだ。きっと手が使えるからそんな行動を取るんだろう。なら永渕の右手を封じてやればいいんだ。手が潰れて使い物にならなくなったら――少しは頭を使うようになるだろう。

「遅っせェンだよォ！」

オレは足元にある小石を蹴飛ばしてやった。

それだけだった。

にも拘わらず、爆発的な速さで小石は飛んでいった。それこそ、拳銃から放たれた弾丸のように目で追えない速度である。

蹴りはオマケだ、本質は風の操作である。

蹴飛ばして浮いた小石を――風の操作で加速させぶっ飛ばしたのである。

「ぐァあああああああああああああああああ！」

ぐちゃり、と嫌な音が炸裂する。

小石は永渕の手の甲を貫通した。ザクロの用に引き裂かれた右手を、押さえようと身を丸めてしまったが、その程度の攻撃で永渕が

死ぬわけがない。
死なねェから――オレは次の攻撃を仕掛ける。
「さっきまでの威勢はどうしたんだ三下ァ？　もっと楽しませろよコラァ！」
ダッ、とオレは陸上の選手のように駆け出す。それも常識的な速度ではなく、風の操作で加速することによって、獲物を狩ろうとするチーター並の速度でオレは駆けていた。
一瞬で間合いを詰め、血に染まった永渕の服を鷲掴みし、とりあえず近くにあった廃倉庫の壁へ思いっきり叩きつけた。
衝撃で壁がへこみ、ダメージを受けた永渕が鮮血を吐き散らす。
立ち上がろうとするが、ダメージが大きすぎて立ち上がれないようである。
ハッ、これで終わりだな……。
「なァ、気になるンだけどよォ……死ぬ間際ってどんな気分なンだ？」
「く、そ……藤島に勝つ前に……こんなもやしに……っ！」
「ハッ、オマエいいヤツだなァ。ただの不良なら普通、必死こいて命乞いするだろうに」
「当たり前だ。俺は死なねえ……藤島に勝つまでは、伊吹ちゃんとヤるまでは……」
「だが残念だァ、その理由が気に入らねェ」
その言葉を聞き、永渕が残った左手で拳銃を構えた。ハハ、学習

能力がねェのかオレに殺されるのが嫌だから、せめて自殺でもしようとしてンのか。
どっちにしてもコイツは死ぬ運命だが……殺す前に一つだけ言っておこう。

「オマエの言葉でオレは――余計にオマエを殺したくなった」

「くそ、テメェ……何者だよ」

「何者？　そォだな……殺し屋だ」

言った瞬間――ドン！　と言う銃声が周囲を振るわせた。
オレの暴風の膜は銃弾に対して鉄壁だ。跳ね返った銃弾は永渕へ直撃し、文字通り弾丸が胸に刻まれ無様な姿を晒す結果となった。
胸部から血を流し、ぐったりとしている永渕。
弾丸は心臓を撃ち抜いたようだ。
ショックで即死か、仮に生きてたとしても数秒か数分以内にくたばるだろう。

「……」

終わった……文字通り血塗れな結果で仕事は終了した。
オレの初仕事はこれで完了だ……。
チッ、これからずっとこの世界での仕事か……オレも闇に堕ちたモンだ。

第178話，永渕晃（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「アナスタシア……アンタの扱いのひどさには泣けてくるぜ」

あかり「えっ？　なんでだ？」

圭介「あかり、お前出番くれとか言っていたけど、アナスタシアに比べたらお前は幸せだよ」

あかり「だからなんでたよ？」

圭介「出番早々気絶状態。永渕に武器として使われた挙句、しかもセリフ無し」

あかり「……」

圭介「だからあかり、余計で無駄な高望みはしないほうがいいぞ。世の中にはもっと不幸な人がいるんだから」

あかり「……うん！」

葵「納得しちゃダメだよ！？　お兄ちゃんの口説きに毒されちゃダメだよ！」

千早「出番……くださいっ」

第179話，死闘の一方で

――早川と永渕が死闘を繰り広げていたその頃、圭介達は……。

「ｗｈｅｎ　ｓｈｅ　ｗａｓ　ａ　ｕｎｉｖｅｒｓｉｔｙ　ｓｔｕｄｅｎｔ，ｓｈｅ　ｗｏｕｌｄ　ｏｆｔｅｎ　ｔｒａｖｅｌ　ａｂｒｏａｄ．　これを……藤島、日本語に訳しなさい」

えっ、ちょっと待てサッパリわからん……英語ダメダメなんだよ俺。

現在、２時間目の英語の時間。どうしようか、絶体絶命のピンチである。今、英語教師である細木（ほそき）先生が俺に当ててきやがったのである。くどいようだが、俺は英語というものが大の苦手科目であり、毎回赤点ギリギリ……いや、去年は赤点取ってたような気がするんだ。

それくらい英語が苦手だってのに……ねぇ？

そんな俺が日本語訳なんて出来るわけないじゃん。だけど、一応頑張ってみよう。

暮葉にいい所を見せて――俺が知的である事を教えてやる！

ｓｈｅは彼女、ｓｔｕｄｅｎｔは学生。んで、確かｗｏｌｄってのが世界だったような気がする。それから予想してそれっぽい文に翻訳すれば完璧だ。

……よし、翻訳出来たぞ――きっとこの文は……ッ！

「彼女は腐ったミカンじゃねえ、世界の学生だ！」

決まった……完璧だ。ここまで完璧な翻訳は人生初めてである。

アルベルト・アインシュタインが一般相対性理論を発表したのと、同じくらい凄いことを言ったような気がするよ。

しかし、何故か周囲は黙りこむ。
と言うか、細木先生は呆れたような表情を浮かべ、
「藤島、君はちゃんと中学に行ってたのか？」
「失敬な！？　一応初芝に入られだけの学力はありましたよっ！？」
「……はぁ、藤島が期末で赤点回避できるか心配だ」
ちくしょう、細木先生に軽くスルーされた。だから嫌だったんだよ、英語で当てられて答えるなんて俺にとっちゃあ自殺行為だよ。
一人で革命を起こすくらい無謀だったんだよ。
大体今更気付いたけど、ミカンって英語でオレンジじゃねえか。
さっきの文にはどこにもオレンジって書いてなかったし……はぁ。
ため息をつきながら、俺はゆっくりと座った。
「あたしって、ほんとバカ」
「圭介、もしかしてさ○かちゃんのつもりかい？」
俺の独り言に、重原がツッコミを入れてきた。
どうやら俺がいない間に席替えがあったらしい。俺と重原と大吾、野郎三人は仲良く揃って窓側の席になり、俺が最も窓に近く、重原は隣で大吾は重原の前に座っている。
暮葉と席が遠くなったのは悲しいが……でも、大吾や重原が近くにいれば、それなりに面白い会話も飛び交い、なんだか時間が前より早くなったような気がする。
「うぐ、そんな簡単に元ネタが分かるとは……流石重原」

「まあね、俺はさ○かちゃん派だし」

「なっ！？　ば、ほ……ほ○ほむが一番だろっ！？」

「心配すんなよ圭介。独りぼっちは、寂しいもんな……いいよ、一緒にいてやるよ……圭介……」

「気持ち悪いわ大吾ォッ！　つーかてめえはまさかの杏子派かよっ！？」

「いや、僕はマ○さん派だ。あの太股はたまらないね！」

どっちにしても大吾は変態だった。まあ、二次元限定だけど。大吾は二次元には欲情出来るが三次元には全く興味ナシ、日頃から「三次は惨事」と言っているくらいだしな。三次元に対する失望と二次元に対する愛情は多分、俺には理解できないレベルに達しているだろう。

俺はまあ二次元は超大好きなんだけど……今は、ねぇ？

そう思いながら、ふと俺は暮葉のほうを見てしまった。ちくしょう暮葉……どうして久々に学校だってのに席遠くなっちまったんだよ。何か知らねえけど寂しいじゃなイカ！

「お前ら授業中だぞ！　オタク談義は休み時間にしなさい！」

「「「す、すいませんでした……っ」」」

クスクスとクラスメイトの笑い声が聞こえる中、俺たち三人は細木に謝罪をする。

ところで細木よ、なんで今のがオタク談義ってわかったんだ？

まさか細木、教師の癖に結構アニメとか見る人なんじゃ……まあ

いいや、ぶっちゃけ細木がどんな趣味を持っていようがどうでもいい。そもそも細木に興味がないからな。

「ところでさ、僕最近肩こりひどいんだけど、どうすりゃいいと思う？」

「そんなの、身体を動かして解せばいいんじゃないかい？」

「それで肩こりが治るのはお前だけだろ広ちゃん！　圭介はどう思う？」

「ふふ、どうせ圭介は妹に揉んでもらってるんだよ」

「どうってそうだなぁ。俺は揉んでもらってるけど？」

「やっぱり圭介はリア充だな。まあ所詮妹と言えども現実の産物だが！」

なに言ってんだコイツら……つか、別に俺と葵は家族なんだし、危ない行為をしているわけじゃないんだから別にいいだろ。肩揉みしてくれるくらい懐かれてると考えれば、兄としては「キモイ」と罵られるよりは遥かに気分がいいと思うぞ。

まあ、うちの妹はそれ以上の事をしようとするから、困ったもんなんだけどな……。

「つか、お前ら身内とかいねえのかよ？」

「そんなものはとっくの昔に捨てた！　僕は悲惨な現実の家族を切り離したのだ！」

大吾は相変わらずのダメ人間っぷりである。早くなんとかしないと……いや、もう現代医学でも太刀打ちできないかもな。きっと医者も黙って首を横に振ることだろう。

「それはそれで救いようねえぞ……重原はどうなんだよ？」

「俺の家は道場だよ？　そんなに優しい親なんていないさ」

「ですよねー」

予想通りのあまり、思わず棒読みになってしまった。

そうだ、重原の実家は道場だった。さぞ厳しい家庭なんでしょう。家族の仲がいい家庭もあれば悪い家庭もあるが、そうやって見ると俺って家族仲いい方だったのか……。

日常が滅茶苦茶すぎて全然自覚がなかった……ごめんなさい。

「圭介の妹だってきっとそのうち圭介離れするんだ……現実なんてそんなもんさっ！」

「なに泣きながら叫んでるんだよお前……っ」

「やっぱ姉も妹も母親も二次元に限る！　劣化する上に歳とる度に性格も悪くなる現実はクソだ！　だから僕は画面の中の家族を一生愛する事にするよ！」

「お前なぁ……」

大吾は三次元への失望を吐きだすように叫んでいる。馬鹿だ、馬鹿がいる。そりゃあ兄と妹なんだからそのうち離れる運命にあるだろ。というかそれが自然だと思うんだ。例外的にうちの妹がそれを

望まないだけであって、俺はそれを結構心配しているんだよ。
だってこのままじゃ葵……絶対彼氏とか出来ないだろ。
お兄ちゃん心配だぞ。将来俺なしで一人立ちできるか不安だぜ。

「けど、やっぱり圭介の家は俺から見ても羨ましいよ」

「そうか？」

「俺の家なんて食事中はほぼ無言だよ。喋る暇があるなら精神統一しろとかでね」

「随分とまあ特殊な家庭だな。道場だからってレベルを遥かに超えてる気がするぞ」

「まっ、それは両親の前だけの話だけどね。姉や弟とは結構話すよ」

「結局てめえも家族とは仲良しなんじゃねえか！」

ちくしょう騙された。みんな家庭の事で色々悩んでるんだなって思ったのに、重原のヤツ親がアレなだけでその他とは仲がいいんじゃねえか！

「コラァお前ら！　今は授業中だぞ、心温まる話は後にしなさい！」

「「「すいません……っ」」」

しかも家族の話を授業中にするモンだから、細木に説教されたじゃねえか。そもそもなんで家族の話になってるんだよ。最初は確か肩揉みの話をしていた気がするぞ。肩揉みの話からいつの間にか家族の話になっていて……結局、誰が最初に肩揉みの話をしたかが重

要だな。
俺の記憶では確か大吾。そう――コイツのせいで俺たちは細木に怒鳴られたのである。
全くいらん話を振るモンだから……結局、その後は静かに授業を受けていたが、クラスメイトの皆さんが俺ら三人を見ながらクスクス笑っていたのは、ここだけの話である。
ああ、それより青空が眩しいなぁ……。
そして平和だなぁ、こんな一日が長く続けばいいんだけど……。
ていうか、ロクにアニメも見れない日常は嫌だから続いてくださいお願いします！
俺はサッパリわからない授業を放置し、青空を眺めながらずっと考え事をしていた。

第179話，死闘の一方で（後書き）

後書きトークコーナー！

雪乃「前回と比べたら随分温度差があるわね」

凪紗「私達の日常と、早川の日常には随分差があるんだな」

千早「……先輩、あの……平和だなぁは事件フラグですよ……っ？」

圭介「ふ、ふふ……俺はフラグクラッシャーだぜ？　そんなハズあるか！」

大吾「一級フラグ建築士の間違いじゃねえのか？」

重原「俺もそう思う」

第１８０話，初恋

４時間目、この日の体育は体育教師が健康上の理由で欠席のため、みんなでテキトーにサッカーをやる事になったのだが、まあカオスなことカオスなこと。

「ぐへぇ……やる気でない」

「あたしも、今日は動きたくない」

グラウンドに大吾と小坂が寝っ転がっている。どうやらコイツら、身体を動かすことそのものが面倒くさいらしく、さっきから一度も起きあがろうとしないのである。

もちろん、面倒くさがっているのはコイツらだけではなく、殆どのクラスメイトがやる気ありませんと言わんばかりに地面に座り込み、休み時間と思ってしまうほどのボリュームで、日常会話やら恋バナなどを繰り広げていた。

これはひどい、小学校の体育でさえもっとしっかりしていると思うぞ？

まあ、そんな文句を言う俺も……ぶっちゃけ面倒くさいから、隣のクラスにいる去年のクラスメイトと馬鹿騒ぎをしているところであるが。

ちなみに体育は2クラス合同で行われ、俺ら４組は３組と合同で体育を行う。

普段は男女で別れているが、この日はもうそんなことなどお構いなし。男子も女子もお互いの国境線を越え、仲のいい異性の友達やら恋人やらが楽しげに騒いでいた。

「皆さんやる気なさすぎなのですっ！」

「ホント、４組って自習になるといつもこんな感じだわ……っ」

「３組もだぞ、私とすみにゃん以外は毎回こんな感じだ」

「無気力な若者が増えているってまさにこの事だね、ナギちゃん！」

叫ぶ暮葉と生駒、呆気にとられた顔をしている伊吹と明智。

へいへいいいですよーだ、どーせ俺らは無気力な若者ですたい。

でも、俺らのことをまとめてそう呼ぶのは間違っていると思うんだ。

武道家の重原は極めて真剣にやっているぞ。

まあ、サッカーじゃなくて瞑想しているんだけどね。流石は武道家、ピクリとも動かないし気配も完全に殺している。そんな重原が何時まで持つか、現在俺は他のクラスの野郎共と賭けをしているところである。絶対負けられないぜ……この勝負、ボール片付けを賭けた聖戦なのだから。

ちなみに、俺は片付けの時間になるまで、重原（ヤツ）が動かないことに賭けている。

「……ふぅ、水でも飲みに行こうかな？」

「なっ！？」

ば、バカな……重原がいきなり瞑想を中止し、水を飲みに行きやがった。そりゃあ重原だって人間なんだから、喉が渇くのは当然の事である。だからって……ちくしょう、重原が片付け前に瞑想を中止したと言う事は、賭けは俺の負けという意味ではないか。

クスクスと、必死に笑いを堪える周りの野郎共。

ううう……堪えるなよ。どうせ俺は敗者だ、笑えばいいじゃないカ！

「だぁーっははは残念藤島ぁっ！　俺らの勝利だぜよ！」

「うげぇ……」

「広敏は超人じゃないんでぇ？　そりゃ水だって飲みたくなるよ！」

「くそーっ！　ボールの片づけは俺の仕事かよっ！」

「まっ、そういうわけで頑張ってくれぜよ藤島」

「それじゃあうちら水を飲みに行ってくるから、あとはよろしくな」

結局アイツらも水が飲みたいだけじゃねえかよ。

あ～あ……なんで俺、賭け事弱いんだろうか。脱衣麻雀はそれなりに強いのに、こういう現実の賭け事にはめっぽう弱い俺。ゲームで強くても現実で弱かったら意味ねえよ……こんなことになるんだったら最初から賭けなきゃよかったよ。

ちなみにアイツら、語尾に「～ぜよ」とか付けるほうが島原で、広島弁で喋る方が藤咲という名前である。まあ、超どうでもいいことなのだが。

「は～い、そろそろ時間なので片付け初めてくださ～い」

突然、俺たちに指示してきたのは、体育教師の代わりである長瀬先生だ。多分３０歳前後の長瀬先生の指示をする姿は、まるで小学校の先生ようであった。

要するに、俺たちは小学生レベルかよ……初芝は一応進学校だぜ？

流石にこの扱いはひどいだろ……。

そうは思いつつも、一応相手は教師なので口答えが出来なかった俺は、やれやれとため息をつきながら体育館倉庫へと向かう。片付け

るものはボールだけとは言え、やっぱり体育館倉庫まで行ってグラウンドに帰ってくる事そのものが面倒くさい。
片付けを賭けた事をさらに後悔した瞬間であった。

「はぁ……不幸だっ」

そんな事を呟きながらも、俺は体育館倉庫の中に入る。
ボールは確かこの籠に入れるんだったか。そうだよな、籠の中には大量のサッカーボールが無雑作に入れられていた。
間違えないようにしないとな。籠は複数並んであり、サッカーボールとバスケットボールとバレーボール、そして野球ボールとで別れている。確認せずに入れると、バスケットボールの籠にサッカーボールを入れるという、アホなミスを犯しかねない。
俺はそこまでドジじゃないぜ。なので、慎重に籠を見極め、俺は正しい籠にボールを投げつけてやった。バイン、と一度だけボールが籠の中で跳ねる。
一瞬ボールが籠から出てしまうのでは？　と、焦ったけが……大丈夫だったようだ。
ボールは籠の中でピタリ、と動きを止めた。

「おぉ、ナイスシュートだったわっ」

背後から、元気な声が聞こえてきた。
この声は――伊吹か。
首を後ろに向けると、サッカーボールを抱えた伊吹が佇んでいた。
なんだぁ……コイツも片付け役だったのか。

「シュートって、手で投げただけだぞ？」

「そりゃサッカーなら反則だけど、バスケだったら今のでチームの

メンバー大喜びよ？」

「そっかぁ。つまり、もっ〇んやひ〇たが大喜びするんだな！」

俺が叫んだ瞬間、伊吹は次第に呆気にとられた表情を浮かばせて、

「ねぇ、あんたの脳内ってアニメ以外には何かないの？」

という、キツ～い一言を言ってきたのである。

伊吹ちゃん……そりゃあ俺には禁句ですよ。確かに日柄一日中妄想してるけどさ、その妄想の内容がアニメ関係ばかりというわけではないんだぞ。

……まあ、それを証明する証拠もないんだけどね。

「へいへい、呆れる伊吹たん萌えー」

「う、うっさいわね！　萌えって何よ萌えって！？」

「怒るなよ、褒めるつもりで言ったんだぞ？」

「ほ、ほめ……別に、あんたに褒められたって何とも思わないけど……でも！　もう少しマシな褒め方があるでしょ！？」

相変わらずアップダウンの激しい子である。ほのかに顔を紅潮させた伊吹は、俺に萌えよりもマシな褒め方を求めてきた。これは――面白くなってきた。

そういえば久しぶりだな。こうやって伊吹をいじって遊ぶのも。久々に伊吹をからかってみるとやっぱり面白いな。反応がいちいち可愛くて面白いぜ。

俺は伊吹の反応を楽しもうと、心を躍らせながら伊吹を褒める言

葉を考える。
よし――これなんてどうだろうか？
「伊吹」
「な、なによ……？」
カッ、と俺は真剣な表情を作って――。
「最近綺麗になったよな」
「～～っ！？　ん、んなわけあるかぁっ！　もうちょっと上手く言いなさいよねっ」
「いや、お世辞じゃねえぞ。最近のお前、ホントに女の子な気がするよ」
「～～っ」
そう言ってあげると、伊吹はほんのり頬を紅潮させ、ぼんやりとしていた。
これはやっぱり――確信したぞ。
伊吹、お前ってヤツは……本当に仕方がないな――。
「伊吹、お前――好きな人でも出来たのか？」
「っ！？　い、いない！　そんなのいないわよ！」
あぁ……この慌てて否定する姿。ギャルゲーのヒロインと同じである。どうやら伊吹にも好きな人が出来たらしい。あれ、でも伊吹

の初恋は今も続いているって、誰だったかなぁ。誰かが言っていたような気がするけど……その初恋の人とはどうなったんだろうか？

「まさか……もう付き合ってんのか！？」

「いないって言ってるでしょ！　話聞きなさいよばか圭介っ！」

「そうか、そういえば初恋の人はどうなったんだ？」

「誰から聞いたのよっ！？」

「そんな反応をするってことは、いたんだな……初恋の人っ」

「ッ！？」

よっしゃいい展開になってきた。エロゲーで身につけた、女子の本音を知る為に話術は現実においても有効のようだ。まさか、伊吹がここまで思い通りの反応をしてくれるとは。

まったく、伊吹は最高だぜ――！

「よし、言おうか」

「な、なにをよ……っ？」

「初恋の人だよ」

「い、言わないわよっ！」

言わないわよ……か。

こんなセリフを吐いたのだ。俺が知らない間に伊吹も恋をしてい

た――どうやら、それは本当のことであるらしい。しかし気になるなぁ、伊吹の初恋の人って誰だろう？

「大丈夫、俺はこれでも口は堅いほうだぞ？」

「うぅ……否定できないのが辛いわっ」

「さあ、女は度胸！　なんでも試してみるもんさ！」

「それを言うなら男は度胸でしょっ！？」

「まあまあ、恋愛相談なら任せなさい！」

「……えぇ、いや……っ」

失恋４回（白藤含む）、今の所好きな人が一人いる俺。確かに、経験豊富かと言えばそれは嘘になるだろうし、しかも未だにチェリーボーイである。

だけど、それでも伊吹よりは恋愛経験があると思うんだ。

うん、少しは相談に乗れるハズである。

まあ……本当の目的は伊吹の好きな人を知る事なんだけどな。

「そいつと俺が知り合いかもしれないだろ？　大丈夫、絶対お前が幸せになるルートを選んでやるから」

「……あ、あんた……よ……？」

「……え？」

「――っ！　な、なんでもない！　今のは取り消しよ取り消し！」

「……え？　お、おい――伊吹！？」

俺が呆気に取られた声を漏らすと、耳まで顔を真っ赤にした伊吹が、恥ずかしそうに大声を上げた後にそのまま、俺を残して体育館倉庫から立ち去ってしまった。

……あれ？

第１８１話，価電子の数

６時間目、化学。

わけのわからない計算式が、黒板にズラリと白い文字で書かれている。アレがどういう意味なのかはサッパリわからないが、そんなことはもうどうでもいい。

それより、今日の体育館倉庫でのこと……一体何が起きたのだろうか？

一応おさらいしておこう。確か、ボールを片付けていた俺と伊吹は、体育館倉庫で２人っきりというエロゲ的なシチュエーションので、初恋がどうのこうのという話をしていた……と思う。

それで、やっぱり伊吹には初恋の人がいたらしい。それが既に過去のものか、あるいは今も続いているものかはわからないが……。

で、しつこく迫った結果――遂に伊吹は初恋の人を教えてくれたが……。

『……あ、あんた……よ……？』

……あんた？

それはおいしい食べ物なのか？　それとも新しいギャグなのか？

だけど確かに俺は聞いたんだ。伊吹が口から漏らした“あんた”という言葉を。

常識的に考えてみよう。あんたと言うのはあなたが変形したもので、江戸時代には既に使われていた言葉らしい。その意味は人が人を呼ぶ二人称代名詞であり、昔の人はもちろん、今でも関西系の子やツンデレ系の子――いや、普通の人でも使う言葉である。

つまりだな……あの場に居たのは俺と伊吹だけ。あんたって言ったのは伊吹で、おそらくそのあんたって人は俺で……ん？

それじゃあ、アイツの初恋の人って――？

「では藤島、Ｌｉの価電子数はいくつだ？」

「え、は、はは、はいっ？」

化学の西村めぇ……なんてタイミングで当てやがるんだ。俺は今、超真剣に幼馴染との事で悩んでいたってのに。大体、Ｌｉってなんだよ。ＩＳというブヒれるヤツなら知ってるけど。

う～ん……わからん。そもそもＬｉって何の略なんだ？　Ｌｉって【リ】って読むと思うからリウマチかリボルバーかな。よくわからんが……多分その辺の事を言ってるんだろう。

価電子数の意味はわかる。要は電子殻の周りをまわっている電子だろ。

Ｌｉの価電子数かぁ……う～ん、もういいや、好きな数字を並べちまえ！

「Ｌｉ、Ｌｉ……多分、にせんはっぴゃくにじゅうはち？」

「何をいっいてるかね藤島？　そもそもＬｉが何か分かっているかね？」

「え……多分、リトルバ○ターズエクスタシー？」

あれ、なんでみんな笑ってんの？

暮葉まで笑ってるし、西村先生完全に呆れてやがるし……どういうことなの？

あれ、もしかして俺……滅茶苦茶変なこと言った？

「はぁ……いいか藤島、Ｌｉはリチウム。ちなみに価電子の数は１だ」

「なん……だと……ッ！？」

知らなかったでござる――！

まさか、Ｌｉがリチウムって意味だったとは……全く、これだから化学は嫌いだ。

は○ないの理科ちゃんなら好きだけどな。でも、化学は難しいから嫌いだ。俺の知ってる科学は全部アニメとかゲームとか、あとラノベ経由の知識限定だぜ。

どうだ参ったか……ふ、ごめんなさい。頭が悪くて申し訳ございません……ッ！

「では木下、Ｎａの価電子数は？」

お、西村のヤツ暮葉に当てやがった。フフフ……だが残念、暮葉は俺の味方だ。暮葉は魔法に関する知識は豊富だが、流石に化学の話には疎いだろう。

某学園都市が舞台なラノベじゃあ、魔法を使う連中は化学に疎かったしな。きっとリアル魔法使いの暮葉も化学には疎いハズで――。

「１なのです！」

「その通りです」

ンな――馬鹿な、暮葉が正解しただと？

そういえば……暮葉のヤツ、チラッと中間テストの結果を見たけど、異世界人だからか歴史系はやっぱり半分以下だったものの、理数系の点数は高かった気がするな。

くそっ、暮葉は理系――いや、文系教科がダメなのはここが異世界だからだ。魔法とか向こうの世界の歴史には詳しいみたいだし、

もしかして――暮葉はあらゆるジャンルに詳しいのでは？
負けた……身体能力でも勝てなければ頭の良さでも負けたよ……ッ！

「圭介、やっぱり悔しいかい？」

「うっせ黙れ重原っ！　別に悔しくなんかないやい！」

「仕方ないんじゃね？　木下の化学の点数は今まで一番だった国宗の上を行くらしいぞ」

「うげ……マジな話なのか、大吾？」

「歩くＣＩＡの僕をナメるなよっ！？」

前は歩く情報本部って言ってなかったっけ？
大吾もアレだよなぁ、コロコロと渾名が変わる男だぜ。
しかも今度はＣＩＡかよ、まさか大吾のヤツ……金髪の鼻が高い白人の友達（ＣＡＩのスパイ）がいるんじゃねえのか？
うん、大吾の情報収集能力は異常だし、居ても不思議じゃねえぞ……。
なんて便利で怖い友達なんだ、長宗我部大吾……。

「あっははは、野郎共は相変わらずだねぇ」

「……た、ただのバカよ。特にばか圭介が……っ」

「そうですね……確かにけーすけ様はおバカなのです！」

おいコラ女子共、聞こえていないつもりかもしれないが……聞こ

えてるぞ？
特に暮葉のはよぉ～く聞こえましたよ。だって一際声が大きいんだもん。伊吹の声も周りが静かだから俺にも聞こえたし。ちくしょう……2人そろって俺の事を馬鹿にしやがってっ。
……けど、暮葉と伊吹。
地味に馬鹿にされたって、何故か2人を悪くは言えないな。暮葉は……まあ、楽しくて可愛くて一緒にいたいと思えて――結局、俺は暮葉の事をそういう風に思っている。
そして伊吹は――気になるなぁ。
やっぱり、アイツの言う“あんた”って俺なんだろうか。
アイツの初恋の人は――俺なんだろうか？
アイツの初恋はもう終わったのか、それとも――まだ続いているんだろうか？
……俺はその後も西村の話など聞かず、ずっとその事を考えていた。

それから数十分後、6時間目の授業は終了し――いよいよ待望の放課後である。
今日は暮葉と葵でも連れて、白藤に会いに行こうと思っていたが……まず、俺は暮葉を誘おうと思ったんだが、何やら暮葉は忙しそうに誰かと電話をしていた。妙に真剣だな……まさかアルファ隊の人と電話してるのか？

「――了解なのです、お任せくださいっ！」

小首を傾げながら、満面の笑みを浮かべる暮葉――言葉を切ると、一緒に電話も切ってポケットの中に携帯電話をしまう。
通話を終えた事を確認し、俺は暮葉に近づいてゆく。

「暮葉、もしかして今のってアルファ隊か？」

「もきゅ？　はい……その、また魔法使いが侵入してきたそうなのですっ」

「またかよ、最近多いなぁ」

「もきゅう……きっと連中がけーすけ様の居場所を掴んだからなのです」

やっぱりそれが原因か。今でこそ違うが当時は白藤がそうだったし、重原に取り憑いていたあの魔法使いもそうだけど、身近な所にスパイが居たのはやっぱり痛かったなぁ。

そのせいで俺の居場所が連中にばれてしまい、近頃――特に風剣のシルフが襲撃してきた前後あたりから、古宇坂に侵入してくる魔法使いの数が一気に増えた気がする。

魔法使いが増えると、それを倒すためにアルファ隊が出動する。つまり、魔法使いが攻めてくると暮葉も忙しくなるわけだ。

「そっかぁ……なあ、俺も一緒に行ったほうがいいか？」

「今回は大丈夫そうなのです。新設された部隊も作戦行動を開始したらしいですし、それに侵入してきた魔法使いは一人だけなのです」

「けど、シルフみたいに強い魔法使いだったら――」

「平気なのです、今回侵入してきたのはただの魔法使い――赤の軍神は現在国内にはいないらしいのです！」

だったら、大丈夫そうだな。
それに毎回俺が戦いに行って、暮葉を心配させているみたいだし……元々暮葉は俺を守る為に派遣されてきたんだ。少しは暮葉を頼ってあげなきゃ、暮葉本人にも失礼だろう。

「わかった、晩御飯までには帰ってくるんだぞ」

「はい！　けーすけ様も、最近この辺の不良の一部がサヴィエトと関わりを持って、けーすけ様を狙っているらしいので気を付けてくださいね！」

「すらっと恐ろしい事言うなお前……不良って……っ」

それじゃ鷲尾有資（わしおありすけ）の時と同じじゃないか。
不良がサヴィエトと関係を持つねぇ……なんでだろう。もちろん、お金目当てってのもあるのかもしれないけど、一番の理由は――やっぱり騙しやすいのだろうか？
まあ、そんな事はどうでもいい。それより――俺は暮葉のほうが心配だな。

「それでは、ぱぱっと片付けて捕まえてくるのですっ」

「おう、無理するなよ！」

俺の叫び声に見送られるように、暮葉は全速力で廊下を走ってゆく。廊下は走っちゃダメって風紀委員が説教しそうだけど、あの暮葉に追いつける風紀委員はいないだろうなぁ。
追いつけそうなヤツは一人いるけど……。
そういえば明智ってバイト始めたような気がするけど、結局なんでなんだろう？

明智が言うあの日って一体……？

まあ、考えた所で俺にはわからねえよ……だけど、あの時の表情からして、多分男関係の何かだとは思うんだ。明智に彼氏……う～ん、どうなんだろう？

居そうと言えば居そうなんだけど、逆にいなさそうなイメージもあるし。結局、明智に彼氏がいるのかわからない。そもそもあの日と言うのが男関係なのかさえ怪しい。

……まっ、やっぱ考えてもわからん事だ。

それより今日は暮葉はいないし、伊吹も部活のようで、しかも若干気まずい……。

小坂や野郎共は既に帰宅、明智は多分バイト。生駒は絶対に嫌だ。よし、葵を呼びに行くついだ。折角だから青山さんやあかりに会いに行こうかな？

それに決着もついたんだ――そろそろあかりに返事をしねえとな。

第１８１話，価電子の数（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「どうも、前回はこのコーナーがなくて申し訳ございません！」

伊吹「こんな駄コーナー、読んでくれてる人がいるかも怪しいけどね」

圭介「コラ伊吹！　そういうことは言わないの！」

伊吹「なんでよ？　事実かもしれないわよ？」

圭介「そうかもしれねえけど、楽しみにしている人だっているかもしれないんだぞ？」

伊吹「そんなのいないわよっ」

圭介「いるって、多分いるよ」

伊吹「そんなのいるわけないわよっ」

圭介「いや、いる！　１人はいるハズだ！」

凪紗「藤島……すごい低次元な争いだぞっ」

第１８２話，スケベしようや

「お兄ちゃん……スケベしようや」

「……」

ここは初芝高校。当然だ、これから学校に帰ろうと思っていたのだから。

問題は――何故俺が音楽室に閉じ込められているのだろうか。

そして、何故―湯子俺は妹にマウントポジションを取られ、しかも性的な意味で言葉攻めされているのだろうか。そして何故――葵は兄貴相手に発情しているのだろうか？

「……どうしてこうなったっ！？」

葵に主導権を握られた俺は、最後の抵抗として大きな声で叫んでみた。が、考えてみれば音楽室って防音壁なんだよね。俺の悲痛の叫び声は葵と、壁に飾られた有名な音楽家の皆さん（写真）の人達にしか聞こえてないんだよね。

どうしよう、俺はこれからどうなってしまうのだろうか……？

――事の始まりはつい数十分前。俺は葵を迎えに行くために、１年の教室が並ぶ場所をうろついていたのだが、その途中で俺は青山さんとあかりとバッタリ出会う。

「……っ！　せ、せんぱい……っ！」

「おっす圭介っ！」

「よっ、お前らは相変わらず元気そうだな」

軽く挨拶を交わした俺たち。これでも８月１７日以来の久々の再会。あの事件以降色々と忙しかった俺は、学校も欠席していて……と言うより家にすら居なかったのだ。

メールはともかく、電話をしている時間もなかった。その為、この２人と話をするのはあの日以来今日が初めてなのだ。

でもよかったぁ。心配していたんだけど……２人はとっても元気そうだ。

「先輩も……ご無事でよかったです……っ」

「心配したんだからな！　全く……電話の一本はよこせよなっ」

「あぁ……ごめん、ここ数日色々と忙しかったんだよ」

「あはは……大体事情は葵から聞いてますよ……？」

「ニュースでもやってたしな！　圭介はもう完全にヒーローだな！」

「ヒーローって、マスコミも随分大げさに扱うモンだなぁ」

俺はただ、守りたいものがあったから風剣のシルフと戦っただけだ。別に世界を救ったり世界から戦争を消してみせたりと、これと言って誇れるような事は何もしていないのに。

まぁいいか……ヒーロー扱いされるのも、決して悪い感じじゃないからな。ぶっちゃけ誰がヒーローでも構わないんだけど、今だけはそう呼ばれておこう。

……実はお店行ったら値引きしてくれて、結構助かってるんだよな。

「いえいえ、先輩はヒーローですよ……わたしの王子様ですっ」

「千早、その発言は痛すぎるだろっ！」

「あ、あかりだってその……流石はあたいの旦那様っ！　って言ってたじゃん……っ？」

「んみゃ！？　そ、そんな事言った覚えなんてないんだからなっ！」

青山さんのあかりの真似が地味に上手かった。声こそ全然違ったけど、やんちゃな感じとか結構あかりにそっくりだったぜ。

つーかあかり、お前は俺の事を旦那様だと思っていたのか。旦那様……クソ、どういうわけがくぎゅボイスで脳内再生される。これもきっと、釘〇病のせいなんだろう。

あかりの声はくぎゅとは全然違うのになぁ……俺も末期患者なんだな。

……ん？　そういえば――あかりの次に元気なヤツの姿が見えないな。

「あれ、葵はどこ行ったんだ？」

「えと……葵、ですか……？」

「おう。ちょっと帰りに知り合いの所に寄ってこうと思ってな、葵も一緒に連れていこうかな～って思ってたんだけど……どこ行ったんだアイツ？」

「葵なら確か、模試がなんだかって言ってたよな？」

「うん……多分職員室だと思います……っ」

模試ですかぁ……流石は俺の妹、頭の出来は兄貴の１０００倍はいいですな。俺なんて就職か進学かすら決まってないのに、模試を受けるって事は葵は進学するんだな。進学かぁ……確かに葵はまだ１年生ながら、学校でも三本指に入る学力を持つ天才少女だ。

その上運動神経も抜群……兄貴の俺とは出来の違う優秀な子なのだ。

ぶっちゃけ俺もテスト勉強をするとき、友達よりも葵を頼っている。だって葵は高３レベルの問題をスラスラ解けるヤツなんだもん。

多分、葵から見たら高２の問題なんて、算数における九九より簡単なんだろうぜ。

ちくしょう羨ましい……なんでだ？　俺って血のつながった葵の兄だよな。じゃあなんで葵は頭が良くて、俺は観察処分者並のおバカなんだろうか？

……まあ、考えたって仕方がねえし……とりあえず葵は職員室にいるんだよな。

「職員室かぁ……わかった、ありがとうな！」

「いえいえ、あの……先輩」

「ん？」

「明日は――」

「明日は部活来いよなっ！」

部活かぁ……そういえば合宿以来、写真部の活動で揃った事はないよな。結局8月17日以降も部活の集まりなんてモンもなかったし、写真部か……久々だな。

浅間部長は相変わらず変態やってるんだろうか？

「おう、ちゃんと暮葉も連れてくるからな。それじゃまた明日なっ」

「明日！　絶対来いよなっ！」

「……あかりに……セリフ奪われた……っ」

青山さん、大丈夫だよ。少なくとも一時期はあかりより目立っていたよ。それにあかりって名前が名前だけにそのうち――空気になっちゃうかもしれないぜ？

……げふんげふん、アッカリ～ンは不憫な子。

さて、葵の居場所も聞いた事だし――さっさと職員室に行くとしますか。

「……」

職員室。

俺にとっては、最も縁のない学校の一室であろう。なんせ、俺というおバカな男には教師と言う存在が恐怖にしか思えないからな。

職員室には教師が沢山いるんだぜ？　宿題やらテストやら説教やらと負の雨を散々降らしまくる、あの恐ろしき教師が大量に――。

ああ、考えてだけで嫌な汗が噴き出てきやがったぜ。

教師……なんて恐ろしい存在なんだ。

つか、一応職員室の中はドアの窓から確認できるんだけど、葵の

ヤツいないな……もう模試に関する用を終えて、あかり達の所に戻っちまったんだろうか？

「それなら俺も、あかり達の所に行ったほうがいいのか？」

よくわかんねえけど……職員室にいないんだし、アイツのことだ。友達を放置して一人で帰宅するってことはないだろう。多分、用事が終わったら友達の所に戻るはずである。

よし、じゃあ早速あかり達の所に戻って――、

「う、あ――！」

突然、俺は右手を誰かに握られ。強く引っ張られ、無理やり走らされた。

それは、あまりにも突然かつ一瞬の出来事である。何者かの不意打ちに、俺は何故こんな事が起こっているのか、誰の仕業なのかさえ分からぬまま――引っ張られ続けていた。

ちくしょう誰だ。せめて犯人ぐらいは特定しないと……って、オイ。

「にゃはは！　お兄ちゃんゲットだぜ！」

「俺はポ○モンじゃねえ！　つか葵、なんのつもりなんですか！？」

「お兄ちゃん、今から葵と一緒に音楽室に行こう？」

「なんでだよ！？」

「葵は音楽室に用があるんだよ？」

「だからって、俺が付き合わなきゃいけない理由がわからねえ！」

なんで俺は妹に強制連行されているんだろうか。

どうして行き先が音楽室なんだろうか。

この時はまだ――あんな展開になるだなんて思いもしなかったんだ。きっと、音楽室に笛やら教科書を忘れたから、一緒に取りにいこうって健全な話だと思っていたんだ。

だけど――現実はそう、甘いモンじゃなかったんだよ……。

「お兄ちゃん……スケベしようや」

「……」

「……どうしてこうなったっ！？」

こうして、現在に至るというわけだ……。

葵が俺を音楽室へ連れ込んだのは、俺と学校であ～んなことをする為だったのだ。確かに音楽室は一階だが、楽器と言う死角も多い。その上ここは防音壁なので、そこの窓さえ開けなければ音が外に漏れる事はないのである。

なるほど……人を監禁するのにもってこいな場所ってわけだ。

だけどなぁ……おかしいだろ。なんでエッチなイベントが発生してんだよ、俺は葵に対してそんなフラグを立てた覚えは皆無だぞ。

そもそも立てる気すら起きなかったのに……何故？

「えへへ……秋葉原で出来なかった分、今しちゃうね？」

「待て葵早まるな。俺とお前は兄妹だぞ？」

「愛に兄も妹も関係ないと思うよ！」

いや、それでも現実の近親相姦はダメだと思うんだ。近親相姦なんてエロゲーだけで十分足りてるんだよ、ヨスガでやってればいいんだよ。

現実の普通の兄貴はそんな事、望まないんだぜ？

しかも愛ってねぇ……俺は別に葵の事は愛してないぞ。家族としてって意味なら、もしかすると当てはまるかもしれないけどさ……。

「葵、今ならまだ間に合う。とりあえず服を脱ぐのをやめい！」

「大丈夫だよ？　お兄ちゃん裸ワイシャツ好きだもんね。ちゃんとブラを取ったらまた着るよ？」

いやいや、そういう問題じゃねえから……。

葵はマウントを取りながら、どういうわけか制服の上を脱いでいたのだ。ブラウスを脱いだ事により露わになった葵の肌。運動神経が特異なだけに引き締まっているが、筋肉質と言うよりは柔らかそうな感じである。きっと触れたらぷにぷにと、うぐ……妄想やめい俺。

相手は妹だぞ。だから――ハイパー兵器が反応したらおかしいはずなんだ。

「っ……お兄ちゃん、ぴくぴくしてる……」

「だからやめんかい！　俺の理性が少しでもあるうちにやめてくださいお願いします！」

やっぱり俺は男なんです……ええ、つまり言うとだな。いくら相手が妹でも限界を超えたら野獣と化するわけなんだよ。だから――理性があるうちにやめてくれ。

近親相姦というタブーを超えないうちに――勘弁してくれぇっ！

……と、心の中で叫んでいた――。

「――――ッ！？」

その時、突如響いた砕ける音に――俺と葵は思わず窓側へ首を向ける。

窓からはどういうわけか――武器を持った数人の男達が侵入してきやがった……。

第１８２話，スケベしようや（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「また懲りずにエロシーンかよ！？」

伊吹「ばか圭介……最っ低」

凪紗「近親相姦とは……いくら藤島が変態でも許せるレベルじゃないぞ……っ」

圭介「おいコラ、どう考えても被害者は俺だろ！」

黒木「知ってるか。男が強姦されても、女は男が女ににした時ほどの重罪にはならないらしいぞ？」

赤佐「ひどい世の中や！」

第183話，藤島はどっちだ？

俺が葵に襲われかけていたその時、謎の武装集団が音楽室の窓を突き破り、銀行強盗のように堂々と校内に侵入してきやがった。男達はどこからどう見てもヤンキーと言う風貌で、全員木刀や金属バットなどの武器を持っている。さらに、数人で俺と葵を囲みやがった。

武装している上に包囲され……迂闊に動くのは危険だな。いくらヤンキーとは言っても数が揃えばそれなりに強敵だ。しかも武器持ってるからな……俺はともかく、木刀や金属バットの一撃に葵が耐えられるとは思えない。葵の為にも――慎重に対応しなければ。

1、2、3、4、5、6……クソ、武器持ってるヤツが6人もいるぞ。

だけどなんだ？　この6人……優位に立っているのに落ちつきがねえな。全員これから初舞台ですという俳優並にそわそわしている。

どういうことなんだ……？

「お、おい……どっちが藤島だと思う？」

「知らねえよ！　クソ、俺らは名字しか知らねえ……藤島が男か女かわからねえよ！」

ちょっと待て、コイツら俺らの名字を知っているのか？

まさか……暮葉が言っていた――サヴィエトと関わっている不良なのか？

ハッ、残念だったな……コイツら、どっちが狙っている藤島か知らねえらしい。

サヴィエトも馬鹿だぜ。ちゃんと標的（ターゲット）を教えないからこうなるんだ。

「てめえら何者だよ、何しに来たんだよ！」

「ど、どうするよ……？　てか、この２人が藤島って名字かすら怪しいぞ」

「けど、手ぶらで帰ったら浜島の命が危ないだろ？」

「クソッ！　こうなったら男を潰して女を狩るぞ！」

コイツらがどういう経緯で襲撃してきたかは知らねえが、その叫び声で確信した。

今、狙われているのは葵だ。ヤツらは葵を標的と勘違いしているようだ。確かに葵は俺の血のつながった妹だから、アレクサンドルの子孫という意味では正しいけど……でも、連中が狙っているのは葵じゃなくて俺だ。だからこの場は勘違い――勘違いで葵は狙われている。

「うあああああああああああああああああああああああっ！」

その時、４人の不良が一斉に飛びかかってきた。

ちくしょう、いきなり４人かよ。同時に相手するのはかなり面倒だ。かといって音楽室にある楽器を武器にするわけにもいかない。助けを呼びたい所だけど……。

防音された音楽室で叫んだところで、誰も助けに来ないだろう。だったら仕方ない、葵を傷つけるわけにはいかない――俺一人で頑張るしかねえみたいだな。

「ち、くしょおおおおおおおおお！」

半ばヤケクソになりながら、俺は武器を持つ４人の暴漢の懐へ飛び込む。どうせ俺の体質的に殴られたって大したダメージにはならない。それを知っての上の突撃は――まさに恐れを知らぬ屈強な戦士のような……気がした。

「おらああッ！」

不良の一人がバットを振り下ろし、ガコン！　と言う衝撃が俺の肩を襲う。激しい勢いで金属の塊を叩き込まれ、激痛のせいで俺はガクン、と動きを止めてしまう。

けど――俺は倒れない。

慣れてるんだよ……殴られることにはな。一瞬脱力した俺の身体に、身体の奥底から湧いてくるような明確な力が籠る。

そして――、

「が、ァ……ッ！」

勢いよく身体を起こし、右腕を大きく振り上げる。俺は凄まじい勢いで握った拳を不良の下顎へと叩き込んだのだ。ゴンッ！　と、骨と骨が衝突しあう音が炸裂すると、振るった拳の餌食となった不良は文字通り――殴り飛ばされたのであった。

「て、テメェ！」

「こらあああァァああァッ！」

一人を殴り飛ばせば、仲間の不良がキレて殴りかかってくる。不良との戦いってのは必ずこういう展開になるから嫌なモンだ。とにかく、コイツらは一人で戦おうとしないのだ。タイマンを張る骨のある不良など――２１世紀の世の中には殆ど存在しないだろう。

群れれば強い。そう信じている不良は――必ず集団で行動する。
過去の経験上、不良との戦いの大半は1対多であった。全く……
魔法使いや超能力者はさらに厄介な存在だけどさ、ヤンキーさん達も面倒くさい相手だ！

「きゃっ！？　お、お兄ちゃんっ！」

「――ッ！？　葵！」

しまった――4人ばっかり相手にしていたせいで、残りの2人を忘れていた。不良に両腕を掴まれた葵は、そのまま2人組に連れ去られてしまった。ヤツらは自分で割った窓から、飛び出すように校舎から逃げていったのである。

「おっしゃ！　標的（ターゲット）確保！」

「ぐっ！　クソ……初芝はお坊ちゃん校じゃねえのかよ！？」

「なんで初芝のお坊ちゃんが、こんな喧嘩慣れしてやがるんだよクソが！」

確かに俺は初芝のお坊ちゃんかもしれない。でも……だからって、初芝の生徒が全員優秀なわけではないだろ。俺は初芝の生徒でも出来の悪い――路地裏喧嘩高校生（ストリートファイター）なんだよ。
だからって、コイツらみたいにグレてるわけじゃないが……まあ悪い子だよな。
とにかく、普通の人間と一緒にしてもらっちゃ困るんだよ。ただ荒事に慣れているだけじゃなくて――特異体質の持ち主でもあるんだからな。

「馬鹿野郎！　そんなのに構ってんじゃねえ――ずらかるぞテメェら！」

「ま、待ってくれ！」

一人の呼びかけによって、不良達は喧嘩をやめて一斉に逃走を開始する。葵を連れ去ったあの2人組のように、俺と戦っていた4人が勢いよく、窓から校舎の外へと飛び出していく。

「――ッ！　待て、てめえら！」

アイツらを逃がすわけにはいかない――俺も後を追おうと窓から飛び出すが、

「うるせえ、テメェは寝てやがれッ！」

「――ァ、が……ッ！？」

刹那、不良の一人が着ている服の裏側から、スプレー缶のようなものを取り出す。

スプレー缶からシューっと、白い何かが噴射された。それを顔に浴びた瞬間、目と鼻や口の中にまで焼けるような激しい痛みを感じ、石にでも躓き転んでしまった。

転んだ時にも痛みは感じたか、今は顔中の痛みのほうが深刻である。さらに涙や鼻水が富まなくなってきて、しかもゲホゴホと咳も激しくなってきた。

ちくしょう……アイツら――催涙スプレー使いやがったな。

「あ、おい……っ」

やべえ……直接殴られたダメージは大したことはないが、催涙スプレーは効いた。

本当なら今すぐにでもヤツらを追って、葵を助け出したいのに……俺は、催涙スプレーのせいで動くことができず、ただ、潰された目で前を見ようと必死になっていた。

「……ん？　あら、藤島君？」

視界が潰され、苦しんでいるその時――不意に誰かに声を掛けられた。

この声、女の子……だよな。それもどこかで聞き覚えのある声と口調だ。優しそうだけど意地悪そうでもあるこの感じ……もしかして。

「あ、く……さ、さいおん……じ？」

「そうよ、それよりどうしたの？　随分苦しそうだけど大丈夫？」

まさか、このタイミングで第三者に見つかってしまうとは……ちくしょう、これで西園寺に余計な心配をかける結果になっちまったじゃねえか。

だけど、この状況で誤魔化せるとは思えないし……だから、せめて今の症状とここで何があったかくらいは説明したかった。しかし、思いの外催涙スプレーの威力は強力で、結局俺はその後も数十分ほど身悶えしていた……。

西園寺が俺を発見してから数十分後、ようやく催涙スプレーの効果も薄れ、若干ヒリヒリするような気はするものの、視界も回復し

満足に動けるようにはなった。それで、予想通り俺が倒れている現場を目撃した西園寺は、あの場所で何があったのか、事情を聞きだそうとしてくる。

どのみち、誤魔化せるような話ではないだろう。それに、ここで西園寺を巻きこみたくないとか言って誤魔化したとしても、今回のこの騒動……一人で解決できるかは微妙だ。

不良との戦闘はともかく――肝心の葵を拉致った不良達の居場所がわからないのだ。

西園寺が知っているとは思えないが、それでも話しておくべきだろうと思い、俺はここであった出来事を西園寺に説明した。ただし、葵に強姦されかけた事は言わなかったけどな。

「ねえ藤島君、その人達に特徴とかなかったかしら？」

「特徴かぁ」

そう言われて、俺は葵を連れ去った連中の特徴を思い出す。特徴って言われても、普通に私服姿のただのヤンキーにしか見えなかったけど……。

それこそ白陵にいる連中とは違う、今時の不良の姿である。だから、どいつもこいつも派手で特徴なんてモンは……あ。

「そういえば、アイツらみんなクソ暑いってのに、ライダージャケット着ていたな」

黒い革製のライダージャケット。よくあるデザインだったけど……不思議なことにアイツらの上半身は全員、同じ柄のライダージャケットなのであった。

「……やっぱり、そいつらはK・M・Pだわ」

「け、K・M・P？」

なんだそれ……白陵じゃねえのか。

西園寺の口から放たれたソイツらの名は、聞いた事のないチーム名であった。

第184話，K・M・P

初仕事の後……いや、性格にはまだ初仕事の途中だ。オレ――早川悠は、その初仕事の後始末をアナスタシアと2人で行っていた。

死体の処理、血液の採取、証拠の隠滅……チッ、人員が少ねェからって、何もオレ達がこんな仕事をする事はねェだろうに。やれやれ、ザスローンってのは人使いの荒い組織だ。能力を使わねェで仕事ってのも結構しんどい……クソッタレ。

「お～いもやしの兄ちゃん。無理しねーでアタシに任せときなさいよぉ」

「チッ、早々に永渕にのされたヤツが偉そうにしてンじゃねェよ」

「っ！　あ、アレは油断しただけよ！　あんのクソ野郎ォ……まさか魔法衣服（マジッククローズ）着てるとは思わなかった」

「ふん……死ぬまで言ってろ」

さて、んじゃあ帰るとするか。確かオレや死体を回収する車が、ラウルのクソ野郎によるともうそろそろ来るらしいが……付き合ってられねェ。

それに、あの野郎も言っていたハズだ。この変換機は魔力を注入しねェと、全く使い物にならねェただのガラクタである。アルファ隊でもヴィンペル隊でもない、そういった正式な特殊部隊とは全くの別物である、この闇の組織にいる以上――知人との接触は好ましくない。

上からも説明を受けているし、そんな事はわかっているが……。

オレの場合、魔力補充という意味でなら、クソガキとの接触も可

能である。
　頻繁には会いに行けねェだろうが……まっ、会えるだけまだマシってモンだ。

「あら？　アンタどっか行くわけぇ？」

「収集車にはオマエ一人で伸び伸び乗ってろォ、オレは勝手に帰る」

「もやしの兄ちゃん、アンタ用事でもあんのかぁ？」

「魔力補充だ。能力使った分の魔力を補充してくる」

「そっかぁ。まっ、何にしてもアンタはザスローンで一番の実力者なんだから、さっさと変換機（ソイツ）を満タンにして帰ってきなよ」

「クソ野郎に殺さなきゃなァ……」

　言いながらアナスタシアに背を向け、廃工場を後にする。さァて、こんなふざけた臭いのする場所から出て、さっさとクソガキの所にでも行くとするか。
　８月１７日……あの日以来、オレはミネット達に会っていねェ。
　その日から今まで、能力を使う機会がなかったからである。今では魔力補充以外の目的でのクソガキ達との接触は、上からの命令で認められないことになっている。
　それにこの仕事を続けていく以上、いずれは死ぬかもしれねェしなァ……案外今回会いに行くのが最後だったりするかもな。
　さて、行くか……確かアイツのマンションはこっちだったハズだ。

それから数時間、既に時刻は４時近く。マンションに行ってみれば……誰もいねェ。

クソッタレ、あのクソガキ共は一体どこに消えたんだ。

まさか……いや、襲撃された痕跡はねェ。そもそも、そんな事があったんだったら真っ先に上から連絡が来るハズだ。すると、あのクソガキ共……外出中ってことか。チッ、人が折角生存報告しに来てやったってのに、どこに消えやがったんだ……？

「……」

携帯電話をポケットから取り出す。

ミネット・ローラン。

あのクソガキの名前だ。ここにいない上に居場所もわからねェ……なら、あのガキに直接電話をするのが一番いい方法だろう。

そんなわけで、アドレス帳に登録されているミネットの通話ボタンを押す。

電話に耳を当てると、コール音も無しにいきなり繋がった。

ミネットのヤツ……電話に出るのがこんなに早かったか？

『早川悠、何か用件ですか？』

違う……コイツはミネットじゃねェ、そもそもこれは男の声だ。口調も敬語なんてモンを知らなェミネットが使うようなモンじゃねェ。

かといって、リーネのものとも、同じザスローンにいる誰のものとも違う。

オレは――コイツのことを知っている。

クソッタレ、割り込まれたか……。

「悪趣味な野郎だ。ふざけやがって、どういうつもりだ？」

『貴方はそちらの世界ではもちろん、こちらの世界でも非公式な部隊の一員なのです。その存在は一般人にも軍にも、そしてアルファ隊やヴィンペル隊にも存在を知られてはいけない影の存在なのですよ。にも拘らず――貴方はアルファ隊の隊員に電話をしようとしましたね？』

「だから割り込んだってワケか……嫌なヤツだ」

相手のヤツの声、間違いねェ――オレを闇の世界に勧誘した顔も知らねェアイツだ。

『何か御不満でもありますか？』

「チッ、一つだけ言わせろ。オレがこれから電話をしようとした相手は、変換機に必要な魔力の唯一の供給源なンだ。ソイツの居場所を確認すンのもNGかァ？」

『残念ですが、その用事の場合でも接触は最低限にしていただきたいものです』

「そォかよ……じゃあいいや、もうオマエと話す事は何もねェ」

『そうですか、残念です。残業をちょっと頼みたかったのですけどね』

「残業だとォ？」

『ラウル・ゲリエ、及び近藤政信が早朝襲撃した――K・M・Pに関する件です』

「あ？」

アイツらもオレらが仕事中に、別な仕事をしていたってのか。ンで、そのふざけた名前のチームっぽい何かは一体何なんだろうか。どう考えてもサヴィエトのものとは思えねェし、学園のものでもねェ。あまりにもネーミングセンスがなさすぎるだろ……まァいい。

「K・M・Pって何だ？　まさか、永渕と似たようなモンじゃねェだろうな？」

『ご察しの通りです。K・M・Pとは“古宇坂・ミッドナイト・パワー”の略。古宇坂市を中心に活動するヤンキー達のチームです』

不良共のチームねぇ……やっぱり永渕と似たようなクソ野郎か。しかも、永渕は一応学生だったらしいけど、チームのメンバーはわからねェな。

若いってだけで、実際は無職だったりするからなァ……。

『彼らは先程初芝高校を襲撃、藤島葵様の身柄を拘束しました』

「襲撃だと？　ンで、その藤島葵ってのは誰だ？」

『我々の護衛対象の妹さんですよ。彼女は確かにあの一族の人間ですが、血は兄ほど濃くはないですし、ただの一般人なので、連中のリストには登録されていないハズなのですけどね』

つまり、名前も知らねェアレクサンドルの子孫の妹ってわけか。その妹の名字が藤島ってことは子孫の名字も藤島か？

藤島ねェ……聞いた事ねェな、結局ソイツは何者なんだ？

まァどっちにしても、コイツはアレだな……。

「ふん、襲撃されたのはオマエらがだらしねェからじゃねェのか？」

『一応その兄妹は、アルファ隊の特隊員が住み込みで護衛しているハズですが、彼女は現在別件でその兄妹を守るべく、サヴィエトの魔法使いと交戦中です』

「ソイツらを守ろうとした結果、ソイツらと離れて襲撃されたってか……笑えねェ話だ」

『アルファ隊もヴィンペル隊も、その他の特殊部隊も全力を挙げているのですがね。どうも最近はサヴィエトの活動が活発です。対佐井学園戦に備える必要もあります。我々の国はまだサヴィエト政権時代の痛手を引きずったままです。予算も人員も足りません、一切の余裕はないのですよ』

「……で、オレにどうしろってンだ？」

『藤島葵様の救出をお願いしたいのですが』

「救出ねェ……もうバラされてンじゃねェのか？』

K・M・Pがどれほどの腕前かは知らねえが、藤島葵ってのは一般人らしい。一般人が力のあるヤツに抵抗するのは難しいだろう。一般人の女の力じゃあ……もう殺されてるかもなァ。

しかし、電話の男の回答は――意外なモンであった。

『ご心配なく、彼らの目的はあくまで拘束し、サヴィエトに身柄を引き渡すことです。それに我々が派遣した諜報員によりますと、現

在藤島葵様は隙を見て逃走を図っているとのことです』

「なら、諜報員に救出させればいいだろ」

『残念ながら、派遣した諜報員が持っているのは拳銃一丁です。数で勝るK・M・Pには数人殺したとしても、おそらく勝てないでしょうね。藤島葵様も近所にあった誠和大学に逃げ込みましたが、残念ながら現在大学は夏休み期間中。最低限の人員以外はおりません。おそらく、彼女の逃走能力では持ってあと数十分ってところでしょう』

誠和大学。

確か、古宇坂市で唯一の大学だったな。しかも小規模な大学で、法学部とその中に3コースがあるのみだったような気がする。まァ藤島葵ってのが大学に逃げ込んだのは正解だな。いくら小規模とは言え大学は広いし、隠れる場所も沢山あるハズだ。

だけど大学もなァ……確かに大学の夏休みってのは始まるのが遅い分、終わるのも秋に入ってからだったような気がする。

それに電話の男の言う通り――ソイツの逃走能力には限度があるだろう。

『お仕事頼めますかね。報酬は現金とミネット・ローラン様に関する情報提供です』

「クソガキの居場所が知りたけりゃあ、仕事を片付けろってかァ？」

『言葉を換えればそうですね』

「チッ、嫌な上司様だァ…とりあず一つだけ約束しろ」

『なんでしょうか？』

「あのガキの居場所だ。仕事を片付けたら必ず教えろ。でないとオマエを肉塊に変える」

『恐ろしい脅しですね。約束はしますよ、ただ――貴方に私は殺せないでしょう』

「あ？」

『ふふふ……それでは、手際よく頼みますよ――早川悠』

ここで電話は切れた。

なんだあのクソ野郎……オレにオマエは殺せねェだと。

ふん、馬鹿な男だ。人間ってのは弱い存在だ。オレが酸素濃度を操作すれば、アッサリあの世に逝っちまうくらいに弱い生き物なんだ。あのクソ野郎だって同じ人間……なら、このオレが酸素濃度を操作すりゃああの世に送れるってわけだァ。

だからオレを怒らすなよォ……無駄な血ィ見る事になるぞ。

「……」

能力使用モードは残り２５分、魔力残量は十分だ。これなら、永渕達のような不良連中を潰すのに苦労はしねェだろう。

だが、極力能力は使わねェ……単なるヤンキーのような雑魚相手に、能力を使いまくるようではまだまだオレも半人前だ。

能力を使うとすれば移動と戦闘の補助、防御の為に暴風の膜を張り巡らすのみ。

それ以外では使わねェ――。

これから先、能力が使うない時で戦闘を行う可能性もゼロではな

い。なら、今のうちに能力を極力使わない戦い方を学んでおく必要がある。
武器は……拳銃一丁と５０発の弾丸。
相手は銃を持っていないだろうし、おそらくこれだけあれば十分だ……と、

「――――ッ！」

その時、誰かがオレの目の前を通り過ぎる。
近くにある階段を飛び降りるように下り、誰かと通話をしながら走る少年。ソイツは黒くて寝癖のような髪がピンと立っている頭。少しだけ細い気もするが、やや筋肉質な気もする体格。
握られた拳。あの顔、あの雰囲気、カッターシャツに学ランのボトム。あの少年は成和大学のほうに向かっているようである。
何をしに行くか……そうか、藤島葵は――。

「あ、の――野郎ォ！」

アイツはオレの前に立ち塞がり――特異点を救ったヒーロー。
なるほど、藤島葵は――アイツの妹だったのか。
ということはアイツの名字は藤島。名前は確か木下のおチビちゃん曰く、圭介って名前だったような気がする。
藤島圭介――やっと見つけた、フルネームも判明した。

「……ッ！」

無意識に変換機のスイッチに手を伸ばしたいたオレ。
そこでようやく気付く。馬鹿かオレは……藤島圭介へのリベンジ、２５分も魔力が残っていればそれは可能なことかもしれない。だけど、今はそんなことをしている場合ではない。藤島葵ってヤツを救

わない限り――オレはミネットの居場所を掴むことが出来ない。
無理に首を振り、藤島圭介のことを忘れ、意識を切り替えようとする。

「藤島葵、コイツを救えばいいんだな？」

なら救ってやるよ、たとえソイツが藤島圭介の妹だとしても、ソイツはただの一般人でありオレらの事情には関係ねェ。
そこに一般人が入るべきではないんだ。

「フッ、救ってやるよ……最も救いから遠い方法でなァ」

何もかも……血みどろに救ってやればいいんだよ。
それがこのオレ――早川悠のやり方ってモンだ。

俺は今、葵と電話をしながら誠和大学という所へ向かっていた。
西園寺の話によると、K・M・Pってのはこのあたりで活動するチームらしい。
だけど気になる事が一つだけあるんだ。そのチーム、今まで敵対するチームとの抗争はやっても一般人を襲う真似はしなかったらしい。でも、なんでだろうか。それなりの節度を誇りを持っていたチームがどうして――サヴィエトなんかと手を組んだんだよ。
それで、西園寺からヤツらのアジトを聞いて、そこに向かっていたのだが……。

「葵！　まだ大学にいるか！？」

『う、うん！　今ね、大学の大講義室に隠れてるよ』

「そうか。いいか、物音立てないでそこに隠れてろ。今助けに行くからな！」

『う、うん！』

俺は途中で進路を変更、誠和大学へ向かうことにした。理由は簡単、どうやら葵は隙を見て逃走を図ったようで、とりあえず清和大学に逃げ込んだらしい。

でも、８月のこの時期と言えば――大学は夏休みの最中である。部活をやっている人も、おそらくは大会やら何やらで学校にはいない。大学に籠って研究を続ける教授も当てにはならない。葵によると、警備員の姿も普段よりは少なかったらしい。

そして葵の話によると――ヤツらは既に大学に侵入しているそうだ。

『お兄ちゃん、クーにゃんやお姉ちゃんは？』

「暮葉は用事、伊吹も部活だ」

『で、でもお兄ちゃん一人じゃ危険だよ！？』

「大丈夫、お前のことは必ず助けるから！」

『お、お兄ちゃ――』

そこで俺は電話を切った。

確かに暮葉は仕事中だし、伊吹は部活中。特に今回の件は暮葉はまあいいとして、伊吹だけは絶対に巻き込みたくない。アイツにと

って不良とは――トラウマのような存在だからだ。
でも、決して俺一人と言うわけではない。今回は――西園寺もいるんだからな。
アイツが突破口を開いてくれるらしい、その隙に俺は大学に侵入する。大学に侵入すれば後は俺と不良達の戦いだ。
思い出してみれば、K・M・Pの連中とは何度か路地裏でやり合った事がある。
チームの名前は知らなくても、なんとなく服装に見覚えがあったからだ。
だが――それは俺が永渕を倒したという噂が広まったからである。だから、今回のように自分からK・M・Pに挑むのは初めてである。

「ちくしょう、葵――無事でいてくれ！」

そう叫びながら、俺は誠和大学正門を突破する。警備員はいない、いや、正しくはいるけど使い物にならない状態であった。何故か大学にいる警備員は。意識を失った状態で倒れている。
これが不良の仕業か、それとも西園寺が突破口を開いたからなのかは知らない。
けど、今はそんな事を気にしている場合でもない。だから俺は突き進む。ガラスが全部砕かれた正面入り口から――誠和大学内部へと侵入した。

第１８４話，Ｋ・Ｍ・Ｐ（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「あんたってやっぱシスコンよね」

暮葉「あ、それは確かに言えてるのです！」

圭介「なんでだよ！？」

亜紀「妹を助ける為に血相変えて大学に行く姿が完全にシスコンだった！」

圭介「いやいや、家族なんだから普通助けるだろ？」

あかり「あたいは別に思わないぞっ！　うん、エロ兄貴相手ならな！」

圭介「ひでえ妹だっ！」

千早「……先輩、あかりはツンデレなんですよ……っ」

あかり「ち、違うっ！　あんな兄貴いなくたって寂しくないんだからな！」

葵「葵はお兄ちゃんがいないと寂しくて死んじゃうよ！」

圭介「葵、てめえは少し兄離れしろ……」

第185話，流血大学

「まだ見つかんねえのかよ……おい！　藤島ってヤツはまだ見つからねえのか！？」

拳を壁に叩き付け、俺――浜島雅人（はまじままさと）は苛立っていた。

クソッ、いきなり意味不明な連中に脅され、藤島ってヤツを襲おうと思ったら、いきなり変なヤツにチームリーダーを殺されて、それでも俺らは意味不明な連中な連中に脅され、結局俺がチームリーダーになって藤島を襲って……。

しかも、その計画さえ失敗に終わろうとしていた。なんと、藤島ってヤツは隙を見てこの大学に逃げ込んでしまったのだ。

大学に襲撃してからも失敗が続いた。警備員が動き始め、襲撃者である俺たちを押さえこもうと活動を始めたのだ。しかも藤島ってヤツは見つからねえまま。

大体、なんで藤島って名字と、男と女が写った写真しかねえんだよ。これだけじゃこの2人のどっちが藤島かわからねえだろ。

「クソッ！　なんなんだよサヴィエトって……一体俺らに何の恨みがある。なんで俺らの信条と逆の事をさせようとするんだ。なんでその後俺らのリーダーが殺されたんだよ！」

もうわけがわからねえ……わかんねえよ。

でも、一つだけ言える事がある。

俺は無理やりK・M・Pのリーダーに仕立て上げられた。と、いうことは……俺も先代リーダーのように殺されるかもしれねえ。

嫌だ……殺されたくねえ。アイツがどこの誰に殺されたか知らねえけどよ、俺はまだ死にたくなんかねえんだよ。だから、生きれるためだったり――意地でも藤島ってヤツを捕える。

それで生き残れるんなら――俺はどんなことでも……ハハ、やってやるよ！

「え……い、いやっ！」

お、女の叫び声……ハハッ、ついにやったか。やっと藤島を見つけたか。藤島が見つかったってことは俺は――生き残れるかもしれない。

喜びに溢れ、テンションを上げた俺は、ポケットから無線機を取り出した。

今から無線機（コイツ）で仲間に連絡だ。

「浜島だ！　標的（ターゲット）発見。俺たちでソイツを捕まえるから、お前たちは警備員追っ払って車の用意を――」

『ぐわっ！　て、テメェなにしやが――――ッ』

え……な、なんだよ……これ。やる気のない返事が返ってくると思ったのに、どうしてヤツらの叫び声が聞こえた。なんで銃声が響いてやがるんだよ。

ありえねえ……警察、なわけがねえ。警察はすぐには発砲しない。あんなヘタレ、逃げようと思えばいくらでも逃げれるんだ。じゃあ誰だよ……向こうで銃を撃ったヤツは？

『はァいクソ野郎共』

なんだ……この声。

警察……じゃねえよな、言葉使いは俺たち並に汚い。それだけじゃない、狂気と殺意と血に飢えた雰囲気を放つ恐ろしい声。コイツ――ただ者じゃねえぞ……ッ！

『なァ、あの世ってどォなってると思う？　オレにはわからねェなァ……だからさァ、オマエらK・M・Pが確認してきたくれねェか？　つーワケで、天国か地獄かどっちか知らねェけど、あの世への片道チケットをプレゼントしやるから、感謝して死にやがれっつーの！　あぎゃははははっ！』

く、狂ってる……コイツ、頭が完全にイカれてやがる。

マトモなヤツの発想じゃない。無線に出た謎の男は完全に頭がイッている。常識なんて通用しないくらいに狂ってやがる。やばい……コイツは本気でヤバいぞ。早く、早く藤島って女を捕まえて大学から逃げ出さねえと――俺たち皆殺しにされちまう。

う、ああ……は、早く、早く仕事を終わらせねえと……ッ！

俺――藤島圭介は大学の廊下を静かに歩いていた。例えるなら、市街地でテロリストと戦う米陸軍のような感じで、俺は壁に背中を張りつけ、武器を構えていた。

現在、俺が手にしている武器は、丁度いいサイズにカットされた鉄パイプ。不意打ちで殴り倒した不良が持っていたのを、俺が鹵獲したものである。俺は鉄パイプを鹵獲した後、隠れては敵が近付けば鉄パイプを振りまわすという動作を繰り返し、今までに４人ほどの不良を倒してきた。

いくら不良とはいえ、正面から戦うのは面倒である。だからこそ、卑怯かもしれないが隠れながら戦う戦法をとったのである。こっちのほうが、確実に倒せるからな……。

「……っ！」

その時、廊下の奥のほうから物騒な物音が響く。
銃声。
凄まじい音が激しく炸裂し、今頃誰かが血を流している事だろう。
しかしなんだ、どうして銃声が聞こえるんだろうか。まさか……K・M・Pってのは銃まで持っているのか？
まずいな……もしそうだとしたら、鉄パイプじゃ太刀打ちできない。でも、俺の身体なら1発や2発程度なら問題ないハズだ。
俺なら——多少は喰らっても平気だ。

「さて、大講義室は……ここかっ」

大講義室に通じる大きな扉。そのノブに、俺は手を伸ばした。
ゆっくりと、ノブを回して扉を開けると、カチリという金属音が響く。おそらく扉の金具が動いたんだろう。開ける際に物音が響くのは仕方のない事だ。
でも、幸いなことに相手には聞こえていないようである。僅かに扉を開け、扉と壁の間から大講義室の中を確認できる。俺は隙間を覗き込み、薄暗い大講義室の中を確認する。
武器を持った不良達が5人。その不良に囲まれるように、葵が座り込んでいた。
全員、武器を持っている。
木刀や金属バット、鉄パイプにただの棒切れなど、種類は沢山だが……どれもこれも俺が持っているのと同じ、近接戦闘用の単純な武器ばかりだな。これなら俺でも戦えそうだけど……さっきの銃声のこともあるしな、もしかしたらアイツらも——銃を持っているかもしれない。
幸い、大講義室は机で死角が多い。
なら、ヤツらにとっての死角から——奇襲を仕掛けて短時間で沈めてやる。

そう決めた俺は――静かに大講義室に入ったのだが、

「お、お兄ちゃん！」

「あ？」

ひえええ、あ……アホか俺の妹は！

どうしてそこで叫ぶんだよ、折角奇襲を仕掛けられそうだったのに。おかげで不良の皆さんがゾロゾロと、不自然に開いた扉を見ながら近づいてきたじゃねえか。

俺は咄嗟に机の下に隠れたけど……こりゃあ、見つかるのは時間の問題だ。

相手はまだ俺を目撃していない、俺に気付いていない。

つまり――まだ不意打ちのチャンスはある。

「――ッ！」

そのチャンスを――俺は逃さなかった。

咄嗟に机から飛び出して、鉄パイプでボサボサとした茶髪の男を殴り飛ばした。こめかみに鉄パイプが直撃し、ゴァ！　という鈍い音が炸裂する。男は一撃で気絶したようだ。

1人撃破。

すぐ目の前にもう一人――剃り込みの男が立っていたが、

「おおァあッ！」

先手必勝。

鉄パイプで鳩尾を突き、怯んだ隙に鉄パイプを左腕だけで持つ。

そして、自由になった右拳を限界まで握り締め、思いっきり振り上げてやった。

ゴッ！　という打撃音が顎に炸裂すると共に、剃り込みの男は大きくぶっ飛んだ。
２人撃破、今の所順調である……が、
「う、動くな！　動くと女を……さ、刺すぞコラァ！」
「……ッ！　て、てめえ……っ！」
俺が残りの３人に近付くと、そのうちの一人が葵にギラギラと輝く何かを突き付ける。
それは、良く研がれたナイフだ。
首筋に刃先を当てられ、葵の首筋から僅かに鮮血が流れ出す。
寸止めではなく、少しだけ刃を葵に刺しているのだ……クソ、あの野郎。
「ど、どうだ迂闊に動けないだろ？　い、今から俺の言うこと聞いて――あ、がァッ！？」
その時、葵を押さえつけ、首筋にナイフを突き付けていた男が倒れる。
突然響いた銃声と共に――。
一度瞬きし、もう一度男の姿を確認してみる。頭がない……ぐちゃり、鮮血の中にまとまったピンクのような、クリーム色のぬちゃぬちゃした物体が、壊れかけの容器からはみ出ている。
「……ッ！　う、ぁ……ッ」
それを見て、胃の中から何かが込み上げてくる。葵は吐きこそはしなかったが、ひたすら悲鳴を上げている。大講義室中に葵の叫び声が響いていた。

そして、殺された仲間の不良達は――、

「う、ああ……あああああああああああああああああああああああああ！」

「だ、誰だよこらあああああああああああああああっ！」

叫びながら、弾丸が飛んできたと思われる暗闇へ――ナイフや携帯電話を投げつける。

どうやら、彼らは拳銃を持っていないようだ。飛び道具を一切持っていないので、彼らは持っているものを投げつける以外に、遠距離にいる敵を攻撃する手段はない。そんな彼らにも――容赦なく鉄の暴風が降り注ぐ。滅茶苦茶に動きまわる男達は、奇跡的に弾丸を回避しているが……。

それでも、遂に一人が胸を撃たれ、口から血の塊を吐いて倒れてしまった。

「あ、葵！　今だ、今のうちに逃げるんだ！」

「お、おにい……ちゃんっ」

「気持ちはわかるけど……でも、逃げないと殺される――！」

誰が銃撃を始めたかは知らねえけど、コイツはかなり無差別な銃撃だ。狙いも滅茶苦茶で弾丸が机に被弾し、嫌な音が炸裂している。いつ流れ弾が当たったっておかしくない。伏せていてもそのうち撃たれるかもしれない。だったら――姿勢を低くして逃げるしかない。

「行くぞ、葵！」

「あ、お……お兄ちゃんっ！」

俺は葵の華奢で美しい腕を掴み、大会議室から脱出する為に走りだす。ただ、誰かが撃っている拳銃の餌食ならない事を祈りながら――。

「ぎゃあっはひゃはぁはっ！　最ッ高に楽しいねェクソ野郎ォ！　愉快にケツ振って逃げてンじゃねェぞコラァ……ハッ、オマエも今すぐ銃殺にしてやるっつーのォ！　あっぎゃははは！」

その時、どこかで聞き覚えのある、狂ったような笑い声が耳に入った。

どうやらこの声の主が拳銃をぶっ放し、不良達を殺してきたらしい。そして、葵を連れて逃げようとする俺も――不良の一人だと思っているようだ。

「ふざけんじゃねえよてめえ！　何者か知らねえけど、人殺しなんてふざけた真似しやがって！　今すぐ警察呼んでやるから大人しくしてやがれ、このクソ野郎が！」

……とは言いつつも、拳銃持ってる相手と戦えるわけがない。

なので、俺はさっさと葵を連れて逃げる事にした。第一、あんな危なっかしいヤツ、相手にしたくもないし関わりたくもない。それにこれ以上、あの空間を葵には見せたくない。下手すりゃ葵の精神が崩壊してしまうかもしれない。そうなる前に――地獄から脱出しなければ！

「オラァ！　テメェ仕返しだコラァ――あ、ぎゃああっ！」

「不意打ちなンて１００年早ェンだよ雑魚！　精々床でも這ってろ

ってンだよォ！」

今のうちに、アイツらが戦っているうちに――ここから逃げないと。

第185話，流血大学　（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「はい来たよ浜面〇上っぽいのが」

大吾「つーか、色々とエグいな今回……」

重原「絶対テレビだと深夜枠だねコレ」

圭介「さて、普通な俺とセロリモドキとヘタレヤンキーが揃ったわけだが……」

大吾「圭介が普通？」

重原「圭介は相〇歩と上〇当麻を足して2で割ったようなキャラだよね」

大吾「ほぼ不死身かつ変態で、その上熱血漢で説教男だからな」

圭介「俺……他の2人と比べたら普通だよね？」

※作者的には怖がりな浜島が一番普通だと思います。

第１８６話，浜島雅人

俺と葵は廊下を歩き、時々倒れる不良達の姿を見ながら、どうにか脱出に成功。現在誠和大学の広い敷地内をさ迷い、どうやら図書館の近くに来たらしい。

え～っと……正門はどこだったかな。追手は多分すぐに来るだろう。捕まってしまう前に大学から逃げ出さないと、今度は俺も葵と一緒に捕まってしまうぞ。

いや、その前に――あの殺人鬼に殺されるかもしれない。

「お、お兄ちゃん……っ」

言いながら、葵が俺の二の腕にしがみ付いてくる。

甘えると言うよりは、抱きつくことによって恐怖を和らげている……と言う感じだ。

「大丈夫だ、俺たちは助からから――必ずここから逃げれるから」

「う、うん……でも、さっきの……っ」

「大丈夫、俺が……俺がいるから、だからお前は大丈夫だ」

俺は開いている右手で、葵の頭を撫でてやった。

本当はどうすればいいのかわからない。あの悲惨な状況を見て、おそらく精神的にも参っているだろう葵に、なんて言葉をかけてやればいいのか――俺にはわからない。

今はただ葵を元気づけようと、葵を慰めようとすることしかできない。

今の弱い俺には――それしか妹にしてやれない。

「お兄ちゃん……やっぱり、お兄ちゃんってすごいよね」

「それはないだろ。俺は……何もできないただの馬鹿男だぞ？」

「それでもだよ、すごいよ……お兄ちゃんは。だって……すごい冷静だったもん」

冷静、か……葵にはそう見えたのかもしれないけど、それは途中までだ。本当は小便漏らしそうなくらい怖かった……本気で死ぬかと思った。不良を壊れた身体を見た時、嫌な汗が噴き出て葵と一緒に叫びたくなった。本当に強いヤツなら——そこで動揺しないハズである。

結局……俺は変わっていない。

まだ弱いまま、これじゃあみんなを——暮葉を守ることができない。

「冷静……か、それはねえよ。俺も葵と同じだ」

だから——俺は正直に葵の言葉を否定する。

「そ、そんなことないよ！　お兄ちゃんカッコよかったよ？　一人で葵を助けに来てくれる姿が正義のヒーローだったよ」

「正義のヒーローが、暴力なんて振るうと思うのか？　誰かを殺せると思うのか？」

「こ、殺すって……お兄ちゃん、あの不良の人を殺したのはお兄ちゃんじゃないんだよ？」

「アイツは、俺がさっさと倒していれば死ぬことはなかった。お前を人質に取られる前に倒してしまえば命を失わなかった。けどアイツは殺されたよ……俺が弱かったから、俺に倒される前に――殺人鬼に殺されちまったよ」

「お兄ちゃん……」

結局、俺が殺したのと変わりはない。

倒れていれば――あの殺人鬼が拳銃を撃つこともない。そう、あの不良達が殺されたりもしなかったかもしれないんだ。だけど……結果はその反対、アイツらは殺された。いや、俺が殺してしまったのかもしれない。俺が弱かったからアイツらは……。

「お兄ちゃんは悪くないよ……だからお兄ちゃん、自分だけは責めちゃダメだよ……っ」

「……悪い」

ハハ、結局……俺って何も変わってねえや。

暮葉や伊吹に言われた事を――葵にまで言われちまったよ。

なにも変わってねえ……相変わらず、俺は弱いままだった。

「……お兄ちゃん、これからどうする？」

「そうだな……これから――」

本当なら警察に通報すべきなんだろうが……今回のこの騒動、K・M・Pが俺や葵を狙っているということは、背後にサヴィエトがいるかもしれない。一応今回のことは、携帯電話で電話でもして暮葉に伝えておこう。今回の後始末は――アルファ隊にやらせたほうが

いい。
そうだよな……やるべき事は山積している。
くよくよしている場合じゃない。強くなる為には――前を向いて進まなきゃな。

「――とりあえず、安全地帯まで行こう。話はそれからだ」

「あ、安全地帯？」

「大学の近くは住宅街だろ？　その辺に明智の家があるハズだ。明智はもちろん、その爺さんとも知り合いだし、明智家のみんななら俺たちを庇ってくれるだろう」

「う、うん。じゃあ、明智先輩の家に逃げようっ」

よし、行くぞ、と俺は葵の手を引き、大学正門を探して歩き始める。
だが。

「止まれ」

俺たちの進路を遮るように、一人の男が立ち塞がっている。アレ……アイツ、どこかで見覚えのある男だな。茶髪のボサボサ頭に、作業ズボンにスカジャンの男だ。おそらく、こめかみを殴られた後にすぐ目を覚ましたのだろう。鉄パイプで殴ったのに……案外、タフなヤツなのかもしれない。

「テメェ……何者だよ。突然現れて俺らを襲いやがって……そうい

えば、テメェは後ろの女と一緒に写っていた男じゃねえか。テメェ……その女とどういう関係なんだよ？」

「俺と葵？　俺と葵は――ただの兄妹（けいまい）だよ」

「兄妹……？　ハハッ、なんだよそれ……ってことはアレか、つまり俺たちは初めから標的（ターゲット）を誤っていた。本来捕まえるべき存在は――テメェだったんだ」

「捕まえる存在……だと？」

「俺もわからねえけどさ……頼まれたんだよ。全く、それで先代リーダーは殺されるし、今回仲間を沢山殺されたし……クソ、笑えねえよ」

「その言い草――てめえがK・M・Pのアタマか？」

「ああそうだよ……この浜島雅人こそ、今のK・M・Pのリーダーだ。全く場違いだよな……俺がリーダーって。でも仕方ねえんだ、もうアイツはいない。そして俺がリーダーである以上――俺も殺されるかもしれねえ」

なんだコイツ……ホントにK・M・Pのリーダーなんだろうか？妙に弱々しい。なんというか……物凄く何かを恐れている気がする。おそらく、浜島って男が恐れているのは死だろう。誰かに殺されるかもしれないらしいし、それが怖いんだろう。

「殺されるだと？」

「何だよその確認は。わかってんだろ……あの殺人鬼、テメェの差

し金なんだろ？　ハハッ、最悪な兄貴だよなぁ……妹を助けるのに殺し屋雇うって……」

「ふざけんなよ。俺はあんなヤツを雇った覚えは無い、雇う金もない、雇う気もねえ。俺はただ兄として葵（コイツ）を助けに来ただけだ」

「つまりアレか……テメェはあの殺人鬼と関係ねえと。ソイツの兄っつーことはテメェの名字も藤島で、俺たちの標的（ターゲット）というわけと……」

言うと、浜島と名乗った男がはは、と小さく笑う。

ゴソゴソと、笑いながら右手を後ろに回し、伸縮式の警棒を取り出す。おそらく、ズボンのベルトにでも挟んでいたのだろう。浜島は取りだした警棒を大きく振り回し、

「テメェさえ捕まえれば――俺は生き残れるってわけだ！」

叫ぶと、浜島が一気にこちらへ駆けてくる。

「お、お兄ちゃ――ッ」

「下がってろ！」

俺は葵を突き飛ばし、不良達を倒すために持っていた鉄パイプを構える。しかし、葵に構っていたせいでワンテンポ遅れた俺の耳に、風を切る嫌な音が響く。

既に浜島は警棒を振りまわし、俺にそれを叩きこもうとしていた。

「ッ！」

咄嗟に顔を守るように鉄パイプを構える。瞬間、金属と金属が衝突しあい、鈍い音を立てて振動が骨にまで伝わってくる。衝撃で鉄パイプを持つ手首を痛み、思わず顔を歪ませる。しかも情けないことに今ので鉄パイプを地面に落としてしまい、ガランゴロンと金属の棒が地面を転がった。

今更取っても遅いと判断した俺は、拾わず浜島の胸倉を掴もうとした……が、

「正しい判断だ」

ぐわん、と突き出した俺の右手に、浜島の警棒が振り下ろされた。ミシミシと言う嫌な振動が手首に伝わってくる。今の一撃で崩れ落ち、顔を歪ませていた俺。

そこに――何かが飛んでくるのが見えた。

「ごっ、あ！」

膝。

突き立てられた膝が俺の腹部を刺激し、腹部に破裂するような痛みを覚えた。

さらにゴァ！　と言う衝撃が首筋に襲い掛かる。おそらく、浜島の固く握られた拳が俺の首筋に振り下ろされ、砕けるような一撃を喰らってしまったのだろう。

次の攻撃が来る――と思ったが、中々攻撃が来ない。

どうやら浜島は、今ので俺を無力化できたと思っているようだ。

「サッパリわけわかんねえけど……とりあえずアレだな。コイツさえ捕まえちまえば、俺らに拉致を指示してきた連中も納得する。それで匿ってもらえる、殺人鬼に殺されないかもしれねえ……はは、ははははは、ははははは！」

勝利を確信したようなその言葉……だけど、馬鹿だよなコイツ。
どうやら、本当にサヴィエトから何も教えてもらっていないらしい。俺が――アレクサンドルってヤツの血を引いているって事も、俺が特異体質であるということも。
それからな、今の言葉――ちょっとムカついたぞ。

「もう一度――言ってみろてめえ！」

腹の底から思いっきり叫んだ俺は、低い姿勢から一気に立ち上がるように、自分の頭を浜島の顎に思いっきり叩きつけてやった。
ヘッドアッパー。
揺さぶるような一撃に、浜島は耐えられず後退りをしてしまう……が、手が届かなくなる前に左腕を伸ばして、俺は浜島の胸倉を掴んだ。
ぐわん、と一気に浜島を引き寄せ――鼻っ柱に握った右の拳を叩き込んだ。
一旦宙に浮いた浜島の身体が、一気に地面へ叩きつけられる。浜島は血だらけ、鼻から大量の血を流している。今の一撃で鼻の骨でも折れたのだろうか？

「あッ、がああああァああッ！」

そんな痛みでもがいている浜島に、俺は言葉を吐き捨てる。

「ふざけんな、誰だって普通は死にたくねえだろうさ。だけど、いくら自分が生き残る為だからって、そんな事をしていいと思ってんのかよ！？」

「仕方ねえだろ！　俺たちみたいなゴロツキに救いなんてねえんだ

よ！　あそこで白旗上げてたって殺人鬼に殺されていた、いや――その前に依頼主に殺されていたかもしれねえ。だからって俺たちみたいな悪人が警察に助けを求められるかよ！　大人に助けを求められるかよ！　どうせ悪ガキの自業自得って切り離されるだろうぜ？　だからなぁ……俺たちには任務を遂行すること以外に――生き残れる選択肢は残されていねえんだよ！」

「生き残れる選択肢？　そんなもん――あるに決まってんだろ！」

熱くなって叫ぶと、浜島が眉をひめろる。
その姿を確認した後、俺は浜島に叫び続けた。

「すべての人がてめえらを見離すと思ったら大間違いだ。確かにてめえらは悪者かもしれねえけど、それでも殺人の被害者だったんなら、全員が見捨てる事はねえだろ。たとえ世論から激しい批判を受けても、周りのヤツらはてめえらを庇うハズだ」

「黙れ！　そういうことを言えるのは……テメェが何も知らねえからだろ！　ありえねえ、たとえ俺たちが被害に遭っても、所詮は路地裏の落ちこぼれなんだよ！　この世じゃ俺たちに生きる資格なんてねえようなモンなんだ。だから――俺たちは自分で自分の身を守る以外に、生きる手段がねえんだよ！　何も知らねえ癖に俺たちを馬鹿にしてんじゃねぇよおおおおぉぉぉぉぉッ！」

警棒を構え直し、浜島が叫びながらこちらへ突っ込んできた。
結局、この男は弱い。
リーダーやっているのが奇跡なくらい――弱い男だった。
もう怖くない。化けの皮が剥がれたコイツは、この程度の人間だ。

「てめえらに生きる資格がねえってのは間違っている」

呟きながら、俺は固く拳を握り締める。葵が後ろで戦いを止めようと叫んでも、浜島が警棒を振りまわしてきても、気にせず俺は集中し――己の拳を限界まで握り締めた。

「教えてやるよ……だから、もう一度やり直してきやがれ――このクソ野郎が！」

同時に、二つの鈍い音が響き渡った。

俺の顔面には警棒、浜島の顔面には俺の拳が突き刺さっている。

互いに大きなダメージを受けてグラグラと、血を流しながらバランスを崩す。

しかし、倒れたのは一人だ。

俺は――決して倒れる事は無かった。

それから数分後、俺と葵の前に西園寺と暮葉が現れた。暮葉は仕事帰りに、俺らが襲撃されていると言う通報を聞き、大急ぎで駆け付けてきたらしい。一方、西園寺は仲間と共に、誠和大学にいる警備員と戦い、ついでに不良も何人か倒していたようである。

しかも、浜島の身柄は私たちで拘束するらしい。

警備員と不良を倒し、浜島を拘束って……西園寺、お前とお前の仲間は何者なんだ？

「……ょしっ、けーすけ様！　これで大丈夫だと思いますっ」

「いいよ暮葉、俺の体質知ってるだろ？　こんな怪我すぐ治るから」

「だ～めです。ちゃんと手当てしないと黴菌が入っちゃうのですよ？」

俺は浜島に警棒でぶん殴られ、額から大量に血を流していた。だからか、暮葉は俺を見るや慌てて歩み寄ってきて、いきなり消毒して包帯を頭に巻いてくれたのである。

消毒と包帯、何故持っていたかが気になるが……まあいいや。

ぶっちゃけ――暮葉に手当てされるの、すごい嬉しいんだよな……。

「むぅ……っ」

「あらあら、仲いいわねあの2人っ」

「不満だよ！　葵だってちょっと怪我したのに、お兄ちゃん全然手当てしてくれないよっ」

「大丈夫よ、私がちゃんと絆創膏貼ったもの。大した怪我じゃなくてよかったわね」

「うう……葵お兄ちゃんに手当てされたかったよ！」

なに言ってんだあのブラコン・マイ・シスター……まっ、いいか。アイツの首の怪我も軽い切り傷だったみたいだし、本人も若干気になる程度の痛みしかないらしいからな。よかった、散々なこともいっぱいあったけど、何より葵が助かってよかったよ……。

「もきゅう……けーすけ様っ」

「っ、お……おぅっ」

暮葉が枕でも抱くかのように、俺の頭に両手を回し、優しく抱き

しめてきた。
あどけない顔が俺の顔と並び、柔らかな頬が触れ合う。それだけでも、一般男子高校生としては興奮モノなのに、増してやこの……汗の混じった甘酸っぱい香り。なにより、俺の背中に覆いかぶさるように抱きついているんだから、背中にはマシュマロのような柔らかい感触を感じる。
うぅ……やばい、胸って小さくても――柔らかいものなんだな……ッ！

「今回は本当に申し訳ないのです……」

「い、いいよそんなの……お前に責任なんてないって」

「にゃふふ……けーすけ様、やっぱり優しくて、広いお方なのです……っ」

「……ふっ」

心配性なんだか単純なんだか、でも……やっぱり可愛いよな。
西園寺と葵が見ているけど、別にもうどうでもいいや。
出来る事なら――しばらくこのままでいたいな……。

「ふン」

オレ――早川悠は狭い道を歩いていた。既に夕暮れ、チッ……時間を食い過ぎた、それにしてもあの時のあの怒鳴り声は一体……。

――ふざけんじゃねえよてめえ！　何者か知らねえけど、人殺しなんてふざけた真似しやがって！　今すぐ警察呼んでやるから大人しくしてやがれ、このクソ野郎が！

最初はK・M・Pのクソ野郎だと思ったが、どうも違うっぽいな。あの言い草、どうやらアイツは第三者のようだ。まさかあの野郎……藤島葵を連れ去ったあの野郎。

オレの目的――藤島圭介だったんじゃねェのか？

そうだな……それ以外には考えられねェ。不良共を倒すのに時間を食ったが、それでも藤島葵ってヤツは生きていた。おそらく、藤島圭介が妹を救ったンだろう。

まっ、どォでもいいか……そう思い、オレは路地裏から出ようとした――その時。

そこでオレは声をかけられた。

「いやいや、俺たちの不手際で残業やってたらしいけど……」

「その顔だと、どうやら成功したらしいな。流石、最強の超能力者って所だよなぁ」

「アンタって案外すごいわ。もやしだからってナメたもんじゃねえわね」

目の前に現れたのはラウルと近藤、その後ろにアナスタシアの姿もあった。

なんだコレ、まさかザスローン全員集合かァ？

どォやら、残業を終えたオレを出迎えに来たようだ。

「このオレに何か用か？」

「大したようじゃねえのよ。ただ、お前さんと酒でも飲もうと思ってなぁ」

「チッ、オレは本来高校生だぞ……？」

「なぁ～に気にしない方がいいわ。初仕事が終わったんでしょ？その打ち上げをやんのよ」

「今まで散々こき使ってきてサヴィエトへの反抗が、今回初めて出来たからね。俺も近藤もアナスタシアも、内心喜んでいるんだよね」

「そォかい……オマエらは仲良しこよしってワケかァ」

オレは狎れ合うつもりはねェンだけどな……ただ、オレは守れればいい。こんなクソッタレた世界からでも、あのクソガキを守れるンなら――それだけで十分だ。

まっ、これがコイツらのやり方だってンなら――少しは合わせておくか。

同業者同士仲が悪いンじゃ、今後の作戦にも影響するだろォからな……。

チッ、オレの柄に合わねェ……。

「まっ、結束力ってのは結構重要なモンなのよな。俺達が少ない人数で戦力になる為には――ソイツ最も大事ってことなのよな」

「そういうわけ、だからアタシらは繋がりを重視する」

「だから手を結ぼう、早川悠。君だって守りたいものがあるんだろう？」

「……ふン」

それがオレの答えであった。

サヴィエトと佐井学園、この二つは必ずブッ潰す。その為には手段を選ばない、たとえコイツらの重視する繋がりを無視し、コイツらをブッ殺してでも――オレはその二つを潰し、全てを捨ててもあのクソガキの命を守る。これ以上――あのクソガキに血ってヤツを見せるわけにはいかねェ。

だから終わらせる。

何もかも、あのガキが関わらなくても、オレが全てを解決する……。

「ふン……上等じゃねェか」

第１８６話，浜島雅人（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「……」

浅間部長「うわー藤島君のテンション低、とヒデキ１００３２号は突っ込みます」

浅間部長「何故でしょうね、とヒデキ１００３９号は疑問を抱きます」

浅間部長「おそらく登録件数減少が原因では？　とヒデキ１３５７７号は推測します」

浅間部長「なるほど、確かに精神的に辛いですね、とヒデキ１９０９０号は同情します」

浅間部長「でも自業自得じゃないの？　ってヒデキはヒデキは言ってみたり！」

千早「……で、先輩……なんで元気がないんでしょうか……？」

圭介「兄貴達（ブラザーズ）が大量繁殖したせいだよ……おぇっ」

あかり「あたいも気持ち悪いぞ……っ」

第１８７話，期末考査２日前

８月２７日土曜日、早朝。
この日は俺の生誕１７周年記念の前日であり、そして期末考査。
つまり、我ら学生にとっては脅威でしかないテスト２日前なのである。ここで俺の学生生活を振り返ってみると、食べて遊んで寝てサヴィエトの魔法使いと戦っての繰り返し……その為、実質殆どテスト勉強をしていないのだ。
いつも通り葵に先生頼めばいいかもしれないが、そんな気分じゃないしな。最近の葵は特に変態なもんだから、密室に２人きりになったらいつ襲われる事やら。
何より、妹に勉強を教えてもらっている姿を――暮葉には見られたくない。
というわけで、俺は現在朝っぱらから部屋で猛勉強中なのである。
だが。

「だあああ！　ちくしょうわからねえっ！」

なんだよ英文の意味わからねえよ、こんなのどうやって翻訳するんだよ。あと数学だってサッパリ意味不明だし、化学もホントに悲惨だ。国語も漢字は読めるが書けないし、その他の教科もどこか抜けていたりでイマイチわからないのである。
クソッ、まずい……なんとかしないと、このままじゃ期末は赤点だ。

「だいじょーぶですっ！　拙者はけーすけ様がおバカでも全然構いませんっ！」

「そうかそうか～、暮葉、お前ってホントいいヤツ――って、オイ

！？」

ちょっと待て、どうして隣に暮葉がいるんだろうか。しかも、俺の左肩に凭れかかって満足そうな表情を浮かべている。

いやいや、そりゃあね。嬉しい事は嬉しいけど……問題はそこではない。

「もきゅ？　どうかされましたか？」

「どうしたもこうしたもあるか！　お前、なんで俺の隣にいるんだよっ！？」

「だって！　ここのところけーすけ様、ず～っと拙者達と別行動だったじゃないですかっ」

「そ、それは……」

まあ、いろいろあるんだよ。例えば伊吹と気まずいとか、だってねぇ？　結局あの体育館倉庫での外事は何だったんだろうか。あの時はあまりにも突然言われたせいか、伊吹に何も言葉を返してあげることが出来なかったけど、もしかしなくてもあれ……告白、だよな……？

いや、でも、初恋の相手が俺ってだけだろ。そうだ、そういうこだよな。幼稚園から小学校にかけては俺の事が好きだったのかもしれない。なんとなく、そんな感じもしていたし。

だけど、初恋が何時までも続くとは限らない。そりゃあ……確かに、ギャルゲーの幼馴染キャラは小さいころからずっと、主人公の事を想ってヤンデレ化する事もあるが、俺達が今生きているこの世界は現実という残酷なものだ。

いくら伊吹が幼馴染だからって、ずっと幼馴染の事が好きとは限

らない。
だけど……何故だろうか。ここの所ずっと伊吹に見られている気がする……。

「にゅふふ、けーすけ様のためにも、深いことは問いませんから心配しないで欲しいのですっ」

「お、おぅ。そうしてくれると助かるけど……」

「はいっ」

ニコッと、眩しくて瞬きしてしまうような笑みを浮かべ、暮葉は更に体を寄せてくる。
俺の肩に体重を傾け、暮葉は目を細める。ああ……暮葉のヤツ、幸せそうだ。そう思っている俺も幸せだと思っているけど、なにこれ……物凄くドキドキする。
8月も末とは言え、気温は昼間になると30度を超える。朝でも暑いくらいで、俺も暮葉も半袖の服を着ていた。華奢で柔らかな腕と俺の腕が直に触れて、彼女の体温が伝わってくる。
髪の甘い匂いが鼻をくすぐる。
まるで恋人みたいなことになっているが……俺達、まだそこまで行ってないんだよ。
だけどダメだ。このままでは俺も——自分を抑えられなくなるかもしれない。

「にゅふふ、幸せです……」

ああ、幸せだな……って、だから俺達まだそういう関係じゃないでしょ。これ以上は流石に自重しておかないと、俺が色々な意味で暴走特急になっちまうだろ。

つか、その前に勉強しないと――期末が恐ろしい結果になっちまうかもしれない。

「暮葉、雰囲気ぶち壊すようで悪いんだけどさ」

「もきゅ？　なんでしょうか？」

「俺、今勉強してたからさ……」

「……っ」

あれだけ幸せそうだった暮葉の表情も、今では完全に曇ってしまった。悲しそうに、少しでも押してしまえば泣きかねない程に。

馬鹿だ俺……そうだよな、こんな事を言ったら普通――こうなるよな。

「もきゅ……そうですよね、ごめんなさい……っ」

暮葉は俺の肩から頭を離すと、どこか寂しげな感じで謝ってくる。

その瞬間、俺はとんでもない罪悪感に苛まれる。

暮葉は悪くねえのに……っ。

「いや、俺の方こそごめん」

「そ、そんなことないですよ！　拙者こそ、テストが近いのに何やってるんでしょうね……」

そうは言われても、やっぱり俺は彼女を放ってはおけなかった。

弱々しく、震える唇で呟いたさっきの言葉。暮葉……やっぱり、俺の勘違いじゃない……のか？

日頃からスキンシップを行ってきたり、合宿の夜にキスされたり……それから、風呂場で初めてをやってしまいそうになった時、俺のことを拒まなかったり……。

全部勘違いだって思ってたんだけど、違う……のか？

暮葉は俺のことが――。

……ああもう、アホくさ。

なにが勉強だよ。そりゃあ勉強は大事だけど……もういい、一夜漬けで頑張るよ。なんだか暮葉のことを放っておけなくなってきた。だから今日は、今日くらいは――。

「暮葉」

「は、はいっ！」

いきなり名前を呼ばれたからか、暮葉はきょとんとした顔をしている。いきなり呼んだから驚かせちまったのかな。ちょっとだけ悪い事をしてしまったかもしれない。

「今から遊びにでも行くか？」

「……え？　で、でも……勉強は大丈夫なのですかっ？」

「俺は大丈夫だよ。日常で本気を出さず、本番で本気を出す男だからな」

「で、ですけど……っ」

「無理にとは言わねえぞ？　お前だって勉強のこともあるからな」

「――――ッ！　だ、大丈夫ですっ！　行きましょうけーすけ様、

遊びに行きましょうよ！」

相変わらず単純というか、子供というか……まっ、そこが暮葉の可愛い所。とにかく元気を取り戻してくれてよかったよ。後はどこに行くかだよな。

残念ながら咄嗟に思いついた事だし、ノープランなんだよな。普通、こういうのって男のほうがリードするモンだろうから、何処に行くかくらいは考えないと。

う～ん……安価で学生が楽しめて、そんない場所がこの辺にあったかな？

いや待て、俺の趣味と暮葉の趣味が一致しないこともある。

その事を考えたらやっぱ、本人の行きたい所にするべきだよな。

「よし、暮葉。どっか行きたい場所とかあるか？」

「もきゅ？　行きたい場所……う～ん、けーすけ様の行きたい場所でいいですよっ？」

「えっ？　いいのか、行きたい場所とかないのか？」

「はいっ、特にないのです！　だから拙者はけーすけ様の行きたい場所で構いませんよっ！」

ここまで元気よく言われると、流石に無理に行きたい場所を聞けないな。

どうしよう。女の子の友達と2人で行って、楽しい所ってどこなんだろうか。

つーかコレ、単純に言えばデート……だよな？

デートって何処に行けばいいんだよ。暮葉は……映画とか興味なさそうだし、服を買ってあげたら喜ぶんだろうが、生憎今月はエロ

ゲーの買い過ぎで財政難なんだ。高校生の癖にエロゲーの買い過ぎで財政難ってのも、ある意味おバカでサイテーだと自覚はしてるんだけど……。

ついつい買っちゃうんだよなぁ。

あ……そうだ！

「暮葉、千葉にでも行かないか？」

「もきゅ？　千葉ですか？」

「おう、割と近場だけど大都市だし、遊ぶ所も結構あると思う」

「大都市……都会、もしかして東京みたいな感じでしょうかっ？」

「東京ほどじゃねえけど、それでも古宇坂よりはずっと街だぜ？」

「お、面白そうなのです！　行ってみたいのです！」

暮葉はロジーナでも田舎のほうの出身らしく、古宇坂ですら街だと思えるらしい。

初めて東京に行った時なんて、目を輝かせていたからなぁ……まっ、千葉も東京ほど大きい街ってわけではないが、それでも人口も１００万近くの人が住んでいる大きな街だ。

きっと、暮葉にとっても新鮮な場所であろう。

それに――千葉にもア○メイトやと○のあなもあるしな！

「拙者！　準備してきますねーっ！」

「おう、俺も今から着替えるな」

さて、しっかりリードしないとな。

これでも県民。そしてア○メイトに行くために、よく千葉には行く俺。一応あの辺の地理は頭に入っているからな。道に迷わない為にも、暮葉を楽しませる為にも――男を見せてやる。

第187話，期末考査2日前（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「ところでさ、作者って道民よね？」

作者「まあ、はい」

伊吹「じゃあなんで地元舞台にしないのよ？」

作者「だって、地元は処女作と次回作で舞台にしちまったし、本州のほうが色々あって便利なんですよ」

伊吹「それ、同じ道民に聞かれたら怒られないの？」

作者「う～ん……ただ、一つだけ言える事があります」

伊吹「えっ、なによ？」

作者「北海道アニメ少な過ぎだろ！　Ａ○－Ｘとニコニコから目ェ離せないじゃないですか畜生！」

純奈「作者は道央なだけまだマシだよ。道東はもっと（ｒｙ」

圭介「なんで生駒が知ってんだよ。お前まさか！？」

純奈「そんなわけないんだべ！？」

圭介「生駒、もしかして道東出身？」

※飯はうまい、けどアニメ難民です……（涙）
でも地元は大事にしようね！

第１８８話，それぞれの日常

私、国宗伊吹はテスト前活動禁止令が発令しているので部活もなく、今日は間近に迫るテストで悲惨な成績を残さないよう、テストに備えて勉強をしていようと思っていた。

でも、部活がなくても、ついいつも時間に起きちゃうのよね。時刻はまだ7時、折角部活がないんだからもう少し寝ていたいわ。せめて8時くらいまで、今日はゆっくりしていたい。でも一度目が覚めてしまうと中々眠れない、私はそういうタイプの人間だった。

仕方ない、朝ごはんでも食べようかしら？

「あっ……」

しまった、パンもご飯もないわ……。

そういえばご飯は昨日切らしちゃったわね。新しく炊くのも面倒くさいし、やっぱりコンビニでパンかお弁当でも買っちゃおうかしら？

その方が楽ね。じゃ、着替えたらコンビニに行こう。

というわけで、私はパジャマから私服に着替え、靴を履いて外に出る。服は最近亜紀と一緒に態々千葉の洋服店で買った、何かの文字入りの白いTシャツとショーパン。

亜紀は、「圭くんはロリ好きっぽいから、ロリっぽいファッションが一番だぁ！」な～んて言っていたし、私もばか圭介は間違いなくロリコンだと思うけど……。

でもアイツ、わかんないのよ……アイツの好みが。

「はぁ……」

しかもここ数日、アイツとマトモに話どころか、顔すら合わせていないし……。

やっぱりあんな事言ったのは失敗だったのかな？

で、でも……私にしては頑張ったのよ。あと一歩だったのよ……

でもその先、さらに先へ進む勇気がない。仮に言おうとしても、何か反対のこと言っちゃうのよね。

意味わかんない……なんでなのよっ。

そんな事を思いつつ、ため息をつきながら私は外に出る……

あれ？

「けーすけ様っ！　早く来ないと置いてっちゃいますよっ？」

「ちょ、歩くの速ぇよお前っ！　つーか走るなっ！」

「にゃはっ！　こっちですよー！」

「たく……ああいう所は子供だよなぁ」

私は衝撃の瞬間を見てしまった。

「なっ、が……ッ！？」

えっ、ちょ、なによアレ……なんでアイツら2人で元気そうにはしゃいでんのよ。

しかもあんの2人とも。なにちゃっかりお洒落しちゃってんのよ。

圭介はダメージ加工を施したジーパンに、文字入りの黒いTシャツ、さらに十字架のアクセサリーって……思いっきり街中にいるチャラ男ファッションじゃないのっ！

暮葉もなにニーソ履いてんのよ。しかも小柄だからか妙に合ってるし。

大体アイツら――なんであんなに仲良しなのよ！？

「う、がぁぁぁムカつくぅ！　リア充は死ねぇっ！」

自棄になって、私は自分の頭を掻き毟っていた。

ああ……しかもリア充って、普通の人はこんなこと言わないわよね。どうしよう、また意味不明な圭介語が伝染しちゃったわ。ああもう、これも全部あのリア充ばか圭介のせいよっ！

そもそも、なんでアイツら2人っきりでお出かけしてんのよ。アイツも暮葉も、葵ちゃんって可愛い妹はどうちゃったのよ？

葵ちゃん放置でお出かけって……何かあるわね。

そう思った私は――ぎゅ、と右拳を固く握って、

「……見てなさい圭介、地獄の果てまで追ってやるわよ！」

青空に向かって叫び、そう天に誓ったのだった……。

あたい――浅間あかりには、ずっと待っているものがある。

それはこの世で最も温かく、胸が破裂しそうな言葉だ。

8月17日のあの別れから――あたいはずっとその言葉を待っている。

待っているんだけど……。

「圭介のヤツ、いつ返事してくんだよ……っ」

あたいは今日のバイトにいく前に、リビングで携帯電話をいじりながら、ず～っと圭介のことを考えている。イライラしたり、ドキ

ドキしたりと、あたいの心は忙しいな。
圭介からの返事……答えなんてわからない。もしかしたら、圭介はあたいの望まない言葉を放ってくれかもしれないけど……それでも――あたいは前向きでいたい。
だから、あたいは温かく、ドキドキするほうだけを考えていた。
もしも、圭介の恋人になれたら――、

「あっかり～んっ！」

その時、背筋が凍るほど聞きたくない声が聞こえ、振り返ると――、

「にゃあああああっ！？」

「う、ちゅうううううっ！」

あたいは咄嗟に左へ跳躍し、変態突撃兵の攻撃を避ける。ううき……キモい、いきなり唇を尖らせて突撃してくる兄貴が――どこの世界にいるんだよっ！

「な、ば――エロ兄貴っ！　なにするんだよ、やめろよなっ！」

「いやぁ～、携帯をいじってる妹の仕草に萌えて――ムラムラしちゃったんだよね☆」

「サイテーだぞ！　このハートキャッチエロキュアっ！」

「まあまあそうおっしゃらず、ボクに妹分を補充させてくれないかい？」

キラッ、とあたいのエロ兄貴はウィンクをしてきやがった。兄貴はイケメンだ、それだけはあたいも認めている。なにも知らない人が見れば、今ので恋に落ちちゃうかもしれない。

でも、あたいは妹だから知ってるんだ。

このエロ兄貴の――真の姿を。

「嫌だっ！　あたいは兄貴の食い物じゃないんだからなっ！」

「まあまあそうおっしゃらず。ましろ色の桜乃は妹キャラながら、兄を夜這いしたんだぞ？」

「そんなのゲームだけだろっ！　あたいはそんな事しないんだからなっ！」

「とにかく、兄をご奉仕しない妹なんて妹じゃないね！　きり○ん氏は例外だね！」

「なにいってるかわかんねーからなっ！　早くゴキブリホイホイ（じぶんのへや）に戻れよな！」

あたいはお腹と喉が破裂しそうな勢いで叫んだ。だけど、あたいのエロ兄貴がこの程度で退く常識人なら苦労はしないよ。どうやら、あたいのトゲのある言葉は兄貴の脳内で、ドM的な快楽に勝手に変換されてしまうらしい。兄貴はハァハァと、目を細め、顔を赤らめ変態のような笑みを浮かべる。

「えへ、えへ、えへへ……キモチイイでしゅもっとボクを罵ってあっかり～んっ！」

「い、嫌だあああァああッ！」

本当に気持ち悪くなってきたあたいは、泣きそうになりながらリビングを飛び出す。
もう――今日はバイト終わるまで家に帰らないっ！
はぁ……兄貴と圭介。同じ男のハズなのに……どうしてここまで違うんだろう？
葵が羨ましい。あたい――圭介の妹になりたかった。

「ミネット・ローラン、ただいま参りました」

ミネットは8月17日、何者かに捕えられ――気がつけば病院のベッドの上にいた。
よくわからないけど……一緒にあの人もいなくなっていた。
今までリーネさんと一緒に、ミネットはあの人の事を探していたんだけど……今日はアルファ隊の上層部から召集され、早朝の今はアルファ隊日本支部へ赴いているんだよ。
長野と言う場所にある、なんて事のない地下道。その最深部の一室に――アルファ隊の隊長を務める聖人の姿があった。民族衣装を身に纏ったその人は椅子に座り、微笑んでいる。

「よく来てくれました、とリーリヤは貴女を歓迎します」

「あの、今日はどんな御用でしょうか？」

ミネットだって一応敬語は話せる人だもん。今回の相手は目上の人、あの人やリーネさんと話をする時とは違い、リーリヤ隊長には敬語で喋る。

一応、アルファ隊にだって上下関係はあるんだよ。

「“赤の軍神”が本格的に動き始めました……と、リーリヤは状況報告をします」

「赤の軍神……あの、風剣のシルフはどうなったのでしょうか……？」

「彼女は重傷を負っています。しばらくは動けないでしょう、とリーリヤは推測します」

「残りは3人……ですよね？」

「邪炎のサラマンダー、硬質のノーム、聖波のウンディーネ。その中でも現在、硬質のノームの動きが活発なようです、とリーリヤは状況を報告します」

硬質のノーム。

ミネットも詳しい事はわからないけど、土属性の天才魔法使いらしいんだよ。

そもそも、赤の軍神は精霊の力を持つ者の中でも、選ばれた天性の才能を持つ魔法使いのみがなる事の出来る――才能の役職。

精霊の力を持つ者でさえ、普通の魔法使いの実力を超えている。

硬質のノームも他の土属性の魔法使いと比べれば、圧倒的に強力な存在だよ。土に対して相性が良くったって、おそらく勝つことは難しいであろう相手。ミネットの水の魔法でさえ――硬質のノームには通用しないかもしれない。

「硬質のノーム……なにをするつもりなんでしょうか」

「現在彼はポルトガルのセトゥーバルで、大規模術式を組み上げています、とリーリヤは現実を伝えます」

「大規模……術式？」

「都市攻略の為の大規模魔法を発動させる為の術式。まあ、ノームの属性を考えればどんな術式を組んでいるか、すぐにわかると思います……と、リーリヤは言います」

「硬質のノーム……土、大地……大地……ッ！？　じ、地震！？」

「そう、彼は地震で東京圏を攻撃。首都圏を叩く事で日本に壊滅的なダメージを与え、一気に日本という一国家を叩いてサヴィエトは領土を獲得するつもりです、とリーリヤはノームの行動目的を推測します」

地震であの人やリーネさん。木下先輩に圭介様、そしてミネットの住む日本を……。

ひどいけど、それ以前に硬質のノーム……すごすぎるよ。魔法で地震を起こすだなんて夢物語のレベルだよ。ただでさえ日本は大変な時期なのに……そこで首都を叩かれたら大変だよ。

「と、止めないとっ！」

「はい、もちろん術式が組み終わる前に対処するつもりです、とリーリヤは今後の方針を伝えます」

「でも、どうすればいいのでしょうか……？」

「簡単です。術式完成前にノームを倒す必要があります。その為には木下さんの力も借りる必要があります。そこで貴女に頼みがあります、とリーリヤは本題を語ろうとします」

「は、はい。なんでしょうか？」

「近頃、藤島様の同級生達が結成したフレンドという組織と接触し、今回の事を教えて欲しいのです。戦力不足の中、彼女達は藤島様の味方として――素晴らしい戦力になると思います。そして彼女達を説得後、木下暮葉と合流し、調布飛行場に向かってください。ロジーナ製の超音速魔動旅客機を用意しておきますので、とリーリヤは計画を説明します」

はわわ、ミネット重大任務課されたよ？

で、でも……これが出来なかったらあの人を守れない。いつまで経っても、一人前の隊員になることは出来ない。何年経っても弱いミネットのまま。

頑張らなきゃ……頑張って作戦を成功させなきゃ。

「わかりました！　ミネット、頑張りますっ！」

大変な仕事だけど――頑張らなきゃ。

第１８８話，それぞれの日常（後書き）

・後書きトークコーナー！

浅間部長「いやぁ～、あっかり～んは可愛いネ！」

あかり「うぇ、気持ち悪いエロ兄貴！」

浅間部長「あっかり～んハァハァ！」

あかり「うわっ！　近寄るな、ハレンチだ！」

浅間部長「まあそうおっしゃらず、先程の続きを――」

あかり「嫌だ！　呪うぞ！」

圭介「あかり……お前Ｃ３見たのか？」

第１８９話，早朝の街遊び

千葉市。

人口約９６万の都市で、県庁所在地であり政令指定都市もある。

幕張新都心や大規模な住宅団地がある都会だが、一部地域には自然も多く残されているらしい。

……と言うのがｗｉｋｉの情報。

いやぁ、便利だよね。態々学校の地理の時間で習わなくても、図書館で分厚い本を探してページを捲らなくても、現代社会にはネットと言うモノがあるからな。全く便利だ、調べ物も趣味もゲームもお宝画像収集も全部ネットで出来るからな。

俺、この時代に生まれてよかったぜ。

「けーすけ様、何か感動する事でもあったのですか？」

「えっ？　まあな、俺は今――珍しく現実に感動しているんだ」

「け、けーすけ様が現実にっ！？　大丈夫ですか！？　病院行きますかっ！？」

「精神的に逝っちゃった人扱いすんなよ！　現実に感動するのってわりとマトモだろうが！」

「もきゅ！？　そういえばそうなのです……っ」

暮葉、お前もこの世界に来てから洗脳されちまったんだな。可哀想に、もし任務が終わって国に帰ったら苦労するんだろうなぁ。

ロジーナって場所には行ったことはないけど、多分俺らの常識は通用しないだろう。

……そういえば、暮葉って任務が終わったら――本当に帰っちゃうんだろうか？

「――様、けーすけ様っ！」

「えっ？」

想像したくもなかった事を考えてしまった。そのせいなんだろうか、嫌な事を考えていた数秒間は誰の声も耳に入ってこなかった。

「どうしたのですか？　完璧上の空でしたよ？」

「悪ぃ、って、なんだって？」

「けーすけ様、お腹が空きましたっ」

「そういえば朝飯食ってないもんなぁ」

葵にバレないためにも、俺達は家で朝ごはんを食べていないのである。超がつくほどどうでもいい情報なんだけど、葵の鼻って犬並なんだよな……。

だから、料理を作るのは危険なのだ。しかし、葵対策の為の朝飯抜きだったが、確かに暮葉の言う通り腹減ったなぁ……。

暮葉でさえ腹ペコなのに、高校生男子に朝食抜きはもっとキツいよ。

「よし、じゃあ色々回る前に飯でも食うか」

「はい！」

現在時刻は8時25分。まだレストランは開いていないだろうし、そもそも朝ごはんだからレストランってほどでもないよな……どっか手頃な店開いてないかな？

「そういえば駅ビルにマックあったよな……そこでいいか？」

「はい、拙者はけーすけ様の食べたいもので構いませんよ」

暮葉、なんていい子なんだ……マックは経済的にも優しいからありがたいよ。確か今月は150円で極光鶏肉（オーロラチキン）とか言う、厨二なメニューがあったハズだ。

それとポテト、あとシェイクがあればいいかな。結構なボリュームだろう。

と、言うわけで俺と暮葉はマクドメルド駅ビル店へ移動する。

朝から込んでるなぁ……流石マック。まぁ朝飯としても手頃なんだろう。サラリーマンから今日は暇な学生カップルまで、色々な人が店内でハンバーガーなどを食べていた。

俺達も食べたいものを注文し、それを受け取り席に座る。安っぽい朝飯だが、たまには外で朝飯を食べるってのも悪くはないかもしれない。

「おぉ、安い割にはうまいなこのチキン」

「もきゅ……ポテトは薄味なのですっ」

「まぁ、マックだとそんなモンだろ？」

別にまずいってわけじゃないし、むしろうまいほうだろう。それに、安価ですぐに食べられるんだから文句を付けたってしょうがな

い。
　こんな朝早くに営業しているだけでも、ありがたいと思っておこう。
「それにしても珍しいのです。けーすけ様が遊びに誘うだんて……」
「そうか？　普段の生活見てたらわかるだろ、俺は遊び好きなんだよ」
「……そう言うと、けーすけ様が軽い人に見えるのです」
「言っとくけど、冗談で付き合ったりはしねえぞ」
「もきゅ、わかってますよっ。けーすけ様はその辺だけしっかりしてますもんね」
「あのなぁ、それ以外はダメダメ見たいな言い方するなよ」
「もきゅ……だってけーすけ様……ゲームでは浮気ばっかりじゃないですかっ」
「あれは攻略したから次のヒロインを攻略しているだけ！　エロ……じゃなかった、ギャルゲーってのはそういうモンなんです！　あと、二次元に複数嫁がいるのは俺だけじゃないんですよっ！」
　なんてダメ人間なんだ俺ら。朝っぱらから何の話してんだよ……オタク丸出しの一般人が引くような話しかしてねえぞ。いや、現に近くの席に座っているギャルに引かれてるし。絶対あのぎすぎすした感じは「うわ～、オタクキモ～イ」って思ってる顔だ。
　ちくしょう、変な偏見持ちやがって。

まあいい……いちいち気にしてたら生きてけないしな。

「けーすけ様っ！」

「あぁ？」

人が語っている途中、暮葉が止めるように俺のことを呼んできた。

そして――、

「シェイク、おかわり飲みたいのですっ！」

天真爛漫な表情を浮かべる暮葉が、おねだりをしてきたのだ。

ちょっと待て、シェイクおかわりって……しかも、Ｓサイズなら１００円で済むが暮葉は絶対それじゃ満足しない。Ｍサイズを買ってあげないと頬を膨らますだろう。Ｍサイズのシェイクはこの店だと２３０円もするんだぞ。５００ｍｌの四ツ矢サイダーより高いじゃねえかよ。

考えただけで頭痛くなってきた……。

「不幸だ……っ」

俺は右手を額に当て、かの有名な考える人のポーズを取り、小さく呟いた。

まあ、結局Ｍサイズシェイク買ったよ。暮葉の可愛さに免じて大サービスだ。

その後、俺達は駅の近くにある洋服店に行き、服でも見ようかな～と思ったが……考えてみればまだ９時代であり、まだ開いていない店もあるようだ。

１０時開店の店って多いからなぁ……それまでなにしていようか、

と議論した所、とりあえず中央公園に行くことにした。
デート……なのかなこれ。まあとにかく、デートで公園は定番であろう。
この公園の中央には人工池があり、それがそれっぽい雰囲気を放っている。まるでカップルにデートでもしなさいこの野郎、と言っているかのようである。
まあ、どこにでもある公園なのだが、

「こんな街中にも緑ってあるのですねっ」

暮葉はどうやらご満悦のようである。どうやら、彼女は都会の中心に――緑が広がっていることに驚いているようだ。
でも、日本人の俺からしてみれば、そんなに珍しいことでもない。

「そりゃああるだろ。東京にだっていっぱいあると思うぞ」

「もきゅ！？　と、東京にもあるのですかっ！？」

「ああ、多分この公園より大きいんじゃねえかな」

「ほ、ぁ……わ……」

すっかり感嘆し、暮葉は目を丸くしていた。
まあ……わからないけど、多分嘘は言っていないハズだ。多分だけど、ここよりも日比谷公園のほうが広いだろうし、何より東京には皇居があるからな。
俺にとっては慣れた街であっても、暮葉にとっては珍しいことだらけであった。

「いないわね……っ」

私――国宗伊吹は仲良しな圭介と暮葉と追跡し、千葉まで来てしまったんだけど……千葉駅の混雑でアイツらを見失ってしまったわ。

アイツら、どこに行きやがったのかしら？

覚悟しなさいよ圭介……私から逃げられないわよ。誓ったんだからね、アンタのことを地獄の果てまで追い回すって。とにかく、アンタと暮葉の関係――調べさせてもらうわ！

とりあえずまだ１０時前……圭介達が行きそうなお店はまだ開いてないわね。多分そう遠くには行ってないと思うけど、もしかして中央公園かしら？

ありえるわね……あそこ綺麗な人工池があるから、デートにはもってこいかも。

そもそも、なんであの２人がデートしてんのよ……っ。

ばか、圭介のばか……。

「……あれ？」

今、私の数十メートル前の交差点に、見覚えのある人達の姿があった。

間違いない、わよね……？　あの背が高くて忌々しいくらい胸が大きくて、ちょっとクールでカッコいい系のあの人……凪紗だよね？

もう一人の明るい髪色のロングヘアの子、あの人は確かうちのクラスの……。

それからもう一人のあの……コスプレしている人は知らないけど、凪紗達……どうして血相変えて走っていたのかしら？

「あっちは確か中央公園……？」

気になる……圭介と暮葉の関係も気になるけど、凪紗達のことも気になるわ。それに元々中央公園に行くつもりだった。凪紗達の後を追ってみようかしら……ッ。

第１８９話，早朝の街遊び（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「国宗のアレ、完全にストーカーだよな」

伊吹「す、ストーカーじゃないわよっ！　私はただ、その……っ」

重原「大好きな圭介を盗られたくない、圭介の貞操を守りたかったのかい？」

伊吹「ち、ちがうわよっ！　た、ただアイツが暮葉に変な事をしないか心配だっただけよ。それ以外に意味なんて……な、ないんだからっ！」

大吾「ツンデレ乙」

重原「ツンデレ乙だね」

第１９０話，中央公園にて

早朝、暮葉と2人で古宇坂を抜けだし、千葉まで遊びに来ていた俺達。しかし、あまりにも時間が早過ぎた為、俺達が行く店の大半はまだ閉まっていたのだ。しかし、中央公園で暮葉と色々な話で盛り上がっていた俺は、ふと腕時計を見て時刻を確認する。

しかし時刻は１０時丁度、多くのお店が閉業を始める時間になった。

「お、そろそろ１０時だな」

「けーすけ様っ！　そろそろ色々お店が開く頃なのですっ」

「そうだな、どっか行きたい所とかないか？」

「もきゅぅ……あっ！　拙者、ア○メイトに行ってみたいのですっ！」

ア○メイトとは、これまた意外な場所だな。確かに異世界人の目から見たら、あれだけアニメや漫画関係のグッズが揃っている店は、超がつくほど珍しく映るのだろう。

だけどなぁ……俺はそこで嬉しい、というか一番楽しめそうなんだけどさ。

「ア○メイト？　服とかじゃなくていいのか？」

「はいっ、お洋服は亜紀さん達と何度も見に行ってますので」

「ああ、なるほど……」

最近暮葉の私服が増えたような……と、時々自分の洗濯物を洗濯機に放り込む時、なんとなくそう感じていたんだけど……そういうわけだったんだな。

ちょっと安心したよ。暮葉も普通にこの国の生活に馴染んで、ちゃんと友達も作って遊びに行っているんだなって。よかったよかった、毎日は楽しいほうがいいよね。

「でもア○メイトか、ああいうお店に行く機会はないのですよっ」

「そりゃあ伊吹も小坂も、アニメとかには興味ないしなぁ」

むしろ、あれが普通の女子高生の姿なんだろうけどさ。

まあ、暮葉は残念ながら俺と葵に囲まれて生活しているんだ。気付けば、暮葉も相当そういうものが好きになっていた。完全に俺と葵の趣味が伝染してしまったんだろう。

それだけに、欲しいものはあるのだが、一人で行くのは恥ずかしい。かと言って伊吹や小坂はそういうものに興味がないから、誘って連れていくこともできない。

コイツもコイツなりに――悩みを持ってたんだな。

「だから、えと……けーすけ様、お願いします！　拙者をア○メイトに連れてってください！」

顔が赤い、暮葉も相当恥ずかしいんだろう……だ、だけど暮葉……。

声でかすぎるだろ……お犬様のお散歩をしていたオッサンや主婦が、暮葉の大声かつ恥ずかしい言葉に反応して、俺らに注目してんじゃねえか。

でもなぁ……暮葉を説教したって始まらないし、ここは紳士的に

対応しよう。

「わかったよ。じゃ、とりあえずア○メイトに行くとしようか」

「もきゅ！　ありがとうございます、けーすけ様っ！」

「ぉ……あわッ！？」

暮葉はにぱぁ、と、太陽のような笑みを浮かべ、俺の胸に飛び込んでくる。気持ち良さそうにすりすりと、俺の胸板に顔を埋めて、首を横に振っていた。

幸せそうで何よりだ。そう思ってるんだけど――アカン、これは俺も気持ちいい。優しく抱きついてきた暮葉だが、それがもうね……説明しなくてもわかるでしょ。

女の子。

そう、女の子の感触だ。苺のように甘く、マシュマロのように柔らかく、欲望的な意味で男の闘争本能を駆り立てる――そんな女の子のある意味危ない感触だ。

もう勘弁してくれ！

俺はね、ラノベに出てくる主人公のような耐性なんてない、一般男子だよ。要するに我慢の限界が訪れるのもヤツらより早いわけでな、このまま暮葉に甘えられると……うん、まずい。

思えばチャンスかもしれないが、朝っぱらからってのもどうかと思う。

やっぱ――告白とか、そういうのをするなら夕方でしょ。

「暮葉、そろそろ行かないか？」

「……っ？　ッ！　もきゅ、そうですねっ」

俺の言葉で何かに気付いて恥ずかしくなったのか、暮葉が俺からパッと離れる。
そして、俺達がア○メイトに向かって歩き始めた、
まさに一歩前で、
ピクン、と暮葉が顔を上げて、
「この気配、この魔力……っ」
突然、暮葉が叫んだ。
「けーすけ様っ！　伏せてくださいっ！」
「おわっ！？」
俺は突然押し倒され、暮葉にマウントを取られてしまった。えっ、なんで……なんかものすご～くエロい展開になっている気がするぞ。俺の真上に乗っかる暮葉。これって……つまり、この体位は騎乗位であって、このまま暮葉が――ってなに考えてんだ俺は！
違うだろ。暮葉の表情を見ろ、なんか真剣だぞ。暮葉がここまで真剣で、かつ俺を突き飛ばすように押し倒したってことは……。
その時、
カチン、と不自然な金属音が響いた。
その瞬間――、
「き、ゅ――ッ！」
「う、ぁ――ッ！」
シュパン、と金属が切り裂かれる音と、直後に爆発音のようなものが炸裂。爆風のような凄まじい風と砂埃が俺達を襲う。

やがて爆風が収まり、自然の風で砂埃が流されていくと、俺と暮葉は爆音が轟いた所を見る為に上を向いた。どうやら、今のは何かが公園内の街灯を切り裂いた音のようだ。スパン、と夜になれば灯がともる街灯が、真っ二つに切断されていたのだ。

一般の人達も見ている中でのこの騒動。

この時――俺は確信した。

「まさか……魔法使いか？」

「そのようですっ。折角いい気分でしたのに……奴らもしつこいのですねっ」

全くだ。俺も暮葉も今――最高に機嫌が悪いぞ。

何故なら――折角のデートっぽい何かを妨害されたからだ。

「暮葉、奴らの場所がわかるか？」

「えっと……あっ！　けーすけ様後ろっ！」

「……あ？」

暮葉に言われて振り向いた時には――既に遅かった。

連接棍棒（フレイル）と言う、柄の先に鎖などで打撃部を接合した武器を持つ、夏なのに灰色のコートを着ている変な男が突っ込んでくる。

男は連接棍棒（フレイル）を振りまわし、穀物と呼ばれる打撃部分が飛んでくる。ピュウっと言う嫌らしい風を切る音を立てながら。

「が、ぁ……ッ！」

こめかみに穀物を打ち込まれ、ぐらん、と視界が揺らいだ。フラ

フラだ、頭もクラクラとしていた視界もぐにゃぐにゃである。そのせいか、バランスを崩した俺は倒れ込んでしまった。
う、ぐ……強烈だったみたいだ。気を抜けば気絶してしまいそうだ。

「……くっ！　曲者（くせもの）、けーすけ様は渡さないのです……っ！」

視界が回復してきた。ざっと周囲を確認、一般人の数が多いな……一本、俺を襲ったコートの男のほかにも、槍や剣を持った貧乏くさい雰囲気の男達が現れ、3人が暮葉を囲んでいた。
武器を持っているのが3人……まずいな。人も多いし、こんな街中だ。いつ警察が来るかわかってもんじゃないから、暮葉も一期一振を振り回せないでいるようだ。
クッソ……早くなんとかしねえと――と、思った、

「あ、ぐぁッ！」

その時、誰かが飛びかかり――剣を持っている男が地面に落ちた。倒れた男の手からガランゴロンと剣が放れる。どうやら、今の一撃で気絶したようだ。
さらに――もう一人の槍を持つ男も、

「――――ッ！」

鉄球が男の後頭部を襲う。
ゴン！　という鈍い衝撃が響いて男は倒れた。今ので後頭部を強打した男は、気を失ってしまったようである。あらま……白目剥いてるぞ。
しかも、男の持っていた槍が俺の近くに落ちてきた。
さて、あとは一人だな……連接棍棒（フレイル）を持つコートの男。コイツさ

えぶっ飛ばしてしまえばこの騒動は終わる。
この調子だと、突然乱入してきた人達か暮葉が片付けてしまいそうだけど……でも、俺はアイツに連接棍棒（フレイル）で殴られたんだ。このままじゃ――気分が悪いよな。

「こんの――大馬鹿野郎ッ！」

俺は近くに落ちていた槍を投げつけ、注意を槍に向けさせた。男は俺が投げつけた槍を避けるので精一杯だった様子だ。辛うじて槍を避け、ヒヤヒヤと冷や汗を流しているようである。
つまり――男は隙だらけ。
飛ぶように起きあがった俺は、その隙を突くように――瞬間的に男の懐に潜り込み、

「お、るあァあっ！」

男の顔面に固く握った右の拳を撃ち込んだ。低い姿勢から殴打したことにより、下から突き上げるような衝撃が走ったようだ。男の身体が浮き上がり、頭も大分揺さぶられたようである。
男の手から――連接棍棒（フレイル）が放れた。

「あ、ぎっ！」

うめき声を上げ、口から血を流しながら俺を睨む男に、俺はさらに拳を叩きこむ。

「さっきのお返しだ、このクソ野郎っ！」

叫びながら突っ込み、
ゴン！　という鈍い打撃音が炸裂する。

全体重を乗せた一撃は容赦なく、男の鼻の真ん中に食い込み、今度こそそのまま地面に叩きつけてやった。さっきの甘い一撃とは違うんだよ……。

背中から落ちた男は、ぴくぴくしているだけで動かない。

俺はホッとした……が、まだ脅威は去っていない。

「けーすけ様っ！」

「暮葉！　狙撃のほうは！？」

俺は暮葉に問うか、暮葉の口を開けない。

代わりに――後ろから数人の声が聞こえてきた。

「大丈夫、そっちはミネットがやっておいたよ！」

「多分、もう敵はいないハズだぞ」

【心配しないで。４人全員、みんなの力で倒したよ】

「……えっ？」

振り返ると、ここにはいないハズの人達が――勢揃いしていたのだ。

「あ、明智……白藤っ？」

「それにミネットさんまで……もきゅ、ど……どうなってるのでしょうかっ？」

確かに暮葉の言う通り、どうなってるんだろうこれ？

なんで、明智達が人の危機を救うヒーローのように――颯爽と登場したんだろうか。
しかも明智に白藤にミネットの組み合わせと来た。
なに、このありえない3人組は……？

「さて、藤島――今から調布に行くぞ」

「えっ？　ちょ、待て明智！　どういうことなんだよ！？」

なんでいきなり羽田なんだよ。調布ってやっぱりアレだよね、東京の調布だよね？
でも調布って……何しに行くんだよ。調布に何かすごい場所とかあったかな。

「あ、明智殿！　どういうことなんですか！？」

「詳しい事は調布までの移動時間中に説明するんだよ！」

【だから2人とも一緒に来て、お願い】

「な、なんでぇっ！？」

やっぱりわからん！
何故だ、そもそも明智と白藤とミネットが一緒にいること自体信じられんが、それ以上にどうして俺達は調布に行かなきゃいけないんだよ。
魔法使いにも襲撃されるし……わけわからん。
え～っと、楽しい街遊びは一体どうなっちまうんだ……？

第１９０話，中央公園にて（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「ラーメンはやっぱ味噌だよな！」

黒木「ふん！　味噌とかニワカだろ、やっぱとんこつだぜ！」

赤佐「みんなわかってないなぁ～、同じ豚骨でも豚骨醤油が最強や」

大林「なんだよ、塩ラーメンが結局一番だろ？」

大吾「馬鹿野郎！　結局醤油が一番人気なんだよ！」

圭介「いや、味噌ラーメン最強だから！」

黒木「豚骨だ！」

赤佐「だから豚骨醤油って何度もゆーてるやろっ！」

大林「塩ラーメンナメるなよっ！」

大吾「醤油が一番！　異論は認めねえよ！」

伊吹「男って……ホントに馬鹿ねっ」

暮葉「拙者はそばのほうが好きなのですっ」

※ちなみに作者は味噌ラーメン派。

第１９１話，調布飛行場

明智達に無理やり連れられ、俺達は現在鉄道で調布に向かっていた。果たして、調布市には何があるのやら……つーか、明智達の目的って一体なんなんだ。

あと、どうして明智と白藤とミネットが一緒に行動してんだよ？

一度沸いた疑問は、膨らんでいくばかりであった。

「はぁ？　これから調布の飛行場に行く！？」

「うん、単純に言うとそういう事……だよな、ミネット？」

明智に話を聞く限り、俺達はこれから調布にある飛行場へ行くらしい。調布飛行場って詳しくは知らないけど、確かすごい小さな空港があるだけだった気がするぞ。

なんでよりによって調布なんかに……？

「そうだよ。これから硬質のノームをみんなで退治しに行くんだよ」

「退治って、鬼退治みたいなノリかよ……んで、その硬質のノームって何なんだよ？」

まぁ、ミネットも一応アルファ隊の隊員らしいし、多分魔法使いだとは思うけど……。

けどなんか引っ掛かるんだよな。いや、硬質のノームって奴は知らないが、似たような名前を何回も聞いた事があるような……う～ん。

「赤の軍神の一人なのです」

「赤の軍神？　ホントか暮葉？」

「はい、確か土の精霊の力を持っている天才魔法使いです」

「硬質のノームは今、遠くで大規模震災術式を組んでいるんだよ」

「聞いたことがあるのですっ。確か大規模な儀式場を必要とする代わりに、一国家を崩壊に追い込みかねない大地震を起こす大魔法なのですっ」

精霊の力だの大規模震災術式だの儀式場だの……もう、一般人の俺には理解不能だ。

だけど、これだけはわかった。その術式が完成したら――古宇坂、いや、日本という一国家が消滅するかもしれない……らしい。

あれ、でもおかしいな。サヴィエトの目的は俺を捕える事なのに……。

「ちょっと待て、なんで俺を捕まえる為に国ごと潰すつもりなんだよ、連中は？」

「圭介様拘束の先にある目標を果たす為かも。要は世界征服、レムリア――特にロジーナに対する総攻撃を仕掛ける為には、沢山の兵隊が必要なんだよ。だから、サヴィエトは日本を占領して領土を獲得し、日本の国民を含む全てを利用するつもりって、ミネットの部隊の隊長が言ってたんだよ」

ミネットの部隊の隊長って……要はアルファ隊の隊長――リーリヤさんじゃねえかよ。

まあそれはともかく、知らない間に随分大事になってるんだな…

…この戦い。
いつの間にか、俺の周囲や古宇坂だけでなく――世界を巻きこむ事態に発展している。
コイツはちょっと深刻だぞ……下手すりゃ第三次世界大戦かもしれないぞ。
サヴィエトが日本を占領し――さらに力をつけたら……な。

「じゃあ、ミネットはソイツを阻止する為に行動してるんだな」

「うん！　久々の大きいお仕事なんだよ！」

「そ、それじゃあ明智殿と白藤さんは？　お二人はどうしてミネットさんと一緒に行動しているのですか？」

ミネットが無い胸をえっへん、と張っている。
その横で、暮葉は俺も気になることを明智と白藤に質問した。

「私達はこの子に協力を仰がれただけだぞ」

【しかも、私達と凪紗は仲間】

「えっ？　つまりどういう事なんだよ？」

第一、明智と白藤には全く接点がないだろ。そりゃあ2人とも、普通の人間には使えない特殊な能力を持っているが、だからって2人が接触する機会なんてあったか？
まあ、世の中なにがあるかはわからないモンだ。事実は小説よりも奇なり、きっと2人が接触するようなイベントが、俺の知らない間に発生していたんだろう。それで、たまたまウマが合ったから友達になったのかもしれない。よかったな白藤……俺以外にも友達が

出来て。

……と、思っていたけど、そんな安易なものでもないらしい。

「だから、私達はフレンドと言う組織の仲間なんだ」

「ふ、ふれんど……ですかっ？」

「しかも友達じゃなくて組織かよ！」

「今の所メンバーは私も含めて５人。１人を除けばみんな何らかの特殊能力を持っているぞ」

これなんて某学園都市の暗部組織？

これで男１人、女４人だったらただのアイテムじゃないかよ。いや、実際フレンドの男女比なんてどれくらいだか知らないし、そもそもフレンドの存在自体――今日初めて知ったよ。

「で、それってどういう組織なんだよ？」

「元々は打倒佐井学園の為に雪乃が作った組織だぞ」

「ゆ、雪乃って、まさかあの西園寺か！？」

「もきゅ！？　雪乃さんが創設者なのですか！？」

「そうだぞ。だから今回は専門外の仕事なんだけど……そこで、ある程度事情を知っている私と白藤が派遣されたんだ。雪乃含む残りの３人は今も対佐井学園戦に向けて準備中だぞ」

そうか、ようやくわかったよ。西園寺が言っていた私たち。その

正体はフレンドっていう組織の仲間――つまり明智達だったんだ。
それにしても、対佐井学園……か。考えてみれば俺と暮葉も佐井学園とは無関係じゃないんだよな。
佐井学園が行っていた特異点潰し。その特異点潰しの阻止に協力した俺。
確かにあれ以降、超能力者の襲撃はなくなったが……それでも、佐井学園は暮葉達を狙って何かを企んでいるかもしれない。
下手をすれば俺も――連中のリストに登録されているかもしれない。

「……あ、あの、拙者も協力しましょうか？」

「ん、大丈夫だ。確かに戦力不足感はあるけど……木下は木下の役目があるだろ？」

「そうだよ木下先輩っ。ミネット達はアルファ隊なんだよ」

「にゃはは、そうでしたね……っ」

協力したくても出来ない暮葉であった。でも、協力したほうがいいよな……友達が自分から危険な戦場へ身を投じようとしている。かと言って、何もしなけりゃしないで危険だ。佐井学園は何かを企んで次の作戦を始めてしまうかもしれない。
だから、その前に学園ごと倒してしまうってわけだな。
でも、それをたったの5人で……危険すぎるだろ。

「だったら俺がお前らに協りょ――」

「大丈夫、それより藤島は色んな人達に狙われているんだ。大人しくしていて欲しいぞ」

【私も、これ以上圭介に負担をかけたくない】

「お前ら……」

なんでだよ……5人でやるよりは、多分マシだと思うのに……。

でも、考えてみれば相手は佐井学園。超能力者だけが敵とも言えない。8月17日に古宇坂を襲ったあの黒ずくめ達のような、特殊部隊が佐井学園にはあるかもしれない。

もしも銃を使う相手がいたら―俺は力になれない。

クソッ、結局役立たずかよ……俺。

『まもなく調布、調布、折口左側――――』

どうやら、俺達が乗っている列車は調布に到着したようだ。

ここから調布飛行場へ向かうのか。調布飛行場……結局何しに行くんだろう。

まさか――硬質のノームは調布で術式を組んでいるのか？

それから数十分後、俺達5人は調布飛行場の土を踏んだ。

調布飛行場。

元々旧日本軍が飛行場として使用していた所を、戦後アメリカが占領し、その後返還されて現在では小さな島へ行く便が来るのみの、小さな都営コミューター空港である。

「小さいとは聞いていたけど、実際に来てみると結構立派だな……」

腐っても空港。調布飛行場は滑走路こそ短いが、それでも立派な空港である。建物も滑走路もよく整備されており、比較的小さな航

空機が複数並んでいる。
伊豆大島行きの旅客機が、離陸する姿も見られた。

「あの、明智殿。もしかして……飛行場ってことは飛行機に乗るのですかっ？」

「そうだぞ。今回は国外に出るんだ」

「もきゅ！？　こ、国外ですか！？」

おいおいお、国外って……ありえだろ。
ここが羽田や成田なら、まだ国外ってのも納得できるかもしれないけどさ。

「明智、調布って国内線しかねえんじゃないのか？」

「そうだけど、今回はミネットが特別に手配してくれたんだぞ」

「うん、あれだよっ！」

ミネットが元気よく指差した方向に、一機の不自然な航空機が駐機している。垂直尾翼には不自然に塗装を塗り潰したような日の丸が描かれており、形状もまるでコンコルドである。見た目は小さなコンコルドという感じだけど……なんなんだコレ。
小型のジェット機なんだろうけど、あんな機種この世に存在してたか？

「もきゅ！？　あ、あれは――超音速魔動旅客機じゃないですかっ！？」

「ん、知ってんのか暮葉？」

「はい、ロジーナ製の航空機なのです。確か時速７０００キロは出るとかで……」

「な、７０００！？」

時速７０００キロも出るだなんて、どう考えてもスペックおかしいだろ。そんなに出したら中の人大変じゃねえか。それ以前に機体が持つのかよ。第一、ジェット機じゃないのかよ。

異世界恐るべし……ＳＲ－７１を超える火葬戦記級の航空機、あったんですね……。

「改めて聞くと凄まじい速度だぞ……っ」

【これが科学と魔法が融合した結果、速い速い】

白藤、それは褒めてるのか？　それともかなり馬鹿にしているのか？

まあとにかく、馬鹿みたいな航空機だとはわかったよ。

問題は――これで何処に行くかだよな？

「なあミネット、国外ってどこの国に行くんだ？」

「ポルトガルだよ。この世界の国のことは多分、圭介様のほうが詳しいと思うんだよ？」

「わ、ｗｈａｔ，ｓ？」

「だから、ポルトガルだよ？　首都はリスボン、サッカーで有名な

国かも」

「うげっ！　よりによってイベリア半島の端の国かよ！？　遠すぎだろ！　2日後にテストあるのに何泊何日の旅行だよ！？　つーかパスポート持ってねえよ俺！」

「大丈夫だよ！　超音速魔動旅客機なら多分1時間半くらいで到着するから、短時間で硬質のノームを倒せばテストには間に合うかも。あとパスポートはいらないんだよ。海外旅行じゃないし、第一ミネット達の行動が公になったら国際非難間違いなしかも」

「なるほど、そういうわけかぁ」

って、関心してる場合じゃねえよ。

1時間半の地獄のフライトで行けるポルトガル、しかもパスポートも無し。万が一硬質のノームを倒せなかったら、死ぬかテストを受けられないかの二択のみ。

あれ、俺達――とんでもない事件に巻き込まれていないか？

そりゃあね、タダでポルトガルに行けるのは嬉しいかもしれない。だけど……魔法使いと戦う為にテスト前に行くポルトガルなんか嫌じゃ。

せめてテストが終わってから行きたいよ、ポルトガル旅行は……ッ！

「と、いうわけでミネットはここらへんで失礼するんだよっ」

「えっ！？　お、お前は行かないのかよっ！？

「木下先輩がいない分、ミネットは日本で頑張るんだよっ！」

「なんだそれ!?　事情を知らない俺らに押し付けてお前は安全席で御見物かよ!?　ちくしょう、なんていい御身分なんだ！　なんで俺らだけで渡航せにゃならんのだっ!?」

「まあまあ、仕方ないのですよけーすけ様っ。早く硬質のノームを倒して、ポルトガル旅行を楽しみましょうよ」

「く、暮葉お前っ、ア○メイトはいいのかよ!?」

「拙者、ア○メイトよりも海外旅行のほうが貴重だと思うのですっ！」

どうしてそこら辺だけ考え方が一般人なんだ、暮葉は。
い、嫌だ……俺行きたくないっ！　テスト前なのに外国になんか行きたくない！

「せ、せめて――ポルトガル旅行はテスト終了後にしてくれえええええぇぇぇぇッ！」

こうして俺は、行きたくもないのに――何故か日本を出る事になってしまった……。

アイツらを追跡し始めてから何時間経過したのかしら。今、私は何故か――調布にある飛行場に駐機中の飛行機の影から、アイツらの様子を窺っていた。
事の始まりは中央公園で凪紗達を発見したあたり。私は凪紗達を

追跡し、中央公園で圭介達も見つけたんだけど……何故か、圭介達は変な人達と戦っていたわ。それで、その後凪紗達と合流した圭介達を追っていたら――何故かここにたどり着いた。

どういうわけ？　みんな飛行場でなにするつもりなのかしら？

まさか、飛行機に乗ったりしないわよね……？

「もしもし？　ああ……えっ、そろそろフライト？　了解した……おう……おう、わかった。今行くからな、それじゃまた後で」

不意に誰かの声が耳に入る。

声の主はたまたま近くにいた、客室乗務員の男性。誰かと電話しているようね、会話の内容からして多分同業者との電話だと思うわ。

あっ！　あの人、携帯電話をポケットにしまった瞬間――圭介達のほうへ向かったわ。

しかも、改めて圭介達を見てみると、なによ――みんな搭乗中じゃない。

やっぱり圭介達は飛行機でどっかに行くのかしら。それで、圭介達が乗る飛行機の客室乗務員があの男の人なのかしら。気になるわね……ていうか、この後どうしよう？

「……っ」

背中、しかも服の裏側に私は竹刀を隠し持っているわ。毎日携帯しているけど、どうやらコイツを使う時が来たようね。本当はいけない事だってわかってんだけど……でも、仕方ないわ。

決めたもの。圭介――アンタのことを地獄の果てまで追いかけるって。

だったら私も飛行機に乗るしかないわ。その飛行機に乗る為には――私が男の人の代わりに客室乗務員になればいいのよ。

その為には――悪いけど犠牲になってもらうわよ。

「――ッ！」

私は服の中から竹刀を取り、しっかり柄を握る。狙いを定めて、私は駐機中の飛行機の影から飛び出し、男を追うように前へ跳躍する。両手で固く握った竹刀を振り上げ、さらに走って男の人に接近してゆく。そして――隙だらけの後頭部を打突した。

「ぐ、あぁ……て、めえ……ッ」

後頭部への一撃で気を失い、力を失った男は地面にゆっくり倒れる。真正面から地面に落ちた男はそのまま動かなくなった。やったわ……計画通りよ。

私、相当悪い事してるわね……でも、圭介達が気になるのよ。アイツら――今度はどんなトラブルに巻き込まれてるのかしら？それを知る為、そして万が一の場合は圭介達に力を貸す為、何より……圭介と暮葉の関係を調べるために――私はあの飛行機に乗るわ。

ちょっとこの人の服を借りて、客室乗務員としてね。

第１９１話，調布飛行場（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「なにこの国宗、ちょっと怖いっ」

重原「そうだね。圭介の為にストーカーしてるもんね」

伊吹「なっ！？　す、ストーカーじゃないわよ！」

大吾「では被告人、どう弁解しますか？」

伊吹「あ、アレはアレよっ！　えっと……そう、浮気チェックよ！」

重原「国宗さん、圭介と付き合ってたっけ？」

伊吹「っ！？　ち、違う！　付き合ってないし好きじゃないわよっ！」

大吾「はいはい、んで、結論――恋する乙女ほど怖い存在はない」

重原「そうだね、ストーカーは立派な犯罪だしね」

伊吹「だから――ストーカーじゃないわよっ！」

第１９２話，ポルトガル共和国

西ヨーロッパのイベリア半島に位置する国家、ポルトガル共和国。
ユーラシア大陸最西端の国家であり、大航海時代に大きく栄え、ヨーロッパでは最初に日本や中国といった、東アジアと接触を持った国家である。
今でこそ当時と比べれば衰退してしまったものの、数々の世界遺産を残し、特に最近ではサッカーなどで人々を盛り上げている国だ。
って、なんで紹介をしているかというと……来てしまったからだ。
ポルトガルに。

「暮葉、ここ……どこだよ？」

「え～っと……り、リスボンらしいのです」

「この国の首都じゃねえか……くそ、ホントに来てしまった」

ここはポルトガルの首都、リスボン。
なんで首都にいるかというと、首都リスボンにはポルテラ空港という、リスボン市域の北部にある大きな空港があるからだ。ここは市街地に近く、交通の便も大変よろしい。なので、とりあえず俺達はリスボン市街地へ向かい、お昼にポルトガル料理を食べる事にしたのだ。
それにしても……。

「ポルトガルって汚いイメージがあったけど、古宇坂の路地裏より綺麗だな」

「藤島……それはポルトガルに対する偏見だぞ」

【凪紗、大丈夫。リスボンは誰だって居れば居る程魅力的に感じる街、らしい】

「白藤さん、詳しいのですねっ！」

【滞在先のことは大体把握してる。わからないことがあったら聞いてもいい】

「ホントですか！？　じゃあじゃあ、ポルトガルで一番美味しい甘い食べ物は――」

暮葉にとっても初めてなんだろう、日本以外の国に行くってのは。つーか、俺も国外に足を踏み入れるのは初めてで、英語も全然話せないから結構緊張してるんだが……でも、暮葉に比べりゃこの緊張も大したことはないのだろう。それと同時に――知りたい事も沢山あるハズだ。

ところでふと思ったんだけが……声は出さず、携帯に文字を打つ白藤の会話方法。

誰も変だとは思わないのか？

それとも、思っていても口に出さないいい子なのかな？

まあ……気にしてもしょうがない事ではあるよな。これも白藤の個性であろう。

「んで、明智。なんでアッサリ超音速魔動旅客機が空港に着陸出来たのかも気になるけど、それより飯ってどこで食べるんだよ。オススメのレストランでも知ってるのか？」

「うん、私は知らないけどな。でも、白藤が美味しい所を知っているらしいんだ」

「へぇ、白藤って旅行か何かでポルトガル行ったことあるのか？」

【ない】

うわっ、随分アッサリした回答だなこりゃ……まあでも、白藤は元々サヴィエトの一員でスパイ活動をしていたくらいだ。情報収集は得意中の得意なものなのだろう。

「ご、ご飯……楽しみなのですっ！」

「お前は食い物しか脳にないのかよ」

「し、失敬な！？　けーすけ様だってどーせ外国人さんのことしか脳にないのですよね！？」

「それこそ失礼だろ！　俺の脳内年中ピンク色だと思ったら大間違いだ！」

「もきゅ？　違うのですか？」

「あれ、藤島は変態のハズだろ？」

【圭介、エッチな人だって聞いてるのに】

「お前らな……」

なにこの反応、なんだか目から汗が出てきそうだ……うぅ。

俺、そんなに変態に見えるのかな？

いや、認めるけど……ストレートに女子3人から言われるのはや

っぱキツい。でも外国人のお姉さんに興味があるのは間違いじゃないしな。うん、ぶっちゃけ悪くない。ロリロリしていない分お姉さんな感じが半端ねえぜ……これはこれで男心を擽るな。

くそっ、外国思ったよりいい所じゃないか。

「藤島、お前やっぱり女のこと考えてるだろ？」

「やっぱりけーすけ様はＨＥＮＴＡＩですっ！」

【洋モノもイケるんですね】

「ちちちち、違うわっ！　つーか白藤その文はやめい！　なんかイヤらしいわ！」

【それほどでも／／／】

「褒めてねえよ！　しかもなんだよ『／／／』って！　照れてるつもりかよっ！」

【私なりのデレ表現】

「ちくしょう……下手なＳＳかよ。もっと人間的な反応をくださいっ！」

俺と白藤はこの後もしばらく、おバカな話で盛り上がっていた。

うん、白藤は声を出さない――携帯に文字を打って会話をする不思議な子だけど、それでも彼女と会話をしていることには変わりない。いやいや、楽しいもんである。

「もきゅっ、いつも人間的な反応してますのに……ッ」

「藤島は馬鹿だぞ……っ」

ん、後ろで何かを呟いている2人が。しかも不機嫌そうだな……どうしたんだ？

しかし明智よ……折角だから路面電車乗らないか？

なんかもう、坂道が多くて疲れてきたよ。リスボンって坂道多いんだね……。

それから数十分が経過、坂道を何度も上り下りし……ついに到着した。

今日のお昼ご飯を食べるレストランに――。

「テーブルクロスに立派な椅子……ゴージャスなのです！」

「お、おい……妙に立派じゃねえか？」

「当然だぞ。その……奮発したからなっ」

【どう、すごい？】

「いや、すごいの何の以前に……金は？」

「大丈夫、ミネットだったか？　あの子が予約したらしいぞっ」

「おお！　ミネットさんグッジョブなのです！」

【ミネットはいい子いい子】

「あ、アイツ……何者なんだ？」

いや、どう考えたってミネット一人にそんな財力あるとは思えないし、これはきっとアルファ隊が最高級のレストランを用意したんだな。まさか……俺がアレだから？　一応アレクサンドルの子孫だから気を使ってたりするのだろうか？

俺は別に庶民の食い物でも、ポルトガルのものは十分新鮮に思えるのに……。

まあでも、お金の事を気にしなくて済むのなら折角の機会だ。

たらふく食べてやろう――ポルトガルの高級料理とやらを。

「Ｌｅｇｕｅ　ｕｍａ　ｖｉｓｉｔａ，ａ　ｏｒｄｅｍ　？　ｈａｂｉｔｕａｌ？」

その時、店員さんが何かを言ってきた。

うげ、英語じゃない……これポルトガル語か？

ちくしょう、英語すら話せないおバカに俺には理解不能の意味不明です。つーか日本人の大半は意味不明だろう。せ、せめて……せめえ英語で喋ってくれぇーっ！

「みんなは何を食べたい？」

「えっ？　明智殿、どういうことなのですか？」

「えっ、ちょ……もしかしてお前言葉分かるの！？」

「ポルトガル語くらい常識だろ？　とりあえず、私が通訳になるから注文を言ってくれ」

「……」

じょ、常識……なのか、ポルトガル語って？
まあ確かに、昔ポルトガルという国が強かっただけに、今でもブラジルではポルトガル語が公用語だったりするし、意外とポルトガル語を話す人って多いのかもしれない。

「じゃ、じゃあ俺マオン・デ・ヴァッカってヤツで」

「拙者はバカリャウ・ア・ブラシュというヤツでお願いします！」

【私はアンコウのリゾット】

こうして聞くと、ポルトガル料理ってカオスだな……。
いや、でも食ってみれば上手いハズ。
魚料理って時点で、日本人の国にも合いそうだからな。

「わかった。Ａｒｒｏｚ ｄｅ Ｔａｍｂｏｒｉｌ，ｖｉｄａ ｄａ ｃｈａｖｉｎｈａ，ｃａｎｊａ」

「Ｃｏｍ ｏ ａｎｔｅｒｉｏｒ ｅｕ ｄｅｓｅｊｏ ｓａｂｅｒ ｓｅ ｅｕ ｆｏｒ ｃｅｒｔｏ？」

「Ｓｉｍ」

「Ｓ？ｂａｄｏ ｐａｒａ ｃｉｍａ ｄｉｒｅｔａｍｅｎｔｅ；ｅｓｐｅｒｅ ｄｕｒａｎｔｅ ａｌｇｕｍ ｔｅｍｐｏ．」

俺にとっては理解不能な会話を終えると、店員さんは静かに去っていく。
こうして見ると改めて思ったよ。明智、浅間部長の顔の１００倍カッコいい……。

でも一つだけ気になるぜ……なんでポルトガル語で地元の人と話せるんだよ？

「すごいのです明智殿！　ぺらぺらでしたねっ！」

【流石、フレンド最高の頭脳派】

「そ、それほどでもないぞ……普通だぞ普通……っ」

とは言いつつ、明智は頬をほんのり赤らめている。はは、コイツ照れてるな。だけど実際明智がすごかったのは事実だ。まさか、ただの高校生が英語以外の言葉をペラペラ喋るとは。流石は俺らの頭脳明智凪紗。俺とは頭の出来が細胞レベルで違うモンだぜ。

でも、一つだけ気になる事があるな……。

明智、結局最低土日はポルトガルに滞在、それ以上に伸びる可能性もあるが、確か明智はファミレスが何処かでバイトをしていたハズだ。バイトのほうは大丈夫なんだろうか？

そして明日は俺の生誕１７周年記念日であり、同時に明智とってのあの日だ。俺は明智の言うあの日が何か、今だに知らないのだ。

明智が言うあの日って、一体どういうものなんだろうか？

そんな事を気にしながら――俺はこの後テーブルに置かれた昼飯を堪能していた。

うん、学食の１５００倍はうまいな――ポルトガル料理。

第１９２話，ポルトガル共和国（後書き）

後書きトークコーナー！

黒木「ここでぶっちゃけた話をするぜぇ！」

圭介「な、なんだよ？」

黒木「いいか？　まず明智と店員のポルトガル語だ」

圭介「ああ、アレか。明智のヤツ妙にペラペラだったよな」

黒木「そうなんだけど、実はアレ――デタラメなんだ」

圭介「……は？」

黒木「いや、だから言葉のまま――デタラメなんだよ」

圭介「えっ？　あれポルトガル語じゃないの！？」

黒木「そうなんだけどよ……英語の成績３の作者がポルトガル語理解できると思うのか？」

圭介「む、無理だな……」

黒木「そう、そこで――グーグルの翻訳機能を使ったんだ！」

圭介「なに！？」

黒木「つまり――翻訳サイトの翻訳なんてデタラメ以外の何者でもないのだ！」

圭介「な、なんだってー！？」

黒木「と、いうわけで読者の皆様。作中のポルトガル語はデタラメだぜ？」

赤佐「実際にポルトガル人に言っても、理解できないかもしれないでぇ？」

圭介「し、知らなかったでございる……っ！」

※舞台がポルトガルなのに、ポルトガル語わからなくてごめんなさいｏｒｚ

第１９２話，追跡者への……

「み、道に迷ったわね……」

私――国宗伊吹は、圭介達を追ってこんな所にまで来たのはいいんたけど、どうやら坂道が多く迷路のような街で、私は道に迷ってしまったみたいだ。

どこなのよ……ここは。人の数はそれほどでもない気がするけど、とにかく路面電車と坂道が多くて日本じゃないみたいね。一体ここはどこの国なのかしら。そもそも私、どうして圭介達を追っていたら国外に来ちゃったのかしら。アイツら……一体国外に何の用があんのかしら？

「途中まではいたのに……っ」

そう――途中までは圭介達の姿が確認できていた。

でも今は違う。沢山の人がいた空港で圭介達を見失ってしまった。そのせいで、私は一人圭介達を探すために街中をさ迷っているのだ。

でも、どこまで行っても狭い路地に坂道坂道坂道……いい加減疲れたわね。ホントにここは路面電車に坂道ばっかりだわ。

雰囲気的にヨーロッパみたいだけど……ホント、どこの国なのかしらね？

「おやおや……おもしろいものを発見しましたねー」

「――ッ！」

いきなり私は声をかけられた。

妙に違和感のある日本語……なによ、現地のナンパ？

もしかして、私のような日本人が物珍しいのかしら。はぁ……ほんっと、日本に居ても知らない国に居ても同じね。どうして私って——いつもこんな人達に声をかけられるのかしら？

とにかく鬱陶しいので、私は追っ払おうと後ろを振り向いた。

しかし——誰もいない。

「……あれ？」

「こっちですよーこっち」

「……ッ！」

スーパーヒーローのつもり？　と一瞬思った。だって……声をかけてきた人が、狭い路地に立ち並ぶ一軒の建物の屋上に——腕を組んで佇んでいたのだから。

「だ、誰よあんた……？」

「いけませんねえお嬢ちゃん。貴女は確か——藤島圭介の幼馴染なんですよねー？」

「ッ！」

あの人……なんで圭介のことを、なんで私のことを知ってんのよ？

オマケに随分奇抜なファッションね……着ているものは修道服っぽいけど、どうして修道服の色が黄緑色なのかしら。明るい上にファッションセンスゼロね……あのおじさんさん。しかも外国人にしては背が低いように見えるし、そこだけは親近感が沸くかもしれない。

するとその時——修道服のおじさんが建物から飛び降りてきた。

「――ッ！」

一瞬、ひやっとした。

人が建物から飛び降りた、いくら高層ビルではないとは言え、この高さから人が落ちれば十分死ぬかもしれない。だから私は思わず唾を飲んだ――しかし。

轟！　と突然、レールが敷かれた地面が盛り上がった。

道路から一本の柱が伸びている。それに繋がるように、轟！　という轟音を轟かせながら柱が何本も伸びてくる。気付けば――それは階段のようになっていた。

修道服のおじさんは、軽々としたステップで道路の階段を降りてくる。

変……よね。普通じゃありえない光景が目の前で起っている。ありえない……合宿の時に乗った帆船で体験した時と同じくらい――ありえない事が起こっているわ。

もしかしてこの人――魔法使い？

「日本の国で大人しくしていてくれればよかったのに……まあ、仮に日本に居ても、古宇坂市は強い揺れと津波で破壊し尽くされるでしょうがねー」

「な、何者よ……あんたっ」

「そう警戒しなくてもいいですよ。別に私は日本人に対して敵意を持っているわけではございません。でもただぁ、そういう命令なので、命令に従って魔術を行使しているだけに過ぎませんよー」

「あんた……サヴィエトなの？」

「ふんふん、基本的に部外者だと聞いていたのですがねー。これは参りましたねー、お嬢ちゃん意外と私達の事を知っているんですねー」

「なによあんた、まさか――圭介（アイツ）が狙いなの？」

私がそう問うと、修道服のおじさんは右手を振りまわし、

「そうですね……それもありますが、もっと大きな目標がありますよ」

まるで、交番に貼ってある指名手配の人の顔写真のような、邪悪に満ちた笑みを浮かべて意味あり気なことを語った。

なによ……もっと大きな目標って？

「大きな目標ってなに、答えなさいよ」

「少なくとも、お嬢ちゃんにそれを答えるメリットは――なにもありませんねー」

「ふ……ふざけんじゃないわよ！　人の事痛めつけて、あんた何がおもしろいのよ！？」

「それにしても……お嬢ちゃんがここにいると言うことは、標的（ターゲット）もここにいるんですかねー」

修道服のおじさんは楽しそうに笑った。

にっこりと。

でも……楽しそうにそんな事を言う修道服のおじさんに――私はムカついた。

「……っ！　言うと思う？　そんなこと……敵になんか言わないわよ」

「そうですかーいるんですねー」

なに勝手に話を進めてんのよ。確かに圭介達は今この国にいるらしいけど……でも、そんなことがバレたら大変よね。圭介達がコイツに襲われるわ。

だから――何が何でもコイツを止めないと。

「残念だけど、アイツはここにはいないわよ？」

「へぇー、では……お嬢ちゃんは何故、客室乗務員の恰好をしているのですかねー」

「……っ！」

「つまり――大好きな幼馴染を追跡してきたのではないですかねー？」

「――ち、違うっ！　あんなヤツ別に……好きでもなんでも……っ！」

「ふふふ、最近の若い子は面白いですね。中々好きな人に素直になれない……聞いたことがありますねー。確か……ツンデレってヤツでしたかねー？」

「わ、たしは……ツンデレじゃないわよっ！」

なんなのよこの人、挑発してるつもりなの？
いい加減にしないと――竹刀でしばらく魔法使いなくしちゃうわよ。

「なるほどそうですかーそれはいい。日本と潰すと一緒に回収するつもりでしたので……手間が増えたと言えば増えましたねー。でも――最近は術式を組む作業ばかりでしたし、いい加減飽き飽きしていた所ですねー。そうですねー……これは、中々の暇潰しになりそうですねー」

言い終えると、修道服のおじさんはゆっくりと歩き、私に近寄ってきた。なんだか怖くなってきた私は背中に手を伸ばし、服の中から竹刀を取りだす。
竹刀を構え、修道服のおじさんを睨みつけた。

「おやおや面白いですねぇ、まさか私と戦うつもりですかねー？」

「これ以上近寄ってみなさい。あんたを攻撃するわよ……あんたにアイツを襲わせないわよ」

「これはこれは手厳しい。ですがご安心ください――今の私は貴女に用があるんですねー」

咄嗟に、修道服のおじさんは右腕を横に伸ばす。
白く細い右腕。
その老人になりかけたおじさんの細腕には、灰色の何かがまとわりついている。その何かはどうやら地面から吸い上げられているものらしく、次第に腕の周りの何かが増えていく。
なんなのよアレ……もしかして、

「す、砂……？」

「その通り――砂ですよ」

磁石の用に修道服のおじさんに引き寄せられた砂は、緩やかに動きに反し、突かれる槍のような速度で私の身体を貫こうと伸びてきた。

ドッ！　という、空気を切り裂く轟音が炸裂する。

「……ッ！」

私は反射的に砂の槍を避け、もう一度修道服のおじさんを睨んでみる。

余裕。

おじさんの顔には、余裕の一色があるのみ。

ナメてるわね……あのおじさん、魔法が使えるからって私をナメてるわね。

「なるほど、素人にしては中々いい動きです。以前ポルトガルの警察と交戦した時は、誰もその槍を避けれず身体に大穴が開きましたけどねー」

「ふざけんじゃないわよ……こんの外道おじさんっ！」

私は修道服のおじさんとの間合いを詰めようと、一気に大地を蹴って飛びかかる。

間合いは一瞬で詰めた。修道服のおじさんとの距離はすぐに縮まり、修道服のおじさんも若干驚いているような表情を見せる。

しかし、驚きの表情はすぐに笑みに代わり――、

「攻めは素晴らしい。でも――華奢ですぐ折れてしまいそうですねー」

「……ッ！」

修道服のおじさん目を細めると、両腕を大きく開いた。両腕が開かれた瞬間、修道服のおじさんが立っている目の前の地面が避け、大きな岩石の塊が宙に浮く。

信じられない光景に、私は思わず目を見開く。その時、岩石の塊が動き始め、砲弾のような凄まじい速度で私に迫ってきた。

「――ッ！」

間一髪、ギリギリで避けることが出来た。

と、思った――次の瞬間。

「残念ですねー」

修道服のおじさんの声が耳に入ってきたと同時に――、

ゴッ！　と、衝撃がお腹を襲った。

「あ、ぐぁ……ッ！」

鈍い痛みを感じ、思わず身体を屈めてしまう。

揺れる意識の中、道路をよく見てみると――砕け散った岩石が落ちている。

それに当たっちゃったのかな……私は？

「最後に自己紹介だけ、しておきますかねー」

「……っ」

薄れる意識の中、修道服のおじさんは一言だけ告げた。

「私の名前は硬質のノーム――赤の軍神の一人ですよ」

硬質のノームという、不思議な名前を。

第１９３話，硬質のノーム

高級レストランでたらふくタダ飯を食べた後、俺達はテージョ川の対岸、バレイロ駅というサド線の駅へ行こうとしていた。どうやら、サド線に乗ればセトゥーバルまで行けるらしいのだ。

あーあ、折角いい所だなぁって思ったのに、目的が赤の軍神退治だとは……もう一度来るかどうかはわからないし、多分こないと思うけど、次に来るとしたら普通の旅行としてがいいな。

正直に言おう。今回は色々な意味でハードスケジュールすぎるだろ……。

「んん～！　おいしかったのです！」

「確かに味はよかったなぁ」

【同意】

「言っとくけどお前ら、今回は旅行じゃないんだぞ？」

へいへい釘を刺されなくてもわかってますよー明智さん。今回は仕事、赤の軍神の一人である硬質のノームを倒すために、態々日本から大陸最西端の国に来たんだからな。

それにしても硬質のノームねぇ……一体どんなヤツなんだろうか。まっ、赤の軍神ってくらいだ。少なくともシルフと同じか、アレ以上に歪んだ性格の持ち主であるに違いない。俺の経験上――サヴィエト所属でマトモだったヤツはいない。

「わ、わかっているのです！」

【大丈夫、目的を忘れているのは多分圭介だけ】

「俺もしっかり覚えてるよ！」

ったくコイツらはいつもいつも……俺だけお馬鹿&変態扱いだもんな。まあ、お馬鹿で変態なのは自分でもわかってるけど、俺一人だけって……差別だ、こんなの差別だよ。

「もきゅ？」

「ん？　木下、どうしたんだ？」

「いえ、あの人ごみはなんでしょうか……？」

「あ？」

暮葉に言われて、俺達は右を向く。その先には路面電車の線路がありながら、ギリギリ車と列車が通れるほどの広さしかない、狭い路地が伸びている……のだが、

何故か。

どういうわけか、普段は人の集まらない路地に大勢の人々が集まっている。まるで海外の大物俳優が来日する時の空港のようだな……。

しかもなんだアレ？

不気味に地面が盛り上がり、柱のようになっている所がある。

「な……あれ、どうなってんだよ……おいっ」

「派手に盛り上がってるな、トーテンポールみたいだぞ」

【どう考えても魔術】

「ですね、それも大地をあそこまで操れるのですから――かなりの使い手なのです」

「木下、もしかしてそいつ」

「間違いない――硬質のノームなのです」

って、いきなりボス格の仕業かよ。やれやれ、ＲＰＧじゃないんだから。ていうかその硬質のノームはここで何をやらかしたんだろうか。ここまで大胆に魔法を使うってことは、誰かと戦っていたか儀式場のつもりかのどちらかだろう。

後者は……ありえないよな。

そもそも儀式場はセトゥーバルで作ってるって話だ。リスボンでは目立つしな、だから俺の予想では前者だと思うけど……硬質のノーム、そいつは一体誰と戦ってたんだ？

「とりあえず俺、現場でも見てくるわ」

「あっ！　けーすけ様っ！」

「すみません、ちょっと失礼します」

まあ、まずは現場検証からだよな。俺は現場を見に行く為に人ごみを掻き分け、大地が柱のように尖っている地点を目指す。やがて人ごみを抜けると、改めて惨状目の当たりにする。

ひどいな……レールはぐにゃぐにゃ、道路も砕けてしばらく通行不可能。いや、そもそもここまでド派手に石柱が出来てしまったら、二度と道路として利用されないかもしれないな。

と、そんな事を考えていた――その時。

「……ッ！」

俺の瞳に――信じられないものが映った。

衝動的にそれを回収する為に前に跳躍し、それを右手で回収する。

「これ……うちの学校の？」

赤を基調とした少しだけ汚れた手帳。

生徒手帳。

初芝高校の生徒なら、誰でも持っているハズの手帳である。

「もきゅう、けーすけ様いきなりどうしたの――あれ？　これって……」

「間違いない、うちの学校の生徒手帳だぞ」

「だよなぁ……」

生徒手帳と言っても、単に学生証を入れるだけのカバーなんだけどな。あとは数ページだけ初芝の校則が記されているページがあるのみ。実にシンプルな生徒手帳である。

しかし、一体誰の生徒手帳なんだろうか？

そう思いながら、俺は誰かの生徒手帳を開いたのだが――、

「う、そ……だろ？」

生徒手帳の中に挿まれている学生証。

そこに記された名前と見覚えのある顔写真を見て、俺は言葉を失

った。

身分証明書、２年４組１０番。氏名：国宗伊吹。

セトゥーバルのサン・ジュリアン教会。ここで私は例の術式を組んでいます。

いやいや、まさか――藤島圭介の幼馴染がポルトガルにいるとは思いませんでした。

ですが、これはむしろ私――硬質のノームにとって、かなり好都合な事ですねー。なんせあの無駄に頑丈と噂の男を、誘き寄せるいい材料になりますからねー。

邪炎のサラマンダーなんかは、正面突破を得意とするらしいですが……世の中、あらゆる戦いを勝ち抜く上で重要なものは、彼が持っている筋肉ではなく、私が持っている頭脳です。いくら力があっても頭が悪くて使い勝手が悪ければ――どんな強者だって弱者となります。

逆に考えましょう。仮に非力でも、頭さえよければ強者となりえるのです。

この素晴らしい方程式に気付いた者こそ――真の勝者になる者なのですねー。

「しかし、やっぱりお酒はフランスのシードルですねー。そうは思いませんか、邪炎のサラマンダー？」

「私はウィスキー派だ」

やれやれ、大柄な白人男性――邪炎のサラマンダー。

この人は相変わらず冷たいお方ですねー。

私と酒を飲むことはありませんし、赤の軍神になる前は神聖教の

同僚でしたのに、大変事務的な会話しか交わそうとしませんでしたからねー。この人、私が嫌いなんでしょうかねー。まあ正直私も邪炎のサラマンダーは、得意なタイプではありませんけどねー。

私の意見に――いつも反対してきますからねー。

「そうですか、まあいいでしょう……お酒はいろいろ種類がありますからねー」

「ふん。で、何故貴様は民間人を巻き込んだのだ」

「民間人を巻き込んだとはひどい言われようですねー。邪炎のサラマンダー？　藤島圭介の幼馴染を一般人とお考えなんですか？」

「当然だ、彼女は何の力も持たない。藤島圭介と我々の事情を知っていても、かといって我々にとって害になるわけではない」

「そうですか。ですが、その考えは間違いだと私は思うのですがねー？」

私がそう言うと、邪炎のサラマンダーの眉が僅かに動いた。

「何故だ？」

「事情を知っているから、いいえ――彼の仲間だからですよ」

それだけの理由があれば十分――国宗伊吹も我々の敵。

そして藤島圭介拘束のために――我々が利用すべき道具（アイテム）となるのです。

「……貴様」

「おや、いいのですかなー邪炎のサラマンダー？　このサン・ジュリアン教会は歴史的建造物。増してや信者２０億、我々の世界で言う神聖教と同等の規模を誇るキリスト教の施設です。しかも、私はこの施設に日本攻略の為の術式を組んでいる最中です。貴方がここで暴れて、施設も儀式場も破壊されてしまったら……どうなるかわかってますよねー？」

それは当然、レニナにはこっ酷く叱られるでしょうねー。いや、それどころかキリスト教という強大な宗教を敵に回すことになるでしょう。

噂では、キリスト教も魔法使いを抱えているらしいですからねー。まあ、我々赤の軍神が倒せないってわけではないでしょうが……そうなったら、色々と面倒ですから宗教との戦争は避けたいですねー。

「……ふん、相変わらず貴様は嫌な奴だな」

「それはお互い様でしょう。まっ、今回貴方には下がっててもらいたいですねー」

「そうか、なら遠慮くなく下がるが――後悔はするなよ」

「はて、どういう意味でしょうか？」

「貴様の大震災術式がどれ程のモンか、一応我が身を犠牲にして味わった事はあるが……その程度で――神国日本が滅びるとは思わないことだ」

「ほほう、その言い方……貴方はいつから日本人になったのですか

？」

「残念だが、私はレムリアの島国――ウェセックスの出身である」

「そうでしたねー、ちなみに私はルテティア人ですよ」

そういえば、この世界の文献に目を通した所、同じ名前の地名がありましたね。

ひょっとして――レムリアはこの世界のパラレルワールドなのでは？

……という、馬鹿な妄想もいつかはしましたねー。

「海と陸の国……ふん、出身国まで敵同士か」

「そのようですねー……ま、赤の軍神に身を置く以上――我々は一応仲間ですよ」

「最も、私はサヴィエトの総有主義なんてモンに興味はないがな」

「それは私も一緒です。結局――我々は神を信じる者ですからねー」

「……では、私はこれで引き下がるが――馬鹿な事をするではないぞ」

「ええ、心がけてますよ……フフフッ」

この組織に、この地位に身を置いているのは――全て個人の目的を達成する為。

シルフやサラマンダーの目的は知りませんが……そうですね、私の目的ですか。

私の目的は――おや？

「外が騒がしいですねー」

地元の警察でしょうかねー。

やれやれ、もう少し――未開の土地で術式を組むべきでしたかな？

警察もしつこいものです……いいでしょう、再び蹴散らしてあげますよ。

フフフ……少しだけ、少しだけ暇潰しをしますかねー。

第１９３話，硬質のノーム（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「ここで作者に質問！　小説書いてる暇あるの？」

作者「いや、まああるっちゃありますけど……」

圭介「そういう意味じゃなくて、アンタ来年受験生だろ」

作者「いや、まあ……うん、ドンマイです」

圭介「ダメだこりゃ……絶対大学落ちるな」

作者「でも、この小説書いてると意外と勉強になりますよ」

圭介「ウソつけ！　何の勉強になるんだよ！？　オタ知識か！？」

作者「少なくとも地理と世界史の勉強には？　うん、多分」

圭介「ねーよっ！　真面目に勉強しろ作者ァ！」

第１９４話，セトゥーバル近郊

サド線。

俺達はそんな名前の路線を走る、セトゥーバル行きの列車に乗っていた。リスボンの路地で襲われたという日本人は伊吹らしい。そしておそらくその犯人は硬質のノーム。硬質のノームはセトゥーバルの何処かに身を潜めているらしいのだ。

だから、俺達は早急にそこへ向かい――ノームを倒して伊吹を助ける必要があるのだ。

「ったく、アイツは……なんでアイツまでポルトガルにいるんだよ」

「藤島、気持ちはわかるが、今は行動するほうが先決だぞ」

「そうですよっ、伊吹さんの命が危ないかもしれないのですっ」

そうだな。伊吹がどうしてポルトガルにいるのか、それも気になるが……それを聞く為にはまず伊吹を助けないといけないよな。

それに許せねえよ。たとえ伊吹をポルトガルで発見したとしても、アイツは元々俺らの事情には関係ない一般人じゃねえか。そんな伊吹を狙って襲いやがって……。

何の為に？

何が目的で？

どういう理由で伊吹を……？

「いいぜ硬質のノーム。これがてめえのやり方だってんなら……」

言いながら、俺は拳を車内の手すりに叩き込む。

ゴン！　という鈍い音が炸裂し、衝撃が骨にまで伝わってとても

痛い。
それでも――俺は真っすぐに手すりを睨みながら、
「その幻想を、欠片も残さずぶち殺してやる！」
「ふ、藤島が本気になったぞ……っ」
「というかけーすけ様、完全になりきってるのです……」
仕方ねーじゃないか、色々と気合いが入るんだから。というわけで、俺は今後も気合いを入れる為に色々とモノマネをするかもしれないぜ。
【みんな、もうすぐ着くよ】
「いよいよセトゥーバルか……」
あと一駅で目的地――セトゥーバルってわけか。
硬質のノームがセトゥーバルの何処にいるかは知らねえが、流石に緊張するな。まあ何処にいようが俺達の目的は変わらない。
硬質のノーム。お前のくだらない計画は――必ずここで折ってやるよ。
そして、その決意と同時に衝撃が走る。衝撃は電車のブレーキによるものではない。
ゴッ！　と。
唐突に電車の壁を引き裂いた攻撃は、俺達が乗っていた車両を爆破した。
突然の異変に、今度こそ電車は急ブレーキをかける。

乗客たちは大声を上げ、電車内を転がる。
俺達は吹っ飛ばされる寸前で手すりに捕まり、なんとか衝撃に耐えてみせた。やがて破壊された電車はピタリと、完全に動きを止める。だが、眼前に広がるのは目を覆うばかりの惨状。無様に破壊された電車に、攻撃の余波を受けて怪我をした人々。
そして、攻撃が直撃して命を失った人々も……。

「ぐっ！　暮葉！　明智！　白藤！」

俺は叫んだが、彼女達は無事なようである。
破壊された車内に立ち込める埃が風に流され、彼女達が姿を現す。よかった、服は汚れているみたいだけど、目立った怪我はしていないようだ。
だが……安心している間にも――第二撃の岩の砲弾が飛んできた。

「この……ッ！」

第二撃は直撃せず、二次災害をもたらすことはなかった。
何処からか放たれた岩の砲弾。暮葉は咄嗟に一期一振を背中から取り出し、それを迎撃するかのように鞘から刀を抜き、何メートルも跳躍した暮葉は岩の塊を叩き斬った。
閃光が走る。
暮葉の放った斬撃は、電車を破壊し尽くす大岩を粉々に砕いたのだ。

「暮葉！」

「平気なのです！　それより二次災害が心配なのです、皆さん電車から離れてください！」

言われた俺達は、破壊された電車から飛び降り、出来るだけ離れようとする。確かに暮葉の言う通りであろう。あの攻撃はどうも俺達を狙っているものらしい。おそらく、俺達が車内にいるだけで乗客を巻きこんでしまうだろう。

そうなるくらいなら――いっそ外に出て戦ってやる。

「2人とも！　大丈夫か！？」

「私は無傷だぞ」

【私も、携帯の画面に少しヒビが入っただけ】

よかった……白藤の携帯電話も殆ど無事でよかった。白藤の場合、携帯電話がなかったらマトモに会話も出来ないからな。とりあえず全員の無事は確認できた。

後は――攻撃してきたヤツを探すだけだな。

「暮葉！　近くで魔力とかは感じてないか！？」

「はい、物凄く大きな反応が迫っているのです……っ」

あの暮葉が大きな反応と言うだなんて……相手は相当の達人なんだろう。

しかも岩を投げつけてくるときた。まさかとは思うが……。

と、思っていた……そこへ、

「おやおや、アルファ隊の特隊員がいるとは予想外でしたねー」

声は上から聞こえた。

近くに建っていた一軒家の屋根の上。
まるで最初からそこで待ち構えていたような人物は、黄緑色の修道服を着ている白人にしては痩せこけた、お爺さんになりかけの中年の親父であった。不思議な男である。地面から吸い上げられた砂が男の右腕の周りを公転している。
アレって……魔法か？
そう疑問に思っていた瞬間であった。
腕の周りを公転していた砂が集まると、鋭い槍に変形した。男によって作られた砂の槍は空気を切り裂き、激しい音を轟かせながら俺達を襲う。

「……ッ！」

その時、白藤が俺達の先頭に立った。

「白藤！」

「危ない、下がれっ！」

俺と明智は白藤に叫びかけるが、白藤はそれに応じようとしない。その代わり、白藤は右腕を大きく振り回した。その動作自体には何の意味もない。一発逆転の秘策というわけでもない。
しかし、盾にはなった。
白藤が右腕を大きく振るった瞬間、数多の金属の塊が空中に現れた。行き先を塞ぐように現れた金属の塊に、鉄砲玉のように突き進む砂の槍が激突する。
砂の槍と金属の塊はその拍子に粉々に砕け散った。比喩ではない。本当にその二つは粉々に砕け散って破片を周囲に撒き散らしていたのだ。

「ぐ……ッ！」

無数の金属片が雨のように降り注ぐが、奇跡的に身体に傷がつかなかった。どうやら俺達は金属片に当たらなかったらしい。それは偶然か、それとも白藤の操作によるものかはわからない。

でも、なんとか助かったようである。

「おやおや意外ですねー、まさか……例の裏切り者までいらっしゃるとはねー」

裏切り者？

それって白藤……ということはコイツ――やっぱり？

「……サヴィエトの魔法使いですね」

俺が言いたかったことを先に暮葉が口にする。

言葉を耳に入れた男は、にやりと不気味な笑みを浮かべて、

「正解……ですが、どうせなら赤の軍神と呼んで欲しかったですねー」

「もきゅ？　赤の軍神……まさか貴方がっ！」

「私の名前は、硬質のノーム」

「やっぱり……土属性の精霊の力を掌る、日本攻略の為に術式を組んでいる人なのですね」

「不思議ですねー。ポルトガルは日本から離れているハズなのに、そんな情報がもう皆さんの耳に入っているとは……いやいや、情報

社会というのは実に恐ろしい存在ですよ」

あの男が硬質のノーム……って事は、伊吹を襲ったのもあの野郎ってわけか。

そうだと分かるとムカつくよな……あの野郎、よくも伊吹を襲いやがったな。

「てめえ、伊吹は何処だよ？」

「伊吹？」

「とぼけてんじゃねえ、てめえが伊吹を襲ったんだろ？」

「なるほど、貴方の幼馴染ですか。彼女は貴方を誘き寄せる為に利用させてもらいましたよ。いやいや中々可愛い幼馴染でしたよ。羨ましいですねー藤島圭介」

この言い草は間違いないな。リスボンの路地の岩の柱といい、生徒手帳だけを残して姿を消した伊吹といい、全部この野郎の仕業なんだな。

確かに、伊吹がポルトガルにいたのは意外だったよ。来ている理由も気になるが、その前にこの野郎は伊吹を、大切な幼馴染を俺を誘き寄せる餌として利用しやがった。

その為だけに襲いやがった……。

「て、めえ――――何様だあァあああッ！」

バギンと、全身が怒りに反応するように熱く感じる……ような気がした。

俺の身体を支える二本の脚が、頭で考えるよりも早く動く。一般

高校生レベルの重みの身体が弾丸のように、硬質のノームを打ち砕かんと向かう。五本の指を粉々に砕くように、固く、どこまでも固く握り締め、眼前のクソ野郎をぶん殴ろうと前進し始めた。

振り上げた拳が、硬質のノームの顔面を捉える。

しかし、

「いけませんねー」

硬質のノームとの間合いを5メートルまで詰めた――瞬間、下から丸太のような土の塊が突き上げ、ゴッ！　という衝撃が脳に伝わった。

「あ、が……ッ！？」

顎が痛い。いや、それ以上に意識が朦朧としている。視界もぐにゃぐにゃで、今の一瞬の間に何が起こったか、理解しきれない。俺は気付いた時にはもう倒れていた。地面に、生きる力を失った野生動物のように地面を這っていたのだ。

そこでようやく何が起きたか理解できたのだ。

大地で作られた丸太。

それが俺の顎に突き刺さり――アッパーを喰らったかのようにぶっ飛ばされたのだ。

「けーすけ様っ！」

「藤島！」

俺の名を叫ぶ暮葉と明智。白藤の声は聞こえないが、携帯に字を打ち込んだか、心の中では叫んでいるのかもしれない。さらに、彼女達の声に続くように、

「今時のキレやすい若者には――冷静さがたりませんねー」

硬質のノームがそう呟いたのだ。

ハハッ、確かに……冷静さなんて俺にはねえな。冷静になったところで、格段に強くなるわけでもないからなぁ。ぶっちゃけ言うと、俺は熱くなっているほうがやり易いんだ。

だからてめえに反論するぜ、と言わんばかりに――俺はゆっくりと立ち上がる。

威圧的に硬質のノームを睨みつけて、

「言い返してやるよ。てめえには――熱が足りねえな」

「ほむほむ、調子よく吠えてくれますねー若造が。全く、貴方はサラマンダーのお馬鹿さんに似ていて少しイライラしますよ」

「だったら、もっとてめえをイライラさせてやるよ！」

要はコイツをぶん殴る。

それで大規模震災術式は完成せずに済む。伊吹を助けることが出来る。サヴィエトの計画を台無しにする事が出来る。俺の怒りを――静める事が出来る。

「硬質のノーム。術式が完成する前に――貴方を必ず倒すのです！」

「覚悟しておくんだな。日本人はお前が思っているほど甘くはないんだぞ」

【私も、今度こそ上に反抗する】

俺の言葉に続くように、彼女達も開戦前にそう呟いた。

「どいつもこいつも……仕方ないですね。まあ暇潰しには持ってこいですし、藤島圭介も捕えられるから一石二鳥というヤツですねー」

ノームは、首から提げた十字架のようなアクセサリーに触れて、楽しげに笑った。

にっこりと。

「そんな訳で、思い上がった若造に神罰を与えましょう」

ちゃりん、と十字架のようなアクセサリーを弾いた、瞬間――戦いは始まった。

第１９５話，線路脇の戦い

破壊された列車と、ポルトガルの大地を背景に、彼はそれらをさらに破壊しようと、ケラケラと不敵な笑みを浮かべながら動いている。

硬質のノームが右腕を振った。

左から右へ。

一瞬の動作であったが、その動きに続くように砂嵐が発生した。

空中で渦巻く破壊の砂が津波のようにこちらへ押し寄せてくる。木々を薙ぎ払い、あらゆるものを破壊してゆく。

「下がってください！」

全員を退かせると、暮葉は一期一振を薙ぎ払うように振り回す。

彼女は破壊の渦を迎撃する為だけに苦手な魔法を使った。２回だけプスンと、不調な感じでカスみたいな魔法が出たが、数秒が経過した後に凄まじい嵐が巻き起こる。風速８０メートルはあるであろう竜巻が発生したのだ。

暮葉の竜巻は、硬質のノームの砂嵐を相殺する。

火花を散らすように激突した破壊の塊同士は、やがて互いに弾け合い、周囲に砂と地上に落ちているゴミを吹き飛ばし、それに俺達は巻き込まれてしまう。

「……ん……ッ！

「――白藤っ！」

白藤が俺と明智を守るように仁王立ちをすると、さっきと同じように、突然俺達の眼前に盾になるように鉄板のようなものが現れる。

おそらく、白藤が魔法で瞬間移動させたもの。硬質のノームに破壊された列車の残骸の一部であろう。

残骸は吹き荒れる嵐の中、砂とゴミから俺達を守りきった。

「中々の連携プレイですねー。チームワークもここまでくれば、雑魚でも私の攻撃に耐えられるというわけですねー」

ニヤリと笑いながら、硬質のノームは砂の槍を放つ。

真っ直ぐ、暮葉の腹を突き刺そうと。

その動きに合わせ、今度は明智が暮葉の前に立つ。砂の槍は構わず、標的を暮葉から明智に変えたのみで突進し続ける。標的となった明智は五本の指を開いて、自身の“発火能力（パイロキネシス）”によってサッカーボールと同程度の火の玉を生成し、それを砂の槍に向けて放つ。

輝くようなオレンジ色の炎弾（えんだん）は、罪人を串刺しにする砂の槍を打ち消した。

「……ッ！」

自分の攻撃を相殺され、そっちに注意が向かっていた硬質のノームの懐に、俺は隙を突いて突撃する兵隊のように突っ込んだ。

「ふん」

硬質のノームが右腕を振り上げ、無数の岩石の丸太が地面から突き出される。俺は再び顎を突こうとする岩石の丸太を避けていく。丸太の動きを先読みし、安全圏を探しながら、ジグザグに走る事によって一度も打撃を喰らわず、岩石の地雷原を突破した。

そのまま右腕を大きく振り、拳を顔面に叩きこもうとした……が、

「――――製造する、岩石を装甲に」

ゴッ！　という鈍い音が響く。
しかし、それは硬質のノームをぶん殴った音ではない。バリバリと、大地をを裂きながら盛り上がってきた分厚い岩石の板に、全力で放った俺の拳が激突した音が響いたのだ。

「ぐ、あぁぁッ！」

拳に砕けるような痛みを感じる。
手首が痛い。一瞬、骨が折れたと思った。
この体質のことだし、多分骨は折れていないだろう。痛みもすぐに消えるハズだ。しかし硬質のノームは俺の体質を知っている。だからこそ――油断というものを見せなかった。
魔法か何かで岩石の装甲を地中に沈めると、今度は右の指をバッと開いた。手のひらに地上の小石が集まり、小石が不気味な音を立てて合体していく。やがて小石は一つの塊となり、硬質のノームの右手には2メートルを超える大きな石剣（せっけん）が握られる。

「……ッ！」

「見くびらないでください、私は貴方の事を知ってるんですよ」

落ちついた声で呟き、笑ったその時――硬質のノームは石剣（せっけん）を振り下ろした。

「が、は……ッ！」

後頭部を殴打される。石製の剣に切れ味なんてものは殆どなく、身体を刃物で刻まれたという感覚はゼロであった。しかし、ノームの石剣（せっけん）は鈍器としての意味を持つ武器。

激しく脳を揺さぶられた俺は、フラフラしながら大地をさ迷う。

「いい加減に――するのです！」

俺を傷つけられたからか、激昂した暮葉が斬りかかる。跳躍した暮葉は、一瞬で１０メートルは離れた場所から、硬質のノームの僅か１メートル手前にまで迫った。

叩き斬るように一期一振を振り下ろす。硬質のノームは慌てて石剣を構え、一期一振から身を守ろうとガードの態勢に入った。

鍔迫り合い。

硬い金属が硬い岩石を打つ。

人間を一刀両断する日本刀の斬撃を受けても、石剣は傷一つつかない。

驚きのあまり、暮葉が目と口を大きく一本で、ノームは表情を崩さない。

あるのは余裕のみ。

「大地よ怒れ――怒りを表すのだ」

硬質のノームが再び告げると、大地が嫌らしく揺れ始めた。

「もきゅ――ッ！？」

「く、そ……地震！？」

俺は突然起こった現象の名前を叫ぶ。その叫びに硬質のノームが反応する。眉を僅かにピクンと動かして、口元を歪ませ黄ばんだ歯を見せつける。

「いいえ、実は地割れなんですよねー」

意外な回答に、思わず頭の上にハテナが浮かんだような気分になる。

瞬間、

轟！　と、爆発的な騒音が周囲に響き渡ると同時に――大地が大きく裂け始めた。

「きゃ、あ……っ！」

「あ、ァあッ！」

大地が避けて大きな溝が出来る。まるで大陸移動の始まりのようだ。俺と暮葉は突然の事態に対処することが出来ず、重力に従って裂け目の底へと落下していく。

もうダメだ――と思った、その時。

「……ん、んっ！」

いきなり俺達2人を助けるように現れ、ソイツはいきなり俺の肩に手を置いた。横目で彼女の隣にいる暮葉を見ると、暮葉の横にも彼女の左手が置かれていた。

そして次の瞬間、

気付いた時には既に――ケツのあたりに硬い感触を覚える。

恐る恐る視線を下に向けてみると、そこには緑色の草。遠くを見てみると、緑色の草原が眼前に広がっていた。ただし、硬質のノームの犠牲になった場所は、はげ山のように禿げていたが。

「けーすけ様っ！　ご無事ですか!?」

「あ、ああ……今のは、白藤か？」

暮葉との会話の後、俺は顔を上げて命の恩人――白藤のほうを向いた。

【2人とも、大丈夫？】

携帯電話の小さな画面に表示されているその一言。一言はとても簡単であったが、何故だかそれを見ているだけで心が温まる。ただの文字なのに……不思議な感じであった。

「はい、拙者は全然平気なのです！」

「俺もだ。身体は殆ど無傷だぜ」

【よかった、でも……】

その一文を見た後、俺も暮葉も白藤と同じ方向に首を動かす。そこには、発火能力（パイロキネシス）という力によって、2メートルの炎剣（えんけん）を作り出した明智の姿があった。

炎剣は左右の手から二つ――つまり二刀流である。

「波ああァああああ！」

叫びと共に、明智は低い姿勢から突きあげるように、硬質のノームを狙う。下から燃え盛る剣を突きあげ串刺しにし、硬質のノームを火刑（かけい）にする作戦のようだ。素早く、ノームの懐深くに潜り込む明智に対し、硬質のノームは軽々としたステップで後ろへ退く。

退くだけ。たったそれだけの動作で、振り回される炎剣（えんけん）を回避したのだ。

代わりに、硬質のノームが右手に握る石剣（せっけん）の先端が、明智の脳を

揺さぶる為だけに突き上げられた。石剣（せっけん）が顎にに突き刺さる。
ゴギッ！　という鈍く、生々しい音が炸裂。
明智の身体が後ろへ仰（の）け反り、抵抗もなく地面に沈む。左右から伸びていた炎剣（えんけん）がガスを失ったかのように消滅。
倒れた明智は拳を突いて、立ち上がろうとするが、

「う、あああァァあァあああッ！」

明智の腹を貫くような、岩石の柱が地面から伸びてきた。
実際に身体を貫くことはなかったにしろ、衝撃は抜群。腹部にハンマーを叩きこまれたような衝撃を受けた明智は、そのまま何も抵抗が出来ず、ドサッと地面に落ちてしまった。
１０メートル以上はあったであろう、高さから――固い地面に。

「この……っ！」

それでも明智は丈夫であったからか、痛みを堪えてすぐに立ち上がったが、その隙に硬質のノームは後退し、俺達から１０メートルほどの距離をとった。
俺と暮葉、そして白藤は走って明智の横に並ぶ。

「大丈夫ですか明智殿！？」

「う、うん。まだまだこの程度――大したダメージではないぞ」

流石明智……攻撃力も高けりゃ身体も丈夫だ。
でも明智も女の子だし、出来ればこれ以上のダメージを受けて欲しくはないな……。
だけど、硬質のノームがそれを許す相手だとは思えないし、何よりあの野郎……。

「くそっ！　四人がかりでこれかよ、これが――赤の軍神……ッ！」

今更だけど思い知ったよ……赤の軍神、いや――硬質のノーム。

コイツ……滅茶苦茶って言葉が１０個ついても足りないくらい強いじゃねえか……ッ！

「噂の頑丈な体は本物のようですが……なんだか期待外れですねー。皆さん、相当の実力者だと聞いていたハズですが、この程度とは……まあ、暇潰しには丁度いい腕前なんですがねー」

「てめえ……ナメてんじゃねえぞ！」

と言う虚勢を張ってはみたものの、実際４対１でも俺達のほうが不利だ。硬質のノームはたったり一人で、しかも相手は全員普通の人間じゃないのに――それでも優勢に戦っていた。

風剣のシルフはギリギリ一人で戦えたけど、コイツは違う……いや、風剣のシルフだってリーリヤの魔法で弱っていたんだ。だから一人で戦えた、もしかしたらアイツも――この硬質のノームと同等の実力を持っていたかもしれない。とにかく――赤の軍神ってのは化け物級だ。

クソみたいに強い……本物の化け物だ。

「……ん？」

その時、硬質のノームが声を漏らし、顔を上げて空を見上げた。

俺達もそれに釣られるように空を見る。そういえば轟音が響いているな。まるで何機もジェット機が全速力で飛んでいるような、そんな轟音である。そして、ジェット機が編隊飛行をしている決定的な証拠として、飛行機雲が横に何列も並んでいたのだ。

行き先は……わからないが、この先って確かセトゥーバルだよな？
まさか――あれって、

「なるほど、いよいよその手を使ってきましたか」

硬質のノームが面白そうに呟く。
面白そうだ。笑ってやがる……だけど、同時に額に汗が浮かんでいるのが見えた。
まるで追い詰められ、恐怖して冷や汗が出ているような、

「ポルトガル空軍の出番ですか……なるほど、この国は歴史的建造物を破壊する覚悟を決めた……わけみたいですねー。そういえば先程教会前で交戦したのは、警察ではなく陸軍でしたし、その報復攻撃でしょうかねー？」

この様子だと……硬質のノームは軍隊と戦ったってのか？
流石というかなんと言うか……強すぎるだろ。
そういえば、風剣のシルフも自衛隊を圧倒していたし……このレベルまでくると、軍隊よりも魔法使いのほうが強いってわけなのか。
硬質のノームはまだ、言葉を続けている。

「しかし、まずいですねー。もしかすると陸海空共同作戦の可能性もありますし、教会の守備にあたっているのは普通の魔術師――あと少しで藤島圭介を拘束できそうでしたが、まあ後回しでもいいでしょう。今は――サン・ジュリアン教会の防衛が最優先ですねぇ」

硬質のノームはそう言いながら、俺達になど目すら向けずに、ただの金属の塊と化した鉄道車両を飛び越えて、線路を走ってセトゥーバル方面へ駆けて行ってしまった。

「もきゅ！？　に、逃げちゃいましたよ！？」

「ま、待て！」

俺と暮葉は叫ぶが、明智が俺達２人の手を握る。

白藤もその隣に並び、何やら真剣な表情で俺達２人を見てくる。

「後を追うぞ！　伊吹も教会にいる可能性がある、早く行かないと伊吹も肉塊だぞ！」

【それに警察も来た。事情聴取を受ける前に立ち去らないと時間がかかる】

壊れた車内で苦しむ人がいるってのに、見捨てていくのも気分が悪い……だけど明智や白藤の言う通りである。このままここにいれば、警察に捕まってしまうかもしれないし、もし伊吹が硬質のノームが言う教会にいるのだとしたら――空軍機の攻撃に巻き込まれるかもしれない。

空軍機に追いつけるわけがねえけど、それでも早く行かねえと伊吹が――！

【みんな、私に触れて。瞬間移動は８０メートルずつだけと、多分車に乗るより速いハズ】

白藤は携帯電話にそんな文字を打ち込み、俺達にそれを見せる。

なるほど、確かに白藤の瞬間移動はとても優秀だ。危うく死にかけた俺と暮葉を救ったのも、白藤のこの魔法だ。

瞬間移動。これなら――確かに車や鉄道よりも早く目的地へ行ける。

「頼んだぞ――白藤！」

俺の叫びに、白藤はうん、と首を縦に振る。

瞬間、

白藤の魔法による瞬間移動が始まり、俺達は８０メートルという距離のみ、空間を移動して光よりも早く移動する。頼む、教会にいないでくれ。生きていてくれ――伊吹！

第１９６話，掃討作戦

現在、スペイン南部上空。超音速魔動爆撃機――救世主（スパシーチェリ）の機内。
魔力を燃料とし、魔動エンジンで推進する大型６発戦略爆撃機だ。
今、オレはヴィンペル隊が引っ張ってきたというこの兵器に乗り込み、とある作戦に参加しようとしていた。
超能力者のセトゥーバル戦域への投入。

「全く……上も変な作戦を考え、ザスローンもよくそれを引き受けたなァ」

最強の超能力者と謳われていたこのオレは、杖をついて爆撃機に乗り込み、通常爆弾倉という爆弾を搭載するスペースに立っている。
ここにいるのは、オレと数名の要員のみ。
数名の要員と言うのも不思議なモンで、整備兵兼落下傘兵というヤツだ。

「どうですか、気分はいかがでしょうか？」

「……最悪だァ」

オレは要員の一人に声を掛けられると、面倒くさそうにそう答える。だって、実際に面倒臭ェンだから仕方ねェだろ。それにオレは――コイツらと狎れ合う気はない。

「僕もヴィンペル隊に入隊してから、今回のような任務は初めてですが……いや、訓練で慣れているハズなのに、超音速爆撃機の威力は凄まじいですね」

「はン――乗ってて気分が悪くなる。全く……誰だァ？　あっちの世界の技術はこっちの世界と技術と、大差がねェってほざいたクソ野郎ォは？」

「は、ははは。本当、誰でしょうね……？　快適……とは程遠いですよね？」

要員は苦笑いしていた。全くその通り、快適とは程遠いな……爆撃機（イツ）は時速７０００ｋｍ／ｈを超える超音速で飛行し、僅か一時間半で日本とポルトガルを結ぶ、この世界の技術では殆ど不可能に近い事を可能にした化け物だ。

その分、身体に掛かるＧはとんでもねェモンで、馬鹿みたいな感じがするがなァ。

と、その時だった。

機内に設置された無線から声が流れる。どォやら……ご報告のよォだな。

『現在、スペイン空軍による追撃を受けております。これより一気にポルトガル領空へ侵入します。機内各員は衝撃に備えてください』

どォやら爆撃機は、この世界の常識レベルの速度で飛行していたらしい。そのせいで領空侵犯を対処すべく飛び上がった、スペイン軍の戦闘機に追いつかれてしまったようだ。

まァ恐れる事はねェだろう。

救世主（スパシーチェリ）なら振り切れる。

「――チッ！」

轟！　と魔動エンジンが唸り、凄まじいＧがオレや要員達を襲う。

この対策に設置されて手すりにオレや要員達は掴まり、何とか衝撃

に耐えようとする。
　ったく、座ってシートベルトを装着する時間くらいくれっての。
まァ、そんな作業をオレ達にさせている程の余裕がねェンだろう。
　そんな状況になっちまうくらい――スペイン軍機が接近してきたってワケかァ。

『現在時速５２５０ｋｍ／ｈ、スペイン軍機との差は約３１００ｋｍ／ｈ』

　速度的にスペインはミラージュ戦闘機を投入してきたか……まァ、確かにスペインが保有する戦闘機の中では、他のユーロファイターやＦ１６よりも足は速いな。
　だがなァ――この世界の常識はオレらに通用しねェ。

『スペイン軍機を振り切りました。減速、ポルトガル領空への侵入へ成功。まもなく“セトゥーバルの血雨作戦”を開始します』

　さてさて……そろそろ始めるとしますかァ。
　お仕事だァ――。
　オレを含め、僅か１４人がポルトガルの都市“セトゥーバル”に降下。その後、ポルトガル軍によるセトゥーバル攻撃を潜り抜け、サン・ジュリアン教会を破壊。硬質のノームという赤の軍神の一人の男を確実に抹殺し、大規模震災術式発動を食いとめる。
　これが今回オレに課された任務。そしてあのガキを守る――数少ない方法の一つだ。

「落下傘の準備は完璧だろォな？」

「はっ、装備も完璧であります」

「ンじゃあ、行くとしますかァ――戦場って場所になァ？」

こうして“セトゥーバルの血雨作戦”は始まった。

何もかも、血みどろにする事によって――日本とクソガキを救う作戦がなァ。

ふう……なんとか間に合いました。瞬間移動系の魔術師は希少な存在ですが、偶然にも私の配下にソレが居たことはまさに幸運。おかげで私は――攻撃が始まる前に教会へ到着しました。

私――硬質のノームは、サン・ジュリアン教会で敵を待ち続けている。血と炎と悲しみと憎悪だけを残す――軍隊と言う計画の邪魔になる存在を。

「おやおや……来てしまったようですねー」

私を空を見上げました。今日は快晴、雲一つない清々しい青空が広がってますが、そんな美しい青空を汚すように――ポルトガルの空軍機が編隊を組んで飛行しています。

いいえ、それだけではないようですねー。

先程、配下の魔術師を斥候に向かわせた所、陸上には戦車１２両を含む。ポルトガル陸軍の２個大隊が教会に迫っており、セトゥーバル湾にも海軍の艦隊が待機しているようです。

どうやら――本格的に私を潰すつもりらしいですねぇ。

「おやおや、なってませんねぇ……たかが人間一人を潰す為に、軍が総力を挙げて教会を破壊しに来るとは。果たして――彼らは本当に神の子を信じているのでしょうかねー？」

まあ所詮、私は異世界の異教徒です。
彼らのことを考えたところで、こちらには何のメリットもないのですがねー。そんな事よりももうそろそろ――ちょっとした戦争が始まりそうですねー。

「儀式場を破壊されては困りますし、暇潰しの為にも――敵軍を迎撃しますかねー」

言いながら、私は天を突くように右手を上げ、五本の指を大きく広げる。轟！　とサン・ジュリアン教会の前の路地に亀裂が走り、巨大な土の塊が浮かびあがる。
狙いは――敵戦闘機。
詳細は不明ですが、おそらく空対地ミサイルを搭載しているのでしょう。なら、ミサイルを撃ち込まれる前に迎撃するのみ。私は数多もの岩の地対空ミサイルを放つ。岩のミサイルが音速を超える速度で急上昇し、中に乗る人間の魔力を感知し、敵機に迫った。
次の瞬間、
ピカッ！　と、幾つもの閃光が走った。

「まずは3機撃墜、おやおや……あと2機で私も撃墜王ですねー」

岩のミサイルの難点はただ一つ。どんな微弱な魔力でも感知できる反面、それ以外のものは一切関知する事が出来ないので、無人機に対しては無力なのです。

「まあ、ポルトガルは無人機なんて持っていないでしょうねー」

そう思った私は余裕を感じ、喜びから笑顔を浮かべた。
にっこりと。

しかし、その笑顔を崩そうと――ポルトガルの戦闘機がミサイルを放つ。

空対地ミサイルだ。３機から放たれたミサイルが、教会を木端微塵に破壊し、この私を肉塊へ変えてやろうと緩やかに降下してくる。戦闘機はそのまま上昇したが……まあ、この程度の攻撃なら私の魔術で対処可能でしょう。今やるべき事は一つ――ミサイルの迎撃ですねー。

「これなんて、どうでしょうかねー？」

さっきのように岩のミサイルを、敵のミサイルと同じ数だけ作り出し、発射台からロケットを射出するように岩のミサイルを放った。命中精度は９５％、ミサイル同士が激突し、空中で爆発が起こると金属片と粉々になった小石が降ってくる。

「おっと、そちらだって逃がしはしませんよ」

ミサイルは悪ですが、それを放ってきた軍隊と言うのも悪ですねー。

そういうわけで、私はまた同じ手順で岩の地対空ミサイルを作った。その数３発、ロケットのように空へ放たれた岩の塊は、ポルトガル空軍の戦闘機に直撃。

全弾、コクピットに命中したので……まあ、誰も生きていないでしょうねー。

「まあ所詮――この世界の科学技術ではこの辺が精一杯でしょうねー」

さて、もうすぐ陸軍の総攻撃が始まりますかね。まあ、空軍による対地支援攻撃は完全に失敗してしまいましたし、十分に戦力を削

いでいない状態で、敵が攻めてくるかは微妙ですが。

「とにかく――大規模震災術式発動の為に、意地でも儀式場となる教会は守りますからねー」

軍隊ごときが、赤の軍神に及ぶことは絶対にありません。おそらく、核兵器を使わない限りは絶対に不可能でしょう。それだけ私と軍隊には決定的な差があるのですよ。

最も、この世界の人間に核兵器を使う勇気があるとは思えませんがー。

まあ――いい暇つぶしにはなりますねー。

あたい――浅間あかりは現在バイト中。正確に言うとバイト中なんだけど、休憩が入って仲良くお昼ご飯を食べているところだった。そう――とっても仲良くな。

「はむ、ほむ……うんっ、ひょうふぉおいひい……っ！」

「千早……全部飲みこんでから喋ろよな」

千早ってこんなキャラだったっけ？

まあいいや。あたいが言う仲良しのバイト仲間と言うのは、新たに古宇坂のマックでバイトを初めた千早のことだ。千早の家はお金持ちだし、千早自身人見知りが激しいから、バイトに向いてないどころかバイトをする必要もない気がするけど……でも、本人曰く社会勉強らしいんだ。

働いて、ついでに人間的にも成長して……千早、立派すぎてあた

い泣きそうだぞ。
　でもなぁ。バイトの理由が社会勉強ってあたり、やっぱ千早ってお金持ちだよなぁ。

「……そ、そういえば……あかり、明日は先輩の誕生日……だよね？」

「えっ？　おお！　そういえばそうだったな！」

　葵から聞いていたんだけど、どうやら明日は圭介の誕生日らしい。千早は圭介に振られちゃったからこの先進展があるか微妙だけど、あたいはまだ明確な返事をもらっていない。
　つまり――まだチャンスがある。

「にっしし。あたい、圭介にすごいものをプレゼントするからな！」

「な、なに……？　すごいものって……？」

「あたいと一夜を過ごす権利だっ！」

「だ、ダメだよ……っ！　それはその……最後の手段だよ……っ？」

　そう言うと、千早は頬を赤くしながら全力であたいのプレゼントを否定する。
　ちぇっ、冗談だったのに。でも、冗談抜きで圭介喜びそうだよな……変態だし。

「あっはは！　冗談に決まってるだろ！　あたいの身体は安くないんだからな！」

「……あかり、もしかしてビッチ？」

「あたいは純潔だっ」

ひどい疑いだぞ千早……そういう千早だって、圭介のせいかもしれないけど、最近以前に増して下ネタ連発するようになっただろ。全く……圭介は本当にウイルスみたいだっ。

あたい達の心を弄んで、その上変態まで感染して……うう、全部圭介のせいだっ！

「はあ……そういえば、先輩……どこに行ったんだろう？」

「さあ？　葵が家にいないって言ってたんだろ？」

「うん……先輩……っ」

ち、千早が泣きそうだっ！

まさか、圭介が家にいないだけでこうなるとは……ヤンデレの素質アリだな、千早。

「ちょ！　な、泣くなよな!?　どーせ圭介は男友達と遊びに行っただけだからっ！」

「ほんと……？　ぐすっ、でも……先輩モテますし……っ」

うあああああ、千早が悲しみのあまり――敬語モードに入っちゃってる。

千早は目上の人以外でも、極端に落ち込むと敬語モードに突入しちゃう子なのだ。

「お、落ちつけよな！　圭介はモテても、圭介はヘタレだから心配ご無用だっ！」

「ぐすっ、えっぐ……ほんと？」

「う、うん！　あたいの目をナメるなよっ！」

ホントはわからないけど……でも、多分合ってるだろ。あれだけ変態なのに、一向に恋人が出来る気配がないってことは、圭介は女相手にはヘタレなタイプなんだよ。

それにしても……千早、一応あたいの恋敵なのに。

なんであたい、千早の恋愛相談に乗ってるんだ？

『ここでポルトガル情勢について情報が入りましたので、最新の情報をお伝えします』

「ん？」

「り、臨時……ニュースだねっ」

普段はお昼のワイドショーやってる時間なのに、今日だけは違う。アナウンサーの人が深刻そうな顔をして、画面の前のいる人々へ視線を向けている。

その背後に映像が映っており、なんだか……戦場みたいになっていた。

『これまでに、警察や憲兵によるテロリスト掃討作戦が行われてきましたが、悉く失敗に終わっています。そこで今回、ポルトガル政府は軍の派遣を決定。テロリストが潜むセトゥーバル市内へ軍主力を送りこみ、本格的なテロリスト掃討作戦が開始されました』

アナウンサーの人は冷静だ。やがて映像が切り替わり、セトゥーバルという……多分ポルトガルの何処かにある街の映像が映し出される。そこは戦場以外の何者でもない。

『こちらの映像は、先程送られてきたセトゥーバル市内の様子です。戦闘機がサン・ジュリアン教会を攻撃しましたが、撃墜されました』

アナウンサーの言葉の通り。戦闘機が建物に向けてミサイルを撃ったが、教会からもミサイルのような何かが放たれ、次々と戦闘機が撃墜されていく。

その後も映像が流れ、国連安保理もどうやら軍事介入する決議を始めたらしい。

ポルトガルの政府も、それを求めている……らしい。

「今年は……大きな事件が多いね……っ」

「う、うんっ」

前にも古宇坂が襲われたよな。確かあの時は一日で鎮圧されたけど……それにしてもテロリストなのに正規軍をあんなに圧倒するなんて……。

もしかして、今暴れているテロリストは、前に古宇坂を襲ったヤツの……仲間？

ああもう、あたいには全然わからないっ。

それより圭介。今頃、圭介はなにしてるんだろう……。

第１９７話，市街戦

ようやくセトゥーバルに到着したが、そこはただの戦場。ポルトガルの軍隊が何者かと交戦している様子だ。どうやら、硬質のノームには手下がいるらしく、その手下の魔法使いがポルトガル軍と戦っているらしい。戦況はわからないけど……まずいな、流れ弾に当たるかもしれないぞ。

民間人の姿は見られない。

おそらく、とっくの昔に民間人は避難したのだろう。

ここにいるのは、硬質のノーム率いる魔法使い集団と、ポルトガルの軍人、そして硬質のノームを追ってきた俺達だけのようだ。

「くそっ！　派手にやりやがって！」

「仕方ないぞ藤島、ここは日本じゃないんだ。敵に対して武力を行使するのは当然だぞ」

そんな事はわかってるし、日本が甘い事もわかってんだけど……俺はな、割と平和な日本の地方都市で生まれ育った羊みたいなモンなんだ。こんなガチ戦場は初めてなんだよ。

「つーか、そもそも何で軍隊が動き出したんだよ！？」

「ポルトガルでは以前から、さっきの男の一派が活動していたとミネットから聞いているぞ。警察や憲兵との戦闘もあったらしいが、殆どがあの男の前にやられていたらしいぞ。だから今回は――」

「一掃作戦が始まったというわけなのですか！？」

「うん――この国（ポルトガル）も本気を出したみたいだぞっ」

大航海時代を征したポルトガルが本気を出した。

全く笑えねえ冗談だぞ。相手はサヴィエトなんだ、出来ることなら――俺らを除くこの世界の人間には関わって欲しくない。これ以上関わっちゃいけないんだ。

「撃ち（Atire）やがれ！　クサレテロリスト（assassine）ども　をぶち殺（um terro）してしまいやがれ（ta）！」

いきなり、右方向から男の叫び声が聞こえた。

ポルトガル語。

まさかと思い、右を向いていると――戦闘服を身に纏ったポルトガル軍兵士が、こちらにアサルトカービンの銃口を向けていた。兵士達は俺達を魔法使いだと……いや、あの人達、ポルトガル語で聞き取りにくかったけど、何となくだが……テロリスト（ris）って言っていたような？

どういう事なんだ？

魔法使いはもしかして――世間ではテロリストとして扱われているのか？

「藤島！　伏せろっ！」

「――ッ！」

明智が叫んだ刹那――ポルトガル軍兵士が一斉に射撃を開始。耳を裂くような凄まじい音と同時に鉄の暴風が吹き荒れ、セトゥーバルの市街地に血の雨を降らそうとする……が、

俺達に風穴は開かなかった。

「白藤さん！」

「白藤っ！」

俺達が助かったのは――白藤のおかげであった。

何処からともなく白藤は、装甲車を瞬間移動（テレポート）させてきたのである。

おそらく、ここから８０メートル以内に停車していた車両の位置を、俺達が気付かない間に記憶していたんだろう。そのおかげで装甲車の瞬間移動（テレポート）が可能になり、俺達を鉄の暴風の猛威から救ってくれたんだな。助かった……金属音が響き渡り、装甲車は銃弾を弾き返している。

ＲＰＧか戦車でも持ってこられたらお終いだが……銃弾相手ならこれで十分だな。

「皆さん！　こっちなのです！」

暮葉に呼ばれたので、そちらを見てみる。彼女は建物の影に隠れて、手招きしながらこっちに来いと叫んでいた。要は――逃げ道を見つけたってことか？

「暮葉！」

「行くぞ藤島っ、ポルトガル軍と戦う大義名分がない以上――構っている余裕はない」

【私も同じ意見。一旦退いて教会まで行こう？】

「……わかった、行こう」

それに戦っても勝てそうじゃないしな。軍もいよいよ本気を出し

たようで、けたたましい音を立てながら戦車が路地を曲がってきた。砲口が装甲車を捉えている。おそらく、テロリストに装甲車を鹵獲されたと思いこんだ軍は、装甲車ごと破壊する作戦に出たのだろう。

「クソッタレ、俺達はテロリストじゃねえよ！」

そうは叫んでみたものの、その悲痛の叫びは相手に通用することは無かった。それは相手に日本語が通用しないからか、あるいはテロリストに人権は無いと思っているからか？

まあいい、とにかく逃げよう。戦車も来たんじゃ勝ち目がないし、何より俺達はポルトガル軍と戦いに来たんじゃない。ポルトガル軍と戦う理由もない。そもそも、俺らの敵もポルトガルにとっての敵も同じ――共通の敵がいるじゃねえか。

共通の敵がいるってのに――なんで対立しなきゃいけないんだよ。

「――うわっ！」

狭い路地に入り込み、建物の影に隠れた、

瞬間、

鼓膜を突き破るような爆音が轟く。ポルトガル軍の戦車が砲撃を開始、放たれた砲弾は俺達が盾に使っていた装甲車に命中したようである。装甲車の運命は……説明するまでもない。

「流石戦車……旧式のＭ４８っぽいけど、アレでも並の魔法使いよりは強いよな……」

「けーすけ様っ！　立ち止まっていたらまた連中に見つかるのです。進みましょう」

「……そうだな」

今はとにかく前進あるのみだろう。硬質のノームさえ倒してしまえば、ポルトガル軍の作戦行動もそのうち終了するだろうし、それで今回の騒動は終わるハズだ。

俺達は目的地である教会に向かって、荒れるセトゥーバルの市街地を歩き始める。

街は戦場だ。

民間人がいない今、この街には情けも容赦もない。破壊と殺戮、そして――敵を殲滅するという双方の思惑がぶつかり合うのみである。銃声や爆音、男達の雄叫びが響き渡っている。

「まだ銃声が聞こえる……一方的な制圧ではないみたいだぞ」

「サヴィエトもまだ抵抗を続けているみたいなのですよ、明智殿」

「あの男の手下が多数いるんだな。全く、私も情報不足で何が何だかサッパリだぞ」

「確かにそうですが……でも、正規軍を相手に正面から戦えるということは、ノームもかなり優秀な魔法使いを配下に置いているみたいなのです」

【多分、教会は一瞬の要塞になっている。要塞の前には多数の魔法使いによる防衛戦を築いている。突破はかなり困難だと思う】

3人が敵の状況を予想しているが、どうやら一筋縄ではいかないみたいだな。サヴィエト側も本気で日本という一国家を滅ぼし、自分たちの領土が欲しいんだろう。

俺の身柄も拘束出来るし、一石二鳥だ。

だけど……それだけ相手が本気だとしても、俺らが作戦を変更す

る必要はない。

「要はノームを倒せばいいんだろ？　だったら俺に任せてくれ」

「けーすけ様。もしかして……また一人で戦うつもりなのですか？」

暮葉が心配半分、呆れ半分な感じで言ってきた。

まあ予想通りの反応だ。それに対し、俺は暮葉に歩み寄り、

「一人じゃねえよ――」

言いながら、暮葉の左肩に右手をぽんっと置いた。

「暮葉は、いや――みんなは突破口を開いてくれ。隙を見て教会に侵入して伊吹を助け出す。硬質のノームはその後倒せばいいんだ」

何も一人であの野郎と戦うだなんて考えていない。仮に一人で戦ったとして、勝てる可能性なんて１０％もあるか微妙だしな。雑魚は雑魚なりに集まって考えるんだよ。どれだけ弱く立って４人も集まったら、少しはあの化け物と戦えるようになるだろう。

「なあ、頼めるか？　アイツを倒すために――協力してくれ」

俺は改めて明智と白藤、そして暮葉にお願いをしてみた。

答えは一言だった。

「けーすけ様、言われなくても拙者はけーすけ様の味方なのです」

「そうだそ。その……私たちは友達だからなっ」

【うん、友達を助けるのはあたりまえ】

お前ら……と、俺は素晴らし過ぎる友情を目の当たりに、少しだけ感動してしまった。

暮葉も明智も白藤も――最高の友達だ。

おかげで、少し消えかけていた戦意も再び湧いてきた……ッ！

「それじゃあ、さっさと面倒くさいことは終わらせて――日本に帰ろう」

「はいっ！」

「明日はあの日だからな。私も藤島と全く同じ意見だぞ」

【帰ってテストに備えたい】

赤の軍神との戦いに軍隊が介入し、いよいよ戦いが本格化する。

そんな中、より一層団結力を高めた俺たちは――絶対に勝利することを決意した。

第１９７話，市街戦（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「なんか、このコーナーも久々な気がする」

伊吹「じ、時間がなかったのよ！　書いている時間がっ！」

圭介「何気にネタ考えるのは時間かかるからな～」

暮葉「ただの言い訳乙なのですっ」

圭介「それにしても伊吹、お前何やってんだ？　全然出てこないぞ？」

伊吹「なっ！？　つ、捕まってんのよこっちは！」

圭介「あ、そういえばそうだったな」

伊吹「忘れんなー！　ばか圭介っ！」

亜紀「俺の嫁に忘れられてショックな伊吹ちゃんでしたー」

伊吹「誰が俺の嫁よ！　圭介は嫁じゃないわよっ！」

※正しくは旦那様……？

第１９８話，サン・ジュリアン教会

セトゥーバルの街並みが次々と崩されていく。
そんな中、俺達はなんとかサン・ジュリアン教会の手前に到着。
残り数百メートルで大規模震災術式発動の為の儀式場と化した、サン・ジュリアン教会に辿りついた。しかし、教会を前に数多の魔法使いが退陣を整え、俺達を迎撃する為に武器を構えていた。
連中の武器はポルトガル軍のように、近代的な銃や火砲ではない。杖や槍、斧に剣など現代戦をするには非効率極まりない代物ばかりだ。
だが、連中は魔法を使える。
それがあれば――現代軍隊と対等に戦えるのだ。

「凄まじい数なのです……」

「ざっと数えて2個小隊分はいるぞっ」

「なんちゅー数だよ……3人だけでなんとかなるレベルかよ？」

3人とも特殊な能力を持っているから、平気だろうと思っていたんだが……実際に防衛線の前まで来てみると、そんな軽い気持ちは一瞬で何処かに消し飛んでしまった。
まずい……敵の数が半端じゃない。どう考えても3人じゃ対処しきれない。
だが、

「大丈夫なのです。敵か何人いようと結果は変わりませんよ」

言いながら、暮葉が一期一振を静かに構える。

「そう、集団ヒステリーと友情なら――友情のほうが強いに決まってるぞ」

明智も微笑みながら、ファイティングポーズをとる。

【大丈夫、突破口は必ず開く。圭介は心配しないで、隙を突いて教会に飛び込んで】

白藤も携帯電話の画面を見せながら、静かに構えた。

ハハ……なんだよ。圧倒的に数が足りなくたって、なんとかなるに決まってる。

サヴィエトらとは違うんだよ。エネルギーの源ってヤツがな。

「――よし、行くぞ！」

明智が叫んだ瞬間、２人の魔法使いと１人の超能力者が前方へ激しく跳躍し、隊を組んで待ち構えていた敵へ奇襲を仕掛ける。敵は３人の姿を目視するまで、３人の存在には気付かず、彼女達の奇襲攻撃を直に受けてしまう。明智のローリング・ソバット、暮葉の斬撃が首筋に決まった。

白藤は明智や暮葉が倒した魔法使いが持っていた、武器を瞬間移動させ、剣なら突き刺すように敵兵へ投げつけ、杖などの鈍器は頭蓋骨を砕くように上から叩きつける。

「Ｔｈｅ　ｅｎｅｍｙ　ｈａｓ　ａｔｔａｃｋｅｄ．　Ｉｔ　ｉｎｔｅｒｃｅｐｔｓ！」

かなり鈍った、辛うじて俺にも理解できる英語で、敵の魔法使いは味方へ敵襲を知らせて混乱を静めようとする。それでも混乱は収

まるどころか、徐々に広がっていく。
感情に任せて魔法を放つヤツもいるが、そんな攻撃なんて暮葉達には通用しない。

「ふっ！　は――ァ！　風紀を乱すな――道を開けろ！」

自慢の体術と発火能力（パイロキネシス）を掛けあわせた明智の戦法は、敵の魔法使いが5人がかりで彼女を襲ったとしても、返り討ちにされてしまうほどに凄まじく、有効であった。
さらに暮葉が風の魔法で強風を吹かせ、魔法使い達の行動に制限を加える。その隙を突くように白藤が付近の残骸や、倒された魔法使いが持っていた武器を瞬間移動（テレポート）する。
瞬間、
敵の魔法使いの一隊が崩壊し――教会への細い通路が確保された。

「今です！　行ってください――けーすけ様！」

暮葉が叫んだ。それは突撃の合図でもあった。
その合図が耳に入ると同時に、

「お、ァァあああああああああああああああああああああ！」

咆哮と共に――敵部隊の裂け目を駆け走った。
俺の事を止める為、または俺を拘束する為に、敵の魔法使いの手が伸びてくる。無数の手に後ろ襟を掴まれるかと思ったが、彼らの手は届かない。暮葉達が攻撃を続けたことにより、敵の魔法使いは自分の身を守る以外の余計な事が出来なくなった。
ありがとう、と感謝をしつつ、彼女達が敵を食い止めている中――俺は走り続ける。
決戦場所、サン・ジュリアン教会を目指して――――。

落下傘による降下が成功し、オレはサン・フェリペ城から市街地を眺めていた。

「ハハッ、血に飢えてンなァ……中世から変わらねェもンだぜ」

このオレ――早川悠は、セトゥーバルの血雨（けつう）作戦に参加する事になった。その作戦行動Ａである降下は成功に終わり、現在作戦行動Ｂ――市街地への突入の準備を進めていた。

一緒に降下してきた要員は装備を固める。黒ずくめの戦闘服は、何処かの特殊部隊を思わせる雰囲気を放っていたが……そういや、ヴィンペル隊は特殊部隊だったなァ。

ンじゃあ、オレも拳銃くらいは持っていくか。

「早川さん、あの……拳銃だけでよろしいのですか？」

「構わねェ……むしろ拳銃以外は扱えねェ」

魔力エネルギー変換機のスイッチがＯＦＦ。つまり通常モードのオレは、歩行障害のせいで杖なしでは自力で歩く事も出来ない――ただのガラクタ同然のゴミ人間である。

従ってどんな時も杖が必要なワケだ。

右手は杖で塞がっている。この状況で自動小銃使えってのが無理な注文だ。

「救世主（スパシーチェリ）より報告。ポルトガル陸軍は市街地から、サン・ジュリアンのボカージュ広場周辺全域に展開中。海軍は依然湾内にて待機、

空軍の支援は２０分前を最後に今の所ないようです」

要員の一人、通信兵がポルトガル軍の動向を知らせてくる。はン、どォやらポルトガルも必死になって敵を殲滅しようとしているな。だがなァ、ソイツはオレらの仕事だァ。

この世界の軍隊が、面倒臭ェことに介入してンじゃねェよ――。

「これより作戦行動Ｂ、セトゥーバル突入を開始します」

「早川さん、準備はよろしいですか？」

「ああ、今日でも明日でも何時でも構わねェ」

「頼りにしてますよ――最強の超能力者」

「ふン……頼れる実力なンて持ってねェよ」

そろそろ作戦行動Ｂの始まりだ。ポルトガル軍に殺されるか、硬質のノームってクソ野郎かその部下に殺されるか。あるいはオレが両方を殲滅するか――どォなるか知らねェが、とりあえず――連中（サヴィエト）を木端微塵に打ち砕く。

サン・ジュリアン教会の中は意外に広かった。

内部は聖ジュリアンの生涯を描いたアズレージョで飾られ、思っていたよりも高い天井を見上げれば豪華なシャンデリア。礼拝堂の奥にも、大きな絵と豪華な装飾が屋内を輝かせている。

マヌエル様式の教会は、確かに歴史的価値のありそうなもの……

なのだが、綺麗な内装を台無しにするかのように――礼拝堂の壁には無数の文字が落書きされていた。
何の文字だ、コレ？
「なんだよ……これ、アルファベットっぽいけど……？」
「それは古ラテン語よ」
「っ！？」
声が聞こえたので、俺は慌てて振り向いたが……硬質ノームではないようだ。そもそも今のはどう聞いても女の子の声だし、その声は聞き覚えのある感じだ。
視線の先には銀髪で、赤く染まった瞳を持つ――小柄な女の子が縄で縛られていた。
「い、伊吹！？」
やっぱり、どう見たってアイツは伊吹だよな……ちくしょう、サン・ジュリアン教会の内部に伊吹が監禁されていたとは。予想通りの展開じゃねえかよ……。
「連中（サヴィエト）の1人が教えてくれたわ。言っとくけど、私は解読は出来ないわよ？」
なんで……だよてめえ、どうして――そんなに元気なんだ。
なんで、何事もなかったような顔してんだよ。
なんだって――そんな風に平気でいれるんだよ。
「……ん、でたよ……」

「な、なによ……どうしたのよあんた？」

俺はイライラしていた。なんとなく、今の今までずっとイライラしていた。何に対してイライラしていたかは知らねえけど……その一言で――何かが吹っ切れたような気がした。

「なんでこんな所にいるんだよ……てめえッ！」

礼拝堂に俺の怒声が響き渡る。多分、俺には見えないけど犬歯も剥き出しだ。縛られた拉致被害者を鋭く睨みつけ、感情を爆発させた俺に、伊吹の動きが凍りついた。恐怖、いや、取り返しのつかない失敗をしたように両目を見開いて、唇は何かを呟こうと小刻みに動いている。

「だ、だって……その、あんたが暮葉と2人で……あ、遊びに行くから。あんたが、こんな所に来ちゃうから……その、わ……私は……」

徐々に弱々しく口ごもって行く伊吹。泣きだしそうに、紅い瞳の潤いも増していく。

小さくなっていくような気がした。もう、彼女は虚勢さえ張れない。

さっきまで普通だったのに。ただ、俺の怒声を聞いただけで……伊吹は、

「ふ、ざけんな……ざけた真似してんじゃねえよ、てめえ！」

ブチリ、という音が聞こえた……ような気がした。

怒声が更に礼拝堂内に響く。伊吹が弱々しく震え始める。

「俺と暮葉が2人っきりで？　友達が2人で歩いて何か変かよ！　てめえの都合で外国まで追いかけてんじゃねえ。変な事件に巻き込まれてんじゃねえよ！　追いかけて来たのは大目に見るとして、ふざけたことに巻き込まれやがって……心配するこっちの身にもなりやがれ！」

叫ぶと、伊吹は見上げて俺を見つめる。

顔を赤くしたまま、泣きそうな瞳で彼女は叫ぶ。

「う、うっさいわね！　悪かったわね！　で、でも……あの緑色の人はあんたを狙ってて……だからっ」

「人に責任押し付けてんじゃねえ！」

「ち、違っ！　私はただそれがムカついたから――」

「だけど、そもそもソイツと関わる事事態が間違いじゃねえのかよ？　結局てめえが何の為にノームと戦ったか知らねえけど、無謀な挑戦してんじゃねえよ！　襲われたってんなら逃げろ。逃げ切れなくても人ごみの中に紛れるとか、ちったぁ頭使えよ。てめえは俺みたいな馬鹿じゃねえだろ！　とにかく俺だけじゃねえ……暮葉や明智、それから白藤を。てめえの勝手で心配させてんじゃねえ！」

俺の叫びの後、伊吹は俺の顔を見つめ……紅い瞳に、ぶわっと涙があふれた。

「ご、めんなさい……ごめんなさい！　ごめんなさい！　わたし……わたし……馬鹿で、ごめん……なさい……」

伊吹が必死に謝っている。大粒の涙を流しながら、嗚咽の声を上げ続けていた。

珍しい……。

伊吹がこんな、こんなに素直に謝って――しかも涙を流すだなんて……何時以来だ？

「――たく、お前ってヤツは」

俺はごそごそと、伊吹を縛り付けている縄を解いてやった。苦労はしたけど、そこまできつく縛っているわけではないみたいだ。少し筋肉に力を入れたら簡単に解けたぞ。

伊吹さえ逃げなければそれでいい、と連中は思っていたんだな。縄を解いた後、晴れて自由の身となった伊吹の小さな体を――俺は抱きしめてやった。

左手を背中に手を回し、空いた右手で銀色の頭をそっと撫でる。

「俺も馬鹿だから……俺もお前を不安にさせた。そのことは悪いと思ってるよ……」

「……え？」

「だけど、それでストーカーされて喜ぶ人間なんて普通はいねえぞ？　それから、本当……心配だけはさせるんじゃねえよ。お前の身に何かあったら暮葉達が悲しむんだよ。俺だって……お前に死なれたら俺も死にたくなるよ」

え、と伊吹は声を漏らす。

俺の言葉に偽りはない。

リスボンの路地でコイツの生徒手帳を拾った時、胸が張り裂けそうになった。もしもコイツが硬質のノームに殺されていたら。もし

も、永渕の時と同じような悲劇が繰り返されていたら。
もしも、手遅れで――コイツが滅茶苦茶にされていたら。
本当に、二重の意味で爆発したよ。伊吹を守れなかった悔しさ…
…そして、
硬質のノームに対する――激しい怒り。

「……ばか、ばか圭介……本当にばかっ！」

言いながら、伊吹は俺の胸に顔をうずめてきた。服が湿った気がする……伊吹はまだ赤い瞳から大粒の涙を流しているようだ。胸に埋まった伊吹が泣き、そして叫ぶ。

「あんた……甘いのよ。なんで優しいのよ……もっと怒りなさいよ。じゃないと、私……また変なこと言っちゃうかもしれないでしょ……！　いつまで経っても、何年経っても……圭介（ここ）から離れられないじゃない……ッ！」

「離れるって……どこから離れるんだ？」

「え、えっと……あ、あのさ、その……っ」

真っ赤な顔であたふたする伊吹。
なんだコイツ……やっぱり何か隠してるんじゃねえのか？

「なあ伊吹。お前……何か隠してるだろ？」

「え、えぇっ！？　別に、あんたなんかにその……隠すような事なんて……っ」

「嘘は言うなよ。正直に言ってくれ……何言われたって気にしない

から」

「え……き、気にしないのはちょっと……って、違う！　なにもないわよ！」

相変わらず素直じゃないっつーか……いつものツッパリ伊吹ちゃんに戻ったな。まあ言いたい事は殆ど言い終わったし、いつまでも泣かれてちゃあ俺も辛いよ。だからまあ……いつもの元気な伊吹に戻ってくれたのはいいんだけど……伊吹、結局何を隠しているんだ？

「頼む、正直に言ってくれ。例え残酷なモンだったとしても――俺はお前を受け入れるから」

「あの、えと……あ……ん、と……っ」

気のせい……じゃない、よな？

なんだ、この伊吹は……耳まで真っ赤にして照れやがって。これって……やっぱ、デレモードと捉えてもいいんだよな。そういえばこの前、体育館倉庫で告白っぽいのもされたし。えっ、まさかあのツッパリ伊吹ちゃんが――本当にデレ期に突入した？

いや、冗談とかではなく、マジな話だ。

だって、この反応……あまりにも分かりやすすぎるし。小刻みに動く唇も、何を言いたいのか何となく予想出来るような……お、おいおいマジか。マジなのかこの展開……ッ？

でも、もし本当だとしても、俺は――。

「わ、わわわ、わけわかんない……あんたな理由が。いつまでもあんただった理由が……気付いてたのに……あんたが一番だって、言っちゃえば楽だったのに……それでも言わなかった。いつも逆のことを言っていたけど……で、でも私は……私はあんたが、圭介のこ

とが――――ッ」

伊吹が今まで隠していた事を告げようとした――まさにその時。

ゴバ！　と。

轟音と共に、礼拝堂の中に土埃が立ち込めた。

「ッ！？」

俺は伊吹から離れて、咄嗟に立ち上がり――慌てて礼拝堂の入り口付近を睨んだ。

思わず目と口を大きく開いてしまった。人影が、誰かが入口付近にいる。土埃の中に不気味な人影が見えたのだ。男のようだが……この地域の人間にしては小柄な気もする。最初はポルトガル軍の兵士が突入してきたかと思ったが、そうでもないようだ。

持っている武器。銃ならその可能性もあったが、男は違う。人影は2メートルにも及ぶ長さの剣を右手に持っており、あからさまな敵意を俺に向けている。

やがて土埃が流れ去ると、人影はハッキリとした人の姿となった。

俺はソイツの名前を知っている――。

「硬質の……ノーム！？」

「こいつは……藤島圭介よ、計算外のことをしてくれますねー」

落ち付きのある声から、どこか苛立ちを感じさせる。怒っている……冷静で嫌味な雰囲気を放つ硬質のノームが――滅茶苦茶怒っている。

「まさか、と思って軍隊との戦闘を切りあげたのは正解でした。本当、まさかですよ……あの防衛線を突破して、教会内に侵入してい

るとは……いちいち癇に障りますねー」

「てめえこそ……街中にこんな儀式場を作りやがって。てめえのせいでこの街はすっかり戦場だ！」

「ふーん、それがどうか。関係ないでしょう？」

その言葉にまた――俺はカチンときた。

「てめえ、人の命を何だと思ってやがる！」

「私は新たなる宗教の始祖となり、神となり、愚民共を信者として、私の言うことを神の声とし、無理やり従わせてやることを目的としているんですよ。大規模震災術式も殆ど――見せしめみたいなものですかねー。神である私を信じない者には――天罰が下るというヤツですかねー？」

「ふざけんなよ……じゃあなんで、てめえは宗教否定派のサヴィエトにいるんだよっ！」

「赤の軍神にいる理由はその目的を達成する為に、魔術師の信者を増やす為にその地位を利用していただけなんですよ。まあ結論、利用して私は神になる。人の命は大事ですよ？　ただ――私の教え以外のものを信じる者は人ではありません。しかし、死ぬことによって罪は償われます。それが出来ない者は本当に行き場がないってわけなんですねー。わかりましたか、極東のお猿さん？」

アマデーオや風剣のシルフはまだ許せた。アイツらには行き場がなかった。行き場がないからこそサヴィエトでしか存在出来なかった。だからアイツらは――ただ命令に従っていた。

でも、そんな裏があるんなら――俺はアイツらを許す事が出来る。だけど……コイツだけは許せねえ。自分の勝手すぎる事情で、狭い価値観を正しいことにして世界を作り変えよう……だって？

「ふ、ざけんな――そんなことさせると思ってんのか？」

「おや、まさか貴方一人で戦うおつもりですか？　ナメられたもんですねー、貴方の喧嘩の腕がポルトガル軍よりも優秀だと言えるのですか？」

言いながら、硬質のノームは薄く笑いながら石剣（せっけん）を構え、

「とはいえ、貴方は暴れたいみたいですし……ですが、儀式場を破壊したくはないのでねぇ……まあ一瞬で終わらせますので、精々悪あがきをしやがってくださいねー」

遂に赤の軍神の一人――硬質のノームが牙を剥いた。

いよいよ始まる……色々な物をブッ壊そうとする――クソ野郎との決戦が……ッ！

第１９８話，サン・ジュリアン教会（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「それぞれの戦いは、さらに激しさを増す。国家レベルの問題にまで発展した今回の騒動。果たして、俺は硬質のノームに勝てるのか？　そして、暮葉達は？　セトゥーバルに舞い降りた早川悠（アイツ）は？　次回、総力戦」

伊吹「な、なに次回予告風のことしちゃってんのよ！」

圭介「だって……ねえ？」

大吾「ああ、そろそろマジでネタが……」

亜紀「そんな……これが終わったらあたし達の出番は！？」

千早「そうですよ……先輩、その……頑張って続けましょう？」

圭介「お、おう。いよいよネタがなくなったら今回みたいに次回予告するよ」

第１９９話，総力戦

装飾に彩られながら、落書きに汚されたサン・ジュリアン教会の外から、耳を塞ぎたくなるような轟音が何度も何度も響いてくる。
どうやら、外ではまだ戦闘が続いているらしい。暮葉達が優勢なのかサヴィエトが優勢なのかは別として、まだ……激しい戦闘が行われているようだ。
そんな中、俺は伊吹を庇うように立ち上がり、右拳を握って硬質のノームを睨み付ける。
距離は大体７メートル。
施設を壊したくないらしいから、おそらく相手は本気を出さないだろうが……それでも自由自在に砂を操れるらしいから、不意に砂の攻撃が飛んで来ないかに注意しないとな。
それからあの石剣（せっけん）。切れ味はゼロだが、打撃力は完璧な代物だ。
ハッ、１人で勝てるかな……ちょっとでも油断したら本当に埋葬されちまうな。

「最後に確認するけどよ、ホントにやるつもりかよ？」

「ええそうですよ。というか、貴方が売ってきた喧嘩ではありませんか？」

「ハッ、そうかよ……ッ！」

その答えを聞いて、俺は床を蹴って前を駆けた。
硬質のノームは、先程まで舞っていた土埃を真横に伸ばした左腕の周囲に集め、やがてそれは砂の槍となってこちらに放たれた。
俺は砂の槍を避けるため、嗟に右へ跳躍し、礼拝堂の椅子の影に隠れた……が、

「詰めが甘いのが難点ですねー」

ドァ！　という轟音と共に、通り過ぎたハズの砂の槍が突然形を崩し、俺の頭上である天井のあたりで再び砂の槍となり、狙撃をするかのように砂の槍が落下してきたのだ。

「ッ！？」

まずいとは思っても、身体が反応してくれない。砂の槍が早過ぎるのか、頭でわかっていても身体がついていかなかった。まずい――このままだと本当に串刺しだ。

しかし――、

「ちょ、しっかりしなさいよ！」

「う、あッ！？」

砂の槍が僅か手前まで迫ったところで、突然伊吹がタックルを仕掛けてくる。ドン、という身体と身体がぶつかり合う鈍い音と共に、俺は何メートルも彼女に突き飛ばされた。

さらにその直後、

砂の槍が床に直撃したのか、砂の槍が床を破壊してさらなる土埃が発生し、また破壊と同時に全てを薙ぎ倒すような衝撃波が発生。俺も伊吹もそれに耐える事が出来ず、いきなり吹きつけてきた衝撃波によって吹き飛ばされてしまった。俺と伊吹はまた、何メートルも投げ飛ばされる。

「い、てぇ……っ」

「う、きゅう。圭介……大丈夫？」

「俺は平気だ。ありがとうな……」

気付いた時には伊吹がマウントポジションをとっていた。どうやら、伊吹はただ俺にタックルしてしがみ付いていたわけではなく、俺を助ける為にタックルしてきたらしい。

抱きついているのも同じだ。せめて、後頭部は守ろうととった行動のようだ。

「ッ！」

轟！　という音を聞いて、俺と伊吹は音の聞こえたほうを見る。音が発生したのは硬質のノームが立っている場所ではなく、砂の槍の爆心地――先程の攻撃で穴が開いた床のあたりだ。

作り出されたのは砂の塊。

砂が渦を巻いて一か所に集まり、不気味に空中に浮いている。

「な、なんだ――あれ？」

なんだかよくわからないが、俺は砂の渦を見て驚いていた。

と、完全に注意を砂の渦に奪われていた……その時、

砂が――大爆発を起こした。

「ぐぁぁ、がぁあああァァァあああああッ！」

「あ、あああああああああああああッ！」

容赦なく俺達を襲ってくる無数の砂。皮膚に触れただけで皮膚を傷つけ、目さえも開けられない状況の中、爆発を起こした砂によっ

て皮膚を傷つけられていく。
やがて、砂は爆風に流されて視界も回復するが……クソッ、体中痛ぇな。右腕や左腕をこの目で確認してみると、無数の小さな傷が出来ていて、そこから真っ赤な血が滲み出ている。
って……待てよ。俺でこんなダメージを負ってるんだから……伊吹は？

「――伊吹！　あ……ッ！」

まさか……と思って、名前を叫びながら彼女のほうを見ると、血塗れになってぐったり倒れている彼女の姿がある。まだ辛うじて意識があるらしく、活力のない瞳で俺の事を見ている。
呼吸も弱々しい。クソ、やっぱり……伊吹は普通の人間だし、重傷だった。

「て、んめえ……っ！」

「ふふふ、仲間想いでよろしいですねー。それとも、貴方は彼女が好きなのですか？」

「ふっざけんな！　好きとか嫌いとかは関係ねえ。お前は誰を傷つけたと思ってんだ！」

「誰って、貴方の仲間――人間の出来損ないが重傷を負っただけでしょう？」

その言葉を聞いて、さらに何かが頭の中で切れたような感じがした。
ブチッ、と。
もう――俺を抑えるものは何もない。

「この野郎……てめえは友達を、大切な幼馴染を傷つけられても何とも思わねえのか！」

「私に友達はいませんよ。いるのは――神のように崇める信者と下僕のみです」

言いながら、硬質のノームは左手を頭上へ上げる。

頭上で開かれた五本の指の上に、砂の槍に破壊された床の破片が集まってゆく。

「それより貴方は――自分の身の心配をしたほうがいいですよぉ？」

硬質のノームの左手から閃光が放たれた瞬間、その現象は発生する。破片は硬質のノームの手のひらに集まり、バレーボール程の大きさの塊になった。

その塊が――爆発を起こしたのである。

ある意味砂よりもたちが悪い。破片が大きい分――ダメージも大きいんだ。

「ぐ、あ、がァああッ！」

ゴンゴンと、銃弾を撃ち込まれるような強い刺激が全身を襲う。

何度も、破片となった塊が容赦なく襲いかかり、俺の身体に傷を増やしていくのであった。

「しかし……本当にがっかりですよ」

「……？」

攻撃を終えたところで、突然硬質のノームがそう呟く。
がっかり……だと？
チッ、少し強いくらいで調子に乗りやがって……まだ決着はついてねえんだよ。

「アレクサンドルの子孫……と聞いていましたから、苦戦を覚悟していたんですがねぇ……案外、その子孫はまだ完成されていない――未熟なケツの青いひよっこでしたよ」

「なんだと……？」

「まあ、その子は幼馴染ということで拘束させてもらいましたが……それ以上、キスだのセックスだのをできる関係ではなさそうですし、それで本来の力を発揮できないのでしょうかねー？」

「本来の……力？」

本来の力って……一体どういうことなんだ？
まさかアレか。俺がキスをしたら強くなるっていう――アレが本来の力なのか？
そういえば、暮葉も似たようなことを言っていたよな……。

「おやおや、知らないとは言わせませんよ？　あのアレクサンドルは神に匹敵する強さを誇っていました。その正体は……まあ語っても仕方ないでしょう。特に無神論者の君にはねぇ？」

「なんだよ……なんだっつってんだよ！」

アレクサンドルの正体というところで俺は反応し、それが滅茶苦茶気になった。俺の御先祖様の正体が何なのか……子孫の俺もかな

り興味がある。
そして、その正体を――硬質のノームは知っているようだ。

「まあまあ怒らないでくださいよ。別に貴方の御先祖様は大したモンではありません。ただ、世界中の魔術師が束になっても勝てない……そんなような人でしたがねー？　逆に貴方は感謝するべきなのです。そんなお強い御先祖様がいたからこそ――貴方は今こうして生きている。そして恨みもしなければいけないですねー。そんな強い御先祖様だったから――貴方が生まれて今、こうして襲われているのです」

結局俺の本来の力についても、アレクサンドルの正体も明かさないのか。結局子孫の俺には何が何だかサッパリわからねえ。物凄い秘密があることくらいしかわからねえ。だけど、そんな無知な俺でも疑問に思うことくらいは出来る。
ふざけんなよ、と硬質のノームに叫びたいところだが、そんな余裕は残されていない。
今はいかにアイツを倒すか。
それをじっくり考える必要がある。硬質のノームの弱点は何か、隙はあるのか、どこか常人よりも脆いところがないのか。とにかく、俺はアイツの弱点についていろいろな事を考えた。
そういえば……地割れだの岩を作るだの、さっきみたいに大胆な技を使わないな。
もしかしてコイツ――、

「ふん、正体を語る気がねえんならもういい……関係ねえよ」

「そうですかぁ……まっ、語った所で貴方は理解できないでしょうからねー」

「ああ、理解出来ねえだろうな。だから馬鹿な俺でもできる事をやってやるぜ」

「へぇ、なにをするつもりなんですかねー？　まさか、木登りでもするんですか？」

「ああ、今から――てめえをぶん殴る！」

それが唯一今の俺に出来そうなこと。それを実行する為に――俺は駆け始めた。

俺の動きに反応して、硬質のノームは右手に持つ石剣（せっけん）を構える。石剣（せっけん）を右手だけで大きく振り回してみせると、今度はそれを激しく床へ叩きつける。それだけ、たったそれだけの動作で礼拝堂の床は大きく砕かれて、無数の破片がこちらに迫ってくる。

そのタイミングに合わせ、俺は大きく前に飛び出した。防御も回避もせず、自ら危険な場所へ足を踏み込んだのである。石剣（せっけん）に砕かれ、飛翔する破片に当たりながら――。

「おおォォあァあああッ！」

激痛を伴い、顔を歪ませても突き進んだ。ただ、前へ突進し続けたのだ。迷いも躊躇いも考えも何もないけど、前に進めば何かがあると信じ――馬鹿正直に進み続けたのである。

「自害はいけませんねー！」

硬質のノームが左手を突き出す。

瞬間、

背中にゴガン！　という鈍く、激しい衝撃が伝わってきた。肺から空気が抜け、一瞬呼吸困難状態に陥った上に、足元がフラフラし

て倒れてしまいそうになった。だけど……気合いと根性だけで立ち上がろうと全身に力を入れ、キッ、と硬質のノームを睨み付ける。

そして文字通り、俺は気合いと根性だけで立ち上がった。呼吸もロクに出来ないくせに目の前のクソ野郎をぶん殴ろうと——ひたすら前へ進み続けたのだ。

一歩、また一歩。一歩ずつ、確実に間合いは詰まってゆく。

「チッ、いい加減鬱陶しいですよ……神聖教でも異端とされる正教会の子孫が。つまり——殆ど異教のクソ猿と同じ意味なんだよォォォォォ！」

ついに本気出してキレやがったな。あの敬語がどこかに消えた。本来の、荒々しい言葉が表に出てきやがったぜ。硬質のノームもよっぽどムカついてるんだな。俺が中々倒れないからか？

だからだろう。だからアイツは——限界に達してキレ始めたんだ。

「おおおォァあああァァあああッ！」

ようやく肺も復活してきたところで、俺は再び雄叫びを上げながら前へ駆ける。拳を振り上げて硬質のノームを睨み付け、顔面に照準を定める。

その動きに合わせて、硬質のノームは右手で石剣（せっけん）を振りまわして、左手で土埃を操って再び無数の砂が腕の周囲を循環する。

やがて硬質のノームは左手を突き出し——砂の槍を放ってきた。

「——————ッ！」

ズドン！　と、砂の槍が直撃する。

直撃の瞬間、砂の槍は形を失って元の土埃に戻るが、受けたダメージは甚大だ。その衝撃に口から血の塊を吐いてしまった。真っ赤

な血が宙を舞う。くの字に曲がった俺の身体。着用していた服も腹の部分が大きく破けており、赤黒い血がボタボタと礼拝堂の床に落ちている。

俺の足元は完全に血だまりと化していた。

「な……」

息を呑む音。

それは俺の音ではない。そう――砂の槍を放った硬質のノームの口だ。

無理もない。

最大の威力で砂の槍を放ったのに、俺は腹に重傷を負っただけで済んだのだから――。

「な、ぜ……なぜ貴方は生きているんですか？」

「あ？」

「戦車さえ……戦車さえ行動不能に陥る今の一撃で――何故貴様はァ！？」

そうか、今の一撃……戦車を行動不能に陥れる程の威力があったんだな。なるほど通りで滅茶苦茶痛いわけだし、丈夫なハズの俺がこれだけ大量に血を流すわけだ。

おかげでフラフラだぜ……クソ、次第に視界もぼやけてきやがった。血が、血が段々足りなくなっていくように感じる。それでも、腹からはドクドクと、赤黒い血が流れ出している。

内臓が痛ぇ、破裂したかのようだ……まあ、多分破裂はしていないと思うが。

骨もヤバい……砕けたように痛ぇ。

俺はこんなにボロボロだ……でも、

ノームの全てを賭けた一撃でも――俺は倒れなかった。

「教えてやるよクソ野郎……」

静かに言い、拳を固く握り締める。

硬質のノームの眉がピクン、と動いた。

「俺は――てめえが思っている以上に頑丈なんだよ」

いくら赤の軍神だからって。どんなにすごい魔法を使えたって……俺は俺、トラックに轢かれてもピンピンしているヤツが、魔法なんて人の扱うもので死に切れるわけがねえだろ。

「全く……不便な身体だ。特に喧嘩が強くなるわけでもねえし、テストの点数が上がるわけでもねえ……身体が頑丈でも痛いだけだよ。だけどな……一つだけいい事があるよ」

「あ、ああ……」

「何度でも立ち上がれる。何回でも――目の前のクソ野郎をぶん殴れる！」

力を籠めて放った一言。それに反応した硬質のノームは、

「う、ほ……ほざいてるんじゃないですよ！　若造のクソ猿が、調子に乗るなあああああッ！」

怒りを爆発させ、硬質のノームは完全にキレてしまったようだ。

言葉も普段の敬語とは程遠いくらいに汚くなっており、額にも短気な人のように血管が浮かび上がっていた。

とうとう崩壊したんだ――硬質のノームという人物が。

「こうなったら術式は後で組み直す！　教会も吹っ飛ばす覚悟で――――」

ついに禁断の決断を下した……まさにその瞬間――、

ブチギレ状態の彼の背後で――バン！　と、礼拝堂の扉が開けられた。彼は俺に注意しながら後ろを振り向き、恐る恐る扉のほうを確認した。

礼拝堂に突入してきたのは、俺の俺の仲間たち。

木下暮葉、明智凪紗、白藤早苗……そして――何故かポルトガル軍の兵士も、彼女達と並んで銃口を硬質のノームへ向けていたのだ。

暮葉達ら……いつのまにポルトガル軍を味方に……？

ハハ……何か知らねえけど、最高の展開じゃねえかよ。

「ま、さか――配下の魔術師共は……？」

「全部、拙者達がやっつけちゃったのです」

震えながら質問する硬質のノームに、暮葉がニコッと、笑顔で恐ろしい事を答えた。

すげえ……3人で。いや、軍と協力してホントに全員倒しちまったのか？

「心配するな、全員急所は外してある。お前の部下は病院送りで済むハズだろう」

と、冷静に部下たちの容体を報告する明智。

これはこれでひどい気がするが……その余裕さが、硬質のノームに火をつける。

「こ、殺す……殺す殺す殺してやります！　まずはそこの死に損ない――藤島ァ！」

その叫びを聞いて、俺は構える。

ポルトガル軍兵士や白藤、暮葉も武器を構えた……が、空気を読んだのか、明智が一歩前に出てから腕を伸ばし、彼らに手を出さないように命じた。

サンキュー明智……決着は――必ず俺がつけてやる。

「おおおォォォあああああああッ！」

冷静さを失った硬質のノームは、両手で石剣を握り締め、それを振り上げてこちらに向かって全力疾走してきた。馬鹿野郎……魔法使いのくせに、体力ない癖に……態々自分が不利な近接戦闘を挑んでくるとは。硬質のノームも追い詰められて、正常な判断が出来ないんだな。

くたばれ、と彼は叫びながら石剣を振り回す。

薙ぎ払うように。俺の首筋へ打ち込もうと――しかし、

「ッ！」

反射的に左腕を伸ばす。その瞬間――俺は左手で石剣を受け止めた。

「ば、か……ッ！？」

驚愕する硬質のノーム。

石剣を受け止めたことにより、ビリビリと伝わってくる、左手への痛み。
だが――そんなものは気にしない。
右拳を砕く勢いで握り締め、恐怖と驚愕に彩られたノームの顔面を捉えて、

「これがてめえの――限界だあああァああッ！」

ゴガン！　と言う壮絶な激突音。
硬質のノームの身体が床に投げ出され、激しく背中を床に叩きつける。
あまりの衝撃に歯が数本飛び散り、背中を叩きつけたと同時にちの塊を吐きだし、そのまま動きを止めてしまった。どうやら、硬質のノームは気を失ってしまったらしい。

「はぁ、はぁ……げっほ！　ゴホ、はぁ……はぁ……っ」

戦いは終わった。
最初はダメかと思った。
だけど俺の拳は、国際レベルの騒動を起こそうとしていた馬鹿を――沈めたんだ。

「う……ッ！」

あ、れ……？
なんだ、何か……思っていたよりダメージが大きかったのだろうか。　視界が……何だかぼやけてきたような……あ、頭がふわふわ……あ、れ……っ？

「あっ！　けーすけ様っ！」

「藤島！」

「オイ少年！　シッカリシロ！」

床冷ぇ……暮葉や明智、それから……ポルトガル兵のカトコトの日本語が聞こえる。

俺の意識は――大体この辺で途切れていた。

第１９９話，総力戦（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「確かに最終決戦だったけど……」

重原「早川の出番なくね？」

圭介「き、気にするな……ほら、よくあるだろ？　ゲームの宣伝ＰＶと内容が全然違うことって」

大吾「うわ、逃げた」

重原「逃げたね」

圭介「いいだろ別に！　少しくらい逃げたっていいじゃないカ！」

大吾「さて、次回は今回のまとめだな」

重原「波乱の２日間編と言いつつ、１日目が異常に長かったね……」

第２００話，白い人影

私……今まで気絶してたの？
どうやら私――国宗伊吹は今まで気絶していたようで、圭介の叫び声で目覚めたらしい。
その圭介は……えっ、ちょ……なんで圭介が血だらけなのに。なんで……あんなに丈夫な圭介が血だらけの状態で気絶してんのよ？
しかも圭介の周りには暮葉や凪紗に白藤。あと、どうして軍服を着た人達が圭介の周りに集ってんのよ？

「ひどい怪我だぞ……っ」

【出血が多い】

「けーすけ様！　しっかりしてください、けーすけ様っ！」

「コレハ……スグニ病院ヘ搬送シマショウ」

「トリアエズ急処置ヲ施シマショウ。早クシナイト少年ノ命ニ関ワル」

なによこれ……一体どうなったのよ？
しかも暮葉達は私に気づいてないのかしら？
……そういえば私、暮葉達の死角になる所にいるわね。そりゃ気付かれないわ……そう思って私は無事を知らせる為に、暮葉達の前まで行こうと立ち上がった――その時、
ガタ、と。
不自然な物音が礼拝堂の中に響き渡り、暮葉達は扉のほうを向いた。

えっ……なによ。もしかして……また何か起こったの……？

「こ、硬質のノーム！」

えっ、と私は驚いた。だってアイツ……圭介が倒したんでしょ？

そう思いながら私は礼拝堂の椅子の影に隠れ、暮葉達の様子を窺った。よくよく見ると暮葉達の奥には一人の男が床に転がっている。黄緑色の修道服に、痩せこけた初老の男性。違いなくソイツは私や圭介を襲ったサヴィエトの魔法使い。名前は確か……硬質のノームだったかしら？

僅かに腕が動いている。でも、力が入らないのかしら。起きあがりはしなかった。

「く、くく……藤島圭介。確かに脅威的な男ですねー……戦えば我々、いや、どんな者でも相性が悪い男でしょう。ここまでタフなお方は正直……初めてですねえ……ッ」

床に転がったままの硬質のノームは、忌々しげに圭介のことを語っている。余程体力を消耗しているのだろうか、硬質のノームの唇が震えている。

ここからじゃ、遠いせいでよくわからないけど……目も虚ろな気がするわ。

「硬質のノーム。まさか、まだ戦うつもりなのですか？」

「ええそうですよ……残念ながら、今回の作戦は失敗ですが……私はこれしきの事で諦めるほど潔い男ではないのですよ……ところで、知りたくないですか？」

「もきゅ、なにを……ですか？」

「彼――藤島圭介の御先祖様についてですよ」

圭介の……御先祖様？

確か日本人じゃなかったって話は、前に暮葉から聞いた気がするけど……。

「アレクサンドル様がどうかされたのですか？」

「これは藤島圭介の正体にも繋がりますよ。考えてみてください。何故、アレクサンドル皇太子は皇族で唯一生き永らえたのでしょうか？　何故、彼は強大な力を持っていたのでしょうか？　そして何故――その力が藤島圭介にのみ、受け継がれているのでしょうか……？」

ちょ、サッパリ意味がわからないわよ。なによそれ、確かに圭介は変人だけど、あの言い方だと圭介が人間じゃないみたいじゃない。失礼よ、いくらなんでも圭介に失礼だわ。

アイツはいくら丈夫でも人間よ。私の幼馴染よ……こんなに勝手な私を、必要以上に咎めないで助けてくれた優しくて、甘すぎる……唯一本音を言った相手なのよ……？

私は別にアイツが人外でも構わない。アイツは何であろうとアイツだから……。

でも、だからって――アイツに失礼なことだけは言わないでよっ。

「なに、簡単な事です。アレクサンドル、そして……藤島圭介の正体は――」

私は……いや、ここにいる人全員が、その答えを聞くことは出来なかった。

ゴッ！　という、莫大な轟音と共に。

いきなり礼拝堂が吹き飛んだからだ。真っ白い閃光が周囲を包み込み、床に横たわる硬質のノームや圭介、暮葉達まで吹き荒れる暴風に流され、何処かにふっ飛ばされてしまった。

私も足が床から離れる。咄嗟に礼拝堂の椅子を掴んで持ち堪えようとするけど、それも失敗に思った結局吹き飛ばされてしまった。

そもそも、礼拝堂自体が吹き飛んでいるのよ。椅子掴まったところで椅子も一緒にふっ飛ばされてしまうに決まってんじゃない。

激しい暴風の煽りを受けて、私達は風に運命を任せて飛ばされる。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああ！」

床に叩きつけられて、あまりの激痛に絶叫してしまった。なによ……一体、いきなりすぎて意味わかんないわよ。何が起こったのよ……どうして私たちふっ飛ばされちゃったのよ？

他にも悲鳴が聞こえるわ……多分、暮葉や凪紗達だと思う。男の声は……圭介は気絶しているから多分軍人さん。それか――僅かに意識を取り戻していた硬質のノーム。

「ッ！」

そういえば――圭介は？

アイツは多分……というか絶対、今の爆発的な暴風に巻き込まれたわよね？

無事なの？

アイツは……教会はもう瓦礫と化しているけど、アイツは無事なの？

暮葉は？
凪紗は？
白藤は？
さっきの軍人たちは？

「圭介！　ばか圭介……圭介ェェェえええええええええええッ！」

激しい痛みと、暴風のせいで立ち上がれないまま、私はアイツの名前を叫んだ。叫び声がアイツに届いているかはわからない。いや、多分届いていないわ……アイツ、どこよ。サン・ジュリアン教会は完全に瓦礫の山と化しちゃったけど、アイツも暮葉達も……一体どこに消えたのよ？

探さないと。みんなを探さないと……そんな衝動に駆られて、全身に感じる激しい痛みを堪えて瓦礫を手すり代わりに、私はなんとか立ち上がった。

どこまでも、延々と続く瓦礫の山……ううう、みんな……どこよ、どこにいるのよ？

「はァ……クソッタレ、こりゃあちっとばっかやり過ぎたかもしれねェなァ？」

突然声が聞こえた。どこかで聞いたことがある……気がするけど、その声を聞いたその時から背筋が凍って、次第に全身が震えてきた。嫌な汗も噴き出してくる。

吹き荒れる暴風の中、一番高い瓦礫の山に立つ人影。杖を持っている、白く、狂ったような雰囲気を放つ人影。どこかで見たような気もするけど……あ、アイツは……何者なの？

「早川さん。これでは死体の確認も困難ですよ」

「うっせェなァ……まさかここまで脆い年代物だとは、クソも思ってなかったンだよ」

白い人影の前に黒い2つの人影が現れる。銃を持っているみたいね……あの2人は軍人でしかも白い人影の仲間なの……？

一体……何がどうなってんのよ？

「しかし、流石は最強の超能力者。我が部隊の魔法使いの誰よりも素晴らしいです」

超能力者？

魔法使い？

アイツら……暮葉の仲間、いや……仲間なわけがないわ。もし暮葉の仲間だとしたら突然教会ごと吹き飛ばすわけがない。中に暮葉がいるかもしれないし、巻き添えを喰らったら……。

とにかくアイツら……普通じゃないわよ。狂ってるわよ……アイツら……ッ。

「ふン……お世辞言ってる暇あったら仕事しろォ仕事」

「はっ、とりあえず死体を探しましょうか」

「標的は確か、緑っぽい服を着ているらしいなァ？　服の切れはしでもいい、とにかく噂のクソ野郎の遺品と思われるものか、クソ野郎の身体のパーツが落ちていたら回収しろ」

「了解！」

「チッ、本当に面倒臭ェ……上は何でオレを派遣しやがったンだァ？　ったく、拠点攻略はアナスタシアのクソアマにやらせろっての。

アイツの魔法の方が今回の作戦には向いてンだろ。オレの能力は破壊と殲滅以外に殆ど使い道がねェンだっつーの」

動けない……怖い、あの人達が誰だかわからないけど……怖いっ。

結局、あの人達とは一度も目が合わなかったし、会って話す事もなかったけど、それでも私の全身を恐怖が包み込んでいた。

勝てない、殺される。

本能的にそう思った。多分それは正しいわ……今の人達。どう考えてもお友達になりましょうって雰囲気じゃなかったし、何より超能力とか魔法とか、普通じゃない事を言っている……。

結局、私はあの人達が居なくなるまで――怯えながら瓦礫に身を隠していた。

「こ、ここまで逃げれば……多分っ」

私――硬質のノームは、辛うじてサン・ジュリアン教会を脱出。

現在、私はサンフィリペ城というセトゥーバル西郊にある、かつて英国対策に建築された城にいる。そこから、セトゥーバルの市街地を見下ろしていました。しかし……今回は私の完敗ですね。

まさか、彼らがあそこまでやる人間だとは思いませんでした。意外な結末ですが、だからと言って諦める理由にはなりませんねー。

藤島圭介のデータも集まった事ですし、今度は念入りに作戦を立てて、それから今度はここよりもっと目立たないアフリカで――大規模震災術式発動の為の儀式場を作りましょう。

それまで、私を倒した平和を守ったと――勘違いしていてくださ

いね。

「ノーム」

「ああ、サラマンダーですか」

背後から足音が聞こえてきたと思いましたが……サラマンダーでしたか。いつのまに彼もセトゥーバルに来ていたんですねー。折角ですから、私と藤島圭介との戦いに介入し、サン・ジュリアン教会防衛を手伝って欲しかったのですが……まあいいでしょう。

この筋肉馬鹿は何でも破壊する男です。介入しても意味はなかったでしょう。

「随分な失態だな。貴様ともあろう者が――シルフと同じ失敗をするとはな」

「そうですねえ。ですが、これだけは言わせてもらえないでしょうか？」

「何か？」

「藤島圭介……アレは想像以上にできる男ですよ」

「ほう」

おやおや、思っていたより関心が薄いですねー。要は相手は強いと言う意味。これほどサラマンダーが好きそうなネタはないと思うのがすが……まあ、いいでしょう。

「出来るからこそ、次はより完璧な作戦でいきますよ」

「どういう作戦だ？」

「次はアフリカで術式を組みます。仮に彼らが攻めてきたとしても、今度は負けないでしょう……一応、藤島圭介やその他の戦闘データは集まりましたからねー」

藤島圭介の腕力、強度、敏捷性、性格……全てのデータが揃いました。その他のアルファ隊の隊員や裏切り者の真の実力。そしてあの――魔術とも違う力を使う女のデータも。

フフフ、これだけ集まれば――次に私が負けることはないでしょう。

「そうか、中々壮大な作戦であるな」

「そうだサラマンダー。貴方も次の作戦に参加しますか？」

「……何故だ」

「なぁに簡単なことです。私の魔術の特性は、今回みたいに大勢の敵を相手にするのは向いていないのですよ。ですから、聖人の貴方が戦列に加わってくれれば――勝率は大幅にアップしますよ」

「……そうだな、私も腕が鈍ってきたところだ。ウォーミングアップでもしたい所だ」

「流石はウェセックスの騎士様。戦意が高くてよろしいことです」

「そうだな……ではウォーミングアップをしようか。貴様でな」

は？　と一瞬思ったが、それを口にする前に――筋肉馬鹿の腕が動きました。

轟！　と言う凄まじい音が聞こえた。

詳しい事はわかりませんが……、

その瞬間、何かかが弾けたような気がしました。

「お……あ……？」

な……にが？

苦し……い、呼吸がマトモに出来ない……一体、今の一瞬で何が起きましたか。そういえば全身に違和感を感じます。なんと言うか……激痛と共に、一部の感覚がない気が……。

いや、ですが……時々感覚が残っているような、不思議な感じがします。

一体……何が、起きたんでしょうか……？

「タフなヤツだ。胸から下と左腕を失いながら……まだ息をしている」

そ、そういうわけ……だったんですか。おのれ……邪炎のサラマンダー。どうやら私は肉体の殆どを失ってしまったようですね。フフ、面白い……どうせ私は助からないでしょうが、このまま私だけ死ぬのはどうも気に入らない。ムカつきましたよ……報復してやります。

まずは延命処置。岩石で傷を塞いで……ッ！

「ん？　岩石で切断面を塞いで止血するとは……まだ魔術を使う元気があるのだな」

「え、ええ……これ、で……数分は、生きれる……でしょうね……？」

「すぐに死んだほうが楽だろう。何故貴様はそこまでして延命処置を行った？」

「なぁに……簡単なことです。何故……貴方は、私を……？」

ふん、とサラマンダーは目を瞑った。

「私は貴様が嫌いだ。貴様のやり方、貴様が神になろうという計画。全てが気に入らん……だから私は良識ある者として貴様を粛清した。傷つくのは我々兵隊のみでいい。貴様のように、民間人すら傷つけるクズは嫌いだ。貴様はいつも言っているだろう……死んで罪を償うがいい」

ふ、フフフ……随分とくだらない理由で私を殺してくれましたね。最低です、同じ神を信じている者としてあるまじき行為ですよ。彼は……私の計画では、私の宗教でも幹部格に仕立て上げようと思っていただけに残念です。そして、私を殺した事は神罰に値します。ですから……彼も、当然――死んで罪を償うべきなのです。

私は残った右腕に、全身に残っている全ての力を注いで動かす。指を五本に開いた手のひらをサラマンダーに向け、私自身も余裕の笑みを作って浮かべました……。

「ほう、この状況で戦うつもりか？」

「ふ、ふふ……私は……神です。その私を殺す行為は神罰……ですから、貴方も罪を償い……この私と共に――死にやがればいいのです」

言いながら、私は右腕の周りに砂を集め、循環させてゆく。藤島圭介に向けて放った一撃は儀式場の破壊を防ぐために、パワーをセーブしたから、あの程度の威力しかなかったのです。

ですが、今回は違います。

残った魔力、私から半径２０メートル以内にある砂を全て集め、戦車どころか５００ミリの装甲を持つ戦艦さえ一撃で撃沈させられる。それくらいの威力はあるであろう砂の槍を、あの化け物聖人邪炎のサラマンダーに放ってやるのです。そうすれば――ヤツも致命傷を負うでしょう。

「元気だな、病院に行けば助かっていたのではないか？」

「どうせ……腸や胃……などは失ってますし、死にますよ……ですが、私……は、貴方を許せないのです……死ね、一緒に……道連れにして、やります……よ……ッ」

言いながら、私は全力を籠めた砂の槍を放ってやりました。しかし、これだけのことをしていると言うのに、何故か邪炎のサラマンダーから余裕が消えません……何故？

「一つだけ忠告しておこう」

と、一言を置いてからサラマンダーは右手を広げる。

「貴様の実力では傷一つつけられないだろう。藤島圭介は私が回収し、日本という国は私が占領する。貴様は――地獄に逝って罪を償え」

次の瞬間、サラマンダーを中心に眩い閃光が発生し、あれほどの

砂の槍を……掻き消しながら閃光は私を襲ってきました。カッ、と……僅かな時間で。声を発する暇もなく――、

……。

第２００話，白い人影（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「寒いなぁ！」

暮葉「けーすけ様、まだ８月なのですよ？」

圭介「馬鹿！　現実じゃ１０月１８日なの！」

暮葉「でも、仮にそうだとしても古宇坂は秋晴れなのですよ？」

圭介「いや、凍えるような寒さだぜ……もう雪降るな」

暮葉「古宇坂は滅多に雪降らないのですよ？」

圭介「いや、降るよ……滅茶苦茶降ってササラ電車が……っ」

暮葉「けーすけ様、どこの地域の話なのですか、それ？」

番外話，世界・国家・街・施設（前書き）

どうも、作戦参謀です！
波乱の二日間、一日目が終了してキリがいいので、色々設定も増えたことなので、序章から今までに出てきた設定をまとめて見ました！
大いにネタバレを含みますので、初見の読者様は先に本編をお読みいただくことをオススメします。

今回は世界・国・町・施設です！
なお、増えたら随時追加していく予定です。

番外話，世界・国家・街・施設

――世界――

●この世界

日本やアメリカなどという国家が存在し、圭介達が暮らしている、一般的に【世界】と呼ばれている現実世界のこと。科学技術が発達している反面、世界的に経済危機に瀕している。

魔法などはあまり信じられていないが、【魔術師】と呼ばれる、魔術（魔法）を操る人達が僅かながら存在している。また、一部の機関は超能力を開発出来る程の技術力を持っている。

だが基本はオカルトに冷たく、それらを扱える人の人数も圧倒的に少ない。

仮に使えたとしても、特に日本などでは社会的に追放される可能性がある。

●レムリア

異世界、暮葉やミネットが暮らしている。その実態は不明であるが、圭介やノームは【パラレルワールド】であると推測しており、【この世界】で言うロシアに相当する国家や、アメリカに相当する国家やキリスト教に相当する宗教が存在するなど、【この世界】との共通点が多い。

魔法が当たり前のように存在しており、暮葉曰く学校でも授業で習うらしい。

生活水準は【こっちの世界】と大差はないらしいものの、科学と魔法を融合させた独自の技術が発達しており、軍事技術など、最先端技術は【こっちの世界】を遥かに超えている。

最近になって、木下木葉らが科学と魔法を融合させた医療を確立

したらしい。

――この世界の国家――

●日本国

極東の島国、圭介達の祖国。一時期は経済大国と呼ばれ、現在でも自動車産業や精密機器などを生産しており、世界でも重要な位置にあり、数々の国際的役割も果たしており、日本を目標とする発展途上国の数も多い。しかし、戦争や軍備自体を禁止する憲法が存在しており、国民の約半数や政府が弱腰な為に有事になっても、警察や自衛隊が満足に動けず、結果事態がより深刻化する事がある。

その為、世界各国から【平和ボケした国】と称されている。

大半の国民は魔法や超能力の存在を知らず、信じられていない。

しかし、佐井学園など先進的な科学技術を駆使し、闇に隠れて超能力の研究を行う組織は存在している。

●ポルトガル共和国

ヨーロッパのイベリア半島に位置する、ユーラシア大陸最西端の共和制国家。

大航海時代は海を征した国家だが、現在では衰退し経済的にもピンチである。それでもサッカーなどで人々を盛り上げる熱い国家。

8月27日、硬質のノームによって、セトゥーバルの街が戦場と化する騒動が発生し、ポルトガル軍もかなりの損害を被った様子。

●スペイン国

イベリア半島に位置する立憲君主国。物語の舞台になったわけで

はないが、領空侵犯を堂々と行った超音速魔動爆撃機為に対処すべく、空軍が戦闘機をスクランブル発進させた。

――レムリアの国家――

●ロジーナ連邦

暮葉の出身国。異世界の国で、【この世界】で言うとロシアに当たる国家。かつては革命でサヴィエトとなり、サヴィエト時代はドメリカと競っていたらしいが、サヴィエト崩壊後はサヴィエトが残した財政危機に頭を悩ませているらしい。

軍事力と魔法技術に長けた国家で、軍事的には超音速で飛行する爆撃機、さらに数多の精鋭特殊部隊や優秀な魔法使いを数多く擁している。魔法技術分野においても、木下木葉などの科学者が研究に研究を重ね、多大な功績を残している。神聖教の宗派の一つ、正教会が存在している。

現在、国家レベルでサヴィエトの計画を阻止しようと動いているらしい。

●ドメリカ合衆国

異世界の国で、【この世界】で言うとアメリカに当たる国家。軍事、経済などあるゆる分野に長けている国家で、かつてはサヴィエトと競って冷戦と呼ばれる対立を長年続けていた。

詳細は不明だが、多分アメリカ同様一人勝ち状態であると思われる。

●　ウェセックス
異世界の国で、【この世界】で言うとイギリスに当たる国家。
詳細は不明だが島国であり、邪炎のサラマンダーの出身国であり、大陸のルテティアとは長きに渡って対立しているらしい。

●ルテティア
異世界の国で、【この世界】で言うとフランスに当たる国家。
詳細は不明だが、硬質のノームの出身国であり、ウェセックスとは対立中。

――日本の都市――

●古宇坂（こうさか）市
一応東京圏にある日本の地方都市。人口は約１３万人。圭介達が済んでいる街で、また暮葉らアルファ隊が圭介護衛の為に数多く滞在する街でもあり、故にサヴィエトの魔法使い、暮葉達異世界人を狙う佐井学園が侵入し、市内で大きな事件を起こす事が多い。
８月１７日には、風剣のシルフに市の大半を制圧される大事件が発生した。
北部は田園地帯が広がり、古宇坂駅を中心に市街地が広がり、市の南部は真新しい住宅街に工業地帯が続いているようである。
正確な場所は不明だが、多分房総半島のどこかにある。

●東京
日本の首都。作中で登場したのは秋葉原や江東区の有明、【Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙ】とのコラボを行った際には下町が登場し

た。
ちなみに秋葉原はＡＭＡ（アキバ・ミッドナイト・アーミー）の根城でもあった。
また、秘密裏に超能力の開発を行う佐井学園も、都内に存在している。

●調布市
東京都にある街。調布飛行場へ行くために圭介達が訪れた。

●千葉市
日本の都市。千葉県の県庁所在地であり、政令指定都市でもある。人口は９０万を超えており、圭介達にとっては一番身近な都会である。その為古宇坂の学生はしょっちゅう遊びに訪れるらしい。

●沼山市
古宇坂の南に存在する地方都市。８・１７事件の時には、この街の体育館が古宇坂市民の避難場所として開放された。

●六角町
海辺にある小さな町。行楽地らしく、海水浴場は大勢の人で賑わっている。
千早の家の別荘があるほか、アマデーオが帆船を作り出して大騒ぎになった事がある。

――ポルトガルの都市――

●リスボン

ポルトガルの首都。テージョ川の河口に位置する湾口都市で、圭介達がポルトガルへ来た際に最初に訪れた都市でもある。坂道が多く、圭介はそんな地形に悲鳴を上げていた。市内には路面電車があちこちに走っている。また、一部の路地は非常に狭く、建物の雰囲気も古めかしい。

硬質のノームの手により、路面電車が一部運行不可能状態にされてしまった。

●セトゥーバル

リスボン都市圏の最南端に位置する、ポルトガル第４の都市。工業が盛んだが、市街地を外れれば手つかずの自然が残っており、サン・フィリペ城やサン・ジュリアン教会など、歴史的な建造物も数多く残されているので、観光拠点としても発展している。

しかし8月27日、硬質のノームらを一層する為に軍隊が派遣され、さらにヴィンペル隊とザスローンの介入もあり、街は壊滅状態に陥った。

また、サン・ジュリアン教会も瓦礫の山と化してしまった。

――古宇坂市の施設――

●県立初芝高等学校

古宇坂市内にある県立高校。

通称【初高】らしいが、この通称で呼ばれる機会は少ない。市内

でも伝統のある高校で偏差値もそこそこ高い進学校であるが、圭介や黒木など例外的に馬鹿も在籍している。
制服は男子が学ラン、女子は少しピンクっぽいブレザーにチェック柄のスカート。
圭介曰く、制服の可愛さで女子の生徒数を稼いでいるらしい。

●県立白陵高等学校
古宇坂市でも、明智家の近くにある筋金入りの不良校。
かつては太田高校と言う名前だったらしいが、ネット上で【バカ田高校】や、学校がある太田地区も【バカ田地区】と呼ばれるようになる。住民も大変迷惑だったようで、校名を変更しろという署名を集めて提出、その後今の校名になり、制服もブレザーとなった。
それでも太田高校時代の学ランを着てくる人がいる。
かつては番長を永渕が、Ｎｏ２を船木が行っていた……が、永渕は殺害され、船木はどこかに転校したらしいので、不良校としての戦力は低下していると思われる。
付近の廃工場をテリトリーとして利用しているらしい。

●市役所
古宇坂市の市役所。６階建ての本庁舎に、２階建ての第２庁舎。さらに２００台駐車できる大きな駐車場がある。８月１７日、風剣のシルフによって制圧されてしまった。

●工業地帯
古宇坂港南岸から、隣の街に掛けて存在する大きな工業地帯で、数多くの工場が集まって毎日かなりの数の船が出入りしている。

●海浜緑地公園
古宇坂港にある海浜公園。夜に来るといい景色を見れる。
圭介があかりに告白された場所であり、風剣のシルフと圭介が戦った場所でもある。
８月１７日の戦闘で、公園の一部が破壊されてしまった。

●廃オフィス
古宇坂市の北部にある廃オフィス。一時は三原の拠点として利用された。

●古宇坂総合病院
市街地にある大きな病院。
８・１７事件で三原中隊の一部が病院に侵入したが、大半が早川に殺された。

●誠和大学
古宇坂市で唯一の大学。小規模な大学で、法学部しかないらしい。
Ｋ・Ｍ・Ｐが葵拉致の為に襲撃をし、圭介と浜島が殴り合った場所でもある。

●訓練施設。
ヴィンペル隊が建設会社に頼んで作らせた、地下に広がる大規模訓練城。
ここで早川など、ザスローンのメンバーやヴィンペル隊の隊員が、射撃訓練などの実戦を想定した訓練を行っているらしい。また、ザ

スローンの秘密基地としても利用されているらしい。

――千葉の施設――

●中央公園
千葉市内にある公園。公園の真ん中に人口池がある。
ここで圭介達とサヴィエトの魔法使いの戦いがあった。

――東京・調布の施設――

●私立佐井学園
最近開校した学校。
表向きは進学校だが、開発科では超能力者の育成が行われている謎の多い学園。
多くの生徒は普通の学校生活を営んでいるが、実は学生に汚れ仕事をさせたり、三原のような狂った科学者がいて、特殊部隊を擁している非合法な学園。
故に事情を知る一部の者からは反感を買っており、今の所早川、凪紗、朱実、そして西園寺などの超能力者が学園を離反している。
アルファ隊やヴィンペル隊でも問題とされており、打倒佐井学園の為に、早川悠をメンバーに入れたザスローンが結成された。

●東の丘学園

【Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙ】とのコラボで登場した高等学校。
東京のどこかにある学園。圭介が迷い込んだことがある。
色々特殊な学園らしく、故に時々事件の舞台になることもあるらしい。

●東京国際展示場
有明にある大規模な展示場。
夏コミの会場であり、圭介や大吾などのオタクにとっては聖地のような場所。

●調布飛行場
調布市にある飛行場。規模はそれほど大きいわけではなく、滑走路も短くて、精々南の島へ行く便が日に数本飛んでいるだけだが、作中では超音速魔動旅客機の滑走路として利用された。

――沼山の施設――

●沼山市にある小学校
沼山市にあるとある小学校。
８・１７事件の時、避難所の一部として開放された。

――六角町の施設――

●青山家の別荘

その名の通り、青山家の別荘。
そこそこ大きいらしい、お風呂も大きく、そのお風呂ではとある事件が……。

●海水浴場。
六角町にある海水浴場で、圭介曰くそこそこ有名な行楽地らしい。故にお客さんも多いが、アマデーオが作った帆船が現れ一時大騒ぎになった。

――セトゥーバルの施設――

●サン・ジュリアン教会
セトゥーバルのボカージュ広場にある教会。大変古い教会で、教会の扉や柱などにマヌエル様式の特徴が見られる。硬質のノームによって儀式場にされてしまい、圭介達との戦闘や早川の攻撃によって瓦礫の山になってしまった。

●サン・フィリペ城
市街地から西に離れた所にある、イギリス軍の攻撃から守るために建設された城。
見晴らしがいいので、早川達の降下地点として利用された。また、サラマンダーがノームを粛清した場所もこの城であった。

――ロジーナの施設――

●木下木葉の研究所

ロジーナの森林地帯に聳え立つ、コンクリート建築の建物。ミネット曰く、ロジーナが誇る研究所とのことで、確かに研究所の規模は大きい。

屋内は典型的な研究所だが、木葉の生活スペースのみ西洋風の立派な部屋になっている。

木葉はここで魔法と科学を融合させた、最先端医療の研究を行っている。

番外話，世界・国家・街・施設（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「次回は魔法や超能力に関する設定集だぜ」

伊吹「あんたってホント厨二病よね」

圭介「おいおい、俺は厨二じゃないぞ。厨二病はこんなのを執筆している作者だろ」

大吾「でも、圭介は瑠璃ちゃんこと黒猫氏と話が合いそうだよな。厨二だし」

重原「いや、圭介は萌え豚だからむしろきりりん氏のほうが……」

圭介「お前ら何の話してんだ？」

番外話，魔法・超能力・その他の能力（前書き）

魔法・超能力・その他の能力も、追加があれば、随時追加していく予定です！

番外話，魔法・超能力・その他の能力

――魔法（魔術）の基礎――

●魔法（魔術）

常人には不可能な手法や結果を、呪文や儀式によって発生させる力、技術、理論。

魔法と魔術、二種類の言い方があるが、特に決まっているわけではない。ただ組織によっては魔法と言うことを推奨したり、魔術と言うことを推奨する所もある。

故に、魔法という呼び方を推奨する組織に属する暮葉やミネット、またその影響を受けている圭介や伊吹は魔法と呼んでおり、魔術という呼び方を推奨する組織の人間は魔術と呼ぶ。ただしこれも結構いい加減なものであり、個人レベルになると個人の趣味で言い方が変わる。

一口に魔法と言っても様々な種類がある。【こっちの世界】の場合は、近代西洋儀式魔術や錬金術に宗教魔術などが。【レムリア】にも【こっちの世界】と同様のものや、【こっちの世界】における魔法の常識を覆すような魔法も存在している。

発動には魔力も関係するが、暮葉曰く魔法の強度は【理想の具現化】であり、要するに魔力のほうにも想像力が重要というわけである。

特に制約がない、自由度の高い能力だが、大規模な魔法を発動させるには、何らかの儀式場が必要である為、魔法に関する知識に疎い素人には多分、そこまですごい魔法は扱えない。

さらに術者が倒されると、魔法自体が無効化されてしまうという特性がある。

【レムリア】で魔法は当たり前のものであり、義務教育で魔法を学ぶらしく、科学と魔法が融合して新技術が発達しているが、【こ

っちの世界】では架空の存在、迷信と認知されている。
また、【こっちの世界】では、魔法を使えるだけで迫害される可能性もある。

●魔法使い（魔法少女、魔術師とも）
魔法を行使する者。魔術師とも呼ばれ、さらに術者の年齢が低いかつ女子の場合は【魔法少女】とも呼ばれる。典型的な魔法少女はミネットだが、暮葉も一応魔法少女の部類に入る。
使用する魔法は人によって様々。つまりは我流の者もいれば、所属している組織や宗教に因むものや神話に因むものなど、多種多様である。
【レムリア】では当然の存在だが、【こっちの世界】では、空想の産物という認識で世の中に広まっている為、その存在が公になるだけで迫害されたり、興味本位で魔法使いを捕まえようとする者が現れるため、【こっちの世界】の魔術師は、基本無闇に自分の正体を明かそうとはしない。

●魔力
魔法を扱うのに必要な力、あるいは普通に蔓延している自然的エネルギー。
自然に存在するものであり、人間にも誰でも基本的に宿っているものである。例えば【こっちの世界】の街の不良なども、基本的には微弱ながらも魔力を持っている。
何にでも応用の効く力であり、最近【レムリア】では魔力を利用し、それに科学技術をプラスして様々な高性能製品を生み出している。さらに魔力は魔法を使う際に、魔力エネルギーが変換される性質を持っている。
魔力エネルギーは何にでも変換可能であり、この特性を生かして

木下木葉は、魔力から脳波に変換する【魔力エネルギー変換機】を開発。早川悠の能力使用に役立っている。
ちなみに魔力が枯渇すると、当然魔法が使えなくなってしまう。
ただし、魔力は余程の事でもない限りは自然回復するものなので、たとえ戦闘で魔力を使い果たしてしまったとしても、一定時間が経過すれば元に戻るようである。

●術式
魔法の方式、呪文のようなものである。

●儀式場
魔法は即席で放つ事も可能だが、魔法が大規模だったり精密だった場合、発動はするのに魔法使い個人の力では困難を極めるので、発動を補助するものの一つとして儀式場がある。
正しい位置に呪文やカード、必要な物を等を並べる事によって、儀式場は完成し効果を発揮するのだが、儀式場の構築には大変な手間がかり、その上豊富な知識も必要である。その為並の魔法使いや素人には絶対作れないものである。

・大規模震災術式
儀式場を必要とする魔法の一つ。文字を描き、指定した場所に大地震を起こす魔法。
二次災害として、海岸沿いの場合は津波を引き起こす。島国である日本にとっては脅威としか言いようのない大変な魔法である。

●魔道書のようなモン（仮称）

魔道書のようなモンとは、風剣のシルフによる仮称である。
魔法発動を補助するものの一つであり、効果は儀式場ほどではないにしろ、即席の魔法よりは精密な魔法を使えるようになる。詳しい詳細は不明だが、シルフの風剣（ウインドソード）を見る限り、どうやら道具に術式を組みこんで魔道書と同じ効果を発揮するものらしい。

●近代西洋儀式魔術
１９世紀に秘密結社が確立させた、その名の通り近代西洋で生まれた儀式用魔術。
ガバラ、占星術、タロット、ギリシア・ローマ・エジプトの神話など、様々なものを統合したシンボリズムと形而上学を枠組みとして、位階制とイニシエーション儀礼、および儀式と瞑想の技法を用いた霊的修練の体系を構築している……らしい。
作中ではアマデーオが使用。

●召喚魔法
その名の通り、何らかの存在者を召喚する魔法。
作中ではアナスタシアがゴーレムを。アマデーオがガブリエルを召喚した。

●精霊
古来より人類が持っている、命や神や霊や魂などを表すときの言葉の一つ。
ブードゥー教ではロアとも言われ、魔法の発動にも重要な役割を持っている。
また、赤の軍神は四精霊（エレメンタル）の力を持っている。

●聖人
教会から認定された、の人物の模範となるような人物のこと。あるいは、神に近い力を持っていたり神の力の一部を行使できる者のこと。詳しい詳細は不明だが、その実力は一般の魔法使いを遥かに超えているらしい。作中で判明している聖人は、リーリヤとサラマンダーの2名のみ。

●天使
言葉の通り、神の使いのことである。
アマデーオは魔法で天使の一人、ガブリエルを召喚した。
不完全な状態でも、１０分で日本を水没させられるほどの凄まじい力を持っている。

――超能力――

●超能力
通常の人間にはできないことを実現できる特殊な能力。世間では、科学的に説明できない超自然的な力と言われているが、佐井学園は科学でこれの発現に成功、以降、その目的を果たすために超能力者を育成し続けている。超能力者の育成には、科学的に脳を刺激するのが効果的らしい。
魔法と超能力ではある意味共通点が多く、超能力も使用者の【理想】が重要となる部分が多いのであるが、魔法と違う点は魔力を必要としない事。魔法以上に頭を使う事であろう。

魔力を必要としない分、能力処理の為に多大な計算能力が必要であり、その為高位の超能力者ほど脳の演算能力が高いということになる。

主に佐井学園の開発科というところで研究されているか、佐井学園の前進である特科会時代から既に研究が始まっていた。基本的に能力開発を受けた者のみが超能力者になれるが、明智凪紗や早川悠のように元々超能力を持つ人間も稀に存在する。

一応超能力の強度はランク付けされているが、現時点では詳しい事は不明。

●超能力者

超能力を扱う者のこと。佐井学園の生徒が中心だが、それ以外にごく自然に超能力が発現した超能力者も存在している。彼らは通常の人間よりも演算能力が高い。

多分理系の人間が殆どであろう。

●能力開発

その名の通り、超能力を開発すること。

脳に刺激を与える……とのことだが、実際の開発内容の詳細は殆ど不明。

●五本指

佐井学園に在籍する超能力者の中でも、特に凄い能力を持つ5人のこと。

現時点で判明している五本指は、早川悠、久我劉生、西園寺雪乃の三人である。

雪乃や凪紗曰く、五本指の殆どは人格が狂ってる人らしい。

●魔道能力者

三原寅彦が提唱したと思われる、最強の超能力者のこと。

要は科学と魔法の融合。魔法使いの概念と超能力者の概念を足したもの。

三原はミネットを被験者とし、これを作り出そうとするが結局未実現。

しかし、早川悠の【黒い翼】がその片鱗に触れるものなのでは？

と、三原は推測していたが解明される前に三原は死亡してしまう。

結局夢の産物なのかもしれないが、早川悠という存在もあるので案外期待できるかもしれない、微妙な存在である。

●発火能力（パイロキネシス）

その名の通り、炎を生み出し操作する能力。凪紗が使う能力でもある。

凪紗のレベルでは、精々サッカーボル程度の炎弾を作り出したり、かめはめ波のように炎を放ってやったり、2メートルの炎剣を作るのが精一杯。

●大気操作（エアオペレイション）

大気系の能力。その名の通り、大気そのものを自由自在に操るもので、気圧や酸素濃度を操作したり暴風を巻き起こしたり、大気中の分子運動の操作、可燃性ガスの収集、爆破。さらに暴風の膜というものを張り巡らせ、どんな攻撃も反射してしまうなど、殆どチートのような能力だ

最強の超能力者と呼ばれている、早川悠が使う能力である。

●吹雪念力（ブリザードサイコ）

水蒸気など水分から氷や雪を発生させ、念力によってそれらを自在に操る能力。大気中に僅かでも水分が存在していれば、それらを瞬間的に冷やす事によって、氷などを発生させられる。

氷はミリレベルから槍のように鋭利な塊、さらには直系６０ｍの巨大な塊まで生成可能。それらを念力によって目視可能な範囲まで吹っ飛ばす事ができる。速度は氷の大きさにもよるが最大速度は９ｍｍ程で３２５ｍ／ｓ．ほどで拳銃並。

６０ｍの塊でも４０ｋｍの速度を誇る。その他水蒸気などから雪を生成して吹雪を吹かせたりする事も可能。念力を使えば氷以外のものも吹っ飛ばす事が可能。最大２００ｔのものを動かす事ができるので、戦車なども余裕で持ち上げたり砲弾のように放つ事ができる。

その他氷は盾にする事もでき、銃弾程度なら余裕で防げる。

実は二種の能力を扱える、大変珍しいタイプの能力で、今の所二種類の超能力を扱う事が出来るのは西園寺雪乃のみ。通常超能力は制約上、二つの能力は使えないものなので、ある意味彼女は魔道能力者に近い存在かもしれない。

●偏差電換（オブザーブホリック）

対象物を分析して「数値」で観測することができる。

スカウターのような能力で、相手の戦闘力や勝率が大体わかるらしい。しかし、あくまで使用者が行うのは予想であり、決して万能な能力というわけではないい。

木山朱実がこの能力を使う……らしい。

●旋風烈剣（サイクロンブレード）

大気中の分子運動を活性化させ、空気による斬撃を可能とする能力。

簡単に言えば、見えない空気でできた刃を作り出すことができる。オーソドックスに剣術を繰り出したり、衝撃波のように飛ばすし遠距離攻撃したりと、戦闘について色々と応用が利く。

物理的に何でも切る事が出来る。明智光雄（光秀）がこの能力を使用した。

●波動操作（ウェーブハウンド）

この世に存在するあらゆる“波”の振動数、周期、振幅、波長、波数を自在に操る能力。他の能力の代用的な技も使えて応用力は極めて高く、使い方次第では破壊力も抜群。

しかし高度な演算を必要とする為、非効率で実際に使える効果が制限される。

能力的には素晴らしいが、その欠点のせいで悠よりもランクが下に設定されている。

第2位の久我劉生が使う能力で、雪乃をギリギリまで追い詰めた。

――その他の能力――

●解放（リミッター解除とも）

アレクサンドル皇太子、及び藤島圭介に宿っている能力。

その名の通り、潜在能力を一気に解放し、脅威的な戦闘力を発揮する力。暮葉曰く自然的な魔法でもなければ、科学的に発現された超能力でもない、全く異種の能力らしい。詳しい詳細は今だに不明であるものの、現時点では【解放】の為には【条件】を満たす必要がある事がわかっている。

圭介の場合、その条件は念じながら女の子とキスをする事らしい。硬質のノームはこの能力の正体やアレクサンドルや圭介の正体を知っていたらしいが、結局正体は明かされなかった。暮葉曰くアレクサンドルは強力すぎる力のせいで、日常生活に支障を来していたらしい。

その為、彼が意図的に力を封じ込めたのが、この能力の始まり…らしい。圭介の身体が丈夫なことや、回復力の高さは完全に力を封じ込められないからしい。

上〇さんの幻〇殺し並に謎の多い能力である。

●黒い翼

早川悠が三原との戦いで、突然背中から生やした謎の黒い翼。翼と言うよりは噴射に近い。三原は最初、風の操作の一種かと思ったが、それもどうやら違うようで結局、三原ほどの頭を持つ男でも説明不能の新たな力であった。魔法とは絶対に違うであろうがかと言って超能力でもなさそうで、とにかく現時点では誰にも説明できないだろう。

三原は魔道能力者へ進化したのでは？　と死に際に疑問に思っていたが、そもそも彼が魔道能力者に進化したかさえも不明で、微妙なラインである。

当の本人は、そんな能力を使った覚えはないらしい。

番外話，魔法・超能力・その他の能力（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「今回は……うん、相変わらずパクリのオンパレード（ｒｙ」

浅間部長「まあ、そう言わないでおこうよ。それより……ボクの出番は？」

圭介「お前が出てくると１８禁になりかねないから、ありませんよ」

浅間部長「と、とうとう後輩にお前呼ばわり！？」

圭介「さて、次回は今までに登場した道具一覧だぜ！」

浅間部長「ええ！？　スルー！？　ボクのことスルー！？」

番外話，道具一覧（前書き）

※随時追加します。

番外話，道具一覧

●一期一振（ひとごひとふり）
暮葉が愛用している刀。
その歴史は古く、朝倉氏や毛利氏、そして豊臣家に伝えられる。
豊臣家崩壊後は豊臣国松がレムリアへ刀を持っていき、以後豊臣は木下を名乗り今は暮葉に伝わっている。
鞘に入れた状態でも十分に武器になる。それほど大きい刀ではないので、暮葉はいつも背中の服の裏に隠し持っているらしい。

●北方ｐｒｏｊｅｃｔのエロ同人誌
浅間部長が圭介を釣る為に用いたエロ同人誌。
内容はロリ物で、タイトルは【みょんなとれーにんぐ】らしい。

●魔法のステッキ
ミネットが持っている、ハート形のステッキ。
効果は不明で、そもそも武器になるかも微妙な代物である。

●黒曜石のナイフ
アナスタシアが武器として利用していた黒曜石で作られたナイフ。
特に魔術的な効果があるわけでもなく、単に武器として利用していたらしい。

●ロフストランドクラッチ

元々は医療用の杖の一種だが、通常モードの早川が歩く際に使用しているもの。
大変現代的なデザインで、これをついて歩く早川の姿はモロ一方さんである。

●魔力エネルギー変換機
木下木葉が開発したチョーカー型医療機器。
高次脳機能障害を持つ人の、日常生活を補助する為に開発されたもので、バッテリーの中に蓄積された魔力を脳波に変換し、不足する演算能力を補うことで一時的に、装着者の能力を負傷前の状態に戻すことが可能である。脳に障害を持つ者を、ある程度復活させる夢のような医療機器だ。
作中では早川悠が脳を負傷後、これを装着している……が、彼の場合は最高位の超能力者なせいで必要以上に演算能力が高い為、当初は最高出力でも使用時間が１５分に限られていた。
その後、ザスローンの技術部によって３０分に延長されたらしい。
なお、魔力補充にはパートナーとキスをする必要がある。

●スリングショット
セルゲイ・ベレゾフスキーが武器として使用していたもの。
見た目は普通のスリングショットだが、セルゲイから放たれた弾は以上に速く、詳細は不明だがこの武器には魔術的な意味があるのかもしれない。

●サンティシマ・マードレ
アマデーオが魔法で生み出したガレオン船。
圭介達とアマデーオ、ガブリエルとの決戦の舞台になった。
ぶっちゃけ道具かどうかは微妙だが、魔法で作り出された道具と

してここに記載する。

●魔法日記

アマデーオが持っている、古くて分厚い魔術書（グリモワール）のような本。

一見、焦げ茶色の表紙に覆んだ金色の文字が記され、中には延々とラテン語が書かれている古本にすぎないのだが、実はアマデーオが今までに行ってきた訓練や儀式の内容、状況、感想などを記録している呪文集のようなもの。ここに記録された事を、アマデーオは再現する事が出来る。

●魔法の杖（ロータスワンド）

アマデーオが持っている、紫色に輝く不気味な古い杖。

シルフの言う【魔道書のようなモン】の一種らしく、アマデーオ曰く、この杖には魔力を介して魔法を発動させるという効果があるらしい。

●バチ

なんてことのない、太鼓を叩く為のバチである。しかしブードゥー教では太鼓のバチは儀式の為に必要な道具であるらしく、ラウル・ゲリエは魔法を使うのにバチを利用していた。

これも【魔道書のようなモン】の一種であるらしい。

●魔法衣服（マジッククローズ）

服の中に着る下着のようなものらしい。その効果は高く、これを着ているだけでその人の身体能力を何十倍にも上げる事が出来る。

作中では鷲尾と永渕が着用していた。

●新型蓄積機
リーネが開発している機械。
どうやら、魔力エネルギー変換機の使用時間を伸ばす為の機械らしい。
小型化に成功すれば、早川の能力使用モードの時間が延長されるようだ。

●三原の笛
正式名称不明。三原寅彦が早川との戦いに用いた笛。
特殊な音波で思考を妨害し、超能力者の計算式を崩壊させる効果がある。
三原は早川との戦いでこれを使い、早川の能力使用を許さなかった。

●パンツァーシュレック
元々はナチス・ドイツ時代の対戦車ロケット擲弾発射器であった。
作中では三原が使用。三原曰く裏ルートから入手し、量産しているらしい。

●ＡＫ－４７
ロシアのカラシニコフが設計した、歩兵用アサルトライフル。
三原中隊（カンパニー）の兵隊など、結構あちこちで利用されている。
つまり、入手しやすい強力な武器なのである。

●佐井学園製の散弾銃
　佐井学園で開発された散弾銃。
　全長は1メートルを超え、、鉄製銃床は伸縮可能。
　早川はこれを杖代わりに使用し、さらに三原中隊戦闘にも使用した。

●実験セット
　詳細は不明だが、三原曰く「魔道能力者誕生の為に必要」な実験セットらしい。

●風剣（ウインドソード）
　風剣のシルフが所持している大剣。
　白銀に輝く刃と、妙に金ぴかな柄が特徴的な派手な剣。実は【魔道書のようなモン】でシルフ曰く魔法の発動には必要不可欠な存在らしい。風の術式を組んでいるらしく、本来の重量を感じさせずに振り回せるので、女のシルフでも軽々と振り回す事ができる。

●木下木葉の補聴器
　木下木葉が持っていた補聴器。
　木葉曰くただの補聴器ではなく、術的効果によってあらゆる音声を、脳に直接送りだす信号に変換する特殊品らしい。開発するのに2年ほどかかったようである。

●特殊受信機
　小型の受信機。これで特殊な音声ファイルを受信することができるようだ。

●超音速魔動旅客機
ロジーナ製の最新型航空機。
圭介曰く、形状は「コンコルドを小さくしたもの」であるが、性能は遥かに上で、なんと時速７０００キロを超える速度で飛行する事が出来るらしい。
魔動エンジンを搭載しているため、当然燃料にも魔力が使われている。
日本からポルトガルまで、１時間ちょっとで行ける。

●救世主（スパシーチェリ）
ロジーナ製の、魔動エンジンで推進する大型６発戦略爆撃機。
ザスローンとヴィンペル隊の特殊作戦に投入され、早川がセトゥーバルへ行くために利用したようであるが、早川曰く乗り心地は最低らしい。
スペイン軍のミラージュ戦闘機を振りきれるなど、凄まじい速度で飛行が可能。

●石剣（せっけん）
硬質のノームが魔法で作製した石製の剣。
切れ味は殆どゼロであるものの、非常に高い打撃力を誇っており、暮葉の一期一振を受けても傷一つつかなかった。しかし圭介には通用せず、結局硬質のノームは倒されてしまった。

番外話，道具一覧（後書き）

後書きトークコーナー！

あかり「相変わらずひどい設定集だな！」

千早「う、うん……厨二だね、ただのオナニーだね」

圭介「こら青山さん！　女の子がはしたない言葉使うじゃありません！」

千早「じゃ、じゃあ……自家発電？」

圭介「そういう意味じゃないよ、青山さん？」

千早「え、えっ？　じ、じゃあ……マスタースパーク？」

圭介「それ違う！　言葉は似てるけど意味も何もかも全然違う！」

あかり「千早……完全に変態だなっ」

葵「千早が変態なのはお兄ちゃんの前だけだから、多分大丈夫だよ？」

番外話，組織・出来事など（前書き）

※随時追加します！

番外話，組織・出来事など

――ロジーナ連邦の組織――

●アルファ隊

連邦特殊情報総局の特殊部隊。

ロジーナ政府がサヴィエト亡命政府を打倒、関係者の拘束を決定後、それらの計画を秘密裏に進める為に、精鋭の魔法使いばかりを集めて結成された精鋭部隊である。しかし……実際は暮葉やミネットのように、どこか抜けた人が所属していたりと、本当に精鋭かは微妙な所である。

主な任務はサヴィエト関係者拘束と単純な戦闘、藤島圭介の護衛である。

今の所名前が判明している隊員は、暮葉にミネット、隊長のリーリヤのみ。

詳しい隊員数は不明だが、そこそこの数はいるらしい。また、ヴィンペル隊の人間の証言によれば隊員は女の子ばかりであり、魔法少女の宝庫でもある。

それなのに最前線で戦っている為、予算や装備は常に優遇されている……らしい。

・特隊員

アルファ隊でも、特に戦闘能力の高い隊員の事を示す隠語。

１０人もいないらしく、その中の一人が暮葉というわけである。

●ヴィンペル隊

アルファ隊と同じく、連邦特殊情報総局の特殊部隊。

主な任務は魔動力施設防護だが、最近はアルファ隊と同じ任務を

こなす事が多い。
隊員の証言によれば、アルファ隊と比べて装備は古いらしい。また、アルファ隊が魔法少女による特殊部隊なら、こちらは普通に男の兵隊が数多く揃っている部隊とのこと。今の所作中で目立った活動はしていないものの、ザスローンのサポート役にはなっている様子。

●ザスローン
連邦特殊情報総局が新たに創設した特殊部隊……とは違う暗部組織。
アルファ隊やヴィンペル隊のみでは対処できない問題を片づける為、過去に罪を犯した者ばかりを集めて結成された。現在の主なメンバーは早川、アナスタシア、近藤、ラウルの４人。
色々汚い仕事を引き受けたりはするが、最終的な目標は佐井学園の解体。サヴィエト亡命政府の崩壊やアリーナ・ウラジミーロヴナ・レニナらの身柄拘束である。
隊員は早川を除き、チームワークを優先する為に隊員同士の繋がりを重要視している。

●連邦特殊情報総局
情報収集、スパイ活動、シギント、偵察衛星・特殊部隊の運用を行う、ロジーナ連邦が誇る諜報機関である。正式に戦争が始まっていないので、正規軍に代わってサヴィエトを攻撃、亡命政府を崩壊へ追い込もうと日夜活動を続けている……らしいが、本編には名前以外未登場である。

――サヴィエト亡命政府――

●サヴィエト亡命政府

２０年前の蜂起で失脚したアリーナ・ウラジミーロヴナ・レニナが、自身の野望を達成する為に樹立させた政府組織。ロジーナの現政権打倒を主な目標としており、その為に【こっちの世界】に渡ってきて赤軍を創設、行き場のない魔法使いを集めたり、また魔法使いを育てたりしている。

当初は政治思想が一致する魔法使いばかりが集まっていると思われていたが、近藤やアマデーオのように何かしらの事情があり、仕方なく所属している魔法使いも数多い様子。

また、ロジーナ皇太子アレクサンドルの子孫、藤島圭介の身柄拘束を目論んでいる。

詳しい理由は不明だが、アリーナの側近リリアはその理由を知っているらしい。

世界中から行き場のない魔法使いを募集している為、中にはアマデーオのような暮葉でも手を焼くような魔法使いもいる。また、暗部組織【赤の軍神】という強力な戦力も持っている。

・赤の軍神

サヴィエトの暗部組織。冷徹なヴァシレフスキー元帥でさえ、固唾を飲むほどの禁断の組織であるらしく、所属メンバーは1人で正規軍を相手に出来る上、人格も歪んでいる。赤の軍神のメンバーは何かしらの精霊の力を持っており、現在のメンバーは四精霊（エレメンタル）の力を持っている。

現メンバーは以下。

【風剣のシルフ】：風の精霊、シルフの力を持つ者。

【邪炎のサラマンダー】：火の精霊、サラマンダーの力を持つ者。

【硬質のノーム】：地の精霊、ノームの力を持つ者。

【聖波のウンディーネ】：水の精霊、ウンディーネの力を持つ者（名前のみ登場）。

――武装集団・暗部組織――

●フレンド

西園寺雪乃が明智凪紗、木山朱実らと共に結成した反学園組織。後に白藤早苗が正式な所属メンバーになり、さらにもう一人男性メンバーがいるらしいが……今の所名前も姿も不明。

佐井学園と戦う為に創設された組織であり、メンバーは1名の男性を除き、超能力や魔法といった何らかの特殊能力を持っている。現在の所、佐井学園との決戦に備える一方、硬質のノームを撃退する為の戦いに参加。圭介や暮葉と協力し、数多くの敵戦力の無効化に成功する。

ちなみに組織名の由来は【友達】である。

構成員は全員、守りたい友達がいるようだ。

●AMA（アキバ・ミッドナイト・アーミー）

鷲尾有資がアタマをやっていた、秋葉原を根城とする不良集団。鷲尾が依頼は善行でも悪事でも必ず引き受け達成する」という信条で行動している為、チームはそれに従い行動する。

その為には善人にも悪人にもなる為、人によっては評価がバラバラである。

作中ではサヴィエトからの依頼を受け、ヒーローじみた行動をする圭介を誘き寄せる為だけに秋葉原で悪事を働いていた。

なお、圭介達との戦闘後、鷲尾が逮捕されたので組織は崩壊した

らしい。

●K・M・P

正式名称は古宇坂・ミッドナイト・パワー。古宇坂市を根城とする不良チーム。

元々はカタギには手を出さないなど、ある程度の節度と誇りがあったものの、サヴィエトに脅された挙句、ザスローンに先代チームリーダーを殺された後、やむを得ず藤島圭介の身柄を拘束する為に悪事を働く。しかし、手渡された資料が少なかった為、彼らは葵を拉致してしまった。

さらに早川に構成員の大半を殺害され、残りも逮捕されたり、圭介やフレンド構成員にボコられたりと災難続きで、見ていて可哀想になってくる人達ばかりである。

先代チームリーダーが殺害された後、浜島雅人がチームリーダーとなり、嫌々チームを引っ張って拉致作戦を進めていたが、圭介との殴り合いに敗北後はフレンドに身柄を拘束される。

前述の通り、構成員の大半は戦死したか捕まった為、チームは壊滅状態である。

――佐井学園関係――

●三原中隊（カンパニー）

三原寅彦が率いる、佐井学園直属の暗部組織。

三原曰くクズばかりを集めているらしいが、総合的な戦闘能力は高い。早急に敵を見つけて重武装を持って殺すのが得意な反面、予想外の事態には弱い。そこがまあ……正規軍やアルファ隊などのような特殊部隊とは違う、所詮は素人の武装集団というところであろ

う。
８・１７事件で特異点回収の為に出動するが、早川悠に潰されてしまった。

●特科会
佐井学園の前進組織。
超能力の研究を行っていたらしいが、やはりどうしようもない組織だったらしい。
三原もここの一員だったらしく、早川悠の能力開発を担当していたらしい。ここで三原が早川悠の担当だった為に、早川悠は後の８・１７事件で三原に苦戦するのであった。

――作中の出来事など――

●特異点潰し
佐井学園によって行われていた、特異点（レムリア人）を脅威とし、特異点と呼ばれる人々を次々と殺害していった一連の騒ぎのこと。
主に早川悠が特異点を殺害していったが、作戦行動中圭介との戦闘が発生。何度攻撃しても倒れない圭介と、アルファ隊の総力を挙げた総攻撃の前に早川悠は敗北。
その後、特異点が殺される事が無くなったので、作戦は中止されたと思われる。

●８・１７事件

８月１７日、風剣のシルフとその補助を行う別動部隊。そして、三原寅彦率いる三原中隊（カンパニー）が古宇坂市に侵入して大暴れした、一連の騒動のこと。

この事件では市役所がシルフに占領され、出動した警察や自衛隊はほぼ壊滅。一方三原達は一時は早川を追い詰めるが、その後部隊の人間が次々と潰されていき、三原本人も激闘の末、早川の新たなる能力によって殺害される。シルフも結局は圭介との決戦に敗れた。

事件自体は１日で解決したものの、街に大きな爪痕を残したり、邪炎のサラマンダーの登場など事態はより深刻化してしまった。

●流血大学

誠和大学の惨状のこと。藤島葵を追いかけたＫ・Ｍ・Ｐの構成員が、次々と早川悠に殺害されてキャンパス内が血塗れになったことから、こう呼ばれるようになったらしい。

●セトゥーバルにおけるテロリスト掃討作戦

ポルトガルがテロリスト（硬質のノーム率いる魔術師軍団）制圧の為、陸海空軍の大戦力をセトゥーバルに送り込み、そこで発生した戦闘のこと。軍と魔法使いの戦闘はほぼ互角で、一時は戦線が膠着していたらしいが、圭介達の到着や早川悠の活躍で、戦況はポルトガル軍が有利に。

最終的にはポルトガル軍がサン・ジュリアン教会を包囲し、圭介が硬質のノームを撃破して早川悠が教会ごと破壊した為、市街戦は一応ポルトガル側の勝利で終わった。

なお、万が一状況が改善されなかった場合、セトゥーバル戦域にＮＡＴＯ軍の主力が介入する予定だったらしい。

●セトゥーバルの血雨（けつう）作戦

ザスローンとヴィンペル隊の共同作戦。超能力者の早川悠を含めた１４人を、セトゥーバルに降下させてポルトガル軍の攻撃を潜り抜け、サン・ジュリアン教会を破壊。硬質のノームを殺害することによって大規模震災術式発動を食いとめるという作戦であった。

作戦は見事に成功を収めたものの、圭介達も作戦行動に巻き込まれてしまった。

番外話，組織・出来事など（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「次回は最後、その他のどーでもいいような設定集だぜ」

暮葉「ある意味一番平和な話かもなのですっ」

伊吹「ど、どういう設定集よ……？」

圭介「えっ？　例えばツッパリ伊吹ちゃんとか、そんな感じの平和な話だ」

伊吹「だ、だから誰がツッパリよ！」

圭介「と、言うわけで次回が終わったら本編に戻りますので。読者の皆様色々と脱線して申し訳ございません！　もうしばらくの我慢です！」

暮葉「……けーすけ様って、後書きでは弱腰キャラですよね？」

伊吹「確かに。謝るかツッコミを入れるかのどっちかしかしてないわよね」

番外話，その他のどうでもいい単語集（前書き）

※随時追加していきます！

番外話，その他のどうでもいい単語集

●いんどろいど
圭介の部屋にいっぱいあるアィギュアのシリーズ。詳細は不明だか、可愛らしくデフォルメされたデザインが人気らしい。元ネタは【ね○どろいど】。

●暗黒物質（ダークマター）
葵が作ったカオスな料理のこと。決して宇宙にあると言われている物質でも、学園都市第2位の工場長が扱う超能力でもない。
味はおいしいが、見た目のせいで暮葉にとってはトラウマになっている。また、圭介は慣れてはいるものの、出来れば食べたくないと思っているようだ。

●ツッパリ伊吹ちゃん
圭介が伊吹をからかう時によく言う言葉。
言葉の由来はツンツン突っぱね伊吹ちゃん＝略してツッパリ伊吹ちゃんらしい。
……が、全然略になっていないのはここだけの話。
これを伊吹に言うと怒って噛みついてくるので、注意が必要……かもしれない。

●マックスバリュエ
市内にあるスーパー、紫色の建物らしい。
ちなみにこの物語は実在の人物、団体、地名などとは一切関係ございません。

●紫チャーハン事件
葵の料理が暮葉にとってトラウマになった事件。
紫色のお米に、ダイオウグソクムシが乗っかっていたのがショックだったらしい。
以後、暮葉が藤島家の食卓を支えるようになったようだ。

●三馬鹿
黒木仁、赤佐直人、大林勇太の三人のこと。初芝でも馬鹿な問題児3人組で、しょっちゅう凪紗と戦っては破れている。
三馬鹿構成員のうち、黒木と赤佐は元ヤン。大林は元スポーツ少年である。
ちなみに、圭介からはヘタレ元ヤン集団と評されている。
最近全然出番がないのはここだけの話。

●現実女（りあるおんな）
大吾が最も嫌うもの。要は現実世界にいる女子のことを言う。
理不尽かつ不条理で、パラメーターも平凡……らしいが、そんなことないよね？

●風紀委員（ジャッジメント）
決して風紀委員ではない。風紀委員（ふうきいいん）である。
校内の風紀、及び治安を守る学生による組織。
しかし、初芝高校の風紀委員は若干特殊で、なんでも風紀委員に所属する学生の大半は何らかの武道に通じているらしい。特に凪紗は武道どころか、超能力まで使える怪物である。

●ヨスガる
とあるアニメから生まれた語句。
実の妹とあ～んな関係になった場合、こう呼ばれるらしい。要は妹とヤる＝ヨスガる。
作中では葵が圭介との肉体関係を迫り、ヨスガる寸前になった事が2回もあった。

●とらゴンボール
国民的な漫画・アニメらしい。
詳しい詳細は不明だが、とんでもないスピードで戦う漫画らしい。

●とらゴンクエスト
ゲームのタイトル、またはそのシリーズ名。
圭介曰く、国民的ＲＰＧらしい。ちなみに作者、元ネタは3しかやった事がない。

●一方藤島（フジシマレータ）
圭介が野原先生と戦う時になるモード。
このモードの時の圭介は人格が一方さん化する。

●エロ兄貴
あかりが自分の兄のことを言う時、必ずこんなことを言っている。

●ＦＦ５（ファーストファンタジー）
ゲームのタイトル、シリーズモノらしい。
ピンクブリッジの死闘とかが、このゲームでは有名らしい。
ちなみに作者、元ネタは４～１０まではプレイしました。

●房総丘陵トレイルラン大会
房総丘陵で行われるトレイルランの大会、賞金は１０前円。
これを獲得するため、またあかりの為に圭介は大会に参加、なんと優秀したらしい。

●暴力魔
圭介のことを言う。中学時代に永渕を殴ったからこう呼ばれるようになったらしい。
本人もそのことを認めてはいるものの、それを広めた永渕が許せない様子。

●はがない状態。
【僕は友達が少ない】的な状態のこと。決してあのラノベとは関係（ｒｙ

●特異点
佐井学園が異世界人をこう呼ぶ。何かと佐井学園は特異点を狙っている。

●連中

色々な意味で使われる言葉だが、本作ではサヴィエトの意味で使われる事が多い。

●自己防衛本能（モザイク）

圭介が見たくもないものに、視界にモザイクをかけるというもの。作中では、浅間部長の股間にモザイクがかけられた。

●リアル一〇通行

早川悠があまりにも一方さんそっくりな為、圭介が彼の事をこう呼んでいた。

●クソガキ

ミネットのこと。早川悠がよく彼女のことをこう呼ぶ。

●クソガキ2号

リーネのこと。早川悠がよく彼女のことをこう呼ぶ。

●天神無双木下流“天下統一”

暮葉の必殺技。凄まじい斬撃で敵を一撃で仕留めるという技……らしいが、いくら強力な技と言えどもゴーレムのように、再生能力を持つ者が相手だと一撃では倒せないようである。

でも、普通の魔法使いに放てば間違いなく一撃必殺であろう。

●藤島流秘奥義……馬鹿の相手はしない

圭介の必殺技。その内容はただ相手かに逃げるのみ……結構シャバい。

●初芝レスリング部の怪物
ジャンボ鶴屋のこと。とにかく強い、「オー！」と叫ぶのが好きらしい。

●右方の船木
船木健太の渾名。圭介曰くＮｏ２が右方を名乗るなとのこと。

●前方の船木
上記を受けて、圭介が提案した健太の渾名。
右方と比べると大分格下になっている。

●有明大戦争
コミケにおける、グッズやら同人誌やらの争奪戦のこと。ただの買い物だが、その凄まじい熱気と男達の姿が戦場の兵士を思わせ、いつしかこう呼ばれるようになった……らしい。

●二次元世界に生きる聖職者
大吾のこと、もはや彼は現実を捨て二次元で聖職者になっちゃったらしい。

●落とし神

大吾が憧れる者。ギャルゲーの神とも呼ばれているが……その正体は？

……はい、版権キャラなので言えませんｏｒｚ

番外話，その他のどうでもいい単語集（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「ふう、やっとこのくだらないコーナーも終了したか」

暮葉「次回からは波乱の二日間編――二日目編なのです！」

あかり「あ、あたい達の出番だな……っ」

千早「わ、わたしも……出番あるかな？」

凪紗「私も活躍するぞっ？」

純「俺と」

勝政「俺も活躍するからヨロシクな！」

圭介「アンタら誰っ！？」

※詳細は次回以降の本編にて！

第２０１話，テスト前日の早朝

ここはロシアのシベリアにある都市、イルクーツク。イルクーツクの郊外、アンガラ川のすぐ近くに急遽築いたという神殿の庭に、サヴィエト亡命政府代表。氷の女王とも呼ばれているアリーナ・ウラジミーロヴナ・レニナが、側近のリリアと一緒に歩いていた。

リリアはアリーナにとって唯一の友人であり、最も信頼を置く側近である。

「好ましい状況ではありませんね」

まさに、極寒のシベリアで凍え死んでしまうかのような笑みを浮かべ、アリーナは誰に向けて言ったのか、青い空を見上げながらそう呟く。

その言葉にピクン、とリリアが反応する。

「う、うん。みんな苦戦しているみたいだね」

「邪炎のサラマンダー……硬質のノームを粛清したみたいですね。確かに、彼は神を信じる不届き者で気に食わない存在でしたが、簡単に殺されると流石に困りますよ……戦力が低下しますからね」

氷の女王に憐れみなんてものはない。あるのは自分の野望と冷徹さのみだ。まだ良識のあるリリアにとっては身震いするような言葉であった。

「赤の軍神……こうも弱い存在でしたとは」

「そんなことないよ……みんな、必死に頑張ってるんだから……っ」

「そうですか、それがリリアの意見なんですね」

「……っ」

くだらない、と鼻で笑いながら、アリーナは神殿の中へゆっくり入ってゆく。その後ろ姿を思いつめた表情で見つめる、リリアの姿……これがサヴィエト亡命政府。

下手に感情を持つ者が所属すれば、かえって傷つく……そういう組織なのである。

一方アリーナは歩きながら考え事をしていた。風剣のシルフ、硬質のノーム。藤島圭介とその一派に次々と倒される赤の軍神。勝手な行動を始める邪炎のサラマンダー。そして出来れば戦線に投入はしたくない聖波のウンディーネ。

赤の軍神は本当に使える組織なのか、と……アリーナはその後も考え続けた。

――圭介Ｓｉｄｅ――

８月２８日早朝、俺は明日のテストに向けて猛勉強中であった。それはもう、額に日の丸の鉢巻きを巻いて士気を高めるほどに本気モード。考えてみれば俺、散々テストが近いと言っておきながら殆どテスト勉強をした記憶が無い。うん、いくら思い出したって記憶がない。

例えば昨日、折角テスト勉強をしようかと思えば暮葉と遊びに行き、どういうわけかミネットと明智に拉致されてポルトガルへ。そこで硬質のノームという、赤の軍神の１人と戦い、その結果俺は重傷を負って気付いた時には日本にいたのだ。

全く……結局昨日のあの一件はなんだったんだろうか？
目が覚めたら暮葉や明智、白藤まで何かしら怪我していたし……。
しかも、硬質のノームにやられた傷はもう殆ど癒えたし……流石は俺の身体だ。

「つーか喉乾いたなぁ」

８月も末と言っても、古宇坂の残暑は厳しいものだ。まだ早朝だってのに半袖でも暑く感じるくらいですよ。扇風機は常に稼働しており、節電？　なにそれ美味しいの状態である。
全く、色々危機的状況なんだから……少しは節電しろよな、俺。

「何か飲もうかなぁ」

そうだ、それがいい。喉が渇いた時は素直に飲み物の飲むのがいい。と、言うわけで俺は飲み物を飲むために階段を降り、台所にある冷蔵庫を開けた。
ひんやりとしていた気持ちいい……んだけど、どないしようか？

「何も入ってねえじゃん……」

そういえば最近、暮葉や葵がお茶やジュースをがぶ飲みしていた気がする。ちくしょうアイツら貴重な水分を無駄遣いしやがったな。節電と同時に節水しやがれ。じゃないと、俺みたいに水不足で苦しむ人が泣いちゃうぞ。下手したら死んで干物になっちゃうかもしれないぜ。
ま、まあ……仕方ないよな暑いし。こうなったら買いに行くしかねえか。水道水で我慢すればいいって意見もあるだろうが、生憎このあたりの水道はまずい事に定評があるのだ。
そんな水道水を好き好んで飲むヤツはいない。それを我慢して飲

むくらいなら、まだ暑い中我慢して飲み物を買いにいったほうがマシである。
と、言うわけでコンビニへ行くべく、俺は玄関へと向かう。
そこでまた一つ、大きな発見をしてしまったのだ。

「暮葉も葵もいない！？　クソ、アイツらどこ行きやがったんだ！？」

サイズの小さな靴がない。探しても何処にもない。棚には……あるけど、それは俺や葵が昔履いていた靴であり、今はもう履けないものである。
ったく……アイツらどこに行ったんだか。まあいいや、俺もこれから出かけるし、あんまり人の事は言えないかれしれないな。だけどアイツら……明日テストだろ。
せめて前の日くらいは勉強しようぜ。ていうかどうしようか……今日は葵に勉強を教えてもらう予定だったのに、葵に頼れない状況じゃねえか……はぁ。
とりあえず、コンビニ行こう……。

それから数分後、私服に着替えて外に出た俺は、近所のコンビニへ向かう為に、このクソ暑い中うちわを仰ぎながら歩いていた。うちわも最初は涼しいんだけど……腕は疲れるし、次第にあの新鮮な涼しさは感じられなくなり、いくら仰いでも暑く感じる……ああ、暑いなぁ。

「ちょ、近づかないでよ！」

「このアマァ！」

「さっきからピーチク吠えやがってよぉ」

「テメェ、お高くとまってんじゃねえぞ！」

それは丁度コンビニの前であった。T字路を右折した所で声が響いてきたので、なんだと思って俺はコンビニのほうを向いた。コンビニの前で3人の男達に、女の子が1人囲まれている。

黒髪の左右で結んだツインテールで、どこかの学校の制服を着ている女の子。そして彼女を囲んでいるのは、イマドキなファッションにヤンキーさん達であった。

なんだアレ、ナンパか？

それに絡まれているあの女の子。アイツ、もしかして……？

「仕方ねえなぁ……」

元々コンビニに用があったんだし、絡まれている女の子にも見覚えがある。出来ればまだ完全には昨日の傷も癒えていないし、危険な事には介入したくないんだけど……まあ仕方ねえ。

ちょっとだけ――救いの手を差し伸べてやるか。

「いい加減にしてよ！　アンタ達に構ってる暇なんてないんだから！」

「なあコイツ。もしかして愛木（あいき）みどりじゃねえ？」

「なっ、あ、あたしはっ！？」

「おっ？　そういえば似てるなぁと思ったら……へえ？」

「テレビの清純そうなキャラとは真逆だな。こりゃいいスキャンダルだぜぇ？」

やっぱりアイツ……最近売れっ子のアイドル――愛木みどりだったか。一応愛木みどりってのは芸名であって、本名は愛木碧（あいきみどり）と、芸名は単に漢字を平仮名しただけだ。

アイツはまあ……人前だと猫被ってるけど、実はああいうヤツなんだよな。まあビッチってワケじゃないんだけど……性格がいわゆるイマドキの女の子なワケですよ。

えっ、どうしてそれを俺が知っているって？

それにはまあ深い事情が……って、呑気なこと考えている場合じゃないな。早く助けてあげないと愛木のヤツ、ヤンキーさん達に拉致監禁されるかもしれないな。

そんなわけで、俺は禁断の一歩を踏み出し――、

「おい、そこのバカ共」

「……えっ？　あ……もしかして……やっぱり、センパイじゃん！」

センパイ。

急展開だが、つまり彼女との関係はそういうわけなのだ。

彼女、愛木碧は俺が暴力魔扱いされる前に転校した――俺の後輩だ。

「んだよテメェ？」

「その子嫌がってんだろ。離してやれ、てめえらはさっさと家に帰れよ」

「な、なんだテメェ……イキナリ現れて調子乗ってんなぁ？」

「なんだぁ？　不良気取りのお馬鹿さんですかぁ？」

「そっかそっかぁ……そんじゃ、本物の不良の恐ろしさ――思い知らせてやんよッ！」

突然、不良の1人が前に出てきたと思いきや、右腕を振るってくる。チッ、やっぱり案の定殴りかかってきたな。そのタイミングが予想よりも早かったが……まあ予想の範囲内だ。

かなり大振りの右拳。

この程度か……なら、少しビビらせておけばコイツらは勝手に逃げるだろう。そう判断した俺は相手の動きを見切って、相手の拳を手のひらで受け止める。

パシ！　と言う衝撃が手のひらに伝わる。流石に拳が当たると痛いモンだが、相手の拳は狙いが外れている上に、俺も荒事には多少慣れているので――大した痛みは感じなかった。

「――ッ！？」

「悪いけど……お前らよりは素人じゃねえんだよ！」

叫びながら、俺は五本の指を固く握り――ソレを相手の顔面に叩き込んだ。拳は鼻っ柱に命中したようで、殴打を受けた不良は鼻から大量の血を流している。

それでも倒れない。その理由は簡単だ。拳を振るった瞬間――ズキッ、という痛みを腹部に感じたのだ。チッ、昨日の傷がまだ完全に癒えてないんだな。力があまり入らなかった。

全く……硬質のノーム。随分派手に傷つけてくれたぜ。

流石は戦車砲波の威力、普通の人なら弾け飛んでいたんだろうな。

「チッ、いってぇ……っ！」

「おい、大丈夫か？」

「クソッ！　あの野郎ォ本格的に調子乗りやがって！」

やばい、３人一斉に襲いかかってきた。誤算だったな……本当なら最初の一撃で、あの鼻血野郎の意識を完全に奪う予定だったのに、これじゃあ１対３の乱闘が始まっちまう。そうなると流石に今の俺には不利だよなぁ……でも、戦わないと俺も愛木も危ないし。

しょうがない――３人くらいまとめて倒してやる。

「オ、ラァッ！」

不良の一人が放ってきた回し蹴りを、俺は後方へ跳躍する事によって避ける。どうやら相手は不良と見せかけて、実はズブの素人のようだ。まさか最初から大技を繰り出すなんて、そんなの相手に避けられて当たり前じゃねえかよ。コイツら本当は喧嘩した事ないんだろうな。

「――テメェ！」

２人目、３人目の攻撃も素人そのもの。大振りの拳、いきなりの大技。どうやらコイツらは駆け引きというものを知らないらしい。俺だって格闘技の経験はないし、ぶっちゃけ本気で格闘技をやっている人から見れば、ド素人レベルでしかないのに……まあいいか。

相手が弱いのも面倒だけど、相手がノームみたいに強すぎるのも厄介だ。

何より今は怪我をしている。

そう、コイツらとでさえ満足に戦えない怪我をな――。

「おおォあああッ！」

「ぐ……ッ！」

一瞬の油断か、それとも相手の実力か。一発拳を貰ってしまった……威力は普通に素人が思いっきり殴った程度。痛いけど俺の体質上、怪我をするレベルではない。

だけど、これで相手は調子に乗るだろうな。一発入ったという事実が出来たんだから。

「オラァさっきの勢いはどうした、あん？」

「ほぉら、もう一発俺を殴ってみろよ？」

「殴れねえのかよ？　ハッ、やっぱコイツシャバ憎だぜ？」

さて、どうしようか……逃げるって選択肢もあるけど、それは禁断のコマンドだ。

出来れば勝ってこの局面を打破したんだが……ちょっと難しいかもしれないな。

勝てない相手ってわけじゃないけど……テスト前だからなぁ、出来れば暴れたくない。

何を、どうすればいいんだ――――、

「おいテメェら、元隼鷹だろ？　シャバいなぁ……1人のガキをいじめてんじゃねえぞ」

それはテノールの若い男の声。

不良の一人の肩に左手を置いたソイツは、金髪で端整な顔を持ちながら、浅間部長とは違って武闘派（ぶとうは）な雰囲気を放ち、薄い笑みを浮

かべながら佇んでいた。
微笑んだ男の顔を不良達は見る。何故だか不良達の顔が青ざめて、
「お、おいマズイぞ。コイツ元桑園の……っ」
「あ、ああ……狂犬のダチ……だよな？」
「狂犬のダチ……だな。確かコイツも滅茶苦茶なヤツだったような……」
「またそれか。いい加減、俺と俺のダチを不良扱いするのやめてくれねえか？」
不良達の言葉に呆れる金髪の男。
なんだ……サッパリ意味がわからないぞ？
でもまあ、よかったぁ……何だか知らないが丸く収まったみたいだ。この男が現れ、金髪の男の噂をした後に不良達は静かに立ち去ってゆく。あの不良達と知り合いみたいだが、一体俺を助けてくれたこの金髪の人は何者なんだろうか？
そして——なんで愛木が地元に戻ってきてるんだ？
８月２８日、テスト前日の早朝。この日もなんだか——波乱の１日になる予感がした。

第２０１話，テスト前日の早朝（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「お、フラグ回収か」

圭介「何のフラグだよ？」

大吾「ほら、第３４話の後書きで浅間あかりのキャラ紹介やったろ？　その時愛木みどりって名前があっただろ？」

圭介「えっ、あったっけ？」

大吾「あったよ。今回はその正体を明かす回みたいだぜ」

圭介「そうか？　テンプレすぎるクソ回だと俺は思うんだけど……」

※多分この後色々とぶっ飛ぶと思います！

第２０２話，古宇坂のヒーロー

あの後、飲み物を買った後に自宅へ戻ったが……もう、勉強どころではなかった。

ここは我が家のリビング。相変わらず暮葉や葵の姿が見えないし、おそらくアイツらは俺の予想通り何処かへ出かけたのだろう。だが、この状況はアイツらには見せられない。むしろ、出かけてくれてありがとうございますとしか、言いようがない状況だよ。

何故なら、それは――、

「センパイの家、久しぶりだなぁ～」

「おい愛木……いい加減膝枕をやめてくれ！」

「なんで？　久しぶりなんだからいーじゃないですか、これくらいっ」

「うっせ黙れ！　俺は明日からテストで勉強してねえし、一切の余裕ないんですよハイ！」

「だいじょーぶ！　あたしも芸能界入ってから全っ然してないから！」

「アイドルと普通の学生は違うだよバカ！　頼むから勉強させてくださいお願いします！」

愛木みどり、本名は愛木碧……って、まあみどりを漢字にしただけだがな。愛木は現在売れっ子の清純派アイドル……らしいのだが、素顔はこんな感じのイマドキな女の子だ。とは言っても何故か男っ

気がなくて、まあある意味では清純かもしれない。いや、どちらかと言うと純潔か？

とにかく素の愛木はまあ、清純派とは言えないタイプなのだ。それで、俺が永渕と揉める前に転校してしまったとは言え、愛木は俺の後輩であり――何故か俺には甘えてくるのだ。

「どうでもいいけど、お前ら付き合ってんのかよ？」

俺と愛木がラブラブに見えたのか、俺達を助けてくれた人がツッコミを入れてきた。

「いや、全然、全く、これっぽちも」

「愛木の言う通りですよ。俺達別に付き合ってるわけじゃないです」

うん、付き合ってはいないよ。別にお互い恋愛感情なんかないし。ただまあ、仲のいい兄貴と妹みたいな関係なのかもしれないな。

当時俺は中１で、愛木は小６。学校も違うし、そもそも小学生と中学生だ。

「ただ、あたし達は色々と深い友情で結ばれてるんですよ。ねーセンパイ？」

「ま、まあそういうわけになるな。と言うわけで、俺達別に付き合ってませんよ」

「そ、そうなのか……意外だっ」

意外で悪かったな。まあでも、確かに愛木も俺にベタベタし過ぎだと思う。こんな所を暮葉や葵に見られたら……ああ、考えただけ

で恐ろしい。特に暮葉には見られたくないよ。愛木に甘えられている所を暮葉に見られたら、間違いなく暮葉ルート突入が困難になるぞ。

俺は今――暮葉攻略に全力を注いでるんだ。

日常で親密度をＵＰ。サヴィエトが攻めてきたら共闘し、そしていつかは――。

「……センパイ？　なんでニヤニヤしてんですか？」

「う、き……気のせいだ」

いかんいかん。つい本音が顔に出ちまった……出来れば、暮葉が好きだってことは誰にもバレたくないんだよな。特に愛木みたいなタイプの人には……絶対俺、いじられるじゃねえか。

さらに下手すりゃロリコン扱いだぜ？

「それにしても、希望（のぞみ）のヤツどこに行きやがったんだ？」

「へ、の、希望？」

その時、俺達を助けてくれた金髪の人――日向勝政（ひゅうがかつまさ）さんが呟いた。

希望ってもしかしなくても人の名前だよな……もしかしてこの人、人探し中だったのか？

「ああ、俺大学生なんだけどよ……」

「え、マジで言ってるんですか！？」

「うそ！？　日向さん大学生だったんですか！？

「お前ら純と同じくらいひでえヤツらだな！　これでも3流大学の学生だよ俺は！」

涙目で訴えてるぞ……なるほど、日向さんは大学生だったのか。外見がヤンキー風のイケメンだったから、てっきりそっち系のホストクラブの人かな～なんて思ってたよ。

日向さん……見た目によらず頭よかったんだな。

「それで俺と同じ大学生で、最も違う大学に通ってるヤツなんだけどよ、橋立純（はしだてじゅん）って高校時代の友人がいるんだよ。ソイツ、彼女と一緒に東京の国立大に行っててよ、ソイツに会いに行こうと希望って……まあ、俺の彼女なんだけどさ。その子と一緒にこっちに来てたんだけど……」

ちぇ、日向さんもその友達もリア充かよ。もう爆発しちゃえこの野郎。

大学生ってのはリア充率が高いとは聞いたが、まさかここまでとは……クソ、俺だって早く暮葉とリア充したいよ。だけど、道は長そうだよなぁ……。

「もしかして日向センパイは、その希望さんって人と逸れちゃったんですか？」

「そうなんだよ……お前結構鋭いな」

「これくらいすぐわかりますよ～」

まあな、愛木は鋭いのが武器だからな。俺も何度本心を見破られたことか。

愛木に嘘は絶対通じない。それほど鋭いんだよ、愛木碧って女の

子は。

「ああ……希望、ヒーローをこの目で見たいとか言いながら、何処に行ったんだよ……うう、俺は寂しいぞチクショオー！」

「えっ、ヒーロー？」

「確かお前……藤島だっけか？　お前だって知ってるだろ？　お前と同じ名字のヒーローがこの街にいるって話をよ」

「ああ！　あたし知ってる！　そのヒーロー、センパイと同姓同名でビックリですよ！」

おいおい、ちょっと待てよ。
日向さんと愛木が言ってて、日向さんの彼女が探しているそのヒーローって……。

「へぇ、そういえばお前藤島圭介って名前だったよな？」

「あたしもさぁ、最初はセンパイかな～って思ったんだけど、流石のセンパイもテロリストを単独で制圧できる超人なわけないかな～って思ってて」

「まあそうだよな。でも、その藤島圭介ってのが古宇坂にいて、希望のヤツがその武勇伝に憧れちまってよぉ、それで純に会う前にこんな所に……」

やべえ……そのヒーローこそ藤島圭介って――俺じゃん！
きっと日向さんも愛木も、そして希望さんって人もあの事を言ってるんだろう。

8・17事件で、俺がテロリストこと風剣のシルフを倒した――あの事を。

「ありぇ、センパイどーしたんですか？」

「お前顔色悪くね？　まさか熱中症じゃねよな？」

「い、いえ、別に？　俺はなんでも……」

「じゃあどうしたんだよ？」

「なんか今日のセンパイ、あの時のセンパイらしくねーですよ？」

言えねえ……俺がそのヒーロですだなんて、絶対に言えねえ。そもそも、この2人に言っても多分信じてもらえないだろうし。いや、でも希望さんって人は俺に会いたいみたいだし。ひょっとしてここは俺がその藤島圭介だと名乗り出て、希望さんって人と会ったほうがいいのかな？

その方がさっさと問題が解決して――テスト勉強に打ち込めそうな気がする。

もういいや、面倒な事になりそうだが……言っちゃえ――俺が藤島圭介だって。

「いやぁその……ハハハ、俺がそのヒーロです、はい」

「……」

「……」

予想通り2人は静まり返り……、

「ちょ、センパイ！　いくらなんでも大嘘にも程がありますよっ！　ぷ、クスクス！」

「そーだそーだ！　大体テメェ、さっき元隼鷹の連中にボコられてたじゃん！」

予想通り、２人は俺を馬鹿にするように笑いやがった。ちくしょう何か悔しい……でもここまでは俺の予想通りだ。一応この後の作戦は考えてある。今はそれを――実行するのみ。

「アレは怪我のせいで本気を出せなかったんだよ！　ほら、これを見てみなさい！」

言いながら、俺はガバッ、と勢いよく服を脱ぐ。俺の上半身が露わになるが、その肉体には白い何かが巻かれている。丁度それが巻かれている部分が傷口。

そう、俺の腹に巻かれている白い何かとは――、

「この包帯、テロリストと戦って負った怪我だよ！」

まあ、８・１７事件で負った怪我じゃないけど……でも別にいいよね。これはシルフと同じ赤の軍神の一人、硬質のノームとの戦いで負った傷だ。

シルフと同等のヤツと戦って怪我したんだし、別に間違いではないよね。

さあて、どう反応する――愛木と日向さん？

「ぷぷっ！　せ、センパイ身体を張った演技ですねっ！」

「お前それ、不良にボコられて怪我しただけじゃねえのか！？　ぷ、だぁっはは！」

全然信じてもらえねえ……まあ、ある程度は予想していたけど。
もう、こうなったらヤケクソで信じてもらうまで粘るしかねえな。

「じゃあ、どうすれば信じてもらえるんだよ！」

ヤケクソになって、俺は2人に叫びかけた。俺の必死かつ大きな声に2人は黙るが、完全に動きを止めた愛木と違い――もう1人は静かに立ち上がる。
ゆっくりと、しかし確実に闘志を燃やしながら。

「そうだな……」

立ち上がった一人の男――日向勝政は一言置いてから、

「俺とタイマン張って勝てたら――少なくとも強いって事は認めてやるよ」

指の関節をバキボキと鳴らしながら、日向勝政は俺へ挑戦状を突きつけてきた。
タイマン。
それは1対1の喧嘩――本物の真剣勝負のことである。

「タイマンか……」

「ああ、その怪我してる状態で俺に勝てたら――実力は本物だろうぜ？」

分かる……俺の経験上、なんとなく分かる程度だけど、この鋭い眼光、日向さんは――かなり強い。

「ちょ、日向センパイ？　喧嘩は流石に……」

「いいぜ、それで証明できるってんなら――相手になってやる」

「フッ、いい覚悟だなテメェ。だが覚悟しろ……俺は強ぇぞ？」

日向さんが薄い笑みを浮かべる。それだけでビリビリと伝わってくる威圧感。

コイツ、不良を言葉だけで退かせた時から思っていたけど……やっぱり只者じゃねえ。

日向さんは――ホンモノの強さを持っている。

「せ、センパイ！　映画の撮影じゃないんですよ？　だ、ダメですよ……センパイ怪我してるのに……っ」

「愛木、大丈夫だ……俺、これでも身体は丈夫だからな」

痛みは我慢すればいい。とりあえず今、武器として使えそうなのは己の身体。異常に身体が丈夫だっていう体質を利用し、持久戦に持ち込めれば――。

「さて、藤島とやら……人目を気にしねえでいい所へ――案内してくれ」

「わかった……」

全く不幸なモンだ。テストまであと1日もないってのに喧嘩とは

……でも、これで俺が藤島圭介である事を証明すれば――全ては解決するハズ。

そう、テスト勉強が出来るんだ。

だから、今は我慢して馬鹿に付き合おう。それが多分―正しい選択だと思うんだ。

こうして俺達は決戦の場へと向かった。人目の少ないあの場所へ。

第２０２話，古宇坂のヒーロー（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「なんか今回、喧嘩番長的な展開になってね？」

赤佐「てゆーか、日向勝政ってホンマに強いんか？」

黒木「馬鹿！　それ言ったらネタバレになるだろ！」

大林「それに、まだ愛木碧と藤島の詳しい事も不明だし、他にも色々イベントが控えてるから話はこれからだな」

黒木「そんなわけで続く！」

第２０３話，男の戦い

古宇坂中央霊園の前にある荒地。
ここは以前、俺と明智が決闘した場所でもある。霊園へのお参り客は少ないし、近所の工事現場も相変わらず工事が行われず、現場だけで放置され重機も既に撤去されている。ここなら殆ど人目を気にする事なく、思う存分に暴れられることだろう。
俺と日向さん、そして愛木はこの荒地へ足を踏み入れる。
そしてこの荒地で――俺と日向さんとの間で火花が飛び散った。

「なるほど、確かにここなら人目を気にしねえで済むな」

「まあな、ここは結構穴場なんですぜ？」

「確かに、金属バットや腐りかけの木刀とか……血に飢えた狼の武器が落ちてるな」

「殴り合うにはいい場所でしょ、日向さん」

「ああ、ここなら文句はねえな」

そこで、俺は横目で体育座をしている愛木を見る。
それにしても愛木のヤツ、どうしてここまでついて来たんだろうか？
下手したら――血を見る事になるかもしれないってのに。

「言っときますけど、俺もズブの素人じゃないですからね。怪我してるからってナメてたら痛い目遭いますよ？」

「そっちこそ手ェ抜くなよ。こっちだって結構場数踏んでるんだからよ？」

「だったらいいぜ。てめえの自信を今ここで――ぶち殺してやる！」

「ふ、上等だ……かかって来いやコラァ！」

日向さんの叫び声が――開戦の合図であった。

お互いの距離は約３メートル。ちょっと踏み込めばすぐに詰められる距離だ。今の俺はノームとの戦いで腹を怪我している。だからあまり無理は出来ない……そうだな、日向さんが強いと言っても普通の人間のレベルだ。なら――先手を打って筋力１００％パンチを打ち込んでやる……ッ！

「おおォォあァあああッ！」

ゴッ、と言う壮絶な足音は俺の足音。荒れた大地を思いっきり踏み込み、俺は３メートルという距離を僅かな時間で詰めてやった。一瞬で間合いを詰められた日向さんは一瞬、少しだけ驚いたような表情になるが、すぐにキッ、と先程の厳しい表情に戻る。

俺はそのカエルを睨み付けるような目のある顔面へ――右拳を打ち込もうと振るう。

だが、寸前で日向さんは首を振った。それだけの動作であったが、日向さんの僅かな動作が俺の心を大きく揺るがせる。恐ろしいまでに心を揺るがせる。

シュン、と拳が空振りした。

「……ッ！」

一秒にも満たない空白の時間で、俺は驚愕していた。

そして次の瞬間――突き刺すような拳が俺の傷口を突いた。

「あ、ぐっァァァあああああッ！」

壮絶な痛みに俺は悲鳴を上げた。そりゃそうだ、傷口を殴られたら誰だった痛い。

いくら俺のような特異体質の持ち主でも――例外じゃねえんだよ。

さらに、痛みで苦悶している隙を突くように――脳を揺さぶる一撃が顎に激突する。

視界がぐにゃぐにゃする中、宙に浮いている事だけは理解できた。

「くっ――てめえ……ッ！」

でも、俺の体はその程度の衝撃では壊れない。拳で壊れてしまうような――羨ましい体は持ってないんだよ……俺。そういうわけで、俺はまだ動ける。十分暴れられる余裕を持っている。

俺は前に進みながら、まずは日向さんを怯ませようと――ジャブを放とうとする。

だが、その瞬間だった……ズキッ、という痛みを腹部に感じた。

「ぐ……っ！」

ちくしょう……さっきの腹パンで少し傷口開いたかもしれない。

いや、仮にそうじゃなくったってあんな衝撃を受ければ、傷口はただじゃ済まされないだろう。

痛みで動きが止まってしまった。その隙を突くかのように、再び拳が飛んでくる。

「がっ――ばっ、ァ！？」

二発。

顔面に二発の殴打が加えられた。一発目で下顎を思いっきり突かれて、二発目は鼻っ柱を砕くような激しい痛みを感じた。衝撃で後ろへ吹き飛ばされるも、辛うじて倒れず持ち堪える。

やべえ……日向さん。ここまで強いとは思わなかった……。

「お、ァ！」

「ぐ、ァ――ッ！」

気付けば日向さんは俺の寸前に立っており、殴打が繰り返された。バン、ゴン、と凄まじい打撃音が何度も繰り返され、その度に俺は鈍い激痛に苦しんでいた。

連続殴打の後、トドメを刺すかのような一撃が飛んでくる。

「あっ……がっ、ァ！」

クソ、なんとか耐えたし痛みはすぐに消えるが……このままじゃまずいな。

「なるほど、滅茶苦茶タフなヤツだなテメェ」

「へっ、体が丈夫なのが唯一の自慢だからよ……っ」

「だけど、傷口が痛んで本気出せねえみたいだな。その程度じゃ一発も当てれねえぞ」

「そうかよ……言ってろコラァ！」

俺は荒地を蹴り、もう一度駆け出す。

「何度でも言ってやるぞテメェ！」

日向さんも同時に駆けだした。

互いに拳を振り上げ、互いに五本の指を固く握ったソレを叩きこもうとする。

だが――片方は顔面に突き刺さらない。

「う、が――――ァ！？」

顔面を突いた拳は、俺を何メートルも後ろへ吹き飛ばす。体が大きく仰け反ったが、気合いと根性だけでどうにか耐えきって、俺は日向さんの胴へ飛びかかる。そのまま押し倒し、マウントポジションをとって殴りまくるという作戦だ。

だが、

「ご、ふっ！」

突き上げるような膝蹴り。

ドス！　と言う衝撃が傷口と内臓を刺激し、鋭い痛みと鈍い痛み、さらに中のモノが込み上げてくるような気持ちの悪い感触を感じた。こうして力を失った俺の肩を、日向さんはガシッと掴んで持ち上げるように体を投げる。放り投げられた俺は辛うじて着地し、バランスを保とうとするが、

そこで――全ての幻想を破壊するかのような、

「げ、ぐ――はっ……ッ！？」

破壊的な拳が砲弾のように飛来し、顔面に炸裂する。ぐらん、と視界が揺らぎ、脳も揺さぶられたのか気を失いそうにもなった。

ち、くしょう……なんで……だよ。俺はシルフとノームを倒した男だろ。それなのにどうして日向さん相手に負けてるんだ。なんでこんな、一方的にボコられ続けてるんだよ。いくら怪我してるからってこれは一方的すぎるだろ。そこまで弱かったか、今までが偶然だったってのか？

ざ、けんなよ……。

日向さんの彼女の為の戦いだろ。俺の明日のテストを賭けた戦いだろ。ここで俺が藤島圭介である事を証明しなければ――このふざけた騒動が終わらねえだろ。

だから、俺は……ッ！

「こんな、ところで……負けるわけには――」

俺はぐらぐらに揺れる意識の中、奥歯を力強く噛み締める。

強く。

失いかけた戦意を取り戻して、

「がッ……ァあああああッ！」

咄嗟に動き、右腕の筋力を１００％に設定する。メリメリと、筋肉が、骨が、右腕の肉が嫌な音を立てて、内部から凄まじい痛みを感じながらもそれに耐える。

日向さんは驚いていた。多分、反撃が来るとは思っていなかったのだろう。

「な、に……ッ！？」

そして今度こそ、確実に――、

両者の拳が交差する。

俺の魂を籠めた全力の一撃が、日向さんの顔面に直撃した。

日向さんの体は壮絶な勢いに乗って、ゴロゴロとと荒地を真後ろへ転がっていった。

「はぁ、はぁ、はぁ――」

「せ、せん……ぱい……っ？」

愛木の力の入っていない声が耳に入る。声を聞いた後、今度は日向さんを見下ろす。

日向さんは顔面を抑えながら苦悶している。そのまま立ち上がろうとはしない。おそらく立ち上がる力さえ一撃で失ってしまったのだろう。

勝った。

俺は日向さんに――拳一本で勝つことが出来た。

「日向さん……あの、大丈夫ですか？」

「う、ぐぁ……ハハッ、強ぇなテメェ。一撃で……ここまでダメージ受けるだなんてなっ」

鼻から大量の血を流し、痛みで顔を歪めながらも――日向さんは微笑んでいた。

「それじゃあ、日向さん――」

「ハッ、テメェがテロリストをやったかは知らねえけどよ――」

そこで一旦言葉を切ると、日向さんは思わせぶりな表情を浮かべながら青空を見上げ、

「認めてやるよ。強ぇってことをよ」

こうして、俺は日向さんに藤島圭介であると認められた。

よかった……これで希望さんって人と会って、彼女を満足させる事が出来たら、

なにも気せずテス勉が出来るぜ――。

第２０３話，男の戦い（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「キタァァァァァァァァ！」

伊吹「ど、どうしたのよ？」

圭介「つ、ついにきたよ……ついに！」

伊吹「だ、だからどうしたのよ？」

圭介「ゆ○ソフト最新作発表だってよ！　２９日が待ち遠しいぜちくしょう！」

伊吹「……ゆ、ゆず○フト？」

圭介「ぶ○くすは俺的に超良ゲーだったし、最新作も超期待だぜ！」

伊吹「……」

暮葉「けーすけ様は相変わらずエロゲオタなのです……っ」

※ちなみに、ゆ○ソフト最新作情報は実話です。

第２０４話，希望探し

「ったく、２人ともなにやってるんですかっ！」

「いや、その……まあ？」

「悪かった……」

俺と日向さんはさっきまで殴り合っていたが、その戦場で俺達は――愛木からありがたいお説教を受けていた。愛木は俺達が殴り合っていた事に対して、大変ご立腹の様子である。まあ常識的に考えていきなり殴り合うのも変な話だし、やたらと心配性な愛木が怒るのも無理はない。

「もう……これに懲りて喧嘩はしないでくださいね」

「お、おう」

「善処するぜ……っ」

日向さん、それ何もしない政治家が逃げる時に言うセリフだぞ、まあ、そんなことはどうでもいいとして、愛木のお説教も随分長いモンだ。気付けばもう９時半じゃねえかよ。

結局、今までテス勉なんて殆どしていないし……明日のテスト大丈夫かな？

それから……なんだろう、何か大切なことを忘れている気がするような……。

「はぁ……超イテェ。つーか希望探さねえと……早く東京行かねえ

と純達怒るぜ」

「そ、それだあああああああああああああっ！」

「あ？　な、なんだ藤島？」

「せ、センパイどーしたんですか？」

突然の叫びに、日向さん愛木は驚いていた……というより若干引き気味であった。

まあ、常識的に考えたら普通はこんな反応だよね……？

「日向さん、俺の名前はなんですか？」

「あ、藤島圭介だろ？　テメェがあのヒーローかどうかは知らねえが……テメェ強いよな」

「って、日向さんの彼女さんはそのヒーロー探してるんですよね？」

「お、おう。それで消えちまったのは間違いねえけどよ……」

「だったら、俺をヒーローって事にして、その人と俺と会わせてみたらどうですか？」

「なっ、テメェがヒーローだって！？」

俺がヒーローのフリをして希望さんに会えばいいんだ。それで希望さんは満足し、日向さんも東京の知り合いに会いに行ける。そういう計算だし、事実シルフを倒したのは俺だ。

ある程度は体験談を語る事が出来るぞ。うん、ある程度はな。

「要は彼女さんが満足すればいいんですよね？　だったら俺をヒーローって事にすれば、その人は満足するんじゃないですか？」

「……て、テメェ。意外と頭いいじゃねえかっ！」

「おおー、センパイ！　今日のセンパイ何だか冴えてますよっ！」

ふ、フフフ……どうだ2人とも思い知ったか。智将藤島圭介とは俺のことだ。俺にかかればちょっとした作戦くらい簡単に思いつくぜ。なんたって、俺の作戦力は辻政信よりは上だからな。

これでも日頃ゲームで鍛えてるんだぜ？

少なくとも――色々と迷走しまくっていた、あの作戦の神様よりは上なハズ！

はい、すみません……調子に乗ってごめんなさい。

「そ、それじゃあ日向さん。まずは日向さんの彼女を――探しに行きましょう」

「おう！」

「センパイ、あたしもとりあえず超お供しますっ！」

なんですか超お供しますって。意味不明も程がある……ってか絹○最愛かよ。

こうして、俺と日向さんとついでに愛木は、古宇坂市の何処かにはいるであろう、日向さんの彼女さんを探すために歩き始めたのだ。

当てはないが、こう言う時に便利なヤツがいるんだ。

まずいソイツに会おう。会えばもしかしたら――希望さんを発見できるかもしれない。

典型的な日本屋敷に典型的な日本庭園。この無駄に立派かつ和風な家に、こんな時に頼れるソイツは済んでいる。木製の表札には明智という文字が堂々と記されている。

そう、明智凪紗だ。

アイツはいろいろと人脈が広いし、アイツ自身が動かなくったって、アイツの仲間がきっと希望さん捜索を手伝ってくれるだろう。ある意味、警察なんかよりもずっと頼れる存在だ。

そんな明智に依頼をすべく、俺はインターホーンを押したのだが……。

「凪紗ならおらんぞ？」

「えぇ……ほ、ホントですか光昭さん？」

明智は出てこなかった。代わりに出てきたのは明智のお爺さんである、明智光昭という織田家や木下家との和解を達成した、超平和的かつ素晴らしい功績を持つスーパーお爺さんだ。

春頃の明智家の騒動以降、どうやら俺はこの爺さんに気に入られてしまったらしい。

今でも時々会ったらよく話す仲である。

「今日はなんじゃろうな、凪紗はかなり張り切って出かけおったぞ」

「かなり張り切ってって……」

そういえば、今日は8月28日。俺の生誕17周年記念日でもあれば、明智にとっては俺も気になるあの日なんだよな……ちくしょう、結局あの日って何の日なんだよ。

今日家にいないのも、あの日に関係あることなのか？

「それにしてもなぜじゃろうなあ。いきなりバイトは始めるし……心配じゃのう」

「何か、意味不明な理由でバイトしていましたけど……」

「ほわっ!?　ま、まさか……凪紗に彼氏が出来たのでは!?」

「えっ？　光昭さん……やっぱそう思いました？」

「あたりまええじゃ！　乙女がここまで積極的に動く……これは男じゃ、間違いない！」

なんという名推理なんだよ。いや、俺も薄々そうなんじゃないかと思ってたが、やっぱり明智に彼氏が出来たのかよ。そりゃあアイツだって女子高生だし、彼氏作るのは変じゃねえけど。

でも、明智だぜ？

あの超お堅い明智が、彼氏なんてものを作るのだろうか。仮に作ったとしても、あのお堅い人と付き合う物好きな男は一体誰なのであろうか？

ま、まさか……もし明智と付き合っているとしたら、その男の目的は――！

「光昭さんまずいっすよ！　仮に凪紗に彼氏がいるとしたら……相手の男」

「ほ、ほい!?　ま、まさか……っ!?」

「多分――体目当てですよ」

「なぁぁぁぬぅいいいいいいいッ！？」

誰もが思いつくであろうその理由に、光昭さんは怒りを露わに叫び声を上げる。

「許せん！　ワシの孫を肉便器として扱おうとは……藤島君！」

「は、はい」

「ワシの孫の貞操を守るのは家族、そして友達の務め。頼めるかね……藤島君！」

「えっ、で……でも俺、テスト勉強しねえと……」

「そんなもの後回しでよい！　頼む、ワシの可愛い孫の――純潔を守ってくれえぇぇえっ！」

ダメだこの爺さん……かなり感情が高ぶってやがる。いや、そりゃあ俺だって体目当ての男と付き合うだなんて反対だ。だけど、付き合っちまった明智のせいでもあるし、なにより……俺はテスト勉強をしたいんだよ。だから明智よりも正直――明日のテストのほうが大事なんだ、今は！

明日のテストで失敗したら、担任の乙坂になんて文句を言われることやら。

野原先生になんて怒鳴られることやら。

そして暮葉や葵に――なんて馬鹿にされることやら。

だが、この後いくら説得しても光昭さんの暴走が止まる事はなかった。なので、光昭さんの暴走を止める為にも俺は――仕方なく明智と彼氏を別れさせるという任務を引き受けたのだ。

はぁ……どうしてこんな事に。

そもそも、明智に彼氏がいるかどうか――まだわからないだろ？
そんな事を考えながら、俺たち三人を明智家を離れ――別の場所へと向かっていた。

「すごい爺さんだったな……藤島」

「あたしも、見てるだけでなんだか疲れた気がしますっ」

「ああ……ホントに疲れたよ、主に精神的な意味でな」

「おい藤島。ホントに明智さんって人は頼れたのかよ、変なジジイだったじゃねえか？」

「あの爺さんは頼れないですけど、娘のほうはすっごく頼れる人ですよ？」

「でも頼れる娘がいないんですよね？　次はどーするんですかセンパイ？」

「だ、大丈夫。次のヤツは多分信用してもいい――ハズだ」

そんなわけで次に俺達が向かった先は、明智家からさほど遠くない場所にある、明智家に匹敵するほどの和風なお屋敷だ。そう、ここは青山家――街一番の由緒正しい名家である。
青山さん自身は大した力じゃないが、この青山家の権力は絶大である。青山さんを賭けた騒動の後の話なんだけど、あれだけ敵対意識を燃やしていた青山家も何故だか最近、俺に対して友好的な態度をとるようになり、特にあの現当主の青山流。
あの人なんて「いつでも来なさい、我が娘の許婚よ！」だなんて言っていたし。

なに言ってるんだか……つーか、いつから青山さんと許婚になったんだよ。俺の親父からはそういう話は聞いていないし、多分流さんの冗談だとは思うけど……。

もし冗談ではなく、親が勝手に許婚って決めていたら……。

うん、これなんてら○ま？

俺は緊張しながら青山家のインターホーンを押した……が、

「よおチェリーボーイ！　今日はなんだ、まさかお嬢様に用か？」

「げっ、岡本さん……」

インターホーンを押して出てきたのは、青山家の執事である岡本さんであった。

「そんな嫌な顔するなよ。もしかして、もうお嬢様とはヤッたのかい？」

「最低だよそのギャグ！　俺もお嬢様もまだ純潔だっ！」

「な～んだ、チッ……つまらないチェリーボーイだね」

「チェリーチェリーうっさいわ！　てめえはこそチェリーじゃねえのかよ！？」

「ど、ど、ど、ど、童貞ちゃうわ！」

その反応はやっぱりチェリーボーイじゃねえかよ。この嘘つきめが、そんな虚勢張るから人前で恥ずかしい思いをする羽目になるんだぞ。全く……この岡本さんとも一度は拳を交えたが、何故だか騒動後に仲良くなってしまい……以後、ご覧の調子なのである。

正直、岡本さんのノリにはついていけねえよ……。

「で、岡本さん……流さんは今日いないんですか？」

「なんだ、流様にご用だったか。まさかいよいよ結婚を――」

「違うわ！　ちょっと頼み事があるんだよ！」

「ふ～ん……残念だが、流様は今とっても忙しい時期なんだ。元々の金融危機に加えて、さらに昨日のポルトガルでの騒動が原因でね。欧州は今大変で、その余波が日本にも届き始めているんだよ」

ポルトガルの騒動……か、もうこんな所にまで影響が出てるんだな。確かにあの騒動でポルトガルが受けた損害は凄まじい金額なんだろうが……。

それがさらに――欧州の金融危機を加速させちまったのかもしれない。

いや、仮に影響が出ているとしても、まだまだ序の口なんだろう。事件の影響というのは本格的に出てくるのはこれから先だ。今はまだ――ほんの序の口に過ぎない。

くそっ、サヴィエトめ……早く倒さないとやっぱり大変だな。

つーか、ここの所アイツらの攻撃が――無差別すぎるだろ。

「ん、どうしたチェリーボーイ。思いつめた表情なんてらしくないぞ？」

「えっ、いや……なんでもねえよ。それじゃあ他の人達は？」

「お母様もお婆様も、そしてお嬢様も現在不在だ。残念だったねチェリーボーイ」

「そうか……」

「ん、何か用事があったのだろう？　何なら僕ら執事が代行しても構わないが？」

「いや、いいよ。失礼したな……」

「そんなことはない。チェリーボーイが来ればお嬢様はお喜びになる。また来てくれな」

「おう」

青山さん一家までいないのか。それも流さんはお仕事、俺や暮葉とサヴィエトに関する事情に巻き込まれるように……くそっ、そう考えると滅茶苦茶迷惑をかけている気分になる。

もしかして、俺の存在が――世の中にとってはマイナスなのか？

俺は……。

「センパイ、またまたどーしたんですか？」

「テメェ、さっきから元気なさ過ぎだろ？」

「えっ？　いや、なんでもないですから心配ご無用です」

ホントは色々と落ち込んでるんだけどな……ああもう、なんで俺、アレクサンドルの子孫として生まれたんだよ。色々と面倒な事には巻き込まれるし……まさか俺、疫病神じゃねえよな？

もしそうだとしたら……俺の存在に価値って……。

「あ、勝政じゃんっ」

「へ……おあ！　の、希望っ！」

はっ、希望？

そう思った俯いていた顔を上げると――俺たちの目の前には女性が佇んでいた。ツインテールだがちょっと大人な雰囲気だな……アレが希望さん、ってことは歳上……だよな？

ていうか、アレが希望さんだとしたら……随分アッサリ見つかったなオイ。

今までの苦労は一体なんだったんだよ！？

「希望お前……今までどこに行ってたんだよ」

「えっ、だから……うん、憧れのヒーローを探してたんだ！」

「やっぱりか……あのさ、言いたい事があるんだけどよ……」

「ん、なーに勝政？」

ぐわっ、くそっ、ムカつくぅ～あのリア充、再会しても殆どお咎めなしかよ。しかも何人様の前で抱き合ってるんだよ、バカップルかっつーのド畜生。

はあ……俺もリア充してぇ。暮葉とリア充したいよ……うう。

「お前、藤島圭介探してるんだよな？」

「うん、あたしサイン欲しいんだ！」

「俺、その藤島圭介と一緒にいるんだけど……」

「えっ？」

「だからアレ、あそこにいるのが――」

言いながら、日向さんは俺に人差し指を向けてくる。その動作に会わせて、日向さんの彼女である希望さんも首を動かし、その時俺と希望さんの視線が合ってしまった。

他人のモノなのに……中々可愛い顔をしている。そんな照れから、思わず視線を逸らしそうになってしまったが、それでも俺は我慢して持ち堪え――コクリと首を縦に振って一礼する。

そしてその瞬間、希望さんは――。

「きゃあああああ！　ああ、貴方が藤島圭介さん！？」

「えっ？　あぁはい、そうなんですけど……」

「すごい、間近で見れるだなんて……あたし感激だあっ！」

希望さんは俺の手を握って、キラキラと光らせる瞳を持つ顔を近づけてくる。これじゃあまるでジャニーズのイケメンに迫る、ちょっと行き過ぎなファンみたいじゃねえかよ。

えっと、この場合……どうすりゃいいの？

「あ、愛木！　お前アイドルだろ！？　こういう場合どうすりゃいいんだよ！？」

「えっ？　う～ん……多分営業スマイル浮かべればいいと思いますよ」

「そ、そか。え～っと……どうも、藤島圭介です」

ニコッ、と俺は白い歯を見せ、吐き気がするような営業スマイルを浮かべた。

希望さんは相変わらず黄色い声を出すばかり。はあ……何かの握手会かよコレ？

ちなみに俺、ＯＫＢ４８の握手会なら行った事あります。

まあ……去年のクラスメイトである島原と藤咲の付き合いなんだけどね。

それから数分後、ようやく希望さんは満足してようで、構ってもらえず嫉妬をしていた日向さんの横に並んだ。それで日向さんも満足したのか、２人は腕を組んでいる。ちくしょう、どこからどう見てもラブラブラカップルだなオイ。本当に爆発して欲しいくらいのイチャイチャぶりだ。

「どうもありがとう！　おかげであたし――心おきなく古宇坂を去れるよ！」

「悪かったなお前ら。希望が迷惑かけてよ……」

「いやいや、そんな事ないですよ」

「うん、あたしもけっこー楽しかったですから」

「そっか……そんじゃ、俺達は東京に行かなきゃいけない」

「ああ……」

日向勝政と妙高希望（みょうこうのぞみ）。

不思議カップルだけど、まあ悪い人ではなかったよな……。
そんな2人ともここでお別れ。2人は友達がいる東京へ行かなくてはならない。

「藤島、テメェは多分――もっとデカい男になれるぜ？」

「えっ、そうですか？」

「純もテメェみてえなヤツだよ。妙に行動力があって強いんだよな」

「あ、そういえば。藤島さんって橋立に似てるかもしれないわね！」

橋立純、かあ……俺はソイツがどんなヤツかは知らないけど、多分……ソイツと比べたら俺なんて大したことがないヤツなんだろう。
俺は別に強くない。
強かったら――自分の存在がマイナスだとか思ったりしねえよ……。

「それじゃあ、またなテメェら――どっかでまた会おうぜ？」

「おう」

2人は俺達に背中を向けて、イチャイチャしながら次第に遠ざかってゆく。
やがて2人の姿は見えなくなった。よかった……1つの騒動がこれで解決した。
後は愛木さえどうにかすれば――心おきなくテスト勉強が出来るぜ。

「センパイ、あの2人仲いいですねぇ」

「そうだな」

2人ともかなり変な人だったけど、仲がいいのは何よりもいいことだよな。うん、リア充ってのがちょっとムカつく所だけど、これからも仲良くいて欲しいな～とは思うぜ。

「ふふっ、今回もセンパイ、超かっこよかったです」

「そ、そんな事はねえだろ？　お世辞言ったって何も出ないからな」

「あたしの超素直な感想ですよ。あの時と同じです」

「あの時、かぁ……」

そういえば愛木と出会ったのは中学1年の頃。一緒だったのは僅かな期間なのに、こうして久々に会っても普通に話せる仲になれたんだよな。

そしてそれは、愛木がアイドルを目指す理由でもあった……。

確か、アレは入学したばっかの頃だったっけかな……？

第２０４話，希望探し（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「なんとか、あとは愛木をどうにかすれば勉強できそうだぜ……」

凪紗「おい、藤島」

圭介「なんだ？」

凪紗「なんか私、今回ビッチ疑惑が浮上してないか？」

圭介「あ、そういえばそうだな」

凪紗「どうしてくれる！　それで作者に嫌われたら私――出番がなくなるだろ！」

圭介「え……ま、まさか明智、ホントにヤリ○ンなのか！？」

凪紗「ち、違う！　違あああああうッ！」

※果たして凪紗の彼氏疑惑の真相は？　続く！

第２０５話，中学１年の春　前編

きっかけはある日、珍しくその日は一人で下校中であった。
珍しくというのも、当時の俺には友達が多かったのだ。まあ、その殆どは永渕との一件で離れていってしまったが、あの頃の俺は……今の俺から見ればリア充だったと思う。
普通に友達作って、普通に日常を過ごして、普通に――好きな人もいて。
あれ、今とあまり変わりない気がするけど……気のせいだよな？
そんなリア充生活を満喫していたその時。俺はたまたま寄り道をして、たまたま母校の小学校に近くを歩いていたのだ。卒業したのは２ヶ月前なのに、何故か懐かしく感じた母校。多分中学生になったからそんな気がしたのだろう。気がつけば――俺は母校の校舎を眺めていた。
中学の制服を着てたからまだしも、今だったら通報されるんだろうな……。

「まあ、今更どうでもいいよな……」

静かに呟いて、母校から立ち去ろうとして――まさにそのタイミングを狙うように、

「……」

校門の前で佇んでいる一人の女の子を目撃したのだ。
不思議な女の子だった。
体格的に多分高学年くらいだとは思うが、ランドセルを背負うその子の服は、どういうわけか泥まみれで、やや乾燥して唇も切れているように見える。切れ目からは血が流れ出ている。

「……っ」

「あ……っ」

さらに偶然なのか必然なのか、俺と女の子の視線が合ってしまった。当時、中1のガキだった俺でも可愛いと思えるような女の子。髪は黒く、ツインテールという髪型で、背は伊吹より若干低い感じでおそらく、小学生としては高い方なのかもしれない。

でも、女の子はボロボロだった。服も、体も、可愛い顔まで傷だらけだ。

不思議と俺の足は勝手に動き、次第に少女へ近づいていた。

そして――、

「ど、どうしたんだ……おい？」

「……え？」

弱々しく声を漏らした女の子。

う～ん……このまま放っておくわけにもいかないよな。よし、ここは……そうだな、まず怪我をしているみたいだし、俺は女の子に手当てをしてあげる事にした。

まあ、今だったら捕まるかもしれないけど……俺も昔は中1のガキんちょ。何より学ランを着ていたんだから周囲には、それほど歳の離れていない兄妹に見えたのかもしれない。

俺は女の子を家に連れ込み、とりあえず傷の手当てをしてあげた。

当時小学生の葵は友達の家に行っているようで、この日は家にいなかった。まだ素直だった伊吹も今日は小坂達と用事があるらしい。多分、乱入者は現れないであろう。

「よし、後は大人しくしてれば怪我は治るだろ」

「……う、ぐっ、ありがとう……ございます」

傷の手当てをしてくれたお礼を言う女の子は、何故だか瞳から水滴を零していた。

「いちいち泣くなよ、怪我人放っておけるわけないだろ？」

「で、でも……私は……っ」

「……ああもうめそめそすんなって！　そうだ、ゲームやろうぜゲーム！」

「……うぇ？　げ、ゲーム……ですか？」

「おう、それで気分――晴らそうぜ！」

自分でもよくわかっていなかったけど、それで気分が晴れればいいなぁ……そう思って俺は女の子にゲームを勧めた。既に微オタ化していた俺だが、一応普通のゲームも持っている。とりあえず引かれないように、無難な格ゲーをプレイすることに。

しかし、女の子はゲームすらプレイした事がなかったらしい。なので、俺は一から女の子に操作方法などを伝授する。女の子は大変物覚えがよく、さらに時間が経過した時には――、

「うおっ！？　ま、負けた……？」

「……はぁっ！　っはは、勝った……センパイに勝ちましたっ！」

「強くなったなぁ愛木。格ゲー得意だったのに……」

愛木碧と名乗る女の子に――完膚無きまでに叩きのめされてしまった。

まさか……何も知らなかった子が、短時間でここまで上達するとは……恐ろしや。

それからしばらく――夕方になるまで俺達は盛り上がっていた。

だが、彼女は妹ではない。いつかは家に帰らなければならない。

「えへへ……今日はありがとうございます、センパイ」

「気にするなって、またいつか遊ぼうな」

「……はいっ！」

我が家の玄関にて、帰り際の愛木は輝いていた。出会った時の愛木とは違う、まるであの愛木とは他人であるかのように輝いていた。

そこで愛木は我が家から出て行き、家に帰ったが……結局どうして愛木が小学校の校門前で、傷だらけで佇んでいたのだろうか……。

その理由は結局、わからなかった……。

その理由がわかったのは、それから二日後のことであった。

俺は友達の家に遊びに行ったその帰りで、色々とどっぷりお疲れであった。その日は帰ったらさっさと寝て深夜アニメに備える予定だったのだが……。

「コイツまた泣いてねぇ？」

「ホントだ、マジウケルー！」

なにやら不快な音声が耳に入り、ふと公園のほうを見ていると…
…チッ、ま～た近所の中学のスケバングループかと俺は思った。連中、何かと悪い噂が流れていて、なんでもうちの中学の永渕達と繋がりがあるとも言われていた。そんな不良少女達は今日は――小学生の女子まで率いている。
なんだ、舎弟みたいなモンか？
将来グループに入れる為に教育中といった感じだろう。不良少女たちと一緒にいるヤンキーなり掛けの女子小学生３人は、不良少女たちと一緒に何かを取り囲んでいるようだ。
なんだよ、カツアゲか？

「お、らぁっ！」

「い、いたい！　いたいよ……っ」

「痛いよじゃねーだろ？　ほら、あたいの妹に今日のお友達料払えよ」

「う、えぇ……ごめん、なさい……お金、ありません……っ」

「泣き顔チョーきもい！　姉ちゃんに逆らったらアンタマジ死ぬよ？」

おいおい……ガラの悪い連中に絡まれてるあの子、二日前に俺と遊んだ……。
あ、愛木がどうしてアイツらに？
まさか、あの日愛木がボロボロだった理由ってのは……。
脳裏に浮かんだ一昨日の愛木の姿。俺は衝動的に足を踏み出し――、

「さっさと払えよ！　じゃねーと妹の言う通りテメェぶっ殺し――ッ」

不良少女達の中でも、おそらくＮｏ１であろう眉毛全剃りの茶髪の少女。俺はその子が愛木をぶん殴ろうとした寸前に――手首を握り締めてやった。

突然の事態にその少女やそり取り巻き、そして愛木は唖然とする。

「な、なんだよテメェ！　離せよぉ！」

「別に離してやってもいいけど、てめえ……今何しようとしてたんだ？」

「テメェに関係ねえだろ！　なんだよ、テメェどこ中だよ！」

「そーだそーだ！　つーかぁ、あたしの姉ちゃんから手離してよ」

「中学生の癖に介入するなよ！」

リーダー格の少女と、その妹と友達が一斉に怒声を放ってくる。鬱陶しい……中学生だから揉め事に介入するなって。じゃあ、逆に言い返して論破してやるよ。

「お前らの姉御はどうなんだよ？」

「テメェ！　あたいの妹と妹の友達に文句言ってんじゃねえ！　いいから離せよ！」

「いい加減間宮さんから手ぇ離せよタコ！」

このスケバンのリーダー格、間宮さんって名前だったのか。どうでもいいけど……間宮さんを守ろうと仲間の不良少女の一人が、全体重を乗せた全力の一撃を放ってくる。

が、俺はソイツを寸前で避けてやった。

拳が直撃する寸前に間宮さんの手首から手を離し、ふっと後ろへ後退した。不良少女の小さな拳は俺を捉える事が出来ず、空振りに終わる。

ギリギリと、不良少女の歯が噛み締められる音が聞こえる。

「テメェ……あたいに喧嘩売ったな？　どこ中のなんてヤツだよっ！」

「お前に名乗る名前なんてねえし、俺は女の子とは殴り合いたくないんだが」

「ふ、ざけんな！　テメェぜってーブッ殺す！」

人聞きの悪い子だ。激昂した間宮さんが素早く駆け出し、拳を構えて迫ってくる。

仕方ない、殴るんじゃなくて――力技で押さえ込むとするか。特に、喧嘩の経験なんてないんだけど体は丈夫だからな。多少の無理なら――どうってことないぜ。

「お、あああッ！」

素早く放たれた右ストレート。俺はそれを避けた直後に右腕をしっかりと掴み、右腕を背中に回して無理やり彼女の向きを変え、空いた左手で肩を掴んだ。

関節技である。これなら痛いだけで、女の子を殴らずに抵抗を無

くする事ができる。

「い、いてててててっ！　ちょ、離せテメェ！　離しや――いて、いてててっ！」

「暴れるなよ……抵抗すればするほど痛いぞ、こういう技はなぁ」

「間宮さん！」

「やべえよコイツ、間宮さんのストレートかわして関節技だよ？」

「わ、わかった……今回は引いてやるから間宮さん離せよ！」

しょうがねえなあ……あんまり女の子を痛めつけたくないし、俺の趣味でもない。というわけで俺は間宮さんから手を離し、彼女を解放して仲間の下へも戻してあげた。

「う、あ……くっそ、痛ぇっ」

「だいじょーぶっすか間宮さん！？」

「う、ぐ……お前ら今日は撤退だ。テメェ次会ったら覚えてろよ！」

負け犬の遠吠えという言葉はこういうことだな。不良少女たちは捨て台詞を吐き、一目散に公園から逃げ出してしまった。次会ったら覚えてろとか言っているが、多分もう会わないだろ。

というか、3年の永渕と関わりあるみたいだし、出来れば二度と会いたくない……。

当時の――永渕と関わる前の俺はそう思っていた。

「センパイ……っ」

「あ……愛木、お前……っ」

目の前に居るのは一昨日、輝いていた愛木ではなく――出会った時の愛木であった。

今にも涙腺崩壊しそうで、かつ傷だらけの彼女。

決定的な瞬間を目撃してしまった俺は――もう彼女の事を放っておけなくたったのだ。

第２０５話，中学１年の春　前編（後書き）

後書きトークコーナー！

純奈「クソ介がロリコンだってわかる回だったね」

凪紗「全くだ。藤島……まさか小学生に手を出そうとは」

圭介「あの、俺当時中１なんですけど？」

純奈「関係ないんだよ！」

凪紗「そうだ、藤島はロリコンだ」

圭介「信じてくれねえし……クソ、こうなったらぶっちゃけるしかねえな」

凪紗「ん、どうしたんだ藤島？」

圭介「まったく、小学生は最高だぜ！」

凪紗「……素で引いたぞっ」

純奈「おまわりさんこっちです！」

圭介「こんな反応するとは思ってたよ！」

※圭介ｖｓすばるんロリコン対戦。勝敗は……多分すばるん。

第２０６話，中学１年の春　後編

あの後、俺は再び愛木を家へと連れて行き、怪我の手当てをしてあげた。彼女が怪我している理由がわかった以上――このまま放っておくわけにはいかない。

「よし、これで大丈夫なはずだ」

「あ、ありがとう……センパイ」

愛木は静かに謝ると、そのまま俺の様子を上目遣いで窺ってくる。これまた強烈、愛でたくなるような可愛さに、思わず照れから視線を逸らしてしまいそうになったが、ダメだよな。愛木を安心させるためにも出来るだけ、愛木のことを見ていてあげるべきか。

いや、かえってジロジロ見られると気分悪くするかもしれないし。全く、女の子というのは難しいものだぜ……。

とにかく……さっきのことを話しておくべきだろうか。本人はあんな現実に、触れたくもないかもしれないけど、俺も事情を知っている以上愛木の力になりたい。

なにより――何時までも逃げるばかりじゃダメだと思うんだ。

「愛木、お前……さっきの奴らとは知り合いなのか？」

「え、は……はい、一応……」

「まあ……改めて説明しなくても大体わかるけどさ、どうしてあんな事になってたんだ？」

「……」

俺の問いに、愛木はやっぱり黙りこんでしまった。
予想通りの反応といえばそうなんだけど……どうする、こうなったらラノベで鍛えた女の子を慰める話術を行使するか。馬鹿みたいな案だけど、これはわりと真剣に考えた結果だ。

「別に俺は責めてるわけじゃないよ、俺はな……その、お前が心配なだけなんだ」

「……ほんと、ですか……？　センパイは、醜いとか……思わないんですか？」

「逆に聞くけど、そう思わなきゃいけない理由ってあるのか？」

「そ、それは……っ」

「人が何を思うかは人それぞれだよ。俺は少なくとも、お前を醜いとは思わない」

むしろ色々とムカつくよ……あの間宮さんってスケバングループに。なんだってこんな可愛い子をあんな目に遭わすんだよ。愛木がこんなに傷つくまで責めやがって……。
でもなぁ、もうアイツらとは会わないだろうし、アイツらにキレたった仕方がない。
流石の俺もそこまで子供ではない。馬鹿な真似は出来るだけしないようにする。

「センパイ……珍しい人ですね。今まで、そんな風に言ってくれた人は……っ」

「それでも、あの間宮たちが多数派だとしても、俺はお前が言う少数派を貫き通すよ」

「……ダメですよ、センパイ……絶対、迷惑掛けますから……」

「そんなとこはない、俺がやりたいと思ってやってるんだ。迷惑なわけがないだろ？」

「あの人達……執念深いんですよ？　センパイまで……標的に……っ」

小さな顔を膝にうずめてしまった。こんな状況で恥ずかしさはありえない。おそらく愛木は涙を隠そうと必死なのだろう。それにしても、愛木がここまで俺を心配していたとは……。

それだけで十分、嬉しい気がするよ――だけど、

「大丈夫、俺はそう簡単にやられるヤワな奴じゃないからな」

「で……です、けど……」

「俺は愛木が心配なんだよ、放っておけないんだよ……だから、俺は愛木の味方をする」

「……えっ？」

「し、信じられないとか言うなよ？　これはもう……なんつーか、決定事項だからなっ」

俺だけはずっと味方でいてやるという、よくあるセリフを言ってみたかったが……なにこれ滅茶苦茶恥ずかしいぞ。ここまで顔が熱

くなるほど恥ずかしいセリフだったとは……。

「ありがとう……ございます、センパイ……」

「気にするなよ。当然だろ、俺と愛木は先輩後輩……んで、友達だからな」

最も、俺が勝手にそう思っていただけかもしれない。その時の、愛木を慰めるために選んだ言葉だったのかもしれない。それでも、友達という一言は愛木に希望を与えた。

小刻みに震えながら、愛木はゆっくり顔を上げて、

「本当……ですか？　センパイは……友達、なんですか……？」

「二回も家に来て、一緒に遊んで、今はお悩み相談して。友達以外の何だって言うんだ？」

「せん、ぱい……っ」

「み、見くびってんじゃねえぞ。そんなの当たり前じゃねえかよ」

「うぅ、え、ぐ……センパイ……ありがとう、ございます……っ」

遂に我慢の限界に達したのか、ダムが決壊するかのように涙を流し始めた愛木。今の俺に出来ることと言えば、精々気持ちを落ち着かせる為に、愛木の頭を撫でてあげるくらいだろう。

少しでも、それで気分を和らげて欲しい。

そう思いながら、俺は愛木の頭をわしゃわしゃと、優しく撫でてあげた。

「愛木、それとさ……お前も少しは強くなろうな？」

「え、ぅ……つ、強く……ですか？」

「ああ、これくらいで折れてたら――絶対アイツらには勝てないぞ？」

「……無理、ですよ……私、強くなんて……っ」

強くなりたい弱者は最初は誰もがそう思う。強者じゃない俺が言うのもなんだけど、自分は弱いからこれは無理だとか、そういうネガティブなものは誰だって通る道だろう。だけど、本人がそんな風に思っているからこそ――その本人には余裕が残されているんだ。

まだ、自分でも気付いていない――凄まじい潜在能力が。

「なれるよ。別にジャイアント間々（まま）のように、屈強になれなんて言ってない。俺が言っているのは人並みには強くなろうぜってことだよ。体じゃなくて心のほうをな」

どんな弱者だって、その気になれば人並みに強くなることはできる。俺はその弱い子が人並みに強くなった例を知っている。幼稚園の頃から一緒だった――伊吹がそうだ。

孤独で、いつも泣いていた伊吹も、今では友達もいて元気な普通の女の子だ。

きっかけ。

そう、要はきっかけさえあれば――俺らは化けるが出来るハズだ。

「で、でも……強く言ったらきっと、あの人達……もっと痛い事してきますよ……？」

「大丈夫だ。むしろ、何も抵抗しないからアイツらは面白がるんだよ」

「で、でも……っ」

「本当はアイツらに、文句が山ほどあるんだろ？　だったらその文句を全部言えるようになればいい。自分の思っている事を――素直に何でも言えるようになればいいんだ」

そうするまでの一歩を踏み出すのが大変だけど、強くなるにはそれしかない。弱者が強者になるのに近道なんてないんだ。でも、別に鬼のような修業をするわけではない。決して、愛木のことを責めまくるわけでもない。ただ――愛木が素直になればそれでいい。

それだけで十分、愛木は強くなれると思うんだ。

実行するのは難しいかもしれないが、多分愛木なら大丈夫だと思う。

俺は愛木を信じるよ――。

「す、素直……？」

「おう、なよなよしないでハッキリと、物事を言えればアイツらに勝てるって」

「……で、でも……私には……っ」

そうだよな、いきなりそうしろなんて無理に決まっている。それを理解した上で、彼女が強くなる為のとっておきの修行方法がある。

たった今思いついた――とっておきの方法がな。

「だったら、俺にアイツらの愚痴を言ってみろ」

「……えっ？　せ、センパイに……ですか？」

「俺になら元気よく言えるだろ？　だから、まず愛木は人に慣れようぜ？　その為なら俺、何時だって練習相手になってあげるからよ」

「うぅ……センパイ、本当に……本当に、それで……っ」

「俺は問題ないぜ、後は愛木次第。愛木は間宮達から解放されたいか？　もっと――大きな存在になりたくないか？」

俺の言葉の後、しばらく考え込んだ末――愛木は首を縦に振った。
それが愛木の、強くなりたいという合図である。

約1時間後、決意した後の愛木はそれはそれは正直。俺の見込み通り、愛木は俺となら普通に話せるみたいで、間宮達に対する愚痴を沢山言ってくれた。それで本当に、愛木が間宮達にひどい目に遭わされていたんだな～という事を俺は知った。
でも、1時間に渡る愚痴で愛木は気分が晴れたらしい。
最後のあたりでは、愛木に昨日のよう――眩しい笑顔が戻っていたのだ。

「あの、センパイ……今日はありがとうございました！」

「気にすんなよ。俺達友達なんだから――お悩み相談は24時間タダだぜ？」

「うん！　ありがとう――センパイ♪」

完全に元気を取り戻した、愛木碧という一人の弱かった少女。

この後、少女は見違えるほどに強くなった。
愛木をいじめていた間宮達と、間宮の妹やその友達で愛木のクラスメイトの、ヤンキーになりかけの女子集団は、ある日を境に愛木をいじめなくなったようだ。理由は簡単、愛木が間宮達との口論に勝利したからしい。その時素直に思ったよ……愛木、やれば出来るじゃんってな。
結局愛木は、自分で思っているほど弱い生き物じゃなかったんだ。もっと強いハズなのに、自分で本当の強さを押さえ込んでいた。だから愛木は馬鹿の標的にされてしまったのだろう。でも、目を覚ました愛木の輝きは日に日に増していった。

それから何ヶ月後かな。多分、永渕が伊吹を襲う一週間くらい前の話だ。突然愛木は父親の都合で転校することになってしまった。父親の転勤で、一家ごと引っ越しをするらしい。

「はぁ、今日で愛木と会えるのも最後かぁ」

「センパイ、そんなに寂しがらないでくださいよっ。そのうち絶対会いに行きますからっ！」

「その日が待ち遠しいぜ……」

「へぇ～、センパイって私が好きなんですか？」

「なんでそうなるんだよ？」

「じょーだんですよじょーだん！　でも、センパイがどぉーしても言うなら、私センパイの彼女になってもいいですよ？」

「うっせ！　余計な世話だっつーの。そういうお前は俺の事が好き

なのかよ？」

「はい！　先輩として、友達としては！」

ぐは、そういうオチかよ……ちくしょう、一瞬期待しちゃったじゃねえかよ。その期待していた気持ちを返せ。今思い出せばあの時の俺、少しは愛木の事を意識していたのかもしれないな。

思い切って告白すればよかったかもな……まあ、今はもういいんだけどよ。

「あ、そろそろ電車の時間です」

「おう、それじゃあ……まあ駅までは送ってくよ」

「だいじょーぶですよっ。お父さんもお母さんもいますから、センパイに来られると恥ずかしいかもです」

「そ、そうか……じゃあ、ここでお別れか……っ」

「やっぱりセンパイ、私の事好きなんですか？　いっそ遠距離恋愛しちゃいます？」

「だぁぁもう、うっさいわ！　引っ越すんならさっさと引っ越せ！」

「はいは～い。それじゃあ、冗談じゃなくて本当に引っ越しちゃいますねっ」

ホント、何かと調子の狂うヤツだったよな……失恋直後でもあったし。あれ、やっぱり俺って愛木の事好きだったのかな。ちくしょう、遠距離恋愛しておけばよかったかも。

まあ、遠距離って長続きしないって噂だが……。

「愛木、元気でな」

「はい、センパイのほうこそ――いつまでも元気でいてくださいねっ」

いつまでも元気……か。愛木から言われたその言葉、俺は守れてたんだろうか？

元気と言えば今は元気だけど、その一週間後から数年はねえ……まあ、助けたい人がいたからって殴り込みをし掛けた、俺も馬鹿だったんだけどさ……。

でもまあ、別にいいか。元気でいろって命令には概ね従えていると思うし。

「センパイ！」

１０メートルほど走った後、愛木がいきなり振り返ってきて叫んできた。

「センパイ、私達――ずっと友達ですよね？」

「そんなの答えは決まってんだろ――永遠に変わらねえよ」

「はい、センパイ――また会いましょうね！」

「おう……」

こうして、愛木は古宇坂の街を去ったのだ。その背中は最高に輝いていた。その輝きを保ったまま突き進んだのだろう、愛木はその

後芸能界デビューを果たした。
それだけではない。今ではＯＫＢ４８に並ぶ人気を誇るアイドルになった。
性格も何だか、駅での別れの時より明るくなっている気がするし、なにより――愛木はまだ前進し続けているような気がする。まだまだ終わりではない、むしろこれからという感じだ。
俺を置いてどこまで行くんだか……。
でも、本当になっちまったよな……大きな存在に。
これが……俺と愛木の過去の話。愛木と仲良くなった理由である。

第２０６話，中学１年の春　後編（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「け、圭介が主人公してる！？」

千早「ほ、ほんとだ……わたし、あんな風に口説かれたことないのに……っ」

凪紗「私達、悪い夢を見ているのかもな」

伊吹「そうよ、私の圭介があんなにイケメンなわけないでしょ！」

暮葉「伊吹さんの同意なのです。けーすけ様はえっちすけっちわんたっちなのです！」

圭介「俺に対する評価が散々すぎる……っ」

第２０７話，返事

所変わって、とある住宅街にある公園。そういえばこの辺は浅間家の近所。あかりは前に愛木のファンだって言っていた気がするけど、もしここにあかりが現れたら喜ぶんだろうな。

俺はこの公園のベンチに座り、愛木と２人で盛り上がっていた。普段の日常、それぞれの人間関係でおもしろいことなど、正直しょうもない話ばかりだけど、それがまたおもしろい。こうして駄弁るだけで不思議と楽しいんだよな。やっぱ、俺と愛木は仲のいい友達だぜ。

「へえ、それじゃあ芸能活動は上手くいってるんだな」

「はい！　みんな超いい人ばかりですよっ、センパイのほうはどうですかっ？」

「俺？　俺はまあ……普通の学生生活をぐーだら過ごしてるよ」

本当は普通とはかけ離れて、ドラマティックかつアクロバティックで、その上デンジャラスなハードすぎる日常を送っているんだけどね。でも、そんな事を愛木に言えるハズがない。サヴィエトやら魔法使いという存在が表に出たら、それこそ暮葉達のピンチでもあるんだからな。

「あっ！　いけない……そ、そろそろお仕事っ！？」

「あ？　仕事ってお前、もしかして古宇坂に戻ってきたのって仕事の都合か？」

「はい……今日はこの辺でライブなんですよ。それでその、仕事の前にセンパイに会いに行こうかな～なんて思ってたら……」

「ああ、それで不良に絡まれていたのか？」

「センパイ、あの時はありがとうございます！」

「いや、気にするなよ。ていうかあの状況をなんとかしたのは日向さんだしさ」

俺はただボコられてただけな気がするけど……そういえば、なんだか腹の痛みが時間の経過と共に消えてきた気がする。流石は俺の身体、丈夫な上に回復力も尋常じゃないな。くそ、もう少し後で日向さんと戦っていれば、もう少しだけスマートに勝てたかもしれなかったのに……。

まあ、今更気にしたって仕方ないよな。

それに俺、今はテスト勉強しないと――明日のテストが本格的にヤバい。

「いや、センパイがいなかったらあたし……とにかくありがとうございます！」

「お、おう。今度から気を付けろよな？」

「はい！」

なにもしていないんだけどなぁ……まっ、お礼を言われるのは嫌な気分ではない。

少しだけ――役に立てた気分になれるからな。

「それじゃあセンパイ。あたし、そろそろ仕事に行きますねっ」

「おう、また古宇坂に戻ってきたら会おうぜ？」

「あっ、そうだ！　センパイ、アドレス交換しましょうよ！」

「そっかぁ、お前携帯持ってたんだ。いいぜ、それじゃあパパッと交換しようか」

こうしてお互いポケットから携帯電話を取り出し、赤外線通信でアドレスを交換。あの頃は俺も愛木も携帯なんて持っていなかったが、今は2人とも持っているんだ。折角だし、このまましばらく連絡も出来ないのは嫌だ。だから今のうちに――連絡先くらいは手に入れておこう。

こうして俺と愛木は互いに連絡先を知り、いつでもメールと電話が可能になった。

まあ、頻繁にはしないだろうが……なんだか嬉しい気分だな。

「これで遠くに行ってもだいじょーぶですねっ」

「そうだな、圏外に行かなきゃ何の問題もねえな」

「はい！　それじゃあセンパイ、そろそろ時間でホントにやばいので――」

「おう、今度こそ元気でな。お前のアルバムとかちゃん買ってやるからな」

「はい！　またいつか――」

愛木はこれから仕事だ。アイドルってのは本当に忙しいんだな。
まあとにかく、愛木とお別れの挨拶をした後、愛木は俺に背を向け職場へ――、

「ん、おー圭介じゃん……って、えええええっ!?　み、みどりちゃん!?」

俺に挨拶をしたり驚いたり、感激したりと色々忙しい声が聞こえてきた。
小柄で明るい髪色のツインテールの少女。
浅間あかり。そう、俺の後輩にして――愛木みどりの大ファンな少女である。
つーか、なんてタイミングで登場するんだよ。確かにここ浅間家の近所だけどよ……。

「う、わっ!?　あ、あの……貴女はっ?」

愛木のヤツも商売モード。
アイドルお得意の猫かぶりを始め、急に大人しい清純系の少女に変貌する。

「あたい、浅間あかりです!　あの、あたいみどりちゃんのファンなんです!」

「えっ?　そ、そうなんですか?　えへへ、ありがとうございますっ」

ぬぐわあああああああ!
き、気持ち悪ぃ……あかりも愛木も猫かぶってて気持ち悪いぞ。
まずあかり、お前はそんな敬語を使うようなキャラじゃない、もっ

とやんちゃで子供っぽいヤツだろ。
なんですか、その元気な後輩系キャラは！？
それから愛木。お前はそんな青山さんっぽいキャラじゃないだろ。いつもはもっとストレートかつ元気で、そう……あかりに近い女の子だろうが。
ああ……猫かぶりも程々にしといてくれぇ。

「お、おい圭介っ！」

「なんだよあかり……」

「なななんで圭介がみどりちゃんと一緒なんだ！？　どこで知り合ったんだよ！？」

ぐは、あかりに胸倉を掴まれてしまった。
あかりのヤツ、小柄な癖に力あるなぁ……妙に苦しくて呼吸がし辛いぜ。

「知り合うも何も、俺と愛木はいわゆる先輩後輩なわけで……？」

「なんでもっと早くに言わなかったんだよ！　みどりちゃんと知り合いだったなんて……そういうことは早めに言えよなっ！」

「久々に会って連絡先今まで知らなかったんだよ！　仮に報告しても信じねえだろお前！」

全く、あかりの理不尽さは相変わらずだな。あかりらしいと言えばそうだけど、この理不尽なキャラを愛木はどう思うことやら。でも、テンションだけは愛木に近いしなぁ。
案外、愛木とあかりはいい友達になるかもしれない。

「み、みどりちゃん！　その、あ、あたいに――サインください！」

胸倉から手を離して愛木の下へ駆けて行ったと思ったら、いきなりかよ。好きなアイドルのサインが欲しい気持ちは分からないでもないが、あまりにも直球過ぎるだろ……それは。つか愛木もこれから仕事があるんだから、ごめんの一言も言ったらどうなんだ？

さっきから愛木はずっと――輝かしい営業スマイルを浮かべていた。

でも、視線で「センパイ、助けてください」と言われている気もしました……。

それから僅か2分後。営業スマイルを浮かべていた愛木は、凄まじい速筆でＡｉｋｉ　Ｍｉｄｏｒｉとサインを書きあげ、多くのファンが泣いて、土下座して欲しがるであろう、貴重な一枚をあかりはいとも簡単に手にする。そして、サインを書き終えた愛木はと言うと、

「それでは仕事があるので、これにて失礼しま～～～す！」

と、大声で叫びながら、まるで牢獄から逃げ出すように走り去っていったのだ。

愛木……ごめんよ、俺の後輩が迷惑かけちまった。仕事――時間間に合えよ。

「はぁぁ、みどりちゃんのサイン……もうあたい死んでもいいやっ」

「どんだけ価値高いモンなんだよ！」

「ふん、オタクの圭介にはどーせわからないだろっ！」

「あのなぁ、そのセリフはオタクに対する冒涜だぞ？」

オタはオタなりに価値高いものがあるんだからな。例えば、ゆ○ソフト新作が発表と聞いた時にはガチで幸せな気分になれたよ。まだ詳細は不明だが、既に購入決定だぜ。

だってねぇ……こ○いち先生とむ○りん先生の絵、俺的には素晴らしいんですぜ。

「……」

あれ、おかしいな……急にあかりが静かになった気がする。

さっきまで愛木のサインを貰って、ガンプラ貰った少年のようにはしゃいでいたのに。

不思議だなぁ……一体どうしたのだろうか？

「なあ、圭介……っ」

「お、おう」

「……つ……んだ？」

「……えっ？　今なんっつったんだ？」

声が小さすぎて全然聞こえなかった。言っておくが俺の耳は悪くないぞ。これでも聴力検査では優秀な成績を残した地獄耳だ。単にあかりの声が小さ過ぎただけである。

「だ、だからっ！　返事、いつしてくれるんだ……？」

「返事？　あぁ、そうか……まだだったよな」

既に8月も末だと言うのに、8月17日から俺はずっとあかりを待たせている。あかりが俺にしてきた告白に対する返事を、彼女はずっと待ち続けていた。色々と忙しかったし、部活であかりに会っても2人きりになる機会は中々訪れず、結局今日まで返事はしていない。

もう、答えは決まってんのにな……決心しているっていうのに。

「圭介……ど、どうなんだ？　決着はついたのか？」

「ああ、とっくの昔にな」

「ええっ！？　だ、だったらさっさと返事しろよな！」

「仕方ねえだろ。ここの所色々忙しかったんだし……」

「忙しかった？　圭介……アンタ、まさかまた面倒事に巻き込まれのか？」

ギクッ、と一瞬、背筋が凍りついたような気がした。

あかりの指摘通り、面倒事に巻き込まれていたんだけど……言えねえ、ポルトガルで戦って重傷負いましただなんて、今のコイツには絶対に言えねえ。

「違う違う、色々用事があったんだよ」

「用事って……圭介はいっつもそれだな。あたいに内緒で二股かけるなよっ！」

「二股も何も、俺らそんな関係じゃないだろ？」

「こ、これからなるかもしれないだろ！　で、圭介……えと、どう……なん、だ……？」

期待半分、不安半分と言ったところだろうか。すっかり紅潮しているものの、どこか落ち付かない感じである。コイツ……振ったら泣くんじゃないだろうか？

いや、でもなぁ……俺は正直な気持ちを伝えたい。

これはちょっと困ったなぁ……。

「……ごめん」

「……ッ」

一言。

たったの一言で、あかりの顔色が明らかに変わる。わかっていた。というか、わざわざ予想なんてしなくても、これが当然の反応だろう。

惚れている状態でこんな事を言われて――ショックを受けない人はいないはずだ。

「あかり？」

「……ふぁ、な……なんだよっ」

虚勢を張ろうとしているが、既に遅い。

あかりは後退りをしながら、目に涙を浮かべている。

小さな体は小刻みに震え、今にも崩れ落ちてしまいそうであった。

「……これ、使うか？」

ポケットの中からシンプルなデザインのハンカチを取りだし、あかりへ差し出す。

「あぁあ、あたいは、な……泣いてないんだからな！」

「そんなこと言われても、お前……説得力が皆無だぞ？」

「う、うるさい！　圭介のせいだ！　圭介の……うぅ、けい、すけぇ……っ」

「……」

心に傷を負ったあかりは、その後もしばらく泣き続けていた。

昼も近い公園でいつまでも泣き続けるあかりに、どうしてやることもできなくて、

俺はただ、彼女のそばで佇んでいた。

第２０７話，返事（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「今回はちょっとした報告だぜ」

大吾「報告？　まさか、僕が主人公に！？」

圭介「ねーよ」

大吾「ですよねー」

圭介「え～っと、今回は【登場人物紹介】の敵キャラと味方キャラに、キャラを追加しました」

硬質のノーム「それはいい話ですねー、では私を1話に渡って紹か（ｒｙ」

邪炎のサラマンダー「黙れ、貴様は地獄にでも堕ちろ」

ノーム「ぎゃあああ！　に、二回も粛清されるなんて不幸ですねー！」

圭介「……なんなんだ、これ？」

大吾さあ？」

風剣のシルフ「後書きでは私らまでおちゃらけ集団なのねぇ？」

第２０８話，あの日

８月２８日の大体午後５時くらい。相変わらず暮葉と葵は家におらず、俺は一人で悶々と勉強に明け暮れている。ちくしょう……英語も数学も化学もサッパリわからん。

あの後――公園で泣き止み、ようやく落ち着きを取り戻したあかりを話し合いをし、結局今後もお友達ではいましょうという結論に達した。それはいいんだけどさ……なんつーか、別れ際のあの寂しそうな顔を思い出すと、俺も何だか罪悪感を感じてしまう。

なんでだろうなぁ。素直な気持ちを伝えただけなのに……。

俺は暮葉の事が好きなのになあ……。

まさか、あかりがあそこまで泣く子だったとは思わなかったぞ。

やっぱ、男という生き物は女という生き物の涙に弱く、この俺も例外ではない。あかりの涙ですっかり参ってしまった……。

はぁ……朝から喧嘩したり、女の子振ったり、勉強したり……心身＋頭脳が疲れた。

そんなことをぼんやり考えながら、数学の問題集を解いていると――、

携帯が振動した。

メールか、しかも赤佐からとは珍しい……。

『ひゅーどろどろどろ♪　おめでとう、今から君はハワイ旅行や』

なんだこの怪しいかつ不吉な文脈……つーか赤佐、ふざけてるのか？

どろどろってなんだよ。ハワイ旅行ってなんだよ。意味が全然わからねえ……。

そして丁度その時、一階のほうから物音が聞こえてきた。

なんだ、暮葉達が帰って来たのかな？

「……あれ？」

足音がこっちに近付いてきている気が……お土産でも買ってきたのだろうか？

と、呑気な事を考えていた――、

「ちぇすとぉー！」

「ナイス黒やん！　よぉ～し藤島喰らえ！　身長１８０ｃｍショルダー・タックル！」

刹那、

扉が蹴飛ばされたように荒々しく開けられ、その上何かデカい人が突進してきて、

「ぐ、は……ッ！？」

ドン！　という壮絶な音が炸裂し、気付いた時には俺は床に倒れていた。何が起こったかサッパリわからぬまま、突然現れた暴漢達の声が室内に響いている。

「いや～我ながらええ体当たりだったなぁ」

「チョクト、テメェ呑気な事言ってる場合か！？　藤島はタフだから復活するぞ！？」

「へいへい、そんじゃあ――体重６８ｋｇ首筋エルボー！」

さらにズン！　という、首の骨を砕くような衝撃が伝わり、呼吸困難に陥る。何が体重６８ｋｇ首筋エルボーだよと思ったが、これがまた滅茶苦茶な威力であった。ちくしょういてぇ……しかも衝撃で意識が段々遠のいて行く気もしないでもない。

ていうか、この声って……あ、赤佐と……くろ……き……？

……。

うう……なんだ、頭が妙にぼんやりとしているぜ。

ていうか、さっき俺の身に何が起こったんだろうか。あまりにも突然すぎて、とりあえず黒木と赤佐のせいだということはわかったが、結局何が何なのかはサッパリで……。

まあいい、アイツらに報復しよう。そうだな……恥ずかしい話でもしてやるか。

去年の宿泊研修でアイツらのナニのサイズ、案外小さかった事をバラすとしよう。

そうと決まれば早速――あれ？

「えぇッ！？　ちょ、縛られてるし……なにこれ怖っ！？」

どうして俺、縄で縛られ椅子に固定されているんだろうか。そして今気付いた、我が藤島家は大変現代的な家であり、和室は一室だけあるんだが……こんなに広い和室はなかったハズだ。

ていうか、どこなんだよここは。

ありえねえだろ……なんかその、立派な古い日本家屋みたいな感じだけど……？

「くそっ、縄抜けの術……って、そんなプロ級なこと俺に出来るわけねえし……っ」

どうする？

何故、俺が広い和室に監禁されているかもわからないが、とにかくピンチだ。早急にここを脱出しなければ、物凄く面倒な事に巻き込まれてしまいそうな気が……。

「ひぃっ！？」

その時だった。緊迫感に包まれる和室の襖が――なんと勢いよく開けられたのだ。

不意打ちに悲鳴を上げる。まずい、ここは和室と見せかけて実は牢獄。まさか三馬鹿ってのはサヴィエトに雇われたおバカトリオだったのか？

仮にそうだとしたらまずいぞ。くそっ、こんな時に限って暮葉はいないし。ああ、もう暮葉でも誰でもいいから俺を助けてぇ――。

「うわぁ……アイツらホントに馬鹿でしょ。なんで圭介のこと縛ってんのよ……？」

心の中で助けを求めると同時に、和室に入ってきたヤツの姿が目に入ってくる。可愛らしい柄のTシャツにベスト、白いスカートを穿いた銀髪の小柄で八重歯が特徴的な女の子である。

待てよ、コイツは誰がどう見たって……。

「い、伊吹？」

「捕獲はしろって言ったけど、何も手荒な真似しなくても……三馬鹿に頼んだ私が馬鹿だったわ」

意味分からんこと言ってるけど、やっぱりあれは三馬鹿の仕業だ

ったんだな。で、伊吹もその三馬鹿に関係あるってことは――俺の監禁を提案したのは伊吹なのか？

「……てめえ、こいつはどういう意味なんでせうか？」

「わ、私のせいじゃないわよっ！　三馬鹿よ、全部アイツらが悪いのっ！」

「はぁ……それはわかったから、どうしてこうなったかを説明してくれよ……っ」

「えっ？私の提案じゃないわよっ？　た、ただ今日はあの日だから……？」

「あの日ってなんだよ。明智も似たようなこと言ってたけど……ひょっとしてお前らグルなのか？」

明智が言うあの日ってのは前々から気になっていたけど、まさか伊吹にも関係あるとは予想外の展開だったな。ていうことは……アレ、明智の彼氏疑惑には関係ないのか？

いや、だが……伊吹は明智と友達だし、明智に協力しているかもしれないからな。

「べ、別になんでもいいでしょ！　察しないさいよばかっ！」

しかも、明智とグル疑惑のある伊吹も明確な回答を控えている。これはますます怪しい。もう少し――調べる必要がありそうだな。

「どうでもいいけど、縄解いてくれよ……キツくて苦しいよ」

「元よりそのつもりで来たのよ……？」

何故か恥ずかしそうに言いながら、伊吹は歩いてこちらに向かってくる。ふぅ、これで縄地獄から解放される。心おきなく家に戻って勉強が出来る――。

「きゃ！」

えっ？　と俺は声を漏らす。

畳だけの何もない所で伊吹が躓き、バランスを崩してこちらに倒れかけてきたのだ。

ちょっと待て、このままじゃ隕石【伊吹】が直撃コースじゃねえか？

しかし、縄で縛られている俺はロクに動くことも出来ず、

「ひゃあ！」

「うわっ！？」

バランスの崩れた状態から体勢を立て直すことも出来ず、そのまま倒れかかってきた伊吹は咄嗟に俺にしがみ付いた。それは多分、最低限の防衛の為の行為だったんだろう。ところが、俺の体に支えられたとは言え、倒れる状態からではすぐに動きを止める事はできない。

伊吹はそのまま圧し掛かってきて、少しの痛みと、唇に柔らかい感触を覚えた。

ようやく伊吹の動きも止まり、何が起きた？　と、目を開けたその時、

俺はようやく――事の重大さに気付いたのである。

「……ッ！」

えっ、ちょ……あかんコレ、俺と伊吹の唇が触れ合っている。
これって……どう説明しようがアレ以外の何者でもないよね？

「ひゃあっ！？」

伊吹もようやく気付いたのか、甲高い悲鳴を上げながら素早く俺から離れた。
相変わらず椅子に縛られ、身動きの取れない俺との目が合う。時間が経つにつれ、伊吹の顔がみるみると赤くなっていき、ぷるぷると小刻みに震えていくのがわかる。
微妙に涙目でもある。まずい……このままじゃ引っ掻かれるかもしれないっ。

「ご、ごめん伊吹っ！」

「いや、その……あ、あんたのせいじゃないし……べ、別に、謝らなくても……っ」

すっかり真っ赤になってしまった伊吹は俯きながら、しかし、時々チラチラとこちらの様子を目で窺いながら言う。単に恥ずかしがっているような……でも、ちょっと違うような。
いつもなら怒る癖に、今日の伊吹はちょっと変かもしれないぞ……？

「ね、ねえ……っ」

「お、おう……」

気まずいなぁ……ただでさえ、最近伊吹と気まずい状態が続いているのに、今の事故キスのせいで余計に溝が深くなったような。それこそ、マリアナ海溝よりも深い溝が……。

「あんた、さ……今日、何の日か本当に覚えてないの……？」

「今日？　今日って……テスト前日だろ？」

「ち、違うわよ馬鹿っ！　私が凪紗に言ったからその……こういう事になったのに……っ」

「お前が明智に？　って、何言ったんだよ」

「だ、だから……その、あんたの……っ」

まだキスのことを引きずってるのだろうか。俺もドキドキしてるけど……あ、アレはどう考えたって事故じゃねえか。事故は事故、それこそその事故で変なスイッチが入っちゃったら、色々と取り返しのつかない事になりそうだけど。でも、事故は事故――気にしないほうがいい……と思う。

それなのに伊吹は未だに恥ずかしそうに、まるで俺を意識しているかのように……。

てか、絶対意識してる……よな？

むしろそれ以外には考えられない。この反応、仕草、あの潤った瞳……まさか、昨日教会で言い損ねたことって、まさか……マジで伊吹は俺の事を――？

「伊吹～まだ？」

「ひゃあっ！？」

「うわあぁっ！？」

と、その時――空気の読めない3人組が和室に乱入してきた。

雰囲気クラッシャー。突然すぎる事態に俺も伊吹も悲鳴を上げてしまった。

「うわっ、もしかしてあたしら邪魔だった？」

「しかも国宗と緊縛ＳＭプレイとな！？　僕が貸したエロゲーの真似か！？」

「まあ、とにかく圭介ってマニアック……というかドＭだったんだね」

小坂、大吾、重原……てめえらなんてタイミングで登場しやがるんだ！

「あ、いや……違うのよ！？　圭介を縛ったのは私じゃないわよっ！」

「おい馬鹿野郎共っ！　勝手に俺の性癖決めつけてんじゃねえ！」

大体大吾も重原も俺の性癖知ってるだろ。エロ本貸し借りする仲じゃねえかよ、だから俺にドＭ属性がない事知ってるハズなのに。ちくしょう、小坂にドＭと思われたらおしまいだぞ。

小坂は地味にＳっぽいし……うん、ばれたら駄犬呼ばわりされそうだ。伊吹は普段の行動に反してドＭっぽいから何もないとは思うけど……。

ていうか、誰にだって緊縛プレイが趣味だとは思われたくねえよ。

「それより国宗さんまだなのかい？」

「そうだよ、僕達の準備は完了。もうみんな待ちくたびれてるぜ？」

何の準備をしていたんだろう。というか、それ以前にもっと気になる事がある。

なんで大吾や重原、そして小坂までこの場にいるんだよ――？

「伊吹、早く圭くんの縄解いてあげなよ」

「う、うん……い、言っとくけど圭介はロリコンよっ！　ドMじゃないわよっ！」

「うん、あたしらは知ってるから大丈夫だって」

ひでえ……ドMも嫌だけど、ロリコン呼ばわりされるのはもっと嫌だ。

それに頷く小坂も十分ひどいや。くそっ、俺ってそんなにロリコンなのか？

「あ、けーすけ様っ！　……って、けーすけ様縛られてるのですっ！？」

「お兄ちゃん緊縛プレイが趣味だったの！？」

また新たな奴らが現れたし。今度は暮葉と葵かよ……どうなってるんだ？

しかも葵にまで緊縛プレイが趣味だと思われたし……もうやだ、死にたい。

それはそうと、伊吹が今縄を解いてくれた。おかげでようやく自由の身だぜ。

解放された俺の前に――暮葉と葵が歩み寄ってきた。

「それじゃあ、行きましょうけーすけ様っ！」

「えっ？　い、行くって何処にだよ？」

「お兄ちゃん鈍いなぁ。会場に決まってるんだよ？」

はっ、会場？

どういう意味なんだよそれ。大吾や小坂達も微笑んでいるように見えるし。コイツらは俺の知らない所で何をやっていたんだ？

会場ってなんなんだ？

結局あの日ってなに？

疑問が次々と湧いてくる中、俺は暮葉と葵に手を引かれ――変な屋敷の中を案内された。

第２０８話，あの日（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「真剣議論、圭介はドMか！？」

圭介「いらねえ議論だなオイ！」

重原「いや、結構重要だよ？」

圭介「なんでだよ！？」

大吾「まあ、物語を振りかえれば圭介の性癖が分かるぜ」

重原「そうだね、そういえば圭介――殴られてばっかりだよね？」

圭介「敵キャラが攻撃してくるんだから仕方ねえだろ！」

大吾「にも拘わらず、圭介は倒れない……つまり圭介はドM！」

重原「痛みに快楽を感じているからこそ、攻撃を喰らっても倒れないんだね」

圭介「違ああああああああああああああああうっ！」

第２０９話，ハワイ旅行じゃないよ、会場だよ！

「なんだ、これ……？」

「おお藤島、昨日の怪我は平気なのか？」

大部屋に入った際の最初のセリフがそれであった。本当に驚いた……だって、まずこの不思議な屋敷は明智家で、明智家には白藤や三馬鹿を含む４組グループ。葵に青山さん、さらにさっき公園で別れたハズのあかりに、ついでに久々登場浅間部長などの写真部の面々。

それだけじゃない。生駒や西園寺までもが一室に集結していた。当然、明智家なだけに明智の姿もあったが……はて、なんなんだこれは？

「えっ！？　お兄ちゃん怪我したの！？」

「えっ？　ま、まあ……つーか、お前知ってるだろ？」

「うぅ……やっぱり、昨日の服についていたあの血はお兄ちゃんのだったんだ。ちょっと勿体ないことしたな……こんなことなら、血のついた部分だけ切り取ってから捨てればよかった……」

「怖ぇよっ！」

ダークな葵に思わず突っ込んでしまった。だって怖いんだもん……これが、噂のヤンデレという生き物か。つーか葵はヤンデレキャラじゃねえだろ……。

さて、この辺でもう一つ驚いた事を説明しよう。この大部屋の装

飾についてだ。何故か和風な大部屋には不似合いな西洋風の装飾の数々。

幼稚園のお誕生会かよ……シュールな光景だ。

「いやいや、藤島くんも相当なリア充だね」

「部長、どういう意味っすか？」

「いやぁ、だってねぇ……？」

「そうだよ、クソ介の癖に私のナギちゃん奪うだなんて生意気だよっ！」

いやいや意味分からん……つか、浅間部長と生駒ってこんな仲よかったか？

思い出してみれば夏休みの合宿。この2人はずっと博打打ってたし……類は友を呼ぶとはよく言うものだが、変態同士気でも合ったんだろうな。

って、今はそんな事どうでもいいんだよ。それよりこれが何かを知りたいんだよ俺は。

とりあえず、ここは明智家だし……明智に聞くのが妥当なところだろう。

「おい明智、これは一体どういうことなんだ？」

「どういうことって……藤島、今日はあの日だろ？」

「あの日ってなぁ……そのあの日が何だかわからないんだよ」

伊吹も察しなさいよ馬鹿とか言っていたけど、全然わからないん

だよなぁ……。
まあいい、それよりあの日が何なのか――お願いですから俺に詳細をくれ。

「あ、あの日っていうのは……つまりっ」

何故だか顔を赤らめて、恥ずかしそうに俯く明智。
まさか明智……本当に彼氏でも出来て、今日はそのお祝いをやるって言うのか？
だけど彼氏が出来たからって、ここまで大がかりなパーティーやるか普通？

「き、木下、雪乃。垂れ幕を頼むぞっ」

「りょーかいなのです！」

「そうね、そろそろ始めちゃいましょう」

確かに暮葉と西園寺がいる方を見ると、天井には垂れ幕がセットしてある。今から垂れ幕を下ろすようなのだが……何が書かれていることやら。
きっと、垂れ幕に書かれている文字こそ――今回の問題の答えなのだろう。
うわっ、なんか緊張してきた……やっぱ彼氏か、明智の彼氏なのか？
それとも浅間部長、医師から余命3年宣告受けました記念パーティーなのか？

「それじゃあ暮葉、下ろすわよ？」

「はいっ！」

そして遂に――謎の垂れ幕は下ろされた。

妙にカラフルかつ寄せ書きだらけの垂れ幕に、一つ大きなメッセージが描かれている。

『圭介、ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ！！』

それを見た瞬間、思わず我が目を疑ってしまった。『圭介、ＦＵＣＫ　ＹＯＵ』ならまだ現実性があるかもしれないが、ハッピーバースデーって……俺、祝われているのか？

そういえば今日は８月２８日。俺の生誕１７周年記念日だった気がするが、まさか明智が言っていたあの日ってヤツも、今日暮葉と葵がいなかった理由も全部……、

と、その時。垂れ幕の前に２人の人影が現れた。

身長の高い筋肉質な男と、胸が大変豊かなアンダーテールの女の子。ちょ、待て……どうして小坂と重原が一緒に登場して、しかもアイツらギター持ってるんだよ？

さらに、ベースを持った明智。キーボードの前に佇む青山さん、いつの間にかセットされているドラムセットの前に座る、スティックを持ったあかり。

そして――マイクを持つ暮葉の姿もあった。

なんだこれ……女子４人＋男子１人。男女混合け○おん部か？

「ワン、ツー、スリー、フォー！」

スティックを叩き合わせ、数を数えるあかり……まさかのあかりっちゃん？

と、くだらない事を考えていたその直後――突然演奏が始まった

のである。

「Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ，Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ」

そこで演奏されたのは、ハッピーバースデートゥーユー。

しかもロックアレンジ版であり、これまた随分お金を賭けている感じだ。

も、もしかして……明智がバイトをしていた理由って……？

「Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ，　ｄｅａｒ　けーすけ様っ」

歌詞の中で俺の名前を言う所だけ、皆が俺の名前を呼んだのだが、やっぱりマイクを片手に持っている暮葉の声が一番室内に響く。けーすけ様だってよ、恥ずかしいな……おいっ。

でも嫌な気はしないな。

なんていうか、暮葉に祝われていると思うと……素直に嬉しい。

「Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ～♪」

ようやくよかったよ……お金持ちの明智がファミレスでバイトをしていた理由。暮葉と葵がテスト前日であるにも関わらず、勉強もしないで半日以上も家を空けていた理由。みんなテスト前で忙しいハズなのに、こんなところに集まっている理由。そして――あの日の意味が……っ。

こういうこと……だったのかよっ。

なんだよ、それ……なんで俺なんかの為に、こんな大掛かりな事を……？

「けーすけ様っ！　お誕生日おめでとうございます！」

「そ、その……先輩、おめでとうです」

「おめでとうな、藤島っ」

暮葉も葵も明智も、他のみんなも俺を言わっている。

そう、俺なんかを……。

それはとっても嬉しいけど……だけどよ。

「お前ら、なんで……」

俺がそう問うと、まずは明智が微笑みながら葵のほうを向いて、

「ああ、藤島の妹が藤島の誕生日を教えてくれたんだっ」

「そしたらね、葵たちでお兄ちゃんを祝おうって話になったんだよ」

「それに、けーすけ様は古宇坂を救ったヒーローなのです」

「あ、あと私らさ。あ、あんたに何度もその……世話になったでしょ？」

「はい、だから……みんなでバイトして、先輩の為に準備を進めてきました……っ」

「それに、あたいら友達だろ？」

【友達の誕生日、祝うのは普通だと思う】

明智に続くように、みんなが俺に説明をしてくる。

いかん、ガチで目から汗が出てきそうだ……っ。

「クソ介の誕生日祝うのも複雑な気分だけど、私らが世話になったのも事実だしね」

「ああ、ったく……テメェは気に入らねえけどよ、少しはスゲェしな」

「黒やんツンデレか？　まあ、そう言うわけで準備に協力したんや」

「文句言うなよ？　藤島に文句言う権利はないんだからな」

「そうそう、だから貴方は黙って祝われてればいいと思うわ」

「祝われるほどみんなに慕われるようになったのは、藤島君自身のせいだしね」

生駒、三馬鹿、西園寺、ついでに浅間部長……。

「ちなみに僕、今日はお前の為に――新作エロゲー3本入手しといたぜ？」

「俺も、割とレアな同人誌3冊くらい入手したかな？」

「そういうわけで、これからもよくしくね――圭くん！」

大吾、重原、小坂……っ。

なんだよお前ら……どうしてここまで出来るんだよ。たかが俺だぞ、そりゃあ裏じゃ魔法使いと戦っていたりするけど、それを除けば何処にでもいるフツーの男。いや、それどころか多くの人を傷つ

けたクソ野郎なんだぞ。なのに……そんなクソ野郎を祝ってくれるだなんて。

お前ら、いい奴らすぎるだろ。

ホントに……心が広すぎるだろっ。

「お前ら……ありがとな……っ」

やべ、ガチで目から汗が出そうになってきた……とりあえず万が一に備えて、前髪で目を隠しておくとしようか。俺が泣くなんて柄じゃねえし、つーか男は泣くモンじゃねえだろ。

だけど、いつ以来だろうな……こんなに嬉しく感じたのは。

ここまで感動したのも、ホント……超がつくほど久しぶりな気がするよ。

その後……俺は目から汗をなんとか堪え、誕生日会たるものを楽しんだのであった。

それから数時間後、もうすっかり空は暗くなっている。はぁ、結局……テスト勉強なんてほんの数時間しかやっていないな。普通の学生なら十分かもしれないが、色々と事件に巻き込まれていたせいで殆ど勉強が出来ず、というか授業中も寝ていた俺からしてみれば——足りなすぎるぜ。

「あ、藤島……っ」

立派な日本屋敷から出てきた、俺に声をかけてきた美麗な黒髪の風紀委員。彼女は一人庭で夜空を眺めていた俺を気にしたのだろうか、俺を見かけると次第に接近してきた。

「よぉ、明智か」

「藤島、こんなところでどうしたんだ。中に戻らないのか？」

「ちょっと考え事をしていたんだ。もう少しだけ一人にしてくれるとありがたいな」

「そうか……」

そうだ、そういえば今回のお誕生日会というヤツ。葵の発言が発端だが、会場の提供や資金稼ぎを行っていたのは主に明智なんだよな。

明智にはもう一度、改めてお礼を言ったほうがいいかもしれないな。

「なあ、お前……今日の為にずっとバイトしていたんだろ？」

「えっ？　あ、ああ……そういうこと、かな？」

「ありがとう」

「……えっ！？　そ、そんな！　急に改まって……例なら提案者の妹に言って欲しいぞ」

「それもそうかもしれないけど、でも何だかんだで俺、お前に一番世話になってるからな」

色々と楽しい日常を送れているのも。

永渕達をぶん殴ってもあまりお咎めがなかったのも、今回の誕生

日会も……みんな明智の努力があったからこそだ。それに、明智が居なかったら勝てなかった戦いもあったわけだし。
明智には本当――世話になりっぱなしである。

「そうだな……いつかは恩返し、したいかな」

「ふ、藤島……っ」

「ん、どうした？」

俯いているせいなのだろうか、前髪で瞳が隠れている頬もほんのりと、微かに赤くなっているような気もするし、何より妙にもじもじしている。
明智にしては珍しいけど……ひょっとして、照れているのだろうか？

「お、恩返しなんて、別にいいんだぞ……？」

「そうか？　でも、俺らは友達だろ？　つか、そうじゃなくても借りを作りっぱなしってのもアレだからなぁ。俺は出来れば借りを返したいよ」

どうやって恩返しをすればいいかなんてわからない。だけど、それでもいつかは全ての借りを返してやりたい。何年掛かってでも――いつかは貸し借りナシの状態になりたいな。
と、そんな事を頭の中で考えていたその時。明智が静かに歩き始め、次第に俺との距離が縮まっていく。距離は僅か５０センチ……ウソ、１メートルにも満たない場所に明智が……？
しかも、近距離から見る明智は頬を染め、瞳を潤ませている気がする。

「……ただの」

「ん？」

「ただの、友達じゃ……嫌だっ」

「……えっ？」

声は小さかったが、耳にハッキリと入ってきて、脳はその言葉の意味を理解する。

それって、どういう意味……なんだろう。好きだから友達でいるのが辛いのか、嫌いだから友達でいるのが辛いのか。どっちなんだろうか……前者は前者で少々困る事があるし、後者はあまりにも辛い現実過ぎて、多分俺の涙腺が崩壊するだろう。

だが、嫌いなヤツの為に――誕生日会なんて開くものなのだろうか？

ひょっとして、コイツは――。

「だ、だから……その、な？」

まさか――今の一瞬の勘違いじゃないのか？

だけど、もしそうだとしても……俺は――――。

「私は、藤島と――――」

ごくり、と唾を飲む。

愛の告白か、絶交宣言か。

気になるところだが、この雰囲気から察するに多分……で、でもどうしよう？

仮にそうだとしても、俺はアイツの事が……っ。

「あああ明智先輩っ！」

「……ん、うわぁっ!?　あああ、あお……やま?」

次の言葉が来ない……と、思いきや、青山さんが突然乱入してきやがった。青山さんの不意打ちに明智は珍しく、顔を耳まで真っ赤に染めて動揺している。

ていうか、俺もかなりドキッときた……心臓に悪いよ、青山さん。

「さ、させませんよ……その、せ、先輩は――わたしのものです！」

「――――ッ!?」

な、なに……言ってるんだ、あの人?

青山さん、まだ諦めてなかったのか……なんて諦めの悪い子なんだ。

あかりは親友ポジでＯＫって言ってくれたのに。

「ダメだよ千早！　千早がどれだけお兄ちゃんの事が好きだとしても――お兄ちゃんは葵の所有物なんだよっ！」

「もはや物かよ俺っ!?」

ひどい現実や……妹に所有物扱いされてしまうとは。

葵はブラコン×ヤンデレ＝残虐的な妹ちゃんだったよ。

ううん、兄として何か悲しいよ。悲惨な現実を実感しちまった気がするぜ……。

「けーすけ様っ、なんだかもう……滅茶苦茶ですねっ」

と、突然俺の隣に並んできた、俺の嫁……げふんげふん！

我が藤島家に居候中の暮葉が、並ぶと同時に語り掛けてきた。

「そ、そうだな……」

「もきゅ、けーすけ様～」

「へいへい」

急に顔を肩にすりすりと寄せてきて暮葉の頭を、優しく撫でてあげる。暮葉の甘えモードはいつものことなんだけど、それが何だか嬉しくて……。

ああ、告白すれば成功しそうだけど……あ、あと一歩が難しい。

告白ってある意味――サヴィエトの魔法使いと戦うよりも難易度高いよね。

はあ……。

そんな事を考えながら、俺はその後もしばらく――甘える暮葉の頭を撫で続けていた。

「……っ、ばか圭介……圭介のばか……っ」

第２０９話，ハワイ旅行じゃないよ、会場だよ！（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「リア充は死ね！」

赤佐「リア充は死ね！」

大林「リア充は死ね！」

圭介「なんなんだよてめえら!?　つーか大林、てめえはリア充だろ！」

雪乃「ところで、ハッピーバースデーの歌って大丈夫なの？」

圭介「え、何が？」

雪乃「だって、歌詞載せたら小説削除するって、新ルールを最近なろう運営が制定したたって話よ？」

圭介「一応日本国内じゃ２００７年で著作権切れらしいし、アメリカから文句言われない限り大丈夫じゃないか？　多分……」

※もしＮＧだったら削除しますんで、ゴメンなさい……ｏｒｚ

第２１０話，雑用係の新入りメンバー

全く、本当アイツらは人使いが荒いよな……いくら俺が悪人だからってよ、何も全員分の弁当を買わせる必要って。これじゃあ、まるで俺がパシリみたいじゃないかよ。

９月８日、３連休初日の土曜日。

今日もこの俺――浜島雅人はヤツらの部下として働かされ、というか仕事以外にも肩揉めだの飯買って来いだの……もう、殆ど奴隷というかパシリのような扱いだ。

はぁ……一時は、嫌々だったとは言えＫ・Ｍ・Ｐのアタマをやっていた俺が、なんで俺は意味不明な暗部組織の雑用係をやっているんだろう。俺はあの日、誠和大学で藤島って野郎にぶん殴られて気絶し、そのまま５時間くらいは寝ていたらしい。

その後目が覚めた時、絶対警察に捕まったと思ったが……、

フレンド。

それが俺を拘束し、俺を奴隷のように扱う組織の名前である。構成員は雑用係の俺を含めて僅か５人程度だが、俺以外の４人が女の子っていう……男の俺には居づらい場所だ。

それでも、俺はそこで働かなくてはならない。一応給料は貰えるし、衣食住と誠和大学での犯罪行為は黙っててくれるらしいから、文句は言えねえけど。

でもよ、せめて……もう少し俺に自由をくれよ……。

それかせめて、俺に車を貸してくれよ……佐井学園って名前だったっけか。そんな名前の学校を潰すのがフレンドの目的。その為に自称スパイのそういう事に詳しい白藤や、実家の権力で裏社会とも取引可能な明智がいるんだ。車くらい――簡単に手に入るだろ畜生。

俺、こうみえても車の運転には自信あるんだぜ。

単車はチームにいた頃、よく乗り回していたからなぁ……。
ところで、話題を変えようと思うんだが、今日俺が5人分の弁当を持ち、フレンドの隠れ家である白藤家向かっている事には、ちゃんとした理由があるのだ。
その理由はフレンドのリーダーを務める、西園寺雪乃からの集合命令。
命令を受け、「ついでにお弁当が欲しいわ、お金渡すから全員分よろしくね」と、頼まれてしまったので、俺はコンビニで弁当を買って白藤家へ向かっているのだ。
だけどなぁ……。

――どうして急に集まる事になったんだ？

それは、俺達フレンドは立派な組織である。なので定期的に集まり、近況を報告したり今後の活動方針を伝える、定例会というものはある。だが、今回は定例会なんてものではない。久々に寝てようと思っていた今日、臨時の集会を行うというメールが届いたのだ。
何か、まずい事でも起きちまったんだろうか？

「あ、そのボサボサ茶髪は浜島じゃん」

「……あ？」

とある十字路で、偶然出会ったかなりの美少女。肩まで届く紫色の髪に、明るく活気のあるその雰囲気には、おそらく多くの男子が惹かれてしまうだろう。
てか、俺もその……なんだ？
いや、何でもねえ……それよりこの子は――。

「よぉ、木山じゃないか」

「おはよう浜島、あんた相変わらずダルそうだね」

「俺が真面目になるわけないだろ？　それより、お前も西園寺に呼ばれたのか？」

「そぉだよ、雪乃ったら今日は珍しく真剣だったんだから」

「アイツが真剣ねぇ……」

俺は西園寺雪乃という人物の素顔を知っている。成績優秀かつ運動神経抜群、そのうえ友達にも恵まれている――俺とは対象的なヤツである。

だが、決して真面目というわけではない。アイツは単に面白い事が好きなだけで、意外とおちゃらけたヤツなのである。そんなヤツだからこそ――俺をこき使うだろうけどなぁ。

ちなみに、今俺と話しているコイツは木山朱実。

西園寺の親友らしく、同じく――フレンドのメンバーだ。

「浜島、その弁当ってもしかして……」

「ああ、西園寺に頼まれたんだよ。５人分だから重いのなんのって……」

ああ、肩凝ってきた……弁当っつっても５人分。

やっぱり重い、単車でいいから動くものに乗りたい……。

「ねえ、よかったら一つ持つ？」

「えっ？　別にいいって、雑用係がテメェに頼るわけにもいかねえ

だろ……？」

「そうやって無理してると、いつか体壊すよ？　ほら、一袋だけだから！」

木山は俺の左手から、弁当二個が入った袋を奪い取った。

「うわっ！　お、おい……すまねえな、なんか」

「いいの、気にしない気にしない。あんただってフレンドの一員だからね」

木山はいいヤツだ……もちろん明智もキツいがいいヤツだし、白藤だって無口な上に携帯電話の文字打って話す変なヤツだが、それでも色々と気を使ってくれるヤツではある。

問題は西園寺……畜生、俺を罪人だからってパシりやがって。ああ、西園寺も木山みたいなヤツだったら――俺も少しは楽出来たかもしれないのに。

文句を脳内に浮かべながら、俺と木山は隠れ家こと白藤家へと向かったのだ……。

白藤家は不思議な家である。

コンクリート造りの四角く、シンプルなデザインの家で、内装もモダンで当たり障りがないシンプルなものだ。ところが、この地下には巨大な施設がある。

武器庫と訓練所。

汚れ仕事を働く俺達には、武器も訓練も欠かせないものである。武器庫にはこれまで仕入れた武器が隠されており……と言っても、今の所一番強力なのがＲＰＧ－７なのだが。

そして訓練所には、様々な筋トレ用の器具と、射撃場までその隣に存在している。
英国ご自慢のＳＡＳもビックリな――半ば軍事基地化しているのが白藤家なのだ。

「ゆっきの～！　あ、凪紗に早苗もいたんだね」

「ちわっす。って……全員集合みたいだな」

白藤家のリビングでは、西園寺に明智に家主の白藤など、フレンドのメンバーが早くもぐーだら朝のニュースを視聴していた。畜生、俺は苦労して弁当買ってきたってのによ。

【やあ、ようこそバーボンハウスへ、このタカナシ牛乳はサービスだから、まず飲んで落ち着いて欲しい】

「おはよう2人とも」

「あら、朱実おはよう。ついでに浜島もね？」

「俺はついでかよ！　テメェ、こっちは言われた通り弁当買ったんだぞ！？」

「あらホントだ、御苦労だったわ。とりあえず2人とも座っていいわよ」

「殆どスルーに近いじゃねえかよ！　クソ、やっぱ俺はこんな扱いかよっ！」

予想はしていたさ。だけど実際にされるとムカつくというか……

ああ、やっぱり西園寺雪乃ってヤツは名前通り、俺に対しては雪のように冷たい女だぜ。

まあ、「貴方は座っちゃダメよ？」とか言われるよりはマシだ。

とりあえず、お言葉に甘えて座るとしよう。

どうせ、この女と争っても勝てる見込みがない。

なんたって……明智も白藤も西園寺も――ちょっと普通じゃないからな。

「って、西園寺さんよ。俺達を呼んだ理由ってなんだよ？」

「そーだよ雪乃、もしかして何かあったの？」

「まあまあ、今から私と凪紗、それから早苗の三人で説明するわ」

全くだ、俺が納得できる説明で頼むぞ。

じゃないと俺、本当に毎日パシられてっからキレそうだ……。

「――そろそろ、学園への総攻撃を仕掛けたいのよ」

「ゆ、雪乃……いよいよ実行するの？」

「おい、そいつはマジな話なのか？　つーか、やっぱ俺も戦うの……？」

「そうよ、あと浜島。貴方はフレンド唯一の男性メンバーなんだから――立派に戦ってもらうわよ？」

「ちょ、待て西園寺！　俺はテメェらみたいに超能力だの魔術だの。そんな便利能力持ってねえんだぞ！？　佐井学園って超能力者がいっぱいいるんだろ？　俺みてーなヤツが前線に立った所で、すぐに

殺されちまうだろ！」

そう、西園寺も明智も白藤も、あと一応木山の特殊な能力を持っているのだ。西園寺と明智と木山は超能力を、白藤は魔術というオカルトな物を扱えるのだ。それを知ったのは、俺がフレンドの雑用係になってからなのだが、最初は信じられなかったけど……まあ、実演されちまったしよ。

信じざるを得なかったんだ――。

そして、佐井学園は西園寺や明智、木山などの出身者曰く、秘密裏に超能力の開発を行っているらしくて、３２０人の超能力者が学園内に在籍しているらしい。

そのうち、暗部組織にいるのか白藤曰く３０人程度。しかし３０人でも超能力者。特にそのうち２人は西園寺に並ぶ――佐井学園の５本指に入る化け物らしいのだ。

対して、俺は単なる一般人。少しは喧嘩の強さに自信はあるけどよ……でもよ、超能力者と比べられたら差はハッキリしている。俺は訓練で――明智にさえ勝てなかったんだぞ？

そんな俺が、化け物たちと戦えって言われても……。

しかし、

「それなら大丈夫だぞ。前線に立つのは私と雪乃だ、白藤は自衛戦闘を行いつつの諜報活動。浜島は武装して木山のサポートに回ってくれ」

「ほ、ホントか明智？」

「うん、浜島は体が以上に頑丈だったりもしない、本当に普通の人だからな……死なれると困るし、無理をさせるわけにもいかないぞ」

「な、なんだ……よかったぁ。てっきり前線に送り込まれるかと思

ったぜ……っ」

「あら、私の代わりにAランク能力者と戦ってみるかしら？」

「か、勘弁してくれぇっ！」

ホントに西園寺ってのは俺に対してはサディスト女王様だ。くそっ、ちなみにAランク能力者ってのは超能力者でも頂点と言われる存在。5人しかいないから5本指というらしいが……聞いた話だと超能力者ってのは、頂点のAランクから最下位のEランクまであるらしい。

Aランクは単独で軍隊と交戦出来るレベル、まあ西園寺クラスの能力者の事だ。

Bランクはエリート生、多分軍事方面でも活躍出来る実力の持ち主。

Cランクはやや強力、明智がこのレベルらしい。

Dランクは平均、特別すごくもないらしい……木山がこのレベルらしい。

そしてEランクは落ちこぼれ。320人のうち60人がこれらしい。

まあ、全部聞いた話だけどさ……EやDならともかく、C以上とは戦いたくないな。

「雪乃、あんまり浜島をいじめちゃダメだよ？」

「そうだぞ、コイツは中身がアレだからな」

【いわゆる、ヘタレ？】

「誰かヘタレだ！　テメェら少しは人を擁護しろよ！」

「まっ、そんなことはともかく……今日の夜に襲撃を仕掛けるわ」

うわ、俺のツッコミはスルーかよ。

西園寺のヤツ、早速作戦会議本題に入りやがったぜ……ていうかよ。

「あ？　ンだよ、今からじゃねえのか？　明るいうちの方がいいだろ？」

「あら、佐井学園は私立高校よ？　土曜日は当然授業があるわ」

「うん、一般生徒を巻き込むわけにはいかないからな。私達の標的（ターゲット）はあくまで暗部に落ちた奴らだ」

こうやってしばらく付き合ってて思ったが、コイツら普通じゃないよな。明智なんて何処かの高校で風紀委員を務めているらしいが、今じゃ逆に風紀を乱すような汚れ仕事やってるぜ。

つか、学生が学校相手に戦争仕掛けるってのもよ、変な話だぜ……。

まっ、退学になって遊びまくってた俺よかマシだろうけどよ……。

「けどよ、仮にソイツらがいなくても、暗部の手ごわいヤツらはいるんだろ？」

「ええ、もちろんよ。だから私たちは比較的警備が手薄とされる、学園北部を突くわ」

手薄ねえ……コイツらがもう化け物じみた能力使えるし、俺の考える手薄とコイツらの考える手薄ってのは、まるで次元が違うもの

なんだろうなぁ……。
はあ、こりゃもう……警察に逮捕されたほうがマシだったかもなぁ。

「簡単に言うけどよ……そう易々と突破させてくれる連中なのか？」

「そうだよ雪乃、相手は佐井学園じゃん？」

「……少なくとも、北部に五本指は出てこないハズよ」

【五本指が所属する組織は『トレント』と『ワクチン』だけど、その二つは北部の守備に当たっていないハズ】

「つまり、早急に突破すれば衝突を避けられるわけだぞ」

超簡単に言ってるけど……ホントに大丈夫なのか？
不安要素しかないんだけど……ま、まあ……コイツらだって普通じゃないし、今は特にチートクラスの実力を持つ西園寺を頼るしかないか。

「そういうわけだから浜島、車を調達してきてほしいわ」

「は、はあ？　俺が？」

「聞いた話によると、貴方は窃盗が得意らしいのよね？」

「ま、まあ……チームで使ってた四輪は盗難車だったしよ……」

「じゃ、窃盗よろしくね」

「マジかよ!?」

西園寺……テメェ絶対悪人だろ。

だけどなぁ、コイツらには逆らえないしよ。

俺はため息をつきながら――仕方なく車を探しに白藤家を出るのであった。

第２１１話，覚悟

９月８日、オレ――早川悠は久々にとある場所を訪れていた。
とある場所に存在する、一軒のマンションの八階の一室。この部屋は元々、あのクソガキが暮らしている場所で、何事もなければクソガキ２号とオレも一緒に過ごすハズだった場所だ。
だか、今は違う。
とある事情からオレは別な場所に住んでおり、ガキ共との接触は必要最低限とされ、精々魔力を供給してもらう為以外には殆ど会えない状況だ。
まァ、会うたびに、

「ねえ、貴方はいつになったらここに帰ってくるの？」

「ミネットちゃんの言う通りなの。悠ちゃん、そろそろ一緒に暮らそうよ」

「何度も言ってんだろォ。オレには仕事があるンだ」

「仕事？　仕事って何の仕事？　すっごく気になるんだよ」

「悠ちゃん……もしかして、また喧嘩してるの？」

「……チッ、超平和的な仕事だァ」

それは嘘だけどなァ、まァこのクソガキ達の事だ。そんな１００％のウソすらも見抜けねェだろォから問題ねェぜ。それより、ザスローンの上も面倒な規定を作りやがったからな。だからクソガキ共と面会できるのは、たったの１時間のみなンだよ。

なンでも、コイツらの保安上の理由だとかだが……。
ま、それについてはオレも賛成だ。
オレがここにいる以上――佐井学園の醜いクソ暗部がここに襲撃してくるかもしれねェ。
「……もう行っちゃうの？」
静かに歩き始めると、ミネットがオレを呼びとめてきやがった。
「あァ、そろそろ出勤時間だ」
「……いつ、なの？　いつになったらミネット達――ここで一緒に過ごせるの？」
「悠ちゃん……ボクも心配なの。また戻ってきてくれる？」
「……ふン、一応約束しておいてやるよ」
最も、オレが今度の戦いで生きて帰れればの話だがな。今回の戦いは……これまで以上に難易度が高いハードな戦いだからなァ。能力に頼ったってアッサリ死ぬかもしれねェ。それくれェ難易度の高い仕事をこれから片付けに行くンだ。
だから、生きて帰れる保証ってのはゼロだが……。
せめて――もう一度くらいはミネット達と再会してェな。
「絶対だよ！　戻ってこなかったらお仕置きしちゃうかも！」
「ボクも悠ちゃんの魔力エネルギー変換、改造しちゃうかもなの」
そォだな、その脅しは怖ェモンだ……じゃあ、精々変換機を改造

されねェよう、少しだけ血の雨を降らせてから戻ってきてやるよ。
ま、血塗れになるのは敵かオレか――まだ分からねェけどなァ。

それから数十分後、オレはタクシーを使って目的地の近くまで移動し、そこから目的地まで徒歩で約3分ほど。コンクリートに囲まれた息苦しい地下空間へたどり着いた。
相変わらず、呼吸すンのが嫌になる場所だ……。
居住空間はある程度生活感があるし、売店や病院だって存在している。だが、外が見えねェから時計を見ねェと時間が分からねェし、朝か夜かの感覚すら失ってくる気がする。全く、地下での生活ってのは窮屈なモンだ。最近になって潜水艦の乗組員の気持ちがわかった気がする。
だが、オレはこの空間で――かれこれ20日ほど生活しているのだ。

「あら、アンタも来たのねぇ？」

突如オレの前に立ち塞がった、どこかの民族衣装を身に纏った女。

「アナスタシア・アベルツェフ……全員集合って話だろォ？」

「まあ、そうだった気がするわねぇ」

「ふン、さっさと行くぞ。ラウルの馬鹿が会議室で待ってやがる」

「それが先にここにいた人に吐くセリフかしら？　まぁいいわ、さっさと仕事済ませちゃいましょう」

さっさと終わらせられる仕事なら苦労しねェっつーの。
アナスタシアは知らねェのか、今回の一大作戦についてを？

それとも、知ってる上で相手をナメてやがンのかァ？
まァいい、アナスタシアが死のうが――知ったこっちゃねェからな……それより、さっさとラウルと近藤から作戦の詳細を聞き、オレがどう行動すべきか情報を集めねェとな。
説明を聞いた上で――さらに確実な方法を見つけて実行する。
それがオレのやり方だ……。そんな事を考えながら、オレはコンクリートの空間に存在する不自然な扉を開ける。網膜認証システムって面倒なモンを採用しているらしい。その他指紋認証や血管認証のシステムなんてのも存在し、会議室に入るだけでも一苦労である。
面倒くせェシステム開発しやがって……クソッタレ。

「来たみたいだな、超能力者に召喚魔術の達人がよぉ」

「2人とも、予定の時刻より10分早いね。社会人としては合格だよ」

会議室には先に、近藤政信とラウル・ゲリエが席に座っていた。
相変わらず奇抜なファッションしてやがる……2人とも。近藤は新撰組風の着流しと日本刀を持つサムライ気取りのクソ野郎だし、ラウルは色黒なラテン系の変人だ。
もっと――現代社会で違和感ねェ恰好は出来ねェのか？

「ラウル、テメェ……アタシは20歳なんだけどぉ？」

「ふン……社会人つっても、ここは裏社会だろォが……」

「まあ、表社会でも裏社会でも礼儀は大事なのよ。お前さんだって無礼な挨拶されっと、イラッと来ちまうだろ？　それと同じ、裏社会でも礼儀は大事なモンなのよなぁ」

「お金の為にサヴィエトへ身を売った、良心パパには言われたくねぇセリフだわね」

「アナスタシア……お前さんも人の事は言えねえんじゃねえのか？」

全くだ、近藤もアナスタシアも同レベルだろォが。もちろん、こんなクソ暗部に堕ちたラウルやオレも同類だろォがな。それより、さっさと仕事の話をしろってンだよ。

テンポ悪ィンだよ。さっさとしねェと首斬るぞクソ野郎ォ。

ラウルもそう思っていたのか、ゴホン、と咳き込み2人を黙らせると、

「悪いけど、談笑タイムは後にしてくれるかな？」

「おっと、いけねえいけねえ。そういやいよいよ戦争すんだったのよなぁ？」

「そうね。アタシも久々に暴れられるってワケよぉ」

「チッ、ザスローンってのはホントに狎れ合い集団だなァ」

近藤の考えと、それに賛成するラウルとアナスタシアのせいで、ザスローンってのはどうも繋がりを大事にする組織になっちまったらしい。

ったく、だからって——オレに酒飲ますンじゃねェよ。

酒は苦手なンだよ……クソッタレが。

「それじゃあまあ、例の学園との戦争に関する最終チェックを行いたいんだけど……」

「ああ、ラウルさんよぉ。俺なら準備完了。いつでも戦場に赴けるのよな」

「アタシも、土さえあれば泥人形（ゴーレム）は何時でも召喚できるわ」

「オレも問題はねェ……」

「そうかい、それじゃあ最終確認を行おう」

そう言うと、ラウルは会議室に設置されているスクリーンに、画像を映し出す。なんでもコイツはただの画像ではなく、衛星写真を地球儀のように観閲出来るソフトらしい。

こういうソフトは、普通に一般向けに配布されているのだが、ザスローンはコイツを重要な軍事基地も見えるように改造。おかげで、各国の重要な軍事基地の場所が容易に分かる。どうやって軍事基地まで見えるように改造したかは知らねェが、どうせ汚ェ技術を使ったンだろう。

「佐井学園には“トレント”“ワクチン”“徳川小隊（プラトーン）”“念力同好会”の5つの組織が存在しているよ。まあ、詳細は不明だけどね」

「でも、要はアタシらと同じ小規模な非公式部隊でしょ？」

「しっかし、敵の詳しい戦力がわからねえのに戦うって、上も危険なことを押しつけてくるのな」

とれも聞いたことのある組織だ。佐井学園ってのはアナスタシアの言う通り、多数の少数の人員を集めた非公式部隊が存在し、汚れ仕事を日夜続けていやがる。みんな、最初は学園長のクソ野郎に誘われて闇に堕ちるのだが、超能力者ってのは厨二病が多いらしい。

そういう闇の組織に興味を持ち、一部の者は簡単に闇の世界に身を潜める。そうして仕事をして行くうちに悪に目覚め、汚ェ事を綺麗な事だと思うようになっちまう。

佐井学園の暗部にいるクソ野郎どもは、大抵そういうヤツだ。

チッ、ガキ共が……いい加減に気付けってンだクソが。

「で、俺達は今から北部を狙うよ。北部には――」

「徳川小隊（プラトーン）だろォ？」

「あら、アンタ知ってんの？」

「オレは元々佐井学園（あそこ）の学生だ。ンで、徳川小隊（プラトーン）ってのは要は武装集団だ。超能力者は一人もいねェが、対能力者戦に特化してっから、まァ不用心に近付くのは危険かもなァ？」

最も、ソイツは下位能力者に限っての話だ。

暴風の膜で殆どの物を防げるオレには――それほど関係のある話ではねェよ。

「警告ご苦労。その徳川小隊（プラトーン）が学園北部を防衛しているらしいけど、俺らは徳川小隊（プラトーン）を排除後、地下の武器庫の破壊へ向かうよ」

「敵戦力を削ぐってわけか、確かに戦において重要なことよな」

武器庫を破壊すれば、面倒臭ェ戦闘員どもは使い物にならなくなる。あとは、オレらの手で超能力者を叩き潰せはいい。出来る事なら――決着つけてやりてェしな。

あのクソ野郎と……ぎゃ、は。

「いいぜ、最ッ高に面白ェ……さっさと学園潰しに行こうかオマエらァ？」

オレはもう覚悟を決めた。

たとえどんなに血を流してでも――あの学園を叩き潰す。

あのガキを狙う連中は――誰であろうと皆殺しにする。

それがオレの覚悟ってヤツだァ……オレはもう躊躇ったりしねェぞ。

「何度も打ち合わせを行ったからね。それじゃあ、そろそろ実行に移るよ」

「おう、いつでも誰かの為に戦ってやる。それが武士ってもんよな」

「上等だわ。久々に暴れてやるわぁ……滅茶苦茶にねぇ」

他のヤツらの覚悟も決まったようだ。目指すは“打倒佐井学園”。

コイツを無事に終わらせることが出来れば、あのガキ達を狙う危険な存在が一つ消えるわけだ。

その存在を消す為に、少しだけ立ちあがってやる。

覚悟してやがれ学園長――オマエのマヌケ面から泡吹かせてやるよォ。

第２１１話，覚悟（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「ねえ、俺の出番なくね？」

暮葉「拙者の出番もないのです……」

早川「オマエらの出番は学園編ではゼロだ」

圭介＆暮葉「えっ？」

凪紗「ウソじゃないぞ？　実話だぞ？」

圭介「え、でも俺、主人公……」

暮葉「せ、拙者メインヒロイン……」

伊吹「この分だと私の出番までなさそうね」

あかり「右に同じく」

千早「出番、欲しいよ……っ」

第２１２話，緊急事態

「あ～あ、暇だなぁ」

じゃなかたった、俺には仕事があるんだったん。

俺こと浜島雅人は今夜の作戦に向け、まずテキトーな車を盗まなきゃいけない。盗難は得意中の得意なんだが、何処かいい車はないのか？

やっぱ、フレンドの人員数を考えると５人乗り。しかもいい車選ばねえと……絶対あの西園寺って女王は俺を怒鳴るんだろうな。はぁ、俺はスポーツカーに乗りたいのに。そう、出来る事なら出力がセーブされている日本車よりも、ハイパワーな外車に乗ってみたいもんだぜ。

けどなぁ、それ盗むと５人も乗れねえし……やっぱワゴン車か。

ああ、乗りてぇ……どっかにバイパーって大出力スポーツカーねえかな？

国内じゃ希少だし、ああ……乗りてぇ。

「……あ？」

ポケットの中で携帯電話が振動している。

誰だよ、窃盗という難易度の高い作業中に電話をかけてきやがったのは。と、イライラしながら俺はポケットの中から携帯電話を取り出し、開いて画面を確認する。

なんだ……西園寺かよ。

「もしもし、こちら浜島。何か用かよ？」

『浜島、何でもいいから車は盗めたかしら……ッ？』

なんだ、妙に切羽詰まった感じだが……白藤家で何かあったのか？
まあいい。俺は俺の仕事をするのみ、コイツらに逆らうことは出来ねえ。

「いや、まだだ。どーせならテメェも名車のほうがいいだろうしよ」

『そんなことはどうでもいいわ。それよりさっさと車を盗んで帰ってきて』

「……どうしたんだよ、急に？」

『緊急事態よ、とにかく早く隠れ家に戻ってきて』

「ま、待て！　とりあえず何があったか言ってくれよ！」

一応アイツら化け物とは言え、女の子であることには変わりない。男として、女を心配するのは当然のことだと思う。もしアイツらが危険に晒されているとした、その時は鉄パイプでも持って戦い加勢してやるよ。使い物になるかは分からねえけどな。

『何者かが――佐井学園への攻撃を始めたわ』

「……あ？　おい、そいつはマジな話なのか？」

『本当よ。だから私たちも、予定よりも数時間早いけど――学園へ急行するわ』

まったく、どこの馬鹿が佐井学園を襲撃しやがったんだ。命知らずだな……まあ、そんなことよりさっさと車を盗んで、白藤家に戻

るとしよう。
緊急事態らしいし、急いだ方が絶対いいに決まっている。
よし、じゃあもう――何でもいいから車盗んでやるよ！

――ラウル・ゲリエＳｉｄｅ――

俺達、早川悠による佐井学園襲撃は成功。北部を守備する徳川小隊（プラトーン）の前衛部隊の大半は早川悠によって一掃され、現在二手に分かれて敷地内を進行中だ。
俺は近藤政信と共に行動し、現在徳川小隊（プラトーン）の兵隊と交戦中である。
徳川小隊は対能力者戦に特化した武装集団で、装備も対能力者戦を想定したもので固めた能力者排除のエキスパート。それだけに、流石に俺ら魔術師でも手ごわく感じるよ。
おかしいね、相手は単なる特殊部隊程度なハズなのに。

「近藤、先に俺に行かせてよ」

「なんでよ？　ここは俺が正面突破し、お前さんは俺の後を――」

「銃が相手なら刀より、俺の能力のほうが数段マシでしょ？」

いいながら、俺は自ら銃弾の豪雨の中へと飛び込む。
服のベルトに挿んでおいた太鼓を叩く為のバチを抜き取り、
「御父（Ｆａｔｈｅｒ）と御子（Ｓｏｎ）と精霊（Ｈｏｌｙ　ｓｐｒｉｔ）の御名によりてアーメン（Ａｍｅｎ）」

言いながら、バチを頭上へ持っていき――カン！　という甲高い音を発生させる。バチ同士を頭の上で接触させるという動作が意味不明だったようで、徳川小隊（プラトーン）の兵士たちはただぽかんとしているだけであった。彼らはどうやら、魔術に関する知識は皆無らしい。

それだけで十分だね。

ハッキリ言って彼らは――藤島圭介よりも相手にしやすいよ。

バチが接触した、彼らが唖然としていた――その直後。

「が、あああああああああああああああああああああッ！」

男女数人の悲壮な叫び声が、学園の庭中に広がった。

白く輝く鋭い鉄矢が射出され、それが徳川小隊（プラトーン）を直撃。鉄矢が何かに触れた瞬間に胸にも響く太鼓のような轟音が炸裂し、赤い液体が飛び散る瞬間を目に映った。

「おお～、お前さん派手にやらかしたなぁ」

「ね？　彼らは魔術に疎いんだ。だから――見かけの都合上、俺の魔術のほうが相手をビビらせることが出来るんだよ」

俺の魔術は出身地では結構信じられている、ブードゥー教を参考にした我流魔術。

ブードゥー教における精霊（ロア）の中でも、鉄の精霊（ロア）であるオグン（Ogoun）の力を儀式用のバチを用いて拝借させていただき、応用して自由自在に操るといいもの。もちろん鉄以外にも火の力を使うことが出来るんだけど……俺は何だか鉄が好きなんだよね。

見た目も派手だし、火の魔術と合わせると鉄の魔術は装甲車でも破壊出来るからね。

「そぉかい、そんじゃ――俺も刀を振るいたいのよな！」

「ええ、相手は混乱しているし、今がチャンスだよ――」

確かに俺の魔術は強力だけど、反面複数の目標を狙うことは出来ない。そう、だから近藤の力がどうしても必要なんだよ。彼、剣術の達人で魔術を使わなくても大人数相手に出来るし。

「ぐ、あァあああッ！」

「おらおら、もっと速く動かねぇと――刀の錆にするのも勿体ねえのよな！」

対能力者戦には特化していても、彼らは魔術師と戦うのは初めてである。そう、そこに弱点というものが存在する。この戦い――俺ら魔術師のほうが遥かに有利なのだ。

さて、さっさと終わらせて――アナスタシア達のほうを手伝いに行こう。

――アナスタシア・アベルツェフＳｉｄｅ――

佐井学園の敷地は広い。なんでも、巨大人工浮島（メガフロート）全体が学園の敷地で、多数の倉庫が存在しているわけだ。ここは車両を隠してある倉庫群の一角。

アタシは地面を右手で触っている。

あんまり……良質の土じゃねえな。

「……居た、侵入者発見！」

チッ、仕方ないみたいね……まあいい、アタシの身さえ守る事が出来ればそれでいい。

とりあえず、あんまりよろしい土じゃないけど――泥人形（ゴーレム）を作るわよ。

「出てきな、クソッタレな泥人形（ゴーレム）！」

既に連中が来る前に、泥人形（ゴーレム）召喚用の術式は組んである。召喚と言っても泥人形（ゴーレム）という生き物を召喚するわけではなく、泥人形（ゴーレム）の魂を召喚するのよ。だって泥人形（ゴーレム）って生き物は所詮は神話の中の生物で、現実じゃもう死んでるモンなのよ。

だからあの世から泥人形（ゴーレム）の魂を召喚し、その魂が宿る身体を作ってあげるのがアタシの召喚魔術の秘密ってヤツよ。

そしてアタシは今――身体を作成している。

轟々と大地……って言っても、ここは浮島なんだけどさ。眼前のアスファルトが大きく盛り上がって泥人形（ゴーレム）の身体が形成されていく。

「うわあっ！」

「ば……化け物！？」

そーよ、化け物の召喚獣よ。

残念だったわね、コイツを倒すには爆弾を上手く頭に当てる意外にないわ。それかアタシ本隊を狙撃すれば、召喚魔術は無効化されてゴーレムも崩壊するけど……。

ま、佐井学園の連中に魔術知識があるとは思えないし、精々踊ればいいと思うわ。

「さあて、愉快に踊ってちょうだいね……このアナスタシア・アベルツェフ様がテメェらを血祭りにあげてやんよォッ！」

「――ッ！」

焦りからか、徳川小隊（プラトーン）が一斉に泥人形（ゴーレム）への射撃を開始。ふ～ん、日本の警察って治安維持組織よりは有能みたいね。全弾ちゃんと命中しているし……。

けど、アタシのゴーレムは――この程度でくたばるヤワな存在ではない。

無数の銃弾を身に受けても、泥人形（ゴーレム）はピンピンしていやがる。銃撃で欠損した部分はアスファルトを吸収することによって補い、体が再生すると泥人形（ゴーレム）は雄叫びした。

泥人形（ゴーレム）が壊れないという不測の事態に、相手の兵士達は混乱する。

「言ったでしょ？　血祭りになんのは――テメェらなんだよォ！」

滅茶苦茶にしてあげようかな。

アンタらに直接恨みはないけど――目的のために死んでくれるとありがたいわ。

というわけで、死にたくなかったら全力で泥人形（ゴーレム）を止めてね。

――早川悠Ｓｉｄｅ――

カチッ、とオレは魔力エネルギー変換機のスイッチをｏｆｆにす

る。ここは倉庫群の一角にある1番倉庫という場所で、ここにはバスだのトラックだの装甲車のようなものなど、学園が保有する自動車が多数収容されている。言わば、大きな車庫のような場所だ。
倉庫内は既にサブマシンガン等で身を固めた、男達の死体で溢れている。血液で赤く染まった床が妙に生々しい。ちなみに、能力は30秒も使っていねェ。
節約に節約を重ねた結果だ。
ここで能力の無駄遣いは――絶対に出来ねェからな。

「失礼、手合わせを願いたいのだが」

新たな足音が聞こえると同時に、渋い、色っぽい機械のような声が聞こえた。
振り返って見てみると、スーツを着たサングラスの色黒男が立っている。殺し屋にしか見えねェ男であるが、ソイツに見覚えがある。確か名前は徳川家則（とくがわいえのり）。徳川小隊（プラトーン）の隊長を務める本職が殺し屋で学園お気に入りの殺しのプロだ。
確か、部下や学園長からそんな渾名で呼ばれていたハズだ。
徳川はスーツの右ポケットから箱を取り出す。おそらく煙草……だが、煙草にしては不自然な感じがするものだ。アレはおそらく電子煙草（エレクトリックスモーク）ってヤツだろう。
殺し屋が電子煙草（エレクトリックスモーク）とは、似合わねェ……。

「早川悠……お前が反乱分子だったか」

「相変わらずオマエは汚ェ仕事してる見てェだな、徳川さンよォ」

「当然、襲撃者から生徒の安全を守るのが我々の仕事だ」

ふぅ、と徳川は電子煙草（エレクトリックスモーク）から煙を吐く。

煙草を吸いながら、オマケに殺し屋という立場の癖に――よく夢と希望に溢れたセリフ吐けるよなァあのクソ野郎ォは。生徒を守る気なンてカケラもねェ癖に、調子のいいヤツだ。

「面白ェなオマエ、反吐が出そうなくらい面白ェぞ」

「さて……前置きはここら辺にして、そろそろ一戦やらないか？」

「オマエ、分かってて言ってンのかァ？」

「当然、学園に身を置く以上――お前の事はよく分かっているつもりだ」

なら一言だけ言えることがあるよ。要はコイツ、オレの事を知っている上で、オレに挑戦しようだなンて考えているわけだ。ソイツをなんて言うか――便利な二文字がこの世には存在する。

「馬鹿じゃねェの？　超能力を開発していねェ上に、精々銃撃と殺人的な体術仕掛ける以外に脳のねェヤツが、一体オレをどうやって倒すってンだァ？」

「……ふっ、これでも徳川家康の子孫なのだがな。それが、士農工商にも入らない穢多（えた）、非人（ひにん）レベルのクソガキに、随分とナメられたものだな……あまり将軍様をナメるなよ？」

「将軍はオマエのご先祖だろォが。オマエはクサレ殺し屋だっつーの」

徳川家も堕ちたモンだ。こんな野郎ォが子孫だったとはな。全く……徳川家康が可哀想に思えてくるじゃねェか。こんなクソ野郎を

――子孫として残したくなかったろうに。
と、その時。
徳川のクソ野郎が拳銃を取り出す。
ハッ、１４年式拳銃たァ骨董品持ってやがる……だが、徳川が銃撃なンて単調な戦い方をするハズがねェだろ。何より、オレに拳銃を撃っても跳ね返されるのがオチだ。
徳川がそこまで馬鹿なワケがねェ。それとも、本当にオレの能力を忘れたかァ？

「そうか、では――」

一言切ると、徳川は銃口をこちらに向けてきて、

「殺し屋は殺し屋らしく――早急に標的（ターゲット）を抹殺する」

バス！　と、銃弾の放たれる嫌な音が響く。オレはスイッチを押し、小さな電子音が鳴ったその直後に演算を実行、暴風の膜を全身に張り巡らせる。これでどんな攻撃も反射出来るが、何故か徳川の銃弾はオレの膜に触れない。旧式拳銃から放たれた弾は――オレの横を通り過ぎたのだ。
な、に？　と思う。
何故――直接オレを撃たなかったのだろうか？
と、考え事をしていると、

「終わりだ」

「――ッ！？」

コイツ、オレの意識を銃弾に向けている隙に――懐に入り込みやがった。

だが常識的に考えて、この野郎がオレの暴風の膜を突破出来るとは思えない。拳が膜に触れれば手首を骨折し、徳川は戦闘不能状態になるだろう。

だから大した警戒もせず、オレは笑みを浮かべて立ち続けていた。

が、

ゴギィッ！　という衝撃的な音が炸裂した。

まずは意識が揺らぎ、何が何だか分からなくなりやがる……その後だった。顔面にビリビリという叫びたくなるような痛みを覚えたのは。

「反射が……効いてねェ……ッ！？」

痛みを感じる頬を右手で撫でながら、いつのまにかそんな事を呟いていた。

徳川はそうしている間にも、余裕の笑みを浮かべて接近してくる。

「三原寅彦は風が循環し、膜の裏に戻る僅かな一点を突き、お前の膜を破ったそうだ」

「まさか、オマエ……ッ！」

「そうだ、それの再現を行った」

チッ、とオレは力強く舌打ちをする。

オレとしたことが、三原と徳川が知り合いだったことを忘れていた。そうだ、三原と徳川は互いに仕事の結果を報告し合う——友人のようなものであった。

だから、三原が知っている情報をコイツは——ある程度理解して

いるってワケだ。
チッ……クソッタレ、ふざけやがって。
「……ナメてンじゃねェぞ、三下がァ！」
風の操作を行い、風力を利用したロケットダッシュを実行する。
ドン！　という爆発的な音と同時に凄まじい速度で前方へ突き進み、ぐわん、と五本の指を大きく開いた。
このまま顔面を鷲掴みにして、酸素濃度を操作して窒息死させるという作戦だ。徳川の顔面目がけて右腕を思いっきり伸ばす。
だが、徳川はオレの攻撃を必死に避ける。
「無駄だ非人、平伏せろ」
その直後再び拳が飛んでくる。突き上げられるような拳はオレの腹を捉え、直後。
ドン！　という太鼓を叩くような衝撃が走る。
込み上げてくるように吐き気に襲われ、オレは倒れ込みそうになるが、さらにそこへ徳川の鉄拳が下から突き上げられた。
右アッパー。
ゴォン！　と、脳を揺さぶる一撃が炸裂した。
一瞬、意識がどこかへ飛んだような感覚に襲われる。ぐにゃぐにゃだ、視界が揺らいで頭もガンガンして、顎と腹が強烈に痛ェ……いや、先程殴られた顔面もクソ痛ェ。
「室内でお前が出せる速度に限度がある。対して、俺は一時期フランス外人部隊で体を鍛え、格闘技は割と得意な方なのだ。お前の単調な攻め方は――俺には全く通用しないぞ」
「……チッ！」

三原の時と全く同じだ。確かに、三原のあの技術を完璧に再現するとは……徳川の格闘センスは実にビックリものだが、だからって――それが完璧であるとは言えねェ。

それにオレの本気がこの程度だと、本気で思ってンじゃねェのかこのクソ野郎ォは？

だとしたら心外だ。そういうわけで見せてやるよ――本物の戦い方をなァ。

「……ッ！」

オレは拳銃を取り出し、その銃口を自分の体へ向ける。

その瞬間、徳川が薄い笑みを浮かべた。

「自害するつもりか？」

「ハッ、そういう選択肢も悪くはねェだろ」

「まっ、反乱分子の罪は死ねば償えるものだ。俺は手を出さん、そのまま死ぬがいい」

「そォかい、そりゃどーも」

軽い調子で答えて、オレは拳銃を自分に向けて放つ。すると、放たれた銃弾は全身に張り巡らされている暴風の膜に接触し、跳ね返って徳川の額を狙って突き進む。徳川は、オレが自害と見せかけて銃弾を反射する作戦を見抜いていたのか、間一髪の所で銃弾の軌道から外れた。

ニヤリ、と徳川が嫌な笑みを浮かべる。

まるで――オレをトコトン馬鹿にするかのように――。

「そんな事だろうと思っていた。まあ、残念だったな……銃弾の回避は比較的簡単だ。要は弾が放たれる寸前に己が動けばよい。よって――今のお前は俺には勝てない。どう卑怯な手を使おうがな」

「……ハッ、そのセリフ――オレを潰してから吐けよクソ野郎ォ」

「あ？」

徳川が小さな声を漏らした、瞬間――勝敗は決した。

どくどく、と徳川の胸から血液が溢れ出ているいる。ピュ、という肉を貫く生々しい音が響いたと同時に――徳川の胸に風穴が空いたのだ。

ぷるぷると体が震え、「あ、あ……あ」と小さな声を漏らし続ける。何かを喋りたげな感じであるものの、今の徳川にそれを喋る余裕はねェ。

「は、ふ……っ」

やがて徳川は息を吐き、バタンと倉庫の床に倒れ込む。

それでも徳川は必死にもがき続ける。

最も、痛みで無意識に苦悶しているだけかもしれねェが。

「最期を教えてやろォか。オマエに風穴が開いた理由と、オマエの敗因を」

オレは床で胸を押さえ、苦悶する徳川を見下しながら言葉を続ける。

「まずはオマエに風穴が開いた理由か。オマエ、オレの能力忘れた

わけじゃねェよなァ？　オレは大気そのものを操作できるから、風の操作なンで造作もねェンだよ。暴風の膜張る以外に風の精密操作が出来ねェと思ったら大間違いだ。その気になれば――初速を保ったまま風で銃弾を制御し、大幅に旋回させながらオマエを背後から狙撃する事も可能なンだ」

徳川はオレを見上げ、虚ろな目でオレを捉える。口からも血を流し、食いしばっている歯も既に真っ赤に染まっていた。それでも、オレの話を聞いているようだ。

「で、オマエの敗因は――ただ殺すのが目的なヤツと、守るために殺すヤツの違いだ」

言葉を聞いた徳川は完全に力を失い、ぐったりと伸びてしまう。それは、徳川家則という男が正真正銘――単なる床の汚れと化した瞬間であった。

第２１２話，緊急事態（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「徳川小隊もうリタイアした！？」

大吾「早っ！」

重原「早川がちょっと苦戦した以外、随分アッサリな回だったね」

圭介「……つか、学園編って容赦なく銃弾が飛び交うんだな」

大吾「徳川家則、何の為の登場だったんだろうな」

重原「ま、後は作者が徳川ファンに殺されない事を祈るだけだよ」

第２１３話，学園襲撃

「あはは、随分派手なことになってるね」

ベージュ色の若干派手なドレスを身に纏った、長い茶髪の少女が言う。

佐井学園に襲撃者が現れた話はすぐに校内全体に伝わり、学園側は生徒の退避を決定。

こうして、一部を除く学生の退避が行われ、現在学園に残るのは暗部の者のみ。その暗部にある組織の一つである、“ワクチン”所属の沢那魅咲（さわなみさき）という少女も、戦場と化した学園に残った僅かな生徒の一人で、さらに彼女はＡランク能力者の一人でもある。

そう、彼女こそ――五本指の序列第四位なのだ。

「結局、襲撃者の特定は出来たのかよ？」

そんな質問をしてきたのは、沢那の目の前に座っているアメカジ系ファッションの男。

彼の名前は志熊大志（しぐまたいし）。硬派な名前の割には軟派な男である。

「さあ？　まぁ、トレントが連中がもう迎撃に向かっちまってるころでしょう」

敬語なのに何故か乱暴な、そんな話し方をする赤髪で三つ編みの眼鏡をかけた、旧日本陸軍の軍服姿のシュールな少女――白梅雫（しらうめしずく）が、その真面目そうな見た目に反し、超がつくほどダルにそうに自分の予想をワクチンのメンバー全員に伝えた。

「結局、自分達の出番はないんですかね」

白いスーツ姿で丁寧な口調の優男――春日樹（かすがいつき）は疑問に思う。
この４人が“ワクチン”。
少数の人員で構成された、佐井学園の非公式部隊の一つである。
彼らの主な業務はあらゆる、“暴走者”を止める事であり、過去にも暴走能力者と何度も交戦してきたらしい。そんな彼らは佐井学園に謎の組織が襲撃し、徳川小隊（プラトーン）が壊滅したと言う話を真っ先に聞く。
本来なら、そんなクソ野郎はさっさと出陣してブッ潰したい所なのだが、

「まっ、侵入者は一人じゃないみたいだし、徳川潰した連中は“トレント”に任せない？」

沢那のその提案に、残りの全員が頷く。態々自分達が手を下す必要は無い、それより佐井学園にさらに侵入してきたという、新勢力の制圧の方が重要であろう。
沢那は立ち上がり、学園のとある教室の窓から荒々しい外を眺め始めた。

――浜島雅人Ｓｉｄｅ――

車で１時間以上はかかったが、ようやく佐井学園の北部に到着。
北部は警備が手薄だと西園寺は言っていたが、だからと言って敵も無抵抗なわけがない。俺も力及ばずながら、木山の横で頼りがあるのかもわからない拳銃を構え、後方から西園寺と明智をサポートするつもりでいた。

だけど、実際に佐井学園の入り口まで来てみると……。

「お、おいおい……こりゃどういうことだよ!?」

俺は思わず大きな声で叫んでしまった。

入口には、大量の黒ずくめ達が倒れていたからだ。ちょっと待てよ……銃を持った男が１０人以上耐えれているってことは、西園寺の話はデマじゃなかったってわけかよ。

「派手にやられてしまったみたいだわ」

「うん、私も話程度になら聞いたことがあるぞ。徳川小隊（プラトーン）は対能力者戦に特化した部隊で、並の超能力者なら制圧されてしまうと思うのだが……中々の達人が襲撃したみたいだぞ」

【作戦、変更しないと】

「早苗の言う通りだよ。雪乃、ちょっと状況が変わり過ぎてるよ」

「そうね、朱実……それにしても、一体襲撃をし掛けたのは誰なのかしら？」

全くだ。武装集団を全滅させられる程の馬鹿だぜ、多分普通じゃねえよ、だけど逆に考えてみると好都合かもしれないな。なんたってよ、俺達の敵が既に一つ消えているわけなんだぜ？

「な、なあお前ら……これって好ましい状況じゃねえのか？」

「ん、浜島。どうしてだ？」

俺の発言に、最初に反応してきたのは明智だ。明智はクールだけどよ、この喋り方が俺にとっては恐怖以外の何者でもないぜ。見た目は西園寺とは対照的に素晴らしい体つきだが、放たれている威圧感は西園寺のものとは全く別物。流石は――どこかの高校のエリート学生だぜ。

俺はそんな彼女に少しビビりながらも、なんとか話を前に進めようと唾を飲む。

それが俺の――覚悟であった。

「だ、だってよ。学園を襲うってことは志は同じなんだろ？　ほら、ソイツらが学園の組織を一つ消したって事は、俺達の敵が少しだけ減ったって話じゃねえかよっ」

「……浜島、相変わらずお前は馬鹿だぞ」

「えっ、な……なんでだよ明智。常識的に考えたらそうな――」

「常識がないのはお前のほうだぞ。襲撃者の志が私たちと同じだと思うのか？」

「えっ、いや……だってそうじゃん。学園襲ってんだしよ……」

「学園を襲うのにも様々な理由があるだろう。襲撃者の情報がない以上、私達と同じ考えを持っていると考えるのはあまりにも危険すぎる」

「そうね、これぱかりは凪紗が正論ね」

【私も、全くの同感】

そんな所に気づくとは……やっぱおバカな俺とは頭の出来が違うな。くそっ、戦闘でも役に立たないとしたら、こういう普通の場面でも役に立てねえのかよ……俺って存在は。

俺は――本当にチームを束ねていた男だったのか？

「あはは……浜島、ドンマイ」

「き、木山……？」

突然木山が俺の背後に回り込み、俺の左肩に手のひらを乗っけてきた。

女の子に突然触れられるという不意打ちに、思わずドキッと胸が高鳴る。

「あんたは新入りだし、唯一こういう世界を知らなかったんだからね。仕方ないよ、それが常人の判断だもん。だから――少しずつ慣れていけばいいと思うんだ」

「き、木山……テメェ、ありがとうな……っ」

木山は俺なんかに気を使ってくれるのか……ハハ、それだけでも幸せな気分だ。こんな真っ黒に染まった暗黒の世界でも――他人を思い遣る気持ちってのは完全には消えないんだな。

それに、そうだよ……。

俺はつい最近まで――ただの一般人だった男だ。

この世界に不慣れな方が自然じゃねえかよ。なにを悩んでいたんだよ畜生、木山の言う通りこれから慣れて行けばいいだけの話じゃねえか。

「あら、朱実ったらヘタレヤンキーが好みなのかしら？」

「――ッ！？　ち、違うって！　あんた達が虐めるから慰めてただけだよ！」

ぐはっ、木山……テメェの今の発言が一番傷ついたかも。

少しは、その……なんだ。少しは想われてるのかな～なんて思ってたのに……。

ハハ、だよなぁ。所詮、俺の勘違いってヤツだよな……。

でも、それだけなのに胸が痛ェのは何故なんだ？

「ふ、ふん……恋愛なんてくだらないぞっ」

【同感】

「あら、貴女達だって好きな人いるでしょ？」

「ッ！？　いいいいないっ！　いないぞっ！」

【い、いるわけない。いるわけないっ】

「ふふ、片想い中かつ2人は恋敵同士。面白い構図だわ――」

さ、西園寺……鬼だ。そして超サディストだ……この女に弱みを握られたら最期。明智や白藤のようにいじられてしまう可能性がある。

怖ぇな西園寺……ある意味佐井学園の暗部より怖いんじゃ――、

「――ッ！？」

「う、あああッ！」

刹那、
激しい轟音が炸裂し、一瞬だったが衝撃波が目に映ったような気がした。
まずい、襲撃だ。
このままじゃ衝撃波に殺される……そう俺はそう思っていたが、何故だかこんな不測の事態が発生していると言うのに、明智も白藤も木山も冷静である。クソ、なんなんだよ。どうしてコイツらは死ぬかもしれないこんな時に——冷静でいられるんだよ。
その答えは、この直後に俺も理解した。
フッ、と人影が俺の前に現れる。その人影は咄嗟に衝撃波に向けて手を突き出し、そこからどういうわけか——冷気を放つ分厚い何かが作成された。
瞬間、
ドン！　という叩きつけるような音が炸裂。衝撃波のようであるが……それを受けてもフレンドのメンバーは俺を含め、全員が無傷であった。

「雪乃！」

木山が叫ぶ。
そういや、俺の前に現れた人影って、長い黒髪の小柄な少女で……そうか、西園寺が俺達の盾になったというわけか。でも、どうやって衝撃波から俺達を守ったんだ？
なにやら、眼前に俺達を守るような——分厚い氷があるような気がするんだが。

「ふふふ、もしかして攻撃を仕掛けた人は——私を存在を忘れていたのかしら？」

そうだ……思い出した。西園寺は学園でも5本の指に入る超能力者。その能力は氷と念力ってヤツらしいが、それを強大な力で操れば――氷で装甲を作り出せるってわけかよ。

「お、おい。テメェらみんな大丈夫か？　西園寺が能力使ってくれたけどよ……？」

「雪乃が居て助かったぞ。私の発火能力（パイロキネシス）じゃ、全く盾にならないしな」

【でも、今のはどこから？】

「朱実、敵の情報を解析してくれるかしら？」

「おっけー任せといて！」

西園寺に頼まれ、それを快く引き受けた木山は静かに瞳を閉じる。そういえば、木山も超能力者だって前に聞いたな。確か木山は偏差（オブザー）電換（ブホリック）と言う能力を持っていて、ソイツを使えば今の状況や敵の強さがある程度わかるらしい。木山は優れた超能力者らしいのだ。

瞳を閉じながら、黙っていたのが大体5秒くらい。

そろそろ次の攻撃が飛んできそうだが――その時。

「対象物の検索、及び数値化を開始。対象物は生命体4、戦闘力はそれぞれバラバラ。敵戦力は4つの座標、分かりやすく東西南北に点在。最も強力な数値を持つ者は南。次に東、次に西、最も低い数値を持つ者は北部。次に勝率と生存率を計算――勝率は約５０％。全員の生存率は４０％」

機械のように放たれる声。

すげえ……何処まで本当かは知らないけど、これが木山の持つ超能力。
これって――上手く使えば軍事利用できるんじゃないか？
まあ、俺は木山がそんな事に使われるのは――絶対に嫌なんだけどな。

「ありがとう朱実」

「それにしても、勝率が低いぞ……っ」

【多分浜島がいる分、勝率が低下しているのかも】

「ひでえなオイ！」

俺ってそこまで下に見られていたのか。いや、仮に木山がそう思ってなくても、木山の能力はあらゆる対象物を数値化出来るらしいし、数字が俺の弱さを証明したのかもしれない。
ううう、流石数字……良心のりの字もねえな。

「まあいいわ、私は南部へ向かうわ。一番厄介そうみたいだからね」

「それじゃ、私は東へ向かうぞ」

【私は西へ……でも】

みんなの表情が曇ってゆく。
ああ、わかってるよ……北部を攻めるヤツが超弱いことくらいな……だが、その程度で諦めるほど俺もヘタレじゃねえんだよ。そりゃ逃げたいけど……女の子だけ置いて逃げられるかよ。

「し、心配すんなよ。北にいるのは一番弱いんだろ？　俺が殴り倒してやるって！」

「不安だけど、今は浜島の腕力を信じるしかないわね……朱実、浜島をサポートしてあげて」

「わかった、浜島――ちょっくら頑張ろう！」

「お、おう！」

勝てるかわからねえけど、これが初めての実戦だ。

超能力者かあ……ま、まあ同じ人間であることには変わりない。

勝てねえってわけじゃないだろ――少し本気になってやるよ畜生！

第２１３話，学園襲撃（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「ついに五本指の４人目が登場したわね」

圭介「一見、普通の女の子だけど……どんな能力を使うんだ？」

暮葉「もきゅ！　実は作者もまだ考えていないらしいのです！」

圭介「……え？」

暮葉「でも、何個か候補はあるのらしいですよ？」

圭介「……とりあえず、主人公なのに出番がない俺って」

暮葉「それは拙者だって……作者に文句を言いたいのです！」

第２１４話，総合研究博物館

徳川家則は死んだ。コイツは三原のクソ野郎の真似をしやがったが、所詮は猿。三原のような精密作業が単なる殺し屋に出来ると思ったら、ソイツは大きく間違っている。

アレは三原の頭がよかったからこそ、三原のセンスが長けていたからこそ――実現出来たこのオレの撃退方法の一つに過ぎない。

まっ、格闘センスは抜群だった。

少なくとも、オレを殴れただけ――どの特異点よりも優秀な成績を残しやがったよ。

と、その時。オレのポケットで携帯が震動する。

画面を開くと、そこにはラウル・ゲリエの名前が表示されていた。

「よォ、そっちの仕事も終わったってかァ？」

『その様子だと、そちらの仕事も終了したみたいだね』

「あァ、今徳川小隊（プラトーン）のアタマを潰した所だ。オマエらはどォなんだ？」

『こちらも、徳川小隊（プラトーン）所属の人員全てを殺害したよ』

「要するに、佐井学園の主要な暗部組織が一つ――消えうせたってワケだな」

まァ、当然の結果と言えばそうだな。オレが負けるわけがねェし、ラウル達は徳川小隊（プラトーン）の連中が知らねェ魔法使いって生き物だ。生物ってのは知らない存在に弱いモンだ。徳川小隊（プラトーン）がオレ達に勝てねェのは戦いが始まった時から――決定事項だったンだよ。

「ンで、この後は予定通りか？」

『ええ、地下の武器庫を襲撃しよう』

「武器が無ければ、ゴミは動けねェからな」

『うん、そういうわけだから一旦集合しよう』

「集合場所は何処だ。それを今から教えろォ……」

『俺達のほうから早川の所へ行くよ。魔力を追跡するほうが絶対早いだろうしね』

「そォかい、そンじゃまァ……一人で待ってるとしますかァ」

『うん、もうしばらく待っててね』

そこでプツン、とラウルからの電話は切れる。

さて、次は何処のクソ野郎が相手なンだろォか……久我のクソ馬鹿か、それとも第４位の雑魚女かは知らねェが、どっちにしてもオレと会えば――ミンチ確定だな。

そォ言えば……少し外が騒がしいが、どこのクソ野郎ォが来やがったンだ？

まっ、どっちにしても――大した脅威ではねェだろォがな。それにしても暇だ、今のうちに徳川の死体でも調べておくとするか。

ひょっとしたら、何か資料を持っている可能性もある。

資料を持っているとしたら――ソイツは見逃せるモンじゃねェからな。

「面倒臭ェ……」

呟いた後、オレは身を屈めて――徳川のスーツを漁り始めた。

――明智凪紗Ｓｉｄｅ――

あの爆発の後、朱実の偏差電換（オブザーブホリック）を信じて、私達フレンドは４組み……と言っても手を組んでいるのは浜島と朱実のみだが、各々の敵を倒すために目的地へ向かった。

私が向かっている場所は爆心地の東部――総合研究博物館前の広場だ。

総合研究博物館は佐井学園に所属する研究者が、独自の研究結果を発表する為に設立された学園が運営する博物館で、中には超能力開発に関する情報も展示されている。当然、超能力に関する情報は極秘に近いものであり、博物館を利用できる者はＩＤを持つ一部の者のみだ。

ちなみに、以前は私もＩＤを持っていた……以前はな。

「なんだ、俺の相手は明智凪紗――Ｃランク能力者かよ」

何処からか声が聞こえてきた。なにやら上から声をかけられた感じだったので、私は視線を上へ向けてみると――総合研究博物館のバルコニーに一人の男が立っていた。

アメカジ系のファッションを着た、今風のチャラい雰囲気の茶髪男。しかし、その眼光にはは暴様な光があった。多分コイツは――暗部組織の人間であろう。

と、すると……。

「お前、徳川小隊（ブラトーン）ではなさそうだな……どこの組織だ？」

「俺？　ああ、俺はワクチンって組織のメンバーだけど？」

「ワクチン……まさか、五本指が所属するって噂の……」

「よくご存じだねぇお姉ちゃん。うちのリーダーがソレなんだけどさぁ、いやぁ～お姉ちゃんほどおっぱい大きくないから――つまらないんだよねぇ」

やっぱり……見た目通りのチャラ男だぞ。藤島以上に変態の最低野郎だぞ。

それにしても、私の名前を知っているってことは……ふっ、私も……学園をやめてから何だかんだで学園に追跡されていたわけか。

やっぱり――この学園はどこかが狂っているぞ。

「さて、そろそろ――名前を名乗ってもらおうか？」

「俺？　俺は志熊大志って名前なんだけど。まぁヨロシクね巨乳の姉ちゃん」

「生憎、私はお前の下ネタトークに付き合っているほど暇ではない。早急に始末させてもらうぞ」

「おやおや？　こりゃ古風なお堅いお姉ちゃんな事。アンタ絶対処女だよね？　ひゃー俺処女って大好きなんだよねー！　こりゃ俺が勝ったらお姉ちゃんの処女奪っちゃわないとね！」

「誰が、お前なんかに渡すか……ッ！」

その言葉を聞き、私が踏んだ一歩が戦闘の開始を告げた。力強く地面を踏みつけ、常人の数倍はあるであろう跳躍力を生かして、私は殆ど瞬間的にバルコニーよりも上を跳躍した。態々超能力を使わなくともチャラ男程度、簡単に気絶させる事が出来る。

志熊から見て数十メートル上空。そこから私は志熊に向けて飛び蹴りを放つ。

「残念」

が、志熊が突然そんな一言を呟く。

人差し指をこちらに向けてくると、続けるように再び喋り始めた。

「単調な攻撃は――命取りなんだぜ？」

「――熱(あつ)ッ！」

志熊が言い終えた瞬間、太股付近に焼けるような痛み……というよりも、本当に炎で焼かれて火傷を負ったような感覚に襲われる。不意打ちと、皮膚を焼かれたような苦しみに、空中で全身から力が抜けてしまい、飛び蹴りの体勢からただ重力に任せるのみとなってしまった。

その状態で勢いよく、私はバルコニーへ落下してゆく。

「が、うァァあああああああああああああああああああああああああああッ！」

１０メートルは超える高さから落下し、背中が床に激しく叩きつけられる。火傷の痛みと打撃による痛みのダブルパンチが、私を余

計に苦しませる。
私は痛みに耐え、苦悶に満ちながらも立ち上がろうとする……が、
「オラ、立つんじゃねえよ姉ちゃん！」
「う、がああああああああああああああああああッ！」
再び皮膚が焼け爛れる様な耐えがたい苦痛。どれだけ叫ぼうが、どれだけ床の上でゴロゴロ暴れようが痛みは消えない。むしろ、余計激痛に襲われているような感覚に襲われる。だが、私は咄嗟に自分の太股を見た時、太股には不思議なことに、火傷をしたと思われる傷がないのだ。
精々、赤く変色した個所があるのみだが、火傷をしているという感じではない。
お風呂に入った時と全く同じ程度にしか――赤く変色していなかったのだ。
「俺は正常位派なんだよ。支配するのが好きだしさ……だから騎乗位にはなるなよ？」
「く……っ！」
どういうことなんだ、志熊の能力がいまいちわからない……が、私は確かに火傷をしたような感覚に襲われた。だから多分、あくまで予想だけど――あの志熊が有する能力は、
「お前、発火能力者（パイロキネシスト）か……ッ！」
「残念、確かに対象物を焼く能力だから、そう考えるのが常識だと思うけどよ――コイツは発火能力（パイロキネシス）じゃねえんだよな」

「――ッ！」

その時、僅かに閃光のような物が瞳に映った。放たれたのは１０本の閃光、私は殆ど反射的に身を屈めるが、そのおかげで１０本もの凄まじい閃光を回避する事が出来た。

そして素早く起きあがり、志熊との距離を取ろうと後方へ跳躍する。

１０メートルほど距離をとった所で私は立ち止まり、能力に関しての推測を行う。

志熊が放ったのは閃光だ。それは間違いない、炎ではなかった。太陽光の操作とはまた別物であると思われる。そもそも今日は曇り、日差しは殆どゼロだぞ。ということは、今の能力は太陽光の操作とは別物だろう。では他に何か、光るもので熱を持つ存在……。

ま、まさか……。

「お前……それは、まさか――電気操作系の能力か！？」

「そう、電磁放射（エレクトロエミット）って能力なんだけど、ミリ波の電磁波を対象物に放射して、誘導加熱で皮膚の表面温度の上昇を誘発させるんだよ。するとな、火傷したみたいな感覚に襲われるってわけさ。おかげで――よく発火能力者（パイロキネシスト）に間違われるけどな」

やっぱり……そういうことだったのか。つまりコイツは電気操作系の能力者で、この火傷のような感覚は電磁波を喰らって皮膚の表面温度が上昇したからか。中々凄い能力……というか私の発火能力（パイロキネシス）よりもランクが高いかもしれないな。

志熊のヤツ――多分、まだ本気を出していないハズだ。

それとも、その能力――本当に殺傷に至るレベルではないのか？

「さて、次は後頭部に放射して気絶させるか。気絶中にレイプすんのも中々興奮するしな」

問題は志熊が電磁波を、どの程度の精度で操れるかどうかだ。単に自分を中心として複数の電磁波を一直線に放射するだけか、放射した電磁波の軌道を途中で変更可能か。

それで勝てるかどうかが決まるが……多分、後者は無理だろう。単に電磁波を放射するだけならCランク能力者、及びBランク能力者でも可能なことだ。だが、電磁波の軌道変更は難しい上に莫大な演算能力も必要だろう。おそらく、それは五本指レベルでないと無理だ。

なら、志熊の攻撃は一度避ければ――追跡してくることはないハズだ。

「は、おら……まずは踊って後頭部を見せろォ！」

電気を通さないものがあれば、志熊の電磁波を防ぐことができるが……待て、確かゴムは絶縁体だったハズだ。つまりゴム製品さえ探してしまえば――ヤツの攻撃をある程度は防げる。

よし、この場は一旦戦線を離脱しよう。

発火能力（パイロキネシス）……いや、並の能力者とは相性が悪すぎる。Aランククラスの高位の電撃使いでなければ対処は難しい。

ならどうするか、その手段を探しに――総合研究博物館へ行くんだ。

「――ッ！」

私は咄嗟に跳躍し、総合研究博物館のバルコニーから飛び降りる。跳躍した時つま先に青白い閃光が見えたので、おそらく志熊の電磁波をギリギリで回避したのだろう。

「ハッ、待てよお姉ちゃん！　俺の電磁放射（エレクトロエミット）からは逃げれねえぞ！」

どうかな、今に見ているがいい。

私はかつて、総合研究博物館のＩＤを持っていた。何度も出入りしたし、だから博物館の中や展示物をある程度知っているんだ。この中には確か――アレがあったハズだ。

電撃使い殺し（エレクトロマスター）の――必勝アイテムがな。

私はドアのガラスを突き破り、総合研究博物館の奥へと進み続けた。

第２１４話，総合研究博物館（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「電磁波避けるって……明智も化け物だよな」

早川「いい事教えてやろォか三下ァ？　電磁波ってフツーは見ェねェンだぞ？」

圭介「えっ？　じゃあこの小説嘘になるじゃねえか」

早川「見えたら東京タワーの天井が眩しくて見えねェだろ」

圭介「じゃ、じゃあなんで明智には電磁波が見えたの？」

早川「可視光線の一種じゃねェの？　通常の可視光線は殆ど人体に影響はねェンだけど、まァオレにも説明できねェわ」

圭介「だから志熊は強いと？」

早川「まァな、電気系統はオレの暴風の膜でも防げねェし」

圭介「じゃあ、お前御〇美琴がいたら勝てないじゃん」

早川「そンな事はねェ……空気ってのは本来絶縁体だろォ？　ソイツの操作を行い、空気の膜さえ張っちまえば電撃に対し、暴風の膜と同じとは言えねェが、電撃から自分の身を守るって効果が得られるンだよ」

圭介「すげえ！　でも空気って絶縁体なのに何で雷落ちるの？」

早川「ソイツはなァ、絶縁体っつっても完璧じゃなくてよォ、空気っつっても非常に高い電圧をかけると絶縁破壊って現象が起こるンだ。まァ、雷が発生する原因の一つでもあるンだが（ｒｙ」

暮葉「長すぎです！　このコーナーは早川先生の科学の授業じゃないのですよっ！？」

※作者も科学音痴なので、詳しいことはグー○ル先生でググってね！

第２１５話，絶縁体を入手せよ

総合研究博物館。

その内部構造は要塞にも匹敵するほど強固。入口のガラスはあくまで飾りで、博物館への本当の入り口は厚さ１２０センチの鋼鉄で出来ている。これほどの物を破壊するためには、おそらくレールガンほどの威力がなければ不可能だろう。なら、ここを突破する手段はたった一つ。

複製ＩＤの使用だ。

私は博物館へ侵入する為の複製ＩＤを所持している。それはこの戦いの数日前、白藤がとある学生からＩＤカードを盗み、その複製に成功したらしい。

これを使えば、ここの生徒のように博物館に出入るする事が可能だ。

「……よし」

小さな電子音の後にガラガラと、耳に響く音を立てて鋼鉄の扉が開いてゆく。一応ＩＤが変更されている可能性も考慮はしていたが、よかった……このカードで侵入することが出来る。

「おいおい、愉快にケツ振って逃げてんじゃねえよ」

「……チッ！」

カツカツと足音を立てて、志熊が博物館の中に侵入してくる。志熊の姿を確認した瞬間に駆け出した私は、博物館の奥へと進んでゆく。

チッ、という何かが焼けるような音が聞こえた。

志熊のヤツ……やっぱり電磁波を放射してきたか。
今の音がそれが博物館の壁に当たった音だ。さて、この場に長居は無用だな。

「――ッ！」

「おい、逃げんなって言ってるだろぉ！」

私は博物館の奥へとひたすら進み続けた。志熊に姿を目撃されれば、咄嗟に進路を変更する事でヤツの電磁波を回避してゆく。屋内では派手に能力を使うことは出来ないだろう。見つかれば右か左に逃げるだけの単調な行動だが、それでも電磁波から逃げる事は可能だ。

私は展示品の影に隠れ、潜入工作を行う工作員のようにコソコソと移動する。丁度志熊の死角となるポイントのみを選び、回避ルートとしてそこを通る。

だけど、何処まで逃げても志熊の足音は遠くならない。まずいぞ……このままではこの鬼ごっこが永遠に続く。長引けば長引くほど私のほうが不利になってしまう。

志熊大志……大した超能力者だぞ。

流石に、ここまで苦戦するとは思ってもいなかった。

まっ、私も所詮はCランク能力者。平均よりもやや強い程度の能力しか扱えない、A～Eの中にも最も半端な超能力者だからな。それより上位の能力者に劣るのは当然だぞ。

だが……下位能力者が上位能力者に絶対勝てないという話は――真っ赤な嘘だぞ。

「……あそこか」

静かに呟き、キッ、と前方を睨んだ。

確かあそこに勝利の鍵があったハズだ。アレさえ入手してしまえば、私は志熊という男に勝つことが出来る……が、それには一つ問題があるんだ。

「よぉおっぱいちゃん。俺からは逃げられねえぜぇ……？」

「ふん、同じ変態でも……お前のような下品な男は嫌いだぞ」

藤島とは大違いだ。藤島は変態でもいい男だから許せるんだ……でも、志熊大志という男は単なる変態にして下衆な男。私は同じ変態でも――志熊のような変態は大嫌いだ。

「はん、いいねそういうセリフ。マジ興奮すんだけど？」

「私は寒気がするぞ……お前の下衆さにな」

「反抗的な目つきがたまらねぇ。コイツは支配してイかせるとおもしれぇだろうな？」

さて、と……どうする……私？

志熊の電磁砲は威力こそ、セーブしているのか本当にそれが限度かは知らないが、殺傷力が殆どないので精々人を苦しめ気絶させる程度。だけど速射力はとても速い……おそらく、私が発火能力（パイロキネシス）を使ったところで発動前に攻撃されてしまうだろう。

志熊の攻撃を避けながら、どうやってアレを入手するか……。

「さぁて、そろそろ焼けるような痛みを味わうか？」

「生憎、痛いのは嫌いだぞ」

「そぉかい、だが破瓜の痛みってのは俺の電磁砲よりヤベェらしいぞ？　今まで何人もの女が俺のハイパー兵器に痛がる様を見てきたからなぁ？」

「……チッ！」

どうする、なにを……どうすれば？

どうやって隙を作る。隙さえあればアレの入手が出来るんだぞ。

「そぉら、いくよぉっ！」

志熊が両手を開いた刹那――、

「あ、がゥゥァあああああああああああああああああああああああああああッ！」

四方八方に電磁波が放射される。

全身をオーブンで焼かれているような気分になり、凄まじい激痛に耐えられず、それでも痛みを紛らわそうと私は叫び、ジタバタともがき続けた。そんな状態でもなお、私は志熊なんてヤツを見ないでアレを展示している場所を睨む。

アレさえ、アレさえ手に入れば――ッ！

「う、く……ぁ、あ……っ」

「そろそろ、痛みで意識が遠のいてきたんじゃねえか？」

「……くっ！」

犯される。

その恐怖とも屈辱とも受け取れる言葉が頭に浮かんだ。許せない……私の、私の処女はあんなヤツのものではない。そういうものは――本当に好きな人に捧げるものだ。

その想いが私の体を動かし、脳では必死に計算を行う。

結果、私は遂に――、

「うあああああああああああ！」

右の手のひらに灯った小さな炎。

それは野球ボール程度の大きさでしかなかったが、それでも炎は炎だ。普通の超能力者であればこれだけダメージを受け、痛みを感じている状態では能力の使用も行えない。痛みで集中力が切れれば計算が出来ず、能力が発動しないからだ。

でも、私の能力は違う――。

発火能力（パイロキネシス）というものは比較的、計算式が簡単に出来ている。

つまり――かなりのダメージを受けても演算処理が可能なんだ。

「チッ！　このおっぱい星人……まだ、計算できる余裕があったのか？」

轟！　という音を立てながら、小さな炎弾（えんだん）が志熊の懐を狙う。私は炎弾が志熊へ向かって無事に飛んでいる事を確認すると、ボロボロの体に鞭を打って走りだす。

距離にして１０メートル。アレを入れているガラスに拳を突く。

バギン！　という音と同時に、拳を突いたあたりを中心にガラスが崩れ落ちる。

そして、

ようやく私はアレ――水流系能力者が製造した超純水入りの容器を入手した。

「こ、の――おっぱいがあああああああああああああッ！」

志熊は立ってキレている。どうやって炎弾（えんだん）を防いだのやら……まあ、そんなことを考えている場合ではないぞ。苛立ちを隠せない志熊は電磁波を放とうとする。

だが、電磁波が私を捉える前に――、

「――――ッ！」

私は超純水入りの容器を取り出す。正確にはただの容器ではなく、超純水で洗浄を行う為に消火器のように水を放出する、佐井学園製の強力な特殊容器だ。

水は本来絶縁性を持つものだが、不純物が含まれると絶縁性が失われ、導体になってしまう不思議なものだが、不純物のない超純水なら――かなりの絶縁性を誇っている。

それを勢いよく放射してしまえば――ヤツの電磁波は私に届かない。

さらに志熊は水圧に負け、声を漏らしながら後退りしてゆく。

「う、ぐぁっ！」

志熊の苦しむ声が聞こえる。

やがて容器から水が無くなるが、その瞬間私は博物館の床を力強く蹴り上げる。水圧から解放された志熊が私に気付いた時には――既に私は志熊の懐に潜り込んでいた。

「な、テメェ――！？」

「悪いな」

言いながら力強く踏み込み、その拳を岩石のように固く握り締めて、倒すべき敵の下顎へ照準を合わせると、私は力いっぱいの一撃を下から突き上げた。

ゴン！　という凄まじい音が炸裂した。

志熊大志の体から力が抜け、背中からぐしゃり、と床に落下していった。顎に強烈な一撃を受けて脳を揺さぶられた上に、背中を強打という肺殺しの副産物を受けた志熊。

力を失った彼はぐったりと、無様な姿を私に晒すのであった。

そんな彼を見下ろしながら、

「生半可な信念では――私の戦意を挫くことなど出来ないぞ」

言いかけていたことを、ぐったりしている志熊に言い放ってやった。

さて、これで一人目の攻略に成功したか……他のみんなはどうしているのだろう？

とりあえず――誰かと会合しよう。

第２１５話，絶縁体を入手せよ（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「たまには、頭を使って勝利するっていうのもいいよね」

伊吹「ホントね、馬鹿みたいに真正面から突き進む圭介より渋く見えるわ」

圭介「それじゃ俺が馬鹿みたいじゃねえか！」

伊吹「馬鹿じゃない？」

暮葉「馬鹿だと思うのです」

早川「まっ、空気が絶縁体だっていう事すら知らねェヤツが、頭がいいとは思えねェけどなァ？」

圭介「……ねえ、俺、泣いてもいいかな？」

第２１６話，それぞれの戦い

それぞれの目的を果たすため、一旦フレンドの仲間と離れた私――白藤早苗は、現在は西部にある校舎側へ向かっていた。このあたりは校舎も近いことながら、付属機関の施設も多い……という話をフレンドのみんなから聞いた後、独自調査で大体の構造を理解した。

私は元サヴィエトの諜報員――こういう仕事は得意中の得意。

でも、今回は戦闘任務……ちょっと不利かな。一応、瞬間移動（テレポート）することによって武器となりそうな物は持ってきているけど、銃弾と同じように制限がある。

太股に忍ばせている鉄矢は５０本。鞄の中には１００本以上。

でも、激しい戦闘を行えばそれはすぐに尽きる。

出来るだけ――弱い人と当たる事を祈ろう。

「貴女が私の敵ってわけですか？」

建物の影から現れたのは、やや丸い眼鏡をかけた赤い三つ編みの女だ。多分、同い年くらいだとは思うけど、ファッションが奇抜……旧日本陸軍って、軍オタの人なのかな？

「なんで黙っちまってるんですか？」

「……」

「ひょっとして、超内向的なそういう人種ってわけですか？」

その言葉に返事をすべて、私は右手で携帯電話に文字を打ち込んだ。

【違う、単に声を出すのが面倒くさいだけ】

「ぷっ、あっはは！　なんなんですかその理由？　声帯こわれちまってんじゃねえですか？」

【壊れていない、声帯は正常】

「貴女、指を動かすほうが面倒くさいと思うんですけど、どーなんですか？」

【指は動かし慣れている。声を出すと喉が痛くなるのが嫌だ】

「こりゃ面白い子ですね。久々に虐めがいのありそうな感じです」

どういうつもりなんだろう。あの人……両腕を広げて、まるで早く攻撃してきなさいって言っているみたいだ。何を考えて、そんな無謀な行動に出るのか……理解に苦しむ。

だけど何があるかは――実際に試してみないとわからない。

「――ッ！」

私は太股に軽く手を触れ、五本の指に鉄矢を挟める。目の前の女に座標を指定し、世界でも珍しい部類に入る魔術――瞬間移動（テレポート）を実行する。

鉄矢が一瞬で女を捉え、太股と肩にそれは突き刺さろうとした。

「ゃ――ッ！」

しかしどういうわけか――鉄矢が跳ね返ってきた。

少女に直撃する寸前に反射された鉄矢は、私を捉えて飛来してく

る。唯一の救いは瞬間移動（テレポート）をしたわけではなく、単に何らかの力によって弾き返されただけであったので、鉄矢が体に直撃する寸前に上半身だけを振り、どうにか鉄矢を回避してみせた。

どういうこと……攻撃が反射されたのは初めてな気がする。

「ヘェ、空間移動能力者（テレポーター）とは珍しいねェ……アンタ面白ェよ」

口調が……変わった？

どういうこと。相手も能力者だし、多少変な能力を使ってくるのは覚悟済み。でも、攻撃を跳ね返す上に口調まで変化するだなんて……そんな超能力、聞いたことがないよ。

とにかく、何かを投げつけるのは危険みたい……なら、近接戦闘を挑もう。

「――――ッ！」

「走るの遅ェ……なァ、アンタ引きこもりってかァ？」

わかっている。私は魔術師、魔術にも色々と種類があるけど、それぞれの魔術には必ず代償というものが存在している。私の魔術の代償は動かなくても移動が出来るという代わりに――身体能力が犠牲になっている。動かなくても戦えるから、身体能力が必要ない。

だから私は瞬間移動（テレポート）を極めた代償として、体力を失った。

でも、もやしはもやしなりに――欠点を埋める策は講じているんだから。

「遅ェ！」

「……ッ！」

女がボクシングのような構えから、左ジャブを放ってきた瞬間だ。
私は自らの瞬間移動（テレポート）を実行して背後に回り込み、脇腹に引き戻されていた手首を掴もうと、手を伸ばす。
手首を取って、瞬間移動（テレポート）で鉄矢を刺しこめば私の勝利。

「ぐ、う、あああああああああああ！」

なのに、悲鳴を上げたのは女ではなく――私だった。
女に触れる寸前、何かに接触したのを感じたその直後である。触れた直後、力が跳ね返ってくるような感覚がして、気付いた時には手首がおかしな方向に曲がっていたのだ。

「今ので手首の骨折れちまったンじゃねェのか？　つか、声出せたンだなァ……」

「う、く……ッ！」

咄嗟に後方へ何度も跳躍し、女との距離を取った。
痛い……これは本当に、手首の骨が折れている……。
でも、どうして――？

「アンタ、佐井学園の生徒じゃねェのか？　って事は天然の超能力者――天然素材（ナチュラルマテリアル）か……それにしたって、知らねェわけねェと思うンだけどなァ――念動力（テレキネシス）ってヤツを」

【テレキ……ネシス？】

聞いたことが無い……超能力の一種かな。
というか、相手は私を超能力者だと思い込んでいるみたいだ。

「代表的な超能力の一種だァ。特に私は――最強の超能力者の演算パターンを参考に開発された幻影防膜（トリックアーマー）ってのを使うから、防御に関しては鉄壁なンだよなァ」

最強の超能力者……雪乃や凪紗から話程度には聞いたことがあるし、独自の調査でその存在が如何なるものかも知っている。確か名前は早川悠。待機そのものを操作し、どんな攻撃も風や空気の膜を張り巡らせる事によって反射する、最強の名に恥じない能力を持つ男だ。

差し詰め、念動力（テレキネシス）という不思議な力で暴風の膜を再現している……感じかな？

だとしたら、念動力（テレキネシス）の膜はほぼ鉄壁の防護。多くのアルファ隊所属の魔術師がその能力に敗れ、その鉄壁の膜を突き破る事は殆ど不可能。

あれ、でも早川は圭介に負けたらしいけど……どうして？

鉄壁なはずの膜を――圭介はどうやって突破したの？

「生憎、攻撃性はゼロなンだが……その分、体術は得意だから、戦闘員としてはアンタよりは有能だよなァ！」

軍服姿の女はボクサーのような構えから、徐々に間合いを詰めてくる。私は咄嗟に左手が太股へ動いたが、相手の能力を考えると、今、瞬間移動（テレポート）を行うのは賢明ではない。

かといって、体術では勝ち目がない。どうする事も出来ず、後退りをする。

そして――全体重を乗せた女の体が飛んできた。

「あ、ぐあああああああああああああああああああッ！」

グシャァ！　という鈍い音が響き、私の肩と後ろに建つ建物の壁

に体を挟まれる。押し潰されるような衝撃と激痛、込み上げてくるような凄まじい吐き気。
体を支える足が脱力していく感じ。
軍服姿の女が静かに離れると、私は静かに崩れ落ちてしまった……。

「はい残念、まぁ所詮空間移動能力者じゃ私には勝てねえんですよ」

私は瞼を閉じたまま、元の口調に戻った女の言葉を耳にする。同時に、いくつもの疑問が頭の中を飛び交っていた。そう、とっても不思議に思うことが沢山あるのだ。
まず、私は女に普通にタックルされた。それはいいとして、どうして女に触れる寸前にさっきのような力が働かなかったのか。
何故、女は私から攻撃させたのだろうか？

「まっ、トドメを刺したい所ですが……気絶しちまってるみたいですし、私は仲間の支援へ向かうとしましょうか。やれやれ、この白梅雫の能力は便利なもんですよ」

ひょっとしてあの女……いや、白梅雫は攻撃と同時に防御が出来ない？
さらに飛躍して、常時膜を張り巡らせる事が出来ないんじゃ……？
圭介が、早川悠に勝利した理由はもしかして、そこにあるんじゃ？

「……っ」

右手は……痛い、手首が骨折していて殆ど動かせない。でも、左手は動く。そもそも私の魔術は態々手に触れなくても——座標さえ理解していればある地点への転送が可能。
ただ、鉄矢は自分が動きまわる都合上、自分の座標を把握する手

間を省く為、あえて手を動かし手動で座標を指定することで、瞬間移動を行う。
脳での計算よりも、精度は若干落ちるけど……殆ど狙いに狂いはない。
攻撃は可能だ。
私は左手に鉄矢を三本挟み、殆ど賭けのような瞬間移動を行った――。

「う、ぐぁっ！」

「……ッ！」

瞬間移動した鉄矢は、反射もされずに白梅雫に突き刺さった。
やっぱり、予想通り――常時膜を張り巡らせれるわけではないんだ。

「あ、あ……」

足に一本、腕にも一本、そして頭部に一本の鉄矢が刺さった白梅雫は、そのまま力を失ってアスファルトの上に倒れ込んでしまった。
脳にダメージを受けたとは思うけど……一応狙いは正確。
多分だけど……命に別条はないハズ。最も、何らかの障害は残りそうだけど……。
さて、早く他の仲間を助けにいかないと……。

「……ッ！」

だ、め……体が動かない、痛い……っ。
段々視界がぼやけてきて、頭もふわふわとしてきて――そこから先の記憶はなかった。

――浜島雅人Ｓｉｄｅ――

俺は北部、つまり俺らが侵入した地点を動きまわっている。日本庭園か……何の意味があるかは知らねえけど、多分誰かがそういう趣味を持っているというわけだろう。

俺は木山と一緒に、日本庭園の草陰に隠れつつ、コソコソと北部を移動する。

「木山、敵はどの辺だ？」

「対象物の検索、及び数値化を開始。対象物は生命体１、座標計算開始……終了、浜島に分かりやすく報告、距離は約２０メートル北東」

「つーことは……この近く、あそこか」

俺と木山は再びコソコソと移動を開始、丁度茂みになっているところで、俺達が身を隠すには十分な場所だ。茂みの隙間からは、駐車場のような場所が広がっている。

少数の車と、白いスーツを着た男の姿が一人。

「アイツか……」

「アイツだね。丸腰……だけど注意して、ああいうヤツは多分銃を隠し持っているよ」

「心配すんなよ……喧嘩と同じだ」

喧嘩だって、相手の野郎が棒切れ隠し持ってるかもしれないしな。それが銃に変わっただけだってんなら喧嘩と大差はねえよ。問題は、どうやってあの野郎を制圧するかだ。

「なあ、お前の能力で相手の能力とかはわからないのか？」

「それは無理」

「そ、そうか……よし、こうなったら賭けるか」

「賭けるって浜島、あんた何するつもりなの？」

「まあ、見てろって……っ」

俺はベルトに挿んでいた、伸縮式の警棒を取り出し、右手で握り締めた。それを握った後に再び隙間を覗き込み、白スーツの優男の様子を窺う。男は俺達を探しているらしい。つまりさっきまでの俺達と同じ状況か……あの様子だと、俺達には気付いていないみたいだな。

……。

俺に背中を向けろ。いいな、背中だぞ。背中を向けやがれよ優男

……よし、今だ――行けよ俺！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

「……ッ！？」

俺は一気に茂みから飛び出し、警棒を振り上げる。だけど、叫び声を上げてしまったのが失敗だったんだろうか、男は俺に気づいたしまった。

まあいい、それでも構わず――俺は警棒を大きく振り回した。

「お、らァァッ！」

「――ッ！」

大きく振り回した警棒を避けられてしまった……が、これは予想の範囲内。すぐさま俺は左手を伸ばして、優男の髪の毛をガシッと力強く掴んだ。

「あ、貴方……が、侵入――ッ」

「そうだよ……ハハッ、俺が侵入者だよ――オラァ！」

セリフに続けるように、自由を奪われた優男の鳩尾に膝を打ち込んでやった。鳩尾への膝蹴りは強烈だったらしく、激痛からか優男は身を屈めようとする。

だが、俺はそんな行動を許さない。すぐに髪を掴んでいた左手を胸倉に回し、今度は胸倉を力強く握り締める。そのまま、左腕の腕力に任せ、優男を引き寄せてる。

そのまま固く握った右手の拳を――力強く叩き込んでやった。

「あ……が、ふ……ッ」

ガードも何もできず、モロに顔面に殴打を受けた優男は気絶した。

ああ、口から血を流して無様極まりない姿になってやがるな……まっ、俺達の目的を果たすためには仕方ねえ……か。

「浜島！」

「木山、お前の能力すげえな……本当にコイツ、大したことなかったぜ？」

「うん、でもあんたシャバいよ？」

「うう……ほ、ほっといてくれ。それより西園寺の所に行こうぜ？」

「えっ、雪乃？」

「ああ、アイツの対戦相手はヤバいヤツなんだろ？」

「……そうだね、うん。浜島にしては冴えてるよ！」

うあああ……き、木山にまでひどい事を言われた気がする。
ちくしょう、唯一の天使だと思っていたのに……いや、小悪魔か？
とにかく、今のはちょっと傷ついたかもしれねえ……。

「は、はは……行くか」

「うん、行こう！」

こうして、俺と木山は西園寺を手助けしに行くことになった。
俺なんかが役に立てるか微妙だけど……頑張るしか、ないよな。
さっきみたいに――カッコよく決めてやるよ。

第２１６話，それぞれの戦い（後書き）

特別コーナー！

【キャラクター・ステータス】

最新話時点でのキャラクターのステータスを紹介！

キャラクターＮｏ００１

・藤島圭介（ふじしまけいすけ）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

※通常モード。

攻撃力：☆☆☆☆

防御力：☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

体力：☆☆☆☆

魔力：ほぼナシ。

魔法（超能力）：ナシ、ただし魔法とも超能力とも言えない力アリ。

知力：☆☆

敏捷性：☆☆☆

地位：☆☆☆

総評：打たれ強い、かなり喧嘩慣れした高校生レベル。

※リミッター解除後。

攻撃力：☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

防御力：☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

体力：☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

魔力：ほぼナシ。

魔法（超能力）：ナシ、ただし魔法とも超能力とも言えない力アリ。

知力：☆☆

敏捷性：☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

地位：☆☆☆

総評：割とチート、まだ誰も全力は見ていない。

第２１７話，学園の実体

侵入場所より南部、ここは医科学研究所付属の附属脳神経解析センター。私――西園寺雪乃はここにいるという、朱実曰く最も手ごわい敵を倒すためにやってきたけど……どこかしらね。

ここは一度だけ訪れた事があるわ。名前通り、脳の解析を行う研究施設らしいけど、その実態は一度訪れた程度では不明。ただ、噂では非人道的な実験が行われているらしい。全く、佐井学園というのはそういう物しかないのかしらね。

「職員は……退避したのかしら？」

一応、研究施設の大半は破壊して、職員の大半は氷漬けにしたけど……。

まだ、ここは綺麗に残ってるわね。

真っ白な照明に照らされた広い空間には、長い金網の階段と、複数のパソコンや培養機が並べられている。培養機の中を覗き込むと、改めて噂は本当だってわかったわ。それぞれ赤い培養機と白い培養機があるけれど、赤い培養機にはお腹を切り裂かれた全裸の少女達が。

白い培養機には、おそらく少女達から摘出された胎児が入っていた。

「胎児を被験体にしているみたいだけど……どういう実験だったのかしら？」

おまけに、お腹を切り裂かれた母体も生きているわ。培養機に接続されているパソコンの画面を見る限り、未だに鼓動が動いている。超能力者特優の強い脳波も出ているわ。

それを確認しつつ、培養機の中身を一つ一つ確認していく……と、その時。

「なによこれ……この子は小学生じゃない」

あまりにもひどすぎる……そんな現実を伝える培養機が一つ、存在している。

実験の犠牲になった母体の中には――毛も生えていない小学生の女の子がいた。

この子……この歳で妊娠して、実験の犠牲に……確か、私の記憶が正しければ佐井学園に初等部も中等部もなかったはず。つまり――この子は外部の人間。

あまりの衝撃に、気付けば後退りをしていたが……その時、くしゃり、と、私の左足が何かを踏みつけた。

「……紙？」

元々冊子か何かだったらしい紙を発見、表紙だけだけど何か書かれているわね。私は足元に落ちていたその紙を拾い、書かれていた文字を読む。

「ＡＳ計画……？」

意味不明な計画名を見た後、私は近くにあったパソコンの画面を覗き込む。なにやらＩＤ入力画面らしいけど……ここを通り抜ければ、このパソコン内に機密があるのかしら？

私は椅子に座り、パソコンを操作する。

これでも私は、そこそこクラッキングには自信がある。素早くキーを打ち、私の知る全ての手法をこのパソコンに試す。すると、３つ目の手法で不正侵入に成功した。

ナメない事ね、私は米大手企業の内部にだって不正侵入できるのだから……。

表示されたのは何やら、レポートのようなものみたいね。

レポート名は『ＡＳ計画概要』……冊子と同じね。

私は唾を飲み、覚悟を決めて――レポートを読み始めた。

『Ａランク能力者の量産、及びその先のＳランク能力者の実現を果たす。Ａランク能力者の量産は、素質ある母体に宿る子を、胎児の時から特殊環境で育成。約４０％の確立でＡランク能力者へと進化し、残りは肉体的、精神的負荷により死滅する見込み。また、子を製造した母体は将来、子の能力測定を行う為の被験体として保存。なお被験体は、コンピュータが叩き出した結果に基づき、内部外部を問わずに暗部組織が回収する』

本当に……この学園は根元から狂ってるわね。たかが、高位能力者と、概念しか存在しない空想上の能力者を生み出すためだけに――こんなふざけた計画を進めていたのね。

さらに私は、Ｓランク能力者の製造法という項目に目を通す。

『Ｓランク能力者の製造法。プランＡ、魔道能力者たる者の製造の為、特異点の回収、及び特異点の脳を解析、可能性のある能力者に対し、特殊能力開発を実施。主要品（メイン）の【大気操作（エアオペレイション）】は学園を離反した為、予備品（スペア）の【波動操作（ウェーブハウンド）】を被験体とする』

これって、早川悠と序列第二位の事を言ってるのよね。いくら外道な人達とは言え、流石に物扱いされているのは可哀想だわ。どうやら、レポートには続きがあるらしい。

『しかし、プランＡは主任の死亡により失敗。ただし、【大気操作（エアオペレイション）】が全く未知の能力を行使した記録があり、魔道能力者の片鱗を見せ

た可能性がある』

あの男が新しい能力に目覚めたって……どういうことよ。というか、あの鬼畜白もやしは今頃何処で何をしているのかしら。学園を辞めたという本人の発現はレポートを見る限り、どうやら事実みたいだけどね……でも、あの男自身の話は最近聞かないわよ。

新能力の発現って……あの男、何処で何を……。

と、そんな事より、レポートにはまだまだ続きがあるみたいだわ。長いレポートね……でも、折角だから全部読んじゃいましょう。

『プランB、感情能力者計画。、【大気操作（エアオペレイション）】の妹【暗黒活力（ダークエネルギー）】を被験体とし、培養機内の被験体【暗黒活力（ダークエネルギー）】に脳波受信機を装着。【大気操作（エアオペレイション）】の脳波から、【大気操作（エアオペレイション）】の負の感情のみを受信。負の感情で脳を刺激し続ける事により、負の感情に犯された強大な、感情能力者が3年で完成予定。こちらは現実性がプランAより高いため、引き続きプランBを実行予定』

レポートにはまだ続きがあるものの、私はそこでマウスから右手を話し、静かに立ち上がって画面を見続ける。こんなゲームを作れば、審査に引っ掛かって発禁になるような。それほどまでに狂気じみたレポートが目の前にある。嘘だと信じたい残酷な実話が目の前にある。

私はそんな現実を見て、頭の中で何かが吹っ切れたような感じがして……、

「ふざ、けるんじゃ――ないわ！」

ダン！　と、力強くデスクを叩く。今の衝撃で、デスクの上に乗っていた書類やパソコンの位置がずれてしまった。だけど、それでも怒りは収まらない。

こんな計画の為に、内部外部を問わずに犠牲になった人がいるの？
こんな計画の為に、命が工業製品のように生み出され、利用されているというの？
こんな計画の為に、狂人だとしても利用されてしまう人がいるの？
このな計画の為に、負の感情しか味わうことが出来ない人がいるの？

「完全にナメてるわね……許せない……ッ！」

こんな計画は間違っている。
ちょっとしたエリートを生むためだけに――多数の犠牲を必要とするだなんて……。
そんなの――間違っているに決まってるわ。

「計画を、止めないと……っ」

まだ、本人達にとっては手遅れかもしれないけど……それでも、今だったら、まだ救える命があるかもしれない。少なくとも、被験体にされた母体は救出出来るハズよ。佐井学園を潰すという目的を果たすと同時に――被験体にされた人々を救いたい。
でも、その前に――お片付けの必要があるみたいね。

「あら、アンタはまさか……意外な再会ね――吹雪念力（ブリザードサイコ）」

あの超能力者の始末と言う名の――。

第２１８話，氷と原子

医科学研究所附属脳神経解析。
あまりにも馬鹿げている計画が行われている事を知った私は、どんな手段を使ってでもこの学園を潰してやろうと思った。本当……馬鹿げているわよね。外部の人間まで巻き込み、多くの人々を狂わせた計画の数々……でも、それも今日でお終いにしてあげるわよ。
私にはやるべき事が山積しているけど、まず最初にやらなきゃいけない事は――。

「吹雪念力（ブリザードサイコ）……まさか、アンタが侵入者だったとはね」

「貴女は……原子操作（アトムハウンド）だったかしら？」

「その名で私を呼ばないで欲しいね。私には沢那魅咲（さわなみさき）って名前があるんだけど？」

「なら、私にだって西園寺雪乃って名前があるわ」

原子操作（アトムハウンド）こと沢那魅咲。
確か、彼女もＡランク能力者……つまり五本指の一人だった気がするわ。どこかのお嬢様って話でとにかく滅茶苦茶我がままな女よ。
気に入らないものは全て排除する……それが彼女の信条。

「ふん、アンタを名前で呼ぶ価値なんてないと思うんだけど？」

「それはお互い様よ……原子操作（アトムハウンド）」

「チッ、その名で呼ぶなよ……氷結のクソ女が」

面白いわね……こういう我がままな子を挑発するのって。もう少し……もうちょっとだけ挑発して怒らせてあげようかしら。それはそれで面白いかもしれないし……なにより、体力温存の為にも出来る限り戦闘は避けたいからね。早く戦って、早く片付けて先へ進もう。

「あら、貴女に私をクソと呼ぶ資格があるかしら？　格下」

格下、一番言われたくないセリフよね。

私は挑発の為に、あえてそれを沢那に向けて言ってあげると――、

「テメェ……すぐにその発言が出来る地位から――引きずり下ろしてやるよ！」

怒り狂った沢那はブチブチと引き裂くように笑っている。両手を大きく開き、その動きに合わせて私も身構えと、次の瞬間に第一撃が飛んできた。

ズバァッ！　という黄色く、先端の鋭い結晶。

無数に放たれた結晶は、見た目こそ綺麗ながら臭いは最悪。まるで、長期間放置していた卵の臭いを嗅いだような、ツンと来る刺激的な悪臭が漂っている。その上、綺麗で臭い結晶自体は凄まじい速度で飛来し、ロケット弾のように降り注いできた。

これが“原子操作（アトムハウンド）”。

沢那が有する能力で、原子核を構成する陽子や中性子などの核子の個数を操作し、原子そのものを作り変えてしまい、その原子から様々な物質を作り出す能力だ。

そして、この黄色い結晶はその能力で作られた――巨大な斜方硫

黄ね。

「ッ！？」

目で捉えるのがやっとの速度で飛来してきた斜方硫黄を、間一髪で回避する。チッ、と硫黄の一部をかすってしまったのか、破れた服の布切れや引き抜かれた髪の毛が視界に映る。

速い、砲弾並の速射力ね……と、その時。視界に一瞬だけ沢那の姿が見えて、

スドン！　という、痛々しい音が炸裂する。

一瞬で確認出来た事は、沢那の膝が私の腹部に突き刺さっていたということ。ゴキゴキという嫌な音が聞こえて、口からも血の塊を吐いていた。

「あはは、３メートルはぶっ飛んだねぇ……でも、意識があるってアンタ丈夫だね？」

「い、ぐ……げっほ！　けほっ！」

蹴り一発で視界がぼやけるだなんて……ど、どんな蹴りだったのよ……？

「内臓潰れててもおかしくないと思うけど、まあいいわ……」

「はぁ、はぁ、はぁ……」

乱れる呼吸を整え、左手で蹴られた部分を押さえつけ、右手で口の血を拭う。まだ腹部に破裂しそうなほどの痛みが残っているけど、それでも私は立ち上がった。

何時までも寝ていては――沢那に殺されるから。

「テメェも今からそこの培養機に突っ込んでやるよ！　科学者も喜ぶだろうしなぁ……Ａランク能力者の母体が手に入りゃ、将来的にＳランク能力者へのシフトも可能な赤ん坊も生まれそうだしよ！　そしたら私は大量の金を貰って……あっぎゃはは！　なにそれ大金持ちコースじゃん！」

「……そんな事、させないわよ」

「あ？　なに、テメェは私に負けて実験動物（モルモット）になる運命だろぉ？」

実験動物（モルモット）……ふざけるんじゃないわ。

冗談も休み休み言って欲しいわね……。

「違う……もう誰も――実験動物（モルモット）扱いなんかさせない！」

「あーうるせーうるせーうるせえ！　超ウゼェんだよコラァ！」

叫び声の後、今度は硫黄――ではなく、透明色の不思議な液体が飛んできた。何の液体化は知らないけれど、おそらく沢那のことだから毒物ね。私は液体から身を守るために、ニヤニヤと笑いを浮かべながら能力を使い――氷の装甲を作り出してやった。

大気中に僅かでも水分があれば、それを操作する事によって氷を作り出す。

複雑怪奇な計算を瞬時に行い――劣化ウラン弾さえ通じない装甲を作ったのよ。

液体程度、どうってことないわね――。

「さぁーて問題」

攻撃を防がれたのにも関わらず、沢那は口が裂けそうな笑みを浮かべている。どんな矛でも貫くことの出来ない盾に攻撃を防がれたのに、あの余裕は一体どこから来るのかしら？

「その液体、ニトログリセリンって言うんだけど……それに衝撃を与えたら――ニトログリセリンはどんな反応をしちまうカナァ！？」

「――ッ！？」

瞬間、前方がピカッ！　と光ったような気がした。

それは爆発。

氷に触れた瞬間、摩擦でも発生したのか――ニトログリセリンは爆発を起したのだ。

「ぐ、あああああッ！」

爆発の直撃自体は、氷の装甲で防ぐ事が出来たものの、爆発によって吹き飛ばされた周囲の残骸が飛来し、凄まじい速度で私の左肩をかすったのだ。

それだけで。

たってそれだけで、私の左肩は――激しい痛みと血に塗れてしまった。

「う、く……えっ！？」

何を思ったのか、私は天井を見ようと首を動かす。顔を上げて天井を見上げると、白銀色に輝く無数の金属の塊が雨のように降下してきた。

先端は刃のように鋭く、まるでいつかの処刑道具のような金属の雨。流石に上空に氷の装甲を作るわけにもいかないので、私は殆ど

反射的に走り始める。転びそうになりながらも、必死に金属の雨から逃げ延びようと、ペースも見た目も無視して走り続けたのだ。

ガン！　ゴン！　と、後ろから連続して金属音が響く。

「くっ！」

その時、私の手前僅か１０センチの地点の床に――金属の杭が突き刺さった。

ふと上を見ると、上からも杭が降ってくる。私はそれを避ける為に右へ跳躍し、とにかく串刺しにならないように、必死になって逃げていた――その時。

「オラオラクソビッチ！　床にケツ振って逃げてんじゃねえ！」

「……ッ！？」

無数の杭が床に突き刺さった事により、埃が舞って視界が遮られている中、突然埃を吹き飛ばしながら青白い、不健康的な光の筋が私に向かって飛んできた。

咄嗟に計算を行い、能力で氷の装甲を製造する。

確かにそれで、青白い光の筋はせき止められた――ハズだった。

「う、あああああああああああああああああああああああッ！」

ハズだったのに――焼けるような痛みが全身に襲いかかってきたのだ。

その一撃で力を失い、私は床に四つん這いになってしまった……。

「ハッ、なんだよ……無様だねぇ吹雪念力（ブリザードサイコ）……」

動きを封じられた私の近くに、沢那が徐々に近寄ってくる。そんな中、私はさっき何にやられてしまったのかを考えていた。確か、アレは青白い光……喰らった時の感触はそう、感電に近いものだった気がするわね。まさか、沢那は電気みたいなものも操れるのかしら？

「あ、貴女……電気まで……？」

「原子ってのは正の電荷を帯びた原子核と、負の電荷を帯びた電子から構成されている。その意味がテメェにわかるカナァ……？」

「……まさか、やっぱり」

「そうよ、電気も多少は操作できるってんだよ」

やっぱり……そういうことだったのね。それにしても流石は五本指ね、今の青白い光線は並の電撃使い（エレクトロマスター）以上の威力を誇っていたわ。

格下……てのは取り消そうかしら。沢那魅咲……貴女は十分強いわよ。

「しっかし簡単だったね……」

「……何が、言いたいのかしら？」

「なぁにが序列第3位だ！　ただのオタ受けしそうなクソロリじゃねえか！　テメェがその程度だったら張り合いがねえだろぉが！　この分だと私が早川のクソ野郎を超すのは時間の問題だナァ！」

でもね、貴女は一つだけ勘違いしているわよ。確かに貴女はとても強いし、今はどう見ても私の方が不利だけどさ……一つだけ、貴

女が完璧超人になれない理由があるのよ。
貴女がいつまでも――第４位という位置で止まっている理由がね。
今からそれを教えてあげるわ。覚悟しなさい――原子操作（アトムハウンド）。

「さて、そろそろ殺す……いや、一応回収しておこうカナ？　実験（モル）動物（モット）にはなりそうだし」

ゆっくり近づいてきた沢那は、私の首を右手だけで掴んだ。もし、この状態で沢那が能力を発動させたら、私を気絶させる事も――跡形もなく消し去ってしまう事も簡単でしょう。
それだけ強力な力が彼女にはある。でも、それだけに残念な欠点もあるわ。

「ま、確かに貴女は強いわね」

沢那の狂ったような笑みを瞳に映しながら、私は言う。

「貴女はそうやって、何件もの汚れ仕事を片付けてきた。そうやって組織の頭になれたのでしょう？　いくら汚い事とは言え、実力で這い上がってきた事だけは評価に値するわよ」

「あ？」

「けどね、貴女だって完璧超人じゃないわ。その短気な性格、単調な攻撃パターン、何より冷静になれない所と余裕ぶる所が痛いわね」

つまり、と私は笑う。

「その余裕が――貴女の決定的な隙になのよ！」

ガシッ！　と、私は首を掴んでいる沢那の手首を握った。固く、固く……岩石を握り潰すほどの勢いで握り締めた。ちなみに私、右手の握力は７０キロ近いのよね、黙っていたけど。
だって、肉体が強くなかったら――沢那の膝蹴りにだって耐えられないでしょ？

「う、ぐ！　は、離せテメェ！」

「小物のセリフね、精々凍るがいいわ」

私は大気中の僅かな水分を瞬間的に冷却。効果範囲は沢那の右手首のみ。私自身が凍傷にならないように、握っていた手は能力発動直後に離した。

「う、あっ！」

右手の広範囲に凍傷を負った沢那は、投げ飛ばすように私を解放する。投げ飛ばされた私は空中で一回転をしながら、そのまま綺麗に着地した。沢那は負傷した右手をだらんと垂らし、未だに苦しみでうめき声を上げている。その隙に能力で氷のナイフを作り出し、右手にそれを持つ。
沢那はようやく意識を私に向け、残った左の手のひらを私に向けて、

「西園寺ィィいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッ！」

地獄の底から響くような叫び声だが、決して驚きも怖がりもしない。私はただ、可哀想な人を見る目で沢那を見続ける。本当に哀れな女ね……と思いながら。

右手を潰された沢那は、左手からドロドロに解けたオレンジ色の何かを放つ。ドロドロの金属と思われるものは、渦を巻きながら私を焼こうと飛来してくる。

右手に氷のナイフを持つ私は、左の手のひらを溶解された金属に向ける。

それが手のひらに触れた瞬間――ジュウ！　と、聞くだけで火傷しそうな音を立て、金属は固体となって床に落ちる。床への落下により、ゴン！　という金属音が響き渡った。

馬鹿ね……私の能力に液体は無効よ。

瞬間的に冷却して――固体にしちゃえば問題ないじゃない？

「――――ッ！」

金属を冷却して固体した直後、私は迷わず沢那の懐へ飛び込んでいく。沢那は残っている左の拳を振り回し、私の顔面を捉えて打ち込んでこようとする。

私はその拳を――左手で払いのける。

「ッ！？」

絶望に満ちた表情を浮かべる沢那。そんな彼女の腹部を狙って――、

ズサッ！　と、氷のナイフを根元まで刺し込んだ。

お腹から大量の赤黒い血を流し、徐々に沢那魅咲の体から力が抜け、膝からストンと落ちるように床に崩れ落ちていった。動くなくなった沢那を見下ろし、私はこう呟いた。

「余裕よ、本気の半分も出せば――貴女程度」

第２１８話，氷と原子（後書き）

キャラクターＮｏ００２
・木下暮葉（きのしたくれは）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

※通常モード。
攻撃力：☆☆☆☆☆☆
防御力：☆☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆
魔力：☆☆☆☆☆
魔法（超能力）：☆☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆☆
総評：魔法は苦手だが、総合的にバランスのいい戦士タイプ。

第２１９話，数か月前の因縁

「さて、これで大丈夫かしらね？」

私――西園寺雪乃と原子操作（アトムハウンド）の沢那との戦いは私の勝利に終わった。

しかし、その戦いのせいで沢那は腹部に深い傷を負ってしまい、放置しておけば今日中には死んでしまうような状態だった。流石の私も、怪我人を放っておけるほど非情にはなれない。ここは医科学研究所付属なだけに、そこそこ医療設備は整っているみたいだ。

なので、そのまま沢那を集中治療室へ担ぎ込み、応急処置を行った。

まあ、多分だけど……一ヶ月も経てば傷は癒えるでしょうね。

「それにしても、ワクチンね……」

ワクチンというのが、沢那の所属する暗部組織の名前らしい。本来、北部は徳川小隊（プラトーン）が守っているハズだったのだけど、やはり何者かの襲撃で状況が変化しているわね。

そもそも、徳川小隊（プラトーン）は既に壊滅していた。

一体……誰の仕業かしら？

「……まあいいわ、次の仕事に移りましょうか」

計画の中止と、ＡＳ計画の被験者たちの救出を行いたいけど……でも、それをやるにしてもこの状況下では、あまりにも行動目標が多すぎるわね。

仲間の方も心配だし、それに被験者たちは一応の生命維持が行われている。この施設が戦いの余波を受けて、これ以上破壊されない

限りは生きているハズ。
まずは仲間と合流しましょう。戦力が分散している状況は好ましくない。
とにかく今は――仲間を集めて学園を潰すわ。

その後、私は医科学研究所付属脳神経解析センターを後にし、北部でワクチンの連中と戦っていると思われる、仲間たちを助ける為に北進中であった。
それにしても、南部は研究所がいっぱいいね。
どこの研究所もおそらく、漁ったら狂気の計画が進められていそうだけど……それも後で調べてなんとかしないとね。とにかく私は――あらゆる計画を中止に追い込む。
ＡＳ計画も、他の計画も。
そして、どんな手段を使ってでも――佐井学園を倒してみせる。

「……ッ」

研究所が立ち並ぶ、侵入口から見て南部の地域。ある研究所の影から、おそらく私と同い年くらいと思われる、それなのに異様な雰囲気を放っている一人の男が歩いてくる。
その男には何処か、見覚えがあった。

「【波動操作（ウェーブハウンド）】……ッ！」

「名前で呼んで欲しいな。俺には久我劉生（くがりゅうせい）って名前があるんだが？」

久我劉生……間違いないわね。
私が学園を離反したあの日に戦った――五本指の序列第二位。

「何の用か知ら？」

「言わなくてもわかるだろ格下……俺はテメェに恨みがあるんだ」

「そうなの？　そういえば貴方、ＡＳ計画だったかしら？　その計画をまとめたレポートに予備品（スペア）って書かれていたけど、貴方って所詮学園にとっては予備でしかないのね」

「図に乗ってんな……ったく、まさか複数の侵入者の中にテメェも居たとは、ムカつくヤツを一度に２人まとめて潰せるのは俺にとっては好都合だな」

「へぇ、ムカつくヤツが２人ね。じゃあもう一人が私たちの他に学園を急襲した――謎の一派の一員なのね」

そこで一旦、Ａランク能力者同士の会話は途切れた。久我の顔に怒りが満ちて、次第に彼の拳に力が籠められていくのがわかる。久我ったら、よっぽど私が憎いのね。

それもそうか。あの日久我は――格下の私に負けたんだからね。

「折角端整な顔してるのに、怒ると醜いわよ？」

相変わらず、久我はイケメンね……金髪のホスト風の男だわ。しかも、今日は佐井学園の緑色の制服とは違う――紅色のホストスーツを着ているわ。

一体、どういうセンスなのかしら……まあ、似合ってはいるけどね。

「テメェは俺達トレントではなく、この俺――久我劉生がブッ殺す」

「そう、なら私も――もう一度格下に負ける悔しさを味あわせてあ

げるわ」

「そうか、じゃあその前に宣言させてもらおう」

久我は不気味なくらいゆっくりと、細いが若干筋肉質な腕を横に大きく広げた。

そして、ヤクザもビビってしまうような笑みを浮かべて――、

「テメェは殺し決定だな」

宣言の瞬間――、

ズバァ！　という光の雨。

久我劉生という男を中心に、真っ白で健康的な無数の光の筋が、四方八方に全てを破壊し尽くす勢いで襲いかかった。私は咄嗟に能力で氷の装甲を製造し、身を守ろうとする。しかし、周囲を見回すと光線を受けた建物に穴が開き、穴の周囲からドロドロに解けた物が流れ出ている。

それから判断するに、あの光線はかなりの熱を持っている。

そして、光線は氷の装甲にも照射され――。

「ぎゃ、あああッ！？」

アッサリと、銃弾が人体を貫通するかのように、氷の装甲は貫かれてしまった。突きぬけてきた光線を避けようと左へ跳躍したが、左半身を焼かれるような感覚に陥る。

おかしい……直撃はしていないハズなのに、左腕と左足がヒリヒリする。

よく見てみると、腕と足が赤っぽく変色していた。

なによこれ……もしかして、火傷している？

「そ、その光は……ッ！？」

「テメェも知っての通り、俺の波動操作（ウェーブハウンド）はこの世に存在するあらゆる“波”を操作する。振動数、周期、振幅、波長、波数……どれも自由自在に操れるのはご存知だろ？」

「へ、ふふ……一応、前にも貴方とは戦ったからね」

「よし、もう一発撃ってやる――正解を言ってみるんだな」

答えは返ってこない。むしろ問題を出題され、またしても無数の光線が放たれる。四方八方に放たれた光線は建物の壁を溶かし、アスファルトを溶かし、氷の装甲すら貫通してしまう。

ないよりマシと思って、私は氷の装甲何重にも渡って製造したが、真っ白で高熱を放つ光線に全てが貫かれてしまった。それでも、逃げるだけの時間稼ぎにはなったわ……。

やっぱり、ないよりはマシみたいね。

それにしてもあの光線は……久我の能力から考えて、もしかして――。

「光波……光の、変換？」

「正解、太陽光を変換してるんだ。触れると熱で人体は消し飛ぶが……まっ、夜間の月光じゃここまでの威力は持たねえし、要するに昼間限定の必殺技だな」

言いながら、久我は無謀にも私に向かって走ってきた。なに考えてるのかしら……いくら強いからってその行動――あまりにも無謀

にしてお馬鹿すぎないかしら？
そう思いながら、私は水分を集め――先端が刀のように鋭利な氷柱を製造する。
今度はそれを念力で放ち、久我の額に刺し込んでやろうとした。
しかし、

氷柱は久我に触れる寸前に綿と化し、ふわふわと宙を舞うだけになった。

やっぱりね……久我は超弦理論まで扱う超能力者よ。
素粒子レベルの波として変換し、全く別の物質を作ることだってできるわ。久我はその操作を行って――氷を綿に変換したのね……
でも、ここまでは予想済み。
馬鹿な事に久我は拳を振り上げている。殴るつもりね……愚かな。
氷の装甲を製造する。さて、拳を突いて痛がりなさい――それが貴方の最期よ。
しかし、

バゴン！　と、
氷の装甲が粉々に、ハンマーで砕いたような粉々になってしまった。

「……ッ！？」

「無駄だ」

さらに次の瞬間、懐に潜り込んだ久我の左拳が振り上げられる。
顔面を守ろうと、反射的に腕をクロスするが――、

「ぎゃ、あ……ッ！？」

ガゴッ！　と、ガードを簡単に突破した拳が顎に突き刺さる。
それを受けただけで、首がゴキリと嫌な音を上げた。私の体はまるでサッカーボールのように回転しながら、アスファルトの上へと叩きつけられる。
激闘と吐き気、息苦しさ、目まいを感じた……けど、多分これは手加減。本人がそうだと言っていなくても、私にはこれが手加減に感じられた。
もし久我が本気を出していれば――私は今頃肉塊に変わっているハズよ。

「その気になれば拳一つでビルを破壊できる」

「う、く……ご、ふっ……！？」

立ち上がる事すら困難になった私は、脇腹に突き刺さった蹴りの威力に負けて、ごろんと仰向けに転がった。口の中に苦い味が広がる。
舌を噛んだ時の出血と、腹から込み上げてきた血液が混ざり合っている。
私の能力に限界は無い……けど、痛みで集中できず、簡単な計算式さえ組めない。

「さて、テメェはどうやって殺そうかな……？」

まずい……このままだと、本当に――殺されてしまう。
やっぱり前回の勝利はただの奇跡だった。そして、奇跡は二度も起きない。
そんな風に考えて、諦めかけていた――――。

「西園寺ィィィいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッ！」

その時、

バゴ！　と言う凄まじい打撃音が炸裂し、私の視界から久我の姿が消えた。
その代わり、新しい人影が現れる。
丁度、その人影は飛び蹴りの体勢から着地し、私を抱き抱えた所だった。

「——じま、こっちこっち！　早く、久我が立ち上がる前に！」

また、今度は女の子の声が聞こえた気がする。
ハッキリとは聞きとれなかったが、その声は誰かの名前を読んでいた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

次に聞こえたのは男の雄叫び。僅かに体に伝わってくる震動。
そう……なるほど、今この人は走っているのね。
全力で、駆けて……そして、この声は……やっぱりそういうことなのね……。

第２２０話，下部組織

徳川小隊（プラトーン）をブッ潰した後、オレ達は当初の予定通り、学園内の地下にある巨大な武器庫を破壊する為に二手に分かれ、現在警備の連中を潰しながら地下を突き進んでいる。

オレ――早川悠はアナスタシアのクソアマとペアを組んで、物騒な地下世界を歩く。警備に当たっているのは何処かの傭兵と、佐井学園製の電動鎧（パワードスーツ）に乗った学園の職員達だ。

電動鎧（パワードスーツ）は、『超能力者ではない者が、超能力者に打ち勝つ為の戦術兵器』というコンセプトの下に開発された、人が乗り込んで操作するロボットのようなものだ。

コイツが馬鹿にならねェ戦闘力を誇っているが……まァ、オレの敵ではねェ。

「にしてもアンタ、あの機械と随分戦い慣れてんのねぇ？」

「まァ、電動鎧（パワードスーツ）の性能テストには何度も付き合わされたからな」

「あら、その役目はアンタだったの？」

「ふン、オレ相手に何処まで戦えるかが基準だったらしい……くっだねェ」

しかも、オレは１０秒以内に２０体を破壊したと言うのに、当時の研究者たちはオレ相手に１０秒も持ったから大成功……とか騒いでいやがったな。今思えば馬鹿馬鹿しいというか、あまりにもハードルが低すぎて腹の底から笑っちまいそうだ。

「で、これからどうするんだい？　アンタも随分能力使っちまった

でしょ？」

「心配すンな、残り２５分……十分だァ」

楽勝だってンだよ佐井学園……オレは今まで何を恐れていやがったンだ。制限時間というハンデがある状態でも、ここまで優勢に戦っているじゃねェかよ。

血を見たくなかったのもあったが……。

何も……こンな事なら特異点潰しだって、やらなくてもよかったンじゃねェか……。

「……チッ」

「それにしても、何やら不気味な気配がするね……」

「……はン、オマエも気付いていたか」

そう、さっきから異様な気配がするのだ。ここに入ったその時から、オレが考え事をしている最中にもずっと、その気配は消えることなく――今も続いているのである。

「コソコソしてねえで出てきな！　テメェらはアタシらがブッ潰してやるよ！」

アナスタシアがコソコソ隠れているクソ野郎共へ叫びかけたその時、ザサ、という異音が響いた後に複数の影が、四方を囲んで逃げ道を完全に塞ぎやがったのだ。

「傭兵が３０人、電動鎧（パワードスーツ）が１０体……随分な戦力だ。ンで、オマエが一団を率いる隊長みてェな存在かァ？」

一団の中から現れた、戦闘服を着ているものの、どういう理由（わけ）かヘルメットだけを外している筋肉質な女が、指の関節を鳴らしながらこちらに近づいてくる。

ポニーテールの、いかにも軍人って雰囲気の女だ……クソゴツイなこの女。

「襲撃者……貴方達はどうせ知っているのだろう？　私たちはトレントに雇われた、下部組織というヤツだ」

「トレント……おかしいわね、ここら辺の警備を行っているのは、確か念力同好会のハズなんだけど？」

「彼らには別な任務に回ってもらった。君らは４人を排除するのは我々だ」

「その言い草……まさかっ」

「チッ、近藤達もコイツら相手に戦ってンのかァ」

ソイツはまずいな。あの野郎共は単なる傭兵ならともかく、超能力者と対等に戦う為に開発された電動鎧（パワードスーツ）の威力を知らねェ。油断して殺されているかもしれねェな。

ま、連中が死のうが知ったこっちねェが。

とりあえず、この筋肉女に質問だけしておこう――。

「一つだけ聞かせろォ……そのトレントってのは誰がまとめてるンだァ？」

「君は知らないのかい？　確か……【波動操作（ウェーブハウンド）】だったか？」

波動操作（ウェーブハウンド）だとォ……？

チッ、そォか……トレントはそのクソ野郎がまとめてるンだなァ？

面白ェ……どっちにしても、ソイツを潰せるのはオレだけだ。なら、オレは――。

「アナスタシア、オマエ……泥人形（ゴーレム）があればコイツら潰せるよなァ？」

「まあ、そうだけど……って、アンタはどうすんの？」

「あァ、そろそろ――あのクソ野郎を潰そうってなァ……」

アナスタシアは複雑な表情を浮かべ、しばらく黙りこんでしまった。

が、覚悟を決めたのか――、

「行きな、誰だか知らねえけど……アンタにとってソイツは好敵手（ライバル）なんでしょ？」

「案外アッサリ行かせるンだな、オマエ」

「ここはアタシが食い止める。アンタは好敵手（ライバル）に勝ってきな！」

「はン……そンじゃまァ、粗大ゴミの解体作業を――始めるとしますかァ」

その宣言の直後、オレは首筋にある変換機のスイッチをＯＮに設定し、風の操作を行ってロケットの如く加速する。空中で右足のみを伸ばし、眼前の傭兵の顔面を捉えた。

瞬間、ゴッ！　という、硬いものを砕くような音が炸裂する。傭兵は少なくとも、目測で１０メートル以上は遠くへ飛び、ダン！　という痛々しい音を立てて、背中を壁に叩きつけた。

それを確認した直後に着地を行い、瞬間的に暴風の膜を全身に張り巡らせる。傭兵や電動鎧（パワードスーツ）から放たれた弾丸を全て反射する。弾丸はオレの体を貫くどころか――撃った自分達の体を貫いて、殆ど生身の傭兵達は鮮血を流して床に倒れ込んだ。

相手が混乱している隙を突き、オレは再び風の操作で加速、出口を目指す。

後はこの場は――アナスタシアのヤツに任せるとしよう。

さァて、と……今から泣いて土下座させてやるよォ――久我の三下ァ。

――ラウル・ゲリエＳｉｄｅ――

地下の武器庫にて、俺と近藤さんはペアを組んで敵と戦っている……んだけど、一体これはどういうことなのだろうか。俺達の敵は念力同好会、主に念動力（テレキネシス）の使い手で構成され、基本的に殆ど武器を使わないと言うのが上層部の報告だったけど……。

なんで、俺達の敵は武装した人と――変なロボットのような連中なんだい？

オマケに兵隊はともかく、あの変なロボットの戦闘力は尋常じゃない。

「御父（Ｆａｔｈｅｒ）と御子（Ｓｏｎ）と精霊（Ｈｏｌｙ　ｓｐｒｉｔ）の御名によりてアーメン（Ａｍｅｎ）」

儀式用のバチを頭上で叩き合わせ、オグン（Ogoun）の力で作り出した鉄矢を、ロボットの装甲が薄いと思われる上面を狙って攻撃する。

これまでの経験で、俺の鉄矢は正面装甲を貫く事が出来ない。仮に破壊できても、精々装甲の一部を溶かしたり、中途半端な穴を開ける程度に終わってしまう。しかし、上面は基本的に視界を確保するためにガラス張りとなっている。多分防弾ガラスなので、銃弾は防げるのだろう。

しかし、砲弾並の威力を誇る俺の鉄矢は――防ぐことが出来ない。

「波ァァァァッ！」

近藤も威力強化の術式を組み上げ、日本刀だけでロボットと互角に戦っている。彼の攻撃は頑丈なロボットの防弾ガラスを突き破り、中に乗っている人の脳を真っ二つに切り裂く。

「やれやれ、俺も負けていられないね――ッ！」

言いながら、バチを頭上へ上げた――その時だった。

突然ガシッと、右の手首を頭上に持っていく前に誰かに掴まれしまった。

「しま――ッ！？」

まずいと思った俺は、無理に振りほどこうとはせず、左腕の肘を勢いよく引いた。

打撃音と同時に、ゴキゴキと言う嫌な音が響いてくる。

そして数秒後、ようやく右の手首が解放されたので――俺は咄嗟に後ろを向いた。

「げっほ、ごほっ！　げほげほっ！」

咳き込みながら、お腹ほ押さえて蹲っていたのは――佐井学園の制服を着ている、褐色の肌に肩にかかる程度の黒い髪の、木の板に黒光りする鋭い物が刻まれた、剣とも棍棒とも捉えられる武器を持った少女である。佐井学園の制服を着ている……と言うことはここの生徒か。

いや、でもあの武器、俺の記憶が間違っていなければ、あれはマクアフィテル。木の板に黒曜石の刃を刻み込んだ、マヤやアステカの戦士が使っていた木剣だ。

そして何より――あの少女自身にも見覚えがある。

「貴女は……もしかして、ミキストリ？」

「お久しぶりです、先輩」

ミキストリ。

俺がサヴィエトに入る前、米国に潰された魔術結社で面倒を見ていた――俺の後輩だ。

第２２０話，下部組織（後書き）

キャラクターＮｏ００３
・国宗伊吹（くにむねいぶき）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

※通常モード。
攻撃力：☆☆☆
防御力：☆☆
体力：☆☆☆☆
魔力：ナシ
魔法（超能力）：ナシ
知力：☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆
地位：☆☆
総評：女子高生にしては実力は高い方、そこらの不良よりは強い。

第２２１話，先輩と後輩

祖国ハイチは独立以来安定期というものがなく、国民も大半が貧困で苦しみ、俺も日本では小学生のころから家の為に仕事を行っていた。そんな中、俺は魔術と言うものに触れ、賃金も待遇もよかったという理由で、メキシコにある魔術結社【メシーカの太陽】の一員となった。

メキシコ政府の直轄部隊で、その任務は軍と共に麻薬組織の取り締まりを行う事。

主に地元のアステカ系の魔術師や、ブードゥー教の流れを汲む魔術師で構成され、最盛期には１００人を超える魔術師が組織に所属していた。

しかし3年前、反科学的な魔術組織の巨大化は、次第にメキシコ政府の不信感を募らせ、アメリカのＣＡＩも魔術師の危険性を説き始め、次第に組織の予算は削減されていった。

それでも組織はしぶとく存続し、勢力を保ち続けたが、

去年の冬、サヴィエトの魔術師がニューヨークで爆破テロを起こした。

アルファ隊との交戦で発生した爆発が、世間ではそう捉えられたらしい。最初の頃こそ中東で活動するテロ組織によるものと思われていたが、やがてテロ事件には【メシーカの太陽】が関与しているとアメリカのお偉いさんは言ったらしい。

その事がきっかけで、やがては米軍が介入する事態に発展。

組織はウシュマル遺跡付近にて、大半の魔術師が殺害された為、壊滅した。

俺と彼女――ミキストリは、生存した数少ない元組織の魔術師なのである。

「ミキストリ……」

「確か組織壊滅の原因にして我らの敵――サヴィエトに身を置いたハズでしたが？」

「サヴィエトからは、とっくの昔に身を引いたよ……」

「そうだったのですか、それはこちらとしても都合がいいですね」

「どういう……意味なんだい？」

「ラウル先輩、私は何故――倒すべき科学側に身を置いていると思いますか？」

俺達は基本、科学を妬み嫌っている。科学によって開発された武器に蹂躙され、科学によって開発された生物化学兵器で苦しみ、科学によって開発された爆弾で粉々にされた。

本来、科学と俺達は敵対関係にある……のに、ミキストリは何故……？

「先輩との接触を図る為です」

「お、俺との……？」

「先輩は佐井学園を襲撃する……という情報がありまして、その情報が正確であるか、そして先輩との接触のために――私は超能力者になりすましていたのですよ」

「超能力者って……君は魔術師だ、超能力なんて……」

「当然使えません。ですが、魔術で誤魔化す事なら出来ます」

「第一、佐井学園は魔術師を狙っているという話が……」

「問題ありません。一応素性は隠しています、ここでの名は鳥栖美樹(とすみき)です」

表情一つ変えずに淡々と話を続けるミキストリ。

俺との接触が目的だというのはわかったけど、でもどうしてだろうか。何が目的で彼女は俺との接触を図ったのだろう。しかも、憎き相手に化けてまで……。

それに、俺が佐井学園を襲うという情報は一体、どこから漏れたんだ？

「……貴女は誰の指示で動いているんだい？」

「ケツァルコアトルですよ」

その名前を聞き、思わず表情を歪めてしまった。

何故ならケツァルコアトルという人物は――俺達の上司だった人だから。

「……彼、生きていたのかい？」

「ええ、テポポチトリ先輩が生贄となりましたので」

「生贄……か、アステカの魔術だね」

「そういうわけです」

アステカではどうも、人間を生贄にする人身御供と言うのが神事らしい。俺の信じるブードゥー教でも動物を生贄にすることはあるが、アステカの社会ではどうも違うようだ。

アステカでは祈りの為に――新鮮な人間の心臓が必要なんだとか。

「さて、単刀直入に先輩へ用件を伝えますが……」

「なんだい？　組織が再結成でもされたのかい？」

「それは羨ましい事ですが、残念ながら違います」

と、言ってきた瞬間、

マクアフィテルを構えたミキストリが、殆ど瞬間的に間合いを詰めてくる。鋭い黒曜石が刻まれたマクアフィテルは俺に向かって振り下ろされ、反射的に避けた俺のすぐ横を斬る。空間を刻んだことによる僅かな風と、身の危険を感じた俺は、咄嗟に彼女との距離を取る為に後ろへ跳躍した。

続けるように、ミキストリが俺との間合いを詰めてくる。俺は身を守ろうと、咄嗟に頭上でバチを叩き合わせ――魔術で薄い鉄板を製造した。

ズガッ！　と、薄い鉄板がミキストリの斬撃を浴びる。

斬撃を受けた個所が捲れ上がっている……引き切られたかのようだ。

そう、マクアフィテルは叩き切る剣ではなく――引き切る剣なのだ。

「どういうつもりだい？　ジャガーの戦士ごっこ……ではなさそうだね」

「単刀直入に言います。死んでください、先輩」

死んでください……だって？

どうしてミキストリが俺を殺そうとするのか、その意味を考える暇もなく、ミキストリのマクアフィテルが横薙ぎに振るわれる。俺は咄嗟に身を屈め、そこから匍匐前進を敢行。ミキストリは凹凸の剣を薪割りのように振り下ろす。

足を開き、どうにか斬撃を回避した所で、俺は再びバチを叩き合わせた。

生まれた3つの鉄矢は、高射砲のようにミキストリの頭部を狙って射出される。

反射的になのか、ビクッ、と体を震わせながら彼女は数歩後ろへ後退する。その隙を突くように立ち上がった俺は、バチを叩き合わせてある物を製造した。

「鋭い剣ですね……エペですか、それは？」

「生憎、スピード命な男なんでね……俺にはこれが使いやすいんだよね」

エペとは、貴族が好んで使っていた剣の一種。細くて軽量で片手でも持てる、まさにスピード重視の実戦的な剣だ。使用方法は切るのではなく、突く。

刃先をミキストリへ向け、彼女の腹部を狙って突き進む。

「さて……ッ！」

エペを握る右手を突き出し、ミキストリの体へ突き刺そうとするが、ミキストリは突撃を回避してマクアフィテルを振り回してきた。咄嗟にエペを構え直し、マクアフィテルを受止める。細い割に頑丈

な剣は、マクアフィテルの重みある斬撃に耐える事が出来た。
何度も刃と刃が交差し、互いに攻撃を繰り返しながら俺は彼女へ話をかけた。

「説明してもらおうかな、君が俺を殺そうとする理由を……ッ！」

「簡単なことです。一瞬でもサヴィエトに貢献した裏切り者を殺すだけです」

マクアフィテルが地球を割れと言わんばかに垂直落下。それを受け流し、ミキストリに生まれた隙を文字通り、エペという細身の剣で勢いよく突く。
狙いは外した。微かに刃が彼女の腹に触れ、皮膚を切って彼女に苦痛を与える。

「う、あ……ッ！　せ、先輩……この……ッ！」

「無駄だよ。君は身体能力は高いけど、剣術には疎いようだ……俺には勝てないよ」

それが唯一の救いであった。普段から近藤さんに扱かれている俺と、剣術素人のミキストリとでは圧倒的な差があった。ミキストリの腕前では——俺には多分勝てないだろう。

「そう、ですね……ですが、先輩の敵は私一人ではないのですよ？」

「……どういう意味だい？」

「私が烏栖美樹を名乗り、トレントに所属している以上——仲間として利用出来る人もいるのです」

「トレント……念力同好会ではないのかい？」

「そんなものと一緒にしないでください。それにしても形勢は明らかに不利ですし……先輩、一旦退かせてもらいますね」

「なっ、ミキストリ――う、あァァッ！」

ミキストリがマクアフィテルを天へ掲げた瞬間――眩い閃光が周囲を包み込む。

目が痛い、焼けるような感覚に襲われ、咄嗟に両手で目を押さえる。

やがて光は収まり、視界も回復してきた所で前を見ると……。

「い、ない……？」

そこにミキストリの姿はなかった。

やられたね……刻み込まれた黒曜石は時には槍としても活用できる。何らかの光を反射させることによって、対象物にその光を浴びせる事が出来る……アステカ式魔術の一種だね。

上手い術者はそれで攻撃もできるらしいが、今のは逃走用の光か……。

「ミキストリ……」

俺を殺すのは大いに結構。一度はサヴィエトに身を置いたのも事実だし、サヴィエトの得になる仕事もしようとはした。ただ、藤島圭介という男が強かった為に失敗したが……。

でも、どうして彼女なんだ……。

何故、彼女が戦わなければならないんだ……。

近藤さんとトレントの下部組織が交戦を続ける中、俺は一人放心状態であった……。

――明智凪紗Ｓｉｄｅ――

学園西部、私は校舎側を移動している。確か西部には白藤が居るハズだ……戦いの物音が聞こえないということは、既に白藤とワクチンの戦いは終了しているらしい。

だけど、白藤は瞬間移動（テレポート）を使えるハズだ。戦いが終わったら、真っ先にその魔法を使ってやってきそうなものだが……。

と、その時――壁に凭れかかる一人の少女を目撃した。

見知った顔だった。

「白藤！」

私は叫びながら少女に駆け寄る。傷だらけの白藤が気絶している。脈もまだある、呼吸も整っているので、恐らく本当に気絶しているだけだと思う。

右の手首がおかしい、どうやら右手首を骨折しているようだ。そして、白藤から数十メートル離れた所に――また一人少女が倒れている。

彼女は手と足と頭から血を流している……けど、命に別条はなさそうだ。

状況から察するに相打ちか、どちらかが勝利した後に気絶したか。

だけど、白藤のほうが軽傷みたいだし……恐らく勝ったのは白藤だろう。

「とにかく、後方へ運んだほうがよさそうだ」

今の白藤は戦闘不能だ。戦闘が行えない状態では危険極まりないし、敵が来ていない今のうちに退避させておいた方がいいだろう。後で雪乃と会った時に言わなければな……。

「……ッ！？」

凄まじい悪寒を感じ、白藤から離れたまさにその時である……私がいた場所に、一発の銃弾が撃ち込まれ、アスファルトに当たった銃弾は何処かに跳ね返ったらしい。

咄嗟に周囲を見回すと、校舎屋上の影から黒ずくめの人影が見えた。

「……そこか！」

サッカーボールと同程度の大きさの炎弾（えんだん）を作り出し、野球のボールを投げるピッチャーのように炎弾（えんだん）を狙撃兵へ放つ。爆発と同時に悲鳴が響き渡ってきた。

しかし、それで終わりではないようだ、

ゾロゾロと――建物の陰から武装した黒ずくめ達と、数十体のロボットが現れる。

まずいぞ、アレは電動鎧（パワードスーツ）……対能力者戦を想定して開発された、佐井学園の科学技術の結晶体のような最新兵器の一種だぞ。それが数十体……しかも、その周りには複数の黒ずくめ達が銃口をこちらに向けている。分が悪いってレベルじゃないぞ……っ。

「なぎ、さ……っ！」

「ん……し、白藤ッ！？」

背後から声が聞こえたので、少し後ろを確認すると――白藤が立ちあがっていた。

白藤は右手首を押さえ、力の入っていない足で体を支えている。少しでも衝撃が加われば倒れてしまいそうなほど、今の白藤は弱々しい。そして同時に――白藤の声を初めて聞いた。

普段言葉を発しない口で喋って……白藤、かなり無理をしているみたいだ……っ。

「わ、たしも……戦う……っ！」

本当に初めてだ……白藤の声を聞いたのは。

確かにこの距離で携帯を見せられても、私の視力では文字が読めない……が、そもそも白藤が口で喋って事なんて今までなかった。これはある意味――大事件なのかもしれない。

「白藤……」

とりあえずどうする？

白藤は戦いたいらしいが……今の彼女はボロボロだ。とてもじゃないが、今の彼女に戦闘能力があるとは思えない。だから私は白藤が戦うことには反対だ。でも、なんだろう……あの強い意志を感じる光のような眼差しは。まるで、何か重大なモノを背負っているような。

断りづらいぞ。私もこれ以上佐井学園絡みで、あの変態に迷惑をかけたくないと言う思いで戦っているだけに――その眼差しは胸の奥に突き刺さるものだぞ。

反則だぞ……白藤っ。

「わかったぞ、仕方ない……前衛は任せろ――白藤！」

そんな反則者に――私は協力をすることにした。

フレンドの仲間として。

そして、大切なモノを背負う者同士として――。

第２２１話，先輩と後輩（後書き）

キャラクターＮｏ００４
・明智凪紗（あけちなぎさ）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

※通常モード。
攻撃力：☆☆☆☆☆
防御力：☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆☆
魔力：ナシ
魔法（超能力）：☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆☆☆
総評：有する能力は微妙だが、身体能力の高さで実力は高い。また、頭脳も明晰で様々な方面で地位もそこそこ高い。

第２２２話，久我劉生

ここは佐井学園の何処なのだろうか。俺は傷だらけの西園寺を背負い、木山と一緒に学園のどこかをコソコソと移動していた。さっきの、ガラの悪い感じの男に見つからないように。

あの野郎が何者かは知らないが、西園寺がこのザマなんだ……多分、俺や木山が戦ったってどうにもならない。肉の破片が飛び散り、もっと悲惨な結果を招くだけだろう。それでも、西園寺を助けて逃げる事なら出来た。あの野郎に不意打ちを喰らわせ、その隙に西園寺を救出したのだ。

あの野郎も西園寺に勝っていたから油断していたんだろう。

ホント……飛び蹴りが入ったのは奇跡だな。

だけどあの野郎、飛び蹴り程度でくたばるような――ヤワなヤツではねえだろう。

「雪乃、雪乃！」

「おい西園寺、しっかりしろよ」

ここまで逃げれば大丈夫だろう、と思った俺と木山は立ち止まり、とりあえず西園寺を地面に寝かせて彼女の様子を見る。ぴくぴくと動いているので、気は失っていないみたいだ。

「う、く……はは、やっぱり……あなた達だった……のね？」

虚ろだった目にも、ようやく光が入ってきたような気がしたが、それでも全身が小刻みに震えているので、おそらく彼女はかなりのダメージを受けたのだろう。

よく見れば肌も赤い。微妙に火傷をしているのかもしれねえな…

…。

「雪乃、大丈夫？」

「大丈夫、よ……もう能力を使えるくらいには回復したわ」

言いながら、西園寺は俺と木山の肩を借りて立ち上がる。これは強がりだな……肩を借りなければ立ち上がれない程に弱っているのに、西園寺は無理やり立ち上がったんだ。おそらく、支えるものがなくなってしまえば、今の西園寺は再び地面に倒れ込んでしまうだろう。

それほどまでに弱っている。足腰もぷるぷる震えているように見える。

この野郎……無理しやがって。

「雪乃……まさか、もう久我と戦いに行くの？」

「久我？　誰だよソイツ、さっきのあの野郎か？」

「え、そうだけど？　浜島が蹴っ飛ばしたアイツが五本指の一人――久我劉生だよ」

「おいおい、アイツ強いんだろ？　第一万全な状態でも勝てなかったのに、今の西園寺じゃ……」

ていうか、出来れば俺だってあの野郎とは会いたくねえよ。だって俺、アイツの顔面に不意打ち喰らわせたんだ。多分ダメージにはなっていないと思うが、やっぱ相手は怒るじゃん？

つまり、今アイツと会えば……俺は――ぶち殺し確定じゃねえか。

「心配しないで、久我は後回しだわ……作戦を練らないとあの男には勝てないわね」

「勝つってテメェ……どうやって勝つんだよ、あんな化け物相手に……」

「あたしも浜島と同じ意見だよ。あれって本当に勝てる相手なの？」

「一度だけ勝った事があるわ……つまり、久我だって無敵の存在ではないのよ」

久我に一度だけ勝った西園寺って……やっぱり西園寺も十分化け物だ。

でも、その西園寺がフルボッコにされていたんだから……。

やっぱ、久我って野郎は怖いなぁ……ああ嫌だ、会いたくねえ……。

「……けど、そいつは後回しにするんだろ？　じゃあ俺達はこれからどうするんだ？」

すると、西園寺の表情が一瞬暗くなったが……やがて希望に満ちた真剣な顔を向け、

「凪紗達と合流後、ＡＳ計画阻止の為に――破壊工作を開始するわ」

「え、ＡＳ……計画？」

俺は再び、意味不明な単語を聞いてしまった。

近頃は専門用語が多くて――ヤンキーの俺には理解がし難いモンだぜ。

――久我劉生Ｓｉｄｅ――

俺はバイクで移動して、学園内にある売店が立ち並ぶエリアへ移動していた。広い佐井学園には複数の売店が存在し、その中でもここは特に栄えた商店街のような場所である。また、近くには学食とも言えるレストランも存在しており、俺はその中の席に座り込んだ。

その中には、外国人の血が混ざっているという鳥栖美樹の姿もあった。

「久我さん、どちらに行っていたのですか？」

「侵入者の排除だ……チッ」

「その様子ですと……」

「ああ、失敗した。西園寺もムカつくが……あの野郎、俺の顔面蹴りやがったな」

まったく痛みのない、蹴られた箇所を軽く左手で触ってみる。蹴りの威力はそこそこ鍛えた野郎並ではあったが、所詮は素人のレベルだろう。だが、不意打ちでも俺を蹴ったのは事実。それだけで今にも暴れたくなるほどムカつく。ブッ殺したくなるほどにムカツく……。

「あの野郎ムカついた、西園寺とまとめて殺し決定だな」

「今からでしょうか？」

「ああ、だが下部組織の連中から通報があった」

「何の通報ですか？」

それを聞かれたその時、俺はホストスーツのポケットから携帯電話を取り出す。口頭で説明するのも一つの手段だが、いちいち面倒なので、鳥栖にはその画面に表示された文字を見せた。

鳥栖は画面を覗き込む

やべえな、こういうシチュエーションは好きかもしれねえ。

「新たな侵入者3人、全員が能力者、念力同好会の壊滅……」

3人の能力者と思われる連中が佐井学園に侵入し、そちらの警備に回っていた念力同好会が殆ど壊滅したそうだ。やれやれ、新勢力か……一体どこのクソ野郎が攻めて来たんだ。今日は狙ったように侵入者が現れて、いちいちムカつく事を繰り返しやがるな。

まあ、念力同好会自体は小規模だし……侵入者も大した能力者ではないだろう。

「これを潰すのでしょうか？」

「ああ、徹底的にな……お前はどうする？」

「これから戦線に戻ります。準備は完了しましたので」

「そうか、まあ精々頑張れや。こっちはこっちの仕事をする」

「はい、お気をつけて」

「そっちも無理はするな」

鳥栖に向かって手を振りながら、俺はレストランの階段を下りる。念力同好会をこの短時間でブッ潰した連中も気になるが、所詮は大した能力者ではないだろう。ソイツらを潰した後は西園寺と足癖の悪いヤツだ。特に後者は俺の顔面を蹴った……これはもうグチャグチャコース確定だ。

そして、そいつらを全て倒した後は――。

「【大気操作（エアオペレイション）】……早川悠か……」

――ミネット・ローランSide――

リーリヤ隊長からの指示で、ミネット達アルファ隊もヴィンペル隊の手伝いの為、ミネットはあの人が昔通っていたと言う佐井学園へ潜入した。

もちろん、ミネットだけでは力不足なので、今回は2人の協力な助っ人がいる。

「相変わらず、昴の能力は綺麗だわ。あのクソッタレ共の攻撃が七色に変わるんだもの」

「物質であれば何でも破壊からな、俺の能力はそういうものなんだ」

緑色のワンピースを着ている、左右の中央でまとめて、両肩にかかるくらいまで伸ばした金髪を持っている、右目が赤で左目が青のオッドアイの少女。

アイリス・オースティン。

ミネットと同じアルファ隊所属で、木下先輩と同じ特隊員の一人。

もう一人、何処かの制服と思われる紺色の学ランを着ている黒髪の少年。彼の名前は北野昴（きたのすばる）でアイリス先輩の協力者であり、同時に親友でもあるらしい。

ミネットの目から見たら、2人は恋人同士にしか見えないけどね……。

「アイリス先輩、この後はどうするんですか？」

ミネットは本来の口調を我慢し、目上の人に敬語で質問をする。

ごく当たり前の事なんだよ。

「そうね、とりあえずヴィンペル隊の連中を遭遇しちまおうかしら？」

「俺も同じ意見だな。仲間は多いほうがいいだろう」

「うん、それじゃあ高い魔力を探せばいいんですね」

「ええ、お願いするわ――ミネット」

任せて、ミネットはこれでも索敵の達人なんだよ。

戦闘は不得意だけど、その分サポート系の術式は数多く覚えているんだから。

だからあの人も、もっとミネットを頼ってもいいのに……。

今頃何しているのか、とっても心配なんだよ？

「強い魔力を持つ人が数人います。でも、魔力は殆どないけど、近くから殺気が――」

ミネットはある一点――とある建物の屋上付近を見ながら報告する。

そのあたりから、凄まじい殺気を感じるからだ。アイリス先輩と北野さんも、ミネットが警戒している建物の屋上を見上げる。やがて、屋上に柄の悪い金髪の男が現れた。

「失礼、そこの一団」

言い終えると、柄の悪いホスト風の男は建物から飛び降りる。どう見ても、この建物は5階ほどの高さがあったのに、その屋上から飛び降りても――男はとても綺麗に着地する。

魔法……ではないね。ひょっとしてあの人、超能力者なのかも。

ということは、さっきの人達と同じ――敵？

「すごいわね今の……ところで、貴方はどちら様？」

アイリス先輩がミネット達の先頭に立ち、ホスト風の男に接近してゆく。

「久我劉生（くがりゅうせい）、一つだけ言ってもいいかな？」

「なにかしら？」

柄に合わない笑顔だね……もしかして、あの人猫かぶりしているのかも。

と、そんな風に考えていた――、

「テメェらが念力同好会ブッ潰した事は分かってんだよ、クソボケ」

刹那、急に凶悪な本性を現した男が、その膝を凄まじい勢いで突き上げた。

ズゴン！　と言う衝撃と、骨と内臓が砕けるような嫌な音が響き渡り、アイリス先輩はたったの一撃で何十メートルも吹き飛ばされる。激しく背中を近くに生えていた木にぶつけて、そのままアイリス先輩はぐったりと、意識を失って崩れ落ちてしまった。

うそ、あの……アイリス先輩が……たったの一撃で？

「あ、アイリス先輩っ！」

「な、お前……よくもアイリスを！」

「ちょっと不調だったか。あの女……まだ生きてるな」

「おい、こっちはお前に聞いているんだ。いきなり何をするんだ」

「それはこっちのセリフだな。テメェらは何故学園に侵入した？俺は学園の人間で、侵入者を排除しろってのが俺の任務らしく、んで……一番厄介そうな女から始末したわけだ。ソイツ――特異点なんだろ？」

一番厄介そうって……確かに、アイリス先輩はこの中では最強の存在だけど。

でも、ひどいよあの人……こんなのってないよ、あんまりだよ。

「さて、次に厄介そうなのは……テメェだな」

「……ッ！？」

久我劉生と名乗るホスト風の男は、ミネットに凶悪な顔を見せると近づいてきた。ゆっくり確実に恐怖を煽りながら、ポケットに手を入れ狂気的な笑みを浮かべて――。

ミネットは一応、魔法のステッキを構える。

通じるかは分からないけど、一応水の魔法を放ってやるんだよ。

「させるかよ……お前っ！」

北野さんが拳を固く握り締め、かなりの速度で久我の懐へ潜り込む。

しかし、久我は笑顔を崩さない。

「引っ込んでろ、雑魚」

宣言の直後、久我は固く握った五本の指を北野さんの顎へ打ち込む。ゴキッ！　という衝撃が炸裂すると、北野さんはぐるんと空中で何回も回転しながら、やがては地面に落下する。

背骨が砕けたのではないか、と言うほどの痛々しい嫌な音が炸裂した。

「ぐ、あぁ……ッ！」

「北野さん！」

苦しさのあまり、北野さんは顎と背中に手を伸ばしていた。

久我は再びミネットに近付いてくる。

何をを語りながら……。

「第四位を倒した程度ではしゃぐな、物質崩壊（マターコラープス）。テメェの能力は触れなきゃ何の意味も成さないだろ？　理論上は人体の崩壊も可能だが……処理しきれない速度でぶん殴っちまえばこっちのモンじゃねえか」

ミネットは確信した……久我劉生は――滅茶苦茶強い。

アイリス先輩も北野さんも、みんな一撃でやられてしまった。あの腕力は多分能力によるものだと思うけど……それでもすごい。アレに2人とも負けてしまったんだから……。

緊張が走る。同時に嫌な汗が噴き出てきて、背筋も凍り、全身がビクビク震える。それでもミネットは魔法のステッキを構えて、久我を睨みつけてみる。

「さて、テメェを殺した後に残り2人もぶっ殺すか……」

「し、死なないよ……ミネットは絶対――貴方なんかに殺されないんだよ！」

「そうか、大した自信だ……では、そろそろ殺すが今のが遺言でいいのか？」

久我はバキバキと拳を握り締め、凶悪そうな顔がより凶悪なものへと変貌する。ミネットも水の術式を組み終え、最大出力でそれを放とうと思った。

しかし、その必要はなかった。

新たな轟音がガゴォン！　と佐井学園中に響き渡る。凄まじい風が吹き荒れる、木々が折れそうなほどに揺れて、ミネットもどこかに吹き飛ばされそうになった。これは烈風、衝撃波にも近いソレが突然吹き荒れた瞬間――久我劉生が烈風に吹き飛ばされていた。

ダン！　と、久我劉生が建物の壁に叩きつけられる音が炸裂する。

そんな中で、ミネットは――何処か懐かしい声を聞いていた。

「ったく、学園の犬やって雑魚いじめてンじゃねェよ。三下ァ」

それはジーパンを穿いた、赤と黒の縞々カットソーの男。現代的な杖を右手に持ち、色素が抜けたような真っ白な髪を持つ、もやしのように細くて弱そうな少年。

かつて、佐井学園最強と言われたあの人の姿と声――。

「もっと面白ェことしよォぜ？　今からオマエと徹底的に遊ンでやるからよォ」

第２２２話，久我劉生（後書き）

キャラクターＮｏ００５
・早川悠（はやかわゆう）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

※能力使用を前提。
攻撃力：☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆（能力あり、素の攻撃力は低い）
防御力：☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆（能力あり、素の防御力は低い）
体力：☆☆☆（体力はないが、能力を使うにはあまり関係ない）
魔力：☆☆
魔法（超能力）：☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆（能力あり、素の状態では走れるかも微妙）
地位：☆☆☆☆☆
総評：素の能力は普通の高校生よりも遥かに低いが、能力を使えばチートキャラと化する。流石は佐井学園最強と言われただけの事はあるだろう。

第223話，殺した本心

俺と近藤さんはトレントに雇われた、と思われる下部組織の連中を撃破し、武器庫を破壊する前に身を休めていた。そうせざるを得ない状況になってしまったからだ。

「大丈夫かい近藤さん？」

「ああ、なんとかなぁ……チッ」

左肩から血を流し、悔しそうに舌打ちをする近藤さん。どうやら、戦闘中に敵の襲撃を受け左肩を負傷してしまったらしい。刀を思うように扱えなくなってしまい、戦力も低下した上に近藤さんのプライドはズタズタだ。この程度の相手に負傷した事が悔しいようだ。武士道……なのかな。俺にはよくわからないけど……近藤さん。

「早川という強力な戦力もいるし、一旦戦線を離れたほうがいいんじゃないかい？」

「大丈夫、右腕さえ残ってりゃあ十分戦えるのよな」

柄に収めた刀を地面につき、右腕に力を入れて近藤さんは立ち上がった。

それにしても、近藤さんも心配だけど……あのミキストリは一体？彼女はどうして、今更俺なんかの前に立ち塞がったんだろうか……？

「それよりお前さん、さっきの小娘はなんだったんだ？」

「あの子かい、あの子はなんというか……俺の昔の知り合いだね」
「は～ん。まっ、深い事は聞かないが、その子の気配がさっきからするのよな」
「ええ、それくらい俺だって気付いているよ」
気配で気付く所が剣術の達人らしいけど、俺だって全く無力なわけではない。これでも魔術師の端くれなんだから、魔力を感じる事で誰が何処にいるかを知ることが出来るんだ。
ミキストリの魔力は何度も感じて覚えたから、どんな魔力かもう把握はしているが……今感じているこの魔力は間違いなく、そのミキストリだろう。
ミキストリは――そこのコンテナの陰に隠れている。
「いい加減出てきたらどうだい、ミキストリ！」
コンテナに向かって叫びかけると、その陰から一人の少女が現れる。
ミキストリだ。
マクアフィテルを構えた褐色肌の娘が、静かにこちらへ接近してきた。
「先輩、出直してきました」
「遅かったね、ミキストリ……」
「ええ、色々準備がありましたね」
バタバタという足音が階段のほうから聞こえてくる。周囲を確認

してみると、黒ずくめの傭兵達が階段を下りてやってきたようだ。
傭兵達は俺達を包囲すると、銃口をこちらに向けてきた。

「やれやれ、準備というのは傭兵の召集か」

「いくら有能な魔術師とは言え、これではラウル先輩も多勢に無勢でしょう」

確かに、近藤さんが負傷している今――この人数を相手に戦うのは厳しいね。
やれやれ、ミキストリめ……本当に面倒なことをしてくれる。
しかし、

「ねぇ、ちょ～っとアタシも混ぜてくれねーかしら？」

どうやら、神は俺達を見捨ててはいなかったようだ。
黒曜石のナイフを右手に持つ、少し血を流した民族服を着ている女が現れる。彼女は同じザスローンのアナスタシア。土属性、特に召喚魔術を得意とする天才魔術師だ。彼女は向こうの敵を掃討して爆弾をセットした帰りなのだろう。ピンチの俺達を見かけて助けに来たらしい。

「アナスタシア……」

「ラウル、その女はアンタがやりな。アタシは近藤と2人で傭兵と戦うから」

「けど、こんな所じゃ泥人形（ゴーレム）は作り出せないし、貴方は召喚魔術以外は……」

「まあ見てなさい。傭兵なんか――体術と黒曜石のみで制圧可能よ」

「ああ、俺らに任せておけよ」

「アナスタシア……近藤さん……」

そうだよ、アナスタシアはかなりの実力者。でなければ、今彼女は生きていないし、仮に生きていても助けにこようとは思わないだろう。だから――彼女は頼ってもいいハズだ。

はは、これで俺は――ミキストリ一人に集中してもいいんだね。

「2人とも、ありがとう」

「例なら後、行くぞアナスタシア！」

「言われなくてもっ！」

近藤さんとアナスタシアは凄まじい勢いで飛びかかり、遂に傭兵達との戦闘を開始。

俺はただ一人、ミキストリと対峙する。

ミキストリは左手で自分の髪を触り、爽やかに靡かせた。

「結局、先輩と私の一騎討ちになってしまうのですね」

「その方がこちらとしても都合がいいんでね。さて、どうする？」

「……仕方ないですね、この際――死ぬ覚悟で先輩に立ち向かいます！」

服の中からバチを抜き取ろうとした瞬間、アステカ式の剣、マク

アフィテルを両手で握ったミキストリが、地面を蹴ってほんの一瞬でこちらとの間合いを詰めてくる。咄嗟の事で、儀式用のバチさえ握る事が出来なかった俺は、横薙ぎに振るわれたマクアフィテルを間一髪で回避する。

左へ跳躍し、その勢いで地面をゴロゴロと転がる俺。ようや動きが止まると、立ち上がって周囲を見回してみる。何か、使えそうなものはないのか？

そう考えているうちにも、ミキストリはマクアフィテルを振り下ろす。それをバックステップで回避しながら、俺は引き続き周囲の確認を行っていた。

「無駄です、不意を突かれた先輩は殺される運命にあります」

マクアフィテルの斬撃を回避しつつ、ミキストリの弱点や周囲を探る。やはり、ミキストリは剣術に疎い上に小柄なので、マクアフィテルに振り回されている感じがあった。

ところが、肝心の俺には武器がない。このままでは、剣術素人にさえ抵抗できない。

「う、わ……ッ！？」

間一髪、マクアフィテルの鋭い黒曜石が俺の髪を数本切り裂いた。

「先輩……まだ後輩に殺されるだけ、幸せだと思ったほうがいいですよ」

「何故なんだ……何故君は俺を狙うんだ！」

「前にも言ったでしょう。これはケツァルコアトルの命令なんです」

「それは分かっている。だけど、君は俺を簡単に殺せるのかい……君にとって俺は、その程度の存在だったのかい！？」

ミキストリは俯き、肩をぶるぶる震わせていた。ぎりっと歯軋りしながら顔を上げ、今にも決壊して涙が溢れだしそうな瞳で俺を睨みつけて、

「仕方なかったんですよ！　私だって、先輩のこと好きですよ……大好きなんです！　でも、ケツァルコアトルが立ち上げた新たな組織は先輩の排除を私に命令しました。命令に背けば私も裏切り者として排除されるんですよ？　そんな状況で――私は何をどうすればいいのですか！？」

「ミキストリ……」

彼女はそんな覚悟で戦っていたというわけか……気持ちを殺して任務を遂行し、俺を殺さなければ自分が殺されてしまう。そんな背景から、本心を押さえ込んでまで……。

ケツァルコアトル……どうやら、俺は本当の敵を発見したようだね。

「ミキストリ、ごめん……俺がサヴィエトなんかに所属しなかったら、君に辛い想いをさせる事はなかったんだよね……」

「そうですよ……先輩が、先輩がお金と自己保身の為にサヴィエトに手を貸したから――組織は先輩を狙うことになったのですっ！」

「本当……俺は馬鹿な男だ」

俺は静かに歩き始め、ミキストリへと近づいていく。既に瞳から

雫が零れ、ずっと震えているミキストリは頼りない手つきでマクアフィテルを両手で握った。

「こ、こないで……こないで、ください……せ、先輩……っ」

言葉では俺を拒んでいるが、俺はその言葉を全く聞きいれずに歩き続ける。

ミキストリ……俺は君を――放っておくことが出来ないんだ。

「いや、来ちゃ……ダメです、私は、私は先輩を……う、あああああああっ！」

糸が切れたように泣き叫び、ミキストリはヤケクソ気味にマクアフィテルを構え、無茶苦茶に走って俺へと近づいてくる。近づけば俺を殺してしまう……そんな感じで俺を拒んだのか。

とにかく、早く彼女を止めてあげないと。

彼女を安心させてあげないと――。

「ミキストリ……」

俺は彼女の全てを受け入れる。だから、俺はこの場からは決して動かない。

ダン！　と地面を踏み付けたミキストリが、必殺のマクアフィテルを振り上げる。しかしそれは狙った一撃ではなく、感情的で滅茶苦茶な荒い一撃であった。そう推測しているうちに振り下ろされたマクアフィテルを、俺は上半身を振るだけで簡単に避けた。

そして、今の動作で隙だらけになったミキストリの腹部へ、握った拳を叩きこんだ。

「……ッ！？」

ドゴン！　という衝撃がミキストリに伝わる。大きな衝撃が伝わったと同時に、ミキストリは力を失いマクアフィテルを地面に落とす。ミキストリ自身も倒れ込みそうになったが、彼女は俺に向かって倒れて来たため、自分の体と両腕で抱きしめることに成功した。

胸元に倒れ込んだミキストリは、弱々しい手つきで俺の服を掴んできた。

「……どう、して……ですか？」

「ん、なんだい？」

「先輩、私は……先輩を殺そうと、したんですよ……？」

「それは、態々聞く必要もないんじゃないかな？」

俺はより強く、ミキストリを抱きしめて、

「君が好きだという気持ちに――変わりはないから」

「せん、ぱい……っ」

ミキストリの服を掴む手の力も強くなり、俺の胸に頭を押し付けてくる。

久しぶりだな……この感触、俺とミキストリはただの先輩後輩ではなかった。日本で言うと確かリア充というヤツか……いや、普通に恋人と言ったほうがいいかな。だけど……何故、あんなに優しかったミキストリが刺客として送られ、恋人だった俺を殺そうとしたのか。

ケツァルコアトル。何故あの温厚な人が残虐な人へと変貌してし

まったのか。
どうやら、俺はケツァルコアトルの新組織と向き合う必要がありそうだね……。
そして必ず救ってみせるよ。ミキストリを、その新組織の手から――。

第２２３話，殺した本心（後書き）

キャラクターＮｏ０００６
・ミネット・ローラン※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆
防御力：☆☆
体力：☆☆☆☆
魔力：☆☆☆☆
魔法（超能力）：☆☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆☆
総評：アルファ隊の中でもそれほど強くはないが、伊吹など鍛えている普通の人間よりは遥かに強い。

第２２４話，因縁のライバル対決

「痛ってえな」

オレ――早川悠は風の操作で烈風を吹かせ、久我をぶっ飛ばしてやったが、久我はむくりと立ち上がって視線をこちらに向ける。そうだ……そう来なきゃ面白くねェよなァ。

「久しぶりに会ってみれば……やっぱテメェはムカつくヤツだな」

「それはこっちのセリフだ。相変わらずブルっちゃって学園の番犬やってンだなァ？」

「吠えてろ犬（ポチ）。テメェは確か、そのガキの為に三原のヤツを殺したらしいが……そのガキ守ってりゃ善人になれるとでも思ってるのか？　だとしたら、テメェはとんだ馬鹿だぜ」

「ハァ、下手な挑発しやがって……いいぜ、今から面白ェ事教えてやるよォ」

言いながら、オレは右手に持っていた現代的な杖を投げ捨てる。チラっと確認すると、ミネットがその杖を回収し、大事そうに抱え込みやがった。

ハッ、別にあンな杖……いくらでも代用品があるってのになァ。まっ、杖を守ってくれンのは正直助かるし、あのガキにしては珍しく役に立っていると言えるだろう。

さァて、そろそろ面白ェ事をしてやるとするかァ。

「なァ、知りてェか？　一流の殺し屋がどンなモンなのか」

「この俺にご教授するつもりか。大した自信があるのだな」

「あァ……今から教えてやるから――よォく体に染みつけてくたばるンだなァ」

そこでオレは足の裏で風の操作を行い、ロケットのような推進力で前進する。近くにミネット達がいる事を考えれば、あまり派手な技は使えねェ……なら、近づいて血祭りにあげる。

飛び蹴りの構えをとった直後――ドゴッ！　と言う鈍い音が響き渡り、弾丸のような靴底を叩きこまれた久我は後方へ吹き飛ばされる。バリバリと生い茂る木々を破り、終いには体育館倉庫と思われる建物の壁を突き破って、中にある危惧をバキバキと破壊する音が連続した。

しかしなンだ……妙に手応えがねェ。

まさか、久我の野郎……能力で今の一撃を防いだのかァ？

「分かってるだろ早川。俺はあらゆる波を操る能力者だ」

破壊された体育館倉庫からそんな声が聞こえ、久我がその中から姿を現す。驚くことに久我は全くの無傷であり、余裕の笑みさえ浮かべていた。

さらにもう一つ、メルヘンな事態が発生しやがった。それは翼、眩しいほどに真っ白く光り輝いている、天使のとも違う6枚の異形の翼が久我の背中から伸びているのだ。

久我はゆったりと、6枚の翼を羽ばたかせる。

「なら、今の場合は重力波を操作すればいい。それでダメージを大幅に軽減できる」

「多芸な野郎だ、ンで……その似合わねェ翼はカッコつけかァ？」

「俺の翼は見世物じゃねえ。普段は発現しねえが、どうも能力をフルに使うと翼が生えてくるらしい。それで回答だな、この翼は音波、光波、重力波、地震波、津波……あらゆる波の集大成で、なんで発現するかは知らねえが、少なくともテメェの能力よりは万能の力を持つ翼だ」

要するに、自分の意思で発現させた翼じゃねェってわけか。なるほど、だがどっちにしても似合ってねェ上にメルヘンすぎて気持ち悪ィ。オマケにおかしくて腹が痛ェよ。

ここはアレか、腹ァ抱えて笑ってやンのが正解かァ？

「今から見せてやろう。この俺こそ――本来の最強である証拠を」

「面白ェ、見せてみろォ……三下ァ」

轟！　と空気を切り裂く音が響く。それは久我の背中から生えている6枚の翼が、稲妻のように伸びてきた音である。6枚の翼が俺を叩き潰そうと、凄まじい勢いで振り下ろされる。直撃の寸前に風の操作を行い、殆ど一瞬で上空30メートル程まで飛び上がった。

ゴバァ！　と、翼がアスファルトを砕き、凄まじい衝撃で建物の窓ガラスが割れ、何やら地面がグラグラと揺れている。あの野郎ォ……衝撃波と地震波を同時に操作したのか。

それとも、あの翼がそういう効果を持っているのか？

「ッ！」

鳥のように翼をはためかせ、天使のように飛翔する。その速度は思いのほか速く、一瞬にして久我とオレの距離は5メートル程にま

で詰まったのだ。
あの形状の羽で飛べるハズがねェ……そういえば、重力も波だったな。すると、久我の野郎は重力を操ってほぼ無重力状態に設定し、強い力で空高く飛んだというわけか。
ヤツのホバリングも重力波の一種って所か？

「ハッ、知ってるか久我？　重力波ってのは大気波の一種で、発生条件さえなければ重力波は生じねェ。要はオレの能力でその力を失わせる事だって可能なンだ。そこン所理解して能力使ってンだろォなァ？」

「なら、その操作を行う前にテメェを殺せばいい」

6枚の翼と両腕を大きく広げた途端に、眩い閃光が放たれた。
それは8本の真っ白な光線であり、恐らくは光波の操作であると思われる。光波は電磁波の一種である故に、オレの暴風の膜で防ぐことは出来ない。だが、オレの大気操作（エアオペレイション）はそんなチンケなモンに敗れる程甘い能力じゃねェ。それが電磁波なら、絶縁体を使えばいいだろォが。
空気はいい絶縁体だ。
だからオレは――空気の膜を張り巡らせる。
反射はされなかったが、光はオレの寸前で消滅した。

「へえ、反射は出来なくても掻き消しは出来るのか」

「電磁気学の勉強が足りてねェな。空気は絶縁体、絶縁破壊を起こさないレベルに操作しちまえば、オマエの光波で壊れはしねェンだよ」

「その分だと、音波も通じそうにねェな。大気の操作で上手い事回

避しちまいそうだ」

「そォ言うわけだ。わかったかァ三下？　オマエが第1位になれねェ理由が」

「甘いな早川。今から見せてやろう……テメェの常識は俺に通用しねえ」

6枚の翼が更に輝きを増し、久我のクソ野郎はどんどん神々しくなっていく。だが、どんな波だろォが所詮は波に過ぎねェ。必ず抜け道はある、その抜け道をオレは知っている。だからオレはいくら久我が輝こうが、決して動じない。オレの能力は――久我の波動操作（ウェーブハンドウ）を必ず粉砕する。

「オーケー。今からオマエを竜巻に放り込ンでやる」

空中で風の操作を行って、ミサイルのように久我の懐へと飛び込んだ。そのまま突き進んで久我の心臓を握りつぶし、久我の死体を竜巻に放り込んでやろうと思ったのだ。

しかし、

「テメェの常識は絶対に通用しねえ」

再び8本の真っ白い光線が放たれ、咄嗟に止まって空気の膜を全身に張り巡らせた。

「ッ！？」

軽く平手で胸を押されたような感覚を感じ、思わず久我との距離をとったオレ。一体これはどういう事なンだ。電磁波が――オレの

空気の膜を通り抜けやがっただと？

「チッ、絶縁破壊かァ……？」

「そんなチンケなものじゃねえよ。ところでテメェは超弦理論（ちょうげんりろん）ってのを知ってるか？　弦理論（げんりろん）に超対称性（ちょうたいしょうせい）って考えを加えて拡張したもんでな、まあ要するに素粒子やクォークの先を説明する理論の一つだ」

「物理学の勉強が足りてねェな。それがオレを攻撃する理由に繋がンのかァ？」

「勉強が足りてねえのはテメェのほうだ。そこに抜け道があるんだぜ」

６枚のメルヘンな翼がさらに輝きを増し、久我の能力が最高出力を叩きだす。よほど複雑な計算を行うと見たが、あの野郎……超弦理論なンかでどォするつもりだ。

どう足掻こうが――オレの能力を突破する事は出来ねェぞ。

神々しい翼で羽ばたき、その余波で何故か真っ白な光線が放たれた。何度も同じ手使ってンじゃねェぞと思いながら、空気の膜を張り巡らせて光線を押さえつけてやった。

だが、その行動を待ってましたと言わんばかりに――久我は薄く笑っていた。

「――最期だ」

「ッ！？」

その言葉を聞いた瞬間――ズドン！　という鈍い音が全身に炸裂

する。光波は空気の膜で防いだハズだと言うのに、どういうわけかオレはダメージを受けていたのだ。
全身がゴキゴキバリバリと嫌な音を立て、万全の防御態勢で構えていたオレの体が、無理やり３０メートルも下にある地面に背中から叩きつけられた。

「あ、ごっばァがあああァァあああ……ッ！」

「ゆ、悠！」

「来るなァ……クソガキ！」

駆け寄ってきたミネットを抑制した直後、オレは首を上に動かし、神々しい翼をはためかせて降り立つ久我を睨みつける。ムカつくほどに余裕そうな笑みを浮かべ、オレを見下している。
格下のクソ野郎が、調子に乗りやがって……だが、今のは何だったンだ？

「超弦理論に基づき物質を素粒子レベルの波として変換すれば、何が出来ると思う？」

「……ッ！？　オマエ……まさか、全く別の物質を……ッ！？」

「流石に理解出来たか。そういうわけで、テメェの膜は破ろうと思えばいつでも破れる」

「……チッ！」

地面に這いつくばった状態で、握った左右の拳をアスファルトに叩きつける。それは単なる悪あがきでも負け犬の遠吠えでもなく、

大気の操作で四つの竜巻を巻き起こしたのだ。
威力はどれもＦ５級、全てを破壊し尽くす悪魔のような渦巻き状の上昇気流。
しかし、久我は６枚の翼で自分を包み込み、竜巻を受けてもビクともしない。何故かその場で丸まり続けて動かないのだ。あの翼…一体どういう原理で生まれているものなンだ。
風撃が終わると、久我はゆっくりと神々しい翼を広げた。

「クソッタレ……ッ！」

今度は竜巻で砕かれたアスファルトの破片を蹴り飛ばし、風の操作で米軍が試作したレールガン以上の速度で飛ばした。しかし忌々しい翼が振るわれ、翼と破片が接触すると、破片の軌道が下方に逸れてしまい、久我の数センチ手前に落下し、地面に小さな穴を開けただけであった。

「残念だったな格下……本来は俺のほうがテメェより上位なんだよ」

「……格下、上位？　笑わせンじゃねェよ三下」

「なに……？」

オレの言葉に反応し、久我は眉をひそめる。

「オマエはその程度が限界だ。それ以上の事は何も出来ねェ」

「……はん、格下の癖に随分威勢がいいじゃねえか。俺様に失礼だろう？」

「どっちが格下か、徹底的に思い知らせてやるよ――三下がァ！」

「無論、テメェだ！」

久我は神々しい翼を羽ばたかせ、オレは風の操作を行い、両者は殆ど同時にお互いを叩き潰す為だけに前方へ駆け出す。久我は重力の操作を行っているのか、やたらと動きが速ェ。だからと言ってオレの速度が負けているわけでもねェ。

互いに音速を超える速度で突進し、能力を籠めた右腕を敵に向かって伸ばした。

「永遠に格下やってろ、久我ァ！」

「引き摺り下ろしてやるよ、早川ァ！」

大気と波動。

二つの強大な力の交差は、ドバン！　という轟音が炸裂した一瞬だけ。

それで――オレと久我の勝負は決した。

第２２４話，因縁のライバル対決（後書き）

キャラクターＮｏ００７
・西園寺雪乃※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆☆☆☆☆
防御力：☆☆☆☆☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆☆☆☆☆
魔力：ナシ
魔法（超能力）：☆☆☆☆☆☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆☆☆
総評：全体的に能力が高く、身体能力も高いのでかなりの強キャラ。
これでも久我や早川よりは圧倒的に弱い。

第２２５話，神にも等しい力ｖｓ説明不能な闇の力

「はい、悠」

オレは杖を持っているミネットに近付き、それを受け取った。戦闘中もこのクソガキは杖を抱えていたらしく、おかげで瓦礫の中から杖を探す手間が省けた。杖を受け取り、それを右手に持ったオレは魔力エネルギー変換機のスイッチを通常モードに戻した。

それからもう一度、クソガキの事を睨み付ける。

ビクッと肩が震え、一歩だけ後退りをしやがった。

怒られるとでも思ってンだろォが……コイツは怒る気も起きねェな。

「で、オマエはこンな所で何してやがったンだ？」

「え、えっと……アルファ隊の仕事なんだよ？」

「仕事だァ？」

「う、うん！　ミネットだってアルファ隊の魔法使いなんだよ。お仕事くらい当然かも！」

それを聞いた後、オレはミネットに背を向けて、

「ふン……程々にしとけ。でないとオマエも死ぬぞ」

「う、うん……今回はありがとうね、悠」

「……チッ」

そのまま杖をつき、ボロボロのアスファルトの上を歩く。その上で、久我劉生がうつ伏せになって倒れていた。今は生えていないが、さっきまで背中から伸びていたあの6枚の翼はあらゆる波動の集大成らしく、あの翼こそが超弦理論の操作を可能にする媒体だったらしい。

光波を衝撃波に変換したり、自身の防御や破片の軌道変更も、全てはあの神々しく輝いていたメルヘンな翼が原因で、オレはソイツの力によってダメージを受けたようだ。

だが、そこまで解析しちまえばこっちのモンだ。

その波動が発生出来ない環境を作り、仮に発生したとしても、オレが影響を受けない防護策を張り巡らせちまえば――久我の能力なンざ大した怖いモンじゃねェンだよ。

最強とは何なのか。

単に能力が強けりゃいいってモンじゃねェ。

一番大切なのは相手の能力を解析し――自分がどう戦うかだろォが。

「にしても、無様な格下だなァ？」

弱点を突かれ、旋風の中心に出来る真空で皮膚を切刻まれた久我の体から、まるで不思議な術式を発動させる為の魔法陣を描くように、大量の血が壊れた地面に広がっていた。

もしオレが藤島（アイツ）なら、久我を見逃してこの場を立ち去るだろう……が、オレはそンな容赦ってモンは知らねェし、この世界には情けも躊躇いも何もねェンだ。

だから、オレはズボンのベルトから銃を抜いた。

「あばよクソ野郎、悪ィが容赦はしねェ」

拳銃の引き金に人差し指が触れる、念のためにしゃがんで近づき、銃口を久我の頭に突きつけてやった。これで終わりだ……久我劉生って存在はこの世から消えてなくなる。

半ば学園の最終兵器と化していたコイツを殺せば、学園に勝利したも同然。

「ま、藤島（ヒーロー）にやられるよりは遥かにマシだろォ？」

これで山場は越えれる。後は学園長の首さえ掴めば学園を潰せる。勝利を確信し、人差し指を動かして引き金を引こうとした、一歩手前で――、

「待って、悠！」

「ちょ、待てよアンタ！」

「貴方、その手を一回置きなさい」

耳障りな声の数々が同時に響いてきた。そちらに目を向けてやると、そういえばそこで伸びていた学ランの野郎と、緑色のワンピースを着たオッドアイの女。

そしてミネットがまっすぐこちらに走ってくる。

「悠！　なにも殺す必要はないと思うんだよ！」

「あ？」

「ああ、この子の言う通りだ。その必要は俺もないと思う」

「アイリスも同じ意見ね、このクソ野郎はこちらで身柄を回収しち

まうから」

オッドアイの女……こちらってどういう意味なンだ？
見た所学園とは関係なさそうだし、何より非科学的な雰囲気を放ってやがる。
しかもクソガキの知り合いか……なら、学園ほどふざけた奴ではねェだろう。

「こちら？　なンだオマエ、何処かの組織の人間か？」

「アイリスはアルファ隊の特隊員よ……貴方は確か、早川悠ってヤツだったかしら？」

「アルファ隊ねェ……ソイツはオレに詳しくて当然だな」

「言っとくけど、アイリスは貴方を超憎んでいるわ……仲間の仇が」

「……そォかい、死ぬまで憎ンでろ」

仕方ねェというより、当然の結果だ。文句なンざあるわけねェ……ただ、コイツらは何故久我の殺害を中止させようとするンだ。このクソ野郎はここで殺しておいたほうがいい。素直に捕まるほど大人しいヤツじゃねェし、必ず脱獄の手段を発見するだろう。
拘束は危険だ。なら残る道は一つ――それは死だ。
オレはもう一度拳銃を構えたが、銃を持つ左手の手首をクソガキに掴まれてしまった。

「離せクソガキが、コイツを生かしておいても得にはならねェ」

「ダメ、ミネットは絶対貴方を離さないんだよ」

「ふざけンな。オマエらがこの三下を安全に管理できるとは思えねェ。コイツはその気になれば世界中の軍隊と戦っても勝つような野郎だ。そンな野郎が大人しく捕まって、大人しく牢獄で体育座りをしているとは思えねェ。何よりオレの進む道に生存はねェ――だからコイツはここで殺す」

生存ルートなンてモンは甘すぎる。本来戦いってのは生と死しかねェが、生とは勝ち取って得る宝物であって、敗者には死の道して残されてねェ。それは自然界においても同じだ。

だが今の社会はこの法則に逆行し、みンな仲良しのおふざけグループだが、裏社会でそのルールが通用すると思ったら大間違いだ。

裏社会とは――常に自然界のルールに従ってるモンなンだよ。

今の社会の自然への反逆は、やがて人類滅亡を招く。今の人間からしてみれば、邪悪な考えだの非人道的だのと文句を言われそうだが……コイツは紛れもねェ事実だ。

仲良しこよしはいずれ破滅を招く。狎れ合いグループに未来はねェ。

だからオレは、一切の容赦をしねェで自然の流れに従う。

それが――本物の道ってモンだ。

「悠……あなたは一体、何の仕事をしているの？」

「オマエには関係ねェ、死体を見たくなかったら目を逸らせ」

「関係あるもん！　ミネットは悠を心配してるんだよ？　だから、関係あるよ……」

「余計な心配すンじゃねェ……オマエはもっと悲惨な地獄を見てェのか？」

「だからって……あなた方一人が泥を被る必要なんかないんだよ！　それに、こっちの拘束技術とレムリアの拘束技術は全然違うんだよ？　牢獄内に拘束用術式が張り巡らされていて、多分悠の能力でも突き破れないハズだよ。だから悠、いくら極悪人だって殺す必要はな――――ッ」

ミネットは全てを言い終えることが出来なかった。

その前に、

ドバァ！　と、久我劉生の背中から突然――6枚の翼が伸びてきたのだ。

翼は一気にこちらへ放たれ、咄嗟にオレは空気の膜を張り巡らせた。そもそもアレが電磁波の一種かどうかも不明だが、電磁波の一種である事を前提に膜を張り巡らせたのだ。

しかし、久我が突いたのはオレではない。

ミネットの目が信じられないくらいにまで見開かれ、口からもドロリと、普通なら出てくるハズがねェ血が流れ出ている。その状態で、ミネットはゆったりと目を下に向ける。

オレもミネットと同じ部分を見ると――そこには久我の神々しい翼。

刃物のように変形した翼が、ミネットの脇腹を貫いていたのだ。

「ミネット！」

「お、おいミネット！」

オレは呆然と立ち尽くし、ミネットの知り合いである男女は名前を叫んだ。そしてミネットの背後で翼を生やした久我が、ゆっくりと立ち上がり――うっすらと笑みを浮かべていた。

「甘いぜ早川……さっさと殺さねえから無駄な物を失っちまうんだ」

「お、オマエ……ッ」

「あ、このガキ？　心配するな、俺もボロボロで急所を外したからな。多分今から病院にでも運べば全治3ヶ月コースだろうが……残念だな、俺はこのガキを殺す事にした。テメェの甘さに反吐が出そうになってよ、それがムカついたから――テメェの大事なものをぶっ殺す事にした」

言いながら、久我は真っ白く輝いている翼をゆさゆさと揺らし、ミネットの脇腹に開いた傷口を徐々に広げていく。翼が揺らされる度に、ミネットは苦しそうに絶叫していた。

次第に全身から力が抜けていくのが分かる。

瞳まで、活気を失い虚ろになっていく……。

「や、めろ……」

「聞こえねえよ。にしても残念だ……テメェほど裏社会のルールを熟知しているヤツも珍しいと思ってたんだが、まさか……これっぽちも理解していなかったとは。それとも、このガキがお前を止めちまう存在だったのか？　だとしたら、このガキが死ぬとテメェにとっては得になる。邪魔をされずに――悪党の道を走る事が出来るんだからな」

そういうことか、この野郎がミネットを攻撃した理由は……それなのか。つまり久我はさっさとトドメを刺さねェオレに失望して、それを妨げていたクソガキを殺すことにした。それでオレをマシな人間にしてから、自分の能力使ってオレをブッ殺そうと……ざ、け

ンなクソッタレ。
確かにオレは、クソガキの言葉で手を止めてしまうほど――甘いヤツだった。

「やめろォ……三下がァ！」

「聞こえねえ！　テメェがそこまで腰抜けだったとは、それじゃあ殺す価値もねえ！　やっぱこのガキを排除して――テメェをもう一度目覚めさせてやるよ！」

だがな、そんな都合で――このガキが死ンでいい理由にはならねェだろ……ッ！

「ふ、ぶけンじゃねェぞ……格下がァァァァァァァァッ！」

「格下はどっちだ!?　このガキに甘やかされて甘くなったテメェのほうが格下だ！　さぁこの俺を殺してみろ！　どうしてもこのガキを助けたいなら、テメェは俺を殺せばいい！　それが俺達のやり方ってモンだろうが！　甘えてんじゃねえよ……ヘタレで腰抜けの三下小僧がァ！」

だが、結局あのガキが地獄を見ているのはオレの責任だ。たとえ、あのガキやあのガキの知り合いに止められても、引き金を引く度胸を見せていれば――こンな悲劇は生まれなかった。
あのガキを守る事が出来ず、あのガキの命が危ねェ事になった。
だからこそ、

だからこそ、オレは――全てを捨てて久我と戦うことにした。
もう他には何も望まねェ……久我を殺してクソガキの命だけを助ける。

それを邪魔するヤツは――誰であろうとブッ殺す。

「が、ぐ……ァァァッ！」

脳が左右に割れたような気がするほどの、凄まじい頭痛が脳全体に広がり、恐ろしいまでの吐き気が胃の中から込み上げてくる。全身がガクガクと震え、心臓が破裂しそうなほど痛く、背中に刀で刻まれたような激痛が走り――――。

そこで――オレの意識は途絶えていた。

――久我劉生Side――

「ォォォおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

なんだこれは……早川の背中から漆黒の翼が生えてきやがった。オレの無意識に生えちまえ翼のそれとは違う、輝きもなければ希望も何もねえ。翼の数こそたったの2枚だが、噴射にも近いその翼からは凄まじい邪気を感じる。良心のカケラすら感じられねえ……あるのは邪心のみ。

一体、大気をどう操作したらこうなるかは知らねえが、とにかくすげえ。

「すげえ、すげえじゃねえか早川！　甘いっつったのは謝っとくぜ、

テメェ……素晴らしい程の極悪人じゃねえか！　それなら確かに俺を格下扱い出来るよなぁ！？」

そこで翼を振るい、突き刺さっていたガキを放り投げてやった。
ガキを回収しようと雑魚の男女が駆け寄っているが、今の俺にとってはあの2人なんてどうでもいい。
興味があるのは早川――テメェだけだぜ。
その５０メートルはあるどす黒い翼……それがテメェの本当の姿か。
これで五分五分の勝負が出来るってわけか……面白ぇぜクソが。

「さあて、殺し合おうぜ大気操作（エアオペレイション）。俺の波動操作（ウェーブハウンド）とどっちが強いか――心臓を賭けたでっかい殺し合いをしようじゃねえか」

やっと、能力をフルに振るっても大丈夫な相手と巡り合えた……
早川悠、コイツならフルパワーで戦っても楽しい勝負が出来そうだ。
俺は更に複雑な計算式を脳内で組み上げ、その解を導き出すことによって強大なエネルギーを創成していく。
明確な力が籠り、翼の大きさと輝きが増していく。
俺の光の翼は１０秒も経てば、早川の黒い翼と同等の大きさに成長した。
これが俺の全力――波動操作（ウェーブハウンド）のフル活用だ。

「は、ははは……ははははははははははははははッ！」

俺はもう神に等しい存在、いや――神を超える存在かもしれねえ。
超弦理論をフルに活用し、物質を素粒子レベルの波に変換すれば……今の俺なら、全く違う物質どころか全く新しい物質の創成だって不可能ではない。
つまり――新しい種類の波動を操作できる。

早川でも防御や干渉が不可能な――新物質の操作が可能になるのだ。

「見たか早川ァ！　俺は神にも匹敵する力を持ってんだ。テメェの翼は、絶対の勝利を得られる鍵にはならねえんだよ！」

「それは貴方の思い込みね」

「……あ？」

鬱陶しい声が聞こえたので、振り返ってみると――オッドアイの雑魚女が、瀕死の重傷を負っているガキを抱えて座り込んでいたのだ。

なに言ってんだあの目ん玉おかしいガキは……俺の思い込みだと？

「笑わせるな、今の俺に不可能はねえ」

「あるわクソ野郎。所詮、貴方の能力は科学の域を逸していない程度のもの。アイリスはこれでも魔法使い、神様の力と言うものは何度か見てきたけど――貴方のレベルを遥かに超えるものが全てよ」

「ざけんなよクソが。神なんていると思ってんのか？　だが、今の俺は存在しねえ神様に匹敵する力を手に入れたっつってんだ。あくまで俺が言う神は表現に過ぎねえんだ」

「残念ね、クソッタレ科学もこの程度とは……神はいるわ、そして貴方の力を遥かに上回る。そもそも貴方の力は波動だの超弦理論だの、科学的に説明できる範囲内でしかない。その組み合わせで新たな物質を創った所で――所詮科学は科学よ。私からしてみれば、そこの早川悠（クソッタレ）の黒い翼の方が――よっほど科学的に説明できないと思

うわ」

本当になに言ってんだろうな、このオッドアイの女。ひょっとしてアレか、宗教のやり過ぎで頭がイカレちまった口か。言う事も全て非科学的だし、大体神なんてものは存在しねえ。存在するのだとしたら科学の力で解明可能だろう。でも、神の存在は一向に明らかにならない。

神は科学的に説明が出来ない。

俺は科学的に説明出来ないものを――絶対に信じねえ。

だからこのオッドアイの女は、オカルトマニアのクレイジー女だろう。

「まあ見てろオッドアイ。俺の波動操作（ウェーブハウンド）は必ず大気操作（エアオペレイション）を粉砕する。その後――テメェにも神にも匹敵する力を打ち込んでやるよ」

そして、俺は再び暴走した早川を睨み付ける。早川は相変わらず殺意に満ちて、今にも俺を殺す為に攻撃を仕掛けてきそうな雰囲気だ。だが、それも上等……俺は早川を粉砕する。

先手を打っても無駄だ。今の俺には――世間の常識が通用しねえんだから。

「ははは、はっははははははははははははははッ！」

笑いに笑いながら、全力を籠めた6枚の翼を早川に叩きつける。

光の速度で放たれた、新物質の塊を――早川は防げねえだろう。

勝った、これで俺の逆転勝利。余裕だってんだよ……早川程度！

ぐしゃり、と。

凄まじい勢いで、肉体が潰れるような音が響き渡った。

「……な、ん……だと……ッ？」

しかし、それは早川の肉体が潰れたのではなく――俺の肉体が潰れた音であった。

正確には俺の翼が早川に触れた瞬間、俺の肉体が崩壊し始めたのだ。それもドロドロと液体のようにではなく、引き千切られたかのように、右腕が根元からボトリ、と地面に落下する。

消えたのは右腕だけじゃねえ。

続いて右足、さらには左足までもが同様に失われていく。

「ぐァ、がァァあああああああああああああああああああああああああああッ！」

クソ……残ったのは左腕だけかよ。

どうなってんだ……全然理解できねえ。

早川のアレ大気の操作とは全く違う……全く新しいエネルギーを感じる。

「ま、さか……ッ」

早川が一歩一歩ゆっくりと近づいてくる。そんなギリギリになってから、遂に俺は早川がどういう存在なのか。何故、早川が俺の上に立つ存在だったのか。その答えが分かったのだ。

「は、は」

「――――――ッ！」

「テメェの正体。そうか、テメェが……魔道能力者――――ッ！」

そうだ、という返事はない。
そもそも、今の早川に理性なんてものは存在しない。
やがて、破壊的な翼が振り下ろされて――――ッ！
……。

第２２５話，神にも等しい力ｖｓ説明不能な闇の力（後書き）

キャラクターＮｏ００８
・白藤早苗（しらふじさなえ）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆☆
防御力：☆☆☆
体力：☆☆☆
魔力：☆☆☆☆☆
魔法（超能力）：☆☆☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆
総評：防御力や体力はないものの、瞬間移動（テレポート）と武器の併用で実力はかなり高い。

第２２６話，白い少女

勝敗は一瞬にして決した。

さっき久我の攻撃で瀕死の重傷を負ったミネットは、即席の防御術式と、アイリス先輩のルーンを用いた回復魔法でとりあえずは助かったんだよ。まだお腹がズキズキと痛むけど、歩けるくらいまでには回復できたし、魔法って便利だよね。

ミネットは戦いの勝者である悠に駆け寄り、倒れた悠の頭を持ち上げ、自分の膝を枕にするように頭を置いてあげた。悠はぐったりと眠っている、まるで眠り姫かも。

一応悠は男の子って設定みたいだけどね。

でも寝顔がちょっと女の子に見えるかも。

「悠……よく頑張ったね」

ミネットは悠の額にそっと手を触れ、そのまま優しく悠の額を撫でてあげた。それでも悠は全く目を覚まさず、ぐっすりと深い眠りについている。

そんな中、北野さんとアイリス先輩が、悠が開けた大きな穴へと近づいて、

「うわっ、グロ……」

「昴、失礼よ。彼、まだ息はある見たいだからくたばっちゃいないみたいね」

ミネットも一旦悠をそっと地面に寝かせ、クレーターの中身を確認する。悠の黒い翼が作った大きなクレーターの中心に、肉の塊が隕石のように落ちていた。それは右腕と両足を失い、残った左腕も

全く原型を留めてらず、右目も抉れて全身から大量の血を流していた。
殆どハンバーグのような状態と化したその人物。
久我劉生。
悠と戦ったその人物は、瀕死の重傷も負いながらも――辛うじて呼吸を続けていた。

「アイリス先輩……その、どうするんでしょうか？」

「そうね、一応アルファ隊の下部組織に送りつけようと思うわ。丁度同期の隊員に科学者がいて、その人が医療分野で技術提供をしている所があるから、多分そこの医療技術を駆使すれば命だけは助かるんじゃないかしら？」

それって木葉さんのことなんだろうなぁ……ってミネットは推測してみる。
木葉さん、地味な所で仕事しているよね……陰のサポーターみたいかも。

「アイリス……こ、これ助かるのか？」

「心配しないで、レムリアの技術なら助かるハズ。まあ……一命は取り留めても永遠に満身創痍かもしれねぇーけどね」

「と、とりあえずこの人は回収、なんだよね？」

「それがアルファ隊の掟よ。どんなクソッタレでも殺さず――回収する」

「う、うん！　それじゃあ回収作業はミネットと仲間でやるね！」

「ええ、任せたわ」

悠の事も心配だけど、悠は殆ど外傷が見られないから多分大丈夫かも。仮に危険な状態だとしてもアイリス先輩の魔法で治せるハズだし、でも……アイリス先輩が嫌がるかも。

と、とにかく……悠は気絶しているだけだから、多分平気だと思うんだよ。

「アイリス、俺達はこれからどうする？」

「そうね……とりあえず、ここの一番偉い人のケツにダイナマイトを打ち込みましょう」

「あ、相変わらず下品な言葉使うなお前……まあ、俺達の次の標的は学園長だな」

「その学園長さえ屈服させれば、佐井学園との戦いは終結するのでしょう？」

「おそらくな。ただ、この状況だから警備はすごいと思うぞ」

「大丈夫、アイリスだって特隊員――ただの雑魚傭兵程度なら敵じゃないわね」

それぞれの次の行動が決まり、今からそれを実行する。佐井学園攻略戦はミネット達以外の別な組織の介入もあるらしいけど、何だかんだでミネット達に有利な方向で進んでいた。

もうちょっとだけ頑張ろう。

佐井学園攻略は――もう目前なんだよ。

「あれ、アイツは？」

「そういえばいなくなったわね」

「え、２人ともどうしたんですか？」

２人がキョロキョロと首を振り回し、何かを探しているようだったので、ミネットは２人に近付きながら聞いてみた……が、２人がなにを探していたのか、それはすぐにわかる事だった。

さっきまで悠がいた場所に――誰もいないのだ。

「あ、あれっ！？　悠は！？」

さっきまで気絶していたのに、一体どこにいっちゃったんだろう。

多分、あの足だとそう遠くへは行けないと思うんだけど……。

「ああ……まあいい、早川ってのは俺達が探しておくよ」

「えっ、本当ですかっ？」

「ミネットにとっては大事な人なんでしょう？　アイリスにとってはムカつくクソ野郎だけど、それでも大切に想っている人がいるんだから――助ける価値は十分あるわね」

「あ、ありがとう……なんだよっ」

２人の優しさに、ミネットは思わず涙が流れ出てしまいそうになった……。

さ、さて……悠も気になるけど、まずはお仕事しないと――。

うう……まだお腹痛い……っ。

――早川悠Ｓｉｄｅ――

「クソッタレ……」

頭がガンガンする。とにかくクソガキ達の世話になるわけにはいかねェと、起きあがって奴らから離れるだけ離れたが……コイツは相当重傷かもしれねェな。

なンだ、この頭痛と異様なまでの吐き気は。どう考えても風邪じゃねェぞ、もっと悪い病気に感染しちまったような、そンな感覚に陥っている。

それに……アレはなンだったんだ？

オレの背中から生えていた――あの真っ黒い翼は？」

「……っ」

ポケットから携帯電話を手に取り、ザスローンの誰かに報告すべきか……と思ったが、まァそンな事をしなくても大丈夫だろう。残り魔力残量は１０分。ハッ、楽勝だァ……これだけあれば学園の主要な人物や、学園長の首を切り落とすのには十分すぎるぜ。

さァて……どう動こうか、恐らく学園長の身の周りの警備は堅い事だろう。なら、どこかから武器を奪って潜入するってのが一番確実だな。

今のオレには武器がねェ……そして能力に頼る事も出来ねェ。

ならばどうするか。

武器を敵から鹵獲（ろかく）する以外に方法はねェだろ。

「とりあえず、久我のクソ野郎が率いたいた連中の死体でも漁るか」

これまで散々ぶっ殺してきた傭兵なら、大量の武器と弾薬を身に持っているハズだ。ソイツらの装備を奪っちまえば、ある程度の武装組織とは戦えるハズだろう。

オレは先程、トレントの傭兵達と戦った場所へ進路を変更し、歩きだそうとした。

しかし、

バガン！　という爆発音が聞こえた。

ここより東南に位置する、研究施設が集中しているエリアからである。

「あ？」

学園長の首を切り落とすのが先か……と思っていたが、今の爆発……兵器によるものと言うよりは能力者の悪戯にも見えるな。コイツは一応、調べておいたほうがいいかもなァ。

「少しだけ寄り道するか……クソッタレ」

オレはここより東南に位置する研究施設群へ進路を変更、先程の爆発の原因と、何者によって起こされた爆発なのかを調べる為――杖をついてゆっくりと歩き始めた。

――浜島雅人Ｓｉｄｅ――

俺達は明智達と合流をすべく、まずは学園の東部へ向かったのが……玄関などが破壊された総合研究博物館があるだけで、彼女達の姿はそこにはなかった。多分、ここでの戦いはとっくの昔に終わってしまったのだろう。続いて、俺達は学園西部――校舎側を目指して移動した。

こっちはかなり生々しいな……。

ボロボロの連中が沢山だ、力尽きて倒れている黒ずくめ達も大量である。

その中に――。

「おい２人とも、あれって明智と白藤じゃねえか？」

俺が指差した校舎の壁のあたりで――明智と白藤を肩を寄せて休んでいたのだ。

「ほ、本当だわ……間違いないわね」

「おーい！　雪乃ー！　早苗ー！」

木山が大声で叫ぶと、明智が右手を大きく横に振って返事をしてくる。どうやら俺達の所に行く力も残っていないようなので、こっちに来いと手で合図しているのだろう。

俺達３人は明智と白藤の下に駆け寄り、２人の様子を窺った。

まず目に入ったのは――ボロボロの白藤の姿である。

「おい、大丈夫かよテメェら？　つーか白藤、テメェ……手首折っ

てるじゃえかよ」

【戦傷した、でも歩けるから兵器】

「凪紗は大丈夫なのかしら？」

「私は疲れただけだぞ。それより雪乃……お前も相当怪我しているみたいだぞ？」

「私は……大丈夫よ、必ず久我（アイツ）は倒してみせるわ」

さっきの金髪ホスト風チンピラ野郎か……アイツも滅茶苦茶強いからなぁ。つか、さっき向こうから凄まじい爆音が聞こえてきたけど、それってあのチンピラ野郎の仕業なのだろうか？

俺と木山を除けば、フレンドのメンバーは殆ど怪我人。明智も疲れているし、元気な俺と木山だって戦闘向きとは言えねえ……クソッ、これじゃあ勝ち目がないんじゃねえか？

「とりあえずこの後どうすんの？　あたしは正面攻撃は危険だと思うけど？」

「そうだな……戦力の殆どは怪我人だぞ。私も疲れて戦えるかどうかは微妙だ」

【一応、瞬間移動（テレポート）は出来るよ】

「私は、まだ一応戦えるわ」

「お、俺は……五体満足だぜ？」

ああ、戦力として使えそうなのが怪我人の西園寺だけかよ……やっぱりまずい、このままじゃ打倒佐井学園って夢は敵わねえぞ。一体この後どうすりゃいいんだよ……。
いよいよコレ、詰んだんじゃねえのか？

「……ッ！　誰か来るぞ！」

いきなり明智がキッと表情を厳しくする。
誰か来るって……武術の達人明智が――誰かの気配を察知したってのか？

「まさか、久我かしら……っ？」

「可能性は一番高いよ、雪乃どうするの？」

「ま、任せなさい……同じ失敗は二度もしないわよ」

そうは言っているけど……あの久我、滅茶苦茶強いんだろ。失敗と言うか……一言でそうまとめられる次元を遥かに超えていると思うんだけど。
と、考え事をしている間に――気配の主の姿が見えてくる。

「う、そ……」

「ま、まさか……冗談なの、か？」

【あ、あの人……っ】

「えっ、雪乃。あの人って確か……」

俺以外の女子メンバーは驚愕していた。
それは胸や股間など、大事な所と腕の一部や脚の一部に包帯を巻き付けただけの、雪のように白い髪の女を持つ少女であった。フレンドにいる女の子たちも相当レベルが高いけど、今現れた女の子も高レベルな感じだぜ……若干冷たい雰囲気を放ちながら、柔らかそうな可愛さも持っている。
赤い瞳に、髪と同じく雪のように白い肌……。
やべえ、可愛いし……身につけているものが包帯だけだから、なんか……エロい。
だけど、女の子の登場を――フレンドの女子は喜んではいなかった。

「い、伊吹……なのか？」

というか、何故か明智の口から――伊吹という女子と思われる名前が出てきたのだ。
もしかして、その伊吹ってヤツに滅茶苦茶似ているのか……あるいは本人なのか？
一体どういうことなんだろうか……そもそもあの子、なんで服着ていないんだろう？
疑問は深まるばかりであった……。

第２２６話，白い少女（後書き）

キャラクターＮｏ００９
・浜島雅人（はまじままさと）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆
防御力：☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆
魔力：ナシ
魔法（超能力）：ナシ
知力：☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆
地位：☆☆
総評：一時期は不良グループをまとめていた事、圭介にもある程度苦痛を与えたことから、そこらの不良よりは強いレベル。しかし能力者に対しては無力である。

第227話，正体

突然、俺達の前に姿を現した――包帯一枚の雪のように白い少女。
や、やべえ……これ、興奮を抑えるのが精一杯なんだか。男の子の俺にはその恰好、流石にハードすぎるぞ。だけど、西園寺を始め、女子メンバーの表情は一向に柔らかくならず、むしろあの少女に警戒しているようにも見える。どうして、そんなに危険そうには見えねえけどな。
いや、包帯一枚で外を歩くのはある意味危険かもしれねえけど……。

「浜島達は下がってて、私がどうにかするわ」

「ゆ、雪乃!?　平気なの？」

「そうだぞ、ここはみんなで行ったほうが……」

「大丈夫、私はこれでも五本指の一人よ。万が一の事もあるから……任せて――」

そう言い残し、西園寺はゆっくりと包帯のみの少女へ接近していった。
両手の拳は硬く握りしめられ、目付きも戦場へ赴く兵士のようだ。
西園寺……テメェ、何そこまで警戒してんだ。相手は女じゃねえかよ……？

「誰ですか貴女は？　伊吹……ではないのでしょう？」

「……どうして」

「……えっ？」

「どうしてこんな目に遭わなきゃいけないの……どうして兄さんも不幸になっちゃうの？」

「あ、貴女……なにを言って……？」

いまいち状況が分からねえけど、包帯だけの少女は今にも泣きだしそうなほどに、哀しそうな表情を浮かべていた。瞳には水滴が溜まり、わなわなと体が震えている。それはとても弱々しい女の子の姿であったが、それでも西園寺は驚くだけで――警戒を解こうとはしない。

「あなたの……せいなの？」

「な、なによ……貴女に何があったかは知らないけど、どういうつもりなのかしら？」

「聞いてよ、あなたのせいなの？　私と……兄さんが不幸になっちゃった理由は……？」

何処までも哀しそうに、今にも沈んでしまいそうな少女が西園寺に歩み寄る。少女に警戒している西園寺は、ジリジリと迫ってくる少女から距離を取ろうと、一歩ずつ後退りをしていた。

そこで俺もようやく感じたのだ――包帯だけの少女の妙な威圧感を。

「……まずは、事情を聞かせてもらおうかしら？」

緊急回避というヤツなのだろうか。
困っていた西園寺は、とりあえず少女の話を聞く事にしたらしい。
しかし、

「……どうして、どうして答えてくれないの……？」

「そ、それはその……なんて言えばいいのか……っ？」

包帯だけの少女は事情を聞かれても、全く答えてくれない。それなのにどうしてって、そりゃあ西園寺が困るのは普通だな。こっちは事情も知らないんだ。何を言えばいいのか、そんな心を読む能力を持っているわけじゃねえんだから――分かるハズがねえだろ。

「……やっぱり、あなた……なんだね」

「さ、サッパリ意味がわからないわ。そもそも貴女とは多分初対面よ？」

「やっぱり……そうだったんだ。兄さんと私を不幸にした……諸悪の根源……っ！」

少女の虚ろだった瞳に明確な力が籠っていくのがわかる。今、少女が西園寺に向けている感情は間違いなく敵意だ。その敵意が何処から湧いたのか、何故西園寺に向けているのか。その理由はサッパリ分からねえけど……これはまずい、あの子相当歪んでいる上に怒っている。
そして、遂に――、

「が、はぁ……ッ！？」

包帯だけの少女が右腕を動かしただけで、西園寺の腹部にドス黒い何かが衝突する。たったのそれだけでゴキゴキバリバリという嫌な音を立てて、西園寺は数十メートルも吹き飛ばされる。

しかし、背中を校舎に叩きつける前に一回転し、バランスを立て直しながら、彼女はどうにか校舎の壁ギリギリのあたりで華麗な着地に成功したのだ。

「ッ！」

だが、それだけでは少女の怒りも治まらなかったのだろうか。

少女は両手を空に向かって上げると、先程まで青空が広がっていたのにも拘わらず、突然闇のようにどす黒い黒雲が、空を黒と灰色一色に染め上げる。続いてバリバリという轟音と、反射的に瞼（まぶた）を閉じてしまうほどの凄まじい閃光。

それでも頑張って目を開けてみると、無数の紫色に輝く稲妻が黒雲から伸びて、学園中の避雷針や樹木等に落雷しているのだ。なんだこれ……西園寺だけを狙ってる感じではねえな。

「う、ぐぅ……なに、この力は……っ？」

「雪乃！」

「西園寺、平気か？」

かなり弱ってはいるものの。それでも立ち上がってきた西園寺。

俺と木山はそんな西園寺に駆け寄って声を掛けるが、西園寺は俺と木山を退かせ、再び少女へ近づいてゆく。

明智はこの混乱の中、負傷者の白藤を守る事で精一杯の様子だ。

「まさか、貴女は……【暗黒活力（ダークエネルギー）】……？」

暗黒活力（ダークエネルギー）？

それってもしかして、ここで言う能力名みたいなものなのだろうか。

「もしかして……感情能力者はもう完成していたのかしら……？」

感情能力者……これまた聞いた事のない単語である。まあ、この学園に来てから、聞いた事のない単語を聞く機会が増えたんだけどよ。でも、感情能力者ってのは初耳だな。

だけど、感情能力者ってどういう意味なんだ？

こ、ここは……木山とか明智とか、超能力に詳しそうなヤツに聞くしかない。

「木山、明智！　感情能力者って一体なんなんだよ！？」

「あたしも知らない！」

「えっ？　あ、明智は……？」

「私も、そんな種類の能力者は聞いた事がないぞ……っ」

「そ、そんな……」

それじゃあ、感情能力者の存在を知っていたのは西園寺だけだってのか。そういえば西園寺は南部へ向かったハズだが、地図を見る限り――あそこには研究施設が集中していたハズだ。

ひょっとして西園寺、そこで何か情報を掴んだのだろうか？

だとしたら……なんで今まで黙っていたんだよ。

「う、があ……ぁ……ッ！」

「雪乃ぉっ！」

包帯だけの少女を、真っ黒の気体――暗黒の気体が包み込んでいた。刹那、少女を包んでいた暗黒の塊が右手に集中し、レーザー光線のようにどす黒い塊が西園寺へ照射される。どういう痛みを感じているかまでは知らないが、西園寺の表情は苦悶に満ちていた。

暗黒の気体を受けた服の生地が焼けるように失われる。

腹部のあたりの生地を失い、西園寺のお腹や背中が丸見えだ。

「くっ、ふざ、けるな……っ！」

苦痛に耐えきった西園寺は体勢を立て直すと、能力で数個の雹（ひょう）を製造する。能力によって砲弾の如く射出された雹は、迷うことなく包帯だけの少女を捉えて突き進んだ。しかし、少女を包み込む真っ黒い気体が少女の姿を完全に隠してしまった。

それでも雹は進路を変えず、真っ直ぐ黒い気体に突っ込んでいく。しかし、じゅぼん、と毒物に肉が入り、その肉が溶けてしまうような音が聞こえる。

暗黒の気体の中から少女が再び姿を現すが、少女は全くの無傷。

流血どころか、体のどこも汚れてはいなかった。

「なによ……これ、強制的に氷が溶かされ……いや、氷が消滅した！？」

おいおい、蒸発したってんなら理解できるけどよ……西園寺の言い分だと、完全に水分自体が失われた感じだぜ。あの暗黒の気体……一体どうなってやがるんだよ。

説明不能だ。俺が馬鹿なせいかもしれねえが、あの少女の力は説

明不能だぞ。

「雪乃、退いてろ！」

と、叫びかけてきたのは明智。

両手に発火能力で生み出して炎弾が灯っている。

「火傷しろォォおおおっ！」

明智はくるん、とをバレエの踊りのように体を回しながら、華麗に炎弾を放つ。包帯だけの少女はワンパターンな事に、再び暗黒の気体で全身を包み込む。だが、そのようなワンパターン戦法でも――明智の炎弾を防ぐには十分であった。

炎弾も西園寺の雹と同様、触れた瞬間に消えてなくなったのだ。

やがて暗黒の気体は少女を包み込むのをやめ、刃のように変形する。鋭く変形したどす黒い気体が縄のようにウネウネしながら、徐々に明智や西園寺へ接近してゆく。

もうダメだ――と思われた、その時。

「ッ！」

シュ、と一瞬で西園寺と明智が消えて、暗黒の刃が地面を大きく抉り取る。一瞬、気体に触れて2人とも消失してしまったのかと思ったが、どうもそれは違うらしい。

後ろを見てみると、西園寺と明智は白藤の左右に立っていたのだ。

「し、白藤……？」

「ありがとう、助かったわ……ッ」

どうやら、2人は白藤の瞬間移動（テレポート）に助けられたようである。
それにしても、あの少女……どう対処すればいいんだよ。
西園寺だって5本指の一人だってのに、まるで実力が違うじゃねえか。

「は、浜島っ！」

「……ッ！」

そして、そんな事を考えていたのが俺達の僅かな油断。気体……と呼んでもいいのかも分からない物質で作られた、暗黒の気体のような刃は俺と木山に向かって振り下ろされる。
気付いた時には手遅れ。西園寺と明智が駆け出し、白藤も能力を発動させようとするが、このままでは間に合わない。クソ……やべえ、ここまで……なのか？

「――ッ！」

覚悟を決めて、木山を抱き寄せ――瞼を力強く閉じた。
が、
その時――ドバン！　という、大地を揺るがす凄まじい轟音が炸裂する。

「う、あああああああああああああああああああああああああああああああああっ！」

あまりの衝撃に、俺と木山は遥か後方へ吹き飛ばされ、校舎の壁に背中を強打する。
全身に広がる衝撃に、思わず表情を歪めたが……。

「ったく、面倒臭ェ事になってンなァ……メルヘン野郎の次はヤンデレ少女かァ？」

その時――救いとも地獄とも捉えられる、狂気の塊のような声が耳に入ってきたのだ。

第２２８話，暗黒活力（ダークエネルギー）

コイツがさっきの爆発の原因か……というか、コイツは早川錐夏（はやかわきりか）。
オレの妹で、確か3年くらい前に三原のクソ野郎に捕まり、回収されて研究材料にされたらしいが……。
ハッ、面白ェ……まだ生きていたのか。
しかも、随分メンヘラなクソ野郎に構っちまったなァ？
オマケに、包帯一枚で外歩くような露出狂にもなっちまったか。

「オマエは錐夏か。まだ生きていたとは予想外だったなァ？」

「……兄さん、久しぶり。うん、私は生きているよ」

何の計画の実験動物（モルモット）にされたか知らねェが、運よく命まで奪う計画には利用されず、中途半端にぶち壊されて生きてるって感じだな。
それはそれで可哀想だぜ、死にきれねェってのも苦痛だろォし。
にしても、一つだけ気がかりな事があるな。

「暗黒活力（ダークエネルギー）か……宇宙全体に広がる、あらゆる正体不明な負のエネルギーを自由自在に操作する、科学者も頭を悩ませる能力だが……オマエにはそもそも、その能力をそこまで使いこなせる器は持っていなかったハズだ」

錐夏は精神的に不安定で、その点は超能力者として失格と言えるだろう。あまりにも弱過ぎると超能力がトラウマとなる可能性があり、伸びるものも伸びなくなるからなァ。
才能のあるなし以前の問題だ……だから、錐夏はそこまで強い力を使えねェ。
ハズだったンだがな。コイツは一体どォなってやがるンだ？

「全部……兄さんが不幸だったから。私は負の力で能力が強化された……」

「負の力ねェ……どンな実験されたか知らねェが、オマエの目的はなンだ？」

「私の、目的……？」

「回答次第じゃミンチ確定だがな、正直に答えろ」

「私の、目的……わからない」

「わからねェだと？」

散々考えておいて結局はそれか。ったく……誰に似たンだかふざけた妹だ。つかよォ、この一緒にいるとオレまで暗くなっちまう、この異様な空気は何なンだァ？

どう考えたって、錐夏が放っているとしか思えねェが……何の力が働いてやがる。

「兄さん……ただ、私は――恨みを晴らしたい」

「恨みだァ？」

「私と兄さんを不幸にした――諸悪の根源をこの世から消したい」

一見正しい事を言っているようだが、コイツの人格から考えると、単なる虐殺ショーを行いたいと言っているようなもンだ。だからその言葉を認めた瞬間、際限のねェ大量虐殺が始まり、関係のねェ一

般人にまで被害が及ぶのはほぼ確実だろうな。
何よりコイツ、オレが不幸だと思ってンのかァ？
何を根拠にオレを不幸にしてるってンだ。もしかして悪の道を突き進む兄の姿が、錐夏にとっては不幸にしか見えなかったと言うのか。
だとしたら余計な心配だ……その道は——オレが選んで突き進んでるンだよ。
だからオマエ程度に——道を塞ぐ権利なンてねェぞ。

「そォかい……なら、オレはオマエを排除する」

「えっ……？」

「余計な世話なンだよ。オマエの考える不幸ってのはオレの突き進む道だ。それを邪魔しようとしてンじゃねェ、悪党の道ってのはオレが選らンだ道だ。オマエに関係のある話じゃねェ……だからオレを道を塞ぐようだったら——オマエはここから消えてもらう」

オレはポケットのベルトから拳銃を取り出し、ソイツの銃口を錐夏へ向けた。こンなもので錐夏の息の根を止められるとは思っていねェし、そもそも錐夏をブッ殺す気もねェ。
急所を外すくらいの技術なら、もう日頃の訓練と実戦に身についている。急所を外し、錐夏の戦闘能力を奪っちまうだけでいいンだ。それだけでオレはオレの道を開く事が出来る。
しかし、この程度で錐夏がソイツを許すとは思えなかった。

「兄さん……あはは、そうか……そうなんだ。兄さんも……学園の悪い虫に毒されちゃったんだね」

「あ？」

支離滅裂な事を錐夏は一人で呟いている。
端から見ていればこの女、かなり痛ェメンヘラのヤンデレ妹だなァ。

「そうだよね……人は不幸を望むはずがないもん。兄さん……可哀想だよ」

「……オマエ、人の話聞いてたのかァ？」

そもそも、オレはもう光の道には帰れねェンだ。ならどうするか……暗黒の世界で陰からクソガキや関係ねェ野郎を守るってのが、悪党の役目だろォが。
今の錐夏はソイツを妨害する存在だ。妹とは言え、見逃すわけにはいかねェ。

「兄さん……今から体の中を――お掃除しよう？」

錐夏はニッコリと、虚ろな瞳であるにも拘わらず、何故か口元が薄く笑っていたのだ。
やべェな……コイツは相当危険なタイプだ。
ひょっとすると、久我のメルヘン野郎より１００倍は危険かもなァ。

「お断りだ。オマエに掃除されるくらいなら――オレがオマエを掃除する」

「言わない……兄さんはそんな事、絶対に言わない――私の知ってる兄さんじゃない！」

「はァ、クソッタレが……学園の悪い虫に毒されてンのはどっちだ？　オマエだろォが」

「違う、私は純潔……今の兄さんは――学園に洗脳されちゃってるんだよ……っ」

「弁解の余地ナシってかァ？」

「ははは、あはは……じゃあ、私が食道も、胃の中も――全部ぜーんぶ綺麗にしてあげる」

「ったく、残り魔力残量は１０分しかねェのに……まっ、一瞬で消してやるよォ」

残り１０分しか能力が使えねェ事と、学園長の首を切り落とす必要もある事から、出来るだけ能力の使用は控えてェンだが、暗黒活力（ダークエネルギー）相手にそうも言ってられねェ。さっきまで錐夏と戦っていた西園寺のクソ共は気絶中、武器は拳銃しか持っていねェ。

そもそも、西園寺はボコボコにされていたし、錐夏に武器は通じねェだろう。

なら、オレの大気操作（エアオペレイション）を使い、一瞬で勝負を決めるしかねェ。

そう思い、オレは首筋にある電極に手を伸ばし、素早くスイッチを切り替えた。

戦闘を前提とした――能力使用モードへ。

「だから、逃げないでね――兄さん」

その瞬間、気体と捉えてもいいのか微妙な黒煙……いや、やっぱり気体か。とにかく説明不能な闇に染まったどす黒い気体が発生し、徐々に錐夏の体を包んでいく。なるほど、アレが暗黒活力（ダークエネルギー）の塊みた

いなものなンだろうか。あの気体から凄まじいエネルギーを感じる。
いや、エネルギーだけではねェ……同時に殺意まで感じられた。
錐夏ァ……オマエ、何処でそンな力の操作を覚えやがった？

「それじゃ、お掃除開始だよ――」

刹那、漆黒の気体がウネウネとヘビのように動きながら、やがてそれは複数のギロチンへと変形を遂げる。ギロチンと化したどす黒い気体が、オレの首を斬り落そうと一斉に落下する。正体不明の物質の塊みてェだが、果たして暴風の膜で吹っ飛ばす事が出来るだろうか。
この位置から飛び上がるのはむしろ危険なので、瞬間的に暴風の膜を張り巡らせる。
刹那、ギロチンはオレと接触し――再び単なる暗黒の気体へ戻されたのだ。
なるほど……暴風の膜で対処可能なモンだったのか。

「あ、れ……？」

「ハッ、まさかオマエ……妹の癖にこのオレの存在――忘れちまったンじゃねェよなァ？」

オレは笑いながら、地面をコン、と右足で蹴りつけてやった。
地面が割れ、複数の岩石が風の力を宙を舞う。ソイツはゆっくりとオレに近付き、オレは地中から掘り出した岩石に裏拳を当て、岩石を錐夏に向けて砲弾のように放ってやった。

「あぎゃははは！　ぎゃっははは！」

面白ェように岩石が飛んでいくか、錐夏は決して避けようとはし

ない。ただ、漆黒の気体で全身を包み込んだだけで、その場から動かないのである。

「ほらほらァッ！」

何発放っても避けようとはしねェ。

しかも気体に触れた瞬間、岩石は太陽にでも触れたかの如く――消滅していくのだ。

どォ言う原理だアレは……クソッタレ、一瞬で片付けねェと制限時間が危険だ。

「……ハッ、互いに攻撃が届かねェってか」

「届くよ兄さん。兄さんの攻撃は届かなくても――私の攻撃は兄さんに届く」

「なに言ってンだオマエ？　オマエの攻撃はオレの能力で反射出来るだろォが」

「兄さんの能力は大気操作系。なら、風の防御で防げない物質を放てばいいだけ」

すると、上空から紫色の稲妻が轟音を上げながら落下してくる。

なるほど、確かに雷ってのは風の防御で防ぐ事は出来ねェが――空気の防御ならどうだろうか。

稲妻が命中するが、空気の膜が作用し――オレの体に凄まじい電撃は届かない。

「馬鹿かオマエは……気体だろォが雷だろォが結果は同じなンだよ！」

ドン！　と風の操作を行い、腕を伸ばしながら錐夏へ接近戦を仕掛ける。どうやら遠距離攻撃は不思議な気体で防がれちまうらしいし、ならば近距離から酸素を奪ってやる。

「さらなら新物質がいいんだね。うん、いいよ――暗黒活力（ダークエネルギー）の本領発揮だね」

オレは錐夏の懐に潜り込むが、錐夏は拳のように変形させた漆黒の気体を、オレの体をぶん殴る為だけに放ってくる。オレは一旦動きを止め、暴風の膜を張り巡らせた……ハズだったが。

刹那、ドガン！　と言う鈍い衝撃が脳を揺さぶった。

「が……ぃ……ッ！？」

反射が……効いていねェ……ッ！？

どォなってやがるンだ、クソッタレ……まさか三原の真似事。いや、暴風の膜の隙を突かれたという感覚はなく、むしろ全く効果を発揮しなかったと表現した方が正しい。

つまり――錐夏の攻撃は暴風の膜を無視して、オレの皮膚を削ぎ取ったのである。

「だ……ぁ……ッ！？」

続く第二撃は切刻むような一撃。腹部を抉り取られる感覚に陥り、気付いた時には数十メートルはぶっ飛ばされ、何かの建物の壁に背中を強打していた。

さらに錐夏は漆黒の気体を槍のように変形させ、それをこちらへ放ってくる。

「おおォ！」

オレは風邪の操作を行って、バネのように地面から飛び上がった。右か左か、どちらに逃げるかで迷ったものの、右には西園寺の仲間と思われる二人、左にも西園寺と……数人がいた。その両サイドに逃げるのは危険と判断した為、オレはあえて風の操作で数十メートル上空へと飛んだのだ。

続いて西園寺達を守る為、オレは破壊されるであろう佐井学園の校舎を中心に、凄まじいまでの烈風を吹かせる。西園寺達を助ける義理はねェが……ついでに救ってやるよ。

そして、その瞬間――佐井学園の校舎は錐夏の攻撃で木端微塵に砕け散る。

無数の残骸が散らばり、西園寺達へ降り注ごうとしている……が、先に吹かせておいた烈風が鉄筋やコンクリーの塊の落下を防ぎ、結果的に西園寺達の命は救われた。

まっ、それもオレが助かるついでだ……。

オレは瓦礫の山の一番高い所に着地し、そこから錐夏のいる場所を見下ろす。

「……チッ」

ようやく気付いたが、頭の横からドロリと何かが流れる感触があった。

口からも同じ感触がある……クソッタレ、気付かぬ間に負傷していたみてェだな。

「兄さん、ねえ……どうしてそこまで抵抗するの？」

「むしろ問おうか。なンでオマエはオレの道を妨害するンだ」

「兄さん、諦めようよ……今の兄さんは私に勝てないよ？」

「なに寝言言ってンだ三下。オレが学園最強だって事、忘れちまったンじゃねェのか？」

「確かに、そこの人達よりは強いよ……でも、結局兄さんは兄さん」

「……なにが言いてェ？」

「結局、兄さんは既存の物理法則に従った超能力しか――使えないってことだよ」

錐夏がそう言うと――。ズバァ！　と、一気に漆黒の槍が無数に放たれる。

それはまるで地獄絵図。

得体のしれない物質である事を考慮し、オレは回避の準備を行った。

そう……ここからが、これからが――本当の戦いの始まりである。

第２２８話，暗黒活力（ダークエネルギー）（後書き）

キャラクターＮｏ００１０

・明智光秀（あけちみつひで）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆☆☆☆

防御力：☆☆☆☆☆☆

体力：☆☆☆☆☆

魔力：ナシ

魔法（超能力）：☆☆☆☆☆☆

知力：☆☆☆☆☆☆

敏捷性：☆☆☆☆☆

地位：☆☆☆☆☆☆

総評：腕力は高いが、基本的に万能タイプ。本当なら暮葉一人でも倒せるレベル。

第２２９話，最強・無能・共闘

う、く……いてて、クソ……いつの間にか凄まじい事になっているな。俺――浜島雅人は背中を強打した時の衝撃があまりにも強く、いつの間にか気絶していたようである。どうやら、俺以外のみんなも気絶しているようだ……クソッ、結局何がどうなったんだよ。

とりあえず、一番近くで寝ているのは木山……ってオイ。

木山のヤツ――頭から血を流しているじゃねえか。

「お、おい木山……しっかりしろ！　木山！」

「……っ」

クソッ、起きねえ……だけど呼吸は整っているし、本当に気絶しているだけだろう。他の連中はどうなったんだろうか……って、なんで後ろにあった建物が瓦礫の山になってるんだ？

それと、俺達が寝ている場所の上空で――何故瓦礫が空中に浮いているんだ。

「ご、ばぁ……ッ！？」

「無駄だよ兄さん……兄さんじゃ、私には勝てないから……」

不意に声が響いて来たので、俺はそちらに視線を向ける。誰かと女が戦っている、その声からおそらくは男だろう。何者かが包帯だけの少女と戦っているのだ。

俺は瓦礫の山を掻き分けて、戦場を確認しようと前に出る。

そして、この目に映ったものは――激戦を展開する白髪の男女であった。

「な、なんだ……アイツら？」

包帯だけの女も凄まじい強さだが、押され気味の男のほうも信じらねえよ……物凄く速いスピードで移動したり、時々飛んだり竜巻を起こしたりしていねえか？

という事は、あの戦っている男も超能力者……なのか？

「が……ぉぁ……ッ！？」

「あはは、ねえ……早く解剖させてよ。兄さんを掃除しないといけないから……」

「ぐっ……ナメてンじゃ、ねェぞこの――三下がァァッ！」

白髪というのか、銀髪というのか、包帯だけの少女に良く似た髪の色の男は、這いつくばった状態で両手の拳を地面に叩きつけ、見る者を圧倒するどす黒い竜巻を発生させた。２人が戦っている場所から俺がいるこの場所は、２０メートルは離れているハズだ。

しかし、それでもあの竜巻に吸い込まれそうである。

まず、い……何かに掴まらねえと――竜巻に巻き込まれちまう。

「……ぐっ！」

咄嗟にコンクリートの塊に掴まったはいいが、それでも竜巻に吸い込まれそうだ。男が生み出した竜巻は進み始め、包帯だけの少女を包み込もうとする。

しかし、少女を包む暗黒の気体が膨張し――ボゴァ！　という、耳を裂くような轟音を炸裂させながら、逆に竜巻を掻き消しやがった。

ば、化け物同士の戦いだけど……あの包帯だけの少女が一番化け物だ。
このままじゃ、あの男のみならず――いずれ俺達も殺されちまうよ。
元々最初に狙われていたのは俺達だし、もしあの白髪野郎が負けちまったら……。

「……っ」

おそらく、あの戦いに俺が飛び込んだ所で――俺は多分役に立てない。
次元が違うんだよ……あの化け物たちとは。俺は単なる人間の不良で、アイツらは化け物じみた能力をバカスカ撃ちまくる超能力者で、この差はあまりにも大きすぎる。詰められない差だ、勝てる見込みなんざ殆どねえよ……でも何故だ。ここで退けねえのは何故なんだろうか？
と、その時。

――すべての人がてめえらを見離すと思ったら大間違いだ。

かつて、誠和大学で遭遇した――俺とは違う学生の男の言葉が、自然と浮かんでくる。

――全員が見捨てる事はねえだろ。たとえ世論から激しい批判を受けても、周りのヤツらはてめえらを庇うハズだ。

言葉と同時に、あの顔まで脳裏に浮かんできやがった……ハハッ、そうだよな。あの言葉は俺に対するものだったけど、確かにその通りだ。
誰か一人を、全員が見捨てるわけがねえ……今がその状況じゃね

えか。
西園寺を、明智を、白藤を、木山を、そして……あの戦っている男、さらには何らかの原因で歪んでしまったあの少女を――助けたいとは思わねえのか？
見捨てていいと思ってんのか？
あの野郎……ハハ、ようやく言葉の意味と俺に足りねえものが理解できたぜ。
ここに来て、俺はズボンのベルトから拳銃を取りだす。

「こんなモンで役に立てるか知らねえけどよ……」

俺が持っているのはダブルアクションタイプの旧式拳銃だ。
本当、こんなもので超能力者と戦おうってのが間違っている。けどよ、俺は……俺はたとえこんなものしか持っていなくても、今更引き下がる気はねえ。弾薬は既に弾倉に装填済みだ。こういう場所だからいつ襲撃されるかも分からねえし、いつでも撃てる状態で持ち歩いている。
俺は引き金を引き、撃鉄を発生させる。連動して弾倉が回転し、やがて弾薬が発射位置まで移動したのか、弾倉が固定される。同時に、引き金が定位置に戻ってきた。
発射準備完了だ……狙いは包帯だけの女。
殺しはしねえ、殺す勇気もねえ……だから狙うのは脚だ。
この拳銃で撃っても風穴が開く程度で済むだろう……よく狙いを定めるんだ。

「頑張れよ俺、この程度じゃねえだろ……俺は男だろうが」

人を撃つってのは初めてだが……戦場で迷っている暇なんかねえ。
とにかく、脚を狙って撃てばいいじゃねえかよ。俺はじっくりと、少女の脚に照準を合わせて……。

「く、喰らえ……クソォォォォォォォォォォッ！」

刹那、

タン！　と言う乾いた音が響き渡り、弾丸は一直線に少女の脚を狙って進む。だが、少女は直撃の寸前にどす黒い気体に全身を包み、一発の銃弾は完全にこの世界から消失してしまった。

「くそっ！？」

まさか、不意打ちでも弾が通じねえのかよ……これは弱った、どうしよう。しかも銃声と飛んでいった弾丸のせいで、包帯だけの少女に居場所がバレちまった。少女は暗黒の気体に自分の身を包み込んだまま、静かに一歩ずつ、こちらに迫ってくる。

それだけで嫌な汗が噴き出てきて、全身が震え始める……くそっ、ここには木山も西園寺も明智も白藤も、みんな気絶している状態で倒れているんだ。

もしこのまま俺がここに居れば、少女の攻撃で全員殺されてしまう。

だ、だったら……そうなる前に――俺が飛び出してやる！

「畜生ォッ！」

俺は文句を言いながら瓦礫を飛び越え、自ら戦場へと飛び込む。

少女は俺と白い男に警戒しつつも、暗黒の気体を解いて姿を現した。

それでもどす黒い気体は少女の周囲を漂い、不気味な光景を演出している。

「あれ……まだ、生きてたの？」

「……て、テメェ……近づくなよ！　近づくと撃つぞおらぁッ！」

「邪魔くさい……」

すると、少女が暗黒の気体を槍のように変形させ、無数のソレが俺を襲う。

「ひ、ぃッ！」

容赦なく襲ってくるそれから、俺は全力で走ったり跳躍したりで逃走を図る。弾丸のような速さで放たれる暗黒の槍だが、未来予測位置さえ分かっていれば回避は可能だ。

結局、俺は全ての槍の回避に成功し――どうにか生き延びる事に成功する。

気付けば俺、自然に少女と戦っていた男の隣に並んでいた。

それでも気を抜かず、俺は再び少女に銃口を向けた。

「オマエ、さっきそこで伸びてた野郎だろ？」

「えっ？　あ、ああ……そうだけどよ。起きたらこうなってて……どうなってんだよ？」

「知るかクソボケ。チッ、そこで大人しくしていれば、助かっていたかもしれねェのにな」

ヤケクソ気味に言い放つ白い男だが、残念だったな。

「生憎、俺は大人しい人種じゃねえんだ……アンタ、助太刀するぜ」

「つかオマエ、ちゃんと戦力になンのかァ？」

「心配すんじゃねえよ。それよりアンタ、一発逆転の必殺技とかねえのかよ？」

あんまり期待はしていねえけど、持ってて欲しいよな……必殺技。もしあったらさ、ヒーローものみたいに強敵に逆転勝利できるじゃねえかよ。

でも期待は出来ねえ……ここは現実、俺ら人間には限度がある。

「……あるにはある」

ところが、白い男の口から漏れた言葉は意外なものであった。

「……ま、マジかよ！？」

「ああ、ただソイツを使うには演算処理に時間がかかる。前は短時間で出来たんだが、脳にタメージを負って、機械の補助を受けても演算能力が低下してるから、処理に時間がかかるンだ……残念だなァ、ソイツは今じゃ実戦には使えねェよ」

マジかよ……けど、男の言葉が正しけりゃ——ソイツは時間を掛ければ使えるんだろ。

だったら、十分有効な戦術兵器じゃねえかよ。

「オーケーわかった。テメェはソイツの準備をしな。その間の時間は俺が稼ぐからよ」

「本気で言ってンのか？　オマエじゃ錐夏の相手は無理だ」

「それでもやるっつってんだよ。いいからテメェは演算処理っての
を始めろよ」

「……チッ、面倒臭ェ」

さてと、時間稼ぎか……上等だ、やってやろうじゃねえかよ。
要はあの野郎の準備が終わるまで、1秒でも長く包帯だけの少女
から逃げればいい。俺がやるべき事はたったそれだけだろ。それく
らいなら……俺だってできるぜ。
俺も少しは役に立たねえと――フレンドの一員として情けねえだ
ろ。
こうして――死ぬかもしれない時間稼ぎが始まったのである……。

第２２９話，最強・無能・共闘（後書き）

キャラクターＮｏ０１１
・永渕晃（ながぶちあきら）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

※魔法衣服（マジッククローズ）を着ていない素の実力。
攻撃力：☆☆☆☆☆
防御力：☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆
魔力：ナシ
魔法（超能力）：ナシ
知力：☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆☆☆
総評：何らかの格闘技をやっていたらしく、ヤンキーの中では強いほう。しかし所詮は喧嘩番長レベル。

第２３０話，時間稼ぎ

くそっ、なんて任務を引き受けてしまったんだろうか……俺。普通に考えたらあんな化け物に勝てるわけがねえし、白い野郎が必殺技を発動するまで時間を稼げるわけもねえ。だけど、今その役目が出来そうなのは俺だけだ。しかも、ここまで来てしまった以上――後には引けない。

やるしか、ねえな……。

だけど大丈夫だ。

超能力者だって――無敵って訳じゃねえ。

「ハーッハハハ！　俺を殺したかったらここまで来いやあああああああッ！」

隙を見て駆けだした俺は、西園寺達が倒れている瓦礫と化した校舎ではなく、その反対側にあった別な建物の陰へ走り込んだ。超能力者と正面からぶつかっても勝ち目はない。それに、俺の役目は超能力者を倒す事ではなく、あくまで必殺技発動までの時間を稼ぐ事だ。

そう、時間さえ稼げばいいんだ……。

だから、少しでも自分に有利になるように――逃げ回ったって何の問題もねえ。

「……ッ！」

バギン！　と警棒でガラスを割り、窓を飛び越えて建物の中へと侵入する。屋内には大きな黒板と水道付きの黒い机が複数。さらに試験管やわけのわからないものまで沢山置いてある。どうやらここは理科室らしいな……隠れ場所も多いし、武器になりそうなものも

多い。
全く、都合のいい場所に逃げ込めたぜ……。

「……どこ？　出てこないと……建物ごと壊しちゃうよ？」

ジャリジャリと、ガラスの破片を踏む音と同時に、包帯だけの少女の声が聞こえた。脅しのつもりなんだろうか、それともガチで破壊するつもりなんだろうか。
どっちにしても、長居は無用みてえだな。
丁度、俺は教卓に隠れているが……何か使えそうなものはねえか？
俺は机の上を探したが、その時――右手にペットボトルのようなものに触れた感覚があり、今度はそれを掴んで、自分の目の前に持ってくる。
フッ化水素……ハッ、中々危険な物質じゃねえかよ。
コイツって確か、すぐには効果は現れねえだろうが……まあいい攻撃手段ではあろう。
俺はベルトに挟んである拳銃の装填も行い、全ての準備が完了したところで、

「おおおぉぉぁあああああああああああああああああッ！」

教卓の下から一気に飛び出し、包帯だけの少女を目がけて突っ走る。少女は暗黒の気体をギロチンのように変形させて、俺の首でも切り落とそうとしている。しかし、そんな事をさせる前に、俺はフッ化水素入りの容器のフタを開け、フッ化水素の気体を少女に向かって放つ。
１９．４度を超えていた為に沸騰した、刺激臭のする危険な気体が少女を襲う。
だが、少女は咄嗟に全身をどす黒い気体で包みこんでしまった。
くそっ、これじゃ皮膚にフッ化水素が触れたか分からねえだろ…

…ッ。

「さようなら」

「……ッ！？」

暗黒の気体の裂け目から少女の顔が見えた瞬間、少女は一言冷たく言い放つ。それはあらゆるものの終了宣言。少女は気体をギロチンのような形状に変形させ、それを振り下ろしてくる。圧倒的な威力で放たれたそれから逃げる為、衝動的に理科室の扉を開け――この部屋から飛び出す。

背後からズドン！　という凄まじい轟音が響いてきたが、そんな事など気にせず、とにかく俺は少女から逃げる為に校舎の中を走り続ける。

玄関は何処だ……下手に校舎を逃げ回るよりも、外に出たほうが安全かもしれない。おそらく少女は俺を殺す為に、校舎の隅々を探すだろうしな……。

とにかく、少しでも時間を稼がねえとな。

俺が生きる為にも、あの少女の暴走を止める為にも――。

「あった、玄関だ！」

玄関を発見し、ペースを整えた長距離用の走り方から、後先を考えない短距離用の走り方へと走法を変更し、タックルをし掛けてガラスを突き破る。

激しく割れたガラスが地面に散乱するが、気にせず俺は走り続けた。

「ねえ、どうして逃げるの？」

「ッ！？」

しかし、俺の逃走作戦は失敗に終わったようである。

どういうわけか――既に俺の背後には包帯だけの少女が佇んでいたのだ。

「て、テメェ……なんで！？」

「知りたい？　ガラス……割ったよね？」

「ま、まさか……」

「うん、あなたが外にいるのはお見通し」

「……クソッ！」

どうすりゃいいんだよ……今から逃げるっつってもよ、俺を捕捉した敵に背中を見せるのはあまりにも危険すぎる。まずいなこれは……これからどうやって戦うべきなのだろうか？

「あはは、ねえ……早く死んじゃおうよ。そっちのほうがきっと楽になれるよ？」

「……生憎、俺はまだ死にたくねえんだ」

「なんで？　楽になれるし、余計な不安を感じる必要だってないんだよ？」

コイツはどうして……ここまで簡単に死ね死ね言えるんだよ。

「……うるせえ」

そう疑問に思ったからこそ、言い放った一言。

少女は意外そうな表情を浮かべ、明らかに驚いている。

そんなに珍しいかよ……死ねって言われて反抗する事がよ。

「どうして？　苦痛も不安も感じる必要はないんだよ……不幸にもならないんだよ……？」

「そうかよ……けどな、そんなのテメェの勝手な言い訳だろ」

明らかに、一瞬包帯だけの少女の肩がぴくん、と震えた。

「そりゃあ俺だってよ、好きで不良やってたわけじゃねえよ。テメェの言う通り、色々苦痛も不安もあってよ……だから好き勝手暴れて、いろんな連中に迷惑かけて。自分で自分の首を絞めているだけかもしれねえけど、俺達はそうやって居場所を見つけてたんだ」

「……だから、何？　結局は……死んだ方が楽だよね……？」

「ハッ、そうかもな……結局俺が存在しなければ、俺達のせいで怖い思いをした藤島葵（ヤツ）も居なかったろうし、俺だって今感じている恐怖を味わう必要もねえだろ」

本当、今になって思えば馬鹿げているぜ……反省した所で許されるハズがねえし、俺は永遠に悪人のレッテル貼られるんだろうけど。

それでも、馬鹿げているとは思えるようになった。

いくら上の奴が怖いからって、罪もねえヤツを襲うのはダメだよな……。

だけど全てを失ったわけじゃねえ。得られたものだって数多かっ

た。

だからこそ――少女に言える事がある。

「だけどな、大切なのは死じゃねえ。一番大切なものは生きてるって事実だろ！　俺みてえな人間のクズが言うセリフじゃねえけどよ、それでも言ってやるよ！　生きてなきゃ幸せも感じられねえだろうが！」

ギリギリと、包帯だけの少女が歯軋りをする。

肩も震え、悔しそうに拳を力強く握りしめている。

彼女から発せられているどす黒い気体も――何故だか勢いを増していた。

「私に、幸せなんか……来るハズがないよ？　兄さんは幸せに出来るかもしれないけど……私は無理。私が兄さんと私を不幸にする存在を排除しても、私は私自身を幸せには出来ないよ……ッ」

「テメェ……そこまで分かってて、なんでこんな事になっちまってんだよ！」

わかる……聞くまでもねえさ。コイツがどうしてそんな行動に移っちまったのか、まだ大人には短すぎるって言われる人生の中で――何度も失敗してきた俺だから、痛いほどに分かる。

「無理、だよ……私、化け物だよ？　こんな悪い性格の持ち主だよ？　こんな化け物が……邪魔を排除した所でどうやって幸せになれるのよ……ッ？」

「……幸せってのはな、自分で掴み取るものなんだよ。もちろん他のヤツの支えもねえと掴み取れねえねえけどな、結局は自分の努力

が一番大事だ。今のテメェにはそれがあんのかよ？　それさえあればテメェだって幸せになれるだろ」

「無理、だよ……だって、結局……私一人だから……っ」

少女が辛い想いをしている。その顔は今にも泣き出しそうな子供のようで、今の彼女には夢も希望も残っていない。彼女が望んだところで――誰もそれを助けてはくれない。

傍にいてくれるヤツもいない。つまり彼女は孤独で――それがとても辛いんだ。

「一人……？　ンなわけねえだろ……テメェには兄って家族がいるだろ。それだけで一人じゃねえってのが何で分からねえんだ。確かに、あの兄貴はテメェの相手をしてくれるかわからねえけど、結局テメェは一人じゃねえんだ。作ろうと思えばテメェにだって友達は出来るんだよ！」

「無理、無理だから……っ」

「無理無理言ってんじゃねえ！　俺も昔はそういうヤツだったけどよ、人ってのは変われるんだよ！　俺は変わっちまったからテメェの前に立ってんだろ！　テメェのような馬鹿みたいに強い奴相手に、大した実力もねえのに立っていられるんだろ！　もう少し前向きになってみろよ……テメェの人生はまだ終わってねえんだよ」

全く、なんだか俺……今、どうしようもねえヤツにしか見えないな。

過去に自分がそうだったってのによ、それなのに説教してるんだぜ、これじゃあ、周りからは変わったって所詮は馬鹿ってしか見られねえだろうな。

だけど、同時に不思議な気分でもある。
まるで――かつての自分に説教しているみたいでよ。
ああそうだよ……人ってのは、キッカケさえあれば変われるんだ。
俺は、警察じゃなくてフレンドに拘束されたから――それがいい機会だったんだろうな。

「無理……たから、私に機会はない……機会を与えてくれる人なんていない。兄さんも、結局は私を排除しようとするんだから……結局、私に――機会なんて訪れない……ッ」

ったく、ホントに面倒くさい女だな……機会なら今あるじゃねえかよ。
少なくとも、俺はこの子を憎いとは思っちゃいねえ。
昔の自分を見ているような気分だ……だったら、俺が言うべき事は一つしかねえだろ。

「今が機会じゃねえのかよ？」

「……えっ？」

「友達になら――俺達（フレンド）がなってやるってんだよ」

「……うそ、そんなわけ……だって、私は……っ」

少女は未だに信じられない様子だが、信じさせるのに一つだけいい方法がある。俺はそれをやる為だけに、少女に信じてもらう為に――武器を捨ててゆっくりと歩み始めた。
向かう先は――少女の目の前。

「私は……化け物、みんなを襲って……全てを破壊して、不幸の元

凶で……っ」

色々震える口で言いまくっているが、気にせず俺は少女に近付いてゆく。

ベルトに挟んでいた拳銃も、特殊警棒も、武器になりそうなものは全て捨てて――、

「大丈夫だ、今の俺は武器を持っていない――お前と戦う力なんて最初から持っていない」

嘘にしか聞こえないかもしれないが、それでも安心させようと少女に語り掛ける。少女の震えは全く止まらず、俺が一歩歩くと少女もまた一歩、後退りをする。

どうやら、もう少女にも戦意は残っていないらしい。

勝った……この時俺は――勝利を確信した。

「ダメ、だよ……不幸が感染(うつ)るよ……近付いちゃダメだよ……っ」

そんなわけねえさ。

やがて、少女の背中が――樹齢もあれそうな大木に触れる。

少女の後退りはそれで終了し、俺が少女に迫るだけとなった。

震える体、苦痛に耐える哀しそうな顔……そんな少女に――俺はもっと近づいて、

「ほら、証拠だ……これでも信じられねえか？」

ぎゅ……っと、温かく、優しく、包み込むように――俺は彼女を抱きしめた。

しばらくは怯えていた少女だが、やがては俺の胸に顔を埋めていく。

「テメェは一人じゃねえよ……」

言いながら、少しずつ少女を抱く腕の力を強める。

少女の柔らかな感触と、薬品の臭いの中に紛れた女の子の匂いが俺を刺激してくる。

やべっ、これ……俺には強烈だったかもしれねえ。

「今日から俺、テメェの友達第一号だから……そういうわけでよろしくな」

「……うん」

でもまあ……別にいいか、とにかくここは我慢しておこう。

友達第一号が――せっかく作った友達を裏切るわけにはいかないからな。

その後、俺は1分ほど少女を抱きしめ、その後俺はとある場所へと向かった。念の為、少女を見つかりづらい場所に隠しておいて、俺はただ一人――やり残した仕事をする為に歩いたのだ。

その場所とは、白い野郎や西園寺達がいる――校舎の瓦礫がある場所である。

「おい、アンタ……必殺技の準備は出来たのか？」

「ハッ、残り15秒だってンだよ……待ってろ、すぐにぶっ放して

やる」

「……その必要はねえな」

「……あ？」

白い野郎は明らかに不機嫌そうに、表情は薄いものの、かなりの驚きを見せていた。

「終わったんだよ、戦いが」

「……どォ言う事だ」

質問され、俺は白い野郎に向かって歩き出す。

俺は交差するように白い野郎の横に並び、こう言い放ってやった。

「俺が説得（たお）したんだ。だからもう――あの子との戦いはお終いだ」

そこでようやく――タイミングを見計らった少女が陰から姿を現す。

そこには戦意も殺意も感じられない。

ただの――純粋な少女が俺の背後、白い野郎の目の前に佇んでいる。

俺は体ごと少女のほうへ向けて、少女の顔を見る。

「兄さん……ごめんなさい。もう私……兄さんとは戦わない」

「そういうわけだ。テメェ、アイツへの攻撃は中止だ」

「……チッ、面倒臭ェ」

しばらく悩んだ末、白い野郎は能力使用を中断したようである。
落ちている杖を拾うと、首筋にある謎のスイッチを押した。多分――それが戦いの終了の合図だったんだろう。
俺はそこで、少女に顔を向けて――静かに微笑んだ。
「……これで、終わりだな」

第２３０話，時間稼ぎ（後書き）

キャラクターＮｏ０１１

・船木健太（ふなきけんた）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆

防御力：☆☆☆☆

体力：☆☆☆☆

魔力：ナシ

魔法（超能力）：ナシ

知力：☆☆☆

敏捷性：☆☆☆☆

地位：☆☆☆☆

総評：永渕には劣るものの、ヤンキーの中では強いほう。しかし所詮は喧嘩番長レベル。

第２３１話，勝者達が得たもの

その後、浜島って名前だったか……錐夏の暴走を止めた野郎と話し合い、オレ達トレントが学園長の首を切り落とす役目を引き受けた。ソイツの所属するフレンドの主要戦力は殆ど負傷者で、組織としては壊滅状態。簡単に言えばもう戦う力は残されていねェらしい。

そこで、まだ全員が戦闘可能状態であるオレ達の出番……なハズが。

――おっ？　アンタはさっきの黒い翼の……？

――学園長……だったかしら？　そのクソッタレはアイリス達が捕えたわ。

目の前には、自信たっぷりに立っている北野昴って野郎とアイリスって女がいる。その奥には縄で縛られ、口にガムテープを張られたハゲ頭の学園長の姿があった。

まっ、結局学園長はアルファ隊に拘束され、北野達は後始末の為に学園に残り、オレ達は報告の為に一旦隠れ家に戻る事になった。現在、オレ達は黒のワンボックスカーに乗っている。

その中で一つ――気になる事があるのだ。

「ンで、ラウル……オマエに甘えているその女は誰なンだ？」

「ああ、この子？　まあ、なんというか……俺の彼女だよ」

「えへへ、先輩……っ？」

「チッ、彼女作ってる余裕があったのか、オマエには？」

「あはははは……」

あははじゃねェよ……こっちは死ぬ気で働いてたってのに、コイツら……どォやらオレがクソ忙しい時に遊んでやがったンだな。

「ちなみにその子の名前はミキストリ。今日からアタシらと行動を共にするからよろしく頼むよ」

「チッ、つまり新入りか……」

ザスローンってのは新入りもOKな組織だったのか。まァ……戦力が増えるンなら、オレとしても全く文句はねェが、足を引っ張るってンなら容赦なく切り落とす。

それがたとえ、ラウルの彼女だろォがな。

にしても、ラウルの知り合いって事はあの女……魔法使いなのかァ？

「いやぁ、まっ、ミキストリちゃん加入もめでてえが、戦いが1日で終わって、しかも俺達の勝利ってのもめでてえ話なのよな」

そう言ったのは近藤だが、日本刀を持つ右手とは逆に左手には一枚の冊子。さらに、複数の書類やケースに収容されたメモリも、近藤の近くに置いてある。

なンだコレ……少なくとも、ここに来る時にはこンなモノはなかったハズだ。

「オイ近藤、その書類の山と大量のメモリはなンだ？」

「ああコレ？　佐井学園の重要書類とか、機密のデータとか、そん

なものなのよな」

「どさくさに紛れて回収したのか。よくもまァ警備の堅い学園東部を攻めたモノだ」

「ああ、潜入したのは俺じゃない。これはラウルとミキストリちゃんのお陰なのよな」

ラウルとミキストリって女が……？

ハッ、そういえば思い出した……ラウルは人の体を複製する魔法を使えるらしい。得意とする宗教魔術とは違う見てェだが、使い勝手はかなりいいらしいな。なるほど……学園東部を警備するヤツに成りすましちまえば、戦わずに重要資料を回収できる。

考えたモンだ……。

ミキストリって女も、ラウルと似たような魔法が使えるンだろォか。

まっ、正直どォでもいい……。

「ねえ早川、アンタ……ホントによかったの？」

「なにがだ？」

ぼーっとしていたその時、不意を突かれるようにアナスタシアに声をかけられた。

なンだあの女……珍しく、人の事を心配しているみてェだな。

「アンタ、妹と再会したんでしょ？　ホントにアンタと一緒に住まなくてもよかったの？」

「……どォ言う意味だ？」

「だってアンタ……家族でしょ？　ザスローンの上だって鬼じゃないわ、条件さえ満たしてしまえばアンタ、その妹と一緒に暮らす事だって可能だったのよ？」

なるほど、そういう意味で心配していたっのか。
アナスタシアめ……オマエは家族想いのいいヤツらしいな。
だがなァ、オレは錐夏と一緒に過ごす事は出来ねェ……。

「お断りだ」

「な、なんでなのよ？」

それは別に、オレが錐夏の事が嫌いだからとか、家庭の都合や錐夏が危険だからとか、そンなチンケな理由なンかじゃねェ。もっと――アイツの事を考えた上で出した結論だ。

「アイツはようやく、居場所ってのを見つけたンだ」

「居場所ねえ……」

「オレの所にいるよりは、そっちにいたほうが幸せってモンを掴めるだろ？」

「……アンタ、意外と家族の事想ってたのね」

「チッ、くっだらねェ」

オマエにだけは言われたくねェよ……。
というか、ザスローンのメンバーには言われたくねェな。ザスロ

ーンってのは、どうも複雑な事情を抱えた魔法使いが数多く所属し、その殆どが家族絡みらしいからなァ。
まっ、ラウルのクソ野郎は違うみてェだが……しかし、家族かァ。そンなモン……とっくの昔に三原のクソ野郎が消しやがったからなァ。
オレと錐夏を除いて――。

「まっ、今日はぱぁーっと宴会でもやろう。ミキストリちゃん加入祝いも兼ねてなぁ」

「ちょ、近藤さん！　ミキストリは未成年だよ!?」

「先輩、私は別にお酒平気ですよ？　日本酒というものにも興味がありますし」

「ほら、ミキストリちゃんだってそう言ってんだ。ラウルもがばぁーっと飲めばいいのよな」

「アタシは酒好きだし、宴会やるなら当然参加するわ」

しっかし、相変わらずザスローンってのは狎れ合いグループだなァ。
ところで宴会って、オレも参加しなきゃいけねェのか？
オレは未成年だし、しかも酒は苦手なンだが……。

――浜島雅人Ｓｉｄｅ――

学園へ向かう際に乗ってきた盗難車に乗り、俺達は古宇坂に戻って早速、白藤や西園寺などの負傷者を病院へ運んでから、残りの俺を含むメンバーは白藤家へと向かった。

鍵は白藤が入院前に明智に手渡され、出入りは自由である。つーか、女の子の家に勝手に出入りするってのもどうかと思うが、まあ……本人の許可があるんだ、別に問題ねえか。

あの後俺は錐夏と名乗る少女を、俺達の居場所であるフレンドの一員にするよう、フレンドのリーダーである西園寺に掛け合ってみたのだが、どうやら別にいいよとの事らしい。他のメンバーもそれについて、異論もないみたいだし、こうして錐夏はフレンドの一員になったのである。

「っで、明智……本当にテメェの家でいいのか？」

「ああ、私の家はそこそこ広いからな。家族が一人増えたと思えばむしろ嬉しいぞ」

「け、けどテメェ……兄貴の事は嫌いなんだろ？」

「まあ……けどな、兄貴は兄貴で錐夏は錐夏だ。錐夏はアイツとは別人だぞ」

「……そっか」

あの兄貴……そこまで悪いヤツには見えなかったけどなぁ。まっ、過去になにがあったか俺は知らねえけど、他人を好く嫌うってのは、それを思う本人の問題だからな。

俺なんかが口出しすべきではないだろう。

錐夏は今、白藤のベッドで寝ているが、その間に錐夏の宿泊場所

が決定した。
今日から錐夏は――明智の家で寝泊まりするようである。

「は、浜島……っ」

「あ、なんだ木山？」

木山が背後から離しかけてきたが、何だか普段の木山と比べると違和感を覚える。
コイツ、こんなもじもじするようなヤツだっただろうか？
いつもの活気な木山とは違い、何故か今の木山は――恥ずかしそうに俯いていたのだ。

「あ、あんたってさ……その、なんて言えばいいのかな？」

「あんだよ、お前らしくねえな……いつも通りハッキリ言っちまえよ」

さくらんぼのように赤く染まった頬、単に恥ずかしそうだった表情も変化する。次第に上目遣いをしながら不機嫌そうに、ギリギリと歯軋りをしていた。
やっぱ、いつもの木山とは違うな……つーか、なんで不機嫌なんだろうか？

「やっぱ、なんでもない！」

「あ、お……おい！」

ぷすっと僅かに頬を膨らませていた木山は、ぷいっ、と後ろを向いてしまい、荒々しい足音を立てて居間から出て行く。やっぱり変

だな、戦いに疲れておかしくなっちまったのだろうか？

「浜島も、藤島には劣るが……中々鈍いヤツだな」

「あ？　明智……今、何か言った？」

「いや、聞こえてないなら別にいいぞ」

「そうか……」

なんだかみんな変だな……確かに佐井学園での戦いは激戦だったし、疲れるのは当然の事だと思うんだけど、頭がおかしくなるほどの疲れだったのか？

まっ、俺は逃げ回っていただけだし、前線で戦っていたコイツらは違うのかもな。

それにしても佐井学園、かぁ……今後、あの学園はどうなるんだろうか。早川悠ってヤツに後の事を任せたのはいいが、その後どうなったか……やっぱ関係者としては気になる所だ。

けどまあ……バッドエンドではねえだろう。

――ミネット・ローランＳｉｄｅ――

ミネットは回復魔法である程度の傷は癒えたけど、それでも傷は深いらしい。結局、後始末はアイリス先輩や北野さんに任せて、ミネットは集中治療室行きなんだよ。

あ～あ……退屈だよ。あの人にもリーネさんにも会えないし……

はぁ。悠、あの人は今頃何処で何をしているんだろう。あの人の障害となっていた学園は、殆ど解体されたも同然。今回の戦いもテロリストによる爆破テロという事にされるらしいし、あらゆる証拠も隠滅するらしいんだよ。

特に科学技術はロジーナが利用できないものかって、残された施設や資料、そして行き場を失った科学者たちを回収しているらしい。

本当に利用できるかはわからない。

本当にそれが役に立つのかもわからない。

でも、世の中にバレて大変な事になるよりはマシだと思うんだよ。

「はぁ、悠……早く帰って来て欲しいんだよ」

また、リーネさんと3人で一緒に暮らしたいな。

その日までちゃんと待っているから、悠――いつかは帰ってきてね。

――リーネ・ディートリッヒＳｉｄｅ――

東京ではどうも、ボクが知らない間に、ミネットちゃん達が佐井学園と交戦。そこで激戦を繰り広げた末に、ミネットちゃん達が佐井学園に勝利したらしいの。

ボクは木葉さんに研究を手伝って欲しいと言われ、その為、一旦ロジーナの奥地にある木葉さんの研究所に戻り、木葉さんの助手として活躍すべく――準備を進めていた。

……と言っても、もう準備は完了なの。

「木葉さん！　リーネ・ディートリッヒ、ただいま到着なの」

「ご苦労かな。リーネ、君がここに来るのも久々かな」

「えへへ、ずっとミネットちゃんと一緒に暮らしていたの」

「もう一人の居候は元気かな？」

「それが悠ちゃん、最近全然家に帰ってこないの」

「まあ、彼も仕事があるらしいからかな。その証拠にミネットちゃんが人を保護してきたし」

「ひ、人……？」

最初は何の事なのかサッパリだったけれど、ボクは木葉さんに案内されて、奥の研究施設へと足を踏み入れる。ここって確か、傷の手当てを行う培養液がある施設だったハズなの。木葉さんが開発した医療機器の一つだけど、一体どうしてここに案内されたの……？

そう思いながら部屋に入ると、その中で一台の機械が作動している。

培養液を入れる為の医療機器なの。

機械の中は緑色の培養液が満タンで、その中に――満身創痍の男性が入っていた。

その人は片腕と両足、右目を失い、左腕もぐにゃぐにゃに曲がっている。

「こ、これ……ミネットちゃんが？」

「おそらく、彼をここまでボロボロにしたのは早川悠のほうかな。

一体、この人がどんな人かは知らないけど……でも、ウチは何としてでもこの人を復活させたいかな」

「ど、どうして……なの？　確かに命は大事だけど、でもこの人今にも……」

「危険な状態なのはわかっている。けど、いかなる人でも救うのがウチの信条。そして何より――彼を救えば超能力者のサンプルが手に入るかな？」

「さ、サンプル？」

「うん、科学技術の結晶体である超能力を利用すれば――医療に役立つかもしれないかな」

流石木葉さん、そこまで考えていただなんて……相変わらずすごい人なの。というかこの人って悠ちゃんと同じで、超能力者だったの……？

えっと、名前は……書いていないけど、能力名かな……何かが書いてある。

日本語……かな、見慣れた文字なの。

彼の事を語っているのであろう、書類の一枚には大きくこう書かれていた。

――波動操作（ウェーブハウンド）。

第２３１話，勝者達が得たもの（後書き）

キャラクターＮｏ００１３
・陳炎彬（チンヤンビン）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆
防御力：☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆
魔力：☆☆☆☆☆
魔法（超能力）：☆☆☆☆☆
知力：☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆
地位：☆☆
総評：ミネットより強く、実は意外と実力者なのだが、早川との差が圧倒的すぎる為、全然目立てなかった不憫な人。

第２３２話，秋のある日の日常

ロシア、イルクーツク郊外の私のお城。そうですね……考えるのも面倒ですし、アンガラ川のすぐ近くにあるという事で、アンガラ城とでも名付けておきましょう。私――アリーナは、リリアやヴァシレフスキーらと共にとあるを計画を立案、その実行準備に明け暮れています。

今日も計画実行の為に忙しいですが、それ以外にも――重要な仕事があります。

藤島圭介。このアレクサンドルの子孫を捕え、その者の首を直ちに切り落とす事。

皇帝の子孫なんか要りませんよ、この世界に……。

何故なら――私が世界を支配するのですから。

「そういうわけで、藤島圭介拘束を頼めるかしら――邪炎のサラマンダー」

「元よりそのつもりである。久々の戦は気合いを入れて掛かるつもりだ」

白を貴重とした赤っぽい服を着ている、茶髪の筋肉質な爽やか中年。邪炎のサラマンダーは巨大なメイスを片手に持ち、硬派な表情を浮かべて私に迫ってきました。やれやれ、いくら爽やか系なキャラクターとは言え、ここまで真剣ですとむしろ暑苦しい。

でも、よろしい事ですね。

最近彼は硬質のノームを粛清してしまうなど、勝手な行動も目立っていますが、私に対しては絶対服従のようですし、もはや彼だけが唯一戦力となる魔術師ですね。

しかも彼は気に入らないものですが、彼は教会から認定を受けた

聖人です。
さらに彼は赤の軍神としての特性、精霊の力も持っています。
要するに――彼は並の魔術師よりも遥かに強いのです。

「頼もしいですね、流石は聖人です」

「ただの聖人ではない。精霊の力を持つ特殊な聖人だ」

「おっと、そういえばそうでしたね」

「今回の戦ではおそらく、敵側もあの聖人を送ってくるだろう……が、その時に見せてやろう。私がただの聖人ではない証拠を」

所詮は教会に毒された愚か者ですが……まあ戦力になるのならよしとしましょう。とにかく今回は彼に頑張ってもらい、なんとしてでも藤島圭介を捕えてもらいます。
藤島圭介……シルフとノームを倒したようですが、彼は倒せるでしょうか？
彼は今までの魔術師とは――全く違う存在なのですから。

――藤島圭介Ｓｉｄｅ――

今日は９月１４日、ここ数日は非常に平和であった。
佐井学園で爆破テロがあったり、新学園長が開発科を来年度から廃止するなど、不可解な事件が発生はしたものの、学園で何があろうが直接俺に影響があるわけではない。まあ、あの開発科がなくな

ったんだから、明智や西園寺。そして狙われている魔法使い達にしてみれば安心だな。

でも、魔法使いでも超能力者でもない俺からしてみれば、大した影響ではないし……結局俺はこの数日間、というより半月ほどは、超平凡な日常生活を満喫していたのだ。

いやいや、やっぱり日常っていいよね。

夏休みは連続して魔法使いと戦わされたし、たまには伸び伸び休んでいたいぜ。

ここ数日は俺にとっても暮葉にとっても本当、心身ともに休まるよ。

「だから魔法少女というものはな、魔法のカードを扱う少女の事を言うと僕は思うんだ！」

「カードキャプターかよ、随分と懐かしいネタ引っ張ってくるな」

「しかも、大吾の言う魔法少女ってありがちだよね。俺はやっぱかめはめ波もビックリな凄まじい魔法をぶっ放す――」

「な○はかよっ！？　お前達の魔法少女のイメージって二次元限定かよ！？」

俺の絶叫に大吾の全身かピクンと動き、凄まじい勢いで顔を近づけてきた。

ちょ、大吾……顔が近すぎるわ、まだ残暑も厳しいし……すげえ暑苦しい。

「むしろ圭介、僕が二次元意外の例をあげると思うのか！？」

「ですよねー、お前は完全二次元派だもんな」

「じゃあ、圭介の魔法少女のイメージってなんだよ！？」

えー、俺の中でも魔法少女かあ……まあ、リアル魔法少女が家に居候していたり、魔法少女で構成された部隊ってのが現実しているけど。でもなあ……それってやっぱ極秘だよな。第一暮葉が魔法少女ですなんて言っちまったら、アイツの居場所が失われる可能性だってある。

特に大吾とか重原とか……コイツらには絶対言わないほうがいいだろう。

「それが聞きたきゃお前、ちょっとマミってみろ」

「圭介の魔法少女のイメージってそれかよ！　ていうかマミったら僕死んじゃうわっ！」

「まあ、確かに魔法少女だよね。というか、俺の中では過去最高傑作だと思うよ」

魔法少女ねえ……春ぐらいまでなら、普通に笑って話せる内容だったんだ。でも、俺の前に暮葉が現れて以降――笑える内容じゃなくなっちまったんだよなぁ。

あれ、そういえば暮葉は何処だ？

最近休み時間になるとちょくちょく消えるけど……友達付き合いが忙しいのか？

近くに暮葉がいないだけで不安になる俺も重症だが……今頃何してるのだろうか。

すごく……気になる。

――木下暮葉Ｓｉｄｅ――

「はーい！　というわけで、今から伊吹と圭くんをくっ付けちゃう作戦会議を始めます！」

お昼休みのことなのです。最近友達が一気に増えて嬉しいなと思う反面、校内でけーすけ様と一緒にいられる時間が減って、寂しいな……って思っていたら亜紀さんに呼ばれ、拙者は食堂へ向かい、そこで亜紀さん達と一緒にお昼を食べていました。

そんなある時、唐突に亜紀さんがとんでもない事を叫んでしまったのです。

「は、はあ!?　ちょ、亜紀……あんた、なに言ってんのよっ！?」

「あれぇ～？　圭くんの事はどうでもいいの？」

「え、あ、ち……違う！　アイツはどうでもいいのよっ！　で、でもどうでもよくはッッ」

すっかり紅潮している伊吹さんは、支離滅裂な事を叫んでいました。伊吹さん、前々からずっと思っていましたけど、やっぱり伊吹さんはけーすけ様の事が……。

そして拙者は今、伊吹さんを応援しなくてはいけない立場にいます。

「……っ」

不思議と気分が重くなってくるのです……。
もちろん拙者だって、伊吹さんに幸せになって欲しいのですけど……で、でも……っ

「じゃあ、圭くんが誰かに盗られちゃってもいいの？」

「と、盗られるって……あ、あの馬鹿で変態なアイツと好き好んでつるむ人なんて……」

「それがさ、あたし大吾から聞いたんだよね。圭くんって結構モテるらしいよ？」

「そそそ、そんなわけないでしょ！？　大吾の情報なんて信じちゃ負けよっ！」

「これが意外とガチなんだよねぇ。凪紗は前に圭くんが好きだって発覚したし、同じ写真部の後輩なんかにも好かれてし、最近じゃ白藤だって圭くんに甘え気味じゃん？」

それは拙者もわかっているのです。けーすけ様達と一緒に合宿に行った時も、その後の日常を過ごす中でも。けーすけ様は意外とモテる人なのです……本人に自覚はないみたいですけど。
で、でも、拙者は思うのです。けーすけ様、女と知ると見境がないのです。誰であろうと助ける善人なのは分かっていますけど、特に女の子に対しては優し過ぎるのです。もきゅ……一度、けーすけ様のあの性格は徹底的に矯正したほうがいいかもなのですっ。
で、でないとその……いつかけーすけ様が誰かのものに――。

「……」

「それとも誰かに盗られる前に、あたしが圭くんに告白しちゃおうかなー？」

「だ、だめっっ！」

伊吹さんは顔を真っ赤にすると、バン！　とテーブルを叩いて叫び、立ち上がりました。

亜紀さんは多分、冗談で言ったのだと思うのです……。

でも、伊吹さんの必死さを見て、少し困った顔をしていました。

「う、嘘だよ嘘。別にあたしは圭くんにそんな感情ないから、ねっ？」

「そ、そう……っ」

少しほっとしながら、でもまだ不安に思っているのか、哀しそうな表情を浮かべながら、伊吹さんは静かに椅子に座りました。伊吹さん……やっぱり本気みたいなのです……っ。

「正直に言って。伊吹は圭くんの事が好きなんでしょ？」

その問いにうん、と頷いた、借りてきた猫のように静かになっていた伊吹さん。

なんだかその顔も、りんごのように赤くなっていました。

わかっていましたけど……うぅ、伊吹さんまでライバルだったのですか……っ。

「じゃ、圭くんと恋人になりたい？」

「……う、うんっ」

「じゃあ決まりっ！　あたしは伊吹の幸せの為に全力を尽くすよ！」

亜紀さんは笑顔になり、伊吹さんの背中を右手に当てました。

気のせいか、伊吹さんも恥ずかしそうにしながら――微笑んでいるような気がします。

「……ありがとぅ……亜紀っ」

「よし、それじゃあ早速作戦を考えよう！」

もきゅ……伊吹さん本気なのです。

もしも、拙者がけーすけ様に告白したら、伊吹さんは……。

おかしいのです、別な友達は他人を気にしちゃダメって言っていましたけど……でも、気にしないほうが難しいのです。拙者に伊吹さんを傷つける真似は出来ないのですっ。

で、でも……拙者もこのままは嫌なのです。

どうしましょう……どうすれば、いいのでしょうか……？

「……はあっ」

しかも拙者、今回一度も喋っていないのです……。

第２３２話，秋のある日の日常（後書き）

キャラクターＮｏ０１４
・アナスタシア・アベルツェフ※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆☆☆
防御力：☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆☆
魔力：☆☆☆☆☆☆
魔法（超能力）：☆☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆
地位：☆☆
総評：体を鍛えており、アスリート並の身体能力を誇っている。魔法のほうもゴーレムを召喚する強力なものだが、それ以外の魔法が使えないのが難点。

第２３３話，危惧する者達、危機感が全くない者達

アルファ隊の日本支部は長野県の地下。この国の軍隊がかつて掘ったという、松代大本営跡地に支部を置き、この地区でのアルファ隊の行動などを統括しています。

リーリヤ――リーリヤ・コスティリナは現在、自分の武器である聖杖ジェーズルを丁寧に磨いていると同時に、通信用の護符を利用してとあるお方と通信を行っています。

それはリーリヤの上司である人物――ヤコフ・ベリチュココフ。

連邦特殊情報総局の局長を務める、実年齢以上に見た目が若く見える中年男です。

と、言っても通信用の護符で会話をしている故、相手の顔は見えないのですが……。

『ふ～ん、所で硬質のノームが死んだ……という報告がヴィンペル隊からあったのだが？』

『はい、それは事実です。とリーリヤは驚愕を露わにします』

硬質のノームはヴィンペル隊が抱える暗部組織からの攻撃を逃れ、今も生きていると言うのが最後の報告でしたが……どうもそれは誤報で、真実はもっと残酷なものだったのです。

実はあの後、ポルトガルのセトゥーバル近郊の森林地帯にて、たまたまそこで活動していたヴィンペル隊の隊員が、興味深いものを地面から掘り出したのです。

それは、硬質のノームの遺体。

損傷が激しく、既に腐敗も始まり、肌の色が変色し始めていたそ

の遺体は、確かに硬質のノームが死んだ……というメッセージをリーリヤたちに伝えてくれました。
すぐに遺体は総局内にある科学技術局へ送られ、解析が行われました。
その死因は……。

『しかも、遺体を解析した結果――彼は強力な魔術を受けた形跡があった』

『はい、それも事実です。とリーリヤは肯定します』

『やはり、邪炎のサラマンダー……同じ赤の軍神であるノームを瞬時にあの世に送る力』

『聖人の力と、精霊の力の二つを持っています。とリーリヤは説明します』

『その名は伊達ではなかった……という事だな』

硬質のノームは我が隊の特隊員でさえ手こずる上に、あの藤島様が初めて気絶なさるような強烈な一撃を放った、少なくとも並の魔法使いでは勝利不可能な達人です。にも拘らず、同じ精霊の力を持つ魔法の天才が、サラマンダーには簡単に殺されてしまったのです。
風剣のシルフ、硬質のノームも十分脅威的な魔法使いです。
しかし――邪炎のサラマンダーはそれ以上の脅威度でしょう。

『確か子孫の下には、住み込みで君の部隊の隊員が子孫の警護に当たっているらしいが』

『はい、しかし今回は厳しいでしょう……と、リーリヤは残念な意

見を述べてみます』

『なるほど……その隊員も中々の実力者と聞くが、サラマンダーの実力は本物だ』

『はい、現状での勝利は難しいでしょう。と、リーリヤは率直な感想を述べてみます』

今の状況はあまりにも不利です。これだけ戦力が分散している状況だと、あの聖人が襲ってくればまず間違いなく――各個奮闘した所で簡単に撃破されてしまう。

だからこそ今、力を合わせて戦うことが重要なのだと思います。

『それで君はどう出るつもりなんだ？』

『戦力を日本に集中しますが……それでもダメな場合は――』

『ま、まさか……君が戦場へ赴くのか？』

『……はい、聖人と互角に戦えるのは聖人だけ、とリーリヤは思っております』

一般の魔法使いではサラマンダーには確実に勝てない。どんなに優秀な魔法使いであっても差は大きいのです。例えるなら、同じ兵器でも５００年前の兵器と現代の兵器なら、使い方にもよるのかもしれませんが、圧倒的に現代兵器のほうが破壊的な力を持っているでしょう。

一般の魔法使いとサラマンダーとでは、それと同じくらいの差があるのです。

しかし、サラマンダーと戦うのが聖人であればどうでしょう？

少なくとも――惨敗という結末は回避できるハズです。

『確かに、君も聖人だ。その力は圧倒的だが……勝てる見込みはあるのか？』

『五分五分……いえ、負ける確率の方が高いでしょう。とリーリヤは分析します』

『そ、それでは意味がないではないか？』

『あります、考えてみてください。相手も聖人ならリーリヤも聖人――リーリヤが勝つ可能性もあるのです、とリーリヤは力強く言い放ちます』

どれほどの確立で勝つか負けるか、正直リーリヤにも検討がつきません。サラマンダーとはシルフとの戦闘があったのあの日、一度顔を合わせただけですからね……。

しかし、私が戦う意味はあると思います。

『……本気でやるつもりか？』

『既に戦闘に備え、術式（こざいく）を準備しています……とリーリヤはここだけの話をします』

『そうか……こちらも全力でサポートしよう。負けるなよ――リーリヤ君』

『その願いに応えられるとは限りませんが、万が一、サラマンダーとの戦闘に発展した時は命を賭けます。とリーリヤは覚悟を決めます』

そこで通信用の護符は効力を失い、ただの紙切れとなりました。
リーリヤはそんな紙切れなど全く気にせず、首から提げている八端十字架を右手で触れました。
この魔装具……と言っても、シルフは魔道書のようなもの、なんて曖昧な表現をしていましたが……果たして、この魔装具は効果を発揮するのでしょうか。
邪炎のサラマンダー。
貴方はおそらく、リーリヤが１８年間の生涯戦った中で――最強の敵となるでしょう。

――藤島圭介Ｓｉｄｅ――

放課後、またしても暮葉がいないが……多分晩御飯までには帰るだろう。暮葉の心配ばかりをしていた俺は現在、写真部の部室へと向かっていた。
写真部……つっても、大した活動はしていないんだけどな。
そんな事を考えつつ、俺は部室のドアを開ける。

「失礼しまーす」

ドアを開け、部室の中に入るが……おかしいな、浅間部長の姿がないような気がする。それにあかりの姿も見えないな。いるのはパソコンの前に青山さんだけか……。

「あれ、今日は青山さんだけなのか？」

「……」

あれー、無反応だな……というかヘッドホンしているし、聞こえてないのかな？

青山さんが真剣な表情で画面に向かっている。一体なにしているのだろうか。ひょっとして写真家になるという夢を叶える為――パソコンで編集作業でもやっているのかな。

ちょっと楽しみかもしれない。どうせ気付いていないし、画面見ちゃいますか。

「なあ、なにしてんだ？」

軽い気分で聞きながら、俺はパソコンの画面を覗き込む……が、アレ？

これはなんというか……編集とは全く関係ない気がする。

とりあえず、ヘッドホン取っちゃうか……青山さん慌てそうだし、面白そうだ。

というわけで、俺はパソコンからヘッドホンを抜いてみた。

『せんぱ……お腹、熱いの……あ、んっ……いっ、うくっ……あ、は……っ』

『う、すごい……』

『あ、あうっ……先輩……先輩の……奥に……きて……ボク、ボクの中、いっぱいにして……』

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ！？」

CG見た時点でわかったよ、わかってたんだけど興味があったんだ。だからヘッドホンを外したんだけどさ……し、失敗だった。これは外さないほうが良かったかもしれない。
ちくしょう……やっぱりエロゲーかよっ！？

「……っ！？　せ、先輩……ど、どうして先輩が……っ！？」

青山さんがヘッドホンを外し、目を白黒させている。
俺が背後にいた事と、急に音が大きくなった事に相当ビックリしたらしい。

「部活だからだよ！　ていうか青山さん、なに部室のパソコンでエロゲーやってんの！？」

「え、えと、その……これは……お、お勉強です……っ！」

「勉強って……エロゲーから何を学ぶんだよ？」

「……えと、先輩がどんなシチュエーションで悦ぶか……その研究を……っ」

「だからお前、後輩ルート攻略してんだな！？　先輩先輩って、後輩の女の子が甘くエッチな声で言うルートを選びやがったんだな！？」

青山さん……前々から変態だとは思っていたけど、まさかここまでとは。正直学校でエロゲーをプレイするだなんて、浅間部長と大差ないかもしれないぞ。
俺でさえ、学校ではＰＮＰのギャルゲーまでで自重しているのに。

「……ちなみに、先輩の大好きなゆ○ソフトですよ……？」

「俺の好きなブランドだからいいって問題じゃねえよ！」

ていうか、なんで俺の好きなエロゲメーカー知ってんのこの人。

まさか葵か、いや、葵以外には考えられないぞ。ていうかそれ以外だったら青山さん――アンタ相当怖い人だよ。

「……あ、あの……先輩？」

「な、なんだよ……」

「エロゲーって面白いですね……っ！」

「ぬがっ！？　あ、青山さん現実に帰って来い！　帰ってこーいっ！」

「……で、でも実際面白いですよ？　ストーリーもよしＣＧもよしエロもよしですよ……？」

俺の知っている青山さんは、満面の笑みを浮かべてエロゲー絶賛する子ではない。このままだと青山さんが浅間部長化してしまう。それだけは、どんな手段を使ってでも止めなければ。青山さんには綺麗なキャラで居続けて欲しいんだ。絶対に――変態キャラにはさせないからな。

ほ○ほむ見たいに変態ちはやさんなんて――変態淑女敵な扱いはさせないからな！

「あ、青山さん知ってるか？　エロゲーやり過ぎると早死にするら

しいぞ？」

「……え、ええっ！？　ほ、ほんと……ですか……っ？」

「ああ、神はこう言いました――エロは程々にしとけと！」

ぶっちゃけ神様そんな事言ってないだろうし、俺神様なんて知らないし、そもそも神様なんて信じていないんだ。でも、間違った事は言っていないと思うんだ。

そりゃあね、俺だって変態紳士だが――それでも一日エロは一回のみ。

これでも自重してるんですよ。日柄一日中脳内ピンク色だと思ったら大間違いだ。

そもそも年中ピンク野郎ってのはな――、

「あんまエロゲーばかりおってると、世の中から突き放されちまうぞ？」

まあ、一日一回はやってる俺が言える言葉じゃないけどね……。

でも、青山さんには浅間部長みたいになって欲しくないんだ。

「……だ、大丈夫です！　わたし……先輩にさえ突き放されなければ……っ」

「友達とかはどうでもいいのかよ！？」

「そ、そんな事……ないです。みんな大切ですけど……先輩が一番大切なんです……っ！」

一見感動的なセリフを言っているように聞こえるけど、さっきま

でエロゲーをプレイしていたという事実と、スピーカーから流れている女の子の喘ぎ声で全てが台無しだぜ……。

「にしても、先輩……っ」

「なんだよ今度は？」

「そ、その……えと、なんと言うか……」

急に口ごもる青山さん。

なんだかその顔も、りんごのように真っ赤になっていく気がした。

「……その、覚悟は……できました」

「えっ、何の？」

すると青山さんは震える小さな人差し指で、パソコンの画面を指差す。当然、エロゲー起動中のパソコンの画面には、男女があ～んな事をしている、子供ＮＧなＣＧが表示されている。

さらに、声優さん必死の演技――女の子のアレな声も室内に響いている。

「青山さん、そういうのは恋人同士でするものだと思うんだけど？」

「……大丈夫ですっ、今の世の中――セッ○スフレンドというものが存在しますから……っ！」

うわっ、とうとうこの小説にも伏字出てきたよ。

確かにセフレってあるけどさ……でも、それ作るの一部の人だけだよね？

少なくとも俺は作らないぞ。俺は現在暮葉一途なんです！

「せんぱい……っ」

青山さんがジリジリと接近してくる。やべえ……あれは間違いなく雌の顔だ。正直俺の心が揺らいでしまうほど、今の青山さんの表情は強烈。まるで誘っている女という感じだが……。

俺にはわかる。青山さん――エロゲーのヒロインの真似してやがる。

ていうかその、これってまたアレか。

――女の子に襲われちゃう的な展開なのか？

第２３３話，危惧する者達、危機感が全くない者達（後書き）

キャラクターＮｏ００１５
・セルゲイ・ベレゾフスキー※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆
防御力：☆☆☆
体力：☆☆☆
魔力：☆☆☆
魔法（超能力）：☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆
地位：☆☆
総評：魔法使いとしては下位。魔法を使えないリーネには勝っていたが、早川悠の前には無力であった。

第２３４話，滅茶苦茶な放課後

エロゲーのボイスが部室内に響き渡る中、何を思ってしまったのだろうか……青山さんがジリジリと俺に近付いてくる。これはまずい、青山さんが葵レベルの事をしようとしている。

まさか、この俺を襲おうとは……フフフ、甘いな青山さん。

葵の計画は自力での脱出が困難だが、青山さん……お前はまだ甘いぜ。

何故だかわかるか……それはだな、態々考えるまでもない事だ。

「残念だったな――」

俺は右手を背中に回し、丁度俺の背後にあるドアへ手をかける。

ラッキーだぜ、丁度ドアの所へ後退りしていたとは、コイツは本当に好都合だ。

なぜなら、これで遠慮なく――この場から逃げられるからな。

「俺の純潔は俺が好きだと思ったヤツの為にあるんだよ！」

陸上選手もビックリな勢いで駆け出し、廊下を走りながら大声で叫んだ。だから甘いって言ってんだよ青山さん。俺は逃走百戦錬磨の男、逃げる事に関してはプロ級だと思ってるぜ。

「……せ、先輩……ま、まだ終わってないですよ……っ！？」

「終わる以前に始まってもいねえだろ！」

「むぅ……先輩、わたし……絶対諦めませんからね……っ！」

できる事なら諦めて欲しいよ。そして、普通に友達のままでいたい……青山さん、早く俺の事を諦めてくれないかな。ああ、あのいい子だった青山さんは一体どこへ？

そんな事を考えながら、俺は放課後の校舎を全力疾走していた。

それから数分後、気がつけば俺は生徒会室の前に来ていた。生徒会室かぁ……そういえばうちの高校の生徒会って、謎が多いよなあ……。

なんたって、今まで生徒会長の姿を見たヤツがいないんだもんな。いつも副会長が頑張ってるけど、生徒会長……一体何者なんだろうか？

「ぐへへ、ここがええのかー？　えぇっ？　ここがええのかぁー？」

「や、やめろすみにゃん！　いい加減にしないと――う、わっ！？」

「ナギちゃん、ここが弱点かあっ！」

「や、やめろと言っているだろうがっ！」

「やめられない止まらない。私の中でナギちゃんはエ○センなのだー！」

「わ、私はエ○センと同じ価値かっ！？」

生徒会室の中から扉越しに聞こえる、我が校の風紀委員と変態ガチ百合淑女の声。多分この中で変態が風紀委員にマッサージをやっているんだろう。うん、そうだと俺は信じる。

むしろそれ以外は……まあ、見たいよね。しかし、結局……。

「……なにやってんだ、アイツら？」

まあ、気にしたら負けだと思うんだ。うん、気にしたら負けだ……俺は生徒会室の前で何も見ていないし、聞いてもいない。俺は正真正銘何事にも無縁なカタギである。

よし、それじゃあ青山さんと、生徒会室の中にいる2人に見つかる前に――帰るか。

大吾や重原の姿はない。暮葉も部活には来なかったし、小坂や伊吹の姿もなし。

おそらく全員帰ってしまったのだろう。他のクラスのヤツもいないし、仮にいたとしても部活で忙しいだろう。これは……しまった、俺ぼっちじゃねえか。

この調子だと葵やあかりもいなさそうだし、今日は寂しく一人下校か。一人下校も以前までは普通だったのに、最近はそれが寂しく感じるな。人の感情って不思議だよね。まあ、そんな事は今更どうでもいいとして、今日は早く帰って新作ゲームの攻略作業を行うとしますか。

そんなわけで俺は玄関で靴を履き替え、校舎を後にした……のだが、

「なんだ……この騒ぎ？」

外に出た瞬間、グラウンドにサッカー部だの野球部だの、体育会系の部活に所属する野郎共が野次馬のように集まっている。どう見てもアレ、何かを見物しているっぽいんだけど……一体アイツらは何を見物しているのだろうか。それが気になったので、俺は現場に向かうことにした。

すみません、と謝りながら、俺は人ごみを掻き分けて人ごみの中心へ向かう。

苦労して突き進むと、一旦人ごみが切れる。そうか、ここが人ごみの中心か。
やっとの思いで到達した俺は、その中心点を見る為に目を凝らす。
「オラァ！　テメェらの筋肉は見世物かよ！？」
「それともなに？　俺達が怖いっての？」
「マジかよ、体育会系ってのも超ツマラネーなあ？」
青系のブレザーの制服でしかも馬鹿……ああ、わかった。駅前の東高の連中だな。昭和中期こそ偏差値は初芝よりも上だったらしいが、今では落ちぶれてご覧の有様。今風ヤンキーとチャラ男とギャル達の巣窟となり、初芝の生徒とは当然折り合いが悪い。
一応、初芝は市内一の進学校だからな。
そういうのにムカつくヤツもいるんだろう。
それにしても相手は3人か……まっ、3人くらいなら大丈夫かな。
「すいません、これ持っててくれないっすか？」
そう言って、俺はたまたま隣にいた野球部の男に携帯電話と腕時計を渡す。特に携帯電話なんて簡単に壊れるからな、戦いには不要な代物だぜ。
「お、お前……まさかやる気なのか？」
「黙って見てるわけもいかないだろ？　悪いけど、教師来ないか見張っててくれ」
「あ、ああ……」

東高の連中とは何度かやり合った事があるけど、大した強くはなかった気がする。とりあえず腕は痛むが、筋力１００％にしてさっさと終わらせちまおう。

ここは校庭だし面倒だし、何より――教師に見つかったら停学確定だからな。

「ぎゃあああああああああああっ！」

「ぐ、ぐ、ぼァ――――！？」

「いでででで！　ちょ、らめえええええええええええええっ！」

な、なんだ……なんとなく瞼を閉じて、ポケットに手を突っ込んだまま戦場へ行こうと思ったんだけど、突然ヤンキーさん達の痛々しい叫び声が聞こえてきた。

悲鳴は未だに続いており、時々反撃しようとするヤンキーさんの怒声も聞こえるが、結局無駄弾に終わっているらしい。悲鳴から察するに、ヤンキーさん達はボコボコにやられている。どこのどいつにやられたかは知らないが……と思いながら、俺は目を開けてみた。

「ああ、圭介」

「い、伊吹……？」

そこには制服姿で竹刀を構え、ヤンキーさんを踏んづけている伊吹の姿があった。態々駅前の東高から殴り込みにやってきたヤンキーさんは、既に満身創痍の重傷者。まあ、伊吹の事だから手加減はしているんだろうが、相変わらず派手にやりやがるなぁ……伊吹も。

そう、伊吹の実力は隠れ気味だが――実はそこらの不良よりは遥

かに強いのだ。

「コイツら……もしかしてお前がやったのか？」

「ああ、面倒だから私がやっといたわ。あんたは戦う必要ないわよ」

「いや、そりゃそうだろうけど、お前……大丈夫なのか？」

「一応部長の許可はあるわよ？」

「部長！？」

今まで伊吹が剣道部の部長だと思ってたんだけど、違うのかよ。

ていうか、部長が喧嘩ＯＫするだなんて、剣道部って一体どんな部活なんだよ。他校との試合が近いから鍛えておけって通達があったのかもしれないけど、剣道部なのに喧嘩で体鍛えてどうするんだ？

ま、まあ……あまり面倒な事にはならなかったし、これでいい……のか？

「コラァァァァッ！　何の騒ぎだあああああっ！？」

後者の方から響いてくるハスキーボイス。

姿は見えないが、おそらくガタイのいい教師が数人全力疾走している事だろう。

「やば……伊吹、逃げるぞ！」

「い、言われなくてもわかってるわよっ！」

俺は伊吹の手を引き、強引に彼女を引きずりながら走り始めた。

周囲には体育会系の部活の人が沢山いた為、俺達の姿は教師陣には見られていないだろう。多分、翌日俺達があの場で何をしていたのかは聞かれないハズだ。とにかく、今はこのまま学校からできるだけ離れよう。

喧嘩で停学だなんて――洒落にならねえからな。

こうして、俺と伊吹はその時の勢いに任せ――延々と走り続けたのだ。

あ……腕時計と携帯電話、回収するの忘れた……。

ま、まあ……いいや。野球部には島原がいるし、後で島原に回収頼もう。

しかし携帯預けたまま忘れるとは……不幸だ。

第２３４話，滅茶苦茶な放課後（後書き）

キャラクターＮｏ００１６
・ジャンボ鶴屋（つるや）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆☆
防御力：☆☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆☆
魔力：ナシ
魔法（超能力）：ナシ
知力：☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆
地位：☆☆
総評：明智でも一撃で倒せれないなど、タフさだけはある様子……というより普通の人よりは遥かに強い。

第２３５話，どうみても夫婦です、本当にありｒｙ

伊吹と共に逃げる事5分、全力疾走を5分も続けていたせいか、俺も伊吹も既に体力の限界を感じていた。はあ、無駄に疲れた……ペース無視の全力疾走ってホント、すぐ疲れるよね。

普段体を鍛えている伊吹でさえ、既に息があがっている。それにしても……息切れしている女の子って何かエロいよね。どうでもいい話かもしれないけど……。

ていうか俺、伊吹でなんちゅー事考えてるんだか。

「はぁ、はぁ、ここまで逃げれば教師も追って来ねえだろ……っ」

「危なかったわね……さっきの声、多分あんたの苦手な野原よ？」

「野原くンかぁ、確かに一番の危険人物だよな」

俺にとって野原くンとは最も危険な人物である。だって殴ってくるし、何もしていなくても因縁つけてくるんだもん。脅威以外の何者でもないよ、とにかくあの人は苦手だぜ。俺の一方藤島（フジシマレータ）モードが全く効かないし。全く、学校から逃げたのは正解だったな。

「そういえば、あんたこんな時間まで何してたのよ？」

「俺？　俺はまあ、部活だけど……お前は今日も剣道部か？」

「今週の土曜日に他校との練習試合があんのよ。不良と戦ったのも鍛錬の為の部長命令」

「デンジャラスな部活や……」

部長が修業の為に不良との交戦を命じるとか、世紀末でもねえよ……。

「言っとくけど、こんなの日時用茶飯事よ？　月に一回だけど、部長主催のヤンキー狩りなんて街の清掃活動もやってるし、初芝剣道部って実は地域の為になってんのよ？」

「ほうほうそうかそうか……って、ヤンキー狩り！？」

ヤンキー狩りってやっぱりアレですよね？
最近バカ売れしたモンスターを狩るゲームでやる、あの狩りと同じ意味だよね？
えっ、まさかやるの？　剣道部がヤンキーさんを狩っちゃうんですか？

「な、なによ？　褒めても何も出ないわよ？」

「褒めてないわ！　害虫駆除のボランティア的なノリで恐ろしい事言うなよ！？」

「だ、大丈夫よ。圭介なんかに心配されなくったって、ちゃんとノルマは達成できるんだから」

「ああ、お前は心配してない。むしろヤンキーさんが心配だ……」

ツッパリ伊吹ちゃんｖｓ街のヤンキーさん。永渕レベルの不良ならわからないが、そこらのヤンキーさんが相手なら、蜂の巣にＲＰＧ－７を撃ち込むのに近い、ヒトラー総統もビックリな一方的な大量虐殺になってしまうだろう。剣道部……恐ろし過ぎる。

もしかして、永渕殺したのって伊吹なんじゃ……？
い、いや……流石にないか。というか、伊吹じゃないと信じたい。

「にしても、最近暇ねぇ。街の不良が全然暴れないし……」

「お前達が虐めているから、ヤンキーさんも怯えて外出なくなったんじゃねえのか？」

「そ、そう？　だったら私達――やっぱり少しは地域の為になってるわね！」

「何とも言えねえ……」

確かに最近ヤンキーに絡まれる事も減ったし、街でもあまり見かけない。なるほど、伊吹ら剣道部の人達が警察以上に活躍したおかげで、ヤンキー達が大人しくなったんだな。でも、その裏で一体何人のヤンキー達が血を流した事やら……ある意味いい事だけど、ある意味残酷かもしれない。

伊吹、あれほどヤンキーが苦手だったのに……。

とりあえず、殴り込み（カチコミ）してない事だけは祈っておこう。

「とりあえず伊吹、一つだけ聞いてもいいか？」

「ん、なによ？」

「暮葉と葵がどこ行ったか知ってるか？」

「葵ちゃんは知らないけど、暮葉ならあかりと遊びに行くって言ってたし、多分葵ちゃんも暮葉達と一緒じゃないの？」

「そっかぁ」

それじゃあ帰りはちょっと遅いかな。葵のゲテモノ料理は食べたくないし、だけどその状況で暮葉が遅くなるなら、葵も必然的に遅くなるだろう。万が一に備えるのも悪くは無い、帰りにスーパー寄って焼きそばの材料くらい買ってこうかな。

それとも、半額弁当の為に狼たちと殴り合いでも……って、現実じゃありえないか。

とにかく万が一に備えて、材料の用意くらいはしておいた方がよさそうだ。

「俺、帰りに買い物してこうと思うんだけど、お前はどうするんだ？」

「えっ？　わ、私!?　私は、その……っ」

そこで恥ずかしそうにする意味がわからんが、どうせ俺と伊吹は隣同士。ここで別れたって何の意味もないし、そもそも一人で帰宅と言うのも寂しいもんだ。

よし、ついでだ。コイツに買い物付き合ってもらうとしよう。

「お前も一緒に来るか？」

「……ふぇっ!?」

「お前も晩飯の材料とか買うだろ？　それにどうせ家は隣だし、お前が嫌じゃなかったら用事済ませちゃおうぜ？」

「……わ、わかったわよ。仕方ないわね……あ、あんたがそこまで言うんなら特別よ！　特別にあんたに付き合ってあげるんだからっ

！」

頬を膨らませた、いつも通りのツッパリ伊吹ちゃん。今の所は特に変わった様子もない普通の伊吹なのだが……俺は未だに伊吹に関して――気になる事があるんだ。

それはある夏の日、体育館倉庫で言われた一言。

そして、サン・ジュリアン教会で聞きそびれた彼女の本音。

伊吹は一体――俺の事をどう想っているんだろうか。

「今回でそれ、わかるだろうか……」

「んっ？　圭介、なんか言った？」

「なんでもねえよ。それよりさっさと行こうぜ」

暮葉の事も気になるが、とうとう聞くことが出来なかった伊吹の本音の気になる。

俺は暮葉とのことよりもまず――伊吹の本音を知る必要がありそうだ。

“マックスバリュエ”。

日本全域に展開するスーパーで、品ぞろえこそ微妙な気もするが、家から一番近いと言う理由で利用頻度はＮｏ１。藤島家の食卓は大抵ここで売っているものを使用している。多分、伊吹もここで買い物をしているハズだ。この店はこの辺の住民には欠かせない、大変重要な場所なのだ。

俺と伊吹は野菜コーナーへ向かい、俺はキャベツを手に取る。俺的に焼きそばにはキャベツが欠かせないと思うんだが、まあそれは人によると思うんだ。

でも、俺はキャベツ入り焼きそばが好きなんだよ。

伊吹もそれがお気に入りのようで、俺が手に取ったキャベツを念入りに調べていた。

「ちょ、圭介。こっちのほうが新鮮よ？」

「えっ、マジで？」

「このキャベツ、芯が微妙に黒ずんでるじゃない」

やたら真剣な表情を作って指摘してくる。

確かにこのキャベツ、少し芯が黒ずんでいる気もしないでもないが……。

「それって重要なことなのか？」

「なっ、重要に決まってるでしょ！　あんたの集めてるゲームの１８２９倍は重要よ！」

「なにその半端な数字！？　ていうか、キャベツに見分け方なんてあるのかよ？」

「あるわよ、いい？　芯が黒ずんでいたり、割れているものは新鮮じゃなかったり、とにかく良質じゃないのよ。こっちのキャベツは色もツヤも完璧だし、芯の大きさも５００円玉程度で丁度美味しいハズよ」

「お前詳しいな……キャベツ博士かよ」

「じょ、常識よっ！　多分……っ」

多分かよ……まあ、主婦の間では常識なのかもしれない。俺も時々、焼きそば大好きな伊吹の為に焼きそばを作ってやったりするが、基本的にはド素人だしなぁ。

ぶっちゃけ、どれが新鮮か見極める能力は殆どゼロなんですたい。

「でもまあ、そこまで詳しかったらアレだな。お前と結婚した旦那さんは幸せだろうな」

「けけけけ結婚って!?　い、いきなりすぎるわよばか圭介っ!」

「確かにいきなりかもしれないけど、お前なら将来いいお嫁さんになれると思うぞ?」

「で、でも……っ!　その、物事には順序があって、私とあんたは……っ」

伊吹の顔が、熱病を患ったかのように一面真っ赤に染まっていく。濡れた紅色(くれないいろ)の瞳に俺の姿を映し、その瞳は迷う人みたいにキョロキョロと、不規則に左右を往復する。

何も、これは俺と結婚するって話ではない。そもそも、誰かと結婚した場合で、本当に結婚するという話をしていたわけではない。

それなのに、伊吹は否定はしつつも、何かを期待するような態度を取っている。

もしかして……本当に俺の勘違いじゃない……のか?

ごくり、と唾を飲み、少し試してみようと思った。

「ま、まあ……もしかしたら、お前と結婚するかもしれないな」

「け、圭介と……結婚……っ」

そこからは、ツッパリ伊吹ちゃんとは別人であった。
赤面した顔が微かにふわりと笑顔になり、頬がうっとりゆるんだ。
胸にあてた手も強く胸に押しあてられ、まるで好きな人に好きと言ってもらった、恋する乙女のようであった。
やっぱり、伊吹は本当に……そういう事なのか？

「ねえ、圭介」

「なんだ？」

「買い物終わったらさ、ちょっと付き合ってくれる……？」

あの伊吹が微かに笑いながら、俺を誘うだなんて……やっぱり変だ。こんなのいつもツッパリ伊吹ちゃんじゃない。と言う事はやっぱり、伊吹って俺の事が――。
確証なんかないけど、何となくそんな気がするんだ。
今までの行動。普段は見せない仕草、妙に麗しく見える彼女。
そのどれもが普段は見せない、俺にしか見せない――特別なものに見えたんだ。

「わかった、だったらさっさと買い物済ませようぜ」

本当にそうだとは限らないけど、そう思うと心臓がバクバク鳴り始めてくる。
だけど、どうしよう……もし、本当にそうだとしても、俺は……。
……。

第２３５話，どうみても夫婦です、本当にあり（ｒｙ（後書き）

キャラクターＮｏ０１７
・鷲尾有資（わしおありすけ）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

※魔法衣服（マジッククローズ）着用時。
攻撃力：☆☆☆☆☆
防御力：☆☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆☆
魔力：☆☆（魔法衣服（マジッククローズ）の分）
魔法（超能力）：ナシ
知力：☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆
総評：強化されており、かなりの実力を誇る。意外と強キャラである。

第２３６話，言えなかった事

伊吹に連れてこられた場所は夜の海浜公園。遠くにぼんやりと、おそらく東京のものと思われる街灯りと、夜の東京湾を航行する船舶の灯りが、夜の海浜公園をより神秘的に彩る。

人の気配は全く感じられず、どうやら今、公園にいるのは俺と伊吹だけらしい。海浜公園というだけにリア充には人気で、２、３組はいると思ったのだが。今日はいないな……夜の公園に女の子と２人っきりって、これ……実は結構桃色なシチュエーションなのではないだろうか？

いくら相手が幼馴染の伊吹とは言え、俺のセンサーが反応しないわけがない。

俺は今、体の奥から溢れ出る欲望を、必死に押さえ込んでいた。もしも今、目の前にいる人が暮葉だったら俺、耐えられるだろうか？

「……うん、ここなら人もいないわね……っ」

静かに伊吹が呟くものの、あまりに小さな声は波の音と、吹き荒れる潮風によって掻き消されてしまった。これでは小さい声で何かを呟かれても、聞き取ることが出来ないな……。

「なあ、話って一体なんなんだ？」

「べ、別にその……大した用事じゃないけど、その……だ、大事な話よ、大事な話……」

コイツも本当に素直じゃねえな。

永渕との一件以降、ずっとこんな感じだけど……いい加減こっち

が辛いよ。
　特に最近は、言いたい事を寸前に殺していて、無理している感があって……。

「う～ん。とりあえず、話があるならハッキリ言ったほうが楽になれると思うぞ？」

「わ、わかってるわよっ！」

　そろそろ夜だし、もしかすると暮葉と葵が家に帰っているかもしれない。２人を心配させるわけにもいかないので、俺は早く家に帰らなければならない。

「え、えっと……話ってね、ポルトガル行った時覚えてる？」

「覚えてるよ」

　観光ではなく、赤の軍神と戦いにわざわざ海外まで行ったんだからな。伊吹が一緒に来ていたのは予想外だったけど、あんな強敵と戦った災難な日――忘れられるわけがない。
　そういえば、最近サヴィエトも大人しいけど、一体何してるんだろうなぁ。

「ほら、その時その……変なおっさんに襲われる前にあんたと私、話したでしょ？」

「そういえばお前、結局何を隠しているのか聞いてなかったな」

「だ、だからそれよそれ……黙っとくのも嫌だし。だから、その……今言うわよっ」

「お、おう」

硬質のノームと戦う前にしていた話の続き……か。正直に言おう、俺はこの展開をずっと待っていたんだ。これでようやく――伊吹の本音を聞くことが出来るから。

赤面した伊吹が恥ずかしそうに口ごもっている。

伊吹の性格的に、やっぱり中々言いだせないらしいが……が、頑張れっ。

ていうかなんだ、俺の心臓までバクバク早くなってきやがった。

「ま、前にも言ったけど、その……わかんないのよ。何年経ってもあんただった理由が、どうして気付いていて、言おうと思っても言えなかったのか……その、私は、あんたが――」

ついに教会で聞くことが出来なかった、伊吹の本音が明らかになる。

と、思っていた。

しかし、伊吹が全てを言い終える前に――口を止めてしまったのだ。

一体どうしたのだろう、と思ったが、その理由に俺が気付いたのも、伊吹に遅れること大体5秒前後くらいだろう。不自然なまでに静かで、無人の風景に得体の知れない悪寒を覚え、一瞬俺の体も恐怖で固まってしまった。しかし、いつまでもそうしているわけにはいかない。

そう思った俺は、思わず伊吹に危険を呼びかけようとする。

しかしできない。

そんな事をする暇がなかったのだ。

「――警告は与えたはずだ」

声が聞こえる。

闇の中から、おそらく男のものと思われる、野太く渋い声が響き渡った。

「――貴様にはいくつかの選択肢があったはずだ」

夜の公園を僅かに照らす街灯が、男の姿に光を当てる。男は筋肉質ながら、爽やかな雰囲気を放っている中年で、白を基調とした赤っぽい服を着た、巨大なメイスを片手に持つ不審者だ。

俺を睨み付ける厳つい顔つき。スポーツで鍛えたとは思えない、実戦的な肉体。まるでどこかの軍人のような屈強な男は、ズンズンと大きな足音を立てながら、徐々に近づいてくる。

「戦闘か逃走か……この場では後者が当たり前の選択だと思うのだ。しかし貴様は違った」

知らない顔ではない。

俺はその男の事を少しだけながら、知っている。

そいつの姿を瞳に捉えた瞬間――全身から嫌な汗が噴き出てきた。

「お前……まさか……ッ！？」

8月17日。俺の拘束と、古宇坂攻略の為に攻め込んできた風剣のシルフを、横取りするかのように回収していった、あの化け物みたいな茶髪の中年男。

シルフと同じく、赤の軍神の一人でもある人物。

「邪炎のサラマンダー。以前、貴様に名前を名乗ったハズだ」

その名を聞いた瞬間、俺は反射的に拳を握り締める。いつ襲ってきてもいいように、いつでも動き回れるように、身を引き締めて男の事を睨みつけた。

同時に俺の隣に並んだ伊吹も、背中から竹刀を取って構える。

彼女は赤の軍神に関する詳しい事情は知らないだろうが、邪炎のサラマンダーという異様な名前と彼が右手に持つ、あの巨大なメイスを見て――仲間ではないとはわかったのだろう。

邪炎のサラマンダーは左手を腰にあて、フッ、と小さく息を吐くと、

「愚かだな。女連れで私との対峙を希望するとは……貴様は相当愚かだ」

さっきから独り言ぶつくさ言いやがって。

愚かだって？

どっちがだよ……思い出したけど俺、考えてみれば――。

「てめえだって愚かじゃねえのか。てめえの仲間2人は誰にやられたと思ってんだよ？」

「……ふん、確かに貴様だな。私も貴様は普通ではないと思っている」

「だったら、怪我する前に引いてくれねえか？」

「それも選択肢の一つだろうが、そういうわけにはいかなか」

やがて、サラマンダーは巨大のメイスを天を突くように突き上げて、

「教えてやるぞ。聖人に喧嘩を売れば――どんな目に遭うかを」

第２３７話，聖人の力

夜の海浜公園で、伊吹の本音がやっと聞けると思ったのに……ちくしょう、とんだ邪魔が入りやがったぞ。しかもアイツは確か赤の軍神の一人だったな。少なくとも、シルフやノームと同等かそれ以上の力を持っているのだろう。苦戦は必須みたいだが……ここで引く気はねえ。

赤の軍神っつっても、同じ人間である事には変わりねえ。

恐ろしく強いのはわかっているけど、何処かに付け入る隙はあるハズだ。

シルフとノームだってそうだったんだ……だったら、アイツだって同じハズだ。

「圭介、ちょっとだけ聞いてもいい？」

「なんだ？」

「赤の軍神って何よ。結局アイツはあんたの敵なの？」

「赤の軍神ってのはサヴィエトの組織らしい。俺達を狙っている事には変わりねえよ」

「そう……だったら私も一緒に戦うわ」

ニヤリと口元を歪ませ、より慎重な構えを見せた伊吹。

伊吹を傷つけたくはないし、出来れば戦わせたくはねえけど……無理だな。

おそらく、核兵器が降ってこようが――今の伊吹は止まったりしないだろう。

「……わかった、無理だけはすんなよ！」

「お互い様よ！　後ろは私に任せなさい！」

暮葉は……まあ、あかり達と遊んでいるんだ。来るわけないか……でも、伊吹は一緒に戦ってくれると言っているし、伊吹だって武術の心得はあるんだ。

浅間部長と一緒に戦うよりは１００倍マシだぜ。むしろ、伊吹は頼れる存在だ。

「貴様も残酷だな。一般人の女を戦闘員として利用するとは……愚かな」

「利用してんじゃねえ、伊吹は俺の大事な仲間だ」

「そ、そうよ。あんた、そんな事言って圭介を痛めつける気なら――本気で叩くわよ！」

「私の任務は藤島圭介の回収である。特別痛めつけるつもりはないが、貴様が刃向かうつもりであれば――メイスの使用はやむを得ないであろう」

あの巨大なメイスと、何を使ってくるかはわからないが、邪炎って事は炎か。とりあえずアイツの魔法にさえ気をつければ問題はなさそうだ。

大柄で筋肉質だし、そこまで動きが速いって事はないだろう。格ゲーによくいる、力で押すタイプと見た。だったらこっちは――俺の戦略と伊吹のスピードで勝負だ。

「ぐ、ォォおおおッ！」

「……ッ！」

ほぼ同時に俺と伊吹は駆け出して、サラマンダーの懐深くへと潜り込んだ。俺の前に竹刀を構えた伊吹が走り、横薙ぎに竹刀を振り回す。風を切り裂く音と共に凄まじい速さで、サラマンダーの脇腹に薙飛（ていひ）の一撃が加えられる――ハズであった。

だが、

閃光。

「ッ！？」

視界を潰すような閃光が俺達を襲う。俺達から視界を奪って、その隙に巨大なメイスで攻撃するって作戦だろうか。それなら我武者羅（がむしゃら）に走れば攻撃は当たらない。

――という考えは甘かった。

眩い閃光の直後に俺達を襲ったのは、皮膚を焦がすような熱波と、ハンマーで全身を叩かれたような

衝撃波。轟！　と言う鼓膜が破れそうな爆音が炸裂する。

「がァあああああああああッ！？」

焼き魚になった気分に次いで、衝撃波によって全身の骨が砕かれた感覚に陥り、さらに背中が激しく地面に叩きつけられる。俺の体はトラックに轢かれても無事だったりと、常識外れなほど頑丈なハズなのに、何故か――今の一瞬で身動きが取れない程のダメージを受けてしまった。

指先は動くものの、腕が上手く動かない。頭がガンガンする……

吐き気もひどい。

「げっほ、げほっ！　ごほ……ッ！」

薄れる意識の中、ボロボロになって竹刀を地面に突いて、殆ど気合いと根性だけで伊吹が立ち上がろうとしているのが見えた。体を支えるのは力強い華奢な腕に、弱々しい華奢な脚。伊吹は全体重を竹刀に乗っけて、後は腕力だけで立っている。非常に不安定な状態だ。

「ちなみに、古宇坂市外周にはアルファ隊が集結していた。どれも精鋭魔術師達であったが、私はそれらを全員退けてきた」

アルファ隊を……全員、だって？
なんだそれ、サラマンダーさんよ……てめえは化け物かよ？
ていうかアルファ隊って事は……まさか……ッ！

「アルファ隊って……あんた、まさか暮葉を!?」

伊吹も同じ事を考えていたのか、俺が言いたかった事を変わりに叫んでくれた。それにしても伊吹のヤツ、俺がこんな状態だってのに随分元気だな。
俺より前にいたのに、当たり所が良くてダメージが軽かったのだろうか？

「暮葉？　ふっ、あの特隊員か……まだ遭遇はしていない」

「……で、でも！　要はあんた、暮葉の仲間を全員殺したのね！」

「殺しはしない。無駄な殺生は私の主義に反する」

「この……あんた、絶対に許さない……ッ！」

怒りを露わにし、全身に力を入れ、竹刀を地面から抜き取る。ようやく伊吹は己の脚力のみで立ち上がり、再びサラマンダーを攻撃する為に――傷だらけの竹刀を両手で構えた。

「中々根性のある女だな。しかし、一組織を滅ぼす相手にどう立ち向かうつもりだ？」

「私は、これでも――剣道部の主将よ！」

「つまり意地というわけか」

「友達の仲間を痛めつけるヤツ、圭介を痛めつけるヤツになんか――絶対に負けないッ！」

それに対し、サラマンダーの回答は「そうか」の一言であった。同時に、サラマンダーの足の裏が爆発し、この目で捉えきれない速さで、弾丸の如く伊吹の懐へ潜り込む。巨大なメイスを右手に持っているにも拘わらず、動きは伊吹の何十倍、いや――何百倍も速いかもしれない。

伊吹は咄嗟に竹刀を構え、ダッ！　と大地を蹴って駆け始めた。やがて、伊吹の目の前に姿を現したサラマンダーと、がむしゃらに前へ進んでいた伊吹が激突する。

伊吹の動きは速い。ハッキリ言って、俺のジャブよりも遥かに速いだろう。

しかし、サラマンダーはその上を行っている。動きが全く見えない。爆発が発生した瞬間に姿を消している。いや、正確には動きが速いだけなのかもしれないが……。

「ち、くしょう……全然見えねえっ！」

見えていないのは伊吹も同じである。つーか、アレが見えるヤツはいないと思う。マサイ族の連中でさえ、サラマンダーの動きは捕捉できないだろう。

それほど素早い動きを――サラマンダーは平然と行っているのだ。

「う、あああああああああああああああああああああああああああッ！！」

聞こえてきたのは少女の悲鳴。

悲鳴というより、断末魔と表現したほうが正しいかもしれない。

苦しみ、痛み、あらゆる苦が籠められた悲痛な叫び声が、夜の海浜公園に虚しく響き渡る。

「伊吹！」

ゴドン！　と言う、大岩を高所から落としたような轟音が炸裂する。それは伊吹が俺の目の前に落下してきた音であった。メイスで脇腹を殴られたのであろうか、傷が出来ている。それも真っ赤な鮮血がドクドクと溢れ出ている。左腕が変な方向に曲がっている気もする。

それになんだ――口からも血が溢れ出ている。

「けい、す……け……っ」

口から血の塊を吐きだし、弱々しい声で俺の名前を呼びながら、伊吹は右手で俺の服をゆっくりと掴んできた。力は全く入っていない。触れれば崩れ落ちてしまうそうだ。

その程度の力しか出せない程に――伊吹は弱っている。

「心配するな、みねうちである。病院へ運べば一ヶ月で治るだろう」

「てんめえ……ッ！」

明確な怒りをサラマンダーにぶつける。

その一方で俺は迷っていた。

こんな化け物相手に――どうやって戦えばいいのかを。

「さて、次は貴様だ。降伏の意思を見せないのであれば、攻撃を続行するぞ」

俺と邪炎のサラマンダーでは――ケタが違いすぎる。

風剣のシルフや硬質のノームだったら、まだ俺の目でも動きを追う事は出来た。攻撃だって強力だったけど、そこに全く隙がないわけではない。隙があったり付け入って、2、3発殴り返す事だって出来たんだ。だけど、コイツは違う。そんな事が出来る次元を――遥かに超えてやがる。

でも、だからと言って――。

「ふ、ざけんな……まだ俺は倒れてねえぞ！」

降参する理由になんかならねえだろ。

敵わないのは分かっている。殴り返す事だっておそらく無理だろう。だけど……アイツは俺の大事な幼馴染を、国宗伊吹というまだ高校生の女の子に――重傷を負わせやがったんだ。

許せねえ……殴り倒さなきゃ気が済まねえよ！

「そうか、ならば――攻撃を続行するだけである」

ドバァ！　と、足の裏で大爆発を起こしたサラマンダーが、またしても目に見えないような凄まじい速度で俺に迫ってくる。見えていないけど、近づいてくるのは分かっている。
そんな風に感じた直後、サラマンダーが目前に現れる。
そう認識した時には、既に特大のメイスがバットのように振り回されていた。

「ご、ばァ……ッ！？」

ズドン！　と、砲弾が直撃したかのような轟音が炸裂する。体が真っ二つに引き裂かれるような激しい痛みに襲われ、力を失った俺はゴロゴロと、吹き飛ばされて地面を転がっていた。
く、そ……意識が。で、でも……ここで諦めるわけにはいかない。

「げっほ！　ごほ、お、ェァ……ッ！」

血の塊を吐きだしながら、どうにか俺は立ち上がった。
ハハ、こんなの……痛みなんか、毎度の事だから……慣れてんだよ。

「やはりタフだな。今のを喰らって立ち上がった者は貴様で5人目だ」

要は5人もバケモノがいるって事かよ……ちくしょう、強い。この男……まさかここまで強いとは思わなかった。なんだこの強さのインフレ……同じ赤の軍神とは言っても、この邪炎のサラマンダーは他の2人とは格が違う。なんで同じ赤の軍神で――ここまで差があるってんだよ。
だけど、俺だってな――策がなくなったわけじゃねえんだぞ。

全身の筋肉という筋肉に力を込め、バキバキと肉体が悲鳴を上げる。
激痛が走る一方で――全身に力がみなぎってくるような気がした。
「ほう、筋肉の出力を上げたか。体が丈夫だと化け物じみた事が出来て便利だな」
「うるせえよ……クソッタレがァァァあああああああああああああああッ！」
これが通じないならサラマンダーには勝てない。最後の賭けだ……全ては筋力１００％の俺の腕力に賭けてやる。そう思いながら、俺は一直線にサラマンダーの懐へ飛び込んだ。
速い、と感じたのか、サラマンダーの眉がぴくんと動いた。だが、それだけだ。驚きもしなければ動揺もしない。それでもお構いなしに俺は突っ込んで、勢いよく前へ跳躍する。
助走をつけて、さらに体重を全て乗せた、筋力１００％の渾身の一撃。
それを打ち込む為に顔面を捉え、硬く握り締めた五本の指を叩きこんだ。
しかし。
パシン！　という、一際大きな甲高い音が響いて――拳は受け止められてしまった。
サラマンダーの大きな平手が――全力全開の拳を受け止めていたのだ。
「――ッ！？」
信じられねえ……今まで、コイツで何人もの野郎をぶん殴ってき

たのに。大抵のヤツは１００％の拳を受けたら――完全に伸びちまったっていうのに。
だけどサラマンダーは違う。初めてだ……筋力１００％の拳を受け止められたのは。

「いいパンチだ。だが、私には――ハエが止まった程度にしか感じんぞ」

「……ッ！」

それが最後のセリフ。
自分の身長の2倍はあるであろう、巨大なメイスを持ったサラマンダーが、そのメイスを用いて恐るべき一撃を放ってくる。ズガンッ！　と、容赦なく腹部に突き刺さった。人体にぶつけるものとは思えない轟音が炸裂し、２０メートル以上は吹き飛ばされてしまった。
それだけでは済まされず、バゴン！　という何かを砕く音が炸裂したと同時に、背中にとんでもない激痛を覚えた。ようやく動きが止まり、それから数秒後に状況の確認を行う事が出来た。
公衆トイレ。
俺は２０メートル先にあったトイレの壁を突き破り――そこでようやく止まったのだ。

「あ……う、はぁ……ッ」

口の中に鉄の味が充満する。体の感覚が殆どない、痛みすら感じない。ハハッ、コイツは完全に神経が逝っちまったみたいだな。頭もクラクラして、意識がなんだか途切れそうだ……。
それでも、サラマンダーは徐々に近づいてくる。やばい……殺される……ッ！

「けーすけ様ああああああああああああああああああああああああッ！！」

——それは、突然にやってくる。

詳しい感触は神経がマヒしていてわからないものの、何かに掴まれた感じはした。優しく包容力のあるもので、サラマンダーの強烈の攻撃とは違う。何より今の声には聞き覚えがあった。

ビュオ！　という音が聞こえる……これは、風の音……なのか？

「おまえ……は……？」

薄れる意識の中、ぼやけてよくわからない目に——ぼんやりと人の姿が映った。

多分、女の子で……髪は桃色で……ああ、誰だかわかったよ。

誰だかわかったけど、俺の意識はその時点から——次第に失われていく。

第２３７話，聖人の力（後書き）

キャラクターＮｏ０１７
・近藤政信（こんどうまさのぶ）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆☆
防御力：☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆☆
魔力：☆☆☆
魔法（超能力）：☆☆
知力：☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆
総評：俊敏で、身体能力も高い戦闘のプロ。

第２３８話，敗北からの決起

ふん、逃してしまったか。

私――邪炎のサラマンダーは、藤島圭介を戦闘不能に陥れる事に成功。あと一歩の所で拘束できる予定だったのだが、とんだ邪魔が入ってしまったな。

しかも、今のはアルファ隊の木下暮葉か。一応、こちらのリストにも敵側の強力な魔術師として登録されている、アルファ隊に１０人しかいない特隊員の一人である事は把握済みだ。

なるほど、中々動きの速い小娘であった。おそらく、風の魔術を利用し、それで自分自身を加速させているのだろう。シルフなどと似たようなやり方だな。まあ、風の魔術を得意とする点では２人は共通しているな。しかし、不意を突いて標的を救出するとは、中々やり手ではないか。

しかし、恐れるような実力ではない。

魔力サーチをかけて追跡し、次に会った時には確実に仕留める。

我が前に立つ意味は――即ち死である。

「ふん、精々今は藤島圭介を救出できたと思って、安心しているがよい」

今日中には回収しにゆくぞ。敵側も私と同じ、聖人を送ってくるだろう。決して勝てない相手ではないだろうが、同じ聖人となればそれなりに戦いが長引く可能性がある。

最も、私も強者との戦闘は好きだが――今回は戦闘が主な任務ではないのだ。

「……ん？」

電話であるか。
相手はリリア……アリーナの唯一の友達の、あの小さな女の子の事だな。

「リリアか」

『サラマンダー……だよね？』

「いかにも。私は邪炎のサラマンダー、赤の軍神の一人である」

『よかった……あ、あの、お仕事のほうはどうなった……？』

ふん、仕事の話であるか。おそらくリリアはアリーナから命令を受け、私に電話をかけてきたのであろう。まあよい、正直な事を言え何の問題もない。

「妨害が入った、標的はおそらく病院にいるだろう。私はこれからそこを襲撃する」

『……もしかして、手当たり次第病院を破壊するの？』

「まさか、私は無駄な殺生は嫌いだ。標的くらい、こちらで確認してから襲撃する」

魔力のサーチは比較的簡単な術式だ。素人の魔術師でも簡単に組めるもので、私くらいになれば東アジア全体から、魔力サーチで標的を発見する事が出来る。
簡単な作業なのだ。
だからこそ、無駄な殺人をしなくても——標的を制圧する事が可能なのだ。

『……なるべく穏便に、ね？』

「それは極秘の命令であるか。それともアリーナからの命令か？」

『私の独断専行……アリーナには内緒だよ？』

「そうか、心がけておこう。こちらも必要以上の破壊は望まない」

標的さえどうにかしてしまえばよいのだ。あくまで私の標的は藤島圭介、しかしそれ以外の関係のない一般市民が傷つく事は、私としても許せない。だからこそ、私はリリアの独断専行に協力する事にしたのである。アリーナの命令では——確実に一般市民も犠牲になるからな。

「間違いない。公園で暴れていたのはアイツだ」

「ちょっと待て……アイツ、この前テロリストを回収したヤツじゃないか？」

「動くな！　手を挙げろ！」

ふん、いきなり現れた制服の集団……日本の警察であるか。

「失礼、治安維持組織が出動してきた。リリア、これにて一旦電話を切るぞ」

『敵？　なるべく……殺さないでね』

「さあて、手加減はするが——生きるか死ぬかは彼らのタフさ次第

だ」

そこで私は携帯電話のボタンを押し、リリアとの通話を切った。
おそらく、次にリリアに電話をかけるのは事後報告の時であろう。
さあて、本格的な仕事へ移る前に――。
少しだけ、日本の警察とやらと遊んでやるとしようか。

――木下暮葉Ｓｉｄｅ――

夜中の９時ごろ、ここは千葉の病院。
古宇坂市内の病院を選ぶという手段もあったのですが、まず間違いなく、邪炎のサラマンダーは拙者達を探すために、病院という病院を探しまわるでしょう。つまり、古宇坂市の病院ではあまりにも不安要素がありすぎるのです。そこで、少し離れた千葉市の病院へ２人を搬送しました。
最も、いずれはここも見つかるでしょう。
単なる時間稼ぎにしかなりませんが……。

「木下、一応外周を見回ってきたけど、まだサラマンダーは来ないわ」

話をかけてきたのは、同僚のアイリス・オースティンさん。拙者と同じく、アルファ隊にたった１０人しかいない特隊員の一人なのです。
長い金髪に、赤と青のオッドアイという、なんだか不思議なお方なのです。

「よかったのです。その……けーすけ様と伊吹さんの容態は……？」

「医者の話によると、2人ともかなりの重傷だわ。特に国宗伊吹って女だっけ？　あの女は左腕は骨折しているし、脳震盪に全身の至る所の間接が脱臼、全身を打撲しているらしいわ。まっ、医者は今も油断できないって言ってたし、サラマンダーのクソッタレにやられた女は相当危険な状態よ」

伊吹さん……赤の軍神、しかも聖人のサラマンダーなんかと戦うから。けーすけ様と違って伊吹さんは普通の人間なのに……で、でも。拙者が悪いのですよね……。

拙者がけーすけ様の傍に居れば――伊吹さんもけーすけ様もあんな目に遭う事なんか。

そうだ、けーすけ様は？

けーすけ様はご無事なのでしょうか？

「それでは、けーすけ様のほうは……？」

「子孫のほうも重傷よ。出血多量で血が足りてねえし。まっ、輸血すれば問題ないらしいけど、他にも全身打撲や脳震盪。骨は折れてないみたいだけど、間接も右肩と左足首の脱臼。それから内臓も少し危険な状態らしいけど……でもまあ、子孫の場合回復速度も速いのでしょう？」

「はい、けーすけ様はその、大怪我しても翌日には治っている人なので……」

「だったら子孫のほうは大丈夫だわ。やっぱり問題は女のほうね……」

どう考えても伊吹さんのほうが、見た目も重傷そうでしたしね…
…伊吹さん、もう少しで体育祭が始まるのに。この事を知ったら、皆さんテンションが下がってしまうかもなのです。
けーすけ様だって、とってもとっても心配なのです……。
いくら回復速度が速いとは言え、そんなに早く回復する保証はないのです。

「木下、気持ちはわかるわ。でも……今はしょぼくれてる場合じゃないと思う」

「……わかっているのです。邪炎のサラマンダーを倒さない限りは――」

「わかってるじゃないの。そうよ、あのクソッタレを倒さない限りは平和は訪れない」

拙者達がしょぼくれている暇なんてないのです。今、ここで泣こうが怒ろうが、いずれにしてもそのうち邪炎のサラマンダーは襲撃してきます。
しかし、病院には沢山の患者さんと――けーすけ様と伊吹さんがいるのです。
２人は重傷者。安静にしていても危険な状態だというのに、戦いの余波に巻き込まれてしまっては本当に命を落としかねない。絶対に２人を巻き込むわけにはいかないのです。
２人を巻き込まず、こちらから先制攻撃を仕掛ける。
ただでさえ不利なのに、防衛戦では余計にこちらが不利になります。
ですので、不意を突いて――サラマンダーを怯ませる必要があるのです。

「全力を尽くしましょう――アイリスさん」

「ええ、アルファ隊始まって以来の大作戦ね」

「確か、日本支部の隊員全員が集まっているのですよね？」

「隊長が苦労したらしいわ。殆どが一日以内にここに集結したわ」

「やれるでしょうか……総力を挙げてぶつかって――サラマンダーに勝てるでしょうか？」

「さあ……でも、やってみなきゃ――わからないわね」

これから始まるのは試合でもなんでもありません。

ただの殺し合い。負ければ死ぬ――ルール無用の戦いなのです。

拙者達アルファ隊は、その殺し合いを――聖人サラマンダーに挑んでやります。

勝ってみせます……勝って、けーすけ様の仇を討ってやるのです！

第２３９話，邪炎のサラマンダー

拙者――木下暮葉は、他のアルファ隊総勢２０人ほどの人達と共に、千葉市内にある火力発電所付近の広い空き地に集合していました。なんというか、人気の少ない場所がここ以外に思い浮かばなかったのです。発電所が戦闘の余波を受けて壊れちゃいそうですが……。

でも、ここの敷地は広いのです。

少しくらい派手に戦っちゃっても、多分大丈夫だと思うのです。

「木下、邪炎のサラマンダーの情報が少しだけわかったわ」

「ほ、本当ですか、アイリスさん！？」

「誰だったかしら？　アマデーオって元サヴィウトのクソッタレが掴まっていたじゃない。あの人と電話が繋がって、ソイツが少しだけサラマンダーの事を知っていたわ」

ここにきてアマデーオの名前が出てくるとは、あの人……どうやら、サヴィエトに身を置かなければ生きていけない状況だったらしいのですが、今頃何をやっているのでしょうか。

少しだけ気になるのです。でも、生きてはいるみたいなのですね。

「邪炎のサラマンダー……ですか」

「ウェセックス出身の傭兵で、昔は神聖教で十字軍を率いていたらしいわ」

「何故、神に仕える者がサヴィエトなんかに……？」

「何かしらの事情があるのでしょう。サヴィエトには訳ありが多いのよ」

「訳あり、なのですか……」

世の中には色々な人がいますが、追いつめられると進む道は限られてきます。多くの人が似たような行動を選択しますが、魔法使いの場合はサヴィエト入りする事が、それなのでしょうね。

「それで、彼は数多（あまた）の戦歴があるわ。ただ、民間人への被害を最小限にしようとしたり、傷ついた同僚と同じ目線から向きあったり……完全に血も涙もない人ってわけじゃないらしいわ」

「……ひょっとして、サラマンダーは善人なのですか？」

「善人、なんて表現はできねぇーわね。甘いクソ野郎ってのが妥当な評価かしら？」

それでも、戦場という気を抜けない場所にいながら、邪炎のサラマンダーという人物は善行を行うほどの余裕があるのです。それでいて、数々の伝説を残しています。

全く……化け物なのです。

けーすけ様も伊吹さんも……どうしてサラマンダーと戦っちゃったのですか……。

「と、ところでアイリスさん。その、アマデーオは他に何か言っていませんでした？」

「他に？」

「はい！　その、サラマンダーに弱点は期待しないのですが……その、戦闘スタイルです。武器とか流派とか……」

拙者がそう問うと、アイリスさんは瞳を閉じて、深く考え込んでしまったのです。

はわわ……ど、どうしましょう。

もしかして、一番肝心な事を聞いていなかったのでしょうか？

「……そういえばこんな事を言っていたわ。アマデーオのクソッタレが」

「ど、どんな事……なのですか？」

「アマデーオは高速移動、局地的な大爆発など、単純ながら脅威的な魔法を使ってくるわ」

「他にも、技は秘めていそうなのですね……」

「ええ、そこまでならサラマンダー以下の一般魔法使いでも、出来るヤツはきっといるわ」

高速移動なら拙者でも出来るのです。風の力を使えば、普通に走るよりも速い速度で移動する事はできます。局地的な大爆発ですと、無属性、あるいは炎系のの魔法使いが得意なのです。

ですが、その二つの力を同時に使える魔法使いは希少なのです。

「それでは、邪炎のサラマンダーは……」

「彼の名前、サラマンダーについて考えてみようかしら」

「サラマンダー……確か、火の精霊の事……なのですよね？」

「ええ、その名の通り――サラマンダーは炎系の魔法を得意とする魔法使いなのです」

「炎系の魔法なら、大爆発の使用は理解できますが……」

ですが、炎系の魔法で高速移動なんて出来るのでしょうか。燃やす、爆発させる、などの単純作業は誰にだって出来ます。ですが……高速移動は常識的に考えると不可能なのです。

もちろん科学的根拠はありませんよ。これは魔法、非科学なのですから。

にしても、炎系の魔法で高速移動は普通――無理な話なのです。

「その爆発がキーポイントだわ」

「……えっ？」

「爆発の衝撃を利用して――サラマンダーは高速移動を可能にしているの」

拙者が呆気にとられていたその時、アイリスさんはとんでもない事を言いだしました。

爆発の衝撃を利用って……。

「で、でも！　そんな事をすれば普通は死んでしまうのです！　衝撃波ですよ？　普通、爆発の衝撃波を喰らえば死んでしまうか、死なないにしても重傷は確実なのです！」

「アイリスだって信じがたいと思ったわ。でも……事実らしいのよ。彼はね、その衝撃波に耐える屈強な肉体を持っているわ。それが聖人ってヤツらしいから……」

聖人……ですか、そういえばリーリヤ隊長も聖人の一人らしいのですが、ひょっとしてリーリヤ隊長ならサラマンダーに勝てるのでは……？

って、あの人は滅多な事では戦場に現れないのです……期待するだけ無駄なのです。

「……どうすれば、サラマンダーに勝てるのでしょうね」

「正攻法では１００人でも２００人でも勝ち目がないわね。でも――木下」

「な、なんでしょうか……？」

「アイリスは開発したのよ。聖人に打ち勝つ――新しい魔法を」

思わず目と口を見開いてしまった今の一言。

聖人って……あの、化け物みたいな強さを誇る人に打ち勝つ……新たな魔法？

「ど、どんな魔法なのですか！？」

「口で説明するのは面倒ね。ただ、文字（ルーン）をテキトーにいじっていたら偶然出来たわ」

「偶然の産物……なのですか？」

「心配しないで。術式はちゃんと脳にも書物にも記憶しているわ」

となると、拙者達がサラマンダーに勝つ方法は一つみたいなのですね。拙者達がうまくサラマンダーを引きつけておいて、隙を突いてアイリスさんが――新たな魔法を放つ。

対聖人用の新魔法。効果までは不明なのですが……期待してみる価値はありそうです。

――藤島圭介Ｓｉｄｅ――

う、く……。

瞼がぴくぴくと動いている……痙攣（けいれん）かな、と思ったけど……はは、どうやら自分の意思で動いているみたいだ。少しだけ、体が回復してきたみたいだな。

それより、目が覚めて思ったけど……この暗い空間は一体何処なんだ。

「……そうか、俺……負けたんだっけ……？」

ここはサヴィエトの幽閉施設……なのかもしれないな。あーあ、調子に乗ってサラマンダーが売ってきた喧嘩を買っちまったが、伊吹を巻き込んで俺もボコボコにされてしまった。最低だ、俺は幼馴染を守る事も、サヴィエトには捕らわれないという――暮葉との約束も守れなかった。

「……あれ、葵？」

何故か、俺が寝ていた場所……多分ベットと思われる所の隣に机があって、椅子に座っていたと思われる葵が伏せている。寝ているのだろうか……ていうか、葵がなんでここに？

葵まで……サヴィエトの捕縛対象だったのだろうか。そういえば、以前誠和大学で葵も連れ去られていたし、ひょっとしたら……葵も連中のリストに乗っているのかな。

ただ、ここでまた一つ――疑問が沸いてきたのだ。

俺達がもし、サヴィエトに捕縛されているんだとしたら……なんで、縛られていない。どうして俺も葵も身動きが自由に取れる状態なのだろうか。

まあ、俺は点滴が繋がっているから……。

「……っ」

ちょっと待て、なんで点滴なんかが繋がっている。

もしサヴィエトに捕らわれたのだとしたら、治療なんてされないハズだろうに……。

「もしかして、ここって……っ」

カーテンは閉まっている……が、隙間から街灯りらしきものが見えている。俺の横には台の横に乗っかっている旧式のテレビ。さらにベッドには『藤島圭介様』という文字。

ちょっと待て……ここって、どう見ても病院じゃねえか。

「戦いは……アイツは？」

邪炎のサラマンダー。

伊吹。

アルファ隊。
暮葉。
色々な単語が頭に浮かんでくる。脳が正常に動き始めたらしいな……今頃、邪炎のサラマンダーは何をしているのだろうか。伊吹は結局どうなってしまったのだろうか……？

「……悪い、葵」

言いながら、ブチッ！　と、点滴を抜く。一瞬鋭い痛みを感じたものの、全身に響いている鈍い痛みよりは遥かにマシだろう。というか、痛みを感じるって事は神経も元に戻ったみたいだ。
体は……う、ぐっ、痛ぇ……だけど、全く動かせないってわけではねえな。少なくとも手すり代わりのものさえあれば、自走は可能だ。歩いているうちに俺の体質もあるだろうし、どうせ次第に回復していくことだろう。トラックに轢かれても平気なんだ……どうって事ねえよ、これくらい。

「邪炎の……サラマンダーか」

恐ろしい化け物だった。筋力１００％の力が全く通じないんだもんな。増してや、今の俺は満身創痍なんだぜ。絶対勝てないのは分かってんだ……。
でも、やらなきゃいけないんだよ……。

「待っていろ、暮葉」

多分、暮葉はサラマンダーの所へ向かっている。ようやく思い出したけど、俺を助けたのは多分暮葉だろう。暮葉はアルファ隊の仲間と共に――サラマンダーと戦っているハズだ。
暮葉を助けねえと。伊吹の仇をとってやらねえと……サラマンダ

ーを殴らねえと、俺の気が済まねえってんだよ。俺は全身を襲う激痛に耐えながら、なんとかベットから起きあがる。そのままフラフラとした足取りで、壁に手を突くことでようやくバランスを保った。

「今、助けに行く……俺がサラマンダーを……倒してやるッ」

勝てるわけのない戦い。

それでも、俺は挑みたかった。

俺のプライドが敗北を許せないし、なにより――守りたいものがあったから。

第２４０話，総力を挙げた激戦

私――邪炎のサラマンダーは、現在古宇坂を出て千葉市という場所へ来ている。古宇坂市において警察や自衛隊と交戦。最初に現れた警察は拳銃や機関拳銃で身を固めており、防弾性の高い盾まで構えて連中もやってきたのだが、戦闘の結果はなんとも無残なものであった。

後に現れた自衛隊もシルフの時とは違い、何処かの駐屯地から１世代か１．５世代くらい前の戦車に最新式の歩兵装備など、そこそこ充実した装備で私に向かってきたというものの、それでも１時間もせずに彼らは撤退を初めてしまったのだ。

最も私を相手にし、撤退という選択肢を選んだのは正しい事なのである。

現代兵器というのは、やたらに金のかかるものになってしまったらしい。自衛隊の上層部か政府の人間かは知らぬが、このままでは軍備や人員の無駄遣いと判断したのであろう。

そう上層部が判断するほど、あまりにも一方的な勝敗であったが……。

「案外、馬鹿ではないのだな」

手際のいい撤退である。専守防衛という……言ってしまえば、本土決戦に徹する組織なだけにそこらへんは上手であった。同じ軍人として素直に感銘を受け、称賛しようではないか。

さて……そろそろ藤島圭介を探すとしようか。

ここは千葉市の火力発電所付近であるな……ここら辺で魔力のサーチを行い、おそらくこのあたりの病院にいるであろう、藤島圭介の居場所を突き止めてやろう。

しかし、その時後方から――何者かの気配を感じた。

「……その必要はなかったのか？」

適当に痛めつけてはおいたが、藤島圭介も馬鹿であるな。先程の戦闘で、私と藤島圭介には圧倒的な差があると証明したハズなのだが……まさか、まだ私と戦うつもりであるか。

それとも、日本人らしく土下座でもしにきたのであるか？

「まあよい、5秒以内で出てこい。傷が痛むのであれば手を貸そう」

そうは言ったものの、藤島圭介は全く姿を現さない……いや、待て。気配は複数。それも全員藤島圭介のものとは違うではないか。おまけに魔力のサーチをかけてみた結果、どれも藤島圭介を遥かに超える魔力を持っている。これはまさか、アルファ隊ではないのだろうか？

「なるほど、そちらは私の行動に不満を持っているのであるな？」

確か、アルファ隊の任務は藤島圭介の守護であったか。面倒であるな……私にはやるべき事が山積していると言うのに、こうも戦いが続くのは流石に面倒と感じるのである。

まあよい、来るなら来るがよい……すぐにメイスで潰してやるぞ。

そう言いたかったのであるが、それを言う前に、

ドバン！　と。

何者かが不意に水と思われる魔術を行使してきたのだ。

不意に放たれた水は複数に分裂した、ブーメランのように私へと迫ってくる。その水で人間の皮膚を切刻もうという魔術であるか。

なるほど、流石はアルファ隊である。どんなに小さな少女であって

もそこそこの魔術は使えるのだな。そうでなければ面白くないのだ。
しかし、その一撃は無駄である。
私は咄嗟に右の手のひらを突き出し、轟！　と言う凄まじい音を立てて、オレンジ色に輝きながらあらゆる物を破壊し、焼きつくす炎の柱を繰り出す。
水のブーメランは全て、私の火炎旋風に掻き消されたのである。

「そ、そんな！？　ミネットの魔法が効かないんだよ！？」

「属性的には有利なハズなのに……と、とにかく下がっていて欲しいのです！」

「あ……き、木下先輩っ！」

続いて飛び出してきたのは……ほう、木下暮葉。アルファ隊に１０人しかいないない、特隊員の１人であるか。詳しい事はわからぬのであるが、どうやら魔法少女らしかぬ刀使いであるか。
ならば、私も魔術は行使しないのである。

「ッ！」

瞬間。
ガッキィィ！　と、金属と金属がぶつかり合って、火花が激しく散りばめた。私のメイスと日本刀が鍔迫り合いをしているのだが、変であるな。本来であれば私のメイスの打撃に、日本刀が耐えられるハズがないのである。強度的にどれほどの達人でも、これほどの物を受止めるのは無理だ。
使用者以前に、使用している武器そのものが持たないのである。

「その刀は……」

「一期一振は簡単に折れないのですよ……何重にも強化術式を張り巡らせているのです」

険しい顔をしながら、彼女は私の殴打を必死に受け止めている。強化術式。そのような魔術は何処にでもあるものだが、極めれば凄いものである。アルファ隊には面白い隊員がいるのであるな。武器がソレであれば木下とも多少は楽しめそうである。

「折角リリーさんに頼んで強化してもらった、一刀両断の必殺刀（ひっさつとう）なのです。その威力を味わうがいいのです――聖人（ばけもの）！」

「野蛮であるな。不意打ちをし掛けてきた上に、強化した刀を使ってくるとは」

「貴方の方が野蛮なのです！　よくも……よくも、けーすけ様を……ッ！」

藤島圭介の名を呟き終えた瞬間である。木下は咄嗟に後ろへ１０メートルほど跳躍し、そこから上空３０メートル程の高さまで、殆ど一気に跳躍したのである。私はそんな木下を逃さず、木下を撲殺する為に爆発の衝撃波を用いて、音速を超える速度で木下に迫った。

私はそこでメイスを横薙ぎに振り回し、木下など真っ二つにしようと試みた……が、どういうわけであろうか。木下は半歩遅れて反応し、再び刀でメイスによる打撃を相殺する。

「ッ！」

そこで、後方から木下の仲間と思われる連中が放った、魔術の大軍が押し寄せてきた事に私は気付いたのだ。ここでメイスを振り回

せば、隙となり、木下から斬撃を喰らう羽目になる。
ならばと思い、ズォ！　と、私は右方向へ爆発による高速移動を実行する。

「……何？」

「……ッ！」

アルファ隊の連中が複数待機していた事も、複数の魔術が放たれた事も、その中に大変珍しい術式が合った事も、私は決して驚きはしなかったが……ただ一つ、驚くべき事がある。
そう、それは――木下が私の速度についてくる事だ。
木下は特隊員とは言え、単なる人間……聖人である私の速度に追いつけるハズがない。
これは木下の実力か……それとも、小細工によるものなのか？

「天神無双木下流“天下統一”！」

「……ッ！？」

木下が一瞬だけ私を追い越し、眼前で止まって私を停止させた瞬間――そのような意味不明な事を叫んだのである。それは宣言、そう――貴様を殺すと言う殺害宣言であった。
ドガバァッ！　と、恐らく音速は超えているであろう刀の動きに合わせ、それによって生まれた鋭い風圧が、刀以上の速度で私の体を切刻もうとしている。
なるほど、確かに必殺奥義である……だが、

「――遅いのである」

ブオォッ！　と私はメイスを一度振り下ろしただけで、木下の攻撃は掻き消される。メイスを振り下ろした事による衝撃波が、木下の風の斬撃を無効化しているのだ。

「ッ！？」

「驚くのも無理はない。貴様の一撃は見事であった」

「そんな……必殺の奥義が……っ」

「確かにそれは、一般の魔術師程度あれば簡単に敵を殺せるであろう」

しかし、木下は最も重要な事を忘れているのだ。
そう、私と戦うにおいて――最も忘れてはならない事を。

「だが、私は聖人だ。一般の魔術師とは訳が違うのだ」

「……ええ、わかっているのです。拙者達と貴方には天と地ほどの差がある事くらい」

「天と地では生ぬるい。差は間違いなくそれ以上である」

「確かに……そうかもしれません。ですか……」

その時。
ガクン！！　と、私の動きは何かに封じられたかのように停止した。

「ぐ……ッ！？」

体が動かない……どういう原理であるか。この魔術は見た事も聞いた事もない、全く新種の魔術ではないか。おかげでどういう術式であるか理解が追いつかない。

何故、私の動きが強制的に停止されているのであるか？

「……あれは？」

ふと下を見てみると、複数のアルファ隊の中の一人。緑色のワンピースを着ていて、金髪の赤と青のオッドアイの女が――剣の刃先をこちらへ向けている。それ自体は脅威ではないのだが、驚くべき事は彼女の前方にいる、長髪で髭を生やした――剣を構えた筋肉質の男だ。

何処かで見た事がある。

以前、こちらの世界の魔術について調べていた時、何かで見た神話の神だ。

「我が神々の中で、最も美しい眉目秀麗な豊穣の神。それは王家の始まりにして、国家に安泰と豊かさをも齎（もたら）した平和の象徴。それは実り豊かな恵まれし王にして、妖精たちの支配者。その役は平和、手段は絶対の勝利。顕現（けんげん）せよ、この世に勝利と豊穣と平和を齎（もたら）せ――ユングヴィの幻想（サモン）――――――ッ！」

ユングヴィ……思い出した。北欧神話……豊穣の神、フレイの事であるか。しかしあのオッドアイの少女は何を企んでいる。とてもじゃないが、それで私を倒せるとは思えない。

「行け！　勝利の剣（つるぎ）を握りし戦士よ！」

「……ッ！？」

体が動かないというのに、剣を構えたフレイがこちらへ接近してくる。速い……まるで聖人級の速度であるぞ。アルファ隊に神の力の一部を扱える者がいるとは……誤算であった。

だが、それでも私を破れぬぞ。見た所、あの神の力はかなり劣化しているものだ。

オリジナルと比べて――大幅にパワーダウンしている。

ならばどうするか。決まっている――こちらも少しだけ力を見せるのみだ！

第２４０話，聖人流落

ユングヴィの幻想（サモン）。

それはアイリスこと、アイリス・オースティンが開発した幻影を召喚する術式。アイリスの出身地に古くから伝わる、北欧神話系の術式で、発動の為には塚状の儀式場を用意しなければならないという、超がつくほど面倒な制約があるわ。もちろん、塚が破壊されればそれでおしまい。

術式は崩壊してしまうのだけど……その為に、塚には隠蔽用術式や防御用術式を何重にもかけているわ。その際にちょこっとだけ文字（ルーン）の勉強をしたのだけど……。

偶然。

文字（ルーン）で遊んでいたら発見したのよ――対聖人用必殺魔法が。

それがコイツよ――。

「……何故だ!?」

邪炎のサラマンダーのクソッタレも、これには流石に驚きを隠せないみたいね。邪炎のサラマンダーの動きを封じているものは、道具でもなんでもないわ。道具でヤツの動きを封じれるなら、こんな苦労はしないもの。でも、所詮サラマンダーは聖人だわ。

聖人は信仰の模範となる信者に対して、教会から贈られる称号のこと。その信仰を得る為には一般人では考えられない程の修行を積み、努力に努力を重ねて聖人になったハズ。

なら、もしもその途中の過程を一時的に崩してしまえば？

もしも、聖人を一時的に並の魔法使いレベルに弱体化させてしまえば？

既存のルールを全て捨て、新たな法則を組み上げる。

それがアイリスが開発した対聖人用必殺術式――聖人流落（ホ・ハギアスレウーマ）。

「行け！　勝利の剣（つるぎ）を握りし戦士よ！」

「……ッ！？」

聖人としての能力を低下させ、その直後に魔法で仮想緊縛を行う。仮想緊縛は縄を用いずとも緊縛を可能とする、拘束に長けたアルファ隊で広まっている魔法の一つよ。

一般の魔法使いと同等レベルにまで、出力が低下しているサラマンダーに、仮想緊縛から逃れる術はないでしょうね。さあ、ユングヴィ――勝利の剣で彼を切刻んでしまいなさい。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』

豊穣を齎（もたら）す神が、それを害する炎の悪魔を排除すべく、この地球さえ揺るがす勢いの咆哮をあげている。確かな自信がある……行ける、今なら彼を無力化出来ると感心した。

だが、

「良い術式であったぞ」

信じられない事態が発生し、アイリスも他のアルファ隊の皆も凍り付いてしまった。

富士山さえ山腹から真っ二つにしてしまうような斬撃を、邪炎のサラマンダーという聖人は左手だけで受け止めてしまったのだ。信じられない怪力と根性だわ……なにより、私の聖人流落（ホ・ハギアスレウーマ）はまだ有効なハズだと言うのに、どうやって仮想緊縛から逃れたのかしら？

「残念であった。貴様達の術式はまさに完璧、私がただの聖人なら

ここで死んでいた」

邪炎のサラマンダーの口が歪む。

なに、あのクソッタレは……ただの聖人ってどういう意味かしら？

だってあなたは――その聖人じゃなかったのかしら？

「しかし、私は赤の軍神でもある。その意味が貴様らに分かるかね？」

ユングヴィの勝利の剣をバキッ！　と、親指と人差し指だけで文字通り、真っ二つに折ったサラマンダーの左手が動く。巨大なメイスを持つ右手も、アイリス達へ向けられた。

「もきゅ、まさか……精霊の力まで持っているのですか！？」

「貴様は木下であったか。正解だ……我が名の通り、私は精霊サラマンダーの力を持つ」

精霊の力と聖人の力、その二つを持つ者って……なにそれ、卑怯じゃない。

なるほど、そういうわけね……つまり邪炎のサラマンダーは、聖人としての力を封じられても精霊としての力までは――封じられていない。

「さあ、手土産だ……貴様ら全員にプレゼントしてやるぞ」

ドッパァ！　という轟音が、火力発電所の横にある広い空き地に響き渡る。閃光が発生した直後にユングヴィの体が吹き飛び、ゴキゴキバリバリメキメキという痛々しい音も響く。

って、こ……この音、アイリスの体から……ッ！？

「がっ、ァアあああああああああああッ！」

咄嗟に塚状の儀式場に張り巡らせるのと同じ感覚で、自分の体にも防護術式を張り巡らせたと言うのに、鉄道車両に轢かれたような、体をバラバラにしかねない衝撃が炸裂する。気付いた時にはアイリスは地面に倒れ、首から下が土や砂に埋もれ、身動きが満足にとれなくなっていた。

そんな中、ズシンズシンと、人外の怪獣のような足音が聞こえてくる。

サラマンダーだわ……歩く度に足の裏で爆発を起こしているのかしら？

「少しも楽しめなかったぞ。残念だが、アルファ隊もやはりこの程度であったか」

「く……ッ！」

「終わりだ。悔しければ、あの世から藤島圭介拘束を阻止してみるがよいぞ」

メイスを構え直しながらも、サラマンダーは腐った魚を見る冷たい視線を向けている。ヴィンペル隊だったらここでお終いね……彼らは元々拠点防衛用の組織。

大した秘密兵器は持っていないわ……でも、我がアルファ隊はこれで終わりではない。

「勝った気になるのが少し早いんじゃないかしら……邪炎のサラマンダーさん？」

「……なるほど、貴様の言うとおりである」

納得したのか、サラマンダーは瞼を閉じながら、静かにアイリスに背を向けた。

「感謝するがよい。貴様らの最終兵器がお出ましのようだぞ」

本当に最終兵器よね……。

サラマンダーのクソッタレを倒せそうなのは、実際あの人しかいないしね。

アイリス達では力不足でした……後はお願いします――隊長。

――リーリヤ・コスティリナＳｉｄｅ――

ギリギリ間に合ったみたいですね……。

リーリヤは周囲を見回します。木下暮葉、ミネット・ローラン、アイリス・オースティン……全員の名前を呼ぶと時間がかかりますが、とにかく皆さんはよく頑張りました。邪炎のサラマンダーという化け物を相手に、よくリーリヤが到着するまで持ち堪えたと思います。

ですので、後はお任せください……リーリヤが責任を持って彼を撃破しますので。

「やはり現れたか、聖人よ」

「一つ質問しますが、リーリヤの仲間に戦死者はいませんか？　と、

リーリヤは真剣な表情で貴方に問います」

「案ずるな。貴様の仲間はみねうちで終わらせてある」

「そうですか、と、リーリヤは少しだけ安心しました。しかし、貴方がリーリヤの大切な仲間達を滅茶苦茶にしてくれた事実に、変わりはありませんね……と、リーリヤは最も大事な事を確認します」

「愚問であるな。我が前に立つ敵に攻撃して、何が悪いと言うのだね？」

「それ自体に問題はありません。問題はその相手がリーリヤの仲間である事と、リーリヤは今の疑問に対する回答をします」

「そうか……」

初めてな気がしますね……邪炎のサラマンダーが口元を緩ませ、僅かに微笑み、満足そうに頷きました。まるで、リーリヤの登場を待っていたかのようですね。戦いが好きな傭兵の彼は、相手が聖人であればようやく一方的ないじめではなく――本物の戦いが出来ると思ったのでしょう。

確かに、聖人同士であれば――能力値に大差はないでしょうね。最も、サラマンダーはただの聖人ではありません。

精霊の力も持っている故、私のような単なる聖人では彼の力には及ばないでしょう。

ですが、

「一つだけ確認する、私はただの聖人ではない。貴様はただの聖人であるが、その差はどれほどのものだと思う？」

「承知の上で貴方に喧嘩を売っているのです……と、リーリヤは回答します」

「そうか、では――私と戦う覚悟はあるのだな？」

「はい、リーリヤもそう簡単にはやられませんので……と、リーリヤは答えます」

左手で首元の八端十字架型の魔装具に触れる。右手だけでジャラジャラと、先端に神々しく輝く黄金の装飾品が取り付けられた、聖杖ジェーズルを構える。よく見てみましょう、聖杖ジェーズルには装飾品のほかにも、極細のワイヤーが巻いてあります。

これも、私の得意な小細工の一つです。

私は聖人の力に加え、さらに上位の敵に対しては――小細工で差を埋める卑怯者です。

しかし時に、卑怯は素晴らしい戦力になります。

簡単には負けませんよ……邪炎のサラマンダー。

第２４０話，聖人流落（後書き）

キャラクターＮｏ００１８
・アマデーオ・ベルサーニ※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆
防御力：☆☆☆
体力：☆☆
魔力：☆☆☆☆☆☆
魔法（超能力）：☆☆☆☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆
地位：☆☆☆☆☆
総評：身体能力は低いが、魔法の天才であり、総合的な戦闘力は非常に高い。

第２４１話，聖人と聖人の死闘　前編

人類が扱う兵器の中で、最も強力なものとは一体なんでしょうか。

核兵器……確かにそれは強力なものです。威力ばかりではなく、攻撃された周囲は放射能汚染によって死の土地と化し、大変住みにくい場所となってしまうでしょう。リーリヤの祖国であるロジーナにだって、大陸を切り裂くようなものや、月の半分を破壊出来るようなものまであります。

ですが、どれも人類でも可能なレベルでしかありません。今、千葉という場所にある火力発電所の横の空き地に響く轟音は――人類の常識を遥かに超えるであろうものでしょう。

ぶつかり合うだけで大地が揺らぎ、東京湾の波が荒々しく立ち、火力発電所の建物がギシギシと歪んでいく。悲鳴に悲鳴、衝撃の余波と余波。全てが常識を遥かに超越しています。

リーリヤこと、リーリヤ・コスティナと邪炎のサラマンダー。

リーリヤ達、聖人の衝突が――この世を震撼させていました。

「おおぉあああッ！」

咆哮と共にサラマンダーの左の手のひらかな放たれたのは、爆発的な炎弾。直径１００メートルにもなる炎の弾は、まるで小惑星のようにこちらへ落下してきました。

まずいですね……このエネルギー。こちらの世界の文献を一度目に通しましたが、ツングースカ級の大爆発が起きるかもしれません。ここは火力発電所のすぐ隣。夜間とは言え、火力発電所には職員がいるかもしれません。さらに市街地も近いですし、炎弾を食い止めなければ……ッ！

「……ッ！」

聖杖ジェーズルに巻いてある極細のワイヤーが、儀式を行う時の魔法使いのように、空中で魔法陣のようなものを描く。魔法陣となったワイヤーから現れたのは水。ガブリエルと言ったほうが一般的なのでしょうが、リーリヤは正教会の人間なのでガウリイルと称しましょう。

ワイヤーで描かれた魔法陣の意味は西の方角、青色、水の元素。要は、魔法陣を介する事によってガウリイルの力の一部を――利用しているわけなのです。

バォォ！　という爆発音が炸裂し、激しい水流は爆発的な炎弾を相殺しました。

「我が炎弾を水で防ぐとは。貴様も中々の使い手であるな」

「そちらが精霊の力を使うのでしたら、こちらは神の力の一部を利用させていただきます、とリーリヤは宣言します」

「ふん、小細工師が」

「それはリーリヤにとって褒め言葉ですと、リーリヤは喜びを露わにします」

こうして語っている最中でも両者は激突、交差しています。リーリヤの聖杖と、サラマンダーのメイスがぶつかり合い、ガギィッ！　と言う金属音と同時に火花が散っている。強いて普通と違う所を上げるとすれば、その火花が落下しただけで――地上で小さな爆発が発生しています。

「武器から飛び散る火花にすら意味があるのですね……と、リーリヤは関心します」

「貴様の方こそ、その杖は奇妙であるな……何故メイスの衝撃を受けても折れん？」

「そうですね……」

そこで大きく跳ね上がり、一気に上空３００メートルの地点に到達しました。温度が低下しているのが肌で分かる。今頃、風を切る音がサラマンダーに響いた頃でしょう。

その高さから、リーリヤは聖杖を上から下へ、大きく振り下ろしました。杖の先端に取り付けられた装飾品が、杖本体とぶつかり合って、ガチャガチャと言う音を立てている。

そこに意味はあります。

「この聖杖はこういう代物だから、とリーリヤは質問に回答します」

次の瞬間、杖の前に先端が鋭く、サラマンダーを睨み付けるかのような、彩度の低い緑色の物体が現れました。その数４個、鉛筆のような形状のそれの全長は約７メートル。

今度は杖を前へ突き出すと、その物体はサラマンダー目がけて飛翔。

「ッ！？」

直後、周囲を包んだ閃光はおそらく、メイスとアレが衝突した時のものでしょう。

サラマンダーは今の一瞬でメイスを振り回し、彩度の低い緑色の、金属の杭から自分の身を守ったようですね。流石です、今のあれを防ぐとは……やはり一筋縄ではいきませんね。

しかも、リーリヤが杭を放った場所には既に、サラマンダーの姿

はありません。気付いた時にはリーリヤの前方、大体１０メートル程にいました。

今の一瞬で杭を防ぎ、ここまで飛び上がったのですね……。

決して崩れない厳つい顔。

しかし、その頬には一筋の切り傷が出来ており、僅かに血が滲み出ていました。

「やはり貴様も聖人であるな。同じアルファ隊でも、ここまで差があるものか」

頬から滲み出ている血を人差し指ですくい、指先でメイスに血液を塗る。単なる銀色だった巨大のメイスの一部に、僅かな血液が付着していました。

「今のは青銅であるか？」

「鋭いですね、とリーリヤは関心します」

「……ふん、ロジーナ正教会の術式であるな」

「貴方はレムリアの人間な上に、元々神聖教最大宗派のロマリア聖教の関係者……東方のこちらと西方の貴方は敵同士ですし、東方の魔法も研究もされていたみたいですね。と、リーリヤは関心してみます」

「当然だ、そちらの事は分かっているのだ」

双方はかつて一緒の巨大な宗教だったのですが、同じ宗教内でも対立が生じ、数百年前にロマリア聖教とロジーナ正教を含む正教会は分裂。以後、双方は独自の発展をしてきました。

リーリヤが持つ聖杖ジェズルも、正教会で発展した魔装具の一種です。元々聖杖ジェズルは権杖であったものが変形したもので、その意味は青銅の杭。

そう言えば、こちにの世界にも似たような話がありましたね。

最も、こちらの世界では杭ではなく、蛇だったような気がしますが……。

まあ、簡単に言えば――神話の再現を行うのが聖杖ジェズルの役目です。

そして、その力を引き出すのが使用者――つまりリーリヤというわけなのです。

「では、そろそろ本番に入りましょうか？　と、リーリヤは提案します」

「そうであるな。そろそろこちらも――体が温まってきた頃だ」

「それでは、ウォーミングアップを終了します、とリーリヤは宣言します」

「よろしい。今から行われるのは本物の戦い。死んでも文句ナシの決戦である」

バゴァオッ！　と言う爆発音が炸裂する。それは爆弾によるものではなく、サラマンダーの足の裏が魔法で爆発した音です。彼は、その衝撃波を用いて加速しているみたいですね。

「ッ！！」

メイスが振るわれても、リーリヤは聖杖ジェズルを構えるばかりで、その場から走ろうとも跳躍しようともしません。ただ、メイス

が寸前に来るタイミングを窺うばかりです。
そして、遂にチャンスは訪れました――。

「……何？」

左目だけを大きく開け、若干悔しそうな表情を浮かべて彼はそう呟きました。通常ならメイスの一撃で、リーリヤの体は遥か遠くへ突き飛ばされていたハズです。ところが、サラマンダーのメイスはリーリヤの体に直撃せず、寸前で動きが止まっていました。
サラマンダーが力を入れても動きません。何かに引っ掛かっているかのようです。

「ワイヤー、だと……ッ？」

「リーリヤは卑怯者です、とリーリヤは自虐します」

すると、今度は胸元の八端十字架が輝き始めました。それは眩しく、神々しく、太陽の光のようでもあります。リーリヤが装備している魔装具の一つでもある、八端十字架。
その意味を考えれば、その効果は容易にお分りかと思います。

「う、ぐ……ッ！？」

八端十字架が輝くと同時に、サラマンダーが左手を心臓部分に当て、突然聞いてもいられないような声を漏らし、苦しみ始めました。おそらく、内部から圧迫されるような感覚に陥り、うまく力が出せなくなっているハズでしょう。仕方ありません、そういう魔法を使いましたので。

「終わりです。と、リーリヤは勝利宣言します」

聖杖ジェズルは、巻いてあるワイヤーがメイスの動きを封じているので使えません。

最大の武器は敵の武器を封じ、最大の八端十字架（まそうぐ）は敵の動きを封じています。

ですが、それで手が尽きたわけではありません。リーリヤは邪炎のサラマンダーという化け物を相手にしているのです。今までのは小細工でしたし、小細工は確かに大切です。しかし、小細工だけで敵に勝てるという考えは甘い。あまりにも甘すぎるのです。

今からリーリヤは、聖人としての力。即ち本命を使います。

成功すれば、リーリヤはサラマンダーに勝てます。

その為にまず、襟元に左手を持っていき、服の中から一枚の白紙を取り出します。

「偉大なる智天使ヘルヴィム。その力の一部よ、顕現せよ！」

瞬間、背中が焼けて裂けるような激痛に襲われました。しかし、本当にリーリヤの背中が裂けたわけではなく、聖人としての力が最大に達したからです。

「その真っ赤な四枚の翼。貴様、智天使の力を……？」

「確かに言ったハズです。ウォーミングアップはここで終了……と、リーリヤは指摘します」

「それが貴様の真の力であるか……」

「ええ、それでもただの聖人ですよ……と、リーリヤはやけくそ気味に言い放ちます」

要は、リーリヤの体に天使の力を宿し、脅威的な魔力を得ただけです。それも、効果は一時的なものですし、完璧に天使になれたというわけでもありません。

しかし、これで実力は五分五分。

ようやく――サラマンダーと互角に渡り合えるレベルに達したのです。

「さあ、さっさと決着をつけましょう……と、リーリヤは貴方を急かします」

サラマンダーの武器は極細のワイヤーで封じてあります。ワイヤーは聖杖ジェズルに取り付けているものなので、ワイヤーを巻いている以上は使い物になりません。しかし、リーリヤの武器が聖杖ジェズルだけと言い切るのは、素人の考えでしょう……。

リーリヤは卑怯者。常に何処かに武器を隠し持っています。

さらに今、八端十字架の意味の一つ。斜めの線は足台。窒息死を防ぎ、罪人を足台で固定し続ける事によって、罪人を長い間苦しませると言うものがあります。

リーリヤはこれを真似て、シルフにも仕掛けた魔女殺しの術式を開発。

八端十字架の意味を参考に、特定の魔力を持つ罪人を圧迫します。決して、その罪人が死に至らない程度に……そう、死ぬ事が出来ず、しかも苦しいのです。今、サラマンダーにはこれを仕掛けてやりましたので、恐らく彼は今――通常よりもやや弱っているハズです。

武器を封じ、本人の能力を低下させ、その隙に――リーリヤは第2の武器で敵を叩く。

聖扇（せいせん）リピタ。

それを用いて――時間がないので一瞬で勝負を決めます。

第２４１話，聖人と聖人の死闘　前編（後書き）

キャラクターＮｏ００１９

・ラウル・ゲリエ※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆☆

防御力：☆☆☆☆☆

体力：☆☆☆☆

魔力：☆☆☆☆

魔法（超能力）：☆☆☆☆

知力：☆☆☆☆☆

敏捷性：☆☆☆☆

地位：☆☆☆☆

総評：総合的には優秀な魔術師だが、暮葉達には及ばないレベル。

第２４２話，聖人と聖人の死闘　後編

聖杖ジェーズルのワイヤー、魔女殺しの術式などの小細工。そして、智天使の力というリーリヤの聖人としての力の本命。動きを封じられた今、サラマンダーを倒す絶好のチャンスです。

リーリヤは聖杖ジェーズルから手を離すと、背中に生えている赤黒い翼を羽ばたかせる事によって大きく跳躍。直後、眼下に映ったのは点ほどの大きさに見えるサラマンダーの姿。リーリヤは空中で先程まで聖杖を持っていた右手を開き、同時に歯を食いしばりました。

右手が熱い、心臓が押し潰されそうなほど苦しい。

やはり、リーリヤが聖人とは言え……智天使の力は体への負担が大きいですね。

仕方ありません……早急に決着をつけましょう。

「……ふんっ！」

サラマンダーが勢いよくメイスを振り回すと、地上で大爆発が発生する。その爆発をこの目で確認したその時、既にサラマンダーはリーリヤの眼前まで飛び上がっていました。

サラマンダーの持つメイスには何も巻かれていない……予想通りですね。サラマンダーはワイヤーを無理やり引き千切ったみたいです。まあ、ワイヤーは無数の予備がありますし、こうなる事は既に計算済みでしたので、改めて驚くような事態ではないですね。

冷静に状況を判断し、全身に襲いかかる苦痛を我慢する。

手に焼けるような痛みを感じました。

ですが、直後。

新たなる武器が現れ、リーリヤはそれを右手で握り締めました。

それは扇状のものながら、杖にも見える黄金に輝く聖なる扇。あらゆる害虫から聖体を守ってきた儀式用の祭具。本来は武器ではないですが、リーリヤはこれを武器として用います。

それがリーリヤの――真の力ですから。

「ようやく本命を行使するのであるか」

「何度も言わせないでください。ここからが本番です、とリーリヤは再度忠告します」

その宣言の直後、リーリヤは聖扇リピタ。ヘルヴィムが描かれている、本来は奉神礼などに用いられる物が変形した魔装飾を横薙ぎに払い、直後、地を突くように上から振り下ろしました。

聖扇リピタが一度振られれば、黄金色に輝く残像が残りました。さらに上に横、下に斜めと聖扇リピタを払い、描かれた残像が八端十字架を描いていく。

「この手順を量産。父と子と聖神、リーリヤ・コスティリナの名により、アミン！」

「ッ！？」

サラマンダーが驚いたのも無理はないでしょう。先程描いた八端十字架が、サラマンダーを包囲するかのように、四方八方に分裂したのです。無数の八端十字架が逃げ道を塞ぐ。更にリーリヤは聖扇リピタをサラマンダーに向かって突き、その動きに合わせて八端十字架が動きました。

ズガアアァッ！　という壮絶的な、常識を遥かに超えた爆発音が炸裂。

衝撃波という常識を無視した、破壊と救いの波が四方八方へ伝播しました。

アスファルトは砕け、電柱はなぎ倒され、発電所の設備も一部が吹き飛ぶ。おそらく発電所の職員に被害はないとは思いますが、後始末が大変そうですね……。

「この程度であるか、ただの聖人よ」

「……ッ！？」

まさか……魔女殺しで体が弱っているハズですのに、今の一撃に耐えたですって？

化け物め。一撃必殺にならなかったのは非常にまずいですが……。

「まだ、負けたわけではありません、とリーリヤは敗北を否定します！」

赤黒い４枚の翼を羽ばたかせ、聖扇リピタをより強く握り締めながら、爆発的な速さでこちらに向かってくるサラマンダーの迎撃に向かいました。サラマンダーのメイスが振るわれ、断続的な爆発が空中で幾度となく発生。しかし、リーリヤは聖扇リピタを扇いで爆発から身を守りました。

リピタを扇ぎながら突き進み、同時に小細工の準備を進める。一瞬で、開いている左手を用いて服の裏から白い紙を取り出し、何も描かれていない紙を口に銜えます。

瞬間、紙に文字が浮かび――リーリヤの左方に木製の車輪が生まれました。

単なる車輪ではなく、車輪の中にもう一つ、車輪が存在する神聖なる車輪。

左手でその車輪を軽く押すと、
バォォッ！　という爆発的な音と同時に、車輪がサラマンダーの顔面を捉えました。

「小細工は通じんぞ」

ゴバァッ！　という激突音が炸裂すると、車輪は単なる木片と化していました。
確かに、車輪自体はメイスの攻撃に耐える程、頑丈には作られていないですよ。
しかし――あくまで車輪は智天使の乗り物です。

「その余裕が隙になるのです――と、リーリヤは警告します！」

車輪を破壊するという動作を行っていた、その隙を突いてサラマンダーに接近し、リーリヤはサラマンダーに向かって聖扇リピタを振り下ろしました。
直後、複数の爆発音が炸裂する。
聖扇リピタの聖なる一撃と、サラマンダーの破壊の一撃が衝突、交差しました。
爆発の煽りを受けて、リーリヤとサラマンダーは大きく後ろへ仰け反る。リピタとメイスが衝突した時に、何らかの衝撃を受けたのでしょうか……口の中に血の味が充満しています。
いや、違います……防御の動作に忍ばせて攻撃も並行した……？

「……ッ」

手ごわい……ここまでの使い手でしたとは。
覚悟はしていましたが……想像以上の化け物ですね。

「大したものだな」

飛びかかって来てメイスを振り回し、リピタとメイスが激しくぶつかり合う中、武器と武器が衝突しあう金属音と、サラマンダーの爆音に紛れてサラマンダーの声が通る。

「我が攻撃を相殺し、私と互角以上の勝負が出来る……貴様の実力は本物だ」

だが、とサラマンダーは続け、

「――貴様の魔術、余程体に負荷がかかるらしいな」

その指摘に思わず、リーリヤは動きを一瞬だけ止めてしまいました。それではまずいと思って動き出した時には手遅れ。サラマンダーは数十もの炎弾を放ってきました。

「く……ッ！？」

聖扇リピタを扇ぐ事によって、瞬時に八端十字架を描きます。描かれた八端十字架とサラマンダーの炎弾が衝突し、鼓膜が破れそうなほどの轟音と、体を消し去りそうな衝撃が炸裂する。

しかし、リーリヤはその衝撃に耐えて――どうにかこの場を離脱しました。

「……ッ！」

地面への着地と同時に駆け出し、地面に落ちていた聖杖ジェーズルを回収。

右手に聖扇リピタ、左手に聖杖ジェーズル。

二つの聖なる武器を握り締め、上空から炎弾を放ってくるサラマンダーを睨みました。

「ふっ！」

サラマンダーが息を吐く音が響いてくる。上空にいるのに……すごい声ですね。しかしそれは安堵の息ではなく、単なる掛け声のようです。

頭上にオレンジ色の巨大な、円形の炎の塊が現れました。

おそらくリーリヤとの距離は上下数百メートル。

しかし、この位置にいながら――火傷しそうなほどの輻射熱（ふくしゃねつ）を感じました。

「封じなければ……ッ！　と、リーリヤは強い使命感を感じます！」

もしも、あの燃える星が衝突すれば、この国の広い範囲に被害が及ぶでしょう。その最悪の事態を避ける為にも、あの燃える小惑星を力でねじ伏せる必要があります。

その為に――右手で聖扇リピタを扇ぎ、左手で聖杖ジェーズルを振り回す。

「この手順を量産。父と子と聖神、リーリヤ・コスティリナの名により、アミン！」

右方と前方に無数の八端十字架。

左方と後方に無数の青銅の杭。

さらに、聖扇リピタと聖杖ジェーズルを交差させてました。

カキィ、という甲高い音が響き渡って、

「サラマンダァァあああああああああああああああああああ

あああああああッ！！」

生まれてから5回目くらいの絶叫をし、右方と前方に広がる八端十字架。左方と後方に広がる無数の青銅の杭。そして、交差した聖扇と聖杖から放たれる――黄金色の光線！

莫大なエネルギーと共に、それらは勢いよく燃え盛る小惑星へと向かった。

全力と全力の激突。

ピカァッ！　という真っ白い閃光と同時に――地球が大きく震えてしまいました。

大爆発という表現では現し切れない爆発。

世界の一大事の中、全身を砕くような衝撃を受け――――。

……。

――木下暮葉Ｓｉｄｅ――

な、にが……あったのでしょうか？

ふと気がつけば、拙者は瓦礫の中に埋まっていました。その瓦礫から脱出すべく、残り少ない魔力を使用し魔法を発動。風の力でどうにか瓦礫を吹き飛ばし、拙者は再び立ち上がりました。

しかし、眼前に広がっていた光景は……。

「こ、れは……一体……っ？」

大地が砕け、荒々しい岩肌が地面から顔を覗かせています。それだけではなく、確か先程まで健在だったハズの火力発電所が、単なる瓦礫と化してしまっていました。

発電所が……もきゅ、これじゃ日本の何処かで停電が起こっちゃいますよ……。

「……ッ！」

そして今更気付いた事……全身に感じている鋭い痛みと鈍い痛みが混ざった、苦痛以外の何者でもないひどい激痛。ようやく神経が元に戻ったのでしょう……体が痛み始めてのです。

ガシャン、という音が聞こえました。

激痛で持っていられなくなり、一期一振を片手から落としてしまった音なのです。

さらに拙者は――衝撃的な光景を目にしてしまいました。

「愚かである。私も無駄な殺生はしない。そこの発電所に職員が居ない事も確認済みだ。あの燃える星がここに衝突したとて、ここの土地が吹き飛ぶだけであり、決して市街地に被害が及ぶ事はない。アルファ隊の聖人よ……貴様は無駄に土地を守り、無駄に傷つき、無駄に戦力を低下させただけだ」

「う、く……っ！」

リーリヤ隊長が……あのリーリヤ隊長が――サラマンダーに押さえ気味なのです。

ロジーナ……いえ、レムリアでも１０本の指に入るリーリヤ隊長が、サラマンダーという恐ろしい傭兵上がりの魔法使いを相手に――実力で負けているのです。

サラマンダーは服が汚れ、顔や腕に小さな傷があるだけなのです

が……リーリヤ隊長は誰がどう見たって重傷なのです。口からは血の塊を吐きだし、頭からも大量の出血。ロジーナの民族衣装も血が滲んで赤黒く変色していました。ひどい怪我、と言わざるを得ないのです……。

「どうした、ただの聖人よ。まさか先程の衝撃で戦闘不能になったわけではあるまい」

「当たり前です……げほっ！　ごほっ！　リーリヤは……まだ負けてはいません、とリーリヤは敗北を更に否定します……ッ！」

しかし、リーリヤ隊長の眼光は決して衰えません。
その眼光が消えない限り、リーリヤ隊長はサラマンダーに立ち向かうのでしょう。
でも、拙者だって……こんな戦い、黙って見ていられないのです！

「まったく……隊長は、相変わらず一人で……無理するタイプよね……っ」

「……ッ！？　あ、アイリスさん！？」

ガタゴトという物音は、アイリスさんが瓦礫を掻き分ける音でした。血を流し、リーリヤ隊長と同じく苦しそうに歯を食いしばっていたアイリスさんが、拙者の横に並んだのです。

「ねぇ木下。あのクソッタレを倒すついでに……教えてあげないかしら？」

「教える……ですか？」

「ええ、アイリス達の莫迦な隊長に――救いの手というものをね」

その言葉を聞き、拙者はうん、と首を縦に振りました。

チャンスはきっとあります。そのチャンスを拙者達は決して逃しません。

リーリヤ隊長、待っていてください――今助けに行くのです！

第２４３話，強い意思

あたい――浅間あかりは、夜の千葉市をトボトボと歩いていた。
葵や木下先輩と遊んでいたのはいいんだけど、突然木下先輩はいなくなるし、圭介のヤツがいきなり入院しやがるし……んで、あたいは一足先に帰ろうとしたんだ。ところが、街中の警備が堅くなって人の流れが悪い上に、夜になるといきなり停電して電車が止まってしまったのだ。
だーちくしょう、結局兄貴に迎えに来てもらう羽目になるのかよ……。

「はぁ……」

今日はなんか最悪だ……圭介は入院しちまうしさ、何度も職務質問されるし……あたいが何かやったのかよ。電車まで止まって帰れないし……。
唯一の救いは、兄貴が車の運転免許を持っていた事だな。
とりあえず、兄貴が車を運転すれば古宇坂に帰る事は出来るしな。
ちなみに、葵のヤツは今日は圭介に付きっきりでいたいらしく、病院で宿泊するつもりらしい。

「おい、あっちすごいらしいぞ。発電所が爆発したらしいぜ？」

「マジかよ！？」

は、発電所が爆発って……一体何が起こってるんだよ。
兄貴はまだかよ……よくわからないけど、あたい怖いぞ。なんだかよくわからないけど早く千葉から立ち去りたいぞ……あ、兄貴。
早く来てくれよ……っ。

と、思ったその時だった。
不意に、前方の暗がりから人影からふらっと出てきた。なんなんだアイツ……まるで大怪我でもしているみたいな感じだぞ。頼りない足取りに、今にも倒れ込んでしまいそうで……その上挙動不審って何処の不審者だよ。色々危険な事になっているし、警察に突き出したほうがいいのか？
と、最初は思ったのだけど……何故か、ソイツの姿に見覚えがあったのだ。

「け、圭介！？」

ソイツの姿が街灯に照らされると、あたいは慌ててソイツに駆け寄った。
だってコイツ……圭介だから。入院しているハズなのに……そういえば、圭介はいつもの制服や時々着ている私服ではなく、薄い緑色の……病院のパジャマみたいなのを着ている。無理な動きで解けた包帯からは血が滲み出ていて、出血が多いんだろうか……顔色まで悪く見える。
目もおかしい……虚ろだし、左右で瞳孔の開き方が違う。
な、なんだよ……圭介、ボロボロだろ。
こんな状態で病院から脱走してきたの……？

「なにやってんだよ圭介！」

「……あ、あかり……か？」

苦しそうに、圭介は力が抜けた体を支えようと壁に寄り掛かる。
それでもズルズルと圭介は崩れ落ちていき、結局は地面に座り込んでしまった。

はぁ、はぁ、と苦しそうな荒々しい呼吸を続けている……。

「自分でやってる事わかってるのか！？　圭介は重傷者なんだぞ！？」

「……行か、ないと……っ」

「な、ど……何処に？」

圭介はあたいの話を聞くつもりはないのだろうか……突然動きだし、地べたと壁に手をついて立ちあがる。頼りない足取りで立ちあがり、辛うじてという感じで圭介は歩き始めた。

「暮葉……多分、戦ってる……助けに、行かねえと……っ」

断片的な言葉だけど……要は木下先輩が誰かと戦っているって事だろ。どうして圭介がここまで重傷を負ったのかまでは、医者も説明不能だって言っていたけど……多分だ。多分だけど、その木下先輩が戦っている相手に――圭介はボッコボコにされてしまったんだろ？

夏休みに入る前から薄々思っていたんだけど……圭介、やっぱり――、

「助けるって……その体で誰かと戦うつもりなのか！？　馬鹿だろ！　早く病院へ戻れよな！」

「……」

「言っとくけど、あたいは圭介が怪我をしているから言ってるんじゃないぞ」

「……っ？」

「あたいは圭介が何を無理して、そこまで命と身を削りながら、何の為に、どんなヤツと戦おうとしているのかわからない……だけどそんな強敵と戦うのは反対だ！」

圭介は黙ってあたいの言葉を聞いていた。

黙っていてくれるのは……好都合かもしれない。

あたいも勢いをつけて――圭介に叫ぶ事ができるから。

「そもそも、圭介が首を突っ込む必要があるのか？　違うだろっ！　そんな危ないヤツは、もっと専門的なヤツが相手をするべきだろ！　とにかく、圭介が自分から傷つく必要なんてないんだからな。もうすぐ兄貴が車を持ってくるから、その車に乗って病院へ戻れよな」

……あれ、何か違うぞ？

圭介を心配して言ったつもりなんだけど……なんか、これ……違う。

「あ、かり……」

「病院で待ってる葵の気持ちにもなってみろ。どんな気持ちで病院に泊りがけで、圭介の事を看病していると思ってるんだ！　なんでいっつもいっつも、圭介だけは一人で無理するんだよ！」

やっぱり……そうだったんだ。

あたい……あたいは――あたいの為にこんな事を言っているんだ。

人として最悪だぞ……こんな怪我人を目の前にしているというの

に、怪我人の心配じゃなくてあたいが安心するために。それだけの為にあんなセリフを叫んでいた……ホント、最悪だぞ。

あたいは……。

「……葵には悪いと思ってるよ」

「……えっ？」

「もちろんお前にも、伊吹にも、暮葉にも……自分でも今の行動は馬鹿げていると思う」

崩れ落ちそうであるにも拘わらず、圭介の体に明確な力が籠っていく。いや、正確には力なんて殆ど入っていないのだろう。ボロボロの体で力を入れるのは、多分無理だからな。

「けど、戦わなきゃいけないんだ……」

本当に力が入っているのは肉体じゃない――圭介の中身だぞ。

「誰の為なんかじゃねえよ……俺は、暮葉を助けたいから暮葉を助けるんだ。伊吹に重傷を負わせやがったヤツを殴りたいから、殴りに行く……そんな自分勝手な理由だけど、だからこそなんだ……俺はその為だったら――何度でも立ちあがってやる」

今の圭介は気力と精神力だけで動いている。圭介自身を支えている芯が、圭介の体に動けという無理な指令を出している。それが……満身創痍の圭介を動かしているんだ。

本来、あたいでも動きを封じられそうな状態なのに、逆にあたいが引きずられてしまいそうなほどのパワーを、圭介の強い信念が引き出しているんだ……。

「馬鹿にしか見えねえかもしれないけど……これが藤島圭介ってヤツなんだ」

異様に強い力で腕を動かされ、とうとうあたいは圭介を離してしまった。離さなければ自分が転んでしまうからだ。強い、今の圭介……重傷者なのに滅茶苦茶強い……ッ。

「だから俺は行く……事情は後で話すから、あかり……行かせてくれ」

「け、圭介……っ」

と、その時だった。

ギギィッ！　と、荒々しいスキール音が車道から響いてきた。

旧式の車が、ライトを照らし――駐車禁止の標識を気にせず路上に停車している。

「あかり！　ふ、藤島君……ッ！？」

人の目の前で堂々と違法駐車をした車の中から、背の高い金髪の男が降りてきた。

あたいの変態兄貴……やっと、ここまで来てくれんんだな……っ。

「あ、兄貴！？」

「よかった、あかり……君が無事なだけでもよかったよ。今、この街の発電所のほうで大きな爆発があったらしい。被害状況はまだ分かっていないけど……とにかく非常事態だ。早く家に帰ろう」

「あ、当たり前だっ！」

あたいだって、こんな場所には長居したくない。したくないんだけど……でも、どうしてもあたいにはこの街から――退く事が出来ない理由があるんだ。

「ふ、藤島君？」

圭介は地面を這って、弱々しい手つきで兄貴のズボンに掴まった。体は満身創痍という言葉がお似合いな程にまでボロボロだけど、それでも圭介の眼光の輝きは衰えない。強い意思と、強い信念が圭介自身を止めようとしなかった。そしてそれは――あたいでもきっと止められない。

「お願い、します……その、発電所には……暮葉が、います……」

「き、木下君が？」

「だから、お願いします……車で、俺を……発電所まで、運んで……くださいっ」

「な、何を言っているんだ君は！？　そんな体で……送ってくから君は病院へ戻るんだ！」

変態兄貴の反応はあたりまえのものだ。

あたいだって、さっきまではそうだったぞ……でも、なんでだろうな。圭介からあんな言葉を聞いちゃったら、いや……言葉だけならまだ、あたいは圭介を止める気でいただろう。でも、圭介から滲み出ているただならぬ気迫と、絶対に諦めないというその気持ちが、あたいを変えてしまった。

それに、あたいだって……木下先輩を助けたいぞっ。

「兄貴……ッ！　あたいからもお願いだ……発電所までいってくれ！」

「……あ、かり？」

「あかりまで……何を言って？　あそこは危険だ！」

言うと思ったよ……だったらあたいだって、強硬手段に出てやる。
覚悟しろ兄貴。兄貴だったら絶対に耐えられないんだからな。
そういうわけで、あたいは背伸びして兄貴の胸倉をガシリと握り締めて、

「いいから行けよな！　もし行かなかったら、これから兄貴の事を妖怪ロリコンマスターって呼ぶんだからな！」

「ひ、ひぃ！？　こ、興奮するけど勘弁して！？　わ、わかった……行くからヤメテェッ！」

ふっ、兄貴はチョロいな……そう思いながら、あたいは圭介のほうへ顔を向け、呆然としている圭介に向かって微笑みかけた。
圭介、あんたの道はちょっとだけ――あたいが開いてあげたんだからな。
さ、事情は後で圭介から聞くとして、行こう――木下先輩が居るハズの発電所へ。

……にしても、あたい……なんなんだろうな。
ひょっとしてまだ――藤島圭介（あの人）を諦められていないんだろうか……？

第２４３話，強い意思（後書き）

キャラクターＮｏ００２０
・風剣（ふうけん）のシルフ※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆☆
防御力：☆☆☆
体力：☆☆☆☆
魔力：☆☆☆☆☆☆☆☆
魔法（超能力）：☆☆☆☆☆☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆☆☆☆☆☆
総評：身体能力はやや低いが、精霊の力を持つだけに魔法の威力は凄まじい。

第２４４話，戦場へ行く男

浅間部長の運転は相変わらず荒々しく、時々体がズキッと痛んだが……まあ、正直あのまま歩いて行くよりは良かっただろう。あのままだと、場所もわからなかったしな。俺――藤島圭介は浅間部長が初めて役に立ったと思っていた。浅間部長……マジＧＪです。

さて、そろそろ爆発があったという火力発電所に到着する頃だ……ひょっとしたら事故による爆発かもしれないが、それでも俺は信じている。

ここにきっと――暮葉がいるであろう事を。

「ここまでで……いいかい？」

浅間部長が車を止め、額から汗を流して俺に聞いてきた。ここは……確かに、発電所の施設っぽいんだけど、みれは一体どうしたって言うんだろうか？

単なる空き地が――妙に荒れ果てていた。

「これ、は……？」

全身至る所に感じる痛みを我慢しながら、俺はドアを開けて車から降りてみる。車から降りても眼前に広がる景色に変化は無い……ここは戦場、荒れ果てた大地が広がっているだけだ。

そして、ゴアァッ！　と言う爆発音が炸裂し、生温かい風が吹きつけてきた。

やっはり……戦いは続いている。

暮葉はきっと――サラマンダーの野郎と戦っている。

「ありがとう……部長、あかり」

「い、いいけど……君はこれからどうするつもりだい？」

「圭介……あんた、ホントに……行くつもりか？」

浅間部長もあかりも乗り気ではないな。あかりは止める気はなさそうだけど、それでも俺が戦場に行くのは嫌みたいだ……って、そんなの当たり前か。

普通、こんな所に飛び込もうとするヤツがいたら……誰だって止めているだろう。

「行かなきゃいけないんだ……あそこには暮葉がいる」

「ほ、ほんとに……木下先輩がいるの……？」

「確証はねえけど、多分な……それに――暮葉と戦っているヤツには恨みがあるんだ」

「う、恨み……？」

邪炎のサラマンダー……てめえだけは絶対に許せねえ。

伊吹を痛めつけやがって、そして今――ソイツは暮葉を痛めつけているだろう。

「ま、待てよな！　圭介っ！」

怒りをまだ見えぬ敵に向けながら、歩き始めたその時だ。あかりが、強い眼差しを俺に向けてくるあかりが――俺が進むべき道に立ち塞がったのだ。

どういう事……なんだ。あかりは、俺を認めてくれたんじゃ……

ないのか？

「あかり……？」

「行く前に説明しろよな……その、圭介が一体、誰と戦っているのか……」

ああそっか、そういえば後で説明するって言ったよな。あかりとしては俺や暮葉が誰と戦っているのか、一刻も早く知りたいんだろう……だけど。

「悪い、今はそれを説明している場合じゃねえんだ」

「で、でも！　じゃないとあたい納得できないぞっ！？」

「心配するな……ちゃんと、戦いが終わったら説明するから……っ」

本当は説明する気なんてないんだけどな……。

あかりはただの一般人、こういう馬鹿げた事に関わるべきではないと思う。

だけど、この場を突破するには――嘘をつくしかなさそうだ。

「ま、待って――」

あかりを押し退け、戦場へ向かおうとした……その時であった。

ビガァッ！　という閃光と、一歩遅れて莫大な轟音が炸裂したのだ。衝撃波が体に激しくぶつかって来て、全身から嫌な音が響き渡る。一瞬で両足が地面から引き剥がされ、そのまま綿埃（わたぼこり）のように何十メートルも後方へ吹き飛ばされていく。

爆発の煽りを受け、俺の前に立っていたあかりまでこちらに転が

ってきた。

「ぐあああああああああああああああああああああああああああッ！！」

地面に叩きつけられ、俺は絶叫する。

ただでさえ背中に鈍い痛みを感じているというのに、夜空を眺めている俺の目には人影らしきものが映り、その人影は俺に照準を合わせているかのように、俺を目がけて落下してきた。

「が、は……ァッ！？」

続いて炸裂したのは、肉と肉が激しくぶつかり合う音。数十キロにも及ぶ肉の塊が高所から落下してきて、俺の身体に只ならぬ衝撃が加わる。骨がゴキゴキと嫌な音を立て、内臓がぐちゃりと押し潰されたような感覚に陥る。普段の俺ならどうって事はないが、今の状態じゃ流石に辛い。

しかし同時に、

小さな唇の、しかし柔らかな感触が痛みに紛れて、傷だらけに唇に感じた。

肉の重みの苦痛よりも、その柔らかく、熱い感触に俺は反応して……。

ドクン。

不意に心臓が高鳴った。

それだけではない。

直前までサラマンダーを倒す事を考えていたからなのだろうか、少女の唇と俺の唇が触れ合った事に体が反応し、血が……体の芯にじわっと集まっている。

これって、不幸なのか幸運なのか……？
まあ、面倒な事になっちまったんだろうけど……ある意味幸運なのかもしれない。

「うぅ……うにゃっ！？」

痛みで唸っていたあかりも、ようやく今の状況を理解してようである。唇と唇が触れ合っていた事実に気づくと、あかりは極度に赤面して飛び退いてしまった。
少し離れた所から、うるうるとした瞳でこちらを見ている……。

「け、けいしゅけぇ……っ？」

ぐはっ！
ちょ、なにその声……俺のアームストロング砲が反応しちまったじゃねえか。
ていうか、あかりとしちゃったぞ……日本語で接吻とか言うヤツを。
どないしよう、責任重大だけど……でも、まあいいか。

「ありがとう、あかり……おかげで――聖人と互角の勝負が出来そうだぜ」

「あ、ありがとうって……圭介、あたいの事……っ」

キスをしてしまったのはマズい事だが、本当にラッキーと言わざるを得ない。運よくサラマンダーを倒す事を考えていた俺自身も、ナイスタイミングだと褒めてやりたいぜ。
念じながらキスをした事により、俺に掛かっているリミッターが解除された。満身創痍で黙っているだけでも苦痛だったのに、今な

ら何でも出来そうな気がするぜ……。
この感じ、この有り余るパワーに湧いてくる闘志……いいぜ、これなら勝てる！

「よし、待ってろ――暮葉！」

そう叫びながら、俺は物凄い勢いでスターティングブロックすら使わず、大地を蹴って広大な空き地を走り始めた。ビュオッ！　という凄まじい風を感じる。すげえ……コイツは、ロケット並の推進力があるかもしれない。しかも、その風圧に耐えられるこの肉体……。
今の俺の身体能力……ひょっとして聖人クラスかもしれねえぜ。

「何度も言っているであろう――効かぬのである！」

再び莫大な轟音と、あらゆる物を破壊し尽くす衝撃波が体に吹きつける。今度は衝撃波を喰らっても吹き飛ばず、力むだけで衝撃波を受けても――その場から動きすらしなかった。

「あそこか……」

立っているのは……あの白と赤の服に筋肉質で、茶髪の厳つい顔の持ち主。爽やか中年と見せかけて実は硬派な傭兵である邪炎のサラマンダー。やっぱり立っていたか……アイツが倒れていない事はわかっていた。だから俺はここまで来たんだ、アイツを倒すためにな――。
サラマンダーの他には3人の少女が立っている。両手に武器を構えた金髪の……って、あの人って確かアルファ隊の……一度顔を合わせて程度だが、間違いない。
アルファ隊の隊長――リーリヤさんじゃねえか。

他には同じく金髪の小柄な子で……あの子は知らないな。
でも、もう一人……刀を構えた制服の女の子は……間違いねえ――暮葉だ。

「いい加減理解せよ、ただの聖人よ。たとえ仲間と共に戦った所で結果は変わらん。私は聖人の力に加え、赤の軍神として精霊の力を持つ――二重の意味で聖人であるのだ」

「わかっていますよ、と……リーリヤは不満をぶつけます」

「貴方、本当にクソ野郎ね。その程度の障害で――アイリス達が退くと思うのかしら？」

「拙者達は絶対に諦めないのです！」

「ふん、精々足掻くがよい……ッ！」

まずい、リーリヤさんも暮葉も緑色のワンピースの子も……みんなボロボロだ。サラマンダーにも多少傷が出来ているように見えるが、三人がかりでもその程度の怪我しか負わない。
化け物だ……サラマンダーは本物の化け物だな。
そんな化け物の攻撃を、満身創痍の女の子達が避けたり防ぎきれるわけがない。

まずいと思った俺。
しかし、頭で考えるよりも先に足が動き始めて――――、

「暮葉ァァァあああああああああああああああああああああああああああああああああッ！！」

咆哮と共に、飛び出した俺は硬く握り締めた右の拳を――メイスに向かって突き出す。

ドゴン！　と、拳と金属の塊が激突した。

拳にジンジンという激痛を感じたものの、それが致命傷にはならない。流石……解放された俺の力はサラマンダーにも通用する。メイスを拳だけで迎撃する事が出来たぜ……。

「……ッ！？」

少女達の肉体を吹き飛ばし、単なる肉塊にするハズであった一撃を、弱いと思っていた俺の拳一つで防がれたサラマンダー。多分、サラマンダーのプライドはズタズタであろう。相変わらずメイスを片手で握りながら、驚愕した様子で一歩ずつ後退りをしてゆく。

「けーすけ様ぁっ！」

「……あ、貴方は……？」

「ふ、藤島様……と、リーリヤは意外な人物の登場に驚愕します……っ」

続いて聞こえてきたのは少女達の声。それに反応した俺は、サラマンダーが攻撃してこない事を確認すると、口元を歪ませ、微笑みながら少女達のほうへ振り返った。

「遅くなっちまったな、みんな」

一言謝罪をいれると、柄を持ち替え、刀の刃先を後ろに向けた暮葉が駆け寄ってきた。

今の彼女は一言で現すなら、助けが来て喜んでいるわけではなく

――怒っている。

「け、けーすけ様っ！　なんで病院から抜けだしてきたのですかっ！？」

「決まってんだろ、そんな事」

えっ、と暮葉は言葉を漏らす。呆気にとられて、口をぽかんと開けている暮葉に、

「俺達は友達だろ」

本当はそれ以上になりたい。そんな気持ちが溢れ出てきて、今にも自分の意思に反してぽろっと言葉が出てしまいそうだ。それでも、そんな感情を必死に押し殺して、俺は言葉を続ける。

「お前がそうであるように、俺も友達の危機は見逃せねえんだよ」

それが理由だ。
そんな単純明快なことなんだ。
俺が――奴と戦う理由ってのは。

「今からお前を救ってやる……いや、お前だけじゃねえ。お前の仲間も……全ての人も！」

覚悟はとっくの昔に決まっている。
これは誰かが可哀想だからってわけじゃねえ……俺がやりたいからやっているんだ。

それが俺の――信じて突き進むべき道だからだ！

第２４４話，戦場へ行く男（後書き）

キャラクターＮｏ０２１
・三原寅彦（みはらとらひこ）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆
防御力：☆☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆☆
魔力：ナシ。
魔法（超能力）：ナシ。
知力：☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆☆☆
総評：天才的な頭脳と、脅威の身体能力を持つ天才科学者。

第２４５話，解放の力

火力発電所があったって、浅間部長からは聞いていたんだけど……本当にここに発電所があったとは思えないくらい、土地は荒廃していた。

ひどいもんだな……空襲後の都市の映像を見ているようだ。だけど、さっきの俺や伊吹とサラマンダーの戦いでは、海浜公園がここまで荒れる事はなかった。一体、この土地でどんな戦いが繰り広げられていたと言うのだろう。とにかく、死闘が展開されていた事に違いはねえ。

そして俺も――これから、サラマンダーと死闘を行おうとしていた。

「藤島圭介、分かっているのであるな……我が前に立つその意味が」

「さあな、だけどこれだけは言える……てめえは伊吹を傷つけた」

「伊吹……ふん、貴様の幼馴染か」

「そして今、てめえは暮葉の事も痛めつけていた」

「……つまり、何が言いたいのだ？」

「ああ、結局俺が言いてえのは一言――てめえだけは絶対に許せねえ」

ぴくん、とサラマンダーの体が反応する。

俺が言った事は、相手にとってはよっぽど意外な事だったのかもしれない。

歯向かう事すら馬鹿馬鹿しくなるような、圧倒的な力を持っているというのに、それでも怒りという感情をぶつけて――歯向かおうとする俺(バカ)が目の前にいるから。

そんな俺(バカ)は、サラマンダーがどう反応しようが止まらない。

「これがてめえのやり方だってんなら、てめえはここで俺が――必ずぶっ倒してやる！」

しかし、宣言を聞いてもサラマンダーの顔色は変わらない。むしろ、しょうもない事を聞いてしまった後のように、サラマンダーはつまらなそうにため息をついたのだ。

「愚かであるな……実力の差が理解できぬのか？」

「てめえが強いのは分かってる。正直、人の攻撃で死ぬかと思ったのは初めてだった」

「そうか、ならばなおさら――私に挑む理由(わけ)が理解できぬのだが？」

「実力差なんて関係ねえよ……俺はてめえがムカつく。だからてめえを殴るっつってんだよ」

感情ばかりの、ひょっとしたら虚勢だったかもしれない叫び声。

でも、いいんだ。

それでもいいんだ。俺にはまだ、サラマンダーと戦う気があるのだから。まだあの強敵を前に歯向かう勇気が残っているんだから、その事実さえあればそれでいいと思っているんだ。

サラマンダーは左手を腰に当て、ふぅ、とつまらにそうに息を吐いた。

「よいのであるな？」

「上等だっつってんだよ……聖人野郎（クソ）！」

「ふん……精々」

瞬間。

ズバァッ！　と、サラマンダーの足の裏で大爆発が発生し、

「足掻くがよいのである」

宣言と共に、轟！　と、火の海すら一瞬で吹き飛ばし、再び新たな火の海を生み出すような爆発を発生させたサラマンダーが、数十メートルもの距離をほんの一瞬で詰めてきやがった。

流石に胃の中から喉にかけて、ぞわりとして緊張が這い上がる。

それでも、力が解放されると視力も向上しているのか、サラマンダーのバカみたいな動きが――俺には見えていた。

「ッ！！」

ギリギリだった。

ものすごくギリギリで、判断が０．１秒でも遅れていればまずかった。でも、サラマンダーが横薙ぎに振り回した巨大なメイスを、俺は右へ跳躍する事でよけたのだ。

「おォォおおおおおおおおッ！」

そこで無意識に叫び、目を瞑って玉砕覚悟で右手を振り上げた。

どこを狙って拳を放っているのかすら理解できていない、そんなしょうもない拳である。サラマンダーのような化け物相手に、こんな

捨て身の素人ナックルが通じるとは、俺も思っていなかった。
思っていなかったのだが、

ぐしゃり、と。聞きたくもない嫌な音と同時に、拳に鈍い感触を覚える。
恐る恐る目を開けてみると、サラマンダーの体が大きく後ろへ仰け反っていた。

「……えっ？」

「う、ぐぉ……ッ」

殴れた……？
あのサラマンダーに右ストレートが入った……ハハッ、なんだよ。解放モードってやっぱりすごいじゃねえか。さっきの戦いじゃ拳は届かなかったし、仮に届いたとしても、サラマンダーの手のひらで受け止められてしまっていた。でも、今は違う……明らかに威力が向上している。
これなら――街の不良と時々やっていた喧嘩と変わりないぜ。

「ぐ、おおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

殴打を受けた衝撃で倒れ込んでいたサラマンダー。俺はそんな彼を見ると、仰向けに倒れていたサラマンダーの鳩尾を踏みつけようと、叫び声と共に大地を駆ける。

「ふ、んッ！」

しかし、
踏みつけようと飛び上がる前に、サラマンダーは倒れたままの状

態でメイスを振り、その攻撃を避けようと、俺は反射的に後退りしてしまった。
そうこうしている隙に、サラマンダーはメイスを突いて立ちあがったしまった。

「ここまで決定的な一撃を放ってくるヤツは久しぶりだ……その力、まさかとは思うが？」

「なんだと思ってんだよ、てめえは！」

「……ふん、そういう事か。やはり貴様もアレクサンドルの子孫……というわけか」

すると、サラマンダーは先程までメイスを右手だけで構えていたと言うのに、今度は左手も使って両方の手でメイスを構え始めた。
と言う事は……今までのアイツは本気じゃないってのか？

「ここからは遠慮はしないぞ。その身が聖人並の能力を誇る以上――容赦はせん」

「上等だ、クソッタレがァァあああああああああああああッ！」

サラマンダーの筋肉が膨れ上がったように見えたが、俺には関係なかった。とにかくサラマンダーをぶん殴り、気絶させてアルファ隊にでも身柄を突きつけてやりたい。病院送りにされた伊吹の仇を討ってやりたい。そんな事しか頭にないので――何も考えずに俺は突っ込んでいたのだ。
瞬間、ガギィィッ！　と。拳と金属が激突し合う莫大な音が炸裂する。
痛ぇ……骨が砕けたかもしれねぇ。で、でも……メイスは受け止

めたぜ。
　サラマンダーは初めて、明確に驚愕した表情を浮かべていた……
その直後、

「ぐ、ォォおおァあああああああああああああああッ！？」

　ガクン！　と。大きくサラマンダーが前へ動いた。それは自らの意思ではなく、何らかの衝撃で無理やり動かされ、体に激しい衝撃がかかっているかのようであった。拳をメイスに突いていた俺にも衝撃が伝わり、只ならぬ、じわじわとした痛みが伝わってきた。
　まずいと思って、咄嗟にメイスを体を離す。
　その時、俺の瞳に映ったものは――。

「藤島様、助太刀します、と。リーリヤは援軍として駆け付けます」

「き、さま……ッ？」

　リーリヤ隊長が黄金色に輝く扇状の武器と、前回彼女と会った時にも持っていた、先端にジャラジャラと大量の装飾が装着されている杖状の武器が、サラマンダーの背中を殴打していた。
　俺とは格の違う、聖人の一撃を直に受けたのだ。ダメージは大きいのだろう。

「天神無双木下流“天下統一”！」

「行け！　勝利の剣（つるぎ）を握りし戦士よ！」

　さらに、サラマンダーが怯んでいるその隙を突くかのように――2人……いや、正確には1人の武士ともう1人の召喚獣のようなものが、咆哮と共にサラマンダーへ斬りかかった。

暮葉の刀は音速は軽く超えているだろう……って、その動きが見えている俺も、十分普通じゃないとは思うけど。とにかく、暮葉の斬撃をサラマンダーはメイスで必死に防いでいる。そんな必死のサラマンダーへ、さらに金髪オッドアイの少女が操る幻影が――勝利の剣を振り下ろしてきた。

「……ッ！」

咄嗟にメイスから左手を離し、離した左手を勝利の剣へ伸ばす。サラマンダーもやはりとんでもない化け物で、暮葉の攻撃を防ぎながら――なんと勝利の剣を握り締めたのだ。

しかし、

「……ッ！？」

自分が間抜けである事に気付いた時には――既に時遅しと言ってもいいだろう。

暮葉の攻撃は終わったものの、右手に持つメイスは防御で精一杯。一方、左手は金髪オッドアイの少女が操る幻影の攻撃から、自分の身を守る為の防衛で精一杯。さらに、そんなサラマンダーへリーリヤ隊長が飛び込み、扇状の武器と杖状の武器を大きく振り回した。

サラマンダーは殆ど反射的に、メイスで二つの打撃を防いだ……しかし、やっぱりサラマンダーのほうが危機である事には変わりない。

「もきゅ――ッ！」

たたでさえ身動きが封じられていたサラマンダーに、さらなる脅威が襲いかかる。

暮葉が――サラマンダーの両足を拳で握り締めたのだ。

足を掴まれ、左右の手は開いておらず、その上――、

「ついでに言いますと、今の貴方はリーリヤの魔女殺しの術式で、並の聖人レベルにまで魔力の出力が低下しています、と。リーリヤは今の貴方の状況について説明します」

「ま、まさか……体の調子がおかしいと思っていたが……ッ！？」

「少々効果が出てくるのが遅かったと思っていますが……よしとしましょう。要するに、今の貴方はリーリヤ達では倒せなくても――押さえつける事くらいなら出来るのです、と。リーリヤは補足説明します」

何がなんだかよくわからないけど、要はリーリヤ隊長の魔法に助けられたって事だな。

初めて、サラマンダーの額に汗が流れている気がする。目で見た分かるほどに、聖人に加えて赤の軍神の力を持つ化け物が――小刻みに震えていた。

魔法で弱り、手段も自信も失った今のアイツは――怖い存在なんかじゃねえ。

「けーすけ様！　トドメは――けーすけ様が刺してください！」

その言葉と同時に、俺はゆっくりと歩き始める。

キッ、と前方を睨むと、サラマンダーが俺からの攻撃から逃れようと、必死に暮葉達を振り払おうとしているものの、リーリヤ隊長の力が強すぎるようだ。弱っている上に、油断できない2人に襲われている今――圧倒していたハズの聖人さえ振り払う事が出来ないでいる。

動けない事を確認し、俺はシュダッ！　と。

殆ど残っていない、カスのような力を振り絞って――、

「歯を食いしばれよ、聖人――――」

体を封じられ、身動きが全く取れないサラマンダーの顔が凍りついた。

炎とは全く反対の――青く、寒い、絶望の色が浮かんでいる。

自信のじの字すら消え失せたサラマンダーに、俺は獰猛（どうもう）に笑い、

「コイツが、伊吹をやってくれた――恨みだァァあああああああああああああッ！」

瞬間。

邪炎のサラマンダーの厳つい顔面に、俺の硬く握られた拳が突き刺さった。

ゴツゴツしている屈強な肉体も、解放された俺の力のせいなのか。

あるいは、リーリヤ隊長が彼の力を弱らせていたせいなのか、サラマンダーは勢いよく砂利の上を、手や足を乱暴に叩きつけられながらゴロゴロと転がっていた。

やがて、その動きは完全に止まり――邪炎のサラマンダーから力が失われた。

第２４６話，勝者の翌日

それは邪炎のサラマンダーを撃破した翌日の事。
邪炎のサラマンダーはアルファ隊に拘束された……らしいが、なんでもアルファ隊の不手際かサラマンダーが強すぎたのか、あの男……途中で拘束術式を破って逃げてしまったらしい。
どんな化け物だよ、と思いつつも……まっ、とりあえず一難は去った事だし、俺はようやく戻ってきた平穏な日々を満喫……はしていなかった。
それは何故かというと……、

「お兄ちゃん！　いくら回復が早いからって、入院直後に脱走ってどういう神経なの！？」

「あんた……結局、赤の軍神って何者なのよ？」

「それで、あの時けーすけ様は解放モードでしたが……誰とキスされたのですか？」

「はあ、結局俺は入院かよ……」

あたりまえだ、と突っ込んでくる暮葉達。
なにこれ……特に暮葉が怖いんですが。
さっきから誰とキスしたか迫ってくるんだけど、言えるかよそんな事……ここで言ったら葵や伊吹に殺されそうな気がするぜ。なにより、暮葉がさらに怒りそうで怖いよ。ただでさえ、伊吹には同じアルファ隊に所属する人の回復魔法をかけて、伊吹の怪我は殆ど完治状態だと言うのに。
それに対し、俺は何の処置も施されず、結局狭苦しい病室に殆ど

監禁状態。

「……まあいいわ、私ジュース買ってくるわ。あんたも何か飲む？」

「俺？　大岩井のりんごで」

「それじゃあ、拙者はサイダーでお願いします！」

「そっ、じゃあちょっくら行ってくるわね」

「あっ！　お姉ちゃん、葵も付き合うよ！」

別に回復魔法をかけられて、殆ど完治状態とは言え……まだ伊吹の容体が不安定である事には変わりない。ここ数日は絶対安静、少しでも暴れれば傷口が開いてしまうかもしれないらしい。

その為、葵は伊吹を気遣ったの行動か、伊吹に付き添う事にしたようだ。

伊吹も葵も部屋から出てしまったが……って事は、まさか暮葉と2人っきりか？

お、おい……これってチャンスじゃねえか？

今までタイミングがないか探っていたが、中々2人っきりになれなかったし……ひょっとしたら今日はイケるかもしれない。頑張れ男、藤島圭介。チャンスがあれば攻勢に出るんだ。

「はぁ……そういえば、結局サラマンダーって逃げちまったんだろ？」

「は、はいっ、その……リーリヤ隊長の魔女殺しの術式が解けてしまったみたいで……っ」

「って事は、またあの聖人（ばけもの）が襲撃してくんのか？」

「もきゅ……その可能性は大なのです……っ」

しまった、何となく当たり障りのない会話から初めて、そこから暮葉との２８２８イベント発動の予定だったのに……なんというか、暮葉が完全に落ち込んでしまった。

いやいや、でもサラマンダー脱走って暮葉のせいじゃないような……？

「う～ん……まあ、お前が気にする必要はないんじゃねえのか？」

「もきゅ？　な、何故……ですか？」

意外な事を聞いたかのように、暮葉の目が見開かれた。

「別にさ、サラマンダーが逃げたのはお前のせいじゃないんだろ？　確かにアルファ隊って組織全体では反省すべき事かもしけねえけど、お前個人がそこまで深く気にする必要はないと思うぞ」

そこでわしゃわしゃと、俺は暮葉の髪を優しく、犬を可愛がるように撫でてあげた。

なんだろう、俺の中ではわんこなんだよね。暮葉を動物にした場合のイメージって。

「……ッ！？　……っ」

暮葉は一瞬びくん、と跳ね上がる。顔色も赤く、緊張の一色の染まったが、すぐにガチガチに固まっていた顔や体はふにゃん、と気持ちのよさそうに力が抜けていった。

まるで、何年も飼っている哺乳類のようだな。

「もきゅう……これ、なんだかいいですね」

「そうか？　気に入ってくれたんなら、もうちょっとやってあげてもいいぞ」

「はい、お願いしますっ」

即答な上に上機嫌。

よかった……もう、サラマンダーの事なんて気にしていないんだろうな。

仮にアイツが攻めてきたとしたら、また俺がアイツをぶん殴ればいい。解放モードになる為には誰かとキスをする必要があるけど、その相手は――。

って、まだそんな事が出来る仲でもねえか……。

「けーすけ様っ」

「なんだ？」

「ありがとうございます」

「……気にするな、礼を言いたいのは俺のほうだよ。暮葉がいなかったら俺、多分今頃サヴィエトの牢獄にいただろうからな……ありがとう、暮葉」

えへへ、と笑いながら、暮葉がゆっくりとベットに上がってくる。

白い、独特の匂いを放っている病院の布団に体を入れて、暮葉は俺の右半身に凭(もた)れかかってきた。

丁度肩のあたりに、暮葉のふにゃりという、柔らかな感触の頬が当たっている。何とも言えない衝動に駆られた俺は、左手を暮葉の右の腰へ持っていく。

左腕には暮葉の温かさ、丁度暮葉のお腹が当たっている。

鍛えているので引き締まっているけど、やっぱり女の子のお腹は柔らかいんだな。

そして、残った右手は暮葉の背中に回し、そっと、ゆっくりと撫でてあげた。

ていうか……あれ？

これって、リア充がよくやるキスの体勢じゃないか？

暮葉はふにゃん、と。目を細めてうっとりしている様子だが……

ええっ、ひょっとしたらこれって本当に行けるんじゃないだろうか？

こ、ここで引いたら男じゃないよな、俺……男なら行くべき、だよな？

「……暮葉」

「なーに、けーすけ様？」

このやりとり……間違いねえ、まだ俺達正式ではないのだが……

俺は確信した。

これは――その正式まで辿りつける。

「俺、暮葉の事が――」

「木下がどうしたというのだ、藤島」

暮葉木下暮葉木下藤島……あれ？

暮葉のものとは明らかに違う、ハスキーボイスが近くから聞こえてきた気がした。

「ふん！　クソ介は所詮クソ介だね！　ナギちゃんを裏切ろうとは言い度胸じゃん！」

ベットの横を向いた瞬間――俺と暮葉は硬直してしまった。

果物を大量に入れたスーパーの袋を片手に持つ、背が高く、暮葉とは正反対の豊かなおっぱいの持ち主――明智凪紗。ツンばっかでデレのない、ガチ百合陸上部員――生駒純奈。

この2人が何故か――いちゃいちゃモードの俺達をジト目で睨んでいたのだ。

「うあああああああああああああああ明智ぃいいいいいいいっ！？」

「もきゅ！？　す、純奈さんまでどうしてここに！？」

「見舞いに来たのだ。それにしてもお前ら……随分仲良しだな」

ど、どないしよう……明智さんがお怒りである。

ていうか明智、アンタってそこまで怒るキャラだったかしら？

「こうなると、私にナギちゃんは止められないんだな」

「そういうわけだ……藤島、覚悟しろ」

「ちょ、ちょっと待て明智！　お、お前……何をそこまで怒ってるんでせう？」

「うるさい！　女遊びも程々にしておけ、この変態藤島ぁっ！」

「ぎゃあああああああああっ！？　にゅ、入院しても不幸だあああああああああああっ！」

その後、俺がどうなってしまったのかは……思い出したくもないのであえて言わない。

ただ、海の藻屑（もくず）同然の状態となったのは、言うまでもないだろう。

ちくしょう……結局告白失敗した、不幸だ……。

第２４６話，勝者の翌日（後書き）

キャラクターＮｏ０２２
・硬質（こうしつ）のノーム※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆
防御力：☆☆☆
体力：☆☆☆☆
魔力：☆☆☆☆☆☆☆
魔法（超能力）：☆☆☆☆☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆☆☆☆
総評：身体能力はシルフと同等レベルだが、土の精霊の力を掌（つかさど）るだけにやはり手強い相手。

第２４７話，さらなる騒乱へ

私は敗北し、そして捕虜となったのだ。
しかし、私には拘束されている暇などない。あの子が待っているのだ……ロシアというこの世界の国で、人を救っても誰にも見向きもされなかった――あの子が。

「さ、サラマンダー！」

ここはロシアのイルクーツクにある、サヴィエトが建てたという宮殿の近く。おそらくこの国の宗教なのだろう、教会が丁度私の眼前に聳え立っていた。不思議であるな……まるで、ロジーナ正教の建物のようだ。いや、殆どそのまま……一体この世界というのはどうなっている？
まあ、そんな事より……今、私に声をかけてきたのは小さな少女である。

「リリアであるか」

「う、うん……私はリリアだよ」

アリーナの唯一の友人……とは言うが、気になる所である。何故、このような善良な人間が友人であると言うのに、アリーナという人物だけが邪悪に染まっているのか。
長年の疑問だ。このリリアは何故――あの邪心に満ちた者と行動を共にしているのだ？

「その怪我……」

「敗北は誰にでもある事だ。準備を整え次第、私は再び藤島圭介の所へ向かう予定である」

「ま、まだ……やるの？」

「当然である。主（しゅ）の命令に従い、報酬を貰う……それが傭兵であるのだ」

しかし、サヴィエトもおかしなものである。総有主義という思想を基軸としながら、何故我々赤の軍神や政府上層部は特別待遇なのだ。矛盾しておる……これではまるで、貧乏人から金を巻き上げて我々だけが、金持ちの生活を満喫しているだけではないか。

間違っているな……やはり。

金というものは、その者の努力に見合った分だけ払われる。努力さえすれば貰える金は増えて行く、そういうものであろうに……やはり、この総有主義は個人的には間違っていると思う。そして何より――この組織そのものが最も間違っている。

藤島圭介、彼を拘束した後に――組織そのものを潰すべきであろうか？

そろそろ考え時（どき）であるな……。

と、私が考え事をしていたその時――一つの足音が聞こえてきた。

「貴様が負けてしまいますとは連中、中々の腕っ節みたいですわね……風剣も硬質も敗北し、邪炎の貴様まで敗北してしまいましたとは……久々にアドレナリンが沸騰してゾクゾクしてきましたわ」

イルクーツクにある教会の近くに響く、びちゃびちゃと、雨も降っていないというのに水溜りを歩いているような、不思議な足音を立てて近づいてくる女の姿。

来てしまったか……思わず、私は嫌な顔を浮かべてしまった。

「聖波（せいは）のウンディーネ……貴様は確か、同志レニナより待機命令が下されていたハズだ」

「相変わらず貴様に笑顔はないのですね、つまらない男ですわ」

クールな雰囲気の、歳は先程交戦した藤島圭介と同程度の少女であろう。私よりも圧倒的に年下でありながら、それでも赤の軍神を束ねる頂点のような存在。

「貴様は何を企んでいるのだ？」

「朕（ちん）の目的を聞いてどうするつもりですの？　貴様は所詮朕の手下でしょう、まさか反逆などと言うくだらない事を考えているおつもりならば、朕は貴様の炎を消火してさしあげますわよ？」

「相変わらず、おかしな喋り方をする女だ……現時点で貴様に反逆するつもりはない」

「そう、それなら一応安心できますわね」

生意気な子娘であり、それでもって不可解極まりない小娘である。この女、ウンディーネは何故か年中髪の毛が濡れている……それどころか、全身が年中濡れているので、服まで年中びしょびしょだ。ここまで年中濡れている女は今までに、実例も単なるうわさ話でも聞いた事がないぞ。それに、この女には色々と謎が多い。

ここにいる、アリーナの友であるリリアでさえ――この女の素性を知らないのだ。

「で、貴様は何を企んでいると言うのだ」

「風剣のシルフの風の魔術も、硬質のノームの大規模震災術式計画も、そして圧倒的な力を持つはずの貴様ですら、その計画は悉く失敗に終わっていますわ。貴様はまだアレクサンドルの子孫という、イレギュラーな存在と交戦するおつもりのようですが、果たしてそれは有意義な事なのでしょうかね？」

確かに、手段という手段を敵にぶつけた事は確かであり、あらゆる手段を行使しても敵を屈服させる事は出来なかった。その点では、これ以上こちらに手段がない事は確かである。

だが、納得いかないのである……聖波のウンディーネよ。

「結局貴様の考えている事が良く分からぬのであるが？」

「これだから脳筋は嫌いですわ。ですから、朕はこう考えていますわ」

青色の濡れた長い髪を靡かせながら、

「アレクサンドルの子孫なんて、どうでもいい存在なんですの」

な、に……と。私も隣に佇むリリアも息を詰まらせていた。

言葉どころか、単語の一つ一つが理解できぬ。何故だ……あれほどのイレギュラーな存在をどうでもいいの一言で済ませてしまう、その腐った感覚は一体どこから……？

「な、なんで……？　あ、あの人は重要！　……だと思うんだよ？」

「ふふふ、リリア……そもそもアレクサンドルの子孫の回収を提案したのは貴様ですわよね？　それが何の為であるか、貴様自身がよ

くわかっている事だと思いますが……」

なんだ、と……藤島圭介の回収指示を下したのは、アリーナではなくリリア……？

それでは、リリアは何の為に藤島圭介の回収を指示したのであるか……？

「私は……ただ、アリーナに元に戻ってもらいたくて……っ」

「元に戻って……リリア、それはどういう事であるか？」

「そ、その……アリーナはね、本当はああいう人じゃないから……その」

アリーナという人物は何度か顔を合わせた事があるのだが、まさに氷の女王という名がピッタリの冷徹な小娘であった。だが今、リリアの口から放たれた――ああいう人ではないという言葉。

それはつまり、アリーナ本来――あのような人格ではない……という事なのか？

もしも、そうだとすれば一体、あの小娘には一体何が……？

私がそんな事を考えていると、眼前でウンディーネが冷たく笑い、

「そう、要は貴様の勝手な都合で、アレクサンドルの子孫を狙っているのでしょう？」

「か、勝手な都合……じゃない！　アリーナの……アリーナの為にやってるんだよ！？」

「そこまでして、貴様は友人を元の姿に戻したいんですの？」

「あ、あたりまえ……だよ。私は……アリーナの親友だから！」

そう、とウンディーネは軽い口調で返事をする。リリアの必死の叫びを何とも思っていないのであろう。そして、ウンディーネの口から放たれた言葉は――――、

……。

バゴン！　という壮絶な音が炸裂する。

それは、リリアの背中が――教会の門に激突した音であった。

「あ、が……ぁ……ッ？」

もはや言葉を発する余裕もないのだろう……朦朧としているであろう意識の中、リリアは辛うじて声を発していた。瞳も虚ろであり、今にも消えてしまいそうな少女の魂。

何故、あのような善良な娘が……友人思いの良い子がこのような目に……？

単に友人の事を心配し、やり方はどうであれ……その為に藤島圭介を回収し、何らかの目的を果たそうとしていた、神の子も関心するであろう、そのような娘を……我が前に立つ小娘は。

「貴様……ッ！」

「おや、朕に敵意を向けるとは……自殺するおつもりですの？」

「……ふん、それは貴様にも言えている事だ。我が前に立つ意味が理解出来ぬのであるか？」

今の私にメイスはない。あのメイスは日本での戦闘で紛失してしまったが……武器が無くても必要があれば戦うという者が兵隊であ

る。私は拳を構え、ウンディーネの顔を睨み付ける。
　これでも、格闘技の心得はあるのである。

「言い返しますの。貴様のほうこそ――朕に歯向かう事の意味を理解していなくて？」

「……ふん、貴様は単なる人間だ。出来る事には限度があるだろう」

「そうですわね……朕は確かに人間。故に本命を行使出来る時間も限られていますわ」

「限れた強さなど、強さのうちに入らぬぞ」

　限られた強さしか持っていなかったからこそ、私に及ばなかったアルファ隊の聖人もいたくらいである。そんな強さは強さのうちに入らない……即ちウンディーネは知れたもの。私は手のひらをウンディーネの顔へ向ける。丁度、視界に自分の手のひらが入り、ウンディーネの顔が隠れた。
　手のひらに凄まじい熱を感じるが、火の精霊の力を持つ私には大した熱には感じない。

「しかし、これだけは忠告しておきますわ」

「何であるか、ただの人間よ」

「そうね」

　ウンディーネが軽い口調で喋り始めた。
　そこで私は、信じられないものを目にしてしまう……そう、本当に信じられん。

ウンディーネが今、この場で行っている事が――人間技ではなかったのだ。

「満身創痍の聖人如き、朕の敵ではないですの」

その瞬間、全てが消失した。

私の目ですら、ウンディーネの全身が青白く輝いた事以外は確認出来なかった。次に目を覚ました時には既に、近くにあったハズの教会が吹き飛んでいる。いや、それどころか……イルクーツクの街が半分ほど、吹き飛んでしまったのではないかと思うほどに――荒廃していたのだ。

それも、私も含めて瓦礫も何もかも、全てが水浸(みずび)しの状態であった。

「これ、は……ッ！？」

「朕は水に帰れば魂を失うんですの。それを恐れているからこそ、朕は水そのものを掌(つかさ)る事によって――聖人さえ玩具(おもちゃ)のように扱える力を手にしましたわ」

なんという理由であるか……それは精霊ウンディーネの事であり、貴様のような小娘の話ではないのである。そんな事はともかく、私はとある事が気になって仕方が無かった。

リリア。

彼女は一体、先程の爆発的な水の後――どうなってしまったのであるか？

「……ッ！？」

「無駄ですわ、今の貴様は日本での戦闘で満身創痍。増して、朕の

属性と貴様の属性とでは、貴様の属性では明らかに分が悪い。相性最悪の攻撃を直に受けて、貴様が無事であるハズがありませんもの」

確かに……現状の私では、これ以上の戦闘行動は不可能であるな。しかし、ウンディーネの目的を聞かねば。

そして、その目的次第では――この小娘の暴走をこの場で止める必要がある。

「二つ、聞かせてもらおう……一つ目は、貴様は何者であるか？」

「朕は聖波のウンディーネ……この世の7割を占める水を掌る精霊にして、赤の軍神の頂点である自然を極めた波の乙女ですわ。その起源は妖精の書で提唱した時より遥か２０００年前、朕の親が流した涙によって、、星気面という精神世界で生まれましたわ」

即ち、人間が語り継いでいるウンディーネよりも、起源は遥か昔であると言うのか。

それは面白い事を聞いたな……それでは、そろそろもう一つの質問をしようか。

「二つ目は、貴様の目的は何であるか？」

「朕の目的は単純明快。現在、アリーナ・ウラジミーロヴナ・レニナの体を借り、魔力を回復させている魔族の皇帝を復活させ、その肉体の入手が朕の目的ですわ」

「魔族……皇帝……？」

「知らないとは言わせませんの。貴様も御存知でしょう……我がサヴィエト亡命政府の赤軍は、魔族や妖怪を兵隊として運用している

部隊が存在している事を」

そういえば、そういう野蛮な部隊が存在している噂を聞いた事があるな。まさか、その噂は本当だったというのか。ウンディーネの目的は、もはや藤島圭介という次元を越しているのか？

この女は、一体どういうつもりで魔族の力を――？

「それは、アリーナが皇帝（カイザー）の力の一部を使用できる。いえ、アリーナの人格そのものが皇帝（カイザー）のものだからですわ」

「……洗脳、であるか？」

「似たようなものですわね。正確には乗っ取りというヤツでしょうが……とにかく、朕にとってアレクサンドルの子孫はどうでもいい存在。いえ、むしろ朕の野望達成には不必要な存在ですの。不必要だからこそ、誰かが手違いで彼を殺してしまうという、最高の展開を望んでいましたのですが……残念ですわ。誰も殺してしまうどころか、逆に敗北しているではありませんか？」

そうか、そう言う事であったのか……聖波のウンディーネ。貴様が我々、赤の軍神が藤島圭介を標的とした際、何も言わずに笑顔でいた理由は――そういう事であったのか。

つまり、我々は踊らされていた。この小娘の思惑通りに動いていた……そして、敗者となった我々は既に用済みであり、この小娘にとっては不要な廃品であると……笑えぬ冗談だ。

何処までもふざけた小娘である。

まさか、野望達成の為に――魔族の皇帝（カイザー）復活を目指しているとは。

既にそれだけで、神に対する反逆……許せぬ愚行である。

「既に革命の準備は出来ていますわ」

「革命……？」

「ええ、朕はこの世界の人間を利用しますわ。サヴィエトも所詮、朕の目的達成の為の手段ですし……とりあえず、サヴィエトの思想に合わせて――この世界の旧ソ連の残党を利用させてもらいますの」

「それで革命を起こすつもりであるか……歴史の逆行であるな」

「革命を起こし、新生ソビエト連邦を建国。それが朕の目的の第一歩になりますわ」

「ロジーナだけではなく、こちらの世界の国まで巻き込むつもりであるか……ッ！」

「だから何だと言うのですか？　所詮、この世界の人間が苦しむだけの話ですの」

この女……芯から腐っているのである。

これで私も決心した……私はサヴィエトを離反する事にする。

そして、何が何でも――聖波のウンディーネの暴走を止める事にした。

「……残念であるが、貴様の野望は叶わん」

「何故ですの　死にぞこないの貴様に何が出来ますの？」

「宣告しよう、貴様の息の根は必ず私が止めてやる」

「……上等ですわ、執行猶予を与えましょう……９月３０日に決起

しますので、ロシア政府を転覆する前に朕を食いとめてみなさい。
それまで怪我人との勝負は――お預けいたしますわ」

セリフを吐き捨てたウンディーネは、私に背を向けた瞬間――ゴバァッ！　と。巨大な水の球体を魔術で精製し、その中へ、発車ギリギリの車両へ飛び込むように身を投じる。ウンディーネを包み込んだ水の球体は、完全な球体になった後に――音速を超える速さでロシアの空へ姿を消した。

私はただ、歯を食いしばりながら空を眺め――敗北の屈辱を味わっていた。

聖波のウンディーネ。
赤の軍神の頂点は――どうやら強敵のようであるな。

「はん。立派な決心ねえ？」

声が聞こえた。
後ろへ振り返ると、リリアを抱きかかえ少女が立っていた。
風剣（ふうけん）のシルフ。

「私の心まで熱くなってきたわ。アンタ、やっぱりいい面構えしてんじゃない？」

「……シルフ、怪我と魔女殺しの後遺症は治ったのであるか？」

「はぁ？　アンタにしては力の入ってない声ね。治癒は終わった。風剣（ウインドソード）の修理が終わって、後は再び魔装具としての能力さえ持たせちまえば――私はいつでも出撃可能よ」

「その子は……リリアは無事なのであるか？」

「私さぁ、不完全な状態で魔術使ってこの子助けたのよねえ？」

「つまり、命に別条はないのだな」

「はん。そういう事よ」

風剣のシルフは他人を救う事を恐れている。それをかつて行ったからこそ、彼女は周囲に見放されてしまい、孤独な一時を過ごしていた。そんな世界を根底から変えてやりたいからこそ、態々赤の軍神に所属し、シルフという精霊の力を手にしたのである。

そんな彼女が親友を助けた一件以降――初めて他人を救ったのだ。

これは彼女にとって、大きな一歩であろう。

そして、シルフの自信は決して折れない。

「さて、サラマンダー。当然アンタ、私に付き合ってくれるのよね？」

「……付き合う？」

「決まってんでしょ。一緒にあの――ウンディーネ（クソアマ）を殺しちゃおうよ」

うっすらと笑いながら、シルフは宣言する。

「……当然だ、手を組もう――風剣のシルフ」

「ええ、アンタだけは頼りにしてるわ――邪炎のサラマンダー」

そして、私とシルフは同盟する。

全ては救いの為。
そう、諸悪の根源――聖波のウンディーネ殺害の為に……。

第２４７話，さらなる騒乱へ（後書き）

キャラクターＮｏ００２３
・徳川家則（とくがわいえのり）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆
防御力：☆☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆☆
魔力：ナシ。
魔法（超能力）：ナシ。
知力：☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆☆☆
総評：【殺しのプロ】と呼ばれていただけに、身体能力の高さは三原並み。

第２４８話，イギリスへ

ここは日本から遥か遠くにありながら、日本と同じく島国であり、かつては7つの海を支配したという輝かしい歴史を持つイギリス。その首都であるロンドンの郊外には、本初子午線の通る旧王立グリニッジ天文台の建物が残されている。

１９９０年代にケンブリッジに移転して移行、観光客以外にここを訪れる者は、精々施設の整備に訪れる人など、専門職の者くらいしかいないであろう。

しかし、今日のグリニッジ天文台は何処か不自然であった。

敷地が完全に封鎖され、建物の中もカーテンなどで完全に隠されているのだ。

「不気味な光景であるな……」

私――邪炎のサラマンダーは、来るべき聖波のウンディーネとの最終決戦へ向けて、シルフと共にイギリスにあるグリニッジ天文台へ訪れていた。

ここに我が敵――聖波のウンディーネの息がかかっている組織が存在しているのだから。

「しっかし、ウンディーネ（クソアマ）もよくやってくれるわねぇ？」

「全くである。我々への対策か――この世界の暗部にまで手を出そうとはな」

「しかし同時に馬鹿でもあるわ。私達って元赤の軍神でしょ？　こっちの世界の魔術師なんか敵じゃねえっつってんのよ」

私とシルフはサヴィエトを離反し、本拠地を求めて英国を訪れたのだ。それは私もシルフも元々はウェセックスの出身であり、この英国がウェセックスに相当する国家であるからだ。

要するに、この土地は我々の故郷に似ている故――非常に過ごしやすいのである。

ところが、ウンディーネのヤツも準備が良いのである。

我々が英国へ訪れる事を察知していたのか、大層な連中を用意していたのだ。

「魔術結社か……」

「天文台跡を本拠地にしてるって、こっちの魔術師は何考えてんのかしらねぇ？」

「秘匿性は低いが、見晴らしがよいのであろう」

「けど、敵襲されやすいんじゃないのぉ？　ま、何重にも防御結界を張っているみたいだケド」

「それだけ自信があるのであろう。己の魔術の腕前にな――」

魔術結社、我々の世界――レムリアにもそういうものはあったな。

私も傭兵時代、魔術結社に雇われる事もあれば、魔術結社を潰す為、女王陛下本人に雇われる事もあった。レムリアの魔術結社は統一性がなく、どれも独自の路線で進んでいたが……どうやらこちらの世界の魔術結社は違うみたいであるな。

昨日英国を訪れて以降、2箇所ほど魔術結社を解散に追い込んだのであるが……どこも似たような形式の魔術を行使し、結社名も似たり寄ったりであった。

聞くところによれば、彼らはとある魔術師の事を尊敬しているよ

うだ。
　アレイスター・クロウリー。
　こちらの世界では有名な魔術師らしく、その実力は５０人束になっても勝てぬほど。

「しっかし、連中が尊敬するアレイスターって野郎、どんなヤツなのかしらねえ？」

「アレイスターは既に故人である。既にこの世に存在しない人物の事を気にした所で、状況は一向に好転しないであろう」

「まっ、確かにそうねぇ。とりあえず、魔術結社ってあと何社なワケ？」

「把握している結社数は１５。そのうち、１０社はレムリア人討伐を掲げている」

「異世界人は邪悪……ねぇ。まっ、どーせウンディーネの働きかけのせいなんでしょうけど」

「全く、我々にとっては迷惑な話である」

　そして、眼前のグリニッジ天文台跡は、とある魔術結社の魔術要塞である。一見小型であるが中々上手い防御術式が張り巡らされている。
　おそらく、戦車砲で砲撃しても、戦車砲の砲弾が砕け散ってしまうであろえ……この世界の魔術師も少しは出来るようだ。最も、私やシルフと互角に戦えた者はまだ居らぬが……。

「さあて、そろそろ……この魔術要塞を破壊するとしようか」

「破壊しちまえば連中も、私らに気づいて地下から湧いてくるでしょ」

「天文台なのに、天文台の建物ではなく、地下に本拠地を築くとは……奇妙であるな」

まあよい……そんなことより、早急に魔術結社を潰してやろう。
我々の行動には魔術結社は邪魔以外の何者でもない。
シルフの復活した風剣（ウインドソード）。
そして、私の新たな武器で――邪魔者を破壊し尽くすのである。

――リーリヤ・コスティリナＳｉｄｅ――

さて、困ったものですね。
リーリヤは現在、長野県の松代大本営跡地に置いた日本支部にて、とある問題が発生したせいで大忙しなのです。おかげで、今週のイッ○Ｑが見れなかったじゃありませんか……。
ですが、仕方ありませんね……そうも言っていられない事態が発生しましたし。
これは、こちらの世界で活動している――全レムリア人の危機ですから。

『リーリス・コスティリナ。魔術結社問題はどうなった？』

「ヤコフ・ベリチュコフ……徹夜で作戦を練りましたと、リーリヤ

は目を擦りながら答えます」

『て、徹夜とは……ご苦労だった』

聖杖ジェーズルにペタリと貼ってある、通信用の護符が光り輝いています。これは現在レムリアでお酒を飲んでいるであろう、連邦特殊情報総局の局長と通話を行っているからです。

本日は9月20日。

6日前の邪炎のサラマンダー問題については、ひとまず安心という所でしょう。

確かに彼は逃亡を図り、実際に隙を見て逃げ出してしまいました。しかし、諜報員の報告によりますと、その後の彼の活動はあまり聞かされておりません。

ただ一つ、不確実な情報がリーリヤの耳に入ってきました。

邪炎のサラマンダー、及び風剣のシルフの離反。

それが本当か、まだわかりませんが……確かにそんな情報は入ってきました。風剣のシルフと邪炎のサラマンダーがサヴィエトを離反し、2人で行動を共にしているという情報です。

しかし、誤報の可能性もありますし、今後……調べていく必要がありますね。

ですが、今はそんな事よりも――、

「昨日から活発化している魔術結社討伐には、こちらも特隊員の派遣を検討しています、と。リーリヤは作戦要綱を伝えます」

『なるべく、行動が表にバレないような頼む。おそらく我々の存在がバレてしまえば、世界は我々よりも魔術結社側の味方をするだろう』

「ですが、敵の魔法使いも中々の使い手です、と。リーリヤは忠告します」

『短期決着は不可能なのか？』

「サヴィエトの件もあります。国内の警備を手薄にする事にリーリヤは反対です、と。リーリヤは己の考えをぶつけてみます」

『確かにそうだな……こちらも、装備の提供くらいならすぐにでも行える』

「ありがたいです、と。リーリヤは素直な気持ちを伝えます」

しかし、どうしていきなり魔術結社が暴れ始めたのでしょうね。それも、レムリアの魔術結社ではなく、こちらの世界の魔術結社が、我々レムリア人を害悪だとしています。そもそも彼らはどのようなルートでリーリヤ達の存在を知り、そして害悪であると決めつけたのでしょうか？

総局の方と連携して、詳しく調べてみる必要がありそうですね……。

それから今後戦闘を行うのですし、彼らについても調べる必要がありますね。

例えば、彼らに魔術を教えたと言われる、この世界で最強の魔法使い。

アレイスター・クロウリー。

彼がどういう人物か。

彼がその後の魔法使いに与えた影響。

既に故人であるハズの彼が――最近日本の長崎で目撃された未確認情報の確認。

「予想よりも、大事になりそうですね、と。リーリヤは一人呟きます……」

さて、リーリヤはやるべき事をやった後――長崎へ向かいましょう。

アレイスター・クロウリー。

対魔術結社戦と並行して――彼の生死をリーリヤが突きとめてやります。

第２４８話，イギリスへ（後書き）

キャラクターＮｏ０２４
・沢那魅咲（さわなみさき）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆☆☆☆
防御力：☆☆☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆☆☆
魔力：ナシ。
魔法（超能力）：☆☆☆☆☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆☆☆
総評：身体能力も高く、上位の西園寺に勝てる可能性を秘めているが、油断しがちで本来の実力よりも弱いという、残念なタイプ。

第２４９話，平穏な一日

９月２０日。
丁度１週間前……いや、微妙に１日多いような気もするが、１日は２４時間。１６８時間に２４時間を足した所で大差はないだろう。今から１週間後、３日間日程で行われる、修学旅行を前に初芝高校の一大イベントが控えている。３日間もかけて行われる――大規模なイベントが。
そして、今週の俺こと藤島圭介は気分がいい。それは何故かと言うと――、

「つかさ、体育祭ってテンション上がらね？」

「圭介にしては珍しいね、行事に関心を示すだなんて」

「そういえば僕の記憶だと、圭介って去年も体育祭は張り切っていたよな」

「ひょっとして、圭介って脳筋キャラなのかな？」

「重原……てめえ、わかってねえな」

だって、体育祭ですよ体育祭？
陸上競技はもちろんのこと、球技や近所の神社の伝統でもある綱引き。さらに陸上競技の一種ではあるものの、地域活性化も目的の一つだったりする借りもの競争がある。種目は多種多様で一人最低二種目は参加する必要があるが、俺にとってはそんな事はどうだっていい。
ぶっちゃけ、運動するのは面倒臭い。

でも、体育祭だぜ？
体を動かせば体温が上がり、必然的に薄着になる……つまりだな。
「女の子が薄着になるだろうが！」
「なっ！？　け、圭介……お前、まさか……体操着に萌えるタイプだったのか！？」
大吾が思いっきり後退りし、驚愕した様子が叫んでいる。
「今更驚く事じゃねえだろ！　これでブルマーだったら文句はねえよ！」
「確かに……これが二次元だったら、僕もウハウハじゃねえか！？」
「運動している女の子かぁ……確かにいいよね、汗ばむ女の子って何かいいよね」
そうだろうそうだろう、と俺は2人に同意を求めようとしたが……その必要はないな。
2人とも、どうやら自分で気付いたようである。
スポーツ少女がいかに素晴らしい存在であるかに――！
「マジで黒やん！？　それマジな話！？」
「大マジだ！　今度の体育祭――二人三脚あるんだぜい！？」
「おお！　って事はアレかい、上手くいったら女子と当たるんやな！」

「巨乳の子と当たったら――いいねいいね最ッ高だねェ！」

黒木が一方さん化している……ていうか、アイツらも体育祭楽しみにしているんだな。しかも楽しみにしている理由が、若干俺と被っているって……。

まあ、仕方ないよね。俺も黒木も男なんだ……ポロリとか、ラッキースケベとか、薄着で汗ばみながら運動している女子とか。期待しないほうがおかしいぜ……。

なんせ、俺らは健全な男子高校生。

男、いや――人間はみんな変態だから仕方ないんだ！

「けど、体育祭って実際大変だよ？」

「そうだなぁ。全員、皆が見てる前で戦うんだぜ？　僕みたいなインドア派は恥かくだけだね」

「俺もねぇ……格闘技の大会みたいなのがあれば、優勝する自信はあるんだけどねぇ」

そうだなあ……。

大吾はオタクの完全インドア派。１００メートルを走らせた時のタイムは、体育教師が我が目を疑うほどに遅いし、実際去年の体育祭じゃ使い物にならなかった気がする。重原も、身体能力は高い上に頭もそこそこいいのだが、重原が得意なのは格闘技のみなのだ。

それが球技や陸上競技となれば話は別。

そして俺も、部活は文化系でスポーツに関しては素人だし……。

「でも、圭介ってトレイルランで1位取ったじゃないかい？」

「あぁ、あれってまぐれじゃねえのか？」

「まぐれで取れるんだったら、僕なんてまぐれで二次元の世界に行けるぞ？」

「圭介は陸上競技に参加すればいいんじゃないかな？」

「陸上競技ねぇ……」

いっそ体育祭の種目でありながら、古宇坂市主催の借り物競争にでも参加しようかな。

ただ、その借り物競走……噂だと滅茶苦茶難易度高いらしいんだよなぁ……。

ああ、困った……ていうか、一週間前なのに出場種目が決まってないって……。

まあ体育の授業で、球技や陸上など、ある程度の事はやったけどな。

「……はぁ」

「鬱だ……」

「体育祭、つまらなそうだね……」

結局、俺達野郎共は女子の体操着姿にしか目がない。つまりどういう事かと言うと、体育祭自体にはさほど興味がない……というより、面倒臭くて結構憂鬱であった。

そして放課後。

大吾も重原も帰ったようだし、今日は部活の活動日でもない。そういえば、さっきまでいたハズの暮葉すら見掛けないのだが……暮

葉のヤツ、一人で帰っちゃったのだろうか？
現在、校内に残っている人は、体育祭に向けて練習中の人か部活やってる人くらい。
先生に説教され、こんな時間まで残っているヤツは多分、俺だけだろうなぁ……。

「はぁ、まさか2日入院していた事で怒られるとは……」

邪炎のサラマンダー。
赤の軍神の一人にして、聖人でもある化け物だ。アイツとの戦いで多くの人が傷つき、しかも俺が入院後、暮葉の機嫌が悪かった為に回復魔法をかけてもらえず、結局俺は病院での治療と自分の回復力のみで復活したのだ。しかし思いのほかダメージが大きく、完治に2日もかかってしまった。
元々成績の悪い俺にとって、2日の欠席は大打撃以外の何者でもない。
ただでさえ、テストの成績が悪かったのだ。
怪我による入院は仕方ないが、あまり無茶はするな……と、先程説教されたのだ。

「無茶って言われても……」

仕方ねえだろ、サヴィエトは俺……いや、暮葉達の事だって狙っているんだ。戦わなかったらもっと悲惨な結果を招いちまうだろ。
そこで無理をしなかったら——負けてしまうだろ。
しかし考えてみれば、俺……無茶をしないと戦えない程度なんだよな。
サラマンダーはアルファ隊に掴まっていない。また襲撃してくるかもしれない。
サラマンダーだけではない。赤の軍神はもう一人残されている…

…。

このままじゃ……ダメだよな。

「……ッ」

拳を握り締め、窓越しの秋空をぐっと睨んだ。

強くなる必要がある。そんな事はわかっているんだ……わかっているんだけど、一体どうすれば強くなれるんだよ。格闘家に挑んだ事もあったけど、練習にすらならなかった……。

どうやら、俺は既に普通の人よりは強くなっているらしい……が、それでも、邪炎のサラマンダーには勝てなかった。ああ……こんな時に聖杯でもあればなぁ……聖杯戦争。

うん、やっぱりサーヴァントは女の子タイプがいいよね。

って、ｆ●ｔｅの話している場合じゃねえだろ……。

「はぁ、ホントに聖杯とかあったら、サヴィエトとか敵じゃねえのになぁ……」

「サヴィエトがどうしたんだ？」

え……やべえ、つい独り言を言っていたら誰かに聞かれた……って、こ、この声？

一瞬ヒヤリとしたが、聞き覚えのある声だったので、俺は首だけ左へ向けた。

「あ、明智？　あと……」

「……なによ？」

凛々しく佇む我が校の風紀委員――明智凪紗。

その横に、むすっ、と。不機嫌そうにこちらを睨んでいる少女が立っている。

「い、伊吹？」

「うん、こうして藤島と話をするのは久々な気がするぞ」

「私も、なんかあんたと会話をするのは久々な気がするわ」

いや、お前ら病院にいたじゃん……。

伊吹は病室違ったけど、明智……お前は俺をボッコにしたハズだぞ？

そのせいで俺、無駄に入院期間が延びたんだけど……約２４時間くらい。

「……んで、何か用か？」

「それはこっちのセリフだぞ」

「そうよ、あんた……悩みでもあんの？」

「悩みっつわれても……」

悩みねえ……ていうか２人とも、やっぱりさっきの独り言を聞いていたんだな。

「……大丈夫だ、わかっている。無理に話さなくてもいいんだぞ」

「えっ？」

「サヴィエトの事だろ？　もちろん、私だって黙ってはいないぞ」

明智が言いながら、俺から視線を逸らし、なんだか微笑みながら空を眺めている。しかし俺には明智の言葉の意味がわからない。明智……結局、何が言いたいんだ？

「圭介、私も凪紗もあんたや暮葉の事情やサヴィエトの事とか、大体の事は暮葉から聞いたわ。私らなんかで力になれるかわからないけど、でも私らはあんた達の味方だから」

「な、なんだよ急に？」

面と向かって味方宣言されたら、その……恥ずかしいじゃねえかよ。

「なんだよって……言葉のままだぞ」

「そうよ、後ろは任せなさいって言ってんのよ」

「だから藤島、戦うなとは言わないぞ。どうせ言ってもお前は絶対に言う事聞かないからな」

「そういうわけだから、あんたは突き進みなさい。私らはあんたの背中を支えてあげるから」

……わかったぜ。

ようやく、伊吹と明智が何を言いたいのかがわかった。

それがわかったからこそ――芯から温かくなったような感じになったよ。

「――ありがとう、２人とも」

伊吹も明智も、本来ならサヴィエトなんかとは無縁なハズだ。にも拘らず、２人は芯から温まるような事を言ってくれた。それはなんだか、言葉で現すのは難しいけど……。

でも、なんか――いいなって思った。

信頼できる仲間がいる。

その事実があるだけでも――実はとても幸せな事なのかもしれない。

第２４９話，平穏な一日（後書き）

キャラクターＮｏ００２５
・志熊大志（しぐまたいし）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆
防御力：☆☆☆
体力：☆☆☆
魔力：ナシ。
魔法（超能力）：☆☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆
地位：☆☆☆
総評：能力は凪紗よりも若干優れているが、それ以外は一般人レベル。

第２５０話，女たらし藤島圭介

「そうだ、２人とも今度の土日のどっちか空いてるか？」

俺や伊吹と明智の家は方向が違うので、明智とはコンビニ付近のT字路でお別れだ。

その別れ際、不意に彼女がそんな事を聞いてきた。

「俺は毎日暇だけど？」

「暇人アピールしてどうすんのよ……まあ私も用はないけど」

結局伊吹も暇なんじゃねえかよ……そう言う俺が一番暇人なのだが。それにしても、友達って居ても休みの日に遊ぶ事って滅多にないよな。もしかしたら、俺だけなのかもしれないけど。

うん、きっと俺だけだ。

リア充のグループは多分、休日になれば殆ど友達との遊びに時間を使っているだろう。

休みの日に友達と遊ぶのはリア充だけだ……と思っていたのだが、

「なら木下も連れてうちに来るといいぞ。爺さんが久々にお前と暮葉の顔見たいって言ってたし、折角だから伊吹も一緒にどうだ？」

「な、凪紗の家って大きいんでしょ？　ホントに行ってもいいの？」

「全然構わないぞ……と、というか大歓迎だっ」

ただ友達を家に誘っているだけなのに、妙にそわそわしている明智。もしかして、明智って友達を家に招待するのが初めて……なわ

けないよな。少なくとも俺と暮葉は招待されたし、ついでに明智の親父さんにとり憑いていた明智光秀を撃破。だから光昭さんに俺達は気に入られたのだ。

だから、初めてではないハズなのに……なんで？

俺の事を何度もチラ見していたような気もするが、多分気のせいだろう。

「伊吹、どうする？　ちなみに明智ん所の飯はうまいぜ？」

「ふ、藤島……お世辞はいらないぞっ」

「お世辞じゃないって。あの豪華な食卓、お前が作ってんだろ？」

「そ、それはそうだが……っ」

「ホントにうまかったから、もっと自分に自信持てよ。そのほうが明智らしいぞ？」

「――ありがとう」

頬を赤らめ微笑みながら言われたその一言は、何故だか心が温まるものだ。

しかしその時、背筋が凍るような不気味な気配を感じた。

「また口説いてる……ばか圭介……ッ」

気配も気になっていたが、それ以上に気になる声に反応して振り返る。視線の先には不機嫌そうに腕を組み、俺から目を逸らしている伊吹の姿があった。

「伊吹、どうした？」

「……なんでもない！　私も行くから今日はもう帰るわよっ！」

「えっ？　ちょ、痛ぇっ！？」

不意に伊吹に手を握られるが、その手に籠められた力が半端ではない。見掛けに反してなんて握力の強い子なんだ。体質的に体が丈夫な俺なのに、力強く握られた手が軽く痛い。そのまま俺は伊吹に引きずられ、次第に明智との距離が遠くなっていく。

伊吹に引っ張られ、転ばないようにバランスをとりながら、俺は明智の様子を窺った。

「……伊吹？」

次第に遠のいてゆく明智は、なんだか思わせぶりな表情を浮かべている。やっぱり伊吹がなんで怒っているのか気になるらしいが……しかし本当になんでだろう？

場所は変わって、ここは閑静な住宅街にある藤島家の前。結局ここまで伊吹に手を握られたままだったが、未だに伊吹は目を合わせてくれない。もう、あれから１０分近くは経ったのに、伊吹のヤツは一体何に怒っているんだろうか。その理由はわからないが……多分原因は俺だろう。

ていうか、それ以外に考えられない。

明智の言葉で怒るとは思えないし、やっぱり俺の何気ない発言が原因だろうか？

「い、伊吹……？」

「……っ」

「ちょ、頼むからスルーだけは勘弁してくれっ！」

「……なに？」

ようやく俺の言葉を聞いてくれたいいが、返ってきたのは機嫌の悪そうな声。しかも顔すら合わせてくれず、伊吹は背を向けたまま、相当に機嫌の悪そうな雰囲気を垂れ流していた。

「……ごめん」

「……何に謝ってるの？」

「俺が原因……だよな？」

「……」

そこで黙ると言う事は、やっぱり俺が原因であるらしい。

俺、何か気に障るような事言ったっけ……？

記憶はないが、無意識に口から漏らしてしまったのかもしれない。

「……あんたにしては鋭いわね」

またですか、それ何度も言われたような……。

俺ってそこまでニブチンなのか？

「じゃあ、あんたが何やってか言ってみてよ」

「えっ？　そ、それは……」

それがわかってたら苦労しねえよ……わからないから悩んじまうんだ。わかっていたら最初に何をやらかしたか言っているさ。ああ、本当……俺は何を言ってしまったんだろうか？

答えられずに視線を逸らしていると、やがて伊吹のほうからはぁ、と。ため息が聞こえ、

「やっぱ、圭介は圭介ね……っ」

「……」

露骨（ろこつ）に呆れられてしまったが、仕方ねえだろ……本当に全く思い出せないんだよ。

「……はぁ、もういいわ」

「はい？」

伊吹の口から信じられない言葉が放たれたので、思わず聞き返してしまった。確かにもういいわって聞こえたけど、伊吹ってこんなにアッサリ許す子だったっけか？

「だ、だからもういいって言ってるの。ほんっとあんたって耳悪いわね」

「う、うっせ黙れ！」

別に俺は難聴（なんちょう）とかじゃねえよ。

聴力検査は正常だったし、ちゃんと今言ってた言葉だって聞こえてたっつーの。

……まあ、聞き返した時点で聞こえていないと思われるのは、当然の事だろう。

「圭介は難聴だから仕方ないわよね……許してあげるけど、その代わり条件があるわ」

コイツの中では俺＝難聴のお爺ちゃんなのか？

つーか今なんて言ったコイツ？

「じょ、条件？　なんだそれ？」

条件。

それをクリアしなければ、今回の罪（？）を許してくれないというわけだ。伊吹もツンツン突っぱね＝ツッパリ少女だからなぁ……どんなキツい試練が待ち受けている事やら。

「罰（ばつ）ゲームよん♪」

うげえ……罰ゲームかよ……

なんだよ、３回回ってワンか？　それとも全裸で町内３週させるつもりか？

はぁ……逃げたい。そして穴があるなら入りたい……。

「そんな胸張らんでも……てめえはどこぞのビリビリ中学生かよ。つーか……胸小さっ」

「な　ん　か　言　っ　た　ぁ　！？」

「い、いえ何でもございません！　罰ゲームですね喜んで受けますよ超悦びますよハハハ！」

怖ぇ……。

暮葉ほどじゃないにしろ、伊吹も貧乳なほうだが……指摘するのはやめておこう。

「ば、罰ゲームで喜ぶってあんたマゾなの？」

「馬鹿野郎！　女の子に罵（ののし）られる？　我々の業界じゃご褒美なんだよ！」

「……変態」

まるで死んだ魚を見るような目で俺を捉え。冷たく一言を放ってくる。だけど今更変態って言われた所でどうとも思わないぜ。何故なら俺は変態、もっと言うならば変態紳士だからだ。

変態？　フフフ……ソイツは俺にとっては褒め言葉だぜ。

「んで、罰ゲームって何するんだよ？　言っとくが、俺に出来る事なんて限られてるぞ？」

「大丈夫よ、私があんたを監禁するだけだから」

「ｗｈａｔ，ｓ　ｔｈａｔ？」

「だ～か～ら。私が圭介を監禁するの、私の家に」

「……なん、だと？」

伊吹はパソコン持っていた気がするが、確かパソコンのスペックは低かったハズ。伊吹の家にあるパソコンでは、スペックが低すぎ

てエロケープレイは不可能であろう。しかも、伊吹は比較的早く寝る子である。寝る子の割には背も胸も小さ……げふんげふん。

とにかく、国宗家の消灯時間は早い。

従って深夜アニメの視聴は困難であり、録画する環境もあるか微妙。

……あれ、国宗家での監禁プレイって結構精神的にキツくないか？

「な、なあ。罰ゲームの内容変更しない？　他の事はなんでもやるからさ」

「えっ？　じゃあ私の家で監禁と全裸でランニング、どっちがいい？」

「……惨めなボクを監禁してください、伊吹お姉様」

「よろしい！　いい子いい子♪」

俺よりも背の低い、しかも強気な割に涙もろい女の子に頭を撫でられるとは……しかも自分で惨めなボクなんて言っちまったし。本当に惨めだぞ……俺。

でも、全裸で町内ランニングするよりはマシだろう。全裸ランニングは下手すりゃ警察沙汰で停学確実だぜ。死んでもそれだけは嫌だよ、まだ監禁されるほうがマシだ。

こうして、俺は国宗家に監禁される事になってしまった。

色々言いたい事はあるが、とりあえずこれだけは言わせてくれ――。

――どうしてこうなった？

第２５０話，女たらし藤島圭介（後書き）

キャラクターＮｏ００２６
・白梅雫（しらうめしずく）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆
防御力：☆☆☆☆
体力：☆☆☆☆
魔力：ナシ。
魔法（超能力）：☆☆☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆
地位：☆☆☆
総評：能力は強力だが、攻撃性がない。その分を高い身体能力で補っている。

第２５１話，自家発電

相変わらず綺麗に片づけられ、無駄という無駄がない国宗家。もちろん我が家だって玄関や廊下や居間、そしてトイレくらいは綺麗に片づけているが、それ以外は結構アバウトだ。俺の部屋は無数の漫画やラノベ、棚にも集めたフィギュアを飾っているなど、結構ごちゃごちゃしている。

葵の部屋だって、それが美少女から美少年（大体お兄ちゃんキャラ）になっただけで、俺の部屋と大差はないし、最近暮葉の部屋を覗いたら、お菓子の袋が散乱していた気がする。

そう、我が家はわりと汚いほうなのだ。

しかし国宗家は違う。

無駄がなく、片付けられてシンプルな内装となっている。

ここは伊吹の部屋だが、精々どっかの歌手のポスターを飾っている程度。本棚も俺のとは違ってきちんと５０音順、あるいはアルファベット順に並べられ、学習机には埃一つない。

Ａ型は細かいとよく言われているが、伊吹……本当に細かいな。

「あ、あんまりジロジロ見ないでよっ」

「悪いっ」

とりあえず謝っておいたが、それでも気になるよなあ……。

そりゃあ綺麗っていう意味もあるが、やっぱりねえ……一応伊吹も異性である。

基本、男という生き物は異性の部屋に入ると――緊張しちゃうものなんですよ。

「……で、罰ゲームって何やるの？」

「なに言ってんの？　もう罰ゲームは始まってるわよ？」

「そうかもしれないけどさ、これだと単に俺が遊びに来ただけみたいだろ？」

「……あんた、そこまで虐められたい？」

「違う違う、ちょっと疑問に思っただけだよ。あんまり深く考えなくてもいいって」

まあ、確かに苦痛ではあるよな……ぶっちゃけ言うとすごく暇だ。自分の部屋とは違って、ここには暇潰し出来るものがない。一応一階にはパソコンが置いてあったのだが、どうやら国宗家共有のパソコンらしく、パスワードもかけてあるらしい。まず伊吹からの使用許可は下りないだろうし、人の家のパソコンを使うのも正直どうかと思う。

家にラノベを取りに行きたい気分だが、考えてみれば監禁中にそれは無理だよな。

「はぁ、暇だ……」

「圭介、一階のパソコン使う？」

「えっ、いいのか？」

「別にいいわよ。あんたのパソコンみたいに見られたら困るもの入ってないし」

悪かったな、見られたら困るものばっかパソコンに入れてて……。

男子高校生なら、むしろエロ画像とか入ってるほうが普通なほうだろ。

「そんじゃあ使うけど……パスワードは？」

「ん、待って。私も一緒に下降りるから」

伊吹も同行か……って、人にパスワード教えるわけにもいかないからな。とりあえずパソコン起動は伊吹に任せておくとしよう。

つーか、伊吹……パソコン使えたんだ。

それから数分後。

古い上にスペックも低く、その割に色々と中に詰め込んでいる為か、パソコンの起動にはやたらと時間がかかってしまった。しかしこれで――ようやくネットが出来るぜ。

伊吹は二階、自分の部屋だな……よし、エロサイト行こう。伊吹の親父は何度か顔を合わせた事があるが、若干小太りのあのオッサン……おそらくあの人は変態だ。娘がいるからってフィルタリングをかけるような人ではないハズだ。頼むぜ国宗のオッサン――俺はアンタを信じてるぜ。

「確かこのサイトにエロゲのＣＧが――ぶ、はっ！？」

きたあああァァあああああああああッ！

ナイスだよ、マジでＧＪ（グッジョブ）だよ国宗のオッサン。

アンタは神だ。共有ＰＣなのにフィリタリング無しとか……ホント神がかってるよ。

「さ、沙弥（さや）かわええ……沙弥たんマジぎゃおぎゃお！」

詳しくはキ●ラギＧＯＬＤ★ＳＴＡＲをプレイするといいぜ。ちょっとおバカなキャラってなんか可愛いよね。あと、電波ソングって物によるけど狼●が恋をしたは神だと思うんだ。

やばい……他人のパソコンなのに、俺の欲望が勝手に右手を動かしやがる。

「くそっ、どっかにティッシュはないのか？」

ああもう我慢出来ん。

伊吹は……見てないよね？

アイツはきっと、自分の部屋で音楽でも聞いているのだろう。

今のこの状況なら――自家発電してもバレないぜ！

「ティッシュ確保、ぎゃおぎゃおな沙弥のエロＣＧ準備ＯＫ……」

後はズボンを下ろすだけ。

フフフ……今、俺の脳内にはムフフの三文字。ムフフ……俺は男だ。男たる者ピンクい事が好きなのは仕方が無いぜ。というわけで行くぞ、ヘブン状態を目指して――。

まずはズボンを下ろして――。

「なにやってるの……？」

「――ッ！？」

聞こえるはずのない声が聞こえ、恐る恐る振り返ると――伊吹がぽかんと佇んでいた。

おそらく彼女の目には、ズボンとパンツを下ろして半ケツ状態の俺と、デスクに置かれた使用目的が不純すぎるテッシュ。極めつけには画面に映っている沙弥のエロＣＧ。

これはひどい、うん……弁解の余地はないね。

「きゃあああああああああああああああああああああああああ！！」

叫んだのは伊吹ではない――俺である。

こういうのって、先に叫んだほうが勝ちだと思うんだ。確かに俺は男だが、男だって叫びたい時は叫ぶんだよ。女の悲鳴は武器になるか、もしかすると男の悲鳴も武器になる可能性が……そんな限りなく低い可能性を信じて、俺は腹の底から大地を揺るがすような勢いで叫んだ。

しかし、伊吹が一気に顔を赤く染め、段々わなわなと震えて――、

「なんで圭介が叫ぶのよ！？」

「う、うるせえ！　変態！　ド変態！　ＤＡ変態！　変態大人！」

「変態はあんたでしょ！　人の家でその、な、なにしようとしてんのよ！？」

どうしよう、素直に自家発電って言ってしまえば楽かもしれないが……そうだ、俺ってひょっとしたら天才かもしれない。今、すごくいい事を思いついてしまったぞ。

「いいか伊吹、これは神聖なる儀式なんだ……」

「ぎ、儀式？」

「ああ、知っているか？　古代オリンピックじゃ女や子供や奴隷は参加できなかった。そして競技は不正を防ぐために全裸で行われた。

古代ギリシャの格闘技でも、不正防止の為に全裸で試合が行われた。それだけじゃねえ、かつて神事は裸で行われていたんだ！」

世の中の常識だぜ……古代オリンピックの選手は全裸だったってな。そうさ、こういう事実があるからこそ、俺は最悪の展開だけは回避できるルートを選べたのだ。

俺はさらに熱く拳を握り締め、伊吹を力強く直視しながら叫び続けた。

「そして、俺が今からやろうとしていた事も神事。欲とは必要なものであれば危険なものでもあり、そんな校舎の邪な欲（よこしま）は人を暴走させかねない。そんな事態を防ぐためにも、自家発電という神聖なる儀式は毎日行わなければならない――神事と犯罪防止の側面を持っているんだ！」

俺の乏し過ぎる知識をフルに活用し、それっぽく説明してみたが……自分でも思うんだけどなんて滅茶苦茶な理論だ。どこぞのカルト教団かよ……まあ、どうでもいいけど。

いや、どうでもよくないな。はたして伊吹は今の叫びを――どう捉えるであろうか？

それによっては俺の運命が決まる――――。

「そ、そんなわけあるかあああああああああああああああああっ！！」

真っ赤な顔で涙目になりなって、唇を震わせていた伊吹が突然叫び出した。あはは、俺が考えた滅茶苦茶な理論は通用しなかったか。ですよねー、多分古代ギリシャ人だって納得しない。日本ならまだしも禁欲的な国なんかに行っちゃったら、俺は今頃処刑されているだろう。

とりあえず、脱げかけていたズボンとパンツを穿き、俺は次の動作に移った。

土下座。

そう、土下座――しかもジャンピング土下座である。

「すみませんでしたオナ禁するから許してくれえェェえええッ！」

今思ったんだけど、なんで人のパソコンでエロＣＧ見ようと思ったんだろう……俺。

つくづく、自分という生き物は馬鹿だなぁ～と思った瞬間であった。

第２５１話，自家発電（後書き）

キャラクターＮｏ００２７
・久我劉生（くがりゅうせい）※☆×１０が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：☆☆☆☆☆☆☆☆（能力込み）
防御力：☆☆☆☆☆☆☆☆（能力込み）
体力：☆☆☆☆☆
魔力：ナシ。
魔法（超能力）：☆☆☆☆☆☆☆☆☆
知力：☆☆☆☆☆☆☆☆☆
敏捷性：☆☆☆☆☆☆☆☆
地位：☆☆☆☆☆☆
総評：実力は大体早川と互角、早川より若干身体能力が高い。

第２５２話，大脱出作戦

パソコン使用禁止令。
それが何を意味するか、諸君は理解できるであろうか？

「……暇だ」

そう、暇なのだ。
現代っ子である俺は日夜パソコンの電源が付いているほど、中毒者なのだ。そんな俺がパソコン使用禁止令なんか喰らって、耐えられるハズがない。確かに、パソコン使用禁止令が発令となったのは俺のせいだ。流石に人のパソコンでエロ画像はないからなぁ……ああ、やっちまったよ。
本当に暇だ、このままじゃ腐っちまうよ……。

「……待て、いい事思いついた！」

そうだ、このまま腐ってしまうくらいなら――国宗家から脱出しようではないか。
大体、ここは俺の家の隣じゃないか。いくら伊吹からの罰ゲームだからって、パソコン禁止な上にラノベ無し遊び道具無しはキツすぎる。こんな状況に耐えられる人なんて、昭和生まれの人か機械を知らない人くらいだろう。俺もそっちの人種だったら、今回何の苦もないのだろう……。
だが、生憎俺は小さい頃からパソコン触れていた現代っ子。パソコンのない世界というものを知らない俺は、今の状況が耐えがたくて仕方ないんだ……やっぱ我慢できん！
伊吹は……確か、今風呂入ってるよな。
今がチャンス。流石の伊吹も全裸で外には出れないだろう……あ、

普通出れないか。
とにかく、伊吹が風呂場から動けない今こそ――最大のチャンスである。

「……すまん、伊吹っ」

一言、聞こえるはずのない謝罪の言葉を呟いてから、俺はこっそり玄関へと向かう。靴を履いてからは簡単だ。家というものは外からの侵入は難しいが、中から出る事は簡単だ。
開場だって、ノブの近くの鍵を少し回すだけで出来る。
がちゃり、という音が聞こえると同時に、ドアは力を加えれば開くようになる。さてさて大ってつけるほど大袈裟な事でもないが、大脱出作戦は成功だな。
外に出た俺はゆっくりとドアを閉め、小走りで国宗家の門を超えようとする。ごく普通の庭付き一軒家なので、門までの距離はそこまで遠くはない。精々自動車一台分であろう。そんな短い距離でさえ移動するのにやたらと緊張する。脱出作戦って簡単なようで難しいぜ……精神的に。

ガタッ、

家の前を通っている道路へ足を踏み入れようとした、その時である。
今、何か聞こえたよな……しかも体のどこかが物に当たった感じだ。暗くて散らかっている場所を歩く時にはありがちな事かもしれないが、それが単なる民家で聞こえたから怪しい。
しかも、確かあっちは風呂……。

「ま、さか……ッ」

よくエロサイトでガチ盗撮モノとかネットに落ちてるけど、まさか……そんなサイトに投稿する動画を撮影すべく、どこぞの変態さんが伊吹の入浴シーンを……。

「伊吹……ッ！」

ちくしょう、ナイスタイミングで脱出しようとしたぜ俺。もし、あのまま我慢して伊吹の家にいたままだったら変態盗撮犯を見逃す所だった。待ってろ盗撮犯……てめえの都合通りに行くと思ったら大間違いだ。必ず捕まえて伊吹の入浴シーンネット流失を阻止してやる。

「おいてめえ！」

狭い庭を全力で走り、伊吹の家の風呂があるあたりまで移動する。しかし、コンクリートブロックが積まれているだけで人の姿はなく、気配さえ全く感じられない。

クソッ、まさか逃げられちまったのか……？

いや、待て……そもそも盗撮犯なんていたのか？

窓すら開いてないし、もしかしてブロックベイが勝手に崩れ落ちただけなんじゃ？

「……」

あれ……ちょっと待て、この状況……まさかとは思いますが。

――俺が最も変態に見えるのでは？

「ッ！？」

ズバーン！　と、勢いよく浴室の窓が開け放たれ。暑そうな湯気

がもくもくと浴室から放たれるその中から、裸の伊吹が姿を見せたのは多分……ラッキーだけど悲劇の始まりだろう。

「……にゃ？」

「……えっ？」

明らかに空気が凍りついた。まるで氷河期、全地球が凍結してしまった大惨事のようだ。

しかし、俺の目頭と股間だけは熱くなっていくような気がした。そう、窓を全開にして外を確認している伊吹は生まれたままの姿。それも、入浴中で火照っている上に濡れ濡れだ。髪や肌がびしょびしょに濡れており、気のせいか顔も赤くなっているような気がした。

何より小ぶりながら形の整った伊吹の双丘に、思わず目を奪われてしまった。

綺麗だ……。

伊吹の裸なんて見るのは数年ぶりだが、やばい……子供の頃よりずっと……。

「うにゃあああああっ！？　ば、ばば、ばかえろ圭介のばかぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

顔を真っ赤に染めた伊吹が、恥ずかしさのあまりか大声で叫んでいた。まずい、このままじゃ俺が逮捕されちまうじゃねえか。とりあえず弁解だ……は、話せばわかるハズだ。

「お、落ちつけ伊吹！　とりあえず落ちついて話を聞いてくれ！」

「うるさい、ばか圭すぅ――――――ッ！？」

たまたま持っていた石鹸を投げつけようと、伊吹が一歩前に乗り出した――その時だ。

ずるり、と。窓枠にかけていた足を滑らし、支えを失った伊吹が窓から落下する。

そこにたまたま佇んでいた俺へ、急降下爆撃機の如く――、

「――!?」

ドゴォ！　という壮絶な音と共に、俺は勢い余って草むらの上へと転がる。下がアスファルトではなく土であった事と、後頭部への衝撃を最小限に止める事が出来たので、幸い背中に少しだけ痛みを感じる程度で済んだ。だが、突然の出来事に思わず瞼を閉じてしまったのだ。

何が起こったのか、予想は出来るが想像が出来ない。それが事実なのか確かめるべく、俺はゆっくりと左、次いで右の瞼を開けていく。

最初は目がぼやけていたが、次第に視力が回復してきた時――ようやく事態を把握できた。

「ん、ぁ……いた、ぁ……？」

左手で自分の腰を撫でながら、痛そうに唸る伊吹。足を滑らせ、落下してきたのだから痛くて当然だろう。別にそれは普通の事だし、特に問題視する必要もない。何故なら、怪我をする以上に危ない事態に発展している事に――俺はいち早く気付いてしまったのだ。

俺に覆いかぶさるように倒れ込んでいる伊吹は、当然濡れ濡れの全裸である。

体は火照ってとても温かいが、彼女の体についている水滴は冷たく感じた。彼女の顔は俺の胸に埋まっており、彼女が呼吸をするた

びにふぅふぅと、程良くくすぐったくて気持ちいい。
視線を下ろすと……うわぁ、綺麗な背中だ。白く、絹のようにしなやかで、無駄毛という無駄毛が見当たらない。剃っている……わけではなさそうだな、本当に生えていないらしい。
さらに、俺はその下へ視線を――って、俺は変態かっ！？

「……えぇっ！？」

ようやく事の重大さに気付いた伊吹は驚きを隠せず、バッと起きあがってしまった。
ていうか伊吹さん、その……起きると丸見えなんだが……？

「――っ！？」

伊吹もその事にしたのか、慌てて顔を真っ赤にしながら再び伏せてきた。くそっ、出来ればずっと見ていたかったが……まあ、無理ですよね。
というか、早くなんとかならないかな。暮葉や葵に見つかったら打ち首獄門確定だ。

「い、伊吹……俺、目ぇ瞑ってるからその間に……なっ？」

「……ばか」

「……えっ？」

今，馬鹿って言われたような……？
しかもしがみ付く腕の力がさらに強く、体もさらに押し付けられてきた気が……。

「ほんと……あんたって、馬鹿……っ」

「……こめん。物音が聞こえたから盗撮犯だと思って……ホントにごめん……」

少なくとも、今の俺には謝ることしか出来ない。信じてくれないかもしれないし、実際その可能性のほうが高いけど……黙っているよりはマシだ。

「別に、もういいわよ……気にしてない、から……っ」

顔はこちらに向けているが、決して目を合わせようとはしない。だからと言って不機嫌そうには見えないし、相変わらず顔は赤い。やっぱ、恥ずかしいんだろう……ていうか、俺もそろそろ理性がヤバい……。

「それより風邪引くぞ。ちゃんと目は瞑ってるから早く家の中入れよ」

全身びしょ濡れの状態でしかも全裸だ。風邪はひくだろうし、何よりそろそろ……。

は、早く……早く行ってくれ。俺は永渕みたいな強姦魔にはなりたくない。

だ、だから早く――早く俺から離れてくれっ。

「……ねぇ、圭介さ……興味、ないの？」

「はぁ、何のだよ？」

「だ、だから……さ。あんたは、パソコンも本棚もベットの下もア

レなのに、その……」

「……っ！？」

どきん、と。一瞬胸を鷲掴みされたかと思ったが……まずい。本当にその、そろそろ我慢するのが辛いぞ。だってその、伊吹が変なスイッチでも入ったのか、何か……求めてきてるような？

「……お前、何言ってんのかわかってるのか？」

「わかってるわよ！　私だって滅茶苦茶恥ずかしくて……で、でも、こんなのあんただけよ！」

そりゃあ誰でもだったらビッチじゃねえか……流石の俺でもそれは引くぞ。

いや、俺だけって時点で十分変だけど……。

この感じはやっぱり気のせいじゃない……な。

だからこそややこしいモンだ。それがわかってたら――ッ！

「……きゃっ！？」

一瞬だった。

得体の知れない悪寒を覚えた俺は、思わず上に圧し掛かっていた伊吹を突き飛ばし、自分も急いで地面を転がったが、次の瞬間――

バガッ！　と、地面に数センチの小さな穴が開いた。

穴と言うよりは窪（くぼ）みに近いが、それを作る為にはかなりの力が必要だ。

ちくしょう……こう大事な時に、何処のどいつの悪戯（いたずら）だよ。

「い、たた……っ」

「伊吹！　大丈――ぶはぁっ！？」

伊吹を心配して咄嗟に振り向いたはいいが、彼女を直視するが出来ない。吹き飛ばされて背中を叩き付けたらしく、彼女は壁に凭れ(もたれ)かかり、しかも開脚していたのだ。

要は丸見え。

女の子の一番大切な所まで――意図はしていないが見てしまったのだ。

「――そこの女が野蛮人を通報し、社会的に抹消してくれると思っていたんだけど」

声が聞こえる。

口調は男っぽいが、甘く幼い声はどう聞いても女の子のものである。同時に、小さな足音を立てながら近づいてくる人影が見えた。身長や年齢は葵と同じくらいであろうか。

「――そう上手くはいかないみたいだね。というわけで、僕が君を抹殺するとしよう」

やがて闇が拭(ぬぐ)われる。決してこの場がライトアップされたわけではなく、俺達を照らしているのは街灯りや、国宗家の風呂の灯りくらいだ。ただ、相手が薄闇(うすやみ)の奥からこちらへ近づいてきただけ、ただそれだけのはずなのに。

その姿を見た瞬間、

俺の思考はほんの一瞬で止まってしまった。

「ちょ……な、なによ……これっ！？」

「う、そ……だろ？」

俺も伊吹も驚きを隠せず、伊吹は叫ぶだけだが、俺はマトモに言葉が口から出ない。

現れた刺客（しきゃく）の顔は見覚えがある……というより、かなりの仲良しな気がする。

確か俺はその子に告白されて、今も俺を落とそうと頑張っているらしいが……なのに、

「なん、で……」

本当になんで、

「なんで魔法なんか使えるんだよ――青山さん！」

いつもの大人しそうな笑顔ではなく、不敵な笑みを浮かべて青山さん。しかも、その右手にはどういうわけか――白銀に輝く怪しい柄をした金属製の杖が握られていた。

第２５３話，青山さん？

風呂場の方から聞こえた異音も、俺が伊吹に襲われかけたのも……まさか、青山さんが仕組んだことだったと言うのか。しかし気になる事がある……この青山さん、何処かおかしいぞ。

仮に青山さんが伊吹に嫌われるような事をさせる場合、目的は恋敵を減らす為。しかしあの青山さんの目的は何か、俺の事を野蛮人と言って排除しようとしているし、口調も何処か変だ。何より青山さんは一般人で、少なくとも魔法使いなんてカテゴリには入っていないハズだ。

それがなんだ……さっきの青山さん、今のは明らかに魔法だ。

確かに俺は素人だけどさ、ああいうのは何度も見てきたし……だから間違いねえ。

アイツは青山さんじゃねえ――――ッ！

「……誰だ」

「ん、何を言っているのかな？」

「誰だっつってんだよ――てめえは！？」

過去に重原が似たような目に遭っていた。あの時は確かハイチ出身の魔法使いで、宗教魔術の他に複製っていう変な魔法を使っていたが……コイツもあの時の野郎と同じなのか？

青山さんの体を複製した上で――コイツは俺達に喧嘩を売ってるってのか？

「ふーん、君は短気だね……後輩に裏切られるのがそんなに心に響いたかい？」

「ふざけんな、てめえは青山さんじゃねえだろ！」

「とんでもない。僕はその青山さんだけど」

「わかってんだよ、前にも似たような事があったからな。てめえは青山さんの体を複製して、仲間の振りして俺らに近付こうとしてるだけだろ！」

そして問題はコイツの所属組織だ。何が目的で俺を野蛮人としているのか、そもそも抹消するって所でサヴィエトではないだろう。連中はあくまで俺の回収が目的だったハズだ。サヴィエトが抹消しようとしているのはアルファ隊や、ロジーナ現政権であり俺ではない。

という事は……コイツ、少なくともサヴィエトの魔法使いではない。

「……はぁ、下手に魔術に精通している素人はこれだから困る」

「なに……？」

「幸い、後ろの君の幼馴染はチンプンカンプンのようだが……藤島圭介だったかな？　君は居てはならない異界からの侵略者だと言うのに、どうして何気ない日常生活を送っているんだ？」

「し、侵略者……？」

「おや、効き覚えがないかい？　確か、君は報告書では異界の皇帝の子孫……らしいけど、皇帝の子孫がこちらの世界に潜伏しているという事は、結局君は侵略者って意味なんだよね」

コイツら……どうして俺がアレクサンドルって奴の子孫だと知っているんだ。しかもこの言い方だとサヴィエトの人間ではないし、少なくともコイツは異世界人ってわけではなさそうだ。

だったら、俺を知っている理由って……しかも、侵略者だと……？

「……てめえ、何様のつもりだよ」

「何様って、一応今の僕……いや、組織や組織に協力する組織は世界の番人って所だろうか」

「そんな理由で……たったそれだけの理由で青山さんを巻き込んだのかよ！？」

「侵略者退治と比べてしまえば、この世界の一人が犠牲になろうが関係ないと思うが？」

ここで俺は確信し、体が震えるくらいの激しい怒りを覚えた。

そもそも、俺が侵略者であるという根拠はあるのか。自分達がこの世界の番人であるという根拠があるのか。そんなあるかもわからない妄想に囚われて、コイツは俺を社会的に抹消しようとした上に青山さんまで……許せねえ、このクソ野郎――絶対に許せねえ。

「ナメてんじゃねえよ――てめえッ！」

全身が熱く、脳味噌が沸騰しているような気がする。怒りに任せて駆け始め、五本の指を粉々に砕く勢いで握り締める。距離は５メートル、飛び込めばすぐの距離である……が、

「いいのかい」

言葉は、拳が顔面を捉えたと同時に始まる。

「この体、本物の青山さんの体だけど」

「――ッ！？」

それは嘘かも知れない。だが完全に頭に血が上っていた為にまともな思考が出来ず、右の拳が魔法使いの鼻っ柱を突く寸前に、反射的に踏みとどまってしまった。

寸止め。拳は魔法使いの僅か1センチほど手前で止まっている。

「フッ、そこで躊躇うあたり――君はまだまだ素人だね」

ぐるん！　と、金属製の杖が横薙ぎに襲いかかってきた。俺は咄嗟に身を屈めてそれを避けようとする。杖は頭上を通過し、余波の小さな風が髪の毛を靡かせた。

所詮は魔法使い……身体能力は低い、と。

そう思った俺は一気に黙らせようと飛びかかる……が、

ゴッ！！　という重たい衝撃が回避したハズの俺の鳩尾に直撃してきた。

この魔法使いは二刀流のようなものなのか。そう思った俺は魔法使いの体を見るが、特に武器を持っているわけではなさそうだ。拳で殴っても、あの細腕でこんな痛みを感じるハズはない。

「……て、めえ。その杖……ッ！？」

「もうバレたのか、早いね。君は魔法使いとしての素質があるんじゃないかい？」

素質以前にそれしかねえだろ。
思い出してみれば、アマデーオも風剣のシルフも武器を持っていた。ソイツらは確かその武器には何らかの意味があって、意味があるからこそ、己の魔法の精度を上げているらしい。アイツらが言っていた事が正しいとすれば、この魔法使いが使う杖も何らかの意味があるハズだ。

「魔装飾（まそうしょく）……そういえば、彼らは魔装具（まそうぐ）って言っていたかな。まあ、どちらも同じものだから呼び方は自由だよ。これね、僕達魔術師って所詮は人間だし、いくら極めようが限度って物があるんだよね。フリーハンドと定規くらいの差がね」

「要は、その魔装飾ってヤツで魔法の精度を補ってんのか？」

「流石は鋭いね。魔術的記号に一致する道具を用いて、それに僕らの魔力を流しこめば粗悪品でも魔装飾にはなるよ。まあ、僕の杖は強度を考えて一応スウェーデン鋼を用いているけど」

魔法使いってのは本当不便な連中だな。いや、魔法は便利かもしれねえけど……結局軍隊と同じで道具使わないと強くないのか。まあ、そんな事は今はどうでもいいんだ。
それより、問題はその杖と青山さんの体の事だよ。イヤらしい意味じゃなくて、コイツは確かこう言っていたな。青山さんの体は本物だって……それって一体どういう意味なんだ？

「てめえが魔法使いなのはわかったけど、結局てめえは何者なんだよ」

「僕？　ああ、僕はハーバート・ピアース。得意分野は近代西洋儀

式魔術……んで、一応【朱色(M・S)の陽射し】って組織の人間なんだけど、とりあえず警告しておくね」

聞いたことがない組織名に続いて警告って……結局コイツは何者なんだよ。

そもそも、【朱色(M・S)の陽射し】って一体なんなんだよ。

「――君の敵は僕だけではない」

「ッ！？」

「【黄金(S・M)の夜明け】を御存知かな？」

「【黄金(S・M)の夜明け】？」

「かつてこの世に存在した巨大魔術結社だよ。その流れを汲む組織の大半がね、僕らみたいに君を害悪だと認定して……というわけだから、精々君は殺されないように頑張ってね」

魔術結社なんてわけのわからないことを言いながら、魔法使いは俺に背を向ける。敵に背を向ける時点でおかしいとは思ったが、その時の俺は何かの作戦だと思っていた。だが、男は次第に暗闇の中に紛れこむように、次第にその姿が遠のいてゆく。

「おい待てっ！」

「待たないよ、今の僕は完全に不利だからね。そういうわけで一旦身を引くからヨロシク」

叫んだ次の瞬間――ズゴンッ！　と、胃液を逆流させるような衝

撃が伝わり、激しい痛みに耐えられず、俺は蹲った状態で地面に落ちてしまった。

「け、圭介っ！　ちょ……し、しっかりしなさいよ、圭介っ！」

いつのまにか、タオルだけ巻いていた伊吹……何処にタオルがあったのやら。ていうかタオルがあるなら最初からしてください。いや、濡れ濡れ裸にタオルも十分エロいけど……。

それにしても、ハーバートだっけ……アイツ、なんで逃げたんだ？

「けーすけ様っ！　伊吹さんっ！」

痛みも治まってきて、でも地面が冷たくて気持ちが良くて起きあがれない俺の耳に、ソプラノボイスの元気で可愛らしい声が聞こえてきた。

ああ、なるほど……そういう事か。

ハーバートめ……勝てないって判断したから逃げやがったのか。

「もきゅ！？　２人とも大丈夫なのですか！？　し、しかも伊吹さんその恰好……っ！？」

「えっ？　ふ、あにゃ……こ、これには色々わけがあんのよ！」

「暮葉、俺達は全然大丈夫……だけど」

そういえば……、

「もきゅ？　どうされたのですか、けーすけ様っ？」

「いや、その……お前の後ろにいる奴ら――誰？」

そう、暮葉の後ろには2人の男女が並んでいたのだ。男は特徴という特徴はないが、女のほうは先端を縛った紫のストレートヘアでしかも……サーベル、だよな……右手持ってる剣は。

服装は普通だけど、持ってるものが普通じゃないし、何より暮葉と一緒にいる……そういえば隣にいる男も細身だけど、喧嘩強そうだな……格闘技やってた雰囲気だぜ。

「私？　私、リリー・アトウォーター。暮葉と同じくアルファ隊の一員だけど？」

「んで、俺は新川夢（あらかわゆめ）……お前が噂の藤島圭介、なのか？」

あれ、少女は暮葉の同僚で、少女と一緒にいた男は俺の事知っていて……。

なにこれ、すっごく嫌な予感しかしねえ……。

もしかして今回の騒動……身内だけで解決できるような甘い問題とは違うのか……？

第２５４話，近代西洋儀式魔術

「おおすげえ！　この家……映画のＤＶＤがいっぱいある！？」

「夢ったら、いつも映画見てるわね」

「仕方ないだろ、それが趣味なんだよ。おっ、これリリーの大好きなコ●ンドーじゃないか？」

「あっ！　ほ、ホントだシュ●ちゃん！」

「……リリーも物好きだよな」

ある者は趣味に浸(ひた)り、

「ちょ、勝手に物色しないでよ！」

ある者は訪問者の行動を怒り、

「この混乱に紛れて、パソコンでアニメでも見るか……」

ある者……というか、俺は混乱に乗じて禁止されているハズのパソコンを起動し、何処かのサイトでアニメを視聴しようとしていた。

そう、ここは国宗家である。

あの後、俺の家には葵がいるだろうし、彼女を巻き込むわけにはいかないので、伊吹の家で暮葉達から事情を説明してもらう事になった。ところが家に入ってみればこの通り。みんなハーバートの事なんてすっかり忘れており、それぞれ趣味に浸っていたりそれを注意していたりしたが……、

「みなさん！　いい加減本題を思い出して欲しいのですっ！」

いい加減堪忍袋の緒が切れたのか、突然暮葉が怒りを籠めた大きな声で叫んだのだ。

そりゃあまあ、普通は怒るよね……皆さん自分勝手に趣味楽しんでらっしゃるし。

しかも、今は色々大変な事態になっているというのに……。

「なあ暮葉。アイツらはその本題ってヤツ、知ってんだろ？」

「も、もきゅ！？　は、はいっ！　リリーさんも新川さんもこちらの関係者ですのでっ」

「だったら、暮葉が説明してくれればそれでいいんじゃないか？」

「そ、それはそうなのですけど……っ」

「頼む、俺は暮葉から聞きたいんだ」

「もきゅっ！？　ふぇ、にゃ……そ、そうなのですか……っ？」

ぶわっ、と。暮葉の顔が赤みを帯びてゆく。

「ああ、だから頼む――暮葉」

「もきゅ……そ、そういう事なら仕方ないですね。ほんと、けーすけ様は困ったちゃんなのです」

くうぅ～……何に照れてるんだか知らないが、赤くなっている暮

葉たんカワユス。
……あかん、今の俺は超キモイだろうな。
少しは自重しようぜ……俺。

「魔術結社って御存知でしょうか？」

それは突然の事であった。
先程まで赤くなっていた暮葉が、いきなり真剣な顔になって話し始めたのである。

「魔術結社？　そういや、ハーバートがそんな事言ってたよな。禁書目録（インデックス）の話か？」

「いえ……その、現実の話なのですっ」

魔術結社と言えば、アニメやゲームでよく登場するモンだけど……現実って。そんなモンが現実に存在するのかよ。まあ、異世界や魔法少女が実在するんだし、あっても変じゃないが。

「拙者も今回知った事なのですが、こちらの世界にも魔術結社というものが存在しているらしいのです。その多くが１９世紀末にイギリスで創設された、黄金の夜明け（S：M：）の流れを汲むものらしいのです」

「黄金の夜明け……？」

「カバラを中心に、当時ヨーロッパでブームを起こしていた東洋哲学や薔薇十字団伝説、錬金術など色々な物を習合させた教義を持つ組織なのです。確か……今アルファ隊でも話題になっている、アレイスター・クロウリーがかつて所属していたらしいのですが……」

アレイスターって……あれ、そんなキャラ禁書目録（インデックス）にいたよな。
あの、機械の中で逆さまになっている人……えっ、ちょっと待てよ。

「暮葉……アレイスターって実在人物なの？」

「もきゅ？　そ、そうらしいのですよっ？」

「マジで？　もしかして学園都市にいるんじゃね？」

「……けーすけ様っ、アニメの見過ぎなのですっ」

「……さーせん」

いや、でも正直驚きだ。あのアレイスターが実在人物だったなんて……まあ、どうせオカルトに走りまくっていたしょうもない人だったんだろうけど。
うん、俺は魔術サイドの人間じゃないから分からないぜ。

「んで、その黄金のナントカってヤツの流れを汲む魔術結社が、今回の黒幕か？」

「一概には言えないのですけど、多分そうだと思うのです」

マジかよ……サヴィエトだけでも手いっぱいだってのに、今度は魔術結社か。今年に入ってからどんだけ組織に狙われてるんだよ……俺。まるで政府に都合の悪い人間が、どこぞの殺し屋に命を狙われているみたいじゃねえかよ。いくら皇太子の子孫だからって、そこまで俺って重要なのか？
しかも、皇太子っつっても異世界の国だし……。

この世界じゃ何の権力もない、単なる高校生だってのに……。

「はぁ……んで、やっぱり連中の狙いは俺か？」

「いえ、拙者達も含めた異世界人全員らしいのです」

「い、異世界人全般？」

「彼らは拙者達を異界からの侵略者だと信じて疑わないようなのです」

「マジかよ……つーかその情報を連中、どっから手に入れたんだよ」

「それがわからないのですよ。だから拙者達が今忙しいのですっ」

ぶつぶつと口を尖らせ、不満を漏らすように暮葉は呟き続けた。

暮葉……相当機嫌が悪いな。

まるで、何か予定を仕事で潰されたかのようである。

「それで、ハーバートはなんで青山さんに……？」

「う～ん……拙者も詳しい事はわからないのです。ただ、黄金の夜（S）明け系（M）の魔法使いは近代西洋儀式魔術を得意としているらしいのです」

「近代西洋儀式魔術？　あれ、それってアマデーオが……」

「多分、今頃アマデーオに尋問が行われているはずですので、詳細は後ほど明らかになると思います」

ここでアマデーオの名前が浮かび上がるとは、随分懐かしいなとは思いつつ、俺は近代西洋儀式魔術とはどういうものなのかを考え始める。考えるっつっても俺は素人だし、基本的にそういう知識は厨二病系アニメで覚えたものだし、それが本当なのかすら怪しいぜ。

ただ、怪しげな儀式を行う事だけは確かだな。

アマデーオはその儀式を再現する魔法を行使し、俺達を苦戦させたんだ。

ハーバートの青山さん化も、多分何らかの魔術的儀式によるだとは思うけど……。

「はぁ……結局どうすりゃいいんだよ」

「魔術結社は基本的にイギリスにあるのです」

「まさかとは思いますが暮葉さん。イギリスに行きますなんて言わないでせうね？」

け●おん映画じゃあるますし、突然ロンドンとかだったら……マジで泣くよ？

だって明日平日で学校だし、今は夜だし――今日中に帰れねえじゃん。

「にゅふふ、何を言っているんですかけーすけ様っ♪」

暮葉が楽しそうにニコッ、と。まるで太陽を見ているかのように笑みを浮かべる。その素晴らしい笑みは思わず、笑顔を守ってやりたいと思うほどであった。

ですよね――暮葉だって今からイギリス行きは困るもんね。

「英国3泊5日の旅、もう決定事項だったりするのですっ！」

暮葉の笑顔を見つめていたら、自然と笑顔になっていく……なんてこともなく、今の発言で今までの喜びがリセットされ、思わず絶句してしまった。

ちょっと待て、3泊5日イギリス旅行……だと？

「えっ！？　ま、マジでイギリス行かなきゃダメなの！？」

「はい、その……けーすけ様、拙者達……友達、なのですよね……っ？」

「お、おう。そんなのあたりまえだろ？」

「にゅふふ、でしたら――拙者に付き合ってくれますよねっ！？」

ぐわっ、コイツ……満面の笑みで友達という立場を利用しようとしている……ッ！

そりゃあさ、行けるんなら行きたいよ、イギリス。

変態紳士の本場だし、観光名所も沢山で何より暮葉と一緒だ……

しかし、

「ちょっと待て！　学校はどうすんだよ、学校は！？」

「心配しなくても、特欠扱いなのですよ」

「……なんで？」

「インターンシップってありますよね、2年生が全員行うものなのですけど」

ああ、それなら俺も１０月に予定している。インターンシップというのは、要は職業体験というヤツであり、最近はどこの高校でも行っているらしい。大体秋の今頃に行われ、俺を含めて１０月に職場に行くヤツが多いのだが、中には９月中に職場に行く者もいるらしい。

しかし、そのインターンシップがどうしたってんだ？

「実は前々からアルファ隊が工作を行っておりまして、けーすけ様の日程を拙者と同じく、明日から３日間に変更させてもらったのですっ」

「な、なんだってぇっ！？　け、けど。インターンは行かなきゃダメだろ！？」

インターンシップは全員強制参加であり、行かなければ単位を貰えないのだ。つまりサボれば留年は確実だし、職業というだけに将来の就職にも影響することだ。

「大丈夫なのですっ！　その為に新川さんとリリーさんを呼んだのですからっ！」

「……はっ？」

つまりどういう意味だってのよ。

サッパリ意味がわからん、ただいまコ●ンドー視聴中の２人がなんだって言うんだよ。

「で～す～か～らっ。あの２人に拙者達の身代わりをやってもらうのですよっ！」

「……ねえ、それ何十パーセントネタ？」

「１００％真実なのですっ！」

「……不幸だ」

マジかよ……インターンシップの日程を勝手に変更された上に、実際に職場に行って働くのは身代わりかよ。しかもアイツら……俺達と初対面なのに、俺達を演じられるのか？

「つーか、それってバレねえのか……？」

「大丈夫だと思うのです。リリーさんは無属性魔法の達人ですし、そういう偽装魔法は得意なハズなのです」

「……せ、洗脳でもするつもりか？」

「にゅふふ、近いかもですねっ」

笑顔で軽く答えるだなんて……暮葉、いや――アルファ隊って超怖ぇ。

「それと、リリーさん達の監視役として――伊吹さんも一緒にインターンなのでっ」

「ちょ、おまっ！？　伊吹の日程まで変えやがったのか！？」

「いや、伊吹さんは元々拙者と同じなのですよ？」

マジかよ……。

なんというか、暮葉を初芝高校に入学させた時点でおかしいとは思っていた。

だけど今日で確信したよ。アルファ隊――絶対汚い手段使って裏工作してるな。

「――というわけで明日から三日間、俺は藤島圭介を演じるから」

「……えっ？」

「――私も木下を演じるわ」

「えぇっ？」

「つーわけで国宗さんだっけ？　よろしくな」

「よろしくね、国宗さん」

「えええええええええええええええええっ！？」

伊吹も暮葉の同僚、リリーとその仲間、新川から真実を聞かされてしまったらしい。なんだかとんでもない事になっちまったが……本当に大丈夫なんだろうか、コレ。

そして俺と暮葉は――本当に明日からイギリス行かなきゃいけないのだろうか？

なんだか、色々と不安になってきた……。

第２５５話，グレートブリテン

俺と言う人物はおそらく、アフリカで飢(う)えている子供達の次くらいに不幸であろう。

何気ない日常生活を送っている最中(さなか)、突然わけのわからない魔法使いの襲撃を受け、挙句の果てにその魔法使いが所属している組織を潰す為、なんと今日からイギリスへ行くことになった。

どこぞの映画のように、卒業前に皆で楽しく行くロンドンの旅ならまだしも、今回は魔術結社と言うものを潰す為の英国旅行……ああ、外国に行っても戦わなきゃいけないのかよ。前にポルトガル行った時もそうだったが……やっぱ俺、海外旅行しちゃいけない人間なのだろうか。

「着きましたよ、けーすけ様っ」

「マジかよ……」

時刻は既に２３時……ああ、もうすぐ日付変わっちまうじゃねえか。しかもイギリスに言ったら時差とかあるし、もういい……俺は基本的に日本時間で行動するとしよう。

それにしても、本当に来ちまったよ……百里(ひゃくり)飛行場。

「ここ茨城じゃねえかよ……帰れるのか？」

「大丈夫っ、きっと５日後くらいには帰れるのです！」

「はぁ……やっぱイギリス行くのかぁ」

「……けーすけ様っ、青山さんを救いたいとは思わないのですか？」

暮葉がジト目で呆れながら、痛い所を突いてきた。
それを言われるとなぁ……くそっ、やっぱり暮葉には敵わん。

「そりゃあ助けてあげたいけどさ……でもイギリスだぞ？　俺、英語喋れねえぞ？」

何気ない一言だったにも拘わらず、暮葉は体から力が抜けたらしく、がくんっ、と。いきなり転びかけてしまった。あれ、俺……何か変なこと言ったっけか？

「大丈夫ですっ！　意外と外国は日本語通じるのですよ！？」

「ま、マジで！？」

「……多分、ですっ」

「多分かよ……」

多分じゃ信用できないし、これだから外国には行きたくないんだ。いくらその国がいい場所であったとしても、言葉が通じないのでは全く意味がない。
そう、言葉の壁である。
身振り手振りが通じるとは限らないし、下手したら日本で当たり前の事が、外国に行くと失礼すぎる事だってありえるんだ。ああ、行きたくねえ……海外旅行嫌だぁ。
しかもなんで海外行くのに、百里なんて小さい飛行場を選んだんだろう？

「にしても、小さい飛行場だけど……本当にイギリスまで行ける飛

行機あるのか？」

「ここは一応国際線もありますけど、中国と韓国にしか行けないのですよ？」

「い、イギリス行きがねえじゃんっ！？」

「大丈夫なのです、ちゃんとアルファ隊が用意してくれましたっ」

……前々から思っていたんだけど、どうやって飛行場に飛行機持ちこんだんだろう。

日本って確か、航空関係の規制が滅茶苦茶多かったハズだけどな……。

アルファ隊、やっぱ恐るべし。

「あっ！　ありました、あの飛行機なのですっ！」

暮葉が飛行機の情報でも表示しているのであろう、携帯電話を振り回しながら、飛行機があるらしい方向を指差していた。元気だなぁ、と思いつつ、俺はそちらのほうを見た。

刹那、思わず動きをピタリと止めてしまった。

コンコルドのような、超音速飛行を追及した美しいスタイル。それは時速７０００キロという速度で日本とヨーロッパを、僅か2時間以内で繋いでしまうと言う化け物航空機。

その瞬間、俺の脳裏に浮かんだのは以前、ポルトガルに行く際に乗った時の地獄だ。

どうしてあの時、暮葉や明智が平気だったのかが知りたいよ。それほどの地獄だったし二度と乗りたいとも思わない。強烈なGが何

時間も連続で全身を圧迫し、胃液と一緒に胃の中に入っていた食べ物が逆流しそうな感覚を覚えた。機内食さえ機内の後ろへ吹っ飛ばす悪魔の飛行機。

俺、この飛行機のせいでしばらく、飛行機恐怖症になったんだ……。

「な、なあ暮葉。も、もっと別な飛行機……ないのか？」

「もきゅ、ありませんよ」」

「い、いや！　もっとマシなのないの！？」

「ないものはないのですよっ」

米空軍のＣ－５ギャラクシーならまだしも、こんなのには絶対乗りたくない。何が恐ろしいってレムリアでは、目の前にある超音速旅客機が普通に空を支配している事だ。

くそっ、Ｐ－３８に撃墜されてもいいから、まだ一式陸上攻撃機のほうがマシだ……。

「さっ、乗りましょうけーすけ様っ！」

「い、嫌ァァあああ～～～っ！」

なんで暮葉は「乗ろう！」とか、無邪気な笑みを浮かべながら言えちゃうんだよ。レムリアって世界の感覚は狂ってやがるぜ……こんな飛行機、俺達の常識からしたら普通じゃねえよ！

そんな嫌がる俺を無視して、暮葉は俺を引きずり――超音速旅客機へ搭乗したのだ。

そんなこんなで2時間後、ここはエジンバラ空港。エジンバラっていうのはどうも英国北部、スコットランドの都市らしく、ここはそこにある、スコットランドで2番目にデカい空港らしい。

俺はてっきりロンドンに行くのかと思ったが、まさかのスコットランドか……そうそう時差の調節しねえとな。確かイギリスって日本とは9時間差だった気がするけど……。

俺、馬鹿だしなぁ……合ってるか不安だ。

「にしても……いねえな？」

「もきゅ？　何がですか？」

「いや、スコットランドだろここ？　バグパイプ吹いてる人いねえなぁ～って」

「……けーすけ様、それはただの偏見なのですっ」

ですよねー、スコットランド人だからって全員が吹いてるわけじゃないよな。それにしてもエジンバラってデカい空港がある割には、思っていたより長閑（のどか）でいい場所だな。

どうせなら戦いじゃなくて、観光で来たかったよまったく……。

「暮葉、これからどうするんだ？」

「グラームス城に行きましょうっ」

「し、城って……観光か？」

「いえいえ、アルファ隊の英国支部がグラームス城にあるのですよっ」

グラームス城って俺は知らないけど、それってイギリスの古いお城なんだよな。アルファ隊英国支部に使っているとか言っているが、勝手に使っちまってもいいんだろうか……？

ま、まあアルファ隊の事だ。そこを使えるように裏工作をやっていたんだろう……多分。

「あ、けーすけ様。最初に忠告しておくのです」

「な、なんだよ？」

「グラームス城はストラスモア伯爵夫妻の居城でして、今も夫妻は住んでいるのでくれぐれも非礼のないようにお願いしますねっ！」

「ちょ、貴族様住んでんのかよ！？」

「しかも、王室にも輩出している家庭なので……下手したら逮捕かもなのです」

イギリス王室とも関わりあるのかよ。すごいなアルファ隊……そんな凄い家の主に許可貰って拠点としているって、一体アルファ隊とイギリスってどういう関係なんだ？

ま、まさか繋がりあります……だなんて言わないよね？

「それにしても遅いのです……っ」

暮葉がふてくされながら呟いている。

そういえばさっきから動かないしな、まるで待ち合わせをしているみたいである。

「ん、なんだ？　誰か待ってんのか？」

「はい、英国支部の支部長さんで……その、聖人の一人でもあります」

「また聖人かよ！？　意外と多いな！？」

「ロジーナにはたったの２人です！　全世界には２０人もいないと思います！」

「ロジーナ国内にいる２人の聖人が隊員って……」

世界ってある意味狭いんだなぁ。

ていうか、アルファ隊ににもう一人聖人がいるんだったら、サラマンダーとの戦いでソイツも来ればよかったじゃねえか。いくらサラマンダーがチート級の強さを持っているとは言え、リーリヤさんとその聖人の２人掛かりなら勝てたんじゃねえのか？

まあ、結果的に俺らだけでも勝てたから別にいいけどさ……。

と、その時――ただならぬ尿意を感じてしまった。

「暮葉、ちょっくらトイレ行って来てもいい？」

「もきゅ！？　と、トイレ……まだ英国支部長が来そうにないですし、いいですよっ」

「サンキュ」

実は俺、日本出る時からずっと我慢していたんだよな。ここは空港だし、人はいっぱいいるがトイレは開いているだろう。なによりエジンバラ空港は綺麗だし、きっとトイレも古宇坂駅のトイレに比

べればとてつもなく綺麗なんだろうな。ああ、綺麗なトイレってホント、落ちつくよね。

俺は空港の建物の中に入り、トイレを探して歩き続ける。

この空港、地味に広いよな……しかも案内は英語だし、トイレって何処だろうか？

必死に馬鹿な頭を使い、英語を解読しながらトイレを探し、空港を更に奥へと進む。

その時だった。

唐突に俺はぽん、と。背中を叩かれたのだ。

振り返ると、そこにいたのは一人の少女がいた。年齢は俺と同い年くらいか、あるいは中学生くらいであろうか。身長は暮葉より高いものの、顔や雰囲気などが幼さを残している。髪型は長い赤毛をポニーテールにしてあって、束ねた状態でも腰まで伸びている。

服装は白のワンピースに、茶色のグラディエーターサンダル。色白で綺麗な腕には白銀に輝くスパイラルブレスレットが巻かれていた。

化粧は殆どしていないようだが、それでもかなり可愛らしい顔つきだ。

大人しそうな雰囲気に、紅い瞳のたれ目……伊吹とは全く正反対のキャラである。

と、いけないいけない……。

俺に用があるみたいなんだし、何か話掛けてあげなければ。

「あっははは…・…何か御用でしょうか？」

しまったぁぁぁ何やってんだ俺、俺の馬鹿。

ここはイギリスだろ、常識的に考えて英語喋ろよちくしょう……。

「ごきげんよう」

「えっ？　あ、あぁっ！　ごきげんよう……？」

ご、ごきげんようとは……これまた随分お嬢様っぽいお言葉を。
つーか、この人イギリス人だよね？
今、日本語喋ったような……？

「藤島圭介様……でよろしいですわよね？」

「お、おう！　どうも、藤島圭介っす」

馬鹿か俺？
こんなお嬢様相手に、いかにもな後輩口調で話すとか……ホントに馬鹿だろ俺。これじゃあ相手に知能が低いですって、自分でアピールしているようなモンじゃねえかよ。

「うふふ、藤島様……お話では聞いておりましたが、面白そうなお方ですね」

「ど、どうもです」

あれ、今褒められたの？
ていうか話には聞いていたって……この人、俺の知り合いの知り合いなんだろうか？
気になるし……ちょっくら聞いてみよう。

「あはは、ところでお嬢さんはどちら様でしょうか？」

と、いかにもナンパ口調の軽い感じで俺は聞いてみた。
俺的にはこれでも十分態度に気をつけているつもりなんだが……

俺、やっぱ馬鹿だな。

「あっ！？　じ、自己紹介を忘れていましたわ」

ぼんっ、と少女の顔が一気に赤みを帯びて、少女もびくん、と慌てて体を震わせていた。ひょっとしてこの子、ちょっとだけ天然ちゃんなのかな。

しかし、そんな俺の思考を遮(さえぎ)るような一言が――、

「わたくし、アルファ隊英国支部長を務めさせていただいております、ブリジット・バウエス＝ライオンと申します」

俺に声を掛けてきたのはアルファ隊の英国支部長であった。

しかも、ブリジット・バウエス＝ライオンって……名前的にロジーナ人ではない。

まるで――現地(イギリス)で生まれ育ったかのような……あれ？

第２５６話，イギリスの問題

立派な庭園に立派な外観のお城とくれば、大抵は内装も立派なものである。ここグラームス城は今も伯爵夫妻が住んでいるらしく、中も外も手入れされており大変綺麗な場所である。しかも庭園は広いし中も立派に装飾されており、ここ――大食堂は我が家を全部足したよりも広かった。

西洋風の大きな部屋には、巨大な誰かの肖像画が飾られている。おそらくこの家で力のあった人の肖像画だと思われるが、肖像画を飾っている時点で流石は貴族様である。

さらに、清潔な白いテーブルカバーが被せられた縦長のテーブルには、いかにも俺達一般庶民が普段食えるようなものではない、とても高そうな料理が並んでいる。

それにしても……イギリス料理って美味(うま)いんだろうか？

巷(ちまた)じゃ不味(まず)いという評判だが……。

「ブリジット隊長……あの、これ、食べちゃってもいいのですかっ？」

「ええ、お話は聞いております。藤島様も木下様も御夕飯がまだなのでしょう？　本日の御夕飯の残りものではございますが、よろしければお食べになってください」

アルファ隊英国支部長、ブリジット・バウエス＝ライオンに案内され、俺と暮葉はグラームス城を訪れた。いきなり宮廷料理みたいなのを出され……しかもこれが残りものらしい。

貴族ってすげえ……高級料理すぎるぜ。

「そ、それじゃあいただいちゃいますねっ。暮葉、食おうぜ？」

「は、はいっ！　いただきますっ！」

早速スプーンを片手に、食べ物を乗っけて口へと手を動かす。茶色のような、黄色のような微妙な色のグラタン風料理で、中には肉とかが入っている……うん、悪くはない。

しかもこの味……羊肉か、まあ噂で聞くほど不味（まずい）くはない……。

「あっ、隊長！　美味しいですっ！」

「あら、お口に合っててよかったですわ」

そりゃあ相手は貴族様な上に上司だからな……まずいとは言えねえよな。

まあ実際、そこまでまずいわけじゃないし……まだ葵の飯に比べりゃ美味（おい）しいよ。

「ところで、藤島様は狙われている身ですのに、どうして日本から遥々来られたのでしょうか？」

「ん、あ？　そりゃあ暮葉が居るからっすよ？」

「彼女は一応魔法少女ですわよ？」

「い、いちおーってなんですかっ！？　拙者は立派な魔法少女なのですっ！」

暮葉が口の中に食べ物を含ませ、不機嫌そうに口を尖らせている。すまん暮葉、俺もお前が魔法少女だって忘れてたよ。だって暮葉……戦法が武士風なんだもん。

まあ、そこを気にしなくても確かに暮葉は強い……だけど、

「俺だって一応戦えますし、どうせ戦わなきゃ今の状況だって改善されないじゃないっすか。それにコイツ一人だけが傷つくの、なんか嫌なんですよ……だから俺、暮葉と一緒に戦う事にしたんです」

「け、けーすけ様……っ」

「うふふ、木下様。頼もしい騎士様……いえ、武士様が傍におられますねっ」

「ちっ！　違います！　けーすけ様は友達なのですっ！」

顔を真っ赤にしながら、俺が武士である事を否定する暮葉。正直俺も武士なんて荷が重い身分は嫌だし、何より俺と暮葉は友達であり――決して暮葉のボディーガードではないんだ。

だけどなぁ……出来る事なら友達以上になりてぇよ。

暮葉の態度を見る限り、攻略出来そうなんだけどなぁ……何故かいつも寸前で失敗する。

俺、呪われてんのかな……？

「うふふ、なんだか微笑ましいですわ」

そんな俺達を見ながらニヤニヤしているブリジットさん。

この人、何か俺らで遊んでねえか？

ていうか、ずっと考えていたんだが……この人、何人なんだろう？

「あ、あのさ、ブリジットさん。ちょっと聞きたい事があるんだけど……」

「はいっ、どういたしましたか？」

「いや、ここって英国王室とも関わりのある城じゃないですか。だから気になったんですけど……今も夫妻が住んでいるのに、なんでアルファ隊の英国支部がここにあるんですか？」

「あっ、それ拙者も思いました！」

どうやら暮葉も同じことを考えていたらしく、ぱん、と。手を叩き話に加わってきた。

「うふふ、やっぱり気になります？」

「ええ」

気になるよ。

アルファ隊の支部が城にある事も、ブリジット隊長がどう見てもロジーナ人じゃない事も。

一体、何の繋がりがあるんだろうか……そんな事を考えていた、その時、

「わたくし、バウエス＝ライオン家の次女ですの」

その言葉を聞き、俺と暮葉の思考と動作が停止する。

そういえば、ブリジットさんの名字はバウエス＝ライオン。ここに住んでいるストラスモア伯爵夫妻の名字もバウエス＝ライオン……

……あれ？

「た、隊長……イギリス人だったのですか！？」

「ロジーナ人じゃねえのかよ！？」

「あら、木下様には前に……あ、間違えましたわ。あの人は木下様ではなく、アイリス様でした」

アルファ隊英国支部長にして、聖人と認定されている少女の正体は英国貴族。それも単なる貴族ではなく、かつて王妃を輩出し、その王妃の娘が現在の女王陛下という名門中の名門。

そんな英国が誇る名門貴族の家に生まれた少女が――なんでアルファ隊に？

「じゃ、じゃあ……なんでアルファ隊に？」

「うふふ、実はイギリスは昔から異世界との親交がある国なんですの」

「はぁっ！？」

「もきゅ！？　ほ、ホントなのですかっ！？」

まさに衝撃の事実。

俺も暮葉も驚愕を露わにし、同時に俺はイギリスってどういう国なんだよ……と思った。

「時を遡れば２０世紀初頭くらいでしょうか、異世界人を名乗る一人の男が、傷だらけの状態でバッキンガム宮殿の前に現れて以降、国教会所属の魔術師達が苦労に苦労を重ね、遂にロジーナ……と言っても、当時はサヴィエトでしたが。どちらにしても異世界との接触に成功しましたわ」

一人の男が原因って……まるで俺とサヴィエトの話みたいだな。
というか、イギリスの国教会に魔術師って所属していんだな。まあ、魔術結社とか危険な連中がいるくらいだし、いくら宗教が魔法を憎悪していたとしても、魔法使いと戦う為には魔法使いが必要だろうからな。
もしかすると、宗教は魔法使い取り締まり用の魔法使いを数多く抱えているのかもな。

「以降、英国はロジーナ国民を支援し、クーデターを起こす為に武器の供与も行いましたわ」

「もきゅ……だから２０年前のクーデターが成功したのですねっ」

「わたくしも、現在極東にいらっしゃるリーリヤ様と手を組み、英国出身の魔法少女としてサヴィエト残党退治を行い、その功績が称えられたのでロジーナ正教会から聖人の称号を戴(いただ)きましたわ」

そんな成り行きで聖人認定されるって、かなり特異な例だろうなぁ。
待てよ、ブリジットさんが聖人って事は……やっぱり滅茶苦茶強いんだろうか？

「しかし政府や王室、国教会がこちらの世界での対外政策や、ロジーナ問題にばかり目を向けていたせいで、近年一時は沈静化したと思われていた魔術結社が、再び息を吹き返してきましたの……」

「なあ、やっぱその魔術結社って存在してたらヤバいのか？」

「宗教問題を無しにして考えましても、何をするかわからない個人主義者達の組織ですわ。現に彼らは藤島様のように、先祖が異世界

人の人さえ狙っていますわ……自らを世界の番人だと称して」

う～ん、確かに魔術結社があったら、個人的にはうかうかエロゲーもやってられない、毎日がスリルとデンジャラスな日常になっちまいそうだしな。だからといって、魔術結社を完全悪にするのもどうかとは思うが……しかし、個人的には魔術結社は許せねえな。

青山さん。

無関係なヤツを、俺達の事情に巻き込みやがって……それだけは絶対に許せねえな。

「……俺も、個人的にはソイツらを許せないです。俺の後輩がそいつらの犠牲になったんです」

「ブリジット隊長……拙者も、けーすけ様と同じなのです」

ああ、俺達は今――最高に機嫌が悪い。

「世界の番人だとか、宗教の魔術禁制だとか……そんな事は俺にとってはどうでもいいんです」

「拙者も、そういうのを抜きに怒っています」

魔術結社の存在とか、ソイツらが全員個人主義者だからとか、そんな事はどうでもいい。

「俺は――後輩を痛めつけられた事にムカついてるんです！」

「拙者も――無関係な人を巻き込んだあの人達が許せないのです！」

それが、俺達が魔術結社と戦う理由。

アルファ隊だとか、英国の問題だとか……そんな事に比べりゃチンケな事かもしれない。
だけど、俺達にとってはどんな大きな問題よりも――それが最も重要な事なんだ。

「……久々ですわ、感動しました……わたくし、久々に仲間想いな人達を見ました」

ブリジットさんは満足そうに笑みを浮かべると、同時に瞳も潤(うるお)い始めてきた。ブリジットさんの言葉は流石に冗談かと思ったが、まさか本当に感動していたとは……。

「今回の問題は魔術結社を放置していた、英国の責任でもありますが……それよりも、わたくしは仲間想いなお二方の為に――久々に本気を出しますわ」

「ブリジット隊長……っ」

「戦いましょう、魔術結社と――――」

こんなクソッタレた世界の中でも、こんな仲間や感動が目の前に存在している。そんな風にでも思ったのだろうか、英国出身の聖人――ブリジット・バウエス＝ライオンの本気宣言。
それは、魔術結社との戦いの――始まりでもあった。

第２５６話，イギリスの問題（後書き）

久々の後書きトークコーナー！

圭介「みなさんお久しぶりです！」

伊吹「今日からこのコーナーを再開したいと思うわ」

圭介「さて、まず最初にお知らせ。実はまた人気投票をやろうと思います」

伊吹「えっ、ま……またアレやるの？」

圭介「そろそろ年末だし、お正月に何かやろうかなと思ってよ」

伊吹「……一位になったキャラには何があるのよ？」

圭介「もちろん短編エピソード。ただし今回は一位だけじゃく、上位３名の短編エピソードを執筆しようかなと思います！」

伊吹「う、うそっ！？　３人も！？」

圭介「締め切りは今年が終わると同時、つまり１月１日０時０分です！」

伊吹「実質１２月３１日の１１時５９分ね……」

圭介「今回はキャラも多いですし、沢山の投票、お待ちしております！」

伊吹「また私、一位になれるかな……？」

圭介「無理じゃね？」

伊吹「なっ！？　前回早川より順位下だった人が言わないですよっ！」

圭介「う、うるせえ！　しかも今回主人公格に浜島追加だし、邪炎のサラマンダーは何かオッサンの癖にカッコいいし……俺、ヤバいかも」

第2回魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

第257話，心身ともに鍛えられる最高の訓練場所

昨日の騒動の翌日。
藤島圭介に変装することになった俺、新川夢。そして木下暮葉に変装することになったリリーは藤島家に潜り込み、本人の振りをして一晩生活したのだが……。

「……それで、本物にお兄ちゃんとクーにゃんは何処なの？」

「……おい、バレてるじゃないか」

「う、うっさいわね。これは私のせいじゃないわ」

藤島圭介には妹がいるらしく、その妹である藤島葵は大変鋭いお方であった。実は昨日から怪しまれてはいたんだが、俺もリリーも頑張って素性を隠し続けて来たんだ。しかし、一晩一緒に過ごした結果がこれだよ……藤島妹、恐ろしいヤツだよ。

「それで、お兄ちゃんとクーにゃんはどこなの？」

「ま、まず聞きたいんだけど……なんで俺らが偽物ってわかったの？」

「お兄ちゃんとクーにゃんの匂いがしないもん！　滲（にじ）み出るオーラも全然違うし。お兄ちゃんと別人なのはバレバレなんだよ、葵の五感とお兄ちゃん電探に狂いはないんだよ！」

「へ、変態だ……っ！」

「変態だわ……っ！」

「知らない人に変態って呼ばれる筋合いはないかも！」

いや、変態なのは事実じゃねえか……なんで匂いで兄と俺を区別出来るんだよ。お兄ちゃん電探ってのも謎だし。ああ……わかったよ、藤島妹はブラコンの変態さんなんだな。

しかし、いきなり詰んだなぁ……なあ、どうすればいいと思う？

「それで、三度目だけどお兄ちゃん達はどこ？」

「え、え～っと……訳があって俺とコイツが2人の身代わりをする事になってだな」

いいながら、俺はぽんっ、と。リリーの肩に左手を置く。

一応身代わりである事はバラしたが、藤島妹はまだ納得できない様子だ。

「訳？　訳ってなに？」

「それはなんというか……」

困った、何も考えてないや……とりあえず外せない用事があるって事にしようか。

いや、それだと態々身代わりを用意する理由としては弱い気がするし……困った。

と、その時――リリーがぐいぐい、と。着ている服の袖を引っ張ってきた。

「ゆ、夢……そろそろ時間よ？」

「あ？　うわっ、やべぇ――あと1時間でインターン始まるじゃん！？」

これをサボったら藤島も木下も留年確定＋就職困難確定だ。流石の俺も他人の人生を滅茶苦茶にするほど下衆（げす）な男では。インターンとか面倒だけど、参加してやらないとな。

「行くぞ、リリー！」

「うん！」

「えっ？　ちょ、待ってよ2人とも！　話はまだ終わってないんだよっ！」

俺とリリーは立ち上がり、不審者から逃げるような勢いで居間から飛び出し、家を出る為に玄関へと駆けた。背後から藤島妹が叫ぶ声が聞こえるが、今はそれを気にしている場合ではない。とりあえず藤島妹の声は無視して、さっさと国宗と合流してインターンに向かうとしよう。

急がないと――藤島と木下の人生が滅茶苦茶になっちまうぜ。

他人の人生を壊さない為にも、俺とリリーはお世話になる職場へ必死に走るであった。

1時間後。

インターンシップを行う職場へ到着したのは、今から１０分ほど前のこと。まさか古宇坂から電車乗って千葉まで行く羽目になるとは……ギリギリの到着で俺もリリーも汗だくだ。

リリーは魔法を使えるし、俺も動きだけは自信あるし……間に合ってよかった。

「あんた達、随分ギリギリだったわね？」

「仕方ないだろ……色々あったんだよ」

「そーよ、それより今日はよろしくね」

「えっ？　うん……よろしく」

それにしてもシュールな光景だ。

リリーは桃色のカツラを被り、木下になりきっているとは言え……リリーが普段じゃ絶対にあり得ない格好をしているのだ。最も、それは俺や国宗にも言えている事だ。多分、普通に暮らしていれば着る機会のない服を俺達は着ている。

緑色の服に黒い靴、作業着のような服に身を包んでいる俺達は、そう――、

「えー、高校生のみなさん。陸上自衛隊へようこそ！」

俺達のインターンシップ先は陸上自衛隊。最近では８・１７事件で出動し、たった一人のテロリストに苦戦した事から国民を始め、諸外国からの評価もガタ落ちだが……やっぱカッコいいな。

でも、なんでインターンシップ先が自衛隊なんだ？

「――まずは皆さんに自衛隊とはどういうものかを知っていただいて、その後に敬礼や気を付けなどの指導を――――」

自衛官が３日間のインターンシップの日程を説明している中、俺は自衛官にバレないように周囲を見回す。やはり男子率が高いが、中には国宗やリリーのような女子も参加している。しかし自衛官の

説明を聞く限り、インターンシップの内容はかなり本格的。
敬礼とか気を付けだけならともかく、2日目はどこの軍隊も行う行軍訓練があり、3日目には体力検定を実施するらしい。インターンシップｉｎ陸上自衛隊……予想以上にハードそうだ。
藤島も木下も、そして国宗も凄い場所選んだな。
アルファ隊の木下はともかく、藤島と国宗……自衛官になりたかったのだろうか？

「……なあ国宗、どうして自衛隊選んだんだ？」

「えっ？　いや、何か強くなれそうだったから？」

「強くなりたいのか？」

「当たり前でしょっ。今のままじゃ圭介達の役に立てないし……だから強くなってやるのよ！」

一途な子や……しかし己を鍛えるという目的なら、自衛隊は最高の訓練場所だな。もちろん身体的にも鍛えられるだろうが、何より精神面が一番鍛えられそうな気がする。
肉体が強くても精神が弱かったら、何の意味もないからな。
これはインターンシップだけど、自衛隊は決して手を抜かない。
ああ、きっと厳しい訓練が待ち受けているんだろう……藤島の身代わりも大変だぜ。

それからさらに数時間。
午前の自衛隊講習と基礎訓練（敬礼や気を付けなど）が終了し、午後に備えての昼食タイムがやっと訪れた。思い知った……自衛隊の厳しさをな。確かに自衛隊は世界に誇れるぜ……だけどリリーから聞いた話なんだけど、自衛隊は８・１７事件では魔法使いと戦っ

たらしい。
結果は惨敗で、結局藤島を支援してようやく勝てたらしい。
つまり、サヴィエトの魔法使いは――自衛隊の秘められた実力を持ってしても勝てない。
サヴィエト、特にその中でも赤の軍神と呼ばれる連中は――それほど恐ろしい存在なのだ。

「夢、どうしたの？」

「……リリーはあんま疲れてないんだな」

「なによ、まだ基礎訓練でしょ？」

「基礎訓練って……敬礼って意外と難しいじゃんか」

「そうね、素人には難しいわよね……」

「……すまん、忘れてた。魔法少女って一応軍人なんだよな」

魔法少女。
それは俺達が想像する派手な服を着て戦う、あの魔法少女とは違う存在だ。確か魔法を使うのは少女だし、中には好んでそういうファッションで戦う者もいる。しかし、魔法少女は単に魔法を使える少女の事を言っているのであって、その実態は特殊部隊に所属する軍人なのだ。
軍人だからこそこういう訓練には慣れており、動きもキビキビしていて完璧であった。

「ねぇ国宗さん、どう？」

リリーが俺との会話を中断し、隣でもぐもぐと口を動かしている国宗に話しかけた。

「……ごくっ……なに？」

「私たち、ちゃんと藤島様と木下になり切れてる？」

そうだ、自衛隊が厳し過ぎて忘れてたけど……俺達、身代わりやってたんだった。

どうしよう、国宗の目から見て2人に見えなかったら大変だ。

「えっ？　う、うん。大丈夫じゃないの？　ここにいる人達であんた達の事知ってんのは私だけだし、誰もあんた達の事疑わないと思うよ」

「そっかぁ……よかったな、リリー！」

「うん！　私たち、ちゃんと任務を全う出来そうね！」

「ああ！」

とりあえず、俺達は藤島と木下の身代わりとして機能しているみたいだ。後は藤島と木下が帰ってくるまで身代わりを続け、今後の日常で2人が困らないようにしとかないとな。

まずは自衛隊でのインターンシップを終わらせよう。3日間日程で、しかも駐屯地に泊まり込みと言うハードスケジュールではあるが、まあ……己を鍛えるのには最高の3日間だな。

……と、考えた所で俺の意識が途切れた。

食堂内、いや……基地全体に――ラッパの音色が響き渡ったから

だ。

実習中、もっと言えば休憩時間で食事をしている最中だった。

自衛隊のラッパの詳しい事はわからないが、少なくともご飯の時に響いたメロディーとは全然違うものだし、俺が唯一知っている起床のものとも違う。

なんだ、このラッパの音は……？

「敵襲ー！」

「総員配置に付け！　これは訓練ではない！　繰り返す、これは訓練ではない！」

おいおいおいおい、こりゃどういう事だよ。

敵襲って……ネタじゃなくてガチなのか？

まさか、たった一人の人間よりも自衛隊が弱いと思いこんでしまったのか、中国か朝鮮の軍隊が攻めて来たのだろうか……いや、それはないよな。確かに攻めてくる可能性はゼロではないが、そもそも攻めてきたらニュースになるだろ。まず海上自衛隊と航空自衛隊が戦うハズだ。

専守防衛を基本戦略とする陸上自衛隊は戦略上、本土決戦しか行えない。つまり陸上自衛隊が戦うとしたら、その時既に敵は本土に上陸しているのだ。

しかし、そんな事になればニュースになるだろうし、インターンだって中止になるハズ。

「夢！　強い魔力を感じたわ！」

「魔力？　……お、おい。じゃあ敵って……ッ！」

「サヴィエトか魔術結社かまでは分からないけど、魔法使いである事は確かね！」

インターンシップ初日からこんな事になろうとは……狙っていたかのようだな。

まあいい、魔法使いが攻めて来たんじゃ――自衛隊だけだと不安だしな。

「おし、行くぞ――リリー！」

「うん、出撃よ！」

「……えっ？　ちょ、ちょっと……待ちなさいよっ！」

何処の所属かは知らないが、馬鹿正直に自衛隊基地に攻めてきやがった魔法使い。その実力は会ってもいないので不明だ。だが、魔法使いである事は確かだ。

油断は禁物であると肝に銘じ、俺達は魔力を放つ者の場所へと向かうのであった。

第２５７話，心身ともに鍛えられる最高の訓練場所（後書き）

・後書きトークコーナー！

第２回魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

圭介「今回俺らの出番がねえ……」

暮葉「もきゅ……今回は新川さん達が主人公でしたね」

圭介「イギリスよりも先に日本での戦いをやんのかよ……」

暮葉「大丈夫です！　きっとこれが終わればバトル・オブ・ブリテンなのです！」

圭介「バトル・オブ・ブリテンは何か違うと思うぞ、流石に空中戦はないと思う」

早川「……オレらは名前すら出てこねェのか」

浜島「まあ、そういう事もあるさ」

第２５８話，魔術師の居場所

リリーが魔法使いが攻めて来たと騒ぎ始め、実際に陸上自衛隊下志津駐屯地では非常警報ラッパが鳴り響き、誰か自衛官が大声で敵襲と叫んでいる。そんな大混乱の中、俺とリリー、そして一緒について来た国宗は、魔法使いを倒す為にリリーを先頭に駐屯地内を走り回っていた。

既に魔法使いが大暴れした後のようで、地面には無数の自衛官達が倒れていた。

目立った外傷はない、気絶しているだけのようだ。

銃声すら聞こえなかったし、チッ……相手はかなりの使い手みたいだな。

「リリー、どっちだ！？」

「こっちよ！　魔法使いは私たちから逃げてるわ！」

「なんだよ、それ……相手は俺達に気づいてるのか！？」

それを聞くとリリーはしばらく黙りこんでしまった……が、

「大丈夫、夢は国宗さんと一緒に行って。私が動くと敵に気づかれるわ」

そうか、リリーは魔法少女だ。

それで魔力を感じ取る事が出来るらしいが、敵も魔法使いである。

魔法少女であるリリーに魔力が感じ取れるなら、魔法使いである敵が魔力を感じ取れたって不思議ではない。

「……わかった。国宗、先に行こうぜ！」

「あ……ちょ、待ちなさいよっ！」

俺達の作戦はこうだ。

魔力が低い俺達がリリーと連絡を取り合い、魔法使いの居場所へ先に向かう。そして俺達が魔法使いへ攻撃を仕掛け、足止めを行う。そうしている間にリリーが戦闘準備を行い、準備が整い次第戦いに参加し、一気に勝負を決めるというものだ。

かなり難しい作戦ではあるが、やるしかない……。

俺は国宗を率いて走りだすと、ポケットにしまっていた携帯電話を取り出す。

電話帳の中からリリー・アトウォーターを選択し、通話ボタンを押して、

「リリー！　聞こえるか！？」

『聞こえるわ』

「よし、誘導を頼む！」

『了解……そうね、魔法使いは基地の北部に転進。魔力の波を感じるから……多分交戦中よ』

「よし、わかった。とりあえず北に行けばいいんだな！？」

基地の北で交戦中……という事は、ようやく自衛隊も態勢を整えたってわけだな。自衛隊が足止めしている今がチャンス。早くそこへ向かって魔法使いをぶっ倒してやろう。

「あんた、そういえば武器とかはあんの？」

全力疾走中の今、大事な事を思い出したかのように、国宗がそんな事を聞いてきた。

「武器は持ってないな」

「じゃ、じゃあ武術の心得とかはあるの？」

「一応空手はやってたけど？」

「わかったわ、無理するんじゃないよ！」

そっちこそな、と俺は軽く返答する。

一応俺はかつて空手で鍛えていて、そりゃあもうクソみたいな修業だったぜ。道場のクソ師範に家のクソ親父のせいで、俺の青春は真っ暗だったが……まあ、今は後悔していないな。とりあえず有段者にはなれたし、ある程度の魔法使いとは戦える。

それでリリーの力になれるってんなら——今更クソ共を恨んだりはしないぜ。

そして。

そんな昔の事を思い出していた矢先、俺の目には襲撃者の姿が映った。　上から下まで真っ黒なローブを着た小柄な男だ。しかしその瞳は蒼く、僅かに見える髪の色は金。

どうやらお騒がせ襲撃者の正体は——外国人の少年のようだ。

「……チッ、なんだよこっちの世界の人か」

光り輝く槍を構えている少年は、面倒くさそうな表情を浮かべて舌打ちをしていた。どうやら俺達はお望みの相手ではなかったらし

い。少年の足元には数人の自衛官が倒れていた。

「お前……サヴィエトか！？」

「サヴィエト？　俺はそんなヤツら知らないけど？」

「じゃああんが魔術結社の人ね……圭介を殺そうとしたヤツの仲間なのね！」

国宗が怒りを露わに叫ぶと、少年はフッ、と。不敵な笑みを浮かべて、

「困ったな……そこまで知ってるんじゃ、保護対象のこっちの世界の人間だとしても――生かして帰すわけにはいかないよなァ？」

今度は牙を剥き、攻撃の意思をこちらに示してきた。それは単なる敵意ではなく、俺達をこの世から消し去ろうとする……そう、殺意だ。

「お前が自衛隊をやったのか！？」

「そうだけど？　恨むなよ……別にコイツら戦ったわけじゃなくて、自滅しただけだし」

「自滅だと？」

確かに銃声は全く聞こえなかったし、リリーが魔力の波を感じたからって、魔法とは戦闘を行う為だけのものではない。ひょっとしてコイツ……他の何らかの魔法で自衛隊を……？

だけど、ここから先は俺にはわからない。コイツはどんな魔法を

使って自衛隊を……。

「ああ、自滅だ……ソイツらは精神的に狂っちまったんだよ？」

「どういう事だよ……ッ！」

「なあ、お前ら……俺を見てみろよ？　そしたら答えがわかるからよ――」

どういう事だ……？
アイツの事を見る？
それに何の意味が？

「う、あ……あァァがゥ……あああああああああああああああああああ！！」

と、いう声と同時に――国宗の体がくの字に折れ曲がった。
すとん、と地面に落ちた国宗は、何故か目を瞑ってこめかみを押えていた。

「国宗……国宗！」

俺は慌てて国宗に駆け寄るが、倒れている自衛官達と同じで目立った外傷はなく、ただこめかみを押えて呻き声を上げているだけ。
クソッ、何がどうなってるってんだ？
あの魔法使い――何をしやがったんだ？

「儀式魔術にはスクライングという技法が存在する」

「ッ！？」

「その技法は物理的光に対応しない視覚イメージでな、その意味が分かればテメェのツレが倒れた理由や、自衛隊の連中が何もできずに戦闘不能になった理由がわかる。最も……テメェがその答えを見つける前に――同じ運命を辿らなければの話だがな」

こんのクソガキ、と思いつつ――俺はポケットから携帯電話を取り出す。

リリーだ。リリーに電話をしよう。

アイツは魔法少女だし――こっちの魔法知識だってカバーしているハズだろ。

……だが、

『おかけになった電話番号は、電波の届かない場所にあるか、電源が入っていない為かかりません』

「……!?」

通じねえ……ッ!?

リリーが……なんで、どうしてこんな事に……？

「ああ、テメェはそういえばもう一人――魔術に詳しい異界からの侵略者を率いていたよな？」

「まさか……!?」

「ハッ、潰しといてやったよ。俺らの抹殺リストに登録されてるし、一番アタマがキレそうで魔術知識も豊富で、最も邪魔になりそうなヤツだったからな。俺の魔術は遠距離でも、そこに何があるかさえわかっちまえば――余裕で通用するモンなんだぜ？」

クソッ、リリーも国宗もダウン……残っているのは俺一人かよ。
だけどアイツがどんな魔法を使うか分からない以上、迂闊に近付いて攻撃するのは危険だ。国宗や自衛官のように、何らかの魔法で意識を奪われてしまうかもしれないし……クソッ、コイツは予想以上に厄介だ。
これが――俺達の世界の魔法使いかよ！

「さて、テメェも追わりだ――俺を見ろ」

不敵な笑みを浮かべ、輝く槍をさらに神々しく輝かせたところで、

「――堕ちたな、ローランド・ストライド」

バギン！　という破壊音が響いた。
音はローランドと呼ばれた少年が持つ槍。先程まで神々しく輝いていた槍から光が消え、さらには槍そのものが粉々に砕け散ってしまった。吹き飛んだ槍の破片がローランドを襲い、顔にも数か所の切り傷が出来ている。しかしローランドは傷の痛みより、突然の出来事に驚いているようだ。

「術式破壊……？　こ、この魔術……まさか！？」

ローランドは目を躍らせながら、俺……ではなく、俺の後ろを見つめている。そういえば背後から声がしたなと思った俺も、首を動かし後ろを向いてみた。

「久しぶりだな、ローランド・ストライド」

「先生……アマデーオ、先生……ッ！？」

それは2メートル近い長身の老人で、重そうな聖職者の法衣を身にまとい、首からは白銀に輝く十字架を提げていた。紫色の不気味な杖を右手に握り、左手には古びた分厚い本を持つ。ゲームに出てくる魔法使いのイメージそのままだ……。

突然現れた老人、アマデーオは先生と呼ばれていた。

もしかして、ローランドの知り合い……か？

「白銀（A.L.）の満月をローマ・カトリックによって崩壊に追い込まれ、居場所を失った我々魔術師はそれぞれの道を歩んだ。私も、つい最近まではある組織の一員だった」

「先生……ッ」

「しかし異界の者の弾圧は感心できないな。それでは我々がローマ・カトリックにされた魔女狩りや異教徒弾圧と同じだ。少なくとも、私は以前からそこまで落ちぶれたつもりではなかった」

……そうだ、思い出した。

リリーが言っていたが、以前アルファ隊に掴まった魔法使いの中には、魔術結社崩れの相当強い老人がいたらしい。このアマデーオって人がそうなんだろう……。

だけど……なんで今更出てきた。どうしてアルファ隊はこの老人の外出許可を……？

「先生……俺だって、俺だって居場所が欲しかったんですよ！　先生と同じで、この世界に魔術師の居場所はなくて……だから俺は英国に渡って魔術結社に入ったんです！　そこのやり方が異界人の弾圧だったんですよ！　だから俺は頑張って……極力人を殺さない魔術を開発したんですよ！」

居場所……か。

俺はそういうのに困っていないし、多分人から見れば幸せなヤツなのかもしれない。それでも俺だって普通じゃないし、居場所について考える事はあるが……。

魔術師達の居場所は――この世界には存在しない。

それが今、ようやくわかったけど……そうか、魔術師ってのはその為に戦っていたのか。

単にこいつらは居場所が欲しくて……ただ、やり方が気に入らねえよな。

「……そうか、しかし殺さなければいいと言う問題ではない。私も人の事を言えた義理ではないが、少なくとも今の貴様は――魔術師の面汚しだ」

それで勝敗は決した。

ぶらん、と。ローランドの手から力が抜ける。次第に全身から力が抜けていき、やがてローランドは地面に座り込んでしまった。

それと同時に、地面に倒れていた自衛官達がむくり、と起きあがる。

当然、一緒になって倒れていた国宗も――、

「あ、れ……？」

「国宗、大丈夫か？」

「私……あれ、なんで……？」

どうやら頭が混乱しているらしいが……しかしスクライングってなんだったんだ？

国宗の場合、アイツを見た後に苦しがって倒れちまったが……。
と、考え事をしていたその時だった。
しゅるる、と。突然現れた縄がローランドの体を締め付ける。
縄は誰かが持ってきたものではなく、その場で創り出されたもののようだ。

「……おお、リリー！」

やがて、ローランドの後ろに立っている人影――リリーの姿に俺は気がつく。
そうか、ローランドに巻きつけられた縄……リリーの拘束術式だったんだな。

「スクライング……要するに幻視魔術を使われるとは完全にやられたわ」

幻視……そうか、やっとローランドが使う魔術が何なのか――わかったぜ。
要は視界に捉えた物体を利用し、対象に幻覚を見せていたんだ。
その物体をローランドは自分や近くにある者に設定して……なるほど。だから自衛官や伊吹はローランドを見た瞬間、苦しんだ末に意識を失ったんだ。リリーはヤツが記憶していた物体にそれを設定され、遠距離攻撃を受けた。

「――でももうお終いね。もう一度自分を見つめ直し――しっかり反省してきなさい」

ローランドの敗北と俺達の勝利が確定した。全く……今回はローランドの先生であるアマデーオに救われたぜ。この老人が魔法でローランドの槍を破壊し、同時に精神的に追い詰めてくれなきゃ、俺

も多分ローランドの事を見ていて――スクライングの犠牲になっていたぜ。
戦わずに敵を制圧する魔法……か。
小柄なヤツだし、一見地味な魔法だけど……すげえ魔法だったぜ。
俺も体を鍛えるだけじゃなくて――敵の技を見抜く修業もしておかないとなぁ。

とにかく、藤島圭介の身代わり二日目は――色々と勉強になった一日であった。

第２５８話，魔術師の居場所（後書き）

・後書きトークコーナー！

第２回魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

夢「戦闘シーンくるかと思ったけど、戦闘ってほどでもなかったな」

リリー「夢と私が組んだら、そこそこ強いのにね？」

夢「まっ、そのうち俺らがド派手に戦う時が訪れるんじゃね？」

リリー「そうね、藤島様や木下が暴れてるんだし――このままだと不公平よね！」

伊吹「……なんで私、毎回初っ端から敵に倒されちゃうだろ？」

圭介「かませ犬だからじゃね？」

伊吹「……何か、言ったかしら？」

圭介「すまんごめんなさい何か目が怖いですホント冗談です勘弁してぎゃあああッ！」

第２５９話，最大勢力【朱色の陽射し】

イギリスは近代的な鉄道発祥の国だ。

確かに２０００年ほど前にギリシャやマルタ、ローマ帝国の一部には切石を用いた単純な軌道は存在していたが、１６世紀ごろに英国では木製のレールが使われ始め、それは瞬く間にヨーロッパを中心に広まっていった。そして１８世紀後半、鉄製のレールの使用が始まった。

その後、イギリスでは蒸気機関車の登場や世界初の地下鉄など、鉄道の歴史を語る上では欠かせない偉業を数多く残し、その影響は現代でも世界中に残っている。

現在でも網の目のように線路が敷かれ、基本都市へは鉄道で行けるようになっている。

俺達はストラスモア伯爵夫妻のご厚意により、専用自家用車を用意してもらったのだが、それだと敵地へ乗り込んだ際に敵にバレる可能性があるので、結局俺達は鉄道で目的へ向こう事に、

俺こと――藤島圭介の目的地はカーディフ。

ウェールズ最大の都市であり、市内にはカーディフ城が存在する……らしい。

「んで、そのカーディフ城が朱色の陽射しの根城なのか？」

いい加減俺も慣れてきたのと、ブリジットさんに普通にしてていいと言われたので、気付けば俺もタメ口で話すようになっていたが……高貴なお相手に本当にこれでいいだろうか？

「ええ。勝手にお城の地下に地下神殿を築きましてね、彼らはそこを要塞としていますの」

「地下神殿……それってバレないのですかっ？」

「何重にも魔術的結界が張り巡らされていますので、そこを突きとめられるのはわたくし達のような魔法少女……と、いうより。魔法使い全般と言ったほうが正しいかもしれないですわ」

「要するに、魔法の心得がねえと見破る事が出来ねえんだな？」

「ええ。だからこそローマ・カトリックのような魔法に厳しい宗教でも、巧妙な魔法を得意とする魔術結社の人達に対抗するべく、少数精鋭の魔術師部隊を保有していますわ」

なるほど、それが過去にあった魔女狩りってヤツの全貌なんだな。アレで処罰された人達は科学者と呼ばれる人達の他にも、本当に魔法を扱う魔法使いがいたんだな……。

しかし、宗教ってのも自分の都合ばっか気にして……勝手な連中だよなぁ。

「隊長、朱色の陽射しって魔術結社の中でも最大規模の所ですよね？」

「マジ？　それっていきなり殴りこむのはまずいんじゃ……？」

ＲＰＧだったらまずありえないな。

下部組織を一通り消してから本組織を潰す……これがゲームのやり方だが、

「飛び石作戦（アイランドホッピング）を御存知でしょうか？」

「もきゅ？　それって飛び石作戦の事……ですか？」

「アレだろ、戦時中に連合軍が日本攻略の為にやったヤツ。確かあまり重要じゃない島は占領せずにスルーして、比較的日本軍の戦力が薄いかつ重要拠点だけを攻略していくってヤツ」

「うふふ、藤島様は歴史がお得意で？」

「ま、まあなっ！」

「……けーすけ様」

本当な架空戦記読んで覚えただけなんて言えねぇ……。

第一、日本史のテスト赤点ギリギリの俺が――歴史に詳しいわけないだろ。

そんな現実を知っている暮葉は、ジト見で俺の事を見ていた……視線が痛ぇよ。

「けどさ、飛び石作戦と今回の魔術結社攻略……なんか接点でもあんのか？」

「特に接点はありませんが、今回はそれを実行しようと思っていますの」

「もきゅ！？　ひょ、ひょっとして――他の魔術結社はスルーなのですか！？」

「他に魔術結社攻略に当たる者もおりますし、ですのでわたくし達は本隊を叩こうと思いまして」

「レベル上げもしないでいきなりラスボスに挑む……サ●フロにそれ出来るシナリオあったよな」

どうでもいい話かもしれないが、分かりやすく例えるとそういう事であろう。つまり俺達は何もしないで、いきなりラストダンジョンへ特攻を仕掛けるのだ。しかし、いちいち魔術結社を全部潰していたら来週の登校日に間に合わないし、ある意味では今回の作戦――都合がいいのかもしれない。

と、その時。英語だからよくわからないが、車内放送が耳に入ってきた。

「うふふ、もうすぐカーディフに到着ですわね」

「ええ、そうみたいなのですっ」

「えっ？　お、おうっ！」

ブリジットさんはイギリス人だから当たり前だけど、暮葉……なんで英語わかるの？

「けーすけ様っ」

隣に座っていた暮葉がぐいぐい、と。着ている服の袖を左手で引っ張ってきた。

可愛いけど……それじゃママにおねだりしている幼稚園児だぞ？

あ、別にいいか――暮葉はロリが売りだからな！

「……けーすけ様、今とぉーっても失礼な事考えましたよね？」

「き、気のせいだ！　それよりどうしたんだ？」

むすっ、と頬を膨らませた暮葉も可愛い……けど、ブリジットさんもいるからな。それにここは公の場だし、控えめに行かないと馬鹿にされる&リア充死ね言われちまうな。

「あの、けーすけ様……無理だけは絶対にしないでくださいね？」

無理、かぁ……あんまり意識した事はなかったな。

無理の基準っていまいち難しい所があるけど、どうなんだろうな……とりあえず、

「大丈夫、無理なんてしないから」

どこまでがＯＫで、何処からが無理なのかはわからない。ただ、無理だと思っていた事でも乗りきれたりする事もあるし、自分で思っている無理よりも、もっと先に無理があるのだと思う。

そんな事を考えている中、列車はカーディフに向かってひたすら走り続けていた。

数十分後、ようやくカーディフへ到着した。

ウェールズはイギリスを構成する国の一つであり、ここカーディフは３０万以上の人々が日常生活を営んでいる、ウェールズ最大の都市でもある。ここカーディフには、カーディフ城という歴史的なお城があり、この地下に魔術結社の本部があると言う事で――俺達はカーディフ城を訪れた。

「地下神殿の入り口はあそこの建物ではなく、そこに天守の中にありますわ」

天守閣……という表現が正しいのかは不明だが、ブリジットさん

が指差す方向には――盛土の上にはカーディフ城の天守閣が聳え立っていた。

今にも崩れそうなほど古びてはいるが……そこそこ立派な天守閣な気がする。

徒歩でゆっくりと近づいていくが、その旅に暮葉とブリジットさんが顔色を変えてゆく。

「……物凄い魔力ですわ」

「術式を組んだ魔法使いは、相当の使い手みたいなのですね……っ」

「んで、どうするんだ？　ここってすごい要塞なんだろ？　何か攻略用の作戦でもあるのか？」

「……そうですわね」

パチン、とブリジットさんが指を弾いた、

瞬間。

古びた剣の鞘が空中にて発生し、ブリジットさんはそれを左手で掴みとる。

「折角日本人もおられるのですし、大和魂とジョンブル魂を見せつける為に――」

提げられた古びた鞘。そこから伸びている剣の柄をブリジットさんは右手で握る。その瞬間から素人目に見ても、その剣は普通ではない事がわかった。ブリジット隊長が柄を握り締めると、漏れるように鞘から……いや、柄も柄を握るブリジットさんの右手も光り輝いた。

陸上競技とも格闘技とも違う、不思議な呼吸法。

不規則なようで規則的な呼吸。
それで呼吸を整えたと同時、剣の本質を発露させるが如く抜刀する。

「――正面突破いたしますわ！」

瞬間、バギン！　というガラスの割れるような音が天守の中から響き渡る。その耳障りな音と同時に天守が青白く、雷光じみた光を発していた。

「――隊長!?　い、今……もしかして結界を――――」

「うふふ、破壊しましたわ」

ブリジットさんが右手に握る、細身ながらも光り輝く神聖という言葉がピッタリな剣（つるぎ）。
まるで、神話の世界に出てくる聖剣（せいけん）のようでもあった。というか、ブリジットさんも剣術使いの魔法少女かよ。アニメのように、純粋に魔法を使う魔法少女っていないのか？
いや、でも先程の結界破壊は……どう考えても魔法だよな。

「斥候の報告によりますと、地下神殿は南北に渡って伸びているはずですの。わたくしは南部を攻略いたしますので、お二人は北部をお願いします」

「け、けど。それだとお前が一人じゃねえか？」

「大丈夫ですの。わたくし――これでも聖人ですので」

聖人。

リーリヤさんやサラマンダーがそれに当たり、その実力は軍隊が全く及ばないほど。そういえばブリジットさんも、化け物級の強さを誇る聖人の一人だって言ってたな。俺と暮葉が束になったって敵わないであろブリジットさんなら、一人で南部に行かせても大丈夫……かな？

「けーすけ様！　隊長なら多分大丈夫なのです――ですのでハーバートを追いましょう！」

……そうだな。

確かに魔術結社の存在は、俺達が日常生活を送る上では非常に危険なものだ。だが、俺達の日常なんて二の次だ。そんな事より朱色の陽射しの魔法使い、ハーバートのふざけた魔法の犠牲となった青山さんを――この手で必ず救って見せる。

そして、ハーバートの野郎は正体を明かしたら――必ず一発はぶん殴ってやる。

「……行くぞ、暮葉」

「はい！　しっかりお供するのですっ！」

作戦は決まった。

やるべき事も明確にハッキリしている。

最も重要な決心をした俺達は、地下神殿の中へと駆けてゆくのだった――――。

第２５９話，最大勢力【朱色の陽射し】（後書き）

・後書きトークコーナー！

第２回魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

圭介「ふぅ、ようやく次回から本格的な戦いが始まるな」

暮葉「相変わらず戦いまでの話が長いのです……っ」

圭介「だから作者はテンポ悪いって言われるんだよな」

暮葉「全くなのです！」

作者「モウヤメテ、オレノＨＰハトックニゼロヨッ！」

圭介「それはそうと、作者のＰＣは相変わらず不調なので、今後も更新が遅れるかもしれませんが、状況改善の為に頑張っていますのでよろしくお願いします！」

暮葉「一応努力の末に起動するようにはなったのですが、起動時に毎回ＢＩＯＳ画面が出てくるのって何故なのでしょうね？」

圭介「それ以外は今の所正常なんだけどなぁ……電池か電圧か、最悪マザボ……？　ＰＣ詳しい優しい人、教えてくださると助かります！」

第２６０話，地下神殿

薄明るい空間に、無数の柱が聳(そび)え立っており、広い地下空間を支えています。その柱には神聖文字(ヒエログリフ)と呼ばれる、古代エジプトで使用されていたものに酷似している文字と、あまり見覚えのない神話の神様のような絵が彫刻されていましたわ

わたくし、ブリジット・バウエス＝ライオンは藤島様達と一旦別れ、カーディフの地下に南北に伸びている地下神殿を、南部に向かって歩いていますわ。

今の所、敵の襲撃はありませんが……それにしても不自然ですわ。魔法使いの姿こそ見受けられないのですが、この強い魔力……界全体に何らかの術式が展開されているのでしょうか？

考えられる物としては罠。

確かに、罠さえ仕掛けておけば人員を減らせるうえに、高確率で敵を仕留められますわ。

しかし、藤島様達が心配ですわね……。

剣術に長けている木下様が同行しているとは言え、罠から逃れる事は難しい事ですの。お二人が罠に引っ掛かって負傷しなければよいのですが……。

……ところで、丁度わたくしは――この空間でとある術式を発見しましたわ。

「数は万物の根源(アルケー)であり、あらゆる自然現象は一定の法則に支配され、その方式は数式で表すことが可能。それを極め、遂に$1^2+1^2=Z^2$。$Z=\sqrt{2}$という式によって無理数を発見。無理数が発生する時、発見者や周囲、術者を含めて大いなる災いが降りかかる……」

要は、世界を構成しているのは【数】で、様々な現象を引き起こすのも数。その中でも無理数と言うものはあらゆる教えに反し、そ

れが災いを引き起こす……という事ですわ。
この術式は無理数とされている核さえ潰せば、魔術的な意味は失われるのですが……。

「上手ですわ……これは紀元前のギリシャ系ピタゴラス教団の理論を、そのまま魔法に応用したものですの。数学を魔法に応用した例はあまり聞いた事がありませんわね」

ピタゴラスは【数】を崇拝していましたが、彼は無理数を数とは認めていませんでしたわ。
ところが、その無理数を弟子で発見してしまい、ピタゴラスはその弟子を殺害。そのような秘密主義的行動と、彼のエリート意識からピタゴラス教団は市民の反感を買い、弟子たちは教団の施設ごと焼き殺され、ピタゴラス自身も民衆からリンチされ息絶えましたわ。
無理数。
現代でこそ、数学を説明する上では欠かせないものとなりましたが……ピタゴラスはその存在を認めなかったあまり、多くの弟子達が血を流し、やがては息絶えてしまいました。
そのような意味があるからでしょうか……無理数という存在がこの術式に用いられたのは。

「さて、この罠をどう潜り抜けましょうか……解はこれしかないですの」

その瞬間、靴底でスイッチを踏みつけたかのように、
ドッ！　という轟音が炸裂しましたの。丁度わたくしの前に聳え立っていた柱が、内部から破裂するかのような爆発を起こし、地下神殿全体を揺らしましたわ。
しかし、わたくしは今の一撃を防ぎました。
逃げたのではなく、防いだのです。

わたくしは――淡く光る円の中にただ、佇んでいるだけでしたわ。

「なるほど……確かに災いが発生しましたわ。ここに数多くの民間人がいたとすれば、今の爆発で２０人近くは亡くなっていたハズですの」

しかし、とわたくしは話を続ける。

「しかし、この程度の災いであれば――円卓の騎士を突破する事は不可能ですわ」

わたくしは鞘から抜いた光り輝く剣を握り、咄嗟に刃先で地面に円を刻みましたわ。

わたくしが行った事はそれだけでしたが、たったそれだけで円から淡い光が発生し、包み込むベールのような光は爆発からわたくしの身を守りましたの。

【円卓の騎士】とは元々、アーサー王伝説に出てくる１３人の騎士……といっても、本当は１２なのですが、彼ら騎士を【円卓の騎士】と呼ぶのです。王を守る為の騎士、という所にわたくしは着目し、わたくしは英国に古くから伝わる防御術式である、【円卓の騎士】を会得しましたの。

ただしこの術式、誰でも使えたら世界のバランスが崩壊してしまいますので、発動させる為にはある条件が必要なんですの。

「――ッ！？」

そこで、今度は天井の一部が崩落を始め、巨大な瓦礫が爆弾の如く落下してくる。しかし光のバリアは岩石を弾き飛ばし、右方の壁に突き刺さりましたわ。

「うふふ、罠は無駄ですわ……この剣がある限りは絶対に」

輝く剣の名前は聖剣エクスカリバー。

アーサー王が持っていた、光り輝く魔法の剣であり、同時にブリテン島の正統な統治者の象徴でもある、英国最強の魔装飾ですわ。

少し王室のほうから拝借させていただいたのですが、わたくしはどうやら魔装飾に選ばれなかったらしくて……いやいや、剣がとても重く感じますわ。

それでも普通に戦えますし、どんな物質だって切り裂く事が出来ますので……あまり不便に感じた事はないですし、とても便利だと思っておりますわ。

「さて、罠如きがわたくしからエクスカリバーを手放させる事が出来ますの？　言っときますけど、円卓の騎士はこの円の中にエクスカリバーがある限り、わたくしが術式の行使を中止しない限りは――半永久的に存在し続けますのよ？」

それでも構うものかと言わんばかりに、今度は大量の炎弾が飛来してきましたわ。おそらく民衆によって焼き殺されたピタゴラスの弟子たちの、悲惨な有様を再現しようとしているのでしょうが……全く罠には知性がありませんし、何度も説明した所で無意味ですわよね。

並の力で――円卓の騎士を破る事は出来ませんのよ？

「さて、こちらは今の間に無理数とされる【核】を発見しましたわ……どうされます？」

と、聞いても返事が返ってくるわけありませんし……当然罠は破壊対象ですわよね。

ドン！　という轟音を炸裂させ、爆発的な勢いで天井付近まで跳

躍する。【核】と呼ばれる場所は戦車（チャリオット）が描かれている地点。
その一点を破壊すべく――ズサッ！　と、杭の如く聖剣を刺し込みましたわ。

瞬間、
閃光が眼前を包みこみましたわ。

轟音で鼓膜が吹っ飛ぶかと思いましたわ。
閃光で失明するかと思いましたわ
ですが、そのような爆発でさえ――わたくしがダメージを負う事はありませんでしたわ。

「うふふ……困りましたわ。半径１００メートルは吹き飛んでしまいましたの」

破壊を齎す爆発はあまりにも威力が高くて、ここは地下神殿だったのですが、地上の光が大々的に入り込んできましたわ。どうやら……穴が開いてクレーターになってしまったみたいですの。

「しかし、南部の要塞は殆どなくなったみたいですの……うふふ、後始末が大変そうですが……よしとしましょうかしら？」

結局魔法使いの気配は感じられませんでしたし、仮に南部神殿にいたとしても、大半は先程の爆発で息絶えたか、負傷して動けなくなったハズですの。
出来れば生存者は助けてあげたいのですが……今はそのような余裕がありませんわ。

「さて、藤島様達を助けに――――」

と、振り返って足を進めようとした、

「――――見つけたぞ、魔術師の面汚し……侵略者め」

刹那、わたくしを呼び止める男の声が聞こえましたの。わたくしはもう一度南を向いて、青い古風な服を着た金髪の男を睨み付けましたわ。

中年くらい……ですわね。魔法使いにも軍人にも見える風貌ですわ。

「うふふ、ごきげんよう」

「ブリジット・バウエス＝ライオンか。貴様は立派な英国人でありながら、異世界に肩を貸す……魔術師の面汚しとしか言いようが無いな」

「そういう貴方は誰ですの？」

「アーチボルト・ガードナー、朱色の陽射しをまとめている者」

このお方が朱色の陽射しの……そういえば聞いた事がありますの。朱色の陽射しの頂点に立つ者は貴族でプライドが高く、その上魔法の天才だったとか……この人がそうなのですね。

「私こそこの世の番人であり、魔術師の鏡……従って貴様のような侵略者の異世界人を処罰し、その首を神に捧げ、邪気を浄化してもらう必要があるのだ」

「うふふ、貴方は何処の神様を信じているのでしょうね？　まあいいですわ……思い上がった勘違いエリートさんに――英国のルール

を叩きこんであげますの」

するとアーチボルトの眼光に、ドロリとした感情の色が混じる。

「よろしい。ならば貴様のような愚か者には魔術師のルールは教えない。その代わり、徹底した懲罰を受けてもらおう」

さて、彼を倒せば最大勢力――朱色の陽射しは崩壊しますわ。
それはつまり、魔術結社問題が解決するという意味ですの。
あまり時間はありませんし……早急に決着をつけてやりますわ・

第２６０話，地下神殿（後書き）

・後書きトークコーナー！

第２回魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！
ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

圭介「さて、次回は水銀ちゃんが出てくるな」

凪紗「藤島、何を言っているんだ？」

圭介「だって次回は戦闘だろ？　ほら、水銀ちゃん大活躍！」

伊吹「気にしないで凪紗。圭介はアニメのみ過ぎなだけよ」

圭介「だって魔術師でアーチボルトったらケイネスせんせ（ｒｙ」

大吾「おーっと！　誰か来たようだ……」

重原「圭介、それ以上喋るのはＮＧだよ。色々な意味で」

浅間部長「ｆ●ｔｅ／ｚｅｒｏ面白いよね」

第２６１話，意外な助っ人

わたくし、ブリジット・バウエス＝ライオンは聖人ですわ。
確かにわたくしは英国出身であり、生粋のレムリア人とは言えません。しかし、あちらの教会から認定を受けたという事実にも変化はありませんわ。それほどの実力があると言っても過言ではないと思いますし、現にわたくしは既に円卓の騎士という防御術式を組んでいますの。
聖剣の鞘という回復術式も存在しますし、何より最大の武器である聖剣エクスカリバーはあらゆる物質を一刀両断し、大抵の魔法使いが相手なら一撃必殺とも言えるものですの。
ですけど、今回の相手はそう簡単に撃破できるとは思えませんわ。
何と言っても、朱色の陽射しの頂点に立つ男ですもの。
個人主義的な魔法使い達を上手くコントロールし、この南部地下神殿の崩落にさえ耐えきった化け物なのですから――おそらく相当の使い手なのでしょうね。
長期戦では間違いなく、こちらが不利になるでしょう。
と、ここでわたくしはアーチボルトの挙動に注意しつつ、剣を握る指に力を入れましたわ。
ええ、そうです……最初から本気で行かせてもらいますわ――、

「ほぉ、初めから飛ばしていくつもりなのか？」

「……」

「……ふっ、まあ答えるわけもないか」

にしても、不気味ですわ……。
何故、アーチボルトはあのような余裕の笑みを浮かべていられる

のでしょうか……？

「よろしい。通常相手が本気で戦う場合、こちらも本気で戦う……というのが魔術師としての礼儀。しかし私は貴様を魔術師とは認めない……ふふ、だから本気は出さないぞ」

本気を出さないで戦うと仰っておりましたが……それはどうでしょうね？

仮にもわたくしは聖人……といっても、彼はその存在を知らなかったですわね。莫大な聖人の力に対抗できるのは聖人、あるいは魔装飾で補正を受けた才能ある魔法使いのみですの。アーチボルトがどれ程の魔法使いかは予想もできませんが、今の発言はハッタリにもなりませんわね。

しかし、

ぞわり、と。

唐突に、アーチボルトの体から見えない何かが放出される。

わたくしの視界に突然、黄金色のハンマーが映り込む。そのハンマーをよく見てみると、一般人には見えないくらいの極細のワイヤーが巻かれていましたわ。

武器にワイヤーとは……まるで、日本支部のリーリヤ様みたいですわ。

しかし、そんな思考をしている時間すら――相手にとっては隙でしかありませんでしたわ。

「ッ！？」

ビュオ！　という風邪を切る音が真後ろが響きましたわ。しかし、アーチボルトはその場でハンマーを振り回しただけで、これといっ

て大きな動作はしていません。
しかし、確かな感触は感じました。
痛いと言う名の――――――。

「がァ……な、ァ……ッ！？」

痛みを感じてから、ズッパァァァン！　という凄まじい轟音が炸裂する。ハンマーを振り回すという動作以外、何も確認出来ず……結局わたくしは何にやられたのか、分からないままでしたわ。
しかも――円卓の騎士による光のバリアが破られた……？

「……ッ！」

バゴォ！　と言う心臓に悪い音は第2撃の合図。崩れた地下神殿の破片、突き刺されば命はないであろう無数の岩石が浮き上がり、なんと豪雨のように降り注いできましたわ。わたくしの円卓の騎士は一度破られれば、さらに輝きを増してバリアの強度が強化されますの。
淡い光がバチバチと、稲妻のようなものを散らしながらさらに明度が増して――、

「あ、ァがァァあああああああッ！？」

バッリィィン！　というガラスが割れるような音が炸裂すると、光のバリアが破片のような形状になって地面に撒き散らされ、わたくしは直に岩石の豪雨を受けてしまいました。
抉り取られるような耐え難い激痛。ふとお腹を見れば、どくどくと血が溢れていましたわ。

「やれやれ……ストラスモアの一人娘も、こんな程度なのか？」

全く、信じられない光景ですわ……わたくしはこれでも聖人ですの。これまで、数多くの作戦に従事して、圧倒的な力を振るって武勲を立て、教会から聖人認定されたのに……。

アーチボルトは両手を緩やかに広げ、わたくしの弱さにでしょうか……失望していますわ。

「いくら魔術師の面汚しとは言え、貴様は異世界で相当暴れていたのだろう？　私もね、少しは苦戦すると思っていたのだが……どうやら、あと1分もあれば貴様を殺せそうだな」

「ッ！」

今の発言に少しだけ――腹が立ちましたわ。

仮にもわたくしは聖人――聖人は戦場の鏡でなければなりません。

咄嗟に立ちあがり、前へ跳躍し、聖剣でアーチボルトの首を斬ろうと試みましたわ。

「……聖剣か」

呟き、アーチボルトはハンマーを振り回し、わたくしの聖剣を【相殺】しましたわ。常識的に考えれば、聖剣が放つ莫大なエネルギーに、単なるハンマーが耐えられるハズがありません。

通常の武器で聖剣を相殺すれば、莫大なエネルギーに打ち勝つ事が出来ず、ただの粉末と化して所持者諸共この世から消失するハズ……ですのに、

何故、アーチボルトもハンマーも無傷なのでしょうか？

何故、アーチボルトは聖人の速度についていけるのでしょうか？

何故、アーチボルトは聖人の攻撃を受けても平気な顔をしている

のでしょうか？

「受講料は死という事で、少しだけ貴様に魔術講義を行っておこうか？」

アーチボルトが指を動かし、間接をゴキゴキと鳴らしながら、静かに語り続ける。

「その聖剣、ブリテンの王の象徴とされるものだろうが……ふふふっ、たかがブリテンだよ？」

「……ッ！　許せませんわね……わたくしの愛する祖国を、貴方はわたくしと同じイギリス人でありながら――祖国を侮辱するおつもりですか？」

「何を言っている。宇宙全ての根源的な源を掌る私にとって、イギリスなどと言う小さな島国はどうだっていい」

今にも斬りかかりたいですわね……許せません。

国民でありながら、国を馬鹿にする……そんな事――絶対に許せませんわ。

しかし、宇宙全ての根源的な源って……一体？

「何を不思議そうな顔をしている？　貴様は仮にも魔術をかじった者だろう？　なら、その源を操る魔術の存在くらい――知っていても不思議ではないと思うが？」

「……まさか、ゾス・キア・カルタス？」

ゾス・キア・カルタス……確か、何らかの物体をゾス（キアの運

び手である統一体）とし、キア（宇宙全ての根源的な源）を完全に制御する。その時に生まれる莫大なエネルギーを用いて、あらゆる魔法の行使を可能とする……そんな、そんな魔法を使える魔法使い、いたんですの？

「ふふふ、このハンマーこそゾス。最も、他の物でもよかったのだがな」

「……確かに、それは高等な魔法ですわ。今までわたくしもそのような魔法を行使する魔法使いなんて、見たことがありませんの。ですが……その魔法、貴方の体にも相当負荷がかかるハズですわ」

「無論。魔力とは生命力から錬成するもの……つまり、この魔術の行使は私自身の寿命を縮めているという事だ。それが魔術師の宿命……魔力を錬成し、莫大なエネルギーを得る代わりに、我々魔術師は分単位で寿命を縮めている。しかし、だ……そこで躊躇（ためら）っては魔術師でいる意味がない」

アーチボルト……このお方はまさか、死ぬつもりですの？

確かに、わたくし達魔法使いという生き物は生命力を魔力に錬成しますし、魔力を錬成すればするほど寿命は縮みます。だから多くの魔法使いは燃費を良くするため、日夜魔法の改良に励み、出来るだけ寿命を延ばそうとしている……それがわたくしを含めた、普通の魔法使いの姿ですわ。

でも、アーチボルトは違いますわ。

彼は命をどうとも思っていない。

他人の命はもちろん、自分の命さえ――――。

「さあ、魔術師の面汚し……講義は終了だ。受講料として貴様の死と言う大金を払いたまえ」

アーチボルトが大きくハンマーを振り上げた瞬間でしたわ。

ズバッゴァッ！　と言う莫大な音が炸裂すると、突然巻き起こったのは【嵐】。

颶風（ぐふう）とも捉えられる凄まじい嵐は、地下神殿の瓦礫を丸ごと持ち上げる。

ぐるぐる、と。アーチボルトの頭上を大量の瓦礫が回っていましたわ。

「――はぁい♪　楽しそうな事しちゃってるから私も混ぜて欲しいんだけど……後で決戦するからもうチョイ待っててくれないカナ？　じゃないとアンタにとってもつまらない勝負になりそうだしサァ！」

聞こえて着たのは女の声。よくよく見れば、嵐の中から大きな剣を持った少女が、徐々にわたくしへ近づいているのが見えますわ。

風使いで大きな剣を持つ女……あれ、何処かで聞いた覚えがありますわ。

「――つーわけだから私、そろそろこの女でも連れてずらかっちゃうケドォ？　この嵐は置き土産だから、美味しく食べちゃってね魔術結社の魔術師サン♪」

言いながら、少女は徐々にこちらへ向かってきましたわ。やがて、吹き荒れる暴風の中でも姿が確認できるくらい、少女はわたくしの近くまでやってきました。

胸部と腰周りを覆うブリガンダイン風の鎧。　しなやかな金色の髪を左右におさげにし、縦ロールにした髪型。服装は騎士で、髪型はお嬢様。白銀色に輝く刃を持つ大きな刀の塚は、悪趣味とも言え

るくらい金ぴかでしたわ。
何より、その大剣を持つ少女――女のわたくしでも可愛いと思ってしまうほどでしたわ。
でも、この人……わたくしの手元に届いた情報が正しかったとすれば、
「何故、貴女が……風剣のシルフ？」
「随分情けないわねぇアルファ隊の聖人サン。まあ説明は後、とりあえず私についてきな」
ここで何故、宿敵であるハズの風剣のシルフが現れたのか……意味がわかりませんわ。
ですが、このままアーチボルトと対峙ていていも勝てる見込みがありません。
ここは一つ、シルフの誘いに乗ってみるのも手の一つですわね……。
仮に襲われても、シルフになら勝てそうですし……。
ですので、わたくしは――シルフの後を追い、一旦戦線を離脱する事にしましたわ――――。

第２６１話，意外な助っ人（後書き）

・後書きトークコーナー！

第２回魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｂＤｅｌｇ４ｈ

圭介「ああ、鬱だ……」

雪乃「あら、何が？」

圭介「今日、学校だ……」

雪乃「何を言っているのかしら。今日は土曜日で初芝は公立高校よ？」

圭介「それが、この時期に変な行事があって……ああ、鬱や……」

雪乃「……もしかして、それ作者のリアルなお話？」

浜島「すげえどうでもいい話だな……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0702u/

魔法少女に会っちゃった場合

2011年12月17日08時59分発行